

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 公園を巡るお話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 10/09/2007 18:34:47

BODY:

摂理、というものがある。

例えば弱肉強食。例えば万有引力。この世界に生きるものである以上、避けることのできない法則だ。

だが、ここにその大自然の摂理に無謀にも逆らおうとしている少女がいた。

「うっっ…はっっ……っ……」

下腹部を走るつつんっ、とした刺激に足を突っ張って耐える。年の瀬が見えつつある冬の夕方、陽は落ちるのも早く、冷え切った風は少女の体から否応なく体温を奪ってゆく。

（でちゃう……おしっこ……でちゃうよお……

おしっこ…トイレ行きたいっ……）

須崎末果（すざき・みか）、市立の中学に通う一年生。

彼女は、迫り来る強烈な尿意と必死に戦っていた。

「ガマン、ガマンっ……しなきゃ…」

アヒルみたいに不恰好におしりを突き出して、足をそろそろと進める。

一歩ごとに恥骨の付け根に衝撃が走り、少女のダムに負担を掛ける。そのたびに末果はぎゅっと腿をくっつけ、かかとを浮かして膝をこすり合わせていた。傍から見ればじれったいほどに遅くもどかしい歩み。

それでも今の彼女には、精一杯の大急ぎだった。

「あと、ちょっと、ただだからっ……」

下腹部の張りを確かめる。

そっと触れるだけで、腰が崩れ落ちそうになるほどの尿意が彼女の恥骨を走り抜けた。もう満水も満水、経験したほどのないくらい危険水域だ。朝から一度もトイレに行けていないのだから、それも当然だろう。

生唾を飲み込んで、冷や汗の伝う背中をぶるっと震わせる。

歩みを進める振動すら今の末果には耐え難い刺激になり、下着の奥で排泄孔がひくんと震えた。

じゅわっ。

「っ！！」

今にも漏らしてしまいそうなおしっこを、なお身体の中にとどめておくというのは、極めて不自然なことである。その真理を世間知らずの少女に思い知らすかのように、未果の自律神経は尿意の信号を発して彼女に恥ずかしい排泄体勢をとらせようとしていた。

未果はぎゅうっ、と強くスカートを握り締め、今にもしゃがみ込んでしまいそうになる膝を押さえつける。

「んんっ、んーっ！！」

こんなところで、少しも余裕のない膀胱を抱えたまましゃがんでしまえば、それこそ絶対に我慢できない。

中央公園の見通しのいいサイクリングロードの真ん中で、未果は足を交叉させ、腰を揺すって尿意の波に耐える。

未果の下着に、じゅわっ、と染みが浮かぶ。

（出ないでえ……お願い……っ！！）

放水の誘惑をぎりぎりのところで押しとどめ、渾身の力で排泄孔の括約筋を締め付ける。女の子のプライドと羞恥心が必死の連携を組んで、凶悪な排泄欲求に抵抗する。

「あ、ああっ」

我慢しきれなかった分のおしっこが、じゅわっ和下着に広がる。

だが、それだけだった。

漏れたのはわずかに数滴分のおしっこ。必死の願いが功を奏したのか、未果はどうかお漏らしの危機を回避した。

「はあ…っ…はあはあ……」

息が荒くなる。未果は慎重に腰を伸ばすと、ゆっくり深呼吸をした。

もっとも、もうその程度で彼女の尿意はごまかせるレベルのものではなかった。

漏らしたてのおしっこの暖かさに、未果は背中を震わせてスカートの上から股間を握り締める。最大の危機は乗り越えたものの、限界まで膨らんだ膀胱と、その中にばんばんに詰まったおしっこはなくなってなどいないのだ。

（……おしっこ、おしっこしたいっ……したいよお…っ）

まるで、幼稚園か小学校に入りたての子供のように、『まー、おしっこーっ』のポーズで未果はくねくねと腰を揺すり、恥も外聞もなく尿意を堪える。

（おもらしなんて……嫌あ……）

足を伝うおしっこが、ポタ、ポタ、とアスファルトに落ちて小さな染みを作る。どれだけ我慢をしようと、ほんの少しずつ決壊は始まっているのだ。

そして、それが致命的なものになってしまうまでの時間はもう残り少ない。

昨夜のジュースと今朝の牛乳。体育の後に飲んだ水。この一日、自分の採った水分の総量を思い出して、未果は背筋が凍るような錯覚を覚えた。

（あんなのが、全部、でてきちゃったら……っ）

足を伝う生暖かい感触。アスファルトを染める派手な飛沫。

その光景を思い描いてしまい、未果は震えあがる。

「トイレ、トイレ、おトイレ行きたい……」

排泄をするための場所を小さく口の中で繰り返して、未果は視線をめぐらせた。

全く周りを見まわす余裕などなかった彼女が、偶然そこに辿りつけたのは天の助けだったかもしれない。白い建物が、赤と青い人型のシルエットを胸にそこに立っていた。

「トイレ…あった……っ」

だが、その偶然はとてつもなく——意地が悪かった。

二つ並んだトイレの入り口、その右側。

赤で女性用と記されたトイレの入り口には、故障中、の張り紙があった。

張り紙の下には無造作に矢印が引かれ、それはもう片方の男性用トイレの入り口を向いている。

「っ……！？」

思わず飛び出しそうになった悲鳴を飲み込む。

（そんなっ……男の、ひとの方で……おしっこなんてっ…できるわけじゃないっ……）

公園管理としてはまあ苦肉の策だったのだろうが、未果にとってみれば最悪の不幸以外のナニモノでもなかった。

異性の見ているかもしれない場所で、女の子が最も秘密にしておきたい行為をするなど、絶対に許容できない事である。個室の中で一番大切な場所をあらわにして、そこから激しくおしっこを排泄する姿——スカートめくりとか、着替えを覗くとか、男の子はそういうのを見たがるのだ、ということを未果は聞いていた。

（こっ、これ以上…がまんなんてっ…できないよう……）

男子トイレ。

いくら異性の知識に疎い未果でもこちらにも個室があるのは分かっていたが、まさか入っていく訳にもいかない。人一倍羞恥心の強い未果は、トイレ、の一言が言えずに学校にいる間中我慢し続けていたくらいなのだ。

が。

きゅううんっ。

「や…っ、ダメえっ……漏れちゃうっ！！」

未果の下腹、膀胱を一杯に満たしたおしっこは、容赦なく少女を攻め立てる。

少しでも気を抜けば吹き出してしまいそうになりながら、もじもじと足をこすり合わせ内股になって、お尻をうしろに突き出した格好になる。

それがいけなかったのだろうか。さっき乗り越えたはずの尿意が、さらなる大波になって未果に襲い掛かってきた。

「おしっこくう。きちゃうよっ……」

耐え切れなくなった未果は、たまらず両手を股間に挟み込んだ。ぎゅううと排泄孔を握り締める。

「でちゃだめっ、だめ、だめ、だめええ……っ！！」

尿道を下るつんとした衝撃。

スカートの布地越しに、暖かいものがほとばしる。

じゅじゅじゅっ、しゅしゅしゅるるううっ。

未果の指の間から、水滴がぼたぼたとこぼれ落ちた。腿を伝い落ちる生暖かい感触に、鼻の奥が熱くなる。

(でちゃってるっ……やだ、ずっとガマンしてたのにいつ……おもしろしちゃう……私、…もう、中学生なのにっ……)

おしっこは未果のか細い抵抗などお構い無しに、下着越しにしゅると噴き出して、ぴちゃぴちゃ地面を打つ。

しゃがんでしまった未果には、おしっこを遮るものなどほとんどない。薄い下着一枚と、疲れ切った括約筋、そして女の子のプライドだけだ。

しゅしゅしゅ……ちゅるるるっ、ぴちゃっ。ぴちゃちゃっ。

地面に点々と黒い染みを描きながら、それでも未果はしゃがみこんだまま脚を動かして移動を開始する。太腿が震えるたびにぶしゅっと音がして、おしっこが外にこぼれてゆく。スカートの中は悲惨なことになっているだろう。

スカートの上から股間を握り締めて、体の奥底からこみ上げてくる尿意にパニックになりながら、未果は必死に尿意の波に耐える。

(がまん、がまんしなきゃっ……出しちゃダメ、出しちゃダメだよっ……)

膀胱ので暴れまわるおしっこをなだめて、未果はたまたまズカートを跳ね除けた。

「んんっ！！」

奥歯を噛み締め、もう一方の手でぐいぐいと下着を引っ張り上げる。おしっこを足元にぼたぼたとこぼしながら、ほとんど根元まで向きだしになった太腿を擦り合わせる。

細かく足踏みを繰り返して、未果は辺りを見回した。

人通りはない。

けれど、排泄のためにしゃがみこめるような物陰も茂みもなかった。

「どうしよっ……おしっこっ……」

足の交叉を組み直すたびに、濡れた下着が肌に張り付く。

今は生ぬるく気持ちの悪いだけのその感触も、やがては冷たくなり、未果を裏切って尿意の味方をするだろう。

選択肢は二つ。

——林の中でお尻を丸出しにして、なにもない地面の上で排泄するか、誰かに見られるのを覚悟で男子トイレに駆け込むか。

未果が選んだのは後者だった。

両手で股間を押さえ、走り出す。

一歩ごとの衝撃に膀胱が震え、外に熱い雫を漏らすそれでも決定的な決壊だけはどうか先送りにして、彼女は男子トイレの入り口をくぐった。

足を上げた瞬間また排泄孔が悲鳴を上げ、しゅるる、じゅじゅじゅ、と漏らしたおしっこを未果は手のひらに受け止める。

指の間から、ポタ、ポタ、と熱い雫がこぼれて腿を伝う。

息を浅く、早く、最後の一線の崩壊だけを何とか先延ばしにして、未果はトイレに駆け込んだ。

三つ並ぶ小用の便器と、二つの個室。

うちの一つはドアが開きっぱなしになって、故障中と張り紙がしてあった。

(ああっ、あっ、早くしないとっ……)

辛うじて本格的な排泄を先送りにしているものの、もう十秒と待っているのも難しい。

未果は空いている方の個室に駆け寄り、自分のおしっこで汚れた手で個室のノブを掴んだ。

「……これで、やっと……」

安堵の声を打ち碎いたのは、がくんという思いもよらない衝撃。

「えっ！？」

ノブの下、赤い色と共に『使用中』の文字があった。

(そんな…あ…っ)

愕然とする暇もなかった。

使用中。

つまり、このトイレには——用を足している男性がいる、という事。

かあっ、と未果の頭に血が上る。

スカートに大きな染みを作り、下着を破れる寸前まで引っ張って恥も外聞もなくおしっこをガマンしている自分の姿によやく思い当たったのだ。

(急がなきゃ、見られちゃう…っ！？)

ただでさえ異性の視線になれていない未果。まして今の彼女は、どうにも言い訳の聞かないほどに惨めな格好である。

焦りのままに踵を返した少女は、ほんの少しだけ股間から意識を反らしてしまった。

きゅううっ、ぷしゅ、ぷしゅっ、ぴゅしゅうっ

(、ああっ、はじまっちゃううっ！！)

本格的な放水の誘惑が、未果の腰を直撃する。

さっきから何度も何度もちよろちよろと漏らしてはいるが、まだ大部分のおしっこは未果のおなかの中だ。一度収縮をはじめしまった膀胱は、少女に排泄を促そうと強烈な尿意を引き起こす。

「あ、ダメ、ダメっ……」

ぱちゃ、ぱちゃぱちゃっ。

じゅじゅじゅじゅじゅうっ

「とまって、とまってよお……っ お願いい……！！」

じんと痺れるような男の射精にも似た感覚。疲れきった括約筋が排泄孔が震え力を失ってゆく。未果の懇願は空しいほどに届かない。

男子トイレの真ん中で、少女はついに本当のオモラシを始めてしまった。じゅわっ、と最後の決壊の瞬間を告げるように、奔流の予兆が下着に溢れ出す。

(でちゃううううっ！！)

未果はスカートを破るようにたくし上げ、そのまま洗面台へと走り寄った。

足を開いた途端、押さえを失って膀胱がきゅうんっ、と収縮する。

ぱちやぱちやと雫がこぼれ、床のタイルを打つ。

もう、未果にはものを考える余裕などなかった。

「あ、あああ、っ、だめえーっ」

声とは裏腹に、未果の股間からこぼれ落ちるおしっこはどんどんと勢いを増していった。噴き出す流れをどうすることもできない。

「い…いや…っ！ いやあ——っ！！」

眼前に迫った『おもらし』の事実には完全なパニックに陥ったまま、未果はトイレ入口の洗面台に股間を押し付けた。とめることなど不可能な尿意に、それでも必死にお尻を揺する。

じゅじゅじゅっ、ぶしゅううー————っ、びちゃびちゃびちゃ……

押し広げられた排泄孔から、琥珀色の液体が下着越しに噴き出して流しを打ち、洗面台の中に渦を巻いてゆく。

少女がこの一日、我慢に我慢を重ねて体の中にとどめていたものが一斉に放出される。

「おしっこ、やだっ、こんな……こんなとこでっ……とまって、とまってよう……」

疲れ果てた括約筋はぴくりともせず、か細い抵抗では羞恥に彩られた放尿を止めることなどできるはずもない。

加減も余裕もない、本当の排泄だった。

洗面台を便器代わりに、立ったまま、未果はその小さな体のどこにそれだけ溜め込んでいたのだろうかという量のおしっこを噴出しつづけた。

じょじょおおおおっ、ぶしゅっ、ぶしゅあああああ……

「やだ、やだああっ……いっぱいっ……おしっこ…ぜんぶっ……でちゃうう……っ」

押し付けられた股間からお尻の方に回ったおしっこが、洗面台を伝って床にもこぼれ落ち、未果の足元に小さな水溜りを作る。

洗面台の前に備え付けられた鏡で、手を洗い清める場所に粗相をする自分のあられもない放尿の姿を見せ付けられながら、未果は泣きじゃくりながら両手を股間に押し付ける。

恥ずかしい琥珀色のおしっこを漏らし続ける彼女の背中で、水を流す音とともに個室の鍵を外す音が聞こえてきた。

(初出：おもらし千夜一夜 449-454 2004/02/06)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: サイトトップ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: サイトトップ

CATEGORY: サイトトップ

DATE: 01/01/2030 00:00:00

BODY:

警告。

ここは特殊な趣味に偏った小説サイトです。

あちこちのサイトやスレに投下した話などの再録もしています。

女の子の小さなほうのトイレの我慢や、排泄などに興味のない方は
先に進まない方がよろしいかと思います。

クロギリ

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: プールを巡るお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 09:07:46

BODY:

燦々と日の照らすプールサイド。まだ少し肌寒い風は残るが、プール開きとしては絶好の日和である。けれどその中でたった一人、須崎未果は楽しげにはしゃぐ6年3組34人から離れ、ひとりプールサイドに座って体を小刻みに震わせていた。

調子が悪くて見学している生徒。傍からはそう映るかもしれない。

だが、彼女は今、強烈な尿意と必死に戦っているのだった。

(どうしようっ……お…トイレ……っ)

ぐっと奥歯を噛み締め、全身の力を総動員して、身体の底から湧き上がってくる衝動に耐える。

未果の右手はきつく握り締められ、左手は体育座りのスクール水着の股間に当てられている。時折、水着の股布の上から強く股間を押さえこむその姿は、彼女の限界がかなり近い状態であることを示していた。

(……あ、あと何分？)

浅く息を繰り返しながら、未果は校舎の壁に取り付けられた大時計を見上げる。授業終了まであと25分。

限界まで膨らみ、恥ずかしい水を一杯に溜め込んだ未果の膀胱には永遠に思えるほどの長さであった。

なにより、これまで耐えてきた地獄のような時間がまだほんの10分そこらであることが未果を失望させる。

(だ、だめっ……絶っ対、無理だよ……最後までなんてガマンできない……っ、おもらしちゃうよっ……)

そう考えた途端、お腹の中がぶると震える。

きゅうっ、と高まった下腹を貫くような尿意に、未果は慌てて股布を押さえる手に力を込めた。きつく目を閉じ、足を突っ張らせて発作に耐える。伸びた足の指が、かりっ、と灼けたコンクリートに擦れる。

(んんんっ、くふう……あんっ、はあうっ……)

今にも吹き出しそうな熱いほとばしり。その予兆が、未果のか弱い水門を打ち破ろうと荒れ狂っている。一晩かけて濃縮され、蓄えられたおしっこが内圧を高めて、未果に尿意を堪える羞恥のポーズを取らせようとしてくる。

けれど、ここはトイレの個室でもなければ一人の部屋でもない。大勢のクラスメイトと先生のいるプールサイドだ。女の子がおしっこを我慢する姿なんて、見せられるわけがない。

股間を押さえる手にぎゅうぎゅうと力を入れ、顔だけは『なんでもないですよ?』というように平静を保つ。

未果の首筋を、嫌な汗が流れ落ちてゆく。

準備運動の体操を乗り切り、プールに入ってから、未果はずっとこれを繰り返してきた。間隔は事件の経過と共に短くなってきて、今ではもう十秒単位だ。

一言、『トイレに行きたい』と、教師に告げればいいことかもしれない。しかし、そうなってプールを上がり、尿意を堪えたふらふらとした足取りで皆の前を歩くのは未果にとって想像を絶するほど恥ずかしいことだった。

来年は中学生になる子がお漏らししそうになるくらい、おしっこを我慢しているなんて。ましてそれを、人に分かるようにくねくねと身体をよじらせて我慢するなんて。それはとても恥ずかしいことであり、はしたない事である。未果は厳格だった祖母にそう教えられて育ったのだ。

(どうしよう……どうしよう……)

だから、

じくん、じくん、と段階的に強まる尿意に、未果はなすすべを持たなかった。

恥骨を刺激する尿意に耐えかねて、腰を浮かせようとするが、

(あ!! や、だめえ、立ったら……出ちゃうっ……!!)

ふくらはぎがぶるぶると震えて、膝が笑っている。見学のためにとっている体育座りだが、和式便器にしゃがみ込んだ女の子の排泄の体勢である。おしっこをするのに一番都合よく筋肉が緩む姿勢で尿意を堪えるのは、地獄にも等しい苦しみだった。

気分が悪いと言って水から上がったのは良かったが、最早動くこともままならない。そうこうしているうちに、濡れた身体が冷えることでますます尿意は強まってしまった。

わずかな身じろぎでも容赦なく下腹部から背中を駆け抜ける衝撃に耐え、未果は今もなお、泣きそうになりながら勝ち目のない戦いを続けている。

きゅううううんっ、びくっ!

(いやあっ……また、また、きちゃうっ……)

波のように押し返す尿意が、未果を責め苛む。紺色の布地に包まれた少女の膀胱には、いったいどれだけのおしっこが詰め込まれているのだろうか。もしここでお漏らしをはじめてしまえば、それは隠しようのないほど大きな流れになって排水溝までたどり着き、クラスメイト達の好奇の視線を集めることになるだろう。

(はやく……はやく、プールなんて、終わってよお……)

未果は、無力にもそう願うことしかできなかった。

じわり。

おしりに感じた暑さは、最初、日に灼けたコンクリートの熱さだと思った。

けれど、その感触が自分の体の奥からのものだ気付いた瞬間。未果の顔が蒼白になる。

(あああっ……)

高まる尿意、ずっと引き締められ、疲れ始めた括約筋。かちりと進んだ時計の長針。様々な要因が重なり、ほんのわずかに緩んでしまった排出孔から滲むおしっこが、水着の股布越しに溢れ出す。

しゅしゅ、じゅ。

未果の股間をぬらす、明らかに水とは違う温度と感触。

(ひゅっ、くっ——！！)

口から飛び出しそうになる悲鳴をこらえ、未果はぎゅうぎゅう両手を股間に押し当てた。そのまま結界へと至りそうなダムを必死に押ししとどめ、そろそろと教師の方に視線を遣る。

(先生、こっち見ないで、気付かないでえっ……)

だが、

「……………？ おい」

「っ！！」

最悪なことに、教師は気分の悪いと申し出た未果の様子を気にしていたようだった。すぐに異常に気付いた彼は、監視台を降りて未果の隣にやってくる。

わずかに息を切らせた教師が、ぎゅうっと足を抱える未果を見下ろして告げる。

「どうした、須崎。大丈夫か？」

「そっ、その、……先生っ……」

平気だ、なんて嘘をついても、すぐにばれてしまうだろう。必死に頭を動かして、未果は言い訳を探す。

頭の中は、もうおしっこトイレの事でいっぱいだ。

「……き、気分、悪くなっちゃって……保健室、行っても、いい、ですかっ……」

がくがく震える膝を必死で誤魔化しながら、未果はどうかそれだけを口に出した。尿意を堪えている未果にとってそれは仮病で

しかなかったのだが、明らかに只事ではない様子を見て、教師は一も二もなく頷く。

「ああ、そうしなさい。保険委員は——」

「い、いいですっ、一人で行けますからっ」

「あ、おい、須崎」

焦るあまり、未果は自分の置かれた状況も考えず立ち上がっていた。

しゅしゅしゅ……しゅるるるっ……ぱたっ、ぱたたっ

（やっ……やだあっ……でちゃだよおっ！！）

不用意に立ち上がったので、お腹に圧力がかかってしまったのだろう。未果はさらにお漏らしをしてしまった。今度はほんの少しとは言えない。水着から不自然に滴るおしっこが、内股に何本も筋を作って流れ落ちる。

我慢に我慢を重ねていたおしっこが排泄される快感に、思わずしゃがみ込みそうになる。

（だめ、だめえっ……トイレ、おトイレ、いかなきゃっ……）

「須崎、平気か？」

「は、はい。ひとりで……大丈夫、ですっ……」

（おしっこ、漏れちゃうよお——っ！！！！）

精一杯の表情を繕って、身体を不自然でない程度に捻り、足を伝うおしっこを隠す。幸いにも、今年最初のプールに夢中になっているクラスメイト達は、誰も彼女を見ている様子はない。心の中で溜め息を付くと、未果はそろそろと校舎に通じる更衣室に向かった。プールに隣接するトイレにはここを通らなければならないのだ。

きゅううんっ。

お腹の中で、膀胱が未果の体に不必要な水分を搾り出そうと収縮を繰り返す。少しでも大きく足を開けば、未果は今も自分を苦しめている尿意の衝動のままに排泄を始めてしまうだろう。

（も……もし、ここで……はじまっちゃったら……）

立ったまま、水着の隙間から吹き出すおしっこ。

布地一枚など意味もないほどに、我慢に我慢を重ねてきたおしっこが噴き出して、ばしゃばしゃとはしたくない音を立ててまき散らされ、床に大きな水溜まりを作る。

そんな光景を、みんなに見られでもしたら。

ただでさえ気の弱い未果は、その場で死んでしまうかもしれないとまで思えた。

「だ、大丈夫、ですっ」

教師にもう一度言うと、未果はそろそろと歩き出した。できるだけ慎重に、膀胱に刺激を与えないように。

幸いな事に、プールの方で調子に乗った男子たちが派手に追いかけてくるのを始めてくれ、教師の注意もそちらを向く。

その間に未果はプールサイドを横切り、更衣室へ続く短い階段を昇る。

襲い来る尿意を堪え、今にも崩壊しそうな膀胱を必死でなだめながら。

……きい、ぱたん。

しゅるっ、しゅしゅるるる……

更衣室に入った途端、辛抱をなくした末果の股間は暴走を始めた。

「あ、あああっ」

突然洩れ始めたおしっこに、たまらず末果はしゃがみこんだ。朝から（正確には昨夜から）一度も排泄を許されず、耐えに耐えつづけたものの決壊は、快感となって美香の腰を砕く。

濡れた水着の下で、少女のスリットからはだらしなく隙間を広げ、ちろちろと熱い雫が漏れ出す。

きゅうんと切なげに収縮を繰り返す幼い排泄孔から、じゅじゅと音を立てておしっこが噴き出した。垂れ落ちる水滴が徐々に激しく、量を増してゆく。

「あ……はあ……んっ」

十分にプールの水を吸っていた水着の股布は、わずかでもそれを吸い取ってくれることはなかった。素通しになった少女のおしっこが、ばしゃしゃと濡れたタイルに落ちてゆく。

「だめっ、だめえっ！！ 出ちゃう、出ちゃうっ……」

しゅるしゅる、じゅじゅじゅうう

しゃがんだまま、末果は腰を揺すって、なんとか決壊をくいとめようと括約筋に渾身の力をこめ、排泄孔を塞ごうとする。

「だめだよお……ちゃんと、ちゃんとおトイレで、しなきゃ……っ」

がまん、がまんっ、がまんだ……っ」

潔癖な少女の性格が、本来するべきではない場所での排泄を押しとどめる。ぐぐぐぎゅぎゅうと立てたかかるとに股間を押し付けて、末果はぎりぎりのところでおしっこの反乱に勝利した。それでも、タイルの上にははっきり水をこぼしたような水たまりが広がっていく。

自分のしてしまった“お漏らし”に、末果は耳まで赤くなる。

水たまりは少し傾斜の付いたタイルの上を進んで、小さな排水溝に流れ込んでいった。

ちょろろ、と水音を立てて排水溝に吸い込まれてゆくおしっこに思わず目を奪われてしまい、末果の下腹部できゅうんっ、と膀胱が切なげに収縮する。

（おしっこ……このまましちゃったら、気持ちいいんだろうな……ぷしゅーって……我慢、してたから、すごくいっぱい……） 再び緩み始めた水門と、高まる気配を覗かせる尿意。

自分がとても恥ずかしい事を考えていたことに気付いて、末果は慌てて首を振る。

（ダメ！！ そんなの……いけないよ。いけないコトだよ。考えちゃだめっ）

おしっこは恥ずかしいことだから、誰にも見られないようにこっそりおトイレで済ますもの。小さいころからそうつけられた末果には、トイレ以外での場所で放尿した経験などない。

11歳の生涯の中で、どれだけ差し迫ったピンチの時でも、茂みや草むらにしゃがみこむ事などせず、前を押さえて下着をひっぱり上げ、足をばたばたと踏み鳴らしてトイレが開くのを待ってきたのだ。

……ほんの少しだけ失敗して、下着に染みを作ってしまうことも何度もあったのだが。

けれど、今日はもう限界だった。

今まで、こんなにおしっこを我慢し続けたことはない。こんなにおしっこを漏らしてしまったこともない。それでも膀胱のなかに蓄えられたおしっこの量からすれば、まだまだちょっとこぼしたくらいのものだ。固く石のようにパンパンに張り詰めた下腹部は、わずかな刺激に反応して未果に恥ずかしい排泄の姿勢を要求し続ける。

みんなの声は遠い。まだ授業の時間は残っているし、一番近いトイレまでだってまだ30mはある。

「……………」

荒くなった息が、更衣室の中に満ちてゆく。おしっこに急き立てられ、ぼうつとなった頭で、未果は11年の生涯の中で最も恥ずかしいイケナイ決心をしようとしていた。

つまり、

おなかの中いっぱい詰まったおしっこを我慢して、未果はしゃがみ込んだ姿勢のまま歩きだす。あひるのようによちよちとタイルの上を進む。一步ごとに脚がじんじん痺れ、これから未果のしようとしている事を喜ぶように、きゅうんと膀胱が収縮する。

もじもじと膝をこすり合わせ、耳まで真っ赤になりながら、彼女は網のかかった排水溝の上にゆっくりと腰を下ろしていった。(……おしっこ、するんだ……。みんなが着替えるところで、これからあたし、おしっこしちゃうんだ……。やっぱり、やだよ……。恥ずかしいよおっ……

……匂いとか、音とか……聞こえちゃうかも……。っ。

でも、もうだめ、ガマンできない……。っ。おしっこ、でちゃうっ……。着替えるのにも時間かかるし……。急がないと……。ほかに誰か、来ちゃうからっ)

それは、潔癖な未果がはじめてトイレではない場所で排泄をするための、精一杯の言い訳だった。そっと水着の股布に指を掛けると、ぐいっと引っ張って横にずらす。

あらわになった未果の女の子。まだつるつるですべすべの、細い縦筋一本のあそこが、ひくひくと恥ずかしいガマンの欲求の動きをして排泄を促す。

(し、ちゃうんだっ。あたし、おしっこ……。こんな、とこで……

でもしょうがない…よね……。もう、ガマンしたくても……。勝手に…でちゃうんだもんっ……)

言い訳を繰り返しながら、水着の股布をずらし、誰にも見せたことのない場所を空気に晒して、未果は最後の時に備えて準備をはじめた。

ぷく、と高まる内圧が未果のスリットを内側から押しあげる。

体の奥で熱い奔流が震え、きゅうと膀胱が縮まって未果に激しく尿意を訴える。

長い間無理に我慢していたせいか、じくんと排泄孔に痛みが滲んだ。未果は大きく息を吐き、お腹にぐっと力を入れて腰を前に突き出す。

一気に整った排泄の体勢。じゅんっ、と一気におしっこが出口に向かって殺到する。

じゅっ、しゅるしゅるしゅるるっ

女の子の短い尿道を突き抜けて、未果のおしっこが恥ずかしい音を立て始めた。

我慢に我慢を重ね、朝から一度もトイレにいかず耐え続けていた未果の膀胱。限界まで溜め込まれていた、未果の熱いほとば

しりが殺到してぞくとした痛みがおしっこに走る。

ちよちよ、と吹き出していたおしっこが、本格的な排泄に変わろうとした、まさにその瞬間。

「あー、漏れちゃうっ、早くはやくっ！！」

「待ってよー」

(！！！！)

どやどやと更衣室に入ってくるクラスメイト達の声に、未果は飛び上がりそうになった。

激しく心臓が鼓動を打ち鳴らし、たった今まで自分のしようとしていた事を未果に思い出させる。羞恥に耳まで赤くなりながら、未果は慌てて水着の股布を離し、立ち上がった。

(あだめえっ)

けれど、外側だけ取り繕っても、女の子の身体はおしっこを容易く途中で止められるようには出来ていない。いきなり排泄を中断されて、行き場をなくしてしまったおしっこは未果の意思に反してじゅじゅじゅじゅと洩れて、水着の内側で跳ね返って音を立てる。おしっこの重みが、未果の抵抗もむなしく水着の外側に浸透してゆく。

(やああっ！！ 止まって、止まってえっ！！)

クラスメイトの前でおしっこをお漏らししながら、未果はパニックになって両手で水着の股間を握り締めた。

じゅわっと広がった熱い雫が指の間からぽたぽたとこぼれ、床に滴る。

バレる。気付かれる。おしっこで両手を汚しながら、未果は必死で足を擦り合わせ、つま先でタイルを叩きながらも『別になんでもないよ』を装おうとした。

きい、とドアが開き、更衣室に入ってきたクラスメイト達は、みんな制服を着ていた。

今日は女の子の理由でプールには入れなかった子達だ。

「あ、未果ちゃん。どうしたの？」

「え、えっと、」

もじもじと足踏みを繰り返し、身体をくねくねとよじり、おしっこガマンのダンスを踊りながら、未果は言い訳を考える。

もし、更衣室でおしっこをしていたなんて、知られでもしたら。

(そんなの、わたし……死んじゃう……っ)

「あー、未果ちゃんもトイレ？」

「ちっちがうよっ」

トイレ。おしっこ。その単語に反応して、無意識に腰が震える。気付かれたかもしれない、という意識も今は未果の思考の十分の一も占めていない。漏れ続けるおしっこを我慢するのだけで精一杯だ。

また、じゅじゅじゅ、と溢れ出したおしっこが未果の足を伝って落ちてゆく。

「違うよ。さっき須崎さん保健室行くて言ってたもん」

「えー、大丈夫？」

「う、うん」

蒼白になりながらクラスメイトと受け答えをし、未果は胸中で絶叫していた。

(でちゃうっ！！ おしっこでちゃうよっ！！！！)

未果の膀胱は限界近くまで膨れ上がり、幼い下腹部は触れられただけではじけてしまいそうなほどだ。

身悶える少女の唇は小さく開閉し、水着に食い込む指がおしっこに汚れる。その刺激も尿意を高め、熱い奔流が出口を求め、未果のお腹の中で暴れ回る。

小さなスリットから少しずつこぼれ出している熱い滴が、否が応でも未果にお漏らしの屈辱感を実感させた。

きゅううんっ……

重苦しいような、股間を貫く鈍い痛み。

怒涛の尿意の大波に、未果はしゃがみ込んでしまった。腰が引けているのとは違い、抑えるもののなくなった尿道口に再び熱い滴が流れ込む。

「はうっ……！！」

みんなの見ている前で放尿——いや、『オモラシ』してしまう恐怖に、未果は目の前が真っ白になった。

我慢できずに噴き出すおしっこは、まるで滝のように進み、床に飛び散ってその色と匂いですぐに未果を恥辱の底に叩き込むだろう。そんな光景すら、ほんの気の緩みで実際のものとなるのだ。

さっきから立ったりしゃがんだりを繰り返す未果の様子が気になったのか、表に向かっていたクラスメイトの一人が足を止め、声を掛けてくる。

「どうしたの？」

「べ……別になんでもないよ……」

「ちょっと、足が痛いかなって……」

必死に言い訳を繰り返す未果。タイルにはもうごまかしのきかないくらいに水滴が滴っている。匂いに気付かれたらそれでおしまいだ。

「だいじょうぶ？ 先生呼んでこようか？」

その言葉に、未果は凍り付いた。

ここでバレルのでも死んでしまいたく成る程なのに、もし先生に見られたら。さっきからずうっと、未果がずっとおしっこを我慢していたことが分かってしまうだろう。

もしそうでなくても、これ以上トイレに行けなかったら、絶対に我慢できない。

「平気……だよ」

がくがくと震える膝をかばい、起き上がって、未果は言ってみせた。笑顔の表情が引き攣り、不自然に歪む。

クラスメイトはなおもしばらく不安げな顔をしていたが、やがて彼女の方でも我慢ができなくなったのか、

「ん、じゃあねっ」

と手を上げて、外に駆け出していった。

安堵の息と共に、未果は両手で股間をこね回す。幼稚園の子だってしないような、『まま、おしっこー』のポーズだ。

（ああああ……わたしもおしっこしたい……）

けれど、どんなに気が逸っても今の未果には走る余裕すら残されていない。そんな事をしたら、三步も持たず地面をびしゃびしゃに汚してしまうだろう。

焦る気持ちを抑えて、壁に手をついて、そろそろと更衣室の外に向かおうとした所で。

未果は、そのことに気付いてしまった。

「ねー、早く変わってよーっ」

「仕方ないじゃん、工事中なんだからさー」

「あー、もうあたしがマンできないかもー」

「ちょっと、漏らさないでよ？ あはは」

表で続けられるクラスメイトのたちの会話。

(え……)

それは、あまりに残酷な宣誓だった。

プール横のトイレは、改装工事の為に個室一つを除いて使用禁止になっていたのである。

つまり、彼女達は今、トイレの前で並んで順番待ちをしている。

そして未果は今、『おしっこなんていきたくない』と、彼女達の前で言っているのだ。

(うそ……おしっこ、できない……の？)

女の子のトイレは長いし、『女の子の日』なのだ。彼女達が順番に用を足して戻ってくるまで、何分もかかるだろう。今の切羽詰ったお腹ではそれまで待っていることなんてとてもできそうになかったし、もし我慢できたとしても、ずっとここにいた事で、様子がおかしかったのはおしっこを我慢していたからだと気付かれてしまうだろう。

訳を話せば、順番待ちなどしないで先に入れてくれるかもしれない。

けれど、調子の悪いプールのトイレで、外には4人のクラスメイト。ドア一枚隔てても未果ががまんしていたおしっこは便器にぶつかって立てる激しい音が聞こえてしまうに違いない。未果にとって、小さな身体で懸命に我慢してきた大量のおしっこの音を聞かせるのは、死にそうになるほど恥ずかしいことだった。

女の子がおしっこを我慢しているなんてことは、とっても恥ずかしいことなのだ。

まして、トイレの調子が悪いから、音消しもできないかもしれない。

未果の目の前が真っ暗になった。

(そんなん……トイレ……おトイレ、そこに、あるのにいつ)

もう更衣室の排水溝に排泄をするという考えも、吹き飛んでしまっていた。一度はした決心も、他のクラスメイトの歩く場所でおしっこをするなんてことは、決してしてはならないという厳格なモラルに打ちのめされてしまっている。

そうなると、一番近いトイレは校舎の中だ。行くには、どうしても校庭を横切って階段を昇らなければいけない。

さっきのみんなは制服を着ていたからいいけれど、未果はまだ水着のままだった。このまま廊下や校庭を歩いたら、どんなことになるか。

——そもそも、プールのトイレが壊れていて、そこを切羽詰った様子で未果が水着のまま歩いたりすれば、それは全身で『わたしはトイレに行きたいんです』と主張しているようなものだ。

(き、着替えなきゃ……っ)

それは、とてつもなく悲壮な決意だった。

排泄を途中で止めた事で、膀胱は収縮を始めおしっこは以前にも増して激しく暴れまわっている。わずかに足を動かすだけでも辛いのに、水着を脱いで股間の圧迫を失ってしまったら。ぱんつを穿くの、スカートを穿くの、足を大きく上げなければならない。

けれど、

未果は、ぐっと奥歯を噛み締めて水着の肩紐に手をかける。

尿意を我慢したまま、水に濡れた水着を脱ぐのは至難の技だった。下腹部に圧力をかけないよう、そっと、慎重に体から布地をはがしてゆく。

（ああ……おしっこ……おしっこしたいっ……！！

がまんっ……がまんっ……）

ぶるっ、と足が震え、またわずかに未果はお漏らしをしてしまった。もう何度目になるのだろう。ずいぶんオモラシを繰り返したはずなのに、尿意は収まるどころか高まる一方だ。

水を吸い切った水着は余分な水を吸収してはくれず、水滴は筋になって足を伝う。

また大きな波を乗り切った未果は、足に絡み付く水着を下半身から抜き取った。股布を失い、迫り来る尿意に今にも屈しそうになる未果の股間がむき出しになる。

「あ……は……う……っ」

（でちゃうっ……でちゃううっ……！！）

ぷしゅるっ。

一切の拘束を失った股間は、あっという間に尿意に占領された。

再び小さな排泄が起こり、未果の足元にぼたぼたと雫が落ちる。我慢しているのに、これ異常ないくらい必死になって苦しんでいるのに、未果の排泄孔はおしっこを撒き散らしている。

それがどうしてもなく惨めで、情けなくて、死んでしまいそうに恥ずかしい。

しゅしゅしゅっ。しゅううう……

「……だ……めえ……」

必死に腰を揺すり、こぼれ落ちるおしっこを止めようとする未果。

涙ぐましいほどの努力で、最後の時をほんの少しだけ先延ばしにする。どうにかダムが決壊は免れ、未果は震える手で慎重に慎重にタオルで身体を拭い、着替えを進めてゆく。

制服のブラウスに袖を通して、もどかしいままにボタンを止めてゆく。

（ぱんっ、どうしよう……）

もう、おしっこを完全に止めておくのは無理だと未果にも理解できていた。

ちよっとずつ漏らしながらも、ガマンを続けるしか方法はない。そうなるとぱんっを穿いてもすぐにオモラシになってしまう。

（あ、あ、あ、だ、ダメっ）

きゅうんっ、とおしっこが出口に殺到する。

まだ着替えは全然途中。下半身は丸裸だ。スカートを穿くには足を上げなければならない。

それがもう、無理だった。

足を開いたら、おしっこははじまってしまう。何秒に一回のペースで迫ってくる尿意に悶えながら、未果は剥き出しのおしりをぎゅっとおさえた。

来年は中学生にもなる女の子が、頭の中をおしっこで一杯にして、足を小刻みにく震わせている。
「どうしようっ……おしっこ、したいっ。したいよお……ああっ、おしっこ、おしっこお……っ」
普段口にすることなど絶対にはない恥ずかしい単語が、小さなつぶやきになって未果の唇から漏れる。

ぶしゅっ、ぱたぱたたっ

過剰に摂りすぎた水分は外に出される……それは生命活動の基本である。
だと言うのに未果のしているのは、まったく不自然極まりないことだった。
どれだけ我慢をしても、膀胱の中を満たすおしっこはなくなりはくれない。むしろ未果の尿意に引かれ、その量はどんどん増していく。

しゅるる、しゅうう、しよしよしよ……

その間にも、未果が摂った水分は、体中を巡る長い旅を終えて未果の膀胱に帰ってくる。
小さな体がぶるぶると震える。熱い雫をしたたらせる丸いおしりは、内側からあふれ出しそうになるおしっこに耐え切れずにひくひくと何度も地面に押し付けられた。
完全な決壊だけは避けると、未果は歯を食いしばってまたそろそろと脚を動かし始めた。
その小さな体で、未果は次々と襲い来る欲求に必死になって耐えている。彼女の膀胱には、普通では考えられないほどのおしっこが今にもあふれそうにぱんぱんに詰まっているというのに。

ちゅるっ、ちゅるるっ。

「あうっ、またっ……」

じんわりと股間に暖かいものが広がる。
まだ年端も行かない少女に排泄を途中で止めることはほぼ不可能であつたし、今日の冷え込んだ曇り空、しかもプールで冷えた身体という悪条件は未果の体の中の水分をどんどんと一か所に集めてしまう。
おなかの奥で作られたおしっこは、もう満杯の膀胱に容赦なく詰め込まれていく。

「お願いっ……もう、っ、でないで、もうでないでえっ」

涙声での懇願。しかし彼女の肉体は、本人の意思を無視し始めていた。強烈な尿意が立て続けにむき出しの股間を襲う。スカートを放り出して股間を握り締めた未果の両手の指の間から、ちろちろと熱い雫がにじみ始めている。
今の未果にとって、おしっこが一気に噴出しないための努力以外は、何の意味もないものだった。
両手の指がしきりに小さなスリットをもみしだく。

ぶしゅつ。ぶしゅうつ、ぴちゃぴちゃぴちゃ……

未果の足の間に、熱い飛沫が舞い上がる。

「や……ダメ……だめっ……」

（でないで……でないでえっ……！！）

悲鳴を上げる未果。けれど一度排泄を始めてしまった肉体はもはや制動の利くものではなかった。

半日以上かけて、未果が我慢に我慢を重ねてきた成果が崩壊してゆく。

ぶしゅうつ……ぶしゅつ……しよろよろろつ

（こ……こんなとこで……はじまっちゃうつ……イヤあっ！！）

未果は氣力を振り絞って立ち上がった。

下半身丸出しのまま、最後の数歩を、遥か遠いトイレに向かって全力疾走。

それは、地獄への行進だった。

ぶしゅるるるつ、ぶしゅうつ、ちゃばちゃばちゃばばつ

「っっ！！」

更衣室の出口を飛び出した瞬間、今度こそはっきりと、おしっこが吹き出すのが解る。もう言い逃れの無い、小学五年生の女の子の放尿が始まっていた。

乾いた地面に激しく黒い染みがぶちまけられ、ホースで水を撒いたような音が響く。

最後の放尿から約12時間。未果の体内で余った水分を閉じ込め切れなくなった膀胱が収縮を始め、おしっこが吹き出してゆく。

（ダメ、だめでちゃダメダメおしっこおしっこトイレおしっこガマンガマンだおしっこおしっこ、おといれええっ！！）

股間を握り締め、未果はよろよろと走る。吹き出したおしっこが手のひらではじけ、足元をばしゃばしゃと濡らしてゆく。

「あー、お姉ちゃんおしっこもらしてるー！！」

どこかで、小さな下級生の声が聞こえた。

限界の限界、おなかをぱんぱんにしてガマンしていた、お腹いっぱいのおしっこが恐ろしい勢いで飛び出す。

「やだ、違う、ちがうのつ、おしっこ、おといれっ……」

ぶしゅっ！！　ぶしゅー－－－－－－－－－っ！！！！

じゃばじゃばば、じゅじゅじゅしゅるしゅるるううっ！！

滝のように、ほとんど色もないおしっこが未果の股間から吹き出した。

足とお尻をつたって、今までの我慢の証がこぼれ落ちる。パニックのなっておしっこを押さえ込もうとぎゅっと股間を握り締めた未果

の指の間から、噴水のように四方八方に飛び散ってゆく。

少女の悲鳴はなおも続き、

校庭に、黒い染みが広がっていった……

(初出：学校で、おしっこ我慢のいじめ 18-26 2004/03/07)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: デパートを巡るお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 09:19:46

BODY:

「もう、早くしなさいっ」

「あ、ま、待ってえっ……」

舞子おばさんに手を引かれて、香苗は必死の声を上げる。

香苗の母よりも4歳年上の姉で、いまだ独身である舞子は少し潔癖症なところがあり、周囲にもそれを強制する事が多い。そのため、親戚一同を含め、まだ小学4年の香苗もあまり舞子のことを快く思っていない。

お母さんのお姉さんに当たる人で、尖った眼鏡をしていつも怒っている怖いおばさん——それが香苗の舞子に対する印象だった。

「アンタの服買いに来たんでしょ。だったら世話焼かせるんじゃないわよ。もう……っ」

香苗の通う私学の制服は、電車で4駅の大きなデパートでしか仕立てられていない。そのサイズを合わせに来る必要があったのだが、仕事の都合で両親は時間が取れなかったのである。

そのため、香苗は舞子に連れられてここを訪れていたのだが——舞子はどうやら、勝手な都合で自分の休日をふいにされたことが酷く気に入らないようだった。普段からきつい口調はいっそう激しいものとなり、その口からは香苗を急かす言葉しか出てこない。

そして、人身事故で電車が立ち往生という最悪のイベントにより、1時間近くも予定が遅れてしまったことが彼女のヒステリーにいつその拍車をかけた。

(うう……く、ふうう……)

おなかにじんと響く衝撃が、下腹部にたまったおしっこを嫌でも意識させる。

(だめ、だめ……引っ張らないでえっ……もう、もう、でちゃうよおっ……)

香苗の爪先はひっきりなしに地面を叩き、不自然に歩幅を刻んでいる。少女の表情は苦痛に歪み、青ざめたほほをつつ、と汗が伝う。

(おしっこ、おしっこ……おしっこでちゃううっ……)

遅れた電車のせいで舞子はかなり苛立っており、のろのろと歩く香苗を何度も急き立てる。けれど小さなお腹を大量のおしっこに圧迫されて、香苗の歩みは遅々として進まない。香苗が電車の中で感じ始めた尿意は、2時間を経て膨大なものとなり、痺れるような排泄孔はじくんじくんと脈動している。ほんの少しでも気を抜けば、香苗は身体じゅうから集められた大量のおしっこを撒き散らしてしまうだろう。

お尻を突き出し、ひざを揃えて軽く曲げる。高まる尿意を必死に堪えながら、香苗はほんとと先を急ごうとする舞子を追いかけられなかった。それでも香苗のおしっこは、少女に恥ずかしい排泄を我慢するポーズを強制してくる。

「ああもう、何してるのっ」

波のように引いては寄せてくる尿意に耐えようと中腰になりかけたところで、香苗は舞子に手を引かれた。バランスを崩しかけ伸ばした足ががごとんと地面にぶつかって、衝撃はじいんと膀胱にまで響いてくる。

(うあ……っ、くうっ……)

今すぐしゃがみ込んでぎゅうぎゅうと股間を押さえていなければならないような切羽詰った尿意だ。それでも香苗は握られた舞子の手を振り解くことができず、我慢の極限のまま無理矢理歩かせらせる。

「ほら、ちゃんと前を見なさい！！ もう、恥ずかしいわねえ」

「あう……っ、だ、だめえっ……」

そんな事を言われたって、限界ぎりぎりまで我慢しているのだ。まっすぐ歩けるわけがない。

ぐっ、と下腹に力を入れて、こみ上げてくる尿意を堪える。足をぴたりと閉じ合わせる。そうすると自然に腰が引けてしまい、香苗は情けない内股のまま、アヒルのようによちよちと歩くしかない。そろそろと進めているはずの歩みも、脚の付け根に響く振動はそ

大きな声で怒鳴られて、香苗は顔から火がでそうな羞恥を覚えながら叫んだ。もう、尿意を悟られないように我慢する余裕もな

い。くねくねと腰をくねらせる『もうガマンできない』の姿勢で懇願する。

「なによ……いきたいの、おトイレ！？」

咎めるような舞子の返事は、それだけで香苗のデリケートな羞恥心を無体なほどに刺激する。ひくつ、と喉にこみ上げてきた涙の気配に、香苗は口をひらく事もできず、だだこくこくと頷くしかない。

舞子はわざとらしく溜息をついて見せると、香苗を冷たい視線で見下ろした。

「もお、恥ずかしいわね……おトイレおトイレ、そんな大きな声で」

（こ、声おおきいの、お婆さんのほうだよ……）

そんな抗弁は、もちろん言葉にはできない。一旦舞子の機嫌を損ねてしまえば、どんな道理も通らなくなってしまうことを香苗は知っていた。だから精一杯の我慢を続けながら、じつとわずかな希望にすがって舞子の言葉を待つ。

けれど舞子は、二三度辺りを眺めただけであっさり結論を下した。

「ないじゃない、トイレなんて……我慢しなさい」

「え、ええっ！？」

まさか。こんなにおしっこを我慢しているのに、そんな事を言われるなんて。あまりのショックに香苗の目の前が真っ暗になる。

確かにこのデパートのこの階には男子トイレしかないけれど、一階分だけ階段を上るか降りるかすればそこにトイレがあるのに。そんなことも解ってくれないのだろうか、と香苗は胸の中で悲鳴をあげた。

「昨日の夜にあんなにジュースガブガブ飲むからよ……あんたが意地汚いからいけないの。自業自得よっ。我慢しなさい。もう子供じゃないんだから」

「そ、そんなあつ」

（む、無理だよおっ……もう、でちゃう、でちゃうもんっ……）

スカートの上から股間に手が伸びる。もう尿意は香苗の制御できる限界ぎりぎりまで達していて、今すぐにでも恥も外聞もかなぐりすてて両手の手のひらでそこを押さえつけ指でぐぐぐぎゅううっと握り締めたいほどののだ。

「うるさいわね、時間が無いて行ってるでしょ。ほら、早く来なさいっ」

「ああ、ダメ、ダメええっ……」

すっかり腰の引けたままの、情けない姿。よちよちと内股で舞子お婆さんに引きずられながら、香苗は括約筋を渾身の力で締めつけ、おしっこを我慢する。もはや香苗の女の子としての意識の90%以上は、今にも漏れそうなおしっこを我慢することに割かれていて、それ以外のことなんて気にしている余裕は全然ない。

ふらふら定まらない足取りでしがみついた香苗に、舞子お婆さんは痼癪を起こしてさらに甲高く叫んだ。

「なにしてんの、そんな格好で！！ ああもう、恥ずかしいじゃないのすぐにやめなさいっ！！ もう4年生でしょ！！」

「だって、だってっ……」

泣きそうになりながら香苗は小刻みに足を動かし、スカートの裾を引っ張る。女の子のお腹のなかにある、秘密のおしっこの入れ物はもう縁のギリギリまで一杯で、じっとしているだけで今にもおしっこが始まってしまいそうなのだ。

さっきほんの少しだけちびってしまった分のおしっこがパンツに拡がって、じわりと熱を奪い始めている。このままお腹を冷やしてしまえばますます尿意はつり、香苗の必死の我慢も遠からず踏みにじられてしまう事は間違いなかった。

「お願い……おトイレ、おトイレっ……」

もうそれだけしか繰り返せない。トイレ。おしっこ。排泄。高まる尿意とその我慢に関連する単語が香苗の脳裏を埋め尽くし、思

考能力を奪ってしまう。

股間を押さえて袖を引っ張り、懇願する香苗に、舞子は根負けしたように息を吐いた。

「もう、本っ当にしょうがないわねえ、だらしないんだから……誰に似たのかしら」

（そんなの、どうだっていいよっ……）

でも。絶対に、おばさんなんかに似てないし似たくない。香苗は腰をよじりながら、一生懸命におしっこに抵抗する。

「……早く行ってきなさい。急いでね」

「う、うんっ」

まだ苛立ちの残る舞子の声に、震える返事を押し殺し、香苗はできるかぎりの早足で階段に向けて歩き始めた。

尿意を我慢しながら階段を降りるのは、地獄のような苦しみだった。1分1秒を争ってトイレに急ぐ香苗に、一階下の婦人用トイレまでの道のりは想像を絶する苦行であった。かたん、と靴底が階段を叩くたびにおなかに響く衝撃に耐え、踊り場の手摺にしがみついては背筋をピンと伸ばし、腿を大きく行進のように上げて腰をよじり、階段の真ん中でしゃがみこんではぐいぐいと踵に股間を押し付け、がまん、がまん、もうすぐトイレ、トイレと繰り返す。

けれど。

「う、うそ……」

階段の下、やっとの思いで辿りついた解放区。婦人用トイレに詰めかける長蛇の列に、香苗は声を失ってしまった。

何度目を擦っても、ぎっしりと人の列は続いている。香苗は知らないことだったが、実は今日はこのデパートあがての創業バーゲンセールで、大々的に打たれた広告を目当てに大勢の客が買い物に詰めかけていたのだ。平日の午後となれば当然、男女比も大きく女性に傾いて、限られた数しかないトイレには長蛇の列ができる。

それがこの結果であった。

「うう……んああっ……」

もうすぐ用が足せる。膀胱をぱんぱんのたっぷんたっぷんにしているおしっこをめいっぱい外に出して、心の底からすっきりできる。そう思っていた期待が完全に裏切られ、尿意は強烈に激しさを増した。ぎりぎりと限界に向かい始めた尿意を必死に堪えながら、香苗は息を荒げながらおしっこ我慢のダンスを再開する。

「んんっ……あううっ……ふう……うっ……」

19、20、21、22……数えるだけで頭がくらくらす人数の列を作る、香苗の母と同年代の女性達。彼女達の何人かは香苗を一瞥しもあったが、その大半は列の縮みだけに注目していた。それなりに切羽詰った列の中、香苗を間に入れてくれそうな可能性は限りなく薄い。

「うあ、……ううっ……く、ふあっ……はああっ……」

（なんで、なんで、あたし、おしっこ、おしっこ、こんなにしたいのにっ……もうでちゃうのにっ……がまん、並ばなきゃ、ダメなのっ……？！）

尿意の度合いで言うなら自分は間違いなくこの中で一番だろうと、香苗には言える自信があった。それでも何十人と順番待ちをしなければ排泄も済ますことができない事実、少女の心は絶望しかける。

ひくんっ、じゅうっ…しゅるる……

(と、トイレ、トイレトイレっ……！！ おトイレいきたい、おしっこ、おしっこしたい、おしっこするうっ)

またもだらしなく排泄孔が緩み、下着におしっこを滲ませる。

半分パニックになりかけた頭のまま、順番待ちも無視してトイレの個室に突撃しようかという考えまでが香苗の脳裏をよぎる。

こうしている間にも、少女の体内を巡る水分は濾過され膀胱に集まり、自律神経は不用になった水分の一斉排出を命じつつけている。大自然の摂理に少女が無謀にも対抗できているのは、女の子のプライドと羞恥心のためだけだ。

ふうー、ふうー、と息を付きながら、香苗は壁にお尻を押し付けて足を交互に持ち上げ、爪先の先端で地面を叩く。まるで体操をしているような大げさな動作は、恐らく誰が見ても香苗がおしっこを我慢し続けていることを理解してしまうだろう。おなかに限界までおしっこを溜め込み、トイレを求めて我慢を繰り返す、舞子が目見れば烈火のごとく怒りかねないはしたない動作。だがもはや香苗に外聞を気にする余裕も理性も粗方残っていない。

(どうしよう、どうしようっ)

ぎゅううん、ごぼ、ごぼぽっ……

じゅじゅっ、しゅう……

「いやあっ……」

またも膀胱が収縮して、香苗の下着にはまたじわりっ、と染みが広がった。

もうほとんど余裕はない。最後の救いを求めるように巡らせた香苗の視線が、ちらり、と隣の紳士用トイレを捉えた。

こちらは長蛇の列の婦人用とは対照的にがらがらで、誰かが待っている様子もない。

トイレ。おしっこをする場所。今飛びこめばそのまま、香苗を苦しめているものを全部出してしまえる。そんな焼けつくような誘惑に駆られ、香苗はそこから外すべき視線を動かすことができなかった。

青いタイルの入り口は、格好だけは婦人用と違いはない。じっと眺めていると、用を済ませて出てきた男の子と視線が合ってしまう、香苗は慌てて視線を反らす。

(でも、でも、あっちは……そのっ……お、おとこの子の……する方だしっ……)

いままで香苗に決壊を堪えさせてきた女の子のプライドが警鐘を鳴らし、羞恥心がちくちくと少女の心に突き刺さる。

けれど、どう考えても香苗にはこの長い列を我慢して待っているなんてできそうになかった。ただでさえ、トイレを目の前にしてますますしたくなってくるおしっこを我慢するのに必死なのに。その上礼儀正しく列を作って並ぶなんてもってのほかだ、

まだ小学校に上がる前、一度だけお父さんに連れられて入ったことのある紳士用トイレ。確かに作りは全然違うけれど、あそこにならば香苗が用を足せる個室はあったはずだ。女の子が恥ずかしいおしっこを済ますための、誰にも知られない秘密の部屋。そこに飛びこんで、スカートを足首まで引きずり下ろして、剥き出しになった排泄孔から我慢に我慢を重ねて必死に耐えてきたものを思いっきり吹き出させる。

それは、この上もなく甘美な快感になるかもしれない。そう思ってしまった香苗の熱い吐息とともに、下半身は理性のコントロールの離れてぶるりと大きく震え、またじゅじゅじゅっ、とだらしなくオモラシを繰り返す。

「うっ……くうっ……」

だが、舞子に気付かれたら、絶対にそんなことは許してもらえない。女の子が男の子のトイレに入っておしっこするなんて、絶対に絶対にあっちゃいけない事なのだと眉を吊り上げ猛烈に怒る舞子の姿は容易に想像できる。

それももう香苗は四年生だ。おしっこを我慢できなかったからなんて言い訳は通じるはずがないし、そもそもそんな恥ずかしいことは絶対にダメと、舞子おばさんは真っ赤になっておしおきするに違いない。

そんな思考が堂々巡りになって、香苗はその一步を踏み出せずにいた。

ほんの少しだけ勇気を出せば、そこで今も香苗を苦しめているおしっこを全部外に出すことができるのに。

脳裏をよぎる舞子のきつい叱責と表情、無遠慮に投げかけられる言葉。それに阻まれて、どうしても香苗は前に進むことができなかった。

だから、香苗はひざを擦り合わせ、もじもじと小刻みに足踏みしながら、婦人用トイレの列に並ぶ選択肢しか残されていなかった。

香苗の小さなお腹の中は、もう限界まで詰まったおしっこでぱんぱんに膨らんで、いつもはゆるゆるのスカートもちよっと苦しいくらいに張り詰めている。内臓を圧迫し鈍い痛みとともにじくん、じくんと段階的に高まってゆく尿意は、下着をぎゅううっとひっぱり上げていなければ我慢できないくらいだ。

それでも舞子の目が怖くて、香苗は精一杯、おしっこなんかとは無縁の『おしとやかなおんなのこ』の振りをしなければいけなかった。

どう見ても限界ぎりぎりの少女に、列の女性達も遠慮がちに視線を反らす中、粛々と列は進んでゆく。15分ほどが過ぎ、香苗は列の半ばほどまで進んでいた。もっとも当の香苗には列の進みは遅すぎるほど遅くて、気が狂いそうなくらいに長く感じられていたのだが。

ゆっくり、ゆっくり列は進む。

（はやく……はやくしてよおっ……）

くねくね、もじもじ、香苗の動きはどんどんと激しくなる。だが、どれだけ我慢を続けてもおしっこが消えるはずはない。むしろその量は増すばかりで、このままでは香苗に勝利などありえない。

それでも、最悪の事態を避けるためには我慢を続けるしかないのだ。

はあ、はあ、と俯き息を荒げる香苗の頬を、つう、と汗が伝い落ちる。

壁に手をつき、もう一方の手で下腹部を庇いながら、小刻みに我慢のリズムを刻む足でよろよろと前に進む。少しでも少しでも前に行けば、それだけ早くトイレに入れる。個室に飛び込んでおしっこをする以外のことが香苗には考えられなくなっていた。本来必要なドアを閉め、鍵を掛けて下着をおろすような余計な動作は既に香苗の頭からは抜け落ちている。そんなほんの数秒分の動作さえ、香苗の我慢の先には見えていない。

もし、今この瞬間、香苗の目の前でトイレの個室が開けば、彼女はそのまましゃがみ込んで下着が濡れるのも、好奇の視線に晒されるのも、激しい水流が水面を叩く音が周りに聞こえるのも構わず、おしっこを始めてしまっていたらう。

（トイレ、おしっこ、もうすぐ、あと19にん、19、じゅうきゅう、じゅうきゅううっ）

あと百数えたら、ひとりが出てきて列が先に進む。そう考えては何度も繰り返して、気を紛らわせる。そうして少し列が短くなればでももう一度百秒。次の百秒の先にこそおしっこができると信じて、香苗は歯を食いしばって我慢を続ける。

と。

「あー、すっきりしたー」

「列、長かったもんね……」

「ほんとほんと。もう漏れちゃうとこだったよ。すっごいっばい」

「あはは。音消してるのにすごかったもんねー」

すっきりした笑顔で、制服姿の少女が二人、トイレから姿を見せた。たったいま、思う存分に用を足してきたのだろう。談笑しながら隣を通り過ぎる彼女達達の無神経な会話に、香苗の膀胱はずうん、と重みを増す。

(あああ……っ……したいよ……わたしもおしっこしたいっ……)

自分とそう変わらない年代の少女達がたったいま個室で済ましてきた行為。制服姿の二人が思い思いの格好で大切な場所をあらわにして、我慢に我慢をしてきたおしっこをする瞬間、その光景。それを想像することは、まだ十分に長い列を並び、必死に尿意と戦わねばならない香苗には、少しばかり刺激が強すぎた。

排泄の欲求とその解放感を思い描き、香苗がふっと、意識を途切れさせた瞬間。

しゅる、しゅるるるっ、ぶしゅうっ、ぱたたっ……

不意にそれまでとは違う、はっきりした水音がフロアに響いた。何人かがぎょとして香苗の方を振り向く中、彼女は同時に激烈に高まった尿意に身悶えして唇を噛み締め足をよじっていた。それでも排泄孔が緩み溢れ出したおしっこが、今度こそ確実に、香苗の内腿を伝ってゆく。

デパートの床をぼた、ぼたと雫が垂れて、香苗の前後の列を作っていた女性が慌てて数歩を離れた。それは、本格的な排泄の前触れに十分な衝撃として、少女の羞恥心を打ち砕く。

(やあ、いやあああっ！！)

「つつ……！！」

力の抜ける膝の成すがまま、香苗はしゃがみ込んでしまった。濡れた下着の包む股間でじいん、じいん、と響く衝撃が恥骨から下腹部を貫いて背筋を駆け抜ける。ぎゅうっと膀胱が収縮して、香苗が懸命に耐え続けている恥ずかしいおしっこを残らず搾り出そうとする。

(ダメっ、ダメっ、もうすぐ、もうすぐ、おトイレ入れるんだからあつ……もうちょっとだけ、出ちゃダメえっ……、あと、あと、ごじゅうに、ごじゅういち、ごじゅうっ、よんじゅきゅうっ)

香苗は背中を走り抜ける尿意にがちがちと歯を食いしばる。スカートの上からぎゅぎゅっと股間を握り締めて、もう一方の手で下着をひっぱり上げる。ほんのわずかでも気を抜いたらたちまち排泄孔は全開になって、パンツの中とスカートををとおしっこでびしゃびしゃに濡らしてしまうだろう。恥も外聞も無く地面に撒き散らされたおしっこは、その量と匂いで香苗がこれまでどれだけの恥ずかしい我慢を続けてきたかをはっきり示してしまうに違いない。

ただならぬ様子の少女に周囲の視線が集中する。

列の途中で耐えきれずにしゃがみ込み、必死になって我慢を続ける少女を、周囲の女性達は動揺を隠せないままじっと見つめていた。声を掛けるものはない。そんな事をしてしまえば、事態はすぐに最悪の局面に至る可能性の方が高い。

「出ないで、出ないでえっ……」

小さく繰り返しながら、香苗は靴のかかとに股間を押し付け揺るように前後させる。外からなにかの圧力を加えていなければ、もう耐えきれないことは明白だった。

内腿に力を籠める少女の白い下着に指が喰いこみ、その周囲にははっきりと浮かぶ染みはじわりと拡がってゆく。すでに香苗はおしっこを我慢しているとは言えなかった。おしっこを“おチビリ”で済ますことができるか、言い訳のきかない“おモラシ”になってしまうかのギリギリの境界線。

ぼたり。ぼたり、と滴る雫が、本格的な排泄の予兆と香苗の堪えている尿意の激しさを語っている。

「はあ、はあ、はあ、あ……」

必死の綱引きは、またも寸前で香苗の勝利に終わった。少しでもおぼれたおしっこは香苗の下着をびしょりと濡らしていたが、香苗の胸中ではまだおしっこは失敗していない。ノーカウントだ。そもそもそんな些細な違いを気にしているほど香苗に余裕はなかった。おしっこの大半はまだ膀胱に残っていたし、まだ大人しくなってくれない尿意を我慢しながら、そろそろと香苗は立ち上がる。

（ならば、なきやっ……もうすぐっ、もうすぐトイレ、トイレっ）

はあー、はあーと息を落ちつけて見回せば、いつの間にか列は随分短くなっていて。香苗の並んでいた場所はもうトイレの入り口まで二人を挟むだけ。トイレの中にも列はあるが、個室までは5人もない。香苗は随分長い間、限界極限のおしっこの大津波と戦っていたのだ。

あとほんの少し我慢を続けさえすれば、お腹の中にぱんぱんに詰まったおしっこを全部外に出せる。こころゆくまでおしっこができて、この苦しみから解放される。香苗の心にほんの少しだけ、希望が沸いた。

けれど、

「ああ——いたわね！！ 一体どうしたの、いつまで待たせるの！！ 帰ってこないで！！ そんなところで、終わったのなら早く戻ってこなきゃダメじゃないの——！！」

突然、きんきんした声が響いて香苗ははっと顔を上げた。

目を吊り上げた舞子が彼女の前に仁王立ちになっている。尖った瞳に急角度の眉。唇は不機嫌に真一文字。最高潮となった苛立ちを隠そうとせず、彼女は香苗の手を掴んだ。

「なにしてるの、もう終わったんなら早く戻ってこなきゃダメじゃないのっ！！ 寄り道なんかして！！ 早く来なさいっ！！」

「え、あ、ああの、ま、待ってっ舞子おばさんっ」

「ぐずぐずしないのっ！！ さっきから何度も何度も何度も何度も時間が無いって言ってるのにあんたは……聞こえないの私のいつてることがっ！！ 返事しなさいっ！！ ほら、なにしてるのよちゃんと立ちなさいっ！！」

香苗の抗議は全く聞いてもらえなかった。それどころか、短くなった列と、さっきまでの我慢でそこからほんの少しだけ離れていた香苗を見て舞子は香苗がとくに用を足していたのだと勘違いしたらしい。全くの遠慮も容赦も無く香苗を引き摺り始める。

ぎゅうん、とねじれる下腹部と同時、膀胱で爆発した尿意が香苗を直撃した。

（っうううううっ！！！！）

「忙しいのよあたしは！！ こんな事で手間掛けさせないで！！」

親と子供ほど離れた香苗に向けられるには、あまりに幼稚で身勝手な文句を一方向的に叩き付け、舞子は香苗をトイレから遠ざけるように引きずってゆく。

もう、ほんの少し。個室まではあと二人。長い長い時間を耐え抜いて目の前に見えていた楽園から引き離される恐怖に、パニックになりそうな頭を必死に保ちながら香苗は舞子に抵抗する。

「ま、待って……待って……おばさん……っ」

「なに、どうしたの！！」

「え、えっと……」

びくん、舞子の鋭い質問に、香苗の鼻の奥がつんと熱くなる。じくん、じくんと時間を追うごとにどんどん強まってきている尿意に、香苗はひゅっ、と声を詰めた。

トイレ、まだ行けてないんです。

おしっこできてないんです。

たった一言、そう口にすればいいのに。

イライラとハイヒールの爪先を踏み鳴らし、並ぶ列をいまましそうに睨み付ける舞子お婆さんはこれ以上ないほどに不機嫌そうで、香苗は恐怖のあまり言葉を失ってしまった。もしもう一度並ばせて、などと言ったら、舞子はどれだけ怒るだろう。

香苗の喉が震えて、悲鳴を飲み込む。

「ああもう、しょうがないわね！！ 何でもないなら呼びとめるんじゃないのっ！！」

「あ……っ」

ささやかな抗議は無視されて。香苗はトイレを目の前にして少しもおしっこをできないまま、連れていかれてしまった。

「……いい？ 女の子が人前でおトイレを我慢するなんて、本当にはしたくないことなんですからね。それをいい歳してあんな風に。スカートまで触って。本当に恥ずかしいじゃない。もう二度と行けないわよ、あんなおトイレ」

鼻息も荒く、ぐいぐいと香苗の手を引きずる舞子。まるで、自分はそんな生理現象とは無縁だとでも言うように香苗に同意を強制する。

けれど、香苗は全然すっきりできていないのだ。香苗がトイレで出すことができたのは、僅かにパンツを汚した数滴だけ。香苗を苦しめるおしっこはそっくりそのまま、まだお腹の中に残っている。時間の経過と共にさっきよりもますます濃縮された尿意がじくん、と下腹部の重みを増し、香苗を責め立てる。ほんのわずかな刺激にも今にも破れてしまいそうだ。

もじもじと腰をよじって必死の内股で歩く香苗も、舞子の視界には入っていない。すっかり用は済んだと思いこんでいるようだ。「それに、出掛ける前にちゃんおトイレにいったおけばいいことじゃない。自分のことも自分でできないなんて、本当に恥ずかしいっ」（そんなあ……早くしなさいっていったの、お婆さんなのにつ……）

膀胱に詰めこまれた尿意がぎゅるぎゅると渦を巻いて、香苗はスカートの裾を固くつかんだ。じゅわっ、と排泄孔からにじんだおしっこが下着を汚す。

香苗はほとんど自分の意志では歩いていなかった。舞子に引きずられるようにして、ずりずりと床を滑り、どうにか転ばないように、おなかに刺激が伝わらないように、それだけを考え、実行していた。

今の香苗には、おしっこを我慢する以外のことはほとんど理解できない。罵声のように叩きつけられる舞子の叱責も、ほとんど耳には届いていなかった。

「ほら！！ なにぐずぐずしてるの。早く来なさいっ！！」

少し冷静になれば、香苗の様子がおかしいのは誰の目にも明白であった。膝は小刻みに震え、靴の中で脚の指がせわしく動き、時折きをつけをするようにぴんっ、と背筋を伸ばす。両足をばたつかせるような大げさな腳踏みや、膝を重ねるような大げさな動きこそないが、それこそが少女が限界を突破した尿意に必死に必死に耐えている証拠である。

もはや、香苗の膀胱は危険水域の遥か上である。絶え間なく渦を巻き、大波となって襲いかかる尿意に、少女の股間はいっ
爆発してもおかしくない。

「もう……どうしたの！！ 早くなさい！！」

「あ、ああうっ……」

だが、舞子はそんな香苗の異常に全く気付く様子もなく、香苗をぐいぐいと引きずってゆく。

（いや、いやあっ……ダメ、おしっこ、おしっこしたい……っ、どこでもいいから早くはやく、おしっこ、おしっこ、おトイレおトイレええ
ええっおトイレええっ！！）

ずくん、ずくん。まるで心臓の鼓動のように、沸き上がる尿意は天井知らずに高まってくる。すでに香苗の下半身は堪えきれない
おしっこの攻撃に痙攣のように震え、まっすぐ立っているのも難しい。身体の奥からやってくる下品な衝動に、幼い少女は全くの無
力だった。

震えの治まらない身体を抱いて、香苗はぎゅっと目をつぶる。

（ダメ、ダメ、ダメちがうの、ここは違うの、ちがうんだからあっ……）

そう。四角く区切られた狭い個室。カーテンに隔てられた喧騒。自分一人だけの場所。

女の子が周囲の視線を気にすることなく、大切なところを全開にするもっとも恥ずかしい姿勢をとって身体の中に溜め込んだもの
を解放することが許された、唯一の場所。

しゅうう、じゅる、じゅじゅじゅう……

勝手に排泄の準備を始める身体が、スカートの下、股間と下着の間に水音を立てる。足の間に左手を挟み、香苗は前後にぐ
りぐりと股間を押し付けて、崩壊の瞬間を辛うじて引き伸ばす。

（いけないんだよ、こんなところで、こんなところでしちゃダメ！！ おトイレじゃないのにおしっこしちゃダメっ！！ ううう……くうう
っ！！ ガマン、ガマン、ガマンしてっ、出ないの、おしっこなんか出ないんだからああっ……！！）

ついさっき。

香苗はそのトイレの目の前にいたのだ。あのまま並ぶことさえできていれば、もうとっくにトイレのタイルを踏んでただろう。いや、もう
個室に入って下着を下ろしていたかもしれない。激しい尿いを堪え、しゃがみ込んで、安堵の溜息と共に思う存分におしっこを白
い便器の中にぶち撒けていたかもしれない。

それはきっと、途方もないほどの快感で。香苗の排泄孔はだらしなく、その想像にじゅじゅじゅじゅうとおしっこを滲ませる。

もはやそれはオモラシと呼んでも差し支えない量だった。

少女の足はもう小さな体を支えるのが精一杯で、まるで動こうとはしてくれない。おなかの中いっぱい溜めこまれたおしっこタンク
を支える支柱にでもなったかのようだ。そう。この瞬間、真白香苗という少女は、おしっこを我慢するためだけの装置に過ぎなかった
かもしれない。

機械ならば、装置ならばどれだけいいだろう。

限界まで黙々と耐え、もう無理ならば壊れるしかない。

けれど、どれだけそう信じこもうとしても香苗はまだ10歳の潔癖な少女で、それゆえに『おしっこを我慢している恥ずかしい自
分』を頭の外に追い出すことができない。

(がまん、しなきゃ……っ)

浅く、早く、必死に息を繰り返し、猛烈な尿意の合間を掻い潜るように、香苗は必死に足を動かす。

はやく。はやく。舞子おばさんにトイレに行きたいと言わなければいけない。舞子はもうとっくに香苗はおしっこを済ませてきたと思っているはずだ。人身事故で長い時間足止めをくらい、ただでさえとても時間がかかって苛立っている舞子が、これ以上予定が遅ればどれほど怒るか。香苗には想像することもできなかった。

だから、今すぐにトイレに行かせてくれと頼むことはできない。

香苗は、“もうおしっこをしてきた”のだから。

舞子の言うことを聞いて、機嫌を取らなければいけなかった。

一度トイレにいったけれど、昨日いっぱいいっぱいジュースを飲んでしまったから、また行きたくなってしまったんだ——と。

香苗の頭はほとんど周りの景色を認識できていなかった。目に入るものが全部、おしっこをするための道具に見える。靴も、服も、じょうろも、ビニール袋や缶なんて見ているだけで悶えてしまう。花壇の植木も、おもちゃの人形も、クレヨンも、画用紙も、おもちゃもゲームも布団もなにもかも。何もかもがおしっこを受け止めてくれるトイレの代わりに思えてしまう。もはや理性を失い、獣と大差ない彼女を辛うじて繋ぎとめているのは、皮肉にも舞子に言われ続けた『おしとやかなおんなのこ』のイメージだった。

はしたない事はしない。おしっこをがまんしてもじもじしたり、お外や草むらで用を足したりしない。おしっこはきちんと、誰にも見られないようにこっそりとトイレで済ます。きれいでかわいいおんなのこ。

もし、今香苗の前に本物のトイレが口を開けて待っていれば。彼女は一切躊躇い無くおしっこをはじめてしまうだろう。それがたとえ、仮設トイレや簡易トイレ、川の畔や地面に穴を掘っただけの場所であっても。股間にビニール袋をちょこん、と当てるだけの携帯トイレや、赤ちゃん用のおまるやおむつであったとしても。それが排泄のために用意された、おしっこをするための正しい場所であるならば構いやしない。

(でちゃう、でちゃうっ……おしっこ出るおしっこトイレおしっこおっ……)

がくん、膝が揺れて足が震える。ぱた、ぱた、とこぼれる雫が地面のタイルに点々と跡を残している。

無限に続くかに思われた香苗の苦行も、終に遂に終局を迎えようとしていた。

(……だめっ、でちゃう、おしっこ……いっぱい、ぜんぶ、でちゃうっ……)

のろのろと震える手足を動かし、香苗はいつもの何倍もの時間をかけて脚を動かす。ショーウィンドウには冷や汗をびっしりとかいて、おなかを押さえて震える哀れな少女の姿が映っていたが、香苗にはそんなことを気に掛ける余裕は皆無だ。

そして。

ついに崩壊へのカウントダウンとなる尿意のクライマックスが少女を襲う。

唐突に、突き上げるように香苗の下腹部に衝撃が来た。

膀胱が身をよじるように身もだえし、中に溜め込まれたものを搾り出すような、問答無用、容赦のない、おしっこの予兆。

じゅじゅじゅじゅっ、びしゅっ、ぴちゃ、ぱた、ぱたたっ

「んあっ、んうう！！」

悲鳴を押さえこむことは不可能だった。

これ以上の我慢は香苗の身体を害する——そう判断した少女の自律神経は、それまでの“おしっこを知らせるサイン”と“おしっこを促す要請”であった尿意のリミッターを外し、少女の身体に排泄を直接命令しはじめたのだ。

それは、理性で抗えるような類のものではない。人間が動物として持つ、原始的な生命の欲求。もはや、10歳の少女に残された抵抗の余地などなかった。

「ふー、ふうー、ふううーっ、ふううっ」

獣のように息を荒げ、香苗は両手を股間に突っ込んだ。スカートがぐしゃりとしわを寄せ、水浸しの下着に触れてじんわりと色を変える。

もはや歩くこともできない。立ち止まった香苗に舞子が振り向き眉毛をねじり切れそうな程に吊り上げる。

「ああ！！ もうっ！！ なんなの、なんなのよアンタは！！ いい加減にしなさいっ！！ さっきから、いつまで待たせれば気が済むのっ！！！」

「ふううーっ、ふうう、ふうううっ」

（ま、待って、ダメ、ダメ、ほんとにダメなのっ）

香苗の背筋に冷たい汗が浮かぶ。がくがくと痙攣する足を押さえこみ、少女はもはや返事をすることもできなかった。

じん、じんと薄い下着越しに股間が疼き、排泄孔が悲鳴を上げる。きつく閉じ合わせた膝の間に、右手を差し入れてぎゅうっ、と下着をひっぱり上げて、香苗は上擦った吐息を浅く早く繰り返す。

怒涛のように押し寄せる尿意の波。おしっこが少女の下腹部を、思考を、理性を蹂躪してゆく。歩くには足を上げなければならない。だが、今の香苗にはそれだけの動作が死ぬほどの苦痛だった。

（お願いお願いお願いいっ！！ ちょっと、ちょっとだけでいいからっ……一生のお願いだから、お願いしますお願いしますっ、おしっこ、おしっこしたいの、おさまって……おさまってよおっ……）

人目がないからこそ、香苗は渾身の力でおしっこに抵抗した。恥も外聞もなく、ぎゅうぎゅうと握り締めたスカートの股間がひしゃげ、どんどんと色を変えてゆく。

香苗の背筋に怖気を奮うほどの恐怖が走る。

「、おば、さんっ……」

それは、少女の心からの懇願だった。最後の最後。本当の本当に限界を迎えた少女の、心からのお願い。どうか怒らないで。許して。

「だ、め……お、し、っこ…… でる……っ」

だが、香苗の決死の思いは——無残に踏みにじられる。

「ちょっと——何してるのっ！？ またオモラシ！？ さっきしてきたんでしょ！？ 本当に愚図ねえ、誰に似たのよ……！！」

怒涛の大洪水を必死に堪える香苗には一切構わず、舞子は大声で怒鳴り散らした。

「トイレも一人でできないの！！ 本当にダメな子ね、アンタは！！ ほら、手をはなしなさいっ！！ なんて所触ってるのよ——はしたないっ！！」

香苗の耳奥に、きんきんと舞子の声が響く。

極限。限界。香苗の下腹部がぎゅううううと絞り上げられる。膀胱にはもはや一刻の猶予もなく、数ミリリットルだってもう入らない。危険水域の3ランク上まで詰め込まれたおしっこが溢れ出す。

カウントダウン開始。排泄の予兆を悟った香苗は、舞子の腕を振り払って通路の脇に走り寄った。

スカートの中に手をつっ込んで、しゃがむと同時に下着を引き下ろす。

一瞬で排泄の体制は整った。剥き出しになった排泄孔はぶしゅる、ぴゅるうっ、とおしっこを吹き出して、床に水滴をこぼしてゆく。

ぶしゅるっ！！ ばたばたばたっ

まさに、解放の始まるその瞬間。

「ちょ——ちょっと、何やってるのあんたはっ！！」

悲鳴を上げて、舞子がすっ飛んできた。血相を変えた彼女はしゃがみ込んでいた香苗を抱え上げ、無理矢理に立たせる。

「いや、だめ、やめてえっ」

「やめてじゃないわよ信じられないわっ。どうしてそういうことするのこの子はっ！！ こんな——こんな表で、丸見えじゃないのっ！！ 何する気だったのっ！！」

「……う……あ、はあ、はあっ」

「ふざけないでよ。あんたもう10歳でしょ！？ おもらしなんて、犬や猫じゃないんだから、女の子がそんなことしていいわけないでしょうっ！！ 聞いているのっ！？」

舞子のがくがくと震える香苗の白い脚を抑え、下腹部にぐいぐいとパンツをひっぱりあげ、ぱちん、とゴムを離す。その刺激すら香苗には耐えきれないほどの衝撃になって、少女はぎゅうっ、とお尻を押さえて数歩を後ずさった。

すっかり丸出しになった白いお腹は、わずかではあるが膨らんでいるようにすら見え、小刻みに震えている。その下着の上から両手を差し込んでぐいぐいと身体を捻る。じっとしていたらもう我慢など無理だ。排泄孔をえぐるような尿意が、香苗の理性を吹き飛ばしてゆく。

「人の話を聞きなさいっ！！ ちゃんと落ちついてこっちを見るっ！！」

「で、できないよおっ……」

おしっこ。おしっこ。おしっこ。トイレ、おしっこといれおしっこおしっこといれでちゃうおしっこがまんできないおしっこもれちゃうといれいきたいといれいかせておしっこするおしっこもれるおしっこしたいおしっこおしっこおしっこ！！

排泄を直前で中断され、香苗の膀胱の中で膨大なおしっこが渦を巻き、激しい尿意になって押し寄せる。それを辛うじて押しとどめているのは香苗の女の子としてのプライド、その最後の一線『オモラシなんかしたくない』という意志だけだ。

身体の方はとくに限界を訴えて、1秒に何回も排泄孔は引きつり、ひくひくと脈打って尿意に屈しそうになっている。少女の小さな体で限界まで我慢したおしっこは、膨大な量と圧力になって今にも外に吹き出しそうだ。

「できないわけないでしょうっ。おしっこおしっこって、少しは辛抱なさい！！」

この後に及んで香苗に『おしとやかなおんなのこ』を強制する舞子は、決壊を押しとどめる最後の防波堤、香苗の手のひらを強引に掴んで股間から引き離した。

「や、やだっ、やだあっ、やめてえっ、手、離してよおっ！！！」

暴れる香苗。だが、苛立ちを通り越してヒステリーに至った舞子はやめようとしめない。

「うるさいわね！！ 静かにしなさいって言っているのが解らないのっ！！」

「ちがう、ちがうの……おしっこ、おしっこっ……でちゃう、でちゃうううっ……」

がくがくと膝が震える。爆発的に高まる尿意に耐えきれず、香苗は舞子の脚にぐいぐいと股間を押し付けた。途端、じゅわわっとおしっこが溢れ出す。

「ちょ、ちょっと、なにしてるの！！ やめなさいっ！！」

濡れた下着を押しつけられて動揺する舞子。だが香苗には止めることはできない。もう何かの支えがなければそのまま漏れ出してしまうのだ。我慢寸前の股間からはしゅる、ぶしゅるっ、と間断的におしっこが吹き出して、下着からは黄色い水流がぽたぽたち滴って香苗の白い足を汚してゆく。

香苗は震えながら、涙を流して何度も何度も謝った。

「だめ……だめっ、……がまん、がまんできないっ……ごめんなさい、ごめんなさいいはいはいっ」

じゅじゅじゅ、しゅるるるるるる、じゅじゅっ！！

大量に弾けたおしっこが、舞子の脚に飛び散った。限界を超えて我慢に我慢を強いられてきたおしっこが、香苗を苦しめてきた張本人めがけて激しく勢いを増してゆく。それでも、香苗は舞子から離れられない。手を離せばそのまま倒れてしまう。舞子はこれまで苦しめ続けてきた幼い少女のおしっこの直撃を浴びるしかなかった。

「離しなさいっ……、なにしてるのっ、止めて！！ こんなところでおしっこなんてっ！！ 冗談じゃないわ……我慢、我慢なさいっ！！ 香苗っ！？」

「も……だめ……ダメっ」

舞子の悲鳴がきんきんと響く中、ついに力尽きた香苗の膝が、かくん、と落ちた。

ぶしゅっ、ぶしゅううううううううう、

じよばじよばじよばじよばじよばじよばじよばじよばじよば……

信じられないほどの激しい水音は、おしっこの下着にぶつかるくぐもった音。少女のスカートの下、まるで滝のように激しい水流がフロアの床にぶち撒けられて、派手に飛沫を散らす。

湯気の立つほどに少女の体内で温められたおしっこは、フロア全てを覆い尽くすかのように激しく、いつまでも続いていた。

(初出：おもらし千夜一夜 804-811 2004/11/29)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: ジョギングのお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 09:24:54

BODY:

「……っ、と、終わりーっ」

目標としているサイクリングロードの三周目。たん、と最後の一步を刻んで、理沙は公園入り口の石畳の上に立った。ゆっくりと両足を曲げ伸ばし、整理運動を開始する。

田辺理沙。中学二年、14歳。

どことなく猫を思わせるショートカットが似合う、健康そうな少女だった。

陸上をはじめて1年の身体は、運動を欠かさない割には細く柔らかい。青色のジャージの下でも分かるほどにしなやかな力強さを始めていた肢体は、やがて彼女が魅力的な女性へと変貌することを窺わせた。

大きく深呼吸三回で息を整えて、スポーツバッグの中からタオルを取り出した。

冬休みに入って随分寒い日が多くなった、日課のトレーニングを終えても、汗はほんの少し襟足と額に滲むくらいですぐに引いてしまう。

理沙は財布を手近く自動販売機まで歩くと、百円玉を2枚押しこんで、並ぶ清涼飲料の中から500ml入りのスポーツ飲料のペットボトルのボタンを押した。がこん、と落ちてきたペットボトルを手に取り、封を切って口を付ける。

「んっ、んっ、んっ……」

良く冷えたほの白い半透明の液体が、見る見るうちに減ってゆく。喉を落ちてゆく冷たい感触に身体の熱が冷まされて心地いい。

「ふは……っ！！ 生き返るーっ！！」

一息で中身を飲み終えた理沙は、空になったペットボトルをごみ箱に放りこみ、もう一本同じスポーツ飲料を買った。再び口をつけ——今度は3分の2ほどを残して息をつく。

きゅ、と蓋を締めたペットボトルをタオルと一緒にスポーツバッグに放りこみ、理沙はうん、と腰を伸ばした。

「さて、おしまいっ」

腰を捻り、アキレス腱を伸ばす。さくっと整理運動を終わりにして早朝の自主トレは完了する。

身体を落ち着けるため公園の中ほどまで歩いたところで、理沙はぞくっと背中を走る感覚に身を震わせた。さっきまではほとんど気にもならなかったのだが、

(……あっ)

下半身につうん、と軽い尿意を感じる。

今日の冷え込みでいつもより早く身体が冷えてしまったせいだろうか、普段ならこんな事は滅多にないのだが。

「トイレ、寄ってこ……」

公園にトイレは3ヶ所あり、そのうち一番近い場所でも理沙の帰り道とは少し方向が違っていた、急ぎ足で5分ほどだろうか。それでも家までの距離を考えれば遥かに近い。

寒空の下で急に切羽詰り始めた尿意に押されるように、理沙は足を速めた。

……だが。

「あちゃー……」

小さな白の建物を前に、理沙は額を覆う。

古びて煤けた外観の女性用トイレのにはぐるぐると黄色いテープが巻かれ、故障中、使用禁止、と張り紙があった。何があったの分からないが、壁や地面のコンクリートにヒビが入り、入り口は無残に崩れかけている。

使用禁止、どころか中に入るのもためられるほどだ。

「うあ、こっちはダメなんだ……」

裏に回った男性トイレの方にも同様の処置が成されていた。誰も見てなければ、とイケナイ事を企んだ理沙だったが、その望みもあっさり断たれて肩を落とす。

トイレに入れないという事が解った途端、少女の自律神経は強く尿意を意識し始めていた。ジャージに包まれた理沙の足が小刻みにステップを刻み出す。

「むー。ついてないなあ」

今すぐ家に戻るか、それとも別のトイレまで行くか。どちらにしても今まで来た道を戻らねばならない。

失敗したなあ、とつぶやく理沙に冷えた朝の空気が理沙にぶつかってくる。頬を凍りつかせるような風の冷たさに、少女の身体は小さく震える。

元来た道に戻り始めた理沙の下腹に、つんと走るむず痒い感覚が走る。

それは、先程の波に比べてもかなり大きなものに変わっていた。

(……う、けっこう……やばい、かも)

きよきよと周囲を見回して、人の目のない事を確認してから。理沙はそととジャージの右手を足の付け根に沿える。柔らかな青の布地の下で、理沙の下腹部は思いのほかきつく張っていた。

「帰ろ……」

そわそわと落ちつかない腰を抱えながら、理沙は家への帰途についた。

信号を六つ、交差点を八つ。普段は二十分もかからない道のりが、今の理沙には随分と遠く感じられる。下腹に響く衝撃は嫌でも膀胱に溜めこまれたおしこの重みを意識させ、立ち止まるたびに理沙を急き立てる。

なかなか変わらない赤信号の前で、スニーカーの爪先で地面を交互に叩きながら、少女の足取りは落ちつかない。すれ違う人々が通りすぎるたびに、理沙は屈伸運動やその場駆け足をしているふりをしてそれをごまかした。

(……もーっ、ボロ信号、早く変わってよっ……)

ちかり、ちかり。いつまでたっても点灯をためらう赤信号に、理沙の膀胱は弄ばれる。

(うー……っ、はやく、はやくっ……)

スポーツバッグのなかで、ペットボトルに残った清涼飲料がちゃぽちゃぽと音を立てる。その水音が自分のおなかの中に溜まったおしこを連想させて、理沙はますます腰をよじらせた。

「あんなに飲まなきゃよかったなあ……」

喉の渇きのために瞬く間に空にした清涼飲料の量を思い出しながら、後悔する理沙。だがもはや摂取してしまった水分を取り出す術など無く、手遅れでしかない。もちろん飲んでしまった分がこんなにすぐ外に出てくるわけがないが、冷えたスポーツ飲料と冬の気候は急速に少女の体温を奪い、同時に下腹部にたまり始めた熱量がじわりじわりとその勢力を拡大する。

信号が変わるやいなや、理沙は横断歩道へと飛び出していた。できるだけ早足で、不自然にならないくらいの速度を保って先を急ぐ。

最後の交差点を曲がり、家までの十数メートルの細い私道に入る。

「あう……っ。……トイレ、トイレっ……」

きゅうんっ、と収縮する膀胱が、溜まったおしこを外に押し出そうとしてくる。こみ上げてくる尿意が理沙の背筋を震わせる。だがもう家のドアは目の前だ。ドアを開け靴を脱いで玄関に上がって、廊下を横切りトイレの個室に入ってジャージとスパッツを下着と一緒に引き下げて便座に腰を下ろす。全ての動作が完了するまでもう1分もかからない。それで楽になれるのだ。

あと少し、あと少し、と小さく口の中で繰り返しながら、理沙は小走りに玄関前の階段を駆け上がり、ドアに手をかけた。——しかし、

がこん。

「え……っ！？」

信じられない手応えと音に、理沙は思わず声を上げていた。もう一度力を込め、ノブを引く。だが、重く閉ざされたドアは玄関には固く施錠されており、いくら引っ張ってもびくとしなかった。

「ちょ、ちょっと、うそっ」

がこ、がこ、がこんっ。

ドアチャイムを鳴らし、やや乱暴にドアを叩き、なおも数度ノブを引いても、家の中からは何の応答もありはしなかった。理沙の顔からゆっくりと血の気が引いてゆく。

同時、ぞくん！ と激しい尿意が少女の背筋を貫いた。たまらずジャージの膝を寄せ合わせ、理沙はもじもじとおしりを突き出す。

「う……ふ、くっ……」

きゅうううんっ、とひときわ強く膀胱が身悶えし、排泄を促す刺激が下半身を貫く。冬の朝の気温もそれを手伝って、理沙はぶるりと身体を震わせた。すでに下腹部の重みはかなりのものに達しており、そう遠くないうちに限界が訪れてしまうだろうことは予想に難くない。理沙は腿の辺りのジャージをぎゅっと握り、おしっこ我慢のステップを繰り返しながら、ドア横のガラス窓を覗き込む。

一体、こんな朝から母親はどこに出掛けたのだろう。少女は愚痴と共に玄関前をうろついてみるが、家の中に気配は無かった。一通り鉢植えの下などを調べてみるが、合鍵が隠されている様子もない。

……そしてさらに都合の悪いことに、いつもならお財布と一緒に鍵は今現在理沙の部屋の机の上だ。

「もうっ、なにこれ……最悪っ」

もじもじと、脚を交差させてうめく理沙。

もし、本当に母親が出かけたのだとしたら、普段鍵を持ち歩いている理沙に遠慮する事はないだろう。

理沙の母親は携帯を持たない習慣なので、連絡のつけようがないのだ。

「うー……ひどいよお母さん……」

庭に出て、落ちつかない足取りのまま順番に窓を見て回る。しかしここもやっぱりしっかりと鍵がかかっており、いくら指をかけても帰ってくるのは硬い手応えだけだった。

裏庭に回りこんだ理沙は震える爪先立ちで背伸びをし、バスルームの窓を覗く。曇りガラスの向こうに覗く小さなクリーム色の扉が、理沙を誘惑していた。あそここそが田辺家のトイレであり、今の理沙にとって魅惑の場所であった。

排泄をするために作られた設備は、硬く閉じられた窓の向こう。今もなお彼女を苦しめつづけているおしっこを出すことのできる場所がとてつもなく遠い。

その事実を確認するだけで、理沙の膀胱はきゅう、と絞り上げられるようだった。

じいんっ、きゅううっ。

「やば……我慢、できないかも……っ」

じんじんと響く尿意は、1秒を数えるごとに膨れ上がってゆく。一呼吸ごとに進む新陳代謝が、理沙の全身を巡る水分を濾過して生産したおしっこが、少女の身体の一箇所に集まって圧力を増してくる。

「……………っ」

理沙の心は羞恥と理性、そして刻一刻と迫る崩壊の時を控える尿意の間で激しく揺れていた。

かあつ、と顔に血が上ってゆくの解る。ばくばくと跳ねあがる心臓が、自分が始めようとしていることへの決心を、イケナイことだと警告している。

「でも……どうしよっ……やっぱり、その……フカコウリョクって言葉もあるしっ……」

迫り来る尿意に圧倒されるように、理沙は頭の中から理性と常識を追い出して、下腹部を支配する欲求のままにゆっくりと腰を沈めはじめる。

理沙は何度も何度も慎重に周囲を見回して、誰の視線もない事を確認する。これから始めることは、理沙の人生で一度も経験したことのないくらいに恥ずかしいことで、少なくともこれまでの常識の中で、絶対にしてはいけないこと、のひとつである。

だが、自分の家の裏庭で、しかも壁一枚隔てた向こうにトイレを見ながら、少女の忍耐は限界に達しようとしていた。

「仕方ないよね……もう、ガマン無理っばいし……」

田辺家の庭は生垣で周囲から隠されている。敷き詰められた芝生は、冬の間にすっかり色褪せて、枯れ草色の絨毯に変わっていた。ここなら、たとえバケツをひっくり返してもすぐに地面が吸収してくれるだろう。

ジャージにかけた手が下に降り始める。理沙は自分の下半身を覆う衣服をまとめてずり下げながら、緊張で荒がる息を押さえ、つばを飲み込んだ。唇を噛みながら羞恥に頬を染め、大事な所を丸出しにした地面の上にしゃがみ込んだ。

そう。理沙の決めた覚悟とは、ここで——用を足してしまうこと。

身体に溜まった老廃物の排泄——それも、トイレまでほんの数メートルの、自分の家の庭でおしっこをする決意だった。

「ううっ……恥ずかしいよお……」

蚊の鳴くような声で俯いてしまう理沙。むき出しになった少女の排泄孔が、内圧に屈するようにひくひくと震える。

と——。

わふ。わふっ。

「うわあっ!？」

いきなりの鳴き声に、理沙は跳びあがるようにしてジャージのズボンを引き上げて立ち上がった。

もう少して始まっていたおしっこを中断されたことに驚愕3割、怒り7割で降り返れば。

わふわふっ!! わおんっ!!

「なんだ……もー、脅かさないでよシローっ!!」

じゅらりと鎖が地面擦る。首輪から鎖を引きずった田辺家飼い犬のシローが、壁からひょこんと顔を覗かせていた。さっきまでは小屋の中だったというのに、どうやら理沙の気配で目を覚ましてしまったらしい。

はふはふと舌を出して、シローは理沙に熱い視線を送っている。今日は誰も散歩に連れていってくれなかったのだろう。

「あとちょっとだったのに……シローのばっか!!」

ぱんぱんに張った下腹部を撫でながら、理沙はいまにも飛びかかってきそうなシローに文句を言う。

一度排泄をやめてしまったせいで、理沙の頭にはせつかく追い出した理性と常識が戻ってきてしまい、もうここでおしっこをする気にはなれなかった。少なくともあんなに元気よくシローが騒いでいる前でそんなことできっこない。たとえ犬だって見られるのは恥ずか

いいし、理沙がヘンなことを始めてシローがずっと騒ぎっぱなしだったらご近所さんが不審に思い始めるかもしれない。第一、シローだって自分の小屋や庭なんかでおしっこしたりはしない。ちゃんと散歩に行くまでじっと我慢している、

それを、もう中学生の理沙が、自分の家の庭でおしっこだなんて。

「お散歩？ ……ごめんシロー、今日ちょっとダメなの……あんっ……」

くねくねと腰を揺すりながら、理沙はシローをなだめる。その間にも、弄ばれた理沙の尿意は次第に強烈なものへと変貌し始めていた。

（うう……どうしょお……っ）

唇をかんでもじもじと太腿を寄せる少女の背中からは、知らないうちに前かがみになってお尻を突き出すような格好に変わっている。排泄孔までの距離が短い女の子は、おしっこを我慢するときにはどうしても身体全体でこんな恥ずかしいポーズを取らなければいけないのだ。

理沙は頭の中の地図帳をめくって、近くにあるトイレを検索する。

（他のトイレ……公園だとまた壊れてたりしたらやだし……まだお店もあいてないし……駅……は遠すぎるし……やっぱり……学校まで、がまんしなきゃダメなの……？）

どれだけ考えても、一番安全にトイレに入れる場所はそこしかない。

窓のすぐ向こうにあるトイレを眺めながら、理沙はそんな悲壮な決意をするしかなかった。

ひよい、と持ちあがった右足が左の爪先の前に下ろされる。ジャージの裾に当てられた手のひらは、さりげなく股間を気にしているのだろうが、その皺の入り具合から、そろそろさりげなく、とは呼べなくなっていた。

大股で数穂を進み、とんとんとスニーカーの爪先で地面を叩き、小刻みにかかとを踏み鳴らす。

きつくきつく交差された足の間で膝がかかくと揺れる。

「はあ、はあはあ……」

風に混じり、荒い吐息がかすかに漏れ聞こえる。

右から左、左から右、体重を預ける脚を数秒に一度のペースで変えて、理沙はジャージの上着の裾をぎゅっと握り締めた。

（んあっ……でちゃう……）

背筋を怖気が走り、スポーツバッグの中に残ったスポーツ飲料をちゃぽん、と揺らした。閉じ込められて容器にぶつかり揺れる水音は、たったいま理沙のおなかの中で繰り広げられている光景をそのまま象徴しているかのようだった。

空色のジャージと紺のスパッツの奥。穢れを知らない少女の肢体を襲う下品な衝動は、理沙の苦悶を楽しむかのようにじわじわと勢力を増していた。

もはや、人前で平静を取り繕う余裕もない。さすがに股間を握り締めるような真似はできないが、そろそろと下腹部に伸びてゆく手を止めることができない。ジャージの上から、おしっこげぱんぱんに張った下腹部をそっと撫でる。できるだけさりげなく、なんでもない風を装って。

——ちゃぷん、じゃぽつ、

(うあつ……ふううつ……したい、したいよお、おしっこしたいっ！！)

だが、理沙のそんな必死の努力もむなしく。

彼女がぎゅっと寄せた膝の奥でおしっこを我慢し、こみ上げてくる尿意を必死に堪えていることなど、不自然に力が入った股間やせわしく擦り合わされる膝を見れば一目瞭然であった。

交差点の反対側の学生から、通りすぎる自転車の上の少年たちから、隣に並び信号を待つ会社員から、何気ない視線が寄せられている。

うっすらと日焼けしたうなじがじっとりと汗ばみ、ほつれた襟足を張りつかせている。俯きがちな少女が尿意を堪えているのは、もはや誰の目にも明らかだった。

(やだっ、見ないでっ……なんでも、なんでもないんだからねっ！？……は、早く、はやくっ……おトイレ、トイレ行っておしっこしないと……おしっこ、でちゃうっ……漏れちゃうよおっ……)

激しく収縮する膀胱に、理沙はあうっ、と切なげなため息をこぼす。元気いっぱい陸上少女が普段見せない艶かしい声だ。

おなかを圧迫するおしっこによって、早朝から強いられ続けてきた我慢劇は、理沙に普段馴染まない“おんなのこ”な振る舞いを強制してくる。

(やだっ……なんで、わたし、こんなにっ……)

横断歩道のすぐ手前、交差点に並ぶ人達の前頭で身体を小さく縮めて震えるジャージ姿の少女。それは恐らく、好機の視線の対象となるに十分な存在であることは、理沙にもおぼろげながら理解できている。

集まる視線がちくちくと羞恥心を刺激し、それはますます理沙の尿意を強めていった。

ひくんっ、びくっ！！

「んふううつ……うあつ……」

ひときわ強い尿意に理沙が身体を硬直させた瞬間、信号がちかりと切り替わる。

(あ……だ、だめっ、まだダメえっ……！！)

一斉に進み始める人ごみに急かされるように、理沙は反射的に脚を進めてしまっていた。途端、ぎりぎりのところで押しとどめられていたダムの水門にヒビが入る。

ひく、しゅ、しゅるるっ……じううつ……

(やだ、っでちゃうでちゃうでちゃうううう——っ！！！)

すんでの所で悲鳴だけは胸中に飲み込み、理沙はジャージの間に両手を突っ込んだ。こんな所でおもらしだなんて、中学生の女の子には絶対に許されない。決壊を防ぐため括約筋に渾身の力をこめて抵抗する理沙。

しかし、がくがくと震える膝が言うことを聞かない。じわあ、と下着に広がったおしっこがジャージの上まで染みだして、股間を握り締めた理沙の手のひらを汚す。そうしてとうとう、理沙は横断歩道の真ん中でしゃがみ込んでしまった。

（ダメっ、こんなところでおしっこなんか……ダメなのにつ……ここ、トイレじゃないのにつ……おもらし、おもらしちゃうっ……おしっこ、おしっこしたいっ……おしっこで、でちゃうよおっ……！！）

横断歩道のなかで膝を抱え震える少女を、通りすぎる人々は不審げな視線で見詰める。たった今自分がおしっこをチビらせながら、全部でしまいそうな恥ずかしい熱湯が吹き出すのを必死に先延ばしにしているのを知られてしまった理沙の顔から火が出る。

「ふ、ぐうううっ……」

意地、だった。

こんなところで、あんな大勢のヒトのいる往来で失敗だけはできない。動けば我慢できない、と解っているが、理沙は強引に立ちあがり無理矢理駆け出していた。

限界はすぐにやってきた。手近な路地に飛びこんだのは、近道でもなんでもなく、もう本当に我慢ができなかったから。

ひんやりとした日陰の空気をかき乱し、荒い息をつきながら理沙は路地の隅っこに再びしゃがみ込んでしまう。

しゅ、ぶしゅる……じゅっ……

「ダメえ……でないで、でないでよお……」

腰を揺らしての懇願もむなしく、既に辛抱をなくした少女の排泄孔はだらしく緩み、湿った下着の中にさらにおしっこを追加する。普通にまっすぐ立っていることも苦痛だった。もう中腰かしゃがんだような姿勢を保つことでしか、理沙はこみ上げてくる尿意に耐えられない。

じゅっ、と恥骨に響く刺激に追い立てられ、理沙は必死に周囲を見回す。

（おしっこ……おしっこ、する、しちゃうっ……）

その思考はもはや、少女としてのプライドを棄てたものだった。薄暗い路地裏に、理沙は排泄の為にもっとも適した場所を捜す。もちろん、こんな場所に用を足すべくして作られた本来の設備があるはずはない。

切羽詰った理沙は、屋外で放尿しても一番人目のつかない場所を捜しているだけだった。

（うくっ……ヤバっ……また、さっきみたいのがきちゃいそう……っ）

膀胱の内部で圧迫されたおしっこが、出口を求めて渦を巻く。きゅんっ、と収縮の予兆を見せる下腹部が、理沙の羞恥心を激しく煽った。

だが、どれだけ辺りを見回してもそこは道の真ん中で、地面は側溝すら見当たらない堅固なコンクリートだ。水を吸いこんでくれる可能性など万に一つもない。しゃがみ込んだ理沙の大切なところから勢い良く吹き出したおしっこは、そのままコンクリートを黒く染めて、川みたいに流れて広がってしまうだろう。

いくら路地裏でも人通りはある。ここから出入りする人だっているだろう。そのとき、隅っこに雨も降っていないのに大きな大きな水

溜りができてしまっていれば。ここで誰かが我慢できずにおしっこをしてしまったことなどすぐに知れる。

そして、理沙がおしっこを必死に我慢しているのは、この辺り一帯を歩いていた人達にしっかり見られてしまっているのだ。

きゅうんっ、きゅううんっ……

恥骨に衝撃が走る。むず痒さを数十倍したような尿意の塊が、少女の胎内から排泄孔までを駆け巡る。

(あうっ……ダメ、ダメえっ……来ないで、来ないでえっ…、今は来ちゃったらっ、ホントにつ……ダメええっ)

さっきですら路上の真ん中で恥も外聞もなくしゃがみ込み、ジャージの股間に染みを作ってしまったほどだ。次の波がきた時、それに対抗できる自信などない。理沙は迫り来る尿意に腰をよじりながら、股間に突っ込んだ指をせわしなく前後させる。

きつく閉じ合わせたジャージの股間をきゅう、と押さえ、理沙は身体を竦ませた。くねくねと落ち着きのないスパッツの下で我慢に震えるおんなのこの排泄孔は、下腹部のティーポットいっばいに注ぎ込まれたおしっこで溢れそうだ。

(おしっこ、おしっこできるところっ……おしっこ出してもだいじょうぶなところっ……)

しくん、しくんと高まり続ける尿意を堪えながら、理沙は必死に辺りを見回す。だが隙間なく敷設された区画には排水溝どころか土の見える地面すらない。膀胱一杯に詰まっているおしっこができる場所など見つからなかった。

(や、やだあつ、おしっこ、でちゃう、でちゃううっ……おもらしちゃううっ……)

寄せては返す尿意の大波。少女の幼い身体の中で、恥ずかしいおしっこがざぱりざぱりと揺れている。細く引き絞られた括約筋の隙間から、少しずつじわりじわりと滲み出していた。

おしっこのできるところ。おしっこをこぼさずにいられる入れ物。

今にも訪れるかもしれない大失敗の危機。尿意を堪えることだけで一杯になって、理沙の少女としての理性と羞恥心は麻痺し、思考は一種のパニック状態になっていた。

普段の理沙ならば死んでもしないであろう、はしたない行動に出たのだった。

(っ……そうだっ……)

理沙はスポーツバッグの中に手を突っ込んで、ペットボトルを引っ張り出した。少し泡だった半透明のスポーツ飲料がちゃぽん、と揺れる。この状況で揺れる水面を目にし、水音を耳にするのは理沙にとって耐えがたい苦痛ではあったが、完全に沸騰した理沙の理性はそれを無視する。

耐久度、容量、防水性、どれも問題はない。

そう、これなら——

(はやく、はやくっ……っ！！！)

嫌悪感も羞恥心もどこかに消え失せていた。このペットボトルがあればおしっこができる。今も自分を苦しめている恥ずかしい熱湯を外に出してしまえるなら、理沙にはもう何だってよかった。

理沙はペットボトルのキャップをもぎ取るように外し、口を付けた。半分以上残っている中身を一気に喉の奥へと流しこむ。

「うううっ……ぶはあっ……えほっ……」

喉が震えて、上手く飲み込むことができない。おしっこを我慢しながら、冷たいスポーツ飲料を飲むのはまさに、地獄のような苦しみだった。飲んだものがすぐおしっこに代わるわけではないが、今の理沙にとってこの行為は、もう縁ぎりぎりまで水の溜まったコップにさらに蛇口からの水流を注ぎ足しているのと同じ行為だ。

ジュースを地面にこぼすのは簡単なことだったけれど、ここで理沙が“なにもしなかった”ことにするには、ひとつも証拠を残すわけにはいかない。味なんて解りもしないまま、理沙はペットボトルを空にする。

「うぅっ……」

そうしてすぐさま理沙はジャージを膝まで引き下ろし、スパッツと一緒にインナーも脱いで、おんなのこの大切な場所をあらわにする。冷たい風がひやりとお尻を撫でていく。

理沙は路地裏の真ん中でしゃがみ込み、恥ずかしいおしっこポーズをとった。どきどきと跳ねあがりそうになる鼓動を抑え、今にも誰かが通りがかるかもしれない、という想像を振り払う。爆発的にゆり戻されてくる羞恥心。それでもおしっこはもう我慢の限界で、いまから『やっぱりやめるっ！！』は通りそうにない。

理沙は、小さな飲み口に、小さく震える排泄孔を近付けた。

口をつける場所に、おしっこをするトコロを押つけて。さっきしたことの正反対の事をしようとしている。

(うぅっ……)

心臓がばくばく鳴って、顔に血を送りこんでくる。理沙の頭は羞恥で沸騰してしまいそうだった。

だが、身体のはうはもうとくに限界を迎えていて――

ぷしゅるっ、じょろっ、じゅごおおおおーっ。

「あああああっ……やだ、やだあっ……」

吹き出した水流が飲み口の中からペットボトルの底を直撃した。透明な容器の中で渦を巻いたおしっこは、水面を激しく波立たせ、泡を立てながら容器の中に収まってゆく。

(あうっ……わたし、すごくヘンなことしてるっ……やだよ、やだよ……ヘンタイみたいっ……)

静まりかえった路地裏では、容器に水流がぶつかる音がひどく大きく聞こえるようだった。理沙は羞恥に耳までを真っ赤に染め、おなかに力を籠めてしまう。すると一段とおしっこの勢いが強まって、じゃぼじゃぼとペットボトルに溜まった水面を乱す。

トイレですらない場所、視界を遮るものもない路地の片隅で、さっきまで飲み物の入っていた入れ物におしっこをしている――そんなコトは、少女の常識からも、決してしてはならない行為のはずだった。

きゅううんっ、きゅううっ。

「んうっ……く、ふうっ……」

少女の膀胱は切なげに収縮を繰り返し、理沙の下腹部はさらにおしっこを搾り出そうとしてくる。それに伴って括約筋も甘く緩み、水門を全開にしようとする痒さに似た感覚で理沙を誘惑する。それでも、細い飲み口におしっこをこぼさず流しこむためには、慎重に排泄孔を調節しおしっこの勢いを制御するしかない。それは必然的に排泄の時間を長引かせてしまうのだ。

(はやくっ……はやく終わってっ……)

容量の限界に達した理沙のおしっこはいつまで経っても勢いを弱めようとしなかった。次々注ぎ込まれる水流に揺れるほの黄色い液体の水面は、ペットボトルの胴を超えて八分目よりも上に達しようとしている。

自分の身体がこんなにたくさんのおしっこが溜めておけるなんて、知らなかった。

「ふう…ふう……ふうーっ……」

痺れるほどの解放感が背筋を走る。耐えに耐えた後の排泄で、理沙は快感に近い感覚を覚えていた。その事実はさらに少

女の羞恥をかきたてて、排泄孔をひくんと収縮させた。

じゃぼっ、じゅるるじゅじゅじゅっ、じょぼぼぼぼ……

(……まだでてるっ……ぜんぜん止まんないよお……)

おしりの方に回って飲み口に入りきらなかった分のおしっこが、ぽた、ぽた、とこぼれてペットボトルを伝ってゆく。容器を握り締める指にかかるおしっこの温かさに、理沙の胸はぎゅうっと締め付けられる。

そして、なおも数十秒。

長い長い時間を掛けて、ようやく理沙の排泄は終わりを告げた。まだ完全に膀胱を空にすることができなかったのか、下腹部にはじんとした尿意の残滓が残っていたが、理沙はかろうじてペットボトルが一杯になる前におしっこを止めることができた。

「……うう、恥ずかしいよお……」

中身がこぼれないように、ぎゅっ、と硬く蓋を締める。

透明なペットボトルの中で、薄黄色の液体の表面が小さく泡立って揺れた。

昨夜のうちに摂取した水分とさっき口にしたスポーツ飲料が、理沙の体でろ過されて作られた、世界でもっとも恥ずかしい液体。500mlの容器を楽に埋めてしまったその量が、理沙が羞恥の果てに耐え抜いた結果である。

「でも、こんなに……」

一体どうやってこんな量を我慢できていたのか、理沙自身信じられなかった。

実際に外に出した分を確認して、理沙は楽になった下腹部を撫でる。今までの我慢の残滓と、路地裏で排尿に及ぶという異常な状況にまだいくら理沙の膀胱はトイレを要求していたが、今すぐ駆け込まなければならないほど切迫してはいない。

「……助かった……んだよね……」

憂鬱な思考を納得させるため、理沙は汚れていた手の雪を振り払った。

たとえ、用を足せたのが寒々しい路地裏で、場所がトイレでもなんでもない飲み物を入れる容器にだったとしても。街中でおもらしなどという大失敗にくらべればいくらかはマシだ。理沙はなおもこみ上げてくる羞恥心を押さえつけるため、自分にそう言い聞かせる。

湿ったままの下着をジャージごとはき直し、汚れた手をティッシュで念入りに拭い清めて、理沙は大きく息をついた。

「どーしょ、これ……」

改めて、それを眺める。

清涼飲料水のラベルの下、薄黄色のおしっこをいっぱい詰めて、まるで新発売の製品のようにになっている簡易トイレ——ついさっきまで、理沙の膀胱が強いられていた状況と全く同じことを強いられているペットボトルを見下して理沙は頭を悩ませた。たとえ自分の身体からでてきたものだと言っても、おしっこの入った入れ物なんて触りたくもない。

だが、このまま置いていける訳もないのだ。誰も真実に気付かなかったとしても、自分のおしっこがいっぱい詰まったペットボトルが見られるなんて死んだ方がマシだ。

「学校……行って、もう一度トイレに……しか、ないよね」

口に出して、思い切りのための準備をする。

(……うん。そうしょ。まだ本当にすっきりしたわけじゃないし……)

言葉に出さなかった後半の理由もあって、理沙は決心を固めた。

ペットボトルを手に取り、何度も何度も蓋が閉じているか確認して、スポーツバッグの中に慎重に詰め込む。中身を汚されてもしたらやっつけられないが、剥き出しで持っていくなんてそれこそ問題外。ヘンタイのすることだ。

理沙はきよろきよろとあたりを確認し、できるだけ人目に触れないよう早足でこっそりと、人気のない路地裏を後にした。

日曜の朝だというのに、校庭は賑やかだった。ソフトボール部かなにかの練習試合なのだろうか。集まった観客から試合の行なわれているグラウンドに歓声が飛ぶ。

平穏に活動している校庭が恨めしい。

理沙はこんなにも苦しくて恥ずかしい目に遭っているのに、あの子達は楽しそうに笑っている。理不尽な現実には少女の気持ちは激しく落ち込んでいた。

「最悪だよ……」

まさか。今日家を出る時には、こんな恥ずかしい思いをする羽目になるなどと思ってもみなかった。いつも通り朝の自主トレを終えて、気持ちよくごはんを食べて楽しい日曜日を迎えるはずだったのだ。

それが、路地裏でおしりを丸出しにしておしっこ。しかもその場所はトイレでもなんでもなく、さっきまでスポーツドリンクの入っていたペットボトルの中だ。まさしく悪夢以外の何者でもない。さらに最悪なことに、理沙はそのおしっこをまだスポーツバッグの中にもっているのだから。

どんよりと沈む気分で足を引きずって、塀の向こうに見える正門を目指す。

いまは早くトイレに行ってバッグの中のおしっこを処分し、ついでにまだちょこっとだけ残っているおしっこも済ませてしまいたい。

「うー……」

そと髪を払いのけた理沙の下半身が、無意識のうちに震える。

それは、更なる悲劇の序章だった。

校門をくぐった理沙は、まっすぐ体育館に向かう。今日は休日であり、授業はないために校舎には鍵が掛かっていて、中に入ることは出来ないのだ。部活動のためには体育館のトイレが解放されており、生徒達はそこを使うように指示されていた。

理沙はジャージの下腹部をそっと押さえながら、体育館横のトイレに急ぐ。利用人数に対してトイレの絶対数が少ないため、トイレは混雑する。理沙は少し遠回りになることを承知で、人気のない表のトイレを選んだのだった。

(見られるのやだし……しょうがないよね)

本日何度目の妥協だろう。

この季節、理沙の目指す体育館横のトイレは立て付けが悪いために隙間風が酷い。さらに掃除もあまりされていないため、中のトイレに比べて利用する者は少ない。万が一でもおしっこ入りのペットボトルを見られるわけには行かないため、どうしても理沙はその選択をしなければならなかったのだ。

だが。

遠回りの道のりは、理沙をそれだけ長く冬の大きに晒し続ける。

(んっ……)

いつしか、吹きつける寒風に理沙の尿意がちりちりと煽りたてられていた。膀胱に掛かる重みじわじわと増し、さっきも感じていた痺れがぶり返してくる。

他人の視線がないのをいいことに、理沙はぎゅうと股間に手を沿えていた。

ぶるっ、と背中が震える。

小刻みになった歩幅は、少女が脚の付け根に抱えた熱い液体のせい。もどかしく思う理沙の意に反して、もうすぐだと思っていたトイレまでの距離は遠く、歩みは遅々として進まない。

ひく、ひくんっ、きゅううんっ。

「はうっ……！！」

走り抜けるひととき強い感覚に、理沙は身体を竦ませる。

(やだっ……また、来ちゃった……)

それはもはや、明らかな尿意だった。時間を追うごとに高まりだす下腹部の圧迫感に理沙はふうっと溜め息を漏らす。少女の膀胱は再び切なげに収縮し、しくんしくんと疼いて中に溜まったおしっこがその存在感をアピールし始めていた。

(おしっこ……またしくなってきた……なんぞ？ さっき、あんなにいっぱいしたじゃないっ……)

前触れもなく訪れた強烈な自然の摂理に、理沙は心の中で悲鳴を上げる。スポーツバッグの中には、さっき理沙がしたばかりのほかほかのおしっこが500mlペットボトルいっぱい詰まっているのに。

水分補給に優れたスポーツ飲料は、運動で水分を消費していた利者の体内にたちまちのうちに吸収され、少女の身体を余さず循環して、老廃物を体外に出すためにふたたび理沙の膀胱を満たし始めていたのだ。

ほんのわずかな時間に立て続けに摂取された1リットルのスポーツ飲料と、冬の寒い気候。それらの相乗作用によって、今、理沙を襲う尿意は、どんどんとその勢力を増しつつあった。

そろそろと体重をかけないよう慎重に、できる限りの早足。それでもおしっこをぱんぱんに溜めこんだ膀胱は、そのずっしりとした重みで理沙の我慢を圧迫する。

不安定な足音が、そのまま少女の限界に近いことを伝えていた。

(うう、あとちょっと、もう少しでトイレだからっ)

自分を奮い立たせる理沙の背中、スポーツバッグの中でじゃぼっ、と揺れる中身。

さっきと同じ水音が、理沙の理性を責め苛む。そして今度のそれは、飲み物のスポーツ飲料ではなく、本物の理沙のおしっこが立てている音なのだ。

たった数時間の間に、トータルで1リットル以上。理沙の身体は呆れるほどの恥ずかしいおしっこを作りだしている。それがとんでもなく恥ずかしいことに思えて、理沙は真っ赤になって俯いた。

ばん、といきおい良くドアを押し開ける。

予想通り体育館横のトイレには人影が無く、しんとした気配に包まれていた。どうやら過去に遡ってもこの数時間、だれもここを訪れてはいないらしい。これから自分のする事に思い悩んでいた理沙は、その事実にはほんの少しだけほっとする。

細く空いた換気用の窓から、校庭の喧騒がわずかに聞こえてくる。

3つある個室のうち、二つが故障中の張り紙で塞がれていた。もともとそんなに使われていない場所だけに、それ程手入れが行き届いているわけではない。床は少し黒ずんで埃も積もっていたが、それでも立派なトイレには違いない。いまの理沙にとっては、長い間渴望を続けた場所だった。

「……ホントに最悪だったなあ」

理沙はたった一つだけ残った一番箸の個室に入る。和式の白い便器が出迎えてくれた小さな部屋にしっかりと鍵をかけ、スポーツバッグを傍らの荷物起きに載せた。

その間にも少女の脚はそわそわと落ち着き無く揺れていた。

だが、さっきに比べればまだ十分我慢できる。

理沙はそれよりも先に済まさなければならない最優先懸案事項のために、ひとまずおなかの中で駄々をこねるおしっこを頭の隅にどけた。

「……………せー、のっ！！」

理沙は意を決してスポーツバッグの中からペットボトルを取り出した。薄黄色のおしっこでいっぱいになった透明な容器は、まだほんのりと温かい。それはまぎれもなく、ペットボトルの中身が理沙の身体の中で作られた証拠なのだ。

今更ながらに路地裏の排泄のことが思い出されて、理沙は羞恥にぐっ、と唇を噛み締める。中学生にもなって、学校までトイレを我慢できなかった証拠——そんなとんでもなく恥ずかしいもの持ち歩いてここまでできたのだ。一刻も早く、記憶と一緒に消し去ってしまいたかった。

「これで、やっと」

理沙は覚悟を決めて、ペットボトルの蓋を空けた。プラスチックの容器の中から、揺れる水面が顔を覗かせる。

理沙は慎重にペットボトルの口を傾け、いまなお温かいその中身をトイレの中へとこぼしてゆく。丸い飲み口のふちに盛り上がった水面がくずれ、ぼちゃ、ぼちゃとトイレの中に吸い込まれてゆく。

（はあっ、ふううっ……）

ちょぼぼ……じよろろ……じょぼぼぼぼぼ……

途切れ途切れの細い雫はすぐに水流になって、トイレの中の水面にぶつかって波紋を描き、飛沫を立てる。

それは、理沙にとってとんでもなく辛いことだった。

(んあうっ……くうっ！！ や、やああっ……)

水音を立てて、白い便器の中に吸い込まれてゆく黄色い水流。

勢い良く水面にぶつかった薄黄色の流れは、飛沫を飛ばしてはばしやばしやと音を立て、わずかに泡を立てて広がってゆく。

じよぼぼぼぼぼぼ……じよろよろ……

さっき、きちんと済ますことのできなかったおしっこが、ようやく正しい場所に解き放たれてゆく。我慢できなくなった理沙の苦しみを肩代わりしてくれていたペットボトルはその中身を思う存分に外にぶちまけていた。

(やだっ……こんなのっ……なんでえっ……)

ペットボトルはどんどんと空になってゆく。それにつれて、流れ落ちるおしっこも激しさを増していた。

じゃぼぼぼぼぼぼ……じゃぼぼぼぼぼっ……

目の前でトイレに流れてゆく自分自身のおしっこを目にして、少女の膀胱は激しく動揺する。ただでさえ水音というのは尿意を誘うものだ。まして今、それを発しているのはお腹の中をたっぷんたっぷんにしている理沙のおしっこそのものである。

つまり今、理沙は自分の排泄を目の前に見せ付けられているのと同じ状況にあった。

(こんなの、ずるいよっ……おしっこ、トイレにしてるのにっ……)

こんな皮肉なことがあるのだろうか。ここは待望のトイレの個室で、今まさに理沙のおしっこがすごい勢いで便器の中の水面へと注いでいるのに。すっきりできるのはペットボトルの方だけで、理沙の尿意は少しも収まってくれないのだ。

500mlのペットボトルをいっぱいにしても、まだ収まりきらなかった理沙のおしっこ。路地裏で済ませた排泄をそっくりそのままなぞるように、ペットボトルの膀胱がトイレでおしっこをしていた。

「ど、どうしてっ……あうっ」

きゅうううううんっ。

時間差で見せ付けられる排泄が少女の羞恥を刺激し、それに連動するように膀胱が激しく身悶えて暴れ出す。

あれから1時間も経っていないというのに、理沙を襲う尿意は、先刻のペットボトルに用を足した時に勝るとも劣らないレベルまで達していた。

ちよろ……びちょん。びちょ……

理沙のおしっこが全部トイレの中に流れ、ようやく空になったペットボトルを見る頃には、もう我慢は限界になっていた。こんなものを散々見せ付けられて、これ以上おしっこをおなかの中に入れておくのは無理だと、膀胱が必死に訴えている。

「……くうんっ……」

切なげにお尻をモジつかせ、吐息をこぼして足をくねらせる。

隙間風は風がいつそう理沙の尿意を煽り立て、膀胱に掛かる重みは増す一方だ。

理沙はいつの間にか、開いている方の手でぎゅうっと股間を握り締めていた。おしっこをぱんぱんに溜めこんだ膀胱は、そのずっしりとした重みで理沙の我慢を圧迫する。

もう限界だった。

「ふ……くっ」

きゅうんっ、と収縮する膀胱の内圧に耐え、理沙は小さくうめきを漏らした。ジャージの股間に押しこまれた指に力が掛かり、少女の下半身を覆う空色の布地がぎゅうぎゅうとよじれる。

排泄孔に湧き上がる違和感が、じくりとオモラシの気配を覗かせる。大きな波の予兆がざわざわと少女の我慢に襲い掛かっていた。中腰になって股間を握り締め、理沙は迫り来る尿意とのせめぎ合いのなか、わずかな隙を突いてジャージに手を掛ける。

（も、ダメっ……出しちゃわないとっ）

少しぐらい汚れても構わない。理沙は尿意の波を乗り越えるのを諦め、便器をまたいだ。思いきって一気にジャージと一緒にスパッツを引きずり下ろす。拘束から解き放たれ、剥き出しになった少女の大切なところがひんやりとした外気に触れる。

ちゅるう、ちゃぽぽぽ、

すっかり腰を下ろしきる前に、我慢をなくしたおしっこが理沙の股間から迸り、トイレの水面を叩く。

だが。次の瞬間。理沙は、目の前の光景に絶句した。

「紙……ない、のっ？！」

伸ばした指の先で、無常にもからからと空転するロールホルダ。

出しかけたおしっこに緊急停止命令を出したまま、おしりを丸出しにして理沙は個室を見回す。

だが、芯だけを空しく回すロールホルダのほかには、トイレットペーパーのロールは愚か、ちり紙ひとつ見当たらない。

そしてその上には無常にも、

『節約のため、紙は外してあります』

の張り紙。

「う、うそお……っ！！ ひどいよおっ！！」

ぎゅうっ、と膝を擦り合わせ、理沙は当惑の視線を投げ下ろす。

タイルの床には、白い和式便器がペットボトルに入っていた分のおしっこを受け止めて、なお準備万端で待ちうけている。まだかすかに揺れる水面が理沙を誘惑しているようだった。

おしっこをするための場所がすぐそこにある。

それなのに——おしっこができないなんて！！

「なんでっ、なんで……あううっ！！」

こみ上げてくる熱い衝動を押さえこんでびよこびよこ小さく飛び跳ねる理沙。もうそうでもして気を紛らわせていないと、勝手に排泄が始まってしまいそうだった。

だが、もしそうしてしまったら——恐らく今まで経験したこともないようなものすごい勢いで吹き出すおしっこでびしょびしょに汚れた股間とお尻を綺麗にできるものはどこにもないのだ。

「ううっ、ふああああっ、でちゃう、でちゃうっ」

うめき声を上げる理沙。しっかりと閉じられた鍵が目に入る。これから鍵を明けて外に出て、他の個室に入って鍵を掛けてしゃがみ込むまで、おしっこをこぼさずにいられる自信がない。トイレトペーパーを探して戻るなんて不可能だった。

理沙は知らないことだったが、このトイレは悪ふざけに興じる一部生徒の格好の悪戯場所になっており、トイレトペーパーが水浸しになるという事態が続出していた。この状況もそれを重く見た教師の苦肉の策だったのだが——今現在の理沙にとっては悪魔の所業に均しい行為だった。

「なんか、なんかないのっ……お願い、ティッシュとか……っ」

懇願にも近い調子でスポーツバッグを引っ掻きまわす。

だが、理沙の願いも空しく、そこからはポケットティッシュの一枚も見つかることはなかった。さっきの路地裏で手を拭いたとき、必要以上に念入りになりすぎたせいで全部使ってしまったのだ。ゴミ箱なんかで処分してしまったことを悔やむ理沙だが、既に後の祭り。

お気に入りのスポーツタオルが手に触れる。スポーツドリンクの懸賞で当てたそれは、理沙のお気に入りです。自慢の品だった。

「ダメ——でちゃううっ！！」

だが、背に腹は換えられない。今は緊急も緊急、最大の非常事態なのだ。

もう洗濯したからと言って今みたいに使うことはできないかもしれない。それを覚悟しながら理沙はタオルを掴み、ぎゅっと握り締めた。徹底して禁じてきた股間の力を一気に抜く。

ちゅるっ、しゅるるるるるっ……

我慢に弄ばれ、堪えに堪えてきたおしっこが、理沙の排泄孔から噴き出して水面を叩こうとしたその瞬間。

バタン、ガチャガチャガチャッ！！ ゴボ、ゴボジャアアア————ツ！！

隣の個室が乱暴に閉められ、音消しの水が盛大に流される。

同時、

どんどんどんどんっ！！

すごい勢いで理沙の個室も、ドアがノックされた。

「ちょっと、ねえ、お願い居るのよね？ 開けてあげてっ」

「え……」

「う……く、ふあうっ……」

切羽詰った、悲鳴のようなうめき声。急かすかのようにもう一度、激しくノックが繰り返される。有無を言わせぬ語調とドアが軋んでしまいそうな激しノックに、理沙は反射的に腰を浮かしてしまう。

「ねえ、お願いっ、開けてあげてよっ！！！」

「あ、あの、ちょっと待って」

「そんな事言わないでっ、お願いだからっ！！！」

その凄まじい剣幕は、とても扉越しの言葉では納得してもらえないものではなく、理沙はジャージのズボン上げざるを得なかった。つい数秒前まで、次にズボンを履くときにはすっかりおしっこを済ませて、心の底からすっきりできているはずだったのに。

ひとまずは引っ込んでくれたものの今もなおちりちりと激しく暴れる膀胱をなだめ、ズボンをぐいぐいと引っばって股間を持ち上げな

がら、理沙は鍵を外す。

がちりと開いたドアの向こうには、青ざめた顔でぎゅうとお腹を押さえている小学校低学年くらいの女の子が、数名の少女達に付き添われて立っていた。

「良かった——」

「ねえ、お願い。妹がちょっと悪いもの食べちゃったみたいで——もう限界なの、だから、お願いっ！！ 校舎の方鍵がかっちゃってるし、このトイレしか使えないし、もう他のところに行ってる余裕もなくて——」

付き添いの少女達が詰め寄ってくる。その向こうで悲痛な声があがる。

「おねえ、ちゃんっ……でちゃうっ……」

「ほら、もう大丈夫だから……あとほんのちょっとだから我慢してっ！！ ——ねえ、お願い、変わってあげてっ！！」

「え……」

理沙の手を掴んで揺さぶりながら、付き添いの少女が懇願を繰り返す。そのあまりの勢いに、理沙は個室から半ば引っ張り出されるようにして外へ出てしまっていた。

理沙にとっては不幸なことに、少女達にとっては幸運な事に。それが、彼女たちには了承の合図に見えてしまったのだった。

「ありがとうっ！！ ほら、速くしてっ——」

「え、あ、ちょ」

何かを言う余裕すらなく、理沙はドアの外へと押しのけられてしまう。

突き飛ばされた身体のバランスを保とうと、理沙の脚がぐいと伸びてタイルの上にぶつかる。同時、靴底から突き上げてきた強烈な尿意が理沙の下腹部を直撃した。

（うあうっ！！）

声にならない悲鳴を上げる理沙の額に、脂汗がびっしりと浮かぶ。もう限界を超えたさらにその上の我慢を強いられているのだ。全力で括約筋を引き絞っていなければならず、他になにもできない。

だが、理沙の絶体絶命の状況に気付いてやれる者は、その場にはいなかった。理沙が声を立てる余裕もなくぎゅうぎゅうと股間を抑え、ダムに流れ込む尿意の大洪水を必死に抑えている間に、付き添いの少女は青ざめた妹を個室に押しこんだ。

「ねえ、紙！！ 紙とってあげてっ」

「あ、うんっ」

「ちょ、ちょっと、待ってっ……」

抗議をする理沙だが、爆発寸前の膀胱を抱えたままではか細い悲鳴すら上げる事はできなかった。慌しくトイレを駆け回る少女達が理沙を隅に追いやって、彼女に気付くことなく通りすぎてゆく。

「ごめんね——あとでお礼、するからっ、今はお願いっ」

少女の一人が理沙をトイレの外へと押しやった。じわりっ、じわりっ排泄孔から漏れ出すおしっこに精一杯の理沙は、それに抵抗することもできず、女子トイレのマークが記されたドアの前に放り出されてしまった。

（そんなあっ……うそ、嘘っ……だって、わたし、まだ、おしっこっ……）

突如訪れた修羅場の光景に、今にも爆発しそうな下腹部を抱えたまま理沙は腰を落として背中を丸める。きつく閉じ合わせた足の間に両手を突っ込んで破裂寸前の膀胱を押さえつける。

（まだ、おしっこできてないのにっ……まだおしっこしてないのにっ……！！）

トイレの中は時ならぬ戦場と化しているようだった。どう考えても10分や20分で済みそうな気配はない。

……つまり、もうこのトイレには入れない。

(……やだっ、やだやだやだっ！！……あ、ああっ、でちゃうっ、でちゃうっ)

「だ、だめっ、わたしもっ、わたしもトイレえっ……トイレいかせてよおっ……」

力なく握られたこぶしが弱々しく壁を叩く。

理沙の悲痛な声が、人の居なくなった廊下に響き渡る。

きゅうううんっ、じわあっ……しゅるっ。

がくがくと震える少女の腰が、尿意に激しくよじられる。既に理沙の括約筋は長い長い我慢のために痺れ始めて、完全にはおしっこを塞ぎ止められなくなっていた。尿意が爆発するたびにじわっ、じわっと股間の先端から吹き出す熱い雫が、スパッツを染み透ってジャージにまで黒い染みを広げてゆく。

「やだっ、おしっこ漏れちゃう、おしっこがっ、おしっこがあっ」

中学生の女の子として決して発してはいけない、恥ずかしい言葉を口にしながら、理沙はふるふると股間を揺すり、お尻をモジかせた。

ここは既にトイレの敷地の中ですらない。部活の聲がこだまするグラウンドは運動をする場所で、おしっこをしたり尿意を我慢したりする場所ではなかった。

そしてここには個室や便器やトイレトペーパーどころか、スポーツバッグもタオルもあのペットボトルすらない。理沙がおしっこをするための手段は完全に失われてしまったのだ。

じゅじゅじゅ……じゅわあっ……

温かいものが理沙の下着にこぼれ、広がってゆく。だがその感覚すら理沙には感じ取る余裕がなかった。

(また……さっきみたいの来ちゃうっ……おしっこ、またいっぱいでちゃうっ……)

おしっこをするための設備の一切を取り上げられてしまった理沙は、がちがちと震える歯をとめることも出来ずくねくねと腰をよじり、足踏みを繰り返す。この一時間で少女の身体は1リットル以上のおしっこを作り出しているのだ。

学校は相変わらずざわざわと喧騒に揺れ、平穏な休日が続いている。たった一人絶望的な戦いを続けている理沙の事などお構い無しだった。

いつも颯爽と地面を蹴って軽やかに走るほっそりとした脚も、ぱんぱんに詰まったおしっこを塞ぎ止めるのにはなんの役にも立たない。

むしろ、陸上で鍛えられた活発な新陳代謝は、理沙をますます苦しめるばかりだった。全身の水分が絞り上げられ、老廃物と一緒に下腹部に集まり、ろ過されておしっこを作り出してゆく。昨晚の分は既に出してしまったとは言え、理沙はついさっきまでに500mlペットボトル二本分、合計1リットルもの水分を口にしているのだ。

「おしっこお、おしっこでううっ……おしっこ、いっぱいいい」

ぎりぎり尿意が高まってゆく。これ以上ないほどに引き伸ばされた理沙のおなかの中の水風船に、さらに大量のおしっこが注ぎ

込まれる。今度こそ逃れられない猛烈な排泄欲求が少女を陵辱し、余すところ無く責め苛んでいた。

（おしっこしたい、おしっこくっ、くるよお、おしっこきちゃうっ、はやくおしっこおしっこ、おしっこでちゃうだしちゃうっ！！）

トイレ、おしっこ、繰り返される二つの単語で理沙の頭の中はいっぱいに埋まる。

限界まで膨らんだ膀胱が嵐のような尿意を訴え、絞り上げられるように収縮する。ずうん、と内臓を圧迫する膨大なおしっこに少女の括約筋が悲鳴を上げ、足の付け根に痺れが伝播する。

せっかくここまで我慢し続けてきたのに、ここで失敗なんてできるはずがなかった。

理沙は体育館横の茂みにむかってふらふらと歩みを進める。

ぷしゅっ、ぷしゅるるるううう……

容赦なく理沙のおなかの中でおしっこが暴れまわり、少女の身体を内側から蹂躪してゆく。恥ずかしい液体を溢れ出させようとする下品な欲求が、理沙の心を千々に引き裂いていた。ジャージの股間を固く握り締めた指の隙間からこぼれるおしっこがぼたぼたとスニーカーを汚し、地面に黒い染み跡を残してゆく。

（おしっこしたいおしっこおしっこしたいしたいしたいするしちゃうでちゃうおしっこでちゃうううっ！！）

がに股になって悲鳴を上げ、理沙は草むらに突撃していた。グラウンドの生徒達の数人が何事かと理沙の方を振り返る。

他者の視線をわずかに隠すことすら叶わないの草むらですら、崩壊寸前のおしっこを抱えた理沙の目には魅力的な排泄場所に映っていた。そんな場所で女の子がお尻を丸出しにしてしゃがみこんでいれば、何をしているのかなんて一目瞭然だというのに。

しゅるしゅるしゅしゅしゅっ、しよしよしよおおおっ

いっそ爽快なくらいに軽い音が、少女の股間で響く。吹き出した水流が下着にぶつかり、ぐぐもったぶじゅじゅじゅっという音を立てて零れ落ち、地面に水たまりをつくる。

理沙の身体でこの1時間の間につくられた新鮮なおしっこが、剥きだしの地面に降り注いでゆく。

じゅじゅじゅっ、じゅうっ、じゅるるるっぷしゅううっ

「ううああっ……でる、でる、でるううっ！！」

膀胱が千切れそうだった。限界を超えて高まる尿意はまるで脈動のように下腹部で繰り返され、理沙の少女に相応しい理性や恥じらいを削り落としてゆく。

今の理沙は、おしっこを我慢することで精一杯で、それ以外の何も考えることができない。ほとんど引き裂くようにしてジャージと下着をずらした理沙は、グラウンドからの視線に気付かないまま腰をかがめる。

同時、排泄孔から恥丘に掛けて走る激しく鈍い痺れと、強烈な尿意。

「あ、ああっ」

（でないで、出ないでええっ……おしっこもうすぐだから、もうすぐ出ていいから、あとほんのちよっとだけおとなしくしててっ、お願いいいいいいいっ！！）

辛抱を無くした排泄孔がこぼすおしっこ先走りがもたらした、あまりにも甘美な解放感に必死に抗いながら、足にまとわりつくズボンと下着を掴んで懇願する理沙だったが、
その願いが届くには、ほんの一瞬だけ、遅すぎた。

じゅじゅじゅうっ！！　じゅばああああああ！！

膝に引っかかったズボンとスパッツめがけ、ついに本当の勢いで吹き出したおしっこが激突する。白い下着に直撃した水流は一瞬で布地をびしょびしょに濡らし、じゃぼじゃぼと辺りに響くほどの大きな音を立てた。

「いや、いやあっ……」

理沙の恥ずかしい所から吹き出した水流はすぐさま奔流に変わり、真っ白な飛沫を上げて地面に叩きつけられた。激しく下品な音が当たりに響く。じょぼじょぼとはしたない音を立てて、水面がぐしゃぐしゃと崩れてゆく。

噴き出した水流は強烈な勢いで黒土をえぐり、泥に深い穴を穿った。少女の排泄孔からとめどなく溢れるおしっこは水面にぶつかって理沙の足元を攪拌し、わずかに黄色身がかった泡を立ててゆく。

限界ぎりぎりのリミットまで溜めこまれていたおしっこは、理沙の下腹部を押し上げるほどに膀胱を圧迫している。そこから放出される排泄の勢いは普段の比ではない。まるでホースの先端を潰して水をぶちまけている時のようだった。

「あ、はああ……」

ばじゃばじゃと音と飛沫を立て、野外、露天の臨時特設理沙専用仮設トイレに放たれる理沙のおしっこ。

14歳にもなって。幼稚園の子のようにおしっこを我慢できなくなった理沙のために用意された、一番恥ずかしい排泄を強要されるトイレ。まして、ここは本物のトイレのすぐ側なのだ。それなのに、理沙のおしっこは弱まるどころか激しく土をえぐり、止まる気配を見せない。それどころか強まってすらいた。

（うううっ……！！　やっちゃったっ……失敗しちゃったあっ……）

耳まで真っ赤になりながら、理沙はおなか一杯、たっぷんたっぷんに詰まっていたおしっこを排泄する。水たまりを直撃する水流とは別に、剥き出しの理沙のスリットから、お尻のほうにおしっこが伝ってぼたぼたと流れ落ちてゆく。

台無しに濡れてしまった下着とスパッツからも、ぼたぼたと雫が垂れ落ちて、理沙の足元に大きく広がった水たまりをどんどんと広げている。

（まだでる、でちゃうよおっ……もう、すっごくいっぱいおしっこしてるのに……まだ止まんないっ……やだ、こんなのやだよお……）

いつも排泄の感覚とは桁が違っていた。少女の体の中に、いったいどうすればこんな量のおしっこが蓄えられていたと言うのか。泡立った水面は理沙の足元から大きな川をつくり、水たまりを広げてゆく。

じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ、じょじょろろろ……

「……ね、ねえっ」

「っ、や、いやあっ！！」

不意に掛けられた声に、理沙は排泄の恍惚から引き戻された。動揺に揺れる理沙の腰の下でおしっこが複雑な放物線を描き、じゃぼぼと激しく足元の水たまりを攪拌する。

「やだっ、見ないでっ、見ないでえええっ！！」

中学生にもなって、おしっこをしている所を、オモラシをしている所を、ぱんつをおしっこでびしゃびしゃに濡らしてしまっているまさにその最中を、同級生や先輩や後輩に見られてしまい、理沙は絶叫する。

それでもおしっこは止まりはしない。水たまりは一回りほど大きくなったのに、まだ理沙の膀胱には半分以上おしっこが残っているのだった。

（はやく、はやく終わってっ、終わってようっ……………）

ベソをかきながら願う心とは裏腹に、排泄は一向に終わらない。

理沙の足元では深く抉れた黒土が顔を覗かせ、水たまりはたっぷりの泡と濁った泥色に澱んでいる。下着もスパッツもジャージも、下半身どころか上半身まで跳ねたおしっこ混ざりの泥水でどろどろによごれていた。その原因は全て、理沙のおなかの中に収まっていたおしっこなのだ。

「やあああっ、いやああっ……………」

だから理沙は唇を噛み締めて、少しでも早くおしっこを出し切ろうとお腹に力を入れるしかない。それがますますおしっこの勢いを早め、激しい音を立てる。

空の下、最も恥ずかしい屋外露天の臨時仮設トイレで、理沙のおしっこはまだまだ続いていく。

（初出：おもらし千夜一夜 833-848 2005/06/09）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: イジメのお話。(full.ver)

STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 09:36:07

BODY:

「はあつ、はあつ……」

放課後のチャイムが鳴り響く夕暮れの校舎。午後 5 時の廊下を、高坂エリは足早に進む。

荒い息、赤い顔。上気した頬の上でメガネが揺れる。彼女の足取りはおぼつかないままで、その右手はおなかにぴったりと添えられている。小刻みに握り締められる上着の袖は、切羽詰ったエリの状況を如実に顕していた。

目指す先は 3 階の階段横。待望の女子トイレ。

朝から我慢しつづけたおしっこが、少女のおなかでたぶんと揺れる。

「っ……ふぁ……あつ……」

今日のエリはとことんまで間が悪かった。

休み時間は委員会の子に用事を頼まれたり、移動教室の時に忘れ物をしたりしてついに行けずじまいだった。昼休みの時も席を立とうとした瞬間に隣の席の子がコンタクトを落としてしまい、その騒ぎで結局 5 時間目が始まるまで教室を出ることができなかった。

まさかという思いはあったが、本当にそのまま一度もおしっこができないまま放課後を迎える羽目になるなんて、エリには信じられなかった。トイレを済ませず家を出てしまった朝の事が死ぬほど悔やまれる。

（あぁっ……もう、げんかいっ……）

ざわざわと下腹部に疼きが走る。昨日の夜から数えて実に 1 6 時間。エリの体内で抽出されたおしっこは下腹部の許容量いっぱいにまで達している。一刻も早くトイレに向かわなければ、最悪の事態だってありうるかもしれない。

スカートの裾を軽く握り、エリは小走りに廊下を急ぐ。

次の角を曲がればトイレだ。やっとおしっこを済ませることができる。一足早く安堵しながら、エリは最後の数メートルを走る。

だが、そこでエリは予想もしなかった事態に直面することになった。

「え……」

トイレの入口にはエリと同じ学年の少女達が揃って並んでいた。それぞれお喋りに興じながら佇んでいた彼女達は、駆け込んできたエリに気付いて一斉に顔を上げた。いきなりの注目に呆然となるエリのほうを見て、少女達はくすくすと笑いあう。

彼女たちの制服のリボンには細い白線の入った緑色。エリのような受験組とは違い、初等部から陵桜に通っている内進生たちだ。

じくん、じくつ、

（は、はや、くっ……！！）

きゅうと収縮する下腹部に急かされ、エリは口を開く。喉がもうカラカラだった。

「あ、あのっ……」

「なあに？ 外進の子が、何か用？」

少女たちの一人がことさらに陰悪な態度を返す。鋭い視線に曝されたエリは、思わずその場を後ずさってしまった。

伝統的な進学校である陵桜学院では、内部進学の子は早い時期から一学年先の授業を進めるカリキュラムがある。そのせいか内進生は外進の生徒を見下す傾向があった。そのテンプレートどおりの対応に、エリはきゅっと身を竦ませる。

何か用、もない。エリのおなかの中は今とんでもないことになっていて、一秒でも早くトイレに駆けこまねば大変なことになってしまうのだ。だがトイレの前に並ぶ少女たちは、まるでそんなことは知らないとも言うようにエリに冷たい視線を向ける。

「そ、そのっ……」

上手く舌が回らず、言葉にすることができない。もじもじと情けない格好でおしりを揺するのを隠せず、エリは俯いてしまった。

「い、入れて……ください……」

「あら、あなたお手洗いに用なのかしら？」

「……っ」

明けてに言い返されて、エリの頬が真っ赤になる。たとえ同性であっても、親しくもない相手にトイレを察せられてしまうのはエリのような年頃の少女にとって耐えがたい苦痛だ。

「どうしたの？ ここに用なの？ ちゃんと仰ってくださないと解りませんわ」

駄目押しのように問いかけられる。

エリはますます赤くなって足元まで視線を落とし、小さく頷いた。

「は、はいっ…あつ、…あのっ、早く……」

答えた直後に、ぞわりと尿意の波が持ち上がってきた。エリは我慢できずに言葉の途中でぐねぐねと身体をよじってしまう。

『……あら、あの子本当にダメみたいね？』

『みっともないですね。こんな人前で。……これだから外進の人は』

『ねえ、見てよあのカッコ。ひどいわね？』

「あつ、あうううっ……」

少女達の間から、くすくすと忍び笑いが漏れる。

容赦のない周知に胸を締め付けられながらも、エリの爪先は廊下を叩き続け、おしこ我慢のリズムを取る。

「ふうん……でもあなた、……高坂エリさんと言うのかしら？ 外進クラスの子でしょう？ どうしてこんなところのお手洗いに来るのかしら？ ここはわたしたちの校舎ですわよ？ 外進生はきちんとそちらのお手洗いがあるはずでしょう？」

「そうそう。わたしたち内進はあんた達と違って、授業中にトイレなんか行けないくらい一生懸命勉強してるんだから、悪いけど譲ってあげられないわよ」

「え……っ」

それはあまりにも残酷な宣誓だった。衝撃に耐えかね、エリはきゅっとスカートを握り締める。

「そ、そんな…どうして……入れて、入れてようっ……」

「ちょっと、何よいきなりっ、あんたっ」

「あらあら。随分と余裕のないことですね。いけませんわ。陵桜の生徒はいつも淑やかであるべしと校則にもあるのをご存知かしら？」

少女達はまるでエリをブロックするように、トイレの入口を塞ぐ。

彼女達の行動が理解できず、エリの頭は一気にパニックになった。

「お、おねがい……もう、本当に……っ、入れて……入れ、てえ……」

「くす。みっともないですわよ。高坂さん。そもそもあなた、入ってどうするつもりなのかしら？」

「そ……そんなっ、決まって……はああ……っ」

下腹部を恥ずかしい液体でぱんぱんに張り詰めさせたエリが、トイレに入っただけだ。少女として耐え難い恥ずかしい行為を強要してくる少女たちに、エリは下を向いてモジモジと膝をこすり合わせながら口ごもってしまう。

エリはトイレを目前にして動けなくなってしまった。声をかけるきっかけを失って黙ってしまったエリを、外進生たちの無遠慮な視線が眺め回す。

（っ……やだ、恥ずかしい、よおっ……）

再び尿意の波が来た。切羽詰ったエリの膀胱はとうに限界に達し、ひっきりなしにエリにおしっこを命令してくる。ぎゅうぎゅうとスカートを押さえてしまう少女の姿は、どう見ても陵桜の生徒がしている振る舞いではない。

こんな風にトイレを我慢したのは小学校の低学年以来だった。情けなさで目元を熱くするエリが、もう一度勇気を振り絞ってお願いをしようとした瞬間。

「ねー、どうしたのかスミ？」

背中から掛けられた声に、エリははっとして振り向く。

そこにはエリのクラスメイトの白河アカリが、にこにこ笑いながら立っていた。

「あらアカリ。丁度いいわ、聞いてくださるかしら。この方がここのお手洗いを使いたいって聞かないのよ」

「へー、そうなんだ？」

アカリはちらりとエリを見る。

どうやら先頭に立つ外進生の少女とアカリとは顔見知りのようだった。カスミと呼ばれた長い髪の彼女は、困ったものですというように軽く両手を開いて、

「ええ、そうです。それでここは外進生のお手洗いだと説明してさしあげただけど、どうも高坂さんは強情で、聞いてもらえなくて困っているのよ」

「あ、アカリちゃんっ……その、わたしっ」

とにかく、エリにしてみればまさに天の助けだった。クラスのリーダー的存在であるアカリならば、外進生の子達を説得してくれるかもしれない。そう思い、エリはくねくねと腰を揺すりながらアカリに縋る。

だが、エリの懇願の先でアカリが浮かべた笑みは、エリを取り囲む外進生たちの浮かべるものと同じ種類のものだった。

「ねえエリちゃん、どうしたの？ そんなにおトイレ行きたいの？」

「え……あ、あの、アカリ、ちゃん……？」

「どうなの？ そんなにおトイレいきたい？ もう限界？」

まるで悪気もないように聞いてくるアカリ。けれどその質問は、カスミがしていたものとまったく同じもの。答えられずにいるエリに、アカリが顔を寄せてくる。

「そ、それは……っ、んうっ……」

「ほらあ、言ってくれなきゃわからないよー？」

「っ、……っ、……」

「んー？ 聞こえないなあ？」

煽るように耳を近づけるアカリ。クラスメイトの明け透けな態度に、エリはぎゅっと唇を噛んで耐える。

「な、なんで……アカリちゃん、までっ……。い……いじわる、しないで……よお……」

「えー。全然いじわるじゃないよー？ だってエリちゃんがおトイレに入りたいのかどうか教えてくれないと、あたしだってカスミに説明できないもん。それじゃエリちゃんもこまるんでしょー？」

「そ、そんなあ……！！」

エリは目の前が真っ暗になるのを感じた。

まさか、アカリまでエリにそれを要求してくるなんて。なんで、どうして？ パニックを起こしたエリの頭はすっかり混乱して、自分がどこにいるのかも忘れかけてしまう。

そこに襲い掛かってくる尿意の大波。

「うあっ……ふあうううっ……」

エリは交差させた脚の付け根にぎゅうぎゅうと両手を押し込んで、爆発してしまいそうな膀胱を押さえ込む。とうとうスカートの中に手をつっ込んでしまった彼女に、周囲から明らかな失笑が漏れた。

「ほらほら、エリちゃん？ じっとしていいのかなー？」

面白そうに顔を覗き込んでくるアカリ。

エリは“その単語”を口にする激しい羞恥に真っ赤になって俯いてしまう。

「……っ、…しっ……せて……さい……」

「よく聞こえないわね。まったく、用事もないのにお手洗いに入ろうとしないで欲しいものですわ。用が済んだなら早く出ていってくれませんか？ 高坂さん」

「っっ……」

カスミの侮蔑に、かあっ、と下を向いているエリの耳が、先端まで赤く染まった。

エリの下腹部がきゅんと切なく収縮する。

「っ、お、おねがい、しますっ……」

尿意に身悶えしながら、途切れ途切れにエリはどうかそだけを口にした。

「おねがい、です……お…といれに……い、いれて、ください……」

……ついに言ってしまった。羞恥に染まるエリの耳たぶがかすかに揺れる。

だが、アカリたちはなおも退こうとはしなかった。

「ふーん。そんなにトイレ入りたいんだ？」

「は、はいっ、だから、そのっ、……は、はや、くっ……」

エリはカラカラの喉にむりやり唾を飲み込む。

「や、いやああ……おね、がいいっ……お…お、しっこっ……させて……っ……」

瞬間、

周囲の少女たちから一斉に笑い声が上がる。頭が焼き切れてしまいそうなほどの羞恥が、エリの繊細な心をずたずたに引き裂いてゆく。

「へー、おしっこ？ エリちゃんおしっこしたいんだ？」

「い、言わないでようっ……」

言いながらもまっすぐ立てないエリに、アカリはぴったりを身体を寄せてきた。小刻みに震える膝を感じかれてしまい、エリは嫌っ、と身体をよじる。

「あっははっ、ほんとだー。これすごい我慢してるんだねー、エリちゃん。ぷるぷるしちゃって辛そうだねー。ねー、どれくらいしたいの？ おしっこ」

意地悪な笑みを浮かべながら、アカリがエリの顔を覗き込んでくる。

だが、絶え間ない尿意と羞恥に、エリは答えることもできず小さく唇を動かすのみだ。

「ほらあエリちゃん、ちゃんと説明してくれなきゃわかんないよー？」

「あっ…だめっ、やめてっ、やめてようっ！！」

アカリがつんつんとエリの下腹をつつく。一番いけない部分を無抵抗のまま触られ、途端に我慢できなくなってエリはぎゅうつとスカートの上から下着を力いっぱい引っ張った。

ぷるぷるとお尻が震え、膝小僧がコツリコツリとぶつかり合う。

「う……はうっ……ふあ、ううっ………！！」

噛み締められた唇がきゅっと引き絞られ、鼻の上でメガネがカタカタと揺れる。

自分を取り囲む少女達の気配に、エリの目尻がじわっとぼやけ始める。

「あれ？ どうしたの？ エリちゃんそろそろ限界～？」

「本当ですわね。恥ずかしいのかしら。そんなにお尻をいやらしく振って。陵桜の生徒とは思えませんわね」

容赦のないカスミの台詞が、アカリの言葉が、外進生たちの囁き声が、エリの羞恥をザクザクと刻んでゆく。

それでも彼女には他の選択肢は残されていなかった。おしっこを我慢するお尻を突き出した不恰好な中腰のまま、エリは羞恥に消え入りそうになりながら少女たちに懇願を繰り返す。

「お…おねがい、ですっ……おねがいっ、します……っ、あ、…わ、わたし、今日、一回も…いちども、……おトイレ行けて……ないんですっ…だから、……おねがい、おトイレ……おトイレで、……おしっこさせてくださいっ……」

全身全霊を込めた、お願いだった。

「ぶっ、あっははははっ、もうだめー、限界っ！！」

だが、エリの切羽詰った視線の先で、アカリはお腹を抱えて爆笑する。

「あー、もー、おっかしー。最高だよエリちゃん。ねーみんな聞いた今の？ 『おしっこさせてくださーい』だって。ホントにそんなにおトイレしたくなってるんだ、あっはははーっ！！」

「え、あうっ……な、なんで？ アカリちゃん……どうして、そんなこと…っ」

「あっははははっ。もー、なんでもなにもないよー。鈍いなあエリちゃん。気付いてなかったの？ 今日一回もおシッコしてないなんて、クラス全員知ってるよー、そんなこと」

「え……」

それはあまりに衝撃的な発言すぎて、しばらくの間エリはアカリが何を言っているのか理解できなかった。

「え……っ」

そしてエリは思い出す。

今日、まるでなにかの嫌がらせのように、エリをトイレに行かせてくれなかったいつもの『偶然』を。よそよそしい視線で委員会の手伝いを頼んできた隣の席の子、どこか怯えながら掃除当番を変わってくれないかと申し出てきた小学校からの幼なじみ。まるでエリが立ち上がるタイミングを見計らって床に落ち、ちょうど昼休みの終わりと同時に見つかったコンタクトレンズ。

「じゃ、じゃあ、今日……ずっと……？」

「嫌ですわ、まさか本当に気付いてなかったのかしら？ 鈍いにも程がありますわよ、高坂さん」

カスミが唇の端を歪める。

「ど、どうして、こんなっ」

「勿論。決まっていますわ。あなたに身の程を知ってもらいたいからです高坂さん。……内進生のくせに調子に乗って！！」

怒気すら孕んだカスミの侮蔑に、エリはびくと身体をすくませる。

何がなんだか、解らなかった。

（なんで、なんで……こんな、ううっ……）

陵桜の伝統は戦前まで遡る。有名私立へも多くの生徒を輩出する名門で、中学からの編入組の、しかも転校生のエリがクラス一番のアカリはおろか内進生たちをもやすやすと飛び越えて実力テストのトップを取ってしまったこと。

それが、アカリたちをこんな行為に走らせた直接的な原因だった。

だが当のエリはそんな事を考えつきもしない。内気なエリにはそんな感情は理解できなかったし、極限まで高まった尿意がそれを許さない。

「そ、そんな、入れて……入れてよおっ……トイレ、おトイレっ……」

「あっははっ、エリちゃんそんなにオシッコしたいんだ？ さっきからもじもじしてばかりだねー」

「あら、いけませんわ高坂さん、はしたない振る舞いはやめたと申し上げたでしょう。そんなに恥ずかしいことを口にするなんて、陵桜の生徒にはあるまじきことですわよ」

「そうそう。5時間目のときなんか、机の下でぐいぐいあそこ押さえてたもんねー。もう必死で、これが見てて笑えるんだー。エリちゃん、いけないんだよ、女の子があんなことしちゃ」

「あ、ああっ、あれはっ……もう、本当にがまんできなくてっ……」

確かに、5時間目はエリが今日体験した人生最大のピンチのひとつだった。

括約筋や膝をこすり合せるだけではとても太刀打ちできないほどの大津波だったのだ。手を当ててぎゅっと出口を塞いでいなければ絶対にそのまま漏らしてしまっただろう。実はそれでもほんの少しだけ我慢しきれず、わずかに下着を汚してしまったほどなのだ。

エリの精一杯の反論を嘲笑うかのように、外進生たちの冷やかな視線が集まる。

「ふふーん。ほらほら、『あっあっダメえ、でちゃう、オシッコでちゃうよお！！』……みたいな感じー？」

アカリはスカートの上から股間に手を当てて、くねくねと腰を振ってみせる。それはひどく誇張されたものだが、確かにエリの物真似だった。少女達の間から笑い声が上がる。

ともかく。

ちゃんとトイレに行きたくてたまらないことも、その理由も説明した。もうこれで十分なはずだ。痛む胸を押さえ、エリはトイレの中に駆け込む。

もはや彼女には小さく区切られた個室しか見えなかった。誰にも知られない秘密の小部屋の中でのもっとも恥ずかしい行為を、下腹部が激しく切望する。

だが——エリがドアノブに手をかけた瞬間、それを押さえる手がすぐ傍から伸びていた。

「どうなさるおつもり？ 高坂さん？」

「え……」

慌ててカスミを見上げるエリが、彼女はドアを押さえる手をどけようとしなない。

「そ、そんな、ちや、ちゃんと説明してって、言ったのにっ……」

「もちろんそうですわ。でも、誰もあなたにお手洗いを使っていいという許可をした覚えはなくてよ？」

「え、えっ！？ な、なんでっ…！？ そんなあつ……」

「あら、心外ですわね。はじめにちゃんと説明してさしげましたわ。ここはわたくしたちのお手洗いですもの。内進のあなたに使う権利なんてありませんわ」

「そ、そんなっ……のって、…あああつ。…っ、ずっ、ずるい…ようっ……」

まさか、トイレの中でおしっこすることを禁止されるなんて。考えもしなかった事態に、エリはがくがくと腰を痙攣させる。

おなかの中でたぶたと揺れるおしっこがそれを引金にして暴れ出した。猛烈な尿意がぎゅるぎゅると膀胱を駆け抜け、激しい蠕動が少女の股間を直撃する。

暴走を始めてしまったエリの股間は、少女の意志を無視して勝手におしっこの準備を始めてしまった。

「や、あ、ダメッ、あああああつ、ふああんっ……！！」

しゅるしゅると漏れ出しそうになるおしっこを食い止めながら、エリは腰を揺すり、その場で行進のように大きく足踏みをはじめた。じっとしているだけでもう限界だ。

我慢の限界をはっきり示したエリのおしっこダンスに、少女たちからくすぐすと笑い声が上がる。

（やだっ……きちゃう……おしっこ、おしっこしたいのがきちゃううっ！！）

狂ったように制服の下腹部をさすり、暴れ回る膀胱をなだめようとするエリだが、それでもおなかの中でおしっこはおさまろうとしない。震える脚は力なく折れ曲がり、まるで重力に引かれるように、エリはその場にしゃがみ込んでしまった。

「くす。高坂さん、そんなところでお座りになったりして、まさか本当にそこで始めてしまうおつもり？」

『本当ね。トイレの前なのに我慢できないなんて』

『子供じゃないんだから、ねえ？』

『呆れた。少しは陵桜の生徒って自覚を持って欲しいですね』

『みっともないわ……』

「っ、あああうっ、そ、そんなっ、そんなあつ……おねがい……んうっ……意地悪しないでえっ……もう、でちゃううっ、でちゃうよお……」

爆発寸前の膀胱を抱え、懇願するエリ。だが見下ろす内進の少女たちの視線はあくまで冷やかだった。

「そうだねー、みんなの言う通りだよエリちゃん？ お犬さんだってちゃんと決められた場所でオシッコするよねー？ 自分の小屋の中でなんかぜったいにしないよね？ 陵桜の生徒がそんな事もできないなんていけないよ？ エリちゃん、お・ん・な・の・こでしょ？」

涙を滲ませるエリの眼鏡をつんと押し上げて、アカリがにっこり笑う。

その笑顔は、エリの心をきつく締め付けた。

「なんで……なんで、そんなこと言うの……アカリちゃんっ……やだよ、こんなのやだ……っ　くうん……っ」

涙ながらの訴えさえ、猛烈な尿意に邪魔をされる。友達の名前を呼びながら、くねくねを腰を揺する少女に再びどっと笑い声が上がった。

うずくまったエリはどうにかおしっこを耐え抜いて、大きく息を繰り返していた。いまだ激しい尿意の残滓が恥骨にじんと響いているが、どうにか耐えられないレベルではない。

だが、遠からずそれが終焉を告げるのは明らかだった。

（はあ、はあっ、はあっ……）

ぎゅっと両手に力を込める。しゃがみ込んだおしっこをするための姿勢で、エリはこの上もなく惨めな気持ちを味あわされて続けた。彼女を困む少女達はそれぞれ奇異と好奇に彩られた悪意で、苦悶を訴えるエリを見物しているのだ。

（やだ、もう……やだよお……こんなの……）

夢ならいいのに。そう思うエリだが、しくんしくんと疼く膀胱はそれをはっきりと否定する。

「あ、そーだっ♪」

唐突に声をあげたのはアカリだった。彼女ははいいことを考えついたとばかりに両手を打ち鳴らす。

「ねえねえカスミちゃん、あたし思ったんだけど。エリちゃんって最近転校してきたばかりじゃない？　この学校のトイレの事よく知らないみたいだしさ、教えてあげようよ」

「……そうですわね。それはいい考えですわ、アカリ」

アカリが何を考えているのかを察したのか、カスミも成程、というように頷いた。それを見たエリの背中に怖気が走る。

（も、もう、ホントに限界なのにつ……でちゃう、もうでちゃうよお……）

すでに酷使された括約筋は麻痺をはじめ、ひくひくと細かく痙攣を繰り返している。両手を離したら十秒も持たずにおしっこが始まってしまうかもしれない。それなのにアカリたちは、これ以上一体何をさせようと言うのか。

「ねえエリちゃん、そんなにトイレ行きたい？」

「……っ、は、はいっ……」

彼女達がなにを考えているのかとても不気味だったが、『おしっこ』の単語にエリには頷くことしかできない。彼女達が許してくれないければ、今のエリはトイレすら自由に入れれないのだ。

「じゃあ、あたしたちがエリちゃんのこと、案内したげるよ」

「え、あ…案内……っ？」

予想外の言葉に疑問を浮かべるエリだったが、次の瞬間アカリはいきなりエリの手を掴んでぐいっと引っ張り上げる。

「や、だめえっ……でちゃう、立ったらでちゃう……っ！！」

無理矢理立たされたことによって、一気におなかが圧迫され、治まっていた尿意が再び爆発した。悲鳴を上げるエリには構わず、アカリはエリに抱きつくように身体を寄せてきた。

「ほらほらー。これからエリちゃんが行きたくて行きたくてどうしようもないトイレに連れてってあげるんだから。こんなところでオシッコなんかシちゃダメだよー？」

「いひあああああっ！！　だめ、やめてえ……っ！！」

アカリは震えるエリの腰をぼんぼんと叩く。恥骨に響く刺激に、限界水域のダムがビリビリと反応した。溜まりに溜まった中身をたぶ

んたぶんと震えさせる衝撃に、エリはますますお尻を突き出して、「くううっ」と切なげな悲鳴を上げざるをえない。

ぎり、と食いしばった歯が小さく震え、エリは全身を堅くして強烈な尿意をやり過ごす。ぐらぐらと沸騰したおしっこが今にも溢れ出して来てしまいそうだ。

（くううっ、うああああっ、あああああつ……）

「はーっ、はあーっ、だめ、だめえ……」

途切れ途切れに訴えるエリだが、二人は容赦しなかった。両脇からエリを抱え込むようにして立ち上がらせ、くるとトイレに背を向ける。

「それでは参りましょうか。高坂さん？」

「ほら、いこ、エリちゃん」

くすくす、と忍び笑いをこぼしながら、外進生たちが道を作って左右に割れる。

（あ、あああ……違う、のにつ……そっちじゃ、そっちじゃないよお……といれ、おといれはやく、おしっこ、おといれっ……）

おしっこを我慢し続けることにありったけの力を注ぐエリに、もはや二人を振りほどく余裕はない。

ついにエリは二人に手を引かれるままトイレの入口から引きずり出されてしまった。絶望に霞むエリの耳元で、アカリが意地悪く囁く。

「ほらほら、ちゃんと歩きよエリちゃん。みつともないよー？」

「あ、ああっ、まってっ、待ってえっ……」

強引に引きずられるようにして廊下を歩かされる。エリの脚はすでに満水のダムを堰き止めるのに精一杯で、移動のための手段としてまともに機能していなかった。

長い長い廊下を立ち止まっては歩かされ、歩かされては立ち止まりを繰り返し、エリはついに後者の端まで連れてこられてしまった。

階段を下りる衝撃に腰を砕けさせてしまい、しゃがみ込んで上履きのかかとをぐりぐりとあそこに押し付けるエリを見下ろして、アカリとカスミがくすくすと笑い合う。

「ふふふー。そんなカッコしてちゃダメだよエリちゃん。ほら、ここだと他の子にも気付かれちゃうよ？ エリちゃんがいっぱいいっぱいオシッコ我慢してますー、いまからここでシちゃうかもしれませんーって」

「……くす。外進の子はお手洗いのしつけもできていないんですね？（はしたない）」

「ちがっ……ちがう、ようっ……」

もう、立っているだけでも辛いのだ。それなのにおしっこを我慢させられたまま学校中のを連れ回され、しかも途中にあるトイレの前は全て通り過ぎていく。アカリ曰く、これは『トイレの見学』なのだ。見学である以上、もちろんトイレは使えない。

「は、はや、くっ……」

「あっはははっ。そんなに焦らなくても全部説明してあげるから心配ないよエリちゃん。終わったらいくらでもオシッコしていいからさー」

目の前のトイレを無理矢理素通りさせられる。今のエリにこれ以上辛い事があるはずもなかった。それぞれの場所で一回ずつ用を足したとしても足りないくらい、エリの膀胱は限界水量を超えたおしっこに蹂躪されている。

手摺にしがみついてもちもぢとおしりを振りながら階段を昇り、アカリに急かされて無理矢理急がされ、翻弄され続けるエリの膀胱はもう何度も危機に陥っていた。それでもなんとか失敗せずにここまで歩けたのは、エリの必死の我慢と少女としてのプライドのおかげだった。

そうして辿り着いたここは体育館前。校舎内とはやや趣の違うトイレを前に、アカリが楽しそうにエリを振り返る。

「はーい、次の見学先とうちゃくー。ここが体育館のおトイレでーす。エリちゃんどう、わかったー？」

「う、ううっ、……っ」

「あはっ、エリちゃんだいぶ限界みたいだねー。がくがく震えちゃって、オシッコそんなにしたいのかなー？」

まるで子供に語りかけるように聞いてくるアカリに、エリは真っ赤になって俯くことしか出来ない。それでも何とか必死に勇気を振り絞って、こくり、と小さく頷き返す。

「あら。高坂さん、しっかりなさって。高坂さん？ ……くす。どうしましょうアカリ？ 本当にだめみたいですわよ、高坂さんは」

「……うーん。でもね、この時間はねー」

わざとらしく腕組みなんかをして、アカリは賑やかな体育館にちらりと視線を向けた。

『あー、休憩休憩ー』

『ね、お手洗いいこー』

『わたしもー』

『もう限界だよーっ』

『あはははっ、ちょっとお行儀わるいよ、みんなー』

同時、どやどやと体育館から、ジャージ姿の少女たちがあふれ出してくる。運動部の子達がちょうど休憩の時間になり、外に出てくるところだった。

「ほら。見てエリちゃん。ちょっと混んでるし、運動部の子達のこと邪魔しちゃういけないでしょ？ エリちゃん間に合わないんじゃないかなー？」

「くす、そうですわね？」

「あ、はあっ…そっ、そんなことない……っ、ちゃ、ちゃんと、入れてって、お願いすればっ……」

「高坂さん、はしたないことはおよしになって。仮にも陵桜の生徒がお手洗いを我慢できないから先に使わせてくださいなんて口にしでいいと思いますの？」

冷酷に告げるカスミに、エリは喉の奥で悲鳴を上げそうになる。

「そうだよねー。あの子達も我慢してるんだしさ、せつかくの休憩時間なんだよ？ エリちゃんが邪魔しちゃったら、トイレ済ませられないかもしれないよー？ いきなり入ってっちゃだめだよね？ そう思うでしょ？」

明るく告げるアカリ。

だが、既にエリは真っ青だ。びくびくと張り詰めた下腹部はもう限界で、脆くなった脚の付け根のダムは決壊してしまいそう。歯の根も合わないまま、エリは必死に二人に懇願する。

「あああ、あああつ。……お、おねがいっ…お願い、しますっ……もう、本当に限界なんですっ……ダメなんですっ……お、しっこ…おしっこ、させてください……っ」

「あっはは、そっか。じゃあ仕方ないねー」

にこりと邪気のない笑顔を見せて、あっさり答えるアカリ。

え、と思うエリの前で、アカリはトイレの入り口に向き直ると、すっと息を吸い込んで口の左右に手を添え、高らかに声をあげる。

「ねえみんなー、ちょっと聞いてーっ、ちゅうもーくっ！！」

かなりの大声に、何事かと運動部の少女たちが一斉に振り向いた。

「おっけー。ごきょーりよくありがとねー。あのさ、この子、高坂エリさんって言ってあたしのクラスの子なんだけど、さっきからものすごくおトイレに行きたって言ってるんだー」

「——っ！！！？　ちょ、ちょっと、アカリちゃんやめてっ！？」

とんでもない行動に出たアカリにエリは我を忘れて飛びつこうとする。だがそれは余裕の笑みを浮かべるカスミにあっさりと阻止された。今のエリはおなかに爆弾を抱えているのと同じなのだ。

「エリちゃん、朝からずーっとオシッコ我慢してて、もうぜんっぜん我慢できないって言ってるんだよねー。このままだと漏らしちゃうみたいだから、入れてあげてもいいかなー？」

どよどよとざわめきが走る。

一斉に注視が集まり、がくがくと我慢の真っ最中の自分が衆目に曝されてしまう。

（や、だ……見、ちゃ、イヤああああ……っ）

窺うような、気にするような、案ずるような視線の群れ。自分のおなかの中の状態まで事細かに知られてしまう途方もない羞恥に、エリは気絶しそうになった。必死になって隠し、我慢に我慢を重ねて耐えている尿意を大声で宣伝される。恥骨を弱火で焙られているような、限界間近の尿意を堪えている少女にとって、これ以上の苦痛があるだろうか？

「アカリ、少しはしたないですわよ。いくらお友達のためとは言っても、もう少し言葉は選ばなければいけませんわ」

「あ、ごめんねー。でもぐずぐずしてたらエリちゃん、ホントに漏らしちゃいそうだからさー。で、オシッコがしたくてしたくてたまらないエリちゃんを、おトイレに入れてあげてもいいって思う人ー！！」

「やだ……っ、やめて、やめてよう……」

さらに追撃がかかる。

ホントに？　我慢してるの？　そんなに、おしっこ？　ずっと？　朝から？　みっともない……雑音に紛れて聞こえてくる少女たちの声が、エリの心をずたずたに切り刻む。

「っ！！」

もう、どうしようもなかった。死にたくなるほどの情けなさが胸の中で爆発する。エリはひくっ、と喉を震わせて、真っ白になったままの頭で廊下を走り出した。待望のトイレに背を向けたまま――

「はーいつ、追いついたー。もー、ダメだよエリちゃん？　せっかくあたし達が案内してあげてるのに逃げたりしちゃ」

「まったくですわね。アカリが恥を忍んでお願いして差し上げているのに、当のあなたがお礼も言わずにいなくなるなんて、恥知らずに

もほどがあると思いませんか？」

必死に逃げていたはずだったエリだが、おしっこを我慢したまま全力疾走なんてできるはずがない。程なくして二人に追いつかれたエリは、再び校舎に戻って西棟の二階、職員室の上の階に連れてこられていた。

廊下の脇にばかりとあいた入口。そしてその上には、恥ずかしい場所であることを知らせる赤い女の子のマーク。

おしっこができる場所を目の前にして、エリの足は知らずそちらに向いてしまう。

が、その歩はすぐにアカリとカスミに阻まれてしまった。悶えるエリを押しとどめ、アカリはさっきと変わらない笑顔で聞いてくる。

「あ、ほらエリちゃん、ダメだよ入っちゃ。ちゃんと読まなきゃ。なんて書いてあるのかな〜？」

「や、やだよ、もう、こんなの……いじわる、しないで……アカリちゃんっ」

「だからー、ほらほら、ちゃんと見なきゃダメだよー」

アカリに促されて、エリは入口の横にあるプレートを見た。かすれた声で書かれた文字をを読み上げる。

「職…員……用…」

「そうでーす。よくできまちー。ぱちぱちぱちー」

無邪気な笑顔を見せながら、アカリはエリの肩をしっかりと捕まえて話さない。もう逃がさない、という無言の意思表示だ。エリの股間がきゅん、と切なげに悲鳴をあげる。

「大正解。すごいねエリちゃん。職員用、来賓用のトイレなのでーす。ここは先生専用のおトイレなのでー、エリちゃんは使えませーん」

「そ、そんなのっ、ムチャクチャだよっ……！！」

論理も何もあったものではないアカリの物言い、エリは必死に言い返す。だがくすくすと笑うアカリはそれをまともに受け取ろうとしない。

「あら。当然のことですわよ？ こちらは先生方や大切なお客様のために用意されたお手洗いですもの。もし高坂さんが使っていたりしたら、その人たちが我慢しなければいけなくなりますわ。いくら高坂さんが困っていらしても、そのために大切な方にお手洗いを使わないようお願いするなんて、そんなことは許されるわけないですもの。ね？」

（あ、あああ……）

エリは悟った。

このままでは本当に、どんなことをしても、自分はトイレには行かせてもらえないのだと。

彼女達の機嫌を損ねてしまったことが、そんなにも思い罪だったのだろうか？ けれど、お漏らしなんてそれこそ死んでもできるわけがない。陵桜の生徒だとかは無関係に、もう中等部の少女には絶対にあってはいけないことだ。

一呼吸ごとにおなかの中でたぶたとおしっこが揺れる。股間をじりじりと焼き焦がすような終わりのない責め苦に悶えながら、エリはぎゅっと唇を噛み締めた。

「ううつ、……はあう……う……っ」

「こちらエリちゃん？ そんなにもじもじしちゃってたらみんなにオシッコ我慢してるのバレちゃうじゃない。いいのかなー、風紀のセンセイにも陵桜の生徒がそんなことしてちゃダメですよーって怒られちゃうよ？ こんなふう」

アカリはすつとエリの側に身体を寄せると、激しい尿意と戦っているエリの下腹部をぺしんと叩く。

「うあうっ、あああつ、ふあううう〜〜〜……っ！！！」

どうにか膠着を保っていた戦局は、あっという間に崩壊した。おしっこに侵略されたエリのおなかの中はびくんと跳ね上がり、限界

水域をこえてたぶたと揺れる恥ずかしい中身がエリの頭の中にまで溢れてくる。

じいんんっ、と響くイケナイ振動。おなかの中で膨れ上がる灼熱の気配に、エリはぎゅっと身体を縮こまらせた。恥骨に伝わる刺激が尿意を増幅して、少女は激しく身体をくねらせる。激しく渦を巻いて波立つおしっこが、ダムが一番脆い部分を突き崩そうと大攻勢を開始した。

決壊寸前のダムを抱えて、エリはとうとう股間を思いきり握り締めてしまった。

切に限界を訴える下半身をもうどうすることも出来ない。必死におなかをさすり、どうにかおとなしくしてくれとなだめるだけだ。自分の身体の中から湧き上がる自然の摂理に、エリはまったくの無力だった。

「まったく、はしたないにも程がありますわね。高坂さん、あなたは一体学校になにをしにいらしているの？」

「ああっ、あああつ、んっ、くう……～っ、っ」

どれだけ鋭い言葉で羞恥心を抉られても、大津波まっただなかのエリにはもう答えることもできない。じくん、じくんと排泄孔が震え、中身を下着に撒き散らそうと緩んではきゅっと引き絞られるのを繰り返す。

きゅうんっ、と膀胱が収縮の予兆に身動きする。エリはただ、ぎゅうっと膝を交差させ、足の間に手を押し込んで股間を握り締めるだけだ。

「ふふ、カスミー、教えてあげよっか？ エリちゃんはいつも休み時間になるとおトイレいくんだよ？ 今日もずーっと前押さえたままもじもじしてたし。エリちゃんの身体って、きとおしっこいっぱい出るようにできてるんじゃないかな？」

「ち、ちが……ううっ、そんなこと、ないっ、いい……っ」

ぎゅっと閉じたまぶたの間から、ぼろぼろと涙がこぼれる。それでもエリの頭の中はおしっことその我慢だけで埋め尽くされていた。トイレのことだけしか考えられないなんて、年頃の女の子にとってこれほど惨めなことはない。

じくんじくんとお腹を責め懲る感覚が、緩みかけるダムの隙間から今にも滲み出そうだ。

はあ、はあ、と息をついて、エリがぐっと括約筋に力を入れるたびに、おしりがつつと上を向く。まるでヨチヨチ歩きのアヒルだった。

（だめえっ……おトイレ、おトイレしたいっ……でちゃう、もうでちゃううっ、）

「ん、どうしたんだ、君達」

不意にかけられた声に、エリは壁に手をついたまま振り向く。もはや我慢の格好を見られることは諦めていた。

廊下の向こうでは、英語の教師が足を止めて、怪訝そうにエリ達を見ていた。廊下の真ん中で立ち止まってお喋りなんて、陵桜の生徒は普通してはならないことだ。

「あ、あのっ、わたし……っ」

形振り構っていられなかった。ここで知らせなければ本当に漏らしてしまうかもしれない。教師に訴えかけようとしたエリが続きを口にしようとした瞬間、

（っ、ひうああああああああっ！？）

アカリの手がエリの腰を抱え込むように回りこみ、ぎゅうっとエリの下腹部を押し込んでいた。

（あ、あ、う、あ、ああ……っ、～っ……っ！！）

外からの容赦のない圧迫に、エリの膀胱が大きくひしゃげ、出口に凄まじい圧力となって襲い掛かった。

これまでどうにか耐え忍んできた波とは規模が違っていった。『おしっこをしたい』という欲求ではなく、『おしっこを出す』という物理的な反応。暴力的なまでの尿意が少女の小さな身体に叩き付けられる。

股間を握り締めたまま、エリは息を詰まらせて尿意に抵抗する。

じゅじゅつ、しゅるるっ、しゅるっ。

だが、きつく締め付けたはずの排泄孔から、ほんの少し漏れ出したおしっこが、エリの下着をじんわりと染めてゆく。

(う、あ…ああっ、だっ、め、だめっ、だ、めええ……えっ！！)

ついに現実のものとなり始めた『お漏らし』の恐怖にエリは声なき絶叫を上げた。途方もない刺激が恥骨を駆け抜け、膀胱がエリのおなかを内側からを圧迫する。緩み始めた排泄孔はなおもだらしく、しゅるしゅるとおしっこを漏らし続ける。たらたらとエリの内腿を黄色い筋が滑り落ちて、ソックスの色を濃く変えてゆく。

(み、みられちゃ、う、や、せん、せえ、でない、で、ちゃ……っ！！)

それを悟られぬよう、エリは必死になって腰をぐねぐねと前後に揺すり、脚をぎゅうっとねじって太腿に垂れてゆくおしっこを隠した。

しくん、じくっ、びく、びくっ、

少女の体奥が深くうねる。ぱんぱんに膨らんだ膀胱がびくびくと痙攣し、エリに今すぐここでおしっこを始めると命令してくる。おしりが勝手に突き出され、知らずのうちに膝が曲がり、おしっこをするための体勢を整えさせようとしてくる。エリの身体はすっかりおしっこの準備を終えており、今すぐに排泄をはじめそうだ。

もちろん従うわけにはいかない。エリは壁に爪を立て、崩れ落ちそうになる姿勢を支えた。

「こんなところで立ち止まってしまって申し訳ありませんでした、先生。こちらの……高坂さんが、急に具合が悪くなってしまったようなんですの」

「はい、あたし保健委員ですから付き添ってたんですけど……大丈夫？ 高坂さん」

「っ、……～～っ、あっ」

まるで本当に心配しているように様子を窺ってくるアカリ。けれど今のエリはそれどころではない。いまや崩壊の瀬戸際にあるおしっこを我慢するために全身全霊を込めたまま、エリは必死にぶるぶると首を振った。だが、アカリの手はエリがそこから逃げ出そうすることを許さない。あとほんの一押し、アカリの手に力がこもればエリの我慢は潰れてしまうだろう。

だがアカリは絶妙にそれをコントロールし、エリの動きだけを封じていた。

「そうですか。お任せしてもいいですか？ 二人とも」

「ええ、勿論ですわ」

「そうですか。……お大事に、高坂さん」

さりりと答えるカスミに、教師はにっこりと笑顔を浮かべ、去ってゆく。

(ああ、ああああ……っ)

教師の後姿が声を掛けてももう届かないほど十分に離れてから、アカリはようやくエリの腰に回した手を離した。

絶望で目の前が真っ暗になる。彼女達はどうしてもエリをトイレには行かせない気だ。じゅわっと滲み出した熱い雫が下着を汚し、エリの指にまで湿り気を伝わせる。

「さ、いこー。エリちゃん」

「ねえっ……お願い、アカリちゃん……もう、いじわるやめてっ……くうっ、……あ、はあっ、はあっ……お願い、だから……ああ……おトイレに、……おねがい、おねがい……しますっ、……～～っ！！」

「あー、そうなんだ。エリちゃんそんなにふらふらしちゃうほど調子悪いんだ。じゃ保健室でちゃんと横にならないとねっ」

「ゆっくり休めばよくなりますわ。さあ」

「おねがい……もう許して……ゆるしてください……」

「あははっ、そんなにしたいの？ オシッコ」

「うああっ、だめ、だめえっ……言っちゃだめ、また、またきちゃうっ、…せ、つかく、がまん、できた…のにつ、ま、またっしたくなっちゃう、からあっ」

アカリの一言にも、敏感になった腰が反応をはじめてしまう。今のエリにとって、排泄を予想させる単語は完璧な鬼門だ。またもほんの少し緩んだ水門から、じゅっ、とぐもった音が響く。

「あっはははっ。エリちゃんすごいカッコー。そんなにトイレしたい？ トイレでオシッコしたいー？」

「っ、めて、や、めて…えっ」

「ひょっとして、もう漏らしちゃってるのかなー？ エリちゃんてばっ」

「ち、ちが…うよおっ、そんな…こと、な…ないい……っ」

エリの反論は弱々しいものだった。どれだけ強く否定しても、じゅうっと音を立ててと下着に広がる熱いおしっこや、じつとりと湿って肌に張り付く股布の感触までは誤魔化すことはできなかった。

内腿を伝うおしっこの跡を隠そうと、エリはスカートの前をぐいぐいと引っ張り下ろす。もちろん脚はばたばたと行進のリズムを刻んだままだ。ぐっしりと湿った下着の上から排泄孔を押さえ、エリはしゃくりあげるように二人を見る。

「くす。もう、本当にどうしようもない方ですね、そんなにみっともない格好をして。まるで幼稚園の子のようですよ？ 高坂さん、あなたもしかして通う学校を間違えてらっしゃるのではありませんか？」

「あっはは。そうかもー。エリちゃん幼稚園なんだねー。だからそんなにもじもじしても平気なんだ」

「っ、あ、や、あ…てえ」

ふるふると首を振るエリ。もうずれた眼鏡を直す余裕もなかった。両手の力を使っても塞き止めるのが精一杯で、手を離したらまたおしっこが出始めてしまう。

と、カスミはふと視線を止め、あの笑顔を覗かせた。

「確かに、そうですわね……アカリ、高坂さんは普通のお手洗いは難しすぎて使えないようですから、ちゃんと相応しい場所に連れて行ってあげませんか？」

「ん。なにに？ 何か思いついたのカスミ？」

「ええ。……高坂さんにぴったりのお手洗いを思い出しましたの」

初等部の一年生二年生たちが、お行儀良く列の順番待ちをしている。

クリーム色の壁は、中等部の校舎よりもより明るい色合いで、清潔感と共に安心感を与えてくれる。まだ排泄という行為に嫌悪感を持つ年端もいかない小さな淑女たちに、安心して排泄を促す工夫だ。

初等部の子達の心を和らげる穏やかな雰囲気も、今のエリにとっては見ているだけでおしっこを強制される牢獄に等しかった。

きちんと列を作り並んでいる一年生、二年生の子達の中で、中等部の制服を着た少女が股間を押さえて懸命に震えている。準備運動のように足を交差させて、スカートの下でおしりをひくつかせながらもじもじくねくねゆらゆらと落ち着きのカケラもない。

「あつ、あつ……」

もはやエリはうまっすぐ立っているのも難しいのだ。何十回目になるかわからない尿意の波に脚をばたつかせるエリだが、たぶたぶのおなかの中身は収まるどころかますます激しさを増してゆく。

「ねえ、お姉ちゃんお行儀悪いよ？」

「そうだよー、ちゃんと並んでよー」

初等部の少女たちから次々に上がる抗議の声。

自分が曝しているみっともない姿に耳まで赤く鳴りながら、おしっこ我慢のステップを止められないエリに、入口の方から声が届く。「くすくす……あらあら。城崎さんは初等部でも不合格になってしまいそうね？ 本当に幼稚園まで戻らなければいけませんわよ？ きちんとお手洗いのしつけもできていないのかしら」

「っち、が…よお……」

自分はずっとイジメられていて、トイレに行きたいのにずっとそれを禁止されていて、だからもう本当に我慢の限界で。もうおしっこがいつ出てしまってもおかしくないくらいおなかのなかにぱんぱんに溜まっている。

でもそんなこと、説明できるわけがない。陵桜の後輩たちに、お姉さんである自分が、一度もトイレにいけていないなんて、そんな恥ずかしいことをしているなんて言えるわけがない。

「高坂さん。この子たちだって早くお手洗いを済ませたいのに、順番抜かしなんかせずにちゃんとお行儀良く待っているんですよ？ あなただけ特別というわけにはいきまわんせよね？ ……くすくす。あなたのほうが、おねえさんなのですもの」

「っ……」

正確には、エリはそんなプライドだけで順番待ちに参加しているわけではなかった。たとえここが無人でドアが開きっぱなしになっていても、そこに駆け込んでおしっこをするだけの余裕がないのだ。

小さな一年生達の列に混じって、エリは両手で股間をおさえ、気付かれぬ程度に前屈みになって、今にもあふれそうになるダムを堰き止める。

水を流す音が聞こえ、幸運にも早々と用を足す機会を得た子が個室を出る。その顔は笑顔に満ち、すっきりとさわやかだった。代わって、列の先頭の子が制服のスカートに手を掛けて個室に飛び込む。これを、あと5回待たなければならない。

いや。5回ですらなかった。気を失いそうになるエリの前で、それを遠巻きに眺めている子が一人、開いた列の隙間に並ぶ。

（なんで、っ、いちばん、おしっこしたいのわたしなのに、っ、といれいきたい、おといれはいつおしっこいつ、っ、……あの子みたいに おしっこ、いっぱいしてっ、すっきりしたい、おしっこっ、おしっこだしたい……っ！！）

ふざけ合いながら更衣室に戻っていく初等部の子たちを見ながら、エリは彼女達とおなかの中身が交換できればなどという空想にすぎる。

たとえあの子たちが、エリよりもずっと容量の小さなおしっこの容れ物しか持っておらず、ちょっとだけしかおしっこを我慢することできないのだとしても、今の自分よりはずっと楽なはずだ。列の先頭でなくてもいい。一番最後まで構わない。

（おしっこ、おしっこさせて……でちゃうっ……トイレ、おといれはやくおといれといれといれといれっ、おしっこといれおしっこ……っ）

憧れのまなざしで見つめられる陵桜の生徒が、頭の中をおしっこのことで一杯にして、足を小刻みにく震わせている姿はなんとも痛々しいものだった。

初等部の子達はただでさえおしっこに時間がかかる。ひとり2分として、5人で10分。いまのエリには絶望的な数字だった。

（はやくはやくかわっておしっこといれはやくはやくっ！！）

すぐ目の前の何mか先にはおしっこをする場所があるのに。そこまでの距離は無限に近かった。

エリのおなかの中にある秘密のティーポットはぐらぐらと沸き立って、今にも口のところまで中身を吹き上げてしまいそうだ。長い我慢ですっかり赤くなってしまった少女の股間がしくしくと疼き、ごぼりと中身を煮えたぎらせる。

スカートを直す振りをしてそっと股間を抑える。トントンと爪先で地面を叩き、くねくねと腰をくねらせる。そんなさりげない動作は不可能だった。トイレを我慢するサインはもはやさりげなくで隠せるようなものではなかった。

スカートが捲れ上がるのにも構わず、両手で股間をぎゅうぎゅうと押さえるエリを、高学年の生徒たちが眉をひそめて見つめる。

「ねえ、あの人……」

「うん、すごく我慢してるみたいだね……」

「……中等部の人みたいね。どうしてこんな所に……」

「なんでちゃんとお手洗い行かないのかしら……」

「……ちょっとみつともないよね……」

なまじ陵桜の生徒として分別がついているだけあって彼女達の言葉は辛辣だった。交わされる囁きがエリの羞恥心をちくちくと刺激する。それに併せてポンプのように膨らむ尿意が膀胱を揺さぶった。股間に重ねられた手のひらにびくん！ と力が入り、エリは背中をのけぞらせる。

「ああっ、おしっこ、おしっこ……っ」

過剰に摂りすぎた水分は外に出される……それは生命活動の基本である。エリのしている『おしっこを外に出さないこと』はまさしく、それに逆らう不自然極まりない行為だ。

だからどれだけ我慢をしても、膀胱の中を満たすおしっこはなくなってはくれない。むしろ尿意は更なる尿意を呼び、限界水域を越えてもおダムに注がれる水量は増していく。

「ねえお姉ちゃん、我慢してるの？　じゅぎょうの時でもちゃんとおトイレいきたいですって言わなきゃだめなんだよ？」

「……へいきですか？」

「ううっ、ううっ……」

そんなことを言われても、エリの口はもはや人間の言葉を喋ってくれなかった。おなかのなかにはただでさえ出口をつんつんと刺激するおしっこが、ぎゅうぎゅうに詰まっているのだ。普通にしているだけでじゅわ、じゅわ、と漏れてしまうそれを我慢するには、ぎゅっと足をくっつけてお知りのアヒルみたいに突き出していなければならない。

その間にも、エリが摂った水分は、体中を巡る長い旅を終えてエリの膀胱に帰ってくる。

列の残りはあと4人。つまり8分。

「あ、あ……く、ふああ……うう……っ、」

果てしないガマンの時間に耐え切れず、エリはしゃがみ込んでしまった。

（もう出ちゃう、もれちゃうっ！！）

エリはしゃがみ込んだままおしりをゆらゆらと揺する。

「高坂さん？　そこはお手洗いではありませんけれど？　くすくす」

トイレでおしっこ。トイレでおしっこ。

それだけで頭をいっぱいにして、エリはまず、まず、と少しずつ足を前にずらして進もうとする。もちろん、列を作る人数は減っていない。一刻も早くトイレに入っておしっこを済ますこと以外をエリの頭は考えてくれなかった。

(でちゃう、おしっこでてきちゃうっ、おしっこきちゃうっ！！)

じゅじゅじゅじゅっ、じゅわっ。

わずかに噴き出したおしっこが、下着にじわりと広がった。エリはおしりに広がる温かみに思わずびくっと飛び上がった。

「んんんんっ、だめ、だっ、め……えっ！！

制服に包まれた小さな体がぶるぶると震える。熱い雫をにじませる丸いおしりは、内側からあふれ出しそうになるおしっこに耐え切れずにひくひくと何度も地面に押し付けられた。

それでもどうにか完全な決壊だけは避ける。耐える。耐え抜く。

もはや人智を超えた精神力だけが、エリの我慢を支えていた。

(おしっこが、おしっこがきゅうんって、きゅうんってなってるっ……)

エリは次々と襲い来る、おさまる事のない欲求に必死になって耐え、またそろそろと脚を動かし始めた。

ちゅるっ、ちゅるるるっ。

「あっ、またっ……」

じんわりと股間に暖かいものが広がる。

彼女の膀胱には、普通では考えられないほどのおしっこが今にもあふれそうにぱんぱんに詰まっているのだ。動くだけでそれがこぼれてしまうのは道理だった。

少しずつおしっこが出ていっているというのに、エリの尿意はますます高まるばかりだった。身体の構造上、少女に排泄を途中で止めることはほぼ不可能であつたし、夕方の空は、エリの体の中の水分をどんどんと一か所に集めてしまう。

おなかの奥で作られたおしっこは、もう満杯の膀胱に容赦なく詰め込まれていく。

(おねがいっ……もうちょっとだからあ、っ、でないで、もうでないでえっ……)

徐々に暗くなってゆく視界の中、エリは胸元を握り締めて、必死に訴え続けた。

「～～……っ、くううっ……はあっ、はあ……っ……」

ちくちくと鈍い痛みにも似た感覚が、少女の身体の奥深くに響く。痛いほど張り詰めた下腹部は、限界を超えておしっこに膨らみ、蠕動を繰り返して排泄を求める。

それを、女の子のプライドだけでおさえこんで、エリは決定的な崩壊の時を先延ばしにする。すでに股間の先端からは熱い濁流が滲み出し、じゅじゅっ、じゅじゅっとな断続的に下着を汚している。

それでも、最後の最後、本当の意味でのおもらしだけは、どうにかおさえこんでいた。

「うわー、すごいすごーい、良く我慢できたねー、エリちゃん」

ぱちぱち、と手のひらを叩いてアカリが囁きたてる。

気付けば初等部の子達はいなくなり、トイレの前の列も消えていた。全員トイレを済ませて帰途についたのだろう。

しゃがみ込んだまま一步も動けなくなってしまったエリは、涙で濡れた眼鏡を拭うこともせずに二人を見上げる。

「お、ねがい……もう、だめ……なのっ……本当に……くうっ……次、きちゃったら、でちゃう……からっ……トイレ、おトイレ……させて……くださいっ……」

「んもー、お行儀悪いなあエリちゃんてば。何度言ってもわからないんだねー。こんなところでオシッコなんて、綾桜の生徒が言っちゃダメだよー？ そんなにオシッコのことばかり考えてるなんて、エリちゃんってホントに恥ずかしい子なんだね」

「ち、ちがうもんっ……さ、つきから、みんなっ、あああっ、い、意地悪ばかりするからっ……」

「えー。いじわるじゃないよー？」

「そうですね。あまりに高坂さんがみっともないので、みなさんでしつけをしてあげているだけですのよ。綾桜の生徒に相応しいお手洗いのしつけをね」

カスミは笑顔を見せたまま、とん、とエリの肩を押した。

バランスを崩しそうになったエリは思わず一步を踏み出してしまった。上履きの底が激しく廊下をこする。

「あくっ……！！ ……ああああっ……～～～っ、っ！！」

背筋を突き抜ける衝撃。膀胱に隙間なく詰め込まれたおしっこがごぼりと渦を巻き、たった一つの出口に向かって殺到する。エリの頭は真っ白になってしまった。そのまま漏らしてしまいたくなるのだけをどうにか堪える。

「くっ、……～～～……っ！！」

ガマン、ガマン、ガマン。

これが最後、これが最後と必死に自分に言い聞かせて、爆発しそうなおしっこを捻じ伏せる。でも一体、これが何度目の『さいごのさいご』だろう？

すっかりおしっこを吸った下着から、ポタ、ポタ、とお漏らしの雫がタイルに落ちる。もうエリの靴もソックスもおしっこで水浸しだ。それでもエリの膀胱は楽になるどころかますます激しく尿意を訴える。

「あら、どうなさったのかしら？ お漏らししてしまったの、高坂さん？」

「えー。そんなことはないよ。だってもし万が一こんなトコでシちゃったら、もう明日から学校にもこれないよ？ あたしだったら死んじゃうかも」

二人の声がくすくすと響く。

もう限界なのだ。おしっこをたぶたぶに溜めているダムはヒビだらけで、いつ崩壊してもおかしくない。トイレにさえいければ最悪の事態だけは回避できるのに、それなのに、それがどうしてもできない——！！

「お願いします……お願いしますっ……！！ おトイレに、おトイレにつ……くうっ……いかせて、くださいっ……はあはあ、っ、……ああっ……おトイレでおしっこさせてくださいっ……」

もはや恥も外聞もなかった。大声を上げてエリは二人に懇願する。

猛烈な尿意に耐えかね、じんと疼く股間を押さえ、スカートの股間を握り締めてしゃがみ込むその様子は幼稚園の子にそっくりだった。

「困りましたわ……高坂さんのお手洗いなんて、心当たりがありませんのよ」

「ふふふ、そうかもねー。だってエリちゃん、初等部の子よりもお行儀悪いんだもんね。トイレトイレって言ってるけどもうそんなに漏らしちゃってるしねー。ちゃんとトイレの順番待ちもできないいでしょ？」

「や、やだあっ、やだあっ」

染みのついたスカートを指差され、エリはたまらずぎゅっと前を押さえた。今の布地が、おしっこで汚れた指に掴まれてさらに色を変

えてしまう。

あと何分かすれば、染みは完全なお漏らしになって、エリの制服は二度と使い物にならなくなってしまうだろう。

「っ、おねがいします、おね…がいつ、おしっこ、おしっこおっ……おしっこいかせてくださいいつ、お、おとこのこの……トイレでもいいですからっ！！」

「あっはははははは！！ ねえ、エリちゃん今すごいこと言ってるよ？ ねえ、わかってる？ エリちゃんっ？」

震える唇が情けなさに噛み締められる。

おしっこのためにならどんな場所でもよかった。お漏らしよりはずっとずっとマシなのだ。

と、

「お待たせ、カスミ」

「みなさま遅いですわ。待ちくたびれてしまうところでしたのよ？」

最初にエリの邪魔をした内進生たちが、そろそろとトイレに入ってきた。あっという間に取り囲まれ、エリは少女たちの注視に曝されてしまう。

「くす、そんなに不安がらないでくださいな、高坂さん。わたくしがみなさんにお願ひしましたの。あなたのためにお手洗いを探してください」

「え……」

呆氣に取られるエリの前に、がこん、とブリキのバケツが置かれる。

何の変哲もない、掃除の時に使われているバケツだ。

「お待ちどうさま、高坂さん。あなたのお手洗いですわ」

それを指差し、カスミはこともなげに言った。

「お似合いですしょう？ 中等部にもなってお手洗いのしつけもできていない高坂さんにはびったりですわね」

「や……やだ、っ、なんで、そんな……やだよ、……わたし、ちゃ、ちゃんと、おといれでっ……」

「ですから、これがあなた専用のお手洗いだと申し上げておりますの。ほら、どうぞ遠慮なさらず、存分になさってください？」

ブリキのバケツがばかりと穴を覗かせている。音消しもできず、水も流れず、個室すらなく、視界を遮ることもできず、おしっこをするための機能は何も備えていないそれを、カスミはトイレだと言い切った。

「はい、じゃあこれがエリちゃん用のトイレでいいと思う人ー」

アカリの宣言に、並ぶ内進の少女たちがこぞって手を挙げる。

「はい、賛成多数。ぱちぱちぱちー。そういうことで、これはたった今からエリちゃん用のトイレでーす。よかったねエリちゃんー。ずーっと我慢してたもんね。お待ちかねのエリちゃん専用のおトイレだよ？ これでもう心配せずに思う存分オシッコできるよねー？」

言うが早いか、アカリはエリの腰に抱きついて、くいくいといけない場所を刺激してくる。もう一滴分だって余裕がないのに、ぱんぱんに膨れ上がった恥ずかしい水風船を刺激されて、エリははしたなく悲鳴をあげてしまう。

「あう、ああ…ふぁあんっ…っ！！ …や……やだ……っ」

だが、たとえ口でカタチばかりの否定をしても、エリはそれを克明に想像してしまっていた。

震えた脚が前に出る。かくかくと揺れる小さな膝はきゅときつく閉じあわれ、おなかにたぶたと溜まった中身を支えるので精一杯。

それでも辛うじてブリキのバケツを跨ぎ、何度もチビってしまったせいでぐしょ濡れの下着を苦労して足元まで引き下ろし、スカート

を引きあげてしゃがみ込むのだ。

間髪入れず、女の子の一番無防備な部分が怒涛の尿意に貫かれる。まるで滝のようにバケツの底に猛烈な勢いでぶつかる水流。長時間の我慢を強いられたゆえに、その反動はとてつもなく大きく、制御できない恥ずかしい音が部屋いっぱいに響いてしまう。あっという間にバケツはおしっこで重くなり、じゃぼじゃぼと音を立てながら泡だって黄色い水で一杯になってゆく。

みんなの前で、

おしっこ、する。

トイレですらない場所で、絶対に誰にも知られちゃいけない秘密の好意を強いられる。

絶対に、絶対に見られたくない、おしっこをしているところを見られる。それだけでは済まない。これまでエリがどれだけはしたない我慢を続けてきたのか、エリがどれだけおしっこをおなかのなかに溜めてしまっているのか、色も、音も、匂いまで何もかも知られてしまう。

——そんな想像は、エリから一切の希望を失わせるに等しかった。

「や、やだあつ……そんなの、や……」

目の前のバケツを恐怖の眼で見下ろして、ぶるぶると震えながらあとずさるエリ。

そうしてエリは、本当に最後の最後のチャンスを逃してしまった。

今の今まで、寛大な慈悲をもってお漏らしの危機を先延ばしにしてくれていたエリの身体が、とうとうエリ自身を裏切った。

きゅうんっ、と鋭い刺激がエリのお腹の奥で響く。

それはエリの排泄器官がエリの意志を離れる瞬間だった。

「あ、ああつ、だめ、ダメ……～っ！！」

じゅじゅっ、と何度も何度もおしっこを先走らせていたエリの恥ずかしいところが少女の我慢を超えて痙攣を始める。

蠕動を繰り返す排泄孔が別のイキモノのようにうねり、渦を巻くおしっこが熱い奔流になって、内側から外側へと走り出す。ちくちくと続いていたむず痒さは、一気にエリの下腹部を支配した。

「どうしたの？ エリちゃん。おトイレあるのに使わないの？」

「ふふ、それは高坂さん専用のお手洗いですもの。どなたも文句なんて言いませんわよ。遠慮なさらずにどうぞ？」

「だ、だめえっ。こんな、こんなのっ、ちゃ、ちゃんとした、おといれじゃなきゃだめっ、だめええっ」

「えー？ なんで？ さっきからエリちゃんオシッコ行きたいって言うてるから連れてきてあげたのに。じゃあもういいんだ？ オシッコしたくなくなったんだね」

そんなわけがない。

時間を追うごとに募る尿意は、既に過去エリが一度も体験したことがないほどに高まっている。猛烈な尿意に抵抗し、じくん、じくんと引きつる括約筋は、今にも力を失ってしまいそうだ。そう、今すぐにも。

じゅじゅ、じゅぶっ、ぶじゅじゅっ、

膀胱が断続的に収縮を始め、本格的な排泄の準備を整えてしまう。

トイレではなく、おしっこを済ますための場所でもない、教室の真ん中で。エリはとうとうおしっこを始めてしまった。

「で、でちゃう、でちゃう……全部、ぜんぶう……っ」

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 犬と飼い主のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 09:41:35

BODY:

遠く、チャイムの音が聞こえてくる。

ゆるやかに傾いたお日様が窓から差し込み、少し湿った風が吹き込んで机の上で開きっぱなしの算数のノートをぱらぱらとめくつた。

リビングからは5時のニュースを読み上げるアナウンサーの声。

鬱陶しい空が久しぶりに青を取り戻し、夏の訪れを感じさせてくれた梅雨の晴れ間の日曜日、そろそろ終わりを告げようとしていた。

「あーあ……お休みおしまいなあ……」

田辺家の二階、自分の部屋のベッドの上で寝転がりながら、秋乃はふうと大きなため息をついた。明日からはまた学校。夏休みまではまだまだ一月近くもある。カレンダーの睨んでみても、夏はやってくる気配はない。

先週買った漫画のまだ読んでいない読者アンケートなんかのところを読むともなしに眺めて、もう一度ため息。

「つまらないなあ……」

せっかくの週末も、日曜日の朝まで雨が続いていれば出かけるわけにもいかない。ようやく晴れたと思えばお昼を過ぎていた気まぐれな空に、秋乃は心の中で文句を言った。

「秋乃、ごろごろしてるならごはんの前にラッキーの散歩にいつてきてちょうだい」

「……はあーい」

一階の台所から、夕飯の準備を始めた母親の声が響いてくる。

秋乃はごろんとベッドの上で寝返りをうつと、読み飽きたマンガ雑誌を放り投げた。机の上で汗をかいている1.5Lのペットボトルに口を付けて、まだ半分以上も残っている炭酸飲料を一気に喉に流しこむ。

「秋乃ーっ！！」

「んもーっ、わかってるってばーっ。いってきまーすっ！！」

急かす階下の母親に叫び返して、秋乃はベッドから跳ね起きた。

階段を一気に駆け下りて玄関脇の戸棚からリードを取り出し、サンダル履きのまま庭に下りる。

「行こっ、ラッキー」

蛍光イエローのリードを振るのは、散歩の合図。

庭でさっきまでの秋乃同様ごろんと寝転がっていたラッキーのしっぽがぴんと跳ね上がる。ご主人様の意図を理解したラッキーは犬小屋の下の日陰から飛び出して秋乃に飛びついてきた。

「っと……おとなしく、してってばっ。意地悪しないからさあっ」

嬉しそうに吠えながらじゃれついてくるラッキー。秋乃が学校に入る前はバスケットの中で丸まってクンクン泣いていた仔犬だったが、今では秋乃を背中に乗せられるくらいの立派なオトナの身体だ。

ところが、ラッキーときたら中身はまだまだ甘えたい盛りの子供なのだった。ご飯のときも散歩のときも、ご主人様である田辺家の面々を見るや否や、ものすごい勢いで向かってくるのだ。

「こらあっ、やめなってラッキーっ！！ 怒るよっ！？ って、うわあっ！？」

ラッキーにしてみれば小さな頃と変わらず甘えているつもりなのだろうが、当の秋乃にしてみればたまったものではない。自分の倍以上もある大きな身体に押し倒されそうになりながら、どうにか鎖を外してリードを付ける。

「んもーっ、すこしはおとなしくなさいっ」

ラッキーの頭をぽかりと殴るまねをしながら、尻餅をついたキュロットのおしりをばんばんとはたき、よいしょっ、と身体を起こす秋乃。

このところ雨続きでよっぽど退屈だったのだろう。ラッキーは千切れそうになるくらい元気にしっぽを振りながら、全身で喜びを表現するように秋乃のまわりを飛び跳ねる。

散歩セットを確認して、リードの持ち手を手首にくると二重に巻いて、出発の準備は完了。

「じゃあ、いってきまーすっ！！」

「はいはい、いってらっしゃい。気をつけるのよ」

「平気だってばっ」

わおんっ、と元気良く鳴くラッキーと共に、窓ガラス越しのいってきますをして、秋乃は田辺家の玄関をくぐった。

ラッキーの散歩コースは、一度海に出てから橋を渡り、川沿いを歩いて県立公園を回り、駅前にでる道順。ゆっくり歩けば1時間くらいかかる。普段はもっと短い市立中学校の前を通るコースなのだが、今日のラッキーはそれくらいでは満足してくれそうになった。

お日様もまだ十分に高いし、遠回りしてもいいだろうと決めた秋乃は大通りを海のほうに歩き出す。

「……～～♪」

鼻歌を交えて軽い足取り。サンダルで歩道のアスファルトを叩き、先を行くラッキーが他の人に迷惑をかけないようにきちんとリードを握る。もちろんおりこうなラッキーはあたり構わず吠えるようなことはしないが、生来の人懐っこさのためいきなり知らない人にじゃれついたりしてしまうことがあった。

そんな相手はたいてい大の犬好きで、なにかの問題になることは少なかった。だが、たとえラッキーがそんな相手を見分けてやっているとしても、きちんとしたしつけはしなければいけないのだ。

自転車に乗って急ぐ高校生や、買い物帰りの主婦、公害のデパートで買い物の帰りらしい家族連れとすれ違いながら、秋乃は思いっきり背中を伸ばした。

「んー……っ！！」

せっかくのお休みをずっと家の中で過ごしていたので、ぐっと胸をそらすとばきと背中が鳴る。

夕方の風がさわさわと半袖のシャツを揺らし、心地よい涼を運んできた。

「……ほら、ラッキー、もうちょっと落ち着きなってばっ」

よほど外に出れたのが嬉しいのだろうか。せわしくしっぽを動かし、ぐいぐいと先を急ごうとするラッキーに引っ張られ、秋乃は小さく抗議の声を上げた。かつかつと地面を叩くラッキーの脚はアスファルトをぐっと掴み、邪魔なリードごと秋乃をかつさらっていきそうな気配だ。

「っと、ほらラッキー、赤信号だよ。待て」

横断歩道の前でそわそわとしているラッキーを制して、秋乃は毛むくじゃらの頭を撫でた。おん？ と首を傾げるラッキーに、リードを引いて車が来ていることを教える。

ごう、と風を切って走り去ってゆく大きなトラック。それに続いて何台もの乗用車が交差点の向こうに消えてゆく。

この信号は一度変わるとなかなか青にならないので有名だった。

行き来する車を眺めながら、秋乃は落ち着きのないラッキーのリードを引っ張り。サンダルの脚を交互に踏み変える。

「んもーっ……！！ どうしたのラッキー？ じっとしてなってばっ」

秋乃に怒られてすら何度も立ち上がろうとするラッキーは、大きな身体を揺すってせわしく秋乃の周囲を歩き回る。

ラッキーがぐるぐる歩き回るせいで、秋乃は足をリードでがんじがらめにされてしまいそうだった。秋乃はリードをぎゅっと握って擦り寄ってくるラッキーに押されて転びそうになるのを踏みとどまった。

「うわ…っつ…っ！？ ……ああもうっ、ラッキーっ！？ 何よっ」

どうにも様子のおかしいラッキーを覗きこんで問いかけるも、つぶらなひとみはじっと交差点の向こうに注がれている。秋乃がいくら目を凝らしても、その向こうに愛犬の興味を引くようなものは見つからなかった。

やがて、目の前を進む車の列が途切れる。車道の信号は青から黄色に変わっていた。

「っ、こらあっ、待てっ。まだダメだってばっ！！」

車がいなくなった瞬間、ラッキーはわおんと吠えてスタートダッシュを切る陸上選手みたいにすごい勢いで飛び出した。ぐいぐいと先に進もうとするラッキーを制し、秋乃は引きずられそうになりながらリードを引っばる。

だが、学校でも背の順で前から数えたほうが速い秋乃ではラッキーと綱引きをして勝てるわけがない。

「きゃっ……んもーっ、まだ信号赤だよっ！？ ラッキーっ！！」

幸い、秋乃が横断歩道に出た頃には横断歩道の信号も青に変わっていた。

片足立ちのサンダルでっ、とっとバランスを保ち、辛うじて倒れこむのをこらえながら、秋乃はラッキーにほとんど引きずられるようにして横断歩道を渡りきった。

「もーっ、さっきからヘンだよラッキー……。どうしたの？」

わふ、わふっ！！

秋乃の問いかけにも、ラッキーは元気のいい返事をしてリードを引くばかり。そのわがままに秋乃がまたまた『んもーっ』と言いかけた時だった。

「あれっ、秋乃ちゃん。お散歩？」

「あ、裕香ちゃんっ」

聞き覚えのある声に振り向けば、鞆を背負ったクラスメイトがひょこっと手を挙げる。秋乃はぶんぶん手を振り返して、仲良しの友達の所に走り寄った。

「裕香ちゃんは？ 塾の帰り？」

「うん。もうすぐ模試だから……」

クラスメイトの大きな鞆を見て、秋乃はうわあ、と嫌な顔をする。

「お休みまで勉強なんだ。大変だねー。わたしなんかまだ宿題も終わってないのに」

「あはは。……でも、やっぱりやる以上は一生懸命がんばって結果を残したいし。大変だけどね」

「すごいなあ……」

すっかり感心してうなづく秋乃。再来年私立のお嬢様学校を受験するという裕香は、秋乃と今年の4月のクラス替えで知り合った。見た目も正反対の二人は、なぜか会って2週間ですっかり仲良しになった。今では毎日一緒に登下校するくらいの大親友だ。

「この子、秋乃ちゃんの家の子なの？」

「うん。ラッキーっていうんだ。……ほら挨拶しなきゃ、ラッキーもっ」

リードを通して促すものの、ラッキーは落ち着きなく身体を振っている。裕香のことなどまるでどうでもいいという様子に、秋乃はむーっ、と頬を膨らませた。

「んもーっ。わがまななんだからーっ」

「あ、いいよ。無理やりじゃかわいそうだし」

「いつもはもっときちんと言うこと聞くのになあ……どうしたんだろ？」

とんとん、とサンダルのつま先で地面を叩きながら、秋乃は首を傾げる。

確かにまだまだ甘えん坊のラッキーだが、基本的にはしつけのきちんとした名犬である。散歩のときでもこんなふうになんか秋乃を困らせることはめったになかった。

「まあ、ラッキーちゃんも時々はいろいろいやになることもあるんじゃないかな？ 怒っちゃかわいそうだよ」

「うん。そうだね……それよりさ、裕香ちゃん昨日のテレビ見た？ ちょうど昨日、お姉ちゃんと——」

「あ、そろそろ行かなきゃっ」

「そうだね。私も早く帰らないと、お母さん心配させちゃう」

長々と話し込んで、いつの間にか太陽はずいぶん地平線に近づいていた。人通りがだいぶ少なくなってきた夕方の大通りを、大きなトラックが走り抜けてゆく。

「ごめんね裕香ちゃんっ、こんなに遅くまでっ」

「うん。楽しかったから。それにまだ6時前だし、平気だよ」

にこにこ笑顔の友達に、きゅっとシャツのおなかのところを握り締め、秋乃は頭を下げる。

ようやく動き出すことを決心した主人の意を悟ったのか、ラッキーは跳ね上がるようにリードを引っ張った。『うわぁっ！？』とそれに引っ張られ、秋乃は思わず膝を寄せ合わせる。

「そ、それじゃ——もう行くねっ、お散歩途中だしっ」

「うん。ばいばい。明日学校でね」

「ばいばーいっ！！」

小走りに去ってゆく友達に大きく手を振って、秋乃はぐっとリードを握る手に力を込めた。裕香が曲がり角の向こうに消えるのを待ってから、シャツを握る手をそとおなかの上に当てる。

ぞわっ、と恥骨の下から響く感触が、秋乃の背中を震わせた。

(……あ……っ)

おヘソの下がきゅんっと疼き、むず痒いような、切ないような気配がぞくぞくと脚の付け根にたまってゆく。ぐりぐりと忙しくサンダルをつま先がアスファルトをこすり、キュロットからのぞく脚にはうっすらと鳥肌が立っていた。

それは、紛れもなく——秋乃の足のある場所へと向けさせる感覚。

(…お、おしっこ……)

切羽詰まった尿意が、秋乃の下腹部を支配していた。

出かける前にラッパ飲みしてしまった炭酸飲料のせいだろう。裕香と立ち話を始めてから、秋乃は尿意を感じ始めていたのだった。はっきりと意識してからもう何十分も経っている。話の途中で気付かれないようにさりげなく腰をねじったり、膝をくねくねと重ねたり、股間を押さえそうになる手を慌てて誤魔化したり、いつしか秋乃はラッキー以上に落ち着きをなくしていた。

(出かける前に、トイレいっとけばよかったなあ……)

思い返せば、ベッドに横になっている頃からなんとなくおしっこの重みを感じてはいたのだ。母親に急かされてすっかり忘れていたが、良く考えてみれば今日は朝から一度もトイレにいったいない。

(えっと、5、6、7……)

いったい何時間分のおしっこが溜まっているのだろう。指折り数えてみて、秋乃はそのことに呆れてしまう。屋外で長い時間話し込んだことによる体の冷え、水分吸収の良い炭酸飲料。秋乃が暢気に話し続けている間にも、健康的な少女の新陳代謝は幼い膀胱をたぐたぐに満たすのに十分な量のおしっこを抽出し続けていたのだった。

「ううっ……」

（トイレ……行きたいっ…）

ぶるっ、と小さな身体が震える。一度はしっかりと自覚してしまうと、尿意はたちまちのうちに膨れがあった。秋乃の小さなおしりはぐっと我慢をするたびにひくひくと震え、おなかのなかのおしっこを納めた秘密のティーポットをたぶたぶと揺らす。

秋乃の頭の中は、あっという間におしっこトイレのことでいっぱいになってしまった。

（えーっとっ……こっちって、トイレあったっけ？ ……あのスーパーはすっごく汚いし、C Dショップは……確か店員さんがイジワルで使えなかったし、海の通りのコンビニは……あ、ラッキーがいるからダメだっけっ……）

秋乃の頭の中にたちまちのうちに知っている限りの町じゅうのトイレが検索され、そのほとんどにバツがついてゆく。ラッキーを連れてたまま入れるトイレはとても数が少ない。といって、ラッキーを残して秋乃だけがおしっこをしに行くわけにもいかなかった。

残った候補はわずかに数箇所。しかも、そのほとんどが海とは反対側だ。

「我慢……できる、かな」

秋乃は不安の混じった声で、確認するようにつぶやく。

我慢とは、もちろん家に帰るまでの我慢だ。まだ散歩コースは10分の1も進んでおらず、どれだけ急いでも30分近くかかってしまうだろう。だが、秋乃のおなかの中のおしっこはそれよりもずっと早く緊急事態を迎えてしまいそうな気配だ。

時折つうんと強まる尿意に、秋乃の姿勢は自然と前かがみになり、太腿を寄せ合った内股になってしまう。

（だめかも……っ、すっごく、しなくなってきた……っ）

ぴりぴりと走る刺激に耐え切れず、秋乃の腰がくねくねと揺すられる。

学校の授業中でも、今すぐ手を挙げてトイレに駆け込んでしまいたいぐらいの切羽詰った尿意だった。

わふっ！！

ひときわ強く鳴くラッキーの吠え声に、秋乃は我に返る。

ぐいぐいと先を促すラッキーに、秋乃はごくつと口の中のつばを飲み込んだ。

服の上からでもはっきりと分かるくらいに、秋乃のおなかは硬く張り詰めている。まるで石でも触っているみたいだった。

「ら、ラッキー、だめ。今日は帰るよっ」

結論——とても我慢はできない。無理。

そう決めた秋乃は、ラッキーのリードをぐいっと引いた。ここから引き返せば家までは5分もかからない。ラッキーには悪いけど、今日はこれでおしまいにして急いで帰ろう。

そうすればトイレに入れる。おしっこができる。

そう思って回れ右をしようとした秋乃は、しかしその考えを実行することができなかった。

「きゃ……ああっ！？」

わふわふっ、わおおんっ！！

まるで秋乃のそんな態度に強い抗議を示すかのように、ラッキーは物凄い力でリードを引き返した。これまでのじゃれ合いとは桁

違いのすさまじい勢いに、秋乃は両手を引っ張られてバランスを崩す。

(んあう…うっ！！？)

反射的に踏み出した一歩が激しくアスファルトをこすり、衝撃がびりびりと秋乃のおなかに響く。辛うじて落ちていたおしっこが大きく波立ち、尿意の大波が一気に秋乃の股間に襲い掛かった。

「あああ……～っ、だ、め、っ、…出ちゃう、ううっ……だめ、ラッキーっ、……や、やめっ…で……っ」

秋乃の頭を占めていた“したい”が“でちゃう”に変わる。

おヘソの下秘密のティーポットがこぼこぼと音を立てる。秋乃は崩れそうになる股間の貯水池の出口を開いている手で押さえた。キュロットの前をぎゅうと握り締め、引っ張られるリードに力を込める。

だが、そんなご主人の状況には構うことなく、ラッキーはぐいぐい前に進もうとした。

「ま、待ってっ……ラッキーっ、そっちじゃないよっ、そっちじゃ、なくて……戻らないと、だめ…なのっ……」

内股で定まらない足取りのまま、秋乃はラッキーに懇願する。だがラッキーはそれを聞き入れるどころかますます激しい勢いでリードを振り回し始めた。ただでさえ不安定な姿勢で、リードを握る手を左右に動かされ、秋乃はひよこひよこことバランスを崩しながら歩道を引きずられる。

「や、あ…う……こら、ラッキーっ、ダメ、ラッキーってばあっ……ふああんっ……っく、うっ……」

大波にさらされて脆い部分が決壊してしまいそうになり、秋乃はキュロットを下着ごとおもいきり引っ張りあげた。ぐいぐいぎゅうと前を押さえながら、はあはあと浅く荒い息をつく。

今にも溢れそうなおしっこを塞ぎ止めることと、ぐいぐいと引っ張るラッキーを押しとどめること。その両方を同時に行うのは不可能だ。ラッキーとの綱引きに負けた秋乃は、ずりずりと引っ張られ次第に大通りを海のほうへ、家とは反対方向にひきずられてゆく。

「待ってえっ、す、ストップ……行っちゃ、ダメえ……っ」

秋乃は必死に手に絡まったリードをほどこうとしたが、主人のいうことも聞かずずんずん前に進むラッキーに引きずられながらではうまくいかない。

いまにも漏れそうなおしっこを我慢し、内股のへっぴり腰では踏ん張ることもできなかった。

限界に近い尿意を抱えながら、秋乃はラッキーに引きずられて通りを二つ越え、川沿いの小さな道に出る。ここから県立公園までは一本道だ。人通りもまばらな道を、おしっこを我慢した秋乃はラッキーに引きずられるまま進んでゆく。

「ラッキーっ、こらあっ……ダメだって…んくうっ……言ってる、のにっ……ホントに…っふあ、…もう、がまんできなくなっちゃうっ……」

おしりを後ろに突き出し、身体を半分に折り曲げて、片方の手はリードに引っ張られ、もう一方の手はキュロットの股間を硬く握り締め。惨めな格好のまま秋乃は何度もラッキーに命令をする。

しかし、おしっこを我慢しながらではうまくラッキーのリードを引いて『それはダメ』の合図を送ることすらままならない。ラッキーはそんなご主人さまをぐいぐいと先導し、草の覆い茂る川原に下りた。荒くなった地面に耐えるため慎重な足運びになった秋乃の股間に、地面の衝撃がダイレクトに響く。

「…うく……っ……」

秋乃は慌てて股間を握る手に力を籠めた。

どう見ても明らかな、おしっこを我慢するしぐさ。しかしもう人の目を気にしている場合ではなかった。幸い、河原には人もまばらで、秋乃のほうを見ている人はいない。

「ね、ねえっ、ラッキーっ」

ふいに、秋乃の手を拘束していたリードが緩む。

気付けば秋乃は背の高い草の中に囲まれて、ようやく歩くのをやめたラッキーのすぐ後ろに立っていた。おなかの切羽詰った状況にせかされて秋乃はリードを引っ張るが、さっきまでの焦りはどこへやら、ぴたりと立ち止まったラッキーは今度はどこでも動かなそうにしっかりと地面を踏み締めている。

「ちょっとっ……早く…行こうよっ！ …んもうっ、言うこと聞きなさいっ」

（でないと、ホントに、おしっこっ……）

きゅん、と疼く膀胱を押さえ、秋乃がぎゅっとリードを退いた瞬間だった。

ぶじゃあああああっ！！

じょぼっ、じょじょぼぼぼぼぼーっ！！ ばちゃばちゃばちゃばぼっ！！

ぐっと踏み締められたラッキーの足の間から、すさまじい勢いで吹き出した水流が秋乃の目の前に叩きつけられる。

「え……っ」

それは、紛れもなくオシッコ。

秋乃が今一番したいことだった。

いくらかしゃがみ込むように曲げられた足の間、地面に近付いたラッキーのおしりから、水道が壊れてしまったような激しさで吹き出したおしっこが地面にぶつかって大きな音を立てる。

「ちょっと、ラッキー……っ」

秋乃は、散歩に出たからのラッキーの行動の謎をようやく悟った。

横断歩道でなかなか変わらない信号待ちをしていたときも。秋乃が裕香と話していたときも。ラッキーはこの川原に来るまで、ずっと漏れそうなおしっこをがまんしていたのだ。

お行儀のいいラッキーは、雨続きで外に出られない間、小屋を汚さないようにずっとおしっこをがまんしていたのだろう。もちろんどうしても無理な時は庭のどこかで済ませていたのだろうけど、いつもの場所で以外はトイレなんてしなくなかったに違いない。

「ふぁ……んっ」

地面をえぐる猛烈な勢いの水流を見せつけられ、秋乃の唇がぎゅっと噛み締められる。

ラッキーのおしっこはなかなかとまらなかった。

地面にできた黒い染みはあっという間に大きな水たまりになって、泡を立てて流れ出す。足元を流れてゆくおしっこの小川を見ているうちに、秋乃の膝はぎゅっとくっついていく。

（いいな……ラッキー、どこでもおしっこできて…）

草むらの地面にたったりおしっこをして、ラッキーは気持ち良さそうに尻尾をふる。すごい勢いで地面にぶつかり、じょぼじょぼと音を

立てて泥を掘り返すラッキーのおしっこに、秋乃のおヘソの下あたりがきゅんとなった。

まるで、おなかの中で火にかけられたティーポットがくつつと沸騰しているみたいだった。

「で……」

（でちゃうっ……）

おなかを圧迫するおしっこの感覚は、おヘソの下から脚の付け根まで降りてきていた。出口寸前までおなかの中をおしっこに占領されて、秋乃は背中をきゅつと丸める。

（ずるいよ、ラッキーっ……わたしも、わたしもおしっこしたいのにつ……）

じょぼじょぼと派手な音を立て続けるラッキーの放水を、秋乃は魅入られたように見つめてしまう。秋乃よりも大きな身体をしたラッキーは、その分だけおしっこの量も多いのかもしれない。

（ここで……）

こくり、とつばを飲み込んで、秋乃は自分を誘惑するイケナイ考えと戦う。

（ラッキーと、いっしょにしちゃえば……バレない、かな……）

目の前でラッキーのおしっこ姿を見せ付けられ、秋乃の膀胱も敏感に反応していた。ざわざわと高まり続ける尿意の波に晒されて、股間を押さえていた手は自然とキュロットの前ボタンに伸びていた。そわそわと落ち着きのない脚はしゃがみ込む姿勢を取ろうとゆっくり曲がり始める。

幸いにして、周囲には背の高い草が生えていて、周りから覗きこむことはできなさそうだった。こっそりと穿いているものを足首まで下ろしてしゃがむのはそう難しくない。

「しよ、しょうがないよねっ……恥ずかしい…けど、っ、もう、ホントに無理だしっ……うん。しちやおう……」

恥ずかしさをごまかすため、あえて口に出して自分に言い訳をし、秋乃はキュロットに手をかける。

「んしよっ……つと、……う、……あ、あれっ？」

ボタンを外し、前のファスナーを下ろそうとしたところで——ふいにがちりという手ごたえが秋乃の指から金具をもぎ取った。

「ううっ……え、あれ？ ……開かな、い？」

焦る秋乃を急き立てるように、膀胱にかかる重みが増す。

慌てた秋乃は無理矢理キュロットを脱ごうとしたが、ファスナーは端から1センチあたりの場所でがっちり布地を噛んでしまい、上にも下にも動かない。当然、そのままではキュロットを脱ぐことはかなわなかった。

「ちよ、ちよとおっ……なによー、もうっ！！ な、なんで開かないのっ！！」

ファスナーの金具を掴んでがちがちと引っ張るが、焦っているせいかうまく外れない。秋乃はくねくねとおしりをもじつかせながら苛立ちの声を上げる。

「んもーっ、な、なんでこんなっ、時にい…っ は、はやくしないと困るのにつ……ああっ、開いてっ、開いてよおっ！！ せっかく、おしっこできるのにっ……！！」

そうしている間にも秋乃のおなかでおしっこが暴れ出す。中腰のままきゅつと股間を押さえた秋乃は、金具をぎゅつと摘むと力任せに下に向けて引っ張った。がちり、と金具がきしむ音を立て、ファスナーはやがてぶちぶちと嫌な音を立てて千切れる。

壊れたファスナーが大きく開き、その隙間に秋乃の真っ白な下着を覗かせる。ファスナーの金具はすっかり曲がって動かなくなっていたが、そんなことよりも今の秋乃には出る寸前のおしっこのほうが重大事だ。

「っ、くうっ……あ、開いたあっ……！！」

尿意を急き立てるおしっこに最後の一時待機の命令を出しながら、秋乃はぐいつ、とキュロットと下着をまとめて掴み、一気に足首まで引き下ろした。汗の籠ったパンツの下からきゅっと閉じた女の子の部分が顔を覗かせる。

（できるっ…おしっこ、やっどできるんだ……っ）

はぁあっ、と大きく息を吐いて、秋乃は地面にしゃがみ込んだ。

すっかり整ったおしっこの格好。視界を遮る背の高い草むらは、秋乃の恥ずかしい姿をすっかり覆い隠している。地面にはラッキーのおしっこが川を作って低い方へと流れている。まるでそこは、おしっこを我慢できなくなった秋乃のための臨時仮設トイレだった。

草むらの真ん中でおしっこを済ませてしまうことには抵抗があったが、些細な羞恥心はおなかの中で暴れるおしっこに追いたたられて消えてしまっている。ゆっくりと緩み始めた水門からは、ぼた、ぼた、ちょろっ、と本格的な排泄の予兆になる先走りの雫が早くも漏れだしていた。

「はぁあ……っ」

秋乃が安堵の吐息とともに、最後の緊張を解こうとしたその瞬間。

すっかりおしっこを終えていたラッキーが、ぶるると身体を震わせた。その意味を理解するよりも速く、秋乃の背中を冷たいものが走り抜ける。

（え、や、待っ……）

ラッキーはずっとガマンしていたおしっこをし終え、すっかり上機嫌だった。あおんっ、と一吠えしてリードを引っ張り、散歩の続きを元氣いっぱい秋乃にねだる。。

突然のことに、秋乃は思わずおなかにぐっと力を入れて、おしっこを中断してしまう。

同時に、まだ手首に絡まったままだったリードに引きずられ、秋乃の身体はぐいぐいと前に引っ張られた。

「っっ、っ、い、やぁあぁっ！！」

ぎゅっと閉じた脚の奥で、しゅるしゅると熱い雫が漏れる。

じゅわっ、と脚の間に広がる感覚を止めることができないまま、秋乃は悲鳴を上げた。

「やめ、っっ……やめて、っ、ダメ、ラッキーっ……」

もう、いつでもおしっこができる姿勢のまま、秋乃は倒れそうになる身体をリードに預けて必死に押さえ込んだ。だがそんな状態では出てしまう寸前だったおしっこを止めることは不可能だ。

ぎゅっと閉じた脚の間にちょろっ、ちょろろっと滲み出したおしっこが秋乃の膝の裏側を伝ってゆく。

漏れ出すおしっこはしゅるしゅると秋乃のおしりを伝い、地面にぼた、ぼた、と黒い染みを作ってゆく。脱ぎかけのキュロットにもおしっこの雫が飛び散った。

おんあおんっ！！ わおんっ！！

「ら、ラッキーっ、ダメ、だめえ、ストップっ！！」

（ヤダぁダメっ、おしっこひっかっちゃううっ！！）

キュロットが汚れてしまう事を恐れて、秋乃は必死にリードを引く。

しかし、ご主人様の様子に首をかしげながら、ラッキーは『さあ出発っ！！』とばかりに川原沿いの道に向かって走り出した。茂みがあつという間に押し広げられ、秋乃はラッキーのおしっこの場所から引き離されてしまう。

「っやあ、ラッキーっ、そっちはだめっ！！ 止まって、止まってようっ！！」

地面にずりずりと靴跡を残しながら、秋乃は今にも暴発しそうな股間をぎゅっと握り締めることしかできない。元気いっぱい地面を蹴るラッキーと、キュロットを膝に絡めたまま転ぶのを堪えるだけで精一杯の秋乃では勝負になるはずもない。。

そしてついに、秋乃は完全に茂みから引きずり出されてしまった。開けた視界の中、おしっこに濡れた手で脱げ落ちそうになるキュロットを必死で掴みながら、秋乃はラッキーを落ちつかせようとリードを引いた。

「ま…待ってえっ！！ ……み、見えちゃうっ、見られちゃうよっ！！」

キュロットと下着は一緒になって膝に引っかかったままだ。むき出しの股間を覆うものはなにもない。ひやりと内腿を撫でる風の感触に、秋乃はとっさにシャツの裾を掴んでぐっと前を隠す。しかし当然短いシャツがキュロットの代わりになるわけがなく、押さえた反対側の白いおしりが丸見えになってしまう。

（やだ、やだやだっ、今誰か来ちゃったら見えちゃうっ、だ、だめっ、だめえ！！）

パニックになりながらぐいぐいとシャツを引っ張る秋乃。

「ラッキーっ！！ 止まって、止まってえ！！ あ、だめっそっち行っちゃダメえええ！！」

ラッキーは階段を駆け上がり、河原沿いの道に昇ろうとしていた。舗装された道まで引き摺られながら、秋乃はシャツを引きちぎらんばかりに握り締めた。

キュロットをずり下げ、おしりを丸出しにしたその格好。

こんなところを誰かに見られたら、死んでしまうかもしれない。

（は、はやくパンツはかなきゃっ、こんなところでおしっこしようとしてたの見られちゃうっ……！！）

それ以外の選択肢は秋乃に残されていなかった。

秋乃は電光石火の早業で、無理矢理膝に引っかかったキュロットのを掴んで引っ張りあげた。

まだおしりは半分見えたままの格好だったが、とにかく本当に大事なところだけはぎりぎりカバーしなければいけない。ふらふらとラッキーの後を追いつつ、ぐいぐいとキュロットを引き上げてゆく。

（み、見られてないよねっ……誰もいないよねっ！？ だ、大丈夫だよっ）

何度も何度も辺りを見回し、秋乃はぎゅっと唇を噛み締めた。

先を行くラッキーに強い視線を向け、リードを力任せに引っ張る。

「もう、もうっ！！ ラッキーっ！！ わ、わたし怒るよっ！？ なんで意地悪するのっ！？ せっかくわたしがっ——」

オシッコ、できるところだったのに。

そのことを意識した瞬間、忘れていた尿意が一気に蘇った。

「……う、はっ！？ や、やだっ、またっ、っだ…メ、も、もれちゃ…っ…」

ついさっきまで、秋乃はまさにおしっこをしようとしていたのだ。おなかはずっかり準備を整えてしまっており、今さらダメですは通らない。

無理矢理引っ張られた布地が秋乃の下腹部を圧迫し、膀胱の中身を激しく震わせる。ぶるり、と猛烈な尿意が秋乃を襲った。

「いやああ…もれちゃ、……ああ、あ、ああああ〜っ…！！」

すっかり緩んでしまった括約筋の力だけでは、それを押さえ込むことは不可能だった。とっさに股間を押さえようとする秋乃だが、とんでもないことに気付いてしまう。

「う、うそっ、やだっ……！？」

そう。さっき無理矢理引き剥がしたキュロットのファスナーは、壊れたままだった。

手を離せば、引っかかるところのないキュロットはすぐにすんと足元まで落ちてしまい、下着がすっかり丸見えなのだ。ウサギのバックプリントのお気に入りぐつしりとおしっこに湿っているのが、道路の真ん中で見られてしまう。

それを避けるためには、キュロットを引き上げる手を離すわけにはいかなかった。

片手はラッキーの首輪につながるリード。

もう片手はキュロット。

しかも、ラッキーはおぼつかない足取りの秋乃を構わずぐいぐいと引きずってゆく。

今にも爆発しそうな股間を押さえる手段は、どこにも残されていなかった。

「う…あ、…ひあつ……く、……や…だめ……お…しっこ…お……っ」

声にならない悲鳴を上げながらくねくね腰をゆすり、必死に膝をこすり合わせる秋乃。ぐいぐいと思いつき引っ張りあげたキュロットの股間部分が秋乃の股間に食い込んでゆく。しかしその努力もむなしく、いったん緩み始めた水門からはじゅじゅじゅと激しい水流の音が聞こえ出した。

「あ、あ、あつ、あーっ、あ……！！」

ついに秋乃は、穿いたばかりのパンツに漏れ出したおしっこをたっぷり染み込ませてしまった。押し付けられた布地の中、ぐじゅっと暖かい湿り気が脚の間に広がり、股布からしみ出した熱い雫がキュロットの股間を大きく濡らしてゆく。

（いやあ、オモラシ、オモラシしてるの見られちゃ……ああうっ…）

「くう…う、うあつ……だ、め、……がまん、ガマン……っ……」

キュロットの股間が引きちぎられんばかりに秋乃の脚の間に食い込む。しかしそんなもので到底間に合うわけもなく、頼りない括約筋は断続的にじゅじゅっ、しゅるると緩み続けた。キュロットの隙間からはじわじわと染みがひろがり、股布部分の保水力の限界を越えたおしっこが太腿を伝ってぽたぽたと地面に垂れてゆく。靴下もすっかり色を変え、スニーカーまでぐつしりと濡れていた。

「はあ…っ。ふううっ、はああっ……」

荒い息をつきながら、ぎゅうぎゅうとキュロットを引っ張りつづける秋乃。

今や秋乃には、おしっこを我慢するために一番楽な姿勢を取ることにすら許されていなかった。

ファン、と響くクラクションの音に、秋乃はふと我に帰る。

ラッキーはいつもの散歩コースを通り、駅近くの大通りへと向かっていた。

片側2車線の大通りだ。駅から繋がる商店街を経由して隣町まで続いており、人通りも多い。

（……嫌あつ……見られちゃ……っ！？ お、おしっこでちゃったの……っ、おもらしパンツ、見られちゃうっ！？）

秋乃はぞっとしておしりに手をやった。脱げかけのキュロットのおしりははっきり分かるほどぐつしりと濡れていて、薄いベージュから深い茶色に色を変えている。軽く押せば今にも雫が滴り落ちそうなほど、指先にもはっきり濡れているのが分かる。

隠しようもない“失敗”の痕跡が刻まれた股間をぎゅっと握り、秋乃は慌ててラッキーのリードを引く。

「だっ、ダメ、ラッキーっ！！ ……だめ、…そ、そっちはやめよう？ ……ね？ い、いつもと違う道で行こうよっ！！」

キュロットの壊れたファスナーを押さえ、秋乃はいやいやをするように激しく首を振った。しかしラッキーはきょとんと首を傾げるだけで、

なんだろう？ というように鳴くばかりだ。

「ねえっ、ラッキーっ！！ こ、こらあっ、言うこと聞きなさいっ！！ ……だめっ、お願い、待ってえっ……！！ み、見つかつちゃうからっ……おしっこっ、我慢出来なかったの見られちゃうからあっ…！！ ああっ！！」

秋乃の懇願にも構わず、ラッキーはベソをかく御主人様を通りへと引きずってゆく。

まるで、さっきまで自分が強いられていたことをそのまま秋乃に対して繰り返すかのように。

「あ、あっ、あーっ、ダメっ、ダメえ、やめてえ、……っ、ラッキー……っ！！」

ついに秋乃は大勢の視線がある大通りに引きずり出されてしまった。

むりやり一歩を引っ張られるたびに、秋乃の股間はじゅっ、じゅじゅっ、と股布におしっこを吹き出した。アスファルトの上を引きずられ、倒れそうになる身体を必死に支える秋乃の脚の動きはそのままぱんぱんに膨らんだ膀胱を圧迫し、中身を絞りだしてしまうのだ。

キュロットの股間に染み出したおしっこは、あっという間におしりまで回り、熱い雫が裾からぼた、ぼたと地面に落ちる。

壊れたファスナーの隙間から白いパンツの端が覗いている。秋乃がぐしゃぐしゃになったキュロットを握り締めるたび、おしっこをたっぷり吸いこんで色が変わってしまった部分がちらりちらりと顔を出す。

（ああああ……やだっ、やだあっ……み、見られちゃうっ……オシッコ我慢してるのっ……トイレ行けてないところ、見られちゃうようっ……）

猛烈な羞恥が秋乃の心をざくざくと切り刻む。

爽やかな風が吹きぬけていく中を、秋乃はぎゅうっとキュロットを握り、顔を伏せたまま進んでゆく。オモラシの跡を見られてしまう——そう意識するたびに下腹部のティーポットが疼き、切ない尿意がくつくつと沸騰する。

濡れた下着に擦れた秋乃の女の子が、じんじんと熱くなっていた。

長い我慢に加え、むりやり布地に擦られた秋乃の股間は、すっかり赤くなってしまっている。

秋乃が大通りに出ると、目の前で、歩行者用の信号がちかちかと点滅を始めたところだった。

（はやくっ……おうちにっ……）

一刻も早く、家に戻ってキュロットを脱ぎたい。トイレに入りたい。おしっこをしたい。はやる一心で横断歩道を渡ろうとした秋乃だが、その手はぐいっとリードに引き戻される。

「ら、ラッキーっ、な…なにしてっ…るのっ……は、はやくしないと、信号変わっちゃ…うう…っ！！」

秋乃を急き立てているのは羞恥心ばかりではない。

ちよとずつのおちびりを繰り返し、ますます募る尿意が、秋乃の小さな身体を攻め立てる。

しかし、ラッキーは横断歩道の手前できちんと足を揃え、『まて』の姿勢で静止していた。

「ラッキーっ、はやくっ……ねえっ、どうしたのよう！！」

ラッキーはとても賢い犬だ。いちど教えられた事はすぐに理解して、きちんと守る。たとえおしっこを我慢していても、横断歩道の前では信号が変わるのをちゃんと待つこと。車が来たらとても危ないのだ。

さっきの秋乃の教えをきちんと護って、ラッキーは動こうとしない。

信号の点滅はやがて早まり、道路の車はしずかにブレーキを離してじりじりと進み始める。

「お、お願いっ……ラッキーっ、意地悪しないでっ……こ、ここの信号っ、すっごい待つんだよっ！？ ……ま、また……がまん、できなくなっちゃうっ……ラッキーっ…」

秋乃焦って、力の入らない腕でむちゃくちゃにリードを引いた。しかしそんな曖昧な命令ではラッキーにはうまく伝わらない。

仮にリードを離しても、ラッキーを置いて秋乃一人だけ家に戻るわけにはいかないのだ。

「あ、あああつ……だめえつ……」

弱々しい秋乃の悲鳴と共に、信号は無常にも赤に切り替わる。

片側2車線の道路を、勢い良く車が進み始める。

同時に支える場所もなく、まっすぐ立つこともできない秋乃の目の前に、ウィンカーを出したバスが進み出てくる。

混雑した車内には大勢の人が乗っており、その視線は自然と窓の外へ——秋乃のほうへと向けられていた。

(やだあつ…見ないでっ……！！！)

脚を擦り合わせたままの滑稽な姿勢のまま、秋乃は声にならない悲鳴を上げた。どれだけ我慢しても、もうおしっこがしたいことを他人に悟られずに我慢することは不可能だった。乗客達の何気ない視線は無造作に、しかし容赦なく横断歩道の前で腰をくねらせる少女に注がれる。

母親らしい女性に伴われ、窓際の席に行儀良く腰掛けていた——小さな女の子と、秋乃の視線が合う。まるで行進でもしているかのように足踏みを繰り返す秋乃を、女の子はじっと見つめていた。

(ち、ちがうのっ……ちがうんだから……っ、ら、ラッキーがいけないんだよっ！！……こ、これはね、おもらしなんかじゃないんだからねっ！？……お、おしっこなんかしてないのっ……暑くて、汗かいちゃっただけなんだよおっ……)

秋乃はたまたま、聞かれてもいないのに必死に股間の染みを言い訳する。しかし、そんなことで尿意がおさまるわけもなく、脱ぎかけのキュロットを押さえながらおしっこを我慢しつつける不自然な立ち方はかえって女の子の興味を引き立ててしまっていた。

「はううっ……うっ、くうっ……ふああ、んっ……っ！！」

下腹部で張り詰めた感覚が強くなる。つうん、と股間に走る甘い痺れが、秋乃の女の子の部分に誘惑する。このまましゃがみ込んでしまえば一気に震え出す脚を押さえこみ、秋乃は信号機の柱にしがみついた。

ラッキーがおうん？ とおすわりの姿勢のまま秋乃を振り返る。

リードを握る手にじっと汗が浮かぶ。腰をくねらせ、膝をこすり合わせ、背中を丸めて浅く息を繰り返す。秋乃はおしっこを我慢することに全神経を注ぎこまねばならなかった。そんな秋乃を見ながら、女の子は隣に立つ母親の袖を引いて、秋乃を指差した。

母親が慌ててやめさせるが、女の子は幼いゆえの無邪気な残酷さで喋るのをやめようとしなかった。

それは、明らかに秋乃がトイレを我慢していることを指摘するもので。

その証拠だとばかりに、はっきりと乗客達の何人かが秋乃のほうを振り返る。

(やだっ、やだあつ、ちがうのっ、してないっ、おもらしなんかしてませんっ！！……ちゃ、ちゃんと我慢してますっ、…おトイレまで……っ、が、がまんっ、がまんするのっ……っ！！……ちゃ、ちゃんとっ……オシッコ、オシッコお……っ、おトイレで…えっ、す、するのっ……)

おヘソの裏で女の子の秘密のティーポットがぐらぐらと沸騰している。きゅん、と疼く下腹から股間までの甘い痺れが、ぎりぎりのところで綱引きを続ける秋乃の我慢を緩ませようとしてくる。

へっぴり腰のまま、内股のみっともない格好で電柱にしがみつく少女。

その股間を伝うおしっこの筋がさらに増し、ぽた、ぽた、と地面にまで染みが増えてゆく。

排泄を待ち焦がれてひくひくと震える股間は、勝手におしっこの準備を整え、おなかの中にたまった熱い雫を吐き出そうとする。

秋乃の理性はここはトイレではないと弱々しく抗議するが、その程度で秋乃の股間はおさまらなかった。

長い長い我慢で酷使され、すっかり赤くなってしまったおしっここの場所がぎゅっと疼く。

ぐっしょりと濡れたままの下着の股布に、またじゅじゅじゅっとたっぷりとおしっこを染みこませてしまう。保水力の限界になったキュロットから熱い雫が滴り落ちる。

すっかり濃い色に変わったキュロットをぎゅぎゅっと握り締めると、絞いだされたおしっこが秋乃の脚をいく筋も伝う。

お気に入りのスニーカーも、靴下ごとすっかり秋乃のおしっこで水浸した。

「ふ……くうっつ……うっ、くううううううっ……！！」

この後に及んでも、なお秋乃は我慢を続けていた。

勝手におしっこを漏らし始めている下半身を精一杯つなぎとめ、必死に信号が変わるのを待つ。

(だめ……おうちまでがまん……がまんするのっ……おうちのトイレ……おトイレええっ……おもらししないのっ、しないのおっ……)

秋乃の状況はすでにどう言い訳しても明確な『オモラシ』でしかなかったが、漏れ出したおしっこの量はまだ全体の3分の1にすら及ばない。こうしている間にも、秋乃ががぶ飲みした1.5リットルのペットボトル一本分の水分が、秋乃の身体でじわじわとおしっこに変わっているのだ。

秋乃はシャツが透けてしまうくらい、背中までびしょりと汗をかいていた。おもらし寸前の我慢が少女の体力を奪い、弱々しい括約筋の力をさらに失わせている。

おしっこの匂いが風に乗って立ち昇る。ずずずと倒れこみかけた秋乃に気付く、ラッキーが励ますように勢い良く吠えた。横断歩道に近付いてきた部活帰りの高校生のグループが、なにごとかと秋乃の方を見る。

「やだ……見ないでえ……ちがうのっ、おしっこじゃないのっ」

電信柱に抱きついたまま動けず、秋乃はベソをかきながら言い張った。

コンクリートの柱にがりつと爪を立て、ぐしょ濡れのキュロットの上から股間を押さえる。

「でちゃ……う……だ……め……っあ、ふ、く……ふぁっ」

ぽたぽたと落ちるおしっこの雫が、電柱の足元に次々と染みを作ってゆく。

濃いおしっこの匂いが立ちこめてゆく。ここは秋乃専用のおしっこの場所だとマーキングをしている。ラッキーでも我慢できたのに、秋乃にはできない。

だらしない御主人様を急き立てるようにラッキーはリードを引っ張るが、もはや秋乃の脚はおしっこを塞き止める姿勢の内股からぴくりとも動かなかった。

ぶしゅ、ぶしゅじゅじゅっ、じゅばじゅるじゅじゅじゅっ！！

「あ、あーっ、あーっ、あー……っ……～っ！！」

握り締めたキュロットの股間から、猛烈な排泄音と共に大量の雫が吹き出した。秋乃のおなかの中に溜まっていたおしっこが一斉に吹き出して、キュロットの裾から滝のようにこぼれ落ちる。黒く染まったおしっこの染みがキュロット全体を占領し、秋乃の下半身を蹂躪した。

ラッキーがご主人さまを心配して吠えるたび、回りの視線はおしっこを漏らし続ける秋乃に集中した。

「やだぁ……つく……やめてよう……もう、いじわるしないで……ラッキー……っ」

交差点の前、信号機の根元にラッキーの代わりにたっぷりとおしっこを撒き散らして、秋乃は股間を震わせた。ぶじゅぶじゅと恥かしい音を立てて吹き出すおしっこが下着にぶつかり、秋乃の下半身を浸してゆく。内腿からおしり、そして脚を伝って靴まで。暖かい感触が、秋乃の身体を水浸しにしてアスファルトに大きな水たまりを作る。

「やだぁ……おしっこ……オシッコっ……」

膝から力が抜けて、秋乃は自分の作ったおしっこの水たまりにばちゃん、と座り込んでしまった。地面にこすりつけた股間から恥ずかしい熱湯が吹き出して、ぶじゅぶじゅぶづつ、とぐもった水音が響く。

まだまだ秋乃のおしっこは終わらない。

信号が変わって、横断歩道を渡ってきた人たちが何事かとギョッとしながら秋乃を見つめる。

「うえっ……ひっ……うっ、えっ、ふえ、っ……」

込み上げてくる嗚咽を我慢できず、泣き出してしまった秋乃の回りで、ラッキーはいつまでも吠えながら、おうちに帰ろうとリードを引き続けているのだった。

(初出：おもらし特区 S S 図書館 2006/11/20)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 全校放送のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 09:43:53

BODY:

「ねえ、まだやってるの？ 今日の放送、坂崎さんの番でしょ？」

「あ、は、はいっ……」

同じ放送委員の加奈が、口を尖らせて理穂を睨んだ。黒板いっぱいに書かれていた板書をやっと写し終えると、理穂は慌てて席を立つ。もうすっかり給食の準備は終わっており、すでにクラスみんなは『いただきます』の体勢だ。

「い、いってきますっ」

「早くしなさいよっ」

ばたばたと鞆の中から原稿の入ったファイルを取り出し、理穂は大急ぎで教室を出た。理穂はクラスの学級会で選ばれた放送委員だ。これからお昼休みが終わるまでの40分、お昼の放送をしなければいけない。

(……………うっ……)

途中、階段横のトイレが視界に入り、理穂はきゅっとスカートの前を掴んだ。

実は今日、理穂は朝から一度もトイレに行っていない。おなかの中ではずっと我慢しつづけたおしっこが出口を求めて暴れており、一刻も早くトイレに駆けこまねば危険な状況だった。

(どうしよう……放送室入ったら、これからまたずっと我慢しなきゃ……)

放送が終わるまで40分。理穂はその間ずっと、おしっこを我慢しなければならない。

とても無理だと、落ちつかない下腹部がざわざわと尿意を訴える。

しかし、放送室は職員棟の3階にあり、急いでもかなりの時間がかかる。もうお昼休みは5分以上過ぎてしまっており、これ以上放送を遅らせるわけにはいかない。

みんなに迷惑はかけられない。

(大丈夫……ガマン、できるよっ……)

真面目な理穂は、そう自分に言い聞かせると、背中に感じるトイレの誘惑を振りきって廊下を走った。

マイクのスイッチが入り、お昼の放送のテーマがはじまる。

『お昼の、放送ですっ』

スピーカーから聞こえるのは、もうすっかりお馴染みになった今年度の放送委員の声。5年4組の委員の女の子は、すこし小さいけれどよく通る声で、全校生徒にもそれなりの人気がある。

しかし、その子の今日の放送はどこか落ちつきが足りなかった。

『きよ、今日もおいしく、給食を食べましょうっ……』

ぺらりと原稿をめくる音。

その動作も、どこかもどかしげに不安定だ。時折かすかに響く物音が、かすかな違和感を滲ませる。敏感な生徒たちの数名は、もうその頃から今日の放送の異常を感じ取っていた。

『いただき、ます……っ』

放送に合わせて各クラスの“いただきます”が唱和する。

ゆっくり流れ始めた音楽の隙間に、くしゃっと何かが握り締められる音と、

『……ふあっ……』

そんな小さなめき声を聞いたのは、やはりそんな敏感な生徒たちだった。

「……………」

「なんだろう？」

些細な疑問は、しかしまだ形になることはない。曖昧な疑念を交えながら放送は続いてゆく。

今日の放送はリクエストのあった土曜日朝9時のアニメのテーマ。高学年の生徒は子供っぽいと馬鹿にしているが、低学年のクラスでは大盛り上がりだった。

けれど、曲を繋ぎ変えるときに妙な間が開いたり、ぶつつ、と音が途切れて『失礼しました』とフォローが入ったりする回数はいつもの数倍だった。もう11月、放送委員はすっかり仕事に慣れ、最近ではそんなことはもう滅多に起きない。

聡い生徒たちは、「なにがあったんだろう？」「だいじょうぶかな？」とスピーカーの向こうを想像し、顔を見合わせていた。

そうして、悲劇の幕が開く。

流行のポップスの曲のサビの直前で、突然パチン、とマイクのスイッチが入り、放送が切り替わったのだ。

音楽のボリュームがぐっと下がり、スピーカーにマイクを通じた放送室の生の音声が割りこんでくる。

ぎしぎしと軋む椅子と床、擦れ合う布地の音。

さすがにこの段に至り、多くの生徒たちが不審を抱く。

『……ふう……つくうっ……』

その頃にはもう、どの教室でも半分近くの生徒が、流れる放送の音が小さく震えていて、いつもの調子とは違うことに気付いていた。

手持ち無沙汰な指先が、原稿をくしゃくしゃに握り締める音。

ぎゅぎゅと、椅子の上でどこかを固く握り締める音。

『……う……ちやうつ……』

かすかに聞こえる声は、意図せずに漏れてしまうかすれた声音。びくん、びくんと突っ張った上履きの爪先が床をこすり、せわしく叩く。

『おしっこ……』

「え……？」

「ちょっと、え、今の」

「聞こえた？」

「うん、僕も……」

それぞれのクラスが一斉にどよめき、お喋りを止めてスピーカーの向こうで繰り返されている事態に注目する。

そして、今度こそはっきりと、マイクが少女の囁きを拾う。

『…おしっこ、でちやうつ……』

ぎしぎしと椅子が軋む音。座る位置を何度もずらし、落ちつきなく腰をよじり、ぎゅうぎゅうと股間を押さえる。高性能マイクによる臨場感たっぷりの放送は、放送室にいる少女がもう立ちあがることもできないほど切羽詰って、おしっこを我慢しているのをはっきりと伝えていた。

というのに、放送室の少女は我慢に夢中で、マイクのスイッチが入ったことにも気付いていない。

『トイレ……おトイレ、いきたい……』

恐らくは誰にも聞こえない場所でしか露になることがない、あからさまな尿意の告白。おしっこのできる場所を求める声は全校生徒の耳にしっかりと届き、一年生から六年生までの全クラスは固唾を飲んで放送に聞き入っていた。

「おいおい……マジかよ」

「トイレ、我慢してるんだ……」

「おしっこ、出来なかったのかな？」

それは、教師とても例外ではない。

全校生徒に生中継される、小学5年生のおしっこ我慢。

一種異常な雰囲気や飲まれ、こんな時ただちに動くべき教師たちも、事態の動向を注視するばかりだった。

ぎしっ、と椅子の軋みが深くなる。

『んっ……うっ』

鼻にかかった声は、どこかエロティックですらあった。

ぐっと身体を伸ばして、大きな尿意の波に耐える少女の姿。それを想像し、早熟な生徒たちは顔を赤らめ、俯いてしまう。
と、揺れ続けていた音が不意に途切れた。

『え……』

呆然とした声。途切れた言葉が、事態を把握して一気に青ざめる少女の動揺を如実に伝えていた。

『ああっ！？ やぁ……っ、ち、違いますっ、違うんですっ！！』

否定に合わせて、ぎい、がたっ、と椅子が揺れる。これまでの事態を悟り、少女はとっさに立ちあがってしまったのだろう。

『違うんですっ、これは、そのっ……えっ、そ、その、……わ、わたし全然オシッコなんかしたくないですっ、ガマンなんかしてませんっ！！』

少女は完全にパニックに陥ったようだった。いくら否定しても、これまでの放送を聞いていればすぐに嘘だとわかったし、そもそもそんなあからさまな否定を聞いて信じる者など居ない。

それに第一、そんな事を言いながらも少女の足が小刻みに震え、床を軋ませている音ははっきりと響いているのだ。

「違うよね、ずっと我慢してる」

「うん……」

「我慢できないのかな。お姉ちゃんなのに」

猛烈なおしっこの攻撃に耐えながら、おしっこなんてしたくない、と叫び続ける少女の恥態は、好奇心旺盛な小学生たちにとって格好の獲物だった。

『ちがいます……っ、お、おしっこ……なんかっ』

声が震え、マイクががたがたと揺れる。少女は耐えきれずにひざを折り曲げてしまい、マイクスタンドにすがりついたのだ。

衝撃で原稿の束がばさりと床に落ちる。

『お、おしっこ……あ……だめ、ええっ……』

音響装置の乗ったテーブルの角にぐりぐりと股間を押し付けて、破裂しそうな膀胱を圧迫し、尿意を無理矢理ねじ伏せようとする。そんな惨めな努力がはっきりと伝わってきた。

「ね、ねえ……この子、もう漏らしちゃってるんじゃない？」

「うん……」

高学年の女子の心配通り、くぐもった水音がかすかに、しかし確かに聞こえてくる。

ぷじゅっ、じゅじゅるるっ、じゅじゅじゅじゅじゅ……

スカートの中の、白い下着の中。小さな排泄音が止まらない。下着の股布に次々と噴き付けられるおしっこが、少女の細い足を

伝ってゆく。足踏みの音にも濡れたものが混じり始めた。

「ねえ、オシッコ漏らしてるよ！ お姉ちゃんオシッコ漏らしてるっ！！」

低学年の男子が無邪気に叫んだ。

『違うんです……っ、…ああ……っ、やだ、あっ……』

それが聞こえたわけではないだろうが、少女は必死に否定し、かぶりを振る。しかしすではじまったおしっこをとめる事はできず、足を伝うおしっこの筋はどんどん増えてゆくばかりだ。ぱた、ぱた、という雫の音も響き始める。

がたん、と激しい音がスピーカーを叩いた。

マイクスタンドが倒れて、床に落ちたのだと多くの生徒が悟った。

『あ、ダメ……、だめえっ……！！』

遠くなった少女の、身を切られるような切ない叫びが響く。

「うわ……」

「こいつオモラシしてるぞっ！！ きったねー！」

『出ないで……出ないでえ……っ』

ぎしぎしと椅子を揺らし、机の角に股間を擦りつける必死の動作。

それにも関わらず、緩み始めた水門からは熱い雫が次々に溢れ出す。長い長い間少女のおなかの中に閉じ込められたおしっこが、出口を求めて床に撒き散らされてゆく。

じゅじゅじゅじゅっ、ぱたたっ、ばちゃ、ちゃばばばば……

『ああ……はあ……っ』

排泄の解放感に声を上げながらも、少女の理性にすがって羞恥に身を震わせながら、我慢の限界を迎え床に大きく水たまりを作ってしまう一部始終。そんな恥辱の風景がはっきりと全校生徒に生中継されてゆく。

床に落ちたマイクは臨場感たっぷりにオモラシの音を拾い、床を直撃する放水やぎしぎしと軋む椅子の様子を伝える。時折響くぼつ、というノイズは、水たまりで跳ねたおしっこがマイクを直撃する音だ。

少女が身体をよじってなんとかおしっこを止めようとする仕草や、匂いや湯気までがはっきり伝わってきそうなほどだった。

『ううっ……ひっく……えうっ……』

いつの間にか、BGMになっていた音楽は２ループめに突入している。もう何分もたつというのに、長い長いオモラシは終わりそう

になかった。

おしこのこぼれつづける音と、ばちゃばちゃという水流の響きを背景に、少女の嗚咽がスピーカーに響いている……

(初出：おもらし特区 S S 図書館 2006/10/26)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 魔法学校のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 09:47:36

BODY:

くす。部屋をうろうろ、もじもじそわそわ、エリザちゃんの足は小刻みに震えて落ち着きがない。いつもはさっそうと箒を乗りこなす脚

も、いまはせわしくステップを踏み続ける。

だんだん『おしっこなんてしたくないですっ』って態度が辛くなってきたみたい。さりげなくスカートの上からお腹をさすったり、膝を重ねてみたり、くねくね揺れたり、おしっこガマンの限界を教えてくれるサインはどんどん激しくなってる。

もう今すぐにでもオトイレに掛けこんで、スカートをぐいってたくし上げて、かわいらしい白のしるくぱんつを引き下ろしたくてたまらないんだ。

ボクが召喚した水精さんの活躍で、エリザちゃんのお腹の中、おんなのこの秘密のティーポットには、今にもあふれだしそうなくらい恥ずかしいホットレモンティーがたぶんたぶんのはず。

今なら、どんなカッコいい男の子の前だって、ちゃんとおなかをつつかれれば地面にいっぱいおしっこを撒き散らしてしまうに違いない。

「そ、その、アリスさんっ……」

「ん？ なに？」

「……お……」

「どしたの？ よく聞こえないよ？」

「……っ……！！」

恥ずかしさと怒りに真っ赤に顔を染めるエリザちゃん。

そりゃあさうだろう。あんなに“できそこない”って馬鹿にしていたボクに、おまたを押さえてもじもじくねくねしながら、おしっこがしたいです、なんて『お願い』しなきゃいけないんだから。

でも、このままじゃ時間の問題なのはエリザちゃんも分かっている様子。

ちらちらとボクの方を見ながら、それでも5分くらい必死にガマンを続けて、

「アリス……さんっ……！！」

ついに、まっかになってエリザちゃんは覚悟を決めた。

中腰になってつき出したお尻を、前と後ろから両手でぎゅうとにぎって、むき出しのぱんつが見る影もないくらいにくしゃくしゃにシワだらけ。

「おねがい……お手洗いにっ……いかせてちょうだい……っ！！」

ちょっと目に涙をにじませながら、エリザちゃんは言った。

くす。ちょっといいかも。こうやって『お願い』されちゃうのも。

でもボクは頷いたりしない。“できそこない”なのはほんとうのことだから許してあげるにしても、ボクのことを男の子みたいってバカにした復讐はこれくらいじゃ終わらない。ちょっとくらいで許してあげちゃ意味がないのだ。

ボクはエリザちゃんに近寄ると、ぶるぶる震えているおなかに手を当てた。

「ふぁっ、ああん……っ……」

なんだかエッチな声。エリザちゃんのおなかは、まるで石みたいにはんぱんに張っている。スカートもきつく食い込むくらいになっていて、どれだけおしっこをガマンしているのかがすぐにわかった。

「くす。トイレいってどうするのかな？ エリザちゃんみたいな綺麗で頭のいい子は、おトイレなんかいかないでしょ？」

「ち、ちがっ……ダ、メ……も、限界……なのっ……本当に、もう、……我慢、できな……っ」

はぁ、はぁと肩をおおきく上下させて、切なそうに脚をこすり合わせるエリザちゃん。もうじっとしているだけでも辛いだろう。おなかのなかでおしっこが暴れだして、それをなだめるので精一杯。いつもの強気な目もすっかり垂れ下がって、しゃくりあげるようにボクを見上げる。

くす。本当に可愛いなぁ。

エリザちゃんの手がとつても気に入ったボクは、精霊語で命令をつぶやいて、エリザちゃんのおなかの中の水精さんにさらに50cc、おしっこを追加してもらった。

「ふぁあああああぁあぁっ！！！！」

まるで、頭からつまさきまで一本の棒をつき通されたみたいに、ぴいんと全身を硬直させて悲鳴をあげるエリザちゃん。

エリザちゃんのおなかに触れている手のひらから、おんなのこの秘密のティーポットの中で、おしっこが渦を巻いて暴れるぎゅるぎゅるって音が伝わってくる。

「や、やだぁっ……おねがい……お手洗いに、はや、くっ……」

「ふーん、そんなに手が洗いたいの？ くす。エリザちゃんってきれい好きなんだね」

「やめてっ……さわらないでえっ……でちゃう…でちゃうっ……」

つんつん、と伸ばした指でエリザちゃんのおなかをつつく。

それだけでエリザちゃんの脚はふらふらとバランスを崩し、いまにも倒れそうにあっちへもじもじ、こっちへくねくね。恥ずかしいおしっこ我慢のダンスを踊る。ちょこんとつき出されたお尻はまるでアヒルのしっぽみたい。

「おねがいっ……いじわる、しないでっ……おしっ、こが……おしっこが……でちゃいそうなのっ……」

ついに、そんな恥ずかしい言葉まで口にして、ボクにおトイレをねだるエリザちゃん。もうきつと、エリザちゃんのおなかの中はトイレのことでいっぱい。

「くす。そんなに限界なんだ？ エリザちゃん、そんなにおしっこしたいの？」

「……………っ！！」

唇を噛み締めまっかになって、小さくコクン、と頷くエリザちゃん。

「くす。それじゃあ仕方ないかなあ」

「はやっ、早くっ……………早くうっ……………」

もったいぶってみせるボクの前で、エリザちゃんはスカートの上からぎゅううっとうと股間を握り締めて足を震わせる。もうそれ以外のカッコをしたら、限界ギリギリのバランスが崩れちゃうにちがいない。

くす、ほっぺもほんのり桜色で、うなじに髪が汗でべったり。はぁはぁ荒い息もなんだかとってもいやらしい。そんなエリザちゃんをまだまだずっと見ていたくて、ボクはことさらにゆっくりと口を開く。

「それじゃあ、つれてってあげる。エリザちゃん、もうひとりじゃあるけないでしょ？」

くす、と笑顔を浮かべて。

ボクは震えるエリザちゃんの手を取った。

「あ、ま、待ってえ……………も、もっと、ゆっくり……………」

悲鳴を上げるエリザちゃんを引っ張って、一階、五年生のための男子トイレに到着する。階段のすぐ下にあるここは、場所のせいかいつも大混雑する。おとこのこはおんなのこよりもずっとおしっこにかかる時間がみじかいはずなのに、休み時間はいつも行列ができちゃうくらいのとっときの場所なのだ。

そして、女子トイレは階段の上であって、場所的にも最適。ここが、ボクがこの魔法の仕上げに用意したさいごの舞台だった。

「はい、ついたよエリザちゃん？」

「え、っ……………」

プレートにきざまれた「おとこのこ用」のマークを見て、思わず言葉を失うエリザちゃん。やっとなつれていってもらえると思った場所が、男子トイレじゃそれもしかたないかな。

そんなエリザちゃんの腰をとんとんと叩き、ボクはエリザちゃんをうながした。

ひんっ、と叫んだエリザちゃんは、ボクをおそろおそろ振りかえる。

「う、うそ……………よね…？」

「ううん？ 嘘なんかついてないよ？ だってエリザちゃん、おしっこしたいんでしょ？」

「で、でも、ここっ」

「ほら、早く行かなきゃ。オモラシしちゃうよ？」

ここ以外で一番近いトイレまでは、直線距離で400m。おしっこを我慢して死の行進まっさいちゅうのエリザちゃんには地獄よりもとおいとおい距離。

“オモラシ”の単語に、エリザちゃんがびく！と背中をふるわせる。そりゃあエルヴィンバレーの首席が学校でオモラシなんてとんでもない。ぜったいにぜったいに避けなきゃいけないことだ。

かたかた震えるエリザちゃんの耳元にそっと唇を寄せて、くす、と囁いた。

「もうすぐ休み時間だけだね？」

「っ——！！」

そして、さらにおしっこを50cc追加。

「————！！」

エリザちゃんの声にならない叫びと同時に、ぱたぱたっ、とちいさな雫が床のタイルに散らばった。とび散る水滴に思いっきり膀胱を刺激されて、エリザちゃんはぎゅっ、と体を縮める。

きゅきゅっ、と上履きがタイルの上でこすれて、エリザちゃんが歩くのをやめてしまう。

きっと今、エリザちゃんとはとんでもないおしっこの大波と決闘中だ。

「くふふ。ほらほら。急がなきゃダメだよエリザちゃん？ せっかくトイレに来れたんだから、ちゃんとおしっこはおトイレでしないと、さ」

びく、と背中を伸ばして。それでももう理性の限界なのか、ずり、ずり、とゆっくりゆっくり慎重に足をうごかしはじめるエリザちゃん。そのゆっくりした歩みとは正反対に、時計の針はかちかちと進んでゆくのをやめない。

あと40秒、30秒、20秒、

「っ！！」

目を瞑って男子トイレに飛び込んだエリザちゃんは、まっすぐに個室にとつげきしていった。ドアに手をかけて、ぐいっとひっぱる。けれど、

「う、うそっ……なんでっ！？なんでっ！？」

くす。エリザちゃんちゃんはパニックになって。がこんがこんと必死になって個室のドアを引っ張る。それでももちろん開くわけない。冷

静になってさえいれば、ドアに掛けられた『錠前』の呪文の存在にも、それを打ち消す『開錠』の呪文が7年生の必修科目なことにも気付けたんだろうけど。

「くす。あと10秒で授業おしまいだよ？ エリザちゃん。男の子がきちゃうけど、いいのかなあ？」

「いやあ、あああああっ！！！」

もう、エリザちゃんはなりふりかまっていなかった。

おなかの中であばれるおしっこと思うがまま、おんなのこなら絶対にやっちゃいけないこともおかまいなしだ。

「だめえ、もうだめえええっ！！！」

エリザちゃんは壁の反対側、男の子が立っておしっこをする便器に飛びつくように身体をおしつけた。スカートを、まるで引きちぎってしまうんじゃないかってくらい勢いでひっぱり上げて口にくわえる。

たおれそうになる身体を支えるため、ぎゅう、と水の流れる管を握り締め、もう一方の手でぱんつをぐいぐい引っ張る。

引き伸ばされたぱんつの隙間から、エリザちゃんのすべすべつるつるなあそこが覗いた瞬間、
ついに、今まで積み重ねてきた女の子のプライドも、なにかかもが消え去っちゃったようだった。

「いやあああああっ……」

はじらいもためらいもなく、ぶじゅうううううううううううーっととんでもない音を立てて吹き出す極太のおしっこが便器にぶつかって、びしゃびしゃと辺りを濡らす。

ものすごい量だった。ボクが魔法で追加した分のおしっこをさしひいても、エリザちゃんはずいぶんいっぱいのおしっこをガマンしていたらしい。あれだけの量をためておけるなんて、やっぱりお嬢様は違うんだね。

エリザちゃんみたいに“立派な貴族”の子は、どれだけおしっこがおなかのなかにいっぴいでも、そんなことは少しも顔にだしたりしないで、こっそりこっそりガマンしてるんだろう。

でも、ものすごい量のおしっこをおなかにためてるってことを知られちゃうのは、それよりもずっとずっと恥ずかしいコトだってこともわかってもらわないとね？

「え……おい、なにやってんだあの子」

「ちょ、ここ男子トイレだろっ！？」

「うわあ……」

「や、やだっ、見ないでっ、見ないでえええ！！！」

授業を終え、入ってきた男の子達が一斉にどよめいて、エリザちゃんのこと注目してしまう。くふふ。耳まで真っ赤になっていやい

やをしても、エリザちゃんのおしっこは全然止まらない。そりゃそうだ。だってボクの水精さんはいまもエリザちゃんのおなかの中で水を作り続けているんだから。おかげでエリザちゃんはこの一瞬を無限に味わい続けられるってわけ。

エリザちゃんはとっても恥ずかしい立ちションのカッコで、おしっこの孔を全開にして思いっきりおしっこを出し続ける。

ぶしゅううーっ！！　じょっ、じょじょじょじょぼぼぼぼぼーっ！！

「ああああっ、あああああっ、待って、だめ、だめええっ！！」

おしっこの孔から吹き出すおしっこは、陶器の中にぶつかって泡立ち、渦を巻いてごぼごぼと流れてゆく。うーん。すごいなあ。

「……女の子ってあんな風におしっこするんだ……」

「うわ、すげ……」

「どんどん出てくる……全然とまらないよ？　すごく我慢してたのかな……」

「いや、いやあっ、いやああああっ……」

秀才で美人で、学院でも超有名な女の子が、見せ付けるみたいに男子トイレの小用でとんでもない勢いのおしっこをしているんだから。男の子達の中は顔を真っ赤にして、それでもズボンのふくらみを隠せない子もたくさん。

くす。ひょっとして、これが原因でボクと同じ趣味に目覚めちゃった子もいるのかもしれない。ちょっと罪つくりだったかな。

（初出：おもらし千夜一夜 882-887 2005/9/29）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 電話ボックスを巡るお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 10:01:03

BODY:

「あうっ……出ちゃうっ」

少女の眉が切なげによじられ、唇がきつくかみしめられる。

ニーソックスに包まれた足がひょこんと跳ねるたびに、野次馬たちのざわめきが高まった。

電話ボックスに閉じ込められ、衆人環視の中迫りくる尿意と必死に戦う少女。果たしてこれ以上、周囲の注視を受けずにすむ存在がいるだろうか。

透明なガラスに仕切られた、素通しの密室。高坂麻衣は膝を小刻みに震わせて、こみ上げてくる尿意に耐える。

野次馬の九割近くを締める男たちは、真っ赤になって身悶えする麻衣から片時も目を離そうとせず、着実に迫る決壊のときを固唾を呑んで見守っていた。どの視線にも下卑た光が灯り、中には、隠すこともなくズボンの前を膨らませている者までいる。

その手のことに疎い麻衣には、死にそうな恥辱だった。

「おねがい、ですっ……もう、もう、ホントに漏れちゃいそうっ……出して……おトイレ、行かせてくださいっ……」

肩を震わせ、足を大きく踏み鳴らして麻衣は声を振り絞る。踏み台昇降のように不自然なほどに上げ下げされる膝は、お漏らしを耐え尿意を和らげる羞恥のステップ。すでに石のように固く張り詰めた膀胱では、じっとしていることさえも苦痛だ。

しかし、額に汗をにじませて尿意に耐え、『おしっこ漏れちゃう』と恥も外聞もなく懇願する少女に、手を差し伸べるものはいなかった。

麻衣の振り上げたこぶしがガラスを叩くが、防犯のため強化樹脂で挟まれた電話ボックスは少女の力にはびくともしない。大したものもないボックスの内側からでは壊すことなど不可能に近かった。

「あうっ……くっ」

どん、どんと力なくガラスを叩きながら、麻衣はもう片方の手をスカートの上から股間に挟み、きゅっと下着を引っ張り上げる。その動作に周囲がどよめき立つ。

一挙手一投足をつぶさに観察する無数の視線が、無遠慮に腰を揺らす麻衣に注がれる。

いやらしい視線をできる限り無視し、麻衣はつま先でそわそわと地面を叩き、少しでも気を紛らわそうとするが——その振動ですら下腹部に蓄えられたおしっこに刺激を与えて、苦しみを倍加するだけだった。

「出して、出してよおっ……でちゃうう、でちゃううう……もう、げん、かいいつ……」

「まだ来ないからさあ……麻衣ちゃん、もうちょっと我慢してね」

「おねがい、おねがいっ……もう、おしっこ漏れちゃうよお……ここ、出してえ、出してえっ……で、っちゃううっ……」

『出して』と『でちゃう』。ふたつの反する言葉を繋げ、見ず知らずの男性に、麻衣は泣きそうになりながらそんな事を懇願する。

年頃の女の子がスカートの股間を握り締めて、『おしっこがでちゃうんです』と叫び続けるその姿は、男たちの視線を引きつけて止まない。

「ほら、麻衣ちゃん、もうちょっとだから」

「あううっ……」

だから、観客達の中からは電話ボックスを壊そうと試みるものなど皆無だった。

くねくねと腰を揺すり、腿をぴたりと閉じては左右の手でかわるがわる股間を握り締める少女を、最後まで追い込んで、下品な衝動に限界を迎えさせてやろうと、その場にいる男たちの意思は言葉を越えて団結していたのだ。

「だめえ……出ないで、出ちゃダメ……出して、開けてよお……っ」

膀胱は限界まで張り詰め、その感触はまるで石のようだ。麻衣は息を浅く早く繰り返してお腹の力を抜き、すでに下腹部を占拠している膀胱に、少しでもその容積を拡大させようとする。

けれど、いくら我慢に我慢を続けても、それは根本的な解決にならない。こうしている間にも麻衣の身体は摂取した水分を排泄できる形に変えて、おしっこをせっせと蓄えているのだ。切羽詰った尿意は一層激しく麻衣を攻め立てる。

「もうダメ、がまんできないっ……しちゃう、おしっこしちゃううっ」

「ほら、座っちゃうとでちゃうよ。ちゃんと立って、がまんして」

「やだあ……おしっこ、おしっこお……でそうっ……トイレ、おトイレいかせてえっ……」

「麻衣ちゃん、おもらししちゃうよ。立って、ぎゅーっとお股押さえてないと」

次々投げかけられる言葉。

しかし、その内容とは裏腹に、そこに籠められているのは麻衣へのどす黒い欲望だ。

そして、その場の残る一割。足を止めて眉を潜める女性達の態度は、もっと酷いものだった。

「あうっ……でちゃうっ……」

「やだ、本当にもらしちゃう気？ あの子……信じらんない」

「だよー。赤ちゃんじゃあるまいし。こんなところでオモラシなんて」

「恥ずかしいなー。あたしらだったらもう生きていけないよー」

「あうっ、そんな、こと言ったってえっ……でちゃう、でちゃうよっ」

もう、麻衣にはろくな判断力は残されていなかった。

そうしてひっきりなしに尿意を口にする少女の我慢ショーは、彼女たちの嗜虐心をいたく満足させているらしかった。

同性だというのに、麻衣を哀れむような視線は一つもない。

囁くというには大きすぎる声で繰り上げられる女性達のひそひそ話は、麻衣をますます絶望へと追いやってゆく。

「ふうっ……つく、あけて、開けてよお……もう、ホントにつ……おもらし、で、ちゃうっ」

腰をかがめ、麻衣は大きな尿意の波を乗り越える。

はあはあと大きく息をつき、下着が濡れていない事を確かめて、ぎゅっ、とその白い布地を掴んで顔を上げた。

「うわ、ぱんつ丸見えじゃん」

「やだー、だっさい下着ー」

スカートが大きくぐずれ、下着が露になる。だが麻衣はもう膀胱にたつぷんたつぷんのおしっこを我慢するのに精一杯で、自分の格好にも周囲の嘲笑にも気付いている余裕はない。

がくがくと震える膝、すっかり引けた腰、ぴたり閉じ合わされていた太腿の奥で、渦を巻いておしっこが出口に殺到してゆく。

少女の下腹部が、激烈な尿意に絞り上げられる。

全身をめぐる水分が膀胱に集中して流れ込み、女の子のプライドだけで保たれている括約筋を突破して、排泄孔を突き破ろうと怒涛の進撃を開始した。

「やだあ、でちゃうっ、おしっこ、おしっこ、我慢、できなっあああああっ」

むき出しになった下着の上から股間を押さえ、ぐりぐりとねじり回す麻衣。恥も外聞もなく耐え続ける少女に、無慈悲な大自然の摂理が鉄槌を下す。

きゅうっ、と膀胱が収縮し、恥骨にじいんと響く尿意。排泄孔を塞ぐ括約筋が緩み始め、しゅるしゅると音を立て始める。女の

子の一番大切な秘密。トイレの個室に秘められていなければならないはずの羞恥の行為が、まったく似た姿のガラス張りの個室に場所を移し、百人を越える観客の視線の中、白昼に晒されようとしていた。

ついに最期の時を迎えた少女の公衆着衣排泄に、辺りの喧騒が一段と深くなる。

「ちょっと、マジでやっちゃう気？ 信じらんない。トイレいけばいいじゃん」

「我慢できないってありえない？ いい年して。もう高校くらいでしょ？ あの子」

「あううっ……でちゃうううっ……でちゃうよおおっ、もおダメえ……っ、おしっこ漏れちゃうううっ」

麻衣はおしっこを出さずに、ここから一刻も早く出たいのに。

この場にいる麻衣以外の全員が、麻衣を電話ボックスから出さず、おしっこを出させようとしていた。

「はうっ！！！」

麻衣の、一際高い悲鳴が上がる。電話ボックスの内側に張り付いた手のひらが空しくガラスを搔き舐る。

ぶしゅっ、と。引っ張り上げられて股間に張り付いていた下着の内側から、まるでコップをひっくり返したような勢いの水流が吹き出す。ぱしゃり、と飛び散った麻衣のおしっこがガラスにぶつかって水滴を撒いた。

「あ、あ、あっ」

一端緩んだ水門は辛抱を知らず、だらしなく中身を漏らし続ける。しゅるるじゅじゅうと吹き出したおしっこは麻衣の下着の色を変え、白い足を伝ってソックスを一際濃い色で染め、地面にぱちゃぱちゃと飛沫を散らす。

ぱたっぱたっ地面に雫がこぼれ、麻衣が必死に身体をよじった瞬間、漏洩は放水に変わった。

「あう……っ、はうあっ、で、ちゃうううっ……！！」

止めようとしても止まらない。まるで自分の身体ではないみたいに、麻衣の下半身は言うことを聞こうとしなかった。女の子の下部は完全に排泄モードに入って、おしっこをじゅるじゅると漏らし始める。

身じろぎする余裕もない麻衣は、手がかりを求めてぎゅうとガラスにしがみつく。まくれあがったスカートの下、おしっこで濡れた下着はぴたりと麻衣の股間に張り付いて、薄布の向こうに恥ずかしいところのかたちをくっきりと露にしている。

その奥からは間断なくぶしゅっ、びしゃびしゃっ、と水流が吹き出して、電話ボックスの床に撒き散らされてゆく。すでに地面は一面が大洪水だった。

「ダメ……ええっ…！！」

麻衣は本能的に我慢を続けようとしている下半身をぐりぐりと透明なガラス板に押し付けた。少しでも支えを増やしてダムを決

壊を防ごうとしているのだが、実際はスカートを腰の上まで捲り上げ、まるで排泄を見せ付けるような格好でしかない。

「うわ……」

「すげえ……！！」

「ちょっと、ねえ、あの子感じてない？」

「ハズカシー……」

どよめく観衆達が、一斉に電話ボックスへと詰め寄る。

熱く押し付けられる息がガラスを曇らせ、携帯のレンズが突き出されフラッシュの連射が少女を襲う。

目の前に張り付いてきた男達の視線に、麻衣は悲鳴をあげた。

「みつ、見ないでっ、おしっこ、するからあつ、見ないでええっ！！」

見ないで、と叫ぶ懇願の声は、それ以上に多くの視線を電話ボックスに集めてしまう。激しくガラスを直撃したおしっこが薄黄色の波紋を描く様を、観衆達の好奇と興奮のまなざしが貫いた。少女は背中を竦ませ、心を切り裂くような羞恥に悲鳴を上げる。

じゅじゅじゅっ、ぶしゅしゅっ、じよぼっ！

「やだ、いっぱい、でちゃう、でちゃっだめ、とまって、とまってえっ……もうでないでええっ」

もはやその懇願も空しいものでしかない。

我慢に我慢を重ね、限界ぎりぎりを超えてなお少女の膀胱に蓄えられていたおしっこが、一気に噴き出した。

下着一枚など何の支えにもならず、白い股間の奥、淡い茂みに包まれたスリットから激しい水流がほとばしり、ぐりぐりとガラスに押し付けられる股間から透明な板に激突して下品極まりない水音を立てる。

じよじよじよぼぼぼぼぼ、ぶしゅじゅじゅじゅじゅじゅ——っ

麻衣の羞恥の熱湯が、ホースで水をぶちまけるようにガラスに激突し、四方に散って流れ落ちる。わずかに色味のついた液体は、間違いなく少女の身体の中で抽出され精製されたおしっこであることを示していた。

「うお……すげ……」

「やつべえ、丸見えじゃん……」

「やだ、本当にもらしちゃったよあの子」

「うっわ、最低……よく恥ずかしいわね、あんなにトイレ我慢してて」

その光景は、ちょうど男子トイレの小用便器をガラス張りにして、反対側から覗いているようなものだった。どんなに想う相手にだっ
て見せることのない、花も恥らう乙女が用を足している姿を、それも変態的極まりなく立ったままの放尿を、隠すものなく見られて
いるのだ。

麻衣は耳まで真っ赤になり、気が狂いそうなほどの羞恥に襲われていた。

「はやくっ、はやく、おわってようっ……こんな、いっぱい、やだああ……」

じゅじゅじゅじゅっ、ぶしゅーっ、じょぼぼぼぼぼぼ……

必死に懇願するが、最後の最後、限界ぎりぎりまで我慢をした女の子のおしっこ。男の排泄なんかとは勢いも量も桁が違う。
滝のように打ち付けられるおしっこはとどまる事を知らず、ボックスのガラス一面に広がってばしゃばしゃと地面まで流れ落ちてゆく。
川を作って広がる水溜りは、もう辺り一面にまで広がっていた。

麻衣は途切れそうになる意識の中、腰をびくびくと震わせて、耐えに耐えてきた排泄の快感を堪える。

「う……く……」

たっぷり一分近く。リットルに届く量のおしっこを撒き散らして、麻衣の排泄は終わりを告げる。

ようやく収まってきたおしっこが勢いを弱め、雫になって垂れ落ちるばかりとなる。

麻衣の身体はずりと電話ボックスの壁を滑り、崩れ落ちた。自分の作ったおしっこの湖の上にばしゃりとしりもちを付き、麻衣は
ひう、と泣き声を上げる。

まだ、かろうじて無事だったスカートも、すぐにおしっこを吸って色を変え、麻衣のしてしまった大失敗、“衆人環視での大放尿”の
証を彩る。

「ふえっ……うええっ……」

狭く、冷たい都会の密室の中で、誰も彼女を気遣うものはいなかった。

小さな個室。けれど排泄をするための秘密の場所とは全く異なる、公の広場の真ん中で。少女の泣き声だけが、悲しく響く。

(初出：おもらし千夜一夜 576-578 2004/05/21)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 遠い異国でのお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 10:05:51

BODY:

「あ、あのっ……すいませんっ」

「■@■ * \$ × ● ?」

「っ、……そ、その、お、お手洗い……どこにありますかっ……？」

「 * # ▼ @ & 、 % ■ & # ! 」

「あ、ああっ……くううっ……」

東欧のとある小国。中世の趣を残す風光明媚な往来で腰をクネらせ、こつりこつりと膝をぶつけて脚をモジつかせる少女を、二人連れの女性達は怪訝そうに見つめていた。

「……お、おねがいです……お…トイレ、ああっ……もっ、もう、もれちゃいそうなんですっ……！！ おトイレ、おトイレ……ば、ばするーむ…どこにあるんですか……っ！？」

小刻みなステップにあわせ、危険水域を越えた少女のダムの中身がたぶんっ、と揺れる。なだらかな稜線を描くまでに張り詰めた少女の下腹部はじんじんと痺れるように脈打ち、切迫感は股間まで達しつつあった。

「# ● @ & \$ %、▼ & ?」

「あ、あのっ……そ、そうじゃなくて、っ、…わ、わたし、あいむ……ごー、…うおんと、……お、オシッコ……っ…！！」

限界に近い尿意に苛まれながらでは、ただでさえ拙い英語すらまともに浮かんでこない。

スカートの前を両手で握り締めた恥も外聞もない我慢のしさを繰り返す。隠そうにも隠せない猛烈な尿意を訴える少女だが、まるでラジオのノイズを聞いているような異国の言葉は、下腹部を襲う圧倒的な気配に震える少女の耳を滑ってゆくばかり。

せめてトイレの場所を指差しでもしてくれればいいのだが、返ってくる反応はまるで見当外れで、彼女の危機を救うなんの役にもたたない。

「っ、あの、ホントに……もう、わたし……駄目、なんですっ………はやく、はやくっ……」

「■ ■ * % & \$ @ \$! ? % \$ * \$ *、■ ● × !」

「あ、あの、ま、待って……待ってくださいっ……ふぁあっ……と、トイレ……えっ……」

快活に手を上げ、別れの挨拶らしき仕草と共に立ち去ってゆく女性たち。少女は慌ててそれを追おうとしたが、迫りくる尿意がそれを許さなかった。

がくがくと膝が震え、少女は倒れこみそうになる身体を必死に支える。今ここでしゃがみこみなどしてしまったら、二度と立ち上がることは不可能だ。

「うぁ…ぁ…ぁあぁっ……ふうーっ、ふうーっ……くうんっ…」

息も荒く鳥肌の立った二の腕をきつく掴み、ニーソックスの脚を交互に交差させる。

(ぁぁぁぁ……だめ、トイレ、おトイレしたいっ……)

おヘソの下で沸き立つ秘密のティーポットがわずかでも鎮まるように祈りながら、少女は切なげに身をよじり続けた。

なんと見回してみても、辺りにトイレを示す赤い三角形のマークは見付からない。

この国では衛生的な観点から、あまり公衆トイレのようなものは設けられていない。繁華街ならばともかく、観光のために残された古い市街地では特にその傾向が強かった。

『だから、トイレの場所だけはちゃんと覚えておかなきゃだめだよ？

いざって時に見付からなかったりしたら大変だからね？ ……ねえ、聞してる？』

『……うん。聞ってる聞ってる』

『ならいいけど。それで、どうしても我慢できなかったら——』

『もぉー、だいじょうぶだよ。トイレくらいがまんするから。小学生じゃないんだから平気だってば。ねえねえそれよりさ、この教会ってどうやって行くの？』

友人と別れ、ホテルを出る時に念入りに注意されたことを思い出す。いざという時のために、友人は何箇所かトイレの場所を少女に教えてくれていたが、初めての海外旅行で舞い上がってしまった彼女は今日のプランを組むのに夢中で、すっかりそれを聞き流してしまっていた。

(ちゃんと……聞いておけばよかったっ……)

遠い異国の地で、言葉も通じない往来の中、途方もない尿意に苦しむ少女を救うものは何一つない。

股間の先端からいまでも滲み出しそうになる熱い雫の気配を感じながら、少女はぎゅっと唇を噛んだ。腰の痺れはますます激しさを増し、大量の欲求を溜め込んだ膀胱は今にも破裂しそうに小刻みな痙攣を繰り返している。

「うあ……やだ、っ……で、ちゃうっ……」

排泄孔に繋がる肉の管をぎゅっと押さえつけ、手のひらの圧迫で尿意を堰き止める。

それでも少女の下着の下で、閉じ合わされた脚の付け根にある恥ずかしい孔がひくひくと蠢きだすのを止められない。

股間を突き抜ける猛烈な衝撃に、少女はたまらず股間の両手を押し込んだ。排泄孔を直接押さえ、びくびくと裏返しそうになる膀胱を押さえつける。腰が跳ね、突き出されたおしりが不恰好に左右に揺れる。

(ダメ……ホントに……もれ…ちゃう……トイレ、トイレどこ、どこ…っ！？)

だが、オシッコを許可するマークは見つからない。

焦燥感にじっとりと汗が滲む。下腹部のふくらみが別の生き物のように暴れだし、少女のコントロールから逃げ出そうとしている。下着に滲む汗が、最悪の状況を連想させた。

いや。あるいはもう既に——

(やだ…ちがうの、オシッコでない、…でないのっ、あああうっ……くうっ、んんっ……オシッコ…ないのっ……！！)

じわじわと広がる湿り気が、波打つような下腹部のリズムに合わせて震える。くしゃくしゃに皺の寄った下着の奥で排泄孔が収縮を繰り返し、頭の奥で本能が放水の誘惑を囁く。少女は奥歯を噛み締めて最後の砦、女の子のプライドを護る。

（あ、ああ……）

それは、我慢と尿意の果てしない綱引きの果て、彼女の意識が遠のきかけたまさにその瞬間。

震える少女の視線が、道端の赤いマークをはっきりと捉えていた。

赤色の三角形。切羽詰ったときにいつも探し、いつも見かけるいつものカタチ。

（とい、れっ……！！）

女子トイレを連想させるマークを目にしたとたん、股間にある排泄機能が猛烈に疼きだす。熱い奔流が短い通路を疾走し、腰の奥に澱んでいたむず痒さが一気に外を目指して出口に殺到する。

それを渾身の我慢で一秒、また一秒と先延ばしにしながら、少女は最後の力を振り絞って走る。一步ごとに伝わる振動が激しく溜まりきった中身を揺らし、少女の意識をちりちりと炙る。

（あとちょっと、ほんのちょっと！！ ……っもうすぐトイレ、もうトイレおしっこできるトイレといれあとちょっとだけ……っ！！）

だが、

ついに、切望していたマークの元まで辿り着きながらも、少女は待ち焦がれていた排泄を済ませることが、がまんにがまんと重ねたおしっこを解き放つことができなかった。

「あ……」

その赤い三角形があったのは、大勢の人々が行き交う道路のすぐ隣、視線を遮る衝立も水を流すレバーもトイレトペーパーも見当たらない、小さな砂場だった。

『オシッコをしてもいい場所』を示すトイレのマークが、信じられない場所を示して立っていたことに少女は慄然とする。

「うそ……ここ…なの…？ …ふぁあっ……やだ、嘘、うそっ……」

道路わきの小さな砂場。

こんな場所でトイレなんかできるはずがない。だが、呆然とつぶやく少女に答えはなかった。雑踏の中で、少女の下腹部が不安げにきゅうと締め付けられる。

股間を責め続ける尿意はますます激しさを増し、孤独な少女をトイレのない街へと無慈悲に突き放していく。

「なんっ…で……トイレ……おしっこ、できない……んうっ…」

切なげに身をよじる少女を、誰も振り返ることはない。

この東欧の小さな街では、ペットのトイレにこうした砂場がよく使われていることと、女性用のトイレを示す記号が黒の二重丸であることを少女が知るのは、まだずっと先の事になる――

(初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 85-88 2006/04/10)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: お姉さまと一緒にのお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 10:14:10

BODY:

「夢みたいです……お姉さまの別荘にお招きいただけるなんて……」

「ふふ。有難う、結衣。……お食事はお気に召したかしら？」

「はいっ……とっても、美味しかったです……」

お姉さまとふたりきりで夜をすごせるなんて、それだけでももう死んでしまっても構わないくらいだ。

シルクのローブに身を包んだお姉さまのお姿は、思わず溜息が出てしまうほどお綺麗だった。

「結衣、申し訳ないのだけれど、ここにはベッドがひとつしかないの。わたしと一緒に構わないかしら？ サイズは随分大きいから、並んで寝ても窮屈ではないと思うのだけど」

「そ、そんなっ……お姉さまとご一緒できるなんて……こ、光荣ですっ……」

本当に、夢なんじゃないだろうか。

まさか、お姉さまと……一緒につ。

感動に打ち震える私の鼻先を、ふわり、と百合の香りがかすめる。それだけでもう、わたしの頭はゆっくりと蕩けてしまいそうだった。

「そう。有難う。嫌だったら言って頂戴。すぐに用意させるから」

「い、いいえっ、大丈夫ですっ。もちろん、そんなっ」

ぶんぶんとう首を振るわたしに、お姉さまはくすくすとお笑いになった。

「ふふ。……楽しみね。結衣の寝顔が見れるなんて」

「っ……お姉さまっ」

思わず真っ赤になってしまった顔を覆う。

ああ。ドキドキが全然おさまらない。眠気なんてどこかに吹き飛んでしまったみたいだ。

……けれど、そんな素敵な時間を過ごしながらもわたしはいつしか、おなかの下の方に、違和感を覚え始めていた。

いや、じつを言うともう、かなりずっと前から、切羽詰っていたのだけど。お姉さまの前でそんなことを口に出せるわけもなく、ずっと我慢していたのだ。

——お手洗いに、行きたい。

お姉さまとの大切な時間と、そろそろごまかしの効かなくなってきた下腹部を天秤にかけ、わたしの心はゆらゆらと揺れ動いていた。

「ふふ。どうしたの？ 結衣」

「い、いえ。そのっ……」

まさか気付かれてしまったのだろうか。わたしはお姉さまの顔を見ることができず、さっと顔を伏せてしまう。

お喋りをしながらずっと我慢していたなんて、恥かしい子だと思われてしまう。きちんとお手洗いにいけけない子だって……

不意に、お姉さまの表情がふっと緩む。

呆氣に取られるわたしの前で、お姉さまはまるで小さな子のように屈託なくくすくすとお笑いになった。

「お姉さま……？」

意外なことに驚いて思わず聞いてしまう。お姉さまの優しい手のひらが、そっとわたしの髪を撫でる。大切なものを慈しむかのように。

「どう、なさったんですか……？」

「ふふ。……そうね」

もう一度くすくすとお笑いになって、お姉さまはぎゅっとわたしを抱き締めた。

「え……っ！？」

突然のことに頭が真っ白になる。やわらかな香りが全身を包み込み、バスローブ一枚だけを隔ててお姉さまの身体が密着した。全身の血が顔に集まったみたいに頬が熱く弾け、心臓が急回転をはじめた。

「お、おお、お姉さまっ！？」

ああ、ぜんぜんまったくこれっぽっちも余裕がない。いつもの百面相で大慌てのわたしに、おねえさまはきゅと身体を寄せてくる。とてもとても楽しそうだ。

でも、わたしはもう混乱の頂点で、いったいもう何が何やら——！！

そんなわたしに顔を寄せ、お姉さまはそっと囁いてくださった。

そう。とんでもない、ことを。

「ふふ……御免なさいね。勝手に笑ってばかりで。

だって結衣がお手洗いを我慢しているの、とても可愛いんですもの」

「え、えええっ……」

シーツの中で、わたしは思わずぎゅっと脚を閉じてしまった。意識すまいと思っていた部分に感覚が集中し、かなり切羽詰っていたおしっこがたぶつと揺れるのが分かる。

「始業式の時もそうだったわね。隠そうと必死だったようだけれど……私にお手洗いの場所を聞こうとしていたんでしょう？」

「お、お姉さま……ご存知だったんですか……っ！？」

「結衣は隠し事が下手なのだもの」

ああ……まさか、お姉さまに見られてしまっていたなんて。

前の日にお祝いに、と食べた四川料理がとても辛くて、ついつい何杯もお水をお代わりしてしまったのだ。おまけにちょこっとだけ飲んだお酒のせいもあってわたしはすっかり寝坊してしまいもう少しのところで入学式にも遅刻してしまうところだった。勝手のわからない学院生活初日、もちろん緊張と不慣れのせいでトイレの場所も探すことができず、ぱんぱんに張り詰めたおなかを抱えたまま2時間にも及ぶ入学式に参加することになってしまった。

途中何度も訪れた絶体絶命の危機を乗り越え、クラスメイトになった天崎さんに聞いてどうにかトイレに駆け込み、個室に辿り着いたのは限界ぎりぎりのほんの数秒前だった。

あの時、椅子を軋ませおしりをもぞもぞと動かし、膝をくっつけ合わせて必死に我慢していた姿。とても綾桜学院の生徒には相応しくないはしたない格好。それをずっとずっと、お姉さまはご存知だったんだ。

「ふふ。ずっとあそこを押さえてもじもじしていたわよね。すぐに分かったわ。坂道でぶつかった子があんなことをしているのですもの。いろいろ想像してしまいたくなったの。いつから我慢していたのかしら、とか。私とぶつかった時ももうしたくてたまらなかったのかしら、とかね……」

「あ……や、やだっ……」

お姉さまの顔を見ていられなくなって、わたしは俯いてしまう。

ただでさえ出会いはとても最悪だったのだ。あの交差点での出来事がなければ確かに、こうしてお姉さまと親しくさせていただくこともなかっただろうけど、それでも……あんな、あんな恥かしい、女の子として失格なところを見られてしまったなんて……っ！！

けれど、お姉さまはわたしの顎にそっと指をかけ、緩やかになぞりあげるように持ち上げてくださる。気付けば、お姉さまの顔がわたしのすぐ目の前に。

そう、とてもとても、楽しそうに。

「ねえ、結衣。言って御覧なさい？ どうしたいのかしら？」

「お、お姉さまっ……」

そんな事を聞かれても、答えなんてひとつだけだ。

なんとか察してくれないものかと視線で訴えるけれども、お姉さまはそれくらいのことで容赦してはくれなかった。

こんな時のお姉さまはとても、とても、意地悪だ。

「だめ。きちんと伝えてくれなければ、わからないわ？」

「あ、ああっ……」

わたしは手持ち無沙汰な手でぎゅっと自分のバスローブの裾を握り締め、小さくかぶりを振る。だって、そんな恥かしいコト、ずっとずっと小さな時ならまだしも、今はたとえお父さんやお母さんの前でも口にできない。

なのに、お姉さまはそれをわたしに言わせようとしていた。

「ねえ、結衣、どうしたの？ ちゃんと教えて頂戴。結衣はどうしたいのかしら？」

お姉さまの手がわたしの手をつかむ。

ぎゅっとローブを握る手のひらを。もっともっと下の方に伸びていきそうになる手のひらを、それ以上、はしたないことをしてはいけな

いと咎めるように。

ぞく、と腰のあたりをむず痒い感覚が伝わってゆく。

「あ、……っ」

毛布の下でもぞもぞと動き始めた脚を、お姉さまは見逃してはくださらない。

どうしよう、このままじゃ、本当に……

最悪の想像が頭をよぎる。決してあってはならない結末。お姉さまのご好意を全て踏みにじってしまうような、最低の状況が。

わたしは、意を決して、

「お……」

それを、口に

「お、お手洗いに……」

まるで消え入るみたいなか細い声。もう何年も前から、こんなにもはっきりと、そのコトを口に

した記憶はない。慎み深く、清楚に、可憐に。はしたないと咎められるよりも前から、わたしはそうすることなどないように教えられてきた。

それはお姉さまも、他の大勢のクラスメイト達も同じだ。綾桜の生徒なら決してそんな事は人前で口にしない。

死んでしまいたくなるほどの恥かしさが込み上げてくる。真っ赤な顔がさらに真っ赤になって、とても目を開けていられない。そんな顔をお姉さまに見られているのだ。でも、でも、とにかくちゃんと言った。これで、お姉さまも許して

そう思った。

けれど。

お姉さまの反応はわたしの想像をはるかに越えていたのだ。

「お手洗い？ ……そんなに手が汚れているのが気になるのかしら？」

「お姉さま……！！」

非難してしまうかのような悲鳴が勝手に口から飛び出す。けれど——お姉さまはさっきからの笑顔を崩さないまま、くすくすとお笑いになっていた。

そして、ああ、と大きく頷く。

「……そうね、寝る前にお菓子を食べてしまうのはお行儀が悪かったかも知れないわね。気持ちが悪いのかしら。お絞りで持ってこさせようかしら。それでいい？ 結衣」

「お、お姉さま……意地悪なさらないでくださいっ……」

「ふふ。私はそんなつもりはないのだけど？ 結衣がちゃんと言ってくれないからいけないのよ」

わたしは悟った。

お姉さまはわたしに、もっともっと、恥かしいことを言わせようとしていらっしゃるのだ、と。『お手洗い』で通じないのなら、もっとわかりやすい言葉があるでしょう、と。

そんな。そんな。

まさか、まさか。お姉さまは、本当にわたしにそんなことをさせるおつもりなのだろうか。必死に打ち消そうとしても、いちど抱いてしまった疑念はどんどんふくらんでゆく。

お姉さまは黙ってわたしを見つめている。わたしが次に何を口にするのかを楽しむように。

だから、わたしは——やめるわけには、いかない。

「と……」

その単語、を口にしようとするだけで、身体を中心に熱い疼きが走る。

「お…トイレに……いきたい、……ですっ」

そんな風にはっきりと口に出したのなんて、もう何年振りだろう。本当の本当に小さい頃ならまだしも、学校に入ってから絶対口にした事はない単語。

人前では絶対に知られてはいけない、恥かしいことを——我慢しているのを、はっきりと知らせてしまう単語。

わたしは、お姉さまにはっきりと知らせてしまったのだ。はしたないことをずっとずっと我慢していて、もう、我慢ができないということ。

「お姉さま……申し訳ありません……その、もう……我慢、できないんですっ……お願い、します……その、お、……おトイレ、に……っ」

頭がくらくらする。恥かしすぎて死んでしまいそう。

けれどおなかの中で暴れる秘密のティーポットがわたしを急かす。急がないと、急がないと、本当にいけないことになってしまうから。

けれど、

お姉さまのお答は、もっともっと、わたしの予想を越えていたのだ。

「ふふ。そんなに我慢しているの？」

「は、はいっ……」

もう頷くしかない。わたしのおなかごどんなコトになっているのか、お姉さまに知られてしまった以上、隠してもしかたのないことだった。

お姉さまはさらににこりと素敵な笑顔を見せて、囁くようにお話しになる。まるで——恋を伝えるかのように、密やかに、艶かしく。

「……ねえ、結衣？ そんなになにを我慢しているのかしら？」

教えて頂戴？ あなたはおトイレで、なにがしたいの？」

「っ……」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

けれどお姉さまは、変わらずわたしをじっと見つめてくださっている。それは冗談でも悪ふざけでもなく、はっきりとした答えをわたしにお求めになっている証拠だった。

「お、お姉さまっ……そんな、そんなっ」

「ほら、教えて御覧なさい？」

信じられなかった。

本当に、本当に、そんなことを口にしなければならないのだろうか。だって、だってお姉さまは本当にお綺麗で、学年を越えて大勢の生徒に慕われていて、もちろんわたしも憧れのかたで、そんなコトを決して口にしないはずの素敵なかたなのに。

「お姉さまっ、……い、意地悪はやめてください……っ」

「意地悪ではないわ。はっきり聞きたいだけよ。……結衣はどうしたいの？ ほら、ちゃんと言って御覧なさい。そうでないとわからないわ」

焦らすようにゆっくりと、お姉さまはわたしに問いかける。

間近で感じるお姉さまの体温、息遣い、鼓動。そんな至福の状況にありながら、わたしはどんどん追い詰められていく。

絶対に、

ぜったいに、あつてはならないことを——要求されて。

「……っ、」

きゅっと唇を噛む。

ローブに食い込んだ指がしんと痛む。

「あ、……」

くちびるがぱくぱくと空をなぞる。お姉さまはわたしから視線を外してはくださらない。その瞬間を見逃すまいとでもするかのよう。

だから、

覚悟を決めるしか、なかった。

「お……おっこ、したい、です……っ」

その、言葉を口にした瞬間。

わたしはぎゅっ、と抱き締められていた。これまでの優しいものとは違う、愛しい相手を逃さないようにするための力強く荒々しい抱擁。

心臓が口から飛び出しそうになる。

けれど、もっと危険なことに——わたしのおなかはぎゅっと圧迫されて、猛烈な勢いで暴れ出す恥かしい衝動に悲鳴を上げそうになる。

「可愛いわ……あなたの小さな唇が、そんな恥かしいことを口にするなんて。素敵」

「お姉さまが……そうさせてらっしゃるんですっ……」

もう、叫び出さないだけで精一杯だった。お姉さまに抱き締めてもらっている嬉しさと、本当の本当に切羽詰ってきたおなかの中身で頭がいっぱいに。

じゅっ、と疼くむず痒さが、次第におなかの奥から股間の先端へと進んでゆく。

ちりちりと震える先端は今にも爆発してしまいそう。なのに……お姉さまを突き飛ばしてお手洗いに立てるわけもない。

「お願いします……っ、お、お姉さま……っ」

喉がからからだった。身体じゅうの水分が絞り上げられて、脚の間に集まってゆくみたい。押さえなきゃと思っても、腰が勝手にくねくねと動いてしまう。おなかの中で溢れそうな恥ずかしいお湯がこぼこぼ沸騰していた。

「…お姉さまぁ……っ……！！」

「ふふ。まるで小さな子みたいね？ 結衣は幼稚園からやり直したほうがいいのではなくて？」

「や、お姉さまっ……」

お姉さまのてのひらがそっと私のおなかを撫でて、つう、と下のほうに降りてゆく。

……あああっ、だめ、っ、そこはっ！！

「ふふ。……こんなに硬くなって……石のようね。いっぱい我慢しているのね？ 結衣」

わたしのおなかの中が、どんな風になっているのか。お姉さまにすっかり知られてしまった。頬が真っ赤になるのがわかる。

「あ、ああ……お許してください、お姉さまっ……」

「駄目よ。まだまだ大丈夫」

根拠のない自信をお示しになって、お姉さまはきゅ、と私の手を握ってくださった。

「私が撫でてあげる。寄りかかっていいわ。楽になるわよ」

「は、はいっ……」

少しでも油断すれば、お姉さまのベッドの上に世界地図を描いてしまう。それだけはなんとしても避けなければならなかった。

お姉さまがお許しになるまで、なんとしても耐えなければいけない。

「ほら、だいじょうぶ……吸って……吐いて……楽にきなさい」

「はあ……ふう……っ」

お姉さまのあたたかい手のひらが、じんわりとおなかを暖めてゆく。

「……どうかしら？」

「……す、すこしだけ……楽になりました……っ」

でも、そんなのほとんど気のせい。お姉さまの前ではしたなくおしっこを我慢しているのだから、余裕なんか全然ない。それに、さっきからどんどんおながが張り詰めてくるのが分かる。

「あ、あの……も、もう平気です……ですから、そのっ……」

「ふふ。そうね、もう随分遅いものね。結衣、あなたも疲れたでしょう。いつでも寝てしまってもいいわ」

「お、お姉さまっ……」

お姉さまは、どうしても……わたしを許してくださるつもりはないらしい。

わたしに、その、お、……お粗相、をさせる……おつもりなのだ。

「眠っているうちに終わってしまうものね。恥かしがる結衣の顔が見られなのは残念だけど……ふふ。今日は初めてですもの。それくらいは赦してあげるわ」

「そんなぁ……む、無理ですっ……」

だって、いま、その……寝てしまったら、きつと。……ううん。たぶん間違いなく。

第一、こんな状態で眠れるわけがない。どういうおつもりなのかは分からないけれど、お姉さまはどうあってもわたしをお手洗いには生かしてくださらないようだった。

でも、どうして？ ……ひょっとして、気付かないうちにとても失礼なことをしてしまったんだろうか。だから、お姉さまはこうしてお怒りになって、わたしにお仕置きのためにこんなことを――

ぐるぐると考えが巡る。でもそれも全て、おなかのなかにおしっこをとどめておこうとするだけで吹き飛んでしまいそうになる。

きゅん、とおなかの中が疼いた。

「あ、はぁあぁっ……」

わたしは恥ずかしい声を上げて、ぎゅっ、とパジャマの前を押さえて、『く』の字型に体を折り曲げてしまう。

も、もう。本当に……我慢、できないっ…！！

「お、お姉さまっ……！！」

たとえ、はしたない子だって嫌われたっていい。お手洗いにいこう。だって、このままじゃ、本当にお姉さまの前で……お、おもらし、を……しちゃうっ！！

けれど、お姉さまはそっとわたしの顔に手を添えて、微笑んでくださった。

「いいのよ？」

「え……？」

「我慢できないなら、してしまってもいいの。……結衣がこのままおしっこするところ、見てみたいわ」

頭が、

ハンマーで殴られたみたいな衝撃だった。

どういこと？ お姉さまが……学院のみんなが憧れるお姉さまが、そんな、そんな恥ずかしい、へ、変態、みたいなことを……っ！？

頭が真っ白になりそう。心臓がドキドキ跳ねあがって、口から飛びだしてしまうのを押さえるので精一杯。

「そんなっ……お許くださいっ……お姉さまっ」

どれだけ憧れていたって、どれだけ好きだって。見せたくない姿だ。

「ふふ……あなたが、ずっとずっと我慢していたもので、ここをぐしゃぐしゃに濡らしてしまうところが見たいわ」

お姉さまの指先が、まあくいけないところをなぞる。

その衝撃にびくびくとはしたなく身体をよじってしまうわたし。

「は…あぁっ！ やぁ……っ！！」

「可愛い声……もう出してしまいたくれないのかしら？ ……いいのよ？ してしまっても」

お姉さまの甘い囁きが耳元でわたしを誘惑する。おなかの奥がきゅんきゅんと疼いて、恥ずかしい場所が勝手に緩んでしまいそう。

で、でも、そんなことっ……できるわけっ……！！

「だ、だめ……ですっ、こ、このままじゃっ、お、お姉さまの、お洋服もっ」

「ふふ。いいわよ？ 結衣のおしっこで濡れてしまうのも。暖かくなりそうね？」

「や、やぁっ……」

自分の出した恥ずかしい尿で、お姉さまの身体を汚してしまう——そんな想像に背筋が震える。

けれどそれは、単純に怯えだけが原因だったのだろうか。

胸がぎゅっと締め付けられる。じんじんと頭の新が痺れて、うまく言葉がまとまらない。……な、なんでお姉さまは、そんなことを……っ！！

「いけない子ね。そんなにおしりをもじもじさせて……」

「お、お姉さまっ……お許ください……っ」

思わずぎゅっとシーツを握り締めてしまうわたし。けれどいくら押さえ付けようとしても、脚は勝手にもじもじと寄せ合わされてしまう。

それを見て、お姉さまはまたふふ、とお笑いになった。

「ああ……なんだかもじもじしている結衣を見ていたら、私も行きたくなってしまうわ。……すぐに戻ってくるから、お行儀良くして待っていなさいね？」

「え。ええっ！？」

わたしの前でためらうことなくお手洗いに行くコトを告げられて、お姉さまはベッドから出てゆく。

取り残されたわたしは、たまらずぎゅうううーと前を押さえてしまった。

「あ、はぁっ……だめ、……ふぁぁうっ……く……」

もう、恥ずかしい場所が爆発してしまいそう。おなかの中でティーポットがぐらぐら沸騰しているみたい。

(……っ)

ちらり、と視線を動かすと、廊下に続く半分開いたドアが見える。

(あの向こうで、お姉さまはいま——っ、……お、しっこ……を……)

するり、とネグリジェのしたをたくし上げて、暖かな便座に腰掛けて。我慢していたものを解き放つ。精一杯おしとやかにしようとしても、それはきつとどうしようもないほど激しくて、乙女にあるまじき勢いで、水面を直撃して大きな音を響かせて、止めたくても止まらない——

そんな恥ずかしい想像もいまは止められない。おなかの中で暴れ回るはしたない衝動が、はやくお姉さまと同じ事がしたいと叫んでいる。

ベッドの中で、お手洗いにも行けず我慢を続けているわたし。最悪の事態を回避するためにも、。いまずぐ跳ね起きて、別のお手洗いまで走らなくちゃいけなかった。例えお姉さまの言い付けを破る事になっても。

でも、

「…んあんっ！！」

もう、普通に立ちあがるのも難しいくらいだ。ぐらぐら沸騰するおなかの中のホットレモンティーがこぼれそうで、腰が勝手に動いて、シーツに皺を寄せてしまう。

このままじゃ、本当に遠からず、お姉さまのベッドを汚してしまう。

そのコトを想像するたびに頭が真っ白になりそうだった。

「ふ……あふ……っ、くっ、くううっ……」

（やだっ、恥ずかしいよお……でちゃう、もう出ちゃううう～っ……）

お姉さまのベッドでくねくねとおしりを揺するわたし。そんなコトしたくはないのに、我慢できないオシッコは全然収まってくれない。

随分長い間そうしていたような気もしたけれど、多分5分もかかっている。

再びドアを閉める音がして、お姉さまはお部屋に戻っていらっしゃった。

「お、おねえ、さまっ……」

救いを求めるようにお姉さまを見てしまう。途切れ途切れの声が裏返って、もうまく言葉も喋れない。じわっ、と視界が歪んだ。わたしの身体は出す事を許されない水分を少しでも減らそうともがいている。

お姉さまはやさしく微笑んで、そっとわたしの隣に腰掛けた。

白魚のような細い指が、息を荒げ顔を真っ赤にしているわたしの頬をぬぐって、涙の跡を消してゆく。

「ふふ……素敵。本当に素敵よ、結衣」

お姉さまの顔がそっと近付き、わたしのくちびるに濡れた柔らかい感触が触れる。

わたしは——お姉さまにキスされていた。

「あ……」

「可愛いわ……そんなにもじもじして、おしっこを我慢している結衣」

「や、や……お姉さまっ……」

甘くトロけるような感触が、あとから頭の中にいっぱいにひろがってゆく。

顔がたちまち真っ赤になり。わたしはその衝撃で決壊してしまいそうになる下半身をぎゅっと押さえるのに精一杯だった。

（そ、そんな——、え、いまの、いまのっ！？）

初めての、キス。

何度確かめても間違いはない。恥ずかしい熱湯を限界まで詰めこんで、ぱんぱんに膨れ上がってずきずきと震える下腹部が、これが夢なんかじゃないということを痛いくらいに教えてくれている。

お姉さまは、わたしに——キスをしてくださったんだ。

「あ……」

胸が震える。せっかく拭てくださった頬をまた涙が伝う。胸に広がる熱いものが、ほんの一瞬だけとんでもないことになっている下半身のことを忘れさせた。

まさか、お姉さまに……ほんとうに、はじめてを差し上げることができるなんて。感動で胸が一杯になるわたしは、まるっきりなにも出来ないまま、ぽろぽろ涙をこぼしてお姉さまにしがみついていた。

「結衣。大好きよ。……あなたのことが。とても、とても素敵」

「あ……っ」

ぞくり、と背中が震える。オシッコだけじゃない。おなかの奥がじんわりと湿ってゆく。頬の熱は背骨を伝ってわたしの身体の芯まで広がりだしていた。心臓の鼓動はさっきにも倍する勢いで、いまにも口から飛び出してしまいそう。

お姉さまはわたしに覆い被さるようにして、ぎゅっと背中を抱いてくださった。やさしく力強いお姉さまの甘い匂いに包まれて、なにも考えられなくなってしまう。

そんなわたしに、お姉さまはさらに驚愕の告白を続ける。

「初めて会った時から、見たいと思っていたのよ。そして、独り締めしたいと思っていたの。結衣がおしっこを我慢しているところを、ぎゅっと、この可愛い手脚の間を押さえて、お漏らしをしようところをね」

囁くお姉さまの瞳は、怪しい輝きに濡れていらっしまった。わたしはその深い色に思わず見蕩れてしまいそうになる。

でも、でも。

「軽蔑したかしら？ でもね、私はそういう人間なのよ。あなたみたいな可愛い子がおしっこを我慢しているのを見るのが大好きなの。ふふふ……」

「っ……」

「だから、心配せずに思いきって、なさいな？ 気持ちいいわよ……」

甘い誘惑の言葉がわたしの理性を揺らす。お姉さまのくちびるが耳を噛む。ぞくんと背中が反り返った。そんな身体の動き一つでも辛くなるくらいに、わたしの我慢は余裕がなくなっている。

「結衣がおシッコするところが、見たいわ」

「駄目です……本当に、ほんとうに……し……しちやいますっ……からあっ」

「ふふ。……そんなはしたないことを口にするなんて……結衣は悪い子ね。

でももう駄目。ずっと黙っていようと思ったけれど、こんなに素敵な姿を見せられていたら我慢できないわ。ねえ結衣。もっと良く見せて？」

「そ、そんなあ……っ」

お姉さまの告白は、確かにとんでもなく嬉しいけれど。

そ、その、お、……おもっ、……お漏らし……だなんて——だめ、絶対にダメっ！！ お姉さまのお気持ちには答えたいけど、そんなの、そんなに恥ずかしいコト、いくらなんでもっ！！

おなかがぴくぴくと引きつり始めている。ぎゅっと閉じられたダムはもう鉄壁ではなく、ヒビだらけのぼろぼろ。一度決壊したらもうあとは大洪水だ。そうなったら、わたし、わたしは……っ！！

「お、お姉さまっ、お願いします……一生のお願いですっ、その、お姉さまのお気持ちはとても嬉しいですけど、でもっ、そ、そんな

……お姉さまの前でなんて、できませんっ！！ も、もう本当に、本当にっ……………っ！！ で、ですから……お手洗いに……お手洗いに行かせて、くださいっ……」

「ふふ、そうね……このまま朝まで我慢できたら、行かせてあげるわ」

「そんなあ……む、無理、ぜったい無理ですっ……」

窓の外はまだ真っ暗だ。いったいあと何時間、我慢しつづければいいんだろう。うん、もう1時間だって無理。それどころか30分だって、15分だって……

1分1秒でもはやくお手洗いに行きたいのにっ……………！！

「ああ……可愛いわ……可愛いわ、結衣」

「んむっ……んふうっ！！？」

気付いた時には、お姉さまに無理矢理、くちびるを塞がれていた。熱い舌がその隙間から滑りこんでくる。あたまを痺れさせるような、セカンド・キスの甘い感触に、わたしは夢中になってお姉さまの舌を吸った。

おなかの奥がじんと響く。

本当は別のものはずの、オシッコがしたいのと、嬉しくてたまらない気持ちがゆっくり溶け合って、びくびくと脚の間で暴れる。

「ん……んふっ……あ…は……ちゅむ……っ」

「んんっ、ふうっ……ふ、あ……」

お姉さまの指が、そっと下腹部に伸びて、ぱんぱんに膨れたおなかを撫でる。たちまち尿意が何倍にも膨れ上がってわたしは脚をばたばたを暴れさせた。それなのにお姉さまはやめてくれない。緩急をつけながらおなかを撫で、軽く押しこみ、いけないところをなぞり上げ、わたしが必死に閉じ込めようとしているものを出させようとしてくる。

ぴりぴりと弾ける衝撃が、腰に響きじんと背骨を伝って頭にまで昇ってくる。

何がなんだか、解らなくなっていた。

ただ、

（おしっこ、オシッコ漏れちゃう……漏れちゃうっ、やだ、っ、やだああっ！！）

それだけがどんどん強くなる。

わたしがお姉さまと出会う前も、お姉さまは何人もの……恋人を持たれていたのだと聞いていた。だからわたしは、今日の今日まで、お姉さまがわたしを心の底から必要としてくださっているのではないと思っていた。

お姉さまがこうしてわたしをお呼びになってくださったのも、そうした感情の上のことではなく……単にわたしに興味があっただけのことだと思っていた。綾桜には珍しいタイプの生徒だから、好奇心の延長のことではないと。

でも、お姉さまはおっしゃった。

『オシッコを我慢しているのを見るのが、大好きなの』

と。

その、他の誰か、も。

ここでこうして、お姉さまといっしょに横になって……誰にも見せたことのない恥ずかしい姿を見せたのだろうか。

「ふふっ……」

「あああああああうっ！？」

不意に。ぎゅっと脚の間を握り締められて、わたしは悲鳴を上げてしまった。恥ずかしさからそこに触れられないわたしの代わりに、お姉さまの手のひらがそこをぎゅううううーと押さえてくれている。

でも、でも、それは。

もうすぐ始まる大崩壊を、ほんの少しだけ先延ばしにするだけのことでしかない。

「もう駄目なのね……こんなにここを熱くさせて。いけない子ね……ふふ」

「は、はいっ……(はいっ……)」

必死で頷く私。今すぐ自分でも股間を押さえたかったけれど、お姉さまがそうして触れている以上それでもできず、ぎゅっと枕に爪を立てた。長い我慢の果てに次々襲ってくる大波に晒されて、ダムはとっくに疲労困憊。せめて何かを握り締めていないと、もう踏ん張りがきかない。

「ふふ……じゃあ、こうして私が代わりに押さえていてあげる。どう？」

「あ、あああつ、お、おねえ、さまっ」

お姉さまの押さえ方は、とんでもないくらいに上手だった。あとすこし、あとほんのすこしで始まってしまいそうになるのを、外と内側の綱引きを保つように、絶妙の力加減で封じている。

出したいのに、出せそうにない。そんな錯覚すらしてしまうくらい。

お姉さまの手が、するりと動いておしりの方へ。そこに籠る熱気を撫でて、お姉さまはくすりと微笑む。

「あら、もう湿ってるのね？ 我慢できなかったのかしら」

「ち、違いますっ、あ、汗ですっ」

本当にそうなのかどうかの自信はない。ずっと我慢を続けていたそこは、もうとっくに感覚がなくなっている。またまた高まってきた尿意にわたしははしたなく叫んでしまう。お姉さまに、おなかの中でのオシッコの事を知らせるように。

「ああ、駄目……駄目えっ……」

「大丈夫よ。結衣、ゆっくりおなかの力を抜いて、深呼吸して御覧なさい」

「は、はあーっ……ふうーっ……(はああーっ……)」

一息ごとにおなかがきゅんとなって、熱い疼きが高まる。まるで、そう、まるで、赤ちゃんを産んでいる時みたいな気がした。

「ふふ……結衣はここに、いっぱいおしっこを我慢しているのね……」

「あ、ああっ……押しちゃダメですっ……お姉さま、あ……」

そうして、何度目かに悲鳴を上げた時。

不意に、お姉さまはおっしゃった。

「ふふ、……ねえ結衣。喉が渴かない？」

「え……」

呆気にとられるわたしをよそに、お姉さまはサイドボードにある水差しを手にとり、ハーブの効いた冷水を口にお含みになった。

「結衣」

「は、はいっ……んっ」

まるで命令。逆らえないわたしを押さえつけるようにして、お姉さまはまたくちづけをしてくださる。それと同時にくちびるの隙間から流れこんでくる冷たい感触。

「ん……んう……つくんっ」

口移しで流しこまれる水が、あっという間に口の中いっぱい。こくりこくりと喉を動かして、わたしはそれを飲み下してゆく。

「ふふふ……もうおなか一杯、って顔ね？」

「あ、ああ……駄目です、駄目です、お姉さま……」

これ以上飲まされてしまったら、出てしまう量ももっと増えてしまう。

「でも駄目よ。……ちゃんと飲みなさい？」

「……あ、あああっ……」

んむっ、と口が塞がれて、もう一度。わたしは何度も何度もお姉さまから口移しでお水を飲まされてしまう。おなかの中で冷えたお水が、じんわりと身体の奥に広がっていく。

「ねえ、結衣……最後におねしょをしたのは、いつかしら」

「っ……」

「恥かしがなくていいわ。誰でもあることですもの。……教えて御覧なさい？」

「……あ、っ」

ぎゅっと唇を噛んで、わたしはお姉さまにお答えする。

「初等部の……3年生の、とき、です……」

「ふふ。3年生ね。……随分大きくなってからも、お粗相してしまっていたのね？ どうして失敗してしまったの？」

「て、テレビで……怖い映画をしてて、……夜中に目が覚めたんですけど、お、お手洗いにいけなくてっ……」

「ふふ。じゃあ結衣はこれから、5年ぶりにお漏らしをしてしまうのね？」

「っ……」

その言葉が、引き金のように頭の中に衝撃を叩きこむ。

お漏らし。

お姉さまの目の前で。おしっこを、我慢できずに。

(あ……つつっ！！)

じんわりと緩みそうになっていた足の間の筋肉に全身の力を込める。ぎゅっと閉じ合わせた脚は、もう動かす事もできない。

「は……はあ…っ、はーっ……ふうーっ……」

危なかった。

もう少しで、あとほんの少しで取り返しのつかない事になるところだったけど。

なんとか、ぎりぎりのところでその誘惑を断ちきった。

じくん、じくんと引きつる股間を感じながら、わたしは大きく息をつく。

「あら……残念。あとすこしだったのに我慢できてしまったのね」

「お姉さまっ……」

でも、これもほんの一時。わずかな間だけのこと。

だっておなかの中で暴れる恥ずかしい熱湯は、少しも、全然収まってくれない。

「駄目よ。お手洗いには行かせてあげないわ」

それに、お姉さまのお許しがなければ、わたしはお手洗いにいくことはできないのだ。込み上げてくる切なさに耐えきれず、わたしは

思わず吐息をこぼしてしまう。

「ふふ。結衣がいけないのよ？ そんな風に可愛い顔をするから……少し、虐めてあげたくなっちゃったじゃない」

きゅっ、きゅっ、といけないリズムでおなかを圧迫する。

わたしのおなかの奥のティーポットがそれに反応して、切なげに身震いした。

「やっ、だめ、駄目えっ……で、でちゃうっ……出ちゃうっ」

「ふふ。凄いわ……結衣のここ、石みたいに硬くなっているのね……どれだけ溜まっているのかしら？」

そっと脚の間をなで上げられ、わたしは我慢できずにぎゅっとお姉さまのバスローブに爪を立ててしまう。

「可愛いわ……もう、本当に出てしまいそうなのね……ふふ。我慢できないのかしら？」

「あ、ああっ、駄目、駄目ですっ……お姉さまっ」

「結衣のはずかしいところ……とっても熱くなって……」

お姉さまは、そのままぐっと身体を下ろし――

わたしのおなかに、体重を乗せた。

「あ、ああっ……！！」

股間で熱い風船が弾けたように、張りつめていた理性の糸が途切れる。

ぷしゅっ、という飛沫が脚を伝い、我慢に我慢を重ねていたものが一気に溢れ出した。

足ががくがくと震え、腰が持ち上がって、背骨がたわむ。止まらない。ぜんぜん止まらない。熱い何かが、激しい勢いでおなかの中から抜け出してゆく。

「ふふふっ……凄いわ。結衣……とっても熱くて……凄い勢いね……」

「や、やだっ……お姉さまっ……離れて……離れてくださいっ……出ちゃう、ぜんぶ出ちゃいますっ……あああああっ！！」

ぐいぐいと、お姉さまの腰がわたしのおなかのいけないところを圧迫する。

止まらない熱い奔流をおなかで受けとめながら、お姉さまはぎゅっとわたしを抱いてくださった。

「ふふ。まだ出ているのね……よく我慢したわ、結衣……素敵。とても素敵よ……可愛いわ」

「おねえしゃまっ……」

じんじんと痺れる頭のせいで、呂律もうまく回らなかった。

重なった唇のあいだで、くちゅりと舌が絡み合う。

びっしりと濡れたパジャマが張りついて、濡れた布地越しにお姉さまとわたしのおなかに触れ合う。熱い奔流をほとばしらせながら、わたしの意識はお姉さまの中に溶け込んでゆく。

「もう我慢なくていいの……いっぱい、残らず出してしまいなさい……」

「あ、ああああ……はうっ……」

だらしない股間は歯止めを知らなかった。ぐしゅぐしゅと擦れ合うパジャマの布地ごしに、シーツに盛大に恥かしい噴水を噴きこぼし、大きな大きな染みを広げてゆく。おなかの中にある全てのものを吐きだしてしまうかのような錯覚が、身体を中心に甘い痺れを広げてゆく。

お姉さまのキスを受けても、わたしの股間はおしっこを止めない。

まるで、いつまでもいつまでも、快樂の泉をあふれさせるように。

そうして、とうとうお姉さまの前でおもらしをしてしまうなんてとんでもないことを経験した、わたしにとって恐らく一生忘れられない日になった、その夜から一夜を開けて。

ようやく起き上がったわたしの前で、お姉さまは素敵な笑顔を見せてわたしに仰る。

「ふふ。結衣。……今日はそれを飲みなさい。特製のお茶よ。……とても効き目が強いから、昨日よりもっと素敵になれるわよ」
「……はい……」

おなかの奥に、じんと痺れる感覚を覚えながら、

わたしは目の前に置かれた大きな陶器のティーポットを見つめ、こくり、と喉を鳴らしてしまう。

それがもたらした快樂と、解放感。今まで味わったことのなかった最高の瞬間の記憶が、まだ余韻の残る身体の芯にじわぁと広がってゆく。

「今日は……お外にいきましょうか」

お姉さまの言葉に、わたしはこくりと頷いて答え――

ティーカップに注がれた暖かなお茶に、ゆっくりと唇をつけたのだった。

(初出：旧ブログ書き下ろし 2007/02/01)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: シズク忍法帖・その壱
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 10:16:41

BODY:

陽は天頂に近付き、夏の陽射しで山の緑を照らしている。

綾瀬の国より篠付の国へ。ここから道は山を越え、これまでの平坦な道とは些か赴きを変えるものの、天下の陰に大戸川の雄大な流れを越えて西海道を旅してきた者にはさほどの障害とは映らぬだろう。

とは言え、道を行く二人連れの少女達にはまだまだ険しい山道であるようだった。

「か、カスミ姉さま…待ってくださいまし」

「もう……」

山道に入ってからもう何度目のやり取りであるだろう。カスミは溜息をついて足を止め、後ろを振り返った。化粧気はないが、わずかに湿った額が、まだほのかに残る幼さと入り混じって、つぼみを膨らませるうら若き乙女の瑞々しさを引きたてている。

やや吊り上った目じりが気の強そうな印象を与えるが、今はその眉は困ったように八の字を描いていた。

「しっかりなさい、シズク。そんな様では今日じゅうに宿まで辿り着けませんよ」

「で、ですが……その、もう、私……」

シズクと呼ばれたもう一方の少女は、カスミよりも幾つか年下であるようだった。こちらは姉に比べてずっと疲れた様子で、うなじには汗を吸った髪が張り付いている。遅れがちな足元は定まらず、杖にもたれかかるような有様だ。

「誰も見ていぬといっってはしたない。もう少し落ち付いたらどうです」

「う、ううっ……」

指摘を受けても、シズクはその様子を正すことはできないようだった。

聞き分けのない妹を気遣うように、カスミは踵を返すと立ち尽くしているシズクの側まで歩み寄る。

「ほら、息を吸って。……少しでもいいから歩いて御覧なさい」

「は、はい……」

助け合いながら険しい旅路を歩く少女達。他に連れもおらず、まだ幼いと言っても良い彼女達が、かのように過酷な旅の最中にあるのは一体どのような理由であるのか。それを示す答えは彼女達の腹部にあった。

二人連れの少女達の腹は、旅支度の上からでもはっきりと眼を引くほどにまあるく膨らんでいる。

西海道は大陸と都を繋ぐ街道であると同時に、子宝の神である慈福大社への参拝路でもあるのだった。戦国乱世の世ならいざ知らず、今は天下泰平の世。初めて子を授かった身重の女達が連れ立って、良い子が無事産まれるよう願を掛けて旅をするのは昨今よく見られる情景であった。

「あ……あぁっ」

カスミに励まされ、それでも辛抱強く歩いていたシズクだが、ついに力尽きたように道端にしゃがみ込んでしまった。小さく腰を揺すり、涙を滲ませた眼ですがるようにカスミを見上げる。

「か、カスミ姉さま……駄目です、その、も、もう……お、……おなかが」

ぎゅっと小袖の脚の間を押さえ、くねくねと背中を振らせながら、シズクは限界を訴えた。

「しっかりなさい。おなかに赤子のいる娘がそうもせわしく落ち付きがないわけがないではありませんか」

「で、でも、カスミさま、も、もう私、辛抱できません……っ」

「なにを弱音を吐いているのです。まだ朱坂の宿までは十里もあるのですよ。ほら、立ちなさい。そんな格好では余計辛くなりますよ」

「だ、駄目です……も、もう、っ」

一度始まってしまうともうそれを堪える事はできない。とうとう手のひらでは飽き足らず、シズクはしゃがみ込んだ草鞋のかかとを使って股間をぐっと押し当ててしまう。

「シズク……ほら、立ちなさい」

「か、カスミ姉さま……駄目、辛抱できませんっ……も、漏らしてしまいますっ……」

「シズク、いい加減になさいッ」

「ひっ！？」

ついに絶えきれず、おのが尿意を口にしたりしたシズクをカスミは鋭く叱責した。

途端、カスミから先ほどまでの初々しい様子は影を潜め、油断の無い視線で用心深くあたりを窺う。

「……迂闊ですよ、シズク。誰に聞かれているとも解らぬと、あれほど注意していたでしょう」

「あ……う、……す、すみません……姉様」

カスミの叱責を受けて、泣き言こそ飲み込んだものの、シズクは立ち上がれる様子は無いようだった。

頼りない妹を見下ろして、カスミはすっかり癖になった吐息を繰り返す。

「やはり、貴方には早かったかもしれませんね、里を出るのは」

「そ、そんな、姉様……」

「辛い旅になると念を押したでしょう。遊びではないのだとも」

「は、はい……」

厳しく言われ、うなだれるシズクに、カスミは腰に下げられた水筒を差し出した。

「飲みなさい。飲んでしばらく休みます」

「え……」

しかし、汗で襟首を湿らせながらもシズクが見せたのは困惑の表情だった。

「で、でも、姉様……私、喉は、ぜんぜん……」

「駄目です。お飲みなさい。疲れている者が水を口にしないわけにはいかないでしょう」

「う、うっ……」

なおもぐずぐずと言い訳をしようとしたシズクだが、無言のまま水筒を手渡されて押し黙った。かすかに震える手のひらで栓を開け、口をつける。

「んっ……んうっ……」

「きちんと飲むですよ。辛いからといって止めてはいけません」

「んくっ……んうっ」

少女が小さく喉を動かすたびに、重そうに腹部が震えた。下品に立てた膝を片時も休まずに入れ替え、ぐいぐいとかかとを脚の間に押し付ける。シズクはもはや落ちつきなく左右に揺すられる腰を押さえこむことが出来ぬのだ。普段ならば即座に叱ってやるところだが、シズクの切羽詰った様子を見てカスミは思いとどまる。

「さあ、こちらに来なさい。そこに腰掛けて」

「は、はいっ……」

「ゆっくり息を落ちつけて。本当に辛いのは一時だけです。乗り越えてしまえばまたしばらく平気になります」

よろめくシズクを街道側の木の根元に座らせ、カスミは自分もその隣に腰を下ろして水筒の中身を口にした。ちゃぽん、と揺れる中身が余計なものまで連想させる。

顔にこそ出してはおらぬものの、カスミとて辛いのだ。切なげに身をよじるシズクの姿を見ているうちに、次第にカスミも余裕が無くなってきていた。

「大丈夫。大丈夫です。シズク」

「カスミ姉さま……っ」

シズクがさすがのようにぎゅっと手を握ってくる。小さな手のひらはじっとりと汗ばんで、少女の辛さを伝えていた。

頼りない妹がぎゅっと込めてくる力を己の支えにするかのごとく、カスミもそれをきつく握り返した。

戦国乱世が遠く過ぎ、幕府が治める泰平の世にあっても——否、大戸におわす大將軍のもと世が統治され、天津国の各地の州国が表向き武力を放棄したこんな世の中だからこそ、闇に生きる者達が必要とされた。

刀と馬と鉄砲の数が戦の優劣を分けた時代は過ぎ、今や諜報と暗殺が政敵を貶める時代である。州国はこぞって資質のある者を集め、忍びを育成する里を築いていた。

カスミとシズクは綾瀬の国、流水の里に住むくのいちである。彼女達は敵対を強める篠付の国の動向を探るべく派遣されていたのだった。すでにくのいちとして何度か任務の経験があるカスミとは違い、シズクはこれが初めての任務である。彼女はその過酷さに直面し、理想と現実の差に苦しんでいるところだった。

「ね、ねえさまッ……や、やめてえ……」

掠れた声で、シズクが拒絶を口にする。

二人は松の木陰になって街道から見えなくなった茂みの中にいた。いくら嫌がっても止めてくれない姉を振りほどこうと、シズクはぎ

ゆつとカスミの手を握り締める。

「カスミ姉さま……駄目、触らないでっ……い、今でもやっと辛抱出来ているんですっ……そ、そんな風にされたらッ……」

「駄目よ。ちゃんと揉みほぐしておくのです。下腹が張り詰めていてはとっさの時に動けないし、後でもっと辛くなります。それに、赤子を孕んだ母の胎というものは、そんなに固く押し返しはしないものですよ」

「あ、あつ、あッ……！！」

まるで、少女同志が睦みあっているような姿であった。絡みあった手足が小袖を掴み、熱く潤んだ瞳は切なげに細められ、柔らかな唇がきゅっと引き結ばれる。

シズクはすっかり上気した頬を小さく左右に振りながら、精一杯姉に訴える。

「ね、ねえ様っ……駄目え、で、出ちゃうっ……」

「辛抱なさい。このままでは山は越えられないでしょう？ 少し耐えていればじき楽になります」

そう言いながらもカスミは手を止めず、シズクはそれに併せてあ、あ、と声を上げ続けた。カスミはシズクを後ろから抱くようにして腕を回し、手のひらでシズクの大きく膨らんだ下腹部に手を伸ばし、大胆に揉みこんでいるのだ。

賢明な読者の方々はすでに気づきであっただろうが、カスミもシズクも赤子を孕んでなどいない。少女達の下腹を大きく膨らませているのは、二人が耐えに耐えて一昨日の寄るから堪え続けている小水である。

「ねえさま、あ……っ」

まるで甘く快楽を囁くような嬌声は、限界を超えた尿意に寄ってもたらされるもの。

広く、一人前となったくのいちは、長い任務の間およそ一升もの小水を堪えることができるという。まる一昼夜を縁の下や天井に潜む彼女達にとって、それくらいが出来ねばまるで忍びは務まらない。

そして、優秀なくのいちを多く育てる流水の里ではこの資質をさらに高め、磨きをかけてひとつの利点とした。それが、耐えに耐えた小水を用いて膀胱をふくらませ、まるで赤子を孕んだかのように変えてしまうこの秘術である。

二人は耐えに耐えた尿意で自身のまだ幼くすらある肢体を造り替えているのだ。

——これを流水の里に伝わる秘術、秘水の塞と呼ぶ。

カスミとシズクは里の中でも選りすぐられた素質を持った娘であり、さらに群を抜いて長く小水を辛抱出来るくのいちであった。忍びの腕はまだまだ半人前のシズクですら、同じ歳の娘の何倍もの小水を堪えることができる。シズクの二つ上のカスミなどは、生まれる寸前の臨月の赤子を腹に抱えているほどに腹を膨らませておくことも出来た。

身重の娘が旅に出ることが一般的な天津国において、これは非常に都合の良い変装であった。我が子を孕んだ母親を無碍に扱う非道者はさして多くも無い。無論腹に詰め物をしていれば服を脱がせられれば気付かれるが、秘水の堰ならば裸になったとて腹の膨らみはなくならぬのだ。

まして、赤子というものは娘の胎内に羊水という水の中に浮かんで収まっているモノだ。同じように小水で腹を膨らましておけば手練の忍びですら見分けるのは難しいものとなる。

あとは、辛抱している振りさえ隠せれば済むことであつた。

「カスミ姉さま、その、後生ですから、……厠に行かせてください……っ」

「何を言うのです、どこに厠などありますか」

「んうッ……で、では、ここで。ここなら陰になっていて見えませんっ。い、いたしてしまっても……いいですか？」

「シズク。宿を経つ前に言っておいたでしょう。一巡り前から一緒に篠付に向かっている四人組、あれは間違い無く雨竜の里の忍

びです。こんなところで術を解いたらたちどころに気付かれてしまうではないですか」

聞き分けの無い妹に言い聞かせながら、カスミは自分の腹にも手を寄せた。切なく疼く股間をなだめるように、ゆっくりと下腹をなでさすり、揉みしだく。

「な、なににも全部なんて言いませんからっ……。ほんの少し、湯飲みに半杯でもいいんですっ……。少しでも良いから出してしまわなければ、も、もう漏れてしまいます」

カスミは大きく溜息をついて、辛抱の足りない妹分の腰をびしゃりと叩いた。

ひゃん！？ と悲鳴を上げて飛び上がるシズクは、ぎゅっと前を押さえ、目を閉じ唇を噛んでしばしぶるぶると震えてから、はぁと詰めていた息を吐いてカスミを睨んだ。

「な、なにをなさるのです、カスミ姉さまっ……！！ も、もうちょっとで本当に、出てしまうところですっ……」

「その程度で漏らしてしまうなど、修行の足りぬ証拠です。ツキノ姉さまなどは一巡りも耐えたと言うのに、貴方ときたら……。それに、きちんと必要な分だけは今朝出させてあげたではないですか」

「で、でもっ……」

秘水の堰とは言え、本当に一滴も漏らさぬままでは腹は膨れるばかりで、不自然になって気づかれてしまう。そのためカスミ達は朝夕の2回だけ、ほんの少しばかり用を済ませて腹の大きさを調整していた。

もともと、いくら訓練をつんではいてもまだ幼いシズクのこと、一度排泄（だ）しかけた小水を途中で止めるのはなかなか辛い。

「いいから辛抱するのです。宿まで着けば術を解いてもいいでしょう」

「ね、ねえ様あ……」

いくら慰めても、シズクは聞きいれる様子は無いようだった。今すぐ漏れてしまいそうなのに、日暮れまでは辛抱しろと言われてい

るのだから仕方の無い事ではある。しかし忍びは忍びて有るを無きがごとく、無きを有るがごとくに変えるが必定。

おのが尿意すらも耐え忍ぶことが出来ずして、いかにしてまことの忍びとなれるのか。

「ひゃんっ！？」

カスミは溜息をつきながら、シズクの背中を軽く叩いた。

（初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 403-412 2007/07/12）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: シズク忍法帖・その弐

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 10:18:15

BODY:

「まったく……もう少し辛抱しなさいと言ったでしょう」

「ひゃんっ……す、すみません……カスミ姉さま……ゆ、許してくださいませ…」

湯気の立ちこめる風呂場に、少女達の声が響く。

綾瀬の里にある温泉街は、多くの旅人を泊める旅籠が多い。ここもまたそうした場所の一つ。

べそをかいて許しを請う妹分の姿は、愛くるしく、同情を誘うものでもあった。同性のカスミにすら立場を忘れさせ良からぬ感情をいだかせるその様は、まさしくシズクが持って生まれた天賦の才と呼んでも良いのかもしれない。

「カスミ姉さま…あ、お許しを……」

「ダメです」

誘惑を振り切るようにきっぱりと首を振り、カスミはシズクの白い肌をやわやわと揉みしだく。まだ膨らみきっていない蕾のような瑞々しい胸と、産毛がうっすらと覗くなだらかな秘所。慎ましやかな秘裂は、いまだ初々しく閉じ合わされ、乙女の純潔を示している。

そして、その上にふんわりと膨らんだ下腹部。

自分もまた、緩やかに膨らんだ下腹部を持て余すように洗い椅子に腰を下ろし、カスミはシズクの裸身を後ろ抱きにしていた。

あれからさらに時が経ち、カスミの腹はさらに幾分か膨らみを増したように見える。少女の華奢な体格もあって目立ちにくい、赤子で言うならば孕んでからもう六月は過ぎているようだろう。

自然に形作られた滑らかな少女の肌は、まるで本当の孕み女のように、それが人為的に造りだされたものだとは信じられないほどだった。カスミの修めた“秘術・秘水の堰”の賜物である。

それに比して、シズクの下腹部は幾分張りを失い、また奇妙な凹凸を作りだしていた。朝の時分には、カスミほどとは言わなくとも十分に着物の上からでもその膨らみが解るほどであったのに、今はこうして素裸になってやっとそれが判別できる程度である。

「まったく……あんなことで漏らしてしまう人がありますか」

「だ、だってカスミ姉さま……あ、あんな格好で、ずっと木の上にいたら……し、辛抱できません……っ」

カスミとシズクは山越えの際に、後を尾けてきた濁水の里の忍びを撒くためにわざと街道を外れ、獣道に分け入った。道に迷ったふりをして敵を深い森の中に誘い込んで道を見失わせ、その間にゆっくりと街道に戻って旅を続けたのだ。

上手くゆくかどうかは五分五分の賭けだったが、追手は具合よくカスミの術にはまり、すっかり森の奥に迷い込んだ。あの分では数日は出てくる事は叶わぬだろう。ここしばらく気に掛けていた監視を撒くことに成功し、カスミは肩の荷を下ろした気分だったが……その最中に、シズクはとうとう我慢をしきれず、腹を膨らませていた小水を漏らしてしまったのだ。

「ああっ……お願いします、姉さま……か、厠へ……さ、させてください……、も、もう我慢できませんっ……」

「何を馬鹿なことを言っているのです。こんなにおなかをへこませているというのに。シズク、これではいつ誰が私達の正体に気付いてもおかしくないですよ」

甘えたことを口にする妹分に厳しく言いながら、カスミはかたく強張ったシズクの下腹部をやわやわと揉みほぐす。カスミの細い指先が瑞々しい肌に食い込むたび、シズクは可愛らしい悲鳴を上げて身体をよじらせていた。

幸いにして、シズクも最後まで自制を失う事はせず、厳しい鍛錬を積んだくのいちの理性で放水を塞ぎ止め、全ての小水を漏らしてまうことはなかった。しかし一度に半分近くも溜め込んだ尿意を解放し、少女の腹はおおきくへこみ、また形も崩れてしまったのである。

なだらかな腹の中に一部、ぼこりと突き出した凹凸。これではとても赤子を孕んだ娘の姿ではない。しかも一度排泄の誘惑に身を委ねてしまったためか、シズクは激しい尿意に襲われ続けているのであった。

「ね、ねえさまあ……」

まるで蕩けたように甘い声をあげるシズク。まるで修行のなっていない妹分に内心呆れつつも、カスミはシズクの下腹部を丁寧に撫でさすり、暴れ回る尿意をなだめ、落ち着かせてゆく。

「で、出ちゃう……っ」

「そのようなだらしないうことを言わずに、息を整えなさい。おなかの中を意識して、熱く大きなものを抱えこむように感じるのです。……ほら……吸って、吐いて……吸って、吐いて……」

「は、はーっ、はーっ、ふうっ……ああっ、駄目、駄目えっ」

「もう、我がまを言わないの。楽になりたかったらきちんと言うことを聞きなさい！」

言いつけに従おうとしながらも、膀胱の入り口近くを刺激されそうになると、シズクはカスミの手をきつく握り締めて抵抗した。いくら漏らしてしまったとは言えども、そこいらの娘とは比べ物にならぬほどなみなみと小水を溜め込んでいるのだ。普通に考えれば触られるだけでも辛いだろう。

だが、一度我慢を失って排泄に転じた膀胱は膨張から収縮へと作用を変え、その中身を絞り出そうとし続ける。カスミはそれを揉み解し、緊張を解くことでシズクの感じている爆発的な尿意をやわらげ、また以前のように大量の小水を溜め、少女の下腹を孕み女のようにふっくらとやわらかに膨らませることができるようにしているのだ。

これもまた秘術・秘水の堰のひとつである。

「あ……あう……」

「そう、身体を楽に。息を深く……いいですよ、シズク」

やがて、荒く浅かったシズクの息が、ゆっくりと落ちついたものによってゆく。固く強張り、不自然に突き出していた下腹部はなだらかに収まり、自然な膨らみを取り戻していた。

もっとも、シズクが漏らしてしまった小水の分だけはどうしてもなく、少女の腹の膨らみは今朝の宿を経たときよりもかなり慎ましやかなものになっていた。

「どうです、楽になりましたか？」

「は、はい……だいぶ……」

ゆっくりと脱力した身体をもたれかかせてくるシズクをそと後ろ抱きにして、カスミはよく頑張りました、と頭を撫でた。

「で、でも……やっぱり、その……まだ、たいです……姉さま」

「シズク。無理を言わないの。そのように弱音ばかりで、里の恥ですよ？ 少しは情けないと思いなさい」

「う、うう……」

また俯く泣き虫の妹分にこっそりと溜息をつきながら、カスミはようやく落ち付いたシズクの下腹を確かめるようにそと撫でる。

「こんなにへこませてしまって……」

「ご、ごめんなさい、カスミ姉さま……」

森を引き上げる時、シズクが堪えきれずに漏らしてしまった分はおそらく5合近くにも及ぶだろう。あれだけ派手に小水を撒き散らし、よくも追手に気付かれなかったものだ。思い返してみれば随分と綱渡りだったことに気づき、カスミは自分の気も緩んでいた事を自制する。

「幸い、ここの温泉は飲んでも身体に良いと聞いています。出してしまった分、きちんと飲んでおきなさい」

「え……！？ そ、そんな……む、無理です」

「無理ではありません。……ほら、聞き分けの無い事は言わずに飲みなさい。手伝ってあげますから」

「あ、んっ、んんうっ……」

カスミは湯船の側を流れ落ちる泉を手にくくと、シズクの口元にもってゆく。

しかし、シズクひとくちふたくちを口に含むと、やはりそれ以上は無理というように首を振ってそれを拒絶した。

「やっぱり、の、飲めませんっ……せ、折角落ち付いたのに、またすぐにしなくなってしまうすっ……お許ください、姉さまっ」

「仕方ないですね……」

カスミは吐息と共に清水に口を付けた。冷たい流れをたつぱりと口に含むと、そのままぼうとこちらを見上げるシズクを抱き締め、そのふつくらとした小さな唇に舌を差し入れる。

「んむう！？」

「ん……ん、んっ……はっ」

暴れるシズクだが、カスミの舌戯はまたたくまにその抵抗を解きほぐしてしまう。緩んだ妹の口にそと清水を流しこみ、息をついてはもう一度水を口に含む。

「は……むっ……」

「んんっ……」

舌と唇でうながすように、カスミは丁寧に、丹念にシズクを慈しみながら、口移して清水を飲ませていくのだった。

「はあ……」

とろん、と力を失ったシズクが湯船の淵に腕を乗せ、頭を傾けて呆けている。

たっぷり一升近く、口移しで湧水を飲まされて、少女は熱とその冷たさに参っているらしい。この温泉の湧き水は身体の不要な成分を排出する役にも経つという。急場しのぎには違いないが、一晩もすればシズクの腹にはまたたっぷりと小水が仕込まれるだろう。あとは夜の内に寝小便などさせないように気を付けていればいい。

（……よし）

すっかり骨抜きになった妹分を尻目に、カスミはそっと膨らんだ腹の具合を確かめ、慎重に頷くとつい、と風呂場の隅に歩いていった。

湯船から溢れ出す豊富な湯が流れ落ちる、排水溝へと脚を広げてしゃがみ込む。

「んんツ……」

カスミの形の良い眉がひゅっとひそまり、小鼻が小さく膨らむ。

シズクよりは幾分育ちはしているものの、やはりカスミのそこもまだまだ成熟には程遠い幼さを残している。そのためまるで本当の赤子を孕んでいるかのごとく形良く膨らんだ下腹部は、どこか背徳的なものを感じさせた。

大きく開かれた太股の付け根、少女の形の良い恥丘が潤み、しとりと雫がこぼれおちる。今朝から禁じていた排泄が、ゆっくりと始まろうとしていた。

「んう…ふうっ」

秘水の堰は、単に小水を堪えて腹を膨らませるだけではない。本来子宮がつくる胎内の膨らみを、小水でおおきく膨らんだ膀胱で形良く再現し、それを美しく保つ術が欠かせない。

堪えすぎれば当然その形も醜く崩れ、またそうはならなくともわずか数日でみるみるうちに腹が大きくなってしまふ。赤子がそんなに急速に成長するわけではないため、こうして日に数度から数日に一度、適切な量の排泄を行なって腹の形と溜め込んだ小水の量を調整してやる必要があった。

「んうっ……」

びくり、とカスミの背筋がくねる。

耐えに耐えてきた排泄をわずかなりとも許すことで、まるで天上の愛撫を受けているかのような快感を感じているのだ。

くのいちの常として色香の術は身に付けているものの、まだ男に抱かれたことの無いカスミだが、この瞬間の心地よさだけは知っている。秘水の堰がもたらすこの快楽にひとたび夢中になると、男女の交わりなど掃いて捨てるようなものだ——先輩のくのいちに教えられていた。

（で、出そう……）

長い長い時間を耐えてきただけあって、カスミの秘所はかたく戒められ、すぐに口を開きはしない。だが少女の秘所が桜色の花

片を綻ばせて緩むうち、ぼたぼたと内腿を雫が伝って垂れ落ちる。

カスミの腹に溜めこまれた雫は、まるで甘露のごとく滴って、湯気に混じってかすかな甘い匂いを漂わせた。

その時である。

「ね、姉さまっ……」

「な、なんです？」

ふと振り向けば、シズクは声を絞り出すように熱く火照った視線を、カスミに向けていた。カスミも唐突のことに驚きながらも、折角緩みかけていた股間を鉄の意志で再び引き絞り、わずかに頬を赤らめて立ち上がる。

いかに同じ女、姉妹同然に育った身であっても、用を足すところをまじまじと見られるのは具合が悪い。

「どうしました、そんなにじっと見て……はしたないですよ」

恥ずかしさをごまかすためにそう叱責するも、シズクはもぞもぞと肩を動かし、湯船の中にちゃぶちゃぶと波を立てる。その仕草ははっきりと、湯船の中で股間を握り締め、とても耐えられないというように腰を使っていることを知らせていた。幼いくのいちはどこか情欲にも似た色香を漂わせ、物欲しそうな視線でカスミを見つめている。

「ね、ねえ様ばかり……お小水、できるなんて、ず、ずるいです……」

「何を言っているのです。自業自得でしょう。貴方はもうあれだけ漏らしているんですよ？」

「で、でも、わたしが我慢してるのに……っ」

どうやら、シズクはカスミがわずかなりとも用を済ませようとしているのを見て、また辛抱できなくなっらしい。

肉体だけでなく精神の限界まで絞り上げられる限界寸前の尿意に晒される状態では、些細なことが決壊の契機になりうる。自分ばかりが我慢を強いられ、そのすぐ前で同じく尿意を堪えている姉の排泄を見せつけられれば、連鎖的にシズクもまた小水を漏らしかねない。

無論、流水の里の忍びとしてそのような素人娘のような真似は許されない筈だが、シズクの様子を見れば、それはとても期待できそうに無かった。

「……わかりました。では今日は私も堪えたままにしましょう」

本当に参ったものだ、と思いつつも、さすがに妹の切ない瞳で見続けられていれば出かかった小水も引っ込んでしまう。諦め気味に口にした言葉はカスミの腰をわずかに震えさせ、その数倍シズクの股間の先端を熱く疼かせたのだった。

(初出：旧ブログ書き下ろし 2007/09/28)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 子供たちとバスの中のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/13/2007 10:24:40

BODY:

バスの中に元気な声がこだまする。綾瀬市雨音小学校、泉会の皆は今日も元気いっぱいだった。

「ねえおねえちゃん、おねえちゃんのぼんだよっ」

「ほらほら、はやくはやくーっ」

薄い空色に、緑の縁取り。揃いのエプロンを付けた母親達は大忙しで子供達の世話を焼いている。わがまま盛りで腕白な子供達はおおはしゃぎで、車内は賑やかな声で満たされている。

そんな中、母親達に混ざって同じエプロンを付け、子供に囲まれてお遊戯の続きを急かされている少女の姿があった。

「ねえーおねえちゃんっ、おねえちゃんってばー！！」

「うん、ちょっと待ってね……」

ぐいぐいと服の袖を引っ張ってお遊戯への参加を促す子供たちに囲まれて、泉会の『おねえちゃん』こと前原詩織は苦笑する。

詩織は13歳、将来の夢は保母さんという中学2年生。

泉会は綾瀬市の町内会のひとつで、小学校に通う子供を持つ母親達が『先生』役を務め、協力してさまざまな行事を行なっている。将来の夢のため、詩織はその泉会のお手伝いをしているのだった。もちろん中学生の詩織に正式な保母の資格などがあるわけではないので、あくまで手伝いという形であるが。

右も左も解らず最初は戸惑うことばかりだった『先生』としての生活も、二ヶ月という時間を経て次第に馴染んできていた。最近

では子供たちともすっかり打ち解け、詩織を『おねえちゃん』として慕っている。

「ねー、おねーちゃん、はやくはやくっ」

「はやくってばあ！！」

「ちょ、ちょっと待ってようっ……」

今日は近くの海浜公園までの楽しい遠足とあって、子供たちのはしゃぎようもひとしおである。いつも以上にお行儀の悪い子供たちを相手に、バスに同乗している泉会会長の新藤先生、付き添いの弓野先生、赤坂先生もてんてこ舞いだ。もちろん詩織だって例外ではない。朝から気の休まる暇もなくみんなの世話に追われている。

人気の『おねえちゃん』である詩織は子供達に引っ張られて後部座席の真ん中に座らされてしまい、お遊戯にしりとりで歌にと大人気。すっかり大忙しで詩織が目を回しそうになっていたとき、新藤先生の拍手がバスの中に響く。。

「はい、みんな、次はお歌を歌いましょう。できるかな？」

「「「はーいっ」」」

もと保母さんの貫禄か、新藤先生の声に、好き放題に遊んでいた子供達の声が唱和する。ほっと胸をなでおろす詩織に、新藤先生はやれやれと肩を竦めた。

「はい、じゃあ、さん……はい！」

たちまち始まるバスの中の大合唱。子供達が思い思いの調子外れに流行のテレビアニメの歌を合唱し始める。

これは、詩織の負担を軽くしようという新藤先生の取り計らいだった。新藤先生に小さくお辞儀をして感謝を伝え、詩織はちらりと窓の外に視線を向ける。

大合唱の子供達、30人を連れてひた走るバス。

そんなほほえましい光景の中、詩織だけがどこか硬い表情のまま、座席の上のおしりをもじつかせていた。

「っ……」

時折、きゅっと唇を噛み、身体を硬くする。

どちらかと言えば引っ込み思案の詩織でも、子供たちと遊ぶのは大好きだ。そんな普段とはちょっと違う『おねえちゃん』の様子に、近くの子供たちは首を傾げる。

「ねえ、おねえちゃんどーしたの？」

「きもちわるいの？」

「うっ、うんっ、なんでもないよっ……ほら、お歌お歌っ」

慌てて否定し、詩織は子供達を促して合唱の続きに参加した。

だが、その背中には冷たい汗が伝う。

青い縁取りのエプロンの下で、じっと閉じ合わされたスカートの脚が忙しく動いている。きゅっと閉じあわされては小刻みに震え、せわしく重ねられる左右の膝は落ちつく様子がない。

「……んー……おねえちゃん？」

「だいじょうぶっ……本当になんでもないから。さ、次のお歌だよ？」

取り繕った笑顔の下で、詩織の心はまったく別のことに囚われ続けていた。

股間を走るむず痒い感触。バスの振動に合わせ、下腹部をつんつんと刺激する甘い誘惑。

(トイレ……行きたいっ……)

時速 80 キロで高速道路を移動するバスという密室の中、詩織は、切羽詰った尿意に晒されていた。

——いいですか？ 今日から前原さんには私達のお手伝いをしてもらいますけれど、そのためにひとつだけ心に止めておいて欲しいことがあります。

このエプロンは、泉会の『先生』であることが解るように身につけているものです。子供たちから見れば、あなたも立派なおとなです。それに、なにも子供達に限ったことじゃなくて、他の人達から見ればあなただって泉会の『先生』と同じように見えるかもしれません。そんな時に好き勝手なことをしていればどうなるか、わかりますよね。

だから甘えたり文句を言ったりせずに、みんなのお手本になるような、良い『おねえちゃん』でいるようにしなければいけませんよ？

「っ……」

詩織はぎゅっとくちびるを噛みながら、『先生』としての生活の初日に新藤先生から言われたことを思いだしていた。

バスにはトイレなど付いておらず、詩織がオシッコを済ませられる場所などどこにもない。そうなれば詩織が取れる方法はただひとつ。じっと我慢するのみである。

青と緑の縁取りをされたエプロンは、他の『先生』と同じように、詩織が子供達のお手本とならなければいけないことを示している。他の『先生』だって大忙しなのに、詩織が自分一人の都合でワガママを言う事は許されない。

（ガマン、ガマンっ……）

しかし、気にしないようにと思えば思うほど、おなかの中のオシッコはどんどんとその存在感を増してゆく。

腰骨に響くツンとした刺激に、イケナイ誘惑が股間を走り抜ける。詩織は慌ててぎゅっと脚を閉じ合わせた。エプロンの下でぴたりと寄り添ったスカートの膝が細かく震え、汗の滲んだ下着には湿った感触が残っている。

下腹部が張って、軽く押さえるだけでも固く張り詰めているのがわかる。すでにかかなりの量のオシッコが溜まっているのは明らかだった。

不安定にざわめく下腹部を、合唱に夢中の子供達には気付かれないようそっとさすりながら、詩織は通り過ぎてゆく標識を探す。

（だいじょうぶ……あとちょっとだから……）

この先のサービスエリアで、バスは一度休憩を挟む予定なのだ。残りの距離は正確には解らなかったが、そこまでガマンをし続ければなんとかなる。

（あと 1 キロくらいだからっ、あと、ほんの 5 分だけなのっ……）

実際に何分かかるのか、詩織にはわからない。だからその『5 分』も本当の事かどうか定かではないのだ。だが、今の詩織にはもう 5 分以上おしっこを我慢し続けることはできそうになく思えた。だから口の中で小さく『あと 5 分、5 分だけ』と繰り返しながら挫けそうになる心を励まし、ダムの入り口を塞ぎ止める。

もうすぐオシッコできる。それだけを希望にして、詩織は今にも緩み出しそうな股間の代わりにバスの座席の手すりを握り締める。

その時だった。

「ねえ、本当にダメ？ 我慢できない？」

「——っ！？」

唐突に弓野先生に声をかけられ、詩織は飛び上がらんばかりに驚いた。

（うそ、き、気付かれちゃった……！？）

なんとしても隠しておかねばならないはずの尿意を言い当てられたことに真っ赤になって振り向く詩織。

しかし、弓野先生の言葉は詩織ではなく、詩織の一つ前の席に座る、小さな女の子——エリに向けられたものだった。

「もうすぐ休憩のサービスエリアに着くんだけど、ダメ？」

「……っ、……うん……だめ、でちゃうっ」

エリが幼い表情を曇らせて、小さく頷く。詩織は自分の尿意に手一杯で気付かなかったが、エリもまたずっと長い間バスの中で尿意と闘い続けていたのだった。

いつもならみんなと一緒に元気に遊んでいるはずのエリが、俯いてぎゅっと脚の間を押さえている。わずかに身じろぎしながらもじもじとおしりの位置を動かしている様子は、もう相当に切羽詰っているのがはっきりと解る。

「あー……仕方がないわね……ねえ、前原さん」

「え、あ、は、はいっ」

突然話を振られて、詩織は我に帰る。

「えっとね、悪いんだけど、新藤先生に話をしてもらって、運転手さんに一度バスを止めてもらえるように頼んできてくれる？ ちょっともうエリちゃん無理そうだし」

「む、無理そう、って……その、」

「解るでしょ？ もう仕方がないもの。そこでさせちゃうから」

視線で窓の外、道路の隅を示す弓野先生。

弓野先生の言わんとしていることを察し、詩織はぎゅっと唇を噛んだ。同時にきゅん、と詩織の下腹部でも甘い疼きが走る。

「え、えっと……」

「ほら、早くして、エリちゃん我慢できなくなっちゃうわ」

「は、はいっ」

急かされるままに席を立ち、詩織はおしっこで重たいおなかを抱えながら、バスの通路を運転席後ろの新藤先生の所まで歩いてゆく。高速道路の震動が靴の裏からダイレクトに震動を伝え、恥骨に危険な感覚が伝播してゆくが、今はそれどころではない。

「あ、あの、新藤先生」

「なにかしら？」

「それが……」

「……ええ！？ 本当？」

話を聞くなり新藤先生は額に皺を寄せて小さく呟いた。

「もうすぐサービスエリアなのに、我慢できないの？」

「えっと、その……む、無理みたいです」

「困ったわねえ……随分予定より遅れてるのよ？ 他の子だって行きたがるかもしれないし、あんまりワガママ放題にさせてもねえ……」

あたかも自分の尿意を見透かされているみたいなのやりとりに、詩織は頬が赤くなるのを押さえられない。当然ながらこの会話は運転手さんにも聞こえているのだ。まるでもう中学生で、『おねえちゃん』の自分が、オシッコが我慢できなくてバスを止めて欲しいと頼んでいるみたいな気分になる。

「で、でもエリちゃん、もうダメそうなんです……弓野先生もエリちゃんの所にいて、早くしたほうが、って」

詩織は込み上げてくる下腹部の疼きをぎゅっと押し隠し、繰り返した。少女のプライドが意地を張って、もう我慢ができないのは自分ではないのだと、無意識のうちにエリの名前を強調してしまう。

「……どうします？」

「そうね、仕方がないわ。止めてあげて？」

訊ねる運転手さんにそう答え、新藤先生も席を立てて後部座席の方に歩いていった。

バスが路肩に寄ってゆっくりと減速する。すぐに止まるのではなく、高速道路の左端、ちょうど崖を覆う石垣の側に近付いたのは、せめて他の車から見えなくなるようにという運転手さんなりの気遣いだろう。詩織はぎゅっと手摺りを握り締め、慣性の法則による衝撃に耐えた。

（あ……うっ）

おなかの中に閉じこめてある恥ずかしい液体がたぶんとぷんと揺れ、股間の疼きはおしりのほうにまで伝播してゆく。膝がくっついておぼつかない脚では、バランスを崩さないように立っているだけでも辛いことだった。

「ほら、あとちょっとよ。頑張ってるね」

「…あう……で、でちゃう……お、しっこお…っ」

「大丈夫よ、大丈夫だからねっ」

バスが停車するが早いか、ぐったりしたエリの手を引いて、新藤先生が大急ぎで通路を進み、詩織の前を横切ってゆく。

ドアから跳びだしてバスの陰に姿を消す二人の後ろ姿から、詩織は目が離せなかった。

（いいな、エリちゃん……トイレ、させてもらって）

みっともない羨望だと解っていても、そう思うことを止めることができなかった。いまここで自分も一緒にオシッコを済ませてしまいたいという考えが詩織の頭を占領してゆく。詩織の右手は知らないうちにエプロンのポケットを探り、その中に収められているポケットティッシュを握り締めていた。

本当なら、自分よりも小さなエリが、ずっと困っていたことに気付けなかったことを反省しなければいけない。詩織は自分の事ばかりに気を掛け、『おねえちゃん』であることをいつの間にか忘れてしまっていたのだ。

しかし、

（わ、わたしも……一緒に……っ）

「………ん」

イケナイ考えだとわかっているのに、その想像は止められない。ほんの数m先で、エリは詩織がしたくてたまらないことをさせてもらっているのだ。おなかの中を蹴飛ばすオシッコの刺激が詩織を誘惑し、あと何k mか先にあるはずのサービスエリアのちゃんとしたトイレが、とてつもなく遠いように思わせる。

羨むな、と言うほうが無理な相談だった。

（どうしよう……今のうちにバス降りちゃえば……今ならまだ、エリちゃんも時間かかると思うし……バスの前のほうなら、気付かないうちに……）

「……ちゃんっ」

もう中学生になる詩織は、小学校低学年の子供達に混じって道端でオシッコをするなんてとんでもない妄想に身を委ねようとしていた。

身に付けた『先生』のエプロンの下で、我知らず詩織の下半身がぎゅっとよじられる。

羞恥心と下腹部の欲求の駆け引きに葛藤し、バスの手摺りにくっつけた腰を浮かせかけては思いとどまることを繰り返していた。

「——おねえちゃん！！」

そんな詩織を、エプロンの端を強く引いて、誰かの叫び声が引き戻す。

「おねえちゃんっ……ねえっ……！」

「え、あ、な、なに……？」

「あ、あのね、あのっ」

詩織を呼びとめていたのは、エリと並んで座っていたカスミだった。普段は勝気な表情を、今はくしゃくしゃに赤らめて、涙すら滲ませている。

「あ、あたしも……あたしもっ」

「あ……」

「うう…おねえちゃあん……っ」

「か、カスミちゃんも……オシッコ？」

驚く詩織に、真っ赤になって小さく頷くカスミ。

しかしそんな反応がなくとも、ぎゅぎゅっと席の上で腰を擦りつける仕草を見れば、さっきまで同じ事をしていた詩織には一目瞭然だ。すでに限界ギリギリまで我慢しているらしきカスミには、エリ以上に余裕がなさそうだった。

「が、我慢できない？」

ムダとは思いつつも聞いてみる。カスミは弱々しく、小さく首を横に振るだけ。予想通りの答えに、詩織は慌ててカスミを抱き上げるようにしてバスを降りた。カスミのスカートにはすでに小さく染みが着いてしまっていて、詩織の下半身はその濡れた感触に同調して疼く。

（ううっ……）

かすかな『オモラシ』の匂いがもたらす誘惑を振りきって外に出た詩織に、新藤先生が何事かと顔を上げた。

「え、なに、どうしたの？」

「あ、あの、カスミちゃんも無理だって言っちゃって……それで……」

「ああもう、やっぱりね……前原さん、面倒見てあげて？」

どうやら、エリはほんの少し外に飛び出すのが間に合わず、ちょっとだけ失敗をしてしまったらしかった。後始末に手を離せない新藤先生に小さな不安を覚える詩織だが、しがみ付いてくるカスミを見、しっかりしなきゃ、と自分を叱咤する。

「おねえちゃんっ……」

「だ、大丈夫。あとちょっとだけだよ！」

縋り付くような弱々しい声に急かされながら、詩織はカスミを手伝った。

少し草の生えた剥き出しのアスファルトには、わずかに砂が積もっている。崖を保護する石垣の下、バスで区切られた高速道路の片隅で、カスミにオシッコをさせるのだ。

動けないらしきカスミに代わって、彼女の股間から小さな子供ばんづを脱がせるやいなや、カスミはたちまちしゃがみ込み、ものすごい勢いでオシッコをはじめた。

じょじょっ、じょぼおー——っ！！

ぶしゅるるるるっ、じゅぼぼぼぼぼぼーっ！！

(う、わぁ……っ)

剥き出しになった幼いつくり排泄孔から、滝のようにオシッコが吹き出して地面を叩く。ほかほかと湯気が立ち昇るほどの、熱く激しい排泄だった。

カスミはまだ小さい泉会生のはずなのに、限界まで我慢しつづけていたオシッコはその分だけ勢いも良く、バスと石垣の隙間の地面に激しく打ち付けられ、水音を響き渡らせる。ぴちぴちと跳ねる飛沫が、カスミの湿ったパンツに小さな泥の染みをつくる。

「あ、はぁぁぁ……」

そんな細かな様子まで観察してしまう詩織に対して、カスミにはそんなことを気にしている余裕はないようだった。尿意を解放を許されたカスミは甘い吐息をこぼし、腰を震わせる。

(か、カスミちゃん、すごい、オシッコ、いっぱい出してるっ……)

カスミの切なげな響きに刺激され、詩織の下腹部も激しくざわめいた。

こぼりと震える詩織の膀胱。カスミにオシッコをさせている『おねえちゃん』のおなかの中には、これよりも遥かに大量のオシッコが溜まっているのに違いなかった。

カスミのオシッコは道路の隅に積もった砂をえぐって水たまりをつくり、地面の一方に河になって流れだしていた。カスミのオシッコの行く先を思わず追いかけてしまった詩織は、その視線の先にエリが済ませたあとらしき水跡を発見する。

瞬間に二人分のオシッコは一つに合体し、大きな河になって流れだした。二人分のオシッコをたっぷりと吸いこんで黒く染まった地面が、外から区切られたスペースにオシッコの匂いを籠らせてゆく。

(や、やだぁっ……)

今やここは、オシッコをするための場所……トイレと同じ場所だった。詩織はたまらずぎゅっと目を閉じた。本当なら耳も塞いで、できることなら今すぐにでもここを逃げ出したいが、しゃがみ込んだままぎゅっと袖を握るカスミを振りほどくこともできなかった。

(……したい……わたしも、おしっこしたい……っ)

耳の奥で反響する放水音に、詩織の膀胱も共鳴するようにざわつきはじめる。文字通りの誘い水がじんと恥骨に響いて、詩織はきゅっと脚を交差させた。

詩織の膀胱はさっきよりも遥かに重みを増していた。ちょっと油断するだけで排泄孔がひくひくと痙攣を始めてしまいそうだ。

(……っ、ずるいよ、カスミちゃんと、エリちゃんだけ……あんなにいっぱい、オシッコさせてもらってっ……)

小さな下腹部を解放し、おなかの中を占領していたオシッコを外に追い出すカスミの姿が詩織の理性をぐらぐらと揺らす。またも筋違いの羨望が、詩織の心を侵食してゆく。

バスが止まることなくちゃんと予定どおり進んでいけば、詩織は本来ならもうとっくにサービスエリアにいて、トイレを済ませられていたかもしれないのだ。

（わ、わたしも、ここでっ……）

「……おねえちゃん？」

いつのまにか、カスミのオシッコが終わっていることにも気付かず、詩織はその小さな手のひらををぎゅっと握り締めていた。

手を塞がれて困惑するカスミは、しゃがんだまま後始末もすることができずに、詩織の様子を窺っている。

「ねえ、オシッコ、終わったよ……？」

「あ、ご、ごめんね。……全部、出た？」

「うん……」

ぶんぶんと頭を振って脳裏を占める悪辣な空想を振り払い、詩織は取り出したポケットティッシュでカスミの後始末をはじめめる。本当ならカスミ自身にやらせることだが、カスミは放水のショックでまだぼんやりとしており、詩織が代わりに世話を焼いてやらねばならなかった。

まだぼたぼたと雫をこぼし、時折びゅびゅつ、と水滴を跳ばすカスミのあそこは、何度か拭いてもまた汚れてしまう。ガマンし続けたせいで、オシッコがすっかり出きっていないのだろう。

「あつ……」

ティッシュごしにじわりと広がるカスミの熱い雫の感触に、詩織のおなかがむず痒く震える。自分とは違って、しただけオシッコを済ませ、おなかの中の苦しみを残らず吐き出してすっきりしたであろう小さな排泄孔が、とてつもなく羨ましい。

カスミのオシッコはエリのオシッコの跡をすっかり覆い尽くして、なおたつぷりと水たまりを残していた。隅に泡を立て渦を巻くオシッコの痕跡は、カスミがあんな小さな身体でどれだけ我慢し続けていたのかを窺わせる。

詩織は最後の仕上げ、カスミの足に絡まっていた、オシッコで湿ったぱんつを脱がせてゆく。バスの中の荷物には、こんな時のための換えのぱんつが積んである。

「ちょっと汚れちゃったね……中で着替えよう、カスミちゃん」

「……おねえちゃん、ひ、……秘密だからね」

ずうずうするお股を隠すようにスカートをぐいっと引っ張って、もじもじと俯きながら、カスミは存外に力強い口調で言う。

「秘密なんだからね。あ、あたし……オモシシなんか、してないんだから。こんなところでオシッコしたくなったりなんか、しないんだから。……そうでしょ？」

「……………」

「あたし、もうコドモじゃないもん。男子は知らないけど、おんなのこがこんな所でおしっこなんてしないもんっ……ちゃんと、おトイレまで我慢できたの、できたんだからあつ」

早熟なカスミらしい言い訳だった。

けれど、その言葉は今もなお、ここでオシッコをするというはしたくない欲望を捨てきれずにいる詩織には辛すぎる。

きゅう、と甘く疼く排泄器官が、詩織に排泄を訴える。

「……そう、だね」

乾いた喉に唾を流し込んで、詩織はカスミを不安にさせないようにしっかりと頷いた。みんなのお手本であることように、エプロンを着けた『先生』がするように。

泉会の『おねえちゃん』として。カスミの立派なお手本となれるように。
ぎゅっと、オシッコを我慢しながら。

ぷしゅう、と音を立て。

バスが駐車場に入り、停止する。

「はい、それじゃあちょっとだけ休憩します。おトイレに行きたいひとはいるかなー？」

新藤先生が駐車場に停まったバスの中で子供たちに呼びかけると、はいっ、という声と共に、数人の手が拳がった。

……オシッコを我慢しているんだから、自分も手を挙げなければいけないんだろうか？ 切羽詰った尿意に急かされてそんな馬鹿な事を考えてしまい、詩織は赤くなってぎゅっと脚を閉じる。股間の奥のむず痒さはさらに増し、詩織の我慢がかなりの逼迫した状況にあることを告げていた。

「じゃあその子たちは『先生』についてきてねー？ 他の子はきちんとお留守番できるかな？」

「「はいっ！！」」

元気の良い返事がいくつも重なる。新藤先生はよしよしと頷いて、バスの後ろの詩織たちに小さく頷き、子供たちを連れてバスを降りていった。

（と、トイレっ……急がなきゃっ……）

ざわざわと騒がしくなった車内を気にしながら、詩織もそそくさと席を立つ。

「あ、ちょっと、前原さん？」

「え、は、はいっ！？」

バスのタラップを降りようとしたところで、詩織は弓野先生に呼びとめられる。

待ち焦がれたサービスエリアに到着し、あとはトイレに駆け込んでゆだけ、という状況で、詩織はすっかり自制をなくしていた。気付けば詩織の両手は、エプロンの前をぎゅっと抑えてしまっている。

はっとして手を離れた詩織だが、もう遅かった。

そわそわと落ち着かない詩織の様子は、少し気を使ってみればすぐに目に付く。案の定、脚をくねくねと動かし続ける詩織に気付いた弓野先生はすぐに詩織の状況を察したらしかった。

「ああ、……ひょっとしてお手洗いの？」

「っ……」

これまで、なんとか尿意を悟られまいとしていた詩織にとって、それはとても明け透けな質問だった。はっきりと我慢しているのを知られたことに詩織は耳まで赤くなってしまう。

それでも、意地を張る余裕は残されていなかった。

かうろじてコクン、と頷く詩織に、弓野先生は小さくため息をつく。返事の代わりにぎゅっとエプロンを握る詩織に、弓野先生は小さく苦笑した。

「そう、じゃあさっきも辛かったのね。ごめんなさい、気付いてあげられなくて」

「は、はいっ」

さっき、というのはエリ達を下ろし、オシッコをさせていた時の事だ。反射的に答えてしまってから、詩織はこみ上げてくる尿意の波にぎゅうっと身体を縮こまらせた。弓野先生も忙しいのに、迷惑をかけてしまうという申し訳なさで押しつぶされてしまいそうになる。

「……こっちはいいから、早く行ってきてね。大丈夫？ 立てるかしら？」

「は、はい……」

優しい声に励まされ、震える足に活を入れて、どうにか腰を上げる詩織。それだけでつうん、と下腹に鈍い疼きが走り、少女の背筋をざわめかせる。

サービスエリアでの休憩時間は、本来なら詩織も『先生』たちの手伝いをしなければならないのだが、弓野先生は詩織の都合を優先してくれたのだった。嬉しさと申し訳なさで一杯になった詩織を、弓野先生は優しく送りだしてくれる。

「ほら、早く済ませてらっしゃい」

「は、はいっ……」

詩織は手摺りを掴まえよたよたとバスのタラップを降りてゆく。ほんの数段の段差だが、今の詩織には油断できない難所だ。本当は走り出したいくらいだったが、ちょっとでも気を抜くとぎゅっと締め付け続けている括約筋が緩んでしまいそうになる。

下着を汚さないように、一段ずつ慎重にタラップを降りきった詩織は、できるだけ早足でサービスエリアのトイレを目指す。

(やっとな、やっとな……オシッコできるっ……)

おなかの中をたぐたぐにしているおしっこを解放できる瞬間を思い描き、詩織ははあっ、と切ない吐息をこぼした。

……だが。

詩織は休日の高速道路のサービスエリアという立地をまだまだ理解していなかった。

我慢を重ね、ようやく辿り着いた婦人用トイレの前で詩織を待ち受けていたのは、その入り口から伸びた長蛇の列だったのだ。

「う、嘘……っ」

知らず、詩織の膝がきゅっとくっつき合う。二十人、三十人では足りないだろう。売店の前を通り過ぎ、さらに照明の下を折れ曲がるようにしてずらりと並ぶ女性たちの列は、隣の紳士用トイレに比べても桁外れに長い。

トイレの中に続いている列は、まるでそこが人気の映画のチケット売り場であるかのような錯覚すら抱かせる。それはある意味正しかった。行楽のシーズンに大勢の人が集まる高速道路のサービスエリアで、一番の人気スポットはトイレなのである。

(そんなあっ……ま、まだ、我慢しなきゃだめなのっ……？)

ここまでくればもうあとはオシッコをするだけ——そう思いこんでいた詩織には、目の前の現実とはとても受け容れがたいものだった。

ふらふらと街灯に寄り掛かる詩織の前で、到着した車から次々と女の人たちが列に並んでゆく。驚くべきことに、トイレからすっきりした顔をして出ていく人たちよりも、新しく列に並ぶ人の数の方が多いかのようだった。

ゆっくりと伸びてゆく順番待ちの列が、遠いゴールをさらに遠くしてゆく。

「は…はやく、並ばなきゃ……っ」

ここで眺めていても、いつまで経ってもオシッコはできない。

詩織は、慌てて列の最後尾につく。詩織がもたもたしている間に、列ははじめに見たときよりも10人ほど長くなってしまっていた。急いで並んでいれば詩織はあと10人分、早くトイレに辿り着けていたはずだ。そう思うと尿意はさらに激しくなってくる。

(ふう……っ……あと、もうちょっと、だけ……がまんっ……)

九回裏、まさかの油断で我慢の延長戦に入った順番待ちの中、詩織のおしりはもももとせわしく揺すられていた。さりげなく伸ばされた手のひらがエプロンの前を押さえ、空色の生地に皺を寄せる。見る人が見ればはっきりとオシッコを我慢しているのが解るだろう。

もともと、こうしてトイレに並んでいる時点でそんなことは明白なのだが。
「……うう……っ」

腕時計を確認すると、休憩時間は残り15分。

じりじりと進む秒針に比べて、トイレの列は遅々として進まなかった。訳を説明して入れてもらおうかと思ったが、詩織の前に並ぶおばさんたちはイライラと足を踏み鳴らしていて、とても気軽に声を掛けられる雰囲気ではない。

（はやく……はやく……っ）

詩織とは対比的に、すっきりした顔の少女たちが、楽しそうにおしゃべりしながら詩織の隣を通り過ぎてゆく。自分がああなるにはあとどれくらい我慢すればいいのだろう。女の子のマークの薄いピンク色をした入り口に列を押しつけて駆け込みたくなるのを堪えながら、詩織はきゅっと唇を噛んだ。

時計の長針が、呆れるほどゆっくりと文字盤の上を動いてゆく。

10分ほどかけて、詩織の前の列はやっとなくなりかけていた。すでに詩織の姿はトイレの入り口をくぐり、建物の中にある。ピンク色のタイルが張られたトイレには、十個以上の個室があり、フォークのように列の先頭の女性たちを順番に迎え入れていた。イライラの頂点に達する直前で個室に迎え入れられ、詩織の前のおばさん集団も次々とトイレに入ってゆく。

目の前の、自分ではない女の人がオシッコを済ませ、すっきりとした顔をして出てゆく姿を飽きるほど繰り返し見せつけられながら、詩織の膀胱はオシッコの瞬間を“おあずけ”され、さらに高まった尿意に辛うじて耐えている。

（もうすぐ、もうすぐ出せる、オシッコ出せるっ……）

焦らされるかのような我慢の連続に、詩織の括約筋も既に限界に近い。両手の応援だけでは足りず、ぎゅっと交差させた脚が何度も組み変えられる。

だがそれももう終わりだ。あと何人かが出てくるまで我慢すれば、ようやくトイレに入れる。朝からずっと苦しめられていたこの尿意を解放できるのだ。

その瞬間を思い描き、詩織は切なげに腰を揺する。

そして、とうとう詩織の前の女性が開いた個室に歩きだした、その時だった。

「ああ、ごめんなさい、すいませんねえ……」

トイレの入り口の辺りでちょっとした騒ぎが起こる。その中心にあるのは、聞き覚えのある声だった。

「すみません……本当にすみませんねえ……」

数名の子供たちを連れて入ってきたのは、泉会の赤坂先生だった。少し白髪の混じった笑顔をさらに緩めて、赤坂先生は詩織を見つけ、ああ、と安堵の吐息をこぼす。

その笑顔は、申し訳ないけれど詩織にはとてつもなく不吉なものに見えてしまった。そして、その予感は的中してしまう。

「ああ、前原さん、ちょうど良かったわあ——ちょっと手伝ってくれるかしら？」

「え……」

「バスに残ってた子達なんだけど、さっき急にお手洗いにいきたくって言いだしてねえ……」

「っ、せんせいっ、オシッコおっ」

それは、今、詩織がなによりも、一番したいことだ。

手を上げて口々に尿意を知らせ、脚をモジつかせる女の子たち。そんなみんなをなだめるように、赤坂先生は声を和らげる。

「ああ、はいはい……いまお手洗いはいれますからね。……前原さん、申し訳ないけど手伝って？ 表で男の子たちが待ってるのよ。お願いして、紳士用のほうに入れてもらって頂戴な」

「え……ええええっ！？」

思わず頓狂な声を上げてしまった詩織に、周囲の視線が集中する。

——紳士用のトイレに。男の子と一緒に。

想像だにしていなかったお願いだった。注目を浴びたせいで詩織の交感神経が活性化し、下腹部にも熱い雫の疼きが激しくなる。羞恥と共に増す尿意を堪えながら、詩織はたまらず赤坂先生に駆け寄った。

「あ、あの、……待って、くださいっ……」

「せんせい、オシッコでちゃうっ……！！」

「ああ、ごめんなさいねえ、すぐに入れてもらうからねえ」

「待って、赤坂先生っ……違うんです、わたしっ……」

「せんせい、オモロシやだあっ、おトイレ、おトイレっ！！」

「ねえ、はやくっ……！！」

必死に説明しようとする詩織だが、口々に尿意を叫ぶ女の子たちの声で遮られ、赤坂先生の耳までは届かない。

「せ、先生っ」

（わ、わたしも、オシッコ、なんですっ！！）

懇願の後半は、言葉にならなかった。

無論、泉会で『先生』をしていれば男の子に付き添って紳士用トイレに入る事だってある。

しかし、自分から“トイレ”の一言が口に出せない詩織が、男の子のトイレになんて入れるわけがない。人一倍羞恥心の強い思春期の中学生の感情を無視した、あまりにも酷な頼みだった。

赤坂先生はもう随分な年のせいか、詩織のような女の子でもまだほんの子供でしかないと考えている節があった。赤坂先生にしてみれば詩織なんて子供たちとそう変わらない扱いなのである。

「あ、赤坂先生っ…あのっ……！！」

「それじゃあお願いね、前原さん」

詩織の抗議はオシッコを訴える子供たちによって阻まれてしまい、赤坂先生はもう我慢の限界らしき子供たちを連れ、詩織の前のおばさんたちに頭を下げて説明をはじめていた。

(わ、私もオシッコ……一緒に、連れてって欲しいのにつ……)

突然の順番割り込みの申し出に不機嫌さを隠そうともしないおばさんたちだが、流石にいまにもお漏らしをしまいそうな様子でおしっこ我慢のダンスをしている子供たちを無視するわけにもいかないらしく、渋々と順番を譲る。

「……すみませんねえ……」

「わかったわよ。早くしてよね……まったく。」

今度からちゃんと並ばせなさいよね、もう」

文句を言いながらも不承不承で割り込みを了承し、おばさんたちは列を詰める。

そして——いつの間にかそこには隙間なくぴっちりと並んだ順番待ちの列が出来上がっていた。

詩織がもう一度列に戻るスペースは、残されていない。

(え、っ……！？)

ぞくり、と詩織の背筋を冷たいものが走る。

まだ、おなかの中のオシッコはわずかも出すことができていないのに。突然のハプニングによって、詩織は十分以上を我慢して並び続けた順番待ちの列から強制的に外されてしまっていた。

「あ……そ、そんな、あ……」

(ああっ！？)

途端、込み上げてきた尿意に詩織は“ぐいっ”と腰をよじる。入っていたはずのトイレが目の前から猛スピードで遠のいてゆく。

そうこうしている間にも個室の一つから水音が聞こえ、用を済ませた女の人がドアを開けた。列の先頭に並ぶおばさんが早足でそこに入ろうとする。

しかし、そこは本来詩織のいた場所だ。

「ま、待ってえ……っ！！」

詩織は慌てて列に駆け寄ろうとしたが、しかし帰ってきたのはより一層不機嫌になったおばさんたちの視線だった。こくっ、と口の中にたまった生唾を飲み込んで、詩織は辛うじて先頭のおばさんに声を掛ける。

「あ、あのっ……」

「何よ、あんた」

すさまじいまでの不機嫌な声に、詩織は声を掠れさせてしまう。

「え、ええとっ、わ、わたしの……番、次で」

「なあにあんた、横入りする気！？」

「え、ち、違いますっ、……わたし、さっきまでそこに——」

おばさんの足元を指差して言おうとした詩織だったが、そこに思わぬほうから声が飛ぶ。

「ちょっと、やめなさいよね。順番よ？　ちゃんと並んでよ」

「そうよ。みんな我慢してるんだから！！」

「え、あ、あの……」

次々に上がる抗議の声は、列に並ぶおばさんたちからのものだった。長い間を待たされ、さらに赤坂先生の連れた子供たちに順番を越されたせいでおばさんたちの不満は頂点に達してしまっただけ。

「ああ嫌だ。ずうずうしいわね。黙ってれば分からないって思ったんじゃない？　……これだから最近の若い子は」

「そうよ、いい加減なこと言わないで頂戴。あたしたちはちゃんと並んでんだから」

おばさんたちはもう一人たりとて順番を抜かされることに我慢がならないらしくった。全くの理不尽な言いがかりだが、圧倒的な迫力に押されて詩織はそれに言い返すことができない。

「そんな……あうっ……！！」

おなかの中でおしっこが暴れだし、詩織を襲う尿意は次第に切羽詰ってくる。俯いて前を押さえた詩織を突き飛ばすように、先頭のおばさんは個室に入ってしまった。

「あ、あぁっ……」

切なげに身をよじる詩織に、さらにおばさんたちの攻撃は続く。

「ねえ、邪魔よ。使わないんならどいて」

「並ぶんならちゃんと一番最後にしなさいよね」

「そ、そんな……わたし、も……もうっ、ガマンできな……」

おしりをもじつかせながら、詩織はそれでも食い下がろうとした。何しろ目の前に、すぐ目の前にトイレがあるのだ。おしっこをしてもいい場所があるのだ。詩織の股間はすでに限界を訴え始めていて、これ以上焦らされてしまえば本当に危険な事態を迎えてしまうと告げている。

だが、そんな最後の勇気も、おばさんたちの言葉によって無碍に碎かれてしまう。

「何言ってるのよ、さっきあんた用事言われてたじゃない、お外に他の子が待ってるんでしょ！？」

「そうよ。早く行ってあげなきゃダメじゃないの。可哀想じゃない。あなたも『先生』なんでしょ？」

（あ……やだ……そんなのっ……したいのに、オシッコしたいのにっ……、い、いじわるしないでよぉっ！！）

「お、『おねえちゃん』だって……おトイレ、行くのにっ……」

売り言葉に買い言葉——と言うには、ささやかな反抗ではあったが。ほとんど反射的に、文句を口に出しかけてしまった瞬間。

詩織の脳裏を、新藤先生の言葉がよぎる。

——他の人達から見ればあなただって泉会の『先生』と同じように見えるかもしれない。そんな時に好き勝手なことをしていればどうなるか、わかりますよね。

こんなにも切羽詰っているのに、オシッコがしたくてたまらないのに。

『先生』、という言葉と。

きゅっと締められた青と緑の縁取りのエプロンが、詩織のワガママを許さない。みんなのお手本になり、困ったことがあればそれを助ける『おねえちゃん』であるために。

「す……すいません、でした……」

詩織は俯いてそれだけを口にすると、重い足を引きずってトイレの出口に向かう。望んでいるのとは逆の、オシッコを済ませる場所から遠ざかる向きに。

猛烈に引かれる後ろ髪を振りきって、膝をくっつけ合わせながら危なっかしく歩いて外に出た詩織を迎えたのは、同じくモジモジと

足を寄せ合う子供たちだった。

「あーっ、おねえちゃん来た、きたよっ」

「おねえちゃん、ボク早くオシッコっ」

「オレもーっ。もう出ちゃうよーっ！！」

三人の男の子がばたばたと詩織に走りよって、ぎゅっと服の袖を握る。

（あ、あ、やだ……っ、だめ……）

両手が塞がり前を押さえることもできなくなり、下腹部がきゅんと悲鳴を上げた。詩織は震える顎をきゅっと噛み締めて我慢する。

「おねえちゃん？ トイレ、いこ？」

「え、あ、ああ、うん……」

（……ど、どうしよう……っ）

詩織は子供たちに引きずられるようにして、ずりずりと紳士用トイレの入り口に向かっていった。こちらは婦人用の混雑具合とは対照的に、数名の列が入り口の奥にあるだけの状態だ。空いているとは言えないが、入り口から何十人も順番待ちが続くの比べれば天と地の差である。

もう一つのトイレ——けれど、そこは男の子専用の場所だ。詩織がオシッコをしていい場所ではない。

壁に並んだ小用便器は、おんなのこがオシッコをするようには作られていないのだ。

（と、トイレ、トイレしたい、オシッコっ……）

詩織の頭の中身の八割は、込み上げてくるオシッコによる『お漏らし』の危険信号と、どうやってオシッコを我慢するかで占められていた。

そんな中、手を引く男の子達の声に詩織は引きずられ、紳士用トイレの中に踏み入れる。少ないとは言っても紳士用トイレの中には順番を待つ列があった。子供たちはもうすっかり限界で、きちんと並ばせるのは難しそうだ。

詩織の頭の中は羞恥に沸騰し、少女の頬は赤く染まる。

（む、無理……だよっ……お、男の人に……順番譲ってくださいなんて、言えないようっ……）

大きな波こそ収まっているが、詩織の下腹部は今もなお強い尿意に支配されている。足を動かないようにするのだけでも一苦労だ。もしここに自分ひとりだけなら下着をぐいぐい引っ張って前を押さえていなければ我慢できないかもしれないレベルだった。

そんな状態で、詩織は気づ知らずの男性にトイレの順番待ちを変わってもらわなければならない。脚をもじもじさせながら、そんな事を申し出ればどうなるか。

（わ、わたしが……男の人のおトイレでオシッコするんだって……思われちゃうっ……）

まず間違いなく、その誤解は避けられそうになかった。

——けれど。

「おねえちゃんっ……ね、ねえ、ボク、もうガマンできないっ……」

「あ、ああ……ごめん、ね……っ」

小さな手を不安げに引っ張る子供たちに、詩織は赤くなった頬を押さえ、荒くなった息を無理矢理飲み込もうとする。

（っ、大丈夫……ちゃんと落ち着いて、はっきり言えば……わたし、『おねえちゃん』なんだから……っ）

無邪気に信頼を寄せてくる子供たちを失望させまいという『おねえちゃん』を演じるための、健気な決意と共に。

「す、すみませんっ……」

詩織は、ぎゅっと目を閉じて列の一番後ろの男性に声を掛けた。

「はーい、全員いるわね？」

「はーいっ」

新藤先生の点呼に、子供達がいっせいに手を上げる。それをもう一度確認して、『先生』たちは運転手さんの隣の席に腰掛けた。

「問題なしです。じゃあ出発してください」

「あ、あのっ……」

詩織は辛うじて声を上げようとするが、ためらいに彩られたか細い声ではあっさりと出発のクラクションにかき消されてしまった。

(う……あう……)

動き出した走る密室の中、詩織は入り口近くの通路に立ったままの内股の脚でぎゅっと椅子の背もたれを握り、せわしく爪先を動かし続けていた。突き出された小さなおしりは手摺りの向こうで左右に揺すられ、落ちつくことはない。その頻度はサービスエリアに着く前よりもはるかに高くなっていた。

ぐらりと揺れて走り出すバスは、再び泉会の人々と『先生』達を乗せ、高速道路に向かってゆく。トイレ休憩を済ませ、子供たちの顔は皆晴れやかだ。ちょっとした失敗に一度は落ちこんでいたエリもカスミも着替えを済ませ、すっかり元気を取り戻して他のみんなと一緒に騒いでいる。

そんな中、詩織だけが少しも楽になれないまま、尿意との果て無き孤独な戦いを強いられていた。

「ふう……はあっ……」

エプロンの上からぎゅっと股間を握る手のひらに、ぐっと力が籠る。

決死の思いで跳びこんだ紳士用トイレで、しどろもどろになりつつも訳を説明して10分。子供たちが全員おしっこを済ませた頃にはとくに休憩時間も終わっており、詩織が改めて順番待ちをする余裕などまったく残っていなかったのだ。

たとえどんなことをしてもオシッコをしておかなければならなかった詩織だが、そんなことしていたらバスの出発は大きく遅れてしまうだろうことは明らかだった。すでにバスは30分近く遅れており、これ以上の遅刻は先生にもみんなにも迷惑をかけてしまう。

せっかくの遠足を台無しにしないため、この期に及んで、詩織は泉会の『おねえちゃん』として、自分の尿意よりもみんなのお手本であることを優先させなければならなかった。

「……どうしたの？」

動き出したバスの中、ちらちらと外を見、いつまでも自分の席に戻ろうとしない詩織のところに新藤先生がやってくる。

「あ、あの、そのっ……」

高まる尿意を隠すべきか、素直に口にするべきか。羞恥と理性の綱引きに思わず口籠もってしまう詩織。

「具合でも悪いの？ トイレ、済ましてきたんでしょう？」

「あ、え……つと」

そうではない。全然、まったく、これっぽっちもすっきりできていない。むしろ事態は悪化さえしている。なにしろ詩織は、膀胱をパンパンに膨らませているオシッコを、たったの一滴も外に出せてはいないのだ。

歩くのだって辛いくらいに、詩織のおなかが張り詰めている。

無理を言っても今からでもバスを止めてもらうべきだろうか。詩織は席にも付かずにそんなことを考え続けていた。しかしバスはすでに高速道路に登る迂回路の中だ。いまさらUターンさせるわけにはいかない。少女の頭の中を、ぐるぐると考えが堂々巡りしている。

（ううっ…お、おしっこ…したい、したいようっ……公園まで、我慢…もたないかもっ……どうしようっ、どうしようっ……オシッコして、でも早く公園行かなきゃっ、と、トイレ、公園で、オシッコっ……と、トイレに行って、公園でっ、オシッコしてっ……）

最終目的地を前に、楽しそうにはしゃぐ子供達と、危険水域を突破し、いつ決壊してもおかしくない状況の下腹部のダム。両者の背反に挟まれて、詩織の思考はパニックに陥っていた。

「ねえ、前原さんあなた」

「っ……」

新藤先生の口調が急にきつくなった。

詩織が無意識のうちに握り締めていたせいで、エプロンのおなかの前の部分には、はっきりとわかるほどに皺が寄っている。もう言い訳は効かなかった。

新藤先生は渋面になり、真っ赤になって俯いた詩織をじろじろと見る。

「どっち？ 大きいほう？」

「い、いえっ」

はっきりと、尿意を咎める言葉に、さらに赤くなって小さく首を振る詩織。だがその答えがなくとも、ぎゅっと前を押さえる姿勢からもオシッコを我慢しているのは明らかだ。

「なあに、さっき行かなかったの？ ……ダメよ、弓野先生に先に下ろしてもらったのに、ちゃんと済ませなきゃ…」

「あ、う……す…いませんっ……」

「きちんと休憩時間があつたでしょう？ どうしてきちんとお手洗いにいかないの？ 自分の体調の管理ができない人が、子供をお預かりするなんてできないわよ？」

「う……くうっ、そ、そのっ……行っただですっ、ちゃんと、行きましたっ……っ、……で、でも、おトイレ混んでて、すぐにできなくてっ……、」

「言い訳しようとしないの。ちゃんとしなかったのはあなたの責任なのよ？ もう子供じゃないんだから、笑われちゃうわよ、みんなに」

説明しようとしたところをぴしゃりと遮られる。これまでの何度か、詩織が失敗をしてしまった時と同じ、厳しく容赦のない新藤先生の姿だった。

新藤先生は諦めたようにため息をついて、詩織を見る。

「前原さん、お手洗いに近いのねえ……もっと訓練しなきゃダメよ。子供達につきあつてると、お手洗いのひまなんてなくなっちゃうこともあるんだから。」

厳しいことを言うようだけど、前原さん、もう少し自覚を持ってちょうだいね。もう中学生なんでしょう？ ちゃんとガマンしなさいね。あなたも“おねえちゃん”なんだから、みんなのお手本にならなきゃダメなのよ？」

今まさに、詩織はそのオシッコ我慢のトレーニング最上級コースの真っ最中だ。

新藤先生は完全にお説教モードで、詩織の言葉になど耳を貸してはくれなかった。まるで自分はオシッコなんてしないかのような口ぶりで、必死に我慢を続けている詩織のことを責めたててくる。

「ち……」

違います。違うんです。違うんです。

否定の言葉は、詩織の喉で潰れて形になりはしない。さらに腰をよじらせる詩織を見て、新藤先生はまた溜息をついた。

「どうなの？ 我慢できそう？ あと1時間くらいあるわよ？」

「っ……そ、のっ……うっ……」

「無理なの？ 無理そう？ 本当に？ ……ああもう、どうしようね……またバスを止めてもらうわけにはいかないし……仕方ないわ。どうしようもなくなったら、アレにしちやいなさいね」

新藤先生が指差した先は、隣の座席シートの下に設けられた収納スペース。そこには、二つ重なって雑巾を挟んだ、青いプラスチックのバケツがあった。

「っ……………！？」

バケツに——オシッコ。

無慈悲な一言に、詩織の羞恥心が激しく煽られる。

走るバスの中、子供たちの注目を一身に浴びながら、床に置いたバケツの中にトイレを済ます自分の姿を、嫌でも想像してしまう。

（い、やあああうっ……！！ やだっ、そんなのやだっ、ちゃ、ちゃんと、トイレで、おトイレでオシッコするのっ、おトイレでしたいっ……！！）

ちゃんとした排泄場所どころか、周囲の視線を遮ることもしてもらえず、本来の用途とはまるで違う、プラスチックのバケツの中に注がれる激しい水流と、響き渡る音、そして匂い。

本来なら個室の中でこっそり行なわれるべき秘密の行為を、衆目の中で強制されることは、たとえ想像の中と言えども中学生の少女には耐え難い屈辱と言ってよかった。

「だ、だいじょうぶです……がまんできますっ……バケツなんか、嫌ですっ……」

嫌悪感に弾かれるように、詩織はそう答えてしまっていた。

「そう……しっかりしてね。でも本当に無理なら我慢しないで言って頂戴。いい？ もし詩織ちゃんがオモラシしちゃっても、換えパンツは子供たちの分しかないんだから」

「は……はいっ」

掠れた声で詩織は頷く。頷くしかない。

ついさっきまで半ば本気で、バスを止めてもらおうかどうか悩んでいたところなのに。もう、今すぐこの場でさえもトイレがしたいのに。詩織にはオシッコをする事は許されなかった。

ふらふらと自分の席に戻ってゆく詩織は、新藤先生が弓野先生を呼びとめて、二言、三言を告げてゆくの聞いた。

「もし——だったら、前の——バケツ——」

何を言われているのかは、聞き取れなくても理解できた。

「くう……ふうっ……っ、はーっ、はあーっ……」

（いや、いやっ、オシッコなんか出ない……オシッコなんか出ない、オシッコなんかしたくないっ……おねえちゃんなんだからっ、ガマン、がまんっ……！！）

身体を投げ出すように——けれど慎重に、後部座席に腰を下ろし、ぎゅっとエプロンの前を握り締める。

おなかをさすりながら、もう余裕のない下腹部の余分な力を抜き、さらに多くの水分を溜めこめるように大きく深呼吸。自己暗示をかけるように詩織は頭の中で繰り返す。

「……？ お姉ちゃん？」

「っ、え……エリ、ちゃんっ」

ただならぬ様子の『先生』たちと、がさごそと落ちつかない詩織が気になったのか、詩織の前の席のエリがきょとんと詩織を見上げる。

「どうしたの？ おねえちゃん？」

続いて、隣の席のカスミも。

二人の視線に晒されながら、詩織はそれでも、脚の付け根を押さえる手を離せない。もじもじとだらしなくおしりを振り続ける詩織に、エリはまん丸の目をぱちくりとさせた。

「……オシッコ？ おねえちゃんオシッコしたいの？」

「っ……」

「おねえちゃん、おトイレ行ってないの？ きゅうけいの時にちゃんとオシッコしなかったの？」

エリたちは、小さいなりに詩織の身を案じてくれていた。しかし、子供ゆえの配慮のない言葉は、天井知らずに高まる尿意に精一杯の詩織の羞恥心を煽るばかりだった。

「だめだよ、おねえちゃん。ちゃんと先生におトイレ行きたいですって言わなきゃ」

「そうよ、おねえちゃんなのにだらしないわよっ」

「あ、じゃあわたしが先生よぶね。おねえちゃんがオシッコしたいですっておしえてあげる。それで、さっきみたいにしてオシッコすればいいよ」

今にも、二人は大声を出して立ちあがりそうな気配だった。

戦慄を覚え、詩織は跳ねあがるように高鳴る心臓を抑え込んだ。

「っ、ダメ……っ！！」

（ちゃ、ちゃんと、ガマンしなきゃ……！！ ……みんなに、おトイレもちゃんとできないダメなおねえちゃんって思われちゃう……っ！！）

中学生の自分が、『おねえちゃん』の自分が、エリ達のようにオシッコを我慢できず、もう一度バスを止めるなんて——絶対に絶対にしてはならない。

詩織はぎゅっと自分の腿をつねりまくって、今にも溢れそうになる尿意を誤魔化しながら、必死に笑顔をつくった。

「あ。あはは……なんでもない、よ。へいき、へいき……」

詩織の股の間で、くしゃくしゃと握り締められる青と緑の縁取りのエプロン。

少しでもみんなのお手本になるために。みんなのおねえちゃんであるために。

その一言に縋り付くように、もう限界の心を奮い立たせて、詩織はぎゅっと唇を噛んだ。憧れのはずだった『先生』のエプロンが、まるで膀胱を縛り付ける鎖のように重い。

「えー？　ほんと？　オシッコしたいんでしょ？」

「ウソついちゃだめよ、オシッコよ。ぜったい」

「ち、ちがうってば……っ、あはは、まねっこ、だよっ……ふ、ふざけた、だけっ」

あまりにも苦しい言い訳だ。

じんっ、と響く排泄の予兆を、股間を座席シートに押しつけることで隠し、詩織は両手を離しておどけて見せる。

（あううっ…！！）

じゅんっ、じゅっ、じゅ、しゅるるっ……

（っ、出てない、出てないっ、オシッコでてないっ……汗、汗なんだからっ……）

熱い刺激が股間を行き来する。じわりとお尻のほうにまで、肌が液体に漬かったような感触が広がってゆく。

それでも——

「はあ、はあっ……つく……」

おなかの中には、今にも爆発しそうな煮えたぎった尿意を抱えながら、詩織は悲壮な決意で我慢するしかなかった。

バスが目的地の公園に着くまで、

——あと、4 5 分。

（お願い、はやく着いてっ、はやく、はやくっ、はやくはやくはやくはやく……っ！！！！）

バスが前後に揺れるたび、許容量を遥かに超える恥ずかしい熱湯を閉じ込め続け、酷使された括約筋が悲鳴を上げる。排泄を禁じるための器官が徐々にその機能を失いつつあった。

再び楽しげに歌い続ける子供たちの中で、詩織はただ独り絶望的な尿意との闘いを続けていた。

高速道路を降りたバスは、最終目的地の海浜公園をすぐ目の前にして渋滞に巻き込まれていた。道路にびっしりと並んだ車は際限のない列をつくり、焦れるほどののろのろ運転でわずかに進んでは停まってを繰り返している。

ほとんど進むこともできないうちに点滅をはじめ、また赤に切り替わった信号に、小刻みに震える詩織の膝がぎゅっと寄せられた。

「うう…あううっ」

我慢の苦悶もすら、抑えきれずに呻きとなって溢れ出す。

ゴールはどこまでも遠くいつまで経っても届かないどころか、遠ざかっているかのようだ。詩織はくねくねと腰を揺すり、座席のシートにひっきりなしに股間をこすりつけ、オモラシの誘惑を必死に振り切ろうとしていた。

（はやくっ、はやくして、お願いっ、早く着いてよおっ……）

口の中で小さくつぶやき、自分に言い聞かせるようにして、蒼白な顔でぎゅっと目を閉じる。

「うう、つく……っ」

もうすでに我慢は限界に達している。次々と押し寄せてくる尿意の大波に対し、全身を強張らせて懸命にやり過ごす少女の頬を冷たい汗が伝う。

詩織の両手は、もう随分前か前かがみになった太股の付け根をおさえこんだまま固定されていた。不自然に折り曲げられ、股間から手を離せない詩織に、もはやみんなのお手本となるべき『おねえちゃん』の威厳はない。

くしゃくしゃになったエプロンは、まるで『ふんどし』のように三角形に詩織の股に挟みこまれ、お尻の方を回って抑えつけられている。限界の尿意に耐えようと、少しでも股間を覆う刺激を増やそうとしての無意識の行動の結果だが、それはまるでオシッコの孔を包むオムツの様相を呈していた。

青と緑の『先生』の証は、“オモラシ”おねえちゃんのだらしない排泄孔を覆い、足の動きに合わせてじわっと染みを広げてゆく。「あ、あ、はっ…」

寄せては帰すように収まることの無い尿意は、波というよりは高潮だった。やってくる尿意の最高潮はじりじり際限なく高まり続け、乗り越えてもすぐには引いてくれなくなっている。自然、我慢の時間も長くなり、疲弊の度合いも激しい。

いつまでも収まらない尿意の高潮に、詩織は思わず声を高め、びくんと腰を竦ませて緊張したおしりを浮かせてしまった。「あ、つく……！！」

じゅんっ、じゅっ、しゅるっ、

固く閉じ合わされた指の間で、熱の籠った下着がじわりと湿る。とたんに訪れる得も言われぬ解放感と、熱い雫の先走りが脚の付け根に拡がってゆく感触に、詩織はぎゅっと唇を噛み締めた。

（ま、またっ……おチビり……っ、だ、ダメ、これがさいごっ、いまで、さいごっ……ほんとにほんとのさいごだからっ、もうしない、もう出ないのっ……！！）

断続的にオシッコをちびり続け、詩織の下着はもう言い逃れのできないほどに湿っている。黒い染みはぼつぼつとスカートにも広がり、さらには座席のシートにまで染み込んでいた。

エリとカスミは、汚してしまったパンツを穿き替えているが、詩織には換えのパンツはない。たとえこれ以上、ちょっとでもオシッコが漏らさずにいられたとしても、詩織はびしょびしょになったパンツを穿いたまま遠足の付き添いをしなければいけないのだ。

（と、トイレ……おトイレ、トイレ行きたいおしっこしたいオシッコしたいオシッコオシッコ……っ！！）

詩織の理性はもはやすべてその言葉で塗り潰されていた。

恥骨を伝って降りてゆくむず痒さが股間の先端に集まってゆく。

硬く閉じ合わされた排泄孔がぶくりと膨らむ。

膀胱がよじれ、オシッコを排泄する蠕動が致命的な場所に集まってゆく。

排泄器官、というオシッコをするための装置が、詩織の身体の中身を絞り出そうとしている。

（で、っでっやう出ちゃう出ちゃうはやくはやくトイレといれオシッコといれオシッコ……っ！！）

——オシッコが、出る。

あまりにも無慈悲に、その現実はずっくりと着実に限界を迎えた少女の身体を侵食していった。心を引き裂くように悲鳴を上げ、懸命に耐え続ける詩織を弄ぶかのように、磨耗した括約筋の隙間から水流が漏れ出す。

じゅじゅつ、しゅるつ、しゅるるっ……ぷちゅつ

「あ……ふうっ……く、う、あっ……ああ！！」

決壊の緊急警報に屈しそうな恥骨の上のダムを押さえ込むため、詩織はたまた両足を“ぐいっ”と椅子の上に持ち上げてしまった。

膝を抱え込むようにして身体を丸め込んだみっともない姿勢に、エプロンの下に隠れていたスカートと下着が大きく覗いてしまう。

(あ、あつ、う、あああつ、)

座席の上で丸見えになった下着がぎゅっと振れ、ぎしぎしと椅子が軋む。おなかの中で暴れるオシッコに合わせて、おしりが揺れる。そうして露になった詩織のぱんつが、じわじわと薄い黄色に侵食されてゆく。

じゅつ、じゅじゅつ、ぷしゅつ……

(で、でちゃう……っ……ダメえ……っ)

恥も外聞も捨て去ってオシッコを我慢しているのに、それでも尿意は収まらない。きつくきつく押さえ込んだ下着の内側で、じわりじわりと熱い先走りが滲み出してくる。もはや、おチビと呼ぶには規模が大きすぎる。断続的に滲む熱いオシッコの潮吹きは、ちょろちょろと下着の中に広がってゆく。

(だ、ダメ……が、ガマンっ……しなきゃ……)

抱え込んだ膝ががくがくと震える。少女の下腹部はじわりじわりと浸透する尿意に執拗に炙られ続け、猛烈に排泄を欲していた。高まった尿意が収まらない。それどころかさらに高ぶり続けてゆく。

生理現象の限界が、訪れようとしている。

(や…だあつ…！！ 出ないで、オシッコ出しちゃだめえっ、……エリちゃん、だつてっ……ちゃ、ちゃんとガマン、できたのにい……っ！！ ダメえ、え、えええ……)

きゅん、と膀胱の疼きが激しくなる。子供のようなオシッコ我慢のモジモジダンスをしているのに、ヒクつく腰をまるでおさえこむことができなかった。

(あと……ほんのちょっとだけ……なのにい…っ！！)

藁にもすがる気持ちで持ち上げた視線の先で、また、信号が青から赤へ。

GOから、STOPへ。

トイレに辿り着くまでの道が、またも通行停止になる。

(も……っ)

ずく、と膀胱が震える。排泄器官がうねる。

詩織は悲鳴を上げそうになった。もはや余裕のない下腹部と、磨耗し疲れきった括約筋が集中が緩むやいなやびくびくと引き攣る。

排泄の甘い誘惑に屈しそうになって震えだす股間を押さえ込もうと、思わずきゅっと脚をくっつけ、股間に手を滑り込ませてしまう詩織。憧れのエプロンがくしゃくしゃに乱れ、大きく皺になる。一時たりとてじっとしていられない。

(もうダメ…っ！！ ……ば、バケツでもっ、なんでも……っ！！ お、オシッコ！！、オシッコしないと、し、死んじゃうっ！！)

我慢の限界——もう、間に合わない。

トイレまで間に合わない。

オシッコするところに行く前に、オシッコが出てしまう。

繰り返される渋滞と、執拗なまでの我慢を強いる不運の連続に、とうとう、詩織はそれを認めざるをえないところまで追い詰められていた。

過去一度も経験したことのない暴力的なまでの尿意に、少女の理性もプライドは見るも無惨にすり減らされていた。さらなる羞恥を屈辱を回避するため、詩織は掠れた声で二つ前の補助席に座る弓野先生に声を掛ける。

「……いっ、……んせいっ」

「え？」

「ゆ、弓野先生……っ、あ、あの……ば、バケツ……貸して……くだっ」

小さく震えた声に窺められた詩織の窮地を知り、弓野先生は血相を変えて身を乗り出した。詩織のそばに顔を寄せ、すばやく耳打ちをする。

「ええっ！？ ちょ、ちょっと、ねえ、本当にダメなの！？ 冗談でしょう……？ あともう１０分もかからないのよ！？」

弓野先生の反応は正しい。しかしほんの一秒でも早くオシッコが出したくてたまらない詩織には、その１０分は永遠と同義だ。

「む、無理……もう、ガマン、無理なんです……は、はやくっ、と、トイレえ……」

「さっきガマンできるって言ってなかったの……？ ああっ、こんなに濡らしちゃってるじゃないっ！！」

「だ、ダメ……で、出ちゃう……」

「ちょ、ちょっと待って、まだ出しちゃ駄目よ！？」

顔色を変えた弓野先生は慌ててバケツを取りに席を立った。いち早くその異常を察した新藤先生も立ち上がる。

詩織もまた、最後の力を振り絞って手摺りにしがみ付いた。

あと十秒、遅くても二十秒。それで、先生たちがバケツを持ってきてくれる。

そこにまたがればオシッコだ。オシッコの時間だ。

（オシッコ、オシッコできるっ、あと、じゅうびょう、にじゅうびょう、いちにさんしごろくななはちきゅうじゅ、じゅうびょう、にかいじゅうびょうかぞえればオシッコ！！ にじゅうびょうでオシッコ！！ といれ、オシッコといれできるのもうすぐもってきてくれるっ……そうすればしゃがんで、パンツぬいで、しゃがんでっ、オシッコできるっ！！）

弓野先生がバケツを掴み、新藤先生が走りだした。バケツが——今の詩織には、その青いプラスチックの入れ物が、トイレにしか見えない。

オシッコをしてもいい場所が、向こうからやってきてくれる。詩織は待っているだけでいいのだ。床に置かれたそれを跨いで、下着をおろしてスカートをたくし上げて、しゃがみ込めば、オシッコができる。それでオシッコをしてもいいのだ。

乙女として必要な羞恥がそのプロセスからごっそり抜け落ちていることにはもう気付けない。少女を苦しめる尿意はそこまでのレベルに達しつつあった。

尿意の解放、それだけを心の支えに、詩織はふらつく脚を叱咤して、ぐっとおなかに力を篋め——

「あ——っ！？ おねえちゃんオシッコ！！ オモラシしてる——っ！！」

「や、っ……！？」

バスの中に響いた大声に、渋滞に退屈していた子供達は一斉に後部座席を振り向いた。叫んだのは詩織の近くに座っていたエリとカスミ。

二人は、思わず腰を浮かした詩織のスカートと座席シートがぐっしょり色を変えているのに気付いたのだった。漏らしたての熱いオシッコがつくるくつきりとした大きなオモロシ跡は、言い訳もできないほど明らかな『大失敗』の証拠だ。

それに追い討ちを掛けるように、またぷくりと膨らんだ排泄孔が熱い雫を吹き上げ、シートの上にぶしゅ、ちょろちょろと新しい水滴を撒き散らす。

「ほんとだ、おねえちゃんオモロシしてるっ！！ おしっこしてるよ！！」

「いけないんだっ！！ こんなところでオシッコしてるっ！！」

「おねえちゃん、おトイレいかなかったの！？ ガマンできなかったの？」

「ち、ちがッ……あああうっ！！」

必死に声を絞り出す詩織。

子供達の視線に晒された衝撃で、だらしない股間はさらにじゅじゅつとオシッコを吹き出し、スカートの染みを一際大きく広げてしまった。下着がオシッコでびしょびしょの水浸しになり、ふらつく足元にぽたぽたと水滴を散らす。

「は……っぐ、うううっ……」

身体をよじり、しゃがみ込むようにして股間をねじり押さえ、オシッコを抑えようとする詩織だが、排泄の準備をすっかり整えていた体は、いまさらそんな命令を聞いてくれはしなかった。

座席からはじき出されるように通路に飛び出した詩織は、オシッコにまみれた手で座席をつかむ。しかしその手もすぐに股間に伸び、オシッコを塞ぎ止める手伝いに回されてしまった。

溢れ出す洪水を塞ぎ止める機能すら失った、水門がゆっくりと口を開けてゆく。怒涛のように高まる水位とともに、詩織の脚をひとつずつ、ふたすじとオシッコの流れが滑り落ち始める。

詩織はただ無力に、椅子の手摺りにしがみついて必死に腰を揺するばかりだ。

「あ、〜〜〜……ッ！！」

ごぼりと膀胱が音を立て収縮した。空を見つめ、ぱくぱくと口を開いた詩織の股間をすさまじい衝撃が直撃する。

じゅじゅつ…しゅるしゅるしゅるっ、ちょろっ、じょっ、じょじょっ！！

猛烈な勢いで膀胱内のオシッコが詩織の排泄孔めがけて突進してくる。緩み始めた水門から、小さな水音がこぼれだす。

（っ、くうううっ、うああうううっ！！）

バケツはまだやってこない。一斉に子供達が駆けよってしまったせいで、先生たちは詩織のいる後部座席までやって来れないのだ。

またも我慢の延長戦。必死の思いで、言うことを聞かない括約筋を締め付け、最期の瞬間を先延ばしにする詩織。

「わわっ、おねーちゃんおしっこしちゃってるっ」

「えー、こんなに大きいのおトイレがまんできなかったのー？」

「いーけないんだー。バスででおしっこしちゃうなんてー」

「おねえちゃん、オシッコしたいんならちゃんと先生に言わなきゃだめだよ！」

子供たちの声は残酷だった。立派な『おねえちゃん』であるはずの詩織がオモラシをするという非常事態に、子供たちは興奮のままに叫ぶ。

「あッ、あ！ あっ！！」

バスががくんと揺れる。足の裏から伝播する震動に、少女の膀胱は猛烈な尿意に絞り上げられ、限界を超えた詩織に一刻も早い排泄を命じてくる。

もう持たない。最後の最後の我慢も、これで限界だ。

（ダメ、だめなのにつ……ここ、バスの、中なのにつ……みんなが、いるのに、おトイレじゃないのに、でちゃう、いっぱいっちゃう、こんなところにおトイレしちゃう……ぱんつ、はいたままで……おトイレしちゃううっ！！）

ぶじゅつ、じゅじゅつ、ぶじゅるるるるうっ！！

激しい水音と共に、詩織の足元にオシッコが降り注いだ。

排泄孔がひしゃげ、麻痺しかけた括約筋の隙間から間断的に排泄を繰り返す。

腰を突き上げるような解放感が恥骨から響き、ふらりと揺らいた詩織の脚が、とうとうバランスを崩し、ゆっくりと膝が折れてゆく。

直立から中腰を経て、しゃがみ込む——もっともオシッコするのに適した姿勢へ。

「——前原さん！！」

その瞬間。

まさに間一髪の神業だった。放水の始まるほんの一瞬前、バケツを抱えて駆け付けた新藤先生が、子供達を掻き分けて詩織のお尻の下にバケツを押し込んだのだ。

同時、

ぶじゃああああああっ！！

「「「わあ————っ！？」」」

バケツの中に叩きつけられる太い水流。激しい水音を立て始めた詩織のオシッコに、バスの中は騒然となった。プラスチックの容器にぶつかりとてつもなく激しい音を響かせる詩織のオシッコが、滝のように暴れ回る。

下着とスカート、そしてエプロン。何重もの布地は、溢れ出した熱い雫に対してまったくの無力だった。股間を押さえた手のひらがおしっこを受け止めて、なおも際限なく溢れ、熱い噴水がじよぼじよぼとプラスチックの容器の中に散ってゆく。壊れた蛇口のように、詩織のオシッコは際限なく、激しく、止らず、途方もない。

憧れのエプロンはオシッコ漬けになり、染みは詩織のおヘソの上あたりまで達していた。オモラシの証は少女の股間から脚を容赦なく覆い尽くしてゆく。

「いやあ……っ、だめ、だめえっ、見ないで、見ないでえ……」

力なく首を振る詩織の懇願は、好奇心の塊のような子供たちには無力だった。

ぷじゅ、じゅじゅ、じょぼぼぼぼちやばちやばちやっ！！

熱い雫を滴らせる少女の股間が、先端から激しく疼く。まるでホースを押し潰して水を撒くときのような、容赦のない激しい水流がバケツの中で踊る。

詩織の脚の付け根とバケツの中を繋ぐ、太く激しい何本もの水流。

『先生』と同じように、子供たちのお手本にならなければいけない『おねえちゃん』のエプロンをつけたまま、詩織の股間は辛抱なくオシッコを吹き出し続ける。

「おねえちゃんなのにガマンできなかったんだあ」

「おねえちゃん、こんなところでオシッコしちゃいけないんだよ？ オシッコ、ちゃんとおトイレでしないきゃ」

「うあ……うああつ……つく…」

子供たちの容赦のない声が、詩織の心に深い傷を刻み込んでゆく。

詩織のオシッコの半分近くは、バケツに入り損ねてバスの床の前の方に大きく飛び散っていた。なおもぼちゃぼちゃとオシッコまみれのお尻からは雫がバケツの中に垂れ落ち続けている。

床に広がったオシッコを避けるように、一斉に子供たちが席を離れた。ジャングルの河の氾濫のように大きく広く広がった羞恥の水跡は、詩織の股間を源流に傾いたバスの床をどこまでも流れ落ちてゆく。

信号は赤。ゴールは、まだ遠い。

(初出：おもらし千夜一夜 2 283-322 2007/09/25)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第1夜 シンデレラ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 10/13/2007 10:27:04

BODY:

お城はいつになく華やかに賑わっていた。いつもは限られた一部の王族達がささやかな宴に興じる大広間も、今日は特別に招待された大勢の人々で埋め尽くされている。普段は王様にお目通りもかなわない商人や位の低い貴族、それに国の外れの村長まで。お城でめったに見ない顔触れが多いのは、王子様のお妃を決める舞踏会が開かれているからだ。

大きな柱時計が飾られた大広間はこの世のもととは思えないほどに美しく飾られ、ごちそうとお酒が山のように積まれている。

優雅な曲に合わせて、大勢の貴族の娘たちが色華やかなドレスを翻して踊る。

しかし、この場の主役は彼女達ではない。この舞踏会で、見事王子の心を射止めたのは一人の美しい少女だった。貴族たちはそろってあの美しい娘はいったいどこの令嬢だろうと首を捻る。けれどそれが誰なのか解るものは誰もいなかった。

それも当然。王子の隣にいるのはシンデレラ。いつもは屋根裏に暮らす灰かぶりのみすぼらしい娘なのだ。

継母と姉達のイジメに遭い、舞踏会に参加できなかったシンデレラの前に現れた魔法使いは、みすぼらしい灰かぶりの少女をどんな王国のお姫様よりも美しくする一晩だけの魔法をかけてくれた。

純白のドレスを纏い、ガラスの靴を履いたシンデレラ。その姿は王子が今までに会ったどんな少女よりも美しく、しかも決してその美しさに奢ろうとしなかった。我先に自分の美しさを誇る貴族の娘達に囲まれていい加減うんざりしていた王子には、奥ゆかしくもはかなげに、言葉すくなく俯く少女がとても新鮮なだった。

「君は素敵だ……本当に。いままで僕があつたどんな女性よりも、素晴らしい」

「……そんなこと、ないです……」

楽隊の奏でる優雅な調べが満ちる大広間で、王子はそっと少女に愛を囁く。

「どうしても名を教えてくださいはないのかい？」

「はい……」

「どうして！？ 僕と踊るのはそんなに嫌なのかい？」

「ち、違いますっ……でも、もう……」

こっ、と何かを飲み込む決意の表情で。少女は辛うじて王子の顔を見つめ返す。

「も、もう……二度と、お会いできることは……ないと思いますから……」

「何故だい？ どうしてそんな事を言うんだい。悲しいよ。……君が望んでくれれば僕はなんだってしよう。君のためならば国を捨てたって構わない！」

シンデレラの美しさにすっかり参った王子は、自分の立場も忘れて熱烈な想いを口にする。けれど熱い思いを告げられればられるほど、シンデレラの困惑は深まるばかりだった。なにしろ今夜のシンデレラのすがたは魔法によるたった一度だけの幻、かりそめの姿。夜が明ければシンデレラはまた汚れた屋根裏部屋で姉と継母たちにいじめられて暮らす灰かぶりに逆戻りだ。

それに、なにより……

大広間の時計がまたかちりと進む。もう間もなく12時を告げる鐘が鳴る。

(ううつ……あ、はああつ……)

嫉妬に胸を焦がしながら、彼女をずっと観察している貴族の娘達は、シンデレラの手がずっとドレスの前から離れないことに気付くことができただろう。どんな女の子だって憧れの王子の隣にいれば緊張するのも当たり前だが、それは少し様子が違う。

「っ……ふぁ……っ」

ぞくぞくっと下腹部で熱い疼きが湧き上がり、背筋をのぼってゆく。脚の間にじんじんと響くむず痒い響きが地鳴りのように続いている。シンデレラは熱い吐息がこぼれそうになるのを必死におさえこむ。

しかし定まらない足元はさっきからふらふらと揺れ、細い腰は小さくねくねと動き、ドレスの下で膝はぎゅっとくっついては離れ、ガラスの靴はきゅきゅ、かつかつ、と床をせわしなく叩いている。

(…も、もうダメ…でちゃう……っ)

間断なく込み上げてくる途方もない尿意を堪えながら、シンデレラは王子に気付かれないようぎゅっと唇を噛んだ。

シンデレラをお城まで運んでくれた魔法使いは決して悪い魔法使いではなかったが、やはり普通の人とは違ってイジワルだった。魔法使いの魔法によって馬車になったカボチャも、馬になったネズミも、ガラスの靴も白いドレスも宝石も、シンデレラの今の姿は、全部シンデレラがおしっこを我慢している間だけ続いている魔法なのだ。

今日のシンデレラは朝から継母と姉達に次々用事を言いつけられて、すっかりくたかった。姉達は特に陰湿で、こういうときのシンデレラがトイレに行くことを許してくれない。オシッコをぎゅっと我慢しながら、前を押さえてふらふらと仕事をする羽目になるシンデレラが失敗をするところを見て笑うためだ。

だから、実はシンデレラは魔法使いに会った時からずっとおしっこがしたくてたまらなかった。

魔法使いはそれを見抜いて、シンデレラをいじめるためのイジワルな魔法を使ったのだった。お城に行く前にこっそりトイレに行こうとしたシンデレラは魔法使いに呼びとめられてその事を教えられ、おしっこを我慢したまま舞踏会に参加しなければならなくなったのだった。

それからもう何時間も過ぎている。王子に見初められ、ずっとダンスの相手を務めながら、シンデレラはおなかのなかに閉じこめたおしっことずっと激しい戦いを繰り広げていた。

けって育ちが悪いわけではないのに、自分のドレスを踏んづけて上手くダンスが踊れなかったのも、ちゃんと落ちついて話すが

できないのも、そのせいなのだ。

(ああ……いやあっ…ま、また……っ)

じゅ、じゅっ…ぷしゅるっ……

もうシンデレラの我慢はとくに限界だった。どれだけ固く水門を閉じようとしても、おしっこは少しずつ少しずつ漏れ出してきてしまう。脚を伝うおしっこに気付かれないように王子の横顔を窺いながら、シンデレラは暴れ狂う尿意を落ち付かせようとおなかをさする。だがそんなものは気休めに過ぎず、遠からず破滅の瞬間が来るのは間違いがなかった。

そう——多分、あの時計の針が12時になるまでには。

(だめ…っ、そんなのっ……！！)

今でさえ、王子のとなりでちょっとずつ下着におしっこをチビりつつけているのだ。それをこともあろうに、王子さまの隣でおもらしをしてドレスや床をぐっしょりとおしっこで汚してしまう——そんな事態を考えるだけでシンデレラの顔は燃え上がるほどの羞恥に染まる。

けれど、たとえかりそめの姿であったとしても、いや、ただ一夜の夢であるからこそ、シンデレラは王子と過ごすこの時間を一分一秒でも長く感じていたかった。

そんな健気な乙女心を嘲笑うかのように、おしっこを限界まで溜めこみ、ばんばんに張り詰めた膀胱はじわじわと収縮をはじめ、シンデレラに最後通告を突き付けてくる。

「はあ……あうっ！！」

「どうしたんだい？ 具合が悪いのかい？」

答えようとしたシンデレラの代わりに、スカートの下では再びだらしのない水門がびゅるっとおしっこを吹き出させる。

「あ……っ！！」

「大丈夫かいっ！？」

じゅわあっ、と下着に大きく染みを広げて、ガクンと大きく腰を揺すってしまったシンデレラを、王子が慌てて気遣った。それは美しい光景であった。少なくとも、表面上だけは。今のシンデレラはそんな王子の心遣いすらまともに感じ取ることができず、くじけそうになる括約筋を必死に締めつけるだけで精一杯なのだ。

「い、いえ……そのっ……あっ！！！」

もう、言葉を取り繕うことすら難しかった。シンデレラの両足はドレスの外からでも解るほどにぐいぐいときつく交差され、白い長手袋の手のひらはドレスのスカートをくしゃくしゃに握り締めている。

思わず緩んでしまった水門からさらにおしっこが溢れ、ドレスの下に滴り落ちる。ふらついたシンデレラの足元に、ぼたぼたと水滴の跡。

(も、もう……ダメっ！！)

「あっ、君！！ どこへ行くんだいっ！？」

かちりと時計が進む。時刻は11時57分。シンデレラはとうとう堪えきれなくなって、王子様を突き飛ばして走りだした。

慌ててあとを追おうとした王子だが、ようやく一人になった王子とお近づきになろうとする貴族たちが邪魔をして追いつくことができない。シンデレラはおしりをみっともなく突きだしたアヒルみたいな格好で、壁にもたれながら一生懸命走る。

(お……おトイレ……っ！！)

おなかのなかでたぶたと揺れるおしっこを済ませられる場所を渴望して、シンデレラはお城を走った。トイレ、お手洗い。オシッコのできる場所。しかし、お城のことなどまったく知らないシンデレラが、広くて迷路のようなお城のなかから、お姫様のためにひっそりと

隠されたトイレを探しだすのは至難の業だ。

たちまち膀胱は限界を訴え、猛烈な尿意がシンデレラを支配した。歩みはふらふらと落ちつかないものになり、シンデレラの歩いた廊下には点々とおしっこ跡が続いている。

（やだ……やだぁあつ！！ おしっこでちゃうっ、でちゃう、でちゃうっ……！！）

出ないで……出ちゃダメえ……王子様に、嫌われ…ちゃうようっ……！！）

あこがれの王子様のおうちをおしっこで汚してしまうというとんでもない所業に、シンデレラの心は無残に引きちぎられてしまう。たとえどんなに王子がシンデレラのことを好きでいても、お城の真ん中でオモラシをしてしまうような恥ずかしくてはしたない女の子がお妃様になれるわけがない。

朝から一度も出せていないおしっこを我慢したまま、シンデレラは必死に走った。もう歩くよりも遅いスピードで、まっすぐお城の出口を目指す。おなかの中のおしっこがシンデレラの出口に到達してしまうよりも先に、少しでも早く。

けれど、同時に大きく鳴り響く鐘の音。12時を告げる鐘の音。ごおん、という音がシンデレラの下半身にびりびり響く。

「あ、あと……ちよつと…つ……あう、ふぁあつ、つく……！！」

ようやく見えてきたお城の出口に安堵するシンデレラ。しかしその気の緩みはダイレクトに下半身に伝わり、さらにおしっこがじゅぶじゅぶつ、と激しく吹き出した。股間を走る排泄の快感に脚がもつれ、床にばちゃばちゃと雫がこぼれおちる。

シンデレラのドレスがゆっくりと消え始めた。魔法が解けかけているのだ。オモラシを繰り返す恥ずかしい股間を両手で鷺掴みにし、耳まで真っ赤になりながら、シンデレラはやっと御城の門をくぐる。

その先には大きくて長い階段が続いていた。これを降りればお城から出られるのだ。

「はやく、はやくっ、しなきや……！！」

覚悟を決めて階段を降り始めたシンデレラだったが、そこでついに崩壊が訪れた。我慢しつづけた脚で長い長い階段を下るのは、やはり無理だったのだ。

（あ、う、あ、や、やだっ、ダメっ、ダメっ！！）

じゅん、と疼いた股間が、オモラシの誘惑に負けて勝手に放水をはじめてしまう。下着に広がる染みが一気に広がり、シンデレラのおしり全体が生暖かいおしっこに侵食されてゆく。

「あ、はうっ……う、あああつ……」

じゅるっ、ぶじゅっ、じゅるっ、じゅじゅじゅじゅっ！！

膀胱をたぶたぶに満たしていたおしっこが、両足の力と共に抜けてゆく。

階段の真ん中ではじまってしまったおしっこをどうにかしようと、ただそれだけを考えてシンデレラは夢中だった。膀胱の圧力に押され、漏れ続けるおしっこはもう止まらない。このままではお城の正面階段に、おしっこの滝を作ってしまう。

そんな事は絶対にできなかった。

シンデレラはほとんど反射的に下着をおろし、ガラスの靴を脱いで裸足になると、ドレスの裾を“がばっ”とたくし上げてしゃがみ込む。

そして股間にガラスの靴をあてがった。一瞬遅れてシンデレラのおしっこが、“オモラシ”としてではなく本当の勢いで出はじめる。透明な靴はまるで容器のように、シンデレラのおしっこの出口をこじ開けて吹き出す熱湯を受けとめた。

「あふううううう……っ」

ぶじゅっ！！　じょぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ……

熱く湿った吐息をこぼし、シンデレラは排泄の快感に背中を震わせた。

1 2 時の鐘が続く。長く、大きく、ゆっくりと鳴り響く。

それにあわせて、丸一日膀胱に閉じ込められていたおしっこがガラスの靴に注がれる。魔法の靴はシンデレラの足にぴったりおさまったように形を変えて、じょじょと女の子にあるまじき音を立てて吹き出すおしっこを受けとめる。ずっとずっと我慢を続けていたせいで、シンデレラのおしっこは黄色く色づいている。

お城の階段の真ん中で、大切なところをあらわにし、透明な容器におしっこを注ぐ女の子。ガラスの靴はみるみる大きくなり、シンデレラが苦しめられていたおしっこを代わりに受けとめる。シンデレラが今日一日、ずっと我慢しつづけただけあって並大抵の量ではない。

「……君、待ってくれ！！　せめて、せめて名前を！！」

そんなシンデレラに背後から声が掛けられる。王子だ。邪魔をする貴族たちを振り切って、長いお城の廊下を走り、どうにかシンデレラに追いついたのだ。

「や、いやああ————っ！！！！」

だがシンデレラはそれどころではない。一番見られたくない格好で、おしっこの真っ最中なのだ。とうとう悲鳴を上げてしまったシンデレラのあられもない姿に、王子は目を丸くする。

逃げなきゃ、急がなきゃ。そう思って反射的に立ち上がったシンデレラ足元に、ばしゃばしゃとおしっこが撒き散らされてゆく。一度出始めてしまった女の子のおしっこは、途中で止まるわけがないのだ。

とうとう1 2 回目、最後の鐘が鳴り響く。

ゆっくりとドレスが消えて行く。それなのに、おしっこをその縁ぎりぎりまで注がれたガラスの靴だけが消えない。

「やだあ、やだあああ…………っ！！」

シンデレラはまだおしっこが途中のまま弾かれるように走り出した。おしっこを出し続けながら王子様に背中を向け、階段を大急ぎで駆け降りる。止まらないおしっこが脚を伝ってばしゃばしゃと階段を汚し、流れ落ちてゆく。もうオモロシなのか立ったままおしっこをしているのかもわからない。

ドレスが汚れ、ぐっしょりと染みを残し、ボロボロの服に変わってゆく。

シンデレラもボロボロと泣いていた。涙を流して泣いていた。

「ひう……えっく……うあ、ああ、ああああ……」

（見られちゃったっ……王子様に、おしっこしてるところっ、オモロシしてるところっ……！！）

階段には、なみなみと黄色い液体を注がれ、シンデレラのおしっこにまみれたガラスの靴だけが残される。

王子はただ呆然と、闇に消えてゆくシンデレラの後ろ姿を見送ったのだった。

——めでたし。めでたし。

……さて。

そんな出来事があった数日後に、シンデレラの残したおしっこでいっぱい大きな大きなガラスの靴をてがかりに、国中の娘にお城からおふれが出された。

『このガラスの入れ物を、おしっこでいっぱいにした娘を妃とする』

なんとともんでもないおふれだった。

けれど王子は本気だったのだ。シンデレラのオシッコをする姿があまりにも鮮烈で、王子はすっかりその虜になってしまっていた。

それを聞いた娘達はこぞってたっぷり水を飲み、震える足を堪えて列をつくり、ガラスの靴にまたがって次々とおしっこをした。誰も彼も王子様のお妃になれるのならと恥も外聞もなく先を急いでおしっこをした。

けれど、シンデレラのおしっこを受け止めて大きくなったままのガラスの靴はあまりにも大きすぎて、誰にもいっぱいにすることができなかったのだった。

そしてシンデレラの家にも来てきた王子と王子の使いは、二人の姉がおしっこを我慢しすぎてはしたなくもオモラシしてしまっているのを呆れて眺めながら、部屋の隅で掃除をしながらモジモジしていたシンデレラにもおしっこをしてみるように告げた。

その日も二人の姉と継母にイジワルをされてトイレに行けていなかったシンデレラは、恥ずかしがって何度もそれを断ろうとし、それでも許されず、とうとう王子の目の前で耳まで真っ赤になって俯きながら小さな割れ目からすごい勢いでおしっこをほとばしらせた。

そして、シンデレラはだれもいっぱいにならなかったガラスの靴をあっという間に黄色いおしっこで満たし、さらに我慢できず残りのおしっこでもう一度ガラスの靴をいっぱいにしてみた。

王子は感激してシンデレラを抱き締め、再会の感動に打ち震えながらシンデレラに永遠の愛を囁いたのだった。

後に、この国ではこの故事にちなんで、おしっこを我慢できる女性ほど美しい、という伝統が生まれることになるのだが——それはまた別のお話である。

今度こそ、めでたしめでたし。

(初出：おもしろ特区 S S 図書館 2007/06/15 改訂)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第2夜 北風と太陽

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 10/13/2007 10:29:25

BODY:

ある日、北風と太陽がケンカをしました。

理由はつまらないことでした。春をつれてくる太陽と冬を呼ぶ北風、いったいどちらが偉いのかという言い争いです。

「俺さまの方が偉いのさ。俺さまが風をひと吹きすれば森の木は倒れて、家はばらばらに吹き飛んで、人間たちだって散り散りに逃げていくんだぞ」

「僕のほうがすごいに決まっているよ。だって僕がいなければ木々は大きくなれないし、人間や動物たちだって弱って死んでしまうのだからね」

「なんだと？ そんな事はないぞ。俺さまのほうが偉いんだ！！」

「いやいや。僕の方がすごいんだよ！！」

北風と太陽はふたりともすっかり意地を張って、どちらがえらくてすごいのかを譲りませんでした。そのせいですっかり季節はおかしくなり、畑を耕すおじいさんはすっかり参ってしまいました。

もっとも、北風と太陽は地面に住む生き物たちのことなんか気にしていません。あちこちで鳥や動物たちが喉を乾かせ、寒さに震え、大勢の人が苦しんでいるのに、そんなことはお構いなしです。

けっきょく、いつまで経ってもふたりのケンカは終わりません。そしてとうとうどちらがえらいかを、旅人の服を脱がせられるかどうかで決めることにしたのでした。

「ああちょうどいいぞ。あの子にしよう」

北風が街道で馬車を待つ女の子を見つけて言いました。女の子はマントを羽織り、背伸びをして馬車が来るのを待っています。どこか落ちつかない様子で、なにかに焦っているかのようでした。ふつうの人間ならば、そんな女の子の様子を見て察し、別の人間を探そうと思うものなのですが、北風と太陽はじぶんたちの勝負に夢中で、そんなことは知ったことじゃありません。

「よし、まず俺さまの番だ」

「どうぞどうぞ」

にやにやと順番を譲る太陽に、むかむかと胸の怒りをおさえながら、北風はごうっと冷たい風を巻き起こし、旅人の女の子に吹きつけます。

たちまち空は曇り、身を切るような冷たさが吹き荒れます。女の子は寒さに震えだしました。しかし、女の子はぎゅっとマントを掴み、ぶるぶる震えながら木の根元に座りこんで動こうとしません。

北風がいくら風を強くしても、女の子はますます縮こまるばかりです。

「くそっ、なんで脱がないんだ！？」

「ふふん。そんなやり方じゃダメさ。そろそろ気は済んだかい北風くん。じゃあ次は僕の番だ」

焦る北風に、したり顔で言ったのは太陽です。不機嫌に順番を譲る北風が変わって、太陽はさんさんと輝き始めます。

「寒がっている相手に、冷たい風を送ったってマントを脱いでくれるわけがないさ。見ていたまえ、僕のすごいところをね」

自身たっぷりに暖かな輝きであたりを照らしだす太陽。

さっきまでの寒さはどこへ、夏のような陽射しが女の子を包み込みます。女の子ははっと顔を上げて、空を見上げます。

「ほら、僕がこうして優しく暖めてあげれば、すぐにあの子もマントを脱いで、元気にはしゃぎだすに違いないのさ」

そう言った太陽は得意げになってさらに強く輝きだしました。地上はあつというまに真夏の暑さを通り越し、さらにぎらぎらと強い陽射しに満ちてゆきます。

けれど、今度もまた女の子はいつまで経ってもマントを脱ごうとはしませんでした。それどころか、マントのフードをかぶり、木の根元に座りこんだまま熱そうに汗を拭うだけで、たちあがろうともしません。

「……あれ、おかしいな？ どうした？ この、このっ」

「おやおや。俺さまにあんな大きな口を聞いたくせに、情けないなあ、太陽くん」

「おいっ、どうしたんだ？ ええいっ、まだ足りないのかっ！？」

北風に馬鹿にされて、太陽はますます強く地上を照らします。

あっという間に地面は乾き、からからに干上がってしまいました。

太陽はじぶんがやりすぎてしまったことに気付いてもしません。こんな陽射しの下で服を脱いで肌を出したら、人間はあっという間に焼け焦げてしまうことになんて考えがおよばないのです。

女の子はすっかり参ってしまい、しきりに持っていた水筒の中身を口にします。いちどはちょっとだけ口をつけてためらったものの、やっぱりこの暑さでは我慢ができなかったのでしょう。

ごくごく、ごくごく、あっという間に水筒は空になりました。それでもますます強くなる日差しに、女の子はさらに辛そうに空を見上げます。

北風はそれを見てあることに気付きました。

「そろそろ交代だ。次は俺さまの番だぞ」

「うう……しかたがない。でもね北風くん。君の風じゃあの子は絶対にマントを脱がないぞ。さっきのでわかっただろう？」

「ふふん、そいつはどうかな。もう一度確認するが、あの子の服を脱がした方の勝ちなんだろう？」

不敵に笑う北風。太陽はそれでも北風を馬鹿にして、「じゃあやってみるがいいさ」と場所を譲ります。太陽は北風なんかに女の子のマントを脱がすことができるわけがないとたかをくくっていたのです。

けれど北風は自信たっぷりです。

「さあ、見ている。俺さまの本当の実力を」

「どうだかね」

再び北風は冷たい冷たい風を起こし、女の子めがけで吹きつけます。けれど、今度はさっきのように激しいものではありません。緩やかにじわじわと、女の子の周りを冷やしていくのです。

それを見て太陽はあははっと笑いました。

「おいおい、どうしたんだい北風くん。さっきより全然弱い風じゃないか。そんなものでマントを剥ぎ取ることなんてできやしないだろう？」

「なあに。だまって見ていればわかるぜ、太陽」

どれだけ太陽に馬鹿にされても、北風は確信がありました。そのうち女の子はぎゅうぎゅうと身体を左右に揺らします。急に立ったりしゃがんだり、近くの木の下に背中を預けたかと思うと今度はぐるぐる木の周りを歩き回りはじめました。

「おや……？」

太陽は女の子の様子がおかしいことに気付きます。

女の子はきょろきょろをあたりを見回し、けれど諦めて溜息をついてを繰り返します。ときどきぴくっ、と背中をまるめ、爪先でトンと地面を叩きました。

そして、そわそわと落ち着きがなかった女の子はまたぎゅっと木の根元にしゃがみ込んでしまいました。脚の間に手をぎゅっと突っ込んで動かなくなります。

「さあ、そろそろだぞ」

北風がささやくと同時でした。ぶるぶる、ぶるぶる震えていた女の子はいきなりがばっと立ち上がると、近くの茂みに飛び込みます。

脚の間を押さえたままふらふらと、それでも精一杯急ぎながら。

女の子の歩いた後には、点々と黒い染みが続いていた。

「ほら、もうすぐだ。よく見ろ、太陽」

女の子は念入りにあたりを見回して、スカートをたくし上げてしゃがみ込みます。太陽はあっと叫びました。

けれどももう遅いのです。北風の冷たい風にすっかり身体を冷やしてしまった女の子は、ついにおしっこをガマンできなくなって、おちびりをしてしまい、この茂みでトイレを済ますことに決めたのです。

すると足元までおりる女の子のパンツを指差して、北風が笑います。

「ほらみろ。あの子が服を脱いだぞ？ 俺さまの勝ちだ」

「ひ、卑怯だぞっ！ 北風くん、こんな——」

「別にマントを脱がせていう勝負じゃなかったよな？ みろ、ちゃんと脱いでいるぞ？」

たっぷりたっぷり時間をかけて、ものすごい勢いのオシッコを済ませた女の子は、涙目になりながらぐしゃぐしゃになったパンツを脱ぎました。

パンツは女の子が漏らしてしまったオシッコをたっぷり吸って汚れ、とてもはいていられるような状況ではありません。なくなりパンツを茂みの奥に捨てる女の子を見て、太陽は悔しそうに歯軋りします。

「そんな……僕が負けるなんて」

「お前がさんざん照りつけたせいで、あの子は暑くて水筒の水を全部飲んでたからな。そりゃあガマンもできなくなるさ。どうだ、これで俺さまのほうが偉いんだってわかっただろう、太陽」

「うう……仕方がない……、僕の負けだ」

太陽は負けを認めて、北風は太陽よりえらいことが決まりました。

哀れ、ふたりのわがままでオモラシをさせられてしまった女の子は、それから家に帰ってお母さんにたっぷりと叱られてしまいました。彼女に罪はありませんが、北風と太陽は知ったことではありません。

——めでたし。めでたし。

(初出：おもしろ特区 S S 図書館 2007/06/15 改訂)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第3夜 ヘンゼルとグレーテル

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 10/13/2007 11:13:14

BODY:

「う……つく……」

「ど、どうしようっ……お姉ちゃあんっ……」

「あ、あたしに聞かないでよっ…！！」

ヘンゼルとグレーテルは脚の間をぎゅっと握り締めながら小刻みに膝を揺らしていた。双子の少女達を襲う尿意はどんどん激しくなり、おしっこの出口がじんわりと熱くなっている。

お菓子の家の中はたくさんの素敵なお菓子でいっぱいだったけれど、そんなものは双子の眼には入らない。二人がおなかのなかのおしっこを我慢しながらじっと見つめているのは、部屋の隅にある小さなドアだけだった。

「お、お姉ちゃん……」

「う、うるさいっ、静かにしなさいよっ！！」

気丈なヘンゼルも、いまは泣きつく妹を邪険に扱うしかない。

グレーテルのことを思っている余裕がないほど、おしっこに行きたいのだ。

……もう何日前のことになるだろう。ヘンゼルとグレーテルの継母は双子を育てるのにすっかり飽きたといって、夫に命令してヘンゼルとグレーテルを森の中に連れていかせた。おとなでも迷えば出てこれなくなるという深い深い森には魔女が棲んでいて、迷い込んできた人間を食べてしまうのだという。

いくら継母が意地悪でも、そんな簡単に魔女のいる森に子供を捨てろなどとは言わずがらない。実は継母は日々成長する双子達に美しかった二人の母親の影を見て、このままでは夫を奪われてしまうかもしれないと激しく嫉妬を燃やしていたのだった。

しかし、双子もそんな継母の悪意に気付かなかったわけではない。

「お、お父さん、あたし、おしっこ……」

「なんだ、またか？」

「う、うんっ……」

ヘンゼルとグレーテルは、森を連れて行かれる間、交代で次々とおしっこがしたいと言って父親の足を止めさせた。曲がり角や三叉路、くねくねと曲がった入り組んだ小路。そんな場所に差し掛かるたび双子は道の隅この草むらに駆け寄って、ちょろちょろとおしっこをした。

「よし、行くぞ」

「う、うん」

「……お父さん、わたしもおしっこ……」

「ちょっと、あんたまだ違うでしょ？ 次の番まで我慢しなさいよっ」

「だ、だってえ……」

「おいおい、またかい。いったいどれだけ水を飲んだんだ？」

のんびり屋のグレーテルとは違い、おませなヘンゼルは、継母が自分達に嫉妬して、自分たちを魔女の森に捨てようと父親に言いつけていることに気付いていた。

そのために、森の中で迷わないように目印をつけておくことを考えたのだ。はじめは信じなかったグレーテルも、やがては自分に迫る危機を悟り、姉の意見に賛成した。

『じゃあ、お弁当のパンを千切って置いておけばいいよ、お姉ちゃん』

『馬鹿ね。そんなことしても鳥に食べられちゃうわ。それに、せっかくのお弁当を捨てたら、おうちに帰ってくるまでにおなかがすいて死んじゃうかもしれないでしょ』

『あ、そっか……じゃあ、どうするの？』

『そうね……』

しばらく悩んでいたヘンゼルだが、ふとふもとの村の牧場が狩っている犬のことを思い出して、すぐに名案を思いついた。

「いい、ぜんぶ出しちゃダメなんだからね？ ちょっとだけよ！！」

「う、うん……」

茂みに歩いてゆく妹にこっそりと耳打ちして、グレーテルもぎゅっと脚を閉じあわせる。

それは、とてもではないがたったいま茂みに駆け込んでおしっこを済ませてきたばかりの様子には見えない。

ヘンゼルが思いついた目印とは、おしっこによるものだった。

牧場の犬がいつも、同じ場所におしっこをして縄張りをつくっているのを知っていたヘンゼルは、森の中に自分たちのおしっこで目印を付けることを考えたのだ。

しかしいくら双子が小さな女の子で、交代交代だと言っても、そんなに何回も何回もおしっこが出るわけではない。そこで二人は昨日はオネショをしてしまうかもしれないくらいたくさん水を飲んで、備えていたのだ。

おしっこをするときも一度に全部出してしまうのではなく、ちよろちよろと地面を湿らすくらいにちよっただけ出して、あとはまた我慢する。それを繰り返しているのだった。

「お、お父さん、おわったよ……」

「もういいかい？　じゃあ行こう」

「うん……」

「グレーテル、だいじょうぶ？」

「……また、パンツ汚れちゃった……気持ち悪いよお」

「我慢して。ぜんぶ出しちゃだめだからね？」

「うん……」

まだ小さな双子には、一度出しかけたおしっこをうまく止めることはとても難しく、だから二人のパンツはすっかりびちゃびちゃに汚れてしまっている。

それを何とかごまかして、父親のあとをついてゆくのだ。父親も自分の娘を捨てるということにいろいろ悩んでいるようで、気持ちが上の空なのがせめてもの救いだった。

「ここで、しばらく待っていなさい。いいね？」

「……はい」

「……………うん……」

そして――

はじめはおなかをたぶたぶにしていたおなかの中のおしっこがすっかりからっぽになった頃、父親は双子にお昼ご飯のパンを与えて、森の奥に姿を消した。

二人はこうして、深い森の中に置き去りにされてしまった。

「馬鹿、泣くんじゃないわよっ」

「うん、でも、でもっ……」

「へ、平気なんだから。ちゃんと帰れるもの。そうすればお父さんだって考え直してくれる。あんな女なんか追い出してくれるわよっ」

「うんっ……」

「っ、な、泣いちゃだめって、いってる、じゃないっ……ひつく」

「うえ、ふええっ……」

覚悟はしていても、本当にそのことを実感するのは辛かった。

ひとしきり泣いていた双子だが、お姉さんのヘンゼルはやがて泣き止み、ぐずるグレーテルを励まして歩き出した。

きよきよと森の道端を見回し、自分達が残したおしっこの跡を探す。

——しかし。

「ウソ……なんでないの！？　ここにあったはずなのにっ」

「おねえちゃん、ここ、どこ？　……わたし、こんなところでおしっこしてないよ……」

「そんな……」

双子が残したはずのおしっこの跡は、どこもかしこもさっぱり、きれいに消えてしまっていたのだった。食べる物もなく、家に帰るための目印も見失って、ヘンゼルとグレーテルは本当に迷子になってしまった。

「おねえちゃん、あれ！！　あれ見てっ！！　お家があるよ！！」

「え、ホントだっ！！」

そして——おなかをすかせて泣きながら歩いていた二人は、一日以上もずっと歩き続け、森の中でお菓子の家を見つけたのだった。

お菓子の家には誰も人はおらず、壁はビスケット、屋根はウェハース、カーテンはチョコレートでできたリボン。色とりどりの窓は飴でできていた。

恐る恐るチョコレートでできたドアを開けて中に入ると、そこには夢のような光景が広がっていた。

クッキーでできたテーブルには、たった今できあがったばかりのおいしそうなタルトにパイ、ケーキが山と積まれていたのだった。焼きたてのおいしそうな匂いに我慢できずヘンゼルとグレーテルがちよっぴりケーキを食べてみると、ほっぺたが落ちそうなくらいにおいしかった。

「これ……食べていいのかな？」

「いいわよ。だって誰もいないんだもの。きっとあたしたちみたいなお客さんのために用意してくれてるのよ、きっと」

「……そうだね。わたし、もうおなかぺこぺこ」

「あたしだって喉からからよ！！」

双子は我先にお菓子の山に飛びついた。

飴細工の水差しの中には冷たいジュースたっぷりはいっていて、双子はそれを飲みながら夢中になってお菓子を食べた。なにしろおなかですいていて、とても喉が渇いていたので、テーブルの上がすっかり綺麗になるまで食べてしまったのだ。

家の中を探検した双子はひねるとメロンソーダやソフトクリームがでてくる蛇口を見つけ、つぎつぎに冷たい飲み物を飲んだ。おなかはいっぱいだったけれど、甘いお菓子をたっぷり食べて、喉はますます乾いていたのだ。

すっかり満足したヘンゼルとグレーテルは、ふかふかのスポンジケーキのベッドで手を握りながら眠った。森の中をさまよい、眠れない日々を過ごしていた双子にとって、何日かぶりの深い深い眠りだった。

明け方に目を覚ましたのは、グレーテルだった。

まだまだ暗い朝靄の中、彼女は眠っている姉のヘンゼルを起こさないようにそっとベッドを抜け出し、きょろきょろとあたりを見回した。あまりにたくさん冷たいものを飲んだので、朝になる前にトイレに行きたくなってしまったのだった。

しかし、グレーテルがお菓子の家の中のどこを探してもトイレは見当たらない。お菓子の家はとても暖かくて居心地が良かったけれど、明かりだけはないのだった。

もじもじとおしりを揺すりながら、外に出て済ませようかと思ったグレーテルだが、薄暗い窓の外に広がる深くて濃い霧の立ちこめた森を見ると足が竦んでしまって動けない。

グレーテルはしかたなしにトイレを我慢したままベッドに戻り、眠ろうとした。

もちろん、眠れるわけがなかった。

そしてようやく朝がきて、ヘンゼルが目を覚ますと、そこではグレーテルが股間をおさえて必死におしっこを我慢しているところだった。お姉さんのヘンゼルはグレーテルのみっともない様子に眉をひそめる。

「んもう、なにしてるのよ……恥ずかしい格好っ」

「だ、だって、お姉ちゃん、ずっと寝てるんだもんっ……お外、暗くて怖かったし…」

「はあ……しかたない子ねっ」

そんなふうにお姉さんぶってグレーテルを叱るヘンゼルだが、実は彼女も起きると同時に、猛烈に張り詰めた下腹と、鈍い痛みを感じていた。なんと双子はもう一日以上おしっこを済ませていない。

ヘンゼルは表情だけは平静を装いつつ、そわそわとお菓子の家を探る。そしてついに二階に続く怪談の陰にある小さなドアを見つけた。そこには小さく『お手洗い』の文字を刻んだプレートがある。

「なんだ、ここにあるじゃない」

「え、ほ、本当っ!？」

昨日の夜グレーテルが見つけれなかったのも無理はない。トイレのドアは本当に小さくて、よく注意しなければまず見落としてしまうだろう。ヘンゼルはほっとしながらドアを開ける。外の草むらでおしっこを済まさなくてもいいと判って、ますますおしっこがしたくなっていた。

けれど。

「……………ウソ…………」

「お、お姉ちゃん……どうしたのっ？」

ドアを開けたまま呆然となるヘンゼルの後ろから、おしっこを我慢し、ぴょんぴょんと跳ねながらグレーテルがトイレを覗きこみ、ええっ、と驚いて叫ぶ。

双子が渴望していたおしっこをするための場所は、やっぱり他の部屋と同じようになにもかもお菓子の家でできていたのだった。

飴とホワイトチョコでできたトイレは、とてもおしっこをする場所ではない。それが作っているのは形だけのトイレで、オシッコが流れて

ゆくための穴も下水もない。当然、水も流れそうになかった。

ただ一つ使えそうなのは、綺麗なソーダ水をためた洗面台。

(そんな、まさか——お手洗い、って……)

ヘンゼルの想像は当たっていた。ここは文字通りの『お手洗い』。外から帰ってきた家の主が、お菓子を食べる前に手をきれいに
する場所だった。

「……お姉ちゃんっ……ね、ねえっ、トイレ……おしっこっ……」

「ま、待ちなさいっ、ダメよっ！！」

我慢しきれずにトイレに入ろうとするグレーテルの手をヘンゼルがつかむ。

ヘンゼルは気付いていた。トイレのないところを抜きにすればこのお菓子の家はとても素晴らしいところだと。ここでなら、グ
レーテルと二人で暮らしていけるかもしれない。いじわるな両親のところに帰らずに生きていけるかもしれない。

けれどそのためには、節約して毎日少しずつお菓子を食べていかなくてはいけないのだ。

だから、このトイレを使うわけにはいかない。一度おしっこをしてしまえば、ここにあるお菓子は全部台無しになってしまうのだから。

「うう……っ」

それどころじゃない。一度したおしっこはどこにも流れていかない。このお菓子の家の中に溜まってしまうのだ。もし溢れだしたりすれ
ば、床一面がびしゃびしゃになって、台無しになってしまう。

そんな事は絶対に許されないのだ。

(もう嫌よ……あんな家、戻りたくない……っ)

のきなグレーテルとは違って、ヘンゼルは継母の悪意に気付いていた。このまま家に戻れば、継母は双子にもっともっとひどいこ
とをしてくるに違いない。今だって、継母は双子を間接的に殺そうとしているのだ。

ぐっと爪を噛むヘンゼルに、グレーテルがぴょんぴょん飛び跳ねながら言う。

「お姉ちゃん、なんでじゃまするの……？ わたし、おしっこ……っ」

「……ダメ、ダメよっ！ 外で、外でしなさいっ！！」

ヘンゼルは、自分ももう我慢の限界に達しているくせにグレーテルにそう命令する。双子はそろってチョコレートのドアに掛けより、
ノブを捻った。

しかし、がちりと固まったチョコレートのドアはびくともしない。

「え……なんで！？ どうして開かないのよっ！？ 開きなさい…よっ！！！」

力任せにドアを叩くヘンゼルだが、ドアはびくともしない。外の冷たさですっかり硬くなったチョコレートは、まるで鉄みたいになってい
た。食べてしまおうにも、これではとても歯が立たない。

いつしか、双子はこのお菓子の家に閉じ込められてしまっていたのだった。

「そんな……」

愕然とするヘンゼルに、グレーテルがぎゅっと前を押さえながら言う。たとえ形だけとはいえ、目の前にトイレが、今にも漏れそうなお
しっこをするための場所があるのだ。お姉ちゃんとはいっても、双子のヘンゼルももう我慢の限界だった。

「ねえっ、お姉ちゃん……だめ……もうでちゃう……いいでしょ？ おトイレ、使ってもっ……」

「ダメよっ！！ だ、だって、ここ使っちゃったら……食べられなくなっちゃうじゃないっ！！」

「いいもんっ！！」

「よくないわよっ！！」

「じゃ、じゃあおねえちゃんはオモラシしちゃってもいいのっ！？」

グレーテルが叫ぶ。もちろんいいわけがない。ヘンゼルだって恥じらい深い女の子だ。オモラシなんて死んでもしたくはない。

「お姉ちゃん……お願い、おトイレ使わせて……っ」

切羽詰った妹の有様は、まるで自分が我慢しているのを鏡に映して見せられているようで、こみ上げてくる尿意をさらにつのらせる。ヘンゼルはぎゅっとスカートの足の間を握りしめ、それでも首を振り続けるしかなかった。

（やっぱり……ここ、魔女の家だったのよっ……）

ヘンゼルは悟る。きっと、魔女はどこかで二人のことを面白がっているのだ。おしっこをしたくてもトイレに入ることができずに、我慢してもじもじおしりを揺する双子のことを。

夜中にグレーテルがトイレが見つけれなかったのも、こんな『お手洗い』があるのも、全部魔女の仕業に違いない。

「あ、あ、だめ、だめ、お姉ちゃんっ……！！！」

「や、だめっ、押さないでっ、ひっぱらないでええっ！！！」

グレーテルがかすれた声を上げながらしゃがみ込む。

もはや、ヘンゼルもそれを止めることはできなかった。ふわあっと体が浮くような感覚とともに、熱い雫がじゅわっと脚の間に広がり、おしりまでを包み込んでばちゃばちゃと床に溢れ落ちてゆくのを呆然と感じるしかない。

地面に落ちてゆく滝のような水音。

「ウソ…！？ とっ、止まんない……なんで、やだ、おしっこ、オシッコでないでえ……！！」

「オモラシ、オモラシやだよお……でちゃう、でちゃう……」

双子のおしっこは、勢いも量も尋常ではない。激しく吹きつけられる水流が壁の根元に届き、ビスケットの壁はぐずぐずと崩れてゆく。お菓子の家がどんどんと双子のおしっこで壊れ、崩れだしていた。

ふたりの止まらないおもらしがあたりに大きな湖を作って行くのを、空に浮かんだ箒に跨って見下ろす影があった。

「——まったく、ひどいことをしてくれるもんだねえ」

長い髪と灰色のローブ、三角帽子をかぶった魔女はヘンゼルとグレーテルのおもらしをじっと見下ろしている。

森の魔女は、決して噂されるような人食い魔女ではない。森に住んでいるのは森に生えるキノコや苔をつかって魔法の研究をしているためだ。村の人々が魔女を恐れて森に近づかないうちは、一人で静かに研究ができてありがたかったのだが、最近では噂が広まり、こうやって子供を森に捨てる親が多くなっていった。基本的にかわいそうな子供を見捨てることができないおせっかいな魔女は、捨てられた子供たちを世話するため魔法で森の奥に大きな洞窟をつくて、そこで大勢の子供たちを育てていた。

「捨てられたのはかわいそうだけど、まったくとんでもない物で目印を付けてくれたものさ。少しは反省してもらおうかね」

最近はやっと余裕ができて、ようやく魔法の研究を再開しようとその矢先。集めにいったキノコや苔が残らず誰かのおしっこでぐちゃぐちゃになっているのを見て、魔女は腰を抜かしそうになった。

どうしても我慢できずに森の隅っこでおしっこをしてしまうくらいのことなら、魔女だって文句は言わない。しかしおしっこは一箇所だけではなく何十箇所も森を汚していた。さしもの優しい魔女もいかげんに腹に据えかねてしまったのだ。

そこで魔女は研究材料を台無しにした双子を見つけ、魔法をかけたお菓子の家に案内したのだ。

「うああああああんっ……ごめんなさい、ごめんなさいっ……オモラシしてごめんなさい……」

「つく、ひつく……ふええんっ……」

「やれやれだ。捨てられたくないって言っても、そこらじゅうでおしっこして回るなんて、いくらなんでも女の子失格だよ。ちっとは懲りてくれるといいねえ」

お菓子の家にあるお菓子には、ぜんぶおしっこが止まらなくなる魔法がかけてあった。それをおなか一杯食べたり飲んだりしたヘンゼルとグレーテルは、いつまでもおしっこが止まらなくなっていたのだった

——めでたしめでたし。

(初出：おもらし特区 S S 図書館 2007/10/13 改訂)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第4夜 ひらけゴマ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 10/13/2007 11:21:10

BODY:

ある日、悪戯好きのアリイがいつものように商売の売り上げを数えていた姉のカシイのところにやってきました。

アリイは女の子のくせにとてもわんぱくで、いつもあちこちを走り回って冒険しています。お姉さんのカシイはことあるごとにアリイに『アンタはもっと女の子らしくしなきゃダメよ！』とお説教をするのですが、アリイはまったく聞こうとはしないので、カシイはすっかり困っていました。

そうしてその日もアリイはいつものように、カシイにこの前してきたばかりの大冒険のお話をしているのです。

「……ねえ、まだ終わらないの？」

「もうちょっと。それでね、わたし、その洞窟の中で迷っちゃったの。朝からずっとオシッコしたかったのに、もうどうしようもなくって、我慢できなくなっちゃってね」

アリイの冒険は、街の西にある洞窟を探検してきたという話でした。あそこは美人の女親分が率いる盗賊団がねじろにしているところで、とても危ない場所として知られています。そんな場所には、カシイはぜったいにちかづいたりしないのですが、アリイはもちろんそんなことお構いなしに忍び込んでしまったのです。

そうして案の定、アリイは洞窟の中で迷子になり、しかもものすごくおしっこがしたくなっちゃったというのです。

「それでね、どんどんどんおしっこがしたくなっちゃって、もうあとほんのちょっとで出そうになっちゃって、もうダメだって思ってたんだけど……その時にね、盗賊たちが帰ってきたの」

「ふうん。で、アンタは見つかっちゃったの？」

「そんなことないよ。隠れたもん。わたしかくれんぼ得意だから。でね、盗賊の女親分が、盗賊たちをつれて洞窟の奥にある岩の前に行ってね、大声で“ひらけゴマ”って言うのを聞いたの。そうしたら、どれだけやってもびくとしなかった大きな岩がごどごどって音を立てて開いたのよ。その奥にはとってもきれいなお手洗いがあったの！！」

女盗賊たちは、ふだんから街の中でいばっているため、けっして弱みをみせようとはしません。だから『あたしたちはこんなにすごいんだぞ！！』というところを見せるために、街ではけっしてお手洗いを使わないのです。

だから盗賊たちは、その洞窟のなかにある秘密のトイレに魔法をかけて、合言葉がないと使えないようにしていたのです。

「それでね、盗賊たちが終わった後に、わたしもその合言葉で岩のドアを開けてお手洗いに入って、どうにか間に合ったのよ！！」

とても嬉しそうに自分の冒険のお話をするアリイ。けれどカシイはそんな妹の話に興味はありませんでした。おしっここの話なんてはしたない、と思いながらも渋々付き合っただけなのです。

なにしろ、カシイはアリイとは違って立派なレディなので、オシッコが我慢できなくてたまらなくなるようなことはないと思っていたからです。本当の本当は、そんなことは決していないのですけれど。

「へえ…本当なの？ アンタみたいなお子ちゃまがきちんと我慢できたの？ ちょっとくらいチビっちゃってたりして、パンツ汚したりしてたんじゃないの？」

「し、してないもんっ！！ちゃんと最後まで我慢したようっ！！盗賊、ぜんぶで40人もいて、すごく大変だったけどオモラシ

なかったもんっ！！」

「どうだかねえ。できっこないにきまってるわ」

「ふんだっ、わたし、お姉ちゃんとは違うもんっ」

ぶんぶんと怒って胸をはってみせるアリイ。とっておきの大冒険をはなしたのに、全然聞いてくれないカシイにアリイはあいそをつかしてしまっていました。けれどカシイはいつものことなので気にもとめません。

「アタシをアンタと一緒にしないでくれるかしら？　だれがそんなはしたないコトするもんですか。いいことアリイ、そもそも一人前のレディってものはねえ、ひとにトイレの場所なんて聞いたりしないものよ？　お手洗いを我慢しているなんてひとに聞かれたら恥ずかしいじゃない」

お姉さんぶって話すカシイに、アリイは首を傾げます。

「そうかなあ……それで間に合わなかったりして、オモラシしちゃったら、もっと恥ずかしいと思うけど……」

「お馬鹿さん。間に合わないわけがないじゃない。いいこと、アタシはレディなんだから、オモラシなんてし・な・い・の・よ。アンタみたいなお子ちゃまじゃないんだから。ほほほ」

「うーっ、お姉ちゃんのばっかっ！！　もうしらないからねっ！！」

そのときカシイは、アリイを馬鹿にしてばかりで、まるっきりアリイの話を聞いていませんでした。だからカシイは、目の前のたったひとだけのトイレのドアを開ける合言葉を、すっかり忘れてしまっていたのです。

そしてカシイは今、アリイのときとまるっきり同じに洞窟の中で迷ってしまっていました。足はがくがくと震え、昨日の夜からがまんしつづけたオシッコは今にも漏れてしまいそうです。

もう一度出口を探そうにも、ぶるぶると震える膝は言うことを聞いてくれません。

「あっ、あふうっ……開いて、開いてよお……ひらけ！！　ひらっ、けえっ……！！」

カシイは大岩をバンバンと叩きます。普通の木のドアならそれだけで壊れてしまいそうな勢いでした。けれど、そこにあるのは見上げるような大きな大きな岩なのです。カシイがいくら頑張っても、びくともしませんでした。

この向こうにトイレがあるのは分かっているのに、カシイはそこに入ることができません。カシイのおしっこはもう限界で、もう一秒だっ

てがまんを続けるのは無理なくらいでした。

それなのに、カシイはおしっこができないのです。

「なんで開かないのよおっ……ふざけ……っ、ないで……っ、ひらけ、ひらけえ……っ！！　開きなさいよおっ！！　アリイのときは開いたんでしょっ！？」

ドアを開ける合言葉を忘れてしまったカシイがいくら叫んでも、トイレのドアは開きません。

もうすぐここに盗賊たちがやってきます。アリイがしたようにこっそり隠れて合言葉を聞けば、カシイもオシッコを済ませることができるでしょう。でもカシイには、40人の盗賊たちが全員オシッコを済ませるまでなんて、絶対に我慢できっこありませんでした。

「ひっ、ひらけ……おおむぎ！！」

何度試しても、岩は閉じたままです。それでもカシィは諦めるわけにはいかないのです。だって、オモラシなんて立派なレディにゆるされることじゃありません。

脚の間にじわあっと広がる熱い感触に、カシィはますます焦ります。

オモラシなんて、目の前にトイレがあるのにオモラシなんて。お姉さんとして絶対にありえないことです。

「ひらけ……か、からすむぎ！！ そらまめ！！ ひ、ひらけ……っ！！」

少しずつ染みが広がるおしりをもじもじと押さえながら、カシィは思いつく限りのありったけの言葉を叫びます。けれど、どれもこれも間違っていました。

それもこれも、アリィのお話を馬鹿にして真面目に聞いていなかったからなのです。

「ひ、らけえっ……開いて、よお……お願いっ……こんなところで、お、オモラシしちゃうじゃないっ……！！ あああっ、でちゃう、でちゃうっ！！」

カシィの悲鳴がむなしく洞窟に響きます。

けれど、ずっしりと大きな岩はけっして動こうとはせず、カシィはいつまでも腰を揺らしながらおしっこをがまんしなければいけないのでした。

やがて、街から帰ってきた盗賊たちが、いつものようにがまんし続けたおしっこを済ませるために洞窟に入ってきました。

けれど、盗賊たちはすぐに異変に気付きます。

「お頭、なんだか変です。知らない女の子がいますよ」

盗賊たちの一人が、洞窟の奥に座り込むカシィを見て言いました。ざわざわと40人の盗賊たちはいっせいに騒ぎ出しました。このトイレのことは盗賊たち全員の秘密です。他の誰かが知っているはずがないのです。

「おい、どうしたんだい？」

落ち着かない仲間たちのお喋りを聞いて、盗賊の女親分がやってきました。

そして、トイレの前の大岩にすがり付いてしゃがみ込み、うつむいてしまっているカシィを見て言いました。

「なんだいお前は。いったいどこから入ってきた？」

「あ、ああ……だめ、お願い……お手洗いに……オモラシ、しちゃう……っ」

ぐずぐずと泣きながら喋るカシィが、びくっと震ながら言います。けれど、もうとっくにカシィのお尻の下には大きな水たまりができていて、いまもじょぼじょぼとおシッコが漏れ続けています。トイレの前に泣き崩れてしまったカシィの足元で、みるみる水たまりが広がってゆきます。

「うわっ、オモラシしてるぞ、こいつ！！」

「あーあ、オシッコか？」

「なんだ。トイレまで間に合わなかったんだな……」

「おいおい、こんなところで粗相（※おもらしのこと）しないでくれよ」

盗賊たちはくちぐちにカシィを指差して笑います。

みじめでどうしようもなくなって、カシィは泣き出してしまいました。小さいアリィだってオモラシをしなかったのに、お姉さんで立派なレディのはずの自分がオモラシをしてしまうなんて信じられなかったのです。

けれど、じんわりと濡れる下着はけっしてかん違いではありません。その証拠に、カシィのおしっこはまだまだ止まらないのです。

「うう……イヤぁ……アタシは違うのにっ……お子ちゃまじゃないのにっ……」

「なんだなんだ。こんな所でオモラシかい。もう子供じゃないんだろうに、なんてみっともないんだ」

「うわああああんっ……」

大きな川を作って流れてゆくカシィのおしっこを見て、女親分があきれたように言います。

カシィは情けなくて死にそうになって、妹のアリィを馬鹿にしたことにごめんんなさいを言いながら、いつまでもおしっこを漏らし続けるのでした。

——めでたしめでたし。

（補足）

このあと本編にはカシィがオモラシをしたことを街中に言いふらした40人の盗賊たちに仕返すため、アリィが召使いのモルディアナと一緒に盗賊を家に招待し、全員にたくさんお酒とジュースを飲ませてトイレに行かせずにオモラシさせてしまう話や、女親分の機転でモルディアナ本人もたくさんお酒とジュースを飲まされ、必死におしっこをがまんしながら自慢の踊りを披露する素敵なシーンなんかもあるのですが、スペースの都合で割愛させていただきます。くわしくは世界オモラシ児童文学全集を参照ください。

（初出：おもらし特区 SS図書館 2007/06/15）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第5夜 鶴の恩返し

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 10/13/2007 11:23:37

BODY:

おつうは本当に良く働きました。

与ひょうよりも先に起きていてご飯の支度をし、与ひょうが寝るよりも遅くまで起きていて繕いものに精を出しています。一体いつ眠っているのだろうと思うほどでした。それだけではありません。おつうはご飯もあまり多くは食べませんでしたし、与ひょうが用事で出かけて家に戻る時もきちんと与ひょうを待ち、なにかあれば必ず与ひょうに譲り、いつも与ひょうに優しく笑いかけてくれるのです。

あの反物のことといい、まるで人間ではないみたいだ——と、与ひょうがおつうのことをそう思うのも不思議はありませんでした。なにしろ、与ひょうはおつうが厠に立ったところを見たこともないのです。

いったいおつうが何のために自分に尽くしてくれるのか、そして本当は何者なのか。何度も聞こうと思う与ひょうでしたが、そのたびにぐっとそれを飲みこんで暮らしていました。

与ひょうはおつうとふたりで暮らし始めて、はじめての春が訪れました。このころになると与ひょうとおつうはすっかりうちとけて、反物をたっぴり売り払ったおかげで手に入れたお金で、のんびりと暮らしていました。おつうの反物はすっかり町でも評判になり、とても高い値段で売れるになっていたのです。

「どうじゃ、大黒屋の大旦那さまも大層お気に入りじゃった。これでしばらくは表に出んでも暮らしていけるぞ」

今日与ひょうはいつも以上に上機嫌でした。町の呉服屋に持ちこんだおつうの反物が、いつもの何倍もの値段で売れたのです。見た事もない大金を前に、与ひょうは浮かれていました。お土産をいっぱい買って戻った与ひょうは、町で起きたことを面白おかしくおつうに話して聞かせます。

けれどおつうはそんな与ひょうを見かねたように言うのです。

「ねえあなた、ゆっくりするのもいいけれど、たまには外に出て働いてください」

「何を言ってるんじゃ、まだこんなに金もある。それにいざとなれば、またあの反物を売ればいいことじゃ。……また織ってくれるんだろう？」

「……え、ええ、でも……」

どこか歯切れの悪いおつうに、与ひょうはにっこりと笑いかけます。

「そんなことよりほれ、この前買ってきた干菓子だ。お前も食べろ。うまいぞ」

「はい……」

心配そうなおつうの顔を晴れやかにしてやろうと、与ひょうは色々なものを持ちだしては見せびらかしました。全部、反物を売りに町まで行った帰りに買ってきたものです。

けれど、与ひょうが何をしても、何を見せてもおつうの顔は曇ったままでした。

何とはなしにおつうのその顔が気にはなったものの、ひさしぶりの酒に酔っ払った与ひょうは、そのまま眠ってしまったのです。

そうこうしているうち、一日が過ぎ二日が過ぎ、五日が過ぎ十日が過ぎて、反物のお金もだんだんと減り始め、与ひょうは困るようになりました。具合の悪そうなおつうを案じて、与ひょうは一日中おつうの側を離れず、町まで使いを頼んだりしておいしいお米や魚を買ってきてもらっていたのですが、もちろんそんなことをしてはいくらお金があっても足りません。

そこで与ひょうは、またおつうにあの反物を持ってきてもらうように頼むのです。

「なあ、そろそろ金がなくなってしまう。おつう、またひとつあれを織ってきてくれ」

「え、ええ……でも、あなた、その……」

「なあに、これで最後、最後にする。約束だ。……な？」

与ひょうが前にもそんなことを言っていたのを、おつうは覚えていました。けれどここで強く断れない理由がおつうにはあったのです。

「では、あなた。決して見ないでくださいね」

「ああ、わかってるわかってる、行ってきてくれ」

「あなた、約束ですよ」

「ああ。もちろんだ、約束だ。」

そう何度も念を押して、おつうは奥の間に入ってゆきます。

やがて、ぎい、ぎい、ばたん、というはたおりの音が響き始めました。

与ひょうはごろりと横になって、煙草に火をつけます。昔の与ひょうならこの間に一仕事すませてくるべえと思い、煙をたがやしてきたのですが、おつうのおかげで贅沢な暮らしに慣れてしまった与ひょうは、すっかり家の外に出なくなっていました。

「……………」

ぎい、ぎい、ばたん。ぎし、ぎし、ばたん。

それにしても、今日のはたおりには時間がかかっていました。一番最初の時は、それこそ煙草を一服ふかしている間に織りあがっていたのですが、今度は待てど暮らせどふすまは空きません。

気のせいかな、いつもよりはたおりの調子が悪いようにも聞こえます。

与ひょうはすっかり待ちきれなくなって、まだかまだかと囲炉裏の前を行ったり来たりし始めます。それでもおつうはさっぱり出てこず、時には突然ぎい、ぎい……とはたおりの音が止まってしまうこともありました。

「……おかしい。変じゃ」

さすがの与ひょうもとうとう待ちきれなくなって、与ひょうはふすま越しに声をかけました。

「なあ、まだか、おつう」

「……………」

「どうした、おつう。まだかと聞いているんじゃ」

「……………は、はい」

どこか、おつうの声も苦しげです。

不安になって、与ひょうはふすまに手をかけようとした。けれど指が触れようとしたところで、それをおつうの声が制します。

「あなた、み、見ないでくださいね。約束しましたよ」

「あ、ああ。じゃが」

いくらなんでも、おかしいことが多すぎました。

大金持ちになって毎日なまけていた与ひょうでも、心根の優しさまでは変わっていません。苦しそうなおつうに声をかけます。

「どうかしたか、おつう。なんぞ身体でも悪いのか。無理はせんでもええ。明日でも明後日でも、構わん。今日は休んだらどうじゃ」

「い、いえ……そんな、とても……」

おつうの声はあきらかにうろたえていました。

「もうええ。わしが悪かった。無理をさせておったんじゃな。すまなかった。……もう今日早めにして、休め、おつう」

「だ、大丈夫です……す、少し考え事をしてしまっ……あなた、あと少しで全部できあがります」

そう言って、ふすまがと開いて、そこからおつうの手が伸びてきました。

与ひょうの前に指したされたのは、ずいぶん短い反物でした。

「ほ、ほら、もうこんなにできています……ですから、できあがったらすぐに町へ売りに行ってくださいまし」

「……お、おう」

けれど、おつうが差し出した反物は、しわくちゃで汚れていて、とてもとても売り物にはならないような貧相なものでした。いつもの出来栄えとはまるっきり違う反物に、与ひょうは言葉を失ってしまいます。

「で、では……あと少しですから、絶対に、絶対に見ないでくださいましね」

「ま、待ておつう。何があったんじゃ、これは……」

「お願いします、見てはいけませんよ……っ！！」

焦ったようなおつうの声に、与ひょうはどうも我慢できなくなってしまいました。

ぎし、ぎし……ぎし、ぎし……ぱたん。ぎい……

不安定な調子の機の音が、与ひょうの不安をいっそう掻きたてます。

(……許せ、おつう)

大事な大事なおつうとの約束でしたが、これだけおつうの様子がおかしくては黙ってはいられません。与ひょうは足音を潜めてふすまに歩みより、ゆっくりと押し開けて、奥の間の様子を覗いてしまいます。

開いたすきまの向こう——そこで起きていたことを知って、与ひょうはあっと声を上げてしまいました。

ぎし、ぎし、ぎい……ぎし、ぎしっ、ぎし……

おつうは機の前で着物の前をはしたなく緩め、片手でぎゅうぎゅうと脚の間を押さえていました。もう一方の手は辛うじてはたおりの前に届いていますが、ふらふらと震えていてとても見ていられない危なっかしい手つきです。

それよりも与ひょうの目を引いたのは、おつうのおなかでした。

緩められた着物の下で、おつうのおなかをはちきれんばかりに膨れ上がっていました。まるで赤ん坊でも入っているように、ぱんぱんに丸くなり、今にも破裂してしまいそうです。

けれど、それがなんであるのか、与ひょうにはすぐにわかりました。

「ああ……っ、だめ、だめ、もう……漏れちゃう……う！！」

おつうの手が止まり、両手が脚の間にねじ込まれます。

ぎし、ぎしとおつうが身体をよじるたびに床がきしみ、寄せられた脚がせわしく動き回ります。おつうが何を我慢しているのかは、何よりもあきらかでした。

「お、おつう」

「え……きゃ……きゃあああああっ！？」

思わず与ひょうが漏らした声に、おつうは跳ね上がるように立ちあがりました。その手がはたおり機を突き飛ばして、がたんと大きな音を立てます。ぱさっと広がったくしゃくしゃの反物の上に、おつうはふらふらと手を突きました。

「お、お前、まさか、あれから一度も厠に」

「あ……ち、ちがうです、これは、そのっ」

おつうは首を振りますが、ふるふると震えている腰と、ぴったり寄せられた膝が、おなかの中に途方もない量の恥ずかしい熱湯を堰きとめていることをはっきりと知らせていました。

おつうは、とんでもないくらいの恥ずかしがり屋でした。与ひょうと一緒にいる時は一人で厠に立つことも出来ず、じっと我慢しているくらいだったのです。

与ひょうが畑に出かけていた頃は、誰もいない時を見計らって一日分のおしっこをこっそりと済ませていたのですが——大金を手に入れてしまったせいで与ひょうがすっかり家から出なくなって以来、どうしようもなくなってしまい、おつうはおなかที่そんなになるまでずっとずっと我慢を続けていたのです。

こうして一人になれるはたおりの時だけが、恥も外聞もなくして脚の間を押さえて我慢できる時間だったのです。

「あ、あ、あっ、あーっ……」

おつうの腰がぐねぐねと動き始めます。与ひょうにだけは見られまいとじっと我慢していたおつうですが、立て続けの衝撃にとうとう我慢が限界に達してしまったのです。

そもそも、普通なら絶対に我慢のできるはずのない量のおしっこです。おつうはもう何日もあんな風になってしまったおなかを抱えながら、毎晩与ひょうに付き合ってお酒を飲んでお菓子を食べていたのです。さぞ喉が渴いたことでしょう。

けれど、いくら水を飲んでも飲んでも、おしっこはおつうのおなかに溜まるばかりだったのです。

「や……だめ、だめ……見ないでえ……っ」

絞りだすような細かい声と共に、緩められたおつうの着物の裾から、ぶしゃあっと激しい水流が弾けます。

色濃く黄色いおしっこが激しく滝のように流れ落ち、おつうの着物と織ったばかりの反物をぐしゃぐしゃに濡らしてゆきます。

「あ、ああ……ち、ちがうです、あなた、これは……違うんです……っ」

すさまじい勢いで进り、ばしゃばしゃと雫を飛び散らせて白い反物と白い着物を染め上げてゆく黄色い海。何日も何日も、それこそ気の遠くなるほど我慢を続けていたおつうのおしっこは、いつまでたっても終わりそうになりませんでした。

おつうがぐねぐねと腰をよじるたびに、滝のようなおしっこがあちこちに飛び散ってゆきます。一度破れてしまった堰は、もはやとても止めようとしても止まらないのです。

「ああ……あああああ……うう、ああああ……」

おしっこを漏らしながら泣き崩れるおつうから、与ひょうは目を離せずにいました。

はじめておつうにあった時と同じような、焼けるような激しい胸の高鳴りが、与ひょうを捉えて離しませんでした。うつくしく可愛いおつうが、可憐な悲鳴を上げながらおしっこをもらし続ける——それは、与ひょうがいままで一度も見ただことのない衝撃的な光景でした。

「おつう……」

「ああ、あなた、見ないで、見ないでくださいまし……っ」

ただただ呆然と見つめ続ける与ひょうの前で、おつうはぱんぱんに膨れがあったおなかที่空になるまで、ずっとずっと長く、おしっこを漏らし続けるのです。

……それからしばらくして。

町では大黒屋の主人が新しく着物を仕立てて売ようになりました。

その着物は、まるで黄金のようにきらきらと美しく輝く色に染め上げられた、とてもきらびやかな反物でできていたのです。

山奥に住む与ひょうが売りに来たというその反物は、たちまち周囲の評判となり、十倍の重さの金と引き換えでも飛ぶように売れてしまいました。金のように輝く着物で着飾る商家や武家の娘を遠くから眺めながら、一体どのようにすればあんなにも綺麗な反物ができるのかと町の人々は首を捻って噂合ったのです。

そして、おつうと与ひょうは数えきれないくらいのお金を貰って、いつまでもいつまでも幸せに暮らしたということです。

——めでたし。めでたし。

(初出：旧ブログ書き下ろし 2007/09/27)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 霧沢学院・1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: ノーション
CATEGORY: ノーション

DATE: 10/12/2007 11:28:42

BODY:

永久我慢スレにおいて提案された、オシッコをしない女の子の偶像＝ノーションというネタに触発されて書いた話。

<hr size=1 />

都心から電車で1時間とすこし。郊外と呼ぶにはやや森深い園に佇む私立霧沢学院。

ここに通うのは10代の、公立で言うならば中学と高校にあたる女の子たちだ。彼女達を尋ね、学院に足を踏み入れる事があるならば聞いてみるといい。

——トイレはどこですか、と。

返ってくる言葉は決まっている。誰に聞いても、みんなきよんとしてこう言うだろう。

「……何言ってるの？ 女の子はお手洗いなんかいかないんだよ」

と。

そう、学院を少し歩きまわってみれば、あちこちに設けられている「洗面所」や「お手洗い」が普通とはまるで違っている事に気付くだろう。一般に“トイレ”を——オシッコをするための場所として示すその単語は、ここでは文字通り顔や手を洗って身支度を整える場所ではない。

この学院には本当に、女子トイレは設けられていない。

霧沢学院は、ノーション達が暮らしている学院なのだ。

もちろん、ノーションなんて幻想である。

サンタクロースがいないように（少なくとも、世界中の子供達に一晩でプレゼントを配ってくれるたったひとりのサンタクロースがいないように）、オシッコをしない女の子なんていない。

が、霧沢学院はまるでノーションでなければ暮らしていけないような構造をしているのだ。

学校には職員用以外にトイレはないし、そこも職員用のカードキーがないと開かないようになっている。

寮の部屋にも、部室にも、およそ学院の中の全ての設備にトイレはない。

個室に付いているバスルームもただのお風呂と洗面所。トイレという生活に必須のはずの設備は、まるで事自体が不自然であるかのようになくなっているのだ。

学院には中等部に一学年4クラス、高等部に一学年3クラスで、およそ600人ほどが生活している。

通学は許可されておらず、全員が寮生活だ。厳格な十字聖教の教えと厳しい規律の中で礼儀作法や学問を身に付け、ノーションとなるべく生活している。

しかし、前にも述べたようにノーションなんてものは存在しない。

では、ここで生活する600人もの少女たちは一体どこでどうやってオシッコをしているのか。

実はそれは、誰にもわからない。学院に入学した少女達は、合格通知と一緒に新入生説明会でこっそりと、学院の様々な場所に巧妙に隠された自分用のトイレの場所を教えられる。一人の生徒が学院で生活する6年の間、使うことを許されるトイレはただこの1ヶ所だけである。

この広い学院で、たった1ヶ所、オシッコをする事を許される秘密の場所。しかしそのことを口外するのは校則で固く禁じられている。たとえ先輩後輩、親友や同級生、ルームメイトにさえも秘密にしなければいけない。もちろんオシッコを済ませているところを見られるのなんてもってのほかで、トイレに入るところや出てくるところも誰にも見られてはいけない。

もし気づかれてしまったら、厳しい罰則が待っている。そして、3回以上トイレを使うところを——オシッコをする事を知られてしまったら、たとえどんな理由があろうと退学になってしまう。

ここまで厳しい規律が設けられているのには、もちろん理由がある。

ノーションを目指す女の子が社会に出て本物のノーションとして振舞うには、誰にも……それこそ恋人や家族にも気付かれずにオシッコを我慢し、こっそりとオシッコを済ませる為の技術を身につけなければならないからだ。たとえ女の子同士であったとしてもそれを明かしてしまうような女の子は真のノーションには相応しくない。

このあまりに徹底した秘密主義のため、毎年学院の新入生の半分くらいは、自分だけがはしたなくオシッコを我慢していて、他の子達は本当にオシッコなんてしないノーションなんじゃないかと誤解してしまうこともあるほどだ。

霧沢学院には、上級生が入学の決まった新入生候補を招いて行なう伝統的な“洗礼”がある。

これは、新入生が本当に過酷な学院生活に新入生が付いていけるかどうかを選別するためのもので、決して恨みや陰湿なイジメによるものではない。このような試練を耐えられない女の子は、この学院で暮らしてゆく事などとてもできないからだ。

入学を控えた三月半ば、上級生達は新入生候補を学院に招いて、学院の案内をする。

もちろんノーションになるためにここに通う女の子たちだ。いまさら学院のどこにもトイレがない事に驚いたりはない。たとえ何時間立ちっぱなしでトイレに行きたくてもちゃんとガマンする、しつけの行き届いた女の子たちばかりだ。

そして学院の案内が終わると、上級生たちは新入生を歓迎会、と称してお茶会に招く。

このときお茶会で振舞われるのは、特性の利尿成分入りのお茶だ。学院では喉を潤す飲み物というまずこのお茶しかない。普

通の女の子ならひとくち飲めば1時間はトイレに往復しなければいけないくらいの強力なものだ。

甘いお菓子をたくさん出されて、新入生達は喉の渇きを理由にお茶をたくさん飲んでしまう。

気付いた頃にはもう遅い。新入生達はすさまじい尿意に襲われる事になる。

もちろんこのとき、同じお茶を上級生達も同じだけきちんと口にする。それまでノーションを目指して訓練し、入学試験を通して学院に通うようになった新入生だ、普通の子に比べればずっとたくさんのオシッコを我慢できるし、激しい尿意にだって耐えられる。しかし学院で過ごす上級生たちはそんなものよりもずっと過酷な特訓を日常的に受けて暮らしているのだ。

ほどなく新入生の子は過去感じた事もないほどの猛烈な尿意に襲われ、俯いて脚を震わせ、」まともな受け答えもできなくなってしまう。もうどうしようもないという我慢の限界まで追いこまれ、けれど優雅なお茶会はまるで休憩など挟まず続き、上級生達は（場合によってはほかの新入生も）楽しそうに話し続けている。新入生はここではじめて、自分とノーションとの違いを思い知るのだ。

そうして、なおもしばらく新入生が限界寸前のオシッコを我慢し続けているのを見計らって、上級生の一人が突然不自然にそわそわしはじめる。この役目は新入生に学院を案内して一番打ち解けた上級生が務める事が多い。新入生は一番優しそうな“先輩”が急に不安になりだしたことに気付いて、その様子を観察し始める。

新入生がはっきりこの先輩役に注目したところで、上級生はさらにはっきりと『ガマン中』の様子を見せつけ、実にさりげなく、けれど不自然ないいわけで席を立つ。

そして、もうどうしようもなくなっている新入生がこれ幸いとそれに続いて席を立ち、あとを追ってくるのを確かめながら、上級生は廊下の突き当たりやカーテンの隙間、清掃用具入れの陰など、いかにも『それっばい』場所に走りこんでゆく。

そして数分すると、さもすっきりした笑顔で、安堵の息をこぼして姿を現し、鼻歌を歌って見せたりしながらお茶会に戻ってゆくの

実はこのとき、上級生はオシッコ我慢の限界でもなんでもないし、駆け込んだ場所もトイレなんかではない。なんにもかも、全てが演技、お芝居だ。

しかし余裕のない新入生はここで厳しい選択を迫られる。学院から割り当てられた自分のトイレはまだ使えず、“お手洗い”にはオシッコのできる場所はなく、仮に使えたとしてもとてもそこまで戻れない。そして目の前には上級生が使っていらしき別のトイレがある——そういうことになるのだ。

しかし、もちろん新入生が廊下の突き当たりや清掃用具入れをいくら探してもトイレはみつからない。当たり前だ。そんなものは元々ないのだから。

この時、ノーションの素質のある聡い新入生は自分が騙されてしまった事を悟り、上級生達が自分とはかけ離れた存在である事を思い知る。

そうなった新入生は、この“洗礼”をパスしたも同然だ。気付かれないように自分のトイレまで向かって、学院生活で最初のオシッ

コを済ませるか、いけないこととされている他の女の子のトイレを探して使おうとした罰として、さらに頑張ってお茶会に戻り、最後までガマンを通すかもしれない。

しかし——我慢の限界の尿意を持て余し、すっかり『オシッコができる』と思いこんだ状況からさらに期待を裏切られたショックに耐えきれず、とうとうスカートの前をぎゅっと掴み、オシッコで制服と下着をびしゃびしゃに濡らしてしまう生徒もいる。

この“洗礼”でのオモラシは、入学前という事もあり慣例的に誰も見て見ぬ振りを通し、規律違反には数えられないが——この経験で学院の真実を思い知ったまま、入学を辞退する生徒も多い。

そうなった女の子は、ノーションへの憧れを思いきって振りきり、トイレに行ってもオシッコをする普通の女の子としての人生を歩む事も多い。

ノーションとしての生活は過酷だ。ノーションは多くの女性と、そしてほぼ全ての男性の夢、幻想を背負って立っている。苦難を乗り越え実際にノーションとして暮らす女の子たちは、ほぼその全てがノーションを目指す女の子たちに自分のような辛い思いをさせたくないと思っているという。

学院の創設者、霧沢雫女史は語っている。

この学院は、全ての女の子の夢を、そして女の子自身を守るためにあるのだと。

——霧雨霽の世界探訪

『ノーションの楽園・霧沢学院を尋ねて』

(初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 188-195 2007/03/19)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 近未来のノーションエイジ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: ノーション

CATEGORY: ノーション

DATE: 10/12/2007 11:31:44

BODY:

「はい、それでは、今日の授業をはじめます。

今回は二十世紀末から二十一世紀初頭の経済社会の混乱とについてお話をしましたね。今日はそれに続いて、当時の社会倫理の乱れについての授業です。

その当時、まだ今のように科学や技術が発達しておらず、栄養の摂取にも自然に育てられた肉や野菜といった非効率な方法で生産された食材を使われていました。現在のようにクローン技術や遺伝子操作を推し進めたバイオペラントでの栽培法が危険性を孕んでいると判断され、敬遠されていた時代でした。これは前回の授業でもちょっと話したことです。

その結果、当時の人々が食べていた食物には多くの不要な成分が含まれ、体内で消化吸収しきれなかった不要物は排泄、という形で処分されていたのです。……ほらそこ、恥ずかしがらないの。これも大事な勉強ですよ。ちゃんと前を向いて授業を受けなくちゃダメですよ」

「……こほん。もちろん、今の時代にはとても考えられないことですが、当時は男の人だけではなく女の子のためにもトイレというものが作られていました。女の子もオシッコをして当然、と考えられていた時代だったのです。

ですが、女の子がオシッコをするなんてとんでもないことです。……当時もそれに気付いていた先進的な女の子たちは、それとできるだけオシッコをしないように、トイレに行かないようにと懸命に努力をしていました。

重ねて繰り返しますが、その時代は食べ物が変わり、飲み物も今とは違います。女の子もオシッコをしても普通のことだと思われていましたから、そうやってトイレに行かない女の子は周りからとても不思議な目で見られたそうです。馬鹿げた、という意味の『ノーション』なんて呼ばれていた時代もあるくらいですから、当時の常識からしてみればよっぽど変なことだったのでしょう。——はい、なんですかチエリさん」

「……そうですね。もし、本当にオシッコをしなくなってしまうのが当たり前の社会だったとしても、女の子ならそんなことは決して口に出さないのが最低限のマナーです。けれど当時は残念なことに、そんな常識もまだ完全に確立してはいませんでした。

いくつかの女の子はそれに気付いて、オシッコを我慢することを死ぬよりも恥ずかしいことだと知っていましたが、多くの女の子にはまだそんなマナーは浸透してはいませんでした。オシッコがしたいなんてことを口にしたり、時には人前でオシッコがしたいのを我慢することができなくなって、ぎゅっとオシッコの出るところを押さえるような、今では考えられもしないとっても恥ずかしい格好を、あろう事かみんなに見られてしまうこともあったそうです」

「はいはい、静かに。お喋りは休み時間にとっておいくださいね。

いつも言っていますが、今の常識で昔の事を考えてはいけませんよ。その頃はまだ、『女の子がオシッコをしない』というごくごく当たり前の常識がなかった時代なのです。女の子がオシッコをしたり、トイレに行きたいのを我慢するなんてことが当たり前であるという考え方は今ではとても考えられないことですが、そんな迷信こそが普通に信じられていた時代があったという事を覚えておかなくてはなりません。

これは、女の子たちが長い間受けてきた偏見に私たちのお母さんやお姉さんが力強く立ち向かい、打ち破って来たことの証でもあるのです。特にこの学院に通って、昔のことを勉強している皆さんは、そのことを忘れずにいなければいけません。いいですか？」

「皆さんの中にも、お祖母様やひいお祖母様から、戦争の前の、昔のお話を聞いた人はいますね？ 二十世紀から比べれば皆さんのお祖母様たちが女の子だった時代もずっと進歩していますが、それでも今のように女の子がみんなトイレに行かないというのがどこでもいつでも当たり前の世の中ではありませんでした。

大戦が終わって30年も経った頃には、先進国ではほとんどの国が女の子のトイレを撤廃して、女の子がトイレに行かないことが常識になっていましたが、ごく一部の人たちがこっそりトイレを作って使用していたという記録もあります。その頃はまた、女の子がトイレに行くことがあるなんて迷信が根強く残っていた時代なのです。皆さんのお祖母様たちは、そんな偏見とずっとずっと戦い続けて、今の素晴らしい社会を作り上げてきたわけです。

皆さんはそのことをきちんと考えたことはありますか？ ……もしそうでない子がいるなら、これを機会に昔のことを調べてみるのもいいかもしれませんね」

「さて。話を元に戻します。そうした皆さんのお祖母様たちの活躍は、長い年月をかけて実を結び、とうとう国連協定に基づいて、W T D……全世界女子トイレ撤廃条約が締結されました。これは皆さんも知っているの十月十日、今から30年前の事です。その中心となったのがこの霧沢学院の生徒会でした。世界に先駆けていち早く女の子にトイレは不要という宣言を打ち立て、多くの女の子たちの賛同を集めたことは皆さんもよく知っていますね。

……こら、誰ですか、知らないなんてことを言うのは。自分の通っている学院の事です。これくらいはきちんと勉強しなければダメです。いいですか？

最後のトイレが取り壊され、世界の全ての国から女の子のトイレが撤去されたこの日は、今も全世界で女の子の祝日となっていますね。ただのお休みだと思って過ごしていた人は、今年はきちんとこの事に感謝して1日を過ごすようにしなければいけませんよ？」

「それ以来この国でも法整備が進み、いまでは女の子がトイレに行くなんてことを噂するだけで厳しく罰せられる厳密な社会の仕組みが完成しました。この陰にも学院の卒業生達の地道な活動がありました。先生はむしろ、生徒会の人たちの表に立っての目立つ活動よりも、こうして一歩ずつ周囲の偏見を解いていった事に対する功績が大きいと考えています。なにしろ二十世紀も信じられていた幽霊の存在は、今もこうして信じられていますから。非科学的だと断定することはできても、皆さんの中にも心のどこかで信じている人は多いでしょう。つまり、迷信をなくすということはとてもとても大変なことなのです。そこに対す評価はもっと高くてもいいのではないかと思います。

……さて。少し話が脱線しましたが、こうしてとうとう『女の子がオシッコをする』という非科学的で無茶苦茶な迷信は打ち砕かれ、今のような素敵で平和な社会ができあがったのです。それではテキストの49ページを開いてください——」

「これが当時の保健体育と理科の教科書に載っていた図です。ちょうど皆さんくらいの年齢の女の子と男の子の身体の断面図が載っていますが、このとおりどちらにも腎臓と膀胱——要するに、オシッコを作る臓器と、オシッコを溜めておくための臓器が書かれています。驚くべきことに、すでに月にまで人類が到達していた当時でも、女の子も男の人と変わらずオシッコをするのだと信じられていたのです。

今ではとても信じられないことではありますが、これよりもずっと昔、地球は動かずに太陽のほうで地球を回っているのだと信じられていたり、ビタミンの不足で起こる脚気が伝染病だと思われていた時代もあったことを考えれば決して不思議なことではありません。当時の女の子たちも、またはっきりと自分の身体の事を意識せずにいたり、オシッコについて強く反論するのは恥ずかしいという意識から、この迷信を受け入れてしまっていたのです」

「ええ。そうですね。トイレやオシッコの話は確かに恥ずかしいですけど、女の子がオシッコをするなんて誤解されているほうがその何千倍何万倍も恥ずかしいことです。ではなぜ、当時の女の子たちはそれに反論しなかったのでしょうか？ ……ユミさん。少し落ち着いて先生の話聞いてください？ ユミさんは知っていても、他の子が知らないことがあるかもしれません。きちんと知っていることでももう一度、覚えていることに間違いがないか確認することも授業のひとつですよ。

はい、では次のページには、はじめてお母さんになる女の子のために、トイレのしつけについて説明してあるパンフレットが載っています。ここでも、男の子だけでなく女の子のためにもトイレのさせかたを教えるように書かれています。女の子の赤ちゃんにオムツを履かせたり、トイレでパンツを汚さないようにする方法も書かれています。これも、当時は本当に女の子もトイレに行くと信じられていたという証拠です」

「今でこそ、女の子はもちろん男の子だって幼稚園にもなれば女の子がオシッコを我慢したり、トイレに行くなんてことを信じている子は誰もいません。

ですが最近の研究では、こうして生まれた時から女の子はトイレに行くものだということを教えられ続けていたために、いつしか女の子はオシッコをするものだという常識ができてしまっていたと考えられています。これは一学期の授業で勉強したいいわゆる“刷り込み”という現象ですね。ですからこの時代、ただしくきちんとオシッコをしなかった——当時の人の考え方で言えば、オシッコをしようとしなかった女の子たちは、とても不自然なことをしているという偏見にいつも晒されていたのです。

……どれだけ大変で恥ずかしくて、苦しいことか、皆さんは想像できますか？ 女の子がトイレに行くわけがないのに、オシッコをしないのか、トイレに行かないのかと、死ぬよりも辛い恥ずかしいことを毎日言い続けられる生活ですよ」

「次のページは、その頃に作られていた女の子のトイレです。こんなマークが女の子のトイレを表すマークとして使われていました。右の、男の人のトイレのマークは今でも使われていますね。

女の子のトイレの中には、このように個室と呼ばれる小さな部屋があって、女の子が誰にも見られないようにオシッコをできるという事にされていました。この国では女の子のオシッコのしかたには二通りあるとされていて、ひとつはこういう洋式と呼ばれる穴の空いた椅子に座って、その下にオシッコをするという方法。もうひとつは、……ちよつと先生も説明するのが恥ずかしいですけど、和式と呼ばれるこんな場所をまたいで下着を下ろしてしゃがみこんで、オシッコをするという方法です。これが女の子が気持ちよくオシッコができる方法だと信じられていたのです。

……はい静かに、静かに。授業中ですよ。皆さん静かに。……ええと、ではミハルさん。この二つからわかる事はなんですか？」

「……そうですね。ここで知っておいて欲しいのは、当時も女の子が人前でオシッコをするという事は恥ずかしいと考えられていたことです。こんな格好をしなければいけないことになっているのですから実に当然ですけど。ちなみにこの頃も今と同じで、男の人がオシッコをする時に使うトイレには、こんな個室はありません。

そして、このように個室の壁には音消しといって、オシッコをする時の音が聞こえないようにする工夫がしてあって、女の子がトイレに入ってもいつオシッコをしたのかわからないようにするという習慣があったことも知られています。……まあ、きちんと考えれば、女の子がオシッコをしている間ずっと音が鳴っているわけですから、逆にいつオシッコをしているのか知らせているようなものなんですけれど、これはどうしようもないことですね。なにしろ女の子は本当はオシッコをしないのに、男の人と同じようにオシッコをすると考えられていたのですから、少しくらい考え方に矛盾があるのはしかたのないことです」

「こうした様々な誤解をひとつひとつ解消しながら、『女の子がオシッコをしない』ということはゆつくりと社会に示されてきました。有名な実験で、女の子が10人で10日間の間グループを作って共同生活し、一度もトイレを使わないことを証明したノーションの

公開実験というものがあります。いまでは実に当たり前の事を当たり前にしただけなのですが、当時はこんな実験を行なうと発表があっただけでもものすごい反論があったことが記録に残っています。その意味で、この実験に参加した女の子たちは実に『ノーション』であったとされて、実験はこの名前と呼ばれているのです。

後の時代になって、この実験に参加した女の子たちの名誉のためにもこんな不名誉な名前を変えようという運動が起きたのですが、昔の時代を忘れないためにもこの名前を残して欲しい、という参加者の女の子たち自らの意見で、実験の名前は変わらないまま今日に至ります」

「——さて、そろそろ時間ですね。少し早いですが今日はここまでにしましょう。日直さん、号令を」
「きりーつ、れーい！」
「「「「ありがとうございましたー！！」」」」」

席を立て先生に一斉に頭を下げる少女達の下腹部は、どれもみな驚くほどにまあるく膨らんでいる。終業ベルよりも少し早く始まった休み時間、お喋りに興じながら、次の体育の時間に備えて着替えをはじめる初々しい少女達。制服の下から覗く白い健康的なおなか、痛々しいほどに大きく、はちきれそうになっている。まるで中に溜まった恥ずかしい液体にたぶたと震えているようだ。

そう、今はそういう時代。女の子がオシッコなんてしない時代。はるか昔、ノーションと、そう呼ばれていた女の子たちが当たり前のように生活する時代。

けれど、今も昔も女の子がオシッコをしたくなるという事実は絶対普遍、決して変わらない自然の摂理だ。たとえ食べ物飲み物が少し変わったくらいで、何万年と進化してきた女の子の身体は変わるわけがない。

「じゃあ、行こうか」
「今日ってマラソンだっけ？ やだなあ……」
「そうだね……揺れて辛いもんね」

我慢している素振りなどなにひとつ見せることなく、少女たちは膨大な量のオシッコをおなかに溜めこんだまま、ごくごく自然に学院生活を送る。もはや、ほとんど使われることすらなくなった無数の秘密のトイレと共に。

けれど、平気なわけがない。少女たちはその笑顔の下で、ただひたすら、声にならない悲痛な叫びをあげ続けているのだ。

『先生、トイレに行きたいです』——と。

たった一言、その言葉を口に出せないまま。

女の子が、オシッコをしないのが当たり前の時代は、こうしてずっと続いている。

——『ノーション・エイジ～馬鹿げた時代、あるいはオシッコをしない女の子の時代～』

(初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 239-254 2007/04/20)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 霧沢学院・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: ノーション

CATEGORY: ノーション

DATE: 10/12/2007 11:34:25

BODY:

オシッコをしない女の子、『ノーション』たちが生徒として通う私立霧沢学院にも、春を過ぎ夏もいよいよ本番を迎える頃、恒例と

なっている身体測定の季節がやってくる。

普通の学校ではもっと早い時期に行なわれるこの行事が、学院では中間試験が終わり夏休みが始まる前という妙な季節に予定されているのはきちんと訳がある。

霧沢学院では3年間、あるいは6年間に渡って寮生活をするのが基本の生徒達だが、夏と年末年始、そして春の長期休暇では授業も部活動の多くも休みとなるため実家に帰省するケースが多い。しかし彼女達の実家は学院とは大きく異なり、ノーションとして振舞うための設備が不足している場合がほとんどである。

生徒たちの生活環境が大きく変わるこの季節だからこそ、学院は長い休暇の間も生徒達がきちんと慎み深くおしとやかに、ノーションでいられるよう促すため、身体測定を実施するのだ。

念のため補足しておく、昨今ではかつて学院の生徒だった少女が母親となり、その娘や姪たちが学院に入学することもある。個人の邸宅にも少女達がノーションでいられるような設備が用意されていることもある。しかしそれはあくまで例外としてお考え頂きたい。ノーションが少女たちの憧れであることが一般化した昨今でも、実際にノーションとなれるのは選ばれた少女たちのさらにごく一部であり、並大抵のことではないのである。

実は筆者もまだ幼い頃、遠縁の親戚にいたノーションに憧れ、なりたいと目指して挫折した経験がある。

さて。霧沢学院の身体測定は、およそ三日ほどのスパンで、2回に渡って行なわれる。無論、これだけの短いサイクルで少女達の身体を念入りに調べるのにはやはりそれなりの意味がある。

実は、本来教育機関に義務付けられている類の身体測定は、学院でも新入生が学院生活に慣れ、落ちついた5月頃にすでに実施済みなのである。この時期の学院で行なわれる身体測定はそれとは別に、少女達の発育——つまり、どれほどノーションとして相応しい体つきになったかを調べるためのものだ。

建前上——あくまで、現実と理想という意味で述べれば、霧沢学院にはオシッコなどというはしたなく恥ずかしく下品な行為をする女の子は存在しない。学院はノーションとなるべくして育てられた少女達が、真のノーションとなれるように日夜努力を続けている場所だからだ。ごく稀に大失敗、いわゆる『オモラシ』をしてしまう生徒がいるが、これは例外中の例外。

学院の生徒は、本来女性の生命活動において必須であるはずの排泄という行為から解放された一段上の存在なのである。

よって、学院が正式に彼女達の発育度合、要するに『どれだけオシッコを我慢できるのか』を把握することはない。生徒達はそもそもオシッコをしないトイレにも行かないので、そんなものを調べるということ自体が矛盾しているのだ。

しかし学院としては、少女達がどれくらいオシッコを我慢できるようになっているのかを把握するのはなによりも重要なことである。普段の生活においていかにオシッコをしないように振舞うのかは学院の生活指導の教師やクラス担任、また風紀委員や生徒会のような一部の生徒たちによっても厳しく監視され、内心という形で報告されているが、そうした精神面とは別に肉体面——実際にどれくらいの量や強さのオシッコを我慢できるのか、そうした能力を調べる必要がある。

学院の生徒達にはそれぞれ、本人以外には絶対秘密、厳重にカムフラージュされた専用のトイレが与えられており、その利用状況や排泄されたオシッコなどの記録が厳密に行なわれているが、これもまたある意味では一部のデータでしかない。

ある生徒がトイレを利用したからと言って、それが必ずしもその生徒が限界ギリギリまでオシッコを我慢していたとは言い切れない

ためである。むしろノーションであるためには、次にいつトイレを済ませることができるか分からないのだから、あらかじめオシッコを済ませておく、という心構えが必要になる。よって、トイレを利用したときの生徒は、ほとんどの場合まだ我慢に余裕を残しているのだ。これでは生徒たちの膀胱の許容量や尿意の我慢レベル、普段通りの生活で低鬼的に水分を摂取しながら、一体何時間トイレに行かずに済むのかなどの限界値を探ることはできない。

——では、どうすればよいのだろうか。例えば、どうしても我慢できずに、実は自分がノーションでないことを隠しきれず、オシッコを漏らしてしまった生徒がいれば、その時の状況を詳しく調べることで彼女のオシッコを我慢する能力を知ることができるだろう。しかし、建前上オシッコをしないように躰られているはずの生徒達を、当の学院側が無理矢理全員オモラシさせるというわけにもいかない。

そこでこの身体測定の出番である。

一般の学校の中にも、オシッコを我慢できる女性ほど美しい、という理念のもとにブラ（＝bladder：膀胱）の計測を行なっている場所も多くあるが、霧沢学院の生徒達は決してオシッコをしないノーションので、直接オシッコの量や膀胱の膨らみ具合を計測することはできないことはお分かりだろう。実にまどろっこしいと思いの方も多いだろうが、何事も一流を貫くにはそれほどの努力や代償が必要だという好例でもある。

学院の身体検査では、基本的に5月の測定と同じ内容が実施されるが、この時慎重や視力データにはあまり直接的な意味はない。重要視されるのは体重測定、内部診断、そして胸囲・腹部囲・腰部囲測定などだ。

秘密裏に——あるいは一部の生徒には暗黙の了解として、1回目の測定の前には生徒達の専用トイレの利用は大きく解禁され、同時に生徒達が日常口にする生活水に含まれる利尿剤の成分が変更、排泄の頻度を高めてできるかぎり自然に膀胱を空にしておけるように準備が行なわれる。この時の少女達の記録が、いわば乾燥重量……オシッコを一切我慢していない状態での身体データである。

次に、2度目の測定——こちらはそれからおよそ3日の間を開き、今度は専用トイレの使用が完全に禁止され、少女達の誰もがオシッコをまったくできない、完全なるノーションとしての生活を強いられた後に行なわれる。

さしもの学院生徒達も3日、72時間という未曾有の我慢を強いられ、平静な表情を保つことも難しい過酷な条件の中、あくまで表向きだけは普通の身体測定という名目で検査が行なわれ、今度は完全重量——オシッコを限界まで我慢続けた少女達の身体データが計測される。

この時の体重は前回との差分のみが記録され、少女達の3日間での体重変化が示される。つまり彼女達がおなかの中に限界まで溜めこんだオシッコの量がはっきりと表示されるのだ。

たとえ入学直後でも、この変化が小数点以下kgという生徒は少ない。中には数キロ以上の変化を記録する生徒も居り、そうした少女達は暗黙の了解の中高く評価される。

しかし、単純に膀胱の許容量だけがそれを示すわけではない。ノーションとして必要なのは、オシッコを我慢し続けることではなく、

まるでオシッコをしないかのように振舞う能力なのだ。測定では続いて腹部囲の計測が行なわれるが、ここで生徒達の真価が問われるといっても良い。

一般の学校では、女の子はオシッコをするものであるのでオシッコをたくさん我慢し、大きな膀胱でおなかをふくらと膨らませるのもまた大人の女性のおおきな魅力のひとつとされているが、ノーションにとってまるで妊娠でもしたかのように大きくおなかを膨らませているのは、それだけで彼女の我慢しているオシッコのことを知らせているのと同じで、大きなマイナスである。

学院ではその方針のもと、今度は腹部囲いの変化が小さければ小さいほど良い評価となるのだ。本来下腹部に収められている膀胱は、体重を大きく変化させるほどの大量のオシッコを詰めこんで大きく容積を増し、少女の下腹部を圧迫する。しかしそれをそのまま身体の外側へ向かって迫り出させていては、理想の女性像であるノーションの魅力という点では激しく欠けているのである。

大量のオシッコを我慢しつつ、そんなものではまるで身体の外観に影響のない、そんな女性ほど『オシッコをしない』ノーションとしては相応しいことは当然である。中世の貴族はウェストの細い女性ほど美しいとされ、コルセットなどによる体格矯正も盛んに行なわれた。彼女たちの中には、膀胱が大きく変化（あるいは進化）をとげ、瓢箪のようにくびれた形となって腰の上、胃の下まで膨らむ構造をしていた女性も少なくなかったという。

いわばこれと同じ事がノーションには要求されている、日常的な訓練で丁寧に鍛えられたしなやかな筋肉によって膀胱の形を外からは気付かれないように変化させ、大きく膨らんだ膀胱を自然に身体の中に収めてゆく素質が求められる。

この素質については、次の検査である内部診断——膀胱の形状を確認する超音波探査ではっきりと診断される。大きく膨らんだ膀胱が、まだ未成熟な少女の身体を大きく占領し、他の内臓を圧迫せんまでに広がっている光景は、感動すら誘う。余談になるが、もし機会があれば是非伝聞ではなくご自身の目でご覧になって頂きたいものだ。

これもまた、人体においては決して荒唐無稽なことではない。たとえば常人の何杯、何十倍という食事をたいらげる能力をもつ人がメディアで紹介されている。彼等は必ずしもめぐまれた体格を持っていない、いわゆる『痩せの大食い』であることが多い。これもまた一種の天賦の才能、素質であり、彼等が食事を終えた後、レントゲンによって確認された消化器官は、他の臓器を圧倒するサイズになっている事が知られている。人体の不思議、驚異であろう。

身体測定。通常ならばなんということもない年間行事の一つであるが、ノーションを目指す学院の少女達には、これもまた潜り抜けていかなければならない試練である。

また、最重要問題である生徒達の身体的オシッコ我慢能力の確認の他に、測定では他の視力測定、身長や座高、血液検査なども行なわれるが、これらにはふたつの意味がある。

一つは、この身体測定があくまで生徒達の発育具合を測定するためであるという建前によるもの。もう一つは、我慢の限界状況に追い込まれた少女達が、それでもノーションとして振舞うために平時と同じ身体能力をどれだけ発揮できるかを確認するためでもある。

ほんのわずかな刺激で爆発してもおかしくない限界の尿意に占領された膀胱を抱え、中腰にならず爪先を踏み鳴らすことも膝を寄せることもなくまっすぐに背筋を伸ばしたり、オモランというあってはならない事態を回避するため一刻も早くトイレを利用したい

と思いながら執拗に視力や聴力検査を行なって、普段と同じ能力を発揮することの過酷さを想像していただきたい。彼女達がいかに厳しい環境で生活しているのかお分かりになるだろうか。

——さて。ここまで順に述べてきたが、最後に一番重要な話をしようと思う。実はこの身体測定、学院側の真意は少女たちの持つ身体的オシッコ我慢能力を調べること——“ではない”。

ここから先は学院の真の実情をつまびらかにするものとなる。今後学院に通うであろう少女をご存知の方は、決して口外せぬようにご留意いただきたい。ぶっちゃけてしまうと、生徒達の我慢能力というものはこのような暫定的な行事のなかで正確に把握する事は難しい。日々、時々刻々と変化し成長する少女達の身体機能は多いに流動的であり、たった年に数度の検査で調査を終えることが不可能に近いのは、賢明な読者の方ならばとうにお察しのことであろう。

霧沢学院がその様な曖昧な方針を野放しにする愚を犯していることに憤っておられる方もいらっしゃると思う。しかし、ご安心頂きたい。実は、これらの少女達の身体機能は、生徒達が学院で過ごす限り、1年365日24時間のリアルタイム、完全体制で管理されており、毎秒ごとに全生徒およそ1000人あまりのパーソナルデータとして記録・更新されている。

学院は常に生徒達のデータを完全に把握し、管理しているのである。

このコラムをお読みの方は、ノーション、つまり『オシッコをしない女性』というおよそ概念的な存在を維持するためには、多分に情報の操作が必須であろうことは想像に難くないこととご理解いただけているだろうと思う。

なにしろ生物学、生理学的にオシッコをしない女の子などこの世には存在しない。排泄というものは生命活動に欠かせない必須の事項である。しかし、学院にいる生徒は皆、その夢幻であるノーションという理想の存在を心の底から目指し、そうあろうと日夜血の滲むような努力を積み重ねているのだ。

そう、この身体検査の裏の目的が身体的オシッコ我慢能力の検査という名目で生徒たちに知られていることを学院が放置しているのもこうした情報統制の一環である。生徒たちに表向きのほかに裏向きの理由も与えることで、彼女達に自分がノーションである、ノーションたらしめているのだという自覚を促し、いついかなる時もオシッコをしないという理想を貫かせるための修身鍛錬のひとつなのである。

こうして学院の少女達は、言葉は悪いが敢えて言うならば他人を欺き社会を欺き、自分すらも欺くことで実現不可欠な存在、ノーションを生み出してゆくのである。

——霧雨霽の世界探訪

『ノーションの楽園・霧沢学院を尋ねて』より

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 雑談スレにての一コマ。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 11:40:50

BODY:

カチカチと無機質なクリックの音が響く。

焦るようにブラウザが再読み込みを繰り返し、ページをリロードする。

「くうっ……んうっ……」

ノートP Cに向かう机の前で、少女は切なげに身体をよじった。

マウスは小刻みに震え、それに連動してディスプレイの上のポインタも震えている。少女のもう一方の手は、きゅっと閉じ合わされた足の間に深く差し込まれ、間断をつけてぎゅうぎゅうと股間を押さえつけていた。

「ねえっ、お願い……はやく、はやくしてっ……」

何度も何度も繰り返されるリロード。だが、掲示板のトップに並ぶスレの順には一向に変化がない。

忙しく絨毯を踏む少女の両足が、ぎゅっと締められる。

それにあわせて椅子が軋み、小さく音を立てる。揺すられる腰の動きが少女の切羽詰った尿意を雄弁に物語っていた。

「だれか、答えてよぉっ……お願いだからぁっ……」

一向にレスのつかない自分の書き込みをじっと凝視しながら、少女はこみ上げてくる熱いうねりに耐える。

長時間酷使された括約筋は既に麻痺をはじめ、ひくひくと痙攣を繰り返していた。

きゅんと疼く下腹部の収縮を感じながら、少女は狂ったようにリロードを繰り返す。

<u>6:トイレに行ってもいいですか(1)</u>

夕方から続いている我慢の末、尿意に耐えかねて少女が立てたそのスレッドは、レスがつかないまま2時間が経過しようとしていた。

ゆっくりと沈み始めてゆくスレの前に、少女は石のように張り詰めたお腹を必死にさすって、尿意の波をやり過ごしながら限界まで溜まりに溜まったおしっこがおとなしくなってくれるように祈り続ける。

「気付いて、よぉっ……」

このままでは誰にも気付かれないまま最新20スレから落ちてしまうかもしれない。だが、もう一度ageてしまえば自作自演だと疑われて、ますます誰にも相手をしてもらえなくなるだろう。

日付が変わって、IDが変わるまであと1時間以上。

最低でもそれまでは耐えなければならない。お昼前から一度もトイレを許されていない少女には、あまりにも酷な期限だった。

「……はぁ……んっ…」

カチカチカチカチ、カチカチカチカチ。

クリックの速度が速すぎてブラウザの読み込みが追いつかない状況だった。空白のページを前に、それと同じ速度で少女の前押さえと我慢のステップは激しさを増す。

「……でちゃう……もう、でちゃう……っ」

猛烈な尿意を捻じ伏せて、必死にレスを求める少女。

そしてまたひとつ、少女のスレッドは沈んでいった。

クリックの音の変わりに、椅子が軋む音だけが響いていた。

スレッド順に変動はなく、誰の応答もない。開きっぱなしになったブラウザには、もう何時間も前から変わらない>1の書き込みが張り付いている。

「ぁ……ダメ、え………」

少女の両手は足の間に差し込まれたまま、股間をぎゅうぎゅうと揉みしだき、かたかくたく水門を塞いでいる。そうしていなければ、絶え間なく襲ってくる尿意の津波を押しとどめることはできなかった。

<u>1</u> 名前:名無しさん@おもらし中 投稿日: 2005/12/06(火) 22:59:18

おしっこが、漏れそうなんです。

お願いします、トイレに行ってもいいですか。

その書き込みに、了承を与えるレスはない。

あれから一体、何時間耐え続けたのだろう。猛烈な尿意に圧倒され、股間から手を離すこともできない少女はレスを確認することもできずにいた。

「はぁっ……はぁっ……」

熱い吐息がディスプレイを曇らせる。

膀胱の許容量を遥かに超えて詰め込まれたおしっこが、少女の小さな身体を際限なく責め苛んでいた。

ふいに、少女の下腹部がきゅんと収縮する。

その感覚そのものは、もう何十回となく感じていたものだったが——それによって引き起こされた結果は違っていた。

脚の付け根に走るじんじんとした痺れ。

股間にじわりと広がった熱い感触に、少女は慄然となった。

「……あああっ、や……お、しっこ、でちゃうう……っ」

崩壊の始まったダムがその隙間から次々に中身を溢れさせる。少女は必死に腿を締め付けて抗おうとしたが、もはや怒涛のような流れは止まらなかった。緩み始めた少女の股間で、じゅじゅじゅじゅと噴き出した水流が激しく布にぶつかる音が立つ。

「いやぁ……だめ、でないで。でちゃダメ……くううっ！！ まだ、誰もおしっこ、行っていいっていつてきて、ないのに……！！」

股間を握り締めて、少女は椅子の上で身を折りまげる。

それでも爆発する尿意は収まらない。

じゅじゅじゅ、ぶじゅっ、じゅじゅじゅじゅじゅううっ！！

「やだ、やだよおっ……！！ ……でないで……おしっこ……でちゃ、ダメ……え」

椅子の上で始まった大洪水はあっという間に少女の下着を汚してお尻全体を侵食した。少女が小さな身体で絶え続けたおしっこの量は膨大で、瞬間に椅子の上にも収まりきらなくなり、絨毯の上へとあふれ出す。

脚を伝い落ち、靴下を濡らし、こぼれ落ちる奔流は少女の部屋に広がってゆく。

少女のしゃくりあげる声が響く中、

スレッドはいつまでも応答のないままだった。

(初出：千夜一夜〜ベリー・ショート・イマジネーション〜 222-223 2005/12/06)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 嘘のトイレ／広い部屋編

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 11:45:41

BODY:

「ふうっ……くんっ……」

「はあ、はあ……っ……ねえっ……まだ、なのっ……！？」

「もう、ダメ、ダメえ……」

「ちょっと、はやく……してよっ！！」

殺風景な広い部屋に押さえ込まれた苦悶の音が響く。古びた体育館にも似た施設の中には、延々と順番待ちをする少女達の列があった。

ざっと百名は超えているだろう。壁に沿って続く列はざわざわと落ち着きがない。

「でちゃう……おしっこでちゃうよっ……」

「だいじょうぶだよ……ほら、頑張って……わたしもがまんしてるんだから……っ」

「ダメえ……もうダメですっ……はやくっ、お願いします、早くしてくださいっ……くうっ……」

「早くしなさい、早く——っ！！」

——そう。少女達は皆一様に顔を紅く染め、膝を震わせながら尿意を堪えていた。

「うくうっ……ひんっ……」

「おしっこ、おしっこ、おしっこ……がまん、がまんっ……」

「はー、はあー……でないで、でないでえっ……」

「んっ、んんっ、……んううっ……」

周囲にいるのが同性ばかりだからだろうか。あるいは、それ以上に猛烈な尿意のためか。少女達の我慢はすでに形振り構っているものではなかった。カー杯股間を握り締め、細かく足を踏み鳴らし、左右に揺すられる腰は止まることがない。良識を持つ人間ならば思わず眉を潜めるであろう、乙女たちにはあるまじき姿であった。

少女達は口々に尿意をを訴えながら、悲鳴を嘔み締めて必死に尿意と戦い、列の前方に向けて懇願する。

彼女達の視線の先。部屋の壁に沿うようにして続く列の終点には、小さな白い扉があった。

扉には赤いマークで女性用を示す印が描かれ、その下にはそれを補強する意味の単語が記されている。この部屋には似つかわしくない、小さな四角い壁に囲まれた部屋。

「ねえっ、トイレ——トイレ、まだなのっ！！」

少女達が苦しめている尿意を解放できる秘密の小部屋の入口は、たった一つだけ。少女達の数に対してあまりに少ない。

「ううっ……はううっ……」

「イヤ、イヤあっ……おしっこが、おしっこがあ……きちゃうううっ……！！」

「ああんっ……早くして……早くしなさいよっ……ねえっ！！」

「あ、はああっ……あああっ……漏れ、ちゃうっ……」

「……おしっこ、おしっこしたいです……っ」

列の遙か先頭。もう一刻の猶予もない切羽詰った様子で、少女達は青い顔をして壁にもたれかかっている。せわしく立てられた爪が壁をかきむしる音が、かり、かり、と無機質に響く。

彼女達は既に、腰を揺り動かして尿意を堪えることすらできなくなった少女達だ。今の彼女達を支えているのは『うごいたら、出る』の論理である。

「——っ、ツツ！！」

「ま、まだなの……？ はやく……変わって……」

「はーっ、ふううーっ、ふううーっ、」

列の先頭に立つ少女は、こみ上げてくる激烈な尿意にもはや理性の半分近くを失い、半ば獣と化していた。少女の口は荒い吐息をこぼすだけであり、意味のある言葉を紡ぐこともできない。

もうこれ以上耐えられない。そう確信してからさらに1時間以上、彼女は決壊の瞬間を押しとどめ続けていたのである。

そして、

がちゃり。個室のドアが開く。

「あ……」

そこから顔を出した少女は、一瞬ためらいながらも外を窺う。

ドアの隙間——開いたドア。開いた個室。

開いたトイレ。

そのことを一瞬、先頭の少女は理解できなかった。

同時に、先頭の少女の下腹部に猛烈な熱がどくんっ、とこみ上げてくる。膀胱が破裂しそうな尿意に悲鳴を上げ、少女の身体はもう限界だと言わんばかりに排泄のの準備を始めてしまう。

「ちょ、ちょっと、終わったんならどいてよっ……！！ もう、限界なんだからあつっ！！！！」

「きゃ……っ」

ドアから一步を出た個室の少女を押しつけて、先頭の少女はトイレの個室に突進した。

ついに、ついに辿り着いた待望のトイレ。もう我慢しなくてもいいもう我慢できない出るでるでちゃうでちゃうおしっこおしっこおしっこ！！ 鍵をかけるのももどかしく乱暴にドアを閉める。

個室から出てきた少女は俯いたまま小走りでどこかへ駆けてゆく。残された大勢の少女達は一人分だけ縮んだ列を震える足で前に進みながら、ぎゅうっと股間を握る手に力を込めた。

「……わたしもおしっこしたい……はやくおしっこさせてえ……」

「トイレ、おトイレ……おトイレ行きたい……」

「そん……なにっ、おしっこ、トイレって言わないでよっ……もっとしなくなっちゃうっ……」

「ああっ、しちゃう、おしっこ、おしっこしちゃうっ……」

「ちがうのっ、おしっこなんかでないの、でないの、でちゃダメえっ……！！」

少女達の羨望が、白いドアに集まる。あの小さな扉の向こうには天国が広がっているのだ。少女達を凌辱し続けている体内の恥ずかしい熱湯を思う存分 j に処分できる場所が、そこにはある。

さっき個室に入った少女も今頃は下着を下ろしものすごい勢いで身体に溜まったおしっこを放出していることだろう。長い列をずっとずっと我慢していた分だけ量ももの凄いくらいになっていて、だからおしっこを済ますにはその分さらに長い長い時間がかかってしまう。だからこそ、列は遅々として進まず、少女達の膀胱はますますおしっこでぱんぱんに膨れ上がる。

とんでもない悪循環。

永遠と思える我慢の果て、辿り着けるかどうか解らないトイレ。だが、そこにおしっこをするための場所があるのなら。そこでの解放感と快感を思い描き、わずかな心の支えにして。少女達は絶望の中必死に身をよじらせる。——だが。

「うそ……なに、これっ……！？」

長い長い我慢の果てに個室に飛び込んだ少女は、目の前に広がる非情な現実悲鳴を上げていた。

小さく区切られた白い個室には、何もなかった。四方を囲まれた白い床には、ただまっさらなタイルが広がっているだけ。そこには汚れた便器どころか穴も開いておらず、なにかを溜めておけるような容れ物すらない。

そこは、ただの白い部屋だった。

「そんな……こんなに、我慢したのにっ……なんでえっ……なんでトイレないのっ！？」

少女は今にも溢れだしそうなおしっこを両手で塞ぎ止めながら激しく身もたえする。

ついさっきまで、あと 10 秒もしないうちに恥骨の上のダムは完全放水を始めている予定だったのだ。すっかり準備を整えた排泄孔はいまにも緩み始め、股間の先端からは熱い雫が滲み出している。

擦り合わされる膝がくねくねと曲がり、ダムの決壊を先送りにする。少女は大きく行進の様にその場足踏みを繰り返し、荒くなってしまう息を必死に飲み込んだ。

白い個室。小さな部屋。中腰の姿勢。何もかもがトイレを連想させる。おしっこをするための場所ではないのに、少女の本能は猛烈に排泄を要求してくる。よく見れば、タイルには数滴の雫の跡や小さなみずたまりがあった。本当に我慢できなかった子や、切羽詰りすぎて気付く余裕のなかった子が一回しゃがみ込んでしまった痕跡だろう。

だが、結局そんな子達も気付いたのだ。ここはトイレではない事に。

ここでおしっこをするなんて、とんでもないということに。

「うそ、トイレ、トイレどこっ、トイレちょうだいよ！！ トイレ行きたいトイレ行かせてっ……トイレ、といれえっ！！ おしっこ、おしっ

こでちゃうっ……でちゃうっ……おしっこさせて、おしっこさせてよお……トイレしたいいいいっ！！」

奇蹟を願い、トイレを懇願する少女。だがそれで排泄場所が姿を見せてくれる事はなかった。

平らなタイルの上では、ほんのちょっと漏らしただけでもおしっこは四方八方に広がって、ドアの隙間から川になって流れ出してしまう。こんなにおなかをたぷんたぷんにしているおしっこを気付かれないようにこっそり済ますなんて、不可能だ。

はあはあとはしたくない排泄欲求を口にしながら、少女は気付いてしまう。

どうしてみんな、こんなおしっこのできないトイレに並んでいるのか。

答えは、単純だった。この広い部屋の中で、何百人もいる女の子に対してトイレはたった一つだけ。だが、実際にはそれすらも嘘だ。ここにはトイレなんて存在しない。おしっこをできるばしょなんてどこにもない。

「ふぐうっっ、くうううんんっ……！！！」

もし、ここがトイレでもなんでもなければ、あの列を並んでいる子達はみんな行く場所を失ってしまうのだ。

あとすこしだけ我慢すれば、おしっこができるから。あとちょっとでトイレだから。何十人も続く列に屈してしまいそうな心を、辛うじて小さな希望で支え、ぎりぎりの崩壊を耐えぬいている子は多い。きっとほとんどがそんな子ばかりだ。

そこに、自分が残酷な真実を告げればどうなるか。

ここはトイレなんかじゃなくて。どこまで我慢しても、絶対におしっこはできない。

そこに待ち受けているのはどんな惨劇だろう。

この個室に飛び込むまでは、彼女自身も、必死にそれだけを考えていた。それだけを武器にしてここまで爆発しそうなおしっこを我慢してきたのだ。彼女達の希望を奪うような真実は、絶対に——できなかった。

「んんんっ、くうんっ……あああああっ！！！」

少女は個室の中でゆっくり姿勢を正し、へっぴり腰を伸ばして必死に自分に言い聞かせる。

おしっこなんかしたくない。おしっこなんかしたくない。ここはトイレ。そう。ここはトイレ。おしっこをするところ。だからもう自分はおしっこを済ませた。もういっぱいおしっこした。すごくたくさんおしっこして、もうすっかりすっきりした。もう完全にすっきりしているから、おしっこなんてしたくない。平気な顔をして出てゆくのだ。

我慢の姿勢を止めたことで、膀胱にますます負担がかかり、少女は唇を噛んで悲鳴を押さえ込んだ。

そうだ。先に個室に入り、出て行った少女達もそうだったのだ。さっき彼女が押しのけてしまった少女も。

ここはトイレなのだから、おしっこのできる場所なのだから。いまもなお苦しみ続けているみんなの為に、ここでおしっこをしたことにしたのだ。

そして、きっと——あの子達は、また部屋の隅に戻って、もうおしっこを済ませたという演技の中で、前よりも何十倍も苦しい必死の我慢を続けて、この嘘を守り通そうとしている。

「開けて、開けてください……おねがい……途中かもしれないですけど……わたしもう無理です……ガマン、無理なんです……」

っ」

激しいノックの音。そして懇願。その向こうに聞こえるみんなの声。

トイレ。おしっこ。といれ。オシッコ。

ぎゅっ、と手のひらに爪が食い込むほどきつく拳を握り、少女は股間から手を引き剥がす。ありったけの力を括約筋に送り込んで、ぶるぶると震える下半身を押さえ込む。

「……っ、開いた……よ……」

「ああっ、ありがとうございますっ……ありがとうございますっ……すいません、もう、ホントに、本当に限界なんですっ——ごめんなさいっ！！」

ぼろぼろの笑顔を取り繕って、少女は激しくノックされるドアを開けた。

少女を突き飛ばすように、次の順番を待っていた少女がトイレの個室に突撃する。

そして同じように気付いて絶望して、そしてまた気付く。

そう。この部屋はトイレなのだ。

限界ぎりぎりのおしっこ、強まるばかりの尿意に耐えつづける少女達が、自分達を苦しめているおなかの中の恥ずかしい熱湯を、思いっきり出してしまえる場所なのだ。

個室を出た少女は、全力で括約筋を閉めつけ、ぼたり、ぼたりと足を伝うおしっこの雫をごまかしながら、震える足取りで進む。姿勢を正し、股間へと伸びる手を意志の力でねじ伏せる。

「がまんっ……がまんしなきゃっ……」

口の中で呪文のように繰り返される言葉。

もう自分は、“おしっこを済ませた”のだから。我慢しているそぶりを見せるわけにいかない。

彼女はふらふらと定まらない足取りで、部屋の隅を目指していった。彼女と同じように、さっきよりも苦しく果てのない我慢を続け、みんなの希望を守っている少女達のもとに。

(初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 50-52 2005/03/22)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 嘘のトイレ／豪華な部屋編

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 11:49:26

BODY:

もう、あのドアが開かなくなって何時間経つのだろう。

床に隙間なく敷き詰められた分厚い絨毯。ふかふかのソファー。大きなテーブル。一見ただけで贅の限りを尽くしたと分かる豪華な部屋も、固く閉ざされたドアで出入りを禁じられてしまえば、結局は牢獄と大差はない。

密室になってしまった部屋の中で、少女たちはじっと俯いて座りこんでいた。

誰もが不安に胸を軋ませながら、不自然なほどに無口。

そして、彼女達の下半身は、揃って小刻みに震えていた。

「ね、ねえっ、」

少女の一人が、耐えかねたように口を開いた。少女達の視線が一斉に集中する。

「……ごめんっ、あ、あたし、ちょっとトイレっ」

注目を浴びて赤くなりながら、彼女は『んっ』と小さく悲鳴を上げて立ち上がった。腰を揺すり、くねくねと膝をこすり合わせながら、部屋の隅に立つ衝立の向こうに走りこむ。

皆の視界から逃れた彼女は、衝立に仕切られた小さなスペースに駆け込むと、両手を腿の間に押し込んでしゃがみ込んだ。

「……うぐうっ、ふ、くうううっ……したいっ、おしっこしたいっ、おしっこしたいよおおっ！！ でちゃうっ、でちゃうううっ……！！」

ぎゅうぎゅうとスカートの上からおしっこの出る場所を握り締め、ばたばたと足を踏み鳴らす。尿意はとつくに限界を超え、びくびくと痙攣する膀胱は今にも破裂してしまいそうなのだ。

「うううっ、でちゃダメっ、おさまってよおっ……お願いだからあつ……」

股間を掴む指が下着深くに食い込んで、じわりと染みを滲ませる。

そう遠からず訪れるであろう、最後の瞬間。それでも、少しでもその瞬間を先延ばしにするために、彼女は我慢を続けるしかなかった。

一方、部屋の中に残る少女達は俯いてじっと目を伏せ、衝立の向こうの物音を聞かないようにしていた。

視線を遮る一枚を隔て、恥も外聞もなく繰り広げられる友人の我慢劇。それは彼女達の尿意も激しく煽り立て、下腹部に沈む重苦しい衝動を暴れさせる。けれど、たった一つしかない『トイレ』はただいま使用中。彼女達はただじっと、慎み深い乙女の貞節を守っておしっこを我慢し続けなければならない。

そう。彼女達の閉じ込められたこの部屋には、トイレはおろか水を流せるような場所もなかった。全員が部屋中を探し、どうにか見つかったのは小さな空の花瓶がひとつだけ。

仮に少女のプライドや羞恥心、全てをかなぐり捨てることができて、その花瓶に用を足せたとしても、問題はそれで終わらない。

全員が全員、もう限界なんかとつくに超越して我慢を続けているのだ。たとえ誰が用を足しても、この小さな花瓶がすぐに温かいおしっこで一杯になってあふれてしまう事は明白だった。

そしてもし、だれかがひとりでもここでおしっこをしてしまえば、他の全員が我慢の限界に達してしまう。もうどこにもおしっこを受け止めてくれる場所はない。全員合わせて、一体何リットルになってしまうのだろうか。少女達の我慢が崩壊すれば、部屋じゅうが彼女達のおしっこでびしゃびしゃに汚れてしまう。だがこの部屋いっぱい敷き詰められ絨毯は、何千万円という途方もない値段の超高級品なのだ。

少しでもおしっこをこぼしたりして、濡らしてしまったら、とても弁償なんてできるはずがない。

「うく……ふううっ……あ、っ」

その瞬間、誰一人口にしないまま彼女達の間にはひとつの協定が結ばれた。部屋の隅にあった衝立に遮られたスペースが、彼女達の『トイレ』になったのだ。

そこは、はどれだけ恥ずかしい姿勢や声を上げておしっこを我慢してもいい場所だ。

『トイレ』に入った子は、もちろん『おしっこを済ませた』ことになる。だから『トイレ』に入った子はちゃんとおしっこがしたくなくなるまで我慢して、おしっこがおさまったら次の人に順番を譲るのだ。

自分たちがおしっこを我慢していることを忘れるため、……正確には『なかったこと』にするため、少女達は我慢に我慢を重ねて平静を取り繕い、おなかの中で暴れだしたおしっこが手におえなくなった時だけ、彼女達は『トイレ』を利用した。

そこは『トイレ』。

限界ギリギリまで我慢している、おしっこを済ますことができる場所。彼女達は小さく区切られた部屋の中で、必死に股間を握り締め、狂おしいほどの尿意が小康状態を取り戻すのを待つのだ。

「良かった……ま、間に合った、よ……。もうちょっとで、くうんっ、その、ダメになっちゃう、とこだったけど」

ふらふらと覚束ない足取りで、衝立の向こうからさっきの少女が顔を覗かせる。

少女はまだ股間から手を離せない。それでも尿意の天津波はどうか乗り越えたようで、彼女は再び輪の中に戻る。

「す、すっきり……した、なあ。あはは……」

バレバレのお芝居も、彼女達の暗黙の了解だった。だって彼女は今、『トイレ』から出てきたんだから、おしっこがしたいはずがないのだ。

「そ、その、わたし……ごめんなさいっ」

代わりに、別の少女が空いたばかりの『トイレ』に駆け込んだ。

それを羨ましく思いながらも、他の少女達は必死に尿意を否定し続ける。おしっこしたことなんかなんでもないという風に、真っ青になってしゃがみ込み、ひょこひょこと飛び跳ねて、『トイレ』の順番を待ちつづける。

いつになるのだろう、この部屋が解放されるその時まで。

(初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 53-55 2005/08/03)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: ファンタジーの精霊使い

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 11:52:31

BODY:

「――邪魔、するなぁっ！！」

司祭の加護を受けた盗賊の短剣は鈍く輝き、覆い被さる狼の喉を貫いた。

仲間を失っても、群れの侵攻は止まらない。

悪魔との契約によって真紅の紋を捺された狼達は、次々と彼等に襲い掛かってくる。

「援護頼むっ！！」

「は、はいっ」

騎士の言葉に従い、魔術師の少女は発動体のスタッフを握り締めて呪を紡ぐ。

さん、と煌く輝き。

幾筋もの水の刃が出現して、迫り来る狼達を切り裂いた。

同時、

(う、あつ……)

体内に沸き起こる衝動に、少女は身をすくませる。魔術とは代償を求めるもの。司祭のように無制限に扱える技ではない。

彼女は水の魔女の末裔だ。生まれてすぐに水霊と契約し、人智の及びもつかないその力を身体に宿して行使する異能者だ。

「くそっ、いくらやってもキリがないぜこりゃ——」

「油断するな！！ もうこいつらはただの獣の群れなんかじゃない。れっきとした奴の眷属だ！！」

一刀両断に二匹を斬り倒し、騎士が叫ぶ。

だが、狼達は恐れるどころか一行を巧みに包囲し、その輪を狭めつつあった。

「……っ！！」

少女は気力を奮い起こし、次の術の詠唱を開始する。

つうんっ、と下腹部が再び膨張を始めた。

ぶるぶると足が震え、腰が引けてゆく。

(だめっ……漏れちゃうっ……)

じんじんと、恥骨を貫き背筋を這い上がってくる感覚に、少女は声に出さず絶叫した。激しい尿意にふっと気が遠くなる。

魔術とは、必ず使用者に代償を求めるものだ。

人の身で、精霊を使役するにはとてつもない代償が必要になる。魔を払う純粹無垢の水を扱う水霊を宿せるのは、穢れを知らない少女の膀胱の中しかない。

「んあああつ、ダメっ、で、ちゃうううっ……」

水の槍が、司祭を狙って飛び出した狼を貫くと同時。少女ははしたない叫びを上げていた。幸いな事に、仲間たちは激戦の中で少女の声を聴きつけている余裕はないようだった。

水霊は力を使う度に活性化し、閉じ込める檻を破ろうと暴れ回る。

幼い頃からの修行で鍛えられた少女と来说ど、こんなに立て続けに魔術を使ったのは初めてだった。下腹部はまるで石のように張り詰め、もうこれ以上少しの余裕もない。

「まだだ！！ そっちにも行ってるぞ！！」

「う、うんっ」

(そんなぁ……もう、もうホントに限界……なんだから……)

膝を擦り合わせ、くねくねと腰を揺すり身体をよじって、それでも形だけ平静を取り繕った顔で、少女はスタッフを握る指に力を籠めた。

もう頭も真っ白で、唱える呪もつかえつかえだ。

それでも、汚れた牙をむき出しにして吼える狼は容赦してはくれなかった。

「お願い、来ないでええっ！！」

絶叫と共に、少女の我慢は限界を迎えた。

痺れそうな甘美な感覚と共に、じゅわ、と少女の股間ではしたない音。

銀色の雨が弾け、狼を縫い止める。

「やだ、やだよぉ……もうやめてよっ……」

(ちがう、ちがうの……ホントにっ、お漏らし、しちゃうからっ……！！)

じゅじゅじゅっ、しゅるるう、

ぱしゃぱしゃ……

耐えに耐えたものが少女のローブの股間をじんわりと濡らし、地面にぶつかって派手な音を立て始める。足をばたばたと踏み鳴らしながら、少女は必死にダムの決壊を堪える。

（おしっこ、おしっこしたいっ……したいよぉっ）

頭の中はそれだけでいっぱいだ。

かなりの量を排泄してしまったというのに、膀胱はなおも満水だった。

水霊の活動は最高潮に達し、行き場をなくしたおしっこは少女の膀胱で激しく渦を巻いている。

じゅじゅじゅっ、と二度目のお漏らしが、少女の内腿を濡らす。

ここでしゃがみ込み、思う存分に放尿してしまえばどれだけ気持ちいいだろう。誘惑に揺れる心を乙女のプライドで捻じ伏せて、魔術師の少女は必死に震える足を前に進めた。

「辛いだろうが容赦するな！！ こいつらはもう、殺してやる以外に救ってやる方法はない！！」

「う、ん……わかってる、よぉ……」

少女の胸のうちなど知らずに、騎士は叫び狼の一匹を串刺しにした。

戦いは、終わりそうに無い。

（初出：千夜一夜～ベリー・ショート・イマジネーション～ 156 2004/03/10）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 保健体育の授業

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 11:54:43

BODY:

「はい、それじゃあ４５ページを開いてね」

先生が、いつもよりもほんの少しだけ大きな声で言う。

愛香はぎゅっと唇を噛んで、もぞもぞお尻の位置を動かしながら机の上の教科書をめくった。

「みんな、お口は閉じてくださーい」

注意を受けてもざわざわと静まらない教室を見回して、先生はこほんと咳払いをし、黒板に図を書き始める。

週に一度の、保健体育の時間。

今日は、男子と女子のからだのしくみを勉強する日なのだ。

愛香の前に開かれた４４ページと４５ページには、男の子と女の子の身体の中が解るような断面図が載っている。いつもならちょっとドキドキしながらもじっくり眺めてしまう、なんだかイケナイことをしているような気分になる図面。クラスのみんなが落ちつかないのも当然のことだろう。

（……うう……）

だが、いまの愛香には、男の子だけにしかない器官よりも、女の子だけにある赤ちゃんを作る大事な場所も目に入らなかった。

愛香がじっと見つめていたのは、そのすぐ近く。

足の付け根のすぐそばにある、おしっこを溜めておくための器官だった。

（ふうっ……くんっ……）

引かれた矢印の先には、膀胱、と名前が書かれている。図の中ではぺちゃんこに潰れているちいさなピンクの袋だが、恐らく今の愛香のおなかの中ではおしっこでぱんぱんに膨れ上がっているはずだった。

（んんっ……！！）

そつとおなかをさすると、それを証明するかのように愛香の下腹部は石のように硬く張り詰めて、じんっ、と鈍い痺れが背筋を走る。静菜は慌ててぎゅっと足を閉じ、暴れだしそうになったおなかの中のおしっこをなだめる。

尿意の蠕動と共に、膀胱に次々と送りこまれるおしっこ。昨日の夜から休むことなく作りつづけられる恥ずかしい熱湯が、少女の小さな排泄器官を蹂躪しているのは明らかだった。

（がまんっ、がまん……っ……）

椅子の上で小さく腰を揺すり続ける静菜には、どくん、どくんと高鳴る心臓の音が、まるでおしっこを膀胱に送りこんでいるポンプの

ように聞こえてしまう。

教科書の上、おしっこ管がおちんちんを通っている男の子に比べて、女の子の膀胱は随分小さく、おしっこを溜めておける量も少なそうだ。膀胱がおしっこでいっぱいになってしまったら、ほとんど我慢できずにすぐに外に出てしまう——愛香にはそう見える。

（ふびょうどうだよおっ……）

男の子なら、もう我慢できないくらいにおしっこがおなかにぱんぱんでも、おちんちんをぎゅつつまんでしまえばおしっこは出てこないはずだ。

それなのに、女の子は押さえるところもないから、ぎゅつと股間に手を当てておしりをもじもじさせながら我慢するしかない。女の子はそんなふうに恥ずかしい格好をしなければ、おしっこを我慢できないのだ。

「……こうして赤ちゃんができるわけです。とても大切なことですから、恥ずかしがったりしてちゃいけませんよ」

先生の話はまだ続いている。

授業が終わるまで、あと35分——。

（初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 58 2005/08/13）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: サイクリングロードの我慢

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 11:57:59

BODY:

サイクリングロードが遠い。普段ならほんの何十秒かで進める距離が、今の未果には何十倍にも遠く感じられる。

道端の標識には『あと1. 6 km』の文字があった。

1 6 0 0 m、つまりグラウンド8周分だ。

「ううっ……ふうっ……」

ぎゅうぎゅうと下腹部を押し、スカートの上からせわしく股間をこね回す。行進みたいに足を上げ下げして、くねくねと腰を揺すりながらの歩みは遅々として進まない。

気ばかり焦る未果の背筋を、つうと尿意が駆け昇る。

「はうっ……っ」

強烈な尿意は心臓の鼓動のようにさざめいて、少女の内腿を細かく痙攣させた。一歩進むたびに脚の付け根にじんじんと痺れが走り、膀胱に蓄えられたおしっここの重みがダイレクトに頭まで届く。

（あうっ……おトイレ、おトイレいきたいはおっ……）

全身の水分が一点に搾り取られてゆく。膀胱はたまりにたまったおしっこでばんばんに膨れ上がって、ほんの少しの刺激で今にも破裂してしまいそうだ。

「だめ、だめ、だめっ、でちゃだめっ……ダメええ……っ」

襲い来る尿意の大波に、中腰になって全身を硬直させ、キュロットの前をぐいぐいと引っ張り上げる。初めこそおしっこを我慢しているのを隠し、取り繕おうとしていた未果だが、もうすでにそんな余裕はなくなっていた。

海岸沿いのサイクリングロードは見通しもよく、身を隠すどころかしゃがみ込むような草むらも見つからない。向かいから走ってくる家族連れが、不審げな顔をして道端に立ち尽くす未果の隣を通りすぎてゆく。

激しい注視に、未果の耳が先端まで真っ赤に染まる。

いまの彼女は、全身で“おしっこがしたいですっ！！”と叫んでいるようなものだった。

「うくっ……あう、ふあうっ……っ！！」

（やだっ……やだよお……っ、おトイレまだなのに……もじもじしちゃうっ……おしっこガマンしてるの、みんなに気付かれちゃうっ……）

じくんっ。じん、じんっ。

またも強烈な尿意が恥骨に伝播する。未果の小さなおしりはぴくぴくと震えて、腹腔内を蹂躪する恥ずかしいレモンティーを押さ

えこもうとしていた。

今の状況の未果にとって、排泄行為とは「おしっこをする」ことであり、それ以外のなににも考えられない。少女の小さな身体の全ては、おしっこを我慢するためにあるのと同じだった。

腹部の不随意筋の動きに合わせきゅうんっ、と膀胱が収縮し、脚の間のダムに溜まったおしっこの重みが増してゆく。

「っ、うああうっ……」

びく、と未果の背中がのけぞった。

(だめっ、きちゃうっ、きちゃうっ、次の……きちゃうっ)

サイクリングロードに入って4度目となる尿意の大津波の予兆に、少女は硬く身体を緊張させた。だが先刻の激しい攻防の末に未果の括約筋はすっかり疲弊してしまい、その尿意を押さえこむための防波堤は全くの不完全な状況だ。

(だめっ、まだこないでえ、おしっこきちゃだめえ……っ、……がまんの準備、できてないのにっ……もじもじしてしちゃうっ、しゃがんじゃうっ！！)

声なき絶叫に続いて、猛烈な尿意の衝撃が無防備な少女の股間を直撃した。

「あう……っ、うああああっ！！」

膀胱が絞り上げられ、腹腔内部で内臓がぎゅるぎゅると蠕動する。溜まりに溜まった不要な水分を排出しようと、身体は自然の摂理を受け入れるよう強制してくる。

ついに未果は耐え切れず、がくんと膝を落としてしまった。サイクリングロードを遮る防砂柵に爪を立てて、閉じ合わせた膝の間に手のひらを押しこんで腰を揺する。

(ダメええっ、ダメなのっ、立たなきゃ……しゃがんじゃダメなのっ……あううっ……もうおしっこでそうっ……したいい……おしっこしたいいっ……あ、はあう……っ…ダメえっ……おしっこするカッコしちゃうっ……おトイレの中のカッコしちゃうっ……！！)

拒絶の心とは裏腹に、未果の身体は脚を肩幅に開き、深くしゃがみ込む『おしっこの格好』を取り始めてしまう。

この状況で、排泄のための体勢をとってしまったらどうなるのか。想像するだけでも怖気が震った。仮に最悪の事態だけは回避できたとしても、爆発寸前の膀胱を抱えたままもう一度立ちあがるのにどれだけ時間がかかることか。

「ダメ……ダメ……っ……」

ぎゅうっと握り締められたスカートの下では、少女の排泄孔を覆う白い布地に皺が寄せられる。汗に滲んだ下着の奥で、熱い雫の予兆が小さく蠢いた。

女の子の大切なところを覆う布地は、あまりに脆く頼りなく、未果の我慢の役には立ってくれそうになかった。今まさに崩壊してもおかしくないぎりぎりの均衡の上で、未果は必死の我慢を続ける。

(だめ……がまんしなきゃ……っ、おトイレまで……おしっこガマンしなきゃっ……こんなところでしちゃうなんて、ぜったいぜったいダメっ……おトイレ、おトイレえっ……)

心の底からトイレを、“おしっこのできる場所”を切望し、ぎゅうぎゅうと身をよじる未果。

しかし、少女の股間で今まさに爆発しそうな尿意を訴えているのは、身体に溜まった不要な水分を排出するための器官なのだ。どれだけ強固な女の子のプライドをもってしても、自然の摂理が備えたその本来の機能を停止することなど不可能である。

「あ、うふあう、っ、はうう……っ！！」

(いやあっ……い、いきなりっ……ダメっ……ま、またっ、またおしっこしたいのが、きちゃったあっ……っ！！ ああっ、ダメっ、ゆるんじゃうっ、おしっこの出るところひくひくってしちゃうっ！！ やあ、やだあっ……漏れちゃうっ、もれちゃううっ！！！！)

足の付け根をつうと走る鋭い疼きに、未果は腰を抱え込んで身体を折り曲げる。

ひひくと震える排泄孔を覆う股布の内側、きつく閉じられた脚の間に、じゅんっ、と熱い雫が滲み出してゆく。

しゅるっ、しゅしゅしゅ。

布地にぶつかるぐもった水の音が少女の股間から響く。とっさに下着を掴む未果だが、じわじわと溢れ出すおしっこを止めることはできなかった。じんと尿意に疼き、小刻みに震える膝の間を、つうと我慢できなくなったおしっこが伝って落ちてゆく。

ソックスにじんわりと染み広がるおチビりの温かさに、未果の頭は一気にパニックになった。

(おトイレしちゃうっ、こんなところでおトイレ、おトイレしちゃうっ！！ だめ、でないでおしっこでないででないでおしっこおしっこおしっこでちゃだめおしっこでちゃだめっ、おトイレちがうの、おトイレないのっ！！ こっ……おトイレじゃ……ないんだからあぁっ！！)

じゅじゅじゅ、しゅるるっ、ぶしゅっ

じわりと染み出したおしっこは、未果の下着をどんどんと侵食してゆく。それに合わせて閉ざされていた括約筋が無理矢理こじ開けられ、じんと恥骨を衝撃が走り抜ける。

「あ……ひぁあうっ……うあう……っ！！」

排泄の快感に腰が砕けそうになる。はぁはぁと荒くなる息を必死に抑え、未果は渾身の力で緩み始めた排泄孔を締め付ける。

「うっ、く、ううううっ、あぁあぁっ！！」

(おもらし、おもらしなんてダメえっ……がまん、おトイレ、トイレ、といれといれといれっ……ふぁあうっ……おトイレまでがまんっ、がまんっ、がまんっ……くううっ！！ おしっこだめえっ、おといれまでっといれといれおトイレまでえっ、はぁあっ、……ちゃんと、おしっこおといれですの、おといれ、といれといれといれっ……あぁあぁっ、しちゃだめえ……っ！！！)

膀胱で煮えたぎる尿意に、まともな思考能力が消え失せてゆく。未果は顔を真っ赤にして、アヒルみたいにお尻を突き出した。へっぴり腰のままもじもじと太腿をくねらせ、腰を指先に擦り付ける。

その隣を、不審げな表情で自転車の男が通り過ぎてゆく。

「あ……あぁっ……！！ っ、くうっ……」

ゆっくり振り返った未果は、サイクリングロードの上に広がる光景を目にして絶句した。灼けたアスファルトの上、未果の股間から次々溢れ出すおしっこは太股に何本も細い川をつくって伝い落ち、革靴の周りに地面に小さな水たまりを作っている。

そして、未果の後ろにはもう何十メートルと、黒い染みが点々と続いていた。

ぽた、ぽた、と滴る雫。それが未果がいままで歩き続けてきたおしっこ我慢の道だった。

「い、いやぁっ……」

信じられない光景が未果の羞恥心をずたずたに引き裂く。ひゅと震える喉を悲鳴が埋める。同時、また吹き出したおしっこが未果の指の間をすり抜けて地面にぱしゃぱしゃと滴り落ちる。

くねくねと続く黒いお漏らしの跡。

未果が今、どれだけおしっこを我慢していて、どれだけおなかの中に恥ずかしいおしっこを溜め込んでいて、もうとっくの昔に我慢の

限界で、排泄孔はぶしゅぶしゅとオモラシを繰り返すほど緩み始めていて、だからたぶんたぶんになったおしっこをどんな風に漏らしてしまったのか——そんなことまで一目瞭然に解る。

通り過ぎていった人々は、みんなこれを見ていたのだ。

今までの我慢がまったくの無駄だったことが、未果の羞恥心にとどめを刺した。

きゅうきゅうと収縮を始めた膀胱が、5度目になる尿意の大津波に変わる。

「いや……っ！！ うぐっ、ふうっ、ふうっ、がまん、ガマンっ、がまんんんっ！！！」

（で、ちゃうっ……！！ でちゃう、おといれっ、おといれっ……おしっこしたいの来ちゃった、またおしっこしたのくるっ、おしっこしたのきちゃうよおお！！ おしっこのでるとこくらんじやうっ、……だめ、したいしたいおしっこしたいしたいおしっこおしっこ！！ おしっこもっといっぱいっ、いっぱいでちゃう！！ おしっこ……ぜんぶでちゃうっ、おしっこぜんぶだしちゃうううっ！！）

じゅじゅじゅじゅっ、じゅおお！！

柔らかな布地に包まれた聖域に、ついに限界が訪れた。

爆発するひととき大きな尿意の波にがくがくと震えた膝が折れ、未果はサイクリングロードの真ん中でしゃがみ込んでしまう。排泄孔がぐにやりと裏返し、その本来の役目を果たそうと水門を開く。下着の中でぶじゅじゅじゅじゅとぐもった水音が響く。

（やだああっ、やだやだやだあああっ！！ ちがうのっ……ちがうのっ！！ ……おしっこしないの……おしっこなんてでないのっ！！ ……おといれまだなのにつ……おといれじゃないのにおしっこのカッコしちゃだめっ、でちゃうからあつ、ほんとうに……ぜんぶ、おしっこでちゃうからあああっ！！）

もはや役立たずになった括約筋を必死に叱咤しながら、すっかり引けた腰をくねくねとクネらせて、最後の抵抗を試みる未果。

だがそれもむなしく、ひくひくと引きつった未果の股間からはじゅわっとおしっこがあふれ出し、ガクガクと震える脚の付け根からは太い水流が何本も太腿を伝って靴下を濡らし、靴にまで染み渡ってゆく。

「うぐっ……ふうっ……あああっ……ああああああああああっ……っ！！！」

（ダメっ、こんなっ……こんなトコでえっ……！！ おトイレ……まだなの……っ、おといれでちゃう、おしっこしちゃうううっ……ぱんつのなかにおしっこでちゃうううっ……おもらししちゃうっ……おもらしっ、おもらしやだっ……！！！）

じゅじゅじゅううっ、しゅるしゅるしゅるるっ！！

ぐねぐねと揺すられる少女の股間から、本当の排泄の音を立てておしっこが吹き出す。下着の中にぶつかったおしっこは股布を直撃し、白い布地を汚して跳ね返り、未果の股間全体を熱く濡らしてゆく。

とうとう始まってしまった本当の排泄。それも視線を遮るものもない屋外のアスファルトの上だ。どう言い訳しても誤魔化しようはない。未果の足元の水たまりは見る間に広がってゆく。

「ああっ、あああああっ、いや、いやあああっ！！」

それでも未果は、遠く離れたトイレを渴望して足を動かし続けた。

一度始まってしまったおしっこは止まらない。くねる腰の動きにあわせて、少女の足元で恥ずかしい大洪水が滝のように流れ落ち、じゃばじゃばと地面を叩く。

ふらついた足がおしこの水たまりに突っ込んで、ぱしゃりと跳ねた。
ずず、ずず、と足を引きずって進む未果の後には、広大なおしこの川が残されていく。少女のおもらしの、隠しようもない証拠として。

(初出：おもらし千夜一夜 871-875 2005/09/03)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 雨あめ降れふれ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 12:00:02

BODY:

昨日から降り続く雨は、午後になってようやく弱まり始めていた。

灰色の空の下、ちらほらと見える学校帰りの生徒たちに混じって、風香は精一杯の早足で帰り道を急いでいた。

けれどその足取りはおぼつかないままで、黄色い傘は右に左にふらふらと揺れている。

「んんう……っ、ん……っ」

（だめっ……も、漏れちゃうっ……）

プラスチックの柄をぎゅっと握り締めて、風香は喉の奥に悲鳴を飲み込む。

小さな風香のおなかの中で、ぱんぱんに膨らんだ膀胱がきゅんっと疼く。おなかの下の方から始まったむず痒い尿意はどんどんと勢いを増して、いまや足の付け根の一番脆い部分まで達しようとしていた。

ぴったりと膝をくっつけ合わせ、はあはあと息を荒げながら少女は歩道をふらふらと進んでゆく。

さっきまでの強い雨の中でも、風香のスカートは傘とレインコートで守られていた。だが、その完全防水の布地の下で、すでに少女の下着は染みだしてきたおしっこにぐちゃぐちゃになっていた。

（出ちゃダメっ……出ないでえ……）

しゅしゅっ、しゅるるっ……

風香の願いもむなしく、オシッコの孔は我慢の壁を突き破ってぶくりと膨らんでしまう。熱い雫がたつぷりと股布に吹き付けられ、排泄の甘い快感がぞくぞくと少女の背筋を震わせた。

むき出しの腿と膝を、ひと筋、ふた筋と漏れ出したおしっこが伝い落ちてゆく。

（やだっ、しないのっ……オシッコしないのっ、しないのおっ……！！ トイレまでがまんっ、トイレ、トイレもうちょっと…なんだからあつ……）

言う事を聞かない自分の身体に癰癢を起こした長靴が水たまりを乱暴に蹴散らす。ばしゃっ、という水の音は、それだけで風香のおなかのなかのおしっこに共鳴して、じんじんとお尻に響く逆効果をもたらした。

「んんううっ……！！、くうんっ、……ゆううっ……っ！！」

こみ上げてきた猛烈な尿意に、風香はびくんと背筋を伸ばした姿勢のまま固まってしまった。おなかのなかを占領したおしっこ、必死の我慢で前にも後ろにも進めない、綱引き状態だ。少しでも余計な身動きをすれば、最後の一線が破られてしまう。

「ふうーっ、はあっ、はあっ……っ！！」

（だめ、オシッコ、オシッコでるオシッコおしっこおしっこっ……）

じゅ、じゅ……じゅわっ…

白い下着につつまれた股間が上下するたびに、少しずつ熱い雫が滲み出して風香の脚を濡らした。レインコートをぎゅっと引っ張り、おまたをきゅうっと引き締めて、風香は吹き出してしまいそうなおしっこを押さえこむ。

またちょっとだけ漏れてしまったおしっこが下着にぶつかってじゅじゅじゅじゅと音を立て、あしもとの水たまりにぽたぽたとこぼれ落ちた。

「んうっ、ふううううっ……」

ほっぺを真っ赤にして、ふらふらとおぼつかない足取り。
傘が揺れて大きく傾き、レインコートからはみ出したスカートの裾が雨に濡れてゆく。
空模様はそろそろ小降りになろうとしているのに、風香のスカートの中はおしっこの大洪水だった。

(初出：おもらし特区 住民登録審査板)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 首都圏速報・5時のニュース（抜粋）
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小ネタ
CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 12:05:06

BODY:

次のニュースです。

今日午後4時ごろ、〇〇県△△市■ ■商店街脇の路地で、女子児童が風紀軽犯罪防止条例違反の疑いで保護されました。

保護されたのは△△市立××中学校2年C組の前原ゆかりさん（13）で、今日午後4時10分ごろ、学校からの帰宅途中で強い尿意を覚え、■ ■通りの路地裏で下着をおろし、しゃがみ込んで局部を露出し放尿を試みようとしたものです。ゆかりさんは排泄を行なう寸前で、近くにいた条例保護委員の手によって保護されました。

ゆかりさんが保護された現場は見通しの悪い路地裏で、普段から条例違反を犯す女子児童の溜まり場となっている場所でした。委員会では以前から商店街の住人より相談を受けており、定期的に巡回をするなどして警戒を強めていました。

現在ゆかりさんは市の保護施設に移送され、保護委員によって査問を受けていますが、どうして排泄行為を試みたかなどの質問には答えようとせず、

『おトイレ、おトイレに行かせてください』

『ごめんなさい、もうしませんから、お願いします、おしっこ…させてください……っ』

『おしっこでちゃうんです、はやく……はやくっ……』

などと訴えているということです。

ゆかりさんは午前の休憩時間に、中学校の敷設トイレを使用していることが確認されており、保護された現場では規制回数を超えて排泄を試みていました。路上での排泄という最悪の事態には至らなかったものの、この事態を重く見た条例保護委員会では、査問にあたる委員の数を増やし、ゆかりさんの体調や本日のスケジュールなどをさらに詳しく調べたうえでゆかりさんが排泄を決心するに至った経緯を明らかにしたいとしています。

風紀軽犯罪防止条例は、今年1月から全国に先駆けて〇〇県など六つの県で施行されているもので、2007年の風紀法施行に伴い女子児童の排泄行為が盗撮などの被害から守るため規制が設けられたことを背景に定められました。女子児童のプライバシーの保護の観点から義務教育中の女子児童の排泄の回数を制限し、衆目の目に触れる機会を減らすと同時に昨今失われがちな少女に必要な羞恥心を育成することを目的としています。

条例の施行されている〇〇県では女子児童は午前、午後の2回の休憩時間を除き、公営施設、公衆トイレ等を含めたあらゆる場所での排泄行為を禁止されており、これに違反した者には厳しい罰則が適用されます。

しかし、一部の女子児童にはこれを見做す動きがあり、より厳密な法改正を求める市民運動などが活発になっています。

それでは、次のニュース……

（初出：千夜一夜〜ベリー・ショート・イマジネーション〜 252 2006/03/16）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: コンビニでの懇願

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 12:29:55

BODY:

「いらっしゃいませー」

ガラスの自動ドアが左右に開き、ひやりとした空気が流れ出してくる。店員の挨拶に訳もなく視線を反らしながら、佐奈はコンビニの入り口をくぐった。ヒクつく腰。たぶたと膀胱を満たすおしっこが、切羽詰った尿意を訴えて恥骨から背筋へと響いてゆく。

エプロンの前をシワが寄るほどぎゅっと押さえ、膝を擦り合わせている佐奈の不自然な姿勢に、店員の一人がはっきりと眉をひそめる。佐奈が客としてではなく別の用事で入店してきたことに気付いたのだ。

（やだ……見ないでくださいっ……ちがうの、ちがうんですっ……うあ……っ、わたし、っ……）

隠し切れない尿意をはっきりと悟られてしまったことに耳まで赤くなりながら、佐奈はできる限りの早足で店内を横切る。店の奥、雑誌売り場のそばの小さな扉。このコンビニのトイレはそこにある。

あまり清潔とは言えないが、もう贅沢を言っている場合ではなかった。破裂寸前の膀胱を抱えた佐奈に選り好みする余地など残されていない。

（ご、ごめんなさいっ、ごめんなさいっ、あとで、ちゃんとお買い物しますからっ……！！）

胸の中で店員に何度も頭を下げ、佐奈はトイレのドアに走り寄った。ノックももどかしくノブを引く。しかし帰ってきたのは無常な硬い手応え。

「え……」

そして佐奈はドア前の張り紙に大きく書かれた赤文字に気付いた。その内容が一瞬理解できず、佐奈は呆然となる。

『従業員専用 トイレはお貸しできません』

「う、嘘……っ、そんなぁ……っ！！」

待望のトイレを目の前にしながら使用を禁止された少女の体奥で、激しい疼きが沸き起こった。危険水域に達した膀胱がきゅんと収縮し、猛烈な尿意が下腹部から股間の先端までを駆け下りる。

きゅきゅと佐奈の両足が床の上で鳴る。我慢のダンスは最高潮となり、佐奈の下半身はあっという間に尿意に屈してしまった。

「や、あああつ、っ……～～っ、あ、あ、あ、あつ、」

か細い悲鳴を上げながら、佐奈はエプロンの股間をぐぎゅうと握り締めた。布地の奥で熱く湿った部分がひくひくと震え、必死の我慢のスキを付いては熱い雫が漏れ出し、下着にぶつかるじゅじゅっ、じゅっとぐもった音を鳴らす。

とうとう始まってしまった“お漏らし”の予兆。わずかずっおしっこを漏らすたびに、焼け焦げるような快放感が排泄器官を支配し、少女の理性を蕩かしてゆく。

「あ、う、あ、あつ、う、…あつ、あ……っ！！」

必死に悲鳴を噛み締め、空を掻く佐奈の右手が壁を掴む。

オモラシを始めてしまいがちながらも、佐奈は健気に最悪の事態だけは回避しようと、ありったけの力を疲弊した括約筋に送り込んだ。ちょこん、と滑稽に突き出しされたおしりが左右に揺れるたび、少女の下腹部にたまったおしっこをたぶたぶと波打たせて刺激する。

（はやく、はやくはやくはやくっ、トイレ、トイレ、おトイレええっ！！）

こんなところで漏らしてしまった情けなさに胸が締めつけられ、佐奈の瞳がじわりと滲む。

それでもどうにか心を奮い立たせ、猛烈な尿意の波の合間を縫いながら佐奈はずるずると足を引きずってカウンターに引き返した。明らかに挙動不審な少女に、伝票を整理していた女性の店員が不機嫌そうに眉をよじる。

「なにか？ 何か用ですか？」

「そ、その……っ、……お、……れっ……」

（でちゃう、でちゃう、でちゃうううっ！！！）

頭の中で排泄本能が絶叫している。ぱくぱくと言葉にならない声で口を動かす佐奈だが、店員はますます鬱陶しそうに視線を強めた。

「あ？ なんです？ もっとはっきり言ってください。聞こえないから」

くねくねと腰をよじらせる佐奈に、容赦のない視線が注がれる。不快な表情を隠そうともしない店員の前で、羞恥に耳までを赤く染めながら佐奈は股間に走る甘い刺激に耐えて腰をもじつかせる。

「……うあっ……つくう……っ す、すいま、せんっ……お、おトイレ……おトイレ、貸してくださいっ……」

エプロンの股間を握り締め、脚を小刻みに踏み鳴らしながら、佐奈は俯いたまま必死に声を絞り出した。いい年をして、まるで幼稚園の子供のようにおしっこを我慢していることを自ら告白してしまうという恥辱の極みに、少女のプライドはずたずたになる。

だが、店員は小さく鼻を鳴らして、無慈悲に告げた。

「ダメです。張り紙見たでしょう？ 他で済ませてください」

「……そ、そんなあつ……っ、あつ。…お、お願いしますっ……わ、わたしっ、もう、我慢っ、できなくてっ……ほんとに、本当にっ……」

「ダメなもんはダメなんです。前にニュースであったですよ？ 異臭騒ぎとか。知らない人間に貸したりして事件になったりしたら、責任取るの私なんですよ」

「あああつ……そんな、そんなあつ……お願いしますっ……もう、本当に……わたし、限界なんですっ……」

せわしないステップが、きしきしとコンビニの床を軋ませる。店員はため息をついて作業の手を止め、佐奈に蔑みの混じった視線を向けた。

「あんた、中学生？ いい年してトイレトイレ騒がないでよ。ホントに我慢できないの？」

「はっ……(はい、はい、はいっ)」

「ったく……マジ？ 信じらんない」

なんとかトイレの許可をもらおうと必死に首を動かす佐奈だが、店員は煩しげに手を振るだけだった。

「あーもう。うるっさいな。この前も女の子だからって甘く見てたら、盗撮用の隠しカメラなんか仕込まれたんだから。……悪いけどもう騙されないからね」

冷たく言い捨てて作業に戻る店員。追い討ちをかけるように襲い来る大津波に佐奈の腰が竦む。

「ま、まってください……おねがいですっ…あ、あのっ……うあううっ！！」

(あ、だめ、だめ、今はだめっ、だめっ、だめえっ！！)

股間を握り締め左右の足を大きく足踏みし、恥もなく我慢のステップを繰り返す。入り口のすぐ前で繰り返される少女の痴態に、コンビニの前を通り過ぎる人々が何事かと足を止めている。

「あううっ……や、約束しますっ……ちゃんと……うっ、くうっ……ちゃんとっ、お、おトイレ、ヘンなことに使ったりしませんからっ……ちゃんと使いますからあつ……おしっこ、おしっこするのにだけつかいますからあつ」

「ダメだって言ってるだろ。しつこい……」

取りつく島もない店員の態度に、佐奈の下腹部はさらに猛烈な切なさを募らせる。佐奈は溜まらず腰を引き、股間に当てた手のひらをエプロンごと脚の間に挟む。

くしゃくしゃになったエプロンは、まるでオムツのように足の間に挟まれて、佐奈の股間の爆発を守るために存在しているかのような惨めな姿になっていた。

「そ、その、わたしっ…き、きのうから、あ、あ、っ……ずっと……はあっ……おトイレ、いけてないんですっ……ずっと、おしっこ、が、がまんしてるんです……っ」

トイレに入るために、おしっこを済ますために、佐奈は必死になって尿意の説明を始める。

「も、もう、おなか、おしっこが、ぱんぱんでっ……あ、あそこがじんじんしちゃってっ、……げ、んかい、なんですっ……もれちゃう、もれ

ちやいそうなんですっ……おしっこ、おしっこがっ……」

一言を口にするたびに、膀胱が断続的に収縮する。少女の本能の命ずるまま排泄器官がびくびくと痙攣して、溜めこんだ中身を絞りだすことを命じてくる。最悪の事態を回避するため、佐奈は必死に股間を握り締めて“おしっこさせてください”と訴え続けた。「……う、うちも、カギわすれて、しめだされちゃって、……あ、あ、あつ、だめっ！！……ひうつ……ちや、ちゃんとおトイレ、おトイレつかいますからっ……よ、よごさないようにっ……しますっ……、おわったら、ちや、ちゃんとおそうじもして、きれいにしますからっ……へ、ヘンなこともしませんからっ……おねがいしますっ……う、…おねがいしますっ、おトイレ、おトイレさせてくださいっ……わたしに、おといれさせてくださいっ……」

びくびくと震える下半身と、こんな場所で粗相をしてしまうのに比べればと焦る気持ち、佐奈の正常な判断力を奪ってゆく。

かつて一度も体験したことのない激烈な尿意に下半身を蹂躪され、佐奈は腰をクネらせ、息を荒くして見ず知らずの相手に切々と尿意を訴え、排泄を求めて媚びる。

だがそんな少女の願いも空しく、佐奈の要望はもっとも無残な形で遮られることとなった。

「ちょっとねえあんた、こどこだかわかってんの？ さっきからトイレトイレって……ダメって言ったでしょ！？ あんまりしつこいと警察呼ぶからね！？」

「や、だ、だめ、……あ、く、う、あ、あ、あ……～～っ！！！」

痺れを切らした店員は佐奈を押しつけるように肩を突き飛ばした。膝をくっつけ辛うじて均衡を保っていた我慢の天秤が大きく傾く。

「あ、あ……っ、～～～っ！！……っ！！！！」

佐奈は両手を股間にねじ込んで、声にならない悲鳴を上げた。

じゅん、じゅじゅっ、じゅぶっ、じゅじゅじゅじゅっ、

エプロンの下で佐奈の股間が痙攣する。少女の下腹が痙攣し、自然の摂理に支配を明け渡した膀胱が容赦なく収縮してゆく。

一番脆い部分を突破したおしっこが下着の股布にぶつかり、濡れたハンカチを蛇口にかぶせたようなはしたない音を立てた。何重にも重ねられた布を貫通して、我慢していたものが一気に噴き出してゆく。

一瞬で股間を水浸したおしっこがあつという間におしりまで広がり、滝口からあふれるように床に叩きつけられた。

「あつ、ちょっとあんた、マジっ！？ 何やってんのよっ！？」

「はあっ……っうう～～～っ！！」

佐奈がどれだけ排水孔を締めつけても、一度決壊したダムはもう止まらない。

クリーム色のタイルに大きく広がったおしっこの海が、がくがくと腰を震わせる佐奈の足元を流れてゆく。エプロンに染みたおしっこは佐奈の下半身を蹂躪し、足を伝って靴までもぐしゃぐしゃに濡らしてゆく。

(初出：おもらし特区 住民登録審査板)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: ガマーン教圏の旅

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 12:39:59

BODY:

世界は広大である。

ところ変われば品変わり、私たちの常識ではまず思いもよらないような習慣というものが、外国にはある。

ガマーン教の教圏であるモ・ジ国、ソワ国には、二千年の昔からいまも続く断尿月という習慣がある。両国のような水の少ない砂漠地方では、水の大切さを知るために行なわれていた儀式が発展したもので、なんと一年のある季節の3週間、トイレの回数を一日に一度だけに制限されてしまうという宗教儀式なのだ。

なにしろトイレに関することなので、これはガマーン教に帰依していない人にとっても大問題となる。一日に一度、夜の11時になると30分だけトイレは解放されるが、一日中我慢をしていた人たちが一斉に詰めかけるため、たいていは大混雑になる。中に

は出遅れてしまい、ついにおしっこをすることができないまま次の日を迎える人もいるくらいなのだ。

以前あたしがお世話になった現地の修道院でシスターを務めるお姉さんは、そんな運の悪い日をなんと三日も続けて耐えきり、実に80時間分以上のおしっこを我慢しきったことがあるそうだ。4日ぶりのおしっこは、まるでバケツをひっくり返したみたいだったと笑いながら教えてくれた。ぞっとする一方で、なにかイケナイ秘密を聞いたようでちょっとぞくぞくしてしまったのはナイショ。

この時期、特に女の子はガマーン教圏を旅行する時は気をつけなければいけない。街中のトイレというトイレは太い綱と鎖で鍵をかけられて、何があっても入れなくなってしまう。おおらかな気質の人々が多く、異教の教えにも寛容な教義のガマーン教だが、この断尿月だけはとても厳しく守られている。昔、この地域では本当に水が貴重品だったのだ。

とはいえ、外国の人も多く訪れるようになった最近では都心のホテルは旅行者向けにいくつかトイレを解放しているが、なにしろ他にトイレのできるところがないのでそこは大抵長蛇の列だ。1時間や2時間待ちはざらなので、もし危険なことになってしまったら覚悟して望もう。

もし不用意に表を歩いていたりすると、トイレを催してもどこに行っても用を足すことができず、最悪オモラシという結果になりかねない。

前の章でも書いたように、モ・ジ国はとても衛生観念が発達している国なので、ちょっと物陰にしゃがみ込んで失礼——というわけにはいかない。トイレでない場所での排泄は即20万ガマ以上の罰金と、即時の国外退去だ。仮に未遂であってもこれに順じた措置がとられることがしばしばで、あたしの友人の中にはおろしかけた下着を無理矢理はかされて、大使館への移動中にあえなく粗相をしてしまった中学生の女の子もいる。

結局、その子はモ・ジ国を出るまでパンツを換えられなかったそうなので——そんなことにならないように気をつけて欲しい。

——霧雨霽の世界探訪

『特集・ガマーン教圏を旅する』より

(初出：旧ブログ書き下ろし 2007/02/01)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: トイレの自動販売機

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 12:40:10

BODY:

薄暗く汚いイメージが先行している公衆トイレ（特に女性用）が犯罪の温床、風紀の乱れの原因になっているとして、公衆トイレの廃止とそれに代わる携帯トイレの開発を打ちだして 20 年。

昨今、環境問題と治安問題の解決を目的として発売された携帯トイレが世間を席卷し、めっきり公衆トイレは見かけられなくなった。

20 年前までは当たり前だったトイレ前の行列はすっかり解消され、女の子達はこっそりと物陰で、スカートの下小さな入れ物におしっこを済ますようになったのだ。なにしろ最近は携帯トイレ使用禁止の電車や病院の中でも気にせずおしっこを済ませてしまう女の子達までいる始末。女の子達はトイレに行くことに他人の視線を気にしたり恥ずかしがったりするという苦行から解放された。

これは素晴らしいことだ、と世の女性解放運動家の著名人は口を揃える。おしっこという、性差をはっきりさせる悪習のひとつから女の子達を解放したのだと、自分たちの偉大な功績を褒め称えあうことを忘れない。

だが、決していい事ばかりではない。

この現状に不満を抱えながら、恥ずかしさのため口を閉ざしてしまっている女の子たちが、かなりの多数に上る。

由利もその中の一人だった。

「んっ……」

買ったばかりの携帯トイレを手にも、由利は足早に休憩スペースの物陰に走りこんだ。

きょろきょろとあたりを警戒しつつ、そっと下着をおろしてしゃがみ込む。同時に真っ白な携帯トイレを股間にそっとあてがった。

待ち構えていたように吹き出す恥ずかしい水流が、由利の手に握られた小さな容器に注がれてゆく。

「ふう……」

政府が販売する最もスタンダードなタイプの携帯トイレ。紙コップ大の円筒形の容器に、逆流防止の蓋と、おしっこを吸収する高分子吸収素子を備えた現代科学の粋を集めて作られた、現代の生理用品の一つだ。

コレを使うことで、女の子はこれまでのようにおしっこの出る孔を汚さずにトイレを済ませることができるようになった。

そのサイズは、黄色のラインぎりぎり一杯まで注いで 200cc。それが政府が決めた標準的な女の子のトイレ一回分のおしっこの量だ。

だが、由利のおしっこはとてもとても足りないものだった。だから、由利はいつもいつも、おしっこを途中で止めて我慢しなければならず、全然すっきりとできないのだ。

「うう……どうしてこんなにちっちゃいんだろ……」

おしっこで一杯になった携帯トイレを恨めしそうに見つめる由利。由利の膀胱はまだたっぴりとおしっこに占領されており、尿意はほとんど薄れていない。

製品の安全基準となる法令にクレームを付けた女性団体のせいだという。彼女達は女性の排泄について一般的なものではない基準を設けるのは蔑視にあたる、と主張し、当初 500cc だった紙コップの容量を半分以下に引き下げた。

当然専門家ははじめ各所から反論が起きたが、団体は強固な姿勢を崩さず、逆に提訴までちらつかせて強引に主張を押し通したのだ。

つまりは、由利たちほとんどの女の子は、“おんなのこはそんなにいっぱいおしっこなんてしませんよ”という見栄に付き合わされて我慢を強いられているのだった。

「はあ……不便だなあ」

まだおなかの中におしっこが残っている感覚があるのに、携帯トイレの容量はもう一杯になろうとしている。由利はここ何年も、本当にすっきりできるまでおしっこを思う存分出せたことがないのだった。

よっぽどトイレに近い女の子でない限り、一度に 200cc でおしっこを済ませるのは至難の業なのだ。まったく、少女達にはたまったものではない。

(初出：旧ブログ書き下ろし 2007/02/01)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 月壬月辰のスズメ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 12:52:18

BODY:

永久我慢スレにて提案された、オシッコを我慢しておなかを膨らませ、まるで妊娠したかのように振舞うという、『月壬月辰』の小ネタに触発されて書いたもの。

<hr size=1 />

苦しそうに優先席に腰掛けている女の子——まだ中学生くらいだろうか。

特徴的なサイドスリットのたつぷりした服は、見る人が見ればはっきりわかる証だ。おなかを大きくしてそこに座るにはさすがに幼すぎる彼女に、車内の数人が好奇の視線を隠すこともなく注目している。

「……ねえ、君、ちょっといい？」

「え……は、はい」

「間違ったらごめんだけど、今日で何日目？」

「……あ……」

少女は驚いたように表情を変え、私を見た。

「お、お姉さんも……知ってるんですか……？」

「うん。……」

頷く私に、少女は顔を青ざめさせながらうろたえる。

「あ、あの、今日がはじめてで……その、インターネットで見たんですけど、ど、どうしても、やってみたくなくて……あ、あの、お願いします……家とか、が、学校とかには……言わないでくださいっ……っ」

私の目を見上げ、早口にそうまくし立てる少女。

彼女くらいの年齢で、こんなインモラルな行為に耽っているのは確かに世間の目が気になるのだろう。実際、月壬月辰は身体に重大な影響を与えかねないので、特に体の未発達な未成年には勧められたものではない。

けれど、彼女くらいならひときわそうということが気になる年齢でもあるのだろう。イケナイ事と解っていても、興味から試してみたいなることはあるはずだ。

「大丈夫だよ。……ほら」

そう言って、私は彼女の手を取り、自分のおなかへと導いた。

「あ……」

少女の表情が変わる。ビジネススーツの下で、岩のように張り詰めた私の下腹部をはっきりと感じ取ったはずだ。安心させるように声を潜め、私は彼女に囁きかける。

「まだ、二日目なんだけど。……そろそろおなかも目立ってくる頃だから、明日からは私もそれ、着ると思うけど」

独身である事のストレスから、私が月壬月辰をはじめたのも最近の事だ。仕事が忙しいのでいつもいつもと言うわけにも行かないが、最近は週末に合わせるように時間を調整して、背徳感に身体を委ねている。

「あ、あの……」

俯きながら、少女は言う。

「な、七日目……です、わたし……」

——驚いた。

初めての挑戦で、まさか一週間も我慢が続けられるなんて。私だってまだそこまで続けられたことはない。せいぜいが4日目までだ。

「わたしの学校、私立だから……春休み、ちょっと長くて……始業式も週明けなんです。だ、だから……四月になってからずっと、我慢してて……」

中学に入った頃はオトナに憧れる時期。そして、女の子なら自分の身体が生命を宿してはぐくみ育てることを自覚する頃でもある。そんな年代の子が、ふとした事で月壬月辰を知れば試してみたくもなるのかもしれない。

「で、でも、もう本当に限界で……ど、どうしても立ってられなくなって、それで……」

ちらりと優先席の表示を見上げ、少女は赤くなって俯く。

骨折やお年寄り、小さな子供を連れたのマークに混ざって、おなかを大きくした女の人が座っているマークも記されている。耐えきれなくなって座ってしまったものの、今度は立ちあがることもできなくなったのだろう。周囲の視線を浴びながら、どうしようかと小さな胸を痛めていたに違いなかった。

そんな少女を見ているだけで、私の胸は背徳感と興奮で激しく高鳴る。

「で、でも、もう今日、だめかも……」

スリットから離れない少女の手は、今もぎゅっと股間を握り締めているに違いない。せわしなく動いているローファーのかかと、ソック

スの上からは白いふくらはぎがのぞいていた。

頭の中を占領した熱に浮かされるように、私は口を開いていた。

「君、今日、時間は平気？」

「え……は、はい……お父さんも、お母さんも……お仕事で、泊まりだって……」

そんな答えを半分見越していた。さすがに中学生が親に気付かれないままこんなにおなかを大きくして、さらにごまかし続けることはできないだろうから、それなりの理由があるだろうと見当をつけていたのだ。

「……じゃあ、さ」

こくり、と唾を飲みこんで、私は続ける。私も多分、おなかをずっしりと圧迫する重みに支配されて、頭のどこかがじんじんと麻痺していた。

「じゃあ、これから私の家においでよ。……一緒に頑張ろう。もし出ちやいそうになっても、大丈夫のように付いててあげるから……ね？」

「え……っ！？」

「もし、どうしてもダメだったら……私が立ち合ってあげるから。ちゃんと君がおなかを大きくして、苦しんで、いっぱいいっぱい我慢してるの、最後まで見ててあげるから。……一緒に、しよう？」

口にすればするほど、自分の頬が熱くなっているのがわかった。

こんな小さな子が、私なんかよりもずっと苦しんで、おなかを大きくして、我慢に我慢を重ねている。どうしようもないほどに、胸が苦しい。まだ名前も知らない彼女を、ずっとずっと側において、その姿を、耐える姿を、最後の瞬間を、一部始終を、見ていたかった。

「……っ、……………は、はい……っ」

ゆっくりと、少女が頷く。

一人でこの趣味にはまるという事は、男性に対する無意識的な恐怖を持っていることも示している。……つまり、月壬月辰を一人でしている女の子は、私を含め多かれ少なかれ同性愛的な傾向を持つ。

……とは言え、こんなにもあっさりとOKされるなんて思ってもいなかった。ひょっとしたら、いつもこんな事をしていると思われたのかもしれない。

内心の動揺を押し殺しながら、スピードを落とし始めた電車の中、ゆっくりと少女に手を伸ばす。次の駅は私の降りる駅だ。

「大丈夫？ 立てる？」

「は、はい……あ、あの、手……握ってて……もらえますか」

「うん」

大切なところを押さえる事を止めて、少女はおずおずと手を伸ばし、きつく私の手のひらを握り締める。そうすることで、更なる高みに耐えようとするかのように。

「行こう。ゆっくりでいいから」

「は、はい……っ」

ふらふらとしたおぼつかない足取りで、少女が立ちあがる。大きなおなかが揺れ、いやがおうにも周囲の注目をひく。

私にぎゅっとしがみ付こうとする少女の手のひらは、たてようもないほど熱く、じつとりと湿っていた。

(初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 212-216 2007/04/08)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: B・B・クィーンズの記録

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 10/12/2007 12:52:34

BODY:

地下スレにて書き込まれた、B Bクィーンズ = Bursting Bladder Queens という発想のネタをに触発されて書いたもの。

<hr size=1 />

“B・B・クィーンズ”

この国の芸能界の歴史を語る中で決して外せない存在として、その名前は燦然と光り輝いている。その活動期間はデビューからわずか3年。多くのスターが現れては消えてゆくブラウン管の向こうの理想郷を、彼女達は文字通りの全身全霊を掛けて駆け抜けていった。

今もなお根強いファンを残し、また同時に多くの謎も囁かれる彼女たちについて、当時の熱狂に浮かされていた一人のファンとして、拙いながらもここにその記録を残しておこうと思う。

ネットの一隅でしかないこの場所で語るには彼女たちの存在はあまりに大きく、また私の知識はあまりに中途半端だ。当然ながら誤解や私見も多く混ざっていることと思う。

けれど、情報格差が失われ、多くの情報が溢れつつあるこの時代に、いつか彼女たちの名前が忘れ去られてしまわないようにと——いまはただそれを願う。

Bursting Bladder Queens

膀胱が破裂しそうなほどオシッコを我慢する少女たち——

オシッコを我慢しながらステージに登るアイドルグループ。

その前代未聞のコンセプトに、世間は騒然となった。そりゃあそうだろう、華も恥らう十代の女の子たちが、異性の前でオシッコ我慢しているということをはっきり口にするだけでもちょっとした一大イベントなのに、まして全国中継のステージの上でいきなりそんな大告白ときた。

その筋の人々が狂気乱舞し、かじりつくように中継に飛びついて、その熱気に後押しされるように『オシッコ我慢』に興味の無い人達まで巻き込んだ結果、彼女達の初の大舞台は過去に例を見ない視聴率が記録された。

彼女たちこそがB・B・クィーンズ。

後に『我慢系』と呼ばれる一大ムーヴメントを巻き起こす、アイドルグループの元祖にしてカリスマの少女達である。

氷室彩音、六辻舞、峰月藤乃、皆瀬透子。

それぞれにタイプの違う4人の女の子が、ぎゅっと膝をくっつけ股間に手を寄せて、ふるふると震えながら演奏し、歌うステージは、たちまちのうちに多くの人を虜にした。

そんな状況にありながら彼女達の演奏技術は決して拙いものではなかったことも、ブレイクの一員だっただろう。どちらかと言えば、技術や能力はあれど本物のカリスマ、いわゆる『スター性』には欠ける少女達が、逆転の発想でそのスター性を手に入れたという方が近いかもしれない。

——皆さんは、いつも……その、オシッコを我慢して本番に臨んでいるんですか？

は、はい。『限界寸前』があたしたちのモットーですから。ステージ以外の時も、カメラの前ではできるだけそうするようにしてます

——そうすると、ひょっとして今もですか？

はい。今朝からずっと我慢してました。

——それは皆さん。全員が？

（一同、そろってうなづく）

——えー、とてもユニークなポリシーだと思いますが、どうしてまたそんなことを？ よろしければ教えていただけますか？

あ、あたし達、女の子が一番可愛く見えるときはどういう時かって考えてたんです。いろいろアイデアがあったんですけど、やっぱり一番可愛いのは、オシッコを我慢してる時なんじゃないかって。

——そ、そうなんですか？

はい、真っ赤になって、ぎゅっと俯きかげんで、控えめで……そう言うの、萌えるひとって多いですね？ でも演技じゃなくて、本当にそういうふうには、オシッコを我慢してるのが一番いいんです。

——なるほど。……た、確かに。

彼女達のステージは破廉恥であり教育によろしくないとして自称『良識ある大人達』からたちまち批判の嵐を巻き起こした。同時に女性の権利を訴える団体にも、年端もいかない少女達が性的なものを売り物にしていると次々に厳しい批評を発表。

しかし、この国はかつてドラッグの名前を堂々と冠した10代前半の少女達が、明らかにセックスを思わせる内容をはつらつと歌って大人気を博した歴史がある。彼女達の姿には、昨今ほとんど見られなくなった、画面の向こう側の観客達に訴えかける強いメッセージを持っていた。

つまりは——もうトイレに行かせて、オシッコさせて、という強いメッセージ。

それが少女達の歌に彩りを添え、強いインパクトを与えていたのだ。

失敗すればするほど辛くなるリテイク。録画だからという心の緩みを制して、一回の舞台を失敗せず演じきる強い意志と情熱。

そして、なにより彼女達は望んでオシッコを我慢し、覚悟して舞台に臨んでいる。急なハプニングでトイレに行きたくなってしまったのとは違い、『適当に終わらせて早くトイレに行っちゃおう』という妥協はないのだ。

あくまでまっすぐに、最高のショーを一発で実現し、一刻も早くオシッコをしたいという強い創造性を生んでいた。

——なにか、メッセージがあるということですが。

はじめに言っておきたいことなんです。あたしたちの——活動に付いて。

——ほほう。先ほどからお話をお伺いしていると、なにかの明確なメッセージがあるということでしょうか？

はい。んっ……その、あたしたちは、一生を賭けるつもりで B B クイーンズを結成しました。だから、半端な覚悟じゃないって事を知っていて欲しいんです。

（彩音、メンバーに視線を向ける。）

（残る 3 人、はっきり頷く。）

あたしたち、一度でもオモラシを……オシッコを漏らしちゃったりしたら、即刻、この世界を引退します。

——……な、なんと。これは驚きです。……ほ、本当ですか？

は、はい。オシッコは漏らしちゃうことじゃなくて、我慢することの方が重要ですから。やらせじゃないって事も証明したいですし。もし舞台の途中であたしたちがオモラシしちゃったって気付いた人がいたら、すぐに連絡ください。それで本当に本当だったら、すぐに解散します。

——これはまた、すごい爆弾発言が飛び出しました。では、皆さんには我慢を続けてもらって…… C M のあとにまたたくさんお話をうかがいましょう。

氷室彩音。

グループのリーダー。ボーカル&ギター担当。明るくはきはきとした受け答えが人気の14歳。スカートは嫌いで、どっちかというズボンやキュロットが好き。いつも皆の気持ちを代弁し、一番前に出ているために我慢のとき足を組んだりかかとをあそこを押さえたりするのに問題がないようにしているためらしい。

六辻舞。

キーボード担当。グループの中でも引っ込み思案で口数も少ない。縁ナシの眼鏡がトレードマークで、いわゆる一番の“萌え要素”の塊。13歳。あざといという批判もありつつも、無口な彼女が健気に腰を揺すって俯いているのはそれだけで画面栄えがするの事実。

峰月藤乃。

ベース担当。吊り目気味のショートカットで、八重歯がチャームポイント。最年少の12歳。普段は彩音と同じくらいお喋り好きで、歯に衣着せぬ物言いが一部のファンに大人気。しかしオシッコを我慢している舞台の上ではその強気な態度もやや影を潜め気味。なにしろ彼女、グループの中でも一番オシッコが近いらしく、他の子がまだなんとか余裕があるときでももう完全に限界ギリギリなのだそう。

皆瀬透子。

ドラム担当で、一番お姉さんの15歳。落ち付いた物腰でいつも皆の心の支えになっているとか。一度比べっこをした時、一番長い時間我慢したうえに一番たくさんオシッコを出したのも彼女だという話。実は趣味もオシッコ我慢で、B B クイーンズ結成の原因となったのは彼女の発言であるとかないとか。

彼女達を一躍スターダムにのし上げた6月6日のスプラッシュ・インパクトから一夜開け、『お願い、アナタのドアを開けて』は脅威的な売り上げを記録。その週のオリコンチャートで4位を記録した。しかしこの順位は、それまでの知名度の低さゆえもともと品薄傾向であったCDが各店舗で供給が追いつかず、売り切れが続出したためであって、市場の動向としては品物さえ十分に揃っていれば、ダブルスコアで2位をぶっちぎっていたであろうと予測されている。

その後、翌々週に増販された分と、これを待っていたかのようにリリースされた新譜の『もお我慢できないッ♪』はさらに爆発的な売り上げを記録。チャートの1、2位を独占する。そして、デビュー当時に販売されていたふたつのアルバム、『レイニー・タイニー』と『急いで☆間に合わない!!』までもが大人気を博した。

この機会を逃すまいかとするように、翌月末にはさらに新作アルバム『すぷらっしゅ！？』も発表。彼女達は一躍時の人となった。

その冬には彼女達を主演に抜擢した映画、『君と雨音を聞きながら』がクランクイン。殺人的なスケジュールの合間を縫って、公言通りオシッコを我慢し続けたまま半年間に渡る撮影を追えた彼女達は、そのメイキングを逐一放映するという新手法によって銀幕のスターとなり、落ち込み気味だった邦画の人気回復に一役買うことになった。

クランクアップ後、ようやく解禁されたトイレが個室ひとつしかなく、オシッコを済ませる順番を巡って4人が競争になり、一番最初に駆け込んだ藤乃以外の3人があえなくオモラシをしてしまうという事態が発生。この事件も彼女達のポリシーが本物であることを再確認させるに至った。

オシッコを我慢に我慢しての熱演は、彼女達がただの偶像ではなく、実力を伴ったグループであることも証明し、特に普段とはまるきり違う役柄に挑戦した舞の演技は大好評、国内アカデミーの助演女優賞に選ばれる。授賞式での舞のコメント、『いっぱい大変なことがあって、たくさんハンカチも濡らしちゃったけど、パンツは濡らしてません』はその年の流行語大賞にも選ばれた。

好悪は世の常、人気が出れば、当然それに対する批判も起こる。彼女達に対する風当たりは決して弱くなかった。オシッコ我慢というものが性的なものであり、みだらな行ないであるため、大衆の前でそれを強制するなんて言語道断という主張は根強く残り、子供の人権を護る某団体の顧問弁護士は何度となくテレビに出演しB B クイーンズの批判を行なった。

また、急に人気を得た彼女達に対し、先輩アイドル達が他人は他人、自分は自分と割り切れず、いい感情を持たなかったことも確かである。あまり好ましいとは言えない陰湿なイジメのようなものも、B B クイーンズの少女達に向けられた。

しかし、もともとその性格的に“自分の立場をわからせ”、“恥をかかせる”ことを主目的に行なわれる先輩後輩の人間関係を基にしたイジメは、そもそもオシッコを我慢し続けるという羞恥に常に晒されている彼女達にとって、あまり苦にはならないものだった。体に傷をつけず苦しめることができ、簡単に実行が可能なことから最も行われやすい『トイレに行かせない』という手段は、彼女達に限ればそもそもまるで意味をなさない。

他の手段も似たり寄ったりで、スタジオでも常にぎゅっと脚の付け根を押さえ、くねくねと腰をヒクつかせてオシッコ我慢を貫く彼女達にとって、それ以上の恥をかかせるのは意外に困難なのだった。

スキャンダルの問題も、彼女達は無難に乗り越えた。人気が出たことによる交遊関係の広がりから、少女にあるまじき男性関係の問題が懸念されたが、オシッコ我慢と未発達な性欲が密接に結び付いた少女にとって、カメラの前の緊張と震える下腹部のふくらみは何よりも換えがたいストレスの解放であり、芸能界の有形無形の圧力によって圧迫された鬱憤を張らすのにアルコールやドラッグに手を出したり、異性関係の問題に発展することはなかった。むしろお互いに悩みを分かち合えるグループ内や、同じように我慢を打ち出して売り出したアイドルグループの少女達と仲良くなり、時には必要以上に濃厚なスキンシップをすることもあったという。とは言え、それは程良い部分に抑えられ、新たな層の女性ファンの一部を開拓、新規獲得するにいった。これはある種のイメージ戦略でもあったとされている。

しかし、なんの問題もなかったわけではない。デート現場や熱愛報道こそなかったものの、バラエティーのロケ撮影中にこっそり彩音が現場を抜け出し、茂みでオシッコを済ませたという場面がスクープされ大騒ぎとなった。彩音は即座に謝罪し、解散——あるいは脱退を申し出たが、大きな反対の声があがり、さらに現場を捕らえた別のカメラが、その後彩音がオシッコを思い止まって再

びロケ現場に戻っていく一部始終を撮影していたことが明らかになり、彼女は引退の危機を免れる。

グループの歴史を語る上で外せないのが、もはや夏の定番となりつつある24時間テレビへの出演だろう。異例の抜擢で総合司会のサポートと言う地位に選ばれた彼女達は、年齢のハンデを感じさせない大活躍をみせた。

折りしも、番組のひとつの目玉企画だった24時間貧乏生活がやらせなのではないかという騒ぎがあり、完全ネット公開やそれに伴う自称『監視役』の出現も手伝って、彼女達が本当にトイレに行かないのかという検証までされていた。

24時間。もうひとつの方はともかくも、オシッコをせずに過ごすにはあまりにも途方もない時間である。しかし彼女達は立派にそれを貫き——その頃には一番の年少だった藤乃もすっかりスターとして『成長』しているところを見せたのだった。

そして——激動の芸能界で、常にあらたな話題を提供し続けた彼女達BBクイーンズは、デビューから3年と4ヶ月、ブレイクから2年半を経て、3度目の全国ツアーの最終日、いまだ人気の絶頂にありながら解散、引退を宣言する。

その理由は定かではないが、もともと4人の間ではずっと前から決められていたことだったのだという噂がある。

その日——

「こっ、ここで、……だ、出しても、いいですか……っ!？」

全ての演目を終えたステージの上、いつまでも終わらないアンコールの大合唱の中、健気に寄り添い、彼女達はとうとう限界を迎え、股間から激しくも美しい水流を迸らせた。太股を、舞台を、純白のステージ衣装を、幾筋ものオシッコの跡でぐしゃぐしゃに濡らしてゆく少女達のその姿は、今もなおこの国のスターの歴史に燦然と輝く1ページである。

ついにはステージを全て覆い尽くすほどまでに達した大きな大きな水たまりは、まるで彼女達がそれまでの3年間、本当に一度もトイレに行かずオシッコを我慢し続けたかのようだった。ステージライトが照らし出す水鏡の上に、涙の跡を残した頬を紅く染め、上気したまま穏やかな微笑を浮かべる少女達。

その姿は誰よりも美しく、そして素晴らしいスターの姿であった。

(初出: 4tw45ujrt 200-227 2007/09/06)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 運動会のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/15/2007 19:32:26

BODY:

たっ、たっ、たっ、たっ、たっ……

運動靴の底がリズムを刻む。わずかに荒くなった息と、汗で湿って首筋に張りついた短めの髪。体操服の胸には和泉小学校 5 年 4 組の所属を示すゼッケンと、3 位入賞の緑のリボン。

見学の父兄と、応援席のクラスメイトでごった返す校庭には、午前最後の競技である 6 年生の 4 0 0 m リレーの実況が響いている。

2 0 点の僅差でシーソーゲームを繰り広げる運動会は、佳乃の赤組がわずかにリードして午前中を折り返そうとしていた。

「はあ、はっ……」

口の中にたまった唾をこくと飲み込んで、小刻みの歩幅。

渡り廊下をくぐり、職員棟から中庭を横断して。何度も足を止めては注意深く周囲を確認し、人の気配の少ないほうへ、無いほうへと急ぐ。

(う、くう、うううっ……)

ぎゅっと寄せられた太腿を隠すように、体操服の前を引っ張って。

全校生徒と観覧の父兄が揃って勝負の趨勢を巡り、グラウンドに注目する中。

佳乃は、一人——並んで走る競走相手もなくプログラムにも載っていない、オシッコ我慢競走に参加していた。

佳乃がこの尿意を最初に意識したのは、開会式の後のラジオ体操でのこと。ぐっと屈伸をするたびに響く、軽く張り詰めた下腹部の鈍くむず痒い感触に、今朝トイレに行かないまま家を出てきたことに気付いたのだ。

とは言え、プログラム最初の競技は5年生全員参加の100m走。すぐさま入場門に整列し、最後から3番目の走者となった佳乃がゴールに走りこむ頃には、すぐに次の競技が待ち構えている。

5年生、学年全員参加のダンス、障害物リレー、学年対抗の借り物競走……立て続けにやってくる競技をこなすうち、佳乃の尿意はだいぶ切迫した事態に達しつつあった。普段、体育の成績ではクラスでも後ろの方から数えた方が早い佳乃が、午前中最後の競技となる400mリレーで個人8位という順位に食い込んだのは、一刻も早くトイレに行きたいと言う執念ゆえであった。

しかし、グラウンドを退場し、クラスメイトとお喋りもそこそこに向かった昇降口で、佳乃は厳しい現実と直面する。

(う、そ……)

お昼が近いめか、昇降口から階段下の女子トイレまでの30mには、父兄や生徒たちの順番待ちの列がずらりと続いていた。

ざっと見ただけでも50人近く。普段は絶対にありえない混雑は、防犯上の理由から校舎が運動会の開催時間に限り1階の昇降口付近をのぞいて閉鎖されていたことによる。

(……あ、あんなに待たなきゃ、いけないの……?)

午前いっぱいをかけてたつぷりと増水した恥骨の上のダムは、すでに危険水位を突破し、なおも尿意が高まり続けている。股間も時折痙攣するように引きつり、限界に近いことを訴えていた。疼く下腹部は、いつ本格的なオモラシを始めてもおかしくなさそうに思えた。

その場で小さく腳踏みを繰り返しながら、佳乃は込み上げる尿意を堪え、ぎゅっと脚の付け根を握り締めぐいぐいと腰をゆする。

列の順番待ちには、まだ小さな一年生や家族に連れられた幼稚園くらいの小さな子までが整然と行儀良く並んでいた。あの中できちんと順番を待ち続けるなんて、とてもできそうにない。

(だめ……ほ、他の、おトイレっ……)

じっとしていられない下半身をごまかすように、佳乃はグラウンドを歩き回った。

しかし、場所を変えようとも、グラウンドには普段よりも遥かに多い人が溢れ、その一方で使うことのできるトイレはごくわずか。利用者に対して圧倒的に不足したトイレは、体育館横も、第2昇降口も、職員棟の来賓用も、どこもかしこにも長蛇の列を築いていた。

(ああ……っ)

そうこうしている間にも、他の学年の生徒も午前中最後の競技を終えて次々と順番待ちの列に加わってゆくのだった。

切なく甘い悲鳴を上げる股間にぎゅっと力を籠め、当てもなくグラウンドをさまよう。

そいうととうとう、佳乃はぐると校庭を回りこみ、人気の無い校舎裏にまでやってきてしまっていた。オシッコを我慢していることを

悟られないよう、自然に人目の無い場所を選び続けた結果、グラウンドからも大きく離れてしまっている。

「うっ……」

他者の視線の無いのをいいことに、はっきりとスパッツの股間を押さえながら、よちよちと小股になって佳乃は校舎裏を歩き回る。

しかし寂れた校舎裏には大したものがあるわけもなく、入り組んだ校舎の裏階段のデッドスペースには雑草がぼうぼうに生え茂っているだけ。無論のこと、佳乃の切望するトイレなど影も形もない。

「オシッコ……っ、でちゃう……っ」

はっきりと尿意を口にして、佳乃はきゅっと身をよじる。

少女のおなかの奥にジンと熱い痺れが走る。運動靴が砂利を踏むだけのわずかな震動でもたふたふと熱い液体が揺れ動くようだった。

しかし、トイレは遠い。

普段なら汚くてほとんど誰も使わない体育館横のトイレすらも、今日は順番待ちの列で人が溢れ返っていた。今から引き返しても、順番が回って来るまで我慢できるだろうか、果てしなく怪しい。

「どう、しよう……が、がまん、できないかもっ……」

身体の奥から襲い来る『オモラシ』の恐怖と戦いながら、排泄孔を抑え腰を前後に揺する佳乃の視界に、校舎の奥まった場所にある茂みが映る。

ちょうど佳乃の腰の辺りまで、背の高い草が綺麗に生え揃った、いかにも『ちょうどいい』場所だった。

(くっ……んっ……)

イケナイことだと分かっているながらも、いちど“そういう視点”でそこを見てしまえば、そこは佳乃が尿意から解放されるのにあまりにもぴったりの場所だった。すくなくとも他者の視線はなく、下着を脱いでしゃがみ込んだ下半身もしっかりと隠してくれる。足元の地面に広がる水たまりだってちょっと外から見たくらいでは分からないだろう。

(んっ……)

その状況がリアルに頭の中で想像できてしまうだけに、込み上げてくる排泄の誘惑を振り払うのは困難だった。佳乃の腰の揺れは次第に大きくなり、我慢のステップも激しさを増す。

本来、用を足すにはあまりにも相応しくない屋外の茂み。しかし、今やそこは佳乃にとって待望にして唯一残されたオシッコのできる場所だ。切なく疼く股間が今にも熱い雫を吹き上げようとヒクつき、膀胱は収縮の蠕動運動を繰り返す。

そして、堪えきれない生理現象に衝き動かされるように、佳乃の足は茂みのほうへと吸い寄せられていった。

(……だ、誰もいないよね？ 見られて、ないよねっ……！？)

震えるあしでさくさくと雑草を踏み、掻き分けてその中央に立った佳乃は何度も何度も慎重に周囲に視線を巡らせ、念入りに人の気配を確認する。

足元の背の高い草むらは膝上までを覆い隠していたが、いくら小柄な佳乃でもそこに隠れることは不可能だ。こんなところでしゃがみ込んでいるのを見られれば、何をしようとしているのか一発でバレバレだ。

(こ、こんなところで……おしっこ……なんてっ……)

多感な十代の少女には耐えがたい羞恥に、佳乃の顔は耳まで赤く染まっている。

5年生にもなってトイレまで我慢できずに校舎裏でオシッコを済ませたなんて、もし誰かに知られたら明日から学校に来れなくなる。

しかし、もはや選り好みをしている余裕はないのも事実だった。

(ダメ、で、でちゃう、うっ……！！)

断続的に股間を突き上げてくる尿意に急かされ、少女のプライドは敗北を許容した。

オシッコを塞き止めるため足踏みを続けねばならない両足から、もたつく指先に焦れつつ下半身を覆うスパッツと下着をまとめて踝まで引き下ろす。

むき出しになった股間が外の風に触れて、少女の下腹部はますます切なげに疼く。同時に深く腰をかがめると、じんっ、と腰骨に甘い解放の予兆が響いた。

「あうっ……」

我慢に我慢を重ねていた如意が、一気に下半身を侵食してゆく。限界を超えて我慢を続けてきた尿道口に、ぞくぞくと鈍い痛みが走る。

佳乃の身体はあっという間に排泄の準備を整え、小さく幼いつくりの割れ目が、しゅあっ、と小さな水音を立てて弾ける。

(ふ、あう……っ)

佳乃が安堵とともに股間の緊張を解こうとしたその時だ。

「——ちょっと！！ なにやってるの！？ あなたっ！！」

「えっ……！？」

静かな校舎裏に響き渡る怒声に、佳乃はほとんど反射的に立ち上がっていた。足首の上まで降りていたスパッツと下着を無理矢理引っ張りあげるまで、半秒もかからない電光石火の早業。

大慌て振り向いた先には、しかし誰の姿もない。

「——いいから！！ 早く立ちなさいっ！！」

再び声が響いた場所は佳乃からちょうど死角になる、非常階段をひとつ挟んだ反対側だった。

「——ちょっと！！ 聞いているの、あなたっ！？」

(な、何……？)

続けざまにびしやりと叩きつけられるような怒声に、さっきまで溢れそうだったオシッコすら引っ込んでしまう。背筋を竦ませながら、佳乃は恐る恐る非常階段の影からそちらを覗きこんだ。

そこでは、腕を組んで仁王立ちになった風紀委員会顧問の風間先生が、ジャージの上だけを着た小さな女の子を見下ろしてじっと睨み付けているところだった。

ジャージの隙間から覗く女の子の体操服には、2 - 1と書かれたゼッケンがある。おでこに結ばれた赤いハチマキを見るまでもなく、佳乃と同じ赤組の下級生だった。

「ちょっと、いったいあなた、こんなところでなにをしようとしていたの！？」

風間先生は6年生の担任で、規則に厳しく、ちょっとしたことでも見逃さずにお説教をすることで有名だった。響き渡るキンキンとした声にすっかり怯えてしまった女の子は、小さくなって俯くばかりだ。

「答えなさい！！ 何をしようとしてたの！？」

「あ…その……っ」

だが、女の子がうまく答えられない理由は他にあった。女の子のむきだしの両足はくねくねと折り曲げられ、膝がせわしくきゅきゅとくっつき合わされている。

その様子を見て佳乃も気付いた。

(あの子も、わたしと一緒になんだ……)

どうやら、彼女も大混雑のトイレを使うことができず、佳乃と同じように校舎裏で済ませてしまおうと考えたらしかった。そこを通りがかった風間先生がそれを見つけたのだ。

オシッコを我慢しているためにまっすぐ立てない女の子にイライラと足を踏み鳴らし、風間先生は大きな声を上げる。

「しゃんと立ちなさい！！ そんな格好、恥ずかしいでしょ！！」

「ひうっ……」

いくら怒鳴られても、無理なものは無理だ。けれど風間先生はそんなことをまるで配慮せず、小さな女の子を怒鳴りつける。

「……………、……………つこ、……………です……………」

「声が小さいわよ。ちゃんと先生に聞こえるようにお返事なさい！！」

「っ……………お、……………お、しっこ……………です」

「おしっこ！？ こんなところでトイレしようとしたのね？！」

「ひう……………」

はっきりと自分の尿意を露にされて、女の子はぎゅっと背中を震わせる。

それはあまりにも残酷な仕打ちだった。

たとえ2年生だって、女の子にとって『トイレに行く』ということはとても恥ずかしいことで、それをはっきり言われるだけでも死んでしまいたくなるくらいなのに。まるでそれを悪いことのように騒ぎ立てる風間先生が、佳乃には信じられなかった。

「あなた、もう2年生でしょう！？ 幼稚園じゃないのよ！？ こんなところでオシッコしちゃいけないことくらい分かるでしょう！！」

次々と辛辣な言葉をぶつけられ、女の子はいまにも泣き出してしまう寸前になっている。小さな両膝がせわしなく擦り合わされ、左右の運動靴の爪先が地面をぐりぐりといじり、スパッツは両手でぎゅうぎゅうと引っ張り上げられている。とてもではないが返事をするどころではないのがはっきりと見て取れた。

「なにしてるの！！ おんなのこなのに、はしたないっ！！ ちゃんとお手洗いまでガマンなさいっ！！」

「ご、ごめん、なさいっ……………」

必死に我慢しようとする女の子の仕草に、一度は忘れていたオシッコが再び佳乃のおなかの中で激しく暴れ始める。

解放寸前のところで塞き止められたためか、尿意はさっきよりもさらに強く激しい。なにしろオシッコの準備は完全に終わっていたのだ。脚の付け根、オシッコの出る孔のすぐ上が、ぐつぐつと熱く煮え滾っているかのような感覚だった。

佳乃はずり落ちかけたスパッツと下着を慌てて引っ張り上げ、その場でオシッコを我慢するための足踏みをはじめてしまう。

(はうっ……………くう、ううっ……………)

「2年生にもなって、おトイレのしつけもできてないのね……………最近の子はっ！！」

風間先生の声が響く。

2年生どころか、佳乃はあの子よりも3歳もお姉さんなのに、我慢できずに草むらでオシッコをしてしまうところだった。沸騰するような尿意と、自分が叱られているような惨めな気分、佳乃はその場を動けなくなってしまうていた。

(お、おトイレ……………はやくっ……………)

一刻も早く、オシッコを済ませなければならなかった。こんな校舎裏の茂みではなく、ちゃんとしたおトイレで。

……………そんな佳乃の願いも虚しく、事態はさらに最悪なほうに転がってゆく。

不意に顔をあげた風間先生と、佳乃の視線が合ってしまったのだ。

慌てて隠れようとした佳乃だが、もう遅い。風間先生は女の子の手をつかむと、「だめえっ」という必死の抗議も聞かずに佳乃のもとまで無理矢理ひきずってくる。

「……あなた、どうしてこんなところに……まあいいわ。この子、トイレまで連れてってあげてちょうだい」

「え、あの、でも……」

トイレは今大混雑の大入り満員、長蛇の列。並ぶだけでも何十分かかるのかわからない。そんな事は風間先生だって十分に分かっているはずなのに。風間先生はまるで佳乃が悪いことをしたかのように眉を大きく吊り上げた。

「なあに、あなた上級生でしょ！？ おねえさんなんでしょ！？ 嫌がるんじゃないありませんっ！！ 上級生は下級生のお手本になって、ちゃんと面倒を見てあげなちゃダメじゃないのっ！！」

言外に籠められた、トイレ以外でのオシッコを許さないという強い強制。

その迫力に、気弱な佳乃が抗うことができようはずもなく――

「は……はい……」

今にも漏れてしまいそうな我慢の限界の下腹部を抱えたまま、佳乃はそうやって頷くしかできなかった。

「いいわね、早くしなさいよ！？」

頭から湯気を立てているかのように怒りながら去ってゆく風間先生を見送り、佳乃はたまらずぎゅっとスパッツの股間に手を添える。

お説教の間は禁じられていた我慢がようやく許されたのだ。

「う……はあう……」

人目を気にせずぎゅっと足を交差させて、どうにかおなかをなだめてゆく。ほんのわずかだけ楽になった膀胱に、佳乃はしゃがみ込んでしまっている女の子のほうを振り向いた。

「あ、歩ける？」

「っ……」

女の子はほんのちいさく、わずかに首を横に振った。

しかし、だからと言ってここで立っているわけにもいかないのだ。

「行こ……先生に、怒られちゃうよ」

「おねえちゃん……っ」

「だ、だいじょうぶ。……トイレまで、すぐだから。……我慢できるよっ……」

それはほとんど佳乃自身に向けられた言葉でもあった。女の子を励まして立たせ、佳乃は校舎裏を回りこむ方に歩きだした。

「お、おねえちゃんっ、……だめ、もっとゆっくりっ！！ ……で、でちゃうっ」

「う、うん……」

身体の小さいせいか、佳乃よりもさらに余裕のない女の子の歩みはじれっとなるほど遅く、ほとんど立ち止まっているのと同じような状況だ。

一歩ごとにびくん、と背中を反らして、くねくねと足を曲げる。

「あっ、……っ……うっ」

既に女の子のスパッツには、前から見てもはっきり分かるくらい大きな染みができてしまっていた。何度もおチビリを繰り返しながら、それでも最後の一線だけは健気を守ろうとしている。

そんな女の子を見ながら、佳乃は想像してしまわずにはいられない。

(い、一緒に並んで……何分くらいかかるのかな……あんなに、混んでるのに……)

込み上げてくる尿意の波を、スパッツをぐいっと引っ張り上げてごまかし、荒くなった息を押さえこむ。

(や、やっぱり、この子に、先に譲ってあげなきゃダメだね……が、ガマンしなきゃ……)

今すぐこの小さな手を振り払って、校舎裏にUターンしたいという本心をぐっと飲み込んで、佳乃はようやく校舎を半分回りこみ、給食場のほうまでやってきた。

しかし、一番近い第1昇降口前のトイレまであと半分、というその場所で、とうとう女の子は足を止めてしゃがみ込んでしまう。

「だっ、だめ、っ、おねえちゃんっ……！！」

掠れた涙声で、女の子は佳乃の手をきつく握り締める。

「もうだめっ！！ でるっ、おしっこ、…っ、でるう！！」

とうとう我慢の限界がやってきてしまったのだ。そう言う間にも、女の子のスパッツはおしりの方までみるみる色を変え、地面にはぼたぼた、ちょろろっ、と染みが広がってゆく。

「ま、待ってっ！！」

ぎゅっと目を閉じ、脚を震わせて、今まさに『オモラシ』をはじめてしまいそうになった女の子に、佳乃は慌てた。

ほとんど反射的に小さな女の子を抱えて、すぐ近くに生えている松の木のそばに駆け寄る。同時に女の子の股間ではオシッコが激しく吹き出し、地面にばちゃばちゃばちゃっと飛び散った。

「あああうっ……！！」

女の子が松の木の根元にしがみ付くように倒れこむと、すぐに激しいオシッコが始まった。スパッツをびしゃびしゃに浸した女の子のオシッコが、揺すられる腰に合わせて地面に撒き散らされてゆく。

目の前で繰り広げられる盛大なオモラシから、佳乃は慌てて目を反らす。女の子のことを思いやったのではなく、つられてオモラシを始めてしまいそうだったからだ。

壊れた蛇口のようにいつまでも止まらないかと思われた女の子のオモラシだったが、およそ1分近くもかかってやっとスパッツから吹き出す水流が細くなり、やがてぼた、ぼた、と雫に変わる。

「つく…ひつく……お、おねえ、ちゃんっ……」

どう言い訳してもごまかせない、完璧なオモラシ。

我慢しきれなかったオシッコで股間をびちゃびちゃに汚してしまった少女は、縋り付くような視線を佳乃に向ける。

「あたし、オシッコ……おしっこ、しちゃったあ…っ」

「っ……」

佳乃はあわててジャージの上着のポケットからティッシュを引っ張りだして渡した。

「これ……つかって」

「……うん……おねえちゃん……ごめんなさい……」

「う、うん……でも、しかたないよ……我慢、できなかったんだよね」

「っ……」

大失敗してしまったことに涙ぐみ、ぐす、と小さく鼻を鳴らして、それでも女の子はのろのろと後始末を始める。オモラシのショックも大きいだろうが、お尻が濡れたままでは気持ち悪いのだろう。股間を覆っていた濡れたスパッツをずり下げる。

女の子の股間は、まだ少しずつオシッコを漏らし続けているようだった。向きだしのあそこからぼたぼたと止まらない雫をさらに地面に振り撒いて、女の子はちいさくしゃくりあげる。

（っ……だめ、我慢、がまんっ……）

今なお、おなかの中にオシッコを溜めたまま我慢を続ける佳乃にとっては、女の子の姿はまるで自分の事のように。哀れな下級生を見捨てることもできず、せわしくスパッツの股間を握り締めながらそこに立ち尽くしていた。

ぐちゃぐちゃに濡れたスパッツと下着はすこし拭いたくらいで渴くはずもないが、それでも女の子はティッシュで股の部分を拭き続けた。

「保健室までいけば、着替えあると思うから……」

「うん……」

励まそうとする佳乃の前で、女の子は濡ったスパッツの股布の部分を気にするようにひっぱりながら、ひよこひよこと立ちあがった。

そして、佳乃が予想もしていなかったことを言う。

「でも、いいよ。おねえちゃんも、おしっこでしょ？ ……あたしなら、ひとりで行けるから」

「そ、そんなことっ……！！」

気付かれていない……などと思っていたのは佳乃だけだった。内股で俯き加減な佳乃の様子は、誰が見てもはっきりと分かるほどにオシッコを我慢しているのが明らかだった。

自分よりずっと小さな女の子にオシッコの心配をされてしまう恥ずかしさに、とっさに首を振るも、今なおもじもじダンスがおさまらないままでは説得力もない。俯き、唇を噛んだ。

「へいき。前にも……おもしろしちゃったこと、あるもん。だから、おねえちゃん……トイレ行って、いいよ」

「……そ、そなんっ」

大変なのは女の子も同じなのに、放っておけるわけがない。

けれど、佳乃の頭の冷静な部分は、保健室まで往復している間、自分の我慢が持たないことを告げている。

「じゃあね、おねえちゃんっ」

「……あ」

出すものを出してしまったからだろうか。さっきよりもしっかりした足取りで、少女は心配する佳乃にちいさく笑顔を見せて走り去ってゆく。

「う……」

小さな背中を見送って、一人、あとに残された佳乃は、茂みの奥にくっきりとこされた少女のオシッコ跡を見てぶるっと背筋を震わせる。

（……ここで、オシッコ……）

少女の残したオシッコの残り香が、まるでトイレの個室に入ったかのような誘引作用をもってして尿意を加速させる。本来、排泄とは無縁の街路樹の根元を、佳乃の頭は『オシッコをする場所』と定められた区画と認識してしまっている。

確かに野外での排泄には激しい抵抗があるものの、一度は校舎裏で済ませてしまおうと思ったのだ。そして一度下級生によってマーキングされた先例があれば、1回も2回もかわらないように思えてくる。

(……気付かれ……ないよね。一緒にしちゃおう……もう、我慢できそうにないし……)

そっとスパッツのゴムに指をかけた佳乃だが、いざしゃがみこもうとしたところではたと大事なことに気付いて動きを止める。

「あ、紙……！！」

少女に手渡したままのポケットティッシュに思い至り、佳乃はぎゅっと前を押さえ、オシッコを一時中断して周囲を見まわした。

すると、中身のからになったティッシュの袋が、茂みのすみに落っこちている。

慌てて中身を確認するも、そこにはもうほとんどティッシュは残っていなかった。まだ半分以上あった中身は、どうやらあらかじめびちゃびちゃに汚れた少女の股間を拭き清めるのに使われてしまったらしい。

「……これしかないや……」

わずかに残った一枚を握り、佳乃は溜息をつく。

女の子のオシッコは、男の子の場合とは根本的に違う。出したらぶんぶんと振って雫をきっておしまい、というわけにはいかないのだ。オシッコのあとを綺麗にするティッシュは、排泄のための最低必須条件になる。たったこれだけでは十分に後始末もできない。

それでもないよりはずっとマシだ。佳乃は袋に手を伸ばそうと腰をかがめ――

「ちょっと！！ ということなの、これは！？」

「え、あ……」

鋭い怒声に、弾かれるように振り仰ぐ。

いつのまに近付いていたのだろう。そこには腕組みをして仁王立ちになった風紀の風間先生がいた。予想外のことに混乱する佳乃に、風間先生は大きな声で叫ぶ。

「あなた！！ あの子はどうしたの！？ ちゃんとお手洗いまで連れていったの！？ なんてこんなところでまだぐずぐずして――」

言いかけた言葉が止まり、風間先生の眉がぐいっと吊りあがる。

先生の視線の先には、女の子が出したオシッコの跡と、丸まったティッシュがあった。佳乃は反射的に、手の中のポケットティッシュを握り締めてしまう。

「ちょっと！？ あなた、こんなところでオシッコなんてしたの！？」

「ち、ちが……」

「ねえ！？ ここがどこか分かってるの！？ 創立記念の記念植樹よ！？ 学校で一番大切な木なのよ！？ ねえっ！？」

佳乃の言葉を掻き消して、怒鳴り声が校舎に反響する。風間先生はすっかり頭に血を昇らせ、松の木に括られた白いプレートを指差して、ヒステリックに叫んだ。

「ああもう、ちゃんとお手洗いがあるじゃないの！！ どうしてそこまできちんと我慢できないの！？ あなたもう5年生でしょうっ！？」

「あ、あの、違い、ます、これ、わたしじゃ……」

「ウソつかないの！！ 先生はちゃんと見てたんですからね！？ あなたがその茂みに入ってしゃがんでるのを！！ 幼稚園の子じゃないでしょ！？ きちゃんとお手洗いのしつけもできてないなんて、恥ずかしいと思わないの！！」

「ち、違い、ますっ……！！ 聞いて、聞いてくださいっ」

「なにが違うの！！ あなた、担任の先生は！？ 名前はなんていうの！？ ご両親と先生にお話しなきゃならないわ。……5年生にもなってお外でオシッコなんて、信じられないもの！！ お医者様に診てもらいなさい！！」

あまりに無慈悲な、一方的な潔癖感だけを押しつける言葉の暴力。

オシッコ、という当たり前の排泄行為をことさらに貶め蔑む風間先生の癪癪に、佳乃の繊細な心は無残なまでにずたずたに切り裂かれてゆく。

「どうしたんですか、落ち付きのないっ！！ せんせいがお話してるんです、じっとして聞きなさい！！」

「ち、ちが、わたし、わたしっ……」

無理矢理きをつけを強制されたせいで、込み上げてくる尿意をあからさまに堪えることも許されない。もう両手の力を借りていないとオシッコを我慢することもできないのに。

いくら言っても落ちつきを見せず、くねくねと腰を揺すり続ける佳乃を、先生は鋭く叱咤する。

「なんです、さっきから……そんなに先生のお話が嫌なんですか！？ でしたらいいわ、罰を追加します。そこをお掃除なさい。徹底的に綺麗にするのよ」

呆然と、佳乃は風間先生の指差す先、自分の足元を見下ろした。

風間先生は、女の子のしてしまったオシッコのあとかたづけをしろ、と言っているのだった。

「それは校長先生と理事長先生が、創立の記念に植えてくださった大切な木なんですからね。汚いオシッコなんかで汚してしまってごめんなさい、って謝りなさい！！ ……ほら、どうしたの！？ あなた、先生のお声が聞こえないの！？ お返事なさい！！」

「っ、う」

（ちがうの、ちがうのっ……わたし、まだ、オシッコして、ないっ……）

必死の訴えももう声にならない。

佳乃が、オシッコで校庭を汚してしまうのはこれからだった。

いままさに、佳乃の股間では押さえきれない尿意が爆発し、緩んだ水門の隙間からオシッコがしゅるしゅると漏れ始めている。

じゅじゅつ、と散った雫が地面に散り、ぎゅつと握られた指の間で色を変えたスパッツから、熱い雫が滲み出して、股間を覆う両手の器を溢れて少女の脚を伝う。

ひとすじ、ふたすじ、堰を切ったように溢れだす黄色い放水が、ぱちゃぱちゃと音を立て始めた。

「ああ、ちよっと！？ なに！？ まだ漏らす気！？ まだそんなに出し足りないのっ！？ あんなにいっぱい出しておいで！！ ……どれだけだらしないのよ、あなたのオシッコは！？」

「う……ふえ……っ、ち、違う、ちがうの……これ、違うのおっ」

「何が違うんですっ！！ 全部あなたのオシッコじゃないの！！（はやく止めなさい！！ 恥ずかしいわねっ！！）」

「そんな、やだっ……止まんない……っ、したいの、オシッコ、……先生、オシッコさせてえ……っ」

「——いい加減になさいッ！！ こんなところでなに言ってるの！？ あなた、それでも5年生なの！？ 女の子でしょう！？ みっともないと思わないのッ！？ ああもう、幼稚園からやりなおしてきたらどうッ！？」

この後に及んで、トイレを禁じようとする先生に、佳乃はべそをかきながら必死に許しを請おうとする。

くねくねと脚を擦り合わせるが、そんなものでもうダムの放水が止まるわけがない。小さな手のひらに受け止めきれないオシッコが、壊れた水道のように流れ落ち、ソックスを濡らし運動靴をびちゃびちゃに浸してゆく。

「ああ、あああつ、うああああ……」

あまりに埋不尽な言葉の暴力を浴びながら、

いつまでも、いつまでも。佳乃は涙といっしょに、大量のオシッコを漏らし続けるのだった。

(初出：移転記念の書き下ろし 2007/10/15)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: イジメの話／美術室にて

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/27/2007 09:19:02

BODY:

絵の具を乗せた筆が、画用紙の白に鮮やかな青空を描いてゆく。

あと二週間に迫った美術コンクールに向けて、一之瀬マナは丁寧にデッサンした画用紙に向かい、一心不乱に筆を動かし続けていた。

今日は日曜日。本当なら学校もお休みなのだが、美術部を始めとしたクラブ活動のために校舎は一部解放されていた。クラブ顧問の浅月先生は用事があって、昼前に一度顔を出してから席を外している。

美術室には、マナと同じ美術部の生徒たちがお喋りに興じながら作品に向かっている。……どちらかと言えばマナ以外の生徒はあまり真面目に取り組んでは居ないようだったが。

マナは前の学校でも美術部に所属していて、その時に描いた絵は市のコンクールに出たこともあった。文化系の活動に力を入れている風見が丘小学校に転校してからも、マナは迷わずクラブ活動に美術部を選んだ。

顧問の浅月先生の熱心な指導もあり、マナはまたもコンクールへの出展を勝ち取ったのだった。

「ふう……」

しゅ、と最後の一笔を引き、小さく深呼吸。

グラウンドから海を見下ろす光景が、画用紙の中に余すところなくおさまっている。完璧、とは言わないまでも改心の出来だ。

筆を置き、数歩あらずさって全体を眺めてみる。

（……よし、っ）

心の中で小さくガッツポーズ。ここまで思い通りに描けるなんて、なかなかあることではない。浅月先生に何度も励まされ、休まずに頑張り続けた結果だった。

出来栄えを確認するため、右から左から画用紙に向かっていたところ、唐突に少女のお腹がぐう、と音を立てる。

「あ……」

マナは頬を赤らめた。

時計は1時を回っている。朝から昼過ぎまで、ご飯も食べずに熱中していたのだ。それはお腹もすくだろう。喉の渇きを感じて家から持ってきた水筒を確認すると、1リットル入りのお茶も中身はほとんど空っぽだ。

（お弁当の前に……お手洗いな）

下腹部に感じる尿意に、マナは腰を上げる。

熱中している間は気付かなかったが、よくよく考えてみれば普段の授業ではマナは午前中に2回はトイレに行くようにしている。1リットルもお茶を飲み干して、さらにお昼過ぎまで一度もオシッコを済ませていなければ、したくなるのも当たり前だった。

「あ、一之瀬さん。ちょっと待ってくれる？」

机の間を縫って美術室を出ようとしたマナを、呼びとめる声があった。

美術部の部長、6年生の御園アヤ。眼鏡の奥に吊り目がちの瞳をした、背の高いショートカットの少女だ。部長という肩書きを使って無理矢理手伝いや用事を皆に押し付けるアヤは、同じ6年生の取り巻きを除いて、部員のみんな……特に下級生にはあまり快く思われていなかった。

「え、っと……なんですか？」

「ちょっと、ねえ？」

意味ありげに言葉を区切り、アヤは周囲の6年生たちとくすくすと笑い合う。なんだか嫌な予感がして、マナは一步あらずさった。

「ちょっと手伝って欲しいの。一之瀬さん、課題終わったんでしょう？」

「は、はい……でも」

「あたし達、人物デッサンしたいんだけど、今日モデルの子が休んじゃったのよね。だから一之瀬さんに代わりにやってもらおうと思って」

頼むような形こそとっていたが、そこには有無を言わせない迫力があつた。

お腹の奥にずんと響く刺激に、マナはぎゅっと脚を寄せてしまう。

「あ、あの、でも、わたし……お手洗いに……」

「ダメよ、すぐに始めないと間に合わないんだから」

いつの間にか、マナの背後に回りこんだ6年生が、美術室の入り口を閉めてガチャリと鍵をかけてしまう。

場を支配し始めた不穏な気配に、マナはあとずさった。

「な……なに？」

「別に？」

「だ、だって、いま、鍵……」

「なんのことかなー？」

ドアに鍵をかけた6年生はそうおどけてみせると、マナがドアに近付けないようにくるとその背中に回りこんで腕を掴んだ。とっさに振り払おうとするマナだが、思うように振りほどけない。

「そうよ。逃げなくたっていいじゃない」

「そ、そのっ……わたし、本当におトイレに……っ」

「へえ。そういうこと言うんだ？ 自分の課題が済んだから、あたしたちの課題なんか間に合わなくたっていいってこと？ さっすが違うわねー。コンクールに出れちゃう子は」

詰め寄ってくる6年生たちの迫力に、マナは萎縮して俯いてしまう。

「ち、違います……そんなこと、思って、ないです……」

「じゃあ、いいでしょ？ モデルお願いね♪」

笑顔の下に、底知れぬ悪意を覗かせて念を押すアヤに、マナはひう、と息を飲む。

小さなおなかの中で、じくんと重苦しい尿意が増したような気がした。

「……ほらあマナちゃん、さっきから動いてばかりじゃない！！ じっとしててくれなきゃモデルにならないよ？」

「あーあ、また失敗だあ」

これ見よがしに、6年生たちが描き損じた画用紙を丸めて破り捨て、床の上に放り投げる。またデッサンは一からやり直した、という意味らしい。

ほんのちよつとだけ、10分くらい、という約束で始まったはずのモデル。しかしあれから既に1時間近くが経っている。マナは机を

どかした教室の真ん中に置かれた椅子に座るよう強制され、トイレに行くどころか立つことも許可されていなかった。

「ねえ、じっとしてなつてば。我慢足りないよ？ マナちゃん」

「ううっ……あ、はぁあっ……」

アヤ達は、マナにポーズを取らせたまま動かずに居るように命令していた。それも普通の格好ではなく、片方の膝を胸に抱え込ませるような格好だ。ちょっと角度を変えれば下着が見えてしまいそうな恥ずかしいポーズなのだ。それだけでもマナの頭は沸騰寸前である。

しかも、マナのおなかの中では、いまだ解放を赦されない尿意がくつくつと煮立ち、激しくマナを苦しめている。とてもじっとしてられない。

びくん、と脚の付け根にイケナイ感触が走る。

「はぁっ……っ……んっ……」

じわ、と緩む水門の気配に、マナはたまらず脚を動かしてしまう。おなかの中で暴れ出すオシッコを塞ぎ止めるため、広げていた脚を閉じ、ぴたりと膝を揃えて椅子の天板に股間を擦りつけもじもじと激しく腰を揺する。

「ちょっと！！ マナちゃん！！」

とたんにアヤから鋭い叱責が飛んだ。

「ほおらまた動いた！！ おお、動くなつて言ったでしょ？ マナちゃんはモデルなんだから、動いちゃダメっ！！ まーた失敗だよお」

「でっ、でもっ……」

いくら我慢しようとしても、自然に腰が動いてしまう。オシッコを我慢しているときの自然現象なのだ。それを分かっている、アヤ達はマナにポーズを取ったままの静止を強要している。叱られるたびに姿勢を正しはするものの、すぐにまた尿意に負けてもじもじと膝を擦り合わせるマナを取り囲み、6年生たちはくすくすと笑い合っていた。

「なにやってるの、手どけなさいよ」

「そうだよー、そんなトコロ押さえてちゃ恥ずかしいよお、マナちゃん。おんなのこでしょ？」

「だ、ダメ……我慢……できない……」

「ダメじゃないつてば。部長命令よ？ ほら」

「や、いやぁあっ……っ！！」

席を立ち、無造作に近付いてきたアヤはマナの股間から両手を引き剥がすと、無理矢理に脚を広げさせる。ただでさえ両手と内腿の助けを借りて我慢していたところに、一気に支えを失ってマナの股間は爆発する尿意に負けそうになる。

「あ、あっ、くうっ……」

なんとか、股間の括約筋だけで決壊を食い止めようと必死なマナが、椅子の上でがくがくと悶える様子を面白がるように、6年生達がどっと笑った。

オモロシ寸前の状況で必死に苦しむマナに対し、心ない言葉が次々とぶつけられる。

「あーあ、みっともない。あんなにシたくなってるんだ？」

「もっとちゃんとトイレ行っとけばいいのにねえ」

「ほんとほんと。ねえ、私もっと変わったポーズがいいなぁ。もっと足開かせてよ」

「そうね。で、そのまましゃがんでもらうの。どう？」

「えー？ 漏らしちゃわない？ あの子」

「でも、それいいかもねっ。出しちゃったら自分で片付けさせればいいわよ」

「題して……シオンベン小娘、とかどう？」

「あはっ、それ最低ー！！」

その中には、明らかに、マナにオモラシを強要するセリフもあった。

女の子としての最大の恥辱を強制する6年生達。一体、どんな悪意があればこんなにも残酷な事ができるのだろうか。理解を超えた先輩の言葉に、マナは背筋にぞっと冷たいものを感じる。

だが、その底知れぬ悪意は、そんなものではとどまらなかった。

「や、やだ……なんで……？」

「ねえ、聞・こ・え・た？ マナちゃん？ そういうことらしいから」

「や……やだあっ、やだっ！！」

「……聞こえたわよね？ 部長命令よ？」

しきりに首を振り、なんとしても逃れようとするマナだが、アヤはまるで万力のようなすごい力でマナを押さえ付ける。抵抗を試みたマナに対して、アヤは容赦なくマナの下腹部に手を当ててぐいっと押し込んだ。

「ふぁう……～～ッ！！？」

石のように張り詰めた膀胱が、無理矢理外部からの力によって絞り上げられる。爆発しそうなオシッコが暴力的なまでに猛烈に暴れ回り、マナは目をぎゅっと閉じて必死にオモラシの誘惑に抵抗する。その間にも、脚の間にはじわりと熱い感触が膨らんでいった。

「ね、手伝って。マナちゃんひとりじゃポーズ取れないって言ってるし」

「えー？ 漏らしたりしないよね？ ひっかけられたりしたらヤダなあ」

「加減してるもん、平気よ」

そして、アヤと数名の6年生によって、マナは椅子の上に両足を乗せ、お尻を深く下ろして脚を開いた、いわゆる体育座りの変形したポーズを強制される。遮二無二振り回そうとした腕はガムテープで椅子の背もたれに固定され、さらに両の足首まで椅子の上に括りつけられてしまう。

「や……あうっ、あ、く、うっ……」

体を折り曲げ、おなかに圧力のかかる姿勢。まる出しになった下着の股布は、既にいくらか湿って色を変えているようだった。

「うわー、かっこ悪。もう漏らしてない？ あの子」

「我慢しなよ。終わったらおトイレ行かせてあげるって言ってるんだからさー」

これはもう、完全にオシッコをする体勢だ。頭では必死に禁止の命令を出しているのに、マナの身体は長年染みついた習慣のままにオシッコの準備を始めようとする。

マナの膀胱がきゅと収縮し、排泄器官がじくんと疼く。溜めこんだ熱い雫がじわじわと漏れて、下着に小さな染みを作る。自由にならない両手足をばたつかせ、マナは必死に許しを請う。

「お、お願いします、もうっ、おトイレ……でちゃうっ……漏れちゃうのっ！！」

「ダメよ、今は部活の時間なんだから。トイレは終わってからよ」

「そ、そんなっ……、部長っ、意地悪しないでえっ……」

「意地悪じゃないわ、規則よ。それともアンタ、部長の言うことに逆らう気？」

「あ……く、ごめんなさい、謝りますっ……お願いします、だから、おトイレ、おトイレえ……っ、オシッコでちゃう〜っ！！」

トイレに行く事にすら許可を要し——オシッコすら自分の意志ですることができないという、惨めな状況。排泄の自由を他人に握られて、マナはパニックに陥っていた。混乱のままに惨めな謝罪を繰り返すマナを、アヤ達は嘲り笑い合う。

「ダメだって言ってるじゃない。あんた、あたしの言うこと聞けないの？ だったらもう解いてあげないんだから」

「そ、そんなぁ……っ」

「どうしても我慢できないなら、そこですればいいじゃない。オシッコ、でちゃいそうなんでしょ？ ほら、手伝ってあげる」

そろそろマナの限界が近いと見て、被害に遭わないようマナの側を離れ、遠巻きに見守る6年生の中から、アヤがずっと進み出た。

その手には水彩用の筆と、筆洗いが握られている。

どちらも、マナ自身の持ち物だった。

これまでなんとしても、浅月先生のお気に入りであろうとしていたアヤは、転校してくるなりあっさり自分から浅月先生の関心を奪ったマナを、はじめてから許すつもりはなかったのだ。

「くううっ……」

どうすることもできず、腰を揺するマナに、アヤはずっと身体を寄せる。限界寸前の尿意に襲われながらも、マナは警戒に身体を竦ませる。

「な、なに……する……」

「別に？ そんなにオシッコしたいなら、我慢は身体に毒だからね。マナちゃんにオシッコさせてあげるの。嬉しいでしょ？」

「っ……あああうっ！？」

マナの悲鳴が上がる。アヤが筆の先端でマナの股間をなぞりあげたのだ。びくびくと痙攣する少女の下着に薄く色のついた染みが広がってゆく。じわじと拡大した染みは、とうとう椅子の天板に広がり、水たまりを広げてゆく。

自分の大切な筆をオシッコで汚し、マナはもがいて暴れた。

「あ、あつ、あ、で、で、ちゃう、でる……っ！！」

「ねえちょっと、本当に出しちゃうの？ ダメよこんなところで。我慢しなさい」

「っ、だめ、ダメ、離して、といえ、といえ……っ」

「あーあ。仕方ないなあ。……じゃあ、マナちゃんのトイレだよ」

マナの股間にぐいっ！！と固いものが押しつけられる。それはマナの愛用している筆洗이었다。

筆洗いには、コピックの乱暴な文字で、『マナちゃん専用トイレ』と書き殴られている。

アヤは、ここにオシッコをしろ、と言っているのだ。

「っ、やだ、やだあっ！！ 離して、離してよっ！！」

暴れるマナの足元に、ぼたぼた、ちよろろっ、と水滴がこぼれ始める。自分の大切な、絵を描くための道具を、自分のオシッコで台無しにしてしまう。そんなことは絶対にできない。

けれど、生理現象の極限を迎えた身体は、マナの鋼鉄の意思を無視して勝手に排泄を開始してしまう。

そして——

激しい水流が、筆洗いの奥へと注ぎ込まれるその刹那。

「いやああああああ！！」

マナは感情を爆発させ、脚を固定するガムテープを無理矢理引きちぎった。自由になった右足をくねらせて、筆洗いを跳ね除ける。

同時、激しいオシッコが始まった。

「うわああっ！！」

「わぁ……オモラシ？ 本当に？」

「あーあ。我慢してって言ったのになぁ」

嗜虐の笑みに頬を紅潮させながら、アヤはマナを見下ろす。自分でも止められない羞恥の水流を恥ずかしい股間から吹き出させながら、マナはいやいやと頭を振り続けた。1リットルのお茶がそのまま変じたオシッコが下着の股布を通過して、椅子の天板を通り越し、放物線を描いて床の上に撒き散らされる。腰をよじるマナに合わせ、水流は湯気を立てびちゃびちゃと床にこぼれ落ちてゆく。

「ねえ、ほら。……マナちゃん？ ちゃんとオシッコ、おトイレにすればよかったのにねえ。……我慢できなかったから、せっかくの傑作が台無しになっちゃったよ？」

「え……？」

マナが、ふと涙で滲んだ視線を上げる。

床の上——茶色い板の上に、いつの間にか、マナには覚えのない青い色彩が広がっていた。

画用紙の上に散る水滴が、まだ乾ききっていない画用紙を濡らしてゆく。

マナの足元に広げられたのは、さっき描き上げたばかりの水彩画だった。

「っ、いや、だ、だめええええええええっ！！！」

少女の金切り声が美術室に響く。

オシッコを中止して立ちあがろうとしたマナだが、脚は自由でも両手はいまだに拘束されたまま。もはや暴走した尿意は完全に少女の身体のコントロールを離れている。激しい水流が床上の画用紙を直撃し、マナが二週間かけて書き上げた力作を台無しにしてゆく。

しびれた足では満足に立ちあがることもできず、吹き出すおしっこ水流はのたうつ蛇のようになって床に飛び散った。

「うわっ！？」

「ちよ、汚なあいっ！！」

跳ね散るオシッコから逃げ出すようにクラスメイト達が一斉に距離を取った。

「やだ、やだぁ！！ 出ちゃダメ、ちがうの、オシッコとまって、とまってよぉ……っ！！ やだ、やだぁ……！！！」

激しい黄色い水流に絵の具が溶けて、緑色になった画用紙が、くちゃくちゃに折れ、汚れてゆく。マナの悲鳴と涙を伴って、床の上に生み出される前衛芸術を見下ろして、アヤは薄く笑みを浮かべる。

『わたしのオモラシ 5年3組 一之瀬マナ』

おしっこでぐちゃぐちゃに汚れた画用紙に、そうタイトルを付けられて、むりやり壁に張り付けさせられ。

美術室を後にするアヤ達6年生を、もう振り向くことすらもできず。

マナはいつまでも、自分の作った水たまりの上で泣きじゃくっていた。

(初出：学校でトイレを禁止されるいじめ 173-179 2007/10/15)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 初めてのデートのお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 12/02/2007 18:29:03

BODY:

駅前の通りを、何人もの人達が通りすぎてゆく。

仲良さそうに肩を組んだり、手を繋いだり——僕よりもずっと大人の男の人と女の人が、楽しそうにお喋りしながら歩いてゆく。

いつもならなんてことなく見過ごしていた風景が、妙に気になって仕方がなかった。

(舞、遅いな……)

待ち合わせの時間まであと5分。広場の時計台をいつもより余計に気にしながら、なんとなく落ちつかない爪先で地面を蹴る。舞が時間ぴったりに来るのはいつものことで、そんなに気にするようなことじゃないんだけど、どうしても今日の僕はそれを意識せずにはいられなかった。

幼稚園の時から幼馴染の舞と、正式に彼氏彼女の……つまり、その……いわゆる“恋人”の関係になってから初めてのデート。特別に思うなってほうが難しいんじゃないかと思う。

とは言っても、別にいつもと違ったことをするわけじゃない。一緒に映画を見て、街をぶらぶら歩いて、お昼を食べる……それくらいだ。舞と一緒に遊びに行ったことなんて、これまでにだって数えきれないくらいたくさんあるのに、なんだか足元がふわふわして落ちつかない。

(……別にいつもと変わらないんだから、普通にしていればいいんだってば)

深呼吸しながら自分に言い聞かせてみる。舞とはそれこそ産まれてからずっとの幼馴染で、オモラシしていた頃のことだって知っている仲だ。いまさら何を気にしたってしかたがない。

それでも落ちつかない気分で、無意味に出ていない汗を拭って、ショーウィンドウに映る前髪を気にしてみたり。

「……あ」

9時まであと2分、という時に、ぱたぱたと駆けてくる見慣れた姿。

いつもと同じように、でもいつもとは少し違う服を着て、舞もどこかきこちなく、頭を下げた。

「お、おはよ……ヒロくん」

「う、うん、おはよう」

僕のほうにまでその緊張が伝わってきて、少しつかえながら短い挨拶を返す。

今日の舞は、いつものキュロットじゃなくて、紺のスカートを着ていた。これまで何気なく接していた相手が、急にほんとうに女の子だってことを思い知らされた気分で、声がうわずる。

「い、いい天気だね」

「……うん」

いろいろ言う事はあったような気がするんだけど、なぜだかそういうのはひとつも浮かんでこなくて。

「……そ、その服、似合ってるね」

気付いたら、そんなことを口にしていた。

「あ……う、うん。ありがと」

反射的に答えた舞の顔が、スカートの裾を恥ずかしそうに押さえて、ほにゃ、と笑顔に変わる。

ああ、となんだか胸にいっぱい、むず痒い熱っぽさを感じながら、

僕は人生初めての、恋人ととのデートに出発した。

全国チェーンのカフェテリアは、僕たちのお小遣いでも気軽に利用できる場所の一つ。ひとまず、という感じでアイスココアを頼んだ僕は、お店の外にあるテーブルの上でホットのカフェオレを頼んだ舞と向き合って座っていた。

「うーん……まだ1時間くらいあるけど、どうする？ はじめて行く場所だし、早めに出ようか？」

「うん……そ、そうだね……」

映画の時間は11時半。席は指定席だし急ぐ必要もないけど、初めての場所だしもし迷ってしまったりする可能性も考えると、ちょっと慎重になってしまう。

舞を誘ったのは僕のほうなので、あんまりカッコ悪いところを見せたくはなかった。つまらないことだけど、やっぱりこれも見栄を張りたい男心ってやつなんだろうか。

「それとも、どこか別にいきたいところ、ある？」

「……………」

「舞？」

「……へ？」

けれど。舞はなんだか、僕よりももっともっと緊張してるみたいだった。さっきから落ちつきなく周りを見回して、もぞもぞと座る位置を直してばかり。お気に入りのはずのスカートも、きゅっと折り目を作って脚の下。せっかくのカフェオレにも全然口を付けていなかった。

いつもなら途切れることもない僕との会話もなんだか上の空で、調子が狂ってしまう。

「舞、どうかしたの？」

「え、えっと、ああ、うん、そうだねっ。どうしようか？」

取り繕うように笑顔を見せるけれど、たぶん舞が僕の話聞いてなかったのは間違いない。僕はちょっとだけ呆れながら、ココアのコップを空に。

実は、舞の様子がおかしいのは待ち合わせからここに来るまでにもずっと気になっていた。お店に入るときも、注文をするときも、舞はなんだかまるで周りのものが見えていないみたいだったから。

そしていまも、僕の向かいの席で舞はさっきからひっきりなし膝をぶつけ、擦り合わせては前後に動かしている。ローファアの爪先も、左右交互にこつこつと地面を叩いていた。

舞自身はテーブルの下に隠れて気付かれていないと思っているようだけど、何度か脚の間にぎゅっと手を伸ばしかけてはそれをもう一方の手で抑え込んだりしてもいた。

「あのさ、」

こういうのを女の子に対して言うていいべきなのかどうか、ずっと迷っていたけれど。やっぱりとうとう僕は決心して、舞にそのことを聞いてみることにした。

「どうしたの？ 舞、さっきからなんかヘンだよ？」

「そ、そうかな？ ふ、フツーだよ。フツー」

あはは、とごまかし笑いをする舞。けれどそわそわと落ちつかない下半身までは全然ごまかしきれていなかった。僕が分かるくらいなんだから、多分他にも気付いた人はいるに違いない。

もう、舞がなにを我慢しているのかは明らかだ。

舞はさっきから、トイレに行きたいんだ。どっちかと言えば、舞は休み時間ごとにトイレに行っているタイプだった。それなのにあんなに我慢してるなんて。

僕はちいさく溜息を付いて、舞にそっと耳を寄せる。

「……あのさ、その、僕に遠慮なんかしないでいいから……行ってきなよ」

「え……」

途端、舞の顔が、まるでお風呂に入ったみたいに真っ赤に染まった。

ぶんぶんと首を振って。声を荒げて身を乗り出す。

「ち、違うよ、ヒロくん！！ わたしそんなじゃないからっ！！」

テーブルの上で、がたとカフェオレが揺れる。舞が手をつけていないせいでなみなみと残った褐色の液体が、ふちのギリギリまで迫ってはちゃぼちゃぽと波を立てた。

『それ』がなんなのか、はっきりと口に出さないことで、舞はいっそうそのことを否定したがっているみたいだった。

「もうっ、失礼しちゃうなあ。そんなじゃないんだからね？ その、ちょっと、緊張しちゃって……それだけだもんっ」

「……………本当に？」

「あーっ、信じてないっ。もう、ヒロくんだって待ち合わせの時、すっごく落ちつきなかったのに」

「そ、それは、その、そうだけど」

いきなり自分の事に話を振られて、僕まで動揺。

えっと、それは確かに、恋人、と待ち合わせをするんだから、いくら緊張するのは仕方ないことだとは思うけど。

「だから、あたしもおんなじ。ちょっとさ、恥ずかしくて……それだけだよ」

ちょっとはにかみながら、舞はカフェオレを口に運び、ぐいっと景気よく半分ぐらいを飲んでしまう。

……火傷、しないのかな。

「だ、だって、これまでだって何度も、こんなふうと一緒に遊んでるけど、やっぱり……その、恋人、って違うんだなって……」

「う、うん……」

なんだかどんどん僕のほうまで恥ずかしくなってくる。いてもたってもいられなくなって、僕はがたと椅子を引きずって席を立てていた。

「え、ええと、じゃあ……行こうか？」

「う、うんっ」

真っ赤になりながら、僕は精一杯舞に手を伸ばす。

舞も、一度はためらいながらも、しっかり僕の手を握り返してくれた。

その時はなんだか妙な雰囲気になってついついごまかされてしまったけれど、やっぱり舞の様子がおかしいのは確かだった。

とりあえず映画館までゆっくりウィンドウショッピングでも、ということになって、商店街のアーケードをぶらつくことにした僕と舞だけど、舞は相変わらずどこか上の空で、しきりに周りを見回している。

かと思うときゅうにぴたっと立ち止まり、スカートの裾をさりげなくいじりまわしたり、靴の爪先をぐりぐりと地面に押し付けたり。もう疑いようもない。

(……おっこだ)

男の僕でも分かる。舞はおっこを我慢している。それもさっきから、ずっと。

よく見れば顔色もちょっと赤いようだった。カフェにいた時よりも我慢の仕草がはっきりしてきている。そうやって小さく腰をひねったり、

膝をくっつけているのを見ていると、舞がだんだん切羽詰ってきているのが分かってしまい、僕のほうまで落ちつかない。

「舞、どうかしたの？」

「う、うん。ちょっとねっ」

どうにも気になってしまっていて聞くたびに、舞はそんなふうに曖昧にごまかす。なんでもないよ、と笑う舞だけど、やっぱりその様子はせわしなくて、放っておける感じじゃなかった。

「ねえ、舞」

「……あ！！ ヒロくん、見て見て！！ これ可愛いかなっ」

「う、うん……えっと」

いかにも“なんでもない”ふうを装って、カゴ売りのシャツを持ち上げ僕に見せる舞。でもそのシャツには黒地に白で北斗七星と『退かぬ、拒まぬ、顧みぬ』なんて力強い筆文字が書かれていたりして、さも適当に話題をそらしました、というのがバレバレ。

それでも舞はめげなかった。

「え、ええとね、その、最近、流行ってるんだよ、これ。……ホントだよ？」

「そうなの……？」

「うん、そうなの！！ 皆真似したりしててね、部活の時なんかもう制服状態で、ちょっと雰囲気すごくなっちゃったりして！！ だから……」

さすがに世紀末霸王伝説を前に嘘をつきとおすのも無茶だと思うけど、必死にフォローする舞。体育館の中で女子バレー部が揃って同じシャツを着て練習してる光景を想像してしまい、軽くめまいをおぼえる僕。

「えっと、ヒロくん信じてないよね？ ホントなんだよ！？」

「ああ、まあ、いいけど……それよりさ」

ムキになっている舞をおしとどめ、僕はアーケードの案内板にちらりと視線を向けた。駅や公園、市役所の距離と方角にあわせて、舞が一番行きたがっている場所も記されている。

「ねえ、舞……やっぱり、ちゃんと、行ってきた方がいいよ」

「え……？」

「舞はいいのかもしれないけど、やっぱり……その、僕、気になっちゃって。ごめんね、せっかくの……えっと、一緒に遊んでるのに、デリカシーなくてごめん」

デート、という単語は、トイレという言葉と同じように、恥ずかしくて口にできなかった。

「待ってるからさ、先に、ね？」

「う……うん」

実はもう、じっと立っているのが辛いかもしれない。舞はそうとう我慢を続けているみたいで、ゆっくりやってくる波を堪えるように小さく腰を揺すっている。

決心した理由の半分は、これ以上舞の苦しんでいる姿を見ているのは辛かったから。もう半分は、いっしょうけんめいおしっこを我慢している舞を見ているとなんだか心臓のドキドキが全然おさまらなくて、どうしていいかわからなかったからだ。

「……………」

舞は俯いて、小さく頷いた。

「じゃあ、待ってて、ヒロくん。……行ってくるよ」

「うん」

僕に背を向けた舞は、小走りになって案内板の示す先、婦人用トイレの方へと歩いてゆく。平気なふうをしていても、やっぱり相当我慢してたんだろう。

とにかくこれで一安心と、僕はまるで自分が間一髪で間に合ったみたいに安堵の息をついた。

トイレは思っていたより混んではいなかったみたいで、舞は5分もしないうちに戻ってきた。ハンカチできゅきゅっと濡れた手を拭いて、にこっ、と笑顔。

「お帰り」

「ただいま。行ってきたよ」

すっきりした顔で告げる舞に、僕も笑顔で応じる。

「じゃ、行こうか？」

「うんっ」

時間も程良く潰せだし、舞を怒らせずに済んだし、まあ結果オーライだと思う。これからせっかくの映画なのに、こんなことで集中できなかったらもったいないし。

ようやく気がかりがなくなったことに、僕もやっと安心していた。

映画館は結構混んでいて、順番待ちの列が続いている。

一昨日封切りの映画は、予約がないと満員らしくて、次の入場時間を待つ列がしっかりできている。別に席はあるんだから急いで並ぶ必要もないけれど、ほかにすることもなし、ほんの10分くらいのことだったので、僕達はそのまま列に並ぶことにした。

「パンフレット、買う？」

「うーん……いいや」

同じく行列のできている記念グッズのならんだカウンターを見て、舞は苦笑い。ああいう記念品はそんなに好きじゃないらしい。

「じゃあ、僕ちよっと思ってるよ。並んでてもらっていいかな」

「あ、うん」

こくりと頷く舞を後に残して、特設カウンターへ。何万円もする記念品を惜しみなく買ってゆくおじさん達を尻目に、パンフレットを二つ買うことにした。舞はいらないって言ってるけど、あって困るものじゃないだろうし、余ったら友達にあげたっていい。……こういうのも男の格好付けたい意地みたいなものなんだろうか。

お金を払って列を抜け出すと、入場時間まであと5分弱。売店とトイレが目に入ったけど、先に席についてからでもいいだろう。どっちも混んでいたし、ジュースにポップコーンを持ったまま並ぶのも大変だし。

「舞……？」

じゃあ戻ろう、と思った時だった。

列の真ん中くらいで順番を取ってくれている舞の様子が、おかしい。

さっきまではなんともなかったはずなのに、きょろきょろと周りを気にしながらとんとん、とんとん、と、サイズの合わない靴を気にするみたいに爪先で床を叩き続けている。

よく見れば舞の身体は右に、左に、ゆらゆら揺れながら、止まることなく体重移動を繰り返していた。片方の脚で立っているのが辛いというように、まるで、おなかの中にずっしりと抱えた“なにか”の重みを持て余しているように。

ふと持ちあがってしまった手がつうと脚の間に伸びるのを、慌てて気付いたように押さえ付け、スカートの裾をぎゅっと握る。

ちょっと子供っぽいけれど、入場が待ちきれなくて、すっかり飽きてしまって落ちつかない様子、と言ってしまうと見ええないこともない。

でも、もっともっと相応しい表現が他にあった。

——おしこの、ガマン。

(舞。ひょっとして……)

でも、さっき舞はトイレに行ってきたはず。それなのになんであんなにそわそわしているんだろう？ 首を傾げた僕は早足で列に戻る。

「舞」

「あ、ひ、ヒロくん、お帰りっ」

僕がじっと見ていたのには気付いていなかったらしい。舞は慌てておなかのほうに伸びていた手を離し、ぎゅっと背中の方で組み合わせる。その急な動作もいかにもわざとらしいものだった。

「な、なあに？」

じっと様子を窺う僕に、舞は焦ったような表情を見せる。

僕は小さく声を抑え、周りには聞こえないように注意しながら舞に聞いた。

「……まだ……トイレ、したいの？」

「え……っ」

さっきトイレに行っただけの舞が、明らかに動揺する。

僕はほとんど確信を持っていたのだけど、舞はもう！！と手を振って否定した。

「そ、そんなことないよ。平気だよ？ さっき行ってきたもん。もうヒロくんってば、こんな所でそんな話しないでよう！！」

でも、さっきから休まることなく続いている舞の体重移動は、明らかに『なんでもない』にしては不自然だった。

どうにも気が気じゃなくて、僕は食い下がる。

「ねえ、遠慮なくていいってば。場所ならちゃんと取ってるからさ」

「……違うってば。それにダメだよ、ちゃんとみんな並んで待ってるのに」

「そんなことないってば。指定席なんだし、ちょっと遅れたって平気だからさ」

「あはは。だいじょうぶだってば。ヒロくん。ほら、ちょっと立ってるのが疲れちゃっただけだから。心配かけてごめんね」

そんなふうにごまかしてはいたけれど、舞はだいぶ辛そうだった。そのくせ意固地になって、トイレだということを認めようとしない。

どうなんだろう、気にしないふりを続けるべきなんだろうか。全然分からない。だってこの前まで、舞はどっちかと言えばトイレの近い女の子で、僕の前でも気にせずふつうに『おしっこしたいからトイレ行ってくるね』なんて言う子だった。今日みたいにずっと我慢を隠しているのは初めてのことで、僕だってどうしていいのか迷ってしまう。

(恥ずかしいのかな……)

舞だって立派な女の子だし、さっきトイレに行っただけで、またこんなにすぐにトイレというのが恥ずかしいのかもしれない。

でもこういうのは仕方のないことだし、なによりこのまま舞がそわそわし続けていると、僕のほうも落ちつかない。一度はおさまった胸

のドキドキがさっきよりも激しく高鳴りはじめる。

「舞、本当にへいき？」

「ち、違うってば、もう、ヒロくんってしつこいなあ」

「……む。それなら、いいけど」

一応、表向きは舞のことを信じたふりをして、僕は買ってきたパンフレットを鞆に押し込み、列に並びなおした。

それでも、最後に釘を刺しておくことにする。嫌われたって、舞のことが心配なのは確かなんだ。

「……もう少しで座れるからさ、ちゃんと椅子とったらしばらく時間できるよ。映画の途中で見れなくなっちゃうなんてつまらないしさ。ね？」

「……………」

「舞？」

舞はまだなにか不満そうだったけど、なにかを言い返しては来なかった。

すっかり余裕のなくなっていた舞は、とうとうごまかしきれずぎゅっと片手で脚の間をおさえこんでの我慢の真っ最中で、僕の声など聞こえていなかったのだった。

満員の映画館の中、二つ並んだ席はスクリーンの正面。

古いけれど広くて立派な映画館は、何度か改修されていてそこも一番の特等席の一つなのだ。少なくとも首が痛くなってしまうということはなさそうで、安心する。

「舞、僕ちょっと、トイレ行ってくるけど……」

言葉には出さず、『舞も行く？』とさりげなく聞いてみる。席はちゃんと指定席だし、二人でいなくなっても問題はないはずだ。僕も同じようにトイレに行くんだから、舞だって恥ずかしがる必要はない。

けれど、舞は立ちあがろうともせずに首を振る。

「あ、うん……だいじょうぶ。待ってるよ」

「え、いいの？」

思わず聞き返してしまった。

「もう、平気だってば。さっきからそればかりじゃない。……ヒロくん、女の子にデリカシーないよ？」

「ご、ごめん」

じっと睨まれ、思わず謝ってしまう。確かにしつこいかもしれないけど、ついさっきまでの脚の間をぎゅっと抑えて俯き、息を殺す舞の様子が頭にこびり付いていて、とてもじゃないけれど放っておける気分じゃなかったのだ。

でも、今の舞はすっかり余裕を取り戻して、まるっきりいつもの舞だった。我慢の波を乗り越えて楽になったのか、それとも本当に一時的なものだったんだろうか。

僕のほうもだんだん余裕がなくなってきていたので、それ以上追求はせずに席を離れた。

「ふう……」

紳士用トイレはさっきよりいらかすいていた。

ざわざわという喧騒から解放されて、静かなリリウム張りの床を進む。

トイレに入っても、僕の心臓はドキドキしっぱなしで少しも落ちつかない。

……舞が、今もおしっこを我慢しているのは確かだ。たぶん今も、席の座ったままぎゅぎゅっと脚を組み替えながら、おなかのなかに溜まった黄色い液体を我慢し続けている。

そんな舞を放って、僕だけがすっきりしていいのかどうか迷ったりもしたけれど、結局僕は素直にトイレに行ってから席に戻ることにした。

紳士用トイレは思っていたよりもずっと広くて、たいして並ぶ事もなくすぐに僕の番が回ってくる。

それでも我慢はかなりのものになっていて、ほとんどズボンのチャックを下ろすと同時に、おしっこが出た。

出かける前にトイレに行っておいたのに、思っていたよりもずっとたくさんで、なかなか終わらない。カフェテリアで飲んだココアが効いてるのかもしれない。そう言えば舞が最後に飲んでいたのはアイスカフェオレだったはずだ。たしかコーヒーとか紅茶にはすぐにトイレに行きたくなる成分が入っていた気がする。

……ということは、舞はこれよりもずっとずっと、おしっこを我慢していることになる。

「ふう……」

ようやく全部おしっこを出し終えて、ぼくはすっきりと深呼吸。

なんとなく頭の奥に熱っぽいものを感じながら、手を洗ってぶるぶると首を振る。ついでに顔も洗って頭を冷やすことにした。

……さっきから僕は舞のトイレとおしっこのことばかり考えている。これじゃあまるで変態じゃないか。

(いけないことだし、恥ずかしいことなんだから……)

できるだけ気にしないようにしないといけない。濡れた顔を拭きながら自分に言い聞かせる。

……よく考えてみたら、これまでかたくなにトイレに行く事を否定してきた舞だ。僕の前ではっきりトイレに行きたいとはいいつらいのかもしれない。でも、だからこそ、こうして僕がいなくなれば、舞だって安心してトイレに行けるんじゃないだろうか。

そう考えた僕は、トイレを済ませるとロビーに出てしばらく時間を潰すことにした。僕のほうもトイレが混んでいたことにすれば、舞が何もなかった風を装ってこっそりトイレに行ってくる事もできるはず。

「そうだ」

ついでにジュースとポップコーンも買うことにした。いちおう、舞の分も合わせて二人分。

席に戻った時にはもう10分ぐらいが過ぎていて、上映は間近だった。

「あ、ひ、ヒロくん、ただいま……」

「お帰りー。……もうすぐ始まっちゃうよ？」

舞は、予想通り僕が席に戻った時にはそこにはいなくて。僕がパンフレットを眺めている時に、僕とは別の出口から戻ってきた。濡れているらしい手でハンカチを握り締めている。

(よかった、ちゃんと行ってきたんだ……)

ちょっと様子がおかしいのは、たぶん僕が気付かないうちに戻ってくるつもりなのがあまくいかなかったからだろう。

「ほら、舞」

「う、うんっ」

でも、余計なことを聞いたって仕方がない。僕は気付かないふりをすることにした。すでに真っ暗になった劇場の中、舞はちょこちょこと席に座る。

やがて、真っ暗になった場内に、上映開始のアナウンスが始まる。

「これ、舞の分」

「え、あ、ありがとう……」

舞にジュースとポップコーンを渡し、僕はゆっくり席に腰を下ろし、スクリーンに向き直った。

僕達の席はスクリーンの正面で、ちょうど大きな通路の前に面した場所だった。前に席がないのでずいぶんひろびろとしている。

あれだけの列も大きな劇場に入ってしまうと、立ち見の混雑ってほどのことはなくて、特に指定席のほうは半分と少し埋まっているくらいだった。

けれど僕はそんなことを気にしていることはできなかった。

もっともっと切実で困った事態が、僕のすぐ隣で進行中だったのだ。

「ん……っ」

小さく押し殺した声が聞こえる。ぎしっと椅子が軋む。ふうー、という、荒い息を無理矢理落ちつけるような深呼吸が響く。

明らかに、おかしい。

僕も気付かないわけにはいかなかった。……僕のいない間にトイレに行ったはずの舞が、さっきの列待ちの時よりも落ちつきなくぎしぎし、ぎゅぎゅと椅子を軋ませている。座る位置を直すふりをして、おしりがもじもじしてしまうのをごまかしているようだったけれど、それくらいじゃ焼け石に水だ。

明らかに、舞のおしっこ我慢の仕草は大きくなってきている。

でもどうして？ まさか、またトイレに行きたくなかったってことなんだろうか？

（たくさん、飲んでたし……そうかも）

こんな季節に冷たい飲み物。そんなこともあるのかもしれない。

できるかぎりのさりげなさを装って（少なくとも舞はそのつもりらしい）スカートの脚の間に手を挟み、ぎゅと膝をくっつけ合わせる。そのたびに椅子の上で小さな身体が上下する。

まるで、見えないなにかに腰を擦り付けているみたいなその格好は、僕の頭を完全に占拠して、離れてくれない。

「んっ……っふ」

辛いなにかを堪える息遣い。ふかふかの椅子の上、前後するお尻。左右にくねる腰。時折身体をぐっと曲げて、小さく『あ』と声を上げる舞の様子は、もうはっきり言って扱いに困るくらいに僕の心を捕らえて離さない。

さっきの今で同じことを聞くのはさすがにためらわれたけど、黙っていられるわけもなかった。

「ね、ねえ、舞、舞ってば」

「……え？ あ、えっと、なに…かな、ヒロくん」

この後に及んでも、舞はとぼける姿勢を崩さない。僕もだんだん腹に据えかねだしてきていた。だって、せっかくの……デートなのに、舞はいつまでも上の空で、全然僕のことを気にしてくれていない。

一応は、恋人、ということになっているはずの僕よりも、おなかの中のおしっこを優先しようとする舞の気持ちが、わからなかった。

「舞、トイレ入れなかったの？」

「そ、そんなことはないよ。ちゃんと行ってきたよ」

「本当？　じゃあなんでそんなに我慢してるのさ」

「が、我慢なんかしてないもん！」

小さな叫び声に、隣の席の人がちら、とこっちを見る。

でも、もうはっきり舞に聞かないと気が済まなかった。僕は慌てて人差し指を口の前に立てて、小声で舞に囁きかける。

「……してるよ、我慢」

「し、してないっ」

「してるっ」

「してないもんっ」

してる、してない、の押し問答。

一目でおしっこ我慢をしていると分かる舞が苦しみながら違うと言い張って、それを隣で見ている僕のほうがそうだと主張する、なんだかねじくれた言い争いだ。

それなのに、舞は強情に我慢なんかしてないと言い張った。僕も引っ込みがつかなくなって、ふたりで子供みたいに、むーっとなりながら顔を見合わせる。

「してるってば！」

「我慢なんかしてないもんっ！　ヒロくんのバカっ」

もう僕だっていまさら後にひけない。売り言葉に買い言葉だ。

「そう。じゃあ、じっとしててよ。舞、トイレなんか行きたくないんならできるよね？」

「う、うん。当たり前だよ」

こちらが強がりですら答えて、ぎゅっと動くのをやめようとする舞。けれど、その静止は5秒も持たずに、あっという間にもじもじダンスは再開してしまう。

「ほら、やっぱり」

「ち、ちがうもん。熱いんだよ。ちょっと汗が出て気持ち悪いから」

「……舞、」

なおも言い逃れようとする舞に、僕はまっすぐその目を見て、言った。

「なんで嘘なんかつくの？　舞、べつに僕は、舞が何回トイレに行ったって嫌いになったりしないよ。恥ずかしいことじゃないもん、そんなの。今までだってそうだったんだしさ」

それは、心の底から僕が思っていたことだし、舞のトイレが近いのはおさななじみとしてちゃんと知っていた（知りたくなくても知っていた）ことなんだけど。

でも、いくらなんでもこのままずっと、僕よりもトイレの我慢を優先され続ければ、さすがに黙ってられない。

しばらく黙っていた舞は、ぷいと目を反らしてから小さく言った。

「……ヒロくんのバカ」

「え？」

「ふんだ。違うっていったら違うんだから。……わたし、ちゃんとトイレ行ってきたもん。そんなに何度も何度もトイレ行ったりしないんだ

から。さっきだってきちんと帰ってきたの見てたでしょ？ ……ヒロくん、わたしなんかどうでもいいんだ。さっきからずーっとトイレのことばかり気にしてるんだから。ヒロくんの変態！」

まるで叱られたことの言い訳をするみたいに、舞は答え、苛立ち紛れにジュースのカップをつかんでぐいぐいぐいっと半分以上を飲んでしまった。

そんなことない、と証明するかのように。

「そうだけど、でも、さっきまたしたくなってたじゃないか！」

「変態。そんなのまで見てたの？ 我慢なんかしてないもん。平気なんだから！」

半分怒ったみたいな声でそんなことを言われて、僕もむかっとしてしまう。

「じゃあ、勝手にしなよっ。オモラシっちゃっても僕、知らないからねっ」

悪いのは舞なのに。それが僕のせいみたいに言われたら、いくらなんでもちょっとひどいと思う。僕にだって我慢の限界はあるのだ。わがままな舞には付き合っていられなかった。

せっかく楽しみにしてた映画なのに、見れないなんて嫌だ。

「う、うんっ。勝手にするよ。だっておしっこ我慢なんてしてないから」

「そうだね」

舞はさらに意地を張って、もう一度ジュースを飲んで見せ、べーっと僕に舌を出したのだった。

すっかり呆れ果てた僕も、冷たく答え、舞のことなんか気にしないで映画に集中することにした。

しばらくして。

スクリーンの中で、ようやく主人公が仲間を集めて王様から船を貰い、はじめての航海に出航した頃。舞がこれまでずっと響かせていた、椅子のぎしぎしが聞こえなくなっていた。

「んう……ふっ……あん……っ」

その一方で、押さえようとしても押さえきれない小さな声が、どんどん大きくなってきている。小さな衣擦れは、両手でスカートの上からぎゅっとなにかを押さえこむような、少しでも力を抜いたらたちまちとんでもないことになってしまいそうな、そんな切迫した気配。

「ね、ねえ……ヒロくん」

小さな声が僕を呼ぶ。でも僕はあえてそれを無視して、映画を見つづけていた。画面では海賊の大親分が、捕らえてきたお姫様を前に剣を突き付けている。大ピンチに怯えながらもまっすぐそれを睨み返すお姫様。そしてそこに急ぐ主人公。いまにも大暴れがはじまりそうな緊張の一瞬だった。

「ひ、ヒロくんっ……っ」

今度はもう少し大きく、すがりつくような声で、舞がぎゅっと僕の服のそでを引っ張る。僕はうるさいなあ、と思いながら舞の方を見た。

舞はもう映画を見てはいなかった。とてもそんな場合じゃないらしい。

ぐっと前かがみになるように深く体を前に倒し、ほとんど身体を二つに折り曲げて、ぎゅっと閉じた脚の間に両手を突っ込んで、スカートの脚の間を硬く握り締め、小さく小刻みに震えている。

指の隙間からまっしろい下着が見えて、まるで、えっちなことをしてるみたいだった。

「ど……どうしよう……っ」

僕を見上げるように言ってくる舞の顔は真っ赤で、今にも泣いてしまいそうだった。

やっぱり、と僕は確信する。こうなるだろうことはもうとくに分かっていたのだ。それなのに強情に首を振り続けてきた舞の自業自得だ。あんなに我慢してるのに、さらに冷たいジュースまで（しかもLサイズ）飲み干して、辛くならないわけがない。

「トイレ、行きなよ。我慢できないんでしょ？」

さんざん言ったのに聞かなかった舞が悪い。

ぶっきらぼうに答えて、僕はもう一度スクリーンに向き直ろうとした。いま、一番いいところなのだ。見逃すわけにはいかない。

けれど、舞は僕のシャツのそでを離してくれなかった。

「っ……、」

こり、と口の中にたまった唾を飲み込んで、か細い声で舞は言ってくる。

「む、……無理だよ……た、立てない、もんっ……」

一瞬意味が分からず、瞬きをしてから。

僕はそのことを理解した。

「えええっ！？」

——舞は、ここでおしっこを漏らしちゃいそうだと言っている。

まさかの告白に驚いて声を上げてしまい、僕は慌てて口を塞いだ。

今度は前と後ろからも他のお客さんにじろりと睨まれて、僕はそれぞれにぺこぺこ頭を下げる。

そうしてから、恐る恐る舞に聞いてみた。

「ど……どうしても、ダメ？ た、立てないの？」

「うん……さ、さっきまでは、その、なんとかこうしてれば平気だったんだけど……こんどのは、なんか、急にっ……すぐくて……っ」

小刻みに震えている舞の爪先は、もう地面に触れてすらいない。

おなかを抱え込むようにして伸ばされた手のひらは、はっきりと脚の間のいけないところをぎゅっと押さえている。どれだけすごいおしっこの波がきてるんだろう、と考えてしまうくらい。

「んうううっ……」

舞が小さく身じろぎをする。ぎしぎしが聞こえなかったのは、我慢できていたからじゃない。もう余計に動くと逆におしっこが出てしまいそうだったからだ。

我慢限界のおしっこが舞のおなかの中で膀胱をぱんぱんにふくらませ、そのなかでたがたたと揺れている様子を想像してしまって、僕はぶんぶんと首を振った。

「ね、ねえ、本当に？ と、トイレまで……」

「う……うんっ……が、我慢、できないようっ……」

舞はとうとう、口に出してそのことを認めた。

いきなりやってきたとんでもない事態に、僕はすっかり映画のことも忘れて慌ててしまう。

「え、えっと……ど、どうしようっ」

「ひ……ヒロくんっ……」

長いおしっことの戦いで疲れきって、僕よりも余裕のない舞が答えられるわけもない。かすれて切羽詰った声。さすがに僕を見つめながら、舞は『あっ』と声を上げた。

「っ〜〜〜……ッ！！　っふう……っ」

口をまっすぐに結んで、眉をぎゅつと寄せ、息を荒くして、それでもぎゅうぎゅうとあそこを押さえる手はそのままに、舞はぐいっと身体を反らす。おなかのなかで暴れているおしっこに動かされているみたいだった。

舞の背中が椅子の上からずり落ちて、身体を丸めたままシートの上にごろんと転がっているような姿勢になった。前から見ればぎゅつと押さえつけているスカートの隙間から脚の付け根とおしりがはっきり見えちゃうような格好だ。

僕達の座っている席の先には通路があって、前の席の人はかなり先にあるから、まず見られたりすることはないだろうけど、二つ先のおばさんは不審げにこっちをちらちら見ている。一緒にいる小さな子は映画に夢中でこっちに気付いてはいないけど、おばさんは退屈しのぎにいいものを見つけたなんて思っていそうだった。

僕は、混乱する頭の中でもうわけがわからないくらいドキドキしっぱなしだった。

「ど、どうしよう……っ」

「どうしようたって……」

椅子から立たなきゃトイレには行けるわけがない。でも舞は間違いなく『立ったら、出ちゃう』状態だ。でもこのまま舞がおしっこを我慢し続けるわけにはいかない。

僕はごくっ唾を飲みこんで、ぎゅうぎゅうと力いっぱいあそこをおさえている舞の手をじっと見つめてしまう。

あの奥で、舞の力だけじゃもう押さえきれないくらいのすごいおしっこが、映画の向こうの嵐の海みたいにものすごい波を立てて荒れ狂っているはずだ。一番弱い場所から今にもダムが決壊しそうな、予断を許さない状況。

「あう……だめ、……で、ちゃう……うっ」

びく、と舞が身体を強張らせる。

考えをめぐらせようとしているうちに、僕は必死におしっこと戦う舞のつらそうな様子を見ていられず、思わず一緒に押さえてあげようと手を伸ばしかけてしまう。

（ば、バカっ！！　何考えてるんだっ！！）

片手で自分の頭を思いっきり殴り付ける。目の奥がちかちかして、じんとした痛みが頭の奥にまで響いた。

……とにかく、少しでも舞のおしっこがしたいのがおさまるまで、僕はただおろおろしながらそばで見ているしかなかった。

「ふうー……はあ……っ」

大波の合間のほんの少しの小康状態。それでも次にやってくる大きな波までおｎインターバルに過ぎないかすかな時間に、舞が小さく息を吐く。

その時だった。

「あっ、ねえねえおかあさんっ」

遠慮のない幼い声が響く。映画館のなかでは歓声が続いていて、全員がそれを聞き取るという事はなかった——と思うけれど、その声は確かにはっきりと、僕の耳に届いた。

「あのおねえちゃんおしっこ？　おしっこがまんしてるよ！　ねえねえっ！」

「っ！！」

全くの不意うち——ちょっとした隙に舞の状況をみとがめた小さな男の子が、舞のほうを指差して叫ぶ。

「ほらおっこ、おねえちゃんおっこしたいんだよ！ おトイレいってないんだあ！」

僕が聞こえるという事は、周りの人にも聞こえるってことで。

「ダメなんだよね？ オモロシしちゃうもん！ ぼくできるよ！ ぼくちゃんとトイレっていえるもん！」

たぶん、幼稚園くらいのその男の子は、最近ちゃんとトイレに行けるようになったのが嬉しくて、お母さんに自慢したかったんだろう。でもそれは、ずっと我慢を続けていた舞の努力を否定して、いけないことだと言っているのと同じこと。

そして、さっきからこっちを見ていたおばさんは、あろうことかそれを止めなかった。

「そうねえ……お姉ちゃんなのにだらしないわよねえ。リョウタはちゃんとお手洗いできるわよね？」

「うんっ、ぼくちゃんとおっこできるよ！ ちゃんとトイレでおっこできるよ！」

まるで、舞はそれができないといわんばかりに——リョウタくんの声が残酷に響く。

おばさんは、きちんとしつけのできたリョウタくんを自慢したかったのだろうか。でも、あまりに無残な仕打ちだった。

「や、やぁ……ち、違うもんっ……わたし、わたしっ」

恥ずかしさと、悔しさと、誤解にふるふると涙を溜めて首を振る舞。

でも、舞のなかで高まり続けるおっこは、その隙を見逃さない。恥ずかしくおっこの場所を握り締めて腰を揺らし、動けない舞を——。

暗闇の中、今まさに始まったスクリーンの大活劇をそっちのけで、映画館のなかのほとんどの人の注意が、舞に集中する。

おっこを我慢しきれない、恥ずかしい女の子として。

舞はとうとうそれに耐えきれず——

「でちゃう……ううっ……！！」

絶体絶命の窮地から、かすれた声で悲鳴を上げた。寄せ合わせれた膝がぎゅっと震え、腰がふわりと浮かぶ。もうダメだ。

舞は、本当の本当に限界だ。

「っ……！！」

ええい！！ マンガで読んだみたいな方法だけど、もう仕方ないっ！！

「あああああ……っ！！」

舞が最後の声を絞り出すようにして叫んだ瞬間。

僕は覚悟を決めて、座席のホルダにあった自分の分のジュースのカップを掴むと、まだ半分以上残っていた中身を舞のシートにぶちまけた。

ばしゃんっ、と響く音に合わせて舞の悲鳴。これはさすがに、できるだけ無関心を装っていた人まで巻き込んで場内の注目を集めてしまった。一瞬シンとなる劇場の中。

「すいません……ジュ、ジュースこぼしちゃいました！！ ……ごめんなさい」

けれど、もう緊急事態なので仕方がないのだ。後ろの座席から立ちあがったり、隣の列からなにごとかと覗きこんでくる人たちに頭を下げて、僕は舞の手を掴んだ。

「舞、いくよっ、立てる？」

「っ……」

俯いたままの舞をぐっと引っ張って立ちあがらせ、歩き出す。

ざわざわと揺れる喧騒の中、ちいさくしゃくりあげたままの舞をぐいぐいと引っ張って、僕は非常口のドアを押し開ける。

……胸の奥を、苦い思いが一杯に満たしていた。

僕達の歩いてきた廊下には、ぼた、ぼた、ぴちゃん、と雫が続いていた。

舞の下半身から滴る水滴が、靴と靴下、それにスカートをぐっしょりと濡らし、舞の靴跡をタイルの上に点々と残している。どれもみんな、舞がとうとう我慢できなかったこの証だ。

「っ……う」

舞はホールに出てもまだ脚を内股に震わせて、黙ったままだった。たぶん、脚の間はこれ以上ないくらいにびしゃびしゃで気持ち悪いだろうし、こんなに大きくなってからのオモラシのショックはそれだけ大きいんだろう。

あんなに大勢の前でおしっこを我慢できなかったなんて、僕だって想像するだけでも死んでしまいたくなる。まして舞は女の子だ。

（僕の、せいだ）

せっかくのデートで。

恋人になったばかりの女の子に、あんなに酷いことをさせてしまったんだから。

嫌われたって、愛想をつかされたって、……できる限りのことを、するしかなかった。

「あの……」

「はい、なんでしょう？」

ホールに出た僕は映画館の係の人を呼びとめて、席にジュースをこぼしてしまったことを説明する。

……ずいぶん無理矢理な説明だったし、多分僕達の席の近くにいた人たちにはバレバレの嘘だったけど、係の人には少し怒られたくらいで見逃してもらえた。スカートをびしゃびしゃに濡らしてしまっていた舞が、しゅんと俯いたままだったことも大きかったのかもしれない。

掃除のために歩いてゆく映画館の人にもう一度頭を下げて、僕は舞の手を取った。

「ねえ、トイレ……行ってきなよ」

「……うん」

「これ、コート。着替えてきなよ。……僕、ここで待ってるからさ」

「うん」

さすがのショックにすっかり打ちのめされているのか、舞はか細い声でうなずくだけ。

それでも舞はよろよろとした足取りで、トイレの中に入っていった。

点々と、濡れた靴跡があとに続いてゆく。

……おしっこが出てしまうのと、トイレに入ると、順番は変わってしまったけど、……それは本当に致命的なことだけだ。

とにかくこれで少しでも舞が落ちついてくれればいいと思う。僕がいけないほうがいいのかどうかかわからないけど、独りになりたいと思う気持ちもあるはずだ。

……もうすぐ卒業なのに、まさか、オモラシなんて。

舞の気持ちは想像することしか出来ないけど、とてもショックに違いなかった。

「ヒロくん……」

待つこと10分。舞がトイレのドアから顔を覗かせる。ゆっくりと押すタイプのドアを開けて、疲れた様子の舞がゆっくりとこちらを窺う。

「ごめんね……」

「いいよ。僕も、ひどいことしちゃったし。僕のほうこそ謝らなきゃ。……ごめん、舞」

一応理由はあったとしても、舞の服を汚してしまったのは事実だ。それに、あんなことを言ってしまった僕が悪い。

でも、舞は首を振るばかりだった。

「うん。ごめん……ごめんなさい」

真っ赤になりながら、舞は廊下に出てくる。上から下まできっちりコートのボタンを留めていた。丈が長いので、これなら元気に走りまわったりしなければ盛大に染みのついてしまったスカートも見えずに済むだろう。

「でも、さっき……映画の前、ちゃんとトイレ行っただよ……それなのに、急に……」

「そっか」

たぶん、今日の舞は特別、おしっこが近いんだ。緊張とか、飲んだものとか、いろいろ理由があるのかもしれないけど、何度もトイレに立つのがきつと恥ずかしくて、意地を張ってしまったんだろう。

劇場から歓声上がる。すっかり忘れていたけれど、そろそろ前半のクライマックスの時間だ。

「どうしようか。まだ続き、やってみたいだけ」

「うん……でも、もう今日…はね、その……っ」

全くその通り。あんなことになった後で、当の舞がまた映画を見れるわけがない。ほじかのどこかに寄りたいたなんて考えるわけもなかった。ここでもデリカシーのなさを見せてしまい、僕は自分で自分の頭を殴り付ける。

「……そっか。じゃあ帰ろうか」

「う、うん……」

とぼとぼ歩いてくる舞に付き添って、その手を握る。

「あ……っ」

舞は反射的に手を引っ込めかけたけど、僕は構わずにその手を取った。

たぶん、舞の手はオモラシの瞬間、おしっこでびちゃびちゃになっていた。もちろん洗ってきたはずなんだけど、やっぱり抵抗があるんだろう。

でも、汚いとか、気持ち悪いとか、そんなことを考えちゃいけないはずだった。

「……行こう」

「うん」

僕は小さく俯く舞をつれて、映画館を出た。

帰り道の電車の中でも、舞はずっと俯いたままで、ときおり小さく肩を震わせていた。泣いていたんだろうと思う。

僕はそんな舞に掛けて上げられる言葉も見つけられないまま、ずっとその隣にすっていることしかできなかった。胸が情けなさで一杯だった。こんなときにどうしていいのか解らないくせに、恋人、だなんて舞いあがっていた自分があまりに情けなかった。

舞はずっと黙ったまま、やがて四つめの停車駅で、僕達は電車を降りる。

改札を抜けて駅前を過ぎ、もうすぐ家の近く、というところで。

舞は、とうとう堰を切ったように、舞が小さく唇を震わせて、言う。

……僕が、予想もしていなかった言葉を。

「ヒロくん……っ」

舞は掠れた声で、僕を見、そして必死に訴えた。

コートの裾から、剥き出しになった両足を交差させ、くねくねと腰を揺すり、道路の真ん中でまるでしゃがみこみそうに前かがみになって。

「……と…お……トイレ……行きたい……っ」

「え、えええええっ……！？」

衝撃の告白。

けれど、舞の様子は明らかに、さっきの時にも匹敵するくらいのすさまじい我慢の真っ最中。中腰になったお尻の、コートの裾からは今にも激しい水流が吹き出してしまいそう。

「ひ、ヒロくん……っ、だめ、でちゃ…う」

「ちよ、ちょっと待ってよ舞！！ だ、だって、だって、さっき！！」

だって、

さっきの映画館で、舞はとうとう我慢できなくて、オモラシしちゃったはずだった。いくらトイレが近かったって、いくらカフェオレにジュースに、あんなに水を飲んでいても、ほんの30分くらいしか経たないうちに、こんなにぎりぎりの限界寸前になってしまうわけがない。

呆気にとられる僕の前で、舞はぶるぶると脚を震わせながら、勝手に説明をはじめる。

「さ、さっき、は、ね……もうホントに、ダメだって思ったんだけど……最後の最後で、ぎりぎり我慢できたから……あはは、ちゃ、ちゃんと我慢したよ？ しつれい、しちゃうよね……人のこと、トイレもきちんとできないみたいに、さ……」

それは、少しでも気分を紛らわそうということだったのかもしれない。言い訳を繋ぎながら、舞はぎゅぎゅつと強く強く前を押さえる。

とてもじゃないけれど、演技には見えなかった。

でも、だとしても。

もしあの時、本当に舞がオモラシをしてなかったとしても、その後で舞は着替える時にちゃんとトイレに行っている。そこでおしっこをすることはできたはずなんだ。

まして、舞は商店街の時にも、ちゃんとトイレに行っているはずだ。それだけじゃない。その後だって、映画の前だって、舞はちゃんとトイレに行くチャンスがあったはずだ。それに戻ってくる時はちゃんと手を拭きながら……

(まさか)

ふと、気付く。

自分の場合を考えてみる。ふつう、普通は、トイレに行ってから手を洗っても、そのまま濡れた手で外に出てきたりしない。ハンカチがあるんだし、ちゃんと手を拭いてから戻ってくるはずで、いくらなんでもトイレから、場内の自分の席までずっと手を拭いているわけがない。

だったら、舞はあの時、やっぱりトイレには行かずに……そのまま、戻ってきたってことにならないだろうか。

自分でも信じられない想像に、頭を殴られたみたいな気分だった。

「ど、どうして！？」

「だ、だって……デートなのに、せっかくのデートなのに……ヒロくん、ほっぽって、そ、その、トイレ、なんか……っ」

「そんな……」

うまく言葉が繋がらない。舞が、そんなことをしていたなんて思いもよらなかった。

「で、でも、今日、舞、何回も……」

「ちがうもんっ！！」

舞は声を荒げて叫んだ。

「と、トイレなんか……行かないんだから……っ、わたし、そんなに、トイレばかり行くような、恥ずかしい女の子じゃないんだからっ……！！

お、おしっこしてばかりの、恥ずかしい子じゃ、ないんだからっ！！ それなのに、ヒロくん……と、トイレのこと、ばっかつ……」

痛々しいまでの姿で、涙を滲ませて。

悲痛に叫ぶ舞の姿に、鈍い僕もやっと理解した。

舞にとって、トイレに行くってことはたぶん、僕が思っているのよりもずっとずっと恥ずかしいことで、秘密にしなければいけないことだった。ひょっとしたら誰かにかかわれたり、いじめられたりしていたのかもしれない。

……いや、僕だって、きっとこれまでも無神経な言葉で舞を傷付けていた。思い返せば心当たりはたくさんあった。休み時間のたびにトイレに行っている自分を、そんなに何度もおしっこをしてしまう自分の身体を、舞はずっとコンプレックスに思っていたのに違いないのに。

そんなことを考えもせず、僕は舞のトイレばかりを心配していた。

舞は、僕とのデートに緊張して、『恋人』として恥ずかしいところを見せたくないと必死に頑張っていたのに。

それなのに、僕はいつもの調子で接してしまった。だから——

「ねえ、舞、まさか」

聞きながら、僕はほとんど確信していた。

「今日、いちども……その、できてない、の？」

「……………うん……………」

消え入りそうな声で、こくっ、とうなずく舞。

一番最初に、商店街でトイレに行った時も、入り口のところに入って、すぐに回れ右して手を洗ってそのまま出てきただのという。

あんなに混んでたのにすぐに戻ってきたのはそういうわけだったんだ。

「ヒロくんと、デートなんだから……………恥ずかしいことしちゃダメって……………」

「そんな……………」

そんな些細なことで、舞は今こんなに苦しんでるのかと思う。舞がこんなになるまでおしっこを許さなかったのは、ほかでもない、僕自身だ。

あまりのことに、あたまがちりちりするくらいだった。

だって、今朝の9時から……………今はもう午後の2時近い。ということは、舞はもうずっと、5時間近くもおしっこがしたいままなんだ。

僕だって、トイレに行けなくて苦労した経験がある。幼稚園のころは我慢しきれなくてなんとか失敗しちゃったこともある。それなのに、僕よりもずっとトイレの近い舞は、たくさんおしっこをしなければいけないはずの舞は、おなかいっぱいにおしっこを我慢して、もう何時間もずっとずっとそのままにいる。

「は、早く行ってきてよ、待ってるから！！」

「で、でも……………」

この後に及んで舞は首を振る。

このすぐ近くには公園がある。そこには公衆トイレがあって、誰でもすぐに使えるようになっている。らちがあかないと思って、そこまで舞を、それこそ抱えてでも引っ張ってでも連れていこうとした僕だったけど、舞は強固に抵抗する。

「舞？ どうしたの？ も、もう……………その、」

舞は相変わらずの、へっぴり腰のまま。

「ご、ごめんね……………ゴメンなさい、ヒロくん……………わ、わたし、……………あそこのトイレ、嫌い……………っ、使えないのっ！！ ああのトイレじゃ、おしっこ、できないのっ……………」

もう、隠しておくだけの余裕もないのか。舞は激しくその場で足踏みを始めてしまいながら、次々と大切な、なによりも一番秘密にしておかなければならないことを、波だの向こうに告白する。

「……………あ、あそこ、和式だから……………あ、わ、わた、し……………っ、しゃがんで、使うトイレ、……………使えなくて……………っ！！」

「え……………」

きっとそれこそが、舞がトイレを、おしっこを恥ずかしいと思いこんでいた一番の原因。僕の家も、舞の家も、トイレは洋式だったから気付かなかった。

最近はいだいぶ少なくなったけど、まだまだあちこちにある和式のトイレ。舞はそれを使うことができないんだという。原因は確か、ずっと小さな頃に、田舎でお化けの出そうな古いトイレで、間に合わなくて大失敗をしてしまったこと。

「ごめんね……………ヒロくん、っ、ごめんなさいっ」

……………ごめんなさい、と、謝り続ける舞。

でも、違う。僕がなんでそのことを知っているかという、その田舎というのは、僕の田舎のことで。

僕はその時の、オモランをしてしまった舞のことを——覚えている。

舞がずっとずっと、トイレのことをを恥ずかしい、と思っていた理由もそれだったんだ。

和式のトイレを使えない、きちんとトイレをできないって知られるのが嫌だったから、あんなふうに虚勢を張ってしまった。

「ま、舞、じゃあ……」

別のトイレに、と言いかけて。僕は口をつぐんでしまう。

ここのほかにすぐ使える、近くのトイレの場所は、とっさには出てこなかった。

「ど、どうしよう。どこかでトイレ、貸してもらおうか？」

「や、やだっ……恥ずかしいようっ……」

トイレに行くこと事態が恥ずかしいと思っている舞には、知らない人にトイレを借りよう頼むのは難しい注文だろう。

それにもし、もしも、借りたトイレが洋式じゃなかったら、舞はまたおしっこができないままだ。トイレを目の前にして、ますますしたくなるおしっこを我慢し続けるのはとても辛い。また同じような事があれば、今度こそ舞はオモラシしたっておかしくない。

「お、うちまで……我慢するからっ……」

悲壮な決意だった。度重なる我慢のせいか、舞の言葉遣いもちょっと子供っぽくなってしまっている。オモラシなんてとくに卒業したはずなのに、その恐怖と戦っているうちに段々昔に戻ってきてしまったのかもしれない。

その、内股でスカートをおさえ、よちよちと歩く舞の後ろ姿に、あの時の、お気に入りのワンピースをオモラシで台無しにしてしまった時の小さな女の子の姿が一瞬、重なって見えた。

「ま、舞、頑張って、あとちょっとだから……」

「う、うっ、あああっ……」

ふらふらと頼りない足取りで、舞は最後の角を曲がる。この先が舞の家で、僕の家もそのすぐ隣にある。

いつオモラシしてしまってもおかしくない様子で、もどかしくなるくらいの足取りで道路を横切った舞が、びくん、と背中を伸ばして立ち止まる。

「う、まって、だめ、だめ……っ、だめえ……っ」

あとほんの数メートルの距離で、猛烈なおしっここの波に行く手を遮られ、舞はまるで呪文みたいに『がまん、がまんっ』と小さく口の中で繰り返す。変わってあげられるものなら変わってあげたいのに、僕にはなににもできない。こんな時までまるっきりおさまらない胸のドキドキが恨めしかった。

「っ、あ、あふ、……っくう……だっ、……ああ、やだっ……またあ……っ」

一度こうなってしまうと、なかなかおさまらないのはもう何度も見せられてきた。立ち止まっただけの我慢のたびにボロボロになりながら、舞は辛うじてこれまでもおなかの中で暴れ回るおしっこを押さえこんできたのだ。

押さえた手のひらのあいだで、ページュのコートがくしゃくしゃになって、ボタンがまたひとつ外れてしまっている。

靴下を脱いで、濡れた靴だけ履いた舞の格好は、ちょうどコートの下には何にも着ていないみたいに見える。

先回りして舞の家の玄関に飛びついた僕だったけど、返ってきたのは思い手応え。

なんと、間の悪すぎることに、舞の家族は残らず外出していて、留守だった。

「えっと……舞、鍵はっ！？」

「あ、バッグ、の、なか……」

反射的に僕は舞の鞆を開けようとする。

けれど、

「っ、だめえ！！」

舞はなにかに弾かれたみたいに叫んで僕の手から鞆を取り上げた。

「わ、わたし、じ、自分で、開ける、からっ……あ、開けちゃダメ！！」

この時の僕には思い至らなかったけど。

舞は、おしっこで汚れた靴下と、それを拭いたりしたハンカチを、全部この鞆の中に入れていた。そこを僕に見られたくなかったんだ。

震える手で鍵を探し出した舞は、ふらふらとドアによりかかかる。

けれど、動けない状態で無理に動いた反動なのか、舞の我慢はついに限界を迎えようとしていた。

「あ、あっ、あ、っ、あ、あーっ！！」

「舞っ！！」

舞の声がひときわ高くなる。

右手でコートの上からおなかを押さえ、左手で鍵を開けようとする舞。でも震える鍵は鍵穴に収まらず、それがますます舞を焦らせる。舞のお尻は不恰好にぐいと後ろに突き出され、小さく左右に揺られている。

まずい、と思って僕は舞の代わりに鍵を開けようと、駆け寄った。

でも、もう間に合わなかった。

「いやああ……っっ」

ぶるぶると舞が震えた瞬間、ぶじゅっ、と大きな水音が響く。

舞はドアノブにしがみ付いたまま、とうとう我慢の限界を迎えてしまった。下着に水がぶつかるとぐもった音に、舞はとっさにコートの前を押さえる。

でも、もう手のひらなんかじゃとてもじゃないけど塞ぎ止められない。一瞬遅れて、剥き出しの太腿の間から滝のように激しい水流が吹き出す。たちまち舞の手のひらをいっぱいにして溢れたおしっこがドアを直撃し、玄関前のコンクリートに大きな水たまりを作る。

「いやあ、で、ないで……止まってっ、止まってえ……っ」

女の子のおしっこが、あんなにも激しくすごい量だということ、僕ははじめて知った。僕がどんなに我慢しても到底届かないような、ものすごい勢いと量で、まるで蛇口にホースを繋いでその先を潰した時にそっくり。

パンツの上からでも全然関係ないというみたいに、舞のおしっこは止まらない。

「やだっ……ちがうの、おしっこ、ちゃんと…っく、…で、できるもんっ……ちゃんと、おトイレまで……我慢できるもんっ……！！ ひうあ、っ、あ、だめ……え」

本当なら、5回に分けて出されていたはずの舞のおしっこ。

壊れてしまった蛇口のように恥ずかしいお湯を吹き出し続けるおしっこの出口を必死に押さえ、舞は足元に恥ずかしいお湯を次々と撒き散らしながら、ふらふらと庭の方に歩いてゆこうとしていた。

「舞……」

舞が出したばかりのおしっこが、隠しようのない跡になって乾いた地面を濡らし、脚の付け根を押さえた舞の指の間から、ばちゃば

ちゃと水流が吹き出してゆく。

「やだ……とまって、止まってよう……っ」

でも、舞にとっては5回分のおしっこが一度に出ているんだから、そんなに簡単に終わるわけない。

とうとう舞はしゃがみ込んでしまった。押さえるもののなくなった舞の股間から本当の勢いでおしっこが吹き出して、庭の真ん中におきなおきな湖を作る。いったいどれだけ我慢してたんだろう、と思うくらいに、舞はたくさんのおしっこをしていた。

やがて力尽きたように舞の膝が折れ。腰が落ちた。

自分で作ったおしっこの湖に座りこんでしまい、それでもなお舞のおしっこは止まらなかった。

これまでいちどだって見たことのない、女の子のおしっこの姿。それももうどうしようもないくらいにたくさんの量。

我慢に我慢を重ねた末、舞の身体をぐちゃぐちゃに濡らし、おしっこを出し続ける舞から、僕は目が離せなかった。

「……ふえ、うえっ……ひっく……」

僕は、何をする事もなく、じっとそんな舞の姿を見つめながら……かちかちに固くなった股間と、パンツに広がるぬるっとした感触を感じていたのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 『ペルシエ』突撃体験レポート

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 01/07/2008 21:28:10

BODY:

季節は12月。景色もすっかり冬模様となり、朝晩もめっきり寒くなった。クリスマスも目前に迫り、読者の皆様もいかがお過ごしだろうか？

今回で17回目となる霧雨霽の世界探訪、1回のお休みをはさんで1ヶ月ぶりのご無沙汰となる今回は、北欧からぐっと身近な都内西区某所に舞台を移し、ある趣味・新感覚のリラクゼーション喫茶、ペルシェのご紹介となる。

……なお、今回いきなり国内のご案内となるのは決して取材費用をケチられてしまったからではない（※1）。ないったらない。

ごほん。えー、今回はいわゆる『その筋のある趣味』の男性向けなお店の体験レポートということで、私なんかには本当に務まるのかとご心配の読者諸君もいたりするかもしれないが、ここはどうかご安心頂きたい。たとえ読者の諸君と性別が違って、女の子の素敵に可愛いおしっこ我慢を愛する心は同じ。不詳わたくし、霧雨霽も心にはしっかりと一物を抱えていると自負している。

さて。まずはお店の外観からはじめるとしよう。

様々な大人の事情で詳しい所在地はここに記すことはできないが、賢明な読者諸君になれば恐らくどのあたりなのかは見当がつくだろうと思われる（※2）。

……ペルシェは西区某所のあまり目立たない繁華街の一角のビルの4階、落ち着いた雰囲気の外装とひっそりとしたたたずまいでお客様を出迎えてくれる。敷地面積はさほど広いとは言えないが、玄関もさほど派手な広告を出しているわけでもないで、初心者でも入店もしやすいだろう。そのぶんぱっと見には見つけにくいという難点もあるが、もともとあんまり一般的ではないお店ゆえに、あまり過剰な宣伝は逆効果とのことだ。

※1）というのを、編集さんのご意向なのでここに書き記しておくことにする。

※2）くれぐれも編集部にお問い合わせたりしないように。お店と周辺に迷惑が及んだりすれば私の原稿料もさっぴかれる恐れ大なのだ。

では百聞は一見にしかず、入店してみよう。

ドアの向こうではさっそく女の子達が可愛い声で出迎えてくれる。この受付の女の子も、もちろん『この筋の』女の子なのでご安心を。

ペルシェが導入しているのはごくオーソドックスな“指名型”のシステムで、カウンターで指名した女の子と一緒にテーブルで楽しいひとときを過ごせるというものだ。あなたがお客としてテーブルに居る間、自分の選んだ好みの子が、小さなおなかをおしっこでいっぱいにして我慢してくれる姿を、存分に見せてくれる、というわけ。

この指名のシステムは大人のお店に行ったことがある人ならば大体想像がつくのではなかろうか（※ 3）。

お店に入るときに、女の子のプロフィールが写真と注釈付きで一覧にされている。どれくらい我慢できるのか、ブラ（※ 4）のサイズやスタイル（※ 5）までも細かく示してくれているので、慌てず騒がずタイプの女の子をきちんとチェックしておこう。せっかく安くはないお金を使ってしまうのだから、できる限りの満足を与えられるようにしたい。

中でも、ブラのカップは重用な判断ポイント。たつぷりと大きい方が好みか、小さくて敏感な方が好みかは読者諸君ごとにそれぞれ譲れない一線があるだろう。ペルシェではどんな好みにもきちんと対応してくれるので、恥ずかしがったり見栄を張ることなくきちんと伝えること。

あと、女の子の容貌そのものにもいろいろ興味津々な読者の方々もいらっしゃると思うが、ペルシェではどの子もとびきり可愛い子ばかりなのでその心配は不要である。安心していただきたい（※ 6）。

※ 3）……と、人生経験の貧困な筆者は乏しい経験に照らし合わせて言ってみることにする。

※ 4）Bladder。もちろん膀胱のこと。

※ 5）我慢の方法。もじもじと動き回るのか、じっとずくまるのか。誤魔化したりウソをついたり、実に様々。

※ 6）リップサービスと思われるかもしれないが、本当にその通りだった。

さて、滞在時間の指定と女の子の指名を済ませればあとはテーブルで女の子と楽しいひとときを過ごすだけだ。なお、ペルシェでの滞在時間は最大で4時間となっている。

テーブルに付いてくれた女の子には、だいたい二つのサービスを指定できる。

ひとつは、『グラス』。

この店自慢の特性アイスティーを、小さな……だいたい100ccくらいの冷えたグラスに注いで持ってきてもらうサービスだ。テーブルの女の子を指名すれば、このグラスを飲ませることができる。

利尿作用たつぷりのこの『グラス』は、つめたく冷えていて、シフトに入る前からおなかをおしっこで一杯にしている女の子達には一杯を口にすることも辛いのはおわかりだと思う。効果はてきめんで、ひとくちふたくちでたちまちのうちに女の子がもじもじと腰を脚を動かし始めるのが分かるだろう。

無論のことながらペルシェは喫茶店である上に、働いている女の子の中には未成年の子も多いので（※ 7）、お酒などは置いていない。無茶を言ってお店の人を困らせないように。それにせっかくの楽しく素晴らしいひとときだ。酔っ払って過ごすよりは、女の子の様子をくつきり心に焼き付けておくのも良いのではなかろうか。

また、女の子がもじもじと恥らう可愛いところを見たいのは実に共感できるのだが、『グラス』を次々と要求するのはいただけない。取材中も女の子に無理矢理グラスを開かせようとしている不埒なお客に遭遇した。このような方には丁重にお帰り願うことになる。それでも強情に抗うと、怖いお兄さんにとっても怖いことをされてしまう可能性もあるので、絶対にやめておこう。

もともとは自由なスタイルがペルシェの売りだったそうなのだが、今では入店時の注意にもある禁止行為。それでもいまだに女の

子に続けて『グラス』を注文し、無理にでも飲ませ続けようとするお客さんが後を断たないのだそう（※ 8）。

ここはあくまで女の子の可愛い仕草を楽しむお店で、女の子に無理矢理をおしこ我慢を強いて苦しませる場所ではないことを理解しておこう。たっぴり雰囲気を楽しんで、じっくり女の子の姿を愛でるのが紳士的なやりかたである。

※ 7）学校に内緒でバイトをしている子も実は多い、とか？

※ 8）大体『グラス』3 杯目あたりでやんわりとストップが掛かる。くれぐれも無茶はしないように。

さて、もうひとつのサービスが『タッチ』。

言葉通り、女の子のおなかを触らせてもらうサービスだ。これを注文すれば女の子はそつとスカートを持ち上げ、可愛い下着の上のおなかを見せてくれる。

そこで始まるのは、その子がどれくらい我慢しているか——石みたいになんぱんに硬く張り詰めたおなかや、我慢に我慢を重ねた結果とうとうおヘソの上まで達した膀胱、ふつくら膨らんだおなかを直接、肌で体験できる、またとない夢のような時間。

……もっとも、いきなり何もせずに『タッチ』ばかりを要求するのはいらない。ここは普通のいかわしいお店とは違うのである（※ 9）。

さらに困ったことには中には力加減も何もあったものじゃなくぐいぐいと女の子のおなかを押して、無理矢理に尿意を加速させようとする言語道断なお客さんもたまに見られる。こんな困った人への対策のため、お店の建前上『タッチ』はサービスには含まれていない。女の子の同意をきちんと得た上で、女の子を苦しめたりしないようにそつとやさしく触ってあげることに。

ブラの張り詰め方は大きかったり小さかったり、個人それぞれで実に違ったりして、柔らかかったりふつくらしたり、石みたいになんぱんだったり……ああもう、筆者も思い出すだけで恍惚とするほど実に刺激的。触られるほうの女の子も小さく俯いて声を上げてしまったり、取材だというのも忘れて心ゆくまで堪能させてもらった（※10）。

繰り返すが、これは非情に紳士的な態度が問われる遊びなので、下心は厳禁。素人にはお勧めできない諸刃の刃。（※11）。

※ 9）おっぱいが揉みたいなら素直にそういうオトナのお店に行こう。

※10）この気分はこのコーナーの読者の方々なら共感いただけるかと思う。

※11）と、書いておかないと編集さんにダメ出しを喰らう。

お店に通い慣れたら、女の子を続けて指名することもできる。

これは『ボトルキープ』と言われている。言うまでもなく普通のお店でボトルを持つ言葉で、ここでは女の子のことをボトルになぞら

えているわけだ（※12）。

もちろん、せわしくお店に通ったとしても、女の子が本当の意味で“ボトル”をキープしてくれているわけじゃない。これは考えてみれば当然で、いくらこのお店で働く女の子達でも、何日も何日もぶっ通しでおしっこを我慢し続けていられるわけじゃないのだ。馴染みの女の子を作る、という意味くらいに捉えておけばOK。

けれど、このボトルキープにはちゃんと意味もある。来れば来るほどボトルの中身が減ってゆく普通のお店と違って、このお店では、来るたびに女の子のお腹の中の秘密の“ボトル”の中身は増えてゆく。

ボトルキープには事前の連絡が必須になる。前日にでもいいから、きちんとお店に連絡をいれて、次に来る時間と日にちを予約しよう。そうすれば、女の子は、これまであなたがお店に来て、注文した『グラス』の数と同じぶんだけ、その日その時間に“ボトル”を満たしてくれている（※13）。

まるでこの前の続きを見せてくれるような、夢のようなサービスである。

※12) 誰が言い出したかははっきりしないが、お客さん側からの提案だったそうだ。実にGJ。

※13) 言うまでもないけど、予約した時間は守るように。何時間も遅れると一気に信用を失うぞ。

さて、常連になったお客さんには特別なサービスとして、『シー』がある。

これはペルシエのシステムからはかなり異質で、なんと女の子にわざとおしっこをする格好をしてもらうというもの。

服を着たままが基本だが、特別に親しくなった女の子は、ときどき本当に下着を脱いで『シー』を見せてくれることがある（※14）。

床に空のコップを置いて、その上での『シー』は実に倒錯的。してくれないとわかっているのに、だからこそギリギリの状況の女の子は見ていて気絶しそうなくらい可愛いのだ。実は筆者もこっそりと濡れてしまったりしたが——こほん。まあとにかく、私でさえこうなんだから、読者諸君の興奮はそれこそ計り知れないことだろう。

おしっこの格好をしながら、おしっこをさせてもらえない——その苦しみと切なさに喘ぐ女の子達には、絶妙に羞恥と興奮がブレンドされて、えも言われぬ美しい表情を見せてくれる。常連になったら一度は体験してみたいものだろう。

……ここを読んでいる方にはもうとっくにお分かりだろうし、まさかやったりはしないとは思うけど、一応念のために言っておくと。一見さんが要求しても無視されちゃうし、それでも構わずに要求し続けると最後には怖いお兄さんが出てくるだけなので、自重しよう（※15）。

※14) まかり間違っても、別の意味でヘンな気分を起こさないように。

※15) このコーナーの愛読者から詳細不明の行方不明者が出てしまうのは悲しいので。

なお、もちろんのことベルシェでの『本番』行為——女の子にオモラシをさせることは文字通りの都の風防条例の違反行為、ご法度だ（※16）。また言うまでもないことだけど、14歳以下の女の子にはたとえ同意があってもオモラシをさせることは理由を問わず罪になってしまうので、ご注意を（※17）。

こほん。……お店で働いている子達は、どう見てももっと小さな……小○生まているようにも見えるけれど、それは間違い。この女の子はあくまで、全員14歳以上なのであしからず（※18）。

まあ、もしも本当にそれが見たいのなら——お店ではなくプライベートで作った彼女と、たっぷりと愛しあうのが一番だろうと思う。などと最後の最後にまったく困ったことを書くレポートであった。

……こんな事書きちゃうとおそらく次あたりから取材費どころか原稿の依頼も来なくなっちゃうだろ気がしてきたので、やめにしておこう。丁度紙面も尽きるところだし。

では、このへんで念入りにお別れの挨拶をば。しーゆー。

（文：霧雨滂）

※16) 都の風紀軽犯罪防止条例、3条。

※17) このコーナーの愛読者からお巡りさんのお世話になる人を出すのは忍びないので。

※18) えー、野暮な忠告ではあるが念のため。文脈をよーく読んで察するように。

（初出：おもらし&おしっこ我慢専門店オープンに関するお知らせ（ネタ） 174-180 2007/12/02）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第 6 夜 長靴をはいた猫

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 01/07/2008 21:32:59

BODY:

そしてとうとう、王様の狩りの邪魔をしたカラパ公爵なる貴族がいったいどんな人間なのかを見極めるため、王様の使いの女騎士がやってきました。ぴかぴかに磨いた銀の鎧を来て、金髪を肩の上で切りそろえた美しい女騎士です。

たとえわがままな王様の命令でも、騎士にとって命令は絶対なのでした。

女騎士はおろおろするハンスをじっと見下ろして、びしっとした声で言います。

「そこな男、カラパ公爵の領地はこちらでよいのか？」

カラパ公爵なんて知らない、と正直に答えてしまいそうになったハンスの唇にしーっ、と指を当て、猫は答えました。

「騎士様。ここはもうカラパ公爵さまの領地でございます」

「なんと。それはまことか？」

「ええ。あの牧場もあの森もあの川も向こうの湖もあっちの家も、全部カラパ公爵の領地でございますよ」

なんと、猫は次々でたらめを並べてゆきます。

本当は、カラパ公爵なんて人はどこにもおらず、獲物のはずのウサギを助けて、王様の狩りの邪魔をしてしまったのはただの木こりのハンスなのですが。

猫は長靴を履いた後ろ足で器用に立ち、ちょこちょこと歩きながら、いかにカラパ公爵がすごい人物であるのかを説明しはじめるのでした。

その後ろでハンスはいつ気付かれやしまいかとらはらはしていますが、猫は心得たものでさも得意そうに村の中を自慢してゆきます。

「カラパ公爵様は大変儀礼に厳しい方でございます。領主が率先して民の手本とならねばならないと、常々気にとめておられます。そのため領民のおおくもああして他人を敬い礼儀正しく過ごしております」

「う、うむ……そうだな」

言いくめられた女騎士はうなずくしかありません。

王様に逆らったカラパ公爵なる人物がすこしでも無礼な人間なら、すぐに王様に報告して打ち首をしようつもりだったのですが、猫がカラパ公爵のことを褒めちぎるものですから、すっかり思惑が外れてしまったのです。

「この道もこの畑も、カラパ公爵様の領地でございます」

「ふむ……ではあそこで畑を耕しているのは誰だ？」

「あれは、カラパ公爵様の土地で暮らす農民でございます」

「ではあの男に公爵の評判を聞くとしよう」

ハンスはぎくっとしました。猫がウソをつくのならいくらでも女騎士をだませますが、他の人に聞かれたらたちまちカラパ公爵のことな
んででたらめだとばれてしまいます。

「では、少々お待ちくださいませ。僕が呼んでまいります」

ですが、猫はまるで動じたふうもなくそう言うと、くわを持った男にぴゅうっと駆け寄って行って何やら話し、ハンスと女騎士のもとまで
連れてきます。

ああ、これはいよいよダメだ、とハンスはぎゅっと目をつぶりました。

「そこな農民、ここがカラパ公爵の領地であるというのはまことか？」

「はい、そうござえます。カラパ公爵様は大変立派な方でござえます。おかげさまでオラも重い税や飢饉に苦しまずここに、幸せ
に暮らしていられます」

「ふむ……そうか。手間を取らせた。これは取っておくがよい」

「へ、へえ。ありがとうございます！！」

女騎士が男に金貨を渡すと、男は深々とお辞儀をして畑に戻っていきました。

一体どうしたことだろう、とハンスは目を白黒させました。

実は、猫はこの男に、何を聞かれても『カラパ公爵は素晴らしい人だ』と答えれば金貨が貰えますよ、と入れ知恵をしていたから
なのですが、女騎士はそんなことに気付きません。

それから、女騎士は猫とハンスの案内であちこちを歩き回りました。とちゅう女騎士は洗濯をしている娘や行商人や、狩人を呼
びとめ、カラパ公爵の評判を聞きました。

娘は、公爵様がいるからまいにちお天気で洗濯物がよく乾くと答えました。行商人は、公爵様が商売を認めてくださるのでいいも
のをたくさん売れると答えました。狩人は、公爵様がいるからたくさんの獲物が取れると答えました。

もちろん彼等には全員、猫がこっそりと入れ知恵をしていたのです。

行商人から氷で冷やした冷たいジュースを買った女騎士はそれをぐくぐと飲みながら、カラパ公爵のすばらしい評判をすっかり信
じ込んでしまいました。

「なるほど……カラパ公爵どの、さぞ素晴らしいかたなのだな」

「はい。公爵様は素晴らしいおかたでございます」

「そして、とても広い領地を治めておられるのだな」

「はい。あの森もあの草原も、カラパ公爵様の領地にございます」

猫はそう言いながら、女騎士の前に立ってずんずんと歩いていきます。ハンスもそれについていくのですが、さすがにずっと歩きどお
しで、だんだん足が痛くなってきました。

けれど猫はいつまでたっても立ち止まろうとはしません。

「ね、猫、ここも……そうなのか？」

「ええ、あの川もその向こうもその先の森も、ずーっとカラパ公爵様の領地にございます。どうです、素晴らしい眺めでしょう？」

「う、うむ……大層広いのだな」

言葉とは裏腹で、女騎士は景色を楽しむ様子はなく、せわしげにあたりを見回しています。馬も心なしか早足で、ハンスは着いて行くのにも一苦労。そのうち段々と息が切れてきました。

「ま、まだあるのか？」

「はい、カラパ公爵様の領地はまだたくさんございます。ご安心ください、僕がきちんとすべてをご案内しますので、迷ったりはいたしません」

「う、うむ、そうか。……は、早く頼む」

「はい」

この頃から、女騎士の様子がだんだんおかしくなりだしたことに、ハンスも気付きました。なんだかずいぶんと先を急かすのです。

「ね、猫、まだ終わらぬのか？ あ、あの十字路はさすがに違うのだろう？」

「いえ、あそこもカラパ公爵さまの領地にございます。その先の森の向こうにもカラパ公爵様の領地がございますので、ご案内します」

「う、ううっ……そ、そうか、は、早くしてくれ」

女騎士は首筋に汗をかいて、あぶみに掛かった脚にぎゅっと力を含め、そわそわと手綱を持ち替え、鞍の上でしきりに座る位置を直しています。

そのうち、女騎士の質問が変わりだしました。

「……うっ…猫、では、あちらの水車小屋の陰も、そうなのか？」

「ええ、もちろんカラパ公爵様の領地にございます」

「で、では……っは……あ、あの茂みは違うのではないか？」

「いいえ。あの草の一本一本までゼーンぶ、カラパ公爵様の領地にございます」

「……そ、そうなのか……あっ……で、ではあの柵の隅などは……」

これまでは猫の後について歩いていた女騎士ですが、なんだか物陰や草むら、木陰などをしきりに気にして、そちらに馬を歩かせようとするのです。

「騎士様、そちらではありません、カラパ公爵様の領地はあちらにもございますよ」

「う、うむ……だ、だがな、その」

「王様のご命令、さぞ大変かとは存じますが、どうかカラパ公爵様の領地をすべて余すところなくご覧になっていただきますせ」

「あ、ああ……くう……っ」

そして、そんな様子のおかしい女騎士のことなぞまるで気にせず、猫はあちこちに立ち止まっては、デタラメな方角を指差しては『カラパ公爵様の領地です』と繰り返します。そのたびに女騎士は焦ったように返事をし、先を急がせました。

いったいぜんたい何が起きているのだろう？ ずっと首を捻っていたハンスに、猫が駆け寄ってきます。

「どうです、もうすぐ面白いものが見れますよ」

それはどういうことだ、とハンスが聞き返すと、猫はすっかり落ちつきなくなった女騎士を指差しました。

「ほらハンス様、見て御覧なさい。あの騎士様。おかしいったらありやしませんねえ。あんなにぐりぐりと鞍に股倉を擦り付けて、あれはもう相当に我慢してますよ」

我慢って、何をだろう。そう思ったハンスに、猫はくすくす笑います。

「何をもって、そりゃあ決まってるでしょう。オシッコですよ。さっき喉が渴いたからってジュースをたくさん飲ませたのがたちどころに効きまし

たね。

ほら、あの女騎士殿はさっきからトイレに行きたくって行きたくってたまらないんですよ。おかしいですねえ、お城に使える騎士様ともあろうものが、さっきから草むらやら物陰にばかり行こうとしてるじゃありませんか。お城に帰るまで我慢できそうにないから、こっそり済ませてしまおうなんて不埒なことを考えてるんですよ」

ハンスは、あまりのことにびっくりしました。

あんなにも勇ましくつくしく若い女騎士が、自分と同じようにおしっこをする生き物だとはとても思えなかったのです。女のきょうだいもおらず、母親もはやくになくし、世間知らずに育ったハンスは、村の幼馴染から言われたデマをいまのいまで信じこんで、女の子はトイレに行かないのだと本当に思いこんでいたのです。

「ほら、いいから黙ってついてきてください。悪いようにやしませんから」

呆然とするハンスの肩をたたき、猫は、女騎士を連れまわします。女騎士はもう誰が見てもこっけいなほどにもじもじそわそわと激しくトイレを我慢していて、剣術の試合で相手に切りつける隙を窺っているかのようにびりびりと張り詰め、少しでも人目が途切れればすぐにおしっこを始めてしまいそうでした。

とうとう馬の上に乗っていらなくなった女騎士は、近くの木に自慢の馬を繋ぎ、猫に話しかけます。

「な、なあ猫よ、こ、こは……ま、まだ、…つく……カラパ公爵の、りよ、領地…なのか？」

「ええ。そうございます」

「ま…っ、まだか……その、私はだな、そろそろ……戻ろうと、思うのだがっ」

「そんなことを仰らないでください。僕はカラパ公爵様の領地を全てご案内するように仰せつかっているのです。まだまだ半分もご案内できておりませんので。もし不手際がありましたら、僕が公爵様に怒られてしまいます」

「し、しかし、だなっ……」

「さあ行きましょう！！」

女騎士が何かを言おうとするのも遮って、お城とはまるっきり反対の方向へ歩きだしました。女騎士はたまらず『ああっ』と小さく声を上げます。

それから猫は焦らすようにくねくねと道を曲がり、騎士をあっちへこっちへと連れまわします。騎士は鎧をかしゃかしゃと鳴らしながら内股になって付いてゆきますが、その歩き方はよちよちと立たばかりのの赤ん坊のようで、ハンスに追いつくこともできません。

「あ、ああっ……だ、ダメ……」

そしてとうとう、女騎士は道の真ん中でしゃがみ込んでしまいました。

銀色の鎧の下で、スカートが小刻みに震えています。

「お、お願い、ま、待って……」

「どうしたんですか騎士様、ここはカラパ公爵様の領地です。ずっとずっとこの先の先の先まで、カラパ公爵さまの領地ですよ？」

「あ、ああ……そ、そんなあ」

女騎士はもうおしっこがしたくしてたくてどうしようもないのです。けれど、ここはひょっとしたら王様よりもずっとずっと立派で、ずっとずっと広い領地を持つカラパ公爵が治めている場所です。王様の騎士がよその国のものを、許可なく勝手に使うわけにはいかないのです。

女騎士はもうずっとこうやって、おしっこを済ませるのにかっこうの茂みや物陰を黙って通りすぎさせていました。それがいよいよ限界になってしまったのです。さっきからずっと内股になっていたのは、スカートの下の下着に滲み出したおチビリが見えないようにごまか

していたのです。

「ほら、騎士様、そんな道の真ん中でしゃがんでないで立ってください」

「あ、嫌、ダメっ……っあ、あ、あっ…！！」

女騎士は、訴えかけるようにハンスの方を見ます。けれどハンスがとっさに何をできるわけもなく、女騎士は下着をおろすこともスカートをたくし上げることもできないまま、おしっこを漏らし始めてしまいました。

「ああ、や、だっ……だめえ……出ちゃう……うっ」

じょぼじょぼと音を立てながら、女騎士の足元に黄色いおしっこが吹き出してゆきます。まるで、女騎士の金髪にそっくりな、美しい透明なおしっこでした。ハンスは、女の子がおしっこをする瞬間、それも綺麗で若い騎士がするオモラシの光景に、すっかり言葉を失っていました。

道の真ん中で、隠すこともできず真っ赤になった顔を俯かせて、腰を揺すりながら、女騎士のオモラシは続きます。

「い、嫌あ……あ……っ」

女騎士はしくしく泣き出してしまいました。美しい頬に涙があふれても、女騎士のおしっこはまるで止まりません。

「あーあー、こりゃいったいどういう了見です騎士様。カラバ公爵様のご領地で、はしたなくもオモラシなさるなんて」

「ま、待ってくれ、その、こ、これはっ」

猫に言われてはっと我に帰った女騎士は必死に身体をよじって溢れるオシッコを塞き止めようとするのですが、滝のようにこぼれ落ちる水流はまるでおさまりません。あっという間に黄色いおしっこは女騎士の鎧を水浸しにし、スカートをお尻の方までぐっしょりと色を変えてゆきます。道の真ん中に大きな水たまりをつくり、地面に吸いこまれてゆくこともない女騎士の盛大なオモラシを、ハンスは呆然と見つめていました。

「あ、ああ……ダメ、止まらない……っ、ぜ、全部、でちゃ、う……う……やだ、やあ……っ」

ぼろぼろと涙をこぼす女騎士に、ハンスは我も忘れてすっかり見とれていました。

すると、猫がハンスの背中を叩きます。

「ほら、何やってるんです。あんな綺麗な女性に恥をかかせたままにするつもりですか、ハンス様」

え？ と顔を上げたハンスに、猫はやれやれといったように肩をすくめてみせます。

「助けておやりなさい。……カラバ公爵様のお目に止まらないように、こっそりとね」

猫がウインクをしたので、ハンスはやっとその意味を悟りました。

「……ご、ご迷惑を掛けた……」

やっと落ちついた女騎士は、ぺこりと深く頭を下げました。

女騎士はハンスの母の服を着ていました。古くさい服ですが、ハンスの家に大切にしまわれていた物です。ちょっと大きめの袖からのぞく白い指が、実は女騎士がハンスの思っていたよりもずっとずっと小さな女の子だということを知らせています。

「いや、礼を言うのは私の方だ……その、あ、あんなことの後始末までさせてしまって」

まるで頭から煙を吹きそうに真っ赤になって、女騎士は何度も何度もハンスに頭を下げます。
「お前の……いや、あなたのお名前を聞かせてください。こ、このお礼は、必ずいたしますから……」
……かくして。

カラパ公爵の治める領地は、王様のわがままから解放されて、そこに住む人々はみな幸せに暮らせるようになりました。
そして、それから時々、お城から女騎士がハンスの家を訪れるようになったのですが……それはまた別のお話。

——めでたし、めでたし。

……おや、みなさんの知っているお話とは全然ストーリーが違う？ 悪い人食い鬼がやつつけられてないし、王様の使いの女騎士なんかもととおはなしに出てこない？ いやいや。世の中のおとぎ話はひとつおりじゃなくて、たくさんの解釈があるのです。
このおはなしでは、たまたまそうだったというだけのことなのですから、ご心配なさらずに。
それでは。また。

（初出：おもしろ特区 S S 図書館 2007/12/04 改訂）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: お遊戯の時間・トイレ取り

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 01/07/2008 21:38:45

BODY:

今日はみなさんに面白いゲームを紹介しましょう。

“トイレ取り”と言うゲームです。イス取りゲームに似た遊びですが、あれよりもずっとスリルに満ちた面白い遊びです。

まず、おしっこを我慢している女の子を何人か……できれば多い方がいいですが、7～8人くらいが適当でしょう。あまり大勢になってしまうと混雑して大変です。

つぎに、おまるをひとつだけ用意します。このおまるは白鳥の格好をしたスタンダードなものがベストです。女の子が小学校にもなればまたぐ真似をするだけでも恥ずかしいような、できるだけ小さな物を選びましょう。

どうしても見つからない場合は、ペット用のトイレや、金だらいなんかでも代用できます。ペット用のトイレは後始末のために専用の砂はたっぷり引いておきましょう。金たらいは金色の、ぴかぴかに磨いたものを用意して、水を注いだ時にできるだけ大きな音を立てるようなものの方がいいでしょう。

遊ぶ場所はできるだけ何も無い、広い部屋がいいでしょう。入り口も少ないほうが心理的な圧迫感を与えてベストです。

さて、用意したおまるを一つ、トイレトーパーと一緒に床に置きます。この時注意したいのは、おまるを高い台の上などに設置して女の子達が座った時、きちんと周りから見えるようにすることです。特にゲームに参加している女の子達から、きちんとおまるにまたがっているのが分かるようにしておきましょう。こうしておかないと、女の子がおしっこをしているときに、恥ずかしくなりません。『ここで

おしっこするなら死んじゃうほうがマシ』くらいになるように、工夫が必要です。

この年頃の女の子達は、きづかれないようにこっそりをおしっこを済ませてしまうかもしれません。誰かに見られているだけで女の子達の羞恥心はぐっとアップし、簡単におしっこができなくなります。

さあ、準備は終わりました。女の子達にはきちんと立ってもらって、おまるの周りにぐるりと輪を作ってもらいます。あとは、普通のイス取りゲームと同じ要領で曲を流し、女の子たちにぐるぐるおまるの周りを回ってもらっただけです。前を押さえてもじもじしているので、なかなか進めない子もいるでしょう。その時はちゃんと参加するように注意しましょう。

選曲は自由ですが、『おトイレまで我慢』や『オモラシないよ』などといったトイレトレーニングの童謡などを使うと効果は倍増です。

そして、曲が止まった時に、女の子達にはおまるに座ってもらいます。このとき、いちばん早くおまるに座れた女の子にはおしっこをする権利があります。もしおしっこがどうしてもガマンできない時は、思う存分出してもらいましょう。他の女の子達がじっと見ている中ではとても難しいので、なかなかうまくできない子もいると思います。

ちゃんとおしっこを済ませられた子には、幼稚園の名札にはなまるをつけた『よくできました』の勲章を渡してあげましょう。この子は勝ち抜けとして、輪から離れたところに座ってもらいます。みんなの中で一番おしっこに行きたくて、我慢ができなかったことをきちんと説明してあげるといいでしょう。

また、この時おまるに座ったのにおしっこをしなかった子は、まだまだおしっこがしたくないということですから、罰ゲームとしてごアイスコーヒや冷たいお茶など、おしっこを近くする飲み物をたっぷり飲んでもらいます。

おまるに座ろうとして間に合わなかったり、あるいはまだ曲の途中で我慢ができなかった子には、『オモラシしました、ごめんなさい』という名札をあげましょう。もう失敗しないようにオムツを使わせてあげたりするのもいい考えです。

あるいは、みんな遠慮しあっておまるに座る子がない、ということもあるでしょう。その時は全員に罰ゲームをさせると効果的です。

さて、おしっこを済ませてしまった子を輪から外して、また曲のスタートです。

あとはこれを繰り返して女の子の数を少なくしていき、最後のひとりになるまで続けます。勝ち残った子が優勝です。優勝した子はいちばんおしっこが我慢できて、おなかがぱんぱんになるまでおしっこをおなかの中に溜めておけるすごい女の子であることを丁寧に説明してあげましょう。

優勝した子にはきちんとしたおトイレでおしっこをしてもいい、と教えておくと、みんな一生懸命我慢に参加してくれます。

幼稚園の頃に卒業したおしっこのしつけを思い出してもらい、とてもいいゲームですので、みなさん試してみたいかでしょうか……？

(初出：書き下ろし 2008/01/07)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: シズク忍法帖・その参

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 01/12/2008 21:49:51

BODY:

「……シズク。やはり貴方は少しばかり修行が足りませんね。今日は少し、特訓をしなければいけないようです」

「えっ……」

湯船から上がろうとした妹分を呼びとめて、カスミは厳かにそう告げた。

え、と首を傾げるシズクを捕まえ、岩の洗い場の上に腰を下ろし、脚を拡げさせる。しゃがみ込むのと似た姿勢に危険を感じたのか、案の定シズクは途端に反応をはじめ。

もじもじと腰を揺すり始めた妹にのしかかるように前から覆い被さり、カスミはそっとシズクの腹を撫でた。今度は遠慮せず、はっきりとその奥に蓄えられた熱いものの存在を感じとらせるように。

「あ、や、やんっ、駄目、駄目です、姉さまぁ……！！」

「——なんです、この程度で音をあげて。だらしないですよ」

ほんの少し、かるく下腹部を撫で上げただけで甘い悲鳴を上げるシズクに、カスミはやや声を鋭くして叱咤する。

「あ、だ、だって……こ、こんなに、辛抱して……るんですからっ……」

「泣き言を言わないの。まだ全然膨らんでもいないではないですか。……ほら、脚を動かしては駄目」

カスミは大胆に、しかしシズクに決定的な刺激を与えぬよう繊細な力加減を見極めてやわやわと下腹部の控えめな膨らみを揉みほぐしてゆく。

「や、駄目、え……姉さま、そんなに強くしちゃ……で、出ちゃう……せ、せっかく、すこしだけ落ちついたのにっ……」

「シズク」

聞き分けの無い妹に諭すように、カスミはその耳元に唇を寄せる。何をされるのかとびくりと身体を竦めるシズク。

「貴方もいずれは流水の里の忍びとして、厳しいお役目を果たさなければなりません。……今更言うまでも無いことでしょうが、私たちくのいちは、必要とあらば娘として殿方に触れねばならぬ時があります」

「……？」

いつもとは違う真剣な口調に気付いたのだろう。手を止めぬカスミに、時折びくっとその身体を竦ませながらも、シズクは暴れるのをやめ、大人しくカスミの言葉に耳を傾ける。

「世の中の殿御の中には、いわゆる——その、男女の交わりについて、あまり“まとも”ではない趣味をお持ちの方もいます。特に私たちのようなくのいちが近付かなければならない身分の高い殿方は、ひととおり普通の男女の交わりというものを知り尽くし、飽きた方が多いのです。そうした方はまず、“まとも”ではないやりかたを好むのです」

「まとも、では、ない……？」

「ええ。中には、このように——」

「ひゃんっ！？ ね、姉さま！？」

ぎゅ、とこれまでより強く下腹部を圧迫され、シズクが可愛らしい悲鳴を上げる。突然の狼藉に恨みがましい目で睨んでくる妹分をさりと受け流し、カスミはシズクの身体をそっと自分の方へと抱き寄せた。

「あ……」

「んっ……」

形良く膨らんだ腹のふくらみが、シズクの身体に押し付けられる。大きさの違うふたつの下腹の膨らみが押しあわされ、やわらかく形を変えた。触れ合う肌の心地よさ、暖かな妹の体温。そして何よりもじんと背筋に響くむず痒さを飲み込んで、カスミは言葉を継ぐ。

「このように、孕み娘を好んで褥に招く方も、多くいるのです」

「え、ええ……っ！？」

シズクには、いづれか想像の埒外のことだったらしい。そうだろう、綾瀬大社に始まり、ここ天津の国では赤子を宿した娘は神の身子を授かったという意味で敬われ、尊ばれる。そんな孕み娘を好んで犯すなど、常軌を逸した行いだ。

「まことの事です。……あ、あまり考えたくは無いことですが、たとえば、他の殿方との愛しい子を、陵辱し蹂躪することに昏い歓びを見出すのかもしれない。中にはそうした相手でなければ男の滾りを覚えない方もいるとか。

……私もなんだか、そのような嗜好の方にお会いしたこともあります。そのような殿方に近付くためには、秘水の堰はとても都合が良いのですよ。まさか気に入られるために本当に赤子を孕むわけにもいかないのですから」

流水の里に限らず、くのいちは任務として身体を使った色事を試みることもある。まさか、そのたびにいちいち赤子を孕んでいたらとてもではないが身が持たない。カスミもシズクも、月の触りが来るようになってからは里の薬師が造った秘薬を服用し、子を孕まぬように心掛けている。

「考えて御覧なさい。そのような時は、今よりも大きなおなかを膨らませたま、そこを揉まれ、触られ、押しこまれ——そうしてさらに殿御の猛りをこの胎（はら）の奥に受け入れなければならないのですよ。……はちきれそうなお腹のなかを掻き回され、うつ伏せにのしかかられ——どれほど辛いかわかるでしょうか？」

「う……」

シズクがぶるっ、と背中を震わせたのは、単に尿意からだけではないだろう。

固く張り詰めた妹の下腹部をそっと包み込み、カスミはやわらかくシズクの耳たぶを噛んだ。

「あ、ひゅっ！？」

「そして、私達には想像すべくも無い、百戦錬磨の手練手管で、天にも昇る心持ちの遊びを与えられ——何度も絶頂へと突き上げられ、それでもなお、秘術を解く事を許されない。……そうした過酷なことも、いくらでもあるのです」

「は、あ、や、……ねえ…さまあ……」

尿意の辛さとその解放への誘惑。同時に甘く蕩けるようなくのいちの手練手管。シズクはたちまちのうちに辛苦の入り混じった渾然一体の感覚の虜となっていた。

四肢をひくつかせ、息を荒くしながらも、言い付けだけは護って股間だけは緩ませぬように懸命に耐える妹。カスミもいつしか、そんなシズクの姿がたまらなくとおしくなっている。

くのいちの、かりそめの伴侶を相手にしても身も心も相手に捧げねばならぬときもある。こうして、目の前の少女を——そう、たとえ同じ女であっても、必要とあらば心から惚れる事ができるように育てられているのだ。

「ね、ねえ様も……そんな風に……？」

「いえ、私もまだそこまではしたことはありません。せいぜいが天井裏で、声も出せず身動きも許されぬまま、堪えきれなくなった小水を辛抱させられて、二刻余りも指やら舌やらで責め続けられたくらいです。……イズミさまや、ツユハ姉さま、アマネ姉さまに」

自分を仕込んでくれた里の姉達の名を挙げながら、カスミはシズクの淡い秘裂へと指を伸ばした。湯ではないぬめりに覆われたそこは、すでにいくらか辛抱できず漏れ出した乙女の秘水が湿らせているのかもしれない。

そこを撫でると、シズクは甘く小さな叫びを上げる。

「ッあ……う」

「皆さん、とても厳しい方達ばかりでしたよ。私のように甘くはありません」

「つく…ね、姉さまより厳しいなんて……そんな、想像も付かないです……」

「……貴方を甘やかすすぎたのですかね、私は」

年上の姉達は、修行と称しながらもまるで底意地の悪すぎるほどに意地悪く、カスミを弄んだ。下腹部を小水でいっぱいにして、どうすることもできずに震えるカスミに徹底的に排泄衝動を制御できるように仕込んだのだ。中でも一番辛かったのが、丸四日にも渡って小水を禁じ、辛抱も限界の状態が無理矢理廁へ連れていくという荒行だ。

この時、カスミの股間には排泄を禁じた符が張られている。墨で丹念にびっしりと暗号文を書かれたこの符を、きちんと読めるまに保つというのが修行の内容だった。符の文字は少しでも水に濡れるとたちまち滲み、読めなくなるという工夫がされている。

そうして、カスミはこの符を股間に張り付けたまま服を脱ぎ、廁にしゃがみ込んで、煙草を一服吹かすばかりの間じっとしていなけ

ればならない。まさに小水を进らせる格好をさせておきながら、一滴も排泄を許さないまま、ちょうど用を済ませたように振舞わせて服を整え、外に出てゆかせるというものだ。

無論、用を足す事は許されない。

もし堪えを無くしてわずかばかりでも小水を漏らそうものなら、たちまち股間に張られた符が文字を滲ませ読めなくなる。廁の入り口で待ち構えている姉に符を調べられ、ごく一部でも文字が読めなくなっていれば、罰として椀に一杯の水を飲まされる。

この間、いつものように普段通りの鍛錬も並行して続けられた。

小水を堪えているということを口にするのも許されず、まるで素人娘のように泣きじゃくって本来の力を出せない惨めさ、情け無さ。まるでが狂わんばかりの厳しい修行に、カスミは何度も姉達を恨みもしたが、そうした姉達の徹底した躰によって、若くして里でも一番の素質と呼ばれるまでにカスミは成長した。

だからこそ——カスミは自分が姉となって一番始めに教えたシズクが、このようにおちこぼれているのがどうしても許容できないのだった。

「ほら、そのように腰を動かすのはお止めなさい。もっときつくしますよ」

「ね、ねえ様っ」

「力を抜いて。脚をもっと広げなさい」

「だ、だめ、でっ、出ちゃう……」

首を振っていやいやをするシズクに厳しく言い聞かせ、カスミはきゅ、と強めにその下腹を押しこんだ。

「手や足を使ってはなりません。おなかに力を入れて、深く呼吸（いき）をなさい。ここの力だけで耐えるのです」

「あ、あ、ああ！！」

排泄孔のすぐちかくを指で押し、その感覚を教えるカスミ。

いつもならこうしてカスミに攻め寄られると、たちまち我慢をなくしてしまうシズクなのだが、今日は少しばかり様子が違っていた。堪えている様子ははっきりと露にしているが、それでもなおふるふると、健気に決壊を耐え続けている。

それを見て、カスミはそっとシズクの耳元に唇を寄せた。

「あ……ねえ、さま？」

「ふふ……そう。ちゃんと堪えていなさいね。いまから始めますから」

「え……っ？」

怪訝に眉を寄せるシズクの耳にそっと息を吹きかける。一瞬身体を竦ませたシズクを椅子の上に引き寄せて抱え上げ、ひときわ大きく足を左右に押し開く。秘所をはっきりさらけ出すようなあられもない様は、まるで幼い子の用足しを手伝っているような格好だ。

「ああっ！？」

「しー、しー……」

「え、……あ、や、やだっ」

それは、まさしく幼子に排泄を促す言葉。天津に生まれたならばどんな者でも知っているだろう共通語。そして、今まさに吹き出さんばかりの小水を腹に溜めこんでいる少女には、あまりにも甘美で切ない誘惑の言葉だった。

優しげに語りかけるカスミの声は、まるで我が子を慈しむ母のよう。

「しー、しー……しー、しー……」

「か、カスミ、ねえ様っ……だめ、それ、駄目え……っ！！」

そして事実、シズクは脚を大きく広げさせられ、まさに秘められた乙女の部位から小水を进らせんばかりの姿を強制されていた。小刻みに震える内腿の間で、ほんのりと色づいた花園がぶくりと膨らむ。

「あく……、あ、はあ……」

一度は落ちつきかけた尿意が、凄じい勢いで再燃してきたのだろう。逃れようと暴れ出すシズクをがっちりと押さえ付けたまま、カスミは悪辣な囁きを続ける。

「ほら……しー、しー……しー……なさい？ 我慢しては身体に毒よ」

「あ、あく……だ、駄目え……」

カスミが取えて声色を変えているのは、これが訓練であるということを忘れさせないため。本来はそのままでの声で囁くのだが、シズクのことだ、ある程度念を入れていないと本当に漏らしかねないとカスミは一応の配慮をしていた。

「しー、しー……いいのよ。ゆっくりと力を抜いて、ここで全部出してしまいなさい」

「う、あつ……っだ、で、ちゃう……う」

言葉遣いまで幼くして、シズクがいやいやと首を振る。排泄を命じる言葉が直接幼い妹を従えてゆく。次第にシズクが排泄の体勢を取りつつあるのを、カスミは感じていた。

「しー、しー……ふふ……ああ、そう、すこしずつ出てきたわ……しー、しー……ちよろちよろと音を立てているの、解る？」

「っ、……くう……」

「ほら……シズク？ しー、しー……」

「っ……！！」

排泄を促す言葉に、目を閉じ歯を食いしばって、それでもシズクは耐えようとしていた。ぴく、ぴく、と膨らんでいた乙女の花園が、内側からきゅと引き絞られ、裏返りそうになっていた排泄孔がゆっくりと元の淑やかな形を取り戻す。

いったいそれを成すのはどれほどの精神力だろうか。姉として慕う愛しい相手に、身体をまさぐられ優しく囁かれ、それでもシズクは幼い身体を奮い立たせて誘惑を断ちきろうとしていた。

「あ、ち、ちが……っ、で、出てませんっ……まだ、も、漏らしてないです……っ……！！」

ねえ様……っ、わ、わたくし……もっと精進、いたします……が、がんばります、からっ……き、厳しく、されてもっ……けして、負けません、からっ……」

切なげに目元を潤めながらも、シズクはカスミを見つめ、固い決意を口にする。

「今は、足手まといでも……姉さまと、同じように……姉さまのように、になりたい……ですからっ……うう……っ」

なおも数度、尿意の余韻に背筋を震わせながらも、ちろり、とほんのひとしずくだけ琥珀色の雫をこぼしただけでシズクは耐え切った。腹の中が泡立つかのような猛烈な尿意を下腹部の筋肉だけで押さえこみ、シズクはげえげえと大きく肩を上下させる。

まさにその腹の中は煮え滾る湯釜の中のような、地獄の有様だろう。

「良く辛抱しましたね、シズク」

「ねえ様……」

憔悴しきった表情で姉に応えるシズク。カスミはそっとその頭を撫でてやった。シズクは普段の緊張した様子からもさらにほぐれた、年齢相応のあどけない笑顔を覗かせる。

「ふふ、ご褒美に今夜は少し遊んであげましょうか？ いつも一人では寂しいでしょう？」

「っ……」

姉妹の絆を深めるための閨の誘いに、羞恥に顔を染めるシズク。

「どうしたの？ 嬉しくないのですか？」

「う……うれしい、ですけど……、ま、また、弄られたら……すぐに、辛抱できなくなってしまう……」

「なんです。本気にしたのですか？」

「——ひ、酷いですっ、姉さまっ！？」

そう答える妹分に、どこか愛おしさを覚えながら、カスミは笑顔で答えるのだった。

(初出：書き下ろし 2008/01/12)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 二人のヒミツ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 01/12/2008 22:01:06

BODY:

おもらし百選スレの小説の一節、「わたしの分までおしっこしてきて？」と、永久我慢の輪舞曲スレに出てきた「おなかの中におしっこする」というシチュエーションに酷く感銘を受けて書いたもの。我慢特化。

<hr size=1 />

美沙の様子がどうにもおかしい、と思ったのは午後4時も回った頃のことだった。

その日も放課後に文化祭の実行委員で残っていた私は、頭のすみにひっかかっていた違和感をさりげなく口にした。

「ね、ねえ……まさか、本当にそうなの？」

「あはは……ばれちゃった？」

クラスメイトと括するには少々親しく、親友と呼ぶのはちよいと気恥ずかしい彼女とは、前の学校から同じクラスと言う縁で親しくなった。

部活には入っていないが運動神経はよく、いつも快活で、勉強はそこそこ、程良い人気者。特徴は軽めの色を入れたショートカットと、男の子みたいなふうを気取った一人称。人を間違えれば痛々しいだけのそれも、彼女には不思議と似合う。

可もなく不可もなく、どこにでもいるごくごく普通の女の子——それが今日までの私の彼女に対する印象だった。

「気付かれてないと思ってたんだけどなあ……千里って結構鋭いねえ」

照れ笑いをするその仕草も、この数年で見慣れたもの。

けれど、たった今聞きだした事実の前では、そんなものは軽く吹き飛んでしまう。

「帰るまでガマンできると思ってたんだけど……ボクもまだまだねえ」

せわしくスカートの下で行き来する膝をぎゅっとくっつけながら、美沙は今日でもう3日近くも、トイレに行っていないのだという事実を告白したのだった。

「ホントに、3日も……？」

「そ、そんなに驚かないでよう、もうっ。それに実際はまだ3日目ってだけで、時間的には2日半くらいだってばっ」

「そんなの変わんないわよ！！」

3日といっても、女の子にとって、その……大きいほうのお通じが不規則なのはありがちなこと。それくらいの期間トイレのお呼ばれがないというくらいなら、聞き流してしまってもそれほど支障はないだろう。

問題なのは、美沙がガマンしているのがそっちではなくもうひとつ——いわゆる小さいほう、おしっこである、ということだった。

「ね、ねえ、嘘だよな？ 冗談……だよな？」

にわかには信じられないことだった。どうにも気になって聞いてはみたものの、気分的にはまさかという思いが半分だったのだ。それなのに美沙は本当に、3日前の朝からトイレに行っていないのだと繰り返す。

「うん、本当……ちょっと昨日の夜ジュース飲み過ぎちゃってさ……ほら、お昼の時からもうおなかぱんぱんで……座ってるのきつかったんだ」

一度認めたことで楽になったのか、美佐はもうもじもじと動く膝を止めようとはしなかった。衝撃の告白にすっかり参ってしまった私は、スカートの下でせわしく動く美沙の脚から目が離せない。

「飲みすぎたって……美沙、今日だってあんなに喉渴いたって……」

「体育の時は平気だったから。ほら、1時間目だし。起きてすぐはちょっと楽なんだよ」

「楽って……」

ぞっとする。朝の登校前どころか夜寝る前にもトイレを済まらずに、そのまま眠って起きて学校に来る——その上あんなにお茶まで飲んで。普段でも2時間に一回はトイレに行っている私には想像すら不可能な、超人とも呼ぶべきガマンだった。

「2日目くらいから結構楽になるんだよ。ほら、だんだん慣れてくるって言うか……わかんないかな？」

「わ、わかるわけじゃないのっ！！」

そんな、生理みたいな呼び方されても困る。だって……トイレ、オシッコだ。どれだけトイレが遠い子だって、せいぜいが学校で一回、済まらずにいられるかどうかだ。私なら半日だって気が狂いそうになってしまう。それを、何日って単位で続けるなんて。

あまりの事に眩暈までしてきた。

3日ということは、24の3倍で72時間。つまり24時間営業のコンビニでも3分の1しか及ばない。まあでも実際は約2.5日で、60時間……ということは、ええと……どういうこと？

わけのわからない方向で混乱に陥る私に、美沙はあはは、と照れながら椅子の上でモジモジを続ける。

「そ、そんなにガマンして平気なのっ！？ 病気とか、なっちゃうんじゃ……」

「うーん……どうかな、こんなにガマンしたのはじめてだし……わからないけど」

辛そうに腰をよじりながら、それでも美沙はまだまだ余裕を見せる振りをしている。

「今まで一番ガマンしてたの、1日半くらいだし……あは、新記録」

「……美沙、あんたって……」

呆れてものが言えなかった。

嬉しそうに3日目だと告げる彼女が、あまりにも嬉しそうだったから。

一体そんなことをして何の意味があるんだろう。そりゃ確かに、私みたいにトイレが近い身としてはそれだけガマンし続けられることに対してちょっと羨ましい気持ちがないでもない。トイレに悩まされずに生活できるというのはなかなか魅力的なことだろう。

それにしても、一日半なんていうのは論外、無茶苦茶だ。まして3日なんて、タチの悪い冗談としか思えない。実際、私はいまだ美沙の告白には半信半疑……どころか三信七疑くらいの状況だ。

「じゃあ、もうホントに一昨日の朝からトイレ行っていないわけ？」

念を押すように、はっきりと『嘘つかないでよね？』と視線で問いかけながら、確認する。すると美沙は、

「……あは、まさか。そんなわけないよ、千里ってば」

「え？」

以外にあっさり前言を翻した彼女に、肩透かしを喰らった気分だった。

どうしたことだろう？ やっぱり嘘ってコトだろうか。でも美沙は今もひっきりなしに腰を揺すって辛そうにしている。演技とは思えない。

「だってほら、皆に気付かれちゃうとヘンな目でみられちゃうみたいだしさ、今日はちゃんと行ってるよ？ トイレ。……しっかりパンツも脱いで座ってるし。おしっこ、してないだけで」

「……ねえ、アンタ実はすごい馬鹿なんじゃないの？」

私はかなり本気でこのお馬鹿な友人の頭の中を開けて覗いてみたい衝動に駆られていた。私が昨日一昨日と小テストを前に必死になって勉強している間、美沙はこんな事ばかり考えていたというのか。それどころかそんな状態のままテストで私よりもいい

点とりやがったのか。

「ま、まあちょっとそのこと忘れてて、昨日までトイレに行くの忘れちゃってたけどさ……そうだね、ちゃんと最初の日からそうしてれば、今日も気付かれなかったのにね」

「のにね、じゃないってのあんたは……ええい同意を求めるなっ」

やっぱり。

どうやら本当、正真正銘に、美沙はガマンを続けているらしい。だってこんなことに嘘をつく必要がない。トイレに行かないなんて気取ってみたって、ガマンしていることを知らせてるんだから意味がないし。

「……………」

「どしたの？」

私の視線にも、きょとんとしたままの美沙。確かにガマンの状況はだいぶ辛そうな部類に入る。もう他人の目を気にせずにガマンし続けられないレベルのようだ。ひっきりなしにお尻を——いや、股間を椅子の天板に擦りつけ、背中を心なし丸めておなかの負担を軽減しているように見える。

ここまで限界の尿意を抱えたまま、個室に入って便座に腰掛けて、それでもなおおしっこをせずに済ませる自信は、とてもじゃないけれどない。

たとえ私が美沙と同じくらいガマンできたとしても、そんな状況になってまでガマンし続ける事は絶対にできない気がした。

「そ、それにさ？」

「まだなんかあるの？」

「おしっこ、『ガマン』してるのは……今日の朝からだから。今朝くらいまではまだトイレ行かなくても大丈夫なくらいだったし」

「……………訂正。あんた本当に馬鹿でしょ」

「ひ、酷いようっ！？　なんで千里そんな酷いこと言うのっ！？」

「ええい自分の胸に聞いてみろっ！！」

「ひんっ！？」

思いつき怒鳴り返して、私は椅子に背中を預けた。

ありえない。ありえない——けれど、間違いない。

ちらり、と美沙の様子を窺う。制服のスカートは、いつもと同じ位置。決して目立つような状況じゃない。あの小さなおなかに、本当にまる二日分以上ものおしっこが溜め込まれてるんだろうか。……想像すら難しい状況に、私の頭は完全にパニックになってきていた。

頭を冷やす必要がある。

「とにかく——なんか変な話してたらしくなってきた。……ちょっと休憩」

「うん、そうだね……」

席を立った私は、そう言ったきりじっと椅子に腰掛けたままの美沙を見下ろす。

「え？　……ねえ、美沙、どうしたの？」

「どうしたの、って、なにが？」

「何じゃないでしょ。行くんでしょ？　一緒に」

「行くて、どこ？」

「トイレに決まってるじゃない！！」

だって3日だ。どれだけガマンしてるって言うのか。遠慮のないようにと席を立った私に対し、思うように反応が返してくれない美沙に、思わず苛立って怒鳴ってしまう。しかし当の美沙はあっけらかんととんでもないことを言った。

「いいよ」

「いいよって、いいわけないでしょ！？」

「だいじょうぶだよ。せっかくここまでできたんだから、ちゃん”と3日間”我慢してみる」

「な……！！」

絶句していた。

「付き合ってあげたいんだけどさ、今トイレ行っちゃうと……ボク、多分、もうガマンできなくなっちゃうから。千里一人で行ってきて？」

「ちょっと、美沙……やめなよ、身体に悪いって、絶対。そんなの……」

「だいじょうぶ。それにほら、千里もけっこうガマンしてるでしょ？」

なにを、言っているのだろう。

2日半もおしっこをガマンしていながら。

美沙は、まだトイレに行かないのだと、言う。

「ボクの分もすっきりしてきて？」

そう言って笑う彼女に、私はなぜか——不思議な胸の高鳴りを覚えていたのだった。

「ふう……」

後始末を終えたトイレトペーパーを便座の中に落とし、一息。

私もまた自分で思っていたよりもガマンしていたようで、我ながらおしっこはかなりの勢いだった、と思う。

(——美沙、本気なのかな)

自分の用を足している間にも、頭の中を占めるのは今なおガマンを続ける美沙のおなかの中のことばかり。そのせいかちゃんと出したはずなのに、あまりすっきりした気分にもなれない。

だって、ずっとずっと美沙の方がトイレに行きたいはずなのに、私のほうだけが先におしっこを済ませてしまうなんて、なんだか順番を抜かしたようで気分が悪い。

「……………」

思わず、わずかに色の付いて染まった便器の中をまじまじと覗き込んでしまう。

もともと溜まっていた水の中に注がれて、全然はつきりとはわからないけど——多分、いま私がしたのは、たぶん500mlペットボトルの半分くらいにも満たない量。

でも、トイレの近い私にしてみれば、尿意はもうかなりのものだった。ちょっとはしたないくらいに勢いも良かったし、音消ししなけれ

ば飛沫も飛んでしまっただろう。

でも、だとすれば——あれだけ見境なく水分を取って、しかももう3日もトイレに行っていない——美沙はいったいどれくらいすごいおしっこをするんだろう。

「……………」

(……ば、馬鹿、何考えてるのよ、私ってばっ！！)

友人のおしっこの様子、なんていうとんでもない想像をしてしまっていた事に気付き、私はぐんぐんと頭を振って個室を出た。流れる水音を聞いても、なんだかおなかの奥がじんじんと熱くてすっきりした感じがしない。

洗面台の前で鏡を覗きこむと、ちょっと頬の赤くなった自分の顔が映っていて、私はたまたま顔を洗ってそれをごまかした。

熱くなった頭を冷やそうと、購買の自販機に寄ってペットボトルの清涼飲料を買うことにする。学生向けゆえには安いのはありがたいものの、運動部の要望が強いせいか500mlの商品が多くて、私なんかはいつも飲みきれず残りを処分するのに苦労するのだが——いまは贅沢を言っている場合ではない。一刻も早くこの沸騰しかけた頭を落ち着かせるのが先決だった。

封を切ったペットボトルに口を付け、ひとくち、ふたくち。

……そうしている間にも、思考は水分の摂取＝おしっこの増量、という方向に向いてゆく。もはや私はすっかり美沙の告白の虜だった。

(美沙、どれだけ……ガマンしてるんだろ?)

そのことに思い至り、私は思わずぐく、と口の中身を思いっきり飲み込んでしまった。

おしっこ、トイレなんて毎日する普通のことはずなのに、それがなんだかとてもイケナイ事のような気がして、私は頬がさらに熱くなるのを感じた。

単純に計算してみれば、私が一日にトイレを使う回数の3倍近くだけ、美沙はおしっこをガマンし続けていることになる。私の平均が、少なめに見て一回100mlとすれば、だいたい100ml×10回×2.5日……以上。

つまり、およそ2リットル半。

(うわ……)

導き出された結論に頭が熱くなった。

2リットルって、簡単に言うけどつまりはコンビニとかスーパーで売ってる一番大きな烏龍茶とかのペットボトルと同じだ。重さにすれば2キロ。

コップに移せば、楽に10杯以上。そんなの一人で飲むのだって大変な量なのに。それをあの小さなおなかの中に収めてしまっているってことになる。

ちゃぽん、と中身を揺らし手に掛かるペットボトル重さが、ダイレクトに脚の間に響くようだった。むずむずし始める下着の奥にイケナイ感触が滲み出す。さっき済ませたばかりなのに、またトイレにいきたくなってしまった。

(これより、多く……美沙のおなかの中に、溜まってるわけね……)

考えまいとすればするほど、その想像は頭の中から離れない。

美沙の腰の上、ふっくらとしたおなかの中にぱんぱんに詰まった黄色い液体。一歩ごとにたぷんとゆれるその水面が、まるではっきりと見えるみたいに頭のなかに浮かんでしまう。

「んっ……」

思わず声が出てしまい、慌てて回りを見まわす。幸いなことに、人影はなかった。

他の女の子のおしっこを考え続けるなんて、……どんだけヘンタイなんだろうか、私。でも、あまりにイケナイことに対する誘惑みたいなものからは逃れられない。ちょうど、初めてえっちなことに興味をもったときと同じように。

「う……」

じくん、と腰に響く甘い痺れに、私はもう一度トイレに引き返す羽目になった。

「お帰りー」

「た、ただいま……」

随分経ったような気がしていたけれど、実際には10分くらいのことだったようだ。美沙は変わらず席に座ったまま、委員の仕事を続けていた。

さっきよりは楽になったのか、腰を震わせる頻度はいくらかおちついている。

それでもぎゅっとおしりの下に巻き込まれたスカートは、大きく皺を寄せて、美沙のガマンが今もなお継続中であることをはっきり物語っていた。

「あ、それ買ってきたんだ。ボクの分は？」

「え？ あ、ええと……買って、来なかったけど……」

「なんだー、せっかく購買まで行ったんなら買ってきてよう」

「ご、ごめん……ってまだ飲む気なの？！」

「喉渇いたんだもん」

いったいこの子は何を言ってるんだろう。だって、今にも辛そうなくらいトイレをガマンしてるのに、この上さらに膀胱を膨らませるようなことをするつもりなのだろうか。

ありえない。

ありえない、けれど。

美沙はずっとそうしていた。昨日も、今日も、一昨日も。

「あの、さ……その、ヘンなこと、聞くけど」

さりげなく聞こう、と思っていたことが、知らず口に出てしまう。

「なに？」

「その、したくなったら……どうするの？」

「ガマンするんだよ」

「そんなのは見りゃわかるわよ！！ そ、そうじゃなくて、もうガマンできないくらい辛くなったりして……ああもう、ほら、分かるでしょ！？ 波みたいになるじゃない！！ ち、ちびっちゃったりとか、ないのって聞いているのよ！！」

「ああ……えっとね、慣れてくると分かると思うんだけどさ……」

美沙の語ったところによれば。

彼女のように、たつぷりと訓練されていると、そのうちに込み上げてくる猛烈な尿意を『飲み込む』ことができるようになるのだと言う。ちょうど気分の悪い時に、吐きたくなるのを無理矢理こらえるみたいな感じで。

「そ、そんなこと……本当に？」

「うん。……あそこをね、こう、ぐって力、入れて……ごくって感じで」

「ごく、って……」

どんな状況なのだろう。まるで想像がつかない。

「あ、ほら、いまちょうどそんなカンジだよ」

「わ、分からないってばっ！！ いきなりおしっこの実況なんてしないでよねっ！？」

だいたい、その、女の子の『そこ』は——まあ女の子に限らないけど——とにかく『そこ』は、もともと排泄器官なんて言うくらいで、おしっこを出すことが役目なのだ。身体に不要になった成分を、水と一緒に血液から濾し取って、外に排出する……そんな機能を持っている部分なのだ。

確かにおしっこをガマンすることはできても、それは……まあ、垂れ流しになってしまわないようにするための付随的な機能で、断じてそれが主目的ではないはずだ。

でも、多分。

美沙の膀胱と、『そこ』は——長い訓練の末に、いまやおしっこを『出す』ことよりもむしろ『ガマンするため』の器官になりつつあるのかもしれない。だから、そんなふうに常識外れのガマンだって可能なんじゃないだろうか。

(うう……なによ、このヘンな気分はっ……！！)

ぐるぐると渦巻く思考を追い払おうとしてはみたものの、目の前にその原因が座っていれば上手くいくわけもない。

「ねえ千里、触ってみる？」

「えええ！？」

席に付いてからもまるつきり上の空で、ほとんど作業なんて手についていなかった私は、不意にそんなことを言われてずっこけるくらいに仰け反った。

「さ、さわ、触って、って……なによそれ！？ そ、そんなのダメよ！？ だってほら、その——だって、そんなの……ああ……ええと、なんだっけ！？」

「あはは。へいきだよ。千里もすっごく気になってるみたいだし。いいよ？」

「って……」

動揺する私をよそに、美沙は制服の上着を半脱ぎにして、薄いブラウスのおなかをぐっと前に突き出させた。

女同士だというのになんだかちょっとヘンな気分になりそうな、細くてすらっとした腰のカタチ。とてもじゃないけど……その、2日半もオシッコをしてないなんて想像がつかない。

「えっと、あんまりぎゅっとされちゃうと辛いから、そつとね？」

「う、うん……」

いつの間にか、流されるように。

遠慮がちに伸ばした指先が、美沙のおなかに触れる。

「んう……っ」

「うわ……」

触った瞬間、その異質さに思わず声を上げてしまった。

まるで、鍛えられた腹筋に触ってるみたい。

美沙のおなかからはまるで想像と違う、石みたいに硬い感触が返ってくる。ただそうやって触ってみるだけでも解るくらいの、途方もない量のオシッコが、小さなおなかにぎゅうぎゅうに詰まっているようだった。

「あふ……」

「へ、ヘンな声出さないでよ！？」

「仕方ないよお……もう、ボクの身体、そうなっちゃってるんだから……」

「ええいあんたはまた誤解を招くような表現を……っ！！」

普段なら軽く鉄拳制裁してやるところなのだけど、いまはそんな場合ではない。私は目の前の神秘に釘付けだった。

「こ、これ、どうなってるの……？ 全然、その、見た目はふつうなのに……」

「おしっこしたいの、たくさん『飲み込んだ』んだ……。油断すると、おなかぼこって膨らんでみっともなくなっちゃうから。制服も着れないし、ガマンしてるの分かつちゃって、恥ずかしいしね。だからマッサージと腹筋で、膀胱をおなかの内側に『飲み込む』の。……えっと、だからね？」

美沙は私の手を握ると、自分のおなかに指を触れさせたまま、おヘソの上のほうまでなぞるようにして動かす。おヘソを通り越し、おなかも通りすぎ、辿り着いた先はみぞおちの近く、ブラのすぐ下のあたり。

「だいたいこの辺まで、膀胱が来ちゃってるカンジかな」

「こ、こんなところまでっ！？」

だって、だってもう、ここはおしっこなんかとは全然関係ない、胸の側なのだ。こんなところまで美沙はおしっこを外に出す代わりに『飲み込んで』いるってことなんだろうか。

そと、自分のおなかに手を添える。どきどきと高鳴る胸の鼓動が聞こえた。

こんなところまで……ってことは、ひょっとして心臓の脈動まで膀胱に伝わるくらい敏感に鳴っているってことだろうか。美沙はもう、おなかのどこを触られても、おしっこを誘発するようなあの感覚を感じてしまうのだ。もし仮に私が美沙だったら、この動揺でおなかのなかがさらにおしっこの感覚でいっぱいになって、漏らしそうになってしまっているのかもしれない。

もう、耳まで真っ赤になっているのが自分でもはっきり分かるくらい、顔が熱い。

「へ、平気……なの？ その、そんなに出さないでいたりして、どうか病気になっちゃったり、とか……」

「そこは特訓あるのみだよ。毎日ちよとずつだけど、しっかり鍛えてるもん。いろいろ役にも立つしさ」

ナニのドコをどういうふうに鍛えてるとおっしゃるのか。反応に困る私の前で、美沙はあは、と小さく笑顔を覗かせる。

「病みつきになっちゃうんだよね……ほら、あるじゃない？ 誰だって。ちっちゃい頃、オトナの女のひとはトイレなんか行かないんだって思ったりしなかった？」

「えっと……それ、どこの国の人？」

「えー？ そうかなあ」

まあ、その。男の中にはそんなふう、に、アイドルとかお嬢様に幻想を抱いてるのがいるなんてことは聞いたことがないでもない。でもそれもほとんどギャグみたいなノリで言ってるのであって、心底信じてるとしたら正直、病気だと思う。

けれど美沙は言うのだ。

「でも、いまのボクってさ、“そう”なんだよ。トイレなんてはしたない場所には、絶対に行ったりしないお姫様……ね？」

「そ、そんなの……違うわよ」

「違うの？　なんで？」

「っ、だって、そんなの、別に——トイレ、行ってないだけで……ガマンしてるだけじゃないっ」

「じゃあ、昨日のボクとかはどうなのかな？　一度もおしっこ行ってないけど、ガマンもしてなかったよ？」

「う、ううっ、ええい離れなさい！！」

間近で囁かれ、思わず胸が高鳴ってしまう。実はごく一部でひそかに下級生にも人気のあるなどという噂もあつたりするんじゃないかと思ったりする、少しハスキーな声でそんなことの同意を求められれば、そりゃまあ動揺するなというほうが無茶でありましてね。

でも。

実は、そのお姫様は、おなかのなかにおしっこをぎゅうぎゅうに詰めこみながら、必死に平静を装っているわけで。

「美沙ってさ、実はかなりのMっ気あり？」

「あはは、かもね」

あっさり肯定されたよオイ。

「……昔から、あんまり女の子らしいこと、させてもらえなかったからさ。その反動かなのかも。ほら、さっきエッチな声出すなって千里、怒ったでしょ？　こうしていると、……なんだか、自分がちゃんとおんなのこなんだなって、安心するんだ」

「……えっと」

おなかにナニかを詰め込む、っていうのは、たぶん赤ちゃんを育てることの真似みたいなもので。女の子が自分の性を無意識に確認するための遊びだ——とかなんとか。美沙の弁舌にごまかされたように納得してしまう。

実のところ、さっきから私は美沙のガマンのことばかりが気にかかっていて、ほとんどまともな思考ができていなかったりした。

「でも、知られちゃったのが千里で、よかったかも」

「な、なによ、それ」

「だって、千里も喋ったりしないでしょ。他の子に」

美沙は、そうやって、まるっきり私を信用したふうに、言う。

「だから、二人だけのヒミツ。……だよね？」

「……あんた、はっ」

違うのに。今日のこれは、私が、一方的に美沙のヒミツを握っただけだと言うのに。そんなふうに、美沙は私とこのヒミツを共有するのが嬉しいとでも言うように、笑うのだ。

ぎゅうっと、胸が締め付けられる。切なく、苦しく、甘く。

二人だけの秘密、という言葉が、こんなにも素晴らしいものだということを、私は今日初めて知った。

「ねえ、千里」

「な、なによ」

「さっきのペットボトル、まだ飲む？」

「……………っ」

美沙が何を言わんとしているのかは、色ボケた頭でも理解はできた。それはクラスメイトとして——友達として、いや、人間としてさせちゃいけないことなのだろうと言うのも分かる。

この上、あんなになるまで小さなおなかの中に尿意を抱え込んで、さらに口からも水分を摂取する。美沙は、おしっこをガマンす

るためのひとつの装置になりたがっているみたいに思えた。

けれど。

私はこの、一種病的なまでに実にお馬鹿な友人の秘密を知ってしまった今、その頼みを断ることが、どうしてもできそうにないのだ

った。

「飲ませて、くれる？」

「……おなか、ホントにパンクしちゃうわよ」

「あは。もうほんとにたぷんたぷんなんだよ」

「……………」

こくり、と息を飲んだ。

「ねえ、千里？」

「……明日」

「あした……？」

ああ、多分。もうきっと、私の頭までどうにかなってしまったんだ。そうでなきゃ説明がつかない。こんなことを言い出すなんて。

ふたりで共有するヒミツという甘美な響きに侵されて、私は頭の中を支配する熱っぽさのままに言葉を続ける。

「あした、どうなってるか……さ、触らせてくれるなら、……いいわよ？ できる？ ちゃんと、ガマンできる……？」

「……………」

「ねえ、どうなの？ 美沙っ」

「……あは。なんだ。千里って……けっこうSなんだ。……女王様あ、ありがとうございますう、って感じ？」

「う、うるさい、真面目に答えなさいよっ……！！」

まともに顔も見れないまま、無茶を言う私に。

美沙は、小さくコクンと頷いてくれたのだった。

(初出：書き下ろし 2008/01/12)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 初詣と神社を巡るお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 01/24/2008 00:09:08

BODY:

（うん……）

気付くと初音は、傘を差して大雨の中にいた。見慣れた庭に商店街、学校の校庭、見渡す限りの一面が水浸しで、見る見るうちに水かさが増してゆく。

（に、逃げなきゃ）

そう思うものの、道路も河のようになっていて、脚がずっしりと重い。思うように走ることもできずにいるうちに、水かさは長靴の上を通り越し、膝の上まであがってきてしまう。雨はますます激しくなり、河の堤防が決壊したのか、どうと大波のような水が押し寄せてきた。

（うそ、流されちゃう……！！）

胸を越えとう頭の上まで深くなった水に飲み込まれて、初音は溜まらずにレインコートの裾をぎゅっと抑える。傘は水流に飲み込まれてどこかにいってしまった。初音は溺れないようにぎゅっと身体をまるめ、目を閉じて息をしないように口を閉じた。

（うあ……やだあ……助けてえ……）

がぼがぼと空いている手を振り回してみても、水面にたどり着くことも出来ない。このままでは息が続かなくなってしまうだろう。けれど、一秒ごとにどんどん深くなってゆく大洪水の中では、初音はまるで小さな米粒のように、なにもできず流されてゆけただった。

全身を——とくにおなかの下から、重く水が浸してゆく。ゆっくりとおなかのあたりから広がってゆく重苦しい水面は、次第に上のほうまで上がってきた。

（やだ、やあ……）

「——！！ ——……さい！！」

（やだあ……助けて、誰かあ……）

深い水の奥から伸びてきた手が、ぎゅっと初音の肩を掴む。暗い水底に引きずりこまれそうになって、初音は必死でその手を振りほどこうとした。けれど、手はしっかりと初音を掴んで、放そうとしない。それどころかガクガクと初音を左右に揺さぶるのだ。

(……あああ……だめ、ダメ……)

もうダメだ、と。初音が覚悟を決めた時だった。

「初音！！ ほら、早く起きなさい！！」

ベッドの上でぼんやりと目を開けた初音の前で、コートを着たお母さんが眉をしかめている。ふかふかの布団のなかに埋もれていた初音は、ん？ と寝惚けた頭で回りを見まわした。

無論のこと、なんの変哲もないいつも通りの初音の部屋だ。大雨も洪水もなく、のどかなお正月の晴れ空が窓の外に覗いている。

「もう、いくら呼んでも来ないと思ったら……起きた？」

「お母さん……？ あれ？ どうして？ ……大洪水は？」

「もう……新年早々寝惚けないでちょうだい。しっかり目を覚まして！！ もうお父さんも支度して下で待ってるのよ」

ようやく焦点を取り戻した初音は、ベッドの上に身体を起こす。

(そっか……寝ちゃったんだ、わたし……)

時計を見れば、朝の10時。つい何時間か前には家族揃って『あけましておめでとうございます』の挨拶をして、おせち料理を食べて、お年玉を貰って、ちょっとだけお屠蘇も飲んでみたりして、初音は元旦の朝を満喫していたのだ。

一通りの行事を終えたあと、新年の特番を流し続けているテレビを放って、初音は初詣に行くために2階の自分の部屋に戻り、よそ行きに着替えて——そのあたりでふらりと記憶が途切れていた。

(うん、確か——ちょっとお布団がふかふかでキモチ良さそうだったから、横になって……)

うとうとしているうちに、いつの間にか眠ってしまっていたらしい。時間にすればほんの30分ほどのことだろう。

「どう、目は覚めた？ 早く行きましょ」

「あ、うんっ」

初音は母親にせかされるまま、寝起きの頭をぶんぶんと振って部屋を出る。頭の左右にリボンで括った髪が犬の尻尾のようにばたばたと揺れた。

(うう……)

階段を降りてゆく間にも、ふわぁ、と大きなあくびが出る。

昨日の夜、つまり大晦日に除夜の鐘が鳴るまで頑張って起きていようとしていたのが、やっぱり響いていたらしい。今年こそ、と気合いを入れて、お母さんにコーヒーや濃いお茶まで用意して貰ってチャレンジしたのに、結局最後には11時半ごろに眠ってしまった。今年も初音は新年の切り替わる瞬間には立ち合えなかったことになる。

とんとんと階段を下りる初音に、お母さんはハンドバックの中の鍵を探しながら聞いてくる。

「夢でもみてたの？ なんだか、随分うなされてみたいだったけど」

「あ、うん……そうみたい」

さっきまでの大洪水の夢のことを思い出して、初音は答えた。新年早々溺れる夢なんて、ぜんぜん楽しくない。

「……ねえお母さん、ああいうのも初夢になるの？」

「さあ……一年で一番最初に見た夢ならそうじゃないかしら」

「えー……やだなあ……あんなの」

口を尖らせる初音に、母親はふいと顔を上げる。

「なあに？ ひょっとして溺れる夢でも見たの？」

「……えっと……」

「そうなの？ 今年こそ泳げるようになりなさい、ってことでしょ。ちゃんと練習しなさいね」

「ええーっ……違うよお」

「ふふ、まあ、初夢は秘密にしていると本当になる、なんていうけどね」

言い合いながらも玄関を出れば、すっかり待ちくたびれた様子で、お父さんが運転席から車のドアを開けてくれる。車の中はすっかり暖房が効いていて、寒くて困る事はなさそうだった。

「初音、お正月からお寝坊かい？」

「……ごめんなさいい」

お父さんにぺこりと頭を下げ、初音は助手席のお母さんに続いて後部座席に乗りこんだ。まだチャイルドシートを使っていた頃から、なんとなくお出かけする時の初音の指定席はここになっている。一人で後部座席を占領するように、シートの真ん中に腰掛ける。

家の前の細い道路から大通りへと乗り出した車がゆっくりとスピードを上げ、窓の外を流れる景色がどんと後ろに過ぎ去ってゆく。お母さんがカーナビをいじると、さっきまでリビングで流れていたお正月特番が音声だけで流れ出した。

陽気な音楽と笑い声が、車内を静かに満たしてゆく。

「お昼までに帰って来れるかしら？」

「うーん。混んでるだろうからなあ」

暢気に答えながら、父親は信号待ちのウィンカーを入れた。午後からは親戚が遊びに来ることになっているので、母親はすこし急いでいるらしい。

「初音も楽しみにしてるんだし、できれば早く戻って来れるといいわね……」

半年ぶりの従姉妹との再会は、もちろん初音にも楽しみなことだ。母親の発現はそれをおもんばかってのことかもしれない。

が、それよりも今の初音には気になることがあった。そのせいで両親の会話は上の空、返事を返すことも忘れている。

(……う)

ぞくり、と鈍い刺激が恥骨に響く。

いまさらのように、初音は下腹部にじんと集まる重みと、脚の付け根に集まったイケナイ感覚を思い出していた。

それは、おしっこ。

はっきりと自覚できるほどの尿意が、初音の下半身を占領している。

(そっか……急いでて、おトイレ、行き損ねちゃった……)

着替える前には、出掛ける前にトイレに行っておかないと、と考えていたのを思い出す。寝坊したせいですっかり忘れていたけれど、良く考えてみれば初音は今日は起きてから一度もトイレに行っていない。

だから、初夢に水の夢なんか見ていたのかもしれない。冷静に分析してみると、おなかに響く尿意はかなりのレベルに達している。

思っていたよりもずっと切羽詰っていた事態に、初音はこくりと口の中の唾を飲み込む。

(ひょっとして、あのまま夢、見つけてたら……オネショとか、しちゃってたかも……)

となると、母親に叩き起こされたのも決して悪いことではなかったのだ。

後部座席に他の人の目がないのをいいことに、初音はスカートの前にぎゅっと手のひらを挟みこむ。

(着いたら、トイレ行こ……)

シートの上でもじもじと腰を前後させ、おしっこを我慢する初音を乗せ、車は一路、片道30分の神社への道を進んでゆく。

「寒いわねえ」

「……去年はこんなでもなかったけどなあ」

「でも、さすがにすごい人ね……去年よりも多いかしら」

「みただね。初音、離れないようにしなさい？」

「う、うん」

神社の境内は人でごった返していた。お正月の渋滞にくわえ、駐車場での10分あまり順番待ち、さらには参道でものろのろ歩きの順番待ちを強いられたため、すでに時計の針は11時半近くを指している。

(ふぁう……っ)

あれからも初音の我慢は続いていた。

早朝の寒さに冷えきった下半身は、すっかり尿意に占領されている。黒いストッキングに包まれた脚はせわしく寄せられて、ぎゅっ……と動きを止めては小刻みに震えるのを繰り返していた。

おなかにじんじんと響く尿意を感じたまま、初音は父親に手を引かれ、境内の人ごみの中にいる。足元はどこかふわふわと頼りなく、まっすぐ歩くのにも苦労する。

新年の冷えこみはタイツに守られた少女の下腹部を容赦なく刺激し、初音の尿意を加速させていた。お参りの最中に、『おトイレまで我慢できますように』なんてお願いをした女の子は多分初音くらいのもんだろう。

(おトイレ……行きたいっ……)

切迫な初音の訴えは、しかし言葉になることはない。

頻繁に時計を気にする母親の様子が伝染したのか、両親はそろって初詣をできるだけ早く済ませたいと焦っていた。車を降りるなり、初音はまっすぐに神社の境内、参拝者の列の中に連れ込まれてしまっていたのだ。

「ふう……っ」

人ごみではぐれないようにとぎゅっと握られた初音の手のひらには、じんわりと汗が滲んでいる。

不自然に力が入る手のひらを、父親は愛娘がはぐれないように緊張しているものと勘違いしている。そうして父親が初音を安心させようとしっかり手を繋ごうとするため、初音はますます自由を失ってしまっているのだった。

片手がハンドバックで塞がり、もう片方の手は握られたままでは、スカートの前をおさえることも叶わない。どうしても不自然に寄せ

合わせる膝が大きく動いてしまう。

「おっと……」

（うぁ！！）

バランスを崩しかけた父親にぐい、と手を引っ張られ、初音は思わず悲鳴を上げそうになった。

せっかく内股に揃えていた膝が離れ、寄せ合っていた内腿にひんやりとした空気が流れこむ。スカートの中にまで侵入してくる初春の寒気は、薄布に守られた少女の股間をゆつくりと侵し、くつくつと沸き立つおなかの中の恥ずかしい液体を活性化させるのだ。

初音は慌ててぎゅっとスカートの前を握り、コートの裾を引っ張って膝を交差させる。

（っ、……出ない、おしっこなんか出ない……ガマン、しなきゃっ……）

自分に言い聞かせるように、呪文のように『我慢』という単語を繰り返して、そっと下腹部を撫でる。わずかではあるが落ち付いたおしっこの波を感じ、初音は小さく息を吐いた。真っ白い吐息が行列の中に溶けてゆく。

（うう……ち、チビっちゃうかと思ったよう……お父さんのばっか）

ちらり、と父親の顔を窺うも、当の父とは言えば母親にしっかりしてと怒られ、いつもの顔で参った参ったと頭を掻くばかり。

「ほら、あんまりきよろきよろしないの」

「だ、だってえ」

「だってじゃありません」

たしなめられながらも、初音はそちらを窺わずにはいられない。少女の視線の先には、人ごみの隙間から覗く境内の端にずらりと並ぶ行列があった。

新年の大混雑は、初音がいま一番行きたい場所であるトイレにも公平に訪れている。初詣で慣れない着物を来ている女の人も多く、そのせいでますます行列の進みは遅かった。

初音が一番最初に確認してからもそれなりに時間は経っているのだが、状況は一行に改善されず、それどころか順番待ちの列はさらに長く伸びていた。普通に並んでいるだけで何十分という時間を浪費してしまうであろう。

この上こんな寒空の下でそんなに焦らされていたら、順番が回ってくる前におしっこが出てしまう可能性のほうが高いようにも思えた。ならばいっそのまま我慢を続けて、家のトイレでおしっこを済ませるほうがまだいくら下腹部に負担を強いなくて済むのかもしれない。

だと、いうのに。

「……ありゃ、小吉か」

「わたしは中吉ね。ここのおみくじ、当たるって有名なのよ。初音はどうだった？」

「え、えっと……」

のんびりと会話する両親に気付かれないように、初音は小刻みに靴のかかとを参拝路の石畳に押しつける。

早く帰りたい、という初音の内心を汲み取ってはくれないまま、両親はおみくじの内容に一喜一憂している。二人とも、まさか愛娘が去年から一度もおしっこをできていない、という事実で苦しんでいるとは思えないのだろう。

手元を覗きこんでくる母親に気付かれないよう、初音はさりげなく膝を寄せ合わせて、できるだけなんでもない風に答える。

「こ、こんな感じだけど……？」

「初音は末吉ね。……失せもの、見つからず。待ち人、望まずとも来る？ なんだかあんまり良い感じじゃなさそうね？」

さすがのご利益と言うべきだろうか。トイレは見つからず、来て欲しくないおしっこの波は次々とやってくる。見事にふたつとも中し

ていた。

「あ、でも健康は良しってなってるわ。よかったじゃない」

（よ、よくないようっ……！！）

またも的中。少女の循環器はいまもいたって健康で、いままさに現在進行中で、去年のうちに飲んで全身に吸収されたお茶にコーヒ—を、強力な利尿作用のままに続々とおしっこへと抽出しては小さな膀胱に送り込み続けている。

「事故……水に注意？ あら怖いわ。気を付けてね初音？」

「う、うんっ……」

（あ、だ、だめ、は、はやく、おしっこ……っ！！）

これまた的中。初音の下半身は今まさに、オモラシ警報の発令中だ。口の中に溜まったつばを飲み込んで、辛うじて顔く。

ちらりと横目に、無効の行列の先頭で俯いていた、自分と同じくらいの女の子がぱっと顔を輝かせてトイレの中へと飛びこんでゆくを見て、初音は切なげに腰を揺らしてしまう。

「……はうっ！！」

同時、じんっ、と鋭くイケナイ感覚が初音の腰骨を伝う。初音はこぼれそうになった悲鳴をぐっと飲み込んだ。

「あらあら……恋愛……年頭に苦難あり。乗り越えられねば今年は難しい、か。まあ初音にはまだ早いわね」

（……う、しない、オモラシなんかしないもんっ……！！ しないの、し、ない……い、う）

初音も今年でもう5年生なのだ。そんなことは絶対にゆるされない。オモラシしてしまう女の子のことなんか、だれも好きになてくれるわけがないのだ。

けれど、もう初音のおなかにはぱんぱんで、タイツの膝はぎゅっと擦り合わされるまま、離れようとしめない。

「初音、どうかしたのか？」

「……具合でも悪いの？」

「あ、あの、お母さん、は、はやくっ……か、帰ろうようっ」

（はやく！！ はやくトイレ、おしっこ、トイレおしっこ！！）

言葉の裏に真意を隠し、初音は両親に訴えた。

その間にも刻一刻と限界へのカウントダウンが進んでゆく。コートとスカートの下で、ぴたりと寄せ合わせた内腿の奥。じっとりと股間に広がる熱い感触が、じわじわと外に広がってゆく。

もはやダム崩壊は少女の括約筋では塞き止めることは叶わず、とうとう初音の今年最初のおしっこが始まってしまったのだ。それも、最悪の——オモラシ、という形で。

「あ、あ、やだ、やあ、やああ！！」

じゅわあ、と下着の股布を溢れだした湿り気があっという間に足の間を伝い、タイツの色を侵食してゆく。

初音は悲鳴を上げながら、くねくねと足をよじるが、そんなことで出始めたおしっこが止まるはずもない。

「お、おい、初音？！」

父親の驚愕の声に、何事かと周囲の注目が集まる。まさか、今年で5年生になる娘がオモラシするとは予想していなかった父親にとっては仕方のないことだが、オモラシのままだたなかの初音にはあまりにも辛い仕打ちだった。

「いやぁ……見ないで、見ちゃだぁ……っ」

排泄の瞬間を隠そうと、初音は反射的にぐりぐりと股間を握り締めてしまう。少女が身体を震わせて声を上げ、小さな手のひらを重ね止まるはずもないおしっこを塞き止めようとする様は、どこか背徳的なものすら感じさせた。

初音の小さな身体が去年から懸命に我慢し続けた熱い雫が、色が変わったタイツの股間から噴き出してぱちゃぱちゃと石畳の上に撒き散らされてゆく。神社の境内で盛大にオモラシをはじめてしまった少女を、周囲の人々は騒然と見つめていた。

自然、周囲に開いた輪の中心で、初音はちいさくしゃくりあげながらよろよろとしゃがみこんでしまった。ちょうどおしっこをするための体勢になった初音の身体は、ここがどこなのかも、服を着ているということも無視して条件反射的におしっこを出し続ける。

我慢に我慢を重ねたおしっこはあっという間に少女の下半身をずぶ濡れにしていって。

「ちょっと、……初音！！ もう、どうしてトイレ行かなかったの！？」

「っだって、だってえ……！！」

自分の作ってしまったおしっこの水たまりの上、いやいやと首を振りながら、初音は母親に言い訳をする。しかし、何もかもがもはや手遅れだ。

一年の計は元旦にあり——初夢は、誰にも言わなければ正夢になるという。おしっこの夢を秘密にしていた初音は、まさにいま夢と同じ状況を体験してしまう羽目になったのだった。

(初出：書き下ろし 2008/01/24)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 裁判風味な。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 02/17/2008 18:30:32

BODY:

「つまり、被告——北条ユキさんは、藤宮邸の来賓室の中に敷かれた絨毯が時価数億円にものぼる高価な品であることを知りながら、下着を下ろし排泄行為に及ぼうとしたもので、これは明らかに屋敷の所有者である藤宮健之助氏の所有する財産を損壊せしめる意図があったことは明白であります。例え未遂とは言え中学 2 年生という年齢はこれらの行為がいかなる結果をもたらすものかを判断するには十分であり、邸内に 4 ヶ所ものトイレがあるにも関わらず子のような行為に及んだことに酌量の余地はないものと考えられます」

「異議あり！！ 検察官、当日、北条ユキさんは藤宮氏の自宅を訪問していたとおっしゃいましたね。そこでこちらの記録を見ていただきたい。藤宮邸の管理は管理人・鈴代氏に任されており、規則正しい巡回と施錠の確認を行なっています。

先程申し上げました通り、当日、急な訪問であった北条さんの来訪は使用人の栄氏によって直接藤宮氏に取り次がれており、鈴代氏は北条さんの来訪を知らなかった。このことは証言からも明らかです。

そのため——この通り、北条さんが来賓室に通されてから 5 分後に、鈴代氏は外から確認を行ない、来賓室が空室であると勘違いし施錠をしてしまった。中に北条さんが取り残されているにもかかわらず、です。

当時、北条さんはかなり強い尿意を感じていました。そこからさらに発見までの 3 時間を来賓室で過ごさなければならなかったのです。トイレもない部屋で長時間の我慢を強いられた北条さんが、ついに辛抱きれずに排泄行為に及んだとしても何ら不思議はありません」

「なるほど。弁護人の言うことももっともです。一見そう聞こえますね。

……しかしこちらをご覧ください。来賓室にはこのように、花瓶、灰皿、植木鉢、最低でも 3 つの容器——排泄を行なうに値する容器がありました。北条さんは以前にも何度も藤宮邸を訪れ、この来賓室に敷かれている絨毯が大変高価なものであることを知っています。それを汚してしまうことを回避する手段は残されていました。にも関わらずそれを放棄したのは、やはり何らかの意図があったことを考えざるを得ません。思春期の少女にとって、床を汚すことは大変な恥辱です。ならばこのような容器を用い排泄した液体を隠そうとするのは至極当然の発想ではありませんか？ それなのに被告はそのための努力を怠った！！ これは間違いなく藤宮氏の財産を傷付ける目的があったことの証左に他ならない！！」

「ふむ。では実際に検証してみましょう。こちらに当日藤宮邸の来賓室にあった三つの容器、それと同じものを用意いたしました。いずれも事前に計量を終えています。結果、この通り——灰皿の容量は450cc、花瓶の容量は740cc、そして植木鉢に注がれた水が保水力の限界に達するのは約400ccを越えた時点でした。

確かにこれならば検察官の主張も一見正しいように思えます。しかし、当時の北条さんが我慢していた量が、これよりも遥かに多かったとしたら？」

「異議あり。それこそ詭弁です！ 平均的な13歳の少女の膀胱容量が400ccを上回る事はありません！！」

「それはあくまで一般論です。水分を摂取し、限界まで我慢して頂いた時の北条さんの膀胱の容量は、700ccを越えるのです。こちらに市内の病院による検尿結果の診断書もあります。……検察官はご存知ないようですが、このような現象は貴婦人の膀胱と呼ばれるものでしてね。中世の婦人は慎みと嗜みのため、排泄を行なわないことこそが美德とされていた。それゆえに日常的に我慢を強いられた女性に見られるものです。

先ほど検察官もおっしゃいましたね。北条さんは極めて羞恥心の強い方です。日常的に排泄を控えていたとしても何の不思議もない！！そして日常的ゆえ、北条さんはそれを自分の身体の一部としてはっきりと知っていた！！ならばこれら三つの容器では排泄した尿が全て納まりきらないことも容易に想像が付いたのです！！」

「弁護人！！だが、花瓶はそれよりも多いとさっきの証拠の検分にありましたね！！そう、740cc。これならば被告は十分に排泄した尿を納めることが可能のはずだ！！ならば被告にはその意思がなかったことを自ら認めています！！」

「ええ。ですが、よくお考えください。花瓶は空で使うものですか？違います。切花を飾るためのものです。そして当時、藤宮邸の来賓室の花瓶には、花が活けてありました。当然、花瓶には花が枯れないだけの水が満たされ、花瓶の実質的な容量は400ccよりも遥かに少ない。つまり、来賓室には北条さんが完全に排泄をし終えるだけの容器はどこにも存在していなかったのです！！」

「待ってください！！それならば二つの容器を使えばいい！！それならば被告は最後まで排泄をすることが可能だったはず！！」

「検察官は少女の排泄の仕組みをご存知ないようです。成人男性のそれと違い、思春期の少女の括約筋は非常に繊細で、か細い。彼女たちの排泄は一度始まってしまうと途中で中断する事は不可能に近いのです。半分を灰皿に済まし、即座にもうひ

とつの容器に残りを排泄する——言葉にすれば単純ですが、尿意の限界で切羽詰った少女に、それをせよというのは保護法の観点上からも酷な話ではありませんか？

以上より、弁護側は北条さんが藤宮邸で排泄行為に及ぼうとしてしまった事は決して害意によるものではなく、もはや最後の限界だった尿意にせかされての緊急避難的措置だったものと主張します」

「異議あり！！それは未必の故意だ！！被告が来賓室の調度品の価値を知っていたことは事実です！！それなのに邸内で排泄行為に及ぼうとしたこと自体が、十分に悪意をもったものです！！」

「異議あり。弁護側は、北条さんが決して最終的な排泄行為を目的としていなかったことを主張します。あれは擬似的な排泄行為を真似ることで、少しでも尿意を和らげることを目的としたものだったのです」

「馬鹿な、でたらめにも程がある！！弁護側はありもしない仮定を元に弁護を行なっています！！いや、百歩譲ってそんな仮定が成り立ったとしても、ならば下着をおろす必要がない！！」

「軽い失禁状態などで、下着に被害があった場合は？限界に近い尿意を感じていながら、その上濡れた下着を身に付けたままではさらに下半身を冷やし、尿意を加速させるであろうことは明かです。なによりも、発見当時北条さんは排泄行為そのものには及んでいなかった！！」

「異議あり！弁護側は明らかに不当な事実をもって被告を弁護しようとしています！！不確定な事実をもって論ずることは意味がなく、まさしく机上の空論です！！だいたい、少女である被告の膀胱容量がそのような膨大なものであるはずがない！！」

「ふむ。それではここで改めて検証のお時間を頂いてもよろしいでしょうか？

先ほどから被告に落ち付きがないのは法廷内の皆様もお気づきのことと思います。そう。いま被告の北条ユカさんには限界まで水分を摂取し12時間排泄を控えていただいております。ここで実際に計測していただきましょう！！」

(初出：書き下ろし 2008/02/17)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第7夜 三匹のこぶた

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 02/17/2008 18:35:00

BODY:

むかしあるところに、ポー、キィ、ピックという3人の姉妹が住んでいました。

3人はとてもなかよしで、いつも一緒に暮らしていました。

ある日、一番物知りで一番お姉さんのポーが、眼鏡をくいと直しながらいいました。

「この家のトイレもだいぶ古くなってきた。どうだろう、二人とも。そろそろ新しいお手洗いを作ろうと思うのだが、どうだろう？」

キィとピックもそれには大賛成でした。あまりはっきりとは言いだせなかったものの、古くて汚れてしまったトイレを使うのは、二人ともあまり好きではなかったのです。

「ええ、とてもいい思い付きだと思いますの、お姉さま。わたくしにいい考えがありますわ。こんなお手洗いはいかがですかしら？」

と、姉妹の真ん中でおしゃまなキィが自分のアイディアを話し出せば、

「ボクねえ、こんなのがいいなっ」

未っ子のピックも画用紙いっぱい絵をかいて説明を始めます。

3人の姉妹は、トイレを作りなすことにこそ賛成でしたが、それぞれが自分の意見を譲らず、話はいつまで経っても決まりませ

んでした。とうとう夜中になって、いかげんに疲れてしまったポーは、二人の妹に提案します。

「……よし。ならば、いっそ３人でそれぞれ別にトイレを作ることにしたらどうだ？　３人が一つずつトイレを持てば、これまでのように順番を待つて困ることもない」

「そうですわね。それにそうすればどれがいちばん素敵なお手洗いか、わかるはずですよ。ピックはどう思いますの？」

「うんっ、ボクもさんせーいっ」

実は、３人の姉妹たちはこれまでも何度か、トイレの順番を待っている間に我慢しきれず、オモラシをしてしまうことがあったのでした。さすがに一番お姉さんのポーは、ちょびつとだけチビってしまうくらいでなんとか乗り越えていましたが、キィはこれまでもなんとか失敗してしまっていましたし、ピックに至ってはそれこそ、大失敗も両手の指に余るほどです。

と言うわけで、みんなが自分専用のトイレを持てるというのは大歓迎なのでした。

３人はそれから１週間かけて、それぞれにおトイレを作りました。

ピックのトイレは藁でできていました。きちんと回りからは見えないようになっているのに、いつでも風通しが良くて、トイレに座ってオシッコを済ませているときでもとても爽やかです。

キィのトイレは木でできていました。スカートと下着を下ろしてしゃがみ込んでいる時でも森の木々の匂いがほんのりと香り、とても心地よくお手洗いを済ませることができました。

そしてポーのトイレは頑丈なレンガでできていました。びっしりとセメントで固められた分厚い壁は、おしっここの匂いや音を外に漏らさないため、いつトイレを済ませたのかを気付かれない素敵な工夫でした。さらに、窓もなく入り口は一つだけ。これなら絶対に外からのぞかれる心配ありません。

「どう！？　ボクのおトイレ、スゴイでしょ！？」

「あら、わたくしのお手洗いが一番素敵ですわ！！」

「いやいや、私のものがもっとも優れているとも」

３人はそれぞれ自分のトイレの素晴らしい場所を自慢しあいます。けれど、どれが一番すごいトイレなのかについてはポーも、キィも、ピックも譲りませんでした。仕方なく３人はそれぞれのトイレを自分の専用として使うようになったのでした。

３人の姉妹がそれぞれのトイレを使うようになって、一週間が過ぎました。

その日は、季節外れの分厚い雲の下でゴウゴウと風が吹いている、嫌な天気の日でした。

「……これは、今夜は嵐になるな」

「そうですわね……でも、きっと大丈夫ですわよ。お家もちゃんと倒れないように補強もしましたし、ご飯もお水もたっぷり用意してありますもの」

「うんっ、みんなで頑張ったもんねっ」

３人は笑いあって、夕飯の準備をはじめました。

今日の夕飯は、羊のおじいさんから買った南の国の香辛料をたっぷりきかせた特性の野菜炒めです。料理当番のキィの味付け

は少し辛かったのですが、とても美味しかったのでみんなは何度もお代わりをしてしまいました。

「そろそろ風が出てきた……今日は早く寝るとしようか」

「ピック、寂しかったら一緒に寝てあげてもいいですわよ？」

「へーきだよ。ボク、ひとりで眠れるもんっ。キィお姉ちゃんこそ怖いんじゃないの？」

「な、ち、違いますわよっ！！」

「二人とも、遊んでないでしっかり寝たほうがいいぞ。明日は庭の片付けをしなければいけないしな。……今日は3人で一緒に寝よう」

「わかりましたわ、お姉さま」

「はーいっ！！」

ポーの提案で、3人はベッドに入ります。がたがたと窓枠が揺れて、ぎしぎし屋根が軋みましたが——3人でぎゅっと身体を寄せあっていれば怖いことはありませんでした。やがて、ごうごうという風の中で、3人はゆっくり眠りに落ちていったのです。

さて、その夜中、一番最初に目を覚ましたのは、末っ子のピックでした。

夕飯の野菜炒めを食べる時に水を飲みすぎて、朝にならないうちにおしっこが我慢できなくなるほどトイレにいきたくなってしまったのです。

「……お姉ちゃん、キィお姉ちゃんってば……」

「……もう、なんですかのピック……？ ふわあ……まだ夜中じゃありませんの……静かにしてくださいまし」

ごろんと寝返りを打つキィを揺り動かして、ピックは困った顔をします。

吹き付ける風がごうごうと唸っているのが、まるで怪物の叫び声のように聞こえました。

「ねえ、お姉ちゃんっ……起きてよっ……」

「もう、一体なんですかの……？」

「あ、あのね、その……ボク……おトイレ……」

「もう……そんなの一人でできるでしょう？」

「で、でもお……」

確かにいつもなら、ピックも一人トイレに行けるのですが、今日ばかりは外に出ていくのが怖かったのです。

「……仕方ないですわね……今日だけですわよ？」

「う、うんっ」

はじめは面倒くさがっていたキィでしたが、気付けば自分もとてもとてもオシッコに行きたくなくなっていたこと気付いて、一緒にベッドを降りることにしました。

すると、ポーも目を覚まして起き上がります。

「なんだ、ふたりともトイレなのか？」

「え、ええ。ひょっとして、お姉さまも、ですか？」

「……まあ、ね。まったく、みんな揃って少しばかり水を飲みすぎたな。……ううっ」

「そ、そうですわね……んんっ」

「は、はやく、行こうよっ……ポーお姉ちゃん、キィお姉ちゃんっ……」

実はポーもいまにも漏れてしまいそうなくらい我慢しているのです。目は覚めていたのですが、なんとなくベッドを抜けだせないまま悶々としていたのです。

結局、3人は揃っておトイレに行くことになりました。

こういう時、それぞれにおトイレがあるのはとても便利です。

「ピック、気を付けろよ。暗いからな」

「う、うん……」

「お姉さま、わたくしも……その、あんまり」

「あ、ああ」

かたく閉めていたドアを開けるとごうごうと唸る風が聞こえてきます。幸いなことに雨は降っていませんでしたが、暗い嵐の中にざわめく突風は、いまにも家を薙ぎ倒してしまいそうに思えました。

3人は足早に家を出て、それぞれのトイレに向かいます。

ピックは藁のトイレに。キィは木のトイレに。そしてポーはレンガのトイレに。

「おしっこ、おしっこ……っ」

ピックはパジャマの前をぎゅっと押さえながら、大急ぎで自分のおトイレに走っていきました。こんなこともあろうかと、ピックのおトイレは家から一番近い場所に作ってあるのです。夜中に怖い思いをしないようにしたためですが、一分一秒でも早くトイレに行きたくなっていたピックには幸いでした。

びゅうびゅうと吹き付ける風にバランスを崩しそうになりながら、ピックはなんとか藁のトイレに到着します。鍵をかけるのももどかしくドアを閉め、ピックはほっとしながらパンツと一緒にパジャマを脱ごうとしました。

その時です。

突然強く吹き付けた風が、藁のトイレを直撃しました。

「わ……わあああっ！？」

吹き飛ばされそうになって、慌てて床にしがみつくピック。けれどそんなことお構いなしに、嵐の巻き起こした暴風は藁のトイレをなぎ倒しました。

なんと、ピックがトイレに座る間もなく、藁のトイレはこなごなになって吹き飛ばされてしまったのです。

「あ、や、やだっ、ダメええっ！！」

もうすっかりオシッコをするつもりでいたピックでしたが、そのトイレがなくなってしまっただけにそのまましてしまうわけにも行きません。なに

しろいまやトイレを囲む壁も屋根もなくなって、まるっきりお外でオシッコをするのと同じ格好なのです。

いくらピックが小さくても、女の子にそんなことができるはずありません。

ピックはぎゅうっとパンツを引っ張り上げ、きちんとおしりも隠せていないまま大急ぎで走りだしました。

「で、でちゃう、でちゃううう…っ！！！」

まっすぐにピックが目指したのは、ポーの作った木のおトイレでした。

「ピック？ ど、どうしましたの？」

キイは自分専用の木のトイレのドアの前にいました。あとほんの数秒でパンツを下ろしてオシッコを始めるところでしたが、血相を変えて駆けつけてきたピックに思わず手を止めてしまいます。

「お、お姉ちゃんっ、トイレ、おトイレ貸してっ！！」

「ええ！？ ど、どうしてですの！？ ピックにはちゃんと自分のお手洗いがあるじゃありませんの！！」

「だ、だって、今、すごい風がびゅうって吹き飛ばしちゃって……お、おトイレなくなっちゃんだもんっ！！」

半脱ぎのままのパジャマから、可愛いおしりを覗かせながら。足の間をぎゅうっと握り締めて足踏みをするピックの姿は、見ているだけでオシッコが我慢できなくなりそうです。

「お願い、お姉ちゃん、ボクに先に、おしっこさせてよう！！」

「そ、そんな……待ってくださいまし、わ、わたくしだってもう我慢できませんのに……！！ ひ、ピック、やめて！！ 離しなさいなっ！！」

二人してドアノブを取りあいながら、キイとピックは言い争いをはじめてしまいます。もうほとんど余裕がなく、何分も我慢できそうにないふたりにとって、どちらが先にオシッコをするかというのは、負けてしまったほうがオモラシをしてしまうのと同じ意味なのです。

「と、とにかく——いくらピックでも、これだけは譲ってあげられませんの！！」

「やだあ！！ お姉ちゃあんっ！！ い、いじわるしないでえーっ！！」

キイは叫びますが、ピックだってこればかりは譲れません。トイレの目の前でオモラシだなんて、絶対にあってはならないことでした。

とうとうピックは、キイのおなかをちょこんとつつき、キイが『ひああんっ！？』と悲鳴を上げて腰をくねらせた隙に、姉の脇を擦り抜けて木のトイレのドアを開け放ちます。

「ボ、ボクが先だよっ！！」

「う、ひ、ピック、ずるいですわよっ！？」

「お、オシッコ……でちゃうう！！」

今にも漏れそうなオシッコを抱えてトイレに駆け込んだピックでしたが、そこには予想外の光景が広がっていました。

「え……？」

ドアも閉めず、トイレの中で呆然と立ち尽くすピックに、キイは声をかけます。

「ピック……？ ど、どうしましたの？」

「な、なにこれ、お姉ちゃん……ここ、どうやってオシッコするの！？」

「どうやってって……そつ、そんなの、しゃがんで……するに決まっているじゃありませんの！！ も、もう、いいですから早く済ませてくださいまし！！」

「そんな……そんなの、できないよ！！ ポ、ボク、しゃがんでオシッコなんてできないっ！！」

「え、えええ！？」

これにはキイも驚きます。

なんと、キイの作った木のトイレの構造は、ピックの作った藁のトイレとは全然違っていたのです。産まれてから、トイレといえば座ってオシッコをするところだと思い込んでいたピックは、キイが図書館で本を調べて作った、しゃがんでオシッコを済ますトイレのことを知らなかったのです。

「キイお姉ちゃん……っ……や、やだ、出ちゃう、ボク、おしっこ出ちゃう！！ ど、どうしよう……っ」

「どうって……そんなの、わたくしに言われても困りますわよっ……！！ は、早く代わってくださいまし！！」

ピックがオシッコをしないとわかって、キイもたまたまに木のトイレの中に駆け込みました。おろおろするばかりのピックを脇に、キイはトイレをまたいでしゃがみ込み、オシッコの準備を始めます。

その瞬間、また、あのごうごうというすごい風がやってきます。

「きゃあああああ？！！」

叩き付けるように吹き付けた風は、開けっぱなしのドアの中から一気にトイレの中を吹き抜けてゆきます。

突風の後には、キイの木製のトイレも影も形もなく、すっかり吹き飛ばされていました。

「い、いやあああああっ！！！！？」

おしりをまる出しにしたキイが、いままさにオシッコをせんばかりの姿のまま凍りつき、悲鳴を上げました。

「ふう……間に合ったか……」

家から一番遠いところにあるレンガのトイレで、ポーはひとりこっそりと溜息をつきます。一番のお姉さんであるポーは、年頃の女の子として、トイレに行くことも恥ずかしくてたまらないのです。そのため、できるだけトイレを遠い場所に作り、トイレを使っているのに気付かれないような工夫をしていたのです。

自分がトイレを使うことすら恥ずかしいと思うポーには、ためらいなくトイレのことを口にできるキイやピックが、うらやましくもあり、少しはしたなくも思えるのです。

「……さて」

ポーが嚴重にかけた南京錠を、胸に下げた鍵で開けていた時でした。

「お、姉ちゃんッ……！！」

「お姉さまあ……！！」

一目散に駆けてくる妹達に、ポーはなにごとかと目を見開きました。

「な、なんだ？！ どうした、二人とも！？」

「うう……」

「はう……つくう」

ポーの質問に答えることもできず、ピックとキィは閉じ合わせた足の間にぎゅうぎゅうと両手を押しこんで、足の間を握り締めています。あまりにあけすけなオシッコ我慢のしぐさに、ポーは顔が赤くなるのを感じてしまいます。

「お、お……おトイレ……え」

「が、我慢できませんのっ……お姉さま、お願い、さ、先に、わたくしに、お手洗いを使わせてくださいまし……！！」

「ず、ずるいよお姉ちゃん、ボクが先……っ！！」

先を争ってトイレをねだる二人に、ただ事ではないことを悟ったポーでしたが、ポーだっていままさに決死の我慢のまっただなかです。

「ちょ、ちょっと待て、ふたりとも、自分のトイレは……うわぁっ！？」

聞き返そうとした瞬間、ポーは飛びついてきた二人の妹に押し倒されてしまいます。オモラシの惨劇を避けるため、厳重なドアの向こう、レンガの壁の奥にあるオシッコのための場所に入ろうと、二人はまさに必死なのでした。

「お姉さま……ぁ！！」

「だ、ダメ、オシッコ……漏れちゃうっ！！」

「ま、待て！！ このトイレは一人用だ！！ い、一緒に入るのは無理だぞ！？ ふたりとも、わがママを言うんじゃないっ！！」

「ダメ……入れてえ……」

「ボ、ボク、もう、げんかいつ……」

「わあああぁっ！？」

キィとピックは二人がかりでドアを無理やりこじあけると、ポーがまさに使おうとしていたトイレに押し入ります。ポーも黙ってはいられません。ひとつしかないトイレを真っ先に使おうと、3人はもつれ合いながらパジャマを脱ごうとしました。

「出、ちゃう……！！ お、ねえちゃ、ボ、ボク、一番最初だよ！！」

「わたくしが、さ、先ですわよっ！！ ピック、あなた、つい最近までオモラシしてたじゃありませんのっ……、も、もう一回くらい、別にいいでしょうにっ！？」

「や、やだぁ！！ ボクもうオモラシしないもんっ！！ お、お姉ちゃんこそ……が、我慢すればいいんだよ！！」

「うぁ……だ、ダメだ、ふ、ふたりとも、離してくれっ！！」

「お、お姉さま！！ そうですわ、お姉さまが、い、いちばんお姉さんなんですから、わたくしたちに譲ってくださいませんの！？」

「そ、そんな、無茶を言うな！？ こ、ここは私のトイレだぞっ！？ あ、ま、待て、ど、どこを触って…っ！！」

「ボ、ボクもうガマンできないっ、出ちゃう、出ちゃうよぉ！！」

「…うく…っ！！ ピック、待ちなさい！！ ……いちばん、が、ガマンしてるの、わたくしですのにっ……！！」

「そ、それは私だって同じだっ！！」

「ボ、ボクだってえ……！！」

やっぱり、3人の一番は決まりません。

けれど、どれだけ仲良しの3人姉妹でも、そこは一人用のトイレです。3人が一緒にオシッコできるようには、もちろんなっていませんでした。

「う、ううう……っ」

「ひっく……ひっく……」

「うわぁーんっ……」

頑丈なレンガの壁に囲まれて、とうとう嵐の中でもレンガのトイレは無事でした。

けれど、朝になって3人が泣きながらトイレから出てきた時には、姉妹のパジャマは3人とも揃って見るも無残にぐっしり濡れてしまっていました。

「わた、私、がっ、……い、一番……お姉さんなのに……オモラシなんて……」

「も、もう……お嫁に、いけませんわよぉ……っ バカ、お姉さまのバカぁ……」

「ボ、ボク、もうオモラシなんか卒業したのに……うわぁーんっ！！」

ぴかぴかなままのレンガのトイレと、それとは対照的に水浸しの床。そしていつまでも泣き止まずにいる3人を、ゆっくりと嵐の後の朝日が出迎えてくれるのです。

——めでたし、めでたし。

（初出：おもしろ特区 S S 図書館 2008/1/24）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 保育園のお話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 02/29/2008 22:46:04

BODY:

「ねーねーおねえちゃん、はやく、はやくっ！！」
「ちょ、ちょっと待ってっば……そんなに引っぱ張ったら……きゃああ！？」
「うわぁっ！？」

——べしゃんっ。

「……災難だったわねえ」
「あ、あはは……みんな、元気いいますから」
「ごめんなさいね、詩織ちゃん。付き合わせちゃって」
「そんな、気を使わないでください。わたしがお願いしたことですから」

前原詩織—— 15 歳。保母さんを目指して勉強中の彼女は、椅子の上でまだ湿った髪を拭きながら答えた。大滝保育園、私立のこの保育園は、詩織の叔母にあたる女性が経営する施設である。

詩織は毎日、学校が終わってからこの保育園で保母さんの見習いをしていた。

元気いっぱい園児達は、詩織を『おねえちゃん』と慕い、毎日あちこちへ遊びに引っ張ってゆく。詩織もすっかり溶け込んでいるが、遊びたい盛りの園児たちのパワフルさにはまったくもって圧倒され、舌を巻くばかりだった。

「でも、平気？ 身体が冷えちゃったでしょう。風邪、ひかないようにね」

「あはは……はい、気をつけます」

今日もまた、詩織は子供達に引っ張られているときに間違っ足て足を滑らせ、水たまりの上に転んでしまったのだった。防寒・汚れ対策のジャージはおろか下着までびしょ濡れになってすっかり壊滅だ。どうにか頭だけはシャワーを浴びて泥を流したが、服はこのままクリーニング行きで決定だった。

「……それで、あたしはちょっと外すけど、あとは頼んでいいかしら？」

「え？ 園長先生もおでかけなんですか？」

「あら。ひょっとして城崎先生もなの？ ……まあ、それは困ったわねえ……」

城崎先生が先程、このあと急な用事で1時間ばかり外出するのでお願い、と伝言を頼まれたことを説明すると、園長先生はむう、と眉を寄せて考え込んでしまう。どうやら相当大切な要件のようだった。

「どうしようかしら……」

「……あの、お急ぎのご用事でしたら、行ってきてください。ちょっとくらいならわたし一人でも平気ですから」

そっと切り出した詩織に、園長先生はしばらくためらい、答えた。

「……ごめんなさいね……本当に悪いんだけど、前原さん、お願いしてもいい？ すぐに戻ってくるわ」

「はい、任せてください！！」

ぐっと胸を張り、詩織は答える。それを見て園長先生はふっと表情を緩め、席を立った。

「あなたももう立派に『おねえちゃん』なのね……頼もしいわ」

「あ……ごめんなさい、ちょっと言いすぎました」

「いいのよ。そんなに謙遜しないで。みんなもあなたのことを慕ってくれているし。じゃあ、お願いしていいかしら」

「はい！！」

部屋を出てゆく園長先生を見送り、詩織も椅子から立ち上がる。

「さあ、早くしなきゃ……みんな待ってるしね」

目を輝かせ、詩織の手を引いていた園児達のことを思い出しながら、詩織は更衣室に入って自分のロッカーを開け、着替えることにした。

「えっと……あれ？」

しかし、中を探る手に物足りなさを感じ、ロッカーの中を覗きこむ。

改めて見てみれば、着替えの中にはジャージの上着とエプロンの替えだけしか残っていなかった。

「あ……そっか……」

よくよく思い出してみれば、昨日も別の園児達との泥遊びで汚してしまい、着替えを使ったばかりなのだ。あと一式あると思っていた着替えは、もうその一部だけしか残っていない。

(……えっと……)

着替えようにも服はなく、かといって下半身は水浸しの泥だらけで冷たく湿っている。このまま着続けている訳にもいかない。

(ど、どうしよう……)

予想外の事態に、詩織はロッカーの前で困惑を隠せなかった。

(……うー、なんか、すかすかする……)

結局、詩織は被害の壊滅的だったジャージと下着を脱ぎ、どうにか汚れの少なかったスカートと、替えのエプロンだけを身につけていた。

下着は脱いだままだ。あんな泥だらけのショーツはどうも履く気になれなかったし、かといってほかに替えの下着もない。まさか他の先生のを黙って借りるわけにもいかないのだ。

頼りない足もとの感触に、なんとなく違和感を感じる。大切なところがすっかり丸出しという状況は、なんとも非常に困ることではあるのだが……まあまさか見られることもないだろうし、気になるものの、急ぐためには仕方のない処置だった。

(1時間くらいで乾くし……それまで我慢しよ……)

と、いまいち吹っ切れない気分を無理矢理切り替えようと、頭を振ったときだ。

ぶるるるっ……

不意に込み上げてきた感触に、詩織は軽く身をよじる。

(う……やだ。濡れたままでいたからかな……)

恥骨をじんと震わせる切ない感覚。どうやら着替えるのに少々手間取り、腰を冷やしたままでいたためか、トイレを求める生理的欲求が増してきたらしい。気付けば下腹部にも軽い重みを感じられ、詩織は自分の身体が思っていたよりも我慢を続けていたことを知る。

——おしこ。

たとえ『おねえちゃん』であろうとも避けられない自然の摂理に背中を押され、詩織はそそくさと方向転換し、トイレの方へと急ごうとした。

だが。

それを見咎めるようなタイミングで、廊下に園児達の声が響いたのだ。

「あー、おねえちゃんいたー！！」

「もう、どこ行ってたの！？ はやくはやく！！」

リウタとアカネ。ついさっき、詩織の手を引っ張っていたふたりだった。

廊下をまっすぐに、全速力で走ってきたふたりは、そのまま勢いよく詩織の身体に飛び付く。

「ちよ、廊下は走っちゃ……きやんっ！？」

「ねえ、おねえちゃん行こうよ、はやく、ねえはやく！！」

「そうだよ、はやくはやく！！ みんなまってるもん！！」

「わ、わあ！？ ひ、引っ張らないでってば！！ す、スカート握っちゃダメ！！」

かなりの力で両手を引かれ、詩織は倒れるのをこらえるので精一杯になる。どうやら二人とも、詩織がいちど事務室に引っ込んでいるあいだもだいごあちこちを探しまわっていたらしく、すっかり待ちきれない様子で詩織をせかすように玄関の方へとぐいぐいと引き寄せる。

その下にはなにも身につけていないスカートの裾を掴まれ、さすがに焦った詩織は慌ててエプロンの上から布地を掴む。

「え、ええと、リョウタくん、アカネちゃん、ちょっと待って……おねえちゃん、おトイレ行きたいんだけど……」

「そんなのいいから！！」

「そうよ、おねえちゃんなんだからガマンしてよ！！ ねえ早く！！」

（い、いいからって……きゃっ！？）

あまりに勢いよく遮られ、一瞬呆気にとられてしまう詩織を、二人は力を合わせて玄関へと引きずってゆく。たとえ小さな子供でも、夢中になっている時のエネルギーはすさまじい。まして二人がかりなのだ。詩織はずりずりと引きずられるままに玄関に押し込まれてしまった。

「おねえちゃん、こっち、こっちだよ！！ もう、遅いってば！！」

「わぁ！？ あ、アカネちゃん、引っ張ったら危ないんだから……ってさっきも言って……」

「ほら、おねえちゃんはやく！！ 早くしてよぉ！！」

「あ、あのね、だからリョウタくんもちょっと待って……うわっ！？」

サンダルを履くやいなや、二人は見事なコンビネーションで詩織の両手をしっかりと掴み、表へ走りだす。バランスを崩しかけながらも、詩織はどうにか転ぶのをこらえて二人に付いてゆくしかない。

（うう……しょうがないや、ちょっとの我慢だもん……）

声を跳ねさせ、遊ぼう遊ぼうとはしゃぐふたりがあまりに強引なもので、とうとう詩織も諦めざるを得なかった。それに、こうまでしてふたりが見せたがっているものを無視するのは『おねえちゃん』としてもなんとなく気が引けてしまう。

じん、と重みを感じる下腹部に、後ろ髪を引かれながらも、詩織はリョウタとアカネに引っ張られるまま、玄関を出た。

「ね、ねえ……リョウタくん、お姉ちゃん、そろそろ……」

「あー！！ おねえちゃん立っちゃだめ！！ ちゃんと持ってて！！」

「え、えっと、その……」

30分あまりが経過し。詩織の姿は依然、園内の隅にある砂場に留まっていた。

エプロンとスカートの端を折り込んでぎゅっと寄せ合わされた膝は、せわしなく左右に入れ替えている。

無論のこと、トイレにはまだ行けていない。詩織の下腹部では、さっきまでの尿意がさらに増して感じられ続けている。

「あの、アカネちゃん、お姉ちゃんちよとご用事があるんだけど……」

「お姉ちゃん、ほら、お姉ちゃんの番だよ！？」

「うう……」

腰を浮かしかけるたび、隣のリョウタとアカネは目ざとくそれを見つけて詩織を制する。園児二人に囲まれて、詩織は思うように身体を動かすこともできなかった。

（っ……どうしようっ……だ、だいぶ、辛くなって、きちゃった……っ）

時間の経過と共に膀胱に蓄えられたおしっこがさらに量を増しているのだ。おまけに屋外の風も、下着を身に付けていない詩織

をさらに攻め立てている。

「ふう……っ」

そっと息を詰めるものの、誤魔化しきれないおしこの重みにもじもじと詩織の腰が揺れる。脚の付け根にぐっと力を入れてみたり、さりげなく肘のあたりでおなかをさすってみたり、少しでも下腹部に負担をかけないよう、詩織は姿勢の微調整を繰り返しながら、次第に高まり続ける尿意の波をやり過ごしていた。

「じゃあ次ね、次！！」

「まって、あたしのが先よ！！」

「ちがう、ボクだよ！！」

リウタとアカネのふたりが見せたがっていたものは、みんなで協力して築き上げた砂のお城だった。

あれだけ一生懸命になるのも確かなことであろう。普段のお遊戯の時間とは一味違って、砂場の砂を全部かき集めて作られたお城のてっぺんは、詩織の背の高さの半分を超えているほどに高い。

園児達にしてみればそれこそまるで見上げるような高さなのだろう。みんなは思い思いにグループを作り、お城のあちこちにミニカーを走らせ、お人形を並べて楽しそうに遊んでいる。

そして、どうやらリウタとアカネがこのお城の建造の発案者らしい。いつもの何倍も大きなお城は、子供達のテンションを高め、すっかり夢中にさせているらしかった。

「はい、お姉ちゃんっ！！」

「あ、ありがとう……」

おままごとをしている園児から泥団子を受け取り、詩織はお礼を返す。しかし下半身を襲うざわめきのせいで、その言葉もどこか上の空だ。

（や……また、来ちゃうっ……）

おなかの奥でたぶん、と黄色い水面が揺れる。波紋のように広がる水の予兆が詩織を焦らせた。

ぎゅっと腿を寄せ合い、少女の腰が左右にくねる。大切なところを覆う下着のない状態でまだまだ寒い屋外に居続けているのだ、生理現象が加速するのも無理はない。しかも今の状態は園児達に囲まれて、屈伸運動の途中のように脚を折り曲げしゃがみ込んだ状態だ。これはまさしく和式便器での排泄の体勢に他ならない。

下着を脱いでしゃがむ、という行為はそれだけで高まりつつある尿意を膨れ上がらせるものだ。本来トイレでしか取ることのない姿勢は、詩織の排泄器官をじわじわとなぶり続け、少女の思考をそのことだけで塗り潰してゆくのだ。

（トイレ……トイレ、早く……）

まるで、おなかの中のティーポットを弱火で火にかけているような、もどかしくも切ない尿意。ポットの口ぎりぎりまで注がれた秘密のレモンティーは今にもぐらぐら沸騰し、縁を超えて吹きこぼれ溢れ出していまいそうだ。いや、その程度のちょっとしたあふれ出しならまだいい。もしポットが倒れ、中身が全部撒き散らされてしまうようなことがあれば……

自分の意志とは無関係にヒクつきはじめる排泄孔を、エプロンの布地をぎゅっとつかむことでなだめ、詩織は浅く息を繰り返し、危険水位を突破しつつあるダムの決壊を防ぐ。

「はあ……っ」

ぐっと我慢をし通し、なんとか小康状態を取り戻した下半身に、わずかな安堵の息をこぼす詩織。

この切羽詰った事態を解決するためには、とれる手段はひとつだけ。とにかく一刻も早くトイレまで戻ることである。それ以外に助

かる方法はないのは明白だった。

「お姉ちゃん、ほらあ、早く！！」

「う、うん……」

「ねえお姉ちゃん、こっち来てこっち！！」

しかし、目を輝かせる園児達が、まるで四方から詩織を奪い合うようにエプロンを掴み、放さない。みんな大好きな『おねえちゃん』と一緒に遊びたくてたまらないのだ。下手に拒絶すれば、大騒ぎに発展しかねない。

（っ……まだ、先生戻ってこないの……？）

園長先生か、城崎先生。せめてもう一人、先生が遊びに参加してくれば抜けだすチャンスもある。しかし詩織の大ピンチにも関わらず、助けが駆け付けてくれる様子はない。

なみなみと注がれた恥ずかしい液体で下腹部を膨らませ、いまもたぶたぶと揺れるおしっこの存在感はあまりに重く、忘れてしまおうとすることもできない。なんど考えまいとしても、腰骨に響く甘い痺れは、避けられない排泄の瞬間を思い起こさせるばかりだった。

遠くない爆発の瞬間をせめて少しでも先延ばしにしようと、詩織はサンダルのかかとをぐりぐりと地面に押し付ける。軽く腕をつねって痛みでごまかす。しかし、そんな抵抗を繰り返してもおなかにずっしりとかかるおしっこの重みは消えてくれない。当たり前だ。

「おーねーえーちゃんーっ！！」

「ふああ！？」

その瞬間だった。詩織が相手をしてくれないことに痺れを切らしたリョウタが、詩織の背中にジャンプして抱き付いたのだ。詩織がおなかのなかで暴れそうになるおしっこに対する備えのためぐっと縮こまっていたのも状況を悪化させた。

ぐらりと揺れた詩織の身体は、たたらを踏みふらふらとバランスを崩す。

（い、嫌あ……っ！？）

もともと、ぎりぎりのところで保たれていた均衡だ。破られてしまえば後はすさまじい勢いで崩壊が始まってゆく。

脚の間に巻き込んでいたスカートが乱れ、反射的に体重を支えようとした脚が広がってしまう。程良く開いた脚の幅は、スカートの奥で剥き出しの排泄孔を刺激し、その奥の膀胱を致命的な角度できゅと絞り上げた。

（や、やだっ、っ……っ、でちゃ……っ！！）

詩織はとっさに悲鳴を上げかけた口元を嚙む。

ただの『しゃがんでいるだけのポーズ』から、『おしっこをするためのポーズ』へ。些細な変化は、しかし爆発的に詩織の尿意を爆発させる。追い討ちをかけるように、閉じ合わせていた内腿に外気が触れ、ぞくぞくとイケナイ感覚を加速させた。

排泄孔が内側から高まる尿意の圧力に耐えかね、自然にぷくりと膨らむ。

「あ……はうっ……っ！！」

（だ、め、来ちゃう、次の来ちゃう！！　せ、せっかくさっき、我慢できたのにっ！！）

たちまちおしっこ我慢の真剣勝負、緊迫の綱引きに直面する詩織をよそに、リョウタとアカネは大好きな『おねえちゃん』の所有権を巡って取り合いをはじめてしまう。

「ねーえーっ！！　おねえちゃん！！　だからこっちだってばあ！！」

「なによ、おねえちゃんはあたしとあそんでるんだよ！？　邪魔しないで！！」

「ちがうよ、ボクとだよ！！　そっちこそじゃまするなよ！！」

「うーそーだー！！ ちがうもんっ！！」

とうとう言い合いは怒鳴りあいのケンカに発展してしまった。リウタとアカネは、それぞれに詩織の手を取って、乱暴にぐいぐいと引っ張りあう。まるで詩織を独り占めしてしまうかのようで、腕が引っこ抜けても構わないとばかりの剣幕だった。

「や……だめ、やめてえ……！！」

か細い声で詩織が抵抗する。だが、リウタもアカネもまるで意に介さない。

「はなせよー！！ おねえちゃんがかawaiiそだろー！！」

「リウタがいじわるしてるんじゃない！！ あんたこそどっかで遊ばばいいのよ！！」

いや、詩織は決してケンカの仲裁のために声を上げたのではなかった。

（っ、だ、だめ、でちゃう、でちゃうっ、でちゃう！！ おしっこっ、と、トイレっ、は、はやくっ……っ！！）

やさしく諭すべき言葉は押し寄せる尿意の津波に掻き消され、詩織はただただ漏れそうなおしっこを塞き止めることに全力を割かねばならなかった。

（このままじゃ……オモロシ……、や、やだ！！ みんなの前で、おしっこなんか……ダメっ、ぜったいダメ……っ！！）

叫ぶ理性とは裏腹に、猛烈な尿意が詩織の下半身を占領してゆく。ぶるぶると震える膝で爪先を地面にねじつけ、前後に揺れる腰がひく、ひくと持ちあがる。不自然に力が入ったふくらはぎと内腿が痙攣し、詩織が唇を噛むたびに小刻みに跳ねる。

だが、いまにも爆発しそうな股間へ即座に応援に駆けつけるべき両手は、それぞれリウタとアカネにしっかりと掴まれている。いくら緊急事態、火事場の馬鹿力をもってしても、園児一人が体重をありったけ預けてぶら下がるのを持ち上げるだけの力は詩織にはない。なりふり構わず股間を握り締めることも許されず、エプロンの下で詩織の脚は激しく擦り合わられ、ヒビの入りはじめた恥骨の上のダムの決壊を必死に押さえ込もうとする。

「おねえちゃんはボクとあそんでたほうがいいよね！？」

「ちがうもん、おねえちゃんはあたしと遊ぶの！！」

そんな限界寸前の詩織にはまるで気付かず、ふたりは口々に詩織に問いかけた。大好きな『おねえちゃん』を奪われたくない一心で、リウタもアカネも自分の方に詩織を引き寄せようと、地面に足を踏ん張ってその手を引く。

倒れないようにと不必要に緊張した下半身が、さらに詩織の股間に不必要な刺激を伝播し括約筋を緩めてしまう。

「あ、あ、あッ……だめ、でちゃ、う……っ！！」

いや増す尿意の限界は、とうとう少女の喉を震わせた。

激しく足を踏み鳴らした反動で、スカートはいつしか膝下まで捲れ上がり、エプロンの下に空間を開けている。視線を低くして覗き込もうとすれば、詩織の大切な場所は丸見えだった。羞恥に身体をくねらせるも、それ以上の身動きは許されない。

詩織の足元には砂場が広がり、いつでも詩織のおしっこを受けとめられる状態にあった。

もはやこれは疑いようもない『おしっこのポーズ』だ。トイレの中、鍵をかけた個室の中でだけ許される、排泄の準備が、なんと屋外、しかも園児たちの多数の視線が交わる砂場の上で進んでゆく。恥辱に顔を染める詩織は、とうとう声を荒げてしまった。

「お、お願い、放して……はなしてえ……っ！！ っ、でちゃ、うう！！」

これまで消極的だった『おねえちゃん』の突然の豹変に、リウタとアカネはびっくりして目を丸くした。ふたりが同時に手を離し、詩織は待ち焦がれていた両手の自由を取り戻す。

だが——詩織はそのまま切なくヒクつく股間をぎゅううと握り締めることも、紅潮した頬を隠して立ち上がり、トイレを目指して駆け出すこともできなかった。

事態はさらに急変する。

「や……あっ！！」

これまでリョウタとアカネに引っ張られていた左右の手がいきなり空を搔いた為、詩織は派手にバランスを崩した。もともと詩織の脚はもうただ寄せ合わされ擦り合わされるばかりで、おしっここの重みに耐えかねまともに立つ事も難しかったのだ。

ぐらりと傾いた身体を支えようと、反射的に伸びた詩織の両手が砂のお城に突っ込んだ。

「あ——っ！！ おねえちゃんっ！！」

「あーあああ——っ！！」

前代未聞の大きさを誇りながらも、さしもの詩織の体重を支えるには不十分だったのだろう。お城は詩織が手をついた場所から大きく崩れてしまう。

大好きな『おねえちゃん』が、あろうことかみんなのお城を崩してしまったことに、園児達がいっせいに非難の声を上げた。

だが、詩織はそれどころではない。

（っ、ダメ、でちゃう、……もう、げんか……い……っ……しちゃう……おしっこ、ここでしちゃうっ……、みんな、いるのにつ……で、でるとこ、いっぱいですとこ、見られちゃう……！！）

「ああんっ……やだっ、だめっ、だめえっ！！」

長い間しゃがみ込まされていたせいで足はしびれ、思うように少女の体重を支えてくれなかった。砂山のお城に両手で体重を預けたまま、詩織は完全に動けなくなってしまう。それでも少女は健気に、耐え切れるはずもない尿意に対し、辛うじて脚の付け根の筋肉だけで、じわじわと漏れ出すおしっこを塞き止めようとする。

みんなの『おねえちゃん』である自分は、そのお手本にならなければならない。

絶対にこんなところでおしっこをするわけにはいかないのだ。つとめて忘れようとしていた、3年前の記憶が詩織の心に蘇る。

詩織のなかでは、もう『なかったこと』になっていた——中学生のときの大失敗が。

「もう、もうしないのに……今度こそ、ちゃんと『おねえちゃん』になったのにい……っ！！ オモロシ、だめなのにい……！！」

「え……」

「おねえちゃん？ ……おトイレ行きたいの？」

ようやく詩織の様子がおかしいことに気付いたアカネが、きょとんと聞き返す。リョウタも驚いたまま、真っ赤になって俯いた詩織の顔を覗きこもうとする。

（いやあ……っ、だめ、だめえっ）

ぴゅるるう！！ じゅ、じゅう！

いやいやをするように首を振った詩織の脳裏を、バスの中の光景と共に溢れ出した悪夢が埋め尽くす。

閉じ合わせた内腿の間に、あたたかい雫が広がる。ぎゅっと締め付ける排泄孔の隙間から勝手におしっこが漏れ出して、激しい水流は腰をよじる詩織の股間でびちゃびちゃと跳ね回る。

ぷしゅるっ、ぱた、じゅじゅっ、じょおお！！

断続的に噴き出す黄色いおしっこが、砂場の地面を激しく打った。なんとかしておしっこを止めようとする詩織の努力は、かえって括約筋をうねらせ一回一回のおしっこの勢いを増していた。まるでのたうつ蛇のように、たちまちすさまじい勢いを得た水流が、詩織の足元にばちゃばちゃと撒き散らされてゆく。砂場は水をすって激しく掻き混ぜられ、泥と泡の浮かぶ水たまりを広げ始めた。

「ああっ、おねえちゃんオシッコしてるっ！ オシッコしてるよっ！！」

「おねえちゃんおしっこだ、オモラシだよ！！」

アカネとリョウタが揃って気付き、園児達は声を上げながら砂場から飛び出した。

「ち、ちがうのっ、ちがうのおっ！！ おしっこ、でちゃうけど、……もう、おねえちゃんだから、オモラシしないの、オモラシしてないもんっ！！ ああああうう……っ！！ ほ、ほら、ぱ、ぱんつだって、汚してないんだからあ……！！」

混乱の中、3年前の悪夢を否定するあまりに、詩織は自ら屋外での排泄を認めてしまう。

詩織ははげしく腰を振っておしっこを塞き止めようとしたが、一度始まった少女のおしっこが止まるわけもない。両手が塞がったまま動こうとしたせいで詩織はさらにバランスを崩し、お城の上半分を押し倒してしまった。園児達が再び不満をあらわに大きく叫ぶ。

そして、なおも吹き出し続ける詩織のおしっこは、残るお城の土台、根元の部分を勢い良く直撃し、たちまちのうちにお城の入り口をえぐってゆく。

詩織が必死になって我慢を続けたせいか、股間から吹きあがる水流はまるでホースの先端を潰して庭に水をまくかのような激しい勢いだった。まるで怪獣の吐く光線で吹き飛ぶように、お城があとかたもなく消えてゆく。

詩織の猛烈なおしっこの前には、園児達みんなが力を併せた巨大なお城もまるで歯が立たない。みんなの憧れの『おねえちゃん』は、瞬時に暴れん坊の嫌われもの、オモラシっ子に変貌してしまった。

「おねえちゃんオシッコだめ！！ 止めて！！ お城くずれちゃう！！」

「そうだよ、ガマンしてよ！！ おねえちゃん、もうおねえちゃんなんだからちゃんとトイレでしなきゃだめだよ！！」

「あーんっ！！ あたしのお人形、おねえちゃんにオシッコひっかけられてるぅ！！」

「ひっどーい！！ オモラシおねえちゃん！！」

「オシッコ怪獣だよ！！ お城ぜんぶこわしちゃった！！」

「うえ、きたねー！！ どうすんだよ、もう遊べないじゃんかー！！」

園児たちが口々に叫ぶ。みんなの努力を破壊しつつ『オシッコ怪獣』を退治しようと、園児たちは精一杯の視線を詩織に投げつけた。

「やだ、とまって、止まってえ……！！！」

（おトイレ……しちゃうっ……み、みんなのお砂場、おトイレにしちゃってるぅ……！！）

じゅじゅじゅじゅっ、ぶじゅじゅじゅじゅうううっ！！

あまりにも盛大な『おねえちゃん』が、あろうことかお外ではじめたおしっこに、園児達の大部分は激しく非難を繰り返す。日ごろ自分たちのトイレのことは気にしていても、詩織のように大きな『おねえちゃん』が目のおしっこをするなんて考えられないのだろう。

「おねえちゃん、どうしておトイレいかなかったの？ おトイレじゃないところでおしっこしたらいけないんだよー？」

「そうだよ、おねえちゃん、せんせいにはい、オシッコいきたいですって言えなかったの？ ダメだよ？ あたしだってちゃんと言えるのに

ー！！」

そんな中でリウタとアカネは次々に詩織に話しかける。だが、ふたりにとってはおそらく悪気のない一言が、詩織の羞恥心を無残なまでにえぐってゆく。もう二度としないと誓っていたオモラシが、こんな最悪の形で起きるなんて、夢だと信じたかった。

たとえ下着は濡れていなくとも、おしっこを我慢できなかったのだからオモラシと同じことだ。

ぶじゅじゅぶぶばぼぼぼじゅばぼぼつ、じょろぼじゅるぶばぼぼぼつ……

「ぐすっ……終わって、はやく終わってよお……っ！！ やだ、もうやだあ……！！」

一体どれだけを我慢し続けてきたのかと言わんばかりに、詩織のおしっこは一向に止まらない。それがまるで、ずっとずっと『おしっこ』を言いだせなかった、トイレのしつけもなっていないことの証明のようで、詩織は泣きじゃくりながら腰を振りたてる。

見事にそびえていたお城は見る影もなく崩れ、詩織の作り出した大きな大きなおしっこの湖の中に沈んでゆく。『オシッコ怪獣』の大暴れはまだまだ続く。これくらいじゃ物足りないと吠え、足でぐちゃぐちゃとおしっこ砂でできた泥をかき回す。

流れ出した河は砂場を大きく流れ、真っ黒に濁っては白い泡を立ててどこまでもどこまでも続いていった。

(初出：書き下ろし 2008/02/29)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第8夜 ジェニーと豆の木

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 05/17/2008 21:38:02

BODY:

昔々、あるところにジェニーという女の子がいました。

ジェニーは両親の顔を知りません。ふたりともジェニーが産まれてすぐに死んでしまったのです。お父さんとお母さんの代わりに、親戚の夫婦がジェニーを引きとって育ててくれたのですが、この夫婦はたいそうイジワルで、ジェニーをまるで牛か馬のように朝から晩まで働かせるのでした。

とくにおばさんは、ジェニーが少しでも失敗をすると何時間も怒って、さらにたくさんの用事を言いつけるのです。

「何してるんだいジェニー！！ またテーブルが汚れてるじゃないかい！！ 庭の掃除もしてないのかい！？ まったくどうしようもなく不器用な子だね！！」

毎日毎日用事ばかりを押しつけられて、ジェニーは夜遅くまで働かされ、すっかりくたびれ果てて屋根裏部屋で粗末な藁のベッドに眠るのでした。

「……こんな生活もうごりごりよ！ ぜったいに逃げ出してやるんだから！」

けれど、そうやって決心してもジェニーはまだほんの小さな子供で、一人で暮らしていけるわけがありません。おばさんはそれを知っていて、ジェニーにわざと意地悪をするのです。

「なにやってるんだいジェニー、さっさと朝ご飯を作るんだよ！！ それが終わったら掃除に洗濯、裏の畑に小麦を撒くのも忘れるんじゃないよ！！」

ジェニーは今日も、おばさんに怒鳴られて家を出ました。

おしつけられた山のような洗濯物を抱えて、家の近くの川で洗濯をはじめました。これが終われば裏の畑を耕して麦を植え、それが終わったら家と納屋の掃除をして、隣村までお使いにこいて塩を買い、その後で口バに餌をやらなければいけません。

「ああもう……こんな毎日、もうイヤ……」

まだ半分も洗濯物が終わらないうちに、すっかりくたくたになって、ジェニーはとうとうごろんと仰向けになりました。

「こんなの夜までかかっても終わらないわ……それなのに、麦に掃除にお使いに口バの世話なんて……無理に決まってるじゃない……」

サボっていたことが分かればおばさんはまたものすごい勢いで怒るでしょう。けれどももうジェニーにはそんなこともすっかりどうでもよくなっていました。毎日毎日働きづめで、すっかりくたくたなのです。

「誰でもいいわ、ここから逃がしてくれたら、なんだってしてあげるのに……」

ジェニーがそうつぶやいた時でした。

「なに？ それは本当かね、お嬢さん。ぬっふっふっふっふ」

いきなり、ジェニーの目の前に妙な笑い声の男が現れたのです。男は背中に大きな荷物を背負っていました。

「あなた、誰？」

「ぬっふっふっふ。私は旅の商人だよ。怪しいものではない」

「とっても怪しいわ」

「ぬっふっふっふ。そんなことはないさ。それよりもお嬢さん、今の言葉は本当かね？」

身体を起こして呆れるジェニーには構わず、商人はふところをごそごそと漁ると、そこから小さな袋を取りだしました。

「もし、なんでもしてくれるというなら、君にこれを売ってあげよう。ぬっふっふっふ」

「なによ、これ？」

商人はジェニーの手のひらの上に、袋の中身をあけます。

それは金色をしたぴかぴか光る豆でした。

「ぬっふっふっふ。良くぞ聞いてくれたね。……これは魔法の豆だよ、お嬢さん。こいつはね、育てればたちまち大きな大きな豆の木になって、空の上までゆけるようになるのだ」

なんともうさんくさい説明でした。けれど、お空の上まで行ける、という言葉にジェニーはがばっと飛びつきます。

「ホント！？」

「ぬっふっふっふ。本当だとも。私はウソは付かない。その代わりお嬢さんには、空の上でやって欲しいことがあるのだよ」

「なんでもするわ！！ お願い、売ってちょうだい！！ あの家から逃げ出せるならどんなことだってマシよ！！」

さて、商人はジェニーに、豆の育て方や、空の上にある巨人の館の話や、そこにある宝物のことや、その中にある魔法の指輪を持ってきて欲しいということを説明したのですが……おばさんの家から逃げ出せるということにすっかり舞い上がってしまっていたジェニーは、逃げ出した後にはじまるばら色の未来を想像するのに一生懸命。そんなことはまるで上の空で、商人の説明は右の耳から左の耳へと抜けていってしまったのでした。

「……と、いうわけだ。分かったかね？ ぬっふっふっふ」

「え？ あ、ええと、うん、もちろんよっ！！」

「……なあ、本当に分かっておるのか？ なんだか私、激しく心配なのだが」

「何言ってるの、まかせてちょうだい！！ はい、じゃあこれ買ったわね！！ やったあ！！ やったわよーっ！！」

ジェニーは魔法の豆をばっと商人から奪い取ると、お使いのお金を残らず押しつけて立ちあがりました。

「……なあ、お嬢さん？ 本当かね？ 本当に分かっておるのかね？ 私もこれでいろいろとその豆を買うのに苦労しておってだな？」

「うるさいわねおじさん。私、もう行くわね。さっそく植えてみなくちゃ！！ じゃあねっ」

「あ、なあ、ちょっと待ってくれ！？ おい、お嬢さんっ？！」

うさんくさい商人も、途中の洗濯物もそっちのけで、ジェニーは大急ぎでおばさんの家に走ってゆきます。おいてきばりにされた商人は、ジェニーに豆を売ってしまったことをなんだかとても後悔しましたが、もうあとの祭りでした。

さっそく家に帰ったジェニーは、納屋から鋤を持ちだして裏の畑をせっせと耕し、植えるはずだった小麦をそっちのけで、そこに大切に宝物の豆を植えました。

「さあ、行くわよ！！」

ドキドキする胸を押さえ、ジェニーは慎重に地面をならして、ジョウロで水をまきます。

商人の話では、さっそく豆の木は芽を出して大きく大きくなるはずでした。

「……………あれ？」

けれど、いつまで待っても芽が出てくる気配はありません。しばらく眺めていたジェニーは、おそろおそろ豆を植えた場所に近寄り、覗き込みます。

地面はぴくりともしませんでした。

「お水が足りなかったのかしら？」

おかしいな、とジェニーはもう一度ジョウロにたっぷり水を汲んで、畑に撒きました。けれど、やっぱり豆は芽を出すどころかぴくりとも動きません。

「どうのこと？」

ジェニーがむう、と首を傾げた時でした。

「おや、どうしたんだいジェニー。なんでこんな所にいるんだい？」

運の悪いことに、おばさんが裏の畑にやってきたのです。おばさんは、とても夜までに終わることができない量の洗濯物をおしつけたジェニーが、もう畑にいるのを見て驚きました。

そして、水浸しになった畑を見て大きな声を上げます。

「ちょっと、なんだいなんだい！！ 畑がめちゃくちゃじゃないか！！ ジェニー！！ これは一体どういうことだい！？ あんたがやっただね！！」

ぎろりと睨まれて、ジェニーは思わずその場に立ち尽くしてしまいました。

「それに、洗濯はどうしたんだい！？ まさかほつぽってきたんじゃないだろうね！？」

「え、ええと…………」

ジェニーは魔法の豆のことに夢中になって、おばさんの用事をすっかり忘れていたことに気がきます。いまさらのようにもごもごと言いつけるジェニーですが、この意地悪なおばさんを相手に上手くごまかせるわけがありません。

おばさんは怒り、ジェニーに怒鳴りつけます。

「じゃあお使いもまだかい！！ ……まだなんだね！？ じゃあお金はどうしたんだい！！ ……ジェニー、まさか使っちゃったんじゃないだろうね！！」

「…………ご、ごめんなさい…………」

ジェニーは観念して、旅の商人から魔法の豆を買ったことを話しました。さすがに、この家から逃げ出そうとしていたことまでは秘密にしておきます。

けれどジェニーが謝っても、おばさんの怒りはおさまりません。それはそうです。おばさんはジェニーに無茶なことを言いつける意地悪をして当り散らすのが目的なのですから、ジェニーを許すはずがないのです。

「ふざけないでくれ！！ こんなくだらないものにお金を使っちゃったのかい！！ どうしようもないね！？ ほんとうにダメな子だよ、あ

んたは！！

「え、ええっと、それは……」

さしものジェニーも、こうやって怒り出したおばさんにだけは言い返すことができません。

「ジェニー！ そんなくだらないものはとっととを引っこ抜きな！！ 言いつけ通りちゃんと麦を植えるんだよ！！」

「だ、ダメよおばさん！！ せっかく植えた魔法の豆の木なのに！！」

「ええい、なんだいなんだい、あたしの言うことに逆らうのかい！！ 誰が養ってやってるのかも忘れたのかい！！ 聞き分けのない子だね！！ じゃあいいさ、罰として今日の夕飯は抜きだよ！！ 家にも入れてあげないからね、今日は表で寝な！！」

「そ、そんな、ひどいわ！！」

「ふん、反省するんだね！！ それとちゃんと用事は全部済ますんだよ！！」

ついつい魔法の豆の木をかばってしまったため、おばさんの大目玉が炸裂です。ジェニーはとうとう家から追い出されてしまいました。

そうして、なんとかジェニーがまるまる一日をかけて用事を終え、戻ってきた頃には外は真っ暗でした。秋もすっかり深まり、ぴゅうぴゅう吹きつける冷たい風に、毛布の一枚もないジェニーはぶるると身体を震わせます。

ジェニーは恐る恐る、家の扉を叩きました。

「お、おばさん……ただいま……」

「ふん、戻って来たのかい。用事は全部終わったんだろうね」

「う、うん……」

すっかりくたくたのジェニーですが、家の扉にはしっかりかんぬきがかかり、おばさんはまるっきり冷たくジェニーをあしらいます。

「おばさん、お願い……おうちに入れて……今日、とっても寒いのだよ？」

「ダメだね。言っただろう、今日は一晩表で反省するんだよ、ジェニー！！」

「そ、そんな……っ」

こうやって他に頼るものもなく、すがり付くジェニーを見て、意地悪なおばさんはいやらしく笑うのです。今日のおばさんはひととき頑固で、ジェニーをなんとしても家には入れないつもりのようなのです。

「お、おばさん……おねがい、勘弁して……」

「ダメだよ、反省しな。あんたみたいなダメな子はいっぺん思い知らなきゃいけないのさ」

「で、でもお……」

冷たい風の寒さに身体をよじり、ジェニーはなおも食い下がります。

大嫌いなおばさんに頭を下げてでも、ジェニーにはそうしなければならない理由がありました。

剥き出しの膝小僧をぎゅっと寄せ、スカートの前をぎゅっと握り。せわしなく小刻みに震える内腿。

「おばさん、お願い、……お手洗い……だけでもいいから……使わせてえっ」

そう。

だってトイレは、家の中にしかありません。お日様の出ているあいだから、日が暮れてもおおずと外で仕事をしていたジェニーには、一度もトイレを済ませる時間なんてなかったのです。

「……も、もう、我慢できないの……おしっこ……っ」

だから、ジェニーのおなかのなかでは、一日じゅう我慢続けたおしっこがちゃぽちゃぽと揺れているのです。これから外はどんどん寒くなってゆきます。そうなればもっともおしっこがしなくなって、とても一晩中なんて我慢がもつはずありません。

それなのに、おばさんはまったく取り合ってはくれませんでした。

「なんだい……、そんなことでわあわあ騒いでるのかいこの子は！？ ふん、ちゃっちゃと表で済ませてきな」

「そっ、そんなぁ！！ ……信じられないわ！！ だ、だってわたし、女の子なのにつ！！ 誰が見てるのかも分からないのに、お外で、おトイレ……おしっこなんかできないわよ！！」

ジェニーだって年頃の女の子です。女の子がお外でおしっこをするなんてとんでもないことなのです。洗濯の時は河原で。お使いのときは森の木陰で。裏の畑では茂みの奥で。納屋の掃除のときは口バのおしっこを見せつけられながら。

なんどもなんどもおしっこの誘惑を断ちきって、漏らしてしまいそうになりながら、やっとここまで我慢したのに。おばさんはまるでジェニーのことなんか考えてはくれないのです。

「うるさいねえ！！ あんたみたいなちんちくりんなんて誰も覗きやしないよ！！ おもてでしちまいな！！ ……いいかい、とにかく今夜は家にや入れないよ！！ わかったね！！」

「嫌よ！！ お、お外でなんて……せっかく、ずっとずっと我慢したのにっ！！ 、で、でちゃう、おしっこ出ちゃうのっ！！ おねがい！！ おばさん、お願いよおっ！！」

がたがたと扉を揺さぶり、叩くジェニーですが、かんぬきはがっちり扉を固定していて、ジェニーがいくら頑張ってもびくともしません。しまいには内側からおばさんに『うるさいは静かにおしっ！！』と怒鳴られ、ジェニーは途方にくれてしまいました。

あたりはすっかり真っ暗で、ジェニーは薄着のワンピース一枚です。

寒さは容赦なく、いっそう厳しくなってきます。吹きつける冷たい風に、脚の付け根がきゅうんっ、と疼き、ジェニーは縮みあがって『あんっ』とスカートの前を押さえてしまいます。ぞくぞくと肩が震えるのは、寒いからだけではありません。

「ふぁあんっ……」

背中を昇ってゆくむず痒さに、思わず腰をはしたなくくねくねとよじってしまいます。

ジェニーの我慢はとくに限界でした。なにしろもうまる一日、おしっこをしていないのです。ジェニーのおなかの中の秘密のカップには、もう縁ギリギリまでおしっこが注がれています。

もしおばさんの言う通り、物陰でおしっこを済ませてしまえば、どんなに気持ちいいことでしょう。

「だ、だめ……おトイレでなきゃ、嫌なの……」

それでも、ジェニーはくじけるわけにはいきませんでした。たとえどんなに意地悪をされても、女の子として譲れない一線があるので。ジェニーはぎゅっとスカートの前を両手で押さえながら、真っ赤になって周りを見まわします。

けれど、家のお外にトイレなんかあるわけがないのです。トイレがなければ、ジェニーはおしっこができません。

しんと冷えこむ外は寒く、とてもじゃないけれど一晩中、家の外で過ごすのは我慢できそうにありません。こくり、とからからの喉に唾を飲みこんで、ジェニーはふらふらと歩き出しました。

「……あとちよつとよ、納屋までいけば……」

せめてこの冷たい風をちょっとでもしのげれば、なんとか我慢が続けられるかもしれません。そうやってくじけそうになる自分の心を励ましなが、ジェニーは少しずつ歩いてゆきます。

けれど、もういくらなんでも限界でした。

「あ、あああ、だめ、だめえ……」

納屋までの道のりの途中、近道をしようとした畑のあぜ道の真ん中で、とうとうジェニーはしゃがみ込んだまま動けなくなってしまいました。

「で、ちゃう……う！！」

畑の真ん中、遮るものがない場所で、ジェニーの身体は自然の欲求に従って溜まりに溜まった水分を絞り出そうとします。なんとか我慢しようと思うのですが、ジェニーの身体はもう言うことを聞いてくれません。せめて下着だけは下ろそうと、腰を浮かして手を掛けた時でした。

「あああ、いやあ！！！」

ぶしゅるるるっ、じゃばばばば……

おしっここの準備が完全に整う前に、限界がやってきてしまいました。畑のすぐ側にしゃがみ込んだジェニーの足元で、下着があつという間に薄黒く染まり、そこから溢れ出した激しい水流が滝のように地面を打ち、畑を耕してゆきます。

「やだあ！！ 出ないで！！ おしっこ出ないでよお！！」

叫んでももう遅いのです。ジェニーは結局ほとんど我慢のできないまま、おなかの中のおしっこをたっぷりと出してしまったのでした。

「ああ……出ちゃったわ……ひつく……もう、赤ちゃんじゃないのに……オモラシなんて……ひゃんっ！？」

ようやくおしっこが止まり、ずるずると力の抜けるままに自分の作ったおしっここの水たまりの中に座りこんでしまい、さめざめと泣いていたジェニーでしたが、ふとおしりの下でもぞもぞと何かが蠢くのを感じて悲鳴を上げました。

得体の知れないなにかが、濡れた下着のしたを擦るように頭をもたげてゆくのです。まるで誰かにスカートの中をイタズラされているかのようなでした。

「ふぁ！？ な、なに！？」

反射的にぎゅっとびしょ濡れの股間を押さえこんだジェニーは、パンツの隙間からひょろんと伸びた黄金色のツルを見てあっと驚きました。

なんと、おしっこでできた水たまりの中から、きらきらと輝く豆の木が泥を跳ね飛ばしてによきによきと伸び始めていたのです。

「う、うそ、これ……」

見ている間に豆の木はぐんぐんと大きくなり、夜空のお月様に向かって伸びてゆきます。ジェニーが地面に染み込ませたおしっこをたっぷりと吸って、魔法の豆の木はうねうねと動き、見る間に大きく伸び上がって、何枚も大きな葉っぱを広げました。

「……あのおじさんの言ったこと、やっぱりホントだったのね……！！」

ジェニーは大喜びし、慌てて豆の木にしがみ付きました。これを登れば雲の上の国にいけるのです。

びしょ濡れのパンツはすこし邪魔でしたが、そんなことを気にしている場合ではありません。この機会を逃してしまえば、豆の木はすぐに枯れてしまうかもしれないのです。ジェニーは気合いを入れると今もなお大きく育ち続ける豆の木を登り始めます。このときばかりはおてんばジェニーの木登りテクニックが役立ちました。

ほんの少しすると、ジェニーはあっという間に空の上にはいました。はるか地面の下には小さくなった家があり、その近くではおばさんがわあわあっと叫んでいます。どうやら大きくなりすぎた豆の木にさすがおおばさんもすっかり驚いて、起きてきたようでした。

おばさんは必死に家のほうを指差し、何かを叫んでいます。でも遠すぎてジェニーの耳には聞こえませんでした。

それに、ジェニーにはもっと他に気になることがあったのです。

「んっ……」

空の上はとても寒く、ジェニーはぶるると背中を震わせます。

さっきもオモロシをしたばかりでしたが、実はジェニーは全部おしっこを出しておなかをからっぽにできたわけではありませんでした。オモロシが嫌でなんとか途中でおしっこを止めることができたため、ジェニーのおなかにはまだまだかなりのおしっこが残っており、さっきおしっこで濡れてしまった下半身があっという間に冷えてしまったのも手伝って、いつのまにかジェニーはまたまたおしっこをしたくなっていたのでした。

けれど、お空の上の豆の木に、おしっこのできる場所——トイレなんてありません。

「どうしよう……またおしっこ、出ちゃいそう……」

きよろきよろと辺りを見まわすジェニー。すると、地上から小さな声が聞こえます。

「ジェ、ジェニー！！ やめておくれ！！ もう、もう家が壊れちゃうよ！！ これ以上おしっこはしないでおくれ！！」

なんと、地上ではおばさんが必死の形相で叫んでいます。その近くではそれこそ豆粒のように小さくなってしまった家がぎしぎしときしんで、いまにも崩れそうに傾いていました。

どうやら、大きくなりすぎた豆の木はとうとうジェニーのおばさんの家まで踏み潰してしまいそうになっているようでした。ジェニーのおしっこがこの豆の木を大きくしたのを知ったおばさんは、ジェニーにおしっこをしないようにと叫んでいるのです。

けれど、ジェニーはもう我慢できそうにありません。

「……ふんっ、いい気味よ！！ おしっこなんかお外でしなさいって言ったのおばさんだもの！！」

「や、やめとくれ！！ お願いだよジェニー！！ お、女の子がオモロシなんて恥ずかしいと思わないのかい！！ ちゃ、ちゃんと降りてきてトイレで済ませるんだよ！！」

「……し、仕方ないじゃないの。ほかにするところもないんだもの。し、下までなんて我慢できないし、……それに、一度オモロシしちゃったんだから…… 2回も3回も一緒よ！！」

とうとう覚悟を決めて、ジェニーは近くの枝にまたがると、しがみ付いたままおなかの緊張を解きます。

今度はジェニーも遠慮はありません。さっきよりも激しく、ぶしゅうと激しく噴き出したおしっこは、下着を通り越しても勢いを衰えさせることなく、ジェニーのまたいでいた豆の木を直撃しました。太い枝にぶつかって飛び散るジェニーのおしっこは、細かい飛沫になってあちこちに散ってゆきます。それはまるで、金色の雨のようでした。

今度は直接ジェニーのおしっこを浴びた豆の木は、みみしと音を立てながらさっきよりも速く大きくなり始めます。

「あああ、家が、あたしの家が——っ！！！！」

豆の木はあっさりとおばさんの家を飲み込み、踏みつぶしてしまいました。

たつぷりとジェニーのおしっこを吸いこんだ豆の木は、ますます天高く伸びてゆき、とうとう三日月の端っこに届いてその尖った先端に絡み付きました。

きっとあそこが空の上、雲の上にある国なのでしょう。

「ふう……すっきりしたわ！！」

二度のオモラシでおなかのなかをすっかり空っぽにし、身軽になったジェニーは、水を吸ってびしょ濡れになった服の裾をばたばたと払いながら豆の木登りを再開したのでした。

——めでたし、めでたし。

(初出：おもしろ特区 S S 図書館 2008/02/29)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 冬の電車の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 02/29/2008 23:13:30

BODY:

寒風の吹く1月末。コートにマフラー、手袋と防寒対策に身を包んだ人々が、一様に階段を昇り改札をくぐる。都心から電車で1時間という郊外の立地にふさわしく、朝の7時半過ぎともなれば、駅には雑踏が絶えない。

(はやく、はやくっ……)

そんなせわしない朝の雑踏の中を、早足で駆けてゆく少女の姿がある。

近所でもそれなりに有名な私立の中学校の制服を、しわひとつなく着こなしたショートカットの少女。長いマフラーとコートをしっかりと着込み、その一方でソックスの上は剥き出しの太腿が覗いている。良く見る登校の風景でありながら、どこか周囲の注目を集めているのは、彼女がどこか焦ったような表情を浮かべ、人ごみをかき分けるようにして先を急いでいるから。

時計を見れば確かに遅刻を焦る時間だが、少女の表情の必死さはそれ以上のなにかが含まれているようで、行き交う人々は何の気なしに白い息を上げる少女を振り返る。

そんな注視を振りきるように——あるいは気付きもしないまま、少女は混雑するエスカレーターを避けて、階段を手摺りを使いながらひよこひよここと昇ってゆく。

(はやくう……っ……ふああ!?)

時折、ぴくんと肩を震わせて、持ち上げた足が制止する。階段の隅っこで立ち止まってしまった少女を、すぐ後ろを歩いていた背広姿の青年がいぶかしげに見つめ、仕方なしに迂回してゆく。

(や、やだっ……またあ、急に……っ……っはあ、…さ、さっきまで、ぜ、全然、へいきだったのに……っあ、……ダメえ……まだ、っ……あ、あと、もうちょっと、だからあっ……)

ぎゅっとくっつけ合わされた剥き出しの膝が、小さく震える。前かがみになって、少女はコートの上、おなかの上あたりをきつく掴んだ。

見るものが見れば、それは単なる寒さゆえのものではないのは明らかだ。

彼女——佐々原ユミは、

(お、おしっこお……、でちゃう、……はやくっ、トイレえ……っ)

いまや、絶えがたいほどの尿意との戦いの中にいた。

ユミは4人きょうだいの末っ子だ。歳の離れた姉2人と兄は、それぞれもう社会人として働いている。昨日はめずらしく全員が夕飯前に揃ったので、みんな少し早い忘年会とばかり飲めや歌えの大騒ぎとなった。

同席したユミもその場の気分に圧されて断りきれず、ついつい勧められるままにビールのグラスをぐいぐいと空けてしまった。

もちろん未成年の飲酒は厳禁で、あっさり酔っ払ったユミはシャワーも浴びれずにそのまま夢の中。下の姉がどうにか着替えさせてベッドに運んだものの、そのまま朝まで夢も見ずぐっすり、目覚ましにも気付かず、飛び起きた時にはいつもとつに朝ご飯を終えている時間だった。

大慌てで支度を整え家を飛び出したのが15分前。

この時ユミは動転していて、トイレに入ることすら忘れていた。それがどんなに重大な事態を及ぼすものか、気付きもせずに。

異変は間もなく起きた。家を出て数分もしないうち、ユミは強い尿意に襲われた。

ここでユミはようやく、自分が昨夜の夕飯前から一度もトイレに行っていないことに気付いた。一旦家に駆け戻ろうかという考えが頭をよぎったが、時計を見ればそんな余裕はあまり残っていない。引き返していたら電車を一本乗り過ごしてしまうのは確実で、その次の電車だとかなりの確率で遅刻コースだ。

(し、仕方がないわね……駅までの我慢よっ……)

結構厳しい状態だが、急いで10分程度の距離ならば我慢も持つだろう。なによりも、トイレが原因で遅刻なんて惨め過ぎる。そう判断して先を急ぐことにしたユミは、程なくしてその判断をひどく後悔することになる。

(うあ……や、やだっ！？ な、なんで、こんな急に……)

肝臓でのアルコールの分解と、胃や食道粘膜からの直接吸収がもたらす利尿作用の相乗効果は、これまでにユミが経験したことのあるものをはるかに超えるレベルで代謝機能を活性化させていた。

睡眠中は体が横たえられているため、膀胱に溜まったおしこの重みは分散して感じにくく、起きたばかりの身体は自律神経が鈍く、尿意を覚えにくい。本来ユミが我慢を許容できるのよりも遥かに多いおしこが、同時に少女の下半身を襲っているのである。

加速度的に高まる尿意は、あっという間にユミの下半身を占領し、その行動までも制限してしまった。早足になることもできず、歩幅まで小刻みに小さくなる。腰は知らないうちに左右に振られ、緊張した下腹部にはかすかに痙攣しているかのよう。

排泄欲だけに支配されたユミの身体は、切々とその限界を訴え、尿意の解放を望んでいる。

「はあ……っ」

ようやく階段を昇りきり、ユミは手摺りにつかまって大きく息を吐く。

もはや尿意は限界に近く、いつ崩壊してもおかしくないほどののびきならない事態である。階段の途中で三回も立ち止まって決壊を堪えたほどだった。これならばじめからエスカレーターのほうがよっぽど早く着いただろう。

(は、はやく、トイレ……漏れちゃう……！！)

こんなにもトイレのことで焦ったのは、産まれてからも初めてだ。一刻も早くおしこがしたい——トイレに入りたい。頭の中をそのことだけでいっぱいにして、ユミはふらふらと改札口へ急ぐ。

(っ、……あとちょっと、…ガマン、ガマンっ……)

そうして呪文のように我慢という単語を繰り返し、辿り着いた駅の構内にも、すぐにはユミの求める安息の場所はない。

駅の多くがそうであるように、この駅にも改札口の内側にしかトイレがないのである。ユミはぎゅっと下腹部にむずがゆい熱を堪えたまま、身をよじて制服のポケットから定期を引っ張りだす。毎日繰り返したいつもの動作だというのに、今日はそんな些細なことまでがもどかしい。

(うう……っ)

こみ上げてきたうめき声を喉の奥に飲みこんで、ユミは自動改札の列に並んだ。

ここを通り抜ければトイレは目の前。もうすぐおしっこができる——ユミはそう自分に言い聞かせ、汗ばんだ手のひらで定期券を握り締めた。本来は通学のための定期券だが、今のユミにはこの定期こそがトイレに辿り着くための大事なパスなのだ。

（あとちょっと……！！）

はやる気持ちをおさえ、ユミが早足で自動改札を抜けようとしたその時だ。

ばちんっ、という音と共に赤いランプが光り、警告音が鳴る。

「え……っ」

左右から飛び出した自動改札の通行防止板に行く手を遮られ、急いでいた勢いのままにユミはがくんとつんのめってしまう。

（ああああ？！）

ちょうど突き出した板が、コートの上からぎゅっとユミの下腹部を圧迫し、ユミは反射的にびくんと背筋を跳ね上げた。ただでさえ余裕のないほどずっしりをおしっこを詰めこんだ膀胱が、外からの圧力に無理矢理押し潰される。

（っ、ダメ、だめえ……が、っ、がまん、ガマンしてっ……！！）

鞆を持った手で尿意を捻じ伏せ、慌ててもう一度定期を改札の読み取りに押しつけるが、結果は同じ。繰り返されて浮かんたメッセージは、定期の期限が昨日で切れていたことを知らせていた。

答えは明白。

このままでは、トイレに行けない。

（う、ウソおっ……！！）

よりによってこんな時に——悲鳴を上げそうになったユミの後ろで、並んでいたおじさんがことさらにはっきりと舌打ちをした。不機嫌そうな表情で、列の後ろの人々が隣の改札に迂回してゆく。

人の流から切り離され、立ち止まってしまったユミの背中を、我に帰る暇もなくイケナイ感覚がじわじわと這い登る。冬の冷気がスカートの下に忍び込んで、下着の上を滑ってゆく。

（ふああああんっ……！！）

たまらずユミは身体をよじった。通行禁止となった自動改札の中で、もじもじと剥き出しの膝が擦り合わされる。

もう目の前に見える、トイレの入り口と男女のシルエットを示すマークが『おしっこのできる場所』としてさらにユミの尿意を煽った。そこに辿り着くには、ほんの数十歩を走れば済むのに、それが許されない。

そうこうするうちにも、ホームからはブルルルル、と電車の発着を知らせる合図が聞こえてくる。ちょうど今まさに出発せんとしているのが、ユミがいつも乗っている電車の1本あとだ。

この次の電車では8割方遅刻コース。

時間がなかった。ぐずぐずしていたら次の電車も、おしっこも、どちらも間に合わなくなってしまう。

（っ、急がなきゃ……）

「あ、あの、すいません、通してくださいっ」

どんどんと後ろから詰めかけてくる人ごみを掻き分けながら、ユミは声を上げる。おなかの中で暴れ回るおしっこをぎゅっと押さえ付け、ユミは唇を噛んで切符を買いに戻らねばならなかった。

やっぱり混雑していた自動販売機で切符を買って、ようやく改札口を抜けた時には、次の電車が来るまであと5分も残されていなかった。これはいつもユミが乗っている電車の2本後のもので、途中から各駅停車になるためにおそらく到着はタイムリミットギリギリ。これを逃してしまうと完全に遅刻してしまう。

「はあ……う……っ」

スカートの奥できゅんと疼く膀胱に、ユミは切ない声を押し殺す。

(でも……こ、これで、やっと……トイレ、いけるっ……)

待望のトイレまであと5m。本当にほんのわずかな距離。これまでの我慢に比べればほとんど誤差のようなもので、個室に飛びこむまで10秒もかからないだろう。

だが、その5mはあまりに遠かった。

冬、1月という季節は決して甘くはない。

我慢の末にようやく辿り着いたはずの安息の地には、ずらりと並ぶ大行列がユミを待ち構えていたのだった。

(っ、はやく、おねがい、はやくっ……)

ただでさえ、朝の駅は多くの人が行き交い、トイレを利用する人も多い。まして寒さの厳しい冬にはどうしてもトイレが近くなる。さらに1回の利用に時間のかかる婦人用のトイレは、必然的に大渋滞となるのだ。

列に並んだ自分がいつ個室に入って用を足せるのか——まったく見当がつかない。

ふだんから駅のトイレの存在など気にも止めず、まして利用した経験もほとんどないユミには、まるで想定外の状況だった。

あんなに頑張っても自販機の列に並び、ほとんど、このトイレに入るために買ったような切符を握り締め、ユミは理不尽なまでのトイレの順番待ちを強いられていた。

(あと10人……一人おしっこするのに1分として、あと10分だけど、でもっ、個室もつとあるはずだから、もっと早く……お願い、トイレはやく行かせて……っ、でちゃう、おしっこでちゃう……っ！！)

ぐいぐいと前押さえを続ける明らかに尿意の限界に近い少女を見て、後ろに並ぼうとしていた数名の女性が距離を取っていた。万が一のための防衛対策である。

「あ、あっ……」

こめかみに汗を流し小さく悲鳴をあげるユミの様子をみればそれも仕方のないことだ。

くつくつとおなかの奥で似え滾るおしっこが、ユミの括約筋をこじ開けんばかりにうねる。膀胱が収縮し、一晩かけて抽出されたおしっこを絞り出そうとしているようだった。

(嫌……オモロシなんか、しないんだから……)

なんとしても、なにがなんでも、トイレまで我慢しなければ——ユミが乙女のプライドにかけて、絶望的な決意をした、その時だった。

プルルルル……

(ええ……っ！？)

そんなユミをさらに急がせるように、ホームのほうからベルが響く。まもなくの列車の到着を知らせるアナウンスが続いた。

反射的に時計を見れば、リミットまであと1分もない。

もうすぐ、最後の電車が来しまうのだ。

(ど、どうしようっ……)

ただでさえ残り少ない時間が、迷っているうちにどんどんと短くなっていく。けれど目の前のトイレ待ちの列は絶望的なまでに長く続いている。どんなにユミが心の中で願っても、電車が来る前に順番が回ってきそうには思えなかった。

いや。もし仮に、今すぐ個室に入れたとしても、おしっこが全部終わるまでには電車が来しまう。

……遅刻か、トイレか。

ユミにはもはやその選択肢しか残されていなかった。

あまりにも非常な二択——けれどその時、ユミの脳裏に天啓が走る。

（——そ、そうだっ！！）

電車の、トイレ。

車内にもちゃんとトイレはある。しかもそこなら、こんなにも苦しい思いをして何分も我慢しなくてもいい！！

「くっ……」

そこまで思いつけばあとの行動は早い。

ぐっと歯を噛みしめ、階段を1段飛ばしで駆け下りる。ただでさえじんと張り詰めた下腹部が、揺さぶられて尿意をきつくする。

1歩ごとにどんどんと高まる尿意の波を必死で堪え、ユミはホームへと走った。

（っ、お願い、間に合って——！！）

ホームにはすでに電車が来ていた。そろそろと人が乗り込み、発車ベルが鳴り響いている。

あの奥に、トイレがある。

遅刻も、トイレも、両方が間に合う！！

（急げ……っ！！）

だんっ！！

まさにベルの鳴り終わったその直後、ユミは閉まりかけたドアの隙間に滑りこむ。

「っは、はあ、はあっ……」

ばたん、と閉まるドアに寄りかかって、反射的にぎゅっとおなかをおさえる。ホームでは、駅員さんが駆けこみ乗車は危険なのでやめくださいと繰り返しアナウンスしていた。

（っ、ごめんなさい、でも……き、緊急事態なんだもんっ……しょうがないじゃないっ）

それでも——とりあえず、間に合った。

遅刻の問題は、万全ではないけれどこれで解決したのだ。ユミはほっとの溜息をついた。

きゅうっ……

（くっあ…！！）

だが、もうひとつの差し迫った問題はそんなユミに安堵の時間を許してはくれない。急激な運動を引き金に、圧迫された膀胱がおしっこを無理矢理絞り出そうと尿意を増す。ぷくりと膨らみそうになった排泄孔に、ぐっと悲鳴を飲み込んで、ユミは直ちに行動を開始しなければいけなかった。

（と…トイレ……っ）

おなかの中でぐると渦を巻き、暴れるおしっこをなんとかなだめ、がたごとと揺れる通路を歩いて、車両の中を移動する。

本音を言えば駅のトイレなんかよりもさらに使いたくはないけれど、もうこうなれば覚悟を決めるしかない。この電車の中のトイレを使っておしっこを済ませてしまうのだ。

（は、恥ずかしいけど、しかたないってば……！！）

男女共用のトイレ、というのはそれだけで思春期の女の子であるユミにはかなり抵抗のあるものだったし、本来のトイレとは違う、金属製の便器やお世辞にも清潔とは言いたくない水、壁の1枚向こうには大勢の男の人もいて、ひょっとしたら色々な音が聞こえてしまうかもしれない。

それになにより、走り続ける電車の中でおしっこを済ませる、ということがとても異常なことのように思えて、これまでユミは一回も電車の中のトイレを使ったことがない。

……だが、それでもお漏らしよりはずっとマシだ。もはやそんな選択をしなければならないくらい、ユミの尿意は限界に近付いている。

しかし——

そんなユミを嘲笑うかのごとく、運命は残酷だった。

前から2両目の座席シートの隣にあるトイレの入り口には、はっきりと赤い『使用中』の文字があった。

（な、なんでよお……っ！？）

ここまで来ると、不幸というよりもなにか悪意があるようにすら思えてくる。まるで世界じゅうがユミにおしっこをさせまいと共謀しているかのようだ。

まるで壁があるかのように、ドアは硬く閉ざされていて動こうとしない。まるで封印のように、『使用中』の文字がユミの行く手を遮っている。

切望を裏切られた衝撃にふっと暗くなった視界で、『使用中』の文字がぐにやぐにやと曲がり、『残念、ユミちゃんはおしっこできません』という文字に変わってゆく。

「はうっ……！？」

思わずノックをしてしまおうかと、ドアに近寄りかけたユミだが、それでは自分がおしっこが我慢できないほどしたくてたまらないのを電車の中の人たち全員に教えてしまうのと同じ事だと気付いて、辛うじて思い止まる。

それにもし中に入っている人が男の人だったら。そこまで思い当たって、ユミはぞっとした。

とにかく落ち付いてじっと待つしかない。幸いなことに、他にトイレの側に立っている人はおらず、待ってさえいれば次は確実にユミの番だ。

（っ……でも、こ、こんな所にずっといたら、次にトイレ入りたいんだって思われちゃう……おしっこ、我慢してるって気付かれちゃう……！！）

トイレに入る瞬間に、一人二人に気付かれるくらいならもうこの際構わない。しかしいつになるのかも分からない順番を待ち続けている姿は、あきらかにユミがトイレに入りたがっていることを、周りの人たちにはっきりと知らせてしまうことになる。

目的地のちゃんとしたトイレまで我慢できないくらい、おしっこがしたくてたまらないのだと——そう宣伝しているようなものだった。

「……………っ」

眉をしかめ、震える顎をおさえ、さりげなく距離をとりながらユミはトイレからふたつ乗車口を挟んだ吊革まで移動した。

目の前ではスーツのお姉さんがマフラーに顔をうずめて居眠りをしている。これなら少しくらいユミが不審な動きをしても気付かれないだろう。

本当なら乗車口のドアにおしりを押し付けて、我慢の仕草も見えないようにしたいのだが、外の風が吹きこんでくるドアの近くは立っただけで辛い。それに向かいの電車や線路に並行する道路から見られてしまうかもしれない。

いちど意識したことで過敏になった羞恥心は、ユミを不必要に疑心暗器の渦へと落とし込んでしまう。

(ふうう……っ)

ざわざわとおちつかない、危険水域の恥ずかしいダムをスカートの奥に抱えながら、ユミは引きつり始めた内腿をごまかすように、そとおしりを揺すりはじめた。

小刻みに繰り返されるその場足踏みと、時折きゅうっと噛み締められる唇。できるだけ自然な風を装いながらも、不自然さでいっぱい手の指が、鞄の下でスカートの裾を掴んでいる。

(ま、まだ……？)

何度も何度もトイレのほうを振り向いては、ドアのロックを確認する。ユミにしてみればできる限りさりげなく見るようにしているつもりなのだが、その格好はもはや誰が見てもはっきりと、『トイレの順番を待ちきれない女の子』だった。この光景をカメラに収めれば、そんなタイトルがしっくり来るほどだろう。

(もうっ、まだなの？ ……早くしてよお……っ)

揺れる車体の傾きが、いっそうユミの我慢を加速させる。時折硬直する少女の身体は、限界へのカウントダウンを教えているかのよう。一つの波を乗り越えるたびに、最後の瞬間は刻一刻と迫ってくる。

我慢に我慢を重ねやっとなぞぎ付けた待望のトイレを前にしながら、ユミの膀胱はいつまでも『おあずけ』を喰わされていた。ちょっと油断すれば、トイレでもなものにおしっここの準備をはじめてしまいそうになる股間を必死に押さえつける。

しかし、焦る気持ちとは裏腹に、まったく順番は回ってこない。たった一人だけ、自分の前には列もなく、次はユミがおしっこできる順番のはずなのに。

(お願い……はやく、はやく、おしっこさせてえ……っ！！)

は、は、という荒い息ももう聞こえない。大きく動けばそのままダムの崩壊が始まってしまいそうなのだ。アルコールという成分がもたらす尿意は、自然のそれとは遥かに違う、あまりに暴力的な刺激である。一呼吸ごと分解が進み、新たに精製をされたおしっこが膀胱の中に注ぎ込まれる。ずっしりと重さを増す恥ずかしい液体が、ユミの下腹部を膨らませ、ベルトをきゅうきゅうと締め付ける。

(っ、漏れちゃうう……っ)

かり、と吊革に細い指の爪が立てられる。いうことを聞かない足の代わりに、吊革にぶら下がる滑稽な姿勢。ユミの足は小さく震え、いまにも崩壊しそうな脚の付け根のおしっここのダムを塞ぎ止めるのに精一杯で、まともに立っているのもむずかしい。

悲痛な少女の胸のうちなどお構いなしに、いつまで経ってもドアは開かず、硬く閉ざされた『使用中』の文字だけがユミの前にそびえていた。

(こんなに待ってるんだから、と、途中でいいから、はやくおしまいにして出てきなさいよっ……！！)

苛立ちながら足踏みを繰り返して気を紛らわせ、じっとトイレのほうを睨み、ドアの奥に見えない相手を想像して、心の中で文句をぶつける。

ほとんど八当たりの理屈なのだが、切羽詰った尿意と必死の綱引きの最中にあるユミにしてみれば、ずうっとトイレを占領している相手のほうがよほど理不尽に思えてしまうのだ。

まさか、自分がトイレを使いたいのを知っていて、わざと中に閉じこもっているんじゃないかと、見えない相手にそんな悪意までを想像してしまうほどだった。

そんなユミをさらに追いたてるかのように、スカートの下で下腹部が痙攣を始めた。

きゅんっ……きゅう……っ

(ふああああ！？)

さっきよりもさらに強く鋭い、膀胱が絞り上げられるかのような強烈な尿意の大津波だ。もうぱんぱんに膨らんではちきれそうなおなかの中の水袋が押し潰され、無理矢理追加された中身が出口へと滲み出す。

「っあああっ……」

押し殺した悲鳴と共に、ユミは鞆を下げた手の甲でぎゅっと下腹部の下あたりをおさえつけてしまった。吹き出しそうになる恥ずかしい水流をなんとか乗り越えようと、ユミはぎゅっと目をつぶった。

(や、だあ……っ、だめ、もう立ってたら、ガマン、できなっ…)

大自然の摂理に伴って押し寄せる怒涛の尿意に対し、少女の抵抗など儚いものだ。脚の付け根の堤防は今にも決壊しそうに痙攣し、軋み、滲み出す濁流の先走りに細い隙間が今にもこじ開けられそうになる。

(っ、だめ、だめだめええ……っ！！ ガマンして、ガマンするのおっ……)

下着に広がるじわあつ、とした熱い感触。

声にならない悲痛な叫びと共に、ユミは腰をヒクつかせ、爪先立ちになって吊革に体重を預けながら、ぐりぐりと身体をねじった。

だが、立ったままの姿勢ではガマンにも限界がある。足がふらついて太腿をぎゅっと閉じ合わせるのも難しく、片手は吊革、もう片手は鞆で塞がっているのだ。

(っ、やだ、でっ…でちゃう、でちゃううっ、～～ッ……！！)

絶体絶命のもじもじダンスの真っ只中にあるユミは、とうとう訪れた崩壊の予兆に、か細い悲鳴を上げてぎゅっと吊革を握り締めた。いまにも崩れ落ちてしまいそうな腰を保つため、頼りない足の分まで吊革に体重を預ける。

せめて、手と足を十分に使って我慢すればこの尿意もやり過ごせるかもしれない。しかし立っている今の状態ではそれは叶わない。腰は砕け、今にもしゃがみ込んでしまいそうになる。それがおしっこを我慢するのに一番危険な体勢だと分かっているのに、力の入らない足ではそれも上手くいかない。

大勢の人が乗っている電車の中で、まるで幼稚園児のようにはしたなくもスカートの前を押さえ込むユミ。

金属製の手摺りや座席の角といった、『ちょうどいい場所』が次々とユミを誘惑する。あそこに思うさまパンツの股間を押し付けて腰を揺ることができれば、おしっこの孔を塞いで堰き止めることもできるはずなのだ。

その時――

『倉橋、倉橋です。お降りの方は足元にお気を付けください。向かって右手のドアが開きます』

アナウンスと共に電車が次の駅のホームに滑りこむ。

何人かの乗客が立ちあがり、ぞろぞろと乗車口に向かう。

ユミの目の前の席に腰掛けていたスーツの女性も、合わせて席を立った。

「……あ」

女性が席を立ったその後に、縞模様の空白の座席シートがぼかりとできあがる。

（あ、空いたっ……！！）

ほとんど倒れこむように、ユミはその席に飛びついた。荷物を抱え込むように深く腰を下ろし、同時にできるかぎりのさりげなさを装って（と、本人は思っていた）スカートの前に鞆の角を押し付けてぐいぐいと股間を押し上げる。

（んんうっ……っ、ふぁ……）

そこは、本来ユミが待ち望んでいたトイレではなかったが、尿意からの解放という意味ではまったく的外れでもない。

これまで禁じられていた分、両手での前押さえの効果は靦面だった。じんと痺れるような股間の疼きが、手の力を借りたガマンによってわずかにだが和らいでゆく。

疲弊していた括約筋をねぎらうような気持ちで尿意を押さえ込み和らげるその行為は、ある種擬似的な排泄であり、いっそ快感すら覚えるほどだ。

ユミがしばらくその体勢で尿意の様子を窺っているうちに、電車のドアが閉まり、発車ベルと共に不安定に揺れた速度が次第に増してゆく。

がた、がたん、がたん……

「はぁ……っ」

列車を揺らすかすかな震動に合わせるように、リズムカルに股間を押さえながら、ユミはどうか危機を乗り越えた安堵に溜息をこぼす。

下半身に刺激を与えないようそと座る位置を直し、ぎゅっと脚を閉じ、さらなる尿意の波に備え、我慢のための体勢を整える。

（お、落ち付いてきたみたい……）

限界に近い波を辛うじて乗り越えた反動のせいか、膀胱はいくらか落ちつき、尿意もわずかばかりの安定期に入ったようだった。電車が目的地につくまとなるとまだ予断を許さないが、せめてトイレが空くまでくらいならガマンを続けることができそうな気がした。

「ねえ、ちょっと？」

どうにか勝ち取った平穏の中、ほっと胸を撫で下ろすユミに、不機嫌そうな声が掛かったのはその時だ。

（え……っ？）

ふと気付いて顔を上げれば、周囲から向けられる奇異の視線。

混み合う車内の多くの人々が、ユミに注視を向けていた。その中心にいるのは、マフラーを巻いたスーツ姿の女性。さっき席を立ち、電車を降りたはずの彼女だった。

「あなた、そこ……優先席よ？ 座りたいのは分かるけど、ダメでしょう？」

「あ……」

そしてユミはようやく理解する。

あろうことか、ユミはたった今、スーツの女性が足を怪我した男性に譲ろうとしていた優先席を、まるで横取りするように占領してしまっていたのだった。

状況を理解できないユミに、スーツの女性は不機嫌そうな顔をして告げる。

「あなたも、具合、悪いのかしら？」

「え……あ、あの……っ」

突然の事態に混乱し、はっきり頷くことも否定することもできず、曖昧な答えを口にしてしまうユミ。

「……そうよね。やっぱり違うのよね？ だったらこの人に譲ってあげて。それがマナーよ」

教え諭すような口調ながら、女性の言葉には有無を言わせない迫力があつた。

いっそユミがウソであろうと気分が悪いと答えでもすれば場も収まったのだろう。しかし、ユミの曖昧な返答はまるで答えをごまかしてうやむやにしておもう、という態度に捉えられてしまっていた。

たちまちのうちにユミに対する周囲の視線は『しつけのなっていない子供』に対するものへと変化してゆく。

「ほら、早くしてちょうだい」

「あ、え、えっとそのっ……」

動揺のもたらした高度の緊張が、せっかくおさまりかけていた激しい尿意を再び呼び戻してしまう。座席の上でもじもじと反応しはじめてしまった下半身をもてあまし、ユミには思うように立ちあがることも許されない。

（あ、くうっ……！！）

アルコールの魔力がもたらした大量のおしっこがおなかの中で激しく暴れている。少女の手のひらが汗ばんで、きゅっと鞆を握り締める。

いくら言っても言うことを聞かず、俯いてばかりの少女に対し、スーツの女性は次第に苛立ちをあらわにしていた。

「ねえ、どうしたの？ 黙ってちゃわからないわよ？」

「あ、あのっ……」

尿意の波に襲われながら、ユミは辛うじて唇を動かす。カラカラの喉では思うように話もできそうにない。

立ちあがろうにも、ぴくぴくと引きつる股間の括約筋は、腰を下ろしていることで辛うじて均衡を保っているのだ。慎重に身体を動かさなければ、ガラスのように敏感になった脆い排泄孔はたちまちひしゃげて、おしっこをそこらじゅうに撒き散らしてしまう。

（だ、だめ、……いま、立ったら……でちゃう……っ！！）

ユミにははっきりとした予感があつた。いや、もはやそれは予知といってもいいほどに確実な未来だ。

「ねえ、あなた……？」

「す、すみませんっ……あの、っ、……わ、わたし……っ」

とうとう堪えきれず、ユミのおしりがもじもじと揺すられ始める。座席の上にぐりぐりと股間をねじ付けるように腰をよじって、ユミは羞恥の告白をしてしまった。

「と……お、トイレ……っ」

「……お手洗い？」

怪訝そうに聞き返す女性に、ユミは小さく頷いて声を絞り出す。

「そ、その……わ、わたし、……お、おしっこ……っ」

（も、漏れちゃうんですっ……立ったら、出ちゃうんですッ……！！）

トイレに行きたい。おしっこが漏れそう。立ったらガマンできない。

その三つの事実を、ユミは切羽詰った下半身を必死に押さえこみながら、途切れ途切れに口にする。しかし、その態度は逆にますます女性を呆れさせてしまっていた。

「……ならなおさらよ。はやくお手洗い行ってくればいいじゃないの」

出来の悪い子供に諭すような口調。

そもそも、優先席は身体の不自由な人や具合の悪い人、おなかに赤ちゃんがいる人などが座るべき席だ。ただかおしっこがしたいくらいで、座ることは許されない。優先席はおしっこを我慢するための席ではないのだから。

スーツの女性にとって、ユミが並べ立てる言葉は、いいわけにも何にもならなかった。

「なにやってるの、ほら！！」

「ッ……や、やああ！！」

ユミを立たせようと伸ばされた女性の手を、反射的に振り払ってしまう。

はたかれた手のひらを呆然と見下ろし、とうとう女性が声を荒げて叫んだ。

「ちよっと……ねえ、あなた、いい加減にしなさいよ！？ 恥ずかしくないの！？ そんなふうに着席を横取りして！！ 朝からそんなことくらいで怒らせないでくれる！？」

（っはあああう……っ！？）

激しい言葉をぶつけられた衝撃で身体が竦み、ヒクン、とユミの排泄孔が疼く。恥ずかしい肉の管がびくびくと蠢き、ぷくりと膨らんで熱い雫を下着の股布に染み込ませてゆく。

（や、う、やだ……でちゃった……っ！！）

かすかではあるが、コートのなかに漏れ出したおしっこは確実にユミの足の間に熱い感触を広げてゆく。

（た、立たなきゃ……ッ！！ と、トイレ、はやく！！）

女性の叱責よりも、オモランの危機というひり付くような焦燥に衝き動かされ、ユミはぐっと腰を浮かせかけた。

しかし、じいんっ、と甘い痺れが恥骨から背骨を駆け抜け、湧き上がる尿意に膝が笑ってしまい、思うように身体が持ちあがらない。

それでもどうにか、ほんのわずか、中腰になって浮き上がった少女のスカートの中で、ついに尿意が限界を迎える。

ぶしゅ、しゅるるるるう……

明らかに電車の中に響くべきではない水音がこぼれ、ユミは小刻みに震える内腿にじわあっと広がる熱い湿り気を感じる。

「や、やああ……っ」

か細い声を絞り出しながら、短く叫んだユミの股間で、尿意の波が爆発する。鞆を股握り締める両手にぐっと力を込め、括約筋を引き絞ろうとするが、もうその程度では崩壊したダムを塞ぎ止めることは不可能だった。

じゅじゅ、じゅじゅじゅっ、じゅぶぶ……っ

「ああああ……だめ、だめえ……！！」

くぐもった音を籠らせながら、長い間少女のおなかに閉じ込められていたオシッコが、締め付けられた括約筋の隙間、狭い出口をこじ開けてユミの脚の間に伝い落ちてゆく。

鞆の留め金が外れ、ユミの足元に、教科書とノートがばさばさこぼれ出す。その上にもユミのおしっこは激しく振り注いだ。

むあっと込み上げるオシッコの匂いに、女性が何事かと後ろに下る。

禁じられたアルコールの分解のため、代謝機能がフル稼働して作りだした少女のおしっこは、普通のそれに比べて色も濃く匂いもきつい。床に落ちてなおはっきり色の分かるほどの黄色いおしっこの水たまりがあつというまに広がってゆく。

身体の不自由なひとが、おなかに赤ちゃんのいるひとが。いたわりと優しさで作られた座席を、あろうことか自分のおしっこがめちゃくちやに汚してゆく。

異常はたちまち密閉された車内に伝播した。

「お、おい、なんだ？」

「……漏らしちゃったのか、あの子」

遠巻きにそんなざわめきが聞こえてくる。ユミの隣に座っていたサラリーマンが慌てて席を立った。ぐるりと自分を取り巻く混沌と好奇の視線のなか、ユミはか細い声をあげて儚い抵抗を試みる。

「うあ……やだ、だめえ……もう出ないでえ……っ……ちがうの、わたし、オモロシ……してな……っ」

自分のおしっこでびしょ濡れになった優先席のシートに、ユミは濡れた自分のお尻を押し付けてしまう。なんとかおしっこの噴出をとめようと腰が左右に揺すられ、スカートの下から覗く下着がぐりぐりとシートの上に擦りつけられる。

少女の排泄孔は股間を包む白い布地を濡らして透けさせながら、激しく熱い水流を吹き上げる。色違いの優先席の座席シートは溢れんばかりのおしっこを直接吹きつけられてあつという間に色を変えてゆく。

吸収しきれないおしっこはユミの足を伝い、ソックスに染み込み革靴までを汚してゆく。ぱちゃぱちゃと滴り落ちる雫は優先席の前に水たまりをつくり、じわじわとその領域を広げてゆく。

「ね、ねえ……大丈夫？」

「っ！！ ごめんなさい、ど、どきます……すぐ立ちますからあ……！！」

さすがにうろたえながら声を掛けた女性に対し、ユミは泣きべそをかきながら無理矢理身体を持ち上げようとした。その瞬間下着に包まれた排泄孔からおしっこがじゅぶじゅぶと溢れ、地面を跳ねて周囲に飛び散る。こんどははっきりざわめきが響き、周囲の乗客達が一斉に距離を取った。

「と、トイレ……ちゃんと、トイレで……おしっこしますからっ……ちゃ、ちゃんと……ああ……っ」

「ちょ、ちょっとあなた！！ ねえ！！」

スーツの女性の手を振り切り、呆氣に取られる車内を横切って、ユミは足を震わせたままふらふらとトイレに向かおうとする。その間にも我慢の果てに崩壊してしまった排泄孔はだらしなくおしっこを噴き出し続け、車内の床にびちゃびちゃと黄色いおしっこを撒き散らしてしまう。

あまりにも異様な光景に、車内の乗客たちは自然と道を明けていた。

ユミの歩いた後にはおしっこがまるで河のように続き、電車の揺れにあわせて低い方へと流れてゆく。

「っ……ねえ、開けて……っお願いい……！！」

辿り着いた車両の端、ユミはスカートの前を押さえてびしょびしょに汚れた手でトイレのドアを叩く。

それでもドアは空かない。硬く閉ざされ、鍵をかけられ、赤文字の『使用中』がユミの行く手を塞いでいる。

ユミはがんとドアを叩き、しゃくりあげ、涙を流しながら懇願する。自分でも経験したことのない呆れるほどのおしっこを漏らし続けながら、ずっといつまでも。

「あ、空けてよお……お願い、まだ全部出てないからっ……うう……残りだけ、でもっ、いいから、おしっこ、トイレでさせてえ……！！

おねがい、順番っ……全部、オモロシっ、ひっく、でちゃう、前にい……！！」

そう叫んでいる間にもユミのおしっこは止まらず、満タンだった膀胱は残量を 0 へと近づけてゆく。ばちゃばちゃと滴り落ちる滝のように、トイレの目の前でユミはドアにしがみついてしゃがみ込んでしまった。たっぷりとおしっこを吸った下着が引っ張られ、さらに床上にばちゃばちゃと雫を注がせる。

靴下も、革靴も……どうしようもないほどにずぶ濡れのびしょびしょ。もう二度と使うことは出来ないだろう。

あまりにも悲痛に泣き崩れる哀れな少女を乗せ、ユミのおしっこまみれとなった電車は、まもなくユミの降りる駅へと到着した……

(初出：おもらし千夜一夜 2 406-417 2008/02/17)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE：浅川静菜 1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 03/25/2008 23:45:56

BODY:

永久我慢の輪舞曲スレに投下したネタの改訂版。

ある種やりすぎなくらいに恐ろしく長い我慢モノ。かなり続く。

<hr size="1" />

「——でね？ そうしたら先輩がさあ」

「ホント？ 凄いねー。三島先生怒ってたんじゃないの？」

「あっははっ、言えてるかもー」

ファミリーレストランの禁煙席でかしましくお喋りの声が響く。冷房の効いたレストランのボックス席でドリンクバーのグラスを重ねる少女達は、遅い梅雨明けの後に訪れた週末の解放感を全身で謳歌していた。

楽しげに交わされる笑い声の中、一番奥まった席に付いている少女の表情だけがわずかに翳っている。良く見れば少女の膝はきゅっと寄せ合わされ、かかとは小刻みに震えていた。

「よし、おかわりしてこよ」

「あ、あたしもお願い」

「わたしもー」

「……静菜ちゃんは？」

「あ、……う、うん」

不意に声を掛けられ、静菜はふと顔を上げた。ちらり、とまだ半分ほど残ったグラスの中身を眺め、小さく頷いた。全員のグラスを持ってドリンクバーに向かう友人達を見送りながら、静菜は席に残った隣の友人に小聲で話しかける。

「ねえ」

「なに？ 静菜ちゃん。なにか頼むの？」

「そうじゃなくてさ……ゴメンね——私、その、『おトイレ』行きたいんだけど」

「あ……ごめんっ」

友人は——先ほどから小さく脚を擦り合わせていた静菜の様子を見て、慌てたように大きく椅子を引いてくれた。ようやく席から立てるスペースが解放され、静菜は大急ぎで席を立つ。

「ありがと……ちょっと行ってくるね」

「うん、行ってらっしゃい」

友人の声を背中に、静菜は混雑する店内を横切って、真っ直ぐに『おトイレ』を目指す。

(うあ……ちょ、ちょっと……マズイ、かもっ)

先刻から静菜の下腹部を占領していた重苦しい圧迫感は、立ち上がると同時に鈍い疼きに変わり、すぐさま股間へと伝播していった。むず痒いようなつんとした感覚があっという間に下半身を占領し、少女の排泄器官を刺激する。

(ああ……だめ、来ちゃう……っ！！)

できるだけ平静を装おうと努力はしていたものの、込み上げてくる尿意の波は静菜の予想を大きく上回っていた。とうとう早足では耐え切れなくなり、静菜はせわしく入り口のドアを揺らし、小走りに『おトイレ』へと駆け込んでゆく。

(は、はやくっ……はやくしなきゃっ……『おトイレ』……間に合わないよっ！)

クリーム色のタイル張りのトイレには、鍵のかかっていない個室が二つ並んでいた。幸いなことに塞がっているのは一つだけ。

心の中で幸運に感謝しながら、焦る心を沸き立つ下腹部と一緒になんとか抑えつけ、静菜は一番手近な個室に飛びこんだ。鍵をかけるのもどかし、ジーンズのベルトに手をかける。

(っ、……！！)

疼く下腹部と尿意の波にこぼれそうになった悲鳴をおしとどめ、きつく腹部を固定していたベルトを緩めて、続けてズボンの前を止めているボタンも外し、脚の間に手のひらを滑りこませる。

そのままノンストップで便座の上に腰を下ろす。都合2秒ほどの『おトイレ』のための動作を早業で終え、静菜は大きく息をついた。

「はあああ……」

狭い個室にゆっくりと響く安堵の声。

(ま、間に合ったあ……)

ゆっくりと詰めていた息を吐きながら、静菜の体が脱力する。

強張っていた下半身の緊張が解け、張り詰めていた尿意がじんわりと拡散してゆく。どうにか免れたオモラシの危機と、尿意からの解放に、静菜はこくり、と口の中にたまっていた唾を飲み込む。

(も、もうちょっとでホントに出ちゃうトコだったかも……『おトイレ』、我慢できてよかったあ……)

きしきし、と身体を前後させながら、静菜はそつと下腹部を撫でさする。

——もし、ドアの外に順番を待つ誰かがいれば、もしかすると異常に気付いたかもしれない。

あれだけ切羽詰って『おトイレ』を渴望し、ぎりぎりのところで駆け込んだ静菜だというのに、一向に尿意の解放を示す水音も、それを隠蔽する音消しの洗浄音も聞こえてこないことに。

「はあ……」

狭い個室の、様式便器の上。慎重に深呼吸を繰り返す静菜の股間。そこには彼女の両手が差し込まれ、下着の上から石のように硬くなった下腹部をゆっくりと前後に揉みぼぐしている。

下着。……そう、下着だ。

静菜は淡い水色の下着をしっかりと穿いたまま、便座に腰を下ろしているのだった。少女の股間を覆い保護するはずの薄い布地は、うっすらと下腹部に食い込み、まるで少女の排泄器官を拘束するかのよう、に、確固としてそこに留まっていた。

「……んっ、……んうっ……」

時折響く鼻にかかった声は、少女の尿意の波を知らせるバロメータ。ぎゅぎゅっと自分のリズムに合わせて股間をマッサージし、静菜は下腹部をゆっくりと揉み解してゆく。手慣れた指先の動きには、そうすることで少しでも長く尿意をやり過ごそうとする意図がはっきり見受けられた。

(はあ……『おトイレ』、キモチいい……。……ずっと我慢してたもんね……)

もう何時間も前から我慢していた“前押さえ”と“股間を握り締め”る解放感が、徐々に股間の緊張をほぐし尿意を和らげて行く。その安心感に身を委ね、静菜はまるでオシッコを済ませたかのような安堵の吐息をこぼした。

なんとも奇矯なことに。

友人に『おトイレ』と告げ、個室に限界に近い尿意を堪えたまま駆け込んでおきながら、静菜はかたくなに、この排泄のための場

所で、膀胱を占領し続けるオシッコを出そうとはしていなかったのだった。

「はぁ……ふう……」

深呼吸と共に、震えていた膝がゆっくりと落ちつきを取り戻し、引けていた腰も脱力を始める。やや内股の脚だけはまだいくら尿意の余韻を残していたが、さっきまでの切羽詰った状況は大分緩和されていた。

「ふう……すっきりしたぁ……」

しかし、その言葉とは裏腹に。ベルトとズボンに抑えつけられていた下腹部は、その跡を薄赤くくっきり残したまま、ぱんぱんになった膀胱の形そのままになだらかに膨らんでいる。

少女のしなやかな体型をいびつに歪めてしまうほどに、静菜の尿意がすさまじいものになっていることは傍目にもはっきりと窺えるのだった。そうして激しい尿意に現在進行形で苛まれながらも、静菜はかたくなにトイレを使おうとはしない。

——いや、

(うう……急にくるんだもんねぇ……ちょっと油断してジュース飲みすぎちゃったかも……。

だいじょうぶ、我慢、我慢……ちゃんと『おトイレ』したんだし、ね)

正確には使いたくとも、使えないといったほうが正しい。

静菜にとって、ここは『おトイレ』をする場所であって、決して本来の意味のトイレ——オシッコを済ませるための場所ではない。暖かな色合いのクリーム色のタイル張りの壁も、十分なスペースを取って堅固に区切られた個室も、清潔に整えられ、温水洗浄と保温便座を備えた便器も、たっぷり準備された上等なトイレットペーパーも、全て飾りでしかない。

排泄を済ませるための設備をこれ以上ないほど完璧に整えていながら、ここで静菜はオシッコすることは許されなかった。

だから、ここで静菜ができるのは、オシッコではなく『おトイレ』。

つまり、今も彼女が続けている、限界近くなった尿意を堪えるための『前押さえ』と『我慢の仕草』なのだった。

……それがいつのことだったか、静菜はもうはっきりと覚えていない。

静菜がずっとずっと小さかった頃だ。たしか、日曜日だかのお休みの日の日、両親が揃って用事で出かけ、静菜は当時はまだ一緒に暮らしていた祖母とデパートにお出かけをした。

その時、どういう具合か静菜はどうしてもオシッコが我慢できなくなってしまった。原因は前の日に飲みすぎたジュースか、祖母にねだったソフトクリームか、定かではない。とにかく、まだ小さな静菜にとってそれは人生最大のピンチだった。

祖母は優しいけれど礼儀に厳しい人で、静菜が行儀の悪いことをしているとすぐに怖い顔でお説教をした。だから静菜は必死になって気付かれないように我慢をし、精一杯普通に振舞った。

けれど、小さな女の子がそんな簡単にオシッコがしたいのを隠しきれるはずがない。とうとう祖母には気付かれてしまい、静菜はデパートに行く途中の商店街のまんなかでお説教されながらオモラシをしてしまったのだった。

『この子ったら！！ いくつになるの！？ まだお手洗いのしつけもできてないなんて、なんて恥ずかしい子かしら！！』

『まだオムツも卒業できてないなんて、恥ずかしい……！！』

『これじゃあみっともなくて、表も歩けないじゃないの！！』

大切なお出かけの日に、多くの人の前で恥も外聞もなくトイレを我慢し、ついにはオモラシという大失態を犯してしまうという前代未聞の出来事に、祖母は激しく怒りをぶつけた。お仕置きという名目で、静菜を着替えさせないまま……オモラシのまま濡れたスカートと靴を履かせたまま、家まで連れ返ったのだ。

絶えることない周囲の視線は、まだ幼い静菜の心を激しく苛んだ。泣きじゃくる静菜をよそに、祖母はオモラシがどれだけみっともないことなのか、女の子が人前でトイレを我慢するなんてあってはならないことか。そして外でオシッコをするなんてとんでもないことだと繰り返し言い聞かせたのだった。

いささか潔癖すぎるそんな道德観を、祖母はまだ片手にも満たない年齢の幼い静菜に押しつけた。それは、ミッション系の教師を勤め多くの生徒をどこに出しても恥ずかしくない良家の令嬢として世に送り出してきた祖母なりの矜持だったのかもしれない。

しかし、静菜はその教えをまっすぐ受けとめるにはあまりに幼かった。羞恥と共に刻み込まれた言葉は、呪縛のように静菜にひとつの恐怖感を植え付けてしまったのである。

仕事で忙しい静菜の両親は祖母に娘を任せきりで、その『異常』を見過ごしてしまっていた。

彼等が注意深く娘の様子に気を配っていれば、いつしか、静菜が家以外の場所でトイレに入ることがなくなったことに気付いただろう。

……それでもまだ、静菜が十分に幼く、生活の場が家を中心に行っている間はそれほどの問題が生じることはなかった。

だが、やがて祖母が他界し、静菜は学校に上がることになる。

そこで静菜は初めて、自身の身体に起きた異常を自覚したのだった。

——自分が、家以外のトイレではオシッコをできなくなっているという事実。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 03/25/2008 23:46:45

BODY:

それまでの生活に比べれば、学校という場所で少女が拘束されている時間はあまりにも長い。当然ながら、静菜は尿意の限界を覚え、学校のトイレを使わざるを得なかった。祖母の教えはそれを否定していたが、生理現象まではどうしようもない。

しかし、できなかった。

どれだけ、頭の中で家のトイレも外のトイレもまるきり同じなのだと理解しても、どれだけ自分に言い聞かせてみても、いざ学校のトイレに入りスカートをたくし上げ下着を下ろし、個室の鍵を閉める頃には静菜のオシッコはぴたりと止まってしまうのだった。

もちろんそれは、尿意までもが綺麗さっぱり消えてしまうわけではない。オシッコがおなかの中で暴れているむず痒い感覚はまるで衰えることなく続いている。しかしその一方で、静菜がいくらおなかに力を入れても、オシッコはまるで出てこようとしないのだった。

むしろ、せつかく排泄のための場所に足を運んだというのに、尿意はますます高まるばかり。運が良ければ（つまり、どうしても我慢できないほどに切羽詰っていれば）ほんの少し、ちよろちよろとおしりを熱い雫が伝うくらいのことはあったが、それはかえって下着やスカートを汚してしまう結果になり、静菜はうまくオシッコを済ませることができない自分をますます嫌悪した。

そんな生活はずっと続いた。進級し、後輩を持つようになって、少女の気持ちだけが焦ってゆく。緊張した肉体と自律神経はますます排泄を促し、一日に何度も何度も尿意を募らせる。そんな悪循環が続いた。

だが、もうその頃には、何度試しても、静菜は学校のトイレを使うことができなくなっていた。どんなに切羽詰っていても、家以外のトイレではオシッコを出す事はできず、むしろオシッコをしようとすればするほど尿意は激しいものとなり、その一方で実際には一滴も絞りだすことができない。地獄のような苦しみだった。

やがてそれは、学校以外の場所でも同じになってゆく。

もし、静菜の家が学校から走って5分、という奇跡的な立地条件がなければ、静菜は何度もオモラシを経験していただろう。

だが、昼休みや20分休みを利用して家を往復し、共働きで留守の家のトイレでオシッコを済ますことで、静菜はなんとかその危機を免れた。

オシッコをするためだけに家に帰る。

学校のトイレではオシッコもできない。

しかし、静菜は両親にはそのことを話そうとはしなかった。祖母はすでに家にいなかったが、自分がきちんとオシッコができないことを大人に訴えるのは、自分がちゃんとした女の子ではないことを認めるのと同じだったからだ。

誰にも言えない秘密をたったひとりで抱えながら、静菜は耐え続けた。そしていつしか、静菜は学校で過ごす時間、どうか一度もオシッコをしないでも過ごせるようになっていた。当時の静菜の幼さを思えば、それは驚異的な出来事である。必須とも言うべき

長い長いオシッコ我慢の繰り返し、もともと素質のあった静菜の『我慢の才能』を開花させたのだ。

とは言え、学校で過ごす時間は次第に長くなり、不意なアクシデントにも事欠かない。次第に陰しくなる学校での長時間の我慢を乗りきるため、静菜は学校のトイレを使って『おトイレ』をするようになっていた。

静菜にとってオシッコをすることができる場所＝本当の意味でのトイレとは、唯一無二の家のトイレだけを指す言葉である。つまり、それ以外のトイレで、静菜がすることはひとつ。限界に近い尿意をなだめ、どうにかして押さえこむための我慢だ。『おトイレ』とは、どうしても我慢できなくなった時にオシッコを我慢するための設備であり、そんな時にする我慢を示す行為だった。

幸いなことに、周囲の視線からも遮られ、少々大袈裟な身じろぎをしてもさして不審に思われない個室の中は、人目を気にせず我慢をするのにおあつらえ向きだったのだ。

これは思わぬ副次効果ももたらした。

多感な時代の少女、まして連帯感の強い、学校という社会の女の子のコミュニティにおいて、休み時間にみんなが席を立つ中で一人だけトイレに行かない、ということがどれほど不自然なのかは考えずとも分かる。

みんなと同じように学校のトイレに連れ立ち、そこで『おトイレ』をすることで、静菜はクラスメイトからも自分の秘密を隠せるようになったのだ。

そして静菜は、長い間自分を苦しめていた排泄に関する悩みから解放されたのだ。

他の女の子なら普通にできるはずの『お外のトイレでオシッコをする』という、当然のしつけ——オシッコの後始末が、やっとできるようになったのだ。

それはあまりに歪んだ代償行為ではあったが、静菜は長年苦しめられていた重荷から解き放たれ、やっと普通の女の子と変わらない生活を送れるようになった。

やがて静菜は上の学校へと上がる。入学当初は祖母の厳格すぎた教えが原因でクラスメイトともすれ違うことが多かった静菜だが、やがて友達ができて人並みにお洒落にも興味を持つようになった。

しかし、お気に入りのジーンズに買ったばかりの革のブーツを履いて、仲の良い親友達と日曜日のお出掛けをするようになって、静菜の心に深く刻まれたトイレのしつけの教えだけは変わらなかったのだ。

だが、もはや静菜には些細な問題だ。その頃には静菜は家のトイレでしかオシッコを済ませることができなくても、外のトイレで『おトイレ』さえ欠かさなければ問題なく毎日を送れるようになっていたのだから。

そう。

この日、までは。

(んっ……そろそろ、行かなきゃ……)

軽く便座の上に腰を浮かし、静菜は尿意を確かめるように中腰になる。

まだじんわりと恥骨に響く感覚は残っているが、十分すぎるくらい『おトイレ』をし終えたせいで、すっかり緊張の解けた下腹部はだいぶ余裕を取り戻していた。ちりちりと続くわずかな尿意も、激しい動きをしなければそれほど辛くはない。

静菜はそれほどたっぴりと『おトイレ』をしたのだ。

(すごかったなあ……あんなにいっぱい『おトイレ』しちゃうなんて……)

遠慮なく前押さえができたおかげで、とうとう最後かと思われるまでに追い詰められた末期的な怒涛の尿意も無事に乗り越えることができた。安定期に入った尿意は、おとなしく膀胱の中にとどまり、ばんばんに詰まったオシッコも圧迫感を与える程度まで落ちつきを回復している。

これでまた、しばらくは大丈夫だろう。

(もうちょっと、『おトイレ』してたいけど……あんまり長いのも心配させちゃうし)

『おトイレ』を終え、静菜はおさまった尿意を不用意に刺激しないようにゆっくりと身づくろいを始める。

息を吸っておなかをぐっと引っ込めながら、窮屈になったジーンズのボタンを一つずつはめ直し、ベルトをぐっ、ぐっと力いっぱい引き上げながら止めてゆく。

「んあつ……う、ううつ、……はう……っ！！」

一度緩めてしまったおなかの中で、膀胱はそこに詰まったオシッコの重みで重力に引かれて、ふつくと前に迫り出している。マッサージでやわらかくほぐれたとは言え、それを再びベルトでぎゅぎゅと締め付けるのだ。何も感じずにいるほうがおかしい。

家以外のトイレでオシッコが禁じられている静菜にとって、こうして『おトイレ』の中で過ごす時間はわずかでも人目を気にせずに我慢できる貴重な時間だった。しかも、尿意こそ和らいではいるがおなかの中にたまったオシッコは一滴も減っていない。

ごくゆっくりとではあるが、再びじわじわとその勢力を増し始める気配を見せる尿意に、どうしても後ろ髪を引かれてしまうが仕方がない。

しかし、今日は外に友達を待たせている。いつまでも『おトイレ』に入り浸っている訳にはいかなかった。

(……よしっ)

ぐっと気合いを入れると形だけ水を流し、普通にオシッコを済ませた女の子と何も変わらない風を装って、静菜は何食わぬ顔で洗面台に向かった。きちんと両手を洗い、鏡に映った自分を眺めてどこかおかしい場所はないかを入念にチェックする。

『おトイレ』に入る前に覗いていたオシッコの気配を全て消し去ったことを確認すると、静菜はにこにこ笑いながらトイレを出た。

「遅いー、もう待ちくたびれたよー」

「ごめーん、ちょっと混んでたから……」

口を尖らせる友達の一人に照れ笑いを返し、静菜は友人達の座るボックス席の開いているスペースに腰を下ろした。

果たして、彼女達に……いや、店内にいる客、店員に至るまでの全ての人間の誰が、もうまるで余裕のないままトイレに駆け込んだ少女が、一滴もオシッコを出さないままに戻ってきた事を想像できただろうか。

それほどに、静菜の我慢は完璧なものであった。厳しい祖母の躰と、それを厳格に守ろうとした努力のためか、オシッコを我慢する才能において、静菜は人並みはずれたものを得るまでになっていたのだった。

まさに鋼鉄の排泄器官。

……いや、ここまで完璧に尿意を押さえ込めるのであれば、静菜の膀胱はもはやオシッコを排泄するための器官ではなく、オシッコを我慢するための器官と呼んでも過言ではない。普通の女の子と比べる方がおかしいくらいなのだ。

「ね、次どうする？ デザートでも食べにいかないか？」

「……あんたまだ食べる気なの？」

「えー、いいじゃん。この前さ、すごーいおいしいジェラート屋さん見つけたんだ」

楽しげにお喋りに興じる友人達を前に、静菜は目の前に用意されたアイ스티のグラスを手取る。

さっき友人たちが用意してくれたおかわりだ。きんきに冷えた利尿効果のある紅茶をなみなみと満たすグラスに、静菜は躊躇なく口をつけた。無論、『おトイレ』を済ませたばかりであるはずの静菜がここでためらうわけがない。

たとえアイ스티ーの利尿効果が同じだけの水に比べて数倍から数十倍に匹敵するとしても、その点においても彼女の我慢は完璧なのだった。

「んっ、んっ、んくっ……」

一息でアイ스티を飲み干し、空になったグラスをテーブルに戻す。摂取した水分は着実に少女の身体に吸収され、やがては尿意の素になって膀胱に集まってゆくだろう。

再会されたお喋りに忌憚なく参加した静菜は、午後の予定がデザートジェラートの屋台の食べ比べに決定するまでのおよそ40分でさらにもう2杯、ガムシロップを多めに入れたアイスコーヒーとアイ스티のグラスを空にして。

2時を少し過ぎた頃、静菜は、またも高まってきた尿意を悟られぬよう平然を装いながら、友人達と一緒に店を出た。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 03/25/2008 23:48:24

BODY:

楽しかった、けれどとてつもなく長かった一日が終わる。

傾いた夕陽の中で最後の友達とさよならして、静菜は足早に家へと続く緩やかな坂を登っていた。

さしもの静菜も、あれからさらに 5 時間という我慢を経て、そろそろ限界が近付きつつあった。歩きながらもどこか引けてしまう腰や、さりげなく下腹部に伸びてしまう手のひらを抑えこむことがそろそろ難しくなっている。

(うあ……トイレ、オシッコしたい……っ……)

今度こそ、家の外の『おトイレ』ではなく、真実オシッコを済ますことができる本物のトイレを目指し、静菜は帰途を急ぐ。

ずっと我慢し続けたオシッコは容赦なく静菜の下腹部を圧迫し、隙あらば暴れだそうと不気味にうねりを見せていた。

あれから、静菜はもう 2 度も外の『おトイレ』に入って限界寸前の尿意をやりすごしている。これは普段のペースに比べても異常だった。いつもの静菜なら、お昼の『おトイレ』だけで家に帰るまでの間十分用を済ませることが可能なのである。友人にも『あはは、静菜お茶飲み過ぎちゃった?』と心配されるほどだった。

そして冷静に振り返ってみれば、静菜は今朝起きてから一度もオシッコを済ませていない。それはつまり、土曜の夜にオシッコをしたのを最後に、実に 20 時間近くもオシッコを我慢し続けているのだった。

それでいて水分の摂取は普段以上に多かった。雰囲気にも飲まれてついついおなかの冷えそうなものばかり食べ続けてしまったせいもある。

つまり、まる 1 日分を遥かに越えるオシッコが、静菜のおなかの中に詰めこまれている計算になる。本来なら何回にも分けて排泄されるべき量のオシッコを、静菜は一滴も漏らさないままに身体の中にとどめているのだった。

これも、祖母の教えに基づいて常識外れに鍛えられた静菜の排泄器官だからこそ成せる技である。もし静菜以外の女の子がこれに挑戦しても、たちまち限界を迎えてオモラシしてしまうだろう。

「ふう……、っと」

静菜は重いおなかを抱えながら慎重に交差点を渡る。もちろん、誰かに気付かれるようなみっともない真似はしない。あくまでも表面上はそんなそぶりを見せることはないのだ。

こんな風に長い長い時間オシッコを我慢できる身体のことを、貴婦人の膀胱、と呼ぶのを静菜は知っていた。昔の貴族はオシッコをしない女の人ほど魅力的だとされていたのだ。だから、静菜はもう外のトイレに行けない自分を恥ずかしいとは思わない。

そろそろ日が山の向こうに消えようとしている。家への道のりもいつしか半分を過ぎ、終わりに近付いている。あとは角を一つ曲ぐればすぐ静菜の家だ。

(……あー、やっぱりちょっと遅すぎたかも……もっと早く帰ればよかった……)

そうすればもっと早く、おうちでオシッコできたのに……んうっ……)

ぶるぶると背筋を這い登るイケナイ感覚に耐えながら辻を折れ、向かって三軒目の玄関の門を押し開ける。15 年前の新興住宅地である藤咲市の 1 区画に、際立てて特筆すべきものはなにもない、ごくごく平凡な静菜の家はあった。

「ただいまー」

「お帰りなさい。もうすぐ夕ご飯よ」

「はあーい」

(オシッコ、オシッコっ……)

母親との挨拶もそこそこに、切羽詰った尿意を心の中で繰り返しながらブーツを脱ぐ。すでに静菜の心はあと数m、廊下のすぐ

向こうにある扉 1 枚を挟んだトイレの中に飛んでいた。ずっと長い間閉じ込められていたオシッコがついに解放を宣言され、その瞬間を待ちわびるように一気にざわめき始める。

（あー、ヤバかった……電車の中、もう出ちゃうかと思ったよお……電車の『おトイレ』まで使っちゃったし……恥ずかしかったなあ。でも、みんなに気付かれなくてよかった……）

今日、この日。

この時、この瞬間までは、静菜にとってみれば決して特別なことが起きた日ではなかった。静菜がこんな風になるまでオシッコを我慢しているのは、いつもとは言わずともたまにあることで、言ってしまうとありふれた日常の一コマでしかない。

けれど、この日だけは違っていた。

コン、コン。

（うう、漏れちゃう、漏れちゃうっ）

軽くノックをしてから、静菜はほぼ時間も空けずにノブに手をかける。静菜の家のトイレはドアの向こうにすぐ便器があるタイプのもので、鍵をかけずに使う者は誰もいない。鍵がかかっていないのはドアノブを見れば一目瞭然で、だからこの動作も静菜にはほとんど習慣的なものだ。

だが。

ガチャリ、と開いたドアの向こうには、黒々と汚れた水を、便座の縁ギリギリまで詰まらせた洋式便器があるのみだった。

（え……？）

まったくの予想外の光景に、静菜の思考が停止し、理解不能のホワイトノイズに包まれる。

目の前の状況がまるで理解できずに、静菜は瞬きを繰り返した。

（え……、え？ え？ え！？）

見る影もなく、壊れた、トイレ。

ゆっくりと、その事実が忍び寄ってくる。

便器から溢れ出した汚水が飛び散ったのか、床も薄黒く汚れ、便座の内側では時折ごぼり、という音を立ててぬめった泡が沸きあがる。生理的嫌悪を催す粘着質の汚れと、鼻を背けたくなる悪臭の奥で、少女が待ち焦がれていた大切な場所が、踏み入るのもためられるような汚辱に侵されている。

配管のどこかが壊れているのだろうか、ちよろちよろという水音がずっと途切れずに響いていた。その水音に歓喜され、静菜の膝が小さく震え始める。

（え、ええ！？ う、嘘……ウソでしょ！？）

目を擦っても、頭を振っても、悪夢は晴れない。

静菜の思い描いていた安息の地とはあまりにかけ離れた光景は、厳然とした事実として少女の眼前に横たわっていた。

世界で唯一、たったひとつ、静菜がオシッコをできる場所は——見るも無残に破壊し尽くされていた。

「ああ、静菜？ ごめんね、トイレ使えないのよ。なんだか下水のほうで故障しちゃったみたいなの。……お隣にお願いしておいたから、もし行きたかったら使わせてもらいなさい。嫌だったらコンビニで借りてもいいしね」

母親がなんでもない風に台所から声を飛ばしてくる。

けれど、それはまるで意味がない。静菜にとって、『ここ』……この家のトイレを除いた世界じゅうの全てのトイレは、オシッコを済ませることはできず、尿意を我慢するための擬似的な『おトイレ』でしかない。

(…お、…お…しっこ……)

ぞくん。

途切れていた意識が、強烈に下腹部に殺到した尿意を察知する。

猛烈な排泄衝動が立て続けに巨大な大波になって溢れ出した。襲い掛かる衝撃に静菜はぎゅっと両手を下腹部に押しつけた。

「はあ…ううう…っ！！？」

びくびくと内腿が引きつり、股間が疼き、下腹がじくじくと暴れる。どうにかなだめすかし、抑えこんでいた尿意が一斉に牙を剥いていた。強烈な衝撃が稲妻のように腰骨に響き、静菜はたまらずトイレの床にしゃがみ込んでしまう。

(や、やだっ、……ウソ、なんでっ、なんでっ！？)

ここに来れば、ここまで我慢すれば、絶対にオシッコができるはずなのに。そうでなければおかしいのに。そう思っずとずと我慢してきたのに。だって、静菜は世界でたった1ヶ所だけ、ここでしかオシッコができないのに。だから、そのために何度も何度も外の『おトイレ』に入って、我慢を続けてきたのに。

それなのに——

オシッコが、できない。

本来ならあと数秒で済まされていたはずの尿意が、解放を許されずに押し留められた静菜のオシッコが、猛烈な勢いで膀胱の中に渦を巻き、ぎゅるぎゅると暴れ始める。

「ウソ……おっ」

ぼやけていた頭が、トイレの故障という事実を理解するに至り、静菜の顔から血の気が引いてゆく。

このトイレが、使えないということは。

静菜は、もう二度とオシッコができないということを意味していた——。

 永久我慢の狂想曲——

浅川静菜のケース。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 03/25/2008 23:52:06

BODY:

トイレが使えない。

オシッコが、できない。

その二つは普通、等号で結ばれるものではない。けれど家のトイレ以外でオシッコをすることのできない静菜は、世界でたったひとつのトイレ＝“オシッコのできる場所”を失い、年頃の少女にとってあまりにも過酷な我慢の延長戦の最中にあった。

(んっ……)

じんっ……

軽く身じろぎしただけで、おなかの中に塞き止められたオシッコがたぷんと揺れて、膀胱の内側に打ち寄せてくるかのようだ。ダイニングで母親と食卓を囲んだ静菜は、ちょっとした油断で疼き始めようとする股間をさりげなく椅子に擦り付ける。

「どうかしたの？ さっきからきよろきよろして」

「う、うん……ちよっと、足、蚊に刺されちゃったみたいでさ。あはは……」

怪訝な顔をする母親に苦しい言い訳を並べながら、静菜はテーブルの下でぎゅっと足を交差させる。

本来ならもうとっくに解放されていておかしくない尿意が、なおも激しく高ぶりながら静菜を責め立てる。ぴったりと寄せ合わされた膝の上、脚の付け根。少女の下腹部をふつくと膨らませるほどの圧倒的な尿意が、間断的に静菜を苦しめていた。

「お母さん、あの……と、トイレ、いつ直るの？」

「ああ……そうね、明日修理屋さんが来てくれるそうなんだけど、一日で直らないかもって電話で言われちゃったのよ。だから悪いけど、しばらくかかるかもね」

（しばらくって……、いつまで……？！）

それが一体いつまでなのか聞きたいのだが、はっきりした答えは帰ってきそうに無かった。静菜は重苦しい気分沈みながら、食卓の上の夕食を機械的な動作で口に運ぶ。今日のメニューは大好きなパスタだが、味もよく分からなかった。

そんなことよりも、少なくとも明日学校から帰るまで。修理の終わった家のトイレに入るまで、静菜はトイレを使うことが不可能であるという事態が、重く静菜の頭を占めている。

（それまで……オシッコできないし、トイレもできないんだ……）

今日一日という長い我慢を乗り越えた直後に、さらなる我慢を要求された下腹部は、昼よりもさらに重く張り詰めている。あれからさらに時間が経って、静菜の膀胱にはさらに多くのオシッコが追加されているようだ。シャツの下では既にベルトは取り外され、ジーンズのボタンも掛かっていない。

それでも、尿意の波の頻度は午後よりも狭まってきていた。

（ん、くっ……）

じくん、と滲むわず痒い感触に、静菜は思わず身を竦める。椅子の上に軽くおしりを押しつけて、小さな波を乗り越える。

静菜が最後に『おトイレ』をしてから2時間近く。高まり続ける尿意は下半身の緊張を促進させ、静菜は段々と我慢の仕草を隠しきれなくなっていた。

（ご飯、食べ終わったら……『おトイレ』、行かないとダメかな……）

本当のトイレが使えないなら、せめて『おトイレ』をたつぷりと済ませて、尿意がおさまるまで暴れ回るオシッコをなだめてやらなければならぬ。うずく股間を鎮めてやるには、恐らくかなりの本格的な『おトイレ』が必要になるだろう。

ひくひくと痙攣を始めつつある括約筋に急かされるように、静菜は食事のペースを早めた。

「あら、スープいらないの？」

「う、うん。ちょっと……おやつにジュース、飲みすぎちゃって」

そうして急ぐゆえにだろうか。静菜は自分でも無意識のうちに、メニューのうち野菜のスープと食後のお茶を外側におしやっていた。

いくら人並み外れたオシッコ我慢の才能をもち、普通の女の子の何倍もオシッコを我慢することができる静菜でも、さらなる我慢を強いられた今、これ以上の水分の摂取は避けねばならなかった。

しかし、静菜の状況をまるで知らない母親は、厳しい顔で静菜に勧めてくる。

「あんまり甘いものばかり飲んできると体に悪いわよ。お茶はいいけど、ちゃんとスープは食べなきゃダメ。いい？」

「う、うん……」

皮肉なことに、静菜があまりにオシッコ我慢の才能に恵まれ、これまで一度の失敗もなく優秀にトイレと『おトイレ』を使い分けてきたため、静菜が家の外のトイレではオシッコをすることができないという事実は、なんと家族にすら知られていない。

無論、静菜の両親も愛娘の異常にもっと早く気付いていれば、こうなる前に何らかの手立てを打っていただろう。祖母が他界し

てから娘に構ってやれなかったことを反省し、専業主婦となった母親も、残念ながら静菜の身体の変調を察することはできなかった。

だが——静菜は今更そのことを口にすることはできなかった。祖母の気持ちを裏切りたくはなかったし、両親を心配させたくはない。なにより、家のトイレ以外でオシッコができないなんて、そんな事を口にするのは恥ずかしすぎる。

これは、自分自身が一生守ってゆくべき秘密なのだと……静菜は幼い心にそう誓っていたのだった。

(どう、しよう……)

目の前に並ぶ、コンソメの香りを漂わせる野菜スープ。いつもならば食欲をそそるその匂いも、口にすればすぐにさらなる尿意の呼び水となることは明白だ。今の状態の静菜には、あまりに辛いものだった。

(こ、こんなの飲んだら、もっとしなくなっちゃう……明日まで、オシッコできないのに……)

飲食と排泄。

実に単純な生物の生理現象だ。飲んだ分だけがオシッコに変わり、排泄される。生命活動として当然の摂理である。

そのうちの一つを封じられ、しかし静菜は普段と同じように振舞わなければならない。誰にも言えない秘密を胸に、今にも脈動を始めそうな下腹部に熱い液体を一杯にして抱え、静菜はどこまでも孤独だった。

「んっ……」

とうとう覚悟を決めてスープに口をつけた静菜は、目をつぶってひとくちひとくちを喉の奥に流し込んでゆく。こうして摂取された水分は、胃と腸を経てやがては身体に吸収され、新たなオシッコの素になって静菜を苦しめるのだ。

(んうっ……っ！！)

一口を飲みこむたびに、直接膀胱の中にオシッコがちゃぽちゃぽと注ぎ込まれているような気がして、静菜は知らず膝を寄せ合い、お尻をももそと動かしてしまう。普段なら絶対にしないような仕草だが、それほどに静菜の尿意は高まっていたのだ。

そして、水物を口にしないまま食事をするのは難しい。

落ちつきがないと母親にたしなめられながら、どうにか食事を終えた頃には、静菜はさらにスープカップに一杯とグラスに一杯の水分を口にしてしまっていたのだった。

「ふう……はぁ……」

六畳のフローリングに、どこか苦しげな吐息が響く。

自室のベッドの上に横になって、静菜はずっと下腹部を撫で続けていた。

時折やってくる尿意を押し殺すようにぎゅっと股間を抑え、こくりと口の中に溜まったつばを飲みこむ。それだけでも敏感に反応しようとする排泄孔は、長い我慢に酷使されてわずかに赤くなっている。

(ま、まだ9時……全然……時間経ってないや)

いろいろ試してみた結果、排泄孔に直接膀胱の重みがのしかからない、仰向けの姿勢が一番楽なことに気付き、静菜はベッドに横になって下腹部を柔らかく撫でながらオシッコの波に耐えていた。

しかし、じっと我慢を続けながらの夜はあまりにも長い。枕もと目覚まし時計の長身が文字盤を一周する、たったそれだけのことがまるで永遠のようだ。

次第に、頭の中からものを考える余裕が消え失せ、オシッコの我慢とトイレの事しか考えられなくなってゆく。

（明日……部活はお休みして、できるだけ早く帰ってこよう……たぶん、学校が終わるくらいなら工事も終わってるよね……そうすれば、すぐにトイレできるし、オシッコも……）

一日後の尿意からの解放を想像し、きゅん、と疼く股間をごまかすように、静菜は寝返りをうって脚を交差させる。

一瞬は楽になったものの、横になった姿勢では排泄孔と括約筋に余計な負担がかかり、すぐに尿意は倍化してゆく。

（えっと……明日の4時……3時半くらいだから、あと……18時間くらい……1時間が18回で、1分が10……1080回）

どれだけ短く見積もっても、それよりも早く尿意の解放が赦される事はないだろう。

その予測も、もっとも都合のいい結果が成立した時のものだ。場合によっては二日や三日、家のトイレが故障したままなんでことだって十分にありうる。しかし、そんなことを考えていたらとてもじゃないが耐え切れそうにない。

そう、

静菜は、本当の本気で明日の夕方までオシッコを我慢し続けるつもりでいた。

（だ、だめ……もう、『おトイレ』しないと……）

羞恥に耐えながら、寝返りを打ってうつ伏せになった静菜は股間に両の手を揃えてあてがい、力を込めてぎゅっと押さえ付ける。「ふう、ふううっ……」

ぐっと枕に顔を押し付け、声を押し殺し、まるで獣のように四つん這いになってお尻を突き上げる。下腹部で沸騰する尿意を緩和するために腰をむりやり左右に揺すって、ヒクつく尿道を指で強く擦り、楽にする。オシッコの出口を手で塞ぐことで、括約筋をほんの少しだけ緩め、酷使された疲労を回復させるのだ。

膝から下をばたばたと動かし、突き上げるような尿意の波を、おしりをくねくねと動かすことによって身体の中に飲みこんでゆく。

とても人には見せられない、あまりにもはしたない姿。しっかりとドアに鍵を掛け、カーテンを念入りに引いた密室の中だからこそできる、恥も外聞もない我慢スタイルだ。静菜の『おトイレ』は予想よりもずっと早く、本気の状態になりつつあった。

「ふうう、……はあ……っ」

肩で息を繰り返しながら、聞き分けなく尿意を訴える股間と、膨らんだ下腹部を丁寧に撫でる。少しでも触りかたを間違えれば、せっかく収まろうとしている尿意がまた膨らんでしまうことを、静菜は経験的に知っていた。

（だんだん、キツくなってきちゃった……っ）

友達とのお喋りに興じながら、午後いっぱい掛けて摂取した水分が少女の全身を循環し、時間差を経て抽出され、いま静菜の身体の中で最も敏感になっている場所に集まろうとしている。

利尿作用の強いコーヒーや紅茶といった飲み物を口にしていたことが、静菜の尿意をいっそうきついものにしていて。そして、さっきの夕食で口にした水分も同じ経路を辿り、さらに静菜を苦しめるだろう。

「んう……ん、っ……」

ぎゅぎゅ、と両手の指が股間を揉みしだくのに合わせ、静菜の腰がベッドの上に跳ねた。うつ伏せになって頭を低くし、おしりを突き上げた姿勢は、排泄孔を高くすることでおなかの中のオシッコの重みを胸の方に分散させる効果もある。

こうして尿意が『キツイ』時に迂闊に体勢を崩し、排泄器官の中で一番脆い部分に、暴れだしたオシッコの重みが全て殺到して

しまえば、あっという間にダムが決壊してしまうのだ。これらは全て、静菜が必要に迫られて身につけた我慢のための知識である。

（おさまってっ、……おねがい、おとなしくしてて……っ）

まるで、おなかの中の赤ちゃんに語りかけるように。静菜は言うことを聞かない下半身をなだめようとしていた。

目を閉じて祈りながら、尿意が収まるのを待ち続ける。真っ赤に染まった顔を枕にうずめ、カバーをぎゅっと噛み締めて込み上げる衝動に耐える。

もはや、まるで自慰でもしているような有様だ。

こんなみっともなく恥ずかしい格好、いくら家の外でオシッコのできない静菜でも滅多にすることはない。そもそも、静菜が隠すことなくオシッコを我慢することを許されるのは、『おトイレ』だけのはずだった。

静菜にはオシッコを我慢することが『おトイレ』ですべきことなのだから、当然『おトイレ』でもない場所で我慢の仕草を見せることはNGである。

なのに、今の静菜はオシッコ我慢の仕草を隠さないばかりか、尿意に耐えかねて、なし崩し的に自分の部屋を『おトイレ』にしまっている。これは普通の女の子にたとえれば、自分の部屋の中でオシッコを我慢しきれず、床や絨毯の上に出してしまっていることに等しい。

まさに、羞恥の極みだった。

「っふ、ふうっ……はあ、はっ、はあ……」

じくん、じくん、とおなかの奥が疼く。

己に課したタブーを破る屈辱と羞恥に心を震わせ、汗で湿った下着を擦りながら、深呼吸を繰り返し、小刻みに腰を揺する。

普段は決してすることのない、自分の部屋での『おトイレ』。

もうそれを、この2時間で3回も繰り返した。一回ごとの『おトイレ』で楽になっている時間も徐々に長くなり、対照的に尿意のおさまり具合は悪く、その間隔も短くなっている。

（っ……だめ、やっぱり……ちゃんとした『おトイレ』じゃないと……）

いつまで経ってもおとなしくならない尿意に身悶えしながら、静菜は唇を噛む。

たとえ実際には使うことがないとしても、形だけでも便器やトイレトーパー、洗面台などといった設備の整った場所とする『おトイレ』は、気持ちの切り換えや精神的な面で、普通の我慢よりもかなり満足できる効果を得られるのだった。

この、耐えようもないほど激しい尿意を我慢しやり過ごすための場所——『おトイレ』を渴望し、静菜はぎゅっと目をつぶる。

「っ……」

またも込み上げる尿意を抑え、静菜の両手に力が籠る。さっきから一向にオシッコの波が引かない。たぶたと揺れる下腹部がひっきりなしにむず痒い排泄のメッセージを訴えてくる。

（……『おトイレ』、行きたいよお……っ）

限界に近い尿意を堪えながら、さらなる我慢のできる場所を求める静菜。

家のトイレが使えない今、せめてきちんとした場所で『おトイレ』をしたかった。おなかをさすり、ぱんぱんに張り詰めた膀胱をマッサージすることで少しでも下腹部に余裕を作らなければ、いつかおなか破裂してしまう。

だが、静菜の家のトイレは現在完全に使用することができなくなっており、そこに入るだけで不自然な行ないとなる。家族に見られれば当然疑問を持たれるだろうし、それをごまかして説明する自信はない。

そもそも、静菜にとって本当の意味でのトイレ——オシッコを出せる場所に入って、そのまま我慢を続けていられるのか、という疑

問もあった。

(おねがい、おさまってよおっ……)

静菜はただ、一心にオシッコがおさまることを願いながら、自分の部屋で『おトイレ』を続けるのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 5

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 03/25/2008 23:52:58

BODY:

「あら、どうしたの、静菜？」

「あ、うん……その、ちょっと……」

玄関に下りて靴を履こうとしていた静菜を見とがめて、母親がリビングから顔を出した。最初は10時過ぎの時計の文字盤を見上げ夜遊びとは何事かと表情を厳しくしていたものの、そろそろ落ちつかない娘の様子に、すぐにその理由を察する。

「ああ、お手洗いね」

「う、うん……『おトイレ』行きたくなっちゃって」

母親は、静菜の発した『おトイレ』がどんな意味を持ち、なんのための場所であるかを知らない。静菜がどれほど苦しんでいるのか

を理解しないまま、悲しいほどにすれ違った納得をして静菜を見送る。

「もう遅いから、お隣に迷惑かけないようにね」

「あの……それなんだけど、コンビニまで行ってこようかなって……だめ？」

「そうなの？ でもねえ、もう遅いから遠出はやめておいたら？ 危ないわよ。最近チカンが出るって話もあるじゃないの」

「でも、こんな時間に『おトイレ』なんて借りるの、恥ずかしいし……」

言葉通り、羞恥心もちろんある。恐らく今の静菜の『おトイレ』は、とんでもなく長く、激しいものになるだろう。いまだ尿意のおさまらない静菜の下腹部はそれだけの切羽詰った状況にあった。

それだけの時間を掛けてたつぷりと『おトイレ』をしなければ、静菜はもう満足にオシッコを我慢できない。

しかし、それよりもなによりも、せっかくトイレを借りておきながら、静菜はそこを『おトイレ』としてしか使わない。実際には一滴もオシッコをすることができないのだ。そんなことのために夜遅く、隣家に迷惑を掛けるわけにはいかなかった。

「だから……いいでしょ？ ね？」

「そうね……」

まるで、おなかの中のおシッコに突き動かされるように熱意を持ってねだる静菜に、渋っていた母親も折れる。

「早く帰ってきなさいね。今日もお父さん帰ってこないから、あんまり遅いとカギ閉めて寝ちゃうから」

「うんっ、ありがとお母さん……行ってきますっ」

「ああほら、そんなに急いだら危ないわよっ」

出発の挨拶もそこそこに、静菜は急いで玄関を出た。お昼も履いていたスニーカーを、サイズの合わない新品を履いた時のように何度も何度もとつ、とつ、と地面を叩きながら、落ちつきなく門を抜けて通りに出る。

静菜の家から最寄のコンビニまでは、徒歩でおおよそ5分。二つ角を曲がり、大通りに出たところだ。すっかり暗くなった住宅街は、早々にそ明かりを落としている家もあり、決して視界はよろしくない。暗闇に気分が萎えると同時に、緊張感で静菜の股間が疼き始める。

（ああっ、ダメ……は、はやく、『おトイレ』っ……）

夏休みとは言え、都心から離れた郊外は幾分冷える。夜の涼しい風にぞわぞわとおしりを撫で上げられ、静菜は加速した尿意を抑えようと腰を“ぐいっ”と捻ってしまう。一刻も早くコンビニに向かわねばならないが、それも思うようにいかない。

急ごうにも、重力に押し下げられる膀胱の重みがいちばん敏感で脆い一点に集まってきて、思わず足は内股に、歩みは小刻みになってしまうのだった。

（っ、だめ、ちゃんと『おトイレ』まで我慢しなきゃ……っ）

薄暗い夜道にはひとけもなく、ついつい膝が寄せられ、手のひらが下腹部へと伸びてしまう。だが、いくら誰も見ていないとは言え、往来で『おトイレ』なんてもってのほかなのだ。

（……ヘンな人とか、来ないうちに……急がなきゃ……）

お昼のお喋りでも、家を出る前の母親の話にもでてきた変質者の事を思い出し、できる限りの早足で、静菜はコンビニへと急ぐ。

オシッコを済ませるためではなく――

オシッコを我慢する、ただそれだけのために。

煌々と照明を輝かせるコンビニが、ガラス張りの窓から駐車場を明々と照らし出し、停められたバイクや自転車の影を長くアスファルトに映し出している。

こんな時間でも、レジの前には会社帰りの男性や夜遅くのバイトに向かうであろう少女達で3、4人の行列ができ、ちょっとした混雑が見られた。幹線道路のひとつである大通りでは、こうして夜遅くまで人通りが絶えない。

（着いたあ……やっ、『おトイレ』できるっ！！）

目的地まで無事に辿り着いたことに安堵しつつも、左右に開いた自動ドアの向こうから吹きつけてくる店内の冷気に迎えられ、静菜はぎゅっとシャツの前を引っ張ってぐっと口を閉じる。

（……が、我慢、してるの……気付かれないようにしなきゃ……）

ここまではさして人目もなかったが、店内には男性客を含め多くの視線がある。そんなところでたとえほんの些細な素振りでも、オシッコを堪えているのを見られるなんて、死んでも耐えられない。

今にも股間を握り締め、『おトイレ』をはじめとなる手を、ぎゅっとシャツの裾を掴むことで代わりにして、静菜は雑誌の並ぶ棚を大きく回りこみ、丁度入り口の反対側にあるトイレに急ぐ。

歩数にしておよそ20歩。これまでに比べればあまりに短い距離だが、そろそろ限界に近付きつつある下腹部を抱えてでは十分すぎるほどに長い。ATMを操作している大学生をそと迂回して、静菜はトイレのある区画に向かった。

しかし――

そこで静菜を出迎えたのは、無常に並ぶ青い注意書きの文字列。

『防犯上のため、トイレは施錠しています』

ご利用の方は、店員までお声をお掛けください』

「え……」

またも訪れた不幸な偶然。予想外の事態に静菜は困惑する。

実は先日、静菜は家までどうしても我慢できずにここで『おトイレ』を済ませていた。その時はこんなものはなかったのだ。このトイレはなんの問題も制約もなく利用することができ、静菜は学校から抱えてきた尿意をたつぷりと我慢し、『おトイレ』を済ませることができたのだ。

だからこそ、家のトイレが使えない今、静菜はここに真っ先に急いだのだが――

（あ、開かない……っ ホントに開かないっ！？）

思わず握ったノブが、硬い施錠音と手応えを返す。注意書きの文字に嘘偽りはなかった。誰にも気付かれずに『おトイレ』ができるはずだったのに、無常にもドアは硬く閉ざされ、静菜を拒んでいる。

「そんなあ……」

（これじゃ、お隣の借りるのと変わらないよおっ……）

むしろ、ここまでの道のりだけ無駄足を踏んだに等しい。5分も余計に我慢し、ここからまた夜の道を引き返すことを考えれば、大きなロスだと言えた。

ちらり、と横目で窺ったレジには、変わらず順番待ちの列ができて会計を待っている。夜遅くだというのに、一番後ろの女性が両手で下げる買い物籠にはお弁当や冷凍食品、飲み物などがいっぱい詰まっていた。

トイレに入ることもできず、店内をうろうろと往復する静菜を、A T Mの前にいた大学生が振り返る。静菜は慌ててドアの前を離れ、なにげない風を装った。ここにいることはそれだけで、静菜がオシッコを我慢してることを知らせているのに等しいのだ。

しかし、そんなこととは無関係に、刻々と水位を増す恥骨の上のダムは、限界へのカウントダウンを刻み続ける。

(と、『おトイレ』……『おトイレ』したい……っ！！)

我慢の素振りすらも押さえ込んで辿り着いた場所でもたも肩透かしを喰らい、静菜の股間は徐々に危険を訴え始めていた。下腹部もジンと重く疼き、もはやさりげなく腰を揺すってしまうのを押さえ込むのは難しい。

一刻も早く『おトイレ』を——誰の目も届かない秘密の個室で股間を握り締めたかった。選択の余地は残されていないことを悟った静菜は、『おトイレ』への渴望に突き動かされ、急いでレジに向かう。

「あー、すみませんっ、えーと……」

「まだかね、ああもう、早くしてくれっ」

レジの列では、先頭にならんだ初老の男性がバイトらしき店員と言い争いをしている様子だった。さっきから少しも列が進んでいないのにはそんな理由があったのだ。不慣れらしいバイトの店員が、電子マネーでの清算を間違えてしまったらしく、レジの前でマニュアルをめくっている。

隣のレジには『休止中』の札があり、なんのタイミングか他の店員は席を外しているらしい。レジに並んだ他の客達もいづらか待ちくたびれた様子で、イライラとした雰囲気伝わっていた。

「……早くしてくれ、まだなのか？」

「すみません……」

男性が不機嫌に唸ると、店員もむつりと声を返す。茶髪の店員の態度があまりよろしくないのも、男性客の怒りをかりたてているらしかった。

(こ、声かけづらいなあ……)

一声、トイレを使いたいと言さえすれば、静菜の用は事足りる。……実際には静菜はオシッコをするわけではないが、トイレに入れないのではどうしようもない。

とげとげしい雰囲気の中、静菜はそろそろと列を迂回してレジに向かう。

「すみませんっ」

下半身の同様を悟られぬよう、ぎゅっとシャツの端を握って静菜は列の脇からレジに声を掛けた。

しかし、店員はレジの前でマニュアルを視線を落としたまま、静菜のほうを見ようともしない。

「あの……」

聞こえなかったのだろうかともう一度声を掛けようとしたとき、レジの前にいた男性客が声を荒げた。

「なんだね君は。横入りかね？！ちゃんと並びたまえ、順番だろう！！」

「あ、違います、わたし——」

「なにが違うんだ、私だって待たされてるんだぞ！！ちゃんと並べ！！」

男性客は唾を飛ばし、列の後ろを指差して怒鳴る。

ちょうど、さっきの最後尾の女性の後ろにアルコールの缶を抱えた二人連れの男女が並んだところだった。有無を言わせず命令する男性客の怒りは一見して至極真っ当なもので、静菜に注がれる店内の客達の視線は控えめに見ても好意的なものではない。

静菜はじろじろと向けられる注目から逃れるようにそと脚を交差させ、我慢を押さえ込みながら、先を続ける。

「違うんです、その、お手洗いを——」

「え……？ んだよ、この忙しいのに……」

男性客に遠慮しつつ、おずおずと問いかける静菜だが、茶髪の店員は顔をあげるなり、静菜にもはっきりと聞こえるように舌打ちをした。

不快感をあらわにされ、静菜は思わず小さくあとずさってしまう。

「え、えっと……」

「使えないって書いてなかった？ 他でやってよ」

「あの、でも、店員の人に声、かけてくださいって、書いてあったんで……」

「うっさいなあ、見てわかんない？ すっごい混んでんだよ今！！ 悪いけど他んトコ行ってくんないかな、ガキじゃないんだからトイレぐらい我慢できんだろ？」

店員は不機嫌な声で言うと、再びレジを弄り始めた。

「いま店長いねーから、勝手に使わして汚されッと迷惑なんだよなあ」

まるで静菜が悪いとばかりの言いようだった。もはや取り合う様子もなく、店員はレジの操作に戻ってしまう。

（そんな……使わせてくれたっていいじゃないっ……べ、別に、汚したりしないわよ……単に『おトイレ』に使うだけで……本当に、その、オシッコ——しちゃうわけじゃないんだから……）

静菜は、『おトイレ』のための場所が使いたいだけなのだ。実際にはトイレットペーパーも使わないし、水だって流す必要はない。まあ、音消しくらいはするかもしれないが、それだってやめろと言われればやめられないわけではない。

だが、ここで店員や大勢の客を前にそんなコトが説明できる訳もない。そもそも、静菜のような多感な年頃の少女には、人前でオシッコを我慢していることをはっきり知られるだけでさえ、できれば避けたい事態なのだ。

「なに？ まだなんかあんの？」

不機嫌な店員が静菜を睨む。男性客も、いらいらと腕組みを続けて静菜を見ていた。

もはや、もう一度お手洗いを借りたいと言いだせる雰囲気は消え失せている。白けた空気に耐えかね、静菜は思わず頭を下げてしまった。

「す、すみませんでした……」

決して、いけないことなどしていないはずなのに。

このコンビニには、もはや静菜の居場所は無かった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 携帯を買う話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/22/2008 22:13:13

BODY:

従姉妹のお姉さんであるエリさんと、その話になったのは単なる偶然みたいなものだった。テレビのニュースで、最近の若者のマナーを問う内容が放送され、その中で往来での携帯端末を使うことの問題が取り上げられていた。

私がたまたま、携帯を持っていないことを知ったエリさんは、目を丸くしてそれが本当か聞いてきたのだ。

「ホントに持ってないの？ 携帯」

「う、うん……」

「それじゃ困らない？ サエちゃんだってもうすぐ卒業でしょ？」

「……でも、これまでなかったし、持ってなかったって、そんなに困らなかったし……」

「そんなんじゃ駄目っ！！」

「ひゃあ！？」

エリさんは大学生で、私からみてもカッコ良くて素敵な大人だと思う。だから、エリさんみたいな人になりたい、と私はひそかに憧れていた。

そのエリさんが、年頃の女の子として携帯は絶対に必要だと強く主張するのだから、やっぱり私にはなんとなく断わりづらいわけ。

私はそのままエリさんに引っ張られて、駅近くのデパートまで連れてこられてしまっていた。

「さ、到着。どう、いっぱいあるでしょ？」

「う、うん……」

エリさんが示す売り場には、たくさんのメーカーの携帯端末がずらあーと並んでいた。これまで立ち入ったことのないエリアで、私はなんとなく二の足を踏んでしまうが、エリさんはそんな私の手を引っ張ってぐんぐん中に進んでいってしまう。

「いっぱいありすぎて困るかもだけど、まあ結局基本的な使い方は一緒だしね。慣れてから買い換えたっていいわけだし。……さっきもやってたけどさ、最近は携帯も使う人のマナーが問題になっているのよね。電車の中とか、ところ構わずに使っちゃう人もいて、規制されるようになったんだけど。」

「……でもやっぱり、サエちゃんくらいの歳からこういうのは慣れておかないと、そのうち本当に大変になっちゃうと思うんだ」

確かに、これまでは多くの人が公衆端末で用事を済ませてきたけれど、携帯端末が普及して一般化したせいで、最近ではほとんど公衆端末は撤去されてしまい、数はぐっと減ってしまった。今では見つけるのも一苦労なのは、その通りだ。

「でも、サエちゃん、公衆端末も無いときって本当に無いでしょ。どうしてたの？　そういうとき」

「近くのおうちで貸してもらったり……諦めて使うの我慢したり、色々」

でも、まだどうしようもない小さい時ならともかく、今はもう無理だと思う。家庭に据えつけの端末はその家固有の情報も多く持っている大切なモノだし、見ず知らずの人間がいきなり貸してというのもためらわれる。

まして、相手の家の迷惑を考えたりすると、とても借りれるものじゃない。

「わかるわかる。辛いよねー」

エリさんはうんうんと頷きながら、壁に並んだあるメーカーの携帯を手にとった。

「あ、これまた新しいモデルも出たんだ。……昔は携帯って言えば昔は重くて全然使えなくて大変だったって話だけど、こんなにコンパクトになってずっと使いやすくなってるんだから、いい時代よね」

「エリさん、なんかおばさんくさい」

「うっ……」

私が指摘するとエリさんはいったん硬直し、ぎぎぎ、と音がするように錆びついた動作で手の中の携帯を棚に戻す。

「……はあ。サエちゃんにおばさんて言われちゃった……ショック」

「ご、ごめんなさい……」

「あは、まあしょうがないけどねえ。サエちゃん、ポケベルなんか知らないでしょ？」

聞きなれない単語にコクンと頷くと、エリさんは頭をかきながら解説してくれた。

「なんか、自分で自分の首締めてるみたいだけど、携帯が一般化する前はそういうのがあったのよ。簡易的な装置で、どっちかっていうと公衆端末の補助みたいなものだったんだけどね」

「……コードレスみたいなもの？」

「えっと……なんて言えばいいのかな。ポケベルで一端受けておいてから、公衆端末がある所まで用事を済ませるって感じ？　どうしても必要な緊急事態の時に、最低限の用が足せるようにした装置……かな。携帯よりもちっちゃくて、機能も限定されてるんだけどね」

「なんか……聞いてると不便そう、なんだけど」

ちょっと見たことのない“ポケベル”を自分が使っているのを想像してしまい、思わず頬が熱くなるのを感じる。いくらエリさんでもそん

な話をするのは恥ずかしくて、私はそっぽを向いてごまかした。

「うう、それでもそういうのが使われてる時代があったの！！ その前は本当に家庭用の端末と公衆端末意外には無くて、みんな苦労したんだから！！」

力説するエリさん。けれどそうやって力いっぱい説明されればされるほど、私はなんとも言えない気分で俯いてしまう。

だって、つまり、そんなことまで知ってるってことは、エリさんもそういうのを使っていた頃があるって事だ。

「こほん。……えーと、まあ昔の話はこれくらいにしようね。で、サエちゃんの携帯だけ」

「うん……でもエリさん、どれ選んでいいのかわからないよ。いっぱいありすぎて」

「うーん……最初はもう、本当に見栄えとかだけで選んでもいいと思うな。最近のは機能も多いし、最初からぜんぶ使いこなすのは難しいだろうし」

そんなことを言われるとますます迷ってしまう。

それでも、ぴかぴかと照明に照らされるたくさんの携帯は、確かにどれも宝石箱みたいで、思わず手を伸ばしてしまいたくなる。

「新しい会社の参入も進んで、競走も激しいからどんどんすごいのが出てるのよねえ」

「エリさんの、見せてもらってもいい？」

「あたしの？ ……うー、ちょっと恥ずかしいなあ。だいが古いし、使っちゃってるし。……はい」

「へえ……こんな、なんだ」

エリさんの携帯はピンクに少しだけメタリックカラーを溶かしたような色をしていた。最近流行の中折れ式。ストラップにはかなり昔に放映されて、最近またリメイクされると噂のアニメのキャラがぶら下がっている。

容量は増設込みで 5 1 2 M。見た目よりもだいがいじられているみたいだった。

「い、いいかな、その、あんまりじろじろ見られちゃうと……」

「うん。ごめんなさい、無理言って」

エリさんに携帯を返して、私は再度壁に並んだ携帯を見た。

「それ買った頃、まだ 5 1 2 M ってのが一般的じゃなくてね。1 2 8 M とか、多くても 2 5 6 M とかだったかな。中には 6 4 M とか 3 2 M とかいうのまであったんだよ？ 信じられる？」

「そ、そんなに少なかったの……！？」

それは、いくらなんでも、さすがに少なすぎる気がする。だって、いくら私でも……それよりは多く使っちゃう自信があった。

「ホント、容量ちっちゃくて使いづらかったよ。そんなに携帯も普及してなかったし、リサーチも進んでなかったからさ。まして女性人権団体の人とかが反対してね。外で携帯使うなんてみっともないとか、そんなに携帯に容量要らないって言ってたくらい。今考えるとヘンな時代だったよねー」

いまは全然そんなこと無いけど、とエリさんは棚の携帯を見る。少なくとも 5 1 2 M か、あるいは 2 5 6 M の 2 サイクルが主流だ。中にははじめてから 7 0 0 M 超えとか、1 0 2 4 M なんて大容量のものまである。

あんなのとても使いきれとは思えないけど、売ってるって事は、その、つまり、使っちゃう人がいる……って事なんだろう。

「大は小を兼ねる、だよ。恥ずかしがらずに自分にあったものを選ぶのがいいと思うな」

「う、うん……」

エリさんのアドバイスを受けながら、私はしばらく売り場を回り、目に止まったひとつを手にとった。

「これ？」

「……うん」

私の選んだモデルは白のスタンダードなもの。昔から人気の機種を、様々な要望にこたえる形でバージョンアップしたモデルだ。
「うん、ちょっと子供っぽい感じもするけど……まあいいんじゃない？ 初めてだしね。シンプルなほうがいいから、ぴったりかも。容量はどれくらいにするの？」

「えっと……基本で2.5.6Mの2サイクルだけど……」

もっと少ないのが標準だったら、なんとなく選びづらかったけど、今はそれくらいが標準なのであんまりためらいなく選べた。これも時代が進んで携帯が普及したからなのかと思うと、なんか複雑な気分になる。

「折角だから多めにしておいた方がいいよ。ちょっと割増になっちゃうけど、何が起ころか解らないし、あとから増設したくてもすぐに来なかったりするし。サエちゃん、学校上がったら電車通学でしょ？ 多い方が困らないと思う」

そう言いながら、エリさんは増設パックを幾つか棚から拾い上げる。

「ほら、これくらいで」

「ええっ……こ、こんなに使わないよお」

思わず言い返してしまっていた。いくら憧れのエリさんのお勧めでも、ちょっとその、これは対応に困る。だって渡されたのは5.1.2Mの増設パックが二つ。もともとの容量と全部あわせると、なんと1.5.0.0Mを越える大容量だった。

「そんなこと無いってば。若いんだし、たくさん使うよ？ 意外とすぐいっぱいになっちゃうって」

「うう……そんなことないもんっ」

「……あたしも最初はそう思ったんだってば。3.0.0もあれば十分で、節操無くそんなにたくさん容量増やさなくても……ってね。でも本当、これは経験者としての忠告。」

用心するに越した事はないんだよ。さっきも言ったけど、大は小を兼ねるってホントなんだから。後で足りなくなっても、使ってる時にすぐに増設できないし。いざって時安心だよ？」

「う、うーっ」

言われていることは正論なのでどうしても反論できないけど、いくらなんでも1.5.0.0Mなんていうのはちょっと、あまりにも大きすぎる。とてもじゃないけど、全部使い切るとは思えなかった。

「と、とりあえず先に契約しちゃうよ。あ、あとで考えるっ！！」

「……そう？ 絶対後悔すると思うなあ」

エリさんはまだ気にしていたようだけど、私は構わずにカウンターへと向かうことにした。

「——ご購入ですね。こちらの機種でよろしいですか？ どのようなプランがご希望でしょうか」

「えっと……」

目の前にばらっと広げられたグラフと数字の山に、いっしょん困惑してしまう。携帯はただ持ってるだけじゃ使うことができなくて、契約して月ごとにお金を払うことで端末としての用をなす。だから、この契約プランもとても重用なんだけど、なにしろいままで一回も使ったことがないから、どれくらいがちょうどいいのか解らない。

カウンターのお姉さんがいろいろお得だったり特徴があったりというのを説明してくれたけど、はっきり言ってどれを選んでいいのかさっぱりだった。

「うーん。これもやっぱりちょっと余裕もたせておいた方がいいかもね。後で変更するのも手間だし」

エリさんが腕組みをしながらグラフの一つを指差す。

……うん、やっぱりそれもちよっと多すぎるような。さすがに一月合計しても、そんなに長い時間使うとは思えない。基本量だけですごいことになっちゃってるし。

「そうなのかな……」

「絶対そうだってば。サエちゃん、そろそろ私のこと信じてよお」

「……そのプランですと、こちらの家族割引などに加入していただくと、基本量はそのままでさらにメンテナンスなどがお得になっておりますが」

「えーと……それは、その、いいです……」

「え、いいの？」

エリさんが不思議そうな顔。

「う、うん……お母さんにも、いいって言われたし」

「そっか。信用あるなあ。さすが優等生」

いいいいこ、と頭を撫でられて、わたしは耳が赤くなるのを感じた。

たとえ家族同士でも、プライバシーを尊重しよう、というのが我が家の基本方針だったりする。携帯にはどうしても他の人に知られたくないことも記録されてしまうので、それを巡ってはクラスの皆もよく家族とけんかになったりするらしい。

中には恋人の携帯の使用履歴とかだまって見たことで大騒ぎになることもあるそうだ。確かに携帯の意味を考えると、できることならそういうのに煩わされたくない。

「じゃ、じゃあこれで……」

「ありがとうございます。それではお会計をさせていただきますね。少々お待ち下さい」

「エリさん、ありがとう」

「いいっていいって。これくらいさせてよ、可愛い従姉妹のためなんだから。……それに、携帯本体の値段よりも、そのあとの使用金額の方が高いしね。エリちゃんはそのへんしっかりしてるから、ちゃんと使うだろうケドさ。くれぐれも使いすぎちゃダメだよ？」

「う、うん……」

そんなことになったりするんだろうか、と思いながら、私はカウンターに手を置いた。

やがて、お店のお姉さんが契約の済んだ携帯をもってきてくれる。

「お客様ご購入のご予定はありませんか？ いまなら古い端末も引き取りサービスをしておりますが」

「もうだいぶ古いけど、使いごちがよくて、慣れてるのが一番だしね……しばらく変える予定はないかな」

エリさんはそう答えた。やっぱり長年使って馴染んだ方が使いやすいんだろうか。新しい機種が出るたびに買い換える人もいるみたいだけど、エリさんは違うらしい。

なんとなく、さすがだなあ、と思って誇らしかったり。

「どうする？ さっそく使ってみる？」

「う、うん……」

不意に聞かれて、私はとまどってしまった。

でも、ちょうど、実はさっきから、そんな気分になってしまっていたところだったりする。せっかく買ったんだからっていう事なんだろうか。

なんとなく、どうしようかなと思っていたところにエリさんに助け舟を出された感じだった。私は勧められるまま、コクンとうなずいた。

「え、えっと……」

「こちらに使用スペースが設けてありますので、どうぞ」

「あ、はい。サエちゃん、こっちだって」

店員さんに案内されて、店の隅にあるカーテンの奥へ。携帯の使用マナーが問われる昨今、お店のまんなかで使うのは回りのヒトの迷惑にもなるし、とってもイケナイことだ。

……もっとも、言われるまでもなくそんな所で使う気にはなれなかった。とてもじゃないけど、想像するだけで恥ずかしい。死んじやいそうなくらいだ。いったい往来とかお外で構わずに携帯を使える人は、どんなことを考えているんだろう？ こんな人目の多いところじゃ、絶対に誰かに聞かれたり、見られたりしてしまうのに。

「使い方、わかる？」

「お手伝いいたしますか？」

「だ、大丈夫ですっ、わかりますからっ」

ふたりを追いだすようにカーテンを閉めて、深呼吸。

ふいにぶると背中が震えた。自分で思っていたよりもだいぶ緊張していたみたい。意外にもう、余裕は残されていなかった。私はちょっと焦りながら携帯を開く。

スペースの壁には、大きな文字で使用方法が図解されている。結構直接的な使い方が描いてあって、なんだか恥ずかしくなってしまう。

ロックを解いて携帯を開けた。一番最初の暗唱番号は、とりあえず誕生日の4桁。そのうち別の数字に変えたほうがいいかもしれない。誰かに拾われて使われちゃったりしたら最後だ。

ぱかり、と開いた携帯の内側は、さらさらの高分子吸収帯。片方が処理部で、もう片方の文字盤が制御部になる。ボタンを順番に押して電源を入れ、使用モードをON。

「んっ……」

思ったよりもさらいに余裕がない。慌てて私はスカートのホックを外した。最近の携帯は服を着けたまま使えるようになっているはずだけど、なんだか上手くいかないで、スカートは諦めて下着と一緒に足元まで下ろしてしまう。こんなところでハダカになるのはなんだかイケナイ事をしているみたいで、ドキドキした。

壁の使用方法にはスタイルは自由に、なんて描いてあるけど……立ったままで上手くできるんだろうか。それともしゃがんだ方が……

「あっ……ダメえ……」

思い悩んでるうちに、身体のほうが待ちきれなくなってしまった。きゅんとおなかの下のほうが疼き、我慢しようという気持ちを無視して勝手に始まってしまう。

止めきれずに吹き出してしまった熱い雫が、ぶしゅと脚の間に飛び散って。処理部に収まらずに床に散ってしまう。

ぽたぽたとこぼれる雫が指を伝って、内腿をオシッコが汚してゆく。

うまく携帯用の排泄端末——つまりは携帯トイレを使えず、いい歳をして“失敗”してしまったことに、顔が真っ赤になった。

慌てて脚を開き、処理部に股間を押しつけるが、動揺してうまくオシッコの穴をおさえきれず、吹き出すオシッコが縁から溢れ出してしまう。

「ああっ……や、やだっ、うまく入らないよおっ……」

身体をよじって一回オシッコを止めようとしたが、もうそれは無理だった。ぎゅっと前を押さえても勝手に出てしまうオシッコは、携帯

の入り口から外れて床にぱちゃぱちゃとこぼれ、どんどん薄黄色の水たまりを大きくしてゆく。

さらに困ったことが続いた。

「う、うそ？ も、もう一杯なの！？ ……や、ま、まだ出ちゃうよぉっ……」

これまで、私は家に備え付けの排泄端末しか使ったことがなかったので、自分のオシッコの量がどれくらいかなんて気にしたこともなかった。いくらなんでもコップ1杯分、200MLを超えるなんて思ってなかったけど、携帯の容量をいっぱいまで使っても全然足りない。

本当なら私のものになったばかりの携帯は256MLの容量がふたつあるタイプのもので、途中でもう一つのパックに切り返れば、まだ256ML、合計で512MLのオシッコを処理できるだけの余裕があったはずなのだが、焦って混乱した私はそれを思いつくことができなかった。もしできたとしても、操作法がわからずに結局同じ事だったろう。

結局、私はそのまま動くことができず、許容量を超えてぐちゃぐちゃになった携帯端末の処理部をぐっとあそこに押しつけたまま、あそこから吹き出して止まらないオシッコが、ぱちゃぱちゃとあふれ続けるのを感じていた。

あったかいモノがたっぴり内腿とお尻を伝って床にこぼれてゆく。

やがて、1分近く出続けたオシッコがやっと終わった。あふれたオシッコで脱ぎかけた下着とスカートはぐちゃぐちゃになってしまっていた。

オシッコの……というよりは、オモラシの解放感と脱力感に下半身が弛緩して、代わりに大失敗の現実が押し寄せてくる。

私はそのまま、我慢できずに泣き出してしまった。

「うう……っ……」

「ねえ、どしたの、サエちゃん、大丈夫？」

カーテンの向こうで、エリさんが心配そうに声をかけてくれた。私はもうみともなくて恥ずかしくて、泣きじゃくりながら答えるしかない。

「……エリさぁん……っ」

「ありゃ……失敗しちゃった？」

「うぁ……ひっく……わ、わたし、も、もう、春から上の学校なのにつ……う、うまくできなくてっ……オシッコ……おもらし、しちゃ……っ、うぁーんっ！！」

「あーもう、よしよし、泣かない泣かない。最初はけっこうよくあることなんだから。ね？ 恥ずかしくなんかないよ」

エリさんに頭を撫でながら慰めてもらっても、私はなかなか泣きやめなかった。

みんなが当たり前のようにちゃんと使えてる携帯トイレを、私だけがうまく使えないなんて。そんなの。

「しーがない、しばらく一緒に練習しようか。大丈夫、すぐに慣れるからさ」

「うん……ぐすっ……」

——20XX年。

健康や倫理の観点から、女の子が携帯トイレを使って用を済ませるのが一般的となり、かつては街に必ず作られていた公衆トイレがすっかりみられなくなった時代のことである。

(初出：書き下ろし 2008/06/22)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: なかなかできない料理店

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/22/2008 22:19:10

BODY:

雲よりも高い山の上、険しい山道。

ひんやりと霧の深くたちこめた岩だらけの道を、ふたり連れの女の子が歩いていました。ふんわりとしたつややかな髪に、曇りのない目をした、整った顔立ちの女の子たちでした。透けるように白い肌や柔らかそうな手のひら、ふっくらとした頬は、毎日のパンを得るために汗水を流して精一杯畑を耕し、声を嚙らして客を呼び込む労働とは無縁のものでした。

どちらもかかとの広いブーツを履き、帽子を深くかぶって外套の襟を立て、背中にはぴかぴかの猟銃を背負っています。身につけているものはどれも上等で立派な、新品の下ろしたてのものばかりです。

「ふう……はあ。疲れた。……どうですか？ どこかに休めるところはありますか？」

「いいえ。……まったく理不尽ですわ。わたくしたちがどうしてこんな思いをしなければなりませんの？」

「本当にそうですわ！！ ……ああもう、なんにも見えませんわ、この役立たず！！」

お嬢様の片方が、うんざりしながら首にさげていた双眼鏡を投げ捨てます。ぴかぴかのレンズは、お嬢様のわがままを聞きいれて、今日のために侍従がとりよせた新品なのですが、フォークとナイフよりも重いものを持ったことのないお嬢様には、首にかかった重りのようなものでした。

「……まったく、ふざけた山ですわね。こんな何もなくて、なにが楽しくて歩かねばならないんですの？」

「本当ですわ。あの子達も主人を置きざりにしたまま帰って来ませんし、お屋敷に戻ったらたつぷりと折檻してやらなければ」

このふたりは、この国でもたいへんお金持ちな会社のご令嬢でした。今日は朝はやくから、狩りにいくために、両手一杯に荷物を抱えさせた侍従を連れて、この山奥深くの険しい峰にやってきたのです。

けれど、あんまり険しい山なので、いつしか侍従たちは疲れ果ててぶっ倒れてしまい、闇雲にずんずん先を進むお嬢様達とすっかりはぐれてしまったのです。

ですがお嬢様たちは、それにも構わずめくらめっぽうに山道を進み、とうとう本当に迷子になってしまっていたのです。

「ねえ、少し休みませんか？ もう足が痛くて、歩けませんわ」

「そうですわね。そうしましょう」

お嬢様たちはめいめいに近くの岩にハンケチを広げると腰を下ろして、棒のようになってしまった足を伸ばしました。ふたりは根っからのお嬢様で、生まれてからこのかた苦労というものをまったくすることがありません。

普段はどこに行くにも馬車と鉄道を使うばかりで、隣のお屋敷まで歩くこともないような箱入り娘なのです。普通のひとならなんでもないような、ほんのひと坂を登るだけでも大変な苦労なのです。

「……それにしても、山道がこんなにたいへんだなんて思いませんでしたわ」

「本当ですわね。こんなに苦しいなら、人を雇って岩を削って、平らにならしてしまえばいいですよに」

「あら、それはいい考えですわね。そうすれば下々のかたがたも歩くのが楽ですわ」

などと、ふたりは生まれながらのお嬢様なので、実にわがままなことを勝手に口にします。

ひとしきり文句を言いながら、額の汗をハンケチで拭くと、お嬢様達は腰に下げていた水筒を取り出しました。

「ふう、まったく喉が渴いてしょうがないですわね。……お飲みになりますか？」

「ええ、ありがたく頂戴しますわ」

「……はいどうぞ、召し上がれ。テーブルもありませんけれど、はしたないのは我慢いたしましょう？」

「そうですわね……せっかく美味しいサンドイッチもスープも、お茶の用意も椅子もテーブルも背負わせていたのに、あの子達がどこかに行ってしまうんですもの」

言いながら、お嬢様達はつぎつぎとお茶をお代わりしてゆきます。

なにしろお昼もとうに過ぎているのに、朝からなんにも食べていないのです。お嬢様たちはすっかり喉が渴いていました。たちまちのうちに、一抱えもあるような水筒がまるっきり空っぽになってしまいます。

「ああ……重かった。こんなものを持つのは召使いの仕事ですのに、どうしてわたくしがこんな重い思いをしなければなりませんの？」

「あら。でもこれですっかり中身も空にしてしまったのですから、邪魔にかさばるばかりですし捨ててしましましょうよ」

「そうですわね。それがいいわ」

もしも万が一の為に文句を言うお嬢様を説き伏せて水筒を持たせた召使い達の心配りも、お嬢様たちにはまるで通じていませんでした。

からっぽの大きな水筒を草むらにポイと投げ捨て、お嬢様達はお喋りを続けます。

「いったいどこなのでしょうね、ここは？　こんなに迷いやすいのならば標識でも立てておかねばならないと思いませんか？」

「そうですわね。きっと村の役人が怠けてばかりなのですわ」

「ぜんたい、今日は悪いことばかりですわ。こんな空模様ですし、せっかく買ったばかりの猟犬もペアですもの、六百円も無駄にしまいましたわ」

「ええ、わたくしは八百円の損害ですわ」

お嬢様たちが口々に愚痴を続けます。普段なら、こうしているとすぐに召使い達が駆けつけて、わがままを聞いてくれるのですが、こんな山の中ではそんなわけにもいきません。

しばらくお喋りを続けていたふたりでしたが、とうとう話すことがなくなって、うっかり本当のことを喋ってしまいます。

「……もう、いい加減はやく帰りたいですわ」

「本当ですわね……」

実は、ふたりとも心の中では寂しくて心細くてたまらないのです。山は陰しく、霧はどんどんと濃くなるばかり。

どれだけ道を急いでも、行けども行けども変わらぬ景色が続き、ごうごうと吹き荒れる冷たい風の中で、そわそわと回りを見回しながら、いつしか二人の手のひらはしっかりと繋ぎ合わされていました。

加えて、ふたりの落ちつきがないのは、たんに心細いばかりが理由ではありませんでした。

「……ふう」

「……はあ」

ふんわりと広がった山歩き用のドレスの裾の中で、登山ブーツの爪先が所在なげに揺れ、膝が寄せ合わされます。どこか気もそぞろに宙をみつめ、お嬢様達はきょろきょろとなにかを探しているのです。

時折、岩の上でもぞもぞと小さくお尻を動かし、

「……どうにも座り心地がよくありませんわね」

などと言い訳をします。

そろそろお日様は傾きかけ、木々の影はゆっくり地面を伸び始めています。お嬢様たちは朝早くに宿を経ってから、一度、山沿いの茶屋を通り過ぎたばかりで、ずっと歩き詰めでした。

「……………」

「……………」

そんなわけですから、お嬢様たちは今日、朝から一度もお手洗いに行っていません。たっぴり8時間近く、一度もおシッコができていないのです。無論のことながら、山奥の険しい山道に都合良くお手洗いがあるわけではありませんでした。

だから、いい加減お嬢様達は、お手洗いに行きたくて仕方がないのです。

そわそわと回りを見回し、さりげなく膝を寄せ合ってはきゅっと俯き、形の良い眉を寄せます。

お腹がすいてすっかりそのことも忘れ、ごくごく飲み干してしまった水筒の中身が、じわじわとお嬢様たちを苦しめているのです。

「ね、ねえ、どうかなさいまして？」

「べ、別に、なんでもないですわ。貴方こそどうかなさったの？」

「い、いえ？　なんてことありませんわよ」

お嬢様たちは、人前でお手洗いにを我慢したり、オシッコに行きたいなどと口にするのは、とてもはしたないことなのだと思います。

おまけに意地っ張りで見栄っ張りなふたりは、自分がおしとやかで控えめな淑女だと思っていたので、相手の前でそんなことを言うのがみっともなく、お互いに相手がそのことを言い出すまで黙っていようと思っていたのです。

そんな風にお互いが考えているものですから、結局どちらも言い出すことができず、ふたりともさっきからお手洗いに行きたくて行きたくてたまらないのに、ずっとそれを我慢して、しらんぷりをしているのです。

「そ、そろそろ参りましょうか？」

「え、ええ」

だんだん、冷たい岩に座ったまま風に晒されているのも辛くなってきたので、お嬢様達は再び腰を上げる事にしました。

「はやく皆を探して、帰りましょう」

「ええ、……もう狩りはこりごりですわ。山鳥なんか、そのへんで買えますもの。こんな重いもの、ベツに要りませんわね」

そうと決まれば、とふたりはとうとう猟銃も放り捨て、歩き出します。

さっきよりも幾分重い足取りは、さっきよりも下腹部が張ってきつくなり、だんだん歩くのも辛くなってきているからでした。

「……………」

「……………」

俯き加減で、そわそわと急ぎ足で進むお嬢様達。霧の中で見えないだろうと、さりげなくスカートの前をさすったり抑えたりしています。もうそうしていないとうまく山道を歩けないほど、お手洗いにいきたくてしょうがないのです。

「こっち、ですかしら？」

「あっちじゃありませんこと？」

だんだん切羽詰まりながら、お嬢様達は相談を繰り返して山道を急ぎます。けれど地図も磁石もなく、霧の深い山の中では、いったいどちらが山を下るほうなのかまるでわかりません。

それでもとにかくずんずん岩だらけの道を行くうち、急に霧の向こうに大きな建物が現れました。

「あら……？」

「あれは……？」

ふたりが近寄ると、それは白いペンキを塗った大きな家でした。

入り口には看板があり、こう書かれています。

>『西洋料理店　山猫亭』</p>
</div>
<div data-bbox="64 848 404 865" data-label="Text">
<p>「ああ……良かった。丁度良いお店がありますわよ」</p>
</div>
<div data-bbox="64 869 542 886" data-label="Text">
<p>「本当ですわね。思ったよりは開けているのですわ、こんな山の中なのに」</p>
</div>

お嬢様たちは顔を見合わせて喜びました。

「これで一息つきますわね」

「ええ、もう、さっきから……おなかがすいて動けなくなりそうでしたの」

「そうですね。もう本当に……なにか食べないとすっかりへばってしまいそう」

お嬢様達はめいめいに、本当に口にしたい『お手洗いがしたかったんですの』という言葉飲みこんで、心にもない事を言いあいます。

ふたりとも実はもうそろそろ、本当に我慢ができなくなってしまいそうだったのですが、そんなことはおくびにも出しません。でも、これでやっとお手洗いが借りられます。そう思えば、こんな山の中にあるレストランでも、ふたりにはまるで天の助けのように思えたのでした。

ふたりが揃ってレストランの玄関をくぐると、すぐにドアがあり、側には小さなコルクのメッセージボードに小さな紙が止められていました。

>『こんな山奥までようこそいらっしゃいました。たいへんお疲れになったでしょう。さあさあどうぞおあがり下さい。店主一同、準備を凝らしてお待ちしております』

「なかなか感じのいいお店ですわね」

「ええ、きちんと行儀の行き届いているお店のようですわ」

文字はまだ続いています。

>『ここは、なかなかできない料理店です。たいへん申し訳ありませんが、どうかいちいちこらえてください』

「なかなかできないというのはどういったことかしら？」

「多分、繁盛しているのですわよ。それでなかなかお料理が出てこないかもしれないけれど、申し訳ありませんと、その様に書いてあるのではありませんこと？」

「ああ、なかなかお食事ができないですけど、こらえてくださいと言うことですね。なかなか謙虚じゃありませんの」

「まったくですわね。なにも言われずにあとでえんえん待たされるよりはだいぶ感じがいいですわ」

首をかしげながら、お嬢様達はさらに先を読みました。

>『いろいろご不自由もおかけしますが、どうかご容赦をおねがいいたします。

「……こんな山の中ですものね、いろいろ大変なのでしょう」

「材料や水を運ばせるだけでも一苦労なのでしょうね。お高いのかしら？」

「仕方ありませんわ。はやく上がりましょう」

「ええ、暖かいものでももらわないと、すっかり冷えてしまいますわ」

実際は、もうふたりともそんな事はもうどうでも良くなっていました。お嬢様たちはおなかの中に閉じ込められたオシッコのことで頭が一杯で、はやくお手洗いにいきたくってたまらなかったのです。

すっかり腰が引けたまま、ふたりはもじもじと身体をくねらせて我慢を続けています。滑稽なことこの上ない格好ですが、お嬢様達はそれぞれおしっこを我慢するのに精一杯で、まるで自分達の姿を気にする余裕がありません。

>『本店は、若い女性の方を歓迎いたします。ことに、身分の高くお若く美しい淑女の方々は歓迎です』

「あら、大歓迎ですってよ？」

「これは具合がいいですわね、わたくしも貴方も、どこの社交界に出たって恥ずかしくない、立派な淑女ですもの」

めいめいに勝手なことをいうお嬢様達ですが、オシッコをこらえようと脚をすり合わせ、ドレスの前を押さえる姿はとても淑女にはあるまじきはしたくない格好です。きちんとお手洗いも我慢できないようでは、とても淑女とは言えないでしょう。

けれどふたりは自分がとても綺麗でうつくしいと思いこんでいるので、互いにもじもじくねくねと腰を揺すり脚をモジつかせるみっともない格好を見せ合いながらも、自分だけはそんなことはないと思っているのです。

>『それでは、姿勢を正しきちんとした作法で、お進み下さい』

最後の一文を見て、ふたりのお嬢様ははっと我に帰り、慌てて前かがみになっていた姿勢を正しました。

互いに相手が恥ずかしい格好をしていた事は知っているものですから、気まづくなってちらちらとそっぽを向いてしまいます。

「……え、ええと、わたくし、こちらが山の中のお店だと思って見くびっていたようですわ、確かに貴族の子女たるもの、お行儀良くないければいけませんものね」

「そ、そうですわね。きっと、奥には偉くて立派な方達がたくさんいらっしゃるのですわ」

お嬢様たちはぴんと背筋をのばし、震える膝小僧を隠しながらぎこちなく微笑みあいました。今更ながらにとっても遅いのですが、それでもお嬢様達は気付かれてはいないと思っているようです。

「ええ。こんなにもお行儀に厳しいレストランですから、来るお客様はきっと立派な方達に違いありませんわね」

「恥ずかしいところを見せないようにしなければなりませんわ」

ちらい、と相手の方を見ながら、お嬢様達は言いあいしました。

ふたりとも、自分の事は棚に上げて、相手がみっともなくオシッコを我慢しているところを見ているので、自分はそんなはしたない様子は見せないように思っているのです。

「さあ、参りましょう」

「ええ」

もう少しの我慢だと自分に言い聞かせながら、お嬢様達はドアを開けました。

すると、ドアの向こうにはまた廊下が続いています。いささか拍子抜けしながら、お嬢様たちはつめたく冷えた廊下にぶるっと身体を震わせ、そろそろと慎重に歩いてゆきます。もうお喋りする余裕もないふたりでしたが、それでも文句を言うのは忘れません。

「き、綺麗なお店ですけど、寒くてかないませんわね」

「そうですね、偉い方がたびたびいらっしゃるなら、玄関と廊下ももっと暖房を入れておかなくてはいけないと思いますの」

「確か、これは北国のほうのお屋敷の作りなのですね。前にお父様にお聞きしましたの。こうしてたくさん壁をつくって、寒さをしのいでいるんですねよ」

「ああもう、できればはやく暖かい暖炉にあたってゆっくりしたいものですね」

めいめいに勝手なことを言いながら、ふたりは廊下を進みます。

しばらくすると、また廊下の突き当りにはドアがありました。側には上等なクローゼットが用意されていて、鏡も備え付けられています。

壁には玄関にあったのと同じメッセージボードがあり、こう書かれていました。

>『こちらで、上着とお帽子をお取りください。また、靴と貴重品もお預かりいたします』

「……そうですね。こんな表を歩く格好のままお宅に上がるわけにもまいりませんわ」

「ええ、中には偉い方がいらっしゃるに違いありませんわ」

そう言いながらも、お嬢様たちは外套のボタンを外すのをためらっていました。しんと冷える廊下の途中で服を脱ぐのは、ますます腰を冷やしてオシッコを近くしてしまうでしょう。けれど、こう書かれていては逆らうわけにもいきません。渋々外套を脱ぎ、帽子を取って、ベストも外してクローゼットにしまします。クローゼットの中には小さな金庫もあり、貴重品もしまえるようになっていましたので、お嬢様たちはお財布やお化粧バッグもそこにしまい、鍵をかけます。

「お店を出るときは、ここでお勘定を済ますのかしら？」

「きっとそうですね」

ブラウスにスカートという身軽な格好になって、お嬢様たちは背筋をのぼる寒さにそっと身体を震わせます。

「い、急ぎましょう。寒くてかないませんもの」

「え、ええ」

ここで上着を脱がせるのですから、ひょっとしたらドアの向こうはしっかりと暖房がきいているのかもしれませんが。そう期待しながらお

嬢様たちはがちゃりとドアを開けますが、その向こうに続いているのも相変わらず代わり映えのない廊下で、やはりしっかりと冷えていました。

廊下のとなりには小さな台がおかれており、また小さな金庫がありました。

同じく一回り小さいメッセージボードがあり、そこにはこう書かれています。

>『手袋はお取りになりましたか？ また、毛糸のはきものもお脱ぎください』

「あ、ああ、すっかり忘れていましたわ」

「え、ええ、こんなみっともないものを身につけたままお食事をするのは失礼ですわね。も、もし気付かれたら田舎者と思われてしまうかもしれませんもの」

「そ、そうですわね。本当に親切ですね、このお店は」

「ええ、本当に」

ふたりとも手袋は外していましたが、こっそりスカートの下には防寒用の毛糸のぱんつを履いていたのです。また、足元にも防寒用のぶあつい靴下をつけていました。

お嬢様たちはお互いに顔を見合わせてから、そそくさと背中を向け合い、スカートの下から毛糸のぱんつと靴下を外します。

これまで暖かくお尻を包み込んで寒さから下半身を守ってくれていたものがなくなった途端、しんと冷えこむ冷気がたちまち脚の付け根を刺激します。

「っ、は、はやく参りましょう」

「え、ええ。あまりじっとしていると寒いのですものね」

さっきよりも震えた声で、お嬢様達は廊下に踏みだします。

薄いストッキングごしに廊下の板の冷たさが伝わり、思わず縮こまりそうになる爪先をぐっと押さえ付けて、慎重に進んでゆきます。

ぞくぞくと背中を這い登る冷たさが、どんどんとお嬢様達の身体を冷やしてゆきました。ますます辛くなるオシッコの重みをこらえながら、お嬢様達はぎゅうっとスカートの前を押さえてしまいます。

またもしばらくすると、ドアがありました。今度はメッセージボードはありません。

「……………」

「……………」

とは言っても、ここでじっとしているわけにもいかないお嬢様達は、内股になりながらドアを開けて中にはいります。

すると、今度は廊下ではなく、そこはちいさな部屋になっていました。白塗りの丸テーブルがあって、藤で編んだ椅子が向かい合わせに並べられています。

テーブルの上にはまた小さなメッセージボードがあって、こう書かれていました。

>『ながらく山の中を歩いてさぞお寒かったでしょう。暖かい飲み物をご用意いたしました。どうぞ、お喉を潤してください』

ほかにテーブルの上には、上等なティーセットと、なみなみと紅茶をたたえて湯気を立てるティーポットが用意されていました。礼儀を弁えた執事かメイドがたたいたまじつらえたような、大切なお客を出迎えるような有様です。

ほわほわと湯気を立てる入れたての紅茶は、レモンを浮かべてティーカップの縁までなみなみと注がれていました。

「あ、あら……美味しそうですね」

「え、ええ……」

ふたりはためらいながらも、無視する訳にもいかず、椅子に腰掛けます。お互いにオシッコを我慢しているものですから、できるだけ慎重に腰を下ろすのですが、やっぱり冷たい椅子の感触に我慢の仕草を押さえこむことはできず、『んうっ』と小さく声をあげてしまいました。

「……………」

ティーカップになみなみと注がれた、色の薄いレモンティーは、あまりにも“それ”を連想させて、見ているだけでお嬢様たちの下腹部にさざなみを立てます。

「お、お飲みになりませんか？」

「あなたこそ、わたくしに遠慮なさらずにお召し上がりなさいませ？」

こういう時、たとえ喉が渴いていなくても示された好意は受け取らねばなりません。けれど、もうお嬢様たちのおなかの中はぱんぱんで、少しでも水分を口にすれば、たちまち溢れてしまいそうなものですから、ふたりはどうにかしてこのレモンティーを飲まずには済ませられないものかと頭をひねっていたのです。

けれど、せっかくの熱々の紅茶を冷ましてしまうわけにもいきません。それに、身体が芯まで冷え切ってしまっているのも確かでした。熱々の紅茶を飲めば、人心地つくかもしれません。

「せ、折角のお茶ですもの、お断りするわけにはいきませんわよね？」

「……ええ、も、もちろんですわ」

お互いに相手を見ながら、お嬢様たちは同時にティーカップをもちあげました。ふたりとも相手が口にするまでは自分も飲むまいと思っているものですから、まるで侍がお互いに刀を構えて、相手のスキを窺っているような緊張感です。

結局、お嬢様たちはまったく同時にティーカップに口をつけ、最後の一滴まで残さず飲んでしまいました。これまた、ふたりのお嬢様はお互いに相手が途中で残せば自分も残してしまおうと考えていたのですが、ふたりがふたりとも同じことを考えているものですから、結局途中で止めることもできず、すっかりカップを空にしてしまったのです。

「と、とても、美味しかったですわね？」

「え、ええ。残らず飲んでしまいました。とてもいい茶葉を使っていますわね」

「お、お水も美味しいものを使っているのでしょうね」

胃袋がちゃぶちゃぶと音をたてるくらい、一息に飲み干してしまったものですから、お嬢様たちはたちまちオシッコがしたくてたまらなくなりました。我慢できずそわそわとあたりを見回しながら、そそくさと立ちあがります。

「え、ええと、……ま、参りましょうか」

「え、ええ。そうしましょう」

もともとただでさえずっとお手洗いを我慢していたところに、さらに紅茶をたっぷりと飲んでしまったものですから、お嬢様たちはそれはもう今すぐにでもお手洗いに駆けこみたくてたまらなくなっています。

小走りに部屋を出たお嬢様たちは、またまた続く廊下を精一杯の早足で進んでゆきます。左右の手は交互にスカートの前を引っ張りあげ、おしりをちょこんと突き出し、ひょこひょこ身体を左右に揺すって、まるでヨチヨチ歩きのアヒルのよう。

とても淑女の仕草とは思えない、不恰好な有様でした。けれども、お嬢様たちはそんな外聞なんて気にしている余裕はないのです。頬を強張らせ、少しでも下腹部に衝撃を与えないように、そろりそろりと廊下を急ぎます。

一刻も速くお手洗いにいきたくてたまらないお嬢様たちでしたが、進む廊下の途中に小さな看板があるのをみつけ、ぱっと顔を輝かせました。

看板には小さな文字で、

>『お手洗い』

と書いてあります。

「あら……」

「まあ……」

ついとうとう、ずっと待ち焦がれていた場所をみつけて、お嬢様達は内心飛びあがらばかりに喜びました。けれどやっぱり、意地を張ってそのことを隠し通そうとするふたりですから、まるでさりげない風を装いながら道を間違えたふりをしてそこに入ってゆきます。

「……………」

「……………」

しかし、突き当たりのドアにあったのは綺麗なホーロー引きの洗面台でした。

蛇口は金色でぴかぴかに磨かれ、新品の櫛と香水、いい匂いのする石鹸と清潔な白いタオルが用意されています。

確かにこれは文字通りの“お手洗い”でした。けれど、ふたりが欲しがっていた、おトイレをするための場所ではありません。予想外のできごとにふたりはしばし言葉を失ってしまいました。

けれど、やっぱり意地を張りながら、お嬢様はくねくね腰を振りながら強がります。

「……そ、そうですわね……外から入ってきて、手も洗わずにお食事をするなんて、言語道断ですわ」

「え、ええ。身だしなみには常日頃から気を使わねばいけませんわ。よ、よほど偉い人がしじゅういらっしやるんですわ。このお店には」

もうすっかり我慢の限界といったふうな様子で、それでもお嬢様たちは律儀に手を洗い、髪を整えます。スカートの上から下着をぎゅっと引っ張りあげながら、それでもお嬢様たちは本当に欲しがっている『お手洗い』のことを口にしませんでした。

「……ま、まだですかしら？」

「も、もうずいぶん、歩きましたわよね……」

『お手洗い』できれいさっぱり身支度を整えたお嬢様たちですが、一番肝心なオシッコだけは済ませることができないまま、また廊下に戻って先を急ぎます。

いいかげん、ふたりともすっかり歩かされてくたびれ果てていたのですが、とにかくこの店で本当のお手洗いをを見つけ、オシッコを済ませてしまわないことにはどうしようもありません。もういつ限界がきてもおかしくないのです。

ここまで歩いてお手洗いが無いのですから、つまりもっと店の奥にいくしかありません。まさか、今来た道をひき返すわけにもいかなかった。山道にはこのレストランの他には建物はありませんでしたし、まさか貴族の令嬢ともあろう自分達が、道端の草むらでこっそりとしやがみ込んでオシッコを済ませるなんてことは考えられませんから。

けれど、今度の廊下はずいぶん長く、ドアもありませんでした。

『お手洗い』からずっと何も無いまま続く廊下を、壁にしがみ付くようにしながら、ふたりのお嬢様はよろよろと進みます。

けれど、もうそろそろ、無理に無理を重ねて我慢続けたオシッコは限界でした。

「も……もう、だめ……」

「ま、まだですよ……？」

はあはあと大きく息をし、寒いうかでじっとりと汗を浮かべながら、ぎゅうぎゅうと身体をよじって、お嬢様達は切ない声を上げます。もうそうやって、全身を使って我慢していないとじっとしていることもできないのでした。

「あ、あの、わたくし、じつは、少し前からお手洗いに行きたくって……」

「あ、あたくしですよ……」

ついにとうとう、お嬢様達はそのことを認めました。

けれどももう遅いのです、どこまでいっても廊下は終わらず、ふたりのお嬢様達がオシッコを済ませられる場所は見つかりません。

「ね、ねえ、わたくし、お、思ったのですけれど」

「な、なんですよ？」

恥も外聞もなく、ばたばたと交互に脚を踏み鳴らしながら、ぎゅうっと両手を重ね、スカートに皺を寄せて股間を前を握りしめるはしたない格好で、お嬢様が言います。

「あ、あの、入り口にあった、なかなかできない料理店ですよという文句ですけど、その、ひょっとして……」

「……………」

言葉の途中でオシッコの波が迫り、お嬢様はびくんっ、と身体を強張らせて言葉を途切れさせます。じんと脚の付け根に熱い感触が参みます。腰を左右に揺すり、まるで小さな子供が聞き分けなく暴れるような格好です。

「よ、ようするに、ふう、はあっ……お、お料理がなかなかできないとか、お食事がなかなかできないというのではなくて、そのっ……」

もう一人のお嬢様は、黙ってそれを聞いていました。

こちらのお嬢様も気付いていなかったわけではありません。もう口を開くと、それだけでそのままオシッコが始まってしまうそうだったのでした。

「っ、……ふうっ…、はあ、はあ……わ、わたくしたちが、なかなか、お……お手洗いのできない料理店、というのではなくって！？」

「そ、そんな、まさか……ううっ……」

「…………っ、あ、ああ、もうダメ……あうんっ……」

「っ、ふうっ……はあっ……くうんっ……」

そして、とうとう廊下のまんなかで、お嬢様たちは動けなくなってしまいました。

最初にお手洗いにいきたくてからもう4時間以上、えんえんオシッコを我慢させられているのですから、いくらなんでももうさすがに限界なのです。人前ではとても許されないような格好をして、必死に耐えていましたが、それでもばんばんに膨らんだ下腹部は、とうとう中身を溢れ出させてしまっていました。

スカートの下では、じゅじゅつ、しゅるるつ、とぐもった水音が響き、下着が勢い良くじ濡れていきます。

「や、嫌あ……っ、だめ……え」

「っ……っふ、うう……」

いつの間にか、長い廊下はぱったりと途切れ、二人の前にはいつものドアがありました。その側にはやっぱりメッセージボードがあり、こう書かれています。

>『なかなかできずに、ずいぶん長い間お待たせいたしました。これで最後です』

>『どうぞ、お入りください。この奥がおまちなのおトイレです。お二人ともご遠慮ならさず、ぞんぶんに、たっぷりとなさってください』

「「ッ———！！」」

お嬢様達は弾かれたようにドアに飛びつきました。

鬼気迫る形相で、ガチャガチャとドアノブをひねるのももどかしく、乱暴にドアを開きます。

けれど、そこにあるのはふたりの想像していたようなお手洗いとはかけ離れたものでした。小さな部屋は行き止まりのようになっていて、その中央には、白鳥の格好をした小さなおまるがちよこんと置かれているのでした。近くにはトイレットペーパーらしきものも積み上げられています。

そして一体なんの親切か、壁には絵入りでおまるの使い方で示されていました。まるで、本当に初めておまるを使う女の子にも、きちんとその使用方法がわかるかのようにです。

おそらくは、ふたりのお嬢様よりもずっとずっと小さな子供がつかうべきもののなのでしょう。お嬢様達がまたいで使うには小さすぎ、、また我慢に我慢を重ねたオシッコを受け止めるにはとても足りないほどのおまるでしたが、ふたりはまったくためらいなく、我先にと中に飛びこもうとしました。

よりにもよってこんな形で提供されたお手洗いでしたが、お嬢様たちのオシッコ我慢は頂点に達していたのです。

「っ、わ、わたくしが先ですわよっ！！」

「お、お待ちなさい、あ、あたくしのほうが先に——！！」

ふたりのお嬢様はがっしりとおまるを掴み、引っ張りあいをはじめてしまいます。

>『順番を守って、きちんと綺麗に使いましょう』

壁の解説には、こう書かれていましたが、もうそんなものはお嬢様達の目には入りません。一秒でも先にオシッコをしたくて、気が狂ってしまいそうでした。

たとえこんなおまるでも、このまま廊下でお漏らしをし、床を汚してしまうよりはずっとずっとマシなのです。けれど、がくがくと膝を振るわせて中腰になったまま。おまるを掴んで綱引きのように引っ張りあい、どちらも譲らないお嬢様達。

そのスカートには見る間に染みが広がり、足元にはぴちゃぴちゃと水滴が散ってゆきます。

もはやおチビリとは言えないほどに下着を大きく濡らしながら、お嬢様達はそれでも意地を張るのを止めませんでした。

「あ、貴方、そ、そんなに床を汚して、スカートもぐちゃぐちゃで、酷い有様じゃありませんの！！ ほ、ほら、も、もう漏らしているんですから、悪あがきはお止めなさいなっ！！」

「ちよ、ちょっとチビってしまっただけですの！！ ま、まだ半分以上残っていますわ！！ あ、あなたこそ、もうすっかり出てしまっているクセに、往生際が悪いですわよ！！」

じゅわ、じゅじゅじゅつ、ぶじゅじゅじゅ……

くぐもった音と共に、腳踏みを続けお尻を振るお嬢様達ふたりのオシッコが下着にぶつかって床にこぼれてゆきます。その量といったらすごいもので、とてもではありませんが、この小さなおまるには全部おさまりきりそうにありませんでした。たとえどちらか一方が使っただけでも、オシッコは一杯になって溢れてしまうでしょう。

「ちよ、ちょっと、ダメ、触らないでくださいましっ？！」

「あ、あ、あ、あつ、ダメ。ダメえ……！！」

たまらずお嬢様の一人が、スカートをひっぱりあげ、下着の上からおまるを脚の付け根におしつけます。たまらずもう一人のお嬢様も同じように、腰を突き出しおまるをぐいぐいと引っ張りました。

ぶじゅ、じゅじゅじゅ。じょわああああ……

もちろんのこと、そんな格好できちんとオシッコがおまるに収まるわけありません。床には大きな水たまりがひろがり、お嬢様達の下半身はすっかりオシッコで水浸しです。それでも、服の上からおまるを股間におしつけ、涙をこぼししゃくりあげながら、お嬢様達はオシッコを出し続けました。いくら止めようとしても、壊れた蛇口のように、もうまったく止まらないのです。

そして、いつしかお嬢様達の足元はすっかり泥だらけになっていました。

足元には脱ぎ捨てた外套や手袋、帽子に毛糸のぱんつと靴下。大切なお財布やお化粧バッグもいっしょになって、山道のすぐそばの草むらの中で、大きな大きなオシッコの水たまりに沈んでいます。

「だ、だめ、止まらないですの……っ」

「い、いっぱい出てしまいますわ……」

西洋料理店など、影もかたちもありません。

廊下も部屋もどこかに消え去り、ふたりのお嬢様は、寒空の下で薄着になって、空っぽの水筒を互いに奪い合うようにして、下着の上からその飲み口を脚の間に押しつけ、吹きだすオシッコをその中に注ごうと必死になっているのです。

(初出：書き下ろし 2008/06/22)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 夏休みの我慢の話。(図書館編)

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 07/27/2008 22:23:13

BODY:

「……暑い……」

言ってみたところで仕方がないが、それでも口にせずにはいられない。図書館を出てほんの数分で、冷房に慣れていた身体はあっという間に悲鳴を上げていた。

夏休みに入ったばかりの通学路は、いつものような賑わいとは無縁に、通りがかる人もまばらである。

じわじわと鳴く蟬の声は、強い陽射しの降り注ぐアスファルトから立ち昇る陽炎をいっそうくっきりと浮かび上がらせ、まるで熱したホットプレートの上を歩いているような気分にさせてくれる。

首筋に浮かぶ汗の不快感を気にしながら、明日香はブラウスの襟を引っ張ってぱたぱたと風を送る。学校指定の夏服は、布地も薄く色も軽いものだが、それでも30度を軽く超える真夏の気候にはとても対応しきれていない。

(急がなきゃ……)

早足で歩く少女の手は、そっと鞆を握り締める。

明日香も、できることならこんな時間に表を歩きたくはなかった。勉強に身が入らず帰るにしても、もっと遅く——日が落ちて、も

っと過ごしやすくなる夕方まで待った方がよほど利巧なやり方だ。

だから——彼女がこんな中途半端な時刻にわざわざ快適な図書館を出て、外を歩いているのには理由があった。

「ん……っ」

ぞわり、と込み上げてくる軽い衝撃。

それを乗り越えようと身体をよじった拍子に軽くこぼれかけた吐息を、下唇を噛んで飲み込む。

じん、と下腹部に広がる甘い痺れが、身震いをするように、おなかの奥でざわめくを感じながら、明日香はこっそりと息を吐いた。

（……っ、はやく……おトイレ……オシッコ……）

制服の下腹部にぐっと飲み込んだ、切羽詰まった尿意。

少女の繊細な膀胱をぱんぱんに膨らませた恥ずかしい液体に急かされながら、明日香は焼けたアスファルトの道を足早に進んでゆく。

一歩を踏むたび、おなかの中で危険水域に達した水面がたぷんと揺れ、たまらずあそこにぐっと力を籠めてダムを出口を塞ぐ。

図書館での勉強は明日香の日課で、毎年夏休みが始まると、明日香は一日のうち最も暑い時間を冷房の利いた自習室で過ごすようにしている。

宿題はだいたい7月のうちに片付けてしまい、あとは気の向くままに本を読んだり、参考書の問題を解いたりして過ごす。クラスでも上の方から数えて何番目、にランクインする成績を維持できているのは、そのおかげでもあった。

クラスメイトは夏休みの開始と同時に、最新の流行のお洒落をしてあちこちに遊びに行くが、明日香はそんないまどきの少女達とは対照的だった。わざわざ外出の時に、校則指定の制服を着ているのも、明日香の生真面目さによるものだ。

「……んう……っ」

（や、やだ……また来ちゃった……）

さっきよりも強い波がきて、明日香は思わず立ち止まってしまった。

ゆっくりしている暇なんてないが、動いているとなにかの拍子にちよびっと漏れ出してしまいかねない。さすがに往来で前押さえはできないので、鞆を持つ手をそっとスカートの前に寄せて、きゅきゅと膝を寄せあう。

これだけの仕草でも明日香にしてみればかなりの譲歩だが、なおも激しい尿意は少女の羞恥心を相手に一歩もひるまない。

路傍のただなかで、より恥ずかしい我慢の格好を引き出そうと、膨らんだ尿意の塊がちくちくと少女のオシッコの出口を責め苛む。あそこが小さく引きつる気配と、背筋の粟立つ感触に、明日香はたまらずくねくねと腰を揺すってしまう。

「っ……」

（は、はやく我慢して……おトイレ、行かないと……）

気ばかり焦るが、じりじり高まり続ける尿意の波のただなかでは思うように足も進まない。ここから家まではまだ10分近くかかるのだが、それもいつも通りのスピードで歩いていればの話だ。

下腹部をぱんぱんに膨らませたオシッコを我慢しながらでは、わけが違う。

きゅんと疼く甘い痺れが、おなかの方から徐々にその下へと移りだしていた。我慢の限界に近いのだ。

(……うう……おさまってよお……)

鞆の下でおなかをさすり、どうにか荒ぶる尿意をなだめようとする明日香。

緊張した括約筋がびりびりと震え、今にも熱い雫がすぐそこまで込み上げてきそうな緊迫感が、休むことなく続いている。

下着の股布にじんわりと滲む湿った感触は、きつと汗なんだと自分に言い聞かせながら、明日香はまたのろのろと歩き出した。

明日香はどちらかというトイレに近いほうだ。

夏の間はきちんと水筒で麦茶を持参して喉を潤すようにしているが、冷房の効いた図書館では結構な頻度でトイレに立つことになる。

だが、今日の図書館ではあいにくなことに、婦人用のトイレが改装工事中だった。

そのため、図書館側の配慮で紳士用トイレが一時的に共用のトイレになるという措置が取られていたのだ。が、人一倍羞恥心の強い明日香が、男の人も利用するトイレを使えるはずもない。

もちろん、明日香も最初からそれを知っていればそもそもこんな状態になる前に図書館を出ていただろう。

だが明日香は不幸なことにそれを知らないまま、いつもの調子で宿題に熱中し、数学の問題集を一区切りつくまで解いて、だいぶ我慢がきつくなってきたところで慌ててトイレに立って、現実の大問題に直面したというわけだった。

(……やっぱり、恥ずかしくても図書館で、おトイレ行っておけばよかったのかな……。でも、男の人も使うところで、お、…オシッコなんて……できるわけないし……)

けっきょくためらった末に、仕方なく図書館を出たものの、もともとは図書館のトイレでオシッコを済ませる予定だったため、まったく不意打ちでおあずけを食ってしまった明日香の排泄器官は、急遽決定した我慢の延長戦におもいのほか苦戦を強いられていた。

この分では、家に帰るまで我慢をしきるのは難しそうですらある。

(……あとちょっとで公園だから……あそこのおトイレ、使わせてもらおう……)

あまり清潔とは言えない公衆トイレだが、もはや背に腹は変えられない。少女の羞恥心を押さえこんで、明日香は緊急放水のための寄り道を決意する。学校の制服で寄り道は本来いけないことで、おまけにこの格好でトイレに入るのはかなり抵抗があるのは事実なのだが、明日香の尿意はそれ以上に切迫していたのだ。

本来は直進すべき交差点を右に曲がり、路地を抜け、大通りへと。

カラフルな遊具と、木々が茂る市立公園は、すぐその先にあった。

(……んうっ)

遊具の向こうにあるクリーム色の小さな建物が視界に入った瞬間、ちくちくと尿意が刺激される。ついに見つけた『オシッコのできる場所』に、おもわず小さくこりと唾を飲み込み、明日香は一番近い横断歩道に向かった。

公園に渡るには横断歩道と歩道橋があり、どちらも同じくらいの距離がある。どちらを通ってもかかる時間は同じようなものなのだが、いまの自分には階段の昇り降りはかなり辛いだろうことは容易に想像できたため、明日香は迷いなく横断歩道を選んだのだ。

だが——

途中でぐずぐずしていたためか、明日香がちょうど横断歩道に辿り着いたところで横断歩道の信号が点滅をはじめてしまった。「あ……」

思わず待ってと口にしかける明日香だが、もちろん待ってくれるわけもない。ほどなく赤になった信号の前で、明日香はじっと立ち尽くす。優等生の明日香には、信号無視なんて発想が浮かぶわけもない。

とたん——明日香のそわそわとした様子が目立ち始めた。不恰好に寄せあった膝と、モジモジと揺すられる腰。歩いていればすこしは紛れた尿意も、じっと立っているだけだとすくなく受け入れることも難しい。

不自然にステップを刻むローファースの爪先も、精一杯のさりげなさを装って交差させられる脚も、もはや誰の目から見てもはっきりとトイレを我慢している様子を知らせるものだった。

(っ……だめ、あとちょっとなんだから……っ)

行き交う車の前に晒される格好になって、明日香は羞恥に顔を赤らめながら俯いて、なんとかして腰の揺れを押さえこもうとする。だが、締め付けを続けて疲弊した括約筋は思うように言うことを聞いてはくれない。

「あ……くう……」

じんとと疼く股間が、ぷくりと尿意の先走りに膨らみそうになる。明日香はたまたま片手を離して前押さえをせずにはいられなかった。スカートの上をくしゃくしゃにして、溢れそうなオシッコを塞ぎ止める。

車道の側の視線を鞆で遮って、その裏側でぎゅぎゅっとスカートを押さえ、股間を握り締める。

せり上がる尿意に溺れまいとするように、明日香は爪先立ちになっておしりを持ち上げ、不安定な上半身を信号の柱にもたせかけていた。

(んう、ああ、あつ)

揉み解された股間にびりびりと電流が走り、背筋を這い上がる痺れに明日香はぐっと唇を噛んで耐えた。

(ま、まだ！？ まだ、信号、変わらないのっ！？)

横断歩道を睨み付けるが、赤信号の変わる気配はない。せりあがってくる尿意は激しく、ずしりと重い。限界に近い尿意になぶられ続け、ほんの数秒が、明日香には何十分にも感じられてしまう。

切なく握り締めた指先が、信号の向こう側の公衆トイレを欲している。

目の前——直線距離ならあと数十mで辿り着けるであろう『オシッコのできる場所』が、ますます少女の排泄欲求を活性化させる。

「はあ、(はあはあっ……)」

なりふり構わず必死に我慢を続ける明日香をよそに、じゅ、じゅっ、とほんの少しチビってしまったオシッコが、下着にちいさな染みを作ってく。

(ちよっと……出ちゃった……っ)

おチビりのショックに赤くなりながらも、そこで屈することはなく、明日香はなんとかおなかの中にオシッコをとどめたまま、強烈な津波を乗り越えた。

そして、ようやく横断歩道が青信号へと変わる。

「……っ！！」

「止まれ（我慢しろ）」から「進め（出してOK）」へと切り替わった信号に、明日香は短距離走のスタートを切るように駆け出していた。おぼつかない脚を無理矢理に急がせて、横断歩道を一息に駆けぬけ、公園の入り口をくぐって待望のトイレへと一目散に走り寄る。

公衆トイレの入り口は二つ、そのうち入ることの許された赤い女性用のマークを見極めて、明日香はためらうことなくその中に駆け込んだ。もはやオシッコを済ませるまで一直線、わずかな躊躇すら成否を分ける秒単位の戦いなのだ。いったんおチビりをはじめてしまったオシッコの出口が、とても脆いことを明日香は知っている。

（はやく、はやくっ……！！）

夏の熱気によって、むわっとした不快な臭いが籠ったトイレの中、二つ並んだ個室は片方が『使用中』のマークをドアノブに刻んでいる。

鞆を荷物掛けに放り投げ、スカートの前を押さえながら、もうひとつの個室へと走りこんだ明日香が、タイルの上で腳踏みをしつつ後ろ手にドアを閉めようとしたその時。

オモロシ寸前の少女を、さらなる悲劇が襲う。

「え……っ？」

がっっ！！

ドアにかけた指先が、強い力でもぎ取られる。

夏の湿気でドアが歪み、地面のタイル接したまま固定されてしまっていたのだ。タイルに食いこんだドアは、開いたままびくりとも動かない。

（う、うそ……っ）

震える指先に再度力を籠めるが、ドアはわずかに動く気配すらない。

洋式の個室は、ちょうどドアの方に向かって腰掛け、用を足す配置になっている。このドアが閉まらなければ、明日香はトイレの外に向かって何もかも丸見えになった状態で、オシッコをはじめなければならない。

もちろん、そんな事はできるわけがなかった。

（な、なんで…え…！？）

公園には少ないながらも人がいるし、いつ誰が入ってきてもおかしくない。そんな状態で、自分がオシッコをしているまさにその最中の格好を見られるなんて、死んだ方がマシだ。

あるいはもっと明日香に余裕がなくて、ドアの異常に気付きもしなければ、もはやどうしようもなくオシッコを始めていただろう。だが、一度気付いてしまえば、隠すものもなく丸見えの状態での排泄は、年頃の少女にはとても許容できるものではない。

「な、なんで閉まらないのっ……！？」

焦りと共に明日香は三度ドアを引く。だが、地面に踏ん張ることもままならない爪先立ちの腳踏み状態では体重をかけてドアを動かすこともできない。下着を下ろそうとしていた片手が、込み上げる尿意を押さえこむためぎゅうっとスカートの下で股間を握り締める。

しかし、もうここで解放される予定だったオシッコは、我慢の再延長戦には応じてくれなかった。手のひらでも塞き止めきれず、じゅ

じゅ、じゅうとチビり出したオシッコが下着にじんわりと拡がってゆく。

(あう……っ)

出ちゃダメ、出しちゃダメ、と呪文のようにつぶやいて必死に我慢を奮い立たせる明日香だが、2度目のおあずけには、身体の方が対応できない。

(や、やだっ、このまま……お、オモラシなんかっ……！！)

おしりを突き出したまま、ふらふらと個室を出た明日香は、最後の望みを託して隣の個室に向かった。

いまだ使用中の個室の中では、音消しの水の音がざざあざあ響いている。我慢の限界寸前の明日香を差し置いて、自分ではない誰かがすぐそこで、オシッコをすることを許されている——その状況に理不尽な怒りすら覚えてしまう。

「……あ、あのっ」

もはや恥ずかしいなどと言ってられない。一秒を争う一大事だ。使用中のドアをノックしながら、明日香は必死に声を上げる。

「す、すいません、か、代わって……くださいっ……！！ あ、あの、わたし、もうっ……、が、我慢……できな……っ！！」

しかし、個室の中からの返事はない。

少女が羞恥をこらえ辛うじて絞り出したか細い声と、力の籠らないノックは、明日香の最期の懇願は、無情にも沈黙をもって応えられた。

閉ざされたままの個室と、

ドアが閉まらず、使えない個室。

もはやこの公衆トイレの中には、明日香がオシッコを済ませられる場所が残されていなかった。

(ど、どうしようっ……で、でちゃっ……！！)

ぎゅううと交差した脚の隙間から、じゅ、じゅと熱い雫が滴り始める。前を押さえた指の間からも、ちろちろと薄黄色い雫が吹きだしていた。もはや耐えきれない尿意が、津波のように少女の下腹部を襲う。

「あ、あ、あっ」

ぱくりと開いた少女のくちびるから、意味を持たない声がこぼれる。

(も、もういいや、見られちゃっても、さ、さっきのところで……っ)

すでに選択の余地はない。ここからさらに他のトイレまで我慢するなど論外だし、このまま使用中の個室が開くまで耐え続けられるとも思えなかった。

覚悟を決めて踵を返した明日香だが、そこまでだった。

「あ、あ〜っ…ああ……っ……」

まさに目前、トイレまであと1mの所で、込み上げてくる激しい尿意の大高潮。明日香は反射的に立ち止まり、爪先立ちになってそれを堪えようとし——結果、3度目の大津波に、とうとう我慢は崩壊した。

トイレのドアにしがみ付いたまま、少女の腰ががくがくと震え、握り締められたスカートがくしゃりとねじられる。

明日香の小さなくちびるが意味のない声をこぼし、少女の身体は股間からおしりへと回ってゆく熱い感触に足元がふわふわと浮かぶような快感に震えていた。

我慢の限界を迎えた排泄孔が、下着の内側で濡れた布地に激しい水流を吹きつけ、制服をだいなしに汚していた。空気の音の混じったじゅじゅ、じゅぶっ、じゅるるっというぐもった水音がこぼれ、トイレの床にばちゃばちゃと水流を散らしてゆく。

ローファーもすっかり色を変え、皮が反り返ってオシッコを吸い、ソックスまでもオシッコ水浸しになっていた。

しゃがみ込んでしまった明日香の足元、床のタイルにどんと大きな水たまりが広がってゆく。本来明日香がオシッコをするべきトイレとは反対側の、わずかに傾斜した床の向こうの排水溝に流れ落ちてゆく少女のオシッコは、トイレの床面積のほぼ半分近くを汚していた。

(っ……)

我慢の末の決壊に、途方もない解放感。

トイレを目の前に、オモラシをしてしまった衝撃に呆然となる明日香をよそに、ようやく使用中だった個室のドアが開こうとしていた。

(初出：書き下ろし 2008/07/27)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: プールの日の順番待ち。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 07/29/2008 22:54:59

BODY:

我慢の仕草のバリエーションを工夫してみる試み。

<hr size="1" />

「うぁ……すごい並んでるっ……」

トイレの前にずらりと並ぶ紺色の水着姿に、ミノリは思わずつぶやいてしまった。

給食の用意をはじめ、4 時間目終了のチャイムまであと 3 分という時間、更衣室横のトイレの前で、紺色の水着に包まれた身体がぶるると震える。

入り口から覗くふたつの個室はどちらもしっかりと埋まっており、その前には 10 人近い女の子がシャワーの近くまでずらずらと列を作っていた。

それでも体操が終わって、まっすぐに飛んできたのだ。それなのにこのトイレの混雑ぶりはミノリにとってまったくの予想外だった。

（す、すぐに入れると思ったのにっ……）

予定外の混雑に、オシッコを『おあずけ』されて、ミノリは小さく腳踏みをしながら、下腹部を刺激しないように内股のままよちよちと列の後ろに並ぶ。

トイレはガラガラなら、ミノリはもうとくに個室に入れていたはずだった。じんじんと疼く足の間を、そっと紺色の水着の上から押さえて、小さく足踏みを繰り返す。

みんなが待ち望んでいた今年最初のプールの時間だが、7 月はじめの曇り空、やや肌寒い気温の中での 45 分間によって、おもいのほか身体が冷えてしまった子が続出していたのだ。

プールの授業は、隣同士の 2 クラス合同で行なわれる。そのため、普段の授業の倍近い女の子たちが、たった二つしかない個室に並んでいるのだった。そう考えればこの大混雑も仕方がないことと言える。

ただでさえオシッコの近くなるプールの授業を終え、敏感で繊細な少女たちの膀胱は、年齢相応の活発な新陳代謝によって作り出された恥ずかしいホットレモンティーを縁ギリギリまで注がれていた。

「ん……ふっ」

もぞもぞとおしりを左右に揺すり、ミノリは小さく声を漏らす。

ぎゅっと噛み締めた唇からは艶めかしい吐息がこぼれ、汗の浮いたうなじには水泳キャップからはみ出した髪が張りつき、ぽたぽたと水滴をこぼしている。

少女のあどけない頬は薄く朱に染まっていた。たんなる疲労や興奮だけが原因ではない。思春期の女の子にとって、オシッコを我慢する仕草なんて、本来は人前ではけって許されないことだ。

できるだけさりげない仕草を装って、そっと、濡れた水着の上からおなかを押さえる。ぱんぱんに固く張り詰めた膀胱は石のようで、こころなしか水着のおなかが膨らんでいるかのようにすら思えた。

まださすがにはっきりとした前押さえまでしなくてもガマンはできそうだが、それもいつまで持つかわからない。事実、ミノリの爪先は落ちつきなく腳踏みを繰り返して、おさまる様子は見られない。

「んんう……」

「は、くう……」

男子のいない更衣室の中ということもあって、みんなのガマンの仕草も遠慮がない。爪先立ちになって壁に寄りかかったり、ひざをきゅうっと交差させてもじもじとダンスを踊ったり、大胆にしゃがんで、立てたかかとにぐりぐりと脚の間を押し付けたりと、普段ならまずすることがない、はっきりとした『オシッコ我慢』の格好までしてしまっている。中には閉じ合わせた脚の間に手を押しこんで、紺色の水着の上から指を使ってぎゅうっと脚の付け根を押さえてしまっている子までいた。

トイレはすぐ目の前で、こんなところで万が一でも失敗してしまうわけにはいかないのだ。みんながみんなオシッコを塞ぎ止めるために必死だった。

「あ……っ」

「ふあ……う」

真っ赤になって我慢を続ける女の子たちの手足を、浮かんだ汗が滑り落ちてゆく。

ミノリのすぐ前でも、ボブカットの女の子がはあ、はあと荒い息をこぼし、頬を赤く染めながら、羞恥心と戦っている。ちょこんと突き出されたおしりは小刻みに揺れ、前かがみになって前の子の肩を借り、水着の股布のところを手で押さえてもぢもぢと腰を揺すっている。

時折、その子の脚の間を水滴が伝って落ちてゆく。それが水着に染み込んだ水なのか、汗なのか、チビってしまった分なのかはわからない。

彼女はただじっと爪先立ちになった不安定な姿勢のまま、ぎゅっと唇を噛んで上を向き、目を閉じていた。なんとか自分の番までダムが決壊を食い止めようと必死なのだ。

（すっごい、辛そう……）

他人事のように思いはするが、ミノりだって彼女たちに負けず劣らずに辛い。開いているトイレが他にあれば、なりふり構わずにすぐさまそこに駆け込んでしまおう。

けれど、列を作るクラスメイトにこうまで全身全霊での必死のガマンを見せつけられては、順番を譲ってくれとも言い出せない。ミノりは仕方なしに口元まででかけた『先、入ってもいい？』の言葉を飲み込んで、ぎゅっと口を閉じる。

（うう……ま、まだ……？）

焦るミノリの気持ちとは裏腹に順番待ちの列はなかなか進まなかった。

なにしろみんなプールから上がったばかりで、濡れた水着が身体にぴったり張り付いてしまっているのだ。ただでさえそんな水着を脱ぐのは簡単なことではないのに、さらにそれを不安定なつま先立ちになってやり遂げなければならないのだ。無事トイレが間に合っても、その後でもう一度水着を着なおさなければならず、オシッコの準備と後始末には普段の倍くらい時間がかかってしまう。

だから、列に並ぶ子たちはいつもよりもずっと長い時間、トイレを我慢し続けなければならなかった。

「……………」

特に列の先頭の子はもう待ちきれないのか、とっくに肩紐を外して、腰の辺りまで水着を脱ぎかけていた。個室が開いたらすぐに飛びこんで足元まで引き下ろし、すぐにオシッコが始められるように準備しているのだ。

まるで50m走のスタート地点に立つみたいに、じっとドアを見つめながら、個室のロックが『閉』から『開』に変わる瞬間を見逃すまいと難しい顔をしている。

その一方で、脱ぎかけの水着に包まった腰は、見えないなにかに擦りつけられるようにくねくねと蠢いていた。小さなおなかのなかでは今もオシッコが激しく暴れていて、その水面がたふんたふんと動くたびに腰が揺られているのだ。

(んうっ……)

そんな必死のガマンを見せつけられていれば、自然ミノリのガマンの仕草も大きくなってしまう。

左右の体重移動が激しくなり、ふらふらと上半身を左右に揺らしながらのその場腳踏みが繰り返される。

濡れた水着からじわりと水滴がにじみ、脚の内側を伝っていく。

腿の内側を伝う熱い感触は、きっと汗だと自分に言い聞かせて、ミノリは必死に個室が開くのを待った。

『あー、もうオレ我慢できねーっ』

『あ、ずりーぞ！！ちゃんと待てよ！！』

不意にがやがやと表が騒がしくなった。

どうも、隣の更衣室でも男子達が同じようにトイレの大混雑に巻き込まれる状況になっていたらしい。だが、彼等はおとなしく順番を守ることなく、水着のまま更衣室を出ていったのだ。その様子が更衣室の高い位置で開いたままの窓から聞こえてくる。

『うー、漏れる漏れるっ』

聞き捨てならないセリフに続いて、ごそごそとプール横の茂みを踏み鳴らすサンダル之音、そして——じょじょおお、じょろろろ、じょぼぼぼぼ……と、あってはならない水音が響いた。

ミノリはすぐにその意味を察し、はっと顔を赤くした。

(う、うそ……信じらんないっ……)

男子たちは、あろうことか、プールの横の壁に向かってオシッコをはじめていた。

「や、やだぁ……」

「何やってんのよ、男子ってばっ……！！」

「……最低…っ！！」

たちまち更衣室の中で次々と非難の声が上がる。

女の子たちがみんなが列を作りきちんと並んでいる。できることならみんな、すぐにでもオシッコを始めてしまいたいのを必死に我慢して、トイレが空くまで順番を待っているのだ。それなのにそのすぐ横で、男子たちは勝手にオシッコを——立ちションをしているのである。

(みんな、こんなに我慢してるのに！！)

ちゃんとトイレを使おうともしない、あまりにもデリカシーに欠けた男士たちの振る舞いに、恥ずかしさとやり場のない怒りが込み上げてきて、ミノリも拳を震わせる。

「んもう、あいつらっ……！！」

我慢しきれずに叫んだのはミノリのクラスの風紀委員長だった。まだ濡れた髪の毛のままでかけた眼鏡のレンズが、赤くなった頬の上でほんのり薄く曇っている。委員長もみんなと同じように膝をくっつけて順番を待っていたのだが、それでも男子の狼藉にはいい加減腹を据えかねたらしい。

「ちょっと、何やってんのよ男子！！」

『うお、なんだよ！？ 見てんのかよスケベ！！』

「だ、誰がよ！！ ちゃ、ちゃんとトイレいきなさいよ！？」

『うるせー、どこでションベンしたって俺の勝手だろー？』

どうやら表の男子たちも、ミノリのクラスらしい。委員長は壁の向こうにいるのが誰なのかも分かっているらしく、言い合いを続けた。

「勝手じゃない！！ あたしたちはみんなちゃんと順番守ってるんだから！！」

『……ふんだ、じゃあお前等もこっちきて一緒にすればいいじゃねーか』

「っ、で、できるわけないでしょ！？ 女の子はそんなことしないのっ！！」

『へーん。不便だよなー、女って。漏らすなよー？』

「う、うるさい！！」

委員長の返事はほとんど悲鳴のようだった。

けれど委員長の言う通りだ。女の子が、そう簡単に外でオシッコなんかできるわけない。今の今に限って言えば、ミノリは壁の向こうの男子たちがうらやましかった。あんなふうに構わずに外でオシッコができれば、こんな風に辛い思いをして順番を待つ必要もないのだ。

男士たちからかわれたせいで、列に並んでいるみんなは真っ赤になって俯いてしまった。委員長もとうとう言い返せなくなり、きゅっと下を向いて水着の前を引っ張り出す。恥ずかしさで我慢を刺激されてしまったようだ。

(……………)

いっそ、シャワーを浴びながらこっそりオシッコもしてしまおうか、とミノリが本気で考え始めたところで、個室のほうでざああ、と水が流れる。

ガチャガチャと鍵を弄る音が続いて、ドアが開いた。個室に入っていた子がぎゅっと水着を胸のところで抱き締めながら、よちよちと歩み出てくる。

その子は水着を着てはいなかった。一応、胸の前は脱いだ水着で隠しているものの、その下からちらちらとハダカが見えてしまっている。目はちよっと赤くなっていて、いまもちいさくしゃくりあげていた。

「あ……」

ミノリにもすぐに分かった。

みんなの視線から逃れるように、その子は俯いてトイレを走り出、シャワールームに飛び込んでゆく。。

タイルにはびちゃびちゃの足跡が残り、つんとした匂いがかすかに濃くなる。

(オモラシ……間に合わなかったんだ……)

順番を守ってなんとかトイレまでは入ったものの、オシッコの準備が間に合わなかったらしい。たぶん、水着を履いたままオシッコがどンドン出始めてしまって、止まらなかったに違いなかった。

汚れた水着をなんとか脱いで出ていったのだろう。よく見ると、個室の床はその子が漏らしてしまったらしきオシッコでびちゃびちゃに汚れている。

水着を半脱ぎにしてまで個室に飛び込む用意をしていた先頭の子は一瞬ためらっていたが、すぐに列の後ろの子のに肩を叩かれて、個室に入る。たとえどんなありさまになっていても、ここしかオシッコをする場所はないのだから。

(ふこうへいだよ……こんなの、ぜったい、ずるい……！！)

男子はあんなに簡単にオシッコができるのに、女の子はどうしてあんなに面倒臭くて恥ずかしい格好をしなければオシッコができないだろう。スクール水着の股間をぎゅっと押さえ、ミノリはくねくねと足を交差させる。きっと男子なら、こんなにも我慢しなくてもいいはずだ。

順番が回ってきたら、もう水着なんて脱がなくていいから、股のところだけ横に引っ張ってそのままオシッコをしてしまおう。小さな子みたいけど仕方がない。そう思いながら、ミノリはひとり分短くなった列を前に詰める。

間の抜けた、4 時間目終了のチャイムの音が聞こえてきた。

(初出：書き下ろし 2008/07/29)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 6

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 07/29/2008 23:11:18

BODY:

当初の予定の帰り道を大きく迂回し、二つ先の交差点と歩道橋を回って、静菜はどうか大通り側の公園へと辿り着く。

この公園は前の学校通学路の帰り道だったこともあり、静菜も昔はよく遊びに来ていたものだ。ジャングルジム、砂場、鉄棒、シーソー、滑り台——ペンキは塗り変えられたりしていたが、ありふれた設備のどれにも、懐かしい記憶がある。

だが、今夜静菜が目指したのはそれらの遊具のどれでもなく、これまで近づくこともなかった、公園の片隅の小さな建物——公衆トイレだった。

「……うう……」

レンガ造りの建物の入り口で、しばしためらいがちに周囲を見まわしてから、静菜はそろそろその中へ足を踏み入れてゆく。

じじ、と点滅する薄暗い照明が、トイレの内部に複雑な陰影を造っている。

正直に言えば、公衆トイレとしてはあまり綺麗な部類ではなかった。

床も汚れ、窓には蜘蛛の巣がびっしりと張っていて、さらによく耳を澄ませば虫の羽音まで聞こえた。普通の女の子なら、よほど困っていない限りまず使うことは考えないような酷い場所だ。

まして、家の外のトイレの使えない静菜にとっては、ここはこれまで無いも同然だった設備である。入るところか近づくことすらなかった未知の場所でもあった。

3つ並んだ個室のうち、一番手近な場所へと慎重に歩みを進める。

個室の中はどれもしみがみ込んで使用する和式のタイプであり、洋式のトイレに慣れた静菜にとっては、そういう意味でもあまり好ましい場所ではなかった。

「……えっと……」

とりあえず個室に入り、後手に鍵をかけ、もじもじと足をすり合わせながら、困惑の中で静菜は視線を落とす。

ここで——“なに”をするべきか。

静菜は迷っていた。

いつもの静菜ならなにも迷うようなことはない。ためらうことなく股間に手を添えて、ぐいぐいと尿意を和らげ、落ちつかせるための『おトイレ』をするまでだし、それ以外にすることなどない。

だが——

(……どうしよう……)

こうして冷静になって、明日まで直らない事が確実に家のトイレと、もう延々と何時間も我慢を繰り返してすっかり固く張り詰めている下腹部のことを考えると、果たしてそれだけで本当に大丈夫なのか、という気分になってくる。

確かに、ここで『おトイレ』をすれば、またしばらくは我慢も持たせよう。だが——家のトイレが使えない以上、根本的な解決にはならないはずだ。

いくら静菜が我慢強いとは言っても、それこそあと10時間以上もオシッコを出さずにい続けられるのかどうか。これまで何度も乗り越えてきた尿意を思い出してしまうと、本当にそれが可能なのかどうか疑問に思えてしょうがなかったのだった。

外のトイレを静菜が本来の用途で使おうとするのは、いったい何年振りのことになるのだろう。『おトイレ』として、オシッコを我慢するのに使った事はあっても、静菜にとって家以外のトイレは排泄場所としての対象になっていない。

(うう……っ)

しかし、下腹部にせり上がる尿意はそれを上回っている。

今日のお昼から狭い膀胱に閉じ込められたまま、ぐつぐつと煮詰められた尿意は、段々と鋭くなって静菜の股間を疼かせる。

オシッコは出したい。……むしろ、したくてたまらない。凝縮された恥ずかしい熱湯は、収まることなく静菜の下半身を占領し、切ないほどの排泄欲求を訴えていた。

「はあ……う」

さりげなく腰をくねくねと揺すってみたり、ぎゅっと両手を膝で挟んでみたり、体重を左右に散らして、床のタイルをきゅきゅと鳴らしてみたり。小さな我慢の仕草を繰り返してみたが、遠慮がちな我慢では中途半端もいいところで、かえって尿意を刺激してしまうばかりだった。

（やっぱり……しちゃおうかな、トイレ……）

『おトイレ』ではなく、トイレ。

長い長い逡巡の末に、静菜はようやくそう決断した。

ざわざわと落ち付かない下腹部をなだめつつ、自分に言い聞かせるように、小さく口に出して繰り返す。

「そうだね……別に、普通のことだもんね……。みんなちゃんとしてるんだし」

静菜は覚悟を決めて、目の前の和式便器に向かい、下着に手をかけてしゃがみ込んだ。祖母譲りの潔癖な理性がわずかな不快感になって胸をよぎるが、あえて無視する。

そして静菜は、トイレの上でオシッコの準備を整え終えた。

むき出しになった股間をひんやりとした空気が撫で、おなかのなかでぐつぐつと沸騰するオシッコを刺激する。トイレの上でオシッコをするための姿勢を整えただけあって、きゅっ、と張り詰める切ない感覚はあっという間に押し込められていた下腹から滑り降り、出口のすぐ近くの脚の付け根まで達する。

けれど。

さっきまで激しく身悶えていた排泄孔は、ぴたりと口を閉ざし、止まってしまっていた。

「ふうっ……くうんっ……」

かすかな吐息が個室の中に響く。静菜はそわそわと足の位置をずらし、おしりを上下左右に揺り動かした。膀胱を膨らませるオシッコがおなかのなかでたぶたぶと揺れ、背中にまでその重みが伝わってゆく。

だが、そうしてずしりと重い疼きが下腹部を支配しているというのに、静菜の股間は静かなままで、わずかの雫をこぼす様子もない。

オシッコは、出てくれなかった。

「んっ……」

静菜は股間に力を入れ、下腹部をさする。手のひらには石のように張り詰めた膀胱の感触が伝わってくるが、焦れば焦るほど股間の排泄孔は硬く口を閉じてしまう。

普段に比べてもとんでもない量のオシッコが詰まっているのは間違いないというのに、静菜の身体は言うことを聞いてくれなかった。

こんな時でも、静菜の下腹部はきっちりとその役目を果たし、排泄孔にまるで固いフタをしたかのようにぎゅっと口を締め付けている。しかしその皮一枚奥では、オシッコを詰めこんだ肉の管が熱い雫を吐きだそうとぴくぴくと震えているのだ。

（出てきてよぉ……せっかく決心したのにっ……さっきまであんなにオシッコしたかったのにっ……）

これでは、まるで口を全て塞いだティーポットを火にかけているようなものだった。ぐらぐらと沸き立つ尿意は密閉された容器の中で際限なく圧力を高めてゆく。途方もない尿意は静菜に終わりのない苦痛を強いているのだった。

(……ここだって、ちゃんとオシッコしてもいい場所なのに……っ！！)

きゅう、とあそこが疼く。

きりきりと高まる尿意の波が、静菜の脚の付け根をこすってゆく。

——もう、限界だった。

(……やっぱり、わたし、お外でオシッコできないんだ……っ！！)

そうして、諦めにも似た答えを悟ると同時。

「ふうっ……っく…！」

静菜はたまらず、トイレのタンク指を伸ばしていた。

激しく流れ落ちる音消しの水の音をバックに、静菜は剥き出しの股間に両手のひらをかさね、ぎゅううと握り締める。

「あああああ……っ」

高まり続ける尿意と、いつまでも出ないオシッコに耐えかね、とうとう静菜は尿意を解決するためのもうひとつの手段——『おトイレ』をはじめてしまった。

硬く張り詰めた下腹部、ジーンズのあとをくっきりと残したおなかのを少女の指が『ぐいっ』と押さえ込む。重ねて押し当てられた両手はきつく排泄孔を塞ぎ、酷使され続けた括約筋にわずかな自由を取り戻させた。

「ふ……っふ……うっ…」

体重を左右に揺らし、ぎゅうぎゅうと股間をさするたび、ボロいタイルの床がざいざいと軋む。活性化したアソコを鎮めるための儀式は、どこか荘厳、崇高にすら感じられた。

壁すらも揺らしかねない大胆なオシッコ我慢は、まったく人気のないこの場所だからこそ許されたものだろう。恥をかなぐり捨てての『おトイレ』は、あまりにも激しいものだった。

「あ……はあああ……」

少女の唇から甘い響きを備えた吐息がこぼれる。

解放感に身を委ねた静菜の下半身を、これまでの緊急避難的な我慢とは比べ物にならないほどの満足が包み込んでゆく。

本来なら、これは限界に近い尿意を抱えながらも、トイレという場所で排泄を行なうことができない、苦行にも等しい悲劇である。

だが、静菜にとってはこれもまた『おトイレ』という排泄欲求からの解放だった。

むしろ、ここでオシッコを済ませることができなかった——外のトイレを使えなかった静菜にとっては、いまや限界に近い尿意から自由になるたったひとつの方法なのだ。床がひとつ軋むたび、静菜は深い吐息とともにおなかの奥で煮え滾る尿意を飲みこんでゆく。

「ふう……っ……あ、あつ、あ……っ」

ぐいぐいと抑えられる股間は、マッサージにも似た効果で磨耗した括約筋を回復させ、もはやどんな余裕もなく膨らんだ膀胱を丁寧に揉み解し、他の臓器の入るスペースをほんの少しだけ押し広げて、さらにオシッコを溜められるだけの余裕を作る。

これは、もはやまぎれもなく排泄行為だった。

静菜はこの『おトイレ』によって、自分のおなかの中にオシッコを済ませていると言っても過言ではない。

「っふう……はあ……」

静菜の『おトイレ』は、実に20分以上もの時間に渡って続いた。

「ふうっ……すっきりしたあ……」

爽快感すら溢れさせる声で安堵の息をこぼし、静菜は公園のトイレを出る。

無論の事ながら、静菜のおなかの中を占める大量のオシッコは一滴も外に排出される事はない。だが、なにしろここはきちんと設備の整った『おトイレ』だ。誰の目も気にすることなく『おトイレ』に入った女の子が、すっきりできないはずがないのだ。

ちゃんと我慢できるようになるまで、静菜はきちんと『おトイレ』を済ませて、すっきりしていなければならなかったのだ。

実際、『おトイレ』でたっぴりと我慢を済ませ、幾分余裕を取り戻した静菜の尿意はかなりのレベルまでやわらいでいる。今回の『おトイレ』をしているうち、はじめは見るのも嫌だった公衆トイレは、静菜にとって大切な心のよりどころにすら格上げされていた。

「……あんまり遅くなっちゃうと、お母さん、心配するよね」

実はまだ、公衆トイレには後ろ髪を引かれるものがあったのだが——かるくそわそわと地面をこするつま先をできるだけ気にしないようにして、静菜は公園を後にする。

気付けば11時近くになっている時計を気にしつつ、静菜は再び、トイレの無い我が家への帰路についた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 7

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 07/29/2008 23:12:41

BODY:

「……………」

ごろん、と寝返りを打ち、静菜はすっかり暖まってしまった枕に頬を押しつける。

できるだけ下腹部に負担が掛からない仰向けの姿勢から、身体を横にしたせいで、ぞわぞわとお尻の上あたりを鈍い痺れが通り抜けてゆく。

(う……)

ちらり、と見上げた目覚し時計は、常夜灯のオレンジの光の中で、「00:36」の文字を点滅させている。

お風呂に入って汗を流し、パジャマに着替えて部屋に戻り、気になるおなかを抱えたままベッドに横になって1時間。じわじわとおなかを圧迫するオシッコの重みは、静菜の下半身を間断無く、執拗に責め続けていた。

一旦は心ゆくまで『おトイレ』を済ませことで落ちついてた下腹部も、夜の静寂の中で再び活性化をはじめている。

「眠れない……よお」

枕にぐりぐりと顔を押し付けて、込み上げるあくびをあふ、と噛み殺す。

いつもならもうとくに夢の中の時間だ。眠気が無いわけではないのだが、オシッコのことが気になって目がさえてしまう。

これまで、家の中でオシッコができないことなどなかった。家のトイレは静菜にとって世界で唯一の『オシッコのできる場所』なのだから、ためらうことなくトイレに立つことができたのだ。

こうしてベッドの上で、眠気と戦いながらオシッコを我慢するような経験は、静菜にはない。

(……うう)

すう、はあ、と深呼吸をして気分を落ちつける。

ちくちくとおなかの内側を刺激する濃縮された尿意は、忘れようとしてもなかなか忘れられない。ちくちくと時を刻む隣の部屋の秒針の音までがうるさいくらいだ。

前にもこんな事があった、たしか、受験の前の日の夜だ。明日が本番、というプレッシャーに、静菜は今日と同じように眠れなくなってしまったのだ。焦っても気分が高まるばかりで、横になっているのがまどろっこしく、何度も何度も寝返りを打った。

時計の針だけがゆっくり進んでいて、いつまで経っても目は開いたまま。

(あの時は確か、お母さんをお願いして、ホットミルク飲んだら、眠れたんだっけ……)

瞬間、下腹部できゅうと膀胱が身をよじる。

もはや、ちょっとした想像だけでも尿意の呼び水になってしまうようだった。慌てて楽な姿勢になりつつ、おなかをさすってむずがる下腹部をなだめる。おなかの膨らみはさらに大きくなり、パジャマの下腹部を緩やかに持ち上げていた。

そつと撫でるたび、下腹部どこもおへソの上近くまでじんっ、と鈍い痺れが走る。つまり、静菜の膀胱は小さな身体の中でそこまで大きく膨らみ、オシッコを溜め込み続けているのだ。

「う、あ、……だいじょうぶだいじょうぶ、平気っ……」

まるで早産を気にする妊婦のようだ。そんな静菜のおなかの中で、排泄欲求は不安定に揺れ、尿意の安定期には程遠い。

あれから何度か、軽い『おトイレ』をしているのだが、その効き目は芳しくなかった。そもそも物理的に不可能なあたりまで我慢をしているのだから当然と言える。いくら強靱な静菜の排泄器官でも、限界というものはあるのだ。

(はあ……)

ぼんやりとまどろみかけた意識が、下腹部の圧迫感によって引き戻され——閉じかけたまぶたは、びくりとそれに抗する。

眠ってしまいたいけれど、そうなれば本当に我慢を続けていられるか不安で、けれどこの尿意の我慢から一時でも解放されるには、せめて夢の中に逃げ込んでしまうくらいしか方法がない。

しかし、尿意は一時も休まることなく、一定の強さで静菜の下腹部を炙り続けているのだ。横になった姿勢ゆえに激しく鋭い大波にこそならなかったが、逆に込み上げてくる尿意は深く、途方もなく、長い。まるで高潮のように、ゆるゆると高まり続けては際限なく昇り詰め、いつ終わるとも知れない。

わずかな身じろぎですらオモロシに繋がってしまうような、不安感を抱えながら、静菜はじっとそれを絶え続けるしかなかった。

<i> 気がつくと、静菜は小さなドアの前にいた。

見慣れたドアは、静菜の家のトイレのドアであり、ドアノブの下には自動販売機のような、硬貨の投入口が開いている。

使用料は1回1000円だった。

「——た、高いよお」

そうは思うが、壊れてしまったトイレを直すのに、たくさんお金がかかってしまったのだ。有料になってしまうのも仕方がない。

ここのほかにトイレはない。静菜は仕方なしにお財布を取り出して、1回分の使用料金を入れてゆく。

500円、600円、700円……

ちゃり、とお財布の中身が軽くなる。

残りの十円玉が9枚、ドアの前にある金額は900円だった。

10円、足りない。

「あ、あれ？ちゃんと用意してきたのに——おかしいなあ」

慌ててお財布をひっくり返すが、中身は全部で990円。トイレの使用料にはやっぱり10円足りない。

静菜はたまたまにドアを引っ張った。がちゃがちゃ、とドアが揺れる。

「うう、いいじゃないっ……せっかく直ったんだから、10円くらいおまけしてよっ……！！全部じゃなくても、は、半分だけでもいいから、オシッコさせて！！」

確かに1000円はないけれど、でも990円分は、オシッコができてもいいはずだ。そう思って静菜はドアを激しく叩く。

がん、がん、というノックに耐えかねて、トイレのドアがまっぶたつに折れてしまった。

その奥にはすっかり綺麗になった洋式便器が——静菜のためのトイレが、用意されている。

喜び勇んで、中に掛けこみ、ぎゅっとパジャマの前を抑えた瞬間——</i>

静菜ははっと目を開けた。

途端、股間に走る猛烈な電流が、静菜の意識を無理矢理に覚醒させる。

「やあつ……！？」

（で、でちゃ……っ！？）

緩みかけていた排泄孔が、内側からの圧力に負けるかのようにぷくりと膨らみ、熱い雫を吹き上げようとする。股間には下着の股布がぴったりと張りついて、わずかな刺激にも反応せんばかりにひくひくと痙攣していた。

いつの間にか姿勢はうつ伏せになり、自分の体重が股間を圧迫していたのだ。膨らんだ下腹部がベッドに押しつけられてぐっと潰される。膀胱を絞り上げるような尿意は、それが原因だった。

「ああ、くうううつ……！！」

夢の中とは言え、家のトイレに入りかけていたのだ。静菜の排泄器官は完全に排泄モードとなり、膀胱はきゅうきゅうと収縮運動を繰り返している。ほんの少し力を緩めさえすれば、たちまちのうちにオシッコを迸らせそうになっていた。

だが、目が覚めたことによって自律神経が活性化し、静菜の排泄孔はなかば強制的に括約筋を絞り上げ、オシッコの出口を閉めつける。

その結果、行き場をなくしたオシッコは激しく少女の下腹部で渦巻いた。

「つふ、は、あつ、あ、う、あつ」

猛烈な尿意の奔流に、ぱくぱくと口を開いて声にならない声を上げ、静菜はまるで、何かに執り憑かれたかのごとく、激しく股間とおなかをさすった。

太腿の付け根に手のひらを押し込んで、引きつる排泄孔を直接指でぐっと圧迫し、全身の力で暴走するオシッコを強引に塞ぎ止める。

オシッコの出口を強く塞ぎ、静菜はかろうじて一息ついた。

「はあ、はあつ…はあ、はあー……っ」

荒くなった息をゆっくりと整えながら、ようやく本来の機能を取り戻し始めた括約筋に安堵しながら、静菜はどうにか最悪の事態だけは回避したことを理解した。

（や、やば……あのまま寝てたら、出しちゃってたかも……）

予想外の伏兵に脅かされ、いまだ高鳴り続ける胸を撫で下ろし、落ち着きのない下腹部を静かに撫で、ゆっくりと深呼吸。

いったん暴発しかけたオシッコを再度押し止め、屈しそうになった心を落ちつけるには、まだかなりかかりそうだった。

（良かった……目、覚めて……）

できるだけ下腹部を刺激しないよう、姿勢を整える。

どうも、うつ伏せになっていたのは知らず、脚の付け根に丸めたタオルケットを挟んで、ベッドに擦り付けようとしていたかららしい。

もう一度仰向けになった静菜だったが、荒くなった息はいつまで経っても収まらない。それどころか、ちくちくと鈍い痛みが股間で疼き続け、排泄孔には細長い何かを突っ込まれたような異物感まで響いてくる。

一度目を覚ましたことで、高まった尿意は、眠りに落ちるよりも張るかに存在感を増していた。

（や、やだ……トイレ……っ）

我を取り戻した静菜の脳裏に——あと数歩のところまで迫っていた、夢の中のトイレが思いだされる。

もしあのまま起きずに夢の中のトイレでパンツを脱いでいれば、オネショというかたちでオシッコを済ませることができたのかもしれない。夢の中とはいえ、静菜がオシッコをしようとしていたのは外の『おトイレ』ではなく家のトイレだったのだ。恐らく問題なくおなかをすっきりさせることができたに違いない。

だが。

それは全て、夢の中のことだ。

今はまた、事情が違う。まったく身動きのできない状況で、静菜はぎゅっと目を閉じ身体を丸めて、長い長い尿意に耐え続けた。

いつまでも途切れることのない尿意を無視して眠ることなど、不可能に近い。まる 1 日に及ぶ長い長い我慢の果て、疲れきった身体にやってくるまどろみに包まれては、反射的に緩みかけた下腹部を締めつけてしまう——そんな永久運動にも似た時間を、それこそ気の遠くなるほど繰り返して——とうとう静菜はそのまま朝を迎えたのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 夏休みの我慢の話。(塾帰り編)

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 09/06/2008 18:03:06

BODY:

8月の陽射しは、正午を回ってよりいっそう鋭い。肌を差すようにかあっと照りつけるぎらぎらの太陽に、焼けたアスファルトからはうっすらと陽炎が立ち昇っている。

まるで、鉄板焼きの具になった気分。

塾の玄関を出た途端、ぶわっと汗が吹き出てくる。とたんに冷房の利いた教室に回れ右したくなるキモチをこらえながら、夕菜は覚悟を決めて一步を踏みだした。

「うああ……」

靴底が焼けてしまいそうな気分で、じっとりと湿った背中に鞆を背負いなおす。

講義の間椅子の背もたれにくっついて汗をかいていたシャツは、まだうっすらと湿っていた。いつもはほとんど気にしていないスポーツブラのラインが透けてしまっているのをなんとなくむずがゆく思い、夕菜はさりげなくシャツを引っ張ってぱたぱたと煽る。

（暑い……よお……）

口を開くとそのまま干乾びるような気分になるので、言葉には出さずぼやいて、早速こめかみに滲みはじめた汗を、日焼けした肌でぬぐった。

このままいつまでも表にいたら、いつ倒れてもおかしくない。冗談抜きで鉄板焼きになりそうに暑いアスファルトを、サンダルが踏み締めるたび、じゅう、という音が聞こえてくるようだ。

（はやく……帰ろ）

塾を出てわずか数歩ですっかりぐったりと疲れてしまい、夕菜はうんざりとまばゆい太陽を見上げた。

塾から夕菜の家までは徒歩で10分ほどだ。駅前の立体交差を通るのが近道なので、自転車は使わない。夏のこの時期、姉は部活で朝から家を空けており、共働きの両親も夕方までは帰ってこない。

だから、夏季講習の終わったあと、夕菜はだいたい近くのファーストフードで友達と時間を潰すことにしていた。猛烈な陽射しを避けて、日が傾いた頃に家に戻る、それがこしばらくの夕菜のお決まりのコースになる。

だが、今日はそうもいかなかった。

お盆間近な日付のせいか、ビルの改装と共に駅前に1件しかないファストフードはお休み中で、鍵っ子仲間の友達もみなそれぞれの理由で講習を休むか、講義が終わるなり夕菜にバイバイを言って、まっすぐ家に帰ってしまった。気付けば、先生と雑談していた夕菜は、正午も15分を過ぎた頃合に、最後の生徒として塾を出ることになった。

「……つまらないなあ」

見知らぬ店にひとりで入り浸るほど夕菜は大胆ではないし、そもそもひとりで時間を潰してもそれこそなんにも面白くない。

となれば、家の中、エアコンで快適に過ごしながら、午後のおやつでもつまむのがお小遣いにも身体にも優しい、一番かしこい過ごし方だろう。

「はー……あついい……」

じりじりと焦げるようなデパートや駅前の本屋を通り、駅ビルへと向かう途中で、夕菜はうんざりとひとりごちる。すっかり暑さにとろけた足取りは、いつもの半分ほどに遅い。もういつもならとつくに駅を越えているのだが、陽炎の立つアスファルトはまるでサンダルの靴底を溶かしてへばりつかせているかのように、一步一步が重いのだ。

いつしかぼーっと思考も霞み、自分がどこを歩いているのかも分からなくなる。

ふと見上げれば、街頭のデジタル温度計は電光掲示板にただいまの気温38度なんていう恐ろしい数字を刻んでいた。すでに、この路上の外気温は夕菜の平熱よりも高い。

拭いても拭いても収まらない額の汗をタオルハンカチでぬぐい、夕菜は根負けしてふらふらと道路脇の自動販売機に歩み寄る。
「もう、やってらんない……暑すぎ……」

ためらうこともなくお財布を取りだし、右上の清涼飲料水のボタンを押した。

講義中にもまるまる一本飲み干した、冷え冷えの500mlのペットボトルを掴むと、ほとんど間を置かず“ぐいっ”と腰に手を当て一気飲み。

さっき飲んだばかりの水分すらも、もう全部身体のどこかに吸収されてしまったようで、夕菜の喉はすっかり渴ききっていた。水分を渴望する欲求のまま、夕菜はごくごくごくぐくつ、と見事な勢いで透明なペットボトルの中身をのどに流し込んでゆく。

「んう、んっ、んっ……ぷは」

気付けば、ペットボトルはあっという間に一本まるごと空っぽになっていた。

「ふう……」

ようやく人心地ついて灼熱地獄から脱した夕菜は、おおきため息をひとつ。

なおも激しい正午の陽射しを見上げ、

「……ちょっと、休憩」

暑さに負けながらそのままふらふらと、コンビニのドアをくぐった。

「はあ……涼しい……」

ちょっと強すぎるくらいの冷房の中で雑誌を立ち読みしつつ、文明の恩恵にしみじみと感謝し、ようやく生き返った心地の夕菜だが、同時にやや困った事態も発生していた。

気になる今月号の連載のページをめくりながら、夕菜の脚はさりげなく重ねられ、片方の爪先はトントンと床を叩く。背中の鞆をかたかたと揺らしながら、夕菜は落ちつきなく身体を揺らしていた。

（んっ……）

体重を乗せた片足から、下腹部にじんっ、と重みが伝わる。脚の付け根にじわじわ溜まってゆくむず痒さが、少女の排泄器官を切なく疼かせる。

自動ドアの一枚を挟んで、気温にして十℃以上も違う快適空間を維持するコンビニの強力な冷房は、次第に夕菜の身体を蝕んでいた。はじめは気持ちよかった力強い涼の風もいまは鬱陶しいばかり。汗に冷えた下半身は硬く強張り、きゅっと寄せあわされた小麦色の脚がぴくんと緊張する。

夕菜が自分で意識する以上に、少女の身体は強い尿意を訴えていたのだった。

「……う」

高まり続ける恥骨上のダムの水位を感じ取り、夕菜はとうとう、続きの気になる立ち読みを中断することにした。読みかけの今月号を棚に戻し、雑誌売り場を後にする。

誰が入ったかもわからないようなコンビニのトイレはあんまり使いたくないが、この際しようがないだろうと自分を慰める。

だが。

「……………うあ」

トイレの前には既に先客がいた。しかも、一人ではなく二人でもなく、三人。個室のすぐ前にはジャージ姿の高校生、さらにその後ろには、小さな女の子の手を退いたお母さんの親子連れ。時ならぬ人気のトイレ、コンビニに一つしかない個室の前で、小さな列を作った3人は落ちつきなくトイレの順番を待っている。

外に人が並んでいるという事は、当然ながら現在も個室の中に先客がいることになる。だから、少なくとも、夕菜の順番が回ってくるのはその後——4人がトイレから出てくるまでだ。

冷凍食品を売る棚の近いトイレの側には、強すぎるくらいの冷風が激しく吹き付けている。それは、ただでさえ現在進行形で高まり続ける夕菜のトイレの欲求をより加速させるのには十分だった。

(……………)

ちくちくとおなかの中に響くむず痒い痺れが、強い冷風に煽られてさらに加速する。

足の付け根に感じる熱い重みに耐えかねて、その場でさりげなく小刻みのステップを繰り返し、夕菜は思案をめぐらせた。

(……………いや、待ってるのも面倒だし……………帰る)

そう決断を下し、夕菜はそのままくると踵を返してコンビニの出口へと向かう。それなりに後ろ髪を引かれなくてもなかったが、駅前のコンビニから家まではわずか5分とすこし。それくらいならさほど苦勞せず我慢できるだろうと判断する。

「ありがとうございましたー」

マニュアルどおりの店員の声を背に、自動ドアをくぐる。

決心はしていたつもりだったが、店内から一步を踏みだしたとたん、再び38度の夏の外気と、ぎらぎらと輝く直射日光が凄まじいまでの圧迫力で夕菜を迎え入れた。

「うう、さっきより暑いかも……………」

くじけそうになった気分を奮い立たせて歩き出した夕菜を、容赦なく夏の陽射しが覆う。

駅ビルの近くには窓ガラスも多く、反射光は通りのいたるところを照らし出している。焼けたコンクリートにエアコンの室外排気もタッグを組んで気温の上昇に貢献している。

ひっこんでいた汗があっという間に吹きだして、じわじわと夕菜のシャツを湿らせてゆく。こうして夕菜が摂取した水分はまたたく間に少女の全身を巡り、活発な新陳代謝の果てに排出されてゆくのだ。

だが、それよりも激しく、夕菜の下腹部はもうひとつの新陳代謝の結果に侵略されつつあった。

(うく……………やだ、なんか……………急に……………)

大量に摂取した水分と、急激な冷房に冷えた身体。さらには気温の上下がもたらした自律神経の軽い混乱。いくつかの要素を掛け合わせて作り出されたオシッコが、重苦しいまでに夕菜の下腹部の一部分を膨らませていた。少女の下腹部に閉じ込められた熱水は、ゆっくりとイケナイ部分へと集まり、少女の羞恥心を圧迫する。

切に解放を訴える下腹部は、アスファルトに踏みだす一步ごとに敏感に衝撃を感じ取り、連動するようにじいんっ、と背筋に微弱な電流を走らせる。

(か、かなりしくなってきたかも……………い、急がなきゃ……………)

急速に高まり続ける尿意の素は、その実授業中から飲み続けていたお茶に他ならない。これまでは別のことに集中していたせいで忘れていた尿意は、一旦意識に浮かぶと、今度は強烈な存在力を示しながら一方的に膨らみ続けている。

脚の付け根に溜まってゆく重圧にせかされて駅前東口の階段に辿り着き、夕菜はしがみ付くようにエスカレーターに飛び乗った。ゆっくりと持ち上がる身体を手摺りに預け、さりげなく呼吸を整えて、楽な姿勢を探す。

(う……は)

ふー、ふー、はぁー、と独特の息遣いで呼吸を繰り返し、排泄器官の余裕を懸命に取り戻しながら、夕菜はじんわりと滲む額の汗を擦った。

「はう……」

こんなに熱くて汗が止まらないんだから、少しくらいオシッコも減ってくれてもいいだろうと思うのだが、膀胱に閉じ込められたまま長時間に渡ってくつくつと煮詰められた尿意は、ちくちくとした針のように、夕菜の下腹部を刺激している。

長い時間の我慢の末、濃縮されてしまった夕菜のオシッコには、体外に排出すべき不要な成分がぐっと凝縮されて、より一層尿意を高めているのに違いなかった。

(あ……やあ、こ、こんなトコで……っ)

ぞわりっ、と尿意の波がやってくる。危険水位を突破した尿意は、ざわざわと波立ち間断的に夕菜を責め立て始めていた。こぼこぼと沸騰する下腹部のティーポットの感触に、夕菜はぐっと唇を噛み、お尻に力を込めて、緩みそうになった出口をぐっと締め付けた。

まさかこんな往来で堂々と前押さえができるわけもなく、夕菜は股間の括約筋の力だけで押し寄せるオシッコの圧力に抗わなければならなかった。

(う……く……)

油断に不意打ちが重なり、一瞬、ぷくりと膨らみかけてしまったオシッコの出口をぎゅうっと締め付け、息を押し殺して足を閉じ合わせる。

緊張した内腿がびくりと強張り、膝が重ねあわされる。知らず左右にくねる腰は、行き場をなくしたオシッコが少女の体内でざわざわとうねる余波だ。

そうして夕菜が身体を強張らせている間に、エスカレーターは終点に近付いていた。

まだ我慢のため内腿を緊張させたまま、夕菜は慎重にエスカレーターから降りる。

「あう……」

移動速度の変化がもたらす特有の感覚に、ぴくんと少女の眉が跳ねた。

慣性の法則に従い、そのままエスカレーターの速度で動き続けていようとしたオシッコが、夕菜の下腹部でうねる。小さな膀胱に閉じ込められた水分が脆くなっている排泄孔に押し寄せた。

落ち着かない下半身に神経を集中させ、夕菜はできる限りの早足で先を急いだ。

(……大丈夫、もうちょっとで家だから……)

ちょうど下りの電車が着いたところらしく、改札口前はそれなりに混雑していた。

雑踏の向こうに一瞬、構内の公衆トイレが映る。それだけで夕菜の下半身は敏感に反応してしまう。

またもきゅうっと高まる尿意を、夕菜は再度脚をくねらせて押さえ込まねばならなかった。

(と、トイレ……っ)

切なく疼くおなかを押さえ、できることなら今すぐにも駆け込んでしまいたい。だが、小さなローカル線の駅のトイレは改札口をくぐった先にしかないのだ。切符を買うでもしなければそこには辿り着けない。

……あるいは、駅員に訳を話して改札を通してもらうという手段がないわけではない。しかし、少女の繊細な羞恥心は、他人に自分のオシッコ我慢の状態を知らせるような行為をよしとしなかった。

（もう、我慢できなかったんだって思われちゃう……）

手の届きそうな場所にオシッコを済ませるための場所を収めながら、夕菜は我慢を続けその脇を通り過ぎねばならなかった。それでも夕菜の心は自動改札の向こうへと通り抜け、閉ざされた城門の先にある婦人用トイレに駆け込んでゆく制服姿の女子学生に自分を重ね合わせてしまう。

（……いいなあ……）

制服姿の子は、あと十数秒で個室に入り鍵をかけ、そこで思うままオシッコを出せるのだろう。それが羨ましくてたまらず、知らず羨望の声を上げてしまう。すでに夕菜の思考は「家まで我慢すればいい」よりも「どこでもいいから、早くトイレ」へとシフトしていた。

後ろ髪を引かれる思いを断ち切って、夕菜はまっすぐ改札口前を通り抜ける。

とにもかくにも、今は一分一秒でも惜しかった。できるだけそっと階段を駆け下りて、立体交差を抜け駅の西口へと出る。

「いいや、近道しよっ……！！」

本当ならこのままぐると駅前の循環バス広場を回りこむように横断歩道を回り、二つ信号待ちをして大通りを横断するのだが、限界の迫る夕菜には、律儀に信号を守っている余裕がなくなっていた。

点滅する青信号の歩道を駆け抜け、そのまま路肩駐車の間隙を抜けようと車道に出た。

のろのろと進むバスを確認しつつ、左右を窺う。

だが――

（あ……や、やば……っ）

信号無視をしたことへの罰だろうか。あるいは、許容量寸前の水風船を抱えたまま激しく動いてしまったからだろうか。前触れもなく唐突に、夕菜の身体の奥底からごぼり、と熱い塊が込み上げてくる。

ぎゅう、と膀胱が身をよじり、ちくちくとした尿意は一層激しいものとなった。まるで本当にお腹の中でオシッコが沸騰しているかのよう。閉じ合わせていたはずのオシッコの出口がぴくぴくと痙攣し、じゅ、じわ、じゅっ、とイケナイ予兆を滲ませる。

（……っ！？）

その猛烈な波を、夕菜はもはや我慢しきれなかった。

ぐりっ、とねじられた身体がそのまま車と車の間に引っ込む。

路上駐車物の陰で丸くなるように腰を落とし、しゃがみ込んだ夕菜は立てたかかたとあそこを押し付けて、ぐりぐりと腰をねじる。ちょうど、オシッコの出口を靴のかかとで塞ぐような格好だ。

「うあ……、ふ、あああつ……くう……」

荒くなった声をおさえるためぐつとくちびるを噛み、夕菜は息を殺して足の付け根を握り締めた。

崩壊の予兆に突き出されたお尻が左右に振られ、股間に走る甘い痺れが夕菜を責め苛む。

こんな姿は、決して人前でしてはならないことだった。せめて人目を避けようと路上駐車の際間に身体をちぢこませるが、猛烈な尿意はまるきりおさまる気配がない。

まるで細く熱い棒のような何かが、排泄孔をこじ開けてゆくような感触。これまでに経験したオシッコの気配よりも数倍激しいそれを、夕菜は必死になってお腹の中にとどませようとする。

きいん、と耳の奥がうなり、目の前がちかちかとまたいた。

全身の水分が、ぜんぶ膀胱に集まってゆくような——そんな感覚。夕菜の身体は、オシッコをこぼさないよう必死に受けとめる、脆く繊細な容器でしかなくなっていた。

全身全霊を使った我慢は、そのまま数分、続いた。

「はう、はっ……」

じわ、と熱く滲む下着の感触を両の手のひらで押さえながら、夕菜は小さく喘ぎつつふらふらと立ちあがる。

（は、はやく……家までっ……）

ありったけの力を使いながら、夕菜は完全な勝利を収めることはできなかった。夕菜のしゃがみこんでいたアスファルトには点々と黒い染みが散らばり、スカートのお尻には色の変った区画がはっきりと浮かび、剥き出しの太腿にはいくすじかの水流のあとが伝っている。

おチビりとは言いがたい、明確なオモラシの証拠がありありと少女の下半身に刻まれていた。

ガクガクと震えている膝は、まだ完全にはオシッコがおさまっていない事を如実に示している。……いや、少女が一度始まってしまったオシッコを堪えることなど、本来できるはずもないのだ。

（ま、間に、合わなく、なっちゃ……）

けれど。だからこそ。夕菜は家に戻らねばならなかった。

だが、わずかに踏みだす一步に反応して、じゅ、しゅるるっ、じゅう、と夕菜の下着は熱く湿って張りついた股間で水音を立て、少女のスカートは色濃く染まってゆく。

じゅ、じゅうっ、しゅるるっ、

「ああ……あ……」

かくり、と曲がった膝が、震えながら折れ曲がり、少女の腰がすんと落ちる。

車の影から飛び出し、通りの真ん中あたりまで出たところで、とうとう夕菜は動けなくなった。

その間にも少女の白い脚には幾筋も黄色い水流が流れ落ち、スカートがどうしようもないほどに濃く色を変えてゆく。濃密なオシッコは、色の薄い布地を経てなお分かるほどに、薄い琥珀色の色合いを覗かせている。

しゅる、しゅるるう、しゅわああ……

「あ、あああ、ああう……」

意思に反して勝手にオシッコを出し始めてしまう身体が、耐えに耐えていたものからの解放感にうち震える。パンツの中にぶつかって溢れ出し、おしりを熱く包み込む感触に夕菜の心は折れてしまった。

力を失った膝がかくんと折れ曲がり、大通りのまんなかに、ぶじゅっ、と激しい水流が叩き付けられた。

夕菜がねじるように掴んで引っ張った下着の隙間から、激しい水流がぶちまけられる。

徐行してきた乗用車が、通りの真ん中で動けなくなった少女に驚き、何事かと停車した。

そのすぐ前で、夕菜は本格的なオモラシを披露してしまう。多くの人々の視線にさらされながら、少女は長い我慢で煮詰められたオシッコをアスファルトの上に盛大に撒き続けてゆく。

「あ、ああ、あっ、ああああっ」

びりびりと脚の付け根を走る圧倒的な解放感。少女の小さな下腹部を占領していた水風船が、激しい収縮と共にありったけの勢いでオシッコを絞り出した。まるで打ち水のように、アスファルトの上に、夕菜の身体の中で長時間かけ煮詰められた特濃のオシッコが叩き付けられる。

都会の陽射しに熱せられた黒いアスファルトの上で、たちまち蒸気がむわっと立ちのぼり、夕菜のオモラシが太陽にあぶられてゆく。

「あ、やつ、嫌ああ……っ」

ばちゃばちゃばちゃ、ぶじゅっ、じゅる、じゅぶぶぶぶ……

車も人通りも多い道路の真ん中でしゃがみこんでしまい、我慢も押さえ込むこともできず、夕菜は本当の勢いで激しくオシッコをはじめてしまった。少女の下腹部を膨らませていた、半リットルにも及ぶ琥珀色の水流は、アスファルトの上で四方に広がり、道の端から端まで流れ落ちてゆく。

「あっお姉ちゃんオシッコしてるよ！！ オシッコしてる！！」

親子連れの無邪気な子供の声が、夕菜にとどめを刺した。

力なく崩れ落ちた膝が、アスファルトの上の水たまりにぱちゃんと落ち、熱せられた地面で火傷しそうに熱くなったオシッコの海に下着が押し付けられる。

地面に押しつけられた少女の股間からは、いつまでもぐもった音と共に、濃い琥珀色のオシッコが溢れ続けていた。

(初出：書き下ろし 2008/09/07)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第9夜 オオカミと七匹の子ヤギ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 11/10/2008 19:10:56

BODY:

— 1 —

「じゃあ、おつかいに行ってくるわ。みんな、お留守番お願いするわね」

「はーいつ、いつてらっしゃーい！！」

お出かけするお母さんやギにそろって手を振りながら、7人のヤギの姉妹たちは頷きます。森の向こうにお母さんの姿が見えなくなるまで、仲良しの姉妹たちは見送るのです。

「さあ、みんなおうちに入って。鍵かけるわよ」

「うんっ」

一番上のお姉さんに促されて、下の姉妹たちは無邪気に笑いながら、家の中に走ってゆきます。

「……姉さん、本当に私達だけで平気かな？」

「そうよ、オオカミが出るって、噂じゃないんでしょう？ ママだって……」

いっぽう、上のお姉さんやギ達は不安げでした。

じつは、昨日から森には乱暴者のオオカミが現れるというのです。もともとこの森にはそんなオオカミは住んでいませんから、どこかの森を追われてやってきたのでしょうか。

お母さんの留守中に、もしおなかを空かせたオオカミがやってきたら——あの大きな牙の生えた口で、みんなはたちまちぺろりと食べられてしまうに違いありません。次女と三女のお姉さんやギ達はその時のことを想像して、ぶるっと身体を震わせます。

そんな二人を励ますように、一番お姉さんの長女のヤギが言いました。

「大丈夫。母さんなら平気だし、しっかり戸締りしてればオオカミなんか入ってこれやしないわ。私達が弱気だと、妹たちまで心配させちゃうわよ。しっかりしなきゃ」

「……うん、そうよね」

「気にしててもしょうがないか。おやつにしましょう！！」

「わーいっ！！」

心配を振り払うように、お姉さんやギたちもおうちの中に入ってゆきました。

みんな揃ってテーブルに着き、いっせいに『いただきます』をします。七つの席には木苺のジュースと緑苔のプリンがおいてありました。おでかけのまえにお母さんがつくってくれた、とびきりのおやつなのです。

テーブルについた姉妹は、仲良くおやつを食べ始めました。

－ 2 －

それから、しばらく経った頃です。

「……ねえ、なにか聞こえない？」

「え……？」

みんながとても美味しい木苺のジュースに夢中になって、3杯めのおかわりをしていた時、四女がふいにそんなことを言いました。姉妹のなかでも一番勘のいい四女の声に、思わずみんながお喋りを止めて耳を済ませます。

……っ……んっ……あ……

すると、確かに家の外から、草を踏み分ける足音と、小さなうめき声のようなものが聞こえてきました。

「え、えっと……」

「お姉ちゃん？ なに？ どうしたの？」

想像したくなかった事態に、お姉さんやギ達は青ざめました。その様子に気付いて、妹たちも不安を顔に滲ませます。

う……んっ……ふう……

はあはあという荒い息の隙間から聞こえる、力強い声。
それは姉妹たちの誰も聞いたことがないうめき声でした。

「ま、まさか……本当にオオカミっ！？」

がたりと椅子を鳴らして、次女が叫びました。

得体の知れない足音は、がさがたと乱暴に茂みを掻き分けながら、一直線にこの家を目指しているようでした。

はあ……はあっ……あと、すこし……

次第にはっきりしてきた物音は、もう姉妹全員の耳に届いています。ドアを破るのも時間の問題でしょう。

怖い怖いオオカミが、来る。

次女の叫び声に、ヤギの姉妹たちはパニックにおちいってしまいました。

「きゃあああ！？ やだ、やだあ！？」

「オオカミ……あたし食べられちゃうの！？ やだ、やだあ！！」

「ママ、ママあ！！」

「ま、待って！！ みんな静かにして！！ 早く隠れるのよ！！ はやく！！」

泣き叫ぶ妹たちを叱り、一番上のお姉さんである長女ヤギが叫びます。それをきっかけに、姉妹たちはそれぞれ、クローゼットの中や柱時計のなか、テーブルクロスの下、家のあちこちに隠れました。

「いいわね、静かに、声を出しちゃダメよ！！」

「う、うんっ」

「ね、ねえ……お姉ちゃん、待って……」

みんなの隠れ場所を確認するお姉さんヤギに、末の妹——七女が不安そうに訴えます。末妹はぎゅっとスカートの前をおさえて、もじもじと脚をこすり合わせていました。じつは、彼女は今とても切羽詰って困った状態にあったのです。

「お姉ちゃん、あたし……」

「ほら、急いで、早く隠れて！！ あなたはここ！！」

けれど、オオカミがやってくることに気を取られて、姉妹たちは誰も妹の異変に気付けませんでした。有無を言わず妹を柱時計の下に押しこんで、よっつ上のお姉さんである三女ヤギはそつと言いつけます。

「いい、何があっても動いちゃダメ、わたしがいいって言うまで出てきちゃダメよ！！ さもないとオオカミに食べられちゃうんだから！！」

「え、えっと、でもっ……」

「いいわね、約束よっ」

「あ、待って、待ってよ！！ お姉ちゃんっ！！」

最後にドアに硬く鍵をかけ、窓にはカーテンを引いて、次女、三女、長女のお姉さんヤギたちも物陰に隠れました。

しんと静まり返る家の中で、姉妹達はじっと息を潜めて、表の様子を窺いました。

「つ……着いたっ、……間に合ったあ……っ」

レンガの家の前に辿り着いて、オオカミは安堵の息をこぼしました。

森の中を長い間さまよい、じっとりと汗をかきながら茂みを掻き分けて歩き続け、やっと見つけた目的地です。

（ふぁ……っ！？）

目的地を目の前にして、ほんと緩んだ瞬間、ぞわりとオオカミの背筋をイケナイ感覚が這いあがってゆきます。オオカミは慌てて腰をぐいっとよじり、せわしくその場で腳踏みをはじめてしまいました。

（っ、だめ、まだダメっ……あとちょっと、ちょっとなんだからあ……っ！！）

じりじりと焦る気持ちをぐっとおさえつけ、悲鳴を飲み込んで。オオカミは小さく深呼吸をすると手を丸めてドアにノックをします。

「ご、ごめんなさい、誰かいる！？」

梢を振るわせるほど大きな声が出てしまうのは、オオカミに全然余裕がないからでした。ありあまる元気をうまく制御できず、オオカミのノックはドアをぎしぎしと歪ませます。

（う……く……）

はあはあと息をつき、オオカミはぐっと前かがみになって耐えます。一旦は大きな波を堪えることができましたが、キュロットから伸びた健康的な脚は内股になったままぴたりと閉じ合わされて、かかとは小刻みに地面を叩いています。

いつもはぴんと尖っている耳も、ぺたりと左右に伏せられて、すっかり情けない格好でした。

タンクトップの裾をぐいっと引っ張り、もう一方の手で脚の間を押さえながら、オオカミはもう一度ドアを、さっきよりも強く叩きました。

「……ねえ、いないの！？ ねえってば！！ 留守なの！？ ねえっ！！」

焦るあまり力加減がうまくいかず、ドアががたがたと揺れてぎいぎいと軋みます。ですが、オオカミはそれどころではありません。

ちょこんと口元から覗いた八重歯が、きゅうっと可愛い唇を噛み締めます。

（あぁう……マズい、マズいってばぁ……）

オオカミがこの森にやってきたのは昨日のことです。

もともと、このオオカミは隣の森に住んでいました。人付き合いがあまり上手ではなく、何を聞かれてもついついむすっとした態度ばかりしてしまうオオカミは、いつも回りのみんなから恐れられ、悪者だと誤解されていたのです。

そしてとうとう、乱暴者のオオカミを退治してやろうと、狩人がやってきたのです。

オオカミは住処を追われて、仕方なく家を捨てることにしました。

確かに森のみんなに比べればちょっと力が強いオオカミですが、別に乱暴者でもなく、噂されるように誰かを食べたりもしません。狩人と出会わないように家を出たのも、オオカミがケンカを嫌ったからでした。

オオカミだってちゃんとした年頃の女の子なのです。痛いことも、怖いことも嫌いでした。

だから、オオカミはいま、とても困っていました。とってもとても、困っていました。

この森に住むみんなも、オオカミのことを怖がって、誰も家に入れてくれないのです。

「あああつ、もう、開いて、開けてよお！！ だ、誰かいらないのっ！？」

だから——オオカミは、昨日から1回も、トイレに行けていませんでした。

オオカミのおなかの中は、夕べから我慢し続けたおしっこでたぐんたぐんになっていました。膀胱はぱんぱんに張り詰めて、もう立って歩くのも辛いほどです。いつもの元気もどこかへいってしまうくらいでした。

でも、オオカミだって女の子です。まさか、お外でオシッコをするなんて、できるはずありません。

だから、オオカミはずっとずっと我慢を続け、一日近くも森をさまよって、ようやく辿り着いたのが、このヤギの姉妹とお母さんの住む家なのです。

「ねえ……お願い、もうダメなの、もう我慢できないのっ！！ 誰かいるんでしょう！？ ねえっ、開けてよ、中に入れてちょうだいっ！！」

そんなわけで、オオカミは今にも漏れそうなオシッコを我慢するので精一杯なのです。

くねくねと腰を揺り動かし、おしりをちょこんと後ろに突き出して、尻尾も小さく震えながらくると丸まって、必死になって縮こまっています。

女の子のダムを満水にして、ちょっと油断すればあっという間に下着に染み出してしまいそうなオシッコは、オオカミの懸命の努力でなんとか塞ぎ止められている状況でした。ここでトイレを借りなければ、たちまちオモラシしてしまうに違いありません。

「ちょっと、本当に誰もいないの！？ ねえ、お願い、開けてよお！！」

激しくドアを叩きながら、オオカミは込み上げてくる尿意を堪えるためドアノブにしがみ付きます。ガチャガチャと揺れるドアノブは、オオカミの強い力で今にも壊れてしまいそうでした。

（だ、だめ、出ちゃう、オシッコでちゃうっ……！！ も、もう小さい子じゃないのに、お、オモラシなんて……っ！！）

くじけそうになる心をなんとか奮い立たせて、なんとかここまで辿り着いたのです。もう、別の場所までトイレを我慢し続ける事はできそうにありません。それなのに、この家が留守では、もはや、オオカミに残された道はオモラシしかないのです。

（っ、そんなの、できるわけじゃないっ……！！ で、でも、っ……！！）

そんな事はお構いなしにオシッコは限界を訴えます。しくしくと疼き始める下腹部は、ずんと重くなってオオカミを苦しめます。

焦るオオカミはちなり、と家の裏手の方に視線を向けました。

ちょうど、ヤギの姉妹達の住む家の裏には、鬱蒼とした森になっていて、背の高い草が生え揃った物陰ができています。誰にも見られないようにするには格好の場所でした。

（い、いっそ……あのへんで、こっそりしちゃう、とか……？）

辛い尿意にせかされ、思わず心に浮かんだイケナイ考えに、オオカミは真っ赤になってぶんぶんと首を振ります。

いったいこれまで何度、我慢できなくなりかけて、いっそ茂みの中でオシッコをしておもうと思ったことでしょう。

（って、だ、ダメに決まってるじゃない……ひとの家のすぐ近くなのに、勝手にそんなこと……！！）

でも、もし誰かに見られたら——そう思うと恥ずかしくて恥ずかしくて、オオカミは死んでしまいそうになるのです。

このままではそう遠くないうちに本当にオシッコが漏れてしまうことでしょう。

オオカミの視線があちこちをふらふらとさまよっては、『オシッコのできる場所』を探します。けれどどこも、とてもではありませんが女の子がオシッコを済ませることが許されるような場所ではありませんでした。

そんなことをしているうちにも、オオカミのダムは刻一刻と崩壊のカウントダウンを進めてゆきます。

「ちょっと、ねえっ……！！」

オオカミが涙を浮かべながらぶん、と振り上げた拳が、ひときわ強くドアを叩きます。

すると、とうとう家のドアはばきりと音を立てて壊れてしまいました。

開いたドアの奥に、一瞬呆然となるオオカミでしたが、すぐに我慢しているオシッコの事を思いだして家の中に飛び込んでしまいます。

「ご、ごめんなさい！！ 壊すつもりなんかなかったんだけど……！！ 本当よ！？ ずっと探してて、それで……も、もう本当に……ううっ、……く、うう……あ、ダメ、ダメ……っ、ごめんなさい、は、入るわね！！」

— 4 —

……ぎしり。ぎし、ぎし。

大きな足音を立てて、家の中に踏み入ってきたオオカミたちに、ヤギの姉妹たちは震えあがりました。

『本当にオオカミだっ！！』

『ドア、壊れちゃった……どうしよう！！』

『もう我慢できないって……！！』

『みつかったら食べられちゃう！！』

悲鳴を上げそうになるのを必死に押さえこみながら、ヤギの姉妹達は震えるのをなんとか我慢しようとします。

「ご、ごめんね、あとでちゃんと、謝るから……！！」

オオカミが叫びました。

もし家の人がいれば、トイレを借りるための許可を得ることもできたのですが、鍵もかかっていたし、なにより明かりも消えてカーテンも閉まっていて、どう見ても家の中は留守なのです。

オオカミは、あとでお詫びをすることにして、先にトイレを済ませるため、家の中を探すことにしたのです。

「も、もう本当に、我慢できなかったの。だ、だから……！！　しょうがないのよっ…」

言い訳をしながら、オオカミはぎしぎしと足を踏み鳴らして家の中を歩き回ります。

じろじろとあたりを見回すオオカミに、自分の隠れているすぐ側を見つめられるたび、ヤギの姉妹たちは心臓が口から飛びだしそうになりました。

『謝られたって、食べられちゃったら……どうしようもないわよ！！』

『おねえちゃんっ……あ、あたし……』

——ぎしっ！！

突然、家じゅうに響いた大きな音に、一緒に隠れていた２番目の妹、六女の口を塞いで、四女のヤギは息を潜めます。

『しっ、静かに！！』

『……………っ！？』

「はうっ……」

一方のオオカミはいきなりやってきたオシッコの大波と戦うのに必死でした。

ぴくんと背中を伸ばして、テーブルに寄りかかって爪先立ちになります。尻尾がきゅると丸まって、ぐいっと膝がクロスし、内股になって腿がぎゅうぎゅうと寄せあわされていました。

（っ、やだ、出ちゃう、出ちゃうっ！！！）

はあはあと息を荒げ、脚の間をぎゅうううと押さえて、オオカミは必死にオシッコを我慢します。留守中の家の中にあがりこんでオモラシしてしまうなんて、どうやっても言い訳ができません。

きつく目を閉じて息を飲み込み、なんどもなんども脚を押さえ、オオカミはどうにか大きな波を乗り越えることに成功しました。

「はあ……はあ……」

（ま、マズいわ……っ、次に、いまみたいなのが来ちゃったら、もう……が、我慢できないかもっ……）

どうにか押さえこみはしたものの、オオカミのおなかの中の入れ物では、いまオシッコが激しく揺れ動き、水面をざわめかせています。固く石のように張り詰めた膀胱は、外から見ても分かるくらいにはっきりと膨らんでいました。

ほんの少しだけできた猶予の中で、オオカミはどうにかしてオシッコを済ませてしまわなければなりません。せわしく腳踏みをしながら、オオカミはなりふり構っていらなくなり、手当たり次第に家の中を物色しはじめます。

「っ……う！！」

（ど、どこ？　と、トイレ、トイレ、どこなのっ！？　……は、はやく、早く見つけなきゃ！！）

手が震え、脚がわななき、ぶつかった洋服掛けが倒れます。テーブルが揺れて床に落ちたお皿が、がちゃんと音を立てて割れました。

『きゃあっ！？』

『オオカミが暴れたしたわ……！！』

『みんな、声を出しちゃだめ……！！』

見つかったら食べられてしまうに違いない——そう信じているヤギの姉妹達は、まるで生きた心地がしません。ぎゅっと目を閉じ、

身体を小さくして、込み上げてくる恐怖の衝動に耐えるのです。

－ 5 －

いっぽうのオオカミだって必死でした。黙って上がりこんだ人の家で、万が一にもオモラシなんてしようものなら、それこそ生きて行けないのですから。

「っ、どこ、どこよお！！」

片っ端から家の中を歩き回り、探しまわり、そしてとうとう、オオカミは階段の下に目当ての場所を見つけました。

そう、トイレです。待望のお手洗いです。『空いてます』とかかれた裏側に『使ってます』と記されている小さな木のプレートは、長女の手作りのものでした。

（あ、あったっ……）

顔を輝かせて、ふらつく足取りでトイレに駆け寄るオオカミ。

けれど、待ち焦がれていたトイレへと続くはずのドアは、固く閉ざされたまま、びくりとも動きません。

「な、なんで！？ どうして開かないのっ！？」

ドアノブにしがみ付いたまま、オオカミは力任せにドアを引っ張りました。がちがちと激しい音を立てながら、ドアが軋みます。

それでも、ドアは開きません。

それもそのはずです。トイレの中には、ヤギの姉妹の五女が隠れていたのです。

激しくがたがたとドアを揺すって開けようとするオオカミに、五女は必死になって身体ごとドアノブを掴み、抵抗します。

『や、やだ、こっち来ないで、来ないでよお！！』

「っ、ここなのにつ、この奥なのにつ……なんで開かないのよお！！ あ、空いてるって書いてあるじゃないっ！！」

オオカミは我を忘れてドアを引っ張っていました。この一枚向こうに、心の底から待ち焦がれたトイレが、オシッコのできる場所があるのです。あと数歩というところにトイレを見つけて、オオカミのお腹の中ではふたたび猛烈な尿意が渦巻き始めていたのです。

『お姉ちゃん、あそこに隠れてるの気付かれちゃった！？』

『だめ、負けちゃダメよ！！ 頑張って！！』

他の場所に隠れていた姉妹達は声に出せないまま、トイレに隠れ続けている五女を応援しました。あのドアさえ開かなければ、オオカミにも見つからず、食べられずに済むのです。

「ちょっと、鍵……かかってないでしょ！？ どうして開かないの！？ どうして邪魔するのよっ！？ ああうう……っ！！」

とうとう腳踏みだけでは堪えられなくなり、オオカミは、ドアノブを掴んでいた手を片方離して、キュロットの前をぐいっと握り締めて

しまいました。

太腿の付け根をじんと痺れさせ、ぞわぞわと絞り上げるような尿意は、どんどんと激しさを増してゆきます。

オシッコの重みに耐えかね、腰が引けた姿勢になって、オオカミはがちゃがちゃとドアノブを揺すりながら情けない声を上げ続けました。

「くぅ……や、開きなさいってば……と、トイレ……っ」

『っ、お願い、開けないで……！！ た、食べられたくないっ…！！』

さしもの力自慢のオオカミでも、腰が引けたままの姿勢では思うように力を籠められるわけがありません。ヤギの五女だって必死です。全身を使ってドアノブにしがみつ、オオカミに負けまいと身体全体でドアを押さえ込んでいるのです。

オオカミは、ドアをこじ開けるのを諦めざるを得ませんでした。

青ざめてドアノブを離し、おぼつかない足取りでよろよろと後ずさります。

「あ、開かない……そんなぁ……っ　なんでっ！！」

八当たりに蹴飛ばした壁が、ぼこんとへこみました。

オオカミはもう我慢の限界なのです。すぐ目の前にトイレがあるのに、そこにたどり着くことができないなんて、こんな辛いことがあるでしょうか。

せっかくここまで必死になって我慢したのに、それを裏切られ、女の子の意地で必死に守りとおそうとしていたものが、とうとう負けそうになりつつありました。

（あ、あ、あ、やばい、ダメっ）

トイレに入ることができないと分かり、しゃがみこんでしまいそうになったオオカミの脚がぶるぶると震えだします。不自然くらいの内股で前かがみになって、少しでもオシッコの重みを軽くします。

「ど、どうしよう……っ」

オオカミは、自分がほとんど動けなくなっていることに気付きました。トイレまで辿り着きながら、『おあずけ』を強制された身体は、言うことを聞かずに勝手にオシッコを出そうとしています。

けれど、オオカミがトイレの前から離れていっても、五女はドアノブを離すことはできませんでした。ドアの向こうを窺い知ることができないヤギの少女は、いまにもまたドアノブが恐ろしい力で引っ張られるのではないかと、強張った指でドアを握り締めます。

（っ……）

涙の滲む可愛い目元が、ぶるぶると震えていました。

恐怖と、ショックと、なんとか逃げ延びたという安堵感。みつつが入り混じった感覚に、小さな身体が小刻みに震え、限界を訴えます。

「あ……っ」

じわあっ……とヤギの五女の脚の間に、熱い滲みが広がってゆきます。

五女がトイレに隠れたのは、実はおやつが始まる前からトイレに行きたかったからなのです。けれど、オオカミがいつドアを開けるかまったくわからないので、すぐ目の前にトイレがあるのに、ドアにしがみ付いたまま離れられなくなっていたのです。

『やだ、やだ、あ……』

どうすることもできませんでした。

ほんのすぐ後ろにトイレがあるのに、怖くてたまらない五女はドアノブを離せません。それどころか、手を自由にしてスカートの前を

押さえることすらできないのです。

ぱたぱたと震える脚が内股になり、ぎゅうっと寄せあわせられ、それでもじゅんっ、じゅわわああ、とオシッコがパンツに滲み出していきます。

しよろっ、しよろっ、しゅわああ、と水音をこぼしながら、五女の白い脚を伝って、我慢しきれなかったオシッコがトイレの床にこぼれていきます。オモラシの証はあっというまに拡がり、水たまりを作ってトイレの床を満たしてゆきます。

溢れ出すオシッコは、とどまる勢いを知りません。

『やだぁ……お、お手洗いの前なのにつ……お、オモラシなんか……あ』

けれど、それでもやっぱり五女には、ドアの前から離れることはできませんでした。

中腰になって震え続ける五女の足元で、オシッコは薄黄色の大きな湖をつくってゆきました。

－ 6 －

悲劇が襲ったのは、五女だけではありませんでした。

おやつに食べたプリンや木苺のジュースは、ヤギの姉妹達に、ひとしくおなじ苦痛を与えていたのです。

いえ、トイレに籠っていた五女はまだ幸せでした。間に合わなかったとしても、オシッコのできる場所がすぐそばにあるだけ、五女は救われていたのです。

『お、おねえちゃあんっ……』

六女のヤギが、まだ舌足らずな声をあげ、ぐいぐいと4番目の姉の服の裾をひっぱります。六女もまた、木苺のジュースの飲みすぎで、さっきから途方もない尿意をじっと我慢していたのです。

『あ、あたし、おトイレ……オシッコ……』

『だ、だめっ、我慢してっ……』

『だめ……でちゃう、でちゃう……』

これまでも何度も、姉である四女の言葉にしたがって、必死に我慢を続けてきた六女ですが、そろそろ限界が訪れていました。いくら足をぎゅっとくっつけて我慢していても、もうオシッコの方が勝手に出始めてしまうのです。

『も、もぉ、ダメえ……』

『や、やだ……我慢して、お願い……っ、じゃ、じゃないと、あ、あたしまで……、一緒につ……』

『おね、おねえちゃ、あ、あああ……～っ』

限界を訴える妹に、お姉さんの四女も慌ててしまいます。四女だって、妹に負けないくらいオシッコがしたくてたまらなかったのです。

た。

でも、もうそれもオシマイです。俯いた六女の小さな身体がぶるぶると震えたかと思うと、その足元がじゅわじゅわと熱い雫に濡れていきます。

『だ、ダメよ……オシッコしちゃだめ、お願い……だからあつ』

四女のその言葉は、半分は自分へと向けられていたものだったのです。

戸棚の中に広がってゆく暖かい感触。目の前で始まってしまった妹のオモラシが呼び水になって、これまでなんとか姉の威厳を保とうとしていた四女まで、きゅんと疼く尿意を押さえ込めなくなっていました。

『あ、あ……うツ……』

『やだあ……オモラシ……気持ち悪いよお……』

『あ、だめ、う、動かない、でえ……ツ！！』

おしりをびっちゃりと汚すオモラシの不快感から逃れようと、六女がむずがるように暴れます。それによって、おなかをぐいっと押されてしまったのが引き金になりました。

『あああ、あつ……で、でちゃ……う……』

二つの水音が、狭い戸棚の中に重なります。

小さな妹だけでなく、お姉さんの四女まで、一緒になってオモラシをはじめてしまったのです。妹の前で我慢しきれずオシッコを出してしまう羞恥に、おませな四女は目の前が真っ暗になってゆくのを感じました。

しゅわしゅわと入り混じって、戸棚の中に、二人分のオシッコのにおいが籠ってゆきます。狭い戸棚の中でぎゅっと身体を寄せあいながら、二人はとうとう泣き崩れてしまいました。

－ 7 －

それは、他の姉妹達も一緒でした。

柱時計とクローゼットの中。食器棚、暖炉の奥。

オオカミから隠れたヤギの姉妹たちは、緊張と恐怖で、耐えがたいほどの激しい尿意を感じていました。一番上のお姉さんである長女すら、いつ漏らしてしまってもおかしくないほどでした。

ですから、それよりも年下の姉妹たちが、いつまでも我慢を続けていられるはずありません。ヤギの姉妹達はそれぞれ繊細で敏感な小さな膀胱をパンパンにして、必死にオシッコを我慢し続けていました。

全員、すっかり我慢の限界で、オシッコがしたくてしたくてたまりません。

けれど――

『っ、お願い、早く出て行って……』

『も、もう、誰もいないんだから……』

『は、はやく……』

けれど、そうやって隠れたままではオシッコをする事はおろか、身じろぎひとつうまくできません。体をゆすること、腰をくねらせることも自由にならないのでは、ちゃんとオシッコを我慢することすら難しいのです。

でも、もしオシッコを漏らしてしまえば、その音と匂いですぐにオオカミに気付かれてしまうかもしれません。だから、ヤギの姉妹達は必死になって、オシッコの出口を閉めつけて、オモラシをしてしまわないように我慢していました。

物音を立てないようにじっと息を潜めて、足の間に力を籠めて、手のひらや小さなでっぱりにぎゅっぎゅっとおそこを押しつけて、必死に必死に我慢します。

なかでも、特にお姉さんである長女、次女、三女の我慢は強烈でした。

オオカミに見つかってしまうかも知れないということがはっきり分かっている上に、妹たちの手前、お姉さんである自分たちが先にオシッコをもらしてしまう訳にはいかないと思っていたからです。

－ 8 －

クローゼットの中に隠れた三女は、みんなの服を濡らしてしまわないように、足の間に手を挟んで、オシッコの出口を指で直接押さえこんでいました。

まるで、指でオシッコの出口に栓をしているかのようです。

『か、替えのパンツならいくらでもあるけど……お、オモラシなんか……っ』

なんと運の悪いことに、つい最近、一番下の妹がオムツを卒業したため、クローゼットの中にはみんなの着替えしかありません。

もし、まだここにオムツが残っていれば、何かしかの言い訳ができたかもしれないのですが――。

『って、ち、ちがうってば……！！ そ、そうじゃなくて……、な、なに考えてるのよ、そ、そんなんじゃ、ま、まるであたしが、オムツ、使いたいみたいじゃ――！！』

オムツというのはつまり、トイレと同じようなものです。トイレのしつけが終わっていない小さな子が、トイレの変わりにオシッコをしてしまう場所なのです。だから、もしオムツがあれば、三女はそこにオシッコを――

『だ、だからそうじゃないでしょ！？ も、もうちゃんとお姉さんなんだから、我慢しなきゃ――！！』

必死に頭を振ってイケナイ妄想を振り払おうとする三女でしたが、ひくつく股間はおさまりません。

ましてここはクローゼットの中、着替えならいっぱいあるのです。

そう、たとえば——

たとえば、一番下の妹が、二番目の妹が、何かの拍子に我慢ができなくて、オモラシをしてしまい……その汚れたパンツや服を、こっそりここに隠していたとか——そんな言い訳がありうるかもしれません。

つまり、妹達の誰かのパンツを使って、三女が我慢しきれずに溢れてしまったオシッコを吸いこませてしまえば——

『ば、馬鹿！！ な、なにしようとしてるの、あたし……！？ い、妹のパンツに、オシッコ、ひっかけちゃうなんて——！！』

言葉では否定しても、三女の指は自然、妹達のパンツを掴んで握り締め、ぎゅっと爪を立てて離しません。

たぶん、ひとり分じゃとても間に合わないでしょう、このおなかをたぶたぶにしているオシッコ全部を始末するには、同時に何枚も使わなければいけません。

でも、自分より小さな妹達なのですから、たとえば本当に我慢できなくて、そんなことだってあるのかも——

『あ、あああつ……だ、だから、違うくって……っ！！』

三女は、はしたない誘惑を振りきろうと、片手で自分のパンツを、もう片手で妹たちのパンツを握り締めて、終わらない苦悩を繰り返すのでした。

— 9 —

暖炉の奥にぎゅっと身を潜めた次女は、脚のかかとにぐりぐりとあそこをねじるように押しつけて、いまにも噴き出してしまいそうな熱い奔流を押さえ込んでいます。

火の消えた暖炉の中には灰が敷き詰められていて、ちょっと動いただけでもすぐにそれが舞い上がってしまいそうなので、次女はほとんど身動きできないままでした。脚を動かすことも、お尻の位置を変えることもできません。

荒くなりそうな息もぐっとおさえこみ、小さく小さく細かい呼吸を繰り返します。

『あ、あくっつ、う……』

なにしろ、ちょうど暖炉のなかの、灰の上なのです。誰も見たりはしません。少しくらい漏らしてしまっても、証拠が残るわけもなく、我慢するのだって相当辛いものでした。

でも、こんなところで万が一にでも、オシッコをしてしまえば——その勢いでたちまち灰がもうもうと舞いあがり、あっという間にオオカミに見つかってしまうはずでした。

『う、あ、あつ。……あ、あと、ひやく、きゅうじゅうきゅうつ……きゅうじゅうはちつ……』

微動だにせぬままでオシッコを我慢するのは途方もない苦行です。

次女は、折れそうな心を支えるために声に出さずに数を数え続けていました。

——あと百数えたら、オシッコをしてもいい。

そう自分に言い聞かせて、百を数えるあいだだけ必死に我慢をします。終わりのない我慢では心が負けてしまいそうでも、おしまいがある我慢なら、なんとか耐えきれそうな気がするのです。

ちょうど、かくれんぼで鬼になって数を数えるように。その間だけはじっと我慢をして、それが終われば、自由になれるのです。

『はちじゅうさん、はちじゅう、にい……っ、は、はちじゅう……い、いちっ……』

でも、次女があと百数えるだけと自分に言い聞かせるのは、これで4度目なのです。

いったいあと何回、『あと百数えるだけ我慢』を繰り返せば、オシッコを出していいのでしょうか。

『ろ、ろくじゅう、ご、っ……ろ、ろくじゅう、ろくっ……』

だんだん頭がぼうとしてきて、なにも分からなくなりながら、ときどき増えてしまう数字を繰り返し、次女は指を噛み締めて百を数え続けました。

— 10 —

長女は、食器棚の中で必死に誘惑と戦っていました。

たくさんの食器がしまわれた食器棚で、長女が隠れている目の前にはちょうど、みんながごはんに使っているミルク入れがあります。姉妹全員とお母さんの分、あわせて8人分のミルクをいれておく壺から、長女は目を離せずにいました。

長女のそばでは、オシッコ我慢の悪魔がイケナイことを囁き続けます。

『だめよ、だめだったら……そ、そんなの、できるわけじゃないのっ……』

オモシシなんて許されない、一番上のお姉さん。

どうしても我慢できないのですから、せめて、下着を濡らさずに、こっそりとでも、どこかにオシッコを済ますことができれば——そんな風に考えてしまったのがいけなかったのです。

家族みんなが飲み干しても、まだ余るほど、たっぷりとミルクを注いでおける、大きな壺が——目の前にありました。

『だ、だから、だめだってば……っ！！』

この、大きな入れ物になら、いまなお膀胱をはちきれんばかりに膨らませている、おなかの中のオシッコを、全部、すっきり、ありったけ、出してしまえるのではないのでしょうか？ 長女は、その考えを振り切ることができませんでした。

『み、みんなの使う、だいじな食器なんだから……で、できるわけ、ないじゃないっ……』

女の子として当たり前前の羞恥心と、お姉さんとしてのプライド。それをもってしても、暴れ続けるオオカミの恐怖と、もう限界を超え

つつある尿意は耐えがたいものです。

ぞわぞわあつ、とお尻から腰を伝って背中に昇るイケナイ刺激に、長女は情けなく声を上げてしまいそうになります。

『あ、あああつ』

我慢、我慢、我慢。

イケナイこと、しちゃダメなこと。自分にそう言い聞かせようとする長女でしたが、必死に奮い立たせようとする勇気も、尿意の大津波にさらされてへにやんと萎えてしまいます。

『うう……く、う……っ』

このまま。

このまま、オモラシてしまうくらいなら、せめて——、いっそ。

こんな所で、下着や床を、汚してしまうくらいなら。せめて——汚すのはあのミルク入れ、ひとつだけにしたほうが、まだマシなので
は——

『っ……………み、みんな……………』

ほとんど無意識に、“ごめんなさい”と口にした長女の手が、勝手にミルク入れを掴み引き寄せます。

大きな壺の口を足の付け根の間に沿えて、ぐいっと下着の股布を横に引っ張り、ひくひくと震えているオシッコの出口を——

そこで、長女ははっと我に帰りました。

『あ、あは、……なんてね、で、できるわけ、ないじゃないの、ねえ……。な、なにしようとしてるのかしら、私……だ、ダメに決まってるじゃない。……こんな、こんなの……っ、わ、わたしが、いちばん、お姉さんなんだから……こ、こんな、ところで……しちゃうなんて……っ』

あと一步。あとほんの、ひと押し。

最後の最後の一線で我に帰り、理性を取り戻し、長女は自分のしようとしていたコトをごまかそうとしました。

込み上げてきた後悔に、胸が押し潰されそうになります。

長女はぎゅっと目を閉じて俯きました。一番お姉さんなのに、一番我慢できなきゃいけないというのに、こんなにもあっさりくじけて
しまいそうになるなんて。

これでは、まだオムツも取れたばかりの妹に、おトイレのしつけをすることも許されないでしょう。

けれど。

なまじ、被害を出すことなく、もう限界のオシッコを受け止める事ができる入れ物がある、という分だけ、ほんとうは一番我慢が
できなければならないはずの長女は、オシッコを堪えつつけるための意志を揺るがされていました。

そして――

限界ギリギリの我慢が、そうそういつまでも続くはずありません。

『ああああ、あっ』

『だ、だめ！！』

『んんううっ！！』

じゅわ、じゅじゅ、じゅうう！！

3人の姉たちは、仲良く、ほとんど同時に、隠れていた場所の中であそこから恥ずかしい熱湯を噴き出させてしまいました。

おさえようとする声が、くちびるから小さく漏れてしまいます。

耐えに耐えて辛抱し続け、それでもとうとう我慢できなくなったオシッコを漏らしてしまう解放感に、3人の姉は抗いきれませんでした。

おチビりはあっというまにオモラシになり、妹達よりもいくらか育ったお姉さんやギたちの下半身を水浸しに変えてゆきました。

我慢の果てに訪れた強制的な尿意からの解放に、姉としてのプライドを微塵に碎かれながら、長女、次女、三女の3人は、それぞれの場所で本格的にオモラシをはじめてしまうのでした。

－ 1 2 －

柱時計のすぐ側を、激しい足音が行き来します。

暴れるオオカミの息遣いすら、はっきりと聞こえてくるほどでした。

「やだ、やあ、……あ、開けないでえ……っ」

オオカミの気配にすっかり怯えきり、もう声を潜めていることもできず、七女……一番年下の妹やギは、恐怖と孤独に戦いながら、全身を使ってオシッコを我慢していました。

我知らず、ガクガクと膝が震えます。恐怖が理由なのか、オシッコがしたいのかはもう自分でもわかりませんでした。

「やだ、やだ、やだあ！！！」

泣きじゃくりながら、末の妹がしゃがみ込んだ柱時計の中は、どんどんと色濃く変わってゆきます。

じつは、姉妹たちのなかで一番オシッコを我慢していたのは末妹の七女なのです。

隠れる前にも、何度も姉にオシッコがしたいと、トイレに行きたいと訴え続けていたのに、オオカミから逃げることに夢中になっていた姉達には聞きいれてもらえなかったのです。

だから、これまで七女がオシッコを我慢し続けていられたのは、ほとんど奇跡のようなものでした。

夜、寝る時のオネショ防止用のオムツが取れたばかりの七女は、押しこまれた柱時計の中で、お姉ちゃん達の言い付けを守って、ただじっと声を殺し、オシッコを我慢していました。姉妹でも一番小さな身体で、一番たくさんオシッコを我慢し続けていました。

でももうダメです、もう限界です。まるで弾けた水風船のように、倒れたガラスのコップのように、高く高く吹き上がる噴水のように、オシッコはあとからあとから溢れ出していきます。

「あああ、やだ、やだよお……！！」

じゅわああとパンツの股布にぶつかる熱い雫が、一番年下の妹の、小さな身体を伝って太股から足元へと滴り落ちてゆきます。座り込んだお尻の下で、パンツと服をびちゃびちゃに汚し、じゅわじゅわと拡がり、オモラシの決定的な証拠を増やしてゆくのです。

自分の身体なのにどうすることもできず、七女はただ、もうこれ以上オシッコが出ないように、お願いを続けるしかありませんでした。

けれど滝のように溢れるオシッコは止まりません。オシッコの出口が壊れてしまったかのようでした。これまで末の妹がしてしまった、どんな限界ギリギリのオモラシよりも、オネショよりもさらにさらに激しく、オシッコは出続けます。

「あう、あ……あ、ああ……～～つ……」

その勢いと量といったらすさまじく、いったい末妹が、こんな小さな身体で、どれくらい我慢をしていたのか、呆れてしまいたくなるほどなのでした。

－ 1 3 －

そして――

だんっ、だん、だんっ！！

「ああう、あつ、あ、ま、あああ！！」

オオカミもまた、とうとう居間の真ん中で、一歩も前に進めなくなっていました。ガクガクと震える膝が、その場でばたばたと床を踏み鳴らします。まるでふくらはぎが丸太のように突っ張って、自分のものではないかのようです。

オオカミは歩くかわりに、吹き出しそうになるオシッコの出口を塞ぐための腳踏みを繰り返していました。握り締めた椅子の背中が
ぎしぎしと軋み、我慢の末にぱくりと開いたくちびるからは、荒く切羽詰まった息がこぼれます。

「あ、……は、うっ、あ、くう……」

そんな有様ですから、ヤギの姉妹たちもすっかりおびえてしまって、誰一人として出て来れないのです。何度もおチビりを繰り返
した末、すっかりびちゃびちゃになってしまった下着が、ぐっしょりと脚の間にへばりつきます。

（も、もうダメ、オモラシ……出ちゃう、オシッコ……っ）

じゅじゅ、じゅぶ、じゅうう、と現在進行系でどんどんと色を変えるキュロットの前を押さえ、きつく握り、オオカミは涙をこらえてすがる
ように——あたりを見回しました。

このオモラシが、もはや避け得ない運命なら、せめて、誰も見ていない事を確認しようとしたのです。

その時でした。

（え……っ）

オオカミの目の前で、ぎしぎしと、壊れていた玄関のドアが軋みます。

「あら、玄関が壊れちゃってるわ。……みんな、なにかあったの？」

そう。ヤギのお母さんが帰ってきたのです。

— 1 4 —

「あら……？」

傾いて軋んだドアを開けた先の、家の中の惨状に、お母さんやギは思わず眉を潜めてしまいました。洋服掛けは倒れ、食器は
床に落ち、壁はへこみ、絨毯はくしゃくしゃに寄っています。

「あらあら、みんな、お留守番はどうしたの——」

不審げに家の中に踏み入れたお母さんやギ。

それと同時に、

「「「「「うわあああ——んっ！！」」」」」」

家の中のあちこちで、一斉に泣き声が上がりました。

食器棚、クローゼット、暖炉の奥、戸棚の下、トイレ、そして柱時計の中。

隠れていた姉妹たちが、お母さんの声に我慢できず泣き出してしまったのです。

それぞれオモラシをしてしまった七人のヤギの姉妹たちは、次々と濡れた脚を引きずって、隠れていた場所を飛びだし、居間のお母さんに抱きつきます。

「ごめんなさい、お母さんっ……」

「お、オモラシ……」

「と、トイレ、が、我慢できなかったのっ」

「わたしなんか、一番お姉ちゃんなのに……」

「オシッコ、でちゃった……」

「ごめんなさいい……」

「ママっ……うわあーんっ！！」

「……ちょ、ちょっと、いったいなにがあったの……！？ あなたたち…？」

オシッコまみれの下半身のまま、お母さんにしがみつき、ベソをかいて泣きじゃくる七人の姉妹に、お母さんヤギはさらに呆気にとられてしまいました。

それだけではありません。

居間には、もうひとり大変なことになっている女の子がいたのです。

「あ……あ」

床にぺしゃんと座りこんで、閉じた脚の間に両手を押し込んで、オシッコ我慢の限界にぐいぐいと腰をくねらせねじりつけ。

両膝をまるめ、尻尾を垂れさせ、耳をくたりと倒し、必死にオモラシを堪えているオオカミの少女を見て、お母さんヤギは目を丸くしました。

「あなた……？」

「お、お願い……み、見ない、で……え」

目をうるませながら、か細い声で悲鳴を上げるオオカミ。

オオカミの身体は、勝手にオシッコを絞り出そうとしていました。オモラシのカウントダウンに入り、パンパンに膨らんだ膀胱の膨らみが、脚の付け根に向かって降り、キュロツのおなかをまるく膨らませています。

なにしろ、オオカミは昨日からオシッコができていないのです。そのおなかはまるで赤ちゃんがいるみたいにまるく膨らんでいて、その激しさといったら、まるで姉妹7人分のオシッコを全部一人で我慢しているかのようでした。

オシッコの出口のすぐそこまで、ずっと我慢し続けた大量のオシッコがやってきているのです。オオカミはもう、動けません。

見知らぬ少女の大変な有様に、お母さんヤギはぼかんと口をあけるばかりです。

「ひっく、こ、この、オオカミのお姉ちゃんが……っ」

「あ、あたしたちね、食べられちゃうの……」

「怖かったのお、ママ……ママあ……っ」

口々に訴える姉妹たちは、オオカミの少女を指差しました。

「そ、そんな、違あ……やだ、あ……ち、違うのお……っ！！」

けれど、オオカミにはそんなつもりはないのです。

ただただ、トイレに行きたい——オシッコがしたいだけなのです。耳まで真っ赤になりながら、掠れるような悲鳴をあげるオオカミ

は、どこにでもいる、ごく普通の女の子でした。

そんな女の子の足元で、じゅじゅう、じゅわああ、と籠った水音が響きはじめます。
「やだあ、……と、トイレ……オシッコ、ぜ、ぜんぶ……でちゃう……、出ちゃうよぉ！！」

じゅじゅじゅしゅわ、じゅわあああぁっ、
じよば、じよじよじよっ、じよぼぼぼぼぼぼお……

ヤギの姉妹とお母さんの見ている前で、オオカミの少女は、とうとうオシッコをはじめてしまったのでした。
オオカミの膨らんだ風船のようなおなかから、まるで滝のようにものすごい勢いでオシッコが噴き出し、床の上に撒き散らされてゆきます。
丸一日我慢し続けていたため、オオカミのオモラシはヤギの姉妹たちのどんなオモラシよりも激しいものでした。あんまりすごい勢いなので、姉妹のうち、下の妹たちの中にはそれにつられて、まだおなかに残っているオシッコを絞り出し始めてしまう子まで出てしまいます。

「ひっく……あう……っ……」

オオカミは真っ赤になった目をこすります。

オシッコの湖に広がる波紋は、ぬぐいきれなかった涙の雫でした。ヤギの姉妹たちも、同じように内腿の間にオシッコの筋を伝わせながら、ぼろぼろと涙をこぼし続けていました。

「ええと……どうしましょう……？」

七人の姉妹と、オオカミの少女—— 8 人のオモラシによってそこらじゅうオシッコまみれになってしまった家の中で、お母さんヤギはすっかり事態についていけずに、ひょっとしてわたしもオモラシしなければいけないのかしら……なんていうようなコトを考えているのでした。

……めでたし、めでたし。

(初出：おもらし特区 2008/07/27 2008/09/27 改訂)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 法廷に至る経緯。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 09/27/2008 19:21:34

BODY:

[『裁判風味な。』](http://shizuku44.blog114.fc2.com/blog-entry-47.html "『裁判風味な。』")の前日譚。

いちおうは選択肢式ですが、どれを選んでも結果はさして変わらずです。

続きを読むでオチが読めますが、全部まとめて表示されます。

<hr size="1" />

「っ……ふう…ッ」

部屋に誰もいないのをいいことに、ユキの我慢の仕草は次第に大胆なものになっていた。ぴんと伸ばされた靴下の爪先はふかふかの絨毯を掻き回し、硬直と弛緩を繰り返す。

膝上のスカートから伸びた白い膝が震えるようにぎゅっと寄せ合わされ、脚の付け根の隙間には手が挟みこまれて、直接下着の上から股間を押さえていた。

尿意の波を乗り越えるためユキが身体を緊張させるのにあわせて、革張りのソファーがぎし、ぎしっ、と軋む。

「あ、はう……っ」

唇をそっと噛んで声だけは押さえこみながら、断続的な波にひとつずつ抵抗してゆく。しかし、固く張り詰めた下腹部の中では、オシッコでぱんぱんに膨らんだ膀胱が一刻も早い尿意の解放を叫んでいるのだ。

じんっ、と下着の股布に響く甘い痺れの誘惑に息を飲む。たといいまはなんとか抗えていても、これは機械を相手にした際限のない綱引きのようなもので、いつかは疲れ果てたユキに限界がきてしまうのは明らかなだ。

じつとりと汗に滲んだ背中が、鈍く重い。

「はあ……はあ……っ」

ぞわりっ、と背中を這い登った感覚をどうにか押さえこんで、尿意は波の合間にあるわずかな安定期を迎えた。いまだ緊張の続く下半身を庇いながらも、いくらか余裕のできた隙を狙ってユキは熱い吐息をこぼす。

(……どうしよう。もう、そんなに……もたない、かも)

少女のプライドも、そろそろ我慢の限界に近いことを認めざるを得なかった。

しかし、応接室は不慮の事態により密室と化している。閉ざされた錠前と嵌め殺しの窓に封じられて、ユキにこの部屋から抜け出す術はないのだ。

それはつまり、ユキにはどうやってもこの爆発寸前の尿意を解放する場所がない、ということであった。

(もしかして、本当に、このまま…… ?)

一向に開く気配のない扉の前に、ユキの脳裏を最悪の予想がよぎる。

もしも本当に、誰にも気づかれないまま、ここで限界を迎えてしまったら——その想像はあまりにも残酷なものだった。

(い、嫌、そんなの……っ！！)

しかし、一旦想像してしまえばそれはあまりにリアルな現実で、不可避の未来にも思える。

いても経ってもいられない。これまではなんとか我慢してこれたが、このままいつまでも持つとはとても思えないのだ。

「んっ……」

ユキは焦る気持ちのまま、下半身を庇って立ちあがる。片足だけに体重がかかり、じんっ、と膀胱が圧迫されて恥骨の下あたりをイケナイ感覚が走る。

ぎゅっと目を閉じ甘い誘惑を堪えながら、ユキは慎重な足取りでドアへと向かった。

「あ、あのう、誰か、いませんかっ」

これまで5回試して、5回とも開くことのなかったドア。ノブを回し、軽く握ったこぶしでドアを叩きながら、ユキは恥ずかしさをこらえて声を上げる。

「お願いします、誰か、ここ、開けてくださいっ……！！」

控えめながらも切羽詰った声は、少女がどれほど逼迫しているかをはっきりと知らせるものとなっていた。事実、ドアを引きながらもユキの腰はちいさく左右に揺すられ、靴下の爪先は交互に持ち上げられてはぎゅっと寄せ合わせられている。

「すいません！！ 誰か、いないんですか……！！？」

中腰のままわずかに突き出されたお尻が、くねくねと揺れる。

乾いた喉に唾を流しこみ、ユキはかあつと頬を染めながら自分の尿意を口にした。

「誰か……あの、わたし……お、……お手洗いつつ……！！」

小さな女の子であるのならばともかく、思春期の少女にとって、トイレに関する台詞は、人前で口にするのをもっとも避けたい話

題である。家の外で普通に口にすることすらめられるのに、よそのお屋敷で、しかも誰かに聞こえるように声をはり上げるのは、少女の人一倍繊細な羞恥心をおおいに刺激した。

それに敏感に反応した尿意が、再度の活性化を始めてしまう。

「すみませんっ、本当に、お、お手洗い…行きたくて…あう…ッ」

一旦は落ちついていた尿意の波が、再び少女の敏感な排泄孔へと迫る。膀胱がきゅと収縮し、膝が勝手に震えだしてしまう。押し寄せる尿意の波は一瞬で少女の下半身を飲み込み、荒々しく暴れまわる。

いつしかユキの内股になった腿までが、細かな痙攣を始めていた。

「あくっ…だ、ダメえ…ッ」

ユキはたまたまズアノブにしがみ付き、もう一方の手をスカートの間に押しこんでぐっと押さえこむ。それでも飽き足らず、股間を握り締めるはしたない姿のまま、ユキの脚は力を失うままにゆっくりとしゃがみこみ始めてしまう。

「っ…う、うっ、つく、ふう…っ」

（ガマン、ガマンしなきゃ…！！）

より一層の危険な体勢が、おおいに少女の排泄欲求を刺激した。今にも溢れ出し、にじみ出てしまいそうなオシッコを堰きとめようと、ユキは立てた靴のかかとにぐいっとあそこを押し付け、はしたなく腰を揺すって堪える。

漏らしてしまうわけにはいかない。

ここは断じてトイレではない。汚してしまうどころか、みだりに触れる事すら許されないような、高価な調度品に彩られた部屋なのだ。もしもガマンしきれずにオシッコを漏らし、絨毯やソファを汚してしまうような k とおがあれば、どう考えてもユキのお小遣いで弁償が利くようなことにはならないのである。

「ッ…」

（だ、だめ！！ ホントにもう、出ちゃう…ッ！！）

しかし、少女の下腹部は、理性の制止を無視しすでにオシッコの準備を始めつつあった。じんと麻痺する股間では、すでにじゅ、じゅっ、とイケナイ水音が響き始めている。

「あああ…っ！！」

立て続けに襲ってくるオシッコの誘惑が、制服の下でユキの下着を汚してゆく。

スカートの上から指を立てて必死に股間をさすり、ユキはもはや自分の身体が我慢を続けられないことを悟った。

（だめ…我慢できない…っ！！）

どうしよう。

どうしよう。

必死になった少女の視線が応接室を巡る。無論、こんな場所にトイレなどあるわけがない。だが、このままオシッコを出してしまうわけにはいかなかった。少女の意思を無視して、いまにも吹き出そうとしている熱い水流。いったん出始めてしまえば最後、もうそれを止めることは不可能なのだ。

限界を迎えたユキが選んだのは――

1. 花瓶

2. 灰皿

3. 植木鉢

EXTENDED BODY:

1. 花瓶

壁に飾られていたガラスの花瓶だった。

花を活ける事よりも、その精緻な細工を楽しませるためであろう美しい曲線を描いた花瓶をつかむと、ユキは片手でパンツを膝まで引きずりおろし、壁際に駆け寄ってドアを背に腰を落とす。

「ごめんなさい、ごめんなさいっ…」

(で、でももう我慢、できないんですっ……！！！)

花瓶に活けられていた花を引っっこ抜き、しゃがみ込むと同時、ユキはオシッコの出口に花瓶をあてがった。

一瞬送れて、激しい水流が少女の股間から吹き出し、花瓶の中へと叩きつけられる。

「あ、ふぁあっ……」

括約筋を振るわせるびりびりとした衝撃に、思わず声が漏れる。

激しい勢いで排泄される熱いオシッコの奔流を、細く小さなガラスの入れ物が受け止めた。容器の底にぶつかって泡を立て、飛沫を飛ばして溜まってゆく薄黄色の液体。まるで——病院でシビンを使っているかのよう。本来ならばトイレの個室で誰にも秘密に行われるはずの、少女の排泄という行為が、いっさいの虚飾を剥ぎ取られて剥き出しにされていた。

(やだ、っ……す、凄い音しちゃう……止まらない……っ！！)

我慢に我慢を重ねた上での排泄は、遠慮のない勢いで花瓶を満たしてゆく。ざっと1リットルは容量のありそうなガラスの容器を、またたく間に埋め尽くしてゆく自分のオシッコをはっきりと見せ付けられて、ユキは顔から火が出る思いだった。

招待されたお屋敷の応接室で、飾られていた花瓶をトイレの代わりにして我慢しきれずにオシッコをしてしまうことの罪悪感が、少女を責めさいなむ。

だが、オシッコは一向に弱まらない。小さな入れ物を埋め尽くしてしまわんとばかりに、少女のオシッコは花瓶のなかへと注がれ続けていった。

(え……う、嘘、も、もう……こんなに…？ ……そんな、いつもこんなにいっぱい出ないのに……っ)

いつしか、花瓶の縁近くまで水面が上昇していることに気づき、ユキは顔を青ざめさせた。今なおオシッコは出続けており、まだまだ終わりそうにないというのに——花瓶のほうに先に限界を訴えている。ガラスの容器は、まるでさっきまでのユキの膀胱のように、もうオシッコを溜めておけないと叫んでいた。

(だ、だめ、だめ……止めなきゃ……溢れちゃう……っ！？)

不幸な事実であった。

長時間の我慢の末に、ユキの膀胱を限界まで満たしていたオシッコの量は、ユキ自身が想像していたよりもずっと多かったのだ。しかしそれでも、本来この花瓶の容量ならばユキのオシッコをすべて受け止めることも可能だったろう。——もし、花瓶が完全に空っぽであるならば。

花を活けていた花瓶には当然のように水が入れており、そのせいで花瓶の実質的な容量は見た目よりもかなり少なくなって

いた。もともと中身が入っているところへ、さらに勢いよくユキのオシッコが注がれたのだから、許容量を超えてしまうのも仕方のないことだった。

「だ……やだ、だめ、だめえ……」

慌てて括約筋を絞るが、もはやオシッコが止まるはずもない。膨らんだ風船がしぼむように、あとは最後まで出きってしまうまで止まらないのだ。動くこともできず、で続けるオシッコを止めることもかなわずに、ユキはただ身体を硬直させるばかりだった。

じょぼじょぼとオシッコを注がれ、泡立ちながらぐんぐんと上昇する花瓶の水面が、その縁にかかり、表面張力で盛り上がる。

「だ、だめ……え！！」

ユキは咄嗟に股間に手を伸ばすが、指で押さえてなおオシッコは止まらない。花瓶に収まるはずだったオシッコはユキの手のひらに受け止められ、指の間からぱちゃぱちゃと溢れて飛び散ってしまう。あんなにも大きな花瓶をいっぱいにしておきながら、ユキのオシッコはまだ普通の女の子が一回に済ますくらいの量を残していた。

「や、やだ……オモシ……こんなのっ……」

人の何倍もオシッコをしてしまう恥ずかしい女の子——それがユキのコンプレックスだった。

花瓶を溢れさせてなお余りあるオシッコを、余すところなく絨毯の上に振りまいて——ユキはぐったりとうなだれ、ぐちゃぐちゃになった床の上にへたりこんだ。

E N D.

<hr size="1" />

2. 灰皿

ユキは、ためらわずテーブルの上の灰皿を掴んだ。テーブルのすぐ傍、絨毯の上にそれを置くと、念入りに周囲を見回して誰も見ていないことを確認する。

（っ、ごめんなさい、あとでちゃんときれいにしますっ……も、もう本当に我慢できませんっ……お、オシッコ、これに、ちょっとだけさせてくださいっ！！）

胸の中で懺悔をすると、ユキはスカートをたくし上げて灰皿の上にしゃがみ込んだ。

こんなものをトイレにしてしまうことの罪悪感はもちろんある。恥ずかしくて死んでしまいそうだった。だが、それ以上に切羽詰った尿意がそんな感傷を許さない。

ユキは下着を膝の上まで下ろし、深く腰を下ろして、灰皿に開いた小さな穴めがけ、破裂しそうな尿意を一気に解放する。

ぶしゅつ、じょじょじょじょおおっ！！

勢い良く吹き出したオシッコが、吸殻一つない灰皿に注ぎ込まれる。たちまち泡を立て、飛沫を散らす自分のオシッコを、小さな入れ物が飲み込んでゆくのを、明楽は真っ赤になって俯きながら確かに感じていた。

灰皿は、要するにタバコを吸った時に出るようなごみを捨てる場所——汚いものを捨てるために用意されているものだ。だから、どうしてもどうしてもオシッコが我慢できなくて、どこかで出してしまわなければならないなら、せめて誰も触らないような場所に出してしまうべきだと、ユキは判断したのだった。

「はあああ……っ」

長い我慢からの解放がユキの背中をぞくぞくと震わせる。開け放たれた水門から、薄く黄色に染まったオシッコが激しく灰皿に注ぎ込まれてゆく。

トイレではない場所での排泄は、限界の少女に異様な興奮をもたらしていた。

しかし——そんなユキの誤算は、自分の我慢し続けたオシッコの量に対して、この灰皿の大きさを見誤ったことにあった。

「え——や、やだっ」

ふと灰皿を見下ろしたユキは、全く予想外の光景に狼狽する。

まだまだ勢いの衰えないまま、ユキのオシッコは出続けているのに、たっぷりと泡立つオシッコを受け止めた灰皿は、早くも一杯になろうとしていたのだった。

「そ、そんなっ、ま、まだ全部出してないのに……もういっぱいになっちゃう……！？ だ、だめ、止めなきゃっ」

そう。本来ならトイレで思う存分できていたはずのオシッコだが、ユキがその代わりに選んだ灰皿には当然、容量があり、自由に好きなだけオシッコを済ませられるわけではなかったのだ。ユキが長い時間をかけて我慢し続けたオシッコは、小さな灰皿のなかに全部収まるとはとても思えないほどに多かった。まだ半分も出きっていないのに、灰皿はすでに水面ぎりぎりまでいっぱいになってしまっている。

じょ、じょぼっ、じょぼろろお……

「や、やだ、止まらないっ……だめ、オシッコやめないとダメなのにつ、あ、ああっ、待ってっ！！」

排泄器官を抑えようと腰をくねらせるも、オシッコは蛇のように左右にのたうつばかりで、吹き出す勢いは全く弱まらない。灰皿には受け止めきれない少女の恥ずかしいお湯が、あっさりと灰皿の縁を乗り越えてあふれ出した。

「や、やだ、だめ、だめえ……！！」

一度、女の子が始めてしまったオシッコが途中で止まるわけもないのだ。

ユキの足の付け根から吹き出す薄黄色の液体は、止めようとするユキの意思を無視して絨毯に広がってゆく。熱い雫がじょぼじょぼと絨毯を色濃く染めてゆくのを、ユキはただ黙って見続けるしかなかった。

E N D.

<hr size="1" />

3. 植木鉢

ユキが選んだのは、植木鉢だった。

両手に余るほどの大きさの巨大な植木鉢——たつぷりと土を詰めて部屋の隅にでんと構えた観葉植物のそれは、確かに力強くユキのオシッコを受け止めてくれそうに思えたのだ。

「ごめんなさい、ごめんなさいっ……」

誰にともなく謝りながら、ユキは部屋の隅へと駆け寄ってゆく。同時にスカートの中に手を突っ込み、下着を膝まで引き摺り下ろしながら。

観葉植物にしがみ付くように身体を幹に寄せ、蟹股に脚を開きスカートを大きくたくし上げて『ぐいっ』と腰を突き出す。ちょうど、出たオシッコが観葉植物の根元に注ぎ込まれるように股間の位置と角度を調整する。

(わ、私、凄いカッコしてる……っ)

まるで、男の子の立ちションのようだった。……いや、それよりも酷いかもしれない。誰かに見られでもしたら、木の根元にオシッコをしていたという以外、絶対に言い訳のきかない明らかな排泄の姿。

(あああ……だめ、出ちゃうっ！！)

オシッコをするためのポーズをとっているのだから、もう我慢が利くわけもない。

ぶしゅっ、じょあああああああ！！

背中をそらせて股間を前に、開かれた脚の付け根から、大きく弧を描いて飛沫がほとばしる。

さすがに男の子ほど上手くはいかないにしろ、広げた脚の間から放たれた野太い水流は、少女の股間から排泄されるものとは思えないほど勢い良く激しく吹き出して、植木鉢の上に叩き付けられる。

(だ、だめ、木にひっかけちゃわないようにしなきゃ……)

ユキは排泄の開放感に震える腰を動かしながら、股間の位置を調節する。湯気を立てるほどのオシッコが、木の根元めがけて注ぎ込まれ、植木鉢の表面に激しく泡を立てた。

いじましいほどの、うまくオシッコをするための努力を経て少女が放つ水流は苔むした木の幹をあっという間に汚し、乾いていた根元の土を泥に変える。

じよぼ、じよぼぼぼぼお……！！

「ふああ……」

とんでもないことをしているという罪悪感は、オシッコからの開放感で薄れていた。長時間強いられた我慢を終えた瞬間の心地よさは、まるで快樂にも近いもの。思う存分オシッコのできることの幸せを噛み締め、ユキの“女の子”は遠慮なくオシッコを出し続ける。

我慢し続けたオシッコも、こうやって木の水やりになって養分になるから、少しでも役に立つだろうと自分を誤魔化し、ユキは鉢植えへのオシッコを続ける。

しかし、ユキは不幸にも知らなかった。

鉢植えというものは基本的に水を溜めておくようなものではない。植木鉢に水が溜まれば、すぐに根が腐ってしまうためだ。そのため植木鉢の土には保水能力など皆無に等しく、注がれた水のほとんどは底からこぼれてしまうものなのだ。それだけに鉢植えへの水遣りは定期的に行われねばならない。

「え……や、な、なに！？ これっ」

ユキのオシッコはたちまちのうちに植木鉢の中を通過して、受け皿をいっぱいにしていた。出続けるオシッコはそのままの勢いで植木鉢のしたからあふれ出してしまっている。

そして——人間の排泄物はそのままでは植物の肥料になることはない。発酵させなければその成分のほとんどは有益どころか害のあるものでしかなく、さらにユキがしたばかりのオシッコは体温に近い温度まで暖められた、植物にとってはほとんど『熱湯』に近いようなものだ。

「や、やだっやだやだっ、なんで！？ お、オシッコ、全部こぼれちゃうっ！？」

唐突にユキのオシッコを浴びせかけられ、てきめんに観葉植物の葉がしおれ出す。鉢植えの土を通過して絨毯にこぼれるユキのオシッコは、泥に汚れた茶色になってなお大量だった。

動揺し腰を引いた途端、ユキのオシッコは制御を失いばちゃばちゃとあちこちに飛び散った。絨毯や観葉植物、それどころか部屋の隅のカーテンや家具までを区別なくびちゃびちゃに汚してゆく。ただのオモロシよりも数倍たちの悪い、オシッコの大災害だ。

「だ、だめえ……止まって……やだあ……」

ユキが押さえ込んだ両手の下で、なおもばちゃばちゃと吹き出すオシッコは、やがて大きく少女の体と、その足元の地面を侵食していった。

E N D.

(初出：書き下ろし)

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 月壬月辰のススメ2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 09/27/2008 19:29:10

BODY:

「ふわぁ……」

感嘆の声をこぼす少女は、顔の前を両手で覆いつつもその実しっかりと指の隙間からちらちらとこちらを覗いている。いちおう了解済みのこととは言え、こうもまじまじと見つめられると、さすがの私もいろいろと恥ずかしいものがあった。

脱ぎかけのシャツで胸元を隠し、身体をよじって軽く口を尖らせる。

「あ、あのさ。あんまり、じっと見られると……」

「ごっごめんなさい！！」

慌てて視線をそらす少女だが、それでもまだ『これ』への興味は尽きないようで、さりげなさを装いながら私のほう——正確には、下着をはちきれさせんばかりに膨らんだ私の下腹部へと視線を向けてきた。

「でも、おねーさん……すごいです……とっても綺麗で……」

こくり、と息を飲みこんで、興味津々な視線を隠そうともせずに、少女はおずおずと訊いてきた。

「あの、……おねーさん、本当に今日で、二日目、なんですか……？」

「まあ、ね」

とは言え、こうして誉められることそのものは悪い気はしない。

スーツの下に押し隠していた私の腹部は、ベルトと拘束帯による戒めを解かれた今、はっきりと分かるくらいに膨らんでいる。赤ちゃんにたとえるならば丁度6ヶ月目程度。大きくせり出した下腹部はすでに下着の中には収まり切らず、ウェストは強制ローライズ状態だ。

月壬月辰の2日目にしてはかなりのサイズであることは確かで、実はひそかな自慢だった。

「そんなにおっきくて——、ふっくらしてます。……わたしなんか、やっと4日でおなか、目立ってきたくらいなのに……」

彼女はすっかり眼を輝かせ、私のおなかに視線を釘付けにしていた。自分のほうこそそれよりもずっとおおきなおなかを抱えておきながら、どうも私の月壬月辰にすっかり目を奪われているらしい。

「その、触って……いいですか？」

「い、いいわよ？」

応じた声まで上擦っていた。取り繕っていた余裕もどこへやら、私はいつのまにかすっかり好奇心溢れる彼女の目差しに気圧され、リードを奪われてしまっていた。

そと、ガラス細工にでも触れるように慎重な手つきで彼女が私のおなかに手を乗せた。おっかなびっくりながらも、少女はウェストを締め付けていたベルトの跡に指を這わせてゆく。

「んう……っ」

「苦しかった……ですね？」

自然、声をこぼす私に、少女はつぶやいた。あるいは、ここにはいない架空の赤ちゃんに呼びかけたのかもしれない。

少女の手のひらが触れた部分が、ジンと甘く痺れて疼いた。ちょうどお腹の真ん中に当たる線、オシッコの出口の真上をゆっくりと逆向きに撫で上げられて、仕事の間は務めて忘れようとしていた感覚が、急速に呼び覚まされてゆく。

（んう……）

むず痒いほどの尿意が、切なく甘酸っぱい誘惑になってつうつと背中を這い登ってゆく。

堪えきれずに腰を振り立ててしまい、私は小さく息を詰めてシーツを掴んだ。

「っは……、あ、あのさ、……もう少し、やさしく……お願い」

「あ、す、すいませんっ！！」

慌てて手をどける少女に、私は深呼吸とともに余裕を取り戻しながら小さく苦笑した。

耳まで真っ赤になりつつも、彼女はあんなにも大胆に私のおなかを撫でまわしていたのだ。いまさら取り繕えると思っているのが初々しい。

「で、でも、2日目で……こんなに……？」

「働いてると時間とかそんなにないからね。いろいろ頑張るのよ」

時間的な制約から、質より量、というのが残念ながら私の今の月壬月辰のスタイルである。仕事の日程の関係上どうしても週末の2日以上時間をとることが難しい以上、私は月壬月辰を始める時は多少無茶をしてもおなかを十分に膨らませられるだけの水分を摂取するようにしていた。

利尿作用の強いコーヒーや紅茶は、残業の多い今の職場では必須アイテムである。それだけの水分を継続的に摂取しながら、トイレを禁じる——うまく装えばそれはさして不自然なことでもなく、おかげで私は比較的うまく初期の状態を乗り越えて、月壬月辰をはじめることができた。

「ど、どれくらい、その……お水、飲んじゃうんですか？」

「……たぶん、キミが想像してるよりもっとたくさん、ね」

ごくり、と少女が喉を鳴らして、頬を赤らめる。自分の抱えている大きなおなかを作るために、どれだけいっぱい水を採って、我慢を続けてきたのかを思い出したのだろう。

わずかに潤んだ少女に擦り寄って、ふっくらとした頬にキスをした。

そと抱き寄せた小さな身体は、すでに興奮にいくらか汗ばんでいる。

「——キミのも、触ってもいい？」

「っ……」

「いい、わよね？」

「……はい……っ」

念を押すようにもう一度耳元で囁くと、彼女は蚊の鳴くような声で小さく答えた。

『そこ』を触るにあたって少女に要求したのは、私と同じように自分で脱いで見せてくれ、ということだった。

さんざんためらい、焦らされながらもついには捲り上げられた“マタニティ”ドレスの下から、本当に赤ちゃんがおなかにいるかのように丸くふつくと膨らんだ少女の下腹部があらわになる。

「……すごい、のね」

思わず素直な感想を漏らすと、彼女は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

一種異様なほどに膨らんだおなか、月壬月辰でももう後期も後期。本物の赤ちゃんにたとえれば臨月に近い状況である。今日明日にも出産予定日を控えて、その下準備として赤ちゃんがおなかのすぐそこ、大切なところの下の方まで降りてきているといったあたり。

緊張で汗ばんだ少女の白い脚がベッドの上で小さく震え、“マタニティ”ドレスの下に籠っていた熱気が、ふうわりと巻き上がる。

「っ……あ、あの、あんまり……見ないで……くだ、さいっ……」

「嫌。だって、こんな素敵なもの、滅多に見られないもの……」

ほとんど目立たない産毛の覗く恥丘から、なだらかに盛り上がった白いおなか。

真っ白い肌は絹のように滑らかで、無垢な乙女の瑞々しい柔らかさを保っている。男の手なんか一度も触れたこともないだろう穢れのない下腹部が、まさに産まれる寸前の赤ちゃんを孕んだようにふつくと膨らんでいる様子は、途方もなく倒錯的だった。

私も一応はこんな趣味をしている人間だ。同好の志である“月壬月辰”中の女性たちと、一晚を共にして楽しんだこともある。けれど、こんなにも美しい肢体を目の前にしたのは初めてだった。

「あ、あの……お姉さんっ」

ほとんど魅入られるように、私はその身体に心奪われていた。

一日が終わるたび、長い我慢で強張った括約筋を丁寧にはぐし、おなかをゆっくりとマッサージして、限界ギリギリの膀胱を少しずつ緩める。“月壬月辰”の基本中の基本でありながら、同時にもっとも難しいこと——きちんと水分を摂取しながら、膀胱の容積を膨らませ、慎重に慎重に拡張してきた結果の賜物だった。

年端もいかない幼い少女が、本当に赤ちゃんを宿しているかのような、母性と無垢な未分化の性を同時に宿した、どこか歪な至高の美。

自分のものではない、幼い少女の漂わせる官能的な匂いに、頭がくらくらとする。

「いい匂い、するね……」

「っ、やあ……っ」

思わず口を付いて出た言葉に、少女は過剰に反応する。

たぶん、何度となく訪れた尿意の波に堪えきれずに漏れ出してしまった、おチビりの余韻なんかを気にしているのだろう。けれど、ほのかにミルクの匂いをさせる少女の首筋は、鼻先を寄せているだけで頭が痺れそうに甘い。

このあまりにも魅惑的な光景を、いったいなんと評すればいいのだろう。

「もう、出ちゃいそう？」

「……っ」

答えるもの辛そうに、少女は小さく頷いた。

まだ未成熟な少女が、その無垢な純潔を保ったまま、たったひとりで無謀にも思える七日間の“月壬月辰”に挑み、母性の象徴たる妊婦の姿を築き上げたのだ。言い知れない興奮に胸が震える。

見られることで改めて自分の状況を思い知り、少女はおなかの中で暴れ続ける尿意を自覚したようだった。

「や……だ、だめ、触っちゃ……」

そつと下腹部を揉み込むと、石のように硬く張り詰めると同時、驚くほど弾力に跳んだきめ細かいなだらかな腹部の感触が返ってくる。大切な赤ちゃんを保護する卵膜と子宮、そして羊水。それらの代役を果たす強靱な膀胱とその内側に閉じ込められたおしっこが、少女をか弱く震えさせた。

この状態では、もはや尿意を尿意として感じきれないのが普通だ。

百回の我慢の上に二百回の我慢を重ね、限界を遥かに越えて溜め込まれたおしっこは、一日中休むことなく恥骨の上のダムや水門、はちきれそうに膨らんだ水風船といった排泄器官を蹂躪し、徹底的になぶり続ける。

それは発情のような、生理の痛みのような、苦痛でもなく快楽でもない、言葉にできない切なさになって女という性の根幹を揺さぶってくる。

「ふあ……あんっ」

きっと、この感覚は赤ちゃんを宿すことのできる女性だけが感じられる歓びのようなものだ、私は実体験を通じて感じ取っていた。それと同じものをいま、私の目の前で年端もいかない少女が感じているのだ。鼓動が高鳴り収まるところを知らなかった。

小さく前後に揺すられた少女の脚の付け根から、膨らんだおなかの下に窮屈そうに張り付いている下着をそつとなぞる。

「っ、あ……っ！！」

出口を刺激され、耐えられないというように、少女は腰を跳ねさせた。息を潜めてびくびくと下半身をねじり、ぎゅっと目を閉じる様はいつそう私の興奮を掻きたてる。

「あ、あの……や、やっぱり、もう……無理、ですっ……」

1週間分のおしっこの重みに耐えかね、音を上げる少女。股間にぴったりと張りついた高分子吸収体から、すでに溢れだした滲みがばた、ばた、とこぼれ落ちている。

「ごめんなさいっ、お、お姉さんっ、せ、せっかく、そのっ……お、おうちまで、連れて来てくれたのにっ……」

この期に及んで、私の満足を案じてくれる少女に、微笑ましいものを覚えた。擦り切れそうな下腹部を襲う衝撃でそれどころではないだろうに、彼女は私に遠慮をしているのだ。

「お願い……その、もうっ……」

おトイレに、行かせて。

はっきりと言葉にしたものでこそないけれど、分かりすぎるくらい分かりやすい、明確な懇願。意志表示。

けれど、応じるわけにはいかなかった。

「ねえ、キミって……これ、はじめてなんだよね？」

「え……？」

何のことかわからない、というように、潤んだ目を瞬かせる少女。

私は彼女の頭をそっと抱え込むようにして、告げる。

「ここで、最後まで、しよう？」

震える唇で、その告白を押し出す。

正直に言えば、拒絶される可能性も十分にあった。同じように“月壬月辰”をたしなむ女性であっても、その最後をどのように迎えるかは様々だ。大きく膨らんだ腹部に満足し、最後にはトイレに駆け込む人も居れば、限界を迎えるまで断固続ける人もいる。

そして私は、その最後の瞬間——つまりは“出産”を見届けるのが好みの類の人間だった。

だから、目の前で小さく喘ぐ少女にも、このまま我慢を解き放つことを要求したのだ。

「だ、だめ……だめですっ！！」

どちらかという、拒絶よりは羞恥の成分を多めに、少女が声を上げる。耐え切れない衝動に身体の内側から敏感な水門をノックされながら、そんなことするなんてとんでもない、といやいやをした。

「だめ、お姉さんの、ベッドっ……汚しちゃいますっ……」

「やだ。……キミが最後に我慢できなくなるところまで、ちゃんと見たいもの」

ぎゅっと少女の身体を抱き寄せ、その耳たぶを優しく噛んでは囁く。すでに小刻みに震える少女が、私の介助なしでベッドを離れ、トイレまで歩いていく余裕はないはずだった。つまり、ここでの彼女の“最期”は、私の手に握られているに等しい。

「それがイヤなら、まだ続けるのかしら。でも君、このまま明日も明後日も我慢して、始業式に行くの？ その格好のまま？ おなか、こんなにおっきくしちゃって……なんて思われるかな？」

「あうっ……」

びく、と背中を震わせる少女が、反射的に腕の中から逃れようとする。それを阻止して、なおも私は言葉責めを続けた。

「こんなだったら、制服着れないかもね。“マタニティ”のまま学校に行くの？ ふふ、君がどこかの男の子とエッチしちゃって、赤ちゃんができちゃったって噂になっちゃうかな？」

「や、や、お姉さんっ、だめ、い、いじわる、しないで……」

涙ぐむ少女の表情が、私の嗜虐心に火を着ける。このまま、食べてしまいたくなるほどの可憐な姿が目の前にあった。

「それとも、ひょっとしたら知ってる子いるかもね、『これ』のこと。そしたらどうする？ 君がさ、一週間もオシッコを我慢し続けてる、とっても恥ずかしい女の子だって、学校じゅうに知られちゃうよ？」

言うまでもないことだけれど——世間での実際の認知度はさておき、月壬月辰という行為は一般常識ではかなりのアブノーマルに位置する。その実用性はあるていど認識されて入るものの、さすがに快く受け入れるヒトばかりではない。

まして、本来の用途である、赤ちゃんのできない夫婦が代償行為として行っているのとは訳が違う。女の子がたった一人で、おなかに赤ちゃんを孕む真似事を試みるというのは、彼女くらいの年齢では相当に倒錯しているだろう。

「うあああ……」

顔を真っ赤にしていやいやをする少女の目元に浮かぶ、涙をそっと掬い取る。

「ね、だから、出して、いいよ？」

その言葉が、まるでカチリ、と少女の水門のスイッチを捻るように響いたのを、私はしっかりと聞いていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 月壬月辰のススメ3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 09/27/2008 19:31:20

BODY:

「あはあ……あああつ、あう、あつ、ああああ……」

耳までを赤く染め、顔を覆い、小さく唇を噛み締めて。

びくびくと前後に腰を揺すりながら、少女の放水は止まらなかった。

かなり濃い目の色のついた奔流は、皺の寄ったシーツの上に大きな水たまりを作ってなお激しく打ちつけられ、琥珀色の水面にじゃぼじゃぼと激しく波打ち、白い泡を掻きたててゆく。

これほどの我慢になると、たとえ限界失禁になっても放水は一度で終わらない。酷使され続けてすっかり充血した排泄孔は熱く腫れぼたくなってしまい、パスター本が通るかどうかまで狭く細くなるのだ。肉の管は充血し疼いて、激しい水流を間断的に何度も吐き出す。

鈍くはあるが圧倒的な尿意がいつまでも収まらず、何度も何度も熱い雫を弾けさせる。下半身は痺れ、腰が抜け、自分の意志とは無関係に、敏感になったあそこを貫くほどの刺激で排泄が続いてしまうのだ。

長い時は、そのまま30分近くもオシッコが続くことを、私は経験として知っていた。

「あう……だ、だめ……止まらな……っ」

ベッドの上にできたぬかるみに続けて叩き付けられ、泡を立ててゆく少女のおしっこ。

長い期間で抽出され濃縮された、色も匂いも濃い琥珀色の液体が、少女の下半身をぐしゃぐしゃに汚してゆく。ぱちゃぱちゃと飛び散る飛沫は私の下半身まで濡らし、少女特有の匂いを際立たせていた。

すでに少女の排泄器官は独立した生き物のように、溜めこんだ恥ずかしい熱湯を吐き出す、ぬめる肉の管に成り果てている。

「お、お姉さん……やだ……おしっこ止まらないのっ……やだ、やああ……わ、わたしのあそこ……おしっこ、でるところ……壊れちゃったよう……っ」

「ん……大丈夫。我慢しないで、力抜いて……。ほら、全部出しちゃっていいからね……」

「あ、あつ、あっ！！」

私の言葉に反応するように、少女が腰を浮かせてがくがく震え、か細い悲鳴と共に背中を反らせる。

敏感すぎるほど敏感になった排泄孔から、高らかに琥珀色の飛沫を吹き上げて、まるで金色の鎖が降り注ぐかのように放出が続く。

「あふあ……」

とろん、と蕩けた少女の腰が持ち上がり、びくびくと痙攣を繰り返した。いつまでも終わらない解放感、女性が知るオーガズムと同じものだ。

腰を浮かせながら口を半開きにして、わずかに唾液すらこぼし、少女は何度も何度も熱く濃いオシッコを吹き出す。そのたびに少女は快楽の頂きに押し上げられる。

頼りない足元を確かめるかのように、ベッドにぐりぐりと押し付けられる少女の股間から、じゅぶじゅぶと熱い音がこぼれた。

「ふわあ……あ……っ」

またも少女の喘ぎの語尾が高く跳ね上がる。それは彼女がまた、快楽の頂きへと押し上げられたことを知らせていた。

まるで禁じられた魔薬のように、排泄の快楽が少女を包んでゆく。既婚の女性でも、一度これを知ってしまえばふつうのありきたりなセックスなんてどうでもよくなってしまいただろう。

これは、本当の最後の最後まで“月壬月辰”を遣り遂げたものにだけ許される、至高の瞬間。

天井知らずの快楽。底知れぬ陶醉。私だって始めての経験のときは、凄すぎて気絶してしまったくらいだ。

「ああ、んう、っんむっ……」

「んう……ふ、ちゅ……」

喘ぐ少女を見ているうち、私もたまらなくなつて、強引に彼女にキスをしていた。

重ねあった唇を深く交わせながら、熱い雫を放ち続ける少女を押し付け、ベッドの上に押し倒す。

「ああ、あつ、あ…、や、ま、また……ヘンになっちゃう…っ！！」

普通のセックスどころか、自慰だって十分に経験のないだろう少女には、あまりに強烈なインパクトだろう。

私と肢体を絡めあったまま、焼けついてしまいそうな敏感な快楽神経を持て余し、少女は何度も何度も絶頂に達し、甘くか細い喘ぎを繰り返す、同時にその脚の付け根から激しくおしっこを撒き散らし続けた。

いったい都合何リットルに及ぶ、途方もない量だったのだろう。

少女のその小さな身体の中で抽出された天使の雫——それを惜しむことなく丹念に撒き散らしたシートの上で、白い身体をずぶ濡れにし、彼女は物悲しげにおなかを撫でている。

「…………おなか、からっぽになっちゃいました…………」

まだ、いづか快感の余韻があるのだろう。どこかとろん、と蕩けた表情で時々小さく背筋を震わせながらも、彼女は目じりに涙を滲ませ、小さくつぶやく。

歳相応の幼い身体を取り戻した少女は、長い長い排泄の衝撃と解放感、そして疼くような痛みに弱々しく身体を痙攣させていた。今なお感じている鈍く甘い幸福感と、どこか身体の奥が抜け落ちたような虚脱感。

それが、女性の1割も経験することの叶わない本当の性的絶頂の余韻だと、少女本人は恐らく知らないままに。

「頑張ったね…………」

「はい…………」

そと少女の身体を抱き寄せる。あまりにも激しい少女の排泄によって、もうお互いにずぶ濡れではあるものの、そんなものを気にすることはしない。最後の決壊の瞬間という、あまりにも神秘的で感動的な一瞬に揃って立ち合った二人だ。いまさら触れ合うことを嫌がる訳もないのだ。

おなかの中の熱量をごっそりと失って、彼女の印象は酷く華奢でほっそりとしたものになっていた。肉付きも薄く、発育もあまりよろしくない小さな胸が、それでもほんのりと柔らかく私のおなかに触れる。

色気とはほとんど無縁の幼児体系ではあったけれど、月壬月辰でおなかを膨らませていた時とのギャップは、かえってその魅力を引き立たせているようにも思えた。

「…………ごめんなさい、…つく…なんだか、わ、分からないんですけど…………っ ぐすっ」

「ん」

よしよし、とぐずりだした少女の髪を撫でてやる。

つまらない言い方をすれば、所詮、月壬月辰は排泄器官を擬似的な生殖器に見たて、妊娠の真似をするだけのものだ。いまの出来事だって、客観的に見ればただ少女がオシッコを我慢できなくなってオモラシってしまった、それだけのことに過ぎない。

けれど、たとえばほんの一週間という短かな期間であっても、おなかを膨らませて自分と共にあったものが身体から抜け落ちることは

——どうしようもないほどに大きな喪失感に繋がるのだ。

これも、生命を宿しはぐくみ育てる女性ならではの感情なのかもしれない。想像妊娠なんて言葉があるように、私も、たぶん彼女も。その相手となる男性——異性のパートナーを忌避したまま、心のどこかで自分の遺伝子を繋ぐ生命をおなかのなかに宿すことに憧れているのだろうか。

だとしたら、酷く歪んだ想像だ。あまり楽しい推論ではなかったので、私は首を振ってその思考を頭の中から追いだした。

「お姉さん——は、しないんですか？」

いつの間にか、少女は私のおなかに手を沿えている。

彼女ほどには及ばなくても、やっぱりその内側に抽出されたおしっこを蓄え、たつぷりとまあく膨らんだ私のおなかを撫で、少女はどこか蕩けた色っぽい表情をあらわにしていた。

困ったものだ。まだ2日目なのに——少女は、今度は私にその“最期”を見せろとねだっている。

「見たいの？」

「……………」

はっきりと聞いてみると、びくり、と身体を硬直させ——それでもごまかすことなく、少女は頷いたのだった。

「えっち、だねえ」

「……………」

そう言えば——

こんなにも濃密な時間を一緒に過ごしておきながら、まだ名前も聞いていなかった。そのことに思い当たり、私は小さく舌を出して、告げる。

「見たいなら、まずは——お友達からはじめようか。また明日、一緒に遊んであげるから、それまで我慢。いい？」

「……は、はいっ」

「さて、じゃあ遅ればせながら、私はね……」

ずぶ濡れのベッドの上、溢れるほどの雫に身体全体を浸し、私は自己紹介をはじめることにした。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 8
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 永久我慢
CATEGORY: 永久我慢

DATE: 09/28/2008 21:11:08

BODY:

明け方の空が白み始め、薄日が住宅街の隙間にちらほらと曙光をのぞかせてゆく。普段ならばまだ分厚いカーテンの内側で眠りの中にあるはずの少女は、沸き上がるオシッコの津波を堪えるために、薄いまどろみの中でなお戦い続けていた。

(…………ツ、う～～～っ…………！！)

「っは、っく…………」

もぞり、と寝返りを打つ静菜の首筋には、じわりと汗がにじんでいる。息を詰めてはわずかに身体を硬直させてそっと深呼吸をし、ベッドの上を落ち着きなく動き回る。

タオルケットの下で脚がせわしなく動き、ぐりぐりとねじり合わされ、時折びくつと縮こまる。

両手はしっかりとタオルケットの下でパジャマの上から股間を押さえ、緩急をつけながら脚の付け根をぎゅ、ぎゅっ、と握り締めていた。両手を余すところなく使って、ぱんぱんに膨らんだ膀胱を抱え込むような有様だ。

(…ううう～～～…………ツツ！！)

声にならない苦悶を上げながら、少女は際限なく打ち寄せてくる尿意の波を押さえ込もうと呻く。両手で押さえたままの股間をベッドに押し付け、枕を軽く噛んでは熱い吐息をこぼす。

ほとんど徹夜に近い状態のせいで、静菜の頭は眠気に支配され朦朧と霞んでいる。半分夢の中のようなまどろみに包まれながら、静菜は思うように我慢をすることもできないもどかしさに悶絶していた。

ベッドの中での緩慢な前押さえや身体によじりでは、効果的にオシッコを押さえ込むことも叶わず、『おトイレ』のような一時的な効果すらも与えられない。

いや、すでに静菜の排泄器官は本来我慢できるようなレベルを超越してオシッコを溜め込んでいるのだ。……およそ、30数時間分のオシッコが、静菜の身体は猛烈な尿意を訴えている。もはやこれ以上の我慢は不可能に近い状況と感じられた。

(うく、はうっ…………う、う、あ～～ツ…………！！)

閉じられた目の上で、眉が切なげによじられ、ぐっとくちびるが引き結ばれる。浅い眠りの中の無意識の動作が静菜の苦しみをはっきりと知らせていた。

股間を、握り締めた手のひらごとベッドに擦り付け、くねくねと腰をもじつかせる。不恰好に突き出されたお尻は左右に揺すられ、まるでたぽんたぽんと擬音を響かせるようだ。静菜の強靱なオシッコタンクですらも、一晚という時間を経過によって許容量の限界を迎えていた。

（っは、くう、んううっ……）

手のひらに押さえつけられた下腹部は、圧迫と開放を繰り返されながらわずかに膨らんで見えるほどだ。横になり、仰向けになり、うつ伏せになり、1分と同じ体勢を続けられない静菜は、ベッドの上で身体をのたうたせていた。

めくれあがったパジャマの袖や裾からは白い肌が露になり、二つ外れたボタンの内側からは、大胆に胸元がのぞいている。うっすらと汗の浮かぶ少女の肢体は、なまめかしく蠢き、まるで陣痛に苦しむ妊婦のようですらあった。

（うく……っは、はあっ、は、ふうっ）

ラマーズ法にも似た呼吸で、体内に抱え込んだものをなだめる静菜。ぎゅうっと前を押さえる手のひらはもどかしくもせわしく股間を押さえ、複雑な動作で脚の付け根をなぞる。

（はあ、はっ、ああああっ！！）

びく！！と突き上がったお尻がクネリ、さらに大きくベッドの上に持ち上がった。

静菜は苦悶に顔を歪ませながら、うつ伏せになってシーツにぐりぐりと顔を押し付けた。ベッドの上を掻いた腕が枕を引つつかみ、無意識のうちに胸元へ引き寄せる。まるで——夜の夢の中で、拙くも自慰の果てに達したかのよう。

（っ、あ、う、あっ）

握り締めた枕をそのまま脚の間に押し付けて、少女の腰が震えだした。

静菜の両足は躊躇わず大きな枕をぐっと股間に挟み、その感触に縋るように脚の付け根が強く閉じあわされる。

まどろみの中で、静菜はついに——尿意からの解放の手段を見つけ出したのだ。

枕の感触に安堵を得たように、ぎゅうっと締め付けられた内腿がぶるぶると震える。まるで解放を許されたオシッコが、そのまま枕へと吹き付けられ、染み込んでいくかのように。

（あ、あ、っ、あっ、お……『おトイレ』え……っ）

最適なガマンの体勢を見出した静菜の身体は、意識のないまま『おトイレ』を始めていた。せり出していたおながぎゅうっと引き絞られ、身体の奥に膀胱が押し込まれ、限界ぎりぎりに達していた危険水域がまたいくらか上限を追加されて余裕を取り戻す。

この期に及んでも、静菜の身体は一滴たりとオシッコを漏らすことはなかった。わずかなおチビリもないまま、尿意をかたく飲み込んで、見事に静菜のオシッコは少女自身のおなかの中へと注ぎ込まれてゆく。

少女の四肢が静かに脱力し、安堵に委ねられた。

そうしてようやく、静菜の意識はまどろみの外に浮かび上がってゆく。

「んうっ……！？」

目が開いた途端、引きかけていた尿意の波が爆発的に膨れ上がった。

自分のとっていた姿勢を自覚して、静菜は跳ね起きた。覚醒する意識と共に、きゅうつと下腹部が激しく震えてしまう。おとなしく下腹部の中に納まろうとしていた膀胱が、再び暴れ出した。

静菜はたった今まで、夢の中に出てきた公園のトイレで、『おトイレ』をしていたところだったのだ。

「ふああああっ……っ！！」

（だ、だめ、今のは夢っ、……と、トイレじゃないから…、しちゃダメ、っ、ガマン、がまん…んん～…ッ！！）

猛烈な衝撃に静菜は思わず股間を握り締めた。すでに押さえ続けられた足の付け根は下着とパジャマに擦れて、わずかにひりひりと痛い。その些細な痛みもむず痒さになって、ますます尿意を加速させるのだ。

（ッ……しないの、オシッコっ……オシッコしないの、したくなんかないっ、オシッコなんか、どっかいっちゃえっ……！！）

まるで、自分にはそんな器官はないとばかりの自己暗示。排泄という自然の摂理を真っ向から否定する、少女の健気な我慢。

ぎゅつと身体を丸めたまま尿意がおとなしくなるのを念じながら、静菜はちらりと机の上の目覚ましを見る。

現在時刻は、06：43。

もう、起きる時間だった。

「はあ……う……」

苦しい息の下で、静菜はゆっくりと、その事実を確認した。

ぱんぱんに膨らんだ膀胱、酷使の果てにすっかり疲弊した括約筋。夢の中ですら、オシッコを許されない自分。

（……だめ、かも……っ）

いくら否定しても、いくら違うと思っても、身体は執拗にそれを要求し続けている。これからその求めはさらにさらに激しくなる一方だろう。

あと十時間以上これに耐え続けるのは、絶対に無理だった。このまま学校に行って、家に帰ってくるまでオシッコを我慢し続けるなんて、本当に気が狂ってしまうかもしれない。

（もう……っ……ちゃ、ちゃんとトイレしなきゃ……我慢できなくなっちゃうっ……！！）

この際、壊れていようと関係なかった。

水が流れてくれなかり、汚れていようとなんだろうと、静菜がオシッコできるのは世界で唯一、この家のトイレだけなのだ。外のトイレでのオシッコができなかった以上、家のトイレを使うしかこの尿意から許されることはない。

（オシッコ出したいっ、オシッコしたい、オシッコ漏れちゃう、オシッコ出ちゃうっ……！！！！）

身体の全部が、ありったけの声で本当のオシッコを要求していた。

『おトイレ』も、もう限界だった。きちんとしたオシッコのための場所で、本当のトイレで、半分でも、ちょっとだけでもいいからオシッコを出してしまわなければ、遠からず限界がやってくる。

「オシッコ……っ」

破裂してしまいそうな尿意を抱え、静菜はベッドから身を起こした。信じられないほどおなかが重い。

まるで、一番重い日の生理の時のようで——その気分の悪さにうんざりとしながらも、細心の注意を払って静菜は廊下に滑り出た。

(と、トイレ、トイレ……オシッコ、オシッコおっ……)

限界を超えた尿意を示す二つの単語だけを、ぐるぐると頭の中に浮かべながら、赤ちゃんのようにぎゅうぎゅうと前を押さえて静菜はよちよちと階段を下る。階段のすぐ横にトイレはある。故障が直っているわけではもちろんないだろうが、このさい、もうオシッコができれば何でもよかった。

(オシッコ……オシッコおしっこオシッコ……っ！！)

思考も、言葉も、静菜の全部がなにもかも、『オシッコ』に支配されている。なんだか全身を膀胱にして尿意を受け止めている気分だった。今なら冗談抜きで、つつかれたらおなかが破裂してしまうに違いない。

だが——心底間の悪いことに、静菜はまだ、オシッコを許されなかった。

(オシッコお……っ♪)

階段を降りきった静菜が、最後のわずか3mの距離を這いずるようなへっぴり腰で、ふらふらとトイレのドアまで駆け寄り、歓喜と共にノブを握ったその瞬間。

母親が肩越しに声をかけてきたのだ。

「あら、どうしたの？ トイレ？」

「っ！？ …え、あ、えっと……」

猛烈な我慢の最中で、静菜は言葉を忘れていた。

ぎゅうっとパジャマの前を押さえ、脚をもじつかせ、膝を擦り合わせる——我慢の仕草が押さえ込めない。鋼鉄の意志も、もはや脆く崩れていた。

「やあね、寝ぼけちゃって……だめよ、使えないんだから。そんなにトイレ行きたかったの？」

「あ……っ」

(や、やだっ、お母さんのイジワル……っ！！ が、我慢してるのにつ、昨日からずっと、オシッコしないでガマンしてるのに……っ！！！)

まさに今、静菜はオシッコのできる場所の前に立っているのだ。それなのに、母親の声は無常にも、静菜にそれを許さない。

母親にしてみれば、迂闊にも壊れたトイレを使おうとしてしまっている娘を案じた言葉だったが、それは静菜にとって事実上のトイレ禁止宣言だった。ドアを開けることを禁じられ、待望のトイレを目の前にしてきゅうう、と静菜の我慢が激しくなる。

(オシッコ、オシッコっ……すぐそこにトイレあるのにつ、トイレ、オシッコできるのにつ……！！ やだあ、イジワルしないで、トイレ行かせて……お、オシッコ……させてよおっ……！！)

静菜の女の子の心は、必死になって溢れそうになる恥ずかしい液体をせき止め、恥骨の上の満水ダムを押さえ込む。

「どうしたの？ そんなに我慢できないなら、お隣さんに貸して貰えばいいじゃない」

「ち、違っ……ちがう、のお……っ」

(オシッコじゃない、オシッコダメ、オシッコ出ちゃだめえ！！ っ、お母さんの前で、おもらしなんでダメエ……！！！)

ドアノブを握ったまま、硬直し続ける静菜に、母親はきょとんと首を傾げる。

静菜は、震える声で答えるのがやっとだ。なにしろ、もう身体のほうはオシッコをするつもりでいる。壊れていても、ぐちゃぐちゃに汚れていても構わないから、世界でたった一つのトイレに駆け込んでオシッコを出すつもりでいるのだ。少女の体は勝手に準備を始め、イケナイ感覚がきゅうっと股の間に降りてゆく。

それを否定するので精一杯で、とてもではないが満足な受け答えができようはずもない。

「だ、だいじょうぶ、学校ですから……っ！！」

「そう？ お隣さんも遠慮しないでいいって言ってくれてるから、無理しちゃダメよ」

「う、うんっ……でも、平気だから……！！」

（ま、間に合わないっ……！！ そんなとこまでもう間に合わないよぉっ！！ だめ、だめだめえっ！！！！）

静菜はそう言い捨て、階段を一目散に駆け上がって部屋に戻った。

（っ、出ちやう、出ちやうっ、でちやううう！！）

震える手で後ろ手に鍵をかけ、パジャマの前をぎゅううっつと引っ張り上げる。

それはちょうど、限界ぎりぎりですぐにトイレに駆け込んだ少女が、最後の最後のプライドに縋って懸命にオシッコの準備を始めるのと同じ仕草だった。

「っは、はあっ……」

（や、やだっ、だめ、だめっ……）

しかし、静菜が全力疾走で駆け込んだのは階段横のトイレではない。階段を駆け上がった先の自分の部屋だ。どうやっても、オシッコが許可をされるわけのない場所だ。

便器の代わりにフローリングの真ん中で深々としゃがみこみ、静菜は必死になってそのまま『おトイレ』を始めた。

弾けるほどの猛烈な尿意と、同時にきゅうつと絞られるオシッコの出口。

パジャマの上からなりふり構わず、静菜は『おトイレ』をする。

朝一番の『おトイレ』は、一晩中我慢し続けたオシッコを済ませるため、普段よりも数段激しいものとなった。フローリングの上でぎゅうぎゅうとねじられる下腹部と、オシッコの出口を激しく揉み上げる両の手のひら。猛烈な尿意を押さえ込むための儀式は、数分にわたって続く。

（ううう、だめ、トイレ、オシッコっ……あああう……）

オシッコの代わりに、『おトイレ』をして。

静菜は、ありったけの力でトイレをガマンし続けた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 9

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 09/28/2008 21:22:07

BODY:

朝食の席で溜息ばかりの静菜を見かねて、母親は眉を潜める。

「どうしたの？ 食欲ないの？」

「う、うん……ちょっと……」

重い唇を動かして答える静菜。

実際に気分は最悪に近かった。普段からは及びもつかない、途方もないと形容してもいいような尿意に一晚中、下半身を責めなぶられ続けてほとんど眠れていないのだ。明け方にうとうとまどろんだ他にはずっと意識を張り詰めて寝返りを繰り返していたか、こっそり起きて軽い『おトイレ』をしていたかで、普通に徹夜したのとほとんど変わらない。

事実、鏡を見てもはっきりわかるほど、静菜の表情には疲労が濃かった。

一晚を経て、限界のはずの膀胱にさらに見境なく注がれ続けたオシッコは、ずしりと起き抜けの少女の下腹部を圧迫する。

（う、う、ま、また辛くなってきちゃった……）

食卓の前でオシッコを我慢し腰を揺するのは、静菜にはとても許容できない、はしたない格好だ。けれどオシッコ我慢の百戦錬磨の静菜でさえも、もうそのレベルでコントロールできるほど容易い我慢ではなくなっている。こっそりと上げた足のかかとで、片方だけ胡坐をかくようにしてそっと、オシッコの出口を押さえる。

「ん、うんっ……」

小さな声と共に身体を揺する静菜に、母親はますます怪訝な顔になる。

ほんとうは、横になっていたほうが我慢そのものは楽なのだ。オシッコの重みを、膀胱の出口でダイレクトに受け止める姿勢はかえって静菜を激しい尿意に晒すことになる。まして何かに腰掛けるとい姿勢は、洋式便器に座っていると理論上は同じ姿勢だ。

眠れぬままに、けれど部屋を出ることもできず、何度かベッドに身を起こし腰掛けて繰り返した『おトイレ』のせいで、この格好がオシッコを塞ぎ止めるための姿勢であるということを、静菜の下半身が覚えてしまっている。

（ああああ……だめ、また『おトイレ』しなくなっちゃう……ごはん食べなきゃいけないのに、ま、また『おトイレ』したく、なくなっちゃう……ふ、普通に座ってる、だけなのにつ……）

ぽこりとせり出した静菜の下腹部は、いつもと違うベルトの穴を使わなければならないほどはっきりと目立っていた。制服の上からそのことを悟らせないようにするため、静菜は普段着慣れないジャージの下を膝まで負って穿いている。これも少しでも下半身を冷

やさないようにという工夫でもあった。

「……嫌ねえ、風邪でもひいたの？ おなか出して寝てたんじゃない？」

「んうっ……！」

身を乗り出して額を触る母親の手のひらに、静菜は反射的に身体を縮めた。もう、場所に構わずどこかに触れられるだけでも尿意が加速するのだ。

「熱は……ないみたいね」

「ね、ねえ、お母さん……」

「気分、悪いの？」

「う、うん……ね、寝不足で……。あの、今日、学校お休みしたい……」

静菜は、本心を押し隠して悲痛に叫ぶ。

今日、家にいればトイレの修理が終わってすぐに静菜はトイレを使うことができる。いや、そうでなくても家に残っていれば、トイレの故障が直ってなくてもオシッコをすることができるのだ。

一分一秒でも早く『おトイレ』ではなく本当のトイレでオシッコをしたい静菜にとって、何よりも切実な願いだった。

しかし、その思いは母親に届くことはない。

「はあ、もう、だからあんなに夜遅く出かけちゃだめって言ったじゃないの……」

「う、うん……」

呆れたような嘆息。

当然のことだった。静菜が昨日の朝から一度もトイレに行っておらず、今なおオシッコを我慢し続けていることなど、母親にはまったく想像の埒外だ。

「熱、ないんでしょ？ ちょっと具合悪いくらいなら平気よ。月曜日なんだし、風邪じゃないんだからちょっとくらい具合悪いくらいで休んだりしちゃダメよ。……ね？」

「え、で、でもっ」

（そ、そうじゃなくて、オシッコ……と、トイレ、行きたいの……。『おトイレ』じゃなくて、ちゃんとオシッコできる、本当のトイレに……）

学校に行ってしまうと、静菜は家のトイレから引き離されてしまう。少なくとも、放課後になる4時、5時まではオシッコができない。そう考えての、少女の悲痛な訴えだった。

「お、お母さん、あの……」

「……ほら、食べられないなら牛乳くらい飲みなさい」

恥ずかしさのなか、小さく抗弁しようとした静菜を遮り、そう言うと、母親はてきぱきと静菜の朝食にラップをかけて片付けてしまった。今日はなにやら用事があるらしく、母親も静菜と同じくらいに家を出るという。ぐずぐずしている暇はないのだった。

テーブルの上にはグラスになみなみと注がれた牛乳が残る。

いつもなら苦もなく飲み干せる量だが、いまやおなかの中に途方もない量の恥ずかしい液体を溜め込んでいる静菜にとって、今は少しでも水分の摂取は避けるべきだった。

……べき、だったのだ。

「どうしたの？ それくらい飲まないで元気でないわよ」

「うん……」

確かに言われて見れば、喉がカラカラだった。一晩じゅう続いた我慢は、なおも多くの水分を静菜の身体から搾り取り、オシッコに変え、同時に静菜の体力をごっそり奪い去っている。

静菜は意を決してグラスを掴むと、震える手をごまかすように唇に運ぶ。

（んっ、んんっ、んうっ……）

ごくりと静菜の喉が震えるたび、一口ごとに、冷たい感触が食堂を通り抜け、胃の奥へと流れ落ちてゆく。空腹のおなかに流れ込むよく冷えた牛乳は、まるで飲み込むたびに直接膀胱の奥に流れこんでゆくような錯覚さえ覚えさせた。

コップの中身をひとくち飲み干すたびに、静菜の下腹部がびくびくとひきつり、猛烈な尿意の呼び水となって下半身を暴れるようだ。深く沈みこみ、恥骨の上のダムにたまってゆくオシッコの原料の存在感を、静菜は身体で感じていた。

ぞわっと背中を搔きなぞる刺激をぐっと堪え、深呼吸を繰り返して我慢する。

「ん、んぐっ……んう……んう、っは……」

とうとうコップいっぱい全てを飲み尽くし、静菜は大きく息を吐いた。

けれど確かに、疲れ切っていた身体に朝のミルクはささやかな活力を与えてくれた。空腹感はないが本当はおなかもすいているはずだし、喉だって確かに渴いている。

（……ちょ、ちょっとだけ、楽になったかも……）

そっとおなかを撫で、飲んだ分のミルクが我慢を続けている膀胱を刺激しないよう、念入りに気を使ってから、何度かこっそりと深呼吸。

飲み込んだコップ一杯の水分が、やがてゆっくりと身体の中に納まるのを感じながら、静菜はおもむろに席を立った。

「ごちそうさま……」

「ちゃんと歯を磨きなさいよ」

「うん……」

「あ、あと、お手洗いだけど」

「———ツツ！？」

不意に飛び出した『トイレ』の単語に、静菜は飛び上がらないようにするので精一杯だった。母親はテーブルの片づけをしながら、静菜に背を向けたまま先を続ける。

「お隣の借りてもいいけど、できれば向こうのおうちに迷惑かからないようにね。さっき寝惚けちゃってたみたいだけど、我慢しないでちゃんと行きなさい」

「う……うん」

そうやって頷くので精一杯。

どうやら、朝のことは静菜がトイレの故障のことを忘れていた、ということになっているようだった。こうなると母親がいる限り、家のトイレに入れるとは思えなかった。とはいえ、母親の出勤を待っていたら学校に間に合わない。どう考えても今朝の静菜が、いつもよりも身軽に登校できるとは思えない。

隣のトイレを借りようにも、まさかきちんと身支度もせずに気軽に入っていくわけにもいかないだろう。

そして、今の状況でそれをすれば、おそらく自分が我慢を忘れて隣のトイレを占領して『おトイレ』に熱中し、登校時間を過ぎてしまおうだろう事に、静菜はなんとなく予想がついていた。

なにしろ臨時的な自分の部屋での朝の『おトイレ』ですら、20分近く続いてしまったのだ。ちゃんとした設備の整った場所での『おトイレ』となると、その誘惑にはとても抗えそうにない。

(私、『おトイレ』のことしか考えてない……最低だ……っ)

いったん波が引いたのか、下腹部はわずかに余裕を取り戻してはいたものの、依然、危機的な状況は予断を許さない。

洗面台に立つ静菜はちらりとシャワールームを見、次に洗面台を見つめる。

それから静菜の視線はしまつてある洗面器、水枕、コップ、台所の流し、ボウル、おなべ、フライパン、ペットボトル、計量カップと映ってゆく。いまや、水に関係ある何もかもが静菜にとっての抗いがたい誘惑だった。

(……トイレ……がまん、しなきゃ……)

あと何時間、この苦痛に耐え続けなければいけないのだろう。

静菜にとって地獄の、トイレのない世界の二日目が幕を開ける。

オシッコに行きたくて家に帰ってきた夕方から、ゆうに12時間以上をすぎてなお、永久我慢の終わりは見えない。

「ってきます……」

普段の倍近く時間をかけてもそもそと身支度を終え、ずしりと重い下腹部を抱えながら、カバンを背負って、静菜は母親よりも先に家を出た。

いつもは軽々と駆け下りてゆく大通りの坂が、今日は途方もなく長く、きつく感じる。下り坂はそれだけ激しく少女の下腹部をゆさぶり、オシッコの詰まった膀胱をたぶたぶと刺激するのだ。慎重に歩みを進めながら、静菜は長い長い坂を下っていった。

(んう……っ)

一歩を進むごとに、おなかの中のオシッコが出口に進んでゆくような、そんな錯覚すらやってくる。

だが、静菜に安住の地はないのだ。たった一つしかないトイレがあとかたもなく消え失せてしまったこの世界で、静菜はただじっとオシッコの誘惑に耐え続けるだけだった。

そんな静菜を待ち構えている学校での出来事を、静菜はまだ知る由もない。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 水音のある風景・1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 11/10/2008 20:01:08

BODY:

たたん、たたん。単調なリズムで車内が揺れる。

都心からやや離れた私鉄沿線の各駅停車の列車で、『私』はじっと彼女を観察していた。

指定の制服であろう紺色のブレザーを、崩すことなくしっかりと身につけ、やはり校則で定められたものであろう肩上で切り揃えられた髪が年齢相応の幼さを覗かせる。薄紅色の唇と、長いまつげが印象的な少女は、控えめに言っても美しかった。

しかし、そんな少女の表情はどこか曇り、かすかな焦燥感すらつのらせて、視線はじっと窓の外に固定されている。

列車は二つ前の駅で急行に接続したため、夕方ちかくの混雑の時間帯にも関わらずさほど混んではない。座席の半分ほどしか埋まっていない車内の中で、空いている席に座ろうともせずドア近くの吊革に捕まっている少女の姿は、一度気にし始めるとやけに目を引いた。

たたん、と揺れる車内の振動に、わずかに少女の身体が傾く。

途端、少女の唇がきゅっと引き絞られた。まるで——不快な何かを必死に堪えるかのように。

背伸びに近い姿勢で精一杯手を伸ばし、高い吊革を無理して掴み。少女は肌寒い車内にも関わらずしっとりとうなじに汗を浮かべていた。

列車内とは言え吐く息も白い季節。用意を忘れたのかまだ平気と判断したのか、いずれにせよコートなしでは寒いだろう。だというのに、少女は隙間風の入り込むドア前から離れようとしなない。『私』は次第に少女の様子に興味を覚えていた。

吊革を握る手を落ち着きなく握り締め、提げた鞆はさりげなくスカートの前に。ローファーの爪先は、できる限りのさりげなさを装って、左右に小刻みのステップを踏む。

列車がレールの継ぎ目にさしかかり、たたん、たたんと音を鳴らすたび、少女の小鼻がひくりと震え、詰めたような息が切なげに漏らされる。形の良い眉はきゅっと寄せられて、あどけない容貌には不似合いな困惑をかたどっていた。それはまるで、幼さに似合わない色香のよう。

左右に流れた少女の視線は、通過する踏み切りの一つを捕らえ、そのままドア上の停車駅表示へと向かう。各駅停車とは言え次の駅まではまだ数分——しかし、少女はいまからその到着を待ちわびているようだった。

焦る気持ちを押さえつけ、一刻も早く、トイレに駆け込むために。

もはや間違いはないだろう。

少女が懸命に尿意を堪えているのは、明らかだった。

ふくらはぎの半分ほどまでしか覆っていない黒のソックスを擦り合わせるように、小さな脚がぴたりと寄せられる。健康的な細い足は、左右に振られる体重に耐えかねるように、間をおかずくねくねと揺すられる。わずかに揺れるスカートは、少女の清楚さを彩るには十分になモノではあったが、それでも初冬の寒さから十分に少女を守っているとは言いがたい。

曇り空の下風景は、背筋を震わせるほどの寒さをじんわりと車内に忍び込ませてくる。『私』がこうして座っているだけでもこたえるのだから、彼女が感じている寒さはどれほどのものか。

わずかな暖房の庇護など吹き飛ばす冷たい隙間風は、少女の脚を這い登るようにしてスカートの下から潜入を続けているはずだった。じわじわと冷え続ける下半身に急かされて、少女のステップは次第に大きなものへと変じてゆく。

鞆の下でそっと押さえられたスカートの前、前後に小さく揺すられる腰。寄せ合わせ、交差する膝。こつこつと床を叩く爪先。時折息を詰め、きゅっと閉じられる愛くるしい瞳。どれもが『私』の興味をかきたてる。

——それでも少女は、尿意を堪えていることを悟られないように必死だった。気付かれていないと思っているのだろう、ローファアの靴底が音を立てるたび、さりげなく再度靴底を床に擦らせ、それと同じ音を立てたり、尿意の大波に耐えるため“ぐいっ”と大きく脚を交差させてしまった直後に、なんでもないという風に膝をこすってみたり。

そうした様は、少女がとても潔癖に——人前でオシッコを我慢することすらもはしたないと思っているのであろうことを容易に想像させる。

「はあ……っ」

じんじんと響く水の誘惑をを堪える小さな吐息が、ドアの窓ガラスを曇らせてゆく。

不幸なことに、この4両編成の各駅停車にはトイレがない。ゆえにここは少女にとって動く牢獄に等しいのだろう。停車と同時に駆け下りる体勢のまま解放の瞬間を待ちわびるように、少女はじっと、外を流れる灰色の風景を見つめている。

まだ未成熟な肢体の奥に、そっと秘められた乙女の秘密の場所——恥ずかしい器官を膨らませ、ちゃぽちゃぽと揺れる大量の液体を、意志の力でぐっと押さえつけて。

量にすれば、おそらくはコップに数杯分ではない水分を、身体の中に溜め込み続けること——その辛さに、狂おしさに切なげに身をよじる少女は、どこまでもいとおしく思えた。

『カーブです。揺れますのでご注意ください——』

がたん——

車内アナウンスとほぼ同時。ゆるやかなカーブに差し掛かった車体が真上に跳ねる。『私』の隣で転寝をしていた買い物帰りらしい主婦がびくっと姿勢を正した。

不意の衝撃は、車内にいた乗客たちを区別することなく降りかかり——ちょうど込み上げてきた波を押さえ込もうと脚をクロスさせ

たばかりの少女をも、例外なく狙う。

「っ！！」

片足立ちの上、いまにも床上に落ちてしまいそうに膨らんだ水風船を抱えて、吊革に半分体重を預けていた少女は、突き上げる衝撃に耐えかねてたたらを踏んでつんのめった。

閉じていた脚を無理矢理開かされた格好で、細い体が硬直する。

慣性の法則に振り回され、体内の水面が大きく揺さぶられ——これまで平穏を保っていたためなんとか耐え切れていた尿意が、容器の縁を乗り越えて膨らむ。

息を呑んだ少女の手のひらが、鞆の上からぎゅうっとスカートの前を掴んだ。車内には背を向けているが、脇から覗き込めばスカートに大きく皺がよっているのははっきりとわかるほどだろう。小さな子供のように脚の付け根を押さえ込み、前かがみになって少女は小さな身体を懸命に震わせる。

開きそうになる袋の出口をぎゅっと締めつけ、閉じ合わせた太腿をしきりに擦り合わせる。高まる水風船の内圧に耐えかねるように、持ち上げられた脚が交差する。

半開きの唇からは小さく息がこぼれ、丸まった背中では制服の上からでもわかるほど、小刻みに震えていた。

「っ……」

三十秒ほどそうしていたか、やがて寄せ合わされていた眉がわずかに緩み、少女は小さく安堵の息をこぼす。

なんとか、すれすれのところで決壊の危機を乗り切ったようだ。

だが、それは限界の瞬間をわずかに先延ばししたに過ぎない。高まり続ける水位は依然そのまま、ますます陰しいものとなるのは火を見るよりも明らかだ。

いまや彼女にとって、次の駅までの数分は一秒が数十分にも感じられるであろう長い長い焦燥の時間だろう。しかし少女にできることは、ただじっと耐え続けることだけ。漏れ出しそうなオシッコの出口が緩むのを締め付けて、到着までの時間をやり過ごすことだけだ。

視線はカタチだけ窓の向こうに向けられているものの、もはや流れる風景を楽しむ余裕などない。少女の意識はいつしか車内を離れ、一足先に次の駅へ——そこに設えられた“オシッコを済ませるための場所”へと飛び立っているようだった。

『まもなく、取崎、取崎——』

やがて——減速した列車は、車内アナウンスと共にホームへと滑り込んでゆく。先行する急行の待ちぼうけを食ったホームには、少なからぬ人々が列を作って並んでいた。次の次の駅でこの各駅停車は再度特急に接続するためだろう。

少女はといえば、既にじっと立つ事もできずにいた。もはや取り繕う余裕も失って、ひっきりなしに姿勢を変えては小さく足踏みを繰り返している。

はあ、ふう、と繰り返される熱っぽい吐息は、少しでも楽な呼吸を探しているのだろう。少女がいつ限界を迎えてしまうかと、半分不安、半分期待で見つめていた『私』は、どうやら彼女が厳しい勝負に耐え抜いたことを知り、心の中で拍手を送る。

もはや一刻の猶予もないであろうしょうじょだが、それでも列車がさらに減速し、停車線にさしかかると、ドア向こうの人々の視線を気にしたのか、いじらしい努力で慌てて背を伸ばし、足を揃え口を結んで、我慢の足踏みダンスをやめようとする。

ぷしゅ、と左右に開いたドアから——ほとんど出口に並ぶ人々を押しつけるようにして。少女はホームへと早足で駆け出した。

「……………、……！！」

恐らくは普段利用することもない駅なのだろう。勝手のわからない様子できょきょと周囲を見回した少女は、案内板を見つけてそちらへと走り寄ってゆく。

地下鉄といくつかのバス路線への乗換えを記した案内板から、目的のマークを見つけ出した少女は、真っ直ぐにそちらへと歩き出した。しかしもう足取りがおぼつかないようで、『私』にも後を追うのはさして難しくない。

いつもの降車駅ではない駅で降りたということは、それだけ少女が切羽詰っていることの証明だ。目的地まで我慢することも難しいと判断するほどの尿意に身を焦がす少女の内心はいかばかりか。抑えきれない興奮をそっと押し隠し、『私』は少女の後を追う。

乗り降りで混雑する階段を、手摺を使って登り切った少女は、そのまま躊躇うことなく改札横のトイレへと向かった。

駅のトイレといえば、多くの利用者もあり、一般には清潔とは縁の遠い場所だ。他人の目も多く、思春期を迎えた少女には使うことに抵抗のある場所だろう。彼女が外見どおりの潔癖な性格ならなおさら利用することは避けたいところのはずだ。

しかし、余裕を完全に失った少女の様子では、既に頭の中にはそこを利用すること以外の選択肢は残されていそうになかった。途中二度ほど、少女が身を竦ませ、不自然に立ち止まったのを『私』は見逃さない。

が――

必死になって少女が辿り着いた駅車内のトイレには、無常にも侵入者を拒絶する『清掃中』の立て札があった。

「うそ……っ」

ずっと青褪めた少女の唇が、小さく絶望の言葉を紡ぐ。

待望のトイレを使うどころか、中に入ることすらも拒絶され、途方にくれる少女をさらなる尿意の波が襲う。

あ、と小さく声を漏らし、少女は恥も外聞もなく足を交差し、くねくねと身を揺すった。

トイレの前でもじもじと震え、立ち尽くしている不審な少女を、目ざとい数名の乗客たちが奇異の目で見つめる。

それに気づいた少女は、かぁと耳までを紅く染めて、弾かれたように駆け出していた。

乗客たちの視線を振り切るように、定期券を取り出して改札をくぐる。おもむろにその後を追った『私』は、ほどなく駅前の広場を歩きながらそわそわと周囲を見回す少女の背中を見つけた。

ぷるぷると震えだしている脚は、もう溢れそうになる熱い雫を塞き止める役には立ちそうにない。

枯れ木に残った落ち葉を吹き散らし、ひゅう、と吹き付ける寒風は車内の比ではなかった。ダッフルコートの襟を合わせ、『私』は少女を逃さないようにさりげなく視界に収めておく。

もはやいつ漏らしてしまってもおかしくない様子の少女は、鞆の下で手を重ね、スカートの上から股間を握り締め、唇を噛み締めて、うなじを震わせ小さく声を漏らしながら広場の片隅へ早足で駆けてゆく。

知らない駅の広場では、どこに行けばトイレがあるのか解らなかったのだろう。道路を一本挟めばコンビニ、喫茶店、食堂のチェーン店も並んでいたが――多感な年頃の少女には、ただトイレを借りるためだけにそれらの店に入ることは躊躇われることだ。

そして、不幸にして駅前の公衆トイレは、少女が選んだ出口とは反対側にあった。そちらのすぐ近くにはデパートもあり、もしそち

らに彼女が向かっていれば、今頃はトイレに間に合っていたかもしれない。

だが、予想外の『おあずけ』を食らって、既に少女の我慢は限界に達していた。

内股の狭い歩幅は、もう少女が下着に小さくない染みをつくっていることの証左。頬を赤くしたまま、少女は広場のすぐ裏手、ひとけのない路地裏へと走り込んだ。

老朽化したビルに囲まれた路地裏は、曇り空の下で一層薄暗い。周囲に誰もいないことを念入りに確認してから、少女は路地の片隅に並ぶゴミバケツの影に走り込んだ。

本来なら、ちゃんとしたトイレでされるはずだった少女の排泄は——屋外のゴミ捨て場の物陰という、ありえないロケーションで行われるようだった。こんな場所でトイレを済ませようものなら、むき出しのアスファルトに叩きつけられた水流が泡を立て、大きく広がって水たまりを作り、隠しようもない屋外排泄の証拠となるだろう。

多感な年齢の少女にとって、それは繊細な羞恥心をずたずたにしてしまうほどの行為のはずだ。

それでもせめて、このまま成すすべなくオモラシをしてしまうよりはマシだと、少女はそう判断をしたらしかった。

ならば。と『私』は思考をめぐらせる。

——スカートを捲り、下着を膝まで下ろしてしゃがみ掛け——いよいよ少女が排泄の体勢をとり、オシッコの準備を終えようとしたところで、路地に面していた裏口のひとつが蝶番を軋ませて開いた。

「え……っ」

警戒していた視線のすぐ前、全くの予想外のところからの他者の乱入。錆び付いたドアはとても使われているとも思えぬ状態で、そこは少女にとって全くの心理の死角であった。

それゆえ、しゃがみ込んだ少女の大切なところは遮るものなくすっかり露になり、——今まさに激しい水流を迸らせる瞬間であるのが、はっきりと分かった。

「きゃあああああっ！？」

小さな悲鳴と共に、ほとんど反射的に少女は立ち上がり、膝にかかっていた下着を引き上げようとする。同時に身体をよじって、ドアの向こうの相手から顔を隠そうとした。

だが、

解放を目前にもはやすっかり準備の整っていた排泄口は、今さらの中断など受け入れることはできず、溜め込まれていた熱い雫をを激しく迸らせてしまう。半脱ぎの下着に勢いよくオシッコがぶつかり、飛び散った雫はまるでホースで水を撒いたように少女の足元に散らばった。

「や、やだっ、でない…でっ……でちゃダメ……え！！」

じゅじゅじゅっ、と吹き出すオシッコを隠すように、少女はぎゅっとうと股間を押さえようとする。しかし猛烈な勢いでほとばしる水流はとどまることなく、濡れた布地にぶつかってはぐもった音を響かせ、あっという間に少女の下半身を侵食してゆく。布地に広がる水流は少女のスカートを色濃く染め、内腿を伝い落ちてソックスに染み、さらには地面にまで広がってゆく。

「ち、違うの——違うんですっ……」

必死の否定も言葉にならない。そして、今まさにオモラシの最中にそんなことを言っても、説得力など皆無だった。

この小さな身体で、一体どれほど我慢していたのだろうか。恐らくはずとずと長い間、トイレにいけず我慢し続けた結果だろう。下着とスカートをぐしゃぐしゃに濡らし下半身をずぶ濡れにしながら、少女のオモラシは止まらなかった。

『私』の目の前で、堪えに堪えていた尿意の崩壊に、少女はいつしか快感にも似た開放感に我を忘れて、下半身から激しく水

流を迸らせ続けた。

「あ……」

全身から急速に熱が失われてゆくのに気付いた少女が、ぶるる、と背筋を震わせる。

ぱちぱち、と少女自身が作り上げた水溜りには、なおも水流がぶつかって音を響かせる。

呆然となって立ち尽くす少女の足元からは、ゆっくりと湯気が立ち昇っていた。少女の体内でたっぷりと暖められていたオシッコは、初冬の路地裏の寒さに晒されて、狭い路地裏に、少女特有のほんのりと甘い匂いを漂わせている。

美しい少女が、下半身を自分の身体から溢れさせた恥ずかしい熱湯に浸してゆく様を——『私』は満足と共に見下ろす。

「っ、……っく、ぐすっ……」

やがて——長い長い時間をかけ、少女のオモロシが終わった。

しでかしてしまった失敗を悟るにつれ、呆然としていた少女の表情がくしゃりと歪み——瞳は光を失って、しゃくりあげるように涙が頬を伝う。

恥辱に押し潰されそうになりながら、ふらりと揺れた少女の膝が折れ、足元の水溜りにぺしゃん、と小さな身体が尻餅をつく。

少女の目の前には、無人のまま開いたドア。

器用にそれを押し開けた黒猫は、少女をちらりと見、目を細めてにやあ、と一声鳴いた。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: お花摘み

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 11/16/2008 22:04:03

BODY:

(……だ、だめっ、もう…が、我慢できないっ！！)

藤原早紀はとうとう音を上げた。ちりちりとおヘソの裏側を炙る尿意はいや増し、下腹部は石のように張り詰めてずっしりと砂が詰まったように重く、すでに自由な身動きすら難しい。我慢の限界を悟った早紀は、上品にお喋りに興じているクラスメイトの輪からそっと抜け出すことを決意した。

部活のお茶会の席を中座し用を済ますなど、伝統ある御園学園の生徒としてあまりにもはしたない行いだ、もはや仕方がない。緊急避難で情状酌量の余地はあるだろう。

「……………失礼します」

「——あら、藤原さん、どちらへ？」

会話の間を見計らってさりげなく席を立ったつもりだった早紀だが、斜向かいに座っていた1年上の先輩である美鈴が、そんな彼女を目ざとく見つけて声をかける。

「す、すみません、わたくし、ちょっと……その、お…お花摘みに、行ってまいりますわ」

「あらあら……それは。大変ですね。……どうぞ、ごゆっくり」

「し、失礼しますっ」

予想外の答えであったのだろう。一度軽く眉を跳ねさせた美鈴が、にこりと微笑んで優しく声を掛ける。いたたまれなくなった早紀は真っ赤になりながら再度頭を下げると、お茶会のテーブルから離れ、一目散に手近な木々の梢の中へと走りこんだ。

お茶会の開かれている広場のある学園の東の森は、近くの建物まで1時間。とてもではないがそこまで走って戻る余裕はない。

仮にも学園の生徒が屋外で用を済ますなどあってはならないことだが、このまま黙って最悪の事態を招くよりはまだマシな選択肢であると思えた。……いや、そうでも考えなければやっていけない。

(ううっ……くう……)

背丈の高い茂みを掻き分け、震える爪先をせわしなく動かしながら、早紀は森の奥へ奥へと向かってゆく。じんと震える下腹部の痺れは、徐々に足の間へと下りてきていた。もはや一刻の猶予もない。

「……こ、この辺りなら大丈夫かしら」

広場から十分に離れ、物音が聞こえなくなったことを確認しながら、早紀は小さく張り詰めていた息をこぼした。ゆっくりと周囲を見回し、『これは』という場所を茂みの中に探す。

そろそろ辛抱も限界に近い。焦るキモチを押さえ付け、込み上げてくる尿意に耐えるため揺すってしまいそうになる腰をそっとおしとどめ、慎重にあたりを確認した。

ほどなく、令嬢は青々と育つ草むらの中に、黄色の花をみつける。

「あ……っ」

それが引き金となって、早紀の下腹部は敏感に反応をはじめてしまう。

はしたなくねくねと腰をモジつかせながら、少女はよたよたとそこに歩み寄り——ついにたまらずしゃがみ込んでしまった。

けれど、もう心配は要らない。ここでなら誰の目にも触れることはないのだ。

「ああ……よかった……」

安堵と共に小さな花の茎を摘んだ早紀は、花卉の根元からそれを軽くちぎった。手慣れた動作で茎の根元から滲む透明な蜜を口に含む。

じんわりと口に広がる甘い味。

同時に、下腹部の緊張もゆるやかにほどけていく。

この花はキヨハセンカと呼ばれる薬草の一種で、自律神経の一部に作用しある種の感覚を麻痺させる効果がある。

「ふう……」

それはつまり、自律神経の一種である尿意の緩和である。固く強張った膀胱はゆっくりと弛緩し、限界寸前だった許容量をやんわりと受け入れてゆく。

無論ながら、いちど膀胱にたまったオシッコがどこかに消えてなくなるわけではない。依然として、早紀の下腹部は大量のオシッコに占領されたままだ。しかしそれでも、さらに我慢ができるだけの余裕が戻ってくる。

キヨハセンカの効能はいわば、腹下しを止める薬に近い。排泄物そのものは残っていても、尿意を感じる原因さえ取り除けばすぐに漏れ出してしまうことはないのだ。

「……んっ」

自然を愛し、博愛をもって尽くすというのが早紀が通う御園学園の理念である。きちんと排泄のための設備が用意されていない場所でオシッコなどをしてしまおうものなら、たちまち大きな水たまりが地面や草花を汚してしまう。

尿に含まれる女性ホルモン、エストロゲンは、昨今環境ホルモンとして問題が取り立たされている。下水から排出された女性のおしっこが原因となって環境破壊が進んでいるのだ。

美しい自然を愛し、守ることを信条とする早紀には、屋外でオシッコを済ますなど論外である。だから、こうしてキヨハセンカの効能を使って我慢の一助としていた。

“お花摘み”とはトイレの隠語だが、早紀にとってはこのキヨハセンカによって迫り来る尿意を一時的に凌ぐ行為を示していたのである。それゆえに、早紀には比較的簡単に口にすることができる言葉でもあったのだ。

もっとも、野外排泄に至らないとは言え、トイレを我慢していることを悟られるのは、年頃の少女にとってあまりにも恥ずかしいことではある。

(ふう……)

だが、不幸なことに、健気な乙女がオシッコを我慢し乙女のたしなみを保とうとするこの行為を指しているこの言葉が、他のクラスメイトたちにとっては屋外で我慢しきれずトイレを済ませる意味であることを、早紀は知らない。

早紀ににとってお花摘みとはあくまで花を摘む行為であった。

だからこそ、この後に待ち受けている悲劇を、早紀は予想もできずにいた。

(もう少し、いたいですけれど……そろそろ切り上げないといけませんわ……)

次第に楽になってきた下半身を軽く撫でさすり、早紀はそっと立ち上がる。

“お花摘み”は無事終わった。ずしりと重い下腹部は鈍く疼き、下半身はまだまだ辛さを訴えていたが、先刻までに比べれば格段に楽になっている。

後ろ髪を引かれる思いを断ち切って、早紀は慎重に服装を改める。しゃがみ込んでいたことでスカートにできてしまった皺を丁寧に伸ばし、汗に滲んだ手のひらを綺麗にハンカチでぬぐい清め、我慢の痕跡をすっかり消し去ってゆく。

まるで本当にトイレを済ませたかのような手順で、ゆっくりと身づくろいを終えた少女は、落ちついた下腹部に余計な刺激を与えないよう、ゆっくりとした足取りで茂みを後にした。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: みんなのお手洗い：ガラス容器編

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 11/16/2008 22:23:36

BODY:

小さな部屋には、しきりに腰をよじり膝をすり合わせ、落ち着きなく悶える少女達の姿があった。

その数は総勢 8 人。部屋は十分に広がったが、それでもそわそわと歩き回り、じっとしていることのできない少女たちにとっては、やや手狭にも思える広さである。

室内にはほとんど家具もなく、四隅に手摺と、鍵のかかった大きなドア、そしてテーブルが置かれているのみの簡素なもの。壁紙や照明の装飾も最小限に抑えられ、窓もなくどこか息苦しい。板張りの床は丁寧にワックスが掛けられて、鏡のように光を反射している。

そんな床板の上を、こつこつと小刻みに足踏みの音が響く。

スカートの前をはしたなく押さえながら、少女達は前かがみになっては小さく息をこぼし、強い尿意を堪え続けていた。

この部屋には、トイレがない。

少女達の我慢は、そろそろ限界に達しつつあった。

——トイレがない、と言ったが、正確にはこの部屋の中に、少女たちがオシッコを済ませるための設備がないわけではない。少女達が熱い視線を重ね、じっと見つめる部屋の中央、小さな檜のテーブルの上には、光を反射してきらきらと輝くひとつの製品が安置してあった。

これこそが、この部屋にある唯一の、オシッコのための設備である。

しかし——なによりも機能的に少女のオシッコのために作られておきながら、部屋にいる少女達の誰もが、それを使うと呼ぶことに激しい抵抗を覚えていた。

少女達の尿意が軽いものではないのは、傍目にも明らかである。が、それでもなお彼女達は、みっともない姿を晒しながらもおしりを揺すり、小さく飛び跳ねてすらオシッコを我慢している。

その理由は、テーブルに置かれた器具の正体にある。

透明なガラス細工で作られ、女の子の脚の付け根の、ふっくらとしたゆるやかなカーブにぴったりと沿うようにデザインされた入れ物は、曇りひとつなく磨き抜かれ、美しいまでもの芸術性を兼ね備えていた。

未発達な少女の身体の中心部に秘められた放水孔をぴったりと受け止め、ひっそりと合わせられた割れ目からほとばしるおしっこを、外にこぼすことなくきちんと注ぎ込めるようにされた機能美、それはまさに、排泄のための設備としては理想の形状を保持して

いる。機会による大量生産などではなく、名のある名工の作であるに違いなかった。

テーブルの上に安置されたそのガラス器具——いわゆる『シビン』を前に、少女達は苦悩と逡巡を続けているのだった。

確かにテーブル上の透明容器は、少女たちがオシッコをするために作られ、それ以外にはおよそ役割を持たない器具である。使用した経験がなくとも、その用途は容易く想像できるだろう。

むしろ、室内の少女達は皆我慢の限界に近いレベルで尿意と激しい戦いを続けており、部屋の床を汚さずに排泄を済ませることができれば、ある程度の妥協はする覚悟を決めていた。

たとえその本来の用途ではない方法であったとしても、何がしかの『入れ物』——バケツなり、なんなりがあれば、それを使って下腹部でたぶたと揺れるオシッコが噴出すのを受け止め、切実な排泄欲を十分に満たすことをためらわなかっただろう。

だが、この状況——身を隠す場所など何一つない部屋の中、同じような多くの少女達の視線を感じながらでは、その行為の難易度は桁違いだ。

まして、テーブルの上にあるのはことさらにはっきりと、『オシッコをするための』容器なのである。たとえその意思がなくとも、実に感覚的に尿意を刺激する形状のガラス容器を見せつけられていれば、それを使ってオシッコをすることでの羞恥心はいや増した。

たしかに、このガラス細工はそれは十分に少女達の排泄欲を満たす役割を果たすだろう。

が、このガラス容器は、少女達が求めている理想のトイレ——清潔に保たれ、個室という空間で他者の目を遮ってプライバシーを守り、音消しの機能を備えて恥ずかしい行為を隠蔽するための設備とはまるでちがう。ただ、オシッコを受け止めるだけの最低限の機能しかないのである。

なかでも最大の問題は、この器具を使って排泄したオシッコはどこにもいかず、じっとそこに残ったままだということだ。

たとえ羞恥を乗り越えこのガラス容器を使用してオシッコを済ませたとしても、彼女たちが腰を揺すりスカートの前を押さえ、膝を寄せ合わせて我慢し続けたオシッコは、膀胱を膨らませていた時とのママに、残らず全て透明な容器の中を満たして、白日の下にさらけ出されてしまう。

部屋の中には他になにひとつ、彼女たちが我慢している恥ずかしい液体を受け止める設備はなく、視線を遮る物陰すらもない。オシッコをしている瞬間の物音や、容器の中にぶつかる音。その時の自分の格好までも皆に見られてしまうのだ。

そして拳句、色や、匂いや、勢いや、泡立ちかたですら——愛する相手にすら見せるコトは許されないであろう、羞恥の熱湯の様子を素通にして、他の少女達の目の前にさらけ出してしまうのだ。

自分がいったいどれほどオシッコを我慢し続けていたか、それをつまびらかにされてしまうのはある意味、オモラシよりも辛いことであると言えた。

そしてまた、この容器には別の問題もある。これはある種、1番目の問題とも関わりのある事だが、——つまりは、容器の中にオシッコが残ったまま、ということは、一人の少女がオシッコを済ませたからといって、次々に少女達がその後が続くことができない点に

ある。

無論、まったく知らない仲ではないとは言え、他人のオシッコが満たされている場所に、そのまま自分のオシッコを注ぎ込むことには羞恥以上の激しい抵抗があるだろう。

だが、それに加えて問題となるのは、もっと物理的——数学的な問題である。

単純な、少女達の我慢し続けているオシッコの総量と、ガラス容器の容量——そのふたつは、明らかに不釣り合い、不等号で結ばれるべきものだ。

これを使用するのがたとえまだ身体の発育の整っていない少女たちだとしても、彼女たちがその小さなおなかの中をぱんぱんにして、精一杯我慢し続けたオシッコが、実に8人分。それに比べてしまえば、ガラス容器の大きさはあまりにも頼りなく、とてもではないが全員分を注ぐことができるとは思えないのだった。

故に少女たちは苦悩する。たったひとつの小さな容器を、確かにオシッコをするための器具を目の前にしながら、誰一人それに手を伸ばすことができない。

少女達は、ガラス細工よりも繊細な下腹部に、おしっこを満たしたまま——言葉もなく、切なげに実を揺するのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 公爵令嬢のお話・1

STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 11/16/2008 22:27:25

BODY:

森深き街道を馬車が行く。

1 頭立ての貧相な乗り合い馬車ではない。4 頭立ての馬は全て毛並みのいい白馬、操る御者も正装の従僕服である。車体を飾る豪華な装飾の中央には鷲と獅子を組み合わせた紋章が押され、この地を治めるジルベレット方伯の名に連なる高家の所有であることを明らかにしていた。

かなりの速度を出しているながら激しく揺れることがないことから、仕立ての上等さや馬や御者の腕が飛び抜けていることは確かであり、馬車が乗っているのが余程の高貴な人物であろうことを予想させる。

そして事実、後ろの席に座るのはその扱いを受けるに足る存在であった。

上等なびろうど張りのクッションに腰掛け、広い車内にたった一人俯くのは、純白のドレスに身を包んだ幼い少女である。

初々しさと共に無垢な純潔を象徴する白のシルク。スカートを覆うクリノリン。まだ十代の半ばを迎えていないであろうほっそりした身体の魅力を十二分に引き出したドレスは、長い手袋と控えめなティアラを備えて少女を飾っている。

そしてそんなドレスにも負けぬほど、少女は美しかった。透き通るような白い肌に整った顔立ち。金の糸を梳いたような流れるブローンドは、エルフを思わせるほどに長く、水色のリボンで緩く編まれてクッションの上に滝のようにこぼれている。

翡翠のごとき深く澄んだ瞳は、長いまつげの下で憂いがちに伏せられ、触れれば壊れてしまいそうな儚さを覗かせていた。どこか硬い表情は、それでも少女の美しさを決して損なうことなく、一目見た者の心を奪わんばかりであった。

リタニア現国王の叔父にあたるジルベレット方伯ディオンの一人娘——リミエルを乗せた馬車は、方伯領郊外の田舎道をひた走る。

力強く響く蹄のリズムを聞きながら、幼い令嬢は物憂げな瞳で窓の外を見つめていた。

(……ああ……)

せわしく鼓動を刻む胸をそっと抑え、桜色のくちびるがきゅっと引き結ばれる。

そっと耳の後ろに伸ばされた指先が、乱れ一つない金髪のを弄ぶ。

そわそわと落ち着きのない様子で、美しき令嬢はは何度も馬車の窓から外の様子を窺う。鬱蒼と茂る森はなお暗く、いつまで経っても途切れることはなかった。

森を横断する街道に入ってからもうどれ程経ったものか、リミエルは憂鬱な溜息と共に焦れる気持ちを抑え続けていた。

(はやく……)

馬車の速度は、幼き令嬢の心地よさと安全を見極めた上での最高のものに近い。しかしそれでもなお、リミエルにはあまりに遅く、

じれったいものに感じられていた。

「……っ、ふ……っ」

小さな吐息がこぼれ、熱っぽく桜色の唇を湿らせた。もぞり、と軽く背中を揺らし、少女の手のひらは揃えられた膝の上できゅっと握られる。こくり、と音を立て、令嬢の細い喉が緊張を飲み込んでゆく。

俯いた視線は絨毯の上に落ち、もどかしくも落ち着きなく揺れていた。

(……はやく、っ)

衝き動かされるように、リミエルの焦りは増してゆく。しかし、ひた走る馬車をこれ以上急かすことができるはずもなく、公爵令嬢はただ、じっと強張った表情の内側で焦燥を噛み締めるしかなかった。

手袋の下で汗ばんだ手を握り締めて、リミエルは再度、窓の外に視線を泳がせた。

幾重にも重なった木々の枝の向こうには、僅かに橙色の夕日が覗いている。傾いた太陽が山の稜線にさしかからんとしている時刻、あたりには緩やかに夕闇が迫りつつあった。

穏やかな夕暮れ。誰もが一日を終えてゆっくりと明日に思いを馳せるであろう、今日の終わり。

だが、それでも少女の気は紛れない。むしろ遅い午後の日差しを浴びて穏やかに流れてゆく景色は、リミエルの気をいっそう焦らせていた。

ドレスのスカートから覗く、かかとの高い小さな靴が、せわしなく絨毯の敷かれた床を叩く。

時折、少女が身を強張らせて俯くと、爪先は揃えられてなにかを耐えるようにぐっと床に押し付けられる。

びくっと緊張した脚は二度、三度と小さく震え——数十秒硬直しては、やがて小さな脱力と共に元に戻る。

だが、安堵の時間もそう長くはない。再び小刻みに震え出す爪先は、いつしかこつこつ、と小さく床を叩き出していた。

(はやくして……、が、がまん……できなくなっちゃう……っ)

小さく揺れる馬車の中。

幼き令嬢を襲う尿意は、切なくも激しく高まり続け、いよいよその勢いを増しつつあった。

ざわざわと下腹を撫で上げてゆく尿意——腰奥をむず痒くすぐるそれは、刷毛で素肌をなぞられているかのよう。ぎゅっと閉じ合わされた内腿を小さく揺すりながら、リミエルは切なげに溜息を繰り返す。

「んっ……」

形の良い眉がきゅっと寄せ合わされ、小さな唇がそっと噛み締められる。思わずこぼれそうになる小さな叫びを飲み込んで、リミエルはドレスの上で小さな手のひらを握り締める。

下腹部で渦巻く下品な衝動——恥ずかしい熱湯で満たされた乙女の秘密のティーポットは、いまやその存在をはっきりと感じ取れるほどに存在感を増している。苦痛からの解放を求めて暴れようとする小さな入れ物をなだめるため、リミエルはそっと手のひらをドレスのおなかに添えた。

まるで石のように硬い手ごたえが、手袋ごしにはっきりと伝わってくる。

純白のドレスに包まれた幼い肢体は、その内部に恥ずかしい液体をなみなみと湛えて、今もひくひくと震えているのだった。

「……っっ…」

がっ。馬車が轍に乗り上げて上下する。些細な振動はそのまま令嬢の中に蓄えられた禁断の水面をちゃぶちゃぶと揺らし、ますます幼い令嬢を小さく身悶えさせた。

リミエルの下腹部は、今朝からいちども排泄を許されないまま我慢し続けていた液体でばんばんに膨れ上がっている。少しでも気を抜けばはちきれてしまいそうな欲求に、先程から自覚できるほどに女の子の部分が伸び縮みを繰り返している。

(ああっ……だめ……っ……)

もはや『我慢の限界』を感じてから既に半刻あまり。乙女の体内の秘密のティーポットをじわじわと高まる尿意で焙られ続け、リミエルはぐったりと疲れ切っていた。

昨日の会食で従姉妹のジュリエッタお抱えの料理番によって披露された、隣領ネザーランドの地方料理。南方産の香辛料をふんだんに用いたスープを、はしたなくも3杯もお代わりした代償に、リミエルは無性に喉の渇きを覚え、ついつい何杯も喉を潤す木苺のジュースを口にしてしまっていたのである。

出立の間際のお茶会でも、リミエルはすでに耐え難い尿意を覚えていた。いつもなら美味しい美味しいと口にするタルトも半分残し、一刻も早くその場を辞したい思いで一杯だったのだ。

が、令嬢たるものが他家を出る直前にトイレを借りていくなど許されるはずもない。後ろ髪を引かれる思いで城を後にしたリミエルは、震えそうになる膝を押し隠し、馬車を走らせた。

だが——耐えに耐え続けた我慢も、いよいよ切羽詰ってきている。

公爵令嬢は縋るようにもう一度、窓の外に視線を巡らせた。無論の事ながらほんの数分で景色が変わるはずもなく、いまだ馬車は深き森の中だ。まだ目的地は遠く、その影も形も見えない。

(こんな……こんなところで……お粗相なんて……)

リミエルは恐ろしい想像にぶると身を震わせる。それは貴族令嬢ならずとも、少女にとって最大の恥辱である。幼くとも淑女であるリミエルにとって、決して許されぬ醜聞であった。だが、少女の身体の扉は内側から熱い液体の圧力によって執拗にノックされ、溜め込んだモノを解き放てと訴えてくる。

公爵令嬢は、そっと下腹部に触れて、自分自身が作り出した恥ずかしい熱湯をなみなみとたたえた秘密のティーポットの存在を確かめる。貴族令嬢として躰けられた厳粛な礼儀作法によって、少女のティーポットの容量は同年代の庶民の少女に比べても驚くほどに多い。

そも、この国の王宮などではトイレがないことなどざらなのだ。高貴な人間は穢れとは無縁であり、貴族の子女などはトイレが遠ければ遠いほど慎み深いとされていた。爵位を持つ名家もそれに習い、滅多にトイレを作らないのが慣例である。

しかし——いくら我慢に慣れた令嬢といえども、それにも限界というものはある。そして、いざ耐えられる容積がなまじ多いゆえに、限界が近づくとそのときの苦痛の並大抵のものではなかった。文字通り、下腹部の中で存在を誇示するほどにずっしりと膨らんだ膀胱が、ちりちりと焦げるように内臓を圧迫し、その重さを直接排泄孔に押し付けてくるのである。

いまにもぶくりと膨らみそうになる排泄孔を意志の力できつく締め付けて、リミエルは荒くなり始めた息を整えようと深呼吸を試みた。少しでも楽な息を探して、試行錯誤を繰り返す。

ドレスの細い身体は心持ち折り曲げられ、ぴんと床に突っ張った爪先は、浅く腰掛けたお尻をクッションの上に押し付ける。腰を小刻みに揺すり、幼い令嬢は座席の上ではしたなく身体をよじらせた。

(——あ、や……ダメ、え……っ！？)

不意に——穏やかだった水面に緊張が走った。

ぞわりと波のように引いては押し返す衝動が、前触れもなくもっとも繊細な部分に押し寄せてくる。

「あ……んうっ……！！」

高貴な振る舞いも淑女のたしなみも忘れ、リミエルはたまらず脚の付け根に手のひらを押しつけた。ドレスの膨らみをくしゃりと握り締め、ぴったりと閉ざされた脚の隙間に押し付けられた手が、硬く張り詰めた下腹部をぎゅうと押さえる。

じんっ、と甘い痺れが腰骨を走り抜ける。かかとが浮かび、爪先が床を擦る。震えていた両膝は硬く緊張し、硬直して重ね合わされ、身体の奥でびく、びく、と震える衝撃に耐える。

下着に覆われた股間では括約筋が痙攣せんばかりに引き絞られ、吹き出しそうになる熱い奔流を塞ぎ止める。出口のないティーポットに閉じ込められた液体が、行き場をなくしてこぼこぼと渦を巻いた。

「あ、ふう……うっ、っは……っ、くうっ……」

それに追い討ちをかけるかのごとく迫る、馬車が道の荒れた部分に差し掛かった。クッション程度では吸収しきれない振動が馬車を小刻みに揺らし、繊細な乙女のティーポットを容赦なく攪拌する。

(が、がまん、ガマンっ、我慢、がまんっ……！！！)

熱い塊を飲み込んだように重い下腹部が、わずかな痛みとともにじんじんと疼く。

今にも沸騰して爆発しそうになるティーポットを必死になってなだめ、おしりを小刻みに動かし、腿を絶え間なく擦り合わせて——リミエルは息をつめ切ない喘ぎを繰り返し、股間を蹂躞する排尿感に抵抗し続けた。

どれほどそうしていたか。やがて、波立っていた水面がわずかにおさまってゆく。

「っ、はあ……」

(っ、お、おさまった……みたい……)

せり上がってきた尿意を押さえ込み、ひとまず勝ち取った勝利の合間、リミエルは訪れたわずかな安堵の時間に小さく息を吐いた。

今なお水面は上昇を続け、不穏に小さく小波を立てていたが——形振りかまわず我慢しなくとも、なんとか耐えられるレベルに落ち着いたのだ。

だが——そう間をおかず、次の波がやってくるのは火を見るよりも明らかだった。

城に辿り着くまでに、あと何回——今のような危機がやってくるのだろう。たとえ1回か2回はなんとなかったとしても、それ以上こらえ続ける自信は、リミエルにはなかった。

城まで間に合わないのであれば、どこかで用を足すしかない。

(でも……)

少女の白磁のような肌には朱が差し、柔らかな頬と耳を染める。

まもなく夕刻。暗くなる前に戻らなければ父は不安に思うだろうし、そうなれば何故そんなにも遅くなったかを問われるのは間違いない。

（ジルベレット公の娘が、おしっこ、我慢できなくなって馬車を止めたなんて……そ、そんなの言えるわけ……ない、です……っ）

ここは人の近づかぬ深い森だ。旅人も滅多に立ち寄らぬ古い街道沿いには馬車を止められるような場所はなく、まして公爵令嬢が用を足せるようなご不浄はどこにも見当たらない。こんな場所で急に馬車を止めれば、一体何事かと思われるのは避けられないだろう。

馬に鞭をくれる御者の背中をそっと見、リミエルは緊張に身を硬くする。純朴そうな青年の御者は、リミエルが何を命じようと素直に従うだろう。だが彼も愚鈍ではなく、リミエルが茂みの奥に姿を消せばその意味を察しないはずがない。

だが、自然の摂理に反する行いを嘲笑うかのように、尿意は跳ねあがるように高まり幼い令嬢の身体を襲う。

（や、やだあつ……）

御者台で馬車を操る青年の目を意識し、リミエルの頬がさらに紅く染まる。

と、その時。

「お嬢様」

「は、はいっ！？」

不意に御者台から声をかけられ、リミエルは心臓が口から飛び出さんばかりに驚いた。

「申し訳ありません、少し揺れます」

訥々と、誠実な声音で事務的なことだけを告げる御者の青年——しかし、一旦意識してしまったリミエルには、彼ははっきりと異性として認識されてしまう。

「っ、や……ッ」

羞恥心に刺激され、緊張した下腹部から尿意が沸き起こった。馬車の揺れも手伝ってたちまち増幅した尿意は、もどかしいむず痒さを伴って排泄孔を刺激し、熱い衝撃がぱんぱんに膨らんだ膀胱を、熱い砂が詰まったように錯覚させる。じんと高まる水圧は内臓を圧迫し、身じろぎするたびに鈍い疼痛とちくちくと細い針を突き刺すような切なさを訴えた。

「お嬢様？　どうかなさいましたか？」

聡い御者はすぐに主人の異常を感じ取った。褒められるべき青年御者の察しの良であるが、リミエルにしてみれば憎らしいほどである。

「な……なんでもっ……なんでもありませんっ……」

馬車の振動によって掻き回される繊細な乙女のティーポット必死に庇いながら、リミエルは辛うじて平静を取り繕い、声を絞り出した。

「なんでも、ないですから……す、すこし驚いただけです……」

どう見ても全く大丈夫とは言えない青ざめた顔と、せわしく擦り合わされる足元。リミエルが虚勢を張っていることは明らかだった。

（は、恥ずかしい……っ、足、動いちゃうっ……見ないでっ……）

御者の青年は椅子の上で小さくなる彼女を見、はっと何かに気付いたように視線を反らす。

そして御者は躊躇わず鞭を振るい、馬車を減速させにかかる。馬がいななき、揺れが大きくなって車軸が軋む。

「っ……！？」

御者の行いに、リミエルもその気配を感じ取った。

(あ、あ……やだ、気付かれちゃった……っ、お……しっこ……したいの、ガマンしてるの、き、気付かれちゃった……！！)

「お嬢様」

「ち、違いますっ！！ その、そんな——わたし、全然っ、が、がまんなんかしてないですっ！！ ちょ、ちょっと、暑くて、あ、そう、汗……汗ですからねっ」

猛烈な羞恥と動揺から、思わず語気を荒げて叫んでしまうリミエル。

そう誤魔化しながら震える膝を抑えこもうとするが、間断的に襲い来る尿意の波を誤魔化し切ることなどできるはずもない。

「——以前、耳にしたことがあります、この森の近くに大層珍しい花が群生しているそうです。お嬢様が手づからお摘みになってお持ちになったとなれば、御主人様もお喜びになられるでしょう」

朝からずっと、おしっこを我慢しながら——貴族であること、少女であることのプライドゆえに、なによりも渴望する「トイレ」の一言が言い出せないでいる。傍から見ればとても滑稽な、羞恥と生命活動の袋小路。

御者の青年は、幸か不幸かそんなリミエルの胸中に気付けないほど愚かではなかった。

「そのために遅くなってしまった事、お許し頂けるようわたくしからもご説明いたします」

(っ……)

リミエルはすぐさま御者の心遣いを悟った。つまり彼は迂遠な言い回しで、漏らす前にトイレに行って来いと言っているのである。

「あ……っ」

猛烈な羞恥が、公爵令嬢の幼き美貌を耳まで赤くする。何から何まで知られてしまったことに、死んでしまいたいほどの恥辱が少女を苛んだ。

(……やだ、あ……そんな、こんなトコロでなんか……っ)

停止した馬車のドアが引き開けられ、地面に降りるための準備がてきばきと済まされる。

つまり——その辺の茂みで、はやくおしっこをしてこい、という意味だ。

「わ、わたし——お、お外でなんか……っ」

「お嬢様。どうかお聞き分け下さい」

有無を言わせぬ調子で、御者が告げる。それはまるで、聞き分けのない子供に言い聞かせるような言葉。幼いながら必死に保とうとしていたリミエルの、令嬢としてのプライドを無残に踏み砕くものであった。

リミエル・エリザベート・レイ・ジルッベレットは、まだトイレの躰もできていないような、みっともない子供であるのだと。そう告げられたも同じである。

(——嫌あ……っ)

ずたずたに引きちぎられてゆく少女の羞恥心。しかし、そんな少女にも大自然の摂理は容赦なく襲い掛かる。震え出す下半身は、再び大波の予兆を覗かせる。

森の茂みでのおしっこ——このまま、馬車の中でのオモラシ。

二つを天秤にかけ、リミエルに残された選択肢は無論ながら、ひとつしかなかった。

ぞわり、ぞわりと一歩ごとに足元から這い登ってくる激しい尿意を堪え、できる限りなんでもないというように装いながら、リミエルは御者の手を借りて馬車を降りる。もはや、足を大きく広げるのも難しい。

「ごゆっくり、なさってください」

「……っ」

地面に降りたところで御者から声をかけられ、とうとうリミエルは耐え切れなくなって駆け出してしまった。街道の茂みを分け入るように、木々の隙間に飛び込んでしまう。

と——

ぶじゅっ、ぶじゅああああああああああ！！

すさまじい勢いで、水音が響く。なんとリミエルの背後で、馬車から放たれた馬の一头が放尿を開始していたのだった。

馬たちも朝からの仕事で、息をつくひまもなかったのだろう。

体内に溜めていた水分を全て吐き出してしまうような激しい音を響かせ、獣の放つ猛烈な水流が地面を穿ち、ばしやばしやと地面をえぐり、周囲にびちびちと泥を巻き上げて乾いた土を侵食してゆく。

まるで、桶で水を撒き散らしているかのように、圧倒的な放水——

(あああ……っ！！)

その光景に、公爵令嬢の頭が真っ白に沸騰する。

これから、自分もあれと同じ事をするのだ——

そうはっきりと認識してしまったリミエルは、羞恥に突き動かされるまま全速力で茂みの中へ走り去った。

鬱蒼とした森は、確かに視界を遮るのにはうってつけだった。柔らかい地面はふかふかの絨毯のように靴を受け止め、重なり合った梢は夕暮れの日差しのほとんどを遮断している。

立ち並ぶ木々はどこまでも続き、動物の鳴き声一つなく静まり返っている。これなら確かに姿勢を低くしてうずくまれば、誰にも気取られずにいられることも難しくはないだろう。

(……で、でもっ……こ、こんな……お外で、なんてっ……)

貴族令嬢として、一人の少女として。このようなことは決してあってはならないことであつた。今まさに自分が禁忌に踏み入れているのだと知り、リミエルは羞恥に顔を染め上げる。

衝立どころか、屋根のない場所を下着をずり下ろしドレスをたくし上げ、少女としてもっとも大切な場所をあらわにし、無防備な姿を晒してしゃがみ込む——それだけでも気絶してしまいそうに恥ずかしい。あまつさえ、リミエルはこれからここで己の体内に満た

された恥ずかしい熱湯を勢いよく吹き出させるのである。

だが、最悪の事態を避けるためには、リミエルはその動物にも均しい行為を受け入れるしか道は残されていないのだ。貴族のプライドと疼く下半身の板挟みになる彼女をあざ笑うかのように、秘密のティーポットに詰め込まれた液体は、リミエルのもっとも恥ずかしい部分を突き破ろうとざわめき、激しく渦を巻く。

「ふぁ……うん……」

しかし、切羽詰った下半身は少女の身体を知らずクネらせ、半開きの唇からは甘い喘ぎがこぼれる。

尿意の波はさらに強まり、ずんと下腹部に抱え込んだ重いティーポットの中身が、リミエルの原始的な衝動を刺激した。

「あ……あぁっ……ダメっ……来ないでえっ……」

また、『さっきの』ような大波が押し寄せる。迫り来る発作はじりじりと水位を高めてゆく。

リミエルの意思に反して、なみなみと熱い液体を湛えた容器が、勝手に収縮を始める予兆である。

羞恥に突き動かされてぎゅっと股間を押さえたリミエルの手のひらの下、一旦はぎゅうときつく引き締められた排泄孔が、尿意に耐え兼ねるように再びじわじわと押し広げられる。美しい少女がその幼い容貌を羞恥に染め、切なく吐息をこぼす様子は、見蕩れるほどに艶かしい。

両足ががくがくと震え出した。股間に間断的に走る痺れが、リミエルの思考をぐらぐら揺らす。

（ダメ……ダメなのにっ…あぁっ、……こんなこと、絶対に……しちゃいけないのにっ……）

「くぅっ……！！ も、もうダメ……、で、でちゃうっ……」

人目のないことをいいことに、リミエルははっきりと尿意すらを口にしてしまう。

大切なところを剥き出しの外気に晒し、そこから地面の黒土にむかって激しい水流を吹き出している姿——さっきの馬たちと同じように、まるで理知も気品も全くないままに、獣のような行為を望んでしまっている自分に、少女の耳は真っ赤に染まる。

それでも、下半身を襲う尿意はもはや一刻の猶予もなくリミエルを急き立てる。ここでおしっこを済ませてしまえば——耐えに耐え続けた排泄の解放感は想像だけで幼い令嬢の心を震わせた。

いくら我慢を重ねても、少女の幼い身体にはいつか限界が訪れてしまうことは明白だった。

もし城まで間に合わず、粗相をしてしまうようなことがあれば。密閉された馬車の中に響き渡る激しい水音と立ち昇る湯気、身を切るような羞恥は繊細なリミエルの理性を侵してゆく。

じくん、と再び膀胱の中でおしっこが暴れ出す。

「ふぁぁ……あううっ……！！」

とうとうリミエルは切なげな嬌声を漏らしてしまった。

耐え切れなくなった腰がくねくねと左右に揺すられ、それにあわせて令嬢の体内の秘密のティーポットもたぶたぶと中身をざわめかせる。

少女の体内、例えるならば精緻な細工を施された陶器のティーポットは、下品な衝動に猛り狂う悪魔の熱湯に占拠されてしまっていた。

「んっ、んんっ、んんう…っ！！」

突き上げるような尿意の衝動に晒され、リミエルは崩れ落ちるように木の根元にしゃがみ込んでしまう。

とてつもなく危険な体勢だった。ドロワーズがくしりと軋み、薄布一枚を隔てた内部から熱い雫をにじませようとする。張り詰めた下腹部を必死にさすりながら、リミエルは大きく息を繰り返す。

(うううっ、くううっ……うあうううっ！！)

でちゃう——だめ、もう、でちゃうっ……！！)

だが——

それでもなお、令嬢の理性は、淑女として躰けられた深窓の令嬢のたしなみは。

野外での排泄という恥も外聞もかなぐり捨てた行いを、許せなかった。

(だめ、がまん——ちゃんとした、おトイレまで——っ)

こんな場所で、地面を濡らし土をえぐり、湯気を立ち昇らせて激しくおしっこをすることを、リミエルは躍起になって否定する。

(ちゃんとしたおトイレじゃなきゃだめ——だめなのっ……！！)

何十秒、そうしていただろうか。

永遠に続くかと思われた尿意の洪水は、緩やかに引いていった。もちろん完全になくなるような事はない。

単に、また次の発作までのわずかな時間を稼いだに過ぎない。次の大波は、今のものよりもさらに激しくなることは確実なのだ。

「はあ、はあっ……はあ……っ」

(な、なんとか、おさまった……みたい)

息を荒げながら、リミエルはそと股間を探り、どうにか自分が下着の純潔を守り通したことを知る。猛烈な尿意に打ち勝った安堵から、ゆっくりと息を吐く。

そんな彼女には、“次”のことなど考える余裕はなかった。一時的に耐え切ったとしても、それはほんの少し限界が遠のいたに過ぎない。少女の下腹部に蓄えられたおしっこは、遠からず更なる脅威になって押し寄せてくることを。

続く。

(初出：書き下ろし 2008/11/16)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: みんなのお手洗い：バケツ編

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 12/12/2008 23:38:29

BODY:

「……っ、その、ごめん、私、……トイレっ！！」

少女の小さな、けれど我慢の限界をまざまざと知らせる切羽詰った叫びは、締めきられたバスの中に響く。

足元を庇うようなふらふらとおぼつかない足取りで、バスの後部座席を覆うカーテンへと向かう彼女を、いくつもの視線が追う。羨望、あるいは軽い非難。小さな背中に注視を浴びたまま、少女は顔を赤くしながらカーテンの奥に消えた。

やがて、かすかな衣擦れの音と、それに続いて椅子を軋ませるぎしっという音。

まるで、座席の上に座りこむような体重を乗せたその音に続いて、我慢に我慢を重ねた激しい水音が響く。

ぶしゅっ、じょぼぼぼぼぼお……

雪道に閉ざされ身動きのできなくなった、修学旅行帰りのバスの中。

6 - C、30人の少女は、それぞれにその繊細で可憐な下腹部の秘密のティーポットを、恥ずかしいホットレモンティでいっぱいにして、座席にうずくまっていた。

ちょろろろ……ぴちょ、ちょぽっ……

雪の中に包まれた密室では、そのささいな雫の音すらもはっきりと響く。再び衣擦れの音を挟んでからカーテンを押し開けて姿をみせた少女は、車内に満ちる不穏な空気の中、深く俯いたまま早足に自分の席へと戻ってゆく。

その様子には、トイレを済ませたことへの安堵よりも、むしろこんな場所で排泄をしてしまったことの嫌悪感、罪悪感が見て取れた。

むろん、年頃の少女達だ。本来排泄をするような場所ではない車内に設けられた臨時トイレを使うのは、たとえ限界まで切羽詰っていても激しい抵抗があるのだろう。

だが、そんなことすら、今の彼女達にとっては些細なことだった。

「……………」

「……ちょっと、沢村さん、また？」

「だ、だって……寒くて、おなか冷えちゃうんだもんっ」

「もう、ちゃんと我慢しなさいよ……………」

入れ替わりに席を立とうとした少女に対し、先ほどにも増して重くなったクラスメイト達の視線がはっきりと集中する。席を立った少女、沢村詩穂は、針の筵のような空気に身を縮こませながら、後部座席へと急ぐ。

（し、仕方ないじゃないっ……我慢できないんだから！！）

重い沈黙に耐え切れず、言い訳のように胸中で叫ぶ。俯いているクラスメイトたちの間を足早に通り抜け、遠慮がちに後部座席のカーテンを押し開けた。

バスの窓を覆っていたカーテンで仕切られた、最後部の座席。床に青いポリバケツを置いただけの、トイレと呼ぶにはあまりにもお粗末なシロモノ。布一枚によって隔てられたこのスペースが、いまの6 - C全員に与えられた排泄の自由であった。

（うそ……もう、こんなに、いっぱい……！？）

詩穂はそっと悲鳴を上げる。床上のポリバケツの中には、すでに8割を超えてなみなみと、黄色く濁った水が溜まっていた。

これらはすべて、6 - Cのみんなが我慢しきれずに済ませたオシッコだ。

少女が我慢できるオシッコの量を、膀胱容積から逆算すると一人あたり平均おそよ300ml。それが1クラス30人分強で9000ml、つまりは9リットル。

雪に埋もれたバスが、路肩に停車してからもう6時間近くが過ぎている。少女達がこのトイレを使った回数は1回にとどまらない。現に詩穂は、これで3回目となるオシッコのためにここに訪れていた。

これまた、回数も平均すればおよそ2回弱。18リットルのバケツがいっぱいになってしまうのも時間の問題というわけだ。

（だ、大丈夫よね……わ、私があと一回使ったくらいじゃ、溢れたりしないわよね……？）

予想外の事態に、流石の詩穂もここでオシッコをするのには躊躇いを覚えた。すでに2回もしてしまったあとで、トイレではない場所を使うことへの嫌悪感や羞恥はもう残っていないが、残り少ないバケツの容積を自分のオシッコがさらに埋めてしまうのはまずいという思いがあった。

しかし、少女を責め立てる尿意はそんな感傷など許さない。

「んっ……………」

ぎゅうっと押さえた股間は切ない疼きと共に苦痛からの解放を訴えている。詩穂は恐る恐る、バケツを倒さないように脚の間から下着を抜き取り、スカートをたくし上げてバケツの上にしゃがみ込んだ。

またもひとり、少女がバスのなかの仮設臨時トイレで、膨らんだ下腹部の中身を勢い良く噴出させる。

じよぼぼぼおおおおお……………」

3度目だと言うのにまったく節操のない激しい水音は、一枚布に隔てられたバスの中にも大きく響き、詩穂自身とクラスメイトの苦痛をなおも高めてゆく。いまや『誰かがオシッコをしている』という事実自体が、バスの中で苦しむ少女たちには拷問に等しい。ましてその証である水音や匂いまではっきりと伝わってくれば、それだけで“誘われて”しまうことまでありえた。

「す、すごい音……してるね……………」

「沢村、もう3回目でしょ……？ もう少しおとなしくさせてよ……っ」

「んうっ……だ、だめッ…そんなにすっきりする音、させないでっ……」

「な、なんでそんなにいっぱい出しちゃうのよ…！！ ……み、みんな我慢してるのにつ」

特に、トイレに近い後部座席の少女たちには、その誘惑は激しい。そもそもトイレの限界が近く、これ以上オシッコをすることすら躊躇われる状況だというのに、いまや順番が回ってくるのを待つさえ難しいほどだ。少女たちは座席の上で切なく身をよじり、息を詰めて耐えていた。

（だ、だって、したいんだもんっ。出ちゃうんだもんっ……しょ、しょうがないじゃないっ）

詩穂は用を足したまま、俯いて、ひたすらに心の中で謝り続けるしかない。

呪うべきはトイレの近い身体と、すぐに一杯になってしまうおなかの中の水風船だった。ただでさえオシッコの『近い』詩穂だが、雪の中に埋もれて冷え切ったバスの中、眠ることもできずに過ごす長い時間は、緊張のためにますます自律神経を活性化させ、精製される恥ずかしい熱湯はいつもの倍近い速度で小さな詩穂の水風船を膨らませてゆく。

（は、早く、終わってよぉっ……）

響く水音は、静寂に沈むバスの中に大きく反響する。カーテンの向こうではクラスメイト全員がこの音や、詩穂の身じろぎする様、吐息、唇を噛み腕をさする様子を聞いているのだ。自分のオシッコを聞かれるという羞恥に、思春期を迎えたばかりの少女は反論することもできず、ただ俯くばかりだ。

少しでも早く終わって欲しいのに、おなかの中の入れ物はなかなか空っぽになってくれない。わずか数時間の間にいっぱいになったオシッコは、1クラス30人分のオシッコが溜まったバケツの上に飛沫をあげて注がれ、その上にしゃがみ込んだ少女の目元までも恥辱で濡らしてゆく。

「っ……だめ、もうだめっ」

後部座席に座っていた矢野茜が辛抱できずに立ち上がった。

彼女は、『トイレ』のすぐ前に座っていた一人だ。カーテン一枚の向こうで、安堵の溜息や身づくろいの衣擦れ、そして延々とバケツの水面を打ち響く解放の水音を聞かされ続けていたため、少女の下腹部ではすでに吹きこぼれんばかりに尿意が煮え立っている。たとえるならば限界まで水を詰め込んだ風船をガスバーナーの火で炙られているようなものだ。

震える脚で通路に出た茜は、大股に、後部座席のカーテンの前に並び、引けた腰をくねらせながらスカート上から股間に手を挟み、もじもじと膝を擦り合わせはじめた。

「ちょ、ちょっと……やめてよっ、こっちまで辛くなっちゃうじゃないっ」

「だ、だって……」

すでに我慢の限界であることを隠そうともしない茜に非難の声が飛ぶ。しかし、猛烈な排泄衝動を堪えながら自分以外の誰かがオシッコを済ませるのをただじっと見ていることの辛さは、車内の誰もが理解している。茜を咎める少女たちもまた、同じように限界なのである。

それでも、6 - Cの少女たちの間には、後部座席の『トイレ』に立つのは、あくまでもそこが空いてから——という暗黙の了解のようなものがあつた。茜の行為はそれを無視したものなのである。

はっきりと『次』を待つ姿勢は、もうトイレを我慢できないことの表れ。車内の全員がそれぞれに苦しみながらも、大人しく耐えているという現状の均衡を破綻させ、あっという間にバケツをいっぱいにしてトイレを使用不能にする事態に繋がりがねない行いなのだ。

「も、もう次じゃなきゃ間に合わない……ほ、他の誰かに入られちゃったら、我慢できないもんっ」

茜は頑なにカーテン前の『出待ち』を譲らない。

その態度につられたのか、さらに数人の少女達がばらばらと立ち上がり、茜のあとに続いた。

辛うじて静寂を保っていた車内に、静かなざわめきが起こる。とうとうなし崩し的に、車内でただひとつのトイレの前で『順番待ち』がはじまってしまったのだ。

「っ……」

「ご、ごめんね……でも、その、もう……だめなのっ」

「……………」

「仕方ないじゃないっ、が、我慢できないんだから……そんな目で見ないでよぉっ」

しかし、トイレに行きたくて仕方ないのは彼女たちだけではないのである。いまだ席に着いたままの少女たちも、順番待ちの列に並ぶ少女たちに負けず劣らず激しい尿意に苦しんでいた。

苦しいのはみな同じ。にもかかわらず、早々にギブアップを宣言した少女たちに、我慢を続けているクラスメイトたちの非難の視線が集中する。

まるで針の筵のようなありさまで、茜たちは俯くことしかできない。無言の非難に堪えかね、列の一番後ろに並んでいた少女は苦渋の表情で自分の席に戻る。いまや車内はトイレに並ぶだけで責められねばならないという異常事態に至っていた。

(っ、我慢、我慢よ、ガマンガマンがまんっ……出ないの、オシッコなんか出ない、おしっこなんてしたくないっ……！！)

バスのなかほどに座る和田麻美は、そうやってずっと意地を張り続けていた。眼鏡に三つ編みという校則を一分の隙もなく守った表情は、普段の落ち着いた佇まいをかなぐり捨てて、下腹部を絶え間なく焦がす猛烈な衝動に対抗を続けている。眉は寄せられて眉間に深い皺、噛み締められた歯ががちかと震え、視線はたよりなくあちこちをさまよう。ぐっと動き出さぬよう床に押し付けられた脚の間には、スカートを大きく押し込むように手のひらが挟まれ、かすかな痙攣を繰り返す。

麻美は今にも突き破られそうなオシッコの出口を直接、指で塞いでいる。もし可能なら、指先を突っ込んですら我慢してやろうというかのような必死の形相だ。

品行方正で通る風紀委員の彼女は、やや病的なまでに潔癖だった。そのこと自体は思春期の少女にはけっして珍しいことではない。本来は当然の自分の身体の生理を嫌うのは、彼女のような年代の少女にはまああることだ。

(ぜったい、こんなところのトイレなんか、使うもんですかッ……)

女の子は、きちんとトイレでオシッコを済ませるもの。

今の時代には珍しく、やや潔癖すぎるくらいのあるほどの貞操観念を堅く守り続けてきた麻美には、まさかこんなバスの中で、しかもバケツにおしっこするなど、天地がひっくり返っても到底許容できないものだったのである。

だから、麻美はまだ一度もこのバスの後部座席には行っていなかった。彼女にとってみんながオシッコをしているポリバケツなど、トイレの代替にはなりえなかったのである。

この大雪の中での立ち往生が始まってからの7時間、羞恥やプライドも尿意に負け、多くのクラスメイトたちは次々とトイレ立っていた。しかし彼女たちは麻美にとってはトイレのガマンもできないだらしない子、としか映っていない。

（お、女の子なんだから、ちゃんとトイレまで我慢するのよ……あの子たちみたいな、みっともないことはしないのっ。……お手洗いのしつけくらい、ちゃんと幼稚園の時にすませておかなきゃいけないんだからっ……）

クラスメイトを蔑むに近いことを考えながら、無謀な努力を続ける麻美は、形振り構わず我慢を続けることで通常の何倍もオシッコをおなかの中に溜め続け、その結果、確かに少女ひとり、2回分のオシッコの余裕を作っていた。

だからこそ、詩穂のようなトイレの近い子が、他の子よりも多く何回もオシッコをしてもまだバケツは溢れずにいたのもまた、事実といえよう。

（ふうっ、ううっ、ああ……が、我慢するのよっ……こんなトコロでなんか、絶対にダメっ……！！ だ、だいじょうぶ、できるわ、朝まであと5時間として、60分だから300分、1800秒よ……ひゃ、百数えるのを180回すればいいのよっ……簡単よっ）

……しかし、5時間どころかこの30分後。熾烈な我慢の果てに、ぼうっと澱んだ頭で結局100を3回も数えられないうちに、麻美は限界を迎えてしまった。

身体をよじり腰をねじりつけ、我慢の果ての我慢、限界も限界になったところでオモラシとバケツでのオシッコ、どちらがいいのかという二者択一の選択肢を付きつけられ、とうとう麻美は泣きじゃくりながら水色のポリバケツを股間に押し当て、臨時トイレを使ってしまう羽目になった。

意地を張って我慢し続けた分、オシッコの量も桁外れとなる。麻美はたった1回のオシッコで、一気に800ml近くもバケツの残り容量を減らしてしまったのだった。

「ねえ、ヒロちゃん、サキちゃん、マナちゃん、大丈夫？」

「う、うん。まだ平気」

「あたしも、結衣こそ行って来たら？」

「そだよ、我慢してるとつらいよ、あたしたちのことなら気にしないで」

「わ、私も大丈夫だよ……」

運転席に近い前座席に、輪になって座り、互いの手をぎゅっと繋ぎあっているのは、結衣、裕菜、早紀、真奈香の4人だ。

由衣たちは、みんな形だけの笑顔を作りながら虎視眈々と“そのとき”を待っていた。

世間的には仲良しグループでとおっている由衣たちだが、実際はそれほど仲がいい訳でもなく、クラスの流行に遅れまいと寄り集

まっている集団であった。少なくとも、いじめられる事がないようにと表向きの笑顔を取り繕って、付和雷同をしているだけだ。

（……ああもう、みんな意地張ってないで先に行けばいいのに、もうヒロもサキもみっともないくらい我慢してるじゃないっ。マナなんかさっきからチビってるくせに……！！）

だから、由衣たちは打算的に、まるで爆弾ゲームのようにその瞬間を狙っていた。

彼女たちは輪になって座っている友達が、皆同じように我慢しているのははっきりとわかっている。勿論、彼女達は自分も我慢していることは承知しているが、同時にあんなみっともない格好だけはしてないはずと確信していた。端から見れば五十歩百歩の有様なのだが、誰一人としてそれに気付いていないのだ。

「無理じゃなくていいよ？ もうつらいでしょ？」

「う、ううん、いいからヒロ、先に行ってきなよ」

「マナこそ、いいよ。我慢してるんでしょ、遠慮しないで？」

この人数が一斉にトイレに並べば、おそらくポリバケツは途中で溢れてしまう。しかし、乙女としてその最後の一人——自分の番のときに、ポリバケツを溢れさせる羽目になるなんて死んでも嫌だ。

そして勿論、バケツが一杯になったあと、もうオシッコができない状態のままずっと我慢していることも間違いなく不可能だ。

だから由衣たちの目論見は、タイミングを見計らって、一番最後にオシッコのできた女の子になることだった。一番最後にすっきりできていれば、そのあとバスが動かないまま長い長い時間がかかっても、一番最後まで我慢できることになる。少なくとも明日の朝まで我慢し続けることができるだろう。

他の子が漏らしたりしちゃったところで知ったことじゃないし、6年生にもなってオモラシなんでももちろん軽蔑するけどそれは心の中だけにして、大丈夫だよ、仕方ないよ、我慢できなかったんだよね、と優しく声をかけてあげれば、その子は一生自分に頭があがらなくなるはずだ。

「あたしたち、親友だよね……」

互いが抜け駆けしないよう、ぎゅっと手を繋ぎあったまま、虚飾の笑顔が並ぶ。

この意地っ張りな我慢がますます自分たちの下腹部を占領する水風船の容積を大きくしていることを知りながら、由衣たちのチキンレースは続いている。

「も、もうだめエ……っ」

がたんと補助席を跳ね飛ばして立ち上がるなり、氷室佐奈は床を蹴立てて後部座席へと奔った。すでにその両手はしっかりと下腹部をホールドし、一部の間もなく固定している。辛抱のきかない両手のひらは、そうあるのが正しいのだと言わんばかりに隙間なく股間に重ね当てられていた。

「で、出ちゃうッ、オシッコ漏れちゃうッ……」

繊細な少女にはやすやすと口にできない言葉をはっきり声にして、唇を震わせ訴える佐奈。もはや隠すこともできないほどに限界なのははっきりと解った。

しかし、後部座席に続く列には5人を越える順番待ちができています。佐奈は今にも駆け込みたいカーテンの向こうまでの距離は絶望的なまでに遠かった。

「か、変わってエ、変わってよオ、ねえ、先、入れてエ……お願い、早くウツ！！」

「ひゅっ……！？ ば、バカやめてっ、引っ張らないでっ」

列の一番後ろにいた藤堂歩は、いきなり背後から袖を引っ張られて悲鳴を上げる。背中を回してお尻のほうから大事なところに押し当てていた両手が引き剥がされそうになったのだ。満杯のダムは辛うじて両の手のひらに支えられて形を保っており、それを失えばたちまち崩壊してしまうのは想像に難くない。

たたらを踏んだ脚で必死にバランスを保ち、ぎゅうっとお尻を押さえながら、歩はきつ、と無法を働いた佐奈を睨む。

「な、なにをするの、やめてよっ」

「っ、お、お願いだからア、先に、トイレさせてエ……っ」

「む、無理よ、わたしだってしたいんだからっ！！ み、みんな我慢してるのよっ」

「そんな、意地悪しないでエ……あ、あアっ……」

無碍に手を振り払われ、佐奈はがくがくと腰を震わせながら通路の隅に座り込んでしまった。どうやら立っていることもできないようだ。

気遣わしげに佐奈を窺うクラスメイトも何人かいたが、彼女がそのまま身動きせずじっとしているのを見て、それ以上なにかを言うのをやめる。

「っ……ウ、ア……あア……っ」

小刻みに震える肩は、佐奈が『立ったら、出ちゃう』状態にあることを知らせていた。

しかし、そんな危機的状況にある彼女を助けようとする者は誰もいなかった。

順番を譲れという佐奈のわがままは通るわけがなかったのだ。誰もが佐奈と同じことを訴えたいのを、必至になって押さえ込んでいるのに、それを崩すことはもはや現状に対する反逆と変わらない。きちんと順番を待てばトイレに入れるということだけが、辛うじてこの熱狂に浮かされた雪の中の密室の秩序を保っているのである。

最後の一線を守り通そう、形振り構わずにもがき、惨めに俯いてしゃがみ込んでしまう佐奈の姿は、同情を誘うと同時に、ああはなるまいという反骨を呼び、少女たちを奮い立たせるのだった。

「や、八重ちゃん、へいき？」

「ん……い、いいよ、いいから行ってきて」

そう答える五十嵐八重の表情は硬い。椅子から半分落ちかけているほどに浅く腰掛け、青ざめて前傾になって。どうみても自分のほうが余裕のないはずの八重は、友達のトイレを見送る。

(がまんするんだとにかく絶対にしないのおしっこしないガマンガマン絶対ダメおしっこ我慢がまんガマンっ！！)

バスの後部座席につくられた臨時仮設トイレの、限られたおしっここの回数は、いよいよ残りわずかとなっていた。バスの中のクラス

メイトの半分以上が今すぐにも使いたいのに、ポリバケツの中はこれまでのおしっこで一杯になりつつあって、みんなが順番に使うなんてとてもありえない。

そんな中、八重はただ懸命に、自分の我慢を保っていた。

（我慢、我慢、我慢がまんっ……！！）

八重はバスが止まってあの『トイレ』ができた直後にオシッコをして以来、一度もトイレに立っていない。

あれからすでに8時間。八重はじっと尿意をおなかの奥に飲み込んでいた。いつもなら形振り構わずトイレに突撃しているであろう“限界”の尿意にすらも、もう2時間前に達している。

腹部を焦がしている激しい欲求は、もはや鈍い痛みに近かった。

八重がここまでして耐え続けているのは、大切な親友の美佐や由紀のため。

4年生まで、八重はイジメられっ子だった。そんな彼女に手を差し伸べて、助けてくれたのが美佐と由紀なのである。

（大丈夫、これくらい平気っ……イジメられてた時にも、何度もやられたもんっ……）

クラスの女子の半数以上によって続いた執拗なイジメはまる半年近くも続いた。中でもとりわけ辛かったのがトイレに行かせてくれないこと。だからこそ八重は、限界を超えたガマンを身につけた。

いまはその恩返しの時なのだ。親友の二人のため、八重は自分の分だけではなく、ふたりの分まで一緒にガマンしているのだ。美佐と由紀が安心してトイレができるように、八重はできるかぎりの平静を装ってふたりにその『権利』を譲っている。

美佐と由紀が、八重を案じながらも限界になってカーテンの向こうに消えるたび、八重の尿意はびくと激しくなる。ふたりがトイレを済ませた分だけ、八重のおなかの中にはどんどんとオシッコが追加されてゆくのだ。小柄な下腹部にはおさまりきらないオシッコで、張り裂けそうな膀胱をぱんぱんに膨らませ、八重はぐるぐると渦を巻いて泡立つ黄色い濁流を、必死におなかの中に閉じ込めている。

（へいき、へいき、我慢、ガマン、がまんっ……）

ぞくぞくぞく、とイケナイ感覚が背中を這いあがる。

股間に響く甘い痺れのとてつもない誘惑を振りきって、八重はぎゅうぎゅうと下着を掴んで引っ張りあげる。

「はあ、はあっ、はあーっ」

息を荒げ、身をよじって、おしっこをひたすらにガマンする。そうやってもたらされる苦痛が、美佐と由紀への恩返しなのだ。ふたりぶんのオシッコを一身に受け止め、八重は歯を食いしばってあそこを閉ざし続けた。

いつしか、バスの中ではじまった奇妙なチキンレースは、大きな熱を持って少女たちを支配していた。目の前にトイレがあるのに、それを使うことが許容されない。……それはなんと奇矯なことであるのだろう。

カーテンで仕切られたその向こうにある車内の臨時仮説トイレで、みんなの膀胱の代わりにオシッコを我慢してくれているポリバケツは、誰かがそこに入るたびに中身を増やし、いつしかいっぱいになってしまう。その時がタイムリミットだ。

バケツの容量の8割がたが黄色く濁った液体に満たされつつある今、その限界に近いことを悟り、いまや車内の皆が少しでもバ

ケツに負担をかけまいと、必死になっておなかの中にオシッコを溜め込んでいた。

誰も彼もがトイレに行きたくて仕方がないのに、それを素直に口にすることができないのである。

なにしろ、バケツを占領した総量 18 リットルにもおよぶオシッコは、この一晩で 6 - C 全員が一致協力して作りだした恥ずかしい液体であり、クラス全員がきちんと我慢できなかった証なのだ。

誰も、最後の一人にだけはなりたくなかった。自分のオシッコでバケツを溢れさせてしまうのだけは、なんとしても避けねばならなかった。

もしそうになってしまえばその瞬間——自分がクラスで一番我慢のできなかった子として、バケツを満たす 1 クラス 30 人分のオシッコ全部を、自分の責任として押し付けられてしまうという不思議な空気が、雪に埋もれたバスの中に出来上がっていた。

だから、と少女たちは妄想する。トイレに行くなら最後から 2 番目だと。

ほんの少しでもいい。ちょっとだけでも出せればそれだけ楽になるはずだと思ってバケツを跨いだ河原絵麻は、3 回ちよろろっ、ちよろろっ、とオシッコをこぼし、とうとうガマンしきれずに残り全部をバケツの中に注いでしまった。

しばらく我慢していれば蒸発するだろうから、ちょっとだけ出してしまおうと思って下着にわざとおチビリした天野未央は、そのままじょわじょわとスカートとタイツまで汚してしまい、泣きながらカーテンの後ろに駆け込み、激しい水音を響かせることになった。

まるでバケツを自分の膀胱のように心配し、少しでも自分が我慢することでみんながオシッコできるようにと思っていた坂崎志保里は、そうやってじっと我慢している間、どんどんバケツの水位が上がり、それといっしょにおなかの中の膀胱が膨らんでいく想像に耐え切れなくなり、自分の我慢をバケツの中に押し付けてしまった。

我慢の限界と共にカーテンの奥に入った飯塚里美は、バケツの縁ギリギリまで迫っている黄色い濁流の水位を目の当たりにして愕然とした。平均と比べて明らかにトイレの『多い』自分が用を足せば、おそらくバケツが溢れてしまうことに気付いたからだ。驚異的な精神力でオシッコを『途中で止め』て、一旦は脱ぎかけた下着を、腰をもじつかせながら穿き直して、席に戻った里美は我慢の延長戦に突入する。

そして、無常にも、カウントダウンは進む。

最後の順番になったのは、クラス全員の非難を浴びながら 4 度目のトイレに立った沢村詩穂だった。

そのとき詩穂の目の前にあったバケツは、もはやどこにも新しいオシッコを受け止める余裕などなく、汚れた水が表面張力で溢れ出さんばかりになっている有様だった。

一体この一晩で何人の子が、何回ここにオシッコをしたのだろう。少女たちが股間から進らせる液体に度重なる陵辱を繰り返され、バケツはもはやその中身の重みに耐えかね、限界のように軋んでいる。

後部座席のトイレは、いつ崩壊してもおかしくなかった。

「ねえ、まだっ!？」

「か、変わって、はやくっ」

「詩穂、ねえ、いつまでしてるのよっ……!!」

次々に詩穂をせかす声が響く。その声音はもはや罵声に近い。

無言のままの詩穂に、クラスメイトたちの声が激しさを増す。一刻も早く次を待っている少女たちがいるというのに、トイレに閉じこ

もり、占領し続けようとする詩穂に次々と怒声が飛ぶ。

「ね、ねえ、沢村っ！？ 怒るわよっ、はやく、はやくっ……してよぉ！！！」

しかし——

（し、したいけど、したいけど……できないの、もうオシッコできないのっ……！！ あ、溢れちゃうっ、もう、これ以上、無理なのっ……）

目の前のバケツは、もはや詩穂同様、どこにもオシッコを受け入れる余裕などなかった。

もし、今すぐに目の前に公衆トイレが出現したら、恐らくクラスの8割以上が先を争って列に並ぶだろう。順番を巡って掴み合いのけんかすら始まるかもしれない。……それができる余裕がありさえすればだが。

いや、もう公衆トイレなんて上等なものでなくてもいい。もうひとつ、空っぽのバケツでもあれば、6－Cの皆は全員、心ゆくまでオシッコを済ませ、すっきりして楽になることができるのだ。

だが、それは叶わない。車内にこれひとつしかトイレはない。これたったひとつしか、オシッコのできる場所がない。

——だからこそ、少女たちの我慢は終わらない。

「……………～～っ……！！」

沢村詩穂は動けなかった。

もはやここではオシッコはできない。それでも、車内にはまだたくさんの子がオシッコを我慢している。もしこのトイレが限界なのを詩穂が黙っていて、このままオシッコを我慢したまま次の子に順番を譲ったとする。けれど、それでなにが変わるわけでもないのだ。

詩穂に変わってトイレに入った次の子が、またもバケツがいっぱいになっていることを知るだろう。その子もそれを黙っていたとしても、いずれは順番に中に入ったクラスメイトたちが順にそれを知ることになる。

いま、この瞬間だけが——詩穂がここにいて、トイレを占領している間だけが、バスの中の6－C全員にとって、『トイレ』が残された最後の一瞬なのだ。

激しく次を急かす声を聞きながら、詩穂はいつまでも、我慢を続けるしかなかった。

（初出：書き下ろし 2008/12/12）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: サンタクロースの話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 12/31/2008 01:48:08

BODY:

「っ、っ、次は……っ」

白くて大きな袋が、雪の積もった煙突からにゅいと突き出した。深い夜空の下に、白い息がほうっと吐き出され、続いてほんのり赤く染まったほっぺたの少女が屋根の上に姿を現す。

屋根の上の新雪を踏みながら、赤と白の衣装をまとった金髪の少女は額に浮かんだ汗を拭う。

「ああもう、急いでサニー！！ だいぶ遅れてるよお、はやくはしなきや朝になっちゃうてば！！」

「わ、わかってるわよお！！」

急かす声に答えて、サニーは足元の大きな荷物をえいやと背負う。一抱えではすまない大きな白い袋は、いまなお詰め込まれたプレゼントでばんばんに膨らんでいた。小柄なサニーでは、まるでいまにも荷物に押し潰されそうな有様だ。

「ほら早くてば、サニー！！」

屋根の端では、ソリを引く赤鼻のトナカイのニコが蹄を鳴らしてサニーを急かす。荒い息をつきながら、あぶなっかしい足取りでふらふらと屋根を伝って、サニーはどうにかそこまでたどり着くと、背中中の荷物をどずん、とそりに載せた。

「はあっ……」

膝に手を乗せて大きく意気を吐くサニーに、ニコはぶるぶると角を振って言う。

「ひと休みしてる暇なんかないよサニー！！ まだまだたくさん回る家が残ってるんだから！！ ほら、次の家は4丁目の角だ！！」

「あ、ちょ、ちょっと待ってよっ！！」

主人の了解も待たずにいきなり走り出したニコに、サニーはびっくりしてソリにしがみ付く。サニーが腰を下ろすと同時、魔法のソリはしゃんしゃんと鈴を鳴らし、光の尾を引いてふわりと夜空に舞い上がった。

「もお、いったいどうしたのさ。他の子はみんなとっくにここらの家にはプレゼント配り終えるよ。サニーだけそんなに遅れちゃって……」

真っ赤な鼻で行く手を照らしながら、ソリをびゅんびゅんと加速させるニコ。金の鈴もうるさいくらいに鳴り響く安全運転とはいいいが

たい速度に、ソリはがだごとと揺れ大きく跳ねた。サニーは慌てて脚に力を含め、ソリの手摺にしがみ付いた。

「ニコ、ちょっと……は、早すぎるってば！！ スピード違反だよ」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！？ 見てみなよその袋、あとどれだけプレゼント残ってるかわかってるの！？」

ただでさえ遅れているスケジュールに加え、屋根の上で延々と待たされ続けたニコはだいたいいらしているようだった。それに関しては全くサニーのせいなので、文句の言いようはない。

（でもっ……）

口にできないもどかしさに、サニーは唇を噛んでそっとスカートを握り締める。

ニコの苛立ちもしかたのないことだ。サニーのプレゼントの袋はまだ見上げるほどに大きく、配るべきプレゼントはぎっしりと中に詰まっている。予定の半分どころか4分の1も終わっていないのだ。

「もう12時も過ぎてるんだよ？ もっと急がなきゃ今夜じゅうに終わらないよ！！ サンタクロースがクリスマスにプレゼントを配りきれないなんて、前代未聞じゃないか！！」

「う、うん……」

まくし立てるニコに曖昧に頷きながら、サニーは冷たいソリの上でもぞもぞとおしりの位置を直した。サンタクロースの正装と決まっている赤白の制服は、この時期には防寒対策をしても少々寒さを感じるもので、スカートとタイツの布地を通して天板の冷たさがじんわりとおしりに染み込んでくるのだ。

女の子のサニーには少々どころか、かなり辛い。

まして——いまのサニーは、それよりもさらに切迫した理由がある。

「とにかく、僕もできる限り急ぐから、サニーもぐずぐずしないでばぱっと配っちゃってね！！ ここが終わったら次の街もこれから回らなきゃいけないんだから！！」

「ね、ねえ、ニコ、あのさ」

「なに？ ……お喋りなら後にしてよ。ほら、次の子のところについた。行ってきて！！」

言いかけたサニーの言葉は、ブレーキをかけたソリによって掻き消されてしまう。次の家の屋根の上に到着したのだ。

座っていたサニーはスカートを握っていた手を離し、ソリから立ち上がった。

「プレゼントは持った？ ここの子はクマのぬいぐるみだから、間違いないでね！？」

「う、うん」

サニーはソリの荷台から、プレゼントの入った袋を持ち上げる。サニーの小さな身体の倍もあるような袋は、もちろん魔法の袋で、サンタクロースが世界中の子供たちに一晩で配るプレゼントを詰め込んだものだ。

子供達の寝ている部屋に行って、サンタクロースがこの袋の中に手を入れると、子供たちがお願いしているプレゼントが自動的に出てくるようになっているのだ。

クリスマスの魔法で小柄なサニーにもどうにか持てるようになってはいるが、それでも世界中の子供たちのためのプレゼントがぎっしり入っているのである。大きな袋を両手で背負い、サニーはふらふらと倒れそうになるのを頑張って堪えるので精一杯だ。

（あう……っ）

しかし、サニーの足元がおぼつかないのは、単に屋根の上に積もった雪やプレゼントの重さだけが理由ではない。

「ほら、サニー早く！！」

「——ああもう！！ わかってるってば、ニコっ！！」

意を決してサニーは煙突から家の中に飛び込んだ。煤だらけの煙突はとても人が通れるほどに広くもないのだが、サンタクロースのサニーはもちろんそんなことで汚れたりしないし、大きなプレゼントの袋がひっかかることもない。

すると煙突を通り抜け、すんと暖炉の中に着地したサニーはまだ暖かい薪の間から顔を出して、ゆっくりと立ち上がる。

(んうっ……)

暖炉のある部屋はかなり広く、パーティーの後のようで、片付け切れていないクラッカーのリボンや七面鳥の食べ残し、グラスに半分だけ残ったワインなんかも並んでいた。

ソファの上では、子供たちが眠ったあともおおはしゃぎだったらいい大人たちが三角帽子を被ったまま毛布に包まって、思い思いのかっこうですうすうと寝息を立てている。中にはワインの瓶を抱きしめて眠っている赤ら顔のおじいさんの姿まであった。

(あ……う……)

部屋の中の全員が深く眠りに落ち、誰も見ているものがないことを確認すると、サニーは袋を下ろし、小さく胸を撫で下ろした。

同時に、彼女の爪先が小刻みにステップを踏み始める。

ぴたりと寄せ合わされたタイツの膝。ぐっと前屈みの前傾姿勢。それが今のサニーの一番楽な格好だ。

(——……っ、と、トイレ……っ)

きゅうんっ、と少女のおなかのなかを占領している熱い液体が、切なく下腹部を疼かせる。

サニーがさっきから落ち着きがないのも、いつもはサンタクロースたちの中でも一番のスピードを誇るサニーが、今日に限ってえらくもたたしている理由も、全てはこれが理由だった。

身体をあつためようとして、みんなに隠れてこっそりと拝借したホットワインをついつい飲みすぎたのが原因だったのだろう。ホワイトクリスマスの街を彩る雪に、真冬の夜風はソリの上のサニーの身体を冷やし、あっという間に飲んだ分をそっくりそのままオシッコに変えてしまった。

サニーはずっと、トイレに行きたいのを必死に我慢したままプレゼントを配り続けているのだった。

(やだ、もうだめ、でちゃうっ……オシッコしたいよ……っ)

間断なくこみ上げてくる尿意の波は休まることなくサニーを苦しめ続け、少女は今にも音を上げそうになってしまう。

サニーのおなかの中はプレゼントの袋なんか問題じゃないくらいにばんばんで、今すぐにトイレに駆け込まなければならないほどに切羽詰っている。

しかし、サニーはサンタクロースなのだ。普通の家でトイレを借りるわけにはいかないのである。そんな事をすれば、クリスマスの魔法が解けてしまい、世界中のサンタクロース全員にも迷惑がかかってしまうのだ。

“サンタクロースはいる”そう信じている子供たちが起こす聖なる夜の魔法は、サニーたちを一晩だけ、絵本の中の本物のサンタクロースにしてくれる。ニコのソリが空を飛べるのも、サニーが煙突から出入りできるのも、何もしなくても枕元に靴下の用意された部屋の場所がわかるのも、全部クリスマスの魔法のおかげなのだ。

(もお……やだあ……っ と、トイレえ……)

泣き出しそうになったサニーのぶるぶるとタイツの膝が震える。

クリスマスの魔法によって、サンタクロースのいる家では子供たちは絶対に目を覚まさない。誰もいないのをいいことに、サニーは人前ではとてもできないような恥ずかしい格好で我慢をしてしまう。

スカートの上から脚の間をぎゅうぎゅうと押さえる片方の手は、はっきりと下着のうえからあそこを握り締めてしまうほど。脚の付け

根にぐっと力を込めて、ちょこんとお尻を後ろに突き出したアヒルみたいな格好で、サニーはそろそろとダイニングを出てゆく。

（すぐそこに、トイレ……あるのにいつ……！！）

小さなドアを目の前にして、一層股間を握り締める手のひらに力が籠ってしまう。待望のトイレを目の前にしながら、サニーはそこに駆け込むことを許されなかった。

クリスマスの魔法が効いているのは、サンタクロースたちがちゃんと仕事をしている間だけなのだ。それ以外のことをすれば、魔法はすぐに解けてしまう。

だって、サンタクロースが家にオシッコがしたくてトイレを借りに来るなんて思っている子供は誰もいないからだ。

（ふうんっ……っ）

きゅきゅと足を踏み鳴らし、もじもじとお尻を揺する。重い足を引きずってトイレの誘惑を振り切り、廊下の反対側の階段を登り始めるサニー。目指す子供部屋はこの上にある。

（や、やあ、やだっ……）

が、立て続けに押し寄せるオシッコの猛威に、サニーは階段の踊り場でとうとう動けなくなってしまった。

「サニー！？　ねえ、どうしたのさ！！　早くしてよ！！　さっきから急いでって言うんじゃないか！！」

いつまでも戻ってこないサニーを見かねて、ニコが煙突の上から叫ぶ。

「っ、わ、わかってるってばあ……っ」

「ぐずぐずしないで！！　まだ沢山プレゼント、あるんだよ！？」

（ば、馬鹿あ……そんなのほっぽって、早く帰りたいわよおっ……そ、それで、はやく、オシッコ……トイレえ……っ！！）

今この瞬間、サニーが願えるものなら、ありったけの一生の願いを使ってクリスマスのプレゼントにトイレをお願いしたいくらいだ。

サニーの身体はすっかり冷え、おなかの中でたふたと揺れるオシッコを堪えるので精一杯だった。ぎゅっと足の付け根を押さえる手は磁石でそこに張り付いたように、ぴったりとくっついて離れない。片方の手はプレゼントの袋で塞がり、もう片方の手はスカートの前を押さえるので精一杯。もうこれ以上、オシッコを我慢するためにできることはないのである。

不恰好なアヒルの姿勢とおぼつかない足取りでは、階段を登りきるのに何分もかかってしまう有様だった。

「サニー！？」

「う、うるさいっ、ちゃんとやってるからあ！！」

ニコに怒鳴られながら、ようやく到着した二階の子供部屋では、長い髪の女の子がすうすうと寝息を立てていた。あまり寝相はよろしくなく、ふかふかの羽根布団は跳ね除けられて、薄い綿毛布だけが辛うじておなかを覆っている。このままでは風邪を引いてしまうのではないかと心配になる格好だった。

ベッドの枕元には紅白ストライプの靴下と、サンタさんに宛てたらしき手紙もある。

けれど、サニーはそんなものを他所に、プレゼントの袋も放り出して、両手でぎゅうっ、とタイツの上から直接脚の間を押さえはじめてしまった。

焦る視線がきろきよと部屋の中をさまよう。

（お、オシッコ……っ）

しかし、子供部屋のどこを探してもトイレなんかがあるはずもない。

サニーにできる一番の方法は、

この子のプレゼントを配ったら、全速力の大急ぎで階段を駆け下り、ダイニングをまっすぐに突っ切って、できるだけ早く煙突を登っ

て、死にたいほど恥ずかしいのを我慢しながら、ニコにオシッコが我慢できないことを説明して、トイレに行きたいとお願いをして、どこか近くの茂みか森の中に降りてもらって、タイツと下着を足首まで下ろし、お尻を丸出しにしてしゃがみ込んで、そこでこっそりとオシッコを済ませることだった。

だが。

（む、無理っ……！！ ムリムリ、ぜったいそんな無理っ……！！ ま、間に合うわけじゃないお……っ！！ ま、またお外に出て我慢なんて、ぜったいにオモラシちゃうっ……！！）

くじけそうになった心が呼び水になったのか、サニーが押さえる指の下で、勝手に水門が開き出してしまう。

タイツの上から脚の付け根を握り締めた指の隙間で、じゅわっという熱い感触と水音が響く。

「あ、や、ああっ」

じよわ、じゅわっ、じゅうっ。

ダムを乗り越えた熱い雫が、下着にじわじわとあふれ出してゆく。タイツの上まで一気に染み出したオシッコが、サニーの脚の間に滲んだ。

「や、やだっ、止まって、止まってえ……っ！！」

こんなトコロでオモラシなんて。

なんとか両手を使っておチビりを止めようとするサニーだが、もう身体の方は勝手にオシッコの準備を完了し、どんどん水門を開いてしまっている。タイツの腿にひとすじふたすじと水流が流れ、サンタクロースの衣装の下半身に濃い染みが広がってゆく。

「サニーっ！！」

「ひっ！？」

唐突に、ニコが怒る声がさっきよりもずっと強く大きく響いた。いい加減に待ちくたびれたニコは、ソリと一緒に子供部屋のペランダに回りこんでいたのだ。

驚いたサニーは反射的にあそこを押さえる手を離し、床の袋を掴んで女の子のベッドの側に駆け寄ってしまった。

両手の助けまで借りてやっと押さえ込んでいた放水を、疲れきった括約筋の力だけでは押しとどめられるわけもない。必死の締め付けも空しく、とうとうサニーのお股の間のところ、オシッコの出口のすぐ下でしゅる、しゅるうっ、じゅわああっ、とイケナイ音が立て続けに響く。

（だ、だめえ——っ！！）

声にならない叫びをあげ、タイツの上から下着を掴んで引っ張り上げるサニーだが、もう遅い。

下着の股布に広がる熱い感触はあっという間に広がり、湯気を立てるほどの熱水が脚の間からおしりへと広がってゆく。閉ざされるべき小さな孔がぶくりとふくらみ、じゅう、じゅうとパンツに飛沫を吹き付けるのがはっきりと感じられてしまう。

同時にサニーの脚から力が抜け、腰がふわりと軽くなった。

「きゃあっ……！？」

サニーはそのままころんとベッドの上に倒れこんでしまった。めくれあがった羽毛布団が上半身を受け止めてくれたものの、女の子の上にどしんと押し掛かってしまった格好である。

「あ、や、……～っ！！」

衝突の衝撃がぱんぱんの下腹部を圧迫し、限界の出口を突き破る。まるで水風船が破裂するように、サニーの太腿に大量の水流がはじけた。ぐしょ濡れで肌に張り付いた布地の中を、噴出す水流が蛇のようにのたうつ。

狭い布地の隙間をいっぱいに浸し、そのままあふれ出したオシッコはタイツの大半を淡い黄色に染めて、めくれたスカートの下からしよしよと流れ出た。雪の積もった寒さの中、しんと冷え切った部屋の中でも、サニーのオシッコは湯気を立てるほどに熱い。

「やだ、だめえ、だめええっ……」

見知らぬ少女のベッドを汚してしまうという最悪の事態に、サニーはすっかりパニックだった。

両膝を突いた姿勢で腰を振りたてオシッコを止めようとするが、我慢に我慢を重ねたオモラシは途方もない威力で、おなかのなかをすっかり空っぽにするまではおさまると思えなかった。

じんわりとおしりや股間に広がってゆく熱い雫の感覚と共に、身体からはすっかり熱が抜け落ちてゆく。崩壊のショックと我慢からの解放感で、サニーはそこからベッドの上で動けなくなってしまっていた。

すうすうと寝息を立てたままの女の子のちょうど腰の上。ベッドどころか直接、女の子の下半身をサニーのオシッコが濡らしてゆく。「あ、は……ふうっ……」

じいーんと腰に響く甘い感触に、サニーは目を閉じて、ぶるりと背中を震わせた。

じゅじゅじゅっ、じゅううう、じょわああああ……

すうすうと寝息を立てる女の子の真上で、サニーの漏らしたオシッコがタイツの太腿を伝い、激しく飛び散り、こぼれ落ちてゆく。いまやベッドの上は大洪水、世界地図どころか七つの海が出来上がっているほどだ。

なんとたつぷり1分以上も、サニーのオモラシは続いた。

おなかをぱんぱんに膨らませ占領していた熱がごっそりと抜け落ち、ぐしゃぐしゃに濡ればそったスカートと下着が股間に張り付く。だんだんと冷たくなってゆく下半身に、ようやくサニーの頭が晴れてゆく。

(っ……！！)

べちゃっ、と脚に張り付いたスカートは、オモラシの最中でも身体の前の方でぎゅうっと握り締められていたため、大きくおしりのほうでまくれ上がり、可愛い下着をのぞかせていた。

そのパンツも水浸しになって、タイツの上から半分透け、サニーのまるくてちっちゃな白いおしりを覗かせていた。

そして足元には大きなオシッコの湖ができ上がり、その上でパジャマのままの女の子は相変わらずすうすうと眠っている。暢気なものだとも思うが、サンタクロースがいる間はこの子は目を覚まさないのだから、しょうがないといえましょうがない。

(や、やだ……やっちゃったあ……)

ようやく戻ってきた現実感と共に、オモラシのショックがサニーを襲った。

(ひ、人の家なのに……ううん、こ、この子の上でっ……お、オシッコ……オモラシ……しちゃったっ……！！……わ、私、サンタクロース、なのにつ……！！)

あろうことか、サニーはプレゼントを配る相手の真上で、残らずオシッコを漏らしてしまったのだ。まるで女の子自身が盛大にオネショをやらしたかのように、ベッドは惨憺たる有様になっている。

この一年、がんばっていい子にしていたはずのアカリに対して、プレゼントを届けるはずのサニーが、あまりにも酷い仕打ちをしてしまったのである。

(っ……)

「うん……？」

サニー同様下半身をずぶぬれにして、ころん、と寝返りをうつ少女に、サニーは口元まで出そうになった悲鳴を飲み込んで飛び上がった。

少し考えれば、サンタクロースの前で子供が目を覚ますわけではないのだが、オモラシのショックで動揺しているサニーがそのことに思い至るわけもない。

サニーは汚れたままの手でプレゼントの袋を掴むと、女の子の分のプレゼントを配るのも忘れたまま、一目散に子供部屋を飛び出していた。全速力で階段を駆け下り、逃げるように暖炉に飛び込む。

その間にも、サニーのびしょぬれのタイツはびちゃびちゃと音を立て、廊下や絨毯にたくさんのオシッコの痕を残してしまう。

「——もお、遅いってば！！ サニーってばなにやってたのさ……」

「っ……！！」

煙突を駆け上がったその先の屋根上で、待ちぼうけをくわされたニコが文句を言おうと口を尖らせる。

「あ、あれ？ サニー？ そ、それどうしたの……？」

「う、あ、っつ……！！」

しかし——下半身をあきれくらいずぶ濡れにし、涙を浮かべ、真っ赤になって戻ってきたサニーを見て、ニコもおもわず言葉を失ってしまった。

ニコの視線が再度濡れた足元とスカートへ向かうのを見て、サニーの頬へとうとう堪えていたものがあふれ出した。

「っ……えぐっ……ひうつ……うわぁ——んっ……」

夜空に響く大きな泣き声。屋根の上で泣き崩れてしまうサニーを前に、ニコはどうしていいかわからずに、ただうろたえるばかりだった。

——翌朝。

クリスマスの朝にアカリを起こしにきたアカリのお母さんは、アカリがいつもよりもさらに盛大におしりの下と脚の間に、特大の世界地図を描いてしまっていることを知って、大きく眉を吊り上げた。

『なんですか、アカリ！！ いい歳して、またオネショしちゃったの！？』

３年生にもなってオネショが直らないアカリは、よくそうやってお母さんに怒られてしまう。けれどその日のアカリは『ごめんなさい』の代わりに小さく首を振って、訳を話すことにした。

『あのねママ、ちっちゃな女の子のサンタさんが来てたの。それで、その子、ずっとプレゼント配る間もいっしょうけんめいオシッコをガマンしてて、でも我慢できなくて、オモラシしちゃったの。だから……』

アカリのたどたどしい説明を聞くと、お母さんは呆れたようにしながらも言い訳しないのという言葉を飲み込んで、それ以上怒るのをやめてくれた。

『はあ……もういいわ。クリスマスだもの、特別よ。……そのサンタさんにお礼を言いなさいね。オモラシしちゃくらいいっしょうけんめいプレゼント、配ってたんだものね』

早くお風呂に入るように言うお母さんにうなずいて、濡れたパジャマを着替えながら、アカリは窓の外を見て心の中で三回、ありがとうとごめんなさいを言いました。

『……だいたいどうだったかな、サンタさん。……サンタさんのママに怒られたりしてないかな……』

アカリの一番欲しかったプレゼントは、実はお父さんをお願いしていたクマのぬいぐるみではない。いまだに直らないオモラシを直す方法だった。

アカリのオネショは正確にはオネショではない。夜になるとどうしてもオシッコに行きたくなるのに、なぜだかはっきり目が覚めないで、そのままウトウトしているうちに、身体が勝手にオシッコを出し始めてしまうのである。

——プレゼントはいりませんから、どうかそれを直してください。

アカリはそうサンタクロースをお願いしていた。

そして迎えたクリスマスイブの昨日も、トイレに行きたいのにどうしてもベッドから出ることができずにいたところに——あの可愛いサンタさんがやってきたのだ。

サンタさんがとうとうガマンできなくて、アカリのベッドの上で顔を真っ赤にしてオモラシを始めてしまったとき、アカリの身体も一瞬だけ遅れてオシッコを出しはじめてしまっていた。

あのサンタさんのおかげで、アカリのオネショはお母さんには気付かれなかったのである。

サニーは知る由もないが、あの場でサニーがオモラシをはじめてしまったのも当然だったのだ。アカリが一番欲しかったのは、自分のオモラシをごまかしてくれる誰かだったのだから。

だから——サニーのおなかをぱんぱんに膨らませていたあのオシッコは、部アカリへのクリスマスプレゼントだったのだ。

(初出：書き下ろし 2008/12/25 2008/12/30 改訂)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 霧沢学院・3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: ノーション

CATEGORY: ノーション

DATE: 12/31/2008 01:52:42

BODY:

『オシッコをしない女の子』——ノーションの楽園である霧沢学院の3年生が活気付き始めるのは、夏休みも過ぎた9月半ば。暑い盛りが過ぎて空が澄み渡り、夕焼けが空に映える秋口の頃だ。

夏季休暇を終え、学期末試験の終わった学院では、中等部の3年間を通じてもっとも盛大なイベント、修学旅行に向けての準備が始まる。この時期に設定されているのは、中高一貫教育のため受験の心配がない学院ならではのことだろう。

字面では“学を修むる”とはなっているものの、昨今の学校では修学旅行本来の堅苦しい史跡観光などの意味合いは薄れ、純粋に観光旅行としての側面が強い。霧沢学院でもそれは例外ではなく、生徒達にとっても学院を離れ、仲の良いクラスメイトと揃って過ごす修学旅行は一大イベントである。

しかし、世の女の子の理想であるノーションをはぐみ育てる霧沢学院では、この旅行こそがノーションの英才教育の成果を示す、文字通りの“修学”旅行なのだ。

年度にもよるが、霧沢学院の修学旅行は概ね4泊5日の行程で、行き先は京都、沖縄、北海道、北九州などが選ばれる。目的地に海外を望む声も一部にはあるが、安全性の問題などから今のところ実現していない。

安全性——つまり“オシッコをしない女の子”=ノーションが実存するという神話が崩壊しかねない危険性を完全に払拭することが、海外では完全に担保できないためである。

この旅行の間、学院生徒達は完全なるノーションとして振舞うことが要求されるのだ。

つまり、旅行の間中、生徒達はいついかなる場合でも、排泄をするという意味でトイレに入ることを許可されないのである。

ノーションの楽園である霧沢学院の生徒として、彼女達は5日もの間、トイレに行くことのない女の子という理想の偶像を務めるのである。

彼女達が滞在するホテルは、格式高く伝統のある施設で、学院の出資者や卒業生が多く関わる場所ばかりだ。普段はその至れり尽せりのサービスで客を出迎えるホテルは、修学旅行で学院の生徒を迎える時だけ、たったひとつ——トイレについてのみ、恐ろしく厳格で理不尽な対応を取る。

学院生徒達が宿泊する棟のトイレの入り口を塞ぎ、壁紙などで封鎖してその存在すら抹消するのである。

学院に属する少女たちは、ノーションであるのだから——オシッコをする設備など不要というわけだ。

トイレの不在——それは、決して彼女たちにとっても珍しい光景ではない。そもそも霧沢学院には来賓用、職員用のものを除けば、トイレは存在していない。生徒達が利用できるのは、文字通り手を洗い清めるための“お手洗い”のみである。

だが、これは彼女たちがオシッコをしないことを示しているわけではなく、オシッコをするための設備が存在していないというわけではない。彼女達は自分専用の秘密のトイレを持っており、そこで誰にも気付かれずにオシッコを済ませることによって、そもそもその存在が物理的、生物学的に不可能なノーションとして振舞うことを可能にしている。

が。この修学旅行中はワケが違う。

滞在先の旅館やホテルはあくまでも一般の人々に向けられた施設であり、学院にあるような秘密の隠しトイレなど、無論のことながら存在していない。つまり、トイレの封鎖されたホテルには本当の意味でどこにもトイレなどなく、少女たちは4泊5日の無限にも思える時間をオシッコのできないままに過ごすことを強制されるのである。

厳格な躰と多くの淑女を排出する霧沢学院には、その名に恥じぬ多くの財閥、名家のご令嬢も名を連ね、在籍している。このような伝統ある学院ではその卒業生が社会で大きな権力を持つことも多く、時にその権力によって不正が起こることも懸念される。残念なことに生徒の中にも、在学中そうした血縁の立場を振りかざし無茶を通そうとする者はいるのである。その関係が明るみに出るのならばともかくも、寮生活や友人、先輩後輩の人間関係に及べば生徒の自治の間でそれらを摘発することは困難を極める。

本来、決して口外無用の秘密のトイレについても、信頼できる親友や先輩、そして時にいじめなどによって、その場所や使用方法を教え合ったり、聞き出されたりという言語道断なことが、厳粛な規律に律された学院内にも事実として存在しているのである。

無論ながら、学院の生活において多くの秘密トイレの存在を知っている生徒は、それだけ自然にノーションとして振舞うことができる。誰にも秘密にこっそりとオシッコのできる場所が人よりも多ければ、同じ学院の生徒にすらまるで本当にトイレに行かないようにも思わせることができる。時に学院執行部によって、24時間以上秘密トイレの使用を禁じられる場合でも、他のトイレを使うことができれば万が一の危機はぐっと少なくなる。

科学的な見地によって冷静に外部から見ればあまりにも無茶な存在であるノーションという存在が、毎年、学院の生徒達の間でもまことしやかに信じられてしまうのは、こうして学院のシステムを逆手に取り、“狡賢く”行動する生徒達がいるためでもあるのだ。

事実、彼女達の行いは学院を卒業し社会に出た後、実際にあるトイレには行かずに本当のノーションとして振舞うためには欠かすことのできない技術であることも確かと言える。

が、学院は修学旅行中のトイレについては、なによりもかたくなな態度を一貫させている。

たとえどんなに有名な財閥や政治家の関係者であったとしても、学院は決してトイレの使用を許可しない。一般には知られていないが、数年前には某民自党総裁であった大物政治家のご息女が、事前に修学旅行で滞在予定の旅館を訴え、トイレの使用を求めたこともあったが——学院はそれを突っぱねている。

また、旅行中の生徒達は班行動を徹底され、引率先でも徹底して行動を管理されるのだ。

この徹底管理が行き届かないとして、海外での修学旅行はこれまで行われていない。しかし、現在学院では卒業生を中心に欧州と北米で受け入れ態勢を構築中であり、数年後には学院初の海外旅行も計画されていると言う。

しかし、過酷な入試選抜を潜り抜け、学院での厳格な教えに従って中等部３年間のノーション教育を受けてきた学院の生徒たちとは言え、４泊５日間もの行程の間中、一回もオシッコをせずにトイレを完全に我慢することなど、まずもって不可能であるのは確かだ。

では、彼女達はどうやって、その小さな下腹部をなみなみと満たすオシッコを処分するのか。

みんなが寝静まった深夜に、ひっそりとホテルを抜け出してコンビニへ？

あるいはお風呂の時に、排水溝でこっそりと？

はたまた、観光の時の自由時間でちゃんと公衆トイレへ？

これまでこのシリーズをお読みの方々には、彼女達がそんな愚を犯さない事は先刻ご承知のことだろう。彼女達はノーションだ。少なくとも、この旅行の間はそう振舞わなければならない。であるならば——オシッコをしないのだから、そもそもトイレに入る姿すら見られてはならないのだ。そんな危ない橋を渡ってオシッコをしてしまうような女の子は、学院生活を送る事などできない。

そして、ホテルのトイレは絶対に使用できない事は既に述べた。

では、トイレが絶無のこの旅行の最中に、彼女達はどうやってオシッコを済ませるのか？

その秘密は、彼女たちが持つ小さな“袋”に隠されている。

修学旅行の初日、生徒達にはひとつずつこの『エチケット袋』なるものが渡される。

通常の意味では、このようなものはバスなどに酔い、気分を悪くした生徒が使うものだが——霧沢学院の修学旅行にあっては、まったく違う意味を持つ。そもそも、本来のエチケット袋はそれぞれ、新幹線の車両、飛行機の機内、はたまた現地での移動手段であるバスにも完備されているのだ。

この『エチケット袋』は、彼女達に与えられた恩情であり、枷でもある。

ノーションとしてのエチケット——人前でトイレに行かず。ひいては決してオシッコをしない女の子であるという、『エチケット』のための『袋』。つまりこの場合のエチケットとは、トイレを我慢すると言う意味であり、『袋』はとりもなおさずオシッコを溜めておくための場所、bladder（膀胱）のことだ。

『エチケット袋』はこの修学旅行中の間のみ、例外的にノーションの身体の一部、つまり膀胱の延長として扱われる。この『エチケット袋』の中にある限り、オシッコは身体の外に出たことにならないのだ。

我慢に我慢を重ねた限界の果て、学院の生徒達がどうしても我慢できなくなり、自分を苦しめる悪魔の液体を処分せなければ

ならなくなったときがこの『エチケット袋』の出番だ。少女たちはさりげなく部屋や移動車両の隅へ移動し、この『エチケット袋』にオシッコを済ませる。

無論ながら誰にもそのことを悟られてはならない——しかしこれはもはや建前上のことではある。なにしろ、『エチケット袋』は少女たちの体の一部なのだから、オシッコをしていることにはならないのである。

もっとも、そもそもこんな袋にオシッコを出しているところを、クラスメイトとは言え見られるなんて、普通の女の子でもありえないほどに恥ずかしいことであるのだが。

この『エチケット袋』は本来の用途同様、防臭、防菌加工の高分子吸収帯を用意したものであるが、性能そのものは段違いに良い。4泊5日の行程中、まったく問題なく少女たちのオシッコを……ノーションとして人並みはずれて鍛えられたオシッコの我慢が可能な少女たちのトイレを余すところなく受け止めるのにふさわしい構造をもっているのである。

修学旅行中、学院の生徒たちはなんどもこの『エチケット袋』のお世話になりながら、ノーションとして振舞うのだ。

面白いことに、これは、たとえノーション候補生である学院の生徒といえども、3日間もの間丸々とトイレを済ませずにいられるはずがないことを示している。たとえどれだけ括約筋を鍛え、オシッコを我慢する訓練をつんだとしても、普通に食事をし、水分を採り、日常生活を送りながら女の子がオシッコを我慢し続けられるのはせいぜいが丸24時間——たとえ奇跡のように我慢が可能だとしても、一日強の30時間が限界であるのだ。

読者のみなさんはこれを短いいと思えるだろうか？ 激しい選抜試験を勝ち抜き、全国から選りすぐられた我慢のエリートである少女達が、たかだか一日程度しか我慢ができないという事実を？

だがもう一度、これまでのコラムを踏まえ、ノーションという存在の大きな矛盾を考えて欲しい。

確かに水分を全く採らないような生活ならば、あるいはもっと長期間のトイレ我慢も不可能ではないかもしれない。しかし、ノーションとは普通の女の子と同じように生活をしながら、トイレと無縁でありオシッコに行かないことを旨とする理想の偶像である。

よって、トイレに行かなくても平気なように工夫をすることは、そもそもノーションとしてまったく見当違い、酷く言えば失格であると言って過言ではない。

たとえ長距離のバスや電車の移動であっても、それを理由にオシッコの心配をし、水分を控えたりすることはノーションとしては全くありえないことだし、夜トイレに起きることを考慮して寝前のお茶を控えたりすることは、ノーションには許されないのだ。

ノーションはオシッコとは無縁の存在なのだから、そもそもオシッコの心配をすること事態が筋違いなのだ。むしろオシッコに悩まされる心配がないからこそ、生徒達は普通の少女以上に多く水分を採り、飲み物を口にすることが推奨されている。

いや、それどころか彼女達はトイレを我慢する事すら許されていないのだ。

霧沢学院は、表向きトイレの一切存在しない、ノーションのための学院である。

しかし、そこで暮らす生徒たちが、実際にはオシッコからは自由にならないごく普通の女の子であるように、学院にはこっそりと隠された秘密のトイレが数多く用意されている。このような秘密のトイレでひそかに、つましやかにオシッコを済ませて、けれどそれを全く悟られないようにすることが、ノーションを目指す少女たちの学院生活の基本事項である。

誤解のあることも多いが、別段、学院の生徒全員が常日頃から限界に汗を流し身体をよじって我慢を続けているわけではない

（一時的にそういう時期にある生徒がいることも確かだが）。

……なにしろ、『オシッコをしない女の子』である以上、我慢することすらノーションにとってはタブーであるのだから。そのような無様な状況を晒すことなく、生徒達は死にそうなほどにトイレに行きたい時も、そうでないときも、全く同じように過ごしているのだ。

それは優雅に湖上を舞いながら、その実水面下で激しく水を掻き分けている白鳥のように。

血と汗と、文字通りオシッコの滲んだ涙ぐましいほどの努力の上で、生徒達はオシッコをひそやかに我慢し、ひとたび機会があれば可能な限り素早くきちんと（そしてこっそりと）トイレを済ませておくのが鉄則なのである。

繰り返し述べてきたように霧沢学院には、生徒一人につきひとつの秘密のトイレが用意されているが、学院を卒業し、名実共にノーションとなって社会に羽ばたいてゆく少女たちはそうもいかない。

学院の中でならばともかくも、大多数がノーションではない女性の生活する実社会において、トイレというのは基本的に、その場所がわからなければ困るものだ。探せば見付かるようになっていなければ非常に大変なことになるため、どうしても目立つようになっている。

だからそこに近づけば自然、その姿は目に付いてしまうものだし、衛生上複数の人間が利用する場所であるため、一緒に立ち入ればそこを使っていることは公知の事実である。

当然ながら人目のあるところでノーションがトイレに立つことが許されるわけもない。実社会で卒業生たちがノーションであることを貫くのは、想像を絶するほどに難易度の上がる行為なのである。

学院の中でならば、まさかそんな場所？ というようなところにひっそりと個人用の秘密トイレが用意してあったりするため、彼女たちはさりげなくそこで用を済ませ、同じ学院の友人たちに対しても思う存分ノーションであることを競うことができる。

しかし、一步学院を出たその先では、当たり前のことだがオシッコのできる場所はトイレしかないのだ。そこに立ち寄ることはノーションとしてやってはならないことだし、不可能である。

つまり、学院の生徒は、学院の外では絶対にトイレに行くことができない。

この修学旅行は、彼女たちにとって日頃磨いてきたノーションとして振舞うための技能を社会の中で試す、テスト期間でもあるのだ。

修学旅行の最終日。帰途に着いた生徒達は、学院の大規模検査室で——ここは入学審査や身体測定が行われる場所だが——『エチケット袋』の測定を行われる。彼女たちが修学旅行期間中、一体どれほどオシッコを猛烈に『ガマン』してきたのかを知らしめるためのものだ。4泊5日にもおよぶ長期間にわたる行程で、溜め込まれたオシッコは凄まじいことになっており、ほとんどの『エチケット袋』は見るも無残な凄まじい『ガマン』を強いられている。中にはそんな状況の『エチケット袋』を抱えてなお、言葉すくなく息を荒げ頬を赤くし、股間を握り締めてしまう、ノーションとしてはイエローカードな生徒も見られる。

そして、多くの生徒達がでずしりと重く、ぱんぱんに膨らんだ『エチケット袋』を前に、俯いて顔を赤らめている中、一度も『エチケット袋』を使用した形跡のない生徒が必ず数人、現れるのだ。

まったく焦る風もなく、乾いた喉を、健康に良いと評判の利尿作用たっぷりのお茶で潤して。少女たちはぺたんこ、空っぽの『エチケット袋』をこどもなげに返却する。

そう、まるで本当のノーションであるかのように、だ。

彼女達は一体どこでトイレを済ませたのだろう。彼女たちが一回もトイレに入っていないのは、同道したクラスメイトたちにははっきり解っているし、オシッコをする姿も勿論誰も見ていない。

しかし、果たして我慢のエリートである他の生徒達が激しい苦悶の中、必死に耐え抜いてなお『エチケット袋』をぱんぱんに膨らませているというのに、そんな状況の中で全く条件の同じ彼女たちだけが悠々とオシッコを我慢し続けているというのだろうか？

その答えは、実は誰にも解らない。

それこそが、生きてゆくための自然の摂理としてどうしても排泄という行為をしなければならない少女達が、オシッコをしない理想の女の子、ノーションとなるための最大の秘密である。たとえどんな苦しみを味わっても、彼女達は隠されたその秘密を口にする事はないだろう。

そして、彼女達こそが未来に羽ばたく、本物のノーションのタマゴたちなのである。

彼女達は、『エチケット袋』など不要である。我慢のための、第二の膀胱——そんな無理矢理で無茶苦茶な誤魔化しの救済措置などなくとも、4泊5日の行程を、完全無欠のノーションとして過ごすことができるのを証明してみせたのだ。

いかがだろう。

この修学旅行における“学を修むる”意味がお分かりいただけただろうか？

そして、——実は、彼女達が旅行にゆくそのずっと前から、試練は幕をあげている。

3年生になる生徒達は、すでに日常的にほとんど自然にノーションとして振舞うことを当たり前にしていて、たとえば丸1日、学院でたった1ヶ所の自分専用のトイレが使えなくなっているような突然のトラブルは日常となっている。

しかし彼女達は口に出すことはない。修学旅行の前日、あるいは前々日、ひょっとするともっと前から、自分の秘密トイレでオシッコができないことを。

そのとき、彼女たちがオシッコを済ませるためにどうしているのか——たとえば、誰かにこっそり教えてもらった別の秘密トイレを使っているのか？ じっと我慢を続けているのか？ あるいは、もっと他の方法でオシッコを済ませているのか？

もうお分かりだろう。学院における最大の秘密とされる、生徒一人一人の秘密トイレの存在すら、学院生活の執行においては実は何の意味も成さないのだ。

学院でたった一つの、自分専用の秘密トイレが使えないとき。生徒達はいったいどのようにノーションであることを貫けばよいのか。それを見つけることこそが霧沢学院の本当の教育である。

単に他人の秘密トイレをこっそり使って、限界になるたびに場当たりにオシッコを済ませ、尿意の解放を満足させているだけでは、決してたどりつけない領域がある。あるいはそこで学院の真意に気付けた少女こそが、偉大なるノーションの道の第一歩を踏みだせるのである。

あなたがこの季節、どこかの観光地で行列のできている婦人用トイレの前を、談笑しながら横切る、紺色の制服の少女達を目

にしたら。

あるいは、大急ぎでトイレに駆けこんできておきながら、洗面台で手を洗い髪を整えただけで外に出てゆく、青いスカーフの少女達を目にしたら。

それは、霧沢学院の生徒たちかもしれない。

彼女たちの生活は想像以上に過酷である。旅行のはるか以前から、すでに限界近いオシッコ禁止を強いられ、さらにそこから生活環境も全く異なる4泊5日にもおよぶ長期間の旅行を強いられ、どうにか学院に帰りついても、さらに過酷なことにまたもや自分のトイレが封印されている——そんなことすらあるのだ。

だが、彼女達はくじけない。

自分達が真にオシッコをしないノーションであるならば、そんなことはまるで関係がないからだ。

そう、もしかしたら彼女達は、本当に丸何日もオシッコを我慢しているのかもしれない。

彼女達はそのちいさなおなかを溢れんばかりのオシッコではちきれそうに膨らませながら、そんなことをおくびにも出さずに旅行を愉しんでいるのかもしれない。いまにも漏れそうな股間を抱えながらも平然と、ずかでも緊張を緩めればたちまち決壊してしまうであろう恥骨の上のダムを閉ざす偉大なる意志の力と、常日頃鍛えられたオシッコ我慢の成果をもって。

そうして、学院の少女たちは本当の意味での淑女の嗜み、“エチケット袋”を身につけてゆくのだ。

——霧雨霽の世界探訪

『ノーションの楽園・霧沢学院を尋ねて』より

(初出：リレー小説：永久我慢の円舞曲 902-913 2008/11/16)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 第10夜 ピーター・パン
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: WetMarchen
CATEGORY: WetMarchen

DATE: 12/31/2008 01:55:59

BODY:

「よーしウェンディ、今日は何をして遊ぼうか。かくれんぼはこのまえやったし、鬼ごっこも飽きたなあ。またフック船長でもからかってこようか？」

満天輝く星空の下、今日もピーターはご機嫌でした。今日は一体どんな楽しい遊びをしてやろうかと、いたずら心をわくわくさせながら考えこんでいます。

ここは子供の国ネバーランド。たとえどんなに夜更かししても、どんなにたくさん悪戯をしてみても、叱る大人はいないのです。いっぱい遊んで、食べたいものだけを食べていればいいのです。

よく冷えた木苺のジュースをぐいっと飲み干して、ピーターは向かいのウェンディに訪ねます。

「ねえウェンディ、どうしようか？ ウェンディ？ ……うん？ どうしたんだいウェンディ、さっきから全然飲んでないじゃないか。君の大好きな木苺ジュースだよ？」

「え、ええ……」

うきうきと心を躍らせるピーターは、やけにおとなしいウェンディに首を傾げます。今夜のウェンディはなんだか妙にヘンなのでした。とっても美味しいジュースを前にしても、ほとんど口もつけないままです。

「じゃあ、アイスクリーム食べるかい？ これも美味しいよ？」

「い、いらないわ……」

「遠慮なんかからしくないよウェンディ。ほら」

「っ……」

それどころか、ピーターとおきのチョコレートアイスまで溶かしてしまう始末。

しきりに様子を気にするピーターですが、ウェンディは俯いて、もごもごと小さくつぶやくばかり。心なしか顔も赤いようでした。何度もパジャマの裾を気にしては、椅子の上で座る位置を直し、小さく溜息を繰り返しています。

「ウェンディ、一体どうしたのさ？ ヘンだよ？」

「……………、っ」

「ウェンディが食べないなら、ボクが貰っちゃうよ。あーんっ」

ぱくぱくとアイスクリームにかぶりつくピーターを前にしても、ウェンディはじっと黙っていました。くちびるを噛んでぐっと膝をくっつけたか

と思えば、今度は一転、スリッパの爪先をテーブルの下でせわしなくばたつかせます。左右の手はお行儀悪く、ぎゅうっとパジャマの上から脚の付け根に押し付けられていました。

（だ、だめ……おトイレ……っ、でちゃう……っ）

それもそのはず。ウェンディは、いまにもオシッコを漏らしてしまいそうだったのです。

（っ……やっぱり、出発する前にちゃんとトイレに行っておけばよかったよお……）

ウェンディはゆうべ、ご飯の時に何杯もジュースを飲んでいて、お母さんに『そんなにいっぱい飲むとオネショしちゃうわよ』と叱られていたのです。でも、ちっちゃな弟ならともかく、おねえさんの自分がオネショなんかするわけないと思ったウェンディは、トイレに行かないまま寝てしまったのです。

もし、ピーターとティンカーベルがやって来ず、あのまま朝まで眠っていたら、ウェンディは間違いなく何年かぶりにシートにとくべつ大きな世界地図を作ってしまったでしょう。

お母さんに叱られたのでむしゃくしゃしていたウェンディはそのまま窓から空を飛んでネバーランドにやってきましたが——気付けば猛烈にオシッコがしたくなっていたのです。

「病気かい？ でも変だな。ネバーランドで風邪なんかひくわけないし。ねえウェンディ？」

「そ、そうね……」

「まあいいや。そろそろ行こうよ。とりあえず今日は向こうの山まで探検だ！！」

けれど、ピーターはそんなウェンディのことなんかまったく気にしてくれません。ピーターときたら自分のことしか喋らず、今日の遊びの算段ばかりしているのです。

（もお、ピーターってばデリカシーないんだからっ……気付いてくれたっていいじゃないっ）

ウェンディも年頃の女の子です、できればはっきりトイレに行きたいなんていいたくはありません。でも、我慢しようとしても、もうそう長く持ちそうにありません。もともとベッドの中でも朝まで我慢できそうになかったのですから、このままピクニックに出かけようものなら、間違いなく途中でオモラシをしてしまいます。

（っ……）

「よし、いこうウェンディ！！」

「ピーター、お願い、ちょっと待って！！」

おやつを食べ終えて飛び上がろうとしたピーターを、とうとう声に出してウェンディは呼び止めました。

「どうかしたのかいウェンディ？ ピクニックは嫌？」

「そうじゃないわ、その、えっと……その前に、ね、ちょっと——」

上手く言うことができず、ウェンディはかあっと顔を赤くして俯いてしまいます。

両手はパジャマの前に重ねて当てられたまま、もじもじそわそわと脚をくねらせるのをやめることもできませんでした。

「もう、いったいなんなんだい、ウェンディ。さっきからさ、おっかしいよ、キミってば」

顔をハテナマークでいっぱいにして、ピーターは首を捻るばかりです。ネバーランドの永遠の子供であるピーターは、そもそも誰かのことを考えたり案じたりというのがとても苦手なのです。だから、そんな自分の振る舞いがますますウェンディを恥ずかしがらせていることにも気付けません。

「ね、ねえピーター、その……」

ピーターにじっと見つめられ、ますますウェンディは言葉に詰まってしまいます。ぎゅうっとパジャマの股間を握り締めて、途切れ途切

れに言いました。

「あの……お、お手洗いは……どこ？」

「お手洗い？ なんだいそれ」

「と、トイレ……おトイレよ！！ わ、わたし、おトイレに行きたいのっ」

きょんと目を丸くするピーターに、ウエンディはとうとう怒鳴ってしまいました。お手洗いなんて、男の子のピーターには、そんな洒落た言い方は通じないのです。

（も、もおっ！！ ピーターのバカっ……！！）

こんな風にもじもじと腰を震わせてトイレの場所を聞けば、自分がオシッコを我慢していることなんか一発でバレてしまうでしょう。ハズカシさにウエンディは耳まで赤くなりながら、ピーターの答えを待ちます。

けれど、あろうことか、ピーターははんっ、と呆れたように鼻を鳴らして笑います。馬鹿なことを言っているのは、ウエンディだと言わんばかりでした。

「何言ってるんだいウエンディ？ ここは夢の国ネバーランドだよ？ ボクたち子供の、子供たちのための国。怖いことや嫌なことなんてなんにもない場所なんだ。だからトイレなんかもないに決まってるじゃないか！ あんな暗くて狭い場所、罰で閉じ込められる牢屋みたいなものだよ！！」

ネバーランドで暮らすようになる前の、まだ普通の子供だった頃のピーターにとっては、トイレなんてものは大切でもなんでもない場所でした。

悪いことをしたとき、ピーターはいつも家から離れたトイレに閉じ込められました。薄暗くて狭くて、寒くて、なんにもない場所。牢獄と同じように、外からかんぬきをかけられ、許してもらうまで外に出ることを許されない場所だったのです。

だからピーターはネバーランドにやってきた時、トイレを無くしてしまったのでした。幸いなことにピーターパンは男の子でしたし、女の子の友達もいなかったのも、トイレのことなんてさして気にしていなかったのです。

けれど、ウエンディには一大事でした。女の子にとって、トイレがないなんて死活問題です。

「牢屋って——そんな、困るじゃないっ！！」

「困らないさ！！ あんなの、なくたって全然困らないね！！」

「困るわよ、バカっ！！」

（——おトイレがないなんて、じゃ、じゃあ、わたしはどこでオシッコすればいいのよ！？）

ウエンディのおトイレの我慢の限界は着々と迫っています。おなかの中のオシッコの入れ物は、さっきから悲痛に叫びをあげていました。

ちょっとでも気を抜けば、下着にじゅわあっと熱いシズクが染み出してしまいそうです。ぶるぶると必死になって我慢を続け、出口を締め付ける『女の子』も、いつ集中が途切れてしまうかわかりません。

脚を交差させ、膝を重ねる切羽詰った姿勢で、ウエンディはピーターを問い詰めます。

「じゃあ、ピーターは、……その、……オシッコ、したくなったとき、どうするの？」

「オシッコ？ べつにどうもしないよ、その辺で適当に済ませればいいじゃないか」

なんでもないというように答えるピーター。それはそうです。男の子のピーターには、オシッコするのなんて簡単なことです。その気になればどこでだってオシッコができるのですから。

けれど、ウエンディはそうはいきません。なにしろ彼女は、女の子なのです。女の子がオシッコをするためにはさまざまな準備が必要

でした。なによりも、ピーターのように、女の子はオシッコをするところを見られて平気なわけがないのです。

「ははあん、ウエンディ、さては一人じゃ寂しいんだね？　ちょうどいいや、ボクもしたかったんだ。一緒に済ませちゃおうか」

「っ……ば、バカっ！！　何言ってんのよおっ！！」

「ぶっ！？　ウエンディ、い、痛いってば！？　なにをするのさ！！」

「バカっ、ヘンタイ！！　ピーターのバカっ！！！」

とんでもない提案に、ウエンディは反射的にジュースのグラスを掴んでピーターに投げつけました。まさか、ピーターと並んでいっしょにオシッコができるはずありません。

「バカ…、そんな、勝手にっ、だ、大体ね……ん、…んんう…っ！！」

けれどそうやって興奮したせいか、ますますウエンディはオシッコに行きたくなってしまいます。

「くうっ……はあ、はあっ……」

ぎゅっと身体をよじりながら、ウエンディは一生懸命ガマンをしました。オモラシをしてしまわないように、ありったけの力でオシッコの出口を押さえつけます。

ウエンディの攻撃がやんだのを見て、ピーターはようやく閉じていた目を開け、呆れたように肩をすくめました。

「なにをするんだよ、まったく——もういいや、ウエンディ、キミのことなんかしらないからね。今日はボクひとりで遊びにいくから！！」

ティンカーベルの魔法の粉を浴びて、ピーターはふわりと空に飛び上がりました。

そのまま空中で逆立ちして、ウエンディにあかんべーをします。

「混ぜてくれて言っても、一緒に遊んでなんかやらないからねっ！！」

そう言い残して、ピーターはひゅうんと夜空に飛んでいきました。ウエンディが『待って！』という間もありませんでした。

ひとり取り残されたウエンディは、途方にぐれてしまいます。

「……っ、ど、どうしようっ……」

ぐりと周りを見回してみますが、テーブルと椅子のほかには何も見当たりません。木苺のジュースとアイスクリームも、もうすっかり空っぽです。

「ああもうっ……と、とにかく——おトイレ、はやく……っ」

ピーターには腹は立ちましたが、ここでじっとしていてもはじまりません。一刻も早くトイレにいかねばなりません。パジャマのお尻をふりふりともじつかせながら、ウエンディは席を立ててトイレを探すことにしました。

けれど、ピーターの言葉どおり、どこにもトイレらしき場所は見付かりません。

「もうっ……おトイレがないなんて、そんなむちゃくちゃなことあっていいの！？　……あうっ……」

ネバーランドの支配者であるピーターが“ない”というのですから、本当にトイレはないのでしょう。ですが、それではウエンディはいつまで経ってもオシッコができないことになります。

弟たちならともかくも、まさか、おねえさんであるウエンディが、トイレ以外の場所で——たとえばその辺の物陰や、草むらの茂みでオシッコできるはずありません。

考えただけで、頭が煙を吹きそうです。

（んっ……ピーターは男の子だからわかってないんだわ……女の子にとって、おトイレがどれだけ大切な場所なのか……！！）

ピーターが子供であることにこんなにも苛立ちを覚えたのは、ウエンディにはこれが初めてでした。たしかにワガママでいうことを聞かない男の子ですが、それがこんなにも腹が立つなんて。

せめて大人の人なら、トイレをなくすなんてバカなことを考えることはないのでしょうか……

「……っ、そ、そうよ、そうだわ！！」

思わずしゃがみ込みそうになりながら、やってきた激しいオシッコの突撃をなんとか凌いだウェンディは、はっと思いついて顔を上げます。

そうです。このネバーランドにも、大人の人がいるではありませんか。

ピーターパンの宿命の敵、海賊フック船長。

確か前に、ウェンディがフック船長にさらわれた時のことでした。ウェンディを人質にして海賊船で酒盛りをしていた海賊の子分が、お酒を飲みすぎて、我慢できずにトイレに駆け込んでいったのを思い出したのです。

（フック船長に頼るなんて、普段なら考えられないことだけど……オモラシするよりはマシよ！！）

ウェンディは走り出しました。ティンカーベルがいればひとつ飛びなのでしょうが、あいにく今日はウェンディはひとりでした。

いつもフック船長とその海賊団が根城にしている西の入り江に、あの海賊船も停泊しているはずです。

「はうんっ……くうっ……」

（がまんよ……ガマンするの。船までの辛抱なんだからっ……！！）

もじもじと突き出したお尻を揺すり、よちよちとアヒルのように内股になりながら、ウェンディはくじけそうになる心を振るいたたせて、できる限りの全速力で急ぎます。

このネバーランドで、たったひとつだけのトイレを目指して。

「なあにい？ 誰かと思えば小娘、ピーターの仲間じゃねえか」

「う……ウェンディよ」

ただでさえ恐ろしい髭もじゃ片目の船長にギロリと睨みつけられて、ウェンディはすっかり震え上がってしまいました。眼帯からはみ出した大きな傷跡がうねり、鉤爪の片腕がぎらぎらと輝いてウェンディの顔の前に押し付けられます。

ここまで走ってくるのだけでふらふらになってしまった脚がすくみ、揺れる船の上ではうまく立っていらなくなって、ただでさえ限界の『女の子』がひっきりなしに悲鳴を上げます。もはや海賊たちの前だというのに隠すこともできず、ぎゅううーっ、とパジャマの上から脚の付け根を握り締め、ウェンディは泣き出しそうになってしまいます。そしてウェンディの『女の子』もいつ泣き出してもおかしくありませんでした。

「ふん、名前なんざどうでもいい。それより小娘、ピーターの小僧はどこだあ？」

「い、いないわ。わたし一人よ」

「……ほう、ひとりで乗り込んでくるたぁいい度胸じゃねえか。いったい俺様に何のようだ？」

「え、えっと……それは、その、……だから……っ」

女の子が大人たちの前でトイレを貸して欲しいなんていうことを口に出すだけでも恥ずかしいのに、海賊船にいるのはどいつもこいつも恐ろしい風貌の荒くれ者の海賊たちばかりなのです。子分の海賊たちからじろじろと見られて、ウェンディはますます行き場をな

くしてしまいます。

たとえ正直に言ったとしても、素直にトイレを貸してくれるとは思えませんでした。けれど、もう他に方法がないのです。

「——……れ……て」

「なんだ？！ 声がちゅちゅぞ！！ 聞こえねえ！！」

「……いれ、…して……って言うてるのっ。……お、……っこ……、なのっ……！！」

「はあ？ 全っ然聞こえねえぞ。小娘！！ このフック船長様を呼びつけておいて、まともにしゃべれねえのか？！」

フック船長に大きな声で怒鳴られ、ウエンディももうやけそでした。顔を真っ赤にして、叫びます。

「っ、うるさいわねオシッコよ！！ オシッコ漏れそうなの！！ トイレ貸してよって言うてるのよ！！」

「と、トイレ？ トイレって、あのトイレか？」

衝撃の告白に、海賊の子分たちがどよめきながら顔を見合わせます。

それはそうでしょう、そんなことのためにウエンディが単身海賊船に乗り込んでくるなど思ってもいなかったのですから。なんだかんだ言っても、彼ら海賊たちも夢の国ネバーランドの住人です。彼らは生まれた時からずっと大人で、わがままで無鉄砲なピーターパンを困らせるために、理不尽な大人として悪さを続けているのです。大悪党の海賊フック船長以下、海賊の子分たちが律儀にきちんとトイレを使っているのも、子供達のオネショやオモラシをからかい、叱るためなものでした。

彼らにとって子供というのは、トイレのしつけがなくて当然なのです。

だから、彼らはいまウエンディが顔を真っ赤にして、トイレでオシッコをしたがっている理由も、その訳も、気持ちも、よくわかっていないのでした。

「ふん、くだらねえ。ピーターと一緒にそこらですりゃあいじゃねえか」

「で、できるわけないでしょ！？ わたし、女の子なんだから！！」

あろうことか、仮にも大人のはずの海賊たちにピーターと同じことを言われて、ウエンディは驚きました。常日頃、女の子なんだからおしとやかにしなさい、と言われ続けているウエンディには、大人から男の子と同じようにしなさいなんて言われたことはありません。

けれど、海賊たちネバーランドの大人にとっては、ピーターもウエンディもおなじ子供なのです。だから女の子のウエンディにも男の子のピーターと同じようにすればいいとしか言えないのでした。

「ね、ねえお願いっ、はやくオシッコさせてえっ！！ ん、う、…も、もう漏れちゃうのっ！！ おねがい……くっ……お、おトイレ、はやく……！！」

足踏みをしながら必死に訴えるウエンディに、フック船長はふん、と鼻を鳴らします。

「ふん……まあいい。ただし、ここは俺様の船だ。当然、トイレだって俺様のものだ。俺様のものを使うんだから、使用料を払ってもうらうぞ。一回金貨百枚だ」

「な、なによそれ！？ そ、そんなにお金なんか持ってないわ、わたし……！！ あうっ……ね、ねえ、意地悪しないでよっ！！ ……ほんのちょっとオシッコするだけじゃないっ！！」

「なあに、払えないんならいいんだぜ？」

困惑するウエンディを見て、フック船長をはじめ、海賊たちがニヤニヤと笑いました。

大人というのは、子供にはよくわからない理由で子供を困らせ、怒り、どなりつけ、理不尽な理由をくっつけて叱るものです。ネバーランドの大人であるフック船長が、素直にウエンディの言うことを聞くはずありませんでした。

「なあに、使っちゃったら汚れるからな、掃除代みたいなもんだ」

「そ、そんな……あ、あつ……わ、わたしそんなに汚くしたりなんか、し、しないわよっ！！　っ、ちゃんと、じよ、上手におトイレ……使えるんだからっ！！」

「いや、ガキの言うことなんか信用できねえな。ガキはトイレのしつけがなってねえ。シヨンベンの始末もできねえもんなんだ」

「や、やめてよっ……あたし、ちゃんとオシッコできるもんっ！！　ねえ、いいでしょ、お願いっ！！　すこしだけ、ちょっとだけでもいいから、お、オシッコさせてよおっ……」

「はあん、だめだな。なあ手前えら？」

「おう、船長のいうとおりだぜ！！」

「ダメだダメだ！！」

「使わせらんねえな！！」

「そんな……お、おねがいっ、おねがいます……オシッコさせて……え……！！　もう、もう本当に出ちゃうのっ、オシッコでちゃうのっ！！　ちょっとだけ、トイレ、おトイレ貸してくださいっ。おねがい、は、半分だけでもいいからっ、お、おしっこ、オシッコ……オシッコお……っ！！」

「半分？　じゃあ金貨50枚にまけてやらあ」

がはははは、と海賊たちが一斉に笑いました。とうとう動けなくなってしまったウェンディが、ぺたんとその場にしゃがみ込んでしまします。

その時でした。

「フック船長！！　ウェンディをいじめるな！！」

勇ましい声と共に、颯爽と風を切ってピーター・パンが現れたのです。ピーターは華麗に空中でくるくると回ると、海賊船のマストに飛び乗ります。その手にはすでに剣が握られていました。

「ぬう、現れやがったなピーター・パンの小僧め！！　手前えら、なにをぼーっとしてやがる、やっちまえ！！」

フック船長が叫びました。海賊たちが口々に戦いの声を上げ、一斉にマストに群がります。

けれど、身軽なピーターはマストを登ってくる海賊たちをふんづけ、けとばし、ひらりひらりと身をかわして、たちまちのうちにフック船長のいる甲板までやってきます。

「ウェンディ、もう大丈夫だよ！！　すぐに助けてあげるからね！！」

「あ……や、あの、ち、違うの、ピーター……だめ……」

いつもなら、ピーターに駆け寄るところです。けれど今のウェンディは、それすらもできません。いいえむしろ、今ピーターに来られてはとても困るのです。

けれど、ピーターはもちろん聞いていません。

「フック船長め、油断もすきもない！！　ウェンディに酷いことをしたな！！」

「ふん、なんだか知らねえがちょうどいい、今日こそ決着をつけてやるぞピーター・パン！！　ふんじばって海に投げ込んでやる！！」

ぎらりと鉤爪を掲げ、剣を抜くフック船長。ピーターも剣を構えて、やあっとばかりに斬りかかります。

きん、きいん、かきいんっ！！

——この二人が戦うのは、もう一体何百回目になるのでしょうか。けれど、いかな大海賊フック船長といえども、ネバーランドの永遠の少年、ピーター・パンにかなうはずがないのです。ひよいとフック船長の剣を受け止めたピーターは、そのままひよいと空に飛び上がり、船長の背中を思い切り蹴飛ばしました。

どうと音を立てて、船長は甲板に突っ伏し、のびてしまいます。

「せ、船長がやられた！！」

「逃げろっ！！」

旗色が悪いと見るや、海賊の子分たちはいちもくさんに船を逃げ出してゆきます。情けない大人たちの背中をふふんと胸を張って見送り、ピーターはウエンディに駆け寄りました。

「大丈夫だったかいウエンディ、怪我はない？」

「あ……あの、まってピーター、あ、あのね、あのっ」

「戻ってみたいなくなってたから心配したんだよ。もう平気だ、フック船長はやつけた。帰ろうウエンディ、ネバーランドに」

「あ、やだ、ま、待ってっ、待ってえっ」

ウエンディはピーターの手を振り払おうとしましたが、うまくいきません。好き勝手にオシッコの準備を始めようとする下半身を押さえ込むので精一杯です。きつく締め付けていたはずのオシッコの出口が自然に緩み出し、パンツの中にぶしゅっぶしゅっとオシッコを吹き出します。

じわじわと脚の間に広がる熱い感触に、ウエンディは背中を震わせました。

「さあ、捕まって、ウエンディ」

ティンカーベルの魔法の粉で、空を飛べるようになっているピーターに手を掴まれ、ウエンディの身体が甲板の上からふわりと浮かび上がります。同時にぞわあっとイケナイ感覚がウエンディの背中を這い登りました。

（や、やだっ……っ、トイレ——っ）

宙に浮かぶウエンディの前から、海賊船が見る見る遠ざかってゆきます。支えを失ったウエンディの脚ががくがくと震えだしました。

また、あのトイレのない国に帰らなければならない——。

ウエンディの顔がすうっと青ざめてゆきます。

すっかり海賊がいなくなったいまこそが、千載一遇のチャンスのはずでした。ネバーランドでたったひとつのトイレは、すぐそこにあるのです。それなのに——

「は、離してっ、ピーターっ、だめ、だめええ！！」

「うわあ！？ ウエンディ、暴れら危ないよっ」

これから帰る先にはトイレはありません。つまり、ウエンディは、お外の物陰や草むらの茂みでオシッコをしなければなりません。

（そ、そんなのイヤあっ……！！）

「と、トイレっ、ちゃんとしたおトイレでっ、お、オシッコ、オシッコさせてえええ……っ！！！！」

とうとうウエンディは叫んでしまいました。

遠ざかるトイレに戻ろうともがくウエンディを、しかしピーターは離しません。それどころか、暴れ出したウエンディが落ちてしまわないようにもっとしっかりと、ぎゅうっと手を握り締めます。

「ウエンディっ！？」

「——、あ、……、あ、…あっ、あ。あっ、…あ、ああっあ、っ……」

ウエンディが丸く口をあけて『あっ』と言うたびに、じゅわっ、じゅじゅわっとオシッコが吹き出し、下着に熱い染みが広がってゆきます。ぷくっと膨らんだオシッコの出口が立て続けに音を立て、断続的にほとばしる熱い水流が閉じ合わせた腿の内側を溢れ、パジャマを水浸しにしてゆきました。

ウェンディは形振り構わずに自由になる片手で、必死に前を押さえますが、もはやオシッコは止まりません。もともと両手を重ね押さえて、ぎりぎりなんとか我慢できていたのですから、片手だけでは吹き出すオシッコを押さえきれないのです。

パジャマのズボンが濡らし、足元まで滴るオシッコが、ぼたぼたばちゃばちゃと海賊船の甲板に飛び散ります。

じわあ、とウェンディの目元にも涙が浮かびました。

「……あ、あの、ウェンディ……？」

「バカっ、見るな、見ないでよおっ……」

ひくっとしゃくりあげながら、ウェンディは叫びます。顔は涙でぐしゃぐしゃで、尖った八重歯を見せて大声でピーターを怒鳴りつけました。

まるで蛇口が壊れたように、ウェンディのオシッコはじゅじゅじゅじゅううと激しく勢い良く吹き出し、まったく衰える様子がありません。

下着にぶつかって跳ね返り、おしりをじわじわと満たしてゆく熱い液体。我慢を続けていたオシッコは、足元へと激しく流れ落ちてゆきます。パジャマに広がる染みは足の間ばかりかお尻のほう、さらにはおなかの下まで広がっていました。

じよろじよろとはしたくない音を響かせ、ますます激しく出続けるウェンディのオシッコに、ピーターは息をするのも忘れて見入っていました。女の子のオモラシがこんなにも素敵なものだなんて、ピーターはまったく考えたこともなかったのです。

それは、ピーターがはじめて、“女の子”を意識した瞬間でもありました。

「バカアっ……見るなって、言ってるじゃないっ……」

オシッコが止まってもなお、じいっと濡れたパジャマを見つめつづけるピーターの頭を、泣きじゃくりながら、ウェンディはぼかぼかと殴り続けるのです。

——めでたし、めでたし。

(初出：おもしろ特区 S S図書館 2008/12/01)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: トイレの多い子の話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 01/01/2009 02:53:49

BODY:

事故による渋滞に巻き込まれ、高速の料金所の前でうごけなくなったワンボックスの中。羽田霧香は、3人の友人達と共にかつてない窮地に立たされていた。

ワンボックスには霧香の友人である4人のクラスメイトと、運転手兼保護者役の親友の姉、三佳子が乗っている。予定にまったくない長時間の拘束によって、車内の少女たちは、迫り来る危機に小さく身体を震わせていた。

「あー、こりゃダメだね……ぜんぜん動かないや」

三佳子が誰に言うともなくつぶやくと、後部座席の少女たちの表情が形容しがたい緊張に彩られてゆく。互いにそれとなく相手の様子を窺い、視線をそらしながら、そっと座席の上で脚を揃える。

言葉すくなく目を伏せながら、しかし霧香たちは何よりも雄弁に、“そのこと”を語り合っている。なんとも不可思議な光景であった。

「ねえ、美希、佐奈ちゃん、霧香ちゃん、だいじょうぶ？ ……無理そうだったら早めに言ってね。遠慮しないでいいからさ。——芽衣ちゃんもね」

「[[[[「……………」]]]]」

できるだけ軽い調子をつとめて三佳子と言うが、霧香たち4人の反応は思わしくない。それも当然だろう。霧香たちを苦しめているモノは、そう簡単にどうこう済ませられる類のものではない。

参ったな、と頭をかいて、三佳子はハンドルに体重を預ける。

この微妙な雰囲気は三佳子にも耐えがたいものであった。

(あーもう、女の子って不便だねえ……ホント……)

それが三佳子の偽らざる感想だった。

少女達は一樣に、背もたれからわずかに浮かせた背中を小さく左右に揺らし、緊張させた腰を軽く動かし続けている。
内腿には数秒に一回の割合で力の籠り、揃えられた膝がきゅっと押し付け合わされる。そのたびにベロアから靴のかかとが浮き、爪先がぐりぐりと床を叩く。

なんとも不自然な姿は、耐え難い苦痛を前に、精一杯のさりげなさを装うとする少女たちのいじらしい努力ゆえであった。

本当は皆、大きく腰を揺すり脚を踏み鳴らし、ぎゅうぎゅうと前を押さえたいのを必死に我慢しているのだった。

そう、例外なく彼女たちを襲っているのは、無慈悲な大自然の摂理——尿意である。

純心無垢な少女達の、ほっそりとした脚の付け根。

乙女の純心と恥じらいを象徴する清潔な白い下着の中に封印されたイケナイ液体は、危険水域を超えていや増し、いまにも一番脆いところを突き破って外に溢れ出そうとしていた。

「んっ……」

俯いた少女の唇からこぼれた可憐な呻きが、小さく、けれどはっきりと車内に響く。それは何よりもはっきりと、彼女たちの心の声——『おしっこしたい』という本能に忠実な欲求を訴えていた。

冬休みを利用した友達同士での遊園地。ほんの数時間前までは楽しげなお喋りの響いていた車内は、いまや気まずい沈黙に包まれている。

時折誰かがもぞもぞと身体をよじり、軽く唇をかんで小さな呻きを漏らしてはため息を繰り返す。

少々暖房の効きすぎた車内で、皆は浮かれ気分のままに次々と水分を口にしていた。ミネラルウォーター、お茶、ジュース、ココア、コーヒー、清涼飲料——5人分を合計すれば500mlペットボトルに換算して8本を超える量が、すでに少女たちの体内へと流し込まれている。

コーヒーやお茶の利尿作用や、清涼飲料の水分吸収効率など、少女たちの身体のことなど考えていない暴挙ではあったが、サービスエリアの利用や目的地まで1時間という距離から、誰もそれを深刻なこととは考えていなかった。

だが、4車線の真ん中、左右を渋滞の車に挟まれて身動きの取れないという事態のまま2時間以上が経過し、摂取された水分は少女たちの健康で活発な循環器を経て丹念に抽出され、いまや彼女たちの身体の一点——その慎ましやかなスカートと下着に覆われた大切な部分へと注ぎ込まれていた。

「んっ……ふう……」

後部座席のシートでもじもじと太腿をすり合わせ、美希が小さく呻く。快活そうなショートカットの下に覗く表情は硬く、緊張に張り詰めていた。4人の中ではムードメーカーの彼女だが、姉の三佳子に軽口で応じるいつもの元気は影を潜めている。

下腹部を激しく圧迫する尿意に耐えかねて、持ち前の快活さもどこかに吹き飛んでしまっているようだった。

「……あっ……」

その隣、小さく口を明けたまま、俯いて細い声を上げ、スカートの前を押さえているのは佐奈。飾り気なく髪留めのゴムで肩までの髪を縛ったいちばん大人しい雰囲気彼女は、もはや口を開くのも難しいほどに羞恥と屈辱に表情を曇らせている。わずかな身じろぎがそのまま大失敗の引き金になることを悟っているのだ。

特に今、佐奈は一番の危機的状況にあった。何度となく訪れていた尿意の“波”が、さらに激しくなって佐奈の“女の子”へと押し寄せてきているのだ。物静かな容貌の少女は、友達の姉のものである車を汚すまいと必死になって重ねた両手を下腹部に押し当て、脚の付け根をぎゅうぎゅうとシートに押し付けている。

「——」

そんな中で、やや様子が異なるのは佐奈の向かいに座る芽衣だ。切羽詰った他の二人とは明らかに違う様子で、できる限り車内を見ないように、視線を窓の向こうに固定している。その頬は薄赤く、見れば耳までもほんのりと赤く上気している。そわそわとした落ち着きのなさはないものの、嘘をついて言い逃れをしたときのような、居心地の悪さを窺わせる様子だった。

少女の足元には、硬く封を閉じられた小さなパックが転がっている。

ぱんぱんに膨らんで、いまにも弾けそうなその正体は、使用済みの携帯トイレだった。半透明のパックには薄黄色い色を透かし、ラベルに記された『大容量、600ml』の宣伝文句を覗かせている。

ついさっき——芽衣は、車内で一番最初に音を上げて、この携帯トイレにおしっこを済ませたばかりなのである。密閉された車内、どこに隠れることもできず、すぐ隣の席で親友が、小さな袋を股間に押し当てておしっこをするのを目の当たりにしてしまった皆の間には、口にできない微妙な雰囲気ができあがっていた。

もちろんすぐに換気を済ませたものの、まだほんのわずか——おしっこの匂いは車内に籠っている。それはこの渋滞の中、動けなくなったワンボックスをトイレと錯覚させるに十分なものだ。いまだ少女のプライドを守り、我慢を続けている残る3人にはまさに拷問とも言える仕打ちなのである。

「……………」

芽衣の排泄はスカートの下に隠れて行われてはいたものの、小さな袋に水音を立てて注ぎ込まれる大量のおしっこの音や匂いは、ただでさえ辛い少女たちをより一層の窮地へと追い込んでいく。

自分も我慢できなくなればやがて同じことをしなければならぬという羞恥や、もう早く楽になってしまいたいという気持ち。もし万が一失敗したらどうしようという不安。多感な年頃の少女たちの胸を、複雑に入り混じった感情が渦巻いていた。

さらに、芽衣もまた言い知れぬ恐怖を感じている。確かに携帯トイレというアイテムで九死に一生を得たものの、本当のトイレではない場所での排泄は無用な緊張を強いて、完全にすっきりした状況とはいえないのだ。

からからの喉にコップ半分くらいのぬるま湯を飲んだような気分で、そう遠くないうちにまたトイレに行きたくなるような不安が頭から離れない。

そしてそれは、芽衣の摂取した水分や車内の状況を鑑みるに、間違いのない事実であった。

そして——

ぎゅっ、とドアの手摺を握り締めた霧香の手に、ひくっと力がこもる。彼女もまた体の奥底から押し寄せてくる下品な衝動と戦っていた。

ブラウスはほんのわずか、緩やかな曲線を描き、少女が必死に耐えているものの存在を教えている。

けれど——霧香の場合、ほかの二人に比べてもさらに事情が違った。

「……ふぁっ……」

おしりの上から背中に向かって、ぞわぞわとした感覚が這い登る。下半身を占領した尿意は、霧香の身体を徐々に支配しつつある。

(やだ……………)

おなかの中をたぐたぐと揺れる水面はもはや“入れ物”の縁のすぐ手前まで達しており、いつ限界になってもおかしくない。霧香の視線が助けを求めるように車内をさまよい、シートに置かれたレジ袋に向けられる。

コンビニのレジ袋には、三佳子が念のためにと用意した携帯トイレが入っていた。芽衣の分を除いた3つの携帯トイレ——ひとりひとつの割り当てで残る未使用の携帯トイレは、少女たちのおしっこ我慢の最終手段として、最悪の事態からの救済を約束してくれている。

くれている、はずだった。

(どうしよう……もう、我慢できないっ……でちゃう、オシッコ出ちゃう……っ)

たとえ友人たちに見られても、この小さな袋を使っておしっこを済ませれば、車の中でのオモラシという悲劇だけは回避できる。そのはずだった。

(どうしよう、あ、あれ、使って……ちょっとだけでもしちゃった方が……でも、途中で止められる……？　っ、む、無理だよお……)

霧香のひそかな悩み。それは、人並み外れて——トイレが“多い”ことだった。

通常、成人女性の膀胱のサイズは、平均して300～400ml。霧香の年齢ならば、それよりもさらに少ないのが普通である。これらには無論個人差はあるが、その半分に達すると尿意を覚えることになる。訓練や生まれつきの体質として、これらはある程度“大きく”することが可能だ。

あまりトイレが近いようであるならば、排泄を我慢することでトレーニングをし、ある程度の量までおしっこを溜めておけるようになる治療法は、実際に行なわれている。

だが、霧香はその逆で、生まれつきトイレが非常に“多い”子だった。

体質的な問題であることは霧香も理解している。極端に循環器系が活発であるためか、霧香の身体は通常よりも遥かに多いおしっこを作り出してしまふのだ。特段、さして多く水分を摂取するわけでもないのに、霧香の排尿量は同年代の少女の倍ほどになる。

そのままではトイレから離れられないような生活を送るしかないのだが——そうした体質に適応したためか、霧香はそうした常人に倍するおしっこを蓄えるための膀胱のサイズも、また人並みはずれて大きかったのだ。

そのため、霧香がトイレに行く回数はさほど多くはない。普通の子に比べるとむしろ少ないかもしれないくらいだ。

膀胱のサイズが大きいということは、それだけ尿意を感じるのも遅いということになり、いざそのためにトイレに入ったら霧香のおしっこの迫力は凄まじい。

なにしろ、霧香がちょっとトイレに行きたいな、と思う頃には、普通の少女の3倍——900から1000mlのおしっこが膀胱に蓄えられてしまっている。

クラスメイトと同じようにトイレに入っても、ちよろちよろ、良くてもしょおおおーっ、という慎ましやかな友人たちの排泄音に比べて、霧香の音といえば——

ぶじょおぼつぼぼぼぼぼぼ、じょぼぼぼぼぼおおおおーっ！！

はたして、この全開にした蛇口に繋いだホースの先を潰し、便器の中に水流をぶちまけたような下品極まりない水音が、この可憐な少女の股間から噴出するおしっここの音だと思い至る人間がどれほどいることだろう。

音消しの水を流しても、恐ろしいほどにはっきりと自己主張をしてのけるほどの激しい水流はまったく誤魔化せない。ひしゃげた排泄孔を波打たせて進むおしっこは、猛烈な勢いで便器の中の水面を打ち、濁流のように波打ち、激しく飛沫すら上げて四方に飛び散る羽目になる。

洋式トイレではお尻がびしょびしょになるほどに跳ね返りを飛ばし、和式トイレを使おうものならどれだけ慎重にしている、周囲の床はおろか壁までをびちゃびちゃに汚してしまう——およそ少女の排泄としてはありえない、下劣な“おしっこ”が、霧香の悩みの種だった。

できるかぎり静かにおしっこする練習というものを、霧香は欠かしたことがない。しかし生来、大量のおしっこに対応している霧香の身体はに、そろそろおしっこの出口を絞りながら、ちよろちよろという静かな勢いに調節して、長く長くおしっこをするのは激しい苦痛なのだった。

実際、普通の女の子のような慎ましやかな排泄では全部出し終わるのに何分かかるものかわかったものではない。だから気がねなく、本当の勢いで『おしっこ』をできる家のトイレが、霧香にとって唯一安堵できる場所だった。

霧香くらいの年齢であると、学内における女子のコミュニティにおいて、様々な行為はコミュニケーションの一環として共同で行われるのが普通である。霧香も休憩時間などには、友人達に誘われて一緒にトイレに向かうこともしばしばだ。しかし、学校の女子トイレは防音も完全ではなく、音消しも設置されていないことがしばしばだ。

それほど分厚くはないトイレの壁ごしに音が聞こえるのをためらうあまり、霧香は個室に入っておきながらおしっこを済ませず、ただ水だけを流してトイレを後にすることもしばしばだった。

だが、ただでさえ人並み外れて多く抽出されるおしっこは、そうやって霧香が我慢すればするほどさらになみなみと少女の下腹部の入れ物を満たし、ずっしりと下腹部に重く圧迫してしまう。そうなればなるほど、いざ用を足す段になっておしっこはさらに激しく多いものとなり、ますます霧香から排泄の機会を奪ってしまうのだった。

一度、いったいどれくらい我慢できるのだろうかと思い、霧香は後ろ暗い好奇心のまま、その量を測ってみたことがある。その結果に、霧香は馬鹿なことをしたと酷く後悔していた。

お風呂場で用意した、廃棄予定の古い洗面器をトイレの代わりに、霧香がぱんぱんに膨らんでいたおなかを空っぽになるまですっきりさせると——そこに溜まったおしっこはいまにもそこから溢れんばかりという——恐ろしい有様になっていた。考えたくもないが、あの時の量はおそらく2リットルを超えていただろう。

あれからまた時間が経って、霧香はさらに我慢できるようになっている事は間違いない。たぶんいま現在、霧香が我慢している量は、それよりもまだ多いのだ。

だから——

携帯トイレなどという、あのちゃちな入れ物程度では、とてもではないけれど霧香のおしっこは全部おさまるわけがないのだ。

だが、霧香の我慢はいよいよ限界に達しつつある。ただでさえ敏感な身体は、普段飲みなれないお茶やコーヒー、紅茶の利尿作用にてきめんに反応していた。膨らんだ膀胱は外から万力でぐいぐいと締め付けられるような感覚すら覚え、いつ水門が崩壊してもおかしくない。

「だ……だめ……え」

天井知らずに高まり続ける尿意に、霧香はとうとう音を上げてしまう。

他の皆は揃って、次に携帯トイレを使い始めるのはもうどうみても余裕のない佐奈だろうと思っていたところだったので、霧香のギブアップは軽い驚きをもって皆に迎えられる。

なにしろ、佐奈はさっきから胸元にぎゅっと形態トイレのバックを握り締めて、神様に祈るような格好をしていたのだ。

だから、その芽衣も意外なように霧香を見上げる。

「霧香ちゃん、うん、無理しないで。恥ずかしいことじゃないから——気にしないでいいよ。ね？」

三佳子のフォローは、しかし繊細な少女たちの羞恥心を和らげる役にはあまり立たなかった。ことさらに微妙な空気になった中、芽衣がおずおずとレジ袋の中から新しい形態トイレを取り出す。

「あの、霧香、これ——」

だが。

未使用の携帯トイレ、我慢の限界のおしっこを受け止める専用の入れ物を、霧香は受け取ろうとはしなかった。

「霧香？ ねえ……」

不安げに首を傾げる芽衣に対し、霧香は小さく首を左右に振る。

「え、ええとっ……」

「ねえ、霧香ちゃん、恥ずかしいかもしれないけど、でも外でおしっこなんかできないでしょ？ 我慢して——」

「ち、違うのっ！！」

三佳子の言葉を遮って、霧香は芽衣の服の袖を掴んだ。

「そ、そっちじゃないの……」

「え……？ でも霧香、その……、お、おしっこ……だよな？」

「っ……違うの、そ、そうじゃなくて……っ」

芽衣にも、他のみんなにも、霧香の意図はもどかしいほどに通じていない。仕方のないことではあるが、それを口にするのは霧香にはあまりにも辛いことだった。

しかしこのまま車内を汚してしまうわけにはいかない。だって——

「そ、それじゃないの！！ それじゃ、ダメなのっ」

恥も外聞もなくして下半身をくねくねとよじり合わせながら、霧香は真っ赤になって声を絞り出した。

「そんなちっちゃいのじゃなくて、そ、そっちの——ビニール袋！！」

おしっこのための入れ物ではなくて、買い物に使う白いレジ袋。霧香が欲しいのはそれだった。

「え？ ……こんなの、どうするの？」

きょんと芽衣が目を瞬かせる。美希も佐奈も目を丸くしていた。

「え、えっと、霧香ちゃん、気分悪い、とか？」

「……霧香？」

「ち、違うのっ！！ わ、わたし、それに“する”から！！ っ——そ、それじゃなきゃおしっこ、できないのっ！！ そんな携帯トイレなんかじゃ、ぜったいに全部出せないから……っ！！」

自分がガマンしているおしっこが、どれほどのものか。自分のトイレが、どれだけすさまじくて激しくて下品ではしたないものであるのか。霧香は声をかすれさせて訴えた。

大容量 600ml。ずしんと霧香の膀胱を膨らませたおしっこを受け止めるには、その程度の当たり前な大きさではとても間に合わない。霧香のおしっこタンクを満杯にする恥ずかしい液体は、携帯トイレどころかその入っていたビニール袋を一杯にしてもおかしくないレベルなのだ。

「え……それって」

「ご、ごめん、もうダメ……おねがい、あっち向いてて……！！」

霧香は立ち上がるなり芽衣の手からもぎ取ったビニール袋の口をがばあっと広げ、スカートを引き上げ下着を膝下までひきずり下ろす。

ワンボックスの中で大きく下半身を丸出しにして、膨らんだおなかの下、いまにも爆発しそうな股間に、白いビニール袋があてがわれた。

思春期の女の子として、決して許容できようはずもない、“ビニール袋”へのおしっこ——しかしそれでも、オモラシよりはマシだ。今の霧香には他の選択肢はない。

本当なら、ちゃんとしゃがみ込んで、見えないようにおしっこをはじめるべきなのは霧香も理解している。だが、そんな不安定な姿勢では、絶対におしっこをビニール袋の中に納めきれず、床にこぼし撒き散らしてしまうだろうことは疑うべくもない。

「いやあ……っ！！ でる、でるうっ……っ！！」

引き攣れたような叫びを皮切りに、おとなしく縮こまっていた排泄孔が数度震えると、そのまま猛烈な勢いでおしっこを吹き出した。

——ッ、——ッ、——ッ！！！！

霧香は唇を噛み締め、俯いて、その猛烈な音を意識の外に閉め出した。あまりにも激しい、消防車の放水のような、触れただけで手の指くらいなら千切れてしまいそうな高水圧の水流が、激しい飛沫を迸らせて、ビニール袋の内側に激突する。

たちまちのうちに白いビニール袋を膨らませる薄黄色の液体は、激しく水面を泡立たせ、ビニール袋の中をずしりと重く押し広げ、あっという間に一杯にしてゆく。

——ッ、——ッ、——ッ、——ッ！！！！

「……………っ！？」

目の前で繰り広げられる超大迫力の排泄シーンに、友人たちが言葉を失って立ち尽くしている。誰も、霧香のこんな姿を知りは

しないのだ。見るなというほうが無理なほど、その排泄音も勢いも凄まじい。

なにしろ——締め切った車内の外まで、霧香のおしっこの音は響くほど。左右の車が突然の異音に不審に思って、霧香たちの乗るワンボックスを覗き込もうとするほどだった。

薄いスモークでは完全に遮りきれず、霧香のビニール袋へのおしっこは、たちまちのうちに周囲の車に乗る人々にも知るところとなってしまう。

しかし、もう堪えきれないおしっこを中断するのは不可能だ。

ずっしりと持ち手が指に食い込んでゆく。安っぽいレジ袋では、霧香の膀胱と同じ役割をするだけの耐久力はなかった。決して小さくはないビニール袋の容量が半分を超えてなお、霧香のおしっこはまるで衰えない。

「う、うそ、そんなに——ガマンしてたの？ 霧香……」

「っ……………！！」

呆然とした美希の呟きが、霧香の羞恥心を激しくえぐる。

特別おしっこのできやすい循環器と、頻繁なトイレを少しでも自由にしようと適応した膀胱が産んだ、特別性の霧香の身体。

携帯トイレでは、残りの3つ全部、佐奈と美希のぶんを使っても入りきらないだろう大量のおしっこは、ビニール袋をほぼ完全に一杯にして、ようやく弱まり始める。

おさまってゆく下半身にわずかに安堵を覚えながら、両手指にのしかかる猛烈な重さに、霧香は声を殺しながらなんどもしゃくりあげていた。

その量といったら、リットルで数えたほうがはるかに早いだろう。

大容量 6 0 0 m l ——むなくもそんな文字を書いた包装の、未使用の携帯トイレが——霧香の足元にすどん、と落ちた。

(初出：書き下ろし 2009/01/01)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 公爵令嬢のお話・2
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 03/15/2009 20:02:13

BODY:

ふらふらと当てもなくさま迷っていたリミエルが、森の中に小さな広場を見つけたのはそのすぐ後だった。力の入らない足を引きずって馬車に戻ろうとしていたとき、少女の耳は調子はずれな歌を聞きつけたのである。

「あ、あれは……？」

そこは、木々を切り倒して作られた広場だった。いくつもの切り株を残した広場には、夕日が差し込み、小さな小屋を照らしている。丸太を組み合わせて作られた小屋は、煙突から小さな煙を吐き出し、そこに誰かが住んでいることをはっきりと示していた。

無人と思っていた森の中、思わぬものをみつけリミエルは小屋のそばに立人影に目を奪われた。

そこには、己を手に薪割りをする男の姿があった。

無精髭を生やした大柄な男は、みすばらしい服の袖をまくって、大して上手くもない歌を妙な節回しで歌いながら、傍らに積み上げられた丸太をリズムよく割っている。

「……………」

木陰から男の様子を覗き見つつ、リミエルの心は震えていた。

人が住んでいる——つまり、そこには生活の場がある。リミエルが渴望する、木こりも人間であるのだから、当然食事もあるはずだろう。つまり、恥ずかしい排泄のための小部屋が、あそこには用意されているに違いないのだ。

(ど、どうしよう……)

わずかな小康状態を保っていた下腹部が、再び活性化の兆しを見せていた。次第に切迫しはじめた尿意に小刻みに膝をこすり合わせ、リミエルは自問する。

足元に青々と茂る草むらと、むき出しの黒土。森とは言え人の手の入った木々の間は視線を覆い隠すようなものは少ない。ここで勇気を出してしゃがみ込んで、用を足すべきか——それとも。

あの木こりにわけを話して——トイレを借りるか？

(でも、っ……)

森の中で、いかにも粗野で乱暴そうな男に話しかけるのは、公爵令嬢ならずとも強い抵抗感があった。父や叔父たちに比べても、毛むくじゃらでむき出しの二の腕は丸太のように太く、背も見上げるほどに高い。日に焼けた赤ら顔は伝説に出てくる大鬼のよ

うで、言葉が通じるのかも怪しく思える。

そんな相手に、うまく話が通じるのか、リミエルははなはだ疑問だった。しかし、トイレを借りるのであれば——声をかけないわけにはいかない。

(——っ)

想像をめぐらせたリミエルは、ざわめく下腹部にぎゅっと手を添えた。

消え入りそうな声で、ありったけの勇気を振り絞り。

おしとやかな深層の令嬢がたった一人、息を荒げドレスの裾を乱して現れ、しかも切なげに腰を揺すりながらトイレの場所を尋ねる。ひっきりなしに擦り合わされている膝は、押さえ込もうとしてもままならない。むしろじっとしていこうという方が無理だ。

そうなれば、あの男にもリミエルがおしっこを我慢していることがはっきりと知られてしまう。乙女の秘密のティーポットに限界まで注がれた恥ずかしい熱湯や、噴出をこらえるべくくねくねと揺すられる腰、もじもじと擦り合わされる膝、所在無げに握り締められる手のひら、赤くなった顔——その全てを告白し、白日に晒すも同じことだ。

(い、いや……っ)

想像しただけで、公爵令嬢の頭は沸騰しかけていた。

とても無理、不可能、できない相談である。

仮にも公爵家の令嬢が、身分を明かすも同然の格好で見ず知らずの男の家を訪れ、あろうことか我慢できないとトイレを借り、そこでおしっこを済ませる——格好の醜聞だ。

それこそ、もし噂にでもなればいい年をして我慢できなかったことを理由に、何をされるかわかったものではない。

(……うっ……ああ……っ)

恐怖に背筋が竦む。足元が小刻みに揺れる。

羞恥と排泄欲、乙女のプライドと生理的な限界。

手を伸ばせば届きそうな所にある排泄のための場所、正しくおしっこを済ませるために作られた施設——それを目の前に、リミエルの胸中では激しい葛藤が沸き起こっていた。

「んっ……」

ぶるぶる、と腰が震える。ちくちくと乙女のティーポットを揺さぶる尿意が、一刻の猶予もないことを改めて強調した。

いまはティーポットに辛うじて収まっている羞恥の液体も、またぐらぐらと沸騰を始めようとしている。縁を乗り越え溢れんばかりに荒れ狂うのは時間の問題だった。

(あ、あっ……)

『ちゃんとしたトイレ』の抗いようのない誘惑が、公爵令嬢を招く。

いつしか、リミエルの足は知らず、木ごりのいる広場へと踏み出していた。

「あ……あのッ……」

渴いた喉で、リミエルは声を振り絞る。

そわそわと落ちつかない下半身をくねらせながら、ぴったりと寄せられた膝が小刻みに震えている。一刻の猶予もないのをひた隠し、一片たりと覗かせまいとしているのだが、もはやおしっこが出そうではないのは誰の目にも明らかであった。

「ごめんなさい——わ、わたし、り、リミエルって……いいます……そ、そのっ、ああっ」

挨拶の途中で突然危なくなり、びく！ と硬直してしまう。ぐいぐいと腰をよじり、幼い令嬢は大柄な男の前で、必死に言葉を紡ぐ。

「と、——と、トイレ——お、お手洗いを……お借りしても——いいでしょうか……ッ」

「ああん？ なんだ、お前え」

仕事を中断させられた木こりは、野太い声を上げて斧を下ろし、無遠慮な視線でリミエルを眺め回す。

それはまるで値踏みをするような無礼極まりない視線だった。だがリミエルにはそれを咎めることはできない。近くで見上げる男はまるで山のように大きく、力強い腕でつかまれるだけで少女の身体はへし折られてしまいそうだった。

すぐ間近には、大きな丸太を景気良く割っていた斧まである。少しでも男の機嫌を損ねれば、何をされてしまうか解らないのだ。

「す、すいません——でも、そのっ、お願いしますっ……お、お手洗いを……か、貸して、ください……っ、も、もう、が——」

（が、がまん、できないんですっ……！！）

思わず口を突いて出そうになった限界を告げる言葉をのみこんで、リミエルは再度男に懇願する。

「お手洗い？ トイレって、便所のこつだかあ？」

「っ——」

「なんだあ、いざなり出てきて便所があ？ こっばずかしい娘だなや。なんだべそつだらぐねぐねして、お前え、家までションベンも辛抱できねえのかあ？ ガキじゃあるめえによお。がつははっ」

（……っ）

聞き取るのも難しいほどの酷い訛りで、男は汚れた歯をむき出しにして笑った。唾を飛ばし、下品に目を歪めた男は、土と埃で汚れた手でフケにまみれたぼさぼさの頭を掻き毟る。

（い、嫌……あ）

公爵令嬢の健気な決意は一瞬で揺らぎ、リミエルはこの男に声をかけてしまったことを後悔した。やはりこの男は大鬼なのかもしれない。迂闊に近づいた自分を取って食らう化け物なのかもしれない。おとぎ話なのだと思っただけでも、リミエルは半分以上本気で、そんなことまで考えてしまう。

「ごのへん滅多に人も来ねえのに、どこから来たべお前え？ 家は近えのが？ 我慢できねえだか？」

男の奇異の視線が、隠す風もなくリミエルの股間に向けられる。ドレスの上から肌に突き刺さる下卑た視線は、潔癖な公爵令嬢にとってあまりにも不慣れなものだった。下品な言葉でずけずけと尿意を指摘され、リミエルは頭から湯気を噴きそうなくらいに赤面してしまう。

（っ、嫌あ……見られて………が、我慢、してるどころ……ッ、やだ、やだあ……っ！！）

それなのに、羞恥に煽られて、体内のティーポットがくつつと沸き立つ。

手持ち無沙汰の右手はせわしくスカートの前を行き来し、布地を軽く撫でる。こみ上げてくる欲求のままに股間をきつく握り締めたい衝動を抑えながら、リミエルは必死に膝を擦り合わせくねらせた。

「それどもお前え、ションベンじゃねえんが？ 腹あ下してんのが？ あん？ 悪いモンでも拾って食っただかあ？」

「あ、っ……そ、その……っ、や、やあ……！！」

言い淀むリミエルを他所に、男は少女のもとにずかずかと近づいてきた。太い丸太のような腕が伸ばされ、鼻を付く異臭が立ち込める。一日二日風呂に入らない程度でここまで酷くなることはないだろう、猛烈な体臭がリミエルの気分を悪くさせた。

寒気がするほどの恐怖が——幼い令嬢の羞恥心を奪い去っていた。

「お……おしっこ……ッ！！ おしっこ、ですっ……！！」

男に触れられまいとする一心で、俯いた幼い令嬢の喉が、掠れるような声を絞り出す。

「お、お願い——お願いします……！！ も、もう、おしっこ——っ、おしっこが、でちゃいそうで——が、がまん、できないんですっ……！！」

たどたどしい言葉で自分の尿意が限界であることを告げ、リミエルは男に懇願した。はしたなくも『おしっこ』と口にして、粗野な男にもわかるようにトイレの欲求を伝えねばならない。

本来ならば一生出会うことなく、口もきかないであろう、下賤な身分の男——しかし今や彼の許しがなければ、幼い令嬢はトイレを使わせてもらうことができないのだ。ここでトイレを使う事を断られれば、リミエルは森の茂みで用を足さざるを得なくなる。

ここまでしておいて、そんな結末は——あまりに割に合わない。

「なんだべ、シヨンベンが。お前えみえでえな綺麗な娘っこでも、ちゃんどオイラどおんなじに、シヨンベン出すんだなあ……」

（いやア……っ）

無精髭の下から漏れた男のつぶやきはに、公爵令嬢の顔が火を吹きそうになる。可憐な美貌は羞恥に染まり、今にも泣き出しそだった。

「は、はい。そうですっ、おしっこです……！！ お、おねがい……です、おしっこ……おしっこ、させてください……っ」

もう、形振り構わずに公爵令嬢は桜色の可憐な唇を喘がせて、しきりに『おしっこ』という言葉を繰り返した。そうしなければ、トイレにたどり着けないと知っているかのように。

脚を交差させ、お尻をモジつかせ、ドレスのスカートを握り締めて、リミエルは叫ぶ。綺麗に膨らんだスカートの生地には無残に爪が立てられて、見るも浅ましい皺が寄せられる。

細い腰の下、屈辱と羞恥によって乙女のティーポットを炙る尿意の炎は弱火から強火へと変わり、ぐらぐらと煮立つ水面は激しくざわめいていた。

あどけなくも無垢な、美しき公爵令嬢が恥辱に顔をゆがませ、涙を滲ませて、卑屈におもねって薄汚れた男に請い願う様——それは、ある種の嗜虐心を満たすのに十分な光景であった。

「シヨンベンなあ……」

「うう……っ」

男はなおも繰り返し、ジロジロとリミエルを見下ろす。何かを値踏みするような視線がさらに強くなる。

槍衾のような視線に耐え、嗚咽を飲み込み、暴発しそうになるおしっこの出口を必死に押さえながら、リミエルはじっと俯いて堪える。

今にも脚の付け根の注ぎ口からあふれ出しそうになる恥ずかしい熱湯を——両手の力まで使って塞き止め、公爵令嬢は惨めに、繰り返しトイレの許可を願った。

「けどなあ……、お前え、」

「お、おトイレで、おトイレじゃなきゃ嫌なんですっ……ちゃ、ちゃんとしたトイレでなきゃ——っ、お願いします、おトイレ、使わせてくだ

さいっ——おトイレでおしっこさせてくださいっ……」

男の言葉を遮っての、あまりにも悲痛で浅ましい叫びに、男は軽く目を見開き、しばし沈黙する。

痛いほどの静寂が数十秒も続いたのだろうか、やがて男は無言で小屋の後ろを指で示した。

「あ、——ありがとうございますっ！！」

ようやくの許可に、リミエルは怒りも羞恥も忘れ、ぱあっと目を輝かせた。それははっきりと、これからオシッコをすると宣言するに等しいものだが、それだけ今の尿意は切羽詰っていたのである。礼もそこそこに、おぼつかない足取りで丸太小屋の裏手へと回る。

小さな丸太小屋よりも、さらに粗末で小さな屋根が——そこにあった。

(あったあ……！！)

はしたなくも、リミエルは胸中で喝采してしまっていた。くねくねと腰を揺すりながら屋根の下へと向かい、リミエルは何度もその屋根がなんなのかを確認する。

確かにみずばらしく汚いが、間違いなく——そこは排泄のための場所、トイレであった。

おしっこを済ませるための場所が、オモラシ寸前の少女をようやく出迎える。下腹部の疼きはなおも激しく、熱い雫がじわじわと出口へと迫っていたが、もうこれ以上辛い思いをして我慢を続ける必要もないのだ。

ほんのあと数十秒、我慢すればいいだけだった。公爵令嬢の懸命な我慢は、この瞬間のためにあったと言っても過言ではないだろう。

錆びたちようつがいを引き、リミエルは狭い小屋の中に駆け込む。鍵のようなものはなく、つかえ棒が立てかけてあるだけであったが、リミエルはおぼつかない手でそれを閉めたドアの脇に押し込み、トイレを済ませるための密室をつくる。

「や、やっと、おしっこ——できるっ！！」

震える唇で安堵を噛み締め、いよいよ待望のおトイレを始めようとしていたリミエルだが——しかし、そこで信じられないものを見て、声にならない悲鳴をあげてしまった。

続く。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 公爵令嬢のお話・3
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 03/15/2009 20:05:28

BODY:

（な——なに、これ）

呆然と、リミエルは声にならない声でつぶやく。

そこは、おおよそリミエルの考えられ得るどんな汚い場所よりも、醜悪に汚れていた。

四方を粗末な板で囲まれ、藁をふいただけの屋根の下は、恐ろしいほどの悪臭に満ちていた。地面はむき出して、ただの土。その上に半分腐りかけた板が2枚、渡されている。

板の間には穴が掘られ、そこには汚らしい泥が泡と共に詰まっていた。顔を背けたくなるほどの猛烈な悪臭の原因はどうやらこれらしく、じゅくじゅくと泡を吹いている泥の周辺には小さな虫まで沸いている。

後始末のための紙などももちろん用意されていようはずもなく、壁の一部には汚れた手をそのまま擦り付けたと思いき黒い染みがあつた。

（そ、そんなっ、……こ、ここ、お手洗い……じゃ、ないんですか……っ！？）

ほとんど反射的に、リミエルは両手で顔を覆う。それは、あまりに穢れたものを見たくないという少女の防衛本能だった。

リミエルも公爵令嬢なりに、このトイレがとてもではないが上等な場所ではないことは覚悟はしていたのだ。しかし、その想像を遥かに超越して、この粗末な小屋の環境は酷いものだった。

地面を掘り返しただけの穴の周りには飛沫や汚辱が飛び散り、あの木こりが日常的にここを使用していることを教えている。恐らくはあの腐った板に足を乗せてまたがり、用を足すようにできているのだろう。だが乗っただけで靴が踏み抜いてしまいそうに真っ黒に汚れた板は、触れるどころか見ているだけで少女の身体を穢してしまいそうだった。

しかも、一体どんな使い方をしているのか——隙間だらけの壁のあちこちにまで跳ね返った雫と泥の痕が飛び散っているのである。

立小便という男のトイレの使い方を知らないリミエルには、信じられない光景である。そもそも、深窓の令嬢たる幼い少女は、男女が共用で使用する公衆トイレというものの存在を知らなかった。

「う、うそ、そんな……っ」

（こ、こんなの、こんなトコロで、おしっこなんか……）

勇気を奮って再度、顔を覆った指の隙間から細く目を開ける。だが——何度見ても、地面にじゅくじゅくと残った泡の跡や、何なのか想像したくもないどろどろと澱んだ汚泥を溜めた悪臭を漂わせる穴は、リミエルがとても使えるとは思えない場所だった。

「あ……あ……～～…ツ！！」

しかし、男が示したのは明らかにここだ。ここの中であらおしっこができると、そう信じてリミエルはむずがる下腹部をなだめ、羞恥に耐えてやってきたのだ。いまさら違うでは通らない。

じくん、と尿意が増す。聞き分けのない下半身ははしたなく反応をはじめていた。下腹部でたぎる熱い奔流に、前かがみになって切なく身をよじらせながら、リミエルは声にならない叫びを上げる。

（っ、も、漏れ…ちゃうッ……！！）

スカートを掴む指は手袋の中で白くなるほど硬く握り締められ、間断なく襲いかかってくる猛烈な尿意に内腿が擦りあわされる。ちょこんと突き出したお尻を左右に振りたてながら、リミエルは淑女の面目もかなぐり捨てて緊急我慢の姿勢をとった。

美しい眉はよじれ、噛み締められた震える唇の隙間から、ふっ、ふっ、と切ない吐息が漏れ出した。細い指先がドレスの上からしなやかに股間を握り締め、何度も何度も脚の付け根を往復する。

下腹部で渦巻く下品な衝動を逃そうと、前屈みの姿勢になったまま、公爵令嬢は肩を上下させ荒い息を飲み込む。ほっそりとしたお腹の中、乙女のティーポットに閉じ込められて、解放を許されない羞恥の黄金水が暴れ回るたび、ちょこんと後ろに突き出された小さなお尻がくねくねと左右に揺すられる。

もし、誰かに見られてもしたら、即座に命を絶ってしまうかもしれないほどの、深窓の令嬢にはあまりにも相応しくないはしたない姿であった。

（だめ、出ちゃう……もうほんとうに出ちゃいますっ……ツ！！）

『おあずけ』を食わされて苛立つ下腹部は、少女の意思に反してその中身を絞り出さんと収縮を繰り返す。ここまでたどり着きさえすれば、秘密のティーポットになみなみと注がれたホットレモンティを残らず空っぽにできたはずなのだ。酷使され続けて限界を訴え、切なく疼く排泄孔の括約筋が、ぴく、ぴく、と痙攣をはじめた。いまにもドロワーズの内側に熱い雫が滲み出さんばかりに、擦り切れた女の子の部分の感覚が薄れてゆく。

「……っ」

（あ、ああっ、で、でちゃう、出ちゃうっ、おしっこ、おしっこもう出ちゃうのにい……っ！！）

排泄孔は、いまかいまかと放水のゴーサインを待ち望んでいる。

どれだけ耐え続けても、自分の身体の中に湧き出す恥かしい泉を止めることはできないのだ。

（で、でもこ、こんなトコロで……こんなっ、汚いところで、おシッコ……なんて……）

庶民に比べればあまりにも潔癖な令嬢には、ここがトイレだということがどうしても許容できなかった。この汚れきった粗末な屋根の下でおしっこを済ませている自分の姿が、どうしても想像できない。

（こ、これなら、お外のほうが、よっぽど……っ）

それは禁忌の想像だと、さっきダメだと己に禁じたことなのだと思いながらも、リミエルはその考えを止めることができなかった。

どれだけ妥協しようと、とてもではないが、ここは公爵令嬢が安心してトイレを済ませられる場所ではない。むしろトイレと呼ぶことすらも憚られるような場所である。

ここで用を足すくらいなら、森の茂みのほうが何倍もマシに思えてしまう。

（——こ、こんな場所で——いったいどうしていらっしゃるの？……あの、方だって……お、お手洗いには、いかないと、いけないはずなのに……）

そもそも、あの木こりはこんなところで本当にトイレを済ませているのだろうか？ そんな疑問がむくりと頭をもたげた。

今にも溢れそうに中身を増し続ける下腹部のティーポットをドレスの上からさすり、腰をよじらせながら、リミエルは頭の隅を掠めた疑問をさらに反芻する。

（……ひよ、ひよとして……ううん……でも、そんな…っ！！）

聡明とは言え、世間の雑事には疎い公爵令嬢にとって、こんな汚物に塗れた場所を排泄のために使用することなど『あり得ない』のである。

溜め込んだ汚物が畑の肥料になり、作物を実らせるので、それなりの金額で引き取られるのだということも、こんな汚れたトイレを、いかにも高貴そうな少女に使わせていいもかとためらってしまった、木こりのささやかな気づかひも、公爵令嬢には知る由もない。

（こ、ここ、本当に、おトイレなの……？）

目の前の事態から目をそらそうとするあまり、リミエルはついにその事実すら疑ってしまった。

一度膨らんだ想像は、新雪を転がり落ちるを雪玉のように、みるみる大きく、押しとどめられないものになってゆく。ここはトイレではない——となれば、そんな場所に自分を連れ込んだ男の意図は何か。本来ならばありえない想像にリミエルの顔色はみるみる青ざめていく。

——そう。

ここがトイレではなくて、全然別の場所であるなら、たとえばそう、悪漢が少女をかどわかすために作った場所であるのだとしたら——あの木こりは、リミエルが用を済ませようと、下着を下ろし無防備になったのを見計らって、邪な欲望を満たすためにここになだれ込んでくるのではないだろうか？

あまりにも恐ろしい想像にリミエルは戦慄した。だが脳裏をよぎった不吉な想像は、容易に振り払えるものではなかった。純粋な少女にとって、いちど気にしだした他人の悪意は、免疫がない故に瞬く間にその心を侵してゆく。

他人のトイレを覗くなどという下品な行いは天地がひっくり返ってもありえないことだが、あの男はあんなにも執拗にリミエルの排泄に興味を示したのである、考えられないことではなかった。

下卑た視線が何重にも身体を這い回る感触を思い出し、少女は身を竦ませる。不安に駆られ恐慌に陥ったリミエルには、あの木こりが具合の悪そうな少女の身を案じていたのだとは、とてもではないが想像の埒外だ。

「っ……」

いまにも男がドアを押し開けようとしているのではないかと想像してしまい、リミエルは上げかけた悲鳴を必死で飲み込む。もしかしたらもう、脚を忍ばせてこのトイレのすぐ側で待ち構えているのではないだろうか。

そうなれば、もはやわずかな隙も見せるわけにはいかなかった。

（だ、駄目……っ）

ぶる、と背筋を震わせて、リミエルはむずがる下腹部を何度もさすり、暴れ出そうとする尿意をなだめる。

今この瞬間にも、壁一枚を隔てた向こうにはあの男がいて、血走った視線をらんらんと輝かせ、幼い令嬢が恥も捨て去ってスカートをたくし上げ、パニエをめくり上げ、ドロワーズを足首まで引き摺り下ろして、深々と大腿を開いてしゃがみ込む姿を待ち望んでいるのに違いない。

リミエルが、耐え切れない尿意に衝き動かされ、まだ淡い産毛もないような幼い股間や、ふっくらとした下腹部を、露に覗かせる光景を。

激しい水音と共に下品な欲求を訴える排泄孔から、勢い良く黄金色の飛沫を迸らせる瞬間を。

この汚らしい部屋で、乙女の秘密のティーポットを残らず空っぽにする、その様子を。

あの毛むくじゃらの醜い大男は、その全てを余すところなく目に焼き付け、その上不埒な欲望を満たそうと、じっと心待ちにして、すぐ側で息を潜めているのだ。

（そ、そんな——っ）

少し冷静に考えれば反論も見つかるであろう想像だが、一度陥った思考の袋小路は幼い少女を混乱させるに十分だった。

完全に疑心暗鬼に陥った公爵令嬢はすっかり萎縮し、思うように息もできぬ事態に陥ってしまう。

わずかな身じろぎに反応し、隙間だらけの薄い板が立てかけてあるだけの壁のすぐ向こうに、あの下品な顔がちらと覗く、そんな幻すらはっきりと観てしまう。

いまにもドアががたがたと鳴り響き、あの野太い腕がつかえ棒をへし折って密室を押し開き、のそりと頭をもたげた山のような身体が、自分を後ろから押し潰してしまいそうにすら思えた。

（そ、そんなの嫌よっ………！！）

折角の排泄のための場所である小部屋にたどり着きながら、リミエルは声を引きつらせ、指一本動かすことができなくなってしまっていた。

そんな公爵令嬢の心中の事情など知らぬとばかり、ぞわり、と、限界の近いことを知らせる腰の震えがリミエルの背筋を撫でてゆく。もはや危険水位を突破した尿意は、追い詰められた深窓の令嬢に、今すぐここで脚を広げてしゃがみ込むことを要求していた。

たとえどれだけ汚れていようと、ここで用を足せと執拗に誘惑していた。

「くう、つう、はうっ……んう、ふっ……ああうっ……」

が——リミエルはそんな目の前の甘美な誘惑を振り切って、ただひたすらに硬直するばかりだった。

そろえた手を重ね、ドレスの股間をきつく握り締める。今にも開きそうになる小さな孔を指で直接、押さえ込む。まさに排泄をすべき場所のその只中で、リミエルは悲痛なまでの姿で、直立不動のまま立て続けに襲い来る尿意の大津波を必死に耐えていた。

そんな、時だった。

『ああ、今度はなんだべ、お前え』

「失敬、こちらにお嬢様は窺ってはいませんか？」

外でかすかに響く、聞きなれた青年の声。大きな木こりの声に掻き消されてしまいそうなその声を、リミエルは確かにきいた。

（あ、っ）

ほとんど反射的に、リミエルは振り向き、ほとんどドアを突き飛ばすように開いて駆け出していた。

「ああ、そったら娘っ子なら、ちょうど今——」

「ヨハン！！」

男の言葉を遮り、リミエルは御者の名を呼び、まっすぐにそのもとへと走り寄った。息を喘がせ、震える唇を押さえ込んで、ぎゅうつと御者の腕を握り締める。

「お嬢様？」

ただ事ならぬリミエルの様子に、何事にも動じない御者もわずかにうろたえる様子を見せる。さりげなく木こりに警戒をしながら、青年は静かにリミエルと木こりの両者を窺った。

「ん、なんだべ、もうシオンベン済んだべか？」

そんな不穏な空気など知らぬかのように、無遠慮な木こりはまったく気にせずそう聞く。リミエルは小さく息を詰まらせながら、ほんのわずか、顎を震わせた。

「がっはは、そったら恥ずかしがることじゃねえべさ。シオンベンも我慢してとぶつ倒れちまうべ？ ほれ、お前えさんを心配して、そこの奴が迎えにきてくれたんだべ。なあ？」

「っ……」

木こりの声にさらに俯き、震えるリミエルを見、御者は大体の事情を察していた。縮こまるリミエルの身体にそっと手を添える。

本来、彼の身分でこのように公爵令嬢と触れ合うことは許されないが、今はそうすべきだと判断していた。

「お騒がせしました。早速で申し訳ありませんが、先を急ぎますので失礼いたします」

「おう、ぞっが。気いづげでな」

「ご恩に感謝いたします。しかし申し訳ありませんが、こちらで起きたことは他言無用に願います。よろしいですか？」

「あん？　なんだべ？」

意味が解らないというように、木こりは眉を動かした。

この木こりが迂闊にも、ジルベレット公爵家の令嬢が、はしたなくも小用を催し、我慢しきれずトイレを借りてにきたなどと言いふらすとも限らない。醜聞というものはどこから広まるとも限らないのだ。まもなく社交界デビューを控えた令嬢が、なんとトイレの躰けもできていないなどと囁かれるのは、何としても避けねばならなかった。

木こりの風体や物腰から、彼が滅多に人里に降りず、コトの重要性も理解していないだろう事を察し、恐らくそうなる可能性は低いだろうと判断していたが、御者はもう一度念を押す。

「後で使いの者を向かわせます。どうかくれぐれも、ご内密に。よろしいですか？」

「……お、おう」

自分の半分もないような御者に、有無をいさせぬ迫力で迫られ、木こりは思わず頷く。それを見、御者はもう一度礼を述べるとリミエルを連れて、広場をでてゆく。

しばらく歩き、元の小路に戻った御者は、リミエルの背中をそっと叩いた。

「……もう、大丈夫です。立てますか」

「あ……っ」

涙ぐんでいたリミエルは慌てて。自分が御者に抱かれていたことを知り、顔を赤らめて飛びのいた。

「大変申し訳ありません。お戻りが遅いので、何かあつてはと思い後を追いました。出過ぎた真似をお許し下さい。……いかなる罰もお受けいたします」

「え、あ、そ、そんな……」

深々と非礼を詫びるように頭を下げる御者に、リミエルのほうが困惑してしまう。確かに淑女がお花摘みに入った後を追いかけてきたなど、普通に考えればとんでもないことだが、彼が助けに来てくれなかったらいったい自分はどうなっていたことか。

そう思うと、叱責の言葉など沸いて来ようはずもない。それどころかリミエルのほうこそどんな言葉を並べても感謝を告げなければならぬほどだった。

「……………」

言葉に詰まるリミエルの様子から、まだ彼女がショックから抜け出していないことを察すると、御者の青年は再度深く頭を下げた。

そうしてようやく、リミエルもわずかに余裕を取り戻す。

「……え、ええと、その……た、助かりました。ありがとう」

今はただ、それだけの言葉を押し出すので、精一杯だ。心の中で深く御者に感謝しながら、リミエルは小さく息を吐く。

「失礼ですが、もうお済みですか」

けれど、御者はなお静かに、落ち着いた声音でリミエルに聞いた。

『お花摘み』のために馬車を降りたリミエルだが、彼女の手はいまだ空のままなのである。名目上、外でトイレを済ませることができない彼女への配慮としてそんな方便を繕ったのだから、リミエルが手ぶらでいるのはいかにも都合が悪いことなのだった。

「え、あ……」

リミエルはようやくそれを悟り、おろおろと周りを見回す。御者の青年はすぐに状況を把握すると、感情の薄い表情でわずかに眉を寄せた。

「では、これを」

どこから用意したのか、御者はすでに美しい黄と白の花をひと束、手に抱えていた。野に咲く花とは思えぬほど美しい、小さく控えめながらも清楚に寄り添う花。まさしく公爵令嬢が目にも留めるのに相応しい佇まいのものであった。

あっけに取られるリミエルに、御者の青年は再度、念を押す。

「出立いたしますが、宜しいですか」

「え、……は、はいっ」

弾かれたように、リミエルは声を上げた。

聡い御者の青年は、無論ながら既にリミエルの様子のおかしさには気付いている。中腰になって身をかがめ、ドレスの前をそわそわと押さえる様子は、先に別れた時よりもさらに落ち着きなく、足元は忙しなげにその場で踏み鳴らされている。

どう見ても彼女が無事用を済ませられたのではないことは明らかだったが、繰り返し念を押しても、リミエルは頑なに認めようとする様子がなかった。

「は、早く参りましょう……。ね？」

それどころか、公爵令嬢はあろうことか、御者の青年の先に立って歩こうとするそぶりすら見せる。

まるで何かに追われているように何度も背後を振り返り、幼くあどけない顔もいまだ青ざめさせたままだ。彼女を森の中に一人にしたのは軽率だったかもしれないと、御者は己の判断を後悔した。

隣国との政情も安定しており、治世も穏やか。ましてこの森は国王統治の直轄である。野党の類や危険な獣などいないことは確認済みなのだが、それでも公爵令嬢に危難を加える何者かがいてもおかしくはなかった。

「では、急ぎましょう」

リミエルが負担にならぬよう、御者の青年はわずかばかり足を速め、道を歩き出す。彼はあくまで公爵家に仕える従者の一人なのだ。信頼篤く聡明な彼ではあったが、いくら仕える主人に配慮し、意見を述べることができようとも、従僕には主の決断を覆すことは許されない。

リミエルは、彼のお済みですかという問いに対し、そうだと答えたのだ。

この上でリミエルが強固に先を急ぐよう指示するならば、彼はただ肅々と、それに従い、それ以上の抗弁は許されないのだった。

続く。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 公爵令嬢のお話・4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/15/2009 20:09:10

BODY:

（が、我慢——がまん、しなきゃ——）

御者の青年に従いながら、もどかしい足取りでよちよちと歩く公爵令嬢が抱えていたのは、哀れにも、悲壮な決意だった。

見えない敵から、乙女の貞操を守るために、緊張に強張る足は大きく内股となり、腰はアヒルのように不恰好に真後ろに突き出されている。さりげないつもりで下腹部を庇う手のひらは、その実ぎゅうぎゅうとスカートの上から前を押さえている。

（だ、大丈夫……、し、しばらく、すれば、ま、また……落ち着くはずよ……あううッ、く……そ、それまで、このまま——静かにしてれば……お、おしっこしたいの、おさまるはずだから……っ）

少しでも隙を見せぬよう、慎重に息を繰り返し、わずかにでも楽になるように姿勢を変えて、猛烈な尿意を身体の中に押し込んでゆく。

もう、こんな場所には一分一秒もいたくなかった。

何度も何度も、ちらちらと背後を振り返りながら、リミエルは、可能な限りの早足で森の小路を進む。

先導する御者の青年が、知ってか知らずか振り返らないのをいいことに、リミエルの我慢の姿勢はますます傍若無人なものとなる。

よたよたと覚束ない足取りと、後ろに突き出されたへっぴり腰、ドレスのスカートの前にぴったりと添えられたままびくりとも動かない手のひらは、慎み深き公爵令嬢の姿にはおよそ許されないはしたない姿だ。

「は……く……っ」

一歩ごとにポンプのように尿意がくみ上げられ、少女の股間に危機を呼び寄せる。それでもふと気を抜けば、あの木こりが後ろをこっそりと尾けてきているような気がして、恐ろしくてたまらない。

（だ、誰もいませんわ……いないに、決まってますっ……）

好色そうな瞳で自分を見ていた、野卑で薄汚れた男。リミエルのまったく知らない世界に住む相手に対してとは言え、過剰ともいえる反応であろう。しかし一度植えつけられてしまった恐怖心は、どれだけ首を振ろうと拭い去ることは難しい。

数歩歩いては後ろを振り返り、あの山のような大男がいないかを確認する。リミエルはただひたすらに自身の心から生まれた恐怖から逃れようと必死だった。

そして、それを追いつけるようにますます激しくなった尿意が、秘密のティーポットを軋ませる。

「は……ふ、っ、ふううっ……っく、はあ、はあっ……」

潜めようとする息も、荒く激しい。御者の青年に聞こえぬよう（リミエルも、いくらなんでも彼に聞こえていないわけがないことは理解はしていたが）必死に息を詰め、汗ばむ額肩袖でぬぐう。

（だ、だめ、やっぱり、お、おトイレ……っ）

一度ははっきりと拒絶したはずの排泄が、またも抗いがたい誘惑を伴って舞い戻ってくる。

結局できなかった『お花摘み』に、下腹部は切ない欲求を繰り返し、小刻みに収縮を繰り返していた。ひく、ひくと蠢く乙女の部分に途方もない切なさを覚え、リミエルは白い首筋をくねらせ、小さく呻き、身をよじらせる。

——これなら、お外のほうがよっぽどマシ。

木こりの小屋、あまりにも汚れはてた、トイレと呼ぶのも憚られるような密室で、ついに至った思考が、再度リミエルの頭を占めてゆく。

もはや高まる排泄欲求は天井知らずに増し続け、いつ限界を突破するかわからない。もはやこの森の中にまともなトイレなどないことをありありと見せ付けられた今、リミエルが楽になるには、御者を再度呼び止め、どこかの草むらに駆け込んでスカートをたくし上げ、しゃがみ込んで用を足す以外の選択肢はない。

おそらく、御者の青年もそのことは理解しているだろう。一声かければ、すぐにそれを察し、叶えてくれることだろう。

だが、背後に迫る男の幻影が脳裏をちらつき、リミエルには御者に声をかけることも、茂みに踏み入る勇気を奮い起こすことも、どうしてもできなかった。

リミエルが我慢に我慢を重ねていたものを思う存分噴出させるその瞬間を、そのあたりの木の陰や茂みの奥に息を潜めて、じっと待ち望んでいる——そんな想像が、頭から離れないのだ。

(いやぁ……っ)

鳥肌の立つような想像に、リミエルはぶんぶんとかぶりを振った。

いまや、御者と共に歩き安全なはずの森の小路すらも、魔物の潜む闇の森のように感じられる。こんなところにこれ以上居続けるのは、とてもではないが耐え難いことだった。

少しでも早く、風のように走る馬車に乗って、誰も後を追ってこれないほどの遠くまで離れなければ、この恐怖を拭い去れないのは間違いなかった。

だがしかし。

(ひ、一人でおトイレなんか、怖くてできないけど……っ、っ、付いて来てなんて、言えるわけないわ……)

まさか、トイレをするその瞬間まで、御者に見張っているというのか。

不可能だ。無論、命じれば彼はそれに従うだろうが、たとえ慣れ親しんだ青年であっても、小さな小さな子供ならばともかくも、その目の前でおしっこをするなど、天地がひっくり返ろうとも在り得ない。

「っ……んうっ……」

ぎゅうっと唇を噛み、俯いて、リミエルは足を動かし続ける。

さして奥まで踏み入れたつもりはないのに、馬車の待つ街道まではなかなかたどり着けなかった。もっとも、無様にお尻を突き出し前屈みのおぼつかない足取りでは、赤子の歩みにも劣るのだが——。

「あ、あ、だめ、だめえっ……」

小路の中央で不意にリミエルは声を跳ねさせた。

不意に高まり始めた尿意が、激しく脚の付け根を内側からノックする。ぐらぐらと火にかかったままの秘密のティーポットの中で、乙女のホットレモンティが沸騰する。

身体の中で暴れ回る尿意に振り回されるように、公爵令嬢はその場に立ち尽くし、突き出した腰を左右に揺すり出してしまった。まるで見ようによっては、発情した獣がオスを誘っているかのようにも見える。公爵令嬢が幼くも無垢な美貌を、羞恥に染めて細い身体を左右に振り立てるのは、危うい誘惑の香りすら漂わせる。

（い、嫌あつ……こ、こんな恥ずかしい格好……ッ！！ だめ、だめっ、や、やめなくちゃ……っ）

斜め下を向いて、手のひらに押さえ込まれた下腹がぐっと張り詰める。重力に引かれて股間の先端に集まり始めた尿意が、リミエルの磨耗した括約筋を押し破ろうと暴れ回る。ぷくり、と出口に集まった熱い雫が水門のすぐ内側で膨らみ、下方に収縮した膀胱が少女の足元へとせり出そうとしてくる。

ふらりと傾いた姿勢が、徐々に脚を広げ、膝を畳み、その場に腰を下ろすようなものへと変わっていった。

「あ、ああつ、や、だめえ……っ」

悲痛な声が公爵令嬢の細い喉から絞り出される。小さな手を包む手袋が皺の寄った指先でドレスのスカートをきつく抑え、握り締める。こぼれる叫びすら、うなじから耳までが羞恥に紅潮し、リミエルの繊細な羞恥心を刺激する。

（だめ、しゃがんじゃうっ、しゃがんじゃダメ……っ、で、でちゃうっ！！）

下腹部に破裂寸前の水袋を抱えるリミエルにとって、その姿勢はまさに禁忌。『オシッコをするための』体勢でしかない。かかどが自然に持ち上がり、歩き方すらより一層不安定な爪先立ちへと変わってゆく。

このまま脚を折り曲げ下腹部にさらなる圧迫を加えれば、逃げ場のない恥ずかしい水が最も脆く敏感な部分を突き破って吹き出してしまおう。その甘美な誘惑は先程、茂みに踏み入れて木の幹にしがみ付いた時に嫌と言うほど思い知っている。

いちどそうなってしまうえばその誘惑は抗いがたく、もはや立ち上がることができなくなってしまう可能性すらあった。

（しゃ、しゃがんだら、本当にでちゃうっ……！！ お、おトイレ、はじまっちゃうっ……！！）

まして、ここは見通しのいい小路の真ん中だ。

傾いた身体を支えるため、捕まるようなものすらない場所で、爪先立ちになった少女はふらふらと左右に身体を揺すり出した。腰から背中がびくびくと波打ち、うなる。

がく、がくと力の抜けた脚を奮い立たせようとするリミエルだが、股間に響く熱い刺激がまったくそれを許さない。すでに下腹部に詰まっているのは液体を通りこして湿った砂かなにかのようで、ずっしりと下腹部を重くするその重苦しさに耐えかねて、膝が大きく曲がってしまう。

「く、ううっ……」

森の梢の中、またも訪れた限界と戦う公爵令嬢の苦しげなうめきが響く。

ふらりと視界が揺れ、ただの踏み固められた地面が、目の前に迫ってくる。

（ああ、か、身体が勝手にっ……しゃがんじゃいそうっ……い、今しゃがんじゃったら、で、でちゃ……っ、こ、このまま、オシッコはじまっちゃうっ……！！ こんなトコロで、おしっこ始まっちゃううっ……！！）

きゅう、と下腹部が波打ち、公爵令嬢に禁忌の排泄姿勢を強要する。

「だ、だめ……で、でちゃう……ううっ……」

（だめ、おさまって、お願いおさまってっ……こ、これ以上は、本当にダメ、ダメ、ですっ……）

必死の思いで尿意をなだめようと下腹部をさするリミエルだが、気休め程度の効果もない。小さな身体の内側で、行き場をなく

した恥ずかしい熱湯がなおもその勢力を増し続けているからこそ、この猛烈な尿意なのだ。

ぷくりと膨らんだ排泄孔は、萎まぬままに、激しい水圧が押し寄せる。

(っ、でちゃう、っ、オシッコ……でるっ、でちゃううっ！！)

ついに大きく脚を広げてしまい、公爵令嬢は心の中で悲痛な叫びを上げた。

(んうっ、でちゃう、でちゃううっ……)

今すぐにでも深くしゃがみ込んで、たぶんたぶんに詰まった乙女の水袋の中身を残らずぶちまけてしまいたい。既にリミエルの繊細な膀胱に耐えられる量などつくに超えている。公爵令嬢としてのプライドと羞恥心が、辛うじて開きかけた排泄孔を縫いとめているのみだった。

「もうだ…め……、も、漏れちゃう……」

熱に浮かされて汗ばんだ公爵令嬢のくちびるが、はしたなくも限界を訴えた。左右の手のひらで抱え込まれた下腹部が痙攣し、ひくひくと震える。

押し寄せる尿意に心すら屈しそうになりながら、それでも少女の身体は、股間をぎゅぎゅぎゅうっ、と握り締め、ねじり上げ、ひたすらに押さえつけて。己の身体が欲求する尿意を否定ようとしていた。

(ああああっ……っダメえ、でるうっ、おトイレ出ちゃうっ、おトイレするっ、おさまってえっ、お願いいっ、……でちゃう、もっちゃう、漏れちゃううっ！！)

なんとか全身の力を使って強烈な波を押し戻しても、すぐに次の高波が押し寄せる。秘密のティーポットの出口を直接指で塞ぎ、沸騰するレモンティを押し止め、リミエルはあえやかに桜色の唇を開閉させた。

形の良い小鼻もぷくりと膨らみ、細い喉は口に溜まった唾液をかすかな動きで飲み込む。

しかし、そんな努力も空しく、すでに令嬢の指先にはじんわりと湿り気が触れていた。ドレスの内側、バニエで膨らまされたスカートのさらに奥で、ドロワーズの股間は押さえられた手のひらの下から、まるで水気たっぷりの果物でも潰したようにぶじゅ、ぶじゅ、とはしたくない水音を立てている。

少女の股間の先端からじゅる、ぶじゅっ、と吹き出す熱い濁流の前兆は、徐々に大きく公爵令嬢の下着を侵食し、じわじわとその支配地域を広げようとしていた。

前を振り仰ぐ余裕もないリミエルは、御者の青年が既に足を止め、背中を向けたまま困惑を露にしているのにも気付けずにいる。

「あ、あっ、あうっ……だめ、だめえ……でないで、出ないでえ……くう、うう。が、我慢っ、我慢するのっ……」

切なくも激しい尿意と、それへの抵抗を、喘ぎ声の隙間からこぼす公爵令嬢は、そのままなおも十数分、森の梢が重なる小路の真ん中で、中途半端に腰を浮かせてはくねくねとよじり、もじつかせては、下着とドレスを少しずつ、少しずつ濡らし続けた。

続く。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 1 0

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 03/15/2009 20:12:35

BODY:

チャイムが鳴った。

二つ目の授業が終わり、休み時間の始まりとなる。

時刻は 1 0 時過ぎ——静菜が登校して 2 時間が経過していた。

教師がドアを閉め退室すると、教室は一気に騒がしくなる。持ってきた雑誌を広げて放課後の予定を立てる者、携帯を広げてメールを打つ者、友達とお喋りを始める者、律儀に次の授業の準備を始める者、課題を忘れていたことに気付き、慌てて友達のぶんを写し始める者——

そんな日常の光景からたったひとり切り離されたかのように、静菜はじっと窓際 4 列目の席を離れずに、俯いていた。

(ふうっ、ふうっ……)

苦しい吐息をぐっと飲み込んで、自然に動いてしまいそうな腰を押さえ込む。

下腹部はまるで石のように硬く張り詰め、緩められたスカートのホックをはちきれさせんばかりに膨らんでいる。比喻抜きで、ベルト

の支えがなければ本当にそうなりかねない状況だった。排泄孔の感覚は薄れ、まるで膀胱に熱い砂の塊を飲み込んでいるようだ。

激しく波打つ発作がない間でも、目の粗い紙やすりでおなかの内側を擦られているような、執拗で猛烈な尿意は絶え間なく続いている。じんと熱を持った排泄器官は、途方もない我慢の果てに今にも擦り切れてしまいそうだった。

（ま、また来るっ……！！）

数分ごとにやってくるようになった猛烈な尿意の大波に、少女は硬く身を竦ませる。咄嗟に当てた手のひらの下で、括約筋が痙攣し、膀胱がぎりぎり引き絞られる。歯を食いしばり、ぎりぎり頬を強張らせながら、静菜は必死に抵抗を続ける。

ぱんぱんに膨らんだ膀胱は、少女の下腹部に納まりきらないサイズにまで膨張しているのだ。丸1日以上にも渡って醸造されたオシッコは、限界容量を超えてなお、ぞくぞくと膀胱へ送り込まれてくる。紙のように薄くなった静菜の膀胱は、それでもなお溢れそうになるオシッコを全て受け止め——奇跡的な我慢を続けている。

（っ、だめ——我慢できないっ……！！）

苛烈な尿意を少しでも和らげるため、静菜は両手のひらを膝の間に重ねて押し込んで、『おトイレ』をはじめた。

（ん、んっ、んううっ……！！）

ふ、ふ、と荒い息がこぼれる。

身体の中で大きく膨らんだ膀胱は、敏感を通り越して過敏すぎるくらい過敏になっていて、内臓の蠕動や呼吸で膨らむ肺、心臓の鼓動すらもはっきりと感じ取ってしまう。

静菜の『おトイレ』のメカニズムは、鍛えられた括約筋を引き絞って、膀胱のふくらみを身体の中へと抱え込むことだ。これによって尿意を飲み込めば、膀胱はおなかの奥へと膨らむことになる。普通の女の子が我慢を続けていれば膀胱はわずかがゆっくりと身体の外側にせり出すのに対し、静菜はそれを身体の中へと納めておくことができるわけだ。

そうやって排泄孔と膀胱との距離を伸ばすことでオシッコを身体の内奥へと押しやり、尿意を緩和するのが、『おトイレ』のコツである。ちょうどおなかの中にオシッコを溜めた袋を抱え込むようなもの。

だが——もうすでに、何度『おトイレ』をしようと、静菜の身体の中にこれ以上のオシッコを納めておくスペースは残されていない。必然的にオシッコは出口めがけて集まり、膨らんだ膀胱はどんどん下腹部のほうへとせり出しているのである。必然、膀胱と出口との距離も縮まり、尿意はいよいよ激しいものになってくる。

「っ、く、う……」

我慢、我慢と必死に言い聞かせる鋼鉄の自制心を乗り越えて、堪えきれないうめき声が外へと漏れてしまう。じわりと浮いた腰をぐりぐりと椅子の天板に押し付け、重力に引かれて落下してしまいそうな膀胱を、おなかの中に抱えなおす。

わずかでも緊張を緩めれば、そこから何もかも崩壊してしまうことはわかっていた。だから決壊寸前のダムに些細なヒビですら入ることのないよう、静菜は一時たりとも気を抜くことなく、我慢を続けていた。

じつとりと背中に張り付いたブラウスには、気持ちの悪い汗が滲んでいる。フェンスのないビルの屋上から地面を覗き込んでいるときのような、一瞬の油断もい許されない緊張感。いまの静菜は綱渡りのように細い細い緊張のタイトロープを渡っているのと同じなのだ。

朝のホームルームは、まだなんとか軽い身じろぎをするだけで我慢できた。

1時間目は、机の下で一回だけスカートの前を押さえた。

その次の休み時間は、どうしても我慢できなくて、5分以上もぎしぎしと椅子を揺らしながら足踏みをしてしまった。

2 時間目の前半で、スカートどころか 4 回も下着の上から股間を押さえてしまい、

2 時間目の後半にはその頻度は倍になった。

ずっしりと下腹部に押し掛かる圧倒的な重圧は、いまや股間のすぐ上まで達してる。オシッコで満たされた膀胱は、静菜から動くことの自由すらも奪っていた。

(どっ…どうしよう……ぜ、全然、オシッコしたいの、治まらないよっ)

スカートの下で下着にしわがより、力の籠った内腿が擦りあわされるたびに股布が激しくよじれる。びくん、びくんと脈動する下腹部は、行き場所を失った膀胱が、出口に向かって膨らみ始めたことの証左だ。

これまで、静菜がここまではっきりと、人前におしっこ我慢の仕草を見せたことはない。静菜にとって学校でおしっこをしないことは当然のことであり、『おトイレ』によって尿意を和らげている間は、そもそも“我慢”に該当しないのだ。

「ねえ、トイレ行こ？」

「あ、うんっ」

すぐ近くで、少女達が連れ立って席を立つ。

静菜にはできないことをするために、おそらく静菜の何分の一も我慢していないだろうに、彼女たちはそんなことを言う。それにつられ、おなかの中に膨らんだ恥ずかしい液体がぷくりと出口へ押し寄せてくる。その激しさといったら、動けない静菜の身体を突きやぶって、直接トイレめがけて飛び出してゆかんばかりだ。

(ん、んっ、んうっ……！！)

けれど、トイレに行きたいのに。こんなにもトイレに行きたいのに。

静菜がおしっこのできる場所は、どこにも存在していないのだ。

凶悪なまでに圧倒的な尿意を前に、他の選択肢はない。ぐっと唇を噛んだ静菜は教室の真ん中、クラスメイトのしているすぐ目の前で『おトイレ』をさらに激しくしてしまう。

教室の中を虚ろにさまよう視線は、すでに宙空に固定され、焦点を失っていた。

ぷくりと小鼻を膨らませ漏れる吐息が、赤く染まった頬を撫でる。こぼれた前髪に半分隠れた顔も赤く、首筋にはしっとりと汗が浮かぶ。少しでも負担を減らそうと寄りかかるように身体を預けた窓ガラスは、湯気でほんのりと曇っていた。

(ん、ふっ、んゆっ、んんっ)

きつく噛み締められた唇は、まるで声を上げてしまえばそこから恥ずかしい液体がが滴り進んでしまうといわんばかり。閉じ合わせた脚の間には深々と両の手が挟まれ、スカートの中まで差し込まれた手のひらは、崩壊寸前の排水口を持ち上げるようにぎゅっと重ね当てられている。

(んううっ……！！)

きゅう、と静菜の下腹部の中で灼けた感触がうねる。張り詰めた括約筋は擦り切れ、覚える尿意はすでに痛みに近い。ちくちくとした感触は針の塊か、熱く湿った砂がぎゅっしり隙間なく詰め込まれているかのよう。

そこを押さえるたび手のひらにも返る硬い手ごたえは、我慢の一秒ごとに増していた。

(んっ、んふっ、んっ、んんっ、んっ……！！)

こみ上げてくる灼熱に、静菜はぎゅっと目を閉じ、唇の内側に強く歯を立てる。ヒクつく腰が浮かびそうになるのを押さえ、恥骨をぐりぐりと親指の付け根にねじつけて、少女は深く俯き、荒い息を押さえつけ、椅子の上で身じろぎを繰り返す。

少しでも楽な呼吸と息遣いを探し、両手をつかつて、重く沈む下半身を支え、抱え上げる。その仕草が今は一番静菜にとって

楽な姿勢だった。重力に従って出口を目指し下降する満杯の入れ物を、両手で直接、必死に持ち上げているのである。

（んくつ、んう、ふ、んうつ、んゆ、んつ、んんん〜っ！！）

少女の小さな水門を固定する括約筋、閉じ合わされた両足、擦り合わされる膝、重ねあわされた手のひら。羞恥をかなぐり捨てて何重にも張り巡らされた防波堤を乗り越え、押し崩さんばかりに波濤は高く、次々と押し寄せる。

容赦のない大自然の摂理に対し、もはや少女はまったくの無力だった。半分捲れ上がったスカートの内側では、股布にじわっ、じわっと熱い雫が吹き付けてはその侵食範囲を広げていた。

（んう、んつ、んんつ、んんうんつ……！！）

股間に張り付く不快な湿り気が、静菜の心を深くえぐる。

少しでも『おトイレ』によって尿意を和らげなければ、荒れ狂う濁流によって意識のほうが先に参ってしまいそうだった。緩慢にヤスリをかけ続けられているような苦痛は全く治まる気配を見せない。

脚の付け根が擦り切れて、そのままぶちん、と入り口が弾け、大洪水が始まってしまいそうだ。

だが——それでも。

（つ、んつ、んゆ、んうんんんつ〜〜ッ！！）

ぎし、ぎし、と椅子を軋ませ、上履きで床を擦りながら——静菜は結局、20分の休み時間のほとんどを『おトイレ』に費やした。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 倉庫とビニール袋の話・1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/25/2009 21:10:58

BODY:

「もーおいーいかーいっ！？」

「まーだだよーっ！！」

はしゃぐ子供達の小さな声が、窓の向こうへ遠ざかってゆく。汗ばんだＴシャツの裾をつまんでばたばたと風を送りながら、美智佳はぼすんと積み重ねられた園芸肥料の袋の上に腰掛ける。

目鼻立ちの整った表情はわずかな期待といくらかの退屈を覗かせ、短いワンピースのスカートから突き出した細い素足は、サンダルを引っ掛けたままばたばたと揺れている。

「もう、まだ？ ……いつまで隠れてるんだろ」

肩上の髪がうなじに張り付いているのは暑いからではなく、プールで湿った髪がまだ乾いていないから。塩素の匂いをわずかにさせた前髪をつまみながら、はぁ、と溜息をつく。

「本当、アキちゃんたちの相手してあげるのも疲れるわよね」

ことさら自分が“お姉さん”であることを強調し、美智佳は大人びたつमोरの口調でそうつぶやいた。プール帰りに近所の低学年の子たちとぼったり出くわした美智佳は、帰る予定を変更して一緒に遊ぶことになった。かくれんぼなんて子供っぽいと思いはしたが、上級生の“お姉さん”としてはたとえ幼稚でも付き合ってあげるのがオトナのやりかたというものである。

しかし、付き合いはじめてかれこれ30分。美智佳が見つかったのはまだたったの1回だけだった。もっとちゃんと探せばいいのに、アキたちは鬼になってもまるで見当はずれのトコロばかり探しているのだ。

いい加減、美智佳は苛立ちはじめていた。

「あっついなあ……」

公園の片隅の園芸用品倉庫は、格好の隠れ場所になってくれはしたが、どうにも暑いし、空気も澁んでいてキモチ悪い。手のひらでばたばたと顔を扇いでみるが、気休め程度でしかなかった。

退屈を象徴するように、宙に浮かんだ美智佳の脚はぷらぷらと前後に揺すられる。園芸用品倉庫は2m四方くらいの小さな部屋で、窓がひとつあるだけの狭い空間の半分くらいに、シャベルと肥料、ロープなどがぼつぼつと置いてある。

春先や秋口にはもっといろいろなものがしまわれているが、この季節はほとんど空なのを、美智佳は去年、夏祭りのお手伝いをして知っていたのだった。とは言え、いまは退屈を紛らわせるようなものも何もないことこそが問題なのだ。

「もーおいーいーよーっ！！」

アキたちの合図の声が聞こえる。

しかし、はしゃぎ声はどんどん遠くなるばかりで、この分ではしばらく美智佳の隠れている園芸倉庫付近まで誰かがやってきそうには思えなかった。

足元には美智佳の荷物の青いバッグもあったが、中には着替えた水着とタオルが詰まっているくらいで、こちらにも暇潰しになるようなものはなかった。

「はぁ……」

もう一度溜息をついて、美智佳は口を尖らせ、腰掛けたスカートのおしりをもぞもぞと動かした。

サンダルを引っ掛けていた爪先がぴんと伸びて、地面をつつく。

いざ気が紛れないとなると、忘れていたと思っていたその感覚が、じわじわと無視できないものになってゆくのだ。

「んっ……」

美智佳は不意に立ち上がると、園芸倉庫の中を歩きだした。さして広くもないうえに荷物があって自由に歩けない狭い空間を、まるで何かに追い立てられるかのようにぐるぐると、小さな円を描いて歩き回る。

「っ、ふ……っ……あ……っ」

ぴたりと立ち止まった美智佳の唇から、ぞわり、ぞわりと波打つように少女の吐息がこぼれる。小さな手はぎゅっと握り締められ、爪先が代わりばんこにぐりぐりと倉庫の床をねじる。

剥き出しの素足がきゅうっと交差され、とうとう我慢できなくなった手のひらが、寄せ合わされた膝の上からぎゅうっと下腹部を押さえ込む。

（ま、またしなくなってきちゃった……っ）

「んうっ……」

目を閉じ、口を閉じてぎゅっと一文字に引き結ぶ。

ぷるぷると震える腰がほんの少し後ろに突き出され、前傾姿勢になった身体を支えるように壁に手を突いて、美智佳はぎゅうぎゅうと股間を押さえ込む。

まるで手のひらで自分の身体を持ち上げてようとしているような格好。

……もはや美智佳が何を我慢しているのかは、明白だ。

（トイレ……っ……）

いつのまにか、身体の中でたふたふと揺れる黄色いオシッコを下腹部いっぱい抱えながら。美智佳はひとり、じっと息を潜めていた。

美智佳が尿意を覚えたのは、ちょうどプールから上がって更衣室で着替えていた時だ。

市営のプールは実のところあまり綺麗ではなく、トイレもできれば使いたくない古びて汚れている場所だったので、よっぽどのことがない限り美智佳は使わないことにしていた。

その時の感覚はまあ、ちょっとオシッコしたい、くらいの軽いもので、家に帰るまで十分間に合うだろうと思われたので、美智佳はそのままトイレには寄らず、我慢することにしたのだった。

事実、帰っている途中はほとんどオシッコは気にならなかったし、アキたちのかくれんぼに付き合うことになった頃にはすっかり忘れていた。

だが、一旦は引いていたオシッコの波は、かくれんぼの間一人でじっと物陰に隠れているうちに再び潮が満ちるように高まり、ついさっきからはこうやってぎゅっと前を押さえなければ我慢できないほどになりつつあった。

(……もう、どこ探してるのよっ、みんな……)

じりじりと高まる尿意に急かされ、美智佳もいい加減、そろそろ切り上げて家に帰らねばならないと思い始めていた。

困ったことにこの公園にトイレがないので、ちょっと休憩というついでにオシッコを済ませることはできないのだった。

と言って、まさかここでオシッコをしてしまうわけにもいかない。美智佳は窓を見上げ、ちらちらと周囲を確認して思案する。

(どうしよう……かな)

このまま黙って帰ってしまおうか。それとも隠れるのを止めてアキたちに見つけてもらうか。せっかく遊びに付き合っている“お姉さん”としてはなんとなくそれを言い出せず、ずるずると今に至っている。

「……………」

こうなるとはやく鬼が見つけてくれるのが一番なのだが、困ったことにその鬼がまるで役に立たないのだった。

「んっ……」

また、オシッコの波の予兆を感じ取って、美智佳の脚がきゅっと緊張する。今度はそう簡単には乗り越えられなそうな、大波の気配だった。

(……や、やっぱりもういいや、アキちゃんたちには悪いけど、か、帰ろうっ)

そう決心した美智佳は、とにかく倉庫を出ようとドアに手をかける。

——だが。

「え……、なにこれ……ちよ、ちよと……っ!？」

ドアノブには何の手ごたえもなく、くるくると回るばかり。いくら力を込めてもがちゃがちゃと音を鳴らすだけで、まったく開く様子がない。

「う、ウソでしょ!？」

困惑から焦燥へ。美智佳は声を上げ、ドアノブを掴んでドアを揺さぶる。だが、押しても引いても叩いても、一体何をどうした具合か、園芸倉庫のドアは硬く閉ざされたまままったく開こうとしなかった。

がんとドアを叩き、美智佳は乱暴にドアをゆする。

わずかにがたがたと扉は揺れるが、所詮少女一人の力でこじ開けられるわけもない。動かなくなったドアは、まるで壁と同じように、狭い園芸倉庫を密室に変えてしまう。

「あ、開けてよっ……だ、誰かイタズラしてるの!？ ねえっ!？」

荒げた声に答えるものはいない。窓の外からは、かわりにじわじわと鳴く蟬の声だけが響いている。

「ウソ……本当に開かない……の…?」

美智佳が閉じ込められたことを理解したとき、それを見計らったかのように高まり出していた尿意が一気に攻勢をかけてくる。

「ふぁうっ……っ!？」

ドアをノックしていた美智佳の両手が、ぱっと股間に集まる。手のひらがあそこに重ね当てられて、十本の指がワンピースのスカート生地の上から脚の付け根を握り締めた。

「や、やだっ……あ、あっ、あっ」

きつく噛み締めた奥歯が美智佳の表情を強張らせ、クロスされた脚がぐねぐねと擦り合わされる。下着にあふれそうになる熱い雫

が、ぶくりとオシッコの出口を膨らませては、収縮する括約筋に押し戻されてゆく。

「あ、あつ、あつ、あーっ……」

尿意を堪える声が高くなり、美智佳の手足は一層緊張に強張った。

（いやぁ……だめ、と、トイレっ……）

助けを求めて、スカートから離れて握り締められた手が、閉ざされたドアを力なく叩く。もう一方の手はぴたりとスカートの前に張り付いて大胆に股間を握り締め、美智香は今にも崩れ落ちてしまいそうな身体を必死に支えた。

ぐいっ、と引き絞られたワンピースのスカートの中、少女の股間を覆う下着の奥で、イケナイ感覚が溢れようとしている。

「あ、あ……あ、～っ……！！」

か細い悲鳴を上げながら、美智香は懸命に緩みそうになる下腹部の水門を締め付ける。身じろぎと共に腰が左右にくねり、健康的に日焼けした膝がぐくぐくと震えた。

（ダメ、だめだめっ、オモロシなんか絶対ダメなのっ……！！　ちゃ、ちゃんとガマンできる、できるんだから……っ）

膀胱の貯水量の限界に迫りつつあるオシッコを押さえ込み、美智香は自分を叱咤する。もうおねえさんの自分がこんなところでのオモロシなんて、決してあってはならないことだった。

ふ、ふ、と唇を噛んで声を飲み込み、息を詰めて、美智香は執拗な『オモロシ』の誘惑に抵抗し続ける。これはもはや少女のプライドをかけた、オシッコとの戦いだった。

「ねえ、だれかいるの？」

不意に声がかかったのはその時だ。

窓の向こうから、アキの声が聞こえた。

「っ、あ、アキちゃんっ」

美智佳が助けを求めようと声を上げた瞬間だった。

じわぁ、と下腹部に熱い衝撃が走る。油断した瞬間を狙い済ましたかのように、不意打ちで込み上げてきたオシッコの波が、とうとう美智佳の防波堤を乗り越えたのだ。

「あ、あつ、あつ……！？」

（だ、だめ、ダメえっ！！）

きつく押さえ込まれたワンピースの下、白い下着に包まれた美智佳の足の付け根の奥で、ぶしゅっ、じゅっ、じゅううっ、と禁断の水音が響く。

排泄孔からぶしゅと吹き出した水流は、股布にぶつかって白い布地をあっという間に侵食してしまう。ワンピース越しにじわっと手のひらを汚すおチビリの感触に、美智佳は背筋を震わせた。

「いや、いやぁあっ」

くねくねと腰を揺すって漏れ出すオシッコをせきとめようとする美智佳だが、努力の甲斐もなくあふれ出したオシッコは下着の保水力を突破し、寄せ合わされた内腿にこぼれ出した。日焼けした膝をつうつ、ちょろろっ、と水流が伝い、健康的に日焼けした脚を汚してゆく。

「あー、美智佳おねえちゃん？　ここに隠れてたんだあ。美智佳おねえちゃんみーいつけたーっ！！」

「っ……」

暢気に鬼の役目を果たすアキ。しかし美智佳はそれどころではない。

(だめ、お、オモラシなんかっ……絶対ダメっ……)

くじけそうになる心を叱咤し、緩みそうになる水門を手のひらの力を使って押さえ込む。しかし、下腹部の奥で収縮を繰り返す膀胱は美智香の意思に反してオシッコを搾り出そうと、じゅう、しゅるしゅるっ、と断続的に熱い雫を滴らせる。このままでは、おチビリを通り越してオモラシに到達するのも時間の問題だ。

「～～……っ！！」

「おねえちゃん？ ねえ、おねえちゃん見つかったんだよ？ こんど鬼だからね？ ねー、美智佳おねえちゃんー？ どうかしたの？」

「っ、あ、アキ、ちゃんっ」

限界ぎりぎりのところで踏みとどまり、あそこを押さえながら声を振り絞る美智佳。けれど、声を出そうとするとオシッコまで一緒にじゅわあと吹き出してしまい、思うように言葉が続かない。

だが今は、アキに頼るしかこの密室を抜け出す方法はないのだ。

「アキちゃん、あの、こ、ここ、開かなくなっちゃったのっ、ね、ねえお願い、開けてえっ！！」

「ええーっ！？ ほんとう！？」

「み、みぎのほうに、ドア、あるからっ」

「うんっ、わかったっ」

ぱたぱたと足音が響き、アキが倉庫のドアに向かう。

「……あれ？」

「そ、そっじゃなくて、反対のほうよっ」

「えーと、えっと、おちゃわん持つほうが右手で……」

あまりにも頼りないドア向こうの救出部隊。美智佳はくじけそうになる心を必死に励まして、オシッコ我慢の姿勢を続ける。懸命の努力でなんとかおチビリは止まっていたが、またいつ再開してもおかしくない状態だった。

(あとちょっと、ちょっとだけ我慢すれば出られるのっ！！ も、もうすぐ、ほんのすこしだけ待てば出られるからっ、だから、オモラシなんかダメっ、ぜったいだめっ……！！！)

両手の指でぐいぐいと濡れた下着を握り締め、ぱたぱたと足をその場で踏み鳴らし、美智佳はドアの向こう側のか細い希望に心を繋ぐ。

だが。

がちゃがちゃ、と倉庫のドアノブをいじったアキは、あっさりと告げた。

「んーっ、んーんっ。……ねえおねえちゃん、これ開かないよお？」

「え……そ、そんな、ウソでしょ！？」

「うそじゃないもん。ぜんぜん開かないよっ」

疑われて気分を害したか、ちょっと怒った声のアキ。

それはいまや死刑宣告に等しい言葉だった。目の前が真っ暗になるのを感じながら、美智佳は背筋に冷たいものを覚える。

「そ、そんな……あ」

「これじゃあ、おねえちゃん見つけたーってできないね。どうしよう？」

この期におよんで悠長なアキの声。美智佳はおもわず叫んでいた。

「そ、それじゃ困るんだってばっ！！ は、早く開けてっ……」

「だからあ、開かないの。おねえちゃん、ちゃんとアキのおはなし聞いてなかったの？」

（そ、そんなことじゃなくてっ……！！）

かくれんぼなどと言う瑣末な問題ではなく、いま美智佳が直面しているのはもっともっと、逼迫して差し迫った超緊急事態なのだ。暢気なアキにとうとう我慢できず、美智香の苛立ちは形になり、オシッコに濡れた手で、ばんっ、と壁を叩いた。

「アキちゃん、だ、誰でもいいから、おとなのひと呼んで来てよっ」

「えー？」

「いいから早くっ！！ も、もう我慢できないのっ！！ お願い！！」

もはや我も忘れて、美智佳は叫んでいた。まったく話の分かっていないらしいアキに“お願い”するのははなはだ不本意で、不安なことこの上ないが、さりとてこのままでは埒があかない。

「早く、ねえ、早くしてお願いだからっ！！ あ、あのね、アキちゃん。その……おねえちゃん、お、おトイレ……がまんしてるの！！ だからお願い、アキちゃんっ、早くして……！！」

「ええー？ そうなの？ おしっこ？ おねえちゃんおしっこしたいの？」

「……っ、そ、そうなの、だからお願い……っ、アキちゃん、はやく…」

アキのような小さな子とはいえ、……いや、むしろ小さな子相手だからこそ、耐え切れない尿意を伝えるのはあまりに屈辱的だった。しかし、背に腹は変えられない。そうでもしなければ、この逼迫した事態をアキに伝えられるとは思えなかった。

「んー、わかったー」

本当の本当に分かってるんだろうか。思わずそう聞き返したくなる。

けれど、アキの足音はそのまますぐに小さくなっていった。遠ざかる小さな望みに、切なく高まる下腹部の危機をゆだね、美智佳はじっと待つしかなかった。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 倉庫とビニール袋の話・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/25/2009 21:12:15

BODY:

(はぁ……っ)

アキの足音が遠く響く子供達の喧騒に紛れて聞こえなくなり、美智佳は大きく息を吐く。

一時はどうなることかと思っていたおチビリはどうにか止まっていた。……いや、あるいは我慢できない分を、全部漏らしてしまったのかもしれない。オモラシの余韻でじんわりと痺れた股間は、まだはっきりとした感覚がない。

事実、いまや美智佳の下着は甚大な被害を被っていた。股布どころかお尻まで布地はぐちゅりと濡ればそり、オシッコに透けて少女の肌に張り付いている。

サンダルの足元も美智香自身が排泄した雫に濡れてきらきらと輝き、倉庫の床にはぼたぼたと雫が飛び散っていた。

(……っ)

いくらか楽になった脚の付け根を握り締めながら、なかば放心状態のまま、美智香は頭が真っ白になってゆくのを感じていた。

指と手のひらを汚すぬるぬるとした感覚。ずっしりと重くなった下着。冷たくなった手のひらに、いっそ心地よいほどの熱い奔流がぶつかる余韻。下腹部をびりびりと走り抜ける甘い痺れ。我慢に我慢を重ねていたものが、大切な場所から勢いよく吹き出す瞬間の開放感。

その全てが、今は激しい罪悪感に化けている。

(も、漏らしちゃった……っ、こんなに……っ)

再度、下半身の惨状を確認し、美智佳は悲痛な呻きを飲み込んだ。

『オモラシ』の衝撃は、少女の羞恥心を無慈悲に蹂躪してゆく。

もう立派なお姉さんなのに、トイレを我慢できなかったことは、繊細な乙女心には耐え難い屈辱だ。

「うぁ……」

身じろぎした下半身が、じゅくつと濡れた感触を響かせる。お尻を包み込む暖かい液体の感触は、ずっとずっと昔に卒業した懐かしいオネショの時にそっくりだ。

蟬の鳴き声が、代わらず響いている。

美智香がしゃがみこんでしまえば、他にはほとんど人が入るようなスペースもない小さな小部屋。まるで本当にトイレの個室にも似たそこは、しかし決してオシッコを済ませるための場所などではない。

「あうっ……」

時間の経過と共に、冷たくなり始めたパンツがおしりに張り付いて、ぐちゅりと音を立てる。股間からおしりの後ろまでを濡らすオモラシの不快感が、美智香の幼い羞恥心をざくざくと切り刻んでいた。

美智佳にとって、オシッコがうまくできないなんていうのは、小さな、それこそアキよりも小さな子供にしか許されないことだ。美智佳が最後にオネショをしたのだってもう何年も昔のことだ。とくに卒業したはずのオモラシの再体験は、知らず潔癖に育った美智香の心に深く根付いたかつてのトラウマを呼び起こしてしまっていた。

（キモチ悪い……よお……）

ぐず、とこみ上げてくる涙を睨り、美智佳はのろのろと動き始める。

こんな格好、誰かに見られたら死んでしまうに違いない。

（このまじゃスカートも汚れちゃう……ぬ、脱がなきゃ……っ）

そもそも、オシッコで汚れ、ぐしゃぐしゃになった下着なんて、気持ち悪くてこれ以上濡れたままの下着を穿いていられそうにもなかった。なんだか今もまだ、オシッコが出続けているような錯覚さえ感じてしまう。

ぐちゅりと音を立て、脚の間にべったりと貼りついた下着の股布部分を指で引っ張り、美智香は脚を大きく開いて腰を突き出したガニ股の格好で、ふらふらと倉庫の隅にある棚に寄りかかる。内腿を伝って落ちるオシッコの筋が、これ以上スカートを汚さないように中腰の姿勢をとる。

「アキちゃんが、誰か呼んでくる前に……なんとかしなきゃ……」

幸いなことに、と言うべきか。漏らしてしまったオシッコの大半は下着に吸収されたため、ワンピースには甚大な被害はない。それでも小さくはない染みががついているが、誤魔化しきれないことはないかもしれない。

しかし、このままの状態で家まで帰ることはまず不可能にも思われた。

ゆっくりと慎重に、美智佳は下着を足元へ引きおろしてゆく。

「うう……っ」

ぐしゅ、と音を立てる下着に、罪悪感と嫌悪感がこみ上げてくる。誰も見ていないとはいえ、家でもなんでもない場所で下着を脱ぐのは強い抵抗があった。

ワンピースのスカートが触れないようにおなかの上まで引っ張りあげて口で端をつまみ、ぐしゅりと湿った下着を、注意しながらゆっくりと引き下ろしてゆく。美智香のオシッコをたっぷり含んだ小さな布地はぼたぼたと黄色い雫をこぼし、倉庫の床に点々と水滴を落とした。

その痕跡をサンダルでぐりぐりとこすり付けて誤魔化しながら、美智香は慎重にゆっくり下着を脚から抜く。むき出しになった股間は、まだ乾いていないせいでひんやりとした感覚を覚える。

「ぐすっ……」

オシッコまみれになった下着は、我慢の最中に無理矢理引っ張り続けられたせいで大きく伸び、形が崩れてしまっていた。お気に入りのパンツを台無しにしてしまった絶望感に、美智香は小さくしゃくりあげた。

このまま捨ててしまいたい気分にも駆られたが、パンツをなくしたまま家に帰ってもお母さんに説明できない。美智佳は濡れた指

で下着をつまんだまま、倉庫の中を見回す。

(……………うっ。嫌だけど、し、しかたないよね…………)

少なからぬ躊躇を飲み込んで、美智佳は近くにあった水泳バッグを引き寄せた。水中眼鏡やキャップといった水泳の道具と一緒に、バッグには濡れたままの学校指定の水着も中に入っている。

バッグを開いて、美智香はそこから使用済みの水着を詰め込んであるビニール袋を取り出して広げる。

オモロシぱんつを水着と一緒にするのは嫌でたまらなかったが、ほかにどうしようもない。まさかこのまま帰るわけにいかないのだ。

「……………っ」

濡れたスクール水着の傍に、美智佳は躊躇いながら別の水分で濡れたパンツをくると丸めて押し込んだ。

中身が出てこないように厳重にビニール袋の口を結んで、一仕事を終える。すうすうと落ち着かない下半身の上をスカートで押さえながら、美智佳は重い気分で溜息をついた。

「はあ……………」

これでなんとか、外に出たときにオモロシしたことは悟られずに済むだろう。

タオルの端でこっそりと手を拭いて、そろそろとスカートの裾を気にしながらくるとその場で一回転して、被害がないかを確認する。夏場のワンピースのスカートは大胆の膝の上に切り上げられていて、ちょっとしたことでめくれてしまわないかと気が気ではなかった。

まだ湿っている剥き出しの股間はすうすうと風に触れる。激しい動作をしなければ下着を付けていないことがわかるような短さではないはずだが、大切な場所をまるで隠すことができていない美智香の心理状態ではほんの少しスカートが揺れるだけでも息を飲むほどのショックだ。

「っ……………」

後始末が一段落すると、再びつうん、と鼻に熱いものが染みる。

まさか、この年齢になってオモロシをしてしまうなんて、ぜったいに絶対にありえなかった。もうとっくの昔に卒業したはずの、脚の間を汚す不快感。おしりを包み込む暖かさ。忘れていたい小さいころの『失敗』の数々が美智香の脳裏をよぎる。

また泣き出してしまいそうになるのを必死にこらえながら、美智香はじっと、開かない倉庫のドアを睨みつけた。

どれくらい時間が過ぎたのだろう。

ほんの数分、ということはないはずだった。小刻みに脚を踏み鳴らしながら、美智香は次第に焦れてくる心を必死になだめ続けている。

スカートの下、オシッコで汚れたままの内腿は、うっすらと薄赤く染まっている。長い我慢とオモロシの十分な後始末ができなかったせいで、少しむず痒い。長い我慢に握り締められた股間は布地にこすれて、ますます少女の下腹部を敏感なものにしていた。

(あ……………やだっ…………)

だから、はじめはそれも乾きかけたオシッコの跡のせいだと決めつけていた。

「ふあ……………んっ」

鼻にかかった甘い声と共に、少女の腰が小さくねる。交差された脚は、さっきまでと同じようにきゅっと寄せ合わせれ、脚の付け根にある大切な場所をガードしていた。

気のせいだ。ちょっと痒いだけ。

そう心の中で繰り返して否定しても、どんどんと高まる下腹部の違和感はたちまちのうちに膨れあがり、美智香を飲み込んでしまう。

(ま、また……しなくなってきちゃったっ……)

おヘソの裏側にある、少女のヒミツのティーポットがくつくつと沸騰する。

あれだけパンツをびちゃびちゃに汚してしまったのに、ほとんど間もおかないうちに猛烈な尿意が美智佳を責め苛んでいた。

(さ、さっきあんなにしちゃったのに……なんで？　こんな、お、オシッコ……っ！？)

実のところ、さっきのオモラシでは美智佳の膀胱は完全に空っぽになったわけではない。必死になってオシッコの出口を圧迫した結果、排泄が中途半端な形で中断されただけだ。

プールの中で半日ちかくを過ごし、美智香の小さなおなかの中は、濃縮された色も匂いも特濃のオシッコに完全に占領されてしまっている。一旦はオモラシと言う形でいくらかの量を処分したものの、時間の経過と共に尿意は再び活性化し、少女の排泄器官は膀胱をぱんぱんに膨らませる不要な水分を絞り出そうと、一層激しい生理現象を訴えていた。

「はっ……はぁっ……」

美智香のこめかみをつ、と汗が伝う。

じわじわとこみ上げるオシッコの圧迫感は、いつしかさっきのオモラシの時に迫りつつあった。

とどまるところのない尿意を堪え、美智香は倉庫の壁に爪を立てて、ぎゅっと力を入める。

無慈悲にも、少女の代謝機能は乙女の繊細な羞恥心など省みることもなく、下腹部に溜まった老廃物の排泄を要求していた。だがそれを口にできるわけがない。たとえ訴えたところで、故障が直るわけではないのだ。

(や、やだ、オシッコ、オシッコしたいっ……トイレっ、トイレえ……！！)

もはや偽ることなく切なる願いを心の中で叫びながら、美智香はくねくねもじもじと身をよじる。

(い、いちどオモラシしちゃってるのに……っ、ま、また、出ちゃうっ……やだっ、やだぁ……っ)

身体のあちこちから、小さな小さな入れ物に次々と送り込まれるオシッコに、恥ずかしい所の奥にある水風船はいまやパンク寸前になって、些細な刺激ですら破裂してしまいそうだ。切羽詰った尿意を悟られないよう、脚をぐっと交差させ前かがみになった姿勢で壁に寄りかかる。少しでも楽な姿勢を探して、美智香は落ち着きなくからだをくねらせる。

狭い園芸倉庫のなかは、まるでトイレの個室にも見えてしまう。

「っは、つくうっ……」

とうとう辛抱できなくなって、美智香はその場で腳踏みを始めてしまう。まるで幼稚園の子のような、みっともない格好だ。ぎしぎしと倉庫の床が軋み、音を立てる。少しでも尿意が紛れればと思っただけの行為だが、さっきまでとは違いほとんどその効果はなかった。

(っ……う)

股間を押さえてトイレのことを強く想像しても、じんじんと疼く下腹部は少しもおさまってくれない。波のような尿意はいつしかさらに水位を増し、高潮のように間断なく高まり続けていた。

一時の激しい尿意の最大値こそさっきよりもおとなしいものの、弱まることなくじりじりと高まり続けるオシッコの圧力が、脆い脆い

排泄孔を押し破ろうとしてくる。

「っは、あふ、つくう……っ」

見えない机の門に股間を押しつけるように、腰を前後に揺する。美智香の下腹部を占領したオシッコがたぶたと揺れているようだった。

いまだ、ドアの向こうに誰かがやってくる気配はない。アキは一体どこまで行ってしまったのだろう。

（ひょっとして、私、ずっとこのまま……なの？）

恐ろしい想像にますます身体が萎縮し、おなかをぱんぱんに膨らませているオシッコが暴れ出す。美智香の孤独な我慢の戦いは終わる気配を見せなかった。

「うあ、だめえ、えっ」

再度込み上げてきた熱い感触をぐっと脚の付け根の奥に押し返し、美智香は倉庫のドアを恨めしげに見つめる。

「ね、ねえ、アキちゃん、いないの？ まだ？ 誰でもいいから、ねえ、開けてよっ……はやく、はやくここから出してよっ……」

とうとう声を上げ、拳を握りドアを叩く美智佳だが、硬く閉ざされたドアは、無常にも少女の懇願を固く弾き返す。いても経ってもいられずにドアの隙間に爪を立てて力を籠めるが、少女の腕力では到底こじ開けることなど不可能なのは明白だった。

それなのにオシッコは今にも出てしまいそうで、じっとしていられることができず、美智香はエレベーターの中をぐるぐると回り始めてしまう。

（はやく、早く、トイレえ……っ！！）

がんとドアを叩き、体育祭の入場行進のような大げさな足踏みを繰り返す美智香。膝を上げて、おなかの中のオシッコをたぶんと押し上げようとするかのよう。

「アキちゃんってばっ、ど、どこ行っちゃったのよお……ほ、ほんとに、間に合わなくなっちゃうからあっ……は、早くして……お願いっ！！」

涙の混じった声での懇願が狭い倉庫に響く間にも、美智佳の下半身はオシッコのできる場所を渴望し、トイレを切に求める訴えを繰り返す。

確かに、厳密な定義で言うならば着衣や下着に被害がなければオモラシとは言えないかも知れない。このまましゃがみ込んでスカートをたくし上げれば、オシッコをしてもワンピースに被害は出ないだろう。

しかし、それはきちんと出てしまったオシッコの始末ができていればの話である。いまの美智香に言わせれば、正しくない場所でオシッコをしてしまったら、それはオモラシと変わらない。

ここは閉ざされた園芸倉庫と言う密室の中で、美智香が一旦出してしまったが最後、オシッコは全部床の上にびちゃびちゃとこぼれてしまうのだ。自分のオシッコが倉庫のそこらじゅうに広がって大きな水溜りをつくり、匂いを立ち込めさせるその光景は、美智香の羞恥心を激しく揺さぶってしまう。

もし、ここから出られたとしても、その瞬間——その場に居合わせた人たちに、トイレを我慢できず、ここでオシッコをしてしまったこと——それがどれくらいの勢いで、量で、音で、匂いで——そのすべてを知られてしまうに違いないのだ。

しかし、いくら我慢を続けても事態が動き出す気配はなかった。

一度も尿意は弱まらないまま、少女の秘密のダムは危険水域を突破してしまった。縁のぎりぎりまで注ぎ込まれた恥ずかしい熱湯が表面張力で盛り上がり、限界を超えてじわじわと溢れ出してくる。

（っ、……っ、ダメ、え……っ！！）

もはや一切の躊躇は許されなかった。女の子としての最大の恥辱、『オモラシ』を回避するため、美智香は必死になって身体をよじり、今にも緩みそうになるオシッコの出口を握り締めた。

（で、出ちゃうっ、出ちゃうでちゃうオシッコ出ちゃう……ツツ！！）

全身全霊の我慢をしてなお、押し寄せるオシッコの波は押さえ込めない。ぎゅうっと強く引っ張られたスカートの下で、しゅる、じゅっ、と女の子の股間がみっともない音を響かせ、美智香の内腿の隙間を熱い雫が満たす。ぽた、ちょろっ、ちょろろっ、と吹き出したオシッコはくねくねと揺さられる少女の脚元、倉庫の床に雫を垂らしてゆく。

（や、だめ、ダメえ……！！！）

オモラシ。

オシッコ。

床を濡らさないために——美智香の身体は最後の力を振り絞って、最悪の事態を回避するための行動に出ていた。

ほとんど真っ白になった頭での、反射的な行動だった。

美智香は床に落ちていた水泳バッグを掴み、もう二度と使うまいと思っていた水着入れのビニール袋を引っ張り出す。

この間にも、溢れそうなオシッコを塞ぎ止めるため、美智佳の脚はひっきりなしにその場足踏みを繰り返していた。

閉じた口の結び目を、焦りながら震える手でもどかしく解き、大きくビニール袋の口を広げる。

「っふうあ……！！」

脚の付け根で、排泄孔がぶくつと膨らむ。美智佳はスカートもたくし上げられず、ビニール袋を跨ぐように“がぼっ”と足を広げ、むき出しの股間にきつくビニール袋の口を押し付けた。

ほとんど間をおかず、制御をなくした排泄孔がオシッコを出し始める。美智香の脚の付け根から激しい水流が吹き出して、あてがわれたビニール袋の内側に叩き付けられた。

じょっ、じょぼっ、じょぼぼぼぼぼぼおーっ！！

まるでホースの先端を潰して庭に水を撒いているかのような、激しい激しい水流だった。

堰を切ったように溢れ出す激しい水流が、半透明の袋の内側にぶつかって、雨が傘にぶつかるようなばらばらという激しい飛沫を飛ばした。美智香が我慢に我慢を重ね続けて溜め込んだオシッコの大放流は、倉庫の床を汚す代わりに、簡易トイレと化したビニール袋の中に注ぎ込まれていく。

「あ、あつ、あつ」

激しいのは音だけではない。長い間の我慢で濃縮されたオシッコは、色も匂いも強く、熱気の籠った2 m四方の密室のなかに濃い匂いを立ち込めさせてゆく。

激しい水流を受け止めるビニール袋の中では、少女の身体に不要な成分をたっぷりと含み、ちくちくと鋭い尿意をもたらしていた特濃のオシッコが、中身をびちゃびちゃに浸していた。美智香がついさっきまで穿いていた下着も、紺の水着も、薄黄色の暖かい液体の中に沈んで行くのだ。

「あ……はあつ……」

しかし、そんなビニール袋の中の惨状には気付けないまま、美智香は恥ずかしさも忘れて、我慢の局地に達していた尿意からの解放感に夢中になっていた。少女の唇は薄く開き、まるで喘ぎにも似た声をこぼす。

焼けた砂を飲み込んでいたようにきつい尿意を訴え、ぱんぱんに膨らんでいた膀胱が、緊張から弛緩へと変化する括約筋とともに中身を空っぽにしてゆく。

おなかの中を占領していた熱がごっそりと抜け落ち、背筋が震える。苦痛からの解放はいっそ快感にも近いほどだった。耐えに耐えたオシッコを思う存分出しきる快感に、ビニール袋を支える手の指にぎゅっと力が籠り、美智香の腰がぶるぶると震える。

「ふぁ……う」

美智佳のオシッコは長く続いた。それは本来、少女の繊細な羞恥心によって隠され、他人の視線には決して触れることのない秘密の行為のはずだ。女子トイレという禁域の、秘密の個室の中でだけ、少女はオシッコをすることが許されている。

美智佳はそれを、おそよトイレとは無関係の場所で行っているのだった。中腰になってスカートの下にビニール袋をあてがうという、およそありえない姿で。しかもあろうことか、そのオシッコの注がれる先は、便器でもなく、彼女自身の下着を詰め込んだ安っぽいレジ袋の中である。

美智香は今、自分の着ていた水着と下着を、自分自身のオシッコで取り返しのつかないほどに汚しているのだった。考え方を変えればこれはもはやオモラシとまったく変わらない。

「あふっ……うああ……」

ビニール袋の中に響くぐもった水音が、次第にゆるやかなものになってゆく。時間にして数えれば実に1分近い放出は、どれだけ美智香が我慢を続けていたのかを示すに十分なものだ。

そして勢いもまたそれに比例して激しかった。しっかりとビニール袋をあてがっていたにもかかわらず、入りきらなかったオシッコは倉庫の床に小さな飛沫を撒き散らしている。

ちよろ、ちよろろ……ちよろっ、ぴちよ……

水流が雫に変わり、水滴の音で締めくくられる。ちいさくいきむと同時に、残っていた水滴がちよろろとこぼれてビニール袋の水面を揺らす。

とうとうおなかの中が空っぽになるまで、美智香は溜まっていたオシッコを全部ビニール袋の中に出してしまった。

「……で、ちゃった……」

そして、猛烈な尿意が去ると共に、徐々に美智佳の頭にも冷静な自分が戻ってくる。

自分がどこで何をしてしまったのかは、ずっしりと重いビニール袋が教えてくれた。美智佳が小さなおなかの中に抱え込んでいた恥ずかしい液体で水浸しとなったビニール袋の熱さと重さが、美智佳の羞恥心をざくざくと切り刻む。

（こんなところで……お、オシッコしちゃった……っ……ビニール袋なんかに、オシッコ、しちゃったっ……！！……水着も、パンツも入ってたのに……あんなにしちゃって、もう着れないよ……）

すん、とすすり上げると、狭い倉庫の中いっばいに満ちたオシッコの匂いがはっきりと感じられた。蒸し暑い気候にくわえ、密閉されて空気の澱んだ園芸倉庫の中ではより一層、自分の匂いが強調されているような気までしてくる。

美智香の目元にじわっと涙が滲んだ。

「ぐすっ……」

オシッコでいっぱいになったビニール袋をぶらさげたまま、しゃくりあげながら、熱い目元をこする。美智香はあとからあとからこぼれそうになる涙をぬぐうので精一杯だった。

(っ、どうしよう……お母さんに、お、怒られちゃう……っ)

大切な水泳道具を入れた袋を、トイレの代わりに使ってしまったことへの途方もない罪悪感が少女を責めたてる。自分のオシッコで水浸しになったビニール袋を抱え、美智佳は途方にぐれてしまう。

女の子として絶対にあってはならないことを、してしまった。飲み込んだ嗚咽と共に、じっとりと湿った空気が、美智香のおしっこの匂いと一緒にあって鼻奥をつんと刺激した。

まるで、倉庫の中全部が、自分のオシッコでいっぱいになってしまったんじゃないか——そんな風に美智香には感じられた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 倉庫とビニール袋の話・3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/25/2009 21:15:34

BODY:

とうとう、倉庫の真ん中で我慢しきれずにおしっこをしてしまい、美智佳はその事実ですっかり打ちのめされてしまった。
女の子としてありえない行いに、美智佳は情けなさで恥かしさでばらばらになりそうで、唇をぎゅっと噛み締めて涙をこらえる。
と、不意に。沈みきっていた美智佳は、閉ざされたままのドアの向こうに気配を感じた。

『おい、誰かいるのか？』

壁一枚向こうで低い声がする。同時にかちゃがちゃと、ドアノブと鍵を弄る音。

それははっきりと、ドアを隔てた美智佳に投げかけられたものだった。

どンドン、と美智佳のしていたよりも数倍力強くドアが叩かれる。その音の大きさに驚きと恐ろしさを覚え、美智佳は思わず口を押さえ、後ずさりドアから距離をとった。

『おーいっ！！ 聞こえるか？ 誰かいるなら返事しろよっ』

聞こえてきたのはやや低い少年の声だった。

一瞬、アキが誰かを呼んできてくれたのかと思うが、ならば中に誰がいるのかも分かっているはずだと考え直す。それに、アキの声も聞こえる様子がない。

「っ……」

スカートの下の剥き出しの下半身が、恐ろしいほどの不安をかきたてた。何も穿いていないのを見られてしまうかもしれない。声の主が男の子だと気付いて、脈絡もない考えに美智佳の頭が凍りつく。

たった一枚のパンツがなくなっただけなのに、美智佳はまるで足元が底のない穴になったかのような恐怖を感じていた。

知らない相手を前に、答えるべきかどうか一瞬ためらう美智佳だが、先刻の一生出られないかもしれないという想像がぞくりを背中を粟立たせる。

『誰もいないのかー？ おーい……』

(どうしよう……でも、中にいるって気付いてもらわないと、出られないし……)

このまま黙っているのは簡単だが、いまだにアキが戻ってくる気配もない今、意地を張っている場合ではないのは確かだ。

「あ……あの、はいっ、います、中にいますっ」

覚悟を決め、恐怖心を押さえ込んで、美智佳は恐る恐る返事をする。ドアの向こうにいる誰かはすぐにそれに応えてくれた。

『なんだよ、やっぱりか……鍵かかってるから変だと思ったんだよな……。なにやってんだ？ 閉じ込められたのか？』

「え、っと……その、アキちゃんたちと一緒に、かくれんぼしてて……」

『なんだよ、こんなトコ勝手に入るんじゃねえよ。ボロ倉庫なんだから』

舌打ちとともに少年が言う。やや苛立ちを含んだ低い声に思わず萎縮してしまう美智佳だが、どうも相手はあまり怒っている様子はないらしかったことがすぐに分かった。

がちゃがちゃと鍵を弄り、ドアを叩く気配が続く。しばらくの後、少年は諦めたようにため息を付いた。

『だめか、開かねえ。やっぱ鍵かかっちゃまってるみたいだな……なあ、お前、平気か？』

「えっと……」

ビニール袋の中の大洪水の状況が、美智香の応答を澁ませる。美智香の大切な水着も、お気に入りだったパンツも、オシッコで悲惨なまでに水浸しだ。とても大丈夫といえる状況ではなかったが、素直に口にできるわけもない。美智佳は口ごもりながらそう答える。

『熱いとか頭痛いとかないか？ そーいやお前、名前は？』

「み、美智佳……」

自分のおしこの匂いの中で、美智香はつかえながら自己紹介をする。

『美知佳か。返事でできや大丈夫か？ いつから閉じ込められてんだ？』

「わ、わかんない……けっこう前から」

思わず倉庫の中を見回し、時計なんかないのだということを思い出して、美智佳はうなだれた。少年はまたなんだよ、と小さくつぶやく。

「ね、ねえ、ドア、開かないの？」

『ああ』

もう一度試すようにがちがちとドアノブを弄り、少年は美智佳に聞こえるようにか、幾分声を大きくする。

『……あのな、落ち着いて聞けよ？ この倉庫の管理、俺の爺さんがやってんだけど。知ってんだろ、町内会の爺さん』

「ごめん、知らない……」

『そっか。まあいいや、それで、俺もその手伝いしてんだけど』

「じゃ、じゃあ鍵もってるの！？」

降って湧いた天の助けに、美智佳は顔を輝かせる。だが、少年はすまなそうに声を落とし、

『それがな、爺さんいまちようど留守にしてんだよ。俺もどこに鍵あんのかわかんねえからな……。ったくボロいから早く直せって言うのに、横着するから』

「そんな……」

期待を裏切られ、がっくりと肩を落とし、美智佳はその場にしゃがみ込んでしまう。声の主の少年に悪いところがないとわかっていても、思わず文句を言いたくなった。

『美智佳、ちょっと待ってろよ？』

そう言うと同時に、足音が倉庫を離れてゆく。まさかまた見捨てられてしまったのだろうか、一瞬不安になった美智佳だが、足音はすぐに戻ってきて、

『これ、やる』

ぶっきらぼうな声と共に天井近くの窓の格子から、真新しいペットボトルが放り込まれた。地面でぽこんと跳ねたそれは、まだ買ったばかりのように冷たく冷えた未開封の清涼飲料だ。

『お前、喉乾いてるだろ。なんか飲んどけ、熱射病になっちまうから。で、とりあえず、一旦家帰って鍵探してきてやるから』

「あ……」

『いいな、待ってろよ？ 美智佳』

「う、うんっ」

予想外の優しさに触れて、美智佳は顔を輝かせた。

アキもどこかにいってしまって、本当にこのまま出られないまま見捨てられてしまうのかもしれない。そう思っていた心細さが、少年の声によっていつの間にかゆっくりとほどけてゆくのだった。

『じゃあ、待ってろよ』

「うんっ」

もう一度言って、少年の足音が遠ざかってゆく。
地面に落ちたペットボトルを手に、美智佳はゆっくりと安堵の息を吐いた。

「よかった……」

これで、もうすぐ出られる。

わずかな、けれど確実な希望。美智佳の緊張に強張っていた全身から力が失われてゆく。ふらふらと倒れ掛かった小さな身体は、近くの土嚢にぼすんと腰掛けた。

「はぁッ……」

疲れきったため息が、少女の唇からこぼれる。

閉じ込められてからどのくらい経ったのだろう。

二度の排泄は美智佳の身体から水分を絞り上げ、いつの間にか喉がカラカラになっていた。緊張のピークを過ぎ、落ち着きを取り戻した身体は素直に排泄した分の水分の補給を訴えている。

ただでさえ30度近い気温の密室に長時間閉じ込められているのだ。その上、最初のおチビりもあわせてこの短時間に2回もトイレをしてしまっている。身体が水分を求めるのも仕方のないことである。

（のど、乾いた……）

まるで熱した塩のかたまりを飲み込んだよう。胃と食道が新鮮な水分を求めて身悶えしている。砂漠で遭難したような気分で、美智香はぼんやりと、さっき手渡されたペットボトルを見る。

壁の隅に追いやられたビニールはできるだけ視界に入れないようにして、美智佳はふらふらとペットボトルの飲み口に手を添える。
いけない、と思う気持ちはなくもなかった。

しかしぼうつとする頭は熱に浮かされ、ほとんど余計なことを考えられなくなっていた。二度も壮絶な我慢と排泄を強いられたせいで、少女の神経は磨耗し、思考はぼんやりと霞んでいる。

よく冷えた清涼飲料のペットボトルは、手が震えるほどに冷たい。服の裾で両手を念入りにぬぐってから、美智香は飲み口の封を切り、口をつける。そもそもオシッコをした場所で飲み物を口にすること自体にも抵抗がなかったわけではない。しかしひり付くような喉の渇きはもはや限界に近く、きんきんに冷えた冷たい水分の誘惑から逃れることは不可能だった。美智香は迷わず、よく冷えた半透明の液体を飲み下してゆく。

こくりと飲み干したとたん、きゅうっと喉がすぼまり、甘美な冷たさがおなかの奥へと滑り落ちてゆく。

「はぁ……」

頭の芯まで染み入るような冷えた清涼飲料の一口ごとに、融解していた理性が形を取り戻してゆく。喉を潤した水分は瞬間に全身に広がって、頭から爪先まで隅々へと行き渡っていった。

ペットボトルをほとんど水平まで傾け、ごく、ごく喉が音を立てる。

ちゃぽん、とう音に我に帰って見れば、すでにペットボトルの中身の半分近くがなくなっていた。さすがにそこで、だいたい冷静さを取

り戻した理性が警鐘を鳴らす。喉が乾いたのは仕方ないが、またこんなものを飲んでしまえばすぐにトイレに行きたくなってしまうのではないかという予感だった。

だが、渇いた身体はまださらなる水分の補給を訴えており、その欲求には逆らえない。

(……だ、だいじょうぶだよ……、もう、2回もしちゃったんだもん……)

美智香は誰にともなく言い訳をして、そのままペットボトルの中身を喉の奥に流し込む。

渇ききった身体にとって、よく冷えた水分はあまりに心地よい。密閉されてかなりの高温となった倉庫内の気温に比べれば、実に20度以上差のある清涼飲料のもたらす美味しさに抗うことはできなかった。

さらに通常の生水とは違い、疲弊した身体が必要とする成分各種を含み、水分補給に最適化した液体は、かなりの量でありながら少女の喉をあっという間にすべりおちてゆく。

ひとくちふたくちと夢中になって飲み続けるうち、その大半はあっさりと喉を通りすぎ、少女の胃の中へと落ちてゆく。

「ぶは……っ」

とうとう500mlペットボトルの底まで完全に空にして、美智佳はほぼ全部を飲み干してしまった。

ようやく行き渡った水分に、朦朧としていた頭に余裕が戻ってくる。数時間ぶりの水分摂取によって、全身が生き返ったようなすがすがしささえ覚えていた。文字通りの人心地ついて、美智佳は倉庫の壁に寄りかかる。

「……全部、飲んじゃった……」

後悔がなかったわけではない。いつ出られるのか動かもわからない密室の中で、後先を考えずにペットボトルを空にしてしまったことへの不安はもちろんあった。

確かに、喉は乾いていた。

けれど、さっきの少年——そういえば名前も聞かなかったけど——がいつ戻ってきてくれるのかは、冷静になってみればわからない。少なくとも、確実なことは言っていなかったようにも思う。

それなのに水を、少なくともあんなにたくさん飲んでしまったのは間違いだったかもしれない。

「……っ」

落ち着きを取り戻せば、倉庫の隅に押しやられたバッグが嫌でも目に入った。バッグの傍に押し込められているビニール袋は、中身を残らずおしっこで水浸しにせんばかりに、なみなみと黄色い液体を注がれている。

美智佳のタオルや水着や、パンツまでもを台無しにした、美智佳の“オモラシ”の証。

まさか、とは思っけれど。

もう一度、あんなことに——

「大丈夫、大丈夫だってば……」

脳裏によぎった最悪の想像を、ぶるぶると首を振り追い払って、美智佳は空のペットボトルを放り投げる。

けれど、もしそうだとしたら。

見るのも嫌なビニール袋は、倉庫のドアが直って外に出られたときには、どうやっても、持っていかなければならないものだ。まさか捨てて置けるわけもない。

「……どうしよう……」

硬くぎゅっと縛られた袋の口を、恐る恐る美智佳は再確認する。

このままそととバッグに入れて持ち運べば、なんとか中身に気付かれずに済むだろうか。オシッコをなみなみと蓄えた袋を、そのまま

バッグに入れるのには激しい抵抗もあったが、まさかこのままぶら下げて持ち歩くわけにもいかない。

美智佳の思い出すのは、まだ低学年だったころ、学校でトイレにいけなくて“失敗”してしまった子たちが、保健室で着替えて持ち帰った“おみやげ袋”だった。汚したパンツやズボンやスカートを、洗って小さく包んだあの袋は、まさしくオモラシの証拠として、見つければしつこくからかわれたものだった。

まして、薄黄色の中身を透けさせる半透明のビニール袋は、その“おみやげ袋”よりもさらに酷いもので、美智佳がこれをトイレ代わりに使ったことを何よりも明白に示している。

改めて事実を思い返していると、またオモラシのショックが蘇ってきて、美智佳の目元に熱い雫が滲む。

倉庫に閉じ込められ、あげくおしっこまで。どうしてこんな不運な目に遭わなければならないのかと、美智香は俯いてしまう。
「ぐすっ……」

早くココから出たい。そう切望すると同時に、美智佳はどうかこの硬く閉じたドアが開きませんように、とお願いしている矛盾した自分に気づき、ちいさくしゃくりあげるばかりだった。

だが――

乾きに任せ一気に飲み干した水筒の中身がもたらす当然の結果が、やがてそんな悠長なことを言ってもらえなくさせてしまうことに、まだ美智佳は気付いていなかった。

少女を襲う悲劇は、まだまだこんなものではなかったのだ。

「おねーちゃん、ねー、どうしよう。誰もいなかったー」

「っ……！？」

不意に響いた高い声に、美智香ははっと振り仰ぐ。さっきの男の子が鍵をもってきてくれたのだろうか、顔を輝かせかけた美智佳だが、ドアの向こうのつまらなそうな声音は、もっと幼い。

「あ、アキちゃん？」

「おとなのひと、誰もいなかったよ？ ねー？」

「うんー」

「そうだよー」

ざわざわと、アキに続く小さな声が口々に言葉を継ぐ。

「ねえ、おねえちゃんこの中にいるの？」

「じゃあおねえちゃんが鬼ー？ おねーちゃん、見つけたよー？ ねえ、つぎはおねーちゃんだよ？」

「ばか、おねえちゃん閉じ込められてるんだぞ！！」

「え、おねえちゃん出られないのー？」

騒々しいほどの騒ぎが、ドア一枚向こうで起きていた。

倉庫の壁に集まってきた小さな子達の気配は、少なくとも数名、下手をしたら十人近いかもしれない。思いも寄らぬ事態に美

智佳は身体を強張らせる。

「ちょ、ちょっと待って、アキちゃん、みんな連れてきちゃったの？」

「うん。みんな連れてきたよ」

えへん、とアキが胸を張っているのだろう。その様子がなぜか、美智佳には手によるように分かった。

思いも寄らぬ大事だった。美智佳としては、ちょっと話の分かる大人に声をかけて、鍵をあけてもらえばそれで済むと思っていたのである。けれどアキが引き連れてきたのはみんなアキと同じか、それよりも小さな子達ばかりなのだ。

「おねえちゃん出られないんだ。どうしよう？」

「先生に言ったほうがいいと思いまーすっ」

「俺知ってる、おまわりさんとか呼ぶんだよ！」

「えー。ちがうよ。こういうときはレスキューって呼ぶの！」

倉庫を取り巻く小さな子たちの台詞が、どんどん剣呑なものになってゆく。一方、ドアの鍵をがちゃがちゃと乱暴に弄る音も始まっていた。

「ねえ、僕にもやらせて！！」

「まってよ、あたしが今やってるんだからっ」

「あーずるい、順番だぞー」

どうやら、何人かは健気にも倉庫の鍵を開けようとしてくれているらしい。だが――

「これでほら、こうやって――」

「ばか、砂なんか入れたら壊れちゃうぞ！！」

「俺知ってる。前にテレビでこういうので開けてたぜ！」

「押すなって、折れちゃうだろ！！」

「そんな枝なんかで開くわけないでしょ、貸してよ！！」

立て続けに響く、不穏な台詞に何かをつつこんだり、押し当てたり、揺さぶったりする、どう考えても危うい音が響いてくる。本人たちは真剣なようだが、いつしかそれは、『この鍵を開けて美智佳を一番に助けだした人の優勝』という雰囲気、に熱を帯び始めていた。

「俺が先だつてば！！」

「順番守れよー！！ 横はいりすんな！！」

「じゃあじゃあ、10秒で交代ね！ いーち、にーい、さーんっ……」

「勝手に決めないでよ、集中できないじゃないの！！」

なぜだかぞっとしたものを覚え、美智佳はたまらず声を上げてしまった。

「待って、いいつてば！！ ねえ、アキちゃんっ、いいから！！ もういいから！！」

「えー、なんで？ おねえちゃん出られないんでしょ？」

せっかくみんなで頑張ってるのに、どうして邪魔するのといわんばかりの不満な声。とたんに不機嫌になったアキがぷうと頬を膨らませるのが、見えないのにはっきりわかる。

「だ、だいじょうぶ！！ さっき鍵をもってる人に来てもらうことになったの！！」

本当は、鍵が開くかどうかはまだはっきりしていない。

けれど今はそう言うしかなかった。

「えー、ほんとう？」

「う、嘘ついたってしょうがないじゃない！！」

アキにしてみれば、好意を踏み躪られたようなものなのかもしれない。ざわざわと周りのささやきが濃くなる。

「あ、俺知ってる。ダイゴでしょ？」

「ダイ兄ちゃん？」

誰かがその名前を呼んだ。どうやら、子供たちの中にもさっきの少年のことを知っている者がいたらしい。

「なあ、俺、ダイゴン家知ってるぜ」

「じゃあ、迎えに行こ。おねえちゃん出してあげようよ！！」

「そうだね」

なにやらいつの間にか、話がまとまり出していた。美智佳が気を揉んでいる間に、アキを中心に意見が交わされる。

どうやら、警察だのレスキューだのという大事からは話がずれ始めているようだった。なによりも、大人に頼らず囚われの美智佳を自分たちの手で救い出す、というところに、小さな子たちの興味は集約したらしい。

「じゃあ、そうしょ。おねえちゃん。行ってくるね！！」

「う、うん……」

「よし、しゅっぱー」

安心していいのだろうか。どう答えたものが困惑する美智佳が曖昧な返事をする、アキはみんなの先頭にたって号令をし、そのままどこかへと走って行く。

（え、えっと……っ）

取り残された美智佳は、安堵と共に、一抹の不安を覚えずにはいられなかった。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 倉庫とビニール袋の話・4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/25/2009 21:17:01

BODY:

「まだなの……！？ もうっ……どこ、行っちゃったのよお……っ」

苛立ちながら、美智佳は赤くなった顔をこしこしと擦る。

少年が立ち去ってから、どれくらい経ったのだろう。もう何時間も前のように感じられていたが、相変わらず日は高く、地面に落ちる影の位置もそう動いていない。実際は30分と過ぎていないだろう。

「す、すぐに戻って、行ってたのにっ……」

それでも、閉じ込められたまま待ち続ける美知佳には途方もない時間だった。ぎゅっと握られた拳がぼすん、と袋詰めの園芸土を叩く。

アキたちも一向に戻る様子がない。いったいひょっとして、表では彼らを邪魔するナニモノかがみんなを捕まえたりしてるんじゃないだろうか、とまで不安になってしまう。もしそんなことがあれば、それは美智佳の責任なんだろうか。

おとなしく、もういちど大人の人を呼んでもらえばよかったのかも……なんて後悔もしてみるが、後の祭りだ。

そして、美智佳の焦りは、単なる苛立ちだけにとどまらない。

「っ、っふ、くっ……」

ぎし、ぎし、ぎっ、と軋む音が、小さな密室に響いている。

座り込んだままもぞもぞとお尻を動かし、身体を左右に小刻みに倒して、美智香はせわしく倉庫の天井を見つめていた。

「うっ、く、ああっ……」

鈍く痺れる腰骨から、恥骨の上でじんじんと熱い衝撃が伝わってくる。

ワンピースのスカートの太腿はじっとりと汗をかいて、布地に複雑なしわを寄せ、その間に挟まれた細い腕をぎゅっと締め付けていた。

脚の付け根に重ねて当てられた両手が、もどかしげに股間を握り、ねじり、押さえつける。

(や、やだぁ……な、なんでよおっ！？)

ありえない、と思っていた。だから何度も何度も違うのだと思いこもうとした。

だって、ついさっき、あんなにいっぱい出したのに。

(なんで、こんな、また——おしっこ、したくなっちゃうのよおっ……！？)

嘘だと思い、気のせいだと言い聞かせ、何度首を振ってみても、身体のうちから沸き上がってくる鋭く激しい尿意は和らいでくれない。決して錯覚ではありえなかった。わずか数十分で、美智香の尿意は再びトップギアに入る勢いで加速している。

胃の中がたばたと揺れるのが解るくらいの勢いで、一気に空にした500mlペットボトルまるまる一本分の清涼飲料は、一適残らず乾いていた身体に吸収され、いまは別の場所——少女の膀胱をたぶたと揺らしている。

「うあああ……うっ、で、ちゃうう……っ！！」

きゅんっ、と疼く下半身に、美智香は小さく悲鳴を上げてしまう。

ぎゅっとスカートの前を押さえる手のひらは、しゃがみ込んで停止したまま動かなかった。執拗に繰り返されるオシッコの波は怒涛のように激しく、一時たりとて気を抜けそうにない。

おしっこの出口を締め付ける括約筋はすっかり弱って、我慢を続けるためには両手の協力が欠かせない状況である。

「っ、やだあ……」

美智佳のじわ、と潤む視界は、縦るように倉庫の中を巡った。しかし、無論ながらそこに突如としてトイレが出現するはずもない。蒸し蒸しと汗を呼ぶ倉庫の中には変わらず、尿意を和らげるためのものなど何も見つかりはしない。

そして美智佳の視線は、必然的に隅に放置されていたビニール袋へと向かう。ほんの数十分前にトイレの代わりになって、美智香のおしっこをたっぷり受け止め、すっかり重くなっている半透明の袋は、初夏の熱気に晒されていまにも破裂しそうなくらいに膨らんで見えた。

「も、もう嫌……っ、なんで、こんなに、おしっこ、くう、……し、したくなっちゃうのよおっ……！？」

最初のオモラシと合わせれば、おしっこが我慢できなくなったのはこれで3回目だ。こんなにわずかな時間に、何度も何度もオモラシをしそうになる恥ずかしい身体を、美智香は激しく恨んだ。

しかし、そんなことで今の窮状が変わるわけではない。

膨らむ膀胱は激しく収縮し、大自然の摂理のまま、溜まった中身を絞り出そうとしている。じつとりと身体を湿らせる汗と、繰り返されたおチビりに濡れたスカートがぐちゃっと音を立てて美智香のお尻にへばりつき、不快な感触をさらに加速させる。狭い倉庫の中は、いまなお美智香自身のおしっこの匂いに満ちていて、まるで本当のトイレの個室のようだった。

(っ、だめ、え……！！)

急激に、凄まじいまでの加速度で尿意は膨れ上がる。喩えるなら洪水か鉄砲水か。少女の下半身は自然の摂理に従って不要な水分を排出せんと収縮し、ぱんぱんに膨らんだ水風船を圧迫する。

「うう、ふうう、はああっ、…っく、あ、あと少し、少しだけ……がまん、あとちょっとだけ我慢……っあとちょっとで、出られるんだから……」

なんとか心を奮い立たせようと、そう口にしてみるが、あまりにも空虚な自分の言葉に、かえって心は萎んでしまふばかりだ。

(少して、いつまで……？ やだ、もうやだよお……ホントにもう、出ちゃいそうなのにつ……！！)

焦りと怒りが失望に混じり、一瞬、美智香の目の前が暗くなる。一秒でも早くここから出て、トイレまで猛ダッシュをしなければいけない事態なのに、その目処すら立たない。

いちど出口を覚えたおしっこは、容赦なく美智佳に二度目の屈辱を要求する。さっき激しい水流を迸らせたばかりの排泄孔が、

切なく疼きぷくりと膨もうとする。ほんのひと撫でではしたなくも熱い雫を吹き上げんばかりに、少女の下腹部は我慢のきかない状態になっていた。

（あ、あたしのおしっここの出るところ、こ、壊れちゃったのかも……っ）

こんなにも我慢がきかないなんて、想像すらしたことがなかった。よっぽど小さかった時はさておき、これまで、美智佳はどれだけオシッコがしたくてもちゃんとトイレまで我慢のできる、おトイレの優等生だったのだ。

それなのに、この小さな倉庫の中で、美智佳はとうとう人生 3 回目、トイレ以外でのおしっこを始めさせられようとしている。

「ね、ねえ、誰かつ、誰かいないの……っ！？」

美智佳は、掠れた声で助けを呼んだ。

この密室を押し開き、こじ開けて、美智佳をトイレへと連れて行ってくれる誰かを求めて、か細い声で懸命に呼びかける。

「ねえ、お願い、開けてよ、ここ開けてよおっ……もう嫌なの、もう、こんなところでおしっこなんか嫌なのおっ……お願い、お願いっ……！！」

力ない拳がドアを叩き、堅い鍵をかちかちと揺する。

それをあと千回繰り返せば閉じられたドアが開くというなら、美智佳は迷わずそうしたかもしれない。

美智香の目元を熱い雫がこぼれる。

こんな場所で、二度とするまいと思っていたおしっこを——またも強いられたことに。少女の羞恥心は激しく傷ついていた。あのビニール袋を、おトイレの代わりするのは、もう嫌だった。

「お、オシッコでちゃうのっ……お、おトイレ、おトイレ行かせてよお……ちゃんとしたおトイレでなきゃ、いやなのっ……」

さっきの一回で、一生分の恥は使い尽くしたと思っていたのに。わずか数十分で、また同じ事をさせられるなんて、思いもしなかった。

だが、無常にも、涙にかすれた美智佳の呼びかけに答えるものはない。

閉ざされたままのドアの奥で、美智佳はまたも、屈辱を強いられるしか道はなかったのだ。

「う……くう……っ」

もはやためらっている暇はなかった。美智香はずっしりと重いビニール袋を再び引き寄せ、汗ばんだスカートと下着をまとめて引きずり下ろす。

もう二度とすることはないと思っていた、死にそうに恥ずかしい行為——このビニール袋の中へ、下着と水着を一緒に詰め込んだ入れ物に、さらにもう一度オシッコをすることを決意したのだ。

1 度目の排泄で水を吸っている袋の中身は、もはやありっただけの布地を動員しても全ての水分を吸収してはくれないだろう。今度の美智佳のオシッコによって、はっきり分かるほどビニール袋の水位は上昇し、内側に水面が見えるほどになるだろうことは想像に難くなかった。

そうなれば、もう二度と言いつの聞かない状況になることも承知の上である。それほどに美智佳の尿意は凄まじいものだった。

最初のオモラシをあわせ、都合 3 回分のオシッコを受け止めることを強いられたビニール袋。それを前にして、美智佳はいまにも泣き叫びたい気持ちだった。

（もうだよお……っ……もうやだ、もうおしっこなんかしたくないのにい……っ）

それが偽らざる美智香の本心でもあった。

床を汚し、ビニール袋には溢れんばかりの、黄色い水。

事情を知らない人が見れば、美智佳がこのビニール袋に収まりきらないくらいの量のオシッコを一度に出してしまったのだと思われるかもしれない。

もっとも、たとえ本当のことを言ったとしても、美智香がこの倉庫の中に閉じ込められていた数時間あまりの間に、3回もオシッコをしてしまったことは事実なのだ。

だがもはや思案の時ではない。行動の時だ。美智佳はビニール袋の口を開けるべく結び目に指をかけるが——
「あ、あれ……？」

さっき、嫌悪感に駆られながらあまりに強く力を入れて結んだためか、結び目は硬く縛られたまま、びくともしない。いくら爪を立ててみても石のように堅い結び口は、美智佳の手を拒んだ。

「や、やだっ、嘘でしょ……！？」

ここにオシッコができなければ、一体どうすればいいのか。焦る美智佳は再度結び目を引っ張るが、どこをどう絡まったものか、まったく結び目は動かない。それはまるで、ビニール袋自体がその内側に溜め込んだ美智佳のオシッコを一滴も漏らすまいとかく口を閉ざしているかのようだった。

「な、なんで開かないのっ……と、トイレっ、だめ……出ちゃうのにつ、もう出ちゃうのにいつ……！？」

スカートと下着は足首まで降りて、すでにオシッコの準備は万端整っている。それなのにオシッコを受け止めるビニール袋だけがそれを拒んでいるのだ。

ビニール袋の中にするのは、嫌で嫌でたまらなかったけれど。

それでも、倉庫の床におしっこをびちゃびちゃに撒き散らしてしまうことと、比べるなんてできない。だってそれは、オモラシなんかよりももっともつと下品でみっともない、最悪の行為だ。

もしも万に一つでもそんなことが美智佳にできたなら、そもそもタオルや水着、パンツの入ったビニール袋をつかって、オシッコなんかしない。

「あ、やっ……！？」

きゅうんと疼く股間に、美智佳はたまたま片手をむき出しの脚の付け根に押し当てた。今にも開きそうになる排泄孔を、直接指で押さえてぐぐっと放水を押しとどめる。そうしておいて、なんとかビニール袋の口を開けようとする美智佳だが——しかし、両手でも解けなかったビニール袋の結び目が、片手だけで開くはずもない。

がくがくっと突き出されたおしりが上下し、いまにもスプリンクラーのようにオシッコを撒き散らそうとする。おなかの中で暴れ回る猛烈な尿意の大渦に、美智佳はぎゅうぎゅうと声を絞り出してしまう。

「で、でちゃうでちゃうでちゃううう……！！ やだあ、トイレ、オシッコお……っ！？」

トイレの代わり。オシッコのできる場所。おなかをパンパンに膨らませる、オシッコを注いでおけるもの。パニックに陥った美智佳の視線が、ついさっき放り投げたペットボトルを、土嚢の影に発見する。そう、いま美智佳を苦しめているオシッコは、元はと言えばこのペットボトルの中身の液体が原因なのだ。

（っ——あ、あつ、あつあ、！！）

ほとんど反射的にペットボトルの蓋を開け、美智佳はしゃがみ込んだ股間にそれをあてがう。

だが、震える手と限界の尿意が噴き出す排泄孔が、おとなしくそれを許すわけもない。美智佳の股間から、思いもよらぬ勢いと角度で水流が吹き出し、ばちゃばちゃばちゃあつと床に飛び散った。小さくひしゃげた排泄孔から、ホースの先をつぶして庭に水でも撒くような勢いでおしっこを撒き散らす。水筒の口の縁にぶつかって熱い奔流があちこちに飛び散り、飛び散り、美智香の手まで

「だ、ダメええ……っ！！」

美智佳がむりやり押し付けた飲み口から大きくそれたおしっこは、透明な入れ物とはまるで見当違いの方向へ飛び散った。

「や、だあっ……！！」

「あ、 、 あっあっあ、 あっ」

「う、あ、あっあ、あっ」

「おねーちゃん、ダイゴ連れてきたよ！！」

「おねえちゃん良かったね！！ 出られるよ！！」

少年——ダイゴは、倉庫の鍵を開けようとしている。

「何言ってんだっての、ほらお前ら、離せってば、鍵開けらんねーだろ。そのまま閉じこもってたら、トイレとかどーすんだよ」

「っ…………！！」

ダイゴの言葉は美智香をおもいやってのものなのだろうが、我慢しきれずに倉庫の中でオシッコをしてしまった少女にはあまりにも残酷な言葉だった、じわ、と喉の奥が涙の味に塞がれて、美智香の声は出なくなってしまう。

そうしている間にも、美智佳の下腹部はおしっこを絞り出そうと激しく収縮を繰り返した。切なくも腰を揺すり、掠れた声を張り上げ、なんとか崩壊を耐え抜こうとする美智佳。

「う、うそ、や、ま、待って……だめえ……！！」

ペットボトルも、ビニール袋にも、おしっこを受け止めることを拒否されて。もう美智佳には縋るものがない。

後に残されたのは、そのまま倉庫の床の上に、おしっこを撒き散らすことだけだ。

「おい、どうした？ 美智佳？ 美智佳ってば！！」

ダイゴが声を荒げる。

すると、それに応じた声があった。

「あー、あのねえ、美智佳おねーちゃん、おしっこがまんしてるの！！ おトイレ行きたいんだって！！」

「や、やあ、やめてえ！！」

金切り声で、美智佳は叫んだ。あろうことか、アキは美智佳が絶対に隠しておかなければならなかったことを、あっさりと暴露する。

「ちよ、おい、マジか？」

「うん。だっておねえちゃん、もうおしっこがまんできないって言ってたよ。もうオモラシしちゃうかも！！」

ええー！？ と子供達の間から驚きの声上がる。それはそうだ、美智佳のように年上のおねえちゃんが、オモラシなんて、彼らにしてみればありえない。

「おいおい美智佳、やめとけよ、漏らすなよ？ 今出してやるからトイレまで我慢しろよ？！」

「や、ち、違うの、違うのお……」

ダイゴが鍵を弄り、声を荒げる。

美智佳は力なく首を左右に振るが、か細い否定の声は、子供達の騒ぎにまぎれて聞こえない。おしっこ？ おねえちゃんオモラシしちゃうの？ おねえちゃんおしっこ？ 幼いゆえの残酷さで容赦なく叩き付けられる小さな子供達の声に、美智佳の羞恥心は致命傷を埋め込まれてゆくばかりだ。

かすれた声を上げながら、美智佳は股間を激しく握り締め、雑巾を絞るようにして排泄孔を塞ごうとする。

（っ、違うの、違うのにい……）

何も違いはしない。

美智佳は今、中腰で、スカートも大きくまくり上げて、その姿勢から動くこともできず、倉庫の床の真ん中で、じゅじゅ、じゅるるう、と股間から断続的にオシッコを迸らせているまさにその真っ最中なのだ。

（と、止めなきゃっ、お、オシッコ、見られ……ちゃうっ）

しかし、満水のダムから放水される水流は、蓋をしようとする手を押し破らんばかりに凄まじい圧力だった。腹圧に反応して、身をよじる美智佳の足の付け根から吹き出して、股間を押さえ込む手のひらを激しく汚す。

がちゃ、がちゃ、がちゃっ、鍵が軋む。

「……あれ？ くそ、なんだこれ、鍵開かねーっ……？ おい、お前らこれなに入れたんだよ？ 鍵穴詰まっちゃってるじゃねえ

か！！」

ダイゴが舌打ちをして叫ぶ。

美智佳は、もうそれを聞いている余裕もない。

「おい美智佳、ちょっと待ってろ？ もう少しだからな！！ あとちょっとだけだからな！！」

呼びかける声。

だがもう、美智佳はこの目の前のドアが開いて欲しいのか、開いて欲しくないのかわからなかった。とうとう倉庫を囲む全員に、おしっこを我慢し続けていることがバレ、オモラシのことまで気付かれ、突然の事態に混乱し、長い長い我慢の繰り返しの擦り切れた思考は、今なお激しい尿意にすっかり占領されている。

「は、くう、ううう……」

美智佳は掠れた声で、本当の勢いで出始めるおしっこを押さえ込み、無我夢中で——倉庫の床を這う。少しでも見られないように、奥に逃げようと、ドアに背中を向けて。

「あ、あ、うあ、っあ、あっあ」

手を付いて、動物のように四つんばいになった美智佳の、片手が押さえ込んだ足の間から、激しい水流が迸る。足の間に飛び散り、ワンピースのスカートにぶつかったおしっこは、あっという間に美智佳の服をびしょぬれに変えていった。

ぶしゅううううううっ……じゅぶ、じゅぼぼぼぼう……

「あふうっ……、あ、あっあ、あっ」

猛烈な勢いでほとばしるオシッコは、もはや遮るものがない倉庫の中に激しく広がって行く。3度目のおしっこだとは思えないほどの途方もない量で、床にはみるみるうちに湖が出現した。

激しい水流を受け止めた倉庫の床上の水面が、氾濫する川のように広がって行く。倉庫の床一面を覆いつくさんばかりの量だった。このまま出し続ければひょっとして、倉庫からも溢れてしまうのではないだろうかと思わせるほどだ。

そのすぐそばには、2回のオモラシを受け止めたビニール袋まである。

自分の身体が作りだしたあまりにも大量の、黄色い汚水に、美智香は心臓を握り潰されそうになる。

「美智佳っ！？」

がらあ、と倉庫の壁が開く。

ちょうど、美智佳は床にはいつくばったまま、ダイゴやアキたちに背中を向ける格好だった。おしりをちょこんと突き上げ、ワンピースのスカートは背中に大きく捲れ上がり、何も穿いていない足は太腿からおしり、爪先まで完全に丸出しだ。

その付け根を、ぎゅうっと手のひらで隠し、おしっこの出口を塞ごうとしているのまで、すっかり——まるで見せ付けるような有様だった。

「っ、いや、いやああ……」

掠れ声で悲鳴を上げた美智佳の下腹部が、感情の高ぶりにしたがって伸縮する。

激しく撒き散らされた3回目のオモラシの上に、さらに追加で激しく熱い水流を叩き付けながら、美智香は泣き叫んでいた。

「違うの、違うのお……っ、こんなにしないの、いつもこんなにオシッコ出たりしないのっ！！ わたし、こんなにオシッコしないんだからあ……っ」

ビニールバッグをぱんぱんに膨らませるオシッコと、その床に大きく大きく広がるオシッコの海。

もはや、倉庫の中はどんなトイレよりも酷く、オシッコで汚れていた。

トイレではない場所を、3回もオシッコのために使い、なおもまだオモラシを続ける恥ずかしい女の子。美智佳はいまやそんな存在だった。

そして、いまなお広がり続ける大きなオシッコの海の、その水源であるオモラシの大滝をつくりだす、美智佳の股間。

美智佳の身体じゅうを巡ってやってきた水分は、その小さなお腹の膀胱を溢れ、なおも小さな割れ目を押し広げて、おなかの中で暖められた熱い雫を、水鉄砲のように吹き上げた。

自分の身体の下、水浸しになった倉庫の床の上に、広がったオシッコの海に涙までこぼして。

美智佳は、もう二度と起き上がれなかった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 春休みの話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/25/2009 21:20:11

BODY:

暦の上では春とは言っても、まだ幾分寒さの残る風が吹き付け、商店街を行く人々の間を駆け抜けて行く。あいにくと曇り空の下、雨の気配を感じた店の人が傘立てや雨除けを引き出し、夕方からの下り坂の天気には備えていた。

そんな雑踏の中を進む、ポニーテールの少女の姿があった。

知らない街を歩くことへの緊張からか、幾分硬い表情の少女は、学校指定の制服とコートを着込み、手提げ鞆からは大きな封筒を覗かせている。

葦原ユミは、無事推薦で合格を決め、この春から通うことになる私立学校の校舎に、案内を貰うためにやってきていた。

新しい学校はこれまでユミが通っていた学校と同じ市内にあるが、距離としては倍近く、家までは歩いて30分ほどかかる。道を覚えるためにも時間をとって歩いてきたのだが、不案内な道で途中、何度か迷い、案内を受け取れたのは受付時間ギリギリになってからだった。

(もう少し、あとちょっと……)

ユミが向かっているのは通りの向こう、普段は減多に使わない、市内北西部の私鉄の駅の南口だ。電車通学の生徒はここを利用するらしいが、ユミの通学路とはまるで正反対である。

ユミが、またも通学路から大きく外れたこの商店街を歩いているのは、また道に迷ったから——ではない。もっともっと、切迫した理由からのことだった。

「ん、う……」

小さな呻きと共に、少女の腰が左右に揺すられる。

暖かくなり始めたこの季節には少々重たいコートの前をぴったりと合わせ、その上からそっとお腹に手を添えて、ユミは時間と共に陰しくなる下半身の緊張を少しでも和らげようとする。

硬くこわばった表情は、頬にわずかな赤みが差していて、荒い息が小さな唇から漏れている。まるで全力疾走でもしてきた後のようだが、むしろ少女の足取りは重くおぼつかない。視点は前方の一点に固定され、周囲を気にしている余裕はないようだった。

ユミの視線の先には、通りの反対にある駅舎南口の階段がある。

(あとちょっとだけ……あそこまで、我慢すれば……っ)

あとほんの数メートルで、この3時間にもおよぶ戦いにも終止符が打てる。それを心の支えに、ユミは内腿の筋肉をぎゅっと緊張させる。

目的地を前にざわつき始める水面と、今すぐにでも放水の誘惑に屈しそうな排水口を感じ、下腹部を押さえる手のひらにきつく力が籠る。

とにかく、校舎でトイレを借りなかったのは失敗だった。かなりおトイレに行きたくなっていたのに、家まで我慢できるだろうと思ってしまったのが運のつき。学校を出て10分もしないうちに、事態はユミの想像を超えて急速に進行していった。

その頃にはもう引き返すまで辛抱する気力もなくなり、ユミはまっすぐに、このあたりでただひとつ心当たりのあるトイレである、この駅へと向かったのだった。

(もうすぐ、おトイレできるから……あと、ほんのちよっただけ……っ)

駅舎の南北通路に繋がる階段。あそこまでたどり着け、ば硬く張り詰めた膀胱の中身を、残らず出すことができるのだ。そう思うだけでじんと脚の付け根に響く甘い痺れがさらに強まり、ユミを苦しめる。

コートの上から制服のスカートの前を押さえ、もじもじと腰を揺すりながら、ユミはぎゅっと唇を噛んだ。ますます頼りなくなった足取りでもたもたと進む小柄な少女を、買い物帰りの主婦や帰宅途中の生徒達が次々と追い抜いてゆく。

(は、はやく、おトイレしたい……っ)

もう何時間も前から、心の中を占めている切なる願いを繰り返し、ユミは小刻みに震える足で横断歩道を渡り、駅舎の階段に足をかけた。

エスカレーターならば緊迫する下半身に余計な負担をかけずに済むのだろうが、生憎と築30年を数える古い駅舎にはそんなものは備えられていない。手摺を使いながら、ユミは一步一步、慎重に階段を上ってゆく。

ようやく昇りきったユミは、記憶に頼りながら駅舎の通路を見回した。ほとんど使わない駅だが、ここに、トイレの案内板があったのは辛うじて覚えている。

落ち着きなく周囲を巡る少女の視線は、やがてすぐにトイレの文字を刻んだ案内板を捕まえる。

だが――

「ええっ……！？」

おぼろげな記憶の通り、確かにトイレへの案内板は壁にあった。しかし、

『トイレ→』

無常にもその矢印は、改札口の向こうへと続いていたのだった。

予想外の事態にユミはしばし呆然となる。

築30年の駅舎には、二つも三つもトイレを設けている余裕はなかったのだった。改札口の横には、小さな張り紙があり、そこには『お手洗いをご利用の方は声をおかけください』と書かれている。

だが――

(そ、そんな……あ)

衝撃だった。マラソンを走り終え、ふらふらになってたどり着いたはずのゴールが、まだ10キロも先にあると宣言されたようなものだ。

きゅうん、と下腹部で尿意が高まり始める。ここまで我慢すればという心の支えが大きく揺らいでいた。

(え、駅員さんに、おトイレ行きたいですって言わなきゃいけないの……？ そんな、は、恥かしいよお……)

ただでさえ繊細な思春期の少女だ。まして、ユミの羞恥心は、こと排泄に関しては非常に敏感なものだった。本当ならトイレに入るところすら誰にも見られたくないくらいである。

だが、駅員にトイレを借りたいことを説明して改札口を抜けるということは、いまユミが絶賛トイレ我慢中であり、ここのトイレを使わなければ、とても間に合わないということを口にするに等しいのだ。

(な、なんでこんな、イジワルするの……っ！？)

無機質に並ぶ自動改札のゲートは、ユミをトイレに行かせるまいと硬く閉ざされた城門のよう。傍に立つ制服姿の駅員は、さながら門番のようだった。

本当なら公衆トイレに入るのすら嫌なのに、人前で尿意を口にするなんてとんでもない。ユミにはとてもそんな勇氣はなかった。思わず俯いてしまったユミの頬が、一層赤くなる。

だが、そんな事情などお構いなしに、じんと疼く下腹部はますますその限界を訴えている。鉄壁の守りを見せる改札口に対し、ユミのおヘソの裏側のダムを塞き止める水門は見ると頼りなく、わずかな刺激で脆くもこじ開けられてしまいそうだ。

「……んっ……」

(だ、だめ……間に合わなくなっちゃう……！！)

思わず小さく声を上げてしまってから、ユミはもう余裕がないことを改めて悟る。3時間の我慢を経て、排泄孔を締め付ける括約筋はもう限界を訴えていた。これ以上焦られ続けると、遠からず貯水量を越えた奔流が激しくスカートの中からあふれ出してしまおう。

「……………」

迷いと共にちらりと駅員を見、胸の奥で激しくなる鼓動を感じながら、少女は覚悟を決めて、改札口横の切符売り場へと向かった。人がまばらなのをいいことにもたもたと制服のポケットから財布を取り出し、百円玉を二枚、券売機に放り込む。

一番左端の安い区間である160円のボタンを押すと、切符とおつりの40円がじゃらりと出てきた。ユミはやるせない気分と共に切符を掴み、おつりを乱暴にポケットに放り込む。

(お母さん、こんなにおこつかい使っちゃてごめんなさい……)

缶ジュースよりも高いこの金額が、言わばトイレへ入るための入場券だった。思春期の少女が、繊細な羞恥心を守りながらあの堅牢な城門を潜り抜けるために、必死に考えて出した答えなのである。

ただオシッコがしたいだけなのに、こんなお金を払わなければならない理不尽に唇を噛み、ユミは踵を返して改札口に向かった。

自動改札に切符を差し込む一瞬だけ、言い知れぬ不安を覚えて駅員のほうを窺うが、無論ながら彼等はユミの『目的』に気付いている様子はない。

そのことにわずかなりとも安堵を覚えつつも、ぱしゅん、と開くゲートをくぐって、ユミはできるかぎりの早足で駅構内へと進んでいった。

おなかの中ではくっくつと尿意が沸き立ち、ユミの一番敏感で脆い部分が、身体の内側から執拗にノックされ続けている。腰をさりげなくねらせるだけではもはや分散しきれない、大きな波が脚の付け根に向けて打ち寄せているようだ。

(は、はやく——)

構内のトイレは改札口を抜け、右に曲がった突き当たりにあるらしい。道案内の黄色い凹凸タイルを辿るように続く矢印を追いかけ、ユミは一目散にそちらへと向かう。

そして——

「う、うそっ……！」

目の前の光景に、ユミはとうとう声を上げてしまっていた。

わざわざ入場券を買ってまで厳重な警備の改札口をくぐり抜けたその先、待望のトイレを目前にして、ユミの足はぴたりと止まっ

てしまう。あとほんの数m先に、自分を苦痛から解放してくれる場所をみつけながら、ユミの脚は止まったまま、その場から進むことも戻ることもできなくなっていた。

一刻の猶予もない尿意にせかされ、すぐに駆け込まねばならないそのトイレの入り口には、『清掃中』の立て札があった。

(っ……や、やだっ、なんで、こんなぁ……)

ユミは今日の不運を呪って泣き出したい気分だった。立て札には添え書きのように『ご利用の方は一声おかけください』とあるが、そんなものはユミにとって慰めにもならないものだ。

少女にそんなことができるくらいなら、改札口を抜けるのにわざわざ切符を買ったりしない。

(ど、どうしよう……っ)

確かに清掃中とは言え、トイレそのものがまるっきり消えてなくなったわけではない。入り口が岩で塞がれていたり、コンクリートで塗り固められているわけでもない。ユミの行く手を阻む立て札も、物理的にはただちよこんと隅に置いてあるそれだけのもので、左右を遮るロープすらない。その気になれば中に入ることは簡単なことだ。

しかしそのためには、『ご利用の方』として『一声おかけ』しなければならない。清掃員や、駅構内にいる人々に、ユミがなりふり構わずトイレに駆けこまねばならないほど、我慢が切羽詰っていることを教えてしまうのも同じことだった。

(そ、そんなの……やだっ、できないよう……っ。……こんな、お掃除中でも、……平気でおトイレに行く子だって思われちゃう……)

それは、学校でトイレに行くのを悟られることすら恥かしがる、この年代の少女にとってあまりにも重い行為だ。思春期特有の過敏な羞恥心は、排泄という行為を激しく拒絶していた。まるで中世の貴族のように、自分がそんな下品な行為とは無縁の存在だと示したいかのようにさえ振舞うことがある。ユミもまた、小さな頃の失敗が理由で、トイレを人に知られるのを極端に嫌がっていた。

また、忙しそうに清掃作業に走り回る清掃員たちが出入りをしているトイレの中は、とてもではないけれど気軽に入り込める様子はないことも、ユミの躊躇に拍車をかける。

「……あら？」

またも立ちすくんでしまうユミのそばで、改札口のほうから歩いてきたスーツ姿の女の人がいったん脚を止め、小さな吐息と共に通り過ぎてゆく。どうやらこの女の人もトイレに用があったらしいが、入り口の『清掃中』の立て札を見て考え直したようだった。

ホームに下りていくその背中を思わず追ってしまいながら、ユミは赤くなって俯いてしまう。

(どっ、どうしようっ……)

そう、あの女の人が普通なのだ。ここのトイレが使えないなら、他のトイレまで我慢すればいい。それだけのことだ。けれどユミの脚はまるで靴底が床に接着されたみたいに、その場を離れない。

ここのトイレは使えないと、頭では判断しているのに、ユミは立ち去ることができずにいた。下半身は惨めたらしく、むずがるようにこのトイレを使いたいと訴え続けている。いっそここが完全に使用不能であれば踏ん切りもつくのだろうが、なまじ侵入が容易そうに見えるだけ、ユミはその誘惑をたち切れなかった。

いつしか、立ち尽くすユミの手のひらは、コートの上から再び脚の上に添えられている。細く小さな手のひらはさっきお腹を押さえていたよりもさらに下のほう、直接出口を塞ぐような位置に移動していた。

「う、くっ……」

ソックスに包まれた脚がぎゅっとクロスされ、かかとが緊張に触れて持ち上がる。もはや、駅員に知られずにトイレにこようとした努力も、まるっきり地に返すような状態であった。

(オシッコしたいっ……も、漏れちゃうっ……)

待望のトイレを前に、生理的欲求はますます激しいものとなる。朝から我慢をし続けている恥ずかしい液体を納めた入れ物、おなかの中からせり出して、脚の付け根の出口に向かって下降してくるかのようだ。

ちくちくと針のような刺激が下腹部に走り、沸騰する尿意が少女の理性を激しく焦がす。体重を預ける足を入れ替え、身体を左右に揺するたび、たぶんと身体じゅうが揺れるようだ。

今から改札口までもどり、そこから再度、別のトイレを探すか、あるいは家を目指すなんて、とても出来そうになかった。そもそも、本当にそこまで我慢できる自信があるなら、こんなところのトイレを使おうとは思わないのだ。

(お、お掃除終わるまでここで待てば……おトイレ、いけるから……それまで、が、我慢すれば……っ)

現実的に考えれば、それこそあまりに非合理的な行いだ。砂漠やら人跡未踏の地でもなければ明らかに他のトイレを見つけるまで我慢したほうがいいはずだが、さらなる我慢の延長戦を続けながら、本当に見つかるかも分からないトイレを探すよりも、待ってさえいればいつか空くであろうトイレの傍にいるほうが、今のユミには楽に思えてしまうのだ。

(だ、だいじょうぶ……じっとしてれば、我慢できるから……っ)

その思いとは裏腹に、ユミの身体は激しく左右にくねり、その場で足踏みをするように両のかかとがステップを刻み、爪先はぐりぐりと床のタイルに押し付けられる。

小さな子でもしないような我慢の仕草は、見るものにはっきりと危機感を抱かせるほどのもの。ユミがトイレに行きたくて仕方がないのは、誰が見ても一目瞭然だった。事実、行き交う人々はトイレの前で身体をよじらせて腰を揺する少女を、奇異の視線で見ている。

けれど、ユミは周囲の怪訝な表情に気付く余裕もないまま、トイレの入り口をじっと見続けていた。

(あっ……も、漏れちゃ……だめ、だめえ……っ)

暴れ回る体内の尿意にストップをかけながら、掃除が終わって、綺麗になったばかりのトイレで一番にオシッコを済ませる——そんな妄想のなかで、ユミは執拗な尿意を紛らわせようとした。現実の自分にはできないことを、空想の中でさせることによって、少しでも現実の苦痛を和らげようとする。

ずらっと並んだトイレの個室の中から、どこでも好きな場所を選んで、個室にしっかりと鍵をかけ、スカートをたくし上げ下着を下ろして、清潔な便器を使って思いっきりオシッコをする権利。一番乗りのユミにはそれが与えられるのだ。

オシッコのための場所で、オシッコをする——至極当たり前の行為が、ユミにはとてつもなく魅力的だった。ずっと遠ざけられていた排泄を許されるという快感が少女の身体を打ち震わせ、頭の奥に消えない熱を点す。

(トイレ、出ちゃう、漏れるぅ……っ)

脚の付け根の敏感な場所から、もう我慢する必要のない恥ずかしい液体を恐ろしいほどの勢いで弾け散らせる。股間から噴き出す蛇のようにくねる薄黄色の水流が、白い便器の底を叩き、音消しに流れる水の中に深々と注がれて行く。我慢に我慢を重ねた苦痛が全身の熱とともに迸り出る。その解放感は何ほどのものだろうか。

「あ、あぁ、あっ」

禁忌の想像に先立ってじわりと滲みかけた先走りが、交差させた脚の付け根に広がる。小さな水滴をこぼし、股布に染みを作った液体は、そのまま辛抱しきれない股間の先端からじゅわ、じゅわ、とあふれ出してゆく。

(ふぁ、あつ、……っ、き、気持ち、いい……)

少女はじわじわと色を変えてゆく股間を両手で押さえたまま、小さな唇を小さく開閉させる。

スカートの半分ほどを色濃く染めながら、滴り落ちる雫が太腿を伝って、ソックスに流れて行く。ひと筋、ふた筋と溢れこぼれる水流は、たちまち数を増し、少女の脚を伝いぱしゃぱしゃと音を立ててゆく。タイルには少女の体内で温められた液体の水たまりが広がり、わずかに湯気を立ち昇らせてゆく。

「あ、あっあ、あっ……」

ふわふわと定まらない足元は、まるで雲の上を歩いているようだ。熱に浮かされた頭はぼうっと霞み、お腹は本当にトイレを済ませたときのように楽になってゆく。

それが想像の中のことでなく、実際にいま自分の身体に起きていることだと理解できないまま、ユミは駅構内の隅でオモラシを続けていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 謎の競技の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 04/04/2009 16:51:41

BODY:

最初は女の子たちが謎の状況でくじ引きでトイレの順番待ちをしてるってだけの妙なシチュエーションを書くだけの予定が、だんだん変な方向に。

<hr size="1" />

そこは大きな、まるで体育館のような部屋だった。

屋外ではないことは、空を覆う天井と、小さな窓から夜空が覗いていることでわかる。見上げる天井も高く、端までは大きく、バスケットのコートどころかサッカーグラウンドですら入ってしまうのではないかと思うほどに、広い。

そこが何のための設備なのかは、一見してわからない。ワックスを掛けられた板張りの床は段差も継ぎ目もなく、軋むこともなかったが、さりとしてその上に何かのスポーツの試合場などが用意されているわけでもない。

確かに、床には白いテープが何かを示すように張られ、この会場を用意した人間の意図を知らせている。しかしそのテープが作るのは、細長い四角。

そう、まるで駅のホームにある、車両ドア前の列を作るためのガイドにも似ていた。

そして事実、そのガイドに従うように、多勢の少女達が列を作り、並んでいた。

「っ、くう……」

「ああ……っ、」

「はあ、はあ……」

少女たちは一様に顔を曇らせ、悲痛な表情を浮かべていた。その脚は硬く閉ざされ、姿勢は前屈み。いまにも倒れこんでしまいそうな者や、顔をうつすらと赤くして、息を荒げている者もいる。

年齢はみな一様で、さしたるばらつきは見つからない。まるでどこかの学校の一学年をそのまま抜き出してきたようだ。それを証明するかのように、少女たちは同じ服装をしていた。

やや厚めの生地、白いＴシャツと、深い紺色のスパッツ。

誰が見ても納得の、体操着である。流石にこのご時世、もはや化石を通り越して骨董価値をもつようになったブルマを身につけていることこそないものの、下半身を覆う薄い布地は、健康的な少女の脚をしっかりと包み、その柔らかな曲線を綺麗にトレースしている。

いまはぎゅっと閉じ合わされた内腿と、その上にいと切れ込んだ股の付け根のささやかな食い込みも、しっかりと覗かせるほどだった。そこから、少女達が当然その下に穿いているはずの下着を身につけていないこと、競技用のスパッツには当然あるはずの、股間を保護するパッドの縫いこみもないことが見て取れる。

そしてまた——ばらつきのある中で特に発育の良い少女の胸元に眼をやれば、その体操着の胸元を押し上げる胸の膨らみを

保護するブラも、また少女たちには許されていないこと分かる。

ブラに限って見れば年齢を考えればそのような少女がいてもおかしくない世代ではあるが、それにしても全員そろって、おまけに下まで、体操着以外をなにも身につけていないというのは、いささか異常な状況である。

「う、あ……く……」

「っふ、はあ、はあつ、……うああ」

体操着そのものにも、異常はあった。ふつう、胸に記されるのは、古式ゆかしくクラスのナンバーか、あるいは昨今の防犯事情から目立つものは何もなく、裏地に小さく名前を記す程度のもの。

しかし、少女たちの胸には確かにゼッケンのようなものがあったが、そこに記されているのは共通性のないただの数字だけだった。ぱつと見たところ3桁以上のものはなく、そして同じ数字を振られている少女もいない。それだけ見れば、たとえばマラソンの選手番号にも見えるかもしれない。

だが——その数字は、やけに偏っていた。300番台から、400番台——時折500番台が混じり、ごくごく稀に600番台、700番台前半の番号が見える。800を超える番号はほとんど見当たらず、逆に200番台の前半や100番台もまた、ほとんど見つからない。

まるで何かの成績のようだが、少女たちの様子とその番号が付随している様子もなかった。番号が大きいから皆苦しげなのかと言うとそうでもなく、その一方で小さな番号でも今にも倒れてしまいそうにふらふらな少女もいる。

そして——少女たちは同時に全て裸足だった。体育履きどころか、ソックスまで脱がされた剥き出しの脚のままでいた。まだ季節的には十分に冷えるこの時期の夜中、広い広い板の間に立つには、少々辛いものがあるだろう。

思わず爪先立ちになってしまうのは、そのせいだろうか？

しかし、少女達が小さく声を上げながらも切なげに身をよじり、ふらふらと危なっかしく身体をゆするのには、他にも理由がある。

少女たちの手は、皆、誰一人の例外もなく、背中で細い紐を使って、しっかりと縛られていたのだ。ちょうど腰の上、肩甲骨の下、『背中に手が回る』の言葉を文字通り体現するかのように、少女たちは両手の動きを完全に封じられている。

ただでさえ冷たい板の間で歩きづらいところに、手まで縛られて——うまくバランスを取るのは至難の業だ。おまけに、並んだ列にいる皆が一樣に同じ格好をしているため、誰かがふらつけば他の誰かにぶつかったり寄りかかったり、ちょっとしたことで次々連鎖的に倒れてしまいかねない。

手を使わずに起き上がることは、このまま立っているよりもさらに難しいことを、少女たちは知っている。

「っ、あ、はあ、は、はっ」

「ね、ねえ、は、はやく——お願い、はやくして……っ」

「もう、ほ、ほんとうに、だめ、なのお……っ！！」

身体をくねらせる少女のうち、列の先頭のほうにいる少女たちが、小さく唇を震わせて懇願する。

その視線の先には、制服姿の数名の少女が、小さなテーブルについていた。体操着の少女たちとさして年齢のかわらない彼女たちは、しかし幾分大人びた雰囲気、いかにも多勢の前で喋るのに慣れている、と見える。

その保障のように、制服の片袖にピンで留められた腕章には「生徒会執行部」と記されている。そのことが、多くの少女たちと、その向かいに立つ制服姿の少女たちの間に、明確な差をつけているようだった。

列を作る少女たちは一見、順番を待つかのようにもみえる。しかしその先頭の少女が何かを許されているかということもそんなこともなかった。他の体操着姿の少女たちとまったく同様、腕を後ろに縛られたまま、腰を震わせての前傾姿勢だ。

もはや、彼女たちの『オシッコ我慢』は限界に達しつつあるのは誰の眼にも明らかだった。

そんな状況の中、机に座る制服姿の少女のひとりが、隣の少女に軽く視線を向けた。制服姿の少女たちは何かを確認するように小さくうなづきあってから、その中の一人がパイプ椅子を引いて席を立つ。

一斉に、体操着姿の少女たちの視線が、そちらに集中した。一つ一つの言葉を聞き取れない、騒音にも似たかすかなざわめきが起こり、広い室内に浸透してゆく。

そんな注視の中、まったく気にする様子もなく、席を立った制服姿の少女は卓上のマイクを取り、軽く音響のオンオフを確認して、口を開く。

『皆さん、長い間ご苦労様でした』

わずかにハウリングの残る声が、大きな室内に反響する。部屋のどこにしよう関係なく届く、無視もスルーもできない、まるで命令のような声だった。

それに従い、体操着の少女達が小さく身を震わせる。脚を深く『く』の字に曲げ、まるで柔軟体操のような姿勢。けれど、緊張に硬く強張った少女たちに余裕の色は見えない。

ご苦労様と言われても、それで彼女たちが苦痛から解放されるわけではない。現在進行形で激しくなり続けるさざ波のような排泄欲求に、少女達は背筋にうっすらと汗を浮かべ、熱い吐息を繰り返す。

『まもなく集計が終わります。結果発表までは今しばらくおまちください。……初めに、生徒会執行部より今期の総評を申し上げます』

どこからか、苦悶のような声が上がった。

そんなことはいいから早く！ という一同の強烈な視線を、まるで風を受け流す柳のようにあっさりと流して、生徒会の少女は一度、手元の目録に視線を落とし、再び顔を上げる。

『今期の測定では、記録を更新された方々はかなり少ないものとなっています。全体的に伸びは低下し、昨年までの状況に比して、特に上位の伸びが著しく低下していることが、集計結果に現れています。一方で下位成績者のなかには努力を放棄するような姿勢もみられ、各委員会からも厳しいご意見をいただきました。また測定中の規律にも大きな乱れが見られ、学院生徒にはあるまじき姿を晒した生徒も少なくありません。……今一度、“貞淑なる乙女”たらんとするものの集う本学院の本分に立ち返り、よ

り一層の向上をはかることが急務と思われます』

生徒会の少女は、良く通る声で淡々と総評を読み上げてゆく。

寄り添う少女達の多くは、けれど半分上の空で、一刻も早く順位発表に移って欲しいとただその一念を繰り返していた。なかには本当に口の中で小さく、はやく、はやくとつぶやき続けているものまでいる始末。

ただ、ぎゅうと下半身の一箇所、熱い水流の渦巻く場所の出口を閉ざしているだけで、余裕や節度といったものは微塵も感じられない。

そんな有様であることも、生徒会の少女たちには嘆かわしいものに映る。これがかつて戦前は県下随一の偏差値を誇り、かの霧沢と並んで全国にその名を示した聖コリアン女学院の現在なのだ。

来年度から実施が予定されている強化プログラムの執行も、これではしかたないことかもしれない。そんな、諦観にも似た共感が、生徒会の少女たちの間に広がる。なによりも先に立って、かつての栄光の復権を目指す生徒会の前には、重くも遠い道のりがあることが改めて感じられた。

『それでは、これより上位成績者の発表を行います。

——順位の発表の前に、再度、順位と賞品の確認をいたします。まず第1位。校舎一階、西館トイレ、4番目の個室の鍵』

ざわあ、とまるでうねりの様にざわめきが膨れ上がった、その一言だけで、これまで小さな静寂を保っていた広い室内に、喧騒にも似た騒音が巻き起こる。

これまでの長い長い我慢が報われる瞬間を前に、体操着の少女たちに落ち着けというのが無茶と言うものだった。彼女達は皆、全校生徒の面前でのオモラシという最低最悪の結果を回避するためだけに、脚を寄せ合い腰をよじって、必死に耐えてきたのである。

それに加えて1位の賞品内容はまさに破格。どれだけ占領しても、どれだけ思う存分使っても構わない、自分専用のトイレが与えられるということだ。これはおよそ一週間にわたり、学院で誰も手に入れられなかったものである。

気兼ねなく思う存分に好きなだけオシッコのできる、そのための専用の場所——どれほど焦がれて、どれほど恋しかったことか。喉から手が出るほどに欲しいまさにその場所が——1位の賞品だという。何十時間にも渡るガマンの果てにそんなものを示されて、これでおとなしくしているという方が無理だろう。

ぎゅうとスパッツの上から脚の間を押さえ込みながら、体操着の少女たちは誰もが皆、自分が“そこ”を使っている光景を想像する。たとえ絶対に1位なんてありえないことが分かっている、そうせずにはいられない猛烈な衝動が、いまなお下腹部に激しくこみ上げているのだ。想像の中で、400人近い少女たちのオシッコが、一斉に校舎一階、西館トイレ4番目の個室の中へと流れ込んでゆく。

怒涛のような熱気のうねりを前にして、しかしマイクを取る生徒会の少女はまるで動じず、賞品説明の補足を付け加える。

『言うまでもありませんが、賞品は一人でしか使用できません。規約に違反した場合、入賞資格とともに賞品も剥奪になりますので、ご注意ください。その場合、繰り上げ当選などありません。

続いて第2位、こちらのシビンです』

言葉に従って、生徒会の腕章をつけた少女の一人が、高々とガラスの容器を掲げて見せた。1位の待望のトイレから、2位にいきなりのランクダウンを宣言され、落胆と悲痛の声が湧き上がる。

そう、確かにこのガラス容器も、オシッコを済ませるためには問題なく使えるもので、そのために用意されたものだ。もともとの用途から異なるそこの缶やペットボトルなんかに比べれば、遥かに遥かにマシなのだが。

しかしせめて、2位ならば、準優勝ならば。“おまる”くらいはあるかもしれないと思っていた少女たちには、あまりにも辛い仕打ちだった。

なにしろこのシビンとは透明なガラス製の容器。無論ながら男女兼用のようなちゃちなものではなく、ちゃんと思春期を迎えたばかりの少女の身体に合わせてにつくられた特注品である。だが、それでもトイレとはまったく違う。たとえカーテンの裏側や物陰などに隠れてこっそり使ったとしても、その透明な容器にたっぷりと注がれた、恥かしい液体の様子も量も色合いもなにもかも、余すところなく見られてしまうのである。

賞品内容として上げられたのはシビンのみで、その使用時、あるいは使用後に、中身をどこかに処分するための権利は付随していないことが生徒会から強調される。予想通りのことではあっただろうが、少女たちはさらに悲鳴を上げた。

つまり、あのシビンにオシッコを済ませてしまったが最後、それをずっと持ち続けていなければならないというわけだ。

『3位は携帯トイレ。ごく標準的な、市販のものです』

体操着の少女たちの苦悶をよそに、淡々と解説が進む。

3位の携帯トイレを見て、少女たちの多くは意外な安堵を見せた。実のところシビンなどといわれるよりは、気分的には遥かにマシなシロモノである。もちろん比較の問題ではあるが、シビンと同じ使用法だとしても、人生でお世話になるかもしれない回数を比べれば、こちらのほうがずっと抵抗が少ないのだ。

その一方で、緊張に全身を強張らせた少女たちも少なからずいる。顔色を変えた少女たちの胸元の数字は、一様に500を超えていた。

市販品、つまり一番良く使われるということは、まず標準的な使用方法、あたりまえな使用条件を前提にしている。だからこそ、予定を超えた状況には対応しきれないということだ。

もっとも、こんなものにオーダーメイドなどないわけだから、仕方のない問題ではある。しかしどれだけ希望的観測をしても、そもそもこの賞品が自分にとって役に立たないことをはっきりと自覚している少女たちにしてみれば、こんなものはまるで賞品たりえないのである。

もう脚の付け根の出口のすれすれまでやってきているオシッコは、一度出し始めたが最後、途中でとまることなどない。それゆえに、標準的な携帯トイレで最後まで“済ませられない”となれば、余った分は全部外に溢れてしまう。それでは——トイレを使った意味などないのだ。その意味で、まず間違いなく誰でもすっきりと楽になれるだけ、シビンのほうが上等とも言えた。

折角、苦勞に苦勞を重ねてたどり着いた上位入賞の賞品が、その実まるきり役立たないなど——報われないにも、程がある。だからこそ、おそらくあの小さな携帯トイレよりも多くのオシッコを、おなかの中に溜め込んでしまっているだろう少女たちは、そのことに苦悶し、表情を青ざめさせていた。

『4位の賞品は、あちらに用意しました』

次の賞品は、生徒会の手によって示されることはなかった。マイクの解説に促され、少女達はその視線の先に、それを見つける。

4位、表彰台を外れて入賞のトップに当たるその賞品は、いかにもなイメージそのままの、チープなデザイン。白鳥を模した子供用の“おまる”だった。

先ほど、いっそもうそれでもいいと思っていた少女たちも、その光景を見て絶句する。どうしてトイレの次あたりに来そうなこの賞品が4位なんて中途半端な順位に用意されていたのか――。

その理由は、本来、持ち運びができるはずのそれが、部屋のほぼ中央あたりにせり出した大きなステージの上に、高々と設置されていたから。これ見よがしに大きなボルトと金具でステージ上に固定されたそれは、さらにガムテープでぐるぐる巻きにされ、持ち運びをはっきりと禁止されていた。

つまり、あの遮るもののないステージの中央で、おまるを使えと、そういうことなのだ。いくら緊急避難でおまるそのものを使うことは許容できても、400人を超える視線の中であの赤ちゃんがトイレトレーニングに使うような器具をまたぐとなると、その難易度は桁外れに跳ね上がる。

もはや、3位の表彰台を外れた者は、評価にすら値しないと言わんばかりの仕打ちだった。

『なお、前後いたしますが努力賞も隣に用意されている金ダライです。努力賞の発表は入賞者の発表後に行います』

さらに幾分酷いのが、憎らしいほど配慮されたその隣の金ダライ。条件そのものはおまるとほぼ一緒だが、もともとそのための用途に作られていないわけだ。

生徒会の少女が試しに軽く叩いただけでかぁん、と五月蝋いほどの音を立てる金ダライは、まるで音響増幅器のように、激しく迸り叩き付けられる少女の水流の水音を、受け止めたそのままに、この広い部屋の中いっばいに喧しく鳴り響かせることだろう。

そのもたらす苦痛といったら、あのマイクの比ではない。どちらが少女たちを辱め、苦痛を強いるかは言うまでもない。

しかしそれも仕方のないことだ。努力賞とは努力したことに対し報いるための賞ではなく、より大きな努力を期待するための、一種の罰ゲームに近い。ゆえに、我慢の足りない少女にはそれ相応の大きな羞恥を与えようというのが、今の生徒会のやり方である。

『5位は、飼育委員会からの提供です。この場を借りてご協力に感謝いたします』

次にてできたのは、ペット用の室内トイレ。匂い消しの砂が敷かれた猫用のものと犬用のものが用意され、用途に合わせてどちらでも選択可となっている。しかしそんな選択肢を、与えられたところで崖から落ちるのとライオンに食べられるのどちらがマシかというような問いしかない。用途に合わせてなんて、いまにもオシッコの漏れそうな少女たちにとって、使用方法はひとつしかないに決まっているのだ。

しかも、室内用のペットというのは総じて小さい。それだけにそのトイレもとても小規模なもので、普通に使うにしたらそもそも無茶がある。いくら小柄な少女と言っても、チワワや猫にくらべて、出す量が少ないわけがない。まして今ここにいる生徒の全員は、ほぼ膀胱の貯水量の限界までオシッコをガマンしているのである。明らかに吸収が間に合わないことがはっきりと分かるものだった。

しかしそれもまた当たり前のこと。5 位の商品が、それより上位の賞品よりマシなわけもない。

……唯一の救いは、この 5 位の賞品が 4 位の賞品のようにステージ上に固定されているわけではないということだろうか。生徒会の補足もなく、それは、少女たちにこのペット用トイレを使ってオシッコをする場所だけは自由であることを保障するものだった。

もっともその利点も、砂のぎっしり敷かれた重いペット用トイレを、少女の細腕とふらつく脚でどこまでか持っていけることができるという問題を踏まえたとえでの話なのだが。

『6 位は紙おむつです。なお、今回はこちらの不手際で幼児向けのものが用意されておりましたので、今回は成人女性用のものを用意いたしました。きちんと着用の上、ご使用願います』

そろそろ本当に賞品なのかも怪しくなってくる。確かにオムツにすること自体はオモラシとはやや趣を異にし、違うと言えるかもしれないが、そもそも少女達が今切実に欲しているトイレという場所がきちんとあって、その使い方も分かっているのに、その上であえて、漏れそうなオシッコのためにオムツを穿いて、そこにオシッコをしろなどというのは実に問題外、ありえないことだ。

前回は今回と同じく 6 位の賞品はオムツだったが、生徒会の不手際によって幼児向けのサイズのもものが用意されてしまった。そのため見事 6 位に入賞した少女はそれを着用できないという理由を盾にこれ幸いと地面にそれを配置して、そこにオシッコを済ませ、想定とまったくことなる使い方をされてしまったという珍事が起きている。

これでは、人目から隠れてきちんとシビンなり、携帯トイレを使ってしまうのと大差がなく、持ち運びの許されない 4 位、5 位の賞品よりも事によると上位の賞品と扱われかねないものだった。

その反省を踏まえ、生徒会はきちんと着用して使用できるものを用意し、権利にもそれを含めてきたのである。

『7 位、シャベル。使用敷地は校庭グラウンド内のいずれかとします』

体操着の少女たちの悲痛な呻きも、そろそろ最高潮に差し掛かっていた。一見まるっきり無関係にも見えるこの賞品、要するにどこでもいいから穴を掘って済ましなさい、ということだ。

しかもなんとただっぴろい校庭の、グラウンドの中だけをその対象にするという凄まじい縛りつき。そもそも我慢しながらのへっぴり腰ではまずまともに使えるだけの深さ、大きさの穴を掘りきることもできないだろうし、万一間に合っても、グラウンドの中央でなければならないという制限が同時に発生し、ステージの上での行為よりも酷いことになりかねない。

第一、自分のオシッコのための穴をいちいち掘るなんて、惨め極まりない思いをせねばならないとなれば、受け入れられる者はほとんどいないだろう。

なお、こちらも、数年前に砂場を利用した少女がいたため、以後レギュレーションに改定が加えられているのだった。

『8 位、西棟三階視聴覚室横トイレの鍵』

ここで、いきなり具体的に出てきたトイレの配置に、一瞬少女達の間からざわめきが起こる。しかし、そこが男子トイレの場所であり、おまけに個室が全て鍵で封印されているという条件が継いで明かされると、ざわめきは叫びに変わった。

たとえ男子トイレに入ること自体に抵抗があっても、個室そのものは女子トイレと何も変わらない。それだけならご褒美にも思える

ものだが、個室が封印されているということは、使えるのは小用便器か、あるいは排水溝くらいのものだ。そこで用を済ませるというのは、正直に言っても恐ろしいほどの苦痛である。

8位の賞品に許された自由は、立ってするかしゃがんでするかを選択できる程度のものでしかなかった。

『9位、ポケットティッシュ』

ここで示されたのはなんとも意地悪なことに、本当にただのポケットティッシュ、それも使い古されてあと残り1、2枚というだけのものがひとつだけだった。もはや限界に近く肩を寄せ合う少女たちの前にそれを堂々と掲げてみせる生徒会も、大したものだといえる。

確かにいま、体操着のみの着用を許され着の身着のままの少女達は他に何も持たされておらず、後始末に使うポケットティッシュは必須のものだろう。何しろこれまで示された賞品の権利には、1位の賞品を除いてこの後始末という観点がすっぽり抜け落ちている。

だが、逆にポケットティッシュだけ提示されてもどうしようもないのだ。仮に家庭用のティッシュひと箱ともなれば、出てきたオシッコを全部、染み込ませてしまうという方法もないわけではないが、もしそれが叶うならそれは4位、あるいは3位の賞品だろう。

9位の賞品に相応しく、少女たちの苦痛の解放には何の助けになるわけもなく、ただ握り締めるくらいにしかならないのである。

『10位、入賞最後となる権利は、我慢権です』

耳慣れない単語は、しかし体操着の少女たちにはすぐに理解のおよぶところとなった。生徒会が示したのが、彼女たちの備品の鉢だったからだ。つまり、いま背中固定されたこの腕を自由にしてくれるので、どうぞご存分にぎゅうっと握り締めて、オモラシを我慢なさいということなのである。

姿勢もポーズも制限なし、まったくのフリースタイル。今は膝の交差と腰のくねりに頼るしかないために、いますぐ両手でそこを押さえ込みたいという猛烈な衝動は、ほぼ全ての少女たちに共通の思いだった。そこで、10位にギリギリ食い込んだご褒美に、どうぞ心ゆくまで堪能してもいい、というものなのであった。

思うように動けないことに比べれば破格の、けれどまったく根本的解決にならない商品なのは、実に憎らしい。

そして——ここに至り、少女達は気付く。

これまでに示された9位までの全ての賞品に対し、両手を自由にするという条件が含まれていないことに。

つまり、1位のトイレ使用权も、2位のシビンも、3位の携帯トイレも、4位のおまるも、努力賞の金ダライも5位のペット用トイレも6位のオムツも7位のシャベルも8位の男子トイレの使用权も9位のポケットティッシュですら。

そもそもそれを使うための、手が使えないのだ。

そんな状況では、たとえどんなに素晴らしい賞品をもらえたとしても、ただの宝の持ち腐れ。オシッコを済ませるための何の役にもたちはしない。それどころか、なまじできるという希望がチラつかされるだけ、苦痛を倍増させるだろう。その果てに待つものは間違いなく、限界を超えてのオモラシである。

「い、意地悪っ……！！」

「ひどいよ、ひどすぎるよお……」

「そんな、そんなのって……」

渦巻く抗議の中、上位 10 位の成績が公開される準備が始まる。ほんの十何分か前まで、少女達が命と引き換えにしても欲しいと思っていたものは、まるで砂漠の蜃気楼のように、どこかに消えうせてしまっていた。身をよじらせる少女たちに、しかし無常にもランキングを並べた紙が掲示板に張られて行く。

さっきまでは羨望の対象であったはずの上位入賞者。しかしいまはそこに選ばれてしまうことこそが、最悪の罰ゲームだ。

『さて、それでは順位の発表となります。なお、選外の方々には残念賞として、お茶が配布されます。良く冷えていますので、残さず飲んでください。

また、前回記録を更新された方には、身体を温められるように暖かいお茶が用意されています。それでは——』

そして——

少女たちの苦悩は、続くのである。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: テストのお話・1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/04/2009 22:22:38

BODY:

時計の針は8時14分。いつもと変わらぬクラスメイトが集う教室は、まもなく始まる朝のホームルームを前に、いつにないざわめきをみせていた。

いつも時間ぎりぎりまで練習をしているソフトボール部も、遅刻常習犯の最前列の生徒たちも。普段なら見ない顔ぶれが教室のそこそこに着席し、あるいは近くの友達の机に集まって、ぺらぺらと教科書に参考書をめくっている。

まもなく始まる期末試験の3日目を前に、言葉にしづらい緊張と、奇妙な熱意が教室を取り巻いていた。

「ねえ、今日どんな感じ？ あたしもう全然自信ないよー」

「あたしも全然。昨日も途中で遊んじゃってさ」

そんな教室の片隅で、参考書をぺらぺらとめくりながら姦しくお喋りに興じている一団がある。

「わたしなんか徹夜だよ？ もーどーにでもしてーって感じで」

「選択問題多いといいけど……」

「一時間目、現国でしょ？ それ絶対ないってば」

無慈悲に進む時計の針を前に、最後の復習をしている——わけではない。形こそ教科書にノートを広げているものの、彼女たちの話題は、諦めと愚痴に満ちていた。

試験を前に、ポジティブにえられる人間はそういない。どちらかと言えば下から数えたほうが早い成績となれば、なおさらだ。そんな意味で友人たちのぼやきも、許容できないわけではないけれど。

（そんなこと言ってる暇あるなら、ちょっとでも何か覚えればいいのに……）

村瀬サツキには、口々に勉強していない、分からない、もうだめと繰り返す友人たちの心境が理解できなかった。入試とは違って試験範囲がはっきり分かっている学校の試験など、最後の最後まで全力を尽くして試験範囲に眼を通しておけば、それだけで何点が変わってくる。

無理に勉強しろとは言わないけど、初めからそれを放棄してしまうのはもったいない、と思うのだった。

「あーあーあー、もう時間ないよー。こんども終わりだー！！」

「うう、どうしよう、こんどこそ赤点かも……」

そんな事を言いながら、まだホームルーム前だというのにさっさと教科書をしまってしまう。結局、彼女たちも本当の意味で困っていないのだろう。溜息とともに、サツキはノートを広げ、もう一度最初から目を通してゆく。

「あー、もうダメ。諦めよ、ね？」

「うんー」

「一緒に補習うけよーよ、ね？ ねえ、サツキもそうでしょ？」

不意に話を振ってきたのは、先ほどからお喋りの中心にいた宮藤チエリ。サボりと遅刻の常習で、先生からもあまり快くは思われていない。アキやユミと一緒に成り行き上、一緒に遊んだりする友達ではあるけれど、どちらかと言えば正直、サツキには苦手なタイプであった。

「サツキも諦めなよ、もうそんな無駄なことしたってダメだってばー？　ねー？」

よほど自信がないか、少しでも仲間がほしかったのだろう。チエリはサツキの机の上を見てそんな事を言う。

「でもほら、まだ時間あるし……」

「いいじゃんそんなの。いまさら遅いってばー」

チエリに应ずるようにそうだよ、そーだよ、と声が繋がる。

「わたし全然勉強してなくてさー。全然ダメなの、ほんと自信ないんだってば。サツキー」

口ではそう言いながら、実のところチエリの成績はそう悪くはない。どちらかといえばこれはポーズのひとつで、『全然勉強していないのに、けっこう頭のいい自分』を演出するためのものだ。彼女のそういうところが、サツキは好きになれなかった。

（一人でやるのはいいけど、周りまで巻き込まなくてもいいじゃない……）

「ねえほら、サツキ、悪あがきやめよーよー」

「ちょっと、やめてよ」

チエリはサツキの机に近づいて、ぐいぐいと教科書を奪おうとする。一応、じゃれ付いた雰囲気を出してはいたが、流石にサツキも無視しかねた。軽く口を尖らせ、チエリの手を払いのけて抗議する。

「別にいいじゃない、復習するくらい……勝手にしょ、私の」

「……ちょっとお」

しかし、そうされてチエリの声が不意に深く沈んだのは、サツキの予想の外だった。

「なんか感じ悪くない？　サツキってば」

「べ。別にいいじゃない。成績悪いよりは」

サツキがそれなりに懸命なのは、理由もある。家庭の事情で祖父母と暮らしているサツキは、奨学金のお世話になっていた。その貸与の条件にはさほど厳しくはないが成績の基準もあり、それをクリアしておかないといろいろと不都合があるのである。

もっとも、そんなことで余計な同情を買いたくもなかったのも、そのことは誰にも話していない。

だが——チエリにはそんなサツキの成績に拘っている姿勢が、酷く腹に据えかねたらしかった。

「ねえ、サツキって昨日もしかして勉強してたの？」

「え……なにそれ」

質問の意味が分からず、サツキは思わず聞き返した。1週間も前から部活も休みになり、試験期間に入っているのだ。いくら適当な生徒でも、この期間くらいは普通、それなりに勉強はするものだ。

「そりゃ、したけど……。てゆうか普通するでしょ、試験前なんだし」

だからサツキは、普通にそう答えてしまっていた。だが、次の瞬間の不穏な空気を、サツキは肌で感じ取ってしまう。

「ええー！？　なにそれっ。サツキい、ちょっと空気読んでよ～」

「ホント。やな感じ。自分だけ優等生ぶっちゃって」

「……な、なによ、悪い？」

いきなり爆発した批判にわけが分からず、反射的に言い返すサツキ。それはサツキにはごくごく普通の回答だったのだが、チエリた

ちの感情を逆撫でするには十分なもので、場の雰囲気はさらに陰悪なものとなる。

「……ふーん、そーゆー態度取るんだ。なんかさ、村瀬ってちょっとさ、……ねえ？」

「言えてる。もう少し回りの事考えなって言うかさ」

「あたし達のことなんかどうでもいいってこと？」

酷く乱暴な理論——のように、サツキには思えた。しかし、そう思っているのはどうも、周囲でサツキだけらしい。いつしか付近にはチエリの友人たちVSサツキ、という構図ができつつある。

「て、テストなんだから勉強するくらい普通じゃない。違う？ わ、私だって別に普段からそんな真面目じゃないし——」

「へえー、それってさ、自分は勉強しなくてもあたしたちより頭いいって言いたいのか？」

「ち、違っ……そんなこと言っていないじゃない！！」

チエリがますます視線の温度を下げて行く。どうして彼女の機嫌を取らねばならないのかという理不尽も覚えながら、サツキは言葉継いで説明を追加した。

「そういう事じゃなくて……別に、いい子ぶりがたくて勉強してるんじゃないし、その、あんまりひどい点だと……困るからっ」

しかし結局、奨学金のことは言い出せず、曖昧な抗弁になってしまう。そんなサツキの言葉尻を捕まえるように、チエリは言い返す。

「なによそれ……それさ、あたし達が頭悪いっていったんの？」

「そ、そんな——」

とうとうサツキが立ち上がろうとした時だ。

がらあ、とドアが開き、担任の教諭が入ってくる。少し遅れてホームルームの鐘が鳴り響く。

「よし、席に着けー。おら、時間だぞー」

なし崩し的に、サツキの周囲の友人たちも各々の席に戻る。

とりあえず妙な話題が中断されたことに、サツキは小さく安堵を覚えていたが——チエリたちの間に燦り始めた火種は、けっして消えているわけではなく、それどころかどんどんと火を起こし、火花を立てて燃えだしていた。

（なんかさ、アレだよな、サツキって）

（かもね。今の、ちょっとどうかなって思う）

（いちおう、言ってることわかるけどさあ……）

多くの学び舎で繰り返されてきた、愚かな行い。けれど尽きることないその種火は、徐々に煙を上げ音を立て、大きくなってゆく。

声を潜めてメモ用紙のメッセージを回しあいながら、気付いていないサツキの背中を見て、少女達が囁きあう。

（いいよ、なんかサツキ、自信あるみたいだから。ちょっとハンデつけてもらおうよ）

（どうするの？）

（んーと、ねえ）

今日の連絡事項を告げてゆく担任の声などど吹く風。顎に手を当てながら、サツキの背中と——カバンから覗いた、お茶のペットボトルを眺め、やがてなにか見つけたようにきりと目を光らせる。

（ふうん。……そっか）

少女の胸のうちに頭をもたげた悪意は、静かに哀れな犠牲者の足元へと這い寄り、気付かれぬようにしっかりと、サツキの脚に深く絡み付いていたのだった。

「よし、じゃあホームルームは以上。各自今のうちにトイレは行っておけよー」

挨拶を最後に。担任の教諭が教室を出てゆく。

1 時間目の現国までは 5 分ほど。サツキが一旦は机に出したノートをぱたん閉じて、席を立とうとする。

「ねえ、サツキ？」

「な、なに？」

その先を塞ぐように、チエリはすっとサツキの傍に歩み寄った。チエリはまだ困惑しているらしいサツキの前で、軽く眼を伏せ、弱々しげな声を作る。

「ごめんね、なんかさつき、ちょっとヘンなこと言ったかも……」

「え……ああ」

きゅうに変わった友人の態度に、軽く面食らいながらも、サツキは事態を理解したのか、やがてほっと胸を撫で下ろす。

「ちょっと、イライラしてたかも。なんかヘンな事言っちゃって、ごめんね……」

「そんな……私こそ、なんか、かっとなっちゃって……」

そう、結局——大本から嫌な子、というわけじゃないのだ。ちょっと、たまに噛み合わないだけで——

(……なんて、思ってたでしょうね、この子)

深く沈んだ思考で、ちらりとサツキを睨み、チエリはさりげなくサツキに近寄って、手を合わせてぺこっと頭を下げる。

「ホントごめん。わたしが遊んでるのが悪いのにさ、サツキもそうなんだって勝手に思っちゃって……」

「そ、そんな……」

戸惑うサツキを横目で見ながら、チエリは視線を動かして、教卓の上の時計を見た。たったこれだけのやりとりで思っていたよりも分針が進んでいることを確認しつつ。さらに謝罪の言葉を口にする。

「でもさ、やっぱわたし——」

——それから、およそ 1 分半。

ようやく離れたチエリを後に、サツキはやや早足で教室を出て行く。その後姿を見送るチエリに、アキが聞いてくる。

「ねえちょっと、チエリ、あんなんでもいいの？ なんか拍子抜けっていうか」

「ふふ。大丈夫。あれだけ時間稼げば、十分でしょ」

チエリは振り返ってアキを見、ユミと、他に数名の少女達が、きちんと席を離れていることを確認して、くすりと笑った。

「チャイムまであと2分くらいしかないし。ユミたちもいるもん」

今頃、サツキはさぞ困惑しているだろう。こみ上げてくる笑みを隠すこともなく、にこにこ上機嫌にチエリは席につく。

「サツキって、結構近いじゃない、おトイレ。なんかあれさ、前に聞いたんだけど、家でそう言うお茶飲まされてるんだって。お通じにいいってアレ」

「へえ……そうなの？」

休み時間に連れ立ってトイレに行くのは女子の風習みたいなものだが、トイレに行ったからと言って誰も彼も必ず個室に入るわけではない。お喋りや身だしなみのチェックだけで戻る子も多いのだ。

そんな中、サツキは必ず、いつもトイレで個室を利用しているのだった。

だから——たぶん、今はきっと困っていることだろう。

授業前には必ず済ませているトイレの前に、ずらりと並んだ順番待ち。ユミ達のおかげでいつもの倍以上の利用者がいるトイレでは、とても一時間目開始前に間に合うはずがないのだから。

チエリはふとその光景を思い描き、それからアキに言った。

「ねえ、たぶんサツキ、困って帰ってくると思うからさ。自販機でさ、コーヒーと紅茶買って来てよ？ せっかくだからたつきさん喉を潤してもらおうよ。テストでいい点が取れるようにさ」

「了解～」

暗い感情を覗かせながら、少女たちはくすくすと囁きあう。

まもなく、チャイムの鳴るほぼ直前に、ユミたちに連れ立って微妙に晴れない表情のまま戻ってきたサツキを見て——チエリはますますその笑みを深くした。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: テストのお話・2
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 04/04/2009 22:24:28

BODY:

しんと静かな教室に響くのは、シャーペンが跳ねる音。消しゴムが踊る音、熱の筆った溜息、がりがり頭を掻く音、かつかつと答案用紙を叩くペン尻の音。

期末試験最難関と噂される3日目の一時限目、その敵陣の先鋒となった現国のテストは、常よりもさらに増した難易度で、夏休みを前にした生徒達を容赦なく迎え撃っている。教卓から黒縁の眼鏡のフレーム越しに教室を睥睨するのは、試験担当の教諭の視線。それはまるでわずかな不正も見逃さんとする法の番人のようだ。

加えて、ささいな書き間違いを見つけては嬉々として減点する、学年主任の現国のテストは、校内を通じてもすこぶる評判が悪い。

だからこそ、普段の予習・復習に支えられた着実な勉強法がものをいう。

——毎日ではなくとも、それらを地道にこなしているサツキには実力を発揮するに相応しいはずのものだった。

だが——

「……………」

吐息と共に、熱っぽい頬を擦り、サツキはまとまらない頭を振る。集中できない自分を胸中で叱咤しながら、熱の筆ったスカートを巻き込んで椅子を軋ませ、脚を揃えては組み替える。

(はあ……)

気にすまいと思えば思うほど、どうにも下腹部の違和感がぬぐえない。朝のホームルーム後で遭遇した、いつもはありえないトイレの大混雑はまったくサツキの予想外のものだった。

チャイムまでの残り時間はわずかで、流石に別のトイレまで出張している余裕もないように思えた。

時計を気にしながら廊下まで続く順番待ちの列に並んでいるうち、あっという間に時間が来てしまい、サツキはとうとうトイレにいけないうま教室に戻る羽目になってしまったのだ。

多少無理すれば個室に入れなくてもなかったけれど、同じく並んでいたユミたちに、『しょうがないけど我慢だね。……いこ、サツキ』なんて口々に言われてしまえば、そのまま残っているわけにもいかない。

(チエリとあんなに話してなきゃ、間に合ったかもね……)

とは言え、せっかく和解した友人のことを悪くいう気分にもなれない。向こうから折れてくれたのに、そのせいでトイレにいけなかったなんていうのは、八つ当たりだ。

椅子の上でもぞもぞと脚を動かし、サツキは軽く気合を入れなおす。

(よし、集中っ……)

改めて、事実のみを抜き出して考えてみれば、なんとも単純で、簡単なことなのだ。

つまり、要するに、たかだか37、8℃の、体温と似たような温度の液体を——ほんのちよっただけ特殊な液体を、一ヶ所に保管しておくだけのことなのである。

コップや花瓶、そんな上等なものでもなくとも、たとえば飲みかけのペットボトルとか、牛乳のパックとか、そんなものだって構わない。そう——まあ、おそらく、およそ500ml強の……ひよっとしたら、もうちよっただけ多いかもしれないが、とにかくそれくらいの液体を注いでも溢れないような容器を使って、おなかの中に溜まっている分の“それ”を入れておくことさえできれば、何の苦労も努力も辛抱も必要なくできてしまうことなのだ。

たとえば、コンビニで買ったペットボトルを一本、サンドイッチと一緒に手にぶら下げていたって、こんな苦痛など覚えるはずもない。しかしたったそれだけのことを、自分の身体を中心、『おんなのこ』の入れ物でしようとするだけで、サツキは激しく長い苦しみに耐えなければならなくなるのだった。

「……ん、っ」

わずかに飲み込み損ねた声が、かるく唇を震わせる。サツキの『おんなのこ』の部分はいまでも、大きく膨らんでその存在感を執拗にアピールしていた。たった数百mlの液体が、おなかの中に溜まっているというそれだけで、サツキの思考はまとまらず、ぼんやりとした熱が頭の奥を占領してゆく。

現に、サツキは朝にも野菜ジュースとスープで、楽にコップ1杯余の水分を摂取している。いまのコレは、それと一体どれほどの差があるというのか。

小さな欲求は次第に大きなうねりとなり、『おんなのこ』の部分はサツキにたった一つのことを命じていた。すなわち——はやく“ここ”を、空っぽにしろ、と。

(……はあ……やっぱり、あんなの飲むんじゃなかった……)

思い返すのは、祖母がつくる生姜紅茶。女の子が身体を冷やしちゃいけないと、親切心から進めてくれるのは分かっていたが、さして頑丈な神経をしていないサツキの身体は、冷え性予防の生姜紅茶の利尿作用をモロに食らい、ひとくち口にすることできめんにその効果を受けてしまう。

どちらかというと繊細な排泄器官は、あっという間に身体から抽出された水分でいっぱいになり、あっさりと音を上げてサツキにトイレを急かすことがしょっちゅうだった。

試験期間中はやめておこうと思ってはいたものの、惰性のようになったいつもの習慣と、祖母の笑顔を遮ることができず、サツキは今日もティーカップ一杯、たっぴりと口にしてしまっている。つまりそれをあわせれば、都合400ml余りの水分が、サツキの身体に染み込んでいた。これにさらに、昨晚からの分までもが加わるのだ。

(だ、だからそんなことを考えてる場合じゃ——)

しかし、一度そんな風に感じてしまうと、まるで自分が水の塊のような気がしてとてもではないけど落ちついていられない。何しろ人間の80パーセントは水分だという。だからつまり、サツキの体重の8割、どう少なく見積もっても30キロ以上の水分がサ

ツキの身体を循環していて、それが刻一刻と毛細血管を巡り全身を行き渡って、健康な循環器を通過してろ過・凝縮されて身体のある1ヶ所に溜まってゆくのだ。

今ガマンしているおしっこ、60倍近い水分がサツキの身体を流れている。つまり、『おんなのこ』が限界を訴える量の、60倍ものオシッコの素が全身を巡っているのだ。

(っ……うっ、と、トイレ……っ)

生姜紅茶の作用はてきめんだ。いつもなら朝出かける前と、ホームルームの後と、さらには1時間目の後の休み時間。それぞれゆうに3回はトイレに通い詰めてようやくすっきり解放される程度のものである。そのうちの朝、出かける前のトイレと、ホームルーム前のそれを禁じられて、そろそろサツキの尿意は無視しがたいものになりつつあった。

(う、く……)

いつしか、頭の中はトイレのことで一杯になっている。

シャーペンの先はもう10分前から止まったまま、抜けの多い回答欄の上で小刻みに震えていた。いつもならもう少し、せめてあと数問はましなはずの回答欄が、全然埋まってくれない。

無機質に針音を刻む時計をじっと睨み、サツキはぐっと下腹に力を籠める。気付けば試験時間の半分は過ぎ、そろそろ後半戦に差し掛かっている。配分としては3枚ある問題のうちの3枚目に取り掛かっていなければならないが、まだサツキのペンは2枚目の最初で足踏みしたままだ。

(あと20分——たった1200秒よ。すぐに済むわ。それより今は集中、集中……!!)

この現代国語のテストが、気を散らしさえせずにじっくり取り組めばそれほど難易度の高い問題ではないことをサツキはこれまでの経験から熟知している。きちんと問題を読んで、ちゃんと回答に集中しさえすれば、それでいいはずなのだ。

雑念を振り払おうと頭を振るサツキだが、頭の一部は熱っぽくも冷静に、そのことに支配され続けている。

「ん、っ……」

小さな苦悶が、もぞりという身じろぎと一緒にあって、静かな教室に響く。同時にぎしっと椅子まで軋み、担当教諭は神経質に眼鏡の奥からサツキのほうを窺う。

些細な不審は、下手をすると不正行為と思われかねない。余計な詮索をされぬよう、サツキはただ顔を伏せて、目の前の試験問題に集中しようとする。

けれど、下腹部に満ちた苦痛の原因はそれを許さない。

握り締めたシャーペンの先が不安定に揺れ、問題文を追っていた視線はどの行までを読み終えたのかも分からなくなる。

少女の体内で次第に膨らみ、ゆっくりと張り詰めて、下腹部のなかで存在感を主張し始めた膀胱は、敏感で繊細なサツキの自律神経を刺激した。『おんなのこ』は既に音を上げ、これからなお20分という時間、おしっこを保管しておかねばならないという状況に抗議の声を繰り返している。

それをねじ伏せ、集中を欠くことなく難関のテストに挑む。たとえサツキがクラス成績上位の常連であったとしても、相当に難しい問題だった。

押さえこもうとすればするほどに太腿はせわしく動いて、椅子の天板の上で座る位置がずらされる。

(我慢、我慢よ……トイレなんか——後っ!!)

切なくも激しい欲求は、絶えることなくテストに苦悶する少女の下腹部を執拗になぶり続けていた。

「——よし、そこまでだ。終了」

教諭の声にサツキは我に帰った。鳴り響くチャイムと、わずかに弛緩し安堵した空気。

ついさっき、確認したばかりの時計が、気付けば大きく動いている。のこり10分のはずの時間を飛び越えて、現国の試験は終わっていた。

かち、かちと、秒針が黒板の上で時間を刻む。

それは同時に——サツキの意識に滑り込んだ無意識の空白が、貴重な期末試験の時間を大きく削り取ったことを意味していた。

（……全然、できなかった……っ）

時間とともに、まるで見えない何かで削り落とされてしまったような、虫食いだらけの解答欄を晒す答案用紙を、回収の手にゆだねながら、サツキは小さく唇を噛んでいた。

ちょっとくらいトイレに行きたくてもどうってことない。ちゃんと集中さえすれば——。

そんなことを考えていた自分がどれほど甘かったかを、サツキは思い知る。下腹部に熱く重く膨らんだ水風船を抱え込むことによる身体の不調は、そのままダイレクトに思考能力にブレーキを掛け、平常心すら失わせていた。読んだ問題文が眼に入らず、自分がどこまで回答したかもわからなくなる。デジャビュにも似た錯誤を何度繰り返してしまっただろう。

それでも、とりあえず解答欄さえ埋まっていれば、儚くも一抹の望みを託すこともできるだろうが——空欄となれば正答の望みはまったくない。おそらく、今回の現国の試験は、生涯稀に見る悲惨な出来となるだろうことは、想像に難くなかった。

答案を回収し終えた教師が、号令をあとにして教室を出る。

（と、とにかく今はトイレ！！ 混んでるだろうし早くしなきゃ。次の時間までなんて、我慢できない……っ！！）

後ろ髪を引かれる思いは多々あったが、もう振り返ってもどうしようもないことだ。試験前ということでもいつも以上の混雑が想像されるトイレに急ぐべく、サツキは椅子の脚を鳴らして立ち上がる。

が。

「ねえ、サツキどうだった？ あたしもう全然ダメでさー」

「えっ……そ、そうね」

いつも以上に距離を近く、チエリがサツキの傍に寄り添ってくる。あまりの至近距離に、不審を気取られまいと緊張したサツキのかかとが、床上で小さくたたっ、とステップを刻む。

ぞわりと立ち昇った感覚が、下腹部からゆっくりと股間の先端へ、むず痒い熱を響かせた。

「んくっ……！」

熱い雫がまさにその『出口』近くに押し寄せる感覚に、サツキは思わず息を飲む。

「なんか、調子悪そうだったよね、サツキもー。あれ難しいからしょうがないけどさ、あはは」

「う、うん……」

チエリから見えないように、スカートの裾をぎゅうと握り締めたサツキはそう答えるが、返事はまるで上の空だった。心は既にまだ見

ぬトイレへと飛び、そこで順番を待つ自分を思い描いている。

チエリの口調から、サツキはテスト時間中に何かに気付かれたのではないかと不安を抱きつつも、それを誤魔化すための方策を必死に考えていた。

その一方で、スカートに包まれた内腿にはぶるぶると力の籠り、硬く張り詰めている。その付け根の下着の布地に包まれた敏感な排水口から、熱く入りそうになる水流を押さえ込むために厳戒態勢だ。

「——ねえサツキ、コレあげるよ」

まったく唐突に、にこにこ笑顔で、チエリは隣にいたアキから小さな紙パックを受け取り、ひょいとサツキに差し出す。

「な、なによ……コレ」

「差し入れだよ。サツキ、喉渴いてるでしょ？」

それは、200ml入り紙パックのコーヒー牛乳と、レモンティ。どちらも校内の自販機で売られているものだ。チエリは困惑するサツキの手の中に、無理矢理その二つを握らせる。

紙パック越しにも良く冷えているのが分かる二つの飲料は、確かにむしむしと籠った教室の中では、喉を潤すには最適だと言える。

「緊張すると喉乾くよねー。あたしはさっき飲んだからさ、サツキにあげる。いっとくけどおごりだよ？ さっきのお詫びも兼ねて、ね」

しかし、明らかに作為的な『コーヒー』と『紅茶』という尿意を呼び寄せるラインナップは、どう繕ってもその裏に意図を勘繰らせてしまうものであった。いまなお苦しむサツキの『おんなのこ』に、更なる不安をもたらす為のチョイスとしか思えない。

「え、でも……」

「眠気覚ましにいいよ？ あたしも夜とかに良く飲むんだ。眠れなくなっちゃうこともあるけどー」

だが、邪気のない顔でチエリにそんな事を言われると、サツキも強くは切り返せない。乏しいお小遣いをやりくりする学生の身分での飲み物のおごりは、それなりに重いものでもある。

「で、でも今——その、ほら、ちょっとダイエット中で……」

「いいじゃん。ちよっとくらい。ね、甘いものがあると頭も疲れないよ？ あたし本当に反省してるんだ。サツキのことも考えずにさ、なんか嫌なこと言っちゃったって……」

口を突いて出たのは、拒否の言葉。しかしチエリはあくまで親切心からというスタンスを崩さず、抵抗しようとするサツキに紙パックを押し付けた。

いつの間にか、サツキはチエリと友人たちに囲まれている。一見、テストの出来を慰めあうようなクラスメイトの語らいは、その実サツキを閉じ込める檻だった。

「遠慮しなくていいってばあ。もお、サツキならそれくらい、余裕でしょ？」

その中心でチエリに迫られ、ますますサツキは追い詰められていた。

手の中に感じる、冷たいコーヒー牛乳とレモンティ。そのどちらもが文字通り、更なる苦難の呼び水となるものだ。

(こんなの飲んだら、もっとトイレ行きたくなっちゃう……)

ただでさえ今朝からの尿意で敏感になっている下腹部には、軽く口にした想像だけでも辛い。

(で、でも……)

せつかくの和解の証を、この状況で断るということは、友人たちの前でチエリとの全面对決の姿勢を見せるということに近い。チエリのほうが深く反省し、折れてくれている状況でのそのような対応は、さすがにわがまま——あるいは、オトナではないものと言えた。

だから、サツキは精一杯の笑顔で、それをうけとる。

「う、うん……ありがと」

チエリの笑顔の裏側に、陰湿な邪気が混じっていることにも、気付かないままに。

サツキはコーヒーの紙パックを受けとると、一瞬躊躇してからその飲み口にストローを指しこんだ。

（っ……、なんでもない、なんでもないのよこんなの。全然、大したことじゃない。ちょっと飲んだくらいで、もう子供じゃないんだから、ちゃんと我慢できるはずよ……これくらい）

覚悟を決めてストローに口を付けたサツキは、そのままごくごくと中身を空にしてゆく。

そう、要は考え方の問題だ。

いくら利尿作用の強いコーヒー飲料とはいえ、飲んだすぐ傍からいきなりオシッコになるわけもない。摂取した水分が吸収されるのは腸であり、そこまで到達するにはどうしたって時間がかかる。これからトイレに行くサツキには、あまり関係のない問題——の、はずだ。

だから大丈夫。だから耐えられる。

（……っ、ふ、はっ……）

少しずつ軽くなってゆく紙パックを感じながら、サツキは理性を総動員してそう考えようとした。決して今すぐ限界が来て、恥骨の上のダムが決壊してしまうなんてことはない。あり得ない。だってもう、サツキはとてもじゃないけどオモラシをするような年齢ではない。

そりゃあ、驚いたり、体調の問題で、トイレが非常に近かったり、上手いかない子が現実問題、いるのは分かる。けれどサツキはそうではないし、なによりもただ単純に、『トイレに行けないうちに、オシッコが我慢できなくなって、オモラシ』なんてありえない。

小学生か、それこそ幼稚園の子なら分からなくもないけれど、サツキは違う。断じて違う。断じて、オモラシなんかをしていい年齢じゃない。許されるわけがない。

（っ、んう、ふう……うっ）

時間をかければかけるほど、どんどん辛くなることを悟ったサツキは、ストローを大きく口に含むとそのままパックを握りつぶすようにしてぐいっと吸い上げ、半分ほど残る中身を一気に喉奥に流し込む。

「ぶは……っ」

わずか200ml——しかし、まるで鉛を飲み込んだように、サツキの腹部は重くなっていた。既に満水の貯水池が、またぐんとその貯水量を増したかのようだ。

「すっごおい。やっぱ喉乾いてたんだねサツキ。もう一本飲むよね？」

言うが早い——チエリはもうひとつのレモンティにストローを刺しサツキに差し出した。有無を言わせぬ口調に、サツキは反射的にそれを受け取ってしまう。

「あ、あの……」

だが、今の200mlでもかなり厳しかったサツキには、もはやこれ以上余計な水分を体内に吸収することは禁忌と言っていいほどに苦痛だった。今こうしている間にも、重くなった胃袋から直接、オシッコが精製され、膀胱に流れ込んでいるような錯覚すら覚える。

わずかな水分を口にただけだというのに、小さく足が震えだし、サツキは小さく腰を揺すり始めてしまう。

しかし——サツキの背中にはユミやアキの視線が集まり、楽しそうな話題が響き合っていた。まるで見えないカーテンが、サツキの

机を周囲から遮ってしまったかのよう。

まるで、サツキがレモンティを飲むことは当然という空気が、そこにあった。

「次、数学かぁ……自信ないなあ」

「わたしもだってば。あー、全然勉強してないっ」

サツキはちらりと後ろを見る。さっきから気になる時計の分針は、既に休み時間の半分ほどを過ぎていた。もはや時間の猶予もなく、ちりちりと高まって差し迫った尿意は、至急トイレに向かい、然るべき行為を済ませろと少女を急かしていた。

(……しょ、しょうがないわ……余計なこと言って、またこじれちゃうのも嫌だし……)

さっきみたいな妙な雲行きで、トイレに行く貴重な機会をこれ以上奪われることだけは避けねばならない。

(だ、だいじょうぶ、あとちょっと、飲むだけだから……)

たった200mで猛烈に効き始めたコーヒーの心理的効果を、あえて無視するように、受け取ったレモンティをこくり、と口を含む。

(飲んだら、すぐにトイレ行って……それで、ちゃんとテスト、受ければ……)

むずがる脚の付け根の奥の『おんなのこ』をなだめ、サツキはゆっくり慎重に、ストローを啜る。あと少し、あと少しと自分に言い聞かせながら水分を摂取するその行為の本質は、表面張力で盛り上がったコップの縁に、水滴を注ぐようなものだとも気付かずに。

「んっ……」

びくん、と下腹部の緊張に思わず喉が震える。

こぼこぼと音を立て、下腹で硬く張り詰めた貯水池が揺れる。まるで身体全体が水分の摂取を拒否しているよう。あるいはそれも、すぐに訪れる苦痛を避けようとする少女の身体の防衛本能かもしれない。

頭がぼうっとしている。ちゃんと思えば冷静なはずなのに足元がふわふわして、じんじんと疼く下半身がそのまま頭にどくどくと血を送り込んできているようだ。

いや、実はこの音もひょっとしたら心臓の音ではなく、おなかに集まる恥ずかしい熱湯の脈打つ音かもしれない。だってサツキは1日に何回トイレに行くのだろう。1回の量なんて考えたこともないけれど、少なくともいつもなら朝起きた時とホームルームの前、それに1時間目の後の休み時間。それだけの分のオシッコが、サツキの身体から排出されているはずだ。

でも、今日はまだ1回もそれをしていないのだ。

(は、はやくしなきゃっ……)

一刻も早くトイレをせがみ、水分の体外への放出を訴える身体とは裏腹に、サツキはその正反対の行為に没頭していた。

だから、いつしかアキやユミの囁き交わす声が、くすくすと潜められた嘲笑に変わっていることにも気付かない。チエリがさりげなく、サツキの行く手を塞いで、教室から動けなくしていることにも気付けない。

そしてとうとう、サツキがレモンティの紙パックを空にするよりも早く、高らかに予鈴が鳴り響く。

(え、ええええ……っ！？)

「はあい、席についてー」

2時間目の試験の開始を告げる、試験担当の教諭の声とともに。

更なる苦痛の第2ラウンド、長い長い数学の50分が、またも幕を開けた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: テストのお話・3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/04/2009 22:25:58

BODY:

(ほーんと、ちゃんと全部飲んでるなんて、馬鹿ねえサツキってば)

立ち尽くしていたところを教師に注意され、のろのろと自分の席に戻るサツキの背中を見ながら、チエリはほくそ笑む。

あんなにごくごく飲んだら、あっというまにおなかの中はたぶたぶだろう。年頃の少女にとって、コーヒーの利尿作用は半端のないものだ。ただでさえ活発な新陳代謝をさらに加速させる猛烈な利尿成分は、場合によっては十数分で効き始め、その後はまるで体中の水分を搾り取られるみたいに、猛烈に尿意の波がやってくる。

(ホントだね。あれじゃ、テストどころじゃないよね、きっと)

(さっきもずうっとモジモジしてて、あれ相当がマンしてたよ？ 今度はマジで漏らしちゃうんじゃない？)

ユミとアキが声を抑えて囁きあう。

実のところ、チエリはレモンティまで飲ませるつもりはなかった。いくらなんでもあんなにしつこく勧めればサツキだって怪しいと思うだろうし、場の空気の読めないサツキのことだ、とっとと跳ね除けてトイレに急ぐかもしれないと予想していた。

（ま、それならそれで文句つけるのも簡単だし、いくらでもやりようはあったけどさー）

それが、あんな青い顔をしながら懸命にレモンティを飲み続けるとは、チエリにはまったく予想外だった。

200mlのコーヒー飲料に加え、更なる追加の200ml、冷たい冷たいレモンティは、ほどなくサツキの身体中を駆け抜けて、熱く悩ましい羞恥のホットレモンティとなって、サツキの『おんなのこ』に注ぎ込まれるに違いないのだ。

容易に逃げることでできない期末試験の教室という閉鎖空間のなか、その切なくももどかしい誘惑に、どこまでサツキが耐えられるか——その瞬間の訪れと、そのときの少女の姿を暗い悦びの感情で思い描きながら、チエリはくすくすと小さく笑った。

「ふう……っ、う」

何回目になるか、小さな唇からこぼれた熱き吐息が、かすかに机上の問題用紙を動かす。

（と、トイレ……っ、トイレ行きたい……っ）

先刻から、増しに増して高まる排泄欲求に、少女の腰は繰り返す左右に揺すられていた。サツキは限界を訴える『おんなのこ』を庇うように、おヘソの裏の空気を吐き出すようにして、ぐっと下腹に力を籠める。

つまり、女の子はオシッコの出口と膀胱の距離が近いからちょっとしたことでチビりそうになってしまうわけで、できるだけその距離を伸ばしてやればいい。実際にそうになっているのかどうかは別として、そんなふうに考えればいくらか我慢が持ちそうだと考える。

「う、くぅ……」

しかし、悩ましげな吐息はそんなことでは収まらない。ぎゅうっとシャーペン握る指に力が籠り、中空で震えるペン先が、問1の計算スペースのすぐ隣で揺れる。

こんなことしてる場合じゃない、早くしなきゃと心ばかりは焦るものの、椅子の上、太腿の下にぎゅっと巻き込まれたスカートの中、熱気の籠った布地の内側で、『出口』はいまもヒクヒクと震えている。

恥骨上のダムを見張る監視塔からは、異常を察知し発せられる警戒警報が弱まるどころか激しくなる一方で鳴り響いている。増し続けるダムの水かさは危険水位を突破し、なおも弱まる様子がないことから、サツキの『おんなのこ』ダム管理システムはますます水門を押し開き、即刻放水をするように再三命令を繰り返していた。

はたして、こんな状態で50分にも及ぶテストを乗り切れるのだろうか。サツキの脳裏を不安がよぎる。

（……ど、どうしよう……やっぱり先生に言って、トイレに行かせてもらおうとか……）

それは、至極常識的な判断といえた。——試験開始3分でそんなことをすることが許されるのなら、だが。

試験と試験の間に与えられた休み時間は十分なものであり、その間にトイレに行っていなかったことは、どう控えめに見ても試験を軽んじ、怠慢だと批判されかねない。

ただでさえ2年生の3学期、進路にも関わる大切な期末試験だ。まして数学はサツキの苦手分野。時間一杯まで使ってやっ

と答案を八割埋められるかどうかというところなのだ。急いでトイレに向かったとしても、5 分以上のロスは避けられない。とても途中で席を立てている余裕はないのである。

（だ、だいじょうぶ……たった 5 0 分よ。さっきだって平気だったもの、こんども我慢できるに決まってるわ……！！）

改めて考えてみれば、試験時間 5 0 分はいつもの授業と変わらない長さなのだ。普段の授業中、それくらい我慢した事はこれまでにだって何度でもある。これくらいのレベルまでトイレに行きたかったことは——まあ経験があったかどうかは微妙だが、とにかくサツキはそう自分に言い聞かせ、問題用紙に向かった。

改めてシャーペンを意識すると、知らず開いている左手が脚の間に向かってしまう。皆が答案に集中しているのをいいことに、サツキはそと制服のスカートの上から脚の付け根をおさえていた。

そと撫でるだけで、手のひらには石のように固い感触が跳ね返ってきた。

おなかの内側をじんじんと痺れさせるように、“そこ”には液体よりももっと重く熱いものがずしんと詰め込まれているようだった。サツキの『おんなのこ』は内側から圧迫され、いまにも脆くも突き破られてしまいそう。

きつく張り詰めた下腹部が切に尿意を訴え続け、椅子に座っている姿勢でも辛く、じっとしているのはさらに厳しい。

（えっと、 $x = 3$ で…… y を、代入して、だ、だから、えっと……）

そんな身体の求めを無視して、必死に問題に取り組もうとするサツキだが、少女の頭の中は半分ほどがオシッコのことで占められていて、簡単なはずの式が超難問に化けてしまう。震えるペン先ががりっと答案用紙をえぐり、小さな穴を開けてしまった。

はあ、と短く息をついてオシッコの波をやりすごそうとするサツキだが、絶え間なく恥骨を弱火であぶられるかのような排泄欲求はおさまる気配がない。

それどころか、サツキの下腹部は無慈悲にも、ここがトイレではないにも関わらずに少女の身体に排泄を命じてくるのだ。サツキの脚の付け根では『おんなのこ』の部分がそれを大歓迎で受け入れ、勝手に水門を開く準備を始めるのだ。

（っ……や、やだ、来ちゃう……っ！！）

容赦なく、怒涛の尿意が襲い来るその気配に、サツキは全身を硬直させた。身構えの余裕すらなく、少女の下腹部に溜まりに溜まった黄色い濁流が、堰を破らんばかりに『出口』へと押し寄せてくる。

もしここがトイレで、サツキがいままさに、施錠した個室の中で下着を下ろして、便座に腰かけた瞬間であれば何の問題もなかっただろう。

（や、ああ、あつ、く、ああ……）

いまだ 1 問目の計算問題の途中で、少女のシャープペンシルの先がびたり、止まった。

痛いほどの静寂の中を、ペンの走る音だけが埋めてゆく。時折挟まるのは問題用紙をめくる音。黙々と試験に取り組むクラスメイト達はまさに真剣そのもの。

ぎしっ……きし、ぎいっ……

そんな中を、かすかな異音が響く。

（うあ……くうんっ……）

誰もが試験に集中する沈黙の中で、サツキは一人、孤独に崩壊せんばかりのダムを必死に押さえ止めていた。

敵の物量は圧倒的で、抗する戦力はごくわずかの、あまりにも絶望的な戦い。それでも必死に机にしがみ付き、サツキは柔らか

な股布に包まれた『おんなのこ』の暴走を押さえ込もうとする。

右手はいまだ辛うじてシャープペンシルを掴んでいるものの、取り落とさずにいるのが精一杯。左手はスカートの股間を握りつぶすように閉じ合わせた膝の間に潜り込み、太腿はそれを動かないようぎゅうっと挟む込むようにして固定し、『おんなのこ』の外側を塞いでいた。

そのあまりにも不審な姿に、周囲の数名がちらりとサツキの様子を窺う。けれど試験中ゆえにそれ以上の追求はなく、サツキに助けの声を掛けるものはいないのだ。

(つぶ……あつ……)

少女が全身を使って尿意を必死に塞き止める中、力なくさまようシャーペンが、ミミズの張ったような筆跡で問 1 (3) までの回答欄を埋めていく。

(う、く、が、……がまん、我慢しなきゃ……あつ……！！)

まだ数学のテストが始まっていくらも経っていない。残り時間は実に 40 分以上。解放の時は遙か遠く、乗り越えねばならない苦しみはあまりに多い。少しでも別の事をして気をまぎらわせてその事実から目を背けていないと、心が折れてしまいそうだった。

回答欄から大きくはみ出した筆跡の端が大きく折れ曲がり、左右にくねくねと揺れる。残された痕跡は、うねる波濤の強烈さの証。

サツキの答案はまるで群発地震を測定する震度計の針のように、次々押し寄せてくる尿意の大波の痕跡を刻んでいた。

(……つぶ、ふあうつ……)

寄せては返す尿意のさざ波は恥骨に響き、背筋を伝って少女の背中を震わせる。

きつく力を籠められたペン先が再び停止する。他の事を考えられないほどの尿意の大波だ。この強烈な尿意は、一度始まると数分は続くことを、サツキの『おんなのこ』は経験上知っている。

この感覚がどんどん狭まり、やがて最後には本当の限界がやってくる。ちょうど陣痛と同じようなものだった。もっとも、“そこ”まで我慢した経験は、サツキにもほとんどない。

必要に迫られてのものとは言え、我慢せずに済むならそのほうがよっぽどいい。だから常日頃、少しでも尿意を感じたらちゃんとトイレに行っておくのがサツキのやり方だった。

けれど、今は違う。度重なる水分の摂取と、利尿作用のもたらす相乗効果。下腹部を膨らませているオシッコの量は比ではない。もはやサツキのダムが抱え込んでいる貯水量は、牛乳パックを超えて 500ml ペットボトルすら大きく凌駕しつつある。

そんな中、いまにもコントロールを離れそうな『おんなのこ』を抱えながら、サキはテストとオシッコ我慢、その両方を見事にやり遂げなくてはならなかった。

(っ、こ、これさえ、乗り切っちゃえば……しばらく……っ)

息を詰めながらぐっとお尻の孔にも力を籠め、そろそろ訪れる次の“波”がこの尿意の頂点だと見極めたサツキは、身体を硬直させてオシッコの波が和らぐのを待つ。

けれど、そうして見切りをつけたはいいいものの、いつもとは違ってなかなか尿意が引いてくれない。ちりちりと脚の付け根を焦がすむず痒いような、もどかしい衝動は執拗に少女を責め弄る。

(っ、あ、つく、う……)

サツキのペン先はもう 5 分も前から動かず、回答欄の隅に意味のない象形文字をなぞるばかりだった。

腰を椅子の上にねじり付けるようにしてくねらせ、息を詰めて膝を閉じあわせ、溢れそうになる熱い雫を押し留める。『おんなの

こ』の部分をつつく押さえる指先が前後するたび、少女の下着はよじれて大きく皺を寄せていた。

まるで——そこに別の生き物の意志すらも感じてしまうようだった。

(お、おねがい、おとなしく、しててよ……っ、あ、あと、ちょっとだけなんだから……っ)

下腹部をさする手にそっと力を含め、そんなふう呼びかけすらして。そして長い長い時間を掛け、緩やかに波が引いてゆく。ようやく厳しかった下腹部の痺れが、わずかに鈍り、穏やかなものとなった。

(っ……はあ……)

わずかな安定期のおとずれを感じ、すこしでも身体が楽になったことに安堵しながら、サツキはちらりと教卓上の時計に目をやった。

(あ、あと……)

文字盤に記された時刻は、テスト開始から10分を数えていた。

もう10分。けれど、たった10分。

「……っ」

とてつもなく長い時間に感じられた我慢の綱引きは、ほんの数分にも満たないわずかの間のことでしかなかったのだ。それは、テストを迎える学生としては安堵すべきことではあったが、同時にオシッコをガマンし続ける少女としては、途方もない絶望でもあった。

時計の針はゴールまでまだ5分の4以上を残している。

その事実により再び沸き立ちはじめる尿意を必死に抑え付け、サツキは唇を噛んで消しゴムを搦んだ。歪んだ答案用紙に残る判別不能の文字をねじつけるように消してゆく。そうすることで、一緒に押し寄せる尿意すらも消し去ってしまわんとするかのようだった。

(余計なこと考えちゃダメよ……しゅ、集中しないと……っ)

なおも激しい尿意の予兆に、小さく下半身が震え出す。サツキは唇を噛み、その痛みで集中を保ちながら、クラスメイトからずいぶん遅れて問2の回答に取りかかった。

(あ、あと……じゅ、10分……っ!!)

血を吐くような思いで、その事実を飲み込む。

いったい何十回、いや何百回見上げたことだろう。遅々として進まない黒板上の時計の針は、長い長い時間をかけてゴールの手前までやってきていた。

サツキの尿意はいまだその頂のただ中にある。最初の頃は10分以上間隔の開いていた尿意の大波が、いまや5分と経たずにやってくる。おまけに一回一回の潮位も高く、長く続くようになっていた。

もはやサツキの“そこ”ダムではなく、防波堤だった。しかも、大地震に伴う津波にはとうてい耐え切れない貧弱なもので、すでに何度か、押し寄せる波の一部は、わずかながら外にあふれ出してしまっている。

股間にじっとりと感じる湿り気を、けれど汗のせいだと決め付けて。サツキは椅子の上、不自然に浮かせた太腿と膝をぎゅうっと重

ね合わせる。

（もうちょっと、あとほんのちょっとよ……！！）

無限にも思えた長い長い時間の終わりが見えたことで、焦りはますます激しくなっている。本当なら今にも席を立てトイレに全力疾走したい。

しかし、試験中に数え切れないくらいの大波を乗り越えようとしたため、サツキの解答欄は惨憺たる有様だ。実質的な試験時間は半分どころか3分の1もなく、さらに頭の中はほとんどが『おしっこしたい』『トイレ行きたい』の文字で埋まっている。

震えるペン先を押さえるのに精一杯で、計算途中の式は途中で何度もくしゃりと歪み、意味のない折れ線を刻むばかり。辛うじて文字が記されたものも、半分もない。この分ならテスト開始と共に席を立ち、トイレですっきりオシッコを済ませてからテストに取り組んだ方がよほどいい結果が出せただろう。

だが、それも後の祭り。いまはまだ、少しでも早く残りの時間が過ぎ去るのを待つばかりだった。

（もう、あとほんの10分だけ……あとちょっとよ……）

あと10分。その残り時間の短さに錯覚し、またもサツキは自分の判断が誤っていることに気付けない。なまじ優等生であることや、これまでの40分をどうにか我慢してきた経験が、かえって仇となり、今わざわざトイレに行くくらいなら、あと10分待ってテストが終わってから——という思考こそが、命取りだということに思い至らないのだ。

それら全てが、今も小さく笑みを浮かべながらサツキの様子を冷静に観察しているチエリの思惑どおりだった。

また、仮にここでサツキがトイレに立とうとしたときにはそれを封殺する手も、きちんとチエリは用意していた。だが、チエリがなおも陰湿な策謀をめぐるせていることなど、サツキには知る由もない。

「っ、はあ……っ」

重く暑苦しい溜息を吐き出す。すこしでも身体の中にスペースの余裕を作り出そうとする涙ぐましいほどの努力だが、その効果は芳しくない。

残り10分。いつもならなんて事のない、ちょっとしたお喋りで消えてしまうような些細な時間。けれど、その10分が、600秒がとてつもなく遠い。

ちらちらと文字盤を覗き見るサツキのまえて、進む秒針はじれったいほどに遅い。

（はやく……っ！！）

テストの最中に願うのなら、問題が解き終わらないときに心の中で叫ぶ『あと5分』であるべきだった。しかしそれとはまったく正反對に、サツキはとにかく、ひたすら、ただただ速くこの地獄の時間が過ぎ去ってくれることだけを願い続ける。

それはもはや、この数学の試験を放棄するに近い感情だ。

ぞわり、もうすっかりお馴染みになった前触れをとまって、またもオシッコの波がやってくる。『おんなのこ』の危機を察知し、身体を意志のように硬くして、サツキはそれを受け止めた。

（……ん、ッ……ま、また……だ、大丈夫、……ガマン、できる……っ）

自己暗示をかけながら、やってくる尿意の波に無駄に逆らわず、じっと身を竦めて過ぎ去るのを待つ。何度か大波を経験しながら、サツキは次第にうまくオシッコの波を乗り越えコツを掴んでいた。

尿意の波は一定ではない。だが、いくら利尿作用があるとは言え、ほんの5分や10分過ぎた程度で、そんなにも急に膀胱の中のオシッコが増えているわけではないのだ。そもそも本当に本当の限界容量までは、まだほんのわずかだが余裕もある。

さっきもガマンできたのだから、次はそれに加えてもうほんの少しだけガマンすればいいだけだ。

(んうっ……だ、だいじょうぶ、へいきなんだから……さ、さっきと、同じ……っ)

確かに一時は厳しいが、逆に言えばその瞬間さえ乗り切ってしまうば、しばらく安定期が続くことも、サツキは身体で覚えていた。その間に問題を解き、疲弊した括約筋をすこしでも休める。ただひたすらにその繰り返した。

(……ふうっ……はあっ……、お、おさまった……)

尿意のうねりを腰全体で飲み込むかのように、サツキの膀胱はさらに高まるオシッコの水圧を押さえ込む。これでまたしばらく楽になる。ガマンによってほんの少しだけできた余裕のぶんだけ、さらに膀胱がオシッコを受け入れられるようになるのだ。

いわば、ほんの少しずつ、おなかの内側にオシッコをしているようなもの。たぷたぷと揺れる水風船がどんと膨らんで行くのを感じながら、サツキは崩壊の瞬間をすこしでも遠くへと引き伸ばしていた。

「よし、あと5分」

残り時間を告げる教師の声が響く。教室のあちこちでかすかにざわめきがあがった。どうやら、サツキと違ってまともなコンディションで試験を受けているクラスメイトたちも、答案の出来はよろしくないらしい。

(よ、よかった、結構なんとかなるかも……)

待ち焦がれていた宣誓に、オシッコ我慢とテストの成績、二つの意味で安堵しながら、サツキはこっそりと胸を撫で下ろす。

おそらく数学のテストは惨憺たる結果になってしまうだろう。普段のサツキにの成績に比べれば、大きな失態だが——それ以上にいまは、“あと5分”に迫った休憩時間が待ち遠しかった。

休憩時間でならば、もう誰に気兼ねするでもなくトイレに行けるし、それでやっと我慢から解放されるのだ。そうすれば、次のテストからは準備万端で望める。そこで取り返せばいい。

尿意からの解放にまたもざわつき始める下腹部をそっと庇いながら、サツキは慌てて首を振り、虫食い状態の答案を少しでも埋めようとペンを動かしはじめた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第 1 1 夜 赤ずきん

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 04/16/2009 22:56:31

BODY:

「じゃあママ、行ってくるわね」

お気に入りの赤いフードつきのコートを羽織り、手には大きなバスケット。とんとんと靴のかかとを叩いて、赤ずきんは元気に言いました。

「ええ、行ってらっしゃい。森の中ではオオカミには気をつけるのよ」

「平気よ、オオカミなんかぜんぜん怖くないわ。追っ払ってやるもん」

「本当に気をつけてね、もし何かあったら、すぐに狩人さんを呼ぶのよ」

「わかってるわ、ママ。行ってきます！！」

台所から顔を出したお母さんが心配そうな顔をして見送る中、赤ずきんはそう答えると、家から続く、森の小路を歩き出します。うらかな日差しはぽかぽかと暖かく、雲ひとつない青空は見上げているだけでうきうきと心が躍ります。赤ずきんは小さく歌を口ずさみながら、スキップをはじめました。

「ああ、本当にいいお天気！ 何か、とっても楽しいことがありそうね」

抜群のお天気に恵まれて、フードの下でキラキラと目を輝かせ、赤ずきんといったら、もう楽しくて楽しくて仕方がないというようです。

放っておいたらバスケットを放り出して、どこか別の場所に遊びにいってしまいそうでした。もう、すっかりお使いだということも忘れてしまっているようです。

「……あら？ あれは……」

いろいろ思案をめぐらせながら歩いていた赤ずきんですが、ふと森の道の向こうに見慣れない人影をみつけます。

きよろきよろと辺りを見回し、忙しく早足で歩くその姿は、赤ずきんの知っているものでした。赤ずきんはじいっとその背中をみつめ、くすっと口元を緩ませます。

「うふふ、そうね、それもいいわね」

そう言うと、赤ずきんはこっそりと足音をしのばせ、その子のあとをつけはじめたのでした。

深い深い森の中、小路の端で、オオカミはすっかり困り果てていました。

「……うう、いったいどうしましょう……困りましたわ……」

オオカミは尖った耳をそわそわと揺らし、可愛い唇を突き出して、ぐるぐるとその場を歩き回ります。

落ち着かない足元と、元気のないしっぽ。笑うと覗く愛くるしい八重歯も、きゅっと結ばれた口元の奥に隠れてしまい、元気に跳ねる左右に括られた薄茶の長い髪も、今日は頼りなげにふらふらと揺れるばかりでした。

オオカミは決して、村の人たちや動物たちが言うような乱暴者ではありません。ただ、ちょっと力強いだけの普通の女の子なのです。しかし、人間や森の動物たちは何故かみなそろってオオカミを怖がるので、オオカミはできるだけみんなを脅かさないように森の中で暮らしているのです。

けれど昨日、オオカミのお家に突然、鉄砲をかついだ狩人がやってきたのです。乱暴者のオオカミを追ってきたという狩人に棲家を追われ、オオカミはそのまま一晩中歩き続け、疲れ果ててここで途方にくれていたのです。

「……はあ……」

ため息と共に深く俯いて、オオカミは重くなった手足をそっとさすります。お家を飛び出してから夜じゅう歩き通しで、体じゅうがすっかりくたびていました。昨夜はすこしも眠っていません。

けれど、どこで狩人と出くわすとも限らないので、棲家に戻るわけにもいきませんし、かといって村に行こうにも、狩人を寄越した人間たちが黙っているわけありません。狩人が歩き回っているせいで森の動物たちもいつも以上にひっそりと棲家に閉じこもり、オオカミに答えてくれないのです。

このままではオオカミは今夜も寝るところがなく、またお外で夜を明かさねばならないでしょう。

「うう……っ、あ、だ、だめ……っ」

それに、オオカミにはもっともっと困った事態が訪れていました。

そわそわとあたりを見回し、さりげなく伸びた手のひらがそと、可愛いキュロットの上から脚の付け根に添えられます。内股で小刻みな足取りはおぼつかなく、オオカミの足跡は小路をふらふらと左右に揺れていました。

「はうっ……くう……っ！」

だめ、と思う間もなくじくん、と身体の奥にイケナイ感覚が響きます。思わず気が緩みそうになり、オオカミはぎゅっと唇を噛んで息を詰めました。ちりちりと脚の付け根を焦がす甘い痺れはますます強くなり、いくら身体をよじってもおさまる様子がありません。

（ど、どうしよう……ほ、本当に……あっ、う……）

差し迫った限界は、じりじりと高まり続け、ますますオオカミを焦らせます。

とうとう耐え切れなくなり、オオカミは両手をきゅうっと股間に押し当ててしまいました。みっともなく中腰になってお尻を突き出し、もじもじとその場で足踏みダンスを始めてしまいます。

（お……おトイレ……っ……）

切なく疼く下半身の欲求を感じながら、オオカミは縋るようにあたりを見回しました。

昨夜、お家を追い出されてから、オオカミは一度もトイレに行っていないませんでした。昨夜から我慢し続けているオシッコは、そろそろ

限界に近く、おなかの中では限界間近に迫った水面がたぶたと揺れています。もはや、オオカミのおなかの中のダムはいつ決壊してもおかしくない状況なのです。

「……は、早くしないと、もう本当に……っ……で、ですけれどっ……」

もじもじ、くねくね、オオカミの足が重ねあわされ、膝が擦り合わされます。

森の中をさまよい歩き続け、もうどうしようもなくなってしまったオオカミはさっきからずっと、ひとけのないちょうど良い高さの茂みを前に、そこでトイレを済ませてしまおうかどうかと思い悩んでいたのです。

もちろんオオカミだって普通の、お年頃の女の子です。おトイレ以外の場所でオシッコをするなんてとんでもないことです。だからオオカミは、朝早くからずっとおトイレを探し続けていました。けれど、森の動物はみんなオオカミを怖がっているのです、おトイレを借りるどころかまともに話も聞いてもらえません。

とうとう森じゅうの動物にそっぽを向かれ、オオカミはほんとうに行くところをなくしてしまっていたのです。

（お、おトイレ……行きたい……っ、も、もお、出ちやいそう……っ……で、でも、こんなトコロで、おトイレなんか……は、はしたない、ですわよ……っ）

おヘソの裏側で、ちりちりといけない感覚が高まってゆきます。

目の前の茂みの誘惑と、女の子としてのプライドが、オオカミの心の中で激しく戦っていました。オオカミはみんなが思っているのよりもずっと、恥かしがりやの女の子なのです。

けれど、誰もおトイレを借してくれないのであれば、いつか決断しなければなりません。いつまでも我慢を続けていられるわけもなく、意地を張ったまま、本当に限界が来たら、——それこそ最悪の事態になってしまうことでしょう。

もじもじと腰を揺すりながら、いったいどれほど経ったのでしょうか。

「……し、仕方ありませんわ、は、恥かしいですけれど、緊急事態ですもの……っ」

ぼそぼそと、誰に言うでもなく言い訳をして、顔を真っ赤にしたオオカミは茂みの中に分け入ってゆきます。

もう周りを見回す余裕もないオオカミが、そのままぎゅっと目を閉じ、キュロットの留め金に手をかけてしゃがみ込もうとした、その時でした。

「あら、オオカミさん？ こんなところでどうしたの？」

まったく唐突に、オオカミの背中から元気な声かけられます。

いままさに、誰にも見られないようこっそりとおトイレをはじめようとしていたところにいきなり名前を呼ばれたものですから、オオカミは飛び上がらんばかりに驚きました。

「……っ！？」

口から飛び出しそうになった悲鳴と、あそこから飛び出しそうになったおしっこをぎゅっと押さえ込んで、慌ててキュロットの留め金を止めなおし、オオカミは茂みから飛び出します。

そこにいたのは、にこにこ笑顔の赤ずきんでした。いつもの赤いフード付きのコートを着て、大きなバスケットを下げて、不思議そうにこくと首を傾げています。

「どうかしたの？ そんなところに隠れて。ひょっとしてかくれんぼでもしてたのかしら。……わたし、オオカミさんの邪魔をしちゃった？」

「あ、赤ずきんちゃん……。い、いえいえ、な、なんでもありませんのよ、ちょ、ちょっとご用事があっただけです」

ご用事。

まさか、その大事なご用事が、オシッコをしようとしていたなんて答えるわけにはいきません。オオカミは慌てて手を振って、なんで

もないですと答えます。けれど、赤ずきんはますます首を傾げます。

「ええ？ そうかしら。なんだかあやしいわ。まさかオオカミさん、なにか悪いことを考えていたんじゃないの？ ……たしか、狩人さんがオオカミさんを探しているのよね？」

「ち、違いますわ！！ そんなことはありませんわよ！！ あ、あれはただの誤解なんですの！！ わ、わたくしは別に、だれも食べたりなんかしませんもの！！」

これはまったくその通りでした。これまでオオカミはいちども、森の動物や人間を食べようとしたことなんてありません。けれど、誰かがいなくなったり、姿が見えなくなると、誰も彼もがオオカミのしわざなのだと噂するのです。オオカミはいつも、涙をこらえて心を痛めていたのです。

けれど、オオカミがいくら言っても信じてはもらえません。だって、オオカミはオオカミなのですから。

「そうなの？ なんだか怪しいわ。……まさか、オオカミさんたらわたしを油断させて食べようとしてるんじゃないのかしら？ 茂みに隠れていたのも、そのためなの？」

危ないものを見るように、赤ずきんが後ずさります。不穏な空気を感じ、オオカミは必死に首を左右に振りました。左右の髪がぴよぴよこと跳ねます。

「し、信じてくださいまし。わたくしは、そんなことは絶対にいたしませんわ！！ 神様に誓って、ぜったいに！！」

「そうなのかしら……」

赤ずきんはなおも疑り深く様子を窺っています。いまにも誰かに助けを求めに走り出しそうに身構える赤ずきんを前に、オオカミは気が気ではありませんでした。

森の中にはまだ狩人がいるはずで、もし赤ずきんを助けに狩人がやってきたら、鉄砲で撃たれてしまうかもしれないのです。

「……じゃあオオカミさん、いったいなんで隠れてたの？」

「そ、それは……」

聞かれたくないことを聞かれてしまい、オオカミは言葉に詰まってしまいました。まさか、女の子なのにお外でおトイレをしようとしていたなんて言えるわけありません。

オオカミは真っ赤になって俯いてしまいます。

そして――

（んうっ……！？）

その恥かしさに反応するように、オオカミのお腹のなかで、じんじんとおトイレに行きたい感覚が膨れがっていきます。あと少しで外に出るはずだったオシッコは、赤ずきんのせいで突然ストップを命じられ、引っ込みが付かなくなったまま、オオカミの下腹部で大暴れをしていました。

（あ、やだ、出ちゃう、でちゃう！！）

押し寄せるオシッコの波が、オオカミの敏感な部分に集まってゆきます。立ったまま、オシッコが始まってしまいそうな緊急事態でした。

それを押さえ込もうと、オオカミは両手でぎゅっと脚の付け根を押さえ、その場で大きく足踏みをはじめてしまいます。おなかの下の方、今にも吹き出しそうなオシッコを抱えながら四苦八苦するオオカミを見て、赤ずきんはくすくすと笑います。

「あは、どうしたのオオカミさんったら。やっぱりなにか様子がヘンよ。なにか悪巧みをしているんじゃないの？ ねえ、どうして隠れていたの？ さっきのご用事ってなんなのかしら？ ねえ、教えて、オオカミさん？」

真っ赤なオオカミの顔を下から覗きこむように、背中を屈めた赤ずきんは、くったくのない表情でオオカミを見上げます。
「ねえどうしたの、オオカミさん？ 顔が真っ赤よ？ やっぱ、茂みに隠れたりして、わたしを気付かれないように襲って食べようとしてたのかしら？ もしそうなら、狩人さんに知らせなきゃ！ オオカミさんが悪いことをしようとしたって！」
「そ、そんなことは……っ、あ、ありませんわ……。で、ですから、狩人さんはよ、呼ばないでくださいまし……」
「ふうん……」

本当のことが口に出せず、口ごもってしまうオオカミを見て、赤ずきんはますます眉をよじらせていました。
いよいよ陥った最大のピンチに、オオカミは焦ります。
(……ああ、ど、どうしましょう、もし狩人さんをよ、呼ばれたら、逃げられないかもしれませんわ……。こ、こんな状態じゃ……)
いつもなら、鉄砲が相手でもなんとかなるかもしれませんが、オシッコを我慢したままのおぼつかない足取りで、全力疾走なんでもできるわけありません。

ぐるぐると巡る頭の中で、オオカミはどうしていいか分からなくなってしまいます。赤ずきんに本当のことを話すわけにもいかなないですが、黙ったままでは本当に狩人を呼ばれてしまうかもしれません。
(あう……。だ、だめ、も、もう……。が、我慢、できませんわ……。っ……)

そして、もう意地を張っている場合ではないのです。
よく考えてみると、これはオオカミにとってチャンスでもありました。これまで怖がって逃げ出すばかりだったほかの動物たちとは違って、赤ずきんはオオカミを怪しんでこそいますが、怖がる様子がありません。
(は、恥かしいですけど……。仕方ありませんわ……。っ)

オオカミは覚悟を決め、恥を忍んで口を開きます。
「っ、あ、あの……。その、赤ずきんちゃん……。は、はしたない話で、申し訳ありませんですけど、わたくし、その……。ちょっと、お花摘みに参りたいんですの……」
お花摘み（オシッコ）。

顔から火が出そうな恥かしさをこらえて、オオカミは我慢続けたオシッコのことを口にします。そうしている間にも、ざわざわと波間がうねり、大きな尿意の津波が押し寄せてくるのです。

「そ、その、どこかに……。できる場所は、ありませんこと？ ……ご存知でしたら、教えて欲しいのですけれど……」

「へえ、お花摘み？ なあんだ、それなら早く言ってちょうだいよ。疑ったりしてごめんなさい。オオカミさん

きょとんと瞬きする赤ずきんは、少し驚いた様子で、そうなのかと腕組みをして納得したようでした。

「お花摘みかあ。オオカミさんも恥かしいんだ、そういうの？」

「え、ええ……」

オオカミはぎゅっと俯いて、小さく頷きます。
そして、赤ずきんは笑顔のまま、そんなオオカミの手をぎゅっと握ります。

「オオカミさんも女の子なんだね。いいわよ、連れて行ってあげる」

「え、あ」

思っていた以上にしっかりと手首を掴まれ、オオカミはうろたえます。

「あ、あの、わざわざ案内していただかなくてもいいですわ、場所さえ教えていただければ——」

「いいからいいから。遠慮しないで、とつときの場所があるのよっ♪ ちょうどわたしも行こうと思っていたところだったの、一緒に行きま

しょうよ、オオカミさんっ」

思いも寄らぬ赤ずきんの言葉に、オオカミは困惑してしまいます。

だって、誰かと一緒にお花摘み（オシッコ）に行くなんて、オオカミはこれまで一度もしたことがありません。まさか、並んでいっしょにおトイレをしようというのでしょうか。

「ちょ、ま、待ってくださいまし、そんな、引っ張らな……あうっ！？」

「ふんふーん♪」

けれど、赤ずきんはオオカミのことを気にする様子もなくそのままずんずんと歩き出してしまいます。

「う、うあ……くう……っ」

手を掴まれ、足元が不安定なままでは踏ん張ってこらえることもできません。おなかをぱんぱんに満たすオシッコを我慢しながら、オオカミは引きずられるようにして付いて行くのが精一杯でした。

「さ、付いたわ。ここよ。すごいでしょ？」

胸を張って赤ずきんが言います。

オオカミが連れてこられたのは、森のしばらく奥にある小さな広場でした。なぜか森の木々が枝を避け、ぽっかりと空を明けたそこには、色とりどりの花が一面に咲いています。

満面の笑顔で、赤ずきんは先を続けます。

「ね？ 綺麗でしょ、ここってわたしの秘密の場所なの。ここならいっぱいお花摘みができるわ。わたしのお祖母ちゃんは、お花が大好きなのよ。持って行ってあげたらきつととっても喜ぶわ」

「っ……」

なんということでしょう。赤ずきんが案内してくれたのは、お手洗いの場所ではなく、本当のお花摘みのための場所でした。期待していた場所とはまったく違う光景に、オオカミは途方にくらえてしまいます。

「さあ、オオカミさん、手伝ってちょうだいね。わたし、お祖母ちゃんのためにお花の冠を編んであげたいの」

「え、ええっ？！」

（そ、そんなことしてる場合じゃありませんのにっ……）

オオカミのおなかの中では、いまも出口を求めてオシッコが暴れているのです。こんなところで悠長に花冠なんか編んでいたら、それこそ絶対に間に合わなくなってしまうでしょう。それどころか、お花を摘んでいる間に限界がやってきってしまうかもしれません。

「でも、オオカミさんがお花摘みが恥かしいなんて思わなかったわ。女の子みたいだって思われるのが嫌なの？ オオカミさん、そんなに可愛いんだから、遠慮することはないと思うの」

すっかり勘違いしている様子の赤ずきんに、オオカミは慌てて声を上げます。

「ち、違うんですの、赤ずきんちゃんっ、その、そういう意味ではありませんのっ！！」

「ん？ 違うって何が？」

「そ、そういうことじゃ、なくて……そ、その、お花摘みに……、あの、お、お……っ……こ……が……」

「だからお花摘みでしょ？ オオカミさんも手伝ってくれるのよね。優しいなあ。優しいオオカミさんは大好きよ」

にこにこ、悪意などカケラもないような素敵な笑顔で赤ずきんちゃんが言います。オオカミは難しい言葉遣いをあきらめてなんとか誤解を解こうとするのですが、『オシッコのことなんですの』という言葉は、恥かしさで喉の奥に引っかかるばかりでした。

いくら促しても手伝ってくれる様子のないオオカミを見て、赤ずきんはまた表情を曇らせます。

「……それとも、やっぱりオオカミさんは悪いオオカミさんなのかしら？ わたしを誰もいないところまで連れて行って、食べちゃおうとしているの？ そうだとしたら大変、やっぱり狩人さんと呼ばないと——」

「で、ですからそれは誤解ですわ！！ お、およしになってくださいましっ！！」

狩人のことを言われると、オオカミはもう強くは出られません。

なによりも、赤ずきんの白くて小さな手のひらオオカミの腕をぎゅっと掴んだまま、離しませんでした。もし無理にふりほどこうものなら、赤ずきんはたちまち大声で狩人を呼ぶことでしょう。近くに狩人がいようものなら、駆けつけてくるなりあの鉄砲ですぐとやられてしまいます。

赤ずきんの有無を言わせない迫力に、オオカミは口から飛び出しかけた『おトイレに行きたいんですの』という言葉を読み込むしかありませんでした。

「さあ、はじめましょうオオカミさん！」

赤ずきんはさあ！ とばかりにお花畑に腰を下ろすと、鼻歌を再開しながら、近くの花をせっせと集め始めます。オオカミも仕方なしにそれに付き合うしかありませんでした。

まさか、赤ずきんちゃんの見ている前でオシッコが始められるわけありませんし、そもそもお花畑のような見晴らしのいい場所の真ん中でなんて、とてもではありませんがおトイレはできません。

（こ、こうなったら、すこしでも早く終わらせて、それからお手洗いに……っ。そ、そうですわ、お手伝いのついでに、赤ずきんちゃんのおうちで、お手洗いを借りてもいいですし……）

とんでもない回り道ですが、仕方ありません。

赤ずきんの誤解を解くには、おとなしく花集めを手伝って、赤ずきんを襲うつもりがないことを示すくらいしかないのです。そう決めると、オオカミもそろそろと腰をかがめ、赤ずきんに続いて花を集め始めました。

「んっ、く、ふっ……」

さて。女の子がお外でおトイレに行くことを“お花摘み”というのは、草むらの中でしゃがんでいる様子を誤魔化すためだという話があります。その言葉どおり、一面に咲いた花園から、たくさんの花を集めるには、どうしてもしゃがみ込んでいなければなりません。

けれど、オシッコを我慢しながらしゃがみ込むのは限界寸前のオオカミにとって地獄のような苦しみでした。なにしろ、しゃがむというこの格好はオシッコをするための格好で、おトイレを我慢するには一番不向きなのです。

「んう、ふあ、あうっ……」

いまにも我慢の水風船がぱちんと破裂してしまいそうで、オオカミは立てたかかとにぐりぐりとあそこをおしつけて、腰をよじらせます。

服を着たままとは言え、おトイレのためのしゃがんだ姿勢では、なにか、他に支えがなければオシッコがじゅわじゅわと漏れ出してしまいそうなのでした。

「ふう、はあ……あうっ……」

ですから、オオカミのお花摘みはまるでかどりません。手も指も震えて、上半身も緊張したままずっと伸びたままです。

お花摘みどころかはしたなく身をよじるばかりのオオカミを見て、赤ずきんが不満げに顔を上げました。

「ねえ、どうしたのオオカミさん？ さっきから全然手が動いてないわ。手伝ってくれるんじゃないのかなしら？」

「え、ええ、でも、そのっ」

これはいけないと思い、もじもじと腰を揺すりながら、オオカミは答えます。赤ずきんにこれ以上怪しまれるわけにはいきません。

けれど、オシッコを我慢するのに身体じゅうを使わなければならず、もうそれだけで精一杯のオオカミは、そのまま動くこともできず、震える手の中から、ほんの少しかき摘んだお花もぼろぼろとこぼしてしまいます。

それを見ている赤ずきんの表情は、どんどん険しくなっていました。

「ねえオオカミさん、オオカミさんはわたしのお祖母ちゃんなんかどうでもいいのかしら？ ……やっぱりそうね、オオカミさんはわたしをだまして食べちゃう気なのね？ そうだわ、最初はお芝居していたのだけど、もう我慢できなくなったのよ」

「そ、そんな……ご、誤解ですわ……」

確かに我慢できなくなったのは本当のことですが、我慢できないのはまったく別のものなのです。身体を震わせ、ぎゅうっと唇を閉じたままでは、思うようにオオカミの口は回りません。

もともとオオカミは恥かしがり屋なので、口下手なのです。ひとりで早合点する赤ずきんを、説得するのは無理なのでした。

「……信じてたのに、オオカミさんはやっぱり悪いオオカミなんだわ。すぐに狩人さんに言いつけて鉄砲で追っ払ってもらわなきゃ！！」

「ち、違いますのっ。そんな、そんなことを仰らないでくださいましっ。わ、わたくしは——」

うまく言い訳をしようにも、ガムの決壊を塞ぎ止めるための我慢の真っ最中で頭の真っ白なオオカミの口は、はぁはぁと熱い息をこぼし、食いしばる歯の間からよだれがこぼれてしまえばかりです。それはますます、赤ずきんを、食べようとしているのだと誤解させてしまうようでした。

そうこうしているうちに、とうとう赤ずきんはオオカミのそばをだっと離れ、大きな声で叫びます。

「狩人さーんっ！！ オオカミさんが、悪いオオカミさんがここにいますよーっ！！」

「や、やめてくださいましっ！？ 赤ずきんちゃんっ！！」

「狩人さあーんっ！！！！」

それはまるで森中に響くような大声でした。あたりの鳥が驚いて、ばさばさっと木を揺らして一斉に飛び立ちます。

「狩人さーんっ、助けてえーんっ！！」

「っ……！！」

こうなってはもうどうしようもありません。オオカミはがばっと身をひるがえすと、風のようにお花畑を駆け抜けて、森の奥に飛び込みます。狩人が駆けつける前に、少しでも遠くへ逃げなければなりません。

ふらふらと頼りない足元に、必死に力を入れながら、オオカミは後ろも振り返らずに走り出します。

このとき、オオカミがちなりとでも赤ずきんのほうを振り返っていれば、この後起きたことは変わっていたかもしれません。けれど、オオカミにはもうそんな余裕はまったくありませんでした。

なおも大きな大きな声で狩人を呼び続ける赤ずきんから、一目散にオオカミは逃げ出していきました。

逃げて、逃げて、がむしゃらに走って。いったいどこをどう逃げ回ったことでしょう。

オオカミは、いつしか森のなかの小さな小路に戻っていました

さっきまで歩いていた場所とはまた違う道のように、オオカミの知らない道でした。

「はあ、はあ、はあ……」

オオカミは荒い息をつきながら、きよろきよと周りを見回します。

いまにもそのあたりの森から、鉄砲を担いだ狩人が、忠実な猟犬を連れて出てくるのではないかと、ただでさえ全力疾走で早鐘のような心臓がいまにも口からとびだしてしまいそうです。

けれど、いくらオオカミもいつまでも走り続けていられるわけありません。とうとう、歩くこともできなくなり、ふらふらと近くの木に寄りかかってしまいます。

（理不尽ですわ……な、なんでわたくしばかり、こんな目に遭わなくてはならないの……？）

やるせなさには涙をこらえ、目元をぬぐうオオカミ。

それでも、しばらく耳を済ませて様子を窺ってみても、狩人が追ってくる様子はありませんでした。とりあえずすぐに追いかけることはないと分かった途端、どっと疲れがやってきます。

（はあ……もう、散々ですわ……）

がっくりとうなだれ、オオカミは俯きました。

もう、あさからまるっきり不連続きです。

（でも……まあ、逃げられましたから、とりあえずは……）

目の前の脅威からはなんとか逃れたのは、それでも数少ない幸運でしょう。はあ、とオオカミが深呼吸と共に、安堵の息を吐いたその時です。

ぎゅうっとお腹の下にイケナイ感覚が蘇りました。

我知らず、オオカミの腰がぶるると震えます。それはたちまち痺れのように背中へと走り、尻尾の先から耳の先端までを貫きました。

「はううっ……っ！？」

猛烈な感覚が、思わず口を突いて飛び出します。

狩人の恐ろしさでいつきは忘れていたオシッコが、また大きな波になって出口に押し寄せてきているのです。いえ、今度の波はそんな生易しいものではありません。まるで陸地を丸ごと飲み込むような津波のようでした。オオカミはたまらず両手でぎゅっと脚の付け根を押さえ込みます。

「うあ……っ……」

（あ、ああ、だめ、お、お手洗いに、は、はやくっ……）

猛烈な尿意が、オオカミの一番脆く敏感な場所に集中してゆきます。股間の先端にあるそこはぎゅっと閉ざされてはいますが、本当は小さな孔が開いていて、水を塞き止めておくにはあまりに不向きな場所なのです。

キュロットの奥でじゅ、じゅわ、といけな水音が響き、じわじわと熱い雫が足の付け根に広がってゆく感覚に、オオカミはぞっと背中を震わせました。

「うあ、はああ……っ、だ、だめえ……」

オモラシの予兆となるおチビリに、オオカミはぱくぱくと唇を動かします。

まるでオオカミの気持ちなんか無視して、身体のほうが勝手にオシッコを絞り出そうとしているようでした。ほとぼりそうになる水流を懸命に押さえ込みながら、オオカミはからだをくねらせます。

お花畑からでたらめに逃げ出したため、オオカミはいま自分が森の中のどこにいるのかもわからなくなっていました。赤ずきんのお家の場所も分からず、もう駆け込めるおトイレはどこにもありません。

森の真ん中で、おトイレにいきたくてたまらなくなってしまうまま、オオカミは一步も動けなくなっていました。

(で、でちゃう……っ)

このオシッコの波は、もうおトイレまでなんとか我慢しようとか、そんな風に考えられるものではありませんでした。

ほんの少しでも気を抜けばこのままオシッコが始まってしまいそうです。オオカミは少しでも尿意を和らげようと、重ねた手のひらの下でぎゅうっと両脚を交差させ、膝を重ねてぐりぐりと身をよじます。

そうやってする我慢は、おトイレまで歩いて行くためのものではなく、おトイレに駆け込んで、ドアに鍵をかけてキュロットと下着を下ろしてオシッコをはじめまでの間にするような、わずかな時間かせぎのための我慢です。

もはや、オオカミが恥かしさをかなぐりすてて、近くの茂みに飛び込もうとしたそのときでした。

ふと見上げた先に、ちいさな煙突が見えます。

それは、赤い壁に白いドアの、小さなお家でした。

「お、お家ですわ……っ！！」

天の助け。不連続きの自分を見放していなかった意外な幸運に、思わずオオカミは声を上げてしまいます。まさかこんなところに誰か住んでいるなんて思いもしなかったものですから、まるでオオカミにはそのお家が光り輝いているように見えました。

(あ、あそこなら、お手洗いを借りれますわっ……！！)

オオカミは大喜びで、よちよち歩きのままそのお家に小走りで駆け寄ります。我慢の延長戦に突入し、もうほとんど余裕のないオオカミは、膝を擦り合わせ、足踏みを繰り返し、がくがくと腰を波打たせて、ドアをノックします。

「も、もしも、どなたかいらっしゃいませんか！！」

掠れた声とノックに返る返事はありません。けれど諦めるわけにもいかず、オオカミはもう一度、ドアを叩きます。

「あ、あの、どなたかいらっしゃいませんか？」

相変わらず返事はありませんでした。

けれど、さっきよりも力強いノックに、揺れたドアがぎい、と軋み、そのまま内側に動きてゆきます。なんと、お家のドアには鍵がかかっていないようでした。

無用心だなどと思う暇もなく、オオカミはたまたま、ドアを押し開けて玄関に踏み入れてしまいます。明かりのついていない部屋の中は、薄暗く、人の気配もありません。

オオカミは無人の部屋の中に、また声を上げて呼びかけます。

「も、申し訳ありませんっ、あの、誰もいらっしゃいませんか？ ……あ、あの、その、お、お手洗いをお借りしてもよろしいでしょうか……？」

しんと静まりかえったお家の中からは、やはり返事はありません。

「ご、ごめんなさい……か、勝手にお借りします……！！ ……も、もう、わたくし、我慢できないんですのおっ……！！」

もはや、オオカミになりふりかまっている余裕はないのです。たとえ後で怒られたとしても、オモラシをしてしまうよりはマシでした。

玄関から駆け込んだオオカミは、部屋の中をぐるりと見回し、玄関の少し奥に待望のトイレのマークを発見します。

そこに、まっすぐ突撃しようと、両手をぎゅっと前に重ねたままオオカミが走り出そうとしたときでした。

「おばあちゃんこんにちわ、お見舞いに来たわ！ ……あら？」

背中から響いた聞き覚えのある声に、オオカミは凍りつきました。

恐る恐る振り返ったオオカミの視線の先、押し開けられたドアの向こうから、ちょこんと赤いフードの女の子が顔を覗かせていました。

開いたドアをこんこんとノックし、なんとさっき別れたばかりの赤ずきんが目丸くしてオオカミを見ていたのです！

（な……なんで、どうして、こんなところに赤ずきんちゃんがいらっしゃるんですの……っ！？）

まさか、ここが赤ずきんのおばあちゃんの家なのだと、オオカミにはすぐには思い当たりませんでした。

パニックになって頭が真っ白になってしまったオオカミの前に、赤ずきんはくすりと笑って、後ろ手にドアを閉めます。

（や、嫌……）

今度こそ、狩人を呼ばれてしまう。オオカミはぶるぶると震え、そのまま床にへたりこんでしまいます。

けれど、赤ずきんはいつまで経っても助けを呼ぶ声を上げる様子はありませんでした。それどころか、くすくすと、イジワルな笑顔すら浮かべて、オオカミのそばにちょこんと腰を屈めます。

「……あ、あの、赤ずきんちゃん……？」

何がおきているのか分からず、オオカミは呆然とたずねます。

赤ずきんはそんなオオカミにすっと手を差し伸べて、こういいました。

「あらお祖母ちゃん、どうしたの？ 起きてていいの？ 具合が悪いんだから寝ていなくちゃダメよ？」

「え……？」

一体何のことかわからず、目を白黒させるオオカミ。

「病気だって聞いたから、心配して見に来たの。ほら、お花もたくさん摘んできたのよ。ママからのお土産もあるわ！」

「あ、あの……え、ええと……」

困惑するオオカミは、わけも分からずに目をぱちくりとさせます。いくらなんでも、赤ずきんにオオカミと赤ずきんのおばあちゃんが見分けも付かないはずがありません。なにしろ、ついさっきまでオオカミは赤ずきんと一緒にいたのです。

けれど、赤ずきんはそんなオオカミにはいっこうに構わず、オオカミに話しかけるのを止めませんでした。

「え、その、あのっ」

「ほら、ベッドまで連れて行ってあげるわ、お祖母ちゃん」

くすくす、と笑いながら、赤ずきんはぎゅっとキュロットの足の付け根の上で重なったままのオオカミの手のひらを無理矢理引き剥がし、ひっぱりました。

「うぁあっ……！！？」

ちょうど、両手のひらと足のクロス、両方の力をあわせてようやくオシッコを塞ぎ止めていたところを、いきなり手のひらの力がなくなったものですから、オオカミはたちまち我慢ができなくなってしまいました。

「ダメ、で、出ちゃうっ！！！」

オオカミは声を上げて、がくがくと震える脚をぎゅっと股間におしつけ、オモラシが始まってしまうように下腹部を床にねじりつけ

ます。しかしそんな努力も空しく、オオカミの股間の先端からはじゅわ、じゅわ、と熱い雫がほとばしり始めてしまいました。

「あ、赤ずきんちゃん、止めてくださいましっ、あ、あの、も、もう我慢できませんのっ！！ わ、わたくし、お、オシッコ……おトイレに、行きたいんですのっ……」

とうとうオオカミははっきりオシッコを我慢していることを叫んでしまいます。

もはや我慢が持たないと知って、オオカミは必死でした。ここは人のお家の中です。絨毯や床を汚してしまうわけにはいきません。

けれど、赤ずきんときたらオオカミの声が聞こえているはずなのに、ただくすくす笑うばかりなのです。

「おばあちゃん、苦しそう……よっぽど具合が悪いのね……さあ、早く横にならずにやめよう」

立ち上がれないオオカミを引きずるようにして、赤ずきんはお家の奥へと連れて行こうとします。そちらはおトイレとまったく反対の方向でした。もうオモラシが始まりかけているのに、オシッコのできる場所から遠ざけられる恐怖に、オオカミはとうとう泣き出してしまいます。

「いやああ！！ あ、赤ずきんちゃん、お願い、お願いですの！！ わ、わたくしですの！！ オオカミですの！！ お、お願い、意地悪なさらないでっ……お、おトイレに行かせてくださいましっ！！ もう本当に我慢ができなくなってしまいますの！！ お、オモラシ……してしまいますからあ……っ」

けれど、聞いているのかいないのか、赤ずきんはオオカミに訪ねます。

「ねえ、おばあちゃん、どうしてそんなに顔が青いの？」

それは当たり前です。もういつオシッコが始まってもおかしくないのですから、我慢に我慢を重ねたオオカミの顔は、すっかり血の気が引いて青ざめていました。

「あ、赤ずきんちゃんっ……お、お願いですの、い、意地悪はやめてくださいましっ、……はやく、お、おトイレにい……っ」

ぐうっと上半身を前に倒し、身体を二つに折ってオオカミは苦しげに叫びます。キュロットに大きな染みができ始めていました。片方だけの手のひらでは受け止めきれないオシッコが、オオカミの指の間からこぼれて、寄せ合わされた膝の間を流れ落ちてゆきます。

けれど赤ずきんは容赦しません。

「おばあちゃん、どうしてそんなにもじもじしているの？」

「あく、あ、だめ、でちゃう、でちゃう……！！」

「ねえおばあちゃん、答えてちょうだい？ どうしてそんなに恥かしい格好で、もじもじしているの？」

「っ、あ、あの、オシッコが、オシッコがでちゃいそうなんですのっ！！ も、もう我慢、で、できませんのおっ……！！」

自由になる片手と両足を使って塞いだオシッコの出口から、じゅわ、じゅわあ、とオシッコが噴出します。いまやオオカミのキュロットの股の部分は大きく色を変え、おしりの方にも大きな染みを作っていました。

「それにおばあちゃん、どうしてそんなところを押さえているの？ 女の子なのに、とっても恥ずかしいわよ？」

「あ、あっ、あ、あっ、あ、っ、あ」

恥かしいなんていわれても、オオカミには離すわけにはいきません。そうしたら最後、ダムは決壊して、行き場をなくしたオシッコが全部出てしまうのです。

けれど、赤ずきんは容赦しません。楽しくて仕方がないというように微笑むと、小さく声を上げるばかりのオオカミの耳元にそっと唇を寄せます。

「うふふ、オオカミさんがおばあちゃんじゃないなんて、そんなこと分かってるわ。だっておばあちゃんは病気なんかじゃないもの。最初が

らお留守だって知ってるわ、わたし。

でも、悪いオオカミさんが勝手におばあちゃんのお家にあがりこんで、こおばあちゃんのふりをしているんですもの。きっと、わたしを油断させて食べちゃうつもりだったのよね。……だから、お仕置きをしてあげるの。くすくす」

「え……っ」

「うふふ。ちゃあんと見てたのよ？ 朝からオオカミさんが森の中でずうっとオシッコ、我慢しているの。お花畑でオモラシしちゃうかと思ったけど、オオカミさんたらとってもしぶといんだもの。逃げられちゃったと思って残念だったけど、まさかまた会えるなんて、とっても嬉しいわ」

「な、なっ……」

赤ずきんの衝撃の告白に、オオカミが一瞬、油断したその時です。

「ねえ、そんなに汚して、みっともないわよ、オモラシオオカミさん？」

そして、赤ずきんはとても女の子とは思えない強い力で、まるで石を詰め込まれたように硬い、オオカミのおなかをぐいっと押し込みました。

「〜〜〜……ッ！？ あ、いや、ダメえ！！！」

それが最後でした。深く上半身を倒し、前傾になったオオカミがぐくと腰を跳ねさせると、まるでその脚の間で、水気たっぷりの果物を押し潰したように、激しい水流が弾けます。

「あ、ああ、あっ」

ほとんど一瞬で、ダム崩壊は始まりました。見ている間にも、たちまちオオカミの下半身がずぶぬれになっていきます。

ぱくぱくと口を動かすオオカミの足元で水流が激しく飛び散り、絨毯と床に大きな水溜りを広げてゆきます。オオカミの視線は今もなお、引きずられ遠ざけられるトイレのドアを凝視していました。

揃えた脚の間にホースを抱え込んだように、凄まじい勢いのオシッコが迸り、オオカミの下半身を水浸しにして撒き散らされてゆきます。ぶじゅう、じゅじゅじゅじゅうとあたり一面を濡らしてゆくオシッコが、たちまちあたりに濃い匂いを立ち込めさせてゆきました。

「本当にみっともないわ、オオカミさんたら。おばあちゃんがお留守なのをいいことに、あがりこんでオモラシなんて。わたしより大きいのに、オシッコも我慢できなかったの？ 止まらないのかしら？ ねえ？ あはは、やっぱりオオカミさんなんて怖くないわ。だって、そんなにみっともないオモラシっ子なんだもの。くすくす……」

赤ずきんは、泣きじゃくるオオカミを見下ろしながら、もういちどくすくすと笑うのでした。

……めでたし、めでたし。

このあと、騒ぎを聞きつけてやってきた狩人は、村でも評判のいじめっ子の赤ずきんと、オモラシのショックで泣きじゃくるかわいそうなオオカミを見つけ、全てを理解しました。

その後、赤ずきんがお母さんと狩人に夜までたっぷり叱られ、お仕置きされてしまったのは、言うまでもありません。

……もう一度、めでたし、めでたし。

(初出：おもらし特区 S S 図書館 2009/03/15)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: テストのお話・4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 05/07/2009 18:10:29

BODY:

無常にも時計の針は、それまでと変わらない速度で進み、淡々と時刻を刻む。

2時間目の試験終了を告げるチャイムが鳴り響き、監督の教師が重々しく宣言すると、クラスの何人かから大きな溜息や悲鳴が上がった。

予想よりも問題は難しく、最後まできちんと問題を解けた生徒は少ないらしい。回答用紙が前に集められる中、そのことにある種の僥倖を感じつつも、サツキは号令が終わるや否や、そそくさと席を立とうと椅子を引いた。

が――

「あ、ねえ、サツキ、お願いっ！！ ちょっとこれ教えて！！ 一生のお願いっ！！」

「あ、あたしも、あたしもっ！！ 英訳で解らないところあってさ、ここのとこのね……」

「ご、ごめん、あたしちょっとそれどころじゃ――」

本日最後の試験であり、次の試験科目となる英語はサツキの得意分野である。それ故に、普段からこうして頼られることもよくあった。

けれど今は下腹部のダムの緊急放水という、何よりも逼迫した緊急事態がある。単語帳をめくってひとつでも英単語を頭に入れることなどよりも、トイレのほうがずっと優先順位が高い。

あまり開いたこともなさそうな新しい教科書を手に集まってくる友人たちを適当に振りきって、サツキは立ち上がろうとする。

「すぐ戻るから、待って欲しいんだけど――ッ！？」

が、その手をしっかりと掴まれて、サツキはその場でぐんっつつんのめりそうになった。突然の衝撃に、下腹部の『おんなのこ』のダムがじんじんと震える。

「なにそれ。ちょっと待ちなよ？ あたしたちの事なんかどうでもいいってこと？ そういう言い方ってないんじゃない？」

とたんに不機嫌な様子をあらわにして、チエリがサツキの手を掴んでいた。場の気配は瞬く間に変わり、漂い始めた陰悪そうな雰囲気、サツキの脳裏に緊急警報が鳴り響く。

「わたしだって一生懸命なのにさ、そうやって友達のこと放ってくわけ？……サツキ、自分だけテストの結果良ければいいんだ？ ふーん？ 優等生はいいよね、余裕たっぷりでさ」

「ち、違……そんなんじゃなくて……」

「そんなんってなによ、やっぱりどうでもいいんだ？ サツキってば」

詰め寄るチエリの気配に押され、サツキは思わず腰を下ろしてしまった。机の上に押し掛かり、顔を近づけてくるチエリ。いつの間にか、周囲にも数名のクラスメイトが集まってきている。

このままでは本当に勢いに押し切られてしまいかねない。サツキは覚悟を決めて、素直に告白する。

「だ、だから違うの！ ちょ、ちょっとトイレに……」

「トイレ？！」

チエリがやけに大きな声で怒鳴る。教室の半分くらいに響いた音量に、周囲の視線が集まり出した。熱くなる頬を感じ、サツキは

続く言葉を飲み込んでしまう。

「トイレって、それくらい我慢しなよ。ちょっと聞いただけでしょ？　すぐ終わるんだから。……サツキ勉強できるんだからさ。みんな困ってるじゃん。見捨てるの？」

意を決して訴えようとした尿意まであっさりと斬り捨てられ、サツキは言葉を失った。言い換えそうにも周りの注目を集めてしまったせいで、堂々とトイレだとは言えない辛い気配まである。

「今の言い方って、ないと思うんだけど。ねえ？」

チエリに頷く少女達。クラスメイトたちの機嫌はかなり悪く、苛立ちもちらほらと覗いている。どうもさっきの数学のテストが、かなり酷いことになっているらしいとサツキは感じる。

「え、で、でもっ」

「——それとも何？　もう漏れちゃうの？」

動揺したサツキに、チエリは間髪入れずに聞いてきた。

「っ、そ、その……っ、ご、5分くらいだから……す、すぐに戻るってば。ずっと、オシッコ……我慢して……っ」

（——や、ば、馬鹿！！　何言ってるの私……！！）

ふとトイレの気配をうかがわせる質問に、ぴく、と反応した『おんなのこ』に衝き動かされ、サツキは思わず秘めておくべき尿意の度合いまで口走ってしまった。

それを聞いたチエリが、小さくすり、と唇の端を歪める。

しかし、咄嗟の油断に完全に我を失い、歯噛みしていたサツキは気もそぞろで、クラスメイトたちの不穏な気配すら見逃してしまっていた。仮にそうでなかったとしても、我慢に夢中で気もそぞろ、余裕のないサツキはそれに気付くことはできなかつただろう。

「じゃあ、これだけ教えて？　ね？　ここだけ！」

チエリがサツキの目の前に問題集を広げ、ページを示す。そこはかなり長い和訳の文章題がページいっぱい並んでいた。

ちょっとだけ、という割には多すぎる問題に対し、口ごもるサツキ。そんな彼女を、チエリはさらに急かす。

「……ねえ、ほら早くしてよ？　時間なくなっちゃうよ」

「ど、どのへん？」

「えっとね……」

チエリに押し切られ、とうとう応じてしまうサツキ。

そんな彼女を見て、周りのクラスメイトたちがサツキに見えないところでチエリと同じ種類の笑みを浮かべていたことに、やはりサツキは気付けずにいた。

「えー？　どうしてそうなるわけ？　だって前のトコと違うじゃん」

「だ、だから、こっちは人称代名詞じゃなくて……別の……」

「そのなんとかって良く解んないんだってば。もっと解りやすく教えてよ。サツキ頭いいんだからさ」

「っ、そ、そんな……」

チエリはサツキが何度繰り返して説明しても、良く解らないと口を尖らせ、執拗に同じ場所を質問してきた。しかも、分からないならと後回しにして次の文を説明しようとしても、『はぐらかさないでよ』と食い下がるのでテンポ良く進めてゆく事もできない。

そんなことが続き、流石に3回目のあたりで、サツキもチエリがわざとやっているんじゃないかと疑念を抱き始めていた。

（ああもう、休み時間半分過ぎちゃったじゃないっ……）

2時間目と3時間目の間にはやや長めの休憩時間が取ってあるとは言え、予鈴も考えるとほとんど時間がない。このままトイレにダッシュして、順番待ちが誰もいなかったとしても、試験開始前にギリギリ戻ってくるので精一杯だろう。

得意分野の英語とは言え、せめて開始前にざっと復習しておかなければいけないというのに、もはやそれは絶望的だ。数学の失態を取り戻すためにも、せめて英語はぜったいに取りこぼすわけにいかないというのに……

「も、もういいでしょ！？ トイレ行かないと、ホントに時間なくなっちゃう……！！」

とうとう痺れを切らし、サツキは声を荒げてしまう。

これまでの解説の間も、サツキは何度かトイレに行かせて欲しいと訴えていたが、チエリは文句を繰り返し、執拗にサツキを解放してくれなかったのだ。

「しょうがないけど、このまままた次も我慢なんてしてたら、テストどころじゃなくなっちゃうから——！！」

「……あのさ、もういいってどういうこと？」

冷え切った、低い声にサツキの言葉はぶつりと断ち切られた。

今度こそはっきりと、怒りを露わにして、チエリはサツキの胸を強く掴み、ぐいと押す。

「わたしなんかいくら教えても無駄ってこと？ 馬鹿だから言ってもわかんないから、もうどうでもいいってこと？ なにそれ。信じられない」

「え……っ」

ぐうっと顔を近づけ、詰め寄りながらきつく襟元を握るチエリの手には、サツキの背中がぞくぞくと寒気を覚える。くちびるがパクパクと動くが、言葉にならず意味もなく震えるばかりだ。

「教えてちょうだいってお願いしてんのにさ、サツキってそういう態度とるわけ？ わたしさ、ちゃんとお願ひしたよね？ なのになに勝手に諦めてんの？ あんた何様？ ……普通さ、もういいって言っているの、わたしのほうじゃない？ ねえ、違う？」

「そ、そんな意味じゃ——」

「なに、言い訳すんの？ やっぱ優等生は違うね。馬鹿なクラスメイトなんか簡単に言いくるめられるってこと？」

突如豹変した友人から向けられる悪意に、サツキは言葉を失っていた。鋭い視線に射抜かれたように、指が強張り身体が硬直する。

押された胸が苦しく、咳き込むサツキ。

振りほどこうにも、きつく食い込んだチエリの手はまるで離れず、すっかり混乱に頭を真っ白にしてしまったサツキは、小さく唇を動かすばかり。

「いまの、ちょっと酷いよね……」

「そうだよ、ほんの少しだけじゃない」

「村瀬さん、あんまりよくないよ、そういうの」

「そ、そんな——」

口々に非難がぶつけられ、サツキの頭は真っ白になってしまう。なにがなんだかわからなかった。ごくごく当たり前の行為であるはずの、トイレに行きたいと口にすることが、なぜか卑劣なことだと非難される。

（な、なんで……！？ そんな、わ、私、べつになんにも悪いことなんか……と、トイレ行きたいって、言ってるだけなのに……！！）

こんなのはおかしいと理性は訴えるが、ぐるぐると渦を巻く思考ではうまく考えがまとまらない。下腹部の欲求に従う身体を理不尽に責められて、サツキは鼻の奥に熱いものを感じた。

じわ、と歪む視界に、嫌な汗が浮かぶ手のひら。

「ひ……う……」

逃げ道のない袋小路に追い詰められ、動けなくなったサツキは、小さく顎を震わせて、涙の気配を押し殺す。

と――

「なんてね？」

くす、と唇の端を持ち上げて、チエリは唐突に素敵な笑顔を浮かべ、サツキの傍から離れる。

解放されたサツキが、わけもわからないまま軽く咳き込んだその瞬間、教室に休み時間の終了と、次のテストの準備の予鈴を告げるチャイムが鳴り響く。

「あーあ、もう始まっちゃった。ふふ、ゴメンねサツキ。トイレ、行けなかったね♪」

「え……」

「ちゃんと我慢しなよ？ オモランなんかしないでよねー？」

事態の推移にまったく付いていけないサツキを後に残し、悪意を滲ませた笑みのまま、チエリはそのまま自分の席へと戻ってゆく。同じようにそれに従うクラスメイトたち。

そしてようやく、サツキは自分が何をされたのかに気付いた時。がらりとドアが開き、次の試験の監督の教師が教室に入ってくる。

気難しいことで有名な古典担当の教諭は、鋭い声で生徒達に席につくように怒鳴った。

「あ、……そんな……」

ごぼり、と下腹部に溜め込まれた液体が音を立てたような気がした。

猛烈な勢いで収縮をはじめ、オシッコを訴える下半身が、サツキの背筋を粟立たせる。

（お、オシッコ……した、かった…のに……）

――それなのに、トイレに、行けなかった。

緊張状態に一時忘れていた尿意が、先ほどに倍する勢いで膨れ上がる。股間の先端を火で炙られたような、痺れとわずかな痛みを伴う排泄欲求が、サツキの『おんなのこ』を内側から激しく膨らませた。

（と、トイレ――行かなきゃ！！ 間に合わなくなっちゃう……！！）

諦め切れず、焦ったように腰を浮かせかけるサツキだが、既にクラスの大半は着席し、教室は静寂の中おとなしく試験問題の配布を待っていた。

そんな中で少女が椅子を引いた音は、クラス中の視線を一斉に集めてしまう。

「え……あ……っ」

「ほらそこ、早く席につけ！！」

すでに試験に備えているクラスメイトの中で、そんなことをしようとしたサツキに、監督教師の鋭い注意の聲が飛ぶ。

既に下半身だけはさきにトイレを目指して進もうとしていた。意識だけが放り出されて、ドアを押し開け廊下をつつきり、トイレまでを疾走しようとする。

しかし、サツキの身体は依然として教室の机の上にあった。

「よし、答案用紙は回ったな。問題用紙は時間まで伏せておくように」

「っ……」

思わず喉まで出かけた、「先生、トイレ」という言葉。

もはや、サツキがそれを叫べる状況ではなかった。すでに試験準備は完了し、誰も口を挟める気配はない。

なにがなんだか分からないうちに、試験前の貴重な貴重な数分は、瞬間に失われてゆく。古めかしいレコーダーを教卓に出した教師は、声をかけることすら憚られるほどの難しい表情で、傍の椅子に腰掛けて書類の束をめくりはじめる。

（トイレ、行かなきゃ……いかなきゃ……っ！！ ま、また我慢なんか……嫌……っ、もう、ぜったいに無理っ……）

またも始まろうとしている、絶対不可侵の試験時間 5 0 分。どうにか乗り越えてきた 1 時間目、2 時間目を凌ぐ尿意が、サツキの足の付け根に膨れ上がる。

喉を滑り出そうになる呻きを辛うじて飲み込み、サツキは椅子の上にぎゅっと身をちぢこまらせた。

そして――

「よし、始め。…… 1 0 分後にリスニングの放送があるからな」

チャイムと同時に、教師が時間を確認。

地獄の 5 0 分間が幕を開けた。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: テストのお話・5
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 05/07/2009 18:12:23

BODY:

答案用紙が配られ、チャイムと共に一斉に問題用紙をめくる音が響く。クラスメイトたちが悩みながら解答欄を埋めてゆく中、サツキはひとり、問題用紙を伏せたままだった。

やや前傾になった上半身は机の上にかぶさり、放り出されたままのシャープペンシルと消しゴムが、所在なげに答案の上に転がっている。

最難関とは言えずとも、難易度では引けをとらない英語の試験。本来、得意科目のはずのサツキの両手は、しかし試験開始からずっと机の下に差し込まれたまま、動こうとしない。

それもそのはず、サツキの両手は、机に隠れてスカートの前にきつく重ね当てられていた。

ぎゅっと寄せ合わされた太腿の間、深くねじ込まれたサツキの両手のひらは、股間の丸みに合わせてぴったりと重なり、スカートと下着を押さえ込むようにして、下腹部の尿意を膀胱ごと押さえ込んでいる。少しでも力を抜けば、たちまちヒビの入り始めた『おんなのこ』のダム崩壊をもたらしてしまう。

（は、はやく、はやくっ……）

10分後にはリスニングのテストも始まる。問題文の読み上げ時間が決まっているリスニングは、どうやっても早く解くことは不可能で、それまでにできるだけ解答欄を埋めておく必要もあった。

だが——サツキの手は問題を解くことよりも、オモラシを塞き止めることに精一杯で、机の上に現れることもできなかった。

（……はやく、はやくしなきゃっ……！！）

気ばかりが急く。

こうしている間にも試験時間はどんどん減っていくのだ。来年に受験を控えた期末試験は、今後の進路にも深く関わる重要なものだ。しかし、乙女のプライドを賭けたオモラシとの戦い、オシッコ我慢の試験は、それよりも優先せねばならないものでもあった。

問題を解こうとすれば、恐ろしいほどの速さで時計の針が進み、トイレを我慢しようと思えば、まるで時間が止まったかのように文字盤の針はピクリとも動かない。

限界寸前の尿意を抱え、トイレを我慢しながら、期末試験を受ける——

サツキにそんなことが、可能であるわけがない。

(っは、はやく、はやく、トイレえ……！！)

生姜紅茶とコーヒーと、レモンティ。繰り返し摂取した二重三重の利尿作用の相乗効果で、敏感な排泄器官はフル稼働。それに伴って容赦なく高まり続ける尿意が、サツキを塗りつぶしていた。

ガマン。オシッコ。お手洗い。

サツキの頭の中は、『おんなのこ』のダム同様、我慢し続けているオシッコのことでいっぱいだった。トイレに行きたい。トイレに行ってオシッコをしたい。もう我慢したくない。もうおトイレしたい。トイレしたい、オシッコしたい。

(と、トイレ、トイレ、オシッコ、トイレ行きたい、出ちゃうっ、漏れちゃうっ、お、オシッコしたいい……っ！！)

震える手で掴んだシャーペンが、回答用紙の隅に『おしっこです、トイレに行きたいです』と書き記す。それで一瞬楽になったような気がした直後、サツキは慌てて我に返し消しゴムを掴んだ。

乱暴に解答用紙を擦ったところで手が滑り、消しゴムが机から跳ねて落ちる。反射的に手を伸ばしかけた瞬間、ぶくりと尿意が膨れ上がった。

(っ、や、またっ……だめ、……が、ガマンっ……！！)

くしゃくしゃに握り締められた下着の股布に、じわりっと滲む危険な気配。膀胱が絞り上げられるように尿意が高まる。

これまでサツキが我慢してきた3時間弱の時間の、3分の1程度の時間。わずかな50分。けれど途方もなく長い50分。秒にして3000秒。

間断なく打ち付ける尿意の波濤の間隔は、大体平均して6秒に1回、つまり尿管の蠕動と同じ間隔だ。あらたにオシッコが膀胱に注ぎ込まれる瞬間すら、過敏になった下半身は感じ取ってしまっている。

1回に増えるオシッコの量は、およそ1cc。本来は再吸収などの作用でこれはもっと少なくなることもあるが、もともと利尿効果をてきめんに受けやすいサツキの身体は、現在それらの作用をほぼ行えていない。

1分間で10回分の10cc。ということは、英語の試験時間の50分間、訪れた500回の尿意の波を耐え抜いたときには、サツキの『おんなのこ』の容れ物を満たすオシッコは、さらに500mlも増えている計算になる。

その素となるのに十分な水分を、サツキは1時間以上も前に摂取しているのだ。吸収されたコーヒー飲料とレモンティは、少女の全身を巡って、一ヶ所に再集結しようとしているに違いない。

(っ……漏れ、ちゃう……よお……っ！！)

ふたたび、下腹部の奥でこぼこぼと水音が響いたかのような錯覚がサツキを襲う。思わず腰を浮かしかけたサツキの下で、がたんっ、と椅子が揺れた。

「……そこ、静かにしなさい」

教師が眉を寄せ、不機嫌そうに言う。これで都合四度目の粗相となるサツキに、流石に周囲からもはっきりと非難の視線が集まっていた。

しかし、もはや放って置いても勝手に動き出してしまう下半身を押さえつけるのは、意志の力だけでは限界だった。

「ふ……うっ……あ、……うっ」

押さえ込もうとして漏れる小さな呻きも、テストの静寂の中では異様なほどに大きく響く。クラスメイトの不審はそろそろ頂点に達し、サツキを鬱陶しげに睨む生徒も少なからず居た。

これではまるで針のむしろだ。

(も、もうダメ……と、トイレ……っ！！！)

ここでの中座は恐らく致命的な時間のロスとなる。だが、一刻の猶予もない我慢を抱えたままではそもそも残り時間を乗り切る
ことすら不可能に思えた。

サツキは背中を丸めたまま、『おんなのこ』を庇うように腰を浮かせ、震える手を上げ、近くを通りかかった試験担当の教師を見る。
トイレに行かせてもらうための許可を貰うためだった。

だが――

『ただいまより リスニングの 問題の 放送を 始めます』

ぷつ、とスピーカーの音と共に、放送が始まる。

試験開始から5分と経っていないのに、リスニングの問題が流れはじめたのだ。

慌てて問題を中断する周囲のクラスメイト。

その中で、サツキは顔を青褪めさせていた。予想よりも、ずっとずっとリスニングの放送の開始が早い。

(そ、そんな……あ……)

はじめに念を押されたように、1回だけしか放送されない上、10分以上は続くリスニングの問題。しかも配点も高く、これを逃
すとサツキの答えは3分の1以上空欄となってしまう。

予定通り試験開始10分後に始まるのなら、というサツキの目算は大きく崩れた。しかも――

「先生、問題が聞こえません」

「……村瀬、静かにしろ！」

「っ、……は、はい」

ぎしっ、ぎしっ……行けるはずだったトイレを禁止され、思わず動く腰が椅子を軋ませる。それを咎める教師が語気を荒げてサツ
キを睨み、叱責する。

読み上げられる英文に、クラスの全員が集中する。雑音もぴたりとやみ、クラス中が一単語も聞き漏らすまいと、一心にスピーカ
ーの向こうの会話に集中していた。

こんな状況では、とてもではないが教師を呼び止め、トイレに行く許可をもらえるとは思えない。

サツキはそのまま動けなくなってしまった。

(う、あ……っ、や、と、トイレ、トイレ、トイレえ……！！)

ぎし――せめて我慢のため腰をくねらせようとしたサツキの体重移動を目ざとく見つけ、再度教師がじろりと睨む。それでもうサツ
キは脚をモジ付かせることすらできなくなった。

(お、おしっこ、オシッコオシッコオシッコ！！ オシッコ、で、でちゃううう！！)

席を立つどころか、押し寄せる尿意をおおびらに押さえ込むことすら許されず、サツキは声にならない悲鳴を上げた。

だが、そんな彼女に救いの手を差し伸べる相手はどこにもいない。

そんなサツキに、今日一番の大津波が押し寄せた。まるで洪水で氾濫する大河のように、身体の奥からありったけの水分がもう
許容量一杯の『おんなのこ』のダムへと押し寄せる。

ぞわりと背筋を走る感覚と共に、サツキは緊張に全身を強張らせた。

(あ……ッ！！)

身動きもできず、机の上で両手を握り締めたサツキの『おんなのこ』がヒクンと引きつり、内側から膨らむ。

トイレの中でしかしてはいけないはずの、オシッコを出す準備を『おんなのこ』がはじめてしまう。その感覚が、制御を離れた脚の付け根の間で勝手に進行してゆくのを、動けないサツキはまるで他人事のように感じていた。

(あ、あ、あ、だめ、ダメっ)

わずかに緩んだ水門が、じわじわと高まる水圧に内側からこじ開けられ、脚の間にぷくりと熱い水流の感覚が広がってゆく。

じゅ、じゅう、じゅわ……っ

(ち……ちびっちゃった……っ！？)

我に返ったサツキの両手が、ほとんど反射的に動いた。『がばっ』と左右の手のひらを脚の間に突っ込んで出口を締め付けるが、もう襲い。致命的な失敗、オシッコ我慢における落第点、——紛れもないおチビりの証が、じゅわあと下着の股布に染み込んでゆく。

(う、嘘……だ、だめ、もう駄目、もう出ちゃだめ……っ)

後ろにずらした椅子の上、身体をかぶせるようにぐうっと前傾になって『おんなのこ』を押さえ込むサツキ。だが一度出口を覚え、サツキのオシッコは、指の奥で間断的に吹き出しては白い布地を少しずつ侵食してゆく。

(っ、ややだ、あ、オモラシっ、っだめ、ダメなのっ……！！)

おチビりはちょびちょびと漏れ続け、まったく止まらない。

下着の股布を通過して、とうとう手のひらにまで溢れるおしっこ感触に、サツキは身震いした。押さえた指の間に溢れたオシッコが、太腿を伝い、スカートのおしりの方にまで流れ落ちて、大きな染みを作っていく。

それでも、サツキは本格的な決壊だけは避けるべく、両手両脚の総力を挙げて『おんなのこ』のダムを押さえつける。

教室ではリスニングの問題が2問目に指しかかっていたが、放送の内容など遠い異国の呪文のようで、サツキの頭には入ってこない。

チエリはそんな様子のサツキを、笑いを堪えながら見つめていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: テストのお話・6

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 05/07/2009 18:13:51

BODY:

『――以上で リスニングの 問題の 放送を 終わります』

ぷつ、と切れるスピーカー。

それと同時に、サツキは震える手を上げていた。オシッコに濡れた手のひらは、スカートにぐりぐりとねじつけて拭いている。

『おんなのこ』を覆うじゅうんと湿った下着は、今もなお断続的なおチビリによって新たな水分を供給し続けられ、そろそろ絞っても水が滴りそうなほどだ。

もはやトイレまで間に合うかも怪しい。制服のスカート、お尻のほうにはもうどうやったところでごまかしようもないくらいに大きな染みができてしまっている。本質的にはトイレでオモラシを続けるか、ここでオモラシを続けるか程度の差でしかないかもしれない。

「あ、あの……ッ」

掠れた声で、サツキはもう一度、教卓の教師を呼ぶ。あまり大きく手を上げると、オシッコで汚れた指なのが分かってしまうんじゃないかとすら思えた。

「どうした？」

手を上げたのがさっきからうるさくしていたサツキだとわかると、担当の教師の表情が険しくなる。けれどサツキにだって後がない。怯む心を奮い立たせ、サツキは震える唇を湿らせて言葉が続けた。強張る頬、背筋に気持ちの悪い汗が浮かぶ。

「す、すみません……そ、その、トイレにっ……」

「……試験中だぞ」

何を馬鹿な、というような声音。教師の表情がさらに不機嫌に歪んだ。

（だ、だって……っ）

試験中だなんてそんなことは百も承知だ。これが大事な試験で、そもそも不正防止のため、試験中の中座は厳しく咎められるべきもので、だからこそトイレは休憩時間のうちに済ませておくんて、それこそ小学校からでも言われる基本中の基本の常識だなんてことは、サツキだって誰よりも良くわかっている。

まだ、解答欄のほとんどが白紙だ。上手く走ることもできそうにないこの状況でトイレに行けば、10分近くは戻れないこともわかっている。

それでもなお、このままここでオモラシなんて、絶対に許容できるわけがなかった。

「——お願いします……が、がまん……できません……」

静寂の中、“オシッコが漏れそうです”とほぼ同義の言葉を口にしたサツキに、教室の中が静かにざわめく。

頭の中が沸騰しそうなほどの羞恥が、サツキに襲い掛かった。

俯いたサツキの顔が耳まで真っ赤になり、少女は必死に唇を噛んで内側からの尿意と、外からの好奇の視線に耐えねばならなかった。

「仕方ない。答えは伏せていくように」

「は、はい」

小さな舌打ちが聞えた気がしたが、サツキはそれを気にすることはやめて、なんども顔をしながら椅子を引き、がたがたと忙しく机を揺らして席を立った。

椅子の天板にはサツキが押しつけてきた股間のカタチに水滴が残り、ぐちゃぐちゃと脚の間に湿った股布が張りつく。

クラス中の視線がサツキに集まり、後ろの席からは隠し切れないお尻の『おちびり』の痕跡を、前や横の席からは、アヒルのように後ろに突き出された腰や、スカートの上から股間を握り締め、一時も離れない手のひらなどを見つけてゆく。

（ねえ、あれって……）

（やだあなにあれ、もう漏らしちゃってるじゃんっ）

（うわ、オモラシ？）

（ちょっと、なにやってんの村瀬さん……？）

（トイレ行かなかったのかしら……）

すでにサツキの脚には、ふくらはぎまでオシッコの水流があとを作っていた。立ち上がった床にも、ぼた、ぼた、と水滴が散ってゆく。事態を把握した周囲の生徒たちが、飛びのくように机を鳴らして距離をとる。

（っ……！！！！）

千本の針のように突き刺さる視線の圧迫に耐えかね、サツキは逃げるように教室を横切って、ドアを開けるのももどかしく廊下へ駆け出した。

無理に走ったせいでさらにじゅじゅじゅじゅとオシッコを漏らしてしまうが、振り返る余裕などない。

だから、

（結構がんばったよねえ、サツキ）

（ふふ、でもあのカッコ、恥かしかったよぉ？）

（馬鹿だよねえ。女の子なんだからごまかしかたならいろいろあるのにさ、トイレ我慢できませーんなんて馬鹿正直なんだもん）

（でも、面白かったなあ…いつ漏らすかドキドキしたよ？）

（まだまだ。あんなもんじゃもったいないじゃん？）

（……え。どうするの？）

（くすくす。こーするの）

ざわめく教室の中静かにしろ、と叱責する教師の声を聞きながら、周囲の少女たちとこっそり囁きあったチエリが、再び手を上げるのを――

サツキは気付けるわけがなかったのだ。

ふらふらと廊下を歩き、途中でなんでもしゃがみ込みそうになりながら、サツキはどうか視界の先にトイレを見つける位置までやってきた。

（トイレトイレオシッコトイレオシッコ漏れちゃう我慢オシッコ）

両手で『おんなのこ』のダムを塞ぎ止めながらでは、階段を下りる脚もおぼつかない。トイレまでの位置エネルギーがそのまま衝撃になって、溜まりに溜まった水風船を揺らす。たぷんと揺れる恥水の水面が、そのまま『おんなのこ』の容れ物を倒してしまいそうだ。

暴発寸前のおなかを抱え、恐る恐る一段目の段差に足をかけるサツキ。

「サーツキっ♪」

ぽんとその肩を叩いて現れたのは、チエリであった。

「え……っ」

予想外の相手の出現に、生まれた思考の空白。募る尿意とあいまって、目の前の少女が自分をこんな苦境に追いやった張本人だということすら、サツキは瞬時には思い至れずにいた。

そもそも――いまの不意打ちで、そのまま漏らしはじめてしまわなかった事こそが奇跡に近い。

そんなサツキの肩をつかんだまま、チエリはぐいとサツキの身体を引き寄せる。内股で小刻みに震えるサツキの脚では、それに抗う力はない。我慢のために整えられた姿勢から無理矢理別の方向を向かされる苦痛に、ただ声を上げるのみだ。

「あっ……や、やめっ……！！」

「ゴメンねえ、サツキ、ずっとトイレ行きたかったのにね、あたしが邪魔しちゃったんだよね。テスト中なのに」

白々しく謝ってみせるチエリに、サツキの思考は空転を続けていた。なんで、どうして。そもそも何故チエリがここにいるのか、まった

く考えが及ばない。

単に、チエリが『おんなのこ』の事情を口実にして教師の許可を取って教室を抜け出してきたのだと——そんなことも思いつけなかった。

目を白黒させたままのサツキに、チエリは飛び切りの笑顔で微笑む。

「でも良かったね、間に合って。一緒に戻ろう？」

100%混じりけなしの、悪意を持って。

そう言う、サツキの手首を掴んで、チエリはずんずんと廊下を歩き出した。ふらつく脚ではそれを抑えることも叶わず、サツキはそのままチエリに引きずられてしまう。

「や、やめッ……だめ！！ だめえ！！ ひ、引っ張らないでっ！！」

バランスを崩した脚が倒れこむ身体を支えようと勝手に前に出て、嚴重な防備のひとつである『膝の寄せ合わせ』が崩れた。おまけにスカートの前をおさえこむ手の数までも半分になって、『両手の前押さえ』すら成立しない。

すでに疲労の極致にある『括約筋の締め付け』はほとんど意味を成さず、辛うじて三重の防備で決壊を塞ぎ止めていた『おんなのこ』のダムが崩壊を始める。

幾重もの押さえを失ったサツキの脚の付け根で、じゅじゅじゅじゅう！！ と激しい水流が噴出し、布地にぶつかってぐもった音を鳴らす。

「っ、だめ！！ チエリ離して！！ と、トイレ出ちゃう！！ オシッコでちゃうからあ！！」

形振り構わない叫びに、しかしチエリはまったく耳を貸さない。恐ろしいほどの力でサツキを引きずり、廊下を歩いて行く。サツキの行きたい方向とはまったく正反対へ——待望の、焦がれ続けたトイレから、最も離れる向きへと。

「だめ、トイレ、オシッコ、オシッコでちゃうっ、でちゃう……！！」

まるで水をくみ上げるポンプのよう。サツキが歩きたびもたつく脚の間からじゅわじゅわと水流が迸り、その足元にびちゃびちゃと水流が飛び散る。

とくに保水力の限界を迎えた下着はそのままオシッコを素通しにして、サツキの下半身をずぶぬれにしてゆく。スカートには前も後ろも大きな染みが広がり、内側から吹き出す水流に従って裾まで濡れ浸る。

上履きが足元までびしょ濡れになり、一步ごとに水音を立てる。

廊下の騒ぎに、近くの教室から何事かと教師が顔を出した。その視線とぼつちり目が合ってしまい、サツキはさらに悲鳴を上げる。

「や、嫌、違うの、と、トイレ……オシッコっ……オシッコするの、ちゃんと、トイレでっ……は、離して、が、我慢ッ、できないっ行かせてっ…！！」

「あーあ、ダメじゃないサツキってば。トイレ行く前に漏らしちゃったの？ オシッコ我慢できなかったんだあ？」

とどめとなる一言が、チエリから放たれた。

わざとらしいほどの大声に反応して、廊下に面した教室のあちこちが騒然となった。ざわめく声が次々と伝播し、それぞれの教室から一斉にがたがたと席を立つ音が響く。

「もう、そんなところでオモランなんか……みともないよ、サツキ！！」

「やめてよ、もうやめてよぉ！！！」

たとえ試験中であつたとしても、チエリ言葉は十分以上に興味をそそる内容だつた。懇願するサツキの足元で、激しい水流が大きな水溜りを作り始めている。排泄の解放感が弱々しく震えるサツキの腰を包み込み、下半身を濡らす暖かな感触が少女の氣力を根こそぎ失わせてゆく。

「あ、あ、あっ」

荒げた大声に反応して、『おんなのこ』が保っていた最後の一線も破られた。廊下に立ちつくしたまま、サツキはアヒルのような格好で、スカートの上から股間を握り締めたまま、本当の勢いのオシッコを始めてしまう。ばちゃばちゃばちゃ！ と激しい勢いで廊下にぶちまけられるオシッコは、サツキが我慢の上に我慢を重ねていただけあって、恐ろしいほどの勢いだ。

「あんなにお茶なんかがぶがぶ飲むからだよ？ テスト中にオシッコ我慢できなくなっても知らないって言ったのにさぁ！！」

「ち、違っ……」

「せめてトイレくらいまでは我慢しなよ！ 女の子でしょ！？」

サツキの抗弁を遮るように、チエリは苛立ちすら装ってサツキを責める。

廊下に漏れたざわめきがどよめきとなり、並ぶ教室のあちこちからあふれ出す。

チエリの声に黙っていられなくなったのだろう。廊下に並ぶ5つの教室の10のドアから何事かと生徒たちが姿を見せ、廊下の真ん中で盛大すぎるオモラシをしているサツキを見て次々に声を上げた。

教師がそれをとどめようと怒鳴るが、一度堰を切った好奇心はその程度でおさまらない。クラス30人よりも遥かに多い、その5倍もの視線が一斉に、廊下でオモラシを続けるサツキへと集まった。

学年じゅうにまたたくまに広まる、オモラシの事実――

「ち、違うの、ぜ、全部、ちえり達がっ……い、イジワリゆ、し、したっ……」

「ひっどい！！ あ、あたしのせいだって言うの！？ なにそれっ！！」

サツキが涙を滲ませ声を震わせて必死に訴える真実の声は、人垣の奥に空しく消えていった。

(終)

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: ビアホール？のお話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 05/09/2009 22:52:27

BODY:

某特区の「今日の○○」の“おかわりのジョッキ 3 杯ぐらいならもう溜まってる”というフレーズに触発されて書いたもの。

<hr size="1" />

「ねー、もうこっち空っぽだよー、はやく追加おねがい」

空になったジョッキを掲げて、8 番テーブルから声が上がる。とはいえそれに答える声はない。大混雑中の店内に何度も響く声に、麻美はレジの客におつりを押し付け、殴り書きにした伝票を放り出して叫んだ。

「ただいまおうかがいします、少々お待ちくださいっ！！」

テーブルを埋め尽くした大盛況の賑わいの中を、麻美はトレードマークのポニーテールを跳ねさせ、エプロンを押さえて走る。

広いんだし、もう少しテーブル減らして余裕を持って配置すればいいのに、と愚痴っていた先輩に、別に平気ですよこれくらいと笑いながら答えていた 3 時間前の自分を叱り飛ばしてやりたかった。

高々と手を上げる一団のテーブルまで、大きく迂回して 1 5 秒。注文票を片手にようやくたどり着いた麻美に、空のジョッキを押しやって、スーツ姿の女性たちが『おそーい』と口々に文句を言う。

「も、申し訳ありませんっ」

「……まあ、しょうがないけどさあ。ナマ中みつね？ 急いでよ？」

「は、はいっ……」

答える麻美に、今度は背中から別の声が注文をせかす。

「ねえ、こっちもビールまだー？ 結構待ってるんだけどー！！」

「も、申し訳ありません、さ、サーバーの調子が悪くて……すぐにお持ちいたします……！！」

「あーもう、ぬるくてもいいからはやくー！！」

他にも次々あがる声に振り回され、麻美はめまぐるしく構内を走り回られてゆく。

(くぅ……んっ)

そんな麻美のおなかは、エプロンの上からでもなおはっきりと分かるほどの、『ビール腹』と化していた。走るたびにたぷんたぷんと揺れるほどにみっともなく出っ張った自分の下腹部を無意識に撫でさすり、麻美はぎゅっと口を引き結ぶ。

エプロン下ではさらに酷いことになっており、制服のズボンのウェストは大きく伸ばされ、不恰好なくらいにせり出している。ベルトの穴は苦しさに耐えかねてふたつ外側、ズボンのチャックまで半分緩めているほどだ。

「はぁ、はぁっ、はぁっ……」

ホールを3周近く走り回った麻美は、汗だくになって何枚も注文票を抱え、なんとかカウンターの奥へと駆け戻った。ぎゅっとカウンターの縁を掴んで、奥に居る奈緒に叫ぶ。

「ナマ中みつ、あと6番テーブルのポテトみつがまだで、向こうのテーブルでもまだチキンもふたつ足りないって……！！」

「わ、わかってるってば！！ もう、急かさなideよ！！」

カウンターの奥、顔を背けたいほどの熱気が籠った仮設調理場でも、奈緒がフライドポテトとチキンを両手に抱えながら走り回っていた。

お約束程度に換気扇が回っているが、もともとは普通の部屋を仕切っただけのスペースなだけに、よっつも並んだ業務用コンロの火が籠って恐ろしいことになっている。蒸し暑さは頂点に達し、その傍では先輩の伝で借りたビールサーバーが、恐ろしいほどに大きく低い唸り声と共に震え、いまにも火を噴きそうな気配を見せていた。

「それより麻美、由紀にこっち手伝うように言ってちょうだいよ！ 全然間に合わないんだってば……！！」

いらいらと足を踏み鳴らし、奈緒が声を荒げる。

彼女もまた、麻美と同じかそれ以上に、酷い『ビール腹』をしていた。調理用のエプロンを下から押し上げる下腹部の膨らみは、外から見てもはっきりと分かるほど。

汗だくの麻美は、髪を鬱陶しげにかき上げながら、時折辛そうにそんなおなかを抱えなおす。

「聞ってる麻美？ 由紀呼んでってば！！ も、もう私……ッ」

「む、むりだよ、レジも凄い行列で……由紀ちゃんだって余裕ないよ。……そ、それにわたしだって……っ」

ぎゅっと手を握り締め、続く言葉を飲み込みながら、麻美は強張った表情を浮かべている奈緒を見つめ返した。

思うことは、麻美も奈緒も同じなのだ。なんとかしてこの『ビール腹』をすっきりさせたい。それ以上に切羽詰った欲求は、いまはありえない。せめて少しでも多く汗をかけばいいのだろうかとも思うが、そんな事をしても逆効果に思えてしまう。

「……おーいってば！！ ねえ、ナマ中まだー！？」

言葉を失っていたふたりの硬直を解いたのは、店内のざわめきの中から飛んだ催促の声だった。

「と、とにかく、ナマ中みつ、追加……っ、冷えてなくても、いいからって……」

麻美は苦しげな溜息と共に奈緒から顔を背けた。こんなところに居ても辛くなるだけだ。少しでも動き回っていたほうが、まだ気が

紛れるかもしれない。

だが——声を荒げて奈緒が言う。

「ま、待って麻美、ビールくらいあなたでもできるでしょ！？ こっちも先の注文あるから、そっちで用意して！！」

「そ、そんな、ずるいはそんなのっ！！」

「ずるくない！ 私、もう何回もやってるんだからね！！」

ぴしゃりと言われ、麻美が思わず口を閉ざしてしまうと、奈緒はそのままぐいと顔を背け、まるで麻美をを無視するように調理場に戻っていった。

「……っ」

そこまで強い調子で言われてしまえばもうそれ以上言い返す気力もなく、麻美は渋々、まだ乾いていないジョッキを抱えて、中古のビールサーバーに向かう。

（っ、や、やっぱ辛いよお……）

小刻みに震える膝と、不自然に寄せ合わされた腿。

気を抜くとよちよち歩きになってしまう下半身を庇いながら、麻美はサーバーを操作する。ジョッキに注がれるビールは、お世辞にも冷えているとは言いがたい。ガラスの容器に泡を立てて注がれて行く黄金色の液体が、麻美を怪しく誘惑する。

片手に抱えた中身一杯のジョッキはずしりと重たく、ますます麻美を苦しめた。背中にも嫌な汗が浮かび、重苦しい下腹部がさらにずしりと重くなる。

（っ、はやく、はやくしないと……マズいかもっ……）

慣れない手つきでビールサーバーを操作しながら、麻美はその場でたんっ、たんっと激しく足を踏み鳴らし続けていた。ポニーテールが左右に揺れ、背中で毛先をひょこひょここと飛び跳ねさせる。

奈緒がああまでして麻美に押し付けようとしたのもわかった。こんなに膨らんだ『ビール腹』を抱えてのこの作業は、まさに地獄に近い。

容量 5 0 0 m l の中ジョッキに、サーバーの中身が泡： 3、ビール： 7 の黄金比で注がれてゆく。この比率がビールの苦味を泡の中に閉じ込め、もっとも美味しい状態にするコツらしい。先輩はそう教えてくれたが、麻美にはそんなもの知ったことじゃなかった。

泡立ち、中ジョッキに溢れんばかりのビール、3 杯。

実際には生ビールの中ジョッキには通常の 3 5 0 m l の缶ビールほどしか入っていない計算になる。つまりこの 3 杯で、およそ 1 リットルほどだ。

（……うう、たぶんそれくらい溜まってるよお、コレ……）

身じろぎするだけでたばんたばんと揺れてつらいほどの『ビール腹』に、麻美は切なく身体をくねらせ腰をよじらせた。

ただでさえフル回転を続けていてロクに冷えてないぬるいビールは、ジョッキの底にぶつかって立てる音はますます麻美の我慢を辛いものにしてゆく。

おヘソの裏に感じるむず痒さは、時間と共にどんどんと下のほうに降りてきているような気がする。塞がった手の代わりに太腿をすり合わせて膨らんだ『ビール腹』を抱え上げながら、麻美はぐっとう唇を噛んで、両手にジョッキを抱えてふたたび店内に走り出した。

（は、はやく、オシッコしたいっ……）

トイレに行きたい、と思ってからもう 3 時間。

それから一度も休む暇なく接客を続けている麻美の下腹部は、はちきれんばかりに溜まったオシッコで大きく膨らみ、つのる尿意はいよいよ我慢の限界に差しかりつつあった。

戦場のような忙しさの理由は、予定の半分しかいないスタッフのせいだ。文化祭の2日目となる今日、サークルの当番だったはずのメンバーのうち三人がそれぞれに適当な理由をくっつけて、模擬店に顔を出してすらいない。

一言文句を言おうにも、携帯も留守電か録音メッセージばかりで、連絡すら取れない有様だった。

そんな状況で、素人の麻美が20を超えるテーブルを受け持ってホール係を務められるわけもない。そもそもが、サークルの中に複数のバイト経験者がいるから、という理由で出店を決めたビアガーデンなのだ。

「先輩、あと中ジョッキで4つ追加ですっ！！」

「ま、またあ？ もお、そんな急がせないでってば……っ」

どうにかレジを終え、追加の注文票を持って駆けてきた由紀に、奈緒が叫び返す。由紀も息が荒く、頬もいくらか上気していた。

わざわざ用意した揃いのコスチュームであるエプロンの下で、由紀の右手は深く脚の付け根の間へと伸びている。人目を気にしてか、掴んでいるのはスカートの端だったが、本当なら今にも爆発しそうな下腹部の『ビール腹』をおもいきり握り締めてしまいたいに違いない。

「ユキちゃん、平気……？」

「あ、あんまり平気じゃないかもです……さっきも、先輩につかまっちゃって、2杯も飲まされちゃって……」

小さな身体に似合わず、由紀はとてもアルコールに強い。それを知っているからこそ先輩がたも、忙しい彼女にねぎらいのを『ごほうび』をあげているつもりなのだろうが、今はまったくの逆効果だ。

アルコールは直接皮膚からも血管に吸収されるため、利尿作用は水などとは比べ物にならないのである。何倍も飲まされなくとも、てきめんに効果を発揮するものだ。

「こ、こーゆうのも、可愛がりっていうんでしょうか……んうっ……」

由紀が言葉を詰まらせてぎゅっと下を向いた。同時に激しく泡立つ黄金色の液体が、小柄な由紀の身体を内側から膨らませている光景を想像してしまい、麻美はぶるっと背中を震わせる。

（や、やばっ……）

オシッコの誘惑というものは伝染するものだ。由紀の様子が引き金になって、麻美の身体でも下腹部に閉じ込められていたオシッコが激しく暴れ出した。

（は、……くうっ……！？）

もはや容れ物のふちぎりぎりに迫りつつある水面が、ざわざわと波立ち濁流となって出口へと殺到する。ジョッキ3杯分、推定1リットル近い『ビール腹』の中身が、圧倒的な質量で麻美に襲い掛かった。

「ねえ麻美、悪いけどまたお願い！！ こっち、手が離せないから——」

「うう……っ、ま、待って、ちょっとタイムっ……！！ こっちもだめ！！ い、今ちょうど来ちゃってるトコなのっ……！！」

麻美は、別の意味であそこから手が離せなくなっていた。

押し寄せる尿意の波を塞ぎ止めるため、前屈みになって麻美は低く叫ぶ。お尻を突き出し、壁に上半身を持たれかけさせて、股間を握り締めてぐうっと脚を交差させる。

「せ、先輩……っ」

あんっ、と短い喘ぎ声を断続的に上げながら、足先をねじり、ぎゅうっと下半身をよじり合わせる。麻美は膨らんでせり出した『ビール腹』を懸命に撫でさすり、容赦なく出口に叩き付けられる身体内部の水圧をおしとどめる。

（うう、恥かしい……っ、ユキちゃんの前で、こんなカッコ……っ）

いい歳をして二人の前で恥も外聞もなく、脚の付け根をぐぐぎゅうっと握り締めてしまう恥辱に、麻美の頬はかあっと赤くなる。しかしこうでもしないと、もういつ漏らしてもおかしくない状況なのだ。形振り構ってはいられなかった。

「ご、ごめん……、お、おさまらない……よ、余裕ないかも……っ」

「っ……」

「ゆ、ユキちゃん……」

一瞬も気の抜けない我慢のタイトロープの上で、懇願するように、麻美は前屈みのまま由紀を見上げた。けれど、由紀もさっきからエプロンを両手でぎゅうぎゅうと掴み、見ているだけで辛そうなほどに脚がその場で足踏みを繰り返している。

由紀も、麻美に負けず劣らずに限界が近いしかった。

「——ああもうっ……わかったわよ！！」

ふたりを見かねたか、奈緒が半ば自棄になってビールサーバーに向かう。今度はジョッキで四つ。サーバーの調子はさらによろしくなっており、ほとんど冷えていないままのビールがジョッキに注がれて行く。

冷えていないためか奈緒の注いだビールはやや泡の割合が多い。4：6程度で、ジョッキ四つで正味1200mlといったところだろう。

大学サークルの模擬店ということで、電子レンジで暖めただけの料理の出来に文句を言う客がほとんどいないのが幸いしていたが、この様子ではさすがに苦情でもでかねない。

「ほら、はやく持ってって！！ 麻美もこっち！！」

どん、とジョッキをカウンターに並べ、奈緒は声を荒げた。忙しさで自分の尿意を誤魔化そうというのか、奈緒は一時も足を止めようとしない。

「まだ一杯注文あるんだから、急いで！！」

「う、うん」

「はいっ……」

その迫力に圧倒されながら、麻美と由紀は反射的にジョッキと、フライドポテトの皿を抱えあげる。

「んあっ……」

「ふあうう……っ」

注文の料理を運んでいる間、手はそれで塞がってしまう。つまり、一歩ごとに大きく揺れ動くずっしり重い『ビール腹』を支えるものはなくなってしまうのだ。料理を手にしてしばし、麻美と由紀はロクに歩けず、小さな喘ぎ声を漏らすばかりだった。

「おーい、まだー！？ 待ちくたびれたよーー！？」

「は、はい、ただいまおうかがいしますーっ！！」

それでも、注文を急かす客の呼び声に答えずにはいられない。ふたりはちらりと視線を交わすと、そろそろと慎重に歩き出す。

その様子は、慣れない新人店員が、緊張に身体を強張らせ無理して両手一杯にトレイを抱えている初々しさを、意図せずに演出していた。客の態度がさほどきついものにならないのも、ホールを行き来する麻美と由紀がそんな様子だからという理由もあるのだった。

もっともながら、少しばかり緊張しすぎ、慎重すぎるのも確かだったが——アルコールの入った雰囲気の中で、それを客に察しろというのも無理なもの。

麻美たちは、孤独に、しかも密かに襲い来る衝動との戦いを続けなければならなかった。

「お、おまたせしましたっ」

「あ、来た来たっ」

「遅いよお～」

テーブルに座る大三人連れが、やってきたジョッキを見、3分の1ほど残ったグラスを掲げ、勢い良く乾杯をして中身を飲み干してゆく。

さっき由紀が言っていた鬼門のテーブル、それがこの13番テーブルだ。サークルの大先輩である3人が、もう2時間も飲み続けている。すっかり出来上がった3人は由紀や麻美がやってくると、模擬店の混雑などそっちのけでいろいろ最近のサークルの様子を聞きたがった。

「ん、こっちも空にしちゃおう」

「飲める？」

「まだまだ、これくらいぜんぜん平気平気！！」

先輩たちはもう何倍目になるのかも分からないグラスをぐいぐいと空けてゆく。

（はあああ……っ）

そんなものを目前で見せ付けられては、まるでそのまま、先輩たちが飲んだ分が麻美の膀胱に注ぎ込まれている気分になってしまう。ずしんとオシッコがお腹を膨らませるような錯覚に、くねくねと揺すられる腰を押さえ込むこともできず、麻美の身体はふらふらと揺れ、その場でたん、たん和我慢のステップを刻み出してしまった。

「ねえ、あなたも飲む？ おごるわよ？」

「えっ、で、でも、まだ仕事中ですしっ」

「いいからいいから、ね？ たまにはOBに気風のいいとこ見させてちょうだい？」

ようやく注文を届けたテーブルの先で、スーツ姿の大先輩にそんな風に言われてしまえば、麻美には断れるわけもない。

何年ぶりの旧交をあたたためて、盛り上がっている場に水をさすこともできず、麻美は喉奥に詰まった『い、嫌ですっ！！』という言葉飲み込んでしまうのだった。

「はい、じゃあ乾杯ーっ」

「か、かんぱい……」

麻美は震える下半身を必死に押し殺しながら、ジョッキのひとつを抱えて立ち尽くしてしまう。困惑は頂点に達し、頭の中は『どうしよう』でいっぱいだった。

（も、もうこれで3杯目……こんなお腹で、飲めるわけないよっ……）

およそ350mlのビールを片手に硬直するも、先輩たちは楽しそうに次々ジョッキを空にしてゆく。アルコールを伴う水分吸収は非常に早く、飲んだ傍からオシッコに代わる。そしてますます、麻美たちの『ビール腹』を大きく膨らませるのに貢献するのだ。

オシッコがしなくなってから3時間、その間だけでさらに1リットル以上のビールを飲まされている。麻美だって由紀ほどにはないにしろアルコールには強いほうだが、だからといって口にしたビールがどこかに消えてなくなるわけもないのだ。

空にしたのと同じだけの水分が、遠からず全て下腹部の容れ物に注ぎ込まれるのは避けようのないことなのである。

「どうしたの？」

「い、いえ、なんでもないです」

震える唇で答えて、麻美はそのままジョッキに口を付けた。ぬるいビールを無理矢理喉に流し込む。

（が、ガマン、ガマン、がまんっ……！！ ううう……ッ！！）

ごく、と喉が動いた、ぎゅっとくっついた太腿の間の奥、脚の根元のの小孔から、中身が吹き出しそうになる。

水を1リットル飲むことは難しいが、仮に飲みきったとしても、オシッコになるのはそのごく一部、2～300mlほどだ。それに対して、ビールは飲んだ1リットルがそのまま全部オシッコに変わるとすら言われるのだ。

ひとくちごとにエプロンの下で『ビール腹』がますます膨らんでゆくという錯覚もあながち間違いではない。下腹をぐっと押さえ込みながら、麻美はジョッキを傾けていった。

「っ、ぷは……あ、ありがとうございました……ッ」

辛うじて礼だけは口にし、麻美はそのまま大先輩たちのテーブルから走り去る。もうあのテーブルには二度と近づきたくなかった。

「ふう……飲みすぎちゃったかなあ……」

「あはは、もう限界ー？ 歳じゃないの？」

「うるさいわねえ。……あ、ちょっとトイレ行って来るね」

小さな歩幅で、精一杯走ろうとする麻美の背中に、大先輩たちの談笑する声が届く。

（そ、そんな話、しないでよっ……お願いだからっ……！！）

頭が沸騰したように熱い。アルコールのせいかもしれないし、ロクに冷房の効かない教室に籠った熱気が原因かもしれない。しかし、熱く真っ白になる思考に合わせて、下腹部では沸騰した尿意がますますその勢力を強めていた。身体の奥をじわじわと侵食し続ける、ぱんぱんに膨らんだ膀胱は、麻美のエプロンの下で、文字通りの『ビール腹』となっていた。

中ジョッキ三杯分、推定、約1000mlと少し。……比喻や誇張などを抜きにして、麻美はそれに近いだけの量のオシッコを我慢し続けている。

「くう……ッ！！」

じっとしていることが辛い。踏み台昇降のように脚を踏み鳴らし、麻美はビールサーバーの前で、ジョッキに4杯のビールを注ぐ。少しでも気分を紛らわそうと、口の中では先輩に教わったビール注ぎのマナーをつぶやき続ける。

泡：3、ビール：7の黄金比。計4杯で、都合1.4リットル。

洗ったばかりの生乾きのジョッキの底に叩き付けられる、黄金色の飛沫。進む激しい水流が泡を立て、じょぼぼと爽快な水音

を奏でながらガラスの容れ物をいっぱいにしてゆく。

(うう、と、トイレ。トイレっ……オシッコっ、オシッコしたいいい……！！)

いっそこれと同じように、麻美の身体の中に閉じ込められている熱い液体も一緒に、地面の上に激しく泡立たせながら叩きつけてしまいたい。ますます膨らむ『ビール腹』は、ただ立っているのもつらいほどに麻美の身体を圧迫している。

すでに疲れも感じない。麻美はおなかにずっしりと溜まったオシッコを抱え続ける、いつまでもぬるいビールを溜め込んでばかりのサーバーと同じだ。

——いや。サーバーはちゃんとビールを外に出せている。もう何リットルも、ジョッキに何倍も、泡立つビールを注いでいる。

(ず、ずるいつ……なんで、なんで私ばかり……っ)

それなのに、それなのに麻美は、あまりにも理不尽な我慢を続けているのだ。どうして機械にできるのに、自分にできないのか。そう揺れる思考が、ふと空のジョッキに落ちる。

およそ、500ml——0.5リットルの容量をもつ、“容れ物”に。

(っ、こ、ここに、ここに出しちゃえば——全部は無理だけど、半分くらなら入るよね……っ、す、すぐに流して洗っちゃえば……っ)

およそ、いい歳をして考えるようなことではない、まともに判断すればまずありえないような誘惑に、エプロンの下で麻美の小さな排泄孔が震える。

ヒクンっ、と緩みかけた小さな孔は、まさにその禁忌の選択肢を麻美に選ばせようと、混乱の極みにある彼女の思考の隙を縫って麻美の理性を支配し、手に握る空のジョッキをぐうと股間に寄せさせようとする。

このままこの入れ物に股間を押し付けて、下着の股布を引っ張って横にずらせば、それで十分用は足せる。万が一のこともあるししゃがんだ方がいいかもしれない。ヒクつく腰に誘われるまま、麻美は場所も考えずに排泄の準備を始めてしまう。

いっそ本当にこのまま——ジョッキを汗ばんだ手のひらで握り締め、麻美が本気でそう思いかけたその時だった。

——不意に。

「ねっねえ、麻美っ、由紀どこ行ったか知らないっ？！」

「っ！？ わ、わわ！？ っ、あ、な、なに！？」

いつの間にか近くに居た奈緒に声をかけられ、麻美ははっと我に帰った。慌てて取り落としそうになったジョッキを、辛うじてつかんで近くのテーブルに置く。

「っだから由紀よ！！ あの子、さっきからいないの！！」

「え……、し、知らないよお」

言われてようやく麻美はその事実に気付く。店内を見回しても彼女の姿は見えず、レジには数名が行列を作っている。その行列で客が店員を呼ぶ声が自分を呼んでいるのだと気付き、麻美は慌てて飛び出そうとしたが——

「す、すみませんっ！！」

「ちょっと、待ったわよ？」

「も、申し訳ありませんでしたっ、お会計ですね——」

ぴゅうっと教室の入り口から駆け込んできた由紀が、深く頭を下げてレジをさばき始めた。

「ね、ねえ、どこ行ってたんだろう、ユキちゃん……」

「どこって、そんなの……」

わざわざ口にするまでもない。

——トイレ、だ。

オシッコ、だ。

忙しなく料金のやり取りをはじめた由紀を、麻美と奈緒はそろって恨めしげに見つめる。互いに言葉にはしなくとも、言いたいことは百も承知だった。

このタイミングでいなくなっていたというなら、その目的はひとつしかない。

（い、いいなあ……いいなあっ、ユキちゃんっ。お、オシッコできたんだ……っ！！）

自分と同じかそれ以上に我慢していたのだから、さぞかしすっきりしたことだろう。まったくすっきりできていない自分の『ビール腹』を抱え、麻美は羨望と嫉妬の混じった暗い視線で由紀を見詰めてしまう。

（わ、私だって、すごくトイレ行きたいのにつ、オシッコ、もう出ちゃいそうなのにつ……！！、ゆ、ユキちゃんだけ先にトイレしてきたなんて……！！）

麻美の隣で、奈緒も同じようにモノ欲しそうな表情を露にして由紀を睨んでいた。奈緒も麻美も、我慢そのものは利く体質だ。けれど多分、由紀のほうがもっとその才能はあることを、何度かのサークルの飲み会で二人は知っている。

「な、なんで……勝手にっ……。はあ……っ、せ、せめて一言あってもいいじゃないっ……。！！」

軋るような、奈緒の呻き。

全員が我慢しているのは３人とも十分に分かっていたはずだ。混雑はますます激しくなり、誰ひとり簡単に抜け出せるような状態じゃないということも。

だからこそ、一番我慢に余裕があるはずの由紀が、最初にトイレに行ってきたという事実が納得できなかったのだろう。

「も、もう……く、ううあっ……だ、だめ……ッ」

下腹部に大きくせり出した『ビール腹』に、ぱんぱんに詰まって熟成された熱い黄金色の液体を抱えながら、ふたりは腰をもじつかせるのを止められない。

しかし——麻美も奈緒も、いくら他人を羨んでも始まらないのだ。切迫した下半身の事情は、つきつめれば他人とは無関係にそれぞれ自分自身の問題でしかない。

由紀には自分たちの分まですっきりしてきてもらったのだから、と麻美は自分を納得させようとする。それは奈緒も同じだったようで、無理矢理に笑顔を作って、不自然なくらいに元気に言うのだった。

「っ、ま、まあいいわよ、ものは考えようね。ぜ、全員が我慢の限界っていうより、ずっといいと思うから……っ」

「そ、そうだね……ユキちゃんもう余裕あるだろうし……」

「……そうよ、そう……っ」

それでもなお、ふたりと由紀の間にできた、苦痛に喘ぐものとそれから解放されたものの溝は大きく深いままだった。

店内からいくつもの注文を急かす声があがり、由紀がレジに奔走しながらそれに必死に答える。すぐに窺います、と叫んではいるものの、レジに並ぶ会計待ちの行列は多く残り、返事どおりにはいかないだろう事は一目瞭然である。

しかし、本来ならすぐにそれをフォローに向かわねばならないはずの麻美はカウンターの奥に立ち尽くしたままで、並ぶ奈緒もそれをとがめようとはしない。

（そうだよ、ユキちゃん、余裕なんだから……っ。さ、先にオシッコ、してきちゃったんだから……っ！！）

なんで、自分より先に楽になった彼女を、もっともっと苦しんでいる自分たちが助けにいかねばならないのか——そんな心理が二人の足を鈍らせていた。

「おーい、席空いてるー？」

「はっはい、しばらくお待ちくださいっ」

新たな来店者に、由紀が悲鳴のようにうわずった声で応じた。

混雑がピークになってからもう1時間近く、来店者がとぎれない。もう9時を回っているのに、まだまだ客足が衰えていないのだ。
「……模擬店の終了って、何時だっけ……」

「基本的には10時で、おしまいだけど……延長許可貰ってれば、11時過ぎまで平気だったと思う……」

去年は、それでも日付が変わるまで完全撤収できなかったサークルも数多くあった。基本、おとがめなしの無礼講なのが昨今の風潮だ。

麻美の脳裏を、不安がよぎる。

まさか。まさか、まさか本当に、このまま、いつまでもずっとトイレにいけず——永遠に我慢を続けていなければならなくて、いつか身体じゅうがオシッコに占領されてしまうんじゃないか。

麻美はそんな気分になり始めていた。

（ゆ、由紀ちゃんみたいに、こっそりトイレ行っておけばよかったっ……。私、奈緒とちがって、ホール係なんだから……っ）

このままどんどん『ビール腹』が膨れ上がって、とうとう最後には自分がビア樽になってしまうんじゃないだろうか。

ビア樽のサイズは、英国式で36ガロン。およそ160リットル。

もちろん数字で考えればそんな我慢なんて常識的には在り得ないが、その百分の一……1.6リットルくらいなら、本当におなかの中に溜まっていそうだった。

「ちょっと、由紀」

「え……？」

とにかく、せめて勝手に持ち場を離れたことくらいは言うておこうと、新しいテーブルの準備に注文に、レジを終えて戻ってきた由紀を、麻美と奈緒は取り囲む。

底意地の悪い先輩根性がなかったと言えば嘘になるだろう。汗だくの由紀を捕まえて、カウンターの裏に引っ張り込む。腕を引か

れ、由紀はバランスを崩して声を上げる。

「きゃ……せ、先輩、なにしてるんですか……っ、ひ、ひどいですっ、居たのになんで手伝ってくれないんですかっ！？」

「だって、ユキちゃん一人で平気でしょ？」

「そうよ……もう大丈夫でしょ、由紀だけでも」

ひとり先に抜け駆けしてトイレでの蜜月を過ごしてきたことに対する、奇妙な嫉妬が麻美たちを衝き動かす。自分でも驚くほど冷たい声音で、麻美は由紀を睨んでいた。

「そ、それってどういう……」

「どういうじゃないわ。勝手にトイレ行って来るなんて……どれだけ今忙しいかわかってるの！？」

「そうだよ、ちょっと自分勝手すぎるよ、ユキちゃん」

「そ、そんな——ちよ、ちょっと離れただけじゃないですか！！ た、確かにトイレ行ってきちゃいましたけど、でも——」

「ちよっとして何よ、私たちだって一生懸命我慢してるのよ！？ もうずっと前から！！ お店離れらんないから、すっごく苦しいのに頑張ってきたの！！ それなのに、なにその態度！！」

奈緒が感情を爆発させる。麻美もまったく同感だった。

「トイレ行ってこれたんでしょ、だったら少しくらい大変でもいいじゃない。もう大丈夫なんだから——」

しかし。由紀は問い詰める奈緒に、あらん限りの声を張り上げる。

「へ、平気って……大丈夫って、な、なんのことですかぁ……っ！！」

見れば、由紀は前屈みのまま、忙しく下腹部を揉みしだき、下着を引きちぎらばかりに引っ張りあげ、強く脚の付け根を握り締めている。

さらには力強くその場行進をするような、大きな足踏みを繰り返して、腰を後ろに突き出し、涙目で麻美を見上げていた。

「え、ゆ、ユキちゃん……？」

「へ、平気じゃないです……っ、ぜんぜん平気じゃないですっ！！ も、もう本当にでちゃいそうなのにつ、はうっ……ぜ、ぜんぶお仕事押し付けるなんてっ……ひ、ひどすぎますっ……！！」

すっきり楽になったどころか、前にも増して辛そうな様子の由紀に、奈緒もその勢いを失ってしまう。

麻美は、由紀のエプロンがさっきよりも大きくせり出して膨らもい『ビール腹』になっているのを見つけ、声を上げそうになった。

いくらなんでも不自然に過ぎる。確かにビールを飲みすぎたときには一度トイレに立ってもまたすぐに尿意を催すのは珍しくないが、それにしても由紀が戻ってきてから、まだ15分も経っていない。

「だってあなた、トイレ行ってきたって……」

「い、行きましたけどっ、行きましたけどっ！！ ……す、すごく混んでて、入れなかったんですっ……何十人も行列、できてて……っ！！」

「ええええっ！？」

麻美は思わず叫んでしまう。なおも、その隣で驚愕に開いた口を慌てて抑えていた。

「せっかくトイレ来れたんだからって、なんとか、ううっ……、ご、5分くらい、待ったんですけど……ぜ、ぜんぜん進まなくて……！！ な、なんだか個室、いくつか、こ、壊れちゃってるみたいで……！！」

両手を脚の付け根から離すことなく、だんだんと床を踏み鳴らしながら、身体をゴムのようにぎゅうぎゅうと捻って由紀が言う。

「じゃ、じゃあ、トイレ行っただのに、オシッコできなかったの……？！」

「……………」

流石に直接的な物言いに、由紀も小さくこくと頷くことで肯定の意味を返す。

「そんな……」

奈緒も言葉を失っていた。

これまでは、それでもなんとかしてトイレまで辿り付けば用が足せると、そう思って自分を慰めてきたというのに、それすら叶わないのでは、おはやすがる希望すら失われてしまう。

「じゃ、じゃあ4階のトイレは！？」

「あ、あそこは今工事中で……」

「5階は！？　なんでダメなの！？」

「き、奇数の階は、男の人専用のトイレになるって決まってたじゃないですかぁ！！　私に言われたって困りますよっ！！」

由紀はベソをかきながら叫ぶ。

「わ、わたしだって大変だったんですからっ！！　やっとトイレできるって思ったのにつ、行ったらまた順番待ちでっ、じ、じっとしてるのだからつらいのにつ……！！　そんな“おあずけ”されちゃったらっ、ほ、本当に我慢できなくなっちゃっても仕方ないじゃないですかっ！！　ちゃんと戻ってきたんですよっ！？　そ、そのまま逃げちゃったってよかったんですからねっ！！」

「っ……」

由紀の剣幕に口をつぐむ奈緒。

麻美も同じだった。由紀と同じ立場になった時、そのまま——オシッコを我慢したまま、ちゃんと模擬店に戻ってきたかどうか。自信を持って答えられないのだ。

「もしもーしっ！！　注文まだー！？」

「ねえ、こっち遅いよ、早くして！！」

客の声が次第に熱を帯び始めている。一刻も早くトイレに駆け込まねばならない3人を、容赦なく呼びつける声、声、声。

限界寸前の『ビール腹』を抱えた3人は、途方にくれるしかない。

「うう、くう……」

「っ、あ、ふうっ」

「あんっ……っ」

ちいさく震える唇を噛み締めて、前屈になっての両手で股間をきつく握り締める、まったく同じ格好で、いまにも破裂しそうな下腹部をぎゅっと抱え込む。

「こっち、ナマ中3つー！！」

「中ジョッキで4杯追加、はやくしてー！！」

「おーい、まだ注文取りこないのー？　ビール5つだってばー！！」

ジョッキ1杯当たり、約350～400ml。

注文を急かす声が要求する、中ジョッキ計12杯。4リットル強。三人合わせれば恐らくその全てをいっぱい出来るほどのオシッコを、その大きく膨らんだ『ビール腹』にぱんぱんに詰め込んで。麻美たちは荒い息をつきながら必死に身をよじり続ける。

聞えていないわけではない。無視しているわけでもない。けれど、今まさに我慢の波の頂点に立ち、それに抗うので精一杯なのだ。

たとえこれを乗り越えても、オシッコは消えてなくなるわけでもない。いつまで我慢を続けても、根本的な解決にはならないのだ。途方にくれる３人の視線は——いつしかカウンターの片隅に用意された、大きなプラスチック容器に注がれていた。

麻美も、奈緒も、由紀も。全員がもう何時間も前から一度ならず何度も『それ』を視界に捉えながら、あえて意識から締め出していたもの——力強く大きな、どっしりとした透明の容器。

麻美たちの『ビール腹』など、たちどころに解決してくれるだろう、大きな大きな入れ物を。

「えーと、ひのふの、……もういいや、ジョッキ面倒だから、とりあえずピッチャーふたつで！！」

「あ、こっちもそうしょ。ピッチャーおねがい！！」

大きく膨らんでエプロンのおなかにせり出す『ビール腹』。もはや、３人の我慢に対して、ちゃちなジョッキなどでは到底つりあうわけもないのだ。たかだか５００ｍｌのガラス容器などでは、試すまでもなく物足りないのは火を見るよりも明かだった。

そう、どれだけ控えめに見栄を張ってみたところで、中ジョッキ程度では注ぎ込んだオシッコはそのまま溢れてしまうに違いない。

だから——容量およそ１．８リットル。巨大な空っぽの容れ物は、今の麻美たちにとってとても、とても都合がいい。

ちょうど数も三つ。３人の『ビール腹』を心ゆくまで満足させてくれるだろうプラスチックのピッチャーは、頼れる大容量と、どっかりとしたサイズの安定感を示し、無言の存在感で３人を誘惑している。

いますぐにあれをまたいで、しゃがみ込んで、このおなかを膨らませ続けているオシッコを、一滴残らず思いっきり出せたら——どんなに気持ちのいいことだろう。そう、まるであのビールサーバーのように。

「——ば、馬鹿なこと考えてないで、は、早くしなきゃ！！」

「そ、そうですねっ！！ い、行ってきますっ」

「……ええっと、こ、このお料理どこだっけっ」

掠れた声で、３人は同時に叫ぶ。

そうやってわざと意識を逸らさなければ、本当に今すぐこの場で、３人ともそれを始めてしまっただろう。

出したくてたまらないオシッコを、必死に押しとどめ、約１．８リットルの、巨大な空っぽのプラスチック容器がもたらす誘惑に、麻美はビール腹をエプロンの上からぎゅうっと握り締めて、必死に必死に抗うのだった。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 車の後部座席の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/13/2009 23:24:23

BODY:

どこまでも続く終わらない渋滞の中、車内にはけだるい空気が満ちていた。3回目のリピートを繰り返すCDアルバムの歌声は、初めの頃に比べてかなり色あせて聞えてしまう。

連休最終日の帰郷ラッシュによって、高架の上の3車線を何十キロ先までも続くテールランプの長行列で埋め尽くしている。

もはや高速道路とは名ばかりになった上り車線の上、ハンドルを握る父親が諦めたように溜息をつく。

「動かないわねー……」

惰性と共にCDを止め、ラジオをつける母親。無機質なニュース番組が今日の出来事を読み上げてゆく。

デジタル時計はとつくに8時を過ぎたことを知らせていた。これからどれほど順調に渋滞が進んだとしても、家に帰りつくまでには繭がいつも眠る時間をとつくに超えているだろう。

「繭、もう眠い？」

「う、うんっ」

「そう？ ……眠かったら無理なくていいわよ。おうちに着いたら起こしてあげるから」

「う、うん……」

後部座席の娘を案じ、シートから顔を覗かせる母親に、繭は身体を強張らせたまま、曖昧に頷いた。

たっぷりはしゃいで遊びつかれた少女の身体は確かに休養を欲していて、油断をしているとふいに顔が落っこちてきそうになる。けれど、繭はそんな頭を一生懸命左右に振って眠気を追い払い、息を殺しながらぐっと座席に腰を押し付けていた。

「……んっ……」

腰奥にじんじんと響くむず痒さはいや増し、少女の身体を休むことなく侵食してゆく。そおと伸ばした手のひらの下で、下腹部は硬く膨らみ、閉じた脚の間には一瞬も気の抜けない緊張感が張り詰めている。

（でちゃう……っ、トイレ、はやくおトイレ……っ）

自分の下半身が執拗に要求する『おトイレ』の誘惑を必死になって振り切りながら、繭は一人孤独に、生理現象との戦いを続けていた。

助手席の母親と運転席の父親に気付かれないように、すこしずつ身体をくねらせて、脚の付け根を後部座席の中央、軽く盛り上がった部分に押し付ける。できるかぎり音を立てないようにと慎重になればなるほど、些細な衣擦れの音が余計に響くような気がした。

（おトイレ、したいよお……っ）

小さな胸を羞恥と煩悶でいっぱいにしなが、それでも繭はそのことを口に出すことはしない。お気に入りのペンギンのぬいぐるみをきつく抱き締めて、少しでも気分を紛らわせながら、シートの上で小さく腰をよじる。

繭が必死に我慢を続けているのには理由がある。

わがママを言って両親を困らせたくないというのがそのひとつだが、なにもそれだけではない。

去年のことになるだろうか。

両親の用事で親戚のおじさん夫妻に預けられ、遊園地に遊びに行った帰りのことだ。その時も今日のように車が渋滞に捕まってしま、遊園地を出るときにトイレを済ませていなかった繭は、車の中でどうしてもおしっこがしたくなってしまったのだ。

とうとう我慢できなくなった繭は顔を真っ赤にしなが、トイレに行きたいと切り出した。けれど、繭を待っていたのは無常にも、道路の隅っこで済ますようにという無慈悲な言葉だった。

無論なが、繭はそれを拒否した。しかしそんな少女の繊細な羞恥心や芽生えかけた乙女心など、まるでただの感傷とばかりに子ども扱いされた繭は、渋滞でずらりと並んだ車の間を引きずられ、道端の側溝におしっこを済ますことを強制されてしまったのである。

激しく音を立て、乾いた道路に飛沫を散らして大きく広がる自分のおしっこを、何十人という人に目撃されたことは、繭の心に大きな傷をつくっていた。

あんな目に合うくらいなら死ぬ方がよっぽどましだと、掛け値なしに繭はそう思っていたのだ。

（ふぁ……っ）

ぞわり、とおしりを撫で上げ腰を伝い、背中を這い登る感覚に、繭はぎゅっと目を閉じる。ぬいぐるみはますます少女の手にきつく抱きつかれ、繭と共に苦しげに震える。

いま、この近くにトイレなどないことは繭も十分に分かっている。だからこそこでそんな事を口にしても両親を困らせるだけだし、まして近くの道端で済ますなんて、それこそできることではない。

（……おねがい……でちゃだめ……っ）

もはや祈ることしかできない無力な少女は、くねくねと腰を座席シートに押し付ける。

こんな状態で眠れるわけがない。もし仮に眠れたとしても、その時は間違いなく夢の中でトイレに掛けこんで、遠慮なく思い切りおしっこを出してしまうことだろう。目が覚めた頃にはオネショで後部座席が水浸しの大洪水になるのは目に見えているのだ。

『——情報をお伝えます。現在〇〇高速、上り方面、××インターチェンジ付近より40kmの渋滞——』

ニュースの交通情報に、父親がやれやれと頭をかく。

「どうする、次で少し休憩するか？」

「……その方がいいかしら。でも、もっと遅くなっちゃうんじゃない？ あなた、明日も早いんでしょ？」

「そうなんだよなあ……もう少し早く出ればよかったか……」

次のサービスエリアまで『あと5km』の表示の案内板が、助手席からも見上げるような位置にある。この案内板が見えてから、車が通り過ぎるまでに二十分もかかっているのだ。

焦っても仕方がないが、この先にどれだけ時間がかかるのかを思うとうんざりするのはどうしようもない。

そんな両親の会話をはつきりと理解しきっていたわけではないが、少なくともあまりよくない状況だというのは繭も分かっていた。言葉にせずとも分かる焦りが、ちりちりと繭の背中を焦がす。

（……はやく、おトイレっ……）

きゅん、とスカートの奥、ふわふわの布地に包まれた部分の一番奥が疼く。おなかのおくに閉じ込められた熱い液体が、じわじわとあふれ出してくる予兆に、繭は背筋を緊張させた。

「あ、っ……」

小さく声を上げてしまい、繭は慌てて口を閉じなおした。ぬいぐるみから片方の手を離し、ぎゅっと閉じ合わせた足の間に押し込む。

おしりの下に何かを押さえつけるように、繭は座席を軋ませ、息を詰めてもじもじと腰を揺すった。

挟んだ手のひらを、下着の上から股間に擦りつけるたび、じんっ、と響くむず痒い感触と共に、ほんのわずか尿意が和らぐ。

ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ。

少し動いては休み、休んでは動き、少しずつ大胆に、繭は腰を前後左右に座席シートにねじつけては身体を小さく跳ねさせた。抱き寄せたぬいぐるみもぴったりと少女の下腹部にくっついて擦れ、布地越しに切ない尿意に震える股間を慰める。

じゅ、じゅっ……

熱い水音が、下着の奥で響く。じんわりと広がる暖かな湿り気が、少女の脚の間の布地をたっぷりと濡らしてゆく。漏れ出したおしっこは、腰をびりびりと痺れさせるほどに鋭い、刺激的な解放感をもたらす。

「……だめ……っ！！」

（おしっこ、がまんっ、おしっこがまんっ……）

小声で呟き、がまんの文字を呪文のように何度も繰り返す。

必死になってダムの決壊を塞ぎ止めようとする頭とは裏腹に、下半身は勝手に動き、繭の言うことを聞いてくれない。またもほんの少し、おチビりが発生してしまう。

じゅわあ、と吹き出した滴は、今度は股布に吸収しきれず、おしりのほうへと溢れてしまった。

(ま、また……だめなのにつ……がまんしなきゃっ……)

脚をきつく交差させ、おしりをもじつかせ、繭は何度も何度もおチビリを押さえ込もうとする。

効果的におしっこの出口を押さえるには、ただぐっと体重をかけるだけではなくて、リズムを刻むようにその上で体重を乗せる必要があった。ぎゅ、ぎゅっと座席シートのでっぱりに脚の付け根を擦りつけているうち、徐々に繭の様子に変化が訪れる。

(あ、あつ、あつあつ)

じわあ、と漏れたオシッコが、下着の上に染み出してゆく。

力の抜けた手はもう意思を持って股間を押さえることができなくなり、力なく垂れ下がる。同時に、抱き締めていたぬいぐるみも脚の付け根まで降りて、その丸っこい脚が湿ったスカートのうえからあそこに擦り付けられてゆく。

もどかしい刺激と、びりびりと痺れるような甘い電流が腰を浸し、いつしか繭を支配していた。頭の芯がぼうっとした熱に侵され、小さな唇がこくと口の中のつばを飲み込む。

「あ、……う、あう、っ」

もどかしさにたまらず、繭はぬいぐるみを脚の上に押し付ける。ぎゅうっと引き寄せられたペンギンは、少女の小さく膨らんだ下腹部にぎゅうっと押し当てられ、たぷりと湿った下着の上から布地を擦り合わせる。

(っ、だ、だめ……こ、こんなことしたら、でちゃう……っ)

腰を痺れさせるイケナイ刺激に、かろうじて残った繭の理性は行為の中断を要求するが、身体はもはやそれを止められない。ぐっとあそこをおさえると確かに一旦は尿意が遠のくが、そのあとに勝手に脚の付け根が緩み、熱い奔流が吹き出しそうになるのだ。こんなことを続けていたら本当にオモラシをしてしまうと、繭の頭のどこかに残った理性はそんな警鐘を鳴らしていた。

(だ、だめえ……っ、おしっこでちゃうっ……！！)

けれどももう止まらない。おしっこを我慢するため——そんな言い訳をつかって、繭は座席の上に押し付けたぬいぐるみの上、ちょうどペンギンのおなかの上あたりに脚の付け根を押し付けるようにして、大きく跨った。

それはちょうど、ずっと小さき時に使っていたおまるのように。そんな事を思い出して繭は真っ赤になってしまう。

しかしもう抑えきれない。

(ごめんね……ペンギー……っ)

大切なぬいぐるみに何度も謝りながら、ついに繭はまたがったぬいぐるみの上に、股間をきつく押し当てる。

擦れる布地の感覚がびりびりと脚の付け根の奥深くまで浸透し、少女の未発達な感覚を激しくえぐる。

同時に繭はぎゅっと締め付けていた股間の力を抜いた。布地の奥ではちきれそうに膨らんでいたおしっこの孔がぷくりと緩んで、下着の奥に激しい水流を撒き散らす。たちまちに水浸しになった下着から溢れ出した熱い奔流は、ぎゅうっとくっついたぬいぐるみに受けとめられてゆく。

「あ……はう……っ」

真っ赤になった耳たぶが小さく震え、繭はぎゅっと目を閉じたまま背中を突き上げる熱い衝撃に耐えていた。脚の付け根で火花がはじけて、ぱちぱちと頭を焦がしているようだ。

じわじわじゅう、じゅるじゅじゅじゅううう……

まるで焼けた鉄に水をかけたときのような激しい放水音は、けれど繭だけに聞えているらしかった。両親は渋滞にぼんやりと視線

を向けたまま、繭がたったいま、ぬいぐるみにまたがってオモランをしていることにも気付かない。

繭に組み敷かれたペンギンのぬいぐるみは、まるで本来そんな用途があるかのように、少女の股間が吹き上げる熱い水流を受け止め、たっぷりと染み込ませてゆく。

「んん、っ、…っ、ふうう……っ」

おなかを張り詰めさせていたものが抜けてゆくに連れ、繭の全身がほぐれ、弛緩してゆく。緊張が薄れる下半身からは、ますます本当の勢いで我慢し続けていたおしっこが迸り、ぬいぐるみに染み込まされていくのだった。

そうして、たっぷり一分近くをかけてありったけのおしっこを絞りだした時、ペンギンのぬいぐるみの下半身はすっかり色を変えていた。

ぼんやりと熱に霞む頭でしばらく呆然となっていた繭だが、やがて我に返って、こっそりと座席シートの上から降りた。

「どうしたの、繭？」

「あ、うん、あ、暑いかなって……」

さりげなく窓を開けながら、籠った匂いを逃がし、繭はあわてて振り向いた母親に取り繕う。

(……ごめんね、ペンギー……)

言葉にはせず、心の中でそういうと、ずっしりと重くなるまで自分のおしっこを受けとめてくれた大切な友達をぎゅっと抱き締め、繭は今度こそ深い眠りに落ちた。

(書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 永久我慢の狂想曲 CASE : 浅川静菜 1 1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 06/13/2009 23:27:12

BODY:

いまは3時間目の授業だろうか。もう、ほとんど何も聞こえていない。

膨らんだ尿意が静菜の体の全部を占領して、頭の中まで膨らみきってしまったかのようで、まともな思考能力は追い出されてしまっている。耳元でちゃぷちゃぷと揺れる水音の幻聴すら響く。

懸命の努力のせいか休み時間よりはぐらか落ち着いていたが、もはや安定期とはいいいがたい。もはや静菜の排泄は限界のカウントダウンの最中にあり、いつまた、あの大津波がやってくるのかはわからなかった。

(と、トイレ、オシッコ、オシッコしたい、オシッコ出したいっ……)

あんなに緩めたベルトは、いまはきつく静菜のおなかに食い込んでいる。それはつまりお腹の内側に膨らみきった膀胱が、少女の身体におさまりきらずに外側にせり出してきていることを意味している。

膨らみきった体内の水風船に胃が持ち上げられる気持ち悪さも感じられる一方で、張り詰めた尿意のむず痒さは股間のすぐ上にくすぶり続けている。『おトイレ』が意味をなくし、身体の中に尿意を『飲み込む』ことができなくなって、その証拠がどんどんと身体の外へあふれ出しているのだった。

(オシッコ……オシッコ、オシッコ、っ……したいよお、オシッコ出したい、オシッコ出したいっ……)

下腹部を中心に広がる重苦しい感覚は、腰裏まで響くほどに辛い。そっと触れてみると、比喻を抜きにしてまるでタイヤのような感触。鍛えられた腹筋に力を込めてもここまで硬くなることはないかもしれない。

そっと撫でながら確かめてみれば、みぞおち近くまで尿意が膀胱に連動している。こんなになるまで我慢をしてしまう自分の身体に、あらためて自分の異常度合いを自覚してしまい、静菜は言いようのない苦悶に奥歯を噛む。

いまも一見程度では分からないだろうが、じっと観察すれば我慢し続けのオシッコでみっともなくお腹を膨らませているのに気付かれてしまうだろう。そもそも、オシッコを我慢したくらいでここまではっきりと身体に異状が見えることそのものがあり得ないのだ。

(トイレ行きたいっ、と、トイレしたいっ……も、もうおなか、空っぽにしたいよお……っ)

ぱんぱんの下腹部をさすりながら、静菜は思う。

この時静菜が思い浮かべていたのは、昨夜の公園での出来事。何年ぶりにチャレンジした公衆トイレの個室のことだった。覚悟を決めたものの結局、自分は家の外ではオシッコを済ませられないことを改めて自覚させられた、新しくも苦い記憶だが——それでもなお、静菜はそのトイレを求めざるを得ない。

そう、ここでいう“トイレ”とは『おトイレ』ではなく、本当のトイレ。今は世界中のどこにもない、つまりは静菜がオシッコを済ませられる場所のことだった。

ふだん静菜が学校で考えたり、行きたいなと思うトイレとは、まず間違いなく当たり前のように『おトイレ』のことを指す。場所として

は同じものを指すわけだが、静菜にとって他の生徒が使う女子トイレは、我慢に疲れた括約筋をほぐし、おなかをマッサージして更なる我慢を可能にするための一時休憩の『おトイレ』でしかない。

けれど。

(トイレ……トイレしたいっ……も、もう『おトイレ』じゃだめ……ホントに、限界っ……)

この時静菜は確かに、学校のトイレを、家と同じ本当のトイレとして欲していた。

家のトイレ以外でオシッコのできない静菜にとって、クラスメイトが言う他の“トイレ”はすべて、ニセモノと同じ意味。『おトイレ』のための場所にしかなりえない。

静菜にとって学校で“オシッコをする”ということは、たとえば裸になってところ構わず走り回るような、そもそも“そうしたい”と考えることからしてありえないことなのだった。

(な、なんで、私、ちゃんとお外の“トイレ”使えないんだろ……っ。ほ、他の子はみんな、ちゃんとオシッコできるのに……わたしだけ……っ)

静菜の『おトイレ』はもう限界を迎えて久しい。

朝から時間さえあれば皆の視線を逃れて必死に『おトイレ』を繰り返してきた。

前にも述べたとおり、そもそもがこのオシッコをより我慢できるようにする『おトイレ』自体も、静菜にとって普通の女の子がトイレで排尿をするのと同じ意味だ。すくなくとも静菜は、学校に通うようになってから今日まで、そういう意識でいる。

だから、そもそも『おトイレ』は、ちゃんと女子トイレの個室に入ってすべきものだ。教室であそこを抑え、身をよじり、声を潜ませて『おトイレ』をするのは、静菜にしてみれば教室の中で放尿しているのと似たようなものである。

だとすれば、今日、静菜はこの教室で何回、いや何十回オモラシをしたことになるだろう。

十年近くも守ってきた決まりを破りつづけ、静菜の羞恥心は極限に達しつつある。前押さえなんて普通の女の子でも見られたらたまったものではないが、静菜にはそれで受けるショックの桁が違うのだ。

(うっ、ま、また！？ また来ちゃうっ！！ また、オシッコしたいのが来ちゃうっ……！！ だ、……ダメえ、がまんっ、がまんしなきゃ……っ！！)

暴れ続ける膀胱を必死に撫でさすり、なだめはするものの、その効き目はほとんどない。不要な水分を身体の外にはじき出そうとする生理現象のまま、ひきつるほどに鋭い尿意が脚の内側に滑り降りてゆく。

わずかな身じろぎで椅子の上で脚をすり寄せ、んんっ、と小さな吐息がをこぼす。『おトイレ』の始まるギリギリの、反則スレスレの我慢。

だがそれも空しく、スカートの下できゅっとかっついた脚の付け根に、堪えようもないほどのむず痒い感覚が蓄積されてゆく。湿った砂のように感じる下腹部の中身が、驚くほどスムーズに脚の内側に集まる。

(っ、み、みんないるのに、ここ、教室なのにつ……！！ こ、こんなところで『おトイレ』なんか、ぜったいに、しちゃいけないのにっ……！！)

それは、静菜にとって教室の真ん中で、スカートをたくし上げぱんつを足元までおろして深くしゃがみ込み、湯気の立つ暖かな液体を床上にじょぼじょぼと注ぎ撒き散らすのと同じこと。

だから。せめて休憩時間のように、教室で『おトイレ』し続けるのだけは避けたかった。必死に自分に言い聞かせながら、静菜は表情を強張らせ、挫けそうになる心を励まし続ける。

だが――

「っん……っ！！」

それも限界があった。今にも熱い潮を吹き上げそうになった股間を、静菜の手のひらがぎゅうっと圧迫する。教師や周囲の目を気にする暇もない。スカートに手を突っ込んで直接下着を押さえ、オシッコの出口にフタをする。そうした直接的な方法でなければ、もう進むオシッコを塞ぎ止められなかった。

「んう、んっ、、んうっ……ゅっ」

またも小さなめきが断続的に始まる。顔から吹き出した湯気が、かあっと少女の頬を曇らせ、俯いた静菜の目元に涙が滲む。

さっきの休憩時間から、静菜の心の中で“何か”の箍が外れてしまっていた。攻勢をかけてきた尿意に耐え切れず、これまでどうにか保たれてきた均衡は崩れ去る。

「ゆ、んっ、んう、～～……っっ！！」

今度は休み時間ですらない。クラスメイトが真剣に授業を受けている授業中だというのに、静菜の理性はまたも徐々に尿意に侵略されつつあった。静寂の中、響く静菜の声に、何人かの生徒が首を傾げる。

オシッコの大攻勢に負けて始まった『おトイレ』は、両手で必死におなかを押さえ、背中を丸め息を殺して呻く静菜を、いつしか教室内から際立たせていた。

「——さん。——わさん」

「んく、ゅっ、んう……っ！！」

あと少し。あとちょっと。『おトイレ』のクライマックスとばかり、ようやく弱まってきた猛烈な水圧をなんとか下腹部の奥に押し込めようと、静菜が股間に重ね当てた両手に懸命に力を入れて下着をねじりあげていた——まさにその時。

「浅川さんっ！！ 聞いているの！？」

俯いて机に身体を押し付けていた静菜を、するどい声が叱りつける。

（え……）

気付けば、周囲のクラスメイトの視線は輪を描くように、静菜に注がれて。腰に手を当てた教師が、教科書片手に呆れたように机のすぐ前で、静菜を見下ろしていた。

「もう……さっきから何をしているの、あなたは？」

「え、あ……」

ようやく、静菜は自分が、授業中の教室の真ん中で、あろうことか一心不乱に『おトイレ』に夢中になっていたことに気付く。そして、その全て、一部始終を、クラスじゅうに見られてしまっていたことを。

「あ、あ……ッ」

（わ、私……な。なに、して……ッ！？）

静菜とクラスメイトたちの『おトイレ』の意味の違いを抜きにしても、静菜がスカートの中に手を突っ込んで、押し殺した声を上げていたことには違いがない。

みるみるうちに少女の顔が朱に染まり、呆気にとられていた少女の表情に猛烈な火が灯る。怪訝そうなクラスメイトの視線が、ますます静菜を孤立させ、繊細な思春期の少女の心をえぐってゆく。

「——あ、あのっ、ち、違うんです、その、っ」

歯の根が合わないほどに顎が震え、ぞおとした冷たさが背筋を這い上がる。

「違うじゃないわ。……もう、授業中でしょう」

「え、あ、あの、だからっ」

はあ、と教師は大きく息を吐いて、教科書で廊下を示す。

「そんなになるまで我慢しないで、ちゃんとお手洗いに行ってください。もう……幼稚園じゃないんだから」

教師の声に、周囲からちいさく笑い声が上がる。

静菜は口を『え』の形にしたまま、ぼかんと教師を見上げた。

「早く行ってらっしゃい。今度からは、休憩時間中に済ましておきなさい。いいわね？」

溜息とともに、念を押す教師——

それで、この件はおしまい、ということらしかった。

「え……っど……」

まったく、ぜんぜん、これっぽっちもわけも分からずにいるままに。

静菜はそのまま、見えない腕につかまれたようにして教室の外に引きずり出されてしまう。もう立ち上がれないくらいの我慢の最中だったはずだが、それも良くわからない。教師が手を貸したのかもしれないし、クラスメイトが手伝ってくれたのかもしれないし、羞恥に逃げるようにして静菜自身が逃げ出したのかもしれない。

いずれにせよ。

(……あ……)

教室から放り出された静菜を、授業中の、静まりかえった無人の廊下が出迎えた。どこか薄ら寒いその通路で、静菜はまた——ぶるっ、と身体を震わせる。

——早く済ませてきなさい。

ふらふらと歩き出した静菜の脳裏に蘇る、教師の言葉。

けれど。

けれど、だけれど。

たとえ、こうして教室から外に出ることができても。そのまま女子トイレに行ったとしても。

そこは、静菜がオシッコを済ませられる場所ではないのだ。

綺麗な、女の子が秘密の行為をするための、特別な個室を前にしても。静菜はなににもできない。いや、何をすればいいというのだろうか。

「嫌あ……っ」

またも振り返した尿意に、必死に脚をくねらせて、

静菜の喉が悲痛な声を絞り出した。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: プールと水着の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 07/27/2009 20:40:05

BODY:

梅雨明けの青空、燦々と降り注ぐ陽射しをいっぱい浴びて、賑やかな声が揺れる水面に響き、歓声とともに水飛沫が上がる。夏休みを目前にして最後のプールの授業は、2時間続きの大盤振る舞いとなっていた。

騒がしいクラスメイトたちの笑顔につられて、残念ながら見学をしていなければならないプールサイドの数名も、我慢できなかったか制服の裾が濡れるのにも構わずに一緒になって騒いでいる。

そんな中、喧騒から少し外れて、所在なげに金網に寄りかかる少女の姿がある。

凹凸の控えめな身体を慎ましく覆う紺色の水着から、剥きたての卵のような白い手足が覗く。肩さほどの髪は、水に湿ってもなお分かる程度の癖毛。脱いだキャップは後ろ手に組んだ指に引っかかって、雫をぽたぽたと垂らしている。

「んっ、ふ……んっ……」

小さく鼻にかかった声で、久賀智里は小さく唇を開け、荒い息を飲み込んだ。

できるだけ『なんでもないですよ』という顔をしているつもりのようなだが、一度注目すれば無視できないほどに、少女の様子は目に

付いた。

眉は困惑に歯の字に垂れ、視線もそっと周りを窺うように控えめ。水泳キャップを掴む身体の後ろに回した指で金網を握り、そこを支点に身体を左右に揺すっている。

細い鎖骨からは水滴と汗の雫がつう、とこぼれて、内股の膝の上では細い太腿がもじもじと寄せ合わされる。

「っ、ふぁ……くう……んっ……」

プールの喧騒に紛れ、そんな小さな声は辛うじて教師たちの耳には届いていない。

あまり日焼けしていない細い喉が小さく震え、硬く握り締められた手のひらが、一番行きたい場所を避けて、ためらいがちに身体の前を行き来する。

熱く灼けたプールサイドの上では、小さな裸足の足が交互に体重を支え、寄せ合わされる太腿が水着のクロッチをきゅうと挟む。いっそ腰を下ろしてしまったほうが楽だろうか。そんなそぶりこそ見せるものの、同じように見学しているクラスメイトをちらりと窺い、智里は結局そのまま動けないままだった。

と、その時だ。

左右に小さく揺すられていた、紺色の水着に包まれた細い腰が、不意にぴくんと上に跳ねて硬直する。

「ふぁ……っ！？」

恥骨を響かせぞくぞくと背筋を這い登る感覚に、さっきまでよりも切実な悲鳴が、少女の唇を飛び出した。

たまらずに、きつく交差させた膝がふるふると震え、よじられた腰がくねくねと円を描いて揺すり動かされる。

細い体の小さなおなかの中、脚の付け根にできた逆三角形の隙間の真上。

少女の小さな膀胱を、ぱんぱんに満たす恥ずかしい液体が、ますますその存在感をあらわにしている。くつくつと煮えたぎる尿意はなお激しく、智里の下腹部に昂ぶっていた。

（と…トイレ……っ、行きたいよう……っ）

きゅんきゅんと排泄の欲求を訴え、閉じ込められた恥ずかしい液体の解放をせつつ正直な下半身に対し、極度の恥ずかしがり屋の智里の心は、手を上げて『先生、トイレ』の一言がいつまでも言い出せずにいた。

教卓ので発表どころか、授業で手を上げることもできない智里の繊細な心は、更衣室のすぐ脇にあるトイレまでのほんのわずかな距離を、地平の果てまでもに等しいほどに遠ざけているのだった。

そのすぐ側では、そんな智里の心中など知る由もなく、高く水飛沫を跳ねさせて、クラスメイトたちが楽しげに騒いでいる。

プールサイドに上がっての十分間の休憩で、再び元気をチャージしたみんなは、強い夏の日差しの下で時間を忘れて遊んでいた。これからあと40分の4時間目も、あっという間に過ぎ去ってしまうだろう。

「ふ……うっ……」

けれど、智里にとってその40分は果てしない時の果てに近いように思われた。

3時間目の授業は、智里もクラスの皆に混じって、一緒にプールに入っていた。しかし、その頃から——正確には2時間目の途中あたりから、智里の身体は激しくトイレを要求していたのだ。

しかし、他の子ならばいざ知らず、着替えて教室から移動するだけで休み時間のほとんどを使ってしまう智里には、途中でおしっこのためにトイレに立ち寄る、という選択肢はない。

つまり、その時点で智里は4時間目が終わるまでトイレに行けない可能性が大、だったのである。

（……おしっこ……っ）

みんなのすぐ側でじっとおしっこを我慢することの恥ずかしさに、紅くなった頬を小さく震わせ、智里はもう一度、更衣室の向こうへと意識を飛ばす。

無論、プール授業中の唯一のチャンスだった十分間の休憩時間——そのわずかな自由に、智里が黙っていたわけではない。しかしもともと身体を動かすのが苦手な智里には、教師の号令も届かずはしゃぐクラスメイトを掻き分けてプールから出て、さらに大混雑のトイレ前の行列を跳ね飛ばし、奥に並ぶ個室まで駆け込むなど、到底叶いはしなかったのだ。

結局、順番が回ってくる前に並ぶだけで休憩時間は終わりとなり、智里は下腹部に張り詰めた膀胱を抱えたまま、プールに戻ることになった。

しかし、その頃には水面に爪先を付けるだけで水着の奥のダムが決壊しそうな有様だった。

『さとちゃん、大丈夫？』

プールサイドで立ち往生していたところを、少し気分が悪くなったのでは、と察してくれた友人のおかげで、少し見学となったものの、授業中ということもありプールサイドを出ることはできない。

まるで背中の中は、智里を閉じ込める牢獄の象徴のようにすら思えてしまう。背中を預けてじっと立ち尽くす智里は、焼けるような日差しの下で濡れた水着に包まれた下腹部の緊張をさらに高め、小さな膀胱を満たす液体の圧力にひとり必死に耐えていた。

(……だめ、……おしっこ……がまんっ……)

体温と日差しで熱された水着は、身じろぎするたびに吸った水を滲ませ、股間を包む内当て布の感触を意識させる。

じわ、と汗の溜まった水着の背中から、重力に引かれて湿った水がおしりの方へと流れ落ちる。そのくすぐったさに思わず両脚を捻ると、水を含んだ水着が絞られて、じわ、と滲んだ水が溢れては内腿を伝って膝裏からふくらはぎへと滑り落ちてゆく。

たまたま、智里の手は背中からおしりの上を回り込んで、脚の付け根の水着の股布部分を背中の方へぐいと引っ張り、脆くも震える出口を押さえ込もうとする。

緊張して強張る内腿の隙間から、ぼた、ぼた、とタイルの上にこぼれてゆく水滴それは、ますます智里の我慢をきつくさせた。

(で、でちゃう……)

ふる、と小さく震えた身体の訴えは、より切実なものになっていた。困惑に及ぶ視線は、頼りなく周囲をさまよい、濡れぼそった前髪の下でますます眉は垂れ下がる。

本当は、こちらもぎゅっと水着の前を押さえたいもう一方の手は、智里の身体の前で折りたたまれて、肘でさりげなくおへソの上を押さえ、曲げられた指先が閉じられた唇に当てられる。

「っ、あ、っ……んっ……ふっ」

(と、トイレ……はやく、トイレ……っ、おしっこ……っ)

そこまでしても、尿意がおさまる気配はなかった。

水着のクロッチの下でぷくりと膨れ上がる尿意を必死に押さえつけ、智里は浅く、荒く息を繰り返して、寄せては返す波をやりすごす。

本来の容積を遥かにオーバーして、我慢し続けたおしっこでずっしりと重くなったダムを下腹部に抱え、智里は少しでも楽な姿勢を探そうと、ぐいぐいと裸足のかかとをタイルに押し付け、もう一方の足を絡めるようにして身体をねじった。

ぎゅうっと、水着の股布を引っ張る指に力が籠もり、伸びた指先が肌に張り付く布地をぐいと押し上げて、むず痒い感覚が集中する出口を直接抑え込んだ。

じん、と痺れるように敏感に反応するそこに、意識を集中する。

「……ふうっ……はぁっ……」

荒い息をこぼす智里の頬は紅く染まり、鼻の頭にもしっとりと汗が浮いていた。

いくら波を乗り越えても、下腹部でくつくつと煮えたぎる尿意は引かず、それどころか増す一方だ。もはやそんなレベルではないことを、智里は身体で理解する。

（っ、と、トイレ……っ）

心の中では必死に訴えるその言葉は、しかし誰にも届かない。水遊びに夢中のクラスメイトも、それを監督するので精一杯の教師たちも、その傍らで今にも漏れそうなおしっこを、誰にも言い出すことができず、その場で必死に我慢している智里がいるなどということは、思いもしていないのだ。

紺色の布地を押し破り、激しい水流が吹き出して、脚の付け根の隙間を満たし、両脚を伝ってぱちゃぱちゃと滴り落ちる——そんな結末は、そう遠くないものと思ってしまうほどだ。

「っ……」

また、横目でちらり、とプールの出口を見、けれど智里はその場から動けない。声を上げたり動いたりすれば、クラスメイトの注目を浴びてしまうことは避けようがなく、その緊張が智里を縛りつける。

先生を呼ぼうとする声が喉に張り付いて、手足が強張り、足は地面に縫い止められたよう。ほんのわずか、身動きするので精一杯だ。

そうこうしているうちに、きゅうんっ、と敏感な膀胱が反応する。

少しだけ気を緩めていた瞬間を狙い済ましたかのように、大きな尿意の津波が智里に叩きつけられた。押さえつけていた出口がじわっと緩み、一番脆い場所めがけて熱い水流が押し寄せてくる。

「あ、あ、あっ」

かくかくと唇を震わせ、智里はきつく歯を食いしばった。

とっさに空いている手で、太腿の上部分の水着を掴み、さらには股布のクロッチを掴み上げて、ぐいっとねじるように引っ張り上げる。引き伸ばされた布地の隙間からは太腿を越えて、足のその付け根から恥丘のすぐ側まで、ふっくらとした白い肌があらわになった。

智里は引っ張り上げた布地をねじり、脚の付け根の合わせ目に食い込ませて、滲み出す熱い雫を塞ぎ止めようとする。同時に両脚がきつく交差し、智里はその場で準備運動のように身体をねじり、くねらせる。

じわ、ぢょっ、じゅうっ……、ぱた、ぱたたっ、

（だ、だめっ、出ちゃだめ……っ）

半分剥き出しになった少女の股間は、緊張に震え、けれど間断的に先走りを吹き出させていた。がくがくと震える膝の上で、引っ張り上げられる水着の布地に包まれた股間の先端から、熱い雫が滴り落ちる。

顔中を真っ赤にして、歯を噛み締め、涙を滲ませ、智里は背中を波打たせ、ぎゅうぎゅうと股間にくいこませた水着をねじった。

「っ、あ、あっ」

（が、ガマン……できないっ。…お、おトイレえ……っ！！）

必死の抵抗も空しく、小さな出口がぶしゅと水流を吹き上げた、さっきよりも多くの水流が、閉じあわされた太腿の間を伝ってゆく。じわ、じゅわ、と水着のクロッチがたっぷり含んだ水分を溢れさせ、股間の先端にびりびりと走る甘い痺れが、智里がありっただけの力で張り詰めさせている緊張の糸を断ち切らんと誘惑する。

「あ、っ……～っ……！！」

身体を中心を押さえ込む両手と、細い肩がぶるぶると震え、痙攣して力の抜ける両足は智里の体重を支えきれず、がくがくと揺れる腰がずり落ちてゆく。

後ろに反り返った身体が、弓のようになり、金網に預けられた背中が左右に揺れ絵動く。ぎゅうう、と渾身の力で水着を引っ張り上げる手も、限界を訴えるようにぶる、と震えていた。

さらに、押さえ込まれたダムが決壊の余波を感じさせるごとく、じわ、と少女の目元が潤み、あふれ出した涙が、智里の頬へとこぼれてゆく。

（だ、っ、あ、で、でちゃう……っ！！）

プールの片隅で、人知れず繰り広げられていた孤独な戦いは、ひっそりと終焉を迎えようとしていた。

じゅう、という、チャックを開けるときのような音に続いて、ぽた、ぱちゃ、と小さな水の音。それはたちまち連続し、智里の我慢が押し破られる。堰を切って吹き出した熱く色濃い水流は、食い込ませ押し付けられた水着の股布にぶつかり、そのまま飛沫を撒き散らした。

ちよろ、ちよぽぽ……ぱちゃぱちゃぱちゃっ……

もともと通水性のいい布地はあっさりとその保水力の限界を超え、股間をささやかに遮る布地にぶつかる水流は、どこに染み込むこともない。智里の身体の内側から勢いよくはじき出された水流は、水風船が中身をほとばしらせるように、大きな放物線を描いてプール脇のタイルの上に飛び散ってゆく。

「や、やだあ……っ、あ……っ」

じょじょ、じょおっ、じょぽぽぽお……

我慢に我慢を重ねたせいで、小さな膀胱に限界まで注ぎ込まれ、煮詰まった智里のおしっこはその小さな身体にはまるで似合わない、猛烈なものとなっていた。漏らすまいと必死になった分だけ、吹き出す勢いは強く激しく、まるで成人男性のそれに近い勢いと量だった。

女の子のものとは思えないおしっこの水流は、寄せ合わされた智里の足を伝い落ち、下半身を包み込む熱い感触をとまって、智里の足元に特大の特設おしっこプールをひろげてゆく。

冷たいプールの水よりもずっと熱く深く、煮詰まった恥ずかしい液体は、いつまでも激しい水流となって足元にこぼれ、智里の裸足の指の間を通じて、プールサイドに広がり続けるのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 買い物帰りの話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 07/27/2009 20:41:45

BODY:

賑やかな大通りから一本、道を入ると、たちまち喧騒は遠ざかってゆく。

植え込みと赤レンガで舗装された歩道は途切れ、真新しいアスファルトが規則正しく碁盤目のように続く清潔な佇まいの一角は、まだ開発の続く新興の住宅地だ。

昨今の不景気で開発が遅れ、まだ分譲の幟がそこそこに見える区画には歯の欠けた櫛のように更地も目立ち、さほど人通りも多くない。

「んっ、しょ……っ」

夏休みの午後とあって、車も滅多に通らない道の真ん中あたりを、危なげな足取りが進んでゆく。

頭の後ろで左右に髪を括った年端もいかない少女は、身体の前に大きなレジ袋を両手で抱えていた。レジ袋のロゴは、ここから程近い量販店のもの。どうやら今日のお使いを済ませた帰りと見えた。

ぎゅーと中身の詰まったレジ袋は少女にはやや大きく、両手で持ち上げていないと地面を擦ってしまいそうだった。荷物を抱えた不安定な足元は、頼りなくふらふらと左右に揺れている。

だが、所在無げに周囲を見回し、落ち着かない足取りは、単に重い荷物を抱えているだけが理由ではなさそうだった。

ふいに、少女の脚がびたりと止まる。

「うう～～……ッ」

道路の真ん中で立ち尽くし、小さく唸る少女の眉はハの字を形作り、困惑と戸惑いをはっきり知らせていた。

は、は、と荒い呼吸が形の良い小鼻を膨らませ、唇は吐息と共に小さく噛み締められる。ほんのりと赤く染まった耳たぶは、俯き加減の少女の羞恥の度合いを知らせるよいバロメーターだ。

少女は無理をして足を踏み出そうとし、そのままよたよたとバランスを崩した。レジ袋の重さに負けた小さな身体は、踏みとどまれぬままにふらふらと道の片側に寄りかかってしまう。

「や……っ」

わずかに声を上げ、小さな手のひらがレジ袋を抱えなおす。

その時にさりげなく、少女は片方の手でスカートの前を押さえ、ぎゅー、と脚の付け根を圧迫した。

こみ上げる衝動に耐えかねてのその動作は、しかしそれだけに留まらない。一瞬だけ応援に向ったはずの手のひらは、そのまま少女の下腹部をきつく押さえたまま、動かなくなってしまう。

「んっ……」

内股に寄せられた脚は小さく震え、つぶらな瞳はきつく閉じられ、小さなあごはちゃんと突き出されて上を向く。それら全てが少女の限界が程近いことを示していた。普通に歩くこともつらいほどに、少女はその身体の中に恥ずかしい液体を溜め込んでいるのだった。未発達な下腹部を膨らませる液体は、一步ごとに危険水域を突破し激しく水面を波立たせている。

しかも、重い荷物を抱えたままでは、両手がふさがってしまい思うように前押さえもできないのだ。大通りを抜けたところで人目が途切れ、緊張がわずかに緩んだことによってか、少女は往来で幼稚園児のような我慢の仕草を披露してしまっていた。

道路の傍らの壁に背中を半分預けるような格好で、小さな脚がたん、たん、と交互に足踏みを繰り返す。同時に腰が左右に揺すられ、膝上のスカートもひらひらと揺れる。ぶれる身体と共に、ちゃぶちゃぶと揺れる水音が聞こえてくるかのようだ。

だが、もともと住宅街であるこの近所に、少女が気軽に立ち寄れるようなトイレはない。見ず知らずの家でトイレを借りるなど、まだ幼い少女にはとても考えも付かないことだった。

もうとくに幼稚園なんか卒業して、ひとりでちゃんとお使いにもいける自分が、いまさらおしっこが漏れそうなんて理由で知らない人に迷惑をかけるわけにはいかない。幼いなりに、少女にも羞恥やプライドというものがあるのだ。

「ん……っ」

下腹部がわずかに落ち着くのを見計らって、少女は再度、大きなレジ袋を持ち上げてはそろそろと進み始める。このままずっと歩いて交差点を三つ、横断歩道を二つ越えれば、ゴールである少女の家まで辿り着ける。

しかし、スーパーを出た時は我慢できると思っていたはずの家までの道のりは、いまは果てしなく遠く思える。ましてこの大荷物を抱え、寄せ合わせた膝の上に満水のダムを抱えたおぼつかない足取りではなおさらだ。

今からでもいいからもと来た道を戻ってスーパーに入り直し、トイレを借りたほうがいいのかは……そんな思いが少女の頭の端をかすめる。

「おしっこ……っ」

無視しようにも、あまりに強烈な存在感を訴える尿意が、股間からぐうっとせり上がってくる。それに押し出されるように少女ははっきりと尿意を口にしてしまっていた。同時に、歩き出そうとした脚がまたびたりと固まり、少女は道の真ん中で立ち止まってしまう。

「だめ……でちゃう……」

一度そう意識してしまえば、辛うじて保たれていた均衡は脆くも破られ、後は際限なく片方へと傾き崩れ出すばかりだ。きゅうんっ、と切なく疼いた下腹部に、少女はぶるっと背中を震わせる。

なんとか家まで持たせようという心が挫けてしまえば、身体の方も同時に音を上げる。少女の水門はこれまでの絶対的な使命だった第一目的“家に到着するまで”を放棄し、“どこか、トイレのできる所”までという短く楽な目標に、我慢のモードを切り替えてしまう。

「あ、あ、っ」

ソレは、排泄器官が放水の準備とカウントダウンを始めることに他ならない。たちまち押し寄せる膨大な尿意に支配され、少女は焦ったように脚を擦り合わせ、何かに縋るように周囲を見回す。

が、そうなったからと言って周囲の状況が変わるわけでもなく、無論の事ながらそう都合よく少女の欲求をかなえる場所など、あるはずもない。

とくに確認していたはずのことに、改めて少女は落胆し、それに連動してますます下腹部がぴくんと反応し、限界を訴える。切羽詰った尿意に押し動かされるように、少女は“最後の手段”を選ぶことを余儀なくされた。

「っ……」

それは、野ション——いわゆる野外排泄だった。

我慢しきれないおしっこをするため、トイレではない場所へと向かう——そんな自分に激しい嫌悪を感じながらも、同時にオモロシの恐怖から逃れる一心で、少女はそれを選択していた。

赤く染まった頬を隠すように俯き気味に、少女は歩く道路の反対側、更地のまま放置されて雑草が生えた区画に向って歩き出した。

雨ざらしになったどこかの不動産会社の看板を乗り越えて、柵もない更地の茂みの中へ踏み入れた少女は、そこに抱えていたレジ袋を下ろす。そのまま、周囲を念入りに確認しながら雑草を掻き分け、さらにその奥へと進んでいった。

「んう……っ」

がさがさと草を押し分けると小さな虫が飛び回り、否が応でも“お外でのおしっこ”を少女に自覚させる。何度も何度も周りを見回して、茂みの中心地へとたどり着く頃には、緊張と焦りでもはや我慢の限界はカウントダウンの秒読みを数えるまで近付いてきていた。もはや家まで我慢できないことは明白だ。

しちゃいけないことだと頭では理解できていても、くつくつと煮えたぎる尿意には逆らえず、少女はなおも念入りに回りを確認し、人目がないことを確かめてから、スカートをたくし上げ、下着を膝まで下ろして茂みの中にしゃがみ込む。

幸いにして生え揃っている雑草はかなり背が高く、少女の小柄な身体ならば背中を丸めて深く腰を下ろしていれば、よほど注意して眺めなければ見つからないだろう。

「……………」

あらわになった白い下腹部の幼い秘部、まだ細いたて筋しかないそこが、小さく震え、我慢による汗でしっとりと湿っている。

(が、がまんできないんだもん、しかたないよね……)

これから始めるおしっこに、罪悪感とぬぐいきれない羞恥を、緊急避難として正当化し、早まる鼓動にぎゅっと口をつぐみながら、少女は最後の防波堤となっている緊張をゆつくりと抜いてゆく。

閉ざされていた水門が緩やかに弛緩し、しゅう、と小さな水音を響かせ、熱い水流にぷくりと膨らみ――

その時、

「……あっ!？」

(や、やだっ、袋、おきっぱなしだ……っ!!)

更地の入り口に放り出したレジ袋に思い当たり、少女は背筋を震わせた。買ったばかりの物が沢山詰まっているそれは、どう見ても道路から丸見えで、通りがかった人の注視を引いてしまうように思えた。

大事なお使いの買い物、おしっこをするところのすぐ近くまで持っていけないという少女の心理が、かえって悪く働いた結果だった。

思わず腰を浮かしかけるが、ソレよりも早く、少女の股間からは塞き止め切れないおしっこがぶじゅう、と噴出してしまっていた。緊張と焦りでヘンな具合に下腹部に力が入り、半分閉じ欠けた排出口は妙な具合によじれ、おしっこはまっすぐ飛ぶことなく脚の内側に激しくびちゃびちゃと飛び散った。

まるで、ホースの先に手を押し当てているかのように、曲がりくねって入り組んだ出口に竦んだ水流はスプリンクラーのように、少女の内腿に所構わず水流をほとばしらせる。

「あ、ああ、っ」

放出の解放感が、足元をふらつかせる。我慢に我慢を重ねていたものが一気に吹き出す感覚は、ぞくぞくと少女の恥骨から腰骨を伝い、背中を震わせてしまう。

中途半端に中腰になりかけたせいでバランスを崩し、おまけに膝には脱ぎ掛けの下着が絡み、おぼつかない脚はふらついた身体をとどめきれない。ましてこれまでも、溢れそうになるおしっこをずっと塞き止め続け、少女の下半身はすっかり疲労していた。

がくり、と、倒れこむ身体はがさぁと大きく茂みを掻き分け、少女は反射的に地面に手を付いた。

その瞬間。

ずるう、と、地面にあるはずの手のひらに、異様な感触を覚え、少女は戦慄する。少女が身体を支えようと手を付いた茂みの下には、1 mはあろうかという大きな蛇が、ぐねぐねと身をのたうたせていたのだった。

「っ――ツツ!？」

声にならない叫びと共に、少女は飛び上がった。そのまま全速力で跳ね起き、まっすぐに茂みを飛び出そうとする。

が、足に絡む下着はそれを遮り、急激な緊張に収縮した下腹部はそのままおしっこを継続してしまう。

恐慌に陥った少女が、這いずるようにしてどうにか更地から道路に転がり出たときには、とつに本格的に少女のオシッコが始まっていた。

「あ、あ、あっ、あっ、や、ああ」

じゅじゅっ、じょう、ばちゃ、ばちゃばちゃびちゃ……じよぼぼぼおお……

腰を抜き、力の抜けた下半身では、いっさいのストッパーを失って、本当の勢いでオシッコが溢れ落ちて行く。

レジ袋のすぐ側に膝を付いて倒れこんだ少女の足元から、薄黄色い水流がほとばしる。内腿を滝のように伝い、波打って暴れるオシッコは、スカートと下着を完全に水没させ、むき出しの地面を色濃く変えながら、アスファルトの地面のほうにまで流れてゆくのだった。

ばしゃばしゃと足元を濡らしながら、呆然となる少女を、まるで出迎えるように。

すぐ近くから、賑やかな話し声が聞えてきた……。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 雨の日のバスの話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 08/02/2009 21:14:40

BODY:

降り続く雨は、このまま夜まで止みそうにない。

薄黄色のレインコートの裾を揺らし、長靴がちゃぷ、と脚元の水たまりを跳ねさせ、結局憂鬱なお天気のまま終わってしまった日曜日に、茜は小さく口を尖らせる。手にぶら下がった傘はデパートを出てきたときのまま、防水の細長ビニール袋に入ったままぶらぶらと揺れている。

バス停の屋根に吹き付ける雨は、時折強くざあっと雨音を響かせ、弱まる様子を見せずにいる。夏休みに入ってからもしめじめと続き、相変わらずスッキリしないお天気は、日曜日の今日も変わらなかった。

「……バス、まだかな……」

そわそわと落ち着かない様子で、黄色いレインコートの裾を払い、茜はぼつりとつぶやく。

時刻表の予定時刻を十五分ちかくも過ぎてなお、バスはやってこず、デパート前のバス停で列を作る乗客たちをいらいらとさせていた。赤ちゃんを抱きかかえるママ、腕時計を気にするＴシャツのおじさん、皆が口には出さないものの、いつまでたってもやってこないバスに胸の中で文句を言っていた。

（もぉ、はやく来てよぉ……）

レインコート姿の茜もそんな中の一人。

もうずいぶん経つのに、一向に姿を見せないバスを気にして、さっきからしきりに雨に霞む２車線の道路の向こうを気にしている。

（どうしよう……まだ来ないなら、いまのうちに……でも、もうずいぶん待ってるし、すぐに来るかも……）

この雨の様子では、一本後のバスもいつやってくるものかわかったものではない。そろそろ５時半を過ぎ、すでにロスタイムをぶっ壊して門限突破は確実。これ以上遅くなるとお母さんは鬼みたいにカンカンだろう。夏休みに入ってからもう三回もそれで叱られているので、できれば次のバスになることは避けたかった。

しかし、茜が焦る理由はそれだけではない。原因が単純な時計の針だけなら、こうやってレインコートの裾を所在なげに押さえてしまう説明には不十分だ。

「んっ……」

俯いた茜の太めの眉が、きゅっとハの字に垂れ下がる。レインコートの裾から覗く長靴の底は、忙しく足元の水たまりにばちゃばちゃと波紋を描き、傘の先もぐりぐりとアスファルトの上をなぞっている。

茜はいま、じっと息を殺し、一生懸命になって、おしっこに行きくなるのを我慢し続けているのだった。

「……つぶ……」

切なげな吐息がちいさく茜のくちびるを震わせる。ぶるる、と震えた背中に合わせて、レインコートの裾を水滴がこぼれおち、ぴちゃん、と地面に跳ねる。

最初、デパートを出ようとした時にもそれなりに催していた尿意は、予定時刻の５分前からいつバスが来るか来るかと待っているうちにどんどん増し、かれこれ２０分以上。いまや我慢は耐え難いレベルにまで達しつつあった。

こんなことなら早いうちにトイレに行っておけば、と思うがすべて後の祭だ。予定時刻をオーバーしている以上、いつバスがやってくるかまるきりわからない。あとすこし、あとちょっと、と思っているうちに、バス停は並ぶ人たちが大混雑となっていた。雨を避けて屋根の下に集まる乗客たちは肩を寄せ合ってぎゅうぎゅうで、茜がトイレに行くのを邪魔しているかのようだ。

（……うう……トイレ、行ってきたいけど……、いつバス来るかわかんないし、乗り遅れちゃったらもっと遅くなるし……）

トイレに行きたいのを我慢すれば、どうしてももじもじと内腿を擦り合わせてしまうのを押さえられない、小さく左右に揺れてしまう腰を、周りの乗客たちに気付かれないかと不安になりながら、茜はきゅん、と震えそうになるおしっこの出口を、ぐっとおしりの孔に力

を箆めて締め付ける。

デパートに戻れば、トイレに入ることは簡単だが、そこでおしっこを済ませて戻ってくるには、どう控えめに見ても5分以上の時間が必要だった。いつやってきてもおかしくないバスが到着して、並ぶみんなを乗せ出発するには十分すぎる時間だ。

「……まだ、来ないの……？」

不安とともに道路の先を覗き込む茜。四角く大きな緑色の車体は、しかし雨に霞む道の向こうには見当たらない。

（あっ……なんだ。トラックか……あれも違う……あれも……あれも……）

雨に煙る道を、信号の点滅とともに何台もの車が走り過ぎてゆく。バス停の近くで、家族連れを迎えに来たらしきワンボックスカーに、歓声を上げて小さな子たちがお父さんお母さんに連れられて飛び乗ってゆく。

道の向こう側では、水飛沫を跳ねさせて突っ切ってゆく乗用車にズボンを汚された背広のお兄さんが、傘を降って文句を言っていた。

「うーっ……」

焦れば焦るほど、おなかのなかでちくちくと強まる尿意の存在感が増してゆく。レインコートの下でスカートを脚の間に巻き込み、茜はぐり、がり、とビニール袋に包まれた傘の先を強くアスファルトに押し付けた。その反動を使って、傘の柄を握る手のひらを脚の付け根に押し付ける。

（っく……はあ……っつ……あ、っ、もお、ちょっとぐらい、おさまってよお……）

じん、じん、と強まるおしっこの波に、茜はぎゅっとくちびるを噛んで手を握り締める。その場で背伸びをするように身体を伸ばし硬直させて、まるで本当の波に押し流されないように、溺れないように息を詰める。

「っはあ、ふう……」

レインコートの足元がまたばちゃ、と水音を立てる。茜はぎょとして脚の間を覗き込んだ。まさかもう漏れちゃっている……ということとはなかったが、言うことを聞かない長靴の脚が、水たまりの水面を跳ねちらかすのは押さえられない。

「っ……あ」

（だ、だめ、やっぱりトイレ……っ！！）

いつまで経ってもおさまる様子のない、おなかのなかで暴れ続けるおしっこに、とうとう茜は音を上げてしまう。もう遅くなって怒られてもいい。そう決めると、茜はバスを待つ行列を掻き分けて、デパートの入り口に戻ろうと踵を返した。

だが——ちょうど、その時。

「あ！！」

誰かが、やっと来た！！と歓声を上げた。クラクションとともにバス停に姿を現したバスが、むうとする熱気とともに停車する。

行列はざわっと蠢いて、バスに乗る準備を始める。

「あ、……っ」

ちょうど列から離れてかけていた茜を抜かして、待ちきれない数名がバスの乗車口に押し寄せる。その後ろで、年配の二人連れが、茜のほうを気にするようにちらっとそちらを見た。

乗らなくていいの？ と視線で訴えかけられ、茜はその場に硬直してしまう。

（ど、どうしよう……）

ずっと待ちきれなかったはずのバスだが、いちどトイレに行こうと決めた今は、乗るのが躊躇われてしまう。トイレに駆け込むつもりで走り出した茜の身体は、いいからはやくトイレに行って、おしっこをしようよ、と訴え続けている。

今の茜には、バスよりもむしろトイレのほうが待ちきれない。

茜の家の最寄のバス停までは、およそ20分あまり。ここから気持ちを切り替えて我慢の延長戦をするのは、かなり難しいことにも思えた。

「ねえ、乗らないの？」

戸惑っている茜を、後ろにいたおねえさんが、少し苛立った声で急かす。

「あ、の、乗りますっ！！」

どこか怒ったようなその声音に、茜は思わず反射的にそう答えてしまっていた。

幸いにして——というべきか。長く遅れた割にはバスの中はそこそこに空席が目立っていた。ちょうど、夕方の買い物にバスに乗ってきた乗客がずらりと降りたことも理由ではあるだろう。

そんな中、茜は後部座席のひとつに座ることになった。

デパートのトイレに後ろ髪を引かれる気持ちで、茜はまだ乗車口の近くにいたい気分が大きく残っていたのだが、ずらりと並んで後から後から乗ろうとしてくる乗客たちに押される形で、茜は追いやられるように、出口から最も遠いうちのひとつの座席に押し込められてしまう。

「んう……っ」

座席に腰掛けるときにも、びりびりっ、と我慢している下腹部に電流が走り、茜は思わず声を上げそうになってしまう。

そろお、と隣を見れば、太ったおじさんが小さなバッグを握り締めて、窓に寄りかかるようにいびきをかいていた。ひとまず、じいっとこちを不審に見られるようなことはなさそうだ。

（……がまん、できる……かな……）

今になって、迂闊なことをしてしまったんじゃあ、と不安がこみ上げてくる。周りを気にしながらも、茜はそっとレインコートの間に手を挟み、ぎゅうっ脚の付け根を押さえ込んだ。

バス停にいた乗客全員が乗った頃には、車内は真ん中の通路にまで人が立って並ぶ混雑ぶりで、茜が簡単に降りれそうな様子ではなくなっていた。もし途中で我慢できなくなったとしても、通路を通り抜けて途中下車するだけでも一苦労だろう。

「っ……」

まるで密室に閉じ込められてしまった気分だった。ひょっとしたら、今からでも考え直したほうが——と弱気になりかけた茜だが、すでに時遅く、ぷしゅう、と音を立ててドアを開めたバスが、次のバス停をアナウンスしながら発車する。

ゆっくりと遠ざかるデパート前のバス停を思わず目で追いかけてながら、茜は小さく身体を縮こませた。

（……っ、……お、おしっこ……）

切実な要望が、茜をさらに追い詰める。

目の前にあるはずのトイレから無理矢理に引き離され、いまや茜は誘拐でもされてしまったかのような気分だった。

雨の中の車道は、多くの車でいっぱい、渋滞と言っても差し支えない。

さっきの家族連れもどうなのだろうが、濡れないようにとなれば車が混むのも当たり前で、出発したばかりのバスは赤信号でもないのに道の真ん中で停車してしまう。バスが遅れている一番の理由は、間違いなくこのせいだ。

しかし、茜にしてみればたまったものではない。折角飛び乗ったバスが、歩いているよりも遅いのでは困るのだ。

(は、はやく……っ)

すでに座席の上でそわそわと身をよじり、まだかまだかと気が気ではない茜はなんどもバスが進むようにと強く念じる。しかし、バスは時折がくんと動いては、のろのろと進んですぐ停車することの繰り返し。

「っ、」

(はやくしてよっ……お、おしっこ……っ、トイレ、行きたいのにっ……)

ぷしゅう、とまたバスが停止する。びっしり並んだ赤いテールランプの向こうに、三つ並んだ信号が赤を灯らせているのが見える。渋滞の中で右折の列はなかなか進まず、時間ばかりが過ぎてゆく。

出発して早くも数分が経過したが、まだ、次のバス停までもたどり着いておらず、大きな背の高いデパートの建物はしっかりとバスの中からも見える状態だった。そのせいで、茜はいまだにいつ今からでも飛び降りてデパートに戻ったほうが、という考えを振り切れずにいた。

これではまるで生殺しだ。

蒸し暑い車内は、混雑のせいで冷房もうまく効いていなかった。びっしりと混み合う乗客に濡れた傘に衣服と湿気の原因も多く、お世辞にも快適とはいえない。おまけに停車のたびにアイドリングストップで冷房を切るせいで、不快指数はみるみる上昇していた。

言葉にはならないが、びりびりとした雰囲気あたりを支配し、茜はそのことにも不安を募らせる。

(……ど、どうしよう……どうしようっ……)

背中じつりと浮かぶ汗が、レインコートの下に籠もって、首筋と脇を気持ち悪く濡らす。息が自然と荒くなり、口の中にも生唾が浮かぶ。

さっきから、もうすぐ『大津波』が来そうな予感があった。さわさわと小さく波打つ尿意が、不気味な予兆を見せて細かい振動を伝えるのだ。もしここで、本当にこのままおしっこがはじまっちゃったら……恐ろしい想像に茜はぎゅっと身体を丸くする。

身動きが取れないほどにぎゅうぎゅう詰めバスの中、もちろん車内にトイレなんかあるわけもない。交差点の真ん中で下ろしてくれるとも思えず、といって次のバス停すらもまだ先だった。そもそも、ここから先のバス停は茜もよく知らないところばかりだ。降りて近くにトイレがあるのかも分からなかった。

でも、たとえ場所が分からなくとも、次のバス停で降りるべきだろうか？

最悪、道端でしゃがみ込むようなことがあっても——このまま、バスに乗ったまま、オモラシなんてのよりは、マシかも知れない。

(あ、あっ、あっ、だめ、っ)

そんなことまで考えたせいか、予感が、はっきりとした予兆へと変わる。

長い赤信号はまだ変わらない。バスは傾いたままワイパーだけを動かし、乗客たちは不機嫌な気配を隠すこともなく、じっと目を閉じて窮屈で退屈な時間が過ぎるのを待っている。

茜に気をかけてくれるような人は、誰もいない。

(っ、とっ、トイレ……っ、トイレしたくなっちゃった……っ……！！)

ぷくり、とおなかの奥から熱い濁流がおしっこの出口めがけて押し寄せてくる。トイレでもなんでもない場所で、猛烈な尿意がやっ

てくる。

茜はきつくレインコートを握り締め、ぎゅっと脚の付け根をねじり付ける。傘を足の間に挟み、腿をぐっと押し付けて圧迫する。しかしそんな急ごしらえの防波堤などを、いくら重ね合わせても、まるで鉄砲水のような勢いを押しとどめられるわけがない。

（や、だめ、だめえ……でないで、おしっこ出ちゃだめっ……！！）

必死に声を殺してもじもじとお尻を揺する茜。そんな茜の隣で、んん、と眠っていたおじさんが機嫌悪そうに唸る。茜は息を飲んで硬直した。

薄目を開けて窓の外を見たおじさんは、うるさそうに茜のほうをちらりと見て、また荷物を抱えなおして目を閉じた。今度はさっきのようにいびきはかかない。

「っ……！！」

（っ、じ、じっとしてたら、で、出ちゃうっ……！！）

わずかな身じろぎすら封じられて、茜は八方塞がりだ。

そうしている間にも、茜の脚の付け根、下着の股布にはじわり、じわわっと暖かい染みが広がってゆく。

（だ、だめえ、でちゃう、でちゃう……っ！！！！）

小さな亀裂が、水圧にこじ開けられようとする。もはや一度突き崩された堰を塞ぎなおすことは不可能だった。ぎゅっと締め付けた脚の間にじゅわあ、と広がるおチビリの感触に、茜の鼻の奥がつんと熱くなる。

（っ、は、はやく、はやくっ、はやくしてえ！！ トイレ、トイレ行きたいんですっ……おしっこ、でちゃう、おしっこ漏れちゃう、漏れちゃう……っ！！ っ、次、つぎでありますっ、降りますからあ！！ だから、はやく、はやくっ！！！！）

もう限界だ。茜はぎゅうぎゅうと脚の間を揉みしだきながら、身体を伸ばして降車ボタンを押した。ぴんぽん、という音とともに次停まります、のランプが点灯する。さっき乗ったばかりの茜が、しかも後部座席に座っておいてもう降りる、ということに、乗客の数名が迷惑そうな顔をする。

しかし茜はもうそんなことを気にかけている暇がない。バスを飛び降りて、もういっそのままバス停標識の陰でだっていい、そこでおしっこをしてしまったって構わない。このまま座席シートの上でのオモロシに比べれば、まだずっとマシに違いない。そんな思考ばかりが頭の中をぐるぐると暴れまわっている。

いまや茜のおしっこは、ガラスのコップの上に、表面張力で盛り上がっているような状態だ。ふうー。ふうっ、と息を繰り返しぎりぎりの綱引きを繰り返す茜の前で、ようやく、長々と灯っていた赤信号が変わる。

（き、来たっ、きたあ、はやくっ、はやくはやくはやくはやく……っ！！）

が、一旦は勇ましくエンジンを始動させたバスは、また無常にもたった数台ぶん前に進んだところで停まってしまった。右折待ちの車の列は対向車線にびっしり並ぶ直進車に遮られてそのまま動かず、バスは諦めたようにエンジンを切る。

（あ、あっ、あ、あっあっ、お願い、はやく、はやくして、もう我慢できないっ、もうでちゃう、おしっこでちゃう！！ おしっこしたいの、おしっこ漏れちゃうのっ！ お願い、お願いいっ！！）

茜の懇願は、しかし誰にも届かない。空しくも青信号は黄色に変わってしまう。茜は無駄と知りながらも、伸ばした手で何度もバスの降車ボタンを叩いた。ピンポン、と響く音が繰り返され、周囲の乗客たちがじろっとな茜を見つめる。

「あ、っ……」

茜はひっ、と喉奥に悲鳴を飲み込んで、慌てて手を引っ込めた。ささいな自己主張すら許されず、茜はぐず、と小さくしゃくりあげる。

(っ、お願いお願いしますっ、次のバス停で、次でいいですからっ、おしっこ、下ろしておしっこさせてくださいっ、オモラシしちやいそうなんですっ、おトイレ、おトイレしたいんですっ、お願い、お願いしますっ……！！)

そんな、ひり付くほどの茜の切実な願いもむなしく。

赤色に変わった信号によって、かすかな希望は打ち砕かれた。

「あ……っ」

声にならない悲鳴が、茜の喉から絞り出される。

このあと、次に信号が変わって、前の車が全部問題なく交差点を曲がって、バスがそれに続いて、さらにもうひとつの信号も過ぎて、それでバス停に到着。席を立て、人がびっしり並んだ車内を横切って、お金を払って、バスを降りて——そこから——

(っ、ま、間に合わないっ……！！ も、もうだめ、もうがまんできないっ……で、でちゃっ……でちゃう……うっ……！！)

じゅっ、じゅう、しゅるっ、しゅるるっ……

レインコートの下で音を立て始めるおしっこの先走り。熱い雫がじゅわぁと脚の間からおしりの方へと広がる。一度緩んだ出口は、漏れ出す濁流を押さえ込むことはもうできず、後から後からおチビりを繰り返す。もはや、それが本格的なオモラシへ発展するのは時間の問題——それもいいところ数十秒の問題だ。

(あ、あっ、あ、だめっ、オモラシだめ、オモラシだけはだめえ！！ お、おしっこっ、おしっこっ……な、なんでもいいからおしっこできるところっ！！ おしっこするところお……っ！！)

ほぼ動く密室に近いバスの中、このまま床一面に恥ずかしい水たまりを広げるのは、絶対に避けねばならなかった。茜はいまにも焼け切れてしまいそうな頭をフル回転させて、『おしっこを出す』場所をはじき出す。

全く余裕のない中で、茜が取った行動はこの上なく迅速だった。

椅子の上に浅く腰掛け突き出した腰の下、脚の間にある下着の股布を、これでもかというくらいぐいぐいっ、と横に引っ張り、おしっこの出口をあらわにする。

これで、ひとまず下着が濡れるのは回避できる。

しかしそのまま出してしまうと、オモラシよりもひどいことになるのは明らか。そこで、茜は——

(お、おトイレ、っ……、これ、おトイレにすればっ……)

傘の入った細長の防水のビニール袋を、引っ張るようにして股間に押し当てたのだ。ちょうど大きめのサイズの袋だったため、茜の傘を入れてなお、袋の口には結構な余裕があった。広げたそのビニール袋の口めがけ、激しい水流がほとばしる。

「あ、あっ、あっ」

(っ、~~~~~ツツ……！！)

身体の真ん中、芯を貫き突き破るように、強烈な衝撃が走る。押さえる手はないのでぎゅっとかちびるを噛み、声を上げないようにして茜は叫びを飲み込む。

広がって脚の付け根、おしっこの出口に押し当てられたビニール袋の中に、勢いよく黄色い水流がほとばしり、内側にぶつかって飛び散って、ばらぁぁ、と小さな音を立てる。

我慢し続けただけあって、その勢いは恐ろしい。細長いビニール袋にたちまち受け止められるおしっこは、茜の傘をしどに濡らし、ひたして、じょぼじょぼと激しい音を立てた。

隣に立っていた女性が、小さく鼻を動かしてそれに気付き、ぎょっとして傘入れのビニール袋の中におしっこを済ませている茜を見るが、すっかりおしっこに夢中になっている茜はそれに気付けない。

見る間に半透明の袋の中に、薄黄色の熱い液体がものすごい勢いで溜まってゆく。見る間に袋の下三分の一がいっぱいになり、大きく膨らんで形を崩す。

それでもなお、茜のおしっこはとまらなかった。

（あ、あっあ、あっ、あっ）

熱い濁流の進りとともに、じんっ、じんっ、と響く甘い疼き。尿意からの解放が腰をふうわりと浮かせ、腰骨から恥骨にかけてを途方もない心地よさが走り抜ける。トイレではない場所で——本当はおしっこをしてはいけない場所でするおしっこなのに、これまで茜が経験したどんなおしっこよりも、きもちがよかった。

とうとう傘袋の半分以上を満たし、水面に大きく泡を立てながらも、ようやく茜のおしっこは勢いを弱める。じょろおろ、という音はさっきよりも大きく響き、今度は確実に、茜の周りの大人たちをぎょっとさせた。

「ふあ……っ」

じゅう、と弱まったおしっこは、まっすぐには飛ばずに茜の脚の間に飛び散り、ビニール袋の入り口を外れて床に垂れ落ちてゆく。

ちよろ、ちゅう、と脚の間からシートにこぼれるちよろちよとした雫が、さらに何度か吹き出し、茜の座る座席シートを色濃く汚した。

「はあ……、っ……」

そうして、一仕事を終えた茜が大きく溜息をついて、目を開けたとき。

周りの乗客たちの視線は、少女がビニールの傘袋の中に終えた大量のおしっこに、まじまじと注がれていた。

「……あ……っ」

ようやく、ことここに至って、自分が何をしたのか——熱の冷めた茜の頭が回り始める。自分が何をしでかしてしまったのか。バスの車内、衆人環視の中で、あろうことか傘袋の中におしっこを済ませた——その一部始終を、見られてしまったことに。

茜は、やっと気が付いた。

「え。あ、あ、あの、あのっ……が、うんですっ」

がくがくと口が震える。ちがう、と唇だけが動くが、何の言い訳もできないことは茜自身が何よりもはっきり理解している。いま、出したばかりのほかほかのおしっこが、傘入れの細長いビニール袋を、たぶんたぶんといっぱいに膨らませているのだ。

まだ下着を引っ張って、あそこも丸出しにしたまま——無数の針の視線の中に晒されて、硬直した茜の指先がすべり、傘が床を擦る。

「い、いや……あ……ツツ！！」

と、茜のおなかの中の代わりに、ぱんぱんになるまでおしっこを注ぎ込まれていた袋が、とうとう限界を迎えた。ぱちん、とまるで風船がはじけるように、開いた穴から地面にオシッコがざばあ、とこぼれ出す。

「————！！！！？」

騒然となる車内の中——

ようやく、忘れたようにバスは、次のバス停に停車した。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第12.3夜 白雪姫

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 08/02/2009 21:18:25

BODY:

その部屋は、お城の中でも一番高い塔にある秘密の場所でした。滅多に人の立ち入ることのないそこに、小さな足音が響いていきます。

「……さあ。……鏡よ、鏡」

こつ、こつ、こつ、と石畳の床を鳴らして響く、かかとの高い靴の足音。それに答えるように、部屋の片隅にかけられていた大きな鏡に、ぼんやりと何かが浮かび上がります。

まるで風に揺れる水面のように鏡の表面が、うっすらと光を帯びると、どこからともなく穏やかな声が聞えてくるのでした。

『おはようございます、魔女様』

「ふん、挨拶なんてどうでもいいですわ。それより鏡。今日もあなたに聞きたいことがありますの。お答えなさい」

礼儀正しい魔法の鏡にそう言うと、魔女は細い腰に手を当て、見上げるように大きな鏡を睨みます。
『なんなりとお申し付けください。魔女様。主さまのため、真実を写すのがわたくしめの役割にございます』
「そう。では教えなさいな。鏡よ鏡、この世で一番、きれいで可愛い女の子は誰ですかしら？」

魔女は自信たっぷりに、魔法の鏡に呼びかけました。

魔女がこの質問をするのは今日がはじめてではありません。王様に一目惚れされてお城に招かれて以来、魔女は毎日この質問を鏡に繰り返しています。

魔女は、つねづね自分の容姿を自慢に思っていました。鴉の濡れ羽のように美しくつややかな黒い髪、ガーネットの瞳、白い肌、どれをとってもそこいらのお姫様にだって負けることはないでしょう。

……ちよっとばかり背が小さいことと、胸がぺたんこなのは置いておくとしても、お行儀作法も、挨拶の仕方も、誰にも負けないくらいに立派にこなして見せる自信もありました。

だから、魔女は毎日、魔法の鏡に訪ねます。

「鏡よ鏡。さあ、お答えなさいな。この世で一番、きれいで可愛い女の子は、いったい誰ですかしら？」

魔女の呪文によって、波間のように鏡が揺れ、そこからぼんやりと顔が浮かび上がります。

『お答えいたします魔女様。この世で一番美しいのは——』

「……………ふふん。それは？」

ここで鏡は、毎日『それは、なんといっても魔女様、あなたでございます』と、そう答えるのです。それを聞いて魔女は毎日、上機嫌でお城の生活を送ることにしていました。

けれど、その日ばかりはちょっと様子が違っていたのです。

揺れる鏡に映し出されたのは、魔女とは違う、美しい雪のような銀髪をした小さな女の子でした。

『——なんといっても白雪姫さまにございます』

「ってちよっとお！？ な、なななな、なんですかそれはっ！？」

昨日までとまったく違う答えが帰ってきたので、魔女はおもわずズッコケかけ、怒りもあらわに魔法の鏡に詰め寄ります。

「ちよっとお待ちなさい！？ い、いつもと答えが違うじゃありませんの！！ どこに目をつけているのかしら、鏡！？ いま、この目の前にいるでしょう、この世で一番可愛い女の子が！？ ほら！！ よおく見なさいませ！！」

『——いえ、なんと言われましても、白雪姫さまにございます』

「いったいどういうことですかっ！？」

頑固に答えを変えない鏡に、魔女はかんしゃくを起こして鏡の枠を掴み、がくがくと揺さぶって顔を近づけます。

「ねえ鏡、どうしたこと！？ 理由をおっしゃい、理由をっ！！」

『なんといいましても美しい髪、可愛い瞳、白い肌——』

「そんなのはワタクシも同じでしょうっ！？ あなたも昨日まではワタクシが一番世界で可愛い女の子だと言っていたでしょうっ！？」

『確かに、昨日まではそうでした』

「なら、どうしてですかっ！？ どうして今日は、あんなちんちくりんの白雪姫なんかを——！！」

『お答えいたします魔女様。白雪姫様は本日、誕生日をお迎えになり、一人前のレディーとなりました。確かに昨日までは、先ほどのご質問のお答えは魔女様でございましたが、今日からは違います。世界で一番美しく、お綺麗で、可愛い女の子は——』

立派なお姫様となられた白雪姫様なのです』

「な、なんですか、その屁理屈は——！？」

『そして恐れながら、魔女さまとくにお身体の一部、胸のあたりはけっして立派なレディとは申せぬほどに、年下であられる白雪姫様に負けず劣らずのべったんこかと思われませんが……』

「きいーっ！？ ううう、うるさいですねッ誰が断崖絶壁ですよっ！？ そ、そんなことは余計なお世話、どーだっていいんですよっ！？」

ばんばんと足を踏み鳴らして、魔女はかんしゃくを起こしました。

昨日までただのお子様だった白雪姫なんかに、世界で一番可愛い女の子の座を奪われるなんて、プライドの高い魔女には許しがたいことです。しかし魔法の鏡はいつもどんなときも真実を告げます。鏡がそうだというなら、それは本当のことなのです。

魔法を使う魔女だからこそ、鏡の正しさはなによりも良く知っていたのです。

ひとしきり暴れてから、魔法の鏡の言葉を噛みしめ、愕然となって俯いていた魔女でしたが——やがて肩を震わせて、大きな声で叫びます。

「……ふふ、そうですわ、じゃあ……白雪姫がお姫様でなければよろしいのね。そうすればまた元通り、ワタクシが世界で一番可愛い女の子ですわ！！」

そう。なんとも恐ろしいことを思いついた魔女は、鏡の部屋から外に出ると、ベルを鳴らして召使いを呼びつけました。

あわててやってきた召使いに、魔女はこういいます。

「いいですこと。この国で一番腕のいい狩人を呼びなさい。その狩人に、白雪姫を連れて、森の一番奥深く連れて行かせなさい。よろしいですよ？ もう白雪姫が、二度と戻ってこれないように、深い深い森の奥にですわ！！ わかりましたわね！？」

「狩人さん、まだ行くのですか？ とっても歩いたと思うのですけれど」

「……へ、へえ、あとほんのもう少しでございますので、ご辛抱くませえ、白雪姫様」

「森のはじめてきましたけど、とっても素敵なおところですね。動物も小鳥もいっぱいいますし、大きな木もいっぱい。わたし、とっても楽しいです」

「へ、へえ、喜んでいただいてなによりでさあ」

ひたいから吹き出る汗をなんども拭きながら、狩人は、あどけなく笑いながらも時々、どきっとするほどに美しさの片鱗をのぞかせる白雪姫を連れて、だれも入ることのできないような深い深い森の奥へと進んでいきます。

この国のお姫様である白雪姫を森に置き去りにするなんて無体な命令、狩人には恐ろしくてとてもできやしないことでした。

「うう……」

そう思うと、狩人の額を流れる汗は止まりません。苦しげに呻きながら、狩人は重い足取りで先を進んでいきます。

白雪姫は、まだまだ小さくて素直な女の子でした。狩人の言うことをすっかり信じ込んで、ドレスのスカートを摘んでとことこと後を付いてくるのです。こんなにも純真なお姫様を、二度と帰ってこれないような森の奥で一生迷わせ続けることの罪悪感に、狩人は暑くもないのにすっかり汗だくになっていました。

けれど、なんといってもこの命令をした相手は恐ろしい魔女です。逆らうことは許されませんでした。

「……お許しくださいませ、白雪姫様……」

「はい？ 何かおっしゃいましたか？」

「い、いえ、なんでもねえです。そ、それより姫様、喉はかわいてねえですかい？ よ、よかったらこいつを飲んでくださいませ」

森のなかの小さな広場、切り株に腰掛けてひとやすみしている白雪姫に、狩人はそっと水筒を差し出します。

「え、よろしいんですの？ ありがとうございます！ もう、お喉がカラカラだったんです！！」

ぱあっと顔を輝かせ、それを受け取って、こくこくとめたい水をおいしそうに飲む白雪姫。すっかり自分を信頼して、疑うことを知らない白雪姫に、狩人は嘘をつき続けるのがだんだん辛くなってきていました。

「……ひ、姫様、ちょっとここで待っていただけますか？ その、ええと、少々落とし物をしちまったようなんで」

まだ、魔女の命令にあった森の一番奥というにはずいぶん足りません。けれど、小さな白雪姫には簡単に戻ってこれない場所なのも確かでした。

どうせ同じことなら、深くて暗い森の奥よりも、少しでもおひさまの見えるようなこの場所で……それは、魔女に逆らえない狩人ができる、精一杯の妥協なのでした。

「あら、それは大変ですね。わたしも一緒に探しましょうか？」

「え、いえその、ああ、ええと、だ、大丈夫でさあ、す、すぐもどりますんで！！」

首を傾げる白雪姫をひとり残し、狩人は一目散にその場を後にします。背中を向けて走り去るその間、なんどもなんども、心の中で白雪姫に謝りながら。

そうして、何も知らない白雪姫は、とうとうひとり、森の中に取り残されてしまったのでした。

最初のうちは、おとなしく狩人の帰りを待っていた白雪姫でしたが、やがてお日様が傾き、木々の影が長くなり、空が橙色に染まっても、狩人が戻ってくる気配がないことに、じょじょに不安になり出します。

「……狩人さん、おそいですね……なにかあったんでしょうか……？」

けれど、白雪姫は狩人のことに怒ったり、不平を言ったりはしませんでした。

それどころか、狩人の身に何か危ないことでもあったのではないかと案じているのです。狩人が魔女の命令で自分を騙していたのだなんていうことには、まるで気付かない白雪姫でした。

ほんとうに、雪のように美しく真っ白に、ひとを疑うことを知らない——純真無垢なお姫様なのでした。

けれど——いつまでそうとばかりも言っていられません。白雪姫は、だんだん別の理由でも困ったことになっていました。

「……ほ、ほんとうにどうしよう……っ」

んっ、と小さく俯いた表情の下で、ドレスの脚が忙しく重なってはきゅうっと閉じ、靴の爪先が地面をとんとんと叩きます。

切り株に腰掛けたおしりがもぞもぞと位置をずらし、両方の手は不安げにドレスのおなかの下の方をさすります。

「はあ……っ……」

ぴくん、とドレスの腰が震えました。そこから背中に伝わるようにぞぞぞと震えが走り、白雪姫は首筋を縮こませます。

「んう……ふ……はあ……」

ぴくん、ぴくん、と立て続けに沸き起こる感覚に耐えかね、身体をよじるようにくねらせて、白雪姫は熱い息を繰り返します。

形の整った眉がそっとハの字に寄せ合わされるたび、閉じられた目がきゅうっと細くなります。暗くなってきたせいであたりはすっかり寒くなり始めているというのに、白雪姫のうなじはしっかりと汗に湿り、頬にはほんのりと赤い色がさしていました。

薄暗い森の奥で、白雪姫はだんだん不安になっていました。早くお城に帰りたい、普段の白雪姫ならそう思ったことでしょう。
「……お、お手洗い……っ」

けれど、今の白雪姫には、お城よりも先に行きたい場所があったのです。

きゅうっとドレスのスカートの前を押さえて、白雪姫はきよろきよとあたりを見回します。

すっかり膨らんでしまったドレスのおなかとその下の出口をさすり、暴れ出しそうになるおしっこをなんとかなだめます。

空になった水筒の中身は、待っている間にぜんぶ白雪姫が飲んでしまっていました。狩人が居なくなってから、お昼も食わずにい

たせいで、いけないとは思いながらも我慢できず全部飲みほしてしまったのです。
それがゆっくり時間をかけて、白雪姫のおなかの中の、『おひめさま』の奥にあるおしっこの容れ物にたつぷりと溜まっているのです。

いまや大きく膨らんだ容れ物は、ぶるぶると震え出しそうにぱんぱんにはりつめていました。

足の付け根は自然に緊張し、大切な『おひめさま』がひくんひくんと収縮します。

もう、白雪姫はそんなに長くがまんできそうにありませんでした。

「でも……勝手に、ここを離れたりしたら……」

狩人は、ここで待っていて欲しいと言ったのです。勝手に動いたりしたら、迷子になってしまうかもしれません。そう思うと、ここを離れてお手洗いを探しに行くことはよくないようにも思えます。

実はもうとくに、白雪姫は迷子になっているのですが、もちろん白雪姫はそんなことを知らないのです。

「……で、でも……っ」

また、きゅうっとおなかの奥でおしっこがぶるぶると震えるのを感じ、白雪姫はいてもたってもいられなくなってしまいます。

震える脚で立ち上がって、白雪姫はぐるぐると広場を歩き始めました。時折がまんできなくなって、ぎゅっと『おひめさま』を押さえて

右回り、左回り、時には立ち止まって、またその場で足踏み。

そわそわと、狩人が走っていったほうを見ては、もじもじと膝を擦り合わせます。

「や、やっぱり、もう……っ」

交互にかかとを上げながら、白雪姫はとうとう小さく叫んでしまいます。ちょっと油断するとたちまち内側からふくらみそうになる『おひめさま』の圧力に耐えるため、ドレスの前から両手が離れなくなっていました。

おしりはちょこんと後ろに突き出して、アヒルのように不恰好な中腰。両脚はいまにもその場にしゃがみ込んでしまいそうにぶるぶると震えています。

「……お……お手洗いっ……。ご、ごめんなさい狩人さんっ、……すぐ、戻りますからっ……」

長いがまんの末に音を上げて、白雪姫はとうとう待ち合わせの場所を離れて、お手洗いを探す決意をしました。

すっかり暗くなった森の中に踏み込んで、白雪姫は慎重にあたりを確認しながら進んでゆきます。小さな枝を踏むばきんという音にも背中をすくませながら、白雪姫はなんどもなんどもあたりを見回します。

「……………っ」

けれど、当たり前のことですが、ここは深い森の中です。こんなところに、白雪姫がが用を足せるような、ちゃんとしたお手洗いなんてあるはずありません。それどころか入り組んだ森の中は道もはっきりしておらず、白雪姫はすぐに迷ってしまいました。

「え、ええと……あれ？ ……さ、さっき、こっちに来たはずなのに……」

慌てて元来た道を引き返した白雪姫ですが、もう手遅れです。ちゃんと元通りに来た道をたどったはずなのに、さっきの切り株のある広場に戻ることができません。

「あ……そ、そんな……」

不安にきゅうと白雪姫の小さな胸が締め付けられます。

そして、それと連動するように、おなかの奥でもきゅうと、おしこの溜まった入れ物が縮まろうとします。

「うあ……っ！？」

きゅんきゅんとうずくお腹の圧力に耐えかねて、白雪姫はたまたまに『おひめさま』をスカートの上からぎゅうと抑え込んでしまします。

けれど、そうやってぎゅうと握った『おひめさま』の奥では、白雪姫の気持なんか無視して、おしこの出口がふくらみそうになるのです。

「あ、や、いやあ……」

白雪姫はふわふわのスカートをバニエの上からきつく握り締め、口をかたく引き結んで、いっしょうけんめいがまんをします。

「あ、あつ、だめ、だめっ……」

小さく揺れる腰と、上下するおしり。

けれど一旦ふくらみだした熱い流れは止まることなく、まるで堰を切った鉄砲水のように、一目散に出口へめがけて殺到してゆくのです。

「あ、あつ、あつ……っ！！」

白雪姫がとうとう悲痛な声と共に、その場にしゃがみ込んでしまおうとした、そのときでした。

何の前触れもなくがさっ、とすぐ近くの茂みが揺れて、そこから小さな何かが飛び出してきたのです。

「……ん、なんだい、あんた？」

白雪姫は、あまりのことにびっくりして、答えることができませんでした。

(続く)

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第 1 2 . 6 夜 白雪姫

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 08/02/2009 21:21:24

BODY:

「ふふふ……うふふふふ……あははははっ！！

翌日——魔女はこみ上げてくる笑いを抑えきれずにいました。秘密の部屋に向かう足取りも軽く、鼻歌まで飛び出します。

なんといっても、白雪姫を二度と出てくることのできない深い森の奥に置き去りにしてやったのです。しかも、おトイレに行きたくないようにたっぷりとお水を飲ませて。

「いい気味よ。どれだけ頑張っている、そろそろ限界かしらね。……うふふ」

魔女が企んだのは、白雪姫におしっこをがまんできなくさせることなりました。

狩人に連れて行かせた森の奥で、言いつけどおり白雪姫は水筒の水をたっぷり飲んだということでした。だとすれば今頃、白雪姫はもうとくに我慢の限界を迎えているにちがいない。

けれど、森には当然ながら、おトイレなどありません。白雪姫はオモラシをしなくては、どこかの茂みにしゃがみ込んでおしっこをするしかないのです。

「でも、お外でおしっこなんてお姫様として絶対ありえせんわ。ちゃんとしたおトイレまでおしっこが我慢できない女の子……お姫様失格ですわね。うふふ。そんなものが、世界で一番可愛いおんなのこであるはずがないですもの。うふふふ……」

意地悪く微笑んで、魔女は上機嫌で部屋のドアを開け、魔法の鏡に呼びかけます。

「さあ、鏡よ鏡、お答えなさい」

『……おはようございます、魔女様』

「うふふ、さあ鏡よ鏡、今日もお答えなさい。この世で一番美しい女の子はだあれ？」

『それは——』

波打つ鏡の前で、魔女はおおきく腕を組んで胸を張って、鏡の答えを待ちました。『それは魔女様、あなたさまでございます』
——鏡がそう答えるのを。

けれど、

『やはり、なんといっても白雪姫様にございます』

「あらあ——っ！？」

鏡は昨日と同じことを言い、魔女はどてーんっ、と振り返ったまま真後ろにひっくり返ってしまいました。

魔女は顔を真っ赤にして立ち上がります。

「ちょ、ちょっと！？ そ、それはどういことですか！？ 白雪姫はもうとくにお姫様失格のはずですわよ！？ ちゃんとしたおトイレまでがまんできずに、お外でおしっこをしてしまうようなはしたない女の子なんですよ！？」

『そんなことはございません。本日も白雪姫さまはお美しく、お行儀も満点の、本当のお姫様でございます』

「そ、そんな！？ ありえませんか、だって——」

『……御覧なさいませ』

鏡に映し出された白雪姫は、魔女の知らない小さな家にいました。

白雪姫は心のそこからほっとしたような表情でした。じゃあーっ、と流れる水の音を背後に小さなドアを後ろ手に閉め、小さな白い手をハンカチで丁寧に拭きながら、深々と頭を下げます。

その前には小人が七人並んで立ち、お礼をいう白雪姫に、いいいいよと答えていました。

おトイレに間に合った白雪姫からは、お姫様として十分な気品と礼儀の正しさが窺えます。その可憐さは、微塵も損なわれてはいませんでした。

『白雪姫様は、魔女様のおっしゃるような、はしたない真似はいっさいなさっておりません』

「っ、そんな——！！」

どうやら、白雪姫はあの小人たちに限界ギリギリのところを助けられて、おトイレを貸してもらい、間に合ったようでした。

鏡の奥で、がまんにがまんをかさねたものを、ちゃんとおトイレまで堪えきったことの達成感や安堵感に、白雪姫は昨日よりもいっそうかわいらしくすら見えます。

『ですから、今日も、世界で一番可愛い女の子は、白雪姫様にございます』

魔女はあまりのくやしさに、ぎりぎり歯を軋らせた。

「そう、そうなのね。わかったわ！！ じゃあ待ってなさい！！ あの子が貴方の言うような子じゃないって事を証明してあげるわ！！ 見てらっしゃい白雪姫。あなたはだらしない、恥ずかしい女の子だって事を見せてあげる！！」

……誰か、誰かいませんの！！ いますぐワタクシの言うものを用意なさい！！」

魔女はますます目を吊り上げて、甲高い声を響かせるのでした。

「ふうっ、いい天気ですね……」

小人たちの家にお世話になって一週間。白雪姫はここでの生活にもすっかり慣れていました。今日も洗濯物を抱えて、家の裏手に向かいます。

訪ねるなりお手洗いを借りるというぶしつけなことをしたのに、行くところがない白雪姫を、七人の小人たちは快く迎え入れてくれました。でも、お世話になってばかりではいけないと、白雪姫は小人たちの家のお手伝いを始めたのです。

なにしろ、小人とは言え七人分の洗濯物ですから、これはけっこうな量でした。張ったロープにひとつずつシャツとズボンを干していきます。

「……………」

そして、白雪姫はちょっと顔を赤くしながら、自分の下着をちょこんと隅のほうに干します。

小人たちはとても白雪姫によくしてくれるのですが、なんとと言ってもこれまでは人間と会うことなく小人たちだけで暮らしていましたから、どうしても気が回らないところもあるのです。

「はあ……皆さん、いい方ばかりなんですけれど……」

いまの白雪姫の一番の悩みは、着替える服がないということでした。狩人に連れられて森に来た時に着ていたドレス一枚しかありません。幸いにして、なんとか着られる村娘の服はありましたが、下着はどこをさがしてもみつかりませんでした。

お世話になっているのにものを強請るというのはあまりに失礼なことです。白雪姫は一枚しかない下着を洗って使いまわすしかありません。

ですからこうやってドレスも下着も洗っているときは、白雪姫は下着を穿いていないのです。

ちょっと短めのスカートの下で、すうすうと落ち着かない足元。おしりが見えたりしてないだろうかとなんども白雪姫が振り返り、スカートの裾を気にしていたときでした。

「もし、そこのお嬢さん」

そこに現れたのは、煙管を加え、大きな荷物を担いだ旅の姿の女でした。

白雪姫はきゃあ、と飛び出しかけた悲鳴を飲み込み、あわててお辞儀をして、ご挨拶をします。

「はじめまして。お客様ですね？ 小人さんたちはお仕事で森のほうにいらっしゃいますけれど」

「ああ、そうじゃないそうじゃない」

女は手を振って、背中に担いでいた荷物を下ろし、広げてみせます。大きな鞆には、見たこともないような品物がたくさん詰まっていた。どこか男の人のような口調で、物売りは言います。

「ご覧の通り、あたしはいろいろなものを扱っておる者さ。お嬢さんはなにかご入用のものはないかね？ いまなら特別にやすくしてあげるがね」

「え、でも……わたし、お金をもっていないから……」

断ろうとした白雪姫ですが、物売りの荷物の中に、上等な絹の下着をみつけて、ぴたりと手を止めてしまいました。

「おや、なにか気に入ったものがあったかね？」

「え、ええと……でも」

「ああ、それかい。仕立てもいいし長持ちするよ？ 肌着は身体に合ったものを身に付けるのが一番だ」

そんな事を言われて、白雪姫は赤くなって俯いてしまいます。すかすかと寂しい脚の付け根が、さらに白雪姫の羞恥心を煽っているのです。

それをみて、物売りは煙管からふうと大きな白い煙を吐き出して言いました。

「よおし。なら、小人たちにわしのことを宣伝してやってくれ。また近いうちにここに来るから、その時に沢山買ってくれるようにとね。それで、ただにしてあげてもいい」

「ほんとうですか？！ ありがとうございます！！」

「いやいや。どれ、ちゃんと身体に合うかね？」

「は、はいっ」

うながされて、白雪姫は下着を抱えるとそそくさと物陰へ隠れ、そこで服をあげて下着を穿きなおしました。

「……わあ、すてきですっ」

なんと、まるであつらえたようにぴったりと、身体に合う下着でした。腰に止める紐をきゅっと結んで、白雪姫は物売りのところに戻ります。

「ちょうどぴったりでした！ ありがとうございます！」

「いやなに、遠慮はいらないさ。そのかわり小人たちにはちゃんと言っておいておくれよ？」

「はいっ」

笑顔で頭を下げる白雪姫に、物売りはおや、と眉を上げます。

「お嬢さん、そこがほどけかけているよ？」

「あ、きゃ……っ」

物売りはひよいと手を伸ばすと、溶けかけていた下着の紐を、きゅうっと強く引っ張って結びます。少しおなかに食い込むくらいの強い力でしたので、白雪姫は思わず声を上げてしまいました。

「これで良しと。じゃあ。つぎの村に行かねばならないからね、そろそろおいとますとしよう」

「あっ、どうもありがとうございました。ぜひまた来てくださいね」

「ああ」

なにからなにまで親切にもらった物売りに深く頭を下げ、白雪姫は小人たちの家を後にする物売りをいつまでも手を振りながら見送ったのでした。

さて、それからしばらくして。

「んっ……」

お洗濯を終えたばかりの白雪姫は、ふるる、と背中を小さく震わせて、白雪姫は早足に小人たちの家に戻ろうとしていました。

すっかりお洗濯に夢中になってしまっていたため、思い出したときには白雪姫のおなかのなかにはたぶんと音を立てそうなほどにたぷりおしっこが溜まってしまっていたのでした。

（お手洗い、お手洗い……っ）

家の中には誰もいないのをいいことに、白雪姫ははしたなくも内股になって、きゅっとスカートの前を押さえ、よちよちとおトイレに向かいます。

小人たちとの暮らしの中でちょっと困ったことといえば、このおトイレもそうでした。なにしろ騒がしくて賑やかな、七人もの小人たち

と一緒に毎日です。朝にはまだ日が昇るかどうかの早くからひとつしかないトイレの前には小人たちが行列を作り、まだかまだか、もう漏れそうだと早くしてくれなんて叫びながら押し合いへしあいの順番待ちをしているのです。

お姫様の白雪姫には、そこにたつことなんて恥ずかしくてとてもできません。

ですから、白雪姫はそれまでの習慣だった朝一番のおトイレをやめにして、むずがる『おひめさま』をそっと撫で、なだめながら過ごし、小人たちが揃って森に出かけてから、こっそりとおトイレを使うようにしていました。

今日はたまたま、洗濯物が溜まっていたのでそのまま洗濯に夢中になっていて、そこに物売りがやってきたりしたものですから、気付けば白雪姫は起きてから一度もおトイレを済ませていないのです。

（がまん、がまん……）

気が急いでさらにきゅうと高まる尿意を、白雪姫はぐっと飲み込みます。ちゃんとお手洗いに行くのを忘れてすっかりおなかをおしっこでぱんぱんにしてしまったことへの恥ずかしさから、白雪姫の頬は真っ赤になっていました。

「……んうっ……」

ぷくりと膨らんだおなかを庇いながら、小さなドアを身をかがめるようにしてぐり、かちやりと鍵をかけます。

なにしろこの家はもともと、女の子の白雪姫から見ても小さな背丈の小人たちが暮らすために建てられたものですから、なにもかもが白雪姫はちょっとばかり小さいのです。それはおトイレも同じことなのです。

着替えたばかりの新しい下着に、万が一にも染みなんて作ってしまわないように、白雪姫は慎重にスカートをたくしあげます。

そうして、白雪姫がゆっくりと下着を下ろそうと、紐の結び目に指をかけたときでした。

「……あ、あら……？」

どうしたことでしょう、引っ張ればするりとほどけるはずの結び紐が、いくら力を籠めてもまるでビクともしないのです。焦った白雪姫が爪を立ててぎゅうと引っ張っても、石のように硬い結び目は、下着の上にぎゅうと食い込んだまま、ぴくりとも動きません。

「ど、どうしたのかしら、これ……？」

さらに何度か結び目をひっぱる白雪姫ですが、まったく状況は変わりません。

おトイレをすぐ目の前にして、あとは下着を下ろしてしゃがみこむだけだというのに、肝心の下着が脱げないのではどうしようもありません。

結び目を弄りながら困惑する白雪姫でしたが、その間にも足元から、ぞぞぞおとイケナイ感覚は容赦なく迫ってくるのです。

「ふぁ……っ！？」

きゅう、と脚の付け根の奥、『おひめさま』に熱い感触が膨らみ、白雪姫は慌てて下着の上からぎゅうと股間を押さえ込んでしまいます。

腰が引け、爪先立ちになった膝が震えだします。

押し寄せるおしっこの波を押さえ込むため、白雪姫ははしたなく丸出しにした下着の太腿の間に両方の手を突っ込んでしまいます。

「や、あ、っ、だ、だめえっ」

出そうになるおしっこにもじもじと腰を揺すり、白雪姫は思わず悲鳴まで上げてしまいました。

確かにここはおトイレの中ですが、まだおしっこの準備はできていないのです。当たり前のことですが、下着をはいたままではおしっこなんかできるわけがありません。

それなのに、白雪姫の身体は、おトイレに入る直前の気持ちのまま、もうすっかりおしっこを出すつもりで、きつく塞いでいたはずの

「ま、まだだめ、だめなんですっ……」

言うことを聞いてくれないおしっこを、すり合わせた腿と交差する膝でなんとかいとめながら、白雪姫は何度も何度も何度も下着の紐をひっぱります。でも、すっかり余裕のなくなった状態では結び目がどうなっているのかもわからず、乱暴に引っ張られた紐はますます深く食い込むばかりでした。

(や、やだっ……な、なんでおさまって、くれないん……ですか……っ!?)

硬く固く結ばれた紐は、じわじわと縮み始めているのです。ただでさえきつく結ばれた紐は、そのままぎゅうぎゅうと白雪姫の小さなおなかに食い込んで、張り詰めた下腹部を締め上げていきます。

きゅう、きゅつ、きゅううつ、リズムをつけるように食い込む紐は、まるでおなかをぐいぐいと誰かに押し込まれているようです。

ぴたり脚に張り付いたまま、脱げることのない下着——なお激しくぎりりと締め付ける結び目の紐は、白雪姫のおなかを強烈に締め上げ、一つしかない出口へ向けて溜まりに溜まったおしっこを絞り出そうとします。

きゅ、きゅつ、きゅうつ、
びくつ、じんつ、びりりつ。

きゅん、きゅうつ、きゅううううつ
ぞわ、ぶるるっ、ぴくぴくぴくんっ。

結び紐のリズムに合わせて、溢れそうになるおしっこを、白雪姫は必死に食い止めます。きゅ、きゅと締まる紐と一緒に、熱い疼きが足を駆け抜け、白雪姫は小さな喘ぎ声をあげてしまいました。

ですが、このままおしっこを出してしまうわけには行きません。すぐ目の前におトイレがあるのに、これではオモラシと一緒にしちゃいます。おトイレに間に合わなかったなんて、お姫様にはあるまじきことでした。

両手で塞いだおしこの出口と、きゅうきゅうと締め付けられる結び紐。行き場を失ったおしこはさらに激しく、圧力を増し、『おひめさま』の閉ざされた出口へと殺到してゆきました。

ぐいっと持ち上がったおしりを抱え込むように、白雪姫は大きく上半身を倒しこみ、ぎゅぎゅぐいぐいぐいぐいと、ありったけの力でおしこの出口を押さえ込みます。

けれど、それも時間の問題。

下着を脱げなければ、いつかは限界が訪れてしまうでしょう。

(あ、ああ……ど、どうすればいいんですか……っ)

白雪姫、絶体絶命のピンチでした。

(続く)

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第 1 2 . 9 夜 白雪姫

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 08/02/2009 21:23:03

BODY:

魔女の性格が突如ここで、千夜一夜の多倉見悦子シリーズを<s>パクリ</s>インスパイア。

ここまでの原作に忠実に最初から書いてたらまとまりきらなかったの、適当に区切って特区用に新しいのを書き直した結果。

<hr size="1" />

「うふふ……あっはははは！！」

再びお城に帰ってきた魔女は、物売りの変装を脱ぎ捨て、肩を震わせて大笑いを始めました。

白雪姫をだまして売りつけた魔法の下着は、ひとりでにぎゅうぎゅうと結び目を硬くして締め付ける魔法の紐です。それを思いっきり締め付けてきましたから、もう魔女にだってほどくことはできません。まして白雪姫が気付いた時にはもう遅いのです。

「うふふ、うふふふ……いい気味ですわ、白雪姫。これであなたは、どうやっても絶対にお手洗いにはいけませんわよ！？」

なにしろトイレに入っても、下着をはいたままなのですから、おしっこができるわけがありません。

とうとう白雪姫にオモラシをさせることに成功したことを確信し、魔女はこみ上げてくる笑いをこらえる事ができませんでした。

今度こそお姫様失格な大惨事を繰り広げているであろう白雪姫のことを思い、魔女は秘密の部屋に戻るなり、魔法の鏡を呼びます。

「さあ、鏡よ鏡！！これでどうかしら！？間違いなく白雪姫をオモラシさせてやったわよ！？お姫様失格の白雪姫と、このワタクシ、どちらが世界一可愛い女の子なのか、答えなさい！！」

『……お答えいたします』

波立つ鏡に浮かび上がった魔法の鏡の顔は、いつものとおり厳かに、答えを告げました。

『やはり、それは白雪姫様にございます』

「——っだあああーツツ！？」

鏡の言葉を聞かす速いか、魔女はありつた力の近くにあったテーブルを蹴飛ばしてしまいました。

ごん、と重い音がして、魔女の足が変な方向にひん曲がります。

「ひぎい！？」

重い檜のテーブルの脚を思い切り蹴飛ばしてしまったせいで、痛む向うずねをさすりながらびよこびよこと跳ね、魔女は涙目になって鏡を怒鳴りました。

「お痛つつ……うう。いったい、なんでそうなりますのっ！？あ、あなた本当に魔法の鏡ですのっ！？」

『お疑いなど滅相もない。私は魔女様にお仕えする魔法の鏡でございます。いついかなる時も、いつわりなど申しません』

「じゃ、じゃあどうして、そんなに白雪姫のかたを持ちますのっ！？おかしいじゃありませんの、どう見たってワタクシのほうが美しく綺麗でしょうっ！？」

『はい。その通りにございます。魔女様がお美しいことは間違いなく真実にございましょう』

応じる魔法の鏡は、いつもどおり冷静に返事をします。

その何事にも動じない口調が、かえって魔女をいらだたせるのでした。息がかかるほどに鏡に顔を近づけて、魔女はつばを飛ばしながら叫びます。

「だったら、ワタクシはきちんとお手洗いにもいけないうようなオモラシ白雪姫にも劣ると言いますの！？」

『いえ。そうではございません。……白雪姫さまは変わらず、美しく気品に溢れ、穢れを知らぬまことのお姫様にございます』

「はあ！？いったいどこに目をつけているのかしら！？ワタクシはたったいま、白雪姫に絶対に一人では脱げない魔法の下着を

穿かせてきたところですよっ！？」

『では、こちらをご覧くださいませ』

鏡が言うと、また波間のように揺れた鏡の表面に、ぼんやりと光景が浮かび上がってきます。

鏡に映し出された白雪姫は、またあの小さな小人たちの家にいました。

白雪姫はどこかほっとした安堵をみせながらも、小さく俯いて、細く空いたおトイレのドアの向こうから、顔を半分だけ覗かせていました。

ざああーっ、と威勢良くなされる水の音を背後に、ドアの前に並ぶ七人の小人たちに、何度も何度も目を伏せてお辞儀を繰り返しています。小人たちの手には縫い物に使う糸切りハサミが握られており、おトイレのドアの前には切られた下着の結び紐が落ちています。

しゅんと俯く白雪姫を、小人たちはいいいよいいよとなだめていました。それはおトイレに間に合わなかったことではなく、はしたなくも買ったばかりの下着の紐を切ってもらったことへのお礼でした。

『このように、白雪姫様は、魔女様のおっしゃるような、はしたない真似はいっさいなさっておりません』

「ま、またですよっ！？ またあの連中が邪魔を——！！」

『ですから、今日も、世界で一番可愛い女の子は、白雪姫様にございます』

猛烈な尿意に耐え抜いて、小人たちが帰ってくるまで我慢を貫いた白雪姫からは、お姫様として十分な高潔さと心の強さが窺えます。その美しさは、すこしも損なわれてはいませんでした。

ちゃんとおトイレを堪えきったことの自信からか、白雪姫は昨日よりもいっそう綺麗にすら見えます。

「きい——っつ！？」

だんだん、と足が痛いのも忘れて、魔女は床を踏み鳴らします。

『魔女様。本当のお姫様というものは、俗世とは違う、穢れを知らぬ高貴な血筋にあるものです。いかなる苦境にあろうとも、それを失うことのない、汚れなき心。それがまことのお姫様というものでございます』

「っ、ワタクシが卑しいというのはですか！？ 無礼なッ」

『いえ、決してっそのような——』

「ええいうるさい、うるさいですわよっ！！」

ぴしゃりと言い返し、魔女は鏡に物売りの変装を投げつけ、ずかずかと大股で部屋を出てゆきます。

「もう勘弁なりませんわ白雪姫っ！！ こうなったら、意地でもあなたに恥をかかせてさしあげますからねっ！！ 覚悟なさいっ！！」

高らかに叫ぶと、魔女は自分の部屋へと駆け戻り、沢山の本と、薬草と、得体の知れない薬を集めて、大きな鍋にくべて煮込み始めました。

「……ふふふ……見てらっしゃい、白雪姫っ！！」

煮えたぎる大釜の中身をのぞきこんで、魔女は高らかに笑うのでした。

「……お綺麗なお嬢さん、喉は乾いていないかえ？ とってもおいしいリングだよ。おひとつどうかね？」

またもあれから一週間。魔女はリング売りの老婆に姿を変え、森の中の小人たちと白雪姫の家を訪ねていました。ちょうど庭の掃除をしていた白雪姫に声をかけ、言葉巧みに、森の中へと誘いだしていたのです。

幸いなことに、老婆の変装でつくたしわがれ声をおかげで、白雪姫はまったく魔女に気づいていないようでした。

「わあ、とってきれいなリングですね……真っ赤で、とてもおいしそう」

「よければ、お嬢さんにひとつあげるとしようかね」

「ええっ、いいんですか？」

「なに、まだ小さいのに一生懸命うちの仕事をして働いているからね。ご褒美だよ」

と、魔女は下げたバスケットを探ってみせ、

「……おや、そう言えばこんなものがあったかね。リングよりこっちのほうがいい。お嬢さん、喉は乾いているだろう？」

魔女の大釜で煮込んだ、特製の秘薬がたっぷりに入ったリングジュースを、魔女はバスケットから取り出してみせました。

さっきから、白雪姫が庭のお掃除でたくさん汗をかいているのを、魔女はしっかりと観察していました。きっとよく冷えたジュースはさぞおいしそうに映ることでしょう。

けれど、白雪姫は小さく首をかしげて言いました。

「あら？ おばあさん、どこかでお会いしたことがありましたかしら？」

「ふエッ！？ な、なななな、なにを言うんだい、そんなことはないよッ」

「そうですか？ でも、だったらどうしてわたしがここで暮らしているって知っているのかしら？」

白雪姫のもっともな指摘に、魔女は口から飛び出しそうになった心臓をおさえようと、両手で口をふさぎました。

あわてて言い訳をさがそうと、魔女はきよろきよと周りを見回します。

「そ、そりゃあ……ほれ、そうだ！！ 小人たちから聞いたのさ！！ いつもいつも、一生懸命働いてくれて、白雪姫はとっても頑張り屋だってねえ！！」

「あら、おばあさん、わたしの名前も御存じなのね？」

「あわわわ！？ い、いやほら、小人たちがそうやって自慢するのさ！！ あいつらはお調子者だからねえ！！」

怪しまれまいと必死に言い訳をしながら、魔女はローブの下でだらだらと滝のように流れる汗をこっそりぬぐいます。

人を疑うことを知らない白雪姫が、こんなにも慎重なのにはわけがありました。小人たちは、先日やってきた物売りの正体をひどく怪しんでいて、白雪姫にうかつに外を出歩かないほうがいと助言していたのです。

白雪姫はその言いつけを守って、小人たちが森に出かけている間も、しっかりと留守番をしていたのでした。

でも、どうやら考えすぎだったようと思った白雪姫は、魔女に深々と頭を下げます。

「……ごめんなさい。おばあさん、わたし、なんだか変なことを言ってしまったみたいです。リングジュース、いただいてもいいですか？」

「あ、あああ、ああ。いいともいいとも。たっぷりお飲みなさい」

ようやく白雪姫が警戒を解いてくれたので、魔女は慌ててさっきのジュースを差し出しました。

（ふふふ、忌々しい白雪姫。このワタクシ特製のおクスリ入りリングジュースで目にも物を見せてあげますわ……！！ 見ていらっしゃい、これさえあればあつという間ですわ……！！）

胸のドキドキを押し隠し、魔女はじつとジュースのグラスを受け取った白雪姫を見つめます。

「とってもいい香り……それにすごく良く冷えてて、素敵ですね……どうやって作っているんですか？」

「え、ああ、そんなのは……いろいろさ。ねえ？」

（いいから早く飲みなさいってのに！！ さあ、ほら、一息に——ぜんぶ、ごくごくっ！！）

焦る魔女の気持ちを知ってか知らずか、白雪姫は目を閉じて、リンゴジュースのいい匂いをたっぷりと胸に吸い込みます。

「はあ……素敵ですね。おばあさんが一生懸命お世話してそだてたリンゴだから、こんなに素敵な香りがするんですね、きっと」

「そ、そうだと。ほら、はやくおあがり。さあ早く！！」

「ええ……でも、なんだか飲むのが勿体ないみたい」

「そんなことないともさ！！ ほれ、ぐずぐずしないで早く飲むんだよ！！」

なかなかグラスを口にしない白雪姫に、魔女は焦る一方です。あと一息だというのにうまくいかず、魔女はじっとりいやな汗が背中に広がるのを感じていました。

（んもう、本当にじれったいっ……そんなくだらしないことはどーでもいいんですよ！！ 早く飲みなさいってのにっ……！！ ほら、はやく、全部、ごくごくごくっ——！！）

小さな唇が、透明なグラスにちゃんと当てられて、ゆっくりとその中身が傾き——

（ああ、さあほら、そのまま、全部、一気に！！ ごくごくっ、ごくごくっ、ごくごくっ！！）

けれど、リンゴジュースがちいさなあかい唇に触れるか触れないかの寸前で、不意にその手を止めて、白雪姫は言います。

「……でもおばあさん、こんなに良いものをお金も払わずにいただいてしまって、本当にいいんですか？ やっぱり、お代を払わないとだめなんじゃ……」

「っ、んなことはいいいから早く飲みなさいませこのうすのろ白雪ッ——あわわわ！！ じゃなかった、いいんだよ、あたしはほれ、お嬢さんの喜んでくれる笑顔さえあれば、それでいいんだよ……っ！！」

思わず本音が飛び出しかけ、慌てて魔女は口をふさぎ、声色を使います。

「……あのう、おばあさん？」

「な、何でもないよ、何でもっ。ちょ、ちよっとのどの調子がねえ……」

わざとらしくごぼごぼと咳をして見せる魔女。もはやローブの下は汗でびしょり。白雪姫とはもうともに目も合わせられず、魔女は目深にローブのフードを引きおろしてそっぽを向いてしまいます。

けれど、

「じゃあ、いただきますね」

白雪姫は再度グラスを手に、ゆっくりとそれを——口に運びました。

ごく、ごく、ごく。

白くて小さな喉がゆっくりと鳴り、グラスの中のリンゴジュースがみるみる白雪姫の喉をおちて、お腹の中へと流れ込んでいきます。

（やった！！ やりましたわ——！！ ついに、ついに飲ませましたわよ！！）

魔女は飛び上って喜ぶたいのを、必死に堪えていました。うきうきと足が動き、方が踊り、おばあさんの扮装はいまにも解けてしまいそうです。

魔女の特製リンゴジュースには、ひとたび口にすればそれだけでたちまち猛烈におしっこがしたくなってしまう秘薬が入っていたのでした。

（うふふ、さあ、もっと、もっとお飲みなさいまし。ごくごくっ、ごくごくっ、うふふふふふ……！！）

一口飲めばたちまちオシッコでおなかがたがたと揺れて動けなくなり、二口でおチビりをしながら一目散にまっすぐトイレに駆け込

み、三口も飲めばもうまる一日はトイレから出てこれなくなるほどの、特製のリングジュース。
それを白い喉がこくこくと飲み干してゆくのを、魔女は胸の中で万歳しながら見つめていました。

効き目は、たちまちあらわれました。

「ふぁ……っ！？」

ドレスの腰がびくびくっと震え、甘い喘ぎ声が白雪姫の口を飛び出します。慌ててコップからさくら色の唇を離し、口に手をあてた白雪姫ですが、そわそわと背中を這いあがる猛烈な感覚に、たちまちドレスのスカートの下で両脚をくねらせ始めてしまいます。

どこからともなく身体の中にこぼこぼと湧き出した恥ずかしいお湯が、際限なく白雪姫のおなかのティーポットに注ぎ込まれてゆくのははっきりと感じ取り、白雪姫は震えあがりました。

「あら、どうしたんですの？」

魔女は笑い出したいのをいっしょうけんめい堪え、なんでもない風を装って白雪姫に意地悪な質問をします。

「い、いえ、そのっ。あ、あの、これっ……」

「ああ、そんなに残してしまうんですの？ やっぱりお姫様には、そんな貧しいものはお気に召さないのですかしらねえ……？」

お婆さんの喋りも忘れて、すっかりいつもの口調になっている魔女ですが、いまや白雪姫は完全にそれどころではなく、自分が騙されているのだ、ということにも気づけません。

「そ、そんなこと、ないですっ……と、とっても、美味しい、ですよ」

（……の、残したりしたら、おばあさんに失礼よ……、の、飲まなきゃ……っ）

今すぐにぎゅうっとスカートの前を握りしめ、『おひめさま』を抑え込みたいのを必死に我慢して、白雪姫は笑顔を作ります。

（だ、大丈夫よ……あとひとくちくらい……）

恐る恐る、こくり、とジュースに口をつけると、たちまちお腹の奥底にこぼこぼこぼと音を立てて恥ずかしいお湯が注ぎ込まれていきます。唇がコップに触れるたび、すさまじい勢いで尿意が高まり、白雪姫のおなかのはぱんぱんに張り詰めていきます。

（うふふ、ごくごく、ごくごく。……ああ、いいですわよ白雪姫っ、もっともっと、はしたなくお飲みなさいまし！！ ふふふ、そうすればそれだけ、あなたのおなかのなかは恥ずかしいオシッコでたぶたぶ、ぱんぱんですわ。……ごくごく、たぶたぶ、ごくごく、たぶたぶっ、うふふふふふふ！！！！）

魔女の視線に押されるように、とうとう白雪姫は悪魔のリングジュースをコップに一杯、ぜーんぶ飲み干してしまいます。

（あああああっ……だ、だめっ……）

まるで、お腹の中にもうひとつ心臓ができてしまったみたいでした。こぼこぼと湧き出すおしっこで、みるみる下腹部が硬く石のように張りつめてゆきます。じんと痺れるように、『おひめさま』の出口へと響き渡るイケナイ感覚に、白雪姫は小さくくねくねと腰を振りだしてしまいました。

スカートの下で膝がこつりこつりとぶつかりあい、お尻もちよこんと後ろに突き出されて、不安定にゆらゆらと揺れ動きます。

「うふふ、白雪姫さま？ どうですかしら、もう一杯いかがですか？」

「えっ……」

やっとのことで空にしたコップを手にしたまま魔女にそう聞かれて、白雪姫は凍りついてしまいます。

「とっても美味しいって誉めてくださるんですもの。ワタクシも嬉しいですわ。うふふ、ほおら、遠慮せずにお代りをお上がりになってくださいませ？ うふふ、うふふふふ……」

「え、あ、あのっ……で、でもっ……」

白雪姫のおなかはおしっこでパンパンで、今すぐおトイレに全速力で駆けこんでしまいたくなるほどなのです。もうこれ以上一滴も口にできそうにありません。

「うふふ、さあ、どうぞ、白雪姫さま？」

「あ、あッ……だめえ……ッ！！」

差し出された“おかわり”を前に、白雪姫の唇が、小さな小さな声で思わず拒絶の叫び声をあげてしまうのも、もちろん魔女は聞き逃しません。

これまでのどんなものよりも、差し迫った危機を訴える白雪姫に、魔女は笑い出したい気分です。

「どうかなさいましたの？」

「い、いえ……っ い、いただき、ます……っ」

(……せ、せっかくの、おばあさんのご好意ですもの、む、無駄にしちゃいけないですっ……)

「んっ、んくっ……んう……」

「うふふふふ、うふうふふ、どうですか？ 美味しいですかしら？」

「っは、はい……っ」

白雪姫はけなげに、二杯目のジュースを口に運びます。

あまりにも思い通りの展開に、魔女はもうこみ上げてくる笑いを抑えることができませんでした。

「うふふ、どうぞたんとお召し上がりなさいまし。まだまあいっぱいおかわりがありますわよ？ うふふ、うふふふふふ！！」

「うあ……や、だっ、あ……」

きゅんきゅんと疼く白雪姫の下半身は、たちまちのうちに猛烈な尿意に支配されてしまいます。もう、頭の中はおしっこ、おトイレのことでいっぱいです。

(だ、ダメ……も、もう飲めない……っ)

ジュースを半分ほど残したところで、白雪姫はどうとう音をあげてしまいます。

コップをかたん、と取り落とした白雪姫は、不恰好にお尻を突き出し、両手をぎゅうっと脚の根本に押し当ててふらふらと後ずさります。

「あ、あっ、あ、あっ」

白いドレスに皺がよるのにも構わずに、白雪姫はぐいぐいと身体をねじり、脚の間につこんだ手のひらでぎゅうぎゅうと『おひめさま』を揉み始めてしまいました。

(うふふふふ、あーっはっはっは！！ 思い知るがいいですわ。……御覧なさい、なんてみじめな格好ですかしら！！ ワタクシの目の前で、あんなにみつともなく、お手洗いを我慢して——！！ うふふ、これでもうお姫様失格、間違い、ナシですわねっ！！ あーんな姿、とても世界で一番素敵な女の子なんて言えませんわね！！ ほほほ、おっほっほっほ！！)

とうとう、目の前でせわしなげに腰を揺すり始めてしまった白雪姫を見て、魔女は笑い出したいのを必死に堪え、胸の中で勝ち誇っていました。

（あっはははは！！ どうですの、あんなにみつともなくハズカシイところを握りしめちゃって！！ もじもじ、くねくね、はしたないったらありませんわ！！ うふふ、あんなになってまでおしっこを我慢して……いい気味ですわね。でも、まだまあ辛くなりますわよ？ だってあんなにごくごく飲んでしまったんですもの。もっともっと、お腹がたぶんたぶんのぱんぱんですわ。……さあ、もっとそのみつともない格好を見せてくださいませ？ もじもじ、くねくね、たぶたぶ、たぶたぶ……うふふふふふ！！）

「ふ、っ、あ、あう、あつ……ああつ……」

汗に湿る指で、ぎゅうっとスカートの上から『おひめさま』を握り締め、白雪姫はなんとか平静を保とうとします。

けれど、細くて白い脚は歩くこともできないほどにがくがくと震え、こみ上げる波を押しとどめるので精一杯です。まっすぐ立っているのも難しく、膝が勝手に動いて、足踏みまで始めてしまうほどでした。

「あうううっ！？」

靴の先がわずかに草にひっかかるわずかな振動すら、強烈な刺激になって白雪姫を襲います。押さえ込んだ手のひらの奥で、おしっこの出口がぶくんと膨らみ、今にも熱い水流をほとばしらせんばかりにひくつきます。

「うふふ、くすくす……あらあら。こぼしてしまって勿体ないですわ。……もう一杯いかがですか？」

「い、いえ、そのっ、も、もう十分ですから！！」

「あら、残念ですわ。……もっともおとお召し上がりになっていただきたかったのに。うふふ、うふふふ……」

「っ、あ、あの、っ」

「はい？ なんですの？」

ぎゅ、ぎゅ、と足踏みを繰り返す白雪姫に、魔女はしらじらしく答えます。

「す、すみません……っあ、あのっ、え、えとっ」

「あら、どうなさいましたの？ すごい汗……どこかお具合でも悪くなりましたかしら？ うふふ、うふふふ」

「っっ……！？」

意地悪な魔女に声をかけられて、白雪姫の顔はみるみる真っ赤に染まりました。

まっすぐ立てないほどのおしっこの猛威に、がくがくと膝を震わせながら、白雪姫はどうか言葉を押し出します。

「白雪姫さま？ やはりまだとてもお喉が渇いてらっしゃるんじゃないでしょうか？ 御遠慮なさらずに、もう一杯お飲みになってくださいまし」

「ッ、い、いいです！！ もういいですっ！！」

限界を訴える下腹部の衝動のまま、白雪姫は叫んでしまいます。魔女はわざと、大げさに傷ついたふりをして見せました。

「あら……そうですね。……やはり、ワタクシのジュースなんて、高貴なお姫様のお口にはあわないのですわね……ごめんなさいまし、白雪姫さま？」

「っ、ち、ちが、違うんですっ！！ そ、その、す、すいませんっ、きゅ、急にっ——」

「急に？ 急に、どうなさいましたのかしら。うふふ？ うふふふふ！！」

「あ、あつ、あつ……」

まさか、いくら本当のことでも、人前で堂々とおしっこがしたくなっただけです！ なんて言えるわけがありません。ましていま口にしていたばかりのジュースが原因だとは、純朴可憐な白雪姫にはまったく思いもよらないことでした。

あくまで、白雪姫にしてみれば、お婆さんのジュースを飲んでいたら、突然猛烈におしっこがしたくなってしまった、ということではかないのですから。

（そ、そんなことをしたら、お婆さんに失礼ですもの……っ、で、でも、も、もうダメ……は、はやく、はやくお手洗いに……っ！！）

お姫様のブライドと、尿意の板挟みになって言葉に詰まってしまう白雪姫の、ふう、ふうっ、という荒い息が、静かな森の中に響きます。

そんな事をしている間にも、白雪姫の『おひめさま』には、次々と湧き出した恥ずかしい熱湯が溢れんばかりに流れ込んでいきます。もうとくに女の子の秘密のティーポットはいっぱいになっているというのに、あとからあとから押し寄せてくるその量はとどまるところを知りません。

「あっあ、そ、そのっ、っ、あ、え、ええと……っ」

うつむいた顔を真っ赤にしながら『おひめさま』を押さえ込んで、くねくねもじもじとおしっこ我慢のダンスをはじめてしまう白雪姫。

「ごっ、ごめんなさいっ、あ、あの、急に、ご、ご用事が、っ」

精一杯のそんな言い訳も、ドレスのスカートを必死になって握りしめながらでは、説得力がありません。魔女はくすくす、と笑いながら、白雪姫にさらなる意地悪な言葉を投げつけます。

「うふふ、あらあら。白雪姫様はダンスもとおてもお上手なんですね？ 舞踏会に備えていっぱい練習してらしたのかしら？」

「っ、あ、ち、違いますっ、その、こ、これはっ……」

「謙遜なさらなくたっていいですわ。とってもお上手。1、2、3、1、2、3……うふふ、うふふふふ！！」

左右の足踏みにあわせてくねくねと揺れる腰を、魔女は手拍子までしてはやし立てます。白雪姫はもう耳まで茹だったように真っ赤になって、必死に動いてしまう脚を止めようとするのですが、限界を超えてなおあふれ出てくるおしっこを堪えるのにはじっとしてられません。

（うふふふふ、そうですわ、もっともっと、もっともっと恥ずかしい格好をなさいませ。スカートをぎゅうぎゅう押さえて、おしりをもじもじ揺すって、脚をくねくね絡ませて！！ うふふ、そして最後には、じわじわ、たぶたぶ、もっといっぱい、一杯に恥ずかしいおしっこを溜めこんで、じゅわじゅわ、びちゃびちゃ、じょぼじょぼ！！ ありったけ、ゼーんぶオモラシしてしまうがいいですわ、白雪姫っ！！）

そうしてとうとう、白雪姫がきつきつ握りしめている白いドレスに、変化が訪れます。

「あ、あっあ、あっあ、ダメっ、ダメっ」

ぱくぱくと、言葉にならない悲鳴を上げる白雪姫のくちびるの動きに合わせるように、白くなるくらいに握り重ねられた手のひらの周り、スカートの布地に、じわ、じわ、じわわあ、と薄黄色い染みが広がってゆきます。

「嫌、いやあ、あああ……っ、で、出ないで、出ないでエ……っ」

悲痛な叫びと共に、白雪姫はなんとか決壊を押さえ込もうとしますが、揺すり動かされる腰からはまるで入れ物のふちを乗り越えて溢れるように、『おひめさま』からはじゅわ、じゅわあ、と熱い雫がこぼれ、引っ張り上げられた下着にぶつかって脚の付け根を濡らしてゆきます。

「あ、あっあ、あつ、あーっ……っ！！」

じゅっ、じゅう、じゅるるう、ぶじょっ、

じよわあつ、ぶしゅるるっ、しゅうう……っ！！

まるでおチビリの音の見本会のよう。白雪姫のダンスにあわせて、ドレスの下で熱い水流が次々とほとばしり、下着と内腿を大洪

水にしてゆくのです。

疑うことを知らない、汚れなき純真なお姫様の身体を、その内側から、特製リンゴジュースを介して魔女の悪意が塗り潰してゆきます。草むらのそばで始まってしまったオモラシは、もはやとどまることを知りません。

「だ、だめえ、お、お手洗いつ、い、いかなくちゃだめなのに……っ、あ、あっ、あっ、で、っ、でちゃう、でちゃう……ううっ」

ぷじゅじゅじゅうっ、じゅわ、ぴちゃじょぼっ、じょじょじょおおおっ、
じゅじゅっ、じゅうううう、ばちゃびちゃばちゃじょぼぼっ！！

口にしたリンゴジュースよりもずっとずっと多いおしっこが、バニエで大きく膨らんだふわふわのスカートを、びちゃびちゃくしゃくしゃに濡らして脚に張り付かせ、そのまま脚元に飛び散ってゆきます。お腹から下だけが河にでもい落っこちたような有様でした。

白雪姫の小さな身体じゅうから、ありったけの水分がを絞り取るように。魔女特製の秘薬は、いよいよ猛烈にその効果を発揮してゆきます。

「ああ……っ、やだ、っ、こんな、違います、違うんですっ、こんなの、っ……」

ますます激しくなるオモラシの大洪水。

井戸が壊れてしまったようにばちゃばちゃと音を立てて滴り落ち、泥を跳ねさせ泡立てる激しい激しい白雪姫のオモラシに、魔女は声をあげて笑い転げます。

「うふふ、うふふうふ、うふふふふ！！ あらあら、オモラシですか？ うふふ、お姫様なのに、こんなところで、お手洗いではないところで、オモラシなさって、うふふ！！ あはは、おーっほっほっほ！！」

「っ、……っ！！」

とうとう、白雪姫をお姫様の座から引きずり下ろしたことに、魔女はいつまでもいつまでも笑いながら、うつむき泣きじゃくる白雪姫をはやし立て続けるのでした。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 部活のイジメの話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 08/16/2009 19:15:58

BODY:

「お、お願い！！ トイレ！！ トイレ行かせてっ！！」

ついになりふり構わずマキは懇願してしまう。

背中にガムテープで固定された両手は自由にならず、腰はジャージで椅子に縛り付けられたまま。上は半袖のトレーニングウェア、下にはスパッツだけという格好で、もう1時間も冷房の効いた教室に放り込まれているのだ。

唯一自由な両脚も、さっきからぎゅうぎゅうと交差されては組み替えられ、脚の付け根の紺色の布地は、色こそ変えてはいないもののその内側に溜まりに溜まった大量の恥ずかしい液体をありありと想像させるように、惨めなくらいに皺が寄せ合わされている。

「えー？ もうギブアップ？ まだ3時だよ？ これからが本番じゃない、部長」

「ねえ、ホントよね。『口ごたえはあとグラウンド10周追加ー！！』だよ？」

マキを囲むように座る少女達は、それぞれ防寒対策ばっちりのジャージにアンダーウェアまで着込み、椅子に腰掛けてスナックなど齧っている。設定温度18度という常識外れの温度下でも余裕たっぷりの彼女たちに比べて、冷風の直撃を浴び続けているマキはすでに限界に近いほどに唇を青くさせ、冷や汗を浮かべながら小刻みに身体を震わせていた。

「あ、部長？ そんなに汗かいちゃって、ひよとして喉かわいてるんですか？ じゃあお代わりあげますねー。はい、口開けて？」

「ちよっ、あんた達、やめッ……んぐっ、ううっ！？」

たちまち見事な連携で少女達がマキを拘束し、無理矢理顔を上向かせると口を開けさせて、卓上に何本も並んだペットボトルから一本を選び、その中身を流し込んでゆく。

「水分供給って大事ですからねー。特にこの季節、熱中症にならないようにちゃんと飲まないとだめですよー？」

「ごほっ、んぐ、うっ、んううっ！？」

むせ返り窒息の恐怖に堪えながらも、必死に息を継ぐマキの喉には、またごぼごぼとよく冷えた“あの”お茶が流れ込んでゆく。

「んぐっ、っ、げほっ、ごほっ！！ っ、い、いい加減にしてッ！！」

苦しさに暴れ回るマキは、脚を振り回してどうにか少女たちを振りほどくことに成功するが、その頃には500mlの大半がおな

かの中へ流れ込んでいた。

ぜえぜえと息を荒げ咳き込む惨めなその様子を目にしながら、少女達はまたくすくすと陰湿な笑みを浮かべる。

「もお。そんなにこぼしちゃって。もったいないなア部長」

「ねえ。折角飲ませてあげてるのに。乱暴ですねー」

「な、なんなのよあんた達！！ も、もう分かったっていつてるじゃないっ、い、一体なの権利があつて、こん、なっ……っ」

睨もうとした視線、叩きつけようとした鋭い言葉が、こみ上げてくる尿意に遮断される。胃の中に流れ込んだ水分が、そのまま硬く張り詰めぱんぱん膨らんだ膀胱の中に溜まってゆくようだ。冷え切ったマキの身体の中、ここだけがまるで熟したように熱を持って脈動を続けている。

「はっ……」

何度も飲まされ続けたあのお茶には、何か妙な細工がしてあるのはもう疑いようがなかった。水分補給に最適、などと言っていたが、恐らくは強烈な利尿作用を伴っているのに違いない。マキの下腹部はたとえようもないほどにじんじんと疼き、まるで焦げ付くように強烈な衝動が、内臓を驚掴みにしたかのような錯覚すらある。

そんなお茶をまた、コップ1杯以上飲まされてしまったのだ。実際の効果以上に、新たに水分を摂取したことによる心理的な圧迫は厳しい。

「んん……っく……はあ、ツ……」

ぷるぷると顎を震わせ、脚をきつく閉じあわせ、『催してしまった』マキはこみ上げてくる猛烈な尿意の波に耐える。俯いた顔を紅く染めて腰をくねらせ、唇を噛み締めるマキの様子に、周囲の少女達はますます陰湿な笑みを濃くしていた。

「ねーえ、部長、ひとつしつもん。本当にもう限界なんですかー？ 県大会準優勝の優秀な部長さんがあ、ちょっと苦しいぐらいでそんなに簡単にギブアップなんかしちゃって、いいんですかー？」

「そうだよ。普段あんなに『軽々しく限界なんて言わない！！』とか言っちゃってる人が、たった1時間でなんておかしいよねえ？」

「っ……だ、だから、それは……っ」

今期から部長を任されたマキの指導が、かなり熱の入った強引なものであり、精神論を振りかざした内容からも一部の部員たちからは鬱陶しく思われているのはマキ自身も自覚しているところではある。しかしそれも、これまで人一倍努力を重ね、自信を付けて県大会でも成果を出してきた自分の経験に基づくもので、決して無謀なことを押し付けてきたつもりはなかったはずだ。

だが——それはこうして、彼女たち部員によるマキへの私的制裁、という最悪の形で裏切られてしまった。

「あのさ、誰も彼もおんなじように出来るわけじゃない。別にわたし、大会とか興味ないしさ。いまだき流行らないって、あーいうノリ。……っつか部長、空気読めなすぎなのよ」

「まあ言うだけなら簡単だけだねー。けっきょくこれで口だけちゃんだって証明されたわけだし？ いいんじゃないの？」

「っ……」

好き放題な言われ様だが、マキに返す言葉はなかった。やる気を見せない部員たちに、売り言葉に買い言葉で散々張り合った挙句——たった1時間で、限界を催しトイレを訴えてしまったのだ。

惨めなほどに擦りあわされるスパッツの脚は、県大会上位入賞をもぎ取った実力など無関係に、必死に尿意に抗する事だけに専念させられている。この惨めな姿こそがいまのマキの敗北の証だった。

「ね、ねえ……もういいでしょう！？ わ、私にも過ぎたところはあったし、それも認めるわ！！ ……だ、だから、いい加減にこんなことは……っ」

「あっはは、本当にもう限界なんだねー部長。可愛い。プルプル震えちゃってさー」

「でもねえ、まさか、ここでオモラシなんてことないですよねえ？ 曲がりなりにも部長なんですから、ちゃんとトイレまで我慢してくださいねー？」

「そうそう、栄光ある我が部の部長が、トイレのしつけもできてないんだーなんて噂されるの、恥ずかしいですし」

部員たちは口々にマキの羞恥をえぐる。そうすることでさらにマキが辛くなるのを彼女たち一人一人がよく理解していた。事実、ちりちりとまるでとろ火の様に下腹部を炙る尿意は、強烈な利尿作用を伴ってますます激しくなり、いまや沸点を超えてなお熱量を溜め込んでいる。ほんの少しの弾みでいつ突沸してもおかしくない具合だった。

「だ、だから……ね、ねえ、早くッ！！ こ、これ、ほどいてっ……も、もうダメなの、と、トイレ……！！ っ、漏れちゃうっ……！！」

がたがたと椅子を揺らし、マキは少女のプライドをかなぐり捨てて叫ぶ。いまや出口をこじ開けんとする水圧を塞き止める水門は、辛うじて一本の細い細い糸で緊張を保たれているようなもの。こうしている間にも崩壊のカウントダウンは着実に進んでいる。

マキはスパッツの下になにも身に着けていなかった。短距離を専門にする選手などは動きやすさを優先するためこのような手段をとることもある。

一応、パットは縫い込んであるが、もともと下着の一種のスパッツは非常に布地が薄く、まともな保水力など期待できない。我慢に我慢を重ねたオシッコはわずかでもちびつたら最後、股布を素通りして外に吹き出してしまおう事は明白だった。

「だからさ、練習時間終わるくらいまで我慢って言ってんじゃない、部長。それともなに？ マキちゃんてば、それくらい我慢できないの？」

「うふふ、おしっこ出ちゃうー、もう漏れちゃうのおー、だって。あははっ」

部員の一人が始めた口真似に、どっと笑い声があがる。

「っ……」

マキは耳まで赤くなり、さらに厳しくなる下腹部の衝撃に、必死になって脚を重ね合わせた。股間を覆う紺色の布地はぐいぐいと引き伸ばされ、皺を寄せ合い、ねじられ、こねあわされ、びくびくと痙攣を繰り返す。

本当なら両手でぎゅうぎゅうと股間を握り締めてもお足りないくらいの事態だ。少しでも気を抜いてしまえば、そのままオモラシが始まりかねない。

「そ、あと4時間くらいだから、部長なら余裕ですよ？」

「そうそ、余裕余裕。ガマンできるでしょ？ 準優勝のマキちゃんならさあ」

「っ……」

当たり前のように無茶を言って、部員たちは一向にマキを解放する気配を見せなかった。そんな、まさか、いくらなんでもと思いつつも、マキの心は最悪の結果を否定できずにいる。もしもこのまま——と、万一の事態を想像してしまい、マキはぶるっと怖気に背筋を震わせた。

（そ、そんなの……嫌……っ）

最上級生になつてのオモラシなど、どんな理由があろうと絶対に許容できない恥辱だ。しかし今のマキにできるのは、声を枯らし、生殺与奪を握った部員たちに必死になってトイレを訴えることだけだった。

「ねえマキちゃん、そんなにしたい？ ねえ、おしっこ出したい？」

「ッ、あ、あたり前、でしょッ……！！」

「あー、そんな言い方していいのかな？ さっき教えたこと、もう忘れちゃった？」

くすくすと笑う部員たち。散々股間をいたぶられ、ぐいぐいと下腹部を圧迫されながら、とうとう最初に限界を訴えた時の記憶がマキの脳裏をよぎる。

「お、お願いします、も、もお、漏れそうなんです……………お、おしっこ…っ、…さ、させてください…………ツッ！！」

一音節を発するだけで頭の中身が蒸発してしまいそうな、猛烈な羞恥に耐えて、マキはどうにかその言葉を口にした。身をよじりながら訴えるマキに、更なる爆笑が巻き起こる。

「ふふ、そおんなにおしっこしたいんだ。はい、じゃあね、どーしてもおトイレまでガマンできないマキちゃんに、特別におトイレを用意してあげましょうねー。よかったですねー？ マキちゃん？」

ことさらにマキを子ども扱いする口調で、部員の一人が鼻歌と共に近くのバッグを漁り、その中からひとつのモノを取り出した。

「うふふ、はいこれ、どうぞー」

「そ、それ…………ツッ！！」

マキは言葉を失った。それは昨年、マキが夜遅くまで必死に努力を重ね、とうとう県大会で手に入れた——準優勝のカップだった。いまは部室に飾ってあり、それを目標にと、今年マキが部長を任されるきっかけを作った品でもある。

この2年間の努力の結実であり、同時に誇りでもある品を、いつの間にか他人に勝手に持ち出された事への怒り——よりも先に、何故それがここにあるのかという事実がマキを困惑させる。

「っ、な、何考えてるの、アンタ…………！？」

「うふふ、だからあ」

銀色にきらきらと輝くカップが、マキの腰掛ける椅子の下にこごとと置かれる。それはマキの左右の脚の付け根の間、ちょうど今にも吹き出しそうなオシッコの出口のすぐ下だ。

「だから、ト・イ・レ、ですよ部長？ これに、おしっこしていいんですよ？ ふふ、これが、どーしてもおトイレまで我慢できない、マキちゃんのおしっこ専用のトイレ。ね？」

にこり、と笑顔で、彼女は取り出した紙片をカップに貼り付ける。

紙片には太いマジックでゴ丁寧に『マキちゃんのおシッコトイレ』と書かれていた。

「ツ…………！？」

あまりのことに言葉を失うマキに、はっきりと声に出しながら部員たちが笑いあう。

「よかったねえマキちゃん、これでおしっこできるよお？」

「ガマンしてたんでしょ、しちゃっていいよ？ あ、もちろん片付けるのもマキちゃんだけだね」

「ほんとにしようがないなあマキちゃんは。ちゃんとトイレも我慢できないんだから」

「ツ、はあ！？ な、なに考えてんの、あんた達…………！？ (ば、馬鹿じゃないの！？ こ、こんなことしてツ…………冗談もいい加減にしてよ！！)」

「えー、冗談なんてそんなことないよ？ ねえ？」

くすくす、と笑いあう部員たちは、まったく訂正の気配すらも見せない。

本当に本気なの、と、マキは声を詰まらせた。

「い、いいから早くトイレっ…………こ、これほどきなさいよお！！ このままじゃ、本当に間に合わなくなっちゃうツ…………」

「もう、だから言ってるじゃない？ マキちゃんのおトイレはそれだってば。さっきからさ、おしっこ行きたいっていうけど、一人で歩いてト

イレまでいけないでしょ？ せっかく用意してあげたのに、いらないの？」

「っ、あ、あんたッ……」

歯を食いしばると共に、マキは戦慄する。断じて言っておきたいが、歩けないのは単に、椅子に縛り付けられているからだ。

どうあっても、彼女たちはマキを解放するつもりはないらしい。

「そんなとこで漏らしちゃったら床汚れちゃうし、先生にも怒られるし？ いつ漏らしちゃってもいいようにそのままにしといてあげるよ。

……うふふ、でも、マキちゃんがいっぱいおしっこしちゃったら、溢れちゃうかな？」

「マキがちゃんと我慢すればいいんじゃない。ねー、部長なんだからさあ」

県大会までたどり着くのに、どれだけの努力を重ねたことだろうか。間違いなく血の滲むような練習の繰り返しだ。他の子が遊んでいる間、眠っている間、怠けている間、全てを犠牲にしてマキは努力を続けてきた。

競技会で泣いた子だってたくさん居る。同じように上を目指す多くの選手たちと競い合って、倒し、勝ち、手に入れた——そんな憧れと誇りの象徴を——彼女達はトイレ代わりにさせようと、しているのだ。

「っ、…………っ」

負けるわけには、絶対にいかない。マキは必死になって歯を食いしばり、尿意を飲み込もうと身体を揺すっては腰を震わせ、息を荒げる。悲壮なまでの覚悟で、マキは彼女たちの挑戦を受ける意志を表示した。

もう、トイレ行きたいなんて軟弱なことは絶対に口にしない。強い意志で身体の要求をねじ伏せて、マキはじっと部員たちを睨む。

「ふふ、頑張るねえ部長？」

「み、見てなさい、よっ……、そ、そんな捻じ曲がった根性、叩きなおしてあげるからっ……」

「はーい、覚悟しておきまーす」

あくまでも軽い調子で——マキが勝てないと分かっているかのように——くすくすと嘲笑を浴びせる部員たちの前で、あまりにも絶対的なハンデを持ちながらも続く、都合 8 時間にも及ぶ我慢劇の、後半戦 4 時間が始まろうとしていた。

マキ自身、あとほんの 10 分もしないうちに音を上げてしまうとは、思いもやらずに——。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 夏祭りのお話・前編
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 08/16/2009 19:17:44

BODY:

「ほら千佳、もうお姉ちゃんたち出かけるわよ。着替えなさい」

「あ、待ってよおかあさんっ」

うだるような暑さが、夕焼け空とともにわずかに弱まり、入れ替わりに蝉の声が強くなって、それに重なるように小さな花火の音。ベッドに寝そべってお財布をひっくり返し、お小遣いを数えていた千佳は、慌てて飛び起き、今日のために用意した硬貨を詰め込んだお財布をポシェットに詰め、リビングに向かう。

「百恵、千佳の手伝ってあげてくれる？」

「はーいっ」

リビングでは既に浴衣に着替え終えた姉が、千佳を待っていた。Tシャツとカットジーンズを脱ぎ、こどもばんつ一枚になった千佳は、とてとと姉の側に走り寄る。

「おねえちゃん、もう着替えたんだ」

「約束、5時半からなのよ。千佳も友達と行くんだっけ？」

「うん、郁乃ちゃんといっしょ」

一番の友達との待ち合わせは6時からだ。待ちきれずバンザイをする千佳に、姉は苦笑しながら浴衣を着せてくれる。

今日のお祭のために新しくしてもらった浴衣は、白地に向日葵をあしらった爽やかな色合いだ。いつもズボンで元気に走り回っている千佳には、ひらひらした浴衣の感触は微妙に馴染まない。

「ほら、じっとして。せっかくお洒落して行くんだから、今日くらいはちょっとはおとなしくしてなさいよ？」

「えー？ そんなのやだよ。ぜったいリベンジするんだもん」

千佳は口を尖らせた。リビングの机には、大きな透明の金魚鉢が置かれている。これも、今日のために用意したものだった。

昨年、千佳は具合悪く夏祭りの当日に風邪を引いてしまい、泣きながらベッドで一日を過ごした苦い経験がある。一番楽しみ

にしていた金魚すくいもできず、それから一年、カレンダーに印をつけてずっと今日を待ち続けてきたのだ。

「あれだってお祭りの後だっていいじゃない。ちゃんと捕れるか分からないのに」

「そんなことないよ。きっと大漁だもんっ」

ぐっと拳を握り、千佳は高らかに宣言する。

きょうはその決戦の日だった。ピカピカの新しいおうちに、きっと沢山金魚さんを連れて返ってくると、千佳は固く決心していたのだった。

妹の意気込みを感じ、姉もはいはい、と応じてくれる。

もうすぐ5時を指す時計の針を見上げながら、千佳は期待に高鳴る胸とともに、ふつつつと闘志を湧き立たせているのだった。

（んー……なんかすーすーするなあ……）

いつもは感じるズボンの感覚がなく、下着のしたはすかすかと頼りない布がぶら下がっているだけなので、妙に脚が落ちつかない。

とは言え、向日葵の浴衣は千佳が一番気に入っていた柄だ。鏡に見ても可愛いので、たまにはこんなのも悪くないかな、と千佳は思う。

（まだかな、郁乃ちゃん……）

サンダルを鳴らしアスファルトの地面を蹴って意気揚々と出発した千佳は、予定通り6時15分前に待ち合わせの神社隣のお店の前に到着していた。

片手には手持ち無沙汰を埋めるために買ったジュースのペットボトルと、途中の出店で買った焼き蕎麦のパック。まだ境内にも入っていないと言うのに、焼き蕎麦はその全部が、ジュースはすでにその半分ほどは千佳のおなかの中だ。

最初はまばらだった人通りも神社に向かうにつれて徐々に増し、いまや道路は人ごみでごった返すほどだ。二年ぶりのお祭の盛況に、否が応でも千佳のテンションは高まっている。

「ん。……あ！！ 郁乃ちゃんっ、こっちこっちーっ！！」

道路の向こうに待ち焦がれていた小さな姿を見つけ、千佳は大きく手を振って叫んだ。名前を呼ばれた少女は、ちょっと恥ずかしそうにしながら慌てて人ごみをかき分け、千佳の元にやってくる。

「こんばんわっ、郁乃ちゃんっ」

「千佳ちゃん、こんばんわ」

薄赤の格子模様の浴衣を着た郁乃は、ぺこりと頭を下げる。

「もう来てたんだ、千佳ちゃん」

「待ちくたびれたよお。早くいこっ」

「うん。……あれ、もうご飯食べちゃったの？」

「ん？ ああ、これくらいどーってことないよ。おやつみたいもんだってば」

焼き蕎麦のパックをゴミ箱に放り込み、千佳は笑いながら答える。ついでに半分ほど残っていたペットボトルを開け、腰に手を当

てぐいっと一気飲みを始めた。

「んくっ、んくっ、んくっ……」

瞬く間にペットボトルの中身が減ってゆく。男前な飲みっぷりに郁乃が『わぁ……』と感嘆の声を上げた。

「んっ……ぷはっ！！ ふう、美味しかったー！！」

あっという間に一本を飲み干して、千佳はけふ、とちいさなげっぷをした。

さっきの焼き蕎麦が、ソースたっぷり、紅ショウガもたっぷりで、喉が渇いて仕方がなかったのだ。

「あはは……すごいね。……わたしならもうきつとお腹いっぱいだよ」

「そうなの？ もっと食べたほうがいいよ、郁乃ちゃん。そんなんじゃ元気出ないよ？」

きょんと首を傾げ、千佳はそのまま空のペットボトルもゴミ箱に押し込んで、もう一度自販機に向かう。

さすがに郁乃が驚きの声を上げた。

「ええっ、そ、そんなに飲んじゃって平気なの！？」

「うん、なんかすっごい喉渇いちゃってさー。おんなじの飲んでもつまんないし、今度はこっちにしよ。……よっと」

さっきの隣のボタンを押して清涼飲料水を選んだ千佳は、すぐさま冷え冷えのペットボトルの封を切って口をつける。

「んくっ、んくっ……」

今度もあっという間に、半分近くが千佳のおなかの中に消えてしまう。

「ふう……」

「すごいね……」

何を褒めているのか分からないが、とにかく千佳の飲みっぷりに郁乃は目を丸くしていた。千佳もなんとなく張りきって、残りもぐいぐいと飲み干してしまう。

実は、途中でそろそろさすがにおなかが悪くなっていたのだが、郁乃の期待を含んだ視線を裏切れないような気がして、千佳はボトルを空にするまで無理をしてしまった。

「わぁ……ほんとに全部飲んじゃった」

「ぷは……おなかたばたぽいってるや」

あっという間に空になったボトルを隣のゴミ箱に放りこんで、千佳はおおきくVサインをする。

「ね、ねえ、ほんとにそんなに飲んじゃっても平気なの？ 千佳ちゃん？ お手洗いとかいきたくない？」

「へいきへいき。これくらいなんてことないってば。まだまだこんなもんじゃないよっ」

威勢良く答えて、千佳は再び空になったペットボトルを自販機横のゴミ箱めがけて放り投げた。狙いを過たずがこん、とナイスシュートでゴミ箱の中に納まるペットボトルを見て、うし、とガッツポーズ。

「今日も絶好調！！」

「あはは……でも、よかったよね。雨じゃなくて」

「ほんとほんと。今年もお祭中止だったらどうしようかって思ったよ。でもいざこうなったら、もう今日は遊んで遊んであそびまくるんだからねっ」

ぐっと握りこぶしを掲げ、にかっとな笑顔で宣言する千佳。友達のあまりの元気のよさに、郁乃もつられてあはは、と笑う。

何しろ2年ぶりのお祭りだ。去年の鬱憤を晴らすかのように、溜まりに溜まった『お祭り』エネルギーが大爆発。千佳はいつも以上に大はしゃぎだった。

「じゃあ、行こうか」

「うんっ」

にっこりと頷く親友と、千佳は夕闇の迫る境内に駆けだした。

念入りに下見をしておいたおかげで、千佳は戸惑うことなく次々と屋台を回ってゆく。

まずは定番の綿飴にソースせんべい、たこ焼き、お好み焼き、フランクフルト、リンゴ飴。いつもはお母さんがうるさくておなか一杯食べられないお菓子が、今日に限っては食べ放題だ。あんなに水を飲んだのもすっかり忘れて、千佳は次から次へと屋台を駆け抜けてゆく。

「……うう、6等だ……」

「あたし4等！！ おじさん、はやくちょうだい！！」

元気に溢れ有り余っている千佳の様子に、屋台のおじさんも威勢良く応じ、古臭い携帯ゲームを取り出して渡してくれる。それをポシェットに放り込み、千佳はぐりん、と視線をめぐらせて次の屋台を見つけ出した。

「ねえ、あっち面白そうだよ？、行こ、郁乃ちゃんっ」

「わ、わ、待ってよお！！」

「あれ面白そう！！ あたし絶対あれやるからねっ！！」

そんな様子の大騒ぎが三十分あまりも続き、千佳はもはや、そのままどこかで露天でも開けそうなくらいの大荷物を抱えていた。クジで当てたゲームと指輪をぶら下げ、お面を斜めにかぶり、射的の景品を背負って突き進む千佳に、郁乃も負けじと付いてゆく。いつもはどちらかという引っ込み思案な友人も、お祭を堪能して楽しんでいるようで、千佳はそれも嬉しかった。

「よし。これで大体回った……かな」

「はー、ちょっと疲れたよお……」

流石に少しはしゃぎ疲れ、二人は境内の少し離れた場所に移動していた。

リンゴ飴と綿菓子を交互にはむはむとかぶりつく千佳。郁乃はその隣で熱々のタコ焼きをはふはふとつつき、舌を軽く火傷してうう、と目を細めていた。

お囃子の音と、さらに混み始めた雑踏。活気はいやまし、屋台に響く呼び込みの声もさらに高まっている。お祭はまだまだこれからだ。

「えっと、次はどこ行こうか？」

「うーん……あっちのほうまだ行ってないよね？ お化け屋敷とかどう？」

「えゝ……」

ここで、思わぬ郁乃の提案に千佳は言葉に詰まってしまう。

「うゝ……あ、あたしそういうのちょっと、ヤダなあ……」

「えー？ どうして、千佳ちゃん、一緒に行こうよ。楽しいよ？」

千佳はジェットコースターやフリーフォールのような絶叫系は大好きだが、そういうお化けとか幽霊とかが大の苦手なのである。一方で普段はおとなしい郁乃は、夏となるとなぜかそういう怖いところに好んで行きたがるので、千佳はいつも困っているのだった。

汗をたらたらと流し、千佳は目を泳がせて反論する。

「ほ、ほら、暗いところだからあぶないし。それにお客さんたくさんいるから並ばなきゃいけないし！！」

「えー？ いいよべつに。ちょっとくらい待っても。千佳ちゃんとお話してれば楽しいもん」

「で、でもさ、えーと……」

目をきらきらさせる郁乃は、すでに境内の反対側に聳え立つ大きな小屋に意識を吸われてしまっているようだった。お化けの恐怖に身の危険すら感じ、ここはなんとか思い止まってもらおうと、千佳はなにかないかと周辺の屋台を見まわす。

「えーと……あ、お、おじさん、ラムネ！！ ラムネちょーだいっ！！」

「わ、千佳ちゃん！？ 待ってよ！！」

千佳はとりあえず目に入った屋台へ、郁乃を引っ張って走り出した。

ちょうどお化け屋敷の反対側に、いきなり手を引っ張られて転びそうになる郁乃が悲鳴を上げながらついてゆく。

「お、らっしやい」

「おじさん、ラムネちょーだいっ」

「あいよっ！！ 二百円だ」

威勢良く差し出されたガラスの瓶。大きな氷できんきんに冷えたつめたいそれを、千佳は郁乃に押し付ける。

「ほ、ほら、郁乃ちゃんも飲みなよ。美味しいよ？」

「う、うんっ」

あまりにも不自然な展開だが、この際勢いでごまかしきることにして、千佳は自分の分も注文する。郁乃は渡された瓶を捨てるわけにも行かず、おっかなびっくり口をつけた。

「う……」

一口を飲んで顔をしかめる郁乃。郁乃は炭酸が苦手なのだ。コップ一杯のサイダーを空にするにも30分くらいかかる。

郁乃のことだからよっぽどのがない限り捨てたりはしないだろうし、もてあまして飲んでいるうちはお化け屋敷の事は言わないだろうから、これでなんとかなるだろうと千佳はこっそり額の汗を拭った。

(……うう。でももうおなか一杯……すぐに全部は飲めないかも……)

流石にあれだけ食べに食べていれば、げっぷがでるのも仕方がない。

しかし、ごまかすためとは言え買ってしまったものは仕方がない。無理をしても飲まないとお小遣いも勿体ないので、千佳はラムネを喉に流しこむ。

しゅわしゅわという炭酸の味が喉で弾ける感触も、残念ながらそんな気分ではいつもほどには素敵ではなかった。

「ふう……美味しいね」

「うん。そうだねっ」

ちびちびとラムネを少しずつ傾けながら、郁乃も応じる。とりあえずお化け屋敷、と言う単語はどこかに飛んでいってしまったようなので、千佳はほっと一息を付いた。

そうしてはたと気づき、千佳はぼんと手を叩く。

すっかり舞い上がって忘れていたが、そもそも大切なことがあったのだ。

「そうだ郁乃ちゃん！！ あたし、絶対に行かなきゃ行けないとこあったんだよ。去年のリベンジ！！」

「え？ あ、そっか。千佳ちゃん楽しみにしてたもんね」

「そうだよ。郁乃ちゃん応援してくれる？」

「うんっ、もちろんっ」

笑いあった二人はそのまま、金魚すくいの屋台へと歩き出す。

けれど、お祭りに浮かれすぎていた千佳が忘れていたことは、金魚すくいの他にもうひとつあった。

時刻は午後 6 時 4 0 分。千佳が浮かれ気分でおなかいっぱい、立て続けに摂取した水分は、ゆっくりと身体中を巡り、元気な身体を循環して、次第にある部分に集まりつつあった――

「ほらほらどうしたお嬢ちゃん、そのへんうまくいきそうだぞ？」

「うう、黙ってっばおじさんっ！！」

「……千佳ちゃん、頑張ってっ」

薄紙の張られたポイを右手に、水を張った金属製のお椀を左手に。

色とりどりの金魚が泳ぎ回る水槽の前にしゃがみ込み、千佳は難しい顔を崩さずにじっと睨めっこを続けていた。2 年越しのリベンジとばかりに向かった金魚すくいの屋台で、千佳はもう 1 5 分も水の中の金魚とにらめっこを続けていた。

何度も体勢を入れ替えて機会を狙うも、元気な金魚たちはポイを近付けると途端にさっと散ってしまい、なかなか狙いが定まらない。

「ほれほれ。お嬢ちゃん、どうしたい？ もうギブアップかい？」

「うーっ、見てて、今年の私は一味違うんだからねっ！！」

そう。いつもなら痺れを切らして水槽を掻き回し、あっという間にポイの薄紙を破ってしまうところだが、今年の千佳は違う。辛抱のきかない心をぐっとこらえて、じっと機会を待ち続ける。

「……うーっ」

「千佳ちゃん……がんばれ！！」

焦る気持ちを落ちつけ、じりじりと立てた膝を入れ替え、チャンスを待つ。

済んだ水の中を泳ぎ回る金魚たちは、千佳の視線から逃げるようにすばしこく泳ぎ回り、右へ左へと散っては集まりを繰り返す。

息を詰め、ぐっと歯を噛み締め、千佳はじいっと待った。

そして――

「ええーっーいっ！！」

掛け声と共に突き出されたポイは、激しく水槽の水面に波を打たせ――

跳ねあがる水飛沫と共に、千佳のお椀には赤と黒と白の三色に彩られた、大きな金魚がおさまっていたのだった。

「いやったあっ！！」

とうとうやってのけた達成感に、千佳はジャンプして喜ぶ。郁乃もそれに負けじと大喜びで、感極まったように千佳に飛びつく。

「千佳ちゃんすごい！！ やったね！！」

「うんっ、リベンジ成功だよ！！」

待ちに待っての会心の出来にぐっと拳をかため、ガッツポーズをひとつ。

いつの間にか屋台の周りには人だかりができていて、お店のオジサンも、郁乃も揃って拍手をして、大健闘の千佳を出迎えてくれた。

「よし、今でコツつかんだっ！！ おじさん、みててよ、もうこうなったらこのお店の金魚さんゼーんぶすくっちゃうんだからね！！」

「おう、そりゃすげえ。商売あがったりになっちゃうな」

「じゃあ、いっくよーっ！！」

そんな大騒ぎは、結局 4 回も新しいポイを買って、さらに 15 分以上も続いたのだった。

赤、黒、白、捕ったばかりの色とりどりの金魚が、都合 7 匹。千佳のぶら下げる透明なビニールのなかで、元気良く泳ぎ回っている。

時刻はそろそろ 7 時半過ぎ。千佳は溜息とともに財布を覗き込んで、口を尖らせていた。

「ひー、ふー……もう 120 円しかないや…」

「あはは。千佳ちゃんすっごく食べてたもんね。射的だってもう一回もう一回って何度もやめなかったし」

「だって、もうちょっとで落っこちると思ったんだもん」

あんなにたくさんあったはずのお小遣いは、いつの間にかどこかに着えてしまい、財布の中にはもう十円玉しか残っていなかった。

「郁乃ちゃんはまだおこづかいあるの？」

「うん。まだ半分くらい」

「うー、いいなあ……」

底を尽きかけた乏しい軍資金は、何度数えてもきっかり 120 円。それ以上増えも減りもしなかった。まだまだ遊び足りないのに、これでは精々ジュース一本かおみくじ 1 回。どこに行くのも自由にならない。

「でも、わたしもちょっと疲れちゃったし、お店、見て回ろうか？」

「んー……」

郁乃が気を使ってくれるのも心苦しいので、千佳は曖昧に言葉を濁し、なんとかなしに辺りを見まわす。

その時、ちょうど鳥居のほうへ歩いてゆく人たちの中に、見なれたオレンジの浴衣を見つけ、千佳はぴょこんと飛び上がる。

「あ、やったあ！！ 郁乃ちゃん、ちょっと待ってて！！」

郁乃に言うと、千佳は金魚のビニールバックを揺らしながら一目散に走りだした。人ごみを駆けぬけ、鳥居の下で数人と連れ立っているオレンジの浴衣まで一直線。

「お姉ちゃん！！」

「え？ あ、千佳」

きょんと目を丸くする百恵の腕に飛びつき、千佳は普段は使いもしない甘い声をあげる。

「ねーえ、お姉ちゃん、今帰るとこ？」

「そうだけど……どうしたの？」

「あのさあ、おこづかい貸してよお」

レアすぎる妹の猫撫で声に、姉は微妙な表情で眉を寄せた。

「な、なによ？ わ、ちょっと引っ張らないでってばっ」

「ねえ、ねえいいでしょ？ お姉ちゃん。ね？ ちゃんと返すからっ、ねえ、ねえねえねえ！！」

「わわわ！！ こら、帶くずれちゃう……ちょっと！！ 千佳、わかった！！ わかったから放しなさいっ」

「やったーっ！！ おこづかいゲットー！！」

たまりかねた姉は、渋々お財布から100円玉を2枚取り出すと、千佳の手のひらに握らせる。大喜びの千佳は、文字通り現金にぎゅむーと姉にくっついた。

「ありがと、お姉ちゃんっ」

「まったく……これだけだよ？ 私、もう帰るから、千佳もあんまり遅くなる前に帰ってきなさいね？」

「うんっ！！ ねえっ郁乃ちゃん、次はかき氷屋さん、行こっ！！」

「あ、ちょっと待って千佳」

「え？」

振り返るなり駆け出していきそうになった妹を呼び止め、百恵はちよん、とその手の荷物を指差す。

「金魚。あんまり狭いトコに入れっぱなしだと可哀想でしょ。連れて帰ってあげるわよ？」

「えー？」

せっかくの戦果を取り上げられる気分になり、千佳は不満そうに口を尖らせる。百恵も妹のそんな反応は心得たものではない、とその頭を軽く撫で、

「ちゃんと用意してあるんでしょ、金魚のおうち。早く広いところで泳がせてあげなさいってば。ね？」

「うー……」

不承不承、といった風で顔き、千佳は金魚のビニール袋を百恵に差し出す。

「大事にしてよね、頑張ってとったんだから！」

「はいはい。あんたも気をつけなさいよね」

「うん。郁乃ちゃん、いこ！！」

「え、わ、千佳ちゃん、置いてかないでよお……わわわ！？」

「ね、イチゴにするメロンにする？ あ、レモンもブルーハワイもいいなあ……」

「わわ、千佳ちゃんあぶない、あぶないってばーっ！！」

ようやく人ごみを抜けて追いついてきた郁乃の手をがしと掴んで、千佳はまた駆けだした。転びそうになりながら、郁乃も必死にそれについてゆく。

あっという間に夜店の中に消えていった妹たちを見送り、百恵はやれやれと腕を組んだ。

千佳の様子がおかしくなりだしたのは、探し当てたかき氷さんで買ったメロン味をを食べはじめてから、まもなくのことだった。

「千佳ちゃん、どうしたの？ 食べないの？」

「う、うん」

郁乃に促され、千佳はかき氷にストロースプーンを差して、しばし思案。それから思いきったようにぱくりと口に運ぶ。

甘さと冷たさにぶるっ、と背中を震わせて、千佳はぎゅっと目を閉じる。

「うー……ちよっと、一杯食べすぎちゃったから、おなかいっぱい」

「あはは、やっぱりっ」

くすくすと笑う郁乃。千佳もそれに応じるものの、その笑顔はどこか硬い。

ふと下を見れば、浴衣の裾から伸びるサンダルのは、せわしく寄せられて、左右に揺れ、爪先で地面の石畳を叩いている。向日葵模様の浴衣の下では、健康的に日焼けした下半身が切なげによじられ、膝小僧が擦り合わされていた。

そう。今の千佳の興味は、目の前のかき氷ではなく、一足先に帰った大収穫の金魚でもなく、もっともっと別のものにあった。

(お……おしっこ……)

じんじんと脚の付け根に響く尿意が、小さな背中を震わせる。

ジュース2本に、ラムネに、リンゴ飴に、2杯の屋台のジュースに、さらにはかき氷。いくらなんでも飲みすぎなのだった。

お祭りの勢いに浮かれて摂取しすぎた水分が、ようやくそれを自覚した身体の1ヶ所へと、急速に集まってきていた。

(……うあ……っ)

きゅん、と下腹部に危険な信号が走る。

かき氷を食べる手が止まり、代わりに浴衣の上から、千佳の手のひらがそとおなかの下のほうを押さえ込む。落ち付きなく左右に小さくくねる腰のすぐ上、敏感になったオシッコのダムが警戒水域の突破を告げていた。

「ねえ、次、どこ行こうか？」

「う、うんっとねえ……」

郁乃に聞かれても、千佳の返事はどこか上の空。頭も真っ白で、うまく答えが浮かばない。じんじんと痺れる股間を気にすれば、きゅっと寄せ合わされた内腿に力を入れていなければならず、自然足取りも重くなる。

いつしか、千佳は郁乃に引っ張られるようによちよちと歩くことしかできなくなっていた。大事なお祭のおもちゃや景品が詰まったトートバッグも、ほとんど手に引っ掛かっているだけの様な有様だ。

(うう……ほ、ホントにしくなってきた……)

後先を考えずさんざん冷たいものを食べ続けたせいで、さらに身体が冷えたのか。一度意識した尿意は加速度的に高まってきていた。

あたりが暗くなるのにあわせ、いくらか涼しい風も吹いてきて、屋台の熱気に溢れる人ごみに時折の涼を運んでくる。なんでもなければ大歓迎のそんな風も、今の千佳には意地悪すぎる。

(…………えっと……)

千佳はちらりと郁乃の様子を窺った。

遠慮なく何でも話せる仲とは言え、やっぱり女の子として言い出しづらいことはあるのだ。

「ね、ねえ郁乃ちゃんっ」

「あれ、なに？ どうしたの千佳ちゃん？ どうしようか？ お化け屋敷行ってみる？」

「え、えっと……」

ぶるぶると背中が震えた。いまその単語はとてつもなく危険だ。こんな状況でもし入ったりしたら、非常に大変なことになりかねない。

(ち、ちびっちゃん……かも……)

お化けへの恐怖と、それ以上の切羽詰った下半身の事情にせかされて、千佳は小さく目を反らし、差し迫ったおしっこを訴える。

「あ、あのさ……ちょっと、おトイレ行きたいかも……」

「え、あ、そっか」

言われて初めて気付いたというように、郁乃は頷く。

「そう言えば、わたしもちょっと行きたいかも」

千佳に比べれば、郁乃はどうやらまだまだ余裕がありそうだったが、それでも郁乃はちゃんと千佳の意を汲んで、提案に乗ってくれた。ここで強固にお化け屋敷、と言い出さないのが、郁乃のとってもいいところなのだ。

「トイレってどこだっけ？」

「えっと、たしかこっちから行けると思うよっ」

実はさっきから入念にチェックしていたので、トイレまでの道のりは完璧に千佳の頭の中に入っている。

焦る気持ちをおさえつつ、千佳は郁乃を先導して境内を出た。

(続く)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 夏祭りのお話・後編
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 08/16/2009 19:20:12

BODY:

現在、七時五十五分。

トイレに直行した二人だが、千佳には大変な誤算があった。

今日のお祭りの人出はいつもの比ではない。普段はガラガラの公衆トイレは、その入り口から伸びる長蛇の列で封鎖されていた。もともとそんなに大人数をさばけるような場所ではないので、まさに満員満席大人気。おそらくは境内のどの屋台よりも大人気だろう。

特に婦人用のトイレには、50m近い大行列ができています。その全員がわずか4室のトイレの順番を待っているのだった。

(うぁ……す、すごい人っ……は、はやくトイレ行きたいのに……っ)

待望のトイレの前で繰り上げられる目の前の光景が信じられず、千佳は呻いてしまう。

すでに我慢はかなり危険な状態にある。いつものズボンとは違うせいか、荷物でいっぱいでは手が自由ににならないせいか、剥き出しになっている脚が妙に頼りない。このままこの行列を待ち続けるのはなかなか厳しそうだった。

無論ながら、この混雑を予想して境内外には臨時の仮設トイレも設けられていたのだが、あいにくと千佳はそちらの存在には気付いていなかった。加えて仮に向かったとしても、行列の状況は大差ないのだったが。

「……あれ？」

ふいに、手のひらが軽いことに気付いて千佳は回りを見まわした。

一緒に来たはずの郁乃の姿が見えない。さっきまで手を繋いでいたはずなのに、その感触もいつのまにか消えてしまっていた。

「え？ 郁乃ちゃん？ どこー？」

声をかけても、大混雑の人ごみの中ではなかなか見つかりそうになかった。そうこうしているうちに尿意の波がじわっとこみ上げてきて、千佳はたまたま前かがみになってしまう。

(あっ……)

トイレを前にして、きゅん、と膀胱が反応する。恥骨上のダムが決壊の危険性を訴え、即刻放水の許可を求めてくる。千佳は呻きながら両脚を交差させ、それを却下した。

このままじっとしている余裕はあまり残されてはいないようだった。まして、並ぶのを中断して友人を探し回っている余裕はもっていない。気になりつつも、千佳はよちよちと列の最後尾に並ぶことにした。

(うう……だいじょうぶ……ガマンガマン……)

もじもじと腰を揺すりながら、千佳は列の最後尾に走り寄った。

不安定な下腹部をそっと押さえ、じりじりと焦りながら少しずつ進む列を待つ。

並んでいる人たちの様子は千差万別で、千佳よりも小さな女の子もいればずっと年上のお姉さんもいる。けれど、みんなどこそわそわと落ち着きなく、進む順番を待っていた。

なかにはずっと綺麗なお姉さんもいて、この人たちも全員、千佳と同じようにトイレがしたいのだと思うと、なんとなく不思議な気分にもなる。

(あの子も、ジュース飲み過ぎちゃったのかな……)

待ちきれないのかくねくねとお尻を抑えながら順番を待っている、眼鏡のお姉さんを見て、千佳はそんなことを考えた。

そんなに狭いトイレではないはずだが、さすがに多勢が並んでいるせいか列の進みはゆっくりだ。切羽詰まった様子の先頭の人と入れ替わりに、すっきりした顔のお姉さんがトイレの入り口から出てくる。千佳もしばらくガマンガマンしていれば、あんなふうですっきりトイレを済ませてでてくれるだろう。

(あ、あとちょっと……)

頼りない足元を寄せ合って荷物を片手に集め、空いている手でぎゅっと浴衣の裾をつかむ。本当は手で思い切り前を押さえてしまいたいのだが、こうも人の多いなかで、小さな子のようにガマンガマンの仕草をすることには抵抗があった。

しかし、目の前でお母さんに連れられた幼稚園くらいの子がぴょんぴょん飛び跳ねたり、その場で大きく足踏みしたり、ぐいぐいと身体をねじっているのを見ていると、千佳もその尿意に感染してしまったような気分にもなってくる。

小さな子と同じように『おしっこ〜でちゃう〜!!』の足踏みをしそうになる、聞き分けのない浴衣の太腿をぎゅっとつねり上げた。

(が、がまんしなきゃっ、も、もうすぐおしっこ……できるんだから……っ)

じりじりと高まり続ける尿意と、その応援に向かいそうになる手のひらを、意志の力で押さえ込み、短くなった列をまた一歩前へ。重い荷物を握る指にも、自然と力がこもってしまう。

幸いなことに、一度は本気で最悪のオモラシという事態を危惧して不安になりかけたものの、それ以上に強烈な尿意の波はやってこなかった。さしたる問題もなく列は進み、千佳の前にはあと数名を残すのみとなる。

順番待ちの列の中、千佳の位置はもう少しでトイレの入り口にさしかかる所まで来ていた。

(これなら、だいじょうぶかも……)

あとほんの数人でトイレの中に入れるし、そのあとはすぐに千佳の番が回ってくるだろう。それでおなかの中のダムも放水を許可できるし、千佳を苦しめ続けてきたおしっこもサヨナラだ。

……が。

予想外の障害は、思わぬ場所からやってきた。

さらにもう一人、短くなった列を前に詰めた時、トイレの入り口の壁に張られた張り紙の赤文字が千佳の目に飛び込んでくる。

『このトイレには、防犯上の問題から

トイレトペーパーを備え付けておりません。

こちらでお買い求めください』

「え……？」

その文面の意味がわからず、千佳は目を丸くしてしまう。

張り紙のすぐ隣には、細長い自動販売機があった。ジュースのそれと同じように、お金を入れるところと小さなボタンが二つ。その上には、ポケットティッシュのようなものがサンプルとして並んでいる。

千佳にはその意味が良く理解できなかった。

(え、え？ ちょっと待って……どうのこと！？)

まばたきをして、千佳はもう一度その張り紙を見直す。

——こちらでお買い求めください。

(これって……と、トイレトペーパーがないってこと……？！)

そんなわけがないと千佳は首を振る。千佳の常識では、どんなトイレにだって、普通必ずトイレトペーパーがあるものだ。だってそれが無ければ、おしっこを済ませた後に、あそこを拭いて綺麗にすることができない。そんなトイレでは、おしっこができなくなってしまう。

トイレなのにおしっこができないなんて、ありえない。

まさか違うよね、と思い込もうとした千佳の前で、少し先に並んでいたお姉さんが前に進み出た。お財布から出した百円玉を2枚、自販機に入れてボタンを押す。

(う、嘘っ！！)

千佳は思わず悲鳴をあげそうになった。しかし、かたん、と落ちてきた包みを手に、お姉さんはやがて空いた個室の中に入ってゆく。

同時、すぐに聞こえ始めた音消しの水の音に、千佳は今後こそ戦慄する。

(う、ウソだあ……違うよね。だって、うん、そんなことあるわけないもんっ……)

首を振るが、目の前の自動販売機も、張り紙も消えてはくれなかった。

次に並んでいた、千佳よりも少し年上の眼鏡の女の子も、もじもじと脚を擦り合わせながら同じように自販機にお金を入れて、小さなパッケージを買おうとしている。

(そ、そんなぁ……な、なんで！？ み、みんなどうして、……おかしいよこんなの、どうしてこんなイジワルなのっ！？ お、おしっこするのに、お金かかるの……！？)

さっき、千佳はかき氷屋さんで300円のかき氷を買った。姉にもらった分の200円と合わせても、おこづかいが320円しかなかった。そこから300円を引いて、千佳のお財布のなかには、20円しか残っていない。

20円じゃ、自動販売機のトイレトペーパーは買えるわけがない。

もしお店の人がいるなら、お願いしておまけしてもらったり、たとえば20円分だけ買うこともできるかもしれないが、ここにあるのは自動販売機だ。そんなことは絶対にできない。

列がまた進む。もうすぐ千佳の番が回ってくるだろう。けれど、千佳にはトイレトペーパーがない。

だから、順番が回ってきて個室に入れても、千佳は、オシッコが、できない。

「あ……っ」

困惑の渦中にある千佳の前で、また一つ個室が開き、列の先頭の小さな女の子が、お母さんに見送られて早足で個室に駆け込んでゆく。あんな小さな子でも千佳とは違って、ちゃんとおしっこをする準備ができているのだ。

それなのに、千佳は——

（な、なんで……おかしいわよ、なんで……！？ う、嘘に決まって、こんなの……っ！！）

ついさっきまで少しでも一人でもいいから早く先に進んでほしい、と思っていたはずの順番待ちの行列が、得体のしれない恐ろしいものに変貌して、千佳に迫ってくる。

このまま、順番が回ってきたらどうすればいいのだろう。

個室に入っても、下着を下ろしても、しゃがみ込んで——それから？ それから、どうすればいいのだろう？

おしっこができないのに、そこで何をすればいいのか。混乱に陥ったまま、千佳はよろよろと、次の順番へ押し出されてゆく。とうとう千佳が列の先頭だ。困惑のまま立ち尽くす千佳の前で——あっさりと、同時に二つ、個室が開く。

（あ、あっ、あ……ど、どうしよう……っ！？）

混乱する頭を整理する暇なんて、なんにもなかった。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。おしっこしたい、おしっこできない、ぐるぐると堂々巡りを続ける千佳は、ばかりとあいた個室のドアと並ぶ行列を交互に見、言葉を失う。

「え……あ」

「ちょっと、開いたわよ？ 入らないの？」

千佳の後ろにいたオバさんが、不機嫌そうに言う。計ったようにたつぷりと水分を吸って膨らんだ下腹部が、憧れのトイレを前に『きゅん』と切なく疼いた。

脚の付け根にぶくつ、と膨らんだ熱い感覚が、そのまま腿の内側につうつと噴出しそうに震えて——

（だ、だめっ、でちゃう、出ちゃうっ！！）

「っ、っは、入りますっ」

ほとんど反射的に、千佳は開いた個室の中に飛び込んだ。後ろ手に鍵をかけ、狭い個室の中にやや汚れた和式便器と二人きりになって、千佳はぎゅうつと荷物を詰め込んだトートバッグを握り締めた。

（あ、あっ、あ、あっ）

ようやく待ちかねたトイレを前に、千佳の身体は心を置いてきぼりにして、どんどん勝手におしっこの準備を始めてしまう。しかし——

「ほ。……ホントにないっ……そんな、なんでよお……！？」

壁に取り付けられた銀色のロールホルダには、トイレトペーパーどころかその芯すらも掛かっていない。ひょっとしたらという一縷の望みすら無残に打ち砕かれて、千佳の目の前は絶望に暗く沈む。

間違いなく、このトイレには紙がないのだ。その事実を突きつけられ、千佳は足元が崩れ去っていきそうになる錯覚すら覚える。

（と、トイレ……トイレなのに、おしっこしたいのに、おしっこできないなんて……！！ む、無茶苦茶じゃないっ……）

焦る下半身はタイルの上でサンダルをきゅきゅと鳴らし、浴衣の裾を乱し、足踏みを繰り返す。必死になって脚の奥に『タイム』を訴え、ぎゅうつとトートバッグの上からあそこを押さえ込む千佳だが——

「あ」

ぐらりと傾きかけた千佳の脳裏に、天啓のように稲妻が閃いたのはその時だ。

(……そ、そうだ、そうだ！！ てい、ティッシュ……！！)

お母さんにうるさく言われて、トートバッグの中に押し込んでおいたポケットティッシュのことを思い出し、千佳は慌ててその中身に手を突っ込む。身をよじり、腰をねじりながら、脚を踏み鳴らして――

「あ、あったあ……っ！！」

ほどなく、探った指に小さなビニールの感触。

取り出してみれば問題なく中身も確認できた。折りたたまれた白く柔らかな紙。大切なところを処理するのに申し分のないそれは、まさにいま、千佳に与えられた唯一の救いの手だった。

普段ほとんど意識したこともないアイテムが、いまはまるで宝物のようにすら感じられる。

「よかったあ……」

これでだいじょうぶ。これでトイレできる。

安堵とともに、千佳はほっと息をつく間もなく、ぎっしりと中身の詰まったトートバッグを荷物掛けに掛け、ちょっとためらってから、浴衣をたくし上げて下着に手を掛ける。

「んう……」

あまり綺麗なトイレではないが、もう悩むことなどない。

(はー……ほんと、一時はどうなるかと思った、け、ど……)

だが。

個室の壁にも小さな注意書きがあることに気付いて、千佳は下着を膝上まで下ろしかけた中腰の姿勢のまま、今度こそ言葉を失ってしまった。

『トイレには決してティッシュ等を流さないでください。

故障の原因となります。

必ず、専用の用紙をご使用ください』

「そ、そんなあ……！！」

あまりにも理不尽に、幾重にも重ねられた警告が、千佳の尿意を束縛する。

もはや、それは千佳にとっての死刑宣告に等しい。

とどめとばかりに記されたその注意書きは、見事なコンビネーションで、このトイレで千佳がおしっこすることを完璧に禁じていた。

(あ、あつ、あつ)

すぐ真下、完全に準備の整った状況のトイレを前に、熱い衝動がぐいぐいと身体の奥からこみ上げてくる。けれど、ここは駄目だ。千佳にとって、おしっこは許可されていない場所であり、トイレでは、おしっこをしてもいい場所ではない。

まったく予想もしていなかった事態に、千佳はただ、呆然と無力に腰を揺さぶるしかなかった。

8時20分。

空っぽに近い財布を握り締め、ふらふらと列を離れてトイレの近くを右往左往していた千佳は、ほどなくして郁乃と合流する。

「あ、い、郁乃ちゃん」

「あはは、千佳ちゃん。トイレなんかすごい並んでたね……」

「う、うん」

「もうちょっとで、オモラシしちゃうところだったよお」

笑いながら言う郁乃に、引きつった表情で答える千佳。

もうちょっと、ではない。千佳は今まさにそのオモラシの危機と戦っているのだ。千佳はあのまま、格好のトイレタイムをふいにし、おしっこを済ませることなく水だけを流し、トイレを後にした。

「ねえ、千佳ちゃん、わたしあれやりたいんだけど、いいかな？」

「え。あ、う、うんっ」

不意に訪ねられ、思わず頷いてしまう千佳。郁乃はヨーヨーすくいを指差して、千佳をそこへと引っ張ってゆく。

(あ……っ、や、あ…)

せっかくだどり付き、一度は個室にまで入ったトイレからまた遠く引き離されることに、千佳は激しい抵抗すら覚えてしまう。しかし、まさか、笑顔の友人にトイレに入っていないとは言い出せなかった。

(郁乃ちゃんも、ちゃんと、おしっこしてきてるのに……っ)

なにしろ、同じようにトイレに行ったはずの郁乃は、ちゃんとトイレに行ってきた様子なのだ。軽い足取りの郁乃を見て、千佳は顔を紅くする。

郁乃はちゃんとお金を出してトイレットペーパーを買って、トイレの中でおしっこをすることができた、『きちんとした女の子』なのだ。

(や、やっぱり、あたしだけなんだ……おしっこ、できなかったの……)

あのトイレに並んでいた大勢の行列の中で、自分だけがちゃんとおしっこを済ませられなかった——そんな猛烈な劣等感とそれによる羞恥が、千佳の言葉を封じ、責め苛んでいた。

百恵にあんなに念入りに無駄使いしないようにと言われたのに、千佳はそれを守らなかった。その結果、トイレに入るお金も持っておらず、普通の女の子ならちゃんとできるはずのトイレットペーパーを買うこともできなくて、とうとうおしっこをすることもできなかった。

恥じ入る千佳のおなかで、ますます尿意は激しく膨れ上がる。もう手で押さえていないと、いつオモラシが始まってもおかしくないようにさえ思えた。

ズボンなら、股の布地をぎゅっと引き上げ、足の間に食い込ませて片手だけでもうまく圧迫することができるが、ひらひらの浴衣ではうまくいかず、下着の頼りない感覚と、内腿の頼りない感覚が引き立つばかりで、かえってその余裕のなさを意識してしまう。

「あ……っ」

切羽詰った喘ぎ声が、千佳の唇からこぼれる。

無理して歩いているために、動いて圧迫された分がそのままダムから溢れ出してしまいそうだ。じわ、と脚の間に熱い雫が広がるよ

うな感触に、千佳はきつく唇を噛み締めた。

とにかく食べてしまおう、と無理をして飲み込んだかき氷が致命的だったのだ。身体が冷えてしまい、さらに次々と全身を巡って集まるおしっこが、際限なくダム水位を上昇させてゆく。決壊の危険を知らせる警報はさっきから鳴りっぱなしで、ぎゅうぎゅうと脚の付け根に押し付けられ、足の間に挟まれた手のひらの奥では、浴衣に小さく染みが広がりだしていた。

（だ、だめ、出ちゃう……っ、おしっこ出ちゃうっ……！！）

きゅんきゅんと収縮する膀胱が、激しく尿意を訴える。

我慢で精一杯の千佳は、もうすっかり余裕がなくなっていて、郁乃が不自然に饒舌なことや、これまで興味のそぶりもなかったヨーヨーすくいに急いでいることへの疑問を感じることはなかった。

大混雑のトイレを見た途端、郁乃が突然姿を消した理由も、先に入っていたはずの郁乃が、トイレの中に見つからなかったことも、千佳は不思議には思わなかった。

だから、実はもう限界だった郁乃が、とても順番待ちなどできないと諦め、境内の裏手にある茂みでこっそりおしっこを済ませていたことも、それに気付かれまいと無理に明るく振る舞っていることも、知る由もない。

「あれ、千佳ちゃん、どうかしたの？」

「う、うんっ、なんでもないっ」

戦果のヨーヨーを、あまり上手ではない手つきでぱしぱしと揺らす郁乃から、千佳は慌てて浴衣の前を離し、目をそらす。すると、じっとしていることができない脚がはつきりとおしっこ我慢のダンスを足踏みを始める。

いっぱい水を詰めこんでぱちゃぱちゃと揺れる風船は、ちょうど今の千佳のおなかの中のオシッコのタンクを象徴しているかのようだった。

（ど、どうしよう、もれちゃうっ……、と、トイレ……っ）

ひり付くくらいの欲求が、千佳の震える下半身を襲う。

もし、いまこの神社の神様がお願いを叶えてくれるというなら、間違いなく一番熱心にお祈りしているのは千佳に違いない。心の中で『おしっこさせてください』を必死に繰り返しながら、千佳は脚をモジつかせ、くねらせながらふらふらと郁乃の後を追う。

その一方、郁乃は郁乃で千佳に気付かれぬようにふるまうので精一杯で、普段ならすぐに気付くだろう、千佳の様子がおかしいことにまで気が回っていない。

「どうする、千佳ちゃん？」

「そ、そうだね……」

空回りのまま続く意味のない会話。けれど、そのもたらす決定的な違いは、茂みに駆け込んですっきりしてきた郁乃と、今なお我慢の真っ最中の千佳の間に如実に現れていた。

千佳の片手はもう浴衣の上からぐいぐいと足の付け根を握りしめている。顔色も蒼白で、買い込んだお土産もいまにも取り落としてしまいそう。

うまくごかない頭をフル回転させて、千佳はなんとかいまずぐにおしっこを済ますための方策を探す。

（い、言わなきゃ……おしっこしたいって、トイレ行きたいって……！！　で、でも、えっと、さっきのトイレじゃ、お、お金なくちゃトイレトイレットペーパー買えないっ、お姉ちゃんもういないから、い、郁乃ちゃんにお願いして、お金借りて……あ、で、でもっ、そうになったら、なんでさっきおしっこしてこなかったのって、言われちゃう……そ、そうだ！！　おなか壊しちゃったって言って、もう一回……）

ちら、と後ろを振り向く。

混雑のずうっと向こうで、さっきよりも長く伸びた行列が、千佳の視界に映った。

（む、無理！！ あんなのもう一回並ぶなんて、絶対間に合わなくなっちゃう！！ と、途中でおしっこはじまっちゃうっ……！！）
そんなの嫌あ……！！）

トイレまで間に合わない、とはっきりと自覚をしてしまったことで、千佳の我慢が大きく緩む。根負けしたようにじゅわあ、とイケナイ感触が内腿の奥に広がってゆく。もはや錯覚ではない、本当の崩壊へのカウントダウンが始まっていた。

「っ……！！」

（と、トイレ、といれ、おしっこっ……ほ、他にトイレ、おしっこするとこ、と、トイレ、おしっこ、おしっこっ、おしっこお！！）

「ね、ねえ郁乃ちゃんっ、あ、あたし、そろそろ帰らなきゃっ」

「え？」

焦るあまりに唐突にそんなことを口走った千佳に、郁乃はぱちくりと目をまばたかせる。まだまだ遊ぶよ、と言っていた親友が急にそんな事を言い出したのだから、当然のことだろう。

「も、もう遅いし、っ、疲れちゃった！！」

言いながらも、千佳の脚はすでに震えながら後ろを向き、境内から遠ざかり始めていた。不自然に足踏みをして、一方の膝をもう一方に擦りつけるのを繰り返しているため、千佳の浴衣の裾は大きく乱れている。

「え、でもまださっき、お祭回るって行ってなかったっけ？」

「そ、その、えっと——そ、そう！！ 金魚！！ 金魚見に行かなきゃ！！」

その上きつく足の付け根をつかみ、大きく前後に揺すられる腰は、もう誰が見ても言い訳のしようのないトイレ我慢の証明だ。

（だ、ダメ、出ちゃだめ、我慢、家までガマンっ！！！）

声にならない悲鳴を上げる千佳の浴衣の奥で、じゅじゅ、じゅうっ、とまた水音が響く。押さえつけた指の間から、水気たっぷりの布地を越して暖かい感触が脚の間を伝ってゆく。

「そっか、じゃあ千佳ちゃん、一緒に帰ろうか？」

「ダメっ！！ あ、あたし先に帰るっ！！」

はっきりと拒絶をぶつけられ——郁乃が、呆然と表情を失くす。

「え……な、なんで？」

「っ、なんでもなにもないから！！ じゃ、じゃあねっ！！」

限界寸前の千佳はもはや、傷ついた表情を浮かべる郁乃にも気付けなかった。長年の友情がはっきりとヒビが入り、音を立てて壊れてゆく。

言うが早い——千佳は、身を翻し、家のトイレを目指して一直線に走りだす。

後には、ぽつん、と取り残された郁乃が、ぷらん、とヨーヨーをぶら下げたまま、その背中を見送っていた。

家に辿り着いたころには、浴衣の被害は深刻なものとなっていた。下着はもはや壊滅状態で、水を吸った布地はわずかに身体

を揺るだけでじゅ、と水滴を滲ませる。

すでにちびった分だけでもかなりの量に達しているが、立て続けに摂取した水分は今もなお少女の前進を巡る旅を終え、千佳の下腹部に集まり続けている最中で、わずかでも排出されたそばからおしっこが次々と補充され続けている。

「あ、あつ、あつあつ」

じゅん、じゅわ、じゅうっ、ひっきりなしに漏れ続ける出口はジンジンと麻痺し、下着が熱く濡れるたびにぞっとするほどの解放感が激しくオモラシの誘惑を繰り返す。

はだけた浴衣の裾からのぞく足を幾筋も水流がつたい、脚の付け根を掴む指の間からも、ぽたぽたと水滴が垂れ落ちる。

「った、ただい、まあ……ッ！！」

家の前の道、サンダルを脱ぎ散らかした玄関、そしてリビング横の廊下にまで、ぽたぽたひちゃんとおモラシの痕跡を点々と残しながら、千佳はどかどかと家の中を走り抜ける。

（つと、トイレ、トイレ、ッ、といええ！！）

一刻の猶予もない。……否、どうしようもないくらいに濡れた浴衣に、ぐちゃぐちゃの内腿、汚れた足跡。端から見ればもうとくに千佳はオモラシをしていた。あとはトイレに入るまでどれだけ多くおしっこをおなかの中に残しておけるか——そんな違いだけだ。

股間を握りしめる片方の手を離し、千佳はおしっこで汚れたままの手でドアノブをつかみ、渾身の力を込める。

しかし、無情にもがこん、という重い手ごたえ。ノブには使用中の赤文字が並んでいる。

「千佳？ 帰ってきたの？ 入ってるわよ」

「お、お姉ちゃんっ、はやく、はやく、トイレえ！！！」

必死の形相で足踏みをし、今にも吹き出しそうなおしっこを押さえ込みながら、千佳は乱暴にドアをノックするが、姉の声はのんきなものだ。

「なによ、もう少し待ちなさいってば。金魚、テーブルの上においてあるわよ？」

「ま、待てないっ、金魚とかいいから、っ、で、でちゃ、でちゃうっ！！！」

「もう、幼稚園の子じゃないんだから、少しくらい我慢しなさいよねー。すぐかわってあげるから」

そんな事を言いながらも、ドアの向こうで姉が動く気配はない。

すぐ、という言葉は今すぐではなく、次の順番で入っていい、くらいの意味合いなのだ。

「ッ、だめもうだめでちゃう出ちゃうおしっこでちゃう意地悪しないで絶対むりもう我慢できないのッ！！ おしっこしたいの、でちゃうの、トイレ、おしっこっ、早くねえお姉ちゃんはやく、本当にもれちゃうっ、でちゃうっおしっこ、おしっこっ、おしっこーっ！！！」

ここまでずっと、地獄のような我慢を続けて帰ってきたのに。

絞り出すように叫んだ懇願と同時に、千佳の下腹部はきゅ、きゅっ、と最後の収縮をはじめてしまった。ぷくりと膨らんだ排泄孔が、千佳の意志などお構いなしにオシッコを絞り出してゆく。

「あ、あつ、あ、あーっ！！」

腰をくねらせ、膝をクロスさせ、内腿ををぎゅっと押しつけて、身体を丸めてオシッコのダムが決壊を塞ぎ止めようとする千佳だが、じゅじゅっ、じゅうっ、と溢れ出す熱い液体は千佳の内腿に見る見るうちに拡がってゆく。

裸足の脚を伝って廊下にこぼれるオシッコの滴が、ぽた、ぽたというにわか雨からぱちゃぱちゃ、ちょろろ、という本降りに変わってゆく。

「お、ね、え、ちゃあつ……」

最後の力を振り絞って、がり、と扉をかきむしる千佳。

一方の姉は暢気なものだ。ドアの向こうでようやく出る気になったのか、かちゃかちゃと身づくろいを始めている。

「んもう、ちょっと待ちなさいよ……もう４年生でしょ、あんまり恥ずかしいこと大声で言わないの」

そのあと少しが、もう千佳にはどうしても不可能だった。

（っ、だめ、えっ……お、オモシシなんか、しちゃ……ッ）

トイレの目の前で、間に合わなかった、なんていう最悪の事態だけは、どうしたって許容はできなかった。

ふわりと腰が浮く。力を失った両膝が折れ、千佳はしゃがみ込んでしまった。

押さえる力の弱くなった股間から、とうとう本当の勢いでしゅるしゅるとオシッコが漏れ始める。

（うああああああっ！！）

ぎりぎり歯を食いしばり、残された力のありっただけで、千佳はリビングに飛び込んだ。せめてなにか、床の上ではなく何かの入れ物に——そんなせめてもの抵抗が、千佳に残されたわずかな少女としてのプライドだった。

千佳はテーブルの上にあったガラス製の金魚ばちを掴んだ。ぐっしり濡れて肌に張り付くパンツを下ろす余裕などなく、浴衣の上から脚の間に、透明なガラスの入れ物を押し付ける。

ぶじゅ、じゅる、じゅぶぶうーっ！！

「あ。あつ、ああ、あつ」

それにほんの一瞬遅れて、シャワーの先にタオルを押しつけたような、激しい水音が響いた。千佳のおしりを水浸しにしたオシッコは、押しつけられた金魚ばちの中に激しく叩き付けられる。

「出たわよ……って、ちょ、ちょっと、なにやってんの千佳！？」

姉が驚いて声を上げる。千佳はもう、答える気力すらなかった。

壊れた蛇口のように吹きだすオシッコが、ガラスの底にぶつかって激しく泡立ち、じゃぼじゃぼと水面を揺らしてゆく。小さな金魚ばちをあっという間に支配し、水位を増してゆくほの薄く黄色い水。

トイレの目の前で、金魚さんのために用意してあった、大切なおうちを——千佳のオシッコが占領してゆく。

暴れ回る水流の中で、とったばかりの七匹の金魚たちは、何事かとあちこちに泳ぎまわっていた。

（初出；書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第 1 2 夜 ウサギとカメ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 08/30/2009 16:06:02

BODY:

むかしむかし、あるところにウサギが住んでいました。

ウサギはとても足が速いのが自慢でした。カじまんのクマも、気難しくて嫌われ者のオオカミも、立派な王様のライオンでさえも、かけっこで勝負をすればウサギにはかなわなかったのです。

今日もウサギはゴールの丘の上、ぴんと立った耳を揺らし。丘の上の木陰で、ゆうゆうと大好きなニンジンのジュースを飲んでいました。

「ぶは……勝利の味はまた格別ねっ♪」

見下ろしてみれば、今日のかけっこ勝負の相手であるキツネは、まだ丘のふもとにさしかかったばかりです。いつもはずる賢くクマやライオンにくっついて威張っているキツネも、まさかウサギがここまですばしいとは思っていなかったのでしょう。

すっかりへばって汗だくのあの有様では、ここまで登ってくる前に日が暮れてしまうかもしれません。

「それにしたって、どいつもこいつも遅いわねえ。まーたあたしの勝ちじゃない」

ごくごくジュースを飲み干して、ふうとウサギは息をつきます。

軽く湿った短い髪を払い、スパッツのしっぽをふわりと逆立たせて、退屈そうに欠伸をひとつ。

「ふわあああ……ほーんと、相手にならない奴ばかりでつまらないわねー……」

とうとう丘のふもとで倒れてしまったキツネに、慌てて駆け寄ってゆくツバメやリスを見下ろして、ウサギはすっかり興味をなくしてしまいました。

「もーいいわ、帰っちゃお」

このままキツネがゴールするのを待っているのも馬鹿らしくなったウサギは、とつと丘を後にすることになります。

自慢の脚でびよんびよんと、まるで風のように丘を駆け下りたウサギは、道すがらにふと見覚えのある姿に出くわしました。

「あら～……ウサギさん～……ご機嫌よう～……」

間延びした声は、三叉路のずっと向こう側。

大きな甲羅を背負ったのんびり屋のカメが、長い髪を揺らし、ずれた眼鏡を直そうともせずにはほわんとした笑顔で手を振っていました。

「今日はあ～……どうしたんですかあ～……」

「どうも何も、見てわかんないかしら？」

カメのじれったいほどの間延びした声に、ウサギはちょっとイライラしながら答えます。

「ええとお～……すみません～……ワタシ、トロいもので～……」

「……ああもう、うっとうしいわねアンタの喋り方！！ 勝負よ勝負。かけっこ勝負で勝ったのよ！！ あのキツネのやつにねっ！！」

「そうなんですかあ～……」

「ふふん。これで99戦99勝、負けなしなんだから。あたしなら、もしライオンに追いかけられたってかーくぶちぎってやるわよ」

「へえ～……すごいですねえ～……」

カメは相変わらずのほわんとした表情のまま、こくこく頷きます。本当にすごいと思っているのか、いまちははっきりわかりません。

なんとなく馬鹿にされているような気がして、ウサギはカメに言います。

「ねえ、わかってんの？ この森で一番速いのってあたしなの。あたしがこの森で一番すごいよ？」

「ええ～……そうですねえ～……」

しかし、カメの様子は変わりません。眼鏡の奥のニコニコ笑顔のほわんとした糸目はまったく動かず、なんだか寝惚けているようにも見えます。

せっかちなウサギは、カメのこのとろとろした性格が大嫌いでした。

(いいわ、相手にしてるだけで疲れるし。無視よ無視っ)

いい加減、話しているのも嫌になって、ウサギはカメを放ってそのまま家に帰ろうとしました。いつもならこれで会話は終わり、立ち去るウサギに置いてきぼりにされ、カメはのたのたとゆっくりどこかへ歩いてゆくのです。

けれど、今日のカメは違いました。

「……？ でも～……でしたらあ～……どうして～……こんなところに～……？」

「は？ 何が？」

意味が分からず、ウサギは怪訝な顔をして耳を揺らします。

「たしか～……かけっこ勝負のお～……ゴールはあ～……丘の上じゃあ～……ありませんでしたっけ～……？」

「良く知ってるじゃない。のろまのくせに」

「有名ですよお～……」

「ふん、だってアイツが来るのを待ってたら日が暮れちゃうもの。そこまで付きあってあげる義理なんかないじゃない。あたしが勝ったんだからさ、負けた奴のこと気にする必要ないわね」

「……でもお～……それはあ～……キツネさんに～……失礼だと思いますよお～……」

「失礼？　なんでよ？」

カメの言うことがわからず、ウサギは口を尖らせます。

「正々堂々の～……勝負なんですからぁ～……、相手のことも～……待っていてあげないと～……。キツネさん～……ひとりぼっちでえ～……かわいそうです～……」

「かわいそうなことないわよ。アイツの足が遅いのが悪いだけよ」

「足が遅いのは～……別にい～……悪くないと思いますよぉ～……」

やけにキツネの肩を持つカメに、ウサギはとうとうカチンときてしまいました。

話し始めてもうずいぶん経つのに、さっきから全然前に進んでいないカメを見て、ウサギは意地悪くへえ、と笑みを見せました。

「悪いわよ。とろとろして、うっとうしいもん。アンタなんか一番そうじゃない」

「そうですかぁ～……？　ワタシは～……別に～……気にしませんけどぉ～……」

「そうかしら。家から湖まで行くのにも半日がかりなんでしょ？　あー、やだやだ。そんなゆっくり生きてたら退屈で死んじゃうわ。アンタみたいな風に生まれなくて、ホント良かったわ、あたし」

「……………」

「なによ？」

じいっとこちらを見つめる（とは言ってもカメの目は相変わらず開いてるのかも分からない糸目なのですが）カメに、ウサギは聞き返します。

なにごとか思案していたカメは、しばらく返事をしませんでした。

ウサギがいいかげんじれっとなってまた文句を言おうとした頃に、ようやくカメはまたのんびりと言います。

「じゃあ～……ワタシと～……勝負～……してくれませんかぁ～……？」

「勝負？　たいした度胸じゃない。……いいわよ、なにするの？」

「かけっこ～……です～……」

「はあ？」

「ですから～……かけっこ勝負です～……ウサギさん、得意ですよぉ～……？」

のんびりと見上げながらボケた提案をしてくるカメに、ウサギはとうとう吹き出してしまいました。

「ぷっ、あっはははは！！　ねえ、ちょっと本気？　あはははっ、あ、アンタみたいなとろいのがあたしとかけっこ？　勝てるワケないじゃないのっ！！　あははっ、おっかしーいっ！！」

「……本気ですよぉ～……負けたら～……ウサギさんの言う事は～……なんでも聞きますからぁ～……」

カメは相変わらずの笑顔で、のんびりとウサギに言います。

「そのかわり～……もしワタシが勝ったらぁ～……もう、他のひとのことを～……悪く言っちゃダメですよぉ～……？」

カメがどうやら本気らしいということを知り、ウサギは自信たっぷりに腕組みをしました。

「ふん、いいわよ。後悔したってしらないから。……いつにするの？」

「ワタシはぁ～……いつでもいいですよぉ～……」

「じゃあ明日の朝、お日様が登ってきたら一本杉の根元の切り株からスタートよ。ゴールはいつもどおり丘の上。先に着いたほうの勝ち。いいわね？」

「はい～……わかりましたぁ～……」

「遅刻するんじゃないわよ？ まあアンタのことだから、今から一本杉まで歩いていっても朝までに着けないんじゃない？ あっはははは！！ じゃあね、のろまのカメさんっ♪」

「では～……また明日～……」

うなづくカメを馬鹿にしながら、ウサギは走り出します。

しばらく経ってからちらりと後ろを振り返ってみれば、カメはまだのろのろと三叉路のちかくを歩いていました。

それを見て、ウサギはもう一度あははは、と笑ってしまいます。

「あー、もう、おっかしい。……本気であたしに勝てると思ってるのかしら、カメの奴。天地がひっくり返ったってあたしが負けるなんてありえないわよ。口だけは生意気なんだから。……思い知らせてやるわ♪」

含み笑いをして、上機嫌に耳をぴこぴこ左右に揺らしながら、ウサギは家へと帰ることにしました。

カメなんてまったく相手にならないとたかをくくったウサギは、その夜、すっかり夜遅くまで夜更かししてしまいました。

お気に入りのマンガにおやつのにんじんチップスに、特製の果物ジュース。

さんざん遅くまで起きて、ウサギがベッドに入ったのは、お月様が沈んで、もうそろそろ東の空が明るくなって来た頃でした。

「むにや……？」

そんな有様ですから、ウサギはすっかり寝坊してしまったのです。

じりりり、とけたたましく鳴り響く目覚まし時計が、毛布の中でばたばたと暴れ続けています。

「なによ、もう朝……？」

寝ぼけ眼で起き上がったウサギは、ベッドの上にさんさんとお日様が照っているのに気付いて青くなりました。

「って……あぁっ！！」

慌てて見上げた窓の外では、もうすっかりお日様は空の上にありました。

もう朝というよりは、お昼のほうが近いかもしれません。

「や、やばっ……！！」

ウサギはとるものもとりあえず、シャツとスパッツに着替えると、とりあえずジュースを一杯だけ飲んで、顔も洗わずに一本杉まで駆け出しました。

途中、森の動物たちが何人か、ウサギに挨拶をしたのですが、そんなものに答えている暇はありません。

「っはあ、はあっ、はあっ」

息を荒くして、ほどなくスタート地点にたどりついたウサギですが、そこにはもうカメの姿はありませんでした。

まさか、という思いと、ひょっとしたら、という期待を込めて、ウサギは一本杉のすぐ近くの木に家を持っているリスに声をかけます。

「ねえ、あなた、ちょっと！！」

「ん？ なんだ、ウサギちゃんか。どしたの？」

「今朝ここでカメの奴見なかった？」

リスはクルミを抱えながら、コクンと首を傾げて答えます。

「ああ、カメさんか。……えっとね、朝はやくに見たなあ。なんか夜のうちからこの辺でキャンプしてて、お日様が出た頃に体操服に着替えてた。んで、なんか『じゃあ～……スタートです～……』なんつってどこかに歩いてったけど？」

「そ、そう。ありがとう」

ひょっとしたら、のろーいカメはまだここまで来ていないのではないかとちょっぴり期待していたウサギですが、さすがにそんなことはなかったようです。

それどころかカメがきちんと時間を守ってスタートしていたカメに、ウサギはちょっと焦りました。

「ちょ、ちょっと寝坊しちゃったわね……で、でもいいわ。カメ相手ならこれくらいでちょうどいいハンデよ。うん」

胸の中の不安をかき消すように、ウサギはあわてて首を振ると、スタートラインにつきます。

丘の上まで続く道は、結構な距離があります。かなり時間は経ってしまっていますが、カメの脚ならまだ到着してはいないでしょう。けれど、それでも油断はできません。なにしろちょっとどころの寝坊ではないのですから。

「……カメ相手に本気出さなきゃいけないなんてっ……」

文句を言いながら、ウサギは大きく跳ねるように走り出しました。

ウサギが“そのこと”に気付いたのは、走り出してすぐのことでした。

(んう……っ、)

ぴくん、と立った耳が、不規則に左右に揺れます。

いつものような、風のようなスピードは出ていませんでした。スパッツの脚は、遠慮がちにきゅっと寄せ合わされてなんとなく内股で、姿勢もやや前かがみ。

地面が足を蹴るたびに、ウサギの表情はかたく強張ってゆきます。

「っはあ、はあっ、はあっ……」

気ばかりが急いて、息まで上がってきていました。いつもはたったこれくらいのことで疲れたりなんてするわけないのですが、すでにウサギの首筋にはうっすらと汗まで浮かんでいます。

「んっ……」

不意に、ぴくんとウサギは背筋をひきつらせ、その場に立ち止まってしまいました。

ぎゅっとシャツの前を足元に向けて引っ張り、爪先立ちになって道の真ん中に立ち尽くします。左右の耳もふらふらと落ち着きなく揺れ、スパッツからちょこんと飛び出した丸い尻尾は、ふわりと逆立って大きく膨らんでいました。

(や、やだ……っ、……と、トイレ……したくなってきちゃった……)

寝坊していたウサギは、起きてすぐ家を飛び出したばかりに、朝一番のトイレも済ませずにでてきてしまったのです。その上、起きてすぐに走り回って激しい運動をしたものですから、おなかのなかにたっぴり溜まっていたおしっこを、激しく刺激してしまったのです。

「んんっ……う……」

右に左に、体重を預ける足を組み替えて、ウサギはふらふらと身体を揺すります。

（と、トイレ……っ。……ど、どうしよう、っ、か、かけっこの、途中なのにつ）

そんな場合ではないというのに、ウサギの頭の中はあっというまにトイレのことでいっぱいになってしまいます。このまま我慢して走っていくのをためらわせるほどに、ぴくん、ぴくんとウサギのおなかの中でおしっここのいれものが暴れています。

たまらずにもじもじと腰を揺すって、ウサギはきよろきよと周りを見回しました。

けれど、かけっこのコースにはトイレはありません。どうしてもおしっこがしたいなら、もう一度お家に戻るしかありませんでした。

「……………っ」

ウサギは小さく唇を噛んで、遠く丘へ続く道を見つめます。いまだに先を進んでいるはずのカメの姿はありません。

いくらなんでも、ここから家のトイレまで戻ってオシッコをしている暇はありませんでした。あれだけ寝坊した上にそんなことまでしていたら、さしものカメもとっくにゴールに着いてしまうでしょう。

そうなれば、明日からウサギはカメに負けた、森で一番ののろまにされてしまいます。

（そんなの、絶対にごめんよっ……！！）

ぷるぷると頭を振って、ウサギはお家のトイレへと回れ右しそうな両脚をぐっと押さえつけます。

「……だ、だいじょうぶよ、これくらいっ。なんでもないわ！」

自分に言い聞かせるように、ウサギは言葉にして心を奮い立たせます。

ざわざわと落ち着かない下腹部をなだめるようにそっと手を寄せて、ごくっとうちの中をつばを飲み込みました。

「そ、そうよ。急いでゴールしてからでも、じゅうぶん間に合うわよっ！ な、なんとってあたし、かけっこチャンピオンなんだからっ……！！」

覚悟を決めて、ウサギはこのままゴールまで走ることにしました。

とん、とんと爪先で地面を叩き、感覚を掴むと、勢い良く地面を蹴って前に出ます。本気を出せば、すぐにカメなんか追い抜いてしまうでしょう。

たったった、たったった、たったった……

けれど、ウサギはどうしても思うようにスピードが出せませんでした。

いつものような、風を裂いて森を突っ切る爽快な足取りとはまったく似ても似つかない、ふらふらと頼りない爪先立ちの歩みです。

「……あ、あつ、あんっ……っくうっ……」

いくら集中していつものように走ろうとしても、オシッコの重みでたぶたぶと揺れるおなかその邪魔をします。

ウサギの足は自然にくっつき、歩幅も大きく広げることではできませんでした。

おしりを突き出して、よたよたと左右に腰を振りながら、きゅうつきゅうと膝を擦り付け合うのは、颯爽とは程遠い格好でした。

「ん、んっ、くう……はあっ、はあっ……」

ですが、これが今のウサギの精一杯なのです。ふだんならひととびに飛び越してしまうようなちっちゃな小川の丸木橋も、内股のままのよちよち歩きでは、落っこちないように慎重に一步一步あるいて渡らなければなりませんでした。

「はうんっ……」

とん、と小さな段差を飛び降りるだけで、じんっ、びりっ、とイケナイ感覚が背中を突き抜けて、腰が崩れ落ちそうになります。脚の付け根にじわじわと広がる感覚は、女の子としてなんとしても忌避すべきもののなのです。

（うう、や、やっぱりトイレ……っ）

ついさっきしたばかりの決心が、すぐに揺らぎだしてしまいました。まっすぐ走ることに集中できず、ウサギの視線はあっちへふらふら、こっちへふらふらと、森の中にトイレを探してしまいます。

ですが、やっぱり森の中にそうそう都合よくトイレなどあるわけがありません。

ちなり、とウサギは木々の間に生えた背の高い草むらを振り返ります。本当にいざとなれば、あそこを使うしかないのでしょうか……ウサギは後始末のためのティッシュも持っていませんでした。

「だ、だから、そもそも今はそんなことやってる場合じゃ……っ」

いまは一分一秒を争うかけっこ勝負の最中なのです。仮に、もしも、万が一、あの茂みでオシッコをすませることにしたとしても、それでどれくらい時間を無駄にしてしまうのでしょうか。

昨日から溜まり続けたオシッコは、そう簡単に終わってくれそうもありません。

（あ、あくまで、もしもの話よっ、か、考えてみてるだけなんだからっ……）

けれど、そうやってウサギが自分に言い聞かせるための声もどこか弱々しいものでした。だめ、だめと繰り返す思考とはべつに、ウサギの脚はふらふらとコースを外れ、茂みのほうに近づいてしまいます。

「う……はあああ……っ」

（トイレ、トイレしたい……っ、は、はやく、はやくっ……）

引いては押し返す尿意の波に翻弄され、ウサギの背中にはすでにじっとりと汗が浮かんでいました。シャツの前を引っ張った上から、スパッツの前を押さえて前屈みのウサギには、風のような自慢のスピードは見る影もなく、まるで歩くのに疲れてむずがる小さな女の子の歩みと変わりません。

いつもの勝負でならほんの一瞬でたどり着けるはずのゴールの丘は、遠く遠く道の先にあって、いくら急いでいるつもりでも少しも近づいてこないようにも思えました。

「……ん？ ……あっ！！」

どれくらい経ったのでしょうか。よちよちと小股で歩き続けていた（走る、とはとても言えないスピードでしたウサギは、ふと道の向こうを進む、小柄な姿を見つめます。

そう、先を行っていたカメに、ウサギはようやく追いついたのです。

カメはいつもの格好ではなく、重そうな甲羅も下ろして、体操服に臙脂色のジャージを着ていました。髪も後ろに縛り上げて、ハチマキまで巻いてやる気満々です。

けれどやはりカメはカメ。低い背でとことんしょうけんめい前に進もうとしているのですが、どう見ても走るというよりは早歩きと言った方が正しそうでした。眼鏡を曇らせて頬を赤くしているカメを見て、ウサギは自分の様子も棚に上げ、思わずくすりと吹き出し

てしまいます。

（な、なによあれ……ぜんぜんトロいじゃないっ。あんなんでホントに私に勝つつもりなの、カメの奴？）

確かに目的地の丘はもうかなり近くに見えますが、それでもまだ先です。あと少し油断していたら本当にカメのほうが先にゴールしてしまったかもしれませんが、追いつきさえすればこっちのものでした。

ウサギは急いでゆっくりと進むカメに並び、声をかけました。

「なによ、ま、まだゴールしてなかったの？」

「あら～……ウサギさん～……。追いつかれちゃいました～……」

折角のリードを追いつかれたというのに、カメはまるで気にしていないようでした。くやしがるでもなく、黙々と歩みを止めません。拍子抜けしたウサギはあわててか目の前に回り込みます。

「ぞ、残念だったわね。ちょっとハンデあげようと思ったのに、ぜんぜんダメじゃないっ」

「ええ～……そうだったんですかあ～……？ ウサギさん～……遅刻じゃあ～……なかったんですね～……」

「あ、当たり前じゃないっ」

とつぜん凶星を指され、思わず嘘をついてまで意地を張ってしまうウサギでした。あれだけ馬鹿にしていたカメの前でみつともない姿をさらすわけにはいきません。本当はいますぐに脚をクロスさせ、腰をクネらせてしまいたいのをぐっとならえ、胸を張って見下ろすようにカメに言います。

「な、なにやってんのよあんたこそ。そんなトロトロ走って。やる気あるのかしら？」

「はい～……いっしょうけんめいですよお～……」

「ふ、ふんっ。ず、ずっとそうやってのろのろ歩いてればいいのよっ。勝つのはあたしなんだからねっ」

「まだ～……わかりませんよお～……？ 勝負は～……最後の最後まで～……気を抜いちゃ～……ダメですからあ～……」

「っ、か、勝手にしなさいはねっ。さ、先行くからっ！！」

どうもまったく話になりません。ウサギはそう言い捨てると、全速力でカメを追い抜きました。ひとつさきのカーブを曲がって、さらにその先の曲がり角まで一気に走り抜けます。

そのまま丘のふもとまでまっすぐに駆け抜け、坂を上りきってしまえばそこでウサギの勝ちでしたが――、

「はううう……っ！！」

とりつくろった威勢のよさもそこまででした。急に動いたことでポンプのようにおしっこがおなかの中で圧迫され、ウサギに襲い掛かります。

そうすると、もう脚は走る役には立ちません。こみ上げてくるおしっこを塞ぎ止めるのには、ぎゅうっと脚を交差させて、腿をきつく閉じ合わせるしかないのです。

我慢に精一杯になったウサギの脚は、びたりと地面に張り付いたように止まってしまいました。

（あ、あつ、だめ、も、漏れちゃ……うっ！！）

じわあ、とスパッツの内側でおしっこの出口がふくらみ、ちょうど脚の付け根の中心の部分に、ぶくりと熱い感触が染み出していきます。布地をほんの少しだけ膨らませた先走り、紺色のスパッツの股間をさらに濃い色合いに染めていきます。

（っ、あ、や、あ……ウソっ、で、出ちゃ……たっ！？）

ありえない事態に、ウサギは必死になっておしっこを食い止めようとします。ぎゅうっぎゅうっと引き伸ばされたシャツの上から手のひらがスパッツの脚の間に押し込まれ、きつく張りつめた脚の付け根をこねまわします。

けれど、効果がないどころかじわじわとスパッツの染みは広がり続け、おしりのほう、丸い尻尾のすぐしたにまでじゅわぁあつと、熱い感触は広がっていきました。

「あ、あつ、ウソ……ち、ちびっちゃった……？」

緩んでしまった出口から漏れ出すおしっこを、たっぷりとスパッツに染み込ませてしまったことを知り、ウサギは真っ赤になってしまいました。左右の耳は力なく倒れ、へにゃん、と意気地のない狼のように髪にしたがって垂れ落ちていきます。ついつと持ち上げられたおしりの上、尻尾はまるで逆立つようにぶわぁつと毛先を広げていました。

「あんっ、あ、あうっ……」

なおも続く強烈なおしっこの波に、ウサギは身もだえして足踏みを繰り返します。自慢の俊足を、じわじわと漏れ続けるおしっこをせきとめることだけに使って、ウサギは道の真ん中で立ち尽くしてしまいます。

しかも、困ったことにかけて自慢のウサギの脚は、おしっこの我慢にはあまり役にたたないのです。押さえても押さえても、ウサギのスパッツの内側にはじわじわと湿り気が広がってゆくのでした。

「あ、あう、あうんっ……ま、またあつ……」

（だ、だめつまた出ちゃうっ……！？ あ、いや、いやぁ……！！）

もはやウサギは目の前のビッグウェーブを乗り切るので精いっぱい。頭にはかけっこ勝負のことも、ゴールのことなど残っていませんでした。

その時です。

「ウサギさん～……負けないですよお～……」

後ろから響いてきたカメの声に、ウサギは飛び上らんばかりに（いえ、本当に飛びあがっていたら全部出てしまっていたでしょうが）驚きました。ウサギがもたもたしている間に、カメが追いついてきていたのです。

ウサギは大慌てで走り出そうとしましたが、足が言うことをききません。それどころか、がくがくと震える膝は勝手に曲がり、そのまま道の真ん中にしゃがみ込んでしまいそうになるのでした。

（っ、や、やだあ、こ、こんなの見られたらっ……は、はやくっ、隠れなきゃっ……！！）

颯爽とカメを抜き去って行った自分が、こんなところでもたもたと立ち止まってトイレのポーズなんかをしていたら、それこそカメに何を言われたものかわかったものではありません。

そもそも、そんな格好をしてしまえばそのままおしっこが出てしまいそうなのです。

ウサギはぎゅうっとスパッツの股間を抑え込んだが二股のまま、道の脇の木陰へと向かいます。

我慢を続けたままのひょこひょこ歩きで不格好ながら、どうにかカメが曲がり角から姿を見せる前に、ウサギは木陰に隠れることができました。息を殺し、じっとしてカメが通り過ぎるのを待ちます。

「もしもし～……？ ウサギさん～……？」

あらわれたカメがきよろきよとあたりを見回します。

けれど、物音のしていたはずの道にはウサギの姿がないので、カメは首をひねるばかりでした。

「あや～……もう見えません～……。ウサギさんはあ～……ほんとうに～……速いんですねえ～……」

まさか、そのウサギがいま自分のすぐ隣で声をひそめ、ひしに漏れそうなおしここと闘っているなんて思いもしていないのでしょうか。カメはのろのろと、けれど立ち止まることはせずに、道を歩いてゆきます。

「でも～……ワタシも～……負けませんよお～……。ふぁいと～……お～……！」

気の抜ける掛け声とともに、カメはウサギの隠れている木のすぐそばを通り掛かります。カメもいっしょうけんめい急いでいるのでしょうが、いかんせんあまりにもゆっくりで、ウサギはじれったくてしかたがありません。

もっとも、そんなカメに追いつかれてしまうほど、いまのウサギは大変なことになってしまっているのですが。

（っはあ、はあっ、んもう！！ は、早く行きなさいはおっ！！ ほ、ホントにとろくさいんだからっ、か、カメの奴っ！！）

その間も、ウサギは身動き一つとれません。見つかってしまうわけにはいかないのです。足をふみならしての我慢も、出てしまいうことになる悲鳴も喘ぎ声も飲み込んで、必死にぱんぱんのおなかともじつく腰をおさえこんでいました。

耳を必死にそばだてて、カメの遠ざかる足音に耳をすませます。

「ふう～……はあ～……。やつぱり～……大変ですねえ～……かけっこは～……」

（お、お願いっ、はやく、はやくしてえ……！！）

ウサギはもはや拷問されているのに近い気分でした。体育座りのかっこうでスパッツの上に重ね当てられた両手は、いまにも力の抜けそうになる水門を精一杯抑え込み、ぎゅ、ぎゅっと断続的に力を含め続けます。

けれど、その手のひらの中には、布地の内側から抑えきれない熱いしずくがじゅわあ、しゅるると染み出してくるのです。

恥ずかしさに涙を浮かべながら、ウサギはじっとじっと息をひそめて耐え続けました。

「んう、ふっ、ふうっ、はあっ……ふぁ、あうんっ……！！」

ようやくカメの足音が遠ざかっていったところで、ウサギは息をつきます。緊張がわずかにほぐれたせいで、またスパッツにじわあっと新しいおしっこが吹き出してしまいました。黒い染みはとうとうふわふわのしっぽの根元まで広がり、ウサギのスパッツは遠目に見てもわかるほど、足の内側だけが別の色合いに変わってしまっています。

ますます顔を赤くして、ウサギは息を荒げ、必死になっておしっこの出口を絞めつけました。

（だ、だめ、もうだめ……っ！！）

けれどそれももう限界です。ギョツと目をつぶり、ウサギは唇をかみしめます。とてもではありませんが、このままトイレを我慢し続けながら、かけっこ勝負はできそうにありません。

あたりを見回し、ウサギは近くにある大きな榎の木の根元に生えた、背の高い茂みに目をつけます。ちょうど、座り込んでしまえば周りの人の目をほどよくさえぎれそうな、具合のよい場所でした。

（っ、あ、あそこで、おしっこっ、出しちゃおうっ……）

羞恥心と女の子のプライドを、迫りくるオモラシの危機が圧倒します。

シャツをまくり、スパッツに手をかけながら、ウサギは膝を擦り合わせたままのよちよち歩きで、茂みの奥に駆け込もうとしました。

「っふ、…あっあ、…くううっ…」

手のひらの間から漏れるしずくが、スパッツを超えてウサギの足につうと滴り落ちます。引けた腰のまま、つま先立ちの内股で、途中3度ほど立ち止まりながらも、ウサギはとうにか最後の一線だけは守り、茂みにたどり着きます。

（あ、あとちよっつ……！！ あ、あと、五秒、五秒だけっ……）

服の上からでもすでにおしこの準備を万端に整えてしまった下腹部をさすり、もぢもぢとお尻を振りながら、ウサギは茂みのなかに踏み入りました。

脚にびったりと張り付くスパッツを脱ごうと、ウサギがシャツをまくり、中腰のままスパッツに手をかけたときでした。

「……あれえ？ ウサギさん、どうしたのこんなところでっ」

「え……？」

ぐいっと後ろにおしりを突き出したウサギの眼の前に、数人の行列がならんでいました。その中の一人、買い物かごを下げたタヌキが、目をまん丸くして声を上げます。

茂みの草の高さは、足元は隠してくれても顔までは届きません。草むらの中でしゃがみこんでも、顔は丸出しなのです。

ウサギはちょうど、ふわふわのしっぽまでぐしよりとおしっこで濡らしてしまって、いままさにスパッツを下げたところまで、丸見えの姿勢なのでした。

「ひょっとして、ウサギさん……トイレ？」

あまりにことに硬直してしまうウサギの眼の前で、ぼん、と大きな音を立てて手をたたいたタヌキが、そう言います。

「っ——！？」

ウサギはあわててがばあっ、と身を起こし、膝まで下がりかけていたスパッツを腰の上に引っ張り上げます。急激な動作でじゅわあっ、とまた足の付け根で水音が響きますが、それどころではありません。

垂れた耳の先まで真っ赤になりながら、凍りついてしまった舌を動かして、ウサギはかろうじて弁解の言葉を絞りだそうとしました。

「ち、違うのっ、そ、そのっ、これはっ——」

間に合わなかった。我慢できなかった。そう言おうとしたウサギでしたが、それより先に割り込んでくる声があります。

「ウサギさん～……？ あのう～……ウサギさんも～……おんなのこなんですからあ～……そんなところで～……おトイレなんて～……しちゃ～……だめだと思います～……」

なんと、行列の一番後ろにはカメの姿があるではありませんか。ウサギは今度こそ、完全に言葉を失ってしまいました。

「お急ぎの途中でも～……ちゃんと～……お手洗いを～……使ったほうがあ～……いいと思いますよお～……？」

そう言うと、カメは進む行列の後に続きながら、真上の木の幹を指さします。

そこには、真新しい大きな文字で『公衆トイレ』と書いてあるのです。あんなに行きたかった場所がこんなところにあるなんて、ウサギにはまったくの初耳です。

頭が真っ白になってしまったウサギの前で、ざあーっ、と流れる水の音が響きます。

先に個室に入っていたタヌキが、ドアを開けて手を拭きながら外に出てきました。

「ふう～……さっぱりしたあ♪」

買い物かごを抱えたタヌキは、次の順番を待つカメを振り向いて、首をかしげます。

「ねえカメさん。なんか見慣れないかつこしてるけど、ひょっとしてウサギさんとなにかしてたの？」

「ああ～……タヌキさん～……じつはですねえ～……いま、ワタシはあ～……ウサギさんとお～……かけっこ勝負の～……最中なんですよお～……」

「ええっ！？ それ、ほんとう！？」

「はい～……勝ったほうがあ～……負けたほうの～……いうことを聞くて～……勝負なんですよお～……」

のんびりと答えるカメに、タヌキはばあっ顔と顔を輝かせ、またぼおんっ、と大きく手を叩きました。

「うわぁ……こりやすごいね、ビッグニュースだっ！！　こりやあおつかいなんてしてる場合じゃないねっ！！　すぐにみんなに知らせなきゃ」

言うが早いか、タヌキは買い物かごを放り出し、風のような勢いで去って行ってしまいました。取り残されたウサギは、呆然とその背中を見送ることしかできません。

そうしている間に、トイレの順番待ちの列はまた一つ進んでゆきます。

「じゃあ～……ウサギさん～……お先にしつれいします～……」

はっ、と気づいた時にはもう遅かったのです。

ウサギが我に帰った時には、もうカメは空いた個室の中に入ってしまったところでした。

（えっ、あ、あっ、や、ま）

「ちょ、ちょっと待ってっ、待ってよおっ！！」

取り乱したウサギは、行列を突き飛ばしてカメの入ったトイレへと駆け寄ります。一歩前に進むごとに足元にはじよろお、じじょじょお、とおしっこが漏れ始めていました。

汚れた手で、ウサギは激しくドアをノックします。

「や、やだぁ、変わってっ、あ、あたしもトイレ、トイレえ！！　も、漏れちゃうのっ、もう我慢できないのおっ！！！！　はううっ……！！」

ドアにしがみつくようにして、ウサギがさけぶと、堰を切ったようにスパッツの内側からあふれ出したおしっこが深く色を変えた紺色の布地を押し上げて、ばちゃばちゃばちゃと地面に飛び散ります。たちまちウサギの足元には薄黄色の水たまりが広がりはじめました。

「うぁ、あっ、あ、お願いっ、おねがいはいやく！！　トイレ、トイレっ、おしっこ出ちゃう！！　もう出ちゃう！！！！」

「ええとお～……でもお～……ワタシのほうがあ～……先に並びましたよお～……？」

「だ、だからそうじゃなくてえっ……！！」

「……ワタシもお～……ずっとお～……ガマンしてましたからあ～……ちょっと～……すぐには無理です～……」

もうウサギは、一歩だって歩けませんでした。

自慢の足も、手も、オシッコの出口を締めつける以外のなににもできません。すっかり垂れてしまった耳が、羞恥にふるふると震えています。細い腰と背中にはびくびくと痙攣し、腰奥に溶けて広がるオモラシの開放感に打ちふるえます。

「あ、あたしのが先なんだからあっ……お、お願いっ、お、おしっこ……先に、さきにおしっこさせてえっ……！！」

どんどんと激しいノックが、涙混じりの嗚咽にかき消されて次第に弱まり、同時にじじゅじゅう、じよろおお……という水音はますます激しいものになっていました。片手だけで抑えたスパッツからあふれたおしっこは、びしょぬれになって見る影もない丸い尻尾からもぼたぼたと垂れ落ち、トイレの前に大きくひろがってゆきました。

するとその時ようやく、ドアの奥から、ちょろ、ちょろろお、というカメのおしっこの音がはじまります。

「すみません～……もうすこし～……かかります～……」

カメのおしっここといったら、まったくもう嫌になるくらい長つたらしいものでした。いつまでたっても全く終わる気配のないカメのトイレに、焦らされ続けたウサギのガマンはもう限界でした。

「っ馬鹿ぁ、は、はやくしなさいよお、で、出ちゃう、おしっこ、ぜんぶ出ちゃうじゃないっ……！！　あぁうっ、くう……！！」

ウサギがとうとうありったけのおしっこを出してしまっても、なおカメのトイレは延々と続きました。

ドアの前でおしこの湖にへたり込み、ぐずぐずと泣いているウサギに、ようやくドアの向こうから顔をのぞかせたカメが言います。
「あのお～……ウサギさん～……いくらかけっこ勝負だからって～……おしこは～……ちゃんと～……お手洗いにいきましょうねえ～……？」

「うあつ、ひつく、ぐずっ……」

馬鹿にしていたカメにそんなことまで言われてしまって、ウサギは、とうとう動けなくなってしまいます。

その頃、タヌキに勝負の話を聞いてようやく駆けつけてきた動物たちは、いったいゴールでもないところで二人が何を話しているのだろうと、しきりに首をひねるばかりでした。

……結局、かけっこ勝負は途中でどこかにいってしまいましたが。

とりあえず、めでたし。めでたし。

(初出：おもらし特区 2009.07.03)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: プール帰りのお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 08/30/2009 16:12:43

BODY:

突き抜けるような青空、じわじわと照りつける太陽が、アスファルトを焦がす。

やかましいセミの鳴き声は絶えることなく響き、梅雨の名残を吹き飛ばす真夏の日差しは、濡れた髪を麦藁帽子の上からもちりちりと乾かしているかのようだ。

「んくっ、んっ、んっ……ぷはあ……、はあーっ……♪」

プール帰りの渇いた喉に買ったばかりのジュースを流し込み、彩花はふう、と額に浮いた汗をぬぐう。自動販売機の誘惑に負けてはしまったものの、ようやく喉の渇きを癒すことができ、茹だっていた頭にも落ち着きが戻ってきていた。

夏休みが始まって一週間のプール通いで、すっかり日焼けした手足は、もうあちこち皮がむけ始めていた。背中の大きく開いたワンピースからは、くっきりと水着の跡がのぞき、まぶしいコントラストを見せている。

「あー、生き返ったあ……」

あんなに水の中に浸かっているのに、どうしてこうものどが渇くのかと不思議に思いながら、彩花はプール用具の詰まった自転車の前かごに、少しだけ残った飲みかけのペットボトルを放り込む。

まさに、夏本番。

始まったばかりの夏休みはまだまだ先が長く、街中にはあちこちを元気に走り回る、彩花よりも小さな子たちの姿も多く見える。

遠くに見える入道雲をぼんやりと眺めていると、彩花のお腹が小さく音を立てる。

「……なんかお腹空いてきちゃったなあ」

まだ11時過ぎのはずだけれど、朝から遊び回っていた彩花の身体はさっそくお昼ごはんを要求していた。

早く帰って何か食べよう、と決めた彩花はスタンドを外し、新調したばかりで少し高い自転車のサドルをまたぐ。

と、

「んっ……」

びりっ、という電流のような感覚に、思わず彩花は声をあげてしまう。

サドルに押しあてられ、体重の掛かった股間を中心にして、じんと響く甘い痺れが、彩花の足の付け根からお腹の下のほう、身体の前側へと広がっていった。

むずむずと股間の奥を刺激する感覚に、彩花は軽くサドルの上で腰をよじらせる。

(あー……、やっぱ着替える前におトイレ行っとけばよかったなあ……)

あまり考えもなしにジュースを飲んでしまったことを、彩花は少しだけ後悔した。

プールを上がるしばらく前から彩花の身体は尿意を訴えていたのだが、あいにくと更衣室のトイレが大行列だったものだから、順番待ちをする気にもなれず、そのまま着替えて出てきてしまったのだ。

今にしてみれば、多少我慢してでもちゃんと並んでおけばよかったかもしれない。後悔する彩花だが、いまさら遅かった。

(……けっこう、おトイレしたいかも……)

ももぞとサドルの上でおしりの位置を直しながら、彩花は自転車の前輪をぐりぐりとアスファルトに押し付ける。

熱気と暑さと喉の渇きにいつとき忘れていたが、気づけば下腹部は硬く張りつめ、水門にもかなりの圧力がかかっている状態だった。学校の授業中でも手をあげてトイレに行きたいと訴えるか迷うあたりだし、休み時間なら、間違いなく最優先でトイレを目指すレベルだ。

「え、っと……」

一度は家に向けて戻りかけた自転車を止め、彩花は唇に指を押し当てて考える。

このまま家に戻るというのが当初の予定だが、それよりも先に、トイレが割りこんできそうな気配だ。

しかし困ったことに、肝心のトイレが近くにはない。この近所には大きめの公園があるが、そのトイレは男女共用で、入口こそ別だが中は完全に繋がっている設計なのだ。彩花としてはあまり積極的に使いたくはない……というか、できることなら入りたくないトイレの一つだった。

（……でも……）

余裕のない下腹部は、できるだけ早い尿意からの解放を切に訴えていた。自転車のかごの中で、飲みかけたジュースがちゃぽんと揺れ、それに連動するように自転車のサドルが小さく震える。

（はやく、おトイレ行きたい……）

空腹を塗り潰して下腹部にせり上がるダイレクトな生理的欲求が、少女の小さな嫌悪感をあっさりと上回る。少し回り道になるのを覚悟で、彩花はハンドルを逆方向に切って、公園への道を走りだした。

「よいしょ、…つと」

公園入り口に自転車を止め、彩花はプールバックを片手に自転車を降りる。ぐうっと足の間に押し付けられていたサドルが離れ、圧迫するものがなくなった股間に、きゅうんと切ない痺れが走った。

「んんっ、あんっ……」

急にやってきた感覚に小さく唇を噛んで、彩花はさりげなくスカートの前を握り、息をつめて、押し寄せる尿意の波をやり過ごす。自分でも知らないうちに彩花のワンピースのお尻が小さく背中のように突き出され、ふりふりと左右に揺すられてしまう。

（やあ…っ、だめ、がまんっ……）

ぷくり、と女の子の大事な部分に膨らむおしっこの気配に、きゅっ、と素足を交差させて、もう一方の手を自転車のハンドルに乗せたまま、彩花はしばらくその場に立ち尽くした。

「……ふう……っ」

やがて、緊急警戒態勢の解除とともに、彩花はそっと緊張を緩める。

（危なかった…かもっ。で、出てないよね……？）

硬直はわずかの間だったが、一瞬とはいえかなり危険な状態だったことに、彩花は密かにスカート下の感覚を確かめながら安堵した。ちびった様子はなかったが、下着の股布はしっとりと汗と熱気がこもり、紛らわしい感触を与えている。

そして、おしっこの出口のすぐそばまで押し寄せてきた熱い水流は、いったん押し戻されてもまだ、出口のすぐ上あたりで渦を巻いていた。

「い、急ごう……」

夏の日差しに炙られておヘソの裏側でくつくつと沸騰するおしっこに急かされて、彩花は足早に公園の入り口をくぐり、まっすぐに公衆トイレを目指す。

入口からそう遠くない場所に、目的のトイレはあった。

古びたコンクリートの円筒形の建物は、落書きと埃で汚れたクリーム色の塗装のあちこちを剥げさせて、その上に蔦を絡めている。左右に空いた出口にはそれぞれ、紳士用婦人用の赤青マークが付いているが、中は一つにつながっていて、小用便器が二つと個室がひとつあるだけの簡素な設備なのだ。

(……うう、やだなあ……)

以前の苦い記憶が、彩花の足を鈍らせる。

前にここに立ち寄ったのも、確か学校帰りの時だった。

その時は彩花も中がこんなになっているとは知らずに、何気なく女子トイレの入り口をくぐったのだが、ちょうど中では低学年の男子たちがそろって用を足しているところだった。

彼等は突然トイレには行ってきた少女を見つけて、男子トイレに入ってきたと勘違いし、口々に彩花を指さして大騒ぎを始めたのだった。

誤解だと言おうにも、いちど騒ぎ出した彼等が簡単におとなしくなるわけもなく、彩花は大急ぎで回れ右、後ろ髪をひかれる思いでトイレを後にするしかなかった。

「私、別にヘンタイじゃないもん……」

顔を赤くしながら、彩花は思い出の中の光景に口を尖らせる。

とは言え、彼等の勘違いもまったく理不尽なものではない。昔は良くあるタイプのひとつだった入口は別でも中ではつながっている男女共用トイレだが、設備が改善された今では滅多に見られない。

ここ以外にそんな奇妙なトイレを知らない彩花やその少年たちにとっては、ワケのわからないヘンなトイレ、くらの認識でしかなかった。加えて、彩花が知る由もないが、この公衆トイレの中の設備は、標準的な男子トイレのそれとほぼ同じであった。

「うう……」

おそらく男の人も普通に使っているだろう個室に入り、そこでおしっこを済ませるのはかなりの抵抗感があったが——それを無視しなければならぬくらい、彩花の尿意は際どいものになっているのだった。

「……………」

慎重に様子をうかがい、彩花はできるかぎりのさりげなさを装って、トイレの入り口に入る。すぐにこもった匂いと、薄暗い建物の中の熱気が押し寄せてきて、思わず顔をそむけなくなった。

（誰も、いないよね……？）

不快感を我慢し、建物の中に入った彩花は、小用便器に向かう背中がないことを確認する。しんと静まり返ったトイレには、人の気配は感じられない。

ぐずぐずしていると誰が来るともわからない。彩花はそのまますぐに個室へと向かった。

別々の入り口に男女のマークを刻んでおきながら、ここのトイレで彩花が使える女の子用のトイレはこれひとつだけだ。不平等さに心の中で不平を言いつつも、古びたノブに使用中の赤いマークがないことを確認して、ドアをノックする。

返事はない。

「……入ってますか……？」

念のためにもう一度ノックを繰り返してから、彩花はドアを引きあげた。

ぎし、と木のドアが軋み、あまり掃除のされていないタイルの向こうに、和式タイプの便器がひとつ、設置されている。洋式だったら座りたくないな、と思っていたところだったので、これは素直にありがたかった。

後ろ手に鍵を閉め、彩花ははやる足で個室に駆け込む。

（んっ……まだ、まだっ、油断しちゃダメ……）

どうにかトイレまでやってこれたが、ここで気を緩めるわけにはいかない。我慢が厳しいときはトイレに入った瞬間が一番『危ない』のを彩花は実体験をもって知っている。

小さく腰を揺り動かしながら、彩花は便器の上をまたいでスカートをたくし上げる。床に触れないように慎重に布地を腰上に引き上げて、下着に指をかけ――

（よし、間に合っ……）

腰を深く下ろそうとした、その瞬間。

「っ……………！！？」

彩花は息を止めて、戦慄した。

まさにおしっこをしようとしたその時、彩花はタイルの上をうねる、ずらりと並んだ足を蠢かせるその姿を見つけてしまったのだ。

はじめは見間違いかと思い、こんどはまじまじと。計 5 秒ばかり『それ』を見つめて、彩花は戦慄する。

彩花が大の苦手になっている虫の、中でもとりわけ大嫌いなムカデが、脚を波打たせて便器のすぐ脇を這っていたのだった。

「っ、ひぁぁぁぁぁッ！！？」

ぞわりとうなじが逆立ち、悲鳴が口を裂く。

下ろしかけていた腰をぐいっとひねり上げ、次の瞬間には彩花は個室を飛び出していた。乱暴に叩き開けたドアから転がり出るようにして、公衆トイレの外まで一目散に走った。

「っ、っっ〜〜〜っ！！！」

なおもそこから全力疾走で 30 m ほどを駆け抜け、だん、だん、だんっ、と背筋に走った怖気を踏み潰すように悶え、彩花は両腕をきつく抱き締めた。

「っ、っは、はあ、はあっ、……や、やだぁ……もうっ！！ なによ、なんで、あーもうっ！！」

はあ、はあ、と緊張と驚きに乱れる息を繰り返しながら、彩花は毒づいた。

嫌になるくらい鮮明に見てしまった不気味な姿に、背中に鳥肌が立つ。ぶる、と寒気のする腕を自分で抱きかかえ、じろり、と遠くなった公衆トイレを睨む。

「……だからこのトイレ嫌なのよお……っ」

大きく溜息をついて、彩花は毒づいた。

もう、なにがなんでもこのトイレには入れない。個室にあんな気持ちの悪いモノがいると分かっていたら、ドアノブにすらも触れないくらいだ。

「……っ」

うーっ、と唸り声を上げながら、なおもしばし、彩花は理不尽な憤りをコンクリートの建物にぶつける。やり場のない怒りと恐怖が、ぐるぐると渦巻いてうまく言葉にならない。

だが――

わずかながら気分が落ち着き、荒くなった息が収まってくると同時、一時は忘れられていたもうひとつの切迫した事態が、自己主張を再開した。

きゅん、と下腹部が独特の収縮をはじめ、むず痒いような感覚がじわじわとせり上がってくる。

(あ、っ……)

下着の奥に感じる危険な痺れに、彩花は慌ててスカートの前を押さえ込んだ。

(……で、出ちゃったり、してないよね……?)

幸いなことに下着に感じる湿り気は、汗によるもののように思えた。本当は違うのかもしれないが、あえてチビったとは思わないことにする。

「あう……っ」

しかし――ちょうどまさに“出る”ところだったおしっこが突然中断され、下腹部の欲求は当然のように激しく高まっていた。断続的にきゅんっ、きゅんっ、と疼く感覚は、しっかり出口を締め付けていなければそのままおしっこが始まってしまいそうな具合だ。

「っ……ど、どうしょ……、と、トイレ……」

このトイレが使えないことに彩花は異論はない。どんなに苦しくても、あんな気持ち悪い場所はまだトイレにカウントすらできない。誰かに一生のお願いで頼まれたって、もう二度と立ち入ることはないだろう。

けれど、だとするなら――他にトイレは？

当然ながら周囲を見回しても、そんなものがあるわけもない。膨れ上がる不安と共に、彩花はぎゅうっとスカートの前を握り締めた。

「そ、そんなに考え込むことじゃないよね。普通に、家まで帰ればいいだけだし」

もともと最初はそうするつもりだったんだし――。そう、自分に言い聞かせるように、彩花は公園の入口へと戻ることにした。来た時よりも数段慎重な歩き方は、一度なりともトイレに入ってきたとはとてもではないが思えない様子だ。

(……そ、そうよ。ほんの10分くらいだもん、我慢できるって)

そうやって具体的な数字と、明確なゴールが頭の中をよぎると、それに反応するようにじいんっ、とイケナイ感覚が高まってしまう。

まるで頭の中に『あと 1 0 : 0 0』を刻むデジタル数字のタイマーが点灯して、カウントダウンを始めたかのようだ。

「あう……」

小さく呟いた手のひらは、さっきからスカートの前を離れない。当てているだけ、のはずの指が、時折びくっと力が篋められて、下着の奥に大きく膨らんだ水風船を押さえ込む。

それらがしつこく求めるのは、女の子の羞恥心やプライドによる『おうちまで我慢』などよりもっと原始的で、シンプルな解決方法だ。

（はやく、おしっこしたい……っ）

水分の摂取と新陳代謝の結果、当然訪れる生理的欲求は、下腹部に閉じ込めた液体の解放を切に求め、それに応じようとしない彩花にますますはしたない姿勢を強要してきていた。

加えておなかが空いているせいでか、ぐう、とへこむ胃袋の分まで、膀胱が大きく膨らんでいるような気さえしてくる。

とにかく早く帰ろう、そう思い精一杯急いで公園の入り口に戻った彩花だったが――

「あ、あれっ……？」

公園の入り口横で、彩花は予想外の出来事に呆然と口をあけてしまった。

抜けるような青空の下、蟬の声がむなしく響き、じりじりと真夏の日差しが地面を焦がす。来た時と寸分違わぬ夏の光景。

しかし、入り口のすぐそば、確かにあるはずのものが、見付からない。

――ほんの少し前に停めたはずの自転車が、そこから煙のように消え失せていた。

「う、うそっ」

そういえばさっき慌てていたせいで、カギをかけていなかったような――

（で、でもほんの五分くらい……なのにつ？）

しかしそれ以外の理由は見付からない。自分の不用心な行為に、さあっと彩花の顔から血の気が失せる。

慌てて周囲を見回すが、当然ながらそんなところに自転車が見付かるわけもなかった。来た時と同じ、人気のないアスファルトの道路で、彩花は言葉を失ってぼんやりと立ち尽くすばかりだ。

「ど、泥棒……？ なによお、それ……っ！！」

他に結論はないだろう。まだ買ってもらったばかりの自転車を、見ず知らずの誰かに奪われてしまったことに、彩花の胸にふつつと怒りがこみ上げてくる。必ずつかまえてやらなきゃ、という静かな闘志を燃やす彩花だが――

さしあたっては、そんなことよりもずっと優先すべき事項として、さらに切羽詰まった状況が少女を待ち受けていた。

「うあっ……」

ぞわわっ、とこみ上げる尿意の波に、小さく悲鳴がこぼれる。

彩花はたまらず身体をよじり、手に提げたプールバッグを握るもう一方の手までぎゅうっと足の付け根に押し付けてしまう。

あとは帰るだけ、のはずだった予定が大きく狂ったことに、下腹部が大きく抗議の声を上げているのだ。

（……ちょ、ちょっと……待ってよ……っ）

つう、と彩花の首筋に嫌な汗が流れ落ちる。

自転車泥棒のことは、とりあえず脇に置く。十分すぎるくらいに重大事件で、今すぐ探し回って見つけて捕まえてやりたいが、それでも――それよりもっと今は先に、早急に済ませておかなければならないことがある。

（お、おしっこ……っ）

こみ上げてくるはしたない衝動が、少女の腰を小さく揺らす。

「え、えっと……っ」

ぶるぶると頭を振って、優先順位を整理する彩花。

残り、10分——すでに始まっているカウントダウンは開始から何十秒かを経過しており、こんな場所でもたもたしている余裕はないぞと、少女を急かす。

しかしそのカウントダウンはそもそも、ここからまっすぐ自転車で家に帰った場合の残り時間だ。その自転車がなければ、彩花に残された手段は当然、徒歩のみ。残念ながらさっきジュースを飲んでしまったせいでバス代なんて持っていない。仮にあったにしても、バス停まで歩いてバスを待っている時間も惜しい。

歩いて帰るしかないとなれば——、家までかかる時間も倍以上に伸びてしまう。それはとりもなおさず、おしっこできるのがそれだけ遅くなってしまうことを意味していた。

この真夏の日差しの中を、おしっこを我慢しながら30分近く歩け、と。つまりは今彩花に要求されているミッションは、そういうことだ。

「ど、どうしょ……う」

極端に難易度の跳ね上がった時間制限に、彩花は動揺を禁じえない。

その不安に連動するように、ぎゅ、とプールバッグの下でスカートの前を押さえる手に力が籠もる。じわじわと膨れ上がる尿意は、膀胱を大きく圧迫し、思っていた以上に予断を許さない事態になりつつあった。

（こ、こんなの、い、家まで間に合わない……かも……っ。す、すっごく、したくなってきちゃった……っ！）

くつくつと煮詰まった尿意が、おヘソの裏で沸騰しているような、そんな感覚。わずかな油断もダイレクトに衝撃となってたぶたと揺れる膀胱に響く。

「と、とにかく、急いで……あうっ……！」

早く家に。あるいは早くトイレに。そのどちらでも構わないから、とにかく急いで出発する必要がある。じっとしていても、おしっこはできない。

じいん、と踏み出しかけた足裏から伝播する振動に、思わず小さく声を上げ。少しでも気を紛らわせようとそわそわ揺れる腰をかばいながら、彩花はできる限りの早足で、公園を飛び出した。

人生、焦っているときに限って、間の悪いことはあるものだ。

いつまでも押さえているわけにも行かないのでプールバッグは肩に掛け、全速力で——お腹をそおつかばいながらなので、走る、というわけにもいかなかったが——歩き始めた彩花は、公園を出た最初の交差点で、空気を読まない信号につかまってしまう。

赤色を点灯させた歩行者用の信号に、怒ってもしようがないとはわかっている彩花は苛立ちを隠せなかった。

「もお……っ、こんな時にい……っ」

ここいらの交差点はやたらに信号が長いことで有名なのだ。先を急ぐ彩花には鬱陶しいことこの上ない状況だったが、けれど中

中央分離帯の生垣まである片側 2 車線の道路は、さすがに信号無視して渡ってしまう訳にもいかず、しかたなく横断歩道の前で足を止めざるを得ない。

（せっかく急いできたのに、これじゃゆっくり歩いてても変わらなかったじゃないっ……）

排気を巻き上げて進んでゆく大きなトラックに、ゆっくり交差点を曲がる市営バス。さらにはたくさんの乗用車。横断歩道の前を行き交う車にまだかまだかと焦れながら、彩花はなんども信号を覗きこむ。

「はやくしてよお……っ」

じっとしていればしているほど、膀胱をぱんぱんに張りつめさせたおしっこは、おヘソの裏側にずしっと重くのしかかる様な存在感を増してゆくようだった。気を紛らわそうとすればするほど、かえってそれが意識されてしまい。彩花の爪先は自然、リズムを取るように小刻みに動きだしてしまう。

彩花のおなかの中でたぶんと揺れるおしっこは、茹だるような夏の日差しで熱せられて煮詰まって、ますます濃度を濃くし、より一層強い尿意を感じさせるような気までしてくる。

（……これ渡って、次は右で、そこからまっすぐ行って、坂を越えて……、玄関、鍵かかっているかな……開いてれば早いけど、でも……）

まだ遥か先の家のトイレへと、彩花の心は一足に飛んでいた。想像の中では早々と家まで帰りつき、玄関を開けて靴を脱ぎずて一目散に廊下を走り、突き当りのトイレへ。飛び込んでドアを閉めて鍵をかけて、そうなればもう後は周りも気にしなくてもいい。脚を寄せあわせながらもじもじ我慢して、下着を下ろして便座に腰かけて――

「……あ、っ」

そんな想像が、いけなかったのだろう。

もう一方の歩行者信号が、ちか、ちか、と青色を点滅させ、まもなく切り替わることを知らせ始めたとき、ごう、と熱気を巻き上げて走るトラックを引き金に、彩花に大きな波が押し寄せてくる。

「っ、やば……っ」

声を上げる暇もなく、両手がスカートの中に延びた。ほとんど反射的に、彩花はぎゅっと両手で脚の間を押さえ込んでしまう。プールバッグが肩からずり落ちて、地面にぼすん、と転がった。

（あ、あっ、あっ）

じん、じんっ、きゅうんっ、ぴくっ、ぴくうんっ。

女の子の大事な部分が小さく痙攣をはじめ、こみ上げてきた熱い衝動が足の付け根に溜まってゆく。前かがみになって重ね当てられた手のひらは、スカートを太ももの間に巻き込んで、直接下着の上からおしっこの出口を押さえ込む。

その下ではぐいっと寄せあわされた膝がくっつき、サンダル足の交互にせわしくアスファルトの地面を踏む。

たん、たん、たんっ、ぐらぐら揺れる上半身にあわせて、腰も滑らかにクネリ、突き出されたお尻がぴくんぴくんと持ち上がる。

きいん、と耳の奥でかん高い音が鳴り響き、目の前がすうっと白くなる。想像の延長線上のままに、このままここでおしっこを出し始めてしまおうとする自分勝手な身体を、彩花は懸命に押さえ込んだ。

じん、じんっ、びり、びりっ。

甘くむず痒く痺れるような感覚が股間を何度も往復し、ぎゅっと引っ張りあげられた下着を包み込んでゆく。股間にきゅうっと食い込む下着はしっとりと湿り、肌に張りつくようだ。

(んっ、っは、んう、んんうっ……)

は、はっ、と荒い息を繰り返し、メトロノームのように上半身を左右に揺らして、彩花は押し寄せる津波をやり過ぐす。ぐうっと水圧が高まる時は必死に息を止め、わずかに緩む瞬間を見計らって息継ぎをする。タイミングを図り間違えば、一番脆い部分からそのまま津波が溢れだしてしまう。

まるで本当に海で溺れかけているようだった。

「んっ、っ……ふう、はあ……っ、あ、……っ！？」

何十分もそうして固まっていた気がしていたが、実際はほんの数秒のことだったらしい。彩花がどうにか波を乗り越え、我に返った頃には、とくに信号は青に変わっていた。

「あ、わ、渡らなきゃ……！！」

車の騒音が途切れていることにふと顔を上げてそのことによく気づき、彩花はプールバックを引っつかむ。

まだざわざわと落ち着かない下腹部からは、手を離すことができなかった。精一杯のさりげなさで、スカートを握り締めながら、その下を確認する。

(……よ、よし……だいじょうぶ……)

まさかの事態には至っていないことに、彩花は大きく安堵する。

太腿はこわばり、脚の付け根にはまだ違和感がある。背中にもぐうっと気張っていた瞬間の嫌な汗が浮かんでいた。

(あ、あぶなかったあ……い、いまの、ホントにやばかったかも……)

もう少し、なにかの加減で気が抜けていたり——押し寄せる波の圧力が高まるタイミングを図り損ねて、出口を押さえつける力を入れる瞬間を間違えてもしていたら、間違いなく『ちょろっ』とは——かなり控えめに考えても——“出て”しまっていたかもしれない。

長い横断歩道を渡りきり、そそくさと歩きながら、彩花はそっと周囲を確認、背後をそろそろと振り返る。

(み、見られてなかったよね……？)

今の“前押さえ”は、足踏みに腰振りまで組み合わせた、よっぽど小さな子でもやらないような、全身全霊の我慢だった。いまどきパントマイムだってあんなに『おしっこ、でちゃうう！！』なんてフリはしないかもしれない。

確かにあとほんのもう少しで出てしまおうところだったとは言え、まさか横断歩道の真ん前ではじめてしまうのは、さすがにためらわれるほどのものだった。

「……………」

幸いなことに何度周囲を見回しても、彩花を気にしている人の視線は見当たらなかったが、それでも気になるものは気になるのであった。

ひとまず安堵する彩花だったが、

「……んう……っ」

すぐに、乗り越えたはずの波が返すように“揺り戻し”がやってくる。さっきまでのものに比べれば些細なものだが、それでも平然としているのは無理な規模だ。

眉を小さくよじらせながら、彩花はぎゅっと唇をかみしめ、歩幅を狭めてそれをやり過ごすのだった。

(あー……っ、だ、だめ、おしっこ、おしっこしたいっ……や、やっぱ、こ、これ、どこかで……おトイレ寄らないとっ、だめかもっ……)

家までの道のりの半分も過ぎていないところで、彩花はそう決心——あるいは挫折せざるを得なかった。横断歩道でのピンチを皮切りに、押し寄せる“おしっこがしたい”波はさらに激しくなりだしている。

こういうものにも癖みたいなのがあり、一度なにかで我慢が辛くなると、そこから持ち直すのは相当に難しいのだ。

往々にして生理現象に抗するのは物理的な限界よりも精神面に依存するものが大きく、残念ながら彩花はそういった“我慢”の才能には恵まれていない。

(どうしよう……どこか、近くにおトイレ、なかったっけ……?)

まさか、見ず知らずの家の玄関を叩いて『おしっこさせてください!』というわけにもいかない。しかしこのあたりにはコンビニやスーパーも少なく、気軽に彩花が利用できるような公衆トイレはすぐには見つかりそうになかった。

自転車ならすぐにたどり着ける距離でも、こうやって歩いてみるとなると存外に遠いものだ。普段あまり通らない道だけに、そのギャップに彩花は戸惑ってしまう。

「……んっ……」

次々とやってくる小さな波を乗り越えながら、うまくまとまらない考えを懸命にめぐらせる。

(えっと、だから……コンビニとかって、トイレ借りたりできたっけ……? ……学校……は、全然別のほうだし、だ、誰かのおうちで……でも)

ぶるぶると震え出す下半身が思考の邪魔をする。そんなことよりもオモロシしたくなきゃ一生懸命我慢しろ、と身体のほうが訴えているのだ。

ますます重く鈍く、下半身の中で存在感を増す膀胱が、石のように硬く張り詰めて、時折ぴくぴくと出口のほうを震わせる。自分の身体のことなのに思うようにならず、まるで心も身体も小さな頃に戻ってしまうようだ。

「……あーもう、あたしの馬鹿……っ。な、なんでプール出る前に、おトイレ寄ってこなかったかなあ……っ……」

おまけにたいした考えもなしに自動販売機のジュースを飲んでしまったことまで思い出し、彩花はまた後悔する。水分を摂ったという想像から連動して、おなかのなかにこぼこぼと音がして水分が注ぎ込まれてしまうようですらあった。

いまなら、もう二度と立ち寄らないと決めたはずのさっきの公園の公衆トイレすら、歓迎できそうだった。……もちろんそれには虫がいないというのが大前提ではあるけれど。

といって、ここまで歩いてきて今更戻ろうにも、そうはいかない。

「って、いけない、いけないっ……」

いつのまにかトイレを探しているつもりが、頭の中が『おしっこしたい』という願望だけになってしまっている。まるで、またさっきの横

断歩道での『やばい』のが来てしまいそうな気がして、彩花はぷるぷると首を振った。

いずれにしても、このまま家まで持つかどうかはかなり怪しくなりだしている。勝手に始まった残り10分、のカウントダウンはのこり2分半を残すのみ。これじゃあウルトラマンにも負けてしまうだろう。

「……と、トイレ……っ」

きゅん、と下腹部の訴えがそのまま言葉になって、彩花のくちびるをふるわせる。一応、他のトイレにもいくつか心当たりが思い浮かびはしたが、そのすべては、ここから大きく回り道をしなければならなかった。

それくらいなら、最初からまっすぐに家を目指したほうが早い。だがそもそも、底まで間に合いそうにないからこんなことになっているわけで――

ぐるぐる巡る思考に出口が見付からず、知らず、不安に駆られた手のひらがスカートの前を押さえてしまう。布地の上からでもはっきりとわかる、ぱんぱんに張り詰めた下腹部と、じんっ、と響く甘い痺れに、ますます彩花の心はざわつき出す。

（っ……お、おしっこ……）

おしっこのタンクと直結したバルブが、高まる水圧に耐えかねてカタカタと揺れている。別に悪いことをしているわけではないのに、彩花は思わず周りを見回してしまう。普段はあまり着なれていない、女の子っぽいワンピースを着ているせいなのか、なんとなくいつもならなんでもないはずのことが妙にやりづらく感じられた。

『工事中 通行止め』

大きな文字が行く手を塞ぐ。交通整理のお兄さんと四角い看板の向こうでは工事の人たちが多勢でアスファルトを剥がし、がりとドリルのようなもので地面を削っている。

彩花の不幸は続く。まるで、町中の何もかもが結託して彩花に意地悪をしているかのようだった。

「んもお、急いでるのにーっ……！！」

思わず漏れた悪態と共に、通行止めの看板を睨み、彩花はきゅっと唇を噛んだ。

看板には迂回路の地図もあるが、どう見ても大きく遠回りを余儀なくされるルートであり、ゴールまでの距離をさらに遠ざけるものだった。

残り時間10分で始まったカウントダウンは残りわずか数十秒。ロスタイムは確定間違いなしだ。……というよりも、ロスタイムのほうが明らかに長いだろう。

（んんう……っ）

看板の前で立ち往生している彩花を、容赦なく尿意が襲う。腰がぐねぐね揺れそうになる。左右の脚がたん、たと足踏みを始め、膝がぎゅっと重なって、爪先がぐりぐりとアスファルトをねじる。

「通行止めでーす。すみません。迂回してくださいー」

未練がましく通行止めの看板前に立っている彩花を促すように、赤いライトブレードを振るう交通整理のお兄さんが言うてくる。

その上でなお通行止めを突破するなんてことは、彩花にできるはずもなかった。赤くなった顔をそそくさと背け、渋々迂回路に入る。

（おしっこしたい……はやくおしっこ、おしっこ、でちゃう……っ）

『おトイレ』ではなく『おしっこ』。

よりもダイレクトに身体の欲求に従う言葉で、どんどん頭の中が塗りつぶされていく。おなかの中だけではなく、頭の中までおしっこでいっぱいになって、彩花の歩みはよちよちと小さな歩幅の、おぼつかないものになっていった。

迂回路は彩花の通ったことの無い道で、さらに少女の不安を加速させた。

「……えっと……っ」

さして広くない道は、進むに連れて最初の方角から違う方向に曲がっていく。目的地からさらに逸れてゆくことに、彩花は徐々に焦り出していた。このままだと全然違う場所に出てしまうと思うのだが、どこまで歩いても元の道に戻る方向に道が見つからない。

「も、もおいしいや、この辺に入ればっ」

とうとう痺れを切らし、彩花は近くにあった狭い路地の中に飛び込んでしまった。ほとんど人が一人通れるかどうかくらいの狭く入り組んだ道を、勘を頼りに進んでゆく。

（た、たぶん……こっちの方に……）

だいたいようぶ、だいたいようぶ、と自分を励ましながら彩花は折れ曲がった路地を歩く。古い住宅街の一角らしい路地は、左右に複雑にうねり、ぐねぐねと曲がり続けていた。

「っ……」

ぴくん、と背筋が震え、彩花の手のひらが再度、ぎゅっとスカートの上から脚の付け根を押さえ込んだ。せめて人目が無いのが幸いだった。人前ではできないような我慢の仕草を繰り返しながら、彩花は精一杯急ぐ。

が……

「え、っと……」

歩けども歩けども先が見えない。まるで迷路のように入り組んで枝分かれした路地は、4、5回曲がったところですっかりどこへ向かっているのか分からなくなってしまっていた。背伸びをして先を見通そうにも、見覚えのある目印は見当たらない。

そして。

彩花はとうとう路地の側にある『この先通り抜けできません』の文字に突き当たる。いつの間にか、完全に道に迷ってしまっていたのだ。

「そ、そんなぁ……っ！！」

（う、嘘、だってさっきの方じゃなくて、こっちなら……んっ、……くう）

普段の彩花がこんなことで道が分からなくなるはずはなかった。

トイレを我慢し続けることに懸命なせいで、物事を考える余裕がなくなっているのだ。今の彩花では二桁の暗算すら普通にできるかもあやしいだろう。

道は行き止まりだが、その一方で彩花のおしっこは行き止まりの指示を無視し、出口を突き抜けようとしている。下腹部のティールポットはぐらぐらと沸騰をはじめ、じんじんといけない予兆を響かせていた。

「あ……っ」

ちりちりとつの尿意は脚の間を通り越して股間の先端まで達し、突如『通行止め』にされた本来の出口を迂回して、いっそお

ヘソあたりから嘔き出せないかと試してでもいるようだ。

ぎゅうっ、と握り締めたスカートの布地の下で、またひくんっ、ひくんっ、と出口が痙攣をはじめ。

「あ、あつ、あ……」

(ど、どうしよう……)

うろたえながら後ろを振り返る彩花。しかし、そこには当然のように、迷いながら歩き続けてきた路地が続いている。

もはや、尿意は限界に達しつつあった。

「ど、どうしよう……ホントに、これじゃあ……っ」

10分のカウントダウンを超過し、ロスタイムに突入した我慢の中、切羽詰った声が、切なく喘ぐ息の隙間からこぼれる。

彩花の視線は、路地の片隅、電柱の根本へ向けられていた。

たまに、飼い犬の散歩をさせている人が、そういうところで犬におしっこをさせているのを見ることがある。ペットにもトイレがあるが、犬は別に外でおしっこをしたって怒られたり恥ずかしがられたりしない。

そして、滅多にないことではあるけれど、彩花は男の子や男の人が、やはり電柱の根本や道端でおしっこをしているのを見たこともあった。

(う……そうよ、男の子なら……べ、べつにそのへんでしちゃうこともあるのに……っ……)

けれど、女の子はそんなことは絶対にできない。

お外の、しかも誰が通るとも分からない道端で、お尻を丸出しにしてしゃがむなんて——絶対に、絶対にありえない。

……ありえない、が。

「で、でもっ。もし本当に、間に合わなくなっちゃって……パンツ汚しちゃうくらいなら……っ」

オモロシと、どっちがいいのかと二者択一を突き詰められれば、その時は……

そうやって『ありえない』を仮定した想像をするうち、彩花のおなかはさらに硬く張り詰め、身体の外へとわずかずつせり出してゆく。

(もし、もしも、だけど。本当にそうなっちゃったら……やっぱり……)

あくまで仮定を貫いたまま、彩花は『その時の場所』を吟味し始める。

(で、できるだけ、見えないトコで……人も来なくて……)

排泄を渴望する心のまま、道脇の排水溝や、曲がり角の手前の小さなくぼみ、カーブミラーの根元、フェンスの脇……あちこちを移り変わる視線の先に、彩花は自分でも知らないうちに『おしっこのできるトコロ』を探し求めてしまっていた。

ふと我に返って自分を叱咤しようとするが、

(だ、だから、そうじゃなくって、そもそもお外でおしっこなんか……だめ、なんだからっ……！！)

「んっ……」

そう強がる心とは裏腹にまた“ぴくん”と反応しそうになったおなかを押さえ、彩花はきゅっとおしりの孔に力を込めて、小さなおなかのなかいっぱい膨らんだ水風船を、身体の内側に抱えなおす。

しかし、一度そう考えてしまった頭からは、そう簡単におしっこ誘惑は振り払えない。たとえここが往來の道端だとしても、そこにしゃがみ込んで我慢に我慢を重ねた熱いほとばしりを思う存分噴出させるその心地よさの想像は、がっちりと彩花の心をつかんで離さなかった。

（で、でも、だめだけど、ほ、ホントはだめだけど……っ）

ちら、と道の隅に都合よく引込んだスペースを覗き込んだまま、彩花の脚は我知らず、ふらふらとそこに近づいてしまう。とく、とく、と心臓が高鳴り、その鼓動に連動して下腹部に響く痺れも高まっていく。

我慢の大半は心によるものだ。諦めてしまえば、そこで限界がやってくる。

ぎゅっと服の上から下腹部を押さえていた手のひらがわずかに下に動き、スカートの前をぎゅっと掴む。そのまま裾を上につまみ上げれば、あとは下着をずらすだけで、おしっこの準備は整うのだ。

だめ、だめと思いつつも彩花の視線はきよきよと周りを見回して、誰も来ないことを丹念に確認する。

（こ、ここで……っ）

ごく、と小さな喉が鳴る。自転車をなくしたせいで絶望的に遠い家までの道のりと、ロスタイムとなったカウントダウン。『オモラシ』と『トイレ以外でのおしっこ』を左右の秤に乗せた天秤が、がくんと右側に傾いてゆく。

どき、どき、と口から飛び出しそうな心臓の鼓動を感じながら、彩花はプールバッグを近くに放り出し、壁に背を向けた。ちょうど電信柱にお尻を向ける格好で、片手でスカートを掴みたくしあげて、もう一方の手をスカートの中に入れ、股間を覆う股布をずらし、その場に深く腰を落としてゆく。

（だ、誰も見てない……うちに……っ）

初体験となる路上でのおしっこを始める用意は整った。最期にもう一回、念入りに周囲を確認し、彩花は硬く締め付けていた出口の力を抜く。

「んっ……」

我慢しすぎていたためか、ごく、とおしっこの出口に鈍い痛みが走った。同時にじわあ、と脚の付け根に熱を感じ、それが大きく膨らむ。

（あ、……でるっ……）

とうとう排泄本能に屈してしまった自分を、彩花はどこか他人事のように感じていた。

深く下ろした腰、太腿の付け根から勢いよく弾けた水流は、遮るものの無い足元善方の空間へと飛び出し、小さな水音を響かせる。

「っあ……」

ぎゅっと目を閉じ、彩花は不安を押し殺しながら、オシッコを済ませて立ち去るまでの数分間、せめて誰も来ませんようにと強く強く念じていた。

ぶしゅ、じゅっ、じゅじゅうううう……

熱い先走りに続いてすぐに大きな水音へと変化した水流は、左右に大きくなつちながらアスファルトの地面を直撃した。土の地面なら激しくえぐって孔をあければかりの勢いで、アスファルトの上にぶつかった強烈なおしっこが周囲に飛沫を散らせてゆく。

夏の熱気にも負けないくらいに熱い水流は、ほわほわと湯気を立てそうに狭い路地裏に拡がり、たちまち彩花のおしっこの匂いが満ちてゆく。

(……っ、は、はやく終わって……っ)

どっどっど、と全力疾走した時のように鼓動がフル回転し、顔じゅうにかあつと血がのぼってくる。今、自分が何をしているのかははっきりと自覚でき、彩花は頭から火を吹き出しそうな猛烈な恥ずかしさを覚えていた。

トイレではない場所で、おしっこをしてはいけない場所でおしっこをしていることへの罪悪感と羞恥心。“きゅうん”と反応を始めてしまう脚の付け根にヘンな力が入り、じゅぶ、じゅうじゅう、と間断を付けて地面におしっこが跳ね回る。

「はああ……っ」

長時間の我慢からの解放に、思わず甘い吐息もこぼれた。しゃがんだ脚がぶるぶると震え、緊張を強いられていた背筋が弛緩する。身体の中から熱が毒と一緒に流れ出して行くような心地よさは、想像を絶するほどの解放感を伴う。

アスファルトの上で小さく泡を立てながら、薄く黄色に色づいたおしっこはあつという間に大きく広がり、さらに路地の隅から低いほうへと流れ出してゆく。

(…ま、まだ……でる……っ、とまんない……っ、やだあ……っ！！)

初体験の路上排泄は、ちくちくと繊細な少女の羞恥心を刺激する。どくどくと熱い頭が沸騰しそうになり、心ばかりが早く早くと焦る。

しかし、少しでも長くおしっこを我慢しようとしていた身体に、今度は少しでも早くおしっこを出せと言っているのだから、うまくいなのは当たり前だ。

しゃがみ始めてから1分近くが過ぎ、それでもなお彩花のおしっこは終わらなかった。ますます勢いを増しながら、薄黄色の水流は泡立った水たまりの上に激しく注がれて、じょぼじょぼと恥ずかしい音を響かせる。地面に水を吸い込まないアスファルトの上には水たまりが出来上がり、さらに路地のまんなかに勢力を広げた。

「あう……っ」

真っ赤になった顔を深く伏せて、彩花はくちびるをきゅっと噛む。

もう、どう言い訳しても取り返しの付かないことをしてしまったのが、改めて理解できた。この上誰かにこの状況を見られてしまったら、それこそ恥ずかしさで死んでしまうかもしれない。

道の隅っこで始めたはずのおしっこは、いつしか狭い路地裏をすっかり占領し、そこを彩花のおしっこのための場所に変えている。オトナでもまたぐのも難しいような大きな水たまりが路地を占領し、ぱちゃぱちゃと水音を響かせて水面を揺らす。

彩花の出したおしっこの水面には、さんさんと輝く夏の日差しが、ゆらゆらと揺れていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: エレベーターの話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 09/04/2009 18:10:21

BODY:

楽しかった夏休みもあっという間に過ぎた。陽射しはまだまだ熱いものの、ヒグラシの鳴き声が増えはじめた9月のある日。デパートの買出しを終えたユミは、大きなエコバッグを肩に下げてマンションへの帰途についていた。

「ふー、重かったあ。ちょっと買いすぎちゃったかもなあ……」

デパート指定の麻製エコバッグの中には紙コップにお菓子、ジュースのペットボトルとぎっしりと中身が詰まっている。どれも皆、明日の誕生日パーティの準備のため、奔走して買い集めたものだ。

クラスの友人が多勢やってくるからと張り切ったものの、ずいぶん色々買い込んでしまったかもしれない。だがそれも、楽しいパーティの事を考えれば些細なものだ。

「ふふ、楽しみだなっ」

これから部屋の片付けと飾りつけをしなければいけない。いつもは共働きの両親をひとりぼんやりと待つ退屈な時間も、いまはと

ても待ち遠しい。思わず足取りも軽くなるというものだ。

「とうちゃーくっ」

とん、と自動ドアの前に立つユミを、ロビーいっぱいの冷たい空気が出迎える。暑がりの管理人さんは今日も冷房を前回にしているらしい。

（はー、涼しい……っ）

たちまち全身から汗が引いてゆく。少し汗ばんだひたいをハンカチで拭い、ユミは大きく深呼吸。そのままロビーをつきつてエレベーターホールに向かう。

ユミの住む部屋はマンションの9階。階段で上り下りするには少々大変なため、いつもこのエレベーターを利用していた。

足元にバッグを下ろし、ユミはエレベーターが降りてくるのを待った。よく冷えたホールで、階数表示のランプはちかちかと点滅しながら右から左に数を減じてゆく。

（……んっ）

ぶるっ、とユミの背中が小さく震えた。

ホールにはちょうど冷風の吹き出し口があり、エレベーターを待っているとそれに煽られる格好になるのだ。築15年のマンションの冷房はあまり微調整が効かないため、涼しいというよりは少し寒いくらいの風で、長時間当たっていれば体調を崩してしまいかねない。

暑い中を歩いてきた少女の身体には、10度以上の温度差はかなりこたえるものだった。吹き付ける冷風に汗が一斉に冷え、同時にそれは『ある感覚』をますます強くユミにもたらしていた。

「……………」

他に利用者がいるのか、エレベーターは途中の階に停まっては動くのを繰り返していた。7階に続いて5階で停まった後、さらに4階でも停止する階数表示をじれったく思いながら、ユミはサンダルをきゅっきゅと左右に踏み鳴らし、肩からずり落ちそうになるエコバッグの紐を抱え直す。

（もぉ、遅いなぁ……）

この夏は節電が叫ばれ、マンションでは2つあるエレベーターのひとつが封鎖されていた。急いでいるなら階段を使うほうが早いのだが、暑い中を階段をひいひい上り下りしたくは皆同じようで、人気が集まるのも仕方ないことかもしれない。

だが、ユミはそれ以上に焦る理由があった。

「んっ……」

再度、ユミの脚がそわそわと寄せ合わされる。落ち着き無く揺すられる腰は小さく前後に突き出され、手のひらの片方がスカートの裾を手持ち無沙汰にきゅっと握り締める。

（はやく……トイレ……っ）

高まる尿意は、ユミの予想よりも早く危険水域に達しようとしていた。

小刻みにかかとを踏み鳴らし、体重を左右の脚に交互に預け、足を閉じるように交差指させる。見るものが見ればはっきりと分かる『我慢』の仕草。ロビーに人目がないのをいいことに、ユミは隠し切れなくなった尿意を紛らわせようと身体をもじつかせる。

（家まで我慢できるとは思ったけど、けっこうギリギリだったかも……）

下腹部にきゅんと響く感覚は、もうかなり切羽詰っている証拠だ。会計を終えた後、途中でトイレに寄らなかったのは失敗だったかもしれない。膝を擦り合わせながらユミはそつと後悔する。

とは言え、それもあとわずかの我慢だ。

ちん、とベルの音を鳴らし、ようやくエレベーターが到着する。ユミは慌ててエコバッグを抱え、姿勢を正した。

「こんにちわ」

「ああ。こんにちはー」

エレベーターには数名の人が乗っており、ユミは小さくお辞儀をして挨拶をし、彼らが全員降りるのを待ってからエレベーターに乗り込む。

幸いにして、乗り込んだのはユミだけだった。9階のボタンを押し、ユミは閉じるドアの中で奥側の壁に寄りかかる。

「はあ……っ」

ぶうん、と鈍い音を響かせゆっくりと動き始めた小さな個室の中で、ユミは安堵と共に小さく息を吐いた。バッグを床に下ろして空いた手が、知らずきゅうっ、とスカートの前を押さえる。それに反応してちりっ、と敏感に尿意を訴える下腹部は、すでにはっきりとわかるほどに硬く張り詰めていた。

「ふー……あー、やっぱり、途中でトイレ行っておけばよかったかもっ……」

思わずそう口に出してしまうほど、ユミの尿意は切迫なものになりつつあった。

狭いエレベーターの箱内は、誰にも見られないちいさな密室だ。本当の意味で他人の視線を気にせずともよくなったユミは、はっきりと腰を揺すり始めてしまう。

一度、気が緩んでしまうと、ちいさな身体の中に押し込められた恥ずかしい液体はたちまちユミの意識を占領してしまった。

（あ、あっ……）

きゅん、と高まる排泄欲求に下腹部が切なく疼く。ちょっとだけのつもりでスカートの前を握り締めた手のひらは、そこから離れることができないまま、ぎゅ、ぎゅっ、と服越しに小さな股間を握りしめる。

「んう……っ」

さらに加えて、エレベーターの上昇とともに、重力がぱんぱんに膨らんだ膀胱を刺激し、たぶんとぶんと中身を揺する。もはやどこにも行き場をなくすくらいに張り詰めたオシッコの容れ物は、ただひとつの出口に向かって中身を集中させてゆくようだった。

ずしりと重みを増した下腹部に危険を感じ取り、ユミはたまたま両手を使って脚の付け根をぎゅうっ、と押さえつけた。体重は右足と左足を交互に行き来し、上半身まで伴ってふらふらと大きく揺れ出してしまう。

（あ、あっ、あっ……はやく、はやくっ……早くトイレ……っ）

原始的な排泄衝動が少女を急かす。重ね当てた手のひらをねじるようにして、持ち上げるように股間を握り締めながら、ユミはその場でくねくねと身をよじり、恥ずかしい格好で我慢のダンスをはじめてしまう。

両手を間に挟み、太腿のを擦り合わせながら、ユミはじっとエレベーターの階数表示を見つめた。4を超えて5を表示し、6に変わるその数を、トイレに到着するまでのカウントダウンのように心に刻む。

（……あと4……3……2……）

しかし。

そのまま減り続け、1、0と続くはずだったカウントダウンは、思いもよらぬ事態によって遮られた。

「……え…？」

まったくの前触れもなく、唐突にそれは始まった。

がりがり、という激しい異音が響き、エレベーターが左右に振動を始める。天井の照明が点滅し、足元がぎしぎしと揺れ、ユミは

反射的にエレベーターの壁にしがみつこうとする。

それとほとんど同時に――

がこ、んッ！！

「きゃあっ！？」

がくと視界が揺れ、激しい震動が鋼鉄の箱にさらに不快な軋みを響かせる。

一瞬の後に照明が激しく点滅し、狭い個室の中をモノクロに瞬かせる。掴まるもののない壁から手を滑らせ、反射的に目を閉じ手足を縮こまらせてしまったユミは、そのまま床上に投げ出されるように転んでしまう。

そうして、ぎざい、と最後に鈍い音を響かせ、エレベーターはがくと上昇を停止した。

「……………、痛ったあ…………」

痛む腰と膝をこすりながら、ユミはゆっくりと身体を起こした。

恐る恐る目を開けてみれば、点滅していた照明が数度明滅してからゆっくりと回復し、ちいさな密室はぎし、ぎし…………という不気味な軋みをあげていた。

固唾を呑むユミの警戒の中、エレベーターは数度小さく上下してから停止した。

ほどなくあたりに静寂が返ってくる。

「…………な、なに…？」

ユミの問いに、答えはなかった。

どこかで響く機械の低い作動音だけを残し、エレベーターの中は元の状態に戻っていた。

呆然としながらも起きあがろうとしたユミは、身動きと共にぎしり、と異音を響かせる鋼鉄の箱に思わず身を竦めてしまう。

「…………きゃっ…………」

わずかに揺れる足元は、どこか定まらないようにふらふらと傾いているようにも感じられる。ずり落ちて床に倒れたエコバッグからお菓子の袋と一緒にみ出したペットボトルの中身も小さく揺れ動き、波を立てている。

「…え…………つと…？」

階数を示すランプは、6と7の両方を赤く灯らせて止まっていた。さっきまで身体を包み込んでいた緩やかな上昇感が失われていることに気づき、ユミはようやくエレベーターが動いていないことに思い至る。

事態を把握できず、ユミは恐る恐るエレベーターのパネルボタンに触れた。しかし、階数のボタンも、開閉のボタンもいくら押しても反応せず、ランプは消えもしなければ点きもしない。

ただ、普段はありえない二つのランプを赤々と輝かせたまま、ボタンはかちゃかちゃと虚しい音を立てるのみだった。

「こ、これ、…………ひょっとして、動かない、の…………？」

乾いた言葉が、少女の喉から絞り出される。

ぞわ、とうなじが嫌な予感に逆立ち、背中を冷たいものが走る。不安に竦む手が、きゅっと握り締められ、太腿の上に押し当てられる。

切羽詰った尿意を抱えたまま、自分が狭い鋼鉄の箱の中に宙吊りに閉じ込められ、恐るべき緊急事態を迎えたことをユミが理解するには、もうしばらくの時間が必要だった。

……何時間が過ぎたのだろう。

「う……っ、くっ……」

あるいは、まだほんの数分しか経っていないのかもしれない。しかし、たったひとり狭い個室の中に取り残され、外と連絡を取るあらゆる手段を封じられたユミにはわずかな時間すらも永遠のように感じられた。

どうしよう。どうしよう。どうすればいいだろう。

想定していなかった事態に混乱ばかりが募り、胸が不安に押し潰されそうになる。ユミが懸命にドアを叩き、何度も声をあげて助けを求めてもなお、まったくそれに答える声はなかった。

パネルの上には緊急連絡用のインターホンが用意されていたが、すっかり混乱してしまったユミはそれを使うことに思い至ってもいない。

「んう……ふうっ……」

なにしろ今のユミにそんなことを考えている余裕はこれっぽっちもなかった。エレベーターの故障で閉じ込められて脱出不可能——そんな危機的状況よりも、遥かに優先すべき逼迫した超緊急事態が、少女の身体には起きているのだった。

(も……漏れちゃう……っ！！)

押さえようとしても押さえ込めない足踏みがだんだんと床を踏み鳴らす。ぐいぐいと腰をよじり膝をクロスさせてなお、まるで収まる気配のない尿意が、すさまじい勢いでユミに襲いかかってきているのだった。

エレベーターに乗る前から切迫していた尿意は、エレベーターが停止してからも容赦なく高まり続け、もはや限界に達しつつある。こぼこぼと音をたてんばかりに次々と膀胱に注ぎ込まれるオシッコのせいで、少女のダムは危険水位のはるか上にまで達している。このままでは必死に制止の命令を出し続けているユミを無視して、いまにも水門を解放し放水をはじめてしまいそうだった。

じんと疼く股間の先端、薄い布地には、何度も染み出したオシッコがすでに熱い雫が滲みはじめていた。股間を覆う布地は誤魔化しようが無いくらいにしっかりと湿り、身動きのたびにじんわりと足の付け根に張り付いてくる。

ぷくりぷくりと出口にイケナイ感覚が広がるたび、股布にじゅうと音を立てる水流によって、濡れた暖かな領域は、おしりの方にまで拡がり出していた。

「う、動いて……動いてよお……っ」

ユミはただひとつの希望に縋り、震える指先でボタンを鳴らす。

しかし、エレベーターは停止したままびくりとも動く気配を見せなかった。沈黙を守る鋼鉄の箱の中、ユミは息を荒げながら何度も何度も手のひらでボタンを叩く。

「お、おねがいっ……早く、う……しないとっ、で、出ちゃうっ……お、オモラシしちゃう……からぁ……、トイレ、お、トイレ、れエ……っトイレさせてよお……！！」

もはや見ようによっては完全にオモラシの状況に突入しながらも、完全な崩壊の寸前、ギリギリのところでユミは踏みとどまっていた。それはひとえに、多くの人が使うエレベーターという場所で、万が一にもオシッコをもらしてしまうわけにはいかない、という意識が

あったからに他ならなかった。

「だっ誰か、誰でもいいから開けてよお……だ、出して、ここから出してっ……で、出ちゃう、出してくれないと、もうホントに出ちゃう、漏れちゃうっ、オシッコ出ちゃうからあ……っ！！」

溢れそうなオシッコを塞き止めようときつく寄せられた膝がきゅきゅと床を踏み鳴らす。しかしどれだけお願い願っても、尿意はおさまる気配を見せなかった。

閉じ込められたと思えば思うほど、激しい尿意が込み上げて来て、ユミは息を詰めながらぎゅうぎゅうと身体をよじる。

最悪の事態を回避するため、下着をおろし、スカートをたくし上げてしゃがみ込んでしまいたい衝動を、必死になって押さえ込む。そんなことをせずとも今にも床を直撃しそうな猛烈な尿意が、勝手にしゅるしゅると漏れ出してしまいそうだった。

加えて、クリーム色の壁に四角い壁のエレベーターはユミの渴望するトイレの個室にそっくりで、それがますますユミを苦しめる。「おね、がい……、お、トイレ……えっ！！ でちゃう、でちゃうのお……っ」

無論、唯一にして絶対の違いとして、エレベーターの床には便器など備え付けられていない。限りなくトイレに近い場所の中で、決してオシッコすることを許されないという悪夢によって。気の遠くなるような排泄衝動がユミを蹂躪する。

狭いエレベーターのなかでぐるぐると歩き回ったかと思うと、今度はぴたりと静止し、ぎゅぎゅと脚を交差させては爪先をぐりぐりと絨毯に押しつける。

他人の視線がないがせめてもの救いだった。こんなに必死になってオモラシを堪えているのを見られたら、恥ずかしくて死んでしまうに違いない。

だが、こうしている間にも、お昼に飲んだジュースとお茶が、ユミの身体の中でオシッコに変わっているのだった。ユミの膀胱はすでに満杯で、もうとっくに縁ギリギリまで中身が入っているのに、そこにさらに蛇口をひねって中身を注ぎ続けているようなものだった。入りきらない中身は、当然そのまま外にあふれ出してしまう。

じゅ…じゅじゅつ、しゅるるっ……

下腹部の蠕動と膀胱の収縮に耐え切れず、わずかにこぼれたオシッコの先走りが下着を汚し、ユミのキュロットにまで小さく染みをつくる。

「イヤあ……っ！！！」

（やだッ、やだあ…っ！！ オシッコ、おトイレ行きたいっ、おねがایی、トイレ、オシッコさせてえ……）

いまや我慢のためのダンスも思うようにできず、ユミはぎゅと膝をくっつけたままおしりを突き出し、アヒルのようなへっぴり腰になって壁に寄り掛かるばかりだった。

「動いて、動いてよお…！！」

ついに現実のものとなり始めた『オモラシ』の恐怖に、力の入らない手でパネルのボタンをめちゃくちゃに叩きながら、ユミは一心に祈った。

すぐにここから出られるように。……あるいは、今すぐこの場にトイレがやってきてくれるように。いかに荒唐無稽なお祈りでも、自分を襲う危機から逃れるための方法を、ユミは他に思い付けなかったのだ。

（あ、明日っ、誕生日なんだからっ……もうひとつおねえさんになるんだからっ……！！ い、いくら閉じ込められたからって、こ、こんなところでオモラシなんか……だめっ、絶対ダメっ……我慢、我慢しなきゃ……み、みんな使ってる、エレベーターの中なんだから

あつ……！！)

そんな場所でオモラシなんて——到底許されることではないのだ。

しかし、少女の身体はもはや限界を超えて排泄を訴えている。なんでもいいからオシッコが、オシッコがしたい。どこでもいいから、なんでもいいからオシッコのできる場所。狭いエレベーターの中にあるはずもないものを、ユミの視線がさまよい探し回る。

「あ……っ」

オシッコがしたいのにトイレに行けない、絶望的な二律背反の中——

ふと、ユミの目に床にほうりだされていたままのエコバッグが入る。同時にある解決手段が、稲妻のようにユミの脳裏を閃いた。

いや、あるいはそれこそなにか悪いモノの誘惑だったのかもしれない。

(あ、あった……っ！！)

“なんでもいいから、オシッコできる場所”。

ユミが目をつけたのは、床に放り投げられたままのエコバッグの中から飛び出したカラフルな紙コップ。ジュースを注ぐために用意したその容器は、ぴったり数も多く、ユミの渴望する条件にぴったり当てはまっていた。

瞬間、ぞくん！ とユミの下腹部が歓喜をあげる。

これでオシッコできる！！ 思わず顔を輝かせかけたユミだが、

「っ、ば、馬鹿っ！！」

すぐに我に返り、ユミは慌ててぐんぐんと首を振る。

——あの紙コップに、オシッコをする。

苦し紛れの果てに思いついたとは言え、それは少女として許されるはずのない、あまりにもはしたなくも恥ずかしい行為だ。

(——な、ナニ考えてるの、わたしってばっ！？ ……あ、あんなトコロに、なんてダメに決まってるじゃないっ！！ だ、だってあれ、明日……みんなで、ジュース飲むのに使うんだよ……！？)

そんなものにオシッコをしようだなんて、たとえ一瞬でも考え付いた自分が、あまりにも恥ずかしかった。みんながジュースを飲むのと同じものに、あろうことか、オシッコをしてしまおうだなんて！！

いくら我慢できないからといって、そんなのは絶対にありえない行為だった。

だが——

(あ、ああ、ダメ、ダメなの、違うの、今のはだめ……っ！！ だめなんだったらあ……)

とっさに否定しても、もうユミはそれを頭から打ち払うことはできない。事実、その想像のもたらした誘惑にユミの身体はたちまち反応をしてしまっていた。

はしたなくもみっともない、女の子として失格同然の行為であっても、ただ——たとえ紙コップだろうとなんだだろうと、オシッコができる、という希望ががっちり心と手を掴んで離さない。

絶望的だったトイレ——“オシッコのできる場所”の可能性に、ユミの心は瞬く間に虜にされてしまう。

(あ、あ、だめ、違うの、あれは違うのに……っ！！ 紙コップでなんて絶対ダメ！！ し、したくなっちゃダメなのっ！！ が、がまん、我慢して、と、トイレまで……ちゃんとトイレで、するんだからあつ……！！)

しかしそう念じるユミの理性とは裏腹に、我慢の利かないユミの身体のほうはもう、紙コップでオシッコすることを冷静に検討し

始めていた。なにしろあれなら床も汚さない、オモラシもせずに済む。どのみちこのまま我慢を続けるのは無理だと、ユミ自身も本当は理解している。

1パック30個入りの、カラフルな紙コップ。そのサイズはおおよそ200ml。

その一つでも使うことができれば、ユミのオシッコはだいぶ楽になるに違いないのだ。もはやユミの目には、紙コップが半ば『オシッコをするための入れ物』に映ってしまっていた。

(あああううううっ……)

それでも揺れ動かされる心を叱咤して、ユミは欲望に屈しそうになる身体を、なんとか思いとどまらせようとしていた。

「だ、だめ……だめ、絶対ダメ……っ」

パーティ用に買いそろえた紙コップは、遊びに来てくれるみんなをもてなすためのもの。仮にもそのために用意した大事なものを、自分のオシッコでいっぱいにしてしまうという、とんでもない想像にユミの羞恥心は激しく刺激される。

喉を潤すための飲み物を入れるべきところにオシッコするなんて、普段のユミには絶対に考え付かないことだ。

しかし、ワイヤーだけで中空に固定されたエレベーター、わずか1.5m四方の狭い密室には、勿論トイレなどどこにもない。当然床には小さくぼみすらなく、少しでも水分がこぼれれば隠しようのない事は明かだった。

このまま我慢できなければ、オモラシは避けられない。百歩譲って、下着を下ろしてしゃがみ込んだとしても、どれだけ隅っこで済ませようとしても狭いエレベーターのこと、たちまち床一面にオシッコが流れ、隠しようもないのは明白だった。

エレベーターが動きだし、ユミが助け出されたとき、盛大にオシッコがまき散らされた床や、ごまかしように無いほどに匂いを籠もらせた惨状を晒すのは、繊細な年頃の少女にとって死んでしまいたくなるほどの恥辱に違いない。

マンションの皆が利用するエレベーターで、オシッコを漏らしてしまうなんてユミには耐えきれない想像だった。

「んあう……くううっ……」

そしてまた、堪えきれなかった尿意の波が、下腹部のダムを溢れて外にこぼれ出す。下着にじゅわあっと広がる熱い感触が、ユミを戦慄させた。

わずかに雫を滲ませたことでも、恐ろしいほどの解放感が下腹部を貫く。じんじんと疼く排泄孔は甘く痺れ、なおじゅっ、じゅう、と熱い雫を吹き出し下着にたっぷりと染みさせた。

「あ、あっ、あ、あっあ……」

ぞわ、ぞわ、と膀胱が収縮し、排泄孔がヒクヒクと緩む。必死に締め付ける括約筋は長時間の酷使に磨耗して擦り切れ、もはや完全に閉じきることも不可能だった。断続的にじゅわ、じゅわと下着の奥に水音が響き、身動きに応じてくちゅくちゅと音を立て濡ればそる股布が、堪えきれない熱い雫を染み出させる。

揺れ続けた天秤が大きく傾いた。

「だめ、……っ、で、でちゃう……！！！」

排泄への渴望に焦がれ羞恥を押し殺しながら、これ以上のオモラシだけは避けたい一心で、ユミはついに決断を下した。

がくがくと膝を震わせながら、少女はエコバックからこぼれ出た紙コップの包装をつかみ、もどかしくラップを破りながらエレベータの隅にすり足で移動する。

片手で下着の股間をぎゅっと引っ張り上げ、突きだしたお尻を左右にクネらせ、オシッコで濡れた震える手で紙コップをひとつ掴んだ。

(っ、……)

オシッコをするために、飲み物を入れるための紙容器を用意する——少女の倫理に照らしておよそあり得ない『いけないこと』をしている自分自身に、気の遠くなるほどの恥ずかしさがユミを襲う。

紙コップを使ってオシッコをするなんて、健康診断の尿検査の時くらいしか経験がない。しかしあれにしても、もともと『そのため』に用意したコップを使っている分、まだ気が楽だった。

だが、これはそんなものではない。

「あ、あっあつ、だめ、まだ待って、まだダメえ！！」

きゅと疼く下腹部に急き立てられながら、ユミは湿って股間に貼りついた下着を膝までずり下ろして、停止したエレベーターの隅にしゃがみ込む。

むき出しになった股間に、そおと紙コップをあてがって。

(う、や、ヤダあ……っ、やだあ！！)

女の子としてありえない行為に、猛烈な後悔と羞恥心がユミの心を切り刻む。オシッコの入れ物が見つかったとしても、エレベーターでオシッコをする、その行為そのものは変わらないのだ。ちくちくと出口を刺激する感覚にユミは泣き出しそうになりながら、もう一度だけエレベーターのドアを睨む。

「あうっ……だ、ダメ……で、ちゃうっ……」

もはや、何の猶予もない。

怒涛のような奔流は、出口のすぐ上まで迫っていた。

(ご、ごめんなさいっ……ごめんなさい……！！)

ぎゅっと目を閉じて、涙を滲ませながら、ユミは誰とも知らない相手に対して精一杯の謝罪を繰り返した。あるいはそれは、このようにはしたくない真似に及んでしまった自分自身への懺悔だったのかもしれない。

(すいません、もう駄目なんです、我慢できないんですっ、お、オモラシ、しちゃうんですっ……ごめんなさいっ、ごめんなさいい……っ)

紙コップの縁が、かるく出口に触れるのと、下着の支えを失った水門がとうとう決壊したのはほとんど同時だった。

ぷしゅるっ！！ しゅうう、じゅじゅっ、じょじょおっ！！

「……んんうっ！！」

強烈な感覚が内腿の付け根を走り抜け、背筋へと這いあがってゆく。

強くほとばしった薄い琥珀色の液体が、激しい水音を立てながら、紙コップのなかに受け止められる。薄い底を直撃し、容器の中に強く飛沫を散らしたオシッコはじゅうじゅうと音を立てながら小さな入れ物の中に注がれていった。

狭いエレベーターの中に響くには十分すぎるほどの、恥辱の排泄音を伴い、わずかに白く泡立った液面を揺らして、紙コップ内の水位がみるみるうちに上昇してゆく。我慢に我慢を重ね、ユミが溜めつづけていた羞恥の液体は、たとえその一部だけとはいえ恐ろしいほどの量だった。

(あ……はあ……っ♪)

ずっと堪えていたものを解き放った爽快感に、ユミは腰のあたりがふわりと軽くなるのを感じていた。その安堵感にいつか、ここがトイレではないことすらも忘れてしまうほどに。

じよぼぼっ、じよおお……じよぼっ、じよじよじゅうっ

それゆえの心の緩みか。あるいはもともと無理な相談だったのか。

容量わずか200mlしかない紙コップは、たちまちのうちに一杯になりかけていた。ユミの膀胱の代わりをさせられた紙コップの中、みるみる水面は縁まで近づき、液面の泡が大きく紙コップの上に盛り上がる。

「あ、いやっ……だ、だめっ！！」

あっという間に紙コップを一杯にしてしまったことに、ユミは耳まで赤く染まる。同時に、『もう溢れちゃう』という事実はユミを狼狽させた。

先天的な、少女としての体のつくりによって、女の子の身体というものは一度出し始めてしまったオシッコを中断することはとても難しくなっている。

慌ててオシッコを止めようとするユミだが、一度緩んだ括約筋は意志とは無関係に開きっぱなしになり、思うように出口を締め付けることができなかった。

「はうんん……っ！！」

押さえるどころか、いきなり大きく吹きだしそうになったオシッコを、ユミはかろうじてぎりぎりの所で押しとどめる。それでも細く開いた排泄孔から、間断的にぶしゅっ、ぶじゅっ、とオシッコが勢い良くほとばしる。

ほぼ一杯になった紙コップの縁からあふれた泡が、ユミの手を汚し、さらには股間にまでぴちゃっと触れた。

「ダメっ、もうこれ以上っ……出しちゃだめ！！ こぼれちゃうっ、溢れちゃうっ……っ…が、我慢、我慢しないとダメっ……！！）」

懸命に出口を絞めつけながら、ほの温かいオシッコが溢れそうな紙コップを、ユミはそっと地面に置いた。それでも出口は閉まりきらず、オシッコはちよろちよろと床にこぼれる。おまけに手が震え、なみなみとオシッコを注がれた紙コップから一部が床にこぼれてしまう。

「あ、あっ、ああ、あっ」

（だ、だめ、出ないで、出ちゃダメっ、あ、あとはトイレまで、が、がまんしなきゃ……っ！！）

しかも少なくとも紙コップに一杯、オシッコをしたはずなのに、尿意はおさまるどころか激しくなる一方だった。

股間の先端からぼたぼたとだらしなく雫をたらしながら、ユミはふたつ目の紙コップを取ろうと手を伸ばす。下腹部はまるで火に掛けられたようにぐらぐらと沸き立ち、ごぼりごぼりと激しく中身を暴れさせている。

足元の紙コップに出した量など問題にならないくらいのオシッコが、なおユミのおなかの中に詰まっているのだ。一度収縮しかけ、しかも出口を覚えたオシッコが、そのままおとなしくしているわけがない。始まったが最後、女の子のオシッコは最後まで止まるわけが無い。

紙コップ一杯だけ――

限界に限界を重ねて我慢した女の子のオシッコが、そんな中途半端で終わるわけがなかったのだ。

「だ、だめええ……っ！！！！」

しゅる、ちゅろろっ……じゅじゅっ！！ じよじよじよおお！！

一度ちよろちよろと弱まりかけたかに見えたオシッコが、再び堰を切ったようにあふれ出す。

間一髪、ユミが思い切り掴んだふたつ目の紙コップは、少しひしゃげたまま脚の付け根に押し付けられ、再開したユミのオシッコを受け止めていた。

『ふたつめ』の薄い紙コップ越しにはっきりとわかるオシッコの温かさが、ユミの手のひらの上でどんどん重くなってゆく。

小さな入れ物の中、勢いのいい液体がに注ぎ込まれ、渦を巻いて水面にぶつかり大きく音を立てる。いよいよ本格的に水門が開いている証拠だった。ユミのオシッコの勢いは中断を挟んでなお増している。

(やあつ……と、止まって……も、もうダメ……ま、またあふれちゃうっ……)

予想もしていなかった事態にユミは悲鳴を上げかけた。まだまだ全然オシッコは終わりそうもないというのに、二杯目の紙コップまで一杯になりかけているのだ。

じんじんと広がる甘い痺れが股間の先端を誘惑し、女の子の部分をかじあげようと暴れ回る。女の子の場所から吹き出す水流は、だらしくしゅる、しゅるる、と漏れ出してもう全く余裕のない紙コップに注がれてゆく。

(こ、こんなに一杯、したのにつ……ま、まだ出るのっ……！？)

いくら我慢していたとは言っても、実際にその量を目の当たりにすることはユミにとって衝撃だった。紙コップの八分目どころか九分目半以上を満たす、薄い琥珀色の液体。これが今なおユミを責め続ける恥辱の液体の一部である。

「そ、そんな、こんなにオシッコしない、わたし……、こんなに我慢してないよお……っ！！」

あまりにも大量のオシッコを出し続ける、恥ずかしい自分の身体。排泄行為にことさらに羞恥を覚える、思春期特有の少女の心理で、目の前の現実を認めきれず、ユミは悲鳴を絞り出す。

だが、いくら否定したくともこれもユミ自身の身体が長い時間を掛けて精製したものなのだ。小さく薄い紙製の入れ物は、すでに二つ分、その縁のぎりぎりまでユミの恥ずかしい液体を受け止めている。まさにいま、彼女の体内で起きているのと同じ状況だった。

「あ、あ、やだ、もう出ないでっ、出ないでえ……っ」

たくさんオシッコをしてしまう恥ずかしい女の子という意識のまま、なお強い尿意を感じているにも関わらず、ユミは羞恥に耐えかねて思わずそれを否定しようと腰をよじる。

が、むき出しの股間が押さえつけた紙コップの上で前後に揺すられ、ちゃぽっ、とオシッコが紙コップの縁を超えて跳ねる。痙攣のように下腹部を震え出し、締め付けていたはずの女の子の部分から、少女の意志に反して液体がほとばしった。

ぷしゅっ！！……ぷしゅうっ……！！

「ああ……っ……だめえ……っ……んああっ……！」

無理に絞めつけようと身体をねじっていたせいで、オシッコの飛沫はまっすぐ飛ばずに、紙コップを外れてぷしゅっ、ぽたぽたと地面に飛び散ってゆく。さらに被害の拡大した床は、すでに悲惨なくらいにユミのオシッコまみれだ。

「だ、だめえ……っ」

膝の内側が震え、女の子の欲求になお屈しそうにぴくぴくと引き攣る。太腿の内側にきつく力が籠められ、痙攣するように蠢いた。

「あ……っ」

掠れた声と共に、ユミの目の前が一瞬、霧が立ち込めたように真っ白に染まる。

二つ目の紙コップも放り出し、少女はとうとう三つ目の紙コップを引っ張りだして股間に押し当てていた。

「で……っ……でちゃう……っ……」

既に猛烈な尿意の前にボロボロになったユミは、突き上げる尿意の衝動に尽き動かされるままにはしたくない言葉を繰り返してしまふ。

エレベーターの隅から、新しい入れ物を求めてどんどん真ん中へと移動し、おさまりきらなかったオシッコをぼたぼたと床にこぼしながら、しゃがみ込んでお尻を突き出し、股間には恥ずかしい液体を受け止める紙コップを押し当てて。

ユミの『紙コップ』へのオシッコはなおも激しく続いた。

しゅるっ、しゅしゅしゅっ、じゅっ、じゅううううっ……！！

いまだ勢いを減じないまま、三つ目の紙コップまであっさり一杯にする勢いで、三度ユミのオシッコがはじまった。少女の顔は羞恥にゆがみ、声は小刻みに震えてすらいる。

多くの人が利用する場所であるエレベーターの真ん中で、スカートをまくり下着を下ろし、股間にあてがった紙コップにオシッコをするという恥辱の極みの中、ユミはとうとう泣き出してしまふ。

「も、もうやだ……もう出ないでっ、でないでよ……な、なんでこんなにいっぱい、オシッコ……っ……」

じゅう、じゅうう、じゅじゅじゅうっ、じょぼぼぼぼ……っ

なお衰えぬ勢いで噴出するオシッコは、ユミの感情の昂ぶりに合わせてリズムを刻むように紙コップの中に注がれていった。

それだけでは飽き足らず、ひしゃげた出口からは脚の間を伝い、オシッコの雫がちいさなお尻のほうにまで回ってゆく。

「あ、ああ、あっあ、ああ……」

やがて、泡立つ薄黄色の液体がなみなみと紙コップを満たす。手のひらの中に伝わるオシッコの温度と重みで、ユミはとうとう3杯目の『お代わり』までいっぱいにしてしまったことを理解した。

あくまで控えめに1杯200ml弱としても、確実に500ml超。それだけの量のオシッコをしてなお、まだユミの尿意は衰えなかった。

「やだ、オシッコでないで、でないでえ……っ」

その時だ。

始まった時と同じように、まったくの唐突にがくりとエレベーターが揺れる。ぎし、ぎし、とその身を軋ませながら、エレベーターがゆっくりと上昇を始めたのだ。

階数表示のランプがちかちかと瞬き、表示が7階へ切り替わる。

（え！？ あ、あっ、あ！！）

支えるものも無く、エレベーターの床の真ん中に、爪先立ちでしゃがみ込んだ姿勢のままのユミは、その急激な振動に耐え切れ

なかった。

ぐらりと傾き倒れこんだ身体に、本能的に危機を察知した少女の手は反射的に前に伸び——結果、股間に押し当てていた紙コップは、床に挟まれてくしゃりと押し潰される。

無論、そのなかになみなみと注がれていたオシッコも、残らず床にぶちまけながら。

「い、いやぁ……っ！！！」

ばちゃん、という激しい水音。

たちまちエレベーターの中に満ちる、これまでよりもさらに濃密なオシッコの匂い。明らかにユミがここで『排泄』したことを証拠付ける羞恥の液体が、容赦なく閉ざされた鋼鉄の密室を汚染してゆく。

そして、それだけでは済まない。3杯の紙コップをいっぱいにしてなお、止まる様子のないオシッコは、その下に水流を受け止める容器がなくなっても、構わずに排泄孔から噴出し続けていた。

四つんばいになる格好で倒れこんだユミの股間からは、なおオシッコがしよろよろお、と流れ落ち、直接エレベーターの床に飛び散ってゆく。

ここに至れば流石に最初の頃ほどの勢いは衰えているが、なおオモラシとして十分な量だった。もうひとつ紙コップを構えていても、十分に一杯にしきる勢いはあるだろう。

紙コップから溢れたオシッコの水たまりに、ぱちゃぱちゃと音を立てながら注ぎ足されて行くオシッコが、さらにユミの下半身を汚す。

困惑の極みにあるユミをよそに、立て続けに事態は進行する。ちん、と音を立てエレベーターがゆっくりと停止するベル音を聞いて、ユミは蒼白になった。

「だ、だめ、だめええ！！！」

目の前で左右に開き始めるドアに、完全にパニックに陥ったユミは、むき出しの脚の付け根を手で押さえ込んだ。しかし壊れた蛇口のように開ききって勝手にオシッコを出し続ける排泄孔を塞ぐことはできず、手のひらに溢れたオシッコが指の間からいくすじも滴り落ちる。じょじょ、じゅう、じゅうう……まるで手のひらに受け止めたオシッコを、そのまま床に撒き散らしているようだ。

必死に身体を起こそうにも、膝に絡まった下着が邪魔をする。太腿の下を拘束され、這いずることもできないユミの前で、無常にもドアが全開になる。

決して開かないかと思われたドアが、あっけなく開いていた。

二つの紙コップをオシッコでいっぱいにし、床に盛大な水たまりをつくって、なお股間から熱い雫を迸らせ続ける少女の姿は、遮るもの無くエレベーターの故障を見守る、マンションの住人たちの視線に晒されてしまう。

大事な買い物を詰め込んだエコバッグもオシッコをたつぷり吸って、色を変えていた。もう二度と使うことはできないだろう。

「い、いや……見ないで、見ないでよぉ……ッ」

同じマンションに暮らす顔ぶれは、ユミの知っているものもたくさんある。その前で、ユミは決定的に取り返しが付かないオモラシを疲労してしまっていた。

痛むような蔑むような、マンションの住人たちの無数の視線の中、悲痛な叫びで泣き崩れるユミの涙は、床上に広がる黄色い水たまりの上に、ぽたんとちいさな波紋を作るのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: バスから路上にいたる話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 11/23/2009 13:42:09

BODY:

(あつ……あ、あつ、だめ、っ)

交差点の中央、右折の信号待ちをするバスの中。

エコドライブ宣言もどこへやら、まばらに席を埋める乗客の中、不規則に暖房を効かせる後部座席の傍で、日野森花梨は唇をかみしめる。

(ど、どうしよう、漏れちゃうよっ……)

今にもくねくねと揺すってしまいたくなる腰を意志の力で押さえ込み、ぎゅっと交差された膝を不自然にならない程度に擦り合わせながら、花梨は間近に迫りくる“オモラシ”の危機と戦っていた。

冬服のスカートは脚の付け根を抑え込む手のひらによって内腿に深く巻き込まれ、吊革に体重を預け、膝下までのソックスに包まれた脚は交互に革靴の爪先でこつこつと床を叩いている。

空席の目立つ車内で、わざわざ吊革に掴まり、バスがバス停を通過するたびに落ち着きなくちらちらと窓外を窺い続けている少女は、車内でもやけに目を引く存在だった。

(……やっぱり、あの時ちゃんとトイレ行っておけばよかったっ……)

今更のように悔いるが、後の祭りではない。

放課後、委員会の仕事を終えたあとに花梨は鍵を返しに職員室に寄り、そこでお喋りな学年主任とついつい、1時間近くも雑談に興じてしまった。その時に御馳走になったお茶2杯が、いまや残らずおしっこに変わって、少女の膀胱を占領しているのだ。

もともと帰る前にトイレに寄ろうとしていたところに、利尿作用のおまけつきで摂取した水分だ。冬の寒さも手伝って、花梨の下腹部は耐え難いほどの尿意をひっきりなしに訴え続けている。

(あつ、あつあ、く、ううう……っ)

ふたした油断でぶくりと内側から膨らみかけた排泄孔を、溜まらずぐいっと手のひらが押さえ込む。花梨の意志を無視して、身体は生理的欲求に従い、ところ構わず勝手に排泄を始めようとしていた。

いちどでも生理現象を訴え出した少女の身体は、際限なくその欲求を加速させてゆく。こみ上げるイケナイ感覚に下半身を震わせて、花梨は熱い吐息をこぼす。

職員室を出たときには、すっかり外は暗くなっており、時計も門限まではあとわずかという時刻を示していた。その焦りもあり、バス停にやってきたバスに即座に飛び乗ってしまったのだが——閉まるドアと出発するバスの中、花梨は早くも己の失敗を悟っていた。

(ど、どうして、家までくらいなら我慢できるなんて思っちゃったんだろ……っ)

駅から学校、市立病院を循環するバスは、利用者も多く通学、通勤にもよく利用される。いまはさほど混む時間帯ではないが、花梨もこの路線を使って通学していた。しかし、いくら重宝されようと、定番の路線バスにはトイレなど付いているわけもない。

動く牢獄に等しいバスに乗っている限り、花梨は次のバス停まではじっと身を竦ませて我慢する以外のことではできないのだ。

『次は、明野三丁目。明野三丁目。』

……お降りの方はお近くの停車ボタンでお知らせください……』

「はあ……あつ……」

ぎゅっ、と通学鞆の持ち手を握る手のひらに力がこもる。

学校前のバス停を出発してすぐに始まった花梨のささやかな我慢ダンスは、すでに誰が見てもわかるほどのはっきりとした腰揺れとなって表れていた。

花梨の中、長期トイレ我慢予報は必窮する下腹部の状況に迫られ、下方修正を繰り返している。当初発表だった『家に帰るまで我慢する』案ははるか昔に取り下げられ、市立病院駅のトイレ、駅の公衆トイレを経て、最新予報では三つ先のバス停前の公園の公衆トイレにまで格下げされている。

(あ、あつ、は、はやくう……っ)

思春期の少女としては、よくホームレスのおじさんがたむろして身体を洗ったりしている公園の公衆トイレなど、使うどころか近寄ることすら躊躇われたが——一刻一刻と切羽詰まってゆく下半身を抱えていては、選り好みなどしてられない。

普段は意識すらしていないトイレすら、焦がれるほどに待ち遠しい場所だった。

バスがゆっくりと交差点を抜け、夕暮れの中に並ぶ乗用車の赤ランプのあとを追いかけてゆく。

とうとう不安定な吊革に捕まっていられなくなり、乗降口の手摺りに体重を預けるようにしながらきつくそれを握りしめて、花梨はバスの進行方向を見つめていた。可憐な桜色の唇は半開きになり、潤んだ視線は中空に固定されてあらぬ方を見つめ、熱い吐息を小刻みに繰り返す。

「はあう……っ」

道路の凹凸による振動に合わせて、花梨の下腹部ではイケナイ感覚を呼び覚ます恥ずかしい水がたぶたぶと揺れ、限界の迫った少女をますます追い込んでゆく。清楚なたたずまいの表情は押し寄せる尿意の波にゆがみ、顔は蒼白になりこめかみには脂汗まで浮かぶ。

一度効力を発揮する緑茶の利尿作用はすさまじい。

冬の寒さを乗せる隙間風も手伝って、明野三丁目のバス停で数名の乗客が乗り降りを追えるころには、花梨は小さく喘ぎ、身悶えしながらばんばんに膨らんだ下腹部をひっきりなしにさすようになってしまっていた。

まるで熱した砂が詰まっているように、硬く張りつめた下腹部は、もはや最寄り駅のトイレまで持つかどうかもあやしい。じっとしていなければならないはずの腰がクネクネと左右に揺すられ、『ああっ……』『んっ……！』という艶めかしい声が少女の唇からこぼれる。

花梨の近くに座っていたおかつぱの中学生が、あえて苦しげな少女の様子を見ないようにと文庫本を広げた。しかし、ぎゅっと下腹部を握り締め腰を揺する少女に気を取られ、まったく本の内容など頭に入らないようだった。

『次は、両瀬台、両瀬台。』

前原医院へは、こちらが便利です……』

かち、かち、と時を刻む腕時計の秒針を、数秒おきに見ながら、花梨は手摺にしがみつく。早いようで全く進まない秒針は、まるで我慢の限界のカウントダウンのように花梨を苦しめていた。

公園までバス停はあと二つ。そこまでほんの数分でたどり着くだろうバスは、しかし大通りに多い信号につかまり停車する。

下方修正に下方修正を重ね、最後の妥協点として見出したはずの、最短コースでたどり着くはずの公園の公衆トイレだが、いまや花梨にはそこまでの距離すら絶望的に遠く思えた。

不意に、信号の変化と共にバスがエンジンを吹かし、ぐらり！ と強く車内が揺れる。

「ああ、ああっ……！！」

気の緩みかけた瞬間に押し寄せた猛烈な圧迫感に、じゅわりっ、と股間に熱く湿った感覚が広がった。とっさにがばっ、と両手で脚の奥を押さえ込む花梨だが、続く放出は塞き止められても、一度あふれた分はどうしようもない。

たちまち下着に染み出したおチビリの気配が、少女の頭から熱を奪い去ってゆく。

じわあ、と脚の間を広がった熱い感覚は、すぐに生ぬるく冷え出し、じつとりと花梨の股間に張り付く不快な感触をもたらした。

(い、嫌あつ……)

いい歳をしてしてかしてしまった『失敗』に、花梨の頭はパニックに陥る。さらには緊張に強張った下腹部は、一度わずかながらも排出を許した排泄孔の位置をはっきりと覚え、そこへ一気に攻撃を開始する。

括約筋が力を振り絞って抵抗を続ける中、花梨の意志に反して下腹部の水圧はぐっと増し、女の子のダムのいちばん脆い部分へと襲い掛かる。熱烈なノックに女の子の通路は押し開けられ、さらにじわ、じわと熱い水滴をこぼし、膨らみかける“おしっこの孔”がびりびりと痺れ、短い排泄孔の中にも液体が詰まりきっているかのよう。

「く、つうつ……！！」

じ、じ、とまるで電流を流すような衝撃に、思わず花梨はぎゅっとおしりの孔に力を籠めて開きそうになるおしっこの出口を押し潰す。

それでもつうと脚の間を、まるで細い毛先でこすられるような感触と共に、つうと細い流れがこぼれ落ちた。

（っ、だ、だめ、間に合わないっ……）

進退極まったことを悟り、花梨はさすがに車内を見回し、目に入った降車ボタンを叩きつけるように押し込んでいた。

バス停を直前に、突然『降ります！！』と叫ばれたバスは、急遽スピードを緩めて路肩に寄り、バス停を少し通り越して停車した。

もたもとと定期入れのＩＣカードを押し付けて精算し（財布を出して小銭を数えていたりしたらあの場合で出始めてしまっていただろう）、花梨は人気のまばらな住宅街に下りた。

その間にも二度、花梨はスカートの下で全力を振り絞ってぎゅっとおしりの孔と一緒におしっこの出口を締め付け、腰を突き出してありったけの我慢を繰り返し、押し寄せる怒涛の尿意を押さえ込んでいる。

花梨だけを薄暗いバス停に残し、すぐに走り去るバスを尻目に、おぼつかない足取りで少女は歩き出した。

（っ、は、はやくはやくっ、おしっこ、おしっこお……っ、も、漏れちゃうっ、漏れちゃうっ！！）

もはや少女が求めるものは『トイレ』ではなく、『おしっこのできる場所』だった。似ているようで非なる両者の差異は、一文にして明白。

前者がもともとそのために作られ、整備た場所なのに対して、後者はただただ、しゃがみ込んで下着を下ろし、脚の付け根からおもうまま恥ずかしい液体を迸らせることさえできればよいという、それだけだ。

最寄のトイレまですら我慢することを諦めてしまった花梨は、オモランによってバスの床を汚すことを畏れるあまり、女の子のプライドすらかなぐり捨てようとしていた。

熱に浮かされたような表情で、花梨はすぐ近くの街路樹の植え込みの前に倒れかかってしまう。

「っ……」こくり、と緊張を飲み込み、花梨は電光石火の早業でちびった分で濡れぼそり、股間に張り付く下着を膝まで引きおろすと、スカートを腰上まで捲り上げてしゃがみ、おしっこの準備を整える。

道路の端、街路樹の根本——まるで犬のようにおしっこをしまおうという行為に対するわずかなためらいは、じっとりと湿る下着と突き上げるような尿意に蹂躪されかかって熱く疼く股間に吹き飛ばされた。

（あ、あっあ、あっあ）

もはやここまで来て躊躇する余裕はなかった。花梨は、植え込みの根本を跨ぐまぐのように大きく脚を広げ、バランスをとりながら

おしっこを始めてしまう。

いかにも優等生然とした容貌を歪め、唇を噛んで耳たぶまでを赤く染め、俯く花梨の足元で、ぷしゅう、と涼やかな水音が口火を切る。

樹の幹にしがみつくようにして、花梨は身体を何度も小刻みに震わせた。

植え込みと木の幹で道路側からの視界は辛うじて遮られていたが、いくら小柄な花梨でも、細い街路樹の後ろに隠れきれぬわけもない。注意して見さえすれば剥き出しの太腿や制服の肩はたやすく目に付き、その向こうに少女が腰を落としているのはすぐに分かってしまう。

股間のすぐ前を隠す樹の幹さえなければ、足を広げて腰を落とし、白いお尻と大切な部分すらもあっさりと見えてしまうだろう。女の子の大切な部分を、行き交う車道へと丸見えにさせ、見せ付けているのに等しい格好だった。

まだ幼いつくりの細い割れ目は、緊張に震え、わずかなほころびもなく少女の下腹部に食い込んでいる。我慢のために出口をきつく締めつけられているのを示すように、もうひとつの小さなすばりもきゅうっと萎縮し、縮こまっていた。

(っ……)

真っ赤になりながら、花梨はこぼれそうになる悲鳴を唇を噛んで喉の奥へと押し込む。両手は揺れる身体を支えるので精一杯だ。

上げそうになる羞恥の悲鳴を堪えてきつく閉じられた花梨の唇同様、少女の股間の秘密の唇も緊張に硬く引き結ばれ、その奥の排泄孔からの水流はそれに遮られて四方へと飛び散る。

じゅじゅう、じゅうっ、とだらしなく飛び散った熱い雫は、きゅっと引き結ばれたおしりのほうへも伝い、ぽた、ぽた、と後ろのほうへも垂れ落ちてゆく。

(っ……！！)

スカートを汚しかねない事態に、花梨は必死で心を落ち着けながら、硬く緊張させていた括約筋を緩めた。きつく詰めていた息をゆっくり吐くと、こわばって硬く閉じあわされていた秘唇ががくっと広がり、その奥から熱い水流が、本当の勢いで太い放物線を描いてほとばしる。

ぶしゅううーっ、と熱水が秘所を擦る鋭い音をたて、街路樹の根元の剥き出しの土に激しく吹きつけられた。硬く踏みしめられた植え込みの根本をえぐるほどに勢いも強く、少女の股間から噴き上げた飛沫は、ほどなく野太い奔流となって、ばちゃばちゃと土の上に泥をあふれさせ色のついた泡を吹き上げるように水音を立てはじめる。

(はああああ……っ)

もはや罪悪感や嫌悪感よりも、我慢を重ねていた尿意からの解放感のはるかに勝るほどに甘美だった。下腹部をばんばんにさせ、はちきれんばかりに溜まっていたおしっこが、勢いよく足元へと叩きつけられてゆく。少女の体内で温められた熱水は、秋の気温に触れて小さく湯気を上げるほどだ。

解放感に震える少女の身じろぎにあわせ、噴き出す水流は蛇のようにくねり、時にはしゃがみ込んだ足元へと飛び散って靴やスカートの裾を汚すが、排泄の心地よさに身をゆだねた花梨にはもう些細な問題でしかなかった。

路上の片隅で地面を深くえぐるほどのおしっこに夢中となり、花梨は、うっとり唇を震わせた。

尿意に耐えかねた少女の暴挙によって、特設臨時トイレと化した路上の片隅の街路樹の根本。屋外だというのにあたりにははっきりと花梨自身のおしっこの匂いが満ち、便器代わりの地面の上には勢いよく薄黄色の水流がじょぼじょぼと音を立てて注ぎ、泡を立てて飛沫を飛び散らせる。

響く水音はぱちゃぱちゃ、という軽いものからじょぼじょぼじょろ、というおよそ少女には相応しくないみっともないものになっていった。

街路樹のすぐ傍には、『飼い犬のトイレはご遠慮ください』という立て札があることにも、花梨は気付かない。

「はあ……っ♪」

ここが本来どこであるかも忘れ、どこか甘やかな響きの混じる深いため息。花梨は排泄の開放感に夢中になっていた。噴き出すおしっことともに身体から沸騰しそうな熱が抜け落ちてゆく。

歩道を歩く人々がぎょっとしながら、お尻を丸出しにして、『犬のトイレ禁止』の場所で猛烈な排泄を続ける少女を遠巻きに見守る中。

花梨の溜まりに溜まったおしっこは、なお1分以上も続くのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第13夜 白雪姫

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 10/03/2009 12:58:50

BODY:

「——大変だ、スノウの様子がおかしいよ！」

「どうしたんだいスノウ、息も荒いし、顔も真っ赤じゃないか！！」

小人たちの声が、森の中に響き渡ります。

ここは、お城からも離れた森の奥深く。七人の小人と白雪姫が仲良く暮らす、小さな小さな一軒家です。

「ねえスノウ、大丈夫かい？ いったいなにがあったんだい！？」

「スノウ、苦しいの？ ねえ、返事をしてくれよ！！」

「ねえ、スノウ、スノウったら！！ ああ、しっかりしてくれ、スノウ！！」

俯いたまま座り込み、いくら呼びかけても答えてくれず、じっと動かなくなってしまった白雪姫の周りで、小人たちはおろおろと慌て、右往左往してめったやたらにあたりを走り回ります。

『——鏡よ鏡、この世で一番うつくしい女の子はだあれ？』

『それは魔女様、あなたさまにございます』

だれよりも高慢で、尊大で、ことあるごとに自分の美しさを誇っていた悪い魔女は、当然のようにこの国のお姫様には自分になるべきだと思っていました。

魔法と謀略によってお城を乗っ取り、女王となった後も、魔女は毎日のように魔法の鏡に“この世で一番うつくしい女の子”は誰なのかを訪ねては、返ってくる答えに悦に入っていたのです。

けれど、白雪姫が12歳の誕生日を迎え、立派なお姫様の仲間入りをしたことで、魔法の鏡は魔女の問いかけに白雪姫の名前を挙げるようになりました。

嘘をつかない魔法の鏡の答えに激怒した魔女は、狩人に命じて白雪姫を森の中に連れ込み、殺すように言いつけたのです。

『——鏡よ鏡、この世で一番うつくしい女の子はだあれ？』

『それは、白雪姫様にございます』

悪い魔女の企みによってお城を追われた白雪姫ですが、狩人の情けで命までは奪われず、森をさまよっていたところを運良く七人の小人たちに助けられることになりました。白雪姫は、それ以来この一軒家で、賑やかな小人たちと慎ましくもささやかな暮らしをしていたのです。

けれど、魔女は、いつまで経っても魔法の鏡の答えが変わらないことに、白雪姫が生きていることに気付いてしまったのです。

お城から追放されてなお、優しく、うつくしく、気品あるお姫様でいつづける白雪姫に激しい嫉妬を抱いた魔女は、リンゴ売りのおばあさんに化け、白雪姫の前に現れたのです。

「スノウ、ねえスノウったら、どうしたんだい！！ どこか苦しいのかい！？ ねえお願いだ、返事をしてスノウ！！」

「熱があるのかい？ 寒いのかい？ そんなに汗をびっしょりかいて……震えているじゃないか！！」

「スノウ、だれかがきたのかい？ あの狩人かい？ ほんとうになにがあったんだい……！！」

小人たちの住む一軒家の近くの広場で、うずくまり、動かなくなってしまった白雪姫を囲んで、七人の小人たちは必死に彼女を案じていました。

くちぐちに声を上げ、せわしく飛び回っては白雪姫のドレスの裾や腕をひっぱって名前を呼ぶ小人たちですが、白雪姫はそれに答えてやることはできませんでした。ただただ、か細くも荒い息を繰り返しながら、手足を小さく丸めて震えるばかりです。

すべては、魔女が盛った秘薬のせいなのです。

「ん……？ なあみんな、ちょっと見てくれ、こいつをどう思う！！」

小人の一人が、白雪姫の足元に転がっていた空のコップを見つけて叫びました。そのコップは、小人たちが食事に使っている木のコップとはまるで違う、美しい銀細工のほどこされた高価そうな品でした。

まるで、お城の食卓に並ぶのがふさわしい見たこともないコップに、小人たちは揃って首を傾げます。

「おかしいじゃないか！！ ぼくたちが見たこともない、こんな立派なものがなんでここに落ちているんだい？ 誰か知っているのはいないか？」

小人たちのなかに、それに答えられるものは居ませんでした。

それもそのはず、このコップはもともとお城にあったもので、魔女が持ち出してきたものなのです。

小人たちの一人が言いました。

「……なあ、これはひょっとして、あの魔女がやってきたんじゃないのか？」

「そうか、スノウをねらってきたんだな？」

「ああそうだ、きっとこれは魔女の仕業だよ。この前の脱げない下帯みたいに、スノウに悪さをしたに違いない！！」

ぐるっと輪になって空のコップを抱え、小人たちはもったいぶって中を覗き込みます。

「そうだ、きっとこのコップに毒が入っていたんだ。そのせいでスノウは動けなくなってしまったんだ！！」

「そんな。それっておおごとじゃないか！！」

「どうしよう、スノウは死んでしまうのかい！？」

「なんてこった、こんな森まで魔女が来ることなんてないと思ってたのに！！」

小人たちは口々に不安がり、いまなお動かない白雪姫の周りで騒ぎ続けます。

そんな中、白雪姫はただじっと、白い頬を赤く染め、深く俯いてぎゅっと歯を噛み締めて、はあ、ふう、と荒い息をついていました。

「スノウ、ねえスノウったら！！ しっかりするんだ！！」

（ああ……っ）

忙しく周りを走り回る小人たちの真ん中で、白雪姫は小さく身を縮こまらせます。形の良い桜色のくちびるはきゅっ、と閉じられ、長いまつげの青い瞳は伏せられ、美しい黒髪は汗の浮かぶうなじに張り付いています。

「スノウ、毒なんかに負けるんじゃない！！ 気をしっかり持つんだ！！」

（っ、だ、だめ！！ ゆ、揺すらないでっ……）

身を案じ、肩を掴んで強く揺する小人たちを、白雪姫は肩を振ってはね退けようとしてしまいます。

小人たちが心配してくれることは嬉しいのですが、いまの白雪姫にはそうやって騒がれること自体が、あまりにありがた迷惑でした。

（お、お願いですから、放っておいて……ください……いつ）

「スノウ、ああスノウ……くそう魔女め、本当にひどいことをするもんだ！！」

「まったくだよ、ああスノウ、死んじゃあだめだ、答えてくれスノウ！！」

騒ぎ回る小人たちに、白雪姫はやはり答えられません。

口を開くこともできないほど真っ赤になって、白雪姫は小さく身をよじります。

ドレスの手袋に包まれたちいさな手のひらはぎゅうっとスカートの間に挟まれ、寄せ合わされた膝の奥、脚の付け根を押さえこんでいます。荒い息とともにその手のひらにはぎゅうっ、ぎゅうっと力が籠められ、地面の上でもじもじと擦り合わされる膝が、びくんびくんと硬直を繰り返します。

ただでさえお姫様失格の恥ずかしい格好をしているのに、その上さらに周りを囲まれてはしゃぎたてられては、声をあげることも難しいほどでした。

「スノウ、死んだりしちゃだめだ！！　ねえ、スノウったら！！」

白雪姫が毒のせいで息もできなくなっていると信じ込んでいる小人たちは、涙ながらに訴えます。けれど小人たちがそうすればするほど、白雪姫はますます小さく縮こまるばかりでした。

（ち、違うの……っ、違うんですっ……）

ぎゅっと脚を閉じあわせ、ぷるぷると俯いたまま、白雪姫は一步も動けません。すこしでも身じろぎしようものなら、なんとか保たれている均衡がたちまち破れ、身体の内側からの圧力に屈してしまいそうなのです。

そう、白雪姫のおなかの中の秘密のティーポットには、まるで音を立てんばかりにこぼこぼと、後から後から激しい勢いで恥ずかしいホット・レモンティーが注ぎ込まれているのです。

（う、あう……っ、だ、だめ……お、お手洗いにっ……はやくっ……）

すでにティーポットをいっぱいにして、なお溢れんばかりに湧き上がってくるホット・レモンティーは、白雪姫の下腹部にずっしりと重くのしかかり、いまやドレスの上からでも分かるほどに小さなおなかを膨らませています。

もうとっくに限界を超えていると言うのに、いまなおどんとその量を増しているのです。

これもすべて、魔女が差し出した特製のリングジュースの効き目によるものでした。魔女が大釜で三日三晩煮込んでつくった秘薬は、ほんの一口で何度もトイレに往復しなければならないほどの、恐ろしいまでのもの効果を持っていたのです。

（あ、あ、あ、あっ）

ぎゅう、と握り締めたスカートの奥で、いけないところがじわ、じわと緩み、白い下着に黄色い染みがひろがっていきます。同時にじいんと響く甘い痺れに、白雪姫は目の前が真っ白になってしまいます。

脚の付け根にじんわり広がる熱い感触。下着の布地をたっぷりと濡らし、おしりの方へと広がるほどにおチビリはもう何度も繰り返されており、白雪姫のドレスの下はすっかりお姫様失格のぐしゃぐしゃに濡れていました。

『——鏡よ鏡、この世で一番うつくしい女の子はだあれ？』

そうです。魔女が思いついたのは、白雪姫にオモラシをさせ、女の子失格にしてしまうことなのです。きちんとお手洗いにいけなようなみっともない女の子が、この世で一番うつくしい女の子であるはずがない、というわけでした。

魔女の特性リングジュースの効き目はすさまじく、必死の我慢にもかかわらず、白雪姫の身体は、もう何度も何度もおチビリを繰り返し、勝手にこのままおしっこを出し始めようとしています。

それでもなんとか、白雪姫は、人前でのおモラシという最大の辱めを避けるため、最後の最後で懸命に押し寄せるおしっこを押しとどめていました。

（は、はやく……お手洗いに……っ）

ふつうの村娘ならばともかく、お姫様がこんなお外で、気軽にしっこを済ませてしまうというわけには、もちろんいきません。一刻も早くトイレに駆け込んで用を済ませなければなりませんでした。

（お願い……ちょっとだけ、ちょっとだけでいいんです、お、おさまって……ください……っ！！）

もはや白雪姫には、そうやって祈るほかありません。

けれど、押し寄せる尿意の波はすさまじく、一時たりとおさまる様子もありません。震える脚はうずくまって身体を支えているのが精一杯で、歩くことはおろか立つことすらとても無理なのです。

「スノウ！！ 苦しいのかい、辛いのかい！？ しっかりするんだスノウっ！！」

（っ……だ、だめっ、離して、お願いですからあ……っ）

白雪姫は、自分の身を案じてすがりつく小人たちが、いまは邪魔で邪魔で、鬱陶しくて仕方がありません。

本当は思う存分腰を揺すっておしりをモジ付かせ、ありったけの力でぎゅうぎゅうと脚の付け根、おしっこの出口を握り締めてしまいたいのです。

そうしなければ我慢できないほどの熱い液体が、今もおなかの中で渦巻いてるのですが、白雪姫にはそれを訴えて小人たちを追いつかうこともできませんでした。我慢のための意識を抜いて、少しでも余計なことをすれば、そのままおしっこが出始めてしまいそうです。

（いやあ……っ！！）

また、閉じ合わせた脚の奥に、じわ、じわ、と熱い滴が広がる気配を感じ、白雪姫は小さくしゃくりあげました。

もはや下着だけに留まらず、染みはドレスのスカートまであふれ出していました。押さえ込んだ手のひらの下、足の間に挟みこんだ部分から、ゆっくりと黄色い染みが濡れ広がりだしています。

スカートをびちゃびちゃに汚し、脚に濡れ透けて張り付かせる、恥ずかしい熱水の奔流が、じゅん、じゅん、しゅるるっ、と音を響かせるたび、ぎゅうっと押さえ込んだ場所がぶくりと熱く膨らみ、手のひらに熱い湿り気が溢れてこぼれてゆきます。

繊細なところをずたずたにされてしまいながら、白雪姫はぎゅっと閉じていた目を小さく開け、そっと辺りを窺います。

「うう、スノウ……スノウ……っ」

あまりにも深い絶望の中、唯一の救いは、騒ぎ疲れたのか、いくらやっても白雪姫が答えないことに諦めてしまったのか、小人たちはみな下を向いてしくしくと泣いていたことでしょうか。

まだ、白雪姫の様子に気付いている小人はいないようでした。

千載一遇のチャンスです。

（い、っ、今のうちに、お、お手洗い……っ！！）

トイレは小人たちのすむ一軒家にしかないのですが、困ったことに、もともと小人たちが暮らすために建てられたものです。小人たちの身体に合わせて何もかもが小さく、それはトイレも例外ではありませんでした。いくら身体の小さな白雪姫でも、周りを汚さずに使うのはとても苦勞するのです。

けれど、贅沢は言っていられません。

下を向いて肩を抱き、おいおいと泣いている小人たちに気付かれないよう、白雪姫は形振り構わずの我慢でなんとかおしっこを

せき止めながら、そっと腰を持ち上げました。

(っ、は、っ、……んんうっ……っ！！)

とたん、隙間なく、びりびりと猛烈な衝撃が下腹部に襲い掛かります。圧迫されたおなかが激しく震え、せり出したおしっここの容れ物が大きく膨らんで出口へと殺到しそうになります。ぐらぐらと沸き立つ秘密のティーポットが吹きこぼれそうに揺れ、またじゅう、じゅじゅっ、と脚の付け根にいけない水音が響きます。

顔を赤くし、歯を食いしばり、荒い息で小鼻を膨らませ、白雪姫は猛烈なおしっこを必死に食い止めます。勝手にその場足踏みがはじまり、内腿はぎゅぎゅっと交差をして、おしっこを塞き止めようとした。

(っあ、ま、待ってっ、だ、だめ。出ちゃダメっ、だめえ！！)

へっぴり腰の前傾姿勢、おまけにぎゅっと両手で深くおしっこの出口を押さえ込んで、脚を広げたがに股。その姿は、両手で必死にぱんぱんに膨らんだおしっこの水風船を抱え込んでいるようなものです。

それはとても人前に見せられるようなものではない、恥も外聞もないみっともない格好でした。足を上げることもままならず、ずずっ、ずずっとすり足で、白雪姫はどうにか小人たちの家に近付こうとします。

(うあ、あっ、あ、あとちょっと、ちょっとだけっ！！)

すり足になって内腿をびくびくと痙攣させ、おしりをくねくねと振りながら、白雪姫はまっすぐに小人たちの家を目指しました。

耳まで赤くなりながら、激しく股間を握り締め揉みしだくその姿といったら、とてもではありませんが魔法の鏡が言ったようなこの世で一番うつくしい女の子のものとは思えません。

(っあ、あっあ、でるっ、でちゃう、オシッコでるううっ！！)

またも押し寄せるおしっこの波が白雪姫を襲います。たまらず硬直する白雪姫は、じゅうう、と立ったままおチビリをしてしまいました。

立ち尽くす白雪姫の脚を、つう、つう、と黄色い水流が伝い、さらに地面にはぼたぼたと雫が飛び散ります。すでにすっかりお尻まで広がる大きな染みを作っていた下着の奥では、小さなオシッコの出口がぶしゅ、ぶしゅと先走りを滲ませていました。

「……一体なんの騒ぎだい、これは」

ふいに、聞き覚えのない声が、白雪姫の耳に聞こえたのは、まさにその時でした。

どこからか現れた、白馬にまたがった立派な服の少年が、目を泣き腫らした小人の一人に話しかけていたのでした。

「ぐすっ……そういう、あんたは誰だい？」

「ああ、ボクは隣の国の王子さ。君たちは森の小人たちかい？」

「そうだと。ぼくたちは七人の小人さ。……はっ、ねえ王子様、そんなことよりも聞いておくれよ！ スノウが、白雪姫が大変なんだ！！」

「……白雪姫だって？」

小人たちに促され、隣の国の王子は怪訝そうに声を上げて、辺りを見回します。

白雪姫は、あまりのことに全身をかたく強張らせ、硬直させたままでした。そう、まさに両脚の付け根を硬く握り締め、おしりを突き出し、まるで見せ付けるように王子様に背中を向けながら、じわ、じゅわ、とオモラシを始めているその格好のままで。

首だけを震わせた白雪姫と、隣の国の王子様の、ぽかんと丸くなった目が、ばつちりと合っています。

「し、白雪姫……？」

まだ幼いながら、雪のようにうつくしいと評判の、この国のお姫様。女王の不敬をかって行方知れずになっているという、その白雪

姫の、あられもない姿を目の当たりにして、隣の国の王子は、ぽかーんと口を明けてしまいます。

なにしろ、ドレスのスカートの大半をオシッコで汚し、いまなおその場にしゃがみ込んでオモラシの続きをしようとしている、まさにその瞬間の格好なのです。

「っ……！？！？」

一方の白雪姫は、心臓が口から飛び出しそうになるほど驚いていました。

（な、なんでこんなところにっ……お、王子様がっ！？）

顔は知らなくても、名前は知っています。男の子の目の前で、絶対にしてはならない格好でいる自分に気付くや否や、白雪姫はほとんど反射的に、下着をぐいっ、と結び紐が伸びきれてはちきれそうになるまで引っ張り上げ、あわてて気を付けをするように立ち上がります。

けれど、出かけたおしっこはそんなことで止まるわけありません。出口のすぐそこまでやってきていた熱い雫は、そのままじゅわ、じゅわわあと、溢れだしてしまいます。

（あ、あっあ、あぁっ、いやぁ！！）

脚の間を伝う熱い雫が水流となり、ひとすじふたすじと増え、下着を湿らせてあふれ出し、身をよじらせる白雪姫の足元にぱちゃぱちゃじゃぱじゃぱと音を立て始めます。

白雪姫が身をよじて、たまらず駆け出そうとしたときでした。

そのスカートが、脚が、肩が。小人たちに掴まれます。

泣きはらしてぼやけた目のせいでそんな有様の白雪姫には気付けずに、小人たちは白雪姫を取り囲むようにして、王子様に訴えようとしたのでした。

「王子様、みてやっておくれ！！ スノウは悪い魔女にジュースに混ぜた毒を飲まされて、動けなくなっちゃったんだ！！」

「ぼく達じゃどうやっても目を覚ましてくれなかったんだ！！」

「ねえお願いだよ、王子様！！ スノウを助けておくれ！！」

すっかり白雪姫が毒で動けなくなっているのだと信じ込んでいる小人たちは、中腰になってくねくねと我慢のダンスをはじめてしまったオモラシ寸前の白雪姫にはまるで気付かず、王子様のほうを見て、口々に叫びます。

「……え、ええと……」

けれど王子様の目には、白雪姫はそんな小人たちの真ん中で、とうとう間に合わず、おしっこを漏らし始めてしまった女の子としか映りません。

「や、やぁあ……っみ、見ないでっ、ち、違うの、違うんですっ……」

赤くなった目に涙を滲ませ、必死に首を振って身体をよじり、少しでも王子の視線から逃れようとして叫ぶ儚い少女。白雪姫は今にも消え入ってしまいそうに、白い肌を朱く染めて、か細い叫びを漏らします。

「ちょ、ちょっと、君！！」

「い、嫌っ、来ないでえ！！」

思わず一歩前に踏み出しかけた王子様に、白雪姫は声を張り上げます。

そんなことをしたものですから、白雪姫の我慢の糸はぷつりと途切れてしまいました。

白雪姫のドレスの内側から大きく広がった染みが、あっというまにスカートを重そうに濡れ湿らせて裾をぐしゅりと垂れさせ、足元に大きな水溜りが広がってゆきます。

たっぷりとおしっこを吸って白い脚に張り付いたドレスのスカートのその奥。脚の付け根から吹き出した激しい水流が、たちまちのうちに白雪姫の下半身をずぶぬれにしてゆきました。

「ああ！！ スノウ！！」

「やった！！ スノウが目を覚ましたぞ！！」

「すごい、すごい王子様！！ ほら見てごらん、スノウの身体からどンドン毒が出て行くじゃないか！！」

白雪姫の叫びを聞いて、小人たちは舞い上がって叫びました。小人たちは王子様がなにかをして、白雪姫が目を覚ましたと思ったのです。

白雪姫のおしっこにひっかかり、身体がびちゃびちゃと濡れるのにもかかわらず、小人たちはくちぐちに喜びをあらわに、白雪姫を取り囲みます。

「はっ、離してっ、お願い小人さんっ、離してえ……！！」

「スノウ、我慢しちゃダメだ、それは悪い毒なんだよ！！ 残らず全部出してしまわなきゃ！！」

「そうだそうだ、身体に残っていると悪いことがあるかもしれないよ！！」

「魔女の飲ました毒なんて、全部絞り出してしまわなけりゃ！！」

「や、やああ！！ だめ、やめてえ！！ っ、さ、触っちゃダメえ、ぜ、全部出ちゃう、ほんとに全部、でちゃう！！」

小人たちは大喜びしながら、白雪姫の身体に飛びついて、そこらじゅうをぐいぐいと押します。おなかを圧迫され、本当の勢いで始まったオシッコは、たちまちの内に白雪姫の下半身をドレスごとずぶ濡れに変え、さらに足元の地面を色濃く変えてゆきます。

「え、ええと……」

王子様はすっかり置いてきぼりにされながら、この世で一番綺麗な女の子のオモラシから、ずっと目を離せずに居たのでした。

この後、泣き出す白雪姫をなぐさめ、手を取り合って隣の国のお城へと戻った王子様は、悪い魔女をお仕置きするためにいろいろと奔走することになるのですが、それはまた別のお話。

……とりあえずは、めでたし、めでたし。

(初出：おもしろ特区 2009/08/01)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 冬の授業の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 11/23/2009 12:17:04

BODY:

ワックスの剥げかけた床を、椅子の脚が小さく軋ませる。

制服の上下だけでは肌寒さを覚える教室は、インフルエンザの猛威によって机のあちこちに空席が目立ち、いつもよりも生徒数の少ない分だけ一層冷え込んでいるようだった。

窓を揺らす北風は日に日に強まっているというのに、担任の主義により1 2月になるまでは沈黙したままのストーブは、教室の空きスペースを無駄に浪費するだけの鉄の塊と化していた。

「……………っ」

静まりかえった教室の中を満たすのは、昼食を挟んで気だるい午後の弛緩した雰囲気ではなく、切れ間ないチョークの音が刻む独特の緊張感だ。

3、4年生を受け持つ社会科の教師は、昨今巷を席卷する学級崩壊や体罰問題などどこ吹く風と、非常に厳格な授業をすることで有名だった。手を出すこととしないが、遅刻や課題の提出忘れ、授業中の余所見などには容赦なく罰則を与える。

教師は生徒の理由で授業のペースが乱されたり、中断されたりすることを大層嫌い、質問も授業終了時以外は認めない。無論、私語なども厳禁で、途中退出もよほどのことでない限り認められない。

それゆえ、その担当時間だけは酷く張り詰めた空気が教室を満たす。まして本格的な冬も間近なこの季節、窓外の冷たい曇り空ともあいまって、授業中の雰囲気の冷たさといったら言語に尽くしがたい。

「……、……………」

そんな中。教壇にに向かって窓際、前から3番目。ポブカットの前髪をピンで留めた有咲は俯き加減に、何度も唇をきつく結びなおしていた。

すでに二度、板書は書き換わっているというのに、有咲のペン先はノートの端に押し付けられたまま、意味のない線の塊を引き結ぶばかりだ。

もぞ、と膝裏に巻き込んだスカートの位置を直し、腰をずらすたび、小さく床板が軋む。何度か無言ながら視線で教師の注意を受けているが、有咲の落ち着かない様子は収まらなかった。

無論ながら、彼女に授業妨害の意図などない。それよりも切迫した生理的欲求が、少女の身体を衝動的に衝き動かしていたのだ。

「はあ……っ」

（あつ、……あ、っ……！！）

机の下で左手が、ぎゅっとプリーツスカートの上を握り締める。冬服の布地の下では、慎まじやかな下着に包まれた乙女の下腹部が、比類のない緊張感に震えていた。

（……っ、と、トイレ……トイレ行きたいよ……っ）

切なる訴えは、しかし声になることなく、少女の喉奥に噛み殺される。

うねる衝動と共に間断なくこみ上げる尿意は、乙女のダムのもっとも脆い部分を突き崩そうと執拗に攻撃を続けていた。次々と押し寄せる波を、排泄孔を締め付けるか細い抵抗だけで追いつくことはや数十回。もはや疲弊した括約筋は、辛うじて現状を保つので精一杯だった。

午前中の休憩と、昼食の時に摂取した水分は、午後の授業開始と共に勢いを増し、いまや有咲が体内に抱える小さな乙女の容器を占領しつつある。

加えて、窓ガラスから侵入し、足元から這い寄ってくる寒さ。

加速する尿意に、すでに有咲の乙女は限界に近い危機を迎えていた。下腹部はその内に溜め込んだ恥ずかしい琥珀色の液体を一刻も早く排出せよと訴え続けている。

「……っあ、っ」

数え切れないほどの尿意の大波が、またも出口へと殺到し、脚の付け根付近に熱い気配を感じて有咲は声を上げ身を竦ませた。

我知らず、きつくスカートを握り締める指は白く色を変え、丸めた背中に緊張が走る。

ノートに突き立てたシャーペンの先で、芯が耐え切れないようにぺき、と折れた。

「あ。っ……くう……ッ」

静寂の中、物音を立てた有咲に教師のみならず周囲の生徒たちの視線も集中する。有咲は下腹部で今まさに荒れ狂う大波を乗りこなしながら、必死になって平静を装わねばならなかった。

（っが、がまん、がまんっ……ガマン、しな…きゃ……！！ あ、あと、あと少しだから、あとちょっとで休み時間っ……）

今日はこの授業で終了。その後は休み時間を挟んで帰りの会、そして放課後だ。そうなればもはや有咲がトイレに行くことを妨げるものは無いに等しいが、それでも少女の身体は一刻も早い解放を渴望していた。

本来なら、今すぐにもトイレに行きたい旨を伝えて席を立つべきだろう。有咲だって心のそこからそう思った。しかし、この授

業中は退出すら減多に認められない。まして、担当教師がトイレを理由にそれを認めたことは一度もなかった。

忘れるはずもない夏休み前の出来事だ。

有咲のクラスメイトの一人が、酷くおなかを壊してしまっていたことがある。その時も担当教師は、彼女が授業の途中でそれを申し出た、ということを経由に取り合おうとせず、結果彼女はとうとう間に合わずに、授業終了の 5 分前にオモラシに至ってしまったことを目の当たりにしている。

その時も、教師は彼女への配慮よりも先に、いい歳をして粗相をしたことを強く責めなじっていた。

他にも、この教師はトイレを申し出た生徒を、自己管理がなっていないと激しい声で叱り飛ばしたことなど枚挙に暇がなく——それは有咲を含め、クラス全員にとって大きな恐怖になっていた。

(……っふ、ふう、はあっ……)

それゆえ、有咲はトイレに立つこともできないまま、限界に近い尿意を必死に押さえ込んで、途方もなく長く感じられる残り十数分の授業時間を、なんとかして乗り切らねばならなかった。

しかし——猛烈な尿意は少女のそんな事情など理解しようともせず、むしろさらに激しさを増していた。きつく閉じ合わされた太腿の奥では、下着の股布はすでにいくらか溢れてしまった『失敗』によって言い訳のきかないくらいに湿っている。

おチビリの感触はスカートの上から脚の付け根に押し込まれた手のひらにも感じられるほどで、それでも乙女のダムが決壊に至っていないのは、懸命に我慢に我慢を重ね続ける有咲のプライドゆえだ。

「——以上とする。質問は」

授業終了のきっかり 2 分前。板書を終えた教師が、生徒達に向き直る。無論、ここで手を上げる生徒はほとんどない。萎縮してしまっているという部分も確かにあるが、その一方で授業の質自体は悪くないためだ。

静まりかえった教室の中を一瞥し、教師は眼鏡を直して小さく頷いた。

「では——」

予定よりも 2 分早まった解放に、有咲の心が躍る。この授業時間短縮はいまの有咲には値千金だった。ここから女子トイレまでは歩いて 1 分かからない。まっすぐ向かえば順番待ちを強いられる危険もなく、個室に飛び込めるだろう。

(やった、トイレ……トイレ行ける。おトイレできるっ……！！)

本来ならまだ教室で我慢を続けていなければならない時間に、排泄を始めることができる。それだけでも有咲は飛び上がりたいほどの喝采を胸中で上げていた。思わず腰が軽く浮き上がり、爪先は今にも床を蹴って走り出そうとする。

が。

「課題を回収する。ノートを前に回しなさい」

教師の言葉は、有咲の予想をまったく裏切るものとなった。

指示があったのは先週の課題。週末に行われた小テストの誤答部分の再学習だ。軽くざわつく教室内だが、無論この教師の居る間に大きな騒ぎになるはずもなく、クラスメイトたちはめいめいに机の上からノートを揃えてゆく。

（そ、そんな後でもいいから……はやく、はやく終わりにしてよぉ）

ドアを飛び出そうとしていたところでそんな指示を出され、心待ちにしていたトイレは寸前でお預けとなる。少し早い板書の終了はこのためであつたらしい。授業時間を一秒も無駄にしない教師らしい指示ではあったが、これでは2分のアドバンテージなど残らないだろう。

（あ、あ、鐘鳴っちゃうてばっ）

無常にも進む秒針を見上げ、出遅れてしまわないかと有咲は気が気ではない。女の子のトイレは時間がかかる。他のクラスの子たちがトイレに来ることは間違いなく、ことによたら個室が全て塞がる可能性があった。ほんの2分程度の時間短縮に一喜一憂している状態の有咲が、この上、トイレでまで待たされなどしたら本当にどうなるか分からない。

大急ぎで鞆の中からノートを取り出した有咲は、後ろから回ってきたノートの束にそれを重ね、前の席の生徒に押しやった。

だが——肅々と進むノートの回収中に、小さなハプニングが起こる。

回収されて行くノートが、列の一つで途切れる。クラスメイトの一人が、青褪めた顔で手を上げ、小さな声で訴えたのだ。

「……すみません……わ、忘れました……」

瞬間、教師の顔色が変わった。一気に緊張感を増した教室内で、立ち上がった生徒の一人に視線が集中する。その中には、何でいまそんなこと言い出すんだ、という非難の声すらあった。

教師が、露骨に不機嫌な声で叫んだ。

「……他に、忘れた者は」

すると。

他にも数名、手を挙げたものがある。

なんと、すでにノートの提出が終わった列の中にもその姿が見えていた。とりあえず形だけでもノートを提出し、あとで申し出るか、あるいは回答なし、で済ませようと思っていた生徒達もいたらしい。それはある意味、この場を乗り切るには賢い判断ではあったが——

今の状況においては、あまりに火に油だった。

結局。

教師の怒りをかったその行為は、該当者が少なくない数に及んでいたため、クラス全体の共同責任、という形にされてしまった。

授業は急遽延長、休み時間に突入し、課題を忘れたものにはさらに倍に近い追加課題が課され、加えて全員に別の課題も義務付けられる。上がりかけた不満の声は、教師の視線と声に押し潰された。

そして、

（あ、あつあ、あつ、で、でちゃうつ、でちゃうツ！！ んんうツ、……つと、トイレえ……ツ、オシッコでちゃう……ツ！！！！）

有咲はとうとうトイレに立つこともできないまま、教室内は帰りの会へと我慢の延長戦に突入していた。尿意はいや増し、いまや数十秒に1回の大波が押し寄せてくる。そのたびに下着に滲む熱い感触が、おしりの方にまで拡がり出していた。

授業が終わったことが唯一の救いではあるが、クラスメイトの前で恥も外聞もなく我慢をできるはずもない。両手を机の下に突っ込んで、スカートの上から恥丘をぎゅっと握り締めては、椅子の上で腰を左右にくねらせ続ける。

膝までくっついた脚は机の板に当たるように引き寄せられ、つま先が床板を繰り返して擦る。

重ねて脚の付け根を押さえ込んだ両手の指の中に、いまにもはしたなく激しい音を響かせ、熱い水流を勢い良く送らせてしまいそうになるのを必死に堪え、有咲は息を潜めて、一刻も早く解放されることを心待ちにしていた。

（っ、っ、トイレ、トイレっ、トイレはやくオシッコ、オシッコっ……！！ はやくして、はやく、漏れちゃう、漏れちゃうんだからッ……が、ッ我慢できなかったら、ぜんぶ、先生のせいなんだから……ッツ！！）

もはや耳にタコができるほどに聞き飽きたインフルエンザの注意を繰り返すクラス担任が、親の敵のようにすら見える。

（はあ、はあっ、はあっ、んうっ、んくう……ッツ！！）

下腹部が熱を持ち、じりじりと高まってじいんと響くむず痒さは、許容量を超えてうねり、ずしんと重く排泄孔に押し掛かる。磨耗した括約筋は細くこじあけられ、じわ、じゅわ、と股布に熱い雫を吹き上げている。そのたびにぷくりと膨らむ湿った布地は、いつまで経っても熱く、冷えることはなかった。

もはや乙女のダムに詰まっているのは液体ではなく、灼けた砂のようだ。

意識はおぼろげで、教師が何を話しているのかも良くわからない。茹だった頭の中では思考能力も無いに等しく、有咲は自分がどこに居るのかも分からなくなり始めていた。

そして、

「起立、礼っ」

「っ！！！！」

ほとんど無意識のうちに号令に従って立ち上がり――

気付いた時には、有咲は教室を飛び出していた。指に引っかかった鞆を後ろに残し、風のように廊下を蹴って昇降口の階段へ。

そこが、この1時間近くにも及ぶ死闘の間、有咲が焦がれ続けた待望の、女子トイレ――悪魔の尿意から自分を解放してくれる聖域だ。ほぼ全速力で走るため、これまで全身全霊で耐えてきた我慢がわずかながらも疎かになり、さらには激しい移動の衝撃と姿勢を変えたことでの重力によって、これまでとは比べ物にならない規模で下着に被害が広がってゆく。

一歩ごとにじゅわ、しゅう、と水音を立て、股布をぷくりと膨らませては太腿にこぼれ始める恥水を感じながらも、有咲はどうにかトイレの目の前にたどり着く。

だが――

そこでは、すでに着替えた生徒達が清掃を始めていた。

「ちょっと、何？ 掃除中よ？」

今日の担当は、上級生である青色リボンの高学年。切羽詰った様子丸出しで駆け込んできた有咲を、入り口に居た彼女達が迷惑そうに見つめる。

「あ、あの、と……トイレを――」

「聞えなかった？ 掃除中。終わるまで待つて」

取り付くしもない、とはまさにこのことだろう。

入り口に立てた古びた『清掃中』の看板の後ろへと、体操服に着替え、掃除用具を手にした上級生たちが消えて行く。

(う、嘘！！ だめ、待ってッ！！ もう、もう間に合わないのにつ！！)

その最後の一人を呼び止めて、有咲は声を振り絞った。すでに下半身は秒読み段階、だん、だん、と上履きが交互に打ち下ろされ、有咲は限界の“乙女”を抱え込んだまま、前屈みになってその場で足踏みを始めてしまう。

「あ、あのっ、お願いしますっ、ちょ……ちょっとだけでいいですから、っ、使わせてくださいっ！！ も、もう我慢できなくてっ……」

恥をかなぐり捨て、我慢の限界を訴える有咲。しかし、上級生は眉を寄せ、

「……うーん……あのさ、無理そうなら別のトイレ行ってくれないかな。ちょっと今日、消毒とかもあるし」

ね、と手を合わせ、最後の望みだった彼女もトイレの中へと入って行ってしまふ。そうしてトイレの入り口に取り残された有咲だが——しかし、待望のトイレを目前にして、少女の身体が諦めきれぬわけがなかった。我慢の限界などもう何十分も前に超えている。他のトイレまで回り道している余裕などないのだ。

「っ、あ、あっ、あ」

「ちょっと！？ ねえ、いま、ここ使えないって——」

いきなり中に入り込んできた下級生に、上級生たちがぎょとする。

みるみる色を変え始めているスカートを両手できつく握り締め、ふらふらとトイレの中に踏み込んできた有咲の足元に、激しい水音と共に水流が飛び散り出したのだ。

「あ、あっあ、っああっ」

じゅうう、じゅじゅじゅじゅっ、

ばちゃばちゃばちゃっ、じょじゅじゅうううっ……

「きゃあ！？」

「っ、ちょっと何やってんのあんたっ！？」

「っだ、あ、と、トイレ、お、っ、オシッコっ……」

目の前の個室のドアに飛びつきながらも、有咲の下半身は本格的な排泄を始めていた。張り付いた下着が響かせる水音に呆然となり、ドアノブを握り締めたまま、その場に中腰になった有咲は、下着を下げることもスカートをたくし上げることもできず、トイレの床の上にオシッコを始めてしまう。

湯気を立てそうに熱い恥水は、溜めに溜め込まれていた勢いのまま、ホースで水を撒くように激しく足元に飛び散り、床のタイルに大きく拡がっていった。

「あ、あっ、あ、あっ」

力なく、ドアノブを握る有咲の腕ががちゃがちゃと鍵を擦る。

あと数分でも早ければ、きちんと然るべき場所で処分されていたはずのオシッコは、トイレではない場所に激しく撒き散らされる。スカートをブリーツが分からないほどにぐっしょりと染みさせ、脚を伝ってソックスを水浸しに、上履きの中に弾って溢れ落ちるオシッコは、なお勢いを弱めない。

ひくひくと収縮する排泄孔からは、感じたこともないほどの快感が少女の背筋を這い上がる。軽く力を籠めるだけで、ぶじゅっ、と猛烈な飛沫が下着にぶつかり有咲の腰を包み込む暖かさがじんわりと少女の意識を蕩かせてゆく。

「あ、っ、あ、あっ、あーっ……」

異様な緊張感から一転、解放への落差は少女を忘我の域に押し上げていた。左右に揺すられていた腰がびくんと跳ね上がり、弛緩する下半身と共にゆっくりと下に落ちてゆく。しゃがみ込んでしまった有咲の足元でますます激しく噴出したオシッコは下着を通過してひとまとまりに地面にぶつかり、じょぼぼおお、とまるで男の子のオシッコにも近い派手な水音を響かせる。

我慢を強いられていた分色も濃く、女の子の強い匂いをさせる液体は留まるところを知らずに床を滑り、トイレの半分近くを汚しながら隅の排水口へと流れてゆく。

「はああ……ああ……、んうつ……」

耐えに耐え続けた排泄の解放感は、有咲に我を忘れさせるほどに甘美だった。それがたとえオモラシという最悪の結果だったとしても、放出の快感が少女の腰をふわりと浮かせるような陶酔をもたらし、蛇口の壊れたような排泄の勢いをさらに加速させる。

スカートの下、張り付いた下着をたっぷり自分のオシッコで、剥こうが透けるほどにびしょびしょに濡らしながら、大切な場所はぷくりと膨らんで、熱い飛沫をクジラの潮吹きのようにぶじゅう、と何度も何度も吹き上げる。

いつしか排泄孔はジンジンとむず痒くも甘く痺れ、あれだけ硬く締め付けられていたのが嘘のようにすっかり緩みきっている。細い孔から吹き出す水流は全身を熱くさせ、ここがトイレではないこともいまや有咲の頭からは抜け落ちてしまっていた。

あまりにも下品な音を響かせ、琥珀色の水たまりのうえに深く腰を落とし。みんなが使う女子トイレの床一面をひとりで使いきって、有咲はオシッコを続ける。

目の前で盛大すぎるほど盛大にオモラシを続ける少女を取り囲みながら、動けない上級生たちも、まるで夢の向こうのように現実味がない。

「はああああ……」

激しくのたつ水流は、女子トイレに有咲の匂いをたっぷりと立ち込めさせる。蛇口につながれたホースの水ではなく、有咲のオシッコが、掃除されるはずのトイレの床一面をどうしようもないくらいに黄色く汚していた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 怪しい投稿雑誌風味
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小ネタ
CATEGORY: 小ネタ

DATE: 01/05/2010 23:00:01

BODY:

怪しげな有料専門サイトみたいな方向性を狙ったもののえらく的外れな気分。

※）フィクションです。実在の人物とは一切関係ないことをくれぐれもお忘れなく。

<hr size="1" />

« 1 »

（写真：あいり.jpg）

さあ、今回お届けする『はじめてスクープ』は、××県〇〇市にお住まいの御咲あいり（みさきあいり）ちゃんの“はじめて”の日です。

あいりちゃんは今年で３年生になった女の子。

最近、妹が生まれたばかりのおねえさんです。

（写真：姉妹.jpg）

３年生ということは、もう立派なおとなの仲間入りですね。

今回は、そんなあいりちゃんの、ドキドキの『お花摘み』の瞬間をはじめてスクープです！！

 （写真：野シヨン表紙 03.jpg #加工、下半分トリミング）

<i> ##念のため某法案対策済み</i>。

 続きを読むにはこの下 ↓をクリック！

EXTENDED BODY:

« 2 »

今日はあいりちゃん、お友達と一緒に、△△農園にやってきました。

あいりちゃんはお花が大好きで、毎週水曜日に、お母さんと一緒にフラワーアレンジメントの教室に通っているそうなんです？

だから、みんなと一緒にお花でいっぱい△△農園にお出かけの今日は、とっても心待ちの日曜日でした★

……でもあいりちゃん、なんだかさっきから、ちょっと様子がおかしいようですよ？

 （写真：我慢 01.jpg）

そう、あいりちゃん、ここに来るまでの高速道路の長ーい渋滞で、すっかりおトイレに行きたくなくなってしまっていたのです。

【へいきだもん！】

 （写真：サービスエリア 01.jpg）

（写真：サービスエリア 02.jpg）

（写真：サービスエリア 03.jpg #トイレ行列風景これのみ）

途中のサービスエリアでの休憩のときは、まだ全然平気だったおしっこ。

ほかのみんなは行列のおトイレに並びましたが、あいりちゃん、なんとこのときもおトイレには行っていません！！

 （写真：我慢 01b.jpg）

そのせいでいまはすっかり、おなかのなかがおしっこでたぶんたぶんです。
車の中でジュースを飲んじゃったのも良くなかったのかもしれないね★

 （写真：ジュース 01.jpg）

だからあいりちゃん、さっきからきよろきよろそわそわ、おトイレを探してばかりです。キュロットの脚はぎゅっとくっついて、おしりも小さくもじもじ、もじもじ。

 （写真：我慢 03.jpg）

ずうっと車の中で待たされていたお友達は、みーんなようやく到着した目的地におおはしゃぎ。あいりちゃんの手を引いて、お花畑のほうに走り出そうとします。

さあて。あいりちゃん、ちゃんとみんなに『おトイレ』が言えるでしょうか？

 （写真：トイレ前 01.jpg）

ほらほらあいりちゃん、そんなに下を向いてちゃ、みんなにははっきり聞こえませんかー？
あいりちゃんは、どこに行きたいのかなー★

……おやおや。あいりちゃん、そっちに行っちゃっていいのかな？ おトイレは反対側ですよー？

 （写真：トイレ前 02.jpg）

あらら。とうとうあいりちゃん、見えないようにおしりの方から、ぎゅーっとキュロットの付け根を押さえてしまいました。
もうおしっこが出ちゃいそうなんです★

 （写真：我慢 04.jpg）
（写真：我慢 05.jpg）

ちらっ、ちらっ★

【おトイレ、行きたいなあ……】

 （写真：トイレ前 02b.jpg #加工済み）

あいりちゃん、何度もおトイレを見ているんですが、いくら待っていても残念ながらおトイレは向こうからはやって来てくれません。
どうやらあいりちゃん、お友達にちゃんとおしっこを言うのが恥ずかしくて、おトイレに行けないみたいです★

【がまんするもん！】

 （写真：トイレ前 02c.jpg #他の素材に差し替え？）

そうですね、あいりちゃんはもうオトナだから、ちゃんとお花畑で遊んでいる間もガマンできますね★
さあ、それじゃあお花畑に向かいましょう！

 （写真：我慢 06.jpg）

あいりちゃんのはじめての「お花摘み」、レッツスタート★

<hr size="1" />

« 3 »

【うわぁ、キレイだねー！】

 （写真：花畑 01.jpg）
（写真：花畑 02.jpg #モザイク、目線追加）
（写真：花畑 04.jpg #背景一部修正済み）

みんなとっても楽しそうですね★
ずっとせまい車の中だったから、もう遊びたくて仕方がなかったのかなー？

 （写真：花畑 05.jpg）
（写真：花畑 06.jpg）

お花畑のじゅうたんででんぐり返し♪
うまく回れたみんなに、拍手ー★

 （写真：我慢 07.jpg）

でもあいりちゃんは、さっきからずーっと、みんなからはなれて立ったまま。
ぎゅっ、ぎゅっ★
おまたのところから手が離れません。

 （写真：我慢 07_拡大.jpg）

おやおや？ ちょこっとキュロットのおまたのところに染みが見えますね？
あいりちゃん。暑くて汗をかいちゃったのかな？ それとも……？

【おトイレ……おしっこ……】

 （写真：トイレ探す 01.jpg）

あいりちゃん、おしっこが出ちゃいそうです★
みんなに気づかれないように、そおとまわりを見回すあいりちゃん。でも、ちかくにおトイレはありません。

ざーんねん。ここのおトイレは、入口のところにしかないのです♪
さっき行っておけば良かったのにねえ、あいりちゃん。

【おトイレ、したいよう……】

 （写真：トイレ探す 02.jpg）

さあ、あいりちゃん困ったぞ。おしっこしたいけどトイレがない！！

ど・う・す・れ・ばいいのかな★

……あいりちゃん、もうおとなだから、わかるよね♪

<hr size="1" />

« 4 »

【あつ、あつ。】

（写真：トイレ探す 05.jpg）

正解は、『おトイレ行きたいです！』ってせんせいに言うこと。

でも、はずかしくて、あいりちゃん、とうとう走り出しちゃいました。

それもおトイレの反対側、どんどん、どんどんお花畑の奥のほうへ——

（写真：トイレ探す 06.jpg）

あれれ。こんなところで立ち止まってとうしちゃったのかな、あいりちゃん？

もぞもぞ、ぎゅつ、ぎゅつ★

キュロットをぎゅつと握りしめて、あいりちゃんもいよいよ限界みたいですな♪

【おしっこが、出ちゃうよお！】

（写真：我慢 10.jpg）

どうやら、オトナなのに、おしっこがガマンできなくなっちゃったあいりちゃん。

さあ大変です、このままじゃあいりちゃん、オモラシしちゃうね！

どうしようかな★ どうしようかな★

（写真：我慢 12.jpg）
（写真：我慢 12b.jpg）

なんともなんともまわりを見まわして、あいりちゃん、そおとキュロットを脱ぎはじめました。

【んっ、よいしょ、よいしょ……】

（写真：下着脱ぐ 03.jpg #拡大加工）
（写真：下着脱ぐ 05.jpg #追加で修正？）

あいりちゃん、いよいよここでドキドキはじめての「お花摘み」タイムです。
足踏みしながら、よいしょ、よいしょ。
おしっこが出そうなのをガマンしながらじゃ、ぱんつを下ろすのも大変です★

【おしり、つめたいよお……】

（写真：下着脱ぐ 08.jpg）

お花摘みでは、虫よけ対策を忘れずに！
スプレーなどで、お肌をしっかり守りましょうね★

【お、おしっこ……】

（写真：しゃがむ 03.jpg）

さあ、かわいいおしりが見えてきました。
いよいよあいりちゃん、「お花摘み」初体験！

【きゃあ！？】

 （写真：中断 02.jpg）

あれれ、あいりちゃんどうしたの？！
せっかく準備ができたのに、またぱんつをはいちゃいました。

 （写真：中断 04.jpg）
（写真：中断 05b.jpg）

……どうやら、すぐ近くにワンちゃんがいたみたいです。
いちもくさんに走り出しちゃったあいりちゃん。
あれ、あいりちゃん、お花摘みは？ いいのかなー？

<hr size="1" />

« 5 »

あいりちゃん、ワンちゃんは苦手だったみたいですね★

 （写真：移動 08.jpg #ピンボケ差し替え？）

おおあわてで逃げ出したあいりちゃん。
でも、なんだかおかしいぞ？

【ああ、あつ、あつ……でちゃう、でちゃう……】

 （写真：チビリ.jpg #地面拡大）

ぼた、ぼたっ……★

なんとあいりちゃん、走りながらおしっこが出ちゃっているみたいです。
地面にばた、ばた続くおしっこのあとを追いかければ、すぐに、ほら♪

【も、もうだめ、おしっこでちゃう！！】

（写真：移動 08c.jpg #加工修正）

さあ、やっと準備したのに、遠回りになっちゃったあいりちゃん、ワンちゃんから離れてる間に、ずいぶん長い寄り道になっちゃいました。

ずっとガマンで、すっかりふらふら。

（写真：移動 09.jpg）

あいりちゃん、こんどから、こういうときはワンちゃんにもご挨拶しようね★
“わたし、ここで今から「お花摘み」するから、待っててね！”ってね★

【あ、あう…】

（写真：下着脱ぐ 08.jpg）
（写真：下着脱ぐ 09.jpg）

さあ、今度こそもう一度、あいりちゃんの「お花摘み」スタート！
しゅる、しゅるるう。ぽたぽたぽたっ★
おしっこをチビリながら、すこしずつそーっとそーっと優しく、ぱんつを脱ぐあいりちゃん。
そうそう、あせっちゃダメ★ いそぐともおしっこが出ちゃいますからね♪

【あ、あつ、でちゃってる、だめえ…】

（写真：しゃがむ 03.jpg）

そのまま、ゆっくりしゃがんで……そうそう、おうちじゃなくて、学校でおトイレをするのと同じですよ★

さあ準備できました。

あいりちゃん、はじめての「お花摘み」です。

【じょじょっ、じゅじゅう…しゅるるっ】

（写真：放尿 03.jpg）

（写真：放尿 05.jpg #モザイク追加）

（写真：放尿 06.jpg）

【じょろおおおおおおお……】

（写真：放尿 09.jpg #目線位置修正）

（写真：放尿 10.jpg）

【じょぼぼぼぼぼぼぼ……】

（写真：放尿 14.jpg）

（写真：放尿 16.jpg #修正追加）

ほーら、とっても大きな水の音！！

見てください。まるで噴水みたいです★

【じょぼぼぼぼぼ……じょろおおおおお……】

（写真：放尿 17.jpg #補正あり）

（写真：放尿 20.jpg）

あ〜っという間に、あいりちゃんの足元には大きな水たまりができちゃいました。

これ、ぜ〜んぶあいりちゃんのおしっこです★

こんなにいっぱい、あいりちゃんのちっちゃなおなかのなかに、おしっこが溜まってたんですね♪

（写真：放尿 22.jpg）

（写真：排泄あと 02.jpg #）

（写真：排泄あと 06.jpg #差し替え？）

とってもガマンしてたんだねー、あいりちゃん？

ハンカチで拭いて、おしっこおしまい！

【……でちゃった……】

（写真：後始末 04.jpg）

（写真：シミ 03.jpg #拡大加工？）

（写真：シミ 05b.jpg）

ちょっとぱんつも汚れちゃったけど、

あいりちゃん、はじめての「お花摘み」大成功！！

（写真：あいり 05.jpg）

カラフルなお花の中で、すっかり真っ赤なあいりちゃんの赤面スマイル♪

おうちに帰ったら、ぱんつを洗わなくちゃね〜！！

（写真：あいり 08b.jpg）

あいりちゃん、はじめてを、ありがとう★

<hr size="1" />

【はじめてスクープ編集部よりあいりちゃんへ】

「あいりちゃん、はじめての「お花摘み」はどうだったかな？

だれかに見られちゃうかもってドキドキしたかな♪

女の子なんだから、ちゃんとみんなにも『おトイレ』を言えるようになろうね！

あとは。ハンカチじゃなくて、ポケットティッシュも持つようにすると、お気に入りのハンカチをおしっこで汚さなくて、もっとよかったかもね★」

 あいりちゃんの使ったハンカチを、抽選で1名の方にプレゼント。
宛先は以下の通り——

（初出：2010/1/5 書き下ろし）

 ……悪意はないのだろうけど、「はじめてのお花摘み」とか「はじめてのお花見」とか、どうもあのキャプションは狙ってると思えない。

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 放課後待ち合わせの話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 02/12/2011 21:32:40

BODY:

みずたまり WEB サイトさんリスペクトの習作。

ツギハギ劣化コピーになってしまった。

<hr size="1" />

『——放課後、中庭で待っています』

まだ年も明けて間もない1月の朝。紺野若葉の新学期は、上履き入れに入っていた折り畳まれたメモに書かれたそんな言葉で幕を開けた。

紺野若葉は、クラスの中でも特に目立ったところのない少女だ。自分でそんなナレーションを入れてしまうほどに、成績も中の真ん中。部活は週に一度の歴史研究会。委員会活動はしていないし、体育祭でも文化祭でも、注目を集めるような桧舞台に上がった経験もない。クラス全員参加の劇をやれば、大道具のその3かその4。あるいは出番5秒のセリフもない通行人Cあたり。

ふたつの胸のふくらみは、なんでもできる証拠。……ずっとずっと昔の魔法少女がそう歌っていたけれど、自分のさびしいむなもとを眺め、若葉はますます憂鬱になる。夢と希望が詰まっているはずのそこは、クラスの誰よりも憤まじやかだ。

まったく無い、という訳ではないはずだけど、たとえば血迷って上半身裸で男湯に入ってみたりしても、十分くらいは気付かれないのではないだろうか。

小学校に上がる前から、まったく変わらないべたんこの胸を見下ろして、一人こっそり溜息を吐く日々。でもたぶん、自分はそんな感じに、世の中のもっともっと美人でカッコよくて才能のある人たちに主役を譲り、エキストラや印象の薄い脇役や、事によれば舞台袖の観客あたりのポジションを担当しながら生きてゆく星の下に生まれているのだろう。

ずっとずっと、そう思いながら過ごしてきた若葉にとって、このイベントはまさに青天の霹靂だった。

「……これ、って」

何度か手紙に目を落とし、思わず若葉は震える手で目を擦る。まさか、そんな、何かの冗談？ 何度瞬きをしても、指で擦って透かしてみても、素っ気ないボールペンの文字は消えなかった。

かあっと胸の中が訳もなく熱くなり、言葉にできない不思議な気持ちが自然、唇を震わせる。

（——うわ、うわあ）

（——これって、そうだね？ そういうこと、だよな？）

そのままバンザイ三唱して叫びだしたくなるのを堪え、ごくり、と口の中に唾を飲み込む。これまでに一度も、美味しい話を見たことがないわけじゃない。迂闊に勘違いしてがっかりするくらいなら疑い深くなれ。

残る理性を総動員して我に返った若葉は、大急ぎで手紙をポケットの奥に仕舞うと、新年の挨拶を交し合うクラスメイトたちに混じって教室へと向かった。

いつものとおり退屈で長いだけの校長先生の挨拶が延々続いた新学期の朝礼も、お正月番組に感化された担任の先生がくだらない冗談ばかりを連発するH Rの時間も。若葉の脚はちゃんと地面を踏んでいるのかも確かではなく、ずうっとふわふわ宙に浮かんでいるような心地だった。

夢じゃないかと疑って何度もほっぺたをつねり、流して顔を洗ってみたりもしたが、ポケットの中を探ればメモの感覚は確かにそこにあった。

堪え切れなくなったら机の下でメモを開くたび、最初に見た時と同じ、放課後の待ち合わせを告げる素っ気ない14文字（句読点含む）が目に入ってくる。教室の後ろのほうの席で背中を丸めて、若葉は何度も何度もメモをなぞって確認する。

『——放課後、中庭で待っています』

（——うん。うん。間違いない）

（——ないよ、ね…？ うん。ない。ないっらない）

最初はその内容を見るたびにやけそうになる口元を堪えるのに苦慮し、続いてまさかなくしてないだろうかと、30秒に1回はポケットを探って安堵し、次には開くたびに文面が変わっているのじゃないかと不安に思うようになり、最後には内容を吟味しようとノートにそれを書き写してみたりしながら、若葉は新学期の1日目を過ごした。

日直の挨拶と共に帰りのH Rが終わり、クラスメイト達が次々に席を立てゆく。

インフルエンザが猛威を奮っている今年も、明日からはもういつも通りの退屈な授業の日々が始まるが、今日はまだ、冬休みの名残のように半日で授業はおしまいだ。

お休みの最後の余韻を楽しもうと、午後からの遊びの予定を計画しているクラスメイトたちを尻目に、若葉はカバンもロッカーに置いたまま、いち早く教室を飛び出していた。

職員棟を挟んで反対側。ちょうど地図上に「三」の字を描く校舎のうちの下側二つに挟まれた中庭は、冬の季節も手伝って、人の気配はまばら。

隅の日陰には薄灰色に溶け残ったお正月の雪が積み上げられ、ますますあたりの寒さを強めているかのようだった。

はあ、と吐き出した息が真っ白く若葉の視界を覆う。

どきどきと高鳴る胸の鼓動が、まるで全身を包むように若葉の身体はわけもなく熱くなっていた。昇降口でいったん外履きに履き替えて、ぐりと校舎を迂回して中庭に繋がる園芸倉庫の裏手に来る間に、緊張に口の中が乾き、あたまの中は『落ち着け、落ち着け』というぜんぜん落ち着かない無意味な呪文でいっぱいになっている。

ポケットの中で手紙の感触をもう一度確かめて、中身を慎重に読み返し、若葉はそっと倉庫の陰から中庭に視線を巡らせる。

そこに目立った人影がないことを確認し、若葉はほんの少しだけ安堵した。

言葉にできない焦燥と、これからどうしようという困惑と、もしかして勘違いじゃないのかという不安をぐっと押し殺し、若葉はゆっくりと中庭のほうへと歩みを踏み出す。

(——ひょっとしたら、見えないところで誰か待ってるかもしれないし)

(——でも、先に待ってるほうがいいのか)

(——なんか、飛び付いてみたいで、かっこ悪くないかな)

人生永世エキストラの自分にはこんなことの経験なんてあるわけがないし、相談できるような人もいなかったから、若葉にはどうするのがいいのか何が正しいのか全然わからない。

でも倉庫の陰でじっと待っているのも待ち合わせとしてはおかしい気がしたので、若葉はゆっくり、できるだけ自然なふうを装って、中庭をぐりと一周する。

やっぱり、誰もいなかった。

もともと冬場で、並木のようにになっている桜の葉も全部落ちていて、芝生だってすっかり薄い茶色。雪解けのせいで地面も湿り、寝転がるにはよほどの勇気と制服をびしょ濡れ泥だらけにする覚悟が必要だったから、倉庫裏から死角になっている場所なんかほとんどなかった。

それでも念入りに、2回もぐるぐると中庭の中を歩き回って、若葉はまだあたりに誰もいないことを確認する。

(——放課後。……うん。時間、合ってるよね)

(——まだ、H R 終わってないのかも)

(——って言うことは、うちのクラスじゃ、ないのかな?)

ちらと見た腕時計は、もう十分に放課後と言える時間を指している。午前中しか授業がない今日なら、用事がなければ帰宅を始めていい時刻だろう。先生たちだって新年早々から遅いお昼や残業は嫌だろうし、まだ帰りのH R を続けているとなればよ

っぼのことだろう。

あるいは、他にににか急な用事があるのかもしれない。『これ』よりも優先していいことなんかそんなにないと思うけど、でも、たとえば委員会とか、部活とかで、どうしても外せない用事ができたとか。そういうことはあるかもしれない。

そんなことを考えながら、若葉は中庭の木のそばにそっと近寄る。

薄い雲のたなびく空に、枝ばかりを広げる木の幹に背中を預ける。さりげなく校舎側の窓からも隠れるように。

若葉は胸に手を当てて何度も深呼吸する。

ちょっと油断すると、いまにも誰かが校舎の陰から、こちらに歩き出してくるように思えた。

いつときも気が抜けない。緊張しすぎたってよくないだろうけれど、たとえば思い切り気を抜いてぼけーとしていているところを見られたら、やっぱりそれはそれでまずいような気がする。きゅ、と握りしめた薄い胸の奥、女の子らしく早鐘のように高鳴る鼓動はさっきからアップテンポを行ったり来たりだ。衝撃を緩和する胸がないから、そのうち心臓が変になって倒れてしまうんじゃないかと、まるで乙女みたいな思考で若葉は赤く染まった顔をぶるぶると振る。

とにかく、ちゃんと待とう。できるだけ周りに気を配りながら、若葉は革靴の脚を擦り合わせ、はあ、と手のひらに小さく息を吐きかける。

時折、渡り廊下を生徒たちが通り過ぎてゆくのが見える。若葉はそのたびに何度もびく、と背中を緊張させながら、じっと一人、立ち続けていた。

けれども、春や夏ならともかくも、枯れ木だらけの寒い中庭には、この時期誰も興味なんかないので、木陰の若葉には誰も気付いていない。

(——コート、着てくれれば良かったな)

姿を見せない手紙の主を待ちながら、若葉は少しずつ後悔を始めていた。

しんと染み込むような寒さは、お昼近いはずなのにまったく和らぐ様子がない。晴れてはいるものの真冬の低い太陽は、中庭を一日中日陰にしているようで、ただじっと立っているだけで少女の身体はどんどん冷えてゆく一方だ。

とくに足元は、雪がまだ残っているだけあってかじかむほどに寒い。

ぐう、と若葉のおなかが小さく唸り、空腹への抗議をあげる。そう言えば今日の朝は全然美味しくもない七草粥。半分残して出てきたせいもあってか、やけに手足に寒さがこたえる。

指先を擦り合せた手をポケットに突っ込んで握りしめ、靴の中で冷えた爪先にぎゅっと力を入れる。

もともと冬服と呼ばれてはいても、この制服が対応していると言える季節は精々が早春、晩秋までの季節まで。それだけでは、1月の芯の寒さに抗するには厳しい。

登下校の時はこの上に厚手のコートを着ているし、マフラーや手袋だって着けている。ベストだって着こんでいるけれど、けれど今はそれらもなく、じっと木の傍にいて身体も動いていない分、さらに身体が冷えてゆくのだ。

(——んっ……)

ぶるっ、と小さな背中が震える。ぞくり、と腰骨のあたりに膨らみ始めた感覚がじわじわとその勢力を誇示しつつある。

寒さで催した熱いものが、じわりっと若葉の意識の上まで広がってきた。

きゅう、ともきゅん、とも表現できる、『おんなのこ』を急かすむず痒い感覚が、若葉の下腹に重く澱のように溜まってゆく。

小さく唇を噛んで、大きめに息を吸う。

『女の子は腰を冷やしちゃダメなのよ』。お正月に田舎に帰った時にも聞いた、お祖母ちゃんの冬場の口癖がちらりと若葉の頭を掠めた。マッサージ器を一番弱くして脚の付け根に押しつけた時のような、熱っぽい痺れが徐々に頭をもたげてくる。

(——トイレ……)

ますます冷える身体がぶると震える。鼻奥にすん、と寒さを吸いこむ。

一方の足にもう一方を擦りつけ、爪先で地面をつつく。もじもじと交互に擦り合わされる膝とともに、若葉ははっきりと尿意を自覚した。

振り返ってみれば、今日はすっかり舞い上がっていて、学校に来てから一度もトイレに行っていない。渡り廊下と二つの校舎に挟まれ、コの字型になった地面の上には、雪を溶かさない寒さが満ちている。

もぞ、と動かした腰の感覚が、下腹部の張りを感じさせた。おへその下の方に感じる強張りは、その奥に溜まった熱い液体の存在感を強めていた。いつの間にか弱火で沸騰を始めたような気配が、下半身をゆっくり侵略してゆく。

スカートの下から染み込む寒さは、膝下の靴下一枚ではとても防ぎ切れず、ふくらはぎと腕のあたりにぽついぽつと鳥肌が立つ。ぎゅっと寄せ合った太腿の奥で、下着の感触が脚の付け根に食い込んで、女の子のだいじな場所に軽い刺激が響く。

(——トイレ、行きたい……)

「ん、っ、……ふ…」

もももぞと身体を揺すり、姿勢を傾けた若葉の小鼻がぴくと震えた。鼻にかかった吐息がかすかな不快感と、腰骨にじんわり広がるくすぐったいトイレの予兆を訴える。

さりげなくスカートの上からおなかに触れた手に、空気を入れすぎた自動車のタイヤのような感触が帰ってくる。ざわざわと小さく波打つおしっこが出口の閉ざされた若葉のダムの中で水位を増してきているのだ。

こみ上げてくる尿意をただちに解放せんがため、まっすぐにトイレに向かいそうになった若葉の足は、けれど二歩目を踏むことはなかった。ぴた、と靴底が地面に張り付いたように、ポケットの中にある手紙が、少女を寒い中庭に縛り付ける。

踏み出した足でそのまま立ち止まり、その場で小刻みに足踏みをはじめながら、若葉は下腹に膨らむ感覚を散らそうと、小さく腰を揺する。

(——トイレ、行ってる間に、誰か来たら……)

(——待っててくれるかもしれないけど、誰もいないと思って、帰っちゃうかも)

顔もわからない手紙の相手は、けれど若葉の心の中をびっくりするぐらい大きく占めていた。ぺたんこの胸がとく、とくとなお高鳴っている。

そうだ。誰かもわからないけれど、待ち合せている相手を放っておくなんて、いくらなんでも不実だと若葉は思う。

それに。

もし、若葉がおしっこに行っているその間に相手が来ていたりしたら、逆に若葉がその人を待たせることになってしまう。もう放課後のチャイムからかなり時間が経っていて、そんなに遅くやって来たということは、若葉のほう待ち合わせの相手のことなんかどうでもいいと思っているように見えてしまうかもしれない。

もしそうになったら、どうやって説明すればいいのだろう？ おしっこしにいった、なんて言えるわけない。

(——おしっこ、行きたい、けど…)

身体の訴えは、もうそんなに余裕がないことをはっきりと知らせていた。

じん、じん。朝からのおしっこを含んで膨らんだ膀胱が、トイレ、トイレと若葉を急かす。ぐっと脚を交差させ、左右の靴を入れ替えるようにして身体をよじる。それでもどういふ具合か、おなかはぐるぐると鳴っていた。こんなにトイレに近いことなんてなかったように思う。まるで板でも仕込んだみたいに硬くなってしまった下腹をそとさすり、とん、とん、と爪先を動かす。

そのままこの場で、足踏みをはじめてしまいそうだ。少しでも動いていれば紛れはするけれど、立ち止まっているととたんに、おなかの重みがずうん、と身体の奥に響く。

、下着に触れるおしっこの出口に、ぴりぴりっと甘い刺激が電流のように走った。

(——トイレ……)

(——うん。我慢しなきゃ)

膨らむ尿意に揺らぎかけた心。それがまるで、手紙の相手に対する不実のように感じられ、若葉は決意と共にきゅっと脚を閉じ、いちどはだらしく緩み始めようとしていたおしっこの出口に、改めて力を籠めなおした。

おしっこなんかで、自分の心は揺らがない。ちゃんと待って、ちゃんと返事をする。これっきりかもしれない人生の一大イベントに比べれば、こんなトイレのちょっとした我慢なんか些細なことだ。

まだ見ぬ相手への想いで、小さな胸をいっぱい満たし、謂れのない迫害に抗する聖女のような気分で若葉は膨らみかけた尿意をぐっと飲み込む。

慎ましさかさを取り戻したあそことは対照的に、おなかの中にとどまる事を強いられたおしっこが、恥骨の上のダムを押し広げ、一回り膨らんだような気がした。

じわりと嫌な気配が背中を圧迫する。ぐうっと下腹が重苦しくなり、詰まっているものが鉛か何かに変わったような気もしてくる。さっきまで寒かったはずの背中に、いつのまにか薄く汗が浮き始める。

(——大丈夫。これくらい、我慢できる)

言い聞かせるようにそう心の中で繰り返し、若葉はちらりと校舎に視線を向ける。時間もだいぶ過ぎたせいか、廊下の窓を通る生徒の数はかなり少なくなっていた。

けれど、ここで話をするのには、それくらいのほうがきっといい。

一年を通じて日陰が多く、陰気なイメージのある中庭は、春や秋の気候のいい季節意外は学校生活の中でもあまり意識に上らないような場所だ。もっと日当たりのいい屋上や第二昇降口、部室棟なんかもあるから、ほとんどの生徒はお昼休みにもそこを利用する。

若葉たちの教室からは廊下側、2年生の教室と特別教室のある校舎からは窓側に面しているけれど、よっぽど授業中に退屈でもしていなければ校舎からそこを見下ろすようなことはほとんどない。

だから中庭を待ち合わせに指定してきた相手のことを、若葉はたくさんある選択肢の中からわざわざ自分を選んでくれたように感じていた。

たとえ自分ひとりの思い込みであったとしても、若葉はまるで義務のように、それに応えなければならないように思っていたのだ。

(——んっ)

さっき波を堪えてからそんなに時間が過ぎていないのに、また一気に尿意が膨らんできた。脚の付け根が緊張して、頭の後ろが熱いような気分になる。さっきまでとは違う熱っぽさ。

スカートの中で膝が擦れる。寒さと尿意の区別が付かなくなってくる。ふくらはぎが冷たくなり、ぎゅ、ぎゅっと太腿に力が籠る。

こぼこぼと、音を立てて、身体の奥から染み出してくる黄色い尿意の塊が、おなかの中に詰め込まれていくよう。

また一段とぶくん、と膨らむ膀胱が、じりじりと恥骨を刺激する。おなかの中がぐっと重くなり、溜息のように息が漏れる。

ぐ、と小さく空っぽの胃袋が文句を告げる。蠕動する内臓の気配が、はっきりとおなかの中に感じられた。膀胱が過敏になって、普段は気にしたことのない身体の中の反応までを感じ取ってしまうようだった。傾いた体勢を直そうと伸ばした足からも、びくん、とダイレクトに振動が硬く張り詰めた下腹部に響く。

(——おっこ。おっこ)

息を詰めると、きゅん、と膀胱が収縮した。普段意識することもない器官が、大きくおなかの中を占領している。早くトイレに行きたい。水に潜って息を止めているときのように、早く楽になりたいともうひとりの若葉が叫んでいる。

おっこに行きたい。トイレがしたい。

おっこが出そう。トイレに入りたい。

脚が小刻みに震える。じっとしているのが苦痛で、貧乏ゆすりが始まってしまう。おなかの中に詰まった、熱い砂のようにも感じられる何かが、どんどん重くなっておっこの孔の上に押し掛かってくる。

我慢できずに、内股の足踏みを繰り返すその付け根。若葉のおっこが溜まっている袋には、小さな孔が開いている。それも、ちょうど一番下、重力に引かれてものが落ちる、一番底の部分に、おっこを出すための孔が開いているのだ。

それに抵抗するのは、ほんのささやかに出口を締め付ける括約筋だけ。もともと孔の開いている出口付近を左右から締め付けるだけだから、栓としてはあまりに頼りない。けれど、そうして出口が塞がれているものだから、若葉のおなかのなかで、おっこの溜まった部分は硬く膨らむばかりなのだ。

爪先の片方を地面に突き立て、とんとん、ぐりぐりと柔らかい泥を擦る。靴が汚れるけれどやめられない。ぎゅっと握ったスカートの

布地にも大きくしわが寄る。

(——んっ。あっ)

熱い吐息が白い息になる。ぷく、ぷく、と膀胱が膨らもうとする。けれど若葉のおなかの中の入れ物はもうこれ以上なにも入らないとそれを拒絶する。おなかの重さはさらに増し、ちりちりとおへその下に、焦げるような感覚があった。

おしっこしたい。おしっこ、でちやいそう。

激しい欲求が、若葉の決心を鈍らせる。これ以上ないくらいに硬くなった少女の下腹部は、さする指先に硬い感触を返す。浅く早く、深くゆっくり。白い吐息の塊がリズムを変え、左右交互に体重を乗せる脚がひと時も休むことなく姿勢を変える。

けれど、どれだけ試してみても、尿意を抑え楽にするような姿勢は見付からず、おなかいっぱい溜まったおしっこはますます脚の付け根の部分に重くのし掛かる。

いまは、なんとか塞き止めてあるダムの出口も、このまま増水を続けていけば、いつかはひびが入って突き破られてしまう。

少しでも尿意を散らそうと、脚をくねらせ、ぐいっと下半身をねじり合わせる。閉じた脚は、X字を書くようにクロスして、膝と膝裏をくっつけ合わせる。力を籠めた脚の上で、膨らんだおなかがずきと痛む。

(——ん、ふっ、はあっ)

息が荒くなる。顔にずっと赤みがさす。こぼ、こぼ、と次々注がれるおしっこが、若葉の意識を侵食してゆく。

おしっこ。おしっこしたい。おしっこでちゃう。

中庭で待ち合わせのためにおしっこを我慢しているのか、おしっこを我慢するために中庭で待ち合わせをしているのか、混乱した思考がうまくまとまらない。

下腹部の中をすっかり占領してしまったおしっこの袋を、ちく、ちくと太く鈍い針がつつついている感じ。

重い砂袋でも抱え込んでいるように、若葉の背中丸まりだしていた。なんどもなんどもスカートの上の辺りを往復する手のひらに、なだらかにせり出した感覚がある。若葉の身体の中に収まりきらなくなったぱんぱんの膀胱が、ぐうっと制服のなかに膨らんでいる。

せわしない足踏みと共に、それが左右に揺れる。

たぶたぶ、ではなく、ぶるん、ぶるん。

はちきれそうに膨らんで、大きく存在感を増した膀胱、おしっこの袋。確かにそれは砂でもタイヤでもなく、暖かい液体の詰まった袋だった。まるで水風船のように、中身をいっぱい詰めこんだおしっこの袋が、もう膨らめないのにどんどん大きくなっている。

ぱんぱんに張りつめ敏感になった膀胱が、緊張が伝わる胃袋や腸の蠕動まで感じとって尿意を促進させる。ぐるる、と蠢く空腹の音は、そのまま同じだけの尿意の渦を、ダムの内側に引き起こした。

ぷくっ、とわずかの気の緩みを付いて、脚の付け根近くの筋肉の緊張が緩む。たちまちダムのひびの走ったに部分に水圧が押し寄せる、かりりと若葉のおしっこの出口を内側からひっかいた。

きゅん、とおしっこの出口がすぼまりそうになる。

(——あ、やつ、だめっ)

ぐうっ、と。まるで見えない手に真上から押し付けられたように、ぱんぱんの水風船が、足元に向けて押し付けられる。背中の骨が圧迫され、電流でも流されたように衝撃が走る。

膨らみすぎたおしっここの袋が、自重で押し潰されていくようだった。ひく、ひく、と脚の付け根の一番奥にあるおしっここの出口が痙攣し、無理矢理引き伸ばされる。きつく締め付けたはずの水門にじわっと熱い痺れがひろがってゆく。

おしっこ。おしっこでちゃう、漏れちゃう。

あっという間に腰上まで押し寄せたおしっここの波。

押し寄せる高潮の水圧に耐えかね、警報を無視して放水準備を始めたダムをぎゅっ……とスカートの上から押さえこむ。

きつく力を込めたおしっここの出口に連動して、きゅっ、と下着の奥のおしりの孔まで緊張し、びくびくと震えて縮こまった。

ぴいんと硬直した若葉の身体は、そのまま二十秒あまり、動かなかった。

(——……………っ、……)

きわどい所だった。

もう少しでそのまましゃがみ込んでしまいそうになりつつも、若葉はなんとかその場に踏みとどまる。

焼きついたようになっている肺を動かし、深呼吸を繰り返して、緊張をほぐす。いまさらのように、じわあ、と首筋に汗が浮かんだ。熱っぽさは相変わらずだけれど、まるで熱くない。むしろ下半身の感じる寒さはさらに増しているようだった。

これ以上ないくらいに硬く張り詰めた膀胱が、服の上から触れてもはっきり解るくらいに膨らんでいる。ちりちりと焦げるような激しい尿意は、一箇所だけではなくおなかの奥底のほう全体にまで広がっていた。

ぴしゃり、と冷や水を掛けられたように、若葉の頭がすっと軽くなる。

耐え切れないかもしれないなかった尿意の波が押し寄せてきたことで、熱くなっていた頭が冷え、ようやく冷静な第三の視点が自分の状況を見下ろす。

(——と、トイレ。出ちゃう)

おしっここの我慢の限界を悟り、若葉は唇を震わせた。

冷めた頭に、またかあっと熱く血が昇ってくる。

こんな姿で、誰に会えるものか。背中を丸め、泣きたくなるくらいに脚を寄せあわせ、スカートの上から両手で股間を押さえ、おしりを突き出したアヒルみたいな格好。

溜まり続けたおしっこがおなかのなかの小さな袋を膨らませ、いまや下半身のほとんどを占領して、身体の外にまでせり出している。

つん、と鼻の奥が熱くなる。

こんな有様になるまでおしっこを我慢して、いったい何をするつもりだったのか。あたまの中は半分以上おしっことおしっここの我慢とトイレのことでいっぱいだ。たとえ誰かが来たとしても、満足に受け答えもできそうにないのに、なんの意地を張っているのか。

本当は、わかっていた。

こんな手紙なんか嘘っぱちだ。若葉を呼び出した相手なんてどこにもいやしない。ここで待ってたって、誰も来るわけがない。だって、手紙には日付も、時間も、誰からなのかも書いていなかった。

『——放課後、中庭で待っています』

たった14文字の言葉だけに惑わされて、馬鹿みたいだ。

ぐす、と水っぽい音で息を吸い、みっともなさで泣き出したくなるのを堪える。背中を震わせ、若葉は叫びだしそうになった声を飲み込む。

後ろ髪を引かれる感覚を振り切って、若葉は小走りに——それもできなかったので早足で、中庭に背中を向け、歩き出した。高鳴る胸のかわりに、ひっきりなしにうねり、疼くおなかをそと抱えて。

くしゅ、とポケットの中に仕舞っていたメモが握りつぶされる音がする。

こんなくだらないものに半日、ずうっと舞い上がっていた自分が情けなかった。

(——早くトイレ。早くしなきゃ)

戻るまでの道のりは来たときの倍近い距離があるような気さえた。一步ごとにぱんぱんの水風船が上下に揺れ、嫌でも限界近い尿意が意識させられる。

早くトイレ。早くおしっこ。

若葉のおしっこの水風船に向かって、身体の奥から湧き上がった熱い液体が容赦なく注ぎ込まれる。

塞き止められた腰骨の上のダムの上流では、その水位に負けない水圧で、若葉の身体が新しいおしっこをつくり出している。刻一刻と限界許容量に近付く貯水量に、首筋にはしっとりと汗が浮かび、握り締めた手のひらは小さく震える。

もう膨らめないのに、どんどん膀胱の中身が増えていく。

吹けばそれだけ大きくなる風船にだって伸びきる限界があって、それ以上膨らませば、伸びてはいけないうところが伸びてしまう。若葉の膀胱は長い間注がれ続けたおしっこでもう限界近くまで膨らんでいる。

(——おしっこ。おしっこでちゃうよ)

土足で廊下には上がれないので、校舎をぐるっと回って昇降口まで向かう。途中で誰ともすれ違わなかったのが、若葉の右手はぎゅっとスカートの前を押さえたままだ。

こんなの、誰かに見られたら恥ずかしくて表を歩けない。

けれど手を離したらそのまましゅるしゅるうと下着の奥が水音を立てそうで、ぶく、と膨らみそうになるおんなのこの大事な場所を指の先でつく押さえ、歯を食いしばって急ぐ。

昇降口にも、ほとんど人の気配はなかった。時計の針はもう12時を大きく回っていて、かつん、という泥のくっついた若葉の靴音がやけに大きく反響する。

誰もいない。

冷静になってみれば、考える余地なんかほとんどない。

最初から全部、騙されたにきまっていた。

誰だかはわからないけれど、こんなことにろくろく免疫のない若葉は、絶好のターゲットに違いなかった。いまどき子供でもしないような悪戯に、まんまと若葉は引っ掛かったのだ。

朝からずっと浮かれ気分でメモを見返してにやけているところや、滑稽にも相手を思い描いて顔を赤くしているところ、来るはずもない相手を何十分も待ち続けてこの寒い中じっと中庭に突っ立っているところを見て、悪戯の張本人は意地の悪い笑顔をしていたに違いない。

いや。そもそもそんなことにすら興味もなかったのかもしれない。ほんの気まぐれで走り書きしたメモを放りこんだ先が若葉の所だったというだけで、いまごろ悪戯の張本人は、悪戯のことも忘れてどこかで笑っているのかもしれない。

(——っ)

やっぱり、こんな胸のぺたんこな女の子なんか誰も好きじゃないんだ。

かわりに恥ずかしいおしっこで硬く膨らむ下腹部を押さえ、若葉は俯く。

ぐす、と涙の味のする息を飲み込んで、若葉は目元を擦り上履き入れに向かう。下腹部をできるだけ圧迫しないようにかばい、不自然に股間を緊張させたまま、おぼつかない足元でなんとか外靴を脱ぎ——

「えっ」

そこで、息を呑んだ。

上履きが。ない。

一瞬何が起きたか分からず、ぱたんと上履き入れの蓋を閉めて、もう一度開ける。間違いなく中身は空っぽだ。外靴はいま足元であって、さっきまで裸足でなかったのだから間違いなくここに上履きがあったはずだ。

もう一度、ふたを閉めた上履き入れの名前を確認して、再度中を見る。

「……ない……」

今朝のメモの代わりに、誰かが失敬したとでも言うのだろうか。あわてて左右の上履き入れを覗くが、もちろん若葉の上履きがあるわけもなかった。

困惑している間にも、ぶるっ、と若葉の背中が震える。尿意は消え失せたわけでもない。トイレを訴える下腹部の声はさらに激しくなっている。

(——だめ、でちゃう。もう出ちゃう)

ぶるぶる、と腰が震え出す。ギョッと抑えた出口が無理矢理左右に広げられる。ぱちんと破裂してしまいそうな股間の先端を、スカートの布地を握りしめる手のひらがぐいぐいと擦り、押し揉む。

もうこれ以上大きくなれない膀胱が、さらなる中身の追加を拒絶した。押さえ込んだ手のひらに押し返され、焦げるような尿意の逆流がぐうっと背骨を押し上げて、若葉の全身にぶわっ嫌な汗が浮かぶ。

高まる水圧にたったひとつの出口、皮一枚で支えられる小さな孔がぴくぴくと痙攣する。下半身の大部分を占領してなお大きく。おへその裏側ぐらいまで膨らんだおしっここの袋の重量が、おしっここの出口へとしかかる。

圧迫に耐えかねぴくんと押し開けられそうになっただいたいな場所を、若葉の手のひらが押さえ込んだ。

下着の上から直接、おしっここの出口を指で無理矢理閉じ合わせ、揉みしだく。

(——あ、あつ、出ちゃう、出ちゃうっ)

おなかの内側にあきれるほど図々しくスペースをとって居座ったばんばんの水風船が、大きく膨らんで広がった過敏なその表面で、近くの内臓の動きまで感じ取る。過敏すぎるレーダーのようだ。

ぴくん、ぴくん。波打つ下腹部をなんどもなんどもさすり、少しでも尿意を紛らせながら、若葉は靴下の裸足のまま廊下に踏み出した。

おっかなびっくり伸ばした爪先が昇降口を離れると、ひやっ、と氷のように冷たい廊下が、縮こまっていた脚をさらに強張らせる。骨を伝うような冷たさが一気にふくらはぎの上まで到達し、脚の指先が痛み始める。一步ごとに脚先が画鋲でも踏んでいるようだ。「っ、痛、っ」

冷たさよりも痛みが勝る。けれど脚先の冷たさは確実に、若葉の足元からふくらはぎ、太腿、腰上へと這い上る。寒い廊下のひとけのない静寂が、下腹部に痙攣をはじめさせた。

(——も、もうだめ、トイレ。おしっこでちゃう)

上履きなんて探してる暇はなかった。

靴下だけでトイレに入るのには強い抵抗もあったが、もうそんなことは言っていられない。震える脚とへっぴり腰で、下腹部をかばいながら若葉はふらふらと廊下を渡ってゆく。

昇降口のすぐ前、西階段横には1年生のトイレがある。もう目指す場所は目の前だ。

下腹部の中で大きく育った尿意の塊は、さっきここを通った時とは比べ物にならないくらいに少女のおなかを張り詰めさせていた。か細い力だけで支えられている小さな孔が、何度も開きそうになってはぐいっと引き絞られる。

まるで儚い抵抗を碎き、このままダムを突き崩そうとするように、尿意は執拗におしっここの出口をちりちりと焦がす。

おしっこ、おしっこ。

冷たいドアの取っ手に手を触れた瞬間、きんと冷えた冷たい感触に、おしりの孔に冷たいものを突っ込まれたように悪寒が走り、それに連動しておしっここの孔がきゅんっとなすぼまる。

同時に、おなかの奥で膀胱が、ぎゅうっと絞り上げられた——ような気がした。

(——あ、だめ、だめ、でちゃだめっ)

緩みかけた括約筋に、若葉は身体をぎゅううっとひねって、残る力をかき集めて出口を塞ぐ。

歯を食いしばり、今度は胸の近くまで一気に押し寄せたおしっこ波から、なんとか溺れないように脚をきつく閉じ合わせる。

けれど、そんな努力もむなしく、おしっこのすぐ出口のところまで渦を巻いて押し寄せた濁流は、細い出口のところの管をぷくっと膨らませ、若葉の意志に反してじわああ、と熱い雫を噴きこぼした。

吹き出したおしっこが下着の股部分に染みをつくり、すぐに数センチほどの大きさに湿り濡らせてゆく。

「……あ、っ」

足の付け根に感じるぞっとするほどの不快感に、若葉は小さく悲鳴を上げた。

とうとう、チビった。

オモラシの予兆でもあるその衝撃に、激しく打ちのめされながらも——なおも第二波の気配を見せる下腹部に怖気を感じ、可及的速やかな解決を目指して、若葉はドアをひき開ける。

けれど。

ドアを開いた瞬間、目に入ってくるのはトイレの床を水浸しにしている、真っ黒に汚れた水たまり。

(——な、なに、これ)

声を失った若葉の、我慢の身じろぎだけが衣擦れの音を響かせる。

目の前の光景は、夢でも幻でもない。

生徒の手による掃除とはいえ、それなりに清潔に保たれていたはずの、薄いピンクのタイルに彩られたトイレは、一面に真っ黒な水に汚されていた。

どろどろと濁った粘性の汚水は、耐えがたい悪臭を放ってトイレ一面を浸し、飛沫を撒き散らして個室の中まで拡がっている。

靴下だけの裸足で、歩いていけるような状態ではなかった。

「うそ……っ」

下ろしかけた脚が、汚水だまりを踏みそうになり、若葉はあわててそれを引っ込める。それでもわずかに爪先に感じる、不快な湿り気の感触。触れるどころか近づくのも嫌になるほどの、汚辱感。

「……………いや、あ……」

少女の喉の奥から低い呻きが絞り出された。胃の奥に鉛の塊を飲み込んだように、ひゅっと胸の下、おなかの上が冷たくなる。首の後ろに濡れタオルを押し当てられたように、意識にノイズが混じってぶつぶつと途切れる。

個室まで直線距離でおよそ4 m。助走距離はゼロ0 m。金メダル選手にだって届かないような立ち幅跳びの距離。

それを、爆発寸前のおしっこ袋をおなかに抱え、まっすぐ背中を伸ばして立てるかも怪しい、若葉がこなせるわけがない。

明らかな悪意を持って汚されたトイレの前に、ちく、ちくとおしっこの袋の奥に針を飲み込んだように、膀胱が軋む。内側からざくつと出口を押しつける、膨らんだ膀胱の水圧に、若葉の顔が今度こそさあっと青褪めていた。

(——や、やだ、トイレ…………っ)

まっすぐ飛び込むはずだったトイレを、できるはずだったおしっこを、全く前触れもなくお預けにされて、ぎゅるぎゅるっと膀胱がうねり、猛烈な尿意を押し上げる。身体はその場に静止しているのに、意識とおしっこだけが前に突撃していくみたいだ。

耐えきれずに若葉はドアの手摺に手をつく。

すぐそこがトイレなのに。

若葉はここにおしっこをしにきたのに、それが許されない。か細い我慢を突き上げるように、ごろごろとうねる尿意が少女に襲い掛かる。

(あ、あ、だめ、ここででちゃだめ……っ)

いっそ、目の前に広がる汚水だまりにしゃがみこんで、そのまま放尿してしまいたい——そうしたらたぶん、ものすごく気持ちいだろう。我慢に疲れた頭は、そんな普段はあり得ない想像をはじめ、とんでもない誘惑で若葉をそそのかす。

けれど。

いくら限界近くまで切羽詰まっても、出来ることと出来ないことがある。確かにこの惨状ではたとえ実行しても解りはしないだろうが、いつ誰が通るか分からない廊下に面したトイレの入り口で下着をおろし、下半身を丸出しにしておしっこを始めるなんて選択肢は、若葉にはない。

若葉は全身を伸び縮みさせながら、押し寄せるおしっこの大津波をじっとやり過ごす。

はあ、はあ、と大きく肩で息をつきながら、若葉はぎゅっと唇をかんだ。

(——と、とにかく、別のトイレ……っ)

このトイレが使えないのだから、ぐずぐずしている暇はなかった。

きびすを返した若葉は慎重に歩きだす。けれど抜き足差し足のようにゆっくり踏み出した一歩も、張り詰めた下腹部は敏感に感じ取り、新しい尿意を生み出してしまう。甘い痺れのような感覚は、おなかの表面ではなく奥のほうへ伝播し、ぱんぱんに膨らんだおしっこの袋を透過して、出口のすぐそばの底のほうをじいん、びりびり、と振動させる。あそこにぎゅっと力を籠めるたび、ぞわわ、ぞわわ、と何度も背中の方へこみ上げてくる。

わずかな振動が引き金になり、ずっしりと重いおなかの中がぶるんぶるん震える。若葉はもうはっきりと、おなかの中ではぱんぱんに膨らんだ水風船のビジョンをイメージすることができた。

器に水を入れて揺すったときの、たふんたぶんという感覚ではなく、薄い膜でできた袋が、今にも破裂しそうなくらいに中身を注ぎ込んで、端を持って揺さぶっているのと同じだ。

ここから一番近いトイレは、ちょうど階段を一階分登ったところにある2階のトイレ。その次は少し遠くなるけれど、もうひとつの昇降口のところにある。どちらも若葉は使い慣れていない場所だが、今はそんなことを言っている場合ではない。

二階のトイレは直線距離こそ短いが——なにしろ天井を通り抜けて真上に5mも垂直移動すれば届くのだが——いつパチンとはじけてしまってもおかしくないおなかを抱えたまま、上下の階段を昇り降りするのは危険に思えた。

少し遠回りになるが、もうひとつの昇降口まで行こう。そう思い、若葉は廊下に出る。

(——あ、っ)

足元からざばりと押し寄せるおしっこ波。あっという間に膝を越し、腰のすぐ下までやってくる。

寒さと水分の相乗効果でますます活性化した若葉の循環器官は、これ以上中身の入らない袋に、無理矢理液体を注ぎ込むとする無茶をやめてくれなかった。

そして、若葉が懸命におしっこを溜め続けている袋には、その底の部分に出口があるのだ。今は閉じられていても、限界まで伸びきった水風船の出口は、ぎゅっと握った手のひらだけでは抑えきれない。

余裕のない袋に無理に中身を注ごうとすれば、膨らみきった力に耐えきれず、閉じ合わせている出口が膨らみ、ぶくっと開いてしまう。

ダム放水を促すように暴れるおしっこが、わがままを言う子供のように暴れ、ちく、ちく、となおも出口をつつく。

我慢の延長戦の最中、もうできるだけ余計なことを考えないようにしよう、と若葉が窓の外へ視線をやった時だった。

(——だれかいる)

こちらを見られた——という意味ではなかった。

若葉がふと視線を向けた先は、校舎に囲まれた中庭。さっきまで若葉の居た場所だ。

そこに、ぼつん、と制服姿の人影がある。

ちょうど若葉には背を向けていて、誰なのか顔はわからない。クラスメイトかどうかともわからない。知っている相手かもしれないし、知らない相手かもしれない。木陰に立っているのと遠目のせいで、身長もはっきり判別がつかなかった。

ついさっきまで若葉のいた場所で、その子はきょろきょろと周りを見回し、ポケットから携帯を出して時間を確かめている。

(——どうしよう?)

頭の中から吹き飛んでいたはずの、見えない手紙の差し出し主が、一瞬で再構成される。

誰だろう。わからない。ひょっとしたら若葉を待っているのじゃなくて、他の誰かと待ち合わせをしているのかもしれないし、別の用事で来ているだけかもしれない。

でも。

でも、でも。

このまま若葉が遠回りしてトイレに行って、おしっこを終えてすっきり戻ってくるまで、あの子はそのまま、待っていてくれるだろうか？

そうだ。もう放課後になって時間はかなり経っている。学校に居る生徒だってまばらだろうに、なんで今中庭に出てくる必要があるのだろう。普通ならこの季節のあんな場所に用事なんかはないはずだ。

若葉が、あそこで何分待っていたとかは、この際関係のないことだ。

名前も、時間もわからない待ち合わせ。そんな不確実なものは、たぶん悪戯のはずだ。

でも。でも、いま、中庭には確実に誰かが来ている。約束を守ろうとしてくれているかもしれない相手がいることが、こうして分かっ

ているのに、それをほったらかしていいいんだろうか？

だめ、そんなことより早くトイレ！ おしっこでちゃうよ！

若葉の心がそんな悲鳴を上げる。

(——でも)

(——勘違いかもしれないけど)

(——いま行かなかつたら、会えないかもしれない)

そうなればもう、若葉はあの手紙の差出人が誰だったのかもわからないまだ。

後ろ髪を引かれる思いと、可能な限りの全速力でトイレに行きたがっている下半身を、無理矢理意志の力でねじ伏せて。

若葉は再度昇降口に向かって、靴を履き替える。

靴下だけで歩いた廊下の冷たさに、まるで棒のように凍えていた足が、感覚の薄れた爪先で革靴を引っ掛ける。

体を曲げたり、伸ばしたり——ほんのわずかな運動で膨らみきった膀胱が圧迫され、おしっこが出口に押し寄せる。びくびくと痙攣をはじめたおしっこの孔に、またぶくりと熱い雫がたまり、細く押しつぶされた管の中にまで注水がはじまる。じわあ、と下着が滲む。

「あ、あつ、あ、っ」

ほんの数ミリ、ぎゅっ、とスカートの間に深く押し込んだ手のひらのすぐ内側にまで、おしっこの重さを感じる。

じわ、と肌に押しつけられた下着の股布に残る湿り気が、若葉の我慢を激しく揺さぶる。

おしっこ。おしっこでちゃう。おしっこ漏れちゃう。

(——い、急がなきゃ。はやく)

はやくしないと、おしっこでちゃう。

けれど、若葉が向かう先はトイレではない。ひょっとしたら、人生で一番大切なことになるかもしれない、中庭だ。

トイレから引き離されるのを嫌って、若葉の尿意はなお激しくなる。おなかのなかがぐるぐるとうねって、なにか別の生き物が暴れているような気さえた。

もう少し冷静なら、なにを馬鹿ことをしてるんだと自分を叱り飛ばしたに違いない若葉の理性は、もうなにを優先すべきなのかを理解できていなかった。

我慢し続けたおしっこで、溺れそうになりながら——若葉は校舎を周り、中庭へと走る。

ぐるっ、と最後の角を曲がり、中庭に出た瞬間に。

下着の奥に、まるで焼きごてを当てられたような刺激が走った。ぢくうっ、と排泄孔に鈍く重い痛みが走り、おしりの孔までぶくりと盛り上がる。

じわあ、と下着が一気に湿ってゆく。脚の間に熱に包まれ、腰の奥が溶け出すようにうねる。我慢に我慢を重ね続けていた下半身が、勝手にその責務を放棄していた。

真冬だと言うのに吹き出した汗と、耳奥がきーんと痛くなったのと、目の前が真っ白になったのとで、若葉は自分が一瞬、真夏の

太陽の下に放り込まれたんじゃないかと錯覚する。腰の奥、背骨の辺り、身体の芯がじわああ、と熱くなり、下着のなかがぐうっと膨らむ。

これ以上、どこにも膨らめなくなったおしっここの袋が、一番もろい部分を突き破る。

そうして、ずっとずっと押さえ込まれていた出口のホースが一気に解き放たれた。

(——あ、あ、あ)

思考が空転し、自分を襲っている事態が理解ができない。そのくせ若葉の下半身ははっきりと、刻一刻移り変わる事態をセンサーのように感じ取っている。

内股になった脚の合わせ目に、じゅうう、と熱い液体が吹き出してゆく。鈍い痛みを残しながら、むず痒さを入り混じらせた——まるでしもやけになった場所をストーブにかざしたような感覚だった。

ふらふらと揺れた身体が、支えを求めて、中庭の桜の幹によりかかる。前向きに倒れこんだ肩を木の幹に押し付けながら、若葉はぎゅっと握り締めたスカートの股間に、指先がやけどしそうな熱さを感じた。

細く開いた出口から、渦を巻き音を立てて濁流が吹き出す。

股間の先端で弾ける灼熱の飛沫が、腰骨と背中を伝い、若葉をふわあ、と極上の解放感へ押し上げた。

ぐるぐると感じるおなかの重苦しさはそのままに、下半身が震え悶え、激しく暴れ揺さぶられる。

「あ、あ、あつ、あ、う……い、つ、あつ、お、っ」

意味のない途切れ途切れの母音が、ぱくぱくと開閉する若葉の口から意味のない呻きになってこぼれる。開きかけはしていても、長時間の我慢で焼き付いたおしっここの出口は、じゅぶつ、じゅじゅつ、と短く区切るように断続的に飛沫を下着のなかに撒き散らし、スカートをみるみる染めてゆく。

身体の中に閉じ込められたまま、何時間もかけて体温で温められた熱水は、まるでお風呂に浸かったみたいな心地よさで若葉の下半身を覆っていった。ぴたりくっついたまま引きつって動かない内腿の間を、何本も何本も、蛇のようにくねりながら水流が流れ落ち、ふくらはぎを伝って、革靴の中に注ぎ込まれてゆく。

冷え切った爪先が溶け出すように熱い。氷のような廊下を歩いて、冷たくなった足先に、じわああ、とおしっここの熱が滴ってゆく。

しゅうう、じゅうううう……

直接地面を叩いているわけでもないのに、はっきりとおしっここの音は響いていた。

下半身だけ熱いシャワーを浴びているような気分。

少しだけ大きめの靴をすぐにいっぱいにしてかかとからあふれ出すおしっこは、若葉が体をひねるたびに下着の奥でぶじゅつ、ぶじゅつとひしゃげた蛇口みたいな音を響かせた。とうとう力尽き、完全に開ききったおしっここの出口から、信じられないほどの勢いでおしっこが飛び出し、木の根元ににばちゃばちゃと広がってゆく。

あれだけ大きく硬く膨らんでいた、おなかのなかのおしっここの袋が、あっという間に萎んでゆく。溜まり続けていた中身を残らず撒き散らしながら。

(あ、ああ、あ……)

断続的なものも含めると、合計 2 分半もかけて。

一滴残らず、最後の最後までおなかのなかのおしっこを出し切ってなお。ぽた、ぽた、ひちよん、と足元に滴り続ける水滴の音を聞きながら、うっとりと目を閉じたまま、若葉は強いられ続けた我慢からの開放に心を許していた。

ぬかるむ地面に広がる水溜りは、近くの灰色の雪を少しずつ、溶かしては広がってゆく。

あったけの熱と中身を吐き出して、おなかの中で、すっかり空っぽになったおしっこの袋は、さっきまでの図々しさをすっかり忘れたように、慎ましやかに小さくしぼんで若葉の体の内側の所定の位置におさまっている。

ずぶぬれの下半身には、もう最初のころのような焼けるほどの熱さはない。けれど、冷たい足をすっかり暖めてくれた熱はしっかり残っている。

じんわりと火照る肌に、濡れて張り付く制服が、まるで自分を抱きかかえてくれているようで、その心地よさに濡れた腰をぶるぶると震わせながら——若葉は熱い吐息をこぼす。

「あ……ん」

とく、とく、と、胸の奥で高鳴る鼓動がリズムを刻む。

熱くなったそこは、さっきまでよりもほんの少し、やわらかくなったようにも感じられ、若葉はそっと、制服の胸を木の幹に押し付ける。自分でもびっくりするような可愛い声が出て、若葉は思わずぼんやりと目を開く。

頬が熱く、額にはしっかりと珠のような汗が浮かび、前髪を数本、頬に貼り付けている。

ずぶ濡れの下半身は、おしっこをすっかり出し終えてなお、まだ熱く火照っていた。

おしっこまみれの押さえた手のひらの中、濡れた下着に脚の付け根がぐちゅ、と擦れる感覚は、尿意とはまた別の、じんわりとした甘い痺れをもたらして、若葉は口の中に浮かんだ唾液の珠を、啜るようにこくと飲み込む。

「……んう、…ふ、」

ぐちゅ、と濡れる下着をもそもぞと指で押さえ、若葉はぼうっと、熱に浮かされた頭で身体を起こす。

そんな若葉から、少し離れた場所で。

一人の生徒が、硬直したまま立ち尽くしていた。

中庭の木の幹にしがみついての、盛大きわまるオモラシを、特等席で一部始終、あますところなく見せてくれた少女に、ただただ言葉を失って。

振り向いた先にその姿を捉え、若葉の意識が、ざりっとノイズを挟む。

「あ……」

どくん、どくん。
はっと目を見開く若葉の胸で、高鳴る鼓動が、きゅっと引き絞られる。
うるさいほどに響く心臓の音が、ひときわ大きく、どくんっ、と震えた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 受験の朝の話
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 01/25/2010 22:23:14

BODY:

空は、あいにくと薄曇り。お陽さまも雲の向こうに顔を隠し、冬の寒さをいっそう際立たせているかのよう。

学校指定の制服の上から、コートとマフラー、黒のタイツ、それに親指以外がひとまとまりになったミトンの手袋を着け、真新しい雪の降り積もった白い道路の端を、河野未希は慎重に歩いていた。

「はあ……っ」

わずかに荒い息が、少女の口元を白く染める。

昨夜のうちに降り止んだ雪は、塀の上にも5センチほど積もっている。もともと温暖で雪の少ないこの市では、雪なんて降ってもすぐ溶けてしまい、せいぜいが校庭や空き地をうすうす覆う程度の泥混じりのものがほとんどだというのに、どういう具合か今年は珍しく2回も積雪が観測されていた。

未希も、こんな雪はまるで記憶にない。

まるで粉砂糖を振りかけたようにデコレーションされた町並みは、穢れなき純白に染まり、見慣れた光景をいつもの数倍は美しく彩っている。滅多にない冬の贈り物を実感しながら、晴れ間を待ってその雪景色を堪能するのでもいいのかもしれない。

しかし、それも時間の余裕があればのこと。外に出かけなければならない用事があれば、どんなに綺麗だろうと雪など邪魔なものではないし、それが一生を左右しかねない受験の当日ともなれば、事態はさらに深刻だった。

「……………もっ」

積もった雪に足を取られそうになり、未希は思わず文句をこぼす。コートに手袋の重装備は、いつも使っている鞆をやけに重く感じさせた。

受験生が滑るだなんて、縁起でもない。一面真っ白の道路を苦々しく眺め、未希はぐっと奥歯を噛み締める。

朝からの雪になんとなく落ち込みそうになる心を奮い立たせ、未希は電車が運休になってはいないことを確認し、いつもより十分ほど早く家を出た。

だが。

受験会場まではバスと電車を乗り継ぐ予定だったのだが、まず最初に辿り着いたバス停では10分待っても一向にバスがやって来ず、ようやく到着した車内はもう誰も乗れないくらいにぎゅうぎゅう詰めで、乗車待ちの列にいた人たちはは半分以上、次のバスを待たされる羽目になってしまったのだ。

「……なんなのよ、本当に……っ」

半年以上も準備を続けてきた今日この日が、まさか会場にたどり着くのにも困難な一日になるなんて、不運にもほどがある。星占いなんか信じたこともない未希だが、今日ばかりは神頼みだってしたい気分だった。

とうとう痺れを切らした未希は、何人かの乗客たちと共にそのまま駅まで歩くことを決めた。駅までは15分も歩けば着くはずだが、しかし、馴染まない雪道は駅へ向かおうとする未希の足取りを重くするばかり。

「っ……」

マフラーを巻いた首元にもしっかりと凍み込んでくる寒さに、吐き出した息は蒸気機関車のように白く冬の気配を染める。

何年か前にスキーに行った時の雪用のブーツを引っ張り出してきたはいいものの、そもそもロクに雪の中を歩いた経験のない未希には、転ばないようにするので精一杯。いつもならほんの十数分で辿り付けはるはずの駅前の大通りまでの道程がやたらに遠い。

焦る気持ちとは裏腹に歩みははかどらず、時間は恐ろしく早く過ぎ去ってゆく。

(うそ、もうこんな時間……っ)

腕時計の文字盤では、たっぷりあったはずの時間の余裕がかちかちと進む秒針に根こそぎ刻み取られ、いまや乗るつもりだった快速にも間に合うかどうかぎりぎり、といった状況だった。

まあ、仮に快速を乗り過ごしたとしても、まだ即・遅刻ということにはならないはずだが——ニュースになってはいなくとも雪の朝の電車が本当に時間通り動いているかの確証はない。そして、なによりも大事な受験当日に時間ぎりぎりに会場に駆け込むのは、さまざまな意味で避けたいことだった。

じやり、とブーツの底がまだ真新しい雪を踏む。

もともと雪の少ない地域だけに、町内会にも道路の雪かきなどの習慣や分担もない。地面に落ちた雪はそのまま溶け消えるに任せるのが常だった。それゆえ、未希の歩く道もまっさらなまま、降り積もった雪が覆っている。

「っ、う……」

雪国の出身者にしてみれば、どうということのない積雪。

しかし、雪道を歩き慣れていない少女にとっては、ただか数センチの雪でも想像以上の障害となる。足元を取られながらの道行きはいつもの倍以上の時間をかけて進む必要があった。

ただでさえ制限時間付きの駅までの旅路は、悪路によってさらに少女の心を焦らせる。

……そして、未希の焦燥感を煽り立てている理由はそれだけではない。

また踏み出したブーツの靴底が、ずる、と雪の上を滑る。

「きゃ、っ！？」

慌てて踏ん張ったタイツの足が、車の轍に踏まれて半分溶けかかったシャーベット状の雪を跳ねあげ、ふくらはぎに泥染みをつくる。

内股になった少女の腰を震わせ、未希の頬にかあつ、と朱を含ませる。

息を詰め、手袋の指先で鞆の持ち手を何度もこするように握りしめ、空いた方の手のひらはスカートの上から太腿を押さえる。防寒のために穿いた黒のタイツの膝は、膝丈のスカートの下でこまかく震えていた。

（は、はやくしなきゃ……っ）

ちら、ともう一度時計の文字盤を見下ろし、徐々にふくらはぎに広がってゆ雪解けの冷たさに口元を引き絞り、可愛い眉をきゅつと寄せて、未希は先を急ぐ。

しかし、その太腿は忙しなくすり合わされ、膝から上はまるでぴったりと閉じ合わされたように不安定だ。

（……お、おしっこ……っ）

昨夜から、未希は体調を崩していた。試験前日の緊張や、ここ数週間の追い込みで十分な睡眠時間を取れていないことも理由だろう。わけもなく小さなほうのトイレが近くなり、昨日、一昨日は1時間に何度もおしっこをしにトイレを往復するようなこともあった。特に紅茶やコーヒーなどを飲んでいるわけでもないのに、形にならない緊張感が下腹部に澱み、胃袋が内側から圧迫されているかのよう。

何もしていなくとも、身体が勝手に水分を絞り出してゆくような感覚は、今もなお続いていた。

まだ日も昇らない——どころか、半分深夜といってもいいような時間に目が覚めてしまったのも、トイレに起きたためだ。幸いにしておねしょなんてことはなかったものの、かなり際どいものだったのも確かだ。朝からそんな事が続いていたため、未希はすっかり疲れはててしまっている。

それから眠れないままベッドに横になり、ごろごろと寝返りをうってぼんやりと朝まで過ごし——暖房の効いた部屋で朝食を取るころにはいくぶん落ち着いたかに思えたのだが、家を出、雪道を歩いているうちに、その寒さを呼び水にしてか、またもごろごろと下腹部に尿意が膨らみはじめたのだった。

(あ、っ、だめ……っ、と、トイレ、トイレっ、はやく……っ)

家を出て少しのところでそれに気付きはしたものの、バス停を前に引き返す気にもなれず(その時はまだあんなに待たされるなんと思ひしなかった)、そのまま進んだのがいけなかった。

ほんの十数分で加速度的に膨らんだ尿意は、いまや少女の最優先事項になるまでにその勢力を拡大していた。まるでこぼこぼと音をたてるように、未希の下腹部にはおしっこが注ぎ込まれている。

コートは着ているものの、下半身は制服のスカートにタイツだけ。ポケットのカイロはわずかな熱を発してくれてはいるものの、思うように下腹部でうねる切羽詰った感覚を和らげるのには不十分だった。

ここから駅までの道程にトイレはない。コンビニがあるのは丁度線路を挟んで反対側で、そこまで回り道をしていると、おそらく確実に電車を乗り過ぎてしまう。駅の構内にも確か公衆トイレはあったはずだが、この時間は清掃をしているはずで、入れるのかどうかはよく分からない。

「は……っ」

しかし、そんな事情などお構いなしに、未希の身体は早急な尿意の解放を訴え続けている。深々と染み入る寒さでますます下半身の事情が切迫し、その欲求はさらに苛烈なものになっていた。

不安定な足元が雪を踏むたび、不用意に力の籠った腰骨にじんと疼きが響き、少女の体内に閉じ込められた熱い液体がくつくつと沸騰する。

慣れない雪道を内股で、膝を擦りあわせながらでは急ぐこともままならない。下半身を占領した尿意は、いつダムを押し破ってもおかしくないほどに猛烈なものとなっていた。早くトイレを済ませないと、駅までだって保たないかもしれない。

——人一倍、羞恥心の強い年頃の少女にそう思わせるほどに。

(ど、どうしよう……トイレ……本当に、我慢できない……っ)

すでに未希の身体は音を上げ、限界を訴え続けている。数歩進んでは立ち止まって、ゴム鞠のように身体を縮め、伸びあがっては腰をねじる未希の様子からもありありと窺えるほどだ。

タイツの腿が忙しく擦り合わされ、硬く張り詰めた下腹部は一刻も早くトイレに駆け込むことを要求していた。

しかし、この近くにそれを叶える場所はまったく見当たらないのだ。

「あっ……」

どうしていいか分からないまま、焦るばかりの未希に、容赦なく尿意の波が襲いかかる。

押し寄せてきたおしっこの波が、一気に少女の足首からふくらはぎを乗り越え、腿の上まで水位を増す。ちりちりと脚の付け根が疼き、膨らむ尿意は下腹部からその底の部分、股間の先端まで駆け下ってゆく。

「あ、っ、ま、待って、えっ」

たまらず前かがみになった未希は、ぎゅっと揃えた脚の付け根を手袋の手で押さえ込んでしまう。スカートの後ろが持ち上がり、身体を前傾にして背中を丸めた少女の肩が、ぷるぷると小刻みに震える。

ぐるぐると渦を巻く下腹部の水圧に対して、出口を締め付ける力は頼りなく、少し気を抜けばそのまま脚の付け根に熱い雫を吹き出してしまいそうだ。閉じ合わせた太腿の奥には、いまもじわりと熱を感じる。

指先を大きく制限された手袋では、微妙な力加減のコントロールすら難しい。

(だ、だめ、でちゃう……っ)

閉ざされた出口をこじ開けるべく、未希の身体の内側から執拗にノックを繰り返す恥ずかしい液体。少女の体内で煮詰められ

たおしこはさらにその尿意を増し、おぼつかない足元を責めなぐる。

懸命に耐える未希の抵抗もむなしく、ぶくり、と膨らむ尿意はそのまま押さえ込んだ手のひらの奥にあふれ出した。じわあ、と一気に下着に熱い感触が広がってゆく。

「あ、あっあっ！！」

タイツの外まで滲みかねないおチビりに、息を荒くし、腰を前後に揺らして、未希は声を上げた。それ以上の崩壊をなんとか食い止める。

脚の間に手を押し入れ、激しく揉みしだく——年端もいかない少女が路上で見せるには、あまりにもはしたない姿。

「あ、あつ、あつ」

小さく開かれた桜色の唇が、悲痛な声を響かせる。

もはや少女の限界は時間の問題だった。

（と、トイレ。おしっこ、おしっこ……っ、だめ、でちゃう、我慢できないっ！！）

とうとう音をあげ、未希はさっと辺りを見回すと、近くの交差点からこれまでの進行方向とは90度離れた場所に見える駐車場へと方向転換する。

すでにちゃんとしたトイレを探している暇もないことは、未希の身体が一番理解していた。わずかな足元の刺激にも反応して、何度もしわ、じわ、と下着に熱い雫を吹き上げる下半身は、駅どころか一番近い商店までも間に合いそうにない。

寄り道をしていれば電車に乗り遅れる、などというレベルはとっくに過ぎていた。

オモラシかどうかの瀬戸際が、少女のプライドと羞恥心を打ち負かす。

未希は必死に歯を食いしばり、まだ誰も踏み荒らしていない道路の端を進み、古びた駐車場の入り口を目指す。

駐車場——そう。少しでも人目につかないところを——スカートをたくし上げ、下着を下ろして、女の子の大切な場所を露にするための、排泄場所の最低条件として、他者の視線を遮るのに路上よりもほんの少しだけマシだというそれだけで、もう未希には十分だったのだ。

前かがみの前押さえ、その姿勢を崩すことはとっくにできなくなっていた。スカートの上から、手袋で脚の付け根を握り締めたその姿勢のまま、鞆すら取り落としそうな有様で、未希は駐車場の敷地の中へと足を踏み入れた。

「は、あ、あう……んぐう……っ」

“そこ”に辿り着いたそれだけで、瞬間的に、ぶるぶると、寒さに震える小さな身体が不要な水分を残らず絞り出してしまおうとする。塞き止めていなければならない水門は、勝手に緩み、黒いタイツの隙間にはすでにはっきりと、あふれ出した熱水の痕跡が流れ始めていた。

ここに来て下腹部をさらに膨らませる尿意が、未希から冷静な思考を——こんな場所で、女の子がしてはいけないはずの行為に及ぼうとしていることへの警鐘を掻き消してしまう。

じやり、じやり、と摺り足のブーツが雪を掻き分ける。内股になった足を上げることもできず、未希の足跡はソリが走ったように等間隔の溝を新雪に深々と刻んでいた。

それも、まっすぐ滑るのではなく、少し進んでは停止し、その場で立ち止まってぐりぐりと地面に両脚をねじりつける、その仕草まで

をはっきりと記録したような有様だ。

「あ、あつ、あ、だめ、あ、まだっ、ダメっ……！！」

じゅ、じゅう、しゅるるうっ、

また未希の命令を無視して勝手に開き始めた出口が、タイツの内側にじわあっと、大きな染みを広げる。最初は駐車場の一番奥——壁際の物陰を目指していた未希だが、すでに少女の下半身はそこにたどり着くための余裕すら残していなかった。

「あ、あう、あつ、あつ」

初めに、激しい尿意を感じてからわずか十五分。かつて経験したことすらない異常な排泄欲求が、この上ないほどの加速度で一気に少女の下半身を侵略した。

じう、じゅうじゅっ、じゅうううっ

股間のタイツの合わせ目を震わせ、ぬるぬると熱い水流が一気に噴き上がる。熱のこもった水流が股間から脚の付け根、お尻にまで広がり、さらに太腿から膝裏まで侵食してゆく。

前を押さえ込んだスカートに色濃い染みが広がり、手袋にもじんと熱いものが染み込み、お尻のほうまでもが水溜りの上に転んだような水浸しとなってゆく。

脚を伝ういくすじもの水路はあっという間にブーツまで到達し、さらにぼた、ぼた、と白い雪の上に黄色い雫が散った。

「いや、あああつ」

悲痛な声を絞り出して、未希はまさにオモラシをはじめてしまった下半身を引きずり、そのまま一番手近に駐車してあった二台の乗用車の隙間に倒れこむようにして身体を丸めた。

（も、もうダメ、っ、我慢できない、こ、ここでっ、！！）

もう選択肢は残されていないかった。どうしようもない。そう思い、未希は鞆が汚れるのも構わずに放り出し、スカートを引っ張り上げて下着を下ろそうとする。

が、親指以外がひとまとまりになった毛糸の手袋では、細かい作業することは叶わない。物を挟むことくらいしかできない手袋の指では、ずぶ濡れで肌に張り付くタイツをうまくひき下ろすことができなかった。

じゅ、じゅうう、じゅじゅじゅじゅじゅ……っ

焦る間にも、未希の下半身は、ますます熱い水流でずぶ濡れになってゆく。

「あ、ああ、いや、だめ、だめ……っ」

意味のない拒絶の言葉がむなしく響く。下着とスカートの保水力を超え、タイツ越しに吹き出した水流が、勢いもないまま雪の上に溢れ落ちてゆく。新雪を色濃く染める少女のおしっこは、無垢な雪の上にいくつも孔を穿ち、湯気を立てて駐車場の雪を溶かしはじめていた。

無理やり引っ張ったタイツに不均一な力がかかり、伝線して少女の肌を薄く覗かせる。ほとんど半狂乱になった未希が、すでにび

し濡れのタイツをようやく膝上まで引き下ろしたところには、足元どころかブーツの中までもぐっしりとおしっこが染み渡っていた。

「あ……っ」

露になった股間が、濡れたまま外気にさらされ、ひんやりとした寒さにきゅうと収縮する。それと同時に、ようやく遮るものが全てなくなった少女の出口、細いたてすじを覗かせる白い股間から、激しい勢いで水流がほとばしる。

布地越しのそれとはまるで勢いの違う琥珀色の水流は、雪の上にほぼまっすぐ、直線状に叩きつけられて、一気に湯気を吹き上げた。

激しい水音と主にじゅじゅじゅっじゅ、と積もる雪には深く穴が開き、その縁を薄黄色に染めながら足元の雪を溶かしてゆく。

少女の体内温度と同じ……およそ40℃弱の熱水にかかっては、薄く積もった雪などあっという間に消えうせ、未希の足元はほとんど地面のアスファルトを覗かせた。

溶け出した雪はそのまま傾いた路面を流れ、ますます地面の孔を大きなものへと変えてゆく。

むき出しになったアスファルトを叩く水流はびちびちと泥交じりのしぶきを跳ね上げ、未希のブーツやタイツ、スカートにまでをも汚し、跳ね染みを散らしてゆく。

「はああああ……っ」

しかし、当の未希はそんな悲惨な状況を拡大してゆく下半身には意識を回せる余裕もないまま、排泄の甘美な開放感に夢中になっていた。最後にトイレに行ってからまだ数時間も経っていないというのに、未希のおしっこは量、勢い共に標準的な少女のものをはるかに上回っている。

駐車場の外からも半分丸見え——どころか、車の間からむき出しのお尻を覗かせて、盛大におしっこをしているその姿を、幸いなことに目にする者はいない。

未希はそのまま、雪の上で心ゆくまでおしっこを続けてしまう。

「あ……う」

遠くから見ても目につくほど大げさな湯気を立て、なおも激しくじよばじよばと地面に撒き散らされては白い処女雪を陵辱するおしっこは、まったく止まる気配がない。身体じゅうの水分がそのまま流れ出しまっているかのようだ。

ぶる、ぶる、と小さく腰を波打たせながら、未希のおしっこは激しくアスファルトの上を打ち、いよいよ広く雪を溶かして一面に広がってゆく。

駐車場の一角で長い長いおしっこが終わり、積もっていた雪をすっかり溶かされてあらわになったアスファルトの上で。

ようやく我に帰り、未希が濡れたタイツと汚れたスカート、水浸しの鞆の中でぐちゃぐちゃになった受験票、さらに台無しになった手袋とブーツの冷たさにを呆然と見下ろす頃には。

冬の朝の時刻はさらに進み、快速に間に合う最終リミットをとくに通り過ぎていた。

(初出：書き下ろし)

 ……駐車場の展開が某所に似てしまったかもしれない。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 習作・1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 02/17/2010 22:38:25

BODY:

「宇宙ヤバイ」のコピペが元ネタ。

というかまったく原型がない。

<hr size="1" />

(……やばい、と、トイレ……本当にやばいかも……っ)

こみあげてくる尿意はいよいよ凄まじいものとなり、刻一刻と限界へ近づいていた。

ほとんど余裕のなくなった下腹部の欲求をを必死にかばいながら、憂は焦る心を抑えつけ先を急ぐ。

もう十分近く歩いているはずなのに、記念館の灰色の屋根は相変わらず遠く、一向に近づいてきたようにすら感じられない。

市営のグラウンドを二十倍したところではるかに及ばない広大な敷地の中には、のどかな風景が広がっており、本当にここが都内なのか疑いたくなるほどだ。

これが鬱蒼と茂る森の中でなら迷った可能性を疑うこともできるが、見晴らしのいい草原と高い空、どこまでも続くサイクリングロードが、少女に厳然たる事実——最も近い建物まで、まだ1キロ近く距離があるということ突き付けてくる。

（っ……うあ……だ、ダメっ、やば……やばい、って…）

スパッツの上からぐいっと引っ張った体操着の前側を、両手で足の付け根に押しつけるようにして、人目憚らぬ“オシッコ我慢”の姿勢のまま、憂はおぼつかない足取りでサイクリングロードを進んでゆく。

一体何坪あるのか数えるのも馬鹿らしくなりそうなほど広大な敷地は、へっぴり腰のよちよち歩きではもはや無限に等しい広さにすら感じられた。

「んあんっ……」

ぶるぶる、と少女の腰が震える。石のように張り詰めた下腹部で尿意が膨らみ、閉じ合わせた太股が激しく擦り合わされる。ちりちりと焦げるようにむず痒い“イケナイ感覚”は、今にもぶくりと花開きそうな足の付け根の少女の秘所のすぐ傍まで押し寄せてきていた。

「はあ、はあ……っ、はあっ……つくう……んんう……っ」

股間にきつく重ね当てられた手のひらが、ぎゅうぎゅうと大切な場所を握りしめる。

（な、なんで……っ、こん…なに、トイレっ、と、遠いの、よ……っ）

女の子にとって、野外での試合でのトイレは死活問題だ。まして普通の選手よりも雑務の多い憂は、ほぼ丸一日試合会場を離れられないことだってある。恥を忍んでチームメイトにお願いし、なんとか抜け出したトイレ休憩だというのに——この絶望的なまでの距離に、憂のこころはすでに挫けかけていた。

最初は10分もあれば戻ってこれる位置にある事務棟のトイレを使うつもりが、故障していたためさらに公園の反対側の記念館まで遠回りを強いられてしまったことも想定外だった。

「んう……んああっ…あう……っ」

思わず力の籠る両手の指に引っ張られ、体操着の背中側が持ち上がり、わずかに白い背中が覗いていた。

限界に近いオシッコをぱんぱんに溜め込んだ憂のおなかは、硬い手ごたえとともに身体の外側にせり出していた。スパッツのゴムが下腹部に食い込み、“おあずけ”を食わされたままなお激しく高まり膨らむ尿意をさらに加速させる。

足の付け根を押し揉むように撫でながら、猛る尿意の大波を必死になだめ、少女は身体を硬直させ、はあはあと荒い息を繰り返していた。際限なく高まるオシッコの波は、膀胱の許容量や憂の意志など無関係に膨張を続けている。

また大きな波を一つ乗り越え、のろのろと進み始める憂。

しかし、どれだけ必死に我慢していたところで、少女の身体が堰き止めておける恥骨上のダムの容積には限界がある。有限のそれを超えた瞬間、限界まで伸び切った少女の体内の水風船は、溜まりに溜まった中身を残らず絞り出してしまうだろう。

そんな想像によってまたきゅんと疼き始めた下腹部をさすりながら、憂はサイクリングロードの分かれ道に差し掛かる。

「……っ、フェンスの外側って……ど、どこなのよ？ ……そんなの、全然見えないじゃないっ……」

先ほど受けた説明では、記念館まではフェンスに沿って進まないとさらに遠回りになるということだった。しかしそんなものはどこを見渡しても目に入らない。

本当にこっちでいいのか、もしかしてやっぱり迷ってるんじゃない——いくつかの逡巡が、少女の脳裏を占めてゆく。しかし他に尋ねる相手すらなく、憂はただ一人、諦めて進むことしかできなかった。

「……く……あう……んんう……」

ぶる、と足元がすくむ。

まだ春先、薄曇りの今日は北風も冷たく、気温は15℃前後。半袖の体操着とスパッツだけではいささか心許なく、また汗に湿った服は容赦なく憂の体温を奪い、身体を冷やしていった。

きつく押さえ込んだ身体を中心にも、その寒さはゆっくりと染み込んで、ますます限界を近づかせてゆく。

ひとけのない公園——そしてあまりにも遠いトイレまでの道のり。

(も、もう……やっぱり、ここで……？ ……っ……だ、だめ……そんなの……でも……っ)

憂の心の中では、このままどこかに腰をかがめてスパッツを引き下ろし、オシッコをしまおうとする本能に忠実な自分と、女の子の羞恥心が激しく綱引きを繰り返していた。

(こんなの、我慢できない……やばい……よおっ)

限界を訴える下半身の欲求に従おうとしてしまう身体を支え、太腿を何度もこすり合わせながら、ここでトイレを済ませることの言い訳を探しては、何度もそれを打ち消して、少女は激しい葛藤を繰り返す。

何も気にせずこのままここで堂々とおしっこができるくらい、小さな子なら良かったのに——

(だめ、そんなこと考えちゃ……もうちょっと、あと少しなんだから……我慢、頑張らなきゃ……っ)

そんな事を考えてしまいながらも、憂はくじけそうになる自分の心を必死に励まして、よろよろとサイクリングロードの先へと進んでいった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

■宇宙ヤバイ■

ヤバイ。宇宙ヤバイ。まじでヤバイよ、マジヤバイ。

宇宙ヤバイ。

まず広い。もう広いなんてもんじゃない。超広い。

広いとかっても

「東京ドーム20個ぶんくらい？」

とか、もう、そういうレベルじゃない。

何しろ無限。スゲー！なんか単位とか無いの。何坪とか何㎡とかを超越してる。無限だし超広い。

しかも膨張してるらしい。ヤバイよ、膨張だよ。

だって普通は地球とか膨張しないじゃん。だって自分の部屋の廊下がだんだん伸びてったら困るじゃん。トイレとか超遠いとか困る

っしょ。

通学路が伸びて、一年のときは徒歩 10 分だったのに、三年のときは自転車で二時間とか泣くっしょ。

だから地球とか膨張しない。話のわかるヤツだ。

けど宇宙はヤバイ。そんなの気にしない。膨張しまくり。最も遠くから到達する光とか観測してもよくわかんないくらい遠い。ヤバすぎ。

無限っていたけど、もしかしたら有限かもしれない。でも有限って事にすると

「じゃあ、宇宙の端の外側ってナニよ？」

って事になるし、それは誰もわからない。ヤバイ。誰にも分からないなんて凄すぎる。

あと超寒い。約 1 ケルビン。摂氏で言うと -272°C 。ヤバイ。寒すぎ。バナナで釘打つ暇もなく死ぬ。怖い。

それに超何も無い。超ガラガラ。それに超のんびり。億年とか平気で出てくる。億年て。小学生でも言わねえよ、最近。

なんつっても宇宙は馬力が凄い。無限とか平気だし。

うちらなんて無限とかたかだか積分計算で出てきただけで上手く扱えないから有限にしたり、f と置いてみたり、演算子使ったりするのに、

宇宙は全然平気。無限を無限のまま扱ってる。凄い。ヤバイ。

とにかく貴様ら、宇宙のヤバさをもっと知るべきだと思います。

そんなヤバイ宇宙に出て行ったハッブルとか超偉い。もっとがんばれ。超がんばれ。

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 習作・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 02/17/2010 22:41:13

BODY:

アメリカ人のバーベキューが元ネタ。
まったく原型がない。

<hr size="1" />

……そうね、外国の女の子のトイレの迫力って、凄まじいものがあるわね。
留学してた時に、ルームメイトの子たちにバーベキューに誘われて……
その時にどうしてもオシッコがしなくなっちゃって、でもがトイレが近くなかったのよ。
それで、気は進まないけどお外で一緒にオシッコしちゃったのよ。

それで、その子たちのオシッコを……見ちゃったんだけど。
まず量がすっごいの。信じられないかもしれないけど、本当にリットル単位よ。
私も、もう限界で我慢できなかつたら、そのままお外でオシッコしちゃったんだけど……
隣の子がそれを見てね、
「なあに、あなたそんなちょっぴりでおトイレ行きたがってたの？」
みたいな顔されるの。
さすが慎みの国ね、おトイレもささやかなのね、可愛いわ。……みたいな感じがしら。

……でも絶対、あの子たちよりも私のほうがずっと我慢してたし、辛かったわ。
せいぜい500ミリリットルくらいだけど、本当にもう限界だったのよ。
あの子たちは全然平気そうな顔してたのに……オシッコ、ほとんど色もなくて透明だったわ。

それでね、見た目はすごく小さくて可愛い女の子たちなのに、
ぜんぜん恥ずかしがらないでパンツ脱いじゃうの。
ちょっと意地悪な子とか、澄ましてるルームメイトも一緒だったわ。
普段は礼儀とかいろいろうるさい寮長まで、気にしちゃダメとか言うのよ。
女の子がお外でオシッコしちゃってるのに……
……あれってちょっと信じられないわ。

うん、それでね。その……音も、すっごくて。
あんまり人のいない公園の茂みだったんだけど、遠くからでも聞こえちゃうくらいなのよ。
じょおおおーっ！！ って、地面に穴が開くくらいのすっごい音。

あんなに勢いよく出しちゃったら、跳ねちゃって服とか汚れちゃうんじゃないかって心配になるくらいだったわ。
……いくらなんでも、ねえ？ ちょっと気にした方がいいんじゃないかなって思ったわ。

それでね、何回も言うけど本当にすっごくい量なのよ。
みんな揃ってもう、どれだけ我慢してたのかって思うくらい。
それも、全員で競争してるみたいに一齐に……だもん。
蛇口からホースで水をまいてるみたいだったわ。
地面が池になっちゃうんじゃないかってくらい。
転校したばかりの私もいるのに、全然気にしないんだから……
……本当に恥ずかしかったわよ、もう……

終わるのにもずいぶん時間もかかったと思うの。みんなすっごくい量だったから……
私のなんかとくに終わってたのに、全然気にしてくれないし……
それで、私が先に後始末して、ちょっと離れてたらね、
「どうしたの？ オシッコしないの？」
なんてティッシュ渡しながら聞いてくるんだもん！！

それからね、5人でたぶん……合計して5リットル以上、オシッコしたあとに、
みんなでダイエットコークとか、カロリーオフのビールまで飲んじゃって……
まだ学年も下の小さな子まで
「今日はあたしも飲んじゃうわ！！」
なんて言うのよね。
でもたぶん、みんなお酒も飲みなれてると思うわ。そうでなきゃあんなにオシッコ出ないと思うし……

で、バーベキューに戻ったんだけど……しばらくしたら一緒に行った子の一人が、
「ちょっとまたオシッコしたくなっちゃったかも……ねえ、またトイレいかない？」
なんて言ってくるの。……そんなこと言われても、まだ1時間も経ってないのよ？
それに、トイレじゃなくてお外でおしっこしてるのに……
遠くから見てもまだ、さっきみんなでしたオシッコが水溜りになってるのによ？ 信じられる？

誰かが
「もうこんなにお腹ぱんぱん」
なんて普通に言ったら、他の子が
「まだ我慢できるわよ。」

なんて答えるし…

ちよつとついていけなかったわ。あんなに簡単にお外でオシッコしちゃうなんて……

うん。あなた達も、海外でおトイレに行くときは気をつけた方がいいかもね。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

■アメリカ人のバーベキュー

まあ、アメリカ人のバーベキューへの思い入れは凄まじいものがあるからな。
海外赴任中に取引先のデブに、ディナー奢ったお礼に誘われて、嫌々行ってみたんだが、
まず肉が凄い。キロ単位で塊で買ってくる。手土産に持ってた肉をみて「それじゃ足りないよ、
貧乏人」という顔をする。Eノミツクアニマルはいつまでも肉食には慣れないらしい、みたいなの。
絶対、その肉 4 キロより、俺が買ってきた肉 500g の方が高い。つつうか、それほぼ脂身じゃねえか。
で、デブが肉を切る。やたら切る。不良風のデブ娘とデブ息子もこのときばかりは親父を尊敬。
普段、目もあわせないらしいガキがダディクールとか言ってる。郷ひろみか？ 畜生、氏ね。
鉄板も凄い、まず汚ねえ。こげとかこびりついてる。洗え。洗剤で洗え。つつうか買い換えろ。
で、やたら焼く。焼いてデブ一家で食う。良い肉から食う。ゲストとかそんな概念一切ナシ。
ただただ、食う。デブが焼いて、デブがデブ家族に取り分ける。俺には回ってこない。畜生。
あらかた片付けた後、「どうした食ってないじゃないか？」などと、残った脂身を寄越す。畜生。
で、デブ一家、5 扣くらい肉を食った後に、みんなでダ イエットとカリカットのビールを飲む。
「今日は僕も飲んじゃう」とかデブ 息子が言う。おまえ、酒どころか絶対薬やってるだろ？
デブ 娘も「ああ、酔っちゃった、あなた素敵ね」とか言う。こっち見んな、殺すぞ。
デブ妻が「太っちゃったわね」とか言って、デブ夫が「カリゼンだから大丈夫さ」とか言う。
アメリカンジョークの意味がわかんねえ。畜生、何がおかしいんだ、氏ね。

まあ、おまえら、アメリカ人にバーベキュー誘われたら、要注意ってこった。

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 習作・3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 02/17/2010 23:03:56

BODY:

元ネタは○○○出ますうのコピペ。

ある意味原型はある……のだろうか。

<hr size="1" />

（ああっ……も、もう…駄目…っ）

とうとう綾乃は音を上げた。折り曲げた背中、手すりを握りしめ、後ろに突き出された腰、太ももの付け根をぎゅっちり押さえ付けた手のひらがわなわなと震える。

外から丸見えのガラス張りの階段の踊り場で、尿意に屈しそうになる可憐な少女のあられもない姿を、雑踏の人々がじっと見上げていた。

「んう…はう、んあ、ああああっ……！！」

じゅ、じゅっ、じゅううううう……っ

熱を帯びた喘ぎ声とともに、少女の脚の付け根の奥で恥ずかしい熱水が溢れ出す。

股間の先端から噴き出す水流は、瞬間に皺の寄ったスカートを侵食し、股間をきつく握りしめる手のひらの周りに大きな染みを広げてゆく。

（い、いやあ……っ！？）

自分の身体がしでかしたことが信じられず、綾乃は必死に腰を揺する、が、もはや決壊したダムをそんなことで塞き止められようはずもない。たっぷりと水を吸って湿ったスカートは腿に張り付き、薄く肌を透けさせてゆく。湧き上がる乙女の羞恥の泉が勢いよく水流を進らせるたび、純白のスカートを滝のように薄黄色い染みが流れ落ちてゆく。

(い、いや……私、こんな……こんなにいっぱい、で、出ちゃって……ッ、お、おしっこ……っ)

とうとう“お粗相”を始めてしまった自分のみっともない姿が眼前のガラスに映り、綾乃は悲鳴をあげそうになる。

ガラスの向こうでは今にも飛び付かんばかりに人々の視線が押し寄せている。好機と欲望に満ちた視線が、悶える少女の身体を無残に切り裂いてゆく。

そうしている間にも、ますます緩む排泄孔からはいよいよ本当の勢いでおしっこが噴き出し、下着に激しくぶつかって、まるで蛇口にハンカチをかぶせたかのようなぐもった音を立て始めていた。爪先立ちになって震える足元には、すでに水たまりが広がり始め、ばちゃばちゃと降り注ぐ雫が跳ね散ってゆく。

ぶじゅっ、じょおお、じょあわああ……

「あ、あ、あっ、あ……」

蒼白になった少女は、酸欠状態のようにぱくぱくと口を開閉させ、言葉にならない声を繰り返すばかりだ。まるで下半身が全く別の生き物になってしまったかのように、溜まりに溜まったおしっこを絞り出してゆく。

(だ、だめ、おしっこ出ちゃう、おしっこでちゃうう！！！)

激しく吹きあがる水流がほとばしるたび、途方もない解放感が甘い痺れを伴って少女の下腹部を走り抜ける。耐えに耐え続けた我慢の限界から解放されて、下着にぶつかりお尻を包み込み、閉じ合わせた内腿を流れ落ちてゆくおしっこが、下半身を余すところなくずぶ濡れにしてゆく。

なんとか排泄を食い止めようと必死になる綾乃は、ますます腰のくねりを大きくさせ、結果そのたびにぶじゅ、じゅじゅう、と下着に水音を響かせてしまう。

じゅじゅう、ぶしゅっ、じゅじゅじゅじゅうううううう。

恥骨を突き抜ける熱い衝撃と共に、ひときわ大きく噴き上げたおしっこが、スカートの内側を一気に侵食してゆく。がくがくと震える足に力が入らず、手すりを握りしめたまま腰が沈む。

……とうとう綾乃はガラスの方を向いたまましゃがみ込んでしまった。

(いやああ……ッ！？ み、見ないで、見ないでください……っ、お、お願い、お願いしますっ……)

少女のスカートの奥が大胆に露わになり、その奥で黄色いおしっこに侵食されてゆく太腿や下着までもが衆目に曝された。幼い子供がいよいよやるようにかぶりを振ってしゃくりあげる綾乃だが、白昼の大通りに面したビルの2階で披露される、ドレス姿の少女のオモロシは、刺激に餓えた人々にとっては絶好の注視的だ。

足元には次々と野次馬が群がり、ガラス越しに吹き出し飛び散る少女の恥ずかしい液体へと視線を注ぐ。

あろうことか、観衆の中には携帯を広げ撮影まで試みている者たちの姿もあった。

「い、いや……やめて、見ないで……え」

繊細な羞恥心を引き裂かれ、綾乃は喉から悲痛な叫びを押し出す。

少女が彼らの視線から逃れようと身を捻った瞬間、また足元にはばちゃばちゃあ、と激しい水流が溢れ落ちる。必死に押さえ込もうとすればするほど、括約筋は引きつった様に痙攣し、断続的にオモラシを繰り返すばかりだ。

（も、もうだめ、これ以上……っ、が、我慢……っ）

それでもせめて、少しでも衆目にさらされまいと、綾乃はなおも漏れそうなおしっこを必死に押さえ込み、そのままの姿勢でよちよちと歩き出した。お尻を突き出し中腰ガニ股の、あまりにも哀れな姿勢。

踊り場のいちばん近い物影は、階段わきの観葉樹の植木鉢だ。そんな所でも、このまま漏らし続けるよりはほんの少しでもマシに思えた。まるで濡れたドレスを絞っているかのように、両手できつく股間を握りしめ、綾乃は摺り足でそこまで進んでゆく。

しかし、

ぶじゅう、じゅっ、じょあああああっ、

じょ、じょおおおおっ。

「ん、はあ、……あああああ……っ！！」

数歩進んだところで、またも綾乃は堪え切れず、激しくおしっこを噴出させてしまった。指の中にはしゃばしゃと勢いよく下着越しのおしっこが吹きつける。

足の付け根に挟み込んで股間を握りしめたその姿で、その場にくんと腰を落としてしまい、綾乃はまるで揃えた手の器の中におしっこをしているような体制になってしまう。

（や、もうダメ、だめなの……お、おしっこ、もう出ちゃダメえ……っ）

歯をかみしめ、酷使され切った括約筋にありつた力の込めろが、それでもわずかな身じろぎに反応して、じゅう、じゅじゅっ、と熱い濁流の噴出は止まらない。

指の隙間から四方に飛び散るおしっこは、これだけ派手にドレスを濡らしておいてなお、まだまだ綾乃の“女の子”が『出したりて』いない——さらなる“お粗相”を始めようとしていることをはっきりと感じさせた。

（っんああ、んう、お、……おし、おしっこ……お……っ、おしっこが……あ、で、出ちゃ……っ）

もう“我慢”すら無理だとばかり、股間の先端でひしゃげた排泄孔がぶじゅ、じゅじゅうじゅ、じょじょお、と激しくのたうつ水流をほとばしらせる。手のひらの中に熱いおしっこの奔流ををまともに受け止めてしまい、綾乃はまたガラスの向こうの観衆たちに絶好のシャッターチャンスを提供してしまう。

ぶじゅ、じゅう！！　じょろ、じょぼっ、じょばああっ！！

（んあ、っ、……い、やあ……あ、私、こ、こんな処で……お、おしっこ、人がいっぱい見、見てるのに、っ、……お、オモラシ、……おしっこ、し、ちゃって……っ）

高ぶる感情の波をそのまま反映するかのごとく、ぎゅっと引っ張られたスカートの奥から、ひときわ激しい水流が噴き出してゆく。すでに靴まで完全にびしょ濡れの綾乃は、まるで池にでも落ちてしまったかのような有様だ。

とうとう力尽きた少女の下半身が膝を折り、かくん、とその場に深くお尻をついてしまう。ずるりと引きずられたお尻の後ろ側のスカ

ートが、足元の水たまりにべちゃりと沈む。

いよいよ排泄に適した体制を整えた綾乃の下腹部は、そのまま遠慮なく、本来、女の子がトイレの個室の中でしかしてはいけないような、本当の勢いでおしっこを出し始めた。下着をものともせず激しい勢いで、床の絨毯に恥ずかしい液体がまき散らされてゆく。

じょおお、じょぼぼぼおお……じゅ、じょおお……

かなりの量を排泄してなお、全く衰える様子もないまま、すさまじい勢いで放たれる水流は、まるで庭に水でも捲いているかのよう。誰にも見せてはいけない羞恥の液体は、色濃く絨毯を染みさせて、階段の上に大きな水たまりを広げてゆく。

眼下ではうねるような歓声が次々と上がり、シャッターの音がますます加速する。

(あ、おしっこ……おしっこ出る、出ちゃってる……う……つ)

もはや、綾乃の意識は朦朧と霧の中に沈み、自分がどこで何をしているのかも曖昧になりだしていた。

辛うじて引っぱりあげたスカートの裾をかすめ、勢いよく地面を穿つ少女の水流は、とどまるところを知らなかった。いったいどれくらい我慢し続ければこんなことになるのか——疑いたくなるほどの量と激しさで、綾乃のおしっこはなお止まらない。

じゅ、ぼちよばちや、じょおろろ……つ、じゅううう……

「い、いや……お願い、見ないで、お願い……」

ひく、と喉を震わせ、うつむいて涙ぐむ顔を、自身のおしっこで汚れた手で覆い、綾乃はか細い声で懇願を繰り返した。しかし昼日中の都心で、まさに今おしっこを漏らし続ける少女という奇異な光景に、衆目は衰えるどころかますます増えてゆく。

それはそうだろう。もう漏らし始めて1分半も過ぎようというのに、なお綾乃のおしっこが終わる気配がないのだ。小柄なその身体に似合わぬ下品な音を立て、ビルを水没させんばかりの勢いを衰えさせぬままにオモラシを披露し続ける綾乃を、誰もが茫然と見つめている。

ぶじゅつ、じゃああああ—————つつ、ぶしゅうつ……

じょ、じょぼぼぼつ、ぶじゅぼぼぼぼぼぼ……

「んっ、はあ……あ……ああ……つ、いや、もういやあ……終わって、早くおしっこ終わって……え！！」

涙にかすむ懇願にもかかわらず、綾乃のオモラシはそれからさらに、何十秒にもわたって続いた。

酷使され続けた括約筋と、我慢の限界を超えて耐え続けた下腹部は正常な感覚を麻痺させ、それから五分近くもの間、断続的にじゅじゅ、じゅううう、とおしっこを漏らし続けた。

「お、お願い……お、おしっこ、おしっこ……もう見ないで、よお……つ」

もはや空しい綾乃の懇願だけが、無人のビルにこだましてゆく。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

■ウンコ出ます

ああっ、もうダメッ！！はうあああーーーーっつっ！！！！
ブライッ！ブボッ！ブリブリブリイイッツイッツイ！！！！
いやああっ！あたし、こんなにいっぱいウンチ出してるウウッ！
ぶびびびびびびびいいいいいいいつつっ！！！！ボトボトボトオオツツ！！！！
ああ…ウンチ出るっ、ウンチ出ますうっ！！
ビッ、ブリュッ、ブリュブリュブリュウウーーーーーツツツ！！！！
いやああああっつっ！！見ないで、お願いいいいつつ！！！！
ブジュッ！ジャアアアアーーーーーツツツ…ブシャッ！
ブバババババババアアアアアアツツツ！！！！
んはああーーーーっつっ！！！！ウツ、ウンツ、ウンコオオツツ！！！！
ムリムリイッツああっ、もうダメッ！！はうあああーーーーっつっ！！！！
ブライッ！ブボッ！ブリブリブリイイッツイッツイ！！！！
いやああっ！あたし、こんなにいっぱいウンチ出してるウウッ！
ぶびびびびびびびいいいいいいいつつっ！！！！ボトボトボトオオツツ！！！！
ああ…ウンチ出るっ、ウンチ出ますうっ！！
ビッ、ブリュッ、ブリュブリュブリュウウーーーーーツツツ！！！！
いやああああっつっ！！見ないで、お願いいいいつつ！！！！
ブジュッ！ジャアアアアーーーーーツツツ…ブシャッ！
ブバババババババアアアアアアツツツ！！！！
んはああーーーーっつっ！！！！ウツ、ウンツ、ウンコオオツツ！！！！
ムリムリイッツ！！ブチュブチュツツ、ミチミチイッツ！！！！
おおっ！ウンコッ！！ウツ、ウンツ、ウンコッ！！！！ウンコ見てえっ！！

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 習作・4
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小ネタ
CATEGORY: 小ネタ

DATE: 02/20/2010 22:22:34

BODY:

元ネタは〇〇って難しいのコピペ。
ちょっとクドいかもしれない。

<hr size="1" />

こ、この前。……はじめて、お…オモラシました……。
お、オシッコ、のです……。
生まれて初めて、授業中に……おしっこが我慢できなくなって……。
正直、授業中にお手洗に行くななんて平気だと思ってました。
だって、みんな普通に手を上げて、お手洗に行きたいです、って言えてたんですから。
でも、私が間違っていました。あれって誰にでもできるものじゃないです。
すっごく、すっごく心が強い人ができるんだと思います。
いざ、手を上げようと思っても、すっごくオシッコしたいのに、恥ずかしくて、びくびくしちゃって……
いけないことしてるみたいに、そーっと周りを見て、そーっと手を上げようとしたんです。
30秒、くらい……かけて。
……でも、途中で怖くなって、やめちゃったんです。
そうしたら、先生が気付いて「そこ、どうかしたのか、何かあるなら言いなさい」なんて言いました。
……でも、それで、私、ますます言い出しづらい雰囲気になってしまって、
それに、急に指されたから、その……び、びっくり、しちゃって……

ちょっとだけ……じわ……って、……で、出ちやい、ました……
おチビリ……。もう、何年もしたことなんてなかったのに。
でも、仕方ないから、我慢するしかなかったんです。
俯いて、黙って……座りなおしました。
でも、それから少ししたらもういよいよ切羽詰まっちゃって、
ほんとうの本当に我慢できなくなっちゃったんです。膝も、なんと交差させてもだめで……スカートの上から抑えても、だめで……
たぶん、ちよろつとだけでも、出ちやった……のが、良くなかったんですよ。
もう、同じ失敗はできないと思いました。
教室でおもらしなんて……嫌でした。
だから、そのまま席を立っちゃいました。
それから、そ、そのっ……、お、大声で……
「おしっこ……漏れちゃいます……」……って。
だって……も、もう他の事なんかしてる余裕がなくてっ……ほかの人が前に出て板書してるのとか、隣の人がじっと見てるのとか、
授業中だとか、そんなの、もう全部、……
気に、してる暇もなかったんです……。
だって、先生が「ちゃんと言いなさい」なんて言ったから。
そ、そこで……もう、限界でした。
本当に大変なことになっちゃって……
す、すごい量で……勢いも……すごくて。
た、たぶん……800ml、くらい……。
ペットボトルでも、入りきらないくらい……でした。
も、もう、思い出したくないんですけど……そ、そのまま……きよ、教室のっ、……真ん中で……っ
ぜ、全然、止まらなくて……スカートも、下着も、靴も、ソックスも……床まで、びちゃびちゃに、なってっ……
制服のまま、水溜りに転んだみたいになっちゃって……
それで、全部出ちやって……気付いたら、先生も、クラス中のみんなも、すごい顔して私のこと……見ててっ……
ごめんなさい……ごめんなさい……っ。本当に、我慢できなくて……っ
は、恥ずかしいなんて、「我慢できる」なんて言ってないで、ちゃんと「お手洗に行きたいです」っていえばよかったのに……
どうしてあんな意地張っちゃったんだろうって……心の底から、後悔、しました……
あ、あんな恥ずかしいこと、もう一生、絶対、忘れられません……
でも、その……それから、しばらくして……その、ほ、他の子が、授業中に、我慢できなくなって……お、おもらししちゃったの、見た
時に……っ、つい……
「なんっておトイレ行かないんだろうね……？」
「恥ずかしいよね……」
なんて言っちゃって……
本当に、悪い子です……私は……

誰か……お願いします、助けてください……

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

■○○って難しい

この前教習所行ったんですよ、初めてね。

で、生まれて初めて車を運転したわけですね。正直最初は車の運転って簡単だと思ってたのよ。みんな普通に運転してるからさ。

あのね、俺が間違ってた。あれは人が乗るもんじゃない。神だね、神が乗るものだよ。

最初に発信させる時さ、めっちゃめっちゃびびってアクセルそろ～って踏んでクラッチそろ～と離れたのよ
10秒くらいかけてさ。でなんか怖くなって両方離しちゃったのさ。

そしたら教官がさ「もっとアクセル踏んで！」とか言うの。

同じ過ちは2度繰り返さないのが俺よ。

だからアクセル踏んだのさ。ええ、そりゃもう踏みましたとも。全てを忘れて踏んだよ。後方確認とかクラッチとかウィンカーとか色々忘れてね。

だって教官が踏めって言ったからね。

そしてエライ事になった。

もうすごい急発進。すごいG。8Gくらい。ドラクエなら薬草だって買える。

それで横見たら教官がすごい勢いで俺の事見てんの。ホントごめんなさい。

正直「男ならマニュアルだぜ！」なんて見栄張らないで素直にオートマにすりゃよかったと思ったよ。

心の底からマニュアルにした事を後悔したね。

でも教習所出て友達と「前のオートマとろかったな！これだからオートマは。」とか言っちゃてんの。

ホント俺ってダメ人間。

誰か助けて下さい

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 夏休みの夜のお話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 07/25/2010 20:12:42

BODY:

ぶうん、と生温い排気ガスを吹かして走り去ってゆくバスが、見えなくなって。鈴は額に浮いた汗をぬぐう。

2 時間に 1 本しか表示のないバス停の前では、荷物を肩から提げた姉の花梨が、時計を見ていた。

「まだ歩くの、お姉ちゃん？」

「うーん。迎えに来てるはずなんだけどね……」

姉妹だけの里帰りは、思いのほかトラブル続きだった。電車の接続や乗り換えで迷い、ここに来るまで 1 時間近くも遅れている。

途中で連絡は入れたものの、1 年ぶりの田舎。はたして迎えがなければちゃんと目的地にたどり着けるか、花梨も怪しいのだ。

だが——そんな姉妹の不安も、杞憂に終わる。

「こんにちわーっ、花梨、鈴ちゃん」

強い日差しの下で大きく手を振りながら、麦藁帽子の少女がバス停に向けて走ってくる。

従姉妹の愛衣が、約束通り二人を出迎えてくれたのだった。

「愛衣、久しぶりー」

「うん、久しぶり。花梨」

「こんにちわ、愛衣おねえちゃん」

1 年ぶりの再会を喜ぶ挨拶を交わし合う姉と従姉妹。少し緊張しながら挨拶をした鈴に、愛衣は腰を低くして「こんにちわ」と微笑んでくれた。

そして、愛衣はぼん、と大きな麦藁帽子を鈴の頭に載せてくれる。

「暑かったでしょ？ これ、かぶっててね」

「あ……う、うん……」

「こんなところにずっといると日射病になっちゃう。はやくいこ」

「そうだね」

荷物を持ち上げた花梨に続いて、愛衣が歩き出す。鈴は慌ててそのあとを追った。青い空の下、左右の畔にヒマワリの咲く砂利道は、遮るものなどどこにもなく、大きな山の麓までずっと続いていた。

（……わあ……）

麦藁帽子の作る日陰の下、鈴は思わず顔をほころばせた。

「ふふ、きれいでしょ、鈴ちゃん」

「う、うんっ」

愛衣に、思わずうなずく鈴。

健康的に日焼けした肌も露わにシャツの袖を捲り、結んだ裾からはおへそが覗いている。白い歯をのぞかせる笑顔はとても綺麗で、鈴は思わず見とれてしまう。何年か前に遊んだときはまだ“女の子”だった従姉妹は、すっかり素敵な“お姉さん”になっていた。

「愛衣、本当にありがとね。無茶言っちゃって」

「あはは、お互い様だってば」

雑談を交わし合う姉と従姉妹を余所に、鈴は一年半ぶりの田舎の空を見上げる。抜けるような青空の下、煩い蝉の声と、山からの風が梢を鳴らし、木漏れ日がさらさらと揺れる。

まさに夏。……宿題のことも、いやなことも全部忘れたいくなるような、素晴らしい空が、頭の上にとこまでも続いている。

「え、じゃあ今日おじさんたちいないの？」

「うん。急な用事みたいでさ。だから今日は私達だけでお留守番」

「……そっか、じゃあいろいろ準備しないとだね」

「いいよ。二人はゆっくりしてて。私がぱぱとやっちゃうからさ」

笑って答える愛衣に、花梨はあ、と鈴のほうを見てその背中を軽くたたく。

「ほら、鈴もお礼言わなきゃ」

「……ありがとう」

「ふふ。いいよ。でも、鈴ちゃんも可愛くなったねえ。お人形さんみたい」

くす、と笑った愛衣にそっと頭をなでられ、鈴はたちまち真っ赤になって俯いてしまう。かなりの人見知りではあるものの、愛衣とはもう10年以上の付き合いだ。いまさら緊張するなんて思ってもおらず、鈴はますます口籠ってしまう。

「あ……」

「この子、全然外で遊んだりしないから真っ白でさ。ちょっとは愛衣を見習ってほしいな。ほんとに一、鈴？ もう子供じゃないんだから、愛衣に迷惑かけないでよ？」

「わ、わかってるよ……っ」

まるで母親みたいに口煩い姉に言い返して、鈴はぶうっと頬を膨らませる。

「そうかなあ。また夜、トイレに起きれなくてとか、やめてよねー？」

「お、おねえちゃんっ！！」

からかうような調子の姉に、鈴は思わず本気で叫んでいた。

鈴のおねしょ癖は、もう何年も前に治ったのに、いまだに姉はそのことで鈴をからかう。やめてと言ってもやめてくれない姉に、いつ

もは諦めていたが——まさか愛衣の前でもそんな事を言い出すとは予想の外で、鈴ははっとして愛衣のほうを見る。

「ち、ちがうから、その、そんな……」

「この子、こういってこのトイレ苦手だからね」

「そっか。そう言えば鈴ちゃんそうだったね。前にお泊まりした時もそれで困ってたっけ」

「だ、だいじょうぶだよ！！ そんなことないもんっ！！」

愛衣の前でそんな格好悪いことはしない——その思いから、鈴は思わず叫んでいた。

綺麗になった“愛衣お姉さん”の前で、ことさらに自分がオムツも取れていない子供だなんて言われるのが、悔しくて、恥ずかしくて、鈴はムキになって反論する。

花梨はなおもそんな鈴をからかうが、愛衣はそれに加担するようなことはせず、やさしく鈴を褒めてくれるのだった。

夕食、お風呂と時間は過ぎてゆき、10時を過ぎたところで浴衣姿のパジャマパーティもお開きとなり、3人は揃って床に就く。普段とは違う浴衣のまま、寝慣れない布団で横になる感触は、鈴になんとも言葉にしがたい微妙な違和感を感じさせる。

けれど、愛衣と花梨に挟まれて川の字になって枕を並べるのは、なんだかとてもドキドキする。

長旅で疲れていたのだろう、姉はほどなく、隣ですうすうと寝息を立て始める。愛衣も目を閉じてすぐに眠ったようだった。

しかし、そんな中——鈴はじっと寝付けないままだった。

(……ん……)

もぞもぞと、もう何度目になるのかもわからない寝返りを打つ。

布団の中で、足に絡まる浴衣の裾が微妙にうっとうしい。

のきな寝顔の姉と、まるで眠り姫みたいに綺麗な愛衣。もちろん肌は健康的に焼けているけれど、それはかえってまるで南国のお姫さまみたいにも見えた。本をたくさん読むのが好きな鈴は、そんなお姫さまが出てくるお話も読んだことがある。

従姉妹の伏せた目の睫はびっくりするくらい長く、まるで本当に、本に出てくるようなお姫様みたいだ、と鈴は思った。

しばらく会わないうちに、信じられないくらい綺麗になった従姉妹。でも、一緒に話したり遊んだりしているときの仕草や声は、やっぱり懐かしい愛衣のものだった。それにほっとすると同時に、鈴はそんな綺麗な愛衣を見るたび、胸の奥にもやもやとしたものを感じる。

(……愛衣おねえちゃん……)

思わず目を奪われるような、けれど、決して内に籠らない、まるでこの田舎の夏の風景そのものみたいな、素敵な愛らしさ、美しさ。

鈴の目にも魅力的な彼女は、やはり多くの人たちから好かれているようだった。買い物に行った先の商店街でも、すれ違う人みんなと親しそうに挨拶を交わしていた従姉妹を思い出し、鈴はぎゅっと胸元を抑える。

とくん、と強くなる鼓動とともに、不安が胸の内に広がってゆく。

(愛衣お姉ちゃん、好きな人、とか……彼氏、とか、いるのかな……)

本の中のお姫さまには、必ず王子様や、騎士が愛を誓うのだ。まだ鈴にはよく分からないけれど、あんなに綺麗な女の子に、恋

人がいないとは思えなかった。

今日一日、愛衣は全く昔通り、鈴の“愛衣おねえちゃん”として振舞っていたけれど、でも。

……どこか、鈴の知らないところに、愛衣をもっとよく知る誰かがいて、その人とは鈴の知らない顔を見せているのかもしれない。

そう考えると、なぜだか鈴の胸は苦しくなる。

(っ……)

ぐりぐりと、枕に顔を押し付けて、鈴はその嫌な想像を振り払う。けれど少し経つとまたその想像は鈴の頭を占めていて、鈴の思考はぐるぐると同じところを回っていた。

そんなことを繰り返しているうち、いつの間にか時間は過ぎ、気づけばすっかり外は虫の声。月も雲の向こうに隠れてしまっている。窓の外はびっくりするぐらい真っ暗で、茂る木々が視界を塞いでいる。目の前にかざした手の指すらおぼろにしか見えない深い闇が、あたりを押し包んでいる。

鈴の目は相変わらず覚めたまま。

のんきな顔をして眠っている姉が、少し妬ましい。こんなに悩んでいるのに、鈴にはどうしていいのかわからない。

そして、

鈴が寝付けられない理由は、それだけではなかった。

「……………」

タオルケットの下、足の付け根にするすると伸びた手の指が、パジャマの股間をぎゅっと押さえる。もぞりと動かしただけで背中から首筋にかけてはわずかに緊張の汗に湿り、パジャマを気持ち悪く貼りつかせている。

(……んあ、んっっ…、……お、おっこ……)

鈴の小さな腰がぶる、と震える。

たつぷりとおしっこを溜まった下腹部は、まるで石のように硬い。

じん、と腰奥に響くむず痒い感覚に、鈴は思わず息を詰める。じわり、じわりとその勢力を拡大し続ける下腹部の尿意は、いまや無視できないほどに高まっていたのだった。

さっきから気にしないようにしようと思っているのだが、それができない。

寝返りを打つたびにたぶんと波打ち、ずしとその重みを増す液体が、ますます鈴の目を冴えさせてしまう。

(……ど、どうしよ……おっこ、したくなっちゃった……)

困ったように周りを見回す鈴。

夕食のときにも、デザートのスイカを食べたときにも、さりげなく花梨は妹が水分を取るのを制していたが、鈴は愛衣の手前そんなことはないと思地を張って、半ば無理をして何倍もコップを空にし、スイカも一人で3切れも食べてしまっていた。

そのつけが今になって一気に回ってきていたのだった。

しかも、ここは勝手知らぬ他人の家。大まかにトイレの位置は把握しているものの、そこへ向かうのは気が進まない。

(……んっ……う)

鈴は、怪談やお化けといったものが極端に苦手だ。

学校の催しものでも、遊園地に行きに行ったときでもそういったものは絶対に避けるし、話題に出れば逃げ出してしまうくらい。そのせいで微妙にクラスメイトとの距離もあいているのだが、そんなことを言われても怖いものは怖い。

田舎の見知らぬ家の廊下には、見たこともないようなものがたくさんあり、窓の外には星もないような闇が満ちている。トイレまで

の距離は、恐ろしいくらいに遠く感じられる。

愛衣の家だとわかってはいるけれど、それと怖いのは別問題だ。

(……どう、しょう……)

半分だけ体を起こし、鈴はじっと、部屋の出口を見る。

ここなら愛衣も花梨もいるから大丈夫だが、ドアの向こうには誰もいない。そこを通過してトイレまで歩いてゆく間に、一体何回怖いものを見てしまうだろう。余裕のない身体は切羽詰まった悲鳴を上げているが、ガマンはそれを乗り越えてゆくだけの覚悟にはならない。

姉や愛衣を起こして一緒に来てもらおうか、と思いはするものの、あんなことをやってしまった手前、トイレについてきてほしいなんていまさら言い出せそうになかった。

「でも……っ」

ぎゅっ、とおまたに挟みこんだ手のひらをきつく太股の間に締めつけ、鈴は爪先でシーツをえぐる。

じりじりとおなかのダムの中で水位を増し続けるおしっこに、水門は警報を鳴らし続けている。このままここにじっとしていれば、やがて放水が開始され、布団の上にそれはそれは盛大な、見事な世界地図を披露してしまうことは想像に難くない。

けれど、ドアを見るたび、その切羽詰まった思いもその向こう側にある恐怖に塗り潰されてしまう。

その向こう側に、ひしめく——無数の得体の知れないものをつい、頭の中に思い描いてしまい、

「……………」

鈴は尿意とは違う震えに背中を竦ませ、ぎゅっと口を閉じ、タオルケットを頭から被る。

やっぱり、せめて明るくなるまで、外には出たくなかった。ぞわっ、と尿意がなおも身体の内側から、恥ずかしい出口をノックするが、鈴はそれをぐっと堪え、息を飲み込む。

いいの？ このままじっとすると、本当におねしょしちゃうよ——と。

過去の自分が、警告を繰り返す。

しかし。

(……あ、朝まで……がまんするもん……)

もう大人だから。朝くらいまでなら我慢できる。鈴はそう決めつけると、むずむずと疼くお腹の下のほうを無視するように、きつく目を閉じて、布団の上に身体を丸めた。

どれくらい経っただろうか。

ふいに、耳元で水音を聞き——夢の中で足元にじわっ、と熱い刺激を覚えた鈴がはっと目を覚ますと、そこには変わらずいつも通りの夜闇があった。

「っ……！？」

慌てて足の付け根を探るが、幸いにして濡れている様子はない。

パジャマの内側をそっと探り、そこにも湿り気がないことに安堵する鈴。どうも、いつの間にか眠っていて、夢の中でおしっこを済ませていたような記憶があった。

（よ、よかった……あ）

大失敗を侵さずに済んだことから、ホッと胸をなでおろす。

幸いにして正夢にはならなかったようだが、あと少し目を覚ますのが遅れていたらどうなっていたか分からなかった。

と、そこまで思い出すと、いつか忘れていた尿意が、鈴の小さな身体を押しつぶさんばかりに一気に押し寄せてくる。

（んあんっ……っは……あう……）

まるで津波のように一気に叩き付けられる尿意に、思わずぎゅうっとパジャマの足の間に両手を差し込み、きつくおまたを押さえこんでしまう。

さっきよりもさらに鋭く重くなったおしっこの感覚が、出口のすぐそこで暴れまわっていた。もじ、もじ、と足を交差させ、お布団の上におしりをぐりぐりとねじつける。

「あ……っ」

さっきまでよりもさらにきつく張りつめたお腹が、パジャマのズボンのゴムを浅く食い込ませている。わずかな身じろぎにも反応してたぶんたぶんと揺れるおしっこが、激しく波を起こし、なおも高まるトイレの欲求が、鈴を急ぎ責め立てていた。

「だ、だめ……っ」

少女がきつく噛み締めた歯の隙間から、猛烈な尿意を訴える喘ぎがこぼれる。

（と、トイレ……おしっこでちゃう……っ）

とうとう喉から小さな悲鳴も押し出され、鈴は自分の身体の限界を悟る。

もう、だめだ、もう我慢できない。

でも——

鈴はちらりとドアのほうに視線を送ると、そのまま身体を起こし、そっと愛衣のほうに近づいていった。

「……………っ」

死ぬほど恥ずかしいけれど、オモラシよりもまだ。愛衣の肩をそっと揺すり、名前を呼ぶ。

「愛衣お姉ちゃん。……愛衣お姉ちゃんっ……」

「ん……？」

ゆっくり目をあけた愛衣の傍で、鈴は前屈みになりながら、パジャマの股間を抑え、恥ずかしさを堪え、小さな声で必死に訴える。

「と……トイレ……っ、おしっこ……っ」

「……あ。うん、わかった。トイレね？」

拙い呼びかけに、寝起きにもかかわらず愛衣はすぐに理解を示してくれた。

愛衣はすぐにパジャマ姿の鈴の手を引いて、廊下へと連れ出してくれる。

「……ごめんね、愛衣お姉ちゃん……」

「いいよ。怖かったんだよね？」

「……うん……」

こくと小さくなづいて、鈴は申し訳なさになくなってしまった。

「だいじょうぶだよ、怖くないから。ね？」

「っ……」

鈴はもう返事もできなかった。時折びくんと身体を強張らせ、なんとかおしっこが吹き出しそうになるのをこらえるので精一杯だ。両手でいっしょうけんめい押えていなければ、我慢ももちそうになかった。

愛衣に手を引かれながら、ぎしぎしと不気味に軋みを上げる暗い廊下を歩いてゆくと、やがて突き当りに小さなドアが見える。

鈴にはそこがトイレだとすぐにわかった。

「ほら、もう少しだから、頑張って？」

「う、うんっ……」

はあはあと荒い息を上げながら、おしっこを我慢しながらのおぼつかない足取りで鈴は精一杯先を急ぐ。しかしどうしたことか、なかなか廊下が終わらない。

静まり返った廊下は、もう何十メートルも歩いた気がするというのに、一向にトイレまでたどり着かない。小さなドアはますます小さくなり近づくどころか、遠ざかっている。

「え……、な、なんで……？」

疑問を口にし、鈴は足を速める。

薄暗い廊下のあちこちに、得体の知れないものが積み重なり、必死に我慢を続ける鈴をあざ笑うように行く手を塞ぐ。

木箱が壁のように立ち上がり、天井がぐにやりと溶け落ち、壁から生えた柵が幾重にも巡らされ、ガラス窓からなだれ込んできた洪水が足元を埋め尽くす。

手をぎゅっとおまたに当て、内股でよちよちと歩く鈴には、とても乗り越えることはできそうにない障害だった。

愛衣は背中から天使のような白い羽根をはやして、空を飛んでいた。

そうしてぐいぐいと鈴の手を引っ張りながら、

「鈴ちゃん、頑張って。早く行こう」

と声をかけてくるのだが、鈴にはもちろん羽根なんて生えていない。

「まっ、待って、愛衣おねえちゃんっ……」

本当なら、両手でしっかりと押さえていなければもう塞き止められないほどの強烈なおしっこの渦が、鈴のおなかのなかから飛び出そうと暴れまわる。

けれど片手はしっかり愛衣に握りしめられたままで自由にならず、さらにぐいぐいと引っ張られるのだ。振りほどくこともできず傾いた姿勢は、もともと不安定な足元では支えきれず、鈴は体勢を崩してしまう。

「あ、あっ、あああ……」

交差させたパジャマの膝がきゅっと緊張し、閉じ合わされていた足の付け根から内腿に、じゅわあ……っ、と熱い雫が滲み始める。

（い、いや……だめ……出ちゃう、おしっこ出ちゃう……っ）

「鈴ちゃん。ねえ、鈴ちゃん？」

必死におしっこの出口を締め付ける鈴だが、もはや抑え込むことはできなかった。一度ヒビの入ったダムは耐え切れず決壊し、ぴりりと小さな電流が股間を震わせる。

パジャマの白いズボンを黄色く染め、とうとう激しい勢いで噴き出したおしっこが、鈴の足元からおしりへと伝い、下半身をお湯に

浸かったかのように濡らしてゆく。足元を埋め尽くす洪水はいつの間にかまっ黄色に染まり、鈴のおもらしの海になっていた。

愛衣お姉ちゃんの前でこんなにいっぱいおしっこが出ちゃうなんて。鈴はどうとう泣き出してしまった。

「いやぁ……おしっこ……おしっこ漏れちゃうよぉ……っ」

「ねえ、鈴ちゃん！！」

耳元で大きく響いた愛衣の声に、鈴ははっと目を開けた。

周りの洪水は消え失せ、廊下もなくなり、あおむけになった鈴は布団の上に寝転がっていた。目の前には不安そうな愛衣の顔。

気づけば鈴は愛衣の手のひらを力いっぱいぎゅっと握りしめ、眠っていたのだ。

「え……？」

自分の置かれた状況が分からず、呆然となる鈴に。愛衣が心配そうに声をかけてくる。

「ねえ、鈴ちゃん、大丈夫？ うなされてたけど……」

「……ゆ……め？」

そう、だって今着ているのは浴衣だ。パジャマは持ってきてはいたけれど、愛衣や花梨が来ている浴衣と一緒に着せてもらったはずだ。

だから——さっきまでのも、やっぱり夢。

それを確認するようにぼんやりとつぶやいた瞬間。覚醒する鈴の意識は、同時に下腹部でいまなお現在進行形で起きている惨状を察知する。じんわりと湿るおしりの裏、たつぷりと広がる水っぽい布が足にへばりつく感触。

間違えようもない、おねしょの証拠だった。

「え、っ、あ、や、やだぁあ！！」

反射的に跳ね起きた鈴だが、まだそれは早計だった。

鈴の身体はまだ全部おしっこを出し切っていたわけではなかったのだ。少女の小さなおなかにたつぷりと蓄えられた恥ずかしい水は、まだ激しい尿意を感じるほどだった。そんな状況でいきなり動いてしまったのだからひとたまりもない。

きゅうんっ、と、致命的に高まる尿意に、鈴ははっとなる。

（お、おしっこ……、で、ちゃ……）

だがそれをしっかり認識するよりも先に、猛烈な水圧にしっかり閉じ切ってもいなかったおしっこの出口が一気に押しあけられ、鈴の布団の奥から、じゅじゅじゅうう……っ、と遠慮のない水音が響く。

「あ、あっ、あ、っ……いやぁあ……」

「す、鈴ちゃん？」

目の前の自体が信じられないというように、きょとん、と愛衣がめをまばたかせる。鈴は必死になって布団の中で足の付け根を抑え込もうとするが、少女の意思を無視して排泄を続ける下半身は全く言うことをきかなかった。

無理やりあてがった手のひらに、まるで指がちぎれてしまうんじゃないかと思うほどの強烈な勢いの水流がぶつかり、布団の中にさ

らに惨状を広げてしまう。

「あっあ、あーっ、あっ」

まるでトイレでするような、加減を知らない女の子の『本当の勢い』のおしっこが、瞬間に鈴の布団を水浸しにしてゆく。まるでさっきの夢と同じ、自分の寝ている場所をおしっこ海に変えんばかり。

「鈴ちゃんっ！？」

「や、いや、見ないでえ！！」

従姉妹の異常を察知し、何事かと布団をめくる愛衣。鈴の身を案じてのことだが、しかし、鈴にとっては更なる羞恥を呼ぶ行為でしかなかった。

抵抗むなしく引き剥がされた掛け布団の下、帯はほどけかけ、乱れた浴衣の裾は太腿の上までめくれ、鈴の下半身はほとんどむき出し、幼い下着一枚のハダカ同然の状況だった。

その少女の足の間から、決して人前では見せてはいけない、恥ずかしくみっともない黄色い水流が勢いよくほとばしり、蛇のようにのたうってはばちゃばちゃとそこらじゅうをおしっこ浸しにしていく様を、はっきりと愛衣に見られてしまったのだ。

「い、いや……あ」

か細い声を絞り出すようにして、鈴は身体をよじる。

おねしょの上、おもらしまで、残さず愛衣に見られてしまった。鈴の幼い心には深く消えない傷が刻まれ、少女の目の前が真っ暗になる。

「鈴ちゃん……」

ようやく勢いを衰えさせる鈴のおしっこを、呆然と見降ろしながら、愛衣はつとめて、優しく声をかける。

「我慢、できなかったんだ……？」

「っ……ごめんなさい、ごめっ、なさい、あい、おねえちゃん……っ」

ひくっ、としゃくりあげるように嗚咽を飲み込み、鈴は頬と一緒に枕も一滞らして、声を上げる。

「おもらし……しちゃった……すず、おもらししちゃった……っ ごめんな、あい……っ」

「……うん、大丈夫。だいじょうぶだよ。ごめんね。気づかなくて……」

怒るでもなく、ぶつでもなく。

そうやって静かに励ましてくれる、愛衣の言葉を聞きながら。

替えのパジャマがあってよかったな、という思いを最後に、とうとう処理能力の限界を超えた鈴の意識は、深い闇の奥に飲まれていった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 新学期のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/19/2010 22:00:44

BODY:

穏やかな街並みは、出会いの季節に満ちていた。

ほんの数週間前までは蕾だった桜も満開となり、そこかしこの枝から花吹雪を散らせている。

脚元に降り積もる花片を踏みしめ、真新しい革靴が、アスファルトの上に不規則なリズムを刻む。

「は……っ」

北村千穂は、ほんのりと紅く色づいた頬を緊張に強張らせ、通学路の坂を上っていた。

少女の着るやや大きめの制服は、下ろしたと一目でわかる程に新しい。

まだほとんど袖を通したこともないだろう紺色のブレザーは、もてあまし気味に少女の身体から浮いている。背負った革の鞆も、汚れ一つない新品同然だ。

初々しさの漂う千穂の表情は、しかしこの上ないほど困惑と焦燥に彩られていた。

「……………、っ」

千穂がきゅっと唇を噛み、鞆の肩紐をつかんで歩みを進めるたび、鞆の奥からはかちゃ、かちゃ、と小さく文房具が揺れる音が響く。

膝下のソックスが包む細い脚はきゅっと内側を向き、太腿はぴったりと寄せ合わされ、スカートの下で遠慮がちに擦り合わされて

いる。もう一方の手は身体の後ろに回され、スカートの上からそっとその裾を押さえていた。

けれどこれは決して千穂が格別、控え目に乙女らしく振舞おうとしているわけではない。

「あつ、……っ！！」

不意に千穂の表情がゆがみ、制服に包まれた小さな身体はびくん、と強張って硬直する。坂の途中で立ち止まり、きつく両目を閉じて、千穂は息を殺しながら、ソックスの脚をぐいっと交差させた。

それでも足りず、スカートの後ろに伸びた手のひらが、はっきりとわかるほどに布地の上から脚の付け根を押さえ、さらにもう一方の手まで、今度は身体の前からぎゅっ……と、閉じ合わせた太腿の上に添えられる。

「…………、……っ、だめ、……だめ……っ」

唇の中で、自分自身にもどうにもならない衝動を、必死に自制しようとするつぶやきが繰り返される。

天下の往来、歩道の傍らで、片手を前に片手を後ろに回し、かかとを支点にぐりぐりと身をよじる少女の隣を、自転車に乗った女性が不審げに視線を送りながら通り過ぎてゆく。

知らぬものばかりの町で、千穂はたった一人、誰よりも孤独だった。

(っあ……んっ……やだ……あ)

かあ、と千穂の表情が赤みを増す。

こんなところで、学校の制服のままみつともない姿をさらしていることに焦りが増し、思春期の少女の繊細すぎるほど繊細な羞恥心はさらに千穂を追いこんでゆく。

が、焦る気持ちとは裏腹に、押し寄せる衝動はまるで引く気配がなく、千穂はそこに立ち止まったまま、歩き出せずにいた。

(は……はやく、しなきゃっ、いけないのに……っ。あ、だ、だめ、ま、まにあわなく、なっちゃうっ……！！)

春先の平日の午後とはいえ、大通りを歩く人の数は少なくない。道端でくねくねと切なげに身をよじる少女は、不必要なくらいに目を引いていた。まして、部活動にも進学にもこのあたりではそれなりに有名な私立校の制服姿となればなおさらである。

ぞわ、ぞわあ、と背筋を擦り脚の付け根を包み、下腹部の底をちりちりと焦がす——堪えようのない羞恥の衝動。中腰になって腰を後ろに突き出し、ふらふらと定まらないまま、よろめく足元が桜の散るアスファルトを擦る。

交差する脚の間、何度も擦り合わされる太腿の奥で、ぷくりと膨らみかけた出口に、千穂はか細い悲鳴を上げる。

「いやあ……っ」

とうとう形振り構わず。身体の前後の手のひらがぎゅうっ、とスカートの上を掴んでしまう。少女の顔は耳の先まで赤くなり、うなじにも薄く鳥肌が浮いていた。

真新しい布地には無残にしわが寄り、千穂が何を堪えているのかを分かりやすいくらい分かりやすく教えていた。乙女の大切な部分を掴んだまま、腰を揺すり脚をもじつかせ、千穂は息を荒げ、荒れ狂う大波を必死に押さえ込もうとさらに手指に力を込める。

(あ……だめ、だめ、こんなところで……っ)

ぱんぱんに膨らんだ水袋の出口は、ほんの些細な油断でぷつりと穴をあけてしまいそうだ。奥歯を噛んで脚の奥に力を込め、ただひたすらに、押し寄せる衝動が過ぎ去るのを待ち続けた。

…………。

……。

どれほどそうしていたか。

うねる水面がどうにかやわらぎ、幾分か落ち着きを取り戻す。わずかな安堵と共に詰めていた息を漏らし、千穂は涙の滲みかけた目を開けた。

「は……あ……っ」

下着には少し染み出した水滴が湿り気をつくっていたが、本格的な決壊はぎりぎり乗り越えることができた。しかし、安心する暇などなくすぐに『揺り戻し』の気配が敏感に下腹部を震わせる。

ぶるっ、と背中を震わせ、千穂は坂の上を見上げた。

家までの距離はまだ遠く、我慢を繰り返して疲弊した脚は、それを登りきるにはあまりに頼りない。

「ど……、どうしよう……っ」

思わず困惑が言葉になって溢れる。

引っ越してきたばかりの千穂には、この町のことなどまだほとんど頭に入っていない。せいぜいが祖母に連れられていったスーパーと、駅くらいのもの。そのどちらも通学路とは反対方向だ。

千穂の知る限り、この近辺に公衆トイレなどはなく、公園やコンビニといった施設もない。切羽詰った尿意を解放するには、とにかく一刻も早く家まで帰るしか残されていない。けれど、そのための道程はいまや、恐ろしいほど遠く感じられた。

（お、おうちまで……我慢、しなきゃ……）

どう考えたところで、それしか選択肢はない。

だが——それすら困難に思えるほど、千穂の身体が限界を訴えていた。いまや数分間隔になった尿意の波は、ひとつを堪えるだけでも至難の技になっている。我慢をすればするほど、押し寄せる排泄衝動は強烈に、鋭いものへ変化してゆくのがわかっていった。

「……あ……っ」

また、同じような尿意が膨らみかけるのを感じながら、千穂は慌てて家路を歩き出す。しかしすでに少女の身体は、腿の付け根にいまにもはちきれそうに水を詰め込んで膨らんだ風船を抱えているようなもので、手で押さえるか脚をぴったりと寄せ合わせていなければ、まともに立っていることもできないほどだ。

激しい運動の後のように頬を赤くし、汗を浮かべ、は、はっ、と息を繰り返し、坂を登る少女を、また数名の少年たちが騒がしく走りながら追い越してゆく。

「なあ、待ってー！！」

「うっせー、速いもん勝ちだろー！！」

つい数週間前に卒業するまでは、千穂もあんなふうに遊んでいた。カードゲームの袋とケースを見せ合いながらはしゃぐ彼等に追い越され、千穂はさらに惨めな気持ちになっていた。

（……………）

きつくかみしめた唇に痛みが走る。

新しい学校に通うため、引っ越してきた祖父母の家、今朝、この制服に袖を通した時には、一歩自分が『オトナ』に近づいたような気がして、あんなにも誇らしかったのに——

『……トイレに行きたいです。』

たったそのひとことが言えずに、とうとう丸一日おしっこを我慢し続けてしまった自分。授業中どころか休み時間すらも、千穂は誰にも話しかけられなかった。

習慣も、勉強も、クラスメイトも、前の学校とは何もかもが違う、知らない顔ばかりの教室。すでに知り合いらしく連れだってお喋りをするクラスメイト達の中から、ひとりぽつんと取り残されて、千穂はあまりにも孤独な一日を送っていたのだ。

祖母はすぐに慣れる、友達もできる、と励ましてくれたけれど。

まるきり異邦のこの地で、千穂には誰かと話すことすらできなかった。まるで恥ずかしがりの子供。卒業と進学を機会に、もうそんなコドモの自分とはお別れすると、約束したのに。

「……………っ」

喉をちいさな嗚咽が震わせる。

だからせめて、人前でこんな無様な恰好をさらすわけにはいかないのに、下腹部で荒れ狂う濁流は、もはや少女の我慢の限界を超えてうねり続けている。

周囲からの視線から逃れるように身体を捻り、俯いて、けれど身体の前後の手はどけることはできないまま、千穂は必死になって、家までの道のりを進む足を速めた。

途中、何度も挫けそうになるのを必死に必死に堪え続け、ようやく辿り着いた千穂を待っていたのは――

無慈悲なまでに硬く施錠された、家の玄関だった。

「嘘、うそっ……おばあちゃん、ねえ、いないの！？」

一度呆然となり、次には何が起きているのかわからず、少女の頭は真っ白になりかけた。

当然ながら、引っ越してきたばかりの千穂は、ここの合鍵など持っていない。祖母とはそのうちねと約束はしているが、今はまだ必要がないものだと言われていた。家にはだいたい祖母がおり、締め出されることなどないはずだったのだ。

「そんな……どこいっちゃったの！？ っねえ！！」

まるで、祖母にまで裏切られた気分だった。家に帰れば、優しく出迎えてくれるはずの祖母まで、自分を見捨ててどこかに行ってしまった――そんなふうにさえ思えてくる。

（っ……あ！！）

呆けている暇はないとばかりに尿意が押し寄せる。

約束が違うと暴れだした下腹部のうねりは、これまでのものよりもさらに激しかった。ここまで来ればトイレに入れる、そう信じてそれに縋って、無理を重ねてきた身体が、裏切りに悲鳴を上げている。

自宅の敷地の中ということで、千穂は人目はばからずぎゅうぎゅうとスカートの上から下着を引っ張り上げ、膨れ上がる尿意を少しでも散らそうと、ばたばたと足踏みまで始めていた。幼稚園の子がするような、必死の我慢のダンスが、限界の尿意を押しとどめようと懸命な努力を続ける。

「なんで……も、もう我慢、できないのにつ……！！」

インターホンを何度も押し込み、ノックをし、震えそうになる脚を引きずり庭を回りこんで窓を擦る。

けれど、窓も勝手口もしっかり施錠され、どうやっても応答がなかった。郵便受けや植木鉢の裏を探してみても、合鍵があるわけもなく。がちゃがちゃとノブをいじってみても、泥棒の侵入も寄せ付けないように作られたドアが千穂の力程度で打ち破れるはずもなかった。

「あ、あつ、あつあ！！」

じわ、とスカートの奥にまた新しい熱い滲みが広がる。

そのままがくんと腰を落とし、しゃがみ込んでしまいそうになるのを必死に堪えて、千穂はぶるぶると肩を震わせ、腰を左右に揺する。

ここまで我慢したのに、トイレに入れない——

トイレのしつてもできていないコドモみたいにオモラシをして、買ってもらったばかりの制服を汚してしまうなんて、絶対にあってはならないことだった。

「っ、い……」

少女の意思を無視して放水のカウントダウンを始めようとする身体をひきずって、千穂は玄関を飛び出した。

もはや、形振り構ってられない。

千穂はまっすぐに向かい家を目指し、生け垣の向こうの玄関へ踏み入れた。日陰になった庭は土が剥き出しで、戦前からそのままといった気配の湿った空気を集めている。

見知らぬ家に踏み入れ、さらにこれからしようとしていることを想って萎縮しそうになる心を必死に奮い立たせ、千穂は恥を押し殺して、曇りガラス張りの横引きの扉を叩く。

「あ、あのっ……すみませんっ……」

張り上げたはずの声は、けれどあまりにも弱々しい。なぜかインターホンが見当たらず、ノックを繰り返す手は扉に弾かれて痛む。

「すみませんっ……と、隣の、家の、っ、あの、この前、引越してきたん、ですけどっ……」

千穂が扉をたたいたたび、たわむ曇りガラスがざわざわと震える。片手はもう脚の付け根から一ミリたりと離せない。内股で前かがみ、ぎゅうぎゅうと左右に腰をよじり、切羽詰った声でからからの喉を震わせる。

「あ、あの、誰かいませんか……？ んうっ、……そ、その、うち、鍵が、掛かっちゃって……っ、あんっ」

は、は、とわけもなく息が詰まり、ひゅうと下腹の底のほうが冷えてゆく。天井知らずに高まる激しい尿意は今もなお、千穂の下腹部に押し迫っている。最後の抵抗を見せる少女のプライドがわずかな拮抗を保ってはいたが、無情にも限界のカウントダウンは刻一刻と迫っているのだ。

応答のない玄関を揺らしながら、千穂の訴えはますます悲痛なものになってゆく。

「あ、あのっ、あ、っあ、と、トイレっ、トイレ、貸してくださいっ……！！ あ、も、もうっ、が、我慢できなっ、…い、ですっ……！！」

隣家とはいえ、千穂自身は見ず知らずの家の前で、腰を揺らし、スカートの前を握りしめ、限界寸前の尿意をこらえ、必死にトイレを訴える——比喻抜きで死んでしまいそうなくらい、千穂の心臓は悲鳴を上げていた。

猛烈な羞恥心が、ざくざくと少女の心を切り刻んでゆく。

だが、そうまでしてなお、隣家の応答はなかった。

「あ、あつ、だめ、で、でちゃ……っつ……っ、！！」

無情にも閉ざされたままの扉に隔たれ、踏み入ることもかなわない。少女の身体はそのまま、ここがどこかも構わずに身体の奥からありったけの水分を絞り出そうとしていた。

最後の勇気を振り絞って、トイレを借りようとした千穂の必死の頑張りすら、嘲笑うように。猛烈な尿意が、決定的な勢いで股間の出口をこじ開けようとする。じわ、と広がる『オモラシ』の予兆が、千穂を『オトナ』から引きずり降ろそうとしてくる。

（っだ、だめ、だめっ、だめっ！！）

じゅ、じゅ、じゅう、と押さえこまれた下着の奥に、これまでよりもさらにはっきりと、明らかな水音が響く。下着にぶつかるほとばしりは、電流のようにきつく閉ざされた排泄孔を震わせ、甘美な排泄の誘惑を繰り返す。

ちゃんとトイレにもいけない——おしっこもきちんと我慢できない、コドモの象徴。オモラシ、の恐怖が千穂を襲う。

「あ、あつ、あつああ、あつ」

（っだ、だめ、ここじゃだめ、だめええ！！）

なおもじゅう、じゅじゅっ、とはしたくない音を響かせる股間を握り締めながら、千穂はふらつく脚を引きずって、内股のまま靴底を滑らせ、玄関前から奥へと進んでゆく。

ほとんど思考すらおぼつかないなか、千穂はそれでも最後までくじけなかった。制服を汚さないよう、必死におしっこの出口を締め付けたまま倒れこむように玄関脇の庭へ移動し、生け垣の隅へふらつくように辿り着くと、そこにしゃがみ込む。

（っ、もッ、もうだめ、っ、こ、ここで、ここでっ、し、しちや……う……ッ！！）

剥き出しの土の上、ほとんど破り取りそうな勢いで下着を膝上まで引き下ろし、スカートを大胆にたくし上げる。丸出しになった可愛らしいおしりを深く落として、肩幅に開いた脚の隙間、震える千穂の『乙女』が、ひくっ、と最後の収縮を終える。

そうして、いま、まさに千穂が耐えに耐えつづけた熱い奔流を、臨界寸前の水圧のまま、地面の上に激しく狂おしく噴き出させようとしたその瞬間。

「ねえ、おねえちゃんなにしてるの？」

がらら、と窓を開ける音と共に、背後からのあどけない声が響く。

「……………え、っ」

どくん。千穂の心臓が痛いほどに縮む。

反射的に振り向いた先、硝子戸の開いた縁側には、まだ小さな女の子が首を傾げながら千穂をじっと見つめていた。

「え、あ、っ」

真っ白な頭はろれつの回らない舌で必死に言い訳を探そうとする。

が、それよりも早く。

女の子は、あーっ、と大きな非難の声を上げた。

「おねえちゃん、おしっこ！？ おしっこしてたの！？」

気づかれていた。

いや、この状況で気づかれないほうがそもそもおかしい。

遠慮会釈なく、興味をそのまま言葉にする——あまりにも残酷な幼さゆえの指摘。向こう三軒両隣に響き渡りそうな大声に、千穂の頭は完全に停止してしまう。

女の子はぴょんと縁側を飛び降りると、大きなサンダルをつっかけて形のいい眉をきゅうっと吊り上げ、まるで自分よりも小さな子に言い聞かせるように、千穂に非難を向ける。

「もう、おねえちゃん。ここ、あたしのおうちなのに、かってに入っておしっこなんかしちゃだめじゃない！！ いけないんだよ！！」

「え、あ、ち、違うの、ま、まだっ……んんう……っ」

千穂は慌てて立ちあがろうとするが、足首に絡んだ下着が邪魔をして、バランスを崩してしまう。

ほとんど反射的に無理やりに引っ張り上げた下着は、ぷちぷちと嫌な音を立てながら辛うじて腿の上に引っ掛かった。どうじ、放出寸前で出口を塞がれたおしっこが、行き場をなくしたまま荒れ狂い、千穂をパニックに叩き込んだ。

「あ。あっあ、あ、やあああっ……」

限界を迎えた少女の身体は、じゅじゅじゅう、とおチビリを始める。くねくねと脚をクネらせ腰をよじる千穂の太腿に染み出した水流がつうと溢れ、突き出されたスカートのお尻はじわじわと色を濃く変えてゆく。

“まだ”オシッコしてない――

そんな言い訳は、なんの理屈にもならない。千穂が下着を下ろし、大事なところを丸出しにして人の庭先にしゃがみ込んでいたのは事実なのだ。あとほんの一秒遅ければ、千穂はこの子の家の庭に、煮えたぎるありったけの尿意を残らずぶち撒けてしまっていたはずだった。

そして今、現在進行系で千穂のおしっこは、始まっている。

「ちがわないでしょ！！ もう、ちゃんとおトイレまでがまんしなきゃ、おねえちゃん！！ あたしよりオトナなのに、そんなのもできないの？」

「や……あ、……っ」

おしっこは、トイレで。そんな当たり前すぎるほどに当たり前なことを、自分よりもずっと小さな女の子からズバリ指摘され、千穂の顔はこれ以上ないくらいに真っ赤になってしまう。今まさにオモランを始めた千穂の身体が、生理的欲求と理性の間で引き裂かれればかりに悲鳴を上げる。

「もお！！ おねえちゃん聞いているの！！」

「っあ、っ、あ、だめっ、だめ！！」

ぷくう、と頬をふくらませて女の子が千穂の肩をつかみ、ぐいぐいと揺さぶった。その振動にこたえるように、じゅわ、ぽた、ぽた、と地面に飛沫が滴ってゆく。羞恥心のせいか興奮したせいか、押し寄せる水圧は急激に高まり、いまなお震える千穂の身体の一点に集中して膨れ上がる。

「あーっ、おねえちゃん、おしっこしちゃだめっていったじゃん！！」

それを目ざとく見つけ、女の子がさらに声を上げた。

「ち、ちが、ちがうの、ちがうのっ……」

「ちがわない！！ もぉー！！ ほら、おトイレ行くよ！！ あたしがつれてってあげる！！」

女の子はそう言うと、千穂の手を掴んで無理やり引っ張った。縁側からトイレに連れて行こうというのだろう。だが、

「だ、だめ、だめえ！！ う、動いたら、で、でちゃ……っ」

膨らみきった尿意に押しつぶされ、千穂はもう一歩も動けはしなかった。

がく、がく、と震える膝の間を、ちょろろ、ぽたぽたっ、と雫がこぼれおちる。しかし一度バランスを崩した身体は、坂道に踏み出した時のように傾くばかり。千穂は引き上げたばかりの下着をきつく押さえ、ばたばたと体重移動を伴った足踏みを始めてしまった。その動作をポンプにでもしたかのように、股間の先端から、じん、じんっ、じわ、じゅ、と熱い雫が断続的に噴き出す。

「ほら、おねえちゃん！！ しちゃだめだからね！！ ちゃんとおトイレまで行くの！！ がまんして！！」

「あ、あ、っ、っ」

ありったけの力で出口を締め付ける千穂だが、身体の方はすっかり準備を整えていて、立っていようとパンツの中だろうと構わずに、直接おしっこを絞り出そうとしていた。

「あ、あっ、あ、ああ、あーっ」

ぱくぱくと開閉する口から、意味のない母音が響き。

ずっと年下の小さな女の子に、引きずられるまま、縁側にたどり着いたところで、ついに千穂の緊張が切れてしまった。

ずっとずっと抱え込んでいた水風船が、ついに破裂する。

千穂がぷつん、とその音を聞いたかのように錯覚した瞬間。

じゅわああああ、と激しい音をたてて一気にスカートが浸食され、ばちゃ、びちゃ、ばちゃばちゃばちゃ……と庭先に熱い水流がまき散らされる。瞬間にスカートはおろかソックスも、革靴も水浸しとなり、抑え込んだ手のひらもスカート越しに噴き出す水流を激しく受け止める。

「あーっ！！ おねえちゃんおもしろしちやったーあ！！」

強い非難を込めて放たれるあどけない声。

『オトナ』の証を無残に染める、自分自身の恥ずかしい熱湯。

下半身をずぶ濡れにしてなおまったくおさまらない千穂のおしっこは、のた打つ蛇のように勢いよく放たれ、知らない町の知らない家の庭を、大きな水たまりへと変えていった。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 第14夜 人魚姫

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 04/29/2010 15:58:13

BODY:

おまし特區の「今日の童話」に触発されて書いたもの。というかほぼそのまま。

人魚姫はどうしてもうまく展開が作れなかったので諦めかけていた時、読んでその秀逸さに衝撃を受けた。

しかし、延々長くなった割に明らかに劣化している気がする。

<hr size="1" />

空には大きな三日月が昇り、美しく輝く星々が、きらきらと夜の中を照らしていました。緩やかな海からの風が、かすかな潮の香りを運んできます。

たくさん船が並ぶ、大きな港町をもつ海辺の王国には、耳を澄ませば国のどこからでも遠く、穏やかな潮騒の音が聞こえます。

きらびやかな王宮の一室でも、それは同じでした。

警備の衛兵や、今日一日の仕事をようやく終えた従者、はたまた明日の下ごしらえをする料理番を除けば、ほとんどが寝静まった、お城の中。

その部屋だけは、まだぼつんと枕もとに明かりを灯しているのが、窓の外からもうかがえます。

大切な客人を迎える部屋は、高価ではあれど決して下品にならないよう、吟味された装飾で整えられており、そこに滞在している者がどれだけ丁重に扱われているかを知らせているようです。

そんな部屋のベッドの上に横になる、一人の少女の姿がありました。

まだ小柄な肢体や、あどけない表情にはだいぶん幼さも残っていますが、その姿ははっと見つめるものの心を釘付けにするような、この世のものとも思えない美しさを備えていました。

深い海の色を思わせる髪は、穏やかな水面のように滑らかに波打ち、真珠のような淡い肌は、そばかす一つなく白く、けれど決して冷たい様子はなく、どこかほんのりと、血の通った温かみも備えています。

伏し目がちな瞳は思わず見蕩れるほどのマリンブルー。整った目鼻立ちの下には、小さくやわらかなくちびるが、まるでほんのりと桜貝のように引き結ばれています。

ベッドに横になっているのは、そんな、誰もが思わず目を奪われ、身分の貴賤など関係なく優しく微笑み、膝をついて敬愛したくなるほどの、愛らしく美しい少女でした。

そんな少女は、けれど額にうっすらと汗を浮かべ、形の良い眉をきゅうっと寄せながら、落ち着かない様子で寝返りを繰り返していました。

「……………っ」

けして、悪夢にうなされているわけではありません。少女は眠りにおちているのではないのです。ベッドの上でなんども、懸命に何かをこらえるように、身を揺すり、けれどどうしても耐え切れないというように、押し殺した荒い息を繰り返します。

「……………あ、っ」

少女の喉が、かすれた声を立てます。

そんなにも苦しいのであれば、声を上げて誰かを呼ぶか、そうでなければ枕もとの呼び鈴を鳴らせばすぐに誰かが駆けつけてくるでしょう。少女の纏う夜着は装飾こそ控え目でありましたが、とても上等なもので、部屋の中の調度と考え合わせても、使用人の一人や二人を呼びつけることになんの問題もないはずでした。

たとえ、そうしたことが出来ないとしても、ベッドから身を起こし、ここを離れることは可能であるはずで。

けれど——少女は頑なに、それをしようとはしませんでした。

びり。少女は不意に、ベッドの上で硬く身をすくませます。

まるで、襲い来る見えないなにかと闘うように、きつく身体を強張らせ、ぎゅっとまつ毛の長い眼を懸命につぶって、シーツの下で小さくなんどもなんども小刻みに身体を揺すって——その可憐な表情を、耐えがたいほどの苦痛で曇らせてゆきます。

「っ……………」

けれど、あどけなくもやわらかい桜色の唇は、それでも助けを求める声を発することはありませんでした。荒い息遣いと、必死に唇を噛み締めるかすかな喘ぎだけが、たった一人きりの部屋にわずかに響くばかりです。

膝を突いてうつ伏せになり、枕に顔を押し付けて。あげくシーツを、その小さな口でぎゅうとかみしめて。

長い長い時間、まるで永遠にそうしているかのように、硬く硬く身をすくませてから。

なんとか窮地を脱した少女——シレネツタは、はあっ、と詰めていた息を吐いて、わずかな安堵と共に全身の力をゆるめました。

「……………」

白い喉がこくりと音を立て、はあ、はあ、と荒い息が、その桜色のくちびるを震わせます。

ほんの少しだけ取り戻した余裕の中で、シレネはそっと、窓の外に視線を向けました。レースのカーテンの隙間から、遠く見える海を、まるでこいねがうように見つめ、切なげな表情をのぞかせます。

遠く、静かに響く海風と潮騒の音に、まるで郷愁のようにその美しくも愛らしい顔を曇らせて、シレネは、そっと、かすかに唇を震わせます。

『おっしょ、漏れちゃう……！』

およそ、王宮の一室に休む、可憐な少女には似つかわしくないほどに、はしたなくもみっともない言葉。誰も聞くものがないとはいえ、そんな事はたとえ幼くとも、淑女の口にしていい言葉ではありません。

けれど、シレネはまるで熱に浮かされたように、切なげに唇を震わせて、必死に訴えるように何度もその言葉を繰り返します。

『おっしょ漏れちゃう……おっしょ、漏れちゃう……っ！！』

シレネの美しい顔がくしゃりとゆがみ、ぼろぼろと涙がその頬を伝っていきます。あまりにも懸命な求めは、けれど誰にも届きませ

ん。

いいえ、届いていいはずがないのです。

たとえどんなことがあろうとも、ベッドの隅でぎゅうぎゅうと夜着の股間を握りしめ、もじもじとオシッコを我慢する自分の姿など、決して見られてはならないのです。

そして、シレネはベッドから身を起こすこともありませんでした。

猛烈な尿意に晒されながらも、シレネは身を起こし、その欲求を果たすのにふさわしい場所——お手洗いへと立つことをしようとしません。

ただ、きつくシーツを噛み、シレネは閉じ合わせた脚の付け根から込み上げてくる衝動を必死になだめていました。すでに両の手はシーツの下にもぐりこみ、はしたなくも夜着の上からきつく脚の付け根を握り締め、休むことなく下腹部を撫で回しています。

『おしっこ漏れちゃう……！！』

ベッドの上では収まることなく下半身がよじりあわされ、はあはあと悩ましい吐息が繰り返されます。

けれど、身体の中の奥底から、止まることなく湧き上がってくるはしたない衝動は、いつとも休まる様子がありません。

それもそのはず、シレネの小さな身体のほっそりとしたおなかを大きく膨らませるほどに、ぱんぱんになって硬く張り詰めた下腹部は、ずしりと重く少女にのしかかっていたのです。

荒れ狂う海の大浪をもたやすく乗り切ることのできる海の王国の王女、人魚の末姫シレネツも、身体の奥深くから押し寄せてくる恥ずかしい衝動の大浪にはあまりにも無力でした。

女の子の恥ずかしい場所をなんども握り締め、シレネはそこに荒れ狂う嵐を鎮めようと、懸命に我慢を続けます。

そんなシレネの努力はしかし、あまりにも無謀なものでした。

シレネは、海の底の王国に住む人魚のお姫様であり、たくさんの姉を持つ一番下の妹でした。多くの姉妹たちの中でも、シレネの美しさはひとときであり、まだ小さなころからその可憐さ、愛らしさで王国中の噂になるほどでした。

ですから、シレネの父である海の王様は、他の姉妹たちには15歳で与えていた、海の上に浮かび上がってもいいという許可を出すことを、シレネにだけは渋っていたほどでした。

けれど、シレネだけを特別にする訳にもいきません。めでたくその許可を与えられたシレネは、初めて見た空の下で、ある出会いを果たします。

あいにくと、その日は大きな嵐の夜でした。海は大きく荒れ狂い、そのなかにはまるで木の葉のように揺れる船がありました。

大きな宮殿のような船は、しかし猛烈な嵐の中でとうとう帆柱を失い、海の中に難破してしまっていたのです。

ひととき大きな波が来て、船がぐらりと揺れたかと思うと、シレネはその船から投げ出された、ひとりの青年を見つけました。

実はこの船は、とある人間の国の船であり、この青年はその国の王子だったのです。船の上では航海のさなか、嵐で姿の見えなくなった王子を探し、大変な騒ぎとなっていました。

けれど、水の中にはそんなものは聞こえません。それでなくとも王子様は気を失っていましたし、仮に誰かがそれに気づいたとして

も、どんなに泳ぎ自慢の船乗りたちでも、この荒れ狂う嵐の中、深く黒々とした海に飛び込んで王子様を助け出すことはかなわなかったでしょう。

王子は、そのまま誰にも気づかれずに、海の底深くに沈んでしまうかに思えました。

けれど、人魚のシレネならば話は別です。心優しい人魚の末姫は、見る見るうちに水底へ落ちてゆく王子様に追いついて、その身体をもう沈んでしまわぬよう、そっと抱き締めました。

なんということでしょう。シレネは一目見るなり王子様に恋をしてしまっていたのでした。

シレネは懸命に王子様を抱え、海の上へと運びあげました。降りつける雨と吹き付ける風の中、遠く波に翻弄される船へ、あらん限りの声を振り絞って叫びましたが、船からの応答はありません。

いえ、もし美しいシレネの声が届いたとしても、帆柱を失った船が王子の元へと戻ることはかなわなかったでしょう。

シレネは王子を助けたい一心で、彼のぐったりとした身体を抱きかかえたまま、まる一晩をかけて嵐の海を泳ぎきり、とうとう朝方には、近くの岸辺まで運びあげました。

酷い嵐でしたが、幸いなことに朝になる頃には海は落ち着いており、王子は浜辺で、雲間からの陽射しに目を覚ましました。

そして王子は、自分が海岸に打ち上げられていることに気付くと、がばと身を起こしました。聡明な王子は、自分がいた船の航路が海の真ん中にいた

ことを知っており、あそこで海に投げ出されれば、まず助かりはしないことを知っていたのです。

ですから、王子は自分がひとりでにこの海岸に流れ着いたのではなく、誰かに助けられたのだということにすぐに思い当りました。そうして、そっと岩陰から様子をうかがっていたシレネに気付いたのです。

声をかけようとした王子ですが、シレネは慌てて背中を向け、海の中に身を躍らせました。人間と顔を合わせてはならないというのが、海の王国の掟でしたし、なによりも人間と違う人魚の姿では、王子様を恐れさせてしまうかもしれないからです。

王子様に一目で恋をしたシレネは、万が一にも嫌われるようなことはしたくなかったのです。海に飛び込んだシレネのすがたを、ちらとでしたが確かに見た王子は、しばらく、じっとそこに残って、シレネの消えた海のほうと見つめていました。

さて。それからしばらく時間がたっても、シレネは王子様のことが忘れられません。もう会えないとわかってはいても……いえ、むしろそうと分かっているからこそ、シレネの恋心は募るばかりです。

悩みに悩み、その小さな胸を痛め、ままならない人間と人魚の恋に何度も涙をこぼしながら、シレネはとうとう決意します。

人魚の姿を捨て、人間の脚を得て、王子様にもう一度会いに行こう、と。

シレネはひとりこっそりと、海の王様や姉たちに珊瑚の手紙を残し、海の深くに住む魔女のもとへと向かいました。

ずっとずっと昔から海の一番深い場所に住む、年経た魔女は、誰も知らない魔法や呪いをたくさん知っていると言われ、恐れられていました。

そんな恐ろしい魔女でしたから、海の王国の住人達は怖がって誰も近寄ろうとはしなかったのですが、この魔女に頼めば、魚の尻尾の代わりに、人間の脚をもらうことができると、シレネは考えたのです。

ですが、この魔女というのが、長い時間を海の底で誰にも合わずに過ごし、何百歳と老いて歳をとったためか、すっかり性格が悪

くなくなってしまっていて、普通にシレネの願いを叶えてなどくれなかったのです。

おっかなびっくり挨拶をして、シレネから願いを聞いた魔女は、いひひひといやらしい笑みを浮かべながら、目の前の美しく幼い人魚姫をじろじろと睨みました。

皺だらけのよぼよぼに老いた魔女は、もう取り戻せない若さを、ことに美しく可愛らしさを備えた愛くるしい姫君を、ひどく妬ましく思っていたのです。

「いいだろう、そんなに欲しけりや人間のあんよをくれてやってもいいさ。……代わりに、お前さんの大事なものを頂くがね。ひっひっひ」

魔女はそう言って、一本の魔法の薬の瓶を取り出しました。

魔女が人間の脚の代価として求めたのは、王国中で評判の、その美しい声だったのです。とんでもないものを払えと言われて驚くシレネに、しわがれた不快な声で笑いながら、魔女は迫ります。

「魔法ってのはね、何かを得るためには何かを支払うもんさ。あたしがこんなにおいぼれたのだって、お前さんに脚をくれてやることができるようになるには仕方なかったんだよ？」

そんな事を言われてしまえば、シレネも黙るしかありません。

どうしても王子様に逢いたいシレネは、悩んだ末に、自分の声を魔女に払うことにしました。

けれど、後でわかることですが、魔女がシレネに渡した魔法の薬は、とてもそれに見合うものではなかったのです。

けれど、とにかくこれで、シレネは人間になったのです。もうすぐ王子様に会える。そのことだけを心の支えに、シレネは海の上を目指しました。

なれない人間の脚で苦労して海の上に浮かび上がり、生えただけで痛むつま先をこらえてなんとか陸地に上がったシレネでしたが、それを見送りに来た魔女は、さらにシレネにとんでもないことを言い出したのです。

「そうそう、ひとつ言い忘れていたねえ。ひっひっひ。その薬の効果が切れちゃう時のことさ」

あろうことか、シレネから魔法の薬の代価としてその美しい声を奪っておきながら、魔女がシレネに与えた魔法の薬には、まだとんでもない秘密がありました。

それはなんと、陸の上でおしっこをしてしまうと魔法が解け、人魚姫は泡を残し、王子様の前から姿を消さねばならないという、とてつもなく意地の悪いものだったのです。

「なあに、なにも延々我慢しなかってことじゃないさ。ちよいと海までもどってきて、そこらの岩の上にでもしゃがんでシャアアアと済ませりゃいいだけさ、なんてこたあないだろう？ ひっひっひ」

あまりにも下品なことを言われて、シレネは思わず真っ赤になってしまいます。

魔女の言うことには、あくまで陸の上でおしっこをすることがいけないのであって、海までもどつてに波に向けてすれば、おしっこができるということでした。

けれど、そうでなければずっとずっと、おしっこを我慢し続けねばなりません。これから陸の上の人間の国で暮らして行こうというシレネには、あまりにも酷な話でした。

「いーひっひっひ！！ なにを不思議がることがあるんかね。あたしの魔法の薬で姿を変えようと、お前さんはもともと人魚だからねえ。海から離れて生きることはできないのさ。わかるね？ それが魔法ってもののなさ。ひっひっひ！！」

そのことを知って愕然となるシレネが面白くてたまらないというように、魔女はにやにやと意地悪な笑顔で、そんな理屈を言っただけでした。

本当にそんな魔法の仕組みがあるのかシレネにはわかりませんでした。けれど、どうしても王子様に逢いたかったシレネは魔女の言葉にうなずくしかありません。

そもそも、そんな無茶苦茶ですっ！と叫ぼうとしても、声は魔女に奪われているのですから、どうしようもありません。シレネは魔女に深く頭を下げ、感謝を示すしかありませんでした。

この偏屈な魔女の機嫌を損ねては、人間の脚をもらうことはできなかったのですから。

……けれど、この性根の悪い魔女のする悪だくみといったら、シレネの想像をはるかに超えていたのです。

「いっひひひ。とは言っても、いい歳をした娘が、まさか人前で我慢できずに粗相なんてみっともない真似は嫌だろう？ ひっひひひ。お前さんの声を、ひとつだけ残してやるとしようか。感謝しな」

幸運なことに。……あるいは不幸にも。

魔女が姿を消してすぐ、シレネはあてもなく街道をさまよっていたところを、たまたまやってきた王子様と再会することができました。

なんと王子様もあの日、出会ったシレネのことを覚えてくれていたのです。あの嵐の夜の命の恩人を捜して、王子様は国中に使いを出していたのです。

そのことを王子様から伝えられ、シレネは感動と喜びで胸がいっぱいになってしまいました。思わずシレネは『王子様！！』叫びそうになってしまいました。

けれど、シレネの口から飛び出したのは、

『お、おしっこ……！！』

という、女の子には決して口に出せないような言葉だったのです。

あまりのことにシレネは頭から血の気が引いてゆくのをはっきりと感じました。王子様は一瞬キョトンとしてから、たぶん何かの聞き違いだろうと、シレネをまじまじと見つめます。

シレネは慌てて、もう一度『ち、違います！ 今のは！！』と叫ぼうとしました。けれど、またもシレネの口から飛び出したのは――

『も、もれ、漏れちゃうう！！』

もう、隠しようもないほどにはしたなくはっきりと、オシッコしたい、おトイレに行きたい！！ ということを叫ぶ、どうしようもない言葉だったのです。

そう、魔女はなんとシレネの声のうちから、『おしっこ漏れちゃう』という言葉だけを返したのです。

どうしても我慢が出来なくなったとき、シレネがそう叫べるように、そんな建前だったのかもしれませんが。でも、その裏には魔女の性根の悪さがはっきりと潜んでいるのがわかる、あまりにもひどい仕打ちでした。

考えてみてください。いくら我慢ができなくなっても、仮にも海のお姫様である女の子が、ずっと慕っていた大好きな王子様の前で、『おしっこ漏れちゃう！』なんて言えるわけがありません。

まして、魔女のこの仕打ちで何よりも残酷なのは、たとえシレネがそれ以外の何を言おうとしても、口にできるのは『おしっこ漏れちゃう』という言葉だけだ、ということにありました。

王子様がシレネに優しい言葉をかけてくれたとしても、シレネが返せるのは『おしっこ漏れちゃう！』という恥ずかしくてはしたない言葉だけなのですから。

これならば、何も話せないほうがまだマシかもしれません。

あまりのことにしばらくぼかんと呆気にとられていた王子様ですが、シレネがあまりに驚き、唇をまっさおにしているのに気付き、とりあえず細かいことは考えるのをやめて、シレネを迎えるための馬車を用意させました。

さりげなく、馬車には遠出をする時のための、ご婦人用のお手洗いも用意させました。王子様はひょっとしたらシレネが、もう本当に、なりふり構わないほど我慢の限界なのかもしれないと思ったのです。

王子様は聡明で、そして一国の後継ぎとして寛容でもありました。初対面のシレネがあまりにも無礼な、慎みの足りないことを叫んだことにも腹を立てず、人間、追いつめられてどうしようもない時には、とても考えもつかないことを口走ってしまうこともあるのだというふうに自分を落ちつかせたのです。

また、王子様はひょっとしたらシレネは、自分の良く知らない国の言葉を喋っていて、それがたまたま、偶然そういうふうに聞こえるのだらうと、そんなふうにも思いました。

結局、シレネがそれから一言も喋らなくなってしまう、さらにあとでさりげなく王子様が馬車の様子を確認させたところ、シレネが馬車の中のお手洗いを使っていなかったことがわかったので、王子様はたぶんそれが正しいのだらうと思うようにしたのです。

こうして王子様の命の恩人として、お城に招かれたシレネでしたが、陸の人間の国は見るものすべてが珍しく、しばらくは勝手も分からずにあれこれとお城の使用人たちを困らせることになりました。

けれど、そうして距離があったのも最初だけ。美しく可愛いシレネは、まもなく王子様の大切なお客様として迎えられました。

王子様が突然連れ帰った、言葉を話せない女の子に、いったいこの誰だらうと不審に思う声になかったわけではありませんが、お行儀よく礼儀正しいシレネの洗練された立ち振る舞いや、なによりも美しいその姿に、皆はきつとどこかの名のある家のご令嬢だらう、と噂し合いました。

なにしろ、シレネはもともと海の王国の王女様ですから、それも当然のことです。けれど——いつまで経っても口をきかないことについてだけは、城の者たちもみなそろって首をかしげました。

少し話していればわかったことですが、シレネは時折、まるでなにかを言いかけ、それを無理やり飲み込むように、小さく開けた唇を嚥むのです。

そうしてあとは俯いて真っ赤になり、黙りこんでしまうものですから、きつと生まれつき口がきけないのではないだらう、何か理由があって言葉を話さないのだと、お城の人たちは囁き交わし合いました。

困っていたのはシレネでもでした。

せっかく王子様とお城で暮らせるようにはなったものの、魔女にたったひとつのをぞいて声を奪われたせいで、どれだけ王子様に優しく声をかけてもらっても、ありがとうと伝えることもできないのです。

王子様に優しく手を握られ、話しかけられるたび、シレネは思わず口を開きそうになり——思わず飛び出しそうになる『おしっこ漏れちゃう！』という、みっともない叫びを、泣きそうになりながら必死になって飲み込まねばなりませんでした。

たったひとこと、『王子様、大好きです』と伝えられればどんなにいいことでしょう。でも、シレネには人間の字は書けません。

大好きな王子様が、すぐ傍にいてくれるのに、黙ったままでいなければならないことは、シレネにとってとてもとても辛いものでした。

生まれた国や、家族のこと、なぜ自分を助けてくれたのか。どうしてまた会うことができたのか。王子様はシレネのことを思いやつか、あれこれと話をしてくれました。でも、シレネは何を聞かれても、答えることができないのです。

「遠い国の、むずかしい言葉でも構わない、知らなければ学ぼう。君のことを聞かせておくれ」

「どんな言葉でもいい。僕は君の声が聞きたいのだ」

「それに、僕はまだ君の名前すら知らない。いったい、君は誰なんだい？」

王子様は、シレネが言葉話をすることを（たとえ、あんなにはしたくない台詞だったとはいえ）知っています。ですからなんとか、シレネのことを知ろうとそう言うてくれるのですが、シレネは何を言われても、困ってうつむくばかりでした。

大好きな相手に自分の名前すら口にできないことは、あまりにも歯がゆいことでした。

王子様も、シレネがあまりにも何も話そうとしないので、時々、少し不安になることもありました。まさか実は、自分がとんでもない勘違いをしていて、まったく関係のないどこかの国のご令嬢を、命の恩人と間違えて連れてきてしまったのではないかと——と。

無礼とは思いつつもそう聞いてみると、シレネは涙を浮かべて首を振るばかりです。

いったいどうしたことだろう、と王子様も四六時中、シレネのことを心配していました。

シレネが言葉話を話せないこともそうでしたが、どれだけ優しい、あたたかな言葉であっても、黙ったまま俯いて、その美しいマリンブルーの瞳に涙を浮かべ、心をかきむしらるばかりの悲しい顔をするばかりのシレネに、王子様はふしぎと心惹かれていたのです。

きつとなにか、悲しいことがあるのだらうと、聡明で思い遣り深い王子様は、シレネのことを案じていました。

さて。聡明で寛容で、さらには立派な志もある、とても素晴らしい王子様ですが、ひとつだけ良くないところもありました。

王子様はあの遭難事故で溺れかけてからというもの、すっかり海が大嫌いになってしまい、いまでは海に近付こうとしなかったのです。海沿いの国だというのに、港のことはすっかり大臣にまかせきりでした。

結婚して王様になったならまず、お城を海から離れた場所に移すのだと言い出して、大臣たちはその準備に大忙しなのです。

一歩間違えば死んでしまっていたのですから、それも仕方のないことと言えばしょうがないかもしれません。

とはいえ王子様がそんな様子ですから、シレネツタはもう大変でした。

なにしろ、陸の上でオシッコをしてしまったら、シレネの魔法は解けてしまうどころか、泡になって消えてしまうというのです。魔女の

言葉を信じたくはありませんでしたが、もし本当だとするなら、どれだけオシッコがしたくなくても、おトイレなんか使えるわけがありません。

ただでさえ大好きな王子様の前では言い出しにくいことなのに、お城の中は警備の衛兵や使用人など、たくさんの人目があり、とてもではありませんがこっそりと昼のうちにお城を抜け出して海まで行ってくるという訳にもいきません。

シレネは王子様が自分の部屋に戻ってゆく夜中まで、じっと息を潜めておしっこを我慢し続けるしかありませんでした。

王子様と一緒にいるときも、珍しい果物やお菓子を口にしている時も、気づかれぬように何度もドレスのおなかをぎゅっとさすっては、耐えがたいほどに高まる尿意をこらえ、オシッコを我慢するしかなかったのです。

そうして、お城の皆がすっかり寝静まる真夜中にこっそりお城を抜け出して、海まで向かっては、顔を真っ赤にして、恥ずかしさに死んでしまいそうになりながらも、波打ち際めがけてたまりにたまったオシッコをほとばしらせるという日々を送っていたのです。

その勢いと言ったらもう、すさまじいもので、魔女が言ったようなささやかなものとは比べ物になりません。シレネの小さな身体のいったいどこにこんなに溜まっていたのかと思えるほどに、勢いよく噴き出す黄金色のオシッコは、飛沫を立て太い水流をまるで海蛇のようにのたうたせながら、じょごおおおおーっ、と海面の波を泡立てるのです。

こんなはしたない姿を万一誰かに見られたら、と思うと、シレネは気が気ではありませんでした。

そうやって、真夜中に一回だけ許されたオシッコの機会を除いては、一度もおトイレに立つこともできず、一日じゅうオシッコを我慢していなければならないのですから、シレネの苦しさといったらなみだいていものではありません。

折角のきれいな脚はドレスの下でくねくねとすりすりもじもじと擦りあわされるばかりで、内股の引けた腰ではまっすぐ立つことすら難しいほどでした。

人の多いところではこっそりおなかをさすったり、腰を揺すったり前を押さえて我慢することもできませんから、どうしても部屋に閉じこもりがちになります。

もしほんのちょっとでもおチビリでもしたなら、そのまま泡になって消えてしまうかもしれませんから、シレネも必死なのです。

そんな毎日がうまいくはずもありません。雨の日などは出掛けるのも一苦勞で、濡れたドレスをどうやってごまかそうか、シレネは本当に困ってしまいました。海までオシッコしに行っていたなどと言えるわけありませんし、仮に説明するにしても、シレネが口にするのはあの恥ずかしい言葉だけなのです。

だんだんと元気をなくしてゆくシレネを励まそうと、王子様は足しげくシレネのもとをおとずれました。

少しでも元気が出るようにと、王子様は毎日珍しいお茶や異国のお菓子などを持ってきてくれるのですが——お昼を回り、いよいよおなかにオシッコがたばたぼと揺れるくらいに我慢がきつくなってきた時に、暖かいお茶を何杯も飲みながら、気づかれぬように必死に我慢して王子のお話をじっと聞いているのは、気絶しそうに辛いことでした。

本当ならドレスの上からぎゅうっ、と脚の付け根を握り締めたいのを必死に堪えながら、笑顔をつくって王子のお話に相槌を打つ——シレネはそんな辛さを押し隠して、懸命に王子様の傍にいようとしました。

だいすきな王子の前では、わずかに腰をよじって、もじもじと我慢することもできないというのに、です。

そうやってシレネがいつまでも喋れない上、名前すらも教えてくれないものですから、王子様はそのうちだんだんと、本当にシレネが自分の命の恩人であるのか疑問に思うようになっていました。

けれどこれは、王子様を責めるのは酷というものでしょう。

なにしろ、最近ではシレネは王子様と一緒にいるときでも、どこか辛そうな表情をするのです。本当は嫌々、自分のわがままに付き合ってくれているのではないかと思ってしまっても仕方のないことでしょう。

それに、あの嵐の晩は王子様は溺れて気を失っていましたし、去り際にちらとみたシレネの姿だけでは、一度芽生えかけてしまった不安はどうしてもぬぐえなかったのです。

もしかしたら、やっぱりシレネは人違いではないか。そう思いながらあの朝別れた少女の顔を思い出そうとすればするほど、王子様はわけがわからなくなってしまうのです。

まして、いつもおぼつかない足取りで、椅子から満足に立つこともできないくらいにか弱く見えるシレネが、あの大波をかき分けて自分を救ってくれたのだとは思いつく、やはり考えれば考えるほど王子様はわからなくなってしまう。

そして、そんな折、王子様の耳にどうにも気になるうわさが飛び込んできたのです。

いつものようにシレネツタを訪ねてきた王子様は、ひとしきりお茶を楽しんだ後に（そして、いつものようにシレネは一生懸命、気づかれないようにオシッコを我慢しながらいたときに）、いつになく真剣な顔で王子様は切り出しました。

「——ところで、君にひとつ聞きたいことがあるんだ」

いいかい？ と念を押して、王子様は話し始めました。

「このところ、城の衛兵が、夜な夜な城から抜け出して行く不審な影を目撃している。……誰も寝ているような真夜中に、だ」

「……………！！！！」

シレネは、口から心臓が飛び出していまいそうに驚きました。

おもわず『じわっ』と緩みかけた脚の付け根に危険な兆候を感じ取り、必死になってすりすり内腿をすり合わせ始めてしまいます。

スカートの前をぎゅううと握り締めてしまいそうになるのをこらえ、緊張に桜色のくちびるを引き結んで、衝撃を押さえ込もうとします。

「それだけではないんだ。僕が直接見たわけではないが、港のほうでも不審な姿を見たというものがいるらしい。海の岸辺に座り込んで、なにやら水音を立てていたとか——」

「っ……………！！！！」

あまりのことにシレネは、思わず口を『おしっこ』の『お……』の形に開きかけてしまいます。

さらに動揺に身体が言うことをきかず、不自然に身体に力が入ったせいか、まだ昼過ぎだというのに、シレネはたまらなくオシッコがしたくなってしまったのです。とうとう王子様の前で小刻みに足踏みをはじめ、さすさすとおなかをさすり出しながら、シレネはなんとか、

悲鳴を上げるのをこらえました。

きっと、その悲鳴ですらあのも、恥ずかしい言葉になってしまうに違いないのですから。そしてまた、その言葉は、今のシレネが一番したいことからあながち外れているわけでもないのです。

「君の事を疑いたくはない。が……城の中にも、不敬なことに君を疑っているものがいる。僕をたぶらかしている魔女ではないか、と。もちろん、僕はそんな事を信じてはいない。……けれど、できれば君の口からそれを聞きたい。もしなにか、どうしようもない事情があるならば、それも教えて欲しいんだ。……約束しよう、決して君を見捨てるようなことはしない」

真摯な王子様の言葉に、シレネは少なからず、心を揺り動かされます。

お城に来てからもうずいぶん経つというのに、いまだになにも話せない自分を、こんなにも大切に想い、信じてくれているなんて。

シレネはけれど、やはりその思いを口にはできず、顔を赤くし、ぼろぼろと真珠のような涙をこぼすばかりでした。

シレネがどれほどお願い願っても、その喉から出る美しい声は、あのはしたないことばひとつだけなのです。そしてまた、シレネは今なお夜まで我慢し続けねばならないほどに、恥ずかしいおしっこでおなかをぱんぱんに膨らませ、それに耐えかねてスカートを握りしめ、もじもじと腰を揺すっているのです。

『おしっこが、漏れちゃう！！』

そんなことを、口にできるわけが、ありません。

「そうか……では、これだけは聞いてくれ。

何があっても、僕は君を信じよう。だから、僕のことを君も信じて欲しい」

そういうと、王子様は席を立ちました。

シレネは思わずそれを呼びとめようとし――

『あ……………ッ！！』

そこまで、でした。

口を『お』の格好に開いて、でもそれ以上は口にできないシレネを、優しげに見つめて。王子様は部屋を出てゆきました。

そうして。シレネは、それからずっと、この部屋にいます。

可哀そうなシレネツタは、王子様への想いから、悲壮な覚悟で、一晩中オシッコを我慢することを決めたのでした。

昨晚から数えてもう丸一日トイレに行っていない人魚の末姫のおなかは、石のようにぱんぱんに硬く張り詰めています。脚はきゅうっと寄せあわされ、いつときも休まずにシーツをかき乱し、ぷるぷると震えていました。

いつもならとっくにお城を抜け出しているこの時間。普段ならもう、海で盛大に、たっぷりと、オシッコを済ませて、足早にお城へと戻っている頃でしょう。けれど、シレネはベッドの上で、ぎゅうぎゅうと細い指で懸命に脚の付け根を揉みしだきながら、なんどもなんども、楽な姿勢を探して寝返りを繰り返すばかりです。

これまで、一日に一度だけ、お城を抜け出して海にオシッコをすることが許された毎日さえ、シレネは何十回、何百回ももうだめだと思うことがありました。

けれど今は、たった一度の海へのオシッコすら、許されていないのです。

硬く張り詰めたおなかを何度もさすり、交互に膝を組み替えて、もぞもぞと揺れる腰が、よじられる背中が、細い脚がシーツをかき乱してゆきます。

『おっしょ、漏れちゃう……！！』

かすかに震える桜色の唇は、ぎゅっと引き結ばれたその隙間から、誰にも届かない小さな悲鳴を、なんども繰り返します。

真珠色のうなじには湿った亜麻色の髪が張り付き、薄赤く火照った頬にも汗が浮かび、ははあはあと荒い吐息を繰り返します。

シレネが懸命にさする手の隙間のすぐ奥では、きゅんきゅんとおなかの内側から、恥ずかしい刺激が一番かわい、敏感な部分を責めなぶっていました。荒れ狂う嵐のように激しく波打つ身体の中の大きな海が、ざぱんざぱんと立て続けに押し寄せ、黄色く渦巻くはしたない熱々のオシッコが、いまにもシレネの我慢を打ち破ろうとしています。

きつく閉じ合わされた脚の奥、人魚の末姫のオシッコの出口は、恥ずかしい水の悪戯の前に、無防備にさらされ続けていました。

このままでは、いつか我慢の限界が来て、シレネははしたなくも、ベッドの上で、ギュッと押さえた手のひらの下から盛大におっしょを溢れさせてしまうでしょう。

股間の先端、脚の付け根から噴き出し進む熱い奔流は、股間を握り締める手のひらの隙間からでさえも高々とシートの上に水柱を噴き上げ、津波のように何もかもを押し流しながら、とめどもなくいつまでも溢れ、シートを汚してしまうに違いありません。

『おっしょ……、漏れちゃう……っ！！』

小さな肩を震わせて、その瞬間の恐怖に必死に抗いながら、挫けそうな心と緩みそうな脚の付け根の水門を励まして、ぐりぐりと股間をシートにねじりつけ。

シレネは、いつまでもいつまでも、熱のこもった部屋の中、ベッドの上で身もだえを続けていました。

いつ終わるともしれない、長い長い夜を越えて――

次の日、王子様がシレネの部屋を訪れた時には。そこにはもう、美しき人魚の姫君、シレネッタの姿はどこにもなく。開け放たれた窓だけがカーテンを揺らしていました。

「君……！？」

王子様は、思わず窓へと駆け寄り、外を見まわしましたが、そこには誰の姿もありません。

けれど王子様が掴んでしまった窓枠と、カーテンの裾、そして足元のふかふかの絨毯は、まるで大雨が叩きつけられたように、ぐっしりと温かく湿っていました。

よく見れば、窓の外のお城の庭にも、同じように何か、水を零したような跡が点々と続いていたのです。

シレネが消えてしまったことに愕然としながらも、振り向いた王子様は、ベッドを見てさらに言葉を失いました。

そう。なんとベッドの上には深く乱れた毛布と、可愛らしい唇の噛み痕を残した枕。シートの上にはまるで海のように、黄色いおっしょ一面に広がっていたのです。

いったいどれほど、シレネはあの小さな身体を丸めて、必死に脚の付け根を握り締めて、孤独な戦いを続けていたのでしょうか。

あんなにも苦しいおっしょ我慢を続けながら。

ついには、こんなはしたないオネショの跡すらを、王子様に見せてしまう結果になっても。シレネは、王子様の側にいたかったのです。

――けれど、『おっしょ漏れちゃう！』以外に声をもたない人魚姫には、ついにその想いを伝えることはかなわなかったのです。

シレネが流したであろう、多くの悲しみの涙は。

すべて、このはしたなく恥ずかしいオシッコの跡に飲み込まれ、消えてしまっていました。

ベッドの上、ほかほかと湯気を立て、少しばかり泡を立ててちゃぷちゃぷとゆれる黄色い水たまりを呆然と見つめ、王子様はいつまでも呆気にとられていました。

……めでたし、めでたし。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 萌えるゴミの日

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 04/29/2010 16:14:11

BODY:

毎週月曜と木曜日は、『萌えるゴミ』の日だ。

一週間に2回、定められたその期日には朝早くから『ゴミ』の『回収場所』に大勢の列ができる。このあたりの朝の風物詩だ。

『ゴミ出し』には一人当たり少し時間がかかるので、いつも行列は長く長く延びてしまう。ぱっと済ませよう、なんて思いながらゆっくり家を出たりすると、その順番待ちで時間がなくなってしまう、心が折れそうになるくらいだ。

『ゴミ』の『回収場所』は大体町の商店街の一角。みんな重そうに揃えた手に、いっぱい詰まった中身を抱えて身体を左右に揺らしながら、まだまだかと列に並ぶ。

中には溜めこんでしまった『ゴミ』が重すぎるのか、ぎゅうっとぱんぱんの『ゴミ袋』を押さえこんで、ふらふらと足元が覚束ない子までいる。

こういうのはだいたい小さな子のことが多い。少し大きくなれば、いくら大変でも、人前でそんな姿をさらすのは、女の子としてはあまり良くないことだというのが分かってくるからだ。

この時間に『ゴミ出し』の列に並んでいる人の多くは、通勤や通学途中。ちかくに私鉄の電車が走っていることもあって、駅までの道すがらに立ち寄ることがほとんどだ。

中でも目立つのは、近くの学校の制服姿の女の子達。

もともとあまり歓迎されることのない『ゴミ出し』ではあるけれど、なかでも特に不潔なものを嫌う彼女達くらいの年代では、汚いものに近づくこと自体を嫌がったり、恥ずかしがったりする子も多い。

けれど、生活をしていればどうしたって『ゴミ』とは無縁でいられないものだ。どんな人でも生きていれば、必ず『ゴミ』は出てしまう。そして、『ゴミ出し』は誰かに代わってもらうなんてことは勿論できない相談だ。

だから多少不便であっても、社会のルールとしてこういった制度があることを学ぶのはとてもいいことだろうと考えている人も多い。

……『ゴミ』というのは、女の子のプライバシーの塊のようなものだ。

たとえば、ぱんぱんに膨らんだ『ゴミ袋』にこの数日でどれだけいったい『ゴミ』を溜めてしまっているのかから始まって、いったいどうしてそんな『ゴミ』が出たのか。どんな色や匂いをさせているのか。さらには『ゴミ出し』の時のマナーを守っているのか。回収場所での行列、出し方、片づけ方、始末の方法——そんなことから、他人には知られたくない秘密の多くが分かってしまう。

だから、女の子ならできるだけ、人目に付かないように『ゴミ』を処分してしまいたい、そう思うのは当然のことだ。

けれど——それを優先するあまり、最近では真夜中に『ゴミ出し』にやってくる子たちが後を絶たない。

確かに、誰も見ていない夜のうちに、こっそりと処分しておきたいという心理はわかる。『回収場所』に並んで順番を待ち、人前で『ゴミ出し』をするというのは、自分の隠しておきたいヒミツを大勢の前にさらけ出しているようなものだから。

けれど、回収車も来ないのにそのまま朝まで『ゴミ』を放置されてしまうと、夏場なんかは一気に匂いが酷くなり、さらには虫やカラスなんかの害の原因にもなる。

だから、基本的に夜が明ける前に『ゴミ出し』をすることはマナー違反として禁じられているし、指定された期日のある時間になるまでは、回収場所に立ち入れないようにしておくなどの対策が取られることもある。

いまは、多くの市や町で、『ゴミ』の回収場所ではそのせいで夜のうちにそうしたことをしてはいけない条例ができているのが普通だ。

マンションなどの場合、この『回収場所』にも工夫がある。すごいところだと雨を避ける屋根や壁まであったり、『ゴミ』を分別できるスペースまで作られていたりするという、とても贅沢なもの。

けれど、普通は町並みの一区画が仕切られている程度。場合によってはゴミをしまっておく専用の箱があったりするが、酷い場合はまったく商店街の野ざらしに、標識が掲げられているくらいだ。

こうなると、出勤や通学の視線にさらされながら『ゴミ出し』をしなければならない。女の子たちは恥ずかしくばんばんに膨らませた『ゴミ袋』を必死に揺らしながら抱えて『回収場所』の列に並び、太腿を擦り合わせながら順番に『ゴミ出し』の行列に並ぶことになる。

順番を守らなければならない——というのは、『ゴミ』の処分方法とは違って実際に法律で決まっているわけじゃなくて、暗黙のうちにできたルール。でも、やっぱりそれを破る人は少ない。

でも、小さい子やどうしても時間に余裕がなかったりする子の場合は仕方がない。中には順番を譲ってあげたり、何人かで一緒に『ゴミ出し』をしたことの経験がある人もいるだろう。

すこし昔までは、少し大きな施設——学校や病院なんかにはそれぞれの『ゴミ』の処理施設があったりした。

さらにそのずっと昔は、今みたいな処理施設ができていなかったこともあり、家ごとに『ゴミ』が出るたびに庭なんかで処分をしているのが普通だった。今では信じられないことだけれど、その頃はいろいろとおおらかだったのだ。けれど時代が進むにつれて人が多くなり、それに伴って『ゴミ』も増え——それは難しくなった。

特に最近、これらの小さな施設での処理は不完全で、環境に良くないということが叫ばれ出してから、『ゴミ』はこうして、まとめて回収するというのが当たり前になっている。まして庭で処分するなんてもってのほからしい。

現在では『ゴミ』の種類によってこまかく回収日は決められていて、当たり前だけれど、『萌えないゴミ』を『萌えるゴミ』の日に出してしまうのは重大なマナー違反だ。

時々面倒くさがって、あるいは不慮の事態で一緒に出してしまう人がいて、それが商店街では問題になっている。

ほかにも、指定日を守らなかったり、ずっと溜め込んでいた『ゴミ』で『回収場所』を長い時間占領してしまったりと、問題は山積みだった。

最近では『ゴミ』の回収にも有料化が叫ばれており、そのために専用のシールや入れ物を販売する自治体も増えてきた。

困ったことにこの容器、その人ごとにはっきり規格が決まっており、その家庭や個人の生活状況に合わないこともたまにある。

あと少し大きければに収まるのに、という状況で、二袋分のゴミ袋を使わねばならない女の子などは、後ろめたさを感じることも多いという。

冬の朝。日も昇るのは遅く、7時過ぎになってもまだ早朝のように空は白い。ちょうど市内の学校の登校時間に重なるのか、通学コートに身を包んだ少女たちの姿が目立つ。マフラーやイヤーマフなどを身に着けた少女たちは、顔を赤らめて落ち着かない表情。

全員がそっと下腹部に押し当てた手のひらから、ずっしりと重い『ゴミ』の存在感を感じとっている。一週間の半分の間に溜まってしまった分は、たとえ一人分ではあってもかなりの量なのだ。

列の先には、いよいよ次の順番を待つボブカットの少女が一人。

見慣れない制服の彼女は、どうも最近越してきたばかりのようだ。まだ前の人が回収場所で作業中だというのに、そのまま飛び込んでしまいそうなほどに焦れている。はやく邪魔なゴミ出しを済ませてすっきりし、駅に向かいたいところなのだろう。

だが

「ねえ、貴方。シールは？」

そんな少女を呼び止める背中の声。近くの主婦と思しき女性に、少女はえっ、という顔をして振り向く。

虚を疲れたような表情の少女に、女性は微妙な表情で胸元のシールを示し、

「ここでゴミを出すときは、指定のシールが要るんだけど……持っていないの？」

「え、ええっ！？」

驚く少女。

こちらに引っ越してきて間が浅い彼女は、ついそれまで住んでいた場所の習慣でゴミ出しをしようとしていたのだ。

「もしかして、……それがないと、ダメ……なんですか？」

「ええ……できない事になってるわ」

「そ、そんなぁ……」

申し訳なげに告げる女性。少女が困っているのはわかってはいたが、町内会の決まりでもある。知らなかった、で済ませるにはいかないのだ。

「じゃ、じゃあ、今日は……できないんですか……？ あ、あの、なんとかならないでしょうか……わたし、先週引っ越してきたばかりで……きよ、今日が初めてなんです……この前のゴミ出しも間に合わなくてっ……」

見れば、両手で抱えるのにもつらそうに、少女は『ゴミ』の重さを持て余していた。足元は忙しく交互に足踏みを繰り返し、内股になって立っているのがやっとという状況。

もう一週間以上も『ゴミ』を溜め込んでしまっているのだろう。

「ごめんなさい、私が決めることじゃないもの。多分、回収してもらえないわ……」

「う……そんなぁ……」

がつくりとんだれる少女の前から、作業を終えた女の子が出てくる。まだ小さいのにひとりで『ゴミ出し』をしている幼い彼女の胸にも、学校のバッチと一緒にシールが張られていた。

こんな小さな子でも、ちゃんと決まりを守っているのに——自分だけがルールを無視するわけにはいかない。

「はぁ……」

少女は落胆のまま、とぼとぼと下腹部でたふんたふんと揺れる『オシッコ』をそのままに歩き出す。
次の『トイレの日』は、3日後だ。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 妖魔退治の巫女さんのお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 05/14/2010 23:53:39

BODY:

「こちらですね？」

「へ、へえ……そうでございますだ」

不気味な鳴き声の響く澁んだ森の中を、二人分の足音が響く。

ひとつは提灯を掲げ先を行く老人のもの。もう一つは、その隣を歩く少女のものだ。

風が茂みを揺らす音にもびくびくと怯えている老人に対して、まだ幼い雰囲気に残る少女は落ち着いた様子で歩みを進めてゆく。緋袴に白の小袖の装束に身を包み、肩で髪を切りそろえている。手には少女の体軀には不似合いなほど大きな梓弓。

年若いながらも凜とした気配も合わせ、この娘が退魔を生業とする歩き巫女であることは、一目で知ることができた。
「……こ、ここですだ」

しわがれた声を緊張に掠れさせ、老人は分岐を示す小さな塚の前に立ち止まった。恐々と提灯を掲げ、藪の深い山道の途中に、薄暗い脇道を指し示す。

「この脇道の先に行きますと、大きな沼がありまして、へえ、そこに化け物が棲みついたらまずでござえます。随分と昔からある沼だそうですが、最近じゃ昼間でもこのとおり、不気味なくらい霧が出ちまって……」

すでに周囲を覆い包む深い霧は、薄暗い森の中ということもあってかなり視界を悪くしている。少女はそっと目を閉じ、その霧の奥へと意識を凝らす。

「——っ」

ざわ、と背筋を這い上るような妖気が、霧の奥に確かに感じられた。

握る弓の感触を確かめて、少女——朱音は村長を振り返る。

「分かりました。ここから先は私一人で大丈夫です。村長さんは村までお戻りになってください」

「へ、へえっ……わかりました。……その、お願いしますだ巫女様。どうか、どうかあの化けもんを退治してくだせえまし！！」

「ええ。お任せください。必ず良い報せをもって戻ります」

村長は、長い年月と苦渋が染み付いた、皺だらけの顔をくしゃくしゃにして深く頭を下げると、老体とは思えぬ早足で村へと引き返してゆく。

ここまで朱音を案内するだけでも、相当の決意だったのだろう。生きた心地もしなかったに違いない。勇気を振り絞って案内を買って出た村長の勇気に感謝し、朱音は村を脅かす妖魔への怒りを奮い立たせる。

「——よし」

再度弓の具合を確認し、懐の符を手用に用意して小さくうなずくと、朱音はゆっくりと、脇道のほうへと足を踏み出した。

「……………」

沼地に漂う妖気は、朱音の想像以上の濃いものとなっていた。深い霧はもはや妖気と同じくらいに濃密で、清浄な香を吹き込んで清められた巫女装束をすり抜け、朱音の手足にまで絡みついてくる。

脚絆や手甲に冷たく染み込み、ふくらはぎや手首に張り付いて、身体を侵そうとするその不快な感触に、朱音は小さく唇を噛んで己を保つ。

「……想像以上ね」

数歩先すらまともに見えぬ、乳のような霧の中は、距離感も方向感覚もまともに働かない。村長の話では、土地鑑があるものですら迷いこんだらよほど運が良くなければ出てくることは叶わないという。

この一帯にはそうしたものを惑わせる妖術が施されているに違いなかった。妖魔の気配を感じ取ることでできる朱音でなければ、沼地まで辿り付くことすら叶わないかもしれない。退魔の業を身につけた朱音でも、ともすれば己を見失いかねないあやかしの術だった。

（……油断できないわ）

こうして、人里から離れた場所に巣を構え、そこに籠る妖魔は、概ねして狡猾だ。

山を根城にしている、頻繁に人里に下りて暴れるような妖魔であれば、村に備えを強いて迎え撃つことができる。いかに力の強い妖魔といえども、向こうから攻めて来てくれるのであれば、それに対抗することはさほど難しくはない。

だが、今回のように巣をつくり、そこに潜んで人を引き込む妖魔に対しては、こちらから討って出る必要がある。彼等を討つためにはどうしてもこちらから巣の中に踏み込まねばならず、それが思わぬ困難を呼ぶことを朱音は知っていた。

「っ……」

草鞋が荒れた地面を擦り、ぼたりっ、と朱音の顎を汗がつたい落ちた。

まだ汗ばむような陽気ではない。むしろ沼地へ近づくにつれて、霧が濃さを増し、同時に寒さが押し寄せてきている。普通の者であればこの妖気と霧に当てられて、引き返すことも考えられなくなっているだろう。

だが朱音は、妖魔のもたらす穢れを浄め討ち祓うことを生業とする歩き巫女だ。幼少時より鍛えられた心と身体は、たとえ身体に触れ染み込んだ妖気ですら浄化することができた。

妖魔と相対する時、してはならないのは相手を畏れることだ。あやかしは人の怖れを食って力を蓄える。だからこそ、巫女である朱音の身体は常に清浄に保たれ、恐れを産む妖気を身体に溜めぬようになっている。

「あと、少し……」

ひときわ濃さを増す妖気の中、この惑わしの霧の中心が近いことを朱音は感じ取っていた。想像をはるかに超える妖気の濃さに、頭が鈍り下腹が重くなる。

このような濃い妖気の中では、朱音のような力を持つ巫女であっても妖魔との戦いも過酷なものになるだろう。いわんや、そうした力のない旅人が迷い込んでしまえば、抗うことすらできぬに違いない。

重苦しく立ち込める妖気の中、朱音の眉は小さくたわみ、唇は小刻みに震えていた。

肩は小さく震え、そわそわと落ち着かない足元が、再び砂利道を擦る。

「んっ……」

ふいに、幼い姿に似合わぬ、艶を帯びた吐息が漏れる。

いつしか、朱音の凜とした表情は弱ったようにほの赤く染まり、足取りも鈍り始めていた。緋袴の脚が、いつの間にか内股を向き、梓弓を握る手は身体の前に添えられている。

「ふぁ……っ……」

呼気に合わせてこぼれた吐息が、ほう、とあどけない唇を震わせる。ぎゅう、と弓を押さえる手が震え、巫女装束の袖を引っ張るように爪を立てる。耐えられぬというように、緋袴の内腿がよじり合わされては波打った。

「ん……やぁ……っ」

じりじりと、砂利を擦るように草履が音を響かせ、朱音は思わず声を上げてしまう。

こぼりこぼりと音を立てんばかりに。どこからともなく湧き上がってきた熱い衝動が、乙女のうちを満たしてゆく。

小さく噛みしめた唇から、荒くなった息が響き、脚の付け根に押し当てられた手のひらが、ぎゅうと緋袴の上から、閉じ合わせた内腿の間に差し込まれる。

「や、やだぁ……っ」

みつもない己の姿に、朱音は頬を赤くした。退魔の巫女とて、年若い娘である。人目はなくとも乙女として曝してはならぬ姿だった。

（ど、どうして、こんなに急に……っ？）

朱音の表情は困惑に揺れていた。

ほんの少し前まで、全く気配もなかった感覚が、一気に波を打って押し寄せてきていたのだ。渦を巻き、波打つように膨れ上がり、あっという間に内側から身体を支配してゆく衝動に耐えきれず、朱音は内腿をぴつたりと寄せあい、擦り合せてしまう。

「ん、あんっ……」

薄く色づいた吐息が、濃い霧の中にかすれて響く。

（お……お手洗い……っ）

は、は、と息を荒げ、巫女装束の前をきつく抑え込んで。下腹部にたちまち膨らむ激しい尿意に、朱音は切なくもぎゅうと身をよじった。

あまりにも、あまりにも急速な尿意だった。

切羽詰った下腹部は恥ずかしい乙女の液体にぱんぱんに膨らみ、わずかな身じろぎにすら甘い痺れを上げる。思わず喘ぎ声をあげ、身をよじらずにはいられない程のはしたない尿意が、巫女装束に包まれた清浄な少女の肢体をむしばんでゆく。

（ど、どうして……？ こんなに急に、催すなんて……っ）

妖魔との対決を前にして、緊張に催すことは考えられなくもないが、それにしても強烈過ぎる。

第一、朱音はちゃんと里を出る前にも用は済ませてきたはずだった。前も後ろも分からない霧の中で時間の感覚も乱されているかもしれないが、どう考えてもそれから半刻も経っていない。それなのにここまで激しく催すとは、通常では考えられないことだ。

（まさか、里の人たちにかされた……？）

そんな疑念が頭をかすめるが、里で口にしたものと言えはせいぜいが茶ぐらいだ。それもひとくちふたくち口をつけた程度で、ここまで効き目をもたらすとも考えにくい。こんなことをして何の意味があるのかという疑問もあった。

朱音が妖魔退治のため村を訪れた時の村の喜びようは本物で、妖魔と結託した村人たちが朱音を嵌めようとしていたとも思えない。騙して妖魔に食わせるにしても、何も知らない旅人のほうが余程やりやすいはずだ。

ならば――

「あ……っ」

巡らせていた思考は、押し寄せる尿意の大波によって中断される。ぞわりっと背中を撫で上げるいけない感覚に、ついに朱音は脚を止め、両方の手で緋袴の股間をきつく握り締めてしまった。

まるで童女のように、はしたなくも脚をその場に踏み鳴らし、袴の腰をぶるぶると震わせてしまい、朱音はかあと耳を赤くする。

（い、いやあ……っ）

誰も見ておらぬとはいえ、少女にとって決して見せてはいけない、恥ずかしい姿だ。羞恥に俯く朱音を、しかし立て続けに尿意は身体の内側から責めたて、自由を与えない。

乙女の秘所を責め立てる恥ずかしい水の誘惑。硬く張り詰めた下腹部に響く尿意の波を、朱音は身体を折り曲げ、腰を揺らしてやり過ごす。

朱音を襲うこの急激な尿意の原因は、辺りに立ち込める霧にあった。

沼地を中心に澱み広がる濃密な妖気は、朱音の推測通り、沼に潜む妖魔が霧に乗せて放ったものであった。この霧は人の口や鼻から吸い込まれることで効果を発揮し、迷い込んだ者の方向感覚を奪い、同時に巣の中心の場所を隠していたのだ。

退魔の歩き巫女である朱音の身体は、この惑わしの霧を浄化せんと急速に活性化し、四肢に、喉に鼻に触れた霧を妖気ともども片端から体外へと排出せんとしていた。

——その結果が、乙女の恥ずかしい液体となって表れたのである。

あっという間に乙女の堰は溜まりに溜まった羞恥の液体で満たされ、たぶたと音を立てて揺れんばかりになっている。下腹部の重い感覚は無視することもできないほどに存在感を増し、朱音に無理やり羞恥の姿を取らせんとしてくる。

「んっ、んう、…ふぁ……んっ」

巫女装束の下腹部は、一気に膨らんだ尿意でぱんぱんに張り詰め、わずかな身じろぎすら激しい苦痛になって少女を襲う。許容量をはるかに超え、なおも次々と注ぎ込まれる羞恥の熱水はさらにその量を増していた。

身体の外側へ緩やかにせり出して強張った下腹部を撫でさすり、腰をよじるたび、朱音ははしたない声を響かせる。

「……っ」

皺の寄った緋袴の太腿を擦り合わせながら奥歯をきつく噛んで、朱音は思わず周囲を見回してしまう。

無論、寂れた山道の、ひときわ奥まった場所だ。妖魔のことも抜きにしてもまわりに視線や人の気配などあろうはずもない。しかしそれでも、なぜか誰かに見られているような気がして、朱音は頬を赤くして腰をもじつかせていた。

(どうしよう……)

困惑が、朱音の胸をよぎる。

脚は定まらず、頭もともに働かない。両手も自由にならぬでは脚を踏ん張って弓を引くことなどできそうになかった。それどころか呪言を紡ぐにも舌がもつれ、震える指では符もともに使えぬかもしれない。

客観的に考えれば、この有様で妖魔退治などできようはずもない。どこかで用を足さねばならないのは明白だった。

しかし。さりとてもし、朱音が茂みにしゃがみ込んで袴を下ろし、無防備に裸をさらしているところを、妖魔に狙い打たれてもしたら？

……このように狡猾に巢を張る妖魔が、このような霧を用意しているとすると、その隙を狙ってこないとは、とても思えなかった。

「そ、それに……っ」

もじもじと足擦り合わせながら、朱音はちらりと近くの茂みにめをやっては、ぴくんと眉を震わせる。

なによりも——乙女としての羞恥心が、このような場所で用を済ませることを激しく拒否している。

「そうよ……そんなこと……」

耐えがたい尿意に晒されてなお、朱音はその決心を付けかねていた。

年若い彼女だからこそ、そうしたことに強い抵抗があったのだ。天地の清浄を保ち、妖魔を退ける役目を持つ巫女が、己の身体から放出される穢れを地に撒き散らすわけにもいかない。そんな建前が取ってつけたように思い浮かぶ。

そもそも、歩き巫女の総本山である“御山”でお役目を担う巫女として躰けられた朱音には、厠以外の場所で明け透けに用を足すなど、到底許容できぬ振る舞いだった。

獣と同じように野原に腰を落とし黄色いゆばりを進らせるなど、言語道断なのである。

「そんなの、だめ……ぁんっ……」

しかし、朱音そうしてがためらっている間にも、ますます下腹部の欲求は切迫してきていた。ぶるぶると震えだした足は、もう一歩も歩けぬとばかり根を生やしたように動かず、もじもじと擦り合わされては押し寄せる尿意を堪えるのに精いっぱい。前かがみになった上半身の下で、下腹部をさする手のひらもそこから離せないほどだ。

事ここに至っても梓弓を取り落とさぬように小脇に挟んでいるのは、朱音のささやかな巫女としての矜持だったが——それもいよいよ崩れそうになっていた。

ぞわり、ぞわり。

身体の内側、溜まりに溜まった恥ずかしい液体の出口を、悪戯な水の誘惑がひっかく。肩を小刻みに震わせながら、朱音は何度もきつく口を引き結ぼうとする。

潮が引くように、次にやってくる大波の予兆が少女に決断を迫った。

(こ、こんなところでなんて……でも、このままじゃ……)

妖魔の棲家の傍で無防備な姿をするわけには——

でももう我慢できない——

退魔の巫女が、こんな処で——

これが相手の狙いかもしれない——

お手洗いじゃないのに——

村の人たちは妖魔と通じてるんじゃない——

我慢しなきゃ——

そんなことできない、恥ずかしい——

だめ——

漏れちゃう——！！

退魔の巫女と、年若き乙女と、朱音の心の中でいくつもの思いが複雑に交差し、ぶつかり合う中、
「……で、でも！！」

やはり乙女の羞恥に耐えかねて、朱音はとうとう音をあげてしまった。

これ以上引き延ばしては、本当にどうにもならなくなる。まさに妖魔はその隙を虎視眈々とうかがっているのかも知れない。

ならば、少しでも余裕のあるうちに用を足しておくべきだ——言い訳も含めてそう思い、少女が羞恥を懸命に押し殺して、重い脚を引きずり茂みに踏み込もうとした、その時だ。

がさりっ——

なんの前触れもなく、背後の梢が揺れる。

朱音は咄嗟に握りしめていた弓を構え、振り向いた。

「妖魔！？」

息を殺し、音のした方を窺うが、深い霧に覆われて不審な姿は見当たらない。気配を探ろうと意識を研ぎ澄ませるが、ますます濃くなる霧は妖気の在りかすら覆い尽くし、ぼんやりと霞ませていた。

そこに居るのが誰かも——いや、そもそもそこに何ががいるのかどうかすらも判然としない。

「んう……っ」

そして、こんな時でも激しく尿意を訴える下腹部が、少女巫女を焦らせていた。意識を集中しようにも、焦げるようにちりちりと暴れる尿意のせいで、うまくいかないのだ。

こぼりこぼりと音を立てるほどに注ぎ込まれる尿意は一時もおさまらず、臍の裏側でぐらぐらと火にかかったように沸き立っている。
「だ、誰か、いるのっ！？」

焦りのまま、朱音は思わずそんな声すらあげてしまう。これに狡猾な妖魔がわざわざ応えてくれるはずもなく、むしろ自分の居場所と動揺を知らせてしまうだけなのだが、もはやそんな事にすら思い至れないほど、朱音は動転し——一切羽詰った尿意に脅かされていた。

「っ……」

弓弦に手をかけ、朱音はまとまらない頭で思案する。朱音の持つこの梓弓は、矢をつがえて放つものではない。その弦のかき鳴らす清浄なる音であやかしの気配をうち払うものだ。

だが、それをするためには特定の作法でもって脚を踏み、弓を引き、弦を鳴らす必要があった。

「は……う、っ……ん、んあっ」

下腹部でぐらぐらと尿意が沸き立ち、今にも恥ずかしい噴水をほとばしらせんばかりの現状。まともに立つことも叶わないようなこのへっぴり腰で、弓など引けようはずもない。

三人張りの剛弓というわけではないにせよ、朱音の身体で大きな梓弓の弦は、単純な力任せにどうにかできるものではないのだ。正しい作法をもって初めて意味をなす退魔の術なのである。

（だ、だめ……そんなことしたら、も、……漏れちゃう……っ）

ぞわりっ、といけな感覚の予兆が朱音の背筋を這いあがる。いつしか草履のかかとが持ち上がり、少女巫女は爪先立ちになって腰を引き、小刻みに震えながらの前屈みという、あまりにもみっともない姿をさらしていた。

膝ががくがくと震え、今にもべしゃんとその場に座り込んでしまいそうな有様。煙草を一服する時間をもつかどうか怪しい。

「あ、あっ……」

それでも朱音は、弓から手を離せずじつにいた。まったく定まらずぶるぶると揺れ動く弓を、深い深い霧の奥へと辛うじて向けたまま、腰を激しくよじり続ける。

いまだ、沼地に潜むという妖魔が、姿どころかその影すら見せていないことが、朱音の心をさらに惑わせていた。

今まさに、牙をむき爪を光らせた妖魔が目の前に迫っているのならば、形振り構っている暇はないのだが——さっきの音も単に鳥か獣が飛び立っただけかもしれない、と思うと、心が定まらない。

疑心暗鬼に陥った朱音は、ますます動けなくなってしまうていた。

「……………っ」

そのまま、時間が過ぎる。

「……………っ」

ひりつくような緊張の中、じつとじつと耐えるその時間は。朱音には一刻、一昼夜ほどの長さにも感じられたが——実際はさほど長い時間ではなかっただろう。

揺れ動く弓を引き絞ることもできないまま、歯の根も合わずに霧の中を睨み、懸命に尿意をこらえていた朱音だが、

「っ、だ、だめ、で、出ちゃうっ！！」

とうとう限界を口にした少女巫女の手から、梓弓がずると地に落ちた。妖魔に抗する最大の武器すらも放り出して、なおも激しさを増すばかりの尿意に耐えかねた朱音は、飛び込むように間近な藪の中へと踏み入れた。

「あ、あっあ、だめ、だめっ、出ないで、出ちゃだめ、もうちょっとっ……！！」

必死の訴えと共に、朱音がはしたなくも腰帯を引きちぎるように解き、袴膝下まで下ろし、乙女の秘所もあらわにしてしゃがみ込んだその瞬間。いままさに、耐えに耐え続けたものが朱音の脚の付け根から、凄まじい勢いで噴出さんとしたその刹那。

再び、がさりと草むらを乱す音が響いた。

しかも今度は朱音のすぐ背後、息も届かんばかりの真近から。

「ッ！？」

退魔の術の修行を繰り返し、覚え込まされた身体は反射的に反応していた。下ろしかけた緋袴もそのままに、懷から符を引き抜いて立ち上がり、振り向いた朱音の目の前で――

その瞬間。

まるで、嘘のように霧が晴れる。

「え。……！？」

突如としてくると視界がめぐり、朱音は軽いめまいを覚えた。

次の瞬間、少女がが目にしたのは、先程までいた里のさっき知り合ったばかりの見覚えのある村人たちだった。

彼等は皆一様に、眼を丸くし、ぼかんと口を開けて朱音のほうをじっと見ている。

「み、巫女様？」

村長の呆気にとられたような声が、朱音の意識を引き戻す。

そう。

突如、村長以下の村人たちが現れたのではない。現れたのは朱音の方だった。村を発った時に、不安げな顔で少女巫女を見送った村人たちは、そのまま村長の家で巫女の帰りを待っていたのだろう。

薄暗い雲の下、囲炉裏を囲み、不安を紛らわすように寄り集まり、酒の杯を持ち出してまで板の間に詰めかけていた村人たちは忽然と姿を見せた巫女を前に、ただただ言葉を失っていた。

（……………こ、これ、っ、そんな、嘘、嘘お…………）

そう。朱音は、村長の家座敷の真ん中で、袴を下ろし、幼い下半身を丸出しにして、尻を突き出し、今にも用を足さんばかりの格好のまま無防備にしゃがみこんでいるのだった。

「そ、そのう、さっきから一体、なにをなさっていらっしやるんで…………？」

呆気にとられた村長のその言葉で、朱音は理解した。理解してしまった。

先刻から。いつからかははっきりしないが――朱音は。はしたなくも腰を震わせ身体をよじり、脚の付け根を握り締めて必死になって尿意を堪えている様も、大切な梓弓を放り捨て、もう駄目漏れちゃうと喘ぎ叫んでいた時も。ついに音をあげて、用を足さんとしていたその瞬間のその姿も。

すべて、あの霧深い山中ではなく――この村長の屋敷の中で。座敷に上がり込み、男達の視線の真ただ中でしていたことなのだと。

「い、いや…………あッ」

きゅう、と少女の喉がかすれた悲鳴を引き絞る。

そして、もはやそれが限界だった。立て続けの衝撃が少女の許容量を超え、堰を切って進む水流が、激しく座敷の古びた畳を討ちつける。

ぶしゅっ、ぶしゅああああああああアッ！！！！

「——いやああああああッ！？」

あどけなさを残す少女の足元に、野太い水流が、まるで鉄砲水のように解き放たれ、畳の上をまっすぐに撃ち付ける。妖気を浄化し濃く色付いた羞恥の熱水は、古びた畳の上でなおはっきりとわかるほどに黄色をしていた。

耐えに耐えつづけた排泄のその勢いは全く尋常なものではなかった。水流は凄まじく、湯気を立て、四方八方に飛沫を撒き散らし、泡立ちながら進む。津波のような羞恥の熱水の放出はとどまるところを知らず、囲炉裏ばたにあった空の茶碗と徳利をまとめて横倒しにし、土間まで一気に押し流してゆく。

「うおをおお！？ み、巫女様なにするだ！？」

「な、なんだべ！？」

「あ、あ、や、あッ……」

畳の上に小便をせよとせ、まき散らす娘を前に、たちまち広間は大混乱に陥った。瞬時に顔から湯気を吹きあがらせ、朱音は喉を引きつらせながらその場を飛び退こうとする。

ぶしゅううッ！！ びしゅつ、びぢゃばぢゃッじょぼぼッ、
びぢゃびぢゃあじゅばばばばあッ！！

だが、放水の快感にうち震える下半身が言う事を聞くはずもない。少女の内腿は激しく痙攣し、朱音はがくりと体勢を崩してしまふ。身をよじったと同時に、背中から後ろに倒れこんでしまい、わずかに上向いた股間から、今度は大きく弧を描くようにして噴き上がった恥水が畳の上に撒き散らされる。

咄嗟のことによけ損ねた近くの男の膝へ、思うさま少女巫女の小便が浴びせかけられてゆく。

「うわあッ！？ な、何するだおメエっ！？」

「あ、あッあ、や、ちが、違うん、ですっ、」

男が叫ぶが、もはや朱音にはどうすることもできない。荒れ狂う水龍を身体の中に抱え込んだ如く、排泄の出口は全く壊れてしまったように言うことをきかず、噴き上がる熱水を抑え込むことはかなわなかった。

じょぼぼぼぼおじょぼぼッ、じょじょぼぼおっ、
じょじょぼぼッ、じゃごおおおおお——っ！！

「いやああああ……ッ！！」

村中に響き渡るばかりの猛烈な音を立て、見る間に畳は湯気を立てる黄色い海へと変貌してゆく。

身の丈六尺余の豪傑が、酒をひと樽飲み干してするであろう立ち小便ですら、ここまで豪快にはいかないだろう。それを、まだ幼さすら残した少女巫女が、顔を耳まで赤くしてしゃがみ、無防備に見せた幼いつくりの股間から怒涛のように噴出させているのだから、いったいどれほどの衝撃と言えようか。

（と、止まって、止まってエ……ッ）

朱音は半狂乱になりながら、滝のようにほとばしる飛沫を止めようと脚元の袴を引き上げていた。

しかし、乙女の身体がいったん出始めた奔流を途中で塞ぎ止められようはずもない。無理やり腰下まで引っ張り上げた緋袴は、

その裾を朱音自身が踏んづけているせいで、かえって少女巫女の動きを封じてしまう。

「あ、あつだめ、止まって、違うの、こ、これはあ…ツ」

ずる、と濡れて滑る裾に足を取られ、べしゃんと座り込んでしまった朱音の足元、腰の奥でじゅじゅう、とはしたない音を立て、緋色の袴はみるみるその色を変えてゆく。引き上げた手のひらがちょうど噴出する奔流を受け止め、ぶつかった進りはびちゃびちゃと泡を立てながら巫女装束を濃い黄色のまだら模様染め上げていった。

この期に及んでも、朱音の放水は全く弱まるどころかますます激しくなるばかりだった。下腹の奥が激しく絞り上げられるように震え、乙女の堰へ熱く煮えたぎった恥水をこぼりこぼりと注ぎ込み続けている。濃密な惑わしの霧の中を歩き、そのすべてを浄化せんとする乙女の身体は、なおも身体の中にとり込んだ不浄な妖気を絞り出さんとしていたのだ。

「あ。あ。だめえ、だめええ……っ！！」

がくがくと腰を震わせ、肩を引きつらせて、朱音は腿を内向きにぴったり合わせたまま腰を落としてしまう。

じゅじゅう、じゅつ、じゅおおおおお……じゅごおお……

膝を寄せ合う女座りの体勢で、濡れて色を変えた緋袴の脚の付け根から、みるみる薄黄色い乙女の泉が湧き上がり、脚と腿でつくられたくぼみに溜まってゆく。紅白の巫女装束に三色めの黄色を追加し、湧き上がりあつという間に脚の縁を乗り越えてあふれ出した恥水は、座り込んでしまった巫女の身体を残さず水浸しにして溢れ流れ、そこら中に散ってゆく。

己の誇りである退魔巫女のあかしを、みずからの恥水で台無しにして、なお朱音の身体の中から噴き出すほとばしりはおさまらない。

涙を浮かべ俯き、見ないで見ないと叫びながら、地に落ちた退魔の巫女の姿は、村人たちの視線をいつまでも釘付けにしていた。

（初出：書き下ろし）

※）主人公の名前の表記ゆれ修正。指摘感謝します。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 長靴いっぱいの話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 06/24/2010 23:56:31

BODY:

どんより澁む暗い空。

もう一週間も降り続く雨は、今日も止む気配がない。誰もが傘を差して行き交う灰色の雑踏の中、水色の長靴がアスファルトの上の水溜りをばちやりと跳ねさせる。

長靴とお揃いの水色の傘の下、手に提げた鞆をかたかたと揺らして、紺野梓は駅前の通学路を足早に駆け抜けてゆく。

「うう……っ」

6月の曇天にも負けない鮮やかな雨傘の下では、汗を吸った前髪が額に張り付き、眼鏡がぼんやりと曇っている。

(はやく、はやくっ……)

頬は赤く、息は荒く。

次第に強まり始めた雨足をものともせず弾くお気に入りの傘の下で、しかし少女の口元は緊張に強張り、小さく呪文のようにそんなつぶやきを繰り返していた。

かち、かち。

急いでいた少女の行く手を遮るように、交差点の信号が点滅し、赤へと変わる。

「……………っ」

横断歩道の手前で足を止め、うらみがましいような視線で車道の六つ目信号を見上げる梓。そんな彼女の前を、2車線の道路いっぱいには車が走り始める。

出かけるのも億劫になりそうな空模様のせい、車道に溢れんばかりの乗用車で、交差点はいつもよりも混雑しているようだった。

（はやく……っ！！）

横断歩道の前でも、梓は落ち着かないように小さく足踏みを繰り返していた。長靴の爪先が交互にアスファルトに擦りつけられ、揺れる身体に合わせて、水色の傘も左右に振れる。

切羽詰った“とある事情”から、焦る気持ちを抑えきれずにいる梓は、手提げ鞆の持ち手をきつく握り締めたまま、車道から一時も視線を切らぬように、信号を凝視していた。

（はやく、はやくしてよ……！！）

まるで陸上の選手のように、信号が変わったらすぐにでも走りださんばかり。

そんな風に余裕のない梓の左右に、やがて傘を手に買い物帰りの主婦や、背広姿のサラリーマンが信号待ちに並びはじめた。

駅前の大通りにつながる交差点は交通量も多く、信号が長いことでも有名だが、こんな天気の中で近くの歩道橋まで迂回するのを面倒に思う人達は、皆ここを利用しているらしかった。

ふらふらと左右に傾く水色の傘の下、鞆を握る手をスカートの前にぎゅとくっつけて、やけに焦っている様子の少女を、人々は不思議そうに一瞥していく。

（……あ、っ、あ、あっ）

不意に、傾いていた水色の傘がビクン、と跳ねた。

撥水性の高い布地が雫を払い、飛沫が飛んだ先の隣にいた主婦や大学生が、迷惑そうに梓の方を見る。

（いや……っ、だめ、だめっ……！！）

しかし、当の梓はそれどころではなかった。

指先が白くなるほどに傘の柄をきつく握り締め、顔を蒼白にして、梓は身体を前かがみに、中腰になって、鞆を握る手の甲を、スカートの付け根のあたりに押し付ける。

制服のスカートの下で膝がきつく閉じ合わされ、内股になった爪先が交互に地面から持ち上がる、すりすり擦り合わされる太腿の付け根にある乙女の貯水池では、今まさに必死の攻防戦が繰り広げられていた。

(だ、めっ、あ、ああ、いやぁ……、っ、で、出ちゃう、っ……！！)

体育の後に飲んでしまった冷たい水。本日の給食に出たスープと、お休みだったクラスメイトの分までお代わりしてしまった牛乳2本。

今日一日の間に少女の身体が摂取したたっぷりの水分は、健康な少女の身体を存分に巡り、いまや下腹部をはちきれさせんばかりの熱い液体となって一か所に集まっていたのだった。

(トイレ、トイレ……オシッコ、オシッコ出ちゃう……！！)

昼休みを越える長い雌伏の時を超え、5時間目の最中に一気に攻勢に転じた尿意は、時間と共にその勢力を増し、いまやその勢いは最高潮に達している。帰りの会の間中、梓は周りに気付かれないようにぎゅうぎゅうとスカートの中に手を押し込んで、腰を小刻みに震わせていた。

学校が終わると同時に全速力で向かったトイレは、なんと都合の悪いことに修理中。そのあおりを食って他のトイレまで混雑の最中にあり、梓は辛抱しきれずに校門を飛びだしていた。

別に家まで我慢するつもりだったわけではない。帰り道の途中にはコンビニがあり、そこでトイレを借りるつもりだったのだ。校則では寄り道は禁止されていたが、まさに人生をかけた緊急事態、そんな事を言っている場合ではなかった。

しかし——ほんの5分も走れば間に合うはずのコンビニが、恐ろしく遠い。生憎の雨の中、片方の手は傘、もう片方の手は通学用の手提げ鞆で塞がって、梓は今にも限界を迎えそうな乙女の貯水池を、両脚を擦り合わせることで耐え抜かねばならなかったのだ。

(ううっ……ガマン、ガマンするの……っ、あとちょっとで、トイレなんだから……っ！！)

石のように硬く張り詰めた下腹部は、じんと鈍く痛むほどに痺れ、両手は今すぐにでも鞆と傘を放り出して、崩壊寸前のダムのように蓋をする応援に向かいたがっている。

制服のスカートの上から、ぎゅうと直接、脚の付け根を押さえることさえできれば、押し寄せる尿意の波にも問題なく耐えきることができだろう。

しかし、大事な鞆と傘を手放すわけにもいかず、梓はもどかしくも必死に膝を重ね合わせ、恥ずかしい液体が溢れそうになるのを押し止め、腰を揺するしかなかったのだ。

深くさした傘の下、梓の表情は幸いにも周囲から隠れてはいたものの、不自然なまでに身体を振り、脚を交差させてはもじもじと腰をよじる少女の姿は、信号待ちの人々の中にあっても殊更に目を引いた。

「あ……っ！」

ふいに、梓は小さく声をあげ、ぶるぶると肩を震わせた。

ギョッと目をつぶり、顔を俯かせて、長靴の爪先をもう片方の爪先で踏み付ける。そのまま膝を揃えてぐりぐりと左右にねじり、身

体を浅く前に倒してゆく。

は、は、と断続的な吐息が、食いしばられた可愛い唇と共に、ぎゅっと止まる。きつく目をつぶり、危険水域を越えた乙女のダムの一番脆い部分へと殺到する尿意を、少女は強引にねじ伏せようとする。

「〜〜〜……っつ……！！」

同時に、激しさを増した雨が、傘を激しく打った。

雨雫は水色の布地を伝ってぱちゃぱちゃと水滴を滴らせ、アスファルトの上に飛び散る。梅雨冷えの寒さが、スカートの裾から這い寄るように忍び寄り、流水音との相乗効果で、少女の尿意をいっそうかきたてる。

（あ、あつ、だめ、だめ……っ）

じわ、じゅ、じゅっ……

こわばる下腹部の、懸命の抵抗にもかかわらず、下着の内側から、じわっと熱いものが滲みだした。きゅん、と疼く飾り気のない下着の奥、脚の付け根に甘い痺れが走る。

雨音とは違う、身体の内側からかすかに響く水音が、梓を戦慄させた。

（いやあああ……っ！！）

ダメなのに、我慢しなければいけないのに、身体は言うことを聞いてくれない。

抜群の撥水性で雨を防ぐおニューの傘の下にあってなお、少女の下着の股布部分にじわりじわりと染みが広がり、脚の間をつつ、と雫が滑り落ちてゆく。

激しいほどの雨音が聞こえなくなり、視界までも白く染まる。押し寄せる猛烈な尿意の波を前に、梓はただ、身を硬くして荒れ狂う尿意が収まるのを待つことしかできなかった。

「……………あ、っ」

……それは、梓には永遠にも感じられる長さだったが、実際にはほんの十秒ほどの出来事だった。

ついに貯水量を超えて溢れだした恥ずかしい液体は、幾筋かに分かれながら、少女の内腿や膝裏を伝って、ソックスへと吸い込まれてゆく。

じん、じん、となおも激しく痺れる膀胱が、がくがくと震えだした梓の身体の中に納まりきらない水分を、無理矢理に排出し始めてしまう。

（オシッコ、オシッコおしっこ、トイレ、トイレっはやくトイレ……！！）

焦れる心とは裏腹に、まだ信号は変わらない。

通り過ぎる車の群れをにらみながら、梓はとうとう、ぱしゃぱしゃと足元を踏み鳴らしながら、その場に足踏みを始めてしまう。じっとしているだけで限界を迎えそうな下腹部から少しでも気を紛らわせようと身悶えし始めた少女に驚き、信号待ちの雑踏がざわつき始める。

（が、がまん、ガマンしなきゃダメ……っ、こんなところでオモラシなんか、絶っつ対だめ……！！）

横断歩道の一番前に立って、硬い表情で歯を食いしばり、道路の向こう側を凝視し続けながら、激しく足踏みを繰り返す梓から、周囲の人々は困惑半分、警戒半分で少し距離を置きはじめていた。

「んっ、んあ、っ、あっ」

舌足らずな声が、幼い喘ぎ声を伴い震える。

（と、トイレ、はやくトイレ、はやくオシッコ、オシッコしたいい……、はやくうっ！！）

水色の傘の下、もはや小さなお腹をぱんぱんに膨らませる尿意に支配され、オシッコ我慢でいっぱいいっぱいの梓は、自分が注目を浴びていることにも気付けない。

緊張の中、決定的な事態には至らぬまま、さらに数十秒が過ぎ——
ようやく車道の信号が、右折優先から再度、黄色に切り替わる。

「あ……！！」

ようやく見えた解放への兆し。思わず声を上げた梓は、そのままさらにぐりぐりと身体をねじりはじめてしまう。よじられた腰と共に傘が振り回され、さらに信号待ちの人々が不機嫌に眉をひそめた。

（あとちょっと、あとすこし……っ、あ、あと十秒っ、9、8、7……）

この信号で足止めを食らって、たっぱり2分以上。梓の限界ぎりぎりでの我慢は続いていた。限界ぎりぎりの状態でさらに上積みされた我慢は、すでに崩壊までの時間を刻むカウントダウンも同然となっている。

（ろく、ご、よんっ、さんっ……）

少し気の早いカウントと共に、車道の信号は赤になる。

梓の意識はすでに横断歩道へと飛び出していた。交差点を渡り、さらに200mほど先に行ったコンビニを目指して、曇天の下を走りぬけてゆく。

（に、いちっ、ゼロ——！！）

フライング気味にゼロを刻んだカウントの中、梓ははやる気持ちのままに一步を踏み出そうとし——それが、引き金になった。
ぱしゃん、と横断歩道の前に大きく一步を刻んだ長靴が、地面に着くと同時。

「あっ、あ、あっ、ま、……だ、だめ、っ……え！！」

まるで石のように少女の身体が硬直し、ちいさな唇はぱくぱくと、酸素を求めるように開閉しはじめた。

「あ、あっ、あっ……あーっ！？」

水色の傘がぐらりと揺れ、梓の小柄な身体はぶるっぶるっと力強く波打つゆに震える。
同時、じゅうう、と力強い水流が柔らかい布に押し当てられるような音が響いた。

「あ、っあ、だめ、だめ、あ、ああ、ああ！？」

意味のない途切れ途切れの叫びをあげながら、梓はついに鞆をその場に取り落としてしまう。地面に落ちて横倒しになる通学鞆は、降り注ぐ雨の下、あっという間に水を吸い、その色を変えてゆく。

それと同時に。横断歩道の真ん前で突っ立ってしまった梓の脚を、激しい水流が伝い始めた。

じゅじゅじゅう、じゅうううううっ、
じゅわあああああっ、じゅおああおおお……

「あ……あ……ああ……っ」

梅雨の寒空の下、まるでホカホカと湯気を立てんばかりに、梓の下腹部の貯水池から、恥ずかしい液体が堰を切って溢れだした。太腿の内側を伝うように、のたうつ水流が白い肌をひと筋、ふた筋と流れたかと思うと、滝のように激しく滴り落ち始める。

トイレを前に、往来のど真ん中で始まってしまったオモラシは、じゅわああとみっともない音を響かせながら、瞬く間に制服のスカートを浸食し、濡ればそった布地は少女の太腿に張り付いてゆく。

「あ、あっ、あ……あー……っ」

我慢の甲斐も虚しく、決壊してしまったダムを必死に押さえ込もうと、梓は傘の柄にしがみつく様に、懸命に腰を揺する。しかしそんな努力をあざ笑うかのように、少女の股間から噴出するオシッコは、ぱちゃぱちゃと激しい勢いで飛び散ってゆく。

雨を防ぐ傘の下、水色の長靴の足元へと叩きつけられてゆく水流は、下着越しとは思えない量と勢いを秘めていた。

梓の脚を滝のように伝いながら流れ落ちるオシッコは、そのまま、梓の足元——水色の長靴の中へと注ぎ込まれてゆく。

とどまるところのない勢いで噴出すオシッコは、じゅごぉお……と音を響かせながら、梓のお気に入りの長靴の中に溜まっていった。みるみるうちに長靴の中はオシッコで満たされ、梓の冷えた脚元はホカホカと湯気を立てんばかりに薄黄色の恥ずかしい液体に浸かってゆく。

「っ……いやぁ……っ！！？」

まるで、長靴いっぱいにおシッコを汲んでいるような状態。

あっという間に左右の長靴は、梓のオモラシした恥ずかしいオシッコで一杯となり、そのま縁からあふれ落ちて、薄黄色の色合いを地面へと広げてゆく。

漏らしてしまったオシッコで、長靴をいっぱいにしてしまう——あまりにも想定外の事態にパニックに陥った梓は、走り出そうとした瞬間、足元をふらつかせて大きくばちゃあつ、と長靴からオシッコを溢れさせてしまった。

すぐさま梓の長靴の中にはじゅごぉおお……とオシッコが追加され、白く湯気を上げながら、再度長靴の中をいっぱいにしていた。

どれだけ我慢していればこんな有様になるのだろうか。小さな身体で梓が必死に我慢していた恥ずかしい液体は、まだおさまる様子を見せなかった。

アスファルトを滑り広がる少女のオシッコから、慌てて周囲の人々が離れる。青信号の中、向こうから横断歩道を渡ってきた通行人たちも、雨の路上でオシッコを漏らしている少女を見、流石に表情を変えていた。

「……………だめえ……と、トイレ、までっ、……ダメなのに……っ」

とうとう深くしゃがみ込んでしまった梓の脚元、なおも吹き出し続けるオシッコは制服を台無しにして飛沫を飛ばし、下半身をずぶ濡れにしながら続く。

トイレで済ませることができなかった少女のオモラシは、びしょびしょに濡れたスカートからも滴り、ぱちゃぱちゃと濡れた地面へ勢いよく撒き散らされていた。

じゅじゅっ、じゅう……じょぼぼ……

遠巻きに見守る見物人の輪の中。いつしか横断歩道の信号が変わり、車道に再び車が溢れても、梓のオモラシはまだ続いていた。

長い長い放出を経て、さすがにいくぶん弱まり出したオシッコはしかし、まだおさまらない様子で断続的に音を響かせながら、梓の

脚元のアスファルトに出續けて、曇天の下、雨に濡れる地面に混じり、どこまでもどこまでも広がってゆくのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 怪しい投稿雑誌風味・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 08/03/2010 22:02:34

BODY:

怪しげな有料専門サイトみたいな方向性の第二弾。

※) フィクションです。実在の人物とは一切関係ないことをくれぐれもお忘れなく。

<hr size="1" />

« 1 »

さて、今回ご紹介する『“はじめて”スクープ』は、“明石あきな”ちゃん一枚！！

●●県××町にお住まいの○○歳の“はじめて”ガールです！

（写真：あきな 01.jpg）

（写真：あきな 03.jpg #露光修正済）

実はあきなちゃん。最近、“あること”が苦手なせいで、とっても困ったことになっちゃったんだって！！

あきなちゃん、教えてくれる？

【……………っ】

（写真：あきな 09.jpg #差し替え？）

おやおや☆ あきなちゃん真っ赤になっちゃったぞ？

そうなのです。なんとあきなちゃん、まだうまくお外のお手洗いが使えないんです！！

そこで……

『はじめてスクープ』編集部では、あきなちゃんの『はじめてのお外のおトイレ』を全面バックアップ！！

あきなちゃんの『はじめてのお外でのお手洗いの瞬間』をはじめてスクープしました！！

（写真：トイレ内 04.jpg #加工、色調補正）

<i> # #もっと黄色が濃く見えるように再補正のこと</i>。

さあ、あきなちゃん、うまくお外でもおトイレできるかな？

はじまりはじまり～♪

 続きを読むにはこの下 ↓ をクリック！

EXTENDED BODY:

« 2 »

あきなちゃんはいつい最近、都内から転校してきたばかりです。でももちまへの元気の良さで、すぐにクラスの間みんなとも仲良くなりました。

今日もみんなと楽しく遊んでいる、あきなちゃん☆

 (写真：あきな 06.jpg)

 (写真：鬼ごっこ 04.jpg)

さあ、お友達とおにごっこだ！！

ほーら、早く逃げないとかまっちゃうぞー！！

【わーい！ 逃げろ逃げろ～☆】

 (写真：あきな 13.jpg)

……あれれ？ あきなちゃん、どうしたのかな？

もじもじ、もじもじ。

あきなちゃん、おんなのこなのに、そんなとこ押さえてちゃダメだよ☆ 恥ずかしいぞお～♪

 (写真：前押さえ 04.jpg)

 (写真：前押さえ 07.jpg #トリミング済)

なんとあきなちゃん、おトイレに行きたくなっちゃったみたいです☆

おやつのときにたっぷりジュースを飲んじゃったからかな？

【ジュース、おいしいね！】

 (写真：ジュース 03.jpg)

でもあきなちゃんは、とっても恥ずかしがり屋さん☆

さっきからずっと、先生の前でもちもち、もちもち。

『お手洗子に行きたいです！！』って言えなかったんだね♪

（写真：後姿 01.jpg）

さあ、あきなちゃん、困ったぞお～☆

<hr size="1" />

« 3 »

【うー……おトイレ……】

（写真：前押さえ 08.jpg）

もじもじ、もじもじ……

あきなちゃん、すっかりおトイレのことしか考えられないみたい。
あれれ～？ いいのかな？ そんなによそみしちゃってると……

【あつ、あぶなーいっ！！】

（写真：鬼ごっこ 09.jpg #差替済）

（写真：鬼ごっこ 15.jpg）

あーあ、あきなちゃん、つかまっちゃった☆

（写真：鬼ごっこ 17.jpg）

とうとう鬼になってしまったあきなちゃん。

でも、そんなふうにギョツとあそこの前を押さえちゃってたら、ちゃんと走れないね～。

鬼さんがのろのろだと、みんなもどんどん逃げてっちゃうよ♪

さあ困ったぞ☆ さあどうしよう、どうするのかな、あきなちゃん☆

（写真：前押さえ 9.jpg）

おやおや？ すると……

あきなちゃんのそばに先生がやってきました！！

先生も、あきなちゃんの様子がおかしいのに気付いてくれたみたいです♪

【あきなちゃん、どうしたの？】

【なんでもないの！】

（写真：前押さえ 11.jpg # 先生・目線修正済）

あきなちゃん、強がっちゃダメですよ！

ほら、ちゃんと勇気を出して、先生に『オシッコ』っていわないと！

（写真：前押さえ 15.jpg # トリミング加工済）

（写真：前押さえ 16.jpg）

【あきなちゃん？ どうしたのかな？ 先生に言ってごらん？】

【ちがうの、なんでもないの！】

【なんでもなくないよねー？】

（写真：前押さえ 16_b.jpg # 拡大加工）

そうそう☆ そんなふうにごめつとおまたを押さえちゃってたら、すぐに先生にもバレちゃうんだよ、あきなちゃん？

さあ、あきなちゃん、絶体絶命のピンチ☆

ちゃんと『おトイレ』って言えるかな～？

<hr size="1" />

« 4 »

【あつ……】

（写真：チビリ 02.jpg # 画質修正）

（写真：チビリ 04.jpg）

じわっ。パンツにちょっとだけ染みがひろがっちゃった。
ほーら。あきなちゃん、ちょっとチビっちゃったみたい☆

（写真：チビリ 05.jpg）

ぐいぐい、もじもじ。
がんばってガマンするあきなちゃん！！

【おうちまで、我慢するもん！！】

（写真：脚クロス 02.jpg # 膝裏拡大）

（写真：我慢 05_c.jpg）

どうやらあきなちゃん、『おトイレ』は言わないみたいです。
あきなちゃんのおうちのおトイレは、座ってできるおトイレ（“洋式”って言うんだよ☆）なんだって。
でも、施設のおトイレは、しゃがんで使わなくちゃいけないんだ。
だから、あきなちゃんはうまくここのおトイレが使えなくて、まだ一回もちゃんとオシッコができてないんだよね☆
前におトイレに入った時は、うまくパンツが脱げなくて、スカートまでびちゃびちゃ。床にもいっぱいオシッコ、こぼしちゃったんだって！！

（写真：水びたし.jpg # セピア加工）

（写真：トイレ個室.jpg # セピア加工）

《!-- イメージ画像であることを追記？ 担当と検討。 --》

【わたし、ここのおトイレ、つかえないもん……】

（写真：我慢 09.jpg # 涙目見えるように表情を拡大）

（写真：我慢 14_b.jpg）

【あっ、あっ……】

 (写真：チビリ 02.jpg)

あきなちゃん、もうちっちな子みたいに、必死になってガマン、ガマン。
……でも、ほんとうにお家までガマンできるのかなあ？
先生がじっとみまもる中、あきなちゃんはオシッコがまんのまっさいちゅう！

さあ、どうなる、どうする、あきなちゃん☆

<hr size="1" />

« 5 »

【せんせい……】

 (写真：我慢 17.jpg)

 (写真：告白 04.jpg)

おっと、あきなちゃん、いよいよ覚悟をきめたみたい☆
さあ、がんばれあきなちゃん！

【オシッコ、でちゃう……】

 (写真：告白 05.jpg)

 (写真：告白 05_c.jpg #表情拡大)

わあー！！ ぱちぱちぱちぱち☆
やっと言えました。あきなちゃん！！
でもね、あきなちゃん？ こんどからもっと早く言わないとダメだぞ☆

【じゃあ、お手洗いにいこうね？】

 (写真：先生とトイレ 03.jpg #先生が目線修正)

 (写真：足元 02.jpg)

 （写真：チビリ 03.jpg）

先生に連れられて、あきなちゃん、おトイレまで、レッツ☆ゴー！！
ガマンしすぎて、もうあしもとがふらふらだ♪

【あれー、おねえちゃんどこいくのー？】

 （写真：低学年教室 03.jpg）

 （写真：低学年教室 06.jpg # 拡大補正）

 《!-- 被写体と異なる対象でも、年齢制限未満の児童を映すと条例に触れるかも？ --》

ありや、ほかで遊んでた子たちにも笑われちゃった☆
そうだね、あきなちゃん、この子たちよりもお姉さんなのに、先生に連れられておトイレだなんて、はずかしいぞー。

【だめ……でちゃう……】

 （写真：我慢 21.jpg）

あきなちゃん、もうおまたから手が離せないみたい。みんなのまゝで恥ずかしいもぢもぢダンスが続きます☆
ほらほら、がんばれあきなちゃん☆ おトイレまではもうすぐだぞ！！
がんばれ、がんばれあきなちゃん♪

【でちゃうよお…っ！！】

 （写真：我慢 25.jpg）

 （写真：我慢 26.jpg）

 （写真：トイレ 01.jpg）

さあ、やっとおトイレにとうちゃ〜く☆
でもあきなちゃん、ここのおトイレでしゃがんでオシッコするの（こっちのおトイレのことを“和式”っていうんだよ☆）が、うまくできないんだって。
だから、きょうは先生と一緒についてきてくれることになりました☆
はやくひとりでできるようになろうね、あきなちゃん！！

<hr size="1" />

« 6 »

 (写真：トイレ内 01.jpg #モザイク修正済)

さあ、それではあきなちゃんの『はじめてのお手洗い』スタート！！
ドアを開けて、鍵をかけて……そうそう、しっかり！ あきなちゃん！

【あ、でちゃう……っ】

 (写真：トイレ内 01-b.jpg #拡大)

【ぶるぶるっ。】

 (写真：足元 02.jpg #差し替え?)

【しゅわわわあ～☆】

 (写真：足元 05.jpg #股間部分モザイク修正済)

ありやりや、ガマンできなかったのかな、あきなちゃん？ オモロシがはじまっちゃったみたいだね☆
まだここはおトイレの上じゃないのに、いけないんだぞお～？ あきなちゃん♪

【もういいもん、ここでしちゃう！】

 (写真：トイレ内 02.jpg #モザイク修正済)

 (写真：しゃがむ.jpg)

 (写真：チビリ 03.jpg)

おっとと。あきなちゃん。とうとうおトイレの前でしゃがんじゃった！
ホントにこのままオシッコしちゃうつもりなのかな？ いーけないんだいけないんだ。こんなところでオシッコなんて、女の子なのに、ダ・メ・だ・ぞっ☆

<hr size="1" />

« 7 »

【あきなちゃん、ダメでしょ！！】

（写真：抱き上げ 01.jpg # 股間モザイク修正済）

（写真：抱き上げ正面 02.jpg # 股間モザイク追加）

もう立ってられないあきなちゃん、先生にだっこしてもらいました！ 踏み台を上って、はぁーい、おトイレに到着☆
あきなちゃん、これじゃあかちゃんみたいだね♪

【まだだよ、まだガマンして☆】

（写真：下着下ろす 01.jpg # 股間モザイク修正済）

（写真：下着下ろす 02.jpg # 股間モザイク、アナルは見せてもいい？）

ひとりじゃ上手に脱げないから、あきなちゃん、先生に手伝ってもらいます。

まずは、スカートをまくって……

ちよっとチビっちゃったばんつも、よいしょ、よいしょ。

【じょろろっ☆！！】

（写真：放尿 01.jpg # モザイク修正済）

（写真：放尿 02.jpg # モザイク修正済）

わあっ！ なんとあきなちゃんってば、まだ途中なのに、いきなりオシッコが出ちゃいました☆

おトイレの中がびちゃびちゃになっちゃうよ！？ とめてとめて！！

先生にもオシッコ、ひっかかっちゃう！！

【じゃぁあーっ、じゃぼーっ☆】

（写真：放尿 02.jpg # モザイク修正済）

（写真：放尿 03_b.jpg # モザイク修正済）

でも、あきなちゃんのおシッコはぜんぜん止まりません☆
先生もおおあわて！ あきなちゃんをいそいでトイレにまたがせてくれます！
あーあ。あきなちゃん、みんな見てるよお！？

【しーしー。しーしー……】

（写真：しゃがみ 02_d.jpg #モザイク修正済）

そうそう☆ ちゃんとそうやって、おトイレをまたいで……
あーあ、あきなちゃん、顔が真っ赤だね☆
そうだね～、あかちゃんがオシッコさせてもらってるのとおんなじカッコだもん！！
あきなちゃんがおトイレできるように、先生もいっしょうけんめいです♪

（写真：しゃがみ 03_c.jpg #モザイク修正済）

えーいっ☆ 先生に手伝ってもらって、やっとあきなちゃんのおシッコが、おトイレにじょぼぼーっ☆

<hr size="1" />

« 8 »

【じょろじょろじょろ～っ！！】

（写真：放尿 04.jpg #角度修正済）

（写真：放尿 05.jpg #色調補正）

わあっ、あきなちゃん、すごいきおいだ☆
やっぱりガマンしてたんだねー。あんなにおチビリしちゃったのに、まだまだいっぱい出るみたいです☆
……でも、おトイレのなかびちゃびちゃにしちゃうのは良くないぞ☆ あきなちゃん！！

【じょろじょろっ、びちゃびちゃびちゃ～っ！！】

（写真：放尿 08.jpg #股間モザイク修正済）

 (写真：放尿 10.jpg)

 (写真：こぼす 03.jpg)

あら☆ またまたあきなちゃん、じよばーって勢いよくオシッコが出てきちゃて、ちょっとトイレからはみ出しちゃった☆
もっと前のほうにしゃがんでるとよかったのにな♪

【じよばあーーーーっ、じよごごごごおー……☆】

【あーん……とまんないよお……】

 (写真：放尿_正面 03.jpg #モザイク修正済)

 (写真：放尿 13.jpg #明度補正)

でも、“おんなのこ、とちゅうでオシッコ 止めれない”☆
ずっとガマンしてたのかな？ あきなちゃん、スゴイ量だね♪
【じよろじよろじよろおおお……】

 (写真：放尿_あおり 01.jpg)

 (写真：放尿 16.jpg #モザイク修正済)

はあ～……♪ ようやくオシッコ、おーしまいつ☆
ぜんぶ出たかな、あきなちゃん？

【んっ……】

 (写真：放尿 19.jpg)

【ちょろろろっ……ちょぽっ。ちょぽっ、ぽたたたっ……】

 (写真：放尿 23.jpg)

もうちょっとだけ残ってましたー。
はい、じゃあこんどこそ、キレイにしようね☆
先生に、トイレトペーパーで、ごしごししてしてもらって……。
きちんと、ふき残しがないように……

【オモラシしちゃった……】

 (写真：後始末 02.jpg)

 (写真：トイレ内部 05.jpg)

 (写真：トイレ内部 05-b.jpg #拡大、色彩補正)

あーあ、床いちめん、あきなちゃんのオシッコまみれ☆

……うーん。あきなちゃん、はじめてのお外のおトイレはうまくいかなかったね☆

おチビりもしちゃったし、パンツもびちゃびちゃ。お外でのオモラシに思わず泣いちゃうあきなちゃん♪

これからお風呂に入って、替えのまっしろパンツをもらわなきゃいけませんよ☆

先生も、ごくろうさま！！

<hr size="1" />

【はじめてすくーぶ編集部より・あきなちゃんへ】

「うーん。きょうは30点くらいかな？ あきなちゃんてば、まだまだおトイレの練習がひつようみたい。がんばろうね、あきなちゃん☆
いつかはちゃんと、先生についてもらわなくても、お外のトイレでもオシッコできるようになろうね！」

 さて、あきなちゃんの『はじめてのお外でのおトイレ』どうだったでしょうか？
今回はあきなちゃんのその後を記録した特別編の映像を、なんと先着10名様にプレゼント！

このあと、あきなちゃんがこっそりお風呂ではじめた『しゃがんでオシッコ』の特訓の風景が、たっぷり詰まった30分です☆
宛先は以下の通り……

(初出：2010/8/3 書き下ろし)

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 赤鳥居にて。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 08/03/2010 22:06:44

BODY:

そこは、商店の立ち並ぶ大通りからも少し奥まった場所に位置していた。

雨風にさらされて古びたブロック塀が、ちょうど具合良く凹凸をつくって周囲からの視線を遮るその場所は、通りに面していながらも意識の死角にあるようで、誰もが見過ごしてしまうようなそんな場所だ。

いま、そんな路地の隙間に、息せきった少女が小走りに駆けこんでくる。

「あ……っ」

切羽詰った表情に、余裕なく足踏みを繰り返す革靴。はっきりと、限界を訴える下半身。

ぶる、と身を震わせ、少女の強張っていた表情がわずかに緩む。

ブロック塀の足元の部分に、あるものをみつけたからだ。

（あった……っ）

適当な木切れで造られたのであろう、赤塗りの小さな鳥居。

昨今ベッドタウンとして発展を続けるこの街には不似合いな、古い風習である。

この小さな赤鳥居はいまでもこそ見られなくなりつつあるものの、数十年前までは良く知られていたものだ。

読者諸兄の中にもご存知の方はいるだろう。

この鳥居は——神社、つまり神様のいる不浄ならざる場所であることを示す。転じて、ここが『ご不浄』ではないことを表し、『立ち小便禁止』を意味する符号である。

だが——この赤鳥居に、実はもう一つの意味が含まれていたことを知る者は少ない。

今日は我が国のとある地方に伝わる、興味深い風習についてお伝えしようと思う。

<hr size="1" />

さて、先程の少女はなんどかの逡巡ののち、いよいよ覚悟を決めたようだ。

数度、あたりを見回し周囲の視線がないことを確認して、息を飲むと、慎重にブロック塀の傍まで歩み寄ると、スカートの内側に手を差し入れた。

もはや余裕も無いのだろう、ためらうことなく秘所を覆い隠していた下着を膝元まで引き下ろし、スカートを腰上まで引き上げて、ブロック塀の前にしゃがみ込む。

そして、少女は鳥居に向かい、そのしゃがんだ姿勢のまま小さく手を合わせ、ギュッと目をつぶって頭を下げた。

(ごめんなさい、神様っ……も、もう出ますっ……！！)

必死めいたその表情が、ついに限界となる。

「んっ……」

わずかに湿ったコンクリートの上、軽く足場を確認して、少女が吐息をこぼすと。

その足元には勢いよく水流が解き放たれた。溜まりに溜まった恥ずかしい水流が、少女の股間から噴き出してコンクリートの地面に跳ね、ブロック塀の根元に泡を立てながら広がってゆく。

その水流は大きく前に飛び、古びた小さな赤鳥居に、激しくぶつかった。

じゅう、じゅじゅうっ、じょごおー——っ！！

じょっ、ぢょぼぼぼぼぼぼぼぼおー……………

よほど我慢していたのだろう。ホースで水をまくようなはしたない音が響き、少女は顔を赤らめた。ブロック塀の根元、湿って苔の生えた区画に、あっという間に薄黄色い水溜まりが広がっていく。強い水流と共に水溜まりは水深を増し、水面に注がれる音はさらに大きく変化する。

「はあ……っ」

安堵の吐息と同時に、頬を紅潮させながらも少女はそっと手を合わせ、おしっこが直撃する小さな赤鳥居に向かって小さく頭を下げた。

(ごめんなさい、ごめんなさい神様……ガマン、できませんでした……)

なおも下品に水音を響かせながら、少女のおしっこは止まらない。波打つ水流はばちゃばちゃと木造りの鳥居をなんども直撃し、びちゃびちゃと音を響かせる。

神様のいる場所になんて罰当たりな——とお怒りの方もあることだろう。

しかし、これは決して、少女が責められるようなことではないのだ。

彼女は必死に我慢を続け、トイレに入ることもできず、いよいよ限界を覚えて、ここを使わざるを得なかったのだから。

……考えてみてほしい。いかに物陰であろうとも、往来からすこし足を踏み入れれば丸見えになってしまうようなこんな場所で、人一倍羞恥心の強い思春期の少女が用を足さねばならないということは、どれほどの精神的苦痛であろう。

姿は見えなくても、すぐ傍を通りかかった相手に音やにおいに気付かれることは間違いないし、切羽詰まって駆け込むところと、全てが終わった後に出てゆくところを、商店街の人たちに見られてしまうのは避けられないのだ。

無論、この商店街の住人達も少女の事情は汲んでいるため、できるだけ知らんぷりしてくれるが、そんなもので彼女の羞恥がやわらごうはずもない。

そんな状況で、ここで排泄を選んだということからも、彼女にもはや“ここ”以外の選択肢がなかったことをご理解いただけるだろう。

そう――

『ごめんなさい神様、もう出ます（詣でます）――』

神社に参拝するという意味の「詣でる」と「もう、出る」を掛けた、駄洒落めいた言葉遊び。

しかしそれこそが、どうしても我慢できなくなった少女達が、屋外で排泄に及ぶことの最後の言い訳なのである。

読者諸兄も、くだらない駄洒落と馬鹿にするなかれ。こうした言葉遊びこそが、我が国の慎みと恥の文化をはぐくんできたのは周知の事実なのである。

“お花摘み”や“雉撃ち”と同様。

神社に向かうという意味合いで、少女達は『おしっこが我慢できない』という危機を、決して直接的ではなく皆に伝えるのだ。

この風習は、十数年ほど前まではひっそりと全国のあちこちで見られていたらしい。

本来、この赤鳥居がここが神聖な場所であり、決して汚してはならないことを示すものであることはすでに述べた。

だが、本当の本当に我慢できなくなった少女達にとって、ここは逆に、他では許されざる排泄を許可された場所だというのである。

さまざまな倫理や決まりごとを飛び越えて、必死の必死、最後の最後の手段として。神様であれば、こうした無体な振る舞いも、きっと許してくださるのではないか。……屋外での排泄を詫げる少女たちの真摯な姿からは、そんな追い詰められた祈りが聞こえてくるようにも思う。

これは主に、思春期から若い女性たちの間でだけ伝えられる、都市伝説めいた性格のものらしい。どこが発端であるのかは諸説あり、この場でそれを論じていると紙面がいくらあっても足りないため割愛するが――その起源については、いくつかの材料から推測することが可能である。

つまり、多くの都市伝説同様、最初はささいなきっかけであったのだ。

今この場で用を足している少女同様、尿意を堪えに堪え続け、余裕をなくしもはやのっぴきならぬ事態に追い込まれた若い女

性——あるいは少女が、この風習のはじまりを形作ったのであろうことは想像に難くない。

なぜなら、『立ち小便』がダメであっても、『しゃがんでオシッコ』するのならば大丈夫——そんな屁理屈を使ってまで、ここで排泄に及ぶことを正当化しようとしたのだから。

<hr size="1" />

いまや、多くの公衆トイレが整備され、衛生教育も進み、立ち小便をとがめるようなことも少なくなった。年配の方ならともかくも、若い男性諸氏は道端での立ち小便の経験のない方も多いだろう。赤鳥居の表向きの意味『立ち小便禁止』がトリビアとなる昨今、その事を知らない方も少なからず居らっしゃるのではあるまいか。

けれど、今もなお我が国の各地でひっそりと赤鳥居の風習が残されているのは、こうした事情があるからかもしれない。いざとなればなんとでもなる男とは違い、さまざまな事情を抱えた女の子達のため、赤鳥居はこの現代にも静かに残されているのかもしれない。

読者諸兄も、もしどこかで——路地裏の古びた赤鳥居と、その根元に大きな水溜りを見つけた時などは、このことを思い出してみてはいかがだろうか。

 ——霧雨霽の世界探訪
『地域の風習に見られる少女のトイレ』より

（初出：書き下ろし 2010/08/03）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 夏休みの当番のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 09/10/2010 23:12:36

BODY:

「はー……あついなあ……」

焼けたアスファルトの上には、ミンミンゼミが大合唱。向こうの交差点を通り抜けてゆく車や、コンビニの看板までゆらゆら揺れている。

麦藁帽子をかぶり、Tシャツと短めのスパッツ。夏休みに入って2週間ですっかり日焼けした肌は、なおも続く高い日差しに、そろそろ休憩をお願いしてもいい気分になっていた。

夏休みになるまでは毎日通っていた学校への道のりも、なんだかやけに新鮮に感じた。

「うー……」

サンダルなんか履いてこなければよかったと、御園仁奈は少し後悔する。

横断歩道を渡り、坂を上ると——仁奈の通う学校が見えてきた。

校門の通用口は、やけどしそうに熱くなっていた。シャツの裾を使い、ノブを掴んで中に入る。

「あ、先生！」

「おお御園。今日は当番か？」

「うんっ」

部活の先生に会って、仁奈は小さくお辞儀をした。

「そうか。……そう言えば昨日は沢村だったな」

「本当、毎日交代で大変だよ……一人じゃ間に合わないしー」

「ぼやくなぼやくな。大事なことだぞ？」

ぽんぽんと頭を撫でられ、仁奈は少しくすぐたくなって身体を揺らす。

「……しかし、昨日は沢村一人だけだったような気がするが……」

「そうなの？ ……ひよとして理沙ちゃんたち、サボったのかな？」

そう言えば3, 4日前に会った時に、どこかに朝早くから出かけるようなことを言っていたなあと、仁奈は眉を寄せる。……となると、昨日の当番は芙美だけだったということになる。おとなしめのクラスメイトである沢村芙美は、よく皆に面倒なことを押し付けられていることがあった。

なんとなく気持ちの悪い感じがして、口をへの字にしていた仁奈だが、ふいにぶるっと身体を揺すり、我に返った。

「……あ……えっと、先生、あたしもいそがなきゃ。みんな待ってると思うし」

「おう、そうか」

鷹揚に手を上げる先生に答えて、仁奈は校舎を回り、校庭のはずれへと急いだ。

(いそげ、いそげ……)

もう時間があまりない。といって、全力で走るわけにもいかず、仁奈は小走りで、慎重に目的地を目指す。自然、足が内股になってしまうせいで途中何度か、つまずきかけながら、仁奈はどうにか花壇までたどり着いた。

校庭の奥まった場所にある花壇には、背の高いヒマワリがたくさん咲いている。仁奈たちのクラスが春に植えたものだった。夏休み中はこの“お世話当番”が、クラスの中で順番に決まっているのだが――

「あれー……？」

仁奈は眉をしかめて周りを見回す。一緒の当番のはずの子たちの姿が見当たらない。花壇の周りをぐるりと回ってみても、どうやらここにやってきているのは仁奈だけだった。時間としてはやや遅刻気味で、てっきり仁奈は自分が一番最後だと思っていたのだが……

「おーいっ。誰もいないのー？」

声にもこたえるものはない。

どうもこのヒマワリのお世話は、まじめにやっている生徒は、かなり少ないのかもしれない。

「んっ……」

ヒマワリを植えた花壇は広く、全部の世話をするのは一人ではとても大変だ。だから“お世話当番”は5人一組で、仁奈だけではとても手が足りないのだが――

(うっ、も、もう我慢できないや……)

片目をつぶって、仁奈は唇をかむ。“当番”のために昨夜から準備して、ここまでもうにか我慢してきたが、もうそれも限界だった。

仁奈は花壇の上にあがると、さっと周りを見まわして、誰の視線もないことを確かめる。

スパッツを足元に下ろし、ヒマワリの根元にしゃがみ込む。それと同時に、仁奈の足元に勢いよく水流がほとばしった。

ぶしゅっ、しゅううー―――っ、

じゅごお―――……

「はああ……」

起きてからずっと我慢していたおしっこが、勢いよく花壇の土をえぐる。

たっぷりのオシッコは乾いた地面を潤し、それを吸い上げたヒマワリはぐんぐんと元気を取り戻してゆく。

「……………」

しばし、我慢からの解放感に恍惚となっていた仁奈だが、

「ああっ！！」

ようやく我に返って、足元を見る。慌てて足の付け根に力を込めるが、じょおお、と激しく噴き出すおしっこは、しかしうまく塞き止められない。

「……や、やば……とまんない……っ」

仁奈の内腿がぷるぷると震える。

無理やり立ち上がろうとした仁奈の足の付け根から、ぶしゅうつと勢いよくおしっこが噴き出して、スパッツに少しかかってしまった。咄嗟に伸ばした手のひらにも、熱い水流がぶつかる。

「っ、あっ……」

ずるずると中腰のまま、すこしでも移動しようと試みるが、そんなものでは焼け石に水だった。昨日の夜に飲んだジュースに、寝る前に飲んだ麦茶。あと少しでオネショしかねないところまでギリギリに我慢して、朝早くから飛び起き、朝ごはんの後トイレに入らないで一生懸命我慢してきたのだ。小さなおなかに溜まりに溜まったおしっこの量も並みはずれていて、一度出口を破った水圧はちょっとやさつとでは押しとどめられない。

「ふぁ、あっ……ううーっ……」

じゅじゅつ、じゅぶぶぶつ……じよぼぼぼぼ……

結局、仁奈はほとんど、おしっこを始めた場所から動けないうちに、溜まっていた水分のほとんどを絞り出してしまった。

「……あー……。…やっちゃった……」

花壇の1区画だけをびしょぬれにして終わったおしっこに、思わずぼやく仁奈。

クラスの皆で植えたヒマワリは、女の子のおしっこで育つという特別な品種だった。だからヒマワリの“お世話当番”である生徒は、責任を持って当番の日に、花壇に水やりを——新鮮なおしっこをたっぷり撒いておく必要があるのだ。

きちんと花壇全体に、水をあげなければいけないのに——仁奈はオシッコができる気持ちよさに我を忘れてしまったのだ。これでは理沙たちのことをあんまり悪く言えない。少なくともちゃんとお世話当番をしたとは言えないだろう。

「うー……」

仁奈がおしっこポーズのまま落ち込んでいた、その時だ。

「……御園さん？」

「あれ、芙美ちゃん？」

白いワンピースの芙美が、驚いたように仁奈のほうを見て立っていた。

「……御園さん、今日、お世話当番だったっけ？」

「あ、……えっと……？ 今日、何日？」

「4日だけど……」

難しい顔をしてから、仁奈はあ、と口を開けた。

「……あたし、当番明日だ……」

がっくり肩を落とす仁奈。せっかく学校まで来たのに、この有様なのだ。もぞもぞと居心地悪く後始末をしながらスパッツをはいて、

仁奈は立ちあがった。

「そっか、やっぱり……私、きょう当番表見て来たから……」

「でも芙美ちゃんは？ 今日、当番じゃないでしょ？」

「うん。……でも、昨日も他に誰もいなかったし……ひょっとしたら、って思ってた。……誰もいなかったら、お世話する人いなくなっちゃうし」

「じゃあ、自分で来たの？」

「うん……」

気恥ずかしそうに俯いて、芙美は軽く腰を揺する。

と、言うことは。芙美も今、我慢しているのだ。

「あ、ごめん……邪魔しちゃって」

「いいよ。……ありがとう、仁奈ちゃん」

小さくはにかんで、芙美はヒマワリのそばに歩み寄った。

けれど、すぐにはおしっこを始めずに、もぞもぞとスカートの裾をいじる。

「？」

「あの、……仁奈ちゃん、見てるの？」

「え？ あ、ああ。ごめんっ」

仁奈は、自分がじっと見ていたせいで、芙美が恥ずかしがっているのだということに気付いて、慌てて顔を反らした。いくら女の子どうしても、おしっこをしているところをじろじろ見るのは失礼だ。

「でも、二人じゃ全部は無理だと思うし……あとでまた来なきゃだめかな……」

さんさんと輝く太陽を見上げ、頭を書いてぼやく仁奈。今日のお天気では、少しくらいの湿り気じゃあっという間に乾いてしまうだろう。また学校まで往復しなければならないのかと、溜息をつく。

「……うん。でも、だいじょうぶだよ」

「え？ でも」

疑問と共に、仁奈は芙美の方を振り向いていた。芙美は仁奈に背中を向けて、花壇の前に立っている。

確かに仁奈もたっぷりおしっこを出したが、それにしただけで花壇の一区画を湿らせた程度だ。もともと4、5人でようやく終わるくらいのお世話が、いくら頑張っても二人で間に合うはずもない。

「……私も、ちゃんといっぱい、我慢してきたし……今日は仁奈ちゃんもいるから」

しかし芙美はそう言うと、ハンカチを口にくわえ、するりとスカートの中に手を差し入れた。白いぱんつをくるんと脱ぐと、片方の足にくるんと丸めてひっかける。

その準備の仕草が、すぐ『おんなのこ』っぽくて、つい仁奈はそれを見つめてしまう。

そして——芙美がスカートをたくしあげながら、腰をおろすと——

ぶじゅっ、じゃばばばばっ、じゅごおおおおおおおおお——っ！！

まるで、ホースを使っているみたいなすごい音。

「……ふ、芙美ちゃん！？」

おとなしい外見とは全く結びつかない、猛烈なオシッコだった。

これに比べたら、さっきの仁奈のオシッコなんかただの水滴みたいだ。みるみるうちに花壇が潤い、土が色を変えてゆく。

「んっ……」

芙美がぎゅっと身体をよじると、ものすごい勢いのオシッコはピタッと止まった。そのまま芙美はハンカチをくわえたまま、花壇の別の場所に移動する。まさか、と仁奈が思っているうちに、芙美はまたそこに腰を下ろし――

じゃばじゃばっ、じゅごおおおおおおおおお――っ！！

さっきからそのまま続いているみたいなすごい音が、また始まる。

（あんなに、いっぱい……！？）

目を丸くしている仁奈をよそに、芙美は腰の位置を上手く調整してまたたつぷりと花壇におしっこを撒いてゆく。カラカラの地面が潤うにつれて、しゃぼくれて俯いていたヒマワリたちも元気を取り戻し、黄色い花を大きく広げはじめた。

「ね、ねえっ、芙美ちゃんっ」

「？」

また立ち上がり、腰を振ってしたたる雫を切っていた芙美は、仁奈の呼びかけに少し顔を赤くして振り向く。

「えっと……もしかして、昨日も、ひとりでやったの？」

「うん……みんな、こなかったから……」

答えながら、そのまま横歩きで花壇の別の場所に移動してゆく芙美。今度の場所はちょうどフェンス際で、しゃがみ込む場所がないところだった。

仁奈がどうなるんだろうとわくわくしながら見つめていると、芙美はスカートを軽く持ち上げ、慣れた様子で立ったまま、花壇に向かう。

「……仁奈ちゃん……あの、見てるの？」

「うんっ」

仁奈が勢いよく首を振ると、芙美は小さく俯いて『恥ずかしいよお』と呟いた。けれど、おしっこを途中で止めているのは大変なのか、それ以上言うてくることはなく、三度おしっこを再開する。

ぶしゃああ――――――っ！！ じゃばじゃばじゃばじゃばじゃばっ！！

その勢いは弱まるどころか、ますます強くなっているようだった。もう3回目のはずなのに、まるでたったいままで我慢してきましたっ、と言わんばかりに盛大に噴き出すおしっこは、太陽の光にきらきらと虹を描いて花壇を潤してゆく。大人しい外見にはまったく似合わない、芙美の威勢の良いおしっこに、仁奈はすっかり度肝を抜かれてしまった。

「すっつごお――っ！！」

「べ、別にすごくないよ……」

「すごいよ！！ だって……」

本来、当番である5人が協力してやるはずのひまわりのお世話を、芙美はなんとひとりでやってしまったのだ。そう背の高さもかわらないのに、いったい芙美の体のどこにあんなにたくさん、オシッコが入っていたのだろう。他の“当番”の子たちがサボり、これから何度も家からここまでおしっこをしに往復をしなければいけないのかと思っていたところを、芙美が全部一人でやってしまったのである。

だというのに、

「昨日も……先週も、そうだったもん……」

まるで当たり前のように、芙美は言うのだ。どちらかと言えばおとなしめのクラスメイトが、たったひとりで一生懸命みんなの分まで世話をしていたということに、仁奈は少なからず驚いていた。

花壇をみるみるうちに潤しながら、芙美は5回に分けて、たっぷりとオシッコを出した。

ヒマワリの根元はすっかり黒々とした瑞々しさを取り戻し、夏の日差しに負けかけて少ししおれていたヒマワリたちは、元気よく花を空に向ける。

「ふう……」

ちよろろろ……。最後の水滴をゆっくりと終えて、芙美は大きく息をついた。

ティッシュを取り出してあそこを拭き、足首に絡めていたパンツをはいて立ち上がる。

「お疲れさまーっ」

「う、うん……」

まだ少し気恥ずかしいのか、出迎える仁奈にも、芙美の笑顔は少しぎこちない。

けれど、仁奈はすっかり芙美のおしっこに興味シンシンだった。尊敬と興奮の入り混じった視線で、きらきらと熱っぽく芙美を見つめる。

「ねえねえっ、芙美ちゃん。あのさ！！」

いったいどうすればあんなに我慢できるのか。いつから我慢しているのか。あんな風に『おんなのこ』っぽく可愛いおしっこのかたつてどうすればいいのか。次々と質問をぶつけられ、芙美は困惑しながらも——まっすぐな仁奈の好意を無碍にもできないまま、ひとつずつそれに答えてゆくのだった。

暑い夏は、いよいよ本番を迎えようとしていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: ある趣味式ウミガメのスープ
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小ネタ
CATEGORY: 小ネタ

DATE: 09/10/2010 23:19:30

BODY:

 ある趣味@ J B B S 「4tw45ujrt」スレ>>237 より。
途中まで書いてから永久我慢モノになってることに気付いて、どちらのスレにも投下できなくなったネタの供養。

<hr size="1" />

 MEMO

尿意に苦しむ 3 人の女性と
尿意と無縁な 1 人の女性

なぜか 3 人は自分たちがトイレに行くより
もう 1 人がトイレに行くことを優先する

尿意とは無縁、トイレにも人一倍行けるチャンスの多い 1 人は
それなのに時々おもらしをする

さあ何故でしょう

<hr size="1" />

殺風景な部屋の中だった。

壁も床も一面の白で統一され、目につく調度品と言えば精々テーブルと椅子くらい。それらもまた、同じ汚れ一つない白で彩られている。入口とは言えば壁の一方に硬く施錠されたドアがひとつ。どこか病室、あるいは実験室のようにも見える。

部屋の中には4人の少女の姿もあった。背格好も服装も、年齢もバラバラである彼女達は、しかしひとつだけ、共通点を持っていた。

部屋の中の彼女達は、全員共に、今まさに激しい尿意の最中にあったのである。

椅子の上に浅く腰かけ、足をしきりに組み直し。

落ち着かない様子で、ぐるぐると部屋の中を歩き続け。

机に寄りかかるようにして、ぎゅっと脚の付け根を押さえ。

立ち尽くし、すりすり太腿を擦り合わせ。

四者四様の思い思いの仕草で、彼女達は高まり続ける尿意に抗していた。

「……………」

「はあ……………」

「くん……………」

「ふあ、あんつ……………」

必死に息を詰めて押し寄せる衝動を堪える中、飲み込み切れずにこぼれた荒い息が、悩ましげな喘ぎ声、熱い吐息となって部屋の中に響く。

誰かがひときわ大きな波を堪えんとぎゅっと目を閉じ、股間を握り締めて腰を揺すれば、それが“呼び水”となって他の3人もすぐに小さな呻きをあげる。それがまた新たな尿意を呼び——という悪循環だ。

当然ながら、部屋の中には身を隠す場所も、気付かれずにトイレを済ませられるような物陰もない。椅子やテーブルも機能性を追求したシンプルなデザインで統一されており、とても視線を遮るような作りではなかった。床も天井も壁も、部屋の中は磨き抜かれたように真っ白で、たとえわずかでも汚れが付けば、ひとめで目につくような状況なのだ。

誰かが尿意に耐えきれないまま、部屋の隅でこっそり用を済ませようとしたとしても、他の3人の視界から逃れることは叶わなかった。壁に向かってお尻を丸出しにして腰を落とし、顔をあからめ羞恥に唇を噛んで、飛沫を散らし盛大に音を立て、股間から勢いよく噴水をほとばしらせる羞恥の一部始終を、他の少女達に見られてしまうことになる。

さらにその恥辱はその行為中にすらとどまらない。

部屋の床に傾斜などなく、排水溝のようなものも見当たらない。つまり、一度でもそんな行為に及んでしまえば、排泄の痕跡は

真っ白な部屋の中に大きく広がる水たまりとなって、いつまでもそこに残り続けるのだ。

白い部屋を彩る、におい立つ薄黄色の水面は、はしたなくも生理現象に屈した乙女失格の証拠として、少女のプライドを引き裂き続けるのに違いなかった。

「……ね、ねえ、こうしててもしょうがないよ。やっぱり……」

沈黙に耐え切れなくなったひとりがそう言いだしたのに促され、俯いて背中を丸めていた他の少女達も、ゆっくりと顔を上げた。

彼女達はきつく脚を組み替え、腰を小刻みに震わせながら、この部屋唯一のドアの方へと視線を向ける。

——正確には、そのドアの横に取り付けられたプレートへ。

そこには、このように記されていた。

 MEMO

尿意に苦しむ 3 人の女性と

尿意と無縁な 1 人の女性

なぜか 3 人は自分たちがトイレに行くより

もう 1 人がトイレに行くことを優先する

尿意とは無縁、トイレにも人一倍行けるチャンスの多い 1 人は

それなのに時々おもらしをする

さあ何故でしょう

出口の閉ざされた部屋、高まり続ける尿意、そして、鍵のかかったドアのとなりに掲げられたこの不自然な文章。この三つから、この問いかけの答えが、事態打開のための何かしらのヒントになるのではないかということは、少女達も想像しなかったわけではない。

無論それが、即、この部屋からの脱出につながるものとは限らない。

しかし、ただ俯いてじっと我慢を続けるだけでは、わずかに残された時間をいたずらに浪費するだけであろうことに、少女達はよう

やく気付き始めていたのだ。

何も無い部屋に閉じ込められ、脱出路もない。何もかの意図を感じずにはられないシチュエーションだったが、その裏側をを類推するだけの材料はなににもなかったのだ。ゆえに、彼女達は最低限の自己紹介や状況の確認を済ませただけで、あとは何がしかの変化が起こるのを待つ、という消極的な選択肢を選んだのだった。

事態の打開の方策を練ることを放棄したその判断は、しかし部屋の中に閉じ込められた状況では全くの悪手とは言いきれない。時間がたてば何か変化が——状況を説明するなにかや、誰かが現れるかもしれない。そんな淡い期待を抱いたこと自体は、決して間違いではないだろう。

だが、そうして無為に時間を過ごすことはただ、全員から思考の余裕を奪い、より切羽詰まった事態を呼び寄せる結果しかもたらさなかったのである。

こと、ここに到り。少女達はいよいよ余裕のなくなった身体で、放置していたプレートの内容についても考え直す必要に迫られていたのである。

「でも、そんなの解いて、どうかなるの……？」

「わかんないけど、こうしてても……んっ……しょうが、ないじゃないっ」

別の少女——便宜上、先に声を発した少女をA、それに異を唱えた少女をBとする——Bの疑問に対し、Aは言葉の途中で辛くなったか、小さく唇を噛み、息をのんだ。

「も、もう……そんなに、我慢、もたなそうだもん……」

Aの言葉は、少女たち全員の状況を代弁していた。口には出さなくても、少女達はすでに我慢の限界に近付いている。部屋の中に異性の眼は無いとはいえ、もはや外面を取り繕っている余裕がないほどにはっきりと“我慢”の仕草を隠せずにいるほどなのだ。

このままだと時を過ごしているうちに、いつかは限界を迎えてしまう。その事実からはいくら目を反らそうとしても、逃げられないことを、少女達は自覚していたのだった。

「ね？ その、気分も、まぎれるかもしれないし……」

「そ、そうですね……」

Aの主張に、Cも賛同する。Bももう異論は口にせず、最後に残ったDも小さくうなずいて同意を示した。

だからと言ってこの問題を解いたからここから出られるという保証もまた無いのだが——もうそんな繰り言を蒸し返す余裕は、少女達には残されていないのだ。

最初に言葉を交わして以来、ほとんど無言のままだった少女達は、ようやくそろってプレートの文章を見直す。

「……でも、これ、どういう意味なんでしょう……」

プレートの一文を指差して、Cが言う。

「……えっと、その、……この『1人の女性』さん、お手洗いに行かなくてもいいのに、お手洗いに行って……それなのに……お……オモロシ、しちゃって……良く分からないですね……？」

その言葉はあまりにももつともだ。尿意に無縁であるならば、トイレに行く必要もないし、ましてオモロシするわけもない。Bもそれに応じるように、別の一文を指差す。

「そんなこと言ったら、こっちの……、『3人の女性』だって、なんで我慢してるのか分からないじゃない。わざわざトイレに行きたくない人に、順番譲ってるんでしょ……？」

「……たぶん、そこを上手く説明するのが問題の要」

ふいに、これまで黙っていたDが、口を開いた。

落ち着いた雰囲気彼女の台詞は、そして声量も大きなものではなかったが、残る3人の注目を集めるには十分だった。

「一応、さっきから考えてはいた。これに良く似た遊びがある。ウミガメのスープ……と言うけど、聞いたことは？」

「ウミガメ……？」

「あ、私知ってるかも。一見意味が分からない問題文を出して、答えるほうが相手に質問して、相手が答えて……ってやつでしょ？　そういうのを繰り返して、正解を探すっていう」

「そう。ただ今回は、質問者がいないから、定番通りにはいかないけど」

Aに頷いて、Dは椅子からゆっくり腰を浮かせると、そっとプレートに近付いていく。

一見、表情もあまり変わらず、落ち着いて見えるDだったが、立ち上がるのにも十分すぎるほどに慎重に時間をかけている様子から、彼女も他の3人と同じように我慢の最中にあることは明らかだった。

「一読しただけでも、この問題文には矛盾があることは明らか。でも、最後に『なぜ』を問う言葉があるからには、この矛盾を満たすような状況が、解答とされているはず」

「そうね、それを見つければ……んっ……いい、のよね？」

「……意地悪な、問題文だけだね……」

吐息と共にAがそう言うと、B、C、Dも思わず曖昧に視線を反らす。Aがそっとさすった下腹部は、石のように固く張り詰め、重く恥骨の上に押し掛かってくる。

少女たちは皆、刻一刻と高まり続ける排泄欲求を、時限爆弾のように下腹部に抱えているのだ。この状況では、できることならトイレにまつわるような会話は避けておきたいというのが普通だった。いつ終わるともしれない苦痛の中で、気をまぎらわすにはあま

りにも向いていない。

そんな少女達の心理を見透かすように設定されたとは思えない、プレートの問題文。尿意に苦しむ女性達を題材にしたその問いかけは、少女達にはあまりにも悪趣味なものとは思えなかった。

「状況を、整理……してみる。文章は3つの段落からできていて、それぞれ1段落目は尿意について、2段落目はトイレに行けるかどうか、最後は……間に合わないかどうかについて書いてある。

登場人物も2種類に分けられる。『3人の女性』と、『1人の女性』……」

「3人いるのに、2種類……なんですか？」

「3人は一セットっぽいから、それでいいんじゃないかな……状況も同じだし」

Aが補足すると、Dはわずかに息を飲み、ぶる、と腰を揺すってからプレートの文章を指差した。

「このうち『3人の女性』については、状況は分からなくもないと思う。尿意に苦しんでいるけど、トイレに行くのは後回し。『3人の女性』が……オモラシをしたかどうかは記述がない。……であれば、何か理由があって『3人の女性』が『1人の女性』を優先するのなら、そんなにおかしくはない。けれど」

「要するに、問題なのは、『1人』のほうなのね。……と、トイレに行かなくてもいいのに、『3人』に順番を譲られる……？」

「……辛いのは分かるけど、言葉を言いかえると意味が変わるかも」

「わ、わかってるわよ……っ」

Bが顔を赤くする。彼女はまさに今、我慢の絶頂にあるようで、ぎゅうぎゅうと股間を押さえこんでしまっていた。喋る余裕があるというよりは、少しでも気分をまぎらわせたい一心なのだろう。その状況で『オモラシ』なんて単語が禁忌中の禁忌であることは皆も理解していた。限界近い我慢の極限状況では、言葉すらも容易に崩壊の呼び水になり兼ねない。

押し寄せる尿意の波に耐えかね、Bが無意識のうちに他の言葉を選んでしまっているのは間違いなく。その気持ちは、他の3人にも十分すぎるくらいに共感できた。

だが、Dの言うことにも一理ある。Aはそう思い、言い直す。

「ええと、『1人の女性』は、によ…尿意と無縁なのに、『3人』より優先してトイレに行けて、……それなのに、お、……オモラシする？」

「……これ、『1人の女性』さん、お手洗いに入ってるかどうか、わからなくないですか？ 行くチャンスが多いっていう、だけで……その、私たちみたいな状況なら……」

「どうのこと？」

Dの問いかけに、Cはかあっと顔を真っ赤にして俯いた、足元を見つめるように視線を落とし、その場でもじもじと手を握り締め、足を擦り合わせる。

言いくさそうに——しかしもはや躊躇している場合ではないと、彼女も悟ってはいるのだろう。3人の視線に晒されながら、Cは

少しずつ話し始める。

「あ……あの、ですね？ その、は、恥ずかしい話、なんですけど……わ、わたし、……その、……わ、和式の……お手洗い、使えないんです……。あの、小さい頃、両親の仕事の都合で、外国に居て……」

「……………」

「そ、それで思ったんですけど、……この『1人の女性』さん、お手洗いに行くチャンスはあっても……そのお手洗いが使えなくて、……ええと……お、オシッコは、我慢したままなんじゃないかな……って。それなら、オモラシしちゃっても……」

「でも待ってよ、じゃあ……この、尿意と無縁ってのはどうなるの？」

「あ、……そ、そうですね」

「尿意と無縁ってことは、……お、オシッコ、したくないってことでしょ？　なのに……なんで、オモラシ……なんか、しちゃうわけ？」

Bに指摘を受け、尻すぼみになりかけたCだったが、Aが代わりにその先を続ける。

「自己申告、とかかな…？　ほら、恥ずかしくて、トイレって言えない時ってない？　今はさ、もうどうしようもないから、私もぶっちゃけちゃってるけど……あんまり大ぴらに言うことじゃないし」

「でも、この問題だと、女の子どうして……ですよ？　そんなに遠慮なんかしなくても……」

「せ、先輩とか、先生とか、みっともないとこ見せたくない相手って、……女の子相手でもいると思うんだけど…どうかな？　ほ、ほら！　それに、他に男の人が、いるのかもしれないし！！　ねっ！？」

——あたし、トイレなんか行かないもん。

具体的に口にしてみれば、まるで漫画の中のようなセリフだ。そんなことを公言するのは——少なくとも、幼稚園くらいのころまでじゃないだろうか、とAも思っていた。

それでも。憧れの相手が目の前に居たのなら。自分はそうしてしまうかもしれない。そのAの告白は、実際にそうした相手がいることを宣伝しているのに等しいものだったが——敢えてその事は、誰も指摘せずにいた。

「——興味深い意見だけれど、もし、羞恥を理由にそう言っている、『3人の女性』にトイレを譲られていたら、成り立たないと思う」

「そ、そっか……そうだね……」

「それに、一応は客観的に書かれている文章だし、疑うのはもう少し他の可能性を考えた後でもいいかも。問題文に規定のない内容は、あるとも言えるし、無いとも言える。書いてないから何でもありだ、と考えていると……かえって思考がまとまらない

「ほ、他の可能性って……？」

「例えば、この——『トイレ』が『お手洗い』や『お花摘み』のような、隠語の意味を含んでいる単語だったなら、今の推論は矛盾を満たして成り立つかもしれない。

『1人の女性』が本当に尿意とは無縁であったとしても、『お手洗い』や『お花摘み』が文字通り“手を洗う場所”だったり、野原で“花を摘むこと”だったりすれば、いまの解答でも文脈的にも違和感はないと思う。でも——普通、トイレと言えば——排泄、

以外の用途ではあまり使われない。一応、着替えや化粧直しのためと取れなくはないけれど……それで通すには、少し苦しい」
「そ、そうだ、けど……」

Dの論調は、全員に賛同を持って受け入れられたわけではなかった。

しかし、実際に今のCとAの回答でも、特に部屋の中に変化は見られなかった。回答の方法すら定かではないが、正解が他に
あるのなら、考えを休めるのは得策ではない。

だが、他の答えを導き出すのはそう簡単なことではなかった。

ふと生まれた会話の空隙に、相談はぶつつりと途切れたまま——4人は問題文を前に、再び沈黙を始めてしまった。

「んあっ……」

「はあ……はあ……っ」

考えをまとめ問題に集中しようとする傍から、くつくつと下腹で煮詰まる尿意は激しさを増し、少女達の思考力を外へと追いやっ
てゆく。

いったん言葉が途切れると、その隙を見計らったかのように、尿意がいやらしく津波のように割り込んでくるのだ。溜まらず腰を揺
らし、身をよじり、少女達の身じろぎの音だけが、部屋の中に響く。

「う……く……っ」

「……ふ……」

Cなどは我慢しきれないのか、机の角に股間を押し当て、ぐりぐりと体重をかけてねじり出す始末だった。Aも両手を脚の付け
根に押し込み、Bはその場で行進の練習でもしているように足踏みを繰り返す。

一番落ち着いていたように見えるDですら、その場にしゃがみ込み、かかとを脚の付け根に押し当てるようにして、開きそうになる
恥ずかしい液体の出口を押さえこんでいた。

「……あ、あのさ……思ったん、だけどっ」

沈黙に耐えられなくなったか、閉じ合わせた太腿の奥、ちょうど恥骨のあたりを、身体の前と後ろから押さえながら、Aが息を荒
げて言う。

「と、トイレって、ほかに使わないかな……？ き、気分悪くて吐いちゃう時、とか……。ほ、ほら、そうすれば、尿意と無縁でも、
『3人の女性』より、優先されるかも……」

「……それだと、……お…『オモラシ』……の、ほうに、無理がでちゃいませんか……？ これも、あんまり……その、おトイレする時
以外には、使わない言葉だと思います……」

「あ……ああ～……そ、そっか。そうだね……」

Aは誤魔化すように舌を出して見せた。

普段ならば些細なしぐさだが、それくらいのことでもAは顔をしかめ、きつく身をよじる。

その切羽詰った姿に、もう、Aには余裕がほとんどないことをありありと伺わせていた。そしてそれは、他の3人も全く同じことだ。

「でも、そうすると……えっと……うーん、と……っ、んあ……うう……だめだ、うまく考えらんない……っ」

「っ……はあ、っ、も、もう、何なのよ……これ……。こんなのに、答えなんかあるわけ……？」

Bのセリフは、その場全員の気持ちを代弁していた。

本当にこんなことをしていていいのか——根本的な疑問が少女たちを疑心暗鬼の渦へと追い込んでゆく。こんなわけのわからない問題に、馬鹿正直に答えている暇があるなら、もっと他に、現実的に尿意を解消する手段や、脱出の方法を探すべきではないのか？

そうして部屋の中の雰囲気は、またも振り出しに戻ってしまう。さっきよりも余裕をなくし、さらに陰悪な雰囲気のまま。

不可解な設問と不可解な状況、そして迫りくる限界がまともに考える余裕を奪い去ってゆく。

身悶えしながら少女たちは、まるで図ったように同時に——けれどそうと意図はせぬままに、部屋の中を見回して、どうにか用を済ませる方法がないかを確認した。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

しかし——視線を遮るものなどなにもなく、ただただ継ぎ目なく広がる、汚れ一つない白い部屋のなかで、いったいどうやって、こっそりとオシッコを済ませることができるのだろうか？

下腹部を締め上げるほどにきつく服が食い込み、かたく強張った下半身はぱんぱんに膨らんでいる。

少女達は皆、いちど自分が壁や部屋の隅に向かってしゃがみ込んだが最後、床一面を余すところなく覆い尽くさんばかりにあきれるほどたつぷりと、大量に、オシッコを出してしまうことを理解せざるを得なかった。

考えてみれば、この部屋自体が、あえて排泄の痕跡を決して隠滅できないような構造になっているのかもしれない。

それは、今の状態を作り出した誰かの意図を想像すれば、決して的外れには思えなかった。

「で、でも……やっぱ、こんなところでなんて……っ」

悲痛な声を絞り出し、Cが叫ぶ。

室内にいるのは全員ともが年頃の少女だ。排泄や性に関することには人一倍過敏になる年代であり、たとえ同性にだってトイレに行くのは見られたくはない。まして、他の視線や物音を遮ることすらできないこの密室で、他の3人の前でオシッコをするなんて

——
検討するまでもなく、許容はできない。

「あ……あ、あっ」

不意に、Aが唇を震わせて、小さく囁く。

ぱくぱくと口を押し開き、切羽詰って絞り出されるかすれた声は、しかし狭い密室の中にははっきりと響いた。

「ダメ、……っ、も、もう、ガマン……できない、かもっ……」

「ちょ、ちょっと！！ やめてよね！？ じょ、冗談じゃないんだからっ」

「で、でも……っ」

くねくねと身をよじるAに、Bが声を上げる。こんなところでオシッコなんて——という非難をぶつけられてなお、Aはもはや耐え切れないという姿勢を隠そうとはしなかった。

ちらちらと、部屋の隅とB、C、Dの3人とを、眉尻を下げた視線で交互に窺う。

「やめてってば……！！ ホントにっ」

「だ、だって……」

Aの様子はもはや限界をはっきりと示しており、両手を身体の前から閉じ合わせた膝の奥に突っ込んで、ぎゅうぎゅうとスカートを引き絞っている。いよいよ乙女のプライドが、迫りくる崩壊の危機に屈し始めているのは明らかだった。

そんなAを、Bは激しく非難する。

「やめてよ！！ そんな、小さな子じゃないんだからっ」

単純な嫌悪感だけではない。Bも、同じように尿意の最高潮を迎えているのは変わらないのだ。沈黙を貫くCも、同じようにうらみがましい視線をAに向けている。

一人だけ先にそこからの解放されようとしているAへの嫉妬と、そんな事をされたら自分ももう我慢していられなくなる——という心理だった。Aが我慢に我慢を重ねたオシッコを済ませる決断をし、その光景を目の当たりに（たとえ直接は目にしなくとも、音やにおいや、地面に撒き散らされた水溜りを見れば）、これ以上を我慢をつづける気力を失い、同じように部屋の隅で済ませてしまおうという誘惑に打ち勝てる自信がないのだった。

その気持ちはAも理解している。けれど、大自然の誘惑の前に、もはやこれまですがり続けてきた乙女のプライドすらも限界だった。

だが——

「ひとつ……」

その、Cの叫びを引き金に、Dが何かに気づいたように表情を変える。

「ん……つ、……ひとつ、思いついた……」

3人が慌ててDのほうを振り向く。気づけば、Dも恥も外聞もなく、その場に足踏みを繰り返していた。身体をメトロノームのようにリズムよく大きく左右に揺すり、なお口調だけは冷静に、静かに吐息を飲み込んで、Dは続ける。

「子供……そう、この設問はただ、女性としか言っていない。つまり——単にこれを、成熟した女性として考えるのではなく、男女の区別をする性別を表わしたものだとするば、その年齢は問うていない」

「……どういうこと、ですか……？」

Cは、壁に手をついて前屈みのまま、Dを促す。

出口のない部屋の中、迷宮のように正解のみつからない問題。思考と現実、二重の密室の中で、わずかな開放でもいいから、事態の打開を皆が望んでいたのだ。

猛烈な尿意を抱え込みながら、いまにも出口をこじ開けそうな乙女の羞恥の噴水をなお堪え続けるには、それしかなかった。

「つまり、この『一人の女性』が幼児、あるいは生後間もない年齢であると仮定する。そうすれば……」

「そ、そっか！　小さな子がトイレに行きたがってるなら、他の人はトイレに並んでも、順番、譲ってくれるってこと！？」

「……そう。その過程なら、……オモラシをしてしまうことも説明、できなくはない。……低年齢であるなら、尿意を我慢する能力も未発達だから」

見え始めた光明の中、少女達の顔に解決の糸口を掴んだことへの安堵が覗く。

しかし、そんな中、Bはまだ異論を挟む。

「ちょっとまって、じゃあ、この——尿意と無縁ってのはどうなのよ？　小さい子だって、トイレに行きたいんだから、無縁ってのはおかしくない？」

「……あ、赤ちゃんならどうですか？　……オムツ、当ててるくらいの、生まれたばかりの子なら……その、ガマンっていうほど、しっかり我慢できてないっていう風には、言えませんか？」

「そこは、正直、微妙でも、あるけど……」

Dもその部分だけは自信がないようだった。珍しく困惑を見せながらも、持論を曲げようとしないう彼女も、もはや限界に近いのだ。これからまた、一から思考を積み上げるような回り道は、許容できないに違いなかった。

切羽詰った尿意はいよいよ激しさを増し、刻一刻と残り少ない余裕を削り取ってゆく。タイムリミットは目前に迫り、他の思考を

今からまとめる余力は、もはや少女たちの誰にも残されていなかった。

「……………」

「……………っ」

息を詰めながら、少女達はじっと、この設問を設けた主に対して、必死に考えた回答をぶつけるしかなかった。

じっと、ただじっと—— 4 人の出した答えが、正解であることを信じて。

その正解が、この停滞した状況の澁みを打ち破り、皆を解放へと導いてくれることを信じて。

じっと、4 人はドアを睨みつけた——

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 特別編 『不思議の国のアリス』

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: WetMarchen

CATEGORY: WetMarchen

DATE: 09/23/2010 18:43:07

BODY:

※我慢シーンのみ。注意。

元ネタは山形浩生版 (<http://www.genpaku.org/alice01/alice01j.html>) の翻訳。

この調子で全編にわたりアリスがおしっこを我慢している展開を書いてはみたものの、途中でデータが破損してやる気をなくしたので、残っていた部分だけ。

<hr size="1" />

7. おかしなお茶会

アリスがたどり着いた広場には一軒の赤い屋根のお家があり、その前の木の下では大きなテーブルを広げた奇妙な顔ぶれがお茶会を開いていました。

ふんふんと鼻を鳴らし、血走った眼をあちこちに向けながら耳をぴこぴこと揺らしている三月ウサギが椅子に座り、その隣では、ティーカップを前に、たくさんの帽子をかぶっては脱ぎかぶっては脱ぎしている帽子屋さん。その二人の間にはくうくと可愛らしいびきをかきながら、ヤマネが眠っていました。

三月ウサギと帽子屋はその眠りヤマネをまるでクッションのようにして、ひじを乗せておしゃべりをしているのです。

(かわいそう、ヤマネさん……痛くないのかな？ でも、眠ってるから気にしないのかしら？)

そんなことを思ったアリスでしたが、さっきから暗い森の中をあるきづめですっかり冷えてしまった身体がぶるりと震え、たまらずもじもじと腰を揺すってしまいます。

「あんっ……」

アリスが小さく声を上げると、エプロンドレスのスカートがふわふわと揺れ、足元ではトイレを我慢する小さな足がもじもじとせつかなダンスを踊っているのです。

アリスが声を上げたもので、テーブルにいた3人は揃って顔をあげ、口々に言います。

「なんだい、もうテーブルは満員だよ」

「……お呼びじゃないさ。ふわあ……」

「うふう、どこから来たんだい、お嬢ちゃん」

テーブルはとってとても大きくて、たくさんお茶の用意がしてあるのに、3人はその隅っこに固まって座っていました。その上で帽子屋たちがいきなり意地悪なことを言うものですから、アリスもむっとしてしまいます。

「どこが満員なのよ。いっぱい空いてるじゃない！！」

お茶会だからお行儀よくしないといけない、ということは、アリスの頭の中からすっぽり抜け落ちてしまっていました。ずかずかとテーブ

ルのそばに近寄ったアリスは、帽子屋たちの座る席の向かいにある、大きな肘掛け付きの椅子に腰かけます。

「……まったく、礼儀のなっていないお嬢さんだ」

「お嬢さんじゃないわ。アリスっていうのよ。帽子屋さん」

「アリス、アリスねえ」

帽子屋は何事か考えているように、つばのついた山高帽をくるくると回し始めます。

「そんなことより！」

アリスはじれっとなって、もじもじとテーブルの下で膝を擦り合せながら、言いました。

「ねえ、あなたたちはずっとここにいの？ 尋ねたいがあるんだけど」

「うふふう。ねえ、ワインはいるかい？」

いきなり三月ウサギに言葉を遮られて、アリスはさらにむっとしましたが——お茶会でどなり声をそう何度もあげるなんて、さすがに無作法なことです。じっと我慢してアリスはテーブルを見回しました。けれど、大きなテーブルの端から端までを確かめても、そこにはお茶しか載っていません。

「……ワインなんか、見当たりませんけど」

お行儀よくしなければいけないというのを思い出して、できるだけ礼儀正しくアリスが答えると、三月ウサギはうふふう、といやらしく鼻を鳴らして目を細めます。

「だって、そんなの用意してないもん。うふっふう」

「だったら、ありもしないものを勧めるなんて失礼だ——失礼じゃありませんこと？」

「うふふう。勝手に来たのは君じゃないか。招待状もないくせに」

「そんなものが必要だってわかったらこなかったわ」

アリスは早くも、このやり取りがいやになってしまいました。ぜんたい、この馬鹿げた国のどこにもかしこにも、まともに話のできる相手がいらないのですから。特にこの三月ウサギは、いやらしい目でじろじろとアリスを品定めするように見てくるので、アリスはもじもじと椅子の上で体を揺すり動かすこともできません。

エプロンドレスのスカートの下では、いままアリスの女の子がせわしなくトイレを訴えているというのに。

「それに、あなたたち3人よりずっと大勢の人のお茶が用意してあるじゃない！」

「うふふう。そんなに飲みたかったら飲めばいいじゃないか」

三月ウサギがそう言うと、テーブルの上のティーセットがひとりでに動いて、アリスの前のティーカップに熱い紅茶をなみなみと注いでいきます。

実際のところ、アリスはもうここに来るまでもに何倍も水やお茶をおかわりしていて、すっかりおなかがたばたぼになってしまっていたのですが——三月ウサギにこれ以上無礼なやつだと思われるほうがしゃくだったので、アリスはぐっと我慢してお茶を頂くことにします。

「……ふう……っ」

大きなカップは普段、アリスが使っているものよりもふた回りも立派でした。こくりこくりと冷えた喉がお茶を飲み干すたび、アリスのおなかの中にはこぼこぼ、こぼこぼ、と我慢し続けているおしっこが音をたてているようです。ギュッと目を閉じて、最後の一滴までを飲み干して、アリスはぶるりと背中を震わせました。

(あんっ……はやく、お手洗いにいかなきゃ……)

「ねえ、それよりも教えて。ここに時計をもったウサギさんが来なかったかしら？ あなたじゃなくて」

アリスは三月ウサギのほうを指差して、言います。

「私、あのウサギさんを探しているのよ」

ほんとうのところはごまかして、アリスはそう言いました。それにそれは、あながち嘘というわけでもありません。もじもじとバニースーツの足の付け根を押さえながら、ぴょんぴょんと何度も跳ねておしっこを我慢していた白ウサギさん。彼女を追いかけていけば、きっとおトイレに辿りつけるはずなのです。

「アリスといったかね、君、もう少し落ち着いたらどうだい」

急に、これまで黙っていた帽子屋が——ヤマネも同じように何も言いませんでしたが、こちらはまたくうくと眠っていたので別問題です——ずっとめずらしそうにアリスを見ていた帽子屋がそう言ったので、アリスはびっくりしました。

まさか、おトイレに行きたいのを我慢しているのに気付かれてしまったのかも、そう思って、アリスはぴんと背をのばします。でも、いくらそうしても、椅子の上では太腿がすりすりと擦りあわされてしまうのです。ごまかしきれないと思ったアリスは、帽子屋が何かを言う前に、声を上げます。

「あなた、学校で習ったでしょ？ そんな風に、レディのことをあれこれ言っちゃいけないのよ」

厳しい先生が、お作法の時間のときに眉を吊り上げていった言葉を思い出しながら、アリスは続けます。

「そういうの、すごくぶさほうなのよ」

帽子屋は、これをきいて目だまをぎょろりとむきました。怒らせちゃったかも、とアリスは思いましたが、結局帽子屋はそれ以上何も言ってきました。

すると突然、三月ウサギが言います。

「うふふう。じゃあ問題。上はびちゃびちゃ、下もびちゃびちゃ。これなーんだ？」

いつものアリスなら、なぜなぞが始まってとても嬉しいなと思ったことでしょう。これでやっとこのわけのわからないお茶会も楽しくなるに違いないのです。

けれど、今のアリスはそれどころではありません。今さっき飲んだ紅茶がきいてきたのか、どんどんおしっこがしたくなってきてしまいました。これまでももちろんおトイレには行きたかったのですが、今度のはじっとしているだけでは我慢できないくらいになってしまったのです。身体を左右に揺すり、ぎしぎしと椅子を軋ませながら、アリスはあたりを見回し始めます。

「うふふう。どうしたのアリス」

「え、ええ、なんでもないわ。……その、わかると思うわ」

「ボクのなぜなぞが？ じゃあ答えてみてよ。うふふう」

三月ウサギは落ち着きなく腰を揺するアリスを見ながら、にやにやと、いやらしく目を細めます。

「ええと……」

上がびちゃびちゃ。下もびちゃびちゃ。アリスは思わず、おトイレに間に合わなくて、足元に水たまりをつくって濡らしてしまい——大泣きしている女の子の姿を思い浮かべてしまいます。もちろん、それはアリス自身のことなんかではないはずだと——もう立派なレディであるアリスは、おトイレまでおしっこ我慢できないなんてことはないはずだと——考えましたが、そうしている間にもアリスの太腿はさらにきつく閉じ合わされ、前後にすりすりと擦り合わされるばかりです。

「うふふう。ほらあ、どうしたの？ 答えてよ。それともわからないのかい、アリス？」

「その、わかるわ。わかるわよ。すくなくとも——すくなくとも、それが私のよく知ってるなぜなぞじゃないっていうのはわかるわ。ふつうは

上は大火事、下は洪水、なんでしょう？ っていうのよ」

その答えはお風呂です。ですが、それを聞いて帽子屋が言いました。

「全然わかってないじゃないか。そりゃあ、『傘は傘でも雨の日に差す傘は？』ってのと、『雨は雨でも傘をさせない雨は？』ってのが違う答えだって言ってるようなもんだ」

「そうそう」

と、三月ウサギ。

「『お茶を飲むとのが渴く』と『のが渴いたからお茶を飲む』がおんなじことだって言ってるみたい」

「ふわあ……『眠るときにおねしょをする』と『トイレをする時に眠ってる』が同じ……みたいな」

「お前さんの場合は同じだろうよ、ヤマネ」

あくび交じりのヤマネにそういって、帽子屋はまた黙ってしまいました。

アリスはなにか面白いなぞなぞを思い出して、気分を紛らわせようとしたのですが、今日はどういう具合かまるっきりなにも思い出せません。

それどころか少しでも気を抜くと、おしっこのほうが出ちゃいそうになるばかりで、きっとこれを我慢し続けてるから考えもどこかで詰まっちゃってうまくいかないんだわ、とアリスは思います。

「ふうっ……」

考えながら、アリスはまた紅茶をティーカップに2杯も空にしてしまいました。空いたカップには、すかさず三月ウサギが新しい紅茶をついでくれるのです。

しばらくして、いちばん最初に沈黙を破ったのも帽子屋でした。

ポケットから時計を取り出して、しかめつらでそれを見ながら耳に当てたり、振ったりしてアリスに聞いてきます。

「ところで、今日は何日だかわかるかい、お嬢ちゃん？」

アリスはすぐには答えられませんでした。わけの分からないことが立て続けですっかり参っていたのもありますが、ちょうどおしっこが出てしまいそうになっていた時で、それが話せるようになるまで我慢するのに精一杯だったからです。

「……んっ……四日だと、思うわ……」

「四日だって？ なんてこった。二日も狂ってるじゃないか」

もじもじと腰を動かしながら、アリスが片目を閉じてそう言うと、帽子屋は溜息のあと、怒ったように三月ウサギを睨みつけます。

「だからバターじゃ良くないって言っただろう」

「うふふう。そんなことないさ、最高のバターを使ったんだよ？」

「パン屑が一緒に入ったんだろうな」

帽子屋から時計を受け取った三月ウサギは、それを自分のお茶に浸してみしてから、また眺めました。けれどどうも具合は良くなっていないらしく、三月ウサギはもう一度つぶやくのです。

「バターは良かったんだけどねえ。うふふう」

アリスはそのとんちんかんなやり取りを見ていました。帽子屋の時計はへんてこで、時間を指す針の代わりに日にちを指す針しかついていないのです。

「ヘンな時計ね」

あんまりトイレのことばかり考えてちゃ良くないわと思い、アリスは続けます。

「今日が何日かはわかるのに、何時かが分からないなんて」

「そんな事が分かってどうなるんだい？　ねえアリス。君の時計は、今が何年かわかるのかい？」

「そんなの、もちろんわからないわよ」

一体、アリスがああ白ウサギを追いかけて、もう何時間経つのでしょうか。あれからずっとアリスはおしっこを我慢し続けているのです。早くお家に帰るか、あるいはあの綺麗なお庭——変なキノコで大きくなったり小さくなったりした廊下のドアから見えたあのお庭の、お手洗いにいきたくて仕方ありません。

「でも、それは、年っていうのがなかなか変わらないからよ」

「……そうだ、まさにそれと同じことさ」

アリスがぎゅっとエプロンドレスの布地をつかみながら言うと、帽子屋は当たり前のようにそう答えるのでした。アリスはだんだん頭がこんがらかってきました。

帽子屋の言うことはちゃんと言葉になっているのに、まるで意味が分からないのです。これでは白ウサギの事を聞いてもちゃんと答えてくれるかどうかあやしいものでした。

「あう……あなたのいってること、どうもよく分からないみたいなの」

できるだけ丁寧にアリスがそう言うと、帽子屋はきゆうに隣を向いて、眠りこけているヤマネの鼻先に熱いお茶を垂らします。

「ほら、何を寝てるんだい、君は」

「ふわあ……うん、そうだねえ。ほんとほんと」

ヤマネの適当なあいづちを聞き流して、帽子屋はまた別の帽子を取り出してかぶります。

「さて、お嬢さん。なぜなぞの答えはわかったのかね」

さっきのクイズのことだと気付くのに、アリスには少し時間が必要でした。

「……うん。ぜんぜん。ねえ、答えはなんなの？」

「私にもさっぱりわからない」

アリスが三月ウサギのほうを見ると、三月ウサギはいやしげに目を細めて言うのです。

「うふふ。ボクにだってわからないねえ。うふふう」

じろじろとアリスのほうを見ながら、三月ウサギは言います。

ひょっとしたら、三月ウサギはもうアリスが落ち着かない様子を知っているのかもしれませんが。アリスは思わず、いすの上に姿勢を正しました。なにしろずっとスカートを押さえながらおしっこを我慢していたので、いつの間にかテーブルの上に顔を載せるくらいに上半身が傾いていたのです。

「あなた、もう少しマシな時間の使いかたをしたほうがいいわ」

急に恥ずかしくなって、アリスはそれをごまかすように怒ってみせます。でも、テーブルの下で足をもじもじとこすり合わせるのをやめていられたのはほんの少しの間だけでした。

「こたえのないなぞなぞなんて、つまらないじゃない！」

すると横から帽子屋が口を挟んできます。

「そんなことはないさ。私くらいに時間と仲が良ければ、付き合い方を無駄にするなんてことはないものさ」

アリスが何のことやらわからずにいると、帽子屋はさっきのバターまみれの時計を三月ウサギの手元から取り上げて、言います。

「君には分からないかもしれないね。おそらく、時間と口を利いたこともないんだろうから」

その言い方が、ちょっと馬鹿にされたように聞こえたので、アリスは慎重に答えることにします。

「それは、ないかもしれないけど。……でも、音楽の時間にはこうやって時間を刻むわ」

「それが良くないのさ。いいかいお嬢さん、時間たちだって刻まれたくはないものさ。君は誰かに切り刻まれたいのかい？」

もちろん痛いのは嫌ですから、アリスは首を横に振ります。

「彼らと上手くやっていくことさえできるなら、時計がらみのことは何だって、ほとんどが上手い具合に運ぶのさ。たとえば、朝の9時というのはちょうど授業が始まる時間だが——そこでちょいと時間をお願いをしてみればね、一瞬で針はぐるぐる巡る。そら、もう午後一時半。晩御飯の時間だ——というような具合にね」

時計の文字盤をぐるぐる指で回して、帽子屋はいいました。午後一時に晩御飯なんて変だとアリスは思いましたが、黙っていることにしました。なぜなら、本当にそうできたら、それは結構すごいことに思えたからです。

（それなら、午後一時半に晩御飯なんてささいなことだわ）

ふと、アリスは先々週の木曜日に、算数の授業中におトイレにいきたくなくなってしまったのを思い出してしまいました。あの時も机の下で何度もひざを交差させながら、授業が早く終わらないかと、やけにのろのろとしか進まない時計の針にやきもきしてすごしたものでしたが——帽子屋のいうとおりなら、あつという間に授業を終わらせてしまうこともできるのです。

「うふふう、今がそうならいいのにねえ」

小声でつぶやいて、三月ウサギも鼻を鳴らします。またいやらしいウサギの視線に目が合ってしまった、アリスは小さく身震いしました。

「でも、そしたら——あたしはまだ、お腹が空いてないわけよね？」

「もちろん最初のうちはそうだろうね。しかし、いつでも好きなだけ一時半にしておくこともできる」

時計の針を進めたり戻したりしながら、帽子屋は答えます。

時間がいたり来たりしているのをみながら、アリスはそと、スカートの上からぱんぱんに張り詰めたおなかを撫でます。

そういえばこのお茶会に来てからもうずいぶん経つような気がしているのですが、いっこうにお手洗いの話は進んでいません。

「あなた、そんなことができるのね？」

はやくこのお茶会を終わらせてしまえばいいと思って、アリスは帽子屋に尋ねます。しかし帽子屋は、悲しそうに頭を振るのです。

「残念ながら、私は違うのだよ。私と時間は、こないだの三月に口論をしてしまってね。ちょうど……彼が狂ってしまうちょっと前だったのだからね」

帽子屋は三月ウサギを茶さじの先で示して、続けました。

「——ハートの女王様が主催の大コンサートがあったのは知っているかね。私たちもそれに招待されて、歌を披露することになったのだが。

“きらきらコウモリ おそらで謀る！” ——君は知っているかい、この歌を？」

「どうかしら……そんなようなのは、聞いたことがあるかも」

とアリス。帽子屋は小本と咳払いをしてつぶやきます。

「“世界の上を お盆を飛ばよ、きらきら——”」

ここで突然、眠っていたヤマネが身震いして、眠りながら歌いはじめました。

「ふわあ……“きらきら、きらきら、きらきら——”」

ところがヤマネは半分眠っているものですから、そこから先に進みません。ほうっておくといつまでも続けそうだったので、帽子屋と三月ウサギはヤマネのおしりをきゅっつつねってやめさせます。

「まあ、それでこの歌をだ。私が一番も歌い終わらないうちに、女王様が飛び上がって言い出したのさ。『こやつめ、拍子の時間をバラバラに刻んでおるではないか！ 首をちょん切るのじゃ！』——とね」

「ひどいわ、残酷よ！」

それは本当にそう思ったので、アリスは叫びます。帽子屋はうつむいて、顔の前で手を組みます。

「そういう訳さ。それ以来ずっと、時間達はバラバラにされたことを根にもってしまってね。もう私の頼みなど聞いてくれないのだよ。それどころか普通に動くこともなくなってね、だから今ではずっと6時のままというわけさ」

「じゃあそれで、お茶のお道具がこんなに出てくるのね？」

アリスが手を打って言います。そうさ、と帽子屋は力なくため息をつきます。

「そうだ。ずっと6時のままだからあと片付けの暇すらない。いつでもお茶の時間だからね」

「だから、こんなところにいるのね。ようやくわかったわ！」

アリスはようやく、この広いテーブルいっぱいティーセットと、その隅っこに座っていた奇妙な3人のなぞにたどり付けて、少し嬉しくなっていました。

「ご名答だ。使い終わるごとに隣の席へ。だんだんずれてゆくのだ」

「でも、最初のところにもどってきたらどうなるの？」

アリスはふと疑問に思ったので、聞いてみることにします。しかしそれに三月ウサギが割り込んできました、。

「うふふう。もうこの話はここでおしまい。飽きちゃったし別の話にしよう。……ねえお嬢ちゃん。なにか面白いお話をしてよ。今したいこととかさあ。うふふう」

にんまりと口先をゆがめて、三月ウサギ。アリスはぞっとしながら、ぷいと顔を背けます。

「悪いんですけど、なにも知らないんですの！」

やっぱり三月ウサギは、アリスがさっきからおトイレを我慢しているのを知っているのだとしか思えません。アリスはだんだん、三月ウサギのことが怖くなってきました。

「うふふう。じゃあ、ヤマネ、君がお話をしたらどうだい！」

三月ウサギはひょいと手を伸ばして、眠っていたヤマネのおしりをつねり上げます。かなり痛そうに見えましたが、ヤマネは悲鳴を上げるでもなく、ゆっくり目を開けるだけでした。

「ふわあ……ねてないよお……」

くしくしと顔をこすりながら、ヤマネはしわがれた小さな声で言います。

「ぼく、今のお話、ぜんぶきいてたよお……」

「うふふう。別にいいさ。それよりもなにか、面白いお話をしてよ」

「ええ、お願い！」

三月ウサギと話さなくていいのだと思えば、アリスもいっしょになってお話をせがみます。

それを見て帽子屋も、また新しいハンチング帽を被りながらいいました。

「始めるのならあまりゆっくりとしないでくれ。お茶の時間はいくらでもあるが、あんまりのんびりしていると、君は眠ってしまうだろう？」

「ふわあ……ええと……むかし、むかし……」

そういわれて、ヤマネは話し始めました。

「……むかしむかし、三人の姉妹がいなかに住んでおりました。なまえは、上からエルシー、レイシー、ティリー。……そして、このいなか姉妹は、井戸のそこに、住んでいまして——」

アリスからしてみればじれったいくらいに間をとったしゃべり方でしたが、これまでうつらうつらと眠ってばかりのヤマネにしてみれば、慌てているくらいなのでしょう。

「井戸の底がおうちなんて変よ。なにを食べてたの？」

じれっとなって、ついアリスは聞いてしまいます。

「ふわあ……糖蜜だよ」

しかし、ヤマネはそれにも一分かそこら、考えてこんでから答えました。ぜんぜん進まないお話に、アリスはまたもじもじと腰を動かしてしまいます。

「そんな生活、うまくいくはずないわ。だって病気になっちゃうもの！」

「まさにそのとおり」

とヤマネは、あくまでマイペースです。

「とっても病気でした」

アリスは、その姉妹たちのとんでもない生き方がいったいどんなものか、想像してみようと思いました。でもあまりにもなぞが多すぎたので、ついにあきらめてもう一度質問します。

「ねえ、その子たち、なんだって井戸のそこになんかに住んでたの？」

「うふふう。ねえアリス。のどは渴かないかい？ お茶、もっと飲むといいよ」

突然三月ウサギが、熱心にアリスに勧めてきます。

しかし、もうアリスは何倍もティーカップを空に置いて、おなかがつたばたぽになっていました。加えてずっとお茶会のテーブルから離れられないものですから、すっかりおトイレにいきたい気分が強くなっていたのです。

「いいえ、結構よ。もうたくさんいただきました！ だからもっとなんて飲めないわ！」

「それは違うな。“もっと飲めない”じゃなくて“ちょこっとも飲めない”だろう？ “ちょこっと”よりも“もっと”のほうが少ないなんてことはない」

帽子屋がいきなりそんなことを言い出したので、アリスは慌てて叫びます。

「誰もあなたになんかきいてないわ！」

このままだとまた紅茶を飲ませられそうで、アリスも必死でした。しかし帽子屋は、不満そうにあごを撫でながらカウボーイハットをかぶります。

「ふむ。……人のことをあれこれと詮索するなど言ったのは君だったのではないかね？」

そう言われて、アリスは何とか言い返そうとしましたが——なんと答えていいかわかりませんでした。だからしぶしぶ、お茶とバターパンをちょっただけ口に運びます。

（んう……っ）

これまでに飲んだお茶でもういっぱいのおなかに、さらに紅茶が注ぎ込まれて、アリスはぞわあっと足の付け根を振るわせる甘い痺

れに声を上げてしまいそうになります。

アリスは気づかれないようにぎゅっとスカートの付け根を握り締め、それからヤマネにむかって質問をくりかえしました。

「ね、ねえ。その子たち、なんで井戸のそこに住んでたの？」

そうすると、ヤマネはまた押し黙ると、それについて考えてだしてしまうのでした。のろのろとしたやりとりに、アリスは気がまぎれるどころか、どんどん我慢が辛くなってしまい、とうとうもじもじと腰を揺すり、テーブルの下にぐりぐりと地面に靴の爪先を擦りつけ始めてしまいます。

そうして、また何分もたってから、ヤマネが言いました。

「糖蜜の湧いてくる井戸だったのです」

「そんなのあるわけじゃないじゃないっ！！」

えんえん待たされてそんな風に続けられ、いらいらとしていたアリスはとうとう声を上げてしまいます。けれど帽子屋と三月ウサギは、さもアリスがマナー違反をしたのだというように、口の前に人差し指を立てて、しいーっ！！　と言ってくるのです。

さらに、ヤマネまでむうっと頬を膨らませ、細く目を開けてアリスを睨みます。

「……ふわあ……ねえ、礼儀正しくできないんなら、話の続きは君がしてくれよ。そんな格好で、みっともない」

3人に見つめられ、アリスはびたり、足踏みを止めて慌てて姿勢を正します。

「い、いえ！！　ごめんなさい、お話を続けてください！！」

懸命におしっこを我慢しているところを見られてしまって、アリスはすっかり気が動転していました。真っ赤になって、ヤマネに頭を下げます。

「もう邪魔しませんから、お願いします。……その、糖蜜の井戸も、探してみればひとつくらいあるかもしれないわ」

アリスはできるだけつつましく言ったつもりでしたが、ヤマネはまだ面白くなさそうでした。

「ひとつくらい？　ひとつくらいだって？　ふわあ……まったく……」

けれど、ヤマネはどうか、それ以上腹を立てるのはやめてくれたようでした。またたつぷりと間を取って、お話を続けます。

「そこで……この、いなか3姉妹は……お絵かきを習っていたのです」

「お絵かき？　何をかいたのかしら？」

約束をしたばかりなのに、つい気になってアリスは聞いてしまいます。何かほかのことを考えていないと、頭の中がお手洗いにいきたいことでいっぱいになってしまいそうなのでした。

ヤマネはまた、ふわあと大きなあくびをして、こんどは全然考え込まずに答えました。

「糖蜜だよ」

「あー、ところで諸君、そろそろ綺麗なティーカップが欲しくはないかい」

アリスがまた、『そんなことないわ！！』と言いそうになったところで、先に帽子屋が割り込みました。

「一つずつ隣に席をずらそう。それ、ヤマネ、君もだ」

言うなり帽子屋は勝手に席を立ち、隣にいたヤマネものろのろと続きます。

三月ウサギがそれまでいたヤマネの席に動き、アリスはいいやいやながら席を立ち——おしっこを我慢しながら立ち上がるのが大変だったからです——さっきまで三月ウサギが居た席に座りました。

つまり、新しい席に座れて得をしたのは帽子屋だけだったのです。

アリスはと言えばそれまでよりずっと悪い席でした。目の前にはなみなみと紅茶を注いだばかりのティーカップがあり、まわりはミ

ルク浸しになっていました。

ちょうど席を立つとき、三月ウサギが肘でミルク壺をひっくり返していったのです。こんなところには座っていただくありませんでしたが、3人が何も言わないので、アリスは渋々、そっと椅子に浅く腰かけます。不安定な座り位置は、ますますアリスの我慢を辛くさせました。

アリスはもう二度とヤマネの機嫌をそこねたくなかったので、とても用心してきりました。

「ええと、良くわからないんだけど、その“いなか”姉妹って、どこから糖蜜をかいいたの？」

「それは決まっているだろう、自明だ。水の井戸から水を掻きだすのと同じことさ。……糖蜜の井戸だから、糖蜜を掻き出すことは簡単だ。この程度のことはわかっていただかないと困るね」

馬鹿にするような口調に、アリスはむっとしながらもヤマネにたずねます。

「でも、そのいなか姉妹たちって、井戸の中にいたんでしょ？」

「そうそう。ふわあ……だから井中（いなか）姉妹」

その答えに、アリスはすっかり意味が分からなくなっていました。アリスが黙り込んでしまったのをみて、ヤマネはあくびをしながら、目を擦ってお話を続けようとします。

「この子たちはお絵かきを習っていて……いろんなものをかきました——“まみむめも”はじまるものならなんでも——」

「あの、どうしてまみむめもの？」

「ふわあ……んう。いけないかい？」

「いけないは、ないけど……」

アリスはどんどんおトイレに行きたくなくなってしまい、考えているのがだんだん億劫になってしまっていました。椅子から半分、身体を乗り出すようにして、しきりに腰をよじり、お尻をもぞもぞと動かして、いつときもじっとしてられません。

時折、ぎゅっとスカートの上から脚の間を押さえてしまい、ありすは小さくはあ、はあ、と息を荒くします。

けれど——ヤマネとは言えば、まるで今にも眠り込んでしまいそうに、両目を閉じてかくりかくりと舟をこぎ始めていました。帽子屋にお尻をつねられて一度は飛び起き、目を開けたヤマネですが、またすぐにうつらうつらと顔を揺らし始めます。

「——ふあああ……“まみむめも”で始まるものならなんでも——。たとえば『まんじゅう』とか『みらい』とか。……『むずかし』とか『めんどろ』とか。ふわあ……『もう』とか——ほら、『もうたくさん』って言うよね」

アリスのほうを見るように、顔を上げて。ヤマネが言います。

「ねえ君、『もう』の絵なんて見たことある？」

「ええっと……？ その、そんなこと言われても……わたしだって、そんなこと……」

アリスは、いつのまにかヤマネのお話を聞き漏らしていたのかと疑いましたが——じっさい、ヤマネのお話はあまりにもめちゃくちゃで、アリスはすっかり頭をこんがらかせてしまっていました。

「そんなの、いままで考えたこともないし——」

「ふむ、では黙っていることかね」

と、帽子屋が偉そうに胸を張ります。

この無礼さ加減には、さすがにもうアリスはがまんできませんでした。

「もう、いいわよ！！ お話もお茶会ももうたくさん！！」

アリスは目の前のティーカップを掴むと、腹立ち紛れにぐいと飲み干し、空になったカップをがちゃんとテーブルに叩きつけます。一気

に飲みすぎたものですからアリスはたまらずに顔をしかめ、けれどしっかりと、3人のほうを見て言います。

「道も教えてくれないで、わけのわからないことばかり！！ 付き合ってもらえないわ！！」

そういいと、アリスはふいと3人に背を向けて、大股で歩き出しました。

3人は、最初ぽかんとアリスを見つめていたのですが、ヤマネはすぐに眠り始めてしまい、残る帽子屋も、三月ウサギもまるきりアリスのことは気にしないふうにお茶会を再開しようとしています。

アリスのほうは、こっそり後ろを振り向いて、誰かが戻ってこいと言わないかなと思っていたのですが——三月ウサギがいやらしそうにアリスのお尻を見ていたのに気づいて、アリスは慌ててその場を走り出します。

さて、帽子屋とは言えば、さっきまでの態度もどこへやら、ヤマネをお茶のポットにおしこもうとするのに一生懸命でした。

「はあ……もう知らないわよ、二度とあんな所にはいかないわ！！」

アリスは、森の中の道を進みながらひとりで言います。

せっかく、道を教えてもらおうとおもって、せいっぱい礼儀正しくしたのに、彼らときたらまるでアリスのことなんて気にしていないようでしたから。

「これまでの人生の中で、いちばんばかばかしいお茶会だったわ！」

けれど、しばらく進むうち、憤慨していたのがだんだんおさまってくると、アリスは少しずつ姿勢を前屈みに、脚も内股に、ぎゅうっとスカートの前を押さえる恥ずかしい格好になってしまいます。

「……うう……もお、っ……？」

そうです。そもそも、アリスは白ウサギの走って行ったほうを教えてもらおうとしたのも、おしっこに行きたいからなのです。それなのにまるで当てをなくしてしまい、アリスはいよいよ弱ってしまいます。

けれどその時。アリスは森の木の中にひとつ、中に入れるような扉が付いているの気がつきました。

「ヘンなの……ううん、でも今日って、なにかかもヘンよね。だからこれもきっと、なんとかなるわ。入っちゃいましょう」

アリスはそっとおなかを押さえながら、ドアを開けます。

ふと目の前がぐらりと揺れる気がして——気がつくと、アリスはまたもやあの長い白黒の廊下にいました。近くにはあの小さなガラスのテーブルもあります。

どうやら、最初の場所に戻ってきたようでした。

「ほら見なさい。なんとかなるものよ。……じゃあ、こんどはもつとうまくやらなくちゃ！！」

アリスはそうつぶやくと、まず小さな金色の鍵を手にとって、お庭につづくとびらの鍵をあけました。それからポケットに入れておいたキノコのかけらをちよつとずつかじり、身長が三〇センチくらいになるまで慎重に調整をしました。

そうして、とうとうアリスは、あの金色のカギの扉の奥に見えた、あの噴水と花壇のあるお庭の、一番奥にあったおトイレの前にやってきたのでした——。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 安全パトロールメール

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 09/24/2010 19:30:47

BODY:

元ネタを追記しようかと思ったが、明らかに自分で自分の足を引っ張る気がするので自重。

<hr size="1" />

No.0020117

都道府県 ○○県

メルマガ名 ▲▲支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 16:32:34

タイトル 女子児童の不審行動

07 月 XX 日 16 時 20 分頃、△△市□□区○○1 丁目を巡回中の▲▲支所巡回員が、個人宅の玄関付近で不審な行

動をしている女子児童を目撃した。

女子児童は個人宅の玄関前で、窓を覗く・鍵をいじるなどの不審な行動をしていたため、巡回員が声かけを行うと女子児童は『違います』『ここ、私の家です！ 本当です！』『その……』『お手洗い……』などと応答した。

落ち着きなく足踏みをするなどの行動も見られたため、女子児童の保護を行おうと試みたが、児童がこれを拒絶したため、立ち去るように指導を行った。

地図 : <http://XXX.XXXX/XX.XXXX9981>

不審者を見かけたら、すぐに当該部局へ通報するか、最寄りの支所へ連絡して下さい。

発信 : ◆◆支所

<hr size="1" />

No.0020123

都道府県 ○○県

メルマガ名 ◆◆支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 16:53:34

タイトル 市立公園での女子児童の目撃

07月XX日16時45分頃、△△市□□区●●を巡回中の◆◆支所巡回員が、市立公園内の公衆トイレ付近で下校途中と思われる女子児童を目撃した。

当該地区には不審者の目撃情報があるため、巡回員は女子児童に声かけを行い、安全のためただちに公園出口まで付き添ったのち、帰宅を促した。

地図 : <http://XXX.XXXX/XX.XXXX9981>

不審者を見かけたら、すぐに当該部局へ通報するか、最寄りの支所へ連絡して下さい。

発信 : ◆◆支所

<hr size="1" />

No.0020131

都道府県 ○○県

メルマガ名 ■■支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 17:02:11

タイトル 女子児童の私有地立ち入り

07月XX日16時50分頃、△△市□□区●●3丁目付近の私有地で、女子児童が私有地への立ち入りが確認された。女子児童は□□区△△市立▲▲▲学校に通う生徒と見られ、下校途中に指定の通学路を外れた私有地の草むらに侵入しようとしていたところを発見、巡回員が声をかけるとそのまま立ち去った。

付近に不審なものは見当たらなかった。

児童は通学鞆を背負った○年生前後。短いポニーテール姿、水色のブラウスにベージュ色のスカートを着用。

地図 : <http://XXX.XXXX/XX.XXXX9999>

不審者を見かけたら、すぐに当該部局へ通報するか、最寄りの支所へ連絡して下さい。

発信 : ■■支所

<hr size="1" />

No.0020133

都道府県 ○○県

メルマガ名 ■■支所・安全パトロールメール・続報

受信日時 2010/07/XX 17:08:14

タイトル 女子児童の路上でのしゃがみ込み

07月XX日17時00分頃、△△市□□区●●2丁目付近の路上で、女子児童が不審な行為まっているのが確認された。女子児童は□□区△△市立▲▲▲学校に通う○年生の生徒と見られ、下校途中の通学路のごみ集積場の陰で下着に手をかけ、しゃがみこもうとしているのを巡回員が発見。巡回員が声をかけるとそのまま立ち去った。

路上にはわずかに水滴の痕が確認された。

児童は通学鞆を背負い、短いポニーテール姿、水色のブラウスにベージュ色のスカートを着用。

地図 : <http://XXX.XXXX/XX.XXXX9998>

不審者を見かけたら、すぐに当該部局へ通報するか、最寄りの支所へ連絡して下さい。

発信：■■支所

<hr size="1" />

No.0020134

都道府県 ○○県

メルマガ名 ■■支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 17:14:32

タイトル 女子児童の路上での不審行為（しゃがみ込み行為続報）

07月XX日17時05分頃、△△市□□区●●1丁目付近の国道×××号交差点で、女子児童がスカートの前を押さえ、しきりに腰をよじるなどの不審な行動を行っているのが確認された。

女子児童は前二報および◆◆支所別報（No.0020131）で確認された児童と同一と見られ、□□区△△市立▲▲▲学校に通う○年生の生徒であることが確認されている。（リンク先：別報問い合わせ1参照）

児童が目撃された交差点は指定の通学路とは異なる区域であり、デパートなどの繁華街からも近い場所である。安全防災上の観点から巡回員が声をかけ、通学路への誘導を行った。

女子児童は通学鞆を背負い、短いポニーテール姿、水色のブラウスにベージュ色のスカートを着用していた。

地図：http://XXX.XXXX/XX.XXXX9997

不審者を見かけたら、すぐに当該部局へ通報するか、最寄りの支所へ連絡して下さい。

発信：■■支所

<hr size="1" />

No.0020135

都道府県 ○○県

メルマガ名 ■■支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 17:16:49

タイトル 【緊急】不審行為を行っていた女子児童の保護要請

07月XX日17時10分頃、△△市□□区●●1丁目付近の国道×××号交差点で、指定の通学路を離れていた□□

区▲▲学校○年●組の女子児童が巡回員に保護され、随伴されて通学路に戻る途中、巡回員の制止を振り切って逃走するという事案が発生。

女子児童は巡回員の質問にもあまり答えず、俯いて声を詰まらせ、スカートの上から股間を握りしめるなどの不審な行動を繰り返していた。

女子児童は支所の問い合わせにより△△市立▲▲▲学校○年●組の氏名：■■■■（出席番号10番、11月3日生まれ、満×歳、血液型O型）であることが確認されている。通学鞆を背負い、短いポニーテール姿、桜の髪留めと白のソックス、黒の革靴、水色のブラウスにベージュ色のスカートを着用していた。

地図：http://XXX.XXXX/XX.XXXX9996

担当地域の巡回員は、ただちに当該女子児童の保護を優先してください。

発信：■■支所

<hr size="1" />

No.0020136

都道府県 ○○県

メルマガ名 ▲▲支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 17:20:27

タイトル 【緊急】不審女子児童の目撃情報

07月XX日17時15分頃、△△市□□区◆◆2丁目付近を巡回中の▲▲支所巡回員が、ビルの解体工事現場の資材置き場付近で、保護要請のあった女子児童を目撃した。

女子児童は、建築資材置き場に無断で立ち入り、設置されていた仮設トイレ付近で『お願い』『トイレ貸してください』などと不審な要求を行っていたもの。現場の建設作業員に制止されていたものの、足を擦り合わせ、前かがみでスカートの前を握りしめるなどの不審な行動を行っていたのが確認された。

巡回員が到着するのと入れ違いに、女子児童はそのまま立ち去った。

※女子児童は△△市立▲▲▲学校○年●組の氏名：■■■■（出席番号10番、11月3日生まれ、満×歳、血液型O型）。通学鞆を背負い、短いポニーテール姿、桜の髪留めと白のソックス、黒の革靴、水色のブラウスにベージュ色のスカートを着用。

07月XX日17時05分頃、国道×××号交差点で、指定の通学路を離れているのを巡回員に保護され、随伴されて通学路に戻る途中、巡回員の制止を振り切って逃走したもの。

地図 : <http://XXX.XXXX/XX.XXXX9995>

発信 : ▲▲支所

<hr size="1" />

No.0020137

都道府県 ○○県

メルマガ名 ◆◆支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 17:23:21

タイトル 【緊急】不審女子児童の情報・追加

現在、No.0020135 にて保護要請の出ている女子児童について、△△市立▲▲▲学校より住所を確認。条例に基づいて各支所に送付を行うとともに、公開を行う。

- ・△△市立▲▲▲学校○年●組の氏名 : ■■■■（出席番号 1 0 番、1 1 月 3 日生まれ、満×歳、血液型 O 型）。
- ・住所は△△市□□区○○ 1 丁目×番◆号 ハイツ●● 1 階
- ・通学鞆を背負い、短いポニーテール姿、桜の髪留めと白のソックス、黒の革靴、水色のブラウスにベージュ色のスカートを着用。
- ・ポケットティッシュなどを所持。前屈みになりスカートの前を押さえる、不意に立ち止まる、小刻みに足踏みをするなどの不審な行動を繰り返している。

各支所の巡回員は、女子児童の保護を完了次第、速やかに連絡を行うこと。

発信 : ◆◆支所

<hr size="1" />

No.0020139

都道府県 ○○県

メルマガ名 ◆◆支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 17:34:56

タイトル 【緊急】不審女子児童の確認

07 月 XX 日 17 時 30 分頃、△△市□□区◆◆ 3 丁目付近の路上で、巡回中の◆◆支所巡回員が、保護要請のあった女子児童

を目撃した。女子児童は、路上に駐車されていた乗用車の陰に入り込み、スカートをたくしあげしゃがみ込んでいたところを巡回員に気付いて逃走。

地面に痕跡はなかったものの、ポケットティッシュなどが残されていた。

現在、女子児童は◆◆ 4 丁目へ向けて移動中。

各支所の巡回員は、直ちに現場へ急行されたし。

地図 : <http://XXX.XXXX/XX.XXXX9993>

発信 : ◆◆支所

<hr size="1" />

No.0020143

都道府県 ○○県

メルマガ名 ◆◆支所・安全パトロールメール

受信日時 2010/07/XX 17:58:19

タイトル 不審女子児童の保護

07 月 XX 日 17 時 50 分頃、No.0020135 にて保護要請のなされていた女子児童（△△市立▲▲▲学校○年●組の氏名 : ■■■■、出席番号 1 0 番、1 1 月 3 日生まれ、満×歳、血液型 O 型）の保護を完了した。

女子児童は◆◆ 4 丁目付近を移動していたところを各支所の巡回員によって保護され、現在は◆◆支所へと移送中。

服装には一部乱れがあり、スカートなどに不審な染みが確認された。

現在、女子児童は『トイレさせてください』『お願いします、トイレ』『もう我慢できない』などと混乱状態にあるため、巡回員 2 名が付き添っている。詳しくは支所へ移動後に事情を聴く予定。

発信 : ◆◆支所

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: お姉さまと一緒にのお話・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/09/2010 20:30:30

BODY:

「……ごきげんよう、彰子お姉さま。結衣さんも」

「ええ、ごきげんよう」

「ご、ごきげんよう、っ、姫子さんっ……」

笑顔と共に姫子たちが見送られ、ぎい、と閉じられたドアの中。

ようやく姉と二人きりとなった結衣は、ついにはしたなくも耐え切れず、ぎゅうっとスカートの前を握り締めてしまう。濃緑の布地に折られたプリーツが、大きな皺に激しく乱され、脚の間に巻き込まれた布地が惨めなほどにねじられる。

まるで、脚の付け根に雑巾をあてがって、思い切り絞っているかのようなありさまだ。とても礼園の生徒——それも、下級生からの憧れの的である生徒会役員の姿とは思えない。

「あ、あつ、あ、あつ」

結衣は口を小さく「あ」の形に開き、空気を求めるようにぱくぱくと震わせる。どくん、どくんと身体の奥で波打つ猛烈な潮の満ち干に小柄な身体をよじり、湿った唇は色鮮やかな桜色に、何度も引き結ばれては空気を求めて開くのを繰り返した。

「っ、っ……」

ひり付くようにうねる衝撃に、結衣の身体がちいさくねる。

それは、まさに今、結衣のもうひとつの秘めやかな場所——乙女の大切な場所で繰り広げられている光景に寸分違わぬ動作だった。

熱くうねる濁流のようにダムのように押し寄せる水圧が、結衣の仕草からこの一年でなんとか身に付けた『お嬢様』の成分を奪い去ってゆく。

「ふふ、結衣？ もう我慢できないのね……そんなに恥ずかしい格好をしてしまって」

「あ、ああつ、ごめんなさいお姉さまっ、ごめんなさいっ……！！ でも、も、もうダメです、もうっ……む、無理なんですっ！！」

耐え続けていた限界を叫ぶ声が、立て続けに結衣の口をついた。

身を揺すりながら、最愛の姉の前ではしたくない姿をさらしてしまうことに死にたいほどの羞恥を覚えながらも、結衣はそうやって限界を訴えるしかなかった。

もはや薄紙一枚ほどのぎりぎりでなんとか踏みとどまっている我慢は、とつにロスタイムに突入しており、いつ危機に瀕する「乙女」を打ち破ってもおかしくない。

「お、お願いします……お姉さまっ……お、……い のっ」

くねくねと身を振り、左右に括った髪の毛を揺らして、結衣は『その言葉』を口にしてしまう。礼園の生徒であれば、そのような素振りを見せることすらはしないと眉をひそめられるような——その言葉を。

「お、お手洗いの……許可を、くださいっ……お姉さまっ、あ、っ、お、お願いしますう……っ、お、お手洗いにっ、いかせてくださいいっ……！！」

目前に迫る崩壊の瞬間を前に、わずかな身じろぎすらできない無力な少女はただ、そうやって惨めにも破裂しそうな排泄器官を押さえ込み、ただただ必死に懇願するしかなかった。

それ自体が意思を持って疼くほどに膨らみきった下腹部の水風船を抱え込み、もはや結衣には一刻の猶予も残されていない。

「ふふ、こんなにお腹を張りつめさせて……とっても我慢してるのね」

「ああ、だめ、お姉さま……っ」

すい、と身を寄せた章子は、制服の上から結衣の下腹部を撫でる。

ぱんぱんに膨らんで、ぱちんと弾けてしまいそうなその部分は、もう風が撫でるただでさえ辛いのに、そこをそおと絶妙な力加減の指先で刺激され、結衣は思わず顔を上げ、小さな悲鳴を放ってしまう。

「ふぁ……んんっ……んう……」

結衣の頬にさっと朱がさす。

まだ、姫子たちが外に出て行って僅かな時間しか経っていない。彼女達は部屋の前で何かを話しているかもしれない——それなのに、こんな恥ずかしい声を上げてしまうなんて——！！

「あ、あっあっ」

しかし、スカートの上から脚の付け根の『おんなのこ』を押さえ込む手のひらは、わずかでも力を緩めればそのまま崩壊に繋がりがねない。ゆえに、結衣は腰を揺らし身体をよじる以外に、彰子の手から逃れるすべをもたなかった。

それをすべて知った上で、彰子は結衣の尿意を弄んでいるのだ。結衣は必死に唇を噛んで、それ以上の悲鳴が口からこぼれないようにする。吐息がますます荒くなり、少女の耳までが真っ赤に染まる。

「素敵よ。とっても可愛いわ……結衣」

「お、お姉さまぁ……っ」

耳元で囁かれる甘い言葉に、結衣の胸が高鳴った。

憧れのお姉さまに可愛い、と告げられ、心はまるで天にも昇るほどの歓喜を覚える。もしこんな切羽詰まった時でもなければ、そのまま嬉しさで気絶しかねないほどのものだった。けれどそんな幻想に浸ることも許さないほどに、切羽詰まった女の子の衝動が結衣の恥ずかしい場所に集中してゆく。

「あ、あっ、お姉さま、もう、もう本当に……お願いします……、お手洗いに、いかせてください……っ。こ、このままじゃ、ここで……っ」

「ここで？ ……ふふ、“ここで”どうしたのかしら？」

「っ……」

殊更に、煽るように囁いてみせる彰子の言葉に、きゅう、と結衣の身体が悲鳴を上げる。鼓動は激しく高鳴り、胃の奥がぎゅっと縮んで、それらの動きすら下腹部へのいけない衝撃となって響く。『おんなのこ』が身悶えし、きつく押し当てた手のひらの内側でぶくりと口を開けてしまいそうになる。

けれど、彰子の言葉は絶対だ。結衣は答えなければならなかった。

うつむいたまま、蚊の鳴くような声で——結衣は、訴えを絞り出す。

「こ、ここで……お……オ、モラシ、し、してしまいます……っ」

口に出した瞬間、かあと顔じゅうに火がついたような羞恥が沸き起こった。

このまま、はしたなくも耐えきれず限界を迎えて、滝のように恥ずかしい水を迸らせ、床に盛大な水たまりを築き上げてしまうその瞬間を幻視したかのように、結衣の腰がじわあど熱くなる。

「お、おねえ、さま……っ」

「うふふ……そんなはしたない事を言うってしまうなんて……いけない子ね、結衣」

ぱくぱくと、酸素を求めて小さく開閉する結衣の口を、そっと彰子の指先が押さえこんだ。全てが彰子の思うがままだというのは、とっくに結衣だって理解している。けれどその上でなお、彰子はこうして、結衣にトイレを我慢させては、恥ずかしく身悶えし、懸命に腰を震わせ脚をすり合わせるその姿を見て楽しむのだ。

一番最初の大失敗から、半年。結衣はこれまでも何度も、こうして大好きな彰子お姉さまに焦らされ、弄ばれ——気の遠くなるような我慢を強いられてきた。

彰子は結衣の限界を実によく見極めており、ぎりぎりの、本当にぎりぎりの限界のところで結衣を解放するのだ。がくがくと震える脚で、結衣が懸命にトイレへと急ぐとき、彰子は実に素敵な笑顔を浮かべ、満足そうに微笑んでいる。

最後の最後にトイレへの許可を与えられたというのに、一步も動けず、床をスカートで、下着をびしょびしょに濡らしてしまった経験も一度や二度ではない。

今日も結衣は、彰子によってお手製の紅茶をたつぷりと採らされて、4時間近くもトイレに立つことを禁じられていた。

この半年、休み時間の度にトイレに立っていたころに比べると、結衣の排泄器官ははるかに強靱なものとなっていたが——それでも、成長期の少女の身体は容易く限界を迎えてしまうのだ。

「お姉さまっ、……も、もう、本当に……駄目ですっ……。お願いしますっ……、お、お手洗いにっ……お手洗いに行かせてくださいっ……！！」

彰子とて、そう何度も何度も部屋を汚されることを好む筈もない。そう信じて懸命に許可を求める結衣だが——そうして必死に尿意に抗う表情や仕草こそが、彰子の嗜虐心をますますそそる姿なのだとはい、まだ思い至っていなかった。

そして今日、彰子はまた、とんでもないことを言い出したのだった。

「ふふ、もう我慢できないのかしら？」

「っ……」

唇を噛み、懸命にこくこくと首を振る結衣。それを見て彰子はくすりと頬笑み——ふと、結衣の背中の方に視線を向けて何かを思いついたようだった。

「そうね、あまり我慢させると、身体に悪いし」

「じゃ、じゃあっ……」

ぱあっ、と顔を輝かせる結衣。しかし彰子は身体を浮かせるとサイドボードへ手を伸ばし、結衣の目の前に、『それ』を差し出してみせる。

「じゃあ、結衣。これに出してしまいなさい？」

「え……っ」

その言葉の意味が分からず、結衣は呆けたように声を上げていた。

目の前に突き出されたのは、さっきまで薔薇の花束を生けていたガラス製の花瓶だった。手の込んだ細工模様に彩られたそれは、触れるのも躊躇われるほどに曇り一つなく、上品で希少な気配を漂わせている。

姫子たちが花束を受け取っていったため、今は空っぽとなった花瓶の取っ手を持ち、結衣の身体を抱きよせるようにして、彰子はもう一度、結衣に言いつける。

「我慢できないのでしょうか？ 結衣。いいのよ、ここに出してしまいなさい？」

「っ……」

『これ』をトイレ代わりにしろと——彰子はそう言っているのだ。結衣の耳が拒否した言葉を、無慈悲にも再度言い聞かせるように、彰子は結衣の耳元に唇を寄せる。

「ふふ。だって、結衣、もう立てないのでしょうか？ 途中で間に合わなくなってしまうわよ？」

「そ、そんな……嫌です、お、お手洗いに……っ」

「これが結衣のお手洗いよ。結衣がどんなに我慢しているのか、調べてあげるわ」

「お、おねえ、さあっ……」

ほとんど悲鳴のように叫んで、結衣はいいやと首を振った。どんなに慕う姉の前だとしても、見せたくない姿というものはある。たとえ彰子が心から望むことだとしても、それは誰にも秘密にしなければならないはずのものだった。

だが——そうやって懸命に抗い、羞恥を訴える結衣の姿を、なによりも彰子は楽しむのだ。

抵抗できない身体を後ろから抱かれるような格好にされ、結衣の背中から手を伸ばした彰子は、結衣が懸命に押さえつけてい

る下腹部を、手のひらの上からそっと撫でさする。

「ふふ……結衣、だめよ？ こんなにここをカたくしてしまうなんて……」

「ああ、だめ、だめえ……」

憧れの“お姉様”の手によって、張り詰めた下腹部がやわやわと揉みこまれてゆく。撫でられればわかるほど、恥ずかしい液体を溜めこんで膨らんだ下腹部は、敏感に反応してしまうのだ。

「お願いしますっ……お姉さま、っ、ちゃ、ちゃんとした……お手洗いに……いっ」

「あらあら……一人じゃ出来ないのかしら？ 仕方ないわね、手伝ってあげるわ」

「ふあああ！？」

きゅうっ、と一際強く下腹部を圧迫され、思わず結衣が悲鳴を上げた瞬間。するりとスカートが腰上まで捲りあげられる。さらには大きく足を広げられ、両手も強引に押さえつけられ、結衣は下着一枚の下半身を、はしたなくも無防備な大股開きの格好をさらしてしまっていた。

「い、いやあああつ、嫌です、お姉さまっ、だめ、だめ……っ」

「ふふ……どうして？ あんなに我慢できないと言っていたのに」

くい、とガラス容器の縁が結衣の下着の股布部分へと押し付けられる。布地一枚だけを隔てたすぐその下、出口のすぐそこまでをぱんぱんに満たした恥ずかしい液体が、結衣の『おんなのこ』を刺激する。

「くうあ……っ……」

唇を噛み、か細い括約筋だけにありったけの力を込めて懸命に崩壊に抵抗する結衣。しかし汗に湿る白い下着の奥で、大切な『おんなのこ』が悲鳴を上げ、出口がぶくりと膨らみ始めてしまう。

「あ、あつ、あつだめっ……出ちゃうっ！！」

漏れちゃう——あまりにもはしたない叫び。結衣には見えていないが、悶え喘ぐ少女の姿に、彰子の瞳には一層妖しい輝きが濡れ煌めいていた。

細い妹の身体の中に、限界まで溜め込まれた羞恥の熱水——それが勢い良く溢れガラス容器の底を激しく叩く瞬間を求め、彰子はさらに結衣を追いつめてゆく。

「うふふ。……結衣？ もう我慢できないのなら、ちゃんと言って御覧なさい？」

「あ……あつ、あつ……」

もはや応答できる様子のない結衣は、それでも必死に首を横に振って抵抗する。学園の生徒として——いや、もっと根本的な乙女のプライドとして、姉の部屋の、それもベッドの上で、花瓶をトイレの代わりにして排泄するなど、赦せるような行為ではないのだろう。

「それとも、このままお部屋と服を汚してしまう方がいいのかしら？」

「っ、ち、ちが……あつ……」

声を絞り出すように、結衣は彰子の手の手ひらに爪を立てる。きつく食い込むその痛みは、しかしむしろ彰子の興奮を煽るだけだった。かわいらしい、飾り気のない白の下着が覆う、ふっくらとした下腹部。その下に繋がる、脚の付け根の最も敏感な場所。ぶくりと膨らんではきゅっと収縮を繰り返す出口へ、再度花瓶の縁を押し当てる。

「ふあああああ！！」

ちりちりと身を焦がすような尿意は、その刺激で一気に燃え盛る炎へと変わる。

ガラス容器の縁が、下着の上から大事なところに押し当てたまま、上下に動かされていた。恥ずかしい出口の場所を探るように、硬く冷たいガラスの縁に敏感な『おんなのこ』を刺激され、結衣は悲鳴を上げた。

今にも弾けてしまいそうにぱんぱんの乙女の水風船を刺激され、はしたなく腰を揺らし、ひくひくと下着をよじらせてしまう。

排出口を堰き止める最後の抵抗すら、もはや無意味だった。股布部分の中心にぼつりと小さな染みが浮かび、それがじわじわと大きく広がってゆく。

「やつ、ああ、あつだめだめえあつ」

がくがくと肩を震わせ、結衣は腰をよじり身を波打たせて押し寄せる尿意の大波を堪えようとする。それでもなお、彰子は結衣が脚の付け根を押さえこむことを許さなかった。

「うふふふ。……もう駄目みたいね？」

「あ、あつあ……あつ！！」

背中から抱きかかえられ、大きく脚を広げられて。可愛い下着を丸見えにしたあられもない姿。大股開きの脚の付け根には、彰子の手にしたガラスの容器。

「ほら、さっきよりもここがもっと硬くなって……」

はち切れんばかりに中身を詰め込んでぷつりと膨らんだ結衣の下腹部を撫でさすりながら、彰子はさらに笑みを深くする。緊張に強張り、柔軟さを失った下腹部は、もはやこれ以上、少女の体内に水分を蓄えておくことを放棄していた。

「ね？ ……結衣がおしっこするところ、見せて頂戴？」

「ちが、っ、違うんですお姉さま、そのっ……そうじゃ、なくてっ……あうっ！？」

「……ああ。下着を汚してしまうのが嫌なのかしら？ ふふ、だったらいいわ、……ほら」

「あああっ！？」

彰子は結衣の下腹部を撫でていた手を離し、結衣の下着の股布部分に指をひっかけると、真横にすべらせるように引っ張った。

結衣の『おんなのこ』が、一気に露わになる。

誰にも見せたことのない場所を、一気に明かりの下に晒されて、結衣はパニックになった。

「い、嫌っ、お姉さま、は……恥ずかしいですっ……！！」

「うふふ。……素敵よ結衣。とっても可愛らしくて……赤ちゃんみたい。そう言えば、こんな明るいところで見せて貰うのははじめてかしら……？」

彰子は残る指先を伸ばして、緊張に強張る乙女の部分をつつんとつついた。お姉さまに『おんなのこ』を悪戯されて、結衣はさらに声をあげてしまう。

「はああああんっ！？」

「あらあら……結衣は可愛いけど、ここもまだ子供なのね……？」

「あ、あつ、ああああ……っ」

憧れの“お姉さま”にそこを見られて、優衣はもう言葉もない。

これまでも何度か、お姉さまに可愛がっていただいた経験はあったが——こんな風に明るい中で、はっきりと見られてしまったわけではなかった。

「うふふ……こんなにひくひくさせて……いやらしいわ、結衣」

真横にずらされた股布の奥。もはや何も遮るもののなくなった少女の秘裂から、しゅるしゅると雫が滴り始めていた。小指と薬指でずらした下着を保持したまま、彰子はまだ硬いその割れ目押し開くようにして、排泄のための部位をくつろげる。

水流の噴射を遮らないように広げられた『おんなのこ』。そのすぐ真下にはガラス容器が傾けて配置され、万全の準備を整えていた。

脚の付け根に押し当てられたガラス容器の感触につられて、股間の先端からじゅじゅうと噴き出した熱い雫が花瓶の底に溜まってゆく。

「っあ、あ。ああっ、だめ、お姉さま、だめえ！！」

「ほら……もう大丈夫よ結衣。いつ出してもいいわ。……ね？」

「だめっ、だめ、だめえっ！！ お姉さまやめてええっ、出ちゃう、ホントに出ちゃいますっ！！」

「うふふ……ほら……しー、しー……」

「あ、あっあだめ、だめえだめえええ！！」

我慢、我慢、必死に食い止めようとしていた排泄欲求が、少女の意思を無視して膨らんでゆく。トイレの合図でもある“しー”——耳元で囁かれる禁断の言葉に、もはや本能はあらがえない。

膨らんだ排泄孔はぱくりといやらしく口を開き、身体が反応を始めてしまう。憧れのお姉さまの前で失態をさらすことへの羞恥が、少女の心をきゅうと締め付ける。

同時に、まるで幼児のようにおしっこをさせられることへの被虐心がぞくぞくと背中を這い上がる。猛烈な羞恥と、崩壊の衝撃が少女の思考を焼いてゆく。

我慢に我慢を重ねていたものが、ついに扉を突き破って溢れだす。

「あ、あああ、あっあ、あああああああ——っ！？」

ぶしゅっ、ぶじゅううううっ！！

まるで、噴水のように。

放出という言葉では足りはしない。噴出——噴射とでも呼ぶのが相応しいだろう。下腹部に限界まで注ぎ込まれ、長時間に渡って煮詰められていた尿意の元が、堰を切ってほとばしった。

しっかりと結衣の出口に押し当てられたガラスの花瓶の中、猛烈な勢いで薄黄色の液体が噴き上がっては波打ち、ホースで水を撒くような野太い水流が透明な容器の中にぶつかってゆく。

「ああ、。あああだめ、だめ、止まって、止まってえ……」

憧れの彰子お姉さまの目の前で、しかも、お花摘みのための場所——トイレでもなんでもない、寮の一室で、花瓶の中にお手洗いをするなんて。

猛烈な羞恥に顔を覆って悶える結衣だが、決壊した乙女のダムはそんな事情などお構いなしに、ガラス容器の底めがけてのたうつように激しい水流を注ぎ込んでゆく。

じゅぶじゅぶじゅううううう——っ、

じゅぼぼぼぼぼっ、じょごごごごおおおおお——っ！！

容器の底を打っていた水流は、すぐに水面を泡立てかき混ぜるさらにみっともなくもはしたない音に変わる。

乙女の秘所が響かせるにはあまりにも下品な排泄音は、部屋の中に余すところなく響き、ガラスの容器の中をたっぷりと満たしてゆく。

ぴつたりと結衣の股間に押し当てられたガラス容器の中に、みるみるうちに薄黄色の液体が泡立ちながら水位を増していった。水位はあつという間に花瓶の容量の半分以上を過ぎ、八分目を超え、容器のなかをいっぱい満たしてゆく。

「いやあああ……………ああ……………」

じゅうううっ、じよぼぼっ、じゅごお—————……ッ

「うふふ……………結衣、すごい音よ……………」

熱っぽく興奮した彰子の囁きが結衣の耳朶を打った。喉を震わせ、しゃくりあげ始めてしまう結衣だが、興奮と緊張はさらに排泄を加速させていた。

ほんのりと湯気さえ立たせそうな液体をたぶんと揺らし、ずっしりと重くなった花瓶を動かして、彰子はくすくすと微笑んだ。
「あつという間にこんなにいっぱい……………ずっしりね？ ふふ、こんなに沢山、おなかの中に溜まっていたの？ ……我慢できなくなるはずね」

「あああつ、ああ、っ、だめ、だめ、止まってえ……………」

彰子の声も聞こえないまま、必死に出口を絞ろうとする結衣だが、堰を切ってダムから溢れ出した水流は、いくら身悶えしても左右に揺れるばかりだ。みるみるうちに水面は容器の縁まで迫ってくる。

「やだっ、やだあ、お姉さまの前なのにッ、見られてるのに、おしっこ……………止まらな……………」

誰にも秘密にしていなければならない、羞恥の姿。

嚴重に施錠し、音消しと消臭設備の整えられた個室の中でこっそりと行われるべき、乙女の排泄行為が——あろうことか寮の一室の中、ベッドの上で繰り広げられている。

「あらあら……………」

じよぼっ、ぶしゅっ、ちよっ、びちゃびちゃっ…………

ついに花瓶の縁を超えて溢れた恥水が、床へとこぼれ出した。せっかく用意してもらった自分専用のトイレだというのに、それでも処分できないほどの恥ずかしいお湯を、みっともなくも溢れさせて——結衣は声もなく、涙に濡れた顔を左右に振り立てる。

「うふふ……………結衣？ どうしたの？ まだ出るのかしら？」

「あ、あつ、いや、違うの、違うのお姉さまっ！！ こんなの、こんな、いつもはこんなにいっぱい出ないんです。わたし、こんなにおしっこ沢山出したりなんかっ……………！！」

懸命に括約筋を引き絞ろうとする結衣だが、それは噴出し続けるはしたない噴水の勢いに間断をつける程度のことではなかった。じよぼぼっ、じゅごおっ、とガラス容器の中に叩き付けられた水流は、そのまま一気に縁を乗り越え、泡立った暖かい液体を溢れさせてゆく。

じよばばば、びちゃびちゃびちゃっ、ばちゃっじよろろおお…………

ほんのりと白い泡を浮かべた薄黄色の液体は、少しだけ傾いた容器からびちゃびちゃとこぼれ出してゆく。

「こんなに大きな入れ物なのに、まだ納まりきらないなんて——結衣ったら、いったいどれだけ我慢していたのかしら？」

決して少なくないはずの花瓶の容積を軽々といっぱいにして、なお溢れて。

結衣のはしたない『おんなのこ』が噴き出させる琥珀色の水流は、ようやく噴出量を弱らせ始めていた。

ぱちゃぱちゃと軽くなった水音が、滴る雫が、徐々に勢いを失ってゆく。

持ち上げた腰を波打つように上下させ、ひくひくと排泄孔を引きつらせて、結衣が奔流をせき止めた頃には、ガラス花瓶を溢れさせてなお床にも大きなおしっこの水たまりができていた。

「うふふ……結衣、凄かったわね……こんなにいっぱい。手まで汚れてしまったわ」

「っ、やだ、お姉さま……っ」

なみなみと、縁から溢れんばかりに乙女の羞恥を注ぎ込まれたガラスの花瓶を、結衣の顔の高さまで差し上げて。微笑む彰子に結衣は顔を反らし、俯いてしまう。

透明な容器は、わずかに泡立つ黄色い液体をこれでもかとばかりになみなみとと湛えていた。

「床もこんなに汚して……はしたないわ。」

「ごめんなさい……御免なさい、お姉さまあ……っ」

「うふふ……いいのよ、結衣。我慢できなかったのでしょうか？」

くすくすと笑いながら、彰子は花瓶をゆっくりと傾けた。

「あ……いやあ、……っ」

床に向けて、花瓶の中に溜まっていた恥ずかしい液体がばしゃばしゃとまき散らされてゆく。

溢れさせた分と、花瓶に出した分。両方合わせれば一体どれだけの量になるだろう。寮の床一面を汚す薄黄色の水たまりは、ほんのりと結衣の匂いを立ち込めさせていた。

結衣の脚から汚れた下着を引き抜き、

「ねえ、結衣？」

囁くように。耳元に唇を寄せて、彰子が言う。結衣はぞくりと背中を震わせた。

「……まだ、我慢しているのよね？」

「っ…………」

息を飲む結衣の脚の付け根に、再びガラス容器が押し当てられる。結衣の放出した恥ずかしい液体で暖まった容器の縁は、さつき感じさせた冷たさはなく、むしろさらなる解放を促すようにほんのりと温かい。

「我慢しないで、って言ったでしょう？ 全部、出してしまいなさい？」

「あ……あ……」

もう限界だった。懸命に、必死になって塞き止めていた最後の力が、お姉さまの囁きでぷつんと途切れる。

こんなにもはしたない姿、これ以上見せていくはないのに——まだ、たくさんおしっこが出そうなのに。

「おねえさま……ああっ」

ひく、と震えた結衣の『おんなのこ』が、再び激しく薄黄色の水流を吹き上げる。

じゅっ……じゅわあああああっ、じょおおおおっ……

力強く噴出を再開したはしたない噴水は、空になったばかりのガラス容器の底を打った。

「あらあら……まだこんなに出るのね？ 結衣ってば、一体どれだけ我慢していたのかしら」

「……っ！！」

いつまでもおしっこを出し続けてしまう恥ずかしい身体。我慢の利かないだらしない排泄器官。いうことを聞かない『おんなのこ』。

死んでしまいたいほど恥じる心とは裏腹に、波打ちほとばしる水流は止まらない。さっき花瓶を一杯にしたばかりだというのに、まとも結衣の身体は熱い水流を絞り出し、花瓶の中を勢いよく満たしてゆく。

じよぼぼ……じよろろろおおお……

流石に先程までのような猛烈な噴射力こそないが、彰子にゆっくりと下腹を撫でさすられ、結衣はまた『はうっ』と身体をすくませる。じゅううっ、と太い水流を塊のようにガラス容器の中に噴き付けてしまい、結衣はがくがくと背中を震わせる。

我慢からの解放はとめどもなく、終わりなく続き、苦痛からの解放感は大きなうねりになって少女を襲っていた。

中断をはさんで二度目の排泄だというのに、終わる気配もなくガラス容器の中に注がれ続ける恥ずかしい噴水は、まとも花瓶をいっぱいにしてしまっていた。

ゆっくりとガラス容器の縁から床へと溢れだしてゆく黄色い滝を見て、彰子も目を丸くする。

「……あ、あっ……いやああ……っ」

「凄いわ……またこんなに出しちゃうなんて……」

結衣の熱に当てられたか、彰子の声も上擦っていた。

どう少なく見ても、数百cc以上は入るだろう花瓶を、2回もいっぱいにして、なお余る量を溢れさせているのだ。結衣が身体を震わせるたび、じよじよっ、じよぼぼっ、じよごごっ、と絞り出された羞恥の液体は勢いよくガラス容器の水面を打ち、そのままぱちゃぱちゃと床の上に飛び散ってゆく。2回目の排泄も、量だけで見れば1回目とほとんど変わらないだろう。

「違いますっ、ちが……こんなに、いつもはオシッコ出ないんですっ！！ 今日はずっと我慢しててっ……ずっとずっと、おトイレ行きたくて……ッ こんなに、しないんですっ……」

ぐずぐずと泣きながら、それでも結衣のお手洗いは止まらない。

本来なら最低でも3回くらいに分けてトイレで済まされるはずだった排泄が、彰子の目の前、ガラス容器を受け皿にして撒き散らされてゆく。

「素敵よ、結衣」

「……おねえさま……」

ついに床上に噴き上がる琥珀色の水流を見ながら、彰子は花瓶と結衣の脚を押さえる手を離し、うっとり、結衣の唇に自分の唇を重ねていた。

床上に広がる水たまりの中央には、縁ぎりぎりまで黄色いオシッコを注がれたガラス容器が残され、そこに結衣の噴射する水流が降り注ぐ。

乙女の身体が溢れさせる羞恥の泉の中、ほんのりと泡を残しながら置かれた花瓶は、太陽の光にきらきらと輝いていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 世界を救う勇者一行

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 我慢

CATEGORY: 我慢

DATE: 10/29/2010 20:26:12

BODY:

「……ねえ、勇者様まだ戻ってこないの？」

「うん……まだみたい」

ここはアマルカンドの西、黄金のカギの洞窟の地下3階。

魔王を倒し世界を救うべく旅を続ける勇者一行——その一員である戦士、僧侶、魔法使いの3人は、顔を寄せ合って勇者の様子をじっと窺っていた。

パーティの先頭を歩いていた勇者が、洞窟の攻略中にいきなり動かなくなってしまうのはや1時間。

勇者の頭上には、神の天啓（コマンド）を受け取るためのメニューウィンドウが開きっぱなしになり、いまも『しらべる』の真横で白いカーソルが点滅を繰り返している。

「……ね、ねえ、戦士ちゃん……あの、ボク…もう……っ」

3人の中で一番背の低い、年下の魔法使いがそわそわと杖を握りしめ、釣り目気味の目元を不安げに揺らして唇を震わせる。いつもは元気に口元から覗くチャームポイントの八重歯も、いまは引き結ばれた唇に隠れていた。

「そんな顔しないでよっ、あ、あたしだってさあ……」

魔法使いにすがりつくような視線を送られ、戦士も落ち付きなく、鋏を打った革靴の爪先を地面にこすりつけてしまう。

スタイルの良い身体を包む、露出の多い鎧の下、もぞもぞとスパッツの太腿を擦り合わせて、戦士もまた小刻みに足踏みを繰り返していた。

「……………」

「……………」

魔法使いと視線を合わせ、戦士はしばしの逡巡ののち、あーっ、と声を荒げて頭を掻き毟った。

「なあ、あたしたち、やっぱちょっと——」

「だめですよ！ もし勇者様が戻ってきたらどうするんですか！？」

機嫌を伺うような申し出をバツサリと切り捨てて、僧侶は眉を逆立て、二人の前に立ちふさがった。

そんな彼女も、いまや法衣の前を大胆にぎゅっと握り締めていた。穏やかな笑顔で人々に神の慈愛を説く唇も、小さく噛みしめられている。しかし、彼女は神への祈りを小さくつぶやいて気を取り直し、

「ここに4人揃ってなかったらどうなるか……判ってるでしょう…？！」

「で、でもさ……」

「そうだよ、お姉ちゃん……ボクも、もう、げんかい……っ」

「やめてください……そんな目で見られても困りますっ。わ、私だって……」

そうやって二人からまっすぐに、強い欲求を込められて言われてしまえば、僧侶だってたじろがざるを得なかった。

「……………」

「……………」

「……………」

3人は再び、視線を揃えて勇者の背中を見つめた。

勇者は相変わらず、洞窟の通路の真ん中に直立不動で突っ立ったまま、まるで動く気配がない。いつも通りの意思を感じさせない表情も、『ガンガンいこうぜ』『めいれいさせろ』と作戦を下す時以外には『はい』『いいえ』しか喋らない寡黙な口元も、中途半端に開いたまま、まるで時間が停止したみたいに止まっている。

途絶えることなく勇者へと下され続ける神様の天啓（コマンド）は一体どうなっているのだろうか。どこかへ行ってしまった勇者の帰りを待ち、これまで3人はじっと辛抱強く待機を続けてきた。

しかし、そんな彼女たちの我慢もいよいよ限界を迎えようとしていたのだ。

何もすることのない時間はただでさえ長く感じられる上に、彼女達は今、それぞれに切迫した理由を抱えている。フィールドマップでなら何十日にも匹敵する1時間は、辛抱強い少女達の我慢を失わせるのには十分すぎるほどだった。

「もうっ……勇者様ってば、人の気も知らないで……っ」

「そうよ、レアアイテム出るまで粘るのもいいけど、もう……本当にヤバいんだから…、早く戻ってきなさいよ……」

珍しく語気を荒げる僧侶に、戦士も思わず文句を重ねる。

もし予定通り探索を続けていれば、今頃はそろそろHPもMPも心許なくなっていて、洞窟を脱出、町に向かっていたはずなのだ。それなら、どれほど良かったことか。

「……っ……」

すっかり予定を狂わされてしまった3人は、ひんやりとした空気の満ちる洞窟の壁際に寄り添うようにして集まり、仲良く揃って前かがみ。

太腿をこすり合わせ、足踏みを繰り返し、しきりに腰を揺すっている。

「っ……」

「んう……あ……」

「っは……くう……」

もぞもぞと、洞窟の岩壁に手を当て、揃って下腹部をかばうような前傾姿勢は、はっきりと彼女達の切実な欲求を知らせていた。

「「「…おトイレ……っ！！」」」

暗い洞窟の、休む場もない地下三階で。

3人の身体の内には膨らむ尿意はますます高まるばかりだった。

「い、いつまでかかるのかな、勇者様……？ ……ボク、もうっ、が、我慢っ、できないよお……！！ は、はやく、おトイレ……えっ！！」

魔法使いが、舌足らずな声で熱っぽい喘ぎをこぼす。一番年下である彼女はまだ、ぎりぎり、人前でそれを口にするのをためらわない年代だった。もっとも、その顔は羞恥に赤く染まっている。

いくら言うことができて、はっきりとトイレの欲求を露わにすることが、乙女として苦痛でないわけがない。

戦士も僧侶も、はっきり口に出してはいないが思うことはまったく同じだった。3人とも、世界を救う勇者の一行とはいえ、その前に年頃の女の子なのだ。いくらオシッコがしたくても、こんな地下の底、天然洞窟のダンジョンの中ではどうにもならない。

「ね、ねえ、やっぱりちょっと行って来ちゃわない？ ……ね？ ほら、勇者の奴がもどって来るまで、たぶんまだかかるわよ。それまでにトイレ済ませちゃって、また戻ってくればわからないからさあ——」

「だ、だから！！ それで間に合わなかったらどうするんですか？ いきなり勇者様だけになってるのに気付かれたら、いったいどうなるか判りませんよ！？

それに、今は4人いるから魔物も襲ってきませんが、その、……お手洗いの時に、ひとりだけになったら……」

神様からの展開を受け取るためのメニューウィンドウが開いている間は、魔物が不意を打って勇者一行を襲ってくることはないという協定がある。

しかし、画面の外でコントローラーを持つ神様が動きを見せず、勇者がパーティに不在状態となっているいま、彼女達がモニタから見える範囲を外れてしまったとき、果たして本当にそれが守られるのか、戦士たちには知る由もない。

いつもは戦闘画面に収まる適当な数に分かれて、順番に襲ってくることになっている魔物たちが、もし波打って襲いかかってきたら——その光景を想像し、戦士は思わず息をのむ。

今にも漏らしてしまいそうなオシッコを我慢しながらのよちよち歩きでは、満足に武器も振るえないし、震える唇では呪文だって唱えられない。そんな状態で魔物の群れを切り開いて進んでゆくんなんて、絶対に不可能だった。

「でも、勇者様が戻ってきたらさ、きっと……まだまだずっとこの洞窟の中、調べようって……言うとおもうよ？」

「それは……っ」

魔法使いが泣きそうになりながらそう言えば、僧侶も口籠ってしまうしかなかった。彼女も、自分たちの我慢が、そう続かないことは悟っているのだ。

3人とも女の子のステータスウィンドウはまっ黄色に異常を示し、乙女のプライドの残りHPはこうしている間にもどんどんと減り続けている。前押さえや膝を擦り合わせるだけでは時間稼ぎにもならないだろう。

いまや、本物のステータスにまで状態異常となって表示され、影響を及ぼしかねない有様なのだ。

「……も、もはやだよお……ちゃ、ちゃんとしたおトイレ……行きたいよお……っ……んあん……っ」

魔法使いはとうとう杖を跨ぐようにして、脚の付け根に押し付けて、ぐりぐりと腰を動かし始めてしまう。

まるで登り棒に捕まるように、杖をスカートの上からぐいぐいとあそこに押し当てるはしたない格好に尿意を呼び覚まされ、思わず戦士と僧侶も腰の揺れを大きくしてしまう。

まだあどけなさを残す魔法使いだからこそ許さるしぐさであったが、戦士も僧侶も、同じようにぎゅうぎゅうと脚の付け根を押さえつきたいのは変わらなかった。

「んあ……っ」

この世を支配せんとたくらむ魔王の四天王をうち2人までを倒し、いまや世界有数の強さまでレベルアップした勇者一行だが、ちからやすばやさがいくら高くなっても、乙女のオシッコ我慢のパラメータはLv1のままなのだ。

……いや、冒険に出てからいくぶん、レベルが上がったことは否定できない。しかし、いくら我慢強くなったところで何日も何日も、宿屋にも泊まらずに洞窟に潜り、フィールドを歩き、トイレタイムすらなしに冒険を続けるなんてことは、非常識でしかない。

「で、でも……じゃあ、まさか、ここで……？」

「やめてよ、そんな、無理に決まってるじゃないっ……」

たとえ、ともに旅をする仲間であっても。みんなの见ている前で、モニタに映っている最中に、トイレを済ませるなんてできるわけがない。

そもそもモニタの外では、コントローラーを通じて勇者に繋がっている神様以外にも、誰が彼女達を見張っていたっておかしくないのだ。

しゃがみ込んだ足元から、洞窟の床一面に大きく広がるほかほか湯気の水たまり——そんなものを見られたら。恐ろしい想像に、3人は身を震わせた。

魔法使いがたまらずに悲鳴を上げる。

「そんなの、恥ずかしくて死んじゃうよぉっ！！」

そして残酷なことに、たとえそれを恥じて命を投げ出したとしても、勇者一行であるかぎり、教会ですぐに蘇生させられてしまうのだった。

「そ、そもそもさ。勇者ってば、自分だけ男のくせに女の子3人のパーティなんか組ませてるのがおかしいのよね……」

「下心、丸見えですよね……申し訳ないですけど」

「……うん。勇者様、いつもボクのこと、えっちな目で見てるんだよ……この前なんか、一緒にお風呂入ろうって……ボク、そんなに子供じゃないのに……」

涙ぐむ魔法使いの気持は手に取るようによく分かる。戦士も僧侶も、悲痛な面持ちで溜息をついた。着替えやお風呂を覗かれたことは一度や二度ではない。

年齢問わず、女の子とみれば欲望丸出しのスケベ勇者には、3人ともほとほと手を焼いていたのだった。

「それでいて、妙なところでヘタレで紳士ぶってるんだから……っ」

本当にタチの悪い犯罪者なら、勇者失格だと叩きのめしてしまう事も、王様に言いつけて勇者をクビにしてもらうことも出来るのだが、半端に勇者としての使命や正義感も持ち合わせているのが、なおさら厄介なのだった。

そして今、世界の危機よりも切実な事態が、彼女達の下腹部に押し寄せてくる

「あっ……ああんっ……」

いつも物腰柔らかかでおしとやかな僧侶が、頬を染め、甘く声を掠れさせて法衣の前を握りしめる。

「んう……っ」

同性・異性を問わず頼りにされる、力強く勇敢な戦士も、いまはすっかり女の子の顔で何度も足を交差させる。

「だ、だめえ……」

幼くして天賦の才を持ち、いくつもの呪文を巧みに操る魔法使いのくちびるは、青ざめて小さく震えるばかり。

必死に身をよじり、腰をクネらせながら耐え続ける3人は、棒立ちになったままの勇者の背中をじっと、穴があくほどに睨んでいた。

「それに、そもそも今日だってさ、勇者のやつが悪いんじゃないっ。あいついつも宿代けちって回復の泉にしか行かないんだから……だから、こんな、我慢する羽目になっちゃうのよ…！！」

「う……うう……っ」

彼女達はもうここ何日も、まともな宿屋に近づいてすらいなかった。

セーブのためにお城に行くか、武器やと道具屋、預り所に立ち寄るくらいだ。宿屋の前はゴールドの節約のためと通り過ぎるばかり。

だから、戦士も僧侶も魔法使いも、ちゃんとした宿屋のお手洗いを使うことすら、もう一ヶ月近くも許されていなかった。

回復の泉では確かにHP、MPは全快になるものの、まさか多くの旅人が利用するそこで、女の子の恥ずかしい水が溜まった下腹部を空っぽにすることができるはずもない。

「っ、ねえ、もし、もし、だよ？ もしこの前みたいに、洞窟の中で、セーブされちゃったら…ボクたち、また、ここで……っ」

「や、やめてよ、そんなこと言うの……！！」

お城に戻ってセーブされれば、ゲームが再開されるまでの間にこっそり酒場に帰って一息つくことだってできる。お風呂に入ったり、遊んだり、トイレに行くのだって簡単だ。

しかし、もし万が一、洞窟の中でセーブされてしまっては、いよいよ彼女達は覚悟を決めるしかない。

洞窟の一角、奥まった行き止まりにしゃがみ込んで。

我慢に我慢を重ねた結果、はちきれんばかりにおなかをたぶたと満たした女の子の水流が、噴水のように恥ずかしい飛沫をあげて足元に飛び散る恥辱に耐えなければならないのだ。

もし、力及ばずそんな結果になってしまったら……

魔物すら寄せ付けぬであろう乙女の“聖水”が、たっぷり我慢に我慢し続けた３人分、洞窟の地面いっぱいにはびちびちと捲き散らされてゆく光景を思い描き、３人はそろって顔を真っ赤にしてしまう。

「もう、嫌です、あんなの……っ」

一番気丈なはずの僧侶が、とうとう悲鳴を上げて顔を覆う。

彼女達がそうした緊急避難を強いられたことは、これまでも何度かあった。神に仕える彼女は、自分の身体から迸らせた恥ずかしい水流で、往來を汚してしまうことに何よりも傷ついていたのだ。

「ボクだって、やだよ……っ」

「……っ、ホントに、はやくしてよね……ばか勇者っ……」

しかし、いくら急いたところで、彼女達に出来るのは、きつく腰をよじり、足の付け根を握り締めて、ただ勇者の帰りを待つことだけだった。

何を言おうと、こうしてゲームが動いている最中は、イベントでもない以上勝手にどこかに行くことは許されない。

「んあ……んっ……」

「うっ……、はああ……っ」

「あ、あっ、あ……あっ……」

だから３人はただ、いつ勇者が戻ってくるか分からないまま、必死に心を奮い立たせて、時間が過ぎてゆくのを待たなくてはいけなかった。

いつまでも、いつまでも。

▼

ゲームを続けますか？

はい

ニア いいえ

(初出 : ある趣味@ J B B S 永久我慢の円舞曲 2 2010/07/13 190-202 改訂 2010/10/27)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: シュレーディンガーのトイレ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 10/29/2010 20:31:04

BODY:

実験開始から4時間が過ぎ、いよいよ全員の我慢は限界に近づいていた。

かなり広い——バスケットボールのコートほどもある部屋。板張りの上にパイプ椅子と、簡素なテーブルだけが並んだそこには、10人ほどの少女達の姿がある。

軽食や飲み物なども備えられており、テーブルの上には雑誌など、時間を潰すための品物も散見される。

しかし、少女達はほとんどそれらに手を付けることなく、大きな動きも無いまま、部屋のあちこちにじっとしていた。

「んあっ……………」

「はあ……はっ、……っ」

「ふううあう……っ！！」

少女達のほとんどは、苦しげに息を切らせ、身をよじっては小さく声を上げている。

椅子に腰かけ、壁に手をついて、うずくまって、しゃがみ込んで、小さく飛び跳ねながら——懸命に脚の付け根を押さえ、腰を揺すり続ける。

さながら『オシッコ我慢』の見本市のような有様だった。

「っ……！！」

何人かの少女は、憤りすら感じさせる鋭い視線で、じっと部屋の壁を睨んでいる。

そこには大きな電飾板があり、点滅を繰り返しながら数字を表示していた。数字が示すのは、現在の時刻と、実験の残り時間。

一秒に1回、点滅しながら刻々と減じてゆく残り時間は、しかしまだ8時間近くを示している。

それはもはや一刻の猶予もない少女達にとっては永遠に等しいものだった。

「あ、……っ、あつ……」

俯いた少女の一人が、スカートの上から腿の間に挟んだ手のひらを前後にねじる。切羽詰った喘ぎ声と共に、パイプ椅子が腰の揺れに伴ってギシギシと音をたてた。それにつられたように、少女たちの何人かが激しく身悶えを始める。

少女たちを襲う尿意の波が、波打ちうねる姿が目に見えるかのようだった。

「くう……うう……っ」

少女達はそれぞれの我慢のポーズで、顔を真っ赤にして、きつく唇を噛む。

下腹部の中に膨らみきった尿意の圧迫に、小さな排泄孔がひくんひくんと小刻みに痙攣する。いまにも緩み、開きそうになる羞恥の出口を押さえこみ、少しでも楽な姿勢、楽な呼吸を探して、少女たちは思い思いの姿勢で我慢を続けている。

「お……」

かすれたような声は、誰の唇を震わせたものだったか。

「おトイレ……っ、！！ ……おしっこでちゃう……っ！！」

それが、この部屋にいる少女達全員の、なにものにも代えがたい切実なる訴えだった。少女達は必死に身体をクネらせ、我慢に我慢を重ねながらじっとじっと、電飾板を睨みつける。

その視線の先には、もうひとつ、別のものがあった。

ちょうど残り時間を刻む電飾板の真下。ごくありふれた白いプレートの付いた、ドアが一つ。

……そこには、赤い女性を模したピクトグラムで、『女子トイレ』を示すマークがあった。

「っ……」

「…あん……だ、ダメえ……」

もはや限界、一刻の猶予も無いほどの尿意に、執拗に下半身をなぶられながら。目の前にこれ以上ないほどはっきりと、『オシッコをするための場所』を突き付けられて、なお少女達は誰も動こうとはしない。

熱く疼く下腹部を、懸命に握り締め、太腿をひっきりなしに擦り合わせ。

ひり付くほどに、その奥にある大切な場所に焦がれながらも、少女達の誰もそのドアを開けようとはしなかった。

——少女達にこの不可解な行動を取らせているのは、今から4時間と少し前、実験の開始時に彼女達に伝えられたある条件によるものである。

この実験の対象となった少女達は、不特定多数の母集団から無作為に抽出された24名。

部屋に集められた彼女達は、12時間を閉鎖されたこの密室の中ですごさなければならないことがまず告げられた。

次に、少女達が先ほど口にした飲料には、強い利尿作用をもつ成分が含まれていること。

そして、少女達は厳正なくじ引きで12名ずつの二つのグループに分けられ、それぞれ別々の部屋に閉じ込められていること。

ふたつの部屋は行き来も不可能で、片方の部屋からもう片方の片方の部屋の状況を知ることはいかなる対策が施されている。連絡を取り合うことも、そもそも説明されたとおり、本当にもう一つの部屋があるのかも、少女達は知ることができない。

このふたつの部屋は設備、構造、状態、あらゆるものが同一だが、たったひとつだけ違う部分がある。

それが、この小さなドアの奥。そこにあるトイレの有無だった。

片方の部屋のドアの奥にはトイレがあり、もう片方の部屋は、ドアの向こうはただの小部屋である。もちろん、トイレでないほうの部屋はオシッコの場所——トイレとして使うことなどできず、一回開けたら最後、ドアを閉じて視線を遮ることすら許されない。

その違いは、外からうかがい知ることはできず、ドアを開けてみるまで分からないのだ。

仮にドアを開けてみたとして、そこがトイレならば、それは全く問題ない。次に誰が使うかの順番争いなどでもめることはあるだろうが、全員が心ゆくまでオシッコを済ませ（間に合えば、だが）、最高の解放感と共に、残る8時間を快適な時間として過ごすことができるだろう。

しかし、そこがもし、トイレではなかったのなら。

残る8時間という、途方もなく長く苦行の時間を、少女達は救いのない完全な密室の中ですごさなければならない。

実験時間の三分の一、わずか4時間を過ごしただけですでに少女達の膀胱はぱんぱんに張り詰め、膨らんで、もはやほとんど猶予がない。この状態でさらに8時間の我慢など、貫き通せるわけがなかった。

そして、——最後の条件がもうひとつ。

どちらかの部屋のドアが開かれた時点で、両方の部屋にそのことが知らされ、もう一つ部屋のドアは使用不能となるということ。この場合、もともとのトイレの有無に関わらず、開けられなかった方のドアは開閉不能となり、中を確認することも、使用することも不可能となる。

これらの説明が終わると共に、少女達の我慢実験はスタートとなった。

利尿剤の効き目は十分で、実験開始から30分もしないうちに、トイレを済ませていなかった数名が落ち着きをなくしはじめ、二時間も過ぎた頃には少女達の9割が尿意を覚えだしていた。

そして4時間が過ぎた現在、少女達はもはや形振り構わず、人目をばからずに我慢のしぐさをとらねばならないほどに追いつめられている。

同性ばかりの密室環境とはいえ、顔見知りでもない集団の中で、子供のようにトイレを我慢する様子を見られるのは思春期の少女達にとってこの上もない恥辱だった。

そして——さらに。こうして我慢できているうちは問題ないのだが、もし少女達が我慢しきれずに、オモラシ、あるいはトイレではない場所、部屋のどこかでしゃがみ込んで自主的な放尿に至った場合、その少女達の氏名、プロフィールと共にその様子が、プライ

バシーなど無視した超法規的措置で全世界に動画付きで公開されることになっているというのだ。

例えば服を汚さなくとも、トイレではない場所で、本来オシッコを許可されていない場所での排泄は、オモラシと何も変わらない。汚してはいけない場所を汚し、してはいけない場所でオシッコをしてしまったことにはなんの変わりも無いということだ。

それが本当かは確かめるすべはない。ただの出鱈目かもしれない。

しかし、実験の主催者を名乗る人物から、スピーカーを通じて淡々と抑揚なく告げられる説明は、無視するには強すぎる印象を少女達に与えていた。

「はあ、はあつ、はーつ……」

「、ん、んっ……んっ！！……ふう……」

下腹部をさすり、前屈み。もじもじとお尻を振り、かかとを脚の付け根に押し付けるようにしてぐりぐりとねじり。断続的に寄せては返す尿意の波をやりすごす。

「……っ……よかった……おさまったよ……」

ちよっただけ楽になったと、表情を緩めたのもつかの間。瞬く間に次の波がやってくる。

あ、あっと声を上げながら、また少女たちが脚を擦り合わせ、膝を何度も組み替えて、身体の前から手を股間に押し当てる。

着々と効果を発揮し続ける利尿剤。そして長い時間。健康な少女達の循環器と利尿作用の相乗効果でつくられた恥ずかしい液体は、すでにぱんぱんに膨らんだ膀胱の中に、音を立てんばかりに注ぎ込まれてゆく。1分におよそ10回の尿管蠕動と共に、少女達の下腹部の液体は増量されてゆくのさ。水門を閉じるための括約筋は酷使され、いまにも焼き切れんばかり。

水圧に負けてぶくりと膨らみそうになる排泄孔を、気力だけで抑え込んで。ヒビの入ってゆくダムを、指でふさぎ続ける。

だが。

ここまで追い込まれ、それでもなお少女達は、そのドアに近づこうとしなかった。

さっきから何度となく、気分を紛らわせるようにわずかな会話を挟み、俯いて苦悶の呻きを上げながらも、少女達は頑なにドアを開けようとはしない。

石のように硬く強張った下腹部の内側、尿意は限界まで膨らみ、身体の中に溜まった水は、たぶたぶと揺れるごくたびに猛烈な大波になって出口のすぐ上まで押し寄せてくる。それを懸命に押しとどめて、少女達は耐え続けている。

それはひとえに、ある理屈のためだ。

理屈とも言えない、ただの屁理屈。無茶苦茶な暴論。それが少女たちを支えている。

そう、これはいわば不確定の、シュレディンガーのトイレ。

部屋の真ん中にあるあのドアを開けてしまえば、そこにトイレがあるかどうかを知ることができる。そのこと自体はあまりにも簡単で、ほんの数メートル近づいて、ノブを握ってみればいい。確かに我慢に切羽詰ってはいるけれど、もう一歩も動けないほどギリギリの少女は、辛うじてまだ出していない。

問題はその先なのだ。

……もしそこにトイレがあるのなら、それでいい。

けれど、けれど、もし。

そこがトイレでもなんでもなく、オシッコすら許されないただの部屋だったとしたら。

少女達は縋っている希望すらもすべて失って、トイレのない部屋の中であと8時間にも及ぶ我慢を過ごさなければならないのだ。そんなことは絶対に、絶対に不可能だと、部屋の中の誰もがはっきりと悟っている。

ほんのわずかな観察で、あのドアの向こうにあるものが希望か絶望かが、決まってしまうのだ。

ドアを開けなければ、50%。

ドアを開ければ、0%か100%。

だと、するなら。

すべてから救われる可能性と共に、2分の1で、希望が絶無のトイレのない世界が待つかもしれない未来よりも。

確かめることも、実際に見ることも、使うことすらも許されなかったとしても。

そこに50%の確率で、トイレがあるかもしれない——そんな不確定な現状の維持こそが、今の少女達の心の支えになりうるのだった。

ドアを開ければその不確定のトイレも、すべて消し飛び、0か1かの、明確な結果だけが残されてしまう。ならばドアを開けて確かめるのは、本当の本当に限界になって、いざとなつてからでも遅くはない。

どうせ確かめてしまえば、それですべてが決まるのだ。……むしろ、それまでは少しでも長くその希望を繋ぐことこそが、少女達の心の支えになる。少しでも長く、我慢を続けられる。そういう理屈なのだ。

「あ……っ、はあ……っ」

「トイレ、……行きたいよあ……っ」

存在の有無も不確定な、未確定のトイレ。

けれど、有るも無いも決まっていないそのトイレを、わずかな心の支えにして。少女達は懸命に時間が過ぎ去るのを待つ。

半数ずつ二つの部屋に隔てられた、24人の彼女達にとって最もいい結果と言うのは、お互いにこのドアを開けることなく、最後の最後まで、我慢を貫き通した時なのだ。理不尽な理屈であっても、それに縋ることを少女達は選んでいた。

……片方の部屋で、少女達の誰かがドアを開けたとしよう。

そこがトイレだった場合、その部屋の少女達はトイレに行くことができる。しかし、もう一つの部屋のにいる、残る半数の少女達はすべての希望を奪われ、残り時間を耐え抜くことは不可能に近い。つまり、残る半数、12人の少女達はオモラシを強いられる結果となる。

そして、先にドアをあけ中を確かめた少女達の部屋に、トイレがなければ。

それならば、途方もなく低い確率だが、我慢をしとすことができるかもしれないのだ。

そのことが、皆分かっているわけではない。

だが——理屈で割り切れても、熱く打ち震える下半身は、そんなものを吹き飛ばさんばかりの猛烈な熱量を伴って、無力な少女達に原始的な生命の摂理を思い知らせようとしている。熱く渦巻くはしたない奔流の誘惑が、少女達を執拗に追いつめてゆく。

そして――

「もうやダあ……っ！！ 最後までなんて無理、絶対無理だよお……！！」

「っ、ダメ！！ 開けちゃダメっ！！」

「離して！！ こんなことしてたって、みんな間に合わなくなっちゃうに決まってるよ！！ そ、それでもいいのッ！？」

癩癢を起した少女の一人が、辛抱できずにドアに突撃しようとするのを、とっさに周囲の少女が押しとどめる。しかし、限界を迎えた少女はなおも無理やり、ドアへと向かおうとしていた。

大事なところを押さえておくのに一生懸命な手を離していなければならず、周りの少女達もたちまち足元の落ち着きを失ってゆく。

揉み合っているうちにお腹を押されたり、せっかく波と波の合間の『安定期』となって落ち着いていた尿意が暴れ始めるのに耐えられず、少女たちは次々股間押さえ込んでしゃがみ込んでしまう。

「だめ、だめだよ……そんなこと、しても……っ」

「でも！！ もし私達がこんなことしてるうちに、向こうの子たちが先にドア開けちゃったら……！！」

悲痛な叫びに、部屋の中が波を打ったように静まりかえてゆく。

それはここにいる全員が、これ以上ないくらいにはっきりと理解していながらも、敢えてずっと目をそらし続けていることでもあった。

「みんなも、わかってるよよね！？ このままだと……っ！！ 向こうの子たちがドアを開けちゃったら、私達、絶対にここ、使えないんだよ！？ ここに、……本当にトイレがあっても！！」

少女達が心の支えにしている50%の、不確定の幻想トイレ。

だが、それは同時にもう一つのことも意味している。この閉ざされたドアの向こうに、トイレがあるかどうかを確定させることができるのは、ふたつの部屋のうち、先にドアを開けた少女達だけなのだ。

もしこの部屋に、本当にトイレがあったとしても。

こうして馬鹿正直に我慢を続けている間に、もう一つの部屋でドアが開けられてしまえば。その瞬間にこの部屋のトイレは使用不能となってしまう。トイレの有無は確定し、この部屋の少女達は自動的にすべての希望を失ってしまうだろう。

「みんな、もう、限界でしょ！？ ホントにいいの！？ 我慢できるの！？」

「やめ、て……よっ、そんな事言たって……！！」

今こうしている間にも、向こうの部屋ではドアが開けられようとしているかもしれない。

50%の不確定トイレを、100%の本物のオシッコできる場所に確定できる権利は、迷いを捨てて先にドアを開けることを決心した少女達にだけ与えられる。

「ねえ、っ、！！ ……まだ、8時間もあるんだよ……！？」

絞り出される声はかすれ、悲鳴ようになっていた。

耐えがたい誘惑と、疑念と、困惑と。お互いの状況を知ることができない二つの密室に隔てられて、少女たちを包む熱の渦は過熱してゆく。

残る時間は、点滅するデジタル数字と共に、

7 時間 5 0 分を切っていた……。

(初出 : ある趣味@ J B B S 永久我慢の円舞曲 206-222 2010/07/18)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 募金のお話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 12/26/2010 00:29:39

BODY:

「募金にご協力をお願いしまーす！」

雑踏の途切れぬ駅前で声をそろえるのは、市内でも有名な私立の進学校の生徒たちだ。濃灰の制服の襟元に輝く銀の刺繍は、内外に示される彼女達の誇りの証。

戦前、華族のご令嬢を育成することを目的に設立されたその学院では、創設者の方針を今日も受け継ぎ、ただ学業優秀なだけでなく、品行方正な子女育成することを旨としていた。

そのため生徒達には在学期間を通じて年に一定時間のボランティアや自主的な奉仕活動をするのが慣例となっていた。あくまで生徒の自主的な活動、とされてはいるものの、免除を受けるには正当な理由と許可が必要なため、実質的には義務と呼んで差し支えない。

そのため、休日、祭日ともなれば市内のあちこちで、活動に勤しむ少女たちの姿を見ることができた。

「ご、ごきょうりよく、おねがいます……っ」

村瀬千尋も、そんな生徒の一人。駅前からは少し離れた交差点で、募金箱を抱えている。飾り気のない、肩の上で額の下でまっすぐ揃えられた髪。寸分の乱れもなく身につけた制服の上からも分かる華奢な体格。

あまり人前で中止を浴びる事に慣れてはいないのだろう。本人は精一杯声を出しているのだろうが、小さな声は歳末の雑踏にまぎれてほとんど聞こえない。

そのためか、ほとんどの通行人は忙しい足取りで千尋の前を素通りしてゆく。

——少女が先程から、小さく足踏みを繰り返し、もじもじと落ち着きなく身体を揺すっているのにも気づかずに。

薄曇りの空の下、制服の上に指定のコートだけではとても12月も末の寒さは凌ぎきれない。吐く息も白い中、もう1時間以上もこうして駅前に立ったままだ。吹き付ける風と日陰の冷え切ったアスファルトの上、千尋の脚はすっかり冷え切っていた。

(あ、あつ、あつ)

声にならない声を喉の奥に押し込みながら、千尋はタイツの脚をすり合わせてしまう。

さっきから頻りに気にしている駅前の時計は、いまだ9時を少し過ぎたところ。まだ指定された時間の半分も過ぎていない。

しかし、下腹部を満たす黄色い熱水は、少女の膀胱をいまや限界までぱんぱんに膨らませていた。

(と……トイレ……っ)

いま、何よりも身体が希求しているものを、必死に訴えながら。千尋は何度もタイツの腿を擦り合わせる。

駅の北口はちょうど背の高い駅ビルに遮られ、午後になるまで日が照らない。日陰の中では一層風は冷たく、昨夜は零度以下まで落ち込んだ冷気の名残が足元からじわじわと這い上り、タイツ一枚を素通りしてスカートの中にまで侵入してくる。

スカートの下、少女らしい下着の股布部が、ぎゅっと寄せられた内腿に挟まれ、まだ幼いつくりの股間に食い込む。もぞもぞと揺すられる腰は明らかに落ち着きなく動き、革靴の爪先がタイルの上を左右交互に叩く。

「……ん、あつ……」

ぎゅ、とくっついた膝だけでは足りなくなり、千尋はとうとう募金箱の下に右手を伸ばし、そこからスカートの布地を掴んでしまう。

ぐいっと下に向けて引っ張ったスカートの下、砂でも詰まっているみたいに硬く張り詰めた下腹の奥で、ぱんぱんに膨らんだ膀胱がざわりと震え、背中を這い上る甘い電流のような尿意のむず痒さが、きゅうんと千尋を襲う。

「あう……っ」

オシッコの出口を内側からひっかかれ、小さな喘ぎ声が飛び出してしまう。はあ、はあ、と息が荒くなり、十二月の街並みに白い吐息の跡が溶けてゆく。

(は、はやく……っ、はやく、トイレ……っ)

ただでさえ厳しい尿意は、寒さによってますます加速されてゆく。もはや一刻の猶予もなく、身体は溜まりに溜まった黄色い熱水の放水を促していた。

「ぼ、ぼきんに、ごきょうりよく、っ……」

ぞわあつ、と背中をはい上がる尿意に、思わず言葉が途切れる。

びたり、と動きを静止して、荒れ狂う波をなんとかやり過ごしてから、千尋はぎゅっと唇を噛み締める。

「ご、ごきょうりよく、おねがい、します……っ」

恵まれない子供たちに、愛の手を。

いま、誰にも負けないくらい、周りの人の手助けを必要としている千尋の、ほとんど棒読みの台詞が、とぎれとぎれに雑踏の中に響く。

（あ、あ、あつ、あ……っ、）

これ以上の我慢は不可能で、このままここに居続けたら、遠からず決定的な事態が訪れてしまう。それが解って居ながら、しかし千尋はここを離れることができずにいた。

そもそも、歳末の募金活動は千尋一人がしているわけではない。駅を中心にした数か所に、生徒がグループになって行うことになっていた。千尋も今朝、他の少女たち3人と共にこの場所を割り当てられたのだ。

けれど、およそ千人近い学内の生徒全員が全員、学院の理念を理解し、慈愛に満ちた聖女のような毎日を送っているわけがない。むしろ生徒の多くはこうした活動に懐疑的で、普段から積極的な参加などしていないかった。

そうした事態を嘆いた生徒会によって企画されたこの募金活動も、参加を強制された生徒たちには不満が高まる一方だったのだ。

『ってことで、私達ちよっと用事があるから。じゃね？』

『ごめんねえ〜。頑張ってるね！』

『先生には上手く言っておいてね。あ、これあげる。温まるよー』

千尋を除く3人は、監督の教師が持ち場を離れたのをいいことに、活動開始から早々に募金箱を千尋に押し付け、どこかへ行ってしまったのである。

（……………っ）

引っ込み思案な千尋には、去ってゆく彼女たちを呼びとめることもできなかった。

持ち場を離れて探そうにも、いつ教師が戻ってくるとも解らない状況で、自分までいなくなっていればさらに問題が大きくなるし、下手をするとサボりの仲間にされかねない。

どうしようかと困惑したまま、千尋はその場に取り残され——現在に至るのだった。

「は……ふ……。……く……う」

すっかり冷たくなったコーヒーの缶が、足元でカランと音を立てる。

寒さに耐えかねて、つい口にしてしまったホットコーヒーは、カフェインに免疫のない少女の身体の利尿作用をかきたて、凄まじいまでの勢いで膀胱に恥ずかしい液体を注ぎ込み続けている。

間断的にじんじんとお腹の奥で鈍い痛みが走り、はち切れんばかりにぱんぱんに膨らんだおしっここの袋が圧迫されて、勝手に出口が開いてしまいそうになる。

（あ、あつ、あ……）

ぐうっと押し寄せてくるような強い波が、千尋を襲う。

足踏みが強まり、腰がぐねぐねと左右に揺られる。募金箱の下で、片手がきつくスカートの上から脚の付け根を押さえこむ。

我慢と尿意を左右に乗せた天秤が、片方に傾いてゆく。

カフェインの暴力的なまでの利尿作用で急速に抽出された蓄積されたおしっこが、寒さに収縮するおなかの中に注ぎ込まれ、お

しっこの袋は水風船みたいにはんぱんに膨らんでゆく。

「あ、あっああっ……っ」

とうとう千尋は声をあげてしまった。すりすりと交互に擦り合わせていた、黒タイツの太腿がさらに激しく動き、バランスを崩したままアスファルトの上をかつかつと足音が刻む。

「あ、あつ、あ」

ふらふらと頼りない脚は、仮に自由になったところで、トイレまで行く余裕を残しているのか、果てしなく疑問に思えた。

おしっこを我慢する以外の目的で足を動かせば、すぐそのままお漏らしが始まってしまう。近くのガードレールに身体を預け、募金箱を握り締めながら、荒く息を繰り返しては身を強張らせる。

「ぼ、ぼきんに、ごきよりよくっ……お、おねが、おねがいっ。し、しますっ……」

まるで学芸会のセリフめいて繰り返されるフレーズ。募金箱を握る手に力が籠り、じっとしていることのできない爪がかりかりと小さい音を響かせる。

下腹部を圧迫する水圧が胸の中まで押し上げて、息が詰まり、声が掠れる。

寒さ以外の理由で震え続けている足の隙間から、いまにもじわりじわりと熱い雫が滲み出しそうになる。

タイツの奥、下着にぼつり、と小さな染みが浮かぶ。

ぷくりと股布を盛り上がりさせた熱い雫は、すぐに外気に触れながら冷え、薄黄色く濡れた布地の面積を広げてゆく。最初の一滴が無垢だった布地を侵略すれば、あとはもう歯止めは利かなくなる。

「ご、ごきよりよ、く、あつ、あ」

意味のつながらない言葉を喉の奥に引き攣らせながら、千尋は壊れたオルゴールみたいに同じ言葉を繰り返していた。けれど千尋の頭の中を占めているのは募金への崇高な理念や慈愛の心などでは断じてなく、それらに対する不平不満でもなく、膨らみ続ける尿意と、それに抗わなければいけない、という意識だけだった。

溜まりに溜まったおしっこは、膀胱だけではなく出口と膀胱の間のおしっこの通る管にまで流れ込んでいる。

女の子特有の短い通り道の中までが、黄色い熱湯にぷくりと占領され、千尋は辛うじて自由になるおしっこの管の出口の側だけを必死になって締め付ける。

「あ、あつ、ああっ」

けれど、脚の付け根に力を入れて強張らせるたび、ぷくりと膨らんだ排泄孔からはおしっこが少しずつ漏れ出して、ぷちゅるると熱い雫が噴き出して下着を湿らせる。

擦り合わせた太腿の奥で、食い込んだ下着の股布はおしっこで湿り、不快感を催させた。

千尋の努力を嘲笑うかのように、まるで焼けた砂の塊を飲み込んだようにずしりと重いおしっこの貯水池は、少しずつ少しずつ決壊へと向かっている。

「うあ、あ、あう、あつ……」

サイダーか何かがおなかの奥でしゅわしゅわ弾けているようだった。少女のおなかの中でおしっこの袋がびくん！と段階的に膨らもうとする。

いよいよ牙をむいたカフェインの魔力が、さらに少女の尿意を加速させる。

「っ……あああう……っ」

とうとう耐え切れずに、千尋はだんだんだん、と左右の脚を行進のように踏みならしてしまう。恥も外聞もなくスカートの前から足

の付け根を抑え込み、溢れそうなものをぐうっと押し上げる。

尿意と一緒に鈍い痛みまでおなかの上、胃のあたりの裏側に、ぐうっと重苦しいものが詰まってゆく。けれど、そうやって手を使っていなければ、いつダムが決壊してもおかしくない。恥骨の上にせり出した膀胱を無理矢理おなかの中に押し込めようとするたびに、千尋の脚の付け根で腰骨までが軋むようだ。

（あ、あつ、やあ、でちゃう、でちゃうっ……、でちゃう……っ！！）

まっすぐに立てない千尋の足が地面を擦るたび、じんっ、と下腹部に響く刺激が腰を震わせる。スカートを揺らし、タイツの膝を不自然なくらいにくっつけて、お尻を真後ろに突き出した不格好な姿勢で、けれど千尋は必死になって歯を食いしばる。

身体の振動は尿意を加速させ、それを紛らわせるために爪先は小刻みに地面をたたく。ざわ、ざわと堤防に押し寄せる高波が出口を内側からひっかく感覚が、耐えがたいほどに甘美な排泄の誘惑をもたらしてくる。

「ぼ、ぼきん、にっ……あう、んあっ……」

（おしっこ、おしっこ、おしっこおしっこおしっこっ……！！）

こんなところで醜態を晒すわけにはいかない。けれど限界を超えて膨らんだ尿意にまともな思考はできないまま、千尋は身悶えしながらいまにも弾けそうなおしっこの出口を堰き止め、噴き出とうとする恥ずかしい熱湯を押しとどめるだけで精一杯。

じわ、じわ、と濡れてゆく下着を押さえこみ、千尋が路上で披露するおしっこ我慢のダンスは、どんどん大胆になってゆく。

「あ、あう、あっ……は、っ、く、あ、っ」

駅前の交差点で激しく脚の付け根を押さえる制服姿の少女に、雑踏の中にも足を止める人が出始めていた。

その奥は千尋よりも年上の男性であった。

寒空の中、募金箱を抱えたまま必死になっておしっこを我慢して悶えている少女に、何気ない様子を装いながら、淫らなものを期待する視線が絡み付いてゆく。

（い、いや、見ないで、見ないで、くださいっ……）

内気な少女の頬が紅潮する。身体を捻って身を隠そうにも、往来にそんなスペースはない。いまからトイレに向かおうにも、尿意の波が落ち着いてくれなければまっすぐ歩くことも難しいのだ。

千尋はいまや衆人環視の中でおしっこを我慢しなければならなくなっていた。小さな身悶えや足踏みひとつ、揺すられる腰の一動作も、いやらしい視線にさらされねばならない。

「あ、あっあ……っ」

（い、嫌、っ、いやあ……っ）

そんな千尋の前に、一人の男性が進みでてきた。

「た、大変だね。頑張って」

野暮ったい眼鏡に小太り気味の身体を揺する、二十歳半ばほどの男は、いくらか上擦った声でそう言って、財布のなかから10円硬貨を出し、募金箱に入れる。

ちゃりん。募金箱の底を叩く金属音。年上の異性を目の前にして、緊張を募らせた千尋の身体は強い尿意を呼び起こし、少女はぶるっと背筋を震わせ、声を詰めてしまう。

「ふあ……っ」

スカートの上から、脚の付け根を握りしめる手に力が籠る。きゅん、とおなかの奥で切ないほどのおしっこの波が出口に押し寄せる。

(あ、だ、だめ、お、お礼、いwanaきや……っ)

反射的にそう思い至り、千尋は慌てて身体を折り曲げた。

ぎゅっと歯を食いしばり、千尋はどうにか喉の奥から声を絞り出す。

「あ、ありが、とう、ございま……っ あ、あう……っ」

もちろん、パンパンに張りつめたおなかでそんな事をすれば、圧迫されて膨らむ下腹部の水圧に、か弱い出口が耐えられるわけがない。我慢を強いられ続けて少し赤くなった股間の先端、女の子の大事な場所から、じゅわ、とはっきり音をたてて下着の中に熱いおチビリが染み出してゆく。

(あ、あっあ、っ、んああ……うっ)

小さな割れ目を溢れ出した黄色い熱湯は、既にたっぷりと湿った下着の股布には吸収できず、スカートの内側、タイツに包まれた腿の合わせ目にまで広がってゆく。

そのまま熱い雫は幾筋かに分かれて足を伝い、膝の裏側からふくらはぎにまで、黒いタイツの上に染み出して、黒い布地をさらに色濃く変えてゆく。

タイツが白地ではなかったこともあって、ぱっと見、遠目には分からないが、布地を抑えた手のひらのすぐ下で、じゅわぁと吹きあがる熱い雫は、千尋を激しく動揺させた。

思わずクネらせた足もとに、ただだらしなくじゅわぁとおしっこの雫を噴き出させてしまい、アスファルトの上にはぱたぱた、と小さな水滴が散る。

「うはぁ……すげえ……」

千尋が漏らしたおしっこが地面に染みを作るのを見て、男は、満足そうに口の端を歪め、眼鏡が曇りそうになるくらいだらしなく息を荒げる。

(！！……い、いや……ぁあっ！！！)

間近でオモラシを見られたことに、千尋は悲鳴をあげそうになった。

もともと内気で、しかも年上の男性など、ほとんど父親くらいしか知らない少女だ。異性への免疫などないに等しい。

下卑た欲望を隠す様子もなく、じっと見下ろす男の視線に耐えきれず、歯ががちがちと震え出してしまふ。

ほとんど、心臓を掴まれたような気分だった。

そう、さっきの励ましの言葉も、募金箱に入れられたお金も、恵まれない子供たちや、募金活動に向けられたものではない。

(あ、あっあ、や、やだ、やだぁ……っ、)

いまの10円は、千尋が披露していたオシッコ我慢のダンスへの代金なのだ。

恐怖と羞恥に動けなくなった千尋を、容赦なく尿意が責め立てる。じっとしていることができずにクネクネと揺すられる腰と共に、タイツの間をじゅう、じゅう、とおしっこの雫が滑り降りてゆく。

「あ、あっ、あ……」

強張った脚を震わせるばかりの千尋の傍に、別の男性が近寄って来て、また募金箱に腕を伸ばす。

今度は50円硬貨。

「ふぁ、あぁ、あっ……ツツ」

ちゃりん、という音に合わせて緊張を高めた千尋は、たまらず腰をクネらせてしまった。

まるでパブロフの犬のような条件反射。

少女のスカートの奥から、水道にハンカチをかぶせて蛇口をひねったような、ぐもった水音が響く。

過敏になっていた下腹部は過剰に反応し、膨らみかけていたおしっこがまた開いてしまったのだ。千尋の排泄孔はさっきの出来事を思い出すようにそっくりそのまま、けれどもっと激しくおしっこをチビる。

「あ、あつ、あ、あぁつ」

ぱくりと丸い円を描いた少女の唇が、湿った吐息をこぼし熱い喘ぎを繰り返す。

意図せずじゅうっ、と噴き出す熱い水流。溜まりに溜まったおしっこの解放。背筋を這い昇る微弱な電流は、むず痒いような心地いいような筆舌に尽くしがたい刺激になって、おしっこの出口を何度も何度も痙攣させる。

「んあ……あふっ」

寒さでかじかんだ手のひらを暖房にかざした時のような、痛さと痒さの混じった感覚にも似たものが大事な部分を貫き、今度はさっきよりもはっきりと勢よく噴き出したおしっこが、スカートの布地を染みだし、股間を握りしめる千尋の手のひらに触れた。

黒い布地を握りしめた手指の格好に、熱い染みが広がってゆく。

「あ、や、も、もう、やめ……」

震える唇から、掠れた声を上げる千尋。しかしそんな少女の行く手を塞ぐように、さらに二人の男性が近寄り、立て続けに放り込まれる100円硬貨。

逃げ出すこともできず、ちゃりんと音を響かせる金属音に誘発されて、じゅ、じゅうっとおチビりで下着を熱く濡らしてしまう。

「んあああ……つあ、あぁつ……」

色づいた唇には唾液の糸を引いて。喘ぎながら身をくねらせる少女の足元へ、びちゃびちゃとおしっこが滴り落ちる。遠くから見ても色が解るほどに濃い黄色のそれは、千尋がどれだけおしっこを我慢していたのかを知らせるものだ。

括約筋をありったけの力で締め付けているのにも関わらず、漏れだすおしっこの量は増えるばかり。掴んだスカートの下では水分をたっぷりと吸って色を変えた下着から、タイツに溢れだしたおしっこが、とうとう革靴にまで染み込んで、ほんのりと湯気を上げ始めた。

ちゃりん、ちゃりん。

「あ、あつ…あつあ、ああ、あつ」

まるで、自動販売機のように。

募金箱にお金が落とされるたび、千尋はパンツの中におしっこをチビり続ける。歯止めのきかなくなった出口は徐々に緩み、些細なことでもだらしく湯気の立つ水流を激しく吹き上げる。

じゅぶ、じゅう、じゅじゅうっ、もはや足もとまですぐ濡れになった千尋の靴は、水溜りに突っ込んだみたいにおしっこをたっぷりと染みさせていた。足元だけ水浴びをしたような有様になって、なおも千尋はじゅう、じゅじゅじゅっ、とみっともない水音を繰り返す。

ずっとおなかの中に留まることを余儀なくされていたおしっこが、細切れになって千尋の足元を濡らしてゆく。

「だ、だめ、でちゃう、っ、お、おしこ、でちゃう、つから……あつ」

断続的な排泄、しかも我慢をしながらのおチビりの連続だ。満足のいく排泄には程遠く、長時間の我慢に酷使された排泄器官は鈍い痛みを残し、漏らした以上の尿意を呼び起こしてしまう。一度出始めた女の子のおしっこが、途中で止まる訳がないのだ。

収縮を始めた膀胱はなお過敏になり、千尋の足元にはばちゃばちゃと激しく黄色い滝が溢れ、地面に恥ずかしい水たまりを広げてゆく。

また一人、足を止めていた人の中から、背広姿の男の人が千尋に近づいて、お財布から100円を募金箱の中に落とす。男

の人の鼻は幾分か膨らみ、荒い息も聞こえる。

こうしていれば正当な名目で、必死におしっこを我慢している女の子の仕草を息遣いを、すぐ間近で見ることができる。募金箱の中に落ちるお金は、千尋のおしっこ我慢&お漏らしショーの、特等席での見物料だ。

「あっ……！！」

ごぼり、とまだなみなみと残る千尋のおしっこが、波立ち泡立つようにせり上がってくる。予兆もなく膨らんだ尿意がもろい出口めがけてせり出すのを感じ、千尋の背中に鳥肌が立つ。

まるで、おなかの中に棒を突っ込まれたような——そんな衝撃と激痛。風船みたいに膨らんでいた膀胱がぶるんとふるえ、緊張に強張った下腹部の収縮に耐えかねて出口を緩ませる。

「あ、あぁ、あ、あーっ、あ、あーっ……」

辛うじて持ちこたえていた最後の糸がぷつんと途切れ、とうとうダムが決壊した。

痙攣とともに、じゅじゅじゅじゅう！！とこれまでとは比べ物にならない激しい水音が響いた。

喉の奥が渇き、ひきつる。

まるで鋭い針金に突かれるように細い出口がこじ開けられてゆく。足の付け根を覆っていた布地と肌の間に渦を巻くようにほとばしった熱水が、ぶじゃああああああ、と、羞恥の放水音を撒き散らす。

前屈みになった千尋のスカートの間から、冗談のように激しい奔流が噴き出した。

あっという間にお尻までがびしょ濡れになり、まだ辛うじて残されていた、下着の無事な部分は完全に蹂躪されてゆく。タイツはすぶ濡れになり、靴にもいっぱいまで黄色い熱湯が注ぎ込まれてしまう。

足元には大きく水たまりが広がり、アスファルトの隙間を伝って広がってゆく。

じゅじゅじゅじゅうじゅう……

激しい放水音はいまだ続き、残るおしっこの全てを噴き出さんばかりに波打ちながら、アスファルトの上を直撃する。

お尻やタイツの腿にまわった雫がぱちゃぱちゃと伏流水を滴らせ、がくがくと震える膝から力が抜けおちる。自分の作ったおしっこの水たまりの水面に、さらに激しく恥ずかしい熱湯をじょぼじょぼと注ぎながら、千尋は募金箱を抱えたまましゃがみ込んでしまった。

おなかの中を占領していた熱の塊が噴き出して、代わりにブラックホールみたいな空洞ができあがってゆくようだった。

「っっ〜〜〜……」

ごっそりと熱の抜け落ちた身体を震わせ、千尋は息を荒げ、小さな唸り声をあげていた。

きちんとおしっこをする姿勢になった少女の身体は、これまで自分を散々苦しめてきたおしっこを、一滴残らず絞り出さんとするように、全く勢いを弱めないまま、排泄を続けていた。

本来、トイレの個室の中でしか行われないうような、大胆で躊躇ない猛烈な水流がなおも数十秒に渡って続く。

いつしか千尋の抱え込んでいた募金箱には、ずしりと重く感じられるほどの金額が注ぎ込まれていたのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 小さな従姉妹との話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 我慢

CATEGORY: 我慢

DATE: 01/08/2011 19:38:14

BODY:

うららかな秋の陽射しの中、群れ生えるススキが静かに穂を揺らす。

川面の響かせる水音に街中の喧騒は押し流されて、高い青空はどこまでも晴れ渡っていた。

「たまには揃って買い物もいいなあ」

「そうねえ。こうやって一緒にのんびり歩くなんで、子供の時以来じゃないかしら？ そう言う意味じゃ、父さんに感謝かもね」

「……なあ、覚えてるか？ 姉さん、昔兄貴と一緒にその川で泳ごうとして溺れかけて、大騒ぎになったよな？」

「ちょっと、嫌なこと思い出させないでってば」

「あー、あれは大変だったよなあ」

まだ残暑の残る9月の週末、真奈美は両親に連れられ、電車に乗って祖父の家までやってきていた。お彼岸を前に、親族揃ってのひと足早いお墓参りだ。

午前中に用事を済ませ、レストランでのお昼を挟んでのんびりとしたお散歩。

川縁の堤防の上続く砂利道は、ずっと昔、おじさんやおばさん達が子供だった頃、父親と一緒に遊び場にしていた場所らしい。

遠く、高速道路の下をくぐって流れてゆく川を見ながら、皆がゆっくりとした足取りで思い出話に華を咲かせている。

そんな中、真奈美だけは少し離れた道の先を、じれったそうに進んでいた。

「ねえ芳乃さん、いいこと教えてあげようか？ その頃からこの子ったら臆病でね？ 小学校で肝試ししようってことになってさ」

「ちょ、待て、姉貴、その話は——」

真奈美は靴の先でがりがりと砂利を跳ねさせ、片方の手をぎゅっとスカートの上、内股になった脚の付け根に押し当てていた。突き出されたお尻が小さく震えると、靴のかかとが小刻みに地面に擦りつけられる。

その表情は青く、血の気も引いて白い。小さく開かれた唇は、はあ、はあ、と荒い息を繰り返していた。

しかし、童心に帰ってふざけ合う両親たちは、そんな真奈美の異様な様子に気付くこともない。

「——そうなんですか。大志さんにそんな頃がねえ……」

「おいおい、昔の話だって。そんな事言ったら姉貴だってよ、運動会の時だけに体育倉庫に閉じ込められて——」

「ああああっ！？ いや、その話は駄目。やめて！？」

「あらあら……真奈美、そんなに先行かないの。迷子になるわよ」

「う、うん……」

母親に呼び止められ、真奈美はじれったくその場に立ち止まる。

ぎゅっと手を握って両親たちが追いつくのを待つが、いくら真奈美が心の中で早く、早くと念じてても、お喋りに夢中な皆の歩みはあまりにも遅い。

すぐにじっとしていることが出来なくなり、真奈美はその場で行進の練習のようにじたばたと足踏みを始めてしまった。

(っ……もおっ、はやく、はやくしてよお……！！)

気ばかりが急ぐが、そんなテレパシーはもちろん通じるはずもなかった。

余裕なくぐりぐりと太腿が擦り合わされ、スカートを掴む指に力がこもる。

(おトイレ……っ！！)

心の中の憤りを形にするように、ぎゅっと口をつぐむ。

真奈美は、もうずっと前からオシッコを我慢していた。

そもそも、お墓参りに行った時からトイレに行きたいなとは感じていたのだ。けれどお寺のトイレは薄暗くて、汚れていて、さらには蜘蛛の巣まで張っていたため、とても中に入る気にはなれなかった。

だからとりあえず我慢することにしたのだが——まさか、バスに乗って移動した先のレストランでもトイレに行けないなんて思いもしなかった。レストランのある郊外の大型商業施設では屋外のイベントが開かれていて、婦人用トイレはまさに長蛇の列だったのだ。

我慢できない小さな子たちは大人に連れられて男の人の方のトイレに入って行ったのだが、まさかとくに幼稚園を卒業した真奈美がそれを真似するわけにもいかない。

（はやく帰ろうねっていったのに……っ！！）

レストランでもおしっこを済ませることができず、真奈美はもう今すぐにでも家に帰りたい気分だった。

けれどその時は、それからバスに乗ってすぐに帰るのだと思っていたので、それまでの30分くらいなら我慢できるだろうと考えてしまったのだった。

しかし、両親たちは折角だから歩いて帰ろうと言い出し、祖父の家までの道のりをのんびりと散歩することになってしまったのである。

30分なんて時間はとくに過ぎ、いまや真奈美の我慢は最高潮だった。

一刻も早く祖父の家まで戻って、トイレに駆け込みたい一心なのに。

「そんなこと言うなら兄貴だって、先生に悪戯してばかりだったじゃないか」

「ばか、そんなのは4年の時に卒業したぞ？ それからは心を入れ替えてだな——」

「あら？ 生徒会であんな悪ふざけてて良く言うわねえ」

さっきから何度も、真奈美は両親の袖を引いて、トイレを訴えようとしていた。しかしお喋りに夢中な両親は、はいはいと生返事を返すばかりで、まるでとりあってくれない。母親の方は、歩き疲れた妹を抱えるので精いっぱいだ。

だから、せめて早く——少しでも早く、祖父の家まで戻りたいのに。

（んんっ……はあっ……）

いっそのこと、自分だけ先に帰ってしまおうかとも思った真奈美だが、しかし祖父の家に来るのがほとんど初めての真奈美には、このあたりの道は全く分からない。

さっきから何度も走り出そうとして、けれど迷子になってしまうかもしれないという不安が、まるで見えない縄のように真奈美の身体を縛り付けていた。

肝心の大人たちは思い出話に夢中で、じれったくなるくらいいのろのろ歩きだ。しかも、交差点や川、駐車場やマンションになった元空地を見るたびに足を止めてはそう言えばこんなことがあった、あんなことがあった、と話を始めるので、まったく先に進まないのだ。

「……おトイレ……っ」

あとどれくらい我慢すればいいんだろう。真奈美の胸をひり付くような不安がよぎる。

いまだに見覚えのある祖父の家は見つからず、先の見えない道のりの中、終わりのない我慢を続けていられる自信は、徐々になくなりつつあった。

（はうう……っ）

ぎゅっ、とスカートの上からあそこを押さえ、真奈美は小さな身体を懸命に震わせる。もうお姉さんなんだから、こんな恥ずかしい格好なんてしちゃいけないのに——そう思うも、もうそうやって押さえないと、我慢が出来ないのだ。

「あっはっは。ダメだなあお前ら。恥かいてばかりじゃないか」

「そりゃそうけどよ、兄貴……」

「あら。そうでもないわよ？ 大志は知らないかもしれないけど、兄さんだってね、卒業式の時に……」

「ん？ おい待て恵、その話どこで——」

「幸恵さんに教えてもらったのよ。ねえ、芳乃さんも聞きたいでしょう？」

「ふふふ、聞いちゃってもいいの？」

いくら焦っても、大人たちの脚が早まる様子はない。

じわっと膨らむ尿意に悶えながら、真奈美はきつく口を引き結ぶ。

（あ……っ、だ、だめ……っ）

ぞわあ、と下腹部にかかる水圧が増し、まるで締め上げられたように恥骨の上あたりが鈍く痛む。ぱんぱんに膨らんだ水風船が、身体の外側にせり出し始めているようだ。真奈美は懸命に脚を閉じ合わせ、それを押さえこもうとする。

焦った真奈美は、とうとう意を決して母親のところまで駆け戻った。下腹部に余計な震動が響かないよう、慎重に脚を進めて——

「ええ！？ それ本当なの？」

「初耳だぞ、兄貴～？」

「い、いやあ、だからな？ その時はほかにどうしようもなくてだな……」

話を弾ませている伯父さん達には気付かれないよう、そっと妹を抱いている母親の袖を引っ張った。小声でそっと、声をかける。

「ね、ねえ、お母さん……」

「へえ。そうなの？ 見かけによらないのね……ん。どうしたの、真奈美」

「……………あの、あのね。……お、おトイレ……」

羞恥をこらえ、そっと小声で告げた尿意に、母親はしばしの間の後、眉をしかめた。

「……トイレ？ 我慢できないの？」

「……う、うん……」

「どっち？ 大きい方？」

「……、お、おしっこ……」

身を屈めるようにした母親に、やや語気荒く問われ、真奈美はわずかにたじろぎながらも首を横に振って、答える。

おしっこ、と聞いた母親は、いづらか安堵したようだった。

しかし、話を弾ませている父親たちの方を見、小さくため息をつく。

「……そう。なら、おじいちゃんの家まで我慢できるわよね？」

「え……っつ」

「大丈夫でしょ？ もうお姉さんなんだから。平気よね？」

予想外のセリフに、真奈美は顔を曇らせる。

我慢できないから訴えたのに、それでは意味がない。再度訴えようとした真奈美をびしゃりと遮るように、母親は声を強める。

「お、お母さん……わたし、おしっこ……でちゃう……」

「真奈美。あなたもうお姉ちゃんでしょ？ わがまま言わないの。近くにトイレもないし……」

母の対応は、親戚の前で、娘がトイレを訴え——困らせることを危惧したものだった。きちんとトイレのしつけも出来ていない、と言われてしまえば、立場がない。そのための予防線だったのだ。

近くに川の流れる田園の畔道には、公衆トイレどころか民家もまばらで、コンビニも見当たらない。母親の判断は間違っているわけではなかった。なおも食い下がろうとした真奈美に盛り上がる父親の様子を示し、母親は言い聞かせる。

「で、でも」

「ほら。お父さんたちもお話してるんだから。静かにしてなさい。……あはは。ごめんなさいお義姉さん。ちょっと聞き逃しちゃって……それでそれで？」

それでおしまい、とばかりに。真奈美の訴えを取り下げて。

母親たちは再度話しはじめてしまった。

(そんなぁ……っ)

取り残されたように、真奈美の心にギュッと不安が押しよ押せる。ますます尿意が強くなり、よちよち歩きのようにになりながら、真奈美は荒く息を繰り返す。

(ふーっ、ふうーっ、ふううーっ……)

(あ、あっあ、。っ……おしっこ、おしっこしたい……おしっこでちゃう……。おトイレ行きたいよぉ……)

もはや真奈美には言いつけられたことに逆らうだけの余裕はない。

恥を忍んで訴えたトイレの要望に対し、まさかの我慢を強いられながら。真奈美はふらふらと、砂利道を歩き続けるのだった。

しばらく歩いた時だった。

母からの理不尽極まりない要求に対しても抗うことなく、じっとおしっこ我慢を続けながら歩いていた真奈美の後ろで、いつの間にか遅れがちになっていた伯母が、まだ小さな従姉妹のそばに近づいてその顔を覗き込む。

「あら、どうしたの、裕菜」

「……っ……」

まだ幼稚園にあがったばかりの従姉妹は、すっかり顔を赤くしていた。伯母の問いかけにも上手く答えられないのか、ぷるぷると首を振って、左右に括った髪の毛を振り、泣きそうになってくしゃりと表情を歪める。

「どうかしたのか？」

「……うん、ちょっと、裕菜がね」

「おう、……そうか」

困ったわ、とでも言うように、伯母が眉を寄せる。

大人たちは何かを察したのか、ああ仕方ないなあ、という表情を浮かべていたが、真奈美はそれどころではない。

“おあずけ”されているトイレのためにも、大急ぎで、おじいちゃんの家まで帰らなければいけないのだ。焦れたようにその場に足踏

みをして、クネクネと腰を揺する。

（も、もうっ、はやく、はやくしてよお……！！ 漏れちゃう、漏れちゃうよお……！！）

しかし、その場に足を止めてしまった大人たちを置いていく訳にもいかず、真奈美は交互にスカートの前を引っ張って、じたばたと砂利道の上を歩きまわるしかなかった。

（ふーっ、ふううーっ、ふうーっ……）

荒い息を繰り返しながら、小さなおなかを膨らませている苦しさの元を、ぎゅうぎゅうと握り締めるようにさする。トイレ、早くトイレ、と何度も訴える下腹部は、もういまにもはち切れてしまいそうにパンパンだ。

そんな時。

「おしっこお……！」

（えっ……！？）

切なる訴えが、真奈美をはっとさせる。

叫んだのはもちろん、真奈美ではない。お姉さんの真奈美がそんな事を人前で叫んだりするわけがない。声の主は、顔を赤くして、丸い目に涙をにじませた裕菜のほうだった。

どうやら、裕菜も真奈美と同じように、ずっとおしっこを我慢していたらしい。

それはそうだ。裕菜と同じようにレストランでご飯を食べて、それから延々、大人たちと一緒に河原を散歩しているのだから。真奈美が我慢できなくなるくらいだから、裕菜だってもちろんもうトイレの限界だろう。

たしか、裕菜もレストランを出かける前にトイレに入ろうとしなかったことも思い出し、裕菜はふと気付く。

（そ、そうだ、チャンスかも！！）

本音を言えば、本当に祖父の家まで我慢できるかどうか怪しいものだった。周りの景色はさっきとほとんど変わらず、いったい後どれだけ歩けば帰れるのかよくわからない。

けれど、小さい裕菜までトイレに行きたいと言い出せば、流石に大人たちだって無視はしていられないだろう。

これでトイレに行けるかもしれない。真奈美の心は浮足立った。

「あらあら……困ったわねえ」

「便所なあ。この辺あったか？」

「兄貴の方が詳しいだろ」

しかし、大人たちも近くのトイレの心当たりはないらしい。

そして会話の流れからして、やはり祖父の家まではまだかなり時間がかかるようだった。そのことは真奈美を大きく落胆させた。

（そんな……で、でも……）

ちりと、真奈美は立ちつくしてしまっている裕菜の方を見る。年下の従姉妹は小さな膝をふるふると震わせて、懸命に口を横に結んで、精一杯耐えているようだった。きつとずっと一人で我慢していたのだろう。仲間がいたことに、少しだけ真奈美はほっとする。

けれど、どう見ても、裕菜にはもう余裕はなく、祖父の家までガマンできそうには見えなかった。一縷の期待と共に、真奈美は息をのんで大人たちの会話の行方を見守る。

「しょうがないわ……ちょっとその辺でさせてきちゃうわね」

「ああ、わかった」

「ねえ、おかあさんっ……」

「はいはい。……裕菜、もう少し我慢してね」

伯母さんが、済まなそうに頭を下げ、裕菜の手を引いて川岸の茂みへと歩きだしてゆく。するとそれを真奈美の母が追い掛けよとた。

「お手伝い、いる？」

「そうね、でも大丈夫よ。すぐ済ませるから」

「そう？ ふふ。でもしょうがないわよね、まだ裕菜ちゃんも小さいんですもの」

「あら。でもそうねえ。真奈美ちゃんはいいわよねえ。手が掛からなくて」

もう限界だった。伯母さんの向かう茂みに、真奈美の視線はがっかりと固定されてしまう。あそこだ。あの、少し背の高い茂みの陰で、裕菜はおしっこをするのだ。

（じゃ、じゃあ……わたしもっ）

もはや我慢は限界に近い。まして、裕菜の我慢を目の前で魅せられ、さらにはその裕菜があそこでおしっこをしようとしているのだ。その上で真奈美だけが我慢をしようなんて、あり得ない。

もじもじと擦り合わされる脚は一時もおさまらず、おなかの中のむずむずは、出口のすぐそこまで降りてきている。おしっこは何もしなくて勝手に出口を押し開け出てきてしまいそうなくらいだった。

真奈美はいてもたってもいられずに、裕菜と伯母さんのあとを追おうとした。

「あら、真奈美。どうしたの？」

「わ、わたしも……トイレ……」

もう限界だと訴える真奈美に、しかし母親は再度表情を陰しくする。

「もう、みっともないわね……そんなことしなくても我慢できるでしょ？」

「え……っ」

走り出そうとした手をぐっと掴まれ、真奈美はたまたま『あぁっ』と声を上げる。

なんでそんなに意地悪な事を言うのだろう。母親の態度が理解できず、真奈美は困惑の中、ぎゅっとスカートの前を掴んでしまう。

「なんてとこ触ってるのよ、恥ずかしいわね……、ほら、よしなさい」

「や、やぁ……っ」

押さえていないとおしっこが出てしまいそうなのに。たまたまクネクネと腰を揺する真奈美に、母親は眉を吊り上げる。

「さっきは我慢できるっていったじゃないの……」

「そんなの言っていないよぉ……」

いつもは優しい母親が、なぜかとても意地悪だった。まだ幼い真奈美には、父とその兄弟たちの些細な確執や、お互いに張り合っている見栄のことなど知る由もない。

裕菜よりも年上の真奈美が、同じようにおしっここの限界であることや、きちんと躰のできているはずの我が子がこんなところでお手洗いを済ませてしまおうなんてしていることが、我慢ならないのだということも、理解できようはずもない。

困惑のなか、真奈美は必死に尿意を訴える。

「そ、それに、ユウちゃんだって、おしっこしてるのに……」

「真奈美。あなたいくつになったの？ 女の子なんだから、こんなところでお手洗いなんかダメじゃない。ほら、ちゃんと立って、我慢なさい」

「お、おかあさんっ……」

声を上げた真奈美に気付いて、父と伯父さんが揃って顔を向けてくる。

「ん？ どうかしたのか？」

「いいえ。何でもないわ」

真奈美のを口を塞ぐようにして、母親はそう答えた。

（そ、そんなの、そんなのって、ないよお……で、でちゃうのに、もうガマンできないのにつ……ちゃ、ちゃんと、おトイレって、行ったのに……っ）

真奈美の脳裏を、いつだったかの思い出がよぎる。

勇気を出して手を挙げたのに、意地悪な先生のせいで、授業中のあいだトイレに行かせてもらえず、とうとうクラスの前でオモラシってしまった友達のこた。

その惨めな姿に自分が重なって見え、真奈美はじわ、と目元に浮かぶ涙をこらえる。

すると、茂みの向こうから伯母さんに手を引かれ、すっかりさわやかな様子の裕菜がやってくる。

「あら、ユウちゃんもう終わったの？」

「ええ。……この子ったらすごく我慢してたみたいで……池みたいになっちゃったわ」

（やだ、やめてよお、……我慢してるのに……）

現在進行形で、トイレの限界である真奈美にはあまりにも刺激の強いお話だった。耳を塞いでしまいたいほどだが、片方の手が母と繋がれているため、それもできない。

「困るわよねえ、お手洗いのしつけど」

「そんなことないわよ、お義姉さん。ユウちゃんくらいならしょうがないじゃない。失敗しないんだから」

「うふふ。そうねえ。はやく真奈美ちゃんくらいになってくれれば手もかからなくていいんだけど」

そう言っ、ちらりと向けられる伯母さんの意味深な視線にも、もちろん真奈美は気付かない。仮に理解できたとしても、いまの真奈美には漏れてしまいそうなおしこのことで精一杯だ。

真奈美は恥をしのんで、母親の手を引いた。

泣きそうになりながら、ここでおしこしちやいたいと訴える。

「お母さん……っ」

「ほら、行くわよ。……早く帰れるように行ってあげるから、ちゃんと我慢してね？ わかった？」

しかし帰ってきたのは無常なる言葉。

そうして真奈美は、引きずられるようにしてあとどれくらいあるのかすら定かではない、祖父の家までの長い道のりを歩かされるのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 佐都子妄想系

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 我慢

CATEGORY: 我慢

DATE: 02/12/2011 21:22:59

BODY:

佐都子はイジメに遭っている。それもクラス全員が結託した大がかりなものだ。

相談できる相手はいない。先生や両親をはじめ、大人には信じてもらえないし、同年代の友達も全員、いじめっ子の味方をしているからだ。

どんなふうに説明しても、皆は佐都子の話を信じてはくれず、ずっとぼけてこういふのだ。

「あはは。そんな事ないってば。気のせいだよ」

——と。

佐都子へのいじめは、クラス的女子が中心だった。理由はたぶんささいな事で、誰かの挨拶に答えなかったとか、一人だけいい成績をとったとか、そんなものだった。何がきっかけだったのかは佐都子もはっきりわからない。

いくら道德の授業をしても、教育評論家が批判しても、政治家が立派な演説をしても。佐都子の年代には、多かれ少なかれあることなのだ。学校という社会は最たるもので、特定の誰かを攻撃の矛先にすることで心の安定を保ち、それ以外の全員の結束を高める。

そのターゲットに選ばれたのが自分なのだと、佐都子は考えている。

クラス的女子たちのイジメは、ノートを破ったり、持物を隠したり傷つけたり——そういった被害の出るような手段にはならなかった。そんなものよりもっと陰湿に、佐都子の心を傷つけることを何よりも好んだのだ。

そうして一番良く使われる手段が、学校のトイレの使用を禁じるものだった。

けれど、たぶんそれをH Rで佐都子が先生に主張しても、誰もその言葉を信じてはくれないだろう。特に男子は絶対にそうだ。

「だって、お前いつも、女子と一緒に便所、行ってんじゃない」

知らずに——あるいは知ってるけど知らないふりをして、そんな間抜けな事を言うにきまってる。だから先生も、佐都子の言うことなんて聞いてくれないのだ。

しかし先生は、そして一部の純粋な男子達は、知らないのだ。佐都子が休み時間に、クラスメイトたちと女子トイレに立っても、そこで一滴もおしっこをさせてもらっていないことを。

トイレに行っても、オシッコができない——それがどれだけ辛いことか分かるだろうか。

考えてみて欲しい。人一倍、人の目を気にする年代の少女にとって、クラス全員の注目を浴びながら、いまにも出てしまいそうなおしっこを堪えて腰を揺すり脚をもじつかせることが、どれだけの羞恥なのか。

授業の時間だけじゃない。朝礼の時も、給食の時も、体育の時も、遠足も、社会見学の時だって。佐都子はいつも、いつでも、おしっこをずっと我慢しながら、参加しなければならない。

それこそ、死んだ方がマシ——そう思えるくらいだった。

『ねえ、我儘言うのやめようよ。それくらい我慢できるでしょ？』

『もう子供じゃないんだからさあ』

『ちょっと、なんてカッコしてるのよ……ちゃんとして！！』

クラス的女子たちは次々と、佐都子の羞恥を刺激するような言葉をぶつけてくる。さも佐都子がトイレに行きたがるのが、みっともないのだといわんばかりに。

それが彼女達のイジメのすべてだった。

……というよりは、トイレを使わせない、その一点を除けばびっくりするぐらいクラスメイトたちの態度は変わっていなかった。距離を

置くでもなく、無視するでもなく、クラスの仕事を押し付けるでもなく、普通に話してくれるし相手だってしてくれる。

お小遣いを取られるようなこともなかったし、身体に傷をつけるような暴力もない。

ただただ、ごく普通に——佐都子がトイレに行くことだけをかたくなに禁止するのだ。想像以上の、しつこさと、巧みさすら備えて。

『今日から、佐都子ちゃんはトイレ禁止ね！』

……確かそんな宣言から、佐都子のオシッコ我慢は日常になった。

はじめのうちは、ただトイレを使わせないだけだった。

それでも、どちらかといえばトイレの近い方の佐都子には地獄のような苦しみだった。できれば休み時間ごとにトイレに立ち、たとえそれが無理だとしても2時間続けて授業を受けるのが精々の佐都子に、登校してから放課後までおよそ8時間以上、一回もトイレに行かないでいるなんてことは不可能だ。

もっとも、この頃はクラスメイトたちの意地悪もまだエスカレートしておらず、なんとか時間を見つけてトイレに逃げ込む余裕があった。ぎりぎりのところでチビりそうになったりもしたが、幸いなことにオモラシにまで至ってしまったことはない。

イジメが本格的なことになっているのに気づいた佐都子はただちにこれに対抗するため、朝、できるだけ水分を取らないように心掛け、出かける前にはトイレで一滴残らず膀胱の中身を絞り出してから家を出るようにせざるを得なくなった。

それでも、8時間以上の我慢はあまりにも無謀だ。

佐都子は少しずつ我慢のコツを身に着けていったが、同時にクラスメイトのイジメも加熱していった。何度もおしっこを漏らしかけ、そのたびに死ぬほど屈辱的な目に遭わされた。

ぎりぎりの所でオシッコを許され、どんどんチビりながらトイレに駆け込むも、パンツをびしゃびしゃにしまうくらいは序の口。

どうしてもトイレに入らずに、ひとけのない校舎裏や、帰り道の草むら、そして拳句は男子トイレでオシッコをさせられたこともあった。

 けれど、一週間が過ぎ二週間が過ぎ、一月が過ぎ二月が過ぎて、できるだけ水分を控えるようにした佐都子になんとか8時間を平常運転で乗り越えられるようになってくると、彼女たちはまた新しいイジメを考え出した。

出すものがないなら、補給すればいい。

彼女たちは朝のH Rの前に、お茶を飲ませるように迫ってきたのだ。最初は350mlのペットボトル。それはすぐに500mlに増量し、やがてそれも2本、3本と増えた。

しかも誰が持ってくる訳でもない。佐都子の机の上に、無言のままにどんと置いてあるのである。

『飲まなかったら、ただじゃおかないからね？』

まだコンビニのシールが張ったままのペットボトルは、毎日毎日、無言の圧力と共に佐都子の机の上に置かれている。この状況で

どうして飲まずにいられるだろうか。

もともとお茶には利尿作用があるが、彼女達の持ってくるお茶はそれに輪をかけて効果の優れたもの。身体の中の悪い成分を追い出してしまうという触れ込みの美容健康茶だ。

その謳い文句に偽りはなく、お茶の効き目は素晴らしいものだった。

もともと敏感な佐都子の身体は、てきめんにその効果を受け、ひとくちふたくち飲むと、ほんの 1 時間くらいであつという間に膀胱がたぶたぶと音を立てるほどに、おしっこでいっぱいになってしまう。

それを 5 0 0 m l ペットボトルに 2 本も 3 本も飲むわけだからたまったものじゃない。……いや、おしっこは恐ろしい勢いで下腹部に『溜まって』ゆく。

まるでザルみたいに身体を通り抜けて、飲んだお茶がそっくりそのまま同じだけ、佐都子の膀胱を占領してゆくのだ。

そのときの感覚はそれ恐ろしく、おなかの中に直接、ホースを繋いで蛇口をひねられているような錯覚さえあった。あ、と思った瞬間には、ひゅごお、と音を立ててそのままおしっこが膀胱いっぱいに注ぎこまれてゆくのだ。

朝、登校するや否や机の上に並べられて待ち受けているペットボトルの重さが、そのまま全部ずしんと佐都子の足の付け根に押し掛かる。

そして佐都子は、一番底に穴のあいた、おなかの中の入れ物に、なみなみとおしっこを注がれて、いまにも溢れそうにたぶたぶ揺れる恥ずかしい液体を、佐都子は毎日、延々と放課後まで我慢させられるのだった。

「さとちゃん、トイレいこー？」

その一方で、友人たちは休み時間になると、そんな風に佐都子をトイレへと連れ出す。これは仲良しを装いながらも実に巧妙で、佐都子がクラスの女子の目を盗んで、他のトイレにいけないうように休み時間中ずっと拘束しておくためだ。

彼女達は佐都子のトイレに近い事を逆手に取り、毎時間そうやって、佐都子を女子トイレに連れ込んでゆく。

しかしトイレに連れだされた佐都子は、そこで個室を目の前にしながら、決して中に入れてはもらえなかったり、ひどい時は個室の中に見張りをつけられて、内側からカギをかけられてトイレをすっかり塞がれ、オシッコができないようにさせられたりもした。

クラスの女子たちはまるで皆が揃って、尿意に翻られる佐都子の下半身を視姦しているかのようだった。

実際、そうやって佐都子の苦しむさまをみて、悦んでいる変態なクラスメイトもいるのかもしれない。佐都子におしっこを我慢させることは、いつしか彼女達にとっても娯楽となっているらしかった。

だからその監視も並大抵のものではない。もし佐都子が少しでもそんなそぶりを見せようものなら、即座に携帯で写真を撮られてばら撒かれると脅されもした。

それが本気かどうかはわからないけれど、試してみる気にはなれなかった。

他にも、授業中に無理矢理「具合が悪い」と手を上げさせられたり、保健室に行く名目で連れ出されたりした。そんな時ももちろん「トイレに行きたいです」とは言わせてもらえず、オシッコを我慢させられたまま次の時間まで保健室に閉じ込められたりするの

だ。

まだイジメがいまほど本格化していなかった頃は、なんとかそうやって、こっそりトイレに駆け込む事も出来たけれど、いまはすっかりこの裏技も知られていて、万が一にでもトイレに入ることは許されない。

授業中ならクラス全員が邪魔できるはずもないからこそ、絶好のチャンスなのに——それすらも封じられて、佐都子の我慢はますます激化した。

例の健康茶の作用で、まるで貯水池みたいにおしっこを限界まで我慢し、ぱんぱんにおなかを膨らませながら、トイレを素通りして保健室に行かなければならないときの辛さといったら、筆舌に尽くし難い。

しかもあろうことか保健の先生まで彼女達の味方をしていて、佐都子をトイレには行かせてくれないのだ。

そうしておきながら、先生は

「あら。トイレ？ 行ってきたら？」

などと意地悪なことを言うのである。もし本気で佐都子がそうしようとしたら、絶対に阻止するくせに。保険の先生は、佐都子がオシッコをするのを見るのが大好きな変態らしく、変えのパンツや制服まで用意して佐都子を待ちかまえている。

……最近ではついに、シピンなんかを用意するようになって、佐都子にそこにおしっこをさせるように迫って来ていたりした。もう最悪だ。

クラスの女子たちだって負けていない。暗黙の了解だった、放課後はオシッコタイムの規定すら破って、最近では帰りの時間まで我慢の延長戦を強いるようになってきた。

彼女達は帰り道に、言葉巧みに佐都子を誘い、逃げられないようにしてからさも仲の良い友達のふりをしてはあちこちを連れ回す。

酷い時はカラオケやファミレスなどに寄り道して何時間も居座り、そこでさらにドリンクバーなどを頼んで佐都子に吞ませるのだ。

もちろん、その間もトイレには行かせてくれない。その間にも彼女達はこれ見よがしに

「飲み過ぎちゃったようー」

などと言いながらトイレに立つ。目の前で、佐都子が必死にオシッコを我慢しているのを知っていながら、だ。そうやって見せつけることで、佐都子の限界を誘っているのだ。

もちろんこの時、佐都子派テーブル席の一番奥に押し込められて、外に出られないようになっている。そうして楽しくおしゃべりしている風を装いながら、佐都子の方をちらちらと見ては、

「佐都子ちゃん、トイレ平気？」

なんて白々しく聞いてくるのである。

それでも佐都子は負けるつもりはない。こんな卑怯な手段には決して屈することなく、正々堂々、イジメに向かい合うつもりだった。トイレ禁止なんて姑息な真似をするんだったら、最後まで徹底抗戦しかない。たとえどれだけ恥ずかしい目に遭っても、いつか向こうが音をあげるまで我慢し続けてやる、と心に決めていた。

……けれどついに今日、このイジメに、姉と両親まで参加してきたのだ。

帰り道の寄り道に2時間もつき合わされ、ジュースとアイスまで食べさせられ、寒空の下で冷える身体をさんざんに引き回されて。

しかも帰り道の公園の公衆トイレでは、あろうことかその目の前は低学年の子たちボール遊びのふりをして待ち構えており、佐都子がトイレに入れないようにしていた。途中のコンビニでも、スーパーも同じ。挙句トイレ自体を使わせないなんてことまでしてきた。もちろんその辺の茂みには犬や猫を散歩させて邪魔することを忘れない。

たった一つのよりどころ、安息の地家のトイレを心の支えに、ふらふらになりながらやっと辿り着いた佐都子を待ちうけていたのは、母親の笑顔。

「今日は、お夕飯は外で食べましょう。すぐに出るから支度してらっしゃいね」

ついに佐都子は、家でのトイレすら禁止されて、おしっこを我慢したままファミレスに連れて行かれることになった。

けれど佐都子はくじけない。たとえ家のトイレすら入ることができなくなっても、このいじめには絶対に屈しない。

(書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: モンスター・ペアレント
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 我慢
CATEGORY: 我慢

DATE: 02/12/2011 21:26:04

BODY:

高野女史の抗議は、3 時間にもわたって続いていた。

時計を見ればすでに 7 時。応接室に詰めた職員達の顔色にも疲労と困惑が濃い。それは私も同じことで、パイプ椅子に張り付いた腰骨がめきめきと嫌な音を立てる。まだやらなければいけない仕事は残っているのだが、いったいいつになればこの牢獄から解放されるのだろう。気付かれないようにそと溜息をつく。

「ねえ、一体どういうことかと聞いてるんですよ！ それをさっきからあなた達は、わけのわからないことばかり言って……こんな人たちが先生だなんて、世も末ね！！ きちんと説明をしてください、説明を！！」

「ええ、ですから、ことの経緯は——」

「ああほらご覧なさい！！ そうやって誤魔化そうする！！ まったくもうっ！！」

とは言え、ただの関係者としてこの席に同席している私など、今もこうして矢面に立たされている学年主任と担任のに比べれば天国のようなものだろう。

感情をたかぶらせてエキサイトが続ける高野女史は、まるで他人の意見に耳を貸す様子がない。意見どころかほとんど口封じのような勢いで、女史の批判は事件当時の担任の対応、学校の態度から始まり現在の学校制度、若者への抗議、は政府への不満に幅広く及んでいた。

受験を来年に控え、そろそろ幅広く視点を持つ必要がある時期だとは言え、この場で現在の政府の弱腰外交と利権をむさぼる政治家を批判する演説をぶちあげられても、こちらとしては頭を下げるばかりである。

「ちょっと！！ 何とか言ったらどうなの！！ だいたいそれが教師の態度ですか！？ 生徒すべてに、平等にチャンスを与えるのが当たり前でしょう！？」

「ええ、はい、それはごもっともですが……」

「だったらどうして言うことがきけないの！！ 子供でも悪いことがあったら謝りますよ！！ このウソつき！！ 税金どろぼう！！」
「はあ……」

私学に税金はあまり関係ない気もする。

マシンガンのような抗議の盾になってくれる担任と学年主任の背中に感謝をしつつ、良くまあ耐えているなあ、と他人事のようと思う。実際、高野女史の言っていることはあまりに滅裂で、真面目に受け取ってしまうと本気で怒鳴り返してしまいそうだった。

……実際のところ、私は問題になった試験當時も別の場所におり、事件についても完全に後になってから知った身であるからおさらである。

「秋穂ちゃんがどれだけ苦しい思いをしたのか、わからないの！？ ええきっと分からないわ！！ 人の心なんかわかりもしないのよ！！ 冷血動物のあなた達は！！」

どちらかといえば、絵にかいたような三角眼鏡の高野女史のほうが失礼ながら爬虫類のようにも見えたりしたが——さておき。

そもその事件——（というほどのことなのか、私にはやや判断しかねる）は、3 日前の6 時間目の授業で起きた。

その時間、3 - A では担任教諭による国語のテスト（担当教科だ）が行われており、高野秋穂を含むクラス28 人全員がそれに取り組んでいた。

しかし、試験開始から15 分ほどで秋穂の様子がやけに落ち着きなくなっているのに気付いて担任が声をかける。

秋穂は大丈夫と答えたものの、数分後にはまたそわそわと身体を揺らし始め、再度担任が具合を聞いた。このやりとりは数回行われ、ついに秋穂が尿意を催していることに担任が気付いてしまう。

異性の、それもまだ若い男性教諭ということで言い出しづらかったのだろう。ようやくそれに気付いた教諭は、秋穂にトイレに行くように勧めるが、秋穂はこれを拒否。理由は回答時間が足りなくなるからというものだった。

それを説得する際にやや押し問答となるも、結果的に秋穂は試験を中座し、教室をあとにトイレに向かう。これが試験開始からおよそ20 分とすこし。

その後、10 分ほどして戻ってきた秋穂は、そのまま試験終了まで回答を続けた。

ことの経緯は以上である。

この対応が何かの問題になるなどとは、担任含め私も学年主任も、まるで思っていなかったのだが——試験の結果発表後、この経緯を知った秋穂の母親である高野女史が、秋穂が不当な扱いを受けたと猛抗議をし、こうして学校にまでやってきて相談会を開くという事態となったのである。

「いいですか！？ ちゃんとお聞きなさい！！ あなた達はね、自分勝手な都合と押しつけがましい偏狭な価値観で、前途ある子どもの将来を傷つけたんですよ！？ 本当にこれがどれほど重大な過失であるのか理解しているの！？」

「ええ、はあ、はい……」

「ウソつき！！ そんなうわべだけ謝ってれば済むって思ってるんでしょう！！ 本当に嘘ばかり！！ ……すでに教育委員会ともお話はさせていただいています。この不当な扱いが、秋穂ちゃんの心をどれだけ傷つけたのかわからないの！？ このろくでなしの人でなし！！」

「ああ、いえいえ、そんなことは決して……なにとぞ、穏便にですな……」

汗だくの学年主任は、もはやなにを言っても無駄と、女史の怒りを鎮めるのに精いっぱい。担任も何か言いたそうな顔はしているものの、女史の前で大人げない対応を取ることはなかった。狭量な私にはとてもできそうにない忍耐で、見習わなければならない。

しかし、実際のところ二人とも内心、気が気ではないに違いあるまい。

そう、女史の隣で、うつむきソファに腰掛ける——ボブカットの少女。件の高見秋穂である。

くせのない黒髪、整った顔立ち、化粧っ気もないおとなしめの外見は、昨今の流行とはかけ離れた、清楚で落ち着いた雰囲気、同性の私から見ても好感が持てる。優等生然と知性を感じさせる切れ長のまなじりは、しかし今は困惑と苦悩に溢れて、落ち着きなく絨毯を行き来していた。

いやはや、それに比べて隣でヒートアップを続ける高野女史ときたら、ビヤダルを二つ三つ重ねた上に布団をかぶせたような、実に恰幅の良い格好で。編み目タイツの胸元や脚はまるでお中元のボンレスハム。よくまあ似なくて良かったものだ、当の高野女史以外はそう思うだろう。

実際、秋穂は礼儀正しく、実に真面目で優秀だった。

何事にも興味を持ち、積極的に取り組み、気配りもする。内申にも非の付けどころがなく、と言って部活や同級生との交流を避けるでもない。実に絵に描いたような優等生なのである。

それだけに今回のような問題が起こるとは、誰も思っていなかったのだ。

「ねえ、聞いてるのあなた達！！ 返事をなさい！！」

女史の主張はこうだ。

試験において、秋穂はもともと中座するつもりなどなく、試験時間終了まで回答を続ける意思があった。それを、担任がむりやり廊下に連れ出して、10分以上も回答時間を浪費させたのだという。それによって秋穂は試験を完投できなかった。これは教師によってわが子の成績が不当に貶められた行為である——云々。

事によると秋穂に対して特別視——言葉を飾らなければ、秋穂に対して邪な思いを抱いて、弱みを握ろうとした変態の卑劣漢ではないか。言えきとそうに決まってる！！ そんな誹謗中傷まで、女史の口からは飛び出した。

誤解のないよう言っておけば、試験での秋穂の点数は86点。クラスの平均点である62点から見てもかなり上であり、空欄だった回答欄も二か所だけ。これでいったいどう不当に貶められているのかと疑問に思うが、高野女史いわく、秋穂なら満点が取れて当たり前なのだという。

つまり担任が秋穂を中座させ、10分以上、試験時間を削られ、さらには精神的苦痛を与えられたことで、満足な実力を発揮できなかった——それが女史の言い分であるらしい。

実にむちゃくちゃな主張であるが、女史の荒唐無稽な論舌はこれだけにとどまらないのである。

「差別よ、これは差別です！！ だいたい教師が、子どもの意志を尊重しないなんてことがありますか！？ 自分勝手な正論を押しつける教育なんて、前時代的もいいところよ！！ 子どもの成長は自由にさせるのが一番でしょう！！ それを——あんな破

廉恥な！！

秋穂ちゃんは、試験を最後まで受けるつもりだったんです！！ ——いいですか、もう一回言いますけどね！！ 女の子が、お手洗いなんて行くはずがないでしょう！？」

そう。

——女の子はトイレなんか行かない。

冗談も誇張も抜きに、高野女史は、そう主張しているのである。

「はあ、ですが、その——」

「ええ、よそ様の子はどうか知りませんがね。失礼ながら先生方もたくさんの生徒さんを見てらっしゃいますから、中には臍のなっていない——こんな、誰が使ったかもわからないような不衛生なお手洗いを、平気で使うような子もいるのでしょうかねえ。……ああいやだ。

ですけど、普通、女の子が人前でお手洗いに立つなんて、そんな非常識なことがありますか！？」

いやはや、最初にそれを聞いた時は正直、正気を疑った。馬鹿かとアホかと。そのまま『は？ あんた何言ってるんだ』と、本気で口に出しかけてしまった。

それは担任も学年主任も同じ気分であるらしい。先程から話題がこの件になるたび、学年主任のほうを困ったように見ている。主任もそれは分かっているようで、困惑は見せながらも、しかし女史の圧倒的安剣幕に圧されて反論はできずにいた。

だがもっとかわいそうなのは、当の秋穂だ。

当事者としてこの席に同室している彼女は、エキサイトが続ける母親の隣で、今もおしきりに腰を揺すって、息も荒く顔も赤く、表情を強張らせている。

すでに両手は人目とはばからずスカートの間に差し込まれ、下腹部をきつく握りしめている。

ただでさえ人一倍他人の視線を気にする年頃だ。その羞恥はいかばかりだろう。時折身体を強張らせ、『んっ……』と短く息を詰めるたび、閉じ合わされた膝の間でスカートがぎゅうぎゅうと握り締められる。

秋穂は切羽詰まった表情で額に薄く汗を浮かべ、しきりに母親のほうを気にしているのだが——高野女史はそれを知ってか知らずか、まるで秋穂のことを顧みようとはしなかった。

もじもじと小さく揺すられた腰が、ソファの上で揺れ、爪先が絨毯をぐりぐりと擦る。

速く浅い吐息は、少しでも油断した瞬間に、少女の崩壊が訪れることをはっきりと知らせていた。

「まあ、じゃああなた達は秋穂ちゃんが悪いっていうの！？」

「い、いえっ、決してそのような事は——」

「嘘つき！！ いま言ったじゃないの！！ だからあなた達は信用ならないのよ！！ そうやって適当にたらい回しにすればいいって思ってるんでしょう！！ いい歳した大人が自分のことも自分でできないで他人を頼るなんて！！」

実の母親のくだらない見栄で、トイレにもいかないお嬢様に仕立て上げられてしまった少女は、足の付け根に懸命に指を食い込

ませ、激しく腰をよじって、腿を擦り合わせている。

しかも、部屋の半分は成人男性だ。その心中はいかばかりか。

私とて、流石に見過ごせない。途中何度か、休憩を申し出てみようとした。しかしそのたびに女史の『結構です！！』『逃げるつもりなの！！』『私が諦めて帰るまで適当に相手してればいいと思ってるのね！！』と散々な言われよう。

秋穂の様子がおかしいことを、遠まわしに指摘して、少し休憩をと言ってみても、『んまあ呆れた！！ あなたまで秋穂ちゃんを馬鹿にするのね！？ もう一体どうなってるの、この学校は！？』と今にも噛みつかれそうな勢いで迫られたため、あえなく断念せざるを得なかった。

今まさに迫る、少女の危機をまるで無視して叫び続けるモンスター・ペアレントの罵声は、なお途切れることはなかった。

(書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: お嬢様ごっこ。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 我慢

CATEGORY: 我慢

DATE: 02/12/2011 21:35:54

BODY:

テーブルの上のペットボトルを取り、飲み口に直接口をつけてお茶を喉奥に流し込む。

「んく…んくっ、んくっ……」

さかさまになったペットボトルの中で、ごぼっと泡立った水面が揺れる。

これが初めてってわけでもないけど、なにしろ全部で2リットルもある。ジュースみたいに甘くもないし、炭酸がきいてるわけでもない、ただの苦いお茶だ。普段のボクなら、絶対に飲んだりしないと思う。

「んく…んく……つくん。ぷはっ」

息継ぎをした瞬間、背中をぞわぞわあっと小さな震えが這い上がってくる。

思わず口元を離しそうになり、ボクは少しだけむせてしまった。けほけほと口を拭い、それでも頑張ってもう一度、ペットボトルに口を付けた。

「んっ……ぷは……」

最後のひとくちを飲み下して、大きく深呼吸。残りの1リットルを、なんとかおなかの中に飲み込んだ。

「飲んじゃった……」

制服のブラウスの下で、おなかがぱんぱんに張って苦しい。

あらためて、空になったペットボトルを見下ろしてみれば、ちょっと信じられないくらいの量。その中身全部が、ボクのお腹の中に注ぎ込まれているのだ。少しくらい苦しくたって当然だろう。

……けれど、それもすぐに楽になることをボクは知っている。

このお茶はある健康食品メーカーが売っている看板商品で、身体への水分吸収を助け、老廃物をそとに出す働きがあることで有名だった。美容のために最適と、ネットの掲示板などでもよく話題にされている。

その効果は強力で、水を飲んだ時なんかとは段違いに速い。

だから胃のなかをたばたぼにしている水分はあっというまに吸収され——すぐに、ボクのおなかの、別の場所をたばたぼにしようのだ。

（ん……っ）

ぶる、と腰が震える。

お昼休みの前から、ボクはずっと、トイレを我慢している。6時間目の最後のほうは、我慢がかなりきつくなってきて、椅子の上でぎゅっとあそこを押さえてしまったくらいだ。

そのうえで、こんなお茶を2リットルも飲んでしまったのだから——もっともっと、オシッコがしたくなるのは間違いがない。

（はうっ……♪）

そおっと触れてみたおなかは、もうはちきれそうにパンパンに張り詰めていて。同時に脚の付け根にもじいんっとイケナイ感覚が電流のように走る。

「ん、んあ…う……っ」

自分でも信じられないくらい、いやらしい、女の子みたいなえっちな声が出てしまう。

ゆっくりと視線を隣に向ければ、ロッカー横の鏡に、見慣れた姿が映っていた。

うなじで切り揃えたちょっと癖の強い髪、太めの眉。部活のせいで日焼けした肌。力を入れて睨めば、大抵の男子はビビって逃

げてしまう目つき。自分で言うのもなんだけど、胸もぺたんこで、腰回りだってすかすかだ。

学校を上げて制服を着るようになって、ようやく男の子に間違われることは少なくなったけれど、いまでもジャージ姿なら男子トイレに入っても追い出されない自信がある。……全然いいことじゃないけれど。

普段からオトコ女なんてからかわれているボク——工藤千尋が、ほんの少しだけ、“おんなのご”になれる瞬間。

それがこの、“お嬢様ごっこ”をしている時だ。

「……あやっ、もうこんな時間っ？ 急がなきゃっ」

ふと見れば、もう時計は4時を回っていた。急いで帰らないとすぐに真っ暗になってしまう。

ボクは鞆を手に、部室の更衣室を後にした。廊下にはひんやりとしていて、ひと折り分短くしたスカートから染み込んできた寒さがきゅうんとおなかの中を刺激する。

ボクは震えだしてしまいそうになる膝を抑えつけ、慎重に、きゅうっと閉じ合わせた。下腹部を圧迫するおしっこを意識しながら、歩幅も小さく、ゆっくりゆっくり、昇降口までを歩いてゆく。

いつもは2段飛ばしで駆け降りている階段も、今は油断できない。爪先を意識しながらそろりそろりと脚を下ろすたび、じんっ、と身体の奥にイケナイ感覚が響いてくる。

「ん……ふ……」

小さく息をこぼして、ぶるる、と身体を揺する。

ぱんぱんに膨らんだおなかをそっと撫でるボクの頬は、かあっと熱くなっていた。

校門を抜けて表通りへと出ると、いよいよ本番。いつもは背中に背負う鞆を、おしとやかに両手で持ち、身体の前を隠すようにして——ボクの“お嬢様ごっこ”が始まる。

『……あ、あっ……っ、ど、どうしようっ……ほ、本当に間に合わなくなりそう……っ』

いつも通りの通学路のなか、ボクは頭の中で『下校途中、お手洗いに行きたくなくなってしまったお嬢様』になりきるのだ。

とたんに周囲には雑踏が満ち、行き交う人々の視線が突き刺さる。殺風景な通学路には、大勢の通りすがりの人達が、じっとボクを見つめている。

今のボクは、歩いているだけでまわりの人たちの目を引くような、そんな素敵で可憐なお嬢様なのだ。

だから万が一にでも、ボクがオシッコを我慢していることに気付かれたりなんかしちゃいけない。

『……だ、だめ……っ。きちんとしなくちゃ……お、お手洗いにいきたいなんて気付かれたら、わたくし……もう、恥ずかしくて表を歩けませんわ……』

頭の中の想像上のボクは、すっかり深窓のお嬢様になり切っている。どうしようもなく恥かしがり屋で、男の子の手を握るところか話したことすらしないような筋金入りの箱入りのお嬢様。

今日は送り迎えの車がちょうど故障していて、どうしても歩いて帰らなくてははいけなくなった。——そんな設定。

人前でトイレに行くどころか身じろぎするのも躊躇うようなお嬢様のボクは、学校でもほとんどお手洗いに立つことはない。たとえどうしても我慢できなくなっても、気づかれぬようにこっそりと、慎み深く席を立つようにする。

それでもいつもは取り乱したりしないんだけど、今日は特別な理由で——（細かいことは決めていないけど、とにかくタイミングが合わなくて）——お手洗いを済ますことができなかったのだ。

『だ、だめよ、ちゃんと、我慢しなければ……っ』

当たり前だけれど、通学路の途中にはいくつも商店街があって沢山、たくさんのお店が並んでいる。コンビニだって2つあって、その気になれば簡単にトイレが借りられる。でも、世間知らずのお嬢様なボクは、そんなところにおトイレがあるなんて思えない。

うん——もし知っていたとしても、そんなところのおトイレを借りるような、みっともなくしてはしたくない真似は、“お嬢様”のほうのボクには絶対にできないのだ。

『そんなこと、……できるわけありませんわ……いい歳して、お、お手洗いのしつけも出来ていないって、思われてしまいますもの……』

“おトイレのしつけ”。ふと浮かんだこのフレーズが気に入って、ボクは想像を膨らませる。

お嬢様のおトイレのしつけは、とても厳しくて、人前でトイレに行きたいそぶりを見せることすら許されないのだ。たとえどんなに切羽詰まっても、おなかがおしっこでぱんぱんに膨らんでも、優雅に、微笑みながら『少し、失礼いたしますわ』そう言って、ゆっくりと席を立つ。

いや——違う。本当のお嬢様は、そもそも人前で勝手に席を立つような無礼なこととはしない。トイレは自分ひとりのときだけにしっかりと済ませておくもので、誰かと話していたり、用事があるときには後回しにすべきことなのだ。だからこんなに我慢してしまう前に、きちんとトイレに行っておくことこそが当たり前。それができないのは、お嬢様失格の、とても恥ずかしいことなのだ。

『ふああ……んっ……』

小さな頃からそうやって躰けられてきたはずのお嬢様のボクは、けれど今、限界寸前までトイレを我慢してしまっている。人前で気付かれてしまいかねないこの状況こそ、もうとっても恥ずかしい事態なのだ。

膨らむ想像とともに胸がどきどきと高鳴る。もう一人のボクの状況に、自然と頭に熱が籠る。

それは同時に、お嬢様のボクが感じている、恥ずかしい気持ちなのだ。

交差点の横断歩道に差し掛かって、赤信号に従いボクは足を止めた。

『あ、あっ……い、急いでいますのにっ……』

焦る気持ちを表現するように、ボクはそおと腰をくねらせる。硬く張りつめたおなかに、脚の付け根にじいんっ、と甘い痺れが走り、思わず息がこぼれる。

もちろん、たったそれだけの動きで誰かが見ているわけもない。

横断歩道には二人くらいしか人がいないし、周りの人はじっと信号を待っているだけだ。

でも、想像の中では違う。びくびくと、尿意に負けて腰を揺すってしまったお嬢様のボクは、そこで恥ずかしい声を上げてしまうのだ。それを見て、何人も何人もの人が、怪訝そうな顔をして、お嬢様のボクを見る。

『いやあ、み、見ないでえ……っ』

じろじろと無遠慮に見つめられて、顔から火を吹きそうになって、お嬢様のボクは俯く。

横断歩道の前で足踏みを始めてしまい、信号待ちの人たち全員に、オシッコに行きたいんだと気付かれてしまった。そのことにお嬢様のボクは、死にそうなくらいに恥かしさを覚えている。

『ち、違いますっ……お、お手洗いなんかじゃ……っないんです……あ、だめ、え……っ』

気分を盛り上げるように、小刻みに爪先を動かしてみる。

じんっ、じいんっ、と響くおしっここの波が、ボクのおなかの中に溜まった液体をたぶんたぶんと揺らす。

「ん……っ」

思わず、小さく溜息が出た。スパッツを内側から押し上げるように、おなかが外にせり出し始めている。あんなに飲んだ健康茶が、はやくもその効果を発揮し出しているみたいだった。

信号が変わり、横断歩道で待っていた人たちが次々に歩き出す。

けれどボクは、そのままそこで、誰かを待つふりをして立ち続けた。

『あ、あっ、だめ、え……おさまってえ……っ』

ボクの想像の中でお嬢様のボクはいま、猛烈な尿意の波に抗って、一步も歩けないような状態なのだ。たまたらずその場にしゃがみ込んでしまいそうになるのを、懸命にこらえ続けている。

足を擦り合わせて、腰をくねらせて、通りすがりの人からじろじろと見られながら。けれどももうすっかり余裕をなくしてしまって、鞆の下でギュッとスカートを掴んでしまう。

現実のボクも、そとおなかをさする。まるでタイヤみたいに硬い感触に触れると、きゅうんっと足の付け根に甘い痺れが走る。ぞわぞわ押し寄せてくる波に、思わず何度も、いやらしい声を漏らしてしまう。

『そ、そんな……だ、だめえ……っ』

ちか、ちかと点滅する青信号。

お嬢様のボクは、ついに横断歩道を渡り損ねてしまったのだ。

(そうだ……っ♪)

そしてボクはふと思い付き、想像の中で、この赤信号は突然、一度切り替わると10分は変わらないということにしてみた。すっかり我慢の限界の状況で、10分なんて待ってられるわけがない。ここをまっすぐ帰るのが家への——“お屋敷”への近道なのだが、お嬢様のボクはそこをもう通れなくなってしまったのだ。

もちろん実際の交差点はたったの2車線。ほとんど車通りもなくて、思い切って信号無視をすれば5秒で渡ってしまえる。でも、お嬢様のボクにそんな事は出来るワケがない。

『うそ……そんなの意地悪よ……っ』

理不尽な事態にも、しかしお嬢様はくじけない。

後ろ髪をひかれる思いで、横断歩道を渡るのをあきらめ、別の回り道を探すのだ。

(えっと……)

おなかにじんじんと響く尿意を感じながら、ボクは次の舞台を探す。……と言っても、だいたい候補は決まっていた。横断歩道から歩道沿いを歩いて、途中でわざとふらふらと脇道を曲がってみたりしながら、ボクは近くの公園にだとりつく。

広い割にジャングルジムと砂場くらいしか遊具も無くて、人気のないこの公園は、ほとんどの人が素通りしてゆく。

『はあはあ……っ、あ、あともう少しよ……！！』

公園の入り口でそっと腰を揺すり、ボクは“お嬢様”の演技を再開した。

目指す場所は公園の端っこにある公衆トイレだ。わざと公園の入り口も遠い場所を選び、意図してゆっくりと、そこまでの道のりを歩いてゆく。お嬢様のボクは足元がもうふらふらで、急ぐこともできないということにして。

ちょうど周りの視線も無いので、ボクはわざともじもじと脚を擦り合わせ、スパッツの上からそっとおなかを撫でてみる。じいんっ、とおなかの底に走る甘い痺れに、思わずふうっと息がこぼれた。

『お、おトイレ……おトイレ、早く……っも、もう、お手洗いなら、どこでも……いいからあ……っ』

お嬢様のボクは渡れない横断歩道を諦めて、なんとかオシッコを我慢しながらここまでやってきた。本当なら、箱入り娘のお嬢様であるボクがこんな、誰が使ったかも分からないようなトイレを使うのは絶対に避けたいことなのだ。

そもそも人前でトイレに駆け込むなんてはしたないことなのだけど、けれど今はそんな建前も忘れてしまうくらい、お嬢様のボクは我慢の限界なのだ。

『あ、あとちょっと、あそこまで……あそこまで我慢すれば、……っ』

行く先に見える公衆トイレに向かいながら、何度も周りを見回してみる。

もちろん誰も居ないんだけど、そこにはオシッコを我慢してはしたない格好をしているお嬢様のボクに、興味しんしんな人たちがいる、ということにする。

『ああっ……駄目、駄目……みないで、見ないでくださいっ……』

顔を赤くしながら、お嬢様のボクは何度も立ち止まり、しゃがみ込みそうになってしまうのをこらえて、それでもなんとか公衆トイレまで到達する。

おぼつかない足取りで、婦人用トイレの入り口をくぐり——そのまま真っすぐ個室へと向かう。

『ま、間に合った……っ！！』

けれど。

開いた個室の鍵を見て、お嬢さまのボクは、絶望するのだ。

『そ、そんなぁ……っ』

普通に空いていたトイレの中の個室を『故障中』ということにする。

もちろん他にも個室はあるけど、そっちも壊れているか、存在しないことにした。

つまり、お嬢様のボクはここではオシッコができないのだ。

「んんっ……」

実際に、ここまで来てやめようとする、かなり強い尿意がやってきた。現実のボクもつい催してしまい、スパッツの上から手を挟みこむように、あそこを押さえこんでしまう。

すると、想像の中でお嬢様のボクは、ドレスのスカートをはしたないぐらいにぎゅうううっ、と絞り上げていることになってしまう。

真っ白でさらさらの、綺麗なドレスを——無残なくらいぐちゃぐちゃに握り締めて、ぶるぶると腰を震わせる、お嬢様なボク。

「あ、ああ、あっ……だめえ、でちゃう……っ」

想像の中のお嬢様になりきって、ボクも悲鳴を上げてみる。

ぞわあっと背中を走り抜ける尿意の波が、じんじんと腰を熱くした。

『そんな……嘘よぉ……っ』

ふと思いついて、想像の中で、ボクは個室のドアに張られた『故障中』の文字の下に、さらに意地悪な事を付け足してみることにした。

——『お急ぎの方は、紳士用のトイレをご利用ください』。

『そ、そんなの、できるわけないじゃない……っ！！』

まあ、普段のボクなら、——オモラシしちゃうくらい切羽詰まればえいっと入ってしまうだろうけど。男の子と手を握ったこともない——いやまあ、現実のボクだってそんな経験ほとんどないけど——お嬢様のボクには、そんな選択肢はあるワケない。絶対にあり得ない決断だ。

実はこの公衆トイレには紳士用と婦人用のふたつのトイレの間に、もうひとつ。車椅子用のトイレもあったりするんだけど、そこも想像の中で存在していないことにした。

『だ、だめよ……我慢しなくちゃ……』

もう、限界も限界、いつ漏らしてしまっても分からないくらいの状況で、がくがくと腰を震わせながらも——なんとか、必死に波を乗り越えて。お嬢様のボクは、我慢を持ち直し、次のトイレまで向かう決心をする。

そう。まだまだ、こんなものじゃ終わらない。

ボクが本当に限界になるまで——お嬢様のボクの、永久我慢は続くのだ。

（書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 今後の活動について
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: その他
CATEGORY: その他

DATE: 03/07/2011 23:16:30

BODY:

※） 3 / 1 4 で締め切りました。
今後の参考にさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

<hr size="1" />

ふとイベントのサイトを眺めていて、参加するのもアリかなと思った。

同人誌（むろん小説本）とか出したら欲しい人いるんだろうか。

<!-- PC 用投票フォーム No.1 -->

<SCRIPT type="text/javascript" charset="shift_jis"
src="http://vote1.fc2.com/poll.php?uid=2076743&mode=js&no=1"></SCRIPT>

<NOSCRIPT>

FC2 投票

</NOSCRIPT>

<div style="text-align:center;">

無料<a href="http://analyzer.fc2.com"
target="_blank">アクセス解析

</div>

<!-- PC 用投票フォーム No.1 END -->

3/8 0:36 設定ミス修正

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 小公女サラ【プリンセス転落編】

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/01/2011 23:11:52

BODY:

ある趣味@ J B B S の往年の名スレよりネタを拝借。

<hr size="1" />

重く硬いドアは、何度引いても開くことはなかった。

力なくドアを叩いていたサラの手は、縋りつくように木肌に指先を立てる。いまにもへたり込んでしまいそうに力を失った脚を小さく震わせて、サラは部屋の中へと振り返った。

「ああ…っ、…おねがい、ゆ、許して……クリス……」

まなじりを下げ、両手をエプロンの上からぎゅっと挟み込むようにして、身悶えをしながら、かつてのクラスメイトに赦しを請う。

「あら、なにを許すのかしら。まるで私があなたにいけないことをしているみたいだわ。ねえ？」

白々しく空とぼけてみせるクリスに、後ろのエリカとシャーロットがくすくすと笑う。

「それにサラ？ あなたはもう公女じゃないのよ。メイドならメイドらしく、言葉づかいに気をつけなさい。そもそも使用人風情が、そんな風に親しげに私に話しかけることが無礼なのよ？」

「っ……」

ほんの数日前まで、同じように授業を受けていたクラスメイトを、無碍に扱うクリスの言葉に、サラは衝撃を受ける。

サラとクリスは取り立てて仲が良かったという訳ではない。むしろあの大富豪クリフォード卿の一人娘として学院でも注目を集めていたサラを、クリスが快く思っていなかったことは確かだろう。

けれど、ここまでされるほど憎まれているとは、お人好しで優等生なサラには想像もつかないことだった。

「で、でも……」

「でもないわ！ クリスお嬢様の言ってることが聞こえないの！？」

「そうよ。余計なおしゃべりはしないで、早く掃除を始めなさい！！」

抗弁しようとしたサラを遮って、シャーロット。

さらにエリカが地面に転がっていたバケツとモップをサラに向けて投げつける。

クリスの取り巻きである彼女達は、より直接的にサラをいたぶることにためらいを持たなかった。先週まで公女ともてはやされていたサラが、汚れたメイド服を着せられて哀れに身体をよじっているのが面白くて仕方がないのだろう。

「あ、あっ……」

あまりの仕打ちに俯いてぎゅっとエプロンの前を押さえ、床に座り込んでしまうサラ。それでもなお足りず、少女の脚はスカートの下ですりすりと擦り合わされ、腰は強く左右に揺すられる。

「や、やめて…！！ ねえ、お願いっ、クリス……意地悪しないで……」

「もの分かりの悪い子ねえ。あなたはもうプリンセスなんかじゃないのよ？」

クリスに強く床を踏みならして恫喝され、サラは体を縮こまらせる。こんな横暴にへこたれるサラではないはずなのだが、この数日、朝から晩まで働き通しで疲れた身体はすっかり反抗する気力を失っていた。

なにより、間断なく下腹部に込み上げてくる熱い衝動を堪えながらでは、強気に出ることもできない。メイドに落ちぶれた公女は、顔を赤くし震える声で、クリスに許しを請う。

「お、お願い……お願いします、も、もう、私……っ」

情けなさに込み上げてくる涙をこらえながら、サラは恥をかなぐり捨てて口を開いた。

「クリス様……ど、どうか、お手洗いに行かせてください……っ」

羞恥に染まった頬が引きつり、スカートはエプロンの上からくしゃくしゃに握り締められる。女の子の大事なところをぎゅっと押さえ、サラははああと息を荒げて身悶えを繰り返した。

「ふうん……お手洗い？ メイドのくせに、仕事もしないでわがままばかり言うのね、サラ。いつまでも公女のつもりじゃ困るのよ」

「そうよ。ちゃんと仕事もできないくせに、さぼることばかり考えてるんだから」

「そんなの後にして、早くクリスお嬢様のお部屋を掃除しなさい」

「そ、そんな……っ、お願い……もう、本当に我慢できないの……朝から、ずっとお手洗いに行かせてもらえなくて……」

そう言っている間にも、サラはみっともなくねくねと腰を揺すってしまう。両手は脚の付け根の出口を押さえこむのに精いっぱい、片時もそこを離れる余裕なんてない。

少しでも気を抜けば溢れだしてしまいそうな、恥ずかしい衝動を懸命に堪えるサラに、クリス達は無慈悲な言葉をぶつける。

「ふふっ……」

「……クリス？」

はあはあと息を荒げ、惨めにオシッコ我慢の仕草を続けるサラに、クリスは更に何かを思いついたのか、意地の悪い笑みを覗かせる。

「あらそう。でもサラ、あなたはメイドなんだから、手が汚れるくらい当たり前でしょう？ そのたびに『お手洗い』なんかに行ったりしたら、仕事にならないじゃないの」

「えっ？」

一瞬、意味が分からずにぼかんと口を開けてしまうサラを余所に、クリスはエリカとシャーロットに目配せをする。

「そうでしょう？ そんなに『お手洗い』に行きたいなんて、よっぽど綺麗好きなのねえ、サラってば」

「そうね！ もう公女様でもなんでもないので、メイドが手が汚れたくらいで何を言ってるのかしら」

「ええ。本当よ！ ほら、早く立って！！」

素早くクリスの意図を察した二人は、サラの腕を無理やり掴んで立ちあがらせると、その手にモップとバケツを押し付けた。

「あ、ああっ……だめえ……」

しかし、左右の手で大事なところを握り締めているサラがそんなものを受け取ることができるはずもなく、バケツは床に転がり、モップもまともに握ることもできない。迫りくる尿意にきちんと立っていることすらできず、その場で太腿を強く擦り合わせてしまうサラ。

「ち、違うの……そ、そうじゃないの……っ」

「ほら！ ちゃんとしなさい！！ サボろうたってそうはいかないわよ！」

「はあう……っ、あ、あっあ……」

「うふふ。いいザマだわ！！ 言っておくけど、あたしの部屋を汚したりなんかしたらどうなるか分かってるわよね？」

もとはサラの部屋だった寄宿舎の特等室で、惨めにスカートを握り締めるサラを見下ろして、クリスはいんまりと微笑む。コーネリア女学院で一番上等なこの部屋は、公女の転落と共に、クリスのものとなっていた。

それだけではない。いまやこの学院にはサラの持ち物は何一つ残っていなかった。お気に入りのレターセットも、何着もあったドレスも、大きな勉強机も、百科事典も全て取り上げられて、サラに与えられているのは粗末な屋根裏部屋と、古びて綻びだらけの使用人服だけだ。

自分の惨めさを噛み締め、サラは高まる尿意に耐えきれず、とうとうモップの柄を脚の付け根に擦りつける恥ずかしい格好を始めてしまう。

エプロンをくしゃくしゃに握り、もじもじと腰を揺すり、バタバタと足踏みを繰り返しては、はあはあと息をせき、顔を真っ赤にするサラ。みっともないオシッコ我慢のダンスに、クリス達はくすくすと笑いあった。

「クリス……どうして、こんな……意地悪をしないで……おねがい……」

「ふふ。どうしてですって？ 決まってるでしょ。あなたがいつまでお嬢様ぶった顔でいられるか、見てみただけよ」

「ああっ、だめ、許して……わたし、もう…本当に……」

握ったモップの柄を、力いっぱい脚の付け根に食い込ませて、必死のサラは喉を詰まらせる。

「もう駄目、もう本当に、オシッコが……我慢できないの……！！ も、漏れちゃう……！！」

声を振り絞って叫ぶサラの内腿を、つうと細い雫が伝ってゆく。

我慢に我慢を重ねた女の子の大事な場所は、すでに耐えきれない尿意を熱くにじませ、下着に大きな染みをつくっているのだ。それを目ざとく見つけ、エリカとシャーロットが囁き合う。。

「メイドのくせに生意気言ってるんじゃないわよ、さっきからなにもしてないじゃない。トイレは掃除が終わってからよ！！」

「そうよ、漏らすなら自分の部屋にしないよね。」

「……ひ、酷いわ……！！」

サラは、自分の味方がもはやどこにもいないことを思い知っていた。

トイレに行くためには、クリスの言うとおりのこの部屋の掃除を終わらせるしかないのだ。サラは唇を噛んで懸命にモップを握り、よろよろと床を拭き始める。

わずかに身体を動かすだけで腰はヒクつき、膝はきつく交差され、ぐりぐりと前後左右によじられるばかり。

内腿はぎゅうと閉じられたままで、覚束ない足取りではモップを支えに立っているのがやっとだった。

「はあ、はあ……はあ……つ……あう……つく……つ」

か細い声を上げながら、きつく目を閉じて襲い来る尿意の波をこらえながら、サラはモップに縋りつく。もはや尿意は限界寸前。掃除どころではなく、脚の付け根に挟んだ木製の柄に女の子の大事なところを擦りつけながら、サラは部屋の中央を行ったり来たりするばかりだった。

「ほら、手が動いてないわよ！！ そんなんじやいつまでたっても終わらないじゃない」

「ああっ！！ だめ、だめ、やめてえ！！」

シャーロットがモップを掴み、無理やりにぐいぐいと動かそうとする。不意の刺激に堪え切れず、サラの出口はぷしゅと飛沫を噴き上げ、下着越しにしゅるると恥ずかしい液体を溢れさせた。スカートをすり抜け、脚の付け根に食い込ませたエプロンまで、じわじわと染みが広がってゆく。

黄色い水流は、モップの柄を伝って床にこぼれ、さらにぽた、ぽた、ぱちゃぱちゃと、サラの足元へ飛び散ってゆく。

「いやあ……つ、だめ、出ちゃだめ、出ないでえ……！！」

誤魔化しようのない『オモラシ』に、涙を浮かべながらふるふると首を振るサラ。モップが濡れた床を擦り、女の子の匂いを強く広げてゆく。

ずっとずっと我慢し続けたせいか、サラのオシッコは色も匂いも強く、エプロンに広がる染みまでもうっすらと黄色く見えるほどだった。

「あ、あっあ、あ……あ……」

じゅじゅう、じゅううっ、しゅるるる……

脚の付け根を突き抜ける水流の解放感が、耐えに耐え続けていた公女のプライドを打ち崩した。もはやおチビりで済む筈もなく、ぱんぱんに膨らんでいた下腹部奥の水風船が弾けるように、サラの足元へ水流が溢れだす。

サラ自身が身体の中から噴き出させる恥ずかしい熱湯を吸って、スカートがびちゃびちゃと足に張りつき、お尻を熱く包み込んでゆく。

「はあああ……」

羞恥や後悔よりも先に、我慢の果ての猛烈な解放感がサラの唇を震わせていた。自分の姿も忘れ、少女はうっとりとした表情

まで浮かべて熱い吐息をこぼす。

本当の勢いで始まってしまったオシッコは、一着しかない使用人服を台無しにしてなお、まったく勢いを衰えさせなかった。

ぶしゅううう……ぢよろろろろ……

みるみるうちに足元の床には水たまりが広がり、拭いきれない量のオシッコはモップすらも水浸しにしてゆく。

「はあ……っ」

ぱちやぱちや……ちよろろっ……ちよろろ……

たっぷり1分以上もかけ、すっかりおなかの中を空にするまでオシッコを出しきって、サラはぶるつと背中を震わせた。

そんなサラに向けて、クリスが悪辣な笑みを覗かせる。

「あらあら、とうとうお漏らしあそばされたのね、公女様」

「……っ！！」

一気に現実に戻されたサラに、クリスは容赦なく笑顔を向け、嫌そうに足元の恥ずかしい水たまりを覗き込んだ。

「すごい量ね。恥ずかしくないの？ こんなに我慢して。それに私のお部屋でオモラシするなんて、よっぽど行儀がなっていないのね。公女様はトイレのしつけもできていないのかしら」

「そ、そんな……」

理不尽な言いがかりに、しかしサラは言い返すことはできなかった。

下半身をずぶ濡れにしたオモラシの感触が、少女の心にわずかに残っていた、公女としての最後のプライドまでをも奪い去ってゆく。

目に涙を浮かべ、俯いてしまったサラを、エリカとシャーロットの囁し声が追い立ててゆく。

「みっともないわねえ。これで本当に公女様なの？」

「本当よ。オモラシ公女さま。あんたなんか一日中濡れたお漏らしパンツのままでいるのがお似合いよ」

「ひ、ひどいわ……そんな、っ、ぜ、全部、あなたたちが……ひっく……」

心ない言葉に、ついにサラは泣き出してしまう。嗚咽を上げながらへたり込んでしまったサラを見て、クリスはここぞとばかりに元公女の心をえぐってゆく。

「ああ、公女様。どんなときだって泣いたりしないんじゃないかったの？ ……ふふ。あなたのお父様に見せてあげたいわね、今のそのみっともない格好。うふふふ」

「……………っ」

悔しさとみっともなさ、涙が次々と頬を伝ってゆく。あれだけ沢山のオシッコを出してしまってもなお、少女の涙は止まらなかった。声を上げて泣き叫ぶことだけは必死に堪えて、サラはオシッコに濡れた手で何度も頬を擦る。

びしょ濡れのスカートと使用人服で、自分の漏らしたオシッコの水たまりの中央に座り込むサラに、クリスはびしゃりと言い切った。

「さあ、いい加減に片づけてちょうだい。もちろん、あなたが私の部屋でお漏らしをしたことはマチルダ先生に言いつけてあげるわ」

「……そんな……や、やめて、クリスっ！！」

サラは声を張り上げてしまう。どんな理不尽な理由があったとしても、クリスの部屋でサラがはしたなくもオモラシをしてしまったことは事実なのだ。マチルダ先生は激怒して更なる罰を与えるに違いない。

いくら弁明しても無駄だろう。サラの味方はこの学院のどこにもいないのだ。

「お願いクリス、それだけは、それだけは勘弁して……！！」

「クリスじゃない。クリスお嬢様よ」

縋りつこうとしたサラを、エリカが突き飛ばす。無様に倒れ伏すサラを、シャーロットは汚いものでも見るように見下ろした。

「……うふふ。どうせロクに着替えもないでしょ。なんでしたら、わたくしの姪のオムツを貸して差し上げてもよくってよ、オモラシ公女様？」

次々に投げつけられる罵倒の言葉に、サラはただ、徐々に冷えてゆくオモラシの水たまりの中で、涙を流すことしかできなかった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 小公女サラ【馬小屋バケツ編】

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/01/2011 23:13:12

BODY:

ある趣味@ J B B S の往年の名スレよりネタを拝借。

<hr size="1" />

「まったくだらしない娘ね。……よりもよって学院の玄関でオモロシなんて。サラさん、あなたは自分のしたことが分かっているんですか！！」

「で、でも、先生……」

「口答えを許した覚えはありませんよ！！」

鋭く叱責され、サラは思わず身体をすくめてしまう。ひゅん、と空を切る鞭の音を聞くだけで、サラの理不尽に抗おうとする心はあっという間にしぼんでしまうのだ。

そこにはかつて、歴史あるコーネリア女学院で持て囃されていた公女の面影は無い。

「一体どういう躰をされてきたのかしら。お手洗いも満足に済ませられないなんて……！！」

「……………」

マチルダ先生の叱責に、粗末な使用人着の身体はますます小さくなる。理不尽な要求の積み重ねの果てに、耐えきれずオモロシをしてしまったことだけでも、死んでしまいたくなるほどの出来事だったというのに——それを先生たちの前でつまびらかにされ、責められるのは、想像を絶する苦痛だった。

乙女のプライドをずたずたにされる仕打ちに、もはやサラは羞恥に俯き、唇を噛むばかりだ。

「大切なお客様の前で粗相をしたばかりか、神聖な学び舎を汚したんですよ。解っているのかしら！？ なにか言い訳があるなら言ってみなさい。……さあ！！」

マチルダ先生に吊り上がった眼鏡の下からじろりと睨まれて。サラはおずおずと伏せていた顔を持ち上げる。

ひゅっと息を吸う音が、小さく喉が震わせた。

先生たちの無言の視線が、ちくちくと背中に突き刺さる。まるで針のむしろのようだ。

こんな有様で自分だオモロシした理由をこんな大勢の中で説明するなんて、考えただけでも顔から火が出そうだった。

(だ、駄目よサラ。ちゃんと……ちゃんと言わなくちゃ……)

このまま黙ってやり過ごしてしまいたい——そう思いかけた心を奮い立たせ、サラは上目づかいにマチルダ先生を見上げ、おずおずと切り出した。

「ま、マチルダ先生、私、何度も言ったんです……お、お手洗いに行かせてくださいって……でもっ、駄目だってイルマ……イルマさんに、言われて……」

「——サラ！！」

抗弁の途中で、マチルダ先生が声を荒げる。

サラはあの鞭の痛さを思い出し、ひゅと小さく喉奥で悲鳴を上げて身体を丸めてしまう。

「何を言っているの！？ あなたはもうクリフォード家のご令嬢ではないのよ！！ そんな我儘は、きちんと仕事を済ませてからおっしゃいなさい！！」

「そ、そんな……私、しっかりやっています！！ お洗濯も、お掃除も、全部——」

そう。本来は使用人頭のイルマの分担のはずの仕事まで。サラは朝から夜遅くまで、一生懸命になって働いているのだ。それが理由でトイレに行くこともできず、延々オシッコを我慢させられる羽目になり——とうとう限界を迎えてしまったのに。

「お黙りなさい！！」

あまりに理不尽な言い分に言い返したサラは、しかし顔のすぐ近くに振り下ろされた鞭に、言葉の続きを途切れさせてしまう。

眼鏡をくいと押し上げて、マチルダ先生は立たせたサラに言い渡す。

「いいことサラ、あなたは神聖な学び家を汚し、使用人の分際で伝統あるコーネリア女学院の名前に泥を塗ったのよ。それを自覚なさい！！」

サラがただの使用人であればまだ良い。しかし、サラは使用人として働く代わりに、学院の生徒として授業を受けさせてもらうことになっている。ゆえにサラの失態は、使用人としてと同時に、学院の生徒——一度は学年首席にもなった少女のものでもあるのだった。それ故に、サラの失態はそのまま、学院全体の評判を落とすことになりかねない。

「あなたには罰を申し渡します。いまの仕事に加えてこれから2か月、馬小屋と馬車の清掃、馬の世話をなさい」

酷い話だった。馬の世話など本来は御者の仕事だ。成人男性でなければ普通はとても勤まらないもので、学院に通わねばならないような少女に任せて良いものではない。まして、サラはまだ社交界にも出ないような年齢なのだ。

しかし、マチルダ先生の言葉に逆らうことはできず、サラは小さく『はい……』と頷くしかできない。

そして——マチルダ先生は更に、とんでもないことを言い出した。

「それに加えてもう一つ。あなたはまだ、使用人としての自覚が無いようですから、今日から授業の間、校内にある生徒用のトイレに行くことを禁止します。いいですね！！」

「そっそんな、無茶ですっ……！！」

余りにも無茶苦茶な命令に、流石のサラも思わず叫んでいた。

「なんです、いちいち口答えをして！！ サラ、そもそもあなたがきちんとお手洗いのしつけもなっていないから言っているんですよ！？」

「で、でも……そんな、……」

サラは、使用人としての仕事以外の時間——朝の9時から午後の4時まで、学内で授業を受けることになっている。その間普通にしていれば2回か、3回はトイレに立たねばならなかった。まして今は冬口で、粗末な使用人服しかないサラは、いつもよりもオシッコが近くなっているのだ。それを禁止なんてされたら、どうなるかは火を見るよりも明らかだった。

「ま、マチルダ先生っ……そんな、ぜったいに無理です……が、我慢、できません……」

「まあ……っ。なんてみっともないことを言うの、この娘は！！ サラ、それでもあなたは伝統ある学院の生徒ですか！？」

こんな時だけ生徒扱いして、理不尽に怒鳴られることに、サラは悔しさに俯いてしまう。

（い、一番恥ずかしい思いしてるの、私なのにつ……）

サラだって、恥ずかしくないわけががない。好きでオモラシをしたわけがないのだ。女の子であれば絶対に見られたくない姿を、二度も晒してしまったのだ。……思い出だけで死んでしまいたくなるほどだった。

なんとか許してもらおうとするサラだが、マチルダ先生はまるで取り付くしまもないというように話を打ち切り、背中を向けてしまう。

「あ、あのう、先生、いくらなんでもお嬢様に……」

流石にそれを見かねたのか、これまでずっと黙っていたアンが、おずおずと申し出る。

彼女はこんな時まで、昔と同じようにサラのことを案じてくれる、いまや数少ない味方だったが——今この時に限って言えば、もし

ろ逆効果だった。

「あなたには聞いていないのよ、アン！！」

「だ、だけでも……」

「黙りなさい！！」

火に油を注いでしまっていることにも気付かずに、サラを庇おうとするアンに、マチルダ先生は更に怒りを激しくする。とうとうぱあん、と鞭が床を打ち、二人はびくっと背中を伸ばして震えあがった。

「……そんなに手伝いたいなら、あなたも同じ罰にしましょう。イルマからも聞いています。要領も悪いし不器用で、仕事を増やしてばかりだそうだから。……丁度いいわね。イルマ？」

「はい、まったくですねえ。本当に何度教えても、物覚えが悪くて——あたしも困ってる場所なんです、ええ、そりゃあもう」

にやにやと意地悪な笑顔を浮かべて、先生に追従するイルマ。

僻みっぽくて性根の悪い彼女だが、こんな時の外面だけは良く、まったく礼儀正しい使用人頭を装っているのだ。困ったことにそのことを知っているのは、サラやアンの他にはほとんどいない。サラがこの場で追及しても、まともに取り合ってもらえないことは明らかだった。

「良いわね二人とも。お返事は！！」

——かくして、サラの粗相に対する罰として、二人は工作中的トイレを禁止されてしまったのだった。

そして、アンとサラの地獄のような日々が始まった。

使用人の仕事はただでさえ山のように多く、朝、まだ外が暗いうちに起きてから、空が真っ暗になるまで働いても終わらない。ましてイルマがしなければならない仕事が全部サラたちに押し付けられているのだから、日によっては夜中まで続くこともあった。

サラはその間に授業を受け、寝る間を惜しんで勉強をして、なんとか成績だけは保っていたのだが——そこに馬小屋の掃除と馬の世話まで加わって、いよいよ余裕がなくなってしまった。

夜が明ける前にベッドを出た二人は、手早く身支度を終えると、大急ぎでその日の仕事に取り掛かる。

「ベッキー、急ぎましょう。ぐずぐずしているとまた怒られてしまうわ」

「はい、お嬢様」

使用人の寝室がある屋根裏部屋を出た二人は、まず使用人用の粗末なトイレに変わりばんこに入って、もうこれ以上一滴も出ない、というところまでおしっこを絞り出す。いざ仕事が始まってしまったら、ほとんどトイレに行っている暇など無いのだ。

さっそく掃除、洗濯、寮の子たちの朝食の準備とその後片付けと、次から次にしなければならないことが目の前に積み上げられてゆく。

不安に胸を締め付けられながら、二人は仕事に取り掛かる。

見えないところでイルマが意地悪をしているらしく、いつもより洗濯ものが多かったり、一度洗った食器をもう一度洗うように申しつけられたりして、普段の倍くらい頑張っても、なかなか仕事が終わらない。

ようやく一段落する頃には、サラは休む暇もなく授業に出かけなければならなかった。

「……ごめんなさい、アン、私そろそろ……」

「わたしなら大丈夫です。いってらっしゃい、お嬢様」

途中で抜け出すことの後ろ暗さを感じながら、サラはアンに見送られて校舎へと向かう。すると教室にはもうクリスが取り巻きたちと一緒に待ち構えていて、サラのことを聞えよがしに喋り始めた。

「——ねえねえ知ってる？ この前さ……」

サラが大事なお客様の前で粗相をしたことは、すっかり学院中に知れ渡ってしまっていた。かつての公女の凋落は、閉鎖環境である少女たちにとっては格好のゴシップで、あることないこと、尾ひれがついた噂はゆく先々でサラの耳に届くように囁かれた。

教師が目を光らせる授業の間だけはわずかにそれから逃れることはできたが、その時間すらサラにとっては拷問のようだった。なにしろ、授業のある時間は校舎のトイレを使うことができないのだ。もし我慢できなくなるくらいオシッコがしたくなってしまうたら、どうすればいいのだろう——その不安がサラの小さな胸を押し潰そうとする。

（駄目よ、気をしっかり持ちなさい、サラ……！！）

ただでさえ噂のせいで、サラにはお手洗いの躰もできていない元プリンセス、というレッテルが張られてしまっている。この上もう一度オモロシなんてことになれば、もう生きていけない——冗談抜きで死んでしまうかもしれない。

そんな具合だから、折角の授業もすっかり気もそぞろで、サラの耳を通り抜けてゆくばかり。得意の外国語も、先生に指されてもしどろもどろで、まったく散々な時間だった。

まして、おしっこを気にしながらではますますその効率は落ちてしまう。

それでも午前中はさほど気にすることもなく終わることができたが——お昼を過ぎ、昼休みに生徒の昼食の洗いものをする頃になると、サラの動きは徐々に固いものになりはじめていた。

「サラさん、どうしたの、さっきから——静かになさい」

「はっはい！！ すみませんっ……」

授業中も、落ち着きなくしているのを何度も注意され、サラはそのたびに謝っては、クラスの生徒たちにひそひそと噂をされる。

顔を赤くしながら、それでもサラはもじもじと、椅子の上で足を動かしてしまうのをやめられないのだ。

（あ、……ああっ……お手洗い……っ、お手洗いに、行きたい……っ）

それもそのはず。寒空と薄着のせいで、朝にあれだけ空っぽにしたサラのおなかの中は、いまやおしっこにすっかり占領されている。硬く張りつめるほどに膨らんだ下腹部は何度さずっても落ち付かず、強烈な尿意が次々に波になって押し寄せてきているのだった。

「ああ……っ」

椅子の上で腰を擦りつけるようなはしたない動きを繰り返し、身体をよじるようにして、授業なんかまったく聞こえてない。ついにははしたなく、スカートの前、脚の付け根を握り締めてしまいがちながら、サラはただ、少しでも早く授業が終わることだけを願い続けるのだった。

「アッ……アン、……大丈夫……？ ……はあ、はあっ……」

「……おっ……お嬢さま……」

ようやく授業から解放されても、サラの試練はまだ終わらない。アンと合流するや否や、山のような仕事が残っている。放っておいたらたちまちイルマの叱責が飛んでくるのだ。

二人は休む暇もなく、使用人の古びたエプロンに袖を通し、午後の仕事を片付けなければならなかった。

「…はあはあ……、あ、アン、がんばりましょう……」

「は、はい、お嬢様……」

健気に震えながら答えてくれるアンに、サラは苦しいのは自分だけは無いことを理解する。

こんな時でもきちんと自分に尽くしてくれるアンには、言葉を尽くしても尽くしきれないほどの感謝をしたかった。もともとは自分の失敗が原因なのに、とぼっちりでマチルダ先生に強いられた理不尽なトイレ禁止の罰にも、文句を言うことなく付き合ってくれているのだ。

時に、思い切り脚の付け根を押さえこんでしまいながら。膨大な仕事に忙殺される中でも、サラはアンが存在を心強く感じていた。自分がたったひとりではないのだと感じられるだけで、昨日のような心細さは和らぐ。なによりも、こんな姿になった自分をまだお嬢様、と呼んでくれるベッキーがいとしく思えた。

「アン、もう少しよ……はあはあ……しっかりして……」

「はっ、(はい)……っ」

なにしろ、朝から一度もトイレに行けていないのだ。本来なら何回にも分けて済ませているはずのおしっこが、乙女のダムの中でたぶたぶと揺れる。危険水位をはるかに上回った貯水量は、いつ決壊してもおかしくない。尿意に波立つ下半身をくねらせ、押さえこみ、アンとサラはお互いに励まし合いながら、一生懸命に仕事を続ける。

校舎の掃除では、おしっこを我慢しながらの雑巾がけがなによりも辛かった。普通に歩いていてもつらいのに、四つん這いになって手を付いた瞬間、そのままオシッコが出てしまいそうになるのを必死にこらえながら、涙を浮かべて床を拭いたのだ。

今日の雑巾は、乙女の涙と、少しこぼれてしまった恥ずかしいオシッコを吸っているに違いなかった。

(あと少し、あとちょっとよ……サラ……！！)

何度も何度も、危ないところを乗り越えて——途中、下着に小さな染みを作ってしまうながらも、震える指先で、仕事をこなしてゆく。途中、クリス達ともすれ違ったが、こちらが二人でいたせいか、彼女たちも今日は無理難題を行ってくることもなく、済んだのだ。

「ああっ……」

しかし。傾いた日が始まるころには、アンはとうとう、スカートの前を抑えたまま、一歩も動けなくなっていた。

「アン、しっかりして……まだ馬小屋のお掃除がまだなのよ……っ」

「ハハハ……おっ、お嬢さま……、ああっ」

ようやくやってきた馬小屋の前で、すっかり立往生してしまい。メイド少女のきつく握りしめられたエプロンの下では、すでにじわじわと小さな染みがにじみ始めている。

使用人服のスカートの下、細い脚をつうつ、とおしっこの筋が伝い落ち、廊下の床に小さな水滴をこぼしていた。

アン我慢が足りないのではない。むしろサラよりも小さなアンが、よくこれまで我慢していたものだ。

しかし、それももはや限界のようだった。がくがくと膝を震わせるアン足元に、みるみる小さな水滴が溢れてゆく。おしっこの出口を締め付けるだけで精一杯のアン窮地に、ただでさえ必死に我慢しているサラも、激しく動揺する。

「が、がんばりましょうアン、……あともう少しでお仕事が終わるわ。そ……そうすればおトイレに行けるのよ……」

アンにだけではなく、自分にも言い聞かせるように言って、サラは握り締めた手のひらで強張った股間を揉みほぐし、激しくくねくねと腰を揺る。

「だ、だめですお嬢様……わたし……もうだめですう……」

「何を言っているのアン、しっかりして……、お願い……！！ ……これが終わらなければ、おトイレにも行けないのよ……！！」

「お、お嬢様、でも……っ」

アンは涙目になって、もう動けないと訴える。

一歩動いただけでもそのまま、足元に盛大な噴水を作ってしまうのは間違いなかった。サラは内心、音をあげたくなりなるのを自制して、小さく首を振る。

「……わかったわ。アン、あなたは休んでいて……。わたしが一人で済ませるから」

動けないアンを置いて、サラは悲壮な決意をする。

しかし、ただでさえいまにも漏れそうなおしっこを我慢しながらでは、いつもの倍近く時間がかかるのに、これから不慣れな馬小屋の掃除を、しかもサラ一人で終わらせることができるのだろうか？

そんな疑念を振り払い、サラは馬小屋の中へと向かう。アンと別れるのは心細かったが、もうそんな事を言っている余裕はない。

「ハアハア……だめよ……だめよセーラ……もう、オモラシなんてしてはだめ……」

片手でスカートを握りしめ、もう片手で体重を支えながら、セーラはのろのろと馬を移動させ、汚れた飼料を取り替えてゆく。

馬の寝床に敷かれた藁はずっしりと重く、両手をしっかり使ってかき分けないと運ぶこともできなかった。しかし藁を抱えようと力を入れようとすると、おなかにまで余計な力がかかってしまう。そのたびにじゅっ、しゅる……っ、と熱い雫がサラの股間に広がってゆく。

「ああ……っ、だめ、駄目……っ」

下着をぐっしりと濡らしてしまうほどにチビりながらも、サラは懸命におしっこを我慢し続け、慣れない馬小屋の掃除を続ける。

がくがくと震える脚をひきずって、藁を取り替え、言うことを聞かない馬を小屋の隅へと追いやる。いつ果てるともなく続く苦悶の中、しかしサラは文句も言わず、必死になって歯を食いしばっていた。

が……ふと顔を上げた時。サラは、アンの姿が見えなくなっていることに気付いた。

「アン？ ……アン、どこ？」

馬小屋からも見えていた彼女がいなくなったことに、急に不安を覚え、サラは仕事も放り出して駆け出していた。折角頑張ってきたのに——まるで見捨てられたような心細さがサラの胸を締め付け、同時に限界まで尿意を溜め込んだ下腹部を疼かせる。

「アン……？」

かたりと小さな物音のした方に向かったセーラは、馬小屋の反対側に回り込んだ。するとそちらの方にじっと立ちつくしているアンの小さな後ろ姿を見つける。

「アン！！ ……何をして……」

彼女の姿を見つけ、安堵したサラは、しかし思わずぎょとしてその場に立ち止まる。

アンはなんと、馬小屋の床の上に置いたバケツをまたぎ、スカートをたくしあげているところだったのだ。

とっさに上げかけた悲鳴を飲み込み、サラは馬小屋の陰に身を隠す。

アンは切羽詰まった表情で、何度もきょろきょろと周りを見回し——物陰で様子を窺うサラに気付く様子はなく、そのまま下着を下ろしてバケツの上にしゃがみ込む。

ぷしゃあああああああつっ……！！！！

次の瞬間。ブリキのバケツに勢いよく水が叩きつけられる音が大きく響いた。水流の勢いは凄まじく、歪んだバケツがカタカタと揺れ動くほど。猛烈な水流はたちまちのうちにバケツの中に注ぎ込まれて水位を増してゆく。

「はあああ……」

長い長い苦痛から解放されたことを示す大きな吐息が、出続けるおしっこ音にかぶさった。バケツの上に腰かけるような姿勢のアンの脚の付け根から、ホースで水を撒いているような強烈な勢いのおしっこが噴き上げてはバケツの中でじょぼじょぼと水面にぶつかる下品な音を響かせる。

アンの苦しい表情は一転して和らぎ、まるで天にも昇る心地で口元を緩めたものへと変わっていた。メイド少女はバケツの中に朝からずっと我慢していたおしっこを済ませながら、全身の力を弛緩させてゆく。

(……ああ……)

サラの下腹部で、余裕のなくなった乙女のダムが悲鳴を上げる。

一緒に我慢していたメイド少女があんなにも気持ちよさそうにおしっこをしているのを見て、サラが辛くないわけがない。じょぼじょぼとバケツのそこに注がれる恥ずかしい水流は余りにも目の毒だった。

咄嗟に押さえ込んだ両手の下で、耐えかねたようにサラのおしっこの出口がちゅるる、と雫を噴き上げ、すっかり濡れてしまった下着の股部分にまた熱い染みがじわっと広がってゆく。

(あ、アンったら、とっても気持ちよさそう……っ……)

トイレ禁止という同じ苦しみを共にしてきたメイド少女が、バケツの中におしっこを放出しているその姿を、サラは固唾をのんで見守っていた。なおも激しく高まる尿意に自然と身がよじられ、足元が小さく震えだす。

恐らく、アンもよほど我慢していたのだろう。もう本当の本当に、どうしようもなくなっただけに違いなかった。トイレを禁止され、一日中我慢を強いられて、尿意の限界と女の子のプライドのはざままで、アンはバケツにおしっこという解決策を見出したのに違いがない。

「ああ……」

サラの下腹部も、早くアンと同じことをしたいと訴える。一足先に至福の表情を浮かべるアンを見て、もはやサラの我慢も限界を迎えつつあった。

たとえばバケツにだとしても、おしっこを済ますことができたアンが羨ましい。

できることなら自分もそうしてしまいたかった。だが――

(で、でも、バケツになんて……っ)

元から使用人であるアンと、サラではことの重大さが違う。いまこそ使用人として扱われてはいるものの、深層の令嬢として育てられたサラには、ほとんど屋外と変わらないここで、汚いバケツを跨いでおしっこを済ませるなんて、とてもではないが許容できないことだった。

目の前でオシッコをしているアンの姿は、元プリンセスであるサラにとって羨望であると同時に、強い軽蔑の対象でもあったのだ。

たとえ父を失い、家が没落して公女としての立場を失ったとしても。――いや、だからこそ、サラは気高く、地位も財産も失っても、誇りだけは気高く保たねばならない。

あんな姿でオシッコをするなんて、赦されないことなのだ。

(っ……)

サラは、アンがオシッコをしているバケツにちらりと視線を向ける。

歪み汚れた薄汚いブリキのバケツ——その上にしゃがみ込み、オシッコを済ませている自分。、他に手段は無いと分かっているが、サラにはそれがどうしても許容できなかった。

たっぶり1分以上、ながながとアンのおしっこは続いた。

「はあ……っ」

最後にもう一度、大きく息を吐いて、じょろろろと尿道に残ったおしっこをバケツの中に絞り出し。アンはのろのろと立ち上がる。バケツからはほかほかと湯気が立ち上り、アンが出したおしっこの量の途方もなさを窺わせる。

まだ半分とろけた表情でアンは湿った下着を穿き直し、スカートに戻して——そうしてようやく、アンは馬小屋の陰に立ち尽くしているサラの姿に気付いたのだった。

「お、お嬢様……」

アンはひどく狼狽していた。一緒に頑張っていたはずのセーラを出し抜いて、一足先におしっこをしてしまった自分を——慌てて言い訳をしようとするが、うまく言葉が見つからないようで、もごもごと口の中でなにごとかをつぶやいてうつむくばかりだ。

「……………」

アン横におかれたままのバケツを、サラは見るともなく凝視してしまう。

驚くべきことに、大きなバケツの中には、アンのおしっこが半分近くも溜まっていた。あれではあんなに勢い良く、しかも長く、オシッコが出続けたのもうなずける。

よっぽど我慢していたのだろう。恥いるように小さくなったアンを見、サラは口元をきつく引き結び、同時にエプロンの前をきつく握り締める。ぱんぱんに張り詰めたサラのおなかの中には、あれ以上の量のおしっこが溜まっているのだ。

冷え込んだ秋の夜の風が、バケツの中から立ち昇る湯気を吹き散らす。

「お、お嬢様……っ」

「アン……」

（だめ……が、がまん、できない……っ！！ わ、私も、…わたしもそのバケツで……っ）

喉元まで出かかった言葉を飲み込んで。サラは歯を噛み締める。アンがバケツにオシッコを済ませている間、一度たりとも反らせなかった視線。いまでもありありと瞼の裏に焼きついている、進む薄黄色い水流。

「アン……、もう、大丈夫なら……手伝って頂戴」

「は……はいっ」

弾かれたようにアンが走り出す。濡れた下着を気にするようなガニ股で、馬小屋の中へと。

後にはサラと、アンのおしっこで半分満たされたバケツだけが残る。

そこにまたがり、下着を下ろし、スカートを大きくたくしあげて。今日一日、ずっとできなかったトイレの代わりに——しゃがみこんで朝からずっと我慢していたおしっこを——

（だめよ、サラ、駄目……っ）

アントイレ代わりとなったバケツを目の前にしながら、サラは懸命にその誘惑と抗っていた。人目もなく、誰にも気づかれずに済ませられるであろう、秘密のトイレ——

思えばここ一週間、サラはほとんどまともにおしっこを済ませることができていない。クリスやイルマ、マチルダ先生の意地悪によって、

限界まで我慢を強いられてついにはオモラシということばかりだった。

たとえトイレではなくとも、きちんとおしっこを済ませたい。強烈な誘惑がサラの脚をバケツの方へと招く。

「ああっ……」

首から下が誰かに乗っ取られているかのように、駄目、駄目と訴える意識を無視して、サラの身体はバケツの傍に吸い寄せられてしまう。あそこをきつく抑えていた手が離れ、スカートの下から下着へと手が伸びる。

このまま——一緒に、オシッコを済ませてしまえば。

もう一時も辛抱できないと訴える下腹部が、乙女の水門が、限界を叫ぶ。

とうとうサラはバケツを跨ぎ、その上にしゃがみ込んでしまった。

サラはこんな恰好でトイレを済ませた経験など無い。真っ赤になった顔を伏せ、元プリンセスはバケツの上に不格好に突き出されたお尻が左右にくねらせる。

（だめ、わ、わたし、こんなところで……こんなところで……っ）

しかし身体は正直だ。

オシッコの体勢をとるや否や、乙女の水門はたちまち緩み、ぷしゃあああああ！！と激しい水流を迸らせる。夜間に響くはしたない音に、サラの耳までが赤く染まる。

「あああ……っ」

掠れた声を絞り出し、サラはどうにもならない下腹部、排泄器官の解放感に背中を震わせる。たちまち足元に激しい水音が響き、バケツの中を先程にも増して大きな排泄音が打ちつける。

アンのさせていたのよりもさらに激しく大きな、はしたない音を。アンの時よりも更に長く長く、延々と続かせて。

たっぶり2分以上。サラのおしっこは続いた。

バケツの中はついに、二人分のおしっこでほぼいっぱいになってしまっていた。今日一日、ずっと我慢を続けていた二人のおなかに溜まっていたはしたない液体は、あちこちへ飛び散り、曲がり、バケツの縁から溢れそうになる寸前でどうにか弱まる。サラのおしっこは、アンの済ませたおしっこよりも3、4割は多かっただろう。

（わ、私……わたし、こんなところで……お手洗いなんで……っ）

お尻を出したままの中腰で、まだ股間からぼたぼたとオシッコの雫を滴らせたまま。顔を伏せた、サラは、しくしくと泣き出してしまった。

サラの身体は、まるで熱に浮かされたように震えていた。

耐えきれずにオモラシをしてしまったのではない。尿意の誘惑に屈し、自分から乙女のプライドを投げ出して、こんな場所でオシッコをしてしまったのだ。下品な誘惑に屈してしまった今、もはや、サラの心の片隅に残っていた公女の誇りなどどこにもない。

一度失ってしまったプライドは、もう取り戻せないのだ。

（ごめんなさい……ごめんなさい、お父様、お母様……っ）

サラは、墮落してしまった自分の心を恥じながら、天国の父に。顔も知らぬ母に、何度も何度も謝り続けた。

この日を皮切りに、サラはアンと共に、どうしてもおしっこが我慢できないときは、人目のない馬小屋や物置を選んでおしっこを済ませることを覚えてしまった。一日近く我慢し続けたおしっこは途方もない量で、二人でバケツを一杯に溢れさせてしまうこともしばしばだった。

それは、乙女の緊急避難としては仕方ないことだったかもしれない。そもそも1日の間、トイレに行かないまま過ごすことなどが無

茶な話なのだ。

だが——そうしてオシッコを済ませるたび、もはやサラは、父にあわせる顔が無いと、心の中で嘆き、いつまでもそう自分を責め続けるのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 小公女サラ【客用ティーポット編】

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/01/2011 23:15:41

BODY:

ある趣味@ J B B S の往年の名スレを元にした話。

<hr size="1" />

「どうして……？ どうして開かないの……！？」

困惑と共に、サラは何度もドアの取っ手に手をかけ、全身の力を込めて押し開こうとする。

しかし、来賓室の重い襜のドアはびくともせず、無情にも硬い手ごたえを返すばかり。なおも数分にわたってドアと格闘していたサラだが、外から施錠された両開きのドアにはわずかな隙間すら作ることはできなかった。

「……そんな…あ…っ」

小さな手のひらが力無くドアを叩く。

来賓室の出入り口はこのドア一つ。予備の鍵も持たずに閉じ込められたサラが、中から開けることは適わないのだ。絶望に打ちひしがれたサラの腰が、ぶると震える。

「あっ……っ」

切なく足をもじつかせ、爪先立ちになりながら。サラは使用人の証である古びたエプロンの上から、スカートの前を握り締めてしまう。

先程から感じていた尿意はますます激しくなっていた。ようやくクリスから解放され、大急ぎでトイレに向かおうとしていたところをイルマに見つかって、この来賓室の掃除を押し付けられたのだ。とっくに済ませているはずだったオシッコが、いまやサラの下腹部をぱんぱんに膨らませている。

「はう……あ、うっ」

小さな唇がきゅうっと引き結ばれる。きつく目を閉じ、サラは押し寄せる尿意の波を堪えていた。握り締めたエプロンには皺が寄り、ドアに倒れ込むように前屈みになって、突き出された可愛いお尻が左右に揺れる。

（だめよ、だめっ、だめよサラ……っ）

自分に言い聞かせるように、サラは激しい下半身の生理的欲求に抗う。

幸いにして、室内には他の人目は無い。脚の付け根に手のひらを押し当て、くねくねと腿をすり合わせる——少女として見せてはならない姿を晒しながら、サラは懸命に息を詰める。

「っ、あ、は、っ、はあ……っ」

立て続けの波を乗り越えて、どうにかわずかな余裕を取り戻したサラは、わずかに息を緩めてドアにもたれかかった。手はじっとりと汗で湿り、背中にもじわりと嫌な汗が浮いている。

懸命の我慢でわずかに引いた尿意は、しかしなおさざ波のように少女の下腹部に燦って、またいつ膨らんでもおかしくない状況だった。硬く張りつめた下腹部をさすり、サラは恐る恐る後ろを振り返る。

「……ど、どうしよう……っ」

切に排泄を訴えている下半身はすでに、恥ずかしい熱水をはちきれんばかりに膨らませ、乙女のダムは決壊へのカウントダウンを始めている。

しかし無論ながら、来賓室の中には、用を足せるような場所などあるはずもない。閉ざされたドアの他には嵌め殺しの窓が並び、わずかな通気口を除けば他に出口は見当たらない。恥を忍んで何度も大声をあげても、いっこうに誰かが駆け付ける様子もなかった。

こんなところで催してしまうなんて、最悪の事態だった。サラは緊張に小さく喉を鳴らし、口の中の唾を飲み込む。

「っ……」

伝統と格式を重んじるコーネリア女学院の来賓室は、それに相応しい調度と装飾を揃えられている。リベア杉のテーブルに、虹織りのソファ。壁にはカラトゥアの壺や前カザゴ時代の名画も並び、床にはパリジャの絨毯が余すところなく敷き詰められている。

リタニアのお屋敷にいた頃ならいざ知らず、今のサラのお給金では一生かかっても買うことができるかどうか分からない。

もしこんなところで粗相をしてしまおうものなら——どうなるのかは火を見るよりも明らかだ。恐ろしい想像に、サラは背筋を震わせる。

（お、お手洗い……っ）

今、一番欲しいもの、一番したい事を心の中にくっきりと思い浮かべ、サラはもじもじと腰を揺する。朝食で口にしたわずかなスープとミルクも、いまやすべて恥ずかしい熱水へと変わり、溜まりに溜まった少女のダムを内側から押し上げて、サラを苦しめている。

（あ、あっ、あ、だめ、……っ！！）

できない、とはっきり分かった途端、むずがる用にサラの下腹部が尿意を湧き起こさせる。腰骨から恥骨の間、太腿の奥へとじいんと伝播するイケナイ感覚に、サラはたまらずエプロンの前を両手で押さえこんだ。

「ああんっ……っ……」

思わずはしたない声が漏れてしまう。膝ががくがくと震え、不格好に突き出されたお尻が左右にくねる。ぎゅうっと前屈みになって脚の付け根を押さえこみ、ふらふらと足踏みをする、みっともない我慢のダンスを披露してしまい、サラの頬は羞恥に染まる。

閉じ合わせた太腿の奥、じわっ、と膨らむ熱い感触に、サラは歯を食いしばって耐えた。

「あ、あっ、あ、だめ、だめえ……っ……」

押し寄せる圧倒的な尿意の波に、いまにもダムが突き崩されてしまいそうだった。

限界を超えて噴き出した恥辱の噴水が下着を台無しにし、一着きりしかない使用人服をびちゃびちゃと黄色に汚し、足にびったりと貼りつけて、匂い立つ湯気の立ち上る水たまりを足元に撒き散らす様を想像し、サラは必死にそれを避けようと抗う。

は、は、と息を荒く吐きながら、サラの視線は当て所もなく来賓室の中をさまよう。

求めるものがそこには無いと分かっている。何かに救いを求めずにはいられなかったのだ。

そして——少女のハシバミ色の瞳は、テーブルの上に残された、紅茶のティーセットへと吸い寄せられるように向けられていった。

「あ……あっ」

ついさっきまで、マチルダ先生とお話をしていた大事なお客様が使っていたものだ。イルマに言いつけられ、いちばん上等な紅茶を用意してここに運んだのもサラだった。その後片付けを命じられて、サラはここに閉じ込められてしまったのだが——

テーブルの上に無造作に置かれた、二つのティーカップと、ティーポットをまじまじと見つめ、思わず小さく喉まで鳴らしてしまい、サラはようやく我に返った。

（……や、やだ……っ、わ、私、何を考えて……っ）

かあっと少女の頬が赤くなる。

あり得ないことだった。曲がりなりにもリタニアの公女が——いや、たとえそんな地位など無くても、女の子がそんな事をしているはずがない。

しかし。サラはテーブルの上から視線を反らすことはできなかった。

そう。あの、あのカップ。あの中に、今自分を苦しめている、恥ずかしい液体を出してしまえば、少しは……少なくとも、ティーカップの分だけは楽になれるのではないだろうか。

あまりにもはしたなく、みっともない——もはや言葉では言い表せないほど下劣な行為は、しかし今のサラには抗いがたい誘惑だった。閉じ込められた密室の中、なおも高まり続ける尿意はとどまるところを知らず、両手で押さえこんだ脚の付け根、乙女のダムには危険水位を遥かに超えて、恥ずかしい液体が溢れそうになっているのだ。

立て続けに襲いかかってくる下品な欲求に耐えかねて、サラの“おんなのこ”は悲鳴を上げる。これ以上自分がどれだけ耐えているのか、全く想像できなかった。

「っ……」

困惑と羞恥と、複雑な感情に、少女の整った顔立ちが歪む。

下品な衝動に突き動かされるように、おぼつかないサラの脚はテーブルの傍に吸い寄せられていく。

(だめよ、だめ……何を考えているのサラ……！！　そ、そんなの、ダメに決まっているじゃないっ……！！)

必死に自分に言い聞かせようとする理性は、しかし、より深い本能の手綱を握ることはできなかった。使用済みのティーカップはまるで、サラに自分を手に取れと訴えかけているようにすら感じられる。

ついに、脚の付け根を押さえこんでいた手の片方を離し、サラの伸ばした指先が、白磁のカップの持ち手に触れる。

まだカップのそこに残るわずかな紅茶の雫から、ほんのりと香る茶葉の名残が鼻をかすめた。昔、リタニアのお屋敷にいた頃にも味わった、上等な紅茶の香り——そんな大事なお客様に出した食器に、いったいいま自分は『なに』をしようとしているのか。

それを改めてはっきりと意識してしまい、サラは耳先までを羞恥に赤く染める。

「っ……………」

しかし、突き上げるように激しい衝動はさらに荒れ狂い、サラの残り少ない理性と余裕を奪ってゆく。少女の意志を無視して波打ち、ずきん、ずきんと脈動する、はちきれんばかりの尿意を湛えた下腹部が、解放の予兆を感じ取って歓喜に打ち震える。

(……やだ……あっ……)

こんな行為にすら悦びを覚えてしまう自分の身体に、サラは戦慄いた。

少女の心を捕えて離さない誘惑——。この空のティーカップに、オシッコを済ませてしまいたい、というあまりにも非常識な想像にすら、サラの下半身は歓喜の声を上げているのだ。

空のカップを手にしただけで乙女のダムの水門はぶくりと膨らみ、排泄の準備を整えようと、ぴくぴくと緩み始めそうになっていた。

「あ……ッ」

自身の意思を無視して、勢いよく噴水のように熱い水流を迸らせそうになった恥ずかしい女の子の出口を懸命に締め付けて、サラは激しく身悶える。

(だ、だめ、だめよ……だめなのっ……)

否定を繰り返す思考とは逆に、手のひらは白磁のティーカップから離れようとしない。

この小さな器を、露わにした乙女の秘密の出口へと、思い切り押し当ててしまいたい——その抗いがたい誘惑が、サラの心の奥底にまで深く染み入ってゆく。

はちきれんばかりに膨らんだ下腹部の液体が、勢いよく排泄孔から噴き出し、カップの底にはしたない音を響かせて叩き付けられる——それはいったいどれほどの解放感を与えてくれるだろう？　我慢に我慢を続けた末、もはや限界まで伸び、膨らみきった下腹部は、ずきずきと鈍い痛みすら覚えるほどに限界が迫っている。

押さえこんだ手の下、切に苦痛からの解放を訴える下腹部をもう一度、サラはエプロンの上から撫でさすった。

まるで石のように硬い手ごたえが返ってくる。

「ああっ……」

それと同時に、甘く切なくむず痒い痺れが、下腹部のいちばん底にまで走り、サラは下半身を激しくモジつかせた。いまやいつ崩壊を迎えてもおかしくないほどに、我慢は限界を迎えている。

サラは再度、手のなかの小さなカップにすぎるような視線を向ける。

こんな小さなティーカップではとても、乙女の秘密のダムいっぱいには沸き立つ恥ずかしいホットレモンティの全てを注ぎ移すことは叶わないだろう。

だがそれでも、たとえそんな、ほんの小さなカップ一杯分でも、この苦痛が和らぐのなら。

(……ぜ、せんぶ、空っぽにできなくても……ちょっとだけでも、楽になるかも……っ)

イケナイ想像をやめられない公女の身体は、ひくんひくんと蠢いて。

秘密の出口を締め付け続ける括約筋は、一刻もはやく下腹部をたぐたぐと満たす熱い雫を絞り出して自由になりたいと訴える。

こぼり。

「ふああん……っ」

甘くはしたない声すら上げ、サラはまた、身体の中に湧きあがる恥ずかしい水の源流を感じ取ってしまう。下腹部のなかに、さらにこぼこぼと琥珀色の水流が湧きあがってきたのだ。すでに限界まで膨らみきった少女の下腹部はそれを受け入れる余裕などあるわけがない。

思わず、スカートの上から、サラは掴んだティーカップを抱え込むようにして、飲み口を股間に押し付けてしまっていた。

(あ、あっ、あっ……、あ……っ！！)

ぐりぐりと、白磁器の硬い感触がスカートの上から脚の付け根を擦り、じわあ……っ、と熱く疼く乙女の秘所が、今にもぶくりと緩み膨らもうと収縮を繰り返す。

引けた腰の脚の付け根、ちりちりと直火であぶられているようなむず痒さは一段と激しさを増し、まさに激しい水流がカップの底を打ち据える音が響き始めそうだ。

(だ、だ、め……っ、だめ……、なのに……っ)

カップを握り締めたまま、サラは激しく身悶えを繰り返した。

眉をハの字にして唇を噛み、きつく息をつめた切羽詰まった表情で、サラは手の中に握り締めたティーカップと、無人の来賓室の中を見比べる。隅から隅までを贅沢な丁度に彩られた来賓室の中は、たとえば部屋の隅であったとしてもしゃがみ込んで、用を済ませられるような場所など無い。

限界を迎えて粗相をしてしまったが最後、絨毯やソファーに、恥ずかしいおしっこの痕跡はありありと残り、今度こそサラは女学院を追い出されてしまうだろう。

(でもっ、でも……っ……)

堪えに堪えたおトイレの限界は、すぐ傍にまで迫っている。

「は……あ……っ」

何度も何度も葛藤と逡巡を繰り返すサラの、きつく押し殺したような息が、部屋に響く。

長い躊躇ののち、サラは驚異的な集中力で脚の付け根に押し当てていたティーカップを机の上に置き直した。細い指はゆっくりとほそい持ち手から離れ、ついにティーカップは最初にあった元の通り、テーブルに戻る。

「く……、う……はあっ……」

そして。サラはそのまま、すぐ隣——同じ白磁のティーポットへと移っていた。

強烈な罪悪感と共に、サラはすっかり空になったポットの蓋を外すなり、残る茶葉を隣のカップへと開ける。

かすかに湯気をたてるそのティーポットを前に、サラはやおら脚の間をに当てていた手のひらを離し、スカートの端をエプロンと共にたくしあげる。

（だ、だめ、もう駄目……っ）

もはやサラに言葉はなかった。ここがどこであるのかも忘れてしまったように、サラはたくしあげたスカートの端をまとめ、口にくわえた。

はしたなく捲りあげられたスカートの下、露わになったドロワーズを、逡巡と共に腰の下まで引き下ろしてゆく。もじもじと膝を擦り合わせる中腰の姿勢では、たったそれだけの事すら全神経を集中させなければならなかった。

ふとしたことで緩みそうになる排泄孔をしっかりと締め付けながら、どうにか作業を終える。

（こ、このあとで、……大急ぎで片付けて……ちゃ、ちゃんと、しっかり洗って……綺麗に、しますから……っ……、ごめんなさい。ごめんなさい……っ！！）

誰にともなく、祈りをささげながら。サラは両手でティーポットを抱えあげると、ついに露わになった乙女の大切な場所へと近づけてゆく。

そう。サラはこのティーポットの中に、オシッコをすることを決めたのだった。

ティーカップではなくティーポットを選んだ理由は単純。小さなティーカップではサラのおなかのなかでたぶたぶと波打ち揺れるほどのおしっこを注ぎ込むのは、どう考えても不可能だったからだ。

アンと一緒に、馬小屋のバケツでおしっこを済ませた時の記憶が蘇る。あの時だって、わずか二回のおしっこで、バケツはなみなみと溢れんばかりに一杯になってしまったのだから。

（ふあ……っ）

羞恥に頬が染まり、緊張に指先が震え、思わずポットを取り落としそうになる。一度は床に置いてそれを跨ぐことも考えたが、それでは小さな穴を外してしまうかもしれない。そうすれば絨毯を汚してしまうことは避けられなかった。普段の時ならともかくも、この切羽詰まった状況で慎重に位置を調整しながら、しゃがみ込むのは無理だと思ったのだ。

乙女の排泄はいったん始まった以上、途中でとめることなど叶わない。

あんなにも小さな陶製のカップなど、一瞬でいっぱいになり、そのままあふれ落ちた水流が絨毯を、床を、余すところなく広がって、少女の羞恥で汚し、水浸しにしてしまうことは間違いないのだ。

動揺にもたつく足元と共に、かすかに床がきしむ。

「ああ……こんな、こんなっ……っ」

乙女の潔癖な理性が警鐘を打ち鳴らす。あろうことか歴史あるコーネリア女学院の来賓室で、スカートをたくしあげ、立ったまま乙女の秘所に直接、押し当てたティーポットに小用を済ませようという常軌を逸した行為に、サラの繊細な羞恥心は焼け切れてしまいそうだった。

だがしかし、それでも。

惨めに無残にエプロンを、使用人服を濡らし、足元に盛大な噴水を撒き散らして、来賓室に大惨事をもたらしてしまうよりは。そんな事を言い訳に、サラははしたない姿勢での排泄の準備を進めてゆく。

「ん……っ」

来賓室の中央、整えられた調度の間。使用人服のスカートをたくしあげ、下着を膝下まで下ろし、仁王立ちになって。心持ち前に突き出した腰は、まるで男の子が立ったままオシッコを済ませている時の姿勢にも似ていた。

ほんのりと色づき、膨らんだ脚の付け根。

乙女の大切な場所を守るように、蓋をあけたティーポットが、股間へと押し当てられる、——その瞬間。

ぷしゅしゅるるうっ！！

「はあああ……っ！！」

強烈な感覚が、内腿の付け根を走り抜ける。

彼女の股間、女の子の部分で弾けた琥珀色の液体が、勢いよく音を立てて、ティーポットの中へと注ぎ込まれていた。

（んあああ……っ）

これまでも何度か経験のある、限界寸前の我慢からの解放感。そのうち震えるような感覚がぞくぞくと背筋をはい上がり、頭を突き抜けてゆく。

ぷしゅうっ、じょぼっ、じょじょぼぼぼぼぼぼぼお……っ

乙女の身体が温め続けていた羞恥のホットレモンティーは、激しい水流となってポットの底を打ちつける。我慢し続けた女の子の放水は、同年代の少年のものと比べ物になるはずもない。たちまち派手な音を響かせながら、乙女のレモンティーがティーポットの中に激しく波打ち始める。

「はあああ……っ……」

サラの唇から、少女のものとは思えない、甘くとろけた吐息が溢れだす。

じょぼじょぼと、剥き出しの股間に押し付けたティーポットの中に、遠慮を知らぬ勢いで恥辱の水流をなお激しく注ぎ込みながら、サラはうっとり目を細めてしまう。尿意からの解放にくちびるは緩み、頬はとろけて、今にも天へと昇っていきそうな様子だ。

大胆に露わになった白い肌。ドロワーズのゴムが浅く食い込んでいたおなかは、猛烈な勢いのおしっこを絞りだしながら、見る見るうちにしぼんでゆく。下腹部を下品に膨らまさせてしまうほど、サラのオシッコははち切れんばかりに溜まっていたのだ。

しかし。

「え、あ……っ」

折角の至福の瞬間も、長くは続かない。じょぼぼじょぼぼと白く泡立って注ぎ込まれる恥辱のホットレモンティーは、みるみるうちにティーポットの中に溜まり、あっというまにポットを一杯にさせてしまっていた。

「あ、あっあ、や……だ、だめっ……」

考えてみれば、当たり前のことだった。

サラのおなかの中に溜まりに溜まっていた、恥ずかしいレモンティは、たかだかティーカップ2杯半程度の容量しかないポットの中に

すべて納まりきる訳がなかったのだ。見る間に一杯になったティーポットが、ずっしりとサラの手の中に押し掛かる。

まだ、半分も出しきっていないはずなのに——すでにティーポットは八分目まで一杯になってしまっている

(や、だ、だめ、こんな……ああ、あつ、止めなきゃ……っ！！)

いまなお激しく噴き出し続ける水流を押さえこもうと、サラは懸命に内腿、“おんなのこ”に力を込める。しかし、一度堰を切った女の子のダムがもう一度それを押さえこむことなど不可能だ。

ぶしゅぶしゅと遠慮ない音を響かせ黄色いおしっこを噴き出す出口を閉じるため、丸出しの股間に、ティーポットを押し当てるといふ、珍妙ながらも下品極まりないすがたのまま、サラはオシッコをこぼさぬようと腰を激しく揺すってしまう。

しかし、それは全くの逆効果。サラが身をよじったと同時に、いまにも溢れんばかりに注ぎ込まれていたティーポットの中身が、注ぎ口からぴゅうと飛び出した。

テーブルの上に激しく飛び散った液体が、ぱしゃと飛沫を跳ねさせる。

「だっ、な、っ、あ、あ、ああっ……」

慌てて腰を動かせば、今度はさらに強く、注ぎ口から出来たてのホットレモンティーが流れだした。まるで、男の子のオシッコのように。立ったままの少女のすぐ前、黒檀のテーブルに、その上に置きっぱなしのティーカップに。太く黄色い水流がびちゃびちゃと注がれてゆく。

(い、いやああ……！？ だ、だめ、だめ。止まって、止まってえ……っ)

ありったけの力を振り絞っておしっこの出口を締めつけようとするサラだが、余計な身じろぎのせいで、テーブルの上に注がれるポットの中身はむしろ増えるばかり。

さらに、中途半端にオシッコを出したせいで、おなかの中にできた余裕は彼女の中の恥ずかしい液体をより一層増長させてしまっていた。急に出口をふさがれ、まだ溜まったままの乙女のホットレモンティは、サラの女の子の部分をかじあげ、股間に秘められた秘密の花園から外界に飛び出そうと激しく暴れる。

「んあ……っ……はああんっ……」

目の前が白くなる。声を上げながら腰を捻るたび、傾いたティーポットからぽたっ、ぽたっ、と淹れたてのサラ特製ホットレモンティが噴きこぼれる。

なお、押し当てられたティーポットの中には、じゅうっ、じゅおおっ、と水流が水面を打ちつけるはしたない水音が響いていた。

「で……っ……でちゃう……っ……」

プライドも何もかなぐりすて、下腹部の衝動に尽き動かされるままにサラに、在りし日のダイヤモンド・プリンセスの面影は無い。

ぶるぶると腰を震わせたサラの女の子の部分から、激しく羞恥の水流がらほとばしり、ティーポットにじょぼぼっと野太い排泄音を響かせる。

先程までの排泄とは液体の量も、規模も、軌道も違っていた。

女の子の部分から滝のようにあふれ出した液体は、押し当てられたティーポットの中。丸い水面に思い切りぶつかって、跳ね返った雫をそこらじゅうに飛び散らせる。

勢いのいい液体どうしがぶつかる音はとどまる事を知らなかった。

サラが股間に押しあてたティーポットを満たす、公女特製のホットレモンティ。わずかに湯気をつてるそれは、注ぎ口から勢いよくテーブルの上のティーカップへと注がれて、さらにそこからも溢れ、まるで芸術的な噴水のように、テーブルの上に広がってゆく。

「ああ……っ……だめえ……っ……んあああああっ！！！！」

あまりにもはしたない、水芸を、歴史あるコーネリア女学院の一室で存分に披露しながら。サラの悲痛な叫びは、いつまでも来賓室の中に響き続けていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 寮の中にトイレがない

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 05/29/2011 20:42:18

BODY:

(トイレ、トイレ……っ)

氷川朋絵は慣れない制服、慣れない寮の廊下を早足で急ぐ。

転校生を出迎える、クラスメイト寮生総出での歓迎会は宴もたけなわ。アルコールこそなかったものの、差し入れのジュースやお菓子を食ベすぎてしまったか、朋絵の下腹部、乙女の貯水タンクははやばやと満水の警告を訴えていた。

歓迎会の主役が途中で席を立つのは少々抵抗があったが、まさかあのまま我慢し続けるわけにもいかない。朋絵は目下、寮のトイレを目指して一直線だ。

（早く戻らなきゃ……。でも、お嬢様学校だって聞いてたけど、みんな優しくやし……。これならすぐに仲良くなれるかな）

思わず、自然と口元に安堵の笑みが浮かぶ。

厳しい寮生活で、幼稚舎から大学までの一貫教育を行っている学院での生活に、自他共に認める庶民派の自分が馴染めるかどうか。口に出しこしてないかったが、朋絵にはそれが大きな懸案だったのだ。

不安半分緊張半分で望んだ転校初日は、しかし朋絵の予想以上に穏やかなものだった。最初は緊張もしたもの、すぐにそれも採り越し苦労とわかり、今はすっかりクラスメイトとも打ち解けている。

格式と伝統を重んじる校風は確かにその通りだったが、理不尽なほどに厳しいというわけでもなく、寮暮らしの先輩達も快く朋絵を歓迎してくれた。

（でも、ちょっと不便なのがねえ……）

学院と同様、歴史のある寮には、各部屋にトイレ・洗面所が設けられてはおらず、それらは浴場込みで共同である。トイレの度に長い廊下を歩かねばならないのはそれなりに面倒なことでもあった。

「んっ……」

節制を保つ校風らしく廊下にも暖房はないため、11月の寒風に背筋を震わせて、朋絵は込み上げてきた尿意にそと腰を揺する。

（……急ご……）

じん、と湧き上がるいけない感覚に、ぶる、と身体を揺すって。朋絵は縮みそうになる歩幅を早める。

ほどなくして、廊下の突き当たりにあるトイレの入り口が見えてきた。

「わ……」

3階建ての各階にひとつずつ、計3か所の寮生用のトイレの中には、すでに数名の先客がいた。他のクラスか、あるいは別学年の先輩たちだろう。寮での義務である体操服をしっかり着こなし、彼女達は4つある個室の前に、フォーク並びで一列に並んで、順番を待っている。

（うえ……混んでるなあ……）

思ってもみなかった光景に、朋絵は思わず眉を寄せてしまう。

つい、まだ家に居る感覚でいたため、トイレに着いてからさらに待たねばならないという状況は想定していなかったのだ。

トイレまで辿り着き、ドアをぐればすぐに用が足せるつもりでいたせいか、身体の方はそのつもりで準備を始めている。

（う……）

予定を外されて、下腹部で尿意がむずがるように暴れる。

しかし流石に人目のある中でそうそうはしたない格好ができるわけもなく、朋絵は膝を寄せながら、おとなしく列の後ろに並んだ。

（……がまん、がまん……）

前に並んでいるのが4人と言うことは、個室が全部空いても朋絵の番は回ってこないということになる。一瞬、ほかのトイレに行くべきかと迷って、朋絵はすぐにそれを打ち消した。

寮長からは各階のトイレを使用するようにと事前に説明を受けていたし、他のトイレもこんな風に混んでいるのかもしれない。慌てて駆け回るよりも、大人しく順番を待つ方がましだろうと判断したのだ。

白いタイル張りのトイレの中は妙に寒々しく、朋絵の尿意はいつこうに和らぐ気配がない。少女は小さく踵を踏みならし、身体をわずかに揺すって、下腹部の切迫した事情を散らそうとする。

そんなそわそわとした様子の朋絵に、生徒の一人がちらりと視線を向けて、わずかに眉を潜める。その態度に、すこしだけ朋絵の心はささくれ立つ。

(……なによ、我慢できないんだから……しょうがないじゃない)

トイレの時くらいもう少し余裕があってもいいのに、などと考える朋絵をよそに、ゆっくりと列は進んでゆく。

ほどなくして3人目の少女が空いた個室に入り、朋絵の前には1人を残すのみとなった。

(ん……あと、ちょっと……)

心持ち前屈みとなってもじもじと腿を擦り合わせながら、朋絵は残る人数のカウントを続けていた。

もうすぐ順番が回ってくる。ほんの数分と経っていないはずだが、思わぬ我慢の延長戦に焦らされた下腹部は、部屋を出た時よりも随分と激しく尿意を訴えていた。

なにしろ、いい歳して我慢のしぐさを外に隠せないほどなのだ。開き直ったつもりでも朋絵だって年頃の乙女だ。恥ずかしくないわけがない。さっきから、すれ違う寮生たちの視線を感じ、朋絵も頬をわずかに赤くしていた。

(うー……恥ずかしいっ。今度はもっと早く来ないとだめだなぁ……)

こんなにはっきりトイレの我慢をしてしまうのは、もう何年振りだろうか。寮生活の課題をひとつ心に積み上げ、朋絵が反省をしているうち、またひとつ、個室が空く。

最後の一人となった朋絵の前の生徒が個室に入るのを見て、朋絵は大きく息を吐いて一歩、前に出た。いつの間にか行列は朋絵一人になり、ふさがった4つの個室を除けば、トイレの中には人影はない。

「うー……っ」

人目がなくなったのをいいことに、もじもじと揺れる腰がさらに大胆になり、足踏みも激しさを増す。上履きがきゅきゅっとタイルを踏み、スカートの前を押さえる手がはしたない部分にまで届いてしまう。

脚をすり合わせながら、朋絵は早く自分の番にならないかと、4つの個室のドアを見つめた。

……と。

(……あれ?)

ふいにおぼえた妙な感覚に、朋絵は首をかしげた。何かの勘違いのような、間違い探しののような、形にできない違和感が頭の隅にひっかかっている。

気のせい——というわけではない。それどころか、意識すればするほどますます引っかかりが強くなっていた。

非常に重要な、重大な見落としをしているような、喉の奥に秘密を抱え込んだような。振り払えない不可解なイメージに、朋絵は眉をよじる。

「えっと……」

思わず周りを見回すが、違和感の正体はつかめなかった。

思考を巡らせようにも、次第に切羽詰まる尿意のせいではっきりと思考がまとまらない。訳のわからない不安感に急きたてられ、妙な焦りが朋絵の緊張を高めてゆく。

(な、なんだろう……?)

実に落ち着かない気分再度、朋絵がトイレの中を見回していた時。4つ並んだ個室の一番右から、用を済ませた少女が姿

を見せる。

「あ」

呆気なく訪れた解放の機会に、朋絵は思わず声を上げていた。洗面台へと向かう少女とすれ違いながら、朋絵はいそいそとドアに飛びついて個室へと駆け込み、後ろ手に鍵を閉める。

（……まあいいや、トイレ済ませてから……）

「え」

しかし。そこで朋絵は身体を硬直させ、ぼかんと口を開けてその場に立ちつくしてしまっていた。

その、トイレの中には。

何も——なにも、なかったのだから。

そこには。女子トイレの個室であれば、本来、当然、当たり前のように無ければならないはずの、用をたすための設備が、なにひとつ。そこには存在していなかった。

——便器も、水を流すためのレバーも、後始末のためのトイレットペーパーも、身づくろいのための汚物入れすらも。

なにひとつ、個室の中には見当たらなかったのだ。

ただ、平坦なタイル張りの床だけが、個室の四方を区切る壁と、内開きのドアだけを残して、ただ無情に広がっている。

（……え？）

理解できない光景の中、朋絵は呆然と個室の中を見回し、数度瞬きを繰り返す。白昼夢でも（もう昼日中ではないけれど）見ているような気分だった。

しかし、狸に化かされているわけでもなく、夢でも無く。目の前の空間は、ただそれだけの小さなタイル張りの床として、朋絵の前から消えてくれない。

「あ、あれ？」

疑問を口にしながら、朋絵はもう一度、個室の中を見回した。

やはり何も変わらない、ただのスペース。ただの灰色のタイルの目地の中には、隅に排水溝すら見当たらない。ただただ、まっさらな1平方メートル強の小さな部屋を眺め、最初に朋絵が考えたことは、

（……入るとこ、間違えた？）

というものだった。

朋絵は恐る恐るドアを開け、そっと個室の外に出る。

無人のトイレの中には、いまだ誰の姿もなかった。自分の居た個室のドアを見るが、そこには何かの注意書きがあるでもない。そしてまた、朋絵の入った個室とは寸分たがわぬドアが三つ、隣に並んでいるばかりだ。

「え……っ」と

さらに、さまよわせた視線の先には、どう見ても間違えそうにない壁の反対側に、『清掃用具入れ』とパネルを付けたドアがあり、

小さく開いたその奥にデッキブラシやホースなどを収納しているのが見て取れる。

「……なに、これ？」

意味が分からず、朋絵はもう一度、自分の居た個室の中を覗く。

しかしやはりそこにあるには、白いタイルの平坦な床。トイレのためにしゃがみ込むことも、座ることもできない、ただの床があるだけだった。

いっそ間違いや勘違いであればよかっただろう。トイレトイレと焦って、つい個室と間違えて清掃用具入れに入ってしまったというのなら、恥を掻いたとは言えまあ、笑い話ですむ話だ。

だが、ここはいったい『どこ』だと言うのか。——この何もないドアで区切られただけのスペースが、いったい何なのか、朋絵にはまったくわからない。

(えっと、……？ え？ なに？ これ、トイレ？ ……な、ワケないよね……？ え、でも……え？ あれ？)

理解を超えた事態に、困惑する頭をぶるぶると振る。

そもそも、このドアから他の生徒が出てきたのを、朋絵ははっきりとその目で見ているのだ。ココがトイレではないとしたら、何のために彼女が中に入っていたのか、意味が分からない。

すっかり混乱している朋絵をよそに、朋絵の居た隣、右から2番目の個室のドアが開いた。

「……あ」

そこから出てきた少女は、戸惑うばかりの朋絵にかかる会釈すると、流しへ向かい、手早く身づくろいを終えてトイレから出てゆく。

朋絵は慌てて、いま少女が出てきたばかりの個室へと向かう。

(……、ま、まさか、ね……)

嫌な予感と共に、一呼吸を挟んでから。朋絵はそっとドアを押しあけた。

「……………嘘……」

するとそこには予想通り——と言うべきか。

決して当たっては欲しくなかった予感通り、そこもまたトイレの面影すらない、平坦な床があるだけのスペースだったのだ。

(ど、どういうこと……なの、これ？)

まったく意味が分からない。とうとう朋絵はトイレの入り口へと駆けもどり、その案内パネルを確認する。

するとどうだろう。そこにははっきりと、『女子トイレ』と記されているのだ。

どうみてもトイレであるはずの、部屋の、当たり前のようにトイレの構造をした部屋の中に、必然としてそうでなければならないはずのスペースに、けれど用を済ませるための設備が、ひとつもない。

訳が解らなかった。

キツネにつままれた気分で目を擦る朋絵を、せつくように、忘れていた尿意が激しく押し寄せる。

「んう……っ」

きゅうっ、と出口に迫る恥ずかしい熱水の気配に、朋絵はたまらず腰をよじり、スカートの前から手を押さえこんでしまう。

「あ……ふ……う……っ」

ぶるぶると内腿が震え、さらに増した尿意が少女の出口へとぶつかる。高まる水压を押しとどめるため、股間をぎゅっと握りしめ、もじもじとつきだしたお尻を左右に振りながら、朋絵は高く足踏みを繰り返した。

(な、なんで？ ここ、トイレでしょ…！？ な、なんで何もないの……？！)

まったく、理解が及ばない事態に、朋絵はぐるぐると渦巻く思考に困惑する。

冷静に考えてみようとしても、波のように引いては返す激しい尿意のせいで、上手く思考がまとまらない。

まさか、本当に妖怪とかに化かされたのではとか、そんな怪談みたいな馬鹿げた想像まで脳裏をよぎる。

「あ、あつ……」

しかし、身体の方はそれを考慮してくれない。排泄孔のすぐそばまで押し寄せた熱い奔流が、じわ、とわずかに出口を押し開いて噴き出そうとする。

それを必死になって押さえている朋絵の前で、さらに3つ目の個室がドアを開けた。

今度もまた、同じように。中に入っていた少女は怪訝そうな顔で、もじもじと震えている朋絵を一瞥し、そのまますぐ傍を通り過ぎてゆく。

「あ……！！」

「……………」

思わず上げた声に、少女が足を止めるが。朋絵はそれ以上声を上げることはできなかった。我慢が精一杯でそれどころではなかったのと、そもそも何を聞いていいのかわからなかったのだ。

——ここ、本当にトイレなの？

——どうやってオシッコすればいいの！？

あまりにも当たり前にここに出入りしている彼女達を見ていると、そんなことを聞いていいものかどうか分らなくなってしまう。

まさか、庶民の自分にはわからないような、お嬢様なりのトイレの使い方があったりとか、転校生の自分には見えないトイレがあったりするのだろうか——？

すっかり不審な様子の朋絵をちらちらと見ながら、少女がトイレから出て行く。

そして朋絵はまたもや、一人トイレの中に取り残されていた。勿論すぐに3つ目の個室の中を確認する朋絵だが、やはり、そこも前の二つとそっくり同じように、何もない床があるばかりだった。

もう確実だ。

——まだもうひとり、空いていない個室の中も少女が居るはずだが、恐らくそこも同じなのではないかという想像は容易だった。

「こ、これ……えっと……っ、な、なんで……？」

そうして。ようやく朋絵は、さっきから覚えていた違和感の正体に気付く。

それは——トイレの中から一度も、水の流れる音がしなかったということだった。

女の子のトイレと言えば、まず一般的なマナーとして音消しがつきものだが、それどころかこのトイレではさっきからあれだけの少女が入り出し、利用しているにもかかわらず、用を済ませた後に水を流す音すら一度もしていなかったのだ。

（そ。それって……それって……！！）

つまり。

本当に、ここでは、誰も——中に入ってきた誰も、トイレをしていないということの証明だ。至ったその結論に、朋絵は慌てて首を振る。

「そっ、そんなことあるわけ——くうっ！？」

激しい同様に、さらなる尿意が呼び起こされる。

もはや余裕を失い、少女の下腹部は今すぐにでも排泄の許可を訴えている。しかし、朋絵はどうすることもできなかった。

目の前にはすでに3つの個室が空いているが、そのどれにもオシッコをするための設備がないのだ。それでオシッコができるわけがない。

朋絵の身体は、今すぐにでもオシッコを噴き出させようとしている。だというのに、いくら床の上にながみこんで、下着を下ろしてスカートたくしあげたくても、このままでは床の上をびちゃびちゃにおしっこで汚してしまうだけだろう。

そして少なくとも、これまでにトイレに入った少女達が、そんな事をしていた様子はないのだ。

(ど、どうしようっ……どう、なってるの、これ……っ！？)

訳のわからない事態に、朋絵の混乱は拡大の一途をたどる。まるで裸の王様だ。この寮には朋絵には見えないトイレがあるとでもいうのだろうか。夢かと思って頬をつねってみる朋絵だが、そこに走る痛みはまごうことなき現実のものだった。

そして下半身に押し寄せる女の子の切迫した事情は、そんな戸惑いすら許してくれない。

「あっ、あっあっ」

トイレを求める下半身は、辛抱しきれずに、とうとうじわあっ、とわずかな先走りを滲みださせてしまう。

押さえたスカートの奥、下着に広がる熱い感触に、朋絵は顔を赤くした。

(だ、だめええ……っ)

いい歳してついにおチビりまではじめてしまった股間を思い切り握り締め、朋絵はもう一度、トイレの中を見つめる。最後の一つとなった『使用中』の個室。あれが空けば、朋絵の前にはフリーになった4つのトイレが出迎えてくれることになる。

だが、仮にそうだったとしても、もはやあの奥にだけはきちんとしたトイレが——オシッコをするための設備が用意されているのだとは、とても思えなかった。

一縷の望みをかけて、我慢を続ける朋絵の前で。

がちゃり、と最後の個室が空く。

もちろん今回も、水を流す音はなかった。

3つも個室が空いているのに、突っ立ったままの朋絵はさぞ奇異に映っているのだろう。個室を出、洗面台に向かった少女は、首をかしげながら朋絵に声をかける。

「ねえ、空いたよ？」

「……あ、う、……え、っと」

答えられずにいる朋絵に、彼女は『ヘンな子』と呟いて、背中を向けた。そのままトイレの出口から廊下へと向かおうとする。

立ち去ろうとした小さな背中に、朋絵はたまたま走り出していた。

「ま、っ、待ってっ！！」

「……なに？」

朋絵に呼び止められた少女は、さっきよりもさらに不信感を露わにして視線を返してきた。その気配に尿意の他にもぶるりと背中を震わせながら、朋絵はこくりと唾を飲み込んでしまう。

「あ、あの……」

「なあに？ 急いでるんだけど」

もはや躊躇っている暇すらない。朋絵は覚悟を決めて、疑問を口にする。

「え、えっと、ここ、トイレのことなんだけど……」

「トイレ？」

少女はさらに視線の温度を下げ、不審げに眉をひそめる。今お前が出てきたのはどこなんだ——と言わんばかりの表情だった。

「トイレがどうかしたの？」

「あ、あの……こ、このトイレって、みんな“こんな”なの……っ？！」

もはや後戻りできず、質問を絞り出す朋絵に。

少女は、——はあ？ と不機嫌そうに眉を動かした。

「……何言ってるんだか分かんないんだけど」

「だ、だからっ……、こ、ここ……」

「ああ。他にもあるけど。1階と3階にも」

「そ、そうじゃなくて……」

まるで会話が噛み合わない。薄々予感ではしていたことではあったが、実際にその事実を目の前に突きつけられて、朋絵の思考はますます混乱の度合いを深めてゆく。

「だからなによ？ ……あのさ。はっきり言ってくれないと分かんないんだけど」

「っ……だ、だって、トイレって……ないじゃないっ」

「はあ？」

本格的に、朋絵のことを馬鹿にしたような表情で。少女は口元を歪める。

はっきりと侮蔑の感情——頭の可哀想な子だと見下すような視線で、少女は口早に先を続ける。関わり合いになりたくないと言わんばかりに。

「あのさ、良く分かんないけどそれ、私に聞かなきゃいけないこと？ ……あなた2年でしょ。ルームメイトに聞けば？ じゃあね」

「っ、あ、あの、待って——」

追いかけてしようとした朋絵だが、もはや少女には取り合う気はないようだった。

トイレがない——明らかに異常であるはずのその事実が、訴えても聞いてすら貰えない。

（お、おかしいわよっ、だ、だって……だってえ……っ）

オシッコができないのに。皆、ここに並んでいた子たちは、朋絵と同じように、トイレを使えていなかったはずなのに。

取り残された朋絵は、もう一度だけトイレの入り口に視線を戻し……それから、よろよろと覚束ない足取りで、廊下を元来た道へと歩き始めた。

「あ、朋絵ちゃんお帰り」

「トイレ混んでたー？」

長い廊下を歩ききり、ようやく歓迎会の開かれていた部屋まで戻った朋絵は、ふらふらと青い顔をしたまま輪の中へ迎え入れられる。クラスメイト達は皆にこやかで、トイレを済ませてこれなかったのだとは、誰も考えていなさそうな様子だった。

「ね、ねえっ……」

テーブルに、机に、ベッドに。思い思いに座るクラスメイトの中。自分の位置に戻った朋絵は、隣の裕美にそっと耳打ちする。

「ん？ どうかしたの？ なんか飲む？」

「う、うんっ。ち、違ってっ」

もう何も飲める気がしない。少しでも水分を採ったら、その分がすぐに下から出てきてしまいそうだ。ぱんぱんの膀胱をさすりながら、朋絵は慌てて首を振った。

「？ なんか、顔青いけど……」

「あ、あのね……そ、その、こ、このトイレなんだけど……」

「？ なに？ だって朋絵ちゃん、行ってきたんじゃないの？」

「そ、そうなんだけど……っ」

裕美はきょとんとしたように瞬きをする。お芝居や嘘の様子は無く、まったく朋絵の言っていることが不思議だというように。

「あ、見つけれなかったの？ 普通に廊下の突き当たりにあるけど……」

「んあっ……ち、違ってっ」

不意に押し寄せてきた尿意の波。びくんと下腹部を伝播する感覚に思わずぎゅうっと身をよじりながら、朋絵は首を振り、早口にまくしたてた。

「そ、そうじゃなくてっ、こ、このトイレって、その、どうすれば……」

あの。床板だけのトイレで、いったいどうすればいいのか。あやふやで伝わりにくいその質問はまさに、朋絵の混乱そのままを表していた。

「どうすればって……普通だよ？」

裕美のその反応は、やはりトイレに居た少女と同じものだった。あれを、あの何もないトイレを、裕美も普通だという。今日一日、転校して来たばかりの朋絵の世話を焼いてくれた裕美ですら、そんな事を言う。

まさか、違うものが見えているのは朋絵だけだというのだろうか？ しかしそんな不条理あり得るはずがない。寮の全員が話を合わせて、朋絵をからかっているとでも考えた方がまだ筋は通るだろう。

あるいは——イジメ、とか。

（んあ……っ）

辛い下腹部を懸命にさすり、正座の太腿をもじもじと擦り合わせながら、朋絵は小さく身悶えする。

しかし、そもそも現実問題として、トイレのはずの場所、皆がオシッコのために並んで入って行った個室の中に、何もないことを、朋絵は確認してしまっているのだ。だからこそ、それらの想像は全て、あり得ない。

「こ、ここ、トイレ……その、ないよね？」

「……何言ってるの？」

意を決して口にした朋絵に、しかしきょとんと裕美は瞬きをするばかり。

「え？ ……なに、ギャグかなにか？」

「だ、だって……、個室の中、なんにも……なかった、のに」

「……えっと……………」

裕美は困惑に言葉に詰まり、眉をハの字に寄せる。そんな裕美には、朋絵を騙している気配など微塵も感じられない。不自然さのかけらも見つけることはできず、もしこれが嘘なのだとしたら、裕美もさっきのトイレに居た子たちも、揃って天才的な演技力の持ち主であろう。

「お手洗い、出来なかったの？ ひょっとして朋絵ちゃんって、……和式とか使えない？」

「っ……！！」

和式？ 朋絵は思わず叫びそうになる。

そんなものありもしなかった。

4つの個室を隅から隅まで確かめて、腰を下ろす便座など、跨ぐ便器などひとつもないことを確認している。あれが全部幻だったとでもいうのだろうか？

それとも。寮の中のトイレは、朋絵の知らない特別な使い方でもあるというのだろうか？ 世間ではそれが当たり前で、和式というのも全然別のトイレのことを指していて、朋絵がそれを知らないだけとでもいうのだろうか？

（な、なんなの、これ？ わ、私がおかしいの？ ち、違うよね？）

朋絵の知る限り、女の子のトイレというのは、洋式と和式のどちらか——下着を下ろし、スカートを脱いで、しゃがみ込んで便器にまたがるか、便座に腰をおろして済ませるものだ。男の子の方には別の、立ったままするやりかたがあることも知ってはいるが、だからと言って、個室の中に何も、オシッコをするための装置がないことなんてありえないはずだった。

けれど、この寮の中ではそれが普通であるらしい。最後の望みだったクラスメイトにまで答えられてしまい、もはや朋絵に縋りつく相手は残されていないかった。

（う、嘘、こんなの嘘だよっ……。だ、だって、だって……っ）

みんなはオシッコしたくならないの？

みんなはトイレに行かないの？

「ヘンな朋絵ちゃん……」

結局、裕美は朋絵の質問を、何かの冗談だと解釈したらしい。そのまま皆のお喋りの輪の中に戻ってゆく。

（あ、あっ、あ……）

尿意と共に溢れそうになる混乱が、ぐるぐると思考の中で渦を巻く。しばらく怪訝な顔をしていた裕美だが、ふたたびお喋りの輪の中に戻ってゆく。その時、さりげなく、わずかに朋絵との間に距離を取ったのを、朋絵は見逃さなかった。

（へ、へんな子だって、思われちゃったの……？！ 今の、で？ ……そんな、だって、おかしいのって、みんなの方じゃないの？ ど、どうやってあんな所でオシッコするの……！？）

あんなトイレ、朋絵の常識には絶対にありえない。精々思いつくのは、例えば検尿カップみたいなものを持ちこんで、それに済ませてからどこかで処理するとか。あるいは、オムツみたいなものを使うとか。それくらいが関の山だ。

仮に、もしも、万が一。年頃の女の子が使うには余りにも抵抗のある、そんな無茶苦茶なシステムなのだとしても。その痕跡すら、

あのトイレには見当たらなかったのだ。

(……なんなの、よ……っ)

もし。このまま、この寮のトイレの使い方が分からないのだと、正直に白状したとして。

皆が、『え？ 普通だよ？』と、答えられてしまったら。

そのあと、どうすればいいというのだろうか。一緒に個室に入って、どういうふうにおシッコをするのか教えて欲しいとでも言えればいいのか？ 目の前で、おシッコして見せてとでも？ 二年生にもなって？

——そんなこと、できるわけがない。

「あ、あっあっ」

混乱と共に押し寄せる尿意の波は、ますます激しく、朋絵の防波堤を突き崩そうと高くうねりを上げる。

(ど、どうしようっ、トイレ、トイレ、トイレえ……っ、おシッコ、おシッコ出ちゃう、おシッコ我慢できなくなっちゃう……っ！！)

寮のトイレは使えない——それだけは間違いなく、確固たる事実だった。

朋絵はもじもじを腰をクネらせながら、必死に考えを巡らせる。

……他のトイレなら使えるのだろうか？ 1階や3階や、あるいは事務員さんとか、職員用のトイレなら？ それとも、もう一度誰かにトイレの使い方を聞いてみる？

でも、もしそこで、『何言ってるの？』みたいに返されたら？

「……そ、そうだ、が、学校っ……！！」

追い詰められた朋絵は、咄嗟にそのことを思い出して腰を上げた。

そう、今日、転校してきたばかりの校舎——これから通うことになった学校には、ちゃんと、普通のトイレがあったのだ。朋絵は昼間のうちにそこを何回も使っているし、間違いなく、寮のトイレとは違って、ごくごく普通の、当たり前のトイレだった。

あそこなら普通におシッコできる。——救いの糸が朋絵の目の前をよぎった。

「え？ 学校？」

「う、うん……、そ、そのっ」

今から学校に行くなんて、かなりの不自然さがある。懸命に腰を揺らしながら、なんとか言い訳を探す朋絵。

しかし、皆はああ、と頷いて首を小さく横に振る。

「忘れものか何か？ ……でもダメだよ？ もう6時過ぎてる。門限厳しいんだから」

「そだね、明日取りに行くしかないかも。宿題なら見せてあげるからさ」

「えっ、えええっ！？ そ、そんなっ……」

「そんなーって言われても、規則だから。しょうがないよ。言っとくけど破ったら罰もあるんだよ？ ルームメイトも連帯責任とか取らされちゃうし。本人もみつかったら停学なんだから」

「厳しいけど、しょうがないよねー」

切羽詰まった悲鳴を上げてしまう朋絵に、優しく諭すように。無慈悲なまでの現実が救いの道を断ち切ってゆく。まるで朋絵一人を包囲するように。

この寮では8時を過ぎると玄関は施錠され、事務室を通らないと外に出ることはできない。チェックは厳重を極め、事前の許可

がなければドアをくぐることを許されず、厳しく理由を問いただされるという。

つまり。朋絵は学校のトイレどころか、寮の外へ出て、近くの茂みでオシッコをすることすら禁止されているのだ。

（あ、あぁあ……っ）

最後の最後のはずの手段、女の子にとって禁忌中の禁忌である、野外排泄という禁断の手段すら封じられて。

間近に迫ったタイムリミットの前に、朋絵はただ、困惑の中、腰をゆすり、懸命に脚の付け根を握り締めるばかりだった。

「あ、っあ、あぁあ……っ」

トイレがない。トイレと言われている場所では、朋絵はオシッコができない。

……それならば他の場所でオシッコをするしかないが、寮の建物からは一切出ることができない。

そして、寮の中にはトイレがない。

見事な三段論法で、もはや朋絵の逃げ道はどこにも残っていない。こっそりオシッコをすることすら許されないという、完璧な八方塞がりだ。

（ど、どうしようっ、どうしようっ……！！）

トイレの個室の中は排水溝すらないタイル張りなため、勿論そこに済ませるというわけにもいかなかった。個室の外には排水溝の蓋があったが、まさかあんなトコロでしゃがみ込んでオシッコをできるとでも？

あと、濡らしてもいい場所と言えば精々、洗面台かお風呂場くらいだが——

（でっ、できるわけ、ないよぉ……っ！！ み、皆も一緒に入ってるのにつ……！！）

しつ前は厳しかった朋絵は、お風呂でのオシッコなど一度も経験がない。

しかも、お風呂の利用方法だって厳しく時間が定められている。一人きりでならともかくも、これから学校だけではなく、三食の食事に寝ている間、生活までも共にするクラスメイト達が一緒にいて、身体を洗い、湯船につかるすぐその隣で——オシッコをする？溜まりに溜まったおしっこを、全部、ありったけ、排水溝の上で？

（うぁ、あぁあぁ、あ……）

寮という密室の中、もはや逃げ場を失った朋絵の、おなかのなか。

際限なく詰め込まれてゆく黄色の熱湯が、出口のない膀胱の中をぱんぱんに膨らませてゆく。遺された最後の二択は、オモロシか、おねしょか——あるいは、朝まで我慢する。そのどれかなのだ。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 校外学習のバスの話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 11/05/2011 20:45:30

BODY:

梅雨の晴れ間の空は、見事なほどに雲ひとつなく晴れ渡っていた。

待ちに待った校外学習の日。5年4組の27人を乗せたバスは、県境近くにあるパン工場を目指して走る。

身近な産業に触れ、体験することで見聞を広め広い視野を養う——そんな名目もどこへやら、車内はすっかり遠足気分。担任教諭も苦笑しながらそれを見つめていた。

それは由姫も例外ではない。

（えへへ……トモくんと同じ班だ……）

浮かれ気分で、頬は朝から緩みっぱなし。通路を挟んだ隣の座席をちらちらと窺っては、きゃあーと頬を押さえてにやにや笑いを繰り返している。不審げにそれを見ている佐奈や愛佳の視線や、ひそひそ話にも気付く様子はない。

大好きな智哉と同じ班になれたことで、由姫はすっかり天にも昇る心地だったのだ。

（神様、ありがとうございますっ！！）

しかも、班だけでなく座席まですぐ隣だ。これを喜ばずして何を喜べというのだろうか。これまで席替えでも一緒になれなかった智哉が、すぐ近くにいる。それだけでもう由姫は世界の全てに感謝したい気持ちでいっぱいだった。

眠いのを我慢して一週間続けたおまじないの効果もあったのだろうか、由姫はもう一度胸の中で『ありがとうございます』を繰り返す。

朝からずっとこんな様子だから、由姫は友達から声を掛けられても上の空。先生の注意もほとんど聞き流していた。

『——いいな、途中でトイレ休憩はないから、必ずトイレに行っておくように』

班決め、席決めが終わって以来、すっかり舞い上がって、朝起きてからトイレに行くのも忘れていた由姫の耳を、とても大事な忠告が通り過ぎてゆく。

それが悲劇の始まりになるとも、気づかないままに。

(うう…お、おトイレ……おトイレ行きたいよお…っ)

バスが出発して30分もすると由姫はすっかり落ち着きを失くしていた。

既に我慢は真っ最中の最高潮。浮かれ気分もどこへやら、由姫はシートの上でもじもじと可愛い太腿を擦り合わせ、落ち着きなく腰を揺する。

ちらりと見上げた運転席横のデジタル時計は、9時55分を指していた。

到着まではあと30分。目的地までの道のりは順調で、予定よりも早いくらいだったが、もはや由姫の我慢は限界までのカウントダウンを始めようとしている。

(…うう～…っ、……先生のバカ…なんでトイレ休憩、してくれないの…！？)

完全に自業自得なのを棚に上げて、由姫は担任教諭の背中を睨んだ。

校外学習とは言え、工場までは片道1時間。普段の50分授業とさして変わらない時間であり、それくらいならわざわざ途中にトイレ休憩を設けないのは至極まっとうな判断であろう。

しかし、由姫にはそうはいかない。何しろ朝から一度もトイレに行っていないのだ。昨日の夜から溜まり続けたおしっこで膀胱はぱんぱんに膨らみ、今にも弾けてしまいそうにじんと脚の付け根が疼いている。

高まった尿意はちくちくと鈍い痛みすら感じさせるほどで、普段ならなんてことないはずの「あと30分」が、果てしなく遠かった。

(が、我慢しなきゃ……トモ君と一緒に居るんだから……！！)

本当なら、形振り構わずぎゅうぎゅうと股間を握り締めてしまいたい。

けれど憧れの相手の前で、惨めな思いはしたくないその一心で、由姫は表向きの平静を取り繕おうと必死だった。

気付かれないようにきつく脚を交差させ、スカートの下ですりすりと太腿を擦り合わせる。じんと響く尿意を和らげるため、そつと下腹部をさする。

はあはあと楽な呼吸を探しながら、油断するとぷくつと膨らみそうになるおしっこの出口を、懸命になって締め付けていた。

(……うっ……がまん、しなきゃ……)

少しでも気を紛らわそうと、由姫が隣を見れば。

そこには顔を真っ青にしたクラスメイトの姿があった。

前屈みになり、唇をきつく引き結んで、もじもじと腰をシートの上で前後に動かすその姿。それは全部、一生懸命おしっこを我慢している時のしぐさだ。

(美穂ちゃんも……？)

思わぬところに『仲間』を見つけて驚いた由姫は、これ幸いとばかりその脇をつついた。

「……ねえねえ美穂ちゃんっ、美穂ちゃんっ」

「え……？」

「美穂ちゃんもトイレ？」

「……………由姫、ちゃんも？」

小さな声で答える美穂に、由姫はそだよお、と困った顔をしてみせる。

「先生、バス停めてくれないかなあ……あーもう、やばいよお……漏れちゃう……」

「……………」

由姫の囁きに、美穂は答えずに俯いて、顔を赤くした。

美穂はクラスの中でも大人しい方で、どちらかと言えば引込み思案なところがあった。大事な事を言い出せずに集合に遅れたり、気の強い女子から掃除当番なんかを押し付けられることも少なくない。

そんな美穂が、バスの並び順で由姫の奥の席に座ってしまったことが不運だったのかもしれない。バスに乗る前から尿意を催していた美穂だが、何度か声をかけても反応しない由姫に遠慮してしまい、せっかくの先生の忠告にもトイレに立つことができなかったのだ。

「美穂ちゃん、どう？ 我慢できそう？」

「……………」

「あとどれくらいあるのかなあ……」

「……………」

そんな事情は思いもよらず、由姫はすっかり美穂のことをトイレに行きそびれた『仲間』だと思い込んでいた。

だから『一緒に我慢しようね』と励まし合うつもりで馴れ馴れしく話し掛けたのである。

しかし、美穂からは思うような反応はなかった。

(……あーもう……なんか喋ってよお……っ)

内心『なんなの、この子？』と思いつつも、由姫もそれほど他人のことを気にしている余裕はない。

(……うー……まだ？ まだ着かないのっ？)

焦って何度時計を見ても、時刻を示す4ケタのデジタル数字はもどかしいくらいに進まなかった。

バスががたと揺れると同時に、下腹部にぴくんと走るイケナイ衝撃に、由姫は「あうっ」と小さく悲鳴を上げ、両膝を抱えて胸にくっつけるように身体を丸める。

「んう……っ」

ぎゅっと目をつぶり、口を噤んでなんとか大波をやり過ごす由姫。到着まではあと25分。こんな調子で目的地まで我慢がもつとは、由姫自身にも思えなかった。行き場を失くして閉じ込められたおしっこは、服の上からでも解るくらいに下腹部をぱんぱんに膨らませている。

(でもでもっ、トモ君がいるのに、おトイレ行きたいですなんて言えないよお……っ！！)

この期に及んでも、女の子のプライドが邪魔をする。もう5年生の由姫が、憧れの男子の前で幼稚園生みたいな事が言えるはずもないのだ。シャツの上からぎゅうっとお股を押さえ込み、由姫は小さく荒い息を繰り返す。

目の前に迫る絶体絶命の危機。

しかしその時。由姫の脳裏にふと、絶好のアイデアがひらめいた。

(あ、そうだ……！！)

素早く隣の座席を振り返る由姫。そこでは相変わらず美穂が必死の我慢を続けている。仕草こそ控えめだが、彼女もまた孤独に限界ぎりぎりの尿意と戦っていたのだ。

「ねえねえ、美穂ちゃん、大丈夫っ？」

「っ……！？」

これ幸いと、由姫は美穂の耳元にそっと囁いた。いきなりなのに美穂はびくんっ、と背筋を跳ねさせ、大きく目を見開く。

ぷるぷると唇を震わせ、美穂は辛そうに脚の付け根を押さえつけ、わずかに視線を陰くして由姫の方を見た。

「んっ……」

その目元には涙が浮かび、座席の上では内股になった脚が激しく擦り合わされている。由姫が余計な事をしたせいで、少しチビってしまったらしい。

もう喋る余裕もない美穂に、由姫は手応えありと身を乗り出す。

「ねえ美穂ちゃん、我慢できないなら、先生に言った方がいいよ。……ね？」

「……………」

はっきりと言われ、美穂の目元にさらに涙が滲む。

(これなら、トモ君にも気付かれないし……美穂ちゃんだっておトイレに行けるもんね。わたしってば頭いい！！)

これが由姫の“作戦”だった。

美穂に我慢できないと手を上げさせ、バスを止めて臨時のトイレ休憩を作り上げ、それに付き添うふりをしてちゃっかりおしっこを済ませてしまおうというのだ。

(……それにそれに、トモ君にも優しい子だと思ってもらえちゃうかも！！)

自分のことは顧みもせず、勝手な想像まで付け足す身勝手さで、由姫は美穂にギブアップを促す。

「……………、っ」

しかし、美穂は涙を浮かべたまま、小さくふるふると首を振った。

実は由姫と違って、美穂はバスが着くまでなんとか我慢を続けるつもりだった。

5年生にもなって、トイレが我慢できずにバスを止めてしまうなんて、オモラシと同じかそれ以上に恥ずかしいことだ。出発前にトイレを言いだせなかった気弱な美穂に、そんな事ができようはずもない。

それを由姫に『もう我慢できないんでしょ？』とあからさまに言われてしまえば、懸命に耐えようとしていた心は激しく動揺し、ぐらついてしまうのは当然だった。

「ねえ、美穂ちゃん、無理しちゃだめだよ。そんなに我慢してるのに……ほら、すぐオモラシしちゃうよ？ 恥ずかしくてもちゃんと言わなきゃ。そうだよね？」

自分も下半身を忙しくモジ付かせているのを棚に上げ、由姫はさらに美穂に迫った。だが、由姫も切羽詰まって形振り構ってられないから当然とはいえ、そうして強引な態度に出ることは却って逆効果なのだ。

人一倍繊細な羞恥心を『おトイレ我慢できないでしょ？』『漏らしちゃうよ？』と煽られて、美穂はますます俯き、顔を赤くして何もできなくなってしまう。

そんな美穂を見て、由姫は焦れ出した。

(……もうっ、美穂ちゃんってば、そんなに我慢してるくせにつ……！！　くう……っ、は、早くしなきゃ間に合わなくなっちゃうのに……っ！！)

バスが黄信号に従って減速し、交差点の前で停車する。

ぞわぞわと背筋に這い上がるむず痒い感覚に身体をよじりながら、由姫は手を伸ばし、無理やり美穂の手を掴んだ。嫌がる美穂を無視して強引に手を上げさせようと、力を込める。

「ほら、先生に言わなきゃっ……」

「あ……！！　いや、……っ、だ、だめえ……！！」

絞り出すような叫びと共に、美穂の座るシートの位置で『しゅうう』と勢いのいい水流の音が響く。両手の力も使ってぎりぎり拮抗していた尿意と我慢の力が、一気に崩壊へと傾いてしまったのだ。

「あっ、あ。あ……っ」

スカートを握り押さえた指の奥で、じゅうううっ、ぶしゅううっ、と女の子らしからぬ豪快な放水音が響き、びちゃびちゃと床に水流が溢れ落ちてゆく。

美穂のスカートにはたちまち大きな染みが広がり、さらに勢いよく水音が増した。

「うわ……！？　なにやってんだよ田辺！？」

目撃くそれに気付いた男子が声を上げた。5年生にもなったのバスの中でのオモラシという異常事態に、たちまち喧騒が沸き起こる。周囲の視線が美穂の席へと集中し、ざわざわと声が渦を巻きはじめた。

「おい、どうした？」

先生までもが騒ぎを聞き付けてやってくる。無論、由姫の憧れの相手も例外ではない。

「汚ねー。なにシオンベン漏らしてんだよ」

「便所ぐらい行けよなあ。ガキじゃないんだから」

「……っ、……っ」

心ない言葉に、俯いたまま涙をこぼす美穂。

だが——その隣でいよいよ追い詰められてしまったのは他でもない、由姫だ。

「……あ、も、もうっ。……さ、美穂ちゃんってば、だから、言ったのにっ……が、我慢できないなら、ちゃんと、言わなきゃ、……だ、ダメじゃないっ……」

集まる視線の中、慌てて両手をスカートの上からどけ、由姫は咄嗟に言い繕おうとする。だが、その腰はゆらゆらと揺れ動き、脚はさっきから何度もきつく交差されて激しくすりすり擦り合わされる。

あんな非常識な方法でバスを止めさせようとしていたくらいだ。由姫ももはや我慢の限界だった。

(あっ、あ、だめ、だめっ、出ちゃう！！　漏れちゃうっ……！！)

おしっこの出口にじくんと鈍い痛みが走ったかと思うと、じわあ、と下着の奥に熱い者が滲みだす。じゅわじゅわと染み出すおチビとともに、途方もない解放感がせり上がってくる。我慢に疲れ切った下半身は、それに抗うにはもはや無力だった。

床には一面に美穂のおシッコが水たまりを作り、すぐ隣では、今なおクラスメイトが出しきれていないおしっこを断続的に漏らし続けているのだ。

この状況でなおも我慢を続ける気力など、由姫に残ってはいようはずもなかった。

「せ、先生、っ、美穂ちゃんが、お、おっしょ、我慢、できないって……っ」

（だめ、がっ、我慢、我慢しなきゃ……っ、と、トモ君、見てるんだからっ…お、オモラシ、なんかダメ、だめ、ああ、ああっ……）

耐え難い尿意に、前屈みになって立ちあがってしまった腰がかくかくと前後に揺れ、脚の付け根に挟んだ手のひらの奥で、しゅるしゅると恥ずかしい水流が音を響かせる。

「んあ、っ、せ、先生、美穂ちゃん、おトイレに、連れて行っても、……、んっ、んんんっ～～……っ！！」

もはやそれがバスを止める理由にはならないことにも思い至らず、由姫は先生にトイレ休憩を訴えようとする。

そんな由姫の姿こそが、間違えようもなく、オシッコを我慢する女の子そのものだ。

ぴちゃ、と由姫の靴の先が美穂のオシッコで出来た水溜まりを跳ねさせたかと思った瞬間、青信号を迎えたバスがゆっくりと動き出した。

「っあ、んう、んっん……っ」

バランスを崩しかけた由姫のスカートを、どういう具合か美穂の腕が掴む。

倒れそうな由姫を支えようとしたのか、立とうとしたのを引き留めたのか、あるいはせめてもの抗議だったか。いずれにせよそれが最後のきっかけだった。

「っあ、あ、やだ、やだやだやだああ……っ、だめ、だめええ、オシッコ……っ、でちゃう……っ！！」

そう叫ぶのが精いっぱい。

前の座席の背もたれに寄り掛かって、後ろに突き出したおしり。

美穂に掴まれてめくれたスカートの下で、バックプリントの下着の股間から後方にかけてが黄色く染まり、太腿の間をしゅるしゅると幾筋もの水流が流れ落ち始める。

それだけでは飽き足らず、股間の中心からさらに激しい勢いで水流が噴射された。真っ直ぐに床に向けて叩きつけられる水流は、下着越しとは思えない勢いで足元を直撃し、じゃごおーっ、と激しい音を響かせる。

「うわあああ！？ 本間もかよっ」

「くっせー……」

朝から我慢していたこともあって、色も匂いも、美穂のものよりも遥かに濃い。しかもかなりの量が座席シートに染み込んだ美穂とは違って、おなかの中に溜め込んでいた恥ずかしい液体は全部床の上にぶちまけられているのだ。

量もその音も、女の子がするにはあまりにも恥ずかしくはしたくない排泄姿だった。

「や、やだっ、違うの、これは違うのっ、……が、我慢できなかったの、美穂ちゃん、なんだから……わたしは、違うんだからあっ……、わ、わたし、ちゃ、ちゃんと、トイレ、いけるもんっ……」

この期に及んでも『トモ君』のために意地を張り、惨めな言い訳をする由姫に、冷やかな視線が集まる。

担任教諭も言葉を失い、呆れた表情で額を覆う。たとえ引率の荷物に替えのパンツがあったところで、服をびしょ濡れにしまった生徒が二人も出ては、着替えるものなどない。

しかもこのまま少なくともあと20分は、バスは走り続けなければならないのだ。掃除をしようにも道具は不十分で、立ちこめるおっしょの匂いと、床を広がる水たまりに、クラスメイト達は悲鳴を上げ、軽蔑の視線を向ける。

「う、ちがうの、ちがうのにい……」

なおも足元の水たまりを広げ続ける由姫は、壊れたようにおなじ台詞だけを繰り返していた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/22/2011 23:05:29

BODY:

「いけー！！ 負けるなーっ！！」

「頑張れ、真琴ーっ！！」

河川敷の市営グラウンドが、応援と歓声に沸く。

心配されていた雨も前日午後には止み、梅雨の貴重な晴天となった6月第二週の日曜日。毎年恒例の町内会対抗運動会は、直前の会場変更をものともせず、今年も盛大に開催されていた。

各町内会の所属チームを示す色とりどりのリボンを身につけ、選ばれた選手たちが白熱の競技に火花を散らす。

開会宣言＆ラジオ体操からいきなりの200m走、そして綱引きによる勝ち抜きトーナメント。河川敷のグラウンドが熱気に包まれている。

「ふー……疲れたー。喉カラカラだよー」

「おつかれさま。はい、これお茶」

美優からよく冷えた麦茶を受け取った瑞香は、たちまちのうちに紙コップを空にしてお代わりを催促する。瑞香も笑顔でそれに応じた。

3杯めの麦茶を飲みほしたところで、瑞香はようやく一息ついたというように大きく伸びをした。

「うへー……お腹がちゃぼちゃぼ言ってるや」

「瑞香ちゃん、そんなに飲むと苦しくなるよ？」

「へいきへいき。飲まなきゃぶっ倒れちゃうって」

6月には珍しい晴天の中、気温は30度を超えると予想されていた。応援の熱気の中ではじっとしているだけでも汗が出てくるほどだ。熱中症にならないためにも自衛は必要だった。

「次は……10時半からだっけ。少し休憩かなあ」

プログラムを確認しながら、瑞香はぱたぱたと体操服の胸元を広げる。男子もたくさんいる会場で、物おじせず大胆な友人の仕草に少し顔を赤らめた美優は、さりげなく周りを確認してしまう。

「すごい人だねー」

「うん。いつもより混んでるかも。宣伝のポスターとかも沢山あったからなあ」

今年の運動会は、いつも利用している会場が諸事情で使えなくなり、急遽河川敷のグラウンドに変更となっていた。交通の便が良くない場所であるため、参加者が減ってしまわないよう、各町内会は普段よりも積極的に参加を呼び掛ける声を上げ、商品などにも力を入れたのだが——その甲斐あって例年以上の盛況となっているようだった。

家族連れ、友達グループ、部活の仲間。選手も応援の観客も、皆一様に楽しげだ。

心地よい喧噪の中、瑞香は遠く、グラウンドで繰り広げられている熱戦を眺めていた。

——と、

「……ミユ？」

「え、……あ、な、なに？」

もぞもぞと不審な動きをしていた美優は、名前を呼ばれて慌てて表情を取り繕う。が、長年の付き合いで彼女が何かを隠しているな、というのはすぐに瑞香には分かってしまうのだった。

「なにじゃなくて、どうかしたの？」

「え……あ、うん。……その、ちょっと……」

よく見れば、ジャージが脚の付け根に強く食い込み、お行儀よく正座した膝もぴたりとくっついたまま。言葉を濁して取り繕うように笑う美優に、瑞香はようやく思い至る。

「ああ、ひょっとしてお手洗い？」

「……う、うん」

はっきり言われて恥ずかしくなったのか、こくん、と小さく頷く美優。

(……こりゃ、結構我慢してるっぽいなー、ミユ)

恥ずかしがり屋の彼女が、もじもじと我慢して居るそぶりを見せるなんて滅多にないことだ。

そっか、と一つ小さくうなずいて、レジャーシートから立ち上がる。

「じゃあ、折角だからあたしも一緒に行っておこうかな」

「え……で、でも、荷物とかあるし……」

「すぐ戻ってくれば大丈夫だってば。……すみません、ちょっと荷物見ててくれますかー？」

隣の家族連れに了承を取ると、瑞香は美優の手を引っぱって立たせる。

まだ困惑している様子の彼女を引き連れ、瑞香は観客席を後にした。

二人が向かったのは、グラウンドの南側、大会の運営本部隣の仮設トイレだった。

グラウンドの管理事務所にはちいさな公衆トイレがあるが、個室が3つしかないような小さなトイレで今日の人手ではとてもさばききれぬワケがない。応援合戦の曲を練習をするブラスバンドの脇を通り抜け、雑踏の中を進む。

「……え？ ひょっとして、朝からずっと？」

「う……うん。その、お弁当の準備とかしてたし」

聞けば、美優はなんと朝から一度もトイレに行っていないのだという。それでまだ我慢するつもりだったらいいことに半分呆れて、瑞香は溜息をつく。

「そんなこと言ってないでさ、あたしのことなんか気にしないでいいから——」

そんな風に言いながら訪れた仮設トイレの前で、しかし美優は急に声をあげて立ち止まってしまった。

「え……」

不自然なほどに、声のトーンを落とした美優が、きゅうっと体操服の前を握り締める。

グラウンドの南には、ちょうど東西に分けて男性用と女性用の仮設トイレが設けられていた。

さして混雑してない東側の男子トイレに対して、西側の女子トイレの前には、既に順番待ちの列が出来上がっていたのだ。

8個ある個室に対して、30人あまり。大半がスポーツウェアなどを見ると、選手が競技の前に用を済ませに来ているのだろうと分かる。ざっと計算しても10分以上の待ち時間が必要に思えた。

瑞香と美優はどちらからともなく視線を交わす。

「……結構、混んでるね」

「う、うん……。待たされそう、だね」

「並ぶ？」

「……………う、うん……」

形だけ、顔はしたものの。

はっきりと、美優が不快感を顔ににじませるのを、瑞香は気付いていた。

(……あちゃー……そっか……)

学校でも、朝礼の後などにこれくらいの人数、トイレが混雑することはたまにある。ここが学校と同じような、洗面台を兼ねたトイレであるならば美優も大して気にせずに後ろに並ぶだろう。

お手洗い、洗面所。直接的には多くトイレのことを示す単語だが、それはつまり、手を洗ったり髪を整えたりして、身だしなみを正す場所、という意味も同時に含んでいる。特に女子にとって『お手洗い』に入るとするのは、必ずしもオシッコを済ませるためではない。

だが、個室が屋外にずらりと並んでいるのとはほぼ同義の、仮設トイレには当然、洗面台などは付いていない。この列に並ぶということは、そのまま『今からここでオシッコします』と宣言しているのと同じことなのだ。

まして周囲には、さして近くにいるわけでもないがちらほらと異性の姿も見える。瑞香たちは他校の男子生徒や父兄も見ている中で、トイレに並ばなければならなかった。

たとえ視線は遮られるとは言え、彼らの視線を背中に受けながら一メートル四方もあるかないかの個室の中へと入り、スパッツと下着をまとめて下ろし、深くしゃがみ込んで汚れた便器の中に、放水音も高らかに激しく熱水を流らせる——それは思春期を迎えたばかりの少女たちにとってなかなか許容できるものではない。

まして、人一倍恥ずかしがりやな美優には尚更だろう。念のため、さりげなさを装って瑞香は美優に聞いてみることにする。

「ミユ、どうする？」

「う……ん。」

じっと、仮設トイレの順番待ち行列を睨み、美優はかすかに、腰を揺すったようなしぐさを見せた。

が、すぐにいつもの笑顔を覗かせ、

「……後にするよ。まだ大丈夫だから」

「そう？」

「うん、それより瑞香ちゃんは？ 次のプログラムの前に戻らなきゃだから、すぐ並ばないと——」

「あたしも平気。ちゃんと出掛ける前に済ませてきたし」

予想通りの答えが返ってきたことに不安を覚えつつも、瑞香も内心不承不承ながら笑顔を返す。

(あんまり、大丈夫そうに見えないけど……)

どう見てもゆらゆらと左右に揺れている美優の足元を見、瑞香は不安が募っていくのを感じていた。しかし、美優本人が大丈夫だと言っているのに、それ以上食い下がるわけにもいかない。まさかここで無理矢理その腕を掴んで並ばせるわけにもいかない。

「そうだね……また、空いてるときにしょ」

遠目に見える同年代の男子生徒たちの視線を感じながら、二人はそのまま、別にたまたま通りがかっただけ、はじめてから用事などなかったんですよ、というような顔をして回れ右、順番待ちの列を後にする。

瑞香はまださして強い尿意を覚えていたわけでもないのに、この判断は決して間違っているとは言えなかった。……あくまで、この時の瑞香が下すには、という条件付ではあるが。

美優はすぐに。

そしてまた、瑞香も後になって、このことを深く悔いることになるのである。

「うわ……さっきより混んでる……」

時刻は過ぎて10時半。瑞香が次のプログラムに向かったのを見届けて、美優はとうとう席を離れて再びトイレへとやって来ていた。30分も待ったのだ、いくらなんでももうトイレも空いているのだらうと思い込んでいた美優だが、目の前の惨状に思わず叫んでしまっていた。

行列に並ぶ人数は50人近くに増えていた。どうやら、同じ学校らしい揃いのジャージを着た高校生たちが、揃ってトイレにやってきたらしい。

列の大半は同年代らしき少女達で占められていて、お喋りに興じる彼女たちの後ろに、所在なげに小学校低学年と思しき子がぼつんと並んでいる。

そのブルマ姿の小学生はかなり余裕がなさそうで、人目を憚らず片手でぎゅっと、体操服の上から脚の間を押さえている。

「……あ」

辛そうな少女の我慢が伝染し、余裕のない下腹部を震わせる美優は小さく身震いをした。

(……ど、どうしよう……っ)

ちらりと視線を反らした先には、相変わらずガラガラの男子側のトイレがある。遠く、雑踏の中の男子達の視線が、無遠慮にこちらを見ているような気が振り払えなかった。

その視線には幾分、男子たちを羨むような気配も込められていた。そもそも一回の使用にかかる時間が大きく異なるだけでも、女子トイレは行列ができやすい。まして使い慣れない仮設トイレではなおさらだろう。

実は、大会運営側でも河川敷のグラウンドにトイレが不足するであろうことは事前にも指摘されており、そのために仮設トイレの増設、さらに当日の混雑状況を考慮し、急遽、男性用の仮設トイレの一部を女性用に振り替える対策がとられていた。

しかしそれでもなお追いつかず、時間と共に行列は伸びる一方となっていたのである。

また、開催日当日には晴天となることが見込まれたため、熱射病を警戒して、水分補給のためには無料でスポーツドリンクやお茶などが大量に用意された。だがその結果、利尿作用や給水に優れた水分補給は、それだけ多く代謝を高め、より強く排泄を促してしまったのである。

むろん、そんな事情を美優が知るはずもない。

(……んっ……)

体操服の上から腿のあたりをきつく押さえ、その場で交互に左右の脚に体重を乗せ、身体を左右に揺する。

朝6時に起きてのお弁当作り、タオルに日焼け対策と、準備に追われてトイレに行くのをつい忘れたまま、会場行きの送迎バスに乗ってしまったのが朝8時。瑞香と合流してからなんとなく言いだしそびれたまま開会式を迎え、美優の貯水池は既に許容量を超えつつある。

そう、『朝から一度も』とは、『朝にトイレに行ってから一度も』の意味ではなく、『昨日の夜から一度も』の意味なのだ。

昨夜から我慢を続けたオシッコは、既に美優に耐え難いほどの尿意をもたらしていた。

(こ、これ以上待っても、空いたりしない……よね、きっと……)

淡い期待。けれどそれがむなしい希望であろうことは、美優にも理解できた。これからお昼を迎え、この仮設トイレがますます人でごった返す事は想像に難くない。

だとすれば、早く並ぶか遅く並ぶかの違いしかないのだ。

(……も、もう、我慢できないよ……)

そして、美優にはもうこれ以上、トイレに行くのを遅らせる余裕はなかった。

恥ずかしさを堪え、美優は順番待ちの後ろへと並ぶ。尿意を押さえるための前かがみ、膝を擦り合わせる格好は、順番待ちの列の中でも異彩を放っていた。

「っ……」

強い尿意を耐えながらの長蛇の列は、もどかしいほどに遅く、じれったいものだった。

はやく、はやく。急かす言葉は声にならず、そわそわと落ち着きのない下半身がひっきりなしに擦り合わされる。揃えたかかとを交互に持ち上げ、小刻みにリズムを刻みながらの我慢ダンス。時折隣を通りがかる男子生徒や男性職員の視線が、繊細な少女の羞恥心を傷つける。

(さっき、ちゃんと並んでおけば良かった……っ)

長い列が徐々に進み、15分あまりが経過した。列はまだ長く、前に10人以上の姿が見える。

瑞香とやって来た時に見栄を張らず並んでいれば、もうとくに用を済ませていられたはずなのに——激しい後悔が美優を襲うが、もはやどうしようもない。

人目のある屋外の行列の中、懸命に我慢を続けていた美優だが、いよいよ取り繕うのも厳しい状況になりつつある。

仮設トイレを前に順番待ちをしているだけで、急かされるように尿意が高まるのだ。

おしっこをするために並んでいるのだ、という事実は、もうすぐやってくる自分の番を心待ちにしていることを美優に否が応でも自覚させた。

一つ前の順番の子が空いたトイレに入り、もうひとつ列が前に進む。美優の番まではあと13人。その次の順番で、美優はようやく朝から並んでいたトイレに入ることが許されることになる。

薄い壁の仮設トイレの個室からは、かなりの距離を隔ててもごそごそと身づくろいの音、流れる水の音、トイレットペーパーを採る音まではっきりと聞えてきて、年頃の少女達の羞恥心を強く刺激してしまう。

(もうすぐ、もうすぐ、おしっこできる……)

すでに美優は、頭の中で下着を下ろししゃがみ込む、おしっこの準備をイメージし始めていた。あとほんの10分も我慢を続ければ、自分の番なのだ。待ち焦がれる恋のような視線を、清潔とは言い難い仮設トイレのドアに向け、もじもじと脚を寄せ合わせる。

あと少し、あと少し。

必死にそれだけを考え、途中何度も脚の付け根を握り締め押さえこんでしまったりもしながら、美優は懸命に順番を待ち続けた。

そして——

ついに。すぐ前に一人を残し、美優は行列のほぼ戦闘にやってきていた。

「んっ……う、はあ……っ」

ぐりぐりと身体をねじるようにして、何度も何度も足を交差し、はあはあと息を荒げる。

声をかけるのも躊躇われるようなその姿に、周りの少女達もわずかに距離をとる。

（あとちょっと……もうすぐ、ほんのちよっただけ……っ）

ぎゅっと目をつぶり、今にも口を開いてしまいそうなおしっこの出口をありったけの力で締め付ける。行き場を失くした尿意が下腹部で暴れ回り、膀胱を無理矢理引き延ばすように鈍い痛みをもたらした。ぱんぱんに張り詰めた下腹部を両手でさすりながら、美優はがくがくと腰を揺する。

ついに最後のドアが開いた。

（やった……！！）

思わず歓声をあげかけてしまう。

実に 2 5 分にも渡る長時間の我慢の末、美優はやっと『次はトイレに入れる』権利、トイレ順番待ち行列の最優先権第一番——列の先頭を勝ち取ったのだ。

どこでも良い。8 つある個室のどれかが空けば、今すぐにおしっこができる。

（トイレ、トイレっ、次、……おしっこできる、おしっこする、トイレで、おしっこっ……！！）

トイレ、オシッコ、思春期の少女にはあまりにも似つかわしくない、羞恥溢れるその二単語で美優の頭の中は埋め尽くされていた。

並ぶ仮設トイレの右端、ドアが開いて中の子が顔を覗かせた瞬間、美優は鳴り響くファンファーレの幻聴を耳にした。

飛びつくように右端の個室へと駆け寄った美優を見、出てきた少女は表情を強張らせる。

「あ、あの……」

「ごめんなさい、も、もう我慢できないのっ！！」

オシッコが我慢できない——躊躇うのを忘れてしまう程、美優は切羽詰まっていたのだ。

「あ、あのっ、待って……っ！！」

まるでゆだったように耳まで真っ赤になって、俯きながらもごもごとつぶやく子を押しのけるように、美優は半ば力づくで、払いのけるように少女を追い出して個室の中へと飛び込んでしまう。

後ろ手に鍵をかけながら、スパッツに指をかける。

その時、美優は思いもよらないものを目にした。

「な、なにこれっ……！？」

呻くような悲鳴が、知らず飛び出していた。

トイレの中は、凄まじい惨状となっていた。いかにも仮設といった体の個室は、ドアのすぐ前に和式の便器を構え、一段段差を昇ってそこで便器をまたいでしゃがみ込む構造となっている。

その個室内部すべてが、あり得ないほどに汚れていたのだ。

和式便器は泡立ち濁った水が縁まで溢れ、ごぼごぼと不快な音を立てて中身を逆流させていた。汚水は便器の中に留まらず、耐え難いほどの汚臭を放って、床上全体を汚している。さらには汚物入れから溢れた様々なものが床の 4 分の 1 を占め、何なのか想像もしたくない臭いを放っていた。

拳句ロールホルダのトイレットペーパーも尽き、予備は床の上で水浸し。

とてもではないが、使えるような状況ではなかった。

「っ……」

込み上げる不快感に、美優は思わずあとじさる。どんと背中がドアにぶつかった。

同時——

（んん、っああああ……っつ）

じわあ、と脚の付け根に熱い衝撃。やっと辿り着いたはずのトイレで、美優の身体は勝手に排泄の準備を終え、おしっこを絞りだそうとしていた。膀胱が収縮をはじめ、足の付け根の奥にあるおしっこの出口が、勝手にしゅるしゅると水音を響かせる。

ジンジンと痺れる小さな穴の感覚はもはや無く、じゅじゅう、ぶじゅつ、とたつぷり水を含んだ布地が脚の付け根にへばりつく感覚が美優を戦慄させた。

「や、だ、め、で、でちゃ、だ……っ」

必死になって両手で股間を押さえこむ美優。しかしふらつく足が定まることはなく、少女の身体は大きく傾いた。

反射的に伸ばした手が水洗レバーを掴む。とたん、世にも不気味な音を響かせて便器が逆流を始めた。声にならない悲鳴を上げ、美優は鍵の掛かっていないドアから外へと転げ出してしまう。

それを見て、個室が空いたと勘違いした列の先頭の少女が走り寄ってきた。彼女もまたドアの中を覗き、その惨状に思い斬り顔をしかめる。ごぼごぼと汚水を塞ぎ止めた便器が、仮設トイレの個室の中から汚辱を外へと溢れさせてゆく。

美優の喉が、ひ、と小さな掠れた音を立てる。

「ち、ちがいます……、ちがうんですっ……！！」

おもわず、美優は叫んでいた。

「私じゃないですっ！！ わ、私が入ったとき、もうこんなになってて——だ、だから、私がやったんじゃない……っど、どうしても、水、流れなくてっ……」

たった今まで、個室の中に中に居た少女は、睨まれる視線から目を伏せるように言い訳を始めた。だが、列の後ろに居た少女達が、この個室の中の事情など知るはずもない。勢い、疑いの視線は個室から飛び出してきた美優に集まってゆく。

美優に責任はない。もともと、仮設トイレは通常のトイレに比べれば脆いものなのだ。早朝から利用者は詰めかけ、女子トイレが混雑をはじめてからすでに4時間が経過している。

限界を超えて酷使された仮設トイレの中に、利用者のマナー問題や配管を詰まらせるなどのトラブルも発生するのは必然だったのである。

（あ、あつ、あ……）

壊れたトイレを遠巻きにして、列に動揺が広がってゆく。

「え、え、……なに、壊れちゃったの？」

「そんなっ、せっかく並んでるのに……！！」

「ちょ、ちょっとお、困るわよそんなのっ、っ、つぎ、私の番だったのにっ！！」

順番待ちの行列は、さらに幾分長くなったようにも見えた。8つある仮設トイレのうち、ひとつが使用不能になれば、それだけ順番が回ってくるのも遅くなってしまふ。耐え難い尿意を堪えて列に並ぶ少女達の中には、美優に敵意にも近い視線を向ける者までいた。

がくがくと腰を震わせ、美優はその場を動けなくなってしまう。

だが。皮肉にも、それからはじまった事態は美優が身を持って、この仮設トイレを故障させた犯人ではないことを証明することとなった。

すでにオモラシをはじめていた美優の下半身が、引きつるように限界を迎える。じゅわ、じゅわと漏れ出した熱い雫は、ソックスまでをびっしょりと濡らしていった。

「あ、あぁあ……だめ……っ」

緊張が途切れ、崩れ落ちるように落ちた腰から、滝のように水流があふれ出す。

ぶじゅっ、じゅじゅっ、じゅうううう！

じゅじょじょじょじょおおおおおお……！！

遠く離れた順番待ちの列の最後尾にまで、はっきりと届くほどの轟音。スパッツと下着の布地にぶつかり、なお突き抜ける水流の勢いは途方もない。じゅぶぶ、とぐぐもった水音は、水道にハンカチを被せて思い斬り蛇口を捻った時のようだ。

まるで滝のように、色の濃いおしっこが美優の脚の付け根から噴き上がる。順番待ちの少女達はどよめきとともに距離をとる中で、美優は盛大なオモラシをはじめてしまった。

「い、いやぁあ……っ」

じゅごっ、じゅごごごごおっ、じゅごお——っ！！

押さえた手のひらにぶつかる水流は、とても女の子の排泄音とは思えないものだった。今日の競技におしっこ勢い測定の種目があれば、間違いなく1位を取れるだろう。

「ち、ちがうの、違うんです……っ、こ、こんなの、こんなの、ぜんぶ、違うんです……っ、わ、私、ちゃんと、ちゃんと、トイレまで、が、がまんっ、したのにつ……したのにっ……！！」

泣きじゃくりながらも、少女が股間を押さえた手のひらの上に吹き付けられた奔流は、呆れるほどの勢いで仮設トイレ前に大きな水溜りを作り上げてゆく。順番待ちに並んでいる少女達のなかには、このオモラシに誘われ、たっぷりとおチビリをして下着に大きな染みを作ってしまうものも少なかった。

仮設トイレの目前で、体操服をびしょ濡れにしておしっこを続ける少女——美優へ向けて、幾つもの奇異の視線が集まってゆく。なかにはあからさまな欲望をぎらつかせる視線もあった。

美優のおしっこはそんな中、実に2分近くにも渡って続いたのである。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/22/2011 23:08:39

BODY:

（やっぱり、こっちの方にはないのかなあ……）

梅雨の合間に覗く青空の下。河川敷沿いの歩道の外れで、小上孝乃は途方に暮れていた。

肩までの髪を短くまとめ、足元はソックスに履き慣れたスニーカー。袖には所属チームを示す水色のリボン。

学校指定のスパッツに体操服という軽装も、ひと足早い初夏の日差しの下では軽く汗ばむほど。誰の視線もないのをいいことに、体操服の裾をつまんでぱたぱたと涼を取りながら、孝乃は河川敷沿いに広がる市営のグラウンドを振り返る。

遠く響くのは、グラウンドを囲む観客たちの歓声と、実況のアナウンス。

町内会対抗の運動会は、午後を過ぎていよいよ白熱しているようだった。

「ん……」

いつのまにかかなりの距離を歩いてきてしまったことに気付いて、孝乃は足を止める。

『次の競技は二人三脚です。参加選手の方は、入場門の前に集合してください——』

アナウンスに耳を澄ませば、プログラムはあと少しで孝乃の参加する障害物競走だ。準備も考えるとそろそろ戻らなければならない時間だった。

「……どうしよう……」

後ろ髪を引かれる思いで、孝乃はぐるりとあたりを見回す。

わずかな期待を込めてここまで歩いてきたものの、めばしい場所は見つからない。河川敷はただ广大で、清掃用具などを片付ける小さな小屋の他には、数キロ先にある私鉄の鉄橋くらいしか目につく建造物はなかった。

アスファルトで舗装された歩道の真ん中で、孝乃の足がとんとんとリズムを刻む。

困惑と躊躇が彩る少女の表情は、なにかを堪えているように陰を帯びていた。

わあっ、と遠くのグラウンドで歓声が上がる。どうやらリレーの最終走者がバトンを受け取ったらしい。実況が力強く、ゴール前のデッドヒートを応援する。

知らず、孝乃の手はきゅっ、と体操服の裾を握り締めていた。

「……やっぱり、戻らなきゃだめ……かな」

気の進まない様子で、少女は来た道を戻り始める。しかし、その足取りは足枷でも嵌められたように重かった。

——誤解のないように補足しておく、孝乃は別段、運動が苦手という訳ではなかった。

均整のとれた手足や、良く使いこまれたスニーカーを見ても分かるように、むしろ身体を動かすのは得意だった。断じて、競技に出ることが億劫なわけではない。

そもそもこの運動会自体が町内会の主催であり、学校行事のように参加が義務付けられている訳でもないのだ。

それでもなお孝乃が躊躇っているのは、別の事情による。

「っ……」

不意に孝乃は背中を丸め、きゅ、と息をのむように小さく口を嚙む。のろのろとではあるが進んでいた足がピタリと止まり、スパッツの内腿が寄せられて、不自然なほどの内股になってゆく。

(……………トイレ……………っ)

女の子の秘密のダムにたっぷりと蓄えられ、下腹部を硬く張り詰めさせる恥ずかしい液体。そのもたらす尿意こそが、孝乃を切羽詰まらせている切実な事情だった。

毎年恒例の町内会対抗の大運動会は、孝乃にとっても幼い頃からなじみのあるものである。市内の子供たちは小学校低学年くらいまでは慣例として参加することが多く、市内に住んでいるのならば一度は足を運んだことがあるという地域密着型のイベントだ。

だが、今年は少々事情が違っていた。昨年まで使われていた市立の中学校のグラウンドが、改装工事によって使えなくなり、急遽開催場所が変更されることになったのだ。

代替場所に選ばれたのは、市内の中心部からもやや離れた場所にある河川敷のグラウンドだった。

当日は参加選手、その応援含めて千人単位での人出が見込まれるため、他に替えがなかったという事情もある。交通の便は臨時駐車場や送迎用のバスを用意することで何とか解決したものの、最寄りのコンビニまで歩いても15分もかかるという立地は、予想外の不便をいくつも引き起こしていた。

その最たるものが、トイレである。

もともと大人数が利用することが想定されていなかった河川敷のグラウンドでは、施設の端にある管理棟に小さな公衆トイレがひとつ設けられているのみだった。

当然ながらそれだけで数千人規模のトイレを賄える訳もなく、開催者側も仮設トイレを用意するなどして対策をしていたのだが——その数が圧倒的に足りなかったのである。

男性用のトイレは辛うじて混雑程度で済んでいたが、女性用のトイレは利用者に対する設備が足りず、順番待ちの大行列を作る結果となってしまったのである。

以上のような経緯により、会場には多くの少女達がトイレの順番待ちに並び、その上更に多くの少女達が『順番待ち予備軍』として、もう少しトイレが空くまで密かに我慢し続けるという異常事態が発生しつつあった。競技に参加している選手も、外で応援している観客たちも、実にその6割近くが尿意を覚えていたのだから、どれほどの状況なのかは推して知るべしであろう。

また、参加者の半数が若い女性——特に思春期の女生徒が多く、どうしても不衛生になる仮設トイレの利用を避けようとする心理が働いてしまったことも理由の一因といえた。

……かくして。

河川敷のグラウンドには潜在的に、数百人に及ぶ体操服トイレ我慢少女を抱え、空いているトイレを求めて放浪する多くのトイレ難民少女が生まれていたのである。

孝乃もまた、トイレを求め河川敷をあちこちを歩き回っている『おトイレ難民』の一人だった。9時半の開会式直後から感じていた尿意は、4時間を経てすでに下腹部に鈍い痛みを感じるほどに限界近くになりつつある。

「んっ……あ……」

もはや尿意は耐えがたいもので、じっとしているだけで腰が揺れ出してしまうほどだった孝乃は。周囲に視線がないのをいいことに、スパッツの上から体操服の裾を足の間に挟み込むようにして、ぎゅっと股間を押さえ込むという大胆な格好まで始めてしまっている。

それでもなお波のように押し寄せる尿意は、おさまることなくじわじわとその勢力を高めつつあった。

(オシッコ……！！)

身体の奥から込み上げてくる欲求に、少女の身体はぶると身悶えする。

孝乃は最初、大混雑の仮設トイレと管理棟のトイレを避け、グラウンドを出て、近くのコンビニのトイレを借りに行くことを考えていた。同じことを考えていた優花と一緒に、しかしいそいそとコンビニへ向かう途中の道で、そちらから戻ってきた学校のクラスメイト達に、

『あっちもダメだよ。すごい混んでて……私達も、おトイレできなかったから……』

と、衝撃の事実を告げられて、浅はかな思考を後悔することとなったのである。

それでも念のためにと様子を見に行った優花と別れ、孝乃は仕方なしにグラウンドの周りを探すことにしたのだ。

別にになにか、具体的な解決策の心当たりがあったわけではない。

だが管理棟と仮設トイレ、他に使えるトイレがない今、わずかでも残った希望に縋りたいというのは自然な心境だったと言えるだろう。普段は野球やサッカーのクラブが利用している場所だけに、誰か知らないような場所にトイレがあるのではないかと、そんなささやかな願いを込めてここまで歩いてきたのだ。

しかしそんな探索行もただ貴重な時間を無駄にただけに終わり、孝乃は再び大混雑のトイレしかないグラウンドに戻らねばならなかった。

(……うう……どうしよう、やっぱり優花ちゃんと一緒にコンビニまで行けばよかったのかなあ……でも、それだと次の競技に間に合わなかったかもしれないし……)

競技に参加する選手は、形だけとはいえ町内会の選抜として選ばれている以上、不参加となるのは避けたかった。孝乃の場合、参加枠に立候補しているだけの責任も感じているのだ。

歩いてきた道を半分ほど戻ってきたあたりで、孝乃は丸まっていた背中を伸ばし、皺になっていた体操服を引っ張り直す。

本音を言えばいまもぎゅっとあそこを押さえておきたいくらいだが、そろそろ恥ずかしい格好も出来なくなってきたのだ。じんじんと疼く下腹部は、膨らみ切った膀胱でまるで妊婦のようだ。なだらかに膨らんだおなかをそっと撫でながら、孝乃は気の進まない足をグラウンドの方へと向ける。

こんな状況で競技に出場できるのだろうか。緊張にまた膀胱が疼き、尿意と共に不安が込み上げてくる。

と、その時だ。

不意に目の前でがさと茂みが揺れ、そこから一人の少女が顔を出した。

孝乃と同年代と思われる、三つ編みの少女は、孝乃とは違うデザインの体操服を着、袖にピンクのリボンを付けていた。彼女とばっちり視線が合い、孝乃は軽い驚きに言葉を失う。

「っ……！？」

その一方で、少女のほうは更に慌てている様子だった。まるで熊と出くわしたように目を見開いた少女は、孝乃と数秒見つめ合い、それからはっとしたように、自分が出てきた背後の茂みの方へと視線を向ける。

直後、まるで湯気を噴いたように三つ編みの少女の顔が赤く染まる。

「え、っと……」

孝乃が困惑のつぶやきを洩らした直後。少女は弾かれたように顔を伏せ、グラウンドの方へ一目散に走り出した。

みるみるうちに小さくなる背中を、孝乃は呆然と見送るばかりだ。

「……？」

訳が分からずしばし呆気にとられていた孝乃だが、不意にその答えを知ることになる。

川沿いを緩やかに吹き抜ける風が、かすかな匂いを運んで来たのだ。

(……………！！)

それは、あまりにも予想外のものだった。

孝乃は思わず、三つ編みの少女が顔を出した茂みの方へと視線を向ける。ふらふらと引き寄せられるように数歩を歩み出し、茂みを踏み分けたその先にあるものを見て、声を上げそうになった。

河原の隅、背の高い茂みの奥には、古びたコンクリートのたたきが設けられていた。

その一角が、たった今水を撒いたかのように黒く湿り、濡れていたのだ。

先程の匂いからも、それがただの水ではないことは容易に知れた。見ればすぐ近くにも丸めたティッシュが捨てられている。

「こ、これって…………」

もはや疑うべくもなかった。ここはついさっきまで、あの三つ編みの少女によって“おしっこ場所”にされていたのである。

(さっきの子…………ここで、済ませてたんだ…………)

あの態度にもようやく得心がいて、孝乃の胸を罪悪感がよぎる。

よほど切羽詰まっていたのだろう。女の子なら屋外の——こんな茂みでのオシッコなんて、本当の本当に限界でなければまず実行しない。もっと小さな子であればともかく、トイレ以外でのおしっこなんて、孝乃の年代の少女たちにとっては“禁じ手”である。確かにオモラシに比べればマシには違いないが、誰かに済ませた跡でも見られようものなら、自殺したくなるほどの羞恥に違いなかった。

あの三つ編みの子も、誰にも見られないようにと必死に願いながら、不安に胸を高鳴らせての決意だっただろうに——ようやくオシッコを済ませたその直後に、孝乃と出くわしてしまったのである。しかも孝乃にそのことを気付かれてしまったのだ。その驚き、その羞恥はいったいどれほどのものだったのだろうか。

(私と、同じくらいの子だったのに…………そんなに我慢してたのかな…………)

胸の奥にちくりと痛みが走る。同時に、孝乃の手のひらは自然、足の付け根へと伸びていた。自分以外の子がここでオシッコをしていたという事実に、現在進行形で膀胱を張り詰めさせた少女の身体は敏感に反応してしまう。

しかもさらにとんでもないことに、よく見ればコンクリートのあちこちには、同じように黒く湿った染みが見えた。ぱっと目に留まるだけでも4つ、中にはあきらかに泡立った水たまりとなっている場所まであった。

「うわ…………」

思わず声が出ていた。

全く予想外の場所に、まったくの偶然で、孝乃は秘密の特設臨時緊急野外女子専用トイレを発見しまったのだ。

いくつもの女の子たちの『オシッコの痕跡』を目の前に、孝乃は耳が熱くなるのを感じる。

確かに、あのトイレの大行列は並んでいるのが苦痛になるほどの大混雑だ。どうしても間に合わない子がでてしまうのも頷ける。おそらくここは、そんな子達の最後の手段のスポットとなっているのだろう。

恐らくは誰が申し合わせたわけでもない。最初に限界を迎え、恥を偲んでの“はじめてのお外でのオシッコ”の場所に、ここを選んでしまった子がいたというだけだ。その子だって別にここをみんなの秘密のおトイレにするつもりなどなかっただろう。

しかし、最初の一步さえあれば、あとは抵抗もずっと少なくなる。私のほかにも誰かがしてるんだし——という共同心理が羞恥心のブロックを和らげ、いつしかここをオシッコの場所にするという暗黙の了解をつくったのだ。

ひょっとしたら、こんな場所が他にもあるのかもしれない。思わぬ場所に思わぬ形の『おトイレ』を見つけてしまい、孝乃は困惑してしまう。

（んっ……あ、あつ、だめ……、ま、また、したくなっちゃった……っ）

こぼりと下腹部のティーポットに、尿意が沸き起こる。沸騰を続ける恥ずかしい液体がその勢いを増し、少女の下半身からわずかに残っていた余裕を奪い去ってゆく。

不自然に伸びた背の高い茂み、整地された地面のコンクリート。確かにここなら周りの視線も遮れるし、出て行くところを見られなければ誰にも気付かれない。ある意味、この極限状態では絶好の用足しスポットとも言える。

禁断の場所を前に、孝乃の下腹部は切羽詰まった現状に強い抗議を訴え、反応をはじめていた。思わず腰をゆすってしまい、孝乃はじいんと足の付け根の奥、恥骨から背骨へと響くむず痒い感覚に身をよじる。これまで堪えていた我慢が、ぷつりと途切れてしまったようだった。

「だ……だめ、だめだよ……っ」

熱い視線が、コンクリートの一角を見据える。まるで恋する乙女のように、孝乃の視線はそこから離れなかった。

もともと、いつ限界を迎えてもおかしくない状況だったのだ。一度きっかけを与えられてしまった少女の排泄器官は、歓喜を叫びながら“ここ”での解放を訴えかけてくる。

——どうせもどつても、おトイレ使えないんだよ？

——我慢したままで本当にちゃんと走れるの？

——終わってから、またずっと並ばなきゃダメなんだよ？

三大欲求と並び示される排泄を訴える本能が、いくつもの誘惑となって孝乃を惑わせる。

「はあっ……う」

ぐらりと揺れる心を抑え、孝乃はぎゅうと交差させた脚に力を込め、きつく唇を噛んだ。

……どれくらい、そこでそうしていただろうか。

忙しく茂みを掻き分ける足音に、孝乃ははっと我に返った。

両手を足の付け根に重ね当て、もじもじと腰を揺する恥ずかしい格好のまま見上げた先、茂みの反対側から、小さな女の子が姿を見せていた。

白のハーフパンツの股間部分を右手でぎゅっと引っ張り上げるようにして、激しく足踏みを繰り返す女の子は、孝乃よりもずっと年少だ。学校指定のものらしい体操服には、『前原（瞳）』という名札が縫い付けられていた。

「あ、あつ、あ……」

もはや我慢の限界というように、その場足踏みを繰り返す。女の子——恐らく瞳という名前——は困惑の極致にあった。切羽詰まって駆け込んできた先に、まさか孝乃がいるとは思っていなかったらしい。

小さな手にポケットティッシュが握り締め、ぴょんぴょんと飛び跳ねながら羞恥と混乱に表情を震わせる。

まさに、『いまからここでオシッコします』と宣言しているようなものだった。

とっさのことに、孝乃は呆然となっていた。まさかこんな短時間に２回も、ここで他の女の子と遭遇するとは思っていなかったのだ。

順番で言うならば孝乃の方が先にここに居たことになる。つまり『ここ』を使う優先権は孝乃にあるのだ。その孝乃が何も言わずにいるものだから、やってきた少女もどうしていいのか分からない。

「あつ、あつ、あ……ッ」

喉を引きつらせ、引き絞るような悲鳴をを上げる少女は、かわいそうになるくらいに腰を前後に激しく揺すり出してしまう。

恐らく彼女も、孝乃と同じようにトイレ難民になり、形振り構わずにオシッコを済ませられる場所を探していたのだろう。あるいはその最中にクラスメイトにでも『ここ』の話を聞いてきたのかもしれない。

そうしてやっとの思いで辿り着いたこの場所、特設臨時野外トイレが、『使用中』だったのである。その絶望感はいかほどのものだろうか。

「……い、……あ……」

くしゃり、と歪んだ少女の身体がピタリと静止する。小刻みに膝が震え、肩が強張り、両の手のひらが我を忘れたように強くハーフパンツの股間を握り包む。「あ、え、っと……」

何か声をかけなければ——そう思う孝乃だが、とっさのことに思考が空回りし、言葉が喉に引っかかって、うまく出てこない。

「っ……」

少女の下腹部で、じゅじゅうっ、とはっきり激しい水音が響いた。

ひ、と小さく掠れたような吐息と共に、少女の肩がびくんと跳ね上がる。握り押さえたハーフパンツの指の間がみるみる色を変えてゆく。

最後の最後で入った邪魔を、少女の身体は待ってくれなかった。

酷使され続け、限界を迎えた少女の水門は、とうとう水圧に押し負けて、下着の中に激しく熱い奔流を吹き上げてしまったのだ。

じゅ、じゅうっ、じゅじゅじゅうううっ！！

一度決壊を赦してしまった水門が、崩壊を食い止められるはずもない。ありったけの力を込めて締め付けていたはずの小さな孔がぷくりと膨らみ、体操服の中に耐えに耐え続けたオシッコを撒き散らしてゆく。

じゅじゅっ、じゅうっ、じよぱっ、と断続的に途切れる水音が、彼女の最後の抵抗の証だった。

「っ……あ、…」

少女は目に涙を浮かべ、くしゃっと顔をゆがませると、じわじわと薄黄色の部分を広げているハーフパンツを押さえたまま、きつく目をつぶって、コンクリートの一角へと走り込んだ。

孝乃にお尻を向ける格好で、大胆に『がばっ』と下着とハーフパンツをまとめて足首までずりおろし、しゃがみ込む。

途端、可愛らしい足首の間に凄まじい水音が跳ね上がった。

じゅっ、じゅぱっ、ぶじゅじゅじゅううううーっ！！

まるで風化したコンクリートの表面を削って穴をあけてしまいそうな、超高水圧のオシッコ。よっぽど我慢していたのを窺わせるかの
ように、色も濃く激しい水流が、コンクリートを穿ってじゅぶじゅぶと泡を立てる。

「つう、あ……、つ……つくう……つ」

肺の中の空気を絞り出すような、掠れた声。

握り締めていた指の間から、くちゃくちゃのポケットティッシュが包みごと地面に落ち、そこにも少女自身が股間から進らせるはし
たない水流が直撃する。オシッコまみれになったティッシュは、猛烈な水圧によって水たまりの中央へと押し流されていく。

「は、あ……あ……つ」

地獄から天国へ——耐え続けた苦痛からの解放に、思わずもれた熱い吐息が少女の唇を震わせる。

ずぶ濡れの下着の股布やハーフパンツからもびちゃびちゃと飛び散る雫がコンクリートを派手に汚してゆく。まだ出始めたばかりの
オシッコが撒き散らされた地面の水たまりは、すでにこれまでのどの『痕跡』よりも遥かに大規模なものになっていた。

「つ……あ……つ」

ぶるる、とふるえた小さく白いお尻の下、途切れることのないオシッコは左右にくねり、前後に震えながらコンクリートのたたきき流れ
出していた。

うずくまる少女の俯いたうなじや耳の先までが真っ赤に染まり、なおも止まる様子のないオシッコは、コンクリートを叩き続ける。

(……すごい……)

自分よりもずっと小さな子が、あまりにも大胆に繰り広げる、激しくも長いオシッコ姿。待望の排泄を目の当たりにして、孝乃の尿
意もなお激しさを増す。

コンクリートを色濃く染める、大きな水たまりの上に。

やがて、もう一つの激しい水音が響き始めるのは時間の問題だった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 河川敷の運動会・3
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 07/31/2011 23:59:33

BODY:

処理人数をはるかに超える利用希望者を生み出し、大勢の『おトイレ難民』を抱えることになった河川敷グラウンドの混乱は、午後を前にいよいよ混雑のピークに達しつつあった。

許容人数を超えた仮設トイレが次々と故障、あるいは不調に陥るという悲劇がはじまった頃、事務棟横の公衆トイレでもまた、別の悲劇が起きていた。

河川敷グラウンドの管理事務棟——今日は運動会の運営本部詰所も兼ねることになった建物の裏手、普段はほとんど利用者もない公衆トイレには、いまや30分待ちという大人気アトラクションさながらの順番待ちが出来上がっていた。

こちらの行列にはひとつ、特筆すべき特徴がある。

それは、利用者の年齢が低いことだ。

行列に並ぶのはほとんどが初等部と思しき幼い女児達で、中には幼稚園と思しき年代の女の子を連れだった姉妹の姿もある。体操服の胸のゼッケンが示す学年は、大半が四捨五入して「0」になってしまう年代ばかりだった。

利用者の偏りには、昨今の学舎のトイレ事情が原因となっていた。

広く衛生管理の整備が進み、バリアフリーが叫ばれる中、多くの学校ではリフォーム、改築等の実施に伴って和式トイレから洋式トイレへの更新が進んでいることは周知の事実であろう。また、新興住宅などでも明らかなように、新築の建物においてほとんどのトイレのスタンダードは『洋式』である。

多くの学校、家庭においてもそれは顕著であり、彼女達がトイレと聞いてまず思い浮かべるのは、様式の便座を備えた『腰かける』タイプのものである。

それに反して、市営グラウンドに設けられた仮設トイレは、そのすべてが衛生管理などを理由に和式であった。

そこにすべての悲劇の発端があったのである。

現代の少女達を年代別にみた場合、低年齢の世代となるほど『和式トイレ』に触れる機会は少なく、『しゃがんでするオシッコ』の経験も激減する。

とりわけ、まだ行動範囲も狭い時期の、初等部低学年以下の女兒にとってはこの状況の偏りは著しい。そのような女兒の中には本当に、一度も和式のトイレを利用したこともない者もいる。さらにはごく一部だが、そもそも『和式トイレ』なるものが存在するという知識すらない女兒も存在するのだった。

そうした女兒達は、たとえ和式トイレに入ったとしても正しい使い方が分からず困惑するばかりであろうことは想像に難くない。

また、そこまでいかなくとも、普段から洋式のトイレに慣れ親しんだ世代には、トイレとはあくまで腰かけて使用するものであり、『しゃがんでするオシッコ』が異質であると捉えている者も多い。そのため、できることならば仮設トイレを使用したくはないと考えることはごく自然なことだった。

他にも『オシッコはきちんとおトイレで』という、やや潔癖な衛星概念の教育を受けている世代には、野原に吹きさらしの仮設トイレを『おトイレ』として認識できない少女もいたのである。

運動会が始まって数時間の間は、仮設トイレを使おうとした女兒もいたものの、そこが全て「学校のトイレ」とは違うものであることが広く知られるにつれ、彼女達はたった一つの「本当のおトイレ」である事務棟横のトイレを選ぶようになった。

ただでさえ女性用のトイレは一回当たりの使用時間が長く回転数が悪いのに、利用者の年齢層が低いことがそれにさらなる拍車をかけ、行列は解消するどころか伸びる一方となっていたのである。

かくして、この公園において唯一の洋式トイレをもつ事務棟横のトイレには、そうした女兒達が大量に押し寄せ、大行列を作っていたのであった。

そんな事務棟脇のトイレの列に、緒方郁美は並んでいた。

祖母ゆずりの濃いブルーの目や、色の軽いロングヘア。同年代の少女から比べるとだいぶ発育の良い身体は、実年齢以上に郁美を大人びて印象付けている。制服を着ていないときは上の学校に通っていると間違えられることもあった。

しかしそんな郁美の表情に余裕はなく、切羽詰まった焦りを隠すこともなく露わにしていた。

固く握り締めた右手はぷるぷると震え、左手は横からブルマの股間部分を思い切り掴んでいる。

たっ、たっとその場で繰り返される足踏みと共に、体操服の腰がぐねぐねと揺すられ、少女の我慢がもはや限界に近いを教えていた。

（あっ、あああっ、はやく、はやくう……っ！！）

内腿がぎゅうぎゅうと擦り合わされるたび、ちょこんと突き出されたお尻の、ブルマの布地にしわが寄せられる。前かがみの姿勢は時折びくんと痙攣し、少女の恥ずかしい出口に押し寄せる尿意の波の規模や強さを余すところなく教えてくれる。

大人びた見た目に相反して、小さな子供のような姿で我慢を続ける少女に、周囲から無遠慮な視線が寄せられる。

その多くが『いい歳して何やってるの？ 恥ずかしいなあ……』というものだった。

郁美がこうまでして、事務棟横の列に並んでいるのには訳がある。

何のことはない、列に並んでいる他の小さな子たちとまったく同じ理由だ。郁美は、和式トイレが使えなかったのである。

その外見からも分かるとおり、郁美は父方の祖母が海外の出身である。郁美自身も外国で生まれ、つい半年前までは両親の

仕事の都合で海外で生活していた。当然そこには和式トイレなど存在せず、郁美に『しゃがんでするおしっこ』の経験はない。つまり、郁美にとってこの市営グラウンドの仮設トイレは無いも同然。唯一とも呼べるトイレがこの事務棟横のトイレだったのだ。ただでさえ少ない選択肢を一層狭められ、郁美は困惑していた。

（は、はやく……はやくっ……）

切羽詰った様子で、郁美は足踏みを繰り返す。

押し寄せる尿意はさらに激しさを増し、少女を窮地へと追い込んでいた。

郁美が最初に尿意を覚えたのは、今からおよそ3時間前。午前中の競技が白熱していた11時ごろになる。

一度は仮設トイレに並んだものの、そこが和式トイレであることを知らなかった郁美は、せっかく回ってきた順番をふいにすることになってしまったのである。

昼食時間のほとんどを割いて、入ったトイレを使うことも出来ずに、郁美は午後の競技を迎えることとなった。

脚を擦り合わせ、もじもじとお尻を揺する、みっともない姿のままどうにか午後最初の競技の綱引きを終え、そのまま走り込むようにしてこの事務棟横のトイレの列に並んでいるのであった。3時間にもわたり我慢し続けた排泄欲求は、時間とともに膨らみ続け、もはや郁美本人にもコントロールできないほどになりつつある。

（おトイレ……はやく、おトイレ……っ！！）

だが——多くの『おトイレ難民』を抱え、排泄設備が圧倒的に不足している市営グラウンドの中。外見だけは十分すぎるくらいに立派な『おねえさん』である彼女が、低学年の女子児童に混じってトイレの順番を待っているのは、それだけでも十分な非難対象であった。

まして、我慢の限界近くまで堪えているというのに、『もうあんなにお姉さんなのに、みっともない』という理不尽な評価まで付いて回るのである。

事務棟横のトイレに並ぶ少女達のほとんどは、和式の仮設トイレを利用できない低年齢の——大半が低学年、あるいは幼稚園児といった女児達だった。そんな中に混じって、背の高く発育も良い少女が並んでいるのだ。それだけでも十分人目を引く。

さらに郁美の大人びた風貌と、それに似合わない恥ずかしい我慢のしぐさは、さまざまな憶測、邪推を呼ぶのに十分だった。

——ねえ、何あの子……あんな小さな子の列で……

——もうお姉さんなんだから、譲ってあげればいいのに。

——そんなに我慢できなかったのかなあ……

一見すれば、まるで——郁美が小さな子たちの列に、無理やり押し入ったかのようにすら見えてしまうだろう。もちろん郁美はきちんと順番を守って列の最後尾に並んでおり、決してそんなことはないのだが、事情を知らないまま途中から様子を見にきた少女達の目にはそうは映らない。

明らかな侮蔑、敵意——そんな温度の低い視線が、遠慮なく郁美にぶつけられる。

いささか過剰と思える、周囲の反応も、けっして理由のない事ではなかった。

——なんなの、あの子……少しくらい遠慮すればいいのに。

——私より年上っばいのに、そんなに我慢できないのかなあ……

——あの子の後ろの初等部の子たち、もう限界っばいよね？

——うん。順番、譲ってあげればいいのにね……

列を遠巻きに眺めたむろす彼女達は、事務棟横のトイレの『出待ち組』。

今は長蛇の列となっている事務棟横の公衆トイレが、空くの待っているグループだった。

彼女達はどちらかと言えば潔癖な傾向をもち、あまり衛生的とは言えない仮設トイレはできれば使いたくないと考えていた。しかし、いかにも自分たちよりも年下の女児達が、間に合うかどうかともわからない切羽詰まった状態で我慢しているのだから、そこに自分のような『おねえさん』が踏み込んでいいわけがない——そんな躊躇によって、なんとなく列が減るのを待っている、日和見な面々なのである。

……もう『おねえさん』なんだから。

その心理には、一見、年長の余裕を気取っているようでありながら、その裏側は体面を気にして、『おねえさん』であることを理由に周りを見下す、卑劣で幼稚な意識が見え隠れしていた。

もし本当に列に並ぶ初等部や幼稚舎の子たちを思いやり、遠慮しているなら、列の周りを取り巻いてうろうろと機会を待っている理由にはならないのは、少し考えれば解る事だ。

初等部の子たちのように、本当に『しゃがんでオシッコ』ができないわけでもないのだから、忌避感を堪えて仮設トイレを使うなり、余裕があるなら我慢するなりすればいい。それをせず未練たらしくあたりをうろうろと様子を窺っているところからも、周囲の同じような少女たちへの牽制や、トイレが空いたら最初に自分が並びたい、という卑しい理由が透けて見えた。

彼女達も、今すぐトイレに駆け込みたいのは同じなのである。女児達に比べればさりげなさを装っているものの、仕草からにじみ出る落ち着きのなさ、余裕のなさはいい勝負だ。我慢のしぐさこそ控え目なものの、同じく懸命にオシッコを我慢しているのははっきりと見て取れた。

思春期特有の矛盾した心理と言ってしまうえばそれまでだろう。羞恥心を理由に、体面を取り繕おとするのは間違った事ではない。

しかし、だからと言ってきちんと列に並んで順番を待つ郁美が、彼女たちに攻められるいわれなどどこにもなかった。

だが——そんな論理など、既に行列の真ん中よりも前に並び、やがて待望のトイレを——仮設トイレよりもはるかに上等な、本当のトイレへ入ることのできるだろう郁美への嫉妬と羨望でたやすく塗り潰されてしまう。

——図々しいよね、もうおねえさんなのに……

——本当だよ、普通ならあんなになって並んでらんないってば。

——初等部の子たち、可哀想ですよ……

自分だって我慢してるのに、どうしてあの子だけ——。

決して禁じられている訳でも、法や倫理に反するわけではない。オシッコがしたいからトイレに並ぶ、たったそれだけの事をまるで罪科のように蔑む視線が、郁美を取り巻いていた。

年少の女兒達の中に、自分達が堂々と割って入ることを恥と感じ、躊躇う心理。そして抜け駆けを許さない意識。歪んだ羞恥心と自意識が、すでに列の中ほどに並び、皆よりも先に用を足せるであろう郁美への羨望と嫉妬が、ない交ぜになって郁美にぶつけられる。

背中に痛いほどに突き刺さる視線を感じながら、郁美は耳の端まで赤くなって俯き、もじもじと腰を揺するばかりだった。

(っ……おしっこ、でちゃう……っ)

もはや郁美はそれどころではない、猛烈な尿意の大波のただなかにあった。

身体の内側で膨れ上がる水圧はおさまるところを知らず、股間にはいまにも熱く湿った雫がほとばしりそう。ブルマに押し込められた脚の付け根を、ぎゅうっと引っ張った体操服の前で必死に隠し、せわしく足踏みを繰り返す。

太腿の付け根に挟み込んだ体操服の上から、手のひらがぎゅうぎゅうと股間を圧迫する。文字通り『オシッコの出口を塞ぐ』、形振り構わずの我慢だ。

引いては返し、揺れ戻しては押し寄せる、留まるところのない尿意の大波、その中に翻弄されながら、帰国子女の少女は、その青い瞳を不安に濁らせる。

育美は自分よりもずっと小さな女の子たちの列の中で、まるで針の筵のように突き刺さる避難の視線の中、じっとつむいて耐えながら、小刻みに身体を震わせていた。

郁美が列の前から半分あたりまで進んだ頃だった。

「あ……」

前触れもなく、グラウンドの方からぞろぞろと初等部と思しき女兒たちがやってくる。

事務棟を回り込むようにしてやってきた彼女達は、午後最初の出場競技——恐らく郁美の参加した創作ダンスの次の、スプーンレースや50m走だろう——を終え、ようやく自由になったグループである。

競技中も相当無理をして我慢していたのだろう。幼い顔に焦りをにじませ、手をつないだり励まし合ったりしながら、やっとここまで辿り着いた雰囲気的女兒が大半だった。

落ち着きのないその様子を見るまでもなく、彼女達が昼の休憩時間にトイレに行く事ができなかったのは明白だった。

お昼休みもオシッコを済ませる事ができず、午後一番の競技にも、トイレに行きたいのを我慢して参加し——やっと辿り着いた待望のトイレ。しかし事務棟を回り込むようにしてずらりと並ぶ長蛇の列は、彼女たちを落胆させるには十分なものだった。

「ええっ……なにこれ!？」

「す、すごい混んでるよぉっ……」

女兒達は驚愕に目を見開き、口々に声を上げる。

恐らく、彼女たちも幼いなりに考え、休憩時間の終わったいまなら空いていると判断したのだろう。あるいはもはや我慢の限界が近く、どうしてもなくなってしまうだけかもしれない。

いずれにしろ、切羽詰まった生理現象に衝き動かされた初等部の女兒達がどうにか辿り着いた事務棟横のトイレは、彼女達の

想像を裏切る大混雑の中にあった。

「そんなぁ……なんで…？」

中には困惑を口にしたり、疑念を叫ぶ女兒も居る。

だが、この行列を作る大半が、自分たちと同じ初等部の女兒——『しゃがんでオシッコ』の出来ない世代であると分かれば、それ以上異論をさし挟むことはできないようだった。

ここ以外に使えるトイレがない事は、誰も同じなのだ。

彼女達は顔を曇らせ、眉をしかめながらも、渋々長い長い列の後ろへと並んでゆく。

たったそれだけで、郁美の並ぶ位置が相対的に列の前から四分の一ほどにまで変化していたのだから、一体どれだけの人数がやってきたのか、考えるだけでも恐ろしい。

女兒達はブルマの股間を懸命に押さえ込んだり、すこし湿ってしまった足の付け根を気にするように、不自然ながに股になっていたり、ばたばたとその場に足踏みをしたり、列に並ぶなりしゃがみ込んでブルマの付け根にかかとを当て、ぐりぐりと腰をよじったりしてしまったり——形振り構わないその仕草を繰り返す。

中にははっきりと、

「あーんっ、もうっ、はやく、おしっこ、おしっこでちょうよお……」

疑いようもないほど強くしっかりと尿意を叫ぶ、低学年と思しき女兒までいた。

彼女達はその幼さゆえに、上手に我慢できるためのタンクも、羞恥心もまだ十分には発達していないのだ。

幼稚舎や初等部の低学年とあれば仕方のないことであるが、女兒達が遠慮なくくねくねと腰を揺すり、人前でも躊躇なく前を押さえる、形振り構わない我慢の様子はいかにも強烈なもので、近くにいる年上の少女たちまでも顔を赤くしてしまうほどだった。

トイレの行列を遠巻きに見ている彼女たちも、個人差はあれど、それぞれ尿意を覚えている事に違いはないのである。

行列に並んで懸命の我慢を続ける女兒達の様子に引きずられるように『もよおして』しまうのは避けられないことだった。

そんな中、郁美はふいに体操服の袖を引かれ、我に返る。

気付けばいつの間にか、郁美の前には初等部の低学年と思しき女兒 3 人が、人目をはばからず体操服に手を当ててぎゅうぎゅうと前押さえをしていた。

3 人とも同じ町内会を示すリボンを胸に付け、ゼッケンの番号も同じ。恐らくクラスの仲良しグループと思しき 3 人の、先頭の子は、その場にばたばたと足踏みをしながら、涙を浮かべて郁美を見上げる。

「お、お姉ちゃんっ……」

「……………っ」

とてつもなく嫌な予感に、郁美は背中を震わせた。そのまま耳を塞ぎ、目を閉じて何も聞かなかった事にしてみたい——冗談抜きでそんな衝動が郁美を誘惑する。

しかし、女兒はそんな郁美のためらいよりも先に、声を上げた。

「おねがい、先に入らせてっ！！ わたしたち、おトイレ……もうがまんできないのっ……！！」

予想と寸分たがわぬ要求だった。しかし、そうと解っていた所で何かの対策ができたわけではない。郁美は顔を蒼白にしながら瞬きをし、女兒を見下ろす。何か返事をすべきだと分かってはいたが、言葉は喉に引っかかってうまく出てこなかった。

「おねえちゃんっ、おねがい、も、もうだめ、もれちゃうっ！！」

3 人の様子はまさに必死。限界はもうすぐそこにあるようだった。股間をしっかりと両手で握り締め、腰をねじり、股上げをしたり、

足の付け根を揉みほぐすようにしながらお尻を滑稽なほどくねくねと振り立てる。我慢できているのが不思議なほどで、切羽詰まった彼女達の様子は郁美の尿意までも二、三段飛びで激しく催させるほどだった。

「あ……う……」

困惑の中、郁美は何度も女兒たちと、残る列の先を見比べる。

（そ、そんな……わ、私だって、もう、漏れちゃいそうな我慢してるのにつ……）

正直な事を言えば、もう誰ひとり列の前には入れたくない。

いや、そもそも順番など回ってくる前に、前に並んでいるのがどれだけ小さな子たちであっても、全員抜かしてトイレに飛び込み、個室に走り込みたいほどだ。

順番が1人遅くなるのでも嫌なのに、あろうことか3人も——そんなのは決して許容できる事ではなかった。残る列の人数を数え、順番が回ってくるまでを計算し、調整していた我慢もすっかり狂ってしまうことになる。

限界すれすれの女兒達を前に『おねえさん』であろうとする理性の叫びもありはしたが、ここにきて状況の変更は、本当に間に合わなくなってしまう可能性があまりにも大きかった。

（っ……で、でもっ……！！）

お互いに手をつなぎ、励まし合いながら身体をよじる、女兒達の切羽詰った様子を見せつけられて、さすがに無碍にはし辛かった。彼女たちも恥ずかしいのを必死に堪えて、順番を譲ってもらうために郁美に声を掛けたのだろう。

だが、そうやって言い出せる子はまだいい方なのだ。列の後ろのほうで、恥ずかしさから真っ赤になって必死に息を殺している子達は、果たして順番が回ってくるまで我慢できるのだろうか。

（……だ、だめ、そんなことしたら、本当に出ちゃう……っ！！）

だが、郁美も譲れない。

この3人だけで済めばいい。しかし、もしここで甘い顔をすれば、他にも我慢の限界の子たちが同じように列に入ろうとするかもしれない。そうなれば順番待ちの列がなくなるよりも先に郁美の我慢がついてしまうのは火を見るよりも明らかだ。

「え、えっと、ね」

郁美が、心を鬼にして、拒絶を口にしようとした時——

「ちょっと、意地悪してないで入れてあげなよ」

咎めるような声は、女兒達のすぐ後ろから。

吊り目がちの、長い黒髪の少女が、郁美を責めるような刺のある視線を向けてくる。

「この子達、もう本当に我慢できなそうじゃない。あなたの方がおねえさんなんだから」

「え……っ」

気付けば、郁美の周りにはいつのまにか、知らない少女の姿があった。驚きに目を見開く郁美の前に、更に何人かの少女が歩みよってくる。

郁美は気付いていなかったが、彼女達は皆、遠巻きに列を眺めていた『トイレ出待ち組』の少女たちだった。

途切れる事のない行列と、先の見えない混雑の中、苛立ちの頂点に達した少女たちは、言葉を交わす事もなくお互いの意図を察し合い、列の前の方に並ぶ郁美を後ろ暗い嗜虐心のスケープゴートに仕立てようとしていたのである。

「そうだよ、可哀想だよ。この子達、ずっと我慢してるんだから」

「他にトイレ、いくらでもあるじゃないの」

「あなたの方がおねえさんなんだよ？」

口々に言い募る少女達は、自分たちが物分かりの良い『おねえさん』であることを誇るように、郁美にも同じことを強いようとする。一見正論、しかし郁美にとってあまりにも無茶な物言いの裏側には、いびつな嫉妬心があるのは明白だった。

「で、でもっ、わ、わたしも……っ、が、我慢して……っ」

「そんなのみんな一緒じゃないの！」

声を荒げ、黒髪の少女は郁美の手を無理やり引っ張る。

「ふああっ……！？ や、やあ……っ！？」

バランスを崩した足元が地面を擦る。下腹部で波打つように排泄欲求が強まり、文字通り、全身を使って堪えていた尿意が一気に激しさを増した。

じわっと脚の付け根に広がるイケナイ感覚に、郁美はたまらず激しく体をよじる。

「ほら、早く——」

「ち、ちがう、の、っ、わ、私っ……」

きゅんきゅんと疼く下腹部を必死に押さえこみ、オシッコの出口を直接指で押さえこんで。ばたばたと足踏みを繰り返すその様子は、列に並ぶ他の女兒たちですらあっけにとられるほど激しいもの。

（あ、あ、あ、だめ、でちゃうっ、でちゃううっ……！！）

「何が違うのよ。そんなにしたいなら他のトイレ使えばいいじゃない」

「ち、違、っあ、あう、わ、私っ、ここのっ、お、トイレ……しか、っ、使えな……い……しゃ、しゃがんで、するっ、ほうの……っ、お、オシッコ、できな……っ！！」

無我夢中で順番を守ろうとするあまり、郁美はあまりにも恥ずかしい告白をしてしまう。

みんなより年上の『おねえさん』なのに、ここに並ぶ低学年の子たちと同じなのだと——その主張は確かに正当性を持ったものであったのかもしれない。

だが——いまや郁美の周囲を取り巻く悪意は、それを許さない、

「——へえ？」

「や、やめ、やめてえ、やめてよおおっ！！」

どうでもいいわよ、とも言いたげに。少女達に次々と手を引かれ、郁美は列の中から引きずり出された。脚の付け根を塞ぐ手の自由をも奪われ、さらには不意を装って下腹部をぐいっと圧迫すられて、我慢の均衡が大きく崩れた。

列から引っ張り出された郁美は大きく下腹を撓ませ、その場にしゃがみ込んでしまう。

「はあ……っ、く、んうあ、あうう……っ！！」

身悶えし、声を喘がせて足の付け根を押さえ込む。女兒達に比べて大分発育のいい少女の肢体が体操服の下でたわみ、紺のブルマに包まれたおしりが激しく振り立てられる。同性の少女たちですら思わず息を呑みそうになるほどの妖しげな魅力を振りまきながら、郁美は懸命に押し寄せる尿意を押さえ込もうとした。

（あ、あっあ、だめ、でちゃう、だめ、だめええ……っ！！）

麻痺しかけた排泄孔がひくひくと震え、じわじわと熱い感触が股布の奥に広がってゆく。

下腹部の奥で不随意筋に伴って収縮の予兆を見せる膀胱に、身をよじり、短いオシッコの出口をありったけの力で締め付ける。

「ほら、いいわよ、並んで。このお姉ちゃん、譲ってくれるって」

「あ、ありがとう！！」

凄まじい尿意との戦いに悶え狂い、言葉も発せずに歯を食いしばり続ける郁美を余所に、黒髪の少女は勝手に女兒達を列に入れてしまう。

その瞬間、彼女が郁美をちらりと見下ろし、ぞっとするほどの悪意を含めた笑顔を見せたことに、郁美は勿論気付かない。

大勢の少女、女兒達の前で大きく脚を広げてしゃがみ込み、股間を握り締め、揉みほぐすように何度も何度も押しこねて。羞恥すらも忘れて声を上げる。

「あつ、あ、あああ……はあうあああつ……んっ、んんんっ、んう……っ」

たとえるなら、コップの縁に表面張力で持ちこたえていたほどに限界まで注がれた水を、テーブルが思い切り揺さぶられる中でこぼさないようにしているのに近い。もはや波立って揺れ動く羞恥のホットレモンティは、下腹部のティーポットに納まり切るような量ではないのだ。

しかし、郁美は懸命になって、崩壊をこらえ続けた。

屋外、トイレの前の行列で、しゃがみ込むというあまりに恥ずかしい姿——和式トイレを使えず、『しゃがんでするオシッコ』の経験のない郁美にとって、トイレの中ですら一度もした事のないみっともない格好のまま、正しい場所で、きちんとトイレの中でオシッコするために、歯を食いしばって耐え続ける。

びくびくと鈍い痛みすら伴って荒れ狂う尿意に、耐え、耐え、耐えきって——

「っはああ……っ」

もはや限界まで伸び切っていた膀胱が、なおも強引に、一段と膨らんでゆく。

大きく肩を上下させ、郁美は驚異的な精神力で崩壊を耐えきった。下着にはじっとりと湿り気が広がり、ブルマの股間もはっきり分かるくらいに色合いを変えていたが、とにかく決定的な崩壊だけはなんとか先延ばしにすることができた。

暴れ回る尿意を懸命になだめ、郁美は肩を激しく上下させる。

みっともなく膨らんだ乙女のティーポットは、すでに体操服の上からも目立つほどに下腹部をせりださせている。なおもいっそう激しく張りつめた下腹部を撫でさすり、なんとか郁美は息を落ちつけてゆく。

「はあ、はあ、はああつ……」

しかし。ようやく我を取り戻した郁美の前で、行列はずっと前に進んでいた。

「え……っ」

女兒達でこったがえす行列は、さらに遠く後ろまで伸び。

郁美に順番を譲るようにねだった３人は、いまや列の最前列にまで到達している。

そして郁美は、迂回するように伸びた事務棟横トイレの順番待ちの中で、自分が完全に列からはずれている事に気が付く。

「う……嘘……っ」

少女の顔が青ざめてゆく。

列は既に大きく動き、周囲は郁美を見ていない女兒が大半だ。今から自分の順番の正当性を訴えても、もう一度列に戻ることはできないのは間違いなかった。

近くでお喋りをしていた黒髪の少女が、そんな郁美の様子をちらりと横目で見、くすりと口元を緩める。

「あら。まだそんな所に居たの？ 早く並んだら？」

少女は悪意を含ませた視線で、列の一番後ろを示す。

遙か遠く伸びた列の最後尾。もう一度あそこから、トイレの順番が回ってくるまで待つなんて、絶対に不可能だった。

「このトイレしか、使えないんでしょ？」

それが最後のひと押し。郁美の視界が真っ黒に染まってゆく。

がくがくと震えだした下半身は、もはや郁美の制御を外れつつあった。

（あ、あ。ああ、ああ……）

糸が切れたようにがくりと腰が落ち、力が抜けるように。一旦は立ち上がりかけた郁美は、再びそこにしゃがみ込んでしまう。

同時、限界を迎えた下腹部のダムが、高まり続けた内圧のままに、膨らみ切った羞恥の水袋を絞り上げた。たったひとつしかない出口から、凄まじい勢いで恥ずかしい液体が噴き上がる。

「あ……あ、あああ……う……」

下半身から一気に熱が噴き出してゆく。脚の付け根で弾けるようにほとばしった水流が、体操服を突き抜け、一気に地面まで打ちつけられる。

これまでの人生の中で、郁美が一度もした事のない、『しゃがんでするオシッコ』が、トイレを目前にした事務棟横の、地面の上で始まっていた。

周囲に、その羞恥の瞬間を遮るものは何もない。事務棟横のトイレ順番待ちの列からは、360度どこからでも郁美のオシッコを直接見ることができた。

深く腰をおろし、足を広げ、ブルマの股間から黄色く染まった野太い水流を地面に力強く噴き付ける。下着とブルマ、2枚の布地を隔ててなおその勢いはかなりのもので、これまでの郁美の我慢がどれほどのものだったのかをはっきりと見せつけるに相応しい。限界まで膨らんだ膀胱は、その内側に蓄えた羞恥のホットレモンティーを、ありったけの水圧でほとばしらせる。

そのポーズは和式トイレの中で行われる、少女にとって最も恥ずかしい行為そのものだ。

女兒たちの多くは、声を出すのも忘れてそれに見惚れていた。

「ああ……やだ……やだあ……見ないで、つく、みないでよお……」

声を上げ、涙をこぼしながら。

なおも皆の『おねえさん』である郁美は、和式トイレを使えない幼い女兒達に、『しゃがんでするオシッコ』のお手本を見せてつけてゆくのだった――。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 海とスクール水着のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 08/11/2011 21:50:24

BODY:

がたん、がたん和リズムカルに揺れる列車の中、さんさんと照りつける太陽に負けじと、冷房がフル回転を続けている。夏休みににぎわい混雑を見せる車内には大勢の子供達の姿も見え、毎日続お休みを楽しむ声が聞こえてくる。

窓の外に流れる景色は強い日差しにきらきらと輝き、夏本番の色合いを濃くしていた。

「はあ、今日も暑いねー」

「夏らしくていいんじゃない？ さあ、今日は泳ぐぞー！！」

ボックス席の端に座る優衣が、ぱたぱたとワンピースの胸元を仰ぐ。向かいに座る千沙も、すでにすっかり日焼けした腕を、タンクトップから惜しげもなく曝していた。

拳を握って決意を見せる千沙に、伊織がくすくすと笑う。

「あはは。去年は大変だったもんねー。雨降ってたのに千沙、無理やり泳ぐって聞かなくてさ。唇真っ青だったじゃない」

「う、いいじゃないそんな昔のことは！！ 私は今を楽しむ主義なんだから！！」

「えー。千沙おねーちゃんそんなだったの？」

一番年下の香織にまで言われてしまえば、千沙も立場がない。バツの悪そうに頬を膨らます千沙を、優衣がまあまあとなだめてジュースを差し出した。駅で買ったばかりの冷えたペットボトルを手に千沙はすぐに機嫌を直す。

わかりやすいその態度に、もう一度皆の間で笑いが起こった。

「でも、晴れてよかったよね。せっかくの海なんだし」

「……うん」

佳奈も、受け取ったジュースのストローに口をつけながら、こくとなづいた。

8月最初の日曜日。クラスの仲良し4人組は連れ立って海水浴へと向かっていた。

メンバーは佳奈の他に優衣、千紗、伊織のいつものメンバーに伊織の妹の香織を加え、総勢5名である。週末に市内のモール街に出かけたり、学校や市内のプールに遊びに行くなんてことはこれまでも何度かあったが、電車を利用して遠出するのはこれが初めてだ。

まして、それが夏休み最初の海水浴となればなおのこと。

(……楽しみだな)

どちらかと言えばおとなしい子、と思われがちな佳奈も、今日ばかりは胸の高鳴りを押さえきれない。昨日の夜はなかなか眠れなくて、今朝も30分も早起きして待ち合わせ場所に一番乗りで到着してしまったくらいだった。

「えー、ホントにそんな水着持ってきたのー？」

「ふっふっふ。お楽しみあれ。あとでじっくり披露してあげるからっ」

「千紗って無茶するよねー、ときどき」

「む、無茶ってなによ。……まあそりゃ、確かにちよつとばかり世間様と比べて胸が寂しいのは認めますけどもっ。そんなこと言ったらあんたたちだって大差ないんじゃないかなあ？！佳奈もなんか言ってやりなつてば！！」

「あはは……」

いつもの通り、ムードメーカーの千紗が何かを言い出して、伊織と優衣に突っ込まれる、という構図。この4人でいると佳奈も自然と笑顔がこぼれる。今年のクラス替えまであまり親しい友達のいなかった佳奈にとって、3人は何よりも大切な親友なのだった。

「水着ねえ……私は去年と一緒だけど」

「そんなんじゃないじゃん。夏的大海だよ！一夜の恋だよ！ここで気合い入れなくてどうするのかなあ！？」

「おねえちゃん、ナンパされに行くの？」

「……う。いやまあ、その、そういうわけじゃないけど。ちよつとは期待というか……ね？繊細な乙女心ってやつよ。香織ちゃんにはまだわかんないかなあ？」

「ふふ。香織、もう彼氏いるんだよ？同じ組にね」

「……え`……マジ！？」

「うんっ。タカシくんっていうの！」

にこやかに笑う最年少。5歳も年下の友達の妹から飛び出した衝撃の告白に硬直した千紗は、ふてくされながら最近の子は進んでるなあちくしょー、と半ば自棄気味にペットボトルをがぶ飲みした。

いつもと同じ——いや、やはり全員、海ということで期待はあるのだろう、千紗は言うに及ばず、優衣も伊織も、いつもよりもテンションが高いようだった。

そしてそれは佳奈も同じだった。実は、佳奈はすでに待ちきれず、ワンピースの下に水着を着てきている。さすがに子供っぽいかなと思いはしたのだが、少しでも早くみんなと遊びたいという誘惑に負けてしまったのだ。

着こんでいるのは学校指定の紺にサイドライン二本の水着だが、服の下にあるいつもと違う感覚が、軽く汗ばんだ内腿に感じられる。

(見えなければ、おかしくないよね……)

どちらかと言えばとろくさい自分だ。海に着いてから着替えていれば、もたもたして準備が遅くなってしまうかもしれない。それでみんなを待たせるのも悪いし——と、佳奈は自分に言い訳する。

そんな時だった。

「ねえ、水着って言えばさ。ほら見て？ 香織ったらもう下に水着着ちゃってるんだよ？」

「あー、お姉ちゃんまた言ったー！！」

伊織が悪戯っぽい口調で、隣に座らせていた香織のスカートを少しつまんで見せる。すると、確かに鮮やかなパステルブルーの布地が香織の足の付け根を覆っているのが見えた。

伊織にからかわれて、香織はぷうっとほほを膨らませる。

「可愛いねー。それ、新しい水着？ 待ちきれなかったんだ？」

「うー……ちがうもん。おかーさんが、言ったからだもん」

「あはは。わかってるって。もう香織ちゃんもおねえさんだもんね」

口をとがらせる香織を、優衣がごめんねと頭をなでてフォローする。

千紗は頭の後ろで腕を組んで、懐かしそうに目を細めた。

「そーいややったねー、昔。学校行く時とかも着てったっけ」

「そうそう。それで替えの下着忘れちゃったりしてね、懐かしいなー。さすがにもうできないけどねー」

「だねー。ちょっと、いくらなんでもねー」

（え……っ？）

突然の会話に、佳奈は急速に頭が冷めていくのを感じた。

確かに、服の下に水着なんて子供っぽいかもしれないと思ってはいたけれど。仲の良い3人から飛び出した言葉は、佳奈の予想を大きく裏切ったものだったのだ。

「男の子もいるし、服の上にも水着のライン出ちゃうからね」

「あはは。そうそう。ブラも付けられないし」

「うー。だからやだって言ったのに、おかーさんが怒るんだもん。……いつもはちがうんだよ？」

「しょうがないよ。ね？ 今日は海だし。ちょっと恥ずかしくても我慢しなきゃ」

優衣の言葉に伊織が、どっちかと言えばお洒落になんか無頓着だと思っていた千紗まで、あっさりと同意する。

3人の口ぶりからすると、服の下に水着なんて、佳奈たちの年齢になればまず絶対にありえないというのは常識で。香織たちの間ですらも、子供っぽいと笑われてしまうことらしい。

確かにみんな経験はないではないらしいが、そんなのはとくに卒業した、と言いたげだった。

（そ……そう、なんだ……）

女の子としてのごくごく当り前の常識を、自分だけが知らなかった。少なからぬ衝撃を受け、佳奈は顔を青ざめさせながら、足の間にワンピースのスカートを挟み込む。

もし万が一のことがあっても、見えないように。

（……………っ…………）

服の下の紺の布地の感触に、佳奈は顔を赤くして俯いてしまった。

急に、三人との間に大きな距離が開いてしまったかのように、佳奈の繊細な心がきゅっと縮む。

そんな佳奈をよそに、優衣達はくすくすと笑い合った。それを見て、香織はぷいっと顔をそむけて拗ねてしまう。

「もぉー、おねえちゃんたちだってしてたんじゃないっ」

「あっはは、ごめんごめん。謝るよ。誰もが一度は通った道だもんね。ねー佳奈？」

「え、あ、……う、うん。そうだね……」

同意を求められ、佳奈は挙動不審になりながら、どうにか声を絞り出す。

まるで佳奈の周りだけ温度が変わってしまったように、居心地の悪い汗がじわりと背中を這い降りてゆく。佳奈はスカートの前をさらにきつく押さえて、ギュッと身を硬くしてしまう。

「うん、小さい頃はね。香織ちゃんの時くらいかな」

「千沙は一年の時もじゃなかったっけ？」

「う、うるさいなー。一年くらい誤差だってば、誤差！！みてなよ、今日の私は一味違うんだから！！」

「あはは。まあ、学校の水着じゃなくていいのは嬉しいけどね」

「う、うん……」

よくよく聞いてみれば、学校指定の水着なんかを持ってきたのも自分だけらしい。次々判明する驚愕の事実、佳奈の心臓はバクバクと高鳴り始める。

いやな汗は背中に広がり、水着の中にじわりと湿り気をこもらせる。

居心地の悪さに、佳奈は思わずもじもじと足を擦り合わせる。

普段の、学校のプールの授業ではみんな同じ格好をしているのだからと、これまで安心していた佳奈だったのだが——優衣達は自分よりもずっとずっと、お洒落で大人であるらしかった。

自分がまるで幼稚園と同じと言われているようで、佳奈は急に水着を着こんでいることが恥ずかしくなってしまう。

「はいはーいっ。あたしだって自分で水着、えらんだんだよ？」

「そうだよね、香織、お母さんあちこち引っ張ってたもんね」

そして、ずっと年下の香織すら、佳奈よりもずっと水着には気を使っているらしい。思わず全員の胸元や脚にちらちらと視線を向けてしまい、この場にいる誰よりも、コドモである自分に気付いて、佳奈はきつく歯を噛み締める。

(……………っ)

佳奈の胸を消えてしまいたいほどの羞恥心と罪悪感が支配し。

さっきまでの気分の高揚は、どこかに消えてしまっていた。

電車の外に出ると、むっと熱気が押し寄せてくる。ホームの端、屋根のない部分には陽炎が揺らめき、まっすぐなはずの線路もゆるゆると揺れて見えるほどだった。気温はすでに32度を超え、ますます上昇する気配が濃厚だった。

「ふわー……あっついー……」

ホームに降りるなりだらりと溶け落ちそうになった千沙が、ずるずるとサンダルを引きずって歩いてゆく。優衣がそれに続き、香織の手を引く伊織、最後に佳奈の順だ。

目的地の海水浴場までは、ここで単線のローカル線に乗り換えてあと4駅。20分と少しで到着の予定だった。

ホームの反対側で時計と時刻表を变りばんこに覗きこんでいた優衣が、顔を上げる。

「えっと……乗り換えは……あ、10分くらいで来るよ？ その次は30分くらい後だけど」

「マジ？ よかったー。こんなんでも30分も待たされてたら暑くて死んじゃうよー」

ベンチの上ですでに半分溶けかけている千沙が、クーラーボックスを抱きかかえて言う。首にかけたタオルで顔を拭い、パタパタと大胆に胸元を広げて煽る。

優衣が止めるのにもかまわず、千沙はまたクーラーボックスの中からペットボトルを取り出して封を切った。

見る見るうちに、500ml入りのお茶がなくなってゆく。

「熱いんだからしょうがないじゃんー。海についたら、自販機で買うからさー」

「もう、トイレ行きたくなっても知らないよ？」

口を尖らせる優衣に、千沙はあっという間にペットボトルを空にして、ああー、生き返るー、と大げさに声をあげていた。

「……？ 佳奈ちゃん、どうかした？ 具合悪い？」

「え……！？」

ふいに伊織に聞かれ、佳奈は慌てて顔を上げた。

どうも、さっきの水着のことですっかり意気消沈して俯いていたのを勘違いされたいらしい。伊織は香織の手を引きながら、佳奈の顔を覗き込んでくる。

「あー、今日、本当に暑いもんね。調子悪かったら、無理しないで言いなよ？」

「う……うん。大丈夫。なんでも、ないよ……」

千沙にも答えて、佳奈は慌てて笑顔をつくった。ぶんぶん顔の前で手を振って、だいじょうぶ、とこぶしを握ってみせる。

あんなことで落ち込んでるなんて知られたくなかったし、心配させてしまったことも心苦しい。確かに、自分だけがまるでお子様なのはショックだったけど、別に優衣達も悪気があって佳奈を苛めようとしているわけではないはずだった。

(……そうだよ、そんなわけ、ないよ……。うん、……だいじょうぶ)

ちく、と胸に刺さる小さな痛み。女の子としての自尊心や、みんなに置いてきぼりにされたことへの羞恥や羨望。そんな暗い気持ちを振り払うように、佳奈は自分に言い聞かせた。

「ちょっと、暑くて……びっくりした、ただだから」

「そう？ 気をつけてね」

うん、と頷いて、佳奈はホームの日陰の下で、じっと、頭の中に思案を巡らせる。

過ぎてしまったことはもう仕方がないとあきらめるしかない。

(……海に着いたら、みんなと一緒に、ちゃんと更衣室に行って……それで、着替えるふりだけして……タオルとかで隠せば、ごまかせる、よね。……水着は……ちょうど、お気に入りののが破れちゃって着れなくて、恥ずかしいけど、しょうがないから学校の持ってきた、って言えば……)

せめてもの女の子のプライドを守るために、佳奈がそんなことを考えていた時。

「うー……やっぱごめん、私、ちょっとトイレ！」

千沙がいきなりそんな事を言い出して、ベンチからとび起きた。

優衣が『やっぱり』という顔をして、千沙はバツが悪そうに視線をそらせる。

しかし、それも当たり前と言えば当たり前だ。千沙は集合の時から、水筒のスポーツドリンクを空にしていて、駅で買ったペットボト

ルのミネラルウォーターを、電車の中でもさらにもう一本、空っぽにしていたのだ。

その上また今、ホームでさらに冷たいお茶——トイレに行きたくなくても仕方がない。

佳奈には見ているだけでもおなかが痛くなってしまいそうな豪快な飲みっぷりだった。

(あ……………)

そして。その単語にきゅん、と佳奈の下腹部も反応する。

(…………私も…………ちょっと、おしっこ…………したい、かも…………)

ぶる、と小さく身体を震わせて、佳奈は下腹部に感じるむず痒さを自覚する。

最初に少しトイレに行きたいなと感じたのは、電車でのやり取りのあたりからだ。できればこの駅で乗り換えの前にトイレに行っておきたかったのだが、あんなこともあったせいですっかり気落ちしてしまい、なんとなく『お手洗い』を言い出しそびれていたのである。

(…………んっ…………)

じんじんと、足の付け根に響く感覚は、思っていたよりも強いもので、佳奈は小さく腰をゆする。

「ごめん、すぐ行ってくるから！！」

「え、いいけど…………間に合う？」

時計を見て伊織が言う。次の電車まではあと4分弱。女の子がトイレを済ませるには少々、余裕のない時間割だった。しかし千沙は構わずに立ち上がり、

「混んでたら戻ってくるよ、ちょっと行ってくる！」

しゅた、っと手を立てるが早いか、千沙はそのまま階段のほうに走り出してゆく。実はけっこう我慢していたのかもしれない。

「えっと…………」

私も、と佳奈はベンチを立とうとする。

千沙がトイレを言い出してくれたことで、佳奈は内心ほっと胸を撫で下ろしていた。誰かがトイレに行くのであれば、それに付き合う形で佳奈も着いて行けるからだ。

しかし。

(あ…………)

思わず浮かせかけた腰が、ぴたりと止まる。

急に心変わりをしたわけでも、やっぱり我慢できそうだったわけでもなかった。

むしろ、トイレを意識したことで尿意ははっきりと強いものに変わっている。そっと押さえたワンピースのスカートの下で、可奈の汗ばむ太腿はすりすりとこすり合わされ、はやくトイレに行きたいと訴えていた。

だが——

(…………水着…………っ)

服の下に着込んできた紺色の布地が、佳奈の脚をその場に縛り付けていた。

佳奈が着ているのは、先にも述べた通りの学校指定のワンピースタイプの水着である。佳奈はその上から、ワンピースタイプの服を着てしまっていた。

…………つまり、佳奈のスカートの下はいつもの下着ではなく、上下一体になった水着の股布部分なのだ。トイレに入ってスカートをたくしあげたところで、下着のように足元へ下ろすことはできない。

つまり、佳奈は今すぐトイレに駆け込んだとしても、用を足すために一度ワンピースを脱いで、さらに水着までも全部脱いで、個

室の中で裸になっておしっこをしてから、また水着とワンピースを着直す必要があった。

電車の到着まではあと4分。もともと、おしっこを済ませるには5分でもギリギリ間に合うかどうかの時間なのに、そんな事をしていたら、どう考えても電車が来るまでには間に合わない。

(……ど、どう、しょう……)

中途半端な中腰になったことで、もじもじ、と擦り合わせた膝が、じいんと甘い痺れを響かせる。

間に合わない、と思うとますますトイレが恋しくなる。身体をぴったりと包む、吸水性の布地の感覚が、逃げ場のないように自分を縛り付けているようにも思えてしまい、佳奈は小さくその場に足踏みを始めてしまう。

(……本当に、おしっこ……しなくなっちゃった……)

急速に高まり始めた尿意に、佳奈は困惑の中、落ち着きなく周りを見回す。

さっきまでは、『トイレ、行っておこうかな？』くらいだった尿意は、はっきりと『トイレ、行きたい！』と強い自己主張を始めている。それに合わせて佳奈の腰も、もじもじくねくねと恥ずかしい我慢ダンスを始めていた。

もちろん、わざわざ水着など脱がなくても、スカートだけ上げて、水着の股布のところだけを真横に引っ張って、おしっこをする方法があることは佳奈だって知っている。

けれど——それは、もっと小さな子がすることだ。

それに、佳奈は、おしっこをするのがあまり上手ではない。トイレに入ってしゃがんでもおしっこをまっすぐ飛ばせず、気をつけていないと、だらしなくぴちゃぴちゃとお尻の方まで飛び散らせてしまう癖があった。これは佳奈の排泄孔の出口が細く入り組んでいるせいで、秘かなコンプレックスなのだが——水着を着たままでは、まず間違いなく股布のところを汚してしまうだろうことはすぐに想像できた。

(……そんなの……、だめ……っ)

トイレに入って、服を汚す。それはつまりおチビリ、オモラシと同じことだ。濡れてもいい水着とはいえ、そんなこと許されるはずがない。

第一、水着がそんな状態ですぐにワンピースまで濡れてしまうし、どこかに座ることも電車に乗ることもできないだろう。着替える場所もないのだから、海に着くまで、佳奈はオモラシ水着を着たままでいなければならないのだ。

きゅん、ともう一度佳奈の下腹部が尿意を訴える。

まっすぐおトイレに駆け込んで、個室に鍵をかけて、ワンピースを脱いで水着を脱いで、便座に座ってたっぷりオシッコをしたいと、女の子の本能は訴えていた。

けれど、佳奈の羞恥心はそれを許さない。

幼稚園の子みたいに、服の下に水着を着て。しかもそれが学校指定の地味な紺色スクール水着でもあるという事実が、佳奈のコンプレックスを強く刺激していた。

(……こんなの着てるから、おトイレ、行けないんだ……)

自分がひどく子供であるような、そんな自虐の念が振り払えない。

焼けつくような日差しと熱気の中、じょじょに下腹部を徐々に膨らませる恥ずかしい液体と、煮詰まり始めた尿意を感じながら、佳奈はますます俯いてぎゅっと手のひらを握り締める。

構内に、次の電車の到着を知らせるアナウンスが響く。

残りわずかとなった時間の中、佳奈はとうとう——『トイレ』を言い出すことはできなかった。

発車ベルが鳴り終わってだいぶ過ぎてから、電車が揺れ始める。

「っはー……っ……、危なかった……」

ぜいぜいと息を荒げ、閉まったばかりのドアに寄りかかった千沙が、ふうー、と胸に手を当てて安堵の息を吐く。汗のかいた額を拭い、へたり込むように近くの手すりを掴む。

「あとちょっとで置いてかれるとこだったよ……」

「もう、だから言ったのに。時間あんまりないって」

せっかく忠告したのにと伊織は口を尖らせる。あと少しで乗り遅れるところだった千沙は、電車の発車時刻を三十秒ほど遅らせてしまったのだ。シャツも出っぱなしでキュロットのファスナーを押さえ、『待って、乗ります！ 乗りますーっ！！』と叫びながら階段を走り下りてきた千沙にはさぞ駅員さんも面食らったことだろう。

「あはは、ごめんごめん。超特急で済ましてきたよー」

「あとで、駅の人に謝った方がいいよ？ 千沙ちゃん」

「うん。そうする……」

さすがに少しは堪えたらしい千沙は、すまなそうに頭をかく。

けれどその表情は晴れやかだった。全速力とはいえ、きちんと駅のトイレに行って、オシッコを済ませてきたのだから。

対照的に、言葉少なになった佳奈は、千沙の分まで我慢を続けているような気分だった。だめだと思っているのに、ちらちらと千沙の、足やおなかのあたりを見るのを止められない。

今もなお我慢を続けている自分とは違って、すっきりさっぱりと、気持ち良くおしっこをしてきた千沙が、羨ましくて仕方がなかった。

(……っ……)

ほんの数分で尿意は激しさを増し、佳奈の下腹部はみるみる硬く張り詰めていた。

電車に乗り込み、駅を出発して、いよいよトイレに行けないと分かったことが、さらに少女の自律神経に余計な緊張を強いていることも理由だろう。

さっき口にしたジュースも、もちろんその要因の一つだ。尿意を感じてわずか10分足らずで、少女の身体はあっという間に小さな水分保有量の限界を超え、みるみる身体の中から余計な水分を絞り出そうとしているようだった。

紺色の布地に覆われたおなかの中では、閉じ込められたままの熱湯が今なおくつくつと沸騰している。

(……おトイレ……、オシッコ……っ)

恥ずかしがり屋の佳奈が、はっきりとその欲求を心の中で形にしてしまうほど、我慢の余裕はなくなっていた。

乗り換えた電車は、ローカル線であるためか座る人もまばらなくらいに空いており、そのぶんだけ冷房もかなり強く効いていた。

ホームとの温度差に身体が反応し、一瞬で引っ込んだ汗の代わりに、佳奈のおなかの中にはみるみるおしっこが溜まってゆく。まるでこぼこぼとおなかの中におしっこが注ぎこまれていく音が聞こえてきそうなほどだ。

恥ずかしい液体をいっぱいにして、たぶんと音を立てて揺れる、佳奈の足の付け根のダム。貯水量を超える危険水位に迫る尿意に、佳奈の身体は緊急警報を発令する。

（ど、どうしようっ……お、おトイレ……っ！！）

さっきまでは、まだ『おトイレ行きたいな』くらいで済んでいた欲求が、『おトイレ行かなきゃ！！』『おしっこさせて！！』と激しいものにすり替わりは始めている。自然に足踏みを始めてしまうのも押さえられないくらいに、佳奈はトイレを求めだしていた。

「はあ。あとちょっとだねー」

「これだと空いてるかもね。日曜日じゃないから」

「お姉ちゃん、すごーい涼しいねっ」

「う、うん……」

このまま、降りる駅までは一直線。ローカルな単線は、さっきまで乗っていた路線とも違い、車内はずいぶんと年季の入った作りをしている。わずか3両の編成の電車は、のんびりと揺れながら住宅街の間を切り開く単線を走ってゆく。

強い冷房の直撃から逃れるように、身体を席の端に寄せ、手すりをつかんで。佳奈はぎゅっと身を硬くする。

目的地の駅まで、あと——20分。

（が……我慢、っ……しなきゃっ……）

たった20分のはずの道のりが、とても遠く感じる。わずか10分でこんなにも我慢がたつくなってしまっているのだ。この倍も我慢を続けることができるのか、佳奈は不安になってしまう。

それでもできるかどうか分らない決意に縋るように、佳奈はこくりと固い唾を飲む。

（だ……大丈夫……我慢、できるもん……！！も、もう、子供じゃないんだから……！！）

つまらない意地だとわかっていても、佳奈はそれを素直に受け入れることはできなかった。

スカートの上から、学用指定の水着のおなかのあたりを引っ張って、ぎゅっと握り締める。

無論、みんなに訳を説明して、途中の駅で降りることは可能だろう。

佳奈もまず最初にそれを考えなかったわけではない。

しかし、この列車はローカルの単線。いちど下車すれば次の電車まで30分は待たねばならず、ホームで無為な時間を過ごす羽目になってしまう。自分のせいでみんなに迷惑をかけてしまうと思うと、たやすく口にするには躊躇われた。

それに。

近くにトイレがあるなら『行ってくるね』で済む話なのだが、この場合は、もうオシッコが我慢できないことを、優衣達にはっきりと伝えなければならない。そうでなければわざわざ電車を降りる理由にならないからだ。

もちろん誰か1人にこっそり伝えるという訳にもいかない。

みんなにそれを訴えるのは、普通にトイレに行きたいということの何倍も勇気が必要だった。

（んっ……）

もじもじと腰をゆすり、佳奈は冷房の風から逃れるように立つ位置をずらす。

手すりを握り、もう一方の手で抱えた、着替えやお弁当を入れたビニールバッグを、そっと身体の前に回して、その後ろ側できゅっと足の付け根を抑える。

がたん、がたん。

年季の入ったローカル線の座席は、あまりクッションも効いておらず、車輪の振動がそのままダイレクトに佳奈の下腹部に響いてく

る。揺れる電車に合わせて、おなかの中のダムの水面もたぶんたぶんと揺れ、出口を求めて水圧が高まる、

佳奈はちょっとした油断で熱い水流が噴き出しそうになる恥ずかしい出口を一生懸命抑え込んで、浅く早く息を繰り返していた。

少しでも気を紛らわせようと車内を泳ぐ視線は、中吊り広告の『水』や『我慢』といったフレーズに敏感に反応してしまう。激しい尿意に苛まれている佳奈にとって、少しでも関連のあるものすべてが、トイレやおしっこに関わるものに見えてしまうのだ。トイレ、おしっこ、我慢、水、水着、電車、揺れる——ドア。

（……そ、そうだっ！！）

その時。

天啓のように、佳奈の脳裏に閃くものがあった。

（で、電車の——おトイレ……っ！！）

普段ならまず使うことはないだろう電車の中のトイレ。男女共用で、誰が使っているかも分からないという立地の上、ドア一枚にはたくさんの乗客がいて、ドアを開けるところをはっきりと見られてしまうということから、潔癖な佳奈にはまず使おうとも思えない場所だ。

高速で揺れながら走る電車の中で用を足す、ということの不安さや、薄い壁一枚では物音を遮ることもできず、用を済ませているのを聞かれてしまうかもしれない、という恐怖もあり、佳奈は普段、その存在をほとんど意識すらしていなかった。

だが、今の佳奈はそれを差し引いてすら、トイレが恋しい。

硬く張り詰める下腹部が、一刻も早く我慢からの解放を叫び続けている。普段は禁忌としているトイレを使う決意には十分だった。

幸いにして、今は車内にはほとんど人の姿もない。これなら問題なくトイレに行ってこれるだろう。

佳奈はあわてて席を立とうと、荷物を下ろす。

「ん？ どしたの？」

「その、ちょっと……」

伊織が気づいて声を上げる。誤魔化しながら立ち上がろうとした佳奈だが、揺れる電車の不安定な足元にたまらず『はあっ』と腰を痠ませてしまう。

スカートの下でぎゅうときつく閉じ合わされ、すりすりと擦りあわされる太腿、小刻みに震える爪先。誰が見てもはっきりと、オシッコを我慢していることが分かる格好だ。

「佳奈ちゃん……？」

怪訝そうな表情を浮かべる伊織に、佳奈は覚悟を決めて、トイレの告白をすることにした。

もともと、黙って皆のそばを離れるわけにもいかないのだ。

「あの……、おトイレ……」

「ええっ！？」

声を潜めて小さく告げた佳奈だが、伊織は大きく声を上げる。

お喋りに夢中だった千沙達も、これには流石にびっくりして佳奈たちの方を振り向いた。

（や、やだっ……伊織ちゃん……、声おっきいっ！！）

わざわざ佳奈の尿意を喧伝するようなことをした伊織に、佳奈は小さな憤りを覚える。女の子同士でもあまり大っぴらにそんなこ

とを言って欲しくないのに。まして車内は空いているとは言っても、他の乗客がいないわけではないのだ。

「ね、ねえ。本当？ 我慢できないの？」

「う、うん……」

伊織は身を乗り出すと真剣な表情でそう聞いてくる。それに気押されながら、佳奈は小さくうなずいた。見れば、千沙たちも表情を強張らせている。

どうしてみんな、驚いているんだろうか。

意味が分からず、佳奈はもう一度『おトイレ、いつてくるから』と言おうとした。その唇が『お手洗い』の『お』の格好になったところで。

「どうする千沙？ 次の駅で降りようか？」

「……そうするしかないんじゃない？ 無理なんでしょ、佳奈」

（え……）

伊織達が相談を始めたのを見て、佳奈は、ようやく自分が重大な勘違いをしていたことに気づいていた。

（——う、嘘……！？）

慌てて顔を上げた佳奈は、立ち上がった先で左右の通路から、両隣の車内を見回した。湧き上がった疑念を、嘘だ嘘だと心の中で必死に打ち消そうとする。

が、しかし。無慈悲にもその想像は、現実となって佳奈の前に立ちふさがっていた。

（お……おトイレ、ない……っ！？）

当たり前のことだった。ローカル線の質素な設備では、車内にトイレなど整備されていないこともよくある事だ。佳奈は普段利用しているJR線の感覚しかなかったため、どんな電車にもトイレは付いているものだという先入観があったのだ。

あるいは、それは願望に近い思い込みだったのかもしれない。トイレを済ませられないまま、我慢しながら乗車した時から、無意識のうちに佳奈は『ここにもトイレがある』ことを当然のこととして思い込んでいたのだろう。

だが、現実には。この3両編成の車内には、佳奈がおしっこを済ませるための設備は、備えられていないのだ。

「あ……っ」

突き付けられた事実の前に、きゅっ、と下腹が冷たく縮む。

こぼりと音を立てるようにうねった下腹部が、一気に重さを増した。溜まらず佳奈は前屈みになって手すりにつかまり、ぎゅっとなんピースの前を押さえてしまう。

（嘘、……っ、おトイレ……やだっ……で、出ちゃう……っ）

ほんの数十秒前まで、あったはずのトイレは蜃気楼のようにかき消えて、強烈な尿意だけが後に残される。誰が使ったかも分からない、清潔とは言えない公衆トイレですら、今の佳奈には使うことを赦されないものだったのだ。

わずかな希望から一転、絶望の中へ。

その転換の中で行き場を失った佳奈のおしっこが、一気にその存在感を増した。まるで外から水を注ぎこまれたみたいの下腹部がせり出し、膨らんだ膀胱が激しい尿意を訴え、鈍くずきずきと痛みすら伴い始める。

佳奈は人目をばからず、足の付け根に前から手をつ突っ込んで、水着の股間部分をぎゅぎゅと押さえはじめた。

とうとう激しく腰を揺すり始めてしまった佳奈を、心配そうに伊織が見上げる。

「佳奈ちゃん、だいじょうぶ？」

「……え、あ、うっ」

気づけば。千沙も、優衣も。みんなが揃って、不安そうな顔で——困ったなあ、と眉をよせて、佳奈の方を見ていた。

そう。車内にトイレがないことを前提として——もう一度さっきの会話を思い返せば。

佳奈は、トイレのない場所で、もうオシッコが我慢できない！！と告げたに等しかったのだ。友人たちとの間に生じた誤解に気付いて、佳奈の顔は一気に紅潮した。

（や、やだ……違うのっ、違うのっ！！お、おトイレあると思ったから、それだけでっ……ま、まだ我慢できるけど、おトイレに、行きたいってだけで……！！）

必死に訴えようとする言葉はしかし、羞恥と緊張と混乱によって喉の奥に引っかかったように詰まっていまい、佳奈は小さく声を漏らすだけだった。

「う……あ、ち……がうのっ……と、おといれ……っ」

膝を交差させながら腰をくねらせるその様子は、どう見ても我慢の限界に近いことを知らせるもので。

「だ、大丈夫……だから……へ、へいき……っ」

「いいよ、次の駅で降りて、トイレ借りよう？ ごめんね、気付かないまま急がせちゃって」

「あ……う、ち、ちが……っ」

猛烈な羞恥に沸騰した思考は、ぐるぐると激しい渦を巻くばかりで、うまく言葉に変換されない。

心配そうに眉を寄せた伊織に優しくそんな言葉までかけられてしまうことで、佳奈のプライドはもはやずたずただった。同級生の友人にまで、佳奈はきちんとトイレにもいけない恥ずかしい女の子だと認められてしまったに等しい。

「おねーちゃん、ちゃんとおトイレ行かなきゃだめだよー？」

「っ……………」

挙句、年の離れた香織にまでそんな事を言われ、佳奈は目の前が真っ暗になるのを自覚していた。

今から何を言ったところで、もはや言い訳にしかならない。

（違うの、違うんだからあ……！！ちゃ、ちゃんと間に合うもんっ。おしっこ、したいけど……え、駅まで、降りる駅まで我慢できるもんっ……さっきのは、ここにっ、おトイレがあると思ってただけでっ……と、途中でもちゃんとおトイレ行ってこれたんだから……！！）

ぜんぶ、ぜんぶ。みんなのことを思っていた判断なのに、それがすべて裏目に出て、自分を追い詰めていったのだ。

佳奈はやり場のない悔しさにきつく唇をかむ。

スカートの下に感じるワンピースの水着の感触が——普通の女の子ならあり得ないというその状態が、さらに佳奈に自分を惨めなものに感じさせた。女の子として当たり前のことが出来ていないのだと、佳奈の心は激しい自己嫌悪にきつく縛りあげられてゆく。

（……乗り換えの前に、……おトイレ、行っておけばよかった……っ）

心の底から、佳奈は自分の行いを後悔していた。

さっきの電車になら、トイレはあったのだ。そこで済ませておけばこんなことにはならなかった。

あるいは。遅れることを謝ったうえで、駅のトイレに行くべきだった。

そうすれば、皆の前で、おしっこが我慢できないことを知られることもなかったのだ。

揺れる心と後悔の中、もじもじと揺れる腰を、擦りあわされる脚を、佳奈はもう押さえこむことができなかった。手すりにつかまった

まま、背伸びしたサンダルが左右に揺れながら体重を支える。冷房によってますます少女の身体は代謝を活発にし、熱源をおなかの中に集めようとしていた。

「あ、……あつ……、つ……！！」

ふいに、ぶくんと膨らみかけたおしっこの出口に、佳奈はぎゅっと水着の股布を掴むようにして脚の付け根を押さえこんでしまう。

優衣がぎょとして佳奈の方をみた。

クラスメイト達の視線を一身に浴びながら、けれどそんな外の事情など気にしている余裕がないくらい、佳奈の意識は身体の内側、脚の付け根の一方所に集中していた。オモロシなんかだめ、その一心で、佳奈は外聞もかなぐり捨てて、おしっこの出口を必死に握り締める。

（だめ……っ！！）

全身の力を使って、おしっこの出口を締め付け、脚をきつく交差させる。じわ、と水着の布地に湿った感触。それを汗だと自分に言い聞かせて、佳奈はくねくねと腰を揺すった。

（……我慢しなきゃ……っ！！ 我慢しなきゃダメ！！ う、海までちゃんと、我慢。……がまんっ、んんんうっ……！！）

そう、挫けそうな心を懸命に励ます。

自分がゴドモじゃないという証明のためにも、佳奈は目的地の駅までトイレに降りるわけにはいかなかった。途中下車などすることなく目的の駅まで辿り着いて、ちゃんとトイレでおしっこを済ませる。

そんなこともできないなんて、女の子失格だ——それくらいのことを自分に言い聞かせるように、じっと窓の外へ視線を向ける。

「あ……んう…、うう……っ」

薄く開いた唇を何度も噛み締め、はあはあと息を荒げ、けれど手のひらはスカートの上から脚の付け根を握りしめたまま動かない。

もともと佳奈の身につけている学校指定の水着は透水性の良い布地でできており、普通の下着なんかにくらべても、ずっと水を通しやすい。

それは泳ぐときに無駄な抵抗が掛からないための仕組みであり、同時に——水を吸収・保持しておく機能が全くないことを意味していた。つまり、こと、トイレに関して言えば、噴き出す水流を塞ぎ止めるという観点でみれば何の役にも立たない、裸同然の状況なのだ。

「っふ。くう…。うあ……っ」

ぎしぎし、と吊革がきしむ。指先だけを引っ掛け、体重を支えるように伸びた指は、真っ白くなるほどに力がこめられていた。爪先を、踵を交互に持ち上げてよじり合わされる左右の足は、オシッコを堰き止めるのに全力を傾け、すでに佳奈の身体を支える役には立っていない。

「ああ……っ、あつ……っ……！！」

ぱくぱくと、小さな唇が開閉する。

きつく手を添え、握りしめた股間の一点にありつた力の注ぎ込んで、波のようにぶつかってくる水圧に対抗するため、出口をきつくきつく、締め付ける。

もし佳奈が我慢しきれずに恥ずかしい液体を噴出させてしまえば、オシッコは股布部分をそのまま通過して、羞恥のホットレモンティーはそのままの勢いで容赦なく足元に叩き付けられてしまうだろう。

つまり、佳奈は、普通の下着ならば股布にじわりと広がり染みを広げるであろう程度の、わずかな“おチビリ”ですら許されないの

だ。

（がまん、っ、がまん、するのぉ……っ！！）

緊張と限界に硬く張りつめた下腹部が、きりきりと絞られられるように鈍い痛みを訴えていた。ちりちり焦げる尿意はさらに激しさを増し、佳奈に次々と襲いかかる。はち切れんばかりのおしっこが、わずかの油断について外に噴出しようとする。

「……………っあ、あっ、あっ……………」

海までの我慢——けれどすでに、佳奈は『海まで』の先の具体的な場所のことを考えようとはしていなかった。『海まで』が『海水浴場のトイレ』なのか『海水浴場の駅のトイレ』なのかすら曖昧である。

それどころか、電車が到着するやいなや、ホームでしゃがみ込んでそのままおしっこを始めかねない有様の佳奈を、遠巻きに見ながら。伊織達は言葉を失うほどの異様な緊張の中に包まれていた。

「か、佳奈……だいじょうぶ？」

傍目に見ても辛そうに思えたのだろう、見兼ねた千紗が聞いてくる。

「っ……………」

だが、佳奈は返事を返すこともできず、眼に涙をにじませ、小さく首を振るばかり。

水着を押し上げる張り詰めた下腹部は、もはや貯水量の限界を超えている。

どうにか尿意の大波こそ乗り越えたものの、次に同じものがやって来たときに耐え切れとは思えなかった。

（……どうしようっ……おトイレ……トイレ行きたい……っ、おしっこでちゃう……！！）

スカートの下、紺色の布地に包まれた下腹部をもてあまし、佳奈は汗ばんだ手で手すりを握りなおす。

膝は小刻みに震え、座席の上ですりすりと太腿を擦り合わせる。

だが、車両の中に佳奈の求めるトイレ——おしっこのための設備は存在しない。次の駅に到着するまで、佳奈の乗る電車は動く密室も同じだった。

次の駅まで何分だろうとしても、電車がホームにたどり着きドアが開くよりもさきに、佳奈の下腹部の出口がこじ開けられるのは明白だった。

（——っ、だめっ！！）

きゅうんっ、と疼き、緩みそうになる排泄孔を、必死に締め付けて。

硬く張り詰めた下腹部を水着の上から撫でさする。

冷房の効いた車内、車輪からのかすかな振動も手伝って、尿意は加速度的に増している。開放を求める下腹部の訴えはもはや暴力的なまでに達していた。

（だ、だめ、海まで、うみまで、ちゃんとっ……………）

「ふぁ…………っ！？」

奮い立たせようとした心が、再び牙をむいた尿意にあっさりと砕かれてしまう。足が震え、膝が笑うようにかくかくと力を失ってゆく。

ぶるぶると手すりを握りしめ、足踏みをし、腰を振り立てて——佳奈はとうとうその場に深くしゃがみ込んでしまった。

「佳奈ちゃんっ…………！？」

優衣が目を剥く。佳奈は水着の股間を、サンダルのかかとに押し当ててぐりぐりと身体をよじらせていた。

手のひらだけでは足りずに、全身を使って排泄を堪える。そ

激しく手のひらで押し揉まれる可奈の股間は、スカートも大きくめくれ、その下から学用水着の紺色の布地をのぞかせていた。野

暮ったい水着の布地に覆われた下腹部は、細い身体の線にぴったりと沿って、ぷっくり膨らんでいる。

我慢し続けた恥ずかしい液体で、おなかをパンパンに膨らませ——佳奈は走り続ける電車の中、次のトイレまでを懸命に耐え続ける。

「おねえちゃん、オモラシしちゃダメだよ？」

「っ……あ……うっ」

香織に悪意はないのだろう。けれど、自分よりもずっと小さな子にそんな風に励まされて、佳奈の羞恥はなお増すばかりだった。香織のような小さな子でもちゃんとトイレに行けるのに、自分はそうではないと言われているのだ。

『まもなく、尾ヶ瀬、尾ヶ瀬——』

駅までの到着を告げるアナウンスに、伊織が小さく囁く。

「あとちょっとだよ、がんばって！」

「佳奈、しっかりして」

二人の応援もほとんど上の空で、佳奈はいまにも決壊しそうなダムを必死に押さえこむ。

そして——

『ここから先、少々揺れます。ご注意ください』

がくん、と車体が跳ねるのとほとんど同時、注意を促すアナウンスが車内に届く。

「んあうっ……」

思わずバランスを崩しかけた佳奈の股間から、あてがっていたサンダルのかかとが外れ、押さえを失った脚の付け根の大事なところが一気に緩みかける。

じゅっ、じゅううっ、と断続的に響くはしたない音とともに。

佳奈の股間、紺色の布地の股布部分が、一気に濃く色を変えた。

股間の先端から噴き上がる熱い雫が、スカートの奥に隠れた紺色の股布に吹き付けられる。脚の付け根にじわっと広がる、ぬるぬるとした熱い感触が、内腿を溢れ、膝の裏にまで流れてゆく。

内腿の間をつうと伝う水滴が、冷房に触れてひやりとした感触を呼んだ。

（ち、ちがうもんっ、汗……汗だもんっ）

水着——濡れるための服は、存分にその効果を発揮していた。もともと水中での活動を前提としている水着は、保水力などなきに等しい。メッシュ状の布地は、こぼれた水滴をほとんどそのまま透過させてしまうのだ。

脚の隙間にあふれる熱い滴を腰をよじるようにして隠し、手すりに指をひっかけ、佳奈は身体をくねくねと揺する。

「——、——！！」

優衣達が何かを叫んでいるが、その声ももはや佳奈には届かない。

じゅっ、じゅう、じゅじゅっ。

ぱたっ、ぽたぽたっ……

また電車が揺れる。レールをはねる車体の上、上下左右に揺さぶられ、ぱんぱんの膀胱からまたおしっこが絞り出される。一度緩んでしまった排泄孔からは、わずかな身じろぎに反応してぷしゅっぷしゅるると熱い水流が漏れ出してゆく。

我慢の許容量を超えたおしっこは、水着の股布を投下して、佳奈の足もとにぱちゃぱちゃと飛び散り始めていた。

時速数十キロで走る動く密室の中、佳奈のチビったおしっこは床の上に水たまりを広げてゆく。

「んうあ、あっああ……あうっ……」

（だ、だめ、もうだめ、もうしないのっ、……が、我慢、がまんっ、がまん……っ……！！）

それでもなお。佳奈は、我慢を止めようとしなかった。下腹部ははすっかり音を上げて、鈍い痛みとともにおしっこを絞り出しているのに、腰をねじり、足を絡ませて必死に噴き出すおしっこを止めようとする。

車体を揺らしながらゆっくりと速度を減じた電車が、ようやくたどり着いた単線のホームに滑り込んでゆく。

『尾ヶ瀬、尾ヶ瀬……お降りの方はお近くのドアから……』

もどかしいほどの時間の中、ようやく停車した電車はぶしゅ、と音をたててドアを開ける。

「佳奈ちゃんっ！！」

外から一気に熱気が押し寄せてくる中、伊織が叫び、優衣と一緒に佳奈の手を引こうとして立ち上がった。

が。

「……………っ」

涙をにじませ、佳奈は懸命に首を横に振る。千沙がぎょとして目を剥いた。

「ちょ、ちょっと、何してんの佳奈、はやくしなよっ」

「……や……あ！！」

言葉にできぬ拒絶を態度に滲ませながら、佳奈は震える喉で声を絞り出す。

「ちゃ、ちゃんと、我慢、できるもんっ……！！ わ、わたし、もう、オナなんだから、海まで、へいき、だからっ……！！」

この期に及んで、佳奈は意地を張ろうとしていたのだ。

自分は大人だから。こんなところで——おしっこのために、駅に降りたりしない。海にたどり着く前から早々と、びしょ濡れになってしまった水着を抱え、佳奈はなお抵抗を続ける。

「なにやってんの、はやくっ！！ どう見たって無理でしょ、佳奈っ」

「や、いやあ、嫌ああ！！」

千里、優衣に。左右から脇を抱えるように掴まれ、佳奈はホームの外へ引きずり出されてしまう。

そして——

ぷしゅうっ、と、高圧の水流を噴出させたような水音が響いた。

白いワンピースを瞬間に染め、佳奈のおしっこの出口は一気に我慢を失くしてしまう。

トイレまでは改札を抜けて300m。とてもそこまで間に合わない。

「あ、あ、や、だ、離してっ、が、がまん、できなく、なっちゃう……っ」

電車がゆっくりと走り出すと同時、佳奈の我慢は限界を迎えた。

水を通す紺色の布地は、噴き出す熱い水流を塞ぎ止めるのにわずかな役にすら立たなかった。ぱんぱんに膨らんだ下腹部の水圧が、おなかの一番底に開いた排泄孔から少女の体外へと噴き出してゆく。

白いワンピースはあっという間にその半分以上を薄黄色の水流でほかほかと染め上げ、佳奈の細い体に張り付いて、その下の紺色のスクール水着を透けさせていた。

じつとりと濃く色を変えた水着の下半身。その股布部分をほぼ素通しにして、激しい勢いでおしっこがホームの上を直撃する。

伊織たちには一瞬、佳奈がそこで下着をおろし、放尿を始めたのかと錯覚したほどだった。

もともと保水力のない水着では、ほとんど素通しも同然だ。

股間部分を突き抜けた水流は、あそこを丸出しにしているのとは変わらない勢いで地面を直撃する。

しかし、紺色の水着はその大部分がますます深い濃い色に変わって、その上のワンピースまで薄黄色く染まっている。どう言い訳しようと隠しようのないオモロシだ。

「うあ、あつ、あ……ちがう、の、ちがうのお……っ！！」

海を泳ぐための衣装は、もはやお漏らしをするための衣装と成り果てていた。

少女の大事なところこそ隠されているものの、股間部分を突き抜けてほとぼしる羞恥の熱水は隠しようも無い。温い風の吹きぬけるホームに、ばしゃばしゃと高い水音を撒き散らしながら、こぼれたおしっこが水溜りを残してゆく。

ホームの真ん中、水飲み場とベンチに挟まれた場所で、しゃがみ込み、そのままオシッコを始めてしまう佳奈。

海まではあと3駅。待ち時間を含めて約40分。しゃがみ込んでしまった佳奈のスクール水着、その股間部分の布地を突き抜けて、ぱちゃぱちゃと噴き出すオシッコが、ホームの上を黄色い海へと変えてゆく。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 両手に大荷物の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 09/22/2011 23:41:30

BODY:

雨上がりの繁華街は、週末ということもあって人通りで混み合っていた。晩夏の空は相変わらず分厚い雲に覆われており、気温と共に湿度も上昇の一途を辿るばかり。

またいつ崩れ出すとも分からない天候を気にして、道行く人々の足取りも忙しない。

「んっ、……ふう……っ」

額にうっすらと汗をかき、志穂は小さく声を漏らす。サマーベストに白のブラウス、薄い緑のスカート。胸元のリボンと校章は、近所でも有名な某私立校の制服のものだ。

息も荒く、雨に濡れた駅前を歩く少女の両手には、はち切れんばかりに中身を詰め込んだ紙袋が提げられていた。

（う、……急がなきゃ……っ）

近づいた文化祭のため、志穂のクラスでは休日返上で準備が進められている。志穂はそのため近くの駅まで買い出しにやってきたのだが、量販店に辿り着いたところで急な雨に降られ、荷物を抱えて戻る事も出来なくなっていたのである。

都合の悪い事に携帯まで忘れ、学校や友人とも連絡が取れなくなっていた。雨がおさまるまで 1 時間以上も量販店に立ち往生する羽目になってしまった。

はやる心を押さえ、今か今かと雨が止むのを待ち、なんとか量販店を飛び出したのはいいものの——両手の荷物は少女一人の手に余る重さで、抱えたままでは真っ直ぐ歩くのもやっとという状況だった。

（や、やっぱり、買い過ぎたかもっ……）

革靴の底は濡れたアスファルトの上を不安定に滑り、ずしりと膨らんだ紙袋の重さに、肩が根元から抜けそうになる。持ち手は指に硬く食い込み、手のひらにも痛みと痺れが走る。

荷物には装飾用の布地や画用紙、料理のレシピ本なども含まれ、万が一にも濡らしてしまう訳にはいかないものばかりだ。休憩をしようにも大雨に振られた地面は一面が水浸しで、どこにも荷物を下ろす場所がなかった。

「っ……ふ、あ、……んうっ……」

土砂降りに濡れたアスファルト、人混みの混雑、蒸し暑い気候、汗で不快に湿る背中、曇る眼鏡。悪条件がいくつも重なり、駅までの数百メートルの距離が、あまりにも遠く感じられる。抱えきれないほどの大荷物がさらにそれに拍車を掛けた。

そして——

「んあ……っ」

ただでさえおぼつかない志穂の足取りをますます鈍らせるもの、それは——

（……だ、だめ、お……おしっこ、でちゃうっ……！！）

下腹部を硬く張りつめさせるほどに、切羽詰まった尿意だった。

多くの客が雨宿りに駆け込んできた量販店でのフロアで、志穂はやきもきしながら窓の外とにらめっこを続けていた。何度もフロアの時計を見上げ、一向に弱まる様子のない雨足を見上げては焦りをにじませ、溜息を繰り返す。

（もうこんな時間……どうしようっ……）

量販店に足止めを食らってから早 1 時間が過ぎ、志穂は焦りと共にフロアの端を行き来する。足元には大きな紙袋が二つ、中身をぎっしりと詰め込んで鎮座している。

本来なら 1 時間も前に学校に届けていなければならない大事な資材ばかりだ。遅れる事の連絡も出来ず、クラスは今頃志穂の帰りを今か今かと待ちわびているに違いなかった。

何度後悔しても、忘れてきた携帯がどこから現われてくれるというような奇跡は起きなかった。ご多分に漏れず、連絡先のほとんどは携帯のアドレス帳の中で、志穂の頭の中には残っていない。焦る一方で連絡手段はなく、時間だけが刻々と過ぎてゆく。

バスで駅まで行く事も考えはしたが、近くのバス停は屋根のない吹き晒しだった。たとえ傘を差していてもバスが来るまでに荷物がどうなるかは火を見るよりも明かである。まして駅まで歩いていくなんで、まず考えられない。

「うう……」

落ち着かない足元が、じっとしていられずに小刻みにステップを刻む。

——実のところ、この時から志穂の身体は少なからぬ尿意を覚えていた。志穂が落ち着かない理由のいくらかは下半身を間断なく襲うさざ波にあり、苛立ちの理由の何割かは、恥骨上のダムをちくちくと刺激するむず痒い感覚だったのだが——早く帰らなきゃと焦るあまり、志穂の頭の中からトイレに行くという考えはすっぱり抜け落ちていた。

（まだ止まないの……？ やっぱり、無理にでも傘とか買って行った方がいいのかな……。でも、荷物濡れちゃうし……もうお金もそんなにないし……ああもう、いつまで降ってるのよぉ！！）

弱まる様子のない雨足を見上げながら、志穂はフロアの一角でじりじりと苛立ちを滲ませる。

そうしている間にも、混雑の中で蒸し暑さを防ぐために強められた冷房の風は少女の身体を冷やしていった。冷風の直撃にぶる、と背中を震わせ、生乾きの制服が気持ち悪く背中に張り付く。眉を寄せながら空を見上げる志穂が、暑さに耐えかねてついがぶ飲みしたペットボトルのお茶は、下腹部の一か所へと集まり続けていた。

まんじりともせずに曇天の空を見上げ、なおも収まらない雨足に焦らされ続け、さらに 30 分余り。結局それから一度もトイレに行く事もなく、フロアをうろついていた志穂は、不意に途切れた雨の音に、弾かれたかのように量販店を飛び出していた。

折しも志穂と同じように、急な土砂降りに閉じ込められていた客たちが一斉に帰途へと付き、繁華街は時ならぬ混雑を見せていたのである。

そんな中、抱えているのがやっという程の大荷物を手に、駆け出した志穂はすぐに後悔することになる。

（と、トイレ……行っておけばよかった……っ！！）

逼迫した生理現象は、量販店を出た時既に急がなきゃ、という焦りを上回りつつあった。一つ目の横断歩道まで歩いた時点で込み上げる尿意は猛烈なものとなり、思わず摺り足の内股になってしまうほどだったのだから、信号が変わるまでの待ち時間の間、下腹部に押し寄せる尿意の波を堪えるのだけで精一杯だったのも仕方のない事だ。

志穂は濡れたアスファルトの上、歩道をごった返す人混みの中で両手に荷物を抱え、途方にくれることになる。

今からでもトイレに寄っていくべきだ、という選択肢は当然のように頭をかすめたが、量販店に戻るには再び横断歩道で信号待ちをしなければならなかった。同時に、既に1時間半以上も予定を遅れているという事実が、志穂の決断を鈍らせる。

逡巡はさらなる迷いと焦りを生み、不用意な緊張がますます尿意を募らせるという悪循環。志穂の排泄欲求は坂を転げ落ちる雪玉のように膨れ上がってゆく。

両手の荷物が、万が一にも汚すわけにもいかない大事なものであるという事が、志穂に無意識のうちにトイレから足を遠ざけさせていたのも事実である。

腕をまっすぐ伸ばせば地面を引きずってしまいかねない大きな紙袋は、トイレの個室に持ち込むにはかさ張り、個室の床におく訳にもいかない。さりとて、用を足している間フロアのどこかにおきっぱなしにしておくなんて、以ての外であった。

——なんのことはない。志穂が尿意を自覚した時から、既に多くの逃げ道は塞がれていたのである。

「はんっ……あ……んっ、……う」

息も荒く、肩を上下させ、気持ちの悪い汗を首筋に感じながらも、志穂は人混みの中を懸命に歩く。繁華街の雑踏の隙間を、大きな荷物を抱えて通り抜けるのはそれだけで十分な重労働だが、今はそれに雨上がりという立地と、切羽詰まった尿意という条件が加わっている。

排泄を求める下腹部は切実に限界を訴え、スカートの下で硬く張りつめた乙女のダムと、その秘められた水門を閉ざし続ける括約筋はもはや余力がない事を叫び続ける。

「っ、はぁ……っ……！？」

繊細な乙女のティーポットに、新しい羞恥の熱水がこぼこぼと音を立て湧き起こり、オシッコの出口が高まる水圧にぶくりと膨らむ。

恥骨からじいんと響くように伝わる尿意に、ぞくぞくと背中を震わせて、志穂はその場に立ちつくしてしまった。

両手はずしりと重い紙袋に塞がれ、スカートの前を押さえるどころか、さりげなく下腹部を撫でさする事すらかなわなかった。押し寄せる怒涛の尿意を押さえ込むため、志穂ははあはあと息を荒げ、膝をきつく寄せ合わせ、内腿をすり合わせる。

それでもぱんぱんに膨らんだ下腹部の欲求を和らげようと、腰はくねくねと左右に揺すられ、後ろに突き出された小ぶりのお尻がもじもじと震える。

（んあ、っ、…で、ちゃう……！！）

脚の付け根、汗ばんだ下着の股布を恥ずかしい所に食い込ませながら、志穂は懸命に脚をくねらせた。酷使された括約筋はいまにも擦り切れんばかりに疲弊し、水門を内側から引っかく尿意の刺激に屈しそうになる。

放水を塞ぐには頼りないおんなのこの水門は、支えるものがなければいつ崩壊してもおかしくなかった。今すぐ、両手で思い切り股間を握り締めてしまいたい。そんなはしたない欲求を覚えながら、志穂は口の中に浮かぶ唾を飲み込み、駅までの道を必死に急ぐ。

じゅうっ……

しかし、そうして無理をすればするだけ、緊張に強張った下腹部からは熱い雫が漏れ出していた。太腿の付け根の隙間、たつぷりと水を吸った下着に、また新しくしみだした熱い雫が、腿の内側を濡らし、つつと脚を伝う。

膝裏にまで滑り落ちる羞恥の雫の感覚に、志穂はがくがくと膝を震わせながら片方の足にもう一方の脚を擦りつけた。

(だ、だめっ、だめえ……っ)

ただでさえ不安定な足元が、おぼつかない足取りのままふらふらと左右に揺れる。満足に我慢する事も出来ないまま、志穂は忙しなく爪先を踏みならし、膝を重ね、深く脚を交差させ、混雑する歩道の真ん中で、くねくねと羞恥のダンスを始めてしまう。

「んあ……っ！！」

ぶるぶると緊張し、硬く張りつめた少女の内腿に、再びじゅうと熱い雫が噴き上がった。

しゅるるっ、じゅう……

今度は一瞬では終わらずに、水音は間断的に続き、くぐもった音を響かせる。同時に志穂の脚をいく筋もの水流が一気に伝い始めた。

「ふああ……、っ、だ、だめ……っ」

しかし、限界を迎えた乙女の秘所に、ただちに救援に向かわねばならないはずの左右の手は、重い荷物を支えるので精いっぱい。大事な大事な荷物を放り投げるわけにもいかず、深く引けた腰を小刻みに跳ねさせ、志穂は顔を赤くしながら、歩道の中央に立ち止まってしまう。

もじもじと腰をよじり、繰り返させる足踏みに、濡れた道路の水たまりがぱちゃぱちゃと飛沫を跳ねさせた。

そして――

両手が自由にならないまま、硬直してしまった志穂の下腹部を、今日最大の尿意の波が襲う。

「あ、あ、あ、いや、あ……っ」

志穂の喉が掠れた悲鳴を絞りだすのと、制服のスカートの奥で、じゅじゅじゅううっ！！と凄まじい水音が響いたのはほとんど同時だった。

心持ち、引けていた腰のスカートの中央、志穂の脚の付け根の部分が、まるで水でも浴びせかけられたかのように一気に色を変えてゆく。

薄い緑のスカートを色濃く染めるのは、少女の股間から噴き上がった羞恥の水流だった。

猛烈な勢いで噴き出した羞恥の熱水が、下着を突き抜け一気に内側からスカートを直撃したのだ。楕円形に広がった染みは、そのままじゅうと溢れんばかりの水気を滴らせ、足元へ向かってさらに広がり落ちる。

「あ……や、だめ、だめ、え、だめえええ……っ」

言う事を聞かずにオシッコを噴き上げてしまう下半身。困惑しながらも放水を堪えようと腰をくねらせる志穂だが、その動きは噴

き出すオシッコを堰き止めるどころか、噴き上がる水流を強く刺激し、さらに激くさせるばかりだった。

羞恥と焦りに収縮する下腹部奥の水風船から、猛烈な勢いで絞り出された薄黄色の濁流は、清楚な少女のスカートを内側から濡らし、色濃く染めながらさらに激しい勢いで足元に噴きこぼれてゆく。

そんな自分の姿を、志穂は荷物を抱えたまま、隠す事すらできずにいた。

「あ、あああ…っ、だめ、止まって、止まってえ……！！」

オシッコを押さえ込もうと、前屈みになって激しく身をよじる志穂。しかし一旦出口を破られた排水がそれで止まるはずもなかった。緩んだ水門からは耐えに耐え続けた熱水が激しく噴き上がり、下着を水浸しにしてなお弱まることなく噴き出し続ける。

ようやく異常に気付いた周囲の雑踏が、志穂を取り巻くように距離を取り、人だかりを作ってゆく。大ぜいの輪の中に残され、志穂はもはや逃げる事も許されない。

オシッコは下着の股布からおしりの方にも回り、こちらスカートを色濃く染めてゆく。たつぷりとオシッコを吸って薄い布地はすっかり志穂の下半身に張り付いて、濡れ透けたその奥に艶めかしい少女の脚を浮かび上がらせていた。

ばちゃばちゃと、スカートの内側に薄黄色い雫が噴き落ち、アスファルトの上に真新しい水たまりを広げてゆく。

止まらない放水はなおも続いた。ずぶ濡れになってほとんど乾いた部分のなくなったスカートを、さらにたつぷりと濡らし、志穂の下半身はびしょ濡れの制服がずっしりと絡みつく。身体の奥から熱が抜け、じんと恥骨から背骨にかけてを途方もない解放感が伝わってゆく。

「あ……あ……」

どさ、どしゃ。

力の抜けた左右の手から、ずっと握り締めていた紙袋が地面に落ち、志穂自身が撒き散らしたオシッコの水たまりの中へと沈んでゆく。

ゆっくりと空の雲が垂れこめ、ぼつりぼつり雨雫が降り始める中。

志穂の足元にはなお、恥ずかしい水流が溢れ落ちる音が、ばちゃばちゃと響き続けていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 仙人見習いのお話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 09/23/2011 00:26:50

BODY:

穏やかに陽気の満ちる、深い深い山の奥。どうどうと流れ落ちる滝の傍、見上げるほどの岩の上に、その娘は腰を下ろしておりました。

短く肩上で揃えた髪には、緑蔦を編み、貝殻を削った止め具を挟んで飾り、纏う服は仕上げも見事に鮮やかな紅の飾り絹糸で綴られ、袖には銅の古銭が縫い止められています。

工夫を凝らした細工の数々は、大邑の御令嬢でも、まず揃える事の出来ぬ細工でありましょう。それもそのはず、娘が身に纏うのは人界のものではありません。この広き心華大陸の山深く、神秘と不思議に溢れた、仙界の道服なのでございました。

娘の名は燐玉（りんぎょく）。

不老不死を極め世のことわり——大道を悟らんとするため、この洞府にて修行を積んでいるのです。。

しかし、立派な道服とは正反対に、燐玉のその様子と言ったら落ち着きなく、もじもじ、くねくねと脚を擦り合わせ腰を揺するばかり。瞑想のため閉じられた目は震え、眉はよじられ、その表情は一時も定まらず、くるくると変わってゆくのです。

流れ落ちる滝のしぶきが、ぱしゃぱしゃと音を響かせる音に耐えかねたかのように、燐玉はついに眼を開き、唇を震わせて泣き声を上げます。

「お、お師匠様あ……っ」

「なんじゃ、情けない声を出しおって」

燐玉の見上げた宙空、ふよふよと漂う長椅子の上で、大きく溜息をついてみせるのは璃覚公主（りかくこうしゅ）。ここ、大慧山酒蓮洞（だいけいざんしゅれんどう）の主にして、燐玉のお師匠様にございます。

とは言っても、公主のお姿は燐玉のそれよりもお若いご様子。燐玉のものよりも立派な道服や、手にした煙管などを除けば、鬼ごっこや隠れんぼをして遊んでいるのが似合いそうな、幼いお姿でございます。しかしながら、大慧山酒蓮洞の冥璃覚さまと言えば、仙界にこの人ありと謡われた五行の名手でございました。

呆れ顔のお師匠様に、燐玉は肩を震わせ、唇を青くして再度訴えます。

「お師匠様…、も、もう、無理です……っ」

その身はぶるぶると震え、両の手は辛そうに、道服の上から脚の付け根へとあてがわれていました。

泣き言を言い出す弟子の姿に、公主さまは煙管に火を灯し、再度大きく肩を落とされます。

「ええい、情けない声を出すでない！ まだ一刻も過ぎておらぬではないか」

「で、でも……っ、も、もう、本当にっ……！！」

叱責を受けたところで、もはや燐玉にはどうすることもできません。ぶるぶると眉をよじり、小さな手を揉み合わせるように握り締めては、歯を食いしばって小刻みに震えるばかり。それどころかはしたなくも、坐した岩の上で、くねくねと艶めかしく腰をくねらせ始めてしまいます。

もう辛抱溜まらないと目に涙をため、燐玉はお師匠様に視線で訴えかけるのです。これを見て公主、いよいよ困ったと首を振り、煙管を咥えて白い煙を吐き出します。

「まったく……燐玉よ、もう何度も教えたであろう？ そのような瑣末な事で己を乱してどうするのじゃ」

「さ、さまつじゃありませんっ……だって、もう、ずっと、朝からっ……がまん、して……っ」

「ああもう、そのように無駄に力むからいかんのじゃ。ほれ、息を整えて姿勢を正せ！ 一巡（9日）はもたぬだろうと思っておったが、まさか半日で根を上げるとはの……情けない」

不出来な弟子に噛んで含めるように、璃覚公主は仰います。

さて、百年千年を生きる仙人ともあろうものが、わずか一巡ほどの行をこなせぬ道理がありましようか。璃覚公主の嘆きももつともありますが——それも仕方のない事でございましょう。なにしろこの燐玉、まだ仙人とは名ばかりの見習い道士なのであります。

世に名だたる崑崙山、蓬萊島といった大仙郷には、多くの洞府を束ねながらも若々しいお姿をされた大仙の方々もいらっしゃいますが、燐玉に限って言うのなら、見た目通りまだ十五にもならぬ、幼い娘なのです。公主にその素質を見出されて仙界へと招かれてまだ半年、学ぶべきことは多く、その道は遥かに遠く——まだまだ村娘気分の抜けぬ時期でありました。

だからこそ、公主はあえて厳しく、燐玉を窘められます。

「良いか燐玉。よく聞くのじゃ。何度か教えたと思うが、仙人にとってももっとも必要なことは、陰陽の気を絶え間なく巡らせ、己のうちにとどめることじゃ。……まったく嘆かわしいことじゃが、大道の乱れは年を経ることに陰しくなるばかり。妖怪や災害によって天地の気はたやすく乱れる。だからこそ、仙人というものは決して揺らがぬ己を保たねばならぬ」

仙人を志す者がまずはじめに覚えることは、己の呼吸を乱さぬようにすることです。

この呼吸というのは、ただの息の吸い吐きではありません。あらゆる物事の間、具合を計る基礎の基礎であります。これによって仙人は体内の気を巡らせ、調和とともに保つのであります。

いかなる時もそれを乱さぬこと。仙道の初歩にしてもっとも大切な教えでありました。

……さて、この陰陽の気と申しますのが、この心華における気とは、陰陽より出で、互いに混じり合い産まれ合い、木火土金水の五行となって広がります。五つの行は互いに克し互いを生み出す相関関係を持ち、仙人のなかでも五行を扱うものは、まずこの五行の相生と相克をを扱えるようにならねばなりません。

しかし燐玉、生まれの性質ゆえか、木行、火行の扱いは人並み以上であるのですが、それ以外はとんと苦手。それはならぬと公主、燐玉にもっとも苦手な水気の扱いのための修行をお命じになったのです。

かくして燐玉は、洞で一番水気の満ちているこの滝のそばで、水気を己のうちにとどめる行を行っているのですが——

「ほれ、もっと胎に力を入れんか」

「ひゃあああ!？」

水気と言いますれば、つまり人間の身体を巡る水でありまして、要するに燐玉、ひたすらにお小水を我慢させられているのでありました。

一人前の仙人ともなれば、体内の気、五行を己の中のみで循環させ、飲み食いなどせずとも生きてゆくことができます。俗に霞を食う、ともされますが——すなわち己の身体をひとつの世界とし、不要なものを口にすることなく、また余分なものを体外に排出することなく、身体の中を巡らせ続けることができるのです。

そのためには木火土金水、五行のつり合いが大事なのですが——その扱いには不慣れな燐玉、どうしても不足しがちな水気を補うため、清浄なる水気に満ちた滝の傍で、その水気を無理矢理取り込まされ——いえ、公主の厳しい指導のもと、修行に励んでいるのであります。

「ふああ……んうっ……あ、あ、だめえ……っ、も、漏れちゃ、う……っ」

しかし燐玉、確かに璃覚公主にその仙骨を見出されて、晴れて酒蓮洞の弟子となりはしましたが、ほんの半年も前まではただの村娘だったわけですし、仙道の暮らしなど分からないことだらけ。いくら言われても、その教えはまったくくんぶんかんぶんなのでございました。そも、普通の娘に、丸一日もお小水が我慢出来ようはずありません。

我慢出来ぬものを出来るようにせよ、とはまったく酷なことでもございました。

「お、師匠様、い、いじわる、しないでくださいっ……」

「……たわけ!! なにが意地悪か、修行じゃ、修行!!」

璃覚公主、不出来な弟子の有様に、すっかりご機嫌斜めのご様子。

けれども、いかな優れた仙骨を持つ者が、戒律に従い肉魚を断って精進の日々を過ごそうとも、そも、人間とは陰陽清濁を共に備えてこの世に生まれ落ちた身、半年やそこいらで俗界の習慣や輪廻の中で染み付いた陰業が抜け落ちることもまたないのであります。

たとえ燐玉が心曇りのない清らかなる乙女とて、その身に満ちた水気は体内を巡るうちやがて澱み、汚れてゆくのです。そうして汚れた水気はまた、不要なモノとして身体の外へと排出せねばなりません。

そして今もなお、満ち満ちた水気は身体の中にとどめておくどころか、娘の下腹の恥ずかしい部分へと集まり、出口を目指してばんばんに張りつめていくばかりなのでした。いくらお師匠様のいうことでも、姿勢を正そうと呼吸を整えようと、その勢いは強まるばかり。

けなげにも言われたことを実行しようとしても、なお刻一刻と下腹部に膨れ上がる濁った水気に、燐玉はどうすることもできずにいたのでした。見事に縫いとられた太極図の道服の前をぎゅうぎゅうと引き絞り、はしたなくも左右の手を足の付け根に押し込んで、みっともなく腰を左右に振るばかりでございます。

「や、やっぱりだ、だめ……!! で、出ちゃいますっ……」

まだまだ見習い気分の抜けない、年頃の娘。燐玉はこみ上げる尿意に身悶えしながら、顔を赤くしてうつむくばかりでありました。いくら言っても聞く様子のない弟子の姿に、璃覚公主もすっかり呆れ顔となるばかり。

「まったく……いつになったらお主のお漏らし癖は治るのかの。いい加減にしゃっきりと辛抱せい」

「そ、そんな……っ、む、無理なものは、無理ですよ……も、もうこれ以上、我慢、なんてっ、」

そんな公主の厳しい叱責にも、燐玉は落ち着きなく首を振り、ぎゅぎゅっとはしたなくも脚の間に手をつっ込んで、思い切り道服

を引っ張るように押さえこみます。

不機嫌な時の璃覚師匠に口答えをするなど、あとで恐ろしいお仕置きが待っているのに違いないのですが——どうも燐玉、余程切羽詰まっているのか、そんな事を気にしている余裕もない様子でありました。

「ああもう！！ 耐えろと言っておるのではない！！ 気の巡りを捕え、循環を絶やすな。そのようにはしたなく身をよじることが未熟な証と言っておるのじゃ！！」

きつい口調でそう言うと、璃覚公主はぺしんと燐玉の腰を叩いて見せます。

しかし、いまさに、羞恥と我慢の綱引きの真っ最中で叩かれた燐玉はたまりません。その弾みでじゅじゅじゅつ、と脚の付け根にはしたくない飛沫を滲ませてしまうのでした。

「ふああああ！？ や、だめ、お師匠様、っ、さわら、ないでっ……！！ でっ、出ちゃうっ……！！」

「はあ……まったく、情けない。そもそも、水気をそんなところに溜め込んでどうする。水は流れ巡るものじゃ。一所に溜まらせておれば、それだけ澱み、穢れてしまうのだぞ！！」

さて、璃覚公主のお説教が始まりましたが、顔を真っ赤にして唇を噛み、身体を硬く強張らせて震えている燐玉に、そのお小言が届いていますかどうか。まさに今、燐玉の乙女はその澱んだ水気をたっぷりと蓄え、懸命の我慢も空しくいまにも弾けんばかりに膨らんでいるのです。

「あっあ、あっ……」

燐玉が高く声を跳ねさせると、とたんにはしたなく漏れだした濁水が、ぶじゅぶじゅうじゅうう！！と激しくはしたくない音を響かせては、道服の色を見る間に変えてゆきます。それでも燐玉がそこに溜めこんだ澱み濁った水気の量に比べれば、ほんのわずか、数滴がこぼれた程度に過ぎません。

ほかほかと湯気を立てる燐玉の粗相を見下ろし、璃覚公主ははあ、と大げさに溜息をついてみせました。

「まったく…進歩のないやつじゃの。お主のように見込みのない弟子は初めてじゃ。……もう良い、罰としてもう半日ばかりそうしておれ」

「そ、そんなっ、お師匠様っ……！！」

涙声で追いつがる燐玉ですが、師匠の命令には逆らえるはずありません。

「や、やだ……だめ、ま、また漏れちゃいますっ……！！」

なおも激しく出口を求め暴れる、体内の濁水気を持て余しては、燐玉はただただ、濡れてちゃべちゃと汚れたままの道服を涙を浮かべながら絞り、途方にくれるばかりなのでした。

燐玉が仙人としてこの心華にその歩みを刻むには、まだまだ長い時間が必要となりそうです。

——さて。燐玉を庇うわけではありませんが、ひとつ種明かしをいたしますと、そもそも、気の巡りというものをうまく感じ取れない見習いの時分には、己のうちに気を留めておくことは至難の技でして、誰もが苦勞して通る道なのでございます。

しかしそこは偏屈かつ意地悪で名を馳せた璃覚公主、さも出来の悪いのは燐玉だけだというような口ぶりをなさるのでした。

「やれやれ……困ったものじゃな」

そう仰る公主のお顔は、自然と意地悪な笑みを浮かべていました。

いかな大仙であろうとも、なかなか捨て去ることは出来ぬ二つの業というものがございます。

ひとつは殺業——己の力を極め、他者と争い競いたいという心。

そしてもう一つは愛業——己の弟子を、愛しいと思う心であります。

これは仙人にとって捨て去ることがとても難しいものであると同時に、この二つを失ってしまえば、それはもはや意志を持ち人の形をとることの意味すら失うものでもあるのです。璃覚公主のそれを愛業と呼ぶのがふさわしいかどうかは、少々議論の余地があるようにも思えますが——野暮なことは言わずにおくといたしましょう。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 小公女サラ【メイド見習い編】

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 09/23/2011 00:30:15

BODY:

ある趣味@ J B B S の往年の名スレよりネタを拝借。

<hr size="1" />

「ほら、なにをぐずぐずしてるんだい！！ 急ぎな！！」

「は、はいっ」

イルマに急かされ、サラは継ぎ接ぎだらけの古びた使用人服に着替えさせられ、厨房へと連れてこられました。

そう、今日からサラは使用人としてここで働かねばならないのです。

厨房の流しには今朝、食堂で使われた食器が山のように積み上げられています。それを指差し、イルマは言いました。

「さあ、あんたはこの洗い物を全部片付けるんだよ。お昼までにすっかり綺麗にしておかないとならないんだからね！」

「こ、これを全部ですか……？」

「当たり前だよ！ さあ、はやとりかかるんだ。一枚でも割ったら承知しないよ！ ほら、返事はどうしたんだい！」

「は、はい、すぐにやります」

「あたしはほかに用事があるからね。後で様子を見に来るから、サボるんじゃないよ！」

慌てて姿勢を正して答えるサラに、ふんと鼻を鳴らしたイルマは、自分だけすすたとどこかに行ってしまいました。アンのほかにもう一人、下働きのメイドが増えたのですから、忙しくなるなんてことはないはずなのですが。

（はあ……）

見上げるようなお皿の山を前に途方に暮れてしまったサラでした。クレマス公爵家の令嬢として、どこに出しても恥ずかしくないお嬢様として礼儀を躰けられてきたサラですが、使用人の仕事なんてした事がありません。

お掃除や洗濯も、メイド頭のエリザの働いているのを見てやり方こそ知ってはいましたが、こんなにもたくさんの量をいったいどうやって片付ければいいのか。

「……いいえサラ、しっかりなさい。こんなことで弱音を吐いていてどうするの！」

そう、もうサラはプリンセスではないのです。学院で勉強するためには、使用人として暮らしていくしかないのです。サラは心を奮い立たせて仕事にとりかかることにします。

けれど。

「ひゃ！？ つ、冷たいっ……」

水を張った桶に指を付けた瞬間、その冷たさにサラは飛び上がってしまいそうになりました。まもなく冬がやってくる季節です。水道の水は恐ろしく冷たくて、まるで指先が切れてしまいそうでした。サラは引っ込めた手を抱え、はあ、と指先に息を吹きかけます。

見上げるような数の食器、冷たい冷たい水。考えるだけでも嫌になってしまいそうです。

でも、止めるわけにはいかないのです。

「頑張るのよ、サラ」

自分に言い聞かせるようにして、サラはぎゅっと口を閉じてお皿を洗い始めました。

山と積み上げられたお皿から一枚を取っては、スポンジを使ってごしごしとこびり付いた汚れを落としていきます。

「よいしょ、よいしょ……」

一生懸命に力を入れるのですが、冷たい水だけでは石鹸の泡立ちも悪く、お皿の油汚れはなかなか綺麗になりません。なにしろ学院の寄宿舍にいる生徒たち全員ぶんの食器です。サラがいくら頑張ったところでそうそう終わるわけはありませんでした。

やがて指先がかじかみ、痛みさえ覚えるようになってきます。

白く冷たくなった指をぎゅっと握り締め、なんども息を吐きかけながら、サラは一生懸命お皿洗いを続けました。ぱしゃぱしゃと流れる水音が、冷たく冷え切った指先からじんと身体の芯まで響いてくるようです。

どれくらい経ったでしょうか。洗っても洗っても減らないお皿の山の前で、やがてサラの様子が少しばかりおかしくなってきます。

「……………」

そわそわと、どこか落ち着きなくサラの身体が揺れ、爪先が床を擦ります。

なにか考え事をしているように洗い物の手も止まることが多くなり、そのたびにサラは小さく息を飲むのでした。

「はあっ……」

溜め息のように熱い吐息を吐き出して、サラは古びたの使用人服の背中をよじらせます。

何度も何度も洗って使い古されたごわごわしたスカートの下で、細い太腿がきゅっとすり合わされ、膝が落ち着きなくぶつかり合います。

決して上等とは言えない下着を、きゅっと引っ張り上げて。サラは小さくこぼれそうになった声を、唇の奥に飲み込みました。

（や、やだ……）

冬の寒さと、冷たい水に触れていたからでしょうか。

サラの下腹部は、いつのまにか強くトイレを訴えていました。

（そういえば、朝からお手洗いにもいっていないわ……）

まだ夜が明ける前からイルマに叩き起こされるなり、あれこれと雑用を押し付けられていたものですから、サラはすっかりそのことも忘れてしまっていました。

昨日の夜からのぶんのおしっこが、おなかの奥に溜まったままになっているのです。むしろこれまで気にならなかったのがおかしいくらいでした。

「んっ……」

いちど意識してしまうと、恥ずかしいところのむずむずはあっという間に強まり、サラは溜まらずスカートの上からおなかをさすってしまいます。

ずっと我慢し続けたおしっこは、まるでおなかのなかでたぷんと音を立てて揺れていそうでした。

そわそわと腰を揺すりながら、サラは厨房の中を見回します。

（どうしよう……）

流しにはまだまだたくさんのお皿が残されています。急いで片付けなければ、お昼になっても終わりそうにありません。けれど。

サラの手のひらが、ぎゅっと使用人服のエプロンを握り締めます。

じんと響く尿意は、いつしか耐え難いものになっていました。

(……お手洗いくらい、行ったっていいはずよね……)

確かにイルマからはここを離れないように言いつけられていましたが、まさかトイレにまで行っていけないということはないはずですよ。

別にいけないことをしているわけではないはずなのですが、イルマに見つかったらまたうるさく怒鳴られるかもしれない、と思うとサラの足はなんとなくすくんでしまいます。

けれど、朝からの水仕事で冷えてしまった身体は、廊下を歩いている間にもどンドン強く尿意を訴えてきます。

「ふぁ……っ」

きゅうんっ、と下腹部で切なく疼く尿意に、思わずはしたない声を上げてしまい、サラは顔を赤くしました。やはり、このまま我慢しているのは難しそうです。

自分の仕事を途中で放り出してしまうことに罪悪感はありませんでしたが、サラはまず先にトイレに行くことにしました。

けれど、そうしてサラが厨房の出口に向かったところで、なんと間の悪い事に、イルマが戻ってきてしまったのです。

「なんだいサラ！！ なにをしてるんだい！！」

大きく腕組みをして、イルマはじろりとサラを睨みます。

「仕事をほっぽりだしてどこに行こうって言うんだい？ まさか、さっそくサボろうっていうんじゃないだろうね」

「あっ、あの、違うわ、イルマ！！」

慌てて弁解をしようとするサラですが、イルマはまるで聞く耳を持ちません。

「イルマじゃない、さんをつけな。……なんだい、全然終わってないじゃないか！！ 本当はどうしようもない子だね、これっくらいも出来ないのかい！！」

「違うわ！ そんなことないの、わたし……お手洗いにいきたくて……」

もじもじと揺すってしまう腰を押さえ込めずに、サラの頬がかアツと熱くなります。こんな風に、おトイレのことを誰かに説明するなんて、いったいつ以来のことでしょう。お屋敷では立派な淑女としての教育をされていたサラですから、人前で『お手洗いに』なんてことは滅多に口にすることはありませんでした。

「ああん？ 何言ってるんだい、よくそんな事が言えるね！！ あんたはもう公女様じゃないんだよ！！ 生意気な事をいうのはきちんと仕事終わらせてからにしろ！！」

「そんな！？ だ、だって……」

まったく聞く耳を持たないイルマに、サラは耳を疑ってしまいます。

「口答えるんじゃないよ！！ おおかた水仕事が嫌になって音をあげそうになったんだろう！？ まったく、これだからお嬢様はだらしないね！！ これっくらいのことで投げ出しちゃうなんてさ！！ あたしらはこれを毎日やってるんだよ！！」

ふんぞり返って言うイルマですが、実際のところは、皿洗いも洗濯も、ほとんどは使用人見習いのアンの仕事です。イルマはアンに大変な仕事を押し付けて、自分はずっと楽で目立つ仕事ばかりをしているのですが——そんなことは勿論サラは知りません。

「ほら、ぐずぐずしてるんじゃない！！ まだ仕事はたんまりあるんだよ！！」

「違うわ！！ 私、そんなことしません！！ 本当に、お手洗いに——」

「ああもう、うるっさいね！！ 生意気言うんじゃないよ！！」

言いかけたサラを遮って、イルマは大きな怒鳴り声を上げました。あまりの剣幕にサラは思わず目を閉じ、身体を竦ませてしまいます。

「ああそうかい、よっくわかったよサラ。あんたがどうしようもない嘘つきだってことがね！！ 正直に認めれば許してやるつもりだったけ

ど、あんたみたいな嘘つきにはそんな温情はつけあがらせるだけだね！！ ああ、なんて浅ましい娘だろう。のろまで愚図な上にズルばかり考えてる嘘つきだなんてね！！ そっとするよ！！」

「そんな、酷いわ……わたし、そんな嘘なんかつかないわ！！」

嘘つき呼ばわりされたことが悲しくて、サラは必死になってイルマに訴えます。けれど頑固で疑り深いイルマは、そんなものに耳を貸すわけありませんでした。

「まだ言うのかいこの嘘つき娘め！！ さあ、はやく皿洗いを終わらせな！！ 他にも山ほど仕事はあるんだよ！！ 今日には罰として夕飯抜きだ！！」

「そ、そんな……」

あまりにもひどい仕打ちに、とうとうサラも言葉を失ってしまいます。

けれど、我に帰ったサラが何を言ってもイルマは聞こうとはしませんでした。サラは仕方なく、流しに戻って皿洗いを再開します。

けれど、トイレに行きたいのを我慢しながらでは思うようにはかどるはずありません。

そんなサラの後ろに陣取って、イルマは次々に怒鳴り声をぶつけてきます。いえ、それどころかますますサラのことを嘘つき呼ばわりして、罰だと言っては自分の分の仕事までを押し付けるのです。

「いいかい、それが終わったら部屋全部のシーツを取り換えて洗うんだよ。破いたりしたら承知しないからね！！ それから水くみ、廊下の掃除、それが終わったら教室を片づけるんだ！！ ほら、何をもたもたしてるんだいサラ！！ 急がないと昼飯も抜きだよ！！」

「は、はいっ……」

もはや何を言ってもイルマが聞く耳を持たない事を悟り、サラは少しでも早く仕事を終わらせることを考えるしかありませんでした。

(うう……お、お手洗いに……っ)

サラは必死にトイレを我慢し続けていました。ぱんぱんに張り詰めた下腹部はずっしりと重く、下着の奥ではおしっこが今にも噴き出してしまいそうです。

流しの前で落ち着きなく腰を揺らし、何度も足を組み替えて、粗末な靴の爪先を擦りつけます。そんな不安定な姿勢で洗い物がはかどるはずもなく、サラは手にしていたお皿を滑らせ、床に落としてしまいました。

がちゃんと白いお皿が割れ、イルマはそれを見てますます眉を吊り上げます。

「サラ！！ なにをやってたんだい！！ 本当にしょうがないねえこの娘は！！」

「す、すみませんっ……」

イルマに怒鳴られ、サラの心は惨めな気持ちでいっぱいでした。

ほんの数日前まで、公女として寄宿舎の一番立派な部屋で、何不自由なく過ごしていた女の子が、いまや使用人見習いとして下働きの毎日です。しかも、きちんと仕事をすることもできず、お手洗いにも行かせてもらえません。

「んあ……っ」

床に落ちたお皿の破片を拾い上げようと、しゃがみ込んだサラの脚の付け根で、じんと激しい尿意が湧き起こります。

それもそのはず、さっきからトイレに行きそびれているのですから、サラのおなかには朝からずっと我慢し続けているおしっこが並々と注がれ、溢れそうになっているのです。もうじつとしているのも辛いほどで、ボロボロの使用人服のスカートの下では細い脚がくねらせ、すり合わせて、一時も静かにしていることはありませんでした。

こんな状況では、とてもではありませんがてきぱきと仕事を片づけるなんてことは無理でしょう。

洗い物の水は冷たく、手を触れただけで背中がすくみ上がってしまいそうです。そのたびにびくん、びくんと強烈な尿意の波が押し寄せてきて、そのたびに手を止め、身体を固くして込み上げてくる衝動に耐えます。

（あああつ……だめえ……）

ぞわあ、と足の付け根に押し寄せるおしっこを、前かがみになって堪えるサラ。それを見るや否や、すかさずイルマの叱責が飛びます。この意地悪な寮母は、サラに自分の仕事を残らず押し付けた上で、サラがなにか大きな失敗をやらさないと、傍でじっと見張っているのです。

それは決してやさしさからなどではなく、サラをいじめるもつといい口実を探してのことでした。

「ああつ……」

そうしているうちにも、サラはとうとう我慢しきれなくなって、ぎゅっとエプロンドレスの上から脚の付け根を押さえ込んでしまいます。

女の子としては決してしてはいけない、はしたない姿。けれどもうそうやってでもいなければ、サラはおしっこが我慢できませんでした。

「あ、あの、……お願い、イルマさんっ……わたし…、も、もう……お手洗いにっ……」

もはや我慢の限界です。いまにもばちんと弾けてしまいそうに、ぱんぱんに膨らんだおなかを抱え、サラは泣きそうになりながらイルマに訴えます。

けれど、イルマは頑として首を縦に振りません。それどころか、ますます声を荒げてサラを怒鳴りつけるのです。

「甘えたことを言うんじゃないよサラ！！ 一人前に仕事もできないくせに、サボることばかり覚えちゃって！！ いいかい、全部仕事を終わらせるまで、そんなことはしてる暇なんかないんだよ！！」

そう。いまや使用人に落ちぶれた、公女様をいじめるのが、この捻くれて意地悪なイルマの何よりの楽しみなのでした。

サラが惨めに苦しんでいるのを見て、イルマは内心にやにやと笑っているのです。

「サラ。お前がぐずぐずしてるから、どんどん用事が溜まってるんだよ。それなのにその程度の仕事にいつまでかかっているんだい！！ いいかい、全部終わらせるまでトイレにや行かせないからね！！」

「そ、そんなっ……」

とうとう、イルマにトイレ禁止をいつかってしまい、サラは悲痛な悲鳴を上げてしまいます。腰の揺すり方はますます大きくなり、もじもじとその場で足踏みすら始まってしまいました。

けれど、哀れな顔をして俯くサラは、のろのろと洗いかけのお皿を拾い上げ、洗い物を再開します。

「それが終わったら教室の掃除だよ！！ サボるんじゃないよ！！」

その足元には、いつしかじわじわと漏れ出した熱い雫が、何本も伝い落ちているのです。

「っ……」

サラが涙をこらえるたび、まるでその代わりというように、じゅじゅっ、じゅう、とスカートの奥ではしたない音が響き、下着を大きな染みが広がっていきます。

いつ終わると思えない、食器の片付けを続けながら、サラの足元には、いつしかぱしゃぱしゃと、みっともない音を響かせるオシッコが大きな水溜りを作り、寒い厨房にほかほかと湯気を立ち上げているのです。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 金髪少女と田舎のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 10/22/2011 21:34:26

BODY:

特区に投稿したもののマイナーチェンジ版。

<hr size="1" />

青い空の下に、どこまでもアスファルトの道が続いていた。

『んんっ……』

太陽の光を浴びて揺れる、緑深い森の匂いを胸一杯に吸い込んで、エレナはぐうっと胸を反らし、細い腕を伸ばす。

自転車に乗って走ってゆく少年たち——恐らく自分と同じくらいの年齢だろう——日焼けした肌に短く刈り込んだ坊主頭の彼等が、ちらちらと視線を送ってきている。農作業に出てゆらしき老人や女性も、あぜ道を歩く異国の少女を、興味深げに眺めていた。

エレナは少年たちへ顔を向け、小さくひらひらと手を振ってみた。

白いシャツに黒の学生服、まるで示し合わせたかのような同じヘアスタイルの少年たちが、日焼けした顔を更に赤くして視線を反らした。

『ふふっ』

まるで逃げるように走りだした少年たちの背中を見、口元には小さく笑みが浮かぶ。

ともすれば不快にも感じかねない対応に、エレナはしかし気にすることはなかった。

父に連れられて、知らない場所へ赴く事はいつものことだ。見知らぬ相手から注目を浴びたり、余所余所しい対応を取られる経験も一度や二度ではない。

まして今回の旅の目的地は大きく海を隔てた異国なのだ。こんな異邦の地に自分のような年恰好の娘は目立つのだろう、と割り切ることにしていた。

『日本って、本当に面白いわ』

くすくすと笑う口元から、小悪魔を思わせる八重歯がちらりとほくろ。額で切り揃えられた金髪と、かすかに残るそばかすも、少女のあどけない魅力をを引き立てていた。

ノースリーブの白いワンピースから覗く白い肩はまぶしく、スカートの下から伸びたすらりとした足は、細くともしなやかな、乙女の魅力を備えていた。

これだけの素養を備えながら、エレナは自分の整った顔立ちが思春期の少年たちを迷わせているのだとは思わずにいた。

父の仕事のためあちこちを転々としての暮らしが長く同年代の友人をあまり持たなかったせい、あるいは早くに母を失ったせい。見目麗しい娘が、自覚なしに振舞う危なっかしい行いは、グレン教授をやきもきとさせるのに十分であった。

そんな事はつゆ知らず、エレナは木陰のしたでうんっ、と大きく背を伸ばす。健康的に大きく開いたワンピースの胸元から、大胆に肌が覗いているのにもお構いなしだ。

『……でも、この暑さだけは何かならないのかしらって思うわね』

湿気の多いこの国の夏は、エレナにはなかなか馴染まないものだ。

夏の陽射しを麦わら帽子の下から見上げ、駅の自動販売機で買った瓶詰めのジュースに口を付ける。まだ汗をかいているガラス瓶は、早々に空っぽになりかけていた。

陽を浴びて焼けたアスファルトから立ち昇る陽炎にうんざりとしつつも、エレナはとうとう空になった瓶を片手にぶら下げながら、田畑の傍の農業道路を歩いていく。

それでも、森に近い木陰や川沿いでは、時折涼やかな風が吹き、汗ばんだ背中を心地よく撫でてゆく。

エレナが父の仕事で日本を訪れるのはこれで3回目だ。1回目は両親の新婚旅行で、エレナはまだ母のおなかの中にいた。その時の事はもちろん覚えていないが、2回目である8年前の記憶はおぼろげながら残っている。

母はとてもこの国を気に入っていたという。それはエレナも同意見で、もし自分に子供ができた時も一度はこの国に連れてきたいと思う。

もっとも自分が母と同じくらいの年になる頃には、世界は二十一世紀を迎えているはずで、この国もいつまでもこのままではない

かもしれない。ノストラダムスの予言だって心配だ。

しかし、それもまだずっと先の事。エレナは先日ジュニアスクールに上がったばかりである。

『本当にお父様ったら心配症なんだから。もう迷子になったりなんかしないわよ』

来日4日目の朝、自信たっぷりに、一人で出かけたいと言い出した愛娘に、しかしグレン教授はなかなか首を縦に振らなかった。自分も大学までは同行するとはいえ、学会中は会場を離れるわけにはいかない。言葉の解らない異国で、愛娘を一人きりにしておくことに不安を覚えるのは当然と言えた。

今回は研究室の予定も噛み合わなかったため同行者もおらず、エレナはすっかり退屈していた。学会の会場となる大学は昨日一昨日ですっかり探検しつくしてしまい、敷地の外に広がる日本の町を歩いてみたくてうずうずしていたのだ。

最終的に、エレナの我がままを受け入れざるを得なかった教授だが、それでも愛娘にきちんと連絡を入れること、午後までには大学に戻る事を条件だと口を酸っぱくして言い聞かせた。その時の父のうろたえる姿を思い出してエレナは口元に笑みを浮かべる。

『あんなのじゃ、私が結婚するときはどんなに慌てるのか分かったものじゃないわ』

先年、妻に先立たれて以来、グレン教授は以前にも増して娘を溺愛するようになっていた。難しい年頃であるゆえに、片親で色々と気負うところもあるのだろうが——いまだに子供扱いされてばかりのエレナには少し不満でもあった。

駅前の繁華街を離れると、街並みは急にのどかなものになってゆく。日本を長らく活気づかせた高度経済成長も、この都心を離れた町までは十分な恩恵をもたらさなかったらしい。学問を志す環境としては素晴らしいものかもしれないが、学生たちにはさぞ刺激の足りない湿地だろう。

エレナは素足に履いたサンダルを鳴らしながら、涼やかな水音を奏でる小さな河をびよんと飛び越える。細い橋を渡れば、その先には民家もまばらな田園風景が広がっていた。遠く山の麓に広がる森の近くには、父に連れられて行った事のある博物館で見たような、草を編んで作った屋根の家がぼつりぼつりと並んでいた。

『……あんな屋根で、雨漏りしないのかしら？』

木と紙でできた日本家屋は、エレナには写真で見る以上の近しさはない馴染みの薄いものではあったが——生まれてから父の影響で異国文化に触れる機会に恵まれていた彼女にとっては、むしろ興味の方が先に立つ。

近くに行ってみてみよう、サンダルの脚をそちらに向ける。

アスファルトの地面はやがて途切れ、途中から砂利道へと変わっていた。少し歩き辛くなった足元を楽しみながら、少女は美しい金髪を揺らして小さな鼻歌を口ずさみ始めた。

右には私有地らしい山林、左には遠く海へと続く澄んだせせらぎ。遠くにセミの鳴き声を聞きながら、白い背中は川沿いの道を選んで進んでゆく。

(……………)

川沿いを歩き始めてしばらく過ぎた頃だろうか、エレナの様子はわずかな変化を見せ始めていた。

あるいはそれは、傍を流れる水のせせらぎを耳にしていたことが原因であったかも知れない。

だがそれよりも明確な原因は、少女の手のひらの中にあった。

サンダルの底が立てる音がやや激しくなり、のんびりと周囲を眺めていた視線が幾分、落ち着きを失くし始める。

注意していなければまず見逃してしまうだろう些細な変化——けれどそれは着実に、少女の動作の中に不自然なものとして混じり始めていた。

(ん…………)

麦わら帽子の下で、エレナの表情にはわずかに硬いものが混じる。

手のひらで暖まったガラスの瓶——特に捨てる事ができないまま、ずっと持ちっぱなしだったその重さが、少女の細い手のひらには少しずつ負担となっていた。

陽に透けるようなワンピースのスカートの下で、細い腰がもどかしげに震える。

サンダル足元が大きく砂利の上を擦り、膝小僧がお互いを擦り合わせるようにこつこつとぶつかり合う。もともと華奢な体格の少女ではあったが、ダンスホールならばともかくもこんな屋外では、不自然なほどの内股だった。

丸く大きな青い瞳の瞼は、長い睫毛を伏し目がちに瞬きを繰り返し、忙しくあたりを巡る。整った顔立ちは数度にわたって緊張に強張り、きつく閉じられた口元とは対照的に、少女の息は荒くなり始めていた。

見えない何かに追いかけられるように、エレナの歩みは少しずつ速くなり始めてゆく。

『……………んあ……………ん』

不意に。前触れもなくエレナは道の真ん中に立ち止まった。山裾の素晴らしい田園風景に目を奪われた——というわけではないのは、傍目にも明らかだった。

眼が伏せられ、小さな顎が緊張に強張る。

白い喉に、つつと細い汗の雫が浮いていた。切りそろえられた前髪も、汗で湿って額に張り付く。

『ふ……………あ……………』

細い手のひらが彷徨うようにワンピースのスカートの前を行き来し、太腿の前で何もない空間を握り締める。砂利道の中央に立ちつくした少女の足元は、小刻みにステップを刻み、陽に透けそうな白いスカートの裾から見えるふくらはぎはまるで寒さを訴えるかのように擦り合わされる。

びく、と俯いたエレナの首筋が震えた。

少女の細い指先が、たまらずにスカートの端をきゅつ……………と掴む。

川面は変わらず水面に白い飛沫を立て、夏の日差しの中に涼をもたらしている。少女の視線はその川沿いを巡り、数十メートル先の石造りの小さな橋をふらふらとさまよって、道の隣にある林の奥へと吸いこまれていった。

舗装も不十分な砂利道の右手には、鬱蒼と茂る木々が並んでいた。特段、立ち入りを遮るような柵などは設けられておらず、あまり手入れの為されていないそこは、数歩踏み入れればすぐに姿も見えなくなってしまう程の背の高い藪に覆われ、奥の林へと道なき道が続いている。

あどけない顔に困惑をありありと浮かべ、エレナはしばし、森の奥へと視線を巡らせるが——ほどなくして、少女は思い直したようにそこからの視線を切った。

ぶるぶるとかぶりを振り、細い顎をきゅつと噛み締める。

『……………、ん……………う』

しかし、少女の表情に浮かぶ困惑は消えることなく、むしろ追い詰められてしまったかのような焦躁感が色濃く増す。

それを証明するかのように、あどけない桜色の唇が、小さく母国語で『どうしよう』とか細い呟きをこぼした。

再び前を向き、歩き出したエレナの歩調は、さっきよりも幾分早足になっていた。同時に少女の視線はさらに落ち着きを失くし、大きな青い瞳は道の左右をきよろきよろと彷徨うばかり。

少女の興味が遠く山の麓の茅葺き屋根を離れ、先刻までとは別のもの、違う場所を求めはじめていることは明白だった。

(……………え、ええと……………)

手の中に残る、空のジュースの瓶を持て余すように、エレナはそれをぎゅっと握りしめる。

故郷を遠く離れた異国の地、見知らぬ田舎道の中で。

エレナは不意に訪れた下腹部の生理現象に、次第に焦りを覚え始めていた。

(……お、お手洗い……どこかしら)

隠しようもない尿意に整った顔立ちに不安を覗かせながら、エレナはきよろきよとあたりを見回した。

が——近くに、求めるものは見当たらない。

それもそのはず、不慣れな異国の地、しかも街中を離れた郊外の田舎道だ。多くは水田や林であり、建物と言っても小さな小屋か、ぼつぼつと民家があるばかり。

百貨店やホテル——とまではいかなくとも、なにか店舗でもあるのならそこでトイレを借りる事も出来るだろうが、生憎とそんなものあたりには見当たらない。

『んんっ……』

ない、と分かれば解るほど、下腹部の欲求はますます明瞭に、下品なものへと変わってゆく。思わずその場でくねくねと腰を揺すってしまい、エレナの頬がほんのりと紅くなる。近くに誰もいないとはいえ、淑女としてあるまじき行いだった。

急な尿意の原因は、ついさっき空にしたばかりのジュース……だけではない。確かに少し汗ばむ気候の中、たっぷりと補給した水分は、当然ながら健康的な少女の新陳代謝によって全身を巡り、いまや少女の下腹部の一点に注ぎ込まれるばかりとなっていた。

だが、ほんの数十分前に口にした水分がこんなにも短時間でトイレの欲求を訴える事は考えにくい。出掛ける前にはきちんとトイレは済ませてきたし、年齢の割に旅慣れたエレナは体調の不調とも無縁である。出掛ける際にはいつもトイレの事は頭の隅に入れていたし、いつもならまだまだ全然平気のはずだった。それなのに何故——少女の頭は予想外の事態に混乱する。

『やっぱり、このジュースがいけないのかしら……』

空にしたジュースの瓶を恨めしげに見つめるエレナ。だが、エレナが気にすべきはむしろその前、朝食の時に代わりしたコーヒーだった。父の真似をしての濃い目のドリップは、ミルクと砂糖をたっぷり入れたとしてもエレナには随分と背伸びをしたものだった。カフェインに耐性のない少女の身体は、てきめんにその利尿作用を露わにしていたのである。

こぼりこぼりと脚の付け根に押し寄せる恥ずかしい衝動に、エレナはきつく唇をつぐみ、スカートの下で小さく太腿を擦り合わせてしまう。腰回りのくつきり出るワンピースのせいで、少女の足元がおぼつかない事は遠目にもはっきりと解るほどだ。

エレナにとって不幸だったのは、コーヒーの効き目がちょうど、駅を離れて1時間近い距離を歩いた時にやってきた事だった。せめてもう少し早いか、遅いかであれば、ここまで困る事はなかったに違いない。

だがここは、駅からも離れた田舎の一本道。近くにトイレなどありはしない。

『んう……っ』

ほっそりとした下腹部が熱く恥ずかしい液体に満たされ、重く張りつめているのを感じ、エレナはそっと手のひらでそこを撫でさする。

硬い手ごたえは、もうずいぶん前から乙女のダムが満水近くまで貯水量を増していた事を知らせていた。

(……ち、近くに、お手洗って……ない、のかしら……)

いくら歩いても一向に変わる様子のない砂利道に、エレナはようやくその事実を、疑問ではなく推測として思い浮かべる。

少女は脚を止め、これまで歩いてきた道を振り返った。

途中の寄り道はあったとはいえ、かれこれ 1 時間近くは歩いてきた。真っ直ぐ引き返したところで、駅までかなりの距離がある事は間違いない。父のいる大学はちょうどここから駅を挟んで反対側で、この際考えに入れることもできなかった。

そして、ここまで来る間の道のりに、ほとんど店と呼べるような店もなかったのである。

トイレに行きたいのに、近くにトイレがない。

これまでに経験した事のない境遇に、エレナは戸惑いを隠せない。いくらエレナが旅に慣れているとは言っても、これまで父に連れられて訪れた場所はほとんどが大都市の圏内だった。そう言う意味で彼女は全くのお嬢様、箱入り娘だったわけであり、グレン教授の不安は全く正しかったのだ。

エレナの知る限り、ここから一番近いトイレは駅の構内にあった公衆トイレだ。戻るなら今すぐに、急いで戻らなければならなかったし、その上で間に合うかどうかは——正直に言って少々、怪しい。

カフェインの効果はいよいよ強まり、避ける事の出来ない生理現象が強烈な排泄欲求となって少女に牙を剥く。下腹部に押し寄せる熱い衝動の波に熱い吐息をこぼし、少女はどうすることもできないまま身悶えを繰り返す。

このまま進むか、引き返すか。

誇張ではなく、今この時その選択は、エレナにとって人生の岐路であった。

(……ど、どうしよう……っ)

さりげなさを装ってもじもじとワンピースの下で太腿を擦り合わせ、エレナは困惑の中で、再度絶るように辺りに視線を巡らせる。だが、言葉も文化も違う遠い異邦の土地で、少女一人にできる事などたかが知れている。

いくら海外に慣れていると言っても、それは空港のあるような都市圏での話だ。まだ自然の多く残る郊外の住宅地では、エレナの知っているような案内板も、チェーン店の建物も見当たらない。こんな郊外での状況の勝手は解らないも同然だった。

もしエレナがもう少し歳を重ねているか、この国に馴染んでいれば、もっと単純に近くの民家でトイレを借りれば良い事に思い立ったかもしれない。だが、まだ幼い少女にとって、初めから多数が利用する事を前提にしていない個人の家のトイレは、最初から勘定に入っていなかったのだ。……そして、仮にそれを思いついたとしても、トイレのためだけに見ず知らずの他人の家を訪ねるというのは、多感な思春期の少女にとっては相当ハードルが高い事に違いはない。

今のエレナは荒野に放り出されたのと同じだった。前に進む事も戻る事もできず、かといって切羽詰まった下腹部はその場に立ちつくす事も許してくれなかった。

押しては返し、引いては戻す尿意は、まるで少女の下半身をなぶるように、一息に押し寄せてくる事はせず、間断的に波を付けながら、しかし確実にその勢いを増している。

その辛さに耐えかね、エレナは足踏みだけでは足りなくなって、ぐるぐるとその場を歩き回り始めてしまう。そんな事をしている暇があるなら進むか戻るかすれば良いはずなのだが、カフェインがもたらす強烈な尿意は、少女から冷静な判断力も奪い始めていたのだ。

『あ……っ』

危険水域を知らせる、恥骨上の乙女のダム。じわじわと脚の付け根に膨らみ始める放水の予兆に耐えかねて、エレナはどうとう、

スカートの前を押さえてしまう。

脚の前で握りしめられた白いワンピースは大きく皺がより、心持ち身体を前に倒し、お尻を後ろに突き出した格好と相まって、少女の肢体は服の上からでもはっきりと凹凸の少ない身体のラインを浮かび上がらせてしまう。

（だ、だめ……、お手洗い……っ）

イケナイ水の誘惑に、エレナがきつく歯を噛み締めて、脚の付け根の排水孔にひときわ強く力を込めたていた時だ。

不意に、先行道の方が騒がしくなる。

はっとエレナが視線を上げれば、そこには少年たちの一団がいた。

年頃は、やはりエレナと同じくらいだろうか。滑稽なくらいに髪を短くして、白いシャツと黒いズボンのそろいの制服姿。大きなバッグを肩に下げたり、自転車のカゴに押し込んで歩く彼等は、恐らく学生なのだろうとエレナにも分かった。

人目をはばからぬ我慢をしていた自分の姿に思い至り、エレナは慌てて姿勢を正す。スカートには深く皺が刻まれていたが、それには気付かないまま、素知らぬ顔で道の端へと歩み寄った。

談笑していた少年達は道の向かいに居るエレナの姿に目を止め、思わず言葉を失ってしまう。この時代、この国を訪れる外国人は多くはなく、まして大学を除けばさしたる名物もないこんな辺鄙な土地では観光客も滅多に訪れない。

まして、普段はほとんど生活道路くらいにしか使われないこの道に、突然青い目に金の髪をしたとびきりの美少女が現れたのだ。少年達の驚愕には十分だっただろう。

さっきまでの元気の良さはどこへやら、急に黙りこくって、そそくさと道の端に寄り、その場をやり過ごそうとする少年達。学校で英語は習っているものの、『これは鉛筆です』と『ぼくの名前はトムです』も怪しい程度で会話が成り立つと思う者は、彼等の中にもいなかったのだ。

が、エレナにしてみれば黙って見過ごすことは許されない。

しばらく人通りのなかった道行に現れた相手なのである。追い詰められた少女にとって、千載一遇の機会といっても良かった。『……ね、ねえ！』

言葉に一瞬の躊躇はあったものの、エレナはそれを振り払って、道の端に小さくなっている彼等に向かって声を掛ける。

同年代の少年に、トイレの場所を訊ねるというのは、少女の中で文庫一冊に及ぶほどの長い長い葛藤を経ての少なからぬ覚悟が必要な行為だったが——もはや背に腹は代えられないほど、エレナの我慢は切羽詰まり始めていたのだった。

『あ、あのう、すみません、ちょっといいデスか？』

声をかけられた少年たちは、気の毒になるくらい動揺していた。ついさっきまでの楽しげな雰囲気は微塵も残らず、一斉に表情を強張らせ、お互いに顔を見合わせる。よくよく注意していればエレナの言葉が日本語であることは——発音もイントネーションも、かなり怪しいものではあったが——分かったかもしれないが、金髪に青い眼の美少女というその外見だけで、彼らは一様にその言葉を英語だと思い込んでしまっていた。

しかも、その相手はこんな田舎では滅多に見ない外国人の、とびきりの美少女なのである。同じ学校の女生徒の手も握った事のないような少年たちにとってはあまりにも未知の相手だ。これで緊張するなという方が無茶なのだが、当のエレナにはその自覚がない。

思っていた以上の警戒を取られ、エレナは内心たいじろいだものの——できるだけ笑顔を作って、少年たちに声を掛ける。

『……ええと、わたし、エレナって言います。あなたたち、この近くの学校の、生徒デスよね？ その、ちょっと聞きたいんデスけど、この近くに——』

“その単語”を口にしようとして、エレナは思わず口ごもった。

言葉は通じているはずだが、それはつまり彼等に、自分がトイレに行きたいと知られてしまう事を意味している。いい歳をしてトイレも我慢できない恥ずかしさに顔が熱くなり、同時に敏感に反応してしまった下半身が小さく震える。

だが、そんなためらいを吹き飛ばすかのように、下腹部にはカフェインの魔力によって刻一刻と、音を立てんばかりに恥ずかしい黄色い熱湯が注ぎ込まれてゆく。ふぁ、と小さく声を上げてしまい、エレナはたまたま足元を踏みならす。

『こ、この近くに、……お、おトイレ——ありませんか？』

なんとか、記憶の中にある単語を繋いで、エレナは声を絞りだした。トイレ、という単語に不必要なまでに羞恥心を覚え、顔が一気に熱くなるのが分かる。

だが聞くは一時の恥、聞かぬは一時の恥だ。たとえここで恥ずかしくとも、躊躇ってしまえばもっとあとで困る事になるはずなのだ。が、エレナが勇気を振り絞って口にした質問にも関わらず、少年たちは心持ち距離を取りながら、困ったように顔を見合せ、小さく何事かを言い合いはじめる。

予想外の反応に、エレナは困惑した。

(つ、通じてないのかしら……？ 日本語、これで合ってるはずだけど……)

拙いながらも、駅やホテル、父の学会などでは意志疎通ができていたはずなのに。思いもよらない事態にエレナは驚愕を隠せない。

これまでの会話の経験は、いずれもそれなりに海外からの相手に慣れていた場所によるものだったということは、もちろん少女の頭にはない。

それなりに自分の日本語には自信のあったエレナだけに、少年たちの反応はまったく想定外だった。

『ええと……わかりませんか？ “トイレ”。“トイレ”、どこにありますか？ ……“トイレ”！ “おトイレ”、“お・ト・イ・レ”！』

ゆっくり、発音を思い出しながらエレナは“その場所”の名前を繰り返す。

しかし、エレナが一生懸命になって訴えれば訴えるだけ、少年たちは曖昧な笑顔の下に感情を押し込め、何事かを囁き合いながら互いを前に押し合うようにして、隣の少年の脇腹をつつくばかりだった。

(ちょ、ちょっと……！)

じりじりと後ずさろうとしている彼等に、まさかこのまま逃げられてしまうのではと感じたエレナは、慌てて前に踏み出した。

『あ、あの！！ だから、……“トイレ”！ “バスルーム”？ えっと、……そうだ、“お便所”……！！ “ご不浄”！ ……ねえ、わからないの？ ねえってば！！』

エレナの会話はいつしか、母国語へと戻っていた。

大きな身振りを交えながら、エレナは少ない語彙で思いつく限りの『オシッコをする場所』に相当する単語を並べてゆく。切羽詰まった下腹部に急かされて、つつい声も大きくなる。

しかし、エレナが熱を込めて訴えれば訴えるほど、それに反比例するかのように、少年たちはまるで叱られているかのように視線を下に向け、居心地悪そうに距離を取ろうとする。中には露骨に顔をそむけている者までいた。

せめて、言葉が分からないならせめてそれだけでも伝えてくれればいいのに、それすら反応がないことに、エレナは苛立ちを覚える。

(な、なんなのよ……っ！！)

あまりにも不可解な彼等の対応にエレナは焦りを強めてゆく。

その一方で、下腹部の欲求は一気に強まり出していた。空にしたガラス瓶の中身、炭酸のジュースまでもが、エレナの体内を循環し、不要な成分を抽出して身体の一か所に集まってゆく。

カフェインの利尿作用によって活性化した排泄器官は、健康な少女の新陳代謝がもたらす当然の帰結として、下腹部にある乙女のダムへと恥ずかしい液体を注ぎ込んでゆく。脚の付け根の恥ずかしい場所のすぐ奥、女の子の水風船はいまやはち切れんばかりに大きく膨らんでいるのだ。

『んうっ…』

身体をよじり、声を上げて。少年達の前だと言うのにも関わらず、左右の手がワンピースのスカートをぎゅっと押さえ込んでしまう。どんどんと高まる排泄欲求に耐えかねて、エレナはとうとうその場でくねくねと腰を揺すり始めてしまった。

『あ、あの！！ “トイレ”…“トイレ”、ねえ、“トイレ”どこにあるの？ ねえ、分からないの！？ っ、あのね、“オシッコ”！！ 私、“オシッコ”！ “おしっこ”したいの！！』

たんっ、たたっ、たたんっ。

サンダルのかかとが、砂利道を跳ねるように鋭いリズムを刻む。繰り返される足踏み、膝を交差させての片足立ちとともに、重心がぶれ、腰がくねくねと揺れる。ぎゅっとスカートに皺が寄るほどにきつく脚の前を押さえ込み、握り締め、世界共通言語の『おんなのこのオシッコ我慢』のポーズで、エレナは少年たちに訴えつづけた。

『お、“オシッコ”、“オシッコ”したいの！！ ガマン、できないの…！！ お願い、意地悪しないで教えてよ！！ “トイレ”！！ “トイレ”行きたいの！！ っ……お、“オシッコ”、出ちゃう！！ ねえ、分かんないの！？ わたし、“おしっこ”漏れちゃうの！ 漏れちゃうのおっ！！』

母国語混じりの激しい訴え。

いや、たとえ言葉が分からなくとも、一目見ただけで思わず眉を潜めかねない、小さな子が叫んでいるのと変わらない、トイレの要求だった。もうオシッコが我慢できなくて、トイレのできる場所を探しているのだと、エレナは叫ぶ。

そしてそれは、少年達にはこう聞こえていた。

『トイレ！ センメンジョ！ おベンジョ……！！ ゴフジョ！ トイレトイレトイレ！！ オシッコ！！ オシッコ、オシッコ、…ションベン！！ オシッコオシッコ、チビル、モレル！！ トイレ、トイレ！！ オシッコ、ションベン、デル！！』

映画の中にしかないような、ブロンドの美少女が、懸命に足をふみならし、腰を後ろに突き出して身体をよじり、その可憐な唇からはとても不似合いな、はしたなくもあまりにも下品な言葉使いで、尿意を連呼し、訴えているのである。

中途半端な日本語の理解と、語彙の変化。まさか自分の覚えている日本語がこんなにも歪なものであるとは、エレナは無論思ってもよらない。

少年達にはあまりにも刺激の強すぎる光景だった。その鬼気迫る訴えに、思わず口籠ってしまうのも、距離を取ってしまう事もせめられないだろう。

そんな事はつゆ知らず、エレナはますます熱心に“トイレ”“オシッコ”を訴える。

彼女として必死なのだ。レディとしてあるまじき、はしたなくもみっともない結果になるかどうかの瀬戸際なのだから。

いよいよ激しくなるエレナの訴えを見かねたか、少年の一人が顔を真っ赤にしなが、ようやく口をひらいた。無論英語ではなく日本語だが、大きな身振りを交えて、道路の先を指さす。

「あ、あのな、あっちの方にグラウンドがあるから、そこの——」

「——あ、おい、馬鹿っ」

『そ、そこでオシッコできるの！？ ありがとう！！』

少年の言葉を最後まで聞かずに、エレナは大きく声を上げた。チャームポイントの八重歯とともにぱあっと顔を輝かせ、少年の手を握り締める。彼はまるで茹で蛸のように、可哀想になるくらい顔に血を昇らせた。

『ほ、本当にありがとう』

待望のトイレの場所を突き止めたことで、生まれた一縷の望みと共に、きゅうんっ、と下腹部にも限界を訴え膨らむ尿意が暴れ出す。

エレナは『んぁあうっ』と小さな悲鳴を上げ、ガラスの瓶も放り捨て、両手で脚の付け根を握り締めたまま走りだしていた。

少年の示した交差点を右に曲がり、先へ進む事およそ5分。

カウントダウンを刻み始めた排泄欲求をなだめながら、必死に急ぐエレナの視界の先で、林が大きく開ける。

『あ、あった！ ここね……！』

彼等の言葉通り、山間には整地された小さなグラウンドがあった。入り口の門扉にはここが近くの市立中学校の第二グラウンドであることが記されていたが、エレナにはもうそんなものは目に入らない。余計な事を頭に入れている余裕などなかったのだ。もっとも、仮に余裕があったとしても、エレナにそれが読めるかは微妙なところだろう。

『うう……も、もう少しよっ……』

自分を励ましなが、エレナはもはや一刻の猶予もなくなった下半身を包み込むように両手で揉みほぐした。ぶるぶると背中が震え、おなかの一番底の毛い孔の部分にじんと熱く鈍い痺れのようなものが走る。

乙女の秘密のダムの放水孔は、一番重力のかかる、少女の脚の付け根、下腹部の最も底の部分に空いている。つまりはオシッコを我慢するという行為は、孔の空いた入れ物に、どんどん水を注ぎ込んでいるようなもので、押さえておくのに限界があるのは当然なのだ。

太腿の隙間で、かつてない乙女の危機を助けるために両手も全力で援軍に向かっている。前屈みになって両手を股間に差し入れ、あまりにもみっともない体勢。

無理な体勢で急いだこともあり、自然と息が荒くなっていた。背中には嫌な汗をかき、じっとりとワンピースを肌に張り付かせている。

限界までのカウントダウンの数字を減らし続ける我慢のロスタイムの中、エレナは既に人目をはばからずに、激しく腰を前後に動かし続けていた。そうすることで渦巻き暴れまわる恥水を、なんとかおなかの中に押しとどめているかのよう。

スカートの前をきつく押さえ、エレナは震えるサンダル爪先の慎重な足取りで、グラウンドの周囲に張り巡らされたネットを潜りぬ

ける。

この奥に、待ち望んだトイレがあるはずだった。

——だが。

『あ、あれ……？』

あるはず、だった。

恥ずかしい思いをしてまで聞いたトイレが、ここに、あるはずだった。

だが、無い。無い。どこにもない。

どれだけ目を凝らして見ても、エレナはグラウンドの中に、目指すトイレを見つける事ができなかった。あるものと言えば精々が、野球に使うのであろうスコアボード、古びた木製のベンチ、整地に使う用具とゴミををまとめておく資材置き場。その程度だ。それ以外には小屋すら——屋根すら見当たらない。

まさかそんな事はないだろう、見落としているだけだと自分に言い聞かせ、少女は絶るような気持ちで二度、三度、目を瞬かせ、グラウンドに視線を巡らせる。

それでも。何度見回しても、小さなグラウンドにそれらしき建物は見つからない。

(ど、どういうこと……？)

ここにきての最大の問題が、エレナの眼前に立ちはだかる。

まさか、あの少年たちが嘘を言ったのだろうか？ ふとそんな疑念が胸をかすめる。だが、そんな事をして一体何の意味があるというのか。意味が分からずエレナは首を振った。

しかし、それならどうして？ 現実として、ここにトイレはない。

でも、でも、どうして？ なんで？

疑念は際限なく膨らむが、それ以上に我慢の余裕はなくなっていた。我慢続けた尿意によって、少女の下腹部はそれ以上にパンパンに膨らんでいる。

ここまで来ればトイレができる——そう思い込んでいただけに、予定外の“おあずけ”は、少女の体に強い負担を掛けた。乙女のダムの細い出口が、エレナの意志を無視して緩みそうになる。

『んあ……う！！』

思わず下着の中に激しい水音を響かせそうになったダムの放水孔を、エレナは両手を使って押さえ込んだ。スカートの上から、まるで栓をするように、両手が重なって脚の付け根を押さえ込み、オシッコの出口をきつく覆い、握り締める。

もう少しで打ち破れるはずだった出口を塞がれて、猛烈な尿意が暴れまわる。恥ずかしい熱湯は一気に噴きこぼれんばかりの勢いで出口に殺到し、エレナは激しく脚を擦り合わせ、足踏みをしながら、ふらふらとグラウンドを彷徨い始めてしまう。

『あ、あっあ、っ……と、トイレ……トイレ、どこなの……っ？』

ここにトイレがあるはずなのだ。

少年達の言葉を、今更疑うことはできなかった。否。もはやそう思わなければ、心が折れてしまいそうだった。エレナはここで、ここに、オシッコをしに來たのだ。

今更、來た道を引き返しても、間に合うわけがなかった。駅前どころか、さっき、少年達と話をした場所ですら戻れそうにない。その途中で、盛大にワンピースを濡らし噴き出したおしっこが、足元に恥ずかしい水たまりを広げてしまうだろう。

『と、トイレ……だめ、オシッコ……オシッコでちゃう……っ』

ぞく、と排泄孔の近くに鈍い痛みが走る。我慢のし続で酷使された括約筋が限界を訴えていた。全身全霊できつく締めあげているはずのオシッコの出口が、エレナの意志に反して緩み、しゅるしゅると音を立てそうに膨らむ。

股間を握り締めた手のひらは、まるで乙女の放水を受け止める入れ物のようにさえ思えてしまう。

もう、エレナは我慢の限界だった。

途方もなく膨らむ尿意に耐えかねて、哀れな少女はとうとう、形振り構わずにグラウンドの隅へと走りだした。

(も、もう駄目……！！)

エレナが駆け込んだのは、グラウンドの隅に残された未整備の草地だった。茂みの中に身をかがめ、スカートの下に手をつっ込んで、縞模様の下着を一気に足元まで引き下ろす。

高まり続ける尿意に、少女の矜持が屈する。

……一度は否定し、それだけは絶対ないと決めた、木々の間、茂みの中。排泄のための設備など何一つ整っていない、視界を塞ぐのも不十分な、草むら。トイレでもなんでもない、屋外、露天の片隅。

エレナはそこで、はしたなくも我慢し続けたオシッコを済ませてしまうことを、許容せざるを得なかった。

大胆にスカートを抱え、その端を口に。これまで続けられていた拘束から、一転、解放へ。

無防備にも下半身を露出させて、エレナはそのまま地面にしゃがみ込んだ。

『ごめんなさいっ……！！』

口早に放たれる謝罪は、勝手に敷地の隅を——恐らくは、先程の少年達が使っているだろうグラウンドの隅を無断で借りて、あろうことかオシッコをしてしまうことへの罪悪感から。

草むらの中に深く腰を下ろし、広げた膝の奥、きつく押さえこまれて酷使され、すっかり赤くなってしまった脚の付け根の奥。誰にも見せた事のない乙女の秘密の放水口から、ついに勢いよく黄色い水流が放たれんとした——その時。

エレナは視界の端に、小さな建物を見つけていた。

『……！！ あ、あれかしら！？』

ほんの、少し、前。

ついさっきまでは木の陰になって見えなかった区画に、小さな——直方体の建物があるのを、エレナの青い目が捕える。

建物というよりは、まるでロッカーのような、人一人入れるのが精いっぱい大きさに見えた。まるでエレベーターの箱だけがぽつんと置かれているような印象を抱かせる。

それがいわゆる、上水・下水設備が不十分な地域に設置される仮設トイレだと言う事を、エレナがはっきりと知っていたわけでない。だが、エレナはそれを間違いなくトイレだと断じていた。

いや、間違いなく、トイレでなければならなかった。

エレナはその為に、ここに最後の望みを託してきたのだから。

『と……トイレ、できるのね！！』

はしたなくも声を上げ、エレナは跳ね起きるように立ち上がっていた。下着を再び引っ張り上げるのもそこそこに茂みの中を飛び出して、グラウンドの反対側へと走りだす。

……ちゃんとした場所でトイレができる。

そうとわかれれば、こんな誰に見られるかもわからない茂みに用などなかった。十分に引っ張りあげられていない下着が、ワンピースのスカートの裾を巻き込んで、背中側がさうとう恥ずかしい事になっているのにも気付かない。エレナは脇目もふらずに、トイレまで

のおよそ 1 0 0 mを疾走する。

オシッコを我慢しながらの状態では、おそらく生涯最高となるタイムで、少女は金髪を振り乱し、グラウンドをひた走った。

くねくねと揺れる腰、一步ごとにダムを揺さぶる衝撃。

もはや我慢のカウントダウンは延長戦をも過ぎ去り、ロスタイムに突入中だ。エレナは既に股間の先端からじゅっ、じゅじゅう、と熱い雫を断続的にほとばしらせていた。下着の股布に滲み、布地を濡らして下腹部にじわあっと広がる熱い感触が、刻一刻と強くなってゆく。

『オシッコ…オシッコ……！！』

少女の素足を伝う水流はひとすじ、ふたすじと増え、サンダルから乾いたグラウンドに転々と黒い染みが散らばってゆく。ふくらはぎまで伝い落ちる水滴をあえて無視しながら、エレナは内股のまま走る。

『あ、ああ、あつあ、っ……』

じゅわじゅわと響く水音と共に、脚の付け根から漏れ出す途方もない解放感。腰骨をじいんと響かせる尿意からの解放に、必死になって抗いつて。

エレナは股間を押さえたままの覚束ない足取りで、どうにか小屋へとたどり着いた。

『ま、間に合っ……』

既に下着はびしょ濡れ、太腿の内側も大洪水。間に合った、と主張するには大分無茶があったが、とにかく本格的な放水だけはなんとか押しとどめて、エレナは小屋のドアに縋りついた。

幸いにもドアに鍵は掛かっていなかった。錆びたノブを掴み、思い切りドアを引き開けてその奥へと飛び込む。

同時にスカートの中へと手を差しこみ、下着のゴムに手を掛けて。

エレナはそこで、言葉を失っていた。

『な、なに、これっ……』

そこにあるのは、エレナの予想していたものと、まったく違う光景だった。

床の上にあるはずの便器——父に連れられてアジアの国々を巡った経験もあるため、エレナは日本のトイレが多く“和式”であることは理解していた。あまり利用したくない程度の忌避感こそあるが、使うこと自体に問題はない。恐らくここもそんなトイレなのだろうと、あらかじめ予防線のように最悪の想定をしていたのだが——個室の中にあったのは、そんなものですらなかったのだ。

便器があったのは個室の床ではなく、壁。

幅 5 0 センチ、高さ 8 0 センチほど。楕円形を半分に曲げたような流線形の、薄汚れた白い用器。それがこちらに向けて無防備に口を開けている。

用器の中央には小さな穴が開き、上には配管が取り付けられ、その上に小さなボタンがあった。そこを押すことで使用後に水を流すのだろうが、どうも壊れているようで、便器は汚れをこびりつかせ、はっきりと分かるほどの悪臭を放っている。

確かに、トイレ。オシッコをするための設備に違いはない。

だがそれは女の子がオシッコをするためには、使うことのできない、男性専用のトイレ。まごう事なき『男性用小便器』。いわゆる

『朝顔』。

それが、この仮設トイレの中にある全てだったのだ。

『う、嘘……っ』

ひく、とエレナの白い喉が息を詰まらせる。

(そんな、こ、ここ…違うの……これじゃ。私っ……わたし、っ)

エレナも、流石に“これ”が男性用のトイレだと言う事は知識として知っていた。

だが、求めているものとのあまりの落差に、目の前の光景を、脳が現象として理解することができない。

だってここには、トイレがあるはずなのだ。ちゃんと勇気を出して聞いて教えてもらったのに。もう漏れそうなのを、野ションするのも我慢して、ようやくやってきたのに。

女の子の自分が、我慢に我慢を続けてきたオシッコをするための設備が。それなのに——、これは、一体。

『ふぁ……っ！？』

この期に及んでなお排泄を許されない下半身が、抗議のように激しくおののいた。じゅじゅじゅう、と猛烈な勢いの『先走り』が、少女の股間を激しく濡らす。よじり合わせた脚の間に、ぱちゃぱちゃと飛沫が迸る。少女の下腹部ではもはや“おチビリ”のレベルですら済まされない、れっきとした“オモラシ”が始まっていた。

『うう、嘘、嘘よね、なにこれ、こんな……んあっ！？』

押さえ込んだ下腹部が、びくびくとのたうち激しく緊張する。我慢の限界を知らせる最終警告——オシッコの限界を迎えた排泄器官が、大きく収縮する予兆となる、強い下半身の反応が、少女をさらに追い詰める。

『んっ、あ、っ……はぁはぁ……っ、…だ、だめ、っ、ガマンっ……ここ、違うのっ、こ、こんなんじゃ、オシッコ、おトイレ、で、できないんだ、からあっ……』

少年達がやけに言葉を濁していたのは、つまりこういう理由だったのだ。

市立中学の第二グラウンド——卒業生の一人が好意で貸し出してくれている土地に、十分な設備がないのは以前からの事だが、それでも練習場所を求める運動部の活動で使われる事は多かった。しかし長時間の練習では大はともかく、どうしても小の問題は付いて回る。

林の中で垂れ流しという事態にも問題があるとされ、この仮設トイレが設けられたのが5年ほど前の事だ。

そんな経緯など、エレナが知ろう筈もない。

『で、でちゃう……だめ、おしっこ、おしっこしたい、オシッコ出ちゃうっ！！』

懸命に排泄孔を引き絞ろうとするが、もはやオシッコの出口はエレナのコントロールを離れつつあった。じんと疼く甘い痺れ、おチビリの解放感が、脚の付け根を包み、まるでお風呂で熱い湯船に浸かったかのような心地よさを、オシッコの孔周辺へとひろげてゆく。

目の前にあるものが、男子専用のおトイレなのだという事。オシッコをしていい場所だと言うのに、女の子に自分には使えないのだということ。

突き付けられた無慈悲な解答に、エレナの目の前には、性別の差という絶望が迫るばかりだった。限界水量を超えた乙女のダムが水面が激しく揺らめき、きゅうっ、と下腹部の奥で膀胱が決定的な大収縮の気配を覗かせる。

これ以上水門を閉ざしている事は出来ないと、排泄器官が最終警告を発令している。既に溢れだした熱い雫が、再びトイレの床をぱちゃぱちゃと叩き始める。

場所も状況も無視して、少女の身体は勝手にオシッコの予備動作に入ろうとしていた。鈍い痛みと圧迫感、猛烈な羞恥、そして解放感。混沌と入り混じった感情がエレナの思考能力を奪う。

『っ……………！！！！』

じわりと目に涙すら浮かべて、エレナはとんでもない行動に出た。

トイレを飛び出し、地面に向けてしゃがみ込んだ——のではない。その逆だ。

エレナは下着を無理やりに引っ張り下ろしながら、大きくスカートをまくりあげて、目の前にある小便器の出っ張り部分を跨ぐように股間をぐいと前に突き出したのだ。

追い詰められたエレナは、思いあまるあまりに少女のプライドも羞恥もかなぐり捨て、この男子用小便器を使って、立ったままオシッコをすることにしたのである。

当然ドアも開け放ったまま、お尻も丸見えである。

それでも、このままここでオモラシをするよりは良かった。壁に作られ、ロクに掃除もされていない薄汚れた男子用小便器へ、可憐な金髪少女がオシッコを噴き出させる——その為に、エレナは形振り構っていない。

女の子として、あつてはならない行動だった。およそ、普段のエレナなら絶対に取らない——思いつきすらしないだろう。だが、カフェインによる猛烈な利尿作用によって絞り出され、乙女のダムをたぶたと揺らす大量の乙女の恥水、たつぷりと喉をうるおしてしまったジュース、何度も排泄を中断され、焦らされてしまった排泄器官。そしてなによりも、ここが懸命に我慢を重ねて、辿り着いたトイレ——『正しくオシッコをする場所である』という事実が、少女をこの場に縛り付けていたのだ。

冷静な判断すらできないまま、エレナは本来その為に作られていない、男子用小便器を跨ぐ。当然ながら、少女の排泄に使う事は想定されていない『それ』を、エレナが使用する事は、不自然極まりない行為だ。女の子のオシッコは真っ直ぐ前に飛ぶようにはできていない。エレナの放水孔は脚の付け根に下向きについており、そこから噴出するオシッコを便器の中に収めるには、脚を大きくがに股にして、まるで腰を壁にくっつけるように突き出さなければならない。

女の子として不自然極まりない、はしたなくもみっともないオシッコの準備。あまりの惨めさに、エレナの瞳にはじわりと熱い涙が浮かぶ。

『だ、だめ、まだっ…………こ、こぼれちゃうっ！！！！』

ぶじゅつ、じゅじゅう…………

解放を待ちきれないオシッコが、体制の整わないエレナの股間から噴き上がりびゅうと鋭い水流を飛ばす。水門は勝手に緩み、押し寄せる尿意に強引にこじ開けられてゆく。

つうんと脚の付け根に響く鈍い痛み、エレナは慌てて腰をひときわ大きく、前へと突きだそうとする。

それがいけなかった。

エレナの下着は、ちょうど膝の上、太腿の下に引っかかっているような状態にあった。限界寸前の状況で足を上げている暇などなく、下着はちょうど半脱ぎの状態、揃えた脚の半ばほどまでしか下がっていなかったのだ。

清潔を保ち、外部の危険性から少女の秘所を守る縞模様の布地は、当然ながら耐久性にも優れている。その上たつぷりとエレナ自身のオシッコを吸って濡れ、収縮した布地は、まるで少女の脚を縛りあげるかのように、自由な行動を阻害してしまう。

縞模様の下着は膝の上に絡みつき、少女の脚を拘束していた。事実上、ほとんど太腿を縛られたような状態に等しい。

『きゃ……あああああっ！？』

それはまるで、少女の股間に、噴水ができ上がってしまったかのよう。

本当なら、目の前の男子用小便器の中へ猛然と叩き付けられるはずだった乙女の大量放水は、トイレのすぐ前の地面を標的に、角度を90度回転させて行われる。

エレナは懸命に身体をよじって、オシッコを堰き止めようとした。角度を変えた放水は下着にぶつかる事は無くなったものの、勢いをとどめる事を知らないまま、猛烈に地面へとぶつかる。整地され、運動部の部員達が踏み固めたグラウンドの地面が、少女が股間から噴き出させる水流に、あっという間に深々とえぐられてゆく。

熱く噴き出した羞恥の水流は、懸命に脚の付け根を握り締める少女の細い指の間から四方に吹き出し、下着の股間とおしりを濡らしながら、勢いよく仮設トイレの個室の床を、ドアを、目の前の地面を、お尻の下を直撃する。

ぶじゅっ、じゅじゅじゅじゅじゅじゅうううっ！！
じゅじゅじゅっ、じゃごごおお……！！

少女の脚元の水たまりはたちまちの内に大きくなり、1mは離れていた麦わら帽子すらその中に飲み込んでしまう。泡立ち濁った泥は大きく跳ねてワンピースや少女の太腿やお尻、ふくらはぎまでもが見るも無残に汚されてゆく。

『んあ、あ、だめえええ……っ！！、と、トイレ、トイレで、するのおっ……！！』

エレナは両手で無茶苦茶に脚の付け根に指を喰い込ませ、言う事を聞かない足を半ば無理やりに引っ張って立ちあがった。

しかし、下腹部に無理な圧迫をしてしまったせいか、それはなお一層激しく、少女の股間から恥水を迸らせる結果になる。エレナの股間が噴射——文字通り“噴射”させた大量の新鮮なオシッコが、少女の手のひらから溢れ、脚に張り付いたワンピースへ、太腿へ、膝へ、ふくらはぎへと叩きつけられた。

ぶじゅじゅうううううっ、じゅじゅじゅううう……！！！！
ばちゃばちゃばちゃばちゃ……

エレナの懸命の努力は、しかし『尻餅をついたままのオモラシ』から、『立ったままのオモラシ』へ移行した程度の事でしかなかった。大量のオシッコが激しく噴き上がり、ワンピースの布地を直撃する。汚れて黒茶に染まっていた布地から、あっという間に泥が洗い落とされてゆく。

ふくらはぎや太腿、サンダルも同様だった。高水压のオシッコがもたらす羞恥のクリーニングによって白いワンピースはたちまち黄色に染まり、さらには泥の汚れに薄茶色を重ねてゆく。

エレナの膝上に引っかかった縞模様の下着は、風にはためく旗のように、噴き出す羞恥の熱水を浴びてばたばたと揺れ、オシッコを撒き散らす。

『あ、いや……いやああ……～っ、！！ あ、はああ……う……っ』

がくがくと震える膝が、びしょ濡れになった腰が、排泄の解放感にうちふるえる。白い喉を反らし、青い瞳から光すらも失って、ぱくぱくと喘ぎ、酸素を求める少女の唇は半開きとなり、その奥に八重歯をのぞかせて蕩けているかのようだった。

きつく押さえ込まれた手の間から噴き出す支流は、ワンピースをずぶ濡れにしたまま泥に濁った水たまりにさらに深く地面をえぐり、大きく飛び散った水流は、仮設トイレの床すらも一面びしょ濡れにしてゆく。

いったん溢れたしたものを止める事はもう出来なかった。こじ開けられた乙女のダムの放水孔から、溜まりに溜まった水压のまま、

ありったけの尿意が噴出する。

懇願のように。喉の奥から悲鳴を絞りだす絞り出されるエレナの足元で。

迸る羞恥の放水は、いつまでも果てることがないかのように、勢いを弱めない。

「……………、……………」

「……………！？」

忘我の縁で、エレナは遠く、グラウンドの向こうから駆け寄ってくる人影を捕える。興奮した様子の少年達——エレナの様子が気になって引き返したのかもしれない——を遠目に見ながら、エレナはその場にくずおれてしまう。

濡ればそって肌に張り付き、肌を濡れ透けさせるワンピースの奥。脚の付け根の合わせ目から、少女の排泄はなおも延々と続くのだった。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

◆原案

- > ところで
- > 金髪前髪バツンの娘が父親の仕事の関係かなんか(この辺は適当でいい)で日本に来て、
- > 街を散歩してたらまあおして、「トイレどこですか」って訊こうにもどう訊いたらいいかわからなくて、
- > 野ションしようとして人の居なさそうな場所を探して、公園のちょっと植木のある所まで行って、
- > スカート下ろした辺りで公園のトイレを発見して、慌ててスカートを戻そうとするんだけど
- > あまりの尿意から慌てすぎて転んで、そこで盛大におもらしする
- > っていう電波を受信したんだが

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 本好きの女の子の話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 10/22/2011 21:35:32

BODY:

「あー。ここにしまってたんだっけ。これももう一度読まなきゃ……」

整理ボックスの底から拾い上げた文庫本をばらばらとめくり、史香は額の汗をぬぐう。

数年前にしまい込んだシリーズものの第 1 巻だ。来月完結となる最終巻が出るはずで、その前に一度最初から読み直しておきたいと思っていたのである。

「……………」

ざっと眺めているだけの視線が、いつの間にか文脈を追いつき始め、やがてページをめくるペースもじっくりとしたものに変わってゆく。昔読んだときには分からなかった表現、思いもよらぬ場所に張られていた伏線。数年ぶりの懐かしさが、いつしかリアルタイムの感動と興奮に変わってゆく。

夏の陽射しが窓の端に強い影を残す、蒸し暑い部屋の中。T シャツにハーフパンツというラフな着こなしの手足にうっすらと浮かぶ汗も忘れて、史香はしばし夢中になって頁をめくり――。

「って、そんな場合じゃないってば！」

思わず自分に突っ込みを入れつつ、史香はばたんと本を閉じた。

気付けば 1 0 0 ページ近くを読みこんでしまっていた。手にした文庫を、傍らの本の山の上に積み上げ、はあと吐息。

「……ホント、悪い癖だよな……」

無理な姿勢でいたせいか、背中が少し痛い。

本の虫――史香を表す上でこんなに的確な表現もないだろう。小さな頃からの本好きは、大きくなるにつれてますます度を増している。学校図書室の本はほとんど読み終えてしまっているし、近くの公民館の本も似たようなものだ。

休日は古本屋巡りか図書館で過ごし、慎ましやかなおこづかいはずいぶん、近所の小さな子たちの家庭教師をして貯めたバイト代までもが、ほとんど本に消えている。

それでも一週間に 1 0 冊のペースで増えてゆく既読の山は、半年もすると本棚から溢れだすので、こうして定期的に本棚の整理が必要になる。部屋の床に溢れだした本はどれだけ積み上げてやがてベッド近くまで迫ってくるため、仕方なしに処分せざるを得ないのだった。

本音を言えば全部保存しておきたいのだが、現状既に壁の 2 面が床から天井まで本棚で埋まり、クローゼットもぎっしりと本が

詰まった収納ボックスで占領されているため、これ以上どこにもしまふ場所がないのである。

「んー……これはまだ読むかなあ。……こっちは……」

そんな中から処分する本を選別する作業が簡単に終わるわけもなく、一度始めてしまえば半日以上かかることも少なくなかった。夏休みも半ばを過ぎ、特にすることもなかった月曜日と言う事もあって、史香は今朝から本格的な大掃除を試みていたのである。

処分することに決めた本を、二重の紙袋の中に詰め込んで。文乃はフローリングの上に積み上げた本の山の中で、こきこきと首を鳴らす。

「ふー……こんなもんかなあ」

大きく膨らんだ紙袋を三つ、よいしょと力を入れて部屋の隅へ。

時計を見ればもう午後の2時を回っていた。

整理を始める前に持ち込んだペットボトルのお茶は2時間も前に空っぽとなり、いまはむなしく床の隅に転がっていた。

朝食後、すぐに整理をはじめたわけだから、かれこれ6時間近くも熱中していたことになる。お腹も空くわけだった。

「んっ……」

そして——空腹よりもはっきりと感じる生理現象が、もう一つ。

積み上げた本を動かしている間にも、部屋着のハーフパンツの脚の付け根を、立て膝のかかとが、片手が知らず押さえてしまう。

部屋の中、誰の視線もないということで、大胆に押さえられた足の付け根、ハーフパンツの股間の布地にきゅうっと皺が寄せられる。

ぴたりと寄り添った太腿がせわしく擦られて、フローリングがかすかに音を立てた。

実はもう数時間も前から文乃は尿意を感じていた。下腹部の乙女のダムは、貯水量がすでに危険水位を超えていることを、かなり前から警告していた。

それにもかかわらず、史香は目の前の本の整理を優先し——いつしか尿意は相当激しいものになっていたのである。床の本を持ち上げようと身体を曲げるだけで、じんっ、と甘い痺れが恥骨を走り抜け、ダムは放水警報を繰り返す。

（あー……ちょっと、やばい、かもっ）

本を段ボールの中に押し込みながら、片足立ちになってもう一方の脚をふくらはぎに擦りつけ、掴んだシャツの裾を下へと引っ張り下ろす。

ついにはその場で小さく足踏みをし、腰をよじる、まるで幼稚園の子のような、みっともない我慢のダンスまで始めてしまう史香。

こと本に関しては、夢中になると他の事をすっかり忘れてしまうのが史香の悪い癖であった。誰かとの約束や登校時間どころか、食事や睡眠まで無頓着になってしまう事も少なくない。本屋巡りをしているトイレを後回しにしてしまったり、図書館で本を読むのに熱中しすぎて、閉館のチャイムと同時におしっこをチビリそうになっているのに気付く、トイレに駆け込んだなんてことも一度や二度ではなかった。

我に返ってみれば、まっすぐ立ってられないくらいの尿意を訴えていることによやく気付く、史香は。もじもじと足を擦りあわせながら腰をあげる。

「ちょっと、休憩——」

いい加減おなかもすいたし、あとはご飯の後で、と。

そう思いながら振り返った史香はの言葉は、尻すぼみに消えていった。

「あ……」

部屋の出口、ドアの前には、たくさんの本の山と共にずっしりと大サイズの段ボールが計六つ、縦横に重ねて積み上げられていた。

……られていた、と他人事のように言うてはいるが、これは何を隠そう、史香自身が積み上げたものだ。普段、クローゼットの中にしまい込んでいる段ボールは、史香が小さな頃から大事にとってある本が納められたものだ。今日は気合を入れて整理をしていたため、後で中身を確認しようとドアの前に並べていたものである。

内開きのドアの前にずしんと鎮座した段ボールは、まるで天岩戸を塞ぐ大岩のように、あるいはアリババの盗賊団が隠れた巨岩のように、部屋の出口を塞いでいた。

「あちゃー……」

そういえばそうだったと思いなおしてみるも、いまさら事情は変わらない。

内開きのドアの手前に段ボールが積まれているのだから、当然それをどけなければ部屋からは出られない。

つまり。

このドアの前を片付け終わるまで、トイレには行けないということだった。

「んっ……」

思わぬ事態に陥った史香の背中が、強い尿意にぶると震える。

じわり、と嫌な汗が背中を流れるのを、史香は感じていた。

じんっ、とハーフパンツの股間にイケナイ感覚が走り、史香はわずかな焦りと共に足を擦り合わせながら、段ボールの傍に歩み寄る。

「えっと……」

積み上げられた本の山を、動かすのもどかしく。本と本の間をわずかなスペースに爪先立ちになった史香は、段ボールの隙間からかすかに覗くドアノブに手を伸ばす。

体を横向きに、斜めに倒して伸ばした指先が、辛うじてドアノブの端に引っ掛かる。

「んう……つつく……うっ……！！ ふぬっ……」

しかし、重い段ボールを手前に置いたまま、ドアを開けられるはずもなく。いくら力を入れたところで、わずかに開いたドアは、段ボールの山にぶつかって重い音を立てるのみだった。

それどころか、爪先立ちの上に無理な体勢で力を入れたのがいけなかったのか、満水状態の乙女のダムが、一気に決壊に向けて動き始めてしまった。

「ふぁっ！？」

ひくん、とハーフパンツの奥、下着の中でおんなのこの出口が収縮し、硬く張りつめた下腹部が強い尿意を訴え始める。

びく、と眉を震わせ、史香は咄嗟に目を閉じてしまう。

「うぁ……っ」

史香はすぐに、ドアを開けるのを諦めて、足の付け根を思い切り両手で握り締めなければならなかった。恥ずかしい場所にぎゅうぎゅうと手を重ね当て、爪先立ちのまま太腿を強く擦り合わせる。ハーフパンツの付け根に押し込まれた指が、ぎゅうっとオシッコの出口を押さえ込み、皺を寄せて握り締める。

不安定になった爪先が本の山を押し、崩れ落ちた数冊の文庫本が地面に散らばる。

「っ……あ……ちよっと……ま、っ……くうっ、あぁんっ」

普段の史香なら、まず人前で見せることはない、女の子みたいな鼻にかかった甘い声。

女の子の出口を激しくノックする恥ずかしい熱水の圧力に耐えかねて、史香は身体を激しくよじり合わせる。乙女のダムがきゅうんと疼き、ひくひくと収縮の前段階を見せ始める。

「っ……」

史香はそのまま本の上に膝をついてしまいがちながらも、きつく息を詰め、なおも思い切りぎゅうぎゅうとあそこをねじり押さえる。

そうして、——およそ、5分。

はあはあと大きく息をつきながら、史香はゆっくりと、手の力を緩めていった。

(……よかった、……おさまった……っ)

ぶる、と尿意の波の『揺り戻し』が下半身を震わせる。

懸命の我慢の甲斐あって、どうにか波を乗り越えることができた。

きつく閉じ合わせた足の付け根は、なおもちりちりとむず痒さを訴え、ますますかたく膨らんだおなかはハーフパンツの上からでも解るほどではあったが——まさかのオモラシの危機が、ひとまずは去った事に史香は安堵する。

しかし、じわじわと高まる水圧は下腹部のダムをいっそう強く張り詰めさせ、はち切れんばかりに溜めこんだ恥ずかしい熱水でさらに薄引き伸ばされていた。

乙女のダムが再び放水を始めようとするのは時間の問題であり、今度のそれは即『決壊』につながりかねないのは明らかだった。

繊細なバランスの上で危うい均衡を保っている下腹部を庇うように、かたく張りつめたおなかをハーフパンツの上から撫でさすり、史香は、背中にじっとりと汗を浮かばせて、目の前の段ボールを見上げる。

「ど、どうしよ……これ……」

もちろん、このまま全部の本の整理を終えるまで我慢するなんて言うのが無理なのは明らかだった。下腹部はきつく張りつめ、ルーズなはずのハーフパンツのゴムまで、軽くおなかに食い込む感覚がある、

今すぐにトイレに駆け込みたいと叫ぶ下半身は、塞がれているドアを前に、話が違えばかりにさらに激しく尿意を訴え、史香はいよいよもじもじと腰を揺すってしまう。

「と、とにかく、急がなきゃ……」

だが——そうしているだけで、部屋の出口が開く訳ではない。史香はわずかに震える手で、段ボール周りの本をどけ始める。

……が。

いくら余裕がないとは言っても、まさか、本をばいばいとそこいらに放り投げるわけにもいかない。しかし床に膝をついての動作は、危機的状況にある下腹部には猛烈な負担をかけた。

脚の間に手を挟み、ぎゅうっとハーフパンツを引っ張り上げる。

突き出したお尻がくねくねと揺れる。

「う……あ、く……ふ、ゆ……っ」

悩ましげに寄せられた眉が、きゅうつとよじり合わされ、びく、と指先が硬直する。

片手に本を握り締めたまま、もう片方の手でオシッコの出口を握り締め、数十秒——動きを止め。はあはあと荒い息をつきながら、作業を再開する。

尿意の波を受け流しながらでは、思うように片付けもはかどらない。

床に積まれた本の山を動かすにはどうしても四つん這いになっての作業が必要であり、その体勢は、貯水量の限界に迫る乙女のダムにとって、もっともイケナイ姿勢のひとつだ。

そして——普段でも、気合いを入れて両手でなければ運べないような段ボールだ。おぼつかない足取りと、へっぴり腰でもち上げるはずもない。

まして、史香の左右の手のどちらかは、ほとんどひっきりなしに足の付け根を押さえ込むのに使われている。そんな状況で重い荷物など持ち上げようものなら、その結果は明らかだ。

押し寄せる波のタイミングを見計らって、なんとか両手を自由にし、ダンボールに手をかけ、力を籠めてはみるものの、太腿はぴつたりと寄せ合い擦り合わされ、大きく後ろに引けた腰で地から仕事なんて出来るはずもない。

「よ、い、しょ……ひあっ!？」

おなかに力を入れようとしたその反動だけで、きゅうんと女の子の出口が悲鳴を上げる。ぶくうっ、と膨らんだオシッコの出口から、びゅるっ、と熱い雫が押し出され、下着にじわっと広がってゆく。

「っ……………」

歯を食いしばって、それ以上の崩壊を押しとどめながら、史香は激しく腰を揺すり立てる。

何度も限界に近い我慢を経験して、鍛えられた括約筋も、酷使されすぎてすり減ったように力を失いつつあった。

ほんの少し力ただけでこれだ。思いきり力を入れようものなら、間違いなくこの場でオシッコが始まってしまうだろう。

は、は、と息が荒くなり、背中の汗がますますひどくなる。

下腹部は次第にずきずきと鈍い痛みすらともない、猛烈な尿意をさらに加速させてゆく。

「んあ……っ、あっあ……っ」

とうとうじっとしていることもできなくなって、史香はその場で大きく、行進のような足踏みまで始めてしまう。

「あ、っあ、まずい、ってば……っああうっ……」

どうしよう、どうしようと口の中で呟きながら、困惑と焦躁の中、余裕を失くした史香は足の踏み場のない狭いフローリングの上をぐるぐると歩き回る。

万が一にだって、オモラシなんて許されない。

いい歳してそんなことできるわけがない、という乙女としてのプライドだってもちろんあるが、ここは史香が長年かけて集めた、書庫なのだ。大切な本が山と積み上げられた部屋には、わずかな水気だって致命的なモノになりうる。絨毯でも敷いてあればまた話は別かもしれないが、床は一面のフローリング、勢い良く噴き出した水流は、一体どこまで広がってしまうか想像もつかなかった。

そして、本の山の中には親戚や学校から借りてきたり、預かっているものも含まれているのだ。もし我慢できなかったら、そんな大事なものでオシッコで水浸しにしてしまうことになる。

「っ……………」

部屋のドアを塞がれたまま、時間だけが過ぎ去ってゆく。

いよいよ切羽詰まった尿意は、史香の理性までも大きく追い詰めていった。

「で、……ちやう……っ」

きゅうんと疼く下腹部に、懸命に押さえ込んだ手のひらの奥。じわりと熱い感覚が染み出してゆく。既にハーフパンツの一部にまで色が変わった部分が見えるほどだ。

「あ……あ、あっ、……だ、め……っ」

ぱくぱくと、酸素を求めるように史香の唇が喘ぐ。

藁をもつかむ思いで懸命に巡らせた視線の端に、ちらりと、空っぽのペットボトルが映った。

恐らく、いま史香を苦しめているこの恥ずかしい熱水の素となったであろう、お茶の入っていた透明容器。

——最悪、あれなら床を汚さずに、オシッコを済ませる事ができるんじゃないか？

ラベルもはがしていないペットボトルの飲み口に、恥ずかしいところを押し付けて、猛烈な勢いで吹きだすオシッコをその中に注ぎ込んでいる自分——

普段なら思いつきもしない想像が、史香の頭をよぎる。

あり得ない想像に慌てて頭を振る史香だが、もはやそんな方法での排泄の誘惑すら否定できないほどに、尿意は限界に差しかかっていた。

健康な少女の身体の隅々を巡り、長い時間をかけて抽出された水分が乙女のダムを満杯にするまでに注ぎ込まれ、押さえこんだ下着の下で排泄孔はびくびくと蠢き、羞恥の噴出の瞬間のカウントダウンを刻み始める。

「あああ……っ！！」

史香が硬く身体を竦ませ、ぶるぶると腰を震わせる。

同時、少女の脚の付け根では、じわっとハーフパンツの染みが一気に広がり始めた。これまで色を変え、湿っていた程度だったそこが、一気に水気を増し、つつただけでしたり落ちそうなほどの水分を溢れさせる。

きゅうん、と強烈な圧力で、少女の理性を打ち破るかのごとく、自律神経が少女に排泄を命じる。脚の付け根に、猛烈な水圧が押し寄せ、おんなのこの出口が打ち破られる。

「だめエ……っ！！」

ハーフパンツの股間を硬く握り締め、史香は、強引にドアへと突進していた。段ボールを突き飛ばさんばかりの勢いで、無理やりドアノブを掴み、力任せに引き寄せる。

が。足元も確かめずに大きく踏み出していたことで、史香の爪先はちょうど不安定な本の山を踏んづけていた。

「っ！？」

半分斜めになっていたハードカバーの本は、ずるりと滑り、史香は大きく脚を広げる格好で前に倒れ込んでしまう。

きゃ、と悲鳴を上げる暇もない。

史香は反射的に、股間の手を離し段ボールを掴もうとしたが、ドアに押されて不安定になっていた箱は、大きく傾いてどさりと中身をまき散らした。

同時に、しっかり閉じ合わせていなければならなかったはずの足が、強引な開脚状態で本の山の上に直撃する。

転倒の衝撃と共に。

じゅ、ぶじゅっ、じゅぶぶぶじゅじゅじゅうううっ！！

猛烈な水飛沫の音を響かせ、脚の付け根の排泄孔が、凄まじい勢いで水流を噴射させた。ぷくりと膨らみ、そのまま大きく広がったオシッコの出口から、猛烈な勢いの黄色い奔流がほとばしり、下着の股間をみる間に侵食して、ハーフパンツを水浸しにする。

鍛えこまれた排泄器官が可能にする、完全遮断からの一斉放水。噴き出したオシッコの勢いで、文庫本の薄いページがぐしゃりと押し流される。

「あ、あっあああつ、あーっ……っ」

腰を打った衝撃と、耐え続けていた尿意の解放による快感が、がくがくと史香の腰を震わせていた。背筋を走り抜ける心地よさに呂律が回らず、思考までもがまとまらない。

はち切れんばかりに膨らんでいた中身を、思い切り股間の先端から噴き出させ、はしたなくも強烈な音を響かせる。膨らみ切っていた膀胱が、元の大きさに戻ろうと強烈な反動で収縮するのにもなって、史香のほとばしらせるオシッコの勢いは、まさに異常とも言えるほどだった。

常から、我を忘れて読書に熱中し、トイレに行きそびれて超時間の我慢を繰り返していたからだろうか。史香の排泄器官は、同年代の少女の平均を大きく超えて強靱なものであったのだ。それゆえ、我慢の限界を迎えた時の被害もまた、尋常なものではなかったのである。

じゅ、じゅじゅじゅつ、ぶじゅうっ！！

びちゃびちゃびちゃっばちゃちゃ……っ！！

「あ……や、やだ、あつ」

観る間に本は水浸しになり、床上にも水たまりが広がってゆく。なおもじゅじゅじゅと激しく壊れた蛇口のような放水音は、本の上に落ちた史香のホットパンツの股間だけではなく、広くおしりの上、腰上近くまでびしょびしょに濡らしてゆく。

史香は、這いずるように四つん這いになって、少しでも本の山から離れ、これ以上の被害を広げないようにする。しかし、ハーフパンツは既に限界を超えて水浸しであり、噴き出したオシッコは少しも吸収されないままびちゃびちゃと床に噴き付けられてゆく。手と膝をついたまま、高く上げたおしりからオシッコを迸らせる様子は、まるで犬か猫の用足しのようなのだ。

そうしてフローリングに飛び散ったオシッコは、これまで無事だった本の山にまで、飛沫を降り注がせていく。

まるで、集めた本に『これは私の！』とオシッコでマーキングをしているかのようだった。

「っ………」

いつ、果てるともなく続くオシッコで、大事な大事な本を台無しにしてしまいながら。それでも史香は、小さくヒクつく腰を抑えきれない。

じんじんと痺れるような甘い疼きは、そのまま乙女のダムが打ち震える、極限の我慢からの解放への悦びだった。

夏の午後、蒸し暑い部屋の中。むっとするほどのおんなのこの匂いを漂わせながら、密室と化した書庫の中で。

史香は、長年かけて集めた、大事な大事な本たちに、大量のオシッコを浴びせかけ続けた――

（初出：おもしろ特区 2011/8/11）

EXTENDED BODY:

◆原案

- > 部屋の掃除してたら部屋からでられなくなって、トイレ行きたかったのに行けなくなっちゃって、
- > 部屋の出入口を塞いでるガラクタの山を乗り越えようとして足を踏み外して、
- > ガラクタの山にダイブしながらおもしろい小説を切望します

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 我慢してトイレ掃除

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 12/23/2011 01:28:36

BODY:

昔どこかのスレでこんなネタを読んだ気がする。

<hr size="1" />

「は……んん…ツ……」

掠れた吐息を無理やり飲み込むような、熱を持った喘ぎ声が、冷え切った室内に響く。

少女が小さく肩を震わせ、身をよじるのに合わせて、ゴム底の上履きが濡れたタイルの上を擦り、耳障りな音を反響させた。

薄暗い女子トイレの中には、6名ほどの少女達の姿があった。手に手に掃除用具——デッキブラシやモップ、使い古された雑巾を持ったその姿から、

少女達の服装は、前時代的な体操服——昨今では出来の悪いコスプレA Vくらいでしか目にする事のなくなった、ゼッケン付

きの体操服に紺のブルマである。思春期の最中にある少女たちにとって、下着姿よりも羞恥心を刺激する服装だろう。

外気温 5℃を切る真冬のこの季節、とても相応しいとは言えない姿こそが、この場での『正装』なのである。

「や、あ……う……っ」

幼い表情を羞恥に曇らせ、俯いた頬を真っ赤に染めて。片手を壁について身体を支え、もう一方の手はぎゅうぎゅうと体操服の前を引っ張り下ろす。握り締めた濡れた雑巾が体操服を湿らせるのにも構わずに、まるで雑巾と一緒に服を絞っているかのようだ。

紺のブルマから伸びた健康的な素足は、寒さに鳥肌を浮かせるほど白く染まり、互いの膝を擦りつけるようにきつく閉じ合わされていた。

交互に浮く上履きのかかとが、忙しくタイルの上を擦る。点滅を繰り返す古びた蛍光灯に照らし出された影が、大きく左右に揺れ動く。

「だ…め……、……ちゃ、う……！！」

掠れた声と共に口を開閉させた少女の脚が、ぶるぶると震えだす。

とうとう両手で脚の付け根を握り締め、少女はずるずるとその場に腰を下ろしてしまう。しゃがみ込んだ脚の付け根に、きつく両手を重ね当て、ふらふらとおしりを左右に揺り動かす。実質、下着とほぼ変わらない面積の布地しか持たないブルマの股間、深くYの字に食い込んだ脚の付け根部分は、じわじわと濃く色を変え始めていた。

「んあ、んっ……」

「くう……っ」

その隣では、二人の少女達がモップを手に懸命に身体をよじっていた。床を磨く清掃の手はもう数分前から止まったまま、デッキブラシを杖のようにして、覚束ない足元を支えるので精一杯だ。

体操服の前を思い切り引っ張るようにして掴み、ブルマの股間を覆い隠すように押し当てている。少しでも人目を避けようとする羞恥心ゆえの行為だろうが、サイズぴったりの体操服でそんなことをしているため、背中側の体操服は大きくめくれ、素肌が大きく晒されてしまっている。

下半身にブルマだけを身につけたお尻は、不格好に後ろに突き出され、くねくねと左右に揺すられていた。

「んっ……あ……ふ……っ」

「ふああ……ッ」

ぎしぎしと、床にデッキブラシが擦れる。

その向かいでは、いよいよ危なくなった少女が崩れ落ちそうな腰を支えるため、両手で握りしめたデッキブラシの柄にまたがるようにして、ぐりぐりと棒の部分を股間に押し付けていた。

登り棒で覚えたての自慰行為を試すように、少女は交差させた脚の付け根に挟んだデッキブラシの柄をぐりぐりとねじつけて、身体を上下に激しく揺すり続ける。

他を見渡しても、少女達の姿はほとんど似たようなものだった。

「っ……あ、く……っ」

しかし、震えて止まりそうになる指先をきつく握り締め、俯いて、お互いに声を交わすこともなく少女達は懸命に作業を続ける。

その額には薄く汗が光り、作業のつらさを物語っていた。

道徳教育の一環として、トイレ掃除をカリキュラムに取り込む学校が増えている。

衛生管理の大切さ、労働の意味を知るため——多くの場合はそんな理由であることが多いだろう。多く、風紀の乱れとは『誰かがやってくれる』という甘えによるものだ。

汚いとされる場所を自分たちの手で掃除させることで、倫理観や衛生観念を学び、責任感や自覚を育て、公共意識の向上に繋げるわけだ。

この学院では、それをさらに推し進めた試みを行っていた。

すなわち——排泄への感謝。人間として当たり前の行為を、当然の場所で出来ることへの喜びを、学ばせることだ。

昨今の、恥を恥とも思わない風紀、倫理の乱れを正すため、学院では積極的にこの実習を取り入れている。

少女達は皆、限界までトイレを我慢させられたまま、このトイレ清掃を強いられているのだった。

このトイレ清掃当番は交代制で、2週間で1度ほどの頻度でやってくる。

当番の日においては、少女達は朝からトイレを使うことが許されず、一日中我慢を強いられることになるのである。『大』の方とはともかくも、尿意の方はそう簡単にはいかない。午前中には早くも数名が、午後を過ぎる頃には当番の少女達の大半が、耐え難いほどの尿意に身をよじり、制服の前を握り締め、腰をくねらせながら授業に臨むようになる。

そこからさらに全ての授業を終え、委員会やクラブなどの活動が終了するまで——3時間以上も焦らされて、ようやく清掃時間がはじまる。

他の生徒達が寮に引き上げ、ささやかな自由時間を楽しんでいる中、当番に当たった生徒達にはさらに地獄のような時間が待っているのだ。

清掃時間は季節によって変動もあるが、その少なくとも2時間を割ることはない。

この間、徹底的にトイレの汚れを磨きあげない限り、少女達はトイレの使用を許可されないのである。朝から塞き止められていた尿意は今や最高潮に達し、些細な刺激ですら限界を迎えるような状況だ。

そんな有様でトイレを目の前にしながら、排泄を許されない——これほどの地獄があるだろうか。いまにも猛烈な勢いで黄色い恥水を噴射させてしまいそうな排泄孔を片方の手で握りしめ、少女達は懸命に便器を磨き続けるのだ。まるで拷問にも等しい所業であった。

無論、粗相を許さないための制度も用意されている。

誰か一人でも、この清掃中にオモラシをしてしまえば、1回につき30分、さらに清掃時間は伸びる。一か所のトイレには6人が割り振られているため、最悪、最後の一人となった場合には2時間30分の延長が課されるわけだ。

さらに、清掃中にそうした不心得をしてしまったものは、反省文の提出と、翌日も再び清掃当番を続けなければならない。この間、少女たちの排泄は厳しく監視され、一切の不正は許されない。

トイレを使えることに深く感謝し、大切に、汚さないように使う事を学んでいくのである。

一見無謀とも思えるカリキュラムには、そうした意味が込められているのだという。

その効果は絶大だった。思春期の繊細な羞恥心をえぐるこの実習によって、当番となった彼女たちは文句どころか無駄口一つ叩くこともなく、床を、壁を、タイルの目地を、蹲って、背伸びをして、汚れた雑巾で一心不乱に磨き上げている。

日常生活に欠かせないものであっても、トイレ掃除に対して特別な思い入れを持っている者は少ない。その場所、衛生的な意味合いからも、トイレ掃除とは一般的に『罰』や『汚れ仕事』であって、喜んで引き受けられることは稀だ。

しかし、辛く苦しい試練の後に、ピカピカに磨き上げられた便器を跨いでするオシッコは、また格別なのだ。

我慢に我慢を重ねた果てに、少女達の下腹部をはち切れんばかりに膨らませる羞恥の熱水を、なにひとつ躊躇いなく便器の底へ向けてほとばしらせるあの瞬間の感動は、言葉にできないほどにとてつもない解放の悦びをもたらすのである。

頑張れば、いい事がある——排泄欲求という不可避の生理現象を通じて、それを直接、少女達の心と身体に叩きこむこの実習は、大きな成果を上げ、いまや社会現象へとなりつつある。

「っ……はあ、ああっ……、は、あっ…！！」

バケツを脚元に置き、少女の一人はブルマを思い切り引っ張り上げ、脚を踏み鳴らし続けていた。紺色の布地を股間に食い込ませて、いまにも溢れそうに水圧を高め続ける出口を辛うじて塞き止めているのだ。

限界まで膨らんだ乙女の水風船に圧迫されて、排泄孔はいつ弾けてしまってもおかしくない。このままバケツの上を跨いでオシッコをしてしまいたいと言う欲求に抗いながら、直接、手で押さえてしまうこともできないほどに敏感になっている下腹部を抱えながら、少女は懸命に息を詰め、腰を震わせる。

「あ……う……」

少女達のつぐんだ唇からは、時折、吐息と共に悩ましげな喘ぎがこぼれるばかり。掃除は遅々として進む様子はない。

時刻は 7 : 4 0 。

清掃時間は、あと 1 時間半以上も残されていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 公園の前で

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 12/23/2011 01:47:59

BODY:

たんっ、たたんっ、左右に踏み交わされる羞恥のステップ。

スカートを思い切り握り締めて、噛み締めた唇。前屈みの姿勢で後ろに突き出された腰は艶めかしくねり、タイツに包まれた太腿は一時も休まることなくすりすり擦り合われている。

（はやく、はやくっ、早く早くはやく、はやくしてえッ……！！）

切なげな表情を浮かべ、息も荒くぎゅうぎゅうと身体をよじりながら、和美はじっと横断歩道の先へと視線を凝らす。もう何十回確認し直したかもわからない、歩行者信号の色はやはり赤のまま。

脚の付け根で、酷使され続けた括約筋が限界を訴えている。ぱんぱんに張り詰めた下腹部の奥、はち切れんばかりに膨らんだ乙女の水風船が、ぶるりと震えた。

「っ……あ……」

じゅんっ、と下着の奥に滲む感触が見る間に湿り気を広げてゆく。断続的に収縮と弛緩を繰り返す排泄孔に伴って、恥骨に走る甘い痺れが耐え難い排泄の誘惑を繰り返す。

（だ、だめ、だめ、我慢っ、我慢っ、っが、まん、しなきゃ……っ！！）

その場にしゃがみ込んでしまいたくなるのを和美は歯を食いしばり、耐えた。

形振り構わず排泄の出口を押さえこみ、ありったけの力を込めて握り締める。行き場を失くしてなお暴れまわる尿意を、なんとか身体の中へと押しとどめようと、残りわずかな気力を振り絞る。

おなかの中で、もうこれ以上膨らみようのない場所が、むりやり引き伸ばされていくような寒気と不快感——そしてそれを遥かに上回る、猛烈な排泄欲求が押し寄せる。

「ん、あ……っ」

中腰、前屈みの前傾姿勢のまま、交差させた膝を小刻みに震わせて。

津波のような尿意を、奇跡的な集中力で乗り越えることができた。

(っは、はやく、はやく、っ、はやく、トイレ……っ！！)

和美は切り替わった信号と共に、横断歩道を走り出した。全速力とはお世辞にも言えない、内股へっぴり腰のよちよち歩き。一歩ごとに揺れる身体と共に、たぶんたぶんと下腹部の中身が揺れて波打ち、脆く弱り果てた水門へ危険な振動を響かせる。それでも、和美は前へ前へと一心に目的地を目指した。

ここから一番近い『オシッコの場所』——市民公園の公衆トイレへと。

よろめく足で何度も立ち止まり、スカートをぐいぐいとねじり上げ、時にはたまらずしゃがみ込んでしまい、踵をタイツの上から直接股間に押し付けて。じゅっ、じゅう、と溢れだした熱い雫で、黒タイツ奥の下着を湿らせながら。

(と、トイレ……トイレ、はやくッ、トイレ……ッ)

股間にちりちりとむず痒い痺れが走る。じわじわと容赦なく押し寄せる尿意は果てしなく、覚束ない脚がもつれそうになる。スカートの中の被害は甚大なもので、和美の足元には点々と、歩いてきた方向を指し示すように、水滴の痕が続いていた。

タイツの色合いが黒だったことで、その被害は辛うじて人目に止まらないものではあったが——

「は、はっ、あつ……くう、あ……んんっ……」

もじもじ、くねくね、まるで子供のように全身で尿意を訴えながらの、おしっこを我慢の行進。気の遠くなるほどの間、もう駄目とくじけそうになる心を必死に奮い立たせて、懸命の我慢を続けてきた和美だったが——

ついにその目的地、市民公園の入り口へと辿り着いたところで限界が来た。

「あ、っあ、あ……！！」

待望の、おしっこのできる場所——公園の公衆トイレ。

しかし、その建物まではまだ遥か遠い、公園の入り口で。堪え続けてきた尿意は、限界を迎えてしまった。

(だ、ダメ、まだダメっ、トイレじゃ……っ、……ここ、トイレじゃないのに……っ！！)

しかし、そんな叫びも空しく、少女の股間にはもはや辛抱できずにじゅう、じゅじゅじゅう、と熱い雫を噴き上げる。

和美は鬼気迫る形相で、公園入り口のすぐ横にある、茂みの中へと駆けこんだ。

「ッ、〜〜〜……っ！！」

周りを見回している余裕などない。スカートの前裾を絞りあげるように捲ると、もう一方の手でタイツの上から下着の股布部分を掴んで強引に下へ引っ張った。

深く下ろした腰の下、わずかに少女の肌が覗くと同時、和美の秘所から猛烈な勢いで水流が迸る。

「っあ、……っ」

しゃがむ暇すらなく始まってしまったオシッコは、地面に大きく孔を穿つ勢いで放たれた。

蛇のようにくねる水流は、膝のあたりに引っかかった下着にまで飛沫を飛ばし、じゅじゅじゅうと焼けた鉄に水を掛けるような音を響かせながら地面に叩きつけられる。

身体の底、一番大事な場所に開いた、恥ずかしい女の子の孔から、溜まりに溜まった熱水が噴き上がる。

「はあああ……ああ……」

大きな溜息と共に和美の背筋を、尿意から解き放たれた解放感が駆けあがってゆく。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 01/02/2012 22:29:20

BODY:

梅雨晴れの空に花火が鳴り響く。

開会から２時間ほどが過ぎ、河川敷の市営グラウンドには、続々と人々が詰め掛けていた。東西に築かれた紅白の入退場門にはジャージや体操服姿の少年少女達の姿が多く見られる。

「がんばってね、二人とも」

「うん。応援してるからねっ」

早朝から場所取りをしていると思しき家族連れが観客席をにぎわせる隣では、選手と思われる少女達が今日の意気込みに闘志を燃やしている。

『……プログラム９番、学校選抜対抗リレー・予選に参加されるかたは、入場門前に集合してください』

放送が呼びかける中、入場門前には既に参加選手たちが列を作っている。

行儀よく整列し、体育座りをするのは皆同年代の少女達だ。上半身だけジャージを羽織り、その裾からは学校指定の白いハーフパンツ。胸元には所属を示す色とりどりのリボンが覗く。

もうすぐ出番とあって、入場待ちをする少女達の間にはかすかな緊張感も感じられる。不安に眉を下げている少女を、隣の少女が励まし、お互いに頬笑み合うといった微笑ましい光景も見られた。

が——

「……………」

そんな中、体育座りの膝を小刻みに揺らし、不安に顔を曇らせている少女が一人。

(……こんなに待たされるなんて……)

丈の短いハーフパンツのせいで、ジャージから直接伸びているようにも見える足を小さく揺らし、彩香は一人後悔していた。そっとジャージの上から、重くなり始めた下腹部をさすり、小さな溜息をつく。

(これなら、あのまま並んでたら間に合ったかも……)

リレー予選の選手呼び出しがはじまったとき、彩香はトイレの順番待ちに並んでいた。その時の彩香の前にはあと2人を残すのみで、あと少しすれば順番が回ってくる所だったのである。

後ろ髪を引かれる思いを断ち切って、諦めて列を抜けて来たというのに——かれこれ10分近く、いまだに彩香の出番はやってこない。

グラウンドでは相変わらずひとつ前のプログラムの障害物競走が続いていた。進行の都合で競技が長引いてしまっているのだが、トイレを諦めて素直に指示に従っている身としては文句の一つも出ようというものだ。

「ん……」

ももとの尿意に加えて、いよいよ自分たちの出番だと言う緊張感も、下腹部の張りに拍車を掛けているようだった。こんな状態でリレーなんて、不安がよぎる。

(……ん……っ)

じんっ、と軽く出口をノックする尿意に、彩香は小さく腰を揺する。

行儀よく順番を待つ体育座りの列の中、一人落ち着かない様子の自分がみっともなく感じられた。

「はあ……」

もう一度、溜息がこぼれる。まさか、漏らしてしまうなどということはないだろうが——決して万全の体調とは言えない。こんな状態で思い切り走れるかという甚だ疑問であり、リレーの順位にだって影響があるかもしれないのだ。せっかく選手に選ばれているのに、こんなことでつらない成績を残したくなかった。

「……志穂ちゃん、間に合ったかな」

一緒に列に並んでいた友人が、せめて自分の分まですっきりしてられるようにと心の中で思いながら、彩香はもう一度、張り詰めたおなかを撫でる。

(どれくらいかかるんだろ……)

競技が始まったとしても、すぐに彩香の順番ではない。

リレーに参加するのは市内の5校から代表2チームずつで、1チームは初等部の4年生から中等部まで、学年ごとの6人が

第一走者からアンカーまでを務める。つまり競技に出場するのは男女でそれぞれ計60人だ。

予選ではグループを2つに分けて行い、各予選の上位2校が決勝進出となるのだが――

彩香の出番は第二グループ、走順は4走目であり、まだまだ出番は先になる。

「……………」

どうせ並ぶなら――これもトイレの順番待ちならいいのに。

高まる緊張感の中、彩香はそう思いながら、列の前方を見た。

しかし、この列の先にあるのはトイレではなく、大勢の応援の交わされる晴れ舞台だ。

リレー選抜の学校代表として参加するのに、そんな最中に恥ずかしい格好はしてられない。

ぐっと奥歯を噛み締め我慢のしぐさを飲み込んで、彩香は入場行進促すアナウンスを待ち続けるのだった。

そして15分。今度はグラウンドの真ん中で、相も変わらず彩香はじっとオシッコを我慢が続けていた。

ただし、いま待っているのは競技の出番。リレーの走者の順である。

トラックに出て、スタートラインに続々と並ぶ第1グループの走者たちを、放送と観客の声援が後押ししている。彩香もやがて彼女達と同じようにトラックに並び、あれと同じバトンを受け取ることになるのだ。

もうすぐ出番――そう思っただけで何度も首を振って、頭の中からトイレの事を振り払おうとするが、下腹部を重く膨らませる尿意はじんじんと疼き、無視することを許さない。

「んっ……………」

順番が来るまで待つよう指示された体育座りの姿勢も、オシッコを我慢するには向いていない。脚を揃えて地面に直接腰を下ろしたこの耐性は、曲げた膝で下腹部を圧迫し、さらに股間の大事な場所を無防備に外気に晒してしまう。ちょうど、和式便器で用を足す姿勢でそのまま後ろに尻餅をついたような格好に近いのだ。

地面の冷たさにモジモジと腰をよじり、そっと回した手で太腿の後ろからハーフパンツの股間部分の布地を掴む。わずかに汗ばんだ手のひらは、一向に休まる様子のない尿意の波を耐え続けているためものだった。

(……オシッコ……オシッコしたい……)

早くトイレに行きたい。これが普段の授業中なら、手を上げてでも教室を飛び出しているだろう。ふー、ふー、と荒い息が体操服の胸元に埋めた口元から漏れ、強い衝動をますます加速させる。

第1グループの第1走者がライン出揃い、パン、とスタートのピストルが跳ねる。一斉に駆け出す一年生たち――が、すぐに再度、ピストルが2回鳴らされた。フライングの合図だ。

走者は呼び戻され、再度ラインへと並ぶように指示が飛ぶ。気合い十分で走りだした選手の中には、かなり遠くまで走っていった者もあり、戻ってくる間にもまた時間が浪費されてゆく。

それらの全てが、彩香には鬱陶しいほどにもどかしい。

(……はやくしてよ……！！)

彩香にとっていまの待機列は、待ちに待ったリレーの晴れ舞台を臨む緊張の瞬間ではない。一刻も早く、自分の走る順番を終えて、そのままトイレへと全力疾走するための順番待ち行列の延長に近いのだ。

オシッコを我慢したまま競技に参加することが、真剣なはずの他の選手達を侮辱しているような気がして、彩香は羞恥と共に申し訳なさずらを感じてしまう。

だが、いくら集中しようとしても、下腹部にはずしりと重いほどに恥ずかしい熱湯が詰まった感覚が膨らみ、大事なところの出口をしきりにノックする尿意はおさまらない。

「ん、はぁ……っ」

吐息と共にぶるぶると腰を揺すってしまい、隣に居た選手の少女が少し不審げに彩香を見る。

再度ラインに並んだ選手達が、ピストルの音と主に、今度こそ一糸乱れぬスタートを切る。空気を叩く空砲の音色に、じんっ、と彩香の下腹部の中の液体にも波が走るようだった。

まるでゴールまでのカウントダウン。一周 400m のグラウンドを駆ける選手たちは、まるで大きな大きなストップウォッチの文字盤を進む針のようだ。あの針がグラウンドをあと何周したら、彩香の番が回ってくるのだろう。

（えっと、あと 5 人だから…… 5 回で……私の前に 3 人いて……あ、でも全員走り終わるまでグラウンド出れないし……、それに、入賞したら順位発表もあって…、っ…だ、だから……）

ちゃんと考えればすぐに分かるはずの、簡単な計算もうまくできない。ちくちくと下腹部を刺激する尿意は、彩香の頭から冷静な思考力も奪いつつあった。

前に居た選手たちが、第二走者としてバトンタッチのために出走位置へと向かってゆく。

彩香も立ち上がりその後に続いた。たぶんたぶんと揺れる恥ずかしい液体を感じながら数歩を歩いて、また体育座り。

ハーフパンツと下着の下に隠されたオシッコの出口が、ひくんと震える。

（あと 3 人と 3 人で、6 人だから…… 1 周 1 分として…… 6 分で……）

彩香は忘れている。ついさっきまで自分が並んでいたトイレの事を。時間の経過と共に続々と増え続けるトイレの順番待ちの行列が、いまや数十メートルにわたって個室のドアから伸び続けている事を。

このグラウンド中央、リレー予選グループの出走順番待ちなど、トイレ前の大行列に並び、個室に辿り着くまでの耐え難くも苦しい、長い長い地獄のような時間に比べれば、ほんのささいな予選会に過ぎないことを。

女子選抜リレー・予選の第 2 グループは、彩香のチームがトップで予選通過、決勝進出を決めて幕を閉じた。

前評判を覆す結果をもたらしたのは、彩香の出した記録によるところが大きい。第四走者の彩香の時点で、トップとの差は 10 秒以上。チームの順位は 5 位だった。それを彩香はたった一人で一気にごぼう抜きして、1 位まで躍り出たのである。

チームはがぜん勢いづき、そのままトップを独走。かくして彩香達のチームは予選にも関わらず、順位発表の際には会場も喝采を持って出迎られることとなった。

バトンタッチの時に、次走者を追い抜きかけてしまったのも、勝負にかける意気込みゆえの御愛嬌。放送による応援が観客を沸かせ、彩香には多くの歓声も飛んだ。

（……う、あのままおトイレ行けてればよかったのにっ……）

しかし、実際のところは違う。

競技の直前、彩香は緊張で急激に高まった尿意に、居ても立っても居られないほどに追い詰められていたのだった。もはや走順

までは猶予がなく、トイレに行くどころか前押さえすらしてられない状況。

ほとんど無我夢中でバトンを受け取り、リレーの事もほとんど忘れてそのまま真っすぐにトイレめがけて突っ走ったというのが真実である。

そう。バトンを受け取った瞬間、彩香の頭は真っ白だった。

（出ちゃう！！ オシッコ、オシッコ出ちゃう！！）

いまにもしゅるしゅると音を立てそうなハーフパンツの奥を必死に押さえ込みながら、何もかも放り出して一目散にトイレを目指した。恥も外聞もかなぐり捨てての全身全霊の疾走がもたらした、空前の大記録だったのだ。

だから、バトンタッチの事も忘れてトイレを——『オシッコのできる場所』目指していた彩香を、掴むように引き留めたチームメイトの次走者を、彩香はまるで睨むように見てしまったほどだ。

幸い、その視線は勝負にかける必死さということで理解して（誤解して）もらえたようだが——問題はそんなことではない。

結局、あんなにしまったオシッコを、一滴も出すことができないまま、彩香はグラウンドに残り続けなければならなかった。

（んあうっ……だめ、ガマン、我慢っ……）

排泄孔を閉ざそうとする懸命の努力により、おしっこは辛うじて下着を湿らせた程度にとどまり、ハーフパンツにはわずかな染みを作るのみで押しとどめられている。しかしそれは同時に、出したくてたまらない羞恥の液体を下腹部の中に詰め込み続けているのと同じ意味だ。我慢を続ければ続けるほど、彩香の下腹部を膨らませるオシッコの量は増え続けてゆくのだ。

「お疲れさま。カッコよかったよー」

「っ……！！」

退場門で出迎える香織や貴音たちの声に応える余裕もなく、彩香は彼女達を振り切るようにしてトイレへと走った。

時刻は間もなく11時半。プログラムの進行が遅れているため、昼の休憩は12時を回ることが確実視されていた。

三度、管理事務所横トイレのの長行列を通り過ぎ、もうひとつのトイレ——仮設トイレに向かった彩香は、その大混雑に顔を歪める。

「んっ、あ、あうっ」

内股に揃えた脚の付け根をきつく握り締め、絶望に傾いてしまいそうな心を懸命に繋ぎ止める。半ば以上予想できたこととはいえ、こうして直接、目の当たりにすると、数十人を超えるトイレの順番待ちの光景は少女のか細い希望を折り砕くのに十分だった。

（っ……が、がまん、がまんっ……）

また、脚の付け根にじゅじゅ、と熱い雫を滲ませてしまいながら、それでもものろのろと列に並び始めた彩香だった。

およそ——40分。昼の休憩の半分ほどを過ぎて、彩香はようやく、仮設トイレ待ちの長行列の半分以上を過ぎた、列の先頭近くへとやって来ていた。

これまでに4回、猛烈な尿意の大津波があった。

一度目はうずくまってなんとか耐えた。二度目は思い切りハーフパンツの上から握り締めた下着の奥に、じゅうっと思い切り黄色い雫をちびらせてしまった。三度目はしゅるしゅると漏れ出す水流を押さえ込めず、膝の裏や太腿の内側にせせらぎを滴らせてしま

った。

そして四度目は体操服のほとんどをびしょびしょに濡らすほどになり、漏らしたオシッコは身体の前で握り締めた体操服のシャツにまで薄黄色い染みを広げている。

（ああ、あはやく、はやく、きちゃ、また、来ちゃっ……！！）

もはや崩壊寸前の水門は、たった今凄まじい大波を乗り越えたばかりだと言うのに、早くも5回目の大津波の予兆を知らせている。

行列の先、彩香の前にはあと6人の少女がいた。うち3人までは、彩香と同じかそれよりも危険そうな状態で、残りの二人もしっかりと体操服の股間に濡れ染みを広げている。

少女達はみな、ドアノブの赤い『使用中』マークに閉ざされた仮設トイレのドアを睨みつけ、一刻も早くそこが開いて、自分の順番が近づく事を渴望している。

「あとちょっと、あとちょっと、あとちょっとだけえ……っ」

5度めの尿意の大津波に怯える彩香は、目の前の残りわずかな順番待ちの人数を数えて心を慰めようとする。これまで4回、なんとか耐えてきた。あと6人、2人待つ間に1回、大津波が来るとして、あと3回——なんとかそれだけ、我慢が続ければ、トイレに入れる。オシッコができる。4回目と5回目の大津波の間にわずか20秒しかない現実を無視した計算だったが、そうでも考えなければ今この場で、力尽きた身体は勝手にオシッコを始めてしまうだろう。

必死に脚の付け根を締め付け、数を数えて残り時間のカウントを始める彩香。

だが——そんな彩香の前、列の先頭で騒ぎが起こる。

「な、なによ……これじゃ、使えないじゃないっ……」

ヒステリックな叫びが聞こえてくる。そう。仮設トイレの一つが故障したのだ。

（え……？）

あまりのことに、彩香は我慢に腰を揺することも一瞬忘れ、ぼかんと口を開けていた。

あまりに多くの少女が詰めかけ、次々に溜まりに溜まったオシッコの処理をし続けた結果、過剰使用に処理能力の限界を迎え、トイレのタンクが故障、汚水が溢れだしてしまったのである。その有様は惨憺たるもので、とてもでは使用に耐えなかった。中には列が無くなったことで、少しぐらいのトラブルならと壊れたトイレに近づいた『豪の者』もいたが、個室の惨状を一瞥してすぐにそれを諦めていた。

ここを使うくらいなら、外でオシッコした方がまし。壊れたトイレは、それくらいに思えるほどのひどい有様だった。

少女達の多くはそれを叫び、嘆き、文句を言って——それでもものろのろと、絶望に彩られた表情を見せながらも、懸命に他の列へと並び始める。さらに長く伸びる行列に、少女達の間から呻きともつかない喘ぎがこぼれる。

そんな中、彩香は動けなかった。

（う……嘘……嘘よね、冗談、よね？ だって、だって、ずっと我慢して……こんなに並んで、やっと、もうすぐ、オシッコ……。できる、のに……）

まさか、まさか。不安に駆られながらも、彩香は目の前の事実から目をそらそうと必死だった。激しく下半身、脚の付け根を押し揉みながら、その場を離れられない。

この後、昼休憩のすぐ後に、彩香達のリレー決勝が始まるのだ。

昼休憩は残り15分。これまで40分以上も並んだのだ。仮設トイレの一つを失ってさらに長くなった列に並んで、自分の番が

回ってくることなどありえない。

あのまま、トイレが壊れずにいれば、もうすぐ、オシッコができていたのに。個室から出てきた子たちのように、天上の喜びを垣間見るほどの解放感を味わえたはずなのに。どうして、よりによって——いくつもある仮設トイレの、自分の並んでいる場所だけが壊れてしまうのか。

運が悪いとしか言えないが、不運なんて言葉で片付けられていいものではなかった。

彩香は継るように隣の列を見る。が、他の仮設トイレを前にして、並ぶ少女達は一様に視線をそらせ、列をぎゅっと詰めるばかりだ。一人二人ならともかくも、トイレひとつが丸々使えなくなるとなると、彩香たちの列を全員、どこかで受け入れなければならなくなる。

ここまで長い間辛抱した上に、それは誰も彼も願い下げだったのだ。

順番待ちの先頭に居た子が悲鳴を上げ、その場にしゃがみ込んでしまう。とうとう待ち切れず、その場でオモラシを始めてしまったらしい。その悲痛な叫び声にも、列は動かない。まるでスクラムを組むように強固に連結した順番待ちは、間に異分子を挟みこむことを拒絶していた。

うーっ、と口の中でうめきをあげながら、別の少女が彩香の隣を通り過ぎてゆく。怒りよりトイレを優先した。隣の列の一番後ろまで走って行って並んだのだ。

(……そ、そんな……)

その流れはもう決定的だった。並ぶ場所を失い、更なる“難民”となった彩香たちは、他の列の一番後ろに並ばねばならない、という約束が出来上がってしまったのだ。

もたもたしている少女たちを置いて行くように、まだ余力のある何名もの少女達は他の順番待ちの列に並び、動けない少女達を取り残してゆく。

そうして——お昼ご飯を食べることもないまま、昼休憩のほとんどを費やしてなお。

彩香はついにトイレへと入ることは叶わず、予選を終えた時を遥かに上回った尿意を堪えたまま、リレー決勝へと向かう羽目になる。

レースの開始と同時、おチビりを始めてしまった彩香は、4番目の走順でスタートラインに並んだ瞬間に思い切りしゃがみ込んでしまい、足元に猛烈な水流を噴き付けてしまう。

驚く他の走者やチームメイトを余所に、ほとんど無意識のまま、バトンを受け取ろうとした彩香は、そのままへっぴり腰のよろよろ歩きで、オシッコまみれの手を伸ばして、立ち上がろうとして——そこで限界を迎えた。

溜まりに溜まった尿意を進らせながらも、選手としての責務を果たさんと前に進もうとして。彩香は、そのままばちゃばちゃと恥ずかしい乙女の水流を、トラックのコース一面に撒き散らしてしまったのである。

競技はそのまま中断し、予選の大活躍とは一転、クラスをどん底の最下位へと叩き込むという結末を迎えたのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・5

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 01/02/2012 22:30:16

BODY:

仮設男子トイレと女子トイレの間——順番待ちの行列でごった返す周囲の中に、奇妙な空隙が出来上がっていた。

人目を憚らずに体操服の上着を引き下ろし、あるいは手のひらで張り詰めた下腹部を撫でさすりながら、小さく下半身を左右に揺り動かす。少女達の我慢はいよいよもって限界に近い。

しかし、彼女たちはお互いに視線を交わしながらも、一歩が踏み出せずにいる。

仮設トイレの個室は壊れているわけでも、隣の女子トイレのように使用禁止とされているわけでもない。

「っ……………」

また一人。欲望に餓えたような視線でちらりとそちらを窺っていた少女が、悪魔のささやきを理性でねじ伏せるようにして顔を反らし、俯く。

長い長い、女子用仮設トイレの順番待ちに並ぶ少女達はしかし、見ないようにしているその方角へ、我知らず意識を向けずに

はいられない。

——男子トイレ。

誰もいない、誰も並んでいない、混雑の中の空白地帯。今すぐにでも、溜まりに溜まった下腹部の下劣な欲望を叩きつけるように排出できる場所をすぐ前にして、しかし彼女達はそこから顔をそむけ、脚を遠ざけ、あまりにも無謀と言える、トイレ順番待ちの長蛇の列に並び続けている。

「うあ……う……っ」

顔を赤く、体操着の前を押さえ、シャツの裾をぐいぐいと引き伸ばすようにして掴み、足踏みをし、腰を揺らし、しゃがみ込み、大事な場所をかかると押し当てて擦りつけ。はしたない姿を公共の視線に晒してまでも、意固地なまでにそこを——すぐ目の前のトイレを無視して我慢を続けようとするその理由は、明白だ。

そう。なにしろそこは——男子トイレなのだから。

いや。この時点ですでにその区分けは意味を持たないだろう。少女達がちらちらと横目で見つめては顔をそむけるその一角は、正確には『元・男子トイレ』とでも言うべき区画なのだ。

およそ10分ほど前に、放送を通じて運営から、男子トイレの一部を共用として使えるようにした旨の通達があった。それにより、男子側の仮設トイレのいくつかは正式に女子トイレへと変更されたのである。

あくまで男子トイレ側にあるとはいえ、そこは彼女たちも使っている、女子用のトイレとなったのである。

河川敷のグラウンドに起きた、大量同時多発トイレ我慢現象——その危機は午前を過ぎ、昼休憩をはさんで午後を迎え、いよいよその深刻さを増していた。

女子トイレの混雑と、それに伴う順番待ちの長期化に伴う大量の『おトイレ難民』の発生は留まる事を知らず、いまや会場の半数以上の少女達がトイレを求めて苦悩する事態となっていたのである。

急遽の会場移転に伴う、設備不足——大会の規模・参加選手や観客の総数に対して十分なトイレが設けられていなかったことが、この混在の主要因であった。

無論、これらの事態を運営側も黙って見ていた訳ではない。近くのトイレを案内し、本来は運営関係者のみに用意していたトイレを急遽女性用とすることなどで対応を図っていたが、それでもなお混雑は解消されるには至らなかった。なにしろ新たに追加されたトイレは個室にしてわずか2つ。おまけに大会関係者の多くも同じようにトイレの少なさに苦慮していたのだから、焼け石に水どころか実質効果はないに等しい。

と言って会場から最も近いトイレまでは20分近くも歩く必要があるとなれば、これまた解決策とは言い難かった。見学・応援に集まった者ならばともかく、参加者の多くは複数回競技に参加する状況であり、プログラムの進行上長時間会場を離れるわけにはいかないのだ。移動だけで往復40分も要するトイレまで行っている余裕などあるわけがない。

その上、この混雑では20分を歩き抜いた先のトイレでも、同じように順番待ちの行列ができていることは予想に難くない。そしてそれは事実であり、一度会場を離れてトイレに行けば、1時間以上を浪費することは確実なのである。

既に我慢の限界に近い『おトイレ難民』の少女達にしてみれば、そんな苦行——長い長い旅路に耐えることはとてもではないが考えられなかった。

そのような状況でさらに緊急事態、苦肉の策として取られたのが、この男子トイレの一部開放だったのだが——結果としてみれば、それはさらなる悪循環を生みだすに過ぎなかった。

その理由として、参加選手の多くが思春期の少女であったことも関係する。

もともと、大会参加者の多くが思春期の学生であることを鑑み、彼等のプライバシーを尊重するために仮設トイレはただの野ざらし・共用ではなく、男女の区別を明確にして設置されていた。

それを急に『こっちの男子トイレも女の子が使っていいですよ』と言ったところで、抵抗なくそこへ入っていける少女は少ないであろうことは、厳然たる事実である。男子校の学園祭などでも生じる事態だが、建物の中のまともなトイレですらこうなのだから、仮設トイレで何をいawanやであろう。

そこはももとの「女の子のトイレ」ではなく、さっきまで男性陣が利用していたトイレなのだ。それだけでも人一倍繊細な思春期の少女達には使い難い場所だというのに、他にも足を遠のかせる理由がある。

仮設男子トイレと女子トイレには、おなじく仮設の洗面所と共に、パーティションが設けられていた。参加者のための最低限のプライバシーを守るための仕切りは、仮設トイレの男子側と女子側を真ん中で区切っている。

当然ながら、解放された個室は男子トイレの側にある。

そのすぐそばには男子の順番待ち列が、人数としては少ないながらもしっかりと存在していた。同じ男子トイレ側であるのだから、当然のごとく彼等の視線を遮るものはなく、そちらのトイレを使おうとしようものなら、彼等からたちまち好奇の視線を向けられることは間違いないのである。

まして、その前に順番待ちの行列を作るなど、なまかなことで許容できるものでなかった。

少女達にとって、よほど切羽詰まっているのならともかくも、異性の文字通りの眼の前でトイレの列に並ぶことは、強い抵抗を覚えるものだったのである。

急遽『仮設・女子トイレ』として設定された『元・男子トイレ』。そこを使うためには、耐えがたい尿意に身をよじり、悶え、長い長い順番待ちをしている姿を、異性の前にさらさなければならないのである。

しかもその上、男子トイレ側には利用人数を稼ぐため、個室とは別に「小用」便器が別に設けられていた。こちらは個室と背中を向け合うように、小用便器がほぼむき出しで屋根の下に並んでいるだけの簡易なもの。

男子達がこちらを使うとなれば少女達に背中を向けて、そのまま用を足す格好になる。

すぐ隣で、仕切りもなく男子たちがオシッコを済ませているのを見せつけられながらとあっては、少女達もたまったものではないことは、少し考えれば自明だった。

結果、解放された男子トイレは、男性陣にも、少女達にも使われないまま、ただ利用者のない無人の空隙となるばかりだったのである。

運営側の措置は、結果的に利用者全体に対するトイレの絶対数を減らしただけにすぎなかったのだ。

——こうしてみると、男性用のトイレも本当に数が足りていたのかは疑わしい。

そもそも、男性であれば、たとえ成人であっても小用はほとんど気にすることなく屋外で済ませることができる。トイレが使える状況でわざわざそちらを選ぶことはないだろうが、その心理的な抵抗は、女性に比べれば遥かに小さなものだ。

しゃがむ事もなく、ものの1分で用を足してしまえる上に、後始末はぶるぶると振って雫を切る程度で済んでしまう男性や少年たちが、きちんとトイレを使うというルールを順守していたのかは疑わしい。

しかし。少女達にしてみればそれは大きな差だ。

男の子と違って、女の子はいくら切羽詰まっても、気軽にオシッコをしてくる訳にはいかないのである。いちいち下着を下ろし、しゃがみ込まなければならないし、終わったあとだって腰を振ってはいおしまい、という訳にはいかない。後始末のためのティッシュは必須だし、そうなれば当然、ゴミまで出してしまう。物理的にも心理的にも抵抗は段違いである。

なによりもその、心理的な抵抗の壁——『お外でオシッコをする』という事実のもつ重みが違うのだ。

多く常識として、女の子であれば、トイレの外でオシッコなどという行為は、よっぽどの理由がなければ選んではならない、してはならない恥ずかしいことであることを教えられる。

だからこそ、少女達は恥ずかしい思いをしながらも——『これからあそこでオシッコをする』と分かってしまう事を敢えて許容しながらも、ながいながいトイレの順番待ちに並ぶのだ。

だがいまや、この河川敷のグラウンドにその常識、倫理を貫く事は果てしなく難しい。多くの少女達がその下腹部を恥ずかしい液体で満たし、もじもじくねくねと腰を揺すりながら、希少なトイレを探し求め、飽和状態の大行列を前に耐え続けている。

遠からず全てが破綻することは、目に見えていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 河川敷の運動会・6
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 02/17/2012 23:46:09

BODY:

「うわ……混んでる……」

仮設トイレ前の混雑を目にし、真紀は思わず声を上げてしまった。

真紀は選手としてではなく、放送委員として大会の運営に関わっていた。運動会ということで体操服にこそ着替えているが、その実質は肩に羽織ったジャージの腕章が示す通り、裏方である。

市内の町内会が対抗する大会だけにその規模は大きく、下っ端の真紀も朝からあれこれと走りまわっていた。開始から3時間、ようやく時間を作ってやってきたというのに——トイレはとてでもないが並んでいられそうもないほどの大行列だったのである。

それは、単純な尿意だけの問題ではない。確かに朝から一度もトイレには行けていないが、流石にそれくらいで漏れそうになってしまうほど、真紀も我慢ができないわけでない。

「どうしよう……10分で戻らなきゃいけないのに」

問題は、大会役員としての時間の制約だった。放送委員の真紀は、大会の実況を担当していた。その出番がすぐ目前に迫っているのだ。

「……無理……だよな……」

確認するように視線を巡らせる真紀の運動靴の爪先が、グラウンドの地面を擦る。

ずらりと並んだ列は、どう控えめに見ても一番後ろに並んだ自分の番が回ってくるまで30分近くが必要となりそうだった。忙しい中、無理を言って抜け出してきた身としては許容できない時間である。

困惑している真紀を余所に、トイレの行列には次々と選手や観客たちが並んでゆく。みるみるうちに伸びてゆくトイレまでの距離を目の当たりに、真紀は思わず足踏みを強くしてしまう。

それは、真紀の思い込みというわけではないようで、

「……ねえ、こんなの待てられないよ……。あっち行ってようか？」

「うん……でも、あんまり離れすぎちゃって戻って来れないかもしれないし」

真紀たちのほかにも、この光景に戸惑う少女たちの姿はちらほらと見受けられた。

不安げな顔でやってきた少女たちが、仮設トイレ前の行列を見て落胆した表情を見せ、なにかを囁き交わしながら来た道に戻ってゆく。

彼女たちの目的が真紀同じだとするなら、この近くにトイレがないことは明白であった。

(……並ぶなら早くしなきゃ……でも……)

制服のスカートを押さえ、真紀は躊躇う。

プログラムの進みが思ったよりも遅れていて、リレーの予選が11時を超えてしまいそうなのだ。勢い進行には『巻き』が入り、運営側の負担は一層重いものとなっていた。プログラムの遅れを取り戻すため、予定の変更や案内などが多く指示されている。それを誤りなく連絡するのも、真紀の仕事だった。

他の委員の子たちに迷惑はかけられない。そう分かっている、諦めて戻る気にもなれないという二律背反。困惑が巻きの足をその場に縫い止めていた。

「どうしよう……」

トイレに行けない。その事実がはっきり目の前に突きつけられることで、かえって尿意は強く感じられる気までしてくる。さっきまでそんなに辛くはなかったはずの尿意は、一気に強さを増し、真紀はそわそわと落ち着きのなくなった爪先をぐりぐりと芝生に押し付ける。

じっとしていても辛いだけだった。

「……並ぶだけでも、しておこうかな……。ひよとしたら、すぐ順番、回ってくるかもしれないし……」

自分で口にして、空々しい希望だと言うのはわかっていた。しかし敢えて無駄な事をしているという事実から目をそらし、真紀は小走りに、行列の後ろへと走り寄る。

もしかしたら、トイレができるかもしれない——。そのわずかな希望に縋って。

わずか10分足らずの間に目の前数十メートルにわたる大混雑が解消する可能性は限りなく0に近かったが、並ばなければ確実な0だ。

限りなく結末の見えた時間であるとしても、たとえかりそめであろうとも、恐らく午前中最後となるだろうこの休憩時間を『ひよとしたら、オシッコが間に合うかもしれない』という期待で心を慰めることができるだけ、マシに思えたのだ。

「……ん……っ」

他のトイレを探そうにも、10分で見つかるかどうかは分からない。かりに見つけたとして、そこもこのように大行列になっている可能性が高かった。……いや、ほぼ確実といっていいだろう。大会委員でもある真紀は、この河川敷のグラウンドにトイレが乏しいことを、他の参加者たちよりも遥かに詳しく知っていた。

だから、真紀はこの列に並ぶ。恐らく10分後、辛い尿意をこらえ、後ろ髪を引かれる思いでほんのいくらか前に進んだ順番待ちの列を離れ、大会本部の放送席に戻らなければならないことを予測しながら。

離脱前提、トイレに入って用足する事は不可能な、トイレの順番待ち——あまりにも空しい我慢の時間が、始まった。

瞬く間に10分が過ぎた。

嘘のように列がはけ、まるでモーゼの十戒のように人混みが割れて、奇跡的に真紀の前にトイレへの道ができる——なんて事はもちろん起きる筈もなく。

真紀はますます重苦しく張りつめた下腹部を抱えたまま、大会運営のテントへと戻っていた。

(……んっ……やっぱり、けっこう、したいかも……っ)

もぞもぞと動き出してしまう太腿をぎゅっと寄せ合わせ、次のプログラムの放送内容を確認する。運営のテントには忙しくスタッフが詰めかけて、次から次へと発生するトラブルへの対応に追われていた。

例年恒例の運動会とはいえ、やはり急遽場所を変更しての開催にはいろいろと見えない無理が生じていたようで、大会会場の各地では大小様々な問題が起きていた。目下真紀が一番の懸案としているトイレのほかにも、入場退場に使う待合広場が狭く、プログラムの進行が遅れ始めていること、放送機材の一部がうまく機能しておらず、アナウンスが会場全体に届かないこと、連絡に使うレシーバーの周波域の問題で通信もうまくいかず、スタッフ間の連絡がもっぱら直接の伝言ゲームになってしまっていること、etc。

「……大変そうだね」

「うん」

テントで声を荒げている大人たちを見やり、真紀は近くの放送委員の子たちと囁き交わす。

真紀は学校の放送委員として、学外活動の一環で参加しているが、その立場はあくまで協力者、悪く言えば『お客さん』的な扱いであり、本格的な運営はあくまで町内会の大人たちによるものだ。

そのため、様々な問題については蚊帳の外であり、他の参加者と同じように適当に文句も言える、ある意味で気楽な立場だとも言えた。

しかし――

(トイレだけは、別だよ……)

真紀も、他の少女たちにとってもそれは何よりも重大な関心事であり、他の事を後回しにしても早急に解決しなければならない問題の筈だった。

結局、真紀は時間ぎりぎりまで並ぶのを諦め、順番待ちの列が数人進んだところでトイレを後にしたのである。

およそ5分の順番待ちで前に進んだのはわずか3人分。列には既にどう少なく見積もっても20人以上が並んでおり、単純計算でも30分近くかかることが予想できた。

「……大丈夫かな……」

じん、と腰に響くむず痒さを紛らわすように脚の付け根に力を込め、真紀は小さく吐息する。深呼吸と共に下腹奥に詰まった恥ずかしい熱水の存在感ははっきりと感じられ、時間と共に高まる水圧が乙女の水風船を大きく膨らませ続けているのが、手のひら越しにもはっきりとわかる。

「ほら、そこの二人！！ お喋りはやめて放送の準備して！！」

「あ、はいっ」

他の放送委員にせかせせ、真紀は慌てて作業に戻る。

そんな真紀の『大丈夫』には二つの意味があった。

ひとつは、あのトイレの大行列は、そのうちなんとか解決するのだろうかという不安。

もうひとつは、自分自身の我慢の問題だ。

気楽な立場の外部協力者とは言え、建前上は真紀も運営のスタッフである。選手や応援として参加している少女達に比べれば、さまざまな雑務で大会本部周辺に拘束される時間はずっと長い。

観客であれば言うに及ばず、たとえ選手であったとしても、よほど多くの競技に片っぱしからエントリーしているのでもなければ、気の向いた時にトイレに向かうことができるはずだった。

しかし、真紀はそうはいかない。大会の時間の大半は運営のテントに詰めていなければならず、抜け出す事は難しい。先刻の10分休憩すら、他の委員の子に無理を言って作ってもらった貴重な自由時間なのだ。

次にトイレに行けるのは、最短でも2時間後。昼の休憩になるだろう。

その時まで我慢できるだろうか——時間の経過と共にますます強まる下腹部の切実な訴えに、真紀は不安と共に下腹をさすりながら、アナウンスを始めるのだった。

『もしも』を論じるのならば。

たとえ、『お客さん』の立場であったとしても——真紀はこの時、仮設女子トイレの混雑について、運営の大人たちに強く訴えるべきだった。思春期の少女達にとってトイレの話題は人前では避けるべき恥ずかしいものであるとしても、この時点で、運営スタッフの中で女子トイレの大行列を把握していたのは、真紀を含む放送委員の少女達数名だけだったのだ。

少女達に比べてずっと我慢も強く、いざという時の思い切りや対応力のある大人たちにとっては、多少トイレが混雑したくらいのこととは、他に山積する問題に比べれば些細なものにしかすぎず、ほとんどトラブルとしては認識されていなかった。

運営に当たるスタッフの主メンバーが、壮年から年配の男性がほとんどだった事も災いした。人前で口ににくいトイレの問題を、年上の、あまり面識もない男性に対して言い出すことへの心理的なハードルは相当なものだ。

それでも、勇気を出した少女がいなかったわけではない。

真紀のほかにも、女子トイレの混雑を問題視した少女はおり（その理由は特に、彼女が真紀よりも数段、我慢が切羽詰まっていたからでもあるが）、彼女が口籠りながらも恥ずかしさを堪えて懸命に訴えたトイレの大混雑について、彼等はほとんどそのことを聞き流し、『そんなことあと、あと！！』とばかりに、目の前のトラブル、主に通信関連の機材を整えるのに執心するばかりだった。

違う反応をした男性スタッフもいるにはいたが、彼等も特段の対応をしたわけではなく、実質的に、少女達の貴重な問題報告と切なる訴えは握りつぶされたに等しい。

Q：女子トイレがすごく混んでるんですけど……

A：我慢なさい！！

トラブル対応としては、あまりにも理不尽、お粗末なものであろう。

これらの対応は後に、会場と参加選手・観客に対する圧倒的な女子トイレの不足として、少女達になによりも切迫した危機をもたらす原因となった。

前代未聞の結果となった大会終了後の反省会——糾弾会とも言うべき場で、運営スタッフはこの不手際について終始、苦しい説明を強いられることになる。

繰り返しになるが、真紀はこの時、何としても自分の境遇と、女子トイレの混雑解消を強く、運営スタッフに訴えるべきだったのだ。

会場で『おトイレ難民』となった多くの少女達を救うためだけではなく、なによりも、真紀自身に、この後に訪れてしまう最悪の悲劇を回避するためにも。

（大丈夫、だよな……）

しかし。この時点で真紀がそんなことを予見できる筈もない。胸中に不安を漠然と思い描きながらも、羞恥のためにはっきりと口にすることはできず、『きっとなんとかしてくれるよね』と大人のスタッフ達を信じて、次の休憩までの時間をじっと辛抱するしかないのだった。

「っ、っ、っ、っ、つぎ、の、走者は、っ、第一グループが、っ、あ、赤いは、ゼッケン、のっ。ふあああつ……〇〇学園、2年、のっ、……んああつ……さ、沢村、い、一香さんっ、で、でっ、……う……」

途切れ途切れの放送が、グラウンドに響く。

放送機材の不調ではない。むしろそれらのトラブルは、午前中に町内会の大人たちが運営スタッフが解決に尽力したため、ほぼ完全に解決していた。

「っ、は、っ、はあ、はあつ、……っ、……だ、第三……じゃなかったっ、だ、第二、グループが……んあああつ、ダメ、だめええ……っ」

にもかかわらず、グラウンドの各所に配置されたスピーカーからは、しきりに何かを擦り、軋ませるようなノイズの混じったアナウンスが続いていた。

放送を続ける運営のテントに、遠くから観客たちの不審な視線が集まる。

「ッ、し、しつれい、しましたっ。だ、第二、グループ、お、おしが、おしがま、……ち、違うッ、おしがみ、忍上さんっ……！！」

躊躇いや戸惑い、読み間違い、名前の呼び違い、走者順のチェックミス。ケアレスミスと思しき間違いが続出し、声量も蚊の鳴くような小さな声や、やけそになったのかと思うほどに乱暴に貼り上げた怒鳴り声に近いものと、まったく安定しない。

さらにはまるでたったいまどこかを全力疾走してきたのではないかと思わせるほどの息切れと荒い吐息が混じり、時折息を止めるように硬い唾を飲み込む仕草や、椅子を軋ませるほどに激しく身をよじる動作までも聞こえる。

皮肉なことに、放送機材がトラブルを乗り越えたことで、それらの以上はむしろ必要以上にクリアに、グラウンド全体に届いていた。

「んあ……う、あつ……は、っ、ふ……い、以上、第三、走者、ですっ……は、はやくっ……はやくしてっ……、もう限界いっ……！！」

原稿の読み上げから、放送が切り替わる直前には、そんな切羽詰まった小さな悲鳴も混じって聞こえる。

この時点で、よほど鈍い者や、自分の事で精一杯で、回りの事を気にしている余裕などまったくなかった一部の選手や観客たち覗けば、運営スタッフのうち有志による放送委員が何らかのトラブルを抱えているのは明白だった。

「っ、あ……く……」

放送機材を乗せた机の上、真紀は震える指でレース中の音楽を流すボタンを押し込み、ダイヤルを調節する。手が滑っていき

なり大ボリュームになった音量を慌てて戻し、切り忘れていたマイクが『だめ、だめ、もう我慢できないっ』と音声拾ってしまったのに蒼白になって気付く。

（や、いやああ……っ）

即座にスイッチを切るものの、今の一言がアナウンスになってグラウンド中に流れてしまったのは間違いなかった。

パイプ椅子の上、ジャージの股間をきつく抑え込んだ右の手のひらは、すでに20分近くそこから離れていない。伸縮性に富んだ布地は少女が握り締めた股間にぴったりと沿うように引き伸ばされ、真紀の硬く張りつめた下腹部を殊更に強調しているようだった。

「んっ、ふ……くう、あっ……んああっ……」

はあはあと肩を上下させ、脚の付け根をしきりに、押し揉み、こねるように指が蠢く。いよいよ天井知らずに高まる尿意が、乙女の水門のすぐ内側を引っ掻いて、一刻も早い解放をと迫っていた。

（で、っ、出る、っ、オシッコでうう、出ちゃう、出ちゃううっ……！！）

暴虐なまでの尿意は、放送席に着いた真紀を執拗に責め苛んでいた。お昼ごろまでは波のように強弱を伴って寄せては返すように押し寄せていた排泄欲求は、もはや電波のような休む事ない連続性を持った衝撃になって、真紀の脚の付け根のダム放水孔へと叩きつけられる。

必死に股間を握り締め擦る手のひらは、さいごの防波堤だ。

きつく閉じ合わせて手のひらを挟み込むジャージの、椅子に接触する部分には、すでにはっきりと色を濃く変えている部分もあった。じわ、じわ、と脚の付け根奥でも熱い雫が噴き上がる感覚がはっきりと分かる。

それでもなお、

（ち、違うの、これは汗っ、暑くて、汗、かいてるだけ……っ）

必死にそう繰り返し、真紀は『おチビり』の事実を認めようとしなかった。

強がりや言い訳ではない。認めてしまえばその瞬間に、ダムの崩壊が始まってしまうとわかっていたからだ。他の放送委員の少女達も、机や機材にもたれかかるように手をついて、前かがみになっては脚の付け根をきつく押し揉んでいる子ばかり。みな我慢の限界にさしかかっており、ひとりでちゃんと立てている子は誰もいない。

「う……、くう……んあああ……っ」

椅子の上に腰を押しつけ、脚をくねらせ。膨らみ続ける尿意に抵抗するため引き寄せた膝を持ち上げるようにすると、爪先が地面をひっかく。ひとしきり足踏みをしては、えいと掛け声をかけて荷物を持ち上げては、その衝撃でびくとう背中を反らし、ぐいぐいと脚を交差させて尿意の大波をやりすごしてから歩き出す。

運営委員からの忙しい指示が飛ぶ中、放送委員の少女達はテントに釘づけにされ、自由に歩き回る事すらできないのだ。

テントの下は、ちょっとした我慢少女たちの品評会と化していた。

「でちゃう……で、ちゃうよ……っ」

真紀達が渴望するのは、はるかグラウンドの対角線上。1時間待ちでも順番の回ってこない長蛇の列が待ち受けている、さな

がら地獄と化した仮設トイレである。

——そんな絶望的な状況のトイレに向かうことすら、彼女たちには許されないのだった。

「……んあ……っ、っは、はあっ、あ……ふっ、ふーっ、ッ、と、トイレ……トイレえ……っ！！ でちゃう……オシッコ……オシッコ……」

放送委員を務めるだけあって、クラスメイト達に比べれば言葉遣いには自信のある真紀だが、下腹部を圧迫する猛烈な水圧と、今にも音を上げそうになる乙女の水門が訴える猛烈な排泄欲求に支配され、普段の見る影もない。

トイレ、おしっこ、でちゃう。少女のあどけない唇から、そんなはしたない言葉を押し出させるばかりだった。

椅子の上に腰を押し付け、ぎゅうっと手のひらを脚の間に挟み込み。熱を持った股間部分を、体操服の上から何度も擦る。

「うああ……っ、でる、でるう……漏れちゃうう……っ」

はしたない呟きを繰り返しながら、少しでも気分を紛らわせようと、グラウンドで続く競技を眺めていた真紀は——ふと、すぐ隣で誰かが大声を上げているのによく気付いた。

「美坂さんっ、マイク！！ マイク入ってるっ！！」

同じ放送委員の少女が、必死の形相で叫んでいた。

極限状況の中で、真紀には周囲の喧騒すら聞こえていなかったのだ。

懸命に訴える彼女の姿も、我慢に擦り切れた思考では、何のことかわからず、ぼんやりと彼女の指さす先を見て——真紀はようやく理解する。

（あ、れ？）

ついさっき、切ったはずのマイクのスイッチが、ONになっていた。

おそらく、次の放送のタイミングを見越して誰かが気を利かせてくれたのだろう。もう動けない真紀へのささやかな配慮だったのかもしれない。

だが——そのマイクが、真紀の我慢の一部始終を、余すところなく拾い上げていたのである。

真紀は、自分の恥ずかしい『おトイレ我慢』を、会場すべてに向けて臨場感たっぷりに生中継してしまっていたのだ。

「……………え」

あまりの衝撃に、真紀の思考はいったん、考えることを放棄した。

だが事実は刻薄で、残酷だった。

ONになりっぱなしの放送によって、すでに異状はグラウンド全体に知れ渡っていたのである。いつのまにか運営のテントの周辺には人だかりができていた。

放送機材の前で、脚を寄せ量の手のひらを挟み込んで太腿をすりすり擦り合わせ、必死に腰をゆすっている少女の姿は、無数の視線の中に晒しものとなっていたのである。

「……………ひ、あ……ッ！！？？」

思春期の少女にとって、たとえ誰か、親友や姉妹といったごくごく親しい相手にだって、オシッコを我慢しているのを知られるのは恥ずかしいことなのに。

真紀は、グラウンドにいるほぼ全ての人々に、同時にそれを知られてしまったのである。

終わりの見えないトイレ我慢のさなか、辛い中で思わずこぼれた『オシッコ出るうっ』『我慢できないかも』『トイレ、トイレ』というつぶやきや、吐息、身をよじり椅子をきしませる身悶えまで、高性能のマイクは真紀の我慢の一部始終を完璧に拾い上げ、ノイズをカットして臨場感あふれる生中継を、5分近くにわたって流し続けていた。

事情を知らない人々からすれば、真紀は自ら生放送で『オシッコしたい！！ トイレ我慢できない！！』と叫び訴えていたに等しいのだ。これで、観衆の興味をひかない方がおかしい。真紀の様子を案じるものから、単なる野次馬、異変に気付いた同級生。少女たちに邪な感情を抱く不埒な男たちまで。

もはや逃げ場なく取り囲まれた運営のテントの中で、真紀に逃げ場なかった。

「あ。っ、あ。あ、…………ツ」

ぷるるっ、と、可愛い——けれど、危険水域を遙かに上回る貯水量に達していた乙女のダムを突き崩すには、十分すぎるほどの振動。羞恥のダムの底にある水門へ、ありったけの水圧が押しかかる。

底が抜けてしまったかのように、真紀の放水孔はばかりと口を開けてしまった。

ぶじゅっ、じゅじゅじゅうっ、ぶじゅじゅうッ！！

ぴちゃばちゃじゅじゅっじゅごおおおおおおおーッ！！

見えない場所からペットボトルの中身を浴びせかけられているかのようなだった。色、量、匂いともに桁外れの放水は、今日一日懸命に真紀が耐えてきた我慢の証。競技に参加こそしていなかったが、この河川敷のグラウンドにおいて『オシッコ我慢』部門での真紀の我慢は、十分にメダルを狙える位置にあった。

噴き上がるオシッコは、下着と体操服、ジャージの布地をあっさりと通り抜け、太腿に挟まれた手のひらにぶつかり、たちまちのうちに、少女の下半身がずぶ濡れの水浸しにしてゆく。

椅子のきしみや衣擦れの音すら余すところなく拾う高感度マイクが、それを黙って見ているはずがない。

「いやっ、いやああ、いやああああ！！ やめてっ、やめてええ！！」

真紀がオシッコをこらえて漏らす恥ずかしい呻きも、解放感とともに唇を震わせる熱っぽいあえぎ声も、ジャージを湿らせ寄せ合わせた太腿と下腹部のくぼみにみるみる溢れ出してゆくオシッコの放出音も、委細漏らさずに拾い上げ、そのまま完全生中継でグラウンド中に響き渡ってしまったのである。

それと同時に、運営のテントにいた放送委員の少女たちも、真紀につられて『催して』しまい、次々にうずくまって脚元に激しく水流をほとばしらせてゆく。

日差しだけを遮るタイプのテントだ。周囲360度を人垣に囲まれている状況で、視線から逃れる死角などない。恥ずかしいオモラシの瞬間を見られまいと誰かに背中を向ければその分、反対側の観客に、きつく抑え込んだ手指の間から、恥ずかしいおしっこをほとばしらせ、股間を激しく濡らす瞬間を見せつけるようになってしまう。

運営のテントは時ならぬ放送委員たちの臨時トイレ——否、オモラシ場所となり。

雑踏は更に混乱を増してゆく。

そして同時に、この影響はテント内だけにとどまらない。グラウンドの各所でも限界を迎え、『おんなのこ』から恥ずかしい熱水のほとばしりを噴き出させる少女たちが続出していた。

彼女たちもまた、『おトイレ難民』であり、長い長い限界我慢の中で酷使され、いまにも緩みそうな括約筋を必死に締め付けて我慢している状態だった。

ほとんど気力だけで耐えているような有様で、真紀のオモラシを生中継で聞かされてしまったのだ。

たとえ音だけとはいえ、下着の奥に叩きつけられ、地面に飛び散り響き渡るオシッコの噴出音。それがリアルタイム、ダイレクトに少女たちの下腹部を、股間を、排泄孔へと伝わってしまったのである。

今なお続く臨場感たっぷりのオモラシ放送の生中継に呼応するように、グラウンドのそこそこにしゃがみ込んだ少女たちも、体操服の股間を激しい水流でびしょ濡れにし、足もとにばちゃばちゃと雫を滴らせる。

真紀のオモラシ生中継は、そのままグラウンド各地の少女たちへと波及して、連鎖的にオモラシを引き起こし——もはや末期的となっていた河川敷のグラウンド一帯に、最後の崩壊の引き金を引いたのである。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・7

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 02/17/2012 23:48:18

BODY:

大混雑の仮設トイレは、男子トイレの一部を女子用に開放してもますます順番待ちの列を伸ばし、故障の続く個室は次々とタンクを一杯にして汚水を溢れさせて使用不能。せっかく並び続けた列から弾き出られた少女の中には、我慢に耐えかねてそのままその場でオモラシを始めてしまう者も少なくない。

会場外最寄りのトイレまではどんなに急いでも15分。しかも尿意の大波を乗り越えるので精いっぱい少女達の足取りは重く、とてもそんな距離を歩くこともできない。挙句、そのトイレすらも詰めかけた少女達で少なくない順番待ちの行列ができています。

事務棟横のトイレすら、低学年の少女達を受け入れるのだけで処理能力の限界を越えつつあり、詰めかける順番待ちのせいで個室のドアは閉じられる余裕すらなく、少女達は個室のドアを開けたまま、丸見えの状態です。洋式便器に腰かけて、オシッコを済ませると言う事態に陥っていた。

朝から我慢を強いられた選手たちも次々と限界を迎え、トイレを求める少女達の数は増える一方だ。午前中に運よくトイレに入ることができた少女達も、時間の経過と共に再びその乙女のダムの貯水量は増してゆく。健康的な少女の循環器は、通常ならば3時間ほどの経過で、尿意を覚えるのに十分な量のオシッコを膀胱に注ぎ込み、一度はからっぽにした筈の乙女の水風船を、再び大きく膨らませてしまう。

昼休憩のお弁当に合わせたお茶や、競技参加後に摂取したスポーツドリンクなどによって、その増加量はさらに増し、はやばやと激しく腰をモジ付かせてしまう者も出始めていた。

一度は尿意から解放された彼女達までもが二回目の排泄を訴え、再びオシッコのできる場所を探してあちこちを彷徨う『おトイレ難民』の列に加わってゆく。

もはや、河川敷のグラウンドを舞台とした町内会の運動会は、末期的な状況となりつつあることは明白だった。

しかし、それに対する具体的、画期的な解決策は、ついぞ運営側から示されることはなく、事態は終局に向けてますます混迷を極め、渾沌と煮詰まってゆくことになる。

本来、昼休憩をはさんで午後の山場となるはずだった障害物競走の決勝戦が、実質『オシッコ我慢競走』となってしまった事からもその一端がうかがえるだろう。

競技は第1から第8までのレーンに、各グループに分かれた走者が並んで行われた。走者は第1からやはり第8までであり、参加者は合計64名となる。

後に判明することとなり、事態に疎かった関係者を驚かせたのだが——この参加者64名のうち、競技以前に一度でもトイレを済ませてからスタートラインに立った少女はわずか2人だけだった。

この2名すら、トイレに入っただけは朝の9時と10時半。競技の行われた午後2時40分と言う時間から見れば、二度目の尿意を催してもまったくおかしくない時間が経過している。

競技の直前、選手たちから運営スタッフに対してトイレの訴えがあった事は、複数の証言で確認されているが、運営側はプログラムの遅れを理由にこれを拒否。かくして走者のほとんどが、ほぼ限界に近い状態の尿意を感じたまま競技に臨み、競技は開始された。

プログラムは既にこの時点で1時間弱の遅れを見せており、運営としても無視できないものだったようだが——いかなる理由があったとしても、擁護は難しいだろう。後の反省会では『どうせ漏らしてしまうなら、この時点で延期していても一緒だ』という暴論極まりないコメントが苦し紛れの運営側から出され、物議をかもした。

——話を戻そう。

ともかくも、少女達が耐え難い尿意に身をよじる中、競技は開始される。

それでも始めのうち、混乱はあれども競技は進んでいった。第1、第2走者の中にはゴール直後、うずくまって脚の付け根を押さえ込んだり、座り込んだ踵を股間に押し付けてぐりぐりと身をよじり始めてしまう選手が出るほど。

中にはスパッツを薄く黄色に染めてしまうほどの大胆な『おちびり』——もはやオモラシと呼んだ方が早いような粗相をしてしまう少女もいたが——それらの出来事は、その後に起きた衝撃的な光景から比べれば、まだまだ何も起きていないに等しい程度のものだ。

しかし第3走者のグループでは早々と、コースの前半のネットくぐりの際に屈んだまま、オモラシを始めてしまう少女が出てしまった。

ちょうど四つん這いになってネットを潜る姿勢は、我慢の限界状態においてはあまりにも『イケナイ』刺激を、少女の股間部分に与えたのだろう。

ブルマを勢いよく突き抜けさせた水流がコースを直撃し、大きな水たまりを広げていく様は、少女の悲痛な叫びと共に、屈辱と絶望に彩られた瞬間となった。幸いにして、オモラシの瞬間そのものの当事者の少女と、すぐ隣を走っていた選手以外には気付かれなかったのだが——それが却ってあとの悲劇を生んでしまう。

続く第4走者、第5走者にも、レース中にオモラシを始めてしまうものが出た。直接的な原因は競技のいくつかが下腹部に負担のかかる動作を強いるものだったことが挙げられるが、その多くが第3走者の少女のオモラシ現場のすぐ近くで頻発した事はただの偶然では片付けられない。

特設グラウンドを大きく一周する、コースの中央にできた水たまり。

それが何なのか、運営スタッフや観客たちのいる場所からでは分からずとも、選手として競技に参加し、近くを通ればその匂いや、泡立った水たまりの緑や、深くえぐられた地面の泥が、嫌でもその水たまりの『正体』を囁いてくる。

はち切れんばかりの尿意を恥骨上のダムに抱え込み、体操服の下腹部をみつともなくせり出させて懸命に競技を続けようとする少女たちにとって、直径1m近い水たまりは、なにものにも勝る強大な『障害物』だったに違いないのだ。

『そこ』で誰かがオシッコをした証拠は、限界ギリギリのところで耐え続けてきた少女達の我慢を容易く突き崩し、崩壊へと導いた。

『他の子もしてるんだし、私もここで……』そんな些細な誘惑。普段の状況なら、考える事もなく思考の端をかすめるだけの想

像も、膨大な『おトイレ難民』に溢れる河川敷のグラウンドにおいては、十分以上に、耐え難い誘惑となって少女達を襲ったのだ。

こうまでも少女達の我慢の崩壊、オモラシが続いたのは、この障害物競走自体が予定よりも遥かに進行が遅れた事も原因の一端である。すでに限界寸前のオシッコ我慢の状態にある少女たちが、飛ぶようにコースを駆け抜け、素早く障害物をくぐり抜けてゴールできるはずもなく、レースごとのタイムは予定の3倍以上を要した。

最下位の選手に至っては、わずか一周400mのグラウンドを走り切ることができずにリタイアした者や、ゴール手前で我慢できずコースを大きく外れて、記録所の機材の物陰で下着を下ろし、オシッコを始めようとする少女まで出る始末だったのである。

そんな有様では、ただでさえ激しい我慢を続けている後ろの走者の選手たちが、ますます下腹部の切なる訴えに晒されるのは当然であり、彼女達を襲う凶暴な尿意は、もはや拷問と言っていいレベルにまで達していた。

さらに走者があとに下ると、コースの途中で深く座り込んでしまい、みるみる大きな水たまりを広げたその中心で動けなくなる者、がくがくと腰を揺すり、内股になった脚をくねくねと擦り合わせながらも懸命に進もうとして、前屈みのまま剥き出しの脚に水流を溢れさせてしまう者。ゴールを見据えながらも前のめりに倒れ込んでしまい、足元に猛烈な勢いで羞恥の熱水を噴射させてしまう者。

次々と繰り上げられる我慢と限界の綱引きの果ての、盛大なオシッコの排泄シーンは、まるでこの競技がもともとそういう類の、オシッコ我慢力を競うためのものだったのかと錯覚させるほどだった。

第6走者グループでの、跳び箱上・着地直後での3連続連鎖オモラシ・スプラッシュ。

第7走者グループでの、スタート地点での4人による同時限界オモラシ・“ジェットションベン”（命名：〇〇小学校△年×組男子生徒）でのスタートライン大洪水事故と、圧巻のシーンが続く中、何よりも衝撃的な展開となったのは最終、第8走者のグループだった。

それまでの競技中の連続オモラシによって、少女達のオシッコによってびしょ濡れになったコースを前に、参加した選手8人は、明らかに『誘われて』おり、一目見て限界と分かるほどに激しく我慢をしているのが明白な状況だった。

身体を折り曲げ、両手を揃えて股間に押し当てがっちりとブルマを掴み上げている者、まるで行進のように高く脚を上げてその場足踏みを繰り返す者、背中に回した手をぎゅっとお尻の方から脚の付け根に押し当て、爪先立ちで小刻みに震えている者、しゃがみ込んだ踵を股間に押し付け、ひっきりなしに身体を揺すっている者、レース前からその異常さは際立ち、レースに臨む全員が第7走者のように、スタートの号砲とともにその場にオシッコを出し始めてしまってもおかしくない状況に思われた。

しかし、そんな周囲の予想を裏切って、第8走者の少女達は懸命に走った。もはや歩いているよりも遅いほどののろのろ歩きで、前屈みになった亀のような進みで、形振り構わず股間を握り締め、内股の脚を動かし、太腿を擦り合わせ、何度もしゃがみ込んで腰をよじり、ぴょんぴょんと飛び跳ね——全身を強張らせて硬直し、猛烈な尿意の波に耐えながら。

それでも彼女達は、幾多の障害物を踏破し、進んだのだ。

そのときの彼女達の胸中は窺うべくもない。乙女のプライド、繊細な羞恥心のなせる偉業。あるいは、せめて自分たちだけは我慢しようという、競技に惨敗して無残な姿を晒した同じ選手同士の連帯感のようなものか。

たとえゴールしたその先に、トイレはなく。

そこからさらに、延々と——長蛇の列に並ばなければならないのだと分かっている。彼女達は視力を尽くして耐え、また走った。

四つん這いになって進まねばならないネットくぐりも、着地の衝撃で膨らみ切った膀胱を激しく掻き回される跳び箱も、もろく引き

つた排泄孔に猛烈な水圧を感じさせられたタイヤ運びも——恐らく最大の障害であった、コース中央にできたオモラシ水たまりの誘惑にも耐えきって。

最後の競技者となった 8 人の走者は、ほとんど差もないまま、ほぼ同時にラストの難関である平均台へとさしかかる。

そして、そこがこの競技のクライマックスとなった。

まっすぐ立つ事も難しいほどの猛烈な尿意、手を離しては勝手に開き始めてしまいそうな、体操服の奥の排泄孔。そんな状況で、8 人の選手たちはそれでも懸命に平均台を渡ろうと足を踏み出し——その中央で、一斉に限界を迎えたのだ。

幅 15 センチの平均台の上では、倒れないように前屈みの姿勢を正し、脚を真っ直ぐに踏み出し、太腿を寄せ合ったり膝を擦り合わせたりすることは不可能だ。さらに、バランスをとるため左右の手を大きく広げなければならず、脚の付け根を押さえる事もできない。真っ直ぐ歩く事は難しく、視線も大きく前を見て。

まるで、聖女が磔にされるかのごとく。

手を大きく十字架のように広げ、ゴールを見据えて——

それでも、そこに真の意味での救いがないことは、競技場の端まで伸び切った仮設トイレ順番待ちの長行列が、ちょうどゴールテープの向こうに見えていることで明らかだった。

そんな、苦境に殉教するかのごとく。

長い長い果てしない、平均台の道を進み続ける少女達の股間から、隠す事もできないほどの猛烈な水流が、四方に滝のように噴き出した。

股間を握り押さえたいばそこにぶつかって勢いを殺され、しゅうしゅうと脚を伝い落ちるだろう羞恥の噴出は、しかしなにも遮ることができない競技場のコースの上、競技に殉ずる乙女たちの下半身を凄まじい勢いで吹き上がり、一瞬で下半身をずぶ濡れにして、平均台の上にコースの上に進った。

もはやなすすべなく、羞恥と屈辱に顔をゆがませ、耳まで赤く染めて。それでも俯く事は許されず。

競技の最中、何百という視線の晒し物にされたまま、羞恥のオモラシで下半身をびしょびしょにし、なおも激しくオシッコを迸らせ続ける 8 人の少女たちの姿は、観衆の中にも深く、深く刻み込まれていったのである。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 我慢 R P G 没ネタ供養・1
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 永久我慢
CATEGORY: 永久我慢

DATE: 02/17/2012 23:58:55

BODY:

ずっと以前に R P G ツクールで作成しようとして頓挫した、「我慢系 R P G」のイベント案を小説風にリメイクしたもの。
一部つながりがあるもの以外、時系列などはバラバラで順不同。

<hr size="1" />

■ O P / 1 帰ってくる

——まさかこの歳になって『うちまで我慢』する羽目なるなんて。

木崎明日香は、焦りと共に帰途を急いでいた。

固く張りつめた下腹部に急かされ、自然に早まってしまう歩みと共に、横断歩道を小走りに渡る。脚の付け根に膨らむ尿意はそろそろ無視できないものになっており、ふと気を抜くと、歩き方まで知らずに内股気味のおしとやかモードになってしまうほどだった。

(……もおっ、これならさっきトイレ行っておけばよかった……)

トイレに行きそびれた時の定番の公開と共に、手のひらがそっとジーンズの上から下腹部を押さえる。

少女の秘密のディーポットになみなみと注がれたホットレモンティが、スニーカーの靴底でも吸収しきれない振動に伴って、たぶっ、たぶんっ、と水面を揺らし続けていた。

強弱に伴って寄せる尿意の波に、足の付け根がむず痒く痺れてゆく。しかし往来で前押さえなどできるはずもなく、明日香は小さく揺れ動く腰を隠すように、控えめな動作でそっとおなかを撫でるのが精いっぱいだ。

「……も、少し……っ」

最後の横断歩道を渡る。家までは残すところ直線200m弱。わずかグラウンド一周の距離だ。

ちょっと散歩のつもりで出かけた先、立ち寄った本屋で目にとめた小説をついつい立ち読みをしてしまい、気付けば1時間。

店員さんの目が厳しくなっているのに気付いて、慌てて小説を手レジに並んで会計を済ませようとしたところで、お財布を持っていないことに気付いたのが15分ほど前のことだ。

その時、明日香は割と強めの尿意を——会計を済ませたらオシッコしていこう、と思うくらいには——感じていたのだが、流石にそのまま店員さんの視線を背中に浴びながら、小説をもとの売り場に戻してトイレを借りれるほど、明日香はずぶとい神経はしていない。

赤くなった頬を擦りながら、気まずい雰囲気を読者を誤魔化すようにして愛想笑いを浮かべ、明日香は一目散に書店を後にしていた。

いまさらながらに自分のやらかしたドジを改めて思い返し、少女は背中の汗を感じ、軽く火照った気のする顔を小さく振る。「うー……あれはたまたまで、別に買わないつもりだったわけじゃなくて、なんというか……運が悪かったというか……ああもう、あれじゃしばらくあの本屋さん行けないかな……」

自分に言い訳しながらの呟きは、尿意を紛らわせるためのものでもあった。

良く似た家の立ち並ぶ住宅地の中、ようやく我が家が見えてくる。明日香は残り50mの距離を、リレーの選手にでも選ばれそうなくらいの見事なスピードで走り抜け、玄関へと駆け寄った。

ドアに手をかけると同時に声をあげ——

「ただいまー……って!？」

重く、硬い手応えに思わずつんのめりそうになる。

「あ、あれ？ 誰もいないの？」

困惑と共に二度、三度。ドアノブを引いてみるものの、玄関は硬く施錠され、明日香の前に立ちはだかっていた。

出かける時には母と妹が家にいたはずなのだ。数度インターホンを鳴らすも反応はなく、家が無人であることはますます疑いようがなくなってゆく。

「ママも京香も出掛けてるのかな……」

この時間なら二人とも家にいるはずなのだが——そう思い、仕方なしにポケットを探り掛けて、明日香は気付く。

「あ……そうだ、鍵……」

普段、明日香は家の鍵をお財布の中に入れている。その財布を、今日は持たないままに出かけてきてしまっていた。

つまり。玄関を開けるための手段を、明日香は持っていない。

それは取りも直さず、家のトイレに入れないことを意味していた。

「あ……う……っ」

『おうちまでの我慢』——そう思って帰ってきたのに、トイレに入れない。

それを認識すると同時、ぞわぞわと下腹部で排泄欲求が活性化を始める。思わず小さく声を上げて身を揺すってしまい、明日香は小さく顔を赤くした。

「ね、ねえ、ホントに誰もいないの……？」

ぽつりとつぶやき、二度、三度とインターホンを押し、ドアを強くノックする。

しかし、やはり何も反応はない。誰かいるのなら物音くらいしていいはずなのだが、その気配すら感じられなかった。小刻みに玄

関前で足を踏み鳴らし、明日香は戸惑うように視線をあたりに巡らせる。

何度ポケットを探っても、鍵の入った財布は見つからない。締め出されてしまったことは明白だった。

「せっかく、戻ってきたのに——」

少女の声に、わずかな焦りがにじむ。

玄関を開け、靴を脱いだら真っ直ぐに飛び込む筈だった家のトイレ——オシッコのできる場所は、硬く施錠されたドアの向こうに隔離されていた。

<hr size="1" />

■ O P / 2 開かない家の鍵

※玄関の鉢植えを調べるなどして発生。

「うー……参ったなあ……」

脚の付け根の小さな出口を刺激するむず痒い尿意を覚えながら、明日香は玄関の前に立ち尽くす。

まさかちょっと散歩するだけのつमりの外出で、締め出されるとは思っていなかったのだ。確かに、立ち読みでずいぶん時間を過ごしてしまったが……

休日は大体、午前中に部活を終えた妹が部屋でごろごろしているか、昼のドラマかバラエティーを見ながら台所でお茶を飲んでいる母がいるかなので、すっかり鍵は空いているものと思い込んでいたのだ。

もっとも、いつまでに帰ると告げたわけでもなく、留守にしていたところで明日香がきちんと鍵を持って出ていれば済んだ話で、こればかりは二人を強く責めるわけにもいかないだろう。

しかし、少女の下腹部の事情はそれを考慮してくれるはずもない。

「んっ……」

こみ上げてくる尿意に脚を揃え、明日香は揃えた脚を擦り合わせるようにくねらせ、小さく息をこぼす。

せっかくできる筈だったオシッコの、思いもよらぬ『おあずけ』に、明日香の排泄器官は強い不満を訴えていた。揺れる腰に合わせてたぶんっ、と音を立てる下腹部をかばうようにしながら、ひとまず強い尿意をやり過ごす。

「……えっと……確か、合鍵が……あった、よね……？」

ずっと昔、母親から聞かされていたおぼろげな記憶を頼りに、明日香は玄関の脇へと回った。

小さい頃——まだ、明日香や妹が家の鍵を持たせてもらえなかった頃に、もし家族が留守にしていたとしても家に入れるようにと、合鍵が隠してあるのを教わった覚えがあったのだ。

しかしなにしろ、聞いたのはまだ小学校に上がる前のことだ。遥か昔のあやふやな記憶は頼りなく、明日香は玄関のまわりを手当たりしだいに探しはじめる。

植木鉢の下、玄関マットの裏、郵便受けの中と思いつくままに辺りを探し回り——しばし。

「う……無い……？」

覚え違いをしているのか、あるいは母親が置き場所を変えたのか。

なんとなく、その後に別の場所を教えられたような覚えもあるのだが、どうせ普段はお財布持ってるし、どうでもいいや……とばかりにほとんど聞き流してしまったようで、記憶を探ろうにも曖昧極まりない。

「こっち……？ でも、こんなところにあるのかな……？」

さらにその後、うろうろと玄関前を歩き回ってみたものの、求めるものは見つからず。

結局 10 分ほどの時間を無駄にただで、搜索は徒労に終わった。

(……あ……やば……かなり、しなくなってきちゃった……)

時間の経過とともに、訴えを強める下腹部をそっと撫で、とんとんと庭の土の上にスニーカーの爪先を押し付けて、明日香は何度も周りを見回す。

まだ肌寒い季節、日陰になっている庭を歩きまわって、身体はだいが冷えてしまっていた。

ぶる、と背筋を震わせ、同時に下腹部で波打つホットレモンティを、太腿の内側にきつく力をこめて押さえこみ、さらにその上から手のひらを押し当てる。

通りからは見えない分、我慢の仕草も幾分大胆だ。

「やっぱ、ダメかな……」

もぞもぞと呟きながら玄関に戻った明日香は、未練がましくもう一度だけ、植木鉢の下を覗く。

そこで『さて、種も仕掛けありません、ちんぷいぷい……』と、さっきまで影も形も無かった鍵が現れる筈もなく、地面には相変わらず、ダンゴ虫が一匹這っているだけだった。

まったくもって平和でのどかな日曜の午後。

明日香は口の中に文句を飲み込みながら、ちらりと家を見上げるように視線をさまよわせる。

固く閉ざされたドアは、無情にも少女の行く手を阻み続けていた。

(トイレ……)

先程よりも幾分、切羽詰まった気配と共に。

少女の切実な訴えは、声になることもなく、消えていった。

<hr size="1" />

■ O P / 3 繋がらない電話

※ O P / 2 以後、アイテムの携帯電話はを使うと発生。

「……もー、はやく出てよ……」

液晶画面の端で、オレンジに点滅を繰り返すバッテリーにやきもきしながら、明日香は愚痴をこぼした。

ポケットに携帯だけは入れておいたのはせめてもの幸運だったと言えるだろう。しかし、締め出されたことに文句を言おうと母親に電話をかけているのだが、接続が悪いのかなかうまいかない。

繰り返されるコールと、すぐ留守番電話サービスに繋がろうとする通話の仕様に苛々しているうち、バッテリーの目盛りはみるみる心許なくなってゆく。

「あんまり電池ないんだから……はやく……！」

次第に強まる足踏みは、苛立ちだけが原因ではない。いまのところ玄関前でうろつく少女を不審に思う者はいないようだが、このままじっとここで待っているわけにもいかないのだ。

10回近い留守番電話サービスとの戦いの末、ようやく向こうにのんびりとした母親の声が聞こえてくる。

『あら、どうしたの、明日香』

「繋がった！！ もしもお母さんっ？ ねえ、今どこ？」

『え、どこってデパートよ。新倉の』

息急いで尋ねた明日香に、母が告げたのは郊外の大きなショッピングモールの名前だった。都市計画の再開発で先ごろオープンしたばかりで、テナントには大型量販店も多く名を連ねている。

お洒落なカフェやレストランも多く、明日香も何度か友人たちと出掛けたことがあった。

だが、今はそんなことよりも重要なことがあった。ショッピングモールは川を隔てた隣の市にあり、電車でも一駅の距離なのである。

近所に買い物に行っているとはばかり思っていた明日香は、母が思いのほか遠い場所にいることに驚きを隠せない。

「新倉って……なんでそんなとこにいるの！？」

『ええ？ しょうがないじゃないの。買い物よ』

母にしてみれば少し脚を伸ばしたくらいのもりなのだろう——車でも急いで20分という距離は、明日香の現況に照らし合わせてみればゆゆしき問題であった。

「玄関、鍵かかっちゃってるんだけど」

『ええ？ ヘンね、京香に留守番頼んでただけど……やあねえ、どこか行っちゃったのかしら、あの子まで。……え？ あらやだあ、そんなんじゃないわ、娘よお』

突然会話が遠くなる。明日香は焦って、受話器に呼びかけた。

「お母さん？ ねえ、お母さんってばっ！！」

『ああ、はいはい……ごめんなさいねえ、ちょっと……それで、なにか用事？』

「なにかって……だから家の鍵！！ 入れないんだってばっ！！」

『なあに、明日香、あなた鍵持ってなかったの？』

「出てく時にすぐ帰るっていったじゃないっ。お母さんも家にいるって言ってたし……！！ 勝手にでかけちゃったのそっちなのに……合鍵とかどこかにないの！？」

『やあねえ……そんなのもう置いてないわよ。無用心じゃない』

切実な明日香の訴えは、しかしあっさりと切り捨てられる。

要するに。今すぐに玄関が開け放たれることはない、というのが確定しただけだった。

まったくこちらの窮状を察してくれない母親に、明日香はとうとう声を荒げてしまった。

「だからっつ、そんな悠長なことじゃなくてさあ……どうすればいいの？」

『どうすればって、しょうがないわねえ、ちょっと表で時間潰してよ。お母さんもすぐには帰れないもの』

「え、やだやだ待つて！？ お母さんっ、ねえ、そんな……」

『あらやだごめんなさいねえ。……うん。……じゃあね、お母さん夕飯までには戻るから』

「ちょっ……」

何か抗弁を挟むよりも早く、通話が切れる。

明日香はしばし呆然としてしまった。

「な、なによそれーっ！！」

さしもの忍耐ももう限界だった。怒りとともに再ダイヤルを試みるが、今度は通話を通じない。録音音声の『おかけになった電話は……』のフレーズに、明日香はしばし憤って足を踏み鳴らしたのち、がっくりと肩を落とす。

「うー……なによお……勝手すぎない？」

恨めしげに玄関を見上げる明日香。

電話の向こうの様子では、母は友達か同窓生とでも一緒に遊んでいるようだった。ああなると本当に夕ご飯までに帰ってくるかどうかも怪しい。母親を呼び戻して玄関を開けてもらう、というのはそもそも不可能に思われた。

「京香は……」

妹の携帯を呼んでみるものの、こちらは最初からまるで応答なし。

「なによ……二人して勝手なんだからっ」

明日香は苛立ちのまま、かつん、と玄関の扉を軽く蹴った。その衝撃はおなかの中に響いて、恥ずかしい液体の溜まった場所を揺する。たぶん、と揺れる下腹部の恥ずかしい液体の感覚に、否が応でも尿意を自覚させられ、少女は眉を下げる。

徐々に高まる欲求は、少女の内側で少しずつ、膨らんでゆく。

■ O P / 4 庭に侵入

※ O P / 2 以後、玄関から中庭に入ると発生。

「こっちのカギは、開いてたりしない……かなあ……」

こんなことをしている暇があるなら、早く他のトイレを探せと、下腹部が明日香を急き立てる。頭の冷静な部分ではその方が賢明だと理解品がらも、明日香は未練がましくいまだに家の前を歩きまわっていた。

しかし、手近なトイレと言っても近くにコンビニやデパートは少なく、そこまで歩いていくのは気が進まない。

まして、このドア一枚隔てた奥にはちゃんとしたトイレがあるのだから、尿意が強ければかえって、無駄と分かってはいても後ろ髪を引かれてしまうのは仕方がないだろう。

そう自分に言い訳し、わずかな期待を込めて、明日香は玄関から庭の方へと回ってみることにした。

どうにも話を聞いている限り、最後に家を出たのは妹の京香らしい。となれば、もしかしたら鍵をかけ忘れていたのかもしれないという一縷の望みだったのだが――

「……あう……」

キッチン横の勝手口は、やはり重い手ごたえを返してきた。これで、家に入る方法はほぼ断たれたといってい

こう。うとうとだけは期待を裏切らない妹に、心の中で文句を付け加える。

（なによ、いつもは適当なくせに……こんな時だけしっかりしちゃって……ああもうっ）

さして期待をしていたつもりもなかったのだが、改めて家の中に入れないということがわかると、下腹部を占める液体の重さがずん、と一回り大きくなったようにも感じられた。そわそわと太腿を擦り合わせながら、ズボンのおしりの側をそっと押さえ、明日香は小さく身をよじる。

ジーンズのデニム地の奥で、少女の恥ずかしい液体がたぶつ、と音を立てる。

明日香はそのままゆっくりと庭に回り、芝生と花壇に面した縁側のガラス戸も順に調べてみるが、残念なことこちらにもしっかりと鍵がかかっていた。

雨戸こそ閉まってははいないものの、レースのカーテンがしっかりと引かれ、家の中の様子はほとんど窺うことができない。

「……ねえ、ほんとに誰かいないの……？」

こつこつ、とガラス戸を叩き、カーテンの隙間を覗き込む明日香。

今家の中にいるとしたらせいぜい、水槽の中を泳いでいる熱帯魚ぐらいのものだが——もちろん彼らが水を這い出してきて窓を開けてくれることがないのは、さすがに明日香も理解している。

だが、返事がないとわかってはいても、何かにすがりたいような心細い気持が膨らんでゆく。

その原因は、下腹部で次第に強まってゆく尿意のせいだった。

本音を言えば、もう我慢したくない。まっすぐにトイレに駆け込んでオシッコを済ませてしまいたい。その程度には、明日香の尿意は切迫していたのだ。

もし、妹か誰かが家の中に残っていて、鍵を開けてくれれば——いや、この窓を破る方法があれば、すぐにでもトイレに駆け込むことができるのに。

窓のカーテンの向こう。リビングの先にある廊下の突き当たり。鍵をかけた清潔な小さな個室の中で、白いトイレにまたがり、脚の付け根から思い切りオシッコをほとばしらせている自分の姿を、明日香はつい思い描いてしまい、たまらず腰を左右にくねらせてしまう。

いっそ本気で、窓を割ってしまおうか。

そんな乱暴な発想が、ちらりとでも頭をよぎるほど、明日香は余裕をなくしていたのだ。

「んう……っ」

しかし、そんなものは夢にすぎない。

このままここに居ても、おしっこを済ませることは不可能だ。それははっきりとわかっていた。何度確かめてもドアも窓も硬く閉ざされ、鍵は一つも開いていない。

家の鍵はお財布に納めたまま2階の部屋の机の上。いまや完全な密室なのだ。

（トイレ……、オシッコ、行きたいよ……っ）

カーテンを重ねるガラス戸を恨めしげに見上げて、このままじっと見つめてたら穴があいたり、通り抜けたりできないかなどと夢のようなことを想像して。

明日香は、どうしても諦めきれないまま、なおもしばらくそこに立ち尽くしていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 我慢 R P G 没ネタ供養・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 永久我慢

CATEGORY: 永久我慢

DATE: 02/17/2012 23:59:29

BODY:

ずっと以前に R P G ツクールで作成しようとして頓挫した、「我慢系 R P G」のイベント案を小説風にリメイクしたもの。
一部つながりがあるもの以外、時系列などはバラバラで順不同。

<hr size="1" />

■ 隣の家イベント

※隣の家の前でおばさんに話しかけると発生

※トイレ修理イベントに派生する

家を閉め出された明日香が次に向かったのは、隣の家玄関だった。

隣家とはもう10年以上、家ぐるみでの近所づきあいがあり、登下校のときなどに挨拶をするような間柄である。困った時にお世話になることは、これまでも何度かあったことだ。

（……ちょっと恥ずかしいけど、知らない人に言う訳じゃないし……）

わずかな躊躇いはあったものの、自分に言い聞かせるように頷いてインターホンを押すと、すぐに返事がありドアが開く。

「あら、明日香ちゃん？ どうしたの？」

「こ、こんにちは……」

顔をのぞかせた隣家のおばさんに、ぺこりと頭を下げる。

明日香は出て来たのがご主人のおじさん——昨年定年を迎えたばかり——ではなかったことに少しか安堵して胸をなでおろす。余裕がないとはいえ、やはりこんなことは女の人でなければ話にくいものだ。

油断するともじついてしまいそうな脚をきゅっと寄せ合わせ、居住まいを正して、明日香は話を切り出した。

「その……ちょっとした行き違いで、家から閉め出されちゃって……お、お手洗い、借りても……いいですか……？」

お手洗い、という単語を口に出した瞬間、わずかに足元がふらついてしまう。結果的にもじもじと腰を揺すり、我慢している様子を見せてしまって、明日香の頬は熱くなった。

いい歳をしてはっきりと『トイレを我慢しています』と訴えるのには勇気がいる。まして、自分の家ではなく他の家のトイレを借りようというのだからなおさらだ。

（でも、このまま遠くまで行くのも……大変だし。ちょっとくらい甘えちゃってもいい……よね？）

本当の本音は胸の内に隠して、明日香は軽く頬を赤くしながら、トイレを借りたい旨を訴えた。

明日香の様子を見て状況を理解したのだろう。おばさんは、あらあら、と目を丸くしつつ、しかし頬に手を添えて困ったように眉を寄せる。

「……その、ごめんなさい？ ちょっとねえ、朝から下水の調子が良くないのよ。……それで、さっき修理をお願いしたんだけど……」

（えっ！？）

『いいわよ。どうぞ』そんな返事を期待していた明日香は、肩透かしを食らって目を丸くした。

にわかに雲行きが怪しくなる。

「そのねえ、工事の人がまだ来てくれないのよ。……午前中には間に合うって話だったんだけど……」

（ええっ！？）

明日香の困惑は表情にも出ていたのだろう。おばさんは済まなそうに何度もうなずいて、御免なさいね、と決定的な一言を告げた。

「だから、今はうちのトイレも使えないのよねえ……」

（ええええっ！？）

「御免なさいね。申し訳ないんだけど……」

やんわりと、しかしはっきりした拒絶。

故障中とはいえ、最悪使うことはできるんじゃないか——と、甘いことを考えていた明日香の期待は、完膚なきまでに打ち碎かれる。

「……そ、そんなぁ……」

まさか断られるとは思っておらず、明日香はついに声を上げてしまう。

またもトイレの直前で期待を裏切られたことに、明日香の排泄器官は抗議するようにきゅうつと収縮し、こぼりつと排泄欲求を湧きあがらせ。強まる尿意に乙女のダムの水面が波打つように揺れ、明日香は慌てて脚をぐっと交差させた。

折角の解決策も全く役に立たず。明日香は回れ右を余儀なくされたのだった。

<hr size="1" />

■ビルのトイレイベント

※大通りのビルのトイレ前で発生

『清掃中』

「うそっ……！！」

明日香は呆然と、ビルのトイレの入り口で立ち尽くしていた。

大きく遠回りをしてまでようやく辿り着いた婦人用トイレには、無情にもそんなプレートが設置されていたのだ。ご丁寧に、その横には『別のトイレをご利用ください』とまで注意書きが加えられている。

「……………そんなぁ……」

まっすぐデパートへ向かえばいいものを、わざわざ余計な苦労まで背負い込んでやってきただけに、失望感もひとしおだった。床に設置されたプレートの前で明日香はがっくりと肩を落としてしまう。

（ここまで我慢すれば大丈夫だと思ったのに……！！）

明日香の身体はすっかりここでオシッコができるつもりで、準備を進めていたのだ。またも『お預け』を食らい、少女の下半身に、堪えていた分の尿意が一気に押し寄せてくる。下半身を飲み込みそうな強い波に、脚の付け根がじんつ、と痺れを走らせる。

思わず明日香はスカートの裾を掴んでしまった。

小さく足踏みをしながら、明日香はしばし、じっと入り口のプレートを睨みつけた。

（ううう……っ）

清そのまましばらくトイレの前をうろうろと歩き、そと、プレートの奥を覗き込む。

トイレの中では、マスクに作業着姿のおばさん達が、何かの薬剤を撒いて床や壁の清掃を始めていた。ちょっと簡単な掃除、といった雰囲気ではなく、徹底的な洗浄・改修作業のようだった。

ただの水洗いなら中に入ることは簡単なのだが、そんな様子でもないらしい。

「あのー……」

「はい？」

それでも——一縷の望みにすぎるように、きゅっ、と太腿を寄せ合いながら、明日香は掃除中のおばさんに声をかける。

「あ、あの、ここ……使えないんですか？」

「……使いたいの？ うーん……ごめんなさいねえ。いつもなら大丈夫なんだけど、今日はちょっと……無理かもねえ」

おばさんの説明によると、今日は半年に一度行われる本格的な清掃作業とのことで、いつもなら深夜におこわれるはずの作業が、テナントの事情で営業時間中にずれ込んでしまったらしい。

先に婦人用のトイレ、そのあとに紳士用のトイレと、一日がかりの作業になるという説明を受けて、明日香は背筋を震わせてしまう。

「そ、その、あと……どれくらいかかりますか？」

「そうねえ、……まだ2時間くらいはかかっちゃうかしら」

「そんなにっ！？」

たまらず声を上げてしまった明日香に、清掃のおばさんはすまなそうに眉を下げる。

「本当にごめんなさいねえ。どうしても我慢できないなら、隣、使ってもらっちゃってもいいわよ。あっちはまだ作業してないから」

「隣？ 隣って……」

「男子トイレよ」

さりとて言われ、明日香はたちまち赤くなってしまった。……確かに、緊急避難としてはまあ、ありえない選択肢ではないが。

ちらりと視線を向けた先、廊下の反対側にある青いマークの入り口に、タイミングを計ったように背広姿の男の人が入っていく。トイレの前で前かがみになっている自分を見られてしまった気がして、明日香は頬をますます赤くする。

「大丈夫よ、こっちが使えないんだから、説明すれば……。なんだったら……」

「あ、あはは、いいですいいです。すみません！！ お仕事中に、お邪魔しましたーっ！！」

放っておくとおばさんが紳士用トイレまで案内付いてきそうな気配を感じ、明日香は慌てて踵を返していた。

しばらく離れてから、ちらり、と背中越しに紳士用トイレのほうを眺め、明日香は苦笑した。

(いや……その、うん……確かにそうだけど、さあ……それはやっぱ、女の子として……どうかなあ……)

そんな事を考えている余裕が、まだあっただけ。この時の明日香はマシだったのだ。

<hr size="1" />

■喫茶店 & 先輩コーヒーイベント

※アイテム：コーヒーの使用法について説明する

※強制尿意上昇イベント

※先輩はコーヒーを使用するまで解放してくれない

「あはは。そんなに汗かいちゃって。暑かったの？ 遠慮なくていいよお、明日香ちゃん」

「は、はい……」

冷えたグラスは汗をかき、ストローが傾いてからんと小さく氷の音をたてる。秋とは言えまだまだ日差しは強く、外で運動すれば汗ばむくらいだ。考えてみればずっと歩き通しで、渴いた喉は確かに水分を欲している。

けれど、目の前のアイスコーヒーには手をつけられないまま、明日香は曖昧に頷くばかりだった。

(……うう……っ)

ウェイトレスの制服に身を包んだ先輩の“好意”の笑顔が、あまりにも心苦しい。

「どしたの？ 飲まないの？ 喉乾いてんじゃないかった？」

「そ、そうなんですけど……」

後輩思いではあるが、良くも悪くも上下関係を強く重んじる先輩だ。あまり会いたくないタイプなのだが、まさかこんな場所でバイトをしてるなんて完全に予想外だった。

困惑を隠しきれずに、明日香はじっと、コップになみなみと注がれたアイスコーヒーを見下ろした。

(こんなの飲んだら、もっと……トイレ、行きたくなっちゃう……！！)

ただでさえ利尿効果の強いコーヒー、それがしっかりと冷えているのだ。恐らく、乾いた身体には効果覿面だろう。

トイレを借りるために慣れない喫茶店に入ったところで、偶然部活の先輩に出くわしてしまったのは、不幸としか言いようがないことだった。決して嫌いな先輩ではないのだが、今日ばかりはそれが恨めしい。

しかもこの喫茶店は集合店舗であるため店内にトイレはなく、いったん店を出てビルのトイレを使うことになっているのだという。それが最初からわかっていれば、明日香もわざわざ立ち寄ることもなかったはずだ。

しかも具合の悪いことに、店内はがらがらで、カウンターの奥にいる店長はバイト中であるはずの先輩が明日香と話し込んでいるところを咎めようもしない。すぐ隣にじっと陣取られていては、席を立て『その前にトイレに』とも言い出しにくかった。

「……い、いただきます」

せっかくの好意を断ることもできず、誤魔化すこともできないまま、明日香は覚悟を決めてストローに口をつけた。喉が渴いていないと言えば嘘にはなる。我慢を続けているせいか口の中はカラカラで、舌がうまく動かないほどだ。

吸い上げたアイスコーヒーは、きんと頭を冷やしながら喉を滑り、おなかの中へと流れ落ちてゆく。

「ん……っ」

喉の奥へ流れ落ちてゆく冷たさは、おなかの奥まできんと響くようだった。同時に下腹部も敏感にそれを察知し、脚の付け根の痺れがじんと強さを増す。

冷えた利尿作用の強いコーヒーは、まるで、そのまま膀胱の中へと注ぎ込まれていくようで、明日香は何度も座る位置をずさりながら、カウンターの下ではしたなく交差させた脚をしきりに組み換えてしまう。

(うう……タイミング、悪すぎだよ……)

トイレを借りるつもりでやってきたのに、オシッコができないばかりかますますオシッコの素になるようなものを飲まされるなんてついていないにも程がある。

「どう？ 結構いけてると思うんだけど、なんでかお客サン少ないんだよねー。場所も悪くないし、もっと流行ってもいいよねえ。明日香ちゃんもそう思わない？」

がらがらの店内がよほど退屈だったのか、先輩はさっきから明日香の前を離れようとしなない。

(と、とにかく、早く飲んで……外、出ようっ)

緊張する喉を震わせ、再度ストローに口をつける明日香だが、きんきに冷えたアイスコーヒーは、舌や喉を痺れさせるほどで、いくら飲んでも減る様子がない。

時間をかければかけるほど氷が溶けて、飲む量も増えてしまうのだ。少しでもはやく飲み終えてしまいたい。そう思うのは当然の心理だった。

目をつぶって、一息にストローを啜る。

(……っ)

半分近く残っていたコーヒーが、一気に明日香のおなかの中へと消え、ストローがずずずと音をたてた。おなかの奥が今飲んだ分だけ水位を増し、たぶんっと揺れるような錯覚を覚えながら、明日香は空になったグラスをテーブルに戻す。

「おー。いい飲みっぷり。さすがだねっ」

嬉しそうな先輩はそう言うと、小さく拍手をして、

「おかわり、いる？」

さらに嬉しそうにそんなことを言ってきた。

<hr size="1" />

■ 茂みの奥で

※公園の少女イベントから派生

※河原に近づくと発生。

※以後、少女の居た位置は野ションスポットに変化する。

(あれ？ あの子……)

河沿いのサイクリングロードを急いでいた明日香が、落ち着かない足元を紛らわせようとふと視線をめぐらせた先に、見覚えのある色合いのリボンを見つける。

河原に生えた茂みの中を、先ほど公園で見かけた女の子が小走りに走っていく。

「……さっきの子、だよな？」

見間違いかとも思うが、公園で忙しそうにしていた少女に間違いはない。

どうしてこんな所という疑問を抱く明日香をよそに、少女は落ち付きなく周りを見回しながら、河原の隅、コンクリートでできた塀の方へと走り寄ってゆく。

姿勢は背中を丸めて前かがみ。その左右の手のひらは、しっかりと重ねられ、デニムのスカートの上から脚の付け根に押し当てられていた。

(あ……！！)

彼女が何をしようとしているのか、明日香はようやく理解する。

公園のトイレは工事中だったのだ。立ち入ることができない以上、トイレを催したのなら、どこかほかの場所でオシッコを済ませなければいけない。

ぎゅうっと股間を握りしめた前押さえの恰好のまま、コンクリート塀の側に辿り着いた少女は、不安げに何度も周りを見回した。ちょうど明日香のいる位置はその真上であり、彼女もまさか、上から自分を見ている誰かがいるとは思っていないらしい。

手のひらは脚の間に深くまで差し込まれ、ちょうど身体の前から股間部分を抱え込むようにそて前屈み。激しくバタバタと足踏みをしなが、ぎゅうぎゅうと腰をよじらせる。

周囲に視線もないためか、少女の我慢の仕草はかなり大胆なものだった。それだけ尿意が切羽詰まっているのだろう。必死に我慢をしている姿につられて、明日香の下腹部もきゅんと切なく疼く。

少女はもう一度回りを見回すと、デニムのスカートに手を突っ込んで勢いよく下着を下ろし、橋のたもとのコンクリートの壁に向かってしゃがみ込んだ。

「あっ……」

小さな、鈴を鳴らすような可愛い声。同時に、少女の脚の付け根から凄まじい勢いで放たれた水流が、コンクリートの上を直撃した。

サイクリングロードまで音が聞こえてきそうな、豪快なおしっこ。

ずっと我慢していたのだろう。小さな身体とは不似合いなほどに勢いよく、まるでホースを使って水をまくような激しい水流が、コンクリートの地面に噴射されてゆく。

噴き上がる水流はみるみる地面の色を変え、白い泡を立てながら傾いたコンクリートの上を滑り、河原の方へと流れてゆく。

「ふぁぁぁぁ……」

放尿を続ける少女が、ゆっくりと安堵の溜息を吐いた。長い我慢から解放された少女の表情はふわふわに蕩け、目は潤み、唇はわずかに開いて甘い喘ぎをこぼす。

（い、いいな……あの子、……あんなに、気持ちよさそうに……）

たまらず大きく揺れ動き、わたしも、わたしも、と。我慢の限界を訴える下半身。もちろん、あんなところでおしっこなんで、まだ小さな女の子だから許されることであって、明日香にはできるはずもないのだが――

（私も、はやくおしっこ……したいよぉ……っ）

目の毒と分かっていながらも、明日香はしばし、その光景から目を離せずにいた。

とてつもなく気持ちよさそうなおしっこをするその姿を見せつけられては、明日香の腰の揺れがおさまるわけもない。それどころか、今すぐあそこに駆け寄って、一緒におしっこを済ませてしまいたいとまで考えてしまう。

（っ……ば、馬鹿！！ 何考えてるのよわたしってば……っ）

明日香は慌てて首を振る。あんな丸見えの場所でトイレなんて、あのくらい小さな子ならまだしも、明日香にできるはずがない。

後ろ髪を引かれるのを無理やり振り切って、明日香は足早にサイクリングロードを走り去ってゆく。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・8

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/15/2012 00:30:13

BODY:

河川敷のグラウンドにもたらされた絶対的な女子トイレの不足——それによる、強制的なオシッコ我慢。時間の経過とともにその傾向はますます加速し、もはやグラウンドにいる少女達の大半が、尿意を覚え始めている異常事態となっていたのだ。

分別のある大人の女性や、簡単にトイレを済ませられる男性はともかくも。

もっとも繊細な年頃である思春期の少女達にとって、トイレの不足は一大問題である。恥ずかしい熱湯で下腹部をぱんぱんに膨らませながらも、羞恥心をかなぐり捨てて、周囲からも丸見えの茂みにしゃがみ込むには心理的なハードルが高すぎた。

結果として、運動会に参加している世代の中で、小学校から高校までの少女達は、ほぼ例外なくトイレ我慢を強いられることになっていたのである。

それでも、すでに出番を終えた選手や、観客席の生徒達はまだ良い方だ。

少ないとはいえまだ残っているトイレに並んで、辛抱強く自分の番を待つこともできし、諦めて会場を後にし、遠くのトイレに行くこともできた。

しかし、残るプログラムに選手として参加しなければならない少女達はそうはいかない。強い尿意に耐えるため身体をくねらせ、小さく飛び上がり、足踏みを繰り返すみっともない姿を、入場待ちの列にいる間から競技のおしまいまで、観客や他の選手たちに晒さなければならないのだ。

しかも。手を離したら、たちまち開いてしまいそうな水門を乙女の下腹部に抱えながら、グラウンドの中央ではおおっぴらに脚の付け根を押さえこむこともできない。

必死に身をよじらせ、腰をくねらせる——精一杯さりげなさを装っての、いじましい我慢のしぐさ。それでも突き刺さる好奇の視線に、少女達の表情は羞恥に染まり、目には薄く涙すら浮かぶ。

競技のプログラムがひとつ、またひとつと進行するに従い、その傾向はより顕著になり、入場門をくぐる少女達の姿はますます悲痛なものへと変わっていった。

同じようにトイレを我慢している同年代の少女達は、まだそれを察することができたため、出来るだけそのことに触れないように、あるいは気の毒そうに、グラウンドにいる選手たちから視線をそらしていた。——実際、苦しげに身をよじって我慢を続ける代表チームの選手たちの姿はじっと見ているだけでも辛く、ふと気を緩めればつられて強い尿意を催してしまうことにもなりかねないため、観客の少女達にとっても文字通りの目の毒であった。

しかし、同じ選手でも男子生徒や、一部の観客はそうはいかない。

晴れの舞台となるグラウンドの真ん中で、もじもじと脚を擦り合わせ、辛そうに体操服の上からはずかしいところを押さえ込む仕草は、十分すぎるほどに扇情的で、たとえ「そんな趣味」を持っていなくとも気になって仕方がない姿である。

中にはジャージの股間をしっかりと膨らませている少年達もあり、彼等の何人かはこっそりと前屈みになり、オシッコとは別の液体を出すために男子トイレへと駆け込んでいくほどだ。その意図を察してしまった少女達は、憤りと共にますます羞恥を覚え、最終的緊急避難のために男子トイレに駆け込む事といった、最後の手段すら失ってしまう悪循環を生みだしていた。

チーム対抗・綱引きの準決勝第1試合でも、これらの自体を象徴する出来事が起きていた。

すでに2時を回った会場、そこかしこに言い知れぬざわめきが満ちる中、紺色のハチマキのグループBと、桃色のハチマキのグループFの代表チームが、アナウンスに促されて入場門をくぐる。

入場行進の時点で既に、選手たちの様子がおかしいのは明らかだった。

全員がほぼ例外なく重い足取りで、腰を引いて背中を丸め気味になり、行進とは程遠いすり足で入場してゆく。視線も俯き、頬は紅く、息も荒い。

中には遠目にも明らかになるほどにまで足の付け根部分を気にしたり、押さえこんでしまっている少女の姿もあった。

大勢の観客達の視線の中、体操服の前をぎゅっと引っ張り下ろして、もじもじと腰を揺るのは、緊張による恥ずかしさだけでは勿論ない。

この準決勝に参加している選手たちはほぼ全員が、強い尿意に苦しんでいたのである。

のろのろと入場を終えた両チームが、第一競技の時の倍ほどの時間をかけて、ようやくグラウンド中央に設置されたマーカーを挟み綱引きのロープの脇に整列する。

ただでさえ進行の遅れている運営委員は、不用意に時間を取らず、素早く行動するように何度も指示をするが、少女達にしてみれば無茶な注文だった。急激な動作はそれだけで、足の付け根の水風船を圧迫してしまうのだ。せめて下腹部に余計な刺激を与えないようにゆっくりと動かしかなければ。

ともかくも、運営委員の指示により、これまでの試合を勝ち抜いてきた両チームは、綱引きのロープを挟んで対峙する。

アナウンスが開始の合図を告げ、審判役を務める運営委員が、

『位置について』

とロープを持つよう指示をだした。

だが、ここでも両チームの少女たちは、お互いの顔を見合わせるように躊躇い、戸惑いを見せて動かこうとしない。

最初は聞こえなかったのかと首をひねる運営委員。しかし何度か繰り返しても、少女達はためらいの表情のままもじもじとうつむくばかりで、一向に用意を始めようとする。

運営委員たちはすっかり焦り、プログラムの進行が大幅に遅れていることを口にして、再度彼女たちに早く用意するように指示を飛ばす。

『早く位置につきなさい！！』

これ以上時間をかけるようなら、戦意喪失による不戦敗としてしまうとする、強い語調だった。

だが、それでもなお選手たちの動きは鈍い。

それも当然のことだ。グループB、グループF、それぞれのチームの少女達は、ほぼ全員、少なくとも昼休憩の前からトイレに行くことができていない。

程度の差こそあれども、全員がいまなお、恥ずかしいオシッコ我慢の最中なのだ。できれば余計なことはせず、じっとして尿意をやり過ごしたいのが本音なのであった。

綱引きの競技開始前にとる、『位置について』の姿勢は、ロープを握り、その場に腰を下ろすものだ。

つまり、手で必死に握り締めている股間の押さえをなくし、和式便器にしゃがみこむのと同じ、『オシッコをするための』ポーズに非常に近いものである。

今そんな格好をしてしまったら、股間の根元、懸命に塞ぎとめている乙女のダムの排水孔に凄まじい負担をかけてしまうのは、選手の少女達の全員にとって明白であった。

せめて体育座りであれば、足を閉じ合わせたり膝を擦り合わせたり、最悪、直接手で体操服の股間をぎゅうっと押さえこむこともできるだろう。事実入場行進の前には、そうやってオシッコを我慢している選手たちが何人もいた。

だが——いつまでも戸惑っている訳にもいかなかった。観客席からは応援の声が飛び、吹奏楽団の演奏も始まる。

強く叫ぶ審判の声に背中を押されるように、少女達はゆっくりと、その場に腰を下ろしはじめる。

「んあつ……！！」

「は……うっ……」

「ああつ……」

身じろぎと共に悩まげな吐息をこぼし、少女達はまだあどけない顔を苦悶に歪ませた。

その場に腰を下ろす——たったそれだけの動作にも、慎重に慎重を期さねばならないのだ。

およそ1分近くもかけて、羞恥に頬を赤く染めながら、綱引きのロープを手に、両チームは向かい合うように腰を下ろした。1チーム18人、両チーム合わせて36人の少女達が、ロープに沿うようにグラウンドの上にしゃがみこむ。

それはさながら、少女達が2列になって順序よく並び、強制的に競技場の真ん中で『オシッコ』のポーズを取らされているのに等しかった。

「ああ、いやああ……っ」

「っ……だめ、でちゃう……っ」

限界寸前の尿意を堪えている少女達にとって、これほど苦しくも辛い拷問があるだろうか。

綱引きのためにしっかりと足場を固めるには、どうしても足を閉じているわけにはいかず、肩幅に開いた脚と膝の奥に、体操服の股間を無防備にさらしてしまう。

しかも、下腹部の水圧に耐えつつけている乙女のダムの水門が、身体にぴったりと沿うスパッツの上からでもひくひくと震えているのが相手チームの選手から丸見えなのだ。

オシッコ我慢のためには一番イケナイ体勢を強いられて、選手の中には激しく腰を揺すりはじめたり、立てた運動靴のかかとにスパッツの股間を押し付けて、ぐりぐりと体重をかけて身体をねじる少女までいる始末だった。

『用意！！』

放送が次の指示を出す。もはや後戻りはできなかった。

いまからトイレに行きたいと叫んでも、そもそも間に合うのかも分からないのだ。少女達は悲壮な決意でロープを手に取った。押さえこめない股間の代わりに、せめてきつくロープを握り締める。

『スタート！！』

合図とともに号砲が鳴り響く。

準決勝第一試合——開始。

両チームは一斉に腰を上げ、力を合わせてロープを引き始める。

だが。

両手を股間から離し、ロープを握った直後から、無防備になった少女達の足の付け根には、猛烈な勢いで尿意の波が押し寄せてくる。覚悟していたよりもはるかに凄まじい水圧が一気に水門を直撃し、少女達の中にはさっそく股間の股布部分にしゅるしゅると熱い雫を噴きこぼし、恥ずかしい染みを広げはじめる者がでてしまう。

だが、綱引きの競技中は、手を離すどころかぴたりと太腿を擦り寄せることも、足を交差させることも、前屈みになって下腹部の負担を和らげることも許されない。

ロープを引っ張るにはどうしても足場に力を入れて踏みしめる必要があり、その時に水門を締め付ける括約筋はどうしても緩んでしまう。さらには握り締めたロープは両チームの間で力の均衡の間で小刻みに揺れ動きながら行き来し、予測不可能なタイミングで少女の身体を引きずり、あるいは押し戻す。

中腰、つま先立ちのおぼつかない脚元で、身体を大きく前後に揺すられて。たちまち少女達の脚の付け根にはじゅわっ、しゅるしゅると恥ずかしい音を立て始め、下着に熱い雫をたっぷりと噴き付けてしまうものが続出した。

特にグループBチームの先頭にいた久瀬圭乃は、『おチビリ』だけでは済まず、スパッツの脚の付け根をはっきりと色濃く変えるほどの大きな染みを広げてしまった。

たまらないのはそのすぐ向かい、桃色のハチマキ、グループFの先頭にいた桧葉朱音である。

手の届きそうなほどの目の前で、圭乃が股間にしゅるしゅると恥ずかしい熱湯を噴出させるのを見て、朱音も明らかに動揺してしまった。できるだけ気にすまいと思っていた尿意が一気に現実のものとなり、ぶじゅっ、と派手な音を響かせて温かい水流を吹き上げる股間に、朱音はたまらず片方の手を離し、股間を押さえこんだ。

ここまでトーナメントを勝ち残り、ほぼ互角の勝負をしていた両チームだ。このわずかな差が大きな影響を及ぼすのは当然だっ

た。

拮抗していた両チームの力の均衡は瞬間に破れ、マーカーは大きく圭乃達のチームへ動く。

朱音達のチームは1 m近くも地面を引きずられ、前に滑る。ロープをしっかり握りしめていたため、つんのめる様にバランスを崩すもの、踏ん張った脚を引きずられるもの。選手たちはもはや硬く張りつめぱんぱんに膨らんだ下腹部をかばうこともできず、少女達は小さく悲鳴をあげてしまう。

圧迫された下腹部では羞恥の水風船がぎゅうと押しつぶされ、出口を貫いた水流がスパッツに広がる染みを勢いよく広げ、ついにはばたばたと地面に水滴まで垂れ落ちてゆく。グラウンドに広がった染みはみるみる大きくなり、スパッツの裾からちよろちよろと恥ずかしい音を立ててしまう少女もいた。

そんな有様でまともにロープを握れるはずがない。片手で、あるいはすでに勝負を放棄して脚の付け根に両手を差し込み、懸命に最後の崩壊だけは避けようとする。いったん総崩れとなったグループFチームは体勢を立て直すことなどできず、ロープのマーカーはそのままだグループBのほうへと引きずり込まれた。

さっと空に向けて赤い旗があがる。

「Bチームの勝利です」

勝負がついたのだ。

しかしそれを喜ぶ余裕などなく、猛烈な尿意に身をよじる少女達に向けて——無常なる声が飛ぶ。

「それでは、2本目——」

そう。この綱引きは3本勝負。2本先取の勝ち抜けである。

もう一度、あるいは、勝敗いかんではその上さらにもう一度。

少女達は、グラウンドの中央で、ロープを握りしめ地面の上にしゃがみ込んで、オシッコをチビらせ股間を濡らすその姿を、観客達に見せつけなければならないのだ。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 中間テストの一コマ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 04/15/2012 00:31:40

BODY:

お茶を濁す（色々な意味で）。

<hr size="1" />

（はやくっ、お、お手洗い、いきたいっ……！！）

もじもじっ、くねくねっ

テーブルを握り締め、椅子の上で激しく足を擦り合わせる六花。ぱんつに恥ずかしい色の染みが徐々に広がり始めている。言うことを聞かない乙女の水門を押さえ込むため、力む上履きの爪先がきつく床を擦り、きしきしとみっともない音を響かせていた。

真新しい制服のスカートは、プリーツを台無しにするほどの皺が寄り、繰り返される前押さえによって足の付け根に押し込まれている。

硬く張りつめた下腹部は我慢し続けた尿意でぱんぱんに張り詰めて、今にも破裂してしまいそうにびくびくと震えている。

あと数分も放っておけば、六花はこのまま教室のまん中で、椅子に座ったままおトイレを始めてしまいそうな様子だった。

（は、はやくっ、はやくうっ……はやくううっ！！）

六花は押し寄せる尿意に歯を食いしばって耐えながら、黒板の上にある時計の文字盤を睨む。一分一秒でも早くこの地獄のような時間が終わってくれますようにと心から祈るが——無情にも分針はテスト終了までの残り時間をゆっくりと刻み続けるばかりだった。

黒板に記されたテストの試験時間は、何度確認しても10時50分。まだ20分以上残っている。途中退室が認められていない以上、六花は教室から出られないのだ。

中学校にあがって初めての中間テスト——前の学校のテストとは全然違うプレッシャーの中、六花の神経はますます追い詰められてゆく。

答えはまだ半分も埋まっておらず、しかも計算問題のほとんどが意味不明でとんちんかんな解答を弾きだしていた。このままでは

赤点回避も難そうだが——いまの六花はそんな事は些細な問題だった。

（お願いっ、はやく、はやく終わってよおおっ！！ で、でちゃう、オシッコ——オシッコでちゃううう！！）

一刻も早く、トイレに行きたい。オシッコしたい。ただそれだけだ。

中学生にもなってオモロシなんて、女の子には絶対に許されないことだ。

ましてすぐ隣にはサッカー部の沢田くんがいるのだ。もしそんな姿を見られたら、明日から生きていけない。

数学の問題用紙を見て難しい顔をして考え込んでいる憧れのクラスメイトに気付かれないように、六花はきつく膝を交差させ、腰をなるべく静かに揺すり続ける。

どうしても荒くなる息を押さえ込み、教卓に座る監督の先生を見た。

分厚い胸板に広い肩幅。陸上部の顧問もしているという男性教諭——2年生の担任の先生だった。不正がないようにじっと教室内を見回す鋭い視線は、じっと真正面から向き合うのも怖いくらい。

同じ部屋に居るだけで、内気な六花はただでさえ気後れしてしまって何も言えなくなる。

先生と視線が合いそうになり、六花は慌てて顔を伏せた。

（っ、お手洗い……っ、だ、ダメえ……！！ がまん、我慢んっ……）

同時に押し寄せた強烈な尿意に、少女は身を強張らせた。

じんと熱く疼く股間が、またじわりじわりと恥ずかしい雫を滲ませ、ぱんつに噴き出した湿り気がどんどん大きくなってゆく。内腿に広がる濡れた感触を誤魔化そうと、六花は激しく腿を擦り合わせた。

言えない。言えるわけがない。

入学式から1カ月半。ようやく名前と顔が一致するようになったクラス全員の前で。誰もお喋りもしていない、緊張の中で、手を上げて——先生、おしっこがしたいです、おトイレに行かせてくださいなんて。

（言えるわけ、ないよお……っ！！）

思春期の少女らしい潔癖な理性が、繊細な羞恥心が、少女の前に大きく立ち塞がる。

時計の針は絶望的なまでに遅い。脈打つように下腹部が疼き、下半身全体が言うことを聞かず、小刻みに震えだしていた。

トイレを我慢しすぎた下腹部はじんと鈍い痛みすら走り、目はちかちかとして、頭の芯がぼうっと熱い。感覚の麻痺しかけた足の付け根から、またしゅるしゅると恥ずかしい水音が漏れてゆく。

（っあ、だめ、え、ええっ……）

椅子の天板にちいさな水たまりが広がり、さらにそこから雫が溢れ落ちて、ぼたぼたと床に垂れてゆく。いよいよ始まった、本格的な崩壊までのカウントダウン。

ヒビだらけの乙女のダムが、貯水量の限界を超えて決壊をはじめようとしていた。

残り時間18分。

人生最大の危機、答えの出ない試験問題は——なお続く。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・9

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/08/2012 23:55:10

BODY:

——根本的な女子トイレの絶対数の不足。

思春期の少女達への思慮の不足から発生した、仮設トイレを使えない、あるいは使うことを拒否した少女たちによる、事務棟横トイレの大行列。

処理能力を越えた仮設トイレの、度重なる故障。

それに伴って生じた、新たな『おトイレ難民』の大量発生——

河川敷のグラウンドに生じた絶対的なトイレの不足はいよいよ末期的な状態であった。午後4時を越えた時点で、会場内でもともに機能している女子トイレは10を大きく割り込み、わずか6つ。それは会場である河川敷グラウンドに居る少女達の数百分の1にも満たない数となっていた。

しかも、実際にトイレの順番待ちをしている少女達以外にも、参加者の大半が潜在的なトイレの順番待ちの状態にある。ただでさえ不足しているトイレは、フル回転で稼働を続けており、午後を回ってから立て続けに故障を始めている。

遠からず、この会場からトイレが消滅し——少女たちの誰ひとり、オシッコができなくなってしまうことが、冗談ではなく本当に予想

されうる未来となり始めていた。

綱引きに続き、午後一番の盛り上がりを見せると予想されていた騎馬戦も、競技の始まる前からすでに惨憺たる有様をさらしていた。

参加チームを得点順で真っ二つに分けての一大合戦。勝利した陣営に等しくポイントが入るうえ、さらに生き残った騎馬の数に応じて追加ポイントもあるという大盤振る舞いの競技である。

優勝の行方を決める大きな転換点となるはずの種目だったのだが、そんな大舞台の戦場に向かうのは、勇ましくも麗しく装った戦乙女ではなく、今にも倒れてしまいそうに前屈みになって、顔を赤くして俯かせる我慢少女達だったのである。

騎馬を担当する少女達も、騎手を務める少女達も、限界まで耐え続けた尿意に恥ずかしく女の子の水風船を膨らませ、すでにちゃんとした地面の上でさえまともに立っていることが難しいのだ。

陣営の線に並ぶどころか、きちんと騎馬を組む事もおぼつかない。

両陣営に並んだ時点でふらふらとまっすぐ立てず、その場で足踏みをし、傾いてはぶつかりそうになって悲鳴をあげるほどなのだ。合図の笛に合わせて騎馬を作って立ち上がることができたのは、ごくわずかのチームだけだった。

そうやって立ち上がることができたチームでも、騎手役の少女が我慢できず、腰を乗せている騎馬の少女達の腕の上でよじった腰をくねらせ、彼女達の腕に恥ずかしくも股間を押し付けて、激しく腰を前後に擦りつける。思春期の少女にはあまりにも恥ずかしい姿だが、もはや、そうでもしていない限り限界寸前のオシッコを堰きとめる方法がないのである。

騎馬の上では周囲の視線を遮るものもなく、彼女達はまるで晒し台の上に乗せられているのと同じだった。騎馬を跨ぐことで足を閉じ合わせることもできず、懸命の我慢に関わらず、これまでの長い長い尿意との戦いで少しずつちびったオシッコでスパッツやブルマの股布部分に広げてしまった恥ずかしい染みを観客たちの視線に晒してしまうこととなった。

ハチマキを奪うため攻撃することも、体当たりの衝撃に備えて騎馬にしっかりとしがみ付く事もできず。交互に開けた左右の手で、ぎゅぎゅっと体操服の上から、無防備な股間を押さえ込む。色が白くなるくらいにきつく押さえつけられた指の隙間からは、ぽたぽたと透明な雫が滴り、溢れ落ちる。

異性の前で恥ずかしい失敗の証を露わにさせられ、少女達の繊細な羞恥心は再起不能なまでに引き裂かれてゆくのだった。

一方で騎馬を担当する少女達も、また似たように苦悶と羞恥にまみれた表情を覗かせている。本当はしっかりぎゅっと体操服の上から脚の付け根の『おんなのこ』の部分を引き握り締めたいのを懸命に我慢しながら、手を組み合わせて『馬』を組まねばならない。

それでもまだ片手だけでも自由になり、股間を押しつける場所のある騎手達と違って、騎馬担当の少女達は、完全に腕を塞がれた格好なのである。決壊しそうなダムの水門を支えるのは使され続けてすっかり弱り切った括約筋のみ。いよいよ高まる身体の内側からの水圧に押し負けそうになって、ぶくりと膨らかける排泄孔を、ありったけの力で引き絞って、

後ろに突き出した腰を小さく揺すり、すりすりとお股になって太腿を擦り合わせることで耐えなければならなかった。

そんな有様では騎馬としての役目を果たす事も難しい状態だが、その上で彼女達は騎手担当になる少女を馬上に登らせなければならない。

これが更なる苦難を生んだ。騎手役の少女を乗せるには、騎馬が身をかがめて、騎手を跨がせてから騎馬が立ち上がるか、騎馬の少女達が手を組み合わせた部分——本物の馬で言う『あぶみ』の部分足を足場に騎手役の少女が上によじ登る方法がある。

しかし、まっすぐ立つことも難しい騎馬担当の少女達が、千鳥足のようによたよたと身体を揺る中で、大きく身体を動かして脚を広げ、ひらりと馬の上に跨ることのできるような騎手役の少女など、ほとんど居ないも同じだった。

繰り返すが、騎手役の少女達も、脚をぴたり閉じ合わせてもじもじと身体をよじる、オシッコ我慢の真っ最中である。その状態で馬に飛び乗るなんて事ができるはずもなく、もし仮にやったとしても、即座にオモラシが始まってしまうことは明白なのだ。

事実、そうやって馬に跨ることができたのは、両陣営を通じてわずかに2騎。幸運にも、午前中のうちにオシッコを済ませることが出来、まだ我慢の余裕がある騎手を擁するチームだけだった。

他のグループでは、騎手をその背中に乗せるため、騎馬担当の少女達は騎馬の形を維持したまま、その場にしゃがみ込んで騎手を迎えなければならなかったのである。手の自由を奪われた上で、下半身に体操服を着たまましゃがまなければならないのだから、オモラシしてくださいと言われていたのと変わらない。

騎馬を組む途中で限界を迎えてしまい、脚の付け根に熱い飛沫を迸らせ、スパッツの股間の布の合わせ目部分から、じゅじゅじゅッ…と恥ずかしい雫を滲ませてしまう選手たちが続出したのである。

もはや誰の目にも明らかな異常事態。それでもなお、競技は中断されなかった。

この時点でさしもの運営委員側も、河川敷のグラウンドに起きている異様な状況を把握していたという。しかしそれでもなお競技が中止にならなかったのは、この期に及んでもプログラムの進行の遅れを問題にする一部の委員達による、強硬な態度での競技続行要求があったためだという。

すでに騎馬戦は開始の用意を済ませており、今更中断したところで事態が収まる訳がないし、競技直前まで準備をさせたのだから、今更撤回しているほうが余計に時間がかかるというのが、彼等の判断であったという。

事実の一側面だけを述べるのであれば、確かにこの時点で競技を止めたところで、ちゃんと歩くことも難しいほどの尿意に苦しむ選手たちがグラウンドを出ていくのには、長い時間を要したであろうことは明白であった。

さらにそうした措置を取ったところで、彼女達がすぐにトイレに入ることもできず、また恐ろしいほどに長い順番待ちをせねばならなかったことも確かである。グラウンドで晒し物同然となった彼女たちに、いかに同情的であったとしても、河川敷に残されたわずかな仮設トイレと事務棟横のトイレにできた長蛇の順番待ち列を押しわけ、彼女たちに先にトイレを使わせる事など、できるはずもなかったのだ。

後の反省会でさまざまな糾弾と憶測を呼ぶこととなったこの決定は、結局のところ少女達をさらに追い詰め、より最悪な形での幕引きを招くだけのものだった。

市民運動会の側面を持つこの大会、会場となった河川敷のグラウンドには、異性の目も多かった。

同級生の男子や家族連れの父親——そして、この時間帯になると、河川敷のグラウンドを舞台に起きている一大イベントを、

ツイッターや掲示板などで聞きつけて集まって来た下世話な興味を持つ野次馬たちも少なくなかった。

それでもなお、競技は中断されず、少女達は観客席に逃げ込む事も許されない。

男達の無遠慮な視線に晒され、半泣きになって騎馬にしがみ付く少女達。

やっと生乾きになった股間の股布部分には、再び新鮮なオシッコがじゅじゅと滲みだし、オモラシの痕跡をさらに大きく大きく広げてゆくのであった。

それでも無慈悲に進行を急かす運営委員に、もはや泣きながらなんとか立ち上がろうとする騎馬達。ここでもまた、下半身に余計な力を入れてしまい、少女達は次々に地面に次々と恥ずかしい熱湯を噴出させてしまう。

我慢と排泄のギリギリで強いられ続ける緊張状態でのおチビリは、そのまま少女達の腰を砕かせるほどの途方もなく甘美な排泄の誘惑となった。

そのままぎゅと脚を閉じ合わせて堪えねばならないところを、もはや全てを諦め、腰を砕けさせてその場にオモラシを始めてしまう少女が出始めたのだ。

一度、溢れだしてしまった奔流は、すでに留められるようなものではなく、次々周囲へと伝播する。

考えてみれば当たり前のことだ。限界寸前のオシッコ我慢の最中で、すぐ息の届くほどの間近で、同じように極限の我慢を続けていたチームメイトや友人がオモラシを始めてしまっているのだ。その上でなお、オシッコを我慢し続けるにはどれほど強靱な精神力が必要な事だろうか。いかに恥じらいの強い思春期の少女達と言えども、ほぼ半日近くトイレに入らずに過ごし続け、いまにもはち切れんばかりに重くばんばんに張り詰めた下腹部を抱えていては、抵抗の余地などなかった。

凄まじい勢いで地面をうつ水流の音が響き、同時にあちこちで苦悶と陶醉の聲が上がる。

競技開始を前に、グラウンドでは少女達のオモラシが続発した。一度は組み上げた騎馬は次々と崩れ、地面に恥ずかしい水たまりを広げながら、少女たちのすすり泣く声を飲み込んでゆく。

実に、競技開始までに、両陣営の戦力はすでに半減しているという、前代未聞の事態。

なかば興味、なかば不安に満ちた観客席で、大勢の選手・応援の人々が固唾を飲んで見守る中、ついに競技開始の笛が響いた。

選手たちはのろのろとした歩みで戦場となるグラウンドに出る。

しかし、競技場で二つの陣営の騎馬達がぶつかり合うことはほとんどなかった。多くの選手たちは戦場になるグラウンドに歩み出したところで動けなくなり、そのまま脚を止めて立ち止まるか、ひどい場合はそのまま騎馬を崩して倒れ込んでしまえばかりだったのだ。

わずかな激突はあったものの、鉢巻きなど取り合う余裕すらなく、よろけた拍子に騎馬がお互いを掠める程度。それでもぶつかった瞬間に、騎手役の少女は体操服の股間から激しく水流を迸らせ、馬の『頭』部分を担当する先頭の少女の背中にオシッコを派手にひっかけてしまう。次の瞬間、騎馬を担当する少女達が耐えきれずにしゃがみ込んでしまう。

かと思えば、今度は後ろ脚担当の少女達が、耐えきれずにぱしゃぱしゃと足元に雫を撒き散らす。どうにか腰を落とすことだけは避けてはいたものの、開いた脚の隙間に噴水のように水流が叩きつけられる様子は、男性諸氏からみても息を飲むほどに豪快で見事なまでの『立ち小便』であった。

これが本当の合戦で、彼女たちが本物の馬であるならば、合戦を前に身を軽くしようと、勢いよく放尿することもあったかもしれない。

しかし、グラウンドに立つ選手たちは皆、騎手も馬も、もっとも繊細な時期の少女達なのである。天地がひっくりかえっても、そんなことができる筈がない。

雌雄を決する戦場へ、勇ましくも誇らしげに向かうはずの騎馬達は、みな生まれたばかりの仔馬のようにまっすぐ立つ事もおぼつかないまま、内股で力の入らない脚を懸命に踏みならし、ついにはそのほとんどがグラウンドの真ん中で、我慢し続けたオシッコを残らず漏らしてしまうことになったのだった。

全ての騎馬が崩れ、啜り泣く少女達の声が当たりを埋める頃には、土の剥き出しのグラウンドはまるで夕立でも降り注いだように泥まみれとなり、汚れた少女達が座り込み、しゃがみ込んで、なおも激しい水音を響かせて水たまりを広げているばかり。

もはや会場は残るプログラムの競技を行うことも難しい状況に陥っていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・1 0

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/08/2012 23:57:02

BODY:

そして――再び、競技場であるグラウンドから、少し離れた河川敷へと目を向ければ、そこにもまた、およそ常軌を逸した光景が広がっていた。

グラウンドから歩いて 5 分ほどの、小さな茂み。

そこは背の高い草の生え揃ったコンクリートのたたき――覚えておいでだろうか、数時間前に孝乃が見つけた、『おトイレ難民』の女の子専用の緊急避難用・臨時仮設屋外トイレである。

そこにはいまや、10 人を超える少女達が列を作って並んでいた。

――なんということだろうか。本来、トイレでも何でも無いはずの、ただの河川敷の茂みにすら、そこで用足しの順番を待つ少女達の列ができてしまっているのだ。

しかし、そこは背の高い草むらが周囲を囲っているとはいえ、十人を超える少女が次々に入出入りするにはあまりにも不自然な場所だ。河川敷に生える茂みはすっかり踏み荒らされ続け、羞恥を堪え排泄する少女達の下半身、最も大切な部分こそ周りの視線から覆い隠しはしてくれるものの、彼女たちの姿を完全に覆い隠すにはとても足りていない。肝心のしゃがみ込んだ少女達の胸から上は丸見えなのである。

――つまり、かなり距離の離れた堤防の上からでさえ、草むらの中で少女達が群れるようにして不自然にしゃがみ込んでいるのは丸見えなのだ。

いくら背中を丸めても、茂みの中に隠れることはもはや不可能。

少女達が脚の付け根の『おんなのこ』の場所から堪えに堪えた恥水を迸らせているその瞬間の、安堵と解放、羞恥と屈辱の入り混じった至福の表情を窺うことは、その気になればさすれば容易であった。

草むらの外で、体操服の股間に手を添え、太腿を激しく擦り合わせ、腰をよじり、ばたばたと足踏みを繰り返して順番待ちをする少女達の行列も。

茂みに身を隠してオシッコを済ませる数多くの少女達が噴きこぼしたオシッコが混じり合う、強く籠った独特の匂いも。

限界を超えて溢れだす猛烈な勢いのおしっこが、コンクリートの地面を激しく叩き飛び散る様子や、草むらの剥き出しの地面の土を抉り、じゅぶじゅぶと泥混じりに泡立ったぬかるみを広げてゆく一部始終も。

耐えに耐え続けた色の濃い恥水が、草叢めがけて激しく噴射され、猛烈な水圧で細い茂みを薙ぎ倒してしまう音すらも。

その気になりさえすれば、誰をはばかりことなく目にすることができた。

当たり前のことだ。ここには、そもそも女の子がオシッコをするための設備などなにひとつ備えられていない。ただの野原の茂みなの

だ。きちんとした衝立も、オシッコを流し込む便器なども当然ない。

トイレでもなんでもない、ただの河川敷の草叢にすら、おしっこをする順番待ちの少女達が先を争って並ぶという、あまりにも非現実的な光景。

しかし、そんな屋外のただの茂みが、絶対的なトイレの不足と、長い長い放浪に苦しむ『おトイレ難民』の少女達にとって、耐え難く永劫と思える苦痛からの解放を与えてくれる楽園なのだった。

——もう、我慢できない。

——トイレが混んでて、入れない。

——ここなら、みんなしていたから。

だから、ここが『お手洗い』。

本当は文字通り、手を洗うこともできないこの場所を、けれど少女達は敢えてそう呼んでいた。

どうしても我慢できず、さりとてオモシシなんてできるはずもなく——そんな少女達が、切羽詰まった限界の中で極限状態の行動に出るには、些細なことであれ、建前が、正当化のための理由が必要だったのだ。

そして切羽詰まった集団心理は少女達の中に徐々に、しかし確実に広がっていった。

ひとり、ふたりとここを訪れ、オシッコを済ませる少女達は少しずつ、少しずつその数を増やし、ついにはここを事務棟横、仮設トイレに続き、第三の『お手洗い』として定着させてしまったのだ。

おおよそ、トイレとは呼べない、女の子がオシッコをするにはあまりにも相応しくないこの場所。けれど、彼女達にはこの『お手洗い』を使う利点があった。

何より大切に、大事で、重要な事。

ほとんど順番待ちの必要がないということだ。

なにしろ、ここは元々ただの草むら。正確な人数制限なんてものがあるわけがない。

正式なトイレであれば、たとえどんなことがあったとしても、個室の数——便器の数以上の少女が同時にオシッコを済ませることはできない。が、ここはそもそも、ただの屋外、野原の茂みでしかないのだ。人数が増えたら詰めることもできたし、まだ誰も“して”いない地面を選んでしゃがみ込んでしまっても、誰も咎めることはない。

ここにいる少女達は硬く張りつめた下腹部を握り締め、みんな同じ苦しみを共有している。本当の本当に限界なら、もう絶対に我慢できないのなら。

もうなにも気にせず、そこうでオシッコを始めてしまったとしても、誰もそれに文句などいうはずもない。

だからこそ、ここは聖地だった。

だれも我慢せず、辿り着きさえすればすぐにオシッコを始めることができる——人一倍繊細な年代の、思春期の少女達が羞恥心をかなぐり捨て、倫理を放り投げて、オシッコを始めるために必要なそのための大義名分も、理由も、状況も、全てが揃っていた。

この『聖地』たる茂みへは、いまやぼつりぼつりと少女たちの姿が続く『巡礼』の道ができていた。

決して少なくない少女達が、グラウンドから、この茂みへと向かうようになっている。行く道は、前屈みの重い足取りで、荒い息をつきながらの険しい苦難の道。

帰途は、尿意から解放された天国と至福——あるいは、トイレでない場所で用を足してしまったことへの烙印を押され、罪に俯き、顔も赤く恥いる道。

グラウンドの西に生まれたその『聖地』の噂は、徐々に少女達の間にも広まり始めていた。

西に向かえばオシッコできる——人から人を経るうちに詳細のぼやけ、漠然としたものとなった言葉は、しかしその分だけ甘美に少女達を誘惑する。常識では、グラウンドには二か所しかトイレがないと分かっているはずの、運営委員側の少女達の中にもそれを真に受け、持ち場を離れて西へ旅立つものが現れる始末だった。

少女達の苦難の巡礼の旅は続くのである。

<hr size="1" />

そんな『聖地』への道の途上、美紀はただひたすらに、困惑をしていた。

（な、なんなのよ、これっ……）

茂みの前にできた10人ばかりの列——茂みでオシッコをするために順番待ちをするという、本来ならば本末転倒な光景である。

もじもじと激しく身を揺すり、腰をよじって、脚を踏み鳴らし。

美紀は真っ赤になった顔を懸命に伏せ、周囲に内心を悟られまいと必死だった。

（なんで、なんでこんなことになっちゃったのよっ……！！ みんなこんなに……ここ、お外なのに、こんなにたくさん……オシッコ、しにきてるなんて——！！

お外なのに、トイレじゃ、ないのに……っ、順番待ちなんて、ヘンよお……っ！！ ぜ、絶対、おかしいよおっ……！！）

困惑を表に出すこともできず、美紀は懸命に歯を食いしばって、怒涛のような尿意に耐え続ける。

そんな彼女の前で、また一人順番待ちの列が進む。こぼこぼと下腹部に湧き上がる羞恥の泉を、あどけない股間部分の排泄孔からほとばしらせ、地面を汚してゆく。言い訳にするにはあまりにも脆弱な、野外の臨時仮設トイレ。オシッコの水たまりには次々と新しい飛沫が注がれ、その大きさを増してゆく。

「いやああ……っ」

叫び、違うと首を振りたくなるのをこらえ、美紀は唇をきつく噛んだ。

（どうして、こんな……っ、やだ、やだ、よお……っ）

『聖地』の存在がひっそりと、しかし多くの少女達に知られるようになるにつれ、少しずつではあるものの、その巡礼への旅も性格を変え始めていた。

周りの事も顧みず、辿り着くなりいきなり、見境なくその場でオシッコを始める少女達を、疎ましく思うような空気が生まれ始めていたのである。

その空気は、最初にこの『聖地』でオシッコをした女の子——『始まりの乙女』を崇拝するように、この野外排泄場所の在り方を

変えていった。

ここに居る以上、きちんとトイレに行けもせずに、野原でオシッコをしてしまう恥ずかしい女の子だという事に変わりはない。

ドングリの背比べであるにもかかわらず、彼女達の中には『最初』の場所、一番最初に使われ始めた茂みの中以外でオシッコするのは『正しくない』のだ、という、妙な空気が生まれていたのである。

多くの歴史を紐解くまでもなく、特定の習慣を持つあるコミュニティが成長を続けてゆくと生まれる、原理主義のようなものだ。

そんな複雑な雰囲気も、美紀にとっては針の筵。自身を苛む拷問にも等しい。

「……………」

何を隠そう、美紀はこのコンクリートの茂みで、一番最初におしっこをした少女である。

——そう。彼女こそ、この『聖地』を崇める少女達の中であって、その崇拜の対象となるべき『始まりの乙女』なのだった。

もう4時間近くも前の事だ。寝坊と夜更かしが原因で昨晚からトイレに行きそびれていた美紀は、運動会の開会式からすでに切羽詰まった状態にあった。

開会挨拶の間も、もじもじと身体を揺すり続けで、周りの参加選手から不審げに思われながらどうにか乗り切ったくらいだ。

すでに仮設トイレにも事務棟横のトイレにも行列ができており、その順番待ちをする余裕がなかった。せめて人目につかないところを、とグラウンドから思い切り離れた場所を選んで、こっそりとオシッコを済ませることにした。

生涯最初の野外排泄。

けれど、それがきっかけとなって、この茂みはいまや、美紀と同じように限界のトイレ不足に苦しみ極限のオシッコ我慢を続ける少女達の心の支え、憧れの場所とも言える小さな聖地となっているのである。

(な、なんなのよお、これっ…………)

しかし彼女は脚の付け根を握り締め、腰をくねらせる少女達の中であって、讃えられることなく、ひたすらに己の罪に恥いている。

尿意に耐えかね『イケナイこと』をしてしまったはずの自分の行為が、知らず、多くの賛同者を生み、いつかひとつの潮流となっている。それは美紀にとってあり得ないほどの羞恥だった。

この『聖地』——古びたコンクリートのたたきを濡らすオシッコは、全て美紀のオシッコにも等しいのである。

「はああ……………」

草むらの向こうから、強烈な放水が地面を叩き、同時に安堵と開放感に満ちた少女の声が聞こえてくる。

噴きこぼれる羞恥の水流の音に、美紀はどうも耐えきれず、耳を塞いでしまう。

この、トイレでもなんでもない草むらを汚すオシッコのすべては、美紀がその発端、原因であった。このコンクリートのたたきでオシッコを済ませたのは、イケナイことで、恥ずかしいことで、女の子としてはありえないことで。絶対に、誰にも秘密のことだったのに。

(や、だ、いや、いやああ…………)

幾重にも重なる放水音。少女達の排泄。

誰も知ることのない中、その身に、草むらを利用する少女達の罪を、羞恥を背負い。

一人の救世主となった美紀の姿に、気付く者はいない。

そして、その極限の羞恥に耐えかねて。二度目のオシッコをこの草むらで済ませることもできずに。ふらふらと草むらに続く列を離れてゆく彼女を、だれも見送ることはなかった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 河川敷の運動会・終

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/09/2012 00:24:47

BODY:

適当に書きはじめたらえらい大作になったけど、一旦これで終了。

<hr size="1" />

（でる、ッ、でる、でるうっ！！　っ、おしっこ、おしっこ出る、でちゃうっ、おしっこ、おしっこおしっこ！！　おしっこ出ちゃうううっ！！）

限界だった。

張り詰めた下腹部がきゅうんとうねり、脚の付け根の『おんなのこ』がじんじんと熱い。

疼く排泄孔が意志に反してぶくりと膨らみかけては、じわっと熱い雫を噴きこぼす。

（でちゃう、オシッコ、おしっこでちゃううっ！！）

数時間前までおなかのなかをちゃぽちゃぽと揺らしていた水分は、そのすべてがオシッコに変わって、おなかのさらに下にある、別の場所をちゃぽちゃぽと揺らしていた。

朝、家を出る前に最後に済ませたオシッコから、から一度もトイレに入ることができずにいた、瑞香の女の子の水風船は、いまにも弾けそうなほどばんばんに膨らんでいた。

猛烈な、凄まじいまでの、尿意。

しかし、そのさなかにあってなお、瑞香はトイレの順番待ちに並ぶことができないでいた。

理由は単純。

そんな事をしている間に、漏らしてしまうことが分かり切っていたからだ。

朝に飲んだ麦茶3倍、お昼に景気良く飲みほしたペットボトル2本、それに午後になってつい飲んでしまった500mlの缶ジュース。都合2リットルを超える水分は、いまや瑞香を責め苛む意地悪な悪魔の熱湯へと変身して、少女の下腹部を内側から執拗にイジメ続けている。

しかし、それを解き放つための場所は、遥か遥か、遠い。

（んくううっ……ッ！！）

右手で体操服のスパッツの前を掴み、左手をお尻から回して脚の付け根を押さえ込む。両手で身体を抱え上げるようにして、よたよたと歩く。

かと思えば、きゅうにびくっと身体を強張らせて立ち止まり、ギョッと目をつぶり歯をくいしばってぶるぶると震える。怒涛のように押し寄せる尿意をなんとかやり過ごすためだ。

その場で大きく足踏みをし、ぐりぐりとスニーカーのかかとを地面にねじ付ける。

ありとあらゆるオシッコ我慢を試して、それでもなお——まったく和らぐことのない尿意に苛まれ続けていた。

（とっ、トイレっ、トイレ、出ちゃうっ……！！）

つま先立ちになって上半身を前に倒し、青ざめた顔で何度も周りを見回す。

そんなものがないと分かっている、恥じらい深い少女の身体は本能的に、排泄のできる場所を探し求めてしまうのだ。

（オシッコ……っ、オシッコ出るっ、でちゃううっ）

下着にじゅわりと漏らしたての熱い雫が滲み、ジャージの下でスパッツにも大きな染みを作っている。白地の体操服には、我慢し続けたオシッコの黄色い染みが大きく目立っていた。

（も、う……無理っ……げん、か、い……ッ）

瑞香はついに音をあげてしまう。

このグラウンドのどこにもトイレは見当たらず、完全に膨らみ切った下腹部は、硬く張りつめてせり出し、体操服のゴムを食い込ませるほどだ。

（だ、だめ……漏れちゃう、漏れ、ちゃうっ！！）

女の子の理性が警鐘を鳴らす。男子に混じってドッジボールやフットサルで主役をこなすわんぱくな瑞香でも、女の子として譲れないものがあるのだ。

——なんとしても、オモラシだけ、絶対に、避けねばならなかった。

しかし、河川敷のグラウンド、開けた場所にはトイレなど存在しない。『聖地』の場所は瑞香の耳には入っておらず、そこに『巡礼』の旅に出るという発想もなかった。これは決して瑞香が特異なわけではなく、そもそも絶対数を考えれば、『聖地』の事を知っていた少女のほうが少数なのである。

そして——ちょうど、真紀のオモラシ生中継が放送され、グラウンドでは騎馬戦に参加した選手たちが次々にオモラシを始めてしまっていた、その時。

思い余った瑞香は驚くべき行動に出る。

グラウンドを一周するほどに長く伸びていた順番待ちの列に背中を向け、少女はグラウンドの反対側——河原へと飛び出したのだ。

「っ……！！」

砂利の残る河原におぼつかない脚で駆けこみながら、体操服とジャージのウェストに手を突っ込んで、勢いよく思い切り『ぐいっ』と、膝上まで引き下ろす。

同時に、河原の端で急ブレーキ。流れる川面へと脚を広げ、深く腰を落とした。

「でる、でるううううっ！！」

色を変えて湿ったジャージの股間部分が膝に掛かると同時、少女の足の付け根から盛大におしっこが噴射される。

ぶじゅっ、と飛沫を撒き散らせて、前方の河原の砂利に飛び散った水流が、瑞香の前方に恥ずかしい乙女の恥水の放出痕を残す。

その直後、さらに勢いを増して、薄黄色の奔流が1メートル半ほど先の水面へと勢いよく噴き出した。

ぶしゅぶしゅばばばばばばば！！ とすさまじい水音が響き、周囲の少女達が何事かと振り返る。

（っはああああ……っ）

腰骨をジンジンと伝う甘い痺れ、身体の芯をとろかしてしまうほどの甘美な解放感。

解放された少女の水門から、壊れた蛇口のようにすさまじい勢いで迸り、川面を叩いてじょぼじょぼと激しい音を響かせる。我慢を続けていたせいか排水孔周辺の括約筋が細かく震え、おしっこはぶじゅっ、ぶじゅじゅうっとな断続的な水流を迸らせるが——やがてすっかり水門が開ききれば、あとはいつ果てるともなく猛烈な噴射が始まった。

まるで水の槍のように、水面を激しく叩く瑞香のオシッコ。川面に泡を立て、浅い川の底の泥をかき混ぜながら、野外の河を仮設のトイレにして、大胆なおしっこが始まる。

河に向かっておしっこを始めた少女に、周囲は騒然となる。

河原の周囲には視線を遮るものなど何もなく、引き下ろしたジャージの下に覗く白い肌や可愛らしいお尻も、そのまま丸見えだった。

「あはああ……………っっ」

極上の蕩けた笑顔で、熱い甘い吐息をこぼし、ぶると背中を震わせる。

どちらかと言えば中性的な顔立ちの瑞香が、熱のこもった『女の子』の声で喘ぐ姿は、たまらなく官能的。

羞恥も倫理も、もはや暴虐なまでの尿意に耐え切れない。

一般客や男子生徒の視線もある中で、ジャージを引き破らばかりの勢いでずりおろし、中腰のまま尿意をほとばしらせるその姿は——あまりにも、美しかった。

ぶるぶると内腿が震え、またも盛大にぶしゅっ、と吹きあがった水流が、緩やかな川面に叩きつけられて波紋を描いた。陸上で鍛えられた、引き締まった内腿からお尻にかけての、無駄のない脚から、力強く——まるでホースで打ち水をするかのごとく、すばまった放水が噴き上がる。

陸上に必要なしなやかな内腿の筋肉は、みごとにまでの勢いでオシッコを噴射させる。白いお尻の谷間ではつつまじやかなすばまりが『きゅうっ』と縮まり、水面に叩きつけられる羞恥の水流音がじゃぼっ、ぶじゅぼぼっ、と激しさを増す。

じよぼっ、ぶじゅう、じゅぼぼぼぼぼぼおおっ！！

トイレの個室の中でしか聞くことのないだろう、全力全開、本気の排泄。便器の中に激しく打ち付けられるはずの羞恥の熱水が、川面に水柱を上げる。

それが——この河川敷の運動会のフィナーレを飾る、最後の競技開始の合図だった。

「んああ……っ！！」

瑞香のすぐ近くを、河原へと走り寄った少女が通り過ぎる。

あまり運動に慣れていない雰囲気、内気な様子の少女だった。競技で転びでもしたのだろう、膝には絆創膏を貼り、耳まで赤くした顔を俯かせたまま、瑞香のすぐ隣へしゃがみ込んだ。

すでに細い足には外からも分かるほどに雫がつたい、腰を下ろすと同時に色濃く変わった紺の股布からぽたぽたと雫が滴り落ちる。少女はブルマの股布部分を大胆に引っ張り、可愛い『おんなのこ』の部分を覗かせる。

同時に——瑞香のそれよりもはるかに大胆な音を響かせて、オシッコを始めた。

瑞香のように勢いよく前には飛ばない。慎まじやかな外見に相応しい股間は、一本線を引いただけのたて筋で、それに合わせて放水孔の出口も複雑に入り組んでいた。

噴き出したおしっこはきつく合わせられた『おんなのこ』の部分にぶつかって、ぶじゅぶじゅとはしたなく飛沫を四方八方に噴き散らしながら、あちこちに飛び散る。まるで足元にスプリンクラーで撒き散らしたように、脚元にびちゃびちゃと水たまりが広がり、川面に流れこんでゆく。

弾かれたように、瑞香の近くに居た何人もの少女達がそれに続いた。

そして、一度始まった崩壊はもはやだれにも止められない。

隣では、瑞香と同じジャージ姿の少女がとうとう音を上げてしまっていた。きつく握りしめた空色のジャージの股間部分がみるみる濃く色を変え、ばちゃばちゃと音をたてて滴り落ちる水流が、そのまま川へと流れ込んでゆく。

しゃがみ込む暇もなく、中腰のままの足の付け根から、斜めの急角度で河原に向けておしっこを噴射させてしまう者もいれば、まるで男の子がするように、背中を大きくそらせ、腰を前に突き出して、見事な『立ちションベン』を披露する、まだ低学年と思しき女兒の姿もあった。

そして、トイレ前にできた順番待ちの大行列を後に、河原へと『おトイレ難民』たちの大移動が始まる。次々に、次々に、河原へと押し寄せた少女達が、しゃがみ込んで、その場にオシッコを迸らせる。

全員が、河川敷のグラウンドで、大会に参加していたほぼ全員の少女達が、耐えに耐え続けていたオシッコを、一斉にし始めたのだった。

本当の難民問題では、決してありえないのかもしれない、全ての問題を撃ち抜きぶち壊す銀の弾丸。

しかし、瑞香の取った行動は——川面めがけて噴き出させた黄金の飛沫の噴射は、河川敷のトイレを我慢する少女達の、最後の限界をぶち抜く行為だった。

まるでその場にいた、多くの少女達全員が、一斉に我慢の限界を迎えた合図のように。

いつか起きる筈だった限界が訪れたのだ。

河原めがけてしゃがみ込んだ少女たちが次々と迸らせる水流が、大きな川をうっすらと黄色く染め上げてゆく。

——決して過大な表現ではない。思春期の繊細な少女たちが、もはやなりふり構ってられないまでに我慢し続けた羞恥のホットレモンティは、彼女たちの下腹部をばんばんに膨らませ、身体の外へとせり出させるまでに大量のものだ。十代前半の少女たちの膀胱の容量はおおよそ400～500mlとされる。通常、この半分あたりに達すれば尿意を感じるものだが、グラウンドにいる少女たちの大半が、そんなレベルを遙かに通り越した猛烈な我慢を強いられていたのだ。

それが一気に数百人近く、同時に放出されたのである。その勢いも影響力も常識ではかされるレベルを遙かに超えていたのは当然であった。

河川敷のグラウンドは、すでに乙女たちの排泄の品評会とも呼べる体をなしつつあった。

運動会の最終競技、全員参加の大トリを飾る、オシッコ排泄大競争。

急遽その会場となった河原では、飛距離、勢い、水量、音、匂い、色、あらゆる側面で競い合うように、少女達のオシッコがほとばしる。

雄大な川面はそれらをすべて飲み込み、済んだ水面を恥ずかしく泡立て、打ちつけられた水流が河底の泥をかき混ぜて濁らせる。

同時に数百人が恥ずかしい行為を済ませる、臨時仮設の野外露天トイレ。

そこにひびく恥ずかしい水音と、解放感にうちふるえる喜びの声は、途切れることはなかった。

なお。

その日、このグラウンドの河川を管理を行う水質検査事務所では、1時間ごとに測定している河川水の水温が、何の前触れもなく0.3℃ほど上昇したことを記録している。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 四月を迎えたある日の話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 07/14/2012 12:56:15

BODY:

4月に更新するつもりだった話。来年まで待つのもどうかと思うので。

<hr size="1" />

春。

つい先日までは寒々しく枝ばかりだった表通りの桜並木も、今は美しく咲き誇り、舞い散る薄紅の花片の下、糊の効いた真新しい制服に身を包んだ生徒達は連れ立って駅へと歩いて行く。

ちらほらと振り積む花片の中では、新学期を迎えた彼女たちの歩みも自然と緩み、朗らかな笑い声は訪れた新しい出会いの

季節を彩るかのよう。穏やかな陽射しのなかでも、まだブロック塀の下隅を吹き抜ける風は幾分冷たく、ほんのわずか、まだそこには冬のカケラが残っているようにも思える。

そんな季節の巡りを感じさせる風情を感じる暇もなく、私は一人、だだっぴろい自宅にて週の真ん中にとる羽目になった代休を持って余っていた。

前年度から続いていた休日出勤がようやく一段落となったことでようやく暇はできたものの、平日にどこかに出かける気力も残っておらず、だらだらと朝寝をして、1時間ほど前によく起き出して遅い朝食を取ったばかりだ。

まもなく正午に差ししかろうかという時計の針を見上げ、手持ち無沙汰に、興味もないワイドショーのチャンネルを回していた時のことだった。

不意に、来客を告げるインターホンが響く。

普段は仕事で家を空けているはずの今日、賓客の予定などあるはずもない。訪問販売か宗教の勧誘かなにかかと、やや興を削がれた気分で立ち上がる。退屈がまぎれるのは結構な事だが、出来れば建設的なことであって欲しいものだった。

姿身を確認して、ひとまず人前に出るにはそれほど問題のない格好であることを確かめ、玄関へと向かう。

サンダルに足をつかけて、一応警戒をしながらどこの誰だろうとドアミラーを覗くと、
「……………っ」

そこにあったのは私の従前の予想を完璧に裏切る、真新しい紺色の制服に袖を通した、小さな少女の姿だった。

どこか不安げに視線をさまよわせ、落ち着きなく身体を動かしながら。長めの袖からちよこんと伸びた指をインターホンに押し当てた姿勢のまま、頬を緊張に引きつらせ、切羽詰った表情で、少女はドア向こうに立っている。

肩上で綺麗に切り揃えられた髪は、最近では珍しい深い黒。ドア向こうの少女は最近の少女達が当然のようにしている大人びた装飾品や化粧気などとは一線を隠した、おとなしめの容貌でありながら、十分に魅力的な顔立ちをしていた。

無論、私にはまるで覚えがない。

いや、思わず見蕩れてしまうほどに保護欲をかき立てるその姿は、親戚にでもいれば自慢して回りたくなくらいには魅力的であったが、残念ながら、その少女は私の面識のない相手であることは間違いなかった。

糊の効いた真新しい紺色の制服と、胸元には白の一本線の緑のタイ。鞆も靴も汚れひとつなく、今日下ろしたばかりの新品であることが手に取るように分かる。

襟元に、礼儀に煩い事で有名な近所にある進学校の校章のピンバッジを揺らし、まだサイズの合っていない靴のかかたとを浮かせるように背伸びして、少女は再度、インターホンに指を伸ばす。

チャイムが間の抜けた呼び出し音を響かせる中、少女は小さく『あ』の形に口を開き、鞆を握る手をそのままスカートの前に押し付けた。

思わず、私は息を飲む。

まさか、ドアミラーのすぐ奥で私がそれを見ているとは思っていないらしい。少女は耐えかねたように、身をよじり、気ぜわしく足を動かして始めている。

浮かんだかかとが交互に上下し、革靴が小刻みなステップを刻む。それに合わせて膝下のソックスに包まれたふくらはぎが内股に寄せられ、上半身は前に、腰は背後へと突き出される。

誰がどう見ても明白な、トイレを我慢している仕草。

大胆な我慢の様子は、いまにも清楚な少女が人前でするにはどうにも憚られるものであった。彼女もまさか私に見せつけるつも

りはないのだろうが、目の前の特等席で披露されるその官能的な仕草に、私は目を離せなくなってしまっていた。

我が家の玄関は、面した道路からも少し奥まった場所にある。ちょうど道行く人々の視線からも遮られ、公道の喧騒も遠い。そんな具合だからこそ、彼女もつい気が緩んでしまったのだろう。

ドアミラー越しに覗く私の前で、少女はしきりにスカートの前を握りしめ、もじもじと腰を揺すり続ける。

「っ、……ふっ……あ、」

くねくねと腰をよじり、必死に息を殺しながら、少女は鞆を持った手でスカートの前をきつく握り締める。その仕草にも恥じらいを覗かせ、顔を赤くするその様はなんとも美しく、艶めかしい。しばし私は身じろぎも忘れて、ドア前で繰り広げられる少女の我慢ダンスに見入っていた。

「……………」

そうこうしているうち、応答のないことに焦れたのか、少女は再び困惑の視線を持ち上げ、三度インターホンに指を伸ばす。電子の呼び出し音が鳴り響くのに合わせて、少女はそのまま小さく拳を作り、とんとんとドアをノックし始めた。

「あ、あの、っ」

少女の我慢はどうも限界に近いようだった。身悶えし、足を細かく踏み鳴らしながら掠れた声を飲み込む少女の表情には、余裕がほとんど残されていない。

「す、すみません、ど、どなたか、い、いらっやしませんかっ」

発生もおぼつかないか、緊張のせいかな。呼びかける声も囁んでいる。確かに面識のない少女ではあったが、そのただならぬ様子は無視を決め込むには憚られるものだった。

しばしの逡巡を挟み、私はとりあえず話だけでも聞こうと鍵に手をかけた。

がちゃん、と閉じていたロックを上げると、ドアミラーの向こうで少女がびく！と身体を竦ませた。彼女にしてみれば不意打ちでいきなり鍵が空いたようなものだろう。少々意地悪な体面になってしまったことを心の中で詫びつつ、ドアを押し開ける。

チェーン越しに見下ろす少女の姿は、ドアミラー越しに受けた印象よりもよほど幼く見えた。この紺色の制服を着ているということは近くの学校の生徒なのだろうが、袖から指先だけが覗くほどに大きな制服に着られてしまっているのが、余計に少女のあどけなさを強調しているようだった。

真新しい服に着られているぎこちなさも相まって、新入生なのだとしたら、つい最近まで下の学校に通っていたのだろうか。

「あ……あのっ」

腰を大きく後ろに引いた、滑稽なほどの前傾姿勢。もう彼女はその体勢を崩すことも難しいのだろう。まるで羞恥にそのまま泣き出してしまうのではないかと思えるほどに、鼻先を赤く紅潮させて、少女はおずおずと切り出してきた。

少女はそれでも精一杯、揺れ動く下半身を押さえ込もうと努力しているようだったが、寄せ合わされた脚は、ひとときも治まる様子がない。すでに余裕の微塵もない必死の形相で、ぎゅうっと脚の付け根に手を当てている。

「す、すみません、突然……、えっと、そのっ」

忙しく脚を交差させ、膝を重ね合わせての要求は、もう何を求めているのか言葉にせずとも明白すぎるくらいに明白だった。鞆の下、何も持っていないもう片方の手のひらは、遠慮なくスカートの前を掴み、ぎゅうっと下腹部を圧迫している。

「と……、お、お手洗い、か、貸してクダサイ……っ」

ともすれば聞き逃してしまいそうになるほどの、小さな声。

最初のつかかりは、『トイレ』という単語を口に仕掛け、慌てて言いなおしたのだろう。人前で排泄行為を口にすることを避けた

い年頃ならではの、繊細な羞恥心の表れか、あるいは嫉の良さを感じさせる態度だ。

「すみません、っ、い、いきなり、こんなお願いっ……で、でも、っ」

言葉を切るように、ぷるぷると小さな身体が震える。

「ご、ごめんなさいっ、も、もう、その……が、がまん、できないんデス……っ」

顔を真っ赤にしつつも、少女ははっきりと尿意の限界であることを口にした。

少女がその張りつめた気を解くのに、私のラフな外見もいくらか良い方向に作用していたらしい。仮に私が異性であったり、普段の仕事着のような格好をしていたら、彼女は委縮してしまっても、この『お願い』を口にすることはできなかっただろうから。

「お、お願い、しマス……っ」

上目遣いで懇願する少女のまなじりは不意安定に揺れ、今にも泣き出してしまいそうな有様だ。まだ年端もいかない少女とは言え、見知らぬ相手を気安く家に上げてよいものか——私はしばし躊躇する。

時間にしてほんの数秒といったところだろうが、彼女にとっては永遠にも長く、まるで審判を下される直前のようにすら感じられたことだろう。

「っ……」

少女の表情が不安と緊張に揺れる。身をかがめ、耐え難い尿意にじっとしている事もできず、掠れた語尾や背中を丸めたままの姿勢からも、彼女の我慢がもはや限界であることはありありと窺い知れる。

わざわざ、面識のない他人の家でトイレを借りようとしていることからそれは明らかだ。その事実が、彼女にはこのほかにもう絶える場所などないのだと——つまり、もう他のトイレを探している余裕など微塵も残されていないのだと、暗に語っていた。

おそらく、様々な事情で用を足すことができず、トイレに入りそびれ、延々と我慢を強いられて——ついにどうにもなくなって、他に絶える場所もなく駆け込むように私の家を訪ねて来たのだろう。

そんな少女を無碍にする理由はない。そこまで考え、私は彼女にトイレの許可を与えることにする。

それを聞いて彼女はぱあっと顔を輝かせ、大きく頭を下げた。

「あ、ありがとうございますっ……」

心からの感謝、地獄で仏に会ったかのような喜びよう。やはり本当に切羽詰っていたのだろう。彼女くらいの年頃の少女なら、人一倍羞恥心も強いものだ。まったく知らない相手の家にトイレの使用許可を申し出るなど、よほどの事がない限りできないはずだった。

感謝と謝罪を口にしながら、少女は、前傾姿勢のまま玄関に踏み入れる。ローファーのかかとを突っかからせながら、後ろ向きになって靴を脱ごうとし——

「あ、あっ、ま、待って、ダメっ……！！」

小さく声を上げながら、びくりと硬直した。

大きく開いた口から可愛い八重歯を覗かせて、視線を宙空に据えたまま、少女の両手はぎゅうっとスカートの上に押し当てられる。

ソックスに包まれた脚がその場で激しくよじりあわされ、こちらに突き出された小さなお尻が左右に揺れる。

「あ、あっ、あっ」

喘ぎにも似た甘い声。

床を擦る靴音と、掠れて響く少女の吐息が、玄関に広がる。

トイレの使用許可を得たことで、少女の身体のほうが先走ってしまったのだ。脚の上にあるダムの中、危険水域を遥かに超えて注ぎ込まれた乙女の恥水が、今にも堰をあふれ出しそうにヒビを広げている。

がくがくと膝が揺れ、少女はそのままべたん、と玄関のうえに尻餅をついてしまった。

「あッ……！！」

一際音程の高い、かすれた声が上がる。

咄嗟に動いた少女の手は、スカートの上から股間を床上に押し付けた。プリーツの裾から覗く太腿がぎゅっと寄せ合わされ、少女は玄関マットの上に小さなおしりをねじつけるようにして身を揺すり始めてしまう。

幼さを残した表情が緊張に強張り、噛み締められた奥歯が小さく震える。

まさに今、少女のダムは崩壊の危機に直面していた。思春期の少女がなりふり構わず脚の付け根を押さえ込むという光景を目の当たりにして、私は驚きと同時に、強い感動すら覚えていた。

押し寄せる未曾有の危機にも決して諦めず、なおも耐え続けようとする健気な少女の気高さに、心打たれていたのである。

「は……つく……う……つ」

上半身がやや前傾になり、スカートを押さえる手に力が籠もる。真新しい制服に大きく皺が寄せられる。

革靴の爪先が玄関の石畳を擦り、紺色の布地に包まれた腰は玄関マットの上で前後に揺すられ続ける。押し寄せる尿意の大波をなんとかやり過ごそうと、必死に我慢を続ける少女の戦いは、なお数十秒にわたって続く。

きつく閉じられた目と共に鞆が床に落ち、スカートの裾が次第にめくれてゆくのに気付かず、小さな手指は必死になって脚の付け根をさすり続けていた。

「っは、あッ……」

やがて、どうにか危機を乗り切ったのか、少女は大きく息をついてわずかに身体の緊張を緩めた。乙女のダムがいまだ危機的状況にあり、予断を許さない中での小康状態ではあるようだが、ひとまず決壊の危険は遠のいたらしい。

息を整えようと小さな唇がわずかな深呼吸を繰り返し、少女はようやく、自分が繰り返していた恥態に気付いたようだった。

「あ……っ！」

みるみるうちに、その顔が朱に染まる。

見ず知らずの他人の家の、それも玄関で、はしたなくも股間を握り締めてトイレを我慢していた自分——しかも、ついさっきトイレを借りる許可を得たその直後に、である。

我慢の限界である事をおのずから叫んでしまっているのに等しい行為だった。

少女は大きくめくれていたスカートの裾を引き下ろし、ただちに鞆を拾い上げて靴を脱ぎにかかる。

「ごっ、ごめんなさいっ！！ す、すぐに済ませマスからっ」

しかし、羞恥と動揺の中では慣れない革靴を脱ぐにも思うように手足が動かないようだった。もどかしいばかりの手つきで紐をほどき、交互に足を動かす間にも何度も身体を竦ませる。ひっきりになしにぶり返す尿意の波が彼女を絶え間なく苦しめているのは明白だった。

しかし、いくらなんでも酷過ぎる。これほどになるとは、いったいどれくらい我慢を続けているのだろう。今朝から——あるいは昨夜から？ 可憐な少女の身体を占領する下品な恥水の量、温度、色合いに思いを馳せ、私はいつしか高鳴る胸を押さえられなかった。

真新しいスカートの奥、ちらりと覗いた白くかわいらしい下着に包まれた柔らかな下腹部は、いまや石のように硬く張り詰め、乙

女の水風船に溜まりに溜まった熱い奔流を溢れさせようとしているのだ。

そんな危機的状況で、身動ぎしている少女の無防備な姿勢を、意地悪な尿意が見逃すはずもない。

片方の靴を脱ぎ終えたところで、また少女の身体が硬直する。

「ふあぁっ」

今度ははっきりと小さな悲鳴を上げ、少女は歯を食いしばった。

靴紐を掴んでいた右手の代わりに、自由にな左手だけが、脚の付け根、大切なトコロをぎゅっと直接、押さえつける。

スカートを細い太腿の間に挟み込み、華奢な少女の肢体、その身体の線が制服の上にまではっきりと露わになる。きつく股間に押し当てられた手のひらの上、引っ張られて身体に密着したスカート越しに、少女の我慢の証である乙女の水風船の膨らみ——ぷっくりとせり出すように、緩やかに弧を描く可愛い下腹部の様子が見て取れた。

「あ、あぁっ、っ！！」

ほっそりとした肢体をも恥ずかしく歪ませるほどの、意地悪な乙女の恥水——なみなみと蓄えられた羞恥の現前は、先程よりもさらに切羽詰った、熱い呻き声と共にたぐん、たぐんと左右に揺れ動く。

半脱ぎの靴を爪先に引っ掛けたまま、擦り合わされる脹脛が何度も緊張し、ぶるぶると震えていた。

「ああ……っ」

絞り出すようなかすかな悲鳴をあげ、少女は俯いた頬を震わせた。

ぶるるっ……、ひときわ強い震えと共に、少女の細い腰がかくかくと前後に揺すられる。きつく前を押さえ込む手のひらに、身体の方からも脚の付け根を擦り付けるような、淫靡な動作だった。

同時に、少女の白い肌が首筋までうす赤く染まってゆく。

「いや……だめえ……っ」

大きく首を振りながら、少女は熱に浮かされたうわごとのようにだめ、だめと拒絶の言葉をくりかえした。

かすかに、鼻をかすめる少女特有の甘い香り。少女は太腿をなんどもすりすり擦り合せて、『そこ』を持ち上げるような動作を繰り返す。

少女の内腿を伝い、わずかにこぼれた水滴がぼた、ぼたと玄関のタイルに散った。

「いや、あ……っ！！！」

間違いない。少女は、とうとう我慢の限界を超えて、乙女の恥水を蓄えたダムの水門を緩ませ、下着に熱い雫をしゅるしゅると染み出させてしまったのだ。

直接、その放水の瞬間を目にすることこそできなかったが、その様子はありありと想像できた。

ま白い下着にじわあと広がる羞恥の染みを想像し、私はなお高鳴る胸を鼓動が、少女に聞こえているのではないかと不安さえ抱く。美しく幼い少女——まさに思春期のただなかにある、今日制服に袖を通したばかりの最も可憐で繊細な年代の少女が、まさに目の前で繰り広げる『おもらし』の衝撃。これからの人生でもう一度巡り合えることなどまずないであろう幸運だった。

「あっ、あ……す、すみ、ま、っせんっ……」

それでも、彼女は懸命に残る力を振り絞り、白い喉から言葉を絞り出した。

足元に滲みだす羞恥の雫に屈し、その場に膝を折ってしゃがみ込みんでしまい——玄関を恥ずかしい噴水の進りで濡らすようなことはせずに、ぶるぶると震える太腿をきつく閉じ合わせながら、ダムの崩壊を押しとどめる。

その白い下着に、湿って暖かな薄黄色い染みを広げながらも、少女はなお諦めていなかったのだ。

私が再度、トイレの場所を告げると、少女は俯いたまま、小さく首を縦に振った。

うなじからのぞく耳はその先端までが朱に染まっている。晴れの門出の日の下着を濡らしてしまった『失敗』と、これから見ず知らずの家になりふり構わずにあがりこんでトイレを済ませることの恥ずかしさ——もはや少女の思考は恥辱で沸騰しているに違いなかった。

どうにか玄関に靴を脱ぎ終えた少女は、そこでなお育ちの良さを知らせるかのように、苦勞してその場に腰をかがめ、脱ぎ散らかした靴を揃えようとする。

いまなお下着を濡らし続けているこの状態、一刻も早くトイレに駆け込んでしまいたいだろう。そんな余計な事をしている余裕などは露ほどもないだろうに、少女はこの上眉をしかめ、唇をかみしめて『あんっ……』と悩ましげな喘ぎを呑みこみながら、下腹部を庇うようにして革靴に手を伸ばした。

が——私に背中を向けたことで、少女は無防備にも自分の『失敗』の証を晒してしまう結果となった。

ぱんぱんに膨らんだ下腹部になるだけ刺激を与えないようにしているためか、少女の膝はほとんど曲がらず、前靴をしているような姿勢になる。

無論、それは仕方のないことだ。いまにもはち切れそうな水風船を抱えたまま、しゃがんだりすればそれこそ、すぐさま乙女のダムの水門は水压に負けて、すさまじい勢いの放水を始めてしまいかねない。少女としても妥協できるぎりぎりのところだったのだろうが、そんな姿勢で身がかがめるものだから、スカートの裾が大きく動き、膝裏が覗くほどにまでせり上がってしまう。

すると、少女の内腿に、幾筋か伝い落ちる水滴の跡がはっきり見て取れた。

少女の失敗の決定的な証拠、まさに『おもらし』の証を目の当たりにして、私の鼓動はさらに高鳴る。

だが——自分がそんな姿をさらしているとはまだ気付いていないのだろう。はあはあと小さな唇を喘がせて、少女は苦勞して再度向き直り、顔を真っ赤にしたまま大きくぺこりと頭を下げた。

「す、スミマセンっ……お、お手洗い、お借りします……っ」

ああ、今——少女の足元を、濡れた染みを広げるスカートを指摘してやればどうなるだろう。どう控えめに評しても、少女の我慢は限界ぎりぎりの綱引きの只中だ。羞恥に少女のプライド、渾身の我慢、ありったけを載せてようやくつり合う天秤の反対側には、もはや耐えがたいほどの尿意がなお膨らみ続けているのだ。

それを詳らかに言葉にして、抗う細い手を押さえつけ、あの無垢な耳元で囁いてやりたい。そんな衝動が強く、わたしの胸を打つ。

嗜虐心と庇護欲がせめぎ合い、ついに私の口を突いて出たのは、

「大丈夫？」

の一言だった。

心から少女の身を案じる、親身な言葉——まあ、言葉の上辺、形だけをなぞればそう取れないこともないかもしれない。だがその意図は、当の少女にもはっきりと伝わるほどに明らかだった。どう見ても大丈夫ではない彼女に、敢えてそう訊ねる意図は、一つしかない。

——『オシッコ、そんなに我慢してるの？』

ありありと羞恥をえぐる一言だ。

「っ……………」

目に見えるほど激しく少女は動揺し、その場に硬直してしまった。顔をさらに俯かせ、赤くさせる。漫画であればぼんと頭から蒸気でも噴き上げていることだろう。きつく唇を噛み締め、小さく呻きを漏らし、内腿をふるふると震わせながら、ほんの少し、小さく、俯いたままの頭を上下させた。

ついに。私は少女自身にそのことを、はっきりと言葉にして認めさせたのだ。

その事実、溢れる感動を噛み締めていると——再び信じられないタイミングで、少女がまた、激しく腰を揺すり始めた。尿意を認めたことで、さらに限界が近づいたらしい。もう隠す余裕もないのか、スカートの上から手のひらを挟みこむように股間を握り締め、あ、あ、と可憐な声をこぼす。

少女はそうして恥も外聞もかなぐり捨て、襲い来る怒涛の尿意を少しでも和らげようとしている。

私にトイレを借りる許可を取り付け、目的地まではほんの数メートル。

もはや彼女を妨げるものなど何一つないというのに。彼女はいま、まさにこの場で、なおそれで激しく恥ずかしいほどの身悶えを繰り返さなければ耐えきれないほどの、猛烈な尿意を催しているのだ。

「ご、ごめんなさい！！」

少女は私を押しつけるように前にふらふらと進むと、そのまま突きあたりの壁に手を突き、自身を苦しみから解放するためのドアへと、ゆっくりと進み始める。

少女は身体を半分前に倒したお辞儀のような姿勢で、おしりを不格好に後ろに突き出した、まるでアヒルのような姿のよちよち歩き。既にソックスの半分近くが色を変え、不完全な少女の、湿った足跡が廊下が続いて行く。

「あ、あぁ、だめ、だめっ、……！！」

しかし。わずか数十センチも進まぬうちに、切羽詰まって叫ぶ少女の声が廊下に響いた。

びく、と大きく身体を硬直させ、蒼白になって、真新しいスカートの前を思い切り握りしめる。今日初めて身につけたのであろう制服は、すでに見るも無惨なばかりに皺くちゃだった。

「んああ……っ」

顔を赤くしながら、左右の手で身体を前後から挟みこむようにして、はしたない場所を押さえ込む少女。

そうしてまた、なんとか尿意の波を押さえ込もうと——或いは、乗り越えようとしたのだろう。しかし、限界を迎えている排泄衝動を押さえ込むのに、そうそういつまでも同じ手段が使える訳がない。

「っ、う、あ、っ」

爪先立ちになって、砕けそうになる腰を無理やり持ち上げ、ぐいっ、と、スカートごととはたなく掴んだ下着の股布を上に向けて引っ張り上げる。

それでも前に進もうとした少女の足は、完全にその場に止まってしまった。

湧き上がる尿意が内側から少女の身体を支配し、圧倒してしまったのだ。脚は歩くための機能を失い、ぎゅうっと閉じあわされてダムが決壊を押しのどめるためのものに。手は支えになる機能を失い、水門がこじ開けられないよう介添えるためのものに。

さらにそれだけでは耐えきれないのか、少女はなんと小刻みに腰を上下させ始める。

かくかくと腰を振る姿は、まるで盛りのついた犬のよう。清楚な外見にはあまりにもふさわしくない、羞恥極まる、下品なままでの

我慢の仕草——それは、少女の尿意がそれだけ切羽詰まった、途方もないものであることを知らせていた。

「は、っ、んう、あ、く、うっ……」

ギュッと目をつぶり、歯を食いしばって。

だらしくぶくりぶくりと膨らみそうになる、恥ずかしい乙女の水門を懸命に握りつぶす。

だが、そうしている間にも紺色の制服、真新しいスカートの奥ではじゅ、じゅうと禁忌の水音が響き、少女の内腿にはつう、と水流がこぼれる。

トイレまでの距離はあと4mと少し。

既に少女の排泄は始まっていた。

「あ、あっ、あ！！ だめ、だめええ！！」

だらしく緩み始めた乙女の水門が恥ずかしい音を響かせる。切なげな声を絞り出し、少女はついにその場にしゃがみ込んでしまった。もはや手の押さえ込みだけでは足りないと見えて、少女は立てたソックスのかかとに股間部分をぐりぐりとこすり付け、身体を揺する。

スカートを挟みこむようにしてぐっぐつと体重をかけて股間をかかとに押し当て、少女はなんども首を振りながら、荒れ狂う尿意に必死に耐えようとする。不安定な股間を押し付けることで、荒れ狂う尿意をやり過ごそうとする最終手段。だが、地面にしゃがみ込んでのその体勢は、もっとも無防備に、排泄孔を地面に向けて晒すことにもなる。トイレ以外でするにはあまりにも無謀な姿だ。

「っ、あ……！！」

少女の顔がみるみる羞恥に染まってゆく。立てたソックスのかかとの上に、こすりつけられる少女の股間——その紺色のスカートに、じわりじわりと染みが広がったのだ。トイレを目前にして、少女はまたも大きなおチビリを披露してしまったのである。

はしたなく擦りつけられる足の付け根から、しゅるしゅると響く水音はもうはっきりと私の耳にも聞こえるほどで、たちまち少女のスカートは色濃く大きな染みを広げてゆく。

ついに制服にまでオモラシの証を広げてしまい、さらにそれを見ていた私と視線が合ったことで、少女はとうとうパニックに陥った。

「っあ、あっあ、ち、ちが、違いマス、違うん、デス、これ、あっあ、ああっ」

無理に立ち上がろうとして、持ち上げかけた腰から、じゅじゅっと熱い水流が噴きつけられる激しい音が響く。動転した彼女は、足をもつれさせ——そのまま大きく前方に倒れこんでしまった。

「んひゃあッ！？」

倒れこむように床に手をついた少女の濡れたソックスは床を滑り、足は左右に大きく割り開かれる。強く前に引っ張られていたスカートは、前傾姿勢を伴って腰上までめくれ上がった。

うつ伏せになって腰を高く上げたような、恥ずかしい格好。曲がった膝の上、太腿の隙間に覗く下着の股布部分は、はっきりと恥ずかしい薄黄色に染まっていた

転倒の衝撃に、一瞬、びっくりと少女の身体が震える。

同時、暴れ回る体内の尿意に振り回されるように、少女の下腹部が左右にくねった。

「う、うあ、あっ」

崩壊は一瞬にして始まった。

恥ずかしいオモラシでたっぷりと水分を吸い、身体にぴったりと張り付くように足の付け根を覆う下着の、ちょうど股間の先端の部位。何度もきつく引っ張り上げられ、乙女の恥ずかしい孔にきゅっと食い込んで、細いたてすじの形や、羞恥の雫をにじませるはし

たない水門の形すらを浮かび上がらせたその部位が、ぶくりと膨らむ。

内側からの放水の圧力で、股布が盛り上がり、そこから激しい勢いの水流が床上に向けて進った。

「いやあああ……ツツ！？」

拒絶とも、悲鳴ともつかぬ少女の悲鳴。

下着がみるみる色を濃く染め、その領域が膨らんでゆく。

腰を小刻みに上下させ、懸命に閉じ込めようとするのをあざ笑うかのように、少女の下着を通り抜け、羞恥の噴水は激しく床へと叩きつけられてゆく。

「……あ、ああ、ああつ……ツ」

喉を震わせて、少女は身体の前から回した手で下着ごと股間を握りしめようとするが——少女の小さな手のひらに収まりきることなく、噴きだすオシッコが手のひらにぶつかり、激しく飛び散った。ぱくぱくと唇を開閉させ、小刻みに震える下半身から、なおも激しく噴水は続く。

足元には見る間に、少女自身が作ってしまった黄色い水たまりが出来上がり、湯気を立てんばかりにして水面を揺らし、それが噴き出す羞恥の迸りを受けとめて、じゅじゅと恥ずかしい音を響かせる。

どれほどの間我慢を強いられていたのだろう。本当ならあと数メートル先のドアの奥、他者の視線を遮りひとりきりになれるトイレの個室の中で、きちんと正しい場所に排泄されるはずだったオシッコが、私の家の廊下に叩きつけられてゆく。

「はあ、あ、あう……あ……ツ」

下着に覆われていて直接は見えないと言っても、噴き出す恥水の水圧でわずかに膨らむ股布越しのオモラシは、はしたなくも黄色い濁流を噴き出させるいやらしい排水孔の存在をむしろ強調しているかのようだった。

腿から膝裏にかけてを伝うように、大量の薄い黄色の熱水が噴き出し、廊下には見る間に大きな水たまりが広がってゆく中、少女は健気にもなお放水を堰き止めんとしていた。

しかし本当の勢いで解放されてしまった乙女のダムを、いまさら塞ぐことなどできようはずもない。水門を閉ざそうと下腹部を震わせる少女だが、噴き出す水流は強弱を変え、断続的にぱしゃぱしゃと噴き出して水たまりを叩くばかり。

「あ……あ……いや、あ……つ」

トイレを目の前にしての、オモラシ。折角ここまで我慢し、必死に羞恥を堪えて見ず知らずの他人の家のトイレを借りた、その矢先。苦痛から解放してくれる楽園のドアを目の前にして、ついに少女は尿意に屈してしまったのだ。

はたしてどれほどの羞恥と屈辱であっただろう。

見知らぬ家のトイレを借りるためにあがりこんで——あろうことかその家の廊下をオモラシで汚してしまう。たてようもないほどの恥辱が少女を襲い、そして責め苛んでいた。

「ふあ……つ」

ぶる、と小さく腰を震わせ、股布の合わせ目からまた、ぷしゅると細い水流を迸らせた。

下腹部に残っていたおしっこを噴出させ、床上に散らす少女は、足の付け根から迸らせる恥ずかしい熱水で、下半身をずぶ濡れにして——びしゃびしゃに濡らしたスカートを腰に張り付け、なおも足元に大きな水たまりを広げてゆく。

排泄の解放感にぼんやりと視線を緩ませ、小さな唇を浅く開いて、荒い息を繰り返す——

無防備で背徳感溢れる少女の姿に、私は目を反らすことなく、じっとその挙動の全てを目に焼き付けていた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: お嬢様我慢の話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 我慢

CATEGORY: 我慢

DATE: 07/14/2012 13:03:34

BODY:

御令嬢我慢のバリエーション。

<hr size="1" />

街中を、曇り一つない黒い車体を輝かせ、高級そうな送迎車が行く。

ほとんどエンジン音も響かせない車内の後部座席には、一人の少女の姿があった。

冬の穏やかな日差しにも美しく輝く深い黒髪は、絹を紡いだように乱れなく、すべらかな肌は処女雪のように無垢で。触れただ

けで溶けてしまいそうに淡い桜色の唇は、我を忘れてそこに触れてしまいたくなるほど。

少女はひとめ見ただけで忘れようのない美しさを備えていた。

そしてその美しさは外見だけに及ばない。行儀よく並ぶ膝は、革張りのシートの上に慎ましやかに揃えられ、重ねた手のひらがその上に乗せられている。伸ばされた背筋もぴんと芯が通っているようにまっすぐで、わずかな気の緩みも見えない。

真新しい制服は、この春から通うことになった進学校のもの。御仕着せの制服でさえ、少女が纏えば神々しく光に包まれているかのようだ。

少女の名は橘霧香。政財界には名の知れた橘家のご令嬢であった。

戦後の混乱期でその勢力を大きく弱めたものの、いまだに旧橘財閥の名は広く知られ、その影響力は計り知れない。そんな名家の一人娘である霧香が、都内有数の進学校とはいえ、私立の学校に通うことになったというのは、一部ではかなりの驚きをもって迎えられた。

橘家のご令嬢ともなれば、進学先と言えどもそれ相応の品格を持つ学院であるというのが普通のことだからだ。場合によっては海外の学校への留学もありうる。

だが、一般の学舎への進学は霧香の強い希望によるものだった。いまの時代、前時代的な橘家令嬢としての特別扱いを嫌うゆえの行動であり、その為に霧香の父はあちこちを奔走し、説得を試みたのだが——最終的には霧香の強情さに折れたという結果となる。

最初、霧香は電車通学を希望していたのだが——それだけはやめてくれ、と父に懇願され、運転手による送迎ということになったのだ。

狭い道をほとんど振動もなく進む送迎車の後部座席。シートベルトを着けた霧香の表情は、しかしどこか硬いものを含ませている。

ハンドルを握る運転手は、わずかに視線をあげ、ミラー越しに霧香を見る。

「あと5分ほどで到着いたします」

「……そうですか」

運転手の言葉にも、霧香はわずかに表情を強張らせ、小さく頷くのみだった。

その表情が硬いことに気付きつつも、運転手はフロントガラスへと視線を戻し、黙って車を走らせる。

年に不似合いな落ち着きを見せてはいても、まだあどけない少女なのである。慣れない体験に緊張しているのだらうと、そう考えたのだ。

この時、この場に居合わせたのは彼だけで、最後に霧香と言葉を交わした使用人も彼であった。それゆえに、この時彼が気を利かせていれば、これから起こる悲劇も回避することは容易だったろう。

だが、それを理由にこの初老の運転手を責めることはできまい。

不意の事態にも対応できるよう、心を砕くことが一流の使用人の務めであるとはいえ、なにもかも予想して行動できる人間など居る筈もない。

まして、彼にとってはあまりに予想外だった。

まさかこの時。橘家のご令嬢が、既にもうどうしようもないくらいに猛烈に、トイレを催してしまっていたなどということは——

来賓室の調度は丁寧に整えられていて、霧香の目にも品良く映るものだった。

学院に到着するなり大勢の教員に出迎えられて面食らったまま、まるで召使いにかしづかれる姫君のような対応で来賓室に通されてはや10分。

すぐにやってくると言っていた理事長はいまだ、姿を見せなかった。

テーブルの上には上等なティーセットで紅茶が湯気を立て、半分ほど中身の減ったティーカップが置かれている。

今日は休日と言うこともあり、窓の外の校庭には人影もなく、野球のフェンスが風になびいているばかりだ。

「っ……………」

辺りにも人気はなく、部屋唯一の出入り口である櫺のドアは重く閉ざされたままである。来賓室の中に一人、じっとソファに腰を下ろし。

霧香は、耐えがたいほどの尿意と戦っていた。

「…………、は…あ…………」

あどけなさを残す整った顔立ちは困惑に歪み、荒い吐息が形の良い唇を震わせる。

無駄な装飾もなく整えられた爪をもつ小さな手のひらは、紺の制服に包まれた細い腰の上、脚の付け根に近い下腹部にぴったりあてがわれていた。

革靴のかかとを持ち上げ、爪先だけを揃えて絨毯の上に下ろし。浮かせ気味の腰を揺らしてはききしと椅子を軋ませて。

はしたなくも片方の手を脚の付け根へと重ね、せわしくそこをさする姿は、深窓のご令嬢がいままさに、恥ずかしい欲求に屈せんばかりの瀬戸際にあることを知らせていた。

「っ、ふう…………、っ」

ぴくん、と汗のうっすらと滲むうなじを震わせ、霧香はもう一方の指先を口元へ寄せた。

こぼれそうになる喘ぎ声を堪えるため、曲げた小指にそっと歯を立てて、己のうちから湧き上がる衝動に必死に耐え続ける。

きつく足の付け根と押し当てられる手が、プリーツのスカートを脚の間に巻き込むようにして皺を寄せているものだから、小刻みにせわしく擦り合わされる太腿の動きまでもが手に取るように見て取れる。

「ん、あ…………」

プリーツスカートを握り締めた白い指先が小さく震え、はしたなくも脚を隠す布地を絞り上げるような皺をつくる。休むことなく擦り合わされる内腿は、上等なソファをなおギシギシと軋ませるほどだ。

ひとけのない来賓室の中、深層のご令嬢の催した尿意はますます猛烈なものへと激しさを増す。美しき少女は、必死に息を詰めながら、身体をよじって込み上げてくるはしたない衝動に抗い続けていた。

「あっ、あ…………っ…………ふあ…………ああっ」

桜色の唇が小さく開閉し、甘く切ない吐息を繰り返す。

ぎゅっ、ぎゅっ、と細い腕が撫でつける手のひらの下では、石のようにぱんぱんに張り詰めた下腹部が、硬く指先を押し返す。

押さえこんだ足の付け根、一番脆い部分をびりびりとむず痒い痺れが刺激し、乙女の秘密の出口はわずかな油断を突いて大きく緩みそうになる。

（…………だ、だめ…………お、お手洗いい…………っ）

来訪途中の送迎車の中で、すでに限界に近かった尿意は、時間の経過とともに大きく膨らみ、いまやあどけない令嬢の身体を余すところなく支配していた。

「んう、……くう……あつ……」

（だ、だめえ……っ。あ、あつ、こんな……っ……お、お手洗い……お手洗い……っ！！）

たとえ天上の美しさを備えた可憐な乙女であろうとも、一日に数度の“ご不浄”を済ませないわけにはいかない。身体の内側に膨らむ下品極まりない衝動に身をよじるように耐えながら、霧香は『トイレ』を欲していた。

どうして先に用を済ませなかったのかと問われれば、不運なめぐり合わせと、とてもそんな事を切り出せる雰囲気ではなかったからだといきようがない。霧香とて年頃の少女であり、年上の男性に囲まれる中でお手洗いを申し出るのには口に辛いことだった。

様々な偶然の積み重なりで、なんと霧香は今朝から一度もお手洗いに行っていない。昨夜から済ませることができていない排泄欲求が、もはや限界だと下腹部で激しく暴れ回る。

もはや猶予は残されておらず、一刻も早く、排泄を許された場所へと駆け込まねばならない状況なのだが——

（あ、あつ……だめえ……っ！！）

仮に部屋を抜け出してお手洗いに立ったとして、その間に理事長がやって来てしまったらどうするのか。

進学を決めるにあたって、父がこの学院にあれこれと無理を言ったことは、霧香にも理解できていた。そんな霧香を快く迎え入れてくれた、言わば恩人でもある学院の理事長を放り出して、先にお手洗いを優先させる訳にはいかないのである。まかり間違えば、学院を出かけ先のお手洗いにしたとも取られかねないのだ。

霧香の常識に照らし合わせてみれば、お手洗いを借りることが許されるのは精々が来訪の予定がすべて終了した帰り際である。訪ねて行った早々にトイレに駆け込むなど、はしたないを通り越して言語道断だ。滞在が長時間にわたる場合であれば、一段落したところで申し出ることも不可能ではないかもしれないが——それにしても失礼にあたることに変わりはない。

一般大衆とは少々かけ離れた社会通念に、幼い頃から触れて育ってきた名家の令嬢にしてみれば、そんな己の育ちへの矜持もあったのかもしれない。

かち、かち、と柱時計が振り子を刻む中、霧香は半分意地になくなって我慢を続けているのだった。

だが、遅い。

霧香の来訪を歓迎していたはずの理事長が来賓室を訪れる気配はいまだない。

誰も居ないのをいいことに、そわそわと落ち着きない様子を隠すこともせずに、霧香は何度もドアの方を伺う。これだけでも十分なマナー違反だが、幼い頃から繰り返し躰けられた礼儀作法を忘れてしまうほどに、霧香の我慢は切羽詰まっているのだった。

さほど広くはない来賓室はしかし、作りつけの窓に重い樫のドアと、柔らかなソファに壁紙に至るまで調度を統一し、美しい調和を保っている。床に敷かれた絨毯は、霧香も知らない見事な飾り織りで、部屋の彩りを増していた。

しかし、退屈な時間をくつろいで過ごすための工夫が随所になされた一室は、いまや霧香にとって牢獄に等しい空間である。

「あつ……ああつ……」

身体の内側で渦を巻き荒れ狂う恥ずかしい熱湯は、制服の下腹部をパンパンに張りつめさせ、ぐらぐらと下品な欲求を湧きたたせる。

堪えようとしてもどうしても抑えきれず、小刻みに揺れ動く腰の上、石のように硬く張り詰めた下腹部には、少女の身体が長時間かけて作り出した恥ずかしい水が、今にも溢れんばかりになみなみと湛えられていた。

(お、お手洗い……っ)

今すぐにでも、トイレに駆け込んで熱い本流を思い切り身体の外へとほとばしらせてしまいたい。慎重な令嬢にあるまじき想像が、霧香の脳裏をかすめる。

あまりにも恥ずかしく、はしたない想像に、少女の白い頬がすうと赤くなってゆく。

しかし、幼い頃から厳格な躰を受けて育った深窓の令嬢をして、いよいよ高まる尿意はなお耐えがたく、紺の制服に包まれた細い肢体にはさらに強く、激しく、身体の内側で膨らみ続ける圧力が押し掛かる。

(ま、まだなのかしら……)

本来、迎えてくれる側の理事長を急かすようなまねはしてはならない。無論相手側の不作法もないわけではないが、それを表だって責めるようなことは、自信の品格にも関わることだ。

こうして尿意に苦しめられているのは、あくまで霧香の都合であり、どんな理由があれど訪問前にお手洗いを済ませていなかった霧香の自業自得なのである。

しかし、耐えがたいほどの尿意に晒され続け、霧香は、いまだ訪れる気配すらない理事長に対し、自分の立場も忘れて苛立ちを覚え始めていた。

(だ、だめ……こ、このままじゃ、本当に……)

後に続く言葉を飲み込んで、切羽詰まった表情をみせ、霧香は何度も室内を見回す。なんでもいから、何か頼れるものが欲しかった。

最初この部屋に案内された時、霧香は名家のご令嬢らしい思い込みで、来賓室というくらいだからご不浄が備え付けられているのではないかと期待していたのだが——勿論、市井の学校にそんな特例があるはずもない。

それどころか来賓室の中には余計な装飾はほとんどなく、精々がテーブルの上のティーセット程度だ。

少し冷めた紅茶が視界に入ってしまう、霧香は慌てて視線をそらした。

手をつけないのも不作法にあたる。無理をして半分口をつけはしたが、もう一滴も水分は身体の中に入れたくはなかったのだ。

(は、はやく……ココ、空っぽにしたいのに……っ)

きゅうっ、と下腹部をさする手のひらに力がこもる。

本当は思い切り脚の付け根を握り締めてしまいたいのを堪え、何度もうねる尿意の波を、意志の力と、乙女の秘密の場所、水門の力で懸命に押さえこむ。

だが、少女の事情なお構いなしに、水の誘惑はますます激しさを増すばかりだ。

下半身は切に排泄を訴え続け、わずかに口に含んだ紅茶すらも、早々と恥ずかしい熱水へと変わり、乙女の下腹部へと集まって行くようにすら思えてならない。

(お手洗い……はやく……、はやく……っ)

冷静に考えれば、果たしてこのまま最後まで我慢が続けられるかは怪しいものだ。橘家の令嬢の直接の来訪なのだから、まさか『これからよろしく』の一言で話が済むはずもない。理事長との面談の後には学内の見学や教師の紹介などもあるはずだった。

その途中で、訳を説明してお手洗いを借りるべきか？ 霧香の心が揺れる。しかしこちらから訪ねていった学院での歓待の最中、さして時間も経っていないうちにお手洗いを要求するのは、やはり礼儀に反する行いだ。

たとえば。そう、仮に。

ありえない仮定としても、霧香は想像を巡らせてしまう。2時間や3時間、学院に居たというなら、常識的に考えて女の子がお

手洗いに立ってもおかしくはないだろう。では一体、どれくらい待てばお手洗いの場所を訪ねても良いものだろうか？ 1 時間？ 3 0 分？ 1 0 分などというのは論外だろうか？ しかしまく理事長が話を切り上げてくれれば、そのタイミングを見計らって――

はしたないにも程がある想像を繰り返してしまうのは、それほど霧香が追い詰められていることの証だ。

もっとも、たとえ 3 時間だろうが 5 時間だろうが、本来は出先でお手洗いを汚すなんてこと自体が霧香の礼儀の基準からすれば、できる限る慎むべきことで、余程切羽詰まったことがなければ避けるべきだと言っている。

だが。いまの霧香はそんな選り好みを出来る状態にはない。家に戻るまでどころか、今すぐ理事長がやって来て、面会の最初のあいさつが終わるまでの 1 0 分の我慢すらできないかもしれないほどに追い込まれているのだ。

(そ、そうよ……こ、こんなところで、お粗相してしまったらっ……………)

不意に、霧香の心の中で恐怖が膨らむ。

確かに礼儀作法も大事だろう。でも、まさか。もしも、万一。

無理に意地を張って、我慢しきれなかったら――そんな最悪の事態の想像が頭をよぎったのだ。具体的な『お粗相』という言葉に、これまでも何度か浮かしかけた腰が、躊躇と困惑の袋小路の中で、再びソファから持ちあがろうとする。

(やっぱり、先にお手洗いに――あ、後で、お詫びすれば……っ)

差し迫った下腹部の事情に衝き動かされ、霧香はかたく張りつめた下腹部を庇うように、腰を浮かせる。

その体制で、霧香はしばし静止してしまった。じっとしているでもない、行動に移るでもない、実にぐずぐずとしてみっともない姿。しかし霧香はなお迷ってしまう。

(……………っ)

あと少し、あと少しだけ待てば。ちゃんと我慢して、失礼のないように――家に戻るまでは無理だとしても、せめて不自然でないくらいまできちんとして、それからお手洗いを借りれば。乙女の、令嬢の羞恥心が必死に自制を叫ぶ。乗り切ってしまうえば、一切の恥をかかずに済むかも知れないのだ。

こんなに迷っている暇があったら、もっと早く、こっそりとお手洗いにいっておくべきだった――そんな後悔も一緒に頭をよぎる。そもそもこんなに我慢を続けてしまうこと自体、令嬢としてどころか、一人の乙女としてあってはならない話なのだ。

躊躇と逡巡、諦観と決断。いくつもの選択肢が、令嬢の中でせめぎ合う。

それでもなお、刻々と高まり続ける尿意は決して和らぐことはないのだ。

(や、やっぱり……も、もう駄目……！！ が、我慢できないわ……！！)

おそらく 1 分以上もそうしていただろうか。

とうとう、霧香は恥ずかしい尿意に屈したことを自ら認め、席を立てしまう。

理事長に挨拶もなく、勝手に外のお手洗いを使ってしまう――それだけ自分が切羽詰まっており、もうどうしようもないくらいおしっこを我慢していたと宣言しているのに等しい行為だった。

後ろ髪を引かれる中、霧香はゆっくりとソファから身を起こす。

身体を曲げた瞬間、じんと膨らむ尿意に思わず声をあげそうになる。敏感になった下腹部の重みをずしりと感じながら、本当は忙しなく擦り合わせたい脚を、驚異的なまでの自制心で押しとどめ、焦る気持ちを押し殺しながら、そろりそろりと脚を進めてゆく。

霧香は重い櫓のドアにそっと手をかけ、ドアの向こうの気配を伺い、誰も居ない事を確認する。

(……………し、仕方がないのよ……も、も、本当に……)

最後の躊躇を振り切って、霧香はドアをそっと、静かに押し開けた。

廊下はひんやりとした空気に満ちていた。

勝手の分からない校舎ではあったが、あまりゆっくりしていて誰かに見咎められる訳にもいかない。出来れば誰にも知られないままお手洗いを済ませ、手早く戻り——可能なら気付かれないように振舞う。それがベストな選択だ。

(……本当なら、お手洗いを借りたこと、言わなければいけないけれど……)

礼儀に反していると頭は理解していても、もし誰にも気付かれないまま、きちんとお手洗いを済ませられたなら。一人の少女として、わざわざそれを口にするには強い抵抗があった。

そんな事を考えていた霧香の背中に、ぶるりと震えが走る。

悠長なことをしている余裕はないのだ。後のことは後で考えるとして、いまはこの差し迫った事態を解決することが最優先である。霧香は廊下の左右に視線を巡らせる。

来賓室から出た廊下のすぐ近くには、職員用と兼用の来賓向けのお手洗いがあったが、霧香はそこに入るべきか、しばし足を止めてしまう。

確かに今日、霧香は来賓者として迎えられてはいるが、春からは生徒としてこの学院に通うのである。そんな立場で、図々しくもこのお手洗いを使っているものだろうか。

(……そうよね)

理事長を待っている間に、勝手にお手洗いに立ってしまうのだ。せめて最低限の礼儀は守るべきだろう。使うなら生徒用の方であるべきだ。

そんな思いと共に、霧香は廊下の反対側、渡り廊下を通して教室の並ぶ校舎のある方へと歩き出す。

折角目の前にあるお手洗いやから遠ざかることに、少女の下半身ははしたなくも強く抗議をしたが、霧香はそっと下腹部を撫で、それを押さえこむ。

まさか堂々と脚の付け根を押さえるようなものではない。ごく自然に、女の子として大事な下腹部を庇うような慎まやかな動作だったが、見る者が見ればはっきりと、尿意を堪えていると明白な体制。人目がないとはいえ、橘家の令嬢にあるまじき行いであった。

(は、はやくしないと……)

いよいよ限界が近い。羞恥に頬を染めながら、霧香はわずかに震える脚を速める。

市井の進学校の構内は、霧香の知っているものとは大きく異なっていたが、同じように大勢の生徒が通う学舎であることに違いはない。まさかお手洗いが存在していないなんてことはないはずだった。

(こっち……で、いいのよね?)

歴史ある進学校という名の通り、修繕はされていても深い年月の重みを感じさせる校舎の中を、わずかに逡巡しながらも進んでゆく。

寒風の吹き抜ける渡り廊下を通り抜けて、霧香は教室棟へと辿り着いた。

幾分、暖かな気配のある廊下はやはり無人で、物音一つない。まっすぐな廊下にはずらりと並んだ教室と、黒地の板に白ペンキ

で書かれたと乏しき達筆な漢数字表記の組番号の案内が続いている。

その間に、同じ案内板に記された『女子便所』の文字を見つけ、霧香は僅かに安堵した。

霧香の感覚からすると、少々直接的な物言いすぎるが、これも仕方のないことだろう。この学院が古くからの伝統を持ち、築百年を超える校舎をなお使っていることは有名でもある。黒地の板に白ペンキの達筆な『女子便所』の文字も、恐らくは年季の入ったものなのだろう。

少なくとも分かり辛いよりはよほどいいはずだ。

——しかし“お手洗い”の本当の目的を全く隠すこともなく堂々と晒している『女子便所』の文字に、自分がこれから何をしようとしているのかを否が応でも思い知らされ、見せつけられている気分ではあった。

頬がわずかに赤くなるのを感じつつも、それもいったん脇にどけておくつもりで、霧香は廊下を、小走りにならない程度に急ぐ。

(間に合った……)

緊急警報を発令しつつある下腹部をかばい、スカートの裾を乱さぬように辿り着いたお手洗いの前、霧香はそっと胸元を押さえ、丁寧に何度もペンキの塗り重ねられた薄桃色のドアを、そっと押しあける。

年季を感じさせる漆喰塗の壁を、天井付近に小さな窓からの明かりがぼんやりと照らしている。

右手前には、清潔ではあるが長年使いこまれたと思しきホーローの流し台と鏡が並び、その反対側の壁に4つ、茶色のペンキを塗られた板張りの壁に仕切られた個室が仲良く身を寄せ合うように並んでいる。

何度も漂白されたであろうタイルの目地を踏まないようにして、霧香はお手洗いの奥に並ぶ4つの扉のうち、一番右端へと向かってゆく。

かつ、かつ、と響く固い音は、否が応でも霧香に緊張を強いていた。ここは霧香にとって未知の領域、異邦の空間なのだ。

個室を仕切る壁は、管理のため上下に大きく隙間を空けており、覗き込もうと顔を床に押し付ければ、中の様子が見えてしまいそうだった。

分けてもわずかな衝立だけが視線を隠しているだけの、個室同士が隣り合った構造のトイレである。衝立も上からのぞきこめるような高さではないが、天井までつながっているわけではなく、個室は真上が完全に解放状態である。

さらに個室のドアも、足元には5センチばかりの隙間があき、その気になれば身を伏せて顔を近づければ中を窺うことも可能だった。

霧香は思わず身を硬くしていた。

(…………、)

橘家ご令嬢という立場もあり、霧香にはごく普通の『公衆トイレ』などに足を踏み入れた経験などほぼ皆無である。これまでに通っていた学校や施設のお手洗いは、ここまであけすけに無防備なものではなかった。

かつり、と靴底がタイルを叩く。

(……あ……)

静けさの中で、冷たい壁は足音すら大きく反響させる。

もし他に誰かがいれば、お手洗いの最中に立てた物音は隣の個室はおろか、あたりにまで丸聞こえになってしまうだろうことが一

目で見て取れた。

そのことに気づいて霧香は顔を赤くしてしまう。

本来、誰にも気付かれてはならないはずの、“お手洗い”という秘密の行為。下腹部の恥ずかしい部分に溜まった、薄い琥珀色の液体を、女の子の一番大切な部分から進らせる排泄という行ないは、誰かに“そう”と悟られるというだけでも恥ずかしい行いである。また、それゆえに決してそうと気づかれぬように振る舞うこともまた、乙女としての嗜みであった。

だが、この学院のトイレは、霧香の想像していた『お手洗い』とは大きく基準を異にしていたのだ。

(……………郷に入っては、郷に従え、ということよね……………)

自分にそう言い聞かせはしても、すぐ隣に自分の用足しの音をそのまま聞かれてしまうような構造のお手洗いで安心できようはずもない。

建物に文句を言っても仕方ないとはしても、プライバシーへの配慮が大きく欠けた前時代的な『女子便所』の構造は、あまりにも慎みに欠けているように、霧香には思えてならなかった。

これ以上ここにとどまることにすら多少なりとも抵抗を覚えながら、霧香は個室のドアに手をかけた。

すっかり色の落ちた金属製のノブを握る。

ぎい……………。

かすかに軋むドアの奥にある光景を見て、霧香は絶句した。

(え……………！？ な、なに、これ……………っ！？)

信じられないという思いで、霧香は瞬きを繰り返す。

しかし、目の前の光景は消えてはくれず、幻や夢ではない現実であることを告げている。

(そ、そんな……………っ……………)

思わず揺れ動きを激しくしようとする腰を、ぐっと脚の内腿に力を込めて自制する。

個室に鎮座していたのは、霧香の予想していたのとはまるで違うモノ。前後左右を仕切る衝立の中、四角いスペースの床に沿うように設えられていたのは、大きく天井に向けて口の開いた白い陶器。先端でゆっくりと反り返り、跳ね返りを受け止めるようなカタチになっている緩やかな曲線——

『女子便所』に相応しい古式ゆかしき和式便器が、その役目を全うせんと控えていたのだ。

(ああ……………う、嘘……………)

そう。何を躊躇うことがあろうか、あとはそのまま踏み入れて、スカートをたくしあげ下着をおろしてしゃがみ込み、存分にお手洗いを済ませればよい。

しかし、待望の『オシッコのできる場所』を目の前にしながら、霧香は困惑を深めてゆくばかりだった。

ふらふらと後ずさった霧香は、儚い願いを込めて隣の個室を覗く。さらにそのまま隣、また隣と順に個室を確認してゆき……………最後の個室の前で、顔を覆ってがくりと窓枠にもたれかかった。

(そんな……………あ……………)

空席ばかりの4つの個室。

そのどれを選んでも、限界寸前の尿意を解放するには十分すぎる場所だというのに。霧香にとってはそのどれもが、まるで意味の

ないものばかりだったのだ。

（せ、折角の、お手洗いなのに……っ。……ど、どうして、こんな……っ）

そう。

海外留学の経験もある霧香にとって、お手洗いというものは生まれてこの方“洋式”でしかない。

霧香は今まで一度も、洋式以外のお手洗いを使った経験がないのだ。無論、知識としてそのようなモノがある事は知っていたし、その使い方もおぼろげながら理解はしている。

しかし、彼女の生活範囲にそうした場所は一つたりとて存在せず、目にする機会すらなかったのである。

「あ……っ」

慎みのかけらもなく下品に床に据え付けられたカタチの和式便器は、そこに大きくスカートをたくし上げ脚を開いてしゃがみ込むはしたない姿を強制するものだ。

当然ながら音消しのための設備もなく、大切な場所から勢いよく噴き出した水流は、高い位置から便器の中に直撃して、大きな音を響かせることは間違いないのである。

しゃがんで、おしっこ。

この学院の生徒——否、普通の女の子ならば当たり前のようにできるその行為が、霧香にはできないのだ。

しかし、曲がりなりにもお手洗いをを目の前にして、令嬢の下腹部でははしたない衝動がはげしく込み上げてくる。繊細な秘密の入れ物の中では恥ずかしい熱湯がぐらぐらと沸騰し、いまにも吹き零れてしまいそうに悲鳴を上げている。

「ああ……っ」

か細い悲鳴を押し殺し、霧香はふらりとトイレの壁に寄りかかった。

ぞくぞくと背中を這い登るイケナイ感覚が、限界に近いことを知らせている。

（ど、どうしよう……っ……で、でも、こんなお手洗いなんかじゃ、とても……）

震え出しそうになる膝をぐっと押さえつけ、霧香は余裕の失われつつある頭で思案を巡らせる。

恐らくは、霧香以外の少女達は普通にしていることだ。この学院のお手洗いが“こう”だというのだから、霧香以外の生徒全員が、問題なくこのお手洗いを使っているのに違いない。

だが——霧香は、それが出来ない。

（い、いや……わ、私、ち、違うの、っ、お、お手洗いのしつけも、できていないなんて……っ）

突き付けられた現実の前に、令嬢の困惑は、ますます深まるばかりだった。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・01 井澤佳奈

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/01/2012 09:00:00

BODY:

一度やってみたかったシチュエーション。

……影響を受けたり参考にさせて頂いた作品が多数あります。

2013/7/10 追記

おもしろ特区 イエローフィッシュ様作品「帰りのバスの中で……」シリーズ

おもしろ特区 printfu 様作品「飲料工場見学後の大渋滞」

おもしろ特区 セブンスウェル様作品「遠足のバスで…」

くすぐり失禁キャットハウス HIROSHI 様作品「子供の目の前で」「生徒の目の前で」

特にこちらの4作はシチュエーション、展開、キャラ造形その他まで多く参考にさせて頂きました。

曖昧な記述で済ませてしまっていたことをお詫びいたします。

<hr size="1" />

(うう……あんな事しなきゃよかった……)

高速道路を進むバスの中で、井澤佳奈は深く後悔していた。

見学場所を出てからすでに3時間近く。時間つぶしにと流されていた映画もとくにスタッフロールを終え、車内には気だるい雰囲気満ちている。時計は間もなく午後5時を過ぎようとしているが、窓の外に落ちる陽射しは初夏という季節もあって、夕日というにはまだまだ早い。

だが、長時間に渡ってバスの中に閉じ込められた生徒達は、皆すっかり疲れた様子で言葉少なだった。

(……んう……っ)

冷房の音だけが聞こえる静寂のバスの中、窓側の席の上で、佳奈は小さく身をよじる。

先程から落ち着きなくもぞもぞと座る位置を直し、遮光用のカーテンの隙間からちらちらと外の様子を覗き込む。その表情は余裕なく強張り、小柄な全身にはかすかな緊張も見て取れる。

「っ……」

形の良い唇が小さく噛み締められ、小さな吐息が漏れ聞こえる。少女の手のひらが紺の夏服のスカートをきつく掴んだ。

窓の外には延々と続く、車道を埋め尽くす赤いテールランプの行列。びっしりと並ぶ車が、片側三車線の高速道路をどこまでも占領し、長い長い列を作っていた。

佳奈を含む2年A組の28人を乗せた専用バスは、社会見学の帰りの高速の中で、後ろへも前へも進むこの出来ない渋滞の中に閉じ込められていたのである。

(……うう……っ)

1時間近く前から全く変わることのない窓の外の光景に、否が応でも佳奈の気は逸り、苛立ちと困惑はその密度を増してゆく。じりじりと焦燥を覚えながら見上げるバスのデジタル時計は、本来ならもうとくに学校についているであろう時刻を過ぎていた。

(こんななら、出発前にトイレ行っておけばよかったよお……っ)

続けるような少女の願いは、下腹部を占領する切実な生理的欲求に起因していた。

制服のスカートの上からそつと下腹部をさする手のひらにも、強張った感触がはっきりと感じられる。硬く張りつめた乙女の下腹部は、佳奈の尿意がいよいよ切羽詰まってきていることを知らせていた。

もう1時間も前から、佳奈はずっと、トイレを我慢し続けているのである。

椅子の上で揃えた太腿をぴたりと閉じ、膝下のソックスを交互に擦り合わせる。しかし乙女の貯水池になみなみと蓄えられた恥ずかしい熱湯は、そろそろそんなささやかな行為では堪え切れない状態になりつつあった。

(うう……、まだ着かないの?)

焦れば焦るほど、佳奈の尿意は強まってゆく。

午前中に走ったのと同じ高速道路とは思えないほどのノロノロ運転で、バスはびっしりと並んだ車の列の中に囲まれている。1時間ほど前にはそれでも、休み休みではあれど少しずつ前に進んでいたが、もう三十分近く、バスはほとんど動いていない。

なにしろ、往路はわずか1時間ほどで到着した道程なのだ。まさか、こんなにも長時間バスの中に閉じ込められることになるとは思っていなかった。

かなり前に通過した道路標識が正しければ、恐ろしいことにまだ帰途のうち半分も進んでいないことになる。

(……どうしよう……我慢……、できるかな……)

言いしれぬ不安が胸をよぎる。

渋滞についてはかなり前に一度、担任の清水先生からアナウンスがあっただけで、一体何が原因で、どれくらい続いているのかは

全く分からない。ほんの 5 分もしたらあっという間に解消して、元通りの速さで高速道路を走れるようになるかもしれない。

それなら良いが、もし——このまままだしばらく、バスが動かないままだったら。

(トイレ……っ)

自分の想像で、強い尿意の波を呼び起こしてしまい、佳奈はぶるるっ、と強く身を震わせる。足の付け根の大事な部分を守るようにきつく脚を閉じ合わせ、小刻みに息を整える。

おそらく、後者のほうの可能性がずっと高いことは、佳奈もなんとなく予想できていた。

佳奈の尿意はすでにかなりのものに達しつつある。三十分も前から、脚を何度もすり合わせたり、おしりをモジモジと揺すったり、スカートの間に手を差し入れて大事な部分に添えたりといった動作を繰り返しており、じっとしていることは出来なくなっていた。

(はやく……早く……)

少女の切実な願いに反して、しかしバスの窓外の光景はまるで変わる気配がない。

まるでタイヤに根が生えてしまったように、バスの動きは停まっていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・02 木崎由梨

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/02/2012 09:00:00

BODY:

木崎由梨は、よく手入れの整った、プリーツスカートの下できゅっと閉じ合わせた膝を押し付け合いながら、いらいらと座席の手摺を叩いていた。

(どうしてよ、なんで進まないのっ……！？)

整った顔立ちは焦りの色が濃く、細い眉は眉間に寄せられた皺できゅうっと吊り上がっている。そのせいでもともときつめの目線が、もはや怒っているかのように鋭いものとなっており、友人でも声をかけることも躊躇われるほどだった。

綺麗に手入れされた爪が手摺にぎゅうっと押し付けられ、細い指は白くなるほどにきつく力をこめられている。

社会的にも成功を収めた両親を見習うように、幼い頃からいつも級長、クラス委員に立候補をしてきた由梨は、いつも他の生徒達の規範となるべきよう心がけてきた。

クラスの代表として、その模範として、普通の少女のように人前ではしたない姿を晒す事などできない。他のクラスメイトのようにスカートの前を抑えることなどせずに、表面上はあくまでも上品な姿勢を保ちつつも、その内心は強い焦りと緊張、それによる苛立ちをの募らせていた。

その原因が、いよいよ激しさを増す尿意であることは今更述べるまでもない。

由梨が尿意を催したのは、見学の休憩時間にお昼を食べた頃からだ。午後の見学時間ではすではっきりとトイレに行きたい程の尿意を覚えていたのだが、見学コースの途中でトイレを申し出るような無礼な事は当然出来ないまま、しっかりと我慢を続けていた。

そしてまた、休憩時間も、昼食の時も、普段使っている清潔なトイレとは似ても似つかない公園の汲み取り式トイレを使うことは、由梨にはとうてい許容できるようなものではなかったのである。

(いいから急ぎなさいよ…！！ いつまで待たなきゃいけないの……！？)

その結果が、いまの由梨だった。

工場見学では新製品の紅茶の試飲会があり、由梨はたまたま近くに居た見学の案内担当者に勧められるまま、カップに3杯も特性のショウガ紅茶をお代わりしていた。せっかくの好意を断るなんては失礼に値すると考えての行為だが、それらは全く軽率なものだったのである。

趣味で紅茶を常飲する由梨の厳しい評価にも十分に耐えうるほどの新製品の紅茶は、由梨とクラスメイト達の喉を十分にうるおし、舌を楽しませてくれた。その紅茶が今、全て尿意へと変貌して、急速にその勢いを増し、由梨の下腹部へと襲いかかっていた、

美容と健康を売りにする目的で、新製品の紅茶には利尿作用を促す成分があったことも災いした。クラスメイトの倍以上の水分の摂取だけではなく、紅茶とショウガの利尿作用が、いままさに、相乗効果で由梨の下腹部に急激な貯水を行っているのである。

(……もう5時じゃない……どうなってるのよ、この渋滞っ……！！)

公園を出発してはや3時間。紅茶を飲んでから4時間近く。本来であれば、十分に余裕を持って学校の、あるいは自宅のトイレに行けていたはずの時間。

摂取した水分が全て尿意に変わるには、十分すぎるほどの時間である。仮に工場を出る時に一滴残らずオシッコを絞り出していたとしても、再び強烈な尿意に見舞われるのは確実だった。由梨はそんな苦痛に、見学中に一度もトイレに行かずに耐え続けていた。

それでも、公園を出発する直前に、由梨はやはりクラスの模範となるべく、清水先生の注意を聞いて、一度は気が進まないながら公園のトイレに向かいかけていた。

しかし、建物外まで悪臭を撒き散らす汚い汲み取り式トイレには、既に他のクラスや同級生たちの3, 4人の順番待ちの列ができており、由梨はそこで並ぶのも馬鹿馬鹿しくなってバスに戻ってきてしまったのだった。

（——いくら渋滞って言ったって、高速道路なんだし、遅れても30分くらいよね。それくらいなら全然平気よ）

もう2年生なんだし、クラス委員長でもある自分が我慢できないはずがない——そんな甘いことを考えていた自分を叱ってやりたくて仕方がない。

我慢を始めてから3時間。じわりじわりと由梨の女の子のダムは水位を増し、バスは渋滞の車の中でピクリとも動かない。

高速道路とは名ばかりの、のろのろ運転は由梨の苛立ちをいっそう高まらせるのに十分だった。

（はやく、はやくしなさいよお…っ）

焦りと共に何度も軽く腰を浮かし、座席の背もたれの間から車内の前方を見る。運転席と、その隣に座る清水先生は、由梨のことなど気にもかけずに、何かを話しこんでいるようだった。

（んもうっ……そんなことしてる暇あったら、急ぎなさいよっ…！！）

憤ったところで筋違いであるのだが、それを冷静に分析している余裕が、由梨にはもうない。ショウガ紅茶の利尿作用は、摂取した水分の多さも相まって、いよいよ急激にその勢いを増しながら、由梨の下腹部のダムに注ぎ込まれている。

下腹部は硬く張りつめて制服のベルトを圧迫するほどで、その強烈な尿意は、おそらく由梨でなければはしたなく腰を揺すり、恥も外聞も捨ててトイレを訴えてしまうほどの強烈なものなのだ。

だが、ゴールとなる学校までの距離はるか先で、このままバスがのろのろ運転を続けていれば、高まる尿意がダムの貯水量を追い越してしまう方が先であろうことは、もはや明らかだった。

「くうん…っ…」

じんっ、と膨らむ尿意の波に思わず声を漏らし、由梨は唇を噛む、

（あっ、あっ、あっ……お、おしっこ…おしっこが…もれちゃう…）

自他共に認める『クラス委員長』としての体面を押しお、声を大にして叫びたい、女の子の欲求を胸の内に押し込めて、由梨はぎゅっとスカートの前を押さえていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・03 佐野真彩

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/03/2012 09:00:00

BODY:

公園を出発して3時間。もうとくに学校に戻っていてもおかしくない、どんなに遅くとも、もう高速道路からはおりていい時間のはずだった。

バスの中程の窓際席に座る佐野真彩は、次第に落ちつかなくなりはじめた下腹部に手を添え、出来るだけ気を反らすようにカーテンを開けた窓の外を眺めていた。

高速に入った当時は順調に走っていたバスが、渋滞に飲み込まれ、全く動かなくなってしまうともう1時間以上過ぎている。
「……………はあ……………」

しかし、窓の外も青空や野原が見えるような爽やかな光景の訳もなく、防音のための高いフェンスに、灰色のアスファルト、びっしりと並ぶ大渋滞の車の列。緑と言えば申し訳程度の路側帯の茂みくらいだ。真っ赤なテールランプがどこまでも続き、エンジン音が低く唸る光景は、かえって真彩の気を滅入らせるばかり。

それもそのはず、この渋滞にはまりこんで動けなくなっているのは2年A組を乗せたバスだけではない。バスを取り囲む渋滞の列の乗用車と、それに乗る人々もまた同じように、数時間も、ほとんど動かない渋滞の中で立ち往生していた。

時折響く、先を急かすクラクションの音が、神経を逆撫でするように響く。耳を澄ませば文句や苛立ちの怒声すら聞こえてきそうで、陰鬱な雰囲気を感じ取った真彩は再度吐息をこぼす。
「…………ふう……………」

窓越しにすら、張り詰めてびりびりとした緊張感と苛立ちを孕んだ空気が染み込んでくるようで、お世辞にも気の休まる光景とは言い難い。ざわざわと落ち着かない下腹部に要らぬ緊張を強いる、不安定な気配に、真彩は眉をしかめる。

映画を流していたモニターも黒地に緑文字の出力だけを表示するバスの中には、少女達がこぼす小さな喘ぎ、かすかな吐息、ひそやかな呻きだけが響く、不自然な静寂が満ちていた。

無論、遠出の社会見学の帰途で思わぬ長時間バスに閉じこめられて疲れたことも理由の一つだろう。

しかし、2年A組の少女達の大半は、より切実で逼迫した生理的欲求という事情を抱えているのである。脚をぎゅっと閉じながら俯いている少女、車内を見回し、運転席のほうを覗くクラスメイトの顔も、どこか青ざめている。脂汗を流している生徒までおり、

そんな子は既に辛抱できないようで露骨に前を押さえたり、忙しく貧乏ゆすりのように落ち着かない様子で腰を揺すったりしながら、顔を見合わせ、周囲の様子を窺っている。

バスの中はどちらを見ても多かれ少なかれ、オシッコ我慢の真っ最中のクラスメイトの姿があり、見ているだけでも引き込まれるように『催して』しまいかねない。

真彩も程度の差こそあれ、他のクラスメイト達と同様に強い尿意に苦しんでいるのは同じだった。

(……やっぱり、外見ての方がマシよね)

出来るだけ車内の要旨は視界に入れないようにして、真彩は窓の外へと顔を戻す。

傾いた陽射しを遮るレースカーテンの隙間に視線を向けた時、その向こうの動かない渋滞の列の中で、乗用車の一台が路肩に寄って停車しようとするのが見えた。

停車したのは銀色のワンボックス。そのドアがスライドし、車の陰から母親に抱えられるようにして伴われる小さな姿が見える。

(あ……っ)

まだ幼稚園くらいの小さな男の子だった。

母親に何事かを言い含められた男の子は、足早に路肩のフェンスに向かう。

真彩はその目的を察して顔を赤くした。

「……………」

何かイケナイことをしているような気がして、思わず目をつぶりかけるが——それよりも、興味のほうが勝ってしまった。

あるいは、トイレを訴え続ける落ち着かない下腹部の乙女のダムが、その光景に共鳴してしまったのかもしれない。

良くないことだと思いながらも、真彩は背中を丸め、咄嗟に顔の前にかざした指の間から、こっそりと窓の向こうを覗く。

そこでは、母親に背中を向けたさっきの男の子がフェンスに向かって立ち、足首までズボンとパンツを下ろして、可愛いおしりを丸出しにしている姿があった。

男の子は勢いよく、フェンスに向けて立ちションを始めたのだ。

真彩にはちょうど背中を向ける格好で立ったその姿に、真彩は頬が熱くなるのを感じてしまう。

(あ……いいなあ……男の子って……)

まだ幼稚園くらいであろうその後ろ姿に、しかし真彩ははっきりと異性を意識してしまう。

立ってオシッコ。

あんなに幼く、小さくても、男の子ならああして、簡単に、立ったままでオシッコを済ませる事ができるのだ。真彩は我知らず、その背中に羨望を抱いてしまう。

同時に、少女の身体では早く不要な水分を放出しようと急かす切なくも激しいむず痒さが、真彩の下腹部に一気に広がってゆく。

「ん……………」

強まってはいても、我慢できないほどではなかった尿意が、ぐんとその勢力を増したような気がした。思わずスカートの上から足の付け根を抑えてしまい、真彩は慌てて周囲を窺う。幸い、クラスメイト達はそれぞれ自分の事に手がいっぱいの様子で、真彩にも、窓の外で繰り広げられている光景にも気付いた様子はない。

小さな身体の割に、男の子のつくる水流はなかなか立派なものだった。かなり我慢していたのだろう。傍らでそれを見守る母親も、どこか落ち着かない表情を見せている。

(立ちションって、キモチ良さそうだな……)

ずるいな、私もしたいな、と。

はしたなくも真彩は思わずそんなことまで考えてしまう。

もう長い間、尿意を抱え続けている真彩には、少々目に毒な光景であったのは確かだ。

こと、オシッコという面では不自由な女の子の事情など、あの男の子には知る由もないことだろう。バスの中に閉じ込められて3時間、知らずもじもじと腰の動きも多くなり始めた今の真彩には、特にそう感じられた。

けれど、女の子にはあんな風にはいかない。

我慢できないからと言って、バスの外に駆け出して済むような問題ではないのだ。

そうこうしているうちに、男の子の放水は終わっていた。お尻を揺らすようにぶるぶると雫を切って、ズボンを上げ、男の子は母親に伴われ、ほっとした表情で車内へ戻ってゆく。

(……羨ましいかも……いいなあ、あんな風にオシッコできて……)

男の子ってずるい。

あんなにも簡単にオシッコを済ませる事ができるなんて——真彩はそう思いながら、なお収まらない下腹部の切なさをなだめるようにそと股間に手を這わせる。

「で、でも、いくら小さな子だからって、良くないわよね」

羨望がはっきりと覗くつぶやきを小さく口の中で転がして、なお、車の中に戻った男の子に恨めしげな視線を向けることは止められずに、真彩は諦めと共に吐息をこぼすのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・04 日向羽衣&雪村乃絵

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/04/2012 09:00:00

BODY:

「……んっ……。あ、っ、う、羽衣ちゃん……っ、あ、あ、あっ」

「だ、だいじょうぶ。大丈夫だよ……乃絵ちゃん……」

バスの後部座席、隣り合ったシートに並んで座る日向羽衣と雪村乃絵は、お互いの指を互い違いにきゅっと握り合わせながら、鏡合わせのようなポーズで同じようにスカートの端を握り締めていた。

どこか外見も似通っている二人の少女は、不安に揺れる視線を交わし、縋りつくように身を寄せ合う。

2 - Aの中でも特に仲の良いことで有名なふたりは、幼稚園の頃からの幼馴染で、家も隣どうし。何をするにも一緒に、10年来の大親友だった。

苗字が離れているので出席番号こそ遠いものの、教室の席も隣どうし、班も一緒、委員会も同じ飼育委員だった。あまりに仲がいいので、たまに夫婦みたいだなんてからかわれることもあるほどだ。

今日の社会見学でも、羽衣と乃絵は当然のように一緒に行動していた。

見学の時もはぐれないように手を繋ぎ、休憩時間はお弁当の食べくらべをして、二人で買ったジュースを半分こして、バスにも隣り合った席に座った。

大好きな親友と一緒に、同じ時間を同じ時間用にすごせるのが二人にとってのなによりの幸せである。だから二人とも、バスの閉じ込められた長い渋滞の中でまったく同じように、トイレに行きたくなってしまっているのだ。

「羽衣ちゃん、……あと、どれくらい我慢できそう？」

「……………っ」

しかし、いくら大の仲良しの二人でも、まったく何もかもそっくりお揃いという訳にはいかない。羽衣は辛いのが苦手で、乃絵は怖い話が大嫌い。国語が得意な羽衣に対して、乃絵は数学のほうが成績が良かった。体育の持久走はふたりとも嫌いだ、水泳が苦手な羽衣に対して、乃絵はむしろバスケットボールやソフトボールのような球技が不得手だった。

いつもの一緒にの二人でも、当然のように別々の、違う少女なのだ。

だから二人のトイレ我慢の様子にも、大きな差があることもまた当然だった。

「羽衣ちゃん……っ」

乃絵の手を痛いほどに握り締めた羽衣の指が、じっとりと汗をかいている。彼女はさっきからほとんど声も上げることもできないくらいに身体を震わせ、下腹部をうねるように襲う必死になって尿意の波に抗っていた。

親友を思い遣る乃絵の言葉にも、ほとんど答えることもできずに小さく首を左右に振るばかり。あとどれくらい、と具体的に示すこともできないほど、羽衣の乙女の我慢はとくにロスタイムに突入していた。

「んう、あ、あっあ……っ、あっ……」

吐息を交えた熱い喘ぎ声が、羽衣の限界を如実に表している。

「羽衣ちゃん……、しっかりして……、ね？ もうすぐだから、きっと、トイレ、間に合うから……」

「っ……………」

励ます乃絵の声が届いているのか、羽衣はしきりに首を振るばかり。それでも彼女は、本格的なダムの崩壊だけはすまいと、なんとかギリギリのところで踏みとどまっているようだった。

「……羽衣ちゃん」

二人の間では、どんなことでも隠し事をしないというのが、小さなころからの羽衣と乃絵の約束だった。

だから、バスが渋滞にはまりこんでまるで動かなくなってしまって1時間、いよいよ本当に尿意が切羽詰まり、トイレに行きたくなった時、乃絵は懸命に恥ずかしさを堪えて、羽衣にそれを訴えた。

けれど、その時既に、羽衣は我慢の限界に近い状態にあったのだ。

「んあ……………」

切なげに唇を震わせ、息を荒げては身を硬くする親友の横顔を、乃絵は言いようのない胸の高鳴りと共に見つめていた。

びく、びく、と何度も緊張を繰り返す羽衣の仕草は、そのまま彼女を襲っている強烈な尿意の波に他ならない。ずっと一緒に過ごしてきた大親友だからこそ、彼女を襲う羞恥と苦しみがまるで手に取るようにわかってしまう。

乃絵は自分の事も忘れて、いつしかその姿に見入っていた。

(羽衣ちゃん、本当に辛そう……)

お互いの家が隣どうしということもあり、二人は家族ぐるみでの親交もある。

小学校の入学式から、どんな時も一緒だった親友。小さな頃から何もかもお揃いだった羽衣。辛い時も楽しい時も、悲しいことも嬉しいことも分け合ってきた親友。

半ば以上、もう一人の自分のように思っていた彼女が、本当は自分とはまったく別の、ひとりの女の子であることを、乃絵はいま、まざまざと思い知らされていた。

もちろん乃絵だって、バスの中でじっと押し込められたままな事に変わりはなく、トイレを我慢している事に違いはない。が、乃絵にはまだ隣の羽衣のことを心配できるくらいには余裕があった。

(できるなら、代わってあげたいのに……)

そう思い、ふと羽衣の下腹部へと向かった視線が、まるで張り付いたようにそこから離れなくなってしまう。

小さな女の子のダムをいっぱいにして、顔を赤く染め、汗を滲ませ、息を荒げながら懸命に耐え続ける親友。

その姿を目の当たりにし、乃絵はぞわりと脚の付け根に感じる尿意が強まるような錯覚を覚えていた。

これに勝る猛烈な排泄衝動と、いますぐ隣で親友は戦っているのだ。それを思うと訳もなく頬が熱くなり、乃絵は言いしれぬ罪悪感にぎゅっと目をつぶった。

(がんばれ……羽衣ちゃん、がんばれっ……)

汗で滑り、小さく震える羽衣の手のひらを、乃絵はきつく握り締めて、心の中で親友にエールを送りつづけた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・05 クラス担任・清水蓉子

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/05/2012 09:00:00

BODY:

高速道路の渋滞に巻き込まれ、前にも後ろにも進む事の出来なくなった 2 号車の最前列の座席で、しきりに足をさすっている女性の姿がある。

（あーんっ、早くしてえ……）

ストッキングの太腿を忙しく擦り合わせ、子供のように落ちつきなく周りを見回しているのは、2 年 A 組担任の清水蓉子だった。

今年で教員生活 3 年目の、まだ新人といってもおかしくない若輩の彼女は、生徒達に混じっていてもあまり違和感のないあどけなさを残している。むろん、きちんと成人した社会人ゆえに子供のような振る舞いこそ慎んでいるものの、まだまだ学生気分が抜けきっていない側面がある。

子供の心を忘れない大人として、生徒達にも親しまれているのは確かだが、教師として少々周囲への配慮に欠ける部分があるのは、彼女の指導に当たる学年主任の教諭の悩みでもあった。

（……ああ、もうっ、まだなの？ 早くしてよお……！！）

彼女は帰路のバスに乗り込む前からかなりの尿意を催していた。休憩時間が終わってもなかなか公園を出てこようとしない生徒達を呼び集め、バスに乗るのを確認するのに手間取り、とうとう出発までにトイレに行き損ねてしまったのだ。

バスの出発前に 2 - A の生徒達の動きが鈍かったのは、彼女達の多くが強い尿意を感じていながらも、記念公園の汚い汲み取り式トイレに入るのを躊躇っていたためなのだが——結局そのトイレを使いそびれた蓉子は、そんな事情を知る由もない。

もともと教師というのはトイレに不自由することの多い職業である。

まして今年度から担任を持つようになってから蓉子の忙しさはいや増し、オシッコ我慢は日常的なものになりつつあった。

授業の途中に襲い来る排泄衝動を、教卓の裏でスカートを掴み、ストッキングに包まれた膝を擦り合わせて乗り切り、短い休憩時間に教員用トイレまで廊下を小走りに急ぐ。

そんな時に限って、授業内容を質問する生徒や、会議の資料を頼んでくる先輩教諭に呼び止められるのだ。今すぐトイレへと駆け込みたいほどの尿意を覚えながら、泣く泣くトイレを後回しにして我慢を続け、そのまま次の授業になだれ込むようなことは日常茶飯事だった。

それでも、ほぼまる1日、朝から一度もトイレに行かずに過ごすのは、蓉子にとっても教師生活3年目の今日が初めての経験だった。

(うう……オシッコ行きたいよう……)

今年度から初めて受け持つクラスの、初の郊外授業と言うこともあり、蓉子も皆から頼れる『清水先生』として立派に担任を勤めるため、いささか気合いが空回りしていた感も否めない。

(ああん……やっぱり、出発前に素直にお手洗いのこと言うんだったわ……。でも、……あーんっ、こんな事になるなんて、意地悪すぎるわよお……！！)

公園を出る時点で蓉子の尿意はかつてない領域に達していた。その原因は、やはり飲料工場で勧められた美容にも最適というショウガ紅茶だ。デトックスという言葉につられて、ついつい何杯もお代わりしてしまったのが本当に悔やまれてならない。

日頃からトイレ我慢を繰り返し、相当に訓練されている蓉子の膀胱であっても、バスが学校まで戻る帰路の1時間、本当にオシッコを我慢できるかどうかは、かなり怪しいものだったのである。

出発直前になって、不安の極致に達した蓉子が、いったいどれほど運転手に言ってバスを止めてもらおうかと深く葛藤したことか。

しかし、2-Aの生徒達とは違って立派なオトナであり、担任の先生でもあるが蓉子が、出発準備を完全に終えたバスの中で、まさかいまさら『お手洗いにいきたいからちょっと待ってください』なんて言い出せる雰囲気ではなかったのだ。

そもそも学年の集団行動の中、スケジュール管理をしなければならない立場のクラス担任の立場で、そんな個人的な理由でバスの出発を遅らせることができるはずもない。蓉子は後ろ髪を引かれる思いを振り切って、涙を飲んでバスに乗りこんだのだった。

生徒達のトイレを心配しすぎた結果が、自分自身のピンチであるという皮肉。それは3時間という未曾有の長時間の我慢延長戦を強いられている中で、蓉子の気を逸らせるばかりだった。

(渋滞しないでってあんなにお祈りしたのに……あーんっ……)

そんな願いもむなしく、バスは1時間も前から渋滞のただ中である。途中にサービスエリアでのトイレ休憩などは、どこにも想定されていない。

スーツ姿の蓉子の、細めのスカートのおなかの、我慢し続けのオシッコでぶつくりと膨らんで、ベルトに浅く食い込みを作っている。

運転席のすぐ隣の最前列の座席シートの上、蓉子の両手は既に大事な部分に添えられており、シートの上でははしたなくも腰が自然と左右に揺すられてしまう。いい歳をしてもじもじとオシッコ我慢のしぐさを堪え切れないことに、蓉子は落ち着かない気分であちからと運転席を窺う。

幸いにして、運転手は蓉子のことを気にするでもなく、バスの運転に集中しているようだったが――

(早く…早くしてよお……渋滞なんかふっ飛ばしちゃって、邪魔な車なんか押しのけちゃえばいいのに……！！ ああんっ、トイレ、

オシッコ行きたい……！！ い、急がないと、急がないとお、……お、おっ、おも、オモラシ、し、しちゃうのよおお！！ ……ああーんっ！！）

とても生徒達には聞かせることのできない、剥き出しの『オンナ』の欲望を胸の中で叫び、蓉子はじりじりと焦る気持ちで、じっと運転席前方に続く渋滞の列を睨む。

万が一にも、こんな有様の自分を、生徒達に気付かれる訳にはいかないのだ。先生としてクラス担任として決してあってはならない事態を前に、蓉子の焦燥はなお深まるばかりだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・06 2年A組の顛末

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/06/2012 09:00:00

BODY:

佳奈たち2年生の社会見学は、郊外の博物館と飲料工場、記念公園を回るもので、事前の予定では午前8時半に学校を出発、10時前に現地に到着し、休憩を挟んで午後2時に公園を出発、遅くとも午後3時半には学校に戻り、解散という予定になっていた。

施設の規模が大きく、一度に学年全員が回ることが難しいため、見学はクラスごとに別のルートを取ることが決められていた。佳

奈たち 2 - A は午前中に博物館、休憩を挟んで午後に飲料工場へと向かうルートである。

昼食と休憩の場となった記念公園は、郊外に相応しく緑で一杯のとても楽しい場所だったのだが、少女達にとってなによりも懸案となる、非常に切実な問題があった。

——トイレ、である。

記念公園と名は付いているが、その実体はバブル経済成長の末期に、工場地帯に隣接する新興住宅地として開発される予定だった地区が、様々な理由により開発を放棄されたもので、以前からもともとあった森林公園を拡充する形で中途半端に改修を受けて、おざなりに形だけを整えられた場所である。

郊外の立地と、折からの不況も重なり、当初予定されたプールや遊園地を併設する一大レジャー公園といった体の建設計画は全て白紙となり、だだっぴろい野原に、ちらほらと遊具が並ぶだけのなんとも中途半端な施設となってしまった。

そして何よりも問題なのが、その規模に反比例して利用者数の少ないことから非常に貧弱な上下水道である。施設管理を行う事務棟の隣に新しく、公衆トイレが設けられた他は、古くからの森林公園時代の設備がそのまま利用されることとなった。

午前中の見学を終え、佳奈たちを乗せたバスが休憩場所を選んだのは事務棟と敷地を挟んで反対側の区画である。

そこでは、早くも困惑と驚愕の声が湧き起こっていた。

『な、なに、これ……！！』

2 - C や 2 - D のように、事務棟の近くの駐車場に停車したクラスや、2 - B のように 2 - A と同じ見学順番でも、午後の見学場所である飲料工場に近い駐車場を選んだバスにはあり得ない事態である。

2 - A の昼休憩の駐車場は、記念公園の敷地内でも旧森林公園の区画のまっただ中であった。

先に述べたように、旧森林公園の区画は拡張計画が中止になったため、諸施設は作られた当時のまま予算不足のあおりを食ってほとんど整備されていない。精々が名称変更とともに看板が掛け替えられた程度のことで、設備の大半は、数十年前に建造されたままである。

よって、2 - A の生徒達が休憩場所のトイレは、当然のように旧態依然とした汲み取り式だったのだ。

『そんな……こんなトイレしかないの？』

普段の利用者の少なさを窺わせるように、掃除も十分とは言えず、時折浮浪者が入り込んでいることを窺わせるようなゴミがそこかしこに転がる。

さらに個室には蜘蛛の巣が張ったり羽虫がびっしりと集った床は、水はけの悪さによって水たまりをそこここを作り、和式の便器の底からは鼻が曲がりそうな悪臭を漂わせている。

消毒用具どころかトイレトーパーも備え付けられていないそこは、およそトイレとしては最低ランクに近い場所であり、多感な年ごろの少女達には使うことを躊躇わせる構造だったのだ。

屋外の公衆トイレというだけでも、なんとなく足が遠のいてしまうような、思春期の盛りの少女達が嫌悪したのも仕方のないことといえるだろう。

バスの出発が近くなり、担任の清水先生が

「みんな、帰りの道路が混んでるかもしれないから、ちゃんとお手洗いは済ませておいてね？」

と忠告する中、佳奈のクラスメイトのうち何人かは、意を決して個室に突撃していったものの、多くの少女達が遠巻きにトイレの

様子を見守る中、佳奈もまた、

(いいや……我慢しよう)

と、すでに尿意を感じていながらも、トイレを使うことを躊躇ってしまったのだ。

帰り道のことを軽く考えてしまっていた事は否めないが、1時間ほどの帰路であれば十分に我慢できる範疇だったはずなのだ。

実際、不快感をねじ伏せてトイレに駆け込んでいった少女達のうちの半分ほどは、結局あまりにも汚く、音消しすらできないトイレを使うことを最終的に諦め、オシッコを済ませられないままにバスに戻って来たのだから、佳奈たちの軽拳だけを責めるわけにもいかない。

高速道路で1時間、公園から学校までを含めても2時間足らずの距離とあって、途中にトイレ休憩などは想定されていなかったことが、ますます2年A組の少女達を追い込む結果となった。

見学の企画段階においてももう小学校や幼稚園じゃないんだから、出発前にしておけば大丈夫——という、実行委員の教諭たちの甘い見通しの結果、高速道路を走るバスは、渋滞のただ中にはまり込むまで、いくつかのサービスエリアを素通りしてきたのである。

のろのろと動いてはすぐに停まるバスの中で、佳奈の、少女達の下腹部で、オシッコはどんどんとその存在感を増していった。

(……んっ……が、我慢、しなきゃ……)

いったい、いつになったら進むのか。不安な気持ちがますます高まる尿意に拍車をかける。バスの座席の上でもじもじと身をよじりながら、佳奈は一向に進まない渋滞の列を、もどかしげに見つめていた。

高速道路の上、一番近いサービスエリアまでの距離表示は4キロ。

延々と続く渋滞に捕まって、はや3時間。

下腹部を恥ずかしいオシッコでたぷんたぷんと満たした、2年A組の生徒28人の少女と、担任教師プラス一人を乗せ、2号車バスはピクリとも動かないまま、長い渋滞の列に飲み込まれていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・07 井澤佳奈その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/07/2012 09:00:00

BODY:

さらに20分が過ぎていた。

(と、トイレ…トイレっ、……と、トイレ行きたい…っ……)

佳奈の下半身に迫る切実な欲求は、時間の経過とともにますますその苛烈さを増していた。早く早くと焦る気持ちとは裏腹に、佳奈たちを2-Aの28人を乗せたバスは、高速道路の真ん中で渋滞の列に飲み込まれたまま、進む気配をまるで見せない。

決して短くない時間が過ぎているというのに、バスの外に見える風景はほとんど変化がない。もともと変わり映えのない高速道路の車線という状況を差し引いても、バスがこの半時間あまりでほんの数百メートルしか移動していないことを示している。

およそ、異常事態と言って過言ではない渋滞。その原因はいまだ、バスの車内で尿意に苦しむ少女達には知らされていない。佳奈たちはいつこの苦悶が終わるのかも分からないまま、ただただ永劫とも言える、拷問のようなオシッコ我慢を続けなければならなかった。

時折唸るように動きだし、わずかに進んではすぐに停止するエンジンの振れが、じんじんと下腹に響く。アイドリングストップを繰り返す車体の振動に揺さぶられ、危険水位を超えた佳奈の下腹部のダムの水面が激しく波立ち、揺れていた。

わずか20分で、佳奈の余裕は大きく失われていた。午後5時に差し掛かる時点で既に、下腹をさすることがやめられなくなっていた少女の両手は、いまや浮かせ気味の膝の間に深々と差し込まれ、スカートの上から股間を抱え込むように紺色の制服に強く皺を寄せ、直接、ぎゅうううっとな女の子の大事な場所、オシッコの出口をきつく押さえこんでしまっているのだった。

(だめ、だめ……漏れちゃう……お、おしっこ、おしっこ、出ちゃう…っ……)

座席に浅く腰かけ、前傾姿勢になった顔が俯き、白い喉が荒い息をこぼす。

不安定に揺れる革靴のかかとが、収まることなくこつこつと床を叩き続け、小さな背中がぎしぎしと座席を軋ませて左右に揺れる。

足の付け根を直接押さえ込む手のひらを、左右から挟み込むようにしてもじつく太腿が、ぎゅっと力を込めては静かに弛緩する。足の間に挟んだ手のひらを、ぐりぐりと股間にねじ付けて、少しでも猛烈な尿意を和らげようとする無意識の動作だった。

オシッコが出ちゃう。

まるで小さな子がトイレを我慢できなくなったの時ように、佳奈の思考はそれだけに塗り潰されていた。こんなにも切実な願いを

訴える少女を嘲笑うかの如く、渋滞は依然、解消する気配を見せない。

佳奈が縋りつくようにわずかな期待を込めて何度も見つめるバスの前方は、車高の高いトラックに塞がれて、ほとんど様子を窺い知ることができなかった。

（おしっこ……オシッコ我慢できない……！！で、でちゃう、トイレ……間に合わないよお……っ！！ど、どうしよう……どうしよう……！！）

先延ばしにしていた我慢の限界が見え始め、佳奈はすっかり混乱の中にあった。オシッコが出る。でも、ここにはトイレがない。

その二つの事実が示す結論は一つだ。

（やだ……そんなのやだよお……！！ちゃ、ちゃんとトイレじゃなきゃだめ、だめ、なのう……トイレ、トイレえ、行かせてよお……っ！！）

両手が握り締めた股間は緊張に引きつり、下腹部はなお次々と注ぎ込まれるオシッコでいろいろ硬く張りつめる。オシッコの出口を締め付ける括約筋はふとした油断で緩みそうで、いまにもしゅるしゅるとみっともない水音を立ててしまいそうだった。

教室の中なら一時の恥と我慢し、手を上げて『先生、おトイレ！！』もできるのだろうが、高速道路で立ち往生するバスはさながら動く密室だ。この場にはオシッコを済ませるための設備などあるはずもなく。佳奈の望みがかなえられることはあり得ない。

いまここから物理的に一番近いトイレは、1時間近く前に通過した、数キロ手前のサービスエリアの公衆トイレだ。その距離はまるで無限にも思えた。

バスがずっとこの調子でなら、冗談抜きで歩いた方がマシかも知れない。

（が、我慢しなきゃダメ……だめ、……で、でも、でもっ、もう……っ）

きゅうんと背筋にイケナイ感覚が這い上り、ぶるぶると顎が震える。ぱんぱんに膨らんだ膀胱が、もう限界と訴えている。

どこにもないトイレを求め、佳奈はぎゅっと目をつぶる。きつく圧迫する下腹部の中で、ぱんぱんに膨らんだ水風船が震える。

このままおなかの中のオシッコも、小さく縮んで全部どこかに行ってしまうばいのに。そんな幼稚な想像をしてしまいたくなるほどに、少女は切羽詰まっていた。半ばやけになって、佳奈はぎゅうぎゅうとスカートの上から下腹部を握り締め、押さえ込む。

しかし現実是非情なまでに残酷だった。強引に押さえ込んだ尿意は、敏感になっていた排泄器官をむしろ不安定にさせ、強く揺さぶってしまったのだ。反動のように急激に膨らんだ尿意が、少女が必死に庇おうとする、乙女の秘めやかな部位、その脆い出口を突き破らんと襲いかかってくる。

「んあ……っ」

押し寄せる尿意の大波が防波堤を打ちつけ、黄色い濁流が乙女のダムの水門押し崩さんと叩き付けられる。ぶるぶると歯を噛み締め、佳奈は身を縮ませてそれに耐えた。

息を詰め、身を竦ませ、数十秒。

どうにか大波を乗り越えた佳奈は、背中に汗を滲ませ、はあはあと息を荒げながら、わずかに生まれた余裕でそっと視線を上げた。

（っ……だめ……が、我慢、できない……っ。できないよお……っ）

ずっと動かないバスの中。変わることのない現状。もはや終焉は見えている。

このまま、ついに我慢の限界が来てしまえば——自分の恥ずかしい場所から猛烈な勢いで噴き出す水流と、バスの床一面に飛び散る黄色い水たまり。——もう2年生なのに、女の子としてあってはならないこと。オモラシ。

恐ろしい想像が佳奈の背中を冷たくする。差し迫った尿意は、その想像があながち間違っていないことを如実に訴えていた。

(どお、しょうっ……、どうしよう、っ)

恥も外聞もかなぐり捨てて——先生にトイレを訴えるべきか。

佳奈の心は、強い葛藤に揺れていた。

——『先生、おトイレ！』

それは本当に本当の最終手段だ。想像するだけで顔が熱くなる。トイレに行きたいと強く主張することは、少なくとも先生や運転手にはそのことが知られてしまうことに他ならない。佳奈がもう、バスを止めてもらわなければならないほどに、オシッコの我慢の限界であることを、教えてしまうことに等しいのだ。

幼稚園や小学校の低学年ならともかく、2年生にもなってそんなことは、断じてあるべきではなかった。

けれど。

(でちゃう……本当に、おしっこ出ちゃう……！！)

もはや、佳奈に時間は残されていない。まだなんとか動けるうちでなければ、この選択肢すら、佳奈の前から喪われてしまうのだ。

先生や他の子たちに迷惑をかけてでも、トイレに行きたいと訴えるべきか。

実際、どこにトイレがあるのかなんて佳奈には分からない。しかし、それを決断しなければ、わずかな可能性すら自分から閉ざしてしまうことになる。

それでも、思春期の繊細な羞恥心は、わずかな勇気の邪魔をする。

佳奈は女の子のプライドと、なお高まる尿意を天秤にかけながら、揺れる身体を必死に押さえつけ、『先生、おトイレ！』の葛藤と戦っていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・08 浅川沙紀

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/08/2012 09:00:00

BODY:

(……あっあ、出ちゃう、出ちゃう……もう駄目、我慢、できない……っ)

脚の付け根の奥でじんじんとその強さを増すイケナイ刺激に、浅川沙紀は限界我慢の戦いを続けていた。

彼女がきつく握り締めるのは、細長いステンレス製の水筒だった。きらきらと輝く銀色のそれを脚の間に挟み、スカートの下に穿いたスパッツの上から恥ずかしい場所に押し当てて、いまにも開いてしまいそうな水門を押さえこんでいるのだ。

(んっ、あ、う、くっ……)

座席の上で腰が上下するのに合わせ、脚の付け根の大事な場所がぐりぐりと水筒を挟み、押し付け、擦り立てる。それと同時に、まだ半分近く中身の残っている水筒がちゅぷちゅぷと音を立てた。

沙紀にはまるでそれが、おなかの中をたぶたと満たしている、恥ずかしいおしっこが揺れているように感じられてしまう。そんな事は無いとすぐに思考を打ち消すものの、錯覚に寄る尿意の加速は停まらない。

(ちゃ、ちゃんと、お茶、飲み過ぎないようにしたのに……っ)

沙紀は人一倍、尿意に敏感だった。膀胱が小さいというよりは、尿意を覚える度合いが人並みよりも随分と速い。つまり、オシッコの我慢がきかない女の子である。

学校でも休み時間の度にトイレに行かなければならないほどであるが、その時に出るオシッコの量はちよろちよろと水面を叩く程度のささやかなものでしかない。

沙紀の頻尿の理由の多くは精神的なものに依存している。

トイレが近いことは、思春期を迎えた沙紀にとっても大きな悩みである。友達と遊んでいても、移動授業のときでも、ふとしたことで急にトイレに行きたくなってしまう沙紀は、他のクラスメイトを待たせてトイレに駆け込む事を気に病んでいた。

できるだけ気にすまいとしていても、トイレに関する悩みはどうしても少女の心に深く根付く不安要素だったのだ。

それを改善するための我慢訓練もしていたが、思うような成果は上がっていないのが実情である。

(なんで私って、いつもこんな……すぐに、トイレ行きたくなっちゃうの……?)

沙紀は、バスの出発前に記念公園のトイレに行っていた。

お世辞にもきれいとは言えない汲み取り式のトイレで、完全にすっきりできたと言い難かったが——それでも、ちゃんと用を済ませたはずだった。

しかも沙紀は、社会見学途中で急にトイレに行きたくならないよう、今日は努めて水分を採らないようにしていた。今日は本当に喉の渇きが我慢できなくなった2回と、お弁当の時を除いて、ほとんどお茶も口にしていなかった。飲料工場でもショウガ紅茶には、ほんの少し——スプーン1杯くらいの分量だけ、口を付けた程度なのだ。

しかし、総量にしてわずか200ml程度の水分摂取に関わらず、有紀の尿意は他のクラスメイト達と比べても勝るとも劣

らないものだった。

（あっあっ、だめ、でちゃう、出ちゃうよお……）

バスに乗っている間にトイレに行きたくなくなってしまうかもしれないという不安。みんなに迷惑をかけたくないという羞恥。バスが渋滞に閉じ込められた事によって顕在化したその恐れが、沙紀の心の安定を大きく乱していた。

そして、少女の健康的な循環器官は、たとえ直接水分を口にせずとも、沙紀の下腹部のダムに十分な量のオシッコを注ぎこんでいた。

自分自身ではジュースやお茶、牛乳のような水分の摂取を控えているつもりでも、そうして沙紀が水分を口にしなければその分、普段の食事で水気の多いものが欲しくなるのは当然のことである。

朝食のヨーグルトやシリアル、煮物や野菜中心のお弁当。デザートゼリー。沙紀が好む食事には、水分の少ない乾いたものはほとんどない。オシッコの元となる水分がいったいどこから来るのか——その答えは明白だろう。彼女の日々の食事からたっぷりと供給されているのである。

そうして少女の体に取り込まれた水分は、健康的な消化器・循環器を経てしっかりと絞り取られ、残らず身体に吸収されている。

ならば当然の帰結として、少女の全身を巡った水分はやがて一か所へと集まってゆく。生理現象として慎ましやかな乙女の水風船はぱんぱんに膨らみ、恥ずかしいおしっこを目一杯に溜め込んでいたのだ。

（なんで……こんなに、っ……）

水分を控えている分だけ、たっぷりと濃縮されたオシッコは、その分だけ身体に不要な成分を高い濃度で含んでいる。生理現象は当然のようにそれを排除すべく、沙紀の身体が覚える尿意は普段よりもずっときついものとなっていた。

要らないモノを排出しようと高まる生理現象。どんどんと身体の内側で膨らむ恥ずかしい圧力。それに抗って、水筒をぐりぐりと脚の付け根にねじり付けるたび、ちゃぶちゃぶと揺れる水音がますます沙紀を苦しめる。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・09 久能愛理

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/09/2012 09:00:00

BODY:

「んっ…、んあっ……！！」

堪えようとした声が、我慢できずに塞いだ口から漏れてしまう。

下腹部を庇う手を離して、咄嗟に白魚のような指が押さえつけた口元から、艶めかしい喘ぎとなって吐息が漏れた。

整った顔立ち、膝の良さを窺わせる慎ましやかなたたずまい。久能愛理はそんな如何にもな『お嬢様』の外見をもつ、掛け値なしの美少女である。

そんな愛理が切なげに腰をくねらせて身悶えする様は、近くに座っていたクラスメイトたちも思わずドキッとさせるほどのものだ。

「んふ、うつ……」

声を上げまいとすればするほど、ちくちくと下腹部を刺激する尿意は鋭さを増しているようだった。愛理の女の子の部分に、身体の中から恥ずかしい液体がイケナイ悪戯をする。

またも漏らしてしまった呻きと一緒に、女の子の大事な場所からもオシッコが漏れそうになり、愛理は慌てて脚の付け根に力を入れ、排泄孔の出口を締め付ける。

それでも我慢きれない熱い雫が、ちよろろつとこぼれて、下着の股布にじわあっと熱い染みを広げてゆく。

（あ……だめ、……あつ）

ほんの数滴のおちびりであっても、下腹部をたぶたぶと揺らすオシッコを排出する行為がもたらす解放感とはとつともなく甘美だった。思わず崩れ落ちそうになる腰を懸命に持ち上げて、愛理は心を奮い立たせる。

猛烈な尿意はなおまったくおさまらず、下腹部の水風船はいまにも破裂しそうに膨らみ続けていた。ダムの内側で激しく泡立った薄黄色い濁流が、隙あらば愛理の大事なところを突き破ろうと水圧を高めているのだ。

（……くう……っ、だめ、おさまって……えっ）

じいんと鈍い痺れがおしこの出口を震わせ、疲れ切った括約筋が限界を訴える。少しでも気を抜けば、座席シートの上に間に羞恥の水流を噴射しそうになる脚の付け根のダムの放水孔を、内腿をぴったりと閉じ合わせて押さえこみ、愛理ははあはあと息を荒げた。

（……こ、こんな所で、お粗相なんて…いけないんです、からあつ……！！）

猛烈な尿意にさいなまれながらも、まだ愛理は一度も、他の生徒のように股間を押さえ込むようなはしたない真似はしていなかった。足を閉じ、そろそろとふくらはぎを擦り合わせ、もじもじと腰を動かす——どうにかその程度の『ささやかな』我慢の仕草だけで、この窮地に立ち向かっているのである。

お嬢様としての気合とプライドを武器にして、折れそうな気持ちを支えるのを手伝わせる。それでも愛理の矜持は、これまでも何度も挫けそうになっていた。

（が、我慢、我慢っ……ちゃんと我慢しなきゃ……いけないんですからっ！！　だ、だからちゃんと我慢っ、しな、あんあう！？）
じんっ、びりびりっ。

エンジンの振動が、座席に押し付けた股間を直撃する。外と中からのダブルの衝撃に、愛理は目を見開いてしまう。

（ああ、あ、ああっ、あ、だめええっ）

珍しく、渋滞の車が前に動いたのだ。立て続けの振動に愛理は思わず弱音を上げてしまう。はあはあと息はますます荒くなり、頬はすっかり紅潮している。形の良い唇はきゅうっと噛み締められ、スカートの裾を掴む指にもきつく力がこもる。

本当なら、みんなと同じように、はしたない姿を晒す事もいとわずにぎゅうぎゅうとスカートの前を握り締めたいのだ。それをせずになお堪えようとしているのは、幼い頃から愛理を躱けた祖母の教育ゆえである。慎み深い淑女に育つように、少々時代遅れとも思える祖母のしつけは、まだ幼いはずの愛理にしっかりと刻み込まれ、ともすれば杓子定規にはしたない真似を決して許容できない、堅物な価値観を植え付けていた。

（ダメよ、あんな——あんなみつともないことだけは、っ、しないようにしなくやっ……！！）

その潔癖な思考は、同じように尿意に苦しむ他のクラスメイト達を蔑んでいる事に他ならないのを、愛理はまだ気づいていない。

辛うじてあそこを押さえるようなはしたない真似だけはせずにいたが、それも時間の問題だった。形振り構わずに我慢のポーズを取らなければ、これ以上切迫した尿意を耐えるのには限界がある。

スカートの裾を掴むだけ、そっとおなかを撫でるだけ。少しだけ、ほんのちよっただけと許した甘えは、いまやブリーツの整った制服のスカートの布地をぎゅうぎゅうと、雑巾でも絞るように握り締めてしまっている。愛理が何を我慢しているのかは明白で、必死に保ってきた委員長としての体裁も、いよいよ崩れそうになっていた。

（っ、はあ、はあっ、はあっ……）

大波のように荒れ狂う下腹部のうねりを乗り越えながら、どうにか深呼吸を繰り返し、愛理は今日4度目となる最大の危機を乗り切った。訪れるたびに前回を上回り、もはや絶体絶命と言っても過言ではない限界を、愛理はまたも退けたのだ。

（は、早くして……、早くして……んっ、も、もう、本当に……っ）

しかしその事実には安堵する暇もなく、愛理は眉を吊りあげ、攻撃的な視線をバスの外へと向ける。失われた余裕はそのまま害意に似た感情を孕み、いまののっぴきならない状況を作り出したこの渋滞の列へと叩き付けられていた。

（うう、お願いします、急いで……急いで……んあぁっ……！！　お粗相を、してしまう、前に、はやくッ……！！）

もう、子供じゃないんだから——と、見栄を張ってまで。

出発前にトイレに行かなかったのは、あくまでの愛理の決断、決断だったはずだ。混んでいたとはいえ、不衛生だったとはいえ、記念公園のトイレが使えなかったわけではない。

しかしそのことを棚上げにして、愛理は今の苦境の理由と原因を、渋滞の他の車や、思うように進まないバスへと転化してぶつけていた。

（こ、こんなじゃ、そのうち、本当にっ……）

また弱気が頭をもたげようとする。それをねじ伏せるように、愛理は強くバスの床を蹴った。ばん、という小さからぬ音に、数名の生徒達が驚いて愛理を振り返る。

オシッコ我慢のゴールとなる学校までの距離はなお遠く、バスの進みは亀のように遅い。学校どころか、高速道路の出口——い

や、ここから一番近いサービスエリアまでだって、間に合うとも思えない。

我慢の限界が迫り、愛理はとうとう椅子の上でばたばたと脚をばたつかせてしまう。

「くっ……んっ！！」

閉じ合わせた唇の間から、苦悶の呻きがこぼれる。幼さをあまり感じさせない整った顔立ちは、高まり続ける尿意に歪み、青ざめ、額やこめかみにはじっとりと汗が浮かぶ。

（ほ、本当に……もらしちゃうかも……っ）

弱気になった心が、あり得ない——あってはならない想像を頭の中に作り出してしまふ。限界を超えて噴き出したオシッコが、下着を一瞬ですぐ濡れにして、スカートを、ソックスを、革靴を濡らして足元に大きな水たまりを作る。

プリーツを綺麗に折り整えた清潔なスカートを、女の子の大事な部分から溢れた薄黄色の水流が見るも無残に染め上げ、濡ればそった布地は脚に張り付いて、溢れ落ちる水流をくっきりと映し出す。

我慢に我慢を続けたオシッコはなお止まらず、壊れたように女の子の出口から噴き出し続け、スカート越しに押さえ込んだ手のひらにも叩き付けられるように溢れ、びちゃびちゃと飛び散って、バスの中を汚してゆく。

その様は、まごうことなき、『オモラシお嬢様』のできあがりだった。

（い、嫌……、そんなの絶対ダメよ……っ！！）

これまで努力を積み重ね、品行方正な『お嬢様』としての地位を築いてきた愛理の全てを崩壊させる恐ろしい想像に、少女は怖気と共に身を震わせる。

（ぜ、絶対、嫌ですっ……！！……と、お手洗いまで、が、我慢っ、しなくちゃ……っ！！）

最悪の想像で心を奮い立たせるという試みは、辛くも成功した。

その代償として、膨らむ尿意と共にまた、下着をじわりと熱い雫で濡らしてしまいながら——なおも愛理は果てのない我慢に挑む。

時に妖艶に、時に近寄りがたく、くると表情を変えるそんなお嬢様の姿を、他の生徒達がじっと注目を浴びせていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・10 戸塚智代

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/10/2012 09:00:00

BODY:

切羽詰まっているのは二人だけではない。

戸塚智代もまた、シートの上で腰をよじり、押し寄せる尿意と戦っている一人だった。

否、その危機的状況だけを切り取れば、彼女ほど追い詰められている少女は、バスの中にもほとんど居ないと言っている。

(ん、んっ、ん……っ、あ、ま、また……)

ぴきゅん、と脚の付け根にイケナイ感触。

慌てて押さえようとした手のひらの内側で、じゅじゅっ、じゅううとかすかな水音が響く。制服のスカートの下大切な場所の、女の子の水門を押し破って噴き上がる雫が、濡ればそった下着にじわあっと温かい感触を広げてゆく。

(ま、また出ちゃった……っ)

さっき、これが最後と決めたばかりなのに。

智代の身体は度重なるオモラシの誘惑に耐えられず、またもおチビりを繰り返してしまう。それは決して小規模なものではなく、既に下着を股布部分以上に大きくぐっしりと湿らせてしまうほどの大失態だ。

ぷくりと膨らむ排泄孔は、懸命の努力にも関わらず、ぶしゅっと飛沫を上げて恥ずかしい雫を噴き出し、漏らしたてのオシッコがじわりと足の付け根を広がり、太腿から膝裏を伝ってゆく。

スカートにきつく挟み込んだ手のひらにも、制服の布地越しに、じわあっと暖かい湿り気が広がってゆく。はしたない水流を迸らせた排泄器官がきゅんきゅんと、排泄の解放感を訴え、じんじんと熱い痺れを下半身全体へと伝播させる。

(んう、はあ……)

ぴきゅんっ、と跳ねるように少女の排泄器官が身悶えし、下腹部に収まりきらない羞恥の水風船が、ただだらしなく出口を緩めてしまう。断続的に響き渡る黄色い稲妻が、恥骨から背骨を這い上がり、頭の中で炸裂した。

(だめ、もうだめ……だめなのに……っ)

じゅじゅう、じゅっ、じゅううう……

必死に食い止めようとする努力もむなしく、羞恥に引きつった内腿を、再度の決壊が襲う。たった今たっぷりとオシッコを吸いこませた下着と座席シートに、さらに熱い水流が噴き出してゆく。

排泄孔を括約筋を締め付け、内腿の筋肉を強張らせて、水門を塞ぐ——そんな事すらままならない。オシッコを我慢する、という命令系統は完全に蔑ろにされていた。

限界を訴える下腹部の水風船の欲望は、そのまま智代の女の子の出口を直撃する。

「んああ……っ」

じゅっ、じゅじゅじゅっ！！

濡ればそってびたりと肌に張り付いた下着の股布部分が、噴き上がる恥水にわずかに膨らむ。既にその布地の保水力を超え、吸収しきれないオシッコは、智代の座る座席シートに、乗り出した足を伝って床上にと零れてゆく。

おチビりの度にびきゅんびきゅんと疼く尿意はいよいよ激しく牙を剥き、本来の命令系統をまったく無視して、いい加減に諦めて女の子の水門を完全に開いてしまえと智代に命令してくるのだ。智代はもはや、荒れ狂う下半身を支配する尿意の奴隷といっても過言ではない。

（はあ、はあっ……あ、やだ、ま、またあ……っ）

たった今、少なくない量をチビらせた股間が、またも熱い雫を噴き上げる。

スカートの上から揃えた両手を腿の間に挟み、前屈みになって身体を強張らせる智代の不審な姿は、周囲のクラスメイトからも注目を集めていた。

智代はとてもトイレに近い。クラスの中でも背の順が前の方であることも含めて、十分に发育しているとはとても言えない排泄器官は、十分な貯水量の膀胱も、強烈な尿意に耐えて水門を閉じるだけの括約筋の力も持っていないのである。

とりわけ、同年代の少女に比べてもその容量の小さな乙女のダムは、一晩の間オシッコを蓄えていることもできず、眠っている間に尿意を訴えることもよくあった。流石に学校を上がったからは、オネショはもうめったに（月に2回くらいしか）しないが、夜中に飛び起きてトイレに駆け込むことはほとんど毎夜のことだ。

そんな智代が、トイレ無しでこの険しい道程を耐えきれはさすがない。

利尿作用たっぷりの紅茶を飲まれた上、3時間もバスの中に閉じ込められている時点で、この致命的状況は確実だったのだ。ただでさえ貯水量の少ない智代の恥骨上のダムは、とくに我慢の限界を迎えていて、これまでに、大規模なもので4回、小さなものを含めれば20回近くも、パンツの中におしっこをチビっていた。

それとはっきりと『漏らした』と数えられるのがそれだけというだけで、数滴ずつ出てしまった分まで含めれば数えきれないほどだ。

既に下着は股布部分どころかおしりの方までびしょりと濡れ、断続的に漏らし続けたオシッコは座席シートの深い部分まで染み込んでしまっている。

（と、トイレ……おトイレ……っ、おトイレ行きたいっ……！！）

智代は、バスの中でも数少ない、公園出発前にトイレに行った少女の一人だった。もともと排泄には悩みを持っている少女だ。いくら使うことの躊躇われる不潔な汲み取り式の公衆トイレとはいえ、オシッコを済ませないままバスに乗るなんてことはありえなかったのである。

清水先生の注意がなくとも、智代は出発を控えたバスからいち早く下りて自主的にトイレに並んでいた。他のクラスメイト達が、改めて汲み取り式トイレの汚さに驚き、躊躇い、ついには使うことを諦めてバスに戻ってゆく中、智代は恥ずかしさと不快感を堪えて個室に駆け込んだのだ。

『……ねえ、本当にこんなトイレですか？』

『あんなとこ使うくらいなら、我慢するよ……』

『うーん、我慢できないのは分かるけど、ちょっと、必死すぎて言うか……』

『なんか女の子として終わってる感じ、しちゃうよねえ。あはは』

そんな雰囲気の中、智代は赤い顔を俯かせて汲み取り式の便器を跨ぎ、ポケットティッシュを握り締めて、おなかに溜まったオシッコを、しっかり、勢いよく、一滴残らず絞り出してきたはずだった。

それなのに、智代の我慢は既に限界のカウントダウンを刻み続けているのである。

(あ、あぁあ、あつ、だめ、またぁ……)

じゅ、じゅじゅじゅ、つじゅうつ。

またもはっきりと周囲に聞こえるほどの水音を響かせて、尿意に屈してしまう、だらしない下半身。じゅわあ、と新鮮な漏らしたてのオシッコが、スカートの間に押し付けた手のひらにまで染み込んでくる。

だが、智代の排泄孔をなぶり続ける尿意は、収まるどころかむしろ激しいものに変わっていた。

そう。いくらおチビりで少しずつ排泄を続けているとは言っても、智代の尿意が和らいでいる訳では決していない。見学の間に摂取した水分は智代の我慢できるトイレの限界を遥かに超えており、現状は容量の小さな排泄器官に収まりきらない分が溢れだしているだけである。

むしろ、利尿作用にも敏感な智代の身体は乙女のダムに注ぎ込まれる恥ずかしい液体の量をいや増す一方であり、延々と我慢させられているのと全く同じことだった。

きちんとしたトイレでちゃんとオシッコを済ませているわけではないのだ。30分近くをかけて続くオモラシは、少しずつ排泄を先延ばしにしているようなもので、おチビりを繰り返し、過敏になった排泄器官はわずかな刺激にも反応してオシッコを漏らしてしまう。水門の弱い場所を覚えたオシッコは、ちくちくとした尿意をますます激しく暴れさせ、執拗に智代の出口の敏感な部分を刺激する。

(あ、あ、あぁあ、だめ、もう出ちゃだめ、なのっ……)

出かける前にトイレに行ったのに、もう限界を訴え恥ずかしいおチビりを繰り返す自分の身体を呪いながら、智代は必死に歯を食いしばる。

くねくねと擦り合わせる脚の間に、またもじわあっと温かい雫を噴き上げながら、智代は懸命に足の付け根を握り締め、ダムの本格的な決壊だけは回避しようと身を強張らせる。これもまた、他のクラスメイトには理解されないかもしれない、少女の孤独な戦いだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・11 佐野真彩その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/11/2012 09:00:00

BODY:

今度、真彩の前で新たな動きを見せたのは、大きなトラックだった。

荷台には重そうな材木をたくさん積み上げて、どこかに運んでいる途中なのだろう。バスの車体とそう変わらないトラックが、わずかに空いた車間から強引にハンドルを切るようにして車線に割り込んでくる。

横入りされた車の列が、抗議のクラクションを鳴らす中、エンジンを切ったトラックの運転席から、日焼けしたお兄さんが下りてくる。

「ええっ……」

信じられない光景に、真彩は思わず声を上げてしまった。

おそらく、真彩のお父さんよりは若いだろうけれど、ちゃんと働いているのだから立派な大人のはずだ。間違っても、子供とは言えない年齢のはずである。

そんなトラックのお兄さんが、さっきの男の子と同じような事を始めたのだ。真彩の驚きも無理はない。これまでにそんな事をしようとした大人を、真彩は一人も知らない。

真彩の驚きを余所に、お兄さんは壁に向かってそそくさとズボンのジッパーを下ろす。その姿に、真彩は真っ赤になって顔を反らし、慌ててカーテンを閉めた。

こればかりは思春期の少女には少々過激すぎる。ドキドキと高鳴る胸を押さえながら、顔を伏せ、真彩は混乱の中ぐるぐると頭の中を渦巻く困惑と驚きを持って余してしまう。

（う、嘘……！？ え？ い、今……本当に？）

押さえたカーテンの隙間から、かすかな光が差し込んでいる。その向こうで繰り広げられているだろう光景を想像してしまい、真彩はますます訳が分からなくなる。

（あ、あんな、大人の男の人も……こんな所でオシッコ、しちゃうんだ……）

それはまったく、真彩の想像の埒外のことだった。

たとえどんな男の人でも、大人ならみんな、ちゃんとトイレで済ませると思っていたのに……。いきなり突き付けられた生々しい現実の前に、真彩は耳までを赤くして、頬を抑えてしまう。

同時に湧き起こるのは、強い、強い羨望だった。

(ず、するい……ずるいよ！ お、男の人って…っ！！)

女の子の真彩は、あれからずっと、オシッコを我慢し続けているのに。男の人はあんなに簡単に、外でオシッコができるのだ。

こんなにもはっきりと、男女の身体の仕組みの違いをはっきりと意識させられたのは、これが初めてのことだ。バスの中に閉じ込められ、なおもオシッコ我慢を強いられる真彩の身体は、簡単に立ったままオシッコができる身体を激しく羨む。

(な、なんで、女の子って、こんな風に、我慢しなきゃいけないの……！？)

不平等な『おんなのこ』。下半身に身体に溜まった不満を、真彩は文句と共にぎゅっと押さえこむ。

真彩の脚はさっきからぴたりと閉じ合わされ、両手はきつく握られてひざの上に置かれている。他のクラスメイトに比べれば慎ましやかなものではあるが、はっきりとオシッコを我慢しているのがわかるには十分だ。

溜息も多くなり、身体も落ち付かないように何度も揺れ動く。それでも気分を紛らわせるためにバスの外を眺めているのは、それなりに効果があるのだった。

けれど。

その分、あんなものを何度も見せられるのではたまったものじゃなかった。

「う……………」

不満を混ぜた呻きとともに、長く葛藤し。

どうしても押さえきれない好奇心を半分交えながら、真彩はそっと顔を上げ、カーテンを細く押しあける。すると、窓の外ではちょうど、さっきのお兄さんがトラックの運転席に戻ってゆくところだった。少し周りを気にして、足早な様子を見ると、それなりに恥ずかしいことなのかもしれない。

ずっと我慢していて、どうしても我慢出来なかったのかもしれないが、やっぱり真彩には受け入れがたいことだった。

(でも、いくら男の人だからって、大人なのに……あんなトコロでオシッコをしちゃうなんて……)

真彩が目を反らしているうちに、バスが少し進んだこともあって、トラックの反対側にあるだろう高速道路のフェンスからアスファルトにかけてを黒く色が変わった水流の跡は、ほとんど見つけることができなかった。

けれど、恐らくはさっきの男の子よりもずっと大きくなっただろう、オシッコの水たまりをどうしても思い描いてしまい、真彩はいつまでも熱い頬を何度もこすって、強く頭を振るのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・12 清水蓉子その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/12/2012 09:00:00

BODY:

（あーんっ、もう、早く動いて……！！ ……渋滞なんて聞いてないわよ！！）

蓉子はもう何度目になるのか分からない、声にならない叫びを上げる。

公園を出て高速道路に入った時点で、蓉子の膀胱に溜まったオシッコは危険水位を突破しており、既に尿意は我慢の限界と言ってもいいような状態だった。それから渋滞に巻き込まれてはや1時間半。もはや蓉子の下腹部のダム破裂寸前に近いほどまで、パンパンに張り詰めている。

じんと断続的に襲いかかってくる尿意の波。いったい何度、形振り構わずギューギューとあそこを押さえてしまいそうになったことだろう。じっとしているのも辛いまま、蓉子はさっきから何度も席を立ては、落ち付きなくバスの通路をうろうろと歩きまわっていた。

「…う、…んあつ……」

ずらりと並んだ車の列の中、思い出したように渋滞の列が数メートル進み、バスがのろのろとそれを追いかける。まるでトイレを焦らされているような気分で、蓉子は座席の手すりを握り締めて、股間に力を込め、オシッコの出口の括約筋を締め付けた。タイトスカートのお尻がくねくねとよじられ、強張った表情が忙しくバスの中を横切る。

（あぁーんっ、いや、でちゃう、出ちゃう！！ と、トイレ、おしっこ……！！ オシッコしたい！！ ああっ、もう、もうっ、い、意地悪しないでよお……！！）

あまりにももどかしいバスの進みに、蓉子は胸中で何度も叫んでいた。

脳裏をよぎる『オモロシ』の四文字が、蓉子を惑わす。今すぐここでオシッコを済ませられれば、それはどんなに気持ちのいいことだろう。耐えに耐え続けた尿意からの解放は、甘美な快感となって下半身を貫き、蓉子を天の頂まで押し上げるほどに満足させるに違いない。

しかし仮にも聖職者であり、教え子たちとは違う、立派な大人の女性である自分が、生徒達の前で無様にオシッコを漏らしてしまうなんてことは、絶対にあってはならないことだ。

（はぁあ……ああんっ、もお……っ）

顔を赤らめ、身をよじり、はあはあと悩ましげに息を荒げながら、蓉子はきつくスーツ姿の下腹部を撫でる。

まるでタイヤのような手応えのそこを、今すぐにでもぐしゃぐしゃに押し揉んで握り締め、かくかくとはしたなく腰を上下させてしまいたくなるのを、理性の力で懸命に耐える。

2 - A 担任である女教師の下腹部には、生徒たちよりも成熟した排泄器官が、朝からの我慢で濃縮された黄色い濁流でパンパンに張りつめて、限界寸前まで溜め込まれたおしっこはいまも沸騰しているかのようにぐらぐらと尿意を沸き立たせている。

この上なく切羽詰まった状況だと言うのに、がぶ飲みしたショウガ紅茶の利尿作用も手伝って、オシッコはあとからあとから膀胱へと注ぎ込まれてくる。

太腿はすりすりと擦り合わされ、背中にもじっと汗が浮かぶ。

（はあはあ……オシッコ、行かせてえ……ああーんっ、もうダメ、もう限界なのおっ！！ も、もっ、もう、漏っちゃうの！！ おしっこ出ちゃうっ、が、っ、我慢、できないのよお……っ！！ だ、から、はやく、はやくしてえ……っ！！）

睨むようにじっと運転席を見つめる蓉子。

その思いを感じ取ったかのように、再びバスが動き始めた。

今度はさっきよりも少し長く、車体が道路を進んでゆく。

「ああ……ッ」

ゆっくりと進むバスに、蓉子は思わず口元をほころばせ、小さく歓喜の声を上げる。

しかし、我慢終了までの距離がほんのわずかに縮んだことに、蓉子の下半身は欲望に忠実に、だらしなく我慢を失くしかけていた、たちまち排泄孔を緩めそうになる下半身を咄嗟に足をクロスさせて腰を揺らしながらやり過ごし、担任教師は座席の手摺に体重を預ける。

「あう……、はあ、はあっ……」

もうこの数時間、バスの中で蓉子はずっとそんな有様だった。

だからこそ、蓉子は本来、担任として把握していなければならない生徒達の異常に気付くことができなかったのである。

車内の生徒達のほとんどが、俯き、言葉も少なく、あるいは顔を赤くし、落ち着きなくそわそわと周りを見回し、腰を揺すり、脚をすり合わせ、蓉子と同じようにトイレを我慢していることを。

いまやバスの中の乗員の多くが、自分と同じ窮地に追い込まれているのだなどとは、思いもせずに。

蓉子はバスが少しでも前に進み、学校に辿り着くことだけを心待ちにしていた。

葛藤に夢中の佳奈が知る由もないが、隣の祐美もまた同じく、切羽詰まった状態にあった。

——いや、バスの中の女子生徒達は多かれ少なかれ、同じ状況にあったのだ。

思春期特有の高い羞恥心ゆえに、それを表に出すことはなく、28人の少女たちのほとんどが、それぞれ孤独な戦いを続けていた。

ある少女は平然を装い、ある少女は俯いて、ある少女はこっそりと身をよじりながら、それぞれが下腹部をたぶんと揺らす恥ずかしい液体の水圧に屈しそうな水門を閉じ合わせる。

無垢な少女の排泄孔はぷくりと膨らみ、いまにも崩壊のカウントダウンを刻みながらも、バスはゆっくりと進んでゆく。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・13 雪村乃絵 & 日向羽衣

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/13/2012 09:00:00

BODY:

「羽衣ちゃん……だいじょうぶ？」

「っ……」

そっと声を潜めて聞いてくる羽衣に、乃絵は答えずぶんぶんと強く首を振った。答える余裕なんかないほどに切羽詰まっているのは本当だったが、それ以上にこちらを案じてくる乃絵が鬱陶しくてたまらなかったのだ。

（なんなの……もうっ……、なんで、こんな、私ばかりっ……！！）

少しでも気を抜くと緩みそうになる脚の付け根の細い孔をきつく閉ざし、ぎゅうぎゅうとオシッコの出口を握りつぶすように抑えつける。視線は宙に固定され、荒い息はまるで蒸気機関車のようだ。

「んっ、ふ、ふう、んあ……く、んああっ……」

ぱんぱんに膨らんだ女の子の水風船が、懸命の我慢を嘲笑うかのようにせり上がり、脚の間へ向けて膨らむ。じりじりと下降してゆく膀胱の出口が、狭い排水孔へと猛烈な水圧を押し付けてくる。

「羽衣ちゃん……」

不安そうな乃絵の声が聞こえる。こちらを励まそうとしているつもりなのだろう、まったく逆効果なそのおどおどとした声に、羽衣はぎ

りと歯を食いしばった。

乃絵は羽衣といつでも一緒、クラスでも一番の仲良しだ。何をするのにも一緒に、どんな時も二人でお互いを励まし合い、喜びあってきた。

——けれど。

(なんで、乃絵ばかり、平気な顔してるのよ……！！)

今日の社会見学でも、羽衣と乃絵は同じ班で、一緒に過ごしてきた。お昼ごはんも、休憩も、喉が渴いた時のジュースだって一緒に、半分こして交換し合った。

トイレだって、そうだ。

二人がトイレに入ったのは、学校を出る時と、午前中の見学の途中での2回だ。二人連れだって隣の個室に入り、同じようにオシッコを済ませた。

誓って、乃絵が羽衣の傍を離れたことはないし、そこに羽衣が一人で別行動を取ったりしてはいないことを、断言できる。

だから、2 - Aをバスが渋滞に巻き込まれて3時間というこの状況でならば、乃絵だって同じように、オシッコを我慢していなければおかしいのだ。

それなのに——羽衣は話もできないくらいに激しい尿意に責め苛まれ、今にもオモラシという限界ギリギリの戦いを繰り広げているのに、乃絵ときたら、まだ他人を思いやる余裕すら見せている。

それが、羽衣には納得いかない。

(……………)

羽衣の落ち着いた視線は、乃絵の下腹部へと吸い寄せられる。もちろん乃絵も我慢をしていることは間違いなく、膝裏に折り込まれた制服のスカートの膝がきゅっと揃えられているし、手のひらが控えめに下腹部をさすり続けている。けれど、そんなのは幼稚園児みたいに股間を握り締めてバタバタ脚を踏み鳴らし、何度も無頭がる用に首を振り続けている羽衣に比べればあまりにもささやかで、比較するのも馬鹿らしい。

乃絵のおなかの中にだって、羽衣と同じくらい、恥ずかしい液体が詰め込まれ、バスの振動にたぶたぶと揺すられていなければならないはずなのに、乃絵の様子はどう見てもそうとは思えないのだ。

「んああ……は、っ、あ、うっ……」

びりびりと股間に響く刺激に、羽衣は目に涙をうかべ、ぎゅっと脚の付け根を握り締めた。それでもじんわりと、熱い湿り気がスカート越しにも広がってゆくのがわかる。絶えず絞め続けた括約筋は痺れて感覚を失くし、おチビりの瞬間すら感じ取れないほどだ。

同じように過ごしているのに、どうして自分ばかり。情けなさや羞恥に俯く視線は、それでも恨めしげに乃絵を追うことを止められなかった。

(不公平だよ……おかしいよ、こんなのっ……乃絵、の、やつっ……)

己を襲う理不尽に、羽衣はまた胸中で激しく声を上げ、親友を罵ってしまう。良心が強くそれを咎めるが、追い込まれた少女の精神は、攻撃的に心をささくれ立たせて、オモラシと我慢の羞恥を転嫁しようとしていた。

そうだ。おかしい。

こんなのは変だ。

羽衣は思い出す。乃絵と二人でいる時、トイレに先に立つのはいつも決まって羽衣のほうだった。まだ羽衣がぜんぜん平気な時にも、乃絵は『羽衣ちゃん、おトイレ行きたくない？』と誘ってくるのだ。

そう。だいたいいつもそう。乃絵の方が我慢が聞かないはずなのだ。オシッコが我慢できなくなるのは、乃絵の方が、早いのだ。だから。

今日だって、乃絵のほうが先に我慢できなくなるのが自然、だった。。

「羽衣ちゃん……？」

「、……さいつ……」

「え？ なに、どうしたの？ 羽衣ちゃん」

「うる、さいって、言ってるのっ……！！」

ついに、羽衣は親友の手のひらを払いのけてしまう。ぱしん、と決して弱くない力で手を叩かれ、乃絵はしばし言葉を失って、呆然としていた。

それを見、けれど羽衣は考えを改めようとしめない。むしろ、驚いた顔をする乃絵をいい気味だとすら思っていた。

（そうよ……そんな、全然まだ余裕って格好してるくせに、裏切られたなんて顔したって騙されないんだから！！ 乃絵のやつ、勝手に……自分だけ、トイレ行ってたんだよね……！！）

そうしか考えられなかった。

機会はあったはずなのだ。そう、特にあの、公園を出発する直前の、バスに集まっていた時。ちらりと乃絵が、あの公衆トイレ——汲み取り式の、汚くて臭い——と手も使う気にならないと、二人で入ることを諦めたあのトイレに。

乃絵はきつと、こっそり、独りで入って、オシッコを済ませてきたのに違いない。

だって、そうでなければ。

「っ、あ、あつ、だめ……っで、ちゃっ……う……」

こんなに辛い自分より、長い間我慢できる筈がない。

そうだ。乃絵は裏切ったのだ。一緒に、こんなトイレ、入らなくても学校まで我慢できるよねと、もし辛くなったら、励まし合おうね、と約束したのに。乃絵はそれを裏切って、自分だけトイレに入って、思う存分、一滴残らず、このおなかの中の意地悪な熱水を絞り出してきたのだ。

羽衣の脳裏には、個室の小さな便器を跨いで、白い陶器の底に勢いよく黄色い水流を叩きつける乃絵の姿がありありと浮かびあがる。小さなころからずっと一緒に過ごしてきた大親友の彼女には、その姿はもはや想像の域を超えてありありと思い浮かべることができる。

（お、オシッコ……！！ 私も乃絵みたいに、オシッコしたいっ！！）

羽衣の中では、乃絵は既にトイレを済ませたことになっていた。便器の中に解き放たれる猛烈な水流と飛び散る飛沫、緊張から一気に弛緩へと転じる下半身と、極限の我慢からの解放がもたらす恍惚の表情。

（なんで、なんで、乃絵、だけっ、オシッコしてるのよお……！！）

まるで、たった今、目の前で乃絵にそれを見せつけられているかのように、羽衣は強烈な羨望を、隣に居る親友へと抱く。

「っ……………！！」

羨望と嫉妬、そして憎しみすら滾らせた視線で鋭く乃絵をにらみ、羽衣はひときわ強く、どん、と床を踏み鳴らす。ひ、と突然の友人の豹変に驚いて乃絵が姿勢を跳ねさせた。

どんな時も不動だった二人の友情が、何を持ってしても分かたことのできない絆が、動く密室と化した高速バスの中で、無残にも引き裂かれようとしていた。

羽衣は知らない。乃絵がいつも先んじてトイレに立とうとするのは、彼女が幼い頃、失敗をしてしまった経験から、前もってトイレを済ませるように努めているからに他ならないと。その時、同じように意地を張ってオモラシをしてしまった羽衣を案じて、一緒にトイレに誘うようになったことを。

辛いものが苦手な羽衣が、お昼のお弁当を分け合った時に、喉の渇きを覚えていたことを。そのせいで飲料工場の見学の時に、紅茶を一杯、余分に飲んでしまっていることを。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・14 佐野真彩その3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/14/2012 09:00:00

BODY:

どれくらいの時間が過ぎただろう。20分、30分、或いは1時間。それともたった5分。窓の外の光景は変わり映えなく、渋滞の行列だ。初夏の太陽は夕方だというのに暮れる気配はまだまだなく、陽射しはなお強い。

時間の感覚すら曖昧となる緩慢な時間の中、真彩はじっと辛抱強く、窓の外へ視線を向けていた。さっきよりも幾分辛くなった下腹部を、きつく抑え込むようにして。

渋滞の中、すぐ前のワンボックスのドアが前触れもなくスライドする。

「あ」

思わず声を上げていた。何でもいい、少しくらい変化がないと、本当に神経がまいってしまいそうなのだ。下腹部で募る尿意はなおきつく、ちりちりとおヘソの裏側をトロ火で炙られているかのようだ。このままではいずれ沸騰した尿意が、恥ずかしい場所から噴き上がってしまうだろうことは明らかで、焦る気持ちを必死に抑えつけ、真彩は視線を彷徨わせている。

銀色のワンボックスの車内では乗っている人たちが何かの言い争いをしているようだった。切羽詰まった尿意を紛らわせるためなら何でもいいと、真彩はそちらに視線をやる。

車内から半分身を乗り出した女の人の脇から、女の子がぴよこっと顔を出した。可愛らしい水色のワンピースを着た幼稚園くらいの女の子が、たたと車を飛びおりる。

女の子は小さな手を服の前をぎゅうっと重ねて、もじもじと腰を前後に振っていた。

(オシッコだ…！！)

遠目にも一目でそうと解る、みっともないトイレ我慢のポーズ。真彩に比べればずっと小さいはずのその子も、やっぱり人前でトイレを我慢するのは恥ずかしいようで、顔を赤くして必死に我慢していた。

女の子はその場にばたばたと足踏みをしながら、車の中に向けて何かを叫んでいる。

恐らくその子のお母さんらしい女の人が、慌てた様子で車の中から身を乗り出し、その手に何かを女の子に握らせた。

小さな手のひらからはみ出すのは、白いポケットティッシュ。

(わ……)

その先の光景は、もう見なくとも分かった。

女の子はそのまま路肩の小さな茂みに走り込むと、道路の方に背中を向けてしゃがみ込む。茂みといっても、ほとんど芝生のようなもので、女の子の身体どころか足元を隠すのにも不十分だった。もどかしく白いこどもパンツを脱ごうとする女の子の可愛らしいお尻までがすっかり丸見えになっている。

不器用にスカートをたくしあげる女の子のパンツが、少し黄色く色を変えていたような気がするの、真彩の見間違いだろうか。

女の子が茂みに向かってしゃがみ込むのとほとんど同時、小さな赤い靴の足元に、勢いよく水流がほとばしる。

ほとんど周りから丸見え状態の、路肩でのオシッコは、周囲の車から何の遮蔽もなく見えてしまう状況だった。当然、車高の高いバスからも同様である。

見ていられないとばかり、女の子のお母さんがビニールシートを手にもって車を飛び出し、慌てて女の子のそばに駆け寄った。なおも気持ちよさそうにオシッコを続ける女の子の前にシートをばさりと広げて、その姿を周囲から覆い隠す。

どうやら、ワンボックスの車内では、こんな見晴らしのいいところでオシッコをさせちゃダメだと言う類のひと悶着があったらしい。

(あの子も、ガマンできなかったんだ……)

脚をぴったりと閉じていても、もはやじっと動かずにいる事はできず、小刻みに膝を擦り合わせたり、爪先を踏みならしてしまいがち、真彩は、ぎゅっとスカートの上からおヘソの上を押さえて、自分に言い聞かせるようにつぶやく。

(お外の、トイレ……オシッコ、キモチよさそう……)

シートの向こうで、女の子のオシッコはかなり長く続いた。

ただの渋滞であればとくにバスが進んで見る事ができなくなっていただろうが、車線一杯にぎっしり詰まった車の列にのおかげで、真彩はほとんど最初から最後まで、女の子のオシッコを見せつけられる羽目になってしまった。

眼をそらそうにも、陽射しを受けて、シートには女の子のシルエットがしっかりと透けて見えてしまっている。しかも、シートの下からは茂みを溢れだしたオシッコの水たまりがどんどん流れだしてくるのが分かるのだ。

たとえ幼稚園のような小さな子でも、すぐそばで女の子がオシッコをしているとなると、真彩も気が気ではない。

(……うう……ダメ、見てたらもっと、したくなっちゃうのに……！！)

まだ小さいのに、女の子のオシッコは堂々としたものだ。まるできちんと『ひとりでおトイレ』ができることを誇らしく胸を張っているかのよう。真彩は気が滅入るのを抑えきれない。

真彩はあまりオシッコをするのが上手くない。ダムの出口の放水口がいりくんでいるのか、どれだけ大きく脚を広げてみても、気を落ちつけてみても、あの子のように綺麗にオシッコを飛ばすことができないのである。

オシッコは勢いよく排水孔をくぐるものの、はぶじゅぶじゅと出口に引っかかるようにぶつかって、前に飛ばずにばちゃばちゃと足元にしたり落ちてしまう。

腿の付け根に伝わり、おしりの孔の方まで汚して——和式の場合は便器を飛び出してしまうたり、ふくらはぎまで伝ってソックスを汚してしまうことも少なくない。拭うにも沢山トイレットペーパーを必要とし、後始末にも苦勞している真彩には、たとえちゃんとしたトイレであっても、オシッコに行くというのはそんなに気軽な行為ものではなかったのである。

(いくら小さくたって、女の子なんだから……お外でおトイレなんか、駄目なのに……っ)

取り繕うような倫理観で、懸命にそう考えようとする真彩だが、女の子だって、トイレに行きたくなるのは変わりがない。

いや、むしろ女の子だからこそ、簡単にトイレに行けない事情だってあるのだ。今まさに、真彩はその事実を実証中だった。

こまめにトイレに行って、水分は控えて、不意のトラブルに備える。

そう心がけていたって、したくなるときはしたくなるのだ。

(ダメ、なんだから……！！　こんな、みんなに見えちゃうところで、オシッコなんて……！！)

必死に自制を求める少女の理性とは反するように、真彩の尿意は、今すぐにでもバスの外へ出て、オシッコをしたいと叫び続けていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・15 清水蓉子その3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/15/2012 09:00:00

BODY:

（あーんっ……だ、つだめっ、ああっアッ！！ お、おしっこ、おしっこ出ちゃうう、おしっこ、おしっこしたいいっ！！）

私も忘れて叫び出したくなるのを堪え、蓉子は居ても立っても居られない。

ついに蓉子は運転席の傍へと歩み寄った。

「あ、あのお」

「んー？ なんだい」

運転席にのんびりと腰かけ、長い渋滞を前になお慌てたふうでもない初老の運転手が、蓉子の方を振り向いた。

できるだけ平然を装って、努めて平静に、世間話でもする風な口調を作る。

「な、なかなか動きませんねえ」

「そうだねえ……参ったねえ」

全然参った様子でもない運転手に、蓉子は苛立ちを隠せなかった。

（そんな簡単に言わないでよ……！！ こっちはもっと参ってるんだからっ！！）

思わず足を踏み鳴らしてしまいそうになり、慌ててそれを自制する。それでも忙しく、パンストに包まれた膝を擦り合わせるのはい慢できない。

「あ、あとどれくらい、掛かりそうですか？」

「うーん……どうだろうねえ。まだしばらくは駄目かも知れないねえ。問い合わせしてみたけど、トラックの荷崩れだか何だかで大分面倒な事故らしいよ。……ああ、けが人は出てないらしいからそれは良かったけどねえ。

……完全に抜けるにはまだ1時間……うーん、2時間くらいかかるかもねえ」

「に、にじかんっ！？」

こんな渋滞は日常茶飯事なのか、運転手はのんびりと答える。

しかし、彼の告げる時間予測はあまりにも絶望的なものだった。その衝撃に、つい蓉子はオウム返しに叫んでしまう。

まだまだ渋滞を抜けられないという事実を突き付けられ、蓉子はその衝撃に下腹部をきゅんと疼かせてしまう。

「それから高速を降りて、学校までだから——7時半くらいになっちゃうかねえ。まあ、最近はいだいぶ明るくなったしねえ……」

だから、生徒達の下校は大丈夫だろうと、運転手はそんな事を言いたいのだろう。蓉子の立場を全く案じてくれないその言葉に、蓉子の胸中は猛烈な不満が湧き起こっていた。

(あーんっ、そんなにのんびりしないで、急いでよお！！ こっちはもう、本当に緊急事態なんだからあ……！！)

とは言え、教師の立場にある蓉子がそれをそのまま口に出すことは出来ない。運転手は客観的な予測を口にただけなのだ。

辛うじて文句を飲み込み、蓉子は懸命に自制を働かせる。

「んっ……」

腰の揺れを押さえつけて小刻みな足踏みだけにとどめ、運転手の傍に顔を寄せる。

「その、なんとかありませんか？ も、もう大分予定からも遅れちゃってるんで……」

つい外れそうになっていた『生徒の事を案じる女教師』の仮面を、慌ててしっかりと付け直す蓉子。

「そうは言ってもねえ。次の出口までまだ14キロもあるしねえ」

「そ、そんなあ……」

当たり前の話だが、この遠足は2年A組だけのものではない。他の組も別々のバスに分乗しており、予定を変えるには他の先生たちとも打ち合わせをしなければならなかった。そんな事は蓉子も百も承知なのだが、それでもなお口にせずにはいられないほど、尿意は切迫したものになっていたのだ。

あと14キロ——それはバスが渋滞に捕まってからこれまでの距離よりも長い。つまり今すぐ高速を降りるにしても、どれだけ短くても1時間以上は要するということだった。

(そ、そんなにもたないわよお……あーんっ！！)

眼前に突きつけられた絶望に、蓉子は目の前を真っ暗になるのを感じる。

そんな時だ。

「……そう言えば先生、トイレは平気かい？」

「びゃあッ………！？」

まったくの不意打ちでそんな言葉をかけられ、蓉子は反射的にびくっと背筋を伸ばしてしまう。

予想外からの一撃は、蓉子の下腹部を直撃した。危険水位を遥かに超えた貯水量のダムを抱え、ぎりぎりのところで保っていた均衡が、途切れた集中力と共に緩んでしまう。

その瞬間を尿意は見逃さなかった。

蓉子の脚の付け根に、じゅうっと熱いうねりが響く。

(んあ、はああああんっ、だ、だめよおッ！！)

女教師の背筋を冷たいものが這いあがる。咄嗟にそれを押さえ込もうとする蓉子だが、いったん緩んだ排泄孔は言うことを聞かなかった。

下腹部で爆発が起きたような衝撃が蓉子を襲う。

(んっあ、はあああッあんッ、んあああ、あくうッッ！？)

かかっ、とたたらを踏んだ靴底がバスの床を叩いた。蓉子は直立不動でその場に硬直し、大きく背中を後ろにそらした姿勢のまま、びくびくとお尻と太腿を痙攣させた。強張った表情、食いしばる歯、行き場を失くした視線が宙をさまよう。

(あ、あ、だめ、ダメえ、だめええ！！ オシッコッ、おしっこ！！ んはあああッ、おしっこでるッ、出るうッ、だめ、だめよおッ……！！！)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・16 清水蓉子その4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/16/2012 09:00:00

BODY:

永劫にも思える時間——けれど、それは実際には、ほんの十数秒ほどのものでしかなかった。

ぴったりと閉じ合わせたスカートの股間にみるみる広がる熱い感触。ぷくりと膨らんだ排泄孔がびくびくと痙攣する。

「っ、は、はぁ、っ、はぁっ……」

下着の股布をたっぷりと濡らしてしまい、はしたものの、蓉子はどうにかそこまで、オモラシを食い止めることに成功していた。なお荒れ狂う尿意は凄まじいが、堤防の決壊だけはぎりぎりのところで押さえ込み、蓉子は大きく肩を上下させる。

「……先生？」

「はぁ、はぁ………な、なにがです？」

きょとんとした顔で運転手が聞いてくる。彼にしてみれば、会話の途中でいきなり蓉子が黙り込んだようなものだ。

「いや、だから、トイレは大丈夫かい？」

「……え、ええ、大丈夫ですよ」

顔に張り付けた不自然極まりない笑顔で運転手に答えながら、蓉子は股間の先端になお押し寄せる大波の“揺り戻し”を食い止めるべくして、排泄孔を閉ざす括約筋にありったけの力を込めて締め上げる。

(ん……んぐううう……っ、うう、ううううう……ッ……！！ だ、だめ、だめえ……が、我慢するの、我慢するのよっ、わ、わたしは、教師なんだからッ……！！)

年配とはいえ、まさか男性の前ではしたない格好を見せるわけにはいかない。蓉子はクラス担任であり、教師であり、なによりも立派な成人女性なのだ。そんな羞恥極まりない姿を、晒す訳にはいかない。

懸命に平静を保つ『女教師の仮面』の下で、さりげなさを装った手のひらを下腹部に添え、スカートの奥を小刻みにモジつかせる。本当ならガニ股になってぎゅうと足の付け根を握りしめてしまいたいのを、必死に堪えていた。

(あ、あっあッ、だ、だめ、だめッ……！！ ああッ、ああーっんっ！？)

だが。いままさにここで本当の排泄をはじめかねない尿意に、そんな生易しい我慢が通じるはずもない。

閉じたはずの排泄孔を、身体の内側からひっかくように尿意が暴れまわる。一度出口を覚えたオシッコは、沸騰するような尿意を収めることなく執拗なほどに蓉子を責め抜いてきた。辛抱しきれない排泄孔は、膀胱からの内圧に負けて、ぶくうと身体の外側へと膨らんでしまう。

蓉子の足の付け根、下着の部分。股布に包まれたいやらしい『オトナのオンナ』の部分から、再びじわあつと熱い滴が噴き出してゆく。

(はああっん、ああ、あああんっ……だめ、で、でる、っ、おしっこ、おしっこ出ちゃう、出ちゃううう……っ！！ せ、先生なのにッ、お、おしっこ、漏るっ、漏れ、ちゃうっ……！！)

おチビリの解放感と、いや増す尿意に耐えかねて。蓉子は手摺を握り締めたまま、ついに突き出したお尻をもじもじくねくねとゆすり始めてしまう。

タイトな灰色のスーツのスカートの下、ストッキングのふくらはぎがせわしく擦りあわせられ、太腿がすりすりと押し付け合わされる。きつく寄せ合わされた腿の内側には、じわりと熱い湿り気が染み出していった。

「っは、はあ、ああんう……ッ！！」

それでも蓉子は、顔に強張った笑顔を張り付けたまま、歯を食いしばり、息を詰め、懸命に恥ずかしい液体の噴出を抑え込んだ。

行き場をなくしたおしっこはなおも解放を求めて暴れ続ける。身体のコわばりはそのまま尿道に溜まった羞恥の雫を絞りだし、下着の股布をたっぷりと濡らす。

(あああんっ……き、キモチいいッ……、お、オシッコ気持ちいい……っ、はああッ、あ、。う、……んああッ、で、でもだめッ、！！ ダメなのッ、お、オモラシなんか、絶対だめええ！！ あああんっ……お、お、オシッコ、出ちゃダメッ……！！)

絶体絶命の綱引きだった。

蓉子は懸命に『女教師』としての体面を保とうとする。

耐えれば耐えるほど、じんじんと痺れる股間の疼きはさらに増してゆく。スカートの奥、秘所に食い込んだ下着の奥から、なおじゅっ、ちゅるるっ、と断続的に恥ずかしい液体を噴き出させながら、蓉子は尿意の誘惑に抗った。

視線は宙をさまよい、息使いは荒くなる。つうと、こめかみから流れ落ちた汗が蓉子の顎をつたい、ぼたりと床に落ちた。

急に黙り込み、不自然に汗をかきはじめた若い女教師に、運転手はわずかに眉を潜める。

「……？ なあ先生、本当に——」

「だっ、だいじょうぶに決まってるでしょうッ！！ お、オモラシなんかしてませんからッ！！」

案じるような言葉を遮って、蓉子は反射的に怒鳴り返していた。

ほとんど怒鳴るような声量に、バスの前方にいた生徒たちが何事かと顔を上げる。

「そんなに聞かれなくたって、平気です、平気に決まってますッ！！ そんな事になる前にトイレに行きますからッ！！ だ、第一、いい大人に失礼じゃありませんか、そんなことを聞くなんてっ！！」

今まさに、おチビりを続けているだらしない下半身をよそに。蓉子はまるで、幼稚園児のようなつまらない意地を張る。切羽詰まるあまりのこととはいえ、あまりにも大人気ない行為だった。

「あ、いや……その、すまんね」

息を切らし、運転手を睨み付けるように見下ろす蓉子。その剣幕に彼も呆気にとられながら、慌てたように視線を反らす。

「申し訳ないねえ。ちょっと余計なことだったようだ。失礼な事をして、申し訳ない」

運転手はバツが悪そうに、蓉子の気分を害してしまったことを詫び、頭を下げた。

おそらく、彼は純粋に蓉子の身を案じていたのだろう。蓉子にまるで痴漢に逢った時のような反応をされながら、その応答は実に立派なものであり、まさに大人の対応の見本として賞賛されるべきだろう。

対して蓉子とは言えば、きちんと『おトイレ行きたいです』と言い出すこともできず、『おしっこしたいの？』と聞かれたのに、おまたを抑えながら『ちがうもんっ！！』と答える——幼稚園の子でもしないような、あまりにもみっともない姿をさらしただけだった。

「……………」

（あ、あああ……ば、馬鹿っ、馬鹿あっ！！）

ようやく我に返った頭で、蓉子は激しい後悔に襲われていた。

（あああーんっ、な、何言ってるの！！ 何やってるのよお、私ってばあ……！！ あ、あんなこと言っちゃって、どうするのよお、これからっ……！！）

無言のままハンドルを握り直す運転手。運転席の周辺には気まずい空気ができ上がっていた。重苦しい雰囲気はしばらくは言葉葉を掛けることも躊躇われるほどで、今更、謝ることもできそうにない。

（あーんっ……馬鹿馬鹿、私の馬鹿あっ……！！ ちゃ、ちゃんと言わなくてどうするのよおっ……も、もう、おトイレ我慢できないのにつ……！！）

せめて、正直に『はい』と答えていれば、少くく我慢の素振りを見せることもできただろうに、あんなことをしてしまっはそれすら出来ない。

下着がじんわりと温い。どうにか大決壊こそ食い止めたものの、下着には気のせいでは済まされないほどの熱い湿り気が広がっていた。腰を下している限りは分からないだろうが、どう考えてもスカートにまで染みは広がっているだろう。

（バカ……あーんっ、私のバカあ……っ！！ と、トイレ行きたい、おしっこもう我慢できないやう……！！）

そして——そんな蓉子の後悔は、運転手に無礼を働いたことではなく、トイレのこと言い出せなかった事にだけ向けられた、あまりにも自分勝手なものであった。

だからこそ、この後に蓉子を襲うさらに無残な運命は、彼女自身がもたらした因果、自業自得であると言えるかもしれない。

自嘲も自虐ももう遅いのだ。

見当違いの自責と後悔の最中でなお、取り返しのつかないミスをしてしまったことに気付かぬまま、蓉子はなお焦りを激しくしていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・17 佳奈の決意

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/17/2012 09:00:00

BODY:

今日から第2部。

<hr size="1" />

「んあ……っ」

「はあ……、はあ……、だめ、ええ……っ」

初夏の日陽射しを受け、熱されたアスファルトがじりじりと車体を焦がす。空調が唸りを上げ、送風口からの風を強めていた。奇妙な沈黙の落ちた車内には座席シートを軋ませる身じろぎと、少女達の荒い吐息が聞こえる。

社会見学のバスは、2年A組の28人を乗せたまま高速道路の中央で動く牢獄と化していた。

——いや、動くとは言っても、終わりの見えない大渋滞の中、テールランプの行列に囲まれて、バスはこの2時間近く、ほとんど前に進んですらいない。数分おきにエンジンを唸らせたかと思えば、10メートル少しの距離をのろのろと進んではすぐに停まる、もどかしい限りの進行速度だった。

これでは高速道路どころか歩道を歩いているのとはほとんど変わらない。

なにしろ窓の外には15分以上前に見えた「サービスエリアまであと12km」の道路標識が、いまだはっきりと見上げることができるほどだ。

待望の『おトイレタイム』は遙か彼方。終わりは見えない。

(ああんっ、だめえ……っ、おトイレ……おトイレ行きたいっ……)

(くうん……だ、だいじょうぶ、これくらい平気なんだから……我慢、我慢よっ……)

(まだ？ まだ着かないの？ ……早くしてよお……！！)

少女達の多くが言葉少なに俯いては、思い思いの姿で下腹部の恥ずかしい訴えを堪えている。バスのそここでまるで我慢の見本市のように、少女達の地帯が繰り広げられていた。

予定外の渋滞に捕まって3時間。すでに2-Aのほとんどの少女達が強い尿意を覚え始めていた。中にはすでに限界が近いのか、切羽詰まった様子を周りからも隠しきれない少女達もいる。

多かれ少なかれ、少女達が3時間以上前に口にしたショウガ紅茶——利尿作用たっぷりの飲料は、少女達の健康的な循環器からしっかりと水分を濾し取って、恥骨上の乙女のダムにへと注ぎ込んでゆく。危険水位を超えた水量がもたらすはしたない欲求はいや増すばかりで、いよいよ迫ってきた『オモラシ』の恐怖が、現実のものとなり始めていた。

佳奈もそんな、限界寸前の中の一人だった。

バスの中でも前寄りに座る彼女は、座席シートにモジモジとおしりを擦り付け、両方の手を大事な部分に当てがって、ひっきりなしに太腿を擦り合わせている。

(ああ……っ、……お願い、早く、早く、おトイレ行かせてよお……んっ、も、もうっ、我慢があ……っ)

もう何度目の後悔になるだろう。

脳裏をよぎるのは、バスが公園を出発する前の出来事だ。

森林公園にあったのは、年頃の少女であればまず使うことを躊躇うような、不潔で悪臭漂う汲み取り式トイレだったが——せめて、せめてあのトイレを使っていさえすれば、こんな悲劇は回避できたはずだった。

脳裏に、ありえなかったもう一人の自分の姿を思い描き、佳奈は切なく腰をくねらせる。

(と、トイレ……っ、おトイレしたい……もうどこでもいいから、おトイレ……オシッコ、させてよお……！！)

今となっては、あの不潔な森林公園のトイレすら、恋しく思ってしまうほどだ。

すべき事を、すべき場所で、正しくきちんと行う。

ちゃんとした『おトイレ』こそが、今の佳奈の切望する望みである。

きつく足を踏み鳴らし、唇を強く噛んで、可奈はスカートの上から硬く張りつめた下腹部と、股間を押さえるように手のひらを重ねる。

我慢を続けたおしっこは佳奈のおなかを膨らませ、乙女の水風船をぱんぱんに膨らませていた。体内の水圧はなお高まり、断続的な刺激になって身体の内側からオシッコの出口をノックし続けている。

猛烈な尿意の波が押し寄せるたびにぴくんと手足をすくませ、ぎゅっとスカートの前を押さえこむ佳奈の頬は、ほんのりと赤みを帯びていた。

それまで我慢が続けられているかどうかは、裕美にも良くわからなかった。

「バス、動かないね……」

「んう……そ、そうだね……」

胸中の不安を口にした祐美に、佳奈は荒い息の隙間からなんとか平静を取りつくろって返事をする。

とは言え腿の間に挟んだスカートの上から、すりすり膝を擦り合わせ、脚の付け根を撫でさすっているのは確かで、隣の祐美にも佳奈の限界の近いことははっきりと分かってしまう。

それでも多感な思春期の少女のプライドゆえか、佳奈は、たとえクラスメイトの祐美であっても、恥ずかしくおしっこを我慢していることは知られたくないらしかった。切実な尿意に追い詰められながらも、佳奈は腰を揺すってしまうのを誤魔化そうと、『ちょっと暑いよね？』『汗かいちゃった』などと言い訳をしようとする。

祐美には、そんな佳奈が不憫でならない。

(やっぱり……見て、られないよ……)

意を決して、祐美は口を開いた。なれないお喋りで間を繋ごうとしていた佳奈を遮って、

「ねえ、佳奈」

「んっ、な、なあに？」

「……えっと……」

佳奈はぎゅっと片目をつぶり、腰を小さく小刻みに揺すり始める。辛そうな様子の佳奈を見て、祐美は思わず言葉を飲み込みかける。これから祐美がしようとしていることは、佳奈の心を傷つけ、努力を無駄にさせる提案だった。

(でも……！！)

友人のためを思い、祐美は心を鬼にして、その先を続けた。

「……トイレ、我慢できないなら……先生に言った方がいいよ」

「えっ……」

一瞬、何を言われたのか分からないと言うように呆けた後、すぐに佳奈の顔がかあっと紅くなる。

やはりさっきからオシッコを我慢していることは隠しているつもりだったらしい。だが、両手を大事な場所に重ね当て、もじもじと腰を揺すっているその様子は、どう言い訳しても「おトイレ」を我慢していることは一目瞭然、それ以外の何物でもない。

「その、……言うだけでも、いいからさ」

「……………」

佳奈のためを思っただけの言葉だったが、当の彼女は真っ赤になって俯くばかりだった。

当然のことだろう。祐美も佳奈ももう2年生なのだ。下の学校から進級して1年と2カ月余り、幼稚園児じゃあるまいし、いい歳をして『先生、オシッコ！』だなんて言えたものではない。

第一、ここは教室でも学校でもなく、高速道路のど真ん中で立ち往生しているバスの車内なのである。たとえ恥を忍んで『先生、オシッコ！』を訴えたとしても、どこにも“その”ための場所など用意されていないのである。

先生に“それ”を訴えると言うことは、つまりバスの中のどこかか、道路の隅っこでオシッコをしたいと言っているに等しい行為だった。ましていざそれを実行したところで、他のクラスメイトや同乗している運転手さんに気付かれずにこっそりとオシッコを済ませられるわ

けがない。

つまり、祐美の発言は、佳奈に「もうオシッコ我慢できないです、ここで漏らしちゃいます！」と認めろと言っているのと同じことなのだ。

（でも……っ）

きっと佳奈は自分のことを恨むだろう、と祐美は思った。もし二人の立場が逆だったなら、これまでの友情をすべて失い、裏切られたように感じて仕方がない。

でも、でも。それでも。羞恥に顔を赤らめながら、もじもじと一時たりともおさまらない佳奈の下半身の忙しない動きを見ながら、祐美は黙っていることができなかった。本当に我慢の真っ最中らしき佳奈の素振りは、まるで伝染するように祐美の下半身へも這い寄ってくる。

ぶると背中を震わせ、祐美は首を振って、再度、声をひそめて佳奈に問いかける。

「佳奈ちゃんが無理なら、私が言ってきてあげても——」

「っ、……や、やめてよ！！」

声を荒げ、佳奈が祐美の言葉を遮った。

祐美としては、友人である佳奈を思っの発言のつもりだったのだが——それも佳奈にしてみればに『佳奈ちゃんがもうおトイレ我慢できないんです』なんて喧伝されているのと同じことだ。まして、自分ではなく他のクラスメイトになんて——

「やめてよ……そ、そんなの……」

（ちゃ、ちゃんと自分で『おトイレ』も言えない子だって思われちゃう……！！）

そんなことは、絶対に許容できない。繊細な思春期の羞恥心は、耐えがたい恥辱に苛まれ、ますます佳奈を激しく揺さぶる。緊張を強くした下腹部にきゅうんと刺激が走り、ひくひくと排泄孔を保つ少女の括約筋が健気に痙攣する。

「佳奈……」

「いいから……じ、自分で言うから……」

もう、後には引けなかった。

実際、もう限界なのは確かなのだ。顔を真っ赤にしなが、唇を噛み、俯いて——佳奈はゆっくり席を立った。

心配そうに後を見送る祐美に、付いてこなくていいから、と視線で釘を刺し、佳奈はバスの通路へと歩き出す。

まさか、手を上げて大声で元気よく『先生、オシッコ！』なんて叫ぶわけにもいかない。辛い下半身を庇うように、佳奈はバスの中ほどの座席から、最前列の清水先生の元まで歩かねばならなかった。

片方だけ手を離して手すりに体重を預け、前屈み、爪先立ちの恥ずかしい格好。良くみればぶるぶると小刻みに、ソックスの脚が震えている。

佳奈はよろよろと、亀のような足取りで、運転席のあるバスの前方へと向かっていく。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・18 恥ずかしい告白

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/18/2012 09:00:00

BODY:

（あーんっ、まだ？ まだ着かないの？ オシッコ、オシッコしたいよお……っ！！）

「あ、あのっ、清水先生っ……」

「へ？」

座席シートの上で忙しく腰を揺すっていた蓉子は、名前と共に袖を引かれてはたと我に返った。慌てて振り向けば、そこには顔を青ざめさせて、落ち着きのない様子の女生徒が一人。

教え子の前でオシッコを我慢している素振りなんて見せられるわけがない。蓉子は慌てて膝に乗せていた手を離し、意志の力で腰の揺れを抑えて、『せんせい』の顔を取り繕う。

「あ、あら。……どうしたの、井澤さん？」

蓉子の目から見ても佳奈の様子は明らかにおかしかった。

佳奈は身体を前屈みにし、両手は制服のスカートの上から女の子の大事な部分をしっかりと握りしめている。ソックスの脚はモジモジと擦り合わされ、バスが動いている訳でもないのに立っているのも辛そうなくらいだ。

「そ、そのっ……」

ぎしぎし、と椅子が軋む。

渋滞のバスの車内の通路、座席の手摺にもたれかかるようにして体重を預け、靴の爪先をよじって、腰を大きく薄理の付きだす。身をよじっては何度も立ち止まり、『はぁ…』『んぁっ……』と切なくも熱い吐息を繰り返しながら、通路でふらふらとたたたらを踏む。

そんな佳奈が他の生徒の注目を集めないわけがなかった。

なにしろ、2 - Aの生徒28人を乗せたバスの中で、ほぼ全ての少女達が同じ理由で苦しんでいるのだ。そんな中で実に『いかにも』な様子の佳奈が、不安と緊張をもって出迎えられるのは当然だった。バスの車内、特に前方の座席に座る少女達は、密かに耳をそばだてたり、ちらちらと視線を向けて、佳奈の一举動にすら注目する。

中にははっきり目を見開いて、固唾をのんで佳奈を見ている少女の姿もあった。

クラスメイトの視線が背中に突き刺さるのを感じながら、佳奈は俯き加減の顔をみるみる赤くしていった。それでも、激しく下半身をよじりながら、少女は急かされるように勇気を振り絞って口を開く。

「……お、お手洗い……行きたいんです……っ」

耐えがたいほどの羞恥に、耳まで赤くしながらの佳奈の告白に、静かなざわめきがバスの中を伝わってゆく。

それは2年A組の28人に共通の思い。この状況で名乗り出て、先生に『それ』を進言した、勇気ある佳奈への静かな賞賛だった。

ずっとこのまま我慢が続けられるはずがないのは、クラス全員が理解していた。渋滞が解消されず、バスの立ち往生が続く限り、誰かが言い出さねばならないことだったのは明白だ。

しかし、2 - Aの女生徒達は誰も彼も、その“最初の誰か”になるのを嫌がっていたのである。

『先生、おトイレに行きたいです』を言い出すなんて、たとえ慣れ親しんだいつもの教室でだって、恥ずかしくて出来るわけがない。もう小さな子じゃないんだから、ちゃんと我慢する——それが、2年生なら当然のことだ。

さらに、この高速バスにトイレが備えられていないことは自明であり、だからこそこの場での『先生、オシッコ！』には特別な意味を持っている。

そんないくつもの障害が、思春期の少女達には超え難い壁となって立ち塞がっているのだ。そこを懸命に乗り越えて名乗り出た佳奈は、一体どれほどの羞恥を、恥辱を堪えているのだろう。同じクラスメイトとして、佳奈の勇気ある決断は、あまりにも貴く、崇高なものだったのである。

「……え、ええと……」

しかし、もう1時間近くも自分のことで精いっぱいだった蓉子には、この佳奈の訴えはまさに寝耳に水だった。予想外の告白に、クラス担任はしばし困惑しながら、目をそらすようにして言葉を探してしまう。

「まだ、少し掛かるらしいけど……我慢できそうにない、かしら？」

「……………」

辛そうに切羽詰まった表情で、佳奈はちいさくくんと頷いて見せた。

——それは、彼女がもはや高速道路を下りるまで、トイレを我慢できないと宣言しているのに等しい。

そして同時に、今この場で、オシッコがしたいと叫んでいるのと同じ意味だった。

車内に再び、小さなざわめきが広がってゆく。同じように我慢の限界を感じている少女達は佳奈と同じ気持ちで、あるいは、まだ僅かながら余裕のある少女達は、その姿に憐れみと同情を持って。

(あーんっ、どうしよう、井澤さんまで……っ！！ わ、私だっても我慢の限界なのにつ)

しかし——本来、その勇気を一番に汲んでやらねばならないはずの蓉子と言えば、佳奈の切羽詰まった姿に焦るばかり。一秒たりとて休むことなく蓉子を襲う強い尿意は、下半身を執拗に責めなぶり、思考をかき乱している。蓉子は普段はきちんとこなせるはずの『清水先生』としての役割をすっかり忘れ去ってしまっていた。

当然のことではあるが尿意とは生理欲求であり、特別に水分を摂取しなくとも時間の経過と共にやがては催すものである。これ

まで自分のことでいっぱいだった蓉子は、ここに来てようやく、自分と同じように我慢をしている生徒がいるのかもしれないということに、ようやく思い至ったのだ。

（あっあ、井澤さんっ、だめ！！ 先生の前でそんな恰好しないでよお、意地悪っ！！ せ、先生もオシッコしたくなっちゃう……っ！！ こ、こんな所におトイレなんてないのよおっ……あるなら、とっくに先生だってオシッコしてるんだから……お、お願い、無茶言わないでよお……！！）

「い、井澤、さんっ、あのね？」

我慢しなきゃ——そう訴える『オトナの女性』としての当然の判断が、果たすべき役目とは正反対の言葉となって、蓉子の口を滑り出していた。

「で、でもねえ。……渋滞、まだまだ続くみたいなのよ」

「そ、そんな……あ」

まるで、罪状を読み上げる判決の瞬間のよう。声を絞り出すように、佳奈が顔色を変え、掠れた悲鳴を上げる。

くねくねと揺れる腰が忙しくなり、制服のスカートの上から、少女の指がはっきりとあそこを握り締めてしまう。オシッコの出口を強引に塞ぐように、ぎゅうぎゅうと脚の付け根を握り締め、スカートを激しくしゃくしゃに皺を寄せる。

「せ、先生……あ、あの、わたし……っ、私、も、もう、本当に、我慢……で、できなっ……ッ！！」

佳奈は恥も外聞もかなぐり捨てて、トイレ我慢の限界を口にした。

目の前で教え子がオシッコ我慢ダンスを始めたことに、蓉子の排泄器官もそれに強い共感を催していた。尿意が一気に膨れ上がり、膀胱が、排泄孔が、きゅんきゅんと疼きだす。

（あああ——んっ！？ あ、ああっ、だめ、だめえ！！ い、井澤さん、やめて、先生もと、トイレ、トイレ行きたいのよおっ、オシッコ、おしっこしちやいそうになるからあ！！！ そ、その格好ダメ！！ やめてええ！！ 先生も、も、漏らしちゃ、う……っ！！ あ、ああああ——んっ、い、意地悪しないでえええ！！）

「そ、そうね……」

それでも、クラス担任として、きちんとした慎み深いオトナの女性として。表向きだけは平静を装い、蓉子は忙しく膝を擦り合わせる程度で、それ以上の我慢を飲み込んだ。

だが、先程のおチビりで濡れて湿った下着は、パンストごと股間に張り付いている。

下半身の濡れた冷たさがますます尿意を湧き上がらせ、濡れた下着がわずかにむず痒くさえた。出口の場所を知ったオシッコは蓉子の水門を隙あらば突き破ろうとしている。もう脚だけでの我慢で済ませるには、蓉子とても限界に近い。

（あああ——んっ、どうしよう、どうしよおっ……どうしたらいいのお……っ、あああ——んっ！！）

辛うじて顔に張り付けた『せんせい』の仮面の下、蓉子の心はみっともなく取り乱し、混乱の最中であつた。自分のことだけでも精一杯なのに、この上、生徒の面倒まで見なければならぬのだ。本来はそうすることこそが当然のクラス担任であることも忘れるほど、蓉子はオシッコ我慢の限界に挑む一人の『オンナ』であることに夢中だった。

「……で、でも、ね？ 井澤さ——」

けれど。

（……そうだわっ！！）

その時だった。蓉子の脳裏を閃光のように、あるアイディアがよぎったのは。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・19 蓉子の思惑

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/19/2012 09:00:00

BODY:

天啓のように舞い降りた素晴らしい“迷案”に、蓉子は矢も盾もたまらず、席を立っていた。
「ねえ井澤さんっ、ちょっと待っててくれるかしら？ 大丈夫、すぐに先生が何とかしてあげるから！」
「え、あ、はい……」
いきなり顔を輝かせて満面の笑顔を見せる『清水先生』に、佳奈も困惑せざるを得ない。教え子を押しのけ、蓉子はタイトスカートの下、ストッキングの太腿をスリスリと擦り合わせながら、さりげない前屈みの姿勢を保って運転席へと歩み寄る。
（そうよ……！ 何で気付かなかったのかしら、こんな簡単な解決法があったじゃない！！）
すっかり浮ついた蓉子は、これから自分がしようとしているのが何を意味しているのかも気付かない。運転席のすぐ隣に身体を寄せ、できるだけ深刻そうな表情を作って切り出す。
「あの、すみません」
「……んん？」
「このバス、停めてください！」

「はあ？」

いきなり耳元に囁かれて、運転手は驚いたように顔を上げた。

「……いやあ、ちょっと待ってくださいよ。そんな簡単に言われても——」

「非常事態なんです！！」

困惑する運転手を遮るように、蓉子は声を跳ねさせた。眉を吊り上げ、一步も引く様子のない真剣な表情だ。その剣幕に、運転手も思わず押し黙ってしまう。

「見てください！！ この子、もうお手洗い、我慢できないんですよ！！ ……だから、仕方ないんです！！ 早くこのバスを、停めてください！！」

こっそりと内股になって、モジモジと太腿をすり合わせながら、蓉子は再度叫んだ。

（……そうよ。そうじゃない♪ 仕方ないの、しかたないのよ！！ 井澤さん、我慢できないって言ってるんだし……バスを停める理由には充分よ♪ だって、こんな所でオモラシなんかできるはずないものね、ね！？）

蓉子は必死だった。表向きは平静を装っていても、その実はバスの中の誰よりも、逼迫していると言っても過言ではない。クラス担任の『女教師』の仮面の下では、だらしなくガニ股になって股間をぎゅうぎゅうと押さえつけたくてたまらないのだ。

突き出したお尻を不自然にならないようにクネクネとくねらせ、蓉子は今にも堰を切って溢れそうな下腹部の恥ずかしい液体を押しとどめる。

（井澤さんに、お外でオシッコさせれば、私もそれに付き添うってことで外に出れるわ！！ そ、そしたら、そこで、一緒に……♪ ……うん、しょうがないわ、しょうがないわよ。だって、先生がまさかオモラシなんてできないものね！！ 他の子たちには気付かれないうようにして……あ、そうだわっ♪ 全部、井澤さんのオシッコってことにすれば！！ うん、良い考えかもっ♪ ……そうよ、そうそう！！ 井澤さんだって、私がバスを停めてあげなきゃ、どうしようもなかったんだものね！！ それなら、私がオシッコ我慢できなかったことだって、黙ってくれるはずよね♪）

教え子を案じるどころか、自身の打算と保身に塗れた、あまりにも醜い計画だった。しかも実行するにあたってはかなり無茶のある計画だったが、冷静になって顧みるほどの余裕が蓉子にはない。

おもねるような蓉子の視線——控えめに表現しても、媚を売っていると言っても差支えないだろう——に、しかし運転手は強く難色を示す。

「いや、でもこれじゃあ停めるのは無理だよ。どちらの車線にも車が詰まって路肩に出られない。車は渋滞してるが、バイクなんかはその間を抜けていくこともあるからね、それで停まって人を下ろすなんて……生徒さん達が危ないよ？ 先生」

「そんな！？ もう、井澤さん、オシッコが我慢できないんですよ！？ はやく停めてあげてください！！」

「っ……………！？」

継ろうとしたところを否定され、蓉子が、ほとんどヒステリーのように叫んだ。

ありえない告白に、佳奈が目を開く。

（っていうか、あたしももう我慢できないのよお！！ あーんっ！！）

自分の尿意の限界もあって、つい声を荒げてしまった蓉子だが——常日頃、教壇に立って授業する教師の叫び声ともなれば、ただの大声とはわけが違う。教室全体にしっかりと注意事項を行き渡らせるのにも十分な蓉子の声量は、狭いバスの中にはっきりと響き渡ってしまった。

後部座席のクラスメイト達までもが、何事かとバスの前方の様子をうかがい始める。

「せ、せんせい……っ」

哀れなのは佳奈だった。他の誰にも気付かれたくないからこそ、勇気を振り絞って、こっそりと先生に相談したのに——はつきり『トイレに行きたい』こと、『オシッコが我慢できない』ことまでも、運転手やクラスメイト全員に暴露されてしまったのだ。

少女の顔は恥辱に歪み、俯いた首筋までもがかあっと赤く染まってゆく。

そもそも、佳奈が訴えたのは『もう、トイレを我慢できない』ことだけだった。差し迫る危機に耐えかね、自分だけではどうしようもなくなって、車内でたった一人のオトナの女性である清水先生を頼ったに過ぎないのである。具体的な解決法が頭にあったわけではない。もしかしたら、頼れる『清水先生』が全てを上手に納める魔法のような解決策を持っているかもしれないと、わずかながら期待もしていた。

それを蓉子はあろうことか、はじめから佳奈自身がバスを路肩に停めて、その物陰でオシッコをしたいと主張しているかのようにすり替えてしまったのだ。暴論と片付けることすら済まされるレベルではない。

あまりの屈辱に目元に涙すら浮かべる佳奈だが、蓉子とは言えば自分の思いつきに夢中で、すぐ隣で心を痛めている少女にはまったく気づかない。

「い、いや、しかし……」

詰め寄る蓉子の気迫に気圧されながら、運転手はちらりと視線を前方の、渋滞の列へと向けた。それから蓉子、少し離れた場所ですりすりにつかまって、前屈みになっている佳奈を交互に見やる。

「……やっぱり危険だ。その、悪いとは思いますがその……バケツにでも」

「む、無茶言わないでください！！ お、女の子にそんなことさせられるわけないでしょうっ！！」

（ば、バケツになんて……！！ 駄目よ！！ 絶対ダメ！！ だって、だってだって、それじゃあっ、わ、私がオシッコ、できないじゃないっ！！ そ、そんなのダメよおっ！！！！ ああーんっ！！）

この提案は、冷静な視線で考えれば、運転手の職業人としての至極まっとうな判断だったと言えよう。

2年A組の28人プラス教師1名を乗せ、その命を預かる高速バスの運転手として、彼は最善の手段を提示したに過ぎない。

だが相手が悪すぎた。もはや下腹部のオシッコタンクが限界寸前、いつパンクしてもおかしくないほど切羽詰まった尿意に衝き動かされる蓉子に、譲歩の余地などあろうはずもない。

クラス担任として、教師としてのプライドを守るため、蓉子は是が非でもバスを停車させなければならなかった。停車したバスの物影、生徒たちから見られない場所で、オシッコを済ませることに、教師人生を人生をかけていると言っても過言ではない。

（わ、私っ、先生なんだからっ……駄目なのおっ、せ、生徒の見てる前で、バケツにオシッコなんて、そんなこと許されないのおっ、できないわよお……！！ あーんっ！！）

「そ、それに、男の人の前でオシッコだなんて……っ！！ で、できせませんっ！！ オンナノコなのにつ……！！」

蓉子が必死になって抗議をすればするほど、佳奈は我慢の限界であることが力強く喧伝され、もうすぐオシッコを漏らしてしまうほど切羽詰まっていることが激しく繰り返し主張される。そのたびに佳奈を取り囲む羞恥は鋭さを増し、まるで無数の針のように、繊細な思春期の少女の心を引き裂いてゆく。

「か、佳奈ちゃんっ……」

固唾をのんで様子を見守っていた祐美は、あんまりだと呟いた。

しかし、もはや尿意と折り重なる屈辱に押し潰され、佳奈は声を上げることもできななかった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・20 2 年 A 組バス緊急停車

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/20/2012 09:00:00

BODY:

「ですから、もう本当に、この子、オシッコが出ちゃうって言ってるんです！！ もう我慢できないんですよ！？ それなのに……！！」

「……わかったよ。…本当はこんなことしちやいけないんだが……仕方ないね」

蓉子の猛抗議に、ついに運転手が折れたのはそれから数分ほど後の事だった。額に深く皺を刻みつつも、運転手は不承不承、ウインカーを出してバスを車線の中に強引に割り込ませてゆく。行く先の見えない渋滞の列の中で無理な車線変更をしようとする高速バスに、あちこちから抗議のクラクションが飛んでくる。

本来、左側通行の車線で、右の路肩に車を停める事は違反である。まして時速 1 0 0 キロ近い運行が常となる高速道路ともなれば、停車には多くのルールとマナーが存在する。

しかし大混雑の渋滞の中でバスが左車線に移る余裕はなく、蓉子が執拗に運転手を急かしたこともあって、バスが停車したのは最右列、本来は追い越し車線側に相当する車線だった。中央分離帯に身を寄せるように停車したバスがエンジンを切ると、

運転手は真剣な顔で立ち上がる。

「いいね、必ず前後を確認してから降りるんだ。車の間を縫ってバイクが走ってくることもあるし、他の車が急に動くこともあるからね。気をつけて」

さすがに、切羽詰まった様子の佳奈を目の当たりにして思うところがあったのだろう。入り口のドアを開けながら、運転手は心配そうに言う。

最初、運転手は自分が降りて安全を確認すると主張していた。

それを強引に却下したのは、蓉子である。自分が責任を持つし、年頃の女の子が外でオシッコするのに近くに男性がいては可哀想と言うのが蓉子の主張だったが——何のことはない、蓉子は自分自身がトイレを済ませるのに気付かれたくないだけだ。一悶着の後に、運転手は車内に残されることになった。

「井澤さん、立てるわね？ さあ、行きましょうっ」

佳奈はすでに傷心の中、ほとんど茫然自失の体だった。それでも粗相をせずに耐えていたのは、この上なお恥をさらすことだけはすまいとする、少女のプライドによるものである。

蓉子はほとんど上の空で、運転手に礼を言うこともせず、通路にしゃがみ込んでしまっていた佳奈の手を掴み無理やり立ち上げらせようとする。佳奈がくしゃりと顔を歪め、目元に涙を浮かばせるのもお構いなしだ。

「あ……！！ ま、まって……せ、せんせい……っ」

タイミングを測ることもできずにいきなり引っ張られ、じゅうっ、と脚の付け根に熱い感触が広がる佳奈が、泣きそうな声を上げる。「皆も少し待っててね、すぐに戻るから——」

（や、やっ、やっ止まったあ～！！ こ、これでおしっこ、オシッコできるのよね！！ はああ……き、気持ちいいわよ、きつと……お、オシッコ！！ オシッコするの！！ これから私、オシッコするのよおっ♪）

蓉子の心は既に、止まったバスの裏側へと飛んでいた。一人の『オンナ』としての欲望に衝き動かされる蓉子は、教師としてあるまじき態度や、生徒をダシにしていることの罪悪感すら覚えていない。これからバスの陰で自分のオシッコの事で頭がいっぱいなのだ。

目の前に迫った猛烈な尿意からの解放に浮足立ち、無理に急がされた佳奈が我慢できず、再び下着の股布のところにじわああと大きな染みを作ってしまったのも、当然のことながら気づいていない。

「っ……」

すっかり晒しものにされてしまった佳奈は、襲い来る尿意を必死になって凌ぎながら、のろのろと蓉子の後を追った。

——私は、オシッコが我慢できませんでした！

——このままだとオモラシちゃいます！！

——だから、これからオシッコに行ってきます！

——いまから、バスの陰でオシッコします！！

蓉子と運転手のやりとりが丸聞こえだった車内には、佳奈がトイレを我慢していることは余すことなく知られており、この状況はそうやって宣言しているのと大差ない。

懸命に羞恥を堪え、涙ぐみ、赤くした顔を袖で拭い——スカートの前を握りしめながら。懸命に進もうとする佳奈のすぐ後ろにい

た生徒には、佳奈の膝裏を伝う水滴をはっきり見てしまった者もいた。

先走る蓉子に引きずられるように、佳奈がふらふらとバスの出口に向かった時――

「せ、せんせいっ！！」

「はへ？」

スキップ同然の軽い足取りで、一足先にバスを降りようとした蓉子を、小さな声が呼び止める。

車内の通路に、ぱらぱらと少女達が立ち上がっていた。全員が全員とも、佳奈と同じように脚を震わせ、前かがみになって、顔を赤らめている。

「……………っ」

「……………」

「…………あ、あの…………」

顔も赤く、躊躇いがちに、しかし切羽詰まった様子に衝き動かされて。ぎゅっとスカートの前やお尻の後ろから手を回し、不自然に傾いた姿勢のおぼつかない足取り。彼女達が何を堪えているのかは、もはや明白だった。

「…………あ、あなた達もなの？」

驚いた蓉子に、3人は、ほとんど声も出せないまま小さく頷く。

それだけではない。

「あ、あたしも…………っ」

「先生、っ、あの、あのっ」

バスの後部座席の方で、少女達が次々と手を上げた。授業参観でも見ないような立候補の多さだ。

その数は最初に立ち上がった少女達を倍近く上回る5名。なんと、佳奈以外にも計8名もの生徒が口々に『先生、おトイレ』を訴えたのである。

ここは、サービスエリアでもなんでもない。車のひしめく渋滞まっただ中の高速道路の、中央分離帯近くの路肩である。そしてまた、バスに乗っているのも、まだ幼稚園の小さな子たちというわけでもない。来年には受験も控えた2年生達なのである。

にも関わらず。2－Aからは佳奈を合わせた合計9人もの少女達が、トイレではないこの場で――高速道路の路肩で、オシッコをしたいと、必死になって訴えたのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・21 選ばれた少女達

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/21/2012 09:00:00

BODY:

路肩に止まった2年A組のバスの通路に、9人もの女の子が列を作って並ぶ。

内股になった太腿を忙しく擦り合わせ、腰をくねらせ。思春期の少女達は羞恥に顔を染め、悩ましげな表情と仕草で、かすかな苦悶の喘ぎをこぼす。

9人は全員共に余裕なく、はしたなくスカートの前を握り締めたり、前屈みになって座席のシートにもたれかかり、小刻みに足踏みを繰り返していた。数名の手からは握り締められた白いポケットティッシュの包みも覗いている。

——この9人の少女達が全員、これから高速道路の路肩に停車したバスの陰で、オシッコをしたいと訴えていたのだ。

(ちよ……ちよつと、ちよつとお……！！ 嘘でしょお……っ！？)

車内に生じた異状事態に、2-Aのクラス担任たる清水蓉子の思考は許容量をすっかり振り切っていた。

事ここに至るまで。蓉子は自分の受け持つクラスの生徒達が、ここまで切羽詰まった尿意に責め苛まれているとは思ってもいなかったのである。

「え、ええと……田坂さんも、室戸さんも…？ みんな、おトイレ行かなかったの？」

蓉子は思わず確認するが、少女達はふいと視線を反らし、俯くばかり。

……その沈黙が何よりも雄弁な答えだった。

(あああーんっ、なによお、み、みんな、出発する前に、あれだけおトイレ行っておきなさいって、言ったのにいいっ……！！ な、なんでなんでちゃんと済ませておかないのよお……ああーあんっ、もうっ……！！)

蓉子は我知らず、強く床を踏み締めてしまう。どんと音を立てた床に、少女達はびくっと身を竦ませ、ますます顔を赤くするばかりだった。

撤収作業に追われ、市立公園のトイレを使うどころか近づけもしなかった蓉子には、生徒達の切実な事情など知る由もない。……あのトイレがとても思春期の女の子たちがオシッコを済ませられるような場所ではなかった事など。

そして。仮に蓉子の指示通り生徒達が全員トイレを済ませていたとしても、事態が好転する事は恐ろしくなかっただろう。飲料工場で摂取した水分と、利尿作用抜群のショウガ紅茶、長時間の渋滞——それらの複合作用によって、一度は空にした少女達

の乙女のダムが再び満水となってしまうことは避けられないのだから。

この事態は、バスが渋滞に捕まった瞬間からの必然とも言える帰結だった。

あまりの事に呆気にとられていた蓉子を揺さぶるように、ぶり返した強烈な尿意が女教師の下腹部を直撃する。

（んああああんっ！？ ふぁ、ぁ、だ……だ、駄目え……っ！！）

思わずその場で激しい足踏みを始めそうになってしまったのを必死に堪え、蓉子は太腿を思い切り自分でつねった。タイトなスカートに包まれたお尻をさりげなく左右にくねらせ、痛みで襲い来る尿意を紛らわせながら、蓉子は強引にクラス担任である『清水先生』の表情を作って、生徒達へ振り返った。

「ね、ねえ、あなた達も、みんな、そうなの？ おトイレ、我慢できないの？」

さっきよりもさらに明け透けに、トイレ我慢限界を訪ねる言葉に、少女達はさらに身をちぢ込ませながら、一様に顔を伏せた。俯いた前髪が視線を隠し、覗いた耳たぶがかあっと燃えるように紅くなる。

握り締められたポケットティッシュが、くしゃりと音を立てた。

ここで違うと言えるのなら。そもそも今こんな場所で、席を立ち上がろうとするわけがない。いい歳をして恥も外聞もなく、先生にトイレを訴えたりしない。

佳奈に続いて立ち上がった生徒達の要求は、ひとつだけだ。

『先生、オシッコ！！ もうオシッコ、我慢できませんっ！！』

『ちゃんとしたおトイレまでなんて無理です、間に合いません！！』

『このままじゃオモラシっちゃいますっ！！』

『出ちゃいます、漏れちゃいます！！ 今すぐオシッコがしたいです！！』

『ちゃんとしたおトイレじゃなくていいです！！ はやく、早くオシッコさせてくださいっ！！』

彼女達の心の中を一切の虚飾なく記せば、概ねそんなところだろう。

つまり。蓉子の質問は、思春期の少女達が口が裂けても言葉にできる筈もないそんな訴えを、はっきりと声にして認めなさいと言っているのに等しいのだ。

精一杯の勇気を振り絞って、恥ずかしい訴えを行動に起こした少女達をより激しく苦しめる以外の何物でもなかった。

だが、頼れる女教師の仮面の一枚下で、いまなお猛烈な尿意と熾烈な戦いを続けている蓉子には、そこまで頭が回らない。

「あ、あのっ……」

「っ……」

「せ、先生っ、」

限界ギリギリの場所で戦う少女達はそれを察してくれない蓉子に、非難と抗議の視線を向ける。涙すらにじませたその迫力に、蓉子は思わずたじろいだ。

「あ、あ、えっと……他には、誰か、居る？」

無言の圧迫に押され、生徒達の視線から逃げるように蓉子は車内に視線を巡らせた。

しかし、こちらも返ってくるのは重苦しい沈黙だ。

蓉子の視線が向けられた瞬間、わずかにぴくりと身体を竦ませた少女がいたが——けれどそれ以上の変化は起きなかった。

(せ……)

(先生の、馬鹿あつ……！！)

(そ、そんな言い方、されたら……したくてもできないじゃないっ…！！)

それもそのはず。一連の蓉子の行動で、今、バスの中で席を立っている生徒達が、もはやオシッコ我慢の限界であり、これからバスの外でオシッコを済ませるという事実をこれ以上ないほどにはっきりとした形で認めたことになってしまっている。

本来、親しい友人の間でも慎ましやかに隠されて行われるべき、女の子の排泄行為を、皆のいる前で堂々と『先生、おしっこ！！』とはっきり口に出して宣言しているようなものである。

まるで針の筵。想像を絶する羞恥と恥辱の苦しむクラスメイトを見て、その上でなお、堂々とその列に加わるなんて、出来る筈もなかった。たとえ、もう一刻の猶予もないほどに追い詰められていたとしても。

無言の車内を、少女達の切ない吐息と、身動きだけが埋めていく。

「……じゃ、じゃあ、みんな、申し訳ないけどちょっと待っていて、くれる、かしらっ」

返事がないのを見て、蓉子は口の中の唾を飲み込み、前屈みの身体を持ち上げる。

ついに押さえ込んでいた尿意が外に漏れ出し、蓉子は言葉を途切れさせながら、かかとと床を踏み鳴らしてしまう。蓉子は運転手に軽く会釈をして開いたドアの外を確認した。

はあはあと荒い吐息を堪え、首筋に汗を浮かばせて、女教師は席を立った生徒達を先導するように、覚束ない足取りで、タラップを下りてゆく。

そのすぐ後を、大きく前屈みになった佳奈が追う。片手で身体を支え、もう片方の手はきつく、脚の付け根を押さえ込んだままだ。残る少女達も皆、似たような格好で、順番になって続いていく。

まるで、死地に赴く戦乙女のように。

廊下を進む9人の少女達へ、残る生徒たちからの視線が集中した。

欲望を果たせることへの羨望や嫉妬。大丈夫かなと案じる不安。はしたなくも限界を訴えたことへの失望。

9人は、いくつもの感情が混沌と渦巻く車内から見送られ、少女達はたったひとつの目的のため、バスの外へと降りてゆく。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・22 止まったバスの陰で…

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/22/2012 09:00:00

BODY:

「うぁ……っ」

そろそろと下腹部を庇いながら、道路に下りた佳奈は小さく声を上げた。

制限時速 80 キロ。常であれば矢のように車の行き交う片側 3 車線の高速道路には、時間の静止したように無数の車が行列を作って並ぶ。

凹凸なく舗装された道路の表面、アスファルトの上にはむわっと熱気を立ち昇らせ、革靴の底を焼いた。まだ真夏には遠いというのに、強い日差しに焼けたアスファルトと、渋滞の車列が噴き出す熱気は密集する車の中に立ち込めている。

バス車内には弱いながら冷房が利いていたため、温度差はなお激しかった。制服の袖下にすぐにじっとりと、不快な汗が浮かんでくる。

「んっ…あ……」

「ふぁ……っ」

「う、んくっ……」

下腹部を庇うような前屈みで進んだ佳奈の後ろから、同じようにバスを降りた陽菜が、志緒里が、次々と続く。全員が全員とも切羽詰まった下腹部の事情に小さな声を上げ、身動きの度に漏れてしまう恥ずかしい喘ぎ声を必死に堪えていた。

「みんな、こっちょ、こっち！」

清水先生の先導に連れられ、まるでハメルンの笛吹きのように。2 - A の少女達は路上をのろのろと進んでいく。

バスが中央分離帯に寄り添うように停車したため、乗降口のドアは道路の真ん中、中央の車線に向けて開いていた。バスの陰に入るには、大きくバスを迂回する必要があった。

他のクラスメイトの視線を背中に受けた少女達は、懸命にオシッコを我慢しながら、一列になってよろよろと車の間を縫うように、バスの後ろへと回り込んでゆく。

普段ならばともかくも、密集し熱のこもる車と車の間の狭い空間を、限界に近い尿意を堪え、まっすぐ歩くのもおぼつかない足で進むのは、思いのほか集中力と時間を必要とする、根気のいる作業だった。

突然、車線を強引に変更して停車した高速バスの中から降りてきた制服姿の少女たちに、渋滞の車列が静かにざわめいた。

高速道路で長い渋滞に捕まり、混雑の中で誰もが退屈していたのだ。視界の端に表れた些細な変化であっても、変わり映え

のしない停滞の中で注目を集めないはずがない。

道路の片隅に現れた異状を敏感に悟った周囲の人々の視線が、容赦なく少女達に絡みつく。

「んっ、あ、ふ……う」

「はう……んっ……ん」

悩ましげに声を上げ、身をよじり、渋滞の車の間を縫って進む、赤い顔の少女達。

それはその場に居合わせた者たちにとって、新鮮な娯楽だった。

多少なりとも気の回るものなら、こんな状況でバスを停めた少女達が、いったい何のために降りて来たのかにすぐ気付けることだろう。まして、いまや佳奈たち9人は、恥ずかしい格好で腰を突き出し、脚を内股にして、定まらない足取りでよろよろと、バスの裏側へと進んでいるのだ。

（ん……なんだ、どうした？）

（なんだよ、いきなり急に……）

（さっきからヘンな動きしてると思ったら、あのバス……まさか？）

前屈みになってスカートの前から両手を重ね当て、脚の付け根を握り締めたり、あるいは背中をそらせてお尻の側から手のひらを脚の間に挟みこんで、恥ずかしい所を押さえてしまっている生徒たちだ。『これから、バスの陰でオシッコします』と看板を背負っているようなものだった。これで気付かれないという方がおかしい。

（おいおい、見ろよ、あれ……）

（ええーっ、あんなに大勢で？ ……嘘でしょ？）

（ちょっと、みんな女の子じゃない……）

（まさかねえ、……本当に？）

（うわあ……いいのか、あんな事させちゃって……？）

たちまち周囲から向けられる好奇の視線は増倍し、遠慮なく佳奈たちを舐め回す。無遠慮かつ容赦ない視線の中には、少女達を案じるものももちろんあった。

……が、こんな場所でバスを止める非常識を咎めたり、はしたない姿をする彼女達に眉を潜める類のものや、強い好奇や興味を抱くものが大半だった。中には年頃の少女達の痴態に暗い愉しみを覚えたり、中にははっきりと下卑た欲望を含むものも少なくない。

せっかく一大決心をして踏み出したすぐその先で、あまりにも恥ずかしい姿を衆人環視のなか、白昼の元に晒してしまったに等しかった。少女達はますます頬を赤くして顔を伏せてしまう。

（やだ……見られてる……っ）

（見ないでよお……ち、違うんだから……）

（うう……やだ、あ……っ）

狭い車の間を、一列になって進む。尿意をこらえながらのもどかしい足取りでは、気ばかりが焦り、わずかな距離すら思うように進む事もできない。

先頭に行く佳奈が、突然の大波に『ふああ！？』と声を上げびくっと立ち止まれば、たちまち後続の少女達も動けなくなってしまう。こうなれば前にも後ろにも動くことができず、佳奈がどうにか大波を堪えて歩き出すまで、足踏みを強いられるばかりなのだ。

そんな事を繰り返しながらでは、ますます注目の的になるのは必然であった。荒い吐息、余裕のない表情、寄せ合わされ、擦り

合わされる太腿。そうして人目に触れれば触れるほど、少女達の下腹部をはち切れんばかりに膨らませる尿意は、ますます衆目の知るところとなってしまう。

（うわあ……おい、あれマジか？）

（すごい辛そう……よっぽど我慢してたのかしら……）

（嫌だわねえ、あんな所でオシッコなんて……女の子なのにねえ……）

（ほら、いいから見ろよ、アレ！！　　すげえぞ！！）

もはや、佳奈たちはこれから自分達がバスの陰の道路の隅にしゃがみ込み、乙女の秘密のティーポットに溜まった恥ずかしい熱湯を勢いよく噴き出させることまで、喧伝しているようなものだ。

思春期の繊細な羞恥心は、バスを降りてからのものの数十秒で、見るも無残にずたずたにされてしまった。

「んっ……はあ……うっ……」

「あ、あっ……だめ……っ」

「で、でちゃ、う……だめ、がまんっ……」

初夏の時候とは言え、窓を閉め切って冷房を入れている車ばかりではない。排気ガスをものともせず、窓を開けて涼を取ろうとしている車もわずかながら存在していた。

「うわ……」

「ちょ、すげえ……」

締め切った窓越しであれば聞こえないであろう、少女達の切ない吐息も、喘ぎも、空いた窓のすぐ真横を横切る車からははっきりと窺うことができた。可憐な少女が懸命に耐え、切なげに身をよじって呻く様子に、ますます渋滞の行列の興奮は加速してゆく。

「みんな、はやくこっち……！！」

とうとう耐えきれなくなったか、先頭の佳奈を押しつけて、結城紗絵が列を追い越すように前に出た。9人の中ではまだ少し余裕のあるらしい彼女の先導によって、少女達はバスの後ろを回り込み、中央分離帯の側へと急いだ。

「ほら、あと少し！！　頑張って……！！　あそこまで行けば大丈夫だから……！！」

すぐそこに、もうすぐそこに、この永遠にも思える苦痛から自分達を解放してくれる場所があるのだ。視線でお互いを励まし合い、少女達は折れそうになる心を必死に支える。

「もうちょっと……！！　もうすぐだよ！！　もうちょっとだから、我慢して！！」

そうすれば。

——オシッコが、できる。

本能を理性でねじ伏せ、懸命に少女達は急ぐ。

残すところ最後の数メートル。下着の股布にじわりと温かい染みを広げてしまうのと引き換えの懸命のダッシュで、先を争うように駆けこんで。

これによって少女達はようやく、渋滞の列の無遠慮な視線から逃れることができた。

バスの陰に入ると、じりじりと焼き焦がすような陽射しは消え、唸るエンジンの排熱も幾分遠のく。日陰のもたらすささやかな涼の中、少女達はわずかに安堵の息をこぼした。

背の高い茂みが目の前に広がり、佳奈たちを出迎える。緑化された中央分離帯は、無機質な防音壁によってではなく、木と芝生で昇りと下りの路線を隔てるものだった。

ここからならバスの陰になって、周囲の視線はほぼ遮られる。

あとはもう、思うままオシッコを済ませるだけだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・23 少女達の躊躇

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/23/2012 09:00:00

BODY:

停車したバスの陰となる、高速道路の路肩。少女達の臨時仮設屋外トイレと化したそこで、間髪置かずに凄まじい水音が響き始める——と、言う訳ではなかった。

羞恥と屈辱に耐えて、ようやく辿り着いた、目的地。

そこで、9人の少女達はお互いの顔を見合わせる。

「……………」

「……………」

「……………」

切ないほどに渴望し続けていた場所のはずだった。

あと少し、もうちょっと。——せめて、あそこまで。

そうやって自分を励まし、くじけそうになる心を奮い立たせてどうにか辿り着いた目的地のはずだった。しかし。いざこうしてその場に立ち尽くした少女達の前には、なお高い障壁が立ち塞がっていたのだ。

そう。そもそも、全員ともが2年生という思春期のただ中にある少女だ。いくら限界寸前まで切羽詰まっても、いきなり何の躊躇も葛藤もなくぱっとオシッコを始められる訳がない。そんなのが許されるのは、せいぜい幼稚園くらいまでだろう。

まして渋滞の行列を通り抜ける最中に強い好奇の視線に晒され、羞恥を殊更に刺激された後とあっては、少女達の心に課せられた障壁はなお高い。

なお強まる強烈な尿意は一刻の余裕もないことを叫んでいるが、路上の片隅、バスの陰でオシッコをすることに対して、簡単に羞恥が拭いされるはずもなく、佳奈たち9人はその場に立ち尽くし、動けなくなってしまっていた。

「あ……っ」

9人という人数も、曲者だった。

もしも。仮にここが本来あるべき女子トイレの中であれば、彼女達の心は全員、個室というプライバシーを重んじる空間の中で隔てられ、守られているはずだった。

その9人は今、ここに一堂に会し、バスの車体の作る物陰で、辛うじて周囲の視線から隠されているだけでしかない。中に居る間は大きく感じたバスもその裏に回ってみればあまりにも小さく頼りなく、集中する好奇の視線から逃れるには心細い。

離れがたいわずかなスペースに身を寄せ合って、少女達は小さく歯を噛み締める。

完全に、忘れかけていた。

ごくごく、当たり前のことだが——ここは『トイレではない』のだ。

不埒な視線を遮ってくれる個室の壁も、防犯と安心のため鍵の掛けられるドアも、清潔な後始末のためのトイレットペーパーも、正しくオシッコを受け止める先の便器すらも、ここにはない。音消しの機械どころか、流す水すらもない場所で。

(み、皆と、一緒に——オシッコしなきゃ、いけないんだ……)

ようやくその事実直面し、佳奈の表情は強張ってゆく。これまでの猛烈な尿意に——次々と押し寄せる羞恥と怒張の展開に、そんな単純な事まで頭から抜け落ちてしまっていた。

ここは、女の子が使うべき、ちゃんとしたトイレではない。

きちんとオシッコをするための場所ではない。

敢えて目をそむけていた、ひとつの事実がはっきりと目の前に立ち塞がる。

オシッコができる——その事ですっかり舞い上がって、佳奈たちは何も見えなくなっていたのだ。

バスの中で手を上げなかった子達のことが。そして、途中で上げかけた手を停めたクラスメイトの気持ちがようやく理解できたのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・24 恥辱の迷路

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/24/2012 09:00:00

BODY:

「だ、大丈夫よ、みんな。外からは見えないし、誰も見てないから、安心して！！ ……ね？」

清水先生が励ますようにみんなを見回して言う。

けれどいくらそんなことをして、佳奈達が2年生にもなって、遠足の帰り道にトイレが我慢できず、無理やりバスを止めさせてしまったという事実は変わらない。

しかもこれからそのバスの陰にしゃがみこんで、死ぬよりも恥ずかしいことを始めなければならないのである。それで安心しろなんて無茶な話だ。

「ほ、ほら、ぜんぜん平気よ。大丈夫！！ ……誰も見てないわ！ ここなら回りにも聞こえないし、先生も秘密にするから、ね？」

【意識：はやくオシッコしなさい！！】。

なお煽るような蓉子の台詞に、無責任なクラス担任の言葉に追い立てられるように少女達の羞恥は過熱し、いまや沸騰せんばかりに湧きたっている。

（そ、そんな言い方……しなくたって……っ）

佳奈も、陽菜も、紗絵も。少女達は徐々に『清水先生』のあまりにも無神経な言動に苛立ちを覚えはじめていた。

みんな、死にそうくらい恥ずかしい思いを強いられているのに、清水先生はその事を一切斟酌してくれない。いまや彼女の株は9人の少女達の中で、現在進行形で最安値を更新中である。

（見てないとか、そんなの、嘘に決まってるじゃない……っ）

蓉子の言っていることはまったくのでたらめだと、佳奈は思う。

ここでオシッコを済ませたとして。佳奈達を苦しめているオシッコが、きれいさっぱりどこかになくなってしまふ訳ではない。その後始末に使ったティッシュや、溜まりに溜まった恥ずかしい水が思い切り地面に噴き付けられ、大きな水たまりを作って流れたその痕跡は、しっかりこの場所に残ってしまうのだ。

今はバスの陰になって見えなくなっているけど、バスが動き出せば、2 - Aの少女達9人がオシッコを済ませた臨時仮設野外トイレは文字通り白昼の元に曝け出されてしまう。

誰にも見られてはいけない筈の、秘密の行為——女の子のトイレ。その痕跡を、高速道路を通る大勢の人々——それこそ、十人や百人どころで済むはずもない数の人たちに、余すところなく知られてしまう。

それは、思春期の少女にとって死ぬよりも辛いことだ。

(っ……嫌あ……そ、そんなの、恥ずかしすぎるよお……っ！！)

パンパンに張り杖めた下腹部を撫でさすりながら、佳奈は込み上げてくる羞恥に小さく首を振った。

どこまでも続く渋滞の中の、道路の片隅に広がる大きな水たまり。しかも回りにはちらほらと、使用済みらしきティッシュも散らばっていて、よく見れば地面を踏み締めた靴底や、立ち去るときに点々と残った足跡も見つけることができるかもしれない。

周囲には水気もなく、不自然に並ぶ九つの水たまり。路肩に突然そんなものが出現すれば、いったいここで何があったのかを想像するのは簡単なことだ。よっぽど想像力のない者でなければ、新鮮で大量の水分を放出した犯人に思い至るに違いない。

さすがにそれだけで佳奈がその犯人であることまでは分からないかもしれない。

しかし、使用済みのティッシュによって、ここでオシッコをしたのが女の子であることまでは、簡単にバレてしまうはずだった。

地面をたっぷり濡らす、大きな大きな水たまり——それは、どれだけ佳奈がオシッコを我慢していたかを知るのに十分だろう。一目確認しさえすれば、下腹部をはち切れんばかりに膨らませていた恥ずかしいオシッコを、ついに我慢しきれず、サービスエリアに着く前に無理矢理車を止めさせて、路肩でオシッコを済ませるしかなかった——その経緯までをありありと描き出してしまうに違いない。

さらに。普通に考えれば、偶然にも9人分の水たまりが同じ場所に並ぶことなんて、まずあり得ない。

少なくとも、何十人もの乗員がある大型車——たとえば、バスのような大きな車に乗っていた子たちである事まで考え及んでしまうかもしれない。そうなれば、この渋滞の中でその条件に当てはまる車はごくわずかだ。

佳奈達の乗る高速バスの前面にははっきりと、今日の社会見学の目的地と、2年A組の生徒達が乗っていることが示されていた。ここまでくれば、名探偵でなくとも推理は簡単だ。もう消去法で、2 - Aの生徒達が一斉に路肩に並んでしゃがみ込み、オシッコをしたことまで分かってしまうはずだった。

たとえこの場に出くわしていなかったとしても、途中のサービスエリアや渋滞の中で、制服や身につけている校章から、佳奈の乗るバスを見つけてしまう人も出てくるかもしれない。

もし、その時。

たとえばサービスエリアのトイレで、他の子たちがまだモジモジ我慢をしながら順番待ちに並んでいたりして、そんな中で佳奈だけが平然としていたら。

佳奈が、高速道路の隅でオシッコを済ませた子だと、気付かれてしまうかもしれないのだ。

冷静に考えれば、そこまでの偶然が続くとは考えにくい。しかし、絶え間ない羞恥に晒され続けた佳奈の頭の中では、悪い想像だけがぐるぐると巡り、際限なく膨らんでゆくばかりだった。

自分のトイレの跡を——それも、この高速道路を通る大勢の、十や百では聞かない数の人たちに、オシッコを見られてしまう。殊更に強くそれを意識した佳奈は、さらに出口のない羞恥の袋小路へと迷い込んでゆく。

「だ、大丈夫よ、みんな、気にしないでいいのよ？　ね？　ほら、もう、おトイレ、我慢しなくたってもいいんだから……！！　恥ずかしがらないで、ね？」

（っ、な、なんで、先生、そんなに、恥ずかしいこと、ばかり……言うのよっ……！！）

なぜかバスの傍に立ちつくしたままの清水先生に、佳奈は強い反発を覚えていた。たぶん心配してくれているのだろう。そう思いはするものの、バスの中で受けた恥辱は忘れたくても忘れられない。

他のみんなに気付かれないように、できるだけこっそり伝えたはずの尿意が、いつのまにかこんな大袈裟なことになってしまったのも、元はと言えばみんな先生のせいなのだ。

いくらクラス担任の先生でも、女の子のトイレを覗いていいなんて理由にはならないし、オシッコするところを見られるなんて、たとえ親や大好きな人にだって許せないことだ。

それなのに清水先生は視線を背けるでも、バスの外からやってくる不埒ものを警戒するでもなく、じっと佳奈達が、トイレを済ます様子を今か今かと待ち受け、食い入るように様子を窺っているのだ。

「ねえ、みんなお願い、はやく！！　はやくしてえ……！！」

蓉子が、どの生徒たちよりも猛烈な尿意を必死に我慢している真っ最中で、佳奈ををダシにしてバスを止め、この隙に自分もトイレを済ませてしまおうなんて企んでいることは、佳奈たち９人には知る由もない。

一度崩れた、クラス担任と少女達の信頼関係は、もはや修復不可能なまでに亀裂を走らせていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・25 教師と女性の狭間で

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/25/2012 09:00:00

BODY:

（ま、間に合ったけど…！！ バ、バスも頑張って停めたのにっ！！ あ、ああーんっ、いや、いやああ！！ こ、これじゃ、わたし、オシッコできないじゃないっ……！！ トイレ、おトイレえ……おトイレ、どおすればいいのよお……んああっ、あ、あっあ、ああーんっ、もうオシッコ出ちゃう、出ちゃうのおお…っ！！）

バスと中央分離帯の間にできたわずかなスペースに、躊躇いながらも分け入り、可愛らしいお尻を並べて顔を赤くしながらしゃがみ込む生徒達。

そんな光景の前で、蓉子は内心で困惑の声を上げていた。

まさに天恵とも思えた佳奈の『先生、おしっこ！』発言。まさに渡りに船、地獄で仏、空からの蜘蛛の糸。千載一遇の大チャンスで大歓迎で迎えたはずが、ふたを開けてみればなんと10人近い生徒達がバスを停車させ、集団オシッコをするという大事になってしまったのだ。

まさかこんなに大勢の生徒が、もう我慢できないほどトイレを切望しているとは、蓉子は思ってもいなかったのである。

（あーんっ、ど、どうしよう……どうしよう、こんなに大勢いるなんて聞いてないわよおっ……！！ ああーんっ！！）

もじもじクネクネと激しく身をよじりたくなるのを、オトナのプライドで懸命に堪え、右のかかとに体重を乗せてぐりぐりとアスファルトに押し付ける。スカートの下でぴたりと寄せ合わされた太腿は小刻みに擦り合わされ、何度も進りかけた熱い奔流の先走りですっりと湿った下着を内腿に貼り付かせている。

一人二人なら、口止めをして誤魔化せる自信もあった。けれど、実に9人、クラスの3分の1の生徒がここにいるのだ。その前で自分も一緒にオシッコだなんて言い出せるほど自分は図太くない。この期に及んでなお、蓉子は自分自身の——否、クラス担任としての建前に固執していたのである。

（み、みんな、キモチ良さそうだわっ……ああっ、はああ、わたしもオシッコ、オシッコしたい……一緒に、ぷしゃああーってオシッコしたい……！！ ずるいいい、ずるいわよお、みんな、どうして私だけ我慢しなきゃいけないのっ……んああっ）

蓉子の成熟した大人の肢体がぶるぶると揺すられる。少女達のつつまじやかなそれとは違う、一揺れごとにたぶんたぶんと震える、スーツの記事を撓ませるほどに大きくせり出した下腹部。

オシッコの出口にぎゅっと蓋をして、蓉子は焦燥にひり付く喉に唾を飲み込んだ。

ショウガ紅茶の利尿作用はなお激しく、猛烈な排泄衝動となって女教師の股間を襲う。

ふと気を緩めれば、じゅじゅっと下着にはしたくない水音を響かせてしまうであろう下卑た欲望が、隙あらば取り繕うクラス担任から倫理の仮面を引き剥がそうとしていた。

（ああーんっ！！ あ、あっああ駄目、出ちゃう、オシッコ！！ オシッコ出ちゃうっ……！！）

今すぐにストッキングと下着を足元まで引きずり下ろして、沸騰する尿意をアスファルトの上にぶちまけてしまいたい。許されない想像が蓉子を誘惑する。剥き出しのアスファルトが、まるでトイレと同じように彼女を招いているようだ。

（い、いっそ、どさくさにまぎれて、わ、私もっ、一緒にしちゃえば……、そ、そうよ、非常事態だものっ、せ、先生だって、オンナノコなんだものっ……が、我慢できなくなっただって、しょうがないじゃないっ……！！）

頭をもたげるいけない欲求にあわせ、こぼこぼと尿意が湧き起こる。下腹部の底、オシッコの出口の内側をひっかくような強烈な刺激が、じんじんと恥骨を伝い背骨を這い上がる。

ぶるっ、とスーツ姿の背中が震え、わなわなと握り締めた拳が揺れ動く。

（しょ、しょうが、ないっ、ないの、っ、……ない、けど……！！ ないけどおっ……！！）

意志に反してオシッコの準備を始めようとする下半身を、蓉子は辛うじて残った理性で無理やりねじ伏せた。鼻息も荒くきつく腕を組んで、仁王立ちになってオシッコの出口を締め付ける。

タイトなスカートの布地を膨らませるオシッコは、蓉子を聖職者と一人の女性の間で激しく揺さぶる。

（だ、駄目よ！！ ダメ、絶対ダメ！！ 私、せ、先生なんだから、生徒の前でそんなはしたないことっ……！！ オトナなんだから、こんなところでオシッコなんて、絶対、ぜったいたい、だめ、そんなみっともないこと、できないもんっ！！ お、女の子なのに、お外でオシッコなんか……！！ していいわけ、ないじゃないのおっ……！！）

教師として、オトナとして、してはならない事だった。

あろうことか蓉子は、教え子たちが追い込まれた極限状況の中、勇気を振り絞っての決断を無惨に踏みにじってまで、ちっぽけな『オトナの女性』の虚栄に縋ったのである。

「だ、大丈夫よ、みんな。外からは見えないし、誰も見てないから、安心して！！ ……ね？」

迫りくる尿意は刻一刻と限界に近づき、蓉子に決断を迫っている。それでもなお、『清水先生』としてクラス担任として。生徒の前で恥ずかしい格好はできないというプライドが、蓉子を衝き動かす。

「ほ、ほら、ぜんぜん平気よ。大丈夫！！ ……誰も見てないわ！ ここなら回りにも聞こえないし、先生も秘密にするから、ね？」

生徒達の前で、教師である自分がオシッコをしてしまうなんて——絶対に許されない。

「だ、大丈夫よ、みんな、気にしないでいいのよ？ ね？ ほら、もう、おトイレ、我慢しなくたってもいいんだから……！！ 恥ずかしがらないで、ね？」

（だっ、だからあ、みんな、早くオシッコ、済ませてよおお……っ！！！！）

蓉子はスカートの下腹部をぎゅうっと押さえ付けながら、生徒達に声をかける。

クラス担任の仮面の下に、あまりにも傍若無人なオナナの欲望を潜ませながら。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 社会見学バスの話・26 2年A組女子9人、準備完了
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 長編連載
CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/26/2012 09:00:00

BODY:

「ふぁ……うつ……ツ」

きゅんっ……と脚の付け根、股間の先端を走る強い刺激に、佳奈は身体を竦ませた。飲み込んだ吐息がぷくりと小鼻をふくらませ、きつく噛み締めた奥歯が震える。

スカートの上からきつく押さえた下着の奥、硬く張り詰めた下腹部を引っ張るような感覚と共に、背筋をじんじんとイケナイ刺激が這い上がる。緩み始めたオシッコの孔が、膨らみ切った膀胱の水圧に負けてじりじりと押し開けられてゆく。

（っ……あ……、で、ちゃ、う………ツ）

前屈みになった腰骨を刺激する、断続的で強烈な排泄衝動。もっとも原始的な本能のひとつ——先延ばしにしていた『おトイレ』の誘惑が佳奈に決断を迫っていた。

（あ、あっあ、だ、ダメ……）

許容量をはるかに超えて満水となった乙女のダムが、佳奈の下半身に水門を開けと緊急放水信号を発する。

がくがくと震える膝が、体重を支えきれなくなるように——少女はその場に膝を折り曲げる。

（っ、………しよ、しょうがない……よ、ね……もう、…もう、ガマン、できない、もんっ……）

半ば自棄になって覚悟を決め、佳奈はついにスカートの下へと手を差し入れた。緊張に震える指で下着を引き下ろしながら、脚を肩幅に広げ、その場に深く腰を下ろしてゆく。

少女の大切なところを覆う布地が、汗ばんだ湿り気にくるくると丸まりながら、膝上にひっかかる。

飛び散った飛沫で汚れてしまわないように、スカートを腰の上あたりに捲るように大きく引き絞って、恥ずかしいオシッコの出口をアスファルトの上へと向ける。

大きく持ち上げたスカートの裾では、後ろからもお尻が丸見えになってしまう、みっともない格好だが——トイレではない場所でオシッコを済ませるためには仕方のないことだった。

「…………っ」

「佳奈ちゃん……」

お互いの様子を窺い、顔を見合わせるばかりだった少女達も、皆の先陣を切ってオシッコの準備を始めた佳奈に追従し、バスの陰に衣擦れの音が響き始める。

「んんう……、っ」

「くう……だ、ダメ、まだダメっ……」

「うあ……っ…」

呆けていたのを我に返り、弾かれたようにしゃがみ込む者。

万が一にも、油断してこれ以上下着や制服を濡らさぬよう、慎重に慎重に準備を始める者。下着を下ろしてしゃがみ込む、それだけの動作でも、少女達の様子は千差万別だった。下着を下ろす暇もなく股布部分を真横に引っ張ってずらし、オシッコを始めようとする双葉や、しゃがむというよりはお尻を後ろに突き出した、馬跳びの馬のような姿勢で静止している芽衣。同じ少女の身体づくりであっても、その排泄姿は千差万別であった。

さながら9人の少女達の、排泄の見本市ともいえる光景。

普段は個室の中で消して他人に見せることのない姿であるからこそ、オシッコするときのポーズなんて、他人と比べることなどまず無い。それを彼女達は、皆の視線の中で披露しなければならないのである。

（っ……やだ、あんな格好……ッ）

（うそ……朱里ちゃん、あんなふうにおしっこするんだ……）

（ちょ、ちょっと、そんな風にしてたら、服、汚れちゃわないのっ……！？）

物心付いて以降まじまじと目にするなどまずない、同年代の友人たちのトイレの方法——その姿に、声には出さずとも皆が驚きを見せるばかりだった。

バスと中央分離帯に隔たれた狭い物陰では視線を反らすこともできず、右を向いても左を向いても、自分と同じように下腹部を露わにしゃがみ込んでいるクラスメイトの姿しかない。自分と違う『オシッコの姿勢』を見せ付けられ、佳奈達の羞恥は暴発寸前だった。

しかも、普段のトイレなら意識もせずに出来る動作であっても、こんな場所では思うようにいかない。

（ち、違うもん、こうしないと、汚いから……っ）

（が、我慢できないのよ、分かるでしょ！？ ぱんっ、下ろしてる余裕なんか……ないのっ）

（こ、これ、汗だからね……オモシじゃないんだからね……！！）

懸命の我慢にも関わらずシミの広がってしまった下着の股布や、くしゃくしゃに握りしめられたスカートの色の変った部分まで見られ、しかもそれらの内側の、乙女の場所すら外気に晒す。

しかも、今回は特別。いつもより大きく広げた脚や、制服をおヘソの上まで引っ張り上げる姿は、アスファルトに飛び散る飛沫からの被害を減らすための、普段のトイレとは違う『特別仕様』のオシッコポーズなのだ。

制服や靴をできるだけ汚さないようにするためには、出来るだけ隠さなければならないオシッコの姿を、出来るだけ上手に済ませるためには大きく露わにしなければならないという矛盾である。

露出した下半身に初夏の熱気を孕んだ風が触れるたび、少女達の羞恥はなお増幅されてゆく。

「………………っ」

さらに、まだ問題がある。オシッコをする『向き』だ。

つまり、どちらに向けてオシッコを噴射させるか、ということだった。仮設臨時屋外トイレの幅は狭く、二人が並ぶ余裕などない。9人の少女達は一列に並んでオシッコをしなければならなかった。畢竟、少女達はバスの方を向くか、中央分離帯の方を向くかを選ばなければならない。

これは単純に身体の向きを示すだけのものではない。

トイレではない野外排泄のコツのひとつとして、足元に飛び散った激しい水流の被害を減らすためには、できるだけオシッコを身体の下から外側へ噴出させることが望ましい。けれどオシッコの出方には当然のように個人差があり、普通にしゃがんだだけでも前に勢いよく飛ぶ少女もいれば、ほぼ真下に向けてオシッコが噴き出す少女もいる。少女達は自分のオシッコの体制や排泄孔の位置を鑑みて、うまくオシッコを出す向きを決めなければならなかった。

バスの車体に向かうようにすれば、道路の渋滞のほうに向かっておしっこをすることになる。バスの車体の側からの視線は遮られているとはいえ、勢い良く噴き出した水流が予想以上に強く、バスに近づくオシッコを引っかけてしまう可能性は否定できなかった。

一方、中央分離帯に向かう場合は、車道に対して丸出しのお尻を向けることになる。これなら周りからの視線はある程度遮ることができるものの、その一方で、周りが見えなくなってしまうという不安感は増倍する。どちらを取っても一長一短、正解のない選択だった。

結果、佳奈を含めた5人が中央分離帯にお尻を向け、亜沙子ともう一人がバスの方にお尻を向け、残る2人は結局決めかねて、中途半端な斜め向きでしゃがみ込むことになった。

いよいよオシッコの噴射の準備を整え、高速道路の路肩に激しく水流が地面を叩く音が響く――

と、いう訳ではなかった。

「あ……ふ……ッ」

勿論限界に近い尿意は確かだが、羞恥を強調され緊張してしまった下腹部では、すぐに排水を始めることはできないのだ。恥ずかしさを乗り越えて下着を下ろしてしゃがみ込み、強張った尿道の緊張を解いて――普段はほとんど無意識のうちに出来ているはずの『オシッコの準備』を、はっきり意識しながらしなければならない。

路肩で裸の下半身を――それも、女の子のいちばん大切な場所をむき出しにしているのだ。およそ、思春期の少女にとってこれ以上の恥ずかしい姿があるだろうか？

沸騰しそうな理性と遠のきそうな意識を懸命に支え、9人の少女達は、不安と恥辱に押しつぶされそうになりながら、バスと中央分離帯の茂みに挟まれた狭い空間の中に一斉に身を寄せ合う。

空の見えるバスの陰。でそんな事をするのだから、よりはっきりと自分がこれから恥ずかしいことをするのだという意識は強くなり、緊張はますますオシッコの出口を強張らせてしまう。

けれど、もう我慢は限界なのだ。9人の少女達の下腹部には、ぐらぐらと湧きたつ尿意がいまにも噴きこぼれそうに沸騰している。

「んう……ッ」

じん、と強く響く尿意が、佳奈の出口をぷくりと膨らませる。短い放水孔に一気に注水され、しゅっ、と布で肌を擦るような音が響く。お尻の骨にぴりっと甘い刺激が響き、身体が一番底でプールの栓が抜けたような感覚があった。

（お、オシッコ……しちゃうんだ……っ）

熱い刺激がジンと脚の付け根を走り、熱い雫がじゅっ、と音を立て始める。

——その時だ。

「…………あれっ、……？」

一瞬、目の前の光景が揺れ、佳奈は自分がめまいを起こしたのかと錯覚した。

しかしそれは考え違いだった。バスの白い車体が、ぐらりと揺れ、ペイントされた観光会社のロゴ文字が右に揺れる。

「え……」

道路に激しく鳴り響くクラクションと同時に、目の前に停まっているはずのバスが動き出していたのだ。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・27 羞恥の高速道路

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/27/2012 09:00:00

BODY:

すべては、当然の帰結であった。

いかな大渋滞の中とは言え、その中の車が完全に停止し、全く動かないわけではないのである。時速に換算するのも馬鹿らしくなるような、数メートル進んでは止まるを繰り返すノロノロ運転とは言え、少しずつ渋滞の列は移動を続けていた。

佳奈が清水先生にトイレを訴え、バスが車線を変更し、中央分離帯に横付けして停車しおよそ10分近く。

少女達が路肩に降り、バスの物陰に向かっているその間にも、渋滞の列は少しずつ、少しずつ、前に進んでいたのである。

2 - Aの生徒達を乗せたバスの大きな車体が、割り込むように車線を横切って移動したせいで、後続の車はそこに押さえこまれるように動けなくなっていたのだ。

他の車線の車が、ゆっくりとは言え移動しているのに、自分のいる車線だけが停車したまま、周りの車の流れからも置いて行かれる——それは大渋滞で神経を尖らせていた運転手たちを刺激するのに十分だった。

しかも、間の悪いことにこのタイミングで、渋滞の列がこれまでよりは大きく動き出したのである。動き出した車線を塞いで、どっかりと停まったままのバスめがけ、次々とクラクションが鳴り響く。

重なり合う甲高い音は、猛抗議となって2 - Aのバスを直撃していた。

奇しくも、運転手の危惧していた事態だった。

中央分離帯への停車はマナー違反とはいえ、いまは2年A組の少女達の緊急事態だ。本来なら、バスを降りたクラス担任の蓉子が後続の車に対して事情を説明するような方法もあっただろう。あるいは、バスの中に蓉子が残っていれば、何が何でもバスを動かさないように、運転手を説得することもできたかもしれない。

だが、その肝心の蓉子まで一緒になってバスの陰に入ってしまったことで、後続の抗議を留める者はいなくなってしまったのである。

——かくして。

鳴り響くクラクションに圧倒されるように、バスは出発を余儀なくされたのだった。

エンジンを唸らせ、排気ガスを噴き出して。動かない壁のようだったバスがすすると前に滑り出る。

運転手にしてみれば、ほんの車間数台分を動かすだけの移動だった。トイレに降りた少女達を置いていく理由などなかったし、そのつもりもなかった。何よりも、彼は男性であったからこそ——少女達が、路肩でオシッコを済ませている状況の本当の問題点まで、頭が回らなかったのである。

バスの移動は数十メートルほどのものでしかなかったのだが——ちょうどその物陰でしゃがみ込んでいた生徒たちには、あまりにも致命的な問題だった。

これまで少女達を覆い隠していた、バスの車体が移動してしまったことで。

少女達の姿は、再び白昼の元に曝け出されることとなってしまったのである。

「————え、っ」

しかも、今度は先程の好奇の視線にさらされた我慢行列の比ではない。下着を下ろし、膝に引っ掛け——あるいは足首までおろしてくると巻き付けて。

スカートを大きくたくしあげ、腰にはさみ、橋を口に咥え、ハンカチを握り。ポケットティッシュを握り締め。

道路の隅にしゃがみ込み、足を広げ、おしりや、あるいは女の子の最も大切な場所をさらけ出して、動くこともできない徹底的なまでに無防備な姿のまま、まさに今、オシッコをしようとしていた瞬間のその姿を。あまりにも最悪のタイミングで、少女達は全く遮るものなく、大渋滞の衆目にさらすことになってしまったのだ。

「きゃああああああ！！！！？」

「な、なに、これ……っ！！」

最初に叫んだのは、右端で座りこんでいた愛理。そしてその隣の頼子、芽衣が、信じられない事態に目を見開く。

絹を裂くような悲鳴が立て続けに響いた。

「い、いやああ！！」

「嘘お……！！」

これまで壁のように、彼女たちの姿を覆い隠してくれていた車体が幻のように消え失せ、制服姿の少女達が下半身も露わに道路の隅にしゃがみ込んでいる姿が、三車線の高速道路から丸見えとなってしまう。

オシッコを始めようとしていた下半身を押さえ込み、佳奈達はパニックを起こしながら身体をよじろうとした。

「あっあああ、あっ！！」

「だ、駄目えええっ」

じゅ、じゅじゅう、ぶじゅじゅじゅじゅじゅッ、じゅううううッ！！

びちゃびちゃっびちゃっ、ぶしゅううう————ツッ！！

猛烈な放水音を、押さえ込もうとした手のひらが、慌てて引っ張り上げた下着が、引き下ろしたスカートが遮る、みっともない水音が響き渡る。

羞恥を堪え、葛藤を乗り越えて、道路の隅で我慢に我慢を重ねてきたオシッコを、ようやく始めようとしたまさにその矢先だ。いきなり止めろと言われても、一度トイレを決意した女の子のカラダが言うことを聞けられない。

少女達の中でまず悲劇を迎えたのは麻野頼子だった。彼女はバスの後ろから三番目、バスのほうを向いてしゃがみ込んでいた。

頼子は、皆に先駆けておしこの準備を終えていたのだ。

バスの陰に向けて足を開き、女の子の部分からいままさにちょうど勢いよく『シュウウッ』と水流を噴射しかけた、ちょうどその時にバスが動き出したのである。

「だ、だめええええ！！！！」

幸いにして、頼子はバスが動き出したことにすぐ気付くことができた。咄嗟に身体をよじろうとした彼女だが、しかし思うように足が動かず、痺れてしまい立ち上がることもできない。

脚を閉じることも、その場に倒れこむこともできず。目の前にやってきたクーパーの座席から、まさに特等席となる位置で。頼子は地面に向けて、足の付け根から女の子の恥ずかしい水流を噴出させるのを、思い切り見られてしまったのである。

ホースが水をまくかのような激しい音が響く。じゅじゅじゅうッ、とまるで焼けた鉄板で蒸発する水のように、激しい音を響かせて噴き出したオシッコは、頼子が腰をくねらせるのに合わせて蛇のように地面に軌跡を描き、アスファルトに痕跡を刻む。

たちまち噴射した水流は飛沫を上げながら大きな水たまりとなって、なおばちゃばちゃと頼子の恥ずかしい放水を受け止め、波打った水面を広げてゆく。

「っあ、ああ、いや、いやああああ！！！！」

頼子は太腿を閉じ合わせ、足の付け根に手を突っ込んで、ぎゅうっと恥ずかしいところを握り締めた。

眉を寄せ、歯を食いしばって懸命に耐える。

じゅじゅじゅうッとさらに激しい水音が響き、押さえ込んだ白い肌を、腿を、ふくらはぎを、黄色い水流が幾筋も伝いおち、足元にはオシッコの証拠である水たまりがどんどんと大きく広がってゆく。

「いやあ、……あああッ……」

まぶしいほどに白い太腿を露わに、ぴったりと足を閉じ腰をくねらせ、股間を押さえこんだ手のひら隙間からはぶしゅうッと水流が

進む。しゃがみ込んだまま動けない頼子に、周囲からの無遠慮極まりない視線が突き刺さった。俯いた顔は耳の端まで羞恥に染まり、少女の切ない吐息と共に、涙がじわりと目元に浮かぶ。

それでも、暴虐に荒れ狂う尿意を、ひくひくと収縮しそうに痙攣する膀胱を必死になだめ、羞恥のホットレモンティを下腹部に閉じ込めるのに精いっぱい頼子は、動くこともできずに小さく身体を震わせ、耐え続けるしかなかった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・28 羞恥の高速道路 2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/28/2012 09:00:00

BODY:

さらに最悪な事態へと陥ってしまったのは、その隣——佳奈のすぐ横で中央分離帯のほうを向いてしゃがんでいた陽菜である。彼女はちょうど頼子と逆に、バスに向けてお尻を向け、中央分離帯の茂みに向けてオシッコをするつもりだった。つまり、道路側には背中を向けた格好だったのだ。そのため陽菜はバスが動いたことに気付くのが、他の生徒よりもかなり遅れてしまった。

陽菜が異常に気付いたのは、皆よりも数秒ほど後。完全にバスが移動し、ちょうど、まさに脚の付け根から本当の勢いで、オシッコを迸らせた瞬間だったのだ。

可愛らしいお尻の谷間を晒し、その奥にある女の子の放水孔から、誰にも見られない安堵と共に放たれる、女の子の本当のオ

シッコ。

ぶっじゅうううううう！！

トイレの個室の中でしか許されないであろう、本当の勢いでオシッコ——地面を激しく打ち、飛沫を飛ばして波打つ、野太い水流。その勢い、量については、成人男性の平均的なそれ等はるかに及ばない。

我慢に我慢を重ねてきた末の、ようやくの尿意からの解放だった。

たとえここが本当のトイレはない、高速道路の片隅であったとしても、陽菜の行為をはしなないと責めることはできないだろう。そもそも彼女達は、我慢に我慢を重ねてついに耐えかねたオシッコを済ませるためにバスを降りてやって来たのである。

そこでオシッコをすること自体は、なんら責められて良いものではない。

だが——そのせいで。

陽菜は完全に安堵して緩んだ排泄孔から、遮るもののなく羞恥の水流をほとばしらせるその姿を、動いたバスの陰から完全に曝け出されてしまったのであった。

「はあああ……んっ」

うっとり、甘い吐息が少女の唇を震わせる。極限からの解放状態にある陽菜の耳には、周囲の喧騒も、隣のクラスメイト達の悲鳴も、届かない。

女の子の最大の秘密——同じ女の子同士でも、絶対に見せる事のない、秘密の行為。

トイレと言う、排泄のための場所でお、個室の中にそっと隠れ、音消しの水を流しながら済ませる本当の排泄。想像される事すら恥ずかしい行為が、衆目に晒されていた。

ちょうどバスの後ろにいた二車線、前後6台の乗用車は、路肩にしゃがみ込んで、ものすごい勢いでオシッコをする、各別の美少女の姿を目の前に見るようになった。

（やっと、やっとできた……オシッコ出る……っ）

トイレでない事の不安もあるため、陽菜は心持ち、完全にしゃがみ込む姿勢からおしりを浮かせ、膝を曲げ切らない、姿勢を取っていた。その状況で以上に気付き腰を持ち上げてしまったものだから、身体はちょうど前屈のような体勢になり、オシッコは陽菜のおしりの側、つまりバスのあった、高速道路の中央に向けて大きくほとばしってしまったのである。

まるでホースで水を撒くように、羞恥の水流が高速道路の路面に撒き散らされる。

長い間の我慢によって、しっかりと濃縮されたオシッコは、遠目に見てもその薄い黄色の色がわかるほどだった。色濃いオシッコが焼けたアスファルトを打ち、湯気を上げる様は、その場にいたほとんどの車から丸見えだったのだ。

ぶじゃあああああ！！

じよじよっ、じよぼっ、じよぼぼぼぼぼぼ！！

（オシッコ……キモチ、いい……っ♪）

まるで見せつけるかのような、各別のサービス精神すら見せての“かぶり付き”で披露される、少女の野外排泄。

躊躇いなく放たれる水流が、アスファルトに滴り、中央分離帯の緑の茂みを揺らすその有様は、天地創造と共に大地に恵みの

雨を降らせるかのような、一種の荘厳さ、芸術性すら伴っていた。

激しく噴きだす最中であってすら、薄黄色の色合いを見せるオシッコは、長時間にわたる我慢で少女の身体に延々と閉じ込められ、強烈な尿意によって煮詰められたものであることをありありと窺わせる。色と湯気ひとつとっても、アレを我慢しているのがどれほど辛いことなのかは一目瞭然だった。

陽菜は、誰よりも辛い尿意を抱えながら、それでも気丈にそれを飲み込んで、皆をバスから誘導していたのである。

そんな健気な少女が、車道に満ちた好機と欲望の目に晒されるなど——悲劇としか言いようがない。

陽菜が、足元に差す陽射しによって、異常に気付いたのは、その直後このことだった。

「え……あ、…………え？」

いつしかバスが消え失せていることに気付き、陽菜はパニックに陥った。

懸命に尿意を堪え、羞恥に耐えてしゃがみ込み、排泄衝動の解放という天国の悦びを甘受したまさにその瞬間。我に帰れば、お尻を丸出しにしてオシッコをしている姿で、路肩に取り残されていたのである。

少女の感じた動揺は計り知れぬものがあっただろう。

「い、嫌……っ！？ な、なにっ！？ なんなのっ！？」

車線の向こうから、見知らぬ車の大行列が押し寄せる。彼等の視線と、身をよじった陽菜の視線がかちあった。

陽菜の動揺はその瞬間に極限へと達する。

ほとんど反射的に立ちあがろうとした脚は、しかし足首まで下ろしていた下着の事を忘れ、その場に脚を取られて転んでしまう。身を底おうと突き出した手は、辛うじて少女の身体を地面にたたき付ける事を防いだが——転倒の衝撃で跳ね上がったスカートは背中の上に大きくまくれ上がり、お尻を腰骨の上まで丸出しにしてしまった。

——そう。

陽菜は、今度は大きく四つん這いになるような格好で、何も身につけていない下半身を、車道に向けて見せつけるような姿になってしまったのだ。

「っ……………ア…………う、」

もはや悲鳴など声にもならない。少女の顔は青ざめ、血の気が失せるように表情を失ってゆく。

その間にも、オシッコは止まらない。

括約筋はコントロールを失い、乙女のダムの水門は開きっぱなしのまま。ダムの底に空いた大穴から、恥ずかしい水流がさまざまな勢いで噴き出し、まるで道路全部を埋め尽くさんばかりの勢いで進む。

まるで、飼い犬の散歩のような姿。手と足をついて這いずるような格好で身体を震わせる陽菜の、股間から。その真下へ向けて、猛烈な勢いで陽菜のオシッコがアスファルトを打ち、みるみるうちに地面に黒い水たまりを広げてゆく。

ありえない光景に、車道にどよめきが広がっていった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・29 綿貫美緒

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/29/2012 09:00:00

BODY:

一方、バスの中でも悲劇は続いていた。

ついに高速道路の路肩での野ションは容認できずに、トイレを言い出せなかった生徒達の数々が、いまや我慢の限界を迎えようとしていた。

今から追いかけてゆく余裕すらないままに、モジモジと身体をよじり、大事なところを握り締める。

綿貫美緒の困惑はいよいよ絶頂に達しつつあった。

和泉先生から荷物の点検を頼まれ、つい出発前のトイレに行きそびれてしまった美緒の下腹部は、誰にも負けないほどに恥ずかしいオシッコでぱんぱんに膨らんでいる。

バスの中で尿意を催した子たちよりもずっと早く、バスが出発するころにはもうトイレに行きたかったのだ。

それでも、学校に着くまで我慢した。

バスが渋滞に巻き込まれ、高速道路を毎分 10 mで動くような非常事態になっても、みつともないところを見せないように、小刻みに震える膝を隠して普段通りに振舞った。前押さえなどはせず、軽く前屈みになって足を閉じる程度の仕草しか見せなかった。

ほとんどのクラスメイトが、ガマンに腰を揺らせながら、美緒のことを羨ましがってすらいたのだ。

先生が、限界を訴えるクラスメイトを連れてバスを降りた時も、美緒は手をあげなかった。尿意はもう一刻の猶予もないレベルまで達していたが、バスの陰でオシッコなんて、厳しく躰けられて育った美緒にはとても許容できないことだったのだ。

女の子なんだから、恥ずかしいことはしちやいけない。

オシッコはきちんとトイレで、誰にも気づかれずに済ませるもの。

「……………」

誰もかれもが自分のことで精一杯のバスの中には、流石に口数が減っている美緒を不審に思うクラスメイトはほとんどいなかった。

だが——そんな健気な我慢も、強烈を乗り越えて暴虐に暴れまわる尿意の前にいよいよ潰えようとしていた。

「あ……っ」

美緒は抱えていた 350ml ペットボトルを落とした振りをして、身体をかがめ、手のひらでぎゅっとオシッコのでるところを塞ぐ。いつ決壊してもおかしくない女の子の出口は、スカートの下で飾り気のない下着に包まれてひくひくと震えている。

（ま、まだ、動かないの…？）

外にトイレを済ませに行ったクラスメイト達のため、バスは路肩に停まっている。渋滞の中でならたとえわずかなりとも前に進み、少しでもトイレに近づいているという期待があった。しかし、停車中の今の時間はただただ無為に流れるだけ。トイレに行けるまでの距離が遠のいているのに等しい。

それが美緒には溜まらず辛いことだった。

（お、お手洗い……したい……っ）

じんと、締め付けられ続けた括約筋が熱を持って悲鳴を上げている。すっかり伸び切ってはちきれんばかりに膨らんだ羞恥の水風船は、鈍い痛みすら伴って放水を叫ぶ。

ぎゅうと身をよじり、スカートの位置を直すふりをして腰を持ち上げた時だ。

じゅっ……

不意打ちだった。前触れもなく、オシッコの出口に電流のような刺激がほとばしる。

あっと思う間もなくじわあっと足の付け根に熱いものが広がってゆく。

我慢し続けたオシッコが、下着の股布を湿らせ、大きな染みを広げていた。

「い、いや……あっ」

辛うじて、悲鳴を喉の奥に押し込んで、美緒は矢も盾もたまずに足の付け根を押さえこんでしまう。

ぎしぎし、少女の全身を使った我慢に、座席シートがギシギシと揺れる。

それでもなお、熱い湿り気は断続的に進み、美緒の下着の股間部分の染みはじわじわと広がってゆくばかりだ。

じゅっ、じゅわ、ぶしゅっ……

強く圧迫された尿道から噴き出す熱い雫は、それに比例して水圧を高め、下着の上からでもびゅうと水流のように内腿を濡らす。

最終防衛ラインは陥落寸前。全身全霊の我慢をもってしても、もはや決壊は避けられない。

（どうしよう……もう出ちゃう、間に合わない……！！）

どれだけ控えめに見ても、いますぐバスが動き出して、渋滞が全部なくなって、途中で信号も全部青で、時速 100 kmを超

「っあ……っ」

「も、もう駄目……っ」

「んんんんうう……っ」

「っ……………！！」

「いやああ…っ」

膨らみきった膀胱はその反動で猛烈な収縮を繰り返し、ペットボトルの中にあきれるほどの勢いで搾りたての乙女のホットレモン

ティーを注ぎ込んでゆく。

あっという間に、ペットボトルはいっぱいになってしまっていた。

もともと350ml程度の容量で、健康的な少女が4時間も我慢し続けたオシッコ全部が入りきるわけがないのだ。まして美緒の我慢はその倍以上にも及び、普段からの訓練によって乙女のダムの貯水量も標準的な少女達のものに比べれば段違いである。

わずか容量350mlの臨時携帯トイレでは、とても間に合うはずもなかった。

オシッコを半分も出しきらないうちに、ペットボトルは満水になってしまったのだ。

美緒は慌ててオシッコを止めようとするが、いよいよ本当の勢いで出始めたオシッコがそんなにあっさりと止まるはずもない。満水になったペットボトルから溢れだそうとするオシッコを、美緒は反射的に手のひらで押さえこんでしまう。

「くあうう……っ」

ぶるぶると腰が震え、思い切り握りしめた指先が白くなる。

それでもじゅじゅう、じゅうじゅうううっ、と断続的な放水音が、少女の手のひらを直接たたき音ははっきりと聞こえた。右手に黄色い熱水をいっぱいまで注ぎ込んだペットボトルを握り締め、左手でそれと同じくらいパンパンに膨らんだ下腹部のティーポットを握り締め、美緒は必死に息をつめ、出そうになるおしっこを押さえこみ続けていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・30 羞恥の高速道路 3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/30/2012 09:00:00

BODY:

バスを降りるのは愛理にとって屈辱の決断だった。

厳しい躰の元で育った愛理にとって、トイレ以外で用を足すなんて、絶対にあってはならない事のはずだ。いや、そもそも普通の女の子であれば2年生にもなってバスの物陰でおしっこなんて、よっぽどの事がなければするべきではない。

だが——今はまさに、その『よっぽどの』事態だ。

(——だ、だって……バスの中で……なんて……っ)

虚栄心に縋って最悪の事態を迎えるよりは、むしろ一時の恥であっても受け入れなければならない。そんな崇高な決意のもとに、愛理はバスを降りる9人の少女の中に加わった。

彼女の周りに座っていたクラスメイト達は、クラス一番の『お嬢様』が、まさかこんなところでバスを降りてオシッコをしに行くなどと思いきやなかったか、少なからず驚きを見せていた。中には愛理の行動を性質の悪いジョークだとも思ったのか『またまた、冗談きついよ』などと笑い飛ばそうとした者までいた。

(皆さんの前で、お、粗相……なんか、してしまうわけには……いきませんもの……っ！！)

そんな彼女たちを振り切って、愛理はバスを降りたのである。

既に愛理のトイレ我慢が限界に達していることは白日の元に晒され、清楚でおしとやかな『お嬢様』が、お外でオシッコを始めているのはクラスメイト達の知るところとなっている。理想のお嬢様であることを放棄した愛理の背中に明らかな軽蔑や、失望をぶつけてきた友人たちも少なくない。

だが。

恥を忍んででも、最悪の事態を避けるべく行動に出た彼女の決断は、決して誇られてはならないものだ。

そんな愛理を——運命は最悪の形で裏切ったのである。

「い、いやぁ……いやぁああああああっ！！！」

皆に遠慮するように、列のいちばん最後——バスの車体の一番端でオシッコを済ませようとした愛理は、一番最初に動きだしたバスの陰から押し出されることになった。

あろうことか。まさにオシッコを済ませるその直前の姿を——同性からも目を引く、優美で淑やかな少女が、道端にしゃがみ込んでオシッコを済ませようとしているその瞬間を。

大勢の男性達に見られることになってしまったのだ。まさに放水を始めた瞬間の股間を、激しく噴き出す乙女の羞恥の熱水の迸りを、衆目に晒す結果となってしまったのである。

反射的に足を閉じ、下腹部を震わせ排泄孔を締め付ける愛理。

「っ、んあっ、はぁ……ああっ……！！！」

膝を揃えたまま蹲ってしまった少女は、強烈な尿意と羞恥に動くことも出来ず、その場に座り込んでしまう。両足と手で押さえこんだ剥き出しの股間からは、なお激しく水流が滴り落ちる。一旦排泄の準備を終えて開いた乙女のダムの水門は、そう簡単に締まらないのだ。みっともない水流は幾筋にも別れ、スカートの裾や下着を水浸しにして、なお太腿と膝を伝い、地面に溢れる。

「あ、だめ……だめ……っ」

熱い吐息とかすれた声が、小さくか弱い否定を繰り返す。

けれどそれではしたない、お粗相の事実まで消えうせるわけもない。ぶじゅ、じゅじゅつ、と外見に似合わぬ下品な排泄音を響かせながら、『オモラシお嬢様』となってしまった愛理は整った眉をひきつらせ、朱に染めた顔を地面に向けて、髪を振り乱すようにかぶりを振り続けた。

アスファルトに広がる頼子の水たまりのすぐ隣で、楠木小枝は苦悶していた。

小枝は陸上部に所属する２年生のエースの一人で、トラック競技では県大会に出たこともある陸上の選手だった。ボーイッシュな外見と爽やかな性格で、下級生のファンも多い。

けれど３時間にも及ぶバス内の監禁によって、陸上部のエースの姿に見る影はない。鍛えた下半身は、無残に尿意を堪えることだけに集中し、がくがくと震えるばかり。余計な脂肪のないすらりとした肢体は、その分熱を溜めておくことには不向きだった。加えて、普段から運動を欠かさない健康的な少女の身体は代謝にもすぐれ、非常に効率よく、体内の不要成分を排出する能力に長けているのだ。

「うあ……あ、や、やだ、あ、ち、ちがつ、も、漏れ、ちゃ。っ」

陸上で鍛えられた下半身がきゅうと股間の水門を締め上げる。しかし、小枝が喘ぐたび、均整のとれた乙女の肢体の中で、目を引くほどにせり出した下腹部が大きく揺れ動くのだ。

ネコ科の肉食獣のように洗練されたフォルムの、鍛えられた小枝の下半身——そのなだらかな下腹部の一部、ちょうど脚の付け根からおヘソの裏あたりまでが、明らかに身体の外側にせり出している。少女の小さな身体を歪ませるほどに、小枝の溜めこんだ尿意は凄まじいものであることが、一目で知れてしまっていた。

他の少女達が密かに慎ましやかに身体の内側に溜めこんでおける尿意は、小枝にとっては腹筋で押さえこんでおかなければならないものなのだ。尿意の元をばんばんに詰め込んで膨らんだ膀胱は、主人の意志を無視して無理矢理に中身を絞りだそうとする。

結果、

ぷっ、ぷしっ！！　ぷししゅっ！！

日々のトレーニングで発達した内腿の筋肉で細く締め付けられた排泄孔を、高い水圧で噴き上がったオシッコは、まるでスプレーのように、強く、小枝子の足の間か噴き出す。下腹部の内圧と、出口の水門を締め付けた括約筋がちょうどノズルのような働きをし、水流はしゃがみ込んだ小枝の前方、２m近くも前の地面に激しく噴きつけられる。

ぷしっ、ぷしいいっ！！

「あ、だめ、で、るな、出るなああッ……！！」

激しい水流は、アスファルトの路面を強く波打たせ、泡立ちながら茶色の濁った泥色の水たまりを浮かばせてゆく。ちょうど高圧

洗浄をするかのように、小枝子の強力なオシッコの水圧が、高速道路の路面を洗い流したのだ。

（ち、ちがう、ちがうから、これ、こんなじゃ、ない、からっ……普段は、もっと、ちゃんとできるのにつ……！！）

小枝の本来の排泄——きちんとリラックスして、トイレの中で便器を跨いでのオシッコであれば、こんなみっともない様を晒す筈がない。よく振った炭酸のペットボトルを開けた瞬間のような、強烈なオシッコの噴出で地面を洗い流しながら——小枝はこみ上げる羞恥に顔を覆ってしまう。

ますます緊張と焦燥で下半身はこわばり、なお激しい勢いと、長い距離でオシッコが断続的に地面を直撃する。アスファルトに孔でもあいてしまうのではないかと本気で心配したくなるほどに。

「あああっ……いやあああ！！」

「あ、ダメ、止まって、止まってええ！！」

「見ないでよお……お願い、見ないで……っ」

9人の少女達は、遮蔽となっていたバスの車体を失い、懸命の我慢も空しく次々に恥ずかしい音を響かせてアスファルトの上に激しい水流を噴射させてしまう。

丁寧にオシッコの準備を終えたためにダムの水門は開きっぱなしに近い状態となり、いくら手で押さえこもうとしても、勢いよく噴き出す暖かい水流を遮ることはできずに、手のひらで直接受け止めてしまうような状態だった。かくがくと腰を浮かせ、下腹部を波打たせ、激しく身をよじりお尻を振って身体を上下させる。

脚の付け根を握り締めた両手の指の間から、泡立ち溢れ落ちる黄色い雫が、ばちゃばちゃと路面に叩きつけられる。

佳奈の、頼子の、愛理の、小枝の——9人の少女達の股間の先端部分から噴き出すオシッコは、アスファルトに大きく水面を広げ、隣の少女の足元まで飛び散ってゆく。お互いの作り出した水たまりと触れ合って一つになる、大きな黄色い湖の中——

「だっ、駄目よお！！ 待って！！ 待ってえ！！ あああーんっ、置いてかないでええ！！！」

無残にも女の子の放水の瞬間を衆目に晒されてしまった教え子達を余所に、しかし彼女たちを一番案じてやらなければならない筈の立場の『クラス担任』——清水蓉子の視線は、先へ行くバスの車体に釘付けだった。

（こっ、こんなトコロに置いていかれたらっ、どどっ、どうやって、おトイレまで、行けばいいのよおっ！！！！ ああーんっ！！）

目の前の生徒達を放り出して、蓉子はよろよろとバスを追いかけ始めた。

タイトなスカートの腰を不格好に振り立て、お尻を大きく突き出して——靴のかかとを激しく打ち鳴らす、羞恥のステップを踏みながら。

じゅんっ、じゅじゅじゅう、と腿の間に広がる熱い刺激が、下着を大きく濡らすのを感じながら——体面をかなぐり捨てた蓉子は、一人の『オンナ』となって、己が欲望のままに走りだした。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・31 下半身露出・オモラシ行列

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/31/2012 09:00:00

BODY:

「っつ……！！」

騒然となる高速道路の一角で、じゅわあっ、と足の付け根の水門が開いてしまう中、佳奈は咄嗟に両方の手のひらで、むき出しになっていた脚の付け根を覆い隠した。

今まさに噴出しようとしていたオシッコの熱い奔流が『ぶじゅうっ』と手のひらにぶつかる。火傷しそうに熱い雫が指の隙間からぱちぱちちゃと飛び散ってゆく。

（だ、だめ…………ええっ…………！！ 見られちゃうっ、オシッコしてるとこ見られちゃうっ！！）

渾身の力を入れて、お尻の穴にもきゅうっと力を籠め、排泄孔を懸命に締め付ける。同時に、佳奈は車道の人々からの視線を振り切るように身体をよじった。

しかし、隠れる場所などない。

出かけていたオシッコはなおも手のひらの中でぶじゅっ、ぶしゅうっ、と断続的に吹き上がる。

（と、止まって、止まってえ…………っ！！）

左右の手のひらを重ねて、お椀のようにして、佳奈は女の子の大事な場所を押さえこんだ。

「あ、あっあ…………だめ、…………」

「はうう…………っ」

それは他の生徒達も同じだった。懸命に腰を揺すり、大事なところを押さえこみ、くねくねと身体をよじり合わせる。咄嗟の判断

で下着を穿き直すことができた少女はまだ運のいい方で、下着を汚れないように足首に引っ掛けていた大半の少女達はそんな余裕すらなく、直接股間を手のひらで握り締めるしかなかったのである。

同じ制服を着た9人の少女たちが、下半身を露出させ、白い肌もまぶしく腰を揺する姿に、渋滞の中からどよめきが上がる。その熱波は波紋のように高速道路を広がっていった。

出しかけたオシッコを途中で止めるのは、女の子にとって死力を尽くしても難しいほどの熾烈なものだ。

まして、我慢の限界を迎えての放出の寸前だっただけに、その『おあずけ』の破壊力は途方もない。思春期の繊細なプライドなどあっさり突き崩さんばかりの勢いで、少女達の乙女のダムは揺さぶられ続ける。

「んあああ……ツツ」

「はあ、はあつ、はあああつ」

足元には恥ずかしい水滴がぼたぼたと飛び散り、指や内腿を伝ってゆく。時折、我慢できなくなった水門から『ぶじゅうっ』とはしえない音をさせてしまう少女があり、それに連鎖するようおチビリは伝播してゆく。

あたりには我慢し続けたオシッコの匂いがたちこめ、それが呼び水になってますます決壊寸前の乙女のダムを緩くしてゆく。

「くう、ううう……ツツ」

なおもオシッコを絞り出そうとする膀胱を懸命に抑え込み、佳奈はなんとか視線を上げた。どこでもいい、早く隠れて——見られない場所へ。猛烈な尿意に押し潰されそうになりながら、回らない頭でなんとかそれだけを考えようとした。

しかし、

(でるっ、で、でちゃう、おしっこオシッコおしっこ！！ おしっこでるっ、でるう！！ 手、離したら……で、出ちゃう……っ)

猛烈に膨らむ尿意は爆発するかのようyに少女の下半身を支配し、乙女の膀胱は身震いして強烈な収縮の気配を見せる。行き場のなくした羞恥のレモンティを絞り出さんと震え、はりつめた下腹部はもうわずかな我慢すらできないと叫んでいた。ぶじゅうっ、と限界を訴える排泄孔が、あそこに重ね当て押さえこんだ手のひらの中へと恥ずかしい水流を注ぎこむ。

それを受け止めた佳奈の手のひらから、ばちゃ、と恥ずかしい雫があふれ落ちた。

最後に後始末をするはずだったポケットティッシュが袋ごと地面に落ち、オシッコの水たまりに沈んでゆく。

(っあ……あ、やだ、やだああ！！ みられちゃ、う、いやああア！！！！ッ)

恥も外聞もなく歯を食いしばって懸命に踏ん張る、少女。

ちかちかと明滅する白黒の視界の先に、佳奈はバスの姿を見つけた。さっきまで自分たちを乗せていた、2-Aの高速バス。

自分たちを置いて行ったバス——けれど、いまはたったひとつ、周囲からの視線を覆い隠す自分たちの居場所。

「も、戻らなきゃ……っ」

うわごとのように呟いて、佳奈は強引に腰を持ち上げた。

出かけていたオシッコがまたぶじゅうっと、股間を握りしめた手のひらの中に注ぎ込まれる。脚に絡む下着を持ち上げている余裕なんか微塵もなかった。

信じられないことに、佳奈はあそこを握り締め、ガニ股になったまま走り出したのだ。

それに続いて、他の生徒達も似たような恰好——何も身に付けていない脚の付け根を、両手で押さえ込んだまままで駆け出してゆく。

その根底には、このまま置いて行かれるかも知れない——そんな恐怖があった事も確かだろう。

ここで渋滞の列の中に取り残され、好奇の視線にさらされながら、最悪の事態を迎えるのだけは避けなければならない。

「ああ……あ、だめ、で、出ちゃう、出ちゃうッ」

9人の少女達は足元にじゅっ、じゅうとオシッコを噴射させながら、よちよちと進もうとする。

まるで、滑稽なアヒルの行列だった。

足首に絡めたままの下着。腰上にかかったままのスカート。剥き出しの股間を両手で握りしめながら、健康的な太腿をオモラシで汚し、アスファルトには水滴をあふれさせながら、ガニ股にになって必死にバスを追いかける少女達。

そんなあられもない姿が、この渋滞の大行列の中で注目を浴びないはずがない。

「わあ……っ」

「お、おい、カメラ、カメラ持ってねえ！？」

「うわ、すげえ……」

国民的アイドルでも目の当たりにしたかのように。周囲から、歓声にも似たざわめきが広がる。

思春期の少女達の恥辱の姿——オシッコを漏らしながら、ガニ股になってバスを追いかけるという、あまりにも衝撃的かつ刺激的な光景に、その場にいた多くの男性達は、すっかり心を奪われていた。

普通、まず見ることでできない、思春期の少女達の排泄シーン。しかもそれが10人近い数だ。

「あ……あつあ、あ」

しかも少女達の顔は紅潮し、息は荒く、目元は涙を滲ませて。

ずり下がった下着がまるで足枷のように足首に絡み、思うように走ることもできない。渋滞の車の中で、佳奈は剥き出しの股間を握りしめていた。

ぶじゅっ、猛烈な水流が手のひらの中にぶつかる。まるで水圧で指を切ってしまいそうに思えるほどの強烈な噴出で、オシッコが飛び散る。

衆人環視、白昼の屋外で、下半身裸のまま足の付け根を握りしめながらオモラシをする少女に、どよめきが起こる。

まるで受け皿のように重ねた手のひらの中に、思いきりオシッコを始めてしまう。指の隙間から、手のひらから黄色い滝があふれ落ちて脚元に降ろしたキュロットを直撃する。

余裕もない状況で焦る少女達は、スカートもほとんど捲れて、オシッコで濡れ張り付いた下着が丸見えの子までいた。白い肌に張り付いた布地は、自分が絞り出したオシッコにたつぷりと濡れ透け、薄黄色に染まっている。

しゃがみ込んだ弾みに思い切り地面にぶじゅじゅじゅうっ、とオシッコを叩きつけてしまい、あるいは噴き出す熱い水流を、お皿のように股間のすぐ下で構えた手のひらで受け止めるようにして。

さらには、きつく握り締めた指の隙間から、四方にオシッコの飛沫を飛び散らせながら。

(嘘、嘘よ、こんなの……ッ)

涙と悔しさと、羞恥で気が遠くなりかける。

バスの外でオシッコをするを選んだ少女達は、ほとんどその目的を達する事も出来ないどころか、あり得ないほどの羞恥を受けながら、バスを追いかけることになってしまったのだ。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 喫茶店のバイトのお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 11/24/2012 12:18:18

BODY:

駅前の繁華街から通りを二つ離れた雑居ビルの1階、軽食喫茶『エボック』のカウンター。肩下の髪を地味なゴムで左右に括った少女が、かつてない危機に陥っていた。

化粧気の薄い、幼い容貌を切羽詰まった焦燥と苦痛に歪め、律歌は荒い息を必死にこらえながら、スカートから覗く太腿を頻りに擦り合わせ続けている。

右手は硬くカウンターの端を掴み、左手は店のロゴを記したクリーム色のエプロン越しに、スカートの前をはしたなく握りしめていた。

「んあう……ッ」

カウンター席に体重を預けるように上半身を傾け、律歌の腰は小さく、しかし激しく上下左右にくねる。ぴったりと寄せ合わされた太腿はすりすりと擦り合わされ、感応的な腰の動きをさらに強調していた。爪先立ちになった足元は一時も休まらずに床を叩き、こつこつと忙しいリズムを刻む。

（は、はやく、早く、おトイレえ……っ！！）

ぎゅうっと圧迫された脚の付け根、太腿の間に挟み込まれたエプロンは、ぴったりと少女の下腹部に押し付けられ、緩やかな孤を描いていた。休日の朝から夕方までの長期シフト、その中での6時間にも及ぶ我慢がもたらした猛烈な尿意は、少女の膀胱をぷくりと身体の外側にまでみっともなく膨らませていたのだ。

破裂寸前の乙女のティーポットに注ぎ込まれた、羞恥のホットレモンティが、身動きごとにたぷんと揺れ動く。湧き起こる猙獰な尿意をなだめるため、エプロンを掴む手で下腹部を必死に撫でさすり、律歌はしきりに時計の針を見上げていた。

現在 4 時 15 分。解放まで、あと 15 分。

（鷹野さん、杉原さんっ、まだ来てないの……？ ……いつもなら、もうとっくに入ってる時間なのに……！！ あああ……、お願い、早く……っ）

救いを求めるようにスタッフルームを覗く律歌だが、次のシフトの二人はいまだやってくる気配がない。交代まであと 13 分。律歌は祈るように唇を噛む。

今日も、律歌はバイトを休んだシフトの二人に変わり、急遽呼び出されて接客にあたっていた。当然のようにフロアには律歌一人しかおらず、調理担当の店員はフロアの事など気に掛けてくれない。普段の倍近い仕事を律歌は一人でまわさねばならなかった。トイレに行く暇などないままに。

接客中はトイレ厳禁——そんな命令がチーフから出されたのは一週間前のことだ。

もともと、『エポック』は店舗面積に対して座席の多い店だ。駅前にコンビニがないことから、トイレに寄る客も少なくない。しかし先日、シフトに入っていたアルバイトが一つしかないトイレ（男女兼用）を占領し、30 分近くも他の人間が立ち入れないという事件が起きてしまった。

彼女が体調を崩していたという事情はあったものの、トイレに入れない客が激怒し、チーフでは間に合わず急遽店長が呼び出されて謝罪するという騒ぎにまで発展したのだ。

そして、以前から一部の不真面目なバイトがトイレに入ると称して長時間個室に居座りサボっていた事実も判明したのである。

店長は激怒し、ただ地の書弾を下した。問題のあるバイト達を辞めさせ、残った者たちにも、シフト中の店舗のトイレ利用禁止を厳命したのである。

あまりの横暴に、律歌達は当然抗議をした。バイト中のトイレ禁止、それは女の子たちにオシッコをするなどと言っているのと同義である。それで店が成り立つわけがないと声を上げるバイトの少女達に、渋々折れたチーフと店長の交渉で、ビルの 5 階にある事務所の共同トイレを使っていいいことになったのであった。

「う、はあ、ああ……っ」

肺の中の空気を絞り出すようにして、律歌はエプロン越しに下腹部の強張りをきつく押さえつける。爪先立ちになった靴がぐりぐりと陽に焼けた絨毯に擦りつけられ、短めのスカートから覗く脚は休むことなく擦り合わされていた。

はち切れんばかりの尿意は一時も緩むことなく少女を責め苛み、なお飽き足らず律歌に屈辱の姿を強いていた。

（だっだめっ……出ちゃう、オシッコ、オシッコ出ちゃううう……！！ んあ、あああつ、あ、だ、誰か、誰でも良いから、はっ早く、はやく来てえええ……！！）

エポックのあるビルは築 40 年のおんぼろで、エレベーターは呼んでもなかなかやって来ず、3 階から上の階段は半分がた荷物置き場になるほどの足の踏み場がなく、おまけに照明も薄暗く狭い。防災上明らかな欠陥で、何度も指摘を受けていながらもオーナーはそれを放置しているという噂だ。

5階のトイレと言うのもお世辞にも綺麗とは言えなかった。男女の区別のない共用で、事務所の人たちが頻りに出入りする上、思わず顔をしかめたくなるほど煙草の匂いが染みついている。年頃の少女達にとって入るのは躊躇われる場所だった。

バイトの3分の1が辞め、新人も入っていない状態で新しく組まれたシフトではフロアの人数も最低限で、一人あたりのシフト時間も3割増となっている。バイトの中で最年少ながら経験もそれなりに長い律歌は、その中でももっとも混雑している時間帯を多く割り振られることになってしまった。

要領の良い子ならフロア仕事の際を見計らってこっそりと席を外し、手早くトイレを済ませてくることもできたのだろうが——一時的とはいえフロアを空っぽにするなど、律儀な律歌には、思いもよらない事であった。

「お、お待たせっ、しましたッ……」

注文のオープンサンドとホットケーキ、ダーズリンとアイスティーをトレイに乗せ、律歌は必死に笑顔を作ってテーブルへと向かう。足元はふらふらとおぼつかず、トレイも小刻みに左右に揺れ続けている。

ただならないバイト店員の様子に、4人掛けの席に座っていたサラリーマンと思しき二人連れが表情を変える。

既にじっと立っていることもできないほど切羽詰まった律歌は、少しでも尿意を紛らわせようと我慢のステップを踏み続けているのだ。内股に寄せ合わされた腿は膝を激しく擦り合わせ、腰はみっともなく前後に揺れ動く。さらにもう我慢の効かないもう一方の手は、エプロンの上から股間を思い切り握り締めてしまっていた。

飲食店のバイトには、許されない姿である。

「あ、はああ……っ、ご、ごちゅう、ものの、っ、あ、アイス、ティー、とっ」

トレイの上、グラスの上のアイスティは地震にでも遭っているかのように激しく揺れ動き、水面を揺らしていた。ちゃぶんと跳ねた水滴が、トレイの上にはばたつ、と散る。

同時。

「っあ、あッ」

律歌はぱくぱくと口を開け、反射的に股間を握り締める手に強烈な力を込めた。トレイが大きく傾き、ティーカップの中身が大きく溢れる。

それでもなおはっきりと。乙女の脚の付け根のティーポットから、噴き出した水流がじゅじゅうっ、と下着にぶつかり広がる音は、静かな店内に聞こえてしまった。

（っ、あ、あ、いや、あああ……、出、出ちゃ、……！？）

ぶじゅ、じゅ、っじじゅうじゅっじゅううっ。

断続的に響く下品な水音。律歌の足元に、ぱぱっと水滴が散る。女の子の出口から溢れだした恥ずかしいオシッコが、下着やスカートをみるみる濡らし、押さえ込んだエプロンまで染み出してみるみる色を濃く変えていく。

「あ、あっあ、だ、っだめっ」

がちゃん、ほとんど投げ出すように乱暴にトレイをテーブルの上に叩き付け、律歌は自由になった両手でエプロンの股間をきつく握

り締めていた。身体を半分に折る様にして前屈みになり、外に出せと暴れ回るオシッコの居場所をなんとか確保しようと懸命に下腹部を揉みほぐす。

少女が白い喉を喘がせ、細い指でぎゅうぎゅうと脚の付け根——女の子の大事な場所を懸命に揉みしだく様を、客たちは呆気にとられて見つめていた。

「はああ……あう、あ、す、すみませっ、すぐお拭き、いた、し、……っ」

失態に気付いて謝罪の声を絞り出した瞬間、律歌は脚の間にじゅううっとなげき出す熱い奔流を感じてしまう。握り締められた指の隙間、エプロンの染みがみるみる広がり、足元へ向かってその領域を拡大してゆく。

「んああ……っ」

腰骨がじんと熱く痺れ、身体の下に穴が開いてしまったかのような喪失感がぶるりと少女を震わせた。背筋を貫く黄色い稲妻に、律歌は激しく腰を揺すり立て、扇情的なまでの喘ぎ声を喉から押し出した。

「っだ、ダメ……え！！」

強く息を繰り返し、ぎゅっとなげきつめて最後の抵抗を試みようとする律歌。

（出ないで、出ないで、出ちゃだめえええ……ッ！！）

だがもはや願い空しく、少女の股間は断続的に響くじゅううっとなげき出す音を押しさえ込めない。ひび割れた水門では、もはや乙女のダムの上を越えて蓄えられるオシッコの水圧に抗する事はできなかった。

ぱしゃぱしゃと足元に注ぎたてのホットレモンティが迸り、陽に焼けた絨毯の上にまで一面に黄色い雫を広げてゆく。

トイレ禁止の6時間で、丹念に抽出された乙女のホットレモンティの濃い匂いが、湯気を伴って立ち込める。

取り返しのつかない事態をしてしまったことを、頭の隅で認識しながら——ばちゃん、と自分の作りだした水たまりの上に座り込みながら、律歌の意識はゆっくりと閉じていった。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 路地裏のお話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 11/25/2012 12:45:33

BODY:

(ヤバイ……)

もう1 2月にもなろうというのに、汗が首筋を伝う。

朝が寒かったのでいつもより厚着をしてきたのも良くなかった。コートならば脱ぐこともできるが、タイツはそうもいかず、汗ばんだつま先が靴の中で気持ち悪い。

気ばかりが焦るものの、思うように歩みは捗らず、行く先はまだ遠い。

余裕はもう残されておらず、有り体に言って危機的状態、ピンチであった。

そもそも乙女の慎みとして、こんな事態に陥らないように常日頃から努めておくのは当然であろう。映画みたいなピンチからの一発逆転よりも、そんなピンチを招かないように、普段から気を付けておくことのほうが現実ではよっぽど大切なのだ。

それを怠ったのだから、文句は言えない。でも、そう気付けるのは大抵は切羽詰まってからのことであり、後悔したって後の祭りなわけ。

まあ何が言いたいかと言うと、要するに。

私——佐々木春香は、今とても、オシッコがしたい。

(うう……)

トイレ。比喻抜きで、女の子にとっての人生の重要課題の一つだ。男性諸氏には思いもよらないことだろうけれど、どんな場所でもぱっと済ませてしまえる男の子とは違って、女の子にとってのオシッコのお手洗いというのはとても大切で重要で、なによりも必須のものである。

考えてみて欲しい。トイレの無い場所で丸一日、2 4 時間を過ごさねばならないと言われた時、楽なのは男女のどちらか？

男の子がそこいらで立ってオシッコを済ますのは、『まあ仕方ない』『そういうもの』として受け入れられるのに、たとえ切迫した事情があったとしても女の子がそんな事をするなんて『はしたない』『みっともない』『恥ずかしい』『あり得ない』のだ。

そして今まさに、私はその危機的状況にある。

脚の付け根は痺れるように疼き、尿意からの解放を急かしてくる。一秒ごとに増してくる下腹部の重みを堪えながら、そっと周囲を窺う。

ひとけの少ない住宅街とは言っても、街中に私の求めているものがあるはずもない。このあたりには公園も学校もコンビニも見つからない。あるいは私が見落としているだけなのかもしれないけれど、そのために来た道を戻って探し回るような時間の余裕はない。

一刻も早くトイレを見つけて、そこで緊急を要する用を済ませなければならないのに——そのための場所はどこにも見当たらないのだ。

(んっ……)

ぶる、と身体が繰り返し限界を訴える。意識せずに震えだす下半身は、2時間ドラマのラスト15分で崖の上に追い詰められた犯人みたいな状況だ。

少しでも早くこの住宅街を抜けて、コンビニか何かのある大通りに出ないと——本当に間に合わなくなってしまう。

とは言えここは天下の往来。あまりみっともない格好は出来ない。本当ならもう、両手でぎゅっと脚の付け根を押さえる『ママ、オシッコ!!』の格好をしてしまいたいくらいなのだ。

不自然な内股と小さな歩幅でひょこひょこと歩く私の格好は、相当みっともない格好になっていることは疑うべくもなく。せわしなくかかとを踏み鳴らしてしまう足は、意識せずとも人目につかない薄暗い路地裏のほうへと向いてしまうのだった。

(……………えっと)

そんな具合だから、『その場所』が目に入ったのもただの偶然でしかなかった。車が一台通れるくらいの細い道の傍ら、区画整備の不具合で出来た、家と家の間のちょっとした隙間。陽の指さない行き止まりの路地だった。

奥行きはざっと5メートル。今は半分ゴミ収集場のような感じで使われているらしい。ネットを被ったゴミバケツの陰には、汚れたビールのケースのようなものも積まれており、ちょうど通りからの視線を塞ぐ遮蔽ができています。

身体を屈めてしゃがみ込めば十分に、周りから見えなくなるだろう。

都合良く左右の家にも窓は見当たらない。ほんの数分くらいなら、よっぽど運が悪くなければ誰も通りがからないだろう事は明らかだった。まして、こんな路地裏の隅っこをいちいち覗きこむようなことはまず絶対にしないだろう。普段なら気にも留めず通り過ぎていたに違いない。

まさに、今の私にとって、そのための準備されたようなおあつらえ向きの場所だった。

我知らずのうちに、手がスカートの前をぎゅっと押さえる。

「……………はっ!？」

じやり、と。ごくごく自然な動作で、踏みだした脚が一步前へと進んでいた。

何のためらいもなくそちらへと向かおうとしていた自分に気付いて、私は慌てて首を振る。かあつと頬が熱くなるのが分かった。

この、人気もなく静かでひっそりとした、落ち着いてしゃがみ込むのに最適な物陰で、いったい私は『ナニ』をしようとしていたのか。

(……、いや、いやいやいや。待て、落ちつけ私。……いくらなんでもこんなトコでってのはマズイでしょ。乙女としてさあ。……うん、ない。……ないない。ありえないって!!)

動揺した頭がぐるぐると意味のない否定の言葉を繰り返す。

が、その一方で、『ありえない』と打ち消したその思考に従って立ち去ってしまうべき足は、地面に張り付いたまま動かなかった。

(だ、だって、ここって、普通の路地じゃない。ねえ？ ……ほら、確かに誰も見てないし、気付かないだろうけど……こんなトコでなんて……女の子としてちょっと終わってるよねえ。まだ、その、もう少し我慢できないってわけじゃ……ないんだし。第一、紙とかも無いじゃない？ ……いや、ティッシュだっても、持ってるけどさ……それはほら、もっと別のところで困った時のための用意だし……)

いざ意識し出すと、もうそこを『そのための場所』として見てしまうことは止められなかった。一度トイレを目の前にしてしまえば、もう我慢がきかないものなのだ。女の子ってやつは。

止めたはずの小さな足踏みが再開する。腰をよじってしまいながら、私はその路地裏の中を何度も何度も路地裏の中を確認してしまう。

無論のこと、だれの視線もない。

つまり——誰にも見られることなんか、ない。

(そ、そもそも我慢できるとかできないとかそういう問題じゃなくてっ、ちゃんと、とっ、トイレまで、が、我慢しなきゃだめなんだって話で……！！ こ、こんな、トコじゃ……だ、誰かに見られちゃうかも、だし……じゃなくて！！ 見られるとかいう以前に、ここで、お、オシッコ、しちゃう……なんてのが、絶対にナイって……！！)

きゅん、と下腹部がイケナイ疼きをあげる。

幼稚園の子みたいに、我慢がきかなくなっていた。ぎゅっと唇を噛み、踏みとどまろうとするのに——むしろ身体はその正反対に、オシッコの準備を始めてしまう。

私の身体は、小さな路地裏をトイレと同じ『オシッコを出来る場所』として認識してしまっていた。ただそこに立っているだけで尿意はちりちりと脚の付け根に集まり、鉄壁に保っているつもりだった我慢の心は脆くひび割れてゆく。

今すぐに、ここに下着を下ろしてしゃがみ込んでしまいたい。

(ち、違うでしょ。ほら！！ ば、馬鹿な事考えてないで、ちゃんと、トイレ……探さなきゃ……！！)

乙女の理性を奮い立たせようと叱咤するが、羞恥心すらもう正常な働きを放棄していた。ずっしりと下腹部にのしかかる重さが、私の足をここに縛り付けているかのようだった。

(っ……だ、だから、ダメだってば……)

もちろん、ここは本来女の子がおしっこを許される場所ではない。そんな事は分かっている。でも、ここには誰にも気付かれずにこっそりとトイレを済ますための条件は十分以上に揃っているのだ。

このままだと見つかるかも知れないトイレを探しだす苦勞を思えば、この誘惑はあまりにも抗いがたい。

(……オシッコ……っ)

例えば、あの、大きなポリバケツ。

(えっと……ちゃんとしていて中がヒビ割れたりしてなきゃ、こぼれないで中に溜まってくれるよね……。蓋すれば、匂いも分からなくなるし……さすがに大きさは十分——というか、いくらなんでもあのバケツ一杯になるくらいたくさんオシッコは出ないって。確かに相当我慢しているから結構な量かもしれないけど……)

例えば、その隣の、くしゃくしゃの新聞紙。

(紙なんだし、少しくらい水を吸収してくれる、よね？ でも、スポンジじゃないんだしやっぱびちゃびちゃになるかも……それに記

事の写真……この前のチャリティコンサートの記事じゃん……うう、写真だけど、あそこにオシッコって……やだなあ)

例えば、横倒しになって転がる空のビール瓶。

(……多分、ずっとここにほったらかしだし、雨とかが溜まったんだって思ってくれるかも……。でも、あんなちっちゃい瓶の口……上手く、オシッコを入れるかな……そ、それに、んっ、あ、あの中に全部……入るかな……？ も、もしかさんオシッコ出し過ぎて、外に溢れちゃったりしたら……)

例えば、丸めてネットに絡み付いたビニールのゴミ袋。

(ん、っと……た、確か、小学校の遠足の時に使った携帯トイレみたいにすれば良いから、何とかなるかも……ああ、でもあのゴミ袋、たぶん穴とか空いてるよね……それに、終わった後も……ここ置いといたら、中身が透けて見えちゃうかも……)

ゴミ捨て場に転がる何もかもが、オシッコをするための器具に見えてしまう。どうすれば一番オシッコが気付かれないだろう、と想像することをやめられなかった。

ここは本来、女の子がそんなことをしていい場所じゃないはずなのに。

(や、やっぱり一番よさそうなのはあのバケツ……かなあ。でも、あのバケツにするって、その、跨ぐか、足を広げて——その、男の子みたいに立ったままオシッコ？ うう、そんなのやっぱり恥ずかしい……っ)

どうすれば、ここで一番うまく、オシッコができるか——そもそもそんな事に考えを巡らせる事自体が異常なのだということは、もう思い付けもしないまま。

わたしは足踏みを続け、足を擦り合わせながら、路地裏でのオシッコの方法を思案し続けるのだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 部活イジメの話・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 12/26/2012 17:23:24

BODY:

学校という特異で閉鎖的なコミュニティでは、いじめはいつも突然始まる。些細な理由とくだらない根拠で選んだ、自分とは“違う”相手を輪の中から彼女を弾くことで、残る多くの安心が得られるからだ。

その際、いじめの対象に非があるかなんて関係はない。無情で無慈悲な偶然で、スケープ・ゴートに選ばれた対象へ、想像もできないほどひどい仕打ちが為されることもある。

クラスに比べて教師や大人の干渉が薄く、上級生下級生の上下関係も強い部活動という環境では、発覚が遅くなることも手伝ってさらにその傾向は加速し、より陰湿なものとなることが多い。

バスケット部の1年生、碧山愛衣の場合もそうだった。

「ふあ……」

さして特別な始まり方をしたわけではないその日の朝。愛衣はマフラーの中に顔をうずめ、欠伸と共に腫れぼったい眼を擦りながら通学路を急ぐ。

一昨日に続いて昨夜も夜更かしをし過ぎて、すっかり寝坊してしまったのだ。時刻は結構ぎりぎり、予鈴と同時に教室に駆け込めるかどうかというところ。部活の朝練をまるまるすっぽかしてしまったことになるが、今更何を言っても仕方がない。

（ってか、朝六時に集合とかってのがやってらんないのよね……）

そもそも愛衣は、あまり真面目に部活に取り組んでいないのだ。朝練のサボりの常習犯であるだけでなく、放課後も気分がのらない時は適当な理由をつけて先に帰ることが多かった。もともと真剣に全国大会を目指すようなレベルの部でもないし、内申に影響するとも思えない。真面目にレギュラー争いをするのも馬鹿らしいと考え、学生らしい青春を謳歌していたのである。

ふああ、と欠伸を噛み殺しながらやって来た昇降口には、数名の顔見知りのジャージ姿の部員たちがたむろしていた。

「おはよー」

珍しいなあと思いながらも、なんの気なしに手を上げて挨拶をする愛衣だが、彼女達はそれに答えもせず、愛衣を見るなりくすぐりと笑い合いながらどこかへ立ち去ってしまう。

「……………？」

無視されたことに多少むっとしながらも、愛衣は靴を脱いで上履き入れに向かう。しかし上履き入れの中は空っぽで、『放課後、体育館裏まで』とだけ書かれた手紙が一枚、残されているだけだった。

「なにこれ。最悪……」

手紙を数度見返して、愛衣は呻く。

早々と予鈴が鳴り響く中、愛衣は憤りと共にくしゃりと手紙を握りつぶした。

(わけわかんない……何なの、もう)

体育館履きの足を椅子の上でぶらぶらとさせながら、愛衣は胸中でぼやく。授業も右から左へと聞き流し、上の空だ。

自分で言うのもどうかと思うが、愛衣はどちらかといえば社交的な性格で、部活でもクラスでも皆に溶け込み、上手くやっている自信があった。だからまさか自分がいじめの被害に遭うなんて想像したこともなかったのだ。

大体が、いじめなんていうものは大概、根暗でおどおどしたような子が標的になるものだからという思い込みがあったのも確かである。

(誰よ、こんな事しようなんて言い出したやつ……小学生じゃないんだからさ)

昇降口での態度からして、部活メンバーの誰かである事は間違いないだろう。ざっと脳裏に彼女達の顔を思い描いてみるが、誰もありそうで誰とも思いにくい。こんな子供じみた事をするなんて、愛衣にはまったくの予想外だったのだ。

体育館履きで一日を過ごす羽目になり、教師には会うたびに説明を求められ、『ごめんなさい、忘れました』と答えて注意を受ける煩わしさ。教室のどこかからくすくすという忍び笑いが聞こえるような気もする。

卑怯なやりくちにやり場のない怒りを抱えながら、愛衣はまだ見ぬイジメの主犯へどう言いかえしてやろうかと、そんな事ばかりを考えていた。

そして待ちに待った放課後、愛衣は大急ぎで着替えるとすぐにひとけのない体育館裏へと向かった。メモに素直に従うことになるのは癪だったが、いったい誰が相手なのかを確かめたい、堂々と糾弾してやりたいという気持ちが強かったのだ。

その時——いつもなら部活前に習慣で寄っているトイレに入らなかったのは、頭に血が上っていたからだろう。後になってみれば、あまりにも軽率だった。

体育館裏で愛衣を待っていたのは、——バスケ部の先輩達と、同級生が3人。気付けば愛衣は、薄笑いを浮かべた彼女達に取り囲まれていた。

ステロタイプな展開に思わず出かけた溜め息を飲み込み、愛衣は先輩達を睨みかえす。

「あの、なにか用ですか？」

「用があるから呼んだんじゃない。頭悪いのねえ」

先輩の一人が、いかにも悪役口調で答える。

なんだか出来の悪いドラマを見ているみたいで内心爆笑しそうになったのを堪え、愛衣はじっと口をつぐんだ。

「生意気なのよ、あんた。真面目に練習でなくせに、1年の分際で部長に口出ししてさ」

「そうよ、あんたみたいに不真面目な奴に絡まれて、部長も迷惑だって言ってたんだからね！」

「そんなわけだからさ。先輩としてちゃんと指導してあげないとって思ったわけ」

まるでステレオのように左右で口々に叫ぶ同級生二人の抗議が続いて、先輩がにやにやと笑う。彼女達のあまりのレベルの低さに愛衣は頭を抱えなくなった。呆れながらじろりと同級生を見返す。

「あんた達だって1年じゃない。それに、私が誰と話したって勝手でしょ。ガキみたいに嫉妬して、恥ずかしくないの？ ……まさか、先輩までそんな理由でこんな子供みたいなことしたってわけですか？」

「……そっか。そういう口きくんだ。愛衣ちゃん、反省してくれたらそれで済まそうと思ったんだけどな」

先輩の一人がそう言うと、いきなり左右の同級生が愛衣の肩を掴む。

咄嗟の事に跳ねのけられず、ちょっと、と声を上げかけた口が無理やり開かされた。愛衣の唇に、プラスチックの飲み口がぐいと押し付けられる。

「んぐ、んんううっ！？」

がぼりと、ペットボトルの中の液体が揺れた。

上向かされた口の中に、ペットボトルの飲み口が強引に突っ込まれたのだ。むせかけたところに、ひどく冷たい得体の知れない液体が流れ込んでくる。

本能的に危機を察し、咳き込み暴れる愛衣だが、同級生たちはあらかじめ予想していたかのようにしっかりと愛衣の身体を抑えつけていた。少女の抵抗空しく、液体はみるみるうちに愛衣の喉奥へと流し込まれてしまう。

多少は吐き出したものの、液体のほとんどは強制的に、愛衣の胃の中へと注ぎ込まれてしまった。

「げほっ、ごほ……っ、な、なに、するの、よっ……」

「えらいえらい。全部飲めたじゃない。……よっぽど喉乾いてたのかしら？ その分だともっと飲めるわよね」

先輩が嫌な笑顔を見せる。答えるよりも早く、もう一本。ペットボトルが咳き込む愛衣の口へと押し込まれる。琥珀色の中身はお茶のようだったが、妙な苦みもあり、愛衣は懸命に歯を食いしばって抵抗する。

しかし所詮は多勢に無勢。二本目のペットボトルの中身も、その大半を飲まされてしまい、愛衣はがっくりとその場に倒れ込んだ。ジャージがこぼれたお茶で濡れるが、同級生たちは構わずにその身体を支え、お互いに顔を見合わせてにやにやと笑う。

「さ、もうすぐ部活の時間だし、行きましょ碧山さん。今日は部長も居ないから、そのぶんしっかり練習しなきゃね」

「い、痛い、放して、っ。ちょっと、やめっ、離してっ」

極上の笑顔を覗かせながら、からん、と空になった 500mL ペットボトルを投げ捨てた先輩の指示で、愛衣はそのまま直接、練習場所の体育館へと連れて行かれることになった。

その後、すぐに部活の練習は始められた。愛衣を囲むように先程の同級生たちが並び、しっかりと監視を続けている。得体の知れない彼女達の行動に、愛衣は強く出られないまま練習に参加する。

他の部活メンバーに混じって、準備運動、基礎練習と、およそ 1 時間のメニューをこなした頃には、愛衣の様子はみるみるおかしくなり始めていた。

「ほら、しっかりしてよ愛衣。まだへばるには早くない？」

「ねー？ 先輩、愛衣ちゃんが真面目にやってませんよー」

「っ、……い、いいから、そんなことより……と、トイレ……っ」

練習が始まって 1 時間半。顧問の教師も、頼りになる部長も不在の中、愛衣は身を丸め、苦しげに息を荒げる。有無を言わずに練習を強いられた愛衣の下腹部は、体操服の上からでも分かるほどにパンパンに膨らんでいる。少女の膀胱は硬く張りつめ、今にも破裂しそうなほどに恥ずかしい液体が、たぷんと揺れる。

さっき飲まれたお茶が原因なのは明白だった。まるで膀胱を絞り上げるように、びくびくと蠕動する熱い衝動が一気に下腹部を駆け下る。猛烈な尿意を催して前屈みになる愛衣の震える手脚を、先輩達の悪意に満ちた視線が無遠慮に這い回った。

懸命に訴える愛衣を、部活のメンバーは決して解放しようとしない。

「お、お願いしますっ、トイレに……行かせてくださいっ」

「だーめ。却下。さっきから全然ダメじゃない。碧山さん。真面目に練習しない子には特別メニューよ」

こんな嫌がらせをする相手に敬語を使うことを強られる屈辱に、愛衣の顔は耳まで赤くなった。しかし先輩達は取り合おうともせず、強いパスを愛衣めがけて放つ。

「ほら、どうしたの！！」

「や、っあ、やだっ、やめっ」

震える腰、覚束ない脚、股間を押さえたまま離せない手で、バスケットボールが上手く捕れるわけもない。容赦ない勢いでばしん、とパスをぶつけられ、下腹部に響いた衝撃に、じゅわっ、と下着の奥に熱い湿り気が広がる。

「んああ……っ」

びくびくと身体を震わせる愛衣の下腹部を狙うように、さらにパスが浴びせられる。重いボールがバウンドし、擦り合わされる膝裏を直撃した。

「あああ……嫌、っ、ああ……」

「ほら、愛衣ちゃん！！ どうしたの！！ ボール取ってきて！ 先輩もダメだって言ってるじゃん。ねえ？」

「まだ全然途中なんだから。最後まで終わらせるまでトイレなんか行っちゃダメだよ」

「そ、そんなの……、無理っ、無理よお！！」

今にも崩れ落ちそうな膝を寄せ合い、下腹部を絞り上げるようにして押さえ込む。懸命におしっこを我慢しなければ今にもこの場で漏らしてしまうのだ。そんな愛衣の恥辱の姿に周囲からみっともない、と嘲笑が飛ぶ。

ここにはもう誰も味方はいない。じくんとおしっこの出口が熱くなり、込み上げてくる尿意に、愛衣は目の前が暗くなる。

放たれるボールをほとんど無視するように避けると、愛衣は体育館のドアへと背中を向けていた。出来る限りの全速力で、外を目指す。

「あれー？ 愛衣ちゃん、ちょっと、どこ行くつもり？」

「と、トイレ……出ちゃう、おしっこ……っ」

だが、ふらつく足で、圧倒的多数の先輩達を振り切ることができるわけもない。体育館を出たすぐのところで、愛衣は捕まり、彼女たちに取り囲まれてしまう。

「碧山さんったら、そんなにオシッコ行きたいんだ？ 我慢できないんだねえ、いい歳してさ」

必死に許可を請う愛衣の、体操服に包まれた下腹部を、先輩がさわさわと撫で上げる。悪意ある優しさをこめ、ことさらに尿意を加速させるその動作に、愛衣は声をあげて身をよじった。

「や、やめっ、出ちゃ、うう、っやめて、くだ、あいつ」

「ん？ 何言ってるのかよく聞こえないよ、碧山さん。なあに？」

唇が震え、歯の根が合わず、呂律も回らない。限界を超えた尿意が身体のコントロールを奪い去る。閉じ合わせた足の奥にじゅじゅ、と熱い雫が滲みだす。目の前に迫る絶望に、愛衣は必死に抗おうとした。

「っ、離し、てええっ！！」

押し寄せるオモロシの気配。女の子としてあってはならない事態の恐怖に、背筋に怖気が奔る。愛衣は全身の力を振り絞り、手足を抑えつけようとする少女たちの腕を強引に跳ね除ける。

「っ、痛っ！？」

悲鳴を背中に、愛衣は体育館を飛び出した。重いドアを開け放ち、渡り廊下を走る。誰かが突き飛ばされて倒れたかもしれないけれど、あんな強引な手段で愛衣を辱めようとしたのだ、いまさら遠慮なんかしてられない。

（と、トイレ、トイレ！ トイレっ！！ ……っ、オシッコ出ちゃうっ！！）

一番近い体育館横のトイレへと一目散に駆け込み、一番手近な個室のドアを掴む愛衣だが、
「え、嘘、っ！？ なにこれ！？」

閉めようとしたドアがごとんと軋む。

愛衣は悲鳴をあげた。飛び込んだ個室のドアの鍵が、ご丁寧にもしっかりと壊されていたのだ。慌てて隣の個室を確認するが、状況はまったく同じ。さらに内股で倒れこんだ三つ目の個室、全開のままで固定されたドアの奥で、愛衣の身体を猛烈な震えが襲う。這い降りる熱が腰骨から恥骨を伝い、股間の先端へと集まってゆく。

「あ、あ、あっああ……」

下腹部を圧迫して膨らんだ水圧がそのまま、一気に出口へと殺到する。下着と体操着に包まれた足の付け根で、じゅじゅう、ぶしゅうっ、と激しい水音が響く。愛衣のジャージの股間を見る間に染め上げ、広がったお漏らしの大きな染みから、前屈みになった足の間を押さえていた手のひらに、勢いよくおしっこが注がれる。

たちまち手のひらを溢れた黄色い雫は、トイレの床のタイルにぱちゃぱちゃと飛び散り、隅の排水口へと流れて大きな川になっていった。

「ふふーん。愛衣ちゃん、どうしたのかなー？」

「愛衣ちゃん、おトイレは間にあったかしら？」

何もかもを察したような、同級生達の声。皆の前であろうことかオモラシの瞬間を見られ、羞恥にがくがくと身体を震わせながら、愛衣は必死におしっこの出口を締めつけようとする。

けれど、力の入らない括約筋では押し寄せる濁流の勢いを塞き止めることはできず、排泄孔をひしゃげさせ、ぶしゅ、じゅじゅう、と噴き出す熱い水流の勢いを乱すだけだった。愛衣はただ、酸素の足りない金魚のように、言葉にならないまま口を半開きにして動かすばかり。

トイレの床一面を占領するおしっこの大河の、水源となった愛衣の股間からは、なおも激しく湧き上がっては滝のように流れ落ちる恥辱の水流が、繰り返しタイルを叩いていた。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 男子トイレ閉じ込めの話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 我慢

CATEGORY: 我慢

DATE: 12/26/2012 17:24:38

BODY:

上手くまとまらなかったのですごく中途半端。

<hr size="1" />

いったい、なんの冗談だろう。

人に話したら笑われてしまうような現状を、私はけれど決して笑い飛ばすことなどできないままに、口を嚙む。

私がここで目を覚まして2時間——つまり、私がこの部屋に閉じ込められて2時間以上が過ぎている。——私の携帯の時計が狂っていなければ、だけど。

「んあ……っ」

身じろぎとともに、思わず小さな声が漏れる。

腰上を伝う、耐えようのない刺激が、ちくちくとおなかの中を刺激する。まるで焦げるようにむず痒い感覚は、刻一刻と激しさを増していた。

決して綺麗とは言い難い床の上に、力なく腰を下ろしたまま。私は懸命に、『そこ』から意識を遠ざけようとしていた。

けれど、気を失う前にたっぷり口にしたジュース2杯が、いまや耐えがたいほどの水の誘惑を伴って、足の付け根に押し寄せてきている。

『そこ』から視線を逸らそうとすればするほど、私はちらりちらりと、部屋の片隅を見つめてることを止められずにいた。

「っ…もおっ…」

憤りとともに、怒りが口を衝いて出る。

何もかも自由にならず、やがてはこの状況を仕組んだやつの思い通りになってしまうことが、たまらなく癢だ。

「っ、ねえ、見てるんでしょ！？ いい加減、馬鹿なことはやめてよ！！」

振り仰いだ天井。

たぶん、どこかで見ているであろう誰かに向けて、私は叫ぶ。声が届いているかは果てしなく怪しいが、叫ばずにはいられなかった。

「まだ今なら、大したことにはならないんだから！！ 早く、ここから出して！！ ドアを開けなさいよ！！」

無駄と分かっていでも、叫ばずにはいられない。もう何十回も、何百回も同じことをして、けれど一度も反応はなかったのだ。

でも、だからと言って、やめるわけにはいかなかった。

私にはもうそれくらいに、余裕がない。

今はまだこうして考えている余裕があるけれど、そのうち本当に切羽詰まってしまうば——もう、きっと形振り構わなくなってしまうだろう。それこそがこの部屋を用意したやつらの目的なのだとわかっていても。

私はまた、ちらりと。ほとんど無意識に、見まいと心に決めていたはずの部屋の隅視線を向けてしまう。

そこにずらりと用意された『設備』は、白く輝いて、私の忌々しい視線を受け止めていた。

『それ』は、馴染みこそ薄いものの、決して知らない構造ではない。

たぶんどんな女の子だって、小さな頃には一度くらい目にしたことはあるんじゃないだろうか。お父さんに連れられてとか、学校の掃除の時間に、とか。

けれど、『それ』は私たちには生涯ずっと、関わることのないはずのものだ。

……よっぽど特殊な趣味や、専門に関わるような仕事をしているのでもなければ、まともな神経でそれを欲することなんて普通はないだろう。

そもそも、それを言い出すならいま私が閉じ込められているこの部屋自体、私の人生にとって縁遠いもののはずだった。

——男子、トイレ。

幼稚園やら小学校低学年の頃ならいざ知らず、まさか今になってこんな場所に踏み入れるなんて、それ自体が屈辱だ。けれど私は理不尽にも、この異性専用の排泄設備の中に、閉じ込められてしまっていた。

歓迎一色のムードの中、美味しいジュースとお菓子を振舞われて、ふいに猛烈な睡魔に襲われ、気付いたら男子トイレの床の上。

あまりにも最悪な目覚めに、気分も最悪だった。勿論すぐに手も顔も洗ったけど、まだ少し吐き気もした。

……あまり自分のことは言いたくはないけれど、私はどちらかと言えば、異性には（同性にも）人気のあるほうだ。告白された回数だって少なくない。

そんな女の子をわざわざこんな場所に閉じ込めるなんて——どう控えめに考えても、不埒な目的があるとは思えなかった。

鞆は無くなってはいたけれど、お財布や生徒手帳は無事。携帯もポケットに残っていたものの、電波は全く入らない。現状、ほとんど時計代わりぐらいにしか役に立たない。

「……………ホント、信じらんないっ……………」

苛立ちまぎれに床を蹴る。かつん、と高い音を立てるタイルの音が、室内に反響する。

靴底に響く衝撃に軽く背中を竦ませ、身震いした。

「んっ……………」

最初のもっと悪い、犯罪的な、誘拐とか拉致とか、別の想像をしていたのだけど。どうやらここに私を閉じ込めた連中の目的は、もっと全然、違うところにあるらしい。

その理由が、この男子トイレの……………私の監禁されている部屋の構造だった。

たぶん、どこかの大きなデパートみたいな建物の中なのだろうと思う。大声を出しても誰の返事もないし、小さく唸るモーターのような音以外何も聞こえないことから、近くに人は誰も居ないのだろうと分かった。

壁のどこにも窓がないことと、天井の換気扇から、なんとなく地下なのじゃないかと想像していた。

全体の広さはだいたい教室の4分の1くらい。女の子1人が座り込んでいるには、少々手広いくらいだ。

天井の照明は蛍光灯で、わずかにちらついて点灯していた。床の汚れ具合から見ても、あんまり使われている場所ではないらしい。

入り口は当然のように一つだけで、そこにはごく丁寧なことに、無数の南京錠とチェーンロックが駆けられており、体当たりでもびくともしないほどに執拗に閉ざされていた。ことによると、ドアの外にも何かかんぬきみたいなものが用意されているのかもしれない。

洗面台がひとつと、個室がふたつ。掃除用具入れが一つ。そして——壁に並ぶ、小用便器がよっつ。それが室内の全てだ。

このうちの個室と掃除用具入れは——男子トイレにだって『大』用の個室があることは、流石に私だって当然の知識として知っているが——それらの個室のドアも、入り口と同じように徹底的に封印されていた。個室の上と下にわずかな隙間はあるが、とてもそこを登ったり潜り抜けたりできるような余裕はない。

要するに。ここには洗面台と男子トイレの小用便器だけが、ずらりと壁に並んでいるだけなのだ。

このトイレの訳の分からないロケーションは、不可解であると同時に不快であり、恐ろしくもあった。目を覚まして最初の1時間くらいは一体これから何をされるのかといろいろと嫌な想像もしたし、怖くなって泣き出しそうにもなった。

つまり、誰かがやってきて、私を動けないようにして酷い事をするのじゃないかとか。どこかに連れて行かれる途中で閉じ込められているのじゃないかとか。このまま誰にも見つけてもらえずに、ここで飢えて死んでしまうのじゃないかとか。

けれど恐らく、私をここに閉じ込めたやつ目的は、そんな事じゃないのだと、しばらくするうちに分かってきた。

時間の経過と共に、私はこの部屋の構造の意味を、嫌でも思い知ることになったからだ。

そう。こんな場所に閉じ込められて、時間が経てば。やがてどうしても、困ったことになってくるものがある。

……………トイレ、だ。

初めのうちからその事に気づいてはいた。けれど、少なくともその時まで、私は尿意なんて欠片も覚えていなかったし——困るとしてももっとずっと先のことだと考えていたのだ。けれど、わずか数十分で、私はもう形振り構わずに股の間を押さえ込んでいなければ

ならないほど、オシッコが我慢できなくなっていた。

けれど、この部屋の中には、洗面台のほかは男子用の小用便器しか残されていないのだ。

その事実気づいたとき、私は少なからず動揺していた。閉じ込められてから1時間近くが経ち、急激な尿意が迫っていた頃だったからだ。

そうしてみると、私をこの部屋に閉じ込めた連中の意図は、それ以外あり得ないような気がしていた。

「じよ、冗談もいい加減にしてっ……ねえ、はやく！！ はやく、ここ、開けなさいよッ！！」

震える爪先をぐりぐりと床にねじ付け、引けた腰を左右に揺すり。一時も同じ姿勢を保てないまま、ぐるぐるとその場を歩き回り、大きく足踏みし、ぴょんぴょん飛び跳ね、両手をきつくスカートの上から脚の付け根に押し当てる。

遠からず限界が来るのは明らかだった。

「ね、ねえ！！ はやく！！ 早く出してよおっ！！ あ、あとで、なんでもするからっ……わ、私っ、も、もうっ……！！」

オシッコ我慢できない。

最後の一言を飲み込んで、狭い部屋の中を何度も見回す。けれどそこにある光景はさっきと変化のないまま。

このまま——もし、本当に我慢できなくなったら。

洗面台と、男性用の小用便器。

あとは、せいぜい床の隅にある、清掃用の排水口。

私はそのどこかで、オシッコを済ませるしかないということになる。

「っ……」

ぶる、と込み上げてくる衝動に、背中が震える。

できるだけ弱味を見せまいと、懸命に堪えていたのが仇になってきた。スカートの上からでもわかるくらい、ぱんぱんにオシッコを溜め込んだ下腹部が、大きく前にせり出してきている。

自然、視線は壁に並ぶ白い、男性用の小用便器へと吸い込まれていく。決して綺麗とは言い難く、誰が使ったのかも想像したくないような、薄汚れた、女の子のためのものではないオシッコの設備。

けれど、——私はいつか、あそこでオシッコを済ませなければならない。

それが嫌なら、オモロシか、あるいはあの洗面台か、このトイレのどこかの床の上で、オシッコを垂れ流すしかない。

それが恐らくはこの部屋用意した奴等の目論見ということなのだろう。

一体どこの変態どもか知らないけれど、思い通りになるのは癪だった。折れかけた心を奮い立たせて、背筋を伸ばす。

「負けるもんですか……っ」

いつ終わるとも知れない我慢は、続く。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 受験と男子トイレの話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 01/20/2013 19:22:57

BODY:

（で、でるう、でちゃうっ……！！ あ、あつあ、だめ、だえっ、でちゃふっ、で、っ、でちゃううう……！！ お、オシッコ、オシッコでちゃう漏れちゃう漏れちゃう！！ っは、はやくっ、はああ、っ、はやくして、早くう、トイレええ……！！）

だん、だんと力強く踏みしだかれる足踏み。ふうー、ふうーと荒い息を吐き、真衣は赤くなった目を見開いて一向に進まない女子トイレ前の行列を凝視する。

もし彼女の視線に力があるのなら、その威力でクラスメイト達の背中すら貫通してしまいそうな有様だ。目の前に並ぶ十人以上の生徒達が今すぐ気を変えて用を足すのを後回すにするか、順番を譲ってくれない限り、真衣は女子トイレの中にすら入ることができない。

そしてそれでもなお、真衣が切望するオシッコのための場所、女子トイレの個室に辿り着くまでにはなお長い順番待ちの時間を耐え抜かねばならない。

だが、客観的に見てそれが叶わないのは、もはや誰の目にも明らかであった。

（んんうっ、で、でるっ、おしっこ、おひっこでちゃうっ、でるう、も、漏れ、漏れちゃうよおおっ！！ はやく、はやく、はやくおトイレさせて、おしっこさせてっ、お、おと、っ、おトイレ、おトイレええっ！！）

大きく前屈みになり、背中を丸め、スカートの前をくしゃくしゃになるまで握り締め。目には涙を滲ませ、唇を噛み締め、顔は熱でも出ているかのように真っ赤。息は荒く、呻き声も喘ぎ声もおさまらない。一時も休まらない足踏みをし、きつく太腿を擦り合わせ、腰はみっともなく左右にクネる。

人一倍羞恥心の強い年頃の、思春期の少女がするにはあまりにもはしたなくみっともない姿。そわそわと落ち着きない少女の目立つ順番待ちの行列の中でも、真衣の様子は一際目立つほどに異様であった。

その理由が、今朝から我慢し続けているオシッコによる、猛烈な尿意であることは、疑いようがない。

「ううっ、うううっ……」

（はやく、いいから早くしてよおおっ、ああっ、う、私、おしっこ、オシッコしたいんだからッ……お願い早くっ、はやく、んあう、あ、ふ、つくうう、お、おしっこ、オシッコ、オシッコ行かせてよおお！！）

全身を持って『オシッコがしたいです』と主張し続ける真衣の前で、暢気そうに談笑する少女達の姿がある。ひとつ前の試験科目の答え合わせだろう。正答に一喜一憂する彼女達に、もはや憎しみとも言える視線を向けて、真衣は歯をきつく噛み締めた。

（なんで、なんで私、ばっかりっ、こんな……あ、朝から、トイレ、できてないのにつ、ああっ、そ、そんなっ、お喋りしてるひま、あったら、早くしてっ……！！ さ、さき、トイレ行かせてよお……！！ んあ、う、で、出ちゃうの、もう本当に、がつ、我慢っ、できないのっ……！！）

女子トイレの行列に敵意すら剥き出しに、真衣は必死に両手に力を込める。閉じ合わせた太腿を強張らせ、同時に激しくすりすりと擦り合わせる。既にぐっしょりと湿った下着が手指に張り付く。ぷるぷると震える脚は、立っているのもやっただ。

それでもなお、断続的なおチビりが少女の手を熱く湿らせた。緩みかけるオシッコの出口をありったけの力で閉ざし、真衣は絶望的な戦いを続けていた。

真衣の、周囲から浮いてしまうほどの切羽詰まった形相には勿論訳がある。

大事な受験の朝、緊張で眠れず夜遅くまで机に向かってしまったこと。十分に余裕を取るはずだったのに寝過してしまった朝。眠気を吹き飛ばそうとして2杯も飲んでしまったブラックコーヒー。試験会場に向かう途中も、先日の雪で電車が遅れ、ほとんどドアが閉まる直前に駆け込んだ乗り継ぎ。

気付けば朝から一度もトイレに言っている暇もなく、真衣の受験は始まったのだ。

普段の数倍の生徒が押し掛けた受験会場では、当然のごとくトイレが不足していた。男女比率は半々だからと、安直に同じ数だけ振り分けた受験生用のトイレという会場側の浅慮が事態に拍車をかけた。

男子と女子では一回のトイレにかかる時間が違う。一度に用を足せる人数も違う。真衣が到着した、試験三十分前には、会場の女子トイレには一階から三階までまんべんなく頭の痛くなりそうなほどの大行列ができていた。

真衣は万全とは言い難いコンディションの中、昨夜から一度もオシッコを済ませられないままで人生の岐路とも言うべき受験に臨

まねばならなかったのである。

それでも 1 科目め、2 科目めの試験には、さほど苦労はしなかった。ちょうど得意科目のだったという事情もある。それでも最後の予習に休み時間にトイレに立つことを諦めて臨んだ、2 科目めの最後の 30 分は、座席の上でもじもじと激しく身をよじって耐えねばならないくらいの猛烈な我慢をせねばならなかった。

試験監督に不審げに見られてしまい、顔を赤くしたのも 1 回や 2 回ではない。

しかし、真衣の不幸はここから始まった。

試験会場の外に出て、お昼ご飯をふいにしてまで空いているトイレを探し回ったのに、排水の故障やら、気分が悪くなって倒れてしまった受験生というトラブルに立て続けに出くわし、ついにトイレに辿り着けなかった昼休み。徒労の果ての最悪のコンディションで迎えた三科目めの試験時間では、細く空いたままになっていたドアから吹き込む隙間風に耐えかねて、ついに下着に恥ずかしいおチビりまでしてしまった。

その直後の長い休み時間、これでおトイレ出来なければもう次の試験でオモラシ間違いなし、という決死の覚悟で臨んだ大混雑の女子トイレ。なんと長蛇の列があとひとりというところでトイレに入りそびれるという悪夢が真衣を襲った。

つまり真衣はただひたすら不安定な姿勢で寒い廊下に並ばされただけという、最悪の結果となった。無理して列に並び続けたため、寒さと緊張でなお大量のオシッコが少女の下腹部に殺到した。猛烈な尿意は真衣の下腹をばんばんに張り詰めさせ、鈍い痛みすら生じさせている。それでもオモラシだけはと懸命に耐えつづけたものの、下着には立て続けに温かいオモラシの証を広げてしまったのだ。

あとほんの少しのところでおトイレに入りそびれ、忘我の体、覚束ない足取りで戻った試験会場、遅刻ギリギリではじまった 4 科目目の英語の試験。もうちょっとのところでちゃんとできるはずだったオシッコが、いよいよ凶悪な本性を容赦なく剥き出しにして真衣を苦しめた。脚の付け根を硬く握り締めたまま、回答欄を埋める事すらできずに極限の我慢を繰り返して、中座しようにもリスニングの放送によってそれすら阻まれ、90 分にも渡って延々と凄まじい尿意に攻め崩られ、少女の排泄器官は、限界を越えて酷使され続けた。

手のひらできつく押さえ込んだ下着の下で、恥ずかしい乙女の粘膜がなんども温かいおチビりを噴き出させ、小さな手のひらを湿らせる。崩壊寸前の水門は鉛筆の先が回答用紙のマークシートを擦る度に緩み、恥ずかしい水音が静謐な受験会場に響いた。

乙女の恥ずかしい熱湯が噴き出し、緊張に硬く強張った女の子の入り口を熱い奔流が通り抜ける度、途方もなく甘美で心地よい解放感が背筋を貫く。

わずかなおチビりすら天上の頂きへ突き上げられるほどの心地よさ。耐えに耐え続けたオシッコが漏れ出す衝撃は、真衣の頭を白く塗りつぶした。

じんと疼き膨らむ膀胱は、熱く湿った砂がぎゅっと詰まって重く下半身にのしかかるかのよう。じゅ、じゅ、とはしたくないオモラシを繰り返すたび、甘い疼きが股間を直撃する。黄色い刺激に耐えかねて、一体、何度机の陰でオシッコを始めてしまう誘惑に屈しそうなことだろう。無限にも思えた試験時間の終了の頃には、座席の上で激しく身をよじってなお食い止め切れなかったオシッコで、スカートのお尻部分にまで色濃く大きな染みを広げていた。

形振り構わずに試験管を呼びとめて、トイレに行かせてもらえば良かったという事に気付いた時には、すでに時計の針はは退出不能時間へと差し掛かっていたのである。

そこからはまさに地獄の 30 分。何十回にも分けて、下着を押さえ込んだ両手のひらの中に、恥ずかしいオシッコを繰り返し

漏らし続けた。ほんの少し出す度に、出口を覚えたオシッコは膀胱の中で際限なく暴れ回る。

ペンを握っている時間よりも、股間を握り締めている時間のほうが明らかに長かっただろう。

度重なるおチビりで黄色く染まった下着の股布とは対照的に、三分の一も埋まっていない真っ白な回答用紙が回収されてゆく。試験の結果は見るも無残なものになっているだろうが——それよりもその瞬間に、真衣の意識はトイレへと飛んでいた。

オシッコができる。もう我慢しなくていい。

号令すら待たずに、真衣は試験会場を飛び出していた。

そして15分。休み時間は残り10分を切った。最後の科目となる試験が迫る中、女子トイレの順番待ち行列はなお途切れる気配がない。

その程中、異様な姿で足踏みをする真衣の内腿にはじわりじわりと水滴が伝い、それを見てぎょっとした女生徒が距離を取る。まだおチビりの段階でありながら、真衣の下半身は既にずぶ濡れの状態だった。

「あ、あつ、あ…！！」

だんっ、だんっだんっ！！ 力強く踏みしだくステップが激しく限界を訴える。

じゅわ、じゅ、じゅっ、押さえ込んだ指の間に滲む熱い湿り気がみるみる増してゆく。限界を越えたおんなのこの身体は、穴のあいたバケツのようなものだ。いくら懸命に耐えようとも、ありったけの力を注ぎこんで括約筋を締め付け、排泄孔の出口を閉ざそうとも。身体の奥深く、おなかの一番底に空いたオシッコの穴から、熱い雫がじわじわと漏れ出している。きつく押さえ込んでいたダムの中身は、ヒビだらけの水門を押し破りらんと激しく波打って暴れ回り、ひくつく出口は水圧に負けて恥ずかしい水流を噴き出させそうになる。

ちりちりと焦げるような羞恥と、限界を訴えるの理性。わずかな気の緩みはそのまま下半身の緩みへと直結し、大事な乙女のバルブを解放せんとする。

硬く押しあてた手のひらに、ぶじゅうっ、と一際激しい水流を感じ、真衣は悲鳴を上げた。

「駄目…………ええッ！！」

下着を突き破らんばかりの猛烈な水圧。すでに真っ黄色の下着には溢れたオシッコを吸収する余裕なんて残されていない。股布部分の保水力をこえたオシッコは手のひらにぶつかって飛び散り、真衣の手が受け止めきれない雫はぱちゃぱちゃと太腿を伝い溢れる。

背中に突き出されてもじもじと揺すられるスカートのお尻に、さらに大きく染みが広がり——ピッタリと寄せ合わされた内腿から、ひと筋ふた筋と黄色い水流が溢れてゆく。

これまでのものよりも大きなおチビりに、酷使された括約筋が一気に緩んだ。なんとか押さえ込んでいた乙女の水風船が一気に収縮する。たぷんと揺れたオシッコが猛烈な尿意の波を湧き起こし、出口を見つけたオシッコは真衣の下腹部の脚の付け根、一番脆い部分へと一点集中攻撃をかける。

ぶじゅっ、じゅっ、じゅじゅじゅじゅうううっ！！

「んあ、は、あ、あああああ……………っ！？」

真衣は眼を見開いて、大きく背を反らした。下着とスカート越しとは思えない激しい失禁が床を打ち、上履きを濡らし紺のソックスを水浸しにしてゆく。きつく下着を握り締めた手のひらすら、その水圧で押し剥がさんばかりの、少女の猛烈な排泄欲求が立て続けに真衣を襲う。

白い肌に爪を立てて握り締められる細い指の間から、ぴゅうっと黄色い水流が噴き出した。リリウムの上に水たまりを広げ始めた真衣から、周囲の女生徒達がぎょっとして距離を取ってゆく。

おチビりなどという言葉で片付けられない、もはやオモラシ同然の事態。しかし、真衣はなおも一層凄まじさを増す尿意に苦しんでいた。朝から懸命に我慢し続けたオシッコが、こんなもので済む筈もないのだ。

ばちゃばちゃと湯気を立たせるほどの水流を足元に迸らせてなお、真衣の苦しむオシッコの大半は、まだ下腹部のダムをずっしりと占領しているのである。

しかし一度破られた水門はもうどうしようもない。いくら気力を振り絞っても排泄孔はじんじんと痺れ麻痺したように熱く疼き、緩む一方となっていた。じゅ、じゅじゅじゅう、ぶじゅっ、とはしたくない水音を繰り返させながら、真衣はその場に爪先立ちになって口を丸く開き、あ、あ、と言葉にならない呻きを繰り返す。

（だ、だめ、出る、……が、我慢、でき、なっ、あ、あああ、ああああっ！？）

またも激しい水流が、びちゃびちゃと脚元に飛び散る。腰がガクガクと震え、体重を支えている事もできなくなった膝がかくんと折れ曲がりそうになる。女の子が限界を迎えた時、自動的に取るそのポーズは、地面に向けてしゃがみ込む、和式便器に腰を下ろすのと同じ『オシッコのための格好』である。

真衣の身体は本能的に排泄の欲求を受け入れようとしているのだ。このまま腰を落としてしまえば、身体の中のオシッコは残らず地面にぶち撒けられてしまうだろう。たとえ我慢したとしてももう時間の問題。オモラシが1分先になるか5分先になるかの差でしかない。

もはや、躊躇の時ではなかった。

「……………～～～ッ！！！」

真衣はぎゅっと目をつぶり、弾かれたようにその場を駆けだした。ずぶ濡れの下半身を引きずり、オモラシの雫を散らしながら、女子トイレに並ぶ行列から外へと飛び出す。

他の階のトイレ？ そんな余裕はない。ここがこんなに混雑しているのだ。今更場所を変えたところで一から行列に並び直した。会場の外のトイレ？ そんなところまで間に合う訳がない。廊下の外の茂み？ 恥もプライドもかなぐり捨てて向かうには、もう遅過ぎる。

もっと近くに、トイレは——オシッコのできる場所があった。

真衣が突撃したのは行列のすぐ隣。がらがらの男子トイレである。

「っ、あ、っあ」

薄青のタイルとペンキで塗装された女子禁制の聖域に、突如踏み込んできた限界寸前の女子生徒。試験前のひと息をついていた、制服姿の男子達が、一斉にぎょっとした表情で真衣を振り返る。

制服のスカートをずぶ濡れにし、恥じらいもなくぎゅうぎゅうと股間を押さえ込み、じゅじゅ、とおチビりの音をさせながらなお必死に

腰を揺すり続ける少女の登場は、男子達にとってはあまりにも突然の出来事だったのだ。

ただでさえお互いのことを強く意識し合う思春期の年代だ。漏れそうなオシッコを必死に食い止めながら男子トイレに突撃してくる女生徒など、滅多に見られるものではない。

「と、トイレ、トイレ、ッ、使わせてっ！！ も、もう、我慢、我慢できないのおっ！！」

それがあろうことか、限界を訴えて叫ぶのだ。男子達の視線をくぎ付けにするのは仕方ないのかもしれないことだろう。本来はこの場に入る事すら許されないはずの真衣は、彼等の返事を待つこともせず、一直線に個室へと向かう。

男子トイレであっても、個室の作りは違わない。だったらそこでオシッコできる！！ ——幼稚園より小さな頃、父親に連れられて入ったデパートの紳士用トイレの構造を思い描き、真衣がとった起死回生の一手であった。

——が、しかし。

それらのドアは見事に全部閉ざされていた。真衣の視界に、女子トイレよりも随分数の少ない個室が、すべて鍵には赤い「使用中」の徴を並べている光景が移る。

男子トイレとて、個室の使用頻度は高いのだ。まして冬の試験会場だ。おなかの調子を崩す生徒は少なくないし、何よりも——女子に比べて、いざ使うとなれば個室の利用時間は長くなるのである。

男子トイレの中で、個室が空くのを待っている男子生徒は、4、5人と短いながらの列を作っていたのだ。

真衣が予想すらしていなかった、ありえない事態であった。

「んあああつ……」

絶望に挫かれ損ねた真衣のスカートの中で、ぶじゅぶじゅつじゅじゅじゅつともはやおちびりなどという生易しい単語では済まさせない派手な漏水音が弾ける。下着を吹き飛ばしてしまいそうな豪快な水流が、少女の足元に激しく黄色い飛沫を噴射させる。

目の前でオモラシを始めた少女に、男子生徒達がどよめきを上げた。

「んう、うあ、くううあああう……」

歯を食いしばり、真衣は個室にふらふらと歩み寄る。ぶしゅつ、となお下着を激しく濡らすのにも構わずに、小さな拳でドアを叩く。オシッコに汚れた手が、男子トイレの個室を激しく打ち鳴らした。

「な、っ、なんで、なんで空いて無いのっ！？ は、はやく、はやくしてっ！！ ねえっ、……んああつ、入れてよ！！ お、おしっこ、おしっこが、でちゃう…でちゃうの、おしっこでちゃうのお！！ も、漏れちゃうの、っ、ねえ、お願い入れてっ、んああ……オシッコ、おしっこっ、おしっこさせてよおお！！」

空しく響くノックの音。その間にも真衣の太腿をじよば、じよばつ、と下着の股布を突き抜けんばかりの激しいオシッコの噴出が繰り返される。これまで両手で押さえていたところを、片手で押さえ込める筈がないのだ。少女の下腹部に圧縮された水圧のまま、オシッコの噴出は止まらない。

「んあああ……っ、でるっ、でるう、だめっ、だめだめ、出ちゃうっ、おしっこでるのっ、でるう！！ おトイレ、トイレ、トイレ入れてええ！！」

いやいやをするように激しく首を振り、髪を振り乱し、だんだんだんとタイルの上を踏み鳴らす。声を枯らして叫ぶ真衣の姿に、男子生徒達は声もない。呆然と立ち尽くす者、顔を逸らそうとしながらも、ちらちらと視線を向ける者、目を離せずにじっと見つめている者。視線のほとんどは、真衣の下半身——オシッコを漏らし続ける少女の官能的なスカートと、その奥に秘められた神秘の部位へと向けられている。

真衣はそれに気付いて、悲鳴を上げた。

「いやあ、いや、っ、いやあ、！！ 見ないで、見ないでおっ！！」

だが、本来この場において異質なのは真衣のほうなのだ。女子禁制のところに許可なく踏み込んできたのも、ガマンできずオモラシを始めたのも、すべて真衣のほうである。男子達に責められるいわれはない。

少女が、誰にも秘密の個室の中でこっそりと済ませなければならない、女の子のオシッコが——衆目の、しかも異性ばかりの場所で、今まさに繰り広げられているのである。気にするなという方が無茶というものだろう。

しかし、同年代の男子達の生々しい欲望に満ちた視線にさらされ、真衣の心はもはやずたずたに引き裂かれんばかりだ。人前でオモラシなんてそれだけでも死んでしまいたくなるほどのことなのに、あろうことか男子トイレの中、しかも同年代の男子達の無数の視線に囲まれて、である。男子達の中には明らかに股間を膨らませている者までおり、これはもう精神的凌辱と言い換えても差し支えない。

「あ、あっあ、ああ……」

真衣の肩がふるふる震える。これまで何度も絶望を耐えてきた少女の心が、いよいよ折れようとしていた。もはや下半身は隠しようもないオモラシでずぶ濡れ、なお激しくオシッコが噴き出し、床に飛び散る。

男子トイレの中は騒然となっていた。あまりの騒ぎに、用を終えて出て行こうとした生徒達は何事かとトイレの中まで戻り、騒ぎを聞き付けた男子生徒達が、用もないのにトイレの入り口に詰めかける始末。いつしか、男子トイレの中には真衣を取り囲むように男子生徒達の人垣ができて上がっていた。

生徒の密集するトイレの出入口の混雑は並大抵ではない。真衣は外に出る事すら叶わなくなっていた。いや、もしそうしようとしたところで、人混みを押しのけて外まで歩いていく余裕など、もう真衣には無かったに違いない。

進むことも戻ることもできず、絶望のただ中に放り込まれ——真衣が最後に縋りついたのは、壁際に並ぶ最終最後の手段であった。

個室の反対側、男子トイレの壁に並ぶ、小用便器。朝顔と呼ばれる男性用の小便器は、横から見ればL字型を描いて、哀れな少女を迎え入れる。

その行為は、ほとんど自暴自棄であつたに違いない。あるいは、せめて、少なくとも、床の上やドアの前ではなく——きちんと、オシッコをすべき場所を選ぼうとした、本能にも似た少女の羞恥心が、荒れ狂う排泄欲求に最後の抵抗を見せたのかもしれない。

「んああああっ！！！」

真衣は、男子専用のオシッコの場所へと、一直線に走り寄ったのだ。

淫蕩な喘ぎ声に白い喉を震わせながら、おヘソが見えてしまうくらい大胆にスカートをまくり上げ、同時に、乙女の最も大切な場所——脚の付け根を覆う慎ましやかな下着の股布を思い切り掴む。本来は白く飾り気のない、ワンポイントだけの子供っぽい白い下着は、度重なるおチビりによる被害と、長時間の我慢でオシッコを擦っては生乾きを繰り返したせいで、見るも無残なほどに黄色く染まっていた。

真衣は股間を覆う布地を引っぺがし、引きちぎらんばかりに真横に引っ張る。たつぷりと湿っていた股布が引き絞られ、ぼたぼたと新鮮な、漏らしたてのオシッコを床に散らす。そうして、てっぺんにほんの少し、産毛を生え揃わせた白い恥丘——ちびり続けたオシッコに濡れ、ひくひくと健気に震える乙女の大事な場所が露わになる。

動作はまさに一瞬。長年練習を繰り返していたかのように、真衣は見事な手際で、「おとこのこおトイレ」でのオシッコの準備を整える。

「いやああ……っ」

絞り出される叫びは、しかし否定のそれではない。こんな有様でなお、少女の身体は、この上なく排泄への歓びに打ち震えていた。

壁に備え付けられた便器とはいえ、小便器の並ぶ壁には衝立などなく、無造作に白い陶製の容器が口を開けているだけである。真衣の細い体と朝顔では少女の痴態を隠すことはできなかった。特に真横からでなら、真衣の露わになった下半身をはっきりと覗き込む事が出来た。

なだらかに盛り上がる下腹部は、真衣がなおため込んでいる猛烈な尿意の源泉である。これだけおチビりを繰り返してなお、少女の細い体を歪めてしまう膨大な量のオシッコ——一体どれほど我慢を続けていたのか、その総量すら想像もつかないほどの恥ずかしい乙女の熱湯である。

下腹部を押し上げるほどの水圧に押され、うっすらと開いた淡いピンク色の隙間がぶくりと膨らむ。濡れ光る柔らかな孔がヒクつき、へっぴり腰のお尻が下品極まりなくかくかくと揺れる。みっともないその姿は、真衣がもう本当の本当に我慢の限界であることを如実に訴えていた。

真衣は不安定な身体を支えるように朝顔の上部、洗浄ボタンのある排水管に手を回した。オシッコがこぼれないようにするには、朝顔の下端に腰を押し付けるようにしなければならない。しかし使い慣れない男子用小便器での排泄に、思い切って腰を前に突き出す事もできず、真衣は引け気味の腰を少しで持ちあげようと爪先立ちになる。

ふらつく身体は、猛烈な尿意に己の身体すら自由にならない少女のもどかしさを感じさせた。

「あ、ああ、あっ」

乙女の股間、細いすじの奥。綺麗な粘膜が震えて忙しくヒク付く。同時にお尻がぐいと引き締まり——捲り上げられたスカートの奥で、慎ましやかなお尻の孔が、ぶくっと膨らんで盛り上がる。

それがまさに、放水のカウントダウンが零になる瞬間だった。

ぶじゅじゅじゅじゅじゅうう、じゅごごごごごごおおお——っ！！

耐えに耐え続けた水圧が、一気に少女の秘密の門を押し破る。待ちかねた、待望の、切望したオシッコの瞬間なのだ。女の子の放水孔が一気に全開に押し広げられ、狭い乙女の粘膜に潰されて太く広がる水流が、小便器の中の排水口を打ち据えた。

濡れてヒク付く乙女の秘所で、野太い水流はまさにダムを打ち砕き進む鉄砲水のように。ぶじゅぶじゅと跳ねかえり猛烈な飛沫を散らし、水撒きのホースを潰したような派手な音が、男子トイレの中いっばいに響き渡った。

「み、見ないでえっ、見ないでええっ！！」

耳まで赤くし、目をつぶり、真衣は必死に叫ぶ。きつくつぶった目元に涙が滲み、頬が上気し、腰がガクガクと震える。しかしやめたと叫ぶ少女とは対照的に、下半身はまるで見せつけるかのように、激しく情熱的な、豪快なオシッコの迸りを小便器へと叩き付ける。

己の下半身がまるで別物のように勝手に動き、『豪尿』とも呼ぶべき、いっそ爽快なほどの男子用小便器を使い尽くした立ちションベンを披露する。そしてそれに伴う鮮烈な解放感——苦痛でしかなかった尿意から解き放たれた女の悦びが、背筋を激しく震わせるのだ。少女にはあるまじき排泄姿をさらしながら、真衣はただただ、肩を震わせ羞恥に耐えながら、やめたと叫ぶしかなかった。

「あ、あぁあ……」

排泄の解放感が少女を震わせる。

少女の身体は責め苛む尿意から解放してくれる小便器を、まるで愛しい恋人のように寄り添い、大胆に腰を押し付けているかのよう。

何より、飛沫を派手に散らして迸る猛烈な水流は、むしろ真衣の立ち小便を見せ付けんばかりの大迫力だ。男子の間ではちょっとした“男の尊厳”ともなる、オシッコの勢い——これまで思春期の彼等が内心比べ合っていた放水の勢いなど、全て児戯とせせら笑うかのような、あまりにも強烈な光景。なにしろ、放出の瞬間に小便器の中にあつた消臭剤である緑色の薬剤の玉を、大きく跳ね飛ばし、便器の外へと弾くほどの勢いだ。それがどれほどのものかは推して知るべしである。

彼等の頭の中では、女の子というのはもっと慎ましやかで恥じらい深く、おとなしいものである。まして、女の子のトイレなどというものは、ちょろちょろと細い水流をほんの少しの時間こぼすくらいのものであるべきだった。

女の子がトイレの個室のなかで、誰にも秘密にしているはずのオシッコの姿——それを見せつけているに等しい。

「あ、ああああ……っ」

がくがくと揺れる爪先。引けてしまった腰から水流が蛇のようにうねり、的を外して逸れたオシッコが朝顔の下のタイルを激しく叩く。意図しない『粗相』に、真衣は喉を引きつらせながら、なお激しく小便器を抱きかかえるように、腰を前に突き出すしかない。

距離の近づいた女の子の排泄孔と、白い朝顔の中の排水口は、野太い水流により繋がってじゅごおおおおおーとさらに凄まじい排泄音を響かせる。

それでもなお、噴き出す水流の幾筋かは、的を外して朝顔の外へと噴き付けられる。当然のことだ。もともと、男子用の小便器は女の子がオシッコを済ませるようになどできていない。男の子であれば幼稚園でもないような、『便器の外へのおこぼし』——ありえないお粗相を、大々的に披露してしまい、真衣の心はさらに激しく削り取られる。

「うわ……すげええ……」

「女って、あんなふうにションベンするんだ……」

「……やべ、勃ってきた……」

下卑た欲望を隠す事もない、男達の視線の最中。

真衣はもはや生きた心地もない。この上なお、少女のオシッコは終わる気配を見せない。それどころかますます勢いを増すありさまだ。

朝顔の中に残っていた小さな消臭剤の玉が、真衣の噴射させる凄まじい水流の直撃を受け、よって見る見る溶かされ、叩き付けられる水流に飲み込まれて、排水口の奥へと消えてゆく。

それでもなお、じゅごおおーと響くオシッコの音は止まらない。オシッコの出口、女子の蛇口が壊れてしまったかのように、終わりが見えなかった。

永遠に続くかのごとく地獄の恥辱。男子生徒達が携帯を取り出し、シャッターをきらめかせる中——真衣は小便器に向かって、オシッコを噴き出させ続けた。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: dans la prairie 01

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/31/2013 23:07:43

BODY:

※浅学ゆえ非常に恥ずかしいスペルミスをしておりましたので訂正します。

ご指摘ありがとうございました。

<hr size="1" />

「じゃあ、ここで下りてね。……気をつけなさい」

「うん。ママ。……行ってきます」

道路の片側に停車した車の助手席から歩道に下り、優里は運転席の母に手を振った。スーツ姿の母も口元を緩めて手を振り返す。

窓が閉じるとすぐにウインカーを出して、白のセダンは走り去っていった。

んしょ、と背中の中通学鞆を直し、優里は歩き出す。

「えっと……こっち、だよな」

急遽仕事の予定が入ったという母の車に乗せてもらって、いつもとは違う通学路での登校だ。なんだか少し妙な気分だった。

近くのバス停を確認しながら、交差点の横断歩道を目指す。

松の枝の張りだしたブロック塀のそばを通り過ぎたとき、優里は思わず足を止めてしまう。

「あ……」

通学鞆をぎゅっと握りしめ、熱くなった頬を自覚する。

（そっか、ここだったんだ……）

普段とは違う道順での登校で、気付かずにいたが、ここはちょうど、『あの場所』に出る道だったのだ。

カーブミラーの付いた交差点のすぐ脇には、草が伸び放題の空き地が広がっていた。数年前に廃屋が取り壊されて以来、駐車場になることもなく放置された空き地——そこはいつも優里が『お花畑』にしている場所だった。

（……や、やだ……）

つい一昨日も、あの空き地の茂みの中でオシッコを済ませたのを思い出し、優里の顔は赤くなる。

夕暮れの薄闇の中で、近くを自転車や車が通る中——通学鞆を背負ったまま、優里はあの茂みの奥にしゃがみこんで、たっぷりとオシッコをしたのだった。

それも、どうしても我慢ができなかったとか、そんな理由ではない。

「……………」

優里の学校にだってトイレはあるし、家までは通学路をゆっくり歩いても20分くらいだ。いくらなんでも4年生の優里がたったそれだけの間、我慢できないなんてことがない。ここから少し遠回りして駅に出れば、昨年改装したばかりの綺麗な公衆トイレもあるし、コンビニや公園でトイレを済ませることだってできた。

それなのに——

（ここで……オシッコ、しちゃったんだ……）

茂みの近くに踏み入って、優里は自分の『お花畑』を見下ろした。なんの変哲もないアスファルトの一角は、妙に湿っているようにも思える。まさか一日経っても乾いてない訳がないので気のせいに違いないのだが、心なしか、茂みの雑草も元気がないように見えた。

他に用事があった訳でも、家の鍵が開けられなかったわけでも、トイレが故障していたわけでもない。

それどころか優里は、わざわざ学校にいる間からトイレを我慢していた。休み時間にもトイレにはいかず、お昼休みから午後の授業、帰りの会までオシッコをしたいのをわざと我慢し、さらに遠回りをしてこの空き地までオシッコをしに来たのだ。

（……制服も着たままだったし……名札も……）

通行人が優里に気付いた様子はなかったが、もしかしたら誰かに見られてしまったかも知れない——そんな想像が優里の心をきゅっと掴む。不安と同時に、ぞくぞくと背中が震えるような熱が高まるのを優里は感じていた。

ここが優里専用の『お花畑』になったのは、今から2年と少し前のことだった。

日曜日に遊びに出かけたまま、鍵を忘れて家に帰れなくなり、トイレを我慢できなくなってしまったのがそもそものきっかけ。その時の優里はまだ小さくて、他のトイレを使うことなんて思いつきもしなかった。

2時間余りに及ぶ我慢の果て、なんどもおちびりをしてパンツを濡らせてしまい、とうとう限界を迎えてしまった優里は、死ぬほど

恥ずかしいのを我慢してこの空き地に駆け込み、脚の付け根から勢いよくオシッコを迸らせた。しかし下着を下ろすのが間に合わず、さらに拭くものも持っていなかった優里は、ぱんつどころかスカートまでびしょびしょに汚してしまうことになったのである。

あとでママには怒られはしたが、その時の途方もない解放感と、噴射するオシッコが足元につくる大きな水たまり。それは鮮烈な体験となって優里の心に刻み込まれたのだった。

二度目はそれから一月後。やはり学校でトイレに入ることができず、家まで我慢の出来なくなった時だ。このままじゃオモラシをしちゃうと思った優里は、この空き地のことを思い出したのだ。

(ここで一度、しちゃったことあるんだし、もう一回くらい……)

経験がある分だけ、忌避感が薄れていたことも確かだろう。優里はもう一度空き地でオシッコを済ませることにした。今度はちゃんとティッシュを持っていたので、ちゃんと後始末もでき、ぱんつも汚さずに済んだ。

その夜、優里はなぜだか胸がドキドキして眠れなかった。

(おトイレじゃないところで、オシッコしたのに……)

イケナイことをした、という背徳感があつたのは確かだ。でもその時、優里は本当に、もうオシッコが我慢できなかつたんだろうか？

何度もおチビりをしてしまい、しゃがむ余裕も下着を下ろす時間もなくなっておモラシを始めてしまった 1 回目とは違ってははずだ。空き地から家までは、急げば 10 分もかからないような距離しかない。そんな間も我慢できないくらい、我慢は切羽詰まっていたんだろうか？

考えるたび、優里の胸のドキドキは際限なく高まっていく。

優里はいつのまにか、自分の新たな性癖を目覚めさせていた事に気付いていなかった。自分でも知らないうちにこの空き地を、オシッコのための場所として認識していたのである。

それから、優里はなんどもこの空き地を使った。

もちろん最初の頃は、どうしても我慢できなくなった時の非常用の場所のつもりだった。トイレが混んでいたり入れなかったりした時に、気付かれないようにこっそりオシッコのできる、自分だけの秘密の場所。そのつもりだったのだ。

(でも……)

いつしか優里にとって、この空き地の価値は変わっていった。

『トイレが使えない時にオシッコのできる場所』から、『トイレよりも優先してオシッコをするための場所』へ。いつしかこの空き地は優里の排泄場所として、トイレとの優先順位を逆にしていたのである。

いまや優里は学校や家のトイレが空いていてもわざとを使わずにオシッコを我慢して、この空き地へとオシッコを済ませに来るようになってしまった。

(……わたし、女の子なのに……こんなところでばっかり……犬、みたい……)

そんな自己嫌悪が後ろ暗い快感となって、まだ幼い優里の心を昂ぶらせる。

もう、我慢できなくてどうしようもなかったのだとか、家のトイレが壊れていたのだとか、そんな言い訳はできない。身の回りに整備されたいくつものトイレを使わずに、優里はこの狭い空き地に、オシッコを済ませにくる。そのことがたまらなく恥ずかしい。

けれど同時に、優里はそのことにどうしようもなく胸を高鳴らせてしまう自分を知っていた。

(……んっ)

自分専用の『オシッコの場所』を目の前に、長いこと立っていたからだろうか。優里は羞恥と、どこかむず痒いような居心地の悪さに思わずもじもじと足を擦り合わせてしまう。普段は切り替えていたスイッチが、入ってはいけな場所でも ON になってしまったかの

よう。

下腹部にこぼこぼと恥ずかしい液体が湧き上がる感覚が、優里の脚の付け根を震わせる。

(……と、トイレ……したくなっちゃった……)

真っ赤になった顔を俯かせ、優里は自分の身体に湧き起こる感覚を自覚し、そつと下腹部を撫でた。信じられないことに、ただの空き地のはずのそこを通り過ぎただけで、優里の身体は恥ずかしい尿意を催していたのだ。

音を立てるように膨らんだ暖かい液体が、下腹部を満たしてゆく。

いまや、優里にとってこの空き地は、『オシッコをしに来る場所』ですらなく、『来ると必ずオシッコがしたくなる場所』の地位にまで昇り詰めていたのである。

はしたなく尿意を訴える身体を、優里は持て余しながらくねくねと腰を揺する。

歩みが止まり、優里は空き地のほうをじっと見つめてしまう。

オシッコがしたい。あの茂みの中にしゃがみ込んで、下着を下ろして、スカートをめくり上げて？ このまま？ 制服姿で？ 登校中なのに？

いくつもの躊躇いを振りきってなお強く、『お花畑』のイケナイ誘惑が、優里を誘う。

「ん……っ」

一度は離れようとした優里だが、靴の裏はまるで地面に張り付いたように動かない。

優里はぐつと奥歯を噛み締め——抱えた鞆をぎゅうつと強く握りしめて、空き地の中へと踏み入ってゆく。たくし上げられたスカートの下、そおつと下ろした下着の奥の、あらわになった幼いつくりの股間は、すでに強い水圧にひくひくと震えていた。

「あ……っ」

鞆に伏せた真っ赤な顔は、湯気を吹きそうに火照っていた。

しゃがみこんだ足元の、アスファルトの上にめがけて。たったいま、優里の身体の中で作られたばかりの新鮮なオシッコが、小さな水門を押し開けて勢いよく進む。

噴き出す水流は威勢の良い音を響かせながら、優里の『お花畑』に広がっていった。

——"dans la prairie"

ピエール・オーギュスト・ルノワール、晩年の傑作。

その絵画の和名は『草原で花を摘む少女たち』という。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: dans la prairie 02

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 03/31/2013 23:09:15

BODY:

※浅学ゆえ非常に恥ずかしいスペルミスをしておりましたので訂正します。

ご指摘ありがとうございました。

<hr size="1" />

「あう……っ、は……っ」

灰色の空の下、しんと雪の降り積もる道に、ぎゅ、ぎゅっと雪を踏み締める小さな音が響く。もこもこの白いコートのフードからは覗く頬は赤く、額には切り揃えられた髪が汗で張り付いていた。

ピンクの長靴と大きな傘。おぼつかない足取りで膝まである雪を掻き分けるように進む少女の背中では、通学鞆の中身がカタカタと揺れている。息は既に荒く、噛み締めた口元からこぼれる息は真っ白だ。

両親が仕事の都合で海外に行かなければならなくなり、理佳は生まれ育った都心のベッドタウンから、祖母の家のある山奥の田舎町に引越して来たばかりだ。父親の故郷でもあるこの小さな山間の町での暮らしは、生粋の都会っ子の理佳には経験したことのないことばかりだった。

膝まで埋まるような深い積雪もその一つ。都会ではうっすらと地面が白くなるだけで大騒ぎだったが、ここでは春まで雪が溶けないのは当たり前のことなのだ。

「んっ……」

チェーンを巻いたトラックが行き来する道路では、定期的に除雪が行われているものの——それでも数時間もしないうちに、足の甲が埋まってしまうほどの雪が積もることはしばしばだ。

深い雪に足を取られそうになり、理佳は慌てて転びそうになる脚を踏ん張る。傘の柄をきつく握りしめ、冷たくかじかむ手袋の指を擦り合わせる。自分の背よりも高い雪の壁なんて、生まれて以来スキーにも一度も行ったことのない理佳には、信じられない光景だった。

いまだ雪道に慣れない都会っ子の足では、片道20分の通学路もゆうに1時間以上もかかる遠い道のりとなる。

理佳の下腹部、女の子の小さな水風船を満杯にしてしまうのには十分な時間だった。

「んう……っつ」

信号待ちの時間にもひゅうと吹き付ける冷たい風に、理佳は思わず立ち止まり、ぶるぶると背中を震わせる。その間にも北国の吹き付ける冷たい風は、防寒着をあっさり通り抜けて、少女の腰を冷やしてゆくのだ。

理佳はきつく足を閉じ、その場で腰をくねくねと揺する。行進みしたいなその場足踏みに、いくつも長靴の足跡が雪の上に踏み締められてゆく。

（お……トイレ……っ）

出発ぎりぎりまでストーブに当たって温まっても、ホッカイロをいくつ貰っても、小さな理佳の身体は、北風のひと吹きであっというまに冷えてしまう。

できるだけお茶もお水も飲まないように水分を控えても、寒さの厳しい雪国の田舎では、理佳の口にした水分はほとんど汗にならず、残らずおしっこになって少女の腰上のダムに注ぎ込まれていくのだ。

足元の雪と吹き付ける風、容赦なく吹きつける冷気のダブルパンチが、理佳の下腹部でぱんぱんに膨らんだ水風船をきつく驚掴みにする。

「んっ、はあ、ふう、……っ」

深い雪を掻き分け、転ばないようにして歩くには、どうしても一歩ごとに足を大きく上げねばならない。けれどそうやって踏み出すたび、硬く張りつめた下腹部が圧迫され、水風船の出口がじわっと開きそうになるのだ。

それを堪えようとするものだから、理佳の足跡はますます乱れ、あっちにふらふら、こっちにふらふらと左右に蛇行し、ますます歩みを遅くする原因になるのだった。

（……だ、だめ……！！ おしっこ……、でちゃう……！！）

限界までの秒読みを刻む少女の頬が震え、硬く結ばれた唇から白い息は溢れる。大きな傘を両手で持たねばならないため、下腹部をさすって、ぱんぱんに膨らむ水風船を満足になだめてやるだけでも、いちいち立ち止まっていなければいけなかった。

数歩を進んでは立ち止まり、前屈みになって突き出した腰を揺すり、防寒着のズボンの太腿を擦り合わせ、手袋がぎゅっとお股を押さえ込む。

湧き上がる猛烈な尿意、緩みそうになるおしっこの出口。はやく、はやくと心が急かす。

しかし脚を交差させ、腿を擦り合わせながらの歩みでは、いつまでたっても祖母の家は見えてこない。まだ覚えの曖昧な通学路、それも毎日に様相を変える雪道では、いま自分がどこにいるのかも分からなくなってしまう事もあった。

「っ、や……だめ……っ」

笠ね穿いたタイツとズボン、防寒着。分厚い着衣の奥で、じわりと危険な湿り気が股間の付け根に広がってゆく。

切羽詰まった尿意に、身体の方が勝手に根を上げ、我慢の残り時間のカウントダウンを刻み始める。帰途の終着点はまだ遠く、祖母の家の屋根すら見えていないというのに、少女の身体は早くもトイレの準備を始めていた。

「あ、あっあ、あああ、っ」

じわ、じわと水門が緩み、温かな布地の奥に湿り気が広がる。少女の下腹部の水風船がひときわ大きく収縮し、ぱんぱんに詰まった中身を絞り出そうとする。

しかし町の中でも山間に近い祖母の家の周りには、ただ延々と畑が広がっているばかりだ。コンビニや公園どころか、民家すらまばらにしか見当たらない。

この山間の通学路では、見知らぬ家の玄関で、トイレを貸してほしいと申し出ることすら難しいのだ。

「っあ……！！」

突然押し寄せた強い尿意の波に耐えかね、理佳はどうする事もできずに立ち止まり、びくっと身体を硬直させる。

防寒着の上から、ありったけの力でぎゅっと足の付け根を押さえこむが、それでも間に合わず、水風船の出口を押さえる力が緩んで、股間の先端部分から、じゅじゅと熱い雫が噴き出してゆく。

「だ、だめえっ！！」

もはやどうにもならないことを察した理佳は、悲鳴のように叫び、大きな傘を放り出して、通学路の道の脇——積みあげられた雪の傍へと走り込んだ。

しゅるしゅる…しよしよ…恥ずかしい音を響かせる下半身をくねらせながら、懸命に防寒着のジッパーを下ろし、ズボンと下着をまとめて膝まで引っ張り下ろす。マイナスの樹陰の中、白い少女の下半身が外気にさらけ出される。

それとほぼ同時。ほとんど中腰の状態のままで、理佳の股間から進ったおしっこが地面を直撃した。

ぶじゅうううううっ！！

「あああ……っ」

猛烈な勢いで進む水流が、白い雪をたちまち黄色く染めてゆく。積もった雪がみるみる溶けだし、真冬の寒気のなかに、羞恥の熱水はもうもうと湯気を立ち上らせる。

まるで、ここで理佳がオシッコをしていることを周りに知らせるための狼煙のようだ。

もう高学年になったのに、道端でおしっこをするなんて、絶対にありえないことだった。うつむいた理佳の目元には、羞恥にじわりと涙が浮かぶ。

「っ……………」

もともと、どちらかと言えばトイレの近い理佳だが、引っ越しに伴う生活環境の変化と、クラスでもいまいち馴染めていないことなどが心理的な負担となって、トイレの頻度はますます上がっている。

酷い時には通学中の片道だけで 2 回や 3 回もこうしてしゃがみ込み、足もとに黄色い雪解け痕を残さなければならないほどだったのである。きちんとトイレまで我慢できないことが、思春期の少女の繊細な心をますます過敏にしてゆくばかりだった。

まだ春も遠い、北国の 1 月末の雪の中。理佳の小さな足跡を残す通学路には、いくつもの黄色い雪解け痕が続く。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: dans la prairie 03

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/19/2013 21:03:23

BODY:

雨の続く 6 月。今日もまた昨日と同じような雨が続き、代わり映えのないネズミ色の空がビルの谷間を覆う。

織江は傘の柄を握る手に力を含めながら、雨の通学路を早足で歩いていた。

靴底が水たまりを跳ね散らかし、防水の十分ではない足元にはいくつも飛沫が跳ねる。靴下まで染み込んだ雨の冷たさは、不

快感を通り越して脚を重くさせていた。

けれど、織江は歩みを緩めない。

「……………、っ」

ぎゅ、ときつく力を込めた手のひらが、少女の切羽詰まった事情を訴えている。

——おトイレに、行きたい。

確かに6時間目の授業中から、確かに軽い尿意を覚えていたのは間違いないが——ほんの数十分でここまで余裕がなくなるなんて、まったく予想していなかったことだった。家までは間に合うだろうと見切りをつけて昇降口を出てほんの10分で、織江は自分の軽率な判断を激しく後悔することになる。

梅雨の寒気が買えたばかりの夏服のスカートを通り抜け、足元を冷やす。まるで湧き上がるように下腹部を満たしてゆく恥ずかしい液体。一旦意識した尿意は瞬間に織江の水風船をぱんぱんになるまで膨らませてしまった。

通学路は片道30分。まだ半分も来ていない。カバンと傘で両手が塞がって、織江はスカートの上から前押さえをすることもできなかった。もどかしく制服の上から脚の付け根に押し当てられた鞆の角が、下腹部の緊張をなお高めてゆく。

——家まで、間に合うだろうか？

その問いかけに、当たり前だと答えることすら怪しかった。毎日続く雨に濡れた道路は普段よりも体力を奪い、歩くのにも余計な時間を要する。歩道のタイルは泥をかぶり、靴底が滑って歩くのも慎重にならねばならない。

ふとした油断ですら、恥骨の奥にじんと甘い痺れを走らせる。もじもじと膝を擦り合わせていなければ、いつ足元に雨水以外の雫を迸らせてしまうかもわからなかった。

——だめ……オシッコ、ガマンできない……。

身体が我慢の限界を訴え、早急にオシッコ済ますための場所へ向かうよう要求するのは当然のことだった。けれど、近くにトイレなどは見当たらない。通い慣れたはずの通学路に、織江の求める場所は見つからないのだ。毎日行き来する学校への道は住宅街を通り抜けるルートで、近くには大きな公園も、コンビニや店舗もほとんどない。今からそちらに向かうには大きく回り道をする必要があった。

——おトイレ、はやく……！

織江の求める『オシッコの場所』が周囲のどこにも存在しないと言う訳ではない。むしろ住宅街という立地には、住人の数と同じだけのトイレがあるといっても過言ではなかった。

だが、それらを使うには、織江自身が見ず知らずの近くの家を訪問して、住人に直接、どうしてもオシッコが我慢できないこと、だからトイレを使わせて欲しいことを申し出るしかなかった。それは、年頃の少女にはあまりにもハードルの高い行いだ。

無数のトイレに囲まれながら、織江の入ることのできるトイレはどこにもなかったのだ。

……そんな最中。

織江がふと眼をとめたのは、路肩に停車した一台の乗用車だった。

標識のない場所を選んで停めてあるらしい車内には人影もなく、ブロック塀の傍で雨に冷たく濡れながら、まるで何年も昔からそこにあるかのように風景の一部に溶け込んでいる。

なぜその時、織江が『そこ』を選んだのかは、織江自身にもよく分からない。ただの偶然、理由などなかったか。あるいは魔が差したというべきなのか。

後になってみればもっと他にもふさわしい場所があったようにも思えるし、そもそも本当に家まで間に合わなかったのだろうか。いずれにせよ、それらの言葉は過去を振り返るもので、今となっては意味のないものでもある。

そもそも、『そこ』で『そんなこと』をしようなんて、その瞬間まで織江には考えてもみないことだったのだ。

——ここで、おしっこ……しちゃう……

この時。まるで天啓でも舞いおりたかの如く。下腹部に迫りくる排泄欲求に従うまま、織江は、そこを人生初の『お花畑』にすることを選んでいた。

今日のような雨の日の午後ともなるとたまに走りゆく乗用車かスクーターがせいぜいで、ひとけもまばらだ。

織江は早足で車の裏に回ると、傘を首と肩にはさんで、その陰に隠れるように背中をかがめる。

雨の中の気配を慎重にうかがって、誰もいないことを3回確認すると、ポケットからハンカチを出して折りたたんだまま端を口にくわえた。そのままスカートの中に両手を差し入れ、素早く下着を膝まで引き下ろす。

スカートの中に吹き込んでくる雨に濡れた外気に、きゅん、と織江の『女の子』が震える。スカートの布地に隠れて大事なところは見えないはずだが、これから織江がしようとしていることはそれよりも恥ずかしいことかもしれない。

緊張に詰まる息を、鼻から吐き落して、織江は車の陰に身をかがめてゆく。完全に腰をおろしてしまうと足元が濡れるので、中腰としゃがみ込むもの間くらいの中途半端な態勢。一度も野外でのトイレ——『お花摘み』の経験のない織江には、正しい屋外でのオシッコの方法など分からなかったのだ。

けれどそんなもの勉強している暇もないし、家まではどうやったって間に合わない。かと言って、織江が使えるトイレはどこにもないのだ。お漏らしをせずに済ますには、ほかに選択肢はなかった。

——でちゃう……っ！

織江はスカートの裾をつかみ、おしりのほうにも飛沫が回り込まないように注意しながら、徐々に腰を落としてゆく。

地面は雨に濡れ、傘の端からこぼれる雫がいくつも波紋を描いている。流れる水の中に紛れて、織江のおしっこの痕跡はすぐに見えなくなってしまうだろう。

高鳴る胸を抑え、荒くなる息をつめて、視線は自然、足元へと向かう。織江がいよいよ震える脚の付け根に『放水』の許可を出そうとしたその時。

雨音の中に混じる物音が、はっきりと聞こえた。

はっと顔を上げた織江の、霞む視界の向こうに、ぼんやりと浮かび上がるオレンジのランプ。こちらに向かってくる乗用車の存在をすぐに理解し、織江はあわてて下着を引っ張り上げた。

せっかく開きかけた水門を再度閉じるのは、並大抵のことではなかった。ギュッと目を閉じ、言葉も発せず、織江はその場に立ち尽くす。腰が震え、脚の付け根をこすり合わせるように、左右の足が交互にもう一方の足をこする。

路肩に停めてある車を迂回するように、乗用車が走り去ってゆく中。

織江は、じっとその場に立ち尽くしていた。

ようやく戻ってきた静寂の中、いまさらのように鼓動が激しくなってくる。耳元で聞こえるくらいに高鳴る動悸は、安堵とともに恐怖にも似た感覚を織江にもたらしていた。

再度、誰もいなくなった通りだが、織江はもう、その場にしゃがみ込もうとすることはできなかった。

車の影、織江がきつく握り締めた傘の下。雨音よりも強く激しい雫が少女の革靴とソックスに振り注ぐ。ふくらはぎを膝の裏を伝い溢れる水流は滝のように、少女のスカートの奥、ぴたりと寄せ合わせた腿の隙間から噴き落ちていた。

無理に引き上げたせいでぐっと脚の付け根に食い込む下着に、お茶をこぼしたような熱い湿り気が広がってゆく。しっかりと傘に守られていた制服のスカートの、水たまりに思い切り飛び込んだみたいなき大きな染みが広がり、みるみる織江の下半身を包み込んでゆく。

「……………」

こぼれそうになる叫びを噛み殺す、織江の荒い息づかいが傘の下に響く。

雨音は強く、けれど織江の足元にばちゃばちゃと溢れる雫の音はなお激しい。黄色い滝は足元の水たまりに融けるように広がり、降り続く雨と混じりながら緩やかにアスファルトの上を流れてゆく。

——あ……あ……。

ぎゅっと押さえた脚の奥から、底の抜けた樽みたいで、中身がこぼれおちてゆく。満水のダムは見る見る水位を下げ、そのそう快感に頭がすうっと軽くなる。

ぱくぱくと口を静かに開閉させながら、織江は呆然とその場に立ち尽くしていた。

……そのまま、5分も過ぎただろうか。

織江の下腹部にずっしりとのしかかっていた重みは嘘のように消え、ちくちくと脚の付け根を苦しめていた重苦しい尿意はどこにもない。

雨はなお続き、びちゃびちゃに濡れたスカートが脚に絡み付く。徐々に冷えはじめた下半身が、失われる熱を求めるようにぶるりと震えた。

びしょびしょの制服、濡れぼそった下着、たっぷりと水分を含み、がばがばと音を立てる革靴。

まぎれもない、『オモラシ』の証拠。

——やっちゃった……。

織江の『お花摘み』はあえなく大失敗に終わってしまったのだ。それどころか、きちんと『お花畑』まで我慢することもできなかった。
唇をきつく噛んだ織江の手から、傘が落ちる。
まだ織江のオシッコの混じる水たまりに落ちたお気に入りの傘を振り返る事もせず、少女は早足で、その場を駆け出してゆく。
なお振り注ぐ雨が、その身から恥辱の全てを洗い流してくれることを願いながら。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: dans la prairie 04

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/19/2013 21:04:47

BODY:

さっそく主題を取り違えてる気がしないではない。

<hr size="1" />

「あった……！」

広い公園の片隅に目的の建物を見つけ、観冬はぱあっと顔をほころばせる。スキップ混じりの小走りで向かう『そこ』は、素っ気ない灰色のコンクリート剥き出しで、面白い事など何もないですよと言わんばかりの飾り気のない外観をしていた。

市民公園の片隅に、うち捨てられたようにぼつんと建つ公衆トイレ——それが、観冬の『お花畑』である。

近々リニューアルを控えている予定の市民公園は、一般の公園にはちょっと見当たらない遊具やアスレチックが設けられており、クラスメイト達たちは皆そっちに夢中になっている。けれど観冬が今日の遠足で一番楽しみにしていたのは、間違いなくこのトイレにやってくることだったのだ。

足音を潜め、入り口からそっと中の様子を窺う。

公園の喧騒を余所に、公衆トイレの中は静寂に満ちていた。

がらんとした室内に人の姿はなく、個室は景気良くドアを開け放ち、和式と洋式の便器までもが丸見えだ。

(……………)

期待に膨らむ胸が高鳴る鼓動を刻む。バスに乗っている間からずっと待ちわびていたのだ。きゅんきゅんと下腹で疼く欲求はもう待ち切れないと限界を訴えていた。念入りに何度も周りを見回し、あたりに人の気配がないことを確認してから、観冬は慎重に観冬は慎重に、青いタイル張りの床へと足を踏み入れた。

「ん……」

ぞわりと腰裏から背筋を撫でる尿意に、脚がすくむ。靴底が小さく砂を踏む音を立て、観冬は背筋を竦ませた。

家を出る前からずっと我慢を続けていたせいでパンパンに張り詰め、硬く膨らんだ下腹部をさすりながら、緊張に強張る喉に、こくりっ、と唾を飲み込んだ。

「……オシッコ……っ……」

ようやくトイレに入ることができたためか、じんじんと脚の付け根に疼く尿意が、いっそう膨らむのを感じる。最後の最後まで気を抜かないように、観冬はスカートの裾を押さえながらそろそろと脚を進めてゆく。

そうして観冬が向かったのは、個室ではなく——

その向かいの壁に据え付けられた、小用便器だった。

観冬が入っているのは薄いピンク色のタイルが彩る婦人用のトイレではない。

そのすぐ隣、水色のタイルが敷き詰められた、紳士用のトイレだった。

(わ、わたし、男の人の方のおトイレ、入っちゃった……)

女の子の自分が入ってはいけない場所。その事実をはっきりと自覚しながら、観冬は火照った頬をぐしぐしと擦り、緊張に溜まった口の中の唾をもう一度飲み込んで、一步を踏み出す。

こくりと動く喉と共に、水分を感知したおなかが運動して、足の付け根のダムが水面を揺らす。たぷんと音を立てる乙女の貯水

池は、危険水位を越えるぎりぎりのラインだ。少しでも波立てばそのまま溢れだしてしまいそうだった。

(あっ……………)

壁にある白い陶製の器具を前に、ぶる、と背中が震えた。突き出し気味に前屈みになった腰がくねくねと揺すられる。男性用の小便器——普通の女の子であれば一生縁の無いはずの器具に、観冬は魅入られたように吸い寄せられてゆく。

男性用小便器。『オシッコをしてはいけない場所』という意味では、少女にとってこれ以上禁忌となる場所は無いだろう。まさにその禁忌の場所で、オシッコをするという行為は、どうしようもないほどに観冬の心を昂ぶらせるのだ。

俯いた顔を真っ赤にしながら、観冬はそつとスカートの中に手を差し入れ、下着を下ろしてゆく。子供っぽい綿の下着から片足が抜かれ、足首にくると絡められた。

(……………っ)

恥骨のあたりを刺激する尿意に身をよじりながら、観冬は大きくスカートの前を持ち上げた。腰上どころかおへそが見えてしまいそうなほどに捲りあげられたスカートの裾の下から、無防備な『おんなのこ』がのぞく。

およそ、トイレの個室の中でも見せないような——無防備な姿。下半身をほとんど丸出しに、我慢したオシッコでぼこりと膨らんだおなかも覗かせて、観冬はほとんどトイレの中で裸になっているのに近い状態だ。

ひやりとお尻を、ふくらはぎを撫でる冷たい風に、観冬はますます熱い刺激を足の付け根に感じ、もじもじと腰を揺すってしまう。

熱の出たようにぼーっと霞む思考はなおぐつぐつと煮立ち、イケナイことへの期待に震える。。覚束ない足取りのまま、観冬は前に出た。足を肩幅よりも大きめに開き、背中を反らせ、前に突き出した腰を小用便器の中に押し込むように押し出す。

慎ましやかに隠されていた『おんなのこ』が無防備に小さな蕾をほころばせる。

男性用の小用便器——古めかしい呼び名で『朝顔』などと呼ばれるそれが、観冬にとってのオシッコの場所、『お花畑』である。

慣れた様子で立ったままのオシッコの準備を整えると、観冬はそつと脚の付け根の力を抜いた。

「あ……………」

しゅつ、と、狭い出口を擦る水流の音が聞こえたと思うと、勢いよく噴射されたおしっこが、便器の中を力強く叩く。少女の脚の付け根から噴き出す水流は、じゅじゅじゅうとはしたない音をトイレの中に響かせた。

「……………あ……………(はああ……………っ)」

ずっと我慢を重ねていた状況からの解放感が、とろけるような心地よさとなって観冬を迎える。激しい水流が白い陶器の中に思い切り跳ね、じよばじよばと大胆な音を響かせる。およそオシッコの勢いと噴射力で比べれば、女の子のオシッコは男の子のものよりもはるかに強力で、猛烈なのだ。

(お、男の子の、トイレなのに……………わたし……………お、オシッコ……………しちゃってるよお……………っ！！……………こんなところで、た、立ったまま……………っ、オシッコ……………っ)

ここは公園の公衆トイレだ。誰が来るかもわからない上に、それはクラスメイトの男子や、先生かもしれない。しかも観冬の服の胸元には、しっかりと学校名とクラス、名前を記した名札がある。。誰かに見咎められたら、まず言い訳はきかないだろう。

そんなあり得ない背徳の状況に、観冬の胸はますます高ぶってしまう。それは同時に、少女の排泄をさらに大胆に、激しいものへと変えていく。

(すごい……………いっぱい、出る……………っ)

張り詰めていた下腹部がみるみる萎み、噴き出す水流の勢いはいよいよ最高潮に達していた。股間の先端で飛沫を跳ねさせ、飛び散る水流は陶器の中を直撃し、じゅごおと音を響かせ、白い泡を立てる。跳び切らないオシッコの雫は太腿を伝い、おしり

へと伝いばたばたと水滴を散らす。

あり得ない場所でのオシッコ——『お花畑』での少女の心を揺らす倒錯した歓びは、まだ幼い少女の性感を強く昂ぶらせてゆく。尿意からの解放と共に、背中を続々と突き上げる甘い疼き。まだ恋を知らない少女にとって、男子用トイレでのオシッコこそが、異性との心の繋がりを得られる場所である。

刺激の強過ぎる快感は、心をとらえて離さない強い誘惑を伴うものだった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: dans la prairie 05

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 04/19/2013 21:23:42

BODY:

家から交差点の横断歩道をみつつ、歩道橋をひとつ。

背の高い塀とそこから伸びた高い木の梢に囲まれたＴ字路は、見通しが悪い割にカーブミラーもなく、向こうから誰かがやってきてもすぐには気付けない。交通量があまりないことから放置されているが、色褪せた飛び出し注意の看板もここが危険な場所であることを訴えていた。

このＴ字路に立つ電柱の根元が、志穂の散歩コース最初の『お花畑』であった。

普段から友達にも犬みたいだと呼ばれる志穂だが、志穂はときどき、こうやって本当に自分の決めたお散歩コースを歩く、遊びをしている。耳の付いたフード付きのパーカーを羽織り、お小遣いで買ったチョーカーが首輪の代わりだ。

ご主人様は居ないけれど、志穂はお利口なお犬さんなので、ちゃんと一人で『お散歩』ができる。目印になるのは人通りの少ない場所にある４か所の電柱。志穂が胸を高鳴らせながら、自分の『縄張り』を主張する場所である。

そう。誰も居ない隙を見計らって、この４か所の『お花畑』である電柱の根元にたっぴりと我慢したオシッコを噴き付けてゆくのが、志穂のイケナイお犬さんごっこである。

この遊びを思い付いた時、志穂の胸はそれを想像するだけでドキドキして、顔が真っ赤になってしまうくらいだった。過去に何度か我慢できなくて、道端でオシッコをしたことはあったけれど——自分でそれをしようと考えた時、志穂はまるで頭が沸騰してしまいそうに興奮する自分に気付いていた。

最初の頃は、我慢したオシッコを途中で止めて次の縄張りである電柱——『お花畑』へ移動するのが大変で、途中の横断歩道の信号待ちなんかの間に思わずチビってしまったりしたものだが、今では一か所目の電柱ですっきりしてしまっても、次の電柱に来る事には自然に、おなかの奥からこぼこぼと尿意が湧き上がってくるほどだ。

それどころか、志穂は学校でトイレに行きたいのをわざと我慢して、一度家まで帰って来てから着替えて、こうして『お散歩』に出ていくことすらあった。

いつしか道ばたの電柱を、本当におトイレ代わりにしてしまっているという、とても恥ずかしい身体になってしまったことを実感し、志穂は顔を赤くする。

けれど、イケナイことだと分かっているけど、志穂はこのお犬さん遊びをなかなか止められずにいた。しゃがもうとしたところで見つかりそうになって慌てて逃げ出したり、パンツをおろしているところで友達に偶然会って不審がられたり、何度も危ないところを間一髪で助かって来たのだ。

もっとも、冬になって雪が降ってからはすっかり余裕がなくなって——寒いのが苦手な志穂はお散歩を止めてしまっていたのだが——

お母さんのお手伝いで、買い物がえりの途中。牛乳パックが２本入った重いスーパーの袋を抱えた志穂は、たまたまお散歩コースの途中にある電柱のひとつを通りがかったのだ。

「……………」

志穂の『お花畑』——電柱の根元には、おそらく誰かが作ったのであろう可愛い雪ウサギがちよこんと二匹、並んでいた。誰かがこの雪を勿体なく思って、作ったのだろう。並ぶ雪ウサギはまるで兄弟みたいに身を寄り添わせている。

心が温まるような微笑ましい光景——けれど。志穂には違っていた。

「……………」

じっと、電柱の足元の雪ウサギを見降ろし、志穂は頬を膨らませる。

ここは志穂の場所だ。志穂の『お花畑』なのだ。いつも志穂がお散歩の旅に縄張りを主張しているはずのそこが、まるで誰かに奪われてしまったみたいだった。

これを作った誰かは、間違いなくここが志穂の『お花畑』であることを知らないはずだった。もちろん知られちゃったりしても困るのだが……けど、けれど、それでも。

志穂だけの秘密の場所が、誰かに占領されてしまったみたいで、なんだかすごく——イライラした。

(私がいけないんだ)

寒いからって、お散歩を止めてしまっていたから。ちゃんと、ここが自分の場所であると、志穂の『縄張り』だと宣言するのをサボっていたから。誰かに、ここが勝手に使われてしまったのだ。

——そんな身勝手は、許されない。

志穂の胸の中に、強くイジワルな感情が込み上げてきた。ここは自分の場所だ。志穂だけの場所だ。恐らく、志穂よりも小さな子が、寒い中小さな手を赤くして、一生懸命頑張って作ったのだらう雪ウサギ。

それを、思い切り——滅茶苦茶にしたいという、嗜虐的な誘惑。

一度思いついた想像は、どんどん膨らんで志穂自身にも押さえきれなくなっていた。

或いは。

昨日、クラスの女子達と頑張って作り上げたかまくらを、笑いながら踏み潰していった男子達の横暴が、志穂の胸に暗い影を落としているのは間違いない。

これ以上、自分の場所を奪われるなんて、ごめんだった。

(……………)

こり、と硬い唾を飲み込んで、志穂は慎重に周囲を窺う。積もった雪の中、普段は頻繁に走りぬけてゆく車の影もなく、遠くを歩く人たちも雪の中で傘を深く傾け、周りを気にしている様子はない。

志穂は少し離れた場所に関し物袋を放り投げ、ひんやりと足に触れる冷たさの中、志穂は防寒のタイツを膝まで引き下ろしてしゃがみ込んだ。高鳴る胸と共に、寒さでつんと高まった下腹部の衝動を、解き放つ。

電柱の前ですっかり準備が出来ていたみたいに、志穂のオシッコは脱ぐと同時に脚の付け根から強く進った。寒い中でじっと我慢していた水流は色も匂いも濃く、勢いよく進み、雪ウサギを直撃する。黄色い水流がみるみる雪うさぎを直撃し、もうもうと湯気を立ち上らせながらその身体を溶かしてゆく。

まるでレーザービームのように、志穂は隣のウサギにも照準を定め、オシッコを噴射した。二匹目のウサギも志穂のオシッコによって融け、じゃばじゃばと降り注ぐ黄色い海の中に沈んでゆく。

(あは……っ)

無邪気な残酷さを見せる、志穂の表情に笑顔がのぞく。

ぞくぞくと身体の奥に熱い衝動が高まってくる。いつものお散歩コースのように、身体の次の『お花畑』を求めて動き出していた。

志穂はゆっくりと腰を振って雫を斬ると立ち上がり、買い物の途中なのも忘れて、次の『縄張り』へと向かって走り出した。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 姉イジメの話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/01/2013 14:30:16

BODY:

明日開催のしーむす8に参加しようと思って用意した話。
もろもろの事情で申込みできなくなったのでこちらに。

<hr size="1" />

「ま、待って……お願い、待って、茜……」

おぼつかない足元、ほんのりと赤くなった頬。

荒くなった息に交えながら、途切れ途切れに少女が切なげな声を振り絞って懇願する。

あたりは夕闇。人気のすくない公園の中を、少女は哀れなかすれ声を振り絞り、ふらふらと頼りない歩みで、先を行く影に追い縋っていた。

「そんなに、先、行かないで……っ、お願いい……」

そんな少女の姿は、この季節にはあまりにも似合わないものだった。

まず目を引くのが、下半身を覆う衣服は見えないこと。そして、上半身に纏っているのも、飾り気のない白い半袖のシャツ一枚だけという事実だ。

真夏の公園の水辺で、幼児がしているならともかくも、思春期のただ中にあると思われる少女が、往来を歩く姿としてはあまりにも相応しくない。

少女は少しでも肌を隠そうと精一杯シャツの裾を引っ張っているのだが、シャツの丈はあまりに短く、ギリギリのところで足の付け根を隠す程度。そんなきわどい丈のシャツの裾から、剥き出しの太腿が伸びている様は、嫌でも注目を集めるものだ。

ただでさえ肌寒いこの季節だ。夕暮れの公園にはひゅうひゅうと風が容赦なく吹き付け、そのたびに少女の身体は小刻みに震える。

「……お願い、許して……っ、だ、誰か来たら、み、見られちゃうよお……っ！！」

掠れた声で、先を行く影に訴え続け、少女はぎゅっとシャツの前を握り締める。しかしぎりぎりの長さの裾でそんな事をすれば、身体の後ろ側、お尻のほうの裾が大きくめくれ上がってしまう。

そこに覗くものも、また少女の年齢には見合わないものだった。

はしたなく見えた少女の形の良いお尻——その下半身を辛うじて『お情け』のように覆い隠すのは、どうみても少女の年齢には見あわない、幼稚園の子供が身に付けるような『おこさまぱんつ』である。

もこもこのコトンの布地には、ご丁寧にデフォルメされたクマの絵までプリントされている。少女の両手がぎゅっと重ねられ、震えるようにシャツの前を引き絞っているため、短いシャツの裾は大きく背中まで捲れ上がり、クマのバックプリントが完全に丸見えになってしまっている。

そのことに少女自身も気づいているのだろう、しかしだからと言ってどうすることもできず、羞恥も露わに腰を激しくくねらせながら、少女は必死に脚を動かし、声を振り絞る。

「あ、…茜、おねがいっ……」

少女——野上秋穂は耐えがたい羞恥に耳まで赤くなりながら懸命に、先をゆく相手に呼びかける。

しかし、対する反応は冷やかなものだ。

「お姉ちゃんが遅いだけじゃん。嫌なら早くきなよ」

「そ、そんな……だって……っ」

「ホントのことでしょ？ それに、そんなカッコしてるお姉ちゃんと一緒に歩いてたりしたら恥ずかしいし」

そう言って、秋穂の1歳違いの妹、茜は目蓋を半分引き下ろした軽蔑の視線で、姉の醜態をじろじろと見回す。口元を嗜虐

的な笑みに歪めながらの無遠慮な視線は、同性の——しかも妹のものであるにも関わらず、秋穂の羞恥心を激しくかきたてる類のものだった。

「っ、違うもん……ぜ、全部、茜がさせてるんじゃない……！！」

「えー？ なになに？ わたしのせいにするんだ？ お姉ちゃんってばひどいなあ。泣いちゃうよー？」

必死になって訴える秋穂をからかうように、茜は目に手を当て、あからさまな泣きまねをしてみせる。くすくす、と忍び笑いまで漏らす妹に耐えきれなくなつて、秋穂は思わず涙ぐみ、鼻を詰まらせて俯いてしまった。

「っ、もう…やめてよ……こ、こんなの、知ってる人に見られたら……明日から、外、歩けないっ……」

「えー？ なーに言ってるのかなあお姉ちゃんてば。だ・か・らあ、わざわざこおんな遠くの公園まで来たんじゃない。お姉ちゃんがそうしたいって言うからさあ。お姉ちゃんが恥ずかしいカッコしてるとこ、知らない人たちにいっぱい見てもらいたいんでしょ？」

「ちがうっ、そんなこと、言ってないよっ……」

秋穂はただ、家の近所でそんなことができるわけないと言っただけだ。

だがその言葉をわざと曲解した茜は、姉をわざわざ駅まで呼び出し、電車に乗って20分の駅まで無理矢理連れて来たのである。

降車駅のトイレでこの格好に着替えさせられたのもその時だ。それから午後いっぱい、ブラを付けることも許されず、Tシャツにパンツ一枚、あとは素足にスニーカーという破廉恥な姿で、秋穂はずっと見知らぬ街のあちこちを連れ回されていた。

知らない街とはいえ——いや、知らない街だからこそ、季節を無視したTシャツ一枚に下着だけというあられもない姿で歩かされる秋穂には、すれ違う人々の奇異の視線がざくざくと突き刺さり、少女の繊細な心はもう再起不能に近いほどに痛めつけられている。

「ふふ。でもさっきから通りかかった人みんーな、ヘンな顔してお姉ちゃんのこと見てたよねー。あれ、絶対気付かれちゃってるよ？

お姉ちゃんがいま『ナニ』したいのか。ねー？ あはっ♪」

「っ……やめて……よお。ち、違う、違うんだからっ……」

ぶり返す羞恥に耐えかねるように、シャツの前を強く引き絞り秋穂はいやいやと首を振る。

出来れば二度と思い出したくない光景だった。もう何年も前の事にすら思えるが、あれはほんの1時間前の出来事なのである。

「あはっ、バレバレだっばお姉ちゃん。……ほおら」

くすり、と笑みを浮かべ、茜はそんな姉のもとに歩み寄る。シャツの後ろから飛び出した、クマのバックプリントを覗かせる下着をさげすむように見下ろして、震えるその腰の後ろをぺしん、と軽くはたく。

「あは、ああああ……ッ や、やだっ、やだあ！！！」

途端、びく、と全身を硬直させた秋穂は、掠れた叫びを上げ、恥も外聞もかなぐり捨てて足の付け根に両手をあてがった。くしゃくしゃになったシャツの上から、女兒用パンツの股間部分を思い切り握り締め、前屈みになって腰を左右にくねらせ始める。

「や、ああ、あっ……で、でちゃ……うう……ッ！！！」

膝を交差させ、ぎゅうぎゅうと身をよじり、足を踏み鳴らす。まるで幼稚園の子がするような、人目もはばからぬ猛烈な羞恥のダンスをはじめよう。

前押さえだけでは飽きたらず、秋穂の手のひらはTシャツの裾から覗く下着の股布を押さえ込み、太腿に挟まれた指がぎゅうぎゅうと脚の付け根を揉みしだく。突き出されたお尻ではクマのバックプリントが引っ張られて皺になり、無残に姿を変えてゆく。

「んんっ……、あ、あつ、はあ、あつ」

スニーカーの爪先がぐりぐりと地面をねじり、鳥肌の浮いたふくらはぎが交互に擦り合わされる。ぴったりと寄せ合わされた太腿は激しく上下し、秋穂の荒い吐息に合わせて腰が激しく揺り動かされる。

短いシャツを引き千切らんばかりに絞り、もこもこした布地の『おこさまぱんつ』の股間を激しく握り締めるみつともない姿で、秋穂は吐息の合間に、茜に抗議の声を上げた。

「あ、茜、やめて、……やめてよお……ッ」

「えー？ どうして？」

苦しげな息を吐く姉の下腹部に手を添えたまま、茜がくすくすと笑う。

やめるどころか、茜はさらに秋穂のそばにびたりと身体を寄せると、無防備なシャツの上から姉の下腹部に手を伸ばした。

下腹部からおヘソの下へと、巧みな指使いで妹の手のひらが茜の敏感な部分をなぞりあげてゆく。硬く張りつめた『そこ』を確かめるように撫でさすられ、茜は再び悲鳴を上げてしまった。

「んふああああ……っ！？ …だめッ、だめやめてえ！！ や、やだっ、やだあ！！ そこ、そこダメえ！！ やめて茜いつ……！！」

「ほらあお姉ちゃん、どうしたの？ そんなクネクネしちゃって、恥ずかしいなあ」

「っ、いや、いやああ……ッ」

茜はなおもとぼけながら、身悶えする姉の耳元に囁きかける。今度は撫でるように優しく、シャツの上から秋穂の腰骨に指を這わせ、子供ぱんつに包まれた丸みを帯びたお尻から背筋にかけてを、たっぷりと時間をかけて愛撫する。

がくがくと腰を上下させながら、秋穂は堪え切れないというように、脚の付け根に押し付けた指を深く、乙女を中心へと食い込ませた。

じん、と甘く痺れる誘惑が、腰骨から背筋へと走り、少女の喉が反り返る。

「あは……恥ずかしいなあ、お姉ちゃん。こんなに、ここ膨らませちゃって」

薄いシャツ一枚の布地の上、下着のゴムを食い込ませてせり出す下腹部の膨らみを、探り当てるように優しく撫でて。耐え難い感覚を与えながらも、決して絶頂は迎えぬように絶妙な力加減で、茜は姉の身体を弄んだ。

「だ、だめ……え！！ やめ、て……やめてっ！！ お願い、お願い茜、もうやめて……っ、でちゃう、でちゃうよお……ッ！！」

もはやまっすぐ立っている事もできない秋穂は、妹の肩に寄り掛かるように体重を預け、きつく目をつぶって喉を震わせた。

「お、おしっこ、おしっこ出ちゃう……っ！！」

とうとう堪えきれず、秋穂ははっきりと、己を苛む尿意を口にしてしまった。

少女の限界を訴えるように、秋穂の下半身が強張り、内腿がびくっと張り詰める。きつく交叉された膝がぐいぐいとねじられ、スニーカーのかかとが地面をえぐる。

秋穂はもう何時間も前から、ずっとトイレを我慢させられていた。

着替えてから一度もトイレに行くことも許されず、耐え続けてきた尿意はすでに限界に近い。わずかな刺激ですら猛烈な大波となって脚の付け根へと押し寄せ、懸命に閉じている乙女の水門を、凄まじい水圧で打ち破ろうとしてくる。

「あ、あつあ、あつ、あッ……」

空腰を使うように腰をくねらせ、秋穂は下半身を激しく揺り動かした。少女の身体を覆うのは、ちいさな布地一枚のみ。秋も深まったこの季節の寒さをしのぐにはあまりにも頼りない。

長い我慢を強いられた膀胱は、羞恥の熱水を限界まで詰め込まれ、はち切れんばかりに膨らんでいる。薄いシャツ一枚の下、

貯水量の限界に達しつつある乙女のダムは、秋穂の下腹部を緩やかな球形に膨らませ、身体の外へとせり出しているのだ。

「っ……お願い、茜……もう許してえ……っ！！」

きつく寄せ合わせた太腿の奥に、じわりと熱い感覚。渾身の力を込めて締め付ける排泄孔が、内側からの水圧に耐えかねてひくひくと震える。いまにも『ぶくっ』と膨らみそうになる排泄孔を、両の手指で押しこねながら、秋穂は必死に妹に訴えた。

「茜、お願いっ……もう、ホントに、本当に……が、がまん、できないのっ……！！ 出ちゃう、から……お願いっ、トイレ……っ、おトイレ、いかせて…え！！」

クマさんのバックプリントぱんつを左右に振り立て、何度も何度も限界を叫ぶ。

まるで幼児のような、思春期の少女が口にするには、あまりにもはしたない懇願。しかもそれは実の妹に対するものだ。

もはやそこに年長者——姉の威厳などと言うものは残されていない。

「んもう、情けないなあ。……ちゃんと我慢しなよ、お姉ちゃんなんだからさあ」

「っ、だ、だって、きよ、今日、っ朝から一度も、トイレ……行って、ないのにつ……！！ も、もう無理、っ、もう…が、ガマンできないっ……！！」

「だーめ。朝ちゃんと行かせてあげたじゃない。その時にちゃんと約束したでしょ？ トイレは1日1回までっ。忘れたの、お姉ちゃん？」

「だ、だって、だってえ……！！」

いやいやをするように秋穂は首を振った。

茜の言葉は真実だ。しかし、そもそも朝のトイレだって、昨晚からずっと我慢させられていたオシッコを許されただけなのだ。

トイレは一日一回。秋穂が妹に強いられている、あまりにも理不尽なルールの一つ。

秋穂は昨日も同じように妹にトイレを禁じられ、夕食の時から延々と尿意を弄ばれ続けた。我慢に我慢を重ね、耐え抜いて、どうにかトイレに駆け込んだのが日付を越えたばかりの午前1時少し前。

確かにその時も、茜はからかうように、秋穂に言った。

『ホントにいいのかなあ？ 今日、もうこの後、オシッコできないよ？』

それを突き飛ばすように頷き、妹の腕を振り切って、秋穂はトイレに突進していた。

一日にたった一回だけ許された権利を、日を越えてすぐに使いきってしまうことへの躊躇いなどは、まったくなかった。まる一日分のオシッコを、猛烈な勢いで陶器の中へと叩きつける解放感のなかでは、それから先の事なんて考えている余裕はまったくなかったのだ。

その結果が、今の秋穂の醜態なのである。

「言っとくけど、オモラシしちゃっても着替えなんかないからねー、お姉ちゃん？ そのまま電車乗ってお家まで帰るんだから。くすくす。オモラシクマさんぱんつ、みんなに見られたいんなら勝手にすれば？」

「っ、やだ、あ！！ 茜、お願い、お願い！！ と、トイレえ……！！」

言いながらも、茜は秋穂の腕に手を絡め、まるで恋人が抱きつくように胸元に引き寄せる。とうとう自由に我慢する事すら遮られて、秋穂は悲痛な呻きを喉奥で唸らせる。

『今日』はまだあと6時間以上も残っている。もはや一刻の猶予もない秋穂の下半身が、それだけの時間我慢を続けていられるわけがないのは、誰の目にも明白だった。

「もう、だらしのないなあお姉ちゃん。ちゃんとトイレのしつけもできてないんだから。妹として恥ずかしいよ。ホント、わたしの身にもなって

欲しいなあ。あはは♪」

「っ、あ、ああっ」

妹の嘲りにも、思うように答える事ができない。限界寸前の尿意は、鈍い痛みを伴ってずきずきと膀胱を疼かせ、執拗に秋穂の排泄器官をなぶり続ける。

薄い布地の内側で長時間のガマンを強いられた排泄孔は、酷使された括約筋と共にうつすらと熱を帯び、じんと脈動を始めていた。

社交的で良く出来た妹と、大人しい性格の引っ込み思案な姉。

理不尽を受けても引っ込んでしまう姉を庇うように、前に出る強気な妹——年が離れていないことと、秋穂が年齢の割に小柄であるせいもあって、秋穂と茜は幼いころから姉と妹を取り違えられることも少なくなかった。

それでも多少のアンバランスさはあれども、長年続いていた良好な姉妹関係が崩壊したのは、今年の夏休みに入る前のことだ。進学に伴い、春から秋穂と同じ学校に通うようになった茜は、社交的な性格と整った顔立ちで、すぐに学年でも人気者となった。部活や委員会からも勧誘がくるほどの引く手数多で、教師からも覚えがよいらしい。秋穂も決してそんな茜を羨むことなく、自分には似合わないくらいに良く出来た妹だと、そう思っていた。

しかし、中間試験も終わってすぐ、秋穂が3年の生徒会長から告白されたことで、事態は急変する。

入学から数カ月で既に10回近くも告白を受けていたという茜は、同学年の男子達をことごとく袖にしながら、その実ひっそりと生徒会長の事を狙っていたのだ。茜が1年にして生徒会に顔を出し、雑用を積極的に手伝うなどして役員とも顔馴染みになっていたのもそれが理由だったと秋穂が知ったのは、随分後になってからのことだ。

実際、秋穂にしても会長からの告白はあまりにも寝耳に水の出来事だった。間違いなく夢か性質の悪い悪戯だと疑い、信じるまでに1週間近くかかったほどである。

なんでも、いつも図書室に籠って本を読んでいる秋穂に、生徒会長はずっと想いを募らせていたのだそう。一体どこが気に入られたのかも、実のところ秋穂にはよく解らない。

ただ、不幸なのは、茜の告白と、会長が秋穂に当てて送った恋文の時期がほとんど重なってしまったこと。

いくつかの擦れ違いが決定的な誤解となり、姉妹の間には修復不可能な亀裂が入ってしまった。

茜は、姉を理由に自分が振られたと思い込み、秋穂に対して深い憎しみを抱いたのである。それまでも、姉妹二人だけの時には我が儘を言う事もあった茜だが、この事件以来その態度は決定的に変わってしまった。言葉の端々に生徒会長との関係を持ち出し、秋穂に理不尽な要求を繰り返すようになったのだ。

『いいなあ、お姉ちゃん。先に生まれたからってだけで、わたしの分まで横取りしちゃうんだもんね』

事情を知るに至って秋穂も罪悪感を覚えていたこともあり、最初の内はつい妹の要求を受け入れてしまったことで、事態に更なる拍車をかけた。茜の要求は日々エスカレートし、ついには理由なく、姉にイジメ同然の理不尽な行為を繰り返すようになったのである。

そうってから、もう秋穂の抗議など受け入れられない。茜は姉が自分より優れているところがないのを確認するかのよう、殊更に秋穂を貶めるような物言いを繰り返すようになった。

そんな事が続いて、秋穂の心は知らず疲れきって、摩耗してしまっていたのかもしれない。

ある日、秋穂は家のトイレの目の前で間に合わずに『失敗』してしまうという事件が起きた。

なんとも運の巡り合わせが悪かったとしか言いようがない。その日に限ってまるで図ったように様々な邪魔が入り、秋穂は放課後になってもトイレに入ることができないまま、家路につくことになった。途中のコンビニにも入りそこね、公園の公衆トイレはあろうことが故障中。家までもたないと、遠回りになるのを承知で飛び込んだデパートは、大売り出しで大行列。

4時間以上も下腹部で暴れまわった尿意を必死になだめ、だましだましなんとか帰着いた家で——悲劇は起きた。

玄関に靴を脱ぎ棄て駆け込もうとしたトイレから、ちょうど茜が出てきたところだった。廊下で妹とはち合わせ、すれ違う——時間にしてほんの数秒にも満たないわずかなロス。けれど、秒刻みのスケジュールで解放のカウントダウンを刻んでいた秋穂の下半身は突如の予定変更に対応しきれなかった。

あとほんの数歩。トイレの目前、ドアノブを握りスカートの上から下着を押さえ込んだ状態、秋穂は我慢の限界を迎え、そのまま盛大に廊下を水浸しにしてしまったのである。

茜はとても信じられないというように、冷たい目で秋穂を蔑み、後始末をしている姉を散々に罵った。いい歳をしての『おもらし』は、出来の悪い姉を疎む妹にとって、格好の攻撃材料だったのだ。

そして目下、茜は秋穂の『トイレのしつけ』と称して、秋穂にトイレに行く事を禁止し、嫌がる姉をあちこち引き回す事を繰り返していた。

「ねえお姉ちゃん、せっかくお散歩にきたんだから、ぐずぐずしないでちゃんと歩きなよ？」

「っ、あ、やだ、ひ、引っ張らないでっ……！！ が、我慢できなくなっちゃうっ……！！」

「あは。だから言ったじゃん。ねえ？ そんなんで本当に夜まで我慢できるのって。これじゃ心配だなあ。明日から学校だよ？ ちゃんと授業中も我慢できるのかなあ？」

くすくすと、口の端を歪めて笑い、茜は秋穂を引きずるように歩き始める。もはや立っている事も難しい秋穂は、脚を動かすこともできず、ずりずりと地面を引きずられ、公園の土の上にはスニーカーの痕が延びてゆくばかりだ。

茜は、明日からもこの『訓練』を続けるつもりらしい。いったいどうやって？ どんな格好で？ どんな無茶な事を？ そんな想像は既に秋穂の思考の及ぶ範囲ではない。たった二日でもう憔悴しきってしまった秋穂は、なお高まり続ける尿意に耐えることで身体のひとつの機能を使い果たし、既に力なく首を振るので精いっぱいだ。

「お姉ちゃん、会長さんの前でもそんなカッコでいるつもり？ お姉ちゃんが恥ずかしい女の子なのは今に始まったことじゃないけどさ、そんなんじゃないわたくしまで恥かくだよ？ なんだったら会長さんにこのカッコ、写メっちゃおうか？ うちのお姉ちゃんはこんなカッコでお外歩くのが大好きです♪ ってさ」

「……………っ」

秋穂から取り上げた携帯をちらつかせ、囁く茜。

そんなことできるわけがない、と思う一方で、茜ならやるかもしれないという恐怖はぬぐえない。妹が本気になった時、自分が抵抗する事など出来ないのを、秋穂は痛いほどに身をもって知っている。

トイレの前でスカートの前を押さえて足踏みをしている写真（顔だけは写されずに済んだ）を送られた時には心臓が止まるかと思ったし、その後の弁解は生きた心地もしなかった。

「ねえ、聞してる？ お姉ちゃん。ちゃんとおうちまで我慢しなきゃ。……できないんなら『罰ゲーム』だよ？」

「んっ、んうっ、くうっ……」

妹に囁かれ、秋穂は顔を赤くしながらばたばたと腳踏みを繰り返す、膝を交差させてなんとか崩壊寸前のダムを押しとどめようとする。

しかしそんな行為すら、茜にしてみればルール違反だと言うのだった。

「ほらあ、クネクネするの禁止って言ったじゃない！！ ちゃんとまっすぐ背伸ばして！ 恥ずかしいトコ押さえるのもダメだからね！！ ……はい、あと十秒ね！ やめなかったら『罰ゲーム』追加だからね！」

「んっ、あ、ま、待って、っ、茜っ……」

「ふふっ……じゅう、きゅう、はーち、なーな、」

理不尽にルールが変更される。慌てて反駁しようとする秋穂だが、無常にもカウントダウンは始まっていた。もはや二人の姉妹の間に対等な会話などない。秋穂は小さな暴君に振り回される、哀れな奴隷だった。

——『罰ゲーム』。

その言葉に茜はおなかの奥に冷たいものを飲み込んだような怖気を感じる。

（っ……も、もう嫌！！ い、今、あんなコトさせられたら……ほ、っ、本当に……あ、あれだけは、もう絶対に嫌っ……！！）

いじらしくも妹の命令に従い、秋穂は茜の言う『ちゃんとした我慢』を実行しようと試みる。しかし、どれだけ頑張ったところで、秋穂の下腹部をぱんぱんに張り詰めさせた恥ずかしい液体がそれを許さない。すでに全身を使って我慢しなければ、耐える事も難しいほどの尿意なのだ。ゆっくりと様子を見ながら脚の付け根から手を離し、足踏みを止め、腰を伸ばしてまっすぐ立つ——それだけのことが、絶望的に難しい。

はち切れんばかりに膨らんだ膀胱は、熱く焼けた砂を詰め込まれたようにずしりと重く、重力に引かれるままに乙女のダムの底に空いた穴から噴き出しそうになっている。圧迫された下腹部では猛烈な水圧が激しく渦巻き、絶えず波のように秋穂の『女の子』に襲いかかる。

尿意の波を堪えようとオシッコの出口に力を籠めるたび、そこは鈍い痛みすら伴ってじんじんと痺れるほどだ。

「んああ……っ」

我慢の辛さに一瞬気が緩み、それと同時に排泄孔が緩みかける。じゅじゅっ、と恥ずかしい音を響かせそうになる股間を思わず押さえてしまい、秋穂はさらに激しく身体をよじり合わせた。こんな有様で、動かずにじっと立っているなんてことができるはずもない。

「ろーく、ごーお、よーん……」

「あ、っあ、っ……ふ…あッ」

手を離すどころか、脚の付け根に突っ込んだ両手の力を借りて、おしっこを出口を塞ぎ続けていなければならない。淡い色合いの下着はますます無残に引き延ばされ、クマのバックプリントは大きく皺を寄せて秋穂の太腿に食い込む。

「さあーん、にーーい、いいーち、」

姉の様子を楽しむようにカウントダウンを引き伸ばし、茜は最後に、ぱん、と両手を打ち合わせた。

まるで手品の掛け声のよう。しかし、マジックのようにその一言で、秋穂の尿意が嘘のように消え去るなんて事は、勿論ない。

「……ぜろ。あーあ、ダメじゃんお姉ちゃん。全然ちゃんとできてないよー？ みっともないなあ、ちゃんとトイレのしつけもできてないお姉ちゃんがいて、恥ずかしーの私なんだからね？」

滑稽な姉の姿を前に、茜は苦笑を隠そうとしなかった。そもそもわずか10回のカウントで、限界寸前の尿意の波を押さえ込むことなど出来る筈がないのだ。慎重に慎重に時間を費やし、タイミングを見極めて、数秒じっとしているのだけが精一杯。ましてこの寒空の下、シャツ1枚と下着だけの薄着では不可能でしかない。

「ふふっ」

「や、やだ、やめて！！ 撮らないでえっ」

携帯のカメラを向けてシャッターを切る茜に、秋穂はかぼそい悲鳴を絞り出す。

動揺は更なる尿意を誘う。カウントダウンが始まった時よりも激しく腰をくねらせ、足踏みを繰り返す秋穂の顔を、茜は口元を緩ませて覗き込む。

「あっれー？ お姉ちゃん、ひょっとしてもうチビっちゃった？ うふふっ」

「っ、そんな、こと、ないっ……」

「そおかなー？ さっきからすっごくオシッコしたそうだけど？ 言ったよね？ 漏らしちゃったらその格好で家まで帰るからね？ あ、罰ゲームももちろんだよ？」

「で、出て、っ、でてないっ、ないから、あっ！！ ちゃ、ちゃんと、我慢できてるもんっ」

万が一にも、そんな事はあってはならなかった。ぶるぶると強く首を振り、秋穂は答える。少しでも気を抜いたら妹の言葉が真実になってしまう事は明白で、だからこそ、秋穂はそれだけは全力で回避しなければならない。

唇をきつくかみしめ、秋穂は再度、妹にアピールする。

まだ、漏らしていないから——トイレに行きたい、と。

「えー？ ホント？ お姉ちゃん嘘つきだもんなあ。信用できないなー」

「っ……そんな、嘘、なんか、じゃっ……」

「ふふっ、じゃあお姉ちゃん、見せて？ いつもの確認ポーズ！！」

「あ、っ……」

かあ、と秋穂の顔が赤くなる。こんな往来でそんな事を要求するなんて——妹の悪意に背筋が震える。が、ここで茜の了解を得なければ、遠からず押し寄せる尿意の前に屈してしまうのは明らかである。それはもはや時間の問題だった。

「……っ」

羞恥を飲み込んで、秋穂は周囲を素早く確認し、シャツを掴んで持ち上げた。薄い布地がおヘソの下が辛うじて覗くくらいの位置になり、小刻みに震える秋穂の白いおなかが覗く。

「た、確かめて、ください、……で、出てないです、お、オシッコして……して、ないです！！ ぱ。ぱんっ、真っ白、です……！！」

心持ち開き気味にしたクマさんパンツの股間を、示すように前に突き出す。

妹に『オモラシてないです』と示すための、定番のポーズだった。

尿意に耐えかねて必死の行為とはいえ、秋穂自身も信じられないほどのみっともない姿だ。少しでも頭の中に冷静な部分が残

っていたら、今すぐこの場で舌を嚙んで死んでしまいたくなるほどに。

「ふーん……なんかよく見えないなあ。このへん濡れてる気もするし」

「っ……あ、汗だもんっ！！ ……お、オモロシなんか、してないっ、ちゃ、ちゃんと、ガマンでき、てるっ……からっ！！」

いつ誰が通りかかるとも知れない公園で、死にも勝る屈辱を強いられ、秋穂の羞恥心はズタズタだ。それでも一刻も早く許しを得るために。秋穂は茜に、下着を汚していないことを全力でアピールしなければならなかった。

「だ、だから、うく、うっ……お願い、お願い茜、お、おしっこさせて……！！ ちゃ、ちゃんと、言われた通り、がまん、っ、してる……うう……っ、はあはあ……っ、ちゃんと、茜の言うこと、聞くから、……お、おねがい、もうだめ、出ちゃうの、うあ……も、もう我慢できないからあ……っ！！ んああっ……今度こそ、ちゃ、ちゃんと、おしっこ……う……おしっこ……させてよおっ！！」

鬼気迫る形相で訴える秋穂の切実な叫びが響く。

「……………」

「っ……………あ、茜。ツ」

しかし、茜がしばしの沈黙の後に見せたのは、醜悪に唇を歪めた笑顔だった。

「ぶっ、あっはははは！！ ひっどーい！！ あっははははは！！」

おなかを抱えて笑いだす茜に、秋穂はもはや言葉もない。

「あーっ、おっかしい！！ ねえ、ねえねえ、お姉ちゃん、やめてよねーもう。お姉ちゃんてば今いくつなの？ そんなクマさんパンツ見せてさ、『おしっこさせてー！！』って、本気で言ってるの？ ちゃんと我慢もできないんだ？ほんとさあ、幼稚園じゃないんだからさあ……やめてよね、恥ずかしーなあ」

「あ、茜……うっ！！」

恥を忍んでの必死の訴えすら、茜にとっては姉をいたぶるための材料でしかない。しかしその妹に赦しを請わなければ、秋穂には排泄の自由すらないのだ。

（んああっ、でちゃう……でちゃうっ……！！）

もはや確認ポーズもとっていらなくなり、いまにも限界を迎えそうな下腹部のダムをきつく押さえつけ、腰を揺すって、秋穂は懇願を繰り返す。

「お、お願いっ……茜……お、おし、おしっこ……っ」

「えー？ ちよっとー、おうちまで我慢するって約束したでしょ？ ホントにだらしないなあ、お姉ちゃんてば」

「っ……」

脚の付け根から手を離す事もできず、秋穂は前屈みのまま縋りつくような上目遣いで、妹の顔を覗き込む。

茜は口元を嗜虐的に歪めると、くすくす微笑んだ。

「そうだなー……ど・う・し・よおっかなー？」

「あ、あき、ほっ……」

もったいぶって考え込むふりをする妹の言葉を、秋穂はただじっと待ち続けるほかない。じりじりと時間だけが過ぎてゆく。きゅうんっ、と張り詰めた下腹部が収縮し、ぱんぱんに膨らんだ膀胱の中身がたぐんと揺れ動く。

「ねえ、お姉ちゃん、もうホントに我慢できないの？」

「っ、う、うんっ……」

「ホントにホント？」

「ほ、本当、っ、んあ……だ、だからっ……は、はやくっ……！！」

妹の言葉に赦免の気配を感じ取り、秋穂は何度も、勢い込んで頷く。しかし、そんな秋穂を見下ろして、茜はさらに意地の悪い笑みを覗かせた。

「あ、ねえお姉ちゃん？ 今さ、ひょっとしてオシッコできるって思った？」

「え……？」

いきなり尋ねられ、秋穂は目を瞬かせる。

「だからさ、お姉ちゃん、いま、わたしが『オシッコしていいよ』って言ったらどうするつもりだったの？」

「ど、どうするっ、て、……っ、そ、そんなの決まって……」

「あーあー、ほらお姉ちゃん、恥ずかしいなあ。ちゃんと周り見なせば？ ねえ、わかってる？ この近くに、どこにもトイレなんかないんだよ？ それなのにさ、なんでこんなところでオシッコさせて欲しいなんて言っちゃうのかなあー？」

「……………っ、そ、それ、は……っ」

ようやく気付いた秋穂の顔は、耳まで朱に染まる。

そう。茜の言葉の通り、この付近には一切、トイレ——オシッコのための設備など存在しないのだ。

しかし暴虐に暴れ回る尿意に振り回され続け、『おしっこができる』という誘惑に支配されていた秋穂に、そんなことまで考えている余裕は残されていなかったのだ。茜が意図して、会話の流れをずらし、秋穂の要求を『トイレに行きたい』から『オシッコさせてほしい』にすり替えていたことにも、秋穂は気付いていなかった。

「ほら、教えてよ？ お姉ちゃん、『どう』するつもりだったのかなー？」

答えなど決まっている。が、とても思春期の少女が口にできるわけがなかった。秋穂は答えられずに、ますます顔を赤くして俯いてしまう。

「なに？ ひょっとして考えてなかったのー？ お姉ちゃんってば、そんなにオシッコしたかったんだ？ ねえ？ それともさ、オシッコできればどこでもよかったのかなあ？ こんな誰かに見られちゃうようなトコロでも関係なかったの？ お姉ちゃんだって、女の子でしょ？ ひょっとしてさ、わたしがオクケーって言ったら、ここで、そのままパンツ脱いでオシッコ始めちゃう気だったの？」

「っ……やめっ、違うのっ……」

「えー？ 違うの？ 本当に？ じゃあじゃあ、どうするつもりだったの？ 教えてよお」

「っ……」

これが妹の手管なのだ。

秋穂だって具体的にこの場で野外排泄を——野ションを始めてしまうつもりだった訳ではない。意識がわずかでも無かったかと言えば嘘になるかもしれないが、そんな事を考える余裕すらなかったというのが実際のところだ。

その、わずかな罪悪感を茜は見逃さない。言葉尻を捕え、羞恥を煽り、あらゆる言葉に悪意をたっぷり塗して歪めてしまう。

茜の容赦ない言葉に突き刺されるかのように、秋穂の下腹部は苦悶を叫ぶ。天性の素質とも言える嗜虐的な言葉が、膀胱を直接刺激されるような羞恥を呼び起こし、ますます秋穂の羞恥の源たる激しい尿意をなお一層沸騰させる。

言いかえすこともできず、溢れ出しそうなオシッコを懸命に堪え、小刻みに脚を震わせながら身悶えする秋穂を、茜は嗜虐的な笑顔で見下ろしていた。

「ふっ、黙ってるってことは図星なんだ？ 一応言っておくけどさ、ダメだよお。お姉ちゃん。お姉ちゃんは分からないかもしれないけどさ、普通に考えて、女の子がこんな道端でおしっこなんて、許されるわけじゃないじゃない？ ……犬とか猫じゃないんだからさあ。そ

んなこと、考えちゃうだけでもヘンタイだよな？　ねえ、それくらい分かってよね？　お姉ちゃんは私より『お姉ちゃん』なんだから。……せっかくわたしがお姉ちゃんの『トイレのしつけ』してあげてるんだからさあ」

そうだ。秋穂は茜に隠し事などできるわけないのだ。

姉妹ゆえか、秋穂の浅はかな考えなどなにもかも茜にはお見通しだった。一方の秋穂には、妹がその笑顔の奥でなにを企んでいるのかなどまるで見当もつかない。不公平極まる差別を産まれながらに強い神様を秋穂は恨む。

「ねえ、それとも、お姉ちゃんはこんな誰かに見られちゃうようなトコロでオシッコしたいの？　ひょっとして、シてるところいろんな人に見られたかったんだあ？　そう言えば、前に路地裏でオモラシした時も、すっごいいっぱいオシッコ出してたよねえ？　音で気づかれちゃうよって言ったのに全然止められないしさ。……あははっ、そっかあ、お姉ちゃんってホントにヘンタイなんだねえ」

「ち、違うわ、そんなのちがうっ……！！」

そう言わなければ、この妹は本気で、雑踏溢れる往来、公衆の面前で秋穂に放尿を命じかねない。恐ろしい想像はなまじ杞憂とも言いきれず、秋穂は背筋に怖気を感じながら、声を荒げて言い返した。

「ふうん……じゃあさ、お姉ちゃん、別にいまここでオシッコしなくても平気なら、ちゃんと我慢できるよね？　そんな、みっともない格好でモジモジしなくてもさ？」

「っ、で、でも、そ、それ、あ、ああ、っ……」

途切れることのない尿意はもはや全身を使った我慢でなければ耐えきれないほどに高まり続けている。いつ下着の奥に漏れ出した熱い雫がはしたない水音を響かせてもおかしくないほどだ。何かで股間を押さえておかなければダムの崩壊は確実で、何でもない風を装うことなど出来る筈がない。

「ほら、どうしたの？　お姉ちゃん、できるよね？」

「っ……」

「うふふ。ねえお姉ちゃん、知ってる？　お姉ちゃんって実はひそかに人気あるんだよ？　会長さんのほかにも、わたしのクラスにも、お姉ちゃんのこと好きだって子、けっこうたくさん居るんだから。それなのに、実はお姉ちゃんって『トイレのしつけ』もできてない恥ずかしい子なんだよね」

「っ、や、やめ、……もうやめて、もう、赦して……っ」

涙を滲ませ、首を振る秋穂。もはや全身に力が入らず、襲い来る尿意の前に身を丸めて息を殺すことしか出来ない。

しかし茜は容赦なく、そんな姉に処刑の決定を下したのだった。

「はい、じゃあそんな恥ずかしいお姉ちゃんには追加で『罰ゲーム』けてーい」

「っ、そんな、嫌……やめてえ……」

茜の言う『罰ゲーム』とは、秋穂が我慢を続けているこの状況で、さらなる水分の摂取を強制されさせることだった。しかも、飲まされるのは特に利尿効果の強いお茶やコーヒーに限られる。

その量は茜の気紛れで変わるが、500mlよりも少なくなることはまずなかった。

秋穂はお茶やコーヒーに含まれるカフェインにことさら敏感な体質だった。元々利尿作用のある物質だが、秋穂の場合はひとくち口にするだけで10分後には途端にトイレに行きたくなるような有様である。すでに我慢の限界に達しつつある状況で、秋穂にとってはほとんど利尿剤に等しいようなものを無理矢理、大量に飲まされるのだから、その効果は想像を絶する。

今、まさに現在進行形で、すでに女の子のプライドをなかば犠牲にして激しい尿意を我慢し続けている秋穂にとって、猛烈な利尿作用と水分の摂取を命じる『罰ゲーム』は何よりも避けなければならないことだった。

「だーめ。あんまり聞き分けのないお姉ちゃんには、追加でもう1回『罰ゲーム』してもらおう？」

「や、やだ……やだよ……」

シャツの前を絞るように握り締め、秋穂は懇願する。2時間前にスポーツドリンクを飲まされただけでこの有様なのだ。この状況で紅茶やコーヒーなんか飲まされてしまったら、身体がそのままその場にしゃがみ込んでオシッコを始めてしまうかもしれない。

茜に縋り付こうとする秋穂だが、おしっこを堪えたまま、太腿をくっつけ脚を交差させたへっぴり腰のよちよち歩きでは茜に付いてゆくのがやっとだ。

その間にも腕組みをした茜はきよろきよと周囲を確認し、思案を巡らせる。

前回は、学校の水飲み場まで連れていかれて、無理やり蛇口に顔を押し付けられた。着せられていた体操服がびしょ濡れになるまで水を飲まれ、そのまま校内を歩きまわされたのだ。肌寒い季節に濡れた服のままで引き回しは、凄まじい速度で秋穂の膀胱に追加分のオシッコを注ぎ込んでいった。

また今回も同じようなことをさせられるのか——もはや恐怖に声も出ない。

やがて公園の一角に目を止めた茜は、これだとばかりに目を輝かせた。

「じゃあ、これにしよう、お姉ちゃん」

「え……？」

茜が足を止めて指差したのは、路上の自動販売機だった。商品の入れ替えが進んでいないのか、もう回りは冬と言っていい季節だというのに、いまだに半分近くが「C O L D」表示のドリンクが並んでいる。

「ほら。今日の『罰ゲーム』だよ。でも今回は特別にどれでもいいから好きなの選ばせてあげる」

「い、いいの……？」

「うんっ」

予想外の言葉に、秋穂は恐る恐る聞き返してしまう。いつもなら茜は間違いなく一番量が多く、利尿作用の強い500mlの緑茶か紅茶、コーヒー飲料のペットボトルを問答無用で指定してくるのだ。

だが、今日はそれを秋穂自身が選んでいいという。

秋穂は思わぬ采配に胸中で喝采を上げていた。一番小さな缶飲料なら、容量はペットボトルの半分以下だ。しかも直接おなかを冷やす原因となって響かないだろう『HOT』を選べば、いくらか尿意を和らげることができるかもしれない。可能なら、水分も少なそうな——ココアかポタージュのような食品に近いものであれば——

「はい！今日はさらに大サービス！！特典で、全部飲んだらおしっこしてもいいよ？」

「ほ、本当っ！？」

「あはっ。……なあにその嬉しそうな顔？ やっぱりそんなにオシッコ出したかったんだ？ もお、さっきからオシッコのことだけしか考えてないんだね？ ヘンタイお・ね・え・ちゃ・ん？」

一瞬の油断に緩んだ秋穂の警戒を潜って、茜の言葉が深々と心に突き刺さる。

ことさら年上であることを強調するように呼びかける茜に、秋穂は繊細な羞恥心を踏みにじられてゆく。だが、それでも今は、『罰ゲーム』の恐怖から逃れられたことへの安堵の方が大きかった。

茜の煽りに耐えながらも、秋穂の視線は自販機の右下、『HOT』表示のココアに釘付けになっていた。

「ふふっ……もお、しょーがないなあ、お姉ちゃんは。おトイレのしつけもできてないんだから。……でもいいよ、わたしとっても優しいから、許してあげる。ほらお姉ちゃん、『罰ゲーム』選んだらオシッコしてもいいよ？」

「っ……じゃ、じゃあ……っ」

「た・だ・し！」

赦免の気配に自販機に飛び付きそうになった秋穂の鼻先に、茜はピンと立てた指を押し付けた。

「ご褒美のオシッコも、それにするコト。いい？」

「え……？」

妹の言葉の意味が分からず、秋穂はぼかんと口をあけ、思わず聞き返してしまう。

「え、っと……そ、それって……」

茜はそんな姉の呆けた表情がたまらなく可笑しいようで、くすくすと笑って、自販機を軽く叩いた。

「だからあ、お姉ちゃんが飲んで空っぽにしたジュースの入れ物が、お姉ちゃんの『専用トイレ』ってこと！！ちゃんと飲んだ分だけおしっこ出していいよって言ってるの！！ふふ、簡単だよな？まさか、お姉ちゃんって、飲んだジュースの分よりもいっぱいオシッコ出しちゃうなんてこと、ないもんねえ？」

悪魔のような宣言だった。

「あ、もちろん私の見てる前でおしっこするんだよ？わたしがちゃんと見張ってないと、お姉ちゃんズルするかもしれないからね♪」

「っ………」

喉が嫌な音を立てて引きつるのを、秋穂は自覚していた。もはや言葉も出てこない。妹の底知れない悪意は、すでに秋穂の想像をはるかに超えていた。

「それと、今特別におしっこさせてあげるんだから、これが済んだらもう明日までトイレは禁止だよ？お姉ちゃんのおトイレって一日一回って決まってるもんね。2回目なんだから当然だよな？あー、私ってば優しいなあ」

残酷な言葉で、茜は巧みに、姉の逃げ場を封じてゆく。

動けなくなってしまった秋穂を見下ろし、茜はくすりと口元を歪め、

「ほら、どれがイイの？お姉ちゃん？はやく選んで？」

「っ……」

「ほらあ、どうしたの？はやくトイレしたいんでしょ？あはははっ」

自販機に並ぶ飲料を前に、茜は黙りこくってしまった姉に意地悪く問いかける。ずき、と鈍く下腹部が重い痛みを繰り返し、硬く閉ざした出口がひくひくと収縮を始める。

（っ、あ、あっあ……っ）

乙女のダム崩壊の予兆が始まっていた。もう一歩も動けないまま、秋穂は自販機を睨み付ける。

——飲んでしまったあとのことを考えれば、一番小さな150ml缶を選ぶのが一番だ。まだ今日は6時間以上残っている上、明日も同じように、トイレを自由にさせてはもらえないことは確定だった。

だからこれ以上下腹部に負担を駆けるわけにはいかず、少しでも摂取する水分は少ない方がいい。それは秋穂も理解している。

しかし、同時に秋穂が選んだ『罰ゲーム』の飲料は、そのまま秋穂の出せるおしっこの量に繋がるのだ。

本来、普通に考えて、茜の迫っているのは選択肢になりえない選択だ。どんなことがあろうと、こんな場所で——飲料の入れ物にオシッコを済ませるなんて、女の子としてあり得ない。一番小さな缶飲料を選んで飲み、あとはなんとか、トイレを我慢するしかない。

だが、半日以上にも及ぶ言葉責めと羞恥の中で限界まで追い込まれた少女は、乙女の羞恥などを度外視して、荒れ狂う排泄欲求のままに従う選択を強いられていた。今すぐ出したい。おしっこがしたい。本能のもたらす欲求が、少女の決断を躊躇わせ、目の前の誘惑を振りきれない。

（んああ……っ）

秋穂はそつと下腹に手をやって、おなかの張り具合を確認める。

少女としてのプライドは否定するものの、常識的に考えれば朝からずっとガマンさせられ続けたおしっこが、あのHOTの小さな缶に全部おさまるとはとても思えない。

「……っ……こ、これ……っ」

長い、長い、長い逡巡の末、秋穂はずらっと並ぶペットボトルの一番右上、夏の名残りのままであろう「増量中・600ml」と書かれたペットボトルのミネラルウォーターを指差した。

指差さずには、居られなかったのだ。

「へえ……お姉ちゃん、これでいいの？　こんなに？」

「っ……ち、違うの、言わないでっ」

赤くなった顔を伏せ、必死にかぶりを振る秋穂に、茜はぴたりと身体を寄せてくる。

「あは。ねえ？　お姉ちゃん、こんなにいっぱいおしっこ出したいの？　600mlだよ？　ろっぴゃくみりっとする。1Lの半分よりも多いんだよ？　そんなにおしっこしたいの？　ねえ、そんなにいっぱい、おしっこおなかのナカに溜めちゃって、恥ずかしくないの？」

「や、やめ、触っちゃダメえ！！！」

やわやわと、妹の手が秋穂の下腹部へと伸びた。必死にシャツの上から股間を押さえる秋穂の腕の隙間を抜け、妹の手のひらが細かい抵抗の上から秋穂の下腹部を押し込む。

「ふあああ！？」

やわやわと、絶妙な力加減で下腹部を揉みほぐされ、秋穂は悲鳴を上げてしまった。緊張と水分で張り詰め、伸び切った膀胱を直接刺激され、身体が一番底の水門が高まる水圧に押し開かれようとしてしまう。

「うあ……っあくっ、あ、っ、あッ……」

だらしなく開いた口ではあはあと息を荒げ、背中を丸め、脚の付け根に挟んだ両の掌を思い切り持ち上げて、股間の前からお尻の後ろまでを引っ張り上げる。シャツが引き伸ばされ、お尻は丸見え、引き伸ばされた下着の股布が少女の股間に食い込んで、きわどい位置まで見えそうになる。

何を選んだところで——こんな風に羞恥をえぐられる言葉をぶつけられるのは決まっていたのだ。もし小さなコーヒーク缶を選択していても、利尿作用のある物を飲んで、すぐにお漏らししたいのかなどと無茶苦茶な理屈をぶつけられていたに違いない。

しかし、更なる理不尽を強えられることを承知で、秋穂は懇願を繰り返すしかなかった。

「お、おねがい、はや、く……っ」

「はやく？　『はやく』どうしたいの？　ねえ、お姉ちゃん、はやく『ナニを』したいの？　ねえ、わたし馬鹿だから、ちゃんと言ってくれないとわかんないなあ♪」

「っ……おね、がい……茜……！！　オシッコ、したいの、は、はやく、それ……飲ませて……っ」

「あはははっ……お姉ちゃん、サイテーだね。オシッコしたいからこれ買うんだ？　これに、600mlもオシッコしたいから、このミネラルウォーター買っちゃうんだ？　ふふ、ジュース会社の人とか聞いたら怒るだろうなあ♪」

「あ、茜エッ……」

「うふふっ、わかったよお」

茜はちろと舌を出して見せると、ポケットの財布から硬貨を取り出し、自販機のボタンを押しこむ。

がこん、と重い音を立てて落ちてきたペットボトル。内容量 6 0 0 m l、この時期にありえないくらいにきんきんに冷えたミネラルウォーターを、秋穂はひたたくようにして奪い取り、蓋をあけると一気に口を付けて飲み始めた。

「んんっ、んう、つつ……」

がぼがぼと、まるで水責めにあっているかのように——飲み口を咥えこんだ唇から、ミネラルウォーターがこぼれおちる。T シャツの胸元にジワリと染みが広がり、少女の肌を濡れ透けさせる。

それでも、恐ろしいまでの勢いで大量の水分があつというまに秋穂の喉奥に流し込まれてゆく。

喉が渇いているのは嘘ではない。延々責め鞭られていたせいで、口の中はカラカウだった。冷たいミネラルウォーターが、火照った喉を胃の奥を冷やしてゆく。

飲料ではなくミネラルウォーターを指定したのは、少しでも利尿作用のないものを選ぶことで、飲んだ分がおしっこに変わらないようにという、いじましい考えだ。たとえ飲む量が同じだとしても、膀胱に負担がかからないほうを選ばなければいけないかった。

「っ……は、っ、はあ、はあっ」

「わー……すごい」

秋穂の形相にしばらく呆気にとられていた茜が、目を丸くして賞賛の声を上げる。

それも道理で、夏にマラソンをした直後でも、こんな勢いでは飲めないかもしれない。咳き込みながらもあつという間にペットボトルを空にした秋穂を、ぱちぱち、と妹が拍手で出迎えてくれた。

「お姉ちゃんそんなに喉渇いてたんだ？ ふふ、じゃあもう一本くらい飲めちゃうよね？」

「ま、待って！！ いいから、だ、大丈夫、だからっ！！」

茜が自販機のボタンに手を伸ばそうとするのを、秋穂は慌てて制止した。

妹はええーっと口を尖らせる。

じんじんと鈍いほどに痛む下腹部の尿意が、これ以上水分を口に入れてはならないと警告している。必死になって食い下がる秋穂に、茜はなおにやにやと意地の悪い笑顔を崩さない。

そう。本番は、これからなのだ。

「うふふ、お姉ちゃん凄いなあ。こんなにいっぱい、これからオシッコ出しちゃうんでしょ？」

空っぽになったペットボトルを示し、茜がくすくすと笑みをこぼす。6 0 0 m l の内容量は、普通に考えて十分すぎるほどの『大容量』だ。しかし——本当にこれに全部、秋穂が我慢しているオシッコが納まるのか。

いくら否定しようと不安になってしまうほど、秋穂の尿意は壮絶だ。

（ち、違うもん、い、いくらなんでも、こんなにいっぱい、オシッコなんかしない……っ）

精一杯の否定も、どこか空々しいものだ。

ペットボトルにオシッコを済ませる——およそ、思春期の少女に許されるような行いではない。秋穂も携帯トイレというものの存在こそ知っていたが、これまでに使った経験などないし、これからもまず使うことはないだろうと思っていた。

多くの少女がそうと認めるように、秋穂にとっても、オシッコというのはきちんと整備されたトイレ——オシッコのための便器と、トイレトペーパーと、周囲の視線を隠す個室の壁や、鍵のかかるドア。その他もろもろの設備をひっくるめて、オシッコのための設備でこ

そ、なされるべきであり。

断じて、こんなものに済ませるようなものではないのである。

「あははっ、お姉ちゃん、ほら、おなかぱんぱんだね？ これ全部オシッコなの？ 恥ずかしーなあ、こんなにオシッコ我慢しちゃってさあ」

自分でさせておきながら、茜はそれがまるで女の子失格であるかのように秋穂をなじる。理不尽極まりないいやもんだが、秋穂にはそれに抗う余裕がないのだ。

秋穂が身につけているのは、上は薄いＴシャツ１枚、下はクマさんプリントの子供ぱんつである。ただ下着を下ろすだけで、排泄の準備は全て整う。

そのギリギリの状況で、薄いたった１枚の布地が、秋穂の少女としてプライドを辛うじて繋ぎ止める命綱だった。秋穂のオシッコはこの薄い股布一枚で塞ぎ止められていると言っても過言ではない。

「うふふっ、ほら……お姉ちゃん、我慢しないでいっぱい出してイイんだよ？」

「あつ、ダメ、ダメええ……！！」

「なんで？ オシッコしたいんでしょ？ ほら、出しているよ？ 私、ちゃんとだって言ったもんね。私はさ、お姉ちゃんとし違ってちゃんと約束は守るよ？ ね？ ほらあ、お姉ちゃん？」

「だっ、だめ！！ やめてえ！！ つああ、こ、こんなトコでっ……で、できなっ……はあはあ……ちゃ、ちゃんと、おトイレ……トイレっ、ここじゃ、嫌なお」

「うふふ。もうとっくに漏れてると思うけどなあ？」

既に秋穂の心は擦り切れる寸前で、冷静な判断力など残っていない。まともに歩くこともできないのは十分すぎるくらいに理解していた。けれども。

どんなに許可をされたからって、どれだけ余裕がなくなっても、身を隠す物陰すらない、公園のど真ん中で——こんな四方八方から丸見えの場所で、脚の付け根に直接、ペットボトルの飲み口を当てがってオシッコをするなんて、できるわけがない。

「お、おねがい、……秋穂っ、と、トイレ……おトイレ……！！」

「えー？ さっきここでもいって言ってたじゃない？ ほら、おねえちゃんだってそんな所にしゃがんじゃってさ、そこでしちゃいなよ？ お姉ちゃんが公園の真ん中でオシッコすると、いーっぱい撮ってあげるから」

「言ってな……あああつ……んう、あつ……やめ、ひやめて、え……ッ、」

否定の言葉も喘ぎにまみれ、体を成さなかった。一時も収まらない猛烈な排泄衝動に屈しかけた膝は折れ、欲望に正直な少女の身体は、立てた靴のかかとに下着の股間を直接押し付け、体重をかけぐりぐりと水門を押し当てて、必死の抵抗を繰り返す。しかしそんな秋穂の涙ぐましい努力も虚しく、既に下着の股布部分には、じわりじわりと湿り気が参みだしているようだった。

そんな秋穂を見降ろして、茜は唇に指を添え、くすくすと笑う。

「ふふっ、ずーっとオアズケされちゃって、すっごい辛そうだね……ねえ、お姉ちゃん？」

「っ、おねがい、お願いっ、あ、茜、っ、はやく、はやく、トイレえ……っ」

「あっははは。ふふ、……そうだよねえ、いかげん我慢させつづけてかわいそうだし」

くすり。茜は秋穂の手を掴むと強引に引っ張り上げた。全身全霊で尿意我慢の体勢に入り、オシッコを堰きとめていた状態を崩されて秋穂はあああつと悲鳴を上げるが、茜はまるで意に介さない。

「あ、茜っ……も、もつとゆっくりっ」

「うるさいなあ。ちゃんと付いてきなよ」

姉妹とは思えぬ力で秋穂の手を引っ張り、茜はどんどん歩きはじめる。覚束ない足取りの秋穂ではそれについていくことは不可能だった。残ったもう一方の手で下着の前を掴み、ぐいぐいと思いつき引っ張り上げ、引きずられるようにしながら後を付いてゆく。もはやオシッコを我慢する以外に役に立たない脚、ぴつたりと隙間なく寄せ合わされた太腿の奥に、靴底が地面を滑る衝撃が走る。

じゅっ、じゅっ、と麻痺しかけた脚の付け根の水門で断続的に恥ずかしい水音が繰り返され、きつく引っ張り上げた股布にじわりじわりと染みが広がってゆく。

「うあ、くあううっ。……ッ」

水門が緩むたびに途方もない解放感が背筋をはいのぼり、じんじんと甘い痺れが恥骨の上を走り抜ける。長時間の我慢で酷使された括約筋が、果てしない労役からの解放に完成を上げ、内部からの水圧にぶくりぶくりと膨らみ押しあがる排泄孔が激しくヒク付いた。

もはや理性でもプライドでもなく、少女の本能で、秋穂はまなじりを下げ、歯を食いしばって耐える。最後の崩壊だけは少しでも先延ばししようと、健気に無謀な我慢を続ける姉に、時折振り返る茜は、秋穂の醜態を見て満足そうに口の端を持ち上げていた。

「はい、到着っ」

永遠にも思える時間の後、不意に手を引く秋穂の足が止まる。

——脚が痺れ、指先の感覚が無くなり、頭が白く、思考が飛び飛びに——太腿に伝う水流は幾筋にも増え、下着の大半、お尻のクマさんバックプリントまで黄色く染まり始めたあられもない姿。

気付けば秋穂の前には、小さなレンガ造りの建物があった。

見間違えようはずもない。二つ並んだ入り口には、赤と青で女性と男性を示すマークが配置されている。

公衆トイレ——

秋穂が切望し、訴え続けた場所、地獄の責め苦のような尿意から解放を許される楽園が、目の前にあった。

「あ、茜……っ」

「もお、お姉ちゃんがトイレトイレってうるさいから、連れてきてあげたんだよ？ 感謝して欲しいなあ。……あのままじゃあそこで動けなくなって、オモラシしちゃってたでしょ？」

少し拗ねたような茜の声。妹がついに絆されて、許してくれたのだ——秋穂はそう思い、茜の方を振り返る。

しかし、茜の顔には、これまで見たこともないような、極上の笑顔が貼り付けられていた。

「はい、じゃあお姉ちゃん、いってらっしゃい」

茜は秋穂の背中に回り込み、レンガ造りの入り口へとぐいぐいとその身体を押してゆく。しかし——

「え、あ、茜、っ、ちが——っ」

「違わないよ、お姉ちゃん」

茜が秋穂の背中を押し向かう先は、女性用のトイレの隣。青いマークを記された入り口だ。

「このトイレなら使ってもいいって言ってるんだよ♪」

「え……」

あまりの事に一瞬、思考が理解を拒む。

男性用トイレ——茜は、秋穂をそこへ押し込めようとしているのだった。事情を察知し、秋穂は悲鳴を上げた。

「や、やだっ、ち、ちがう！！ わ、私は隣……っ」

「ほらあ、おねえちゃん、トイレ行ってイイんだよ？ スキなだけオシッコしてきて？」

「んう、ふあああああ！？」

踏ん張ろうとした脚が、思わずもつれる。茜が背中から回した手でぐいぐいと秋穂の下腹部を押し揉んだのだ。猛烈な尿意の波が押し寄せ、秋穂は抵抗すらできなくなった。じゅじゅじゅうっ、とこれまでにない激しい水漏れが起き、少女のクマさんパンツが無惨に色を変えてゆく。

「どうしたの？ セっかく私がトイレ行ってイイよって言ってるのに。お姉ちゃん、オシッコしたくなかったの？」

「っあ、ち、ちが、っや、やだ、こっち、男のヒトのツ……！！ み、見られちゃ、ツ……、そ、それに、あんなところで、お、オシッコなんか、できないよお……！！」

男性用トイレの入り口が迫る。幸いにしてまだ人影は見当たらなかったが——壁に並んだ小用便器が眼に入り、秋穂は反射的に拒絶を叫んでいた。

意地悪く微笑む茜に、秋穂は混乱の中、腰をくねらせ激しく暴れた。だが秋穂が必死に足掻こうとも、疲労困憊の少女の身体では全ての動作は弱々しく、茜の前では成す術をもたない。

「えー？ うっそだあ。お姉ちゃん、あっちだってちゃんとオシッコできるでしょ？ ほら、この前だってちゃんと、立ったままオシッコ出来たじゃない。うふふっ」

残酷な茜の宣言と共に、市民温水プールのシャワールームに連れ込まれて立ったまま放尿を強制されたトラウマが蘇る。水着を裸に剥かれ、左右に利用者が居るにもかかわらず、茜に下腹部をいじくられ、排水口のある壁めがけ猛烈な羞恥の噴水を噴射させてしまったのは、秋穂にとって深層心理まで刻まれた悪夢のような現実だった。

「や、やだああ！！ やだ、っやだあ！！」

男子トイレの入り口に捕まって、秋穂は最後の抵抗をする。Tシャツに下着一枚で、異性のトイレの入り口で暴れること自体が、即座に注視的となり、場合によっては人を呼ばれてしまいかねない異様なものであったが——それはもはや、絶体絶命の秋穂にとってどうでもいいことだった。秋穂の望みはただただ、ちゃんとオシッコがしたい、それだけだ。

その必死の足掻きにぐいと押し戻され、茜ははあーと大げさに溜息をついてみせた。

「ホンっトーに我がままばっかりだよねえ、お姉ちゃんはさ。アレも嫌これも嫌って、じゃあどうするの？ もういいからそこでそのままオモラシなよ」

「っ、やあ、やああ！！ やめて！！ やめてお願い、撮らないでっ、おねがiiii！！」

男性用トイレの前でしゃがみ込んでしまった秋穂に、無情にも携帯のレンズが向けられる。フラッシュと共に数枚シャッターが切られた。

生徒会長へのメールアドレスは短縮に登録済みだ。いつこの姿が転送されてしまってもおかしくない。じゅっ。じゅううと脚の付け根に新しく水流が溢れ、駄々っ子のように首を振り、秋穂は声を絞り出した。茜はなおも携帯を操作し、秋穂の痴態を携帯のカメラに収めてゆく。

「あっあ……っ」

脚は力を失い、がくがくと震え、立ち上がることもままならない。身体の内外から激しい尿意と羞恥に延々と嬲られ続け、すぐ隣にあるはずの女性用トイレの個室まで駆け込む余裕もなく、秋穂は身動き一つ取れない状態だった。

もはや希望の欠片すら残されていないそんな彼女の手に、ぐい、と空のペットボトルが押し付けられる。見ればさっき中身を飲みほしたばかりの600mlのボトルだ。

「じゃ、ちゃんと『罰ゲーム』ね。いい？」

「っ……」

「分かったの、お姉ちゃん？」

出来の悪い小さな子に言い聞かせるかのように、強く叱責され——秋穂はがくがくと首肯した。

「わ、わかっ、わかりましたっ……だ、だから、お願い、撮らないで、っ、お願いっ」

「ふふ。どうしよっかなあ？ 会長さんだってコイビトに隠し事されちゃうの、嫌だよねえ。それに、お姉ちゃんがこんなカッコしてるの見たら、興奮しちゃうかもよ？」

「あ、茜えっ！！」

この期に及んで絶妙に乙女の羞恥を探り出し、辛辣な言葉で撻ろうとする妹に、秋穂は涙を滲ませて哀れに懇願する。姉の威厳どころか、少女としての尊厳すら許されない姿だった。

「わかったよ。写真は止めてあげる。……ちゃんとココにオシッコ、するんだよ？ これがお姉ちゃんの専用のおトイレなんだから。お粗相しちゃったらまた『罰ゲーム』だからね？」

「っ……」

茜は念入りに言い聞かせるように囁き、秋穂の手に握らせたペットボトルの飲み口を握り、次いで湿った下着の股布に指を引っ掛け、『ぐいっ』と真横にずらす。

秘めやかに隠されているべき乙女の秘所と共に、秋穂の排泄孔があらわになった。長い長いガマンを強いられ、さらになんどもなんどもおチビりを強いられて、秋穂のそこはお世辞にも慎ましやかとは呼べない有様になっていた。

これまで辛うじて、脚の付け根を覆ってくれていた布を失い、もはや秋穂の排泄孔を何も遮るものは無くなった。わずかな布一枚、けれど頑強で強靱な堰を失って、少女の身体は瞬間に激しい水圧を湧き上がらせる。

「お、お願いッ、あ、あっはやく、早くそれ、それにさせて、オシッコさせてえ！！」

さっきの『罰ゲーム』からおおよそ10分余り。限界寸前の尿意と、鋭敏に高められた排泄器官は摂取した水分に過剰反応し、少女の下腹部でぱんぱんに伸び切った膀胱が激しく震え、収縮をぜんと脈動した。おなかの中を直接絞り上げられるような猛烈な尿意が一気に押し寄せる。

少女の股はぶちゅ、ぶちゅる、と断続的にオシッコを滴らせ、剥き出しになった排泄孔がぷくりと大きくヒク付く。脚の付け根をねじ込むように抑え腰を振りたてながら、秋穂は茜にねだった。

「ふふ、じゃあどうぞ、お姉ちゃん」

茜はぱっと手を離し、秋穂の手を解放した。秋穂はもはや躊躇うことなく、ペットボトルの口をそっと秋穂の股間に押し当てる。

丸い小さな飲み口が、排泄孔にぴったりと押し当てられるのとほぼ同時途端、少女の股間が爆発したように凄まじい水流を噴き上げた。水を詰め込んだ風船を破裂させたかのように、激しい水音が弾け、秋穂のオシッコが始まる。

小さな飲み口には収まりきるとも思えない、野太く猛烈な噴出——ペットボトルの内側を直撃する黄色い水流が、激しい泡をたてて透明な容器の底に溜まってゆく——

その、直後。

「——あ、お姉ちゃん。トイレ、誰か出てくるよ？」

あっけらかんと、茜が背後を指差して告げた致命的な一言に、秋穂は背筋を凍りつかせた。全身に緊張を漲らせ、泡立つ背中がびきりと硬直する。慌てて後ろを見ようとするが、足がもつれ上手いかない。

「う、嘘っ、だ、誰も居ないって言ってっ……」

「ごめーん、見落としちゃったのかなあ」

くすくすと笑う茜。目の前で痴態を繰り広げているのは実の姉だというのに、まるで関係なしとばかりの他人事だ。

「あは。見られちゃうねえ。お姉ちゃんこんな所で、ペットボトルにオシッコしてるトコ」

秋穂のすぐ背後で、物音が響いた。個室のドアを開け、水を流し、洗面台に寄って外に出てこようとする、大きな革靴の足音。

或いは——それはすべて、限界寸前からの尿意から解放され、耳鳴り激しい秋穂の幻聴だったかもしれない。だがそれらの真偽を確認している事などできなかった。

（み、見ら、れ、ちゃ）

逃げなければ。秋穂は反射的に行動を起こしていた。しゃがみ込んだ姿勢のまま、ずりずりと脚を引きずって、懸命に公衆トイレの建物を回り込み、入り口から視覚になる場所へ——身体を引っ張り込む。クマさんパンツの股布を真横にずらし、そこに600mlのペットボトルを押し当てて、ガニ股姿勢で必死に急ぐ秋穂の股間から、ぶじゅじゅじゅうっと猛烈なオシッコは噴き出し続けていた。無理な体制でそれらが全部ペットボトルの小さな飲み口に納まる筈もなく、あふれたオシッコは秋穂の手にぶつかり、地面に飛び散り、撒き散らされ、公衆トイレ前の床のコンクリートを、むき出しの地面を激しく濡らす。

「っ、は、はあっ、はあっ」

オシッコをペットボトルに排泄しながらの旅路はおおよそ10m弱ほど。がくがくと腰を震わせ、回り込んだ公衆トイレの壁に背中を預け、秋穂は激しく息を荒げた。

もはや手指に感覚は無く、透明な容器の飲み口に押し当てられた排泄孔が噴き上げる猛烈な水流がボトルの中に注ぎ込まれる。たった10分前までは清涼なミネラルウォーターに満たされていたペットボトルは、泡立つ黄色いオシッコでみるみる一杯になってゆく。

秋穂の意識は薄れ、周りの何もかもがぼんやりと遠い。何もかも忘れて思いっきりオシッコをしたい——その望みのまま、乙女のダムは水門を全開にして放水を続ける。トイレのすぐ横で、本来はちゃんと個室の、白い陶器の中へと注がれるべきはずの乙女の恥水は、600mlの妖忌の中へと噴き出し、水面を激しく叩いて暴れ、少女の指にずしりと重く押し掛かる。

恥ずかしいオシッコがペットボトルの壁に跳ね、自分自身の作りだした水面を叩いて響かせる音だけが秋穂の意識を埋め尽くしてゆく。

「あははっ、…ほら、もういっぱいになっちゃうよ？」

くすり、茜の声に秋穂は顔を上げ——凍りついた。

茜はじっと、携帯カメラを構え、こちらに——ペットボトルにオシッコをしている自分を余すところなく捕えんばかりに、レンズを向けているのだ。

「お姉ちゃん、さっき飲んじゃった分までぜんぶおしっこにしちゃってるんじゃない？ お姉ちゃんってば恥ずかしいなあ。こんなにいっぱいオシッコ出しちゃうなんて、みっともないカラダしてるんだねえ♪」

「や、あ、茜っ、しゃ、写真、とらないってっ……、や、約束した、のにッ！！」

「えー？」

惚ける茜に、秋穂はせめて視界だけは遮ろうとシャツを引っ張ろうとした。しゅうしゅうと激しく止まらないおしっこは小さな口にはおさまきらず、秋穂のおしりを回ってぼたぼたとこぼれる。飛沫は容赦なく秋穂の肌を、白いシャツをも汚してゆく。

そんな中。茜はくすりと微笑む。

「やだなあお姉ちゃん、嘘なんかついてないよ。これ、動画だから」

「————ツッ！？」

慌てて身をよじろうとする秋穂だが、茜は巧みのその先を回り込み、秋穂が飲み口に押し付けたオシッコの出口を、ほんのりと色付いた女の子の大事な場所を、慎ましやかな秋穂の肢体とは対照的に、豪快に猛烈なオシッコを噴き出させるその瞬間をレンズに収めていた。

絶対に露わにしてはならないはずの乙女の部位を、カメラに収められる恐怖に、羞恥に、秋穂は気が遠くなる。

「や、やだっ、やだあ！！ だ、め、撮らないで、撮らないでええ！！」

身悶えしながらわめく秋穂だが、茜のレンズから逃れることはできない。カメラ越しにじっと姉の痴態を見降ろし、「いいいいいー」と監督気取りだ。無機質な携帯のレンズが、得体の知れない大勢の視線に見え、秋穂は強張った顎で歯を軋らせる。

妹の手で羞恥の姿を暴かれ、秋穂は絶望の中、最後に残された、たったひとつだけ出来る抵抗を試みる。

「ふうう、う、くあああつあ……んあう……ッ」

苦悶の声。激しい喘ぎ。ぶしゅぶしゅと吹き上がる水流に躊躇い無く手を押し当て、ぐいっとなぐり締め——太腿を震わせ、腰をくねらせ、ありったけの力を振り絞って、女の子の部位に力を込め、括約筋を引き絞る。

そう。

出始めたオシッコを、途中で止めたのだ。

「う、く、あああ……っ」

尋常ではない精神力で、秋穂はそれを実行した。

排泄は、不随意筋である腹筋の一部に起因する膀胱の収縮による圧力で行われる。要するにばんばんに膨らんだ風船と同じだ。出口を離せば、中身は空になるまで出続ける。

通常、一度排泄を始めてしまったオシッコは、中身を全部絞り出すまで収まらないそれは尿道が短く、排泄孔と膀胱までの距離が短く、括約筋も男性に比べれば未発達なことが多い少女であればなお顕著であった。

女の子が、限界まで膨らんだ尿意の中、出し始めたオシッコを途中で止めるなど、奇跡に近いのである。

しかし、秋穂は、まさに排泄が本格的に始まった、本当の勢いで噴き出し続けている奔流のごときオシッコを堰き止めるという荒業を、本当に実行したのだった。

「はあ、はあっ、はああ……ううう……」

ぜいぜいと肩を荒げ、大きく下腹部をうねらせる。ひく、ひくと赤く充血した乙女の部位が震え、排泄孔がヒク付く。股間はまだ小刻みに震え、ぐしゅりと湿ったクマさんパンツからは身動きのたびに新鮮なオシッコの雫が垂れ落ちる。

しかし。ぶじゅ、じゅうじゅつ、と断続的な噴出は続いているものの、先程までペットボトルの中にぶちまけられていた野太い水流は停まっていた。ダム放水を力づくで押さえ込んだようなものだ。秋穂の下半身には凄まじい負担がかかり、力を使い果たしてがっくりとその場に膝をつく。

「うあ……はうっ、くう……ッ」

わずかな——ほんの十数秒といった時間で、秋穂の握り締めるペットボトルの内部は、6割方が少女のオシッコに占領されていた。単純計算で360ml。外にこぼしたり溢れた分を考えれば400ml。強のオシッコがほんの10秒余りで噴射されたはずだが、なお秋穂の膀胱は硬く張りつめ、激しい排泄欲求を訴えていた。

むしろ、中途半端にオシッコをしてしまった分だけ、収縮を始めた膀胱は秋穂の状態などお構いなしにオシッコを出そうと激しく暴れ、身をよじって恥ずかしい熱湯を噴きだそうとする。

「あ、あぁあ……」

半分だけ膀胱が縮んだことで、中途半端な排泄欲求は最後まで欲望を吐き出させろとわめき、閉じ込められたオシッコはぐつぐつと濃い尿意を煮詰め、激しく沸騰する。今度こそ完全に行き場のなくなった尿意を抱え、秋穂は口をパクパクと開閉させ、熱い喘ぎを漏らした。

はしたなくも脚を擦り合わせる様子で一目瞭然。猛烈な尿意はほとんど収まっていないことは丸分かりだった。「わー、おねえちゃん、凄いのが撮れたよお？ ほら、見てみて？」

ぱちぱちと手を叩き合わせ、秋穂が携帯の画面を示す。

小さな四角い画面の奥に、哀れで淫らな自分の姿があった。尿意に苦しみもだえ、悲鳴を上げて下半身を震わせ、恥ずかしいところに押し当てたペットボトルにオシッコを注ぎ込み——やめてやめてと懇願しながら、それを途中で止める。

もはや言い逃れのしようのない、自分自身の痴態だった。

茜はポケットからハンカチを（当然、秋穂から取り上げたものだ）取り出し、地面に置かれたペットボトルをひょいと持ち上げたきさらと輝く黄金色の中身をうわあと声を上げながら眺め、取り出した蓋をしてちゃぽちゃぽと揺すって見せる。

「うふふ、お姉ちゃん特製のおしっこ入りペットボトル600ml……あは。おカネ出しても欲しいって言う人いるかなあ？ ひよつとして。オークションに動画付きで出したりしたら売れたりしてね」

「や、やめてっ！！」

あまりの恥ずかしい提案に、金切り声を上げてしまう秋穂。しかし奪い返そうにも、なお募る猛烈な尿意はそれ以上の自由を秋穂に許さない。

「ふふ、冗談だよ。それとも本当に売って欲しいの？ お姉ちゃん、まだまだおしっこ出せそうだもんね」

「っ……」

「さ、じゃあオシッコも終わったし、帰ろっか、お姉ちゃん」

「え……、だ、だって……わ、わたし、まだっ……」

一秒ごとにじりじりとせりあがるような尿意の波。下腹部を占領していた膀胱が幾分縮んだせいで、これまで身体のなかに留まっていた水分が、一気に膀胱へと流れ込んでいるのだ。

乙女の健康な循環器を通り、作り立てほやほやの新鮮なオシッコがじゃぼじゃぼと膀胱に注がれているのが、秋穂にははっきりと感じられた。

見る間にぱんぱんに膨らみ直した膀胱が内臓を押し上げ、圧迫し、胃の法までせまっているような、身体の中で風船のように大きくなっているような感覚。さっき飲んだばかりのミネラルウォーターで膨らんだ胃もちゃぽちゃぽと動き、その反応が膀胱を刺激する。

「それっておかしいよね？ お姉ちゃん、オシッコ終わったんでしょ？ ちゃんと私、約束通りお姉ちゃんにオシッコさせてあげたのに、約束破るの？」

「っ……」

茜の指が、携帯のメール送信ボタンの上を滑る。あの動画を送ると言っているのだ。脅迫をちらつかされ、秋穂はそれ以上の抗弁を遮られてしまった。

「あ、茜え……っ」

脚の付け根は酷使され続けてじんじんと熱く、オシッコの出口がなおびくびくと痙攣する。都合半リットル以上にもなる熱湯を塞ぎ止めるには、オシッコの出口の括約筋だけではとても間に合わず、秋穂は汚れた下着を押さえこんでぎゅうぎゅうと腰をよじる。

ちょうど、両手を使ってたぶたぶに膨らんだ破裂寸前の水風船を持ち上げているようなもの。重さにこらえきれなくなると、水風船がずとんと落っこちて、そのまま中身の量に耐えきれずに破裂してしまうのだ。

せめて。

最後まで、あのペットボトルを一杯にしきるまで、オシッコを出していれば——悔やむがもう遅い。今日最後のトイレは終わってしまった。もう、秋穂は明日まで、オシッコをすることを許されない。

「ねえ、ところでお姉ちゃん、言ったよねえ。こぼしたらもう一回『罰ゲーム』だって」

飛び散った雫で、黒く染まった地面を指差し、くすりと微笑む茜の言葉に——秋穂はもはや抗う術を持たなかった。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 我慢しながら掃除・2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小ネタ
CATEGORY: 小ネタ

DATE: 06/09/2013 21:37:15

BODY:

ツイッター連載風味に短く区切ったらどうなるかと思った実験作。
シチュエーションは某 A V（牛乳浣腸モノ）を参考にしました。

<hr size="1" />

殺風景な体育館は、梅雨時特有の湿った匂いを籠らせていた。
壁際に並ばされた少女たちは、皆落ち着きなく身をよじり、小刻みに足踏みを繰り返す。衣擦れの音や喘ぎ声を抑え、こぼれそうになる弱音を飲み込む少女たちは皆、表情に疲労の色を滲ませていた。

頭上の時計を見れば、時刻は 20 時を過ぎている。夏場といえど窓の外はすっかり暗くなり、かすかに響く霧雨の雨音。少女たちの年齢を考えれば、すぐにでも家に帰らせねばならない時刻。しかし少女達はいまだ、解放される様子がない。

「全員、並んで。用意をしろ！」

ジャージ姿の教師が笛を吹き、床に積み上げられた雑巾を示して鋭く指示を飛ばす。
しかしそうして号令は掛かったものの、少女たちはみな壁のそばにかたまって、顔を赤らめ、ぎゅうっと体操服のまえを押し下げているばかりだった。

そう。少女達は全員、体操服の上しか身につけていない。幼い下半身はスパッツどころか、下着すら身につけることを許されず、まったくの素裸なのだ。下半身においてはそれは徹底され、体育館用の内履きも、靴下すら履くこともなく、素足を強制されていた。

ジャストサイズの体操服は、普通にしているとおへその下あたりまでの丈。当然、女の子の一番大事な部位までは隠してくれない。羞恥心の強い思春期の少女達が、もちろんそれで平気なわけがない。

少しでも肌をを隠そうと、少女達は体操服の前を引き絞るようにして、牛っ引っ張り、脚の付け根を隠そうとするのだが——十分に大きいとは言えない体操服では、前を引っ張ればその分背中側が持ち上がって、今度はかわいらしいおしりが丸出しになってしまう。

「聞こえなかったの！ 壁から離れて用意をなさい！ いつまでたっても終わらないのよ！ それでもいいの、あなたたち！？」
再び強く吹き鳴らされるホイッスル。強い声音の叱責が少女たちを打ち据える。

もしも、他者の視線が紛れ込んでいれば、それだけで大騒ぎになるだろう、あまりにも異常な姿。……しかし、理不尽な要求に声を上げて抵抗すべき少女たちは顔を赤らめ、もごもごと口の中で小さく抗弁するばかりで、反論の声は酷く小さかった。

壁に背中を向け、丸見えのお尻を見えないようにして。体操服の前をきつく握りしめ、少女達は赤く染まった顔をうつむかせていた。思春期特有の、蕾が花開く寸前の禁忌の青い果実。少女たちの発育はまちまちであり、股間にほのかな淡い茂みを覗かせている者もいた。

……それでも彼女達の多くはまだ、穢れ一つなくつややかな白い肌を見せるばかりだ。あどけない表情を羞恥に彩り、困惑と戸惑いの中でうつむきながら、切なげに息をこぼし、細い脚をしきりにモジつかせている。

「はああ……っ」「ああっ……」「んっ、あ、だめ、え……っ」

少女たちの身じろぎは激しさを増す。体操服の上から、切なげに下腹部をさすり、たまらないというようにきつく脚の付け根を押さえこむ。

唇を震わせる少女達の下腹部を強く張りつめさせ、ぱんぱん膨らんだ恥ずかしい液体が揺れる。たぷんと音を立てそうなほどに溜まり切った恥ずかしいオシッコは、今日一日、トイレに入ることを許されずにいた結果なのだ。

幼い下腹部を膨らませてしまうほどに募った尿意のまま、下半身をかばうことも許されずに、少女たちはいよいよ追い込まれていた。

確かに、体育館には異性の目はない。

しかしその代わりとばかり、右に3台、左に3台、都合7台ものカメラが三脚に載せられ、無機質なレンズを少女たちに向けていた。

複雑な電子制御をされているらしきカメラは、まるで意志を感じさせるかのように次々と、壁のそばで悶える少女たちにレンズを向け、照準を合わせてその姿を映像に収めていく。半裸姿の現役の〇学生をリアルタイム無修正で捕える、異様なレンズ。

そして、そこから伸びた大きな集音マイク。鳥の巣みたいな大きなマイクは、少女たちのかすかな吐息や、あえぎを飲み込む小さな唇、体を寄せ合わせる衣擦れの音すら、余すところなく拾い上げているのだろう。

増設された強い照明の下、床に広げられた大げさな機材は、まるで未来の機械。有り得ないとは思いながらも、少女たちは匂いや温度まで収集されているかのような錯覚すら覚えていた。

これらの映像機材はただの記録用であるという。収録された映像は全て厳重に管理され、外部に公開されることはないと説明されてはいたものの、それをまともに信じている少女はほとんどいない。

無慈悲に過ちなく事実を記す機械の瞳は、ある意味で、男性の目よりもよほど強烈だ。自分の姿が余すところなくカメラに収められ、記録されてしまうということは、これからずっと、無数の人々に自分の痴態をさらけ出すことに他ならない。

低くうなりを上げながら動き続けるカメラによって、さらに強く羞恥を呼び起こされ、少女たちはますます委縮してしまう。

「んっ……」「はああ……っ」「く……っ」

吐息、喘ぎ、かすかな呻き。響く少女たちの声とともに、ぎし、ぎしと床を軋ませる足踏みの音。

少女たちの体操服のゼッケンには、名前やクラス表示はなく、代わりに 3 桁の数字が記されていた。

数字や並びには一見して規則性は見当たらず、おおよそ三〇〇番代から、上限は七〇〇番代後半といったところ。

概して小柄な少女のほうが数字は小さいようにも見受けられるが、背が高く発育も良い少女が、緩やかに膨らんだ胸で持ち上げるゼッケンが『389』であったりする一方で、低い方から数えた方がよさそうな、野暮ったい黒縁眼鏡の線の細い少女が『743』などという大きな数字を付けていたりもする。

また、同じ番号の少女がいないというわけでもないようだった。敢えて言うならば——数字の少ない少女のほうが、より落ち着きなく体をよじっていたり、激しく太腿を擦り合わせていたり、堪らないとばかりに飛び跳ねていたりといった様子が強く見受けられた。

「どうしたの！ はやくしなさい！ 終わらなかったら帰れないのよ！！ それでもいいの！？」

体育館の隅で、ジャージに袖を通した教師が怒りをのぞかせて叫ぶ。叩きつけられるような大声に、少女達は身を竦ませた。

気が進まないというのも当然だろう、異性の目こそないとはいえ、下半身を覆い隠すものは何もないのだ、少し身動きすれば乙女の大切な場所がちらりと覗いてしまうのは間違いない。むしろちらり程度で済むのなら、まだマシな方だ。

皆、もはや限界に近い状態で、さらに恥ずかしいものを堪えているのだ。このまま下手に動けば、女の子としてありえないほどに、もっとも恥ずかしい姿を晒してしまうのは間違いない事だった。

およそ5分。その間にも刻一刻と募る生理的欲求は少女たちを突き動かすのに十分だった。お互いに顔を見合わせ、少女たちは悲痛な表情でゆっくりと動き出した。片手で体操服の前を引っ張りながら、よちよちとおぼつかない足取りで前に進み、床の端に積まれた新品の雑巾を拾い上げる。

「んっ……」

募るに尿意は下腹部を強く張りつめらせている。もうしゃがむのも辛いのか、床に置かれた雑巾を拾うのにも小さく呻きをあげ、びくりと身体を緊張させる少女もいる。

下腹部をかばうようにしてもたもとと膝を曲げる者もいれば、延ばした足先で雑巾を引き寄せようとするお行儀の悪い生徒もいた。けれどその誰もが、思うように動くこともできず、かわいらしいおしりを揺すり、なまめかしく腰をクネらせ続けている。

「くう、うう……ああ……っ」

胸のゼッケンに『5 4 3』と記された少女は雑巾を掴むや否や、その場に動けなくなって座り込んでしまった。体操服の前ごと腕を

脚の付け根に挟み、ぎゅうううっと押さえつける。もじもじとお尻が揺れ、きつく唇が噛み締められる。

「はやく、もたもたしない！」

叱責とともに鋭い笛の音。急かされるように、少女達は苦勞しながらも雑巾を手に、体育館の隅へと移動した。動けなくなっていた少女達も、何とか立ち上がり、お尻を突き出しよちよち歩きのアヒルのような格好でどうにか所定の位置につく。

一列に並んだ少女たちを、カメラのレンズが順にねめつける。マイクが角度を変え、床からの反響音を拾う位置へ移動。望遠レンズが伸び、股間を押さえつける少女たちの手をアップに収めた。

「いやあ……」「見ないで、撮らないでよあ……」

右端のカメラが、すでに腿の内側に不自然な汗をかいている『6 2 3』番の少女を目ざとく見つけ出した。スクープとばかり他のカメラも首を捻り、集中的にレンズを回転させる。

「っ……………」

羞恥に言葉を失い、その場にしゃがみ込んでしまった『6 2 3』の少女。体操服の前を思い切り引っ張り、かかとに直接、脚の付け根を押し当てる。息が荒くなり、ぎしぎしと身体が上下。それでもしゅる、しゅう、とかすかに細い場所を水が通りぬける音を、マイクが拾い上げる。

「——揃ったわね。じゃあ、はじめなさい」

無慈悲な教師の号令が響く。少女達は躊躇いながら、しかしそれには逆らえなかった。恐る恐る、ゆっくりと、体を折り曲げて——床に手をつき、四つん這いの雑巾がけの姿勢をとった。

瞬間。

「っあう、っ……！！」「ふああ……」「あううっ……！！」

切なくも甘い声が次々と上がった。

しゅ、しゅう、しゅるる……いくつもの水音が跳ね、ゆかにぴちゃぴちゃと水滴が散らばる。カメラはいよいよ好奇の視線をむき出しにして、つぎつぎにレンズを切り替えながら、少女たちを片端から映像に取り込んでゆく。

「あ、あっあ…くうっ」

片手を突きながら雑巾を握りしめ、もう一方の手は裸の股間、足の付け根を直接、きつく抑え込む。何よりもきつく唇を噛み、危険な姿勢のままに猛烈な衝動に耐える、耐える、耐える。

けれど。何も身に付けていない下半身は、わずかな空気のそよぎすら敏感に感じ取り、ぴくんと激しく反応した。漏れそうなオシッコを我慢したまま、まさにトイレに入る格好と同じ状態で、なお猛烈な尿意を我慢し続けているのだ。その苦痛と言ったら計り知れない。

オシッコが漏れそうな下腹部を抱えたまま、手をついて四つん這いになるのはそれだけで、懸命に押しとどめる我慢の均衡を崩す行為だった。雑巾がけの体勢になった瞬間、抑え込んだ指の間からみるみる黄色い滴があふれ、しゅるる、しゅうと可愛らしく水流が漏れ出す音が響く。

『397』番の少女もその一人。片手だけ手をついて、もう一方の手で足の付け根を、体操服越しに抑えようとするが——不安定な体勢でバランスも取れず、しかも足を閉じようとするものだから姿勢を保つこともできずに、少女の足の付け根からは我慢しきれずに恥ずかしい奔流が吹きあがる。

「あ、っやあ、出ちゃう、出ちゃ…っあああっ」

がくがくと腰を振りながら、崩壊するダムの水門を押さえ込もうとする少女。しかし、下着すら見に付けることを許されぬ下半身は、一旦堰を切った恥ずかしい熱水の噴射をせき止めることは不可能だ。

スタート地点から動くこともできないまま、オシッコを始めてしまった少女たちが、およそ半数。

けなげに雑巾がけを始めようとして腰を持ち上げ、四つん這いになって足に力を入れた瞬間、股間の緊張がゆるみ、はげしくオシッコを床めがけて噴射させてしまう少女もいた。

まるで道路の散水車。、そうやって——床をたっぴり濡らしておくことで、掃除の効率を上げるのだと言わんばかりの姿。思春期の女の子にとって、あまりにも酷な姿は、しかしカメラの望遠レンズで無修正高画質のまま記録されてゆく。

床に勢いよく叩きつけられる黄色い水流は、今日一日我慢を強いられたことをくっきり示すほどに濃いものだ。びちゃびちゃと我慢できずに噴き出し、ホースで水撒きでもしているかのようだ。

高級品のタオルと言ってもまったく違和感のない、白い新品の雑巾が、恥ずかしいオシッコを吸ってみるみる黄色くなってゆく。漏らしたてのオシッコはまだ温かく、床に広がる広大な水たまりと、オシッコの匂いは、さらに少女たちの尿意を誘う。

しかし、これで許されるわけがないのだ。自分自身で派手に汚してしまった床を、床上に広がるクラスメイトのおしっここの水たまりを、彼女達は綺麗になるまで拭き清めなければしまわなければならない。時間までに綺麗に出来ていなかったら、掃除はまた最初からやり直した。

汚いなんて言っていられなかった。体育館のそこらじゅうに設けられたカメラが、少女たちの恥ずかしい瞬間を仔細漏らさず録画せんと動き続けているのだ。この地獄のような時間を、少しでも早く終えるには、必死にオシッコを我慢しながら手を動かすしかない。

羞恥に顔を歪め、耳まで赤くなった少女が雑巾を動かし、床の恥ずかしい水たまりを拭く——そのすぐそばから、また限界を迎えた少女の一人が激しくオモラシをして、床をびちゃびちゃと汚してしまう。一度の崩壊はすぐに連鎖を招き、あちこちで断続的にオモラシが頻発した。

我慢しすぎたせい、勢いが激しすぎるのか。しゃがみ込んだ足の間から前方へ、1 m近くも勢い良く前で飛ぶおしっこは、体育館の床の上に強くぶつかって跳ねる。他の子が漏らして広げたばかりの水たまりに勢いよく直撃し、白く泡を立てるほどだった。

「何してるの！！ それくらい我慢できないの！？」

「立ち止まらないで動きなさい！！ 終わらないわよ！！」

「服から手を離して！ きちんと掃除をしていないものには罰を与えます！」

ジャージ姿の教師、指導官の叱責に、少女たちは小さな頬を羞恥に染めながら、雑巾を両手で押さえ、床を拭き始める。この上でなお慎み深く、トイレなどというはしたない欲望に屈しない、乙女たること——それが少女達に求められているのだ。

急いで終わらせよう——そう考えたのかもしれない。脚の付け根に力を込め、雑巾がけの姿勢で走りだした『4 7 3』番は、体育館の真ん中までたどり着かないうちに失速し、足をもつれさせて倒れこんでしまう。

手が震え、力を失って思い切り顔から床に突っ伏して。痛いと声を上げる暇もなく、衝撃に、ずっと緊張させていた下半身から力が抜ける。「あ、あつだめ、だめ、出ちゃダメえ！！」お尻を高く持ち上げた格好——ちょうど、女の子の大事な場所が皆に丸見えになる体勢だった。

慌てて手で押さえようとするが、間に合わない。まだ何も生えていない、つるんとした足の付け根、細く綴じあわされた女の子の隙間がプクリと膨らみ、天井にめがけて弧を描くように羞恥の噴水がほとばしる。

ぶじゅしゅううううーっ！！本物の噴水とそっくりに勢いよく波打つ噴水は、薄黄色い飛沫を体育館の真ん中に飛び散らせる。「あ、あっ、あ、あっ」言葉も上手く発することができずに、押さえようとした手にぶつかって、おしっこはさらに大きくまき散らされた。

指の隙間から何本にも分かれた水流が、少女の体操着にまで降り注いでゆく。びちゃびちゃと吹き上げる噴水の真下で、自分のおしっこの水たまりの中に、少女の身体が沈んでゆく。

『6 3 2』番は思い切った行動に出た。ずっと握りしめていた雑巾を直接、足の付け根に抑え込つけるようにして、お漏らしを始めたのだ。どうせ漏らしてしまうなら、それはある意味で効率的な判断だったのかもしれない。

容赦なく噴き出すオシッコを雑巾に吸わせてしまおうと考えたのだろうが——我慢の限界までため込んだオシッコが、雑巾一枚で吸収し切れるわけがない。見る間に黄色く染まってゆく雑巾から、ばちゃばちゃと地面に飛び散ってゆく。

羞恥にあえぎ股間を押さえようとするものだから、手指にも力が入り、黄色く染まった雑巾は握りしめられるばかりだ。たっぷりとオシッコを吸った雑巾を絞っているのと変わらない。絞るそばから女の子の出口から噴き出すオシッコが、さらに濃く雑巾を染め上げてゆく。

時計の針はかちりと動き、カメラが忙しく身を震わせる少女を捉える。もはや体育館はどこにレンズを向けようと、被写体に事かかなかった。

断ちこめるおしっこ匂いに耐えかね、とうとうしゃがみ込んで自分からオシッコを始めてしまう少女を、脚の間からほとばしる猛烈な水流の噴射から、うつむき紅潮する顔まで、しっかりとレンズに収め、マイクで激しい水流の音すら拾い上げる。

胸のゼッケン——『557』番。屈辱的な検査で完璧に把握されてしまった、乙女の下腹部のダムの許容量、その限界まで貯め込んだ恥ずかしい液体を、残らず床へと噴きつけて。白い手が握りしめた雑巾は黄色く染まって、ぽたぽたと恥ずかしい雫を垂らしていた。

（初出：書き下ろし）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 授業中の我慢

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 06/14/2013 18:41:53

BODY:

基本タイプの我慢の習作。

もう何度も似たような話やってきた気はするけども。

<hr size="1" />

4 時間目の授業は続いていた。

(……おトイレ、行っとけばよかった……)

教室窓際の後ろから三番目。退屈な授業からこっそり逃れ、居眠りをするのに最適な席で、檜野瑠璃は張り詰めた下腹部をさすりながら 30 分前の愚かな自分の判断をしきりに後悔していた。3 時間目の体育の授業で普段の倍もお茶をがぶ飲みしたお昼ご飯のあと、友達とのお喋りに夢中になって予鈴にも気付かなかったのは、本当に間抜けとしか言いようがない。

拳句、授業前に連れ立ってトイレに立つクラスメイトを、付き合い悪いなあとはばかり見送っていたりしたのだから目も当てられない。

思い返すもあの時の自分に文句のひとつもぶつけたくなるが、そんなことをしても、現在瑠璃を追い詰める状況は一向に改善しないのも明らかだった。

教壇の上、教師が黒板にびっしりと細かい字を書きつけてゆく。午後一番の歴史の授業は、普段なら退屈で、眠気を誘うことこの上ないが、今日に限っては忍び寄る睡魔に抵抗する必要はなさそう。より切実な、差し迫った事情が、少女の下腹部に押し寄せてくる。

(……あー……もう、私の馬鹿……っ。なんで、トイレ行かなかったんだろ……)

募る尿意にすりすりと足を擦り合わせ、瑠璃は教科書も広げず、教師の話も上の空で、教室の時計を睨むように見つめる。

お昼休みの 1 時間を挟み、午後最初の授業は 50 分。終了まではあと 20 分以上も時間を残していた。時計の文字盤は変わらず、のろのろと針を動かすばかり。

「んっ……」

一向に進まない時計の針とは対照的に、脚の付け根にじんじんと響くむず痒い感覚はみるみるその存在感を膨らませていた。じれったさのまま落ち着きなく腰を揺すり、膝を重ねるようにして脚を寄せ合わせる。椅子の上でモジモジと左右に揺すられる腰は、典型的なオシッコ我慢の様相を呈していた。

スカートの奥で、うねるように尿意が波打つ。黄色い濁流を危険水位のはるか上までたたえた乙女のダムには、なお刻一刻と注水が続けられていた。膨らむ水圧に下腹部は張り詰め、太ぶたぶと揺れるオシッコが出口を求めて揺れる。

床の上で上履きがきゅっきゅと小刻みにリズムを刻み、爪先がぐりぐりと押し付けられる。

机の上でシャーペン握る手は頼りなく汗ばみ、肘はきゅっと身体に寄せられて、瑠璃のペン先はノートの上に浮かんでふらふらとさまよう。

左手はといえもう15分も前から机の下に潜り込み、下腹部を撫で、脚の付け根を行き来し、スカートの前を押さえこんでいた。

(うう……トイレ……トイレ、行きたい…オシッコしたい……っ)

切なる欲求は、ストレートな要求を少女に突き付ける。この尿意からの解放。しかしそれは現状、不可能に近い無茶な提案である。

縮こまるように身体を丸め、不安定に細めた肩が左右に揺れる。瑠璃の視線はあたりを落ち着きなく戸惑い、さまよい、10秒に一度は教卓上の時計に向けられていた。しかしいくら時間を確認する頻度を増やしたところで、時計の針の動きは変わらない。

むしろ、注視すればするほど、気にすればするほど、もどかしいほどに遅くなっているかのように感じられる。

(オシッコしたい……！！)

思春期の少女の心を占めるのは実に切実な欲望。切羽詰まった生理現象はいよいよ少女の下腹部で牙を剥く。口から摂取され、吸収されて健康な少女の身体を潤した水分は、やがて少女の身体を巡る長い旅の果てに、再び下腹部の一カ所に集まってゆくのだ。朝、家を出る時にトイレに行ってから、瑠璃の身体は新鮮なオシッコをたっぴりと作って、次々に膀胱に流し込んできているのだろう。

もういい、もう十分だと叫ぼうとも、一方的に乙女のダムに注ぎ込まれ続ける。行き場を失くして激しく暴れる尿意はいよいよ膨らみ、少女の余裕を失わせていた。

「は、んっ……」

唇を噛み、漏れそうになった息を飲み込む。隣に座る生徒が不思議そうに顔を上げるが——すぐに授業に集中しようと顔を戻した。歴史の授業は板書も多く、聞き逃すとあつという間に先に進んでしまうのだ。

それどころではない瑠璃は教科書にしてもう3ページも前から置いてきぼりだった。

歴史の授業を担当する教師はどのクラスでも厳しくて有名である。理不尽に生徒を怒鳴ることはないが、宿題を忘れたりするのはご法度だった。質問に答えるか発表の時以外は私語も許されず、言うことを利かない生徒は厳しいおしかりを受ける。

先週の授業では、ついふざけていた男子達が厳しく叱られ、授業の終りまで立たされていたくらいだ。とてもではないが淡々と板書をし、洪く低い声で授業をする教師を遮って手を上げ、『先生、おトイレ行きたいです』なんて言えそうな雰囲気ではない。

できそうにない、と考えただけで、きゅんと瑠璃の下腹部が疼く。おなかの中で、恥ずかしいオシッコをなみなみとたたえて揺れるダムの重みが一段と増したように思えた。なお下腹部を硬く張り詰めるさせて募る尿意に、瑠璃は覚悟を新たにする。

(やっぱり、がまんしなきゃ……)

そもそも、女の子が4年生にもなって授業の最中に皆の前でトイレに行くなんて、普通はあってはならないことだ。きちんと休み時間もお昼の休憩もあったのに、トイレに行かなかったのは瑠璃の責任なのである。

ちゃんとトイレのしつけが出来ていないのだと言っているのと同じことだった。

(あと20分……えっと、1分60秒だから、1200秒……だから、っ、百まで、12回数えれば、おしまい……っ)

拙い計算をして、いち、にい、と数を数え始めるが、余裕のない頭の中ではただ数を数えるくらいの簡単なことも上手いかない。一年生だってできるだろうに、三十くらいまで数えたところで思考が息切れし、ぐうっと押し寄せてきた尿意の波に身体を硬くしている間に、どこまで数えたかも分からなくなってしまった。

仕方なく、適当に数字を切りあげて続きを始めるが、それもすぐに込み上げてくる衝動を堪えて、途切れてしまう。

(ごじゅう、なな、ご、ごじゅう、ごじゅうはち、っ……)

飛び飛びになる数字を数え、焦る気分のままに教卓の上の時計を睨む。もう60まで数えたのだから、1分くらいは進んでいなければおかしいはずだが、長針の位置はまるで変わっていないように思えた。本当にこの教室は時間が流れているのだろうか。そんなことまで疑いたくなる。

（は、はやく、早く授業、終わってよぉ……っ）

ペンを握っていた手が、そのまま机の板を握り締めた。

いまや下半身に留まらず、瑠璃の身体は全身でトイレをねだっている。小さな椅子の上に身体を縮こませ、身体の中心をきつく押さえて、足を寄せ、おしりをモジ付かせる。ぎしぎしと軋む椅子が立てる音が切なげな吐息に混じる。

（オシッコ、オシッコ、オシッコしたい……オシッコ、でちゃう…！！）

ひとたび心が我慢の限界の警告をしてからは、それまでとは違い加速度的に尿意が高まり始めていた。瑠璃の脳裏を清潔な女子トイレの、綺麗な個室、白い便器がよぎる。それだけできゅうんと下腹部の水風船が握り絞られるような錯覚すらあった。

オシッコでちゃう……限界を叫び傾いてしまった心は、みるみる想像の中のトイレに縛り付けられてしまう。たとえ頭の中でさえ、一度トイレを前にした女の子の身体はみるみる我慢がきかなくなっていた。

トイレに行きたい。オシッコがしたい。背筋がびくんと震え、脚の付け根がじわっと熱くなる。見る間にオモロシの予兆が押し寄せ、瑠璃は戦慄した。遠浅だったはずの尿意があっという間に高潮に襲われ、水位を増してゆく。

ほんの10分くらい前までは、精々『トイレに行きたい』くらいだったのが、いまや瑠璃の頭の中を占めるのは途中を全てすっ飛ばして『オシッコ出る』『オシッコ漏れちゃう』である。

もはやペンすら手にする余裕も無く、瑠璃は両手で足の付け根を握り締める。ぎゅうぎゅうと体重を乗せてあそこを握り締めていなければ、いまにもダムが崩れ、水門が開いてしまいそうだった。

敗色濃厚、全面降伏も時間の問題——すでに授業もそっちのけで、瑠璃は教室の片隅、ひとり孤独に激しい尿意との戦いを繰り広げていた。

そんな時だ。

「——以上だ。では、これから小テストを行う」

言うが早いか黒板を消し始めた教師の発言に、クラスのあちこちからええーっと非難の声が上がる。授業終了まであと10分と少しという残り時間で、突如振って湧いたテスト発言に、横暴だと生徒達たちがにわかに騒がしくなる。

「教科書とノートを机からしまうように。問題用紙を配る」

しかし、些細な抗議など時間稼ぎにすらならなかった。問答無用とばかりにテスト用紙を配り始める教師の有無を言わせぬ姿勢に、クラスの皆も渋々ながら従っていく。

一転、静まり返る教室の中で——瑠璃だけがそれどころではない。

（あ、あっ、あ……で、出る、でちゃう…だめえ……っ）

「——え、……ちゃん」

（が、我慢しなきゃ……がまん、しなきゃっ……あと、あと12分っ……）

「ねえ、瑠璃ちゃん、前、前」

「っ、え……！？」

後ろから背中をつつく声にはっと顔を上げれば、テスト用紙を手にも前の席のクラスメイトが少し不満げに瑠璃を見ていた。

今まさに尿意のビッグウェーブとの戦いの真っ最中で、瑠璃は周囲の事など全く耳に入っていなかったのだ。教師の言葉すらほと

んど聞き流していたが——気付けば瑠璃を除くクラスの全員がテストの準備を終え、机の上に筆箱と問題用紙だけを並べ、緊張の面持ちを浮かべている。何もしていないのは瑠璃だけだ。

「ご、ごめんっ」

ほとんど反射的にテスト用紙を受け取り、自分の分を取って後ろに回す。ほぼ白紙のノートと、開いてもいなかった教科書を乱暴に机の中に突っ込んだ。

「よし、では始め」

瑠璃が準備を終えたのを見て、教師がテストの開始を宣言した。クラスの机の上で一斉にテスト用紙が翻り、ペン先の音が踊る。

いつしか本物のテストと何ら変わらない、ピリピリとした緊張が教室を支配していた。授業終わりの小テストと言いながらも、成績にはちゃんと関係する大事なテストなのである。お調子者の男子までが、真剣な顔で答案に向かう。

そんな雰囲気の中——瑠璃だけがまるで、それどころではない。

(だ、だめ……、っ、も、もう、ガマン、できな、っ……ああっ)

まさにいまこの時が、一瞬たりとて気が抜けない我慢の真っ最中だったのだ。全身全霊をかけて、襲い来る尿意とせめぎ合っていたその最中に、無理して動いてしまったのが、一気に瑠璃の形勢を不利にした。

ぐるぐると下腹部で蠢く熱い衝撃が、股間の先端、脚の付け根の中央へと集まっていく。限界まで伸び切った膀胱が、反動のようにぎゅと身をよじり、ぱんぱんに詰まった中身を絞り出さんと収縮を始める。

「うあ、……っ」

必死に、必死に我慢してきた。窮地に陥ってから、たった20分——授業が終わるまでのほんのわずかな時間。けれど瑠璃にとってそれはまるで永遠にも感じられた。挫けそうな心を支え、女の子の大事な部分に両手を援軍として送り込み、必死になって残り時間を、解放までの瞬間を数えて、なんとかここまで耐えてきたのだ。

まさに、奇跡といってもいい10分間だった。

しかし、授業の終了まではまだあと10分もの時間がある。これまで耐えてきたのと同じだけの時間を、ますます強くなる尿意に耐えて我慢し切る——そんなことはどう考えても不可能だった。

たかだか10分、600秒。けれどその10分が、もはや耐え切れない。

(漏れ、ちゃう……っ)

4年生にもなって教室でオモラシなんて——必死にそう自分に言い聞かせようとするが、瑠璃の身体はそんな事お構いなしにオシッコの準備を始めていた。脚の付け根の奥がじわりと湿り、オシッコの出口がぷくりと膨らむ。押さえ込んだスカートの奥、下着を突き抜けて噴き出す熱い水流が、椅子の上にぶつかり、天板を伝ってばちゃばちゃと盛大に床に飛び散る——

最悪の形で終局が瑠璃の頭をよぎる。

ここまで我慢したのに——悔しさに、情けなさに、恥ずかしさに涙が滲む。辛うじて瑠璃が縋りつく女の子としてののけなしのプライドも、なお激しく荒れ狂う尿意の前には無力だった。高まる水圧に負け、耐えかねたように水門が押し開けられる。我慢の限界、想像の中のトイレに、瑠璃の意識が吸い寄せられる。

瑠璃がいよいよ屈辱の中、女の子の生理現象に屈しそうになったその時。

「——終わった者から休憩とする。用紙を前に提出し、他のクラスの迷惑にならないように」

まるで、天啓のように。教師の言葉があった。

薄れかけた意識を覚醒させる、頭に突き刺さるようなその一言に、瑠璃は瞬時に我を取り戻した。

終わった者から、休憩。

他のクラスの迷惑にならないように。

二つの言葉が意味することは単純。テストが終わったら、休み時間にしても良いということだ。つまり、

（——終われば、トイレに行ける！！）

オモロシ寸前の瑠璃にとって、単純なその事実だけが稲妻のように閃き、脳裏に焼き付いた。まさに天啓のごとく、少女の心はその恩寵にひれ伏し縋りつく。

瑠璃は飛び付くように、机の上に裏返していたままのテスト用紙をひっくり返した。

小テストというにはいささか重すぎる、びっしりと文字の並ぶ文章題の問題が5つ。10分で解くための全5問のテストだというには随分難易度が高そうにも思えた。

けれども瑠璃にはそんなものはどうでもいい。教師の思惑も、成績も、何も関係ない。

これに全部答えれば、トイレに行ける。その事実だけで十分だった。

瑠璃はスカートの付け根を握る手を左手だけに減らし、震える手でペンを持った。恥ずかしい水門を外から押さえる力が半分になり、一気に尿意が激しさを増す。それを誤魔化すように、瑠璃は左手で激しく股間を押し揉んだ。背中が揺れ、大きく椅子が軋む。後ろで友人が不審げに顔を上げる。

けれど瑠璃は気付かない。背中に目は無いし、なにより今はテストだ。

震えるペン先で名前を書き込む。慌てて書いたせいでひどく歪んだ「かしのり」の五文字の下に、出席番号を書きなぐる。

「つ——」

問題文に目を通しても、全然頭に入って来ない。あてずっぽうで回答欄を埋めていく。この際間違っていようが、全然見当違いだって構わなかった。

（全部、答えだけ書きゃええ——）

問3の選択問題を全部『A』で埋め、問4の文章題に差し掛かったその時。

「んああっ……！？」

猛烈な尿意の波が瑠璃を襲った。びくとペン先が跳ね、回答欄に歪んだ線をなぞる。宙に浮いたペン先が虚空にふらふらと文字を刻み、咄嗟に引き寄せた肘で下腹部を押さえる。おヘソの上近くまで、触れるだけでジンと尿意が腰骨に響いた。

机の下でぎゅうっと左手が足の付け根を固く握り締め、もじもじと忙しく激しく太腿が擦り合わされる。はあはあと熱い吐息が少女の唇を震わせた。

（で、でちゃ、っ……！？）

「んう、んんっ、んーっ……」

ぴたりと寄せ合わせた太腿を激しくすりすり擦り合わせ、瑠璃は噴水のように弾けんとする熱い濁流を、すんでのところで堰き止めた。無理に出口を押さえこまれ、行き場を失くしたオシッコがびく、びくと少女の下腹部を激しく震わせる。

（で、でる、でるう……んっ、ダメ、我慢、ガマン、して……っ、これ、終われば、トイレ、行けるの……っ！！）

問題用紙に齧りつくように背中を丸め、瑠璃はペンを取った。

五十文字以内で答えよ——ほとんど判別不能の文字で回答欄を埋める。無意識のうちに瑠璃がなぞった文字は、『オシッコが出ます』だった。

最後の問 5 の問題は回答欄に辛うじて丸だけを書き入れ、瑠璃はテスト用紙を握り締めるようにして席を立った。スカートの前を押さえ、前屈み、おしりを突きだしたみっともない姿で、並ぶ机にぶつかりながら、ふらふらと覚束ない足取りで教卓へと歩み寄る。

教室内を見回っていた教師が顔を上げた。テスト開始から 2 分も過ぎていない。あまりにも早い回答者に、彼も不審に思ったのだ。

瑠璃はそんな教師の疑念にも構わず、くしゃくしゃのテスト用紙を卓上に叩きつけるようにして置き、教室のドアへ向けて一目散に走り寄ろうとする。

しかしそれとほぼ同時、
「んあああ……っ！？」

まるで瑠璃の行く手を阻むかのように。させんとばかりに再びの尿意の大波。否、それはあと少しというところで瑠璃がわずかに気を緩めてしまったがゆえの必然だった。押さえ込んでいた尿意が一気に膨らみ、瑠璃は声を上げてしまう。

教卓の前での突如の悲鳴に、クラスメイト達は何事かと視線を向けた。

しかし瑠璃はそんなもの見えていない。テストは終えた。もうおしまい。授業はおしまいで、瑠璃はトイレに行っても良いのだ。

はやく、はやく、早くしないと間に合わない。一秒でも早くトイレ。けれど押し寄せる尿意は容赦がなかった。瑠璃は教卓にしがみ付くようにして、懸命にオシッコを押しとどめる。

ちょうど、授業で指されて黒板に向かい、クラス全員に背中を向けて見せつけるかのような姿勢になった。教卓にしがみ付くようにして、激しく内股になり、ぎゅっと左手で股間を押さえたスカートのおしりを左右に振り立ててしまう。

「あ、あっあ。あ、だめ、でる、でるう……っ！！」

我知らず恥ずかしい尿意を口にし、ぎゅうぎゅうとスカートの前を押さえ、必死に膝を擦り合わせ、行進のようにその場足踏みを繰り返すような有様で、一步もその場から動けない。

もじもじと腰を揺すり激しくスカートの前を握り締める様は、全身で『オトイレしたいです』と叫んでいるに等しかった。呆氣にとられる教室の一同を前に、瑠璃は全身でオシッコ我慢ダンスを披露してしまう。

「あ、あっあ、あっっ」

それでもなお、瑠璃は諦めず教室のドアへ進もうとする。しかしもう歩くのも難しい。がくがくと膝が震え、教壇の上でとうとうしゃがみ込んでしまう。

スカートがめくれ、白い下着が覗く。同時、瑠璃の女の子の部分から、じゅじゅじゅうと恥ずかしい音と共に、強い水流が噴き出した。

「はあああ……っ」

水門をこじ開けた恥ずかしい水流が一気に少女の体の外へと迸った。下着の股布に勢いよくぶつかり、弾ける熱い水流が、瑠璃の脚の内側にばじゃあと撒き散らされる。

股間の先端に火が弾けたようだった。ぶるぶると背中が震える。背筋を黄色い稲妻が走りぬけ、頭の中で白く閃光が輝く。

耐えに耐え、我慢し続けていた女の子のオシッコが、激しく噴き出して教壇を打った。脚の付け根を突き抜け恥骨に響く途方も無い解放感。足元がもつれ、身体が傾ぐ。同時に仰け反った背中から、大きく前へ——下着を突き抜け、噴射する猛烈な水流。白い下着が黄色く染まり、スカートまでが色を変える。

御開帳——そんな言葉が浮かぶほど大胆に、見せつけるように瑠璃はオモランをクラスの皆に披露してしまう。

それでも、我慢に我慢を重ねた待望のオシッコを、足元に噴き出させる快感に、瑠璃は思わず嬌声すら上げてしまっていた。教卓の上、皆にも見えるようにしゃがみ込んで、オモラシを始めた瑠璃の唇が甘く喘ぎをこぼし、白い喉が上下する。上気した頬はほんのりと紅く、激しくオシッコを進らせながら腰をクネらせる様は艶めかしくすらあった。圧倒的なオモラシの迫力に、もはやクラスメイトはおろか教師まではテストもそっちのけ、視線を離せない。

便器どころか、教壇を、教卓を、教室の床をトイレにしていまいながらも、瑠璃のオモラシは終わらない。我慢していた時間と同じだけ、ずっといつまでも続くのだと言わんばかりに、瑠璃のオシッコはテストの沈黙の中に沈む教室の中に広がってゆく。

(初出：書き下ろし)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・32 再びバスの中で

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/20/2013 09:00:00

BODY:

 去年の続きになります。

 ……本作を描くにあたり、多くのすばらしい作品を参考にさせて頂きました。

 中でも以下の作品、

- ・おもらし特区 イエローフィッシュ様作品「帰りのバスの中で……」シリーズ
- ・おもらし特区 printfu 様作品「飲料工場見学後の大渋滞」
- ・おもらし特区 セブンスウェル様作品「遠足のバスで…」
- ・くすぐり失禁キャットハウス HIROSHI 様作品「子供の目の前で」「生徒の目の前で」
- ・おもらし特区他掲載 漫画「先生、オシッコ！」シリーズ
- ・黄瀧女学園物語

 こちらにはシチュエーション、展開、キャラ造形、作中要素などその他まで多く影響を受け、また参考とさせて頂いております。これまで曖昧な記述で済ませてしまっていたことをお詫びいたします。

<hr size="1" />

 9 人の少女達が露出させた下半身の股間を握り締め、恥ずかしい水流を噴き出させながら必死になってバスを追い掛けるという、渋滞の高速道路を騒然とさせた惨劇から半時間あまり。

 初夏の日差しにも乾かぬほどのオモラシの痕跡はいまだ、路面に残り続け、少女達の恥辱の痕跡をはっきりと残していた。後続の渋滞に捕まった人々が、車内から不自然に濡れた地面と点々と続く水たまりの痕に、一体なにがあったのだろうと首を傾げている頃——乗員数を 28 人プラス 1 名に戻した 2 年 A 組の高速バスは、再び高速道路を埋める車列の中を進んでいた。

 一度は開け放たれたドアを再度固く閉ざし、動く密室へと戻ったバスは、窓に分厚いカーテンを引いて外からの視界を遮っていた。節電のため照明を落とした薄暗い車内からは、あちこちで小さくすすり泣く声や、荒い吐息、くぐもった呻き声に満ちている。

「んあ……っ、あ、はあ、はあっ……くうっ……」

「ああっ……っや、で、ちゃう……っ」

「と……トイレ……おしっこ、したい…よお……」

「んんああっ……あ、やだ、やだあ……」

 じゅっ、と熱い水流が薄い布地にぶつかって鈍い水音を響かせるほどだ。路上の悲劇からさらに時間を経て、2 - A の少女達の尿意はさらに猛烈なものとなっている。トイレのない密室の中に閉じ込められたまま、ショウガ紅茶の悪魔的なまでの利尿作用と、少女達に自らを呪わせるほどの健康な代謝機能によって増え続ける体内のイケナイ水分は、彼女達の下腹部をさらにぱんぱんに膨らませ、乙女のダムは以前よりも貯水量を増している。

 既にほとんどの少女達が多かれ少なかれ、制服を濡らせ下着を濡らし、数分おきにおチビりを繰り返す、極限状態へと陥って

いた。

羞恥心の強く、潔癖になりがちな多感な思春期の世代の少女たちにとって、終わることのない尿意に延々と下半身をなぶられる続けるこのバスは、まさに地獄であった。

「っ……あ、やだ、……よお……もう、やだあ……！！」

「こんなの……どうしてこんな……っ」

苦悶の声の多くは、先刻バスの外で、耐えようもない恥辱にさらされた少女達のものだった。覚悟を決めてバスの陰での野外排泄を選んだ9人——佳奈をはじめとする彼女たちは、女の子にとってあってはならない『高速道路での集団野外排泄』を衆目にさらされるという、死にも勝るような恥辱を受けたばかりなのである。

必死になってバスまで戻ってきた彼女たちを、せめて周りからの視線を遮るために、車内のカーテンはしっかりと閉められ、窓を塞いでいる。

しかし、窓の外からはカーテンのわずかな隙間から少女達の決定的な瞬間を狙って、いくつもの無遠慮な視線や、携帯のカメラのレンズが向けられていた。

佳奈をはじめとする彼女たちが、膝までずりおろした下着に足を取られながら、必死の形相で高速を走りだしたバスに追いつき、入口のドアをこじ開けるようにしてよじ登った駆け込んだのがおよそ10分ほど前のことだ。

運転手としても決して悪気があった訳ではなく、渋滞の中で他の車からのクラクションのオーケストラによる抗議を受けての苦渋の選択だったのだが——まさか、少女達があのようなあられもない姿で駆け戻ってくるとは想像もしておらず、虚脱状態になって一瞬呆然とし、ドアを開けるのに手間取ってしまった。

その間にもバスの入口に詰めかけた少女達は、びっしりと並んだ渋滞の行列からの無数の視線の餌食となってしまった。下劣な欲望や、蔑みの感情を隠す事もなく、舐めるように少女達の素肌を犯してゆく視線に、少女達の精神は再起不能に近いほどにまでズタズタにされている。

捲り上げたスカートを下ろす暇もなく、足首に下ろした下着を絡ませた剥き出しの下半身、女の子の大切なところを両手でぎゅうぎゅうと握り締め、なお激しく噴き上がる薄黄色の水流を足元に進らせ、熱い雫をぼたぼたと撒き散らしながら、ガニ股になってバスを追いかける少女達。

恥辱に染まる赤い頬、俯いた視線、零れる涙、覚束ない足取り。制服のお尻は、股間は濃く色を変え、恥ずかしいオモロシの染みはみるみるうちに大きくなる。太腿に挟みこんだ両手の奥にしゅるしゅる、しゅわあ、と慎ましかとは言い難い漏れ音と共に女の子特有のオシッコの匂いが立ち込め、擦り合わされる膝から滴った雫がアスファルトの上で蒸発して湯気を立ち昇らせる。

あまりにも衝撃的なその光景は、観客となった人々の記憶に鮮烈に焼き付いていた。彼等はいまもその続きを求めるように、バスをじっと覗き込み、下卑た欲望で取り巻いているのである。

しかも、9人の少女達の多くが、突然のバスの移動に対応できず、動転したまま走りだしてしまったため、本来行われるべきだったオシッコの排泄をほとんど終わらせることができず、中途半端な状態で屋外トイレを切り上げ上げざるを得なかったのである。

否、きちんとオシッコを『出せた』のはわずか数名で、佳奈を含む半分以上の少女達が、ほとんど満足に女の子の水門を開く事すらできなかったのだ。開きかけた乙女のダムの水門を懸命に閉じ、排泄孔をねじりつけるように押さえこんで、そのままバスに駆け戻っていた。

漏らしてしまった分など、なお激しく震え収縮の隙を窺っている膀胱を満たす大量のオシッコからすればごく一部。むしろ、一旦トイレの準備を終えてしまった分だけ、過敏になって排泄器官は隙あらば下腹部をぱんぱんに膨らませる恥ずかしい液体を絞り出

そうと震え、少女達に強烈な尿意の衝動を送り込んでいた。

死ぬよりも辛い目にあいながら、行き場を失くしたオシッコは渦を巻き泡立って小 k 所の出口を執拗に攻撃し、尿意は募るばかり。苦痛はさらに増し、それが一層羞恥を刺激する、終わりのない悪循環。

さらに具合の悪い事に、いまやこの 2 - A 高速バスに乗る生徒達が、限界寸前のオシッコを我慢し続けている事は、衆目の知るところとなっている。佳奈たちがバスを降りた事で、2 - A の少女達が、我慢に我慢を重ねたオシッコを高速道路の路肩に停車したバスの陰で済ませようとしていた事も、彼女たちの多くがそれを済ませられずにバスに戻ったことも、今なお耐えがたい尿意に身をよじり、小さなおなかをおしっこでパンパンに膨らませていることも、広く喧伝する結果となってしまったのである。

恥ずかしい乙女のレモンティーをぎゅうぎゅうに詰め込み、運ぶバス。渋滞の中で身動きも取れぬまま、行く手すらも塞がれた密室の周囲を取り巻く車たちが、欲望を隠すこともせず、そこから再び、羞恥の雫が溢れ進む決定的瞬間を虎視眈々と狙っているのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・33 長谷川陽菜

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/21/2013 09:00:00

BODY:

「ううっ、ぐすっ……っく……ふえ……っ」

バスに戻った陽菜は泣きじゃくっていた。

後から後から溢れる涙を、両手でぬぐう。さっきまで脚の付け根を押さえ込んでいた両手は、おしっこでびちゃびちゃに汚れたまま、袖にまで黄色い染みが広がっている。

白いふくらはぎには、まだ脱ぎかけたままの白い下着が、びちゃびちゃになって絡み付き、スカートは重く水を吸って腿にへばりつく。太腿からひざの裏を掛けてはまだ細い水流がちよろちよろこぼれ、すっかり水を吸ってがぼがぼの革靴にぼたぼたと雫を垂ら続けていた。灰色から紺へ色を変え、たつぷりとオシッコを吸ったスカートの裾から落ちる恥ずかしい水滴はバスの床に点々と続き、つうと通路の真ん中へ流れてゆく。

陽菜は、バスを降りた9人の少女達の中で唯一、外でのオシッコを終えていた。

ただし——きちんとした形ではなく、完全なるオモラシという結果で。バスが動いた瞬間に気付かなかった陽菜は、他の少女たちよりもオシッコの出口を押さえ込む野が遅れてしまったのだ。

時間にして数秒——陽菜が気付いた時にはもう遅かった。開きかけた排泄孔は長時間の我慢でひりひりと疼き、むず痒く震え、耐えかねるようにぼかりと丸い口を開けて本当の勢いのオシッコを迸らせてしまった。

オシッコ我慢中の女の子は、我慢の限界で一旦トイレを見てしまったら、もう辛抱きかない生き物なのだ。オシッコの『出始め』で緊急放水停止命令を発して排泄を止めようとした他の少女——佳奈や、頼子達とは対照的に、陽菜の身体はもう『オシッコを出せ』以外の命令を聞いてはくれなかった。

蛇口を全開にしたような猛烈な水流が、しゃがみ込んで突き出したお尻の側へ思い切り噴射され、アスファルトを直撃するのを、もう陽菜は自分でも止められなかった。解放されたオシッコの出口は途方もない解放感に震え、ぶると収縮する脚の付け根から絞り出される熱水が地面を跳ねるのに、歓声すら上げたいくなるほどの喜びを覚える。

焼けた鉄を水に漬けた時のような音を響かせて、おなかの一番底に空いた穴から、ずっと自分を苦しめ続けていた恥ずかしいお湯が噴き出すのを、どこか他人事のように感じてしまっていた。

そして、気付いた時にはもう遅い。

隣に居た頼子も、向こうの佳奈も、葵も、呆気にとられたように陽菜の大胆な野外オシッコを、羨ましそうに見つめていた。

その視線に気付いた陽菜の背中を、冷たいものが走る。

次の瞬間には、喉が千切れんばかりに悲鳴を上げていた。動転した身体が足を滑らせて倒れ込み、四つん這いになってお尻を高く持ち上げてしまう。いよいよ噴き出すオシッコは勢いを増し、陽菜のおなかの下へ激しく噴き出して地面を洗い流す。押さえる手が無くなって垂れさがったスカートを直撃し、飛び散る飛沫は、地面に倒れ込んだ上着まで容赦なく汚した。

「っ……ひぐっ……うえ……っ」

トイレの牀のできていないような、小さな子だって、ここまで全身をオシッコでずぶ濡れにすることなんてないはずだった。

地面へと放出されるはずだったオシッコは陽菜自身の制服を直撃し、普通にオモラシをしたよりも大規模な被害をもたらしている。

一歩ごとにじゅじゅっ、とオシッコを染み出させる服では椅子に腰を下ろすこともできない。陽菜は立ち尽くしたままバスの背もたれに寄りかかり、涙をこぼす。

しかし、そんな彼女を、あろうことかいくつもの視線が非難がましげに睨みつけている。

陽菜の受けた恥辱を考えれば同情こそすれ、羨望や失望などあり得ないはずである。しかしその視線が含む成分は、はっきりと

した憎しみすらはらんでいる。

そう、いまなお猛烈な尿意をその小さな下腹部に抱え込んだ少女達からすれば、陽菜は一人、抜け駆けのように、バスの陰でオシッコを終えた少女なのである。その結果が見るも無残なオモラシだったとしても、28人のクラスメイトの中で、いち早く尿意に膨らむ膀胱かを空っぽにし、ぱんぱんのおなかからオシッコを絞り出した少女でもあるのだ。

今なお耐え難い苦悶に身をよじる少女達は、先にオシッコを済ませた陽菜を羨み、蔑み、さらに目に触れるだけでさらなる尿意の元となるその姿を厭うようにして、扱ってしまうのだった。

一人だけ先に『オシッコをしたくせに』、泣いている陽菜を鬱陶しいと、あるいは邪魔だと思う感情は、ひりつくほどの排泄欲求に耐えしのぶ少女達にとっては、ごく自然なものであった。

“早くわたしもオシッコをしたい！”という羨望。

同時に、“あんなみじめな格好になりたくない”という差別。

陽菜を見て必死に自分を奮い立たせ、あるいは邪険に視線から外し、クラスメイト達はまるで居ないもののように扱っていた。

良くも悪くも、この扱いは陽菜にとっては新たな苦悶の種でしかなく——バスの中に生れた人間関係はますます渾沌と、複雑になってゆくばかりであった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・34 佐野真彩その4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/22/2013 09:00:00

BODY:

真彩は窮地に陥っていた。太腿の内側に重ねた手のひらをぎゅっと押しあて、前屈みになった姿勢で激しく膝を擦り合わせる。

じりじりとせり上がり、水位を増した尿意が全く収まらないのだ。さっきまでは大津波とはいえ、断続的な高低差を持った『波』だった尿意が、いまは高潮のように強まったまま、どんどんとその力を増してゆくのだ。

「うく……う……」

胸の奥が詰まるように呼吸が浅く、早い。少しでも気を抜けば一緒に股間からも熱い水流が噴き出してしまいそうだ。酷使され続けた括約筋が痺れ、熱をもって疼く。じんじんとおなかに響く衝撃に、内側からノックされ続けるダム of 放水口がぶくつと膨らみそうになる。オシッコの出口を塞ぐため、お尻の孔にきゅっと力を込めるたび、下着の中で桃色に染まった恥ずかしい場所がひくひくと震える。

それでも押さえた指を下着とスカート越しにも湿らせるはしたないおチビりの感触が、真彩を追い詰めていた。

尿意の波——バスの中に閉じ込められて4時間近くが経過した今となっては『オシッコしたい』と『すぐオシッコしたい』と『もう限界』の間を行き来するような状態だが——それでも本当に辛い瞬間とそうではない時の差がある分だけ、一番危険な瞬間に必死に我慢を集中して、波のうねりを乗り越えさえすれば、少しは気が休まる瞬間があった。

だが、今の真彩の尿意はそうではなく、高くせり上がった水面がまったく下がる気配を見せない。『オシッコしたい』という尿意の波の、一番危険な瞬間が延々と続いているのだ。

「ふ、は……く、あ……」

満足に息継ぎもできないまま、全身が黄色い海の底に沈み、溺れていくようだった。両手と太腿と使って必死に押さえ込んでいる水門は、内部の水圧に負けるようにじりじりと押し開けられてゆく。じゅ、じゅ、とイケナイ音を響かせる股間に、真彩は背中を丸めて耐える。

少女のおなかの内側で限界まで膨らみ張り詰めた膀胱が、これ以上の伸び切ることができないと、真彩の意志を無視して中身を絞り出そうとしているのだ。排泄器官を掴んでひねり上げるような、強烈な排泄衝動——膀胱が爆発しそうなほどの猛烈な尿意が来る。

（っあ……やば、い……っ！！）

膀胱が排泄の本能のまま、きゅうつと収縮をはじめようとする予兆に、真彩は眼を見開いて背中を戦慄させる。おなかをさすってそれを押さえ込みたいが、手が離せない。真彩の十数年の生涯初めての『オモラシ』のカウントダウンがはじまっていた。

少女の身体は排泄欲求の本能を優先し、倫理や理性をかなぐり捨てようとする。『これだけ我慢したんだから』『こんな状態じゃしょうがない』と、少女のプライドがこれまで頑なに否定してきた、最悪の事態をいよいよ許容し始めた時、カーテンの隙間から見覚えのある色彩が覗く。

陽射しを反射する銀色のワンボックスカーが、タイヤを鳴らすようにして車線に割り込み、強引に路肩に停車した。

非常駐車帯に停まるやいなや、ワンボックスの助手席のドアが吹き飛ばすように開く。

（あ、あれ、さっき、の……）

見たことのある車だと気付いたのは、見覚えのある男の子が、続けて後部座席のドアをスライドさせて車内から顔を覗かせたからだ。

次の瞬間、路肩に向けて凄まじい勢いの放水が叩き付けられる。炭酸飲料のペットボトルを思い切り振り混ぜて蓋を開けた時のような、容赦のない本当の勢いのオシッコ。

そう。あろうことか——助手席のドアから身を乗り出した女の人が、車の外へ向けて下着もほとんど下ろせないまま、大股開きになって、腰を突き出し、路肩に向けて凄まじい勢いのオシッコを始めていたのだ。

(う、嘘……っ)

頭をぶんなぐられたような衝撃が、真彩を襲う。子供までいる大人の女の人——真彩のお母さんとそう歳が変わらない人なのに、こんな所で、ガマンできずにオシッコをはじめたのだ。しかも、とてもではないが慎み深いとは言えない状況で。

上手くドアを使って見えないようにしているつもりらしいが——車高の高いバス、真彩の位置からはちょうどそれが丸見えだった。

あまりの姿に、ちょっと心配そうな顔をして、男の子もその様子を案じている。彼の視線の先、助手席のドアの陰で、立派な大人の女の人——男の子のお母さんが、気持ちよさそうにオシッコをしている。

(……こ、これだけ渋滞してるんだもん、っ、し、しかた、無いよね……)

はしたない、と目を背ける事もできたらう。しかしもはやその光景は真彩を躊躇わせることはなく、むしろ少女の背中を後押しする。

女性だから、大人だから。恥じらいを持たねばならないと叫ぶ理性を置いてきぼりにして、余裕を失った下腹部が激しい訴えを繰り返す。

そう。——むしろ逆に。

ちゃんとした、立派な大人だからこそ。どうしようもなくなるまで我慢を続けるなんて事の方が、愚かしいことだと言うのをわかっているはずなのだ。

どれだけ慎み深く、礼儀正しいお嬢様だって、トイレに行けないまま、ずっと我慢を続けていればいつかは限界がやってくる。それは仕方のないことのはずだった。

(そ、それに、本当の、本当に、ガマンできなくなっちゃったら……っ)

我慢を続けたまま、一歩も動けなくなって——そうだった時の結末は、火を見るよりも明らかだ。カウントダウンを始めたオシッコの出口と、ますます硬さを増す下腹部をさすり、真彩はぶるりと背中を震わせる。

そもそも、こんな万が一の危機的状態に陥らないようにすることこそが、本当のきちんとした大人の振る舞いだと言う至極まっとうな意見は、頭のどこかにこびり付いてはいたが。

もう真彩にそんな理屈は通じない。

(どうしようもないんだもんっ、オシッコ、出ちゃうもんっ…！！)

行き場を失くした女の子のおしっこは、なお真彩の下腹部を膨らませて、出口を求めて暴れ続ける。額にはじっとりと汗が浮かび、恥骨にはじいんと甘い痺れが響く。おしりの孔にまできゅつと力を込めて締め付けなければ、排水口はいつ緩んでしまうかもわからない。

きつくつぶった目の向こうで、真彩は、オシッコをしている自分の姿を思い描く。

ワンボックスカーのドアの陰で響いているであろう、滝のような水音を想像しながら、真彩の息づかいは一段と荒くなっていった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・35 清水蓉子その5

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/23/2013 09:00:00

BODY:

「ええ、はいっ、そうです……もう皆、だいぶ疲れてる様子で……ほかの組の子もそうですよね？ 休ませてあげたいと思いますっ、ええっ、い、いいですよね？ いいですよね！？」

汗ばむ手で携帯電話を握り締め——蓉子は電話口に叫んでいた。

そう、汗だ。断じて汗以外の何物でもない。さっきまでバス乗車のどさくさに紛れて、恥も外聞もなく『がばあっ』と捲り上げたスカートの中に手を突っ込んで思い切りあそこを押さえていた蓉子の手が湿っているのは、汗以外が原因にあり得ない。

バスのタラップをひっきりなしに足踏みし、いつときも収まることなくねる腰が、はしたない我慢ダンスを踊っているが、クラス担任たる『清水先生』は、あくまで『オシッコなんか我慢してません！！』という態度の初心貫徹を崩さなかった。

（あはあ……んっ……くううっ、ダメ、我慢、我慢よ、我慢するのよ、蓉子っ……！！）

オトナの女性に相応しく、みっともない真似はしないように、腿の内側の筋肉だけでいまにも暴発しそうな股間の蛇口を締め付ける。それももはや、傍目にはあきらかに嘘とわかる、ただ本人が認めていないだけの薄っぺらい主張でしかなかったが。

「……え？ 一度高速を降りちやうと合流できない？ も、もうっ！ そんなことどうだっていいじゃないですか！！ ぐ、具合悪い子もいるんですよ！！ 休ませてあげなきゃ可哀想じゃないですかあっ！！」

電話の相手は、後続する3号車の学年主任だ。蓉子の上司であり、今回の校外学習の責任者ということにもなっている。

「せ、生徒の事を思いやるのも、教師としての務めじゃないですかっ……！！ え？ そ、そんなの知りませんッ！！ ほ、他のバスが降りられないかもしれないとか——そ、そんなこと、言われても困りますッ！！ ……わ、わたしは、2年A組のく、クラス、担任としてッ、見過ごせないって言ってるだけですっ……！！」

ほとんど怒鳴るように電話口に叫び、蓉子は傍らにある座席シートの背もたれに、身体を押しつけるようにぴったりと寄せた。太腿に背もたれを挟んでぐりぐりとスーツの股間を押しつけ、円を描くように腰をよじり擦りつける。

まるで発情したメス犬のような有様のそれは、オシッコの出口を物理的に塞ぎ、もっとも脆いダムの出口から尿意を少しでも分散させようとする必死の動作だった。手で押さえたらオシッコしたいのがバレてしまう——その考えに固執するあまり、蓉子は自分が今どんな姿をしているのか、客観的に見る事すらできていない。

（はぁあんっ……！！ ……出ちゃう、出ちゃうっ、オシッコ！！ オシッコ出ちゃうのおおっ！！ あぁ——んっ、も、もうッ、ガマンするなんて無理なのよッ…！！）

あそこを手で握り締めるのなんてはしたない——最初は、それが頭にあった。

けれど募る尿意は和らぐどころか激しさを増すばかりで、摂取したショウガ紅茶の利尿作用はいよいよ本格的に牙を剥き、代謝機能を活性化させる機能を十全に発揮しつつある。スーツの下腹部をぽっこりと膨らませるほどの大量のオシッコが、蓉子の膀胱をかつてないサイズまで拡張しているのだ。

じんと下腹部を襲う、鈍い痛みすら伴う排泄衝動は全身を使った我慢でなければとても耐えきれものではなかった。

だからこそ、『手で押さえしていないから、OK』とばかりに、とても成立しない逆説を免罪符に、蓉子のトイレ我慢はますます大仰なものとなってゆく。

小さな子供染みたその悶えぶりは彼女の教え子たる生徒達と比べても酷いもので——年齢と体格差を考慮した、膀胱の貯水量の差を差し引いてなお、そもそも真っ当な大人の振る舞いとしても失格な格好であった。

蓉子は、オナラの欲望を剥き出しに、今すぐ一心不乱にありったけの力で股間を揉みほぐし、いつとも収まることのない尿意を和らげたい——その欲求と戦いながら、オシッコを我慢しているのである。

「で、ですからっ……！！ もう、トイレ、ガマンできない子が、ウチのクラスに大勢いるんですっ！！ お、オモロシ……トイレじゃないところで、お、オシッコ、漏らしちゃうしちゃうかもしれないんですよっ……！？ お、女の子なのに、ガマンできないなんて……惨め過ぎますッ、か、可哀想だっ、思わないんですかぁッ！！」

今すぐにでもサービスエリアに向かうべきだという蓉子の主張に対し、主任はそれに難色を示していた。先行する1組と2組のバスはすでにサービスエリアへの出口を通り過ぎてしまっているというのだ。渋滞の中後戻りはできないし、予定にも大きくずれが生じると主任の声に、蓉子は声音を強めるばかりだ。

「こ、これ以上、がががが、ガマンなんてさせられませんッ！！ も、もう漏らしちゃってる子もいるんですからッ！！ 井澤さんとカッ、坂上さんとカッ、麻生さんもッ！！ お、オシッコ、もう、出ちゃいそうにしてるんですよ！！」

渋滞の中で分断され、お互いの姿すら見えなくなっていたはずの、他のクラスのバスにまで——2年A組のオモロシと、臨界状態の尿意を懸命に堪えるオシッコ我慢の全貌が、余すことなく実況生中継で知らされていく。

「——ば、バケツ！？ 当然却下ですッ！！ 当たり前じゃないですか、女の子がそんなところで、オシッコなんかダメです、絶対ダメええ！！ は、はやくしなきゃ、もう、本当にツダメ、なんですよ！！」

そこまでして必死になる蓉子の言葉の裏には、今更言及するまでもないだろうが、別の意図があった。

（——わ、わたしがつ、もうオシッコガマンできないの、出ちゃうの、オシッコ、モロしちやのおよおおっ！！ あぁあつ、はぁ、はぁああ

あんっ……！！）

くねくねッ、モジモジッ、たんっ、たたんっ。

澁みなく繰り上げられる、羞恥の我慢ダンス。トイレの欲求を少しでも先延ばしにせんと喘ぐ蓉子は、荒い息の中凄まじい剣幕で眉を吊りあげ、口角泡を飛ばして携帯に叫ぶ。

「だ、だったら、そのッ、……っ、次のサービスエリアで待ってるとか！！ そ、そうですよっ。ほ、他にもッ、ほらっ、い、色々あるじゃないですか！！ ね、ねえ？ それでいいですよ、しゅにんせんせえッ！！」

痴態にまみれたその姿から視線を反らし、声だけを聞いていれば、生徒達のことを思いやる熱心な教師——と、見えない事もない。異様な気迫や強引極まりない頑固な主張、焦って震える声音など、諸々の失態に目をつぶればだが。

しかし、『清水先生』の仮面の下で、蓉子はまさに『オンナ』の薄汚い欲望に塗れた、打算を繰り広げていた。

（そっ、そうよ！！ こうなったら、な、何としてもサービスエリアまでっ……ガマンしてやるんだからぁ……！！ も、もうすぐ、もうすぐおトイレ出来るのッ……あんな風に、皆みたいに、バスの陰なんかでみっともないことしなくなったって、いいんだからッ……！！ だっ、だから、それまで我慢っ、ガマンするのよ、っ、蓉子っ……！！）

ぱんっぱんに空気を入れた、パンク寸前のタイヤのよう。強張った下腹部をスカートの上から思い切り握りしめ揉みほぐしてしまいたいという、強い女の欲望を必死に堪え、辛うじて腰を揺るだけにとどめて、蓉子は電話の向こうの主任に訴える。

「主任先生、い、いいですよね！！ いいって言ってくださいっ！！ じゃなきゃ、み、生徒達みんな、漏らしちゃいますよっ！！ ねえっ！！」

もはや脅迫だ。身悶えし鬼気迫る形相で叫ぶ蓉子を、運転席から恐ろしげなものでも見るような眼で見つめている運転手の姿は、蓉子にはまったく見えていない。

（ああーんっ、トイレ、トイレっトイレトイレおトイレエっ…！！ オシッコ出ちゃう！！ オシッコ出ちゃうのおおっ、ああーんっ！！ はやく、早くおトイレ！！ おトイレ行きたいいい！！ オシッコおおおおっ！！）

だだんっ、と強く床を踏み鳴らした蓉子からは、既に『清水先生』のクラス担任という仮面が緩み、外れかけていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・36 トイレに向かって進路を取れ！

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/24/2013 09:00:00

BODY:

カーテンに仕切られた薄暗い車内に、オシッコの匂いが立ち込める。既に限界を迎えつつある28人の生徒達のおチビりによるものだ。

バスの中には倦怠と疲労、そして何よりも絶望が満ちていた。

恥ずかしさを堪え、バスの陰の臨時の野外トイレを使ってオシッコを済ませに行ったはずの9人は、下半身を丸出しにして道路を100m近くも練り歩くという悲劇に見舞われ——しかも、ほとんどの少女達はわずかな放水、おチビりをした程度で、オシッコを済ませることすらできず、まだ大量のオシッコを乙女のダムに溜め込んだままなのだ。

渋滞の行列から携帯のレンズを向けられ、オモラシの瞬間や路面にオシッコを噴き出させる一部始終を録画され、その上高速道路の車の合間をあそこを押さえてガニ股で歩く姿を見られる——そんな惨状を目の当たりにした少女達に、もう一度バスを降りるなんて選択肢はあり得なかった。

今すぐここから飛び降りて死ねと言っているにも等しい。

「ふぐっ……う、ううっ……」

「あ、あっ、あ……あああっ、ああああ……っ」

また、ぐもった水音が響く。バスの床をぱたぱたと垂れ落ちる水滴の音が、ちよろちよろと流れ落ちる細い水流の音が、ぷしっ、と噴き出す高圧の噴射音が、指に、布地にあたってじゅじゅじゅうと震える熱い放出音が、幾重にも重なってハーモニーを奏でる。

もはや後は時間の問題——最後の、野外排泄という手段すら失った2-Aの生徒達は、あらゆる希望を断たれ、動く密室と化したバスの中に閉じ込められたまま、最後の瞬間を迎えるしか道が残されていない。

あらゆる希望を失って、それでもなお往生際悪く、少しでも崩壊の瞬間を先延ばしにして、懸命の我慢が続けられているのは、ひとえに彼女達が、なによりも繊細で潔癖な世代の少女であるからに他ならなかった。

その、時だ。

「み、みなさんに、お知らせがありますッ」

突然、バスの連絡用のスピーカーにノイズが入る。

ガッツポーズと共に携帯を握り締め、いきなりマイクを手にした清水先生が通路の真ん中に立ち上がったのだ。尿意を堪えていた少女達も、もう限界の我慢の綱引きの真っ最中の子を覗いて、一斉に顔を上げ、何事かとそちらに顔を向ける。

「皆さんっ、き、聞いてください！！ じゅ、渋滞がっ、ひどいので！！ はうう……っ、い、今から、っ、はあはあっ、こ、このバスはっ、

す、すぐ近くの、さ、サービスエリアに行きますっ！ そ、そこでっ、とっ、とと、トイレ！！ トイレ、休憩をッ、す、する、ことに、っ、な、なりましたっ！！」

張りのある声で、良かったですね！！ と喝采を叫ばんばかりの清水先生の声。事実、先生の顔は笑顔に輝き、車内から歓声が上がること期待している風な気配だった。

皆を励ますようにするための、殊更に明るい『清水先生』の声。しかし28人の少女達を乗せたバス内には対照的に重い空気が漂う。

「……そ、そんなぁ……」

「な、なにそれ……！！」

不穏な気配を孕んだざわめきが、バスの中を伝播してゆく。

(……おかしいよ、ヘンだよ、そんなのっ……だ、だって……っ！！)

(なら、どうしてさっき、バス、停めたのよ……！？)

(あ、あんな恥ずかしい目にまであって……！！ が、ガマン、したのにッ……！！ なんて、先生、もっと早く言ってくれないのっ……！？)

(わ、分かっていたら、皆の前で、お、お外に、オシッコになんか、行かなかったのに……！！)

彼女たちの多くは、さっきの停車時にバスを降りた少女達だった。繊細な羞恥心を必死に押さえこんで、バスの陰での野ションまで決意したのに。それをすべて無駄にし、しかも裏切られた彼女たちの恨みは根深い。

ひととき敏感な世代の少女たちがが恥を忍んでそんな行為を許容したのは、渋滞の中でバスがどうなるかも分からず、これからトイレに行けるとは思えなかったからだ。蓉子が提案したバスの陰でのオシッコという、恥ずかし過ぎる選択肢を選んでしまったのは、あの時点でそれ以外の手段が無かったからに他ならない。

その挙句、彼女達は周りの車に乗っている人たちからあんなにも恥ずかしい姿を見られることになってしまった。——それなのに。

今からバスは予定を急変して、トイレに行くというのだ。もはやこれまでと観念して、死にそうな羞恥をこらえ、バスを降り——或いは、水筒やペットボトルに、座席シートの上で恥ずかしいオモラシを許容した少女達が、その事に憤るのも仕方がない。

待望のトイレは確かに近づいたが、そのことを素直に喜べる生徒達はほとんどいなかったのである。

しかし。バスの影の臨時仮設野外トイレなどではなく、本物の——間違いなく本物の『オシッコをするための場所』へ向かうこととなったバスに、内心飛び上がって歓声をあげたい蓉子はそれに気付かない。

「あ、あと15分くらいでっ、付くと思うからっ♪ そ、それまでもう少し、頑張ってね、みんなっ♪」

無責任な先生の発言に、車内には見えないイライラが溜まってゆく。

そんな中、当の蓉子は——

(やったあ♪ やった、やった、やったわあっ♪ 頑張った、わたし、とっても頑張ったわっ……！！ あ、あとすこしっ、あとすこしでっ、と、トイレに行けるの！！ おトイレできるのよおっ……！！ はああ、トイレ、トイレ、オシッコ、オシッコ、オシッコできる、オシッコじゃーってできるっ、ぷしゅーって、トイレで、ちゃんとしたお手洗いで、しゃーって、思いっきりオシッコできるのよおっ♪ はあんっ、はああああんっ…♪)

まるで恋人に会う乙女のごとく、浮足立つ爪先がみっともないリズムを刻む。

蓉子はすでにまだ見ぬサービスエリアのトイレの個室の中へと、待ちきれない心を飛ばしていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・37 動く密室ダム／都築朝香

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/25/2013 09:00:00

BODY:

喜色満面の笑みでバスの行く先を見つめるクラス担任以下、限界を越えたオシッコ我慢を強いられる28人の少女達を乗せ、2－Aの社会見学バスは高速道路の渋滞をゆっくりと進みながら、サービスエリアへの降車口へと進路を向ける。

蓉子が歓びの中サービスエリアでのトイレ休憩をアナウンスしてなお、バスの中に閉じ込められた2－Aの少女達の顔は曇ったままだ。

まさか、トイレに行きたい、オシッコが我慢できないというただそれだけで、本来のバスの行程にはなかったはずの『トイレ休憩』を急遽差し挟まれるなど、バスが出発する前には思いもよらなかった事態である。

まして、2－Aの少女達は既に一度、バスを路肩に止めての臨時トイレ休憩まで訴えた後なのだ。多感な年頃の少女達にとって、この期に及んでオシッコのために社会見学の予定を捻じ曲げてしまうことに、強い羞恥と抵抗感を覚えるのは仕方のない事だった。

「んっ……んああ……っ」

「は、っああ、だめ、だめえ……」

「で、でちゃう、漏れちゃ、う……っ、もうだめえ……オシッコでちゃうう……っ」

「だ、っだめだよ、我慢、あとちょっとなんだから……ちゃんと、おトイレまで我慢しなきゃ……」

「わかってるわよお……でもっ、あ、あっああ、ああっ」

なによりも、いまにもはち切れそうなほどに乙女の水風船を膨らませ続けた少女達にとってみれば、あと十数分というサービスエリアまでの短い距離すら、世界の果てに辿り着くまでの無限にも等しい時間に感じられるのだった。

サービスエリアへの出口にも、渋滞の列は続いている。3車線の高速道路がぎっしりと視界の端まで車の行列で埋まるこの有様なのだ。一旦休憩を入れて渋滞の解消を待とうと考える利用者達も少なくなかった。

ウィンカーを出し、のろのろと動く車の列を堰き止めるように、28人プラス1人のオシッコで下腹部をぱんぱんにした少女達をのせたバスが車線を移動してゆく。

この道の先に、少女達が焦がれて止まない聖地がある。バスの陰や、路肩の茂みなどとは違う、本物の、オシッコのための場所がそこにあるのだ。

——今度こそ、本当に、ちゃんとしたトイレでオシッコができる——。

その事実は、少女達にとってあまりにも甘美な毒であった。

既に待ち切れず、想像の中でサービスエリアのトイレの中へと心を飛ばしている女生徒達も少なくない。彼女達は一流のアスリートたちが世界大会の決勝に臨む時のように、オシッコのイメージトレーニングを繰り返し、猛烈な尿意を紛らわせていた。

クリーム色のタイルときちんとした密閉性を保つ壁に仕切られた清潔な調度、世間の喧騒から隔離された落ち着いた個室の中、白い便器に跨り、あるいは深く腰を下ろして、じんじんと疼く股間の先端から凄まじい勢いで恥ずかしい熱水を足元へと噴射させる——

危険な妄想に身を委ね、少女達は既に閉じ合わせた太腿を擦り合わせ、くねくねと腰をよじるのを隠そうともしない。

硬く閉ざされていた水門がぶくりと緩み、いまにも下着の奥でダムのでかい堤防が決壊しそうになる、その危険な想像が、しかし下半身の緊張をわずかにほぐし、既に伸び切った膀胱の壁を僅かに延長させるだけの余裕を作り出していた。佳奈も、有紀も、皆そうやって、想像の中で何度も何度もオシッコをして、限界までの時間を少しずつ先延ばしにしているのだ。

「あ、あっあ、ああっ」

無論、加減を間違えてしまう少女も居た。また一人、緩んだ水門からじゅじゅじゅうと熱い水流を噴き出させてしまう。隠しようもなく響く水音と、立ち込めるオシッコの匂い——トイレの中よりも濃いオシッコの気配が、文字通りの呼び水となって、近くの少女達の身悶えを一層激くさせた。

今、漏らしてしまったのは、湿って股間にびたりと張り付いた下着を噴き出す水圧で持ち上げさせてしまうほどの——おチビりなどというには生易しいほどの被害が、制服のスカートと下着に広がっている。しかしそれでも、懸命に歯を食いしばってダムの本格的な崩壊はなんとか喰いとめる。

自分だけではない、クラスの皆のために、オシッコを我慢しなければならない。

もはやバスの中の28人は一蓮托生、運命共同体だ。誰かが気を緩めてしまえば、もうあとは歯止めがきかず、雪崩のようにつぎつぎと連鎖してしまうことが、少女達には分かっていた。

我慢しているのは自分だけではない。他のクラス全員分のオシッコが、少女達一人一人の尿意を通じて共有されている。28人分のオシッコを我慢しているのに等しかった。

サービスエリアまであと300m。時間は焦れるほどに長く、粘性をもって引き伸ばされる。ほんの数分であるはずの時計の針が、まるで遅々として進まない。

車内の少女達の苦悶はさらに増し、座席シートの上に身を丸めるようにして、膝を抱え込み、両掌で腿に挟みこんだスカートをぎゅっと押さえつけ、股間を握り締めてしまう者もいる。

「んっ、んう、んっ……」

くぐもった呻きが、羞恥に彩られて車内に響く。

担任の清泉先生から、もうすぐトイレに行けるというアナウンスがあってから既に20分が経過していた。尿意に苦しむ少女達の安息の地であるサービスエリアへの進路転換。それは彼女達を乗せたバスが切望するトイレ、オシッコのための場所へと直行することを意味する、地獄に仏の報せであつたはずだ。

しかし、遅々として進まないバスに2-Aの生徒達の表情はいまだ晴れぬまま。喜色満面でトイレ休憩をアナウンスした担任は、焦りを滲ませてバスの行く先をじっと睨んでいるばかりであつた。

（は、はやく、はやくしてっ、なんで進まないのよっ……）

まるで生殺しだ。

バスの中には少女特有の甘い匂いと、細く狭い管を勢よく水流が通り抜ける、微かな水音が断続的に聞こえてはじめていた。既に2-Aの28人の生徒達の中には、バスの到着を待ちきれず、このままバスの中でオシッコを済ませようとしている者が始まってしまっていた。

無理もない、『もうすぐトイレが出来る』という言葉に敏感に反応してしまった少女達の膀胱は、その瞬間からすでに準備万端に排泄の準備を整えている。

徒競争で言うならスタートラインに付き『位置について、用意』のまま、延々と待たされているのに等しい。いまにも下腹部をはじけさせてしまいそうな尿意を抱え、そんな状態で長時間の『おあずけ』に耐えきれはさすがなかったのだ。

羞恥に紅くなった顔を俯け、ちらりちらりと周囲を窺い、息を殺して慎重に、築かれぬようにこっそりと。水筒やペットボトル、バスに供えられたエチケット袋、お菓子の入っていたビニール袋。果てはタオルや着替えを股間に当てがって。少しずつ少しずつ、漏れ出すオシッコをそこに吸収させようとする。

しゅる、しゅっ、じゅっ、じゅう。

座席シートに漏れ出すオシッコがじわじわとその染みを広げてゆく。

——限界ギリギリの状態で、極限の選択を迫られた少女達は、ついに猛烈な尿意の責め苦に耐えかね、最大の恥辱に屈しようとしていた。

そんな彼女達は蓉子の席から離れた、彼女の背後の列の後部座席に集中している。別段、その近辺に座る少女達が特段強く尿意を覚えていた訳でも、揃って我慢が足りなかった訳でもない。

ほんの数分前、バスの前方座席でこっそりペットボトルにオシッコを済ませようとした都築朝香が、蓉子に見つかってしまったからだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・38 都築朝香その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/26/2013 09:00:00

BODY:

朝香はその時、汗ばんで脚に絡みつく下着を膝下まで下ろし、座席シートの上に浅く腰かけ、腰を突き出して、スカートをおヘソの上まで捲り上げていた。

下半身は肌もあらわ、女の子の大事なところを露出させ、硬く握り締めたペットボトルの小さな飲み口を、オシッコの出口にきつく押し当て、いまさにオシッコを出そうとしていた瞬間だったのである。

朝香も多くの少女達と同様、市立公園を出てからの長い時間の我慢を強いられ、バス内のほとんど身動きの適わない自分の席で、少女の敏感な排泄孔を執拗な尿意に延々と責め鞭られていた生徒だった。クラスの中でもいたって普通、成績も背の高さも真ん中くらいという、特段目立つことのない彼女が、まさにその瞬間、蓉子に見つけたのは、不幸な偶然としか言いようがない。

この時点で、何らかの方法によってバスの中でオシッコを済ませようとしていた、あるいは済まさざるを得ない状況に追い込まれていた生徒達は朝香のほかにも複数存在していた。その中で彼女だけがその行為を見咎められ、不必要なまでにあげつらわれる謂われは無かっただろう。

けれど。

サービスエリアでの緊急トイレ休憩を告知し、あと少しの我慢でちゃんとしたトイレに行ける、と、それを心の支えに己を鼓舞していた女教師にとって、目の前でオシッコを始めようとしている朝香は、自分の懸命の我慢を突き崩しかねない危険な存在であり、クラスの規範となるべき教師である自分を差し置いて、卑劣な抜け駆けをしようとした反逆者として映らなかったのだ。

「都築さんっ、あ、あっあなた、なっ、なんてことしてるのツッ！？」

ほとんど悲鳴のような金切り声に、少女達は目をつぶった。授業中に騒いでいたのを怒られた時にも聞いたことのない、清水先生の本気の怒声だった。

蓉子は肩を怒らせ、目を吊り上げて、ずかずかと大股で朝香の元に駆け寄る。

「え、あ、せ、せんせ……」

「やっ、やめなさいっ！！ なにしてるの、はしたないツッ！！」

バスの中の視線が一斉に朝香へと注がれる。隣の席のクラスメイトにも気付かれぬよう、こっそりと進めていたオシッコの準備が、白日のもとに暴露されてしまったのだ。

下着をずりおろし、恥ずかしい場所にペットボトルを押し付けた姿勢のまま、呆然として硬直する朝香のすぐ傍に、仁王立ちになって。蓉子は更なる大声を張り上げる。

「こっ、こっ、こんな所で、オシッコなんて！！ 都築さんっ、は、恥ずかしいとっ、思わないのっ！？ だっ、だだ、ダメじゃないのっ、もうすぐ、と、とっ、トイレ、行けるのよ！？ な、なんで我慢できないのっ！？」

理不尽極まりない叱責だった。何故も何も、もうどうにも我慢できないからこそ朝香はバスの中でペットボトルにトイレを済ませようなどという、はしたない行為に及ぼうとしているのである。

「ん、あ、だ、で、でも、先生、わたし、もう、ずっと、オシッコ……」

「い、いいからやめなさいツッ！！！」

蓉子は振り上げた手を素早く動かし、朝香が握り締めていたペットボトルを奪い取った。いまにも噴出する朝香のオシッコを受け止めるはずだったペットボトルは、緊急用トイレの役目を果たすこともできず、バスの床に転がる。

「こ、こんな所でオシッコだなんて、絶対にダメよ！！ 都築さんっ、あ、あなたもっ、女の子でしょ！？ ダメ、絶対にダメなのよ！？ ねえ、分かってるのツッ！？」

叫ぶ女教師の叱責が、哀れな少女を打ち据える。クラス担任の立場を借りて投げつけられる冷酷で卑劣な言葉が、乙女の羞恥を踏みにじる行為であるとは、当の蓉子には思い至らない。

（んああああ！！ ダメ、出ちゃう、出ちゃう、でっで、でちゃうウウんん〜っツッ！？）

なにしろこの時。蓉子は、己の恥ずかしい女性の部分を突き破らんと荒れ狂う鉄砲水のような尿意に耐える事だけで精いっぱいだったのだ。女教師の下腹部に溜まった１リットル半ものオシッコは、時間の経過と共になおその水圧を増している。

もし朝香がペットボトルにオシッコを始めれば、それに連動して女教師の下腹部でもダムのような猛烈な放水を始めてしまう事は確実であった。それゆえに蓉子は何が何でも朝香の卑劣な暴挙を阻止せねばならなかったのである。

自身の生徒に投げつける、理不尽で無茶苦茶な言葉の大半は、蓉子自身に向けられたものでもあった。

「せ、せんせえ……っ」

「と、とにかくっ、ダメよ！！ はっ、はやく、パンツをあげなさいっ！！ そんな格好してたら、お、おもッ、オモラシちゃうでしょうっ！！ ほ、ほらっ！！」

あろうことか、蓉子は朝香の膝に絡まった下着を掴み、思い切り上に引きずりあげた。ハイレグめいて引き伸ばされた下着の股布がぐいぐいと朝香の幼い股間に食い込み、きつく締め付ける。

「んっ、ッ、い、いやぁ……ッッ！？」

異常な光景であった。執念めいた女教師の視線は異様なまでに濁り、血走ってすらいる。脚の付け根を覆う布地を強引かつ無理矢理に元に戻され、たまらず身をよじる朝香。その股間の股布には、じゅっと黄色い染みが広がり始める。

下着を無理やり引っ張り上げられ、股間を圧迫されたせいで、朝香がこれまでの必死の我慢でなんとか回避していたおチビりが強制発生し、少女の下着を濡らしてしまったのだ。

「あああっ……ッ」

少女の本能で、剥き出しの下着の上から股間を押さえ込み、激しく揉みしだく朝香。前押さえは、猛烈な尿意を押さえ込むための反射的な動作だ。しかしそれでも、出せるはずだったオシッコはなおなお朝香の下腹部にとどまり続けることを強いられ、激しく暴れ回る。中身をぱんぱんに詰め込んだ水風船が少女の意志を無視して収縮し、じゅっ、じゅううっつと断続的に熱い雫を噴き上げる。

ぴゅっ、しゅるっ、と、少女の股間から水流が噴き出す。しかしそれを受け止めるはずだった朝香の緊急用トイレ、350mlのペットボトルは床の上を転がってゆく。距離にして数メートル。けれどそれは身動きできない朝香には絶望的なまでに遠い。

漏れ出すオシッコは少女の全身を使った我慢でもなお足りず、じわじわと噴き出しては無残に床を、座席シートを濡らすばかり。「い、いいわね、都築さんっ、ダメよ！？絶対に、漏らしちゃ駄目だからね！？ほ、ほかの、皆もよっ！？もっ、もう少しで、おトイレ行けるんだからねッ！！」

傲慢に言い捨て、蓉子はバスの中をじろりと睥睨する。

がくがくと震える膝を擦り合わせ、下腹部をぱんぱんに膨らませる1リットル半ものオシッコを、蓉子は驚異的な精神力で堪え続ける。苦しむ生徒達のようにタイトスカートの上から下腹部をぎゅうぎゅうと押し揉んで、この地獄のような尿意を少しでも和らげたい——女教師の惨めなプライドに縋って、切なる欲望に耐えながら。

そんなクラス担任をよそに、朝香は悲痛に身をよじり、なおも断続的に噴き出すおチビりに、制服と下着を汚していくのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・39 長谷川陽菜その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/27/2013 09:00:00

BODY:

バスが出発してから一度もトイレに行くことができず、出したいオシッコを堪え続ける2年A組。たった一人。

車内に乗り合わせたクラス担任の清水蓉子を含むクラス28人プラス1人、全員が同じ共通項で括られるなか、一人だけその例外がいる。

彼女はきつく唇を噛み、びしょびしょに濡れた制服の下半身を抱き締めるようにして、バスの中程の座席でひっそりと息を潜めていた。

長谷川陽菜。

——覚えておいでだろうか、路肩に止めたバスを降りてオシッコをしようとした9人の少女達の中で、唯一、オシッコができた少女である。

だが——それは、彼女がちゃんとトイレを済ませられた事を意味しない。むしろ、陽菜のトイレは大失敗と言っていい有様だった。

物陰を作るはずのバスが移動し、高速道路の路側帯にしゃがみ込んだ姿を隠す事もできず、大渋滞の車の列の中で、衆目の中、大きく股を広げ女の子の恥ずかしい部分を晒し。

まだ幼いつくりの、薄桃色をした女の子の脚の付け根から、猛烈な勢いで恥ずかしいオシッコの噴出がアスファルトを叩き付けるのを——陽菜は、百人近い観客達に見られてしまった。その恥辱は、決して尿意からの解放として祝福される幸運ではなく、むしろ最悪の恥辱、死にもつながりかねない悲劇であった。

あろうことかオシッコの途中で転び、膝に引っかけていた下着に噴出するオシッコを直撃させ、さらに自分の作ったみっともない水たまりの中にへたり込んで制服をびしょびしょに濡らしてしまった、あまりにも恥ずかしい大オモラシ。

そんな悪夢のような記憶冷めやらぬ中、陽菜は目に涙を浮かべ、しゃくりあげ、己の不幸を嘆き、屈辱の涙で頬を濡らしていた。

けれどそんな彼女へ向けられる周囲の視線は、憐みよりも敵意に似た嫉妬の方が強い。

どんな形であれ、現在進行形で尿意に苦しみ続ける他の27人の生徒たちからは、良くも悪くも彼女はたった一人、先にオシッコを済ませる事ができた例外だったのだ。

先にも述べたが、既にバスの中で辛抱たまず、トイレを済ませようとした少女達は複数存在している。だが、その事がクラス全員に知られているのは、オモラシで制服をびしょ濡れにし、惨憺たる有様で涙する陽菜一人だけであった。

だからこそ、クラスメイト達の敵意は強い。担任である蓉子すらその例外ではなく、先にオシッコをできた陽菜を、呪詛めいた視線で羨み、蔑んでいるのだった。

……だが。

ただでさえ苦境にある陽菜を、さらに苦しめるものがあつた。

(や、やだ……っ、本当に、“また”、したくなってきちゃった……)

そう。二度目の尿意である。

膀胱の中身を絞り出すような猛烈な尿意と、それに連動した激しい放水。少女の下半身をずぶ濡れにしてなおアスファルトに大きな水たまりを広げる大量のオシッコ——それを下腹部から絞り出してなお、陽菜の身体は再度の尿意を、再びのオシッコを訴えていた。

(な、なんで……？ さ、さっき、あんなに出たのにっ……)

屈辱よりも、疑念と困惑の方が強い。あれだけ出したのだから、もう当分はトイレなんて行かなくて済むと思っていたのに——陽菜は自分の身体に起きている異変が全く理解できず、ただただ堂々巡りの思考を繰り返す。

はじめのうちは、ちょっとした違和感だった。濡れた下着が生乾きになって、むず痒さを感じるのだと——そんな風に考えていた。なにしろさっきまでのトイレの欲求は、これまでの陽菜の人生の中で、ぶっちぎりのトップクラスの尿意だったからだ。それがオモラシのような最悪な結末を迎えて、まだじんと下腹部が疼き、ひり付くような錯覚があるのは仕方のない事だろうと、そんな風に考えていた。

慣れない正座を止めても、しばらくは足の痺れが続くように。過酷な我慢を強いられた排泄器官がまだ熱を持っているだけなのだろうと考えていた。

なにしろ、陽菜のオモラシからはまだ1時間余りしか経っていない。陽菜はどちらかと言えばトイレの遠い方で、普段ならそんな頻度でトイレに通い詰めるなんて事は、まったく経験のないことだったからだ。

(で、でも、……やだ、っ、ま“また”……っ、また、したく、なっちゃってる……っ)

あんなにもはしたないオモラシ行為をしたのに、まったく懲りた様子もなく、少女の下腹部は本能的な排泄を要求する。陽菜の恥骨上のダムにたまったホトレモンティの水位は、既にさっきバスを降りた時と同じくらいまで達しつつあつた。

(も、もう一度……お手洗い……！？ で、でも、そんなの、また……っ)

あまりにも早い二度目の尿意に、陽菜はただただ、困惑するばかりだった。

周囲のクラスメイトからの針のような視線は、陽菜をなお責め続けている。このうえ、またトイレに行きたいなんて事は冗談でも口にできそうにない。

陽菜はじっとうつむき、唇を噛んで、耐えるしかない。

しかし、主観を排して理論的に考えるならば、これは当然の帰結であると言える。飲料工場と市営公園を巡るこの社会見学遠足で、2 - Aの少女達が摂取した水分量は、単純評価しても相当量のものだ。経口摂取された水分は着実に少女達の体内に吸収され、それらは今もなお、健康的な少女達の全身をめくり続けている。それらがやがて代謝を経て循環器を通り、下腹部の一点、不要物を含み最終地点に辿り着くことはごく自然なことである。

そもそも、水分は摂取した直後にオシッコに代わるわけではない。循環する水分が膀胱にまで辿り着くには、少なく見積もっても経口摂取から数時間が必要である。それ以前に感じる尿意はカフェインの利尿作用や、水分を口にしたという事実による精神的なものが強く、少女達が摂取した水分が恥ずかしいオシッコとなり膀胱に注ぎ込まれるのはむしろこれからが本番と言えた。

陽菜の場合、中身をぎゅうぎゅうに詰め込み張りつめていた膀胱が一旦、空に近い状態になったことで、それまで水圧に負けて押しとどめられていた水分が再び乙女のティーポットへと一気に注ぎ込まれたのだ。

尿意の高まりは一度目よりもはるかに急速であり、水位上昇グラフの鋭さは最初の波の比ではない。

さらに、ちゃんとしたオシッコのための設備が整ったトイレでの排泄とは違い、物陰や、着衣のままのオモラシでは少女の身体は緊張状態のままである。完全にリラックスできるような環境とは程遠いため、十分に排泄器官も弛緩できないことも理由となった。

たとえ他者の存在がなくとも、トイレの個室という安全確実な空間ではない、野外での排泄は、無意識下で陽菜の排泄をつかさどる自律神経にブレーキをかけた。誰かに見られるかもしれない、気付かれるかもしれないという意識がある中では、たとえきちんと最後までオシッコが出来ていたとしても、トイレでの排泄に慣れた少女の身体は、完全に膀胱を空にすることは至難の業だ。

まして、陽菜の場合はオモラシという、限界を越えた尿意が不自然な形で噴き出した、あまりにも歪な方法での尿意の解消である。トイレで済ませオシッコとは雲泥の差であった。

陽菜が初めて体験する、『トイレの近い子』の尿意。未体験の排泄衝動の波は、少女を激しく動揺させ、二度目という事実も相まって陽菜の心をさらに激しく傷つける。

(やだ……本当にどうしちゃったの！？　なんで、こんなにすぐオシッコしたくなっちゃうの！？　わ、私っ、ヘンになっちゃったの……？)

オシッコの出口が故障してしまったのではないかと——そんな想像すらよぎる。一度激しく尿意を噴き出させた排泄孔は、いくら力を入れても言う事を聞かず、出口を覚えたオシッコは的確に鋭い尿意をそこに差し込んでくる。

じわ、じわとおなかの一番底を押し破り広がる恥ずかしい衝動に、陽菜は身体を丸めて耐え続けた。

もう一度おしっこがしたい—— 2 - A 2 8 人を乗せたバスの中でたった一人、二度目の尿意を覚え、“また”オシッコを催してしまった陽菜の、トイレを望む孤独な戦いの第二幕が始まっていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・40 崩壊の引き金

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/28/2013 09:00:00

BODY:

びっしりと車線を埋め尽くす渋滞の列をかなり強引に横切って、社会見学2年A組のバスはサービスエリアへの分岐へと差し掛かる。

恥ずかしい尿意に下腹部をぱんぱんに膨らませ、もはや一刻の猶予もない28人の少女達を乗せ、バスは精一杯の速度で、4時間半ぶりの休憩場所へと急いでいた。

周囲からの視線を遮るため、カーテンを閉め切った車内は薄暗い。少女達の肌はじっとりと汗ばみ、うなじや襟もととは制服の下のブラウスに張り付いていた。皆の要望で、尿意を加速させる冷房は切られ、車内の温度は徐々に増しているのだ。

俯いて荒い吐息を繰り返し、かすかなうめき声を堪える。時折、だんだんと床を踏み鳴らす音も断続的に響いていた。革靴の爪先が床を擦り、ぎゅうっとスカートを押さえ込む手のひらと共に、座席シートに押し付けられた腰がぎしぎしと淫靡なリズムを刻む。

きつく唇を引き結び、あるいは中途半端に押し開いて、視線の定まらない目は宙をさまよい——下腹部に荒れ狂う猛烈な尿意に必死に抗う。少女達を襲う排泄欲求は、波と形容するよりは、高潮——あるいは氷河期の終了に伴う海面上昇に近かった。

一定の間隔をもって押し寄せるのではなく、乙女のダムの内側でせり上がった水面は、そのまま水位の限界線を越えて外に溢れだそうとしているのだ。どれだけ水門を硬く閉じようと、もはやなにをどうやってもそれ以上、内側に液体を留めておけなくなっている。

ずっしりと、まるで砂袋のように重くなるほど、伸び切った膀胱が一気に収縮に転じ、硬く張りつめた『水袋』が思い切り握りつぶされそうになる、そんな尿意。

おしっこ。

その四文字が、酷使され続けた排泄器官同様に、少女達の思考のほとんどを埋め尽くしている。サービスエリアでの臨時トイレ休憩を前に、出口に続く短い排水経路に注水が開始され、ほんのわずかに皮一枚を隔てたおしっこの孔のすぐそこにまで、濁流のごとき羞恥の熱水が押し寄せる。

少女達がその身体の内抱え込む秘めやかな『水袋』は、満水の中身を保持するために適した姿勢とは正反対の上下さかさま、出口を下に向けているに等しい。脚の付け根、股間の先端、恥ずかしいオシッコをため込んだ膀胱の一番底に、もっとも脆い水門がヒク付きながら震えている。

ブラウスの下腹部を硬く張りつめさせ、高まる水圧にも関わらずなお注水は続き、膨らみ続けでいる。既に我慢は肉体の限界を越え、精神が身体を凌駕する領域だった。

乙女のプライド、羞恥心、潔癖な心——そんなものに頼って、途切れそうになる心を奮い立たせ、懸命に、出口を閉じ合わせる。

まさに一色即発、限界寸前。些細なきっかけがバスの中に大参事を引き起こす引き金になろうことは明らかだった。

だから、バスがはいはいサービスエリアに近づいたことを知らせるアナウンスがあっても、誰も余計な口は挟まない。お喋りなどもってのほかだ。バスの車内にはじっと、重苦しい沈黙だけが横たわっていた。28人全員が、熾烈な尿意との戦いの中にある。

バスがサービスエリアに到着して希望が確かなものとなるまで、迂闊な行動は避けねばならなかった。2 - Aの28人の少女達はめいめいにバスの座席にじっと座り、一番楽な姿勢を探し、息を殺して身じろぎを押さえ、切ない脚の根元の疼きと、下腹部から押し寄せる欲望による喘ぎをかみ殺す。

そんなひり付くような緊張の中——

「ッ、あああ、ああああああああっ！！」

頓狂にも聞こえる絶叫は、バスの後部座席で響いた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・41 花藤涼子

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/29/2013 09:00:00

BODY:

「あつ、う、はあ、もつ、もう、もお、っんああ、くう、ダッ、ダメッ、駄目ッ、駄目ええええええええええッ！！！！」

白い喉を震わせて響くソプラノの叫び。

バスの後部通路、座席背もたれから伸びる手摺にしがみつくように、がくがくと腰を震わせて立ち上がっている生徒に、車内の視線が一斉に集まる。

ほとんど爪先立ちになるようなへっぴり腰で、身体を半分に折り曲げて。アイロンの掛かっていたスカートのプリーツをぐちゃぐちゃに乱してしまうほどにまで猛烈に足の付け根を押さえ、ぐぐぎゅうううと太腿をきつく閉じ合わせ、後ろに突き出したこしを左右に振り立てる。

「んあ、はああッ、だ、ダメッダメだめええ、っ……お、お、おし、おしっこッ、おしっこ、あ、あああうッ、あ、おしっこ、も、もれッ、んうもれちゃうううううッ！！」

幼稚園くらいであればまだしも、年頃の乙女として、たとえ同性の前であっても発することは赦されない、あまりにもみっともなく、無様で、はしたない告白だった。

あろうことか、そんな恥ずかしい叫びの主が花藤涼子であったことは、車内の少女達を少なからず動揺させた。

涼子は今日日誰も守ってやしない校則の教本にそのまま掲載されそうな、お下げ髪に黒縁眼鏡の、とにかく真面目な少女なのだ。席替えでもいつも教室の前の席を進んで選び、授業も真面目にノートを取って、先生にしっかり質問し、板書も進んでこなす。皆勤賞でも目指しているかのようにH R 30分前には登校して席に着き、遅刻早退、サボリ居眠りなんてもってのほか。

休み時間にちょっと背伸びをしたグループが、雑誌の恋愛特集記事なんかを読んでいるのを見るだけで、頬を真っ赤にして顔をそむけてしまうような潔癖で純情な少女である。

少なくともクラスのほとんどの生徒が、涼子が入前で狼狽することなんて一度も見たことがない。そんな彼女が、全身全霊をもって、『オシッコが我慢できません』と叫んでいた。

つまり、涼子にとってこのバスでの時間は、形振り構わず外に助けを求め、今すぐ『どうか』してもらわない限り対処不可能な、極限限界の窮地だったのである。

「お、オシッコ、オシッコ、っ、トイレ、降ろしてっ、ねえッ、んあ、あッあ、ダメ、出る、出ちゃううッ、トイレ、オシッコッ、トイレ行かせてええ！！！！」

とてもまっすぐ歩くことも出来そうにないふらふらの足取りで、涼子はバスの前方、出口へと進み始める。数歩で座席に寄りかかり、背もたれに身体を預けて両手でぎゅぎゅぎゅと脚の付け根を押さえ込み、おしりを左右にクネクネと振りながら。

香と思えば、ぴくっと背筋を反らして眼を見開き、眼鏡のレンズの内側に涙を滲ませ、口を半開きにして『あ、あッあッ』と喘ぎ、その場で大きく足踏みを始め出す。

常軌を逸した涼子の様子に、他人の事などもう構っている余裕のなかったはずの他の生徒達も、思わず注目せざるを得ない。「ちよ、ちよと、花藤さん……！？」

運転席の傍でタイトスカートの下、ストッキングの太腿を擦り合わせ、バスのフロントガラスを凝視していた蓉子も同様だった。バ

ス後部の通路を、のたうつ様にして進もうとする涼子に圧倒されながら、現実には引き戻される。

この時。蓉子の手には、スイッチを入れっぱなしにした車内アナウンス用のマイクがまだ握られていた。咄嗟のこととはいえ、蓉子はマイクを持ったまま席を立ち、涼子の元へと駆け寄ってしまったのだ。

「だっ、だめ、だめだめ、だめえ……！！ おしっこ、おしっこ！！ オシッコお！！」

8つのスピーカー備え、後部座席にまではっきりと音を届ける音響設備を通じ、涼子のオシッコ出ちゃう宣言は、必要以上の音量になってバスの中に響き渡ってしまう。

「お、降ろして降ろして、バス、停めてええ！！ んあ、っ、もお、でるっ、でちゃうっ……！！ おしっこ、漏らしちゃうよおお！！ あんう、つくう、お、おっ、お願い先生、っ、お、おしっこさせて！！ お外で、オシッコ、させてよおお！！ も、もれっ、もれちゃう、もらしちゃう、お、おひっこ、もれひやうよおお……！！」

呂律の回らぬ舌で、涼子はまるで幼稚園の子のように我慢できないと叫び、激しくバタバタと足を踏み鳴らす。いますぐ、ここで、涼子はトイレを——『オシッコ』を要求していた。

しかし、いくら少女が叫ぼうとも、バスはいまだ道路の途上。サービスエリアへ向かう車の列の最中にある。一列に並ぶ車道は狭く、当然ながら追い越しなど不可能だ。むしろ、まださっきまで——片側3車線の高速道路本線にいた時のほうが、可能性の高い選択肢だったのだ。

この狭い1車線では。2年A組の生徒28人を乗せるバスは大きく、いくらバスを路肩に寄せてたところで、後続の車を塞いでしまう。停めることは不可能だった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・42 花藤涼子その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/30/2013 09:00:00

BODY:

「っあ、やだあ、やだあっ！！　せ、せんせえ、い、うあつ、いつ、イジワル、しない…でえっ！！　と、トイレ、っ、おトイレしたいの、お外でいいからおトイレするのぉっ！！　も、もれっ、漏れちゃうから、お、オモラシしちゃうからあぁっ……！！」

子供のように叫んで激しく足踏みをし、もじもじクネクネ太腿を擦り合わせ、重ねた両手で『ぎゅうううっ』とスカートの上からおまを押し下して下着を引っ張り上げる。

オシッコ我慢限界の御手本のような涼子の有様は、車内で同じく尿意と戦っていた少女達にとってあまりにも目の毒だった。自制を失くして漏れちゃう漏れちゃうトイレトイレと叫び続ける涼子の姿に、他の生徒達が反応せずにいられるわけもない。駆け寄った蓉子を押しのけてバスの出口に突貫しようとする涼子につられて、少女達はひときわ大きな尿意を催してしまう。

この瞬間、実に8人もの生徒達が、次々と漏らしたての新鮮なオシッコで脚の付け根に恥ずかしくも熱い染みをじゅじゅと広げてしまった。中には亜理沙や美穂のように、これまでなんとか下着を濡らさずにいたにもかかわらず、この日最大の尿意の大津波に襲われて、真っ白さを保っていた下着の股布からおしりまでを濡らし、さらにはスカートまで濃く色を変えてしまうほど特大の恥ずかしい黄色い染みを広げてしまった少女も居た。

おチビりに言葉も失って青ざめる彼女達をよそに、涼子の訴えはなお激しさを増した。

「降ろして、降ろしてよぉ！！　せんせい、じゃ、邪魔、んっ、邪魔しないでよぉ！！　お、おしっこっ、おしっこするの！！　こんなところじゃやだっ、やだあ、まっ、間に合わないっ、出ちゃう、出ちゃうのっ！！　おしっこ、おしっこ出ちゃうよぉっ！！」

「はっ、花藤さんっ、ダメ、今降りたら危ないのよ！！　席に戻って！！　ほら、もう少しだから！！　あと少しで、サービスエリアだから！！　も、もうちょっとでっ、おトイレだから！！」

遮二無二突っ込んでくる涼子を押しとどめ、蓉子もまた必死だった。しかし、それは生徒の身を案じる女教師としてではない。ここでバスを止められたら、またサービスエリアまでの時間が遠のいてしまう。ゴールまでの時間を逆算し最後の時間を耐え続けていた蓉子にとって、それだけは避けなければならない問題だった。

純粋な女の欲望に基づいた打算で、蓉子は教え子をはがいじめにする。

（あなたがバスを停めてたら、わ、わたしのオシッコが間に合わなくなっちゃうのよぉ！！　せ、生徒の前でなんてっ、ぜ、ぜったいに、ぜったいに！！　オモラシなんか……でっ、ででっ、出来ないんだから！！　あぁーんっ、い、いいからっ、黙って言う事聞きなさいよぉ！！）

半ば憎しみさえ含ませて、蓉子は涼子の前に立ち塞がる。本来、生徒達の身を案じ、なによりもその事を考え導いてやらねばならない教師の立場にありながら、蓉子の頭にあるのは自身の保身のみに他ならない。

我慢の限界、形振り構わず決行した最後の懇願すら封じられ——涼子に待つのはあまりにも無慈悲な、たったひとつの結論であった。

「い、いや、っ、いやあ、いやあぁあぁ！！」

じゅっ、じゅううう、じゅじゅじゅじゅじゅ、
ぶじゅじゅじゅじゅじゅじゅっ！！！！

宙を見据え、涼子の瞳が大きく見開かれる。ぱくぱくと唇が震え、寒さに震えるように激しく少女の身体が震え出す。繰り返される否定の言葉は、しかし下半身に溢れ出す羞恥の熱水を消し去ることはできなかった。

押さえ込んだ布地を震わせる、激しい水音――

「うあ、あ、あああああああああつ……」

白い喉から絞り出させる悲痛な呻きと同時に、少女の足元、バスの通路に激しいスコールの音が鳴り響いた。

制服のスカートのすそがみるみる濃く染まり、涼子の下腹部から黄色い滝が噴き上がる。

涼子はわずか、爪先立ちになって腰を上に乗せていた。さっきまできつく脚の付け根を押さえこんでいた手のひらを重ねて作った器に、自分の絞り出したオシッコを受け止めようとするかのように、その場にしゃがみ込んでしまう。太腿を伝うオシッコはみるみるその太さと勢いを増し、バスの床に大きな水たまりを描き始めた。

そんな一部始終を、蓉子の手にしたマイクは一音も漏らさずに拾い上げていた。涼子の声と、噴き出すオシッコの音。全ては余すところなくスピーカーを通じて、バスの中に響き渡ってしまったのである。

まるで、バスそのものが――いや、2年A組社会見学バスの中でじっと身を縮め、懸命にオシッコを我慢し続けていた少女たち全員が、ついに最初の限界を超えてしまったように。

涼子のオモラシは、これから始まる悲劇の発端となるものだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・43 花藤涼子その3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 07/31/2013 09:00:00

BODY:

「そのキミ、これを早く持ってって！！」

「せ、先生！！」

異状事態によりやく我に返り、運転手が声を上げる。指示を受けた前部座席の少女が、運転席のすぐ近くにあったポリ製のバケツを掴み、バスの中を走った。

不安定な足場の中、彼女は蓉子のすぐ後ろにたどりつく。その頃には彼女の足先にちゃぷんと水がぶつかるほどに、涼子が溢れさせたオシッコは床を流れはじめていた。

蓉子を押しつけるように差し出されたバケツを跨がされ、涼子はオシッコを始める。

しかし、もはや彼女に下着を脱ぐ余裕もなく、スカートをまくることすらも叶わなかった。着衣のまま、トイレ代わりのバケツを跨いだだけだった。

潔癖な彼女に良く似合う白のワンポイントの下着は、涼子の大事なところをしっかりと隠したまま——それでも股間の排水孔からはっきりとオシッコが噴き出す瞬間を見ることができた。白い下着がびっしょりと濡れ透けた女の子の大切な場所が、バケツの上を跨ぐと同時に、猛烈な勢いで噴射する水流が思い切りバケツの底へと叩き付けられる。

ぶじゅっ、ぶじゅじゅじゅじゅううううううううじゅじゅば

じゅばばばばばばばばばばばばおびちびちびちじゅばばばおほおほ！！

一体、どんな偶然の重なりか。あろうことか。押しつけられた蓉子の手からマイクが落ち、ちょうどバケツの底へと転がりおちていた。

こうした学生の遠足では定番となる貸切バス。長時間の移動に伴って車内で飲食をすることも考慮されたため、バスのマイクには防菌・防水加工が施されていた。誤ってジュースなどがこぼれたりしても問題ないようにとの配慮である。

まさにそのマイクめがけて、涼子のオシッコは噴射されていた。

水流の直撃は8つのスピーカーで増幅され、本当の滝のような轟音となって車内に響き渡った。一人の少女が我慢に我慢を重ね、ついに限界を迎えてバケツにオモラシをするその様を、完全生中継の大迫力で、2年A組の全員に伝えてしまったのである。

見る見る水位を増すバケツの中で、マイクがオシッコの海に水没し、なおじょぼじょぼと猛烈な水圧で威勢よく水面を掻き回すおしこの噴射音を臨時生中継。

「はあああああああ……ツツ」

途方もない、快楽とすら思えるような喘ぎ声。

我慢に我慢を重ねたオシッコを、クラスのだれよりも先に思い切り進らせる快感に、涼子はうっとりとした声をなんども上げていた。

涼子の握り締める女の子の大事な部分から、猛烈な勢いで黄色い熱湯が噴き出し、一直線にバケツの中へと叩き付けられてゆく。すでに涼子のスカートは見るも無残なほどに濡れ汚れ、ソックスから革靴に至るまでがびしょ濡れである。周囲に水たまりをまき散らしながらバケツの底を叩くオシッコは、ほんのりと湯気を伴って、その音を響かせる。

恥辱の極みであるオモラシをする涼子に、奇妙な羨望の視線が向けられていた。

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・44 清水蓉子その6

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/01/2013 09:00:00

BODY:

蓉子もまた、涼子の盛大なオモラシ姿に見惚れてしまったものの一人だった。

すでに蓉子の尿意は過去一度も経験したことのないレベルにまで達している。最後のトイレの機会となった公園の公衆トイレに入りそびれ、遠足バスが出発して以来、蓉子の股間の先端部分の『おんなのこ』は際限なく高まる尿意に責め罅られ続けてきた。

驚異的な精神力で『清水先生』の仮面をかぶり続け、極力、そんなみっともない素振りを見せないよう押し隠してきたものの、バスの中にははしたなく我慢の仕草も露わに、脚の付け根を押さえ込み、モジモジと腰をくねらせ、膝を擦り合わせ、座席シートの上で幼い肢体を喘がせる生徒達の姿がある。そんなものをずっと見せつけられていては、さしもの蓉子もたまらない。

（あ、ああーんっ、でちゃう、でちゃうよおお……っ！！）

もはや周囲の視線など形振り構わず、女性の欲望を剥き出しにして、股間を直接ぐいぐいぎゅううっを思い切り握りしめたい欲求は、刻一刻と強まり続けている。少しでも気を紛らわせようと、蓉子はたんととヒールの底で床を踏み鳴し、苦悶を必死に飲み込んでいた。

そんな状態で、大渋滞のバスという逃げ場のない密室の中、すぐ目の前で教え子が、オシッコ我慢の限界を全身で訴え、ついにはバケツを跨いで大迫力のオモラシ・オシッコの大噴出シーンを見せつけられてしまったのだ。

教え子のおトイレを見せつけられ、蓉子の『おんなのこ』が反応しないわけがない。それまで、素知らぬ顔で、そんなものありませんよ？ とばかりに存在を無視しようとしていた、1 リットル半ものオシッコを溜め込んでち切れんばかりに膨らんだ膀胱が、激しくぴくんぴくんと反応する。

じいんと熱い解放感を伴う痺れが、腰骨から恥骨の間を走り抜け、はしたない黄色の電流となって蓉子の股間を直撃する。生

徒がバケツを跨いで、見せつけるように始めたオシッコ。容器の中へ叩きつけられる滝のような涼子の失禁オモラシ。防水マイクが増幅し、車内に響き渡る大迫力のオシッコ放出音。教え子の痴態を目の当たりにして、僅かに蓉子の集中が途切れた一瞬を、狙いたがわず見定めたかのように、猛烈な尿意が牙を向いた。

蓉子の下腹部、これまで堅固に守り続けてきた、タイトスカートの奥。ストッキングに包まれた下着の股布に包まれた蓉子の水門が、凄まじい水圧にこじ開けられて悲鳴をあげる。

「ふぁ、あはっ、はぁぁぁぁんっ……！？」

じよ、じよっ、じゅぁぁぁぁ……っ

（ぁぁぁぁぁ！？）

蓉子の耳に響くはっきりとした水音は、今なお続くバケツの中への教え子のオシッコとは、明らかに別の部位から発生していた。そう、その根源は蓉子自身の股間。限界超えた我慢に晒された蓉子の『おんなのこ』である。じゅうっと吹き上がる迸りと共に、じわりと熱くなった股間を押さえ込み、蓉子はぎゅうときつく太腿を閉じ合わせた。

じわっ、じわっと脚の付け根に熱い雫が広がる感触に、女教師の背筋が冷たくなる。

蓉子は、とうとう下着の中に、熱い奔流を迸らせてしまったのだ。

（ぁぁっ、あ、ぁぁぁぁぁぁ！？ だ、だめよぉぉぉぉぉっ！！）

予想外のタイミングでの決壊に、蓉子はパニックに陥った。そして同時にやってくる本格的な尿意の波と、おチビりのもたらす猛烈な解放感。このまま水門を開放して、女性の欲望を全て吐き出してしまえば、蓉子のはしたなくも剥き出しの排泄本能が疼く。

じゅうっ、…じゅっ、じゅう、じゅぶっ、じゅうううっ……

（だめっ、だめっ、だめえええええええっ！！！！！！！！！！）

目の前の涼子のオモラシが、何よりも強烈な『呼び水』であった。普通の水音であればまだましかもしれないが、匂いと色を伴うリアルな感触をもった教え子のオモラシは、ダイレクトに女教師の下腹部を直撃したのだ。無防備のところには渾身のボディブローを貰ったような有様で、このままでは、無様にバスの床めがけて、溜めに溜め込んだ1リットル半ものオシッコを噴きださせてしまう。

（そ、そんなのだめ、っ、だめえ、だめなのぉ！！ み、皆の前なのよ！？ 生徒の前で、先生がオシッコなんか……！！ 駄目に決まってるじゃないっ……も、もうすこしでトイレ、おトイレいけるんだからっ、ガマン、我慢しなきゃっ……！！）

もはや気力の勝負だった。身体は既に限界で、いつオモラシが始まってもおかしくない。必死でおしっこを食い止めようとする蓉子は、座席シートの手摺に体重を預けて通路で激しく地団駄を踏み、お尻を突き出し、前かがみの状態になりながら踏ん張った。通路の真ん中で、タイトスカートの女教師のおしりがぐねぐねと激しく上下前後する。

「くっ……！？ ううううっ！！」

ぶじゅっ、じゅじゅうっ、じよわぁぁっ。

スカートの奥で再び羞恥の噴水が小爆発。蓉子は耐えきれず、食いしばった歯の隙間から苦悶の呻きまで漏れ出させてしまう。

『清水先生』の豹変ぶりに、近くに座っていた生徒達が驚いて蓉子の方を見あげた。

(だ、だめっ……我慢、我慢するのよ……生徒の前で、オモシなんて……！！)

その視線を感じ、蓉子に残るプライドを奮い立たせる。鉄の自制心で、蓉子は津波のように荒れ狂う尿意を、渾身の力を込めて押さえ込む。叩きつけられる尿意の波を、締め上げた括約筋が堤防のように押さえ込む。

スカートの下ではタイツの脚がぶるぶると震え、猛烈な足踏みが繰り返される。それでも股間を押さえることだけは必死に耐え、爪が手のひらに食い込むほどに握り締める。股間の奥、内部からの水圧にぶくりと盛り上がろうとする水門を引き絞り、下腹を擦って『おんなのこ』を懸命になだめる。

(はああ…あああ…ツ)

どれほどそうしていたか。形振り構わずの我慢が功を奏したか、蓉子はなんとかこの場での決壊を免れる事ができた。しかしもはやロクに動くことはできず、自分の席まで移動するのもおぼつかない。

きつく閉ざされた水門の中で、危険水域を遥かに上回ったオシッコが暴れ狂っている。波立つうねりと共に腰が動いてしまうのを押さえきれずに、蓉子は脚をぴたりと寄せ合い、ぎゅうぎゅうと膝を擦り合わせる。

そして、いくら我慢をしてもいったん緩んだ水門から噴き出したおしっこまでは、なかったことにはできない。勢いよく下着に向けて噴き出したおしっこは、下着をたつぷりと濡らし、タイツにも染み込んで太腿を伝い濡らしている。その感触がタイツを伝うと、またオシッコの出口が緩みそうになるのだ。

(っ……だめえ、出ちゃう……あーんっ、出ちゃうっ……！！)

薄い水色のパンツの股間には、恥ずかしい黄色い染みが大きく広がり、なおじわじわとおしりやおなかの方にまで広がりはじめていた。

トイレに行きたい。オシッコがしたい。

女の欲望を剥き出しにして、蓉子ははあはあと荒い息を隠せずにいた。

動き出したバスが、ようやくサービスエリアの中へとさしかかる。

「先生、もうすぐ着くよ」

のんびりとした声を上げる初老の運転手の背中に、突き刺さりそうなくらいに刺々しい必死の視線を向けながら、蓉子は心の中で絶叫していた。ただひとりの大人の女性であるはずの蓉子も、他の生徒とまるで同じように、オシッコ我慢の限界に苦しむ女の子だったのだ。

(は、はやくっ、早くしなさいよおおおお！！ いそ、っ、急いで、急いで！！ いそいでえ！！ でちゃうの、おしっこ出ちゃう、おもらし、オモシしたら、あんたのせいなんだからねええ！！)

その心の中を覗くことができれば、どの生徒よりもはしたない姿でオシッコを我慢する女教師を乗せ、いよいよバスはサービスエリアへと差し掛かろうとしていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・45 花藤涼子その4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/02/2013 09:00:00

BODY:

バスの中には、女の子のおしっこ特有の匂いが充満していた。

「はぁぁぁぁぁ……っ」

あの真面目で規律を絵にかいたような涼子が、うっとりと潤んだ表情でバケツに跨り、腰をくねらせて艶めかしい声を上げている。

それに伴って股間から噴き出す猛烈な噴水が、バケツの中に激しく叩きつけられる。黄色い水面には泡まで立ててじょぼじょぼと響く下品な水音と、飛び散る飛沫は締めきったバスの中の空気を汚染してゆく。

スイッチが入りっぱなしのマイクは、防水加工もあってしぶと動き続け、涼子のオシッコの音をリアルタイムで、臨場感たっぷりに中継し続けていた。

「オシッコ、、気持ちイイ……っ」

何時間にも及ぶ限界我慢と尿意に下腹部を、股間を嬲られ続けていたのだ。虐げられていた排泄器官はついに訪れた解放の時に歓声を上げ、生真面目な少女に至福をもたらしていた。制服のスカートに、下着にじゅわじゅわと熱い水流が溢れ、羞恥のオモラシ色に染め上げてゆく。

ここがどこか、自分がどうしているのかすらはっきりと認識できず、ただただ排泄の解放感に我を忘れ。涼子は皆の眼前に、大迫力で女の子が本当の勢いで進らせるオシッコを見せつけているのだった。

「っ……………」

「……あ、っ……」

「……、ふッ、くう……っ」

4列に並ぶ座席シートの上、張り詰めた下腹部を押さえ、制服のスカートの股間を恥ずかしく握り締めて身悶えする少女達が

揺する腰の動きはさらに激しく、緊張はなお高まる。

動く密室に閉じ込められて数時間。渋滞の高速道路をゆっくりと進むバスの振動は、下腹部を不規則なリズムで揺さぶってゆく。28人の少女達の膨らみきった羞恥の水風船がたぶんたぷんと波打ち、2-Aの少女達は次々に身を震わせ、切なげな喘ぎをこぼした。

すぐ間近で響く激しい水音と、バケツの中の水面に叩きつけられる飛沫。バスの座席シートの上に身をよじり、今なお激しい尿意と戦い続ける少女達にとって、涼子のバケツオモラシは、すべてはここをトイレ——オシッコをして良い場所だと誤認させる、あまりにも危険な環境だ。

しかし窓を開けるものは少なかった。衝撃的なまでの、涼子のオモラシ——バケツを跨いでのオシッコは、車内の生徒達からごっそりと気力を奪い去ってしまったのだ。

そしてまた、汗ばむこの季節、サービスエリアに入る車線では窓を開けている車も多い。窓を開ければオシッコの匂いがあたりにも撒き散らされ、バスの中の危機的状況が知られてしまう可能性も強かったのだ。

「あああ……ふああ……っ」

バスの廊下、バケツを跨いでのオモラシ——本来なら最悪の結末となるはずの体勢のまま、涼子はその場を動かない。バスの通路の真ん中で、バケツに腰かけるように座り込んだままへたりこみ、放心したように宙をみつめたままだ。白い頬は上気してほんのりと紅く、潤んだ口元が薄く開閉し、目元はとろんとろけてすらいる。

いまなお漏らしたてのオシッコが制服のスカートの色を濃く変え、おしりの側だけでなく前までも無残なほどにオモラシの染みを広げてしまっていた。靴は最初のおちどり水流でがぼがぼと音を立て、ソックスまで無惨に色を変えている。下半身をまるまるオシッコのプールに飛び込んだような有様だ。

バスが揺れるたび、涼子は『はあんっ』と声を上げ、バケツの中にはじゅじゅ、じょぼぼぼっ、と断続的な放水音を響かせる。

涼子のオモラシは、五分以上が経過してなお続いていた。

乙女の水門は限界を迎えて全開状態になってしまったものの、酷使された排泄器官は麻痺したように熱く痺れ、ほとんど感覚がない。溜まりに溜まったオシッコで限界までその壁を薄く薄く引き延ばされ、ぱんぱんに膨らんでいた乙女の膀胱は、いざ解放の瞬間を迎えてもすぐには元通りに収縮しきれず、だらしなく収縮を繰り返しながら、断続的に残った中身を噴き出させていたのだ。

敏感になった排泄孔は、少女の呼吸やかすかな緊張にも反応して、はしたない水音を噴き出させる。バケツの中にはなみなみと注がれた涼子のオシッコが、泡立つ黄色い水面を揺らし、バスの進行と共に波立たせる。

恥辱の中でオモラシをしてしまったにもかかわらず、一度で完全にオシッコを終える事ができないまま、涼子はいまだにオモラシを続けているのだ。

死ぬよりも辛い恥辱に違いなかった。

「んあ……っ」

涼子がか細い悲鳴を上げると、じょぼぼぼぼおっ、と熱水が水面を直撃する恥ずかしい音が響き渡る。防水マイクが拾い上げた涼子のオシッコ音は、バスの中にある六つのスピーカーから増幅されて、少女達が必死に塞ごうとする耳に響いてゆく。バスの中が涼子のオシッコで満たされていくかのようですらあった。

「あう……っ」

びくびく、と涼子が身体を折り曲げる。緊張した下腹部からぶじゅうううっ、と激しく噴き出したオシッコがバケツの中に注ぎ込まれ、大きなバケツの水位がなお増してゆく。

止めようと思ったって止まりはしない。もっとも繊細で敏感な思春期の少女にとって、あまりにも残酷に。己の意志すら無視して下半身が奏でつづける羞恥の音に、涼子は静かに涙を浮かべていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・46 井澤佳奈その3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/03/2013 09:00:00

BODY:

ようやく、ぱちん、とマイクのスイッチが切られる。

長い長い涼子のバケツオモラシが終わって、バスの車内には重苦しい沈黙だけが満ちていた。紆余曲折はあったものの、サービスエリアでの臨時トイレ休憩という救いの手が差し伸べられた直後の悲劇だった。

沈み切った雰囲気の中内には、少女達が尿意を堪える身動きの絹擦れたかすかな呻きに混じって、涼子がすすり泣く声が聞こえる。クラスメイト達は皆、できるだけ彼女の方を見ないようにして、顔をそむけ、あるいは俯いていた。

あまりにも悲痛な姿であるというのがひとつ。そして、迂闊に見えていたら自分もつられてオモラシを始めてしまいかねないからだというのが、その理由だった。

サービスエリアまではわずか数百メートル。けれど、歩くよりも遅い渋滞の車列速度では、そこまでの距離は絶望的に遠い。……

次は自分がああなってしまうかもしれない。そんな恐怖が少女達に重くのしかかる。挫けそうになる心を必死に励ましてきたところに、痛烈な現実を突き付けられた形だった。

（お願い……！！ 早く着いて、はやく、はやく、はやくっ、はやくう……！！）

佳奈は両手を脚の付け根に押し付け、懸命にスカートの上から足の付け根を揉み押さえ、バスがサービスエリアに到着するのを待ち続けていた。座席シートの上に身体を深く折り曲げ、あるいはぐうっとブリッジをするように仰け反らせ、激しく身体を動かして少しでも尿意の波をやり過ごそうとする。無論その間、左右の手のひらは一時も脚の付け根を離れない。

（でちゃう、でちゃう、でちゃうおおお……！！）

あと数秒、涼子のオモランが遅ければ、佳奈もまたはしたなくもバスいっぱい届く声で『もうだめ、おトイレ！』の宣言をしていたに違いなかった。まさに口を開きかけた瞬間に、涼子のバケツオモランが始まったのだ。

幼稚園の子であればともかく、それより大きくなれば女の事にとって決して許されないであろう、『先生、オシッコ！』。佳奈はまさにその羞恥の行為へ至る寸前の勇み足を、ぎりぎりのところで踏みとどまったのだ。

そう。常識的に考えれば。たとえ今ここで大声で叫んだところで、既にサービスエリアへの路線へ入ったバスはもう止まれない。十分な道幅もなく、非常にのろのろとした速度とは言え進み続けている車の列の中で、バスの路肩駐車などできるはずもない。

一度は断念した、路肩に留めたバスの物陰でのオシッコ——道端にしゃがみ込んで、はしたなく激しい水流を迸らせることすら、今の佳奈には許可されていない。

サービスエリアに入るまで、道端でオシッコすることも許されないのだ。

だとするなら、この状況でトイレを訴える事は、ただただ、バスの中に居るクラスの皆に、オシッコが我慢できない事を全力で叫ぶことに他ならない。2年A組28人の中で、一番最初にトイレに行きたいとバスを停めさせ、路肩での野外排泄を申し出た佳奈が。

また、オシッコが我慢できないと叫ぶのに等しい。

そんなのは嫌だ。もう駄目だ。女の子なんだから。もう、大人なんだから。涼子が引き起こした惨劇は、佳奈にトイレに行きたいと、オシッコがしたいと叫ぶ事すら禁じてしまっていた。

股間を押さえる両手に力が入る。滴り落ちる汗、震える身体。

（オシッコ……オシッコでちゃう、オシッコ……したいたいオシッコしたいオシッコしたいオシッコしたい……っトイレ、トイレででちゃうトイレおトイレ……っトイレしたい、オシッコしたい、トイレ、先生トイレ、トイレ行きたい、っせんせいオシッコ、おしっこおっ……！！）

声を大にして叫びたい主張を、頭の中だけに押しとどめ——いくらかは胡乱なつぶやきとして唇からこぼれてしまっていたが——佳奈は、じっとバスの前方、変わり映えのしない車の列を睨む。もし視線に力があれば、並ぶ車の大渋滞を全て吹き飛ばしてしまわんばかりに、ひたすらに。

（トイレ、トイレ……オシッコ……っ、か、神様、かみさま、っ、お願いします、どうかお願いしますからっ、が、我慢する力を、ください……っ）

いつしか佳奈の願いは、いじましいものへと変わっていた。尿意を消し去る事も、おしっこをせずに済ませる事も諦めて、トイレまでオモランをしないようにと、我慢の助力を願い続ける少女の悲壮な願い。

想像の中で、神様にも一緒になって脚の付け根を押さえて貰いながら、佳奈は耐える。サービスエリアまでの最後の時間を、残った少女のプライドに縋って、必死に、必死に。

けれど、いくら願おうとも虚しく、少女の股間にはいつしか、しゅるしゅるという水音と、おチビりの先走りが膨らむ熱い感覚が参るのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・47 木崎由梨その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/04/2013 09:00:00

BODY:

サービスエリアでの臨時トイレ休憩——清水先生のアナウンスに、なんとか心を奮い立たせ、由梨は我慢の延長戦に臨んでいる。幸いにして由梨はバスの前の方に座っており、涼子のバケツオモラシを視界に入れずに済む席の位置だった。

なおバケツを跨いだまま動かない涼子の事は、努めて意識から追い出し——由梨は耐える。

そうだ。委員長の自分が、はしたないことをするわけにはいかない。クラス28人の模範となり、皆の苦しみを少しでも和らげる助けにならなければならない。

心構えばかりは立派なことを申し立てるが、実際由梨の姿と言えば、懸命に水門を押さえこみ、身体の内側から出口にノックを続けるオシッコをなだめる、みっともないものだ。きつく閉じ合わせた膝の奥、直接、下着の上から指が押さえた『おんなのこ』の水門は、間断的にぷしゅ、じゅっ、と熱い飛沫をにじませ続ける。

たっぷりカップ3杯摂取した、霖用車用抜群のショウガ紅茶は、一滴残らずオシッコへと変わり、すでに悠里の下着は、股間の部分に張り付いて真っ黄色に染まり、クラス委員長を立派な『オモラシの模範生』たる、オモラシ委員長へと変えていた。

それでも、好きをみてはぶくりと口を開け、決壊しそうな水門を、指の先で押さえ込むようにして塞ぎ、すんでのところで押しとどめ、由梨は身を震わせて耐え続ける。

「くっ……！！」

刻一刻と限界は近づいている。これまで無理をさせてきた身体がみるみる消耗し、もはや猶予がないことを訴えている。

（も、もうすぐ……もうすぐよ！！）

バスはいよいよ大渋滞の高速道路本線を離れ、サービスエリアへのひき込み路線へと入っていた。路肩にあった「サービスエリアまであと300m」の案内板を最後に見てからもうずいぶん経つ。

（258、257、256……）

由梨はさっきからずっと口の中で小さくカウントダウンを繰り返していた。

“あと300m”の数値が、一秒に1mの割合で削れてゆく。

だが、果たして今のこのバスが、毎秒1m……時速3.6キロも出ているのだろうか？ 歩いている方がよほど早いのではないかと思えるほどにじれったくも進まない渋滞の列の中、由梨は股間を握り込む両手に一層の力を込める。

浅く腰かけたまま、身体を前後左右に小刻みに揺らす。ふらふらと定まらない視線がバスの車内を巡る。自分と同じように、オシッコの誘惑に耐え続けるクラスメイト達の姿を目にして、由梨は尿意を限界まで溜め込んでぱんぱんに張り詰めた下腹部をきつく撫でつけた。座席シートの上、限界水量を突破して膨らみ切った乙女の水風船は、もはや行き場をなくして、脚の付け根、おなかの一番底、出口へとめがけて膨らんでいく。

恥骨の上に押し掛かる膨らみ切った尿意の水風船。カップ3倍のショウガ紅茶よりもはるかに多い、乙女のティーポットの中でくつつと煮詰められた恥ずかしく黄色いホットレモンティーが、前の座席の背もたれめがけて噴き出しそうになる。

（が、我慢するのよ、あ、あと少しなんだから……！！ できる、んだから、あと、200秒、くらい、簡単でしょ……？ へいき、これまでも、できたんだから、後30分くらい、がまんするつもりで、いれば、すぐっ……き、気を抜いたら、花藤さんみたいに、なっっちゃうんだから……っ！！）

バスの通路で繰り広げられた、女の子として決してあってはならない痴態——クラスメイトの恥辱を思い出し、由梨はくじけそうになる心を叱咤した。皆の模範となるべき委員長が、悲劇を迎えた友人を踏み台にして耐えることなど、あってはならないはずなのに。

（ごめんなさい……っ、ごめんなさい……！！）

そう。本当なら——クラス担任の蓉子がまるで役に立たない今、バケツを跨いでオモラシという惨めな思いをして動けない涼子や、バスの外での野外オシッコを衆目に晒されて、深く傷ついた陽菜の面倒をみるのは、クラス委員長である由梨の役目であるはずだった。

けれど由梨は、動けない。彼女たちを助ける余裕なんてどこにもなかった。いや、それどころか——そうした惨劇に見舞われたクラスメイト達を想いやるところか、『ああはなりたくない』『あんなみっともない事は私はしない』と、自分のプライドを守るために踏み付けてしまっていた。

（ごめんなさい、ごめんなさい、っ、長谷川さん、花藤さんっ……）

激しい罪悪感に心を苛まれながら、スカートの奥からほとばしる羞恥の熱湯が、湯気を立てながら床に盛大に撒き散らされ、下

着、靴下を、靴をずぶ濡れにしてゆく姿を想像して、由梨は懸命に自分を鼓舞する。

（そ、そんなの、絶対イヤよ……！！）

由梨もまた、一人の年頃の少女だった。

オモロシ委員長——そんな姿だけは、晒す訳にはいかない。歯を食いしばる由梨の視界に、ゆっくりとパーキングエリアの遠景が入ってくる。カーテンの仕切られたバスの向こうに見える目的地——永劫とも言える尿意から解放される理想郷を目に、由梨は歓喜の叫びをあげる。

「あああっ！！」

同時に、じゅうっ、と下着の股布部分にまたも新しくオシッコが噴き出す。漏らしたてのホットレモンティが太腿をたっぷりと湿らせ、座席やスカートにまで染み込んでゆく。

あと少し、あと少し。虚ろな目で呟くカウントダウンの残数は、1 0 0 を切った。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・48 麻生伊織

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/05/2013 09:00:00

BODY:

長い長い少女達の我慢——その果てに辿り着いたサービスエリア。

広い駐車場と大きな休憩所を伴うその施設は、大渋滞に巻き込まれた社会見学バスという動く密室に囚われ、半日近いオシッコ我慢を強いられ、尿意と戦い続けてきた少女達にとって、まさに求め焦がれた理想郷であった。

だからこそ。長い長い渋滞を通り抜け、ついにバスがその入り口にさしかかった時。まだ駐車場所を探そうとするよりも早く、先走ってしまう生徒が出ることは、ある意味で当然のことであった。

「っ、着いたのね！？」

これまで、バスの前部座席に座り、ずっと無言で蹲っていた麻生伊織は、バスがサービスエリアに差し掛かるや否や飛び降りるように席を離れ、運転席横の乗降口へと駆け寄った。

「お、おい、君！！」

運転手がそんな伊織を咎める。

サービスエリアに着いたとはいえ、まだバスは動いている。大渋滞から抜けたこともあり、駐車場は予想通り混雑していた。車の流れの中で停車することもできずにいるバスの中で、不用意に立ち上がることはおろか、降車準備を終えていない乗降口に近付くのは危険があったのだ。

しかし伊織には、せっかくの注意もまるで届かない。じっと静かに耐えていたものの、彼女もまたもはや我慢の限界。いつオモラシしてしまってもおかしくない状況にあった。

- ・サービスエリアに着いた。
- ・ここにトイレがある。
- ・早く降りてオシッコしたい。

行動原理をわずか三行に集約できるほど、少女の思考は排泄欲求という本能に根ざす部分まで退化し、切羽詰まったものになっていたのである。

「ちょっと！！ 危ないよ、戻って！！」

「あああ、早く早くしてええ！！」

伊織は乗降口の閉じたドアに飛び付き、バンバンとガラスを叩いた。格納された乗降口のタラップに激しく足踏みをし、スカートから下着が覗くのも構わずにぎゅうぎゅうと股間を押さえ、身をよじる。少女の暴挙に、バスの中は再び騒然となった。

「はやく、はやく降ろしなさいよ！ 降ろして、降ろしてってばア！！ つ、着いたんでしょ！？ ここ、トイレなのよね！？ はやく、はやく！！」

もはや形振り構わずに、伊織はしきりに乗降口のガラスを叩き、ドアに手を掛けて揺さぶりはじめる。そこがトイレの入り口で、誰かが意地悪して通せんぼをしているとでもいうかのようだ。女の子の欲望のまま、伊織はドアに体当たりでもせんばかりに激しく足を踏み鳴らす。

「お、おい、やめなさい！！ 止めなさい、君！！ ちょっと先生、止めさせて！！」

運転手は身を乗り出して制止しようとするが、バスの運転をほっぽり出す訳にも行かず伊織を留めることはできない。

本来、これを一番に静止すべきなのは担任の蓉子である。しかし……。

（つつ、着いたわっ♪ とうとう到着したのよ、やった、我慢できたあ……♪ ちゃんとおトイレ、我慢できたわあっ……！！ えらい、

えらいわよ私っ♪ ……やっと、やっとやっとやっと、おトイレ到着したのよお……っ！！ で、っできる、できるわもうすぐおトイレできるのっ、ちゃんとおトイレっ♪ おトイレ出来るのぉ♪……おしっこっ、おしっこぶしゃあぁーって、おトイレできるのぉ……♪)

彼女もまた辿り着いたサービスエリアの待望のトイレを前に、女の欲望を剥き出しにしていた。心は既に至福の場所へと飛び、バスの中の状況など完全に上の空。強張った下半身に力を漲らせ、いまにも走り出さんばかりの有様だ。獲物を狙う餓えた肉食獣の如く、サービスエリアの建物の一角を凝視して動こうとしない。

それは他のクラスメイト達も同様だった。もはや我慢の限界に達した少女達の心は伊織とひとつだった。行動にこそ出ていないものの、無言の中で運転手に今すぐバスを停めろ、トイレに行かせろと訴えている。

伊織が騒ぎを起こすのが少しでも遅れ、運転手の注意が間に合わなければ、2年C組の生徒達の大半はまだ動いているバスの乗降口に殺到していたことだろう。

「はっ、はやく、ここっ、あっ、開け、開けなさい、よおっ……！！」

「危ない、戻って、席に戻って！！」

運転手の制止も届かぬまま、手のひらでばんばんと乗車口のドアガラスを叩き、叫ぶ伊織。そんな彼女を——今日特大の尿意の大津波が襲う。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・49 麻生伊織その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/06/2013 09:00:00

BODY:

「んあ……うッ！？」

不意打ちのような衝撃だった。ずっと我慢し続けた尿意とは段違いの、猛烈な衝撃が恥骨を激しく震わせる。びくびくびくつ、と少女の背筋がわななき、伊織は大きく身体を仰け反らせた。反射的にドア近くの手摺を握り締め、ぎゅうと細い爪を立てる。

「あぁあ、あ、あ！ あぁあ！？ や、で、でちゃ、でちゃう、でちゃう……ッ！？」

熱く湿った砂が詰まったかのように、下腹部の重みが増す。ダムの水門を突き破らんばかりに押し寄せる下品な衝動に、脚を閉じ合わせ膝を擦り合わせるだけでは足りず、伊織はドアにぴったりと身体を寄せ、抑えつけるように突き出した腰をドアに押し付けた。

排泄孔に繋がる細い水路に通水が始まり、膀胱が急速に収縮、脚の付け根の一番底、もっとも脆い部分に凄まじい水圧がかかる。

何でもいい、なにか、支えるものが欲しかった。机の角や、足のかかと——そんなものには股間をねじ付けて、少しでも尿意を紛らわせる動き。伊織はそれを、ドアのガラス窓にむけてやってしまっているのである。無我夢中とはいえ、この有様は異様であり、同時に、もはやバスの中に残る少女達の我慢が常軌を逸していることを知らせていた。

ぐりぐりと股間をドアガラスに押しつけ、上下させるいやらしい動きは、とても思春期の繊細な少女の物とは思えない程に大胆で下品なものだ。短いスカートがまくれ、少女の下着が露わになる。伊織の下着には既に隠しようもないほどにオシッコの染みが広がり、たっぷり塗れて股間に張り付き、少女の恥ずかしい場所のカタチをくっきりと浮かび上がらせている。

その姿は、ドアガラスの外からもはっきりうかがう事が出来た。

「お、おい！！ 見ろよあれ！！」

「……あれ、女の子だよな？ 学生か？」

サービスエリアの駐車場には、大渋滞で身動きの取れない高速道路の車線から避難してきた多くの人々がいた。本来は駐車できないエリアまで緊急解放して車を止め、あるいは一時停止して休憩をとっていた大勢の利用客で、普段は閑散としたサービスエリアも、観光シーズンの人気アミューズメントパークのような混雑の様相を呈していたのだ。

従って、普段ならばほぼ無人のサービスエリアの駐車場の端の端まで、人混みが途絶えない。

そう。2年A組28名プラス1人を乗せ、ゆるゆると動くバスの周辺にも。

「ちょっと、何やってんのあの子……！？」

「うっわあ……ねえ、見てよあのカッコ！！ パンツまで全部見えちゃってるじゃない……」

顔を背ける会社員らしき女性、眉をひそめながらも、咎めるようにじっと見つめる母親、何かを察したかのように戸惑う初老の夫婦。嬉々として注目するのは若い男性に多い。当然だ。少女が切羽詰まった形相で足を踏み鳴らし、ドアに張り付いて激しく腰をくねらせ、拳句めくれたスカートも直さずに、下着を見せつけているのだ。これで衆目の興味を引かない方がおかしい。

「なあおい、あの子、ひょっとして……」

「ねえママ、あのお姉ちゃんオシッコだよ！ オシッコ我慢してるよ！！」

「やめなさい、指差さないの！！ お姉ちゃんが可哀そうでしょ」

母親の手を引き、残酷に指差して叫ぶのはまだ小さな少年だ。さっき彼は立派にこのサービスエリアまで失敗せずにオシッコを我

慢しき『経験者』であった。だからこそトイレには敏感で、今まさに間に合わなそうな伊織の様子を見て誇らしげだった。

母親の制止も聞かず、少年は伊織を指差してオシッコだ我慢だと叫ぶ。それはなお注目を呼び、伊織を晒し物にする視線をますます増やしてゆく。

「んあ、あつ、おね、がい、開けて……そ、外に、出して、だして、よお……でちゃう、出してくれなきゃ、で、でちゃう、よおお……！！」

そして、その視線が飽和に達した瞬間。ついに伊織に限界が訪れた。ばんばんと力なくガラスを叩く手のひらが震え、ぴたりと止まった。外から丸見えの白い下着、その股間の先端、きゅっと食い込んだ股布部分がみるみる色を変える。

「で、でる、う、で、る、でちゃ、う、……あ、あああああああ……ッ」

ぶじゅつ、じゅう、じゅつ、じゅじゅじゅつ！！　じゅあああつ！！

ぶじゅばばばばばばばばばばばば！！

がくがくと白い膝が上下する。はしたなく腰がくねり、前後する。

伊織が張り付いたドアガラスに向けて、少女の股間から凄まじい水流が迸った。下着越しということも忘れさせるほどに野太く豪快な水流が、まるで噴水のように——ドアガラスに直撃した。

ぶっしゅううううううううううう！！

びぢゃびぢゃびぢゃじゅばばばばばあああああ！！

猛烈な水流はドアガラスを叩き、四方八方に飛び散る。制御できない下半身を持て余し身体をくねらせ、懇願する羞恥に歪む伊織の顔も臨場感たっぷりに、少女のオモラシは、大観衆の眼前で始まった。

「あ。あああ……だめ、だめえ……だめええ……っ」

噴き出す水流は下着を貫通して、容赦なくドアガラスを叩く。長時間にわたる我慢で伊織が小さな下腹部に限界まで溜め込んだ恥ずかしい熱湯が、大量に溢れ出してドアをびしょ濡れにする。羞恥の噴水は、ホースでの水撒きと何ら変わらない程の水量と水圧だった。

女の子がトイレの個室の中でしか見せない、本当の勢いのオシッコが、バスのドアガラスを直撃する。

「ああ、あつ、やだ、でちゃ、でる、でちゃう、うう……っ」

がくがくと膝を震わせながら、伊織はもう股間の水流を押しとどめる手段をもたなかった。

ちょうど、男性用の小便便器をに用を足しているところを、反対側から透視して見ているのと同じ——とでも表現すれば、この光景が少しは説明できるだろうか。ドアのガラスに向けて、我慢に我慢を重ねたオシッコを激しくほとばしらせる、制服姿の少女。徐行するバスはまるで展示場が見世物小屋のように、ガラス一枚に隔てられた伊織の恥辱の姿を観衆に見せつけてゆく。

駐車場は伊織のオモラシを眺める特等席と化した。隣を通り過ぎる車の座席で、カップルらしき二人組が呆然と口を空け、その姿を凝視する。

「う、あ……ああ……」

もはや伊織には言葉もない。2年A組28人を乗せた社会見学バスの乗降口に派手にオシッコを噴き出させてマーキングし、

『ここには、こんなふうに恥ずかしいオシッコを我慢して、オモラシしちゃう女の子たちが乗っています』と全身で宣伝しているかのよう。

ガラス越しに、景気良くパンツの股布を突き抜けるオシッコ大放水のの一部始終を見せつけながら、伊織が熱いオモラシの雫を滴らせてその場にへたりこんだその時。

ようやく、バスは停車した。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・50 開かれた密室の扉

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/07/2013 09:00:00

BODY:

市民公園を出発してから延べ4時間半。高速道路の路肩での『休憩』から1時間余りを経て、社会見学バスの扉が開かれた。

2年A組28+1人を乗せていた動く密室はサービスエリアの駐車場にの一角に停車して、その出口を開け放ったのだ。それはまさに、少女達の恥ずかしいオシッコをぱんぱんに詰め込んだ密室の水門が開け放たれたに等しかった。

途端に、それまで聞こえるものと言えば精々が呻き声や荒い吐息、うわごとの様なつぶやきがせいぜいだった車内に、激しいざわ

めきが湧き起こる。

「んあ……つ着いた、オシッコ、おしっこできるよお……♪」

「も、もおガマン、我慢できないっ……オシッコ……トイレえ！！」

「は、はやく、はやくはやくはやくう！！」

もはや待ち切れない生徒達が一気に席を立ち、バス前方の乗降口へと殺到しはじめた。だんだんと強く床を踏み鳴らす足踏み
が地鳴りのように響き、両手を股間に当てがい激しく腰を揺り動かすもじもじクネクネ我慢ダンスがバスの床を軋ませる。

焦らしに焦らされ、耐えに耐え続けた激烈な尿意——それを解消できる場所、『トイレ』。サービスエリアでのトイレ休憩はまさに
その待望の瞬間の到来を告げるものであり、バスが停車しドアが開くということは、2年A組の生徒達にとって『もうオシッコしても
いい』という合図とほぼ同じものであったのだ。これまで辛うじてオシッコ我慢の外面を繕ってきた少女達も、待望のトイレを目の前
にして恥ずかしい欲望を露わにしてしまったのである。

「み、みなさんっ、いつ、いいですか！？ んあ、つはあ……い、いまからっ、と、とととつ、んああ……トイツ、おトイレ休憩にします
っ！！」

そんな『清水先生』の注意などまるで聞こえていない。車内の少女達は、みな同じように、女の子の出口からの解放を求める猛
烈な尿意の限界を迎えていたのだ。2年A組の少女達は震える膝、ふらつく足を引きずって、決死の形相で乗降口に押し寄せ
る。

ただでさえ狭いバスの通路に、車内の生徒の大半、20人以上にも及ぶ生徒が詰めかけたのだからその混雑は尋常なもので
はなかった。

「ちょっと……静かに、落ち着いて！！ 押さないで、気をつけて降りてください！！」

見かねた運転手が声をかけるが、そんな注意は乗降口に押し寄せた生徒達の喧騒にかき消されてしまう。バスの前方にはたち
まち十人以上の生徒が押し合う混雑が発生し、我先にとバスを飛び出そうと混乱が起きていた。2年A組の少女達は、ほぼ全
員が例外なく一刻の猶予もないくらいの猛烈な尿意を我慢していた。制服のスカートをくしゃくしゃにして股間を握り締め、激しい
足踏みを繰り返し、他の生徒を押しのかけてでも外に飛び出そうとしている。

「ちょっと、どいて！！ 邪魔しないで！！」

「伊織ちゃん、ごめんっ！！」

乗降口へあたりこんでいた伊織は、オモラシの始末もできずに両手を掴まれ、まるで政府の工作員に捕まった宇宙人みたいな
格好で、びしゃびしゃのスカートを隠すこともできずに駐車場へと押し出されてしまった。

いくら狭い乗降口とはいえ、20人そこそこの混雑だ。きちんと順番を守ればものの数秒で降車できる筈なのだが、それぞれが
身体を揺すり、一秒もじっとしていないまま激しく脚を踏みならしているため、それも難しい。

「んうう……はっ、はやく、早く降ろしてよお！！」

「で、ちゃう、でちゃうでちゃう……っ」

「なにしてるの……！？ は、はやく降りてよお！！ 後ろにもまだいっぱい、人居るんだから……！！」

我先にと細い通路に殺到し、狭い出口に詰めかけ、他の生徒を押しのかんと押し合う状況では、スムーズな秩序など生まれよ
うはずもなかった。

——そして。

「んああああああつ……オシッコ、オシッコオシッコ、オシッコでう！！ トイレトイレトイレ！！ 出るででちゃうう、皆どいてえ！！

先っ、私が先よお！！ せ、っ、先生もう駄目なの、も、もうっ、もうもうおトイレ我慢できないのおおお！！」

本来ならばそんな生徒達を誘導し、叱責する役目を負うべき指導者——クラス担任の蓉子は、バスの停車と共に貞淑な女教師の仮面を脱ぎ棄て、生徒すら押しのけてバスを飛び出そうとしていた。

そこにはクラス担任の『清水先生』のあるべき姿はどこにもない。恥も外聞のない格好でガニ股でタイトスカートの股間を握り締め、激しく地団太を踏みならし、一人の女となった女教師は、あろうことか生徒達を押しのけていち早くバスを飛び出そうとしていた。

「じゃ、邪魔しないでっ、出ちゃうの、出ちゃうのお！！ せっ、先生、みんなよりずっとずっと我慢してるのよお……！！ んあ、っ、はあ、っ、……お、お願い、ね、通して、先に降ろしてえ！！ わ、わたし、んっ……はあはあ……み、皆と違って大人なんだから、お、オモラシなんか、っ、くう……ぜ、絶対に、できないのよお！！ はやく、はやくう！！ 先に、先にトイレ行かせてよお……！！」

教え子たちを押しのけ、あろうことか蔑ろにしてさえ自分の欲望を優先する、あまりにもはしたない要求だった。大人だから——と体面を気にするその台詞は、翻せば生徒達を犠牲にしても構わないという言い分である。クラス担任の思わぬ変貌は、車内の混乱にますます拍車をかけ、ただでさえ余裕のない少女達のトイレ我慢の限界を覚らせてしまったのだ。

「んあああああうっくううんんはあああ！？ どいて、どいてどきなさい、っ、トイレ、トイレえええええ！！ でるっ、でるう、でるでる漏っちゃう漏っちゃう！！ もるう！！ トイレオシッコ、オシッコでるのお！！ とっ、トイレえええええええええ！！」

今日一番の『大波』が蓉子を襲う。

叩きつけられる『オンナ』の欲望。呆れるほどお代わりしたデトックス効果満載の、ショウガ紅茶。それらがもたらした1リットル半ものオシッコが『清水先生』の仮面を粉碎する。

もはや蓉子に聖職者としてのプライドなど残されていなかった。はしたない絶叫と共に鬼の形相になって破裂しそうな股間を思い切り握り締め、乗降口に押し合う教え子たちを突き飛ばす。クラス担任の責務を完全放棄し、蓉子はバスを飛び降りた。ガニ股になって走るその姿は、みるみる小さくなってゆく。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・51 木崎由梨その3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/08/2013 09:00:00

BODY:

「あつ、あつ、早くつ、早く開いてよおおつ！！」

クラス委員長——木崎由梨はそんなバス前方の混雑列の中で泣き叫んでいた。彼女もまた停車と同時にいち早く座席を離れようとしたのだが、丁度そのタイミングで押し寄せた尿意の波によって動きを封じられてしまったのだ。

身動きできないほどの尿意の大洋波は、しかし三十秒ほどですんなりと引いてくれた。とは言え、貴重な貴重な初動の時間を失い、由梨は混雑の中に取り残されてしまったのである。

由梨のスカートは、既に押し当てられた手のひらの回りを中心に色濃く色を変え、身じろぎの度にじゅじゅつ、じゅうう、と隠しきれない噴き出す熱水の音が響いている。

「つ、着いたんでしょ！？ サービスエリア……は、はやく、お手洗いつ……早くトイレ行かせなさいよおっ……！！」

下着はこれ以上ないほどにオシッコを吸ってぐっしょりと湿り、保水力の限界を超えた少女の雫はぴったりと合わされた太腿の隙間を伝い、膝裏を滑るように流れ落ちてソックスを濡らす。靴の中まで染み込む熱い感覚に、由梨は激しく背筋を震わせる。

もはや誰に見せても恥ずかしくないほどの『オモラシ委員長』の完成だ。

「っ……」

ぽたぽたと脚の内側に垂れる水滴を感じながらも、それでも本当の意味での『決壊』だけは防ごうと、由梨はいじましい努力を続けている。しかしそんな彼女の股間は数秒と置かず断続的なおチビりを繰り返し、股布はたっぷりと恥ずかしい潤いを溢れさせる。

酷使された括約筋はすっかり火照り、もはや擦り抜ける水流の感覚がないのだ。じんと疼く股間からぷしゅぷしゅと水滴が噴き出し、由梨の手を汚す。

「あ、く……」

由梨のトレードマークであった、整ったプリーツスカートにまで、みるみる恥ずかしいオモラシ染みが広がってゆく。

皆の模範、クラス委員長であることを示すように、プリーツのひとつひとつにまで丁寧にアイロンを掛けられたスカートは、押さえ込んだ手のひらの間で漏れ出したオシッコを吸い、くしゃくしゃに握り締められてゆく。まるでオモラシの後始末をした雑巾のような有様だ。

自らの股間から断続的に吹き上がる羞恥の水流に、みともなく下半身を浸しながら、列の真ん中で怒鳴る由梨。そんな彼女を責める声もある。

「い、委員長っ、ねえってば！！ どうにかしてよ、これ！！」

「そ、そうだよ……木崎さん、委員長でしょ！？ なんとかしてっ……！！」

運転手の呼びかけも虚しく、乗降口に殺到するクラスメイト達。社会見学バスの車内はいよいよ混迷を極め、尿意からと言う解放という切実な事情の為、先走って乗降口を飛び出そうとする少女達でバスの前部には喧騒すら起きている。蓉子がクラス担任としての責務を放棄し、いち早くバスを飛び出してしまったことで、混乱はなお加速していた。

みな、恥も外聞もない我慢の限界だ。このままでは車内は無法地帯となりかねない。崩壊しかけた2年A組の秩序維持ができる人物として、皆が視線を向け縋るのはクラス委員長たる由梨だったのだ。

「あ、あのっ、あの、わっ、わたっ、私っ……、お、お願い、先にっ……」

「ずるいっ！！ 私だってもう駄目、もうオシッコでちゃう……！！ わ、私もっ、ね、ねえ委員長っ、お願いよ、わ、私が先……っ！！」

「委員長っ、乃絵ちゃんが、もう我慢できないって……先に行かせてあげて……！！」

「そ、そんなの、私だって同じよ、わ、わたしだって、我慢して、っ」

モジモジくねくね、濡れたスカートを押さえて足踏みする少女達。その足元には既にぼたぼたと雫がこぼれ始めている者も少なくない。トイレと口々に訴える少女達に詰め寄せられ、由梨は言葉を失っていた。

（な、なにそれ、わ、私だって、ガマン、して……っ）

いや、利尿作用たっぷりのショウガ紅茶のせいで、由梨の尿意はこの場の誰よりも激しいはずだった。他の誰よりもトイレに行きたいと、オシッコを我慢しているのだと胸を張って言える。——その証拠に、もう、由梨の下半身は由梨自身の意志を無視して、オモラシを始めてしまってるぐらいなのだ。

「んあう……っ、だ、だめ……えっ」

「だ、黙ってないでなんとかしてよ！！ ねえ、由梨ちゃん、委員長でしょ！？」

「そ、そうよ、責任、とってよ……はやく！！」

「ねえ、委員長っ！！ トイレ、はやくして、トイレ行きたいの、お、オシッコっ、……今すぐオシッコさせてよお……！！」

役職にあるならば、それゆえの責務を負えとばかりに。

この場に居る2年A組28人全員を、すぐにトイレに連れて行けという無理難題が、委員長たる由梨に押し付けられる。無茶苦茶な理論であるが、ここに居る少女達は5時間近くもトイレのない密室に閉じ込められて我慢を強いられ、2年生にもなって一度は路肩にバスを停め、その陰でオシッコを済ませようとしたのだ。

拳句そこからも1時間以上トイレを『おあずけ』された上に、度重なるおチビりや涼子、伊織といった派手な『オモラシの見本』まで見せつけられていた。お互いの姿がお互いの尿意を加速させる悪循環。屈辱と羞恥に理性は擦り切れ、冷静な判断など及ぶべくもない。

「わ、私にどうしろって言うのよ！？」

「そんなのわたしが知るわけじゃない！？ あんた、いつも偉ぶってるんだから、こんな時くらい役に立ってよっ……！！」

「そうよ、このままじゃ、全員、オシッコ……、できないかもっ」

「やめて、やめてよ！！ もうやだ、もう出ちゃう！！」

「ねえ、由梨！！ 委員長！！」

——委員長！！

「あ……」

叫ぶ声の前に、由梨は何も言葉をもたなかった。困惑のまま動けず、半開きになった乙女の水門からぶしゅっぶしゅと水流が噴き出し、足元に激しい水音を立て、水たまりを広げてゆく。避けられない悲劇、回避不可の結末を前に、恐慌に陥った少女達はその原因を一人の生贄に押し付ける。『あいつの所為だ』『あいつが悪いんだ』と。

皆がバスに閉じ込められ、長くつらい我慢の挙句にオモラシをしてしまうのは、由梨がしっかりしていないからいけないんだ。委員長なのに、先生にも何も言わなかったし、何もせずに自分だけトイレに降りようとしている。

そうだ、そうだ、由梨の所為だ、委員長がいけないんだ。次々に声が上がる。

(ちがう、ちがうの、私、だって……ずっと、ガマンして……そんな……)

「あ……あ……」

身体を前にかがめ、恥ずかしい前押さえのポーズのまま。

勝手に開いてしまった乙女のダムの水門から、火傷しそうに熱い水流が噴き出し、内腿を擦って激しくスカートを内側からびしゃびしゃに濡らしてゆく。コントロールを失った下半身のオモラシの感触を、どこか他人事のように感じながら。

羞恥と恥辱にまみれたオシッコが、『オモラシ委員長』の制服をますます惨めに彩ってゆく。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・52 出口順番争い／添田茜

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/09/2013 09:00:00

BODY:

口々に上がる非難と悲鳴。涙声すら混じった糾弾の中、クラスメイトの責めを負わされて、お手本のようなオモラシ姿を披露させられながら。

2年A組のクラス委員長、木崎由梨が口にしたのは、至極単純でもっともな解決法だった。

全員落ち着いて、順番に、ゆっくりバスを降りて、サービスエリアのトイレに行く。

最も現実的で最もシンプル、簡単な理屈だ。しかし混乱の極致にあるバスの中でそんなものが受け入れられるような状況ではなかった。危機的状況にある意識は、容易く理性的な判断を失わせ、混乱をますます加速させる。

なによりも『順番に』というフレーズが、もっともいけなかった。

順番ということは、先と後がある。最初と最後がある。

誰しも一番最初にバスを降りて、一刻も早くトイレに行きたい、オシッコを済ませたいと思っているこの瞬間。否が応でもクラスメイト達のトイレに順番を付け、優先順位をつくってしまうその一言はもっとも口にしてはならないものだったのだ。

「ねえ、どいてよ！！ 通して！！」

「わ、わた、私が先っ、私が先なんだからあ！！」

「押さないで！！ ま、前も混んでるの！！ 押さないでってばあ！！ ……あ、ふああっ！？」

「みんな意地悪だよ、あたし、一番、我慢して……っ」

わたしが先、私が先に降りるの。私の方が我慢してる、私の方が漏れそう。何の益にもならない我慢比べが始まり、どれだけもう自分がオシッコを我慢できないくらいに辛いのかを競い始める。湿ったスカートや濡れた脚元、揺れる腰やくねる股間を見せつけ合い、先を争って乗降口へと突進し、もみ合いまではじまっていた。

「智代ちゃんだって、も、もうそんなチビっちゃってるんだから……、いいじゃない、先に行かせてよ……」

「違うもん、が、我慢してるもんっ、ま、まだ、すっごく、オシッコ出そうなの……っ」

「裕美ちゃん、まだへいきそうだよな？ スカート、汚れてないし……あの、私、先に……」

「そ、そんな、みんな一緒だよ……！！」

およそ、事態は行きつくところまで来てしまったと言ってもいい。今現在の2年A組の少女達にとって、湿ったスカートや足元の水滴が、トイレに先に入れるという証になっていた。

既にオシッコ我慢が限界で、もう一刻も猶予がない証拠だという理屈なのだが、少女達がどれほど異常事態に陥ってとなっていたかを示すいい例だろう。無法地帯と化した社会見学バスの中では、思春期の少女にとって当たり前の、人前ではきちんとトイレを我慢し、オシッコはちゃんとトイレで済ませる——という、当然の礼節や慎みが、まったく通用しない世界だった。

『スカートを汚しておらずおチビりもしていない』事の方が、トイレに行くのは後でいい、という理屈。猛烈な尿意は皆同じ条件だというのに、これまで必死に耐えてきた数少ない少女達にとって、あまりにも無茶な理屈である。

だが、それに対する抗議を顧みるような者は、もう誰もいない。

「ま、待って、お、押さないで、押さないでよっ！！」

バスの外に待つ桃源郷、地獄のようなトイレ我慢からの解放にひた走るクラスメイト達にもみくちゃにされ、添田茜は悲鳴を上げる。乙女のティーカップはその縁ぎりぎりいっぱいまでオシッコを注がれ、揺れる水面に少しでも刺激を与えないように立っているのがやっとだ。表面張力で辛うじて水面を保っているような状況では、歩くにもそろそろと擦り足がせいぜい。茜には、出口までを走るだけの余裕がなかった。

きつく締め付けたオシッコの出口に阻まれて、膀胱はいまにも破裂してしまいそうなくらいにぱんぱんに張り詰め、制服の上からさすってもしっかりと分かるくらいに膨らんでいる。それを懸命に撫でさすり、猛烈な尿意の波をなだめながら、席を立ったところだった。「ひっ……………！？」

どん、と茜の背中が強く押される。後ろに並んだクラスメイトが、堪え切れずに出口へと突っ込んできたらしい。むぎゅうつ、とおしくら饅頭のようにクラスメイトの身体に挟まれて、茜は身動きが取れなくなる。さらに具合の悪いことに、ちょうど挟まれた茜の下腹部に、他のクラスメイトの肘が押しあてられ、下腹部を圧迫してしまう。

「んうあ…………つ！！？」

強制的に高まる内圧と共に、きつく押さえこんでいたオシッコの出口が無理やりこじ開けられ、弾け飛ぶ。

茜は股間に熱いものを感じた。これまで辛うじて押しとどめてきたはずの恥ずかしい水流が、一気に少女の下半身を湿らせてゆく。

ぱくぱくと唇を開閉させる茜の足元で、ぶじゃあああつ、と凄まじい音を立て噴き上がる。女の子の本気の勢いと化した奔流が、混雑するバスの前方部通路に響き渡る。かくかくと震える腰の奥、下着を突き抜けて勢いよく噴き出した水流は、バスの床にじゃごおおお——と激しい音を響かせ始めた。

「きゃああっ！？」

「ちょ、ちょっと、誰！？」

「やめてよお！！」

始まってしまった茜のダムの崩壊が、混乱を一層激しいものへと替えてゆく。茜のオシッコを避けようと暴れるもの、つられて催し、動けなくなってしまうもの、せき立てられるように出口を目指す者、混乱はまさに極致に達した。ほとんど密着状態でオモラシを始められてしまったクラスメイト達にはたまったものではない。限界のところで我慢していた均衡は、一気に崩壊へと傾いてゆく。

ぶじゅつ……

じゅ、じゅう、じゅうう、びちゃびちゃびちゃ……

ぷしゅつ、しゅるるるるう……

じょぼつ、じょぼぼつ、ぶじゅじゅじゅう……

茜のオモラシ音に重なるように、立て続けにいくつもの水音が跳ね、バスの床に叩きつけられる。恥ずかしい輪唱となって響く水音は、できたばかりのオシッコの水たまりの上にさらに激しく水流をもたらし、じょぼじょぼと泡立ちすら始める。

誰かがおチビりをすればそれに誘われるように他のスカートの奥でも熱い雫が噴き上がり、床を叩く水流の音がさらなる尿意の限界を誘う。身動きの取れない混雑の中、バスの床一面にオシッコの水たまりが広がり、際限なくその領域を広げてゆくのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・53 少女たちの我慢延長戦・バスの外

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/10/2013 09:00:00

BODY:

そして――運よく、バスの出口近くに座っていたため、バスの停車と共にいち早く乗降口を駆け下り、外へ出ることができた生徒達も、決して救われたわけではなかったのである。

ごく当然の話だが、サービスエリアに到着したところで、すぐその場でオシッコを始められるわけではない。バスから降りた場所が『おトイレ』であるはずもなく、そもそもバスがトイレの真横に停車できようはずもないのだ。

一般的常識として、駐車場からトイレまでは、ある程度の距離がある。

まして、2年A組の生徒達を乗せた社会見学バスは、大渋滞を原因に急遽当初の行程を変更してサービスエリアにやってきたのだ。つまり、佳奈たち28人はもともとこのサービスエリアに降りる予定はない。

しかも過去に例を見ない大渋滞。片側3車線の高速道路を視界の果てまで埋め尽くす車の行列だ。サービスエリアには渋滞から逃れようとした車が多数押し寄せていた。誰も考えることは同じなのだろう、連休中の行楽地もかくやの大混雑を見せていた。

本来なら、乗客の多い大型バスは、利便性の面からもサービスエリアの建物すぐそばに停車するように指定されている。ところが、これらの事情も相まって、2年A組を乗せたバスが停車したのは、サービスエリアの駐車場の端の端。

本来駐車区画ではない区域に、緊急対応として臨時に設けられた停車位置だったのである。

そう。少女たちが目指す最終目的地——オシッコのできる場所、トイレはバスからも遥か先。直線距離ですら200mの彼方、およそ300mも巡礼の道を経なければならない場所にあった。

「っ……」

バスの出口を降りたところで、がっくりと膝を折って、しゃがみ込んでしまった生徒の足元から、ぱちゃぱちゃと水流の音が響き始める。

長い長いトイレ我慢、耐えに耐え続けた4時間半。高速道路のバスという、動く完全密室がようやく停車しその出口を開け、永劫に続くかと思われた苦行からの解放は、同時に少女達の集中力を途切れさせてしまったのだ。

——サービスエリアに着いたらトイレに行ける。

——バスが止まったらトイレ到着。

——あのドアが開いたらトイレに入れる。

——バスを降りればオシッコができる！！

焦燥感と募る尿意に少女たちの思考は摩耗し、いつしか短絡的に二つの事実を混同してしまっていた。

『バスの降車』と、『オシッコができること』は、必ずしもイコールではない。

冷静な頭でなら至極当然のことだろう。

しかし、2年A組の生徒達の中には焦燥感と尿意のあまりあまり、停まったバスから降りてトイレまで歩く——そんな常識以前の問題すら、失念してしまっている生徒が少なからずいたのだ。

長い長いオシッコ我慢は、そんな当たり前の思考すら、少女達から失わせていた。中には、バスの出口へ並ぶ列を、トイレの順番待ちと錯覚してしまっている少女までいたのである。

彼女にしてみれば、バスの出口はトイレの個室とほぼ同義であり、タラップを降り、飛び出したその場で下着を下ろしてしゃがみ込むような感覚だった。長いトイレの順番待ちを辛抱強く耐え抜き、挫けそうになった心を奮い立たせ、ようやく巡って来た自分の番で個室のドアを開けたら、トイレまで300mの長い廊下が出現したに等しい。いや、状況や事態を鑑みれば、それよりも現実には遥かに残酷で過酷だった。

心が折れてしまうのも、まったく仕方のないことだろう。

「んんあ……っつ、はああはあつ」

直線距離にして200m……一目散にトイレを目指すルートは、駐車場を横切るもの。車通りが多く、ふらふらの足取りではとても渡り切ることはできない事は明白だった。悲壮な覚悟で、バスを降りた少女達はサービスエリアを大回りし、トイレに向かう長い長い巡礼の旅へと向かわねばならない。

再び少女達の旅が幕を開けた。

バスという移動手段の助けすらなく、いうことをきかない自分自身の足を使って、遥か彼方のトイレまで辿り着かなければならない、過酷な過酷な旅だった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・54 少女たちの我慢延長戦・バスの中

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/11/2013 09:00:00

BODY:

少女達が殺到して混乱に陥ったバスの乗降口と、運転席の周辺部。そこから離れた後部座席周辺には、いまだちらほらと生徒達の姿がある。その数は10名には満たないものの、2年A組の生徒数から見れば決して少なくない人数だ。

誰も彼もと我先にバスの降車順を競う中、折角設けられたはずのサービスエリアのトイレ休憩に、急ぐ様子を見せない生徒達。

他のクラスメイト達からも羨まれる、優雅に余裕を覗かせる姿だろうか？ きちんとトイレを済まし、水分の摂取を控え、慌てることなくバスが空くのを待っている、真にお手本となるべき優秀な生徒達だろうか？

……無論、違う。

彼女達の浮かべる表情は決して余裕のあるものではない。むしろ焦って我先にとバスの出口へと駆け寄った生徒たちよりも、遥かに苦悶と羞恥に悶える限界を覗かせるものだった。

「っ……………」

「あ…………はあ、っ」

食いしばった歯の隙間から熱い吐息を喘ぎをこぼし、手足を強張らせてわずかな身動きのみを繰り返す。その危機迫る様子は、声をかける事すら躊躇わせるほどだ。石のように固く身体を緊張させ、はっきりと脚の付け根を押さえたり、もじもじと腰を動かす様子すら見えない。

停車と共に席を立った少女達は、いわば「動」のガマンをする少女たちだ。押し寄せる尿意の波に、身体を揺すり、抗い、拙いながらもトイレという尿意の解消場所へと向かうことのできる少女達である。

いまだバスの後部座席に残っている少女達はそうではなかった。

もはやそんな余裕すらなく、動くこともままならない——「静」の我慢を強いられている少女たちだった。

彼女達は皆、わずかな身じろぎや息継ぎすら、間断なく押し寄せる尿意の大波の、わずかな隙間を縫ってしなければならないほど、尿意と疼く排泄器官の欲求に支配されてしまっている。

端的に言えば——『動いたら、出ちゃう』状況にある。

彼女達の多くは、これまで『おちどり』や『オモラシ』といった失敗に陥らず、下着をほんの僅か湿らせる程度の、きちんとした我慢を貫いてきた少女だった。我慢の限界を訴え、路肩に止まったバスの物陰へと降りていった佳奈たち9人の中にも、加わっていない。

押し寄せる尿意の波を乗り越え、押さえ込み、真っ白な下着をきちんと保っていた者たちだった。しかし、これまで一度も失敗を赦さずにいたからこそ、その反動とばかりに尿意はぶり返すたび、重く激しく、ちりちりと恥骨を焦がさんばかりに猛烈さを増す。

もはや尿意は波ではなく、際限なく高まり続ける高潮のようだ。温暖化で上昇する海面の如く、下腹部を内側から圧迫する水圧は一方的に高まり続け、和らぐ気配すら見せない。

さっきまではまだ『したい』と『すっごくしたい』と『もうだめ、でる！』を行き来していた尿意のバイタルメーターは、『したい』の項目を失い、『すっごくしたい』と『もうだめ、でる！』を交互に行き来する状態となり、いまや『もうだめ、でる！』からピクリとも動かない。

ずしんと下腹部に押し掛かるダムは一瞬の緩みがそのまま崩壊へと繋がるのが確実で、余分な動作は即惨劇につながることを、少女達は直感的に知っていたのである。

だからこそ、ほとんど身じろぎもせず、際限なく高まる尿意を石のように硬直して耐え続けているのだ。

彼女たちとて、できることなら今すぐにサービスエリアのトイレに駆け込みたい。バスの仙宝で大騒ぎしているクラスメイト達と、下腹部に抱え込んでいる恥ずかしい欲求には些かの差もないのだ。だが——猛烈な尿意がそれすら自由にさせてくれないのだ。

席を立ちあがろうと体重を動かすだけで、ぱんぱんに張り詰めた羞恥の水風船が破裂しそうにたぶんっと揺れ動く。彼女達はその揺れ動く波を押し堪えるだけでも、莫大な労力を強いられるのだった。

しかしここでじっとしているだけでは、どうしようもない。それは皆、理解してしていた。どれだけ尿意に耐え続けていたとしても、トイレがむこうから駆け付けてきてくれることはないのだ。それどころか、休憩時間が終わってしまえば、一度も立ち上がれないままバスが発進してしまう。学校に返り着くまで我慢がもたないのは誰の目にも明白だった。

(お願い、オシッコ、おさまってよお……っ)

少女達は「静」のオシッコ我慢を続けながら、一心に願う。

オシッコ、おさまって——。

尿意が消えてくれることを願っているのではない。

せめて、バスの席を立ってトイレに行くことができるくらいに、尿意が和らいでくれることを願い、必死になって身体をねじり続けるのだ。

しかし、そんなあまりにもいい、ささやかな少女達の願いすら、残酷な神様は聞き入れてくれる様子にはなかった。身動きも取れないままの我慢で少女達の体力はみるみる失われ、そこそこで恥ずかしい水音が響き始めるのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・55 清水蓉子その7

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/12/2013 09:00:00

BODY:

「み、みなさんっ、いっ、いいですか！？ んあ、っはあ……い、いまからっ、と、とととっ、んああ……トイレっ、おトイレ休憩にしますっ！！」

（やった、やったわ、っつ、着いた！！ とうとう着いたのよ！！ 到着っ、とうちゃくっ、とうちゃーくっ！！ 間にあったあ♪ 間に合ったわよあ♪ やった、ガマン出来た、ガマン出来たわ……そうよ、わ、わたし、大人なんだもんっ、せつ、先生なんだもの！！ ちゃんとしたオトナなんだから、お、オモシロいなんかするわけじゃないもの、できるわけじゃないのよあ♪

きゅ、休憩っ、ご休憩、『ご休憩』できるのお、これからいっぱい、……んああ……、つとと、ととっ、トイレ休憩！！ おトイレ休憩

できるのよ！！ お、おトイレで、おトイレで思う存分、いっぱい、オシッコ、オシッコできるのよオシッコ、これでオシッコできるのおお
お♪ ぷしゃーってっ、ぷしゃあああああ——ってオシッコできるのよおお♪)

「んあああああつ……オシッコ、オシッコオシッコ、オシッコでう！！ トイレトイレトイレ！！ 出るででちゃうう、皆どいてえ！！
先っ、私が先よお！！ せ、っ、先生もう駄目なの、も、もうっ、もうもうおトイレ我慢できないのおおお！！」

（んうああああ……っ！！！！ な、なんでよ、なんでみんな邪魔するのっ、なんでイジワルするのよおお！？ や、あ、
は、早く通して、そこどいてよお！！ も、漏れちゃ、う、漏れちゃうのにつ、……せっ、先生トイレ、先生おトイレなのっ、先生、もう
オシッコガマン出来ないのおおおお！！！！ で、でちゃうの漏れちゃうオシッコ漏れるトイレオシッコでるでるもるもるもるうう
う！！ でるっ、トイレオシッコでるうもるう！！ あはああああんっ、んくうあうう……ツツ！！ せ、せっかくここまでガマンしたの
にいつ！！ とっ、トイレトイレトイレ、お便所っ、ご不浄、用事場っ、お手洗いいい！！

わ、わたし、せ、先生なんだから！！ おっ、オトナなんだからあ！！ おもっ、オモラシなんかダメなのっ、ダメなお！！ んああっ、
はうああああ！？ で、でちゃう！！ チビっちゃうう！！ オシッコちびっちゃうう！！ だっ、ダメ、駄目よ蓉子っ、挫けちゃ駄
目！！ ちゃ、ちゃんとトイレまで、トイレまで我慢しなきゃダメなのお！！)

「じゃ、邪魔しないでっ、出ちゃうの、出ちゃうのお！！ せっ、先生、みんなよりずっとずっと我慢してるのよお……！！ んあ、っ、
はあ、っ、……お、お願い、ね、通して、先に降ろしてえ！！ わ、わたし、んっ……はあはあ……み、皆と違って大人なんだから、
お、オモラシなんか、っ、くう……ぜ、絶対に、できないのよおお！！ はやく、はやくう！！ 先に、先にトイレ行かせてよお
……！！」

（ど、どいてよどいてどきなさいよおおお！？ 邪魔っ、全員邪魔あ！！ せ、先生がオモラシしてもいいのっ！？ オ
モラシ先生のクラスなんて言われちゃってもいいの！？ 嫌でしょ！？ だからっ、どきっ、どきなさいよおおおあんた達！！ せ、先
生オトナなんだから、みんなと違って子供じゃないんだから、ちゃんとトイレまで行かなきゃいけないの！！ オモラシなんてできるわ
けないのよおおお！？

わたしが、一番っ、一番我慢してるんだからああ！！ あんた達のせいで、オシッコ、オシッコずっとできなかったんだからね！？
あんた達がぐずぐずしてたからと、トイレ、トイレにいけなかったんだから！！ と、っ途中でバス停めたときだってそうじゃないっ、……
くっ、空気読みなさいよ先生だってオシッコしたかったのオシッコしたかったのよおお！？ それなのにあんな、あんなあ……ツ、う、わか
るでしょもう限界なのトイレ行きたいの、もう、すっごく、すっごくオシッコ！！ 我慢してるの！！ ぱんぱんなの、膀胱パンパンなの
よおお！！ あ、っあんなにヘンなお茶一杯飲まされてっ……！！？？)

「んあああああうっくううんんはあああ！？ どいて、どいてどきなさい、っ、トイレ、トイレえええええ！！ てるっ、でるう、でるでる漏っちゃう漏っちゃう！！ もるう！！ トイレオシッコ、オシッコでるのおお！！ とっ、トイレえええええ！！」

（そ、そうよそうだわ、あのお茶のせいよっ、あのお茶にヘンなものが入ってたから、あのお茶のせいでこんなにオシッコしたいの、オシッコで膀胱パンパンなの、オシッコ出そうになっちゃってるのよ！！ そうだわ、そうに決まってるわっ♪ ふ、普段ならもつとガマン出来るんだからっ、せ、先生なんだから、オトナなんだからっ……あ、あんた達と違うんだからツツ！！

もう漏れちゃう、漏れちゃうのお！！ お、おお、オモラシ、オモラシなんかしちゃったら、あんた達のせいなんだからね！！ せ、責任っ、責任取りなさいよおお！！ せっ、先生がオモラシしちゃったら、あんたたちも全員っ、と、トイレなんか入れさせてあげないんだからっ……！！ ツみんな一緒に、連帯責任でオモラシよ！！

だっ……だからっ、だからあ……あーんっ、早く、早くトイレ、トイレ行かかてせええええええ！！ お願いい、行かせてえええ！！ ちびっちゃうう、オシッコちびっちゃうのおお、オシッコ、オシッコもう我慢できないいい！！）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・56 清水蓉子その8

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/13/2013 09:00:00

BODY:

サービスエリアに到着するや否やの早業だった。

蓉子は乗降口に駆け寄ろうとしていた生徒達を罵声と共に突き飛ばし、いち早くバスを飛び下り、トイレめがけて走り出していた。

クラス担任としての責務や、女教師としての体面など脱ぎ捨て、2年A組の『清水先生』ではなくひとりの女——清水蓉子として、最低最悪の事態を回避するために、焦がれ続けた待望のトイレ、オシッコをしても良い場所へと走るのだ。

（と、トイレっ、トイレトイレえ！！ おトイレ、おトイレっ、おトイレ！！ ま、待っててね、今すぐ行くからッ、もうすぐだからッ、と、トイレ休憩、『ご休憩』なんだからぁ！！ そ、そしたら、お、オシッコ、オシッコしていいの、オシッコできるの！！ ぷしゃーって、ぷしゃーってオシッコできるのぉ！！ それまで、それまで、あとちょっとだけ、ほんのちょっとだけ我慢なのよぉ！！ ）

蓉子は立派なオトナである。だからこそ、きちんと定められた場所、オシッコをするための場所でなければ、排泄を済ませるなんて決して許されない。オモラシなんてもってのほか、どこかの茂みでオシッコを済ませるなんてありえない。

蓉子の下腹部には女のプライドが我慢に我慢を重ねたオシッコが、膨大な量となって溜めこまれ、ぐつぐつと猛烈な尿意を沸騰させている。抜群のデトックス効果を謳うショウガ紅茶と、それまでに飲料工場で摂取した水分が残らず変じた羞恥の熱水。長時間の我慢で煮詰められた特濃な女教師のオシッコである。膨らみ切った膀胱は破裂寸前の水風船のごとく膨らみせり出して、ヘソ下から股間の先端までをばんばんに張り詰めさせていた。

容積1リットル半もの羞恥の水袋を抱え込み、蓉子の下腹部はまるでタイヤを触るほどに硬く強張っていた。それを少しでも和らげようと、女教師の手のひらは一時も休むことなく下腹部を押し揉み、撫でさする。もじもじと腰をくねらせて足踏みし、両手を股間に押し当てて前屈みになり、顔を紅くして歯を食いしばり、ぶるぶると震えてその場に硬直する。

まさに蓉子は今、全身全霊、頭のとっぺんから爪先までが余すところなくオシッコを我慢するために存在しているといっても過言ではなかった。

「はぁぁぁぁ……んっ……ッ」

押し寄せる尿意の間隙を縫うように悩ましげに喘ぎ、身をくねらせ、タイトスカートの股間をわしづかみにしたガニ股になってまで、鼻息も荒くサービスエリアを疾走する。

これまで何度もチョロチョロと（実際はそんな可愛いものではなかったのは明白だが）とやってしまったように、蓉子のスカートのお尻部分にはしっかりと恥ずかしいオシッコの染みが広がり、下着はおろかタイツにまでぐっしょりと濡ればそり、女教師の股間を包み込んでいる。ギュウッとスカートを押さえこめば、指にまでじわりとおチビりの痕跡があった。

（んっ、んっ、で、でちゃう、あーんっ、駄目、ガマン、ガマンよぉおっ……も、もうすぐおトイレできるんだからッ、し、失敗できないんだから……ここまで、ちゃ、ちゃんっ、ガマン出来たのが、全部無駄になっちゃうじゃないっ……そんなの、そんなの駄目よぉお！！ 耐えるの、耐えるのよ、蓉子ッ……！！）

しかし蓉子はこれを頑として自分の『お粗相』であるとは考えていない。ただの汗、あるいはほんの1、2滴、湿らせてしまった程度の、トイレの後の『拭き残し』とそう変わらないものだとして強弁を続けていた。

（も、漏れっ、漏れてなんかないわっ、い、異議ありッ！！ ……だって、わ、わたし、んぁぁ…先生、なんだもの、オトナなんだもの

ッ、子供じゃないんだから、バスの中なんかでッ、はあああ……も、漏らしたりなんかしない、しないに決まってるじゃないっ……！！
女の子なんだもの、と、トイレ以外の、おトイレじゃない場所でなんかッ、ぜ、ぜったいに、オシッコしちゃいけないに、決まってるのよっ……！！ ああんっ、あーんっ！！）

今なおじゅわ、じゅわと明白なオモラシの物証を突き付ける現実から、全力で目を反らし、あろうことか自分が置き去りにした担任クラスの生徒達を引き合いに出して貶める始末だ。実際、蓉子の下腹部でなお激しく沸き立つ尿意は、些かも衰えていない。女教師が己の膀胱に溜め込んだオシッコは、実に恥ずかしくも 1 リットル半を超えているのである。

日頃からトイレ我慢を日常とし、さらに鍛えられた括約筋と排泄器官、そして過剰なまでの自尊心があつてこそ成せる神技であつた。

「んはあああああくんああああ……ツツ！？」

ずがん、と強烈な波がボディブローのように蓉子の下腹部を揺らす。まるで本当に一撃をくらったかのように、満水のダムが激しく揺さぶられる。押さえ込んだ水門は熱くひりつき、女の短い排水路に新鮮なオシッコが注水され、排泄孔の粘膜はぷくつと膨らんで先走りを噴き上げる。

（や、やだあ、出る、出るでるでるでりゅう……！？ オシッコ、オシッコでるう……ツ！？ と、トイレ、トイレえええええ！！
だめ、まだ開いちゃだめえ、オシッコ、オシッコ出るトコ、オシッコの孔、開いちゃだめえええ！！）

全身を戦慄かせて腰を揺さぶり、蓉子は女性にあるまじき形相で歯を食いしばった。耐える、耐える、耐える。オモラシは駄目。トイレまで我慢。ここはもう、出口のないバスの中ではなく、死ぬ思いをして辿り着いたサービスエリアなのだ。トイレのある場所なのだ。

女教師として、オトナとして。取り返しのつかない事態になる前に、蓉子は一刻も早く、トイレに辿り着き、この悪魔の水を排水せねばならなかった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・57 清水蓉子その9

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/14/2013 09:00:00

BODY:

身悶えし腰をくねらせ、はあはあと息を荒げ、顔を紅くして切なげに眉を寄せ。タイトスカートの股間を握り締め、女教師の仮面をかなぐり捨ててひとりの『オンナ』となった蓉子は、女の欲望を剥き出しにしてサービスエリア縦断のオシッコ我慢行を続けていた。

本来、聖職者として守り導くべき雛鳥たち、2年A組の生徒は遙か後ろにバス諸共置き去りだった。2 - Aバスの近くでは弱り切った教え子達が、過酷なまでに遠い300mの距離を、懸命に身を寄せ合い、肩を貸し合って悲壮な決意で進もうとしていた。そんな懸命な少女達の姿すら、蓉子はまるで振り返ろうともしない。

（見えたあ……っ♪ あれよ、あそこがおトイレ……お・ト・イ・レ……っ♪ ああーんっ、していいのよね。オシッコしても良いのよね♪ あそこが、ホントにオシッコできる場所だものっ……はああっ、良かった、あ……え、えらいわ、私、ちゃんと我慢できたんじゃないっ、失敗せずに頑張ったわよねっ……！！）

猛烈な尿意からの解放という悦楽に、蓉子はすっかり目がくらんでいたのだ。焦がれに焦がれたトイレを鼻先にちらつかされ、我が身可愛さゆえに周りも見えていない。恥ずかしくも身をよじりながら、着々とサービスエリアの公衆トイレに近付いていた。

（……クラスの子達、お、置いてきちゃったけど、……しよっ、しょうが、ないわよねっ、あ、あの子たちに構ってたら、わたしまで、オモラシっちゃったもんっ……あああ、っ、そんなの、駄目よっ……あ、ああの子たち、まだ、子供だから、オモラシくらいしたってへっ、平気だろうけど！！で、でも、…わたしっ、わたしはっ、もうオナなんだもの、先生なんだもの、っ！！ あんなところでオシッコ漏らすなんて駄目、ッ、無理無理無理よっ、できないわ！！……ちゃ、ちゃんとした、っ、トイレ、おトイレでなきゃ、だめ……っ、なの……！！）

少女達の繊細な羞恥心を踏みにじり、傲慢に決めつけて、蓉子は己を自画自賛で飾る。自分を鼓舞し、励まし、過酷な運命に立ち向かうヒロインの妄想に陶醉して、下腹部に詰まった1リットル半もの特濃オシッコから目を逸らそうとしていた。

（んあああ！？ あっああっ、あっ、あ、あっ！！ っつだめ、まだだめっ、まだしたくなっちゃ駄目ええ……っ！！ あーんっ、まだ駄目え……っ！！ も、もうちよっつ、もうちよっただけ！！ っあ、あそこで、っあそこでなら、オシッコ、おしっこ、ぶしゃーって。ぶしゃーって、いっぱいオシッコできるのよお♪ あそこにイクまで、っ、がまんっ、後ちよっとの、我慢っ、ガマンよお……っ！！ ああーんっ！！）

しかし——ああ、しかし。まさに悪魔が運命を嘲笑うかの如く。

或いは、聖職にありながらも恥ずかしくも守るべき教え子を踏み台にして辿り着いた蓉子への報いを示すかのように。

公衆トイレの前には地獄のような光景が広がっていた。

「なっ……何よ、なによこれええええ……っ！！！」

目の当たりにした蓉子は声を上げる。雑踏の中のいくつかの視線が、公衆トイレの前で前屈みになってぶるぶる震える女教師へ

と注がれる。

遠目には、サービスエリアの周りの人だかりのように見えた。

近付くにつれ、それが規則正しく一定の法則を保っているのが分かるようになった。

それでもなお、蓉子は認めていなかったのだ。

公衆トイレの女性用入り口の前に、100人を超える順番待ちの行列ができていた事など。

このサービスエリア唯一の、公衆トイレ。

その前に並ぶ、長蛇の列、列、列。蛇腹状に作られた大行列が、婦人用トイレの入り口から伸び、遥か長くねるように、公衆トイレの前にできあがっていたのだ。目に入るだけでも100人近いと分かる、長蛇の列。その行列はすべて、女性用トイレに入るための順番待ちである。

このサービスエリアの混雑がが連休中の行楽地だとするなら、公衆トイレの前の順番待ちが一番の人気アトラクションの入場ゲートに等しい。

この列に並ぶ女性のほぼ全てが、内心で強い尿意に耐え、オシッコを済ませるために居ると言っても過言ではない。

何度も挫けそうになった心を繋ぎ止め、懸命に堪え、羞恥に耐え、辿り着いてなお——蓉子が女性用のトイレの個室に入ってオシッコを済ませるには、この順番待ちを乗り越えねばならなかったのだ。

「そんな、そんなああ……っ！！　なんで！？　なんでこんなに混んでるのよおお！？」

叫ぶ蓉子だが、全ては当然の帰結である。

これだけの混雑をみせた大渋滞、一体どれだけの人々が高速道路で立ち往生していた事だろうか。サービスエリアに入るにも30分近い待ち時間があるという時点で、余りの異常事態だ。この高速道路前後数十キロにわたる大混雑地域の、唯一のトイレが、ここなのだ。

そこに殺到する人々が出るのは至極もつともであり、少し考えれば容易に想像のつく事態なのだが、切羽詰まった蓉子にはいまのいままで、そんなことをちらとでも考える余裕すらなかった。

あるいは——意識的にか、無意識にか、蓉子は自分でその可能性に思い至ることを禁じていたのかもしれない。そんな事実直面すれば、もう我慢の限界のオシッコが、懸命の努力を嘲笑うかのようにその場で溢れ出してしまうから。

しかし現実是非情である。ただただ、視界を横切るように続く長い長いトイレの順番待ちが、厳然たる事実として目の前にあった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・58 清水蓉子その10

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/15/2013 09:00:00

BODY:

「そっ、そんな、そんなッ、なにこれ、なんなの、っ、やだ、もう我慢、できな、っ、ああ、っんも、漏れ、ちやうのにつ……あ、ああっあ、あ！！ あ！！！！ っだ、ダメえええええええ……ッ！？」

激しく脚を踏み鳴らし始めてしまった蓉子の股間、きつく押さえた指の間で、ぶしゅっ……と熱い飛沫が吹き上がる。下着を超えてタイツにまで染み出す女教師の恥ずかしいオシッコ。

いくら叫ぼうとも現実是不変。蓉子がオシッコできる順番が回ってくるのは、この行列の一番後ろの101番目だ。そうして悶えている間にも、列の後ろには続々と女性達が並び、行列はなお伸びていく。

そう、驚くべきことにこの大蛇めいたトイレ順場待ち行列はいまだに成長の途上なのだ。

「あ、あつあ……ま、まって、な、並ばなきや……わ、わたし、っ、私が先、さきなの、先い、さきに、いくのお、いかせてええ！！ トイレ行かせてえええ！！ んあああ、っだ、だめえええ……！！」

何度もおチビりを繰り返してぐっしりと濡れた下着に、またぶじゅじゅじゅっ、とたっぷり漏らしたてのオシッコが染み込んでゆく。

蓉子はまだ執拗に、自分が立派な『オトナ』の女として、つつましくオシッコを我慢しきれていると思い込んでいたが——すでにおチビりの回数は2ケタを超え、下着に溢れ出したオシッコは既に保水力の限界を超え、タイツにしみ出し、タイトスカートのおしりにまでみっともない染みを広げていた。

今のおチビりでおしりに広がるオシッコの染みを二回りは大きくしてしまいながら、蓉子は羞恥のオシッコの我慢ダンスを始めてしまう。

「んあああ、くうあはああああんんっ……んあつ、あああつ……ああつ、はああ、ああああうう……っで、出ちやうう、でちやうう、出る、出る、もるもるもうう！！！」

ぐりぐりと脚を交差させ、強く脚を踏み鳴らして、タイトスカートの上からストッキングの股間を驚掴みにして塞ぎ止める。押し当て

られた手のひらの奥では、断続的にぶじゅっ、しゅるるう、と熱い雫が噴き出して押さえ込まれた出口へめがけ殺到、激しく水音を響かせた。

その勢い、量、温度共に、女教師の下腹部に溜まった１リットル半のオシッコが迸る限界放水の予兆を感じさせるものだ。

もはや蓉子に猶予はない。今から悠長に順番待ちの行列に並んでいる余裕はなかった。

「んあああつ、あつあああ、っ、で、でちゃ、でちゃう、駄目、も、っ、もるもれもっ、漏っちゃう、オシッコ……オシッコ、んあああ……ダメ、だめええええ！！！」

どこからどう見ても『限界』の女教師を前に、行列に並ぼうとしていた大学生らしき少女達がぎよっとする。おおよそいい歳をした大人が、人前であそこまで堂々とオシッコを我慢し、悶えて半狂乱になっている姿は、普通目にできるものではない。

「あ、あの……」

鬼気迫るその形相は、嫌でも悪目立ちしていた。しかし当の蓉子はそれどころではない。今まさに、オトナの矜持が地に落ちるか否かの大勝負の最中なのである。

その姿に見かねたのだろうか。列の中程に行儀よく並んでいた小学生と思しき幼い少女が、列を抜け出して蓉子の方へと歩み寄った。顔を紅くし歯を食いしばり、内股になって股間に手を挟みこみ、激しく腰を揺らす蓉子に、だいぶ気押された様子で声をかける。

「——あの、お姉さん……あたし、まだ大丈夫だから……代わっても、いいですよ？」

「は、はあ！？ 別にそんな、っ、へ、平気よ！！ 放っておいて！！」

「え、で、でも……」

「イイって言ってるでしょ！？」

自分の倍近い年齢の女教師が、襲い来る猛烈な尿意に身悶えするのを見かねてのものだったのだろう。しかし、蓉子は自分の歳の半分にも満たない少女からの温情にすら、理不尽な応答を返してしまう。

（ゆ、譲るって、ま、まだ列の真ん中くらいじゃないのっ……まだ、50人も待たなきゃいけないなんて……い、意味ないわよッ！！ そんなんで恩着せられたってしょうがないの！！ わ、わたしは、今！！ おトイレ！！ 入りたいのっ……！！ い、いますぐ、オシッコがしたいのよおお！！ あ——んっ！！ オシッコ、オシッコ、オシッコおしっこオシッコ！！ も、漏れッ、漏れるうううう！！！！）

蓉子は呆気にとられる少女のを押し退けるように走り出した。せっかくの好意を見せた少女は、半分押しのけられて数歩たたらを踏む。

「っ、あつ、あああつ……んっ、はああ……んっ……！！」

ぞわぞわと背中を這い上る『イケナイ感覚』。じいんと股間の先端から恥骨を伝わって腰骨の奥にまで響く、大きな大きな『大波』の予兆。蓉子の意識は危機的状況に引き伸ばされ、加速し、高速で回転を始める。

17、16、15……蓉子の耳には、我慢の限界を告げる無慈悲なカウントダウンが聞こえていた。

「んあああああ、出る、出るう、出るうう！！！」

ガニ股になって大きく開いた脚の根元を、まるで猛禽の爪のように力を込めた指が握り締め——女教師ははしたなく尿意を連呼しはじめた。

（と、トイレ、トイレ……おトイレえええ！！ あつああ、駄目、もう駄目、こっ、こんなの並んでられないいいいい……ッ！！ も、もう駄目もう出るもう出ちゃうオシッコ、オシッコでうう！！ んあああ、っ、あ、あつ、……あ、あつ、あ、駄目、どっ、どこか、どこか、おとっ、

とっ、トイレ、おトイレええ！！）

だんだんと靴のかかとを踏み鳴らし、周囲を目まぐるしく巡る蓉子の視線が、公衆トイレから少し離れた植え込みの陰を目ざとく見つけ出した。自販機とゴミ捨て場の陰、ちょうど雑踏の途切れたエアポケットのような空間は、周囲からの視線も遮ることもできる場所だった。

（あ、あそこ、あそこで……っ、あそこで、おっ、おしっ、オシッコ……する、しちゃう、するうう！！ だっ、誰もみてないものっ！！ 生徒の子達もいないしっ、しょ、しょうがないの、しょうがないのっ、わ、わたし、先生だけど、大人だけどオ！！ もっ、もももう、が、我慢っ、オシッコ我慢できないんだからあ……っ！！）

自分は教師なのだから——

立派な大人なのだから——

だから、用を足すのはちゃんとした『トイレ』でなければならない。しかし大人のはずの自分はあっさりと尿意に屈し、これまで言い訳として何度も繰り返してきたその持論を翻してまで茂みの中へと駆け込もうとする。

（そっ、そんなこと、はああんっ……い言ってる暇なんか、も、もうっ、な、ない、っ、ない、わよ……つくうううう！！ ぼ、膀胱、破裂しちゃうっ、オシッコ、オシッコが漏れちゃうう！！ 漏れちゃうのおおお……っ！！！！）

下腹部で膨らみ切っていた水風船が、蓉子の意識を離れて勝手に収縮を始める。1リットル半ものオシッコが、それ自身の重さに猛烈な水圧を加え、股間の尖端の一番もろい部分を突き破ろうと押し寄せる。

…… 9、8、7、6 ……

いつしか、女教師のオシッコ開始まで、カウントダウンはひとケタを切っていた。

蓉子の身体は自然、女の欲望を剥き出しに、スカートをたくし上げ、濡ればそったタイツと下着に指をかけてしまう。

「あ、あっああああああっ！！」

じょわ、じゅじょわあと押さえこんだタイトスカートに恥ずかしいオモラシ染みが広がってゆく。それでも——最後に残った蓉子のプライドは、植え込みの茂みでの、むき出しの地面の上でのオシッコに待ったをかけていた。オトナのプライドと、限界寸前の尿意。大混雑のトイレと一刻の猶予もない排泄欲求。二律背反の中、妥協も屈することもできない蓉子は、ついにその場にへたりこんでオモラシを始めてしまうかに見えた。

…… 4、3、2 ……——

そして——

蓉子は最後の最後で、とんでもない行為に出た。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・59 女教師のオモラン 1

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/16/2013 09:00:00

BODY:

「んああああああっ！？ も、もう駄目えええ！！」

容子は、婦人用トイレの入り口から伸びて蛇行する順番待ちの大行列を前屈み前押さえガニ股のまま迂回し、その隣に入り口を並べる、もう一つの列へと突っ込んだ。

（漏るッ！！ 漏るもるもる漏れちゃう出ちゃう漏れちゃうオシッコおおおお！！ トイレ、おトイレ！！ おトイレえええ！！ あ、ああああんっ……んああ、トイレ、トイレええ……っ、あ、っこ、こっち、こっち空いてるじゃない！！ はああ……ッ、こっちのおトイレ、こっちのおトイレはいるのおおっ！！）

あろうことか、26歳の女教師は恥も外聞もなく紳士用のトイレになだれ込んだのである。

——列が空いている、ただそれだけの理由で。

無論、比較問題としては確かにそうだろう。実際、男性用のトイレは女性用のトイレに比べれば格段に混雑は少なかった。一般論としても個室と小用便器を分けるという構造上、同じ面積であっても一度に排泄を済ませることが可能な人数は多く、面積当たり、あるいは時間当たりの処理能力は高く、女性用のトイレよりも効率は上だ。最適化されているといっても良い。

もっとも、たとえオシッコであっても人目を避けるためやその排泄体制の問題から個室を使用しなければならず、その利用時間も男性の倍から3倍近いという、女性特有の事情もあるだろう。

加えて、小用であれば男性は女性よりも遥かに簡単に『非常手段』を取ることできる。『その辺で済ませる』ことへの心理的な障壁の差は段違いだ。ちょっとした場所で簡単にオシッコを済ますことのできない分、総数で見ればどうしても、女性は男性よりもトイレの利用割合が多くなる。

しかも『女の子』にとって人前でおトイレに立つことは恥ずかしいという風潮は現代でも根深く残り、女性は押し並べて男性よりも尿意を人前で我慢しがちであり、そうやってしっかり溜め込まれてしまった分、回数の限られた排泄はさらに激しく勢い良く、長くな

り——一回当たりの利用時間を伸ばしてしまうのである。

その他多くの複雑な理由によって、男性と女性のトイレの混雑は明白だった。

（こ、こちならすぐに入れるわっ、ぜんぜんひと居ないもんっ、すぐにオシッコ、今すぐオシッコできるのお……ッ♪ おっ、おトイレで、オシッコ、オシッコぶしゃーって、ぶしゃああああってできるのよお……ッ♪）

しかし、いかにそんな一般論があろうとも、この大渋滞の人混みである。比較すれば人の数が少ないというだけで、男性用のトイレも十分に混雑していた。トイレを求めているのは女性ばかりではない。彼らとて同じ渋滞に巻き込まれ、長時間を車内で過ごしているのだ。尿意を覚えるのは当然のことだった。

事実、トイレの入り口には短いながらも順番待ちの列があった。

その彼等を突き飛ばさんばかりの勢いと剣幕で、いい歳をしたスーツ姿の女性がガニ股で突撃してきたのだから、男性一同の驚愕は並みのものではなかった。

「もるもるもるもるの、漏れちゃうの、漏っちゃう、漏れちゃう！！ っくうううう、も、つもれっ、オシッコ漏れちゃうのおおお！！ っはあああ、あああんっ、ああーんっ！！ ね、ねええっ、ねえっ、オシッコ出る、おしっこでるうううう！！ オシッコ漏れるううううう！！ ねええんっ、んああ……っはあ、はあはあ、お、お願いっ、お願いよお、トイレ、ナカ入らせてッ、オシッコさせて！！ はやく、はやくうっ！！」

あまりにもはしたない叫び声と共に、激しく身悶えし、タイトスカートの前を押さえこんで足踏みをする女教師。普段はつつまじやかな美貌は、決死の我慢によって汗だくになり、荒い息と喘ぎ声が懇願の最中にも混ざる。

「お、お願いい、イでしょっ、いいわよね、ナカ、ナカに、おねがいの、ッ、っはああはあ、わたし、ッ、もう駄目、もう駄目なの、いっちゃう、オモラシ、しちゃっ……な、なかに、入れてええ！！ っ、はああナカに、早くう！！」

もじもじ、くねくねッ、ぎゅうぎゅうッ、かくかくッ、上気した頬で唇を震わせ、蓉子の懇願はもはや淫語と変わらない。いい歳をした『お堅い』印象をつくるスーツ姿の女教師が、はしたなくおもねってねだるトイレ使用許可の申請に、周囲は騒然となる。

しかし入らせろと言われても、ただのトイレの順番待ちだ、この場を取り仕切るリーダーがいる訳もなく、男性一同は困惑の中にあつた。おおよそここまでの必死な、惨めきわる女性のトイレ我慢モジモジダンスなど、多少人生経験が豊富であろうと生涯に一度遭遇することもないような珍事である。

「ッんあああああッ、は、はい、入るわよッ！！」

呆氣にとられる男性陣を押しつけて、蓉子はそのまま紳士用トイレの中へと突っ込んだ。

女性用との区別を測るため、薄いブルーで統一された男性用公衆トイレの内装。そのタイルを蹴り破らんばかりの猛烈な足踏みで、蓉子は一直線に奥の個室を目指した。

身悶えしながら、数少ない個室のドアに取りついた女教師は、赤い『使用中』のロックを一瞥してまた呻き声を上げた。

「んはあああああッ……！？、う、ううう、嘘、うそおお！！ なんて、何で開いてないのよおおッ！！！！？」

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・60 女教師のオモラシ 2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/17/2013 09:00:00

BODY:

理不尽な怒りを叩きつけ、蓉子は拳を丸め個室のドアを乱暴に叩く。

ドンドンドンガンドガンッ！！ まさに火事場の馬鹿力。細い女教師の腕の音は、ノックなどと生易しいものではなく、ドアが歪み
たわみ、壊れてしまうのではないかと思えるほどだ。

「あああ、あああ、だめ、駄目ええ、でちゃう、でちゃう、でちゃうのにいい、っ、い、意地悪しないで、入れて、入れてよおお！！ おねが
い、おねががいい、おっ、オシッコ、オシッコ、私にオシッコさせてえええ！！」

切迫した黄色い悲鳴が、紳士用トイレの中にこだまする。

しかし、これまた仕方のないことだった。よく観察すれば分かることだが、男性用公衆トイレの順番待ちは『2列』あった。

ひとつは短く回転も速く、どんどんと中へ進んでゆく列。

もう一つは多少長く、回転も非常に遅い列。

蓉子は当然ながら思いがらなかったが、これは男性トイレ特有の現象である。大小のトイレの処理方法が別々の男性にとって、
わざわざオシッコのために個室に並ぶはずもない。その目的が特定なのは明らかである。そうした事情もあり、女性用トイレに比べ
れば個室の数はずっと少ない。

つまり、2列あるうちの前者が『小』の列。

そして後者——紳士用トイレの行列の大半の理由となる『大』の方の列であった。

全ての目的が分離されている上に、男性用トイレの個室は数が少ない。従って、混雑している場所での男性用トイレの『個室
順番待ち』の列の解消速度は女性用トイレの列の比ではなく、遅い。同じ人数だけを比較すれば、女性用トイレに比べても遙か

に、自分の番が回ってくるまでに時間がかかるのである。

「は、はやくしてよおお！！ わ、わたし、女の子なんだからああ！！ も、漏れちゃうの、おしっこでちゃうのおお！！ お願い、トイレ、トイレ入らせてよおお！！ おっ、オシッコ、オモロシなんかッ、そんなみつともないこと、恥ずかしいコト、できないのおよおお！！！」

脚の付け根から断続に噴き上がる熱い雫と、じんじんと痺れた排泄器官、酷使された括約筋、収縮を始める膀胱、注水でばんばんになる尿道、ぷくりと膨らむ排泄孔、そしてなお募る猛烈な尿意。わずかなおチビりが凄まじい排泄の悦楽となって蓉子を誘惑する。このまま漏らしちゃうなんて死んでも嫌だとだけ叫び、必死にスカートの股間を鷲掴みに握り締め、1リットル半のオシッコを抱え込み、ダムの決壊を押さえ込む。

限界を告げるカウントダウンがゼロを刻もうとする中、蓉子は周りの事などまるで視界に入らない。

「はやくっ、はやく出てきなさいよおお！！ いいでしょ、別に一人ぐらい間に入ったって平気でしょ！？ はやく、っ、ううう、も、私もう漏れちゃうのおお、お、女の子が、が、ガマンできなくて、お、オシッコオモロシなんかダメなのおお！！ わかるでしょ！？ でちゃうッ、オシッコ出ちゃう！！！」

尿意を連呼する蓉子の股間ではぶじゅぶじゅつじゅつ、と隠しきれない放水音が響き、足元にはびちゃびちゃと飛沫が飛び散る。欲望を剥き出しに暴れまわる彼女は、もはや女性としての尊厳すら危うい姿だった。

しかし、男性陣の視線は多少の道場こそあれど、惨めな女教師を想いやるといよりは、迷惑そうに視線を反らすばかりで、ひどく冷ややかなものだった。

当然だ。男性用トイレの中でもこちらの列は、要するに物影で済ませる事のできる尿意よりも、より切迫な事情で並んでいる男性達の集団、言わば『選抜組』である。

女性用トイレの列とほぼ同じ、許容できない事情で作られた鉄の順番待ちだ。その中で蓉子が取ったこの行為は、そんな男性陣を無視してのものと言え、いくら蓉子の事情を考慮しても、あまりに傍若無人、目に余るものだったのである。

そもそもここにも十分な列の順番待ちがあるのだ。たとえどこまで切迫していても、礼儀もわきまえずに蓉子が割りこめる理由などないのである。せめて事情を離し、冷静にお願いをするのならともかくも——こんな状態で受け入れろという方が無茶だ。

「んああああ…………ツ、もる、もるう、もるもるもるもる、もれるうううッ！！！！」

がくがくと腰を震わせ、盛りのついた雌犬が腰を振り立てるように、深い前傾姿勢でドアに縋りつき、突き出したおしりをくねらせる女教師。

蓉子はなお縋りつくようにドアを叩きまくった。だが、個室は開かない。傍若無人な女教師の上から目線の要求は、むしろ硬く男性用トイレの個室を閉ざしてしまったのである。

にいい、いち、——ゼロ。

「も、っ、もれ、もれう…………ツツ～～～…………っつ！？！？！！」

無慈悲に限界を告げるカウントダウンが打ち切られた。爆発のような尿意に——蓉子は宙空に視線をさまよわせたまま、ぱくぱくと口を開閉させる。女教師の脚の付け根、股間の先端で水門だ大きく口を開けてしまったのだ。下腹部内側からの水圧に押し破られ、女教師のぴったりと合わせた太腿の奥で、ぶじゅッ、と外からでもはっきり聞こえるほどの恥ずかしい水音が響く。

ぷちん、と糸が切れ、がくりと落ちた腰と共に、蓉子は個室のドアの前に倒れ込むように、男子トイレの真ん中にしゃがみ込んでしまう。

ぶじゅじゅう、と激しい水音が立て続けに響いた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・61 女教師のおモラシ 3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/18/2013 09:00:00

BODY:

「んうウツツ……！？ ツうもるうつ、もるもる漏っちゃうう！！ オシッコ漏れる、漏れるっ、もれるううううううううっ…！！」

異性ばかりがあつまる男性用トイレの中央で、あまりにもハシタない大絶叫が響き渡る。

否、漏れる——ではなく、蓉子はもう、漏らしていた。

いまだ断続的ではあるが、下半身からはぶじゅ、じゅじゅじゅううと下着とタイツの布地を突き破り、タイトスカートの裏地に激しくぶつかる水流の音が響き、タイルの上にびちゃびちゃと激しい滝が流れ落ちている。

26歳女教師のおモラシ——それも、2年A組のクラス担任であることを放棄し、苦しむ教え子たちを突き飛ばしてバスを飛び降り、一人で先行して駆けつけた公衆トイレの、しかも男性用トイレの中で。蓉子のオシッコは始まっていた。

最悪の、異性だけが集まる場所でのおモラシという形で。

迫り来る尿意に耐えかねて、女教師の仮面を脱ぎ捨てて一人の『オンナ』となった蓉子は、肉体の欲する欲望をむき出しにして、

あられもなくまくれ上がったスカートの下で股間を猛烈に前を握りしめる。

いつも2 - Aの皆を指導する『清水先生』の面影はない。

「漏れちゃうっ、漏れちゃうう！！ オシッコ漏れちゃうう！！！」

言葉とは裏腹に、蓉子の排泄孔は既にじゅじゅうとと熱い雫を吹きこぼし、黄色い熱湯は下着をじんわりと湿らせている。長時間の我慢とショウガ紅茶のデトックス効果で全身から絞り取られた不要成分がたっぷりと抽出された1リットル半の特濃オシッコは、タイルに広がるや否や色が分かるほどに濃く、そして匂いも強い。

すでに突き出されたおしりタイトスカートの8割は色を濃く変え、濡れて股間にぴったりと張り付いたタイツの奥は水門を全開にし、蓉子の白い指をオシッコまみれにして、その隙間から激しく水流を飛び散らせている。

「あっ、あっ、あっあああああ……！！」

眼前で繰り広げられる女教師のオモラシ、その圧倒的な迫力に、男性陣は言葉を失っていた。

両手の指をタイツと下着の上から股間に深く食い込ませ、突き出したお尻を左右に揺すり、前かがみになった蓉子の靴が激しくトイレの床を踏み鳴らす。

じゅじゅじゅじゅばばびちゃびちゃとと響く恥ずかしい雫に濡れた床を、さらに靴のかかとで踏み鳴らし、猛烈な尿意を催した女教師は、男子トイレの中央で恥ずかしいオモラシ姿を披露させられていた。

そして、既に始まってしまったオモラシ状態の最中であってなお、蓉子は1リットル半を超えるオシッコの強烈な我慢ダンスを強制されていた。

ここはトイレではない。便器がない。オシッコをしていい場所ではない。

そんな理性が蓉子になお、『まだ漏らしちゃ駄目』とブレーキをかけているのだ。この状況で水門が開きっぱなしになっても、自律神経はなお排泄孔を閉じ塞ごうとして、強烈な尿意を引き起こす。下腹部ですでに膀胱の収縮、限界まで膨らみ引き伸ばされた乙女の水風船の放水という不随意運動が始まっているというのに、だ。

「あああああっ、だめ、っだめだめえ、おし、っ、オシッコしないの、しないんおお、っ、おもっ、オモラシ、だめえっ……！！」

オモラシをしながらなおオシッコを我慢するという矛盾。その体現者が、限界の限界、羞恥の極致にある蓉子の現状だった。26歳にもなったのオモラシという現実を受け入れられず、蓉子はお、自分がきちんと我慢を続けているという妄想に入り始めていた。

「ちょ、ちょっと、あんた……こっちは男のほうだよ」

流石にこの醜態を見かねたか。外に出て行こうとする初老の男性が躊躇いながらも蓉子の傍に近付き、声をかけるが——オモラシと同時に未曾有の大津波のサーフィンのただ中にある蓉子には、そんなものは届かない。

「ああああ、あうあ、はやく、はやくうう、はやくトイレ、トイレ、トイレえええ！！ あ、開いてよお、トイレ、トイレさせて、オシッコッ、……じゃ、じゃないと……あああああっ！！ もれちゃうっ、もれちゃうっ、おしっこおおおおっ！！」

前屈みのまま涙声で激しく腰を上下させ、びしょびしょに濡れぼそったタイツの膝を擦り合わせ、ぎゅうぎゅうと股間を押さえ込む蓉子。しかし、一度決壊したダム水流を、外から押さえこめる訳がない。むしろ勢いは増し、出口を見つけたオシッコはさらに水压を増して外に噴き出してゆく。わずかな身じろぎと共に蓉子の足元のタイルにじよばあああああっ、と、湯気を立てんばかりの黄色い水流が撒き散らされた。

「もう…もうだめええっ！！ で、で、出ちゃううううううっ！！！！」

股間はオシッコでずぶ濡れ、羞恥の極みの晒し物状態。

もはや威厳の欠片も残らない姿となった蓉子の足元に、いよいよ大量の放水が噴き出す。女教師の指の間から迸る水流が、男性用トイレの中を満たしてゆく。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・62 女教師のオモラン 4

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/19/2013 09:00:00

BODY:

「んっ、んっ…はあッ……ああ、ああう、ああっ……っ！！ は、は、はやくウ……っ、はやっ、く、早くお、おトイレ、いつ、入れてえええエエッ！！！！ で、出る、ぜんぶ出ちゃうウ、オシッコ、オシッコするう、するのお、……もうやだ、もう我慢できないい、お、おトイレ、イかせて、いかせてよおおオオオッ！！」

男性用トイレは騒然となっていた。一度は動けなくなっていた蓉子が、絶叫と共に暴れ出したのだ。あのまま我慢できずに男性用トイレの床上で大決壊すると思いきや——蓉子は最後の最後に残った気力を振り絞り、それを堪えてまた動きだしたのである。

今だ、個室のドアはどれも赤い施錠のマークを並べたまま開かない。足を踏ん張る事もできずにガニ股のまま、蓉子は男性用トイレの中をぐるぐると歩きまわっては、半狂乱になってドアを叩きまくる。

女教師の下半身は彼女の意志など無視して床の上にびちゃびちゃとオシッコを撒き散らしている。股間を押さえ込んだ指の間から水流が次々に噴き出し、蓉子の下半身をずぶ濡れにしていた。すでにトイレの床は水をまいたかのようにびしょ濡れに黄色い水たまりを広げ、そこらじゅうに女性特有の甘酸っぱいオシッコの匂いが満ちている。

「っああああ……お願い、おねがiiiiiiii！！ 開けて、お願い開けてええ……っ」

じゅじゅじゅじゅううっ、ぶじゅじゅっ、びちゃびちゃびちゃばちゃちゃちゃッ……

妙齡の女性がナマで披露する限界我慢オモラシ。大迫力で噴射されるオシッコと女教師の痴態に、順番待ちの列や、小用便器に向かう若い男性や少年の中には、トイレという状況にも関わらず股間を硬くさせてしまっているもの達も少なくなかった。

はしたない叫びを上げ喘ぎ声に肩を上下させ、艶めかしく突き出した腰を揺すり立てる蓉子の股間からは、壊れた蛇口のように水流が噴き出す。

スカートのお尻にかけてまでが既に恥ずかしい熱水でぐっしょりと濡れており、股間を押さえている両手からは今も断続的にオシッコが噴き出し続けている。酷使され過ぎた蓉子の括約筋はまともに機能しておらず、もう両手を離れた瞬間に大決壊は確定の状態だった。

それでもなお、と惨めにオシッコの噴出を押しとどめようとする蓉子を余所に、男性用トイレの個室は一向にあこうとしない。「おっ、おっ、おっ、お願いiiiiiiiiっ！！ ひぐっ、…！！ っは、早くっ、早くううううっ！！ はやくっ、はやくっ、はやくううっ！！ っと、トイレ！！ んああああ、トイレトイレオシッコオシッコオシッコ、ッ、お・し・っ・こおおおおっ！！！！」

蓉子の懇願がとうとう鼻声になる。

「おあ、っ、ああ……」

酸素を求める金魚のように、顔を赤くしてぱくぱくと口を開け閉めし、蓉子の腰がガクガクと揺さぶられる。前屈のような姿勢になって伸びた女教師の股間から、激しく羞恥の水流が迸った。下腹部を占領していた1リットル半ものオシッコが噴き出して、タイルの上にたたき付けられてゆく。

その時だ。個室の一つから水音が響く。中にいた男性が用を終えたのだ。激しい水音と共にロールペーパーを回す音、そして身じろぎ。

トイレが空いたのだ。蓉子のみならず、その場の全員が顔色を変えた。

しかし、個室が空く予兆の物音は——蓉子の限界を打ち砕く最後の一手でもあった。

ぶじゅじゅうううっ！！

「んああああああああ！！！！」

女教師の足元で、びちゃびちゃと凄まじい放水が床を打った。ホースを床に向けて端を押し潰したかのような遠慮のないオシッコの噴射が、深く前に折り曲げられた蓉子の股間から、後ろに向けて激しく噴き出す。

「出ちゃうおしっこ出ちゃう出ちゃう！！ ホントに出ちゃうのもうガマンできないッ、オシッコ！！ オシッコ出ちゃう！！ オシッコ出ちゃう！！！！」

開いた個室は一番端っこだった。両手で股間を持ち上げるように挟みこみ、脚をきつく交差させたままで個室に向かおうとする蓉

子。だが、覚束ない足取りな上に思い切り脚を閉じようとしているものだから、まるで前に進まない。焦れば焦るほどオモラシの勢いは増し、蓉子の足元を激しく汚す。

（んはああアッ……だめええ……ま、つま、間に合わないっ、！！ こ、こうなったらああ！！）

スーツの下半身はほぼびしょ濡れ、ストッキングも靴も黄色い熱水を浴びている中で、蓉子はさらにとんでもない暴挙に及んだ。

意を決し、蓉子はこれまで握り締めていた股間から両手を離した。そしてがばと振り仰ぎ、思い切り腕を振って猛然と個室めがけでダッシュしたのだ。

両手を離れた瞬間、おしっこが一気に勢いを増して溢れだした。

「んんううううううううっ！！！」

ぶじゅうじゅうじゅうじゅうじゅうじゅうううううううううっ！！

猛然と走り出した蓉子の足元に、盛大にオシッコが叩きつけらる。その勢いと言ったらその場に居た男性諸氏のどれよりも凄まじいものだった。自分のオシッコによる噴射力を利用して前に進んでいるかのようだ。羞恥の走法で個室に向かう一方。蓉子は股間を覆うスカートを躊躇いなく引き上げ、下着とタイツに指をかける。露わになったタイツ越しの下着は、蓉子の股間に張り付き、よく手入れされていると思わしき女性のジャングルを透けさせていた。

溢れるオシッコが、床上に激しく飛び散り、うすい青色のタイルの上に黄色い水たまりを溢れさせ、緑のコントラストを生んでゆく。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・63 女教師のオモラシ 5

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/20/2013 09:00:00

BODY:

もはや女教師の頭の中には、オシッコをすること以外の一切に興味がなかった。蓉子は個室までの移動と同時に下半身をむき出しにしてオシッコの用意を整え、ドアが開くと同時、そこに飛び込んで放尿を始める構えだ。

「んアツ、あ、あああつ、出る、出るうううう！！！」

ストッキングを引き裂かんばかりにかきむしり、伝線させながら、スカートをまくりあげ下着を引きずり下ろそうとする。

が、走りながらでは無茶があり過ぎた。わずかな段差に躓き、バランスを崩した蓉子はドアに向けて倒れ込む。

「んツはあああああ！？」

驚いたのは個室の男性だ。表の騒ぎは聞こえてはいただろうが、正確に何が起きているかは把握できていなかったに違いない。丁度個室が開きのドアを開けたところで、決死の形相で駆け込んできた女教師がそのドアに倒れ込んで来たのだ。

「うお！？」

驚く男性をよそに、がくん、と大きく腰が揺さぶられ——蓉子はそのまま、個室のドアにしがみつくように、思い切り腰を突き出した。

その体勢は、脚を肩幅よりも大きく開いて、しゃがんだ状態に近い。

「んああツ、はああああ……んツツ……！！？ で、でっ、でええ……ツ、でりゅうううううううう！！！！！！？」

それは丁度、個室の中にある和式便器めがけ、蓉子が取ろうとしていた体勢と同じだった。

ただ、ほんの2mばかり距離が足りず、——手前である、というだけで。

ぼぶじゅぶぶぶじゅじゅじゅウウウウウウウツ！！

ばじゅつびじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃ——っ！！

下着を突き破らんばかりに、前回になった水門から放水が開始された。個室の中ではじまるはずだった、女教師のオシッコが本当の勢いで噴射される。猛烈な湯気を伴わんばかりのオシッコが、男性用トイレの個室の入り口ドアから、個室の奥へと激しく叩きつけられる。

それは凄絶な、壮絶なまでの、マーキングだった。

次は私、次にその個室に入ってオシッコするのは、この私とばかりに。蓉子は個室の入り口、ドアの下部めがけて本当の勢いでオシッコを始めてしまったのだ。

細い秘裂を押しあけて、どんな体格の良い男性のそれよりもはるかに激しく猛烈な水流が、ドアめがけて直撃する。女教師の膀胱を限界まで膨らませていた1リットル半ものオシッコが、男性用の個室の入口へ噴き付けられていく。『便器』ではなく、『個室』がオシッコを注ぎ込む場所であるのだというかのよう。

細い水門を通り抜ける特濃オシッコ——濃縮され煮詰められた尿意は、ショウガ紅茶のデトックス効果で蓉子の体内に含まれ

る不要成分をたっぷり濾しとった特別製だ。身体に不要なものを絞り出される感覚の解放感は、常の比ではない。

「んああはああああああうう……っ」

限界からの解放感はまさに悦楽のごとき快感を、蓉子にもたらした。背筋を突き上げる排泄衝動に身を任せ、蓉子はうっとりと眼を細め、頬を紅くして甘美な喘ぎを洩らした。唇も半開きとなって、微かに震える。

ぶじょぶじょぶじょ！！　じゅうっじゅうぶびびびびびじゅじゅじゅう！！

びじゅっ、じゅばじゃばばばばばばばばあッー！！！！

豪快すぎる女教師の公開排泄姿に、トイレ内の男性一同が言葉を失うなか、蓉子はなおも凄まじい勢いの放出を続けていた。おおよそどんな屈強な男性の自身すら失わせかねない、消防車の放水のような排泄。それは、個室のドアの場所から、3 mは離れた先にある和式便器の中へと直接届くほどの凄まじいものだ。普段の授業で鍛えられた女教師の括約筋が可能にする、超遠距離オシッコと呼んでもいい。

便器の底から溢れんばかりに飛び散る飛沫が個室の壁じゅうにとびちり、床にまで跳ねる。

長時間の我慢で色濃く黄色に染まった羞恥の熱湯は、遮るものの何もない床の上を直撃し、尻もちをついた蓉子の下半身を中心にして、みるみるうちに巨大な水たまりを作り上げてくる。

「だ、だいじょうぶか、……姉ちゃん……」

「はああああ……」

放出の解放に酔いしれるあまり、蓉子の眼はとろんと緩み、唇からも甘い喘ぎが断続的に響く。絶望的な尿意からの解放は、女教師から全てを奪い去ってしまったのだった。

びじゅうううううっ、じゅぶっ、じゅぼぼっ、びちゃびちゃびちゃ……

放心状態の蓉子をよそに、噴射される1リットル半ものおしっこは、男性用トイレの床一面を占領していた。誰も見たことがない、女性の限界の本当の勢いのオシッコの圧倒的迫力の前に、男性陣が騒然としはじめていた。

「な、なあ……あんた」

「はあああああ……ああんっ……♪」

「っ……お、おい！！」

悦楽の声を上げる蓉子に声がかかる。しかし、蓉子は放水の快感の絶頂にあり、まるでその声は耳に届いていなかった。限界からの解放というご褒美の中、男性用トイレの真ん中で放尿を続ける蓉子は、なおもぶじゅうぶじゅうと、1リットル半のオシッコを猛烈ないきおいで噴出させ続けている。

「おい、ちよつとあんた！！」

蓉子の行為は、たとえ限界ぎりぎりの尿意を何とかするためのものとは言え、あまりにも傍若無人に過ぎるものだった。もし性別を逆にしていればその場で警察に通報されかねないだろう。いくらなんでも文句の一つも言いたくろうというものだ。

「聞いているのか！！」

男性は声を荒げ、蓉子の肩を揺さぶる。ようやく蓉子が顔を上げた。

「きゃ……！？」

そう。この男性は誰だろう、蓉子がオシッコをしている個室の中に居た。ちょうど用を済ませて外に出ようとしたところで、蓉子が駆け寄ってきてドアにしがみ付き、出られなくなってしまったのだ。そこへ駆け込んできた女教師が見せつけるようにオシッコを始めたのである。

しかし、蓉子にしてみれば——自分が必死でトイレに駆け込み、オシッコをしていた所へ、突如、男性が出現したように見えていた。

「なっ、なな、なに、なによあなたっ、そ、そんなッ……み、見ないでっ、見ないッ、っは、の、覗きね！？　っち、痴漢っ、痴漢よおおおお！！」

「な、お、おい、ちょっと待てよ！！　何言ってやがんだこいつ！！」

「きゃあああああ！！　は、離し、離し、でッ……ああああ！！」

しかし、猛烈な水流を現在も放出中である蓉子の震える脚は簡単にバランスを崩し、そのまま身体を捻るように倒れ込んでしまった。

どしんとおしりが尻もちをつき、ストッキングが足に絡む。ごろんと背中から床をを転がり、それはちょうど、前転を失敗し——股間に一番高く持ち上げてみせたような姿勢。順番待ちの男性一堂に大きく開脚して股間を晒すような格好だ。

突如の女教師の大サービスに、呆気にとられる男性一同。その股間からはまさに本当の勢いで、オシッコが猛烈な勢いで床のタイルを直撃し、さらに高々と噴水のように噴き上がって壁にまで叩きつけられる。

「ひ、あ、はあ、んあくう、ッ恥ああああああん……ッ！？」

ぶじゅじゅじゅじゅううううううう……！！

びぢゃぶじゅじょぼばじゃばば……！！

蓉子のだらしない股間はそのまま、ぽかりと排泄孔を全開にし、噴水のように猛烈な 1 リットル半ものオシッコを噴出させ続けた。ドアどころか壁一面、床一面に特濃オシッコを噴き付け、消防車の放水のように、タイルを砕きかねないほどの勢いだ。

男性の中には、彼女が床に落ちていたホースでも踏みつけたのではないかと誤解するものまでいた。しかし、それは蓉子が我慢しつづけた 1 リットル半ものオシッコなのだ。

「い、いやああああああああああつ！！！！！！　見ないでっ、見ないでっ、見ないでえええええっ！！！！！！」

泣き喚く蓉子。それでも 1 リットル半のオシッコはまったく止まる気配を見せない。膀胱は収縮し、羞恥によって下腹部が緊張、放水はさらに水圧を増して勢いよく、噴水のように噴き上がって蓉子自身の身体に降り注ぐ。

下着を水圧で膨らませ震わせるじゅぶぶぶぶという恥ずかしい音を響かせながら、清水蓉子は多くの人々の前で、26 歳女教師の「オモラシ」という痴態を晒し続けることになってしまった。

EXTENDED BODY:

【不要な中書き】

長々と続いた蓉子先生のお話でした。

当初ここまで掘り下げる予定はなかったのですが、拍手などの反応が大きかったことから展開を変更しました。

普段やらないようにしていることを敢えてやってみることを目的に、「下品」と「恥辱」をテーマとし、羞恥ではなく体面を理由に我慢させるという事を試しています。

……なお、まだ花もつぼみの可憐な少女たちが、羞恥にほんのりと頬を染め、うつむきそつと唇を噛んでスカートの前を押さえ、懸命に堪える我慢が好きな方へ向けた展開は明日以降も続きます。

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・64 バスの前に広がる水たまり

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/21/2013 09:00:00

BODY:

蓉子が女教師としての立場を全て失い、公衆トイレの前で屈辱の醜態を晒している頃——クラス担任に見捨てられた2年A組のバス周辺でも、ちょっとした騒ぎが起きていた。

4時間以上にも渡る密室から解放された制服姿の少女達は、バスの乗降口から飛び出し、きつく唇を噛み、制服のスカートの前を押さえた擦り足で公衆トイレへと急ぐ。

同じ制服を身に付けた少女達が、ぞろぞろと連れ立って、サービスエリアを縦断する300mの道のりを進む。

「ああっ……はあはあ……うっ……」

「ん、くう……っ」

「はあはあ、だめ、だめ……っ」

ぞろぞろと進む行列は、切なげに甘い声を漏らしては脚を止め、或いは根負けしたかのようにその場にしゃがみ込んで突き出したおしりを左右に揺すり、きつく膝を交差させて爪先で地面を叩く。全身で尿意を訴え、オシッコがしたいと叫んでいるに等しい。

狭い下腹部に閉じ込められた羞恥の熱水が、激しく尿意を沸騰させる。湧き上がるように込み上げる尿意を必死に堪え、いまにも水圧に負けて外にぷくりと膨らみそうになる排泄口を『おんなのこ』の力できゅっと締め付けて堪える。

「くううんっ……」

それぞれの羞恥と苦悶に、少女達の声が桃色に染まる。

突き出したスカートのおしりの奥、ぐうと『恥ずかしい後ろの穴に力を込めて』やるのが、乙女の水門を閉ざすのに一番いい方法なのだ。おチビりに濡れぼそった下着の中では、力を込めた括約筋に連動して可愛らしいおしりの穴までがヒクヒクと震えるのをしっかりと感じ取ってしまい、数名の少女達がな顔を紅くした。

「っ、は、っあ……っ」

恥ずかしがって遠慮していたら、下腹部の水風船をぱんぱんに張り詰めさせたオシッコが漏れてしまう——分かってはいても、人前でするにはあまりにもはしたない姿。まだ恋も知らない少女達が強いられるには辛すぎる辱めである。少女達の羞恥は並みのものではない。それでもここまで必死に我慢したのだ、今から無駄になんてできるはずもなかった。

濡れる下着の羞恥に俯き、太腿を閉じ合わせた内股に頬を染めての行進は続く。その有様は混雑したサービスエリアの中でも人目を引いた。

バスを路肩に停めての野外排泄の時よりも、遥かに多い外からの視線が注ぐ。

「いやあ……っ、見ないで、よお……」

「っ、と、トイレ、いきたい、だけ、なのにつ……」

晒しものとなってしまった2年A組の少女達は、ただただ顔を地面に向け、針の筵のような衆目から顔を反らすことでしか抵抗できない。

もっとも慎ましやかさを求められ、人一倍繊細な羞恥心をもつであろう思春期の最中にある少女達が、あろうことか人前で隠すことなく懸命にオシッコを我慢しながら身悶えし、トイレを目指してぞろぞろと進んでゆくのだ。その姿に、下卑た視線や軽蔑のまなざしを向ける人々は少なくなかった。

だが——少女たちはもはや、クラスメイトの一人も例外を許さず我慢の限界だ。衆目の中であっても、人目を憚ることなく激しいオシッコ我慢の仕草をしなければ、果たして公衆トイレにまで辿り着けるかも怪しい状態であった。

「あ……んう、あっ、だめ、え……」

今もまた、バスの乗降口タラップに捕まりながら、くねくねと恥ずかしい我慢ダンスを始めてしまった生徒がいた。右手でぐぐぐぎゅうとスカートの上から脚の付け根を押さえ込み、その場に立ち止まり足踏みを始める。

「ちょ、ちょっと、先行ってよっ」

「あ、あっ、だめ、お、押さないで、っ、で、でちゃ、っあああっ」

まだバスの中には後がつかえているのだ。すぐ後ろの生徒が急かすが、我慢ダンスを始めてしまった生徒はタラップから前に進む事はできない。

「う……あ……っ」

そして、彼女のすぐ前には、乗降口を出た直後にしゃがみこんだまま動けなくなってしまった生徒がいた。おしりのほうまで大きく色を変えた制服のスカートが、ぱちゃぱちゃと雫を噴き上げるのを見て、タラップ上の少女の腰のクネりはますます大きく激しくなる。

目の前にお手本のような『オシッコ我慢ダンス』と『オモラシ』を立て続けに見せつけられ、後ろに並ぶ少女達はたまったものではない。まるで自分達のこれからの結末を見せられているようなものだ。バスの中から次々とじゅじゅう、しゅるるうと恥ずかしいおチビりの音が響き、はしたない喘ぎ声や涙声が聞こえ始める。

サービスエリアの端から、トイレまで300m。その距離は今の少女達にとってあまりに遠くに絶望するに等しいものだ。

そしてなお、たとえそのトイレまで辿り付けたところで、そこには100人以上にも及ぶ順番待ちの大行列が待ち受けている。婦人用トイレの前では、個室利用順番待ちの大行列が蛇行して入り口を塞ぎ、2年A組の少女達オシッコをさせまいとばかりに阻んでいた。

また一人。タラップを降りたそこで、心折れた少女が足元に恥ずかしい水たまりを広げ始めていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・65 前園里佳子

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/22/2013 09:00:00

BODY:

……そう。バスを降りてすぐにトイレへと向かうことができた彼女達は、まだクラスの中では恵まれている方だった。バスの前部座席に座っていたためどうにかバスを降りることはできたものの、そこで身動きできなくなってしまった生徒達が少なからずいたのである。

里佳子もその一人だ。一緒に並んでいたクラスメイト達と励まし合い、下腹部を庇うようにしてどうにか乗降口のタラップを降りたものの、もはや一步も動けずにその場にしゃがみ込んで、動けなくなってしまったのだ。

ショートカットに眼鏡の落ち着いた服装。いつも窓際の席で静かに本を読んでいる彼女は、普段変化の乏しい表情を珍しく強張らせ、緊張の面持ちでスカートの上から膝の間に両手を押し込んで、ぎゅっと握り締めている。

言葉少なな唇もきつく噛み締められ、荒い吐息を懸命に押さえ込もうとしていた。

「……………、っ…………」

クラスメイトの皆がはやくはやくと騒ぐ中でも、一人じっと静かに座席に座り、口数少なく尿意に耐え続けてきた里佳子。その、いつも沈着冷静な面持ちは苦悶と羞恥に歪んでいた。

時に、無表情すぎるだなんてからかわれたりもするが——里佳子だってやはり年頃の少女である。表に出ないだけで、その胸中は激しい動揺と羞恥に揺れ動いているのだ。

眼鏡のレンズには大粒の涙が落ち、溢れる雫は頬を伝う。肩上で切り揃えられ、ヘアピンで留められた髪は頬に張り付き、必死に涙をこらえる少女の赤い顔をわずかに隠す。

身動ぎの為に出てしまいそうになる声を堪えようとぎゅっと口元に押し当てられた手のひらが、はあはあと荒い吐息に湿る。

「っ…………！！」

きゅんと下腹部に強い刺激。同時に脚に付け根、恥骨の奥に熱い刺激が走った。

無口な本人に代わるかのように、里佳子の『おんなのこ』がぶじゅう、と激しい水音を響かせてしまったのだ。

恥ずかしい水門が噴き上げる水流が下着と押さえ込んだスカートにぶつかってぐもった音を響かせる。押さえようとした里佳子だが、一旦押し破られた水門はもう堰き止めすることはできない。里佳子がぎゅっと息を堪えるたび、恥ずかしいオシッコの出口はだらしく緩みじゅじゅじゅじゅ、と激しい水流を迸らせる。

じゅつ、じゅじゅじゅじゅ……ぶじゅじゅじゅじゅ、じゅつ、

ぶじゅつ、ぶしゅるうううううう！！

握り締めた下着にぶつかり手のひらを熱く湿らせる雫は、奔流のように堰をきって溢れ出す。噴射するオシッコの勢いはみるみる激しくなり、里佳子のダムが決壊がいよいよ本格的な事になったのを知らせていた。

「う、あ…………っ」

俯いた里佳子の眼鏡のレンズがどんどん曇ってゆく。歪む表情がみるみる赤くなり、少女は耳の先までまるでゆで上がった様に真っ赤になってゆく。

片膝をついてしゃがみ込んだ里佳子のスカートは、既に股間を中心に大きな染みを広げ、ニーソックスにまでびしゃびしゃに濡らしていた。立てたひざの隙間に押し込まれた手のひらが、忙しく下腹部の先端部分を包み、懸命に押し揉む。しかし酷使され支えを失った排泄孔は、口を開けて本来の役目のままに女の子の恥ずかしい水流を噴き出させるばかりだった。

「あ……あ……、あ…………っ…………」

脚とおしりを伝い地面に注がれるオシッコは、アスファルトの上に広がりながら、里佳子の足元を勢いよく流れ始める。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・66 三浦芽衣

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/23/2013 09:00:00

BODY:

里佳子の斜め前で、同じようにアスファルトの上に深く腰を落とし、うずくまったまま、それでも懸命に前に進もうとしているのは芽衣だ。

芽衣のスカートは大きくめくれ、可愛いおしりとまぶしい太腿が露わになっていた。

無防備な下着の股間を立てた靴のかかとに押し当て、背中を反らせ、おしりを左右に揺り動かしてぐりぐりと身をよじる。白い下着に包まれた『おんなのこ』を押さえ込んで、オシッコの噴出を防いでいるのだ。もはや手で押さえる程度では抑えきれないほど、芽衣の下腹部の水圧は高まり続けている。

「が、我慢、がまんしな、きゃ、ああ……っ」

とくに乙女のダムの限界水位は超えているのだ。いまにも水圧に負けそうなオシッコの出口はヒクヒクと痙攣し、このままここでオシッコをしてしまえと芽衣を誘惑する。はしたない欲望に抗おうと、芽衣は大きな波の合間を見つけては、ぐりぐりとオシッコの出口

に踵をねじりつけながら、少しずつ前に進もうとしていた。

わずか数センチでも、トイレに近づく。芽衣はまだ見ぬ公衆トイレを諦めず、しゃがんだままの右足をほんの少しずらし始めた。だが、前に進むには女の子の大事な部分押さえ込む左脚のかかとを離さなければいけない。少しでも支えを失えば股間はぶじゅぶじゅとだらしなくオモラシを始めてしまうだろう。

「……だ、だめ、……こんな、ところで、オモラシなんか……っ」

無茶だとは分かっていた。それでも、乙女のプライドはそんな醜態を許容できるはずがないのだ。芽衣はカニ歩きのような横移動で靴底を削るようにして、慎重に腰を浮かせてゆく。

瞬間、感覚のなくなり掛けていたあそこからじわっと染み出すものがあった。

「ひっ……」

満水のダムから溢れ出した水流は、踵の押さえ込みが緩んだ瞬間を見逃さない。一気に下着に湿り気が広がり。膀胱をぱんぱんに膨らませている恥ずかしい雫が、じゅじゅじゅとお尻を伝って噴き出してくる。

「っはああ……ダメ、ダメえっ……」

芽衣の左手が力いっぱい下着を引っ張り上げる。いまにも破れそうなくらいに深く食い込んだ股布には、すでに大きく恥ずかしい染みが広がっていた。黄色いオシッコの染みは、見る間にどんどんその領域を広げ、すぐ下の芽衣の靴のかかとにまで滴り始める。

芽衣はなんとか放水口を締めつけようとするが、もはや下腹部の圧力に抗えなかった。狭い出口はみるみる緩み、しゅるしゅると恥ずかしい水音を響かせてゆく。

「っや、で、でない、で、出ちゃ、ああ、あっあっっ……」

ぶしゅっ、じゅっ、じゅう、しゅるるう……

アスファルトを削るような横歩きを続ける芽衣は、その足元に10センチおきに恥ずかしい水たまりを作ってゆく。ぽたぽたと滴っていた雫はすぐに蛇口を緩めたようにちよろちよろと溢れ、さらに勢いを増していった。

「あっあっ、は、あっ、つく、や、っ、と、止まんないっ、あ、だ、ダメえええ……ッ」

声を絞り、再び靴のかかとに下着の股間を押し当てるが、もう遅い。いくら体重を乗せぐりぐりと『おんなのこ』を押さえこんでも、水門を押し破って噴き出す放水の勢いは変わらなかった。弱まるどころかはいよいよ本当の勢いで地面を直撃するオシッコの噴射が、じゅごおーっと猛烈な勢いでアスファルトを叩き始める。

「だ、ダメっ、トイレ、早くトイレ……っ！！」

芽衣は下半身から噴き出す恥ずかしい噴水を止めることもできないまま、カニ歩きのような移動を続ける。もはやトイレに間に合うはずもないことは明らかなだか、人前でオモラシという事態に直面し、羞恥に焼き切れた少女の思考は冷静な判断をすることもできなかった。

ただ、どんどん勢いを増していく水流を見られたり、排泄音を聞かれたりしたくない一心だった。

「いい、いやあ！！ やだ、っ、止めてえ！ だれか、止めてえええ……」

最初の内は下着の股布にぶつかりお尻を伝っていた細い水流は、勢いを増すにつれて斜め前の地面を直撃する。下着の奥でくぐもった音を出していた芽衣のオシッコは、締めつけていた水路が緩み、ヒク付く排泄孔がぷくりと口を開くに従って、その勢いを増

していった。

ぶじゅううううううううっ！！

「いや、いや、いやああ……！！！」

前方の地面を強く打ちつけ、芽衣の身じろぎに反応して蛇のようにのたうちながら撒き散らされる黄色い水流。もう芽衣の力ではどうやっても止める事はできない。

出口を見つけたオシッコは猛烈な勢いで放たれ、駐車場の一角をトイレの代わりに、アスファルトの上で大きく泡立ちながら大きな水たまりを広げている。これまでどれだけ芽衣がオシッコを我慢してきたのか。それを分かりやすい大きさと量と、匂いと色、全てで叫んでいるのかわからないものだった。

勢い良く噴き出してじゅごおおと響くオシッコを地面に噴射しながら、猛烈な後悔と激しい羞恥心を刺激され、芽衣はとうとう泣き崩れてしまった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・67 添田茜その2

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/24/2013 09:00:00

BODY:

「ひぐっ……ぐすっ……」

茜は、涙をこらえながらバスを降りた。一歩ごとにずぶ濡れのスカートからびちゃりと雫が滴り、たっぷり水を吸った革靴ががばがばと音を立てる。

オシッコに濡れた手のひらで頬に溢れる涙をぬぐい、しゃくりあげながら、ふらつく足をアスファルトへと下ろす。

2年A組のバスがサービスエリアに停車して15分ほどが過ぎていた。到着と共に乗降口に詰めかけた少女達の混雑もようやく解消されて、出口を塞いでいたクラスメイト達の姿はない。その代わりに、バスの乗降口周辺には、いくつもの恥ずかしい水たまりと、その中ですすり泣く少女達の声があった。

バスの乗降口とタラップもまた、バスを降りようとした少女達の、度重なるオモラシでびちゃびちゃに濡れている。

「っ……ぐすっ、うえ……ッ」

しゃくり上げる茜の足元に、ばちゃばちゃと雫が滴り落ちる。股間はじんと熱く、排泄器官の感覚が薄い。下腹部の乙女の水風船はすっかりしぼんでいるはずなのだが、びしょ濡れのスカートと下着の奥ではまだ時折、思い出したように熱い奔流がじゅじゅじゅと溢れ出すのだ。

茜もまた、バスの到着と同時に乗降口へ殺到した少女の一人である。

しかし強い尿意に妨げられてわずかに初動の遅れた茜はすっかり先着争いに出遅れ、ぎゅうぎゅうのすし詰め状態になってしまったバスの通路を通り抜けることができないまま、後ろからは押され、前には進む事もできず、その場でオモラシを始めてしまったのだ。

茜のオモラシは、列の中程に居た少女達のオモラシを誘い、次々に我慢の限界を誘発させた。茜がバスの通路に盛大にオシッコを撒き散らしたことで、つられるように他の少女達も催してしまったのだ。乗降口に向けて小さな川のように床を流れるオシッコ——バスの中をトイレ同然にしてしまった事は、他のクラスメイト達の下着や制服にまでさらに大きく被害を広げた。

もしかしたらトイレに間に合うかもしれないなかったクラスメイト5名を巻き添えにしたことで、茜は周囲から激しい非難を浴び、放心状態のまま通路の端へと追いやられた。

そうして今。ようやく誰もいなくなった通路を抜けて——バスを降りる事が出来たのである。

「っ……」

身体の前面のほとんどすべてをぐっしりと湿らせたスカートは、今なおばちゃばちゃと雫を溢れさせ、茜の腿や膝裏、ふくらはぎを伝って水流を滴らせる。

頬に残る涙の痕と同様に、茜の脚には恥ずかしい水流の跡が生々しく残り、靴下と革靴はオシッコをたっぷりと吸ってごわごわと形を変えている。

脚に絡み付く制服は、川に飛び込んだのかと思えるほどにびしょ濡れだ。一体どれほど激しいオモラシをしたらこうなるのか——想像もつかない。

がば、と濡れた革靴を引きずって駐車場に降りた茜は、小さく身を震わせた。

外の風がずぶ濡れの下半身を撫で、たちまちのうちに冷やしてゆく。初夏とはいえ、オシッコ出ずが濡れのところに吹き付ける風は冬のように冷たい。まして、ぱんぱんに溜め込んでいた中身をすっかり絞り出した水風船は、茜の小さな身体からごっそりと体温を奪っていた。

下着の中に噴き出させてしまった時は熱湯のように熱かった羞恥の奔流も、いまや背中を震わせるほどに冷たい。

「んああ……っ」

そして、ぞくりとこみ上げてくる寒さと共に、酷使された排泄器官に妙な感覚がある。

腰骨にじんと響くむず痒くも甘い痺れ。自慰の時のような、イケナイ感覚。さっきまで途方もない悦楽と解放感を与えてくれた、下腹部の要求が、再び急速に膨らみ始める。

あろうことか——たった今オモラシを終えたばかりの下半身は、少女に対して再度の尿意を訴えていた。

「っ……はああっ……」

既に言い訳の効かないほどに制服をびしょびしょに汚していながら、なお執拗にトイレを訴えるはしたない下半身に、茜は悔しさで恥ずかしさのない交ぜになった感情を押さえきれない。きゅんと疼く下腹部には、いつしかじんと重い砂のような感覚がある。

(っ、な、んで……、よ、こんな……っ)

急速に、あまりにも急速に、おなかの奥でしぼんでいた水風船が膨らみ始める。

どこからわき出すのかも分からない、みっともない羞恥のホットレモンティの『おかわり』が、茜の下腹部のティーポットを満たしてゆく。

「もぉ、やだぁ……っ」

気付けばポットはぐらぐらと沸き立ち、自然に膝がくっついて、足が交差していた。

濡ればそったスカートをぐしゃぐしゃと音立て、茜の小さな腰がもじもじと左右に揺れ始める。みっともなくトイレを要求する下半身に茜は後から後から止まらない涙をぬぐい、赤くなった頬を擦ってゆっくりと歩き出す。

オモラシをした姿のまま、トイレの順番待ちに並ぶために。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・68 バスの中、羞恥のバケツ排泄

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/25/2013 09:00:00

BODY:

バスの中には、いまだ数名の生徒達の影があった。動く密室のドアが解放されてなお、募る尿意に席から動くことができずに『静』の我慢を強いられていた少女達である。

俯き、息を殺し、じっと動きを停めた少女たち。しかしその表情は先程までとは少し違っている。堪えているのは内側からの尿だけではなく、外からの刺激も加わっていた。見たくないものから顔を背け、耳を塞いで必死に意識を逸らそうとしている。

ぶじゅううううっ、じょぼぼぼぼぼぼぼぼ、

ぶじゅう、じゅごおおおおお——ッ！！

そう。バスの中にはそんなはしたない、耳を塞ぎたくないような恥ずかしい音がずっと響き続けていた。バスの通路、真ん中に誰の視線を遮る事もなくおかれたバケツ。涼子が一番最初にオシッコを済ませたそこに跨って、クラスメイトの一人がオシッコを始めているのである。

破裂寸前の膀胱を抱え、バスから降りることもできなくなった少女達は、涼子のオシッコがなみなみと注がれたバケツを使うことを余儀なくされていた。既に追加で2人の少女がバケツでオシッコを終え、今は3人目——涼子から数えて4人の少女が、バケツを跨いで、クラスメイトの目の前でオシッコを強いられているのだった。

外のトイレに向かおうとする余裕すらない彼女達に、下着を下ろしている暇などない。そのほとんどがバケツの上でスカートと捲り、下着の股布部分をひっぱり掴んで横にずらす——いわゆる『ハミずらし』の体勢でオシッコをしていた。

男性諸氏には理解しがたい事かも知れないが、この股布ずらしはおおよそ、女の子であるのなら、幼稚園を過ぎればまず普通はすることのない、あまりにもみっともないオシッコの済ませかたである。

——誤解を恐れず、あえて男性のトイレで喩えるならば……小便器に向かい、下着とズボンを足首まで降ろして下半身丸裸で用を足しているようなものだろうか。同年代のクラスメイトがいるすぐ前で、それを強制されることの恥辱たるや、想像を絶するものがあつた。

しかし、たとえそれでも一応は下着をずらし、バケツを跨いで形の上だけでもきちんとオシッコの体勢を整えることが出来た生徒はまだマシな方だ。もはや数歩を歩くことすら間に合わず、バスの廊下にしゃがみ込んで、あるいは中腰のまま座席にもたれかかるようにして、その場にオシッコを始めてしまう子もいたのである。

何度も繰り返されたおチビりとオモラシで、バスの床に濡れていない場所はない。ゆっくりと傾斜する通路を、ちよろちよろと小川のようにオシッコが流れてゆく。立ち込めたオシッコの匂いを攪拌するように、バケツの中に叩きつけられる羞恥の噴射音がじゅごごごとと激しい泡を立てて黄色い水面をかき混ぜる。

今もなお少女の一人が用を足すバケツ内側の水面は、気付けば容器の内側の半分を超えていた。たった4人分のオシッコで、バケツは早くも一杯になろうとしていたのだ。少女達の噴き出させたオシッコの底深く沈んだマイクが、小さな泡を立てて揺れている。バスに備え付けられたバケツは小さなものであるとは言え、最大容量で5リットル近い。

様々な悪条件が重なり、長時間に及ぶバス内の我慢によるものとは言え、マイクを水没させ壊すほどのオシッコがこの短時間でバケツに注がれている事は驚異、驚嘆の一言であろう。

「はあああ……っ」

じょぼぼと激しい音を響かせていた少女が、うっとり眼を細め、バケツに跨ったまま大きく息を付く。熱い吐息は、彼女が快感すら覚えていることを教えている。少女としてあり得ない、屈辱的なまでの姿勢であったとしても、これまで自分を苦しめていた悪魔の熱水を、なみなみ注がれたバケツの中に叩きつけ、尿意から解放されることは、少女にたえようもないほどの快感をもたらしているのだ。

その後ろでは、早くも次の少女が、中腰になって激しく足踏みし、バケツの空く順番を待っていた。バスの真ん中に置かれたただのバケツ、トイレとはとても呼べないただの空き容器ですら、いまの2年A組バスの居残り組生徒達には、オシッコを済ませるための焦がれ求める場所たりうるのである。

——はやく、はやく、はやく！！

下腹部を激しく押さえながら、「次」の順番を待つ少女はバケツの中にオシッコをする順番を待ちわびている。彼女の足元にはすでにぱちゃぱちゃとオモランが始まっていた。

果たして今、用を足しているクラスメイトがオシッコを終えるまで、全部漏らしきらずにいられるかは怪しいところだろう。そしてどうにかバケツにたどり着いたところで、余裕なく切羽詰まった表情からはもうスカートを上げている余裕すらなさそうな事は明白だった。

下着を下ろすどころか、横にずらす暇すら皆無。『おんなのこ』を押さえこむ以外の動作をしたその瞬間から、激しく恥ずかしい熱水が噴き出してしまう。

折角、足元にはオシッコを受け止めるための容器、オモランを防ぐためのバケツがあるのに——。

少女に許されているのは、バケツをまたいでオモランをするか、このまま床にオモランをするかのどうしようもない二択だけだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・69 都築朝香その3

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/26/2013 09:00:00

BODY:

(どうしよう、どうしよう、どうしよう……)

朝香は、なおも困惑の中にあった。

——もう我慢できない。

——おトイレまで間に合わない。

——オシッコが出ちゃう。

それは認めざるを得ない事実だった。というよりも、クラスメイトの目を盗んでペットボトルにオシッコを済ませようとしていたあの時点で、もうとっくにそんな段階は通り過ぎていたのだから。

清水先生——蓉子に静止されなければ、間違いなく座席の上で自分に恥ずかしい場所にペットボトルの飲み口をあてがい、透明な容器を溢れさせんばかりに、自分の『おんなのこ』から噴き出すオシッコを注ぎ込んでいたに違いないのだ。

けれどそれを、清水先生の一方向的な理屈で中断され、朝香は身動きが取れなくなっていた。クラス担任であり、唯一の『オトナ』の女性である先生に制止され、朝香はそれがとても『イケナイこと』であるという認識を植え付けられてしまった。

トイレを我慢できないなんて、おんなのことしてあり得ない、とても恥ずかしいことで。

まして、皆のいる前でペットボトルに済ませようなんて、まるで変態みたいな行為なのだと。繰り返し叫び主張した蓉子の言葉が、呪縛のように朝香を絡め取る。

本当なら、朝香の取ろうとした行動は、決して責められるようなことではないのだ。

オモラシを避け、バスの床や座席を汚さないための配慮として。もうどうしようもなく我慢できない時の緊急避難として。我慢できないオシッコを、手ごろな入れ物に済ませようと言うのは、むしろ正しいはずの行為である。

けれど、蓉子にそう強く意識させられてしまったせいで、朝香はもう一度ペットボトルへのオシッコを試みることができずにいた。それはおかしい事で、女の子が絶対にやってはいけないのだと禁じられ、あんなに繰り返して言い聞かされれば、もうなけなしの勇気

なんて完全に打ち砕かれていた。

朝香の前には二つの選択肢がある。

恥ずかしいけれど、バスの外まで出て、どこか、外で——茂みとか物陰とかで、オシッコをするのか。

それとも、バスの中で、あのバケツにオシッコを済ませるのか。

我慢という選択肢は、これ以上選び続けることができない。乙女のダムに注ぎ込まれ続けた恥ずかしい熱水はすでに危険水域どころか、ティーポットの容量いっぱい、縁のすれすれぎりぎりまで盛り上がっている。弱く脆い表面張力のおかげでかろうじて溢れずに堪えているようなものだ。少しでも気を抜けば、確実に水面が波立ち溢れ出してしまうことが明らかだった。

(でちゃう……でちゃう……っ)

350mlの、蓋の空いた空のペットボトルが朝香のすぐ足元の床に転がっている。さっき、朝香がオシッコをするはずだった容器が、床の上に鎮座し、ばかりと空いた口を朝香の方に向けて倒れていた。

もし。もし。

あの時、ほんの少しでも——たとえ全部とは言わなくとも、あのペットボトルの半分くらいでも、オシッコを出せていたら——。もしかしたら、あとほんの数分くらいは、余裕があったかもしれない。どうにか二つの選択肢のどちらかを選ぶくらいの、猶予が与えられていたかもしれない。募る尿意の苦しみの中、朝香は悔やむ。

(あ、あつ、で、でちゃう、うっ)

堰きとめられ続けてきた熱い濁流が、ダムの底の一番脆い部分、もはや両手の力を借りて押さえこんでいるばかりの水門へと押し寄せる。凄まじい水圧とともに尿意という牙を剥き出しにして押し迫るおしっこが、ついに一滴、二滴と滲みだす。

細く緩んだ水路を膨らませ、緊張を続けていた括約筋が限界を叫んで緩み、水滴は水流へと変わってゆく。

下腹部に響く強い解放感。耐えに耐え続けていたものが、諦めと共に力強く噴き上がる。同じように強張っていた朝香の表情も、きつく噛み締められていた口元も、同じように緩んでいた。

一度開け放たれたものを、再度塞ぎとめるなどということが出来るはずもなかった。すがすがしいほどの解放感と共に、勢いを増した水流が、身に付けた服など無いかのように激しく飛沫を上げてほとばしる。

下腹部に鈍い痛みを感じるほどの尿意だ。我慢している量も普段の比ではない。噴き出したオシッコの水流が、床の上にあった350mlのペットボトルにみごと命中。射的の標的みたいにすこんと弾き飛ばした。

ペットボトルを軽々と一杯にして、なお余りあるオシッコの噴射が、水たまりを床にじょぼじょぼと吹きこぼしてしまう。

黄色い水たまりの中に空っぽのペットボトルをオシッコまみれにして。座席の上に出現した女の子の噴水は、バスの中にいつまでも水音を響かせ続けていた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・70 トイレ我慢巡礼路

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/27/2013 09:00:00

BODY:

解放されたバスの扉から、多くの女子生徒がパーキングエリアのトイレに向かって進んでいた。

脚の付け根を押さえ、太腿をすりすりと擦り合わせ、お尻を突き出してくねくねと揺すり、前かがみのつま先立ち。走るなんてもつてのほか、これ以上スカートの奥に被害を広げないよう、慎重に慎重を期した擦り足が精々の、走っているなんてとても言えないのろのろ歩き。

それでも彼女達にとっては激しいオシッコ我慢を続けながらの『全速力』である。公衆トイレまでの最短距離 3 0 0 m はあまりにも遠く、果ての無い道のりだった。

わずかな段差をまたぐだけで下着を押さえた指の間からふしゅると雫が噴き出し、白い腿を伝いふくらはぎを流れ落ちる。アスファルトの舗装を小さく躓くつま先が、じゅじゅと濡れた足跡を引きずる。

急激な尿意の波によって舗装の上で立ち止まってしまった少女が、新しくサービスエリアに入ってきたクラクションに急かされ、突きだしたスカートのお尻から、押さえた下着越しに激しくばしゃばしゃと水流を噴き出させてしまう。

そこかしこで我慢の限界を迎えた 2 年 A 組の生徒たちがしゃがみ込み、立ち止まり、我慢の限界に漏らしちびったオシッコで駐車場を濡らして中丸。

それを指差し、あるいは蔑むような視線を向けて、多くの人々が囁きかわす。

彼等は少女たちの姿を見ては、憐憫や同情の、あるいは軽蔑や嫌悪の——そしてなによりも、滅多に見られない奇異な光景への好奇心と興味に満ちた視線を寄せていた。

「あのお姉ちゃんたち、オモラシてるよ！！」

「やだ、間に合わなかったの……？ ……可哀想……」

「ちょっと、あの子もよ？ ねえ、ほら、あの制服……同じ学校なんじゃない？」

「ほら、〇〇学院の……結構いいところの学校じゃない。みんなオモロシしちゃってるの？ やあねえ……」

人ごみの中には、事情の良く解らない他の乗客に、経緯を説明している観光客の姿まである。途方もない時間の限界我慢を強いられたいで、さらに無慈悲にも恥辱を烙印を押されるようなものだ。

オモロシ、オシッコ、トイレ。みっともない、恥ずかしい、我慢できないの？ 容赦ない単語の羅列に少女たちの繊細な羞恥心は無惨に切り刻まれていった。

悲壮な表情は辛い我慢の汗に湿り、涙に濡れ、食いしばった歯が羞恥に震える。

並ぶ2年A組の生徒達は、みな同じ制服姿である。ソックスやタイツを変えたり、ジャケットの代わりにブラウスの上にベストを着ている生徒もいるが、その大半は同じ学校の、同じ学年の生徒であることは一目瞭然だろう。

その彼女達が一人の例外もなく、はっきりと『オシッコを我慢してます！』と宣言しているに等しい姿で、サービスエリアの端の駐車場から、公衆トイレへの道のりを、苦悶と喘ぎに表情を歪めながら、ゆっくりと進んでゆく。

脚をきつく交差させて、擦り足のその歩みはもどかしいくらいに遅く、そこかしこで立ち止まっては激しいおチビりを恥ずかしい下腹部の中心から噴き出させ、じゅじゅと下着から勢いよく黄色いオシッコを染み出させては地面に水たまりを作ってゆく。

アスファルトに点々と並ぶ水たまりは、恥ずかしいオシッコ巡礼路の案内図のようなものだった。

一度しゃがみ込んでしまい、激しいおチビりをほとばしらせて地面に大きな水たまりを広げては、それでもなんとか心を取り戻してまた歩き出す。そんな少女も多いた。

公衆トイレまでの300mは、バスからトイレに向かう最短コース。必然的に生徒たちは皆そこをなぞるように歩くしかない、少女たちのトイレ我慢巡礼路だ。

先を行くクラスメイトが地面に噴きこぼしたオシッコの痕跡は、その後を通る少女達に、その色に、匂いに、『ここがオシッコをしてもいい場所ですよ』と囁いているかのよう。むろんそんな事実はないのだが、限界寸前まで溢れそうになっている乙女のダムは、誤認のままに放水命令を連発し、股間の水門を解放せよと叫ぶのだ。

2年A組の恥ずかしいオシッコ我慢巡礼路を示すいくつかの水溜りをさかのぼれば、それは駐車場の端に止められたバスへと繋がっている。

バスの前には、思いつめた悲壮な表情で、あるいは羞恥と屈辱に顔を歪め、しゃがみ込み、動けなくなったままばちゃばちゃと足下に恥ずかしい水流をほとばしらせる少女達の姿があった。バスを降りたいものの、もうそれ以上動けなかった生徒たちは、深く身体を曲げたりしゃがみ込んで動けなくなったまま、乙女の恥ずかしい水流で地面を濡らしている。中にはとうとう開き直ったか、恥を忍んで下着を下ろし、バスの前で勢いよくオシッコを始めてしまう少女もいた。

社会見学バスを思う様マーキングし、勢いよく流れおちる少女たちのオシッコ。

この貸切バスが、たったいまおなかの中をオシッコでぱんぱんにした2年A組の女生徒28人を満載にしてサービスエリアに到着したばかりだということまで、白昼の元に晒していた。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・71 2年A組の“マーキング”

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/28/2013 09:00:00

BODY:

「見てみろよ、ほら、あれ」

「うわ……すげえ……。あれ、全員そうなのか？」

少女達を取り囲む人々の中、特に男性を中心に、隠すことなく下卑た視線を向けてくる者たちもいた。思春期の女の子が人前でオシッコを我慢している仕草なんで、それだけでも十分に『ある趣味』をもつ男達にとっては垂涎の光景であろうが——十代の幼さを残した彼女達が羞恥に顔を紅く染め、俯いてきつく唇を噛み、言葉少なに脚をモジ付かせる様は、男達の欲望を誘うに確実であった。

「やべえ、これ、ちょっと俺目覚めそうかも」

「馬鹿言ってるなよ」

「いや、ほら、だってさあ」

荒い吐息を必死に堪え、押し寄せる尿意の波に喘ぎ声を漏らし、見られまいと濡れたスカートの肢体をよじり、立ち止まって硬直した足元にばしゃばしゃと新鮮な水流が進る——そんな有様の少女達が十人以上、延々とサービスエリアを横切り歩いてゆくのだ。

滅多に見られない光景に、容赦なく携帯カメラのレンズが向けられ、シャッター音までもが響く。同様に動画だって撮られているだろう。

人一倍羞恥に敏感な年頃の少女にはあまりに無残な仕打ちだ。

「本当、もうなんなのあの子達……信じらんない？」

「ですねー。ちゃんと漏らす前にトイレ言っとけって感じ。つかいい歳して、恥ずかしくないのかなあ。我慢しろっての」

「ねえねえ、ママー、あのお姉ちゃん達おしっこだよ、おトイレ我慢してるよ！」

「ほら、指差さないの！ そうね、キリエはちゃんと我慢できたものね、えらいえらい」

一方、女性陣はどちらかと言えば軽蔑、あるいは侮蔑の感情が強い。自分たちもトイレ、排泄に関しては同じように人一倍の苦勞をしているだけにか、サービスエリアで漏らしてしまった少女達、同性の痴態に対しては殊更に冷ややかだった。

そして。

「間違いないって！ ほら、良く見ろよあの子達、絶対そうだって、さっきのバスから降りてきた子達だって……」

「うおお……マジか？ さっき見逃したんだよ俺……うわあ……」

「だ、だれか、カメラ、カメラ持ってねえ！？」

高速道路の大渋滞において、並ぶ車列はほぼ同じ速度で進む。この時間、サービスエリアに辿り着いて休憩している数多くの車の中には、佳奈たちを乗せたバスの近辺を並走していた車も少なくなかった。

「ちょっと……なに、本当に漏らしちゃったの？ バスの中で済ませればいいじゃん」

「いや、でもあれはしょうがないんじゃないかなあ……」

進まぬ渋滞の車列、不自然な路肩停車を繰り返す不審な運転をしていたバスと、そこから降りた9人の少女——あの一連の『不祥事』の顛末をしっかりと覚えている者が、この場にも居たのである。

あの時、高速道路の路肩で起きた一連の事件は、忘れるにはあまりにも鮮烈で衝撃的な光景であった。

制服姿の少女たちが、路肩に止めたバスの陰でオシッコをしようとしていた事や。

動き始めたバスに気づかずに、下着を下ろしスカートたくしあげ、女の子の大切な所をあらわにしていた事や。

高速道路の路面に恥ずかしいオシッコを噴き出させる瞬間や。

その後動き出したバスを追いかけ、パニックになって転んでしまう少女や。

満足に下着も引っ張り上げられないまま、ほぼ下半身丸出し状態で足の付け根を抑え込み、バスを追いかけた少女たちの恥辱の姿を、目撃者達は一部始終仔細漏らさず記憶していた。

いまもあの路肩に残されているであろう女の子のオシッコの『マーキング』は、あのバスに居た2年A組の少女たち全員に、オシッコ我慢の限界にあるという烙印を焼き押したに等しい。

同じ制服と同じバス、その符号ははっきりと、高速道路で起きた痴態とこの場を歩く少女達を結びつけ、一つの結論を弾き出す。

いや。たとえそれを知らずとも、おなじ制服を着た少女達が激しく身をよじり足踏みをし、サービスエリアの一点へ脇目もふらずに進む様は、他に誤解のしようがない。

ギョツとスカートの上からあそこを押さえる恥ずかしい格好をしていれば、全員がオシッコをがまんしているのはすぐに分かることだ。

噂はさざ波のように広がり、さらに多くの好奇の視線となって少女達につき刺さる。逃れようにも隠れる場所はなく、目指すトイレまでは遠い。押し寄せる尿意が下腹部の刺激と共にじゅじゅうと溢れ出して地面を直撃し、それがまた何よりの『証明』となってしまう。

紺色の制服は、2年A組の少女達の所属を示すだけではなく。彼女達が限界までオシッコを我慢し続けていることを、周囲に宣伝しているに等しかったのだ。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・72 戸塚智代その2 / 木場小百合

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/29/2013 09:00:00

BODY:

そしてまた、数名の少女達はバスを降りたものの、もはやサービスエリアのトイレまで向かい気力もなく、駐車場で力尽き、そのまましゃがみこんで、泣きながら足元のアスファルトに恥ずかしい水たまりを広げていった。

智代のオシッコは、バスが停車する以前から既に半漏れ状態であった。智代の下腹部の小さな器に納まりきらないオシッコは、もう両手両足の指で数えきれないくらいのおチビリを繰り返している。その上で、何度じゅうじゅうと下着に熱い雫を噴き出させてしまっても、下腹部の乙女のティーポットには次々と新鮮なオシッコが注ぎ込まれ、膀胱はまったく縮まる様子もないまま、激しい尿意を訴え続けているのだ。

智代は目に涙を浮かべながら必死にトイレへ走った。何度も何度もおチビリをしてしまい、既に下半身はオモラシとまったく変わらない状況だ。事実、これまでの間に智代がチビった恥ずかしい熱水の総量は、智代の膀胱の限界貯水量をはるかに超えている。

既に一回、たっぷりとオモラシをして、限界まで我慢したトイレ1回分のオシッコで制服と下着を汚してしまったのに等しいのである。

股間にじゅうじゅうと温もりを感じながら、オシッコが足を伝っていくのが感じられる。智代の走った後には、おしっこの染みが点々と

残されていた。

「あつ、あつ、あつ！！も、もうだめ、なのっ、っ！！！」

地面に恥ずかしいオモラシの痕跡を点々と残しながら——智代は懸命に前へ進もうとする。

繰り返されるおチビりが脚を伝い、握り締めたスカートの布地をぐっしょりと濡らして、ソックスに染み込んで地面に飛び散る。下着の股布からは直接ばちゃばちゃと雫が噴き出し、再びおチビりではすまされない大量のオシッコが溢れだしていた。

（や、やだぁ……だめっ、だめなの、だめなのに……ああぁ……、お、オシッコ、まだいっぱい、でる……っ）

興奮と緊張で下腹部がはりつめ、じゅじゅじゅう、ぶじゅじゅう、と連続してみつともなくも激しいオシッコの噴射音。もはやおチビりなんて可愛いものではないのだが——いくらチビっても、一向に智代のおなかは楽にならない。

（、やだ……ぁ……もお、やだ……、なんで、こんなに、オシッコ……でちゃう、の……？）

ぐず、と嚙りあげる鼻声と共に、智代の頬を涙が伝う。全身の水分をあちこちから絞り出しながら、それでも智代のおチビりは停まらない。あるいはこのままずっと、百回を超え二百回を数えるのかもしれない。

——二百回も、おチビり。

ありえない回数だが、今のペースで行われれば絶対にないとは言い切れない。小さな膀胱を抱え、猛烈な水圧を押さえ込むため酷使され続けた排泄器官はじんじんと疼き、オシッコの出口はすっかり赤くなるほどに擦り切れてしまっている。

繰り返される噴出が、下着に染みてゆく熱い感触を広げ、ぐっしょりと湿ってもう保水力の限界に達した制服をまた新しく潤わせる。

他の少女達が精々、数度味わえばよいオモラシの恥辱を、智代はその何倍も何十倍も受けなければならないのだ。

（わ、わたしの、あそこ、壊れちゃった、よぉ……っ）

いくら利尿作用の強い紅茶を飲んだとはいえ、智代は公園を出発する前にトイレに行っているのだ。それなのに、それなのに、こんなに何度も、なんども。

——智代の下半身は壊れた様にオシッコを漏らし続ける。智代の心が擦り切れるのと、どちらが早いのだろうか。

智代の斜め後ろ、バスの車体のすぐ真横で、小百合は一步も動けなくなっていた。

「はっ…、は、…ツ、ふうっ…」

しゃがみ込んでしまっていない。まだ、小百合はトイレに向かう事を諦めてはいない。

けれど他の少女達との差異はそれくらいのもので、他はほとんど似たような有様だ。懸命に息を詰めながら、一時も休まずにその場で足踏みを繰り返し、太腿を擦り合わせる。

小百合の我慢はやや特徴的で、他の前屈みになっている少女とは異なり、背中を反らし、薄い胸を突き出すようにして両手を背中から回し、おしりの方から脚の付け根に押さえていた。この体勢でびよんぴよんと跳びはねるのが、小百合の標準的なオシッコ我慢のお作法なのである。

しかしいま小百合のぱんぱんの膀胱は跳びはねるところか歩くだけでも破裂しそうで、もはやいつも通りの我慢ダンスで尿意の波を和らげることもできない。浅く開いた腿の付け根に両手を重ねるように押さえ当て、手のひらで覆うようにしてぎゅっと女の子の恥ずかしい場所を握り締める体勢のまま、ガクガク膝を震わせる。

目には涙を浮かべ、頬を赤くし歯を食いしばって、小百合は全身を使って猛烈な尿意に耐え続ける。

しかし——バスを降りてからはや十五分、小百合はいまだに、一歩も先に進めていない。

涙に滲む小百合の視線が遙か先、サービスエリアの駐車場の彼方にある公衆トイレを見つめる。

(ダメ…も、もう、動けないっ…出ちゃう…っ)

きつく押さえつけたスカートの奥、下着の股布にはじゅじゅっ、じゅうっと熱い雫が滲み、太腿に挟まれたスカートの色を変え始めてゆく。

まるで、地面にこぼさなければオモラシではないと主張するかのように。小百合は自分の手のひらで作った入れ物に、オシッコを受け止めてしまう。小さく白い手のひらはみるみる、下着でろ過された黄色い水流で満たされ一杯になってゆく。

女の子の大切な場所にあてがった手のひらに、おチビりの熱い水流を受け止めながら、小百合はぶると肩を震わせた。

「んあッ、……あ、あう、ううっ……」

バスの周囲に人垣を作り、小百合達を遠巻きに眺めている他の人々の視線の中、こみ上げる尿意を押さえ込む事ができないまま、くねくね、もじもじ、前に突き出した腰をくねらせおしりを揺らしてしまう。

悔しさと羞恥に、耳の先まで紅くなるのがわかった。

何度も、何度も。渋滞の間も、バスが路肩に止まっている時も、根を上げそうになる乙女のダムを必死に押さえ込み、くじけそうになる心を奮い立たせて、折角ここまで我慢したのに。

最後の最後に立ちはだかる、トイレまでのあと300mの距離が、絶望的なまでに遠い。

じゅ、じゅうっ、じゅじゅじゅッ

下着の股布を貫通して噴き出すオシッコが、押さえ当てた手のひらの奥に激しく吹き付け、手のひらの器から溢れ出す。仰け反る体勢の我慢と合わせて、手の中にオシッコをしているのを周りに見せつけているような格好である。

「はああ……う、あ……あんっ……」

スカートの奥にじわじわと広がってゆく熱い滲みは、いよいよ拡がり、さらに広がった水門からぶしゅうううと凄まじい水圧が手のひらに叩きつけられる。

小百合はおなかの中が空っぽになるまで。脚の間の手のひらの器に、オシッコを出し続けるのだった。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・73 順番待ちとぶり返す尿意

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/30/2013 09:00:00

BODY:

バスを降り、さらにサービスエリアまでの長い道のりを踏破して。

2年A組の少女達の中で、特に運の良い——あるいは、オシッコ我慢の得意な少女達は、どうにかして公衆トイレまで辿り着く事が出来ていた。

少女達もまた、女性用の公衆トイレの前に蛇行し行く手を塞ぐ、百人をゆうに超える順番待ちの行列に驚き、戸惑い、挫けそうになり、——それでもなおお互いに励まし合い、心を奮い立たせて、その列の一番後ろについた。

クラス担任の蓉子が見せたのように、順番を抜かしたり、無視して入り口に駆け込もうとしたりといった醜態はもちろん見せない。きちんとお行儀よく、礼儀正しく、順番待ちの苦行に身を投じたのだ。

その理由は明白である。ちょうどこの時、隣の男性用トイレでは、一世一代、空前絶後のド派手な大迫力オモラシをして、そのまま腰を抜かしへたりこんだまま動けなくなっていた蓉子が、左右を初老の男性に抱えられてサービスエリアの事務所まで引きずられていったところだった。

両脇を抱えられて引きずられていく蓉子は、なお先生なのに、大人なのにと叫びながら、世話を焼いてくれている男性達の手を振りほどいてトイレに戻ろうとし、その場にまたぶじゅうと激しい水流を迸らせる。

まったく、なにひとつ、見習うべき人生の先達に相応しい行動を示さないままに退場してゆくクラス担任の評価は、かつてない最低ランクにまで落ち込んでいた。

——あんな恥ずかしいこと、死んだって真似したくない。

それが皆の総意だった。

たとえ限界であっても、わめいたり騒いだり、暴れたりはおもてのほか。

蓉子本人は預かり知るところではないが、蓉子の醜態、暴挙は見事に反面教師として、2年A組の少女達に、あくまでも慎ましく、しやかに振舞うという、淑女の振る舞いを教えていたのである。

教師があんなだから生徒達も似たようなものだなんて、安易に思われたくないという心理が、見事なまでの連携を生んでいた。行列にはすでに大きく制服を濡らし、隠しようもないほどにスカートの股間からお尻までの色合いを大きく変えている少女達の姿もある。

そうでない少女達も、激しく掴まれた股間には大きくしわを寄せ、下着には多かれ少なかれ、チビってしまったオシッコで恥ずかしい染みを広げている。長い長い高速道路での我慢と、繰り返される悲劇。ここまで辿り着いた少女達とて、まったくの『無傷』では済まなかった。

中には、もうはっきりと、我慢できずにオモラシを済ませてしまった様子の少女達もいる。まだ我慢が続けている他のクラスメイトとは明らかに異なり、下半身をずぶ濡れにし、なおぴちゃぴちゃぼたぼたと雫を足元に垂らしているような少女達だ。

しかし、そうした『オモラシ済み』の彼女たちが順番待ちの行列に並んでいるのは、トイレで汚れた服を着替えたり、下半身を濡らすオモラシの後始末のため——ではない。

「はあああ……っ」

「んあ……う」

「くう……っ」

オモラシの証、大量のオシッコでたつぷりと制服を汚してなお、彼女たちはなお下腹部に滾る、激しい尿意に苦しんでいたのだ。

そう。ここでもまた予想外の二度目の尿意によって、2年A組の少女達は翻弄されていたのである。

少しずつおチビりを繰り返して、すっかり濡らしてしまったもの。

懸命の我慢に関わらず、高まる水圧に乙女の水門が押し開かれ、公衆トイレまでの途中でオモラシをしてしまったもの。

恥ずかしい決意と共にバケツやバスの前で、オシッコを始めてしまったもの。

経緯は様々であれど、彼女達『オモラシ経験済み』組は、確かに下腹部に膨らんでいた恥ずかしい水風船を満たす熱い水は、残らず押さえた下着の中や、スカートの奥に噴きこぼしてしまったはずだと言うのに——下半身をずぶ濡れにさせた少女達の身体の中、ぴくんと張り詰めた下腹部はみるみる新しい恥水に満たされてゆく。

困惑と戸惑いの中、『経験済み』のはずの少女達は有無を言わず突如の尿意我慢リターンマッチのリングに上げられてしまったのである。

その理由は複雑である。体調や、長時間の緊張の具合で不用意に尿意を覚えることもあるだろうし、飲料工場で摂取した利尿効果たつぷりの紅茶やスポーツドリンクのせいということもある。しかし、それよりもなによりも。

きちんとしたトイレに入らず、緊張状態でオモラシをした状態では、完全に尿意が解消される事はないという事実を、少女達は知らなかったのだ。

単純な思考である。激しい緊張と羞恥の中出口をきつく塞ぎ、下着の奥の水門が開かないように懸命に押さえ、『出しちゃダメ』な状態で漏らしてしまう場合と、誰の目も届かない場所で一人静かに心を落ちつかせ、大事な部分をあらわにして、きちんとしゃがみ、あるいは腰かけ、自分から恥ずかしい水門を全開に開いた『出してもいい』状態でオシッコを出す場合と。

一体どちらの状態が、排泄器官がトイレに適した弛緩状態になるのかは明白なのである。極度の我慢で酷使され、未だ緊張状態にある下半身では、たとえ我慢の限界を突破してオモラシが始まったとしても、そのまま完全に膀胱が空になることはあり得ないのだ。

トイレに入って用を済ませる——『オシッコをするための場所』で、お行儀よくきちんと用を足せる、のであればともかくも、トイレではない場所でのオモラシでは一度に放水は終わることはなく断続的に訪れる猛烈な尿意と共に、小康状態と激しい噴出の繰り返

返しとなる。

『ちゃんとしたオシッコ』が出来ていないと判断した理性は、たとえ限界を超えた我慢の結果であっても、ある程度下腹部の水風船の中身が抜けて楽になったところで、自然と水門を閉ざしてしまうのである。

結果、中途半端なところで止まったオシッコは、身体が冷えるにつれすぐさま第二派の尿意となって襲い掛かってくるのだ。

これまでは膀胱が限界水量までオシッコを溜め、猛烈な水圧で膀胱の入り口を塞いでいたため、『もう入りきらない』と身体の中に滞留していた水分は、膀胱の貯水量が減ったことを敏感に察知し、恐ろしい速度で少女のダムへと恥ずかしい熱水を補給してゆく。

まったくありがたくもない水分補給は、迅速かつ高速に貯水タンクを満たし、一方で長時間の我慢で酷使され続けた排泄器官は過度に敏感になり、些細な水位の上昇であっても、必要以上に強烈な尿意を感じ取ってしまうのだ。

一度そうなれば、漏らしちゃったばかりという事実も相まって、少女達の羞恥は二重に跳ねあがる。

——さっき、漏らしちゃったばかりなのに、なんで……？

言う事を聞かない、自身の身体への不信や困惑は、更なる尿意の呼び水となり、そんな尿意は実際に循環器系を刺激して、一層多くの不要な水分を健康的な身体から絞り出そうとしてしまう。その苦痛は並大抵のものではない。

本来、『オシッコが溜まった』のだから『トイレに行きたい』という欲求が起こるのであるところを、その逆、『トイレに行きたい』と感じているのだから『オシッコが溜まった』のであるに違いないと身体の側が誤認して、本当にそれに足るだけの水分を、膀胱へと注ぎこんでしまうのだ。

順番待ちの少女達の我慢は、まだ終わらない。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 社会見学バスの話・74 黄色いナイアガラの滝

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 長編連載

CATEGORY: 長編連載

DATE: 08/31/2013 09:00:00

BODY:

サービスエリアの女性用公衆トイレ。その前に蛇行する長い長い順番待ちの列は、ゆっくりとゆっくりと進んでゆく。

もう、これ以上ないくらい我慢を続けているのに――。

2年A組の少女達にトイレの順番が回ってくるまでのカウントダウンは、時計の針が止まってしまったかのように遅い。何度前を見ても百人近い行列は、高速道路の渋滞の列同様、ほとんど進む気配もない。

順番待ちの行列の中に、佳奈たちは固まって並んでいた。他の順番待ちの女性達とは明らかに違う様子の、見るからに『もうだめ、限界』と全身で叫んでいるかのような我慢ポーズで、およそ10人余りの少女達が荒い息を繰り返し、しきりに脚をモジ付かせ、腰をくねらせ続けている。同じ制服姿の少女達が、ずらりとオシッコ我慢の見本市のようにトイレに並んでいるのは、いっそ壮観な眺めといって良かった。

固まって行列に並ぶ少女たちの先頭にいるのは頼子だった。交互にきつく目をつぶり、ピンと背中を反らせてきゅっと口を嚙む。

小さな手のひらは清楚な膝丈のスカートの前に重ね揃えて押し当てられ、爪先はひっきりなしに地面をたたく。衆目の中でせめて恥ずかしい格好をするまいと必死なのが一目で分かる、躡けられたお行儀のよさを窺わせる我慢だ。が、もはやその小さな腰は小刻みに震えており、乙女の恥ずかしい水門が限界なのがはっきりとわかる。

きつく両手で支えられた脚の付け根、スカートの奥では、恥ずかしい下腹部の水圧に耐えかねたように、小さなオシッコの出口がヒクつき、ぷくりと膨らむ。小さな出口が緩み、いまにも重ね当てた手のひらの中めがけてじゅじゅじゅしゅわああと、つつまじやかな頼子の外見とは裏腹の、激しくも豪快な水流を迸らせてしまいそうな様子だ。

すぐ後ろに並ぶ綾は、そんな頼子の肩に捕まるようにして、辛うじて倒れそうになる身体を支えていた。深く「X」の字を描くように交差させた脚は、ぎゅっと膝を重ねて上下に曲げ伸ばしを繰り返し、尿意に震える女の子の『イケナイ場所』を支えていた。クネクネとよじられる腰は、下腹部のダムの最も脆い場所にのしかかる総水量を少しでも分散させようとひっきりなしに動き続ける。

しかし、疲れきって言う事を聞かない足は前に歩くどころか、しっかりと地面を踏みしめて立つこともできない。ただただ、太腿を必死になって擦り合わせ、オシッコをせき止めようとするだけで精一杯だ。頼子に体重を預け、縋りつくようにして宙をさまよう視線は、ときどき思い出したようにきつく閉じられる。ずん、ずんと乙女の水門を乱暴にノックする身体の内側からの欲望に、綾はぶかぶかの袖を掴むようにして必死に耐えていた。

スカートの前を握り締め、俯いた頬を長い髪が流れる。熱い吐息が頼子の背中を擦っていた。

羽衣は、そのすぐ後ろで乃絵と支え合うようにして身体を寄せていた。内股に爪先を曲げ、スカートを持ち上げるような大胆さで、遠慮なく身体の前から深く手のひらを股間へと伸ばす。

右手を脚の付け根に差しこんで、人差し指と中指で下着の上から直接、大事な場所を押さえ込むその様は、思わず好奇の視

線を寄せたくなるほど見事な我慢ポーズだ。下着の上からはっきりと『オシッコの出口』ピンポイントで押さえるのは、我慢効率としては最も効果的ながら、それだけ羽衣の状況が切羽詰っていることを知らせていた。めくれたスカートの裾から丸見えの白い下着には、すでにじわじわと黄色い染みが広がっている。

乃絵もその隣で、おしりを突き出し膝を曲げた前傾姿勢となり、きつく歯を噛み締めていた。身体の内側から膨れ上がる凄まじい水圧に、今にも打ち破られそうな脆い水門へ、ぶるぶると肩を震わせて左手をあてがって耐えている。

乃絵は羽衣のようにはっきりと『出口』をふさぐのではなく、乃手のひらでおんなのこの大事な部分全体を包み込むようにして覆っていた。きつく抑え込むのではなく、常に動かし、下着の上から『おんなのこ』を撫で、さすり、時には優しく揉みほぐすようにして、押し寄せるに用意を和らげようとしているのだ。

羽衣も乃絵も、既にその足元には、幾筋もの水流が伝い落ちて、脚元のアスファルトを濡らしている。体内の水圧に負けて噴き出した滴が、下着にぶつかりぷじゅっ、とくぐもった恥ずかしい音を響かせる。膨らみきった羞恥の水風船は、時間の経過とともに激しく収縮を繰り返し、押し寄せる波の激しさはいよいよ強さを増している。懸命にあそこを抑え込むものの、片手だけでは水圧を支えきれないのは明らかで、二人はすぐにでももう一方の手を応援に向かわせるべきだった。

しかし、寄り添う二人は、その手を指を互い違いに固く繋いで離さなかった。この窮地を乗り切るためには、『おんなのこ』を直接手で押さえ握りしめるよりも、つないだ手でお互いの心の支え逢うことが大切だと理解していたからだ。

そんな熱々カップルぶりを見せつける二人から視線をそらし、一見、平静を装っているのは千代だ。澄ました横顔をつんとそむけ、『私は他の子たちとは違うの』とばかりに表情を取り繕ってはいるものの、小刻みに震える脚はそれを隠し切れてはいない。革靴の爪先を立てるようにトントンと地面を叩き、制服のスカートのポケットに深く手を差し入れて、そこからぎゅっと下腹部を押さえ込んでいる。

人前で前押さえなんてするわけないという意志の表れだが、制服の布地にくしゃくしゃに皺を寄せるくらいにきつく下腹部を押さえ込んでいては説得力も薄い。長時間の我慢で張り詰め、少女たちの下腹部を歪めるほどにまあるく身体の外へ向けて「せり出した」乙女のダムを、両手で抱え支えるように。

あるいは、おなかに宿した大切な命を抱えるように——きちんと背伸びをして、まっすぐ順番の列に並び、けれど千代の頬は赤く、小さく開いた唇からは熱い吐息が漏れていた。彼女もまた限界が近い。

きちんと背伸びをして待つ千代の後ろで、亜里沙はもはやそれどころの騒ぎではなかった。我慢の限界を超えてしまった彼女の尿意は、既に順番待ちを待つどころの余裕を残していなかったのである。

亜里沙は水筒代わりに持っていたペットボトルのふたを開け、大きく開いた足の付け根に近づけていた。立て膝にしゃがみ込み、下着を膝までずり下げて股布を大きく引っ張り、ペットボトルの飲み口をオシッコの出口へと押し付ける。

せっかくバスを降り、公衆トイレまでたどり着いたのに——きちんと『オシッコのできる場所』を目の前にして、亜里沙はペットボトルの中に恥ずかしい排泄をしなければならなかった。

丸く小さな排泄孔が、白い下腹部の先端にぎゅっと押し当てられる。同時に、中身のぱんぱんに詰まった水風船を針でつついたかのような噴射がはじまった。我慢に我慢を重ね続けたおしっこは量勢い共に半端ではない。透明な容器の中に注ぎこまれる水流の勢いはすさまじく、少女の排泄孔は入り組んだつくりをしているため、小さな飲み口には到底おさまりきらないのだ。熱々のホットレモンティーの多くは小さな飲み口に注ぎ込むことはできず、黄色い水流は溢れて床に飛び散ってしまう。

小さな容器の中に勢い良く注がれるオシッコは見る間にペットボトルを——亜里沙の『おんなのこ』の代わりされた容器をいっぱいにし、その飲み口から黄色い雫を逆流して噴き出させる。

女の子がオシッコを途中で止めることはとても難しく、排泄孔をうまく絞って勢いを調節するなんてややこしい芸当は不可能に近い。中途半端に出したおしっこは、却って亜里沙の尿意を加速させる。もういっぱい、もう出すところはないと言っているのに、意地悪なオシッコはたったいま覚えたばかりの女の子の恥ずかしい出口、脚の付け根の水門めがけて押し寄せてくる。

並ぶ少女達と同じ数だけの、満水状態の乙女のダムが、ずらりと並んで勢ぞろい。しきりに左右に前後に上下に揺れ動きながら、じゅじゅ、じゅうとうおまたの間、脚の付け根の奥にある秘密の出口を熱い雫で濡らしてゆく。

高速道路での悲劇から、何人ものクラスメイト達が、下着を、スカートを、押さえた手のひらを濡らして脱落していった。そんな過酷な道のりを乗り越え、予選とも言える長い我慢を踏破して辿りついた『選抜組』の少女たちに与えられたのは、衆人環視の中、身を隠す事も出来ず、動けず、すぐ目の前の女性用トイレの個室に駆け込むこともできないまま、オシッコ我慢の限界を迎えることだったのだ。

いまや順番待ちを強いられる2年A組の少女たちの姿は、それぞれ脚の付け根で、1リットル近くの恥ずかしい水を抱え、グラグラ沸騰するティーポットを抱え続ける拷問のようだ。沸き立つ尿意は少女たちの意思を無視して激しく暴れ、股間を押さえ込む手は、揺れ動くポットをひっくり返すまいとして懸命に押さえ持ち上げているのである。しかしその重みに耐えかね、酷使された少女の身体はもはや限界だ。

「あ……あ、あッ……、だめ……ッツ！！」

十人いれば、十人分の我慢。お互いを支え合い、励まし合い、それだけ長く我慢できる——なんてことはあり得ない。一つ堰をきれば、それは即座に呼び水となって、左右のダムの崩壊を誘った。行列の中——ずらり並んだダムの奥。もっとも脆い水門が破られ、激しい放水音をぶちまけた。

ぶしやあああああああああああッ！！

「あっ、あっ、あっ………！！！」

遂に決壊がはじまったのだ。同時、それは見る間に周囲に伝播し、少女たちはまるでそれを合図にしたかのように、一斉に放水をはじめてしまう。

連鎖的に水門が押し開かれてゆく。行列のそこかしこで響き始める恥ずかしい水流の音が、高くアスファルトの上に飛び散った。一人のオモラシは隣の少女達の尿意を誘い、立て続けにティーポットがひっくり返る。じゅじゅじゅじゅわあああじゅわあああああッ
ぶじゅううううぶしゅうッ、びちゃびちゃじゅばばあ……トイレの順番待ちの列の中で、制服姿の少女たちが一斉に脚元に水たまりを広げてゆく。

並んだ少女たちの水門が次々にこじ開けられ、大決壊の放水が始まる。制服のスカートの上、股間をきつく握りしめた手のひら突き破るように、激しい音をアスファルトの地面の上にまき散らし、黄色い滝を出現させてゆく。

横に広がり飛沫く奔流は、まるでオシッコのナイアガラ。

恥辱に泣き出す少女達に容赦なく、携帯カメラが向けられた。そう、人混みの中にはじっとこの光景を待ち望んでいた者たちが

いた。少女達が『あの』2年A組、『あの』社会見学バスの生徒達だと知って、じっとその後を辛抱強く追いかけてた者たちだ。思春期の少女たちが限界までオシッコを我慢させられ、羞恥と屈辱の中オモラシをする——それを今か今かと待ち望み、渋滞の中、喰らい付くように執拗にその後を追いかけて、少女達が限界を迎え、恥ずかしく脚元をずぶ濡れにさせる瞬間を、固唾をのんで見守っていた不埒者である。

やめて、やめてよお。

叫ぶ声も届きはしない。フラッシュが焚かれ、シャッター音が刻まれる。揺れ動くレンズは動画の撮影だ。女性用トイレの前の、順番待ちの長蛇の行列という、オシッコ我慢を印象付けるにはこれ以上ない食らう意の格好のロケーション。

モジモジ、クネクネ、腰を振り足を踏み鳴らし、清楚な制服のスカートの前を握りしめ。遂には顔を真っ赤にして、眼には涙を浮かべ、ついに力尽き果て豪快なオシッコの滝を噴き出させてゆく少女たちの繰り広げる痴態を、一秒も余すところなく永遠に記録に残さんと、下卑た欲望が思春期の少女達をずたずたに切り裂いていく。

「あっオシッコ我慢してるよ！　ねえねえママ！！　あのお姉ちゃん達、あんなに大きいのにオシッコ我慢してる！！　あっあー！！　ほら見て、ママ！！　お姉ちゃんオモラシ！！　オモラシしてるよ！！　いけなーいんだー！！」

親子連れの——おそらくは姉妹なのだろう。幼稚園に通うかどうかのあどけない少女が、佳奈たちを指差して大声を上げる。無邪気な指摘に、少女達の恥じらいは否が応でも加速し、その苦痛は増すばかりだ。2年生にもなってオシッコ——オモラシ。それも、トイレの目の前で。

ありえないはずの痴態、恥辱。呻き、懸命に足踏みをして下腹部の水門を閉ざそうとしても、もうオシッコは止まらない。永遠に続くかのようにいくつもの豪快なアーチが地面をたたき、初夏の日差しに焼けた黒いアスファルトに、黄色い湖が湯気を上げながら広がってゆく。

じゅぼぼぼじゅぼぼぼと出来たばかりのほかほかの黄色い湖面に叩きつけられ、オシッコの『滝壺』の周辺には飛沫と一緒に白い泡まで立ち始めた。

いっそ女性用トイレを水没させんばかりに、少女たちの身体から噴き出す恥ずかしい水流は、いよいよ激しさを増してゆく——。

EXTENDED BODY:

8月の後半あたりから、だいぶ描写も練り込みも粗くなっていてちょっと申し訳ない気分。

……お話としてはあと数話残ってるんですが、流石に余裕がなくなってきたので、いったん区切ります。

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 後輩と一緒にの話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 我慢
CATEGORY: 我慢

DATE: 02/16/2014 19:05:55

BODY:

細かい設定変わってるけど昔書いた「お姉さまと一緒にの話」と同じ世界観。

<hr size="1" />

グラウンドに、部活の声がこだまする。チャイムが鳴り、一日の終わりを告げる放送が校舎に残る生徒たちの帰宅を促す。夕陽に染まる煉瓦作りの校舎を背負った中庭に、二人の少女の姿があった。

目を引くのはその片方、そわそわと落ち着きのない様子の少女である。

紺のブレザーに膝下のスカート。白二本線のリボンタイ。言わずと知れたこの学院の制服、優麟館学院のものだ。伝統あるお嬢様学校として有名な制服は、街中を歩いても人目を引くもので、独特の通学鞆と合わせて近隣の少女達の憧れである。

芦原結衣——優麟館学院の二年生である。

落ち着かない様子で辺りを見回す少女の表情には明らかな焦りをみえた。まだあどけなさを残す顔は青ざめ、寄せられた眉は困惑によじられている。

厳しい礼儀作法に知られる学院の生徒は、学院の内外に関わらず常日頃、慎み深き良家の子女としての振る舞いを求められるものだが——あまりそんな印象は無い。左右に括った栗色の髪が余計に子供っぽさを強調しているせいもあるのだろう。紅色のリボンタイは既に彼女が上級生であることを示しているが、先輩らしい威厳は感じられない。

その隣、彼女にピタリと寄り添うのは、さらに小柄な少女である。

「どうなさいましたの、結衣おねーさま？」

結衣よりも頭半分は低い、小動物のようにくりくりと大きな目をした、サイドテールの少女だ。制服胸元の緑のリボンタイは結衣と呼ばれた娘の一年後輩であることを示している。

けれど、どこかおどおどと回りの様子を窺っている結衣に対して、少女の堂々たる振る舞いはむしろ学年を逆にしてみた方がしっく

りとくるかもしれない。

それもそのはず、緑リボンの彼女——篠守裕乃は、優麟館幼稚舎からのエスカレーター組である。学院で過ごした年数で言えば結衣の数倍も上なのだ。

そわそわと足踏みをしながら、結衣はしきりに背中を気にしている。

彼女の意識が校舎の昇降口——正確に言えば『その奥』から離れないことににんまりと口元を緩め、裕乃は背伸びをして結衣の耳元に囁きかける。

「うふふ、結衣おねーさま？ そんなにあちらが気になりますの？」

「そ、それは、その……っ、だって……っ」

みるみる挙動不審になる結衣。足元が落ち着かないように身を揺すり始めてしまう先輩のそばで、裕乃がくすくすを笑みを漏らす。

そう、まるで——小悪魔のような笑みを。

「あは、結衣おねーさま、恥ずかしい格好……」

「っ……！？ ひ、裕乃ちゃん、おねがい——や、やめっっ」

先輩を気遣うように伸びた裕乃の手のひらに、結衣は反射的に身を竦ませる。裕乃の手が、はっきりと『そこ』を目指していたのに気付いたのだ。ますます落ち着きを失い、左右に揺れ出す少女の身体——その場にじっとしていることもできなくなった結衣の様子に、裕乃はもういちど笑みをこぼす。

「ダメですよ結衣おねーさま。わたしが許可するまで、おトイレは禁止です」

かあっと結衣の頬が紅くなる。

はっきりとその事実を指摘され——けれど、結衣は押し寄せてくる欲求に耐えられなかった。こんな場所で、誰の目があるかも分からないのに。してはいけないことだと、わかっているのに——。

意地悪な後輩の誘惑に負けて。ついに、少女の手のひらは、スカートの上から女の子の大事な部分を押さえこんでしまう。

「っ……あ……っ」

スカートの上から恥ずかしい場所を握り締め、前屈みになった結衣の耳元に、サイドテールを揺らして口元を寄せ、そっと囁く。

「うふふ、ねえ結衣おねーさま、どこを押さえてらっしゃいますの？ くすくす……そんなに我慢できませんの？ ねえ、どうしても、『オシッコ』、したいんですの？」

「っ……」

はっきりと尿意を囁かれ、結衣の顔が紅潮する。優麟館の生徒がこんな往来で、スカートの前を押さえて脚をモジつかせるなんて、断じてあってはならないことなのに。学院生徒どころか女の子として落第だ。

羞恥と屈辱に耐えかねて、結衣は黙って俯いてしまった。裕乃はますます嬉しそうに微笑んで、わがままを言う小さな子に言い聞かせるよう、身をかがめて結衣の顔を覗き込むでくる。

「ねえ、黙ってちゃ分かりませんよう。ちゃんと分かるようにお返事、してください？」

裕乃はぴたりと寄り添うように必要以上に身体を押し付けてくる。

するりと伸びた裕乃の手のひらが、結衣の腕の隙間をすり抜け、制服のブラウスの上からやわやわと下腹部をさする。

「ふあ！？」

硬く張りつめ敏感になった下腹部を撫でさすられて、結衣は大きな声をあげてしまう。じいんと腰骨に刺激が走り、甘い痺れとな

って脚の付け根に押し寄せてくる。こみ上げてくる大きな尿意の『波』。結衣はたまらずぎゅうっと太腿を寄せ合わせ、小刻みに腰を揺すって耐えた。

前屈みの上半身はさらに前傾を増し、結衣は身体をよじって裕乃の手から下腹部を庇おうとする。しかし裕乃はふらつく足の結衣を支えるかのように身体を寄せたまま、恥ずかしい液体をぱんぱんに詰め込んで硬く張りつめた下腹部の感触を楽しむように、絶妙な力加減でそこを揉みほぐしてゆく。

「っ、んあああ……ッ」

たまらず喘ぎを上げてしまい、耳まで赤く染まる結衣の耳に唇を寄せて、裕乃はくすくすと笑いながら、
「ねえ、結衣おねーさま？ ちゃんと教えてくださなくちゃ、私、分かりませんよ。ほら、どうなさったんですか？」

「っ……あ……」

おヘソの下でぐらぐらと沸き立つ羞恥のティーポットを刺激され、ぐいぐいと押し揉まれるたび、激しさを増した水圧がダムの一審底にある脆い水門を押し開けようとする。びく、びく、と酷使された括約筋が悲鳴を上げ、短い水路がうねり、くねり、ぷくりと膨らんで熱い雫を滲ませる。

もはや、結衣に正常な判断力は残されていなかった。桜色の唇を震わせて、結衣はとうとう、後輩の前で自分から、恥ずかしい欲求の告白を始めてしまう。

「だ、だめ……なの、も、もっ、もうっ……が、っ、がまん、できなっ…できない、いつ」

「我慢？ うふふ、なにが我慢できませんのかしら？ 『なに』が、ですか？ ねえ、ユイおねーさま？」

「っ……あ、っ、や、やだっ、やだああ……ひ、裕乃、ちゃんっ……いじ、わる、しない、でっ……」

「あら。だってわたし、ユイおねーさまがどうして苦しそうなのか、分からないんですもの。ちゃんと教えて下さなくちゃ。ねえ？ うふふ♪」

少女の手のひらが、悪魔じみた力加減で、巧みに結衣の下腹部を押しこねる。嬲るように繰り返される下腹部絵の刺激に、結衣は食いしばった唇の隙間から熱い吐息をこぼした、

「っ、あ、っあ、……っ、し、……っ、……」

ぱくぱくと唇が開閉する。恥骨に響く甘い痺れが、稲妻のように背筋を這いあがり、ぞくぞくと少女の身体を震えさせる。

かあと頬を染めて、結衣は半ば自棄になって叫ぶ。

「お、……おしっこ……、おしっこが、がっ、がまん、できない……のおっ！ もっ、もう、で……、で、でちゃう……っうっ！！」

絞り出すようなはしたない訴えが、けして小さいとは言えない声量で校庭に響く。誰かに聞かれてしまうかもしれない、そんな事に気が回らないほど、結衣は追い詰められていたのだ。

ほんの数時間前に出会ったばかりの新入生の前で、その模範となるべき上級生であるはずの自分が、まるで初等部の子のように腰を揺すり、足をモジ付かせ、懸命にトイレの限界を訴えてしまったのだ。堪えようのない羞恥に、結衣は耳まで赤くしてしまう。

その様子に満足したように、裕乃はにんまりと満面の笑みをみせながら、口元をぬぐう仕草をした。

「くすくす……よく出来ました。花マルを差し上げますわ、結衣おねーさま♪ でも、これからは恥ずかしがらずに、ちゃあんと自分から『おトイレ行きたいです』って言わなきゃ駄目ですよ？ でないと——」

「んあ…ッ！？」

ぐい、と心持ち強めに、結衣の下腹部が圧迫される。

小さなお腹をぱんぱんに膨らませた水風船が押し揉まれ、出口に強烈な水圧がかかった。強引に肌を掴まれる感覚に結衣は

目を見開き、口をパクパクと開閉させる。

「ふ、あ、う、あああつ……」

同時に凄まじい勢いで尿意の波が押し寄せてくる。結衣は反射的に足を交差させ、スカートの上から股間をきつく押さえつけた。全身の力を振り絞って、オシッコの出口、括約筋にありつたけの力を込める。

それでもなお足の付け根にはじゅっ、じゅうっ、と熱い雫が吹き上がる感触と、じいんと腰を痺れさせるような甘い排泄の解放感が溢れだした。

「あっあ、あつ、あ……！！」

目に涙すら浮かべて、結衣は必死に、オモラシの誘惑に抗う。

ここは神聖なる学び舎の一角なのだ。慎み深く、貞淑であるべし——人前でトイレに立つ事すらはしたないとされる場所で、女の子としてのプライドも当然ながら、歴史ある優麟館の生徒として万が一にも、足元の地面に恥ずかしい水たまりを広げてしまうようなことなど、決して許されない。

「くすくす……ね？ 意地を張りすぎて、そんなふう到我慢できなくなっちゃったら、どうするんですの？」

前屈みになり、言葉も失って、ただただ全身全霊の力を振り絞って尿意に抵抗する結衣。ぷるぷると腰を震わせ、きつく脚を交差させ、両手の力も借りて排水孔を締め付ける。

永遠にも思える地獄の時間は、しかしどうにか結衣の勝利で終わった。辛うじて乗り越えた尿意の大波の揺り戻しを押さえ込みながら、結衣は裕乃に縋りつくように、懇願の視線を向ける。

「わ、わかった、からっ……わかったからあ……っ、と、トイレ……おねがい、裕乃ちゃんっ、と、っ、トイレ、行かせてっ……」

「くすくす……もお、恥ずかしいですねえ、結衣おねーさま。そんなに大声出したら他の子にも聞こえちゃいますわよ？ ふふ、そんなに必死になって……おしり、モジモジさせて、そんなに『オシッコ』したいんですか？」

「……っ」

自分が認めた事ではあるが、ことさらに明けて透けに、羞恥を煽るかのような裕乃の囁きに、結衣は真っ赤な顔を何度も小さく縦に振る。曖昧にしているのは裕乃はまた『あら、違いますの？ じゃあ平気ですわね』とでも言い出すに違いない。これまで何度も、そうやって結衣は恥を忍んで後輩に訴えたトイレの要求をうやむやにされてしまった。

「本当に？ そんなに、オシッコしたいんですか？」

「っ、そ、そう、も、もうっ、我慢、できない……で、でちゃう……から、っ、だ、だから、早く……っ」

焦らすように執拗に確認してくる裕乃に、結衣は必死になって肯定し、トイレを訴える。上級生の尊厳など微塵も残らない無様な姿だが、もはやそうでもしなければ解放してもらえとは思えなかった。

「くすくす。しょうがないですわねえ……結衣おねーさま、上級生なのにみっともなさすぎですわよ。……ふふ、そんなにしたいんですしたら、『オシッコ』、してきてもいいですわよ♪」

そう言って、裕乃はぱつと結衣の手を離した。

それまでの拘束を突然緩められ、一瞬つんのめりそうになりながらも、結衣はすぐに我に帰った。これで自由だ、もう邪魔されない。その事を全身が理解するより早く、ぱつと身を翻し、校舎へと走り出そうとする。

トイレ、トイレ、トイレ！！

もうそれ以外考えられない。執拗な尿意に捌かれた下腹部は悲鳴をあげて限界を訴えている。ようやく解放されたその足で、結衣は一目散に一番近い、昇降口のトイレに向かった——その、直後。

がしっと凄い力で、結衣の手首が掴まれた。

「あらあら。どこ行くんですかおねーさま？」

くすくす、いつもの笑顔で、裕乃は再び結衣の行く手を阻む。

「っ、う、うそつきっ、な、なにをするの！？ ひ、裕乃ちゃんっ、裕乃ちゃんがぁ、も、もういいって言ったんじゃないっ……！！ も、もうやめてよっ、もう意地わるしないでっ！！ お、おトイ……レ、いかせてよお！！」

結衣の様子と言ったら、まるで幼稚園の子が、駄々をこねているみたいな有様だった。我慢できずにじたばたとその場で足踏みまで始めて、結衣は全身をねじりながら抗議の声を上げた。しかし裕乃は退く気配はなく、至極真面目な顔をしている。

「ですからおねーさま？ どこに行かれるんですか？」

「だ、だから、お……お手洗い……っ」

くねくねと腰を揺らしながら、トイレに行きたいと叫ぶ結衣の顔は、もう取り返しのつかないほどに真っ赤になっている。優麟館の生徒ならずとも、年頃の少女が口にしていい言葉ではないのだ。

しかし、裕乃はそうやって必死に羞恥の訴えを繰り返す結衣に、にんまりと笑みを返し、

「うふふ。おねーさま。わたくし、『オシッコ』はしてきてもいいって言いましたけど、おトイレに行ってもいいなんてい・ち・ど・も言ってませんわよ？」

「えっ……！？」

意味が分からず呆気にとられる結衣に、すっと歩み寄って、裕乃はその下腹部をつんとつつく。

「うああ……っ！？ や、やめ、てっ……裕乃ちゃんっ」

外からの刺激にさらにみっともない格好を披露して必死の我慢を続ける結衣。激しく腰を左右にクネらせてしまう結衣に、裕乃はうっすらと口元を緩め、

「うふふ、ですから。結衣おねーさまがどうしても『オシッコ』させて欲しいと仰いますから、その許可はさしあげましたの。でも、お手洗いにいく許可は差し上げていませんわ。ですから、結衣おねーさまが行くのはあちらですわよ？」

そう言って、裕乃が指差したのは――

学舎の一角に作られた、遊戯用のアスレチックの足元。幼稚舎の女の子達が使う、どんな学校にも必ず一つはある、砂場だった。

意味が分からず、結衣は眼を瞬かせる。

どうして、トイレとあのアスレチックが繋がるのか。あそこには別に、トイレも何もなかったはずで――

「あ、あの、裕乃ちゃん、よく、い、意味が……」

「で・す・か・ら？ 結衣おねーさまのおトイレは、『オシッコ』をなさる場所は、あ・そ・こだと言っていますの」

もう一度。しっかりと、砂場を指差して。裕乃はくすくすと笑みを深くする。

「あのお砂場でなら、『オシッコ』、いくらでもなさってもよろしいですわよ。結衣おねーさま♪」

にっこりと――

最高の笑顔で、裕乃は言う。

犬みたいに——あの、砂場にしゃがみ込んで、おしっこを——大きな音を立て、地面の上を大きくぐぐって激しく泡立ちながら足元を水浸しにする——

理解を超えた羞恥に、オーバーフローしかけた結衣の思考がヒートする。

「で、できるわけないでしょ、そ、そんなのっ！！ す、砂場って……っ、そ、そんなこと、絶対につ……だ、だって、あそこは皆が遊ぶ場所で……そ、そんなところで、おトイレなんか——！！」

「うふふ、結衣おねーさまがなさりたいのなら、それはそれで一向に構いませんわよ。わたくしは、結衣おねーさまがどーしてもおしっこを我慢できないと仰るから、そうしてはいかがですの、と提案しただけですもの。

構わないというなら、まだまあだあーっぶり我慢できるってことですよのね、結衣おねーさま？」

「ふあああ！？」

言いながら、裕乃はさわさわとイヤらしく結衣の下腹部を撫でる。さっきまでの圧迫とは違う微妙な力加減の手つきは、けれどますます結衣の羞恥を炙る火力を上げ、恥ずかしいティーポットをぐらぐらと沸き立たせる。

脚の付け根で沸騰し、蓋を押し上げしゅんしゅんと噴きこぼれそうな、羞恥のホットレモンティ。ぴったり閉じ合わせた脚の付け根にじわっと熱いものを感じ、結衣はたまらず出口を懸命に押さえ込む。

「ああっ……ああっ…だ、だめ、裕乃、ちゃんっ……」

ちょこんと突き出したおしりが左右に揺すられる。恥ずかしくクネクネと腰を揺すり、モジモジと膝を擦り合わせ、結衣は一時もジツとしていられない。裕乃の意地悪な指によって揺さぶられるティーポットに、注ぎ口のぎりぎりまで注ぎ込まれた恥ずかしいレモンティを溢れさせないようにするので精一杯だ。

「ほら、どうしましたの？ 宜しいんですか、結衣おねーさま？ ふふ。『おしっこ』なさりたいんでしょう？ そんな有様で、ちゃあんと夜までガマン出来ますの？」

くすくすと——裕乃が結衣の耳元で熱っぽく囁く。小悪魔めいた誘惑は、愛くるしい容貌と相まってぞくぞくするほどに蠱惑的だ。裕乃はこうやって、結衣の欲望を見抜き、ぎりぎりのところを煽るのが実に得意だった。

この理不尽な仕打ちに、上級生としてせめて何か言わねばならないと考え、結衣がなけなしの勇気を奮いたてて叱ってみても——

『そんなの決まってますわ、結衣おねーさまが可愛過ぎて、いじめたくなっちゃうのがいけないんですよ？』

と、じゃれつくように言ってくるのだから性質が悪い。本当の悪意があればともかくも、慕ってくる相手まで無碍にできないのが結衣の性格である。

「うふふ、夜まで……いち、にい…… 5時間くらいですかしら。さっきいっぱい、お茶を飲んで頂きましたから、結衣おねーさま、もっともおーつと『おしっこ』しくなりますわね。きつとっと、もじもじ恥ずかしいカッコをなさるんですかしら。……ああ、楽しみですわ」

腕に抱きつかれ、ぎゅっと小さな胸を押しつけられる。はたから見れば年下の生徒が先輩にじゃれついているような光景だが、その実、結衣は片方の手を塞がれてしまっているのだ。本当なら、今すぐぎゅうっとスカートの上から、はしたなくも制服の股間を押さえてしまいたいくらいなのに。

「あ、あああ…っ」

これも言外に、お姉様は人前でそんなはしたないことなさいませんよね？ と言われているに等しい。裕乃の他にはだれもない初等部の校庭だというのに、不安定な姿勢のまま結衣は太腿を擦り合わせるしかない。

「あ、そうそう。これ、内緒でしたけど——あのお茶、お味はいかがでしたかしら？ きっとその様子だと、とっても気に入っていただけましたのよね、結衣おねーさま。……うふふ、あのお茶、とっても、とーっても、『美容に良い』って評判なんですよ？」

「え？」

美容、健康茶——話の方向に不穏なものを覚え、結衣は思わず訊き返していた。その類のものには、以前に嫌な思い出がある。

「代謝を良くして、身体の中の余計なものをぜんぶ、ぜえーんぶ、からだの外に出してくれるそうですの。うふふ、そのせいで、ほんのちょっとだけ、おトイレが近くなっちゃうんですけれどね」

「そ、それって……！？」

「……うふふ。彰子お姉様にあのお茶を差し上げたの、わたくしですよ？」

とんでもないことをさりと告白して、悪戯っぽくウインクする裕乃。

しかし、結衣は告げられた事実にながらにも衝撃的すぎて、ただばくばくと口を開閉させるしか出来ない。

（あ、あのお茶……なの、本当に！？）

結衣の手のひらは反射的に下腹部を擦っていた。

脳裏を、二度と思い出したくなかった記憶が閃光のようによぎる。

二月の連休の『お泊まり会』で彰子に飲まれた、あの忌まわしき「健康茶」のことは、忘れようたって忘れられない。ほんのわずか、たったティーカップに一杯口にいただけなのに——それから2時間もの間、結衣は20分おきにトイレに駆け込まねばならないようなものだった。言う事を聞かない『おんなのこ』をはしたなく押さえ込み、もじもじとみっともない足踏みをしながら彰子に懇願して許しを乞い、なんと、洗面器に向けて恥ずかしい水音を響かせてしまったかわからない。

それを、あろうことか、一度にあんなにたくさん！？ いくら喉が渇いていたからと言って、500mlのペットボトルに1本分も？！ あまりの事に結衣の思考はパニックに陥る。

「うふふ、ちょっと淹れる時の温度と、お湯を変えるとあんな感じに、冷やしてもすっきり飲めるようになりますよ。これでもわたくし、以前は華道部の副部長をつとめておりましたのよ」

ウインクしながら恐ろしい事実を告げる裕乃。結衣の耳にはもうほとんどその言葉も入らない。

独特の苦みと渋みがないせいで油断していた。あの猛烈な利尿作用が、結衣を待ちうけているのだ——そう思った瞬間、下腹部の尿意が一気に強さを増した気がした。

気のせいだ——とは言い切れない。裕乃のお茶を飲んでからそろそろ1時間。あのすさまじい利尿効果が表れ始めてもおかしくないころだった。

「あっあ、あつ……」

ガクガクと膝を震わせ、結衣は激しく腰を揺すり始める。いよいよ煮詰まった尿意が限界を迎えつつある。

「うふふ、それじゃあ、おトイレでなければ我慢なさるでしたわよね？ 行きましょうか、結衣おねーさま。そろそろ戻らないと正門も閉まってしまうすし。先生にも怒られてしまいますわ」

「……………」

言葉を失った結衣の手を抱きしめたまま、くすくすと笑い、裕乃はそのまま歩き出そうとする。もう駄目だ。もう無理だ。

全てが彼女の手のひらの上だと分かっている、結衣にはもう無理だった。

——結衣は、顔を紅くして、小さく答える。

「……わ、わかった、から」

「はい？ なんですか、おねーさま？」

「も、もう……だめ、ガマン、できないから……っ、も、漏れ、ちゃう……！！ だ、だから、こ、っここ、で、……っ」

ちらり。砂場に視線を向け、結衣はこれから口にしようとするはしたない言葉で、先に耳まで赤くなってしまふ。

ここは小さな後輩たちの大事な遊び場所なのに——限界の尿意が結衣を追い詰めてゆく。

「こ、ここで、オシッコ……する、からあ……っ！！」

はしたない懇願が、最後は小さな、けれど切実な叫びとなって結衣の口をついた。実際に尿意は限界に近く、裕乃の巧みな言葉で責め廻された少女の小さな出口は、いまにも緩みそうに悲鳴を上げているのだ。

ぱんぱんに膨らみ、シクシクと鈍い痛みを訴え始めた下腹部を擦り、結衣は戦く。

（あ、あのお茶を飲んで、夜までなんて……絶対に、無理……だよっ！！ 絶対に、絶対に我慢できない……お、お、オモラシ……しちゃう……！！）

一度体験したからこそ、その恐ろしさは骨身に染みていた。彰子の手によって施された健康茶による体中の水分を絞り出されるような感覚と、なんど噴き出させてもまったく弱まらない猛烈な羞恥の水流。繰り返すたびに鋭敏になってゆく『おんなのこ』の中心から噴き出す水流の感覚——強力な利尿作用による強制的な排泄の連続は、結衣の心を完全に屈服させていたのである。

だから。

だから、ここで。

今すぐに。

トイレでなくたっていい。

ここで、オシッコをする、と——。

学院の生徒にあるまじき訴えを、結衣は口にします。

「あら。あらあらあら。あらあ♪」

口元を押さえて笑顔を見せながら、裕乃は俯いた結衣の顔を覗き込む。殊更に、少女の羞恥を煽るように。

「うふふ、きちんとご自分で言えましたのね、結衣おねーさま。花マルですわ。……結衣おねーさまは、ここで、このお砂場で、『オシッコ』なさりたいんですのね？ おうちに戻るまで我慢できないから、こんなお外で、誰かが見てるような、お外で、お尻を丸出しにして、『オシッコ』なさりたいんですのよね？」

「……………ツ」

こくり。羞恥に歯を噛み締め、悪魔の誘惑に従って、結衣は小さく頷く。きつく握り締められたスカートの奥で、今にも尿意が溢れそう。

「うふふ……それじゃあ今すぐ……あ！」

とてもいいことを思い付いた、とばかり。ぱん、と手を打ちあわせた裕乃は砂場の近くに転がっていた——恐らく幼稚舎の子達が片付け忘れたのだろう——砂遊び用のシャベルを手にする。

「そうですわ♪ お砂場を使うのでしたら、これがありませんとね！ 貸して差し上げますわ、はい、どうぞ、結衣おねーさま！」

「え……？」

にこりと、極上の笑顔でシャベルを結衣に押し付ける裕乃に、結衣は眉を潜めてしまう。

後輩の意図が掴めず、けれど彼女の笑顔に不穏な気配だけは感じ取って、結衣は困惑のまま瞬きする。

「うふふ、どうぞ？ ほら、これ、使ってよろしいですわよ、結衣おねーさま」

さも『これはいいものだ』と言わんばかりに押し付けられる、砂遊び用のシャベル。ますます混乱する結衣に、裕乃はとんでもないことを言ってきた。

「あら、お分かりになりませんか？ うふふ、結衣おねーさま？ いけませんわよ？ ねえ、うふふ、ま・さ・か、結衣おねーさま、そのままお砂場に、直接、そのままで、『オシッコ』なさってしまうおつもりでしたの？」

「……………っ！！」

まさかも何も、そう強いたのは裕乃であるはずなのに——あまりの言い分である。しかし切羽詰まった下腹部を抱え、それに従うしかない悔しさに、結衣は非難と懇願の入り混じった視線を、縋るように裕乃に向けてしまう。

「うふふ、そんな困った顔なさらないでくださいまし。心外ですわ。私、ちゃあんと結衣おねーさまの事を思っでご忠告さしあげてますのよ。だって、猫さんや犬さんだって、おトイレの準備と、後始末はなさいますものね？ 結衣おねーさまのココに、いい一つぱいになってる恥ずかしいオンナノコの『オシッコ』。そのまま、このお砂場になさってしまったら、大事な大事なお砂場が、おねーさまの『オシッコ』で泥だらけの水たまりになってしまいますのよ？ ねえ、『オシッコ』なさっている後で、そんなどろどろのぐちゃぐちゃになったお砂場を、幼稚舎の子達が見つけたら、いったいどうなさるおつもりでしたの？」

「っ、な、なに、言って……そ、そんなトコで、し、しろって、いったの……裕乃ちゃんじゃないっ……！！」

「で・す・か・ら！ うふふ、はい、おねーさま。ちゃあんと『コレ』で、結衣おねーさまも、お砂場を汚さないように、おねーさまの『おトイレ』の準備をなさらないと。ねえ？」

裕乃の言いたいことは簡潔だった。

要するに。

このシャベルで砂場に穴を掘って、そこにおしっこをしろ——ということなのだ。

「ひ、裕乃ちゃんっ、そんな…………」

「あらあら。おねーさま？ まさかのまさかですわ。幼稚舎の子たち、毎日ここをお遊戯に使ってるんですよ？ 大事な大事な遊び場所ですよ。そんなところをまさか、ただ、おトイレが我慢できないというだけの我儘で、『オシッコ』でびちゃびちゃにしまってもいいとおっしゃいますの、結衣おねーさま？」

裕乃がふいに、くいと下腹部を押し揉んだ。結衣はたまらずその刺激に『ひゃうんっ』とはしたない悲鳴を上げてしまう。

「そ、そんな…………」

有無を言わせぬ勢いで、裕乃は結衣の手にシャベルを握らせてきた。自由を奪われた結衣の背中に回り込み、そのまま砂場の方へと、足元のおぼつかない結衣を押しだす。

目の前に近づいてくる砂場——清潔に保たれた学舎の一角。あろうことかこんな場所で——改めて、自分のしようとしていることを意識させられ、結衣の思考は羞恥の炎に炙られてゆく。

「っ、ああ、や、ひ、裕乃ちゃん、や、あ、っ、ま、待って、待って！！ わたし、やっぱりこんなのっ…………っあ、んくう…………ッ」

できない、と言いかけて。

じんと激しく押し寄せる尿意の波に、結衣は言葉を失った。思わず脚の付け根を押さえ込み、きつく唇を噛んで脚の付け根を閉じ合わせる。

早くもあの健康茶の利尿効果が表れてきたのか、更なる尿意が下腹部を膨らませていくのがはっきりと感じるかのようだ。全身をめぐる水分が、片っ端から絞り取られて下腹部の一点に注ぎ込まれるような——あの、抗いがたい感覚。脚の付け根の恥ずかしい排泄公が、壊れた蛇口のように火照り、何度も何度も猛烈な水流を噴射させる——トイレから一時も離れられなくなるような、あの感覚の予兆。

我慢——我慢しなければ。乙女のプライドは弱々しく抗議の声上げる。

(がまん、夜まで——我慢……っ……そ、そうよ、夜まで我慢すればいいだけ……なんだ、から……っ、んあああ！?)

幽かな抵抗の意志は、しかしあっさりと、押し寄せる尿意に打ち砕かれた。

「……ん、ふ、あ……う……ッ」

ダムの出口へ向けて押し寄せる水圧が増す。激しく身を揺すり、結衣ははしたなく声をあげてしまう。物理的に、もうこれ以上の我慢なんて——不可能だ。

(だ、ダメ！！ あのお茶、飲まされて、そんなの——ぜ、絶対無理……！！)

「うふふ、どうしましたの、結衣おねーさま？」

しれっとした顔でよくわからない、という顔をしてみせる裕乃。もちろん演技であるのは結衣にだってわかる。こうなるように仕組んだのは、この可愛らしい後輩なのだ。

(あ、あと、5時間なんて……ぜったい、無理、だよお……っ)

今ですら、こうしてじっとしていることもできず、足踏みして、恥ずかしくスカートの上から股間を押さえていなければならないほどのに。あのお茶を半リットルも飲まされて——夜まで我慢なんて、何をどうやっても、絶対に、絶対に不可能だと、結衣の身体は訴えている。

「っ……」

長い葛藤の末、結衣はついの自分の意志で砂場用のシャベルを手にとった。覚束ない足取りで砂場へと向かう。

「うふふ、ごゆっくり♪」

思わせぶりな裕乃の声援が飛ぶが、ゆっくりしている暇などない。結衣は下腹部を庇うように砂場に腰を下ろし、羞恥を堪えて顔を俯かせ、握ったシャベルを動かし始めた。

しかし。普通の地面に比べればいくら柔らかな砂場とはいえ、プラスチックの小さなシャベルでは思うように掘ることは難しい。まして、恥ずかしい乙女のホットレモンティでぱんぱんに膨らんだ下腹部を抱えたまま、しゃがみ込んでの作業である。

「んっ、あ、う、ふ……ッ」

ふと気を抜けばスカートを握り締め、下着の股布にまでじゅうううと熱い进りを滴らせてしまいそうな状況で、体重を左右の脚に載せ換え、膝を揃えてぐりぐりと動かし、時には、はしたなくも靴のかかとに下着を押しつけて。

我慢で精一杯の状況では、深い孔を掘るなど不可能に近い。結衣の額にはうっすらと汗も滲み、息も荒くなるばかりだ。

(も、もう、これで——)

中途半端にほじくり返した砂場の穴。——自分専用の『おトイレ』を見降ろし、結衣はわずか数十秒で結衣は音を上げかける。込み上げる猛烈な尿意に比べればはるかに小さく頼りない、とてもではないが排泄欲求を満足させるには不十分な砂場の穴、けれど、結衣の下半身はもう今すぐにでも下着を下ろしそこをまたいでしまいたいという切なる訴えを続けていた。

もう、いいはね——と、諦めようとするなり、見計らったように裕乃の声が飛んでくる。

「うふふ、結衣おねーさま？ どうしましたの？ お手てがお留守になってますわよ？ ねえ、おねーさまの『おトイレ』、そんなに小さく

てもよろしいんですの？ あは、おねーさまの我慢してる恥ずかしい『オシッコ』、そんな小さな『おトイレ』じゃ溢れてしまいすわよねえ？」

「……そ、そんなこと、言わないでよおっ」

まるで見透かすように、じっと結衣の下腹部を見つめて裕乃が言うてくる。

結衣だって、自分自身、どこかで理解していることだった。今の切羽詰まり具合を考えて、しゃがみ込んだ脚元に噴き出す水流がちよろちよろなどという生易しいものではないだろうことは、結衣だって分かっている。

音消しもない屋外で、近くでも聞こえるくらいに激しく、はしたない、ぶじゅじゅじゅうという水流音が地面を抉り、じよぼと辺りに恥ずかしい音を響き渡らせる決まっているのだ。

自分自身のことだ。結衣は、自分のオシッコが同年代の女の子に比べても極端に激しく猛烈で、量の多い体質だという事を、これ以上ないくらいはっきりと理解していた。何度も、何度も、彰子の前で恥ずかしい思いをさせられて、死ぬほど実体験として覚えこまされてきた。

結衣がひとたび我慢の限界を迎えた時、決壊したダムから噴き出すオンナノコの恥ずかしい水流は、500mlの計量カップを一杯にして溢れさせるくらいの途方もない量なのだ。

地面に開いた、わずか拳一つが隠れるくらいの小さな穴など、跨いでしゃがみ込んだ途端にあっという間に一杯になってしまうに違いない。

（ううう……っ）

自分のおしっこのために、自分自身で砂場に穴を掘るなんて——それだけでも死んでしまいたくなるほどの恥ずかしさだ。しかもここは、幼稚舎の子達が遊ぶ大事な場所だ。そんなところを、自分の欲望の為に使ってしまうなんて、『オシッコ』のために使うなんて。

理不尽に打ち震える心は、しかし裕乃の言葉によって巧みに操られている。

キャンプ等で山の中に行ったときは、こうしてトイレを作ることは、お嬢様の結衣でも知識として知っている。けれど仮にもお嬢様学校に通う結衣にそんな経験はまだなかったし、優麟館の制服を着たまま、学校の片隅に、オシッコを済ませるための穴を掘られるなんて——ありえないことでしかなかった。

「っ……～～ッ！！ も、もういいでしょ！？ も、もうっ、もう駄目……っ」

なおも乱暴にシャベルを動かし続けていた結衣だが、ついに掘りかけの孔をまえに、シャベルを投げ出して、結衣は限界を訴えた。

ちらりと裕乃を窺うが、これまであれこれと割り込んできた彼女は特に口を出してこない。いよいよ限界の結衣を見て、これ以上邪魔をすまいと思ったのか。

あるいは——これから結衣がしようとしている恥ずかしい行為を、一部始終しっかり見届けようとしているのか。優麟館の生徒が砂場の前でスカートをたくし上げ、しゃがみ込むなどと言うはしたない行いを続ける結衣から視線をそらすどころか、しっかりと見つめている後輩の姿に、結衣の羞恥はなお激しく沸騰する。

しかし、少女の身体はもはや言う事を聞かない。下腹部は完全に尿意に屈し、排泄欲求を全てに優先していた。結衣は砂場に掘った小さな穴——自分専用の『おトイレ』を跨いだ。

トイレ、おトイレ。

今は一刻も早く、おしっこをしたい。

ここがその場所だ。この砂場に掘られた小さな穴が、結衣のためのトイレなのだ。その為に恥も外聞もなく、後輩に訴えてきたのである。今更止めるなどあり得ない。たとえお外で、トイレではない場所であっても——下腹部をぱんぱんにふくらませ、くつくつと沸騰を続ける尿意はもう一刻の猶予もない。

砂場の穴を見降ろし、ほんのわずか、一瞬だけの躊躇のあと、結衣はすぐに行動に出た。慎重に周囲を見回して、他に誰も視線がないことを確認し、そと腰をかがめ、スカートの下へと手を差し入れて、股間を覆う下着に手をかける。スカートをたくし上げ、下着を引き下ろし、砂場に掘ったばかりの穴を——結衣専用の『おトイレ』をまたいでしゃがみ込む——

その、瞬間。

「すとっつ。そこまでですわ。結衣おねーさま」

「え……っ」

割り込むように前に出た裕乃は、スカートへと伸びた結衣の手をしっかりと掴み、じっと結衣の顔を見上げてきた。そのまま、結衣の肩を掴んで無理矢理立たせ、下着をぐいと引き上げる。

ぱちん、と下腹部を叩く下着のゴムに、結衣は『はぁんっ』と身をよじった。

手を押さえられて前押さえすらできないまま、結衣は恥ずかしく腰をよじり、モジモジと太腿を擦り合わせてしまう。

「ひ、裕乃、ちゃん、離してっ……と、トイレ……っ、お手洗い、させてっ……！！」

「あら、結衣おねーさま？ 何をおっしゃってるんですの？」

「なに、って……っ、も、もう意地悪やめてよ！！ も、もう我慢できないの、お、オシッコ……漏れ、ちゃう……っ！！ ちゃ、ちゃんと、こ、ここで、裕乃ちゃんの言うとおりに、こ、ここで、お、オシッコ、する、からあっ……！！」

降ろした途端に元に戻された下着を葦の付け根に食い込ませ、身をよじる。

だんだんだんっ、いまにも緩みそうな水門を引き締めるため、激しい足踏みを繰り返し、靴の爪先をぐりぐりと地面にねじ付ける。ほぼ準備を終えかけたところで急に邪魔されてしまったのだ。手を塞がれて、前押さえすら自由にならず、結衣は激しく身悶えて暴れる。

しかし、裕乃は明らかな失望の顔。

「結衣おねーさま。本当に、何をおっしゃってますの？ さっきから、一体何の事ですか？」

「え……で、でもっ」

いきなりの裕乃の態度の豹変に、結衣は困惑する。さっきまであんなにも煽るような事を言っておいて——目の前には、激しい尿意と、羞恥を堪えて必死になってシャベルを動かし、せっかく作ったおトイレがあるのだ。

それなのになんで今になって邪魔をするのか——なおも誘惑を振り切れず、砂場と裕乃の顔を交互に見比べる結衣を、裕乃はピシと指差して。

裕乃は、たつぷりと悪意を含んだ笑顔を見せる。

「でも、っておねーさま。うふふ。ねえ、結衣おねーさま？ おねーさまは、そこで、そんなところで、いったい、『ナニ』をなさるおつもりだったんですの？ ねえ？」

「な、なに、って……っ」

決まっている、おしっこだ。我慢できない、漏れそうな、下腹部の乙女のダムをぱんぱんに膨らませているおしっこだ。いきなりの前言撤回。結衣の身体はもうおしっこの準備をすっかり整えており、いきなりの排水命令の緊急停止に、下腹部では乙女のホットレモンティが激しい抗議を上げている。

「で、でも、っあ、あつ」

「ねえ♪ 結衣おねーさま？ そこは、幼稚舎の子たちが遊ぶ大事なお砂場なんですよ？ そこで、おねーさまはいったいなにを始めようとなさっていましたの？ うふふ、差し支えなければ教えてくださいませ？」

砂場に掘った穴を指差し、くすくす。意地悪に口元を緩め、八重歯をのぞかせて。小悪魔めいた笑顔が結衣に近付いてくる。

「だ、だって、だってっ、ひ、裕乃ちゃんが、言ったんじゃない、こ……ここで、お、おしっこ……しなさいってッ」

「あらあら。何をおっしゃいますの結衣おねーさま。ひどいですわ、心外ですわ……ううっ、ぐすっ」

あからさまな泣き真似まで始める裕乃に、結衣はもはや混乱の極みである。トイレを我慢することで精一杯の頭は、裕乃の態度の豹変についていけない。

「……わたくしは、本当にどうしても我慢できないなら、そこでおしっこしてもいいですよ、って言うだけですよ。結衣おねーさまに命令なんて、そんな大それたことなんかしてませんわよ？」

それにですねえ、結衣おねーさま。そんな常識で考えて、冗談に決まってるじゃありませんの。ねえ？」

くすくす。目を細め、口元手を当てて。とても優雅に、上品に。

優麟館の生徒に相応しい態度で、裕乃は結衣を見て微笑む。

「……ふつうのオンナノコは、どんなに我慢できなくても、こんなお外で『オシッコ』なんか、絶っつつ対にしませんわよ、ねえ？」

「っ………そ、そんなっ……」

改めて羞恥を刺激され、結衣は耳まで赤くなってしまふ。仕向けていたのは裕乃であるはずなのに、梯子を外される行為をされても結衣は反論できなかった。激しい尿意にそれだけの余裕がなかったのも事実だが、裕乃の言っていることは全く正しく、理にかなったものだからだった。

「それなのに結衣おねーさまったら、勝手に勘違いして、本当にパンツまで脱いで、しゃがんでしまいそうなんですもの。いったいどこで誰が見ているのかもわかりませんのに。ここは、幼稚舎の子達の、大事な遊び場所ですよ？ そこに、『オシッコ』なさろうとしてたんですよ？ ねえ、本当の本当に、本気でしたのかしら、結衣おねーさま？ まさか本当に、『ここ』で『オシッコ』なさろうとしてましたの？」

くすくす……ことさらに結衣の羞恥をくすぐるような言い回しは、しかし観面に効果を見せる。崩壊の危機を迎えたダムの水門を押さえこんで、膝を擦り合わせ、身体をくねくねと揺すりながら、じたばたとみっともない足踏みすら始めてしまった。

「で、でもっ、でも、も、もう我慢できないのっ、あ、あんなにお茶、飲まされちゃって、夜までなんて——」

「うふ、うふふふふ。ねえ、おねーさまって、本っ当に可愛いんですのね♪ あーんなデタラメ、本気で信じちゃったんですの？」

「えっ……！？」

結衣の懇願を遮るようして、裕乃はちろりと舌を出してみせる。

小柄な身体をびたりと結衣に押しつけて、無防備になっていた結衣の下腹部をさわさわと撫でさする。。絶妙の力加減でもたらされる刺激に耐えかねるように、結衣は「はうっ」と呻いて身体を折り曲げてしまふ。

「うふふ。ねえ結衣おねーさま？ わたくし、一言もあのお茶が、彰子お姉様のお茶だなんて言ってませんわよ？」

「そ、そんな、だってっ……」

「ですから、結衣おねーさまがお飲みになったのは、ごくごく普通の、なんの変哲もない、ただのお茶ですよ？ 天地神明に誓ったってよろしいですわ。……うふふ、ねえ？ それなのに、結衣おねーさまったら、そんなにみっともなく悶えて、前屈みになって、スカートの前を握り締めて……そんなになるまで我慢できないくらい、『オシッコ』がなさりたいんですのね？」

「え、あ……」

急転直下のネタばらしに、結衣の心が揺らぐ。いまにも下半身を突き抜けてしまいそうな衝動に、結衣はぱくぱくと口を開閉させるだけだ。

「その、普通のお茶を飲んだだけですのに——結衣おねーさまはなにをなさろうとしてらしたんですの？ うふふ、この、幼稚舎の子達の大切なお砂場で、穴を掘って、『オシッコ』をなさろうとしてましたのよねえ？ わたくしより先輩ですのに、おトイレまで我慢できなくて——ううふ、ねえ？ こんな見晴らしのいいお外で、スカートをたくし上げて、下着を下ろして、大事なところを丸見えにして、しゃがみこんで——」

「あ、やだ、……やだ、やめて……やめてよう……っ」

熱を持って囁かせる後輩の言葉は、まるで毒のように結衣の心に染み込んでゆく。限界を煽ると同時に、いかに結衣がはしたなくみっともない女の子であるのかと——優麟館の生徒にあるまじき、恥ずべき行為をしようとしていたのか、と。

「“ただの”お茶なのに……そんなになるまで我慢ができなくなるなんて——おねーさま、ここって、そんなにゆるゆるの、ガマン出来ないはしたないオンナノコなんですの？ うふふ、結衣おねーさまって、本当に恥ずかしいオンナノコですのねえ……♪ 下級生の皆さまが知ったら、みーんな幻滅ですわよ？ それとも結衣おねーさま、こんなところで『オシッコ』済ませてしまおうなんて……まだお手洗いのしつけもできてらっしゃらないのですかしら？ ……うふふ、幼稚舎の子達だっけとつくに済ませていますのにね……？」

もはや言葉もない。俯いてしまう結衣のそばで、裕乃はにこりと笑顔。

心から、先輩を信頼し、思いやるかのように——悪魔の言葉を告げる。

「さ、ですから結衣おねーさま？ ちゃんと、夜まで我慢、できますわよね？」

永遠にも等しい結衣の地獄は、まだ始まったばかりだった。

(了)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 連携

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: その他

CATEGORY: その他

DATE: 06/02/2014 01:08:44

BODY:

twitter はじめました。

<a class="twitter-timeline" href="https://twitter.com/kurogiri44"
data-widget-id="473133206514847745">@kurogiri44 からのツイート

<script>!function(d,s,id){var
js,fjs=d.getElementsByTagName(s)[0],p=/^http:/.test(d.location)?'http':'https';if(!d.getElementByI
d(id)){js=d.createElement(s);js.id=id;js.src=p+"://platform.twitter.com/widgets.js";fjs.parentNode
.insertBefore(js,fjs);}}(document,"script","twitter-wjs");</script>

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 即売会参加のお知らせ

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: お知らせ

CATEGORY: お知らせ

DATE: 05/01/2015 21:13:42

BODY:

ご無沙汰しています。いろいろあってすっかり更新が遠のいていました。

5/3（日）、都立産業貿易センター浜松町館で開催されます

「都産祭 2015 ふあいなる」内「しーむす 11」
に参加させていただきます。

[!\[\]\(104fbf564e2e5a8fbd84f31656d114c7_img.jpg\) しーむす](http://blog-imgs-78.fc2.com/s/h/i/shizuku44/shizuku.png)

配置は 23、「シズクのおと」にて

- ・不幸な偶然で一日中、おしっこを我慢する羽目になってしまった女の子の話
- ・停車してしまった満員電車のなかで、トイレに行きたくなってしまった女の子とその友人の話

などを頒布させていただきます。

いつものような感じの話を詰め込んだコピー本です。

また、頒布したお話はこちらのブログにも再録します（数週間から 1 カ月ほど時間は空くと思います）。

当日はどうぞよろしくお願いします。

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 入院中の女の子と看護師さんのお話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 05/03/2015 13:26:18

BODY:

ツイッター投稿より加筆再録。

実在の職業とはかんけいありません。

<hr size="1" />

足を骨折して入院することになった女の子。

幸い手術はしなくてすんだものの、ベッドから起き上がることができず、トイレにも立てない。看護師さんには何かあったら呼んでくださいねと言われているけれど、恥ずかしくてそんなことは言えなかった。尿意はどんどん強くなり、必死になって我慢する。それでもついに限界になり、パジャマの足の付け根を激しく前押さえ。

面会はなく、病室は個室。危機を脱するには目の前のナースコールを押すしかない。けれど、押し寄せる尿意の波に股間から手が離れない。

涙を浮かべて必死に堪える女の子。緊急事態を知らせるナースコールは目の前だ。けれど、でも。羞恥は膨らみ、指先が止まる。これは看護師さんに「オシッコがしたいです」と知らせるためのスイッチだ。おしっこが我慢できないので、おトイレの手伝いをしてくださいと、白衣の天使を呼びつけるものに他ならない。

おしっこしたいなんて知られたくない。我慢できないなんて聞かれたくない。顔を赤くして、枕を噛み、パジャマの股間を握り締め。

羞恥と躊躇の狭間で、下着にはじわじわと黄色い染みが滲んでゆく。

ついに押されたナースコール。ちょっと間を置いて駆け付けてきた看護師さんに、真っ赤な顔で俯き、消え入りそうな声で「お、おトイレ……もれちゃう……っ」と訴える女の子。「……オシッコ？」看護師さんに訊ねられ、消え入りそうに小さくなってうつむく。

けれど。個室の外のトイレまで連れて行ってもらえると思っていた女の子は、パジャマと下着が脱がされて悲鳴を上げる。

剥き出しになった股間を隠そうとする女の子を制し、看護師さんはベッドの上の女の子の股間にガラス製の容器をあてがう。白い肌の、なめらかな未発達少女の曲線に、ぴったりと合う排泄のための器具。シビン。

検査のため、おしっこも調べなければならないのだという。看護師さんの手によって、小さく閉じ合わされた秘密の場所が押し開かれ、透明なガラスの容器が白い足の付け根に押し当てられる。

ここで、このままオシッコをしろと。そう言われているも同然の仕打ち。女の子は狼狽し、激しく抵抗をあらわにする。

けれど、もはや少女の身体のはうは、勝手にオシッコの準備を終えていた。ぐっとあてがわれたガラス器具の内側めがけ、ほぼタイムラグなく激しい飛沫がほとばしる。

ぶじゅじゅじゅううう！！ 噴き出す黄色い熱水は、泡を立てて透明なガラス容器の壁にぶつかり、跳ね返って飛び散って、じゃばじゃばと下品な音を響かせた。我慢に我慢を重ねた、猛烈なおしっこ。股間にあてがわれたガラス容器は、本来だれからも秘密にされねばならない女の子の排泄を、おしっこの瞬間を、間近で見るときの器具と変わらない。ベッドから起き上がれずに済ませる排泄は、実質的におねしょとそう大差ない。

横に置かれたガラス容器の中、泡立つ黄色い濁流はみるみる水位を増してゆく。猛烈に我慢を続けて濃縮され、痛み止めなどの薬のせいで色も濃くなった下品なおしっこ。

透明なガラスのなか、遮るものなく、女の子のおしっこは続く。様子を見るためという名目で、毛布で隠すこともしてもらえず。女の子はベッドの上に横になった不自然な体制での、羞恥の排泄を強制され続けた。

◆ ◆ ◆

シビンの中に、我慢に我慢を重ねた結果であろう猛烈なおしっこがほとばしる。ガラスの容器の底を叩くのは、色濃く湯気を立て泡立つ奔流。少女らしい羞恥と排泄への抵抗から、この小さなおなかの中に、精一杯我慢を続けてきたのであろう。そのことをはっきりと窺わせるほどに、目の前のおしっこは激しくまた鮮烈だ。

少女が目には涙を浮かべ、俯いた顔を紅潮させ、肩を震わせ、羞恥と開放感のせめぎ合う狭間で、熱い吐息をこぼす様子の一部始終を、看護師の女性はじっと羨望の眼差しで見つめていた。

病院勤務の激務の中、折からの人手不足も手伝って、看護師の女性はまったく時間に余裕を持たない。今日、彼女はシフトについてから、まだ一度もトイレに立てていないのだ。

急遽、穴の開いたシフトの代行を求められ、家からの出がけに最後にオシッコを済ませたのはもう16時間近く前。摂取した水分は全身を巡り、白衣の下腹部は長時間の我慢で煮詰められた特濃オシッコでパンパンになっている。

その量、推定で1リットル以上。

酷使されつづけた括約筋は熱く疼き、はりつめた膀胱は鈍く痛む。我慢し続けたおしっこは、まるでたっぷり水を吸った砂のように重い。

おしっこの出口を、閉じ合わせた太腿でぎゅっと押さえこみ、女性看護師は白いタイツの膝を何度も何度も擦り合わせる。すりす

り、もじもじ。きちんとした大人として、清潔な病棟で勤務する白衣の天使として、前押さえなんかできるはずがない。精一杯、けれど心からの我慢の仕草。

けれどシフトは残り2時間。まだお仕事はぎゅしりと詰まり、激務の中で排泄は許されないのだ。

あまりにも目の毒であると分かっているが、女性看護師は目の前の光景から目が離せない。鮮烈なまでに目の前で繰り広げられる、盛大で激しい少女のオシッコ。限界我慢からの開放感に震える少女の顔は、羨望にすら感じられた。

これは検査のために必要なことで、決してそんな目的ではないはずなのに。看護師はあえて、毛布などを使って少女の排泄から視線を遮ってやることをしなかった。

ちゃんと、おしっこするところ、見せて頂戴。無情な宣告に俯く少女の顔が、みるみる赤くなるのをじいっと見つめ。羞恥に歪む少女の顔に、ほんの少しだけ、悪魔めいた昏い嗜虐心を満足させて。

白衣の天使の仮面の下で、こっそりと哀れな少女を責めさいなむ。

同時に、白衣のスカートの下で腰が揺れ動く。たぶん、たぶんと恥骨の上のダムが揺れる。

早く私もオシッコしたい。早く楽になりたい。苦しむ自分を置き去りに、排泄欲求を解消してゆく少女を、羨望と、嫉妬で見つめながら。

白衣の天使は、その脆くも妖しい仮面の下で葛藤する。

今すぐ、自分の白衣のスカートをまくり上げ。少女からこのシピンをもぎ取って、タイツと下着を引き下ろした自分の恥ずかしいところを押つけて。

その中に、自分を苦しめるオシッコを残らず噴射、注ぎ込んでしまいたいという、下卑た欲望が、女性の瞳に妖しく揺れる。

天使と悪魔、ふたつの相反する感情がせめぎあう中。

必死に、懸命に下腹部の衝動を堪え、葛藤の中、女性看護師は激しく身もだえと足踏みを繰り返す。

(初出：@kurogiri44 ツイッター 加筆修正)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 男子トイレ内の姉弟の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 05/03/2015 13:30:18

BODY:

（ああっ……いや……だめ、っ……。はああ、はあっ、…ああ……だめ、こんなの、こんなのっ、やだあ……っ！ わ、わたしも、わたしもっ、オシッコしたいのに……っ）

焦がれ、求め続けた待望の『おトイレ』を前に、優奈の下半身は敏感に反応してしまう。手のひらがきゅっと押さえた下腹部のなか、募る尿意はなお強まる一方で、少女を窮地へと追い込んでゆく。

しかし、しかし。だ。

いくらオシッコが我慢の限界で、もう辛抱できないとはいえ、ここは『男の子用』のトイレである。まさか付き添いの優奈が割り込んで、勇太のトイレの順番を横取りしてしまっていていいわけがない。

優奈が使っているトイレはその隣。あの、ずらりとホールの外まで順番待ちの列が続く『女の子用』のほうなのだ。

（っ、こっちの……トイレなら、こんなに空いてるのに……っ、ふこうへい、だよっ……っ！！）

がらがらの個室。出入りもまばらな入り口。混雑とは程遠く、順番待ちなど起きやしない。

すぐ隣にあるというのに、まったく対照的なトイレの中。優奈は激しくその場に足踏みを繰り返す。水色とブルー、寒色系のタイルに、たんっ、たんっ足音が響く。

体の中の内側から、今にもおしっこにこじ開けられそうな女の子の出口を押さえ、押し寄せる尿意を紛らわせるため、いつきだっでじっとしてられない。しかし、そうして激しく身体を動かせば、優奈の張り詰めたおなかの中で、はち切れんばかりに膨らんだ水風船が、たぶんっ、たぶんっ大きく揺れる。

（ああ、ああっ……だめ、だめえ……っ）

付き添いの優奈のすぐ目の前。弟の勇太の小さな背中があった。

壁の際。ずらりと並んだ陶製の白い小用便器に向かう弟は、ショートパンツを足首までおろし、短い男の子のホースから 勢いよく水流を進らせていた。

「ねえ、おねえちゃんっ さっきの面白かったねっ！」

「ゆ、勇太、よそ見しないで！ ちゃんと前見て！」

陶製の白い便器にぶつかって、激しい音を響かせる『オシッコの音』。個室という閉鎖空間ではなく、壁に向かってトイレの中全て

に丸見え丸聞こえ。『女の子用』のトイレの中では絶対ありえない光景に、優奈の羞恥は強く刺激される。

立ったまま、壁に並んで、パンツを下ろし。『男の子用』で、ホースから勢いよく噴き出しづつかる水流が響かせる水音は、我慢の真っ最中の優奈にとってまさに禁断の囁きだ。耳を塞いでも聞こえてくる排泄音の誘惑に、優奈の腰は小刻みに揺れ動いてしまう。

（あ、ああっ、だめ……そんな音、聞かせないで……っ、今は、いまは、ダメ……っ）

しゃああ、ぱちゃぱちゃ。こんな時に一番聞いてはいけない雫の音。『イケナイ』響きに誘われて、激しい下腹部の訴えが少女を追い詰める。

しかし、ここは紳士トイレ、『男の子用』の場所である。入ってくるのは男の人ばかりだ。思春期の最中の少女が、入ってはならない場所である。事実、さっきから出入りする男性たちは、勇太の後ろで付き添いの優奈に、ぎょっとして視線を向ける者ばかりだった。

（お、おしっこ、がまん、できなくなっちゃう……！　っう、だめ、したいの……っ！！　わたしもおしっこ、おしっこしたいの……！！　ああっ、はああっ、おねがい、おトイレに……ああっ、はやく、おトイレに……っ、行かせてえ……！）

本当なら、今すぐにでもこの場で、スカートの上から、思い切り『ぎゅううううっ』とあそこを押さえてしまいたいほどなのに。

小さな弟を放り出し、この場を後にして、自分のための『おトイレ』に入ることができればどれほど楽だろうか。猛烈な尿意はあり得ない思考に優奈を誘惑し、激しい葛藤に少女の心が揺れる。

けれど、もしここを飛び出して、隣の『女の子用』に向かったとしても、そちらはずらっと外にまで続く順番待ちの大行列だ。いまからその後ろに並んでも、優奈の番が回ってくる頃には、とくに休憩時間が終わってしまう。

……いや、そもそも優奈は、そこまでちゃんと、最後まで我慢できるのか。

（はああ……つく、う、うう……っ……！！　おしっこ、おしっこしたい、トイレ、おトイレいきたい……っ！！）

足踏みと共に、優奈の身体が左右に大きく揺れ動き始める。たんっ、たんとりズミカルに響く足音は、まるで羞恥のメトロノーム。押さえ切れないトイレ我慢が刻む、イケナイ欲望のテンポは、どんどんと早くなる一方。

その下腹部のダムが大きく波立ち、ぱんぱんに膨らんだ膀胱はたぶんっつと揺れ、いまにも少女の身体の外へとせり出してきそうだった。重いおなかを必死に抱え、優奈は思わず口を開く。

「ゆ、勇太、まだ……っ？」

「えー、まだあー」

切羽詰まった優奈の声に、勇太は『男の子用』に向かったままのんびりと返事をした。いったん止まった水流の音が、しばらくしてまた再開する。まだ小さい勇太は、一人ではすぐにトイレが終わらない。大勢の観客で混雑する会場で、弟を放っておくわけにはいかないのである。

（う、うう……んああ……っ、つく、はあ、はあ……っ。ず、ずるいよ、勇太……っ、な、なんで、男の子って、あんな簡単に……おしっこ、できるの……！？）

弟への羨望が膨らみ、我慢の限界に近い優奈を追い詰めてゆく。こんな状態で、弟のおしっこをずっと見せつけられるなんて、優奈にとってあまりにも刺激が強すぎた。

たったいま『男の子用』で済まされている勇太のおしっこが、まるでそのまま、自分のおなかの中へじゃぼじゃぼと注ぎ込まれているようにすら感じられる。

（う、くっ……んあ……っ）

刻一刻と張り詰める下腹部を懸命にさすり、優奈は大きく前かがみ。はあ、はあと荒く浅い息を繰り返す、きゅっとくちびるを引き結ぶ。

「ね、ねえ、勇太っ、……はやくして……！ おばさんたちも待ってるよ？ おねがい、勇太、はやくして……！」

（お姉ちゃんもおしっこしたいの……！ も、もう、おしっこ、がまんできなくなっちゃうのっ……！！）

本音を隠した必死の訴えは、けれど小さな弟にはまるでとどかない。優奈がずっとトイレを我慢しているのは、まだ誰にも知られていないのだ。

きゅうんっ、ひくひくっ。腹部の内圧がぐうっとたかまり、限界まで膨らんだ水風船が、収縮を求めて大きく蠕動した。力を込めた『おんなのこ』の奥。きつく締め付けた細い水路に熱い雫がそそぎこまれ、優奈の足の付け根で、大切な秘密の場所がぶくっと膨らんだ。

（っっ……！！ だめ、でちゃう……おしっこでちゃう、でる、でちゃう、もれちゃう……っ！！）

絞り出すような声が、少女の唇を震わせる。勇太は壁の『男の子用』トイレにむかったまま、『ん？』と首を傾げて後ろを見た。しよろよろ、となお景気のいい音を響かせている短いホースから、壁の便器の外側へ、ぱちゃぱちゃと飛沫が飛んだ。けれども、優奈にはそれを注意する余裕はない。ただただ『自分のこと』、優奈自身の秘密のダムを押さえ込むことだけで精いっぱい。

トイレ、トイレ！ おトイレ！！

おしっこのできる場所を求め、我慢の限界を訴える水門が、きつく引っ張られた下着の股布に、じゅわあっとイケナイ湿り気を滲ませる。

（……だ、だめ、トイレ……お、トイレえ……っ！！）

求める『おトイレ』。おしっこの場所。追い詰められた優奈の視線が、さまようブルーと水色のタイルの中に、ぽかりと開いたドアを見つける。……見つけてしまう。

これまで、あえて意識の外にシャットアウトしていた、禁忌の場所。

（……………っ！！）

ついに『そこ』から目を離せなくなり、切羽詰まった少女の表情が大きくひきつる。

『男の子用』のトイレの中にも設けられた、トイレの個室。『女の子用』とおなじ設備。

あそこなら。優奈だって。女の子だって、普通におしっこをすることができる。立ったままおしっこを済ませる勇太を羨むこともない。あのドアの中に駆け込んで、内側から鍵をかけてしまえば、中の様子は見られない。

——ちゃんと、おしっこが、できる。

（……っ……！！ で、でもそんなの……そんなの、だめ……！！ だって、ここ、男の人のおトイレなのに……っ！！）

思春期に特有の、異性への強い忌避感と潔癖感。女の子として当然のプライド。猛烈な羞恥。それらをすべて押し流さんばかりに激しさを増す、尿意。

さまざまな感情がないまぜになり、優奈の頭の中でぐるぐると渦を巻く。開いたままの男子トイレの個室から目を離せずにいる優奈の下腹部で、ひときわ大きく尿意が揺れる。

「んうっ、あああ……っ！？」

だだんっ、だんっ。強烈な足踏み、ぎゅうっと押さえつけられる足の付け根。おしっこ限界のカウントダウンが始まった。無情にも、

少女の身体のほうが音を上げたのだ。

限界を告げるシグナルに、優奈はたまたま、その場にしゃがみこんでしまった。

「ふぁ、う、ううう……ッ！！」

立てたかかたとにぐりぐりと股間を押し付けて、押し寄せる尿意の大津波、暴れ回すおしっこの水圧に、懸命に耐える、耐える、耐える。目の前が真っ白になる。きつく抑え閉ざしてなお、優奈の股間では、しゅるしゅると小さな水音が漏れ始めていた。

「——おねえちゃん？」

ふいに。

目の前に弟の声を聴いて、優奈ははっと顔を上げた。ようやくトイレを済ませ、ざあざあと水を流しながら、勇太が不思議そうに、しゃがみこんだ優奈を見下ろしている。

「ねえ、おねえちゃん、おしっこ？ オシッコ我慢してるの？」

「っ……あ、ちが……っ」

思わず立ち上がりかけた優奈の足の付け根で、じゅううと激しいおチビリの音。股間を激しく刺激するおチビリの誘惑に、少女はたまたま腰を落とし、ぐりぐりぎゅうぎゅうもじもじと、はげしく足の付け根を押さえつけた。

「ほら、おねえちゃん。おしっこでしょ？ ウソついちゃいけないんだよ？ ほら、トイレ行かなきゃだめ！！」

「あつ、だめ、まって、まって、勇太っ」

（で、でる、でちゃう、お、押さえてなきゃおしっこでちゃうの！！ て、手、放してえ！！）

幼い弟なりの、思いやりであったのかかもしれない。勇太はきつく『おんなのこ』を握りしめる優奈の手を掴み、そのまま無理やり引っ張るようにして、奥の個室のほうへと引っ張り始める。羞恥と尿意の狭間で、なお入ることを葛藤していた、『男の子用』の個室へと。

支えを失った優奈の足元で、じゅうう、しゅるる、ぱちゃぱちゃと、もはや取り返しのつかない音が響き始める。

「ほらっおねえちゃんはやくっ！ ちゃんと立ってよう！！」

「だめ、……勇太、だめ、おねがい、はなしてえ……っ、もれ、ちゃ、おしっこ……っ。おしっこでちゃううう！！！」

もはやなりふり構わずさけぶ優奈に、周囲の視線が集中する。『男の子用』のトイレにいた、大学生、会社員、白い髪の老人。優奈と同じくらいの男子もいた。

「ああっい、あああああ………ッ」

「おねえちゃんっ……？」

ひきつるような、優奈の悲鳴。勇太は目を丸くしていた。勇太よりもずっと年上の、おねえちゃんの優奈が、こんなところでオモラシをしてしまうなんて想像もしていなかったのだろう。

いちど押し破られた水門は、もうせき止めることは不可能だった。

じゅうう、びちゃびちゃびちゃ、ぶじゅううううう！！ すさまじい水圧で噴き出す下品な噴水は、下着越しでもまったく弱まる様子がない。綺麗に磨かれ、顔が映るくらいびかびかの、ブルーのタイルの上。

しゃがみ込んだ股間から、猛烈な勢いで優奈のおしっこが噴射され、水色のタイルを直撃して、四方に飛び散ってゆく。なきじゃくる優奈の足元、『男の子用』の床の上、正しい『女の子用』トイレ、『オシッコの場所』にすることのできなかった、優奈の黄色い水流が、激しく噴出を続けていた。

(初出：@kurogiri44 ツイッター投稿の加筆再録)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 『おねえちゃん、おしっこしたいの…！』

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 我慢

CATEGORY: 我慢

DATE: 05/03/2015 14:48:51

BODY:

ゆっくりと、進んでは止まるバスの中。遠足で元気いっぱい遊び疲れた『晴空の会』の皆を乗せて走る車内のそこここから、可愛い寝息が聞こえる。

インターチェンジの前、慢性的な渋滞にせき止められた高速道路、のろのろと動く車の列に挟まれた高速バス、その午後の気怠い雰囲気の中で。

「あ、あのね……あの、お、おねえ、ちゃん、ね？ ……、その、っ、……」

言葉に詰まり、ぱくぱくとくちびるを開閉させる星佳を、不思議そうに見上げて首を傾げる沙希。

あどけない瞳に見つめられるなか、耳の先まで真っ赤になった星佳の唇が、小さく「お」の形をつくる。擦れた声、荒い吐息。

(い……言わなきゃ……っ。ちゃんと言わなきゃ……。も、もう、だめ、無理よ……っ！！)

震える指先を握りしめて、星佳はくじけそうになる勇気を振り絞る。いくら恥ずかしくても、もうこれ以上、黙っているわけにはいかなかった。

「その、おねえちゃん、……お……お、……お、っ……、おしっ、……こ…！　っっ、……お、しっこ……、おしっこが、したいの……っ！！」

沙希の耳元に顔を近づけ、「お」から始まる恥ずかしい四文字言葉の欲求を、星佳は何度も何度もつかえながら、口にした。

○学生にもなって、こんな恥ずかしいことを——しかも、自分が『おねえちゃん』として引率すべき子供たちに、打ち明けなければならないなんて。星佳の整った顔は、みるも顕わに羞恥に染まってゆく。

「ええええー！？　おねえちゃん！？」

「っ……沙希ちゃん、しずかに！」

あれだけ秘密よ、と念を押していたのに、秘密を打ち明けられた途端に大きな声を上げた沙希に、星佳はあわてて口の前に指をたて、しーっ、しーっと強くアピール。沙希が、あ、そうかとばかりに両手で口を押さえた。

おくちチャックのまま、隣の席の沙希は信じられないというよう大きく瞬きをする。それはそうだろう、自分よりもずっと年上の『おねえちゃん』が、おしっこが我慢できないと告白したのだ。つぶらな瞳に見上げられ、星佳は耳の先まで顔が紅潮していくのを感じていた。

（だ、だって、しょうがないじゃないっ！！　……きよ、今日、ずっと……おトイレ、できてないんだもの……っ！！）

キュロットの上、ぎゅっと白い手が握りしめられる。子供たちの引率のため、活動的に整えた服装は、しかしいまや押し寄せる生理的欲求の前に縮こまり、可憐に小さく震えるばかりだ。

「ねえ、どうしておトイレいかなかったの？　おねえちゃん。先生も、バスにのるまえにおトイレにいきなさいって言ってたよ？」

「…………っ……」

当然の疑問。沙希の無邪気な問いかけは、おそらく本人も無自覚のまま叱責も暗に含まれているものだった。無論、星佳だって長い高速の上、おそらく重体になるとわかっているバスの出発前に、トイレのことを考えなかったわけではない。その時点でかなり強い尿意を覚えていたこともあり、なにがなんでもトイレに行っておかねばならないと考えていた。

それができなかったのは、やんちゃに暴れ回る子供たちに振り回され続けていたためである。

（しかた、ないじゃない……っ！！）

心の中をぶちまけ、反論したかったが、ここで沙希にあたり散らしたって意味がない。沙希だけが悪いわけではないし（むしろ、彼女はおとなしいほうの部類だった）、そうしたところでこの尿意が消えてなくなるわけがないのだ。

（……おしっこしたい……っ。トイレ、トイレ、行きたい……っ）

先生たちの確認にも生返事、きちんと言い出すことができないまま、出発するバスの中に乗り込んでしまった事を星佳は深く後悔する。たとえ皆を引き留めてしまうことになっても、あそこで星佳は自分がトイレを済ませてくるまで待っていてもらうべきだった。

もう、かなりおしっこがしくて困っているくらいだったのに。どんとんと募る一方の尿意に、『帰るくらいまでなら、だいじょうぶかな……』と、根拠もない自信に安易な決断をしてしまったことを、強く強く悔いていた。

「ふあ……う……っ」

バスがゆっくりと道路の継ぎ目に乗り上げ、かすかな振動をもたらした。それに連動してきゅうん、と下腹部でうずくイケナイ感覚が、じいんと恥骨の上に響く。

艶めかしい喘ぎ声が、少女の唇を震わせた

「……もお、やだ……っ」

自分を苦しめる、おなかの中の悪魔の尿意に、俯いた星佳の目元に涙が浮かぶ。

引率の子供たちは皆、休憩時間中に、バスに乗る前に、しっかりとトイレを済ませてきている。すやすやと可愛い寝息は、お昼寝前のきちんとしたトイレのおかげだ。

こんな小さな子たちでさえできることが、できないなんて。……そう思うと、下腹部の重みが一段と増すような気さえしてくる。

「おねえちゃん、へいき？ 我慢できるの？」

俯く星佳の顔を覗き込み、沙希がそう聞いてくる。心配すると言うよりは、おトイレのしつけも満足にできていない『おねえちゃん』を、責めているようにすら聞こえた。

けれど、沙希達よりずっと大人のはずの星佳は、俯いたまま、ぎゅうっとスカートの奥で膝を寄せ合わせ、小刻みに擦りつけながら、ぶるぶると首を横に振ることしかできない。

いま、まさに星佳は、ふいに押し寄せてきた尿意の大波にさらされ、羞恥と我慢が激しく綱引き合う、せめぎあいの最中にいた。

(っあ……あ、あつ、あ、ダメ……が、がまんできない……っ、で、でちゃう……っ、でちゃう、よお……お、おトイレ……っ！)

「ねえ、おねえちゃん？ おねえちゃん？」

答えない星佳に、ぐいぐいと袖を引っ張る沙希。騒ぐ彼女に目を覚まし、周りの席の子供たちが目を覚ます。『おねえちゃん』のおしっこ我慢とその限界に、にわかに皆が声を上げ始めた。

「おねえちゃん、おしっこ？」

「えー？ おねえちゃん、トイレ行ってないの？」

「いけないんだー！ ちゃんと、先生のいってること、まもらなきゃだめだよ！ ねえ、おねえちゃん！！」

「おねえちゃんへいき？ がまんできる？」

無邪気な言葉が、次々に星佳を責めたてる。もはや少女のプライドははずたはずた。『おねえちゃんは、おしっこがしたいの！』。誰にも秘密のはずの告白はあっというまに、バスの後部座席に広まっていく。

(ああ……だめえ……)

声にならぬ悲痛な叫びが、星佳の喉を震わせた。こんなことになるなんて。意を決して、覚悟を決めて「おしっこ」の欲求を口にしたらはずなのに。どこか予想していたけど、けれどやっぱり覚悟が足りなかった。

沙希に尿意を告白したのは、なにも彼女に縋るためではない。一緒に座る沙希に席を交換してもらい、バスの座席を立て、車体の前のほうに座る、先生たちに尿意を訴えるつもりだったのだ。

どこか——近くのサービスエリアの、トイレに寄って。

おしっこを済ませるための、休憩時間を取ってもらう、ための。

「ちょっと、今井さん、本当？ 我慢できないの！？」

騒然となる車内のさわぎは、やがてバスの前方まで届き。先生たちが次々に立ち上がり、後ろのほうを見る。本当なら、最小限——あと一人。主任の松中先生にだけ知らせるはずの、秘密が——運転手さんや、他の付き添いの子たちも含め、バス全体の公開共有情報へと変わってってしまう。

「すみません、すぐにサービスエリアに寄ってください。あの子、トイレが我慢できないみたいで——」

まるで、小さな子のように。トイレのために、バスを止める。そんな相談が堂々とはじまり、子供たちが口々に叫ぶ。

バスに乗る皆が、星佳のトイレのことを心配し、そのために動き出し始めていた。猛烈な羞恥の中それを感じ、星佳は、けれど

(だめ、ま、まに、まにあわ、ない……っ、でちゃう、もう、出ちゃうよお……っ)

バスは高速道路の中、ゆったりと車の列を走り続けている。

道路標識によれば、次のサービスエリアまでは、少なくとも 8 キロ。

子供たちが息を呑んで見守る中、星佳の——『おねえちゃん』の、長い長いオシッコ我慢劇場が、その第一幕の幕を上げた。

(初出：@kurogiri44 ツイッター投稿より加筆再録)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ
TITLE: 満員電車（略）の話。
STATUS: Publish
ALLOW COMMENTS: 0
CONVERT BREAKS: default
ALLOW PINGS: 0
PRIMARY CATEGORY: 小説
CATEGORY: 小説

DATE: 06/03/2015 00:20:34

BODY:

しーむす 11 で頒布した「事故で停車した満員電車の中でオシッコが我慢できなくなってしまった女の子とその友人の話」の再録です。

<hr size="1" />



藤倉葉子。眉目秀麗、容姿端麗。才色兼備。そんな四字熟語が並ぶ私の親友。

葉子なんて古風な名前の通り、イマドキ珍しいくらいの良いトコのお嬢様。別段、郊外に大きなお屋敷を構えているとか財閥のご令嬢であるとかそんなマンガみたいなことはないのだけど、お家は古くから続いているところだそうだ。

葉子のご両親は窮屈な家のしがらみなんかにとらわれまいと自由にさせてくれているということなんだけど、お箸の上げ下ろしとか、笑う時の仕草とか、授業中に当てられたときにすっと立ち上がる時の姿勢の綺麗さとか。そういうのは真似しようとしてもできない育ちの良さを感じるのである。

本人も嫌がるから、あまり言わないようにはしているけれど。かくいう私のようにガサツな女子とは雲泥の差。幼稚園のころから砂場で男子と取っ組み合いの喧嘩をし、学校に上がっても運動部で朝から晩まで練習となれば、そりゃ諦めてはいたけれど、内心こっそり女の子らしい姿にだって憧れもあるというもので。

クラスが一緒だったという程度のきっかけだったけど、いまは無二の親友である。休日に友達同士でお出かけをするとか、学校帰りにちょっと寄り道して買い食いをするとか、そんなのに憧れていたのだそう。

進学した先にちょうどいい部活がなかったというのもあって、いまは帰宅部まっしぐら。長年男子と間違われそうな短さだった髪も伸ばし始めてみたり。……まあ、伸ばしたら伸ばしたでライオンのたてがみみたいにみっともないばかりで、思うようにならないもんだなあと思ったりもしたけど。

それでも、お休みには車で待ち合わせて新都の駅までウインドウショッピングなんて毎日が、私はとてもお気に入りなのである。
「……あー。参った、ちょっと遅刻だ」

バスが遅れたのは言い訳にもならない。待ち合わせの時間を過ぎた駅前の時計を見上げ、足を速める。全力疾走なんて数か月ぶり。部活レギュラーを勝ち取った足もすっかり錆びついてしまったらしい。

葉子のことだ。待ち合わせに遅れるなんてことはまずないように行動しているはずだ。ことによったら何十分も待たせてしまっているかもしれない。お昼過ぎの集合だからおなかをすかせてるってことはないと思うけど――

飲みかけのスポーツドリンクをカバンの中に放り込み、階段を駆け上がり、約束の駅前の噴水へ。

予想通り、そこにはすでに葉子の姿があった。遠目にもわかる長い絹みtainな黒髪と、すらりとした背筋。同性の自分が言うのもなんだけど、とても清楚で美人だ。うちのガッコにだって可愛い子はたくさんいるけど、美人で綺麗な子となるとそう多くはない。まして、女子たちの間からも認められているとなれば、なおさらだ。

当然ながら人目を引いてもおかしくないのだけど――

「ありゃ」

葉子の周りには、あまり柄のよろしくない感じの男どもが数名。困惑した様子の葉子を取り巻くようにして、なにやらしきりに話しかけている。葉子もそれを断ろうとしているのだが、連中がしつこいらしくなかなか引き下がらない。

「まったく……」

大きいため息をついて、私は葉子と男どもの間に割って入った。

「はいはい、邪魔邪魔」

「あ、ヒロ」

「んあ、なんだオイ、お前、何よ」

「その子は私と約束があるの。邪魔しないでくれる？ いこ、葉子」

こういうのは有無を言わせずやるのがコツだ。葉子の手を掴んで引き寄せる。

「オイ、おめー、なんだよ、おら」

「聞こえなかった？ 私たちこれから約束があるの。じゃね」

追いつがる連中を一蹴し、そのまま葉子の手を引っ張って大股で歩きだす。オウだのヨウだの言い続けてるのは無視して、そのまま一気に改札へ。

ホームへと降る階段の前で、さりげなく背後を確認。追いかけてくる様子はないことをチェックし、そっと息を吐く。ああいう連中は部活やってた頃になんとか付き合いはあったけど、こうしてその辺から距離が開くと、今更ながらに緊張していた。じっとりと汗をかいた手のひらをひらひらと降る。

「葉子、へいき？」

「う。うん。ありがとう。……ちょっと、困っちゃってて」

「気を付けなよ。葉子は美人さんなんだから、ずっと一人で待ってりゃ目につくって」

「そ、そんなこと……っ」

とは言え、待ち合わせに遅れてしまった私だってその責任の一端はある。そこについてはしっかり謝った。

まあしかし、葉子だってこう見えて押しに弱いわけじゃない。薙刀とかも習ってるらしいし、普段はあれくらいの連中、もっと毅然と追い払うくらいできるような気もするんだけど……

「っと、電車来ちゃうわね」

ホームに快速が到着する旨のアナウンス。最寄りの駅から新都までを結ぶこの私鉄は、やたらに駅が多く、急行を逃すと三十分で済むところが倍近くかかってしまう。

「いこ、葉子」

「え……あっ」

引いた手がぎゅっと握りしめられ、私は階段の前でつんのめりかけた。何事かと思って葉子を見れば、彼女はちらりと改札の向こうに視線を送る。

「……どうしたの？ 電車、乗り遅れちゃうよ」

「え、っと……その」

「さっきの連中？ 大丈夫大丈夫。追いかけてこないわよ。なんなら帰りはＪＲからバスでもいいんだし」

待ち伏せなんてされてると思わないけど、葉子にフォローを入れる。それでもなお葉子は動こうとしないことに、少しばかり私が違和感を覚えたとき——電車が発着を知らせるベルが鳴り、階段を乗降客がせわしく上り始める。

「あ、まずい！ 待って待って、乗りまーすっ」

「ひ、ヒロっ」

私は葉子の手を引いて、そのまま快速の待つホームへとダッシュしていた。



飛び乗った快速は、やけに混雑していた。新都までの近道である快速は普段から利用者が多いけれど、休日の午後というよりは通勤ラッシュに近い人口密度である。どうやらさっきまで踏切故障があったらしく、そのせいでダイヤが大幅に乱れているということだった。振り替え輸送もが行われているようで、一気にホームに乗客が殺到しているらしい。

「わ……っ、ちょ、つちよとっ」

「っ……」

こちとら自転車通学の毎日だ。ラッシュなんてほとんど未体験の混雑の中、人並みに押し込まれながら一気に車両の奥へと押し込まれてゆく。

乗り換えの接続もあってぎゅうぎゅうと乗り込んでくる後続の乗客たちに背中を押し込まれながら、私たちはドアからも奥まった地点に押し込められてしまった。

「んぎゅっ……!？」

「っ……!!」

ドアの奥に立った葉子のすぐ前に到着し、どうにか足場を確保したと思った瞬間、背中を思い切り押されて思わずつんのめる。顔をこわばらせた葉子がいた。葉子の身体を押しつぶすように押し寄せてくる人の圧力に必死に対抗し、倒れそうになる体を支えるため、片手は手すり、もう片手はカバンを握って壁に押し当てられていた。

もがいて姿勢を保とうとするが、なおぐいぐい後ろから押し込まれる圧力はまったく弱まる様子がない。

葉子がびくと背中を震わせ、身を強張らせるのがわかった。

「よ、葉子、へいき？」

「う……うん」

むぎゅっと押し付けられる身体を、壁に手をついてどうにか押し返す。

私は壁を背にしてなんとかさやかな自由を手に入れていたものの、葉子の両手は人ごみと大混雑の中、まったく自由の利かない状態になっていた。

葉子が薄く顔を青ざめさせる。

「大丈夫？」

「次の駅までいけば、空くと思うから……」

言いながら、葉子はもどかしそうに足踏みをする。足元に置かれた他の人の荷物のせいで前につんのめった体勢を、なんとか手で支えている状態なのだ。

せめて変わってあげられれば——そう思うが、なんともならない。発車ベルは鳴り響いていたが、ほかの車両でもこんな感じで入り口に人が殺到しているらしく。ドアがなかなか閉まらない。

「無理な乗車はなさらないでください」「後続の各駅停車をご利用ください」「お荷物、お体を強く引いてください」

途中まで閉じては開きなおい、また閉じては閉まらずアナウンス。そんなことを十回近く繰り返して、いい加減社内の雰囲気がいまい感じに苛立ち始めたところで、ようやく快速はホームを出発したのだった。

◆ ◆ ◆

しかし、考えが甘かったことに気づかされるのにはそうかからなかった。まだ復旧して間が開かないためか、あるいは普段の倍以上の乗客を詰め込んだためか、急行の速度は普段の比ではないくらいにのろのろとしている。もどかしいくらいで通過駅のホームを抜け、時折減速しては信号待ちで停車してしまう。先行している各駅停車が線路に詰まっており、思うように進めていないのだ。

普段なら5分程度で着く隣の停車駅までは、たっぷり10分以上の時間を要した。無論、その間も車内はぎゅうぎゅうのすし詰めである。同じ姿勢を保つのに足首が悲鳴を上げ、痺れにつま先が痛くなる。私はまだ身動きができるからいいけれど、葉子は完全に姿勢が固定されてしまっており、だいぶ辛そうに見えた。

そうやって辿りついた次の駅でも、ホームには電車遅延で待たされた乗客が詰めかけており、ほとんど降りる人がいないのにさらに乗車率は増大した。私たちの周辺でも降りるお客さんは一人もおらず、むしろそこにさらに外から乗客が押し込んでくる始末。

とにかく乗り込んでしまおうとぐいぐい中に押し込んでくる人たちがいるせいで、私たちはますます電車の奥の奥に押し込められてしまう。

「んぎゅ……ごりや、新都まで降りれないなあ」

どうせ大きな乗り換えのある駅だ、到着さえすれば空くだろうけど、そこまではずっとこの混雑と付き合わねばならないらしい。乗客数の多さに車内は蒸し暑く、天井で動いているファンの送り出す風も生温い。

じっとりと背中に汗が浮かぶのを感じながら、少しでも気を紛らわせようと、葉子に様々な話を振る。明後日の学校の話。もうすぐはじまる中間試験、そのあとの修学旅行の話。ちょっと早いけど夏休みの予定。

どこか切羽詰まった面持ちの葉子の緊張を解せればとおもっていたのだけど、肝心の葉子の返事はひどく上の空で、ええ、うん、と小さい相槌を返すばかり。

「ねえ、葉子、だいじょうぶ？ ……場所、変わろうか？」

「……………」

問いかけるも、葉子は顔を赤らめて俯き、無言でふるふると首を横に振るばかり。

ひょっとして、何か怒らせるようなことをしてしまっただろうかと思ってみたが、さっきの待ち合わせの遅刻を除けば、いまいち心当たりがなかった。

発車ベルが鳴り始めると、葉子ははっと顔を上げた。動かせない背中はそのままだ、首をひねって視線だけをちらちらと、ホームのほうへと送る。やっぱり辛いのだろうか。

「どうする？ 降りる？」

「……う、うん。へいき……、だよ。新都まで……だいじょうぶだから」

葉子がそういうものだから、それでいいのかと一瞬納得しかけるが——堪えるように、とぎれとぎれに熱い息をこぼす葉子の様子は、やっぱりちょっと普通ではなかった。

るるる、と発車ベルの音を響かせながら、何度も何度も試行錯誤してようやくドアが閉まる。そのあともなおずぐずぐずとアナウン

スを繰り返し、がこんがこんとドアを揺らして、ようやく発射準備を終えた急行はよたよたとホームを滑り出した

「たぶん、前の各停もこんな感じだから、遅れてるのね」

「そう……だね。まだ、かかりそう、かな」

「1時間くらいはかかっちゃうかもねー。あーあ、時間余ったら映画でも行こうって思ってたんだけど、お店見て回るだけになっちゃうかな。……あ、それとも新しくできたカフェって言うってみる？ 水出しのアイス珈琲がおいしいって聞いたんだけど」

「んっ……そ、そう、ね。いい……かも」

ゆっくり進みはじめる電車がホームを抜け、がたんがこんとのろのろ運転で踏切を横断していく。こっちも長く遮断機が下りているようで、道路のほうも渋滞が起き、歩行者に自転車を抱えた人たちが不満げに通れるのを待ちわびていた。

「本当、事故とか勘弁してほしいよね……いつ着かわかんないのが一番困るよ」

「……う、ん……っ」

上の空の返事。さすがにこのあたりで私もいい加減、葉子の様子がおかしいのには気づいていた。

「ねえ、葉子、本当に平気？ さっきからなんか、様子が——」

いかけたその時。急に車内の照明が明滅し、列車ががくんと揺れる。

ぎいいいいいい！ 急ブレーキと共に車体が揺れ、がくんと傾くようにして停車した。慣性の法則が混み合ったままの車内をぎゅうっと圧迫し、私たちは満員の乗客にむぎゅっと押しつぶされる。

「ひう………ッ」

葉子の、ひきつような悲鳴が耳元で聞こえる。車内にざわめきが満ちる中、停車した電車に明かりが戻り、車内アナウンスが放送される。

『ただいま、付近の踏切に車が立ち入っており、緊急停止ボタンが押されました。状況を確認しているため、しばらく停車いたします。お急ぎのところ誠に申し訳ありませんが——』

「……なに？ また事故……？」

ぼやいて、私は葉子と密着した体を動かし、押しつぶされた乗客の中でもがく。と、

「っふあ………ッ!？」

耳元で、切羽詰まったような声。何事かと顔をあげ、私はそのまま言葉を失っていた。

葉子の顔は血の気が失せ、真っ青に青褪めている。もともと彼女の白い肌はとてもきれいだけれど、これは明らかに普通じゃない。

「ちょ、ちょっと、ホントに平気？ 具合悪いの？」

小さくかぶりを振る葉子。けれどその形のいい唇はきつく噛みしめられ、シャツから覗く首筋には汗がすごい。それなのに、袖から見える腕には烏肌が浮いていた。

いままで真面目に注意を払っていなかったことを、今更ながらに後悔した。何が親友だ、こんなことに気づけていないなんて。

「葉子、無理しないで。顔真っ青だよ……次の駅で降りよう」

「っ……」

ふるふると首が左右に振られる。まったく、強情な奴め。

「電車？ すぐに動くて。大丈夫大丈夫。私のことなんか気にしないでいいから。調子悪いんでしょ？ ごめんね無理させちゃって。だから、そんなんで我慢しなくてもいいんだってば……」

まったくこの混雑だ。私だって快適とは言えないのに、混雑の真ん中に押し込まれた葉子にはさすがに国だった。気分が悪くなくても仕方ないかもしれない。こうなる前に位置を代わっておけばよかったのだけど、後の祭りだ。

「無理しちゃだめだよ。途中で降りたっていいし、休むならどの駅だってできるもの。あと少しで……」

「ち……ちがうの……」

それでも、葉子は堅固に首を振った。ちがうの、ちがうの、と、俯いた顔の、さらりと流れ落ちる長い髪の間から、真っ赤に染まった耳の先端が覗いている。

「……お……、っ」

掠れるような葉子の声は、最初、言葉になって私の耳には聞こえなかった。だから、思わず耳を澄ませ、首を傾けてしまう。

「……お……い、……の」

そうして顔を近づけた先、葉子は爆発してしまいそうに真っ赤になった顔を俯かせ、顔全体から蒸気を噴き出させんばかりに俯いて。

「……お手洗いに、行きたいの……っ!!」

湯だったみたいに真っ赤な顔で、小さな唇を震わせて。

切実で、切羽詰まった、女の子の危機を私に告げた。

◆ ◆ ◆

「ちょ……え？ マジ？」

訊ねる私に、ぷるぷると顎を震わせて、葉子はこくん、とちいさくうなづいた。

「……も……がまん……できないよお……」

「ちょ、ちょちょちょ、待っ!? そんな急にっ……」

思わず身じろぎした私のほうを、近くの人たちが一斉に振り向く。吊革の上に細くたたんだ新聞を読んでいた（曲芸みたいなポーズで、執念を感じた）おじさんにじろっと睨まれ、私はあわてて口をふさぐ。

がたん、がたん。ゆっくり進むレールの音を聞きながら、そっと声を潜めて葉子に訊ねる。

「え、い、いつから……?!」

「……………つと……。ずっと、前、から……っ」

聞いて唖然とした。

なんでも。葉子は私との約束に待ち合わせる、そのはるか前から、ずっとずっとトイレを我慢していたらしい。家を出る前にもトイレに入ることができず、途中でどこかに寄り道すればいいものを、待ち合わせを優先するためにそれらも諦めてきたらしい。

約束の時間の30分前に来ていながら、私が来た時にいないと困ると思って、律儀に噴水の前を離れないようにしていたのだという。

思い返してみれば、ナンパ男たちに絡まれていた時も、葉子の言動は妙に歯切れがよくなかった。あれも、ずっとトイレに行きそびれていたせいで、それどころじゃなかったからなのだ。

ようやくそれに思い至り、私は今更のように目の前の靄が晴れたようだった。

「その、じゃあ……朝から、ずっと？」

「……………」

こくん。顎の先が震えるのとほとんど変わらないくらいの、小さな小さな肯定の頷き。

あまりにも衝撃的な告白だった。いろいろ不都合と妙な間の悪さが重なってしまったためか、葉子は朝から一度もトイレに行けていないらしい。信じられない話である。私なんか、朝寝坊してからもう3回……いや、途中のコンビニへの寄り道も入れれば、4回もトイレを済ませているのに。

「ヒロと……っ、会ったら、行けばいいやって、おもってた、から……………」

「そんな……気にしなくてよかったのに……！」

「だって……、時間の前にいなかったりしたら、嫌、かなって……」

「……………」

さすがに呆れた。いくらなんでも真面目すぎる。呆然となる私に、葉子は慌てたように首を振って、違うの、と付け加える。

「それに、その……一度は、もう、どうしようもなくなって……先に、その、っ、お手洗いに……行こうって思ったら」

「あー……あの連中……」

まるで見透かしたみたいタイミングで、あのガラの悪い連中に絡まれたということだろう。いや、どこまで気づいてたかわからないけど、ああいう手合いは不安だったり余裕のない感じの女の子を見つけるのが上手いものだ。葉子の内心を見抜かれていた可能性もあるかもしれない。

トイレに行きたいから邪魔しないで、というのは女子の断りの必殺技の一つだが、どう控えめに見ても男子に免疫のない箱入りお嬢様の葉子にとって、男の前でトイレに行きたいなんて言い出すことはできなかったんだろう。

あれは恥ずかしい姿なんて絶対に見せていい場面ではなかっただろうし。

私が着いた時点で、もうずいぶんあいつらは葉子に絡んでいた様子だった。それでなお断り切れないってことは葉子もよっぽど辛かったに違いない。

電車に乗ったのは2時少し前くらいだが、のろのろ運転とホームでの大混雑の乗り換えのせいで今はもう二時半を回ろうとしている。

待ち合わせの時間も考えると、私との約束をほっぽり出して（別にそんなのどうでもよかったんだけど）今すぐにトイレに駆け込みたいような状態に陥ってから、葉子はもう1時間以上も限界の我慢を続けていることになる。

それでようやく今になって音を上げるとか——いったい葉子のおなかのダムはどうなってるんだろうと言いたくなった。

片方の手は荷物ごと拘束され、もう一方の手は押し寄せる人波に耐えるため手すりを掴んでいる。

とは言え満員電車の中、ぎゅうぎゅうとすし詰めに押し込まれている状況では満足に足踏みもできないだろう。腰を浮かせるようにして、葉子は懸命に腰をくねらせていた。

体勢的に、ちょうど友人の痴態をまじまじと見つめる格好だ。なんとも微妙な気分で視線をそらそうとする私を見て、涙声で葉子が声を絞り出す。

「どうしよう……………」

「どうしようって……」

こっちが聞きたい。この車両には少なくともトイレはない。電車をくまなく探せばあるのかもしれないが、普段あまり意識したこともないため確証はなかった。いずれにせと、この満員すし詰め状態をかき分けてほかの車両に移動するのは無茶だろう。大声をあげて通してもらう——にしても、うまくいくとは限らない。

ちらりと向けた視線の先、涙目になりながら訴える葉子。さっきまでの青白い顔は一気に紅潮し、耳は先まで赤い。同性で友達の私に告白しただけでこんな有様だ。社内全体に聞こえる声で、「すいません、トイレです！ 友達がおしっこ漏れちゃいそうなんで！ 通してください！」なんて言えるわけがない。

そもそも、仮にトイレがあったとして、そこまでたどり着いたとして、この混雑で都合よく空いているだろうか？

「……ヒロ……おっ……」

「ああもう……っ」

唇を震わせる葉子は、もう5分も持ちそうにないくらいに切羽詰まっていた。はっきりといつからとは分からないけど、限界になってからもう1時間以上も我慢し続けているわけで、そりゃ頼りたくなるのだって分からなくもない。

代わってあげられるものなら代わってやりたいが、こればかりはどうしようもない。声にするわけにもいかず、心の中で葉子を応援する。

しかし。

白い首筋に汗をうっすらと浮かべ、うつむいて頬を染め、長いまつげの目を伏せてきつく唇を噛み、

(ん、うっ……！)

(……ふぁ……うっ！)

そんな声ばかり上げて、息をつめる葉子の姿は、間近で見るとなんだかイケナイものを見ているようでわけもなくドキドキしてしまう。もう本当に限界間近なようだ。そりゃそうだろう、あの葉子が形振り構わず私におしっこを告白してくるくらいだ。もう本当のぎりぎりまで一人で我慢し続け、どうしようもなくなって私に言ってきたのだろう。

「いま、何時くらいなんだろう……」

電車が停まってもう随分経つような気がする。時計を確認しようにも自由にならず、見慣れない窓の外をじっと眺めて、早く電車が動き、駅のホームまで到着するのを待つしかない。それまで葉子の我慢はもつのだろうか？ 冷静に考えて、激しく怪しいと言わざるをえない。一刻も早く電車が復旧して、次の駅まで動いてくれるのを待つしかなかった。

が、最初のアナウンスから新しい情報はない。ぎゅうぎゅう詰めの車内に、乗客たちの苛立ちがすこしずつ、しかし確実に折り重なっていく。

「ね、ねえ、ヒロ………っ」

「だ、だから頼まれてもどうしようも……」

「ち、違うのっ……!!」

もじもじと腰をゆすり——たぶん、それでも精一杯、外に見せないように耐えているんだろう——耳まで真っ赤になりながら、葉子はとんでもないことを頼んできた。

「もう、ホントに……駄目……だ、だから、お願い……、お、押さえて……っ」

「は？」

「お、おねがい……ぎゅって、して……っ」

そんな顔でそんなこと言われちゃったら、おそらく世の男どもの9割は勘違いするに違いあるまい。

だが違う。そういう意味じゃない。ある意味もっときわどくて怪しいことを、この友人は私に頼んできたのである。

つまり。私に——両手の自由にならない自分の代わりに、丁度具合よく手の空いている私に、代わりに、あそこの前押さえをしてくれ、と言っているのだ。

「い、いいの？」

「いいから、はやく……!!」

間抜けにもそんな確認をしてしまった（後で考えれば、もっと嫌がるとか困るとか、仮にも少女としてまともな対応があったようにも思う）私だが、葉子は普段の控え目でおしとやかな物腰とは似ても似つかない、切羽詰まった鬼気迫る迫力で言うてくる。それでもなお、可愛らしさがまったく損なわれてないというのはまさに驚嘆というほかない。

そう。さっきの告白時点で、我慢の状態はもはやぎりぎり。葉子の女の子のダムは、決壊のカウントダウンを始めている緊急事態であるのだ。このまま、その、万一のことがあれば被害をこうむるのは、ほぼ密着状態で押し込まれている私も一緒なのだ。

ええいままよとばかり、私は覚悟を決めて葉子の脚の方へと手を伸ばした。

綺麗なフリルとプリーツのついたスカートの上から、適当に見当をつけて手のひらを添える。

できるだけ刺激を与えないよう、優しくしたつもりだが、葉子はとたんに肩を震わせ小さく声を上げた。

「っ、くう……ツ……」

きれいな形の眉がきゅうっと寄せあわされる。

「っ……あ……っ」

ぶる、とあごを反らし、背中を震わせる葉子に、私の背筋にも緊張が走る。

「ちょ、ちょっと……？」

「っ、ち、ちがう、も、もう、ちょっと、上……っ」

「こ、こう？」

「んっ。……っ……ツ」

言われるまま、私は位置を微調整する。自分がトイレを我慢している時のことを考えて、どこをさすり、どこを押さえれば少しでも楽なるか。それを考えて。慎重に、ゆっくりと。けれど大胆に。

「ち、ちがうの、そこ、押されるとダメ……っ!! ……もっと、下、足のほう、きつく、おさえて……ツ!!」

「わ、わかった……」

自分を基準に考えてはいたものの、どうもそれでは多少外れていたらしい。女の子の大事なポイントというのは、人によってミリ単位で違う、繊細で敏感なものなのだ。葉子に言われるまま、指を這わせ、そっと手を動かす。

「んっ、ご、ごめん、そっちじゃ、駄目……!!」

「あ、う、うん……」

スカート越しにも、はっきりとわかるくらいに、葉子の下腹部には猛烈な力が籠められていた。みなぎるくらいに羞恥が詰め込まれた、まるでタイヤでも触ったみたいな硬い手ごたえ。はちきれんばかりにぱんぱんに中身が詰まっていることははっきりわかる。

葉子さんの「おんなのこ」もよくまあこんなに耐え続けたものだ。

「はあ……っ」

どうにか、丁度いい「前押さえポイント」が見つかったか。葉子が小さく息を吐きながら、ぐりぐりと股間を押し付けてくる。私の手は

ぎゅっと葉子の太腿の間に挟み込まれ、押し包むように摺り合わされた。熱く籠った熱気がスカートの根本をしっとりと湿らせる。不安定な姿勢でそうなったものだから、つま先立ちになった彼女の体重もぐっとこちらに預けられ、私はあわてて倒れないようにそれを支えこむ。

「っは……く……っ」

耳元で倒れこむようになった葉子の吐息が、艶めかしく響く。

(すごい……こんなに？ どれだけ我慢してんのよ……)

これ、もし私が男だったら、一発で痴漢犯罪検挙の状態じゃないだろうか。……いや、女の子同士でもちよつと言い訳の聞かない格好してる気がするけど。

「っはああ……あ……っ」

ぎゅうぎゅう、もじもじ、くねくね。目の前で熱っぽく繰り返される友人の吐息。おしっこ我慢の様子を、ゼロ距離の特等席で見せつけられ、私も思わず足をそっと擦り合わせてしまう。

葉子は全体重をあずけるようにして、股間に挟み込んだ私の手を足の付け根に押え込んでいた。そうしていないと、もうおそらくダムの『水門』をせき止めていられないのだろう。

つまり、これ。

私が……ちよつと気まぐれをして手を離してしまえば、葉子はそのまま——限界を迎えてしまうのだ。

そう考えると、ぞくぞくと背中を這い上がる、嗜虐心のようなものがあつた。

「……っ、いかんいかん」

思わず首を振る。才色兼備で知られ、校内でも下級生憧れの的である友人が、こうして身を縮こませ、切なげに腰をモジつかせて震える様には、背徳的なものがみえないでもないけれど。もし、ここで葉子が限界を迎えれば、そのまま噴き出したホットレモンティは、密着する私めがけてスプラッシュである。このせっぱつまった状況において、興味本位でやっていいことではない。

「あ。あつ、あ……ツ」

葉子が目を伏せ、ぶるぶると首を震わせた。

かあつと、そのうなじが朱に染まる。

「あ……ツ……」

ぐうっと押えこんだ手のひらに、ほんのわずか、熱い湿り気が増えたように感じた。『それ』が何を意味するのかを悟り、思わず手を引きかけるが、途端に切なそうに足をぎゅっと閉じてそれを停めようとする葉子。反射的な行動だったようで、ごめんつと言って震える足を放そうとするが、いま葉子の支えになるのは私の手だけで、これがなくなったらもう葉子は一人じゃ耐えられないはずなのだ。

ああもう。そんな顔されたら、無視できないじゃないか。

ぷしゅ、しゅっ、しゅ。ほんの少しずつ、レモネードの瓶の底で炭酸がはじけるような音。スカートの布地の奥で、わずかな湿り気が、ゆっくり、ゆっくりひろがっていく。熱のこもった下着の奥で、葉子の『おんなのこ』がひくつ、ひくつと細かく震えていた。

あれだけおなかを固く張りつめさせ、パンパンにさせているんだ。どれだけ辛いのか。

(……がんばれ、がんばれっ)

声には出せない。けれどせめて。友人の立たされた苦境に、少しでも力になろうと。私は葉子を心の中で応援する。

◆ ◆ ◆

10分ほど、過ぎたろうか。

何度となく唇を引き結び、息をつめ、肩を上下させは吐息を殺し。

耐えに耐え続けた葉子が、私の耳元で、ポツリ、とささやいた。

ごめん。でちゃう。

限界を告げるその声を、私は自然と受け入れていた。そうだろう。葉子はもうとっくに限界だった。普通の女の子だったら、最初の電車が止まった瞬間に音を上げていたに違いない。いや、そもそも私に会う前まで我慢して約束待ち合わせなんてできていたかどうか。

何よりも慎重深く、がまん強い葉子だからこそ、ここまでなんとか、限界を先延ばしにしてきたのだ。

だから。友人が尿意の限界を訴え、がまんできないことを知らせてきたのは、もう仕方のないことだった。「わかった。……だいじょうぶだよ」

このまま、あるがまま結果を受け入れよう。どんなにひどいことになっても、絶対に葉子のことを見捨てない。そう決意を込めて。私は友人に微笑みかける。

けれど。

「ヒロ……っ、か、カバンっ……」

葉子が要求してきたのは、そうではなかった。

言われるままカバンを探れば、中身は小さなプラカップとセットになった空っぽのペットボトルが見つかる。最近、健康にいいと有名な特保の健康茶である。

……その筋では、飲むとおしっこが近くなってひどい目に合うということで、評判の逸品だ。私も話のタネに、昼休みに一番小さなボトルを試し飲みして、午後の授業は休み時間のたびにトイレに駆け込む羽目になった。6時間目の英語の授業では。小テスト中についに耐えかねて、先生、トイレ行ってきていいですか！ と幼稚園みたいな宣言をしてしまったほどだ。

こんなものを500mlボトル1本も飲んでしまっていたのかと呆れてしまいそうになる。

聞けば、健康のためお茶を毎日朝晩飲むのが葉子の家での習慣だということらしい。外出時の飲み物も当然のようにお茶で、今日葉子は美味しいからということで、お出かけ先ではじめてこれを試してみたらしかった。いや、けっこう細かいところで世間知らずとは思ってたけど、それにしたってこれはどうなのか。

(こっ、これ、にっ)

喉を震わせて、ボトルを視線で示す葉子。彼女のことから、律義にゴミを家まで持ち帰るつもりだったに違いない。

(お、おねがい、おねがいっ……！)

空のボトルを示すその意図は、私にもわかりすぎるくらいわかっていた。あまりにも大胆で、あまりにもお嬢様らしくない発想。女の子としたりして失格当然の発想だ。

けれども――

「わかった。……動かないでね」

「う、……うん、はや、くっ……!!」

葉子のためなら何だってすると覚悟した。今更引いたら、乙女がすたるってもんだ。

◆ ◆ ◆

満員電車の車内が、ギンギンと揺れる。人口密度300パーセント。身じろぎも満足にできない状態で、もう30分近くこうして閉じ込められている。冷房は聞いているけど車内温度は徐々に上昇し、不快指数も増してきていた。どこか遠くで、子供の泣き声が聞こえ、それに文句を言う様子も聞き取れる。

そんななか、葉子は真っ赤になってうつむき、必死に声を殺して、唇を噛んでいた。

そりゃあ恥ずかしいだろう。これからやろうと思っていることを考えれば、正直私だって頭から蒸気が噴き出しそうだ。

でも、ぐずぐずしてられない。俯いたままの葉子の足の間。わずかに力を緩めた彼女の股間から手を引き抜き、そのままスカートの前をまくり上げる。反対側の手に掴んだペットボトルを用意しながら、

スカートの下、手探りで葉子の足の付け根へ手を滑り込ませる。

すべすべの太腿がほんのりと温かく、女の子としてうらやましくなるくらいにすらりと細い。そんな葉子の足の付け根、下着の股布をひつつかんで脇にずらし、空っぽになったボトルを突っ込んだ。見えない中で小さな飲み口を葉子の「そこ」に押し当てる。

(あっ……)

足を開かせた葉子の股の付け根に、丸い飲み口がぶつかった瞬間、そんな色っぽい声があった。ぎしっと軋むドアと窓の音がやけに大きく聞こえる。

(も、もうちょっと、前っ)

いくら付き合いの長い親友のことだって、おしっこの出口の位置なんてわかるはずもない。まあ、そりゃ、すごく小さなころは一緒にお風呂に入ったりしたし、トイレだって一緒に行ったりしたけど。手探りで友人の『おんなのこ』、秘密の場所を探し当てるその状況は、まるで——とんでもなくいやらしいことをしているみたいで。こっちまで頬が熱くなるのを抑えきれない。

いや、実際、これは友人としての範疇をこえてるのだ。

ペットボトルの胴を握り、何度か確かめるように、『そこ』を探り当て。うまくいくように、おしっこの出口、水門を邪魔する部分を左右に押し開く。

「お……音、きか、ないでっ」

最後の懇願はそれだった。

ぶしゅっ、とサイダーの栓を抜いたみたいな音を皮切りに、透明な容器の中に水流が噴射される。薄いポリ容器の中で跳ね返った水流が、じゃごおおおっとすごい音を響かせるのを、私は手のひら越しに感じていた。

ペットボトルの底を直撃するその勢いはとんでもないもので、掴んでいたペットボトルがそのまま水圧で跳ね飛ばされてしまいそうになるくらい。庭の水まきに、ホースの先端をつぶして勢いをつける、あんな感じに違いなかった。

「っ………あ……」

きゅっと寄せあわされる葉子の眉。おしっこの開放感よりも、こんな異常な状況での排泄の羞恥のほうが勝っているようで、その表情は苦悶に近い。

葉子が目をつぶっているのをいいことに、私はこっそり彼女のスカートを持ち上げ、その奥に目を凝らした。

(うわ、すご……っ)

私だって女の子だ。トイレを我慢しなければならない時だってあるし、そういう時、かろうじて間に合った個室の中で、音消しても完全には消えないくらいものすごい勢いと音で、足元にめがけ恥ずかしい熱湯を噴き出させてしまうことだってある。

でも、それが実際こんなにもすさまじい迫力であるなんて、知らなかった。そりゃそうだ普通に生きてたら見る機会もないしまじまじ観察するチャンスなんてあるわけもない。

ましてそれが——自他ともに認めるいかにもな清楚で慎ましやかなお嬢様の、葉子のものだなんて思うと。

取り落とさないようにつかみなおし、力を込めただボトルの中に、信じられないほど野太い水流が蛇行しながら注ぎ込まれていく。比喩抜きで、蛇口を全開したみたいなた量と勢い。

ぼじゅうううううっ……

その音も勢いもじゃぼじゃぼ程度ではないのだ。溜まったホットレモンティの黄色い水面を猛烈に泡立てながら、まっすぐに直撃するその様子は黄色いレーザービームめいてすらいた。

幸いだったのは、ちょうどこの時、電車の隣を急にやってきた快速が通り過ぎ始めたこと。どうやらそろそろ電車が復歸するようだった。揺れる車体が窓越しにも顔をしかめるくらい喧しい轟音に包まれるなか、葉子は私の持つペットボトルの中に、我慢に我慢をし続けた限界おしっこを噴射させてゆく。

たぶん、これがなければ、容子の排泄音は決して静寂とは言えない電車の中でも十分に周りに響きわたり、周囲の視線を一身に浴びてしまうくらい、ものすごい音だったと思う。

「はあ……あ、ふ、あつ……」

徐々に本当の勢いを取り戻す排泄とともに、葉子はとろけるみたいに気持ちよさそうな顔をして、堪えていた息を解放する。まるで、ひとりでこっそりいやらしいことをした後のよう。

いや、これはもうそういうのと同じかもしれない。トイレを我慢していた時に感じるむずむずは、一人でえっちなことをしているきっかけになった子だって少なくないはずだから。

ちなりともう一度、スカートの隙間に視線をやれば、すでに泡立つ水面の位置はペットボト全量の7割近くにも達しておいた。手ごたえもずっしりと重く、油断したらその重さと水圧でとり落としてしまいそうなほど。これだけ我慢してるんだから当然だとは言っても、まったく弱まる様子もない。

(このお茶、たしか500mlサイズのはずなんだけど——)

いったいどれだけ我慢してたのこの子、可愛い顔して。これもギャップ萌えてやつなのだろうか。

〇〇学院の現役女学生、深窓のお嬢様の絞りたて生お小水……なんていったら、世の変態どもが高い額で買うかもしれない、なんて馬鹿げたことを考えていた、その時。

「っ、ヒロ」

「え!? あ、な、なに？」

考えていたことを見透かされたのかと思ったが、まさかそんなわけはなかった。むしろその逆。容子は顔を真っ赤にして、余裕なく辛そうに身をよじる。じょぼっ、じゃぼっと押し当てた飲み口の奥に、断続的に水流がぶつかる。

「ま、に、あわないよお……っ」

「え？」

どうということ？ 瞬きをする私のそばで、目に涙をにじませながら。葉子は衝撃の告白。

「まっ、まだっ、まだおしっこいっぱい出そうなの……っでちゃう……っ、こ、これじゃ、溢れちゃう。入りきらないよおっ……!!!」

なんですと。

「ヒロお……っ」

縋り付くような視線。いや、500mlで足りないってそれいったいどうしたことよ。思いはするが、目の前の現実がすべてだ。葉子の股間に押し当てたペットボトルはもはや満水。それでもなお、葉子は激しく腰をよじり、ぶしゅっぶしゅっところえきれない水流を断続的に噴射させている。

女の子が、一度はじめちゃったおしっこを停めるなんて無理だ。我慢の限界で、一度トイレを前にしたら、女の子はもう辛抱できない。

どうすれば——？ 一瞬の迷いののち、私は葉子の足の付け根にボトルをあてがったまま、自分のカバンを空けた。奥に突っ込んでいた自分の分のボトルを引っ張り出す。自転車での移動中にのどが渴いたので買った、スポーツ飲料。

中身はまだ半分くらい残っていた。構うもんか。蓋をあけるのももどかしく、飲み口に口をつけて、残る全部を一息に飲み干す。

「んくっ……」

飲み終わるころには、葉子の股間のボトルはほぼ限界。飲み口のところまでいっぱい、本当の意味での満水になりかけていた。見事500mlを一杯にしてなお、葉子のおしっこの出口はなお内側からの圧力に耐えかねるようにぷくぷくっと膨らんで、まだ足りない、もっと出ちゃうとむずがっている。

瞬間の早業で、私は葉子の股間から中身の一杯になったボトルを遠ざけ、新しく殻にしたボトルを押し当てる。

ぶしゅっ、ぱたたっ。

地面に飛び散る小さな飛沫。

「もうちょっとでいいから！ ガマンしてっ！」

短く叫び、ペットボトルの交換を終えた直後。

新しく押し当てられた飲み口の奥に、ぷじゃああああっ!! と強烈な水流音。

すでに500mlペットボトルを一本、一杯にしたとは思えない——あまりにも猛烈な勢い。ふたたびじゃぼじゃぼと音を響かせ、ボトルの中に注ぎ込まれていく友人のおしっこ。さっきにも勝るとも劣らない勢いで、透明な容器がみるみる泡立つ水位を上げていく。

(うああ……)

その迫力に気圧され飲まれて、もう私は唸ることしかできなかった。握りしめたボトル内に注ぎ込まれるオシッコの振動が手のひらを震わせ、ほかほかと温かい、葉子のおなかの中で温められた羞恥の熱水が、黄色い水面をみるみる増していくのを黙って見続けるしかない。

あっという間に、葉子のオシッコは切り替えたボトルの半分ほどまで水面を上昇させていく。こりゃ、確かにさっきの一本だけじゃ満足できないのは明らかだった。 本当、いったいどれだけ我慢していたんだろう、葉子ってば。

まさかこれも溢れさせてしまうんじゃないかと思ってひやひやしたが、さすがにそうなる前に葉子のオシッコは見る間に勢いをなくし、じょつ、じょつと断続的に吹き付けられていく。

最終的に、ボトルの8割強あたりのところで、水面の上昇は停止した。とりあえずの避難として、ボトルにキャップをはめる。驚いたことに、葉子はこの状況でもきちんとおしっこをボトルの飲み口の中に注ぎ込み、一滴も外側にはこぼしていなかったのだ。葉子のお行儀のよさは、こんな状態でのおしっこの仕方にすら反映されていたのだ。そういえば、自分と比べて葉子のおしっこはすごくきれいに、まっすぐ前に飛んでいた。あれもひょっとして、日ごろの訓練とか礼儀作法で培ったものなのだろうか。

思わず妙なことに感心をしてしまう。

「よし、っ……」

こぼさないように注意して、慎重にキャップを閉めた500ml ペットボトル2本ぶんのおしっこ。健康茶とスポーツ飲料、どちらもラベルに偽りあり、だ。ずっしりと重いそれらは、つまり単純計算で約1リットル。こんなにも大量のオシッコを、葉子はあのほっそりしたおなかの中に押し込めていたというのか。

その圧倒的迫力に魅入られて、黄色く泡立った中身をしばしばと見つめてしまい、葉子は顔を赤くして私の手を掴もうとした。

「ひ、ヒロっ、見ないでっ」

「ごめんごめん……でも、見られるわけにはいかないしね」

現役学院生の生しばしばたてオシッコ。なんとも背徳的な響きである。

空になっていたコンビニの袋を取り出し、二本をまとめて押し込む。半透明の袋に入れて、外から少し透けて見えるようになってるのは、葉子としても激しく抵抗があるみたいだったが——だからと言ってカバンに入れるのはさすがにナシだ。まあ、こういう色合いのお茶だとかスポーツ飲料だと言い切れば、ギリギリ言い逃れができなくもない外見だろう。

◆ ◆ ◆

葉子がおしっこを終えてから、すぐにアナウンスがあつて。あつけないくらいあつという間に、快速は運転を再開した。ほどなく、電車は問題の踏切を越え、駅に入る。

降りる予定の駅ではなかったけれど、予想外の混雑と満員状態に耐えかねて、私たちはそのまま駅を降りることにした。

そもそも電車内であんなことになってしまった葉子のショックは大きいだろうし、ほかにいろいろしなければならなかったこともあったからだ。なにしろ、手にはカバンのほかに葉子さんの絞りたておしっこ入り500ml ペットボトルが2本もある。これの『処分』も考えなければならぬ。降りてすぐ、駅のトイレも探したけれど、さっきの事故のせいで婦人用トイレも混雑していて、しばらく順番待ちに並ばなければならなかった。さすがに今そんな気分にはなれない。

私も葉子が目の前で見せつけてくれた大迫力のせいで、すこしばかり『催して』いたのだけど——まあ、これは我慢できるはずだ。

それよりも葉子だ。あんなことになったショックはただ事じゃない。結果的になんとか、最悪の事態は免れたとしても——満員電車の中、乗客に囲まれて立ったままペットボトルにおしっこだなんて、女の子として相当のダメージを受けているに違いなかった。最悪、今日のお出掛けは中止にしなければならないかもしれない。そんなことを考えながら葉子の手を引いて、改札を出る。

「でも、替えの下着とか——ないとだめでしょ？ コンビニ行ってくるから、ちょっとここで……」

と。葉子の様子がおかしいのに、私はここでようやく気付いた。妙に足取りが重く、なお、顔が赤い。

「？ どうしたの、葉子」

「ご、ごめんなさいっ!!」

葉子はぱっと身を翻し、駅の出口から外へ駆け出してゆく。走り出す彼女を、私は慌てて追った。ちょっと余計なこと言い過ぎたか。あまり深刻になってほしくなかったのだけど、よく考えてみればちょっとひどい物言いだったかもしれない。でも、それだけ私にとっても衝撃的な出来事だったわけで――

「って！ 違う！」

言い逃れしている場合じゃない。よたよたと走っていく葉子の背中はずぐに見つかった。追う私に距離を詰められながら、葉子の足取りは繁華街を離れるように、駅のそばの路地を曲がり――

「葉子っ」

そうして、追いかけた先。路地を曲がった彼女を追いかけて、そこで見たものは、あまりにも私の想像を超えていて。

それが何を意味しているのか、一瞬私には理解できなかった。

行き止まりの路地裏――ビールケースやゴミ箱の積み上げられた、お世辞にも綺麗とは言いがたい場所。剥き出しのアスファルトに汚れた行き止まりの、その路上で。

長いスカートを引っ張り上げ、追いかける私に背中を向けるようにして、路地裏の隅に深く腰を落として。

お尻を突き出し、足を開き、ガニ股になってしゃがみ込み。

切羽詰まったせいだろうか、下着を下ろすこともできず、股布部分だけを指でつかみ、ぐいっと真横に引っ張って。

どう言い逃れのしようもない、完全無欠な『野外おしっこポーズ』100%の体勢で、しゃがみ込み開いた足元に、猛烈な勢いでおしっこを噴き出させる、親友の姿。

「っ……!？」

なんで、どうして、こんな？

ぶしゅうううじゅぼぼぼっじゃばばばば!!

路地裏に響くこの猛烈な音は、広がる水たまりの黄色さは、飛び散るしぶきは、立ち込めるにおいは、幻なんかじゃありえない。

だってついさっき、葉子はあんなにもいっぱい。500ml ペットボトルを2本近くも一杯にさせるくらい、とんでもない量と勢いで、おしっこをしていたのに。いくら健康茶の利尿作用がすごいと言ったって、あれからまだ10分も経っていない。いくらなんでも、たった10分でもう我慢できないほど強烈に、急に効いてくるはずが、ない。

それなのに、なんで葉子はまた――こんなに、オシッコをしてるんだ。

「み、みないで、ヒロ、お願いっ、見ないでよお……っ」

「え、だって……さっき……」

思わず踏み出しかけた手の中、コンビニのビニール袋にずっしりと手の中にかかる重さ。それは夢でも幻でもなく。袋の隙間から500ml ペットボトル容器、二本をほぼまるまる一杯にして、泡立つ親友のおしっこ。ほんの10分前にしぼりたて、出されたばかりの羞恥のホットレモンティは、まだほんのりと温かい。

ああ、それなのに。葉子はまたも、野太い水流を、勢いよく――まるで、トイレですのとまったく同じように、露天の、路地裏の、

だれがいつ通りかかるかもわからないような、行き止まりの道端で、足もとのアスファルトに向けて、盛大に、激しい水流を噴射させている。

あまりにも非常識な光景に、私は親友の路地裏でのおしっこから目が離せない。

「お、おトイレまで……がまん、しなきゃ、いけないのに……でっ、できなかったからっ」

消え入るような、親友の告白。

つまり。

葉子は。電車の中でこの500ml ペットボトルを2本、ほとんどいっぱいにしてなお。

それで、おなかの中のおしっこを全部、完全に、ありったけ出し切ったというわけではまったくなくて。むしろ、これだけの——約1Lに及ぶおしっこを排泄して、ようやく、電車を降りるまでの一時的な我慢が可能になるレベルまで、尿意を抑えることができた、ということ。

さっきのボトル内水面への断続噴射も、おしっこを出し切ったときのしぐさではなく、強烈な精神力と鍛えられたお嬢様の括約筋で、羞恥のダムの水門、なお水流を噴出させるおしっこの出口を、塞ぎ、せき止めることに成功した、ということだったのだ。

でも、一度中断したところでおしっこはあくまで一時しのぎ。どうにか電車が駅までたどりつくまで我慢するので精一杯。中途半端な排泄は、かえって大きな尿意の呼び水になる。それは女の子のトイレの常識だ。

類まれな精神力と、排泄器官の制御で、どうにか駅までは辛抱したものの。そこでもうなけなしの我慢は品切れで。改札前の婦人用トイレが外にまで並ぶ大行列なのを見たところで、葉子は再び限界を迎えてしまったということらしかった。

だから、せめて人に見られない場所に逃げ込んで——路地裏で、オシッコを始めようとした。

「……………っ」

「みな、い、で、よお……っ、ヒロのばか……ばかあ……っ」

地面をたたきつける水流は、強く激しく野太く、アスファルトの上の小砂利を押し流すほどに凄まじい。さっきあんなに大量におしっこを出したとはとても思えなかった。

長い我慢が続けたあとは、ちゃんとトイレを済ませても——、一気に全部出しきれなかったり、キチンとすっきりしたとしても、すぐにまた行きたくなくなったりすることがある。あんまりにも我慢しすぎて膀胱がパンパンになっていると、腎臓のほうで作られるおしっこは渋滞を起こしてそこにとどまっているらしい。

それでも、葉子のおしっこの様子は、そんな理屈では説明つかなかった。

「……葉子……」

ともかく。葉子の三度目のおしっこは、そこからなお1分以上たっぷりかけて、路地裏の中を一面水浸しにするほどの派手さを保ち、ようやく終わった。

ついさっき、出したばかりの、私が持つ、500ml ペットボトル2本分のおしっこに加えて、さらにそこから、私が我慢に我慢きった時の量と同じくらい、長く、激しく続いた。

その合計量は、推定で、たぶん……1.5L以上。下手をしたら、2L近いかもしれない。

ぽた、ぽた、ぷしゅっ、しよろよろお……

「はああ……っ」

ようやく全部を出し切ったという、安堵と開放感に震える葉子の、とろけるような吐息。
両手にずしりと感じる重さに、食い込むコンビニのビニール袋が、指の先を白くする。
静かに、『おんなのこ』から細い水流と、名残りのしずくを滴らせる友人の姿を、私はただ、じっと、食い入るように見、その姿を一
時も忘れぬよう、目に焼き付けていた。

(了)

(初出：2015.5.3 しーむす 11)

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 体育倉庫の中で

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 06/07/2015 01:50:05

BODY:

“——こんなトコロでなんて、絶対にダメなのに……！”

それが、少女たちの偽らざる本音だった。

内側からは脱出不可能の密室と化した体育用具倉庫。空調も不十分で蒸し暑い中、持ち込まれていたお茶は全部飲んでしまった。そして、それから2時間。皆の我慢はもはや限界に達していた。

前時代的なデザインである体操着から伸びたまぶしい太腿をもじもじと擦り合わせ、胸のゼッケンが読み取れなくなるほどに服の前をぎゅうっと引っ張って。体育座りで俯く唇からは、荒い吐息と艶めかしい喘ぎがこぼれる。

オシッコ我慢の牢獄と化した体育倉庫の中で、少女たちはありったけのプライドを振り絞り、迫りくる尿意に懸命に耐え続けてきた。それでもなお、倉庫のたった一つのドアが開く気配はない。

困惑と羞恥に揺れる皆の視線は、倉庫の中央に置かれた、防災用のバケツからじっと離れない。むろん、そんなものあり得ないとばかりに知らんぷりを決め込んでいる少女もいるが、それでもこの状況で意識せずにいるなんて不可能だ。

ご丁寧に、バケツは倉庫の床に頑丈に固定され、倉庫の中央からまったく動かせない状態にされている。せめて。せめて周囲の視線を遮るものさえあればまた話も違うのだろうが、用具の大半を取り除かれてがらんとしたわずか8畳ばかりの体育用具倉庫ではそれも難しいことだった。

ここまで都合よく用意された状況。それらがどんな意図で用意されたものか、少女たちにも察せないはずがない。と、なれば、その裏に隠された悪意や欲望についても、容易に想像することができた。

その思い通りになるなんて、少女のプライドにかけて、避けねばならないことだったろう。

けれど——

バケツの中には、すでに泡立つ黄色い水面が揺れている。少女たちのうち、3人がすでにここでオシッコを済ませていた。迫りくる尿意に耐えかね、我慢の限界を訴えて。バケツをまたぎ、誰からも姿を隠せない状態で、羞恥の噴水を激しく金属容器の中へと注ぎ込ませたのだ。我慢に我慢を重ねた激しいオシッコは、すでにさして大きくはないバケツの4分の1ほどを埋めている。

——ここに、異性の視線があればまた話は違っていただろう。こんなところでオシッコなんて、死んでも嫌！ と、最後まで乙女の意地を貫いてしまう子もいたかもしれない。

しかし。お互いに顔も見知ったクラスメイト、しかも同じ少女どうしということもあって、この場に閉じ込められた皆が皆、お互いの切羽詰まった窮地を嫌でも理解できてしまった。

“もうだめ、おトイレ、我慢できない——”

気心の知れたクラスメイトの前であるからこそ、本来ありえない選択肢を避けようとする最後の一线はもう崩れてしまう。「もう無理！ 駄目なの、ごめんなさいっ！」と心は甘え、下半身の欲望に屈してしまうのだ。まったくもって、絶妙なまでに少女たちの心理を知り尽くしたセッティングと言えた。

普段、清潔な女子トイレの個室の中で、慎み深く行われている、秘密の排泄行為。体育倉庫の隅に置かれたバケツで行われるには、あまりにも非常識、非日常。しかし一度その前例さえ作られてしまえば、その心理的抵抗はぐっと小さくなってしまう。

じゃばじゃばと音を立てて注ぎ込まれる黄色い水流、限界我慢からの解放によってもたらされる至福の表情。他人のトイレ姿を

間近に見せつけられることは、する側される側どちらにとっても猛烈なまでの、イケナイ誘惑を引き起こすものであった。ましてここにいる全員が張り詰めた下腹部を抱え、足元の付け根を握りしめ、膝立ちのかかとにぐりぐりと股間を押しつけるような状況である。気にするなという方が無茶である。

まして。決意とともに倉庫の真ん中に向かうクラスメイトの状況を察し、顔を背けようにも、もともと手を伸ばせばすぐ届くような場所だ。

じっと息をつめていれば今から『オトイレ』をしようとしている子の『オシッコの準備』の動作全てが、息遣いや身じろぎ、体操着を捲り下着を下ろす衣擦れの音まで聞こえてくる。

「んっ……」

またもひとり。羞恥の極みに至った少女が、真っ赤な顔を俯かせて倉庫の中央に向かう。体操着の前をぐいぐいと引っ張って、せめて身体を隠そうとしているが、その分背中側が大きくなり、後ろからは紺色の布地に包まれた可愛らしいお尻がぶるぶると震えているのが丸見えだ。

少女は意を決した表情で、下半身を覆う布地を引き下ろし、古びたバケツを跨いでしゃがみこむ。長時間の我慢で汗に湿った下着と体操着がくると丸まり、足に引っかかる。

白い喉が蠢き、かすかなうめきと、堪えていた息をふっと抜くと同時、剥き出しの股間の中央、ひくつと震えた薄桃色の部位から、凄まじい勢いの水流が噴射されてバケツの中に叩きつけられる。

ぶしゅっ！！　びじゅっ、ぶじゅぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ……！！

まるで上下さかさまになったクジラの潮吹きだ。最初の時の空のバケツの底を叩かん高い反響こそなくなったものの、黄色い噴水は水位を増したバケツの中の水面を直撃し、飛沫を跳ねさせ激しくぶつかって、白い泡を立てる。

みな年頃の少女たちだ。限界まで我慢した女の子のオシッコが、男子達の想像するような慎ましやかでささやかな「ちよろちよろ」などという生易しいものではないことは、十分に知りつくしている。

曲がりくねった水路を持つ男のそれと違い、女性の排泄器官は膀胱と直結したごく短い水路である。

長時間の密室への閉じ込めと、我慢の果てに、下腹部からぷっくりとせり出すまでに膨らみきった乙女のダムはその内側に猛烈な水圧を溜めこみ、伸びきった膀胱はその反動で猛烈な勢いで収縮を試みようとする。

凄まじい尿意は文字通り、少女の足の付け根の『水門』で支えられているといっても過言ではない。だからこそ、はちきれんばかりに膨らんで、乙女のダムが水門を開いた瞬間の放水はすさまじいものとなった。

金属製バケツの反響効果も伴って、噴水は体育倉庫の中いっぱい、ぶじゅ！！びじゅ！！　じゅぼぼぼぼ！！と恥ずかしい音を響かせ続ける。

それに驚き、慌ててせめて、音だけではできるだけ静かにさせよう——などという配慮ですら、裏目であった。排水孔に力をこめて、健気に勢いを調節しようとしても、むしろ出口を細めた結果膨らむ水圧によって勢い良くオシッコをバケツの外へと飛ばしてしまう結果になった。

「あっあああっ」

バケツに跨ったまま、少女の困惑の声が上がる。

ふらつく足もと、限界までの我慢から解放された排泄の解放感で言うことを聞かない下半身。

勢いよく跳ねあがった水流はバケツの縁を超え、激しく前方、1 mばかりを飛んで体育倉庫の床を直撃する。実に豪快な「はみション」だ。

とても乙女のものとは言えない、みっともない『お粗相』に、少女はますますパニックになるばかり。

床を直撃するオシッコの勢い——そのあまりの様子に、他の生徒たちが尿意を堪える腰の動きもさらに激しいものとなる。目の前でクラスメイトが繰り広げる、

（んんツ……はぁ……ッ）

尿意からの解放を、色・音・匂いまで含んだ五感で訴えかける特等席最前列で見せつけられているのだ。鉄壁の我慢もたちまち緩み、下着に恥ずかしい黄色い染みを広げてしまう。体操着を握りしめる指はさらにきつく力を込め、紺色の布地の上から股間を押さえる手はなお激しさを増す。

まだ、バケツの上にまたがっている少女がいるというのに——早くも「次」「その次」とばかりに腰を上げる少女たち。体育倉庫の中で繰り広げられる羞恥の宴は、なお終わらない。

（了）

（シズクのおとツイートより加筆再録）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 続・部活イジメのお話

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小ネタ

CATEGORY: 小ネタ

DATE: 06/07/2015 23:27:36

BODY:

部活のイジメの話 (http://shizuku44.blog114.fc2.com/blog-entry-107.html) の続編。

<hr size="1" />

「おねがいっ、ほどいて、コレほどいてよおっ！ でっ、出ちゃうの、もう……ほっ本当に、がまん、できなっ…はああっ…お、オシッコ！ オシッコさせてえ！！」

無理やり開かされたマキの両脚の付け根が、椅子の上を跳ねる。両足の膝と踝をガムテープで固定され、さらに両手も椅子の背板の後ろ。

自由になる部分と言えば口だけで、だからマキは惨めに哀れに、もはや我慢が限界であることを叫ぶしかない。

「えー、そんなこと言っちゃっていいんですか部長？ みーんな見てますよお？」

からかうように部員の声が飛ぶ。みっともなく取り乱す部長の姿に、また部室の中に笑い声が広がってゆく。

部員の中に、誰ひとり、マキを助けようという者はいない。

もはや県大会準優勝の功績も、部長としての尊厳も奪われて、マキは無防備に広げさせられた股間を震わせ、猛烈な尿意を懸命に堪えるばかり。

トイレ、オシッコ、とはしたくない言葉を繰り返し、哀れに声を上げる少女の苦悶と喘ぎが響く。

(オモランは、オモランだけは嫌……っ)

追い詰められた思考は、マキの頭の中から他のまともな選択肢を奪い去ってゆく。

「おねがい、お願いしますっ、オシッコさせてください……っ！！ もうっもうホントに、本当にダメなのぉ！！」

こんな卑屈な態度、マキは今まで誰にも見せたことがない。

オシッコ、トイレ、漏れちゃう。迫る崩壊の時から少女のプライドを守るための必死の訴え。

けれど恥を忍んでの懸命の懇願も、部員たちは冷笑して返すばかりだ。

「部長～、さっきからそればかりじゃないですかー。やだな、10分前ももうダメえ～限界い～って騒いでたのに、アレ嘘だったんですか？」

「そうそう、やればできるって。マキちゃんいつも言ってるよねえ？ ……あと3時間半だっけ？」

告げられる解放までの『残り時間』は、絶望的なまでに遠い。下腹部に押し寄せる尿意の波は刻々と高まり、既にマキの乙女の水門は緩み始めていた。大きく広げられたままの脚では通常の我慢すら難しい。

猛烈な尿意の波に抵抗しようと力を込めるたび、下半身をぴったりと包み込むスパッツの布地がたわみ、皺を寄せる。

紺色のスパッツの股間の合わせ目部分は薄く色を変え、いまなおじわじわと染みを広げおり、彼女の限界が間近なのは誰の目にも明らかであった。

濡れてぴったりと肌にはり付く布地は、吸水性に優れた性質をいかんなく発揮して、布一枚に隔てられた真紀の股間をくつきりと浮かび上がらせている。少女の水門がいまにも内側の水圧に屈しそうになり、ひくひくっ、きゅうっ、とひっきりなしに伸び縮みを繰り返している様子まで丸見えであった。

「だっだめっ、ダメえ、でっ、出ちゃうっ！！ 出ちゃうッ〜〜……ッ！！」

ひくひくひくっ、きゅうううんっ、ぶくっ、ぶくんっ。

大股開きにされたマキの股間、スパッツの合わせ目が大きくうねる。括約筋にありったけの力を込め、女の子の水門を閉ざそうとする少女の健気な努力が丸見えだ。

「あ、っあ、ああッ」

がくがくと身体を揺らすマキ。それに合わせて、彼女に縛りつけられた椅子の足ががたがた床の上を跳ねて、ボルトを軋ませる。

きつく歯を噛み締め、懸命に最後の瞬間を先延ばしにするマキ。しかし部員たちの視線は冷ややかだ。

「ちょっとお部長、ウルサイっすよぉ」

「ホントだね。さっきから出ちゃう出ちゃうってそればっか。何度も言ってるじゃない。マキちゃん？ ちゃんとオシッコは『トイレ』でってさ」

マキの足元には、彼女達が言う『トイレ』が用意されている。

昨年の大会、部創設以来の快挙となった表彰台の上で受け取った、銀色の準優勝カップ。

ちょうど、大股開きで脚を椅子に縛りつけられたマキの股間の真下。耐えきれなくなった羞恥のほとばしりをしっかり受け止められるよう絶妙に計算された位置に、銀色のカップは配置されていた。

『マキちゃんのオシッコトイレ』と、無造作にマジックで大書きされたコピー用紙が糊で貼り付けられて。

「くぅ……ウウウ……っは、は、あ、はあはあっ、あっ、あ、ダメ、あっあっだめえ、出ちゃう、出るっ、オシッコでちゃううう……！！」

自らの努力の結晶、長い労苦の果てにつかみとった栄光を踏み躪られる屈辱にも、しかしもはやマキは拘泥する余裕を持たなかった。

強力な利尿作用を持つ健康茶は、いよいよその本性を剥き出しにして、猛烈な勢いで少女の全身を駆け巡り、老廃物を残らず濾しとってマキの下腹部へと流れ込みつつあった。

直接排泄器官を攻め襲うようなすさまじい尿意は、腹部に鈍い痛みすら伴うほどで、マキの思考を根こそぎ奪い去ってゆく。

きらきらと輝く銀色のカップ——血のにじむような努力で勝ち取った栄光。それを、漏れる寸前のオシッコを受け止めるトイレがわりにする——そんな選択、絶対にありえないはずなのに。

「ああ、あっあ、あダメ、お、お願い、出ちゃう、もう漏れちゃう！！ なんでもいいから、これ、ほどいてえ！！」

「っ、ぬ、脱げな、っ、ふ、服、汚しちゃうッ……！！ つも、もう、っ、な、なんでもいいから、どこだっていいからあ！！ ちゃっ、ちゃんとオシッコさせてえ…！！」

まるで、羨望のように。椅子の下に置かれた銀の準優勝カップを見つめてマキは声を絞り出す。

『マキちゃんのオシッコトイレ』——血の滲むような努力の果てに勝ち取った栄光のトロフィーは、羞恥と屈辱で沸騰きった思考の中、いまやマキにとって排泄のための容器にしか見えていないのだ。

銀のカップにまたがり、このままここでオシッコをすることを、少女は心から切望していた。

「こ、これっ、ほどいて、ほどいてよ！！ 早くっ…！！ ふ、服、汚しちゃう…！！ こ、このままじゃ、ぬげな、い、オシッコできないからあつ……！！ はやく、はやくうう！！」

ひくん、きゅううんっ、ぷしゅっ。しゅるるっ……

恥ずかしい水音を響かせながらのマキの懇願に、部員たちは顔を見合わせた。

「……うわ…マジ？」

「ちょっと引いたかも……ありえない？」

「捨ててるよねー、いろいろ」

氷点下の視線で、軽蔑の眼差しが注がれているのも気付かずに。このまま、ここでオシッコをする気満々で、準備まで始めた部長を見て、部員達はますます冷やかな態度を強めていく――。

「はっ、はや、はやくっはやくう…！！」

「煩いなあ…はい、ほどいたよ？ これでいいんでしょ」

「…ツ、は、う、ふ、あああああツ……♪」

背中がかがみ込んだ部員が、面倒そうに告げる。腕を固定していたロープが床に落ちるや否や、マキはスパッツの股間を思い切り握りしめていた。

椅子の足ががりがり床の上を滑る。すっかり色を変えた紺色の体操服が、押さえこんだ手のひらの下でじゅうっと湿り気を滲ませた。しゅるしゅると細く開いた水門から熱い滴を洩らし続ける股間を懸命に握り締め、マキは激しく身悶えする。

「あ、あつああ、あつあ、だめ、出る、でるう…ツ！！ あつあ、だめ、出ちゃう、漏れ、ちゃ、う、っ、は、っはやく、はやく、こっちも解いてよお…ツ！！」

左手こそ解放されたが、もう一方の手を縛めるロープは依然健在だ。せっかく自由になった手も、いまは猛烈な尿意に苦しむ股間へと押しあてられ、女の子の我慢の応援で塞がってしまう。

「だって、どこまでとか言っていないじゃん。片っぽ解けてるんだからもう勝手にしてよ。マキちゃんの面倒見てる暇ないの、私達」

軽蔑を込めた視線がマキに突き刺さる。部室のの片隅でみっともなく尿意を叫び続け、マキに対する部員たちの信頼は完全に失われていた。

「くああ……ツツ」

マキはわずかなロープの隙間を使い椅子の天板に股間を擦りつけ、身体を伸び縮みさせて尿意を堪える。左手は脚の付け根をぎゅうっと覆い、揉みしだくように動いて少しでも水門の負担を和らげようとしていた。女の子がおしっこを我慢するための、ほとんど本能的な動作だ。

片手だけ自由になったところで、椅子の上から立つこともできないし、足と腰を縛り付けた結び目は椅子の背中側だ。

せめて両手が自由ならばまた話は違っていただかもしれないが――限界の尿意を堪えたまま慎重に指先を使う作業なんかできるはずもない。左手はそれ以外のことにかかりきりなのだ。

「ああ、あつあ……っ」

歯を食いしばり唇を噛んで、喘ぎをこぼすばやけるマキの視界に、銀色のカップが映る。地面に飛び散らんとしている恥ずかしい噴水を、受け止めてくれる容器、入れ物。

『マキちゃんのおシッコトイレ』。無造作に張りつけられたラベルが、少女の羞恥を猛烈にくすぐる。

(だ、だめ、もうダメ、我慢できない……ッ)

暴れ出した下腹部に満杯の恥水を堪えるため、マキはギューッとスパッツの上から股間を押さえつけた。がたがたと椅子を揺らし、腰を振りたてるようにして耐える。

すでに何度も先走りをチぢらせた股間の布地は、言い訳の聞かないほどに湿っている。

もしも、マキの着ているものが、今や漫画にしか出てこないような前時代的な体操服——いわゆるブルマーであれば、股間を覆う股布の所に指をひっかけて真横にずらし、そのまま放水するという、女の子の窮地の緊急避難、せめてもの建前だけでも、排泄の準備を整えることが可能だったかもしれない。

だが、腰から膝上までをびったりとカバーするスパッツでは、もはやどうすることもかなわなかった。どうあっても避けようのない悲劇——苦痛すら伴う限界我慢からのオモラシ。

それを回避せんとマキの身体は本能的に動いていた。

恥ずかしいオシッコを、床に撒き散らすことだけは、避けようと。

「、ああ、だっだ、だっ、だめええ、待って、待って、まだ駄目……！！」

脚の付け根をヒクつかせ、全力をもって水門を閉ざす活躍筋に力を籠める。マキは、股間を押さえていた手を離れた。

紺色の布地の奥からは緩んだ水門を震わせ、じゅじゅじゅじゅぶぶぶと猛烈な熱い水流が噴出し始める。

オシッコまみれの手を伸ばして、マキは床に置かれた銀色のカップを掴み取り、それを大きく開いて固定された脚の付け根へと押しつけた。

「はあああああ……ッ」

『マキちゃんのオシッコトイレ』。そう書かれた、県大会準優勝のカップの中めがけ、羞恥の噴水が解放放たれる。

布地が引っ張られて肌に密着し、股間パッドの位置もずれていたため、ほとんど遮るものもなく、マキのおしっこは布地一枚をそのまま通り抜け、激しい水流となって噴き上がる。

ぶじゅじゅじゅじゅっじゅ！！　ぶじょじょぼぼぼぼぼほう！！

銀色に輝くカップの中に、はしたない水音が響いた。

「はあああああ……ッ」

陶酔にも似た、天にも昇らんばかりの甘い喘ぎ声。

緩む唇、うっとりとした表情。股間を突き抜ける解放感にマキの心が躍る。絶妙な角度で——本人にはそんな意図はなかったかもしれないが、股間から吹き上がる水流はほとんど外にこぼれずカップの中に注ぎ込まれていく。

「うっわあ、本当に出しちゃってる……」

「ここどこだか分かってるのかしら……？」

「ねえねえ、誰か写真、証拠撮っというよ。ほら、はやくっ」

クラスメイトの視線を余所に、凄まじい勢いで噴き上がる水流は、カップの中へ激しく叩きつけられ、じょぼじょぼぼと泡立ちながらその水位を増す。

銀色のカップを満たす、羞恥の熱湯、黄金色の液体はみるみるカップの縁までせり上がってくる。地方大会の準優勝ということで、片手で持つには少々重いほどの大きなカップだったが、健康茶の利尿作用で我慢を続けていたマキが溜めこんだ熱水がこんな小

さなカップで収まりきるわけがない。

ぶじゅじゅじゅぶじゅううううじゅぼぼぼじゅごおおおおお……！！

「はああああん……っ♪」

（オシッコ……出てる、…おしっこ…気持ちイイ……っ）

我慢に我慢を重ねたマキの並々ならぬ規模もものだった。スパッツを貫通してカップの中に叩きつけられる恥ずかしいオシッコは泡立ちながら銀色のカップを満杯にして、縁ぎりぎりまで盛り上がってきた。

その上でなお、マキのオシッコはまるで終わる気配を見せなかった。許容量を超えて注ぎ込まれた恥水はあっさりとカップの縁を乗り越えて、じよばじよばと床に溢れだす。銀のカップを満たすマキの羞恥の噴水は、まるでシャンパングラスのよう。

「ちょっと…なにやってんの！！ どんだけ出せば気が済むの？」

「うわー……オモロシとか、信じらんない……っ」

部員達が声を上げて距離を取る。

そんな彼女たちの姿すら、もうマキには届かない。恥骨を震わせる途方もない解放感とともに、ただただ下半身から噴き出す羞恥の熱湯に身をゆだね、足元のカップへと注ぎ込むことに夢中になっていた。

下品な欲望を優先し、自分の栄光すら台無しにして。噴き出す黄色い羞恥が、銀色の栄光を染めていく。

部長の肩書を失い、その権威も尊敬も地に落ちて。ただ、恥ずかしいオモロシ少女となったマキのオシッコは、銀色のカップから溢れ落ち、床一面に水たまりとなって広がりつづけた。

（初出：シズクのおとツイート 加筆再録）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:

AUTHOR: クロギリ

TITLE: 一日中我慢をする羽目になった女の子の話。

STATUS: Publish

ALLOW COMMENTS: 0

CONVERT BREAKS: default

ALLOW PINGS: 0

PRIMARY CATEGORY: 小説

CATEGORY: 小説

DATE: 08/03/2015 00:35:59

BODY:

しーむす！ 11で頒布した「不幸な偶然で一日中ずっとおしっこ我慢をする羽目になってしまった女の子の話」より。
もともとこのあと続く予定だったのをページの都合でカットしてしまったので、あと半日くらい我慢は続く予定。

<hr size="1" />

「お姉ちゃんっ、いつまで入ってるのー！？」

真新しい制服と、通学鞆。出かける準備を整えた少女が、トイレの前でノックを繰り返す。忙しく中を急かす千佳に、しかし姉の返事は「んー、もうちょい」ばかり。朝から一体中でナニをしているのかと文句の一つも言いたくなるのだが、いくらやっても千佳の抗議は暖簾に腕押しだ。

「もぉー、私が先だったんだよ！？ ご飯食べたらトイレ行こうと思ってたのにー！！」

さっきまでは父親が生活に必需なこの個室を占領していたため、千佳は仕方なしに朝起きて一番のトイレを諦め、先にご飯を食べることにしたのだ。

前原家の大黒柱はいつもトイレの中で新聞をじっくり読みこむのが日常で、家族からの評判はすこぶる悪い。

水を流すのもそこそこに、遅刻遅刻とつぶやいて玄関を飛び出していく父を呆れた顔で見送り、ようやく入れると思ったのもつかの間。やってきた姉が順番を無視してすると個室に滑り込み、鍵をかけてしまったのである。

「ねー！！ 百花姉えってば！！」

「待ちなよ、もうちょいなんだから……」

「百花姉え、まだ時間あるんでしょ！？ わたし今日日直なんだよ？ 先に入れてくれたっていいじゃないっ！！」

「んー……」

日直は担任の連絡や、花瓶の水換えなど、いつもより15分ほど早く家を出なければならない。そろそろその刻限が迫っており、千佳としてはその前にぱっとトイレを済ませて、キモチ良く出かけたかったのだが……。

「あと五分……」

「そんなに待ってらんないよ！ 急いでるんだから、早く代わって、百花姉え！！」

聞こえてくる唸り声から察するに、姉はどうも何日かぶりの『ご無沙汰』であるらしい。千佳だって女の子だ、事情くらい分からなくはないけれど——昨日も遅く帰ってきて寝坊しておいて、妹の事情も考えずにのりくらりとまともな返事もしない態度に、いい加減千佳も限界だった。

「もぉ、いいよ、学校ですからっ」

憤慨と共にバンと一回、ドアを叩き。千佳はそのまま通学鞆を背負って家を飛び出した。

玄関のドアがバタンと閉じると同時、トイレのドアから姉が顔を出す。

「千佳ー、空いたぞー って、あれ、もういないの？」

いつの間にか取り残され、百花は部屋の中を見回して溜息。

「せっかちなあ……ちょっとぐらい待てばいいのに。日直なんてちょっと遅れたくらいじゃ怒られないでしょ」

妹が聞いていたら火に油を注ぐような言い分は、しかし既に家を出かけた本人に届くことはない。千佳はとっくに家を出、ぷりぷりと怒りながら、家の前の通学路を早足で歩いていたのである。

時の流れに『I F』は ないが。

この時、もう少し大人しくじっと我慢して、順番を待っていれば——と。千佳はこの日、最後の最後までその事を後悔することになる。

◆ ◆ ◆

片道 1 キロ、まっすぐ歩けば 1 5 分の通学路を足早に、千佳は学校へと辿り着いた。日直の事で気分が急いでいたのもあったけれど、いつもならきちんとできるはずの、朝一番のトイレをちゃんと済ませられなかったせいで、どうにもおさまりが悪かったのも確かである。

しかも、途中で道路工事のせいで通行止めになっている路地を迂回して、大通りを通ったせいで 5 分ほど余計に時間がかかってしまい、気付けば予鈴の数分前。日直どころか、どうにか遅刻はせずに済んだけれど……といったかなりギリギリの時間であった。

昇降口で上履きに履き換え、階段へと急ぐ。ちらりと覗いた昇降口前のトイレは、下級生たちで混雑しているようだった。入学して半年もたてば、慣れや気のゆるみから朝寝坊や遅刻もちろほら見え始め、学校でトイレを済ませる子達も増えてくるものだ。

(……うー、トイレ行きたいけど、あと、あとっ)

ちょっとだけ後ろ髪を引かれながらも、千佳は教室へと向かった。そのためにいろいろなものを我慢してやってきたのだ。まずは日直の仕事を先に終えてしまわなければならない。

「おはよー」

「あ、おはよう、千佳ちゃん」

隣の席の智美に応え、千佳は鞆を下ろす。鞆の中身を机に入れ——もちろん几帳面な千佳は横着して教科書やらノートやら

を学校に置きっぱなしになどしていない——智美が手元に体操着袋を抱えているのを見て、あれ、と千佳は声を上げた。

「え、今日一時間目から体育だけ？」

「うん。時間割変更だって——昨日、先生言ってなかったっけ？」

「えーっと……」

さらりと返され、千佳は視線を泳がせて思い返す。

そう言えば昨日の帰りの会でそんな連絡があったのを、今更ながらに思い出す。今日は担任の先生が一日留守にしている、そのせいで時間割が変わっているのだ。その影響で朝の会も中止になっていたはずである。

決して忘れていたわけではなく、昨日の夜授業の準備をしている時にも、あさ、身支度をしているときにもちゃんと頭の中には入っていた。その後、トイレの前でバタバタしていたせいで、すっぽり注意が抜け落ちてしまったのである。

（あー……馬鹿だ、わたし）

担任の先生がいない場合、よっぽど緊急の用事でもないなら朝の会の連絡もない。つまり、千佳が済ませなければならないのは精々花瓶の水換えくらいであった。そんなものの者の重病で終わってしまうことで、いっそ授業が始まる前の時間でだって簡単に済ませられる。千佳が急いで来る理由などどこにもなかったのである。

（んっ……）

ぶるっ、と背中が震える。日直の役目と家族へのいらだちで後回しにしていた感覚が、ぐうっとおなかの下に膨らんでくる。

やることがないとすれば、優先すべき用事もない千佳はまず、なによりも向かいたい場所があったのだが——

「朝から体育って、ちょっと嫌だねえ」

「う、うん。……そうだね」

運動が苦手な智美は単純に言葉のままの意味で言ったのかもしれない。が、千佳にとっては少しばかり意味合いが違っていた。

体育の武蔵先生は、風紀委員の顧問で生徒指導を兼ねており、毎朝、校門の前で生徒達に声をかけている。もちろん体罰とかそういうのではないけれど、規則や時間に厳しく、授業開始前に全員揃って着替え、ランニングと準備体操を済ませていないと怒られてしまうのだ。

（う、その前に——おしっこ、したいのに……）

教室の黒板上の時計を見上げる。時計の針はもうすぐ8時15分になろうとしている。朝の会がないとはいえ、今から着替えて、体育館まで移動するとなると、それだけで授業開始までぎりぎりだ。加えて準備運動にランニングもおこななければならないとなれば、とてもトイレまで寄っている余裕はない。動揺する千佳を追いたてるように予鈴が鳴り響く。

「なんだよ、まだ女子残ってんのか？ 着替えらんねーじゃねえか、早くしろよー」

入り口に詰めかけるのは隣のクラスの男子達だ。体操着入れを振り回しながら、彼らは早々と教室に入ってくる。彼らは暇さえあればグラウンドを駆け回っているような連中で、体育の授業前に一遊びしようというつもりだった。

千佳のクラスの女子達が抗議の声を上げるが、ずかずか踏み込んでくる男子達は悪びれもせず、人目も関係なしに着替え始める。

今回ばかりは男子の言うことが正しい。体育は2クラス合同で行われ、着替えは女子と男子がそれぞれ別々の教室に移動して行う決まりなのだ。

気づけば智美も着替えをもってもう教室を出ていた。

「もお……わがままばっか言うんだから」

口を尖らせて手早く花瓶の水を換えてから、千佳は渋々体操服を抱えて教室を飛び出した。一応、職員室にも寄って連絡があるかどうか確認しなければならない。

この分だと、朝一番のおトイレも諦めるしかなさそうだった。

◆ ◆ ◆

途中、こっそりとトイレに寄れないかと回り道をしたものの、やっぱりそんな時間の余裕はなかった。息せき駆けつけた体育館では、もうクラスの大半の生徒が集まっていた。目にもとまらぬ早着替えで早々と体育館についていた男子達が、冬の初めの温度にも関わらず走り回っている。

(ひやうっ……寒いっ……)

吹き付ける風が、千佳の足元に染み込むように浸食してくる。夏冬兼用のジャージと体操服では、冬の朝 1 時間目の寒さを遮断するにはあまりにも心もとない。

染み込んでくる寒さがさわさわと千佳の下半身を撫で、強張った膝裏、ふくらはぎ、足の付け根を意地悪く刺激する。

ぶるると身を震わせると、おなかの奥にむず痒さがじいんと広がっていく。

(うう……おトイレ……)

後ろ髪を引かれる思いで校舎のほうを振り返るが、早々と体育館では当番達が準備を始めていて、ジャージ姿の武蔵先生もパイプ椅子に陣取っていた。

いまさ「ちょっとおトイレ行ってきます」とは言い出せない雰囲気の中、千佳はしぶしぶ準備運動に参加した。ラジオ体操を終え、体育館をぐるりと 3 周する。ガマンを続けながらの準備運動は、どこか気もそぞろで、足取りもおぼつかない。

「よーし、揃ったな？」

千佳が体育館の周りを走り終えるのと、本鈴はほとんど同時だった。どうにか間に合った千佳を見て、先生が点呼を取りはじめる。

そそくさと列についた千佳だが、その様子はどうにも落ち着きがなかった。そわそわと回りを見回し、時折体育館履きを爪先を重ねるように足踏みを繰り返す。

(……うっ……やっぱり、おトイレ行きたい……)

家を出た時に比べても、下腹部の欲求は随分とはっきりしたものになっていた。気にするまいとすればするほど、下腹部の疼きはその強さを増していく。

それもそのはずで、通常、眠っている間は姿勢や神経の鈍化によって、人の身体というものは尿意を感じないようにしている。そうでもなければ、夜中の間中…… 7 時間も 8 時間もトイレに行かずにいられるわけがないのだ。

朝一番のトイレが勢いも量も多いのはそのためである。

目を覚ましてから 1 時間半。千佳の身体はすっかり覚醒し、下腹部に溜まったおしっこの量を明瞭に察知するには十分だった。

本来、朝一番のトイレは目が覚めてすぐに済ませていなければならないものだ。一晩をかけて溜まったおしっこは、少女の意識するよりもずっと大量に下腹部を占領しているのである。

それなのに、家のトイレを使えないまま学校に来て、そのまま崩しに始まってしまった1時間目。千佳の下腹部では、本来ならとくに済ませているはずだったおしっこに、一向に排水許可が下りない乙女のダムが、予定が違ふと抗議の声を上げはじめていた。

(んっ……ふ……)

体操服のスパッツの上からそつと下腹部をさすり、千佳はちらりと列の後ろ、用意された器具に視線を向けた。

今日の授業はマット運動と跳び箱だ。なんというか、よりもよって、と言うか。……どう控え目に表現しても、あまりタイミングのいい課題とは言えない。

(さっき、走ってる時もちょっとキツかったのに……)

登校時には意識しなかった、ずうんと足の付け根にのしかかる下腹部の重み。一步を踏み出すごとにじいんと腰骨に響く刺激は、徐々に無視できないものとなっていた。

思わず下腹部に伸びた手のひらが、そつとおなかの下の方をさする。ジャージの上からとは言え、だいぶ危険な仕草である。

(トイレ……)

知らず、膝が寄せ合わされ、太腿がすりすり擦り合わされてしまう。

強くなり始めた尿意は、一度意識し始めるともう忘れることは難しかった。そわそわと我慢の仕草を始めてしまいそうになるのを堪えて、千佳は俯きがちに説明を聞く。

運動は得意な方の千佳だが、今日の課題であるマット運動と跳び箱は、どうにも頂けない。だって、どっちも——あまりにも、いかにもだ。

せめてバスケットボールとか、バレーボールとか、勝負で気がまぎれるようなものなら良かったのに——そう思いはするが、まさか今から急に内容が変わるはずもなかった。

渋々参加する千佳の隣で、智美が嫌そうな顔をしていた。

「いいなあ、千佳ちゃん、跳び箱得意だもんね……」

「そ、そうだね」

羨ましそうに言われ、千佳はそう答えざるをえない。しかし残念ながら、今はちょっと事情が違う。

実際、この日の千佳の成績は散々なものだった。

出席番号順で跳び箱に挑んだものの、どうにも気になるおしっこを下腹部に抱えながらでは助走の歩幅も狭まり、踏み切りも力いっぱい、思い切りとはとてもいかない。普段なら軽々と飛べるはずの6段にもつまずいて、跳び箱の上にとんと尻餅をついてしまう始末。

(……ひゃんっ！？)

お尻がぶつかった衝撃で、一瞬足の付け根の水門が緩みそうになり、千佳は慌てておしっこの出口を引き締めた。幸いにして被害はなかったものの——下着の奥にはじいんという痺れがいつまでも残り、そのまましばらく跳び箱の上から動けなかった。

マット運動でも同じようなもので、脚を揃えてマットの前にしゃがんだ時点で千佳のおしりは小さくモジモジと左右に揺れ、我慢したままの開脚前転を途中で失敗してしまう始末。

じっと閉じておきたい足を大きく広げ、おなかを圧迫するように前回りする姿勢は、とてもではないけれど今の千佳には簡単にでき

ることではない。

「んっ……あ……う」

思わず小さな声を上げてしまい、慌てて脚を閉じて顔を紅くするなど、周囲のクラスメイトも不思議に思うくらいの状況だった。それでも、我慢しながらではどちらも厳しいと思われる器械体操を、下着やスパッツを汚すこともなく、特に失敗なく乗り越えたのは、千佳にしてみれば花マルを貰っても良いくらいの頑張りだったのである。

◆ ◆ ◆

「——良し、今日はここまでとする」

生徒指導も兼ねている武蔵先生の授業は、しっかり授業終了のチャイムと同時に終わる。時間を切り上げてあとは自由、なんてことはまずあり得ない。

（終わったあ……！！）

そして、今日もチャイムと同時におしまいになる体育の授業。落ち着かない体育座りからきりつ、れいを済ませ、千佳は内心で喝采を上げた。

これでやっとトイレに行ける——その喜びに胸を一杯にしなが、そのまま立ち上がると、千佳はまっすぐに体育館横のトイレに向かおうとした。

その時だ。

「千佳ちゃん、ちょっとちょっと！ 今日、3班と4班が片付け当番だよ」

背中から呼び止められ、千佳はつんのめるようにその場に立ち止まる。腰を当てて眉をとがらせているのは、同じ班の田中さん。その険しい視線には、千佳のサボりを見逃してくれそうな様子は見られない。

体育の授業では、準備当番と片付け当番が週替わりの交代制で決まっている。授業の必要な道具を用意したり、片づけたりを担当するのだ。今日の授業、準備は他の班の分担任だったのだが、片付けは千佳の3班も含まれているのである。

（うう……早く終わらせて、早く、トイレ行こ……）

呼び止められているのに、それを無視するなんて千佳にはできない。田中さんとはあんまり親しくないせいで、こっそりトイレを我慢していることを打ち明ける気分にもならなかった。

仕方なしに千佳は、3班の他の女子と跳び箱を運び始める。並んだ跳び箱は全部で四つ。女子4人で片づけるには結構な大仕事だ。しかし向こうでは当番のはずの男子達が、担当のはずのマットを放り出したまま、倉庫から勝手にバスケットボールを出して遊び始めていた。

「ちょっとお！ 男子、片付けなさいよ！！」

「わかってるよ、後でやるから！」

最近バスケ部でレギュラーになった瀬戸という男子が中心になって、即興の3オン3まではじまる始末。女子がいくら注意の声

を上げても、ゲームに夢中になっている男子達は聞き入れない。具合の悪い事に、こういうことに厳しい武蔵先生は席を外している。

「ねえ！ 先生に怒られるよ！ 次のクラスの子だって来ちゃうし！！ はやくしなよ！！」

「うっせーなあ、わかってるよ、よし、じゃあよ、あと1点——あ、3点取った方の勝ち！！ 勝ちな！！」

全く聞く耳を持たない彼等に、3班の女子達は溜息。

「しょうがない、私達でやっちゃおうよ」

「えー！？ なんで！？ 男子がやればいいじゃない。私達ちゃんとやることやったよー？」

「でも、他のクラスの子に迷惑になっちゃうし、良くないよ。みんなでやればすぐ終わるし……男子には、後で先生に怒って貰おうよ。ね？」

風紀委員の田中さんの意見もあり、女子達は渋々マットのほうも片付け始める。

しかしそんなのは、千佳にはまるっきり余計なお世話であり——

（そんな……うう、ぐずぐずしてたら休み時間、終わっちゃうじゃない……）

特段の切羽詰まった事情が千佳を急かす。せめて急ごうとする千佳だが、もともと男子の仕事なのに、と田中さんを除いて女子達はいまいちやる気がない。もたもたとしているうちに時間は過ぎ、休み時間も残り数分となってしまった。

「あ、もうこんな時間、みんな、急がなきゃ」

まだ白熱の3オン3を続けている男子たちを尻目に、体育館横のトイレに入る時間もないまま、千佳は教室に戻ることにになった。途中、トイレの入り口を横切るときに、そっちに身体が引っ張られるような気がしてしまったのは、錯覚ではない。

着替えの時間も、千佳はすっかり上の空。授業のことなんかそっちのけで、さわさわ、ざわざわと下腹部で揺れる尿意の波のことばかり気にしていた。

「……………んっ」

スパッツを脚から抜き取る時、じんと脚の付け根に感じるむず痒い尿意に、千佳は思わず声を上げてしまう。反射的にもじもじと足をすり合わせ、腰をよじってしまい、千佳はかあっと頬を熱くした。

そんなところでチャイムが鳴る。千佳は大急ぎブラウスを着直し、スカートを穿いて、体操服をたたむ暇もなく自分の教室へと戻った。

◆ ◆ ◆

2時間目は算数の時間だった。

体育館で遊んでいた男子たちは案の定遅刻して、先生にこっぴどく叱られた。罰として宿題を追加されたことに彼らは不満たらただったが、正直ちよっという気味だと千佳は思う。

（あんたたちが真面目にやってれば、私もおしっこできたんだからね……！）

1 時間目から体育で動いた後とあって、教室の雰囲気はどこか気怠い。黒板に刻まれる図形問題が、ますます眠気を誘ってくる。

今日の問題は、水槽の容積を求める計算。

「いいですね、基本的には体積の求め方と同じです。水槽の底面積と、高さの掛け算で表されます。ただし、水槽のガラスに厚さのある場合は少し注意が必要で——」

呪文みたいな計算問題に、いつもの千佳なら思わずうとうと舟を漕いでいただろう。けれど今日ばかりは、千佳の目はぱっちりと冴えていた。

けれど、授業に集中できているかといえば、お世辞にもそんなことは言えない。

(うう……トイレ……っ)

千佳の尿意はさらに強さを増していた。そわそわと椅子の上で腰を揺すり、ときどき机の下に手を差し入れてそっとスカートの前を押さえてしまうほどだ。

体育の時間では、まだそんなに気にならないくらいに弱まるときもあったのだけど—— 2 時間目に入ってから、強弱の波はあっても、千佳の下腹部は尿意を感じ続けている。

授業が始まる前、つい水飲み場に行ってしまったのも良くなかったかもしれない。体育の後で喉が渴いていたのもあって、がぶがぶと冷たい水を飲んでしまったことを、いまだのように千佳は後悔していた。飲んだ分がそのままおしっこになるわけではないのは、千佳もわかってはいたけれど——

「じゃあ、問い四を——前原さん！」

「は、はいっ」

先生の指名に、千佳はあわてて立ち上がった。こんな時に限って当てられてしまうなんて。運命の理不尽さを呪いながら、千佳は黒板の前に出て、チョークを手に計算式を書き始める。

問題は、底に穴の開いた水槽に、水を注ぎ込むものだった。水槽の体積を使って 10 分後に水面の高さがどうなるかを計算するもので、水槽に空いた穴から中身の水がこぼれだすのが問題を難しくしている。

意地悪な問題だ。自分だったら絶対、こんな穴なんかあけておもらしなんかさせないのに。ついそんなことを考えて、千佳はぶんぶんを首を振る。

(んっ……)

黒板に向かい合ったところでタイミング悪く尿意の波が押し寄せ、千佳は背中を強張らせた。チョークの先が止まり、指先が震える。

いますぐ「ぎゅうっ」と脚の付け根を握り締めてしまいたい。けれど教団の上、黒板の前で皆の視線にさらされながらそんな事が出来るはずもなく、千佳はスカートの裾をきつく掴み、尿意の波が和らぐのを願うしかなかった。

押し寄せる尿意に我慢しながら板書した計算式は大きく歪み、読めない数字が 2 カ所ほど並んでいた。苦勞して書いたのに減点もらい、千佳は理不尽な想いに唇を噛んで席に戻る。

(……やばあ……もうちょっとで、出ちゃった……っ)

板書の間中、強まっていた尿意は、椅子に腰を下ろすと幾分楽になった。周りの視線が遠のいたことを感じながら、千佳は机の下でそっと足の付け根を押さえ、パンパンに膨らんだ下腹部をなだめる。

ノートをとる暇もなく教科書がめくられ、板書が進む。結局その時間、千佳はほとんど足の付け根に押し寄せるおしっこの波をや

わらげながら、残りの授業の時間を過ごした。

◆ ◆ ◆

それから。千佳の我慢は際どいところの綱渡り。意地悪な尿意と女の子のプライドの綱引きは一時も気の休まらないまま続き、どうにか残り時間の25分を乗り切った。

途中、何度も危険な瞬間があり、もう少しで下着を濡らせてしまいそうになったものの——そこは根性で回避して。

2時間目を乗り切った千佳に、待望のチャイムが鳴り響く。まさに、苦難の道を乗り切った少女にとって、ゴールの瞬間を知らせる祝福の鐘。

（よかった……ちゃんと我慢できた……！）

胸の中で喝采を叫び、日直の号令もないうちから腰を浮かしかける千佳。しかし。

「ん。もう時間か……ちょっと中途半端だな。この例題だけ終わらせるぞ」

「えええーっ！？」

思わぬ授業延長の宣言に、クラス中からブーイングが起こる。千佳もそれに混じって思いっきり叫んでいた。

けれど、その理由は皆とは違う。下腹部に切迫した女の子の危機のためだ。

（は、早くトイレ行きたいのに……っ！！）

一度期待してしまった心は抑えきれない。はやばやとトイレに飛んでいた千佳の心は、もうすっかり準備万端でおしっこの用意を始めている。

（あ、っ、やば……っ）

一瞬の油断はすぐさま排泄欲求の『呼び水』となった。きゅううんっ、とおなかの奥の水風船が収縮し、強烈な尿意の波となって足の付け根に押し寄せる中。千佳は椅子に腰かけたままばたばたと足を動かして、懸命に下腹部を直撃するイケナイ衝動に耐える。

きゅんきゅんと疼く足の付け根は甘く痺れ、女の子の水門がひくひくと震え始めていた。それを下着の股布の上からぎゅっと手のひらを当てて押さえ、力を込めておさえこむ。

「つくう、……っは、ああっ……」

一秒が一分にも思えるほどの長い長い延長戦は、休み時間の半分ほどをオーバーして終了した。

「では、ここまでとする。宿題を忘れないように」

本来なら20分はある2時間目と3時間目の休み時間。たっぷり遊ぶことができるはずだった。ほかのクラスの生徒たちで混雑し始めた廊下を横目で窺いながら、皆の視線が恨みがましい目で先生を見つめる。

クラスからの避難の視線の集中砲火にさらされても、先生は涼しい顔をしていた。

（うっっ……授業普通に終わってたら、トイレだって楽勝で行って帰ってこれたよ……！！先生の意地悪っ……！！）

やっとトイレに行けると思った瞬間の、10分間の延長我慢。千佳だって文句の一つも言いたくないというものだ。

ともあれ休み時間だ。短い残り時間にもさっそく外に遊びに行こうとする男子たちを尻目に、千佳は授業の片付けもそこそこに席を立った。

早くトイレに——そう思ったところで背中から声かけられる。

「前原さんもお手洗い？」

廊下にはクラスメイトの女子数名が連れ立っているところだった。千佳ほどではないとはいえ、トイレを我慢していた女子は結構いたらしい。1時間目がいきなり体育で、そのあとに授業の延長。着替えに教室移動があったせいで、トイレに行きそびれた子たちは結構いるようだった。

「ねえ、じゃあ一緒にいこ」

「う、うん……」

申し出を断ることもできず。千佳は彼女たちと連れ立ってトイレに向かうことになった。今すぐトイレまで全力ダッシュしたい千佳にしてみれば、みんなと一緒にのんびりお喋りしながらなんて遠慮したい気分だったのだが——

（あんまり慌てるのも恥ずかしいよね……）

ついそんな気分になってしまったのは仕方ない。しかし、階段下のトイレにやってきた千佳たちが目にしたのは、思わぬ光景だった。



トイレの前にずらっとならんだ順番待ちの列、列、列。

廊下まではみだした行列に、千佳はおもわずうえっと顔をしかめてしまう。

（ちよ、ちよと……！ なによこれ……！）

長く続く列を前のあたりにして、さっそく敏感に反応を始めてしまった下腹部。小刻みに足踏みを始めてしまうのを押さえ切れず、口の中に溜まった唾をこくりと飲み込む。

「うわー……混んでるねー」

「どうしたんだろ？」

クラスメイト達の反応は呑気なものだ。一緒にトイレにやってきたとはいえ、彼女たちの多くは、学校に来る前や朝の会の前にトイレを済ませているのである。朝からずっとトイレに入りそびれ、今なお、おなかをおしっこでぱんぱんにさせた千佳とは、いろいろ事情が違っていた。

近くにいた先生に話を聞いてきたクラスメイトが、ぱたぱたと駆け戻ってくる。

「……聞いてきた。なんかね、上のトイレ故障しちゃってるんだって」

「それで下級生もきてるんだ……参ったなあ。これじゃ入れないかもよ」

「うん。……そうだね」

排水管のトラブルがあって、2階3階のトイレが丸々使えなくなっているらしい。結果、ほかの学年やクラスの子たちもここに集まってきてしまっているということのようだった。

「工事の人がもうすぐ来るから、そんなにかからないで使えるようになるって言ってたよ」

「そっか……」

（うう、仕方ないけど、並ぶしかないわね……）

そう思って千佳が、順番待ちの一番後ろに近づこうとする。

「どうしても我慢できないなら、男子のほうを使ってもいいって」

「えー、なにそれ。やだーっ！」

1階の隣のトイレに、女子用とマジックで書かれた張り紙がされている。先生手作りの緊急用だろう。

しかし、いくらそうになっているとはいえ、男子トイレに入ろうとする少女たちは一人もいない。当然だ。いろいろ複雑な年頃である。男の子のトイレなんてそんな簡単に使えるはずがない。

つんとおすまし顔で、女子トイレの順番待ちに並ぶしかないのである。

「どうする？ 並ぶ？」

「うーん……」

複雑な顔をするクラスメイト。その視線には、上の階からやってくる下級生たちの姿もある。

「いいや。次の時間まで我慢する。すぐ直るみたいだし」

「そうだね」

「えっ……」

思わぬ展開に、つい驚きの声が千佳の口を突いて出た。

「千佳ちゃんは？」

「あ、あたしは……」

ついもじもじと腰を揺すってしまい、千佳は頬が紅くなるのを感じていた。

「並んでみる。順番回ってくるかもだし」

「そっか。じゃあね」

「……………っ」

小さく足を踏み鳴らし、その最後尾に並ぶ千佳。

授業延長で削られた休み時間はあまりにも短く、続く列はあまりに長い。そしてとうとう、千佳の順番が回ってくる前に授業の予告が鳴り始める。

（そんなあつ……、ま、まだ、私、トイレ行けてないのに……っ）

鳴り響くチャイムの中、ぐりぐりと廊下に上履きを押し付ける千佳。

「えー？ もう時間？」

「……ねえ、授業始まっちゃうよー。次まで我慢しよ？」

「そうだね、まだそんなにしたくなかったし」

並んでいた生徒達も次々に仕方なしに教室に戻ってゆく。

(もうっ！ 我慢できるなら、最初っから並ばないでようっ……！！)

まだ余裕のある子たちが、最初からそうしてくれていれば——もしかしたら千佳まで順番が回ってきたかもしれないのに。八つ当たりと分かっているとは思わずにはられない。

列に残されたのは、切羽詰まって余裕のない子たちばかり。千佳の前にはまだ3人の順番待ちがあり、個室が開く様子はない。廊下からみるみる人がいなくなり、次の授業の用意をした先生たちがやってくる。

「っ……」

戻るか、留まるか。しばらくの葛藤の末。千佳は後ろ髪を引かれながらも、待望のトイレを後にせざるをえなかった。

◆ ◆ ◆

3時間目、地理。

千佳のクラスの担任の周防先生の授業だが、やってきたのは別の先生。千佳の良く知らない、白髪の先生は、周防先生は急な用事ができてお休みだという連絡を短く告げた。

その知らせに教室がわっと湧いた。

「ということで、この時間は自習とし、DVD鑑賞の時間とする。……うるさくしないようにな」

カーテンを引いて電気を消し、暗くなった教室のスクリーンに、古い外国の映画の映像が流される。遊び疲れた男子は居眠りをはじめ、興味深げに映画の字幕を見る女子たち。

「……っ……ふ……っ」

そんな中。薄暗い教室の机の下で、千佳は誰も見ていないのをいいことに、スカートの前をぎゅっと押さえ続けていた。閉じた腿の間に手を挟み、足の付け根をぎゅうっと握りしめる。

ぎし、ぎし、軋む椅子が小さな音を立てる。映画の音声が大きいので今はなんとか誤魔化しているが、千佳の姿はいまや立派なおしっこ我慢の真っ最中。浅めに腰かけた椅子を揺らし、机にもたれかかるように上半身を倒し、上履きのかかとを交互に持ち上げる。

(うーっ……おしっこ……トイレ……っ、おトイレ行きたい……っ)

誰も見ていないのをいいことに、千佳の我慢はますます大胆になってゆくばかりだ。

少女の下腹部、募る尿意は高まる一方。きゅんきゅんと疼く膀胱が、固く張りつめているのが分かる。

下腹部の重みがぐんと増し、千佳の『おんなのこ』の出口に押し掛かる。朝から一度もできていないおしっこは、3時間目に入っでどんどんその勢力を増していた。朝食で飲んだお茶と野菜スープが、少女の健康な新陳代謝によって新たな尿意のもととなり、小さな下腹部のダムへいまなおどんと注ぎ込まれている。

ぴたりと閉じ合わされ、細かく擦り合わされる太腿の奥。水門を閉ざす括約筋がひくひくと震え、ダムの水圧に耐えかねたように膨らむ。

(ん、う、くううつ……っ)

押さえた手のひらの応援で押し寄せる波をやりすごし、荒く息を繰り返す千佳。一層激しく揺れた椅子の足が床を擦り、ぎしぎしと尾をと響かせる。隣の席の亜里沙が、怪訝そうな顔をした。

「千佳ちゃん、どうかしたの？ 平気？」

「えっ！？ う、うん、なんでもないっ」

咄嗟に答え、へいきへいきと首を振る。

そう答えてしまってから、すぐに千佳は後悔した。具合が悪いとでも言って、保健室に行くことにすればよかったのだ。調子が良くないのは本当だし、トイレに行く恰好の口実だったのに。

「……？」

まだ少し、不思議そうな亜里沙に、精一杯の平静を取り繕いながら。千佳はちらりと代理の先生のほうを見る。白髪の先生は、普段は千佳のクラスを教えていない、別の学年の担任らしい。

「……………」

どうしよう。トイレに行きたいと言おうか。たとえ最初は恥ずかしくても、勇気を出したほうがいいのかもかもしれない。切羽詰まった下腹部のダムを考えれば、意地を張っている場合ではないかもしれない。張り詰めたおなかをさすって、千佳はぎゅっと口を引き結ぶ。

(……トイレ、行きたいって……言わなきゃ)

でも、それでも。それが一番いいというのは分かっているのに、女の子の羞恥心が邪魔をした。クラスの皆の前でそれを口にするのが、どうしても躊躇われてしまう。

さっきの休み時間、千佳はクラスの皆とトイレに行った。予鈴が鳴った時に順番待ちの中に残っているのだって見られている。

(またトイレかって思われちゃうのも、やだな……)

千佳の心が揺れる。クラスの皆と一緒に映画に熱中している先生は、ちょっとやさっと手を挙げたくらいでは気付いてくれそうにない。気付いてもらうには、大きな声を出すか、席を立てて言いに行くか。いずれにしても皆の注目を浴びてしまうのは間違いなかった。

時計をちらりと見上げる。残り時間は20分。

(あと20分くらいなら……我慢できる……かな)

人目を気にせず我慢できているおかげか、それくらいの余裕はありそうだった。我慢しよう。こんどはまっすぐトイレに行く。授業が終わってすぐに行けば、トイレだって空いているはずだ。

あとほんの少し。ほんの少しだけ我慢すれば大丈夫。すぐにトイレに行ける。おしっこできる。

——だから、できるだけ気を紛らわそう。前かがみになって小刻みに足踏みを続け、千佳は映画に集中することにした。

この決断を千佳が後悔するのは、授業が終わる直前のことである。

◆ ◆ ◆

失敗した——。千佳の頭の中を激しい後悔が渦巻いていた。自習となった社会の授業が終わり、4 時間目は音楽の時間。そう、音楽室への移動教室である。そのことを千佳はすっかり忘れていたのだ。

しかも、今日は笛のテストが実地される予定だという。授業が終わるや否や、クラスの皆はすぐに準備を終え、移動をはじめ。

「て、テストって、本当なの？」

「あれ？ 千佳ちゃん知らないの？ この前先生言ってたけど……」

「わ、私、先週お休みだったもんっ……」

「ああ、そうだったっけー？」

呑気な返事をする亜里沙。しかし千佳は衝撃の事実を前に気が気ではない。

（そんなの聞いてないよおっ……！）

教室はたちまちがらんとし、取り残された千佳はたちまちパニックになる。今日がテストだとは知らず、リコーダーは家においてきまっていた。いまから家に取りに帰るなんてもちろん無理だ。

「笛、借りなきゃ……っ」

ほかのクラスの誰か——去年、クラス替えで別れてしまった理穂を訪ねてみたが、タイミング教室には不在。別のクラスの友人を頼ってさらに遠くの教室にも行って見たが、そこでもまたすれ違いになってしまう間の悪さ。みるみる休み時間もなくなってゆく。

「……………もお、やだあ……っ」

トイレなんて寄っている場合じゃなかった。教科書とノートだけを掴んで、音楽室へ急ぐ。尿意を感じて全力疾走できない千佳が音楽室に滑り込んだのは、授業開始のチャイムぎりぎりだった。

「前原さん、いけませんよ、先生の話はちゃんと聞かなければ」

遅刻と、忘れ物で音楽の先生に叱られて。席に着いた千佳を待ち、授業が始まる。

一人一人前に出て、先生の伴奏に合わせて笛を吹く。それを 1 クラス 2 8 人分。千佳の出席番号は「前原」の 1 8 番だ。音楽室の備品であるリコーダー——きちんと消毒はしてあるものの、誰が使ったかもわからないということで、クラスの皆にはとても不人気である——を借りて、惨憺たる気分でテストに臨む。

（……っ、ふう、はあっ、はあーっ……）

自分の前に 1 8 人。テストの順番が回ってくるまで、千佳はじっとおとなしく待っていなければならない。この間、音を出して吹くことはできなくても、指使いの練習くらいはできる。順番までにはまだ時間がある。すこしでも結果をよくするため、最後の復習をするべきなのだったのだが——今の千佳には、静かな音楽室の中で物音を立てずにじっと順番を待っていることのほうが何十倍も辛いことだった。

一刻も早くテストを終わらせ、そのままトイレに駆け出したい。そのことばかりが頭を占め、リコーダーのテストなんてまったく気にしている余裕はなかった。

（っ……ダメ、トイレ……っ、で、ちゃう、出ちゃう、おしっこ……！！）

しかし、テストの順番を控えた千佳に、そんなことは許されなかった。弱り切った『おんなのこ』を見逃さず、尿意は断続的に千佳の下腹部で暴れ回る。千佳はろくにリコーダーを握ることもできないまま、ぐっと息を堪えて足の付け根に力を入める。

閉ざされた水門が震え、貯水量の限界を超えつつある少女のダムが水面を揺らす。もはや机の上にじっとしているのも難しいほどだ。ぎし、ぎしと椅子を軋ませてしまい、何度か先生から注意される。

(あ……っ、だめ、お、おしっこ……出るっ、漏れちゃう……っ！)

そのたびに、恥を忍んで「先生、おトイレ」を言おうとする千佳だが、先生はテストの採点にかかりきりで千佳の様子を確認しようともしない。どうして休み時間中に済ませておかなかったのかと言われるかもしれないし、いい歳をしておしっこが我慢できないなんて思われたくない。千佳の握りしめた笛は、ぎゅうぎゅうと振り合わされる足の付け根に挟まれて、トイレを我慢するための一助にされてしまっていた。

◆ ◆ ◆

20分近く待たされた末、ついに千佳の順番が回って来た。

押し寄せる尿意はさっきまでの比ではなく、平静を保とうとしても千佳の足は自然と寄せあわされ、膝が重なり、交互に交差を繰り返してしまう。上半身は前かがみ、腰は後ろに引けて左右に揺れ、太腿をすりすりと擦り合わせながらではじっと立っているのも辛い。

そんな状態でみんなの注目の前に出て、課題曲を一曲吹き終わるまでじっとしていなければならないのだ。

(だ、だめっ……我慢しなきゃっ……！！ ああ、あっあ……っ！！)

席を立ったその瞬間から、緊張で強張った下腹部は過剰なまでに尿意に反応した。脚の付け根がきゅうんと疼く。張り詰めた膀胱がこぼりと音を立て、おさえた手のひらの下で収縮をはじめた。

「次は前原さんね。いきますよ」

テスト最後の一人とあって、クラスの皆の注目も増す。

重い足を引きずり、どうにか皆の前に立ったその瞬間。股間に熱い雫の予兆を覚え、千佳はその場に硬直して動けなくなってしまう。

(あ、あっ……んゆ、うあ……ッ！！)

人目をばからずぎゅうぎゅうと寄せ合わされる太腿。握りしめられたリコーダーが震え、力のこもった指が白くなる。いまや千佳はクラスの注視の中、尿意の大波の上でサーフィンの真っ最中だ。

(はああ……ッ、く、う、で、出ちゃ、あう、だめえ……っ！！)

しかし、先生は無情にも千佳の様子など考慮せず、テスト開始の合図を出た。伴奏が始まる。テスト。吹かなきゃ。震える唇にリコーダーをくわえ、指を動かし始める千佳だが、その音はひどいものだった。演奏は大きく音を外し、乱れる息は定まらずに荒く震えて、ぴい、ぽおお、と雑音を混ぜる。

(あ、だ、だめ、だ、め、でっ、でる、っで、でちゃ……あ、ああっ)

両手でリコーダーを持てば、自然、足は無防備になる。下腹部を押さえていた手のひらを失い、すぐに千佳の脚元は不自然なくらいに立ち位置を変えはじめた。体重を左右の足に寄せ換えて、大きく左右に揺れながら、ぎし、ぎしと教壇を軋ませる。しまいにはその場で足踏みまではじめてしまい、クラスメイトが怪訝そうに首を傾げた。

手にはじっとりと汗が滲み、孔を押さえる指が滑って、演奏どころか旋律の体も成していない。

甲高く外れたリコーダーの音は、千佳の「おしっこしたい」という叫びだった。

「……前原さん。不合格よ。ちゃんと練習したのかしら？」

散々な結果になったあとで、先生は不満げな顔で、千佳に再試験を言い渡した。不合格は千佳だけだ。音楽嫌いの男子たちの演奏よりもよっぽど、千佳のリコーダーはひどいものだった。

「みんなが終わった後、一番最後にもう一度、再テストをします。それまで皆の演奏をみて、ちゃんと練習しておきなさい。いいですね」

「……………っ、あ、あのッ——」

「返事は？ 前原さん」

低く威圧的な先生の声。千佳はそれ以上何も言えず、蚊の鳴くような声で「はい……」としか答えられなかった。

そのお達しで——千佳はとうとう、音楽の時間の間も授業を抜け出してトイレに行くことはできなくなってしまう。

机に戻され、じっとそのまま授業の最後まで外出を禁じられた千佳の脚の付け根。いつきも収まらずにモジ付く脚の付け根を包む下着には、いつしか小さな黄色い島が出来上がっていた。

◆ ◆ ◆

音楽の授業。終了から10分を過ぎて。

再テストの後、さらに不合格になった千佳は、居残りで再々テストまでさせられて——次の授業までに課題曲をちゃんと吹けるようにしておくことと宿題を出され、ようやく千佳は音楽室を解放された。

「あ……っ、はあ、う……ッ」

膝ががくがくと震え、まっすぐに歩くことも辛い。気持ちだけは今すぐに廊下を駆け抜けてトイレに飛び込みたいのに——千佳はずっしりと重い下腹部を庇い、のろのろと亀のように進むのが精いっぱいだった。

一歩ごとにじいんと響き震える、満水のダム。恥骨の奥でひくひくと震える『おんなのこ』。ぎゅっと押さえたスカートの下、きつく引っ張られた下着は、おしっこの出口の部分を中心にじわりと湿り、黄色い染みを広げている。

（でる、でちゃう……っ、おしっこ出ちゃう……っ！！ っはああ、う、だ、だめっ、我慢……っ、がまん、しなきゃ……っ！！）

登校して一番に済ませるはずだったトイレ。いや、もともとは朝起きてすぐにできていたはずのおしっこ。溜まりに溜まった悪魔の熱水は、千佳の下腹部をぱんぱんに膨らませ、少女を意地悪に誘惑する。

下着の股布、濡れて張り付く水門の部分の感触が、ゆっくりと冷えながら千佳に『おチビリ』の現実を意識させる。

（違うもんっ……こ、これ、ただの汗だから……っ、ま、まだ平気……っ、トイレまで、がまん……するの……っ！！）

下着に滲む熱い感触は、あくまで気のせいだと言い聞かせて。千佳は懸命に廊下を急いだ。

登校から4時間。すでに少女の我慢は限界に達しつつある。緩み始めそうになった水門に、恥も外聞もなく両手を足の付け根

に押し当て、きつく握りしめてしまったのも一度や二度ではない。

（あ、あっああ……お、おしっこ、おしっこ……、だめ、でる、でちゃう、おしっこでちゃう……ッ）

トイレ。ずっと辿りつくことを禁じられてきた、焦がれ求める場所。いますぐあの小さな秘密の個室の奥で、白い便器にまたがって、ありったけのおしっこをぶちまけてしまいたい。足元めがけ激しく噴射する水流を思い描き、千佳の下腹部がきゅうんと疼く。

——そんな欲望を、無情にも遮る事実がある。

給食当番。今週、千佳の3班はその担当だった。

専用の給食衣に着替え、昼食の始まる前に給食を取りに行き、クラス全員分の配膳を済ませねばならないのだ。

でも、いくらなんでももう無理だ。訳を話して、先にトイレに行かせてもらおうつもりだった。

この時まででは。

「前原さん、おーそーいっ！！ みんなもう始めてるのよ！？」

給食衣を着た委員長の早希が、腰に手を当て、目を吊り上げて叫ぶ。居残りテストを受け、ひとり遅れていた千佳に、班の他のメンバーも不満たらたら。ただ一人、亜里沙だけは先生も怒ってたしとフォローをしてくれたのだが、早希が語気荒く自業自得だと言い切ったため、千佳はそれ以上何も言うことができなかった。

「あなたひとりがぐずぐずしてるから、みんなが迷惑するんだからね！ちゃんと係としての責任持たなきゃ！ほら、早くして！！」

「な、なによ、そんな言い方……っ」

「なによ、なにか言いたいことでもあるの！？自分のこともちゃんとできない人に言われたくないわね！！」

トイレに行きたいです。おしっこ、我慢してるんです。気弱な自分が本音を吐きそうになる。それでも、挑発的な早希の視線に、千佳はむっとなって黙り込む。

（できるわ……できるにきまつてるじゃない。こ、これ、終わったら、トイレ——行けるんだから、も、もう少しだけ我慢するくらいっ……へっちゃらなんだから……！！）

「ほら、急いで着替えて！！支度してよ！！」

「わかってるわよ！！」

売り言葉に買い言葉。女の子のプライドを刺激され、千佳はつまらない意地を張って、またもトイレの機会を逸してしまう。

「……ふぁあっ！？」

冷たい水で手を洗った瞬間、千佳はぶるっと背中を震わせ、またじわあっと下着に温かい染みを広げてしまった。

◆ ◆ ◆

「う……あ……っ」

落ち着かない足元、下腹部を底いながら白い割烹着と帽子をかぶり、校舎の端にある配膳場で給食を受け取ってワゴンに乗せる。今日のメニューにはパンがあり、それはワゴンには載せきれず別に運ばねばならなかった。亜里沙と一緒にパンの担当になっ

た千佳は、苦労しながら大きなトレイを運ぶ。

（あ……っ、あ、っ、く、うう……はあ、ああっ……）

脚の付け根で千佳の『おんなのこ』が激しく疼き、しきりに我慢の限界を訴える。少しでも油断して気を抜けば、このまましゃがみこんで、おしっこが出始めてしまいそうだ。

大きな荷物を抱えながらでは、ふらつく足を制御できない。猛烈な尿意を訴える下腹部を庇おうにも手が塞がっており、前押さえすらかなわなかった。そもそも、みんなのごはんを運んでいる最中にそんなことできるはずがなかった。

「ねえ……千佳ちゃん」

トレイを抱えて息も荒く身もだえする千佳を見かね、亜里沙がその隣に並んだ。周囲の視線を窺い、そっと千佳の耳元に囁いてくる。

「千佳ちゃん、トイレ……我慢してるよね？」

「っ………！！」

（気付かれちゃった……っ！？）

クラスメイトに秘密を言い当てられ、千佳の身体が恐怖にすくむ。しかし、もはや異状に気づかれないほうがおかしいくらいに、千佳の様子は普段とは違っていた。

「無理しないで、おしっこ、いってきなよ。……漏らしちゃうよ？」

案じるような亜里沙の声。けれど。

「だ、大丈夫よっ！！」

本来なら、千載一遇の助け舟。けれど千佳は激しく虚勢を張ってしまう。じわあっと脚の付け根に広がる暖かい湿り気。隠しようもない『おチビリ』の事実が、少女のプライドを強く刺激していたのだ。

（へ、平気よ、ちゃんと我慢できる……！！ 幼稚園の子じゃないんだし、お、おもらしなんか、オモラシなんかするわけないじゃないっ、……！！ ちゃ、ちゃんと、我慢できるんだから……っ！！）

無謀な、そして後先を考えない強情さ。なおも続けようとする亜里沙をさえぎって、千佳は無理やりに走り始めた。

きゅんっ、きゅううんっ、ひくひくっ……！

無理やりに意地を張る千佳の、白い割烹着の下。千佳の下着に広がる黄色い島は、いまや大陸のように大きく、お尻のほうにまで広がっている。色を変えた股布に包まれたおしっこの出口が、濡れ空けた布地の奥で、じわじわと羞恥の雫を滲ませながら、ひくんっ、きゅううんと激しく収縮を繰り返していた。

◆ ◆ ◆

教室に戻り、千佳たち3班は並べた給食を配膳する。千佳の出遅れもあって、いつもより少し遅い昼食だ。いつも気にもならない列の乱れや、ご飯の量が少ないとごねる男子の挙動までが、千佳がトイレに行くのを邪魔しているかのように思えてならなかった。

た。

（そんなのいいから、はやく、はやくしてええっ）

配膳台の向こうで激しく足踏みをしながら、千佳は必死にトイレの誘惑耐えていた。はやく、はやく。焦る気持ちとは反対に、配膳は遅々として進まない。まるで、クラスメイト全員が示し合わせて意地悪をし、千佳にと大手を振ってトイレに行かせないようにしているのではないか——少なくとも千佳にはそう思えた。上げ下げする腿の奥では、支えを失った股間がじゅっ、じゅっとなぞる音が繰り返している。

「っ……」

おチビりをしながら給食をよそうなんて、こんなにみっともない事があるのだろうか？ 野菜スープをお椀に注ぐ度、千佳の下着にも新鮮な水分が供給されてゆく。

（だ、だい、じょう、ぶ……っ、に、決まってるじゃないっ、ちゃんと、最後まで終わらせてから、っ、トイレに行くんだから……っ、そ、それまで我慢するのなんて、簡単よ……っ！！ いままで、ちゃんと我慢できたんだから、あと少しくらい、楽勝……なんだ、からあつ……！！）

もはや意地だ。すでに白い給食衣の下、千佳の下着の状況はお世辞にも「きちんと我慢できた」といえるような有様ではなかったが——それでも千佳は強情に、給食係の使命を果たすことにこだわった。

どうにか配膳が終わり、給食全てが皆にいきわたる。それでもなお——千佳はなおトイレに駆けだすことはできなかった。

担任の周防先生の代わりに、お昼の様子を見に来た学年主任——厳しいと有名な三浦先生が存在が原因だった。いつもと違う厳しい雰囲気、クラスの皆も俯きき気味。

千佳たち3班も給食衣を脱いで、席に着かされる。

「では、給食を作ってくださったセンターの皆さん、野菜をいただ農家の皆さんに感謝して——いただきますをしましょう」

「「「……いただきます」」」

委員長の号令と共に、皆がいっせいに唱和した。

「いいですね。お喋りはせず、お行儀よく、ゆっくり噛んで食べましょう。きちんと食べ終わるまでは席を立たないこと」

声は静かでも、三浦先生の言葉には有無を言わせぬ迫力があつた。学年でも乱暴者の3組男子グループも、三浦先生にだけは逆らえないらしい。

実際、きちんと食べ終わるまで席を立ってはならない。クラスにはそんな取り決めがあつた。男子達がちゃんとご飯も食べないうちから外で遊び始めてしまい、先生が怒ってそんな決まりを作ったのだ。

いつもとは違う雰囲気の中、それでも給食自体はさほど騒ぎも起きずに進んだ。遊びたい男子達は急いで給食を食べ、「ごちそうさま」をして外に飛び出してゆく。食器を片付け損ねた一人が三浦先生に指摘されて、あわてて戻ってきたくらいだ。



そんな中。

千佳は、ろくにお箸も動かさないまま、机の上でじっと俯いていた。

今日の献立は野菜たっぷりのスープにハンバーグ、パン、そして牛乳。

(こ、こんなの、もう、飲めないよ……っ)

もはや我慢は限界に近い。こんな状態で、これ以上水分を採るなんてできる訳がなかった。飲んだ分がすぐにおしっこになるわけではないとわかっていても。

パンを一口、ハンバーグの端っこを口に運んだが、ぎゅうぎゅうと脚を寄せ合い、懸命におしっこの出口を押さえながらでは、味なんてほとんどしなかった。

乾いた口につばを飲み込み、千佳は給食に手を付けられず、もじもじとしきりに腰をよじる。いつしか教室からは人が消え、千佳と数名、嫌いなものを食べられず残している子たちばかりが残されていた

「——前原さん」

教卓から、三浦先生の声が聞こえたのはその時だ。

「前原さん、好き嫌いは駄目よ」

「え、えっ、でも…わ、わたしっ」

「ちゃんと食べなくちゃ大きくなれないわよ？ きちんと食べなさい」

有無を言わせぬ迫力。千佳はそれに圧倒され、思わずお箸を取り落としかけてしまった。眉を潜める先生に、激しく椅子の上で身をよじり始めてしまう。机の下、スカートの上を押さえる掌はもうそこから離れない。

「あの、先生っ」

隣で不安そうな顔をしていた亜里沙が、手を挙げた。

「千佳ちゃん、おトイレ我慢してるんです……！」

「っ、馬鹿……っ！！」

亜里沙の行為は、この期に及んでなお意地を張り、強情に無謀な我慢を続ける千佳を案じてのことだったのだろう。しかし、周囲の状況も省みず、秘密にしていた尿意を公開されて、千佳の顔に一気に血が上る。

「先生、千佳ちゃん、もうずっと前からおしっこ我慢してて——」

「幸村さん、お行儀が悪いですよ。食事の途中です」

やんわりと、しかし確実に亜里沙の言葉をさえぎり。席を立った三浦先生は、千佳の隣までやってくる。

「前原さん、本当なの？ どうしてお食事の前に済ませておかなかったんですか？」

「……………」

千佳は答えない。答えられるわけがなかった。けれど、一時も収まらない身じろぎが、その場の皆に明らかな「YES」を伝えていた。

「わかりました」

三浦先生は大きく息を吐いて、けれど、明らかな赦免の気配の中で、とんでもないことを言ってきた。

「はやくお食事を済ませて、行ってきなさい」

「え…………っ」

今の流れは、『早くトイレに行ってください』というものではなかったか。腰を浮かしかけていた千佳は、縋るように先生を見上げる。

しかし、相変わらずの厳しい顔つきで、三浦先生は厳かに言い渡した。

「前原さん。あなたはこの学校の生徒として、下級生たちの規範とならなければいけません。授業のことだけではありませんよ。毎日の生活も、学校で学ぶべき立派な勉強です。しておくべきことをしないのは、良くないことです。それを心に刻みなさい。

……きちんとお食事を済ませてから、はやくお手洗いにいきなさい。後片付けはしなくても結構です。……いいですね」

ざわり。教室内がざわめきに包まれる。給食当番に遅れたことも。黙っていたことは、悪いことなのだと。これまで我慢できたのだから、それくらい簡単だろうと。そう言わんばかり。

（そ、そんな……っ）

そうだけど、そうじゃないのに。千佳の反論は、しかしもう声にはならない。

「この給食もそう。農家の人たちに毎日、一生懸命お世話をしたお野菜に、それを料理してくださったセンターの方たちがいます。そのことに感謝をして、全部きちんとおいしく食べなければいけません。……皆さんも一緒です。残してはいけませんよ。いいですね」

有無を言わせず。教室を見回す三浦先生に、クラスに残った皆が身を縮こまらせる。周防先生とは全然違う。

かくして。先生に迫られるまま、千佳は猛烈な尿意を我慢しながら、ぱんぱんに膨らんだおなかに、無理やり野菜スープと牛乳を飲まされることになってしまった。

もうこれ以上、一滴だって身体の中に水分を入れたくないのに——涙を浮かべながら、必死になってスープを口に運び、牛乳のストローを吸る。一口ごとにおなかにずしんと重さが加わるようで、千佳はそのたびに悲鳴を上げそうになる。

それでも——

（これ、これさえ飲めばっ、お、おトイレに、行けるっ……、おしっこできる……っ）

それだけを心の支えに、必死になって千佳は食事を終えた。

◆ ◆ ◆

三浦先生の厳しい環視の中、どうにか全てを飲み終わり、千佳はふらふらと教室を出た。教室では静かなざわめきが続いていたが、もう、そんなことに構っている状態ではなかった。くねくね、もじもじ、まっすぐ歩けない下半身を引きずって、懸命にトイレへと急ぐ。

おしっこでぱんぱんに膨れた下腹部に加えて、無理に飲み切った水分で、胃までたばんたばんと震えている。まるで二連の給水タンク。

（とっ、トイレっ、おトイレえ……っ！！）

閉ざされたドアの奥、小さな小さな秘密の個室。焦がれ求めた『おしっこをするための場所』。昼休みは長い。たとえどれだけトイレが混んでいたって、順番が回って来ないことなんてありえなかった。

もっとも、もしも仮にまた、3時間目の休み時間の時のように、女子トイレに長蛇の列ができていた場合、その光景にもはや

千佳の心は耐えきれず、折れてしまっただろうことは想像に難くない。その上でなお千佳が自分の順番まで我慢できていたかは、とても怪しい。

とはいえ。

この時、千佳の視界に見えてきた女子トイレには人の気配もまばらで、順番待ちなどせずにはほぼフリーパスで個室まで駆け込めるような状態にあった。

（おしっこ、おしっこできる……っこれでやっつ、おしっこ……っ♪）

女子トイレの奥の奥、閉ざされた個室の中に鎮座する白い便器を思い描き、千佳は待望の喜びに心躍らせる。遠距離恋愛の恋人同士が出会いを待つのに似た、至福の心境。いまなら、白い便器と結婚したっていいとさえ思えた。

個室の前に立ち、千佳は気も早くトイレの準備を始めてしまう下半身を懸命になだめる。ドアが開いたら飛び込んで、スカートをたくし上げ下着を下ろし、便器をまたいで腰を下ろし、思い切りおしっこを噴射させる。我慢に我慢を重ねた熱水を、ありったけ地面に噴出させるのだ。

——その瞬間を思い描き、何度もシミュレートした解放の瞬間を心待ちにする。

じゃごおおお……

後始末に水を流す音が響き、千佳がスタートの号砲を待つ短距離走の選手ばりに、飛び出さんばかりにしていたまさにその時。

けたたましいサイレンが校舎に鳴り響く。

構内の火災警報器が一斉に放つ赤い輝きは、火事の発生を知らせるものだった。

一気に校舎の中がざわつき始める。たったいま空いた個室からでてきた生徒と鉢合わせ、すでに足踏みの中スカートの中に手を突っ込んで、下着に手をかけていたまさにそのタイミングで、千佳も一瞬静止した。

同時に、校内放送が避難の案内を告げる。直後、先生の一人が声を上げてトイレに駆け込んできた。

「みんな！ 火事よ、早く外に出て！！ 早く！ 早くして！！ あなたも早く！！ 逃げるの！！ 逃げるのよっ！！」

「っえ、あ、やだっ、待って、待ってっ、わ、私まだっ……！！」

（まだなのに、おしっこ、まだ、してないのに！！）

必死になって抵抗するが、生徒の千佳と大人の先生では勝負になるはずもない。ヒステリックに叫ぶ先生に、ほとんど追い出されるような格好で、千佳はトイレから追い出されてしまった。

目の前、ほんのわずか 50 センチまで迫っていたトイレまでの距離は、見る間に絶望的なほどに遠ざかる。あんなにも苦労して、苦しいのを我慢して、スープと牛乳と、全部を飲み干したのに。千佳の視界が暗くなる。

「あ、あ。あ……ッ」

じゅわああ、じゅううっ。きつく抑え込んだスカートの下、ぐもった水音が断続的に続き、絶望の予兆がさらに大きく、千佳の下着に広がってゆく……。

（続）

EXTENDED BODY:

EXCERPT:

KEYWORDS:
